オレは女子高生

AT

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
オレは女子高生

【Ｎコード】
Ｎ６１５９Ｅ

【作者名】
ＡＴ

【あらすじ】
●女子高に女として入学した男の子の話。女の子としてのフェチな成長物語りです。●普通の小説として書いていますが、物語の性格上、読む方によっては、ＴＳ、ＢＬ、ＧＬ、ファンタジー、リアルすぎ、刺激が強い、などのように感じる方もいるかも知れませんので、苦手な方はご注意ください。●長い話なので１章だけでも読んでいただければ、どんな話かわかると思います。●挿絵つきとなっていますが、基本的に挿絵はありません。●修正している話は、ほとんどが文字の修正なので、あらためて読んでいただく必要はあ

りません。

1章　第1話　進路　オレが女子高生？

＞ｉ１５８８１―１２４９＜

オレの名前は戸田有希（とだゆうき）、中学3年生。

なんといってもオレの最大の不覚は、人間は自然に大人になるものだと思い込んでいた事だろう。

遊んでいても大きくなれば、自然に勉強ができるようになり、それなりの高校へ入り、それなりの大学へ入り、それなりの仕事に就く。

そしてそれなりの家庭を築き、それなりに幸せに暮らしていく。

人生とはそういうものだと信じ切っていた。

もちろんそう思い込んだのにも理由はある。

オレの父、有正（ありまさ）は売れない小説家で、ずっと昔に芥河賞にノミネートされたこともあるらしいが、今はペンネームで三次元文庫に書いてるのが主な収入だ。

母の麻希（まき）は空間デザイナーとかいって店舗の内装などをやっている。

我家の家計はほとんど母の収入で成立っているらしい。

どちらも高卒で、母はデザイン関係の専門学校に通ったらしいが、父のことは良くわからない。両親とも勉強しろとか、ほとんど言わない人だったが、８つ離れた兄の有友（ありとも）は成績優秀で、現在は国立の薬科大の大学院生だ。

そんなわけだから、オレもいつかは兄貴のように勉強が出来るようになるのだと、勝手に思い込んだまま今日まで生きて来た。

その結果、どうにもならない事態になっているのを実感したのは、

事もあろうに中学3年も2学期になってからだった。

入学願書を出さねばならない期限が迫って、オレは担任の井原に呼び出された。

「おい戸田、お前こんな成績じゃ行ける高校なんかないぞ！」

「え？！」

「なんだこの成績は！国語はまあいいとして、英語と数学は赤点ギリギリじゃないか！」

「あ、でも理科と美術は5ですよ。」

体育はそんなに良くなかったが・・・

「お前なあ、ふざけてるのか？受験に出ない教科がどんなに良くても意味ないんだぞ！」

「なるほど・・・」

言われてみて初めてそんな事実にも気づく始末だった。

「先生、僕でも行ける高校って無いんですか？」

オレが聞くと、担任は渋い顔をしながらペラペラ資料をめくった。

「まあ・・・無いこともないんだが、俺は勧めんなぁ。」

「そ、それはどこですか？」

オレは藁にもすがる気持ちだった。中学浪人にはなりたくない。

「それは・・・白鴻女学園〈しらとり　じょがくえん〉だ。」

オレは一瞬、担任が言った言葉を頭の中で反芻した。意味がわからなかった。

白鴻女学園といえば地元じゃ結構有名なお嬢様学校だった。清楚で伝統的なセーラー服が特徴の女子校だ。ここらではセーラー服の高校は珍しいから、オレたちの学校の女子とは違う大人っぽい雰囲気は遠目に見かけてもドキドキする。

「先生、僕男ですよ。なんで女学園なんですか？」

「あそこも来年から共学になるんだそうだ。だから積極的に男子学

生を募集しているんだ。」
「はあ・・・そこは勉強が出来なくても行けるんですか？」
「推薦枠というのがあってな、向こうの条件に合えば多少のことは目をつむってくれるだろう。」
「条件があるんですか・・・」
「さすがに元が女子校だからな、がらの悪い生徒に来られては困るらしい。幸いお前は頭は悪いが不良じゃないし、受験すればまず受かるんじゃないか？」
「う～ん・・・でも、女子校ってのは・・・」
さすがに悩むオレを不憫に思ったのか、井原は入学案内のパンフレットを差し出しながら
「まあ、提出期限は来週の月曜日だ。両親とも話し合って決めるんだな。」
そう言ってオレの頭をポンと叩いた。

オレは教室に帰るとすぐに、貰ったパンフレットをカバンの中に隠した。もし、女学校のパンフレットなんか持ってるのを見つかったら何を言われるかわかったものじゃない。
「おい、進路相談だったんだろう？お前どこ受けるか決めたのか？」
オレが戻ってきたのを目ざとく見つけて、仲が良い鈴木が声をかけてきた。
「いや、まだ決めてない。」
「そろそろ決めないとヤバいんじゃないか？」
「そうなんだけどな、どうもオレの成績じゃ行ける所は少ないらしい。」
オレはかなり控えめな表現をした。
「だろうな。お前ぜんぜん勉強してなかったからなぁ。」
どうやらヤバいことに気づいてなかったのはオレだけだったようだ。
「でも、まあ何とかなるんじゃないかなぁ。」
オレがそう言うと、鈴木は

「お前ほんとのんきだな。」
と言って笑った。

家に帰ったオレは、すぐに父の書斎へ向かった。書斎と言っても納戸を改造した窓もない小さな部屋だが。オレは引き戸をノックした。
「とうさん、入っていい？」
「・・・いいぞ・・・」
部屋の中からくぐもった声で返事があった。
引き戸を開けて入ると、父は机に向かってキーボードを打っていた。口にはマスクをしている。
「なんか用か？」
「うん・・・」
この部屋は壁全体が本棚になっていて、床にも所狭しと本が積み上げられている。
「そこに座っていいぞ。」
そう言って指さしたのは積み上がった雑誌の上だった。

オレは雑誌を崩さないように注意して座った。
「なんだ？」
父は机から顔をあげるとオレの顔を見て言った。
「あの、今日進路相談があって、こんどの月曜までに願書を出さなきゃいけないって・・・」
「そりゃ遅れないようにしなきゃな。」
「でもオレ頭わるいじゃん。」

「そうなのか？」
父はまったく意に介さないようだ。
「それで、行ける高校がないんだ。」
「そりゃ困ったな。お前料理とか好きじゃないか、板前の修行とかしたらどうだ？中卒でもなれるんじゃないかな。」
たしかにオレは料理とか嫌いじゃないけど、中卒で板前の修行というのはちょっと抵抗があった。
「でも、ひとつだけ行けそうな所があって、それがここなんだけど・・・」
おれはそう言って父にパンフレットが入った封筒を手渡した。

父はしばらくパンフレットをパラパラめくっていたが、急に真面目な顔でオレの顔を見た。
「有希、お前女子高生になりたいのか？」
そう言ったが早いか、父は急いでメモ帳に何かを書きだした。
「男女子高生・・・ぼくは女学生・・・女学生なオレ・・・」
どうやら小説のネタでも思いついたらしい。
「とうさん！おれ女子高生になるんじゃないんだけど。」
父はやっと我に帰った。
「でもこれは女子校のパンフレットじゃないか。みんなセーラー服着てるし・・・セーラー服の男の子・・・セーラー服男子・・・」
またメモを書きだした。
「あのさ、そこは今は女子校だけど、来年から共学になるらしいんだ。」
「あー、そういう事か。で？」
父とはどうもまともに話が噛み合わない。まあ、いつもの事なのだが。
「だから、そこなら受かりそうだって話だよ！」
「ふ～ん・・・別にいいんじゃないか？・・・女学生有希か・・・」
父に相談したオレがバカだったようだ。オレは父の手からパンフレ

ットを受け取ると書斎を出た。とたんにオレは咳き込んだ。父が書斎でマスクをしているのは掃除するくらいならマスクをした方がラクという自堕落な考え方による。父はアレルギー体質なのだが、どうやらオレもその体質を受け継いでいるらしい。

「なんだお兄ちゃん帰ってたの?」

オレがダイニングのテーブルに置いた、パンフレットが入った封筒を前にどうしたものかと考えていると、妹の麻衣(まい)がやってきて冷蔵庫からペットボトルを出し、ジュースをコップについで持って来るとオレの前に座った。

「なにそれ?」

妹はジュースを飲みながら封筒を指さした。

妹は小学校6年生、なぜかオレと違って勉強は出来る方だ。

「なんでもないよ。」

オレがそう言って隠そうとすると、妹は封筒の片方をつかんで引っ張った。

「コラ!大事な書類なんだぞ!」

オレが破れるのを心配して手を放したため、封筒は妹の手に渡ってしまった。

「しろ・・・じょがくえん?」

妹は封筒からパンフレットを出すと、そこに書いてある文字を声に出して読んだ。

「お兄ちゃん、この字なんて読むの?」

さすがに小学生では鴻という字は読めなかったらしい。もっともオレもあらかじめ学校名を知らなければ読めなかったが。

「とり、しらとりって読むんだ。」

「ふ~ん、しらとりじょがくえんか、聞いたことあるかも。」

妹はパンフレットをしげしげとながめながら

「お兄ちゃん、この高校に行くの?」

「まだはっきりとは決めてないんだけどね。かあさんにも相談しないといけないし・・・」
「ふ～ん・・・」
妹は何度もパンフレットとオレを見比べている。
「うん、お兄ちゃんこのセーラー服なら似合いそうだね！」
「な、バカなこと言うなよ！オレがセーラー服なんか着るわけないだろう！」
「な～んだ・・・でも男子の制服なんかついてないよ。男子はどんな制服なの？」
そういえばどんな制服になるのか聞いてなかった。
「たぶん女子がセーラー服なんだから、男子は詰め襟じゃないのかな？」
「あたしも来年からセーラー服なんだよ！」
妹は嬉しそうに言ったが、そんな事は知っている。
「当たり前だろう。オレと同じ中学に行くんだから。」
「あ、そっか。でもつまんないなぁ。一緒にセーラー服着れるのかと思ったのに。」
「やめてくれよ！男がセーラー服なんか着たら気持ち悪いだけだろう。」
「そうかなぁ～」
妹は何故か納得しないようだった。

「だってさぁ、お兄ちゃん女の子の服着るの好きなんじゃないの？」
「はあ？！ゲホゲホッ・・・」
オレはいきなり妹にそんな事を言われて咳き込んだ。まだホコリの影響もあるのかもしれない。
「な、なんでそんなこと考えたんだ？」
「だって、お兄ちゃん小さいころの写真で女の子の恰好してるじゃない。」

「あ、あれは・・・」
たしかにオレが小さいころの写真は女の子の服を着たものばかりだった。
「あれは、かあさんが勝手に着せてただけだろう。」
母は兄の次は女の子が欲しかったらしく、8年後に産まれたオレに女の子の服を着せていたのだ。それは3年後に妹が産まれるまで続いたから、3才のころの事はなんとなく憶えている。
「別に好きで着てたわけじゃないぞ！」
「ふ～ん、そうなんだぁ。」
妹はなぜか残念そうにパンフを見ながら
「ほんとに似合うと思うんだけどなぁ。」
「もうやめてくれよ！」
おれは妹の手からパンフを奪い取った。

「かあさん、ちょっといいかな。」
母が帰ってくるとすぐに両親の部屋に行った。母はまだ化粧を落としている最中だった。
「あ、ごめん・・・後でいいや。」
オレが部屋を出ようとすると
「気にしなくていいわよ。なに？」
オレは部屋に入ってドアを閉めた。
「ちょっと高校の事で相談があるんだけど・・・」
母は手を止めて振り向いた。もう化粧はほとんど落としていた。
「もうそんな時期なのねぇ。」
母はのんきなことを言った。

「そんな、時期なんてもんじゃないよ。来週の月曜日までに願書を出さなきゃいけないのに・・・」
「そうなの?で、どこ受けるか決めた?」
「それがさぁ・・・ここしか受かりそうな高校ないらしいんだ。」
オレがそう言ってパンフレットを渡すと
「あら?ここ、かあさんの母校よ。」
と嬉しそうに言った。そんな話は聞いた事がなかった。
「でも、ここ女子校よ。」
「あ、来年から共学になるらしい。」
「へ〜、そうなんだ。それでここに決めたの?」
「いや・・・どうしようかと思って・・・」
「でも他に行けそうな高校ないんでしょう?」
「うん・・・」
「じゃあ、ここにすれば良いんじゃない?かあさんは有希が行きたいとこなら何処でもいいわよ。」
「いや・・・行きたいって訳でもないんだけど・・・」
母が息子の自主性を重んじてくれるのは嬉しかったが、オレは行きたくもない高校しか行けないのが情けなかった。しかし母の思いは少し違うようだった。
「ここなら、かあさんも良く知ってるし、いいんじゃないかな。校風もいいわよ。」
なぜか母は嬉しそうだった。
だがオレはとてもそんな気分にはなれなかった。ただ女子校に行くだけでも気持ちが落ち込むというのに、母親と同じ女子校に通うとは何とも複雑な気分だ。

「かあさんここのセーラー服すきだったなあ。実は今でも持ってるのよ。」
「え?!」
オレは初めて聞くことばかりで驚きっぱなしだ。

「有希は身長どれくらいだっけ。」
「１６３ｃｍだけど？なんで・・・」
「かあさんより少し大きいけど、有希は細身だから着れるかもしれないわよ。着てみる？かあさんが着てた白鴻女学園の制服。」
「ち、ちょっと待ってよ。オレそこに行くとしてもセーラー服着て通うわけじゃないんだけど。」
「あ、そっか・・・そりゃそうよね・・・有希は似合うと思うけど、他の子は似合わなかったら可哀相だもんね。」
「いや・・・そういう事でもないと思うけど・・・」
今まであまり考えたことは無かったが、うちの家族はみんなどこか普通じゃないようだ。

結局オレは他に行ける高校もなく、白鴻女学園を受験することになってしまった。

第2話　受験　オレが女の子？

冬休みが過ぎ3学期になると、同級生たちは最後の追い込みに必死になっていた。

しかし、そんななかでもオレはどうも実感を持てないでいた。それは女学校を受験するという想像しにくい事態だったからかも知れないし、もともとオレはそういう性格だったのかも知れない。まあ、これまでも全然勉強しなかったことを考えれば後者である可能性が高い。たんなるのんびり屋なのだろう。

オレが白鴻女学園を受験する事は同級生には頑に隠していた。たとえ共学になるとはいえ女学園なんて名前の学校を受験するなんて恰好悪くて言えるハズがない。しかし、それは案外簡単なことではなかった。この時期、どこを受験するかは同級生たちが最も感心がある事だったからだ。仕方なくオレは別の県の高校を受験するということにしていた。なぜ他県の高校を受験するのか聞かれても、引っ越すからとか適当に答えていた。学校ではそれなりに友達もいたが、オレの家に来たことがある友達はいなかったからバレないだろうと考えていた。なぜ自分の家に友達が来なかったかというと、オレが来てほしくなかったからだ。父親が売れない小説家なんて格好悪いから知られたくなかったし、ペンネームで三次元文庫を書いてるなんてもっと知られたくなかった。

ただ、受験の日だけはそういう訳にはいかなかった。幸い同じクラスからは白鴻女学園へ受験する人はいなかったが、他のクラスには数人いた。オレは彼女たちと一緒に受験しなければならなかった。うちの中学では、同じ高校を受験する生徒は一旦学校に集まって、いろいろ持ち物を確認してから一緒に受験会場まで行くのが決まりだったのだ。多少助かったのは、一緒に受験する女子たちがあまり

おしゃべりなタイプではなかったことだ。全員別のクラスだったからそれぞれの性格までは知らなかったが、さすがに白鴻女学園を受験するだけあってお嬢様タイプなのだろう。でもそんな中に男のオレが混じっているのは何とも居心地が悪かった。

　オレはできるだけ目立たないようにしていたが、少ない人数の中で男がひとりではどうしたって目立ってしまう。

「戸田君、白鴻受けるんだ。男子で受ける人がいるなんて知らなかったわ。」

そのうちの一人が声をかけてきた。となりのクラスの長谷川順子（はせがわじゅんこ）という生徒だった。

「うん、まあ・・・でもこのこと秘密にしてるんだ。」

「なんで？」

「だって、なんか恰好悪いじゃん。男子が女子校受けるなんて。」

「でも共学になるんでしょう？」

「まあ、そうだけど。でも恥ずかしいんだよ。」

「そう、じゃあわたしたちも戸田君が受験してたの秘密にしておくわ。」

「そうしてもらうと助かるよ。」

オレは受験後言いふらされる心配がなくなって、少し落ちついてきた。

「戸田君も滑り止めなんでしょう？」

「え？」

「わたしたちもみんなそうだよ。本命に落ちた時の用心のため。」

なるほど白鴻女学園はそういう位置にある高校だったのか。確かに伝統ある高校だったが、今や女子でも四年制の大学に行くのが主流だから、そうなると白鴻では難しいのだろう。白鴻女学園から大学へ行く人は白鴻女子短大に進むのが普通らしい。もともと白鴻女学園は白鴻女子短大の付属高校なのだ。そんなところに推薦でしか入試できないとは我ながら情けなかった。

「そう、オレも滑り止めなんだ。」
この場はそう言うしかなかった。
しかし、このことはオレにとっては良いことかもしれない。彼女たちが本命の高校に受かれば白鴻女学園には来ないわけで、オレには同じ中学出身の知ってる人が少ない方が恥ずかしくなくて都合がいい。

受験会場の白鴻女学園に着くとあたりは女子ばかりだった。オレの他にも受験する男子がいたとしても、見渡した中にはひとりもいなかった。
教室に入っても男はオレひとり、他はセーラー服やブレザーや各中学の制服を着た女子ばかりで、暖房で暖かい教室の中は女の匂いに包まれていた。そんななか、オレは男ひとりで何とも落ちつかなかった。もしうちの中学からの受験者がオレひとりだったらと考えると、最初は困ったことになったと思った女子たちでも、同じ中学からの受験者がいることは有り難かった。

受験勉強は付け焼き刃もいいとこだったが、それでも国語と数学は何とかなった。国語はもともと苦手ではなかったし、数学は必死に公式など暗記していた。ただもともと一番苦手な英語だけはどうにもならなかったが、それもいくつかの答えの中から選ぶタイプの問題だったから何とか助かった。

もっとも、受験の前にオレが言われたのは、面接についてがほとんどだった。推薦の場合、面接が一番重要らしい。そこで何度も言われたことは、この白鴻女学園しか受けないということをしっかりと言えということだった。その時は良くわからなかったが、滑り止めとして受ける人が多いから、受かれば絶対来るという生徒は学校にとっても有り難いのかもしれない。

面接も無事に済んでいつもの中学生活に戻ったオレは、他の生徒が本命の高校受験に本腰を上げるなか、もうすべてが終ってしまいボーッとしていた。もう授業もまともに無く、受験に行く生徒を引率するため先生たちも出払っていたから、ほとんど自習ばかりだった。

たまに廊下でとなりのクラスの長谷川にばったり会ったりすると、自分達しかわからないくらいに、目で軽く挨拶を交わすこともあった。どうやら彼女も他の白鴻女学園を受験した女子も、オレの事は誰にも言っていないようで、クラスでオレが白鴻女学園に受験したことがバレることもなかった。

――

２週間もすると合格通知が届く者も出てきた。その日もいくつかの高校の合格発表があり、数人の同級生に合格通知が担任の手から渡されるのをオレは羨ましく見ていた。しかし、まだ滑り止めに受けた高校からのものがほとんどだったから、みんな手放しでは喜んではいなかった。オレは推薦だから合格するだろうとは思っていたが、それでも他の同級生たちとは違い一校しか受けていないから心配だった。もしも面接で落とされたりしていたら目もあてられない。

数人に合格通知を手渡し、今日もオレのは無かったかと思っていると、担任はオレに一緒に来るようにと手招きした。

オレが担任の井原について行くと、なんと着いたところは校長室だった。担任はノックをしてドアを開け、オレに先に入るように指図する。オレは何事かとビクビクしながら校長室に入っていった。

そこには校長と、もう一人知らないバーコード頭の男が座っていた。オレが入っていくと校長とそのバーコード頭の男は立ち上がって向かえた。なんか場違いな状況にオレは緊張した。

「あー彼が戸田有希くんです。」

校長はオレをバーコード頭に紹介した。オレはわけも判らないままお辞儀をした。すると校長はオレにバーコードを紹介した。

「あーこちらは白鴻女学園の教頭の石渡先生です。」

それを聞いて思い出した。このバーコードは面接の時に会ったことがある。

「あ、面接の時はお世話になりました。」

「いやいや・・・」

バーコード教頭はやけに低姿勢な人だった。

オレと井原は教頭の前にテーブルを挟んで並んで座り、校長は両方が見渡せる横に座った。

「戸田君、先日は我が校を受験してくれてありがとう。」

「あ、いえ・・こちらこそ・・・」

オレは何と言っていいのか全然判ずそう言った。

「ご存知のとおり我が校は来年から共学になるはずだったのですが、実はとりやめになりまして・・・」

「え?!」

オレは驚いた。

「えー実はですね、君以外受験者がいなかったのです。」

「はあ・・・」

オレは予想もしなかったことに気の抜けた返事をしてしまった。教頭はさらに話を続ける。

「それに当校の卒業生からも共学化には反対の声が多くありまして、本当なら戸田君にも他の学校を選んでいただくところなのですが、戸田君が当校しか受験していないことが問題になりまして・・・」

このころにはオレにも事態が飲み込めてきた、エライことになった

と思いイヤな汗が出てきた。
「それで私と校長で話し合いまして、どうしても君が当校に入学することを希望するのであれば、特別に入学出来るように取り計らっても良いという事になったのです。」
「・・・・・・」
「ただ、少々申し上げにくい条件がありまして・・・」
「条件・・・ですか・・・？」
「もし君が女子として入学しても良いということであれば、受け入れようという話になったのです。」
「・・・・・・」
オレは担任を見て、それから校長を見た。どちらもすでにこの事を知っていたらしく、さすがに気まずいのかオレが見ると目線を逸らした。
「もちろん今すぐに結論を出さなくても結構なので、ご両親とも相談になられてから私に連絡いただければと・・・」
そう言って教頭は自分の名刺と、合格通知と共にオレの両親に宛てた手紙をオレに渡した。
「あーもし君が入学を希望すると決まれば、当校も協力するからその点は心配いらないからね。親御さんと十分話し合って決めなさい。」
校長はそう言ったが、オレはほとんど聞いていなかった。あまりのことに耳に水が入った時のようにボンヤリとしか聞こえてこなかった。

オレはいつの間にか校長室を出て、井原と並んで廊下を歩いていた。
「エライことになったなぁ、戸田・・・」
「はぁ・・・」
オレは何を言ったらいいか判らなかった。

「女子としてなんてなぁ・・・おれも責任感じるよ。」
「・・・・・」
「でも中学浪人もキツイからなぁ・・・まあ、どうするにしてもおれも協力するから気を落とすなよ。」
井原はそう言ってオレの背中を叩いた。

「あ！戸田君、合格通知もらった？」
教室へ帰る途中で長谷川と会った。
「うん・・・」
オレはそういってもらってきた封筒を見せた。
「良かったね、わたしも合格したよ。でも本命に受かったらそっちに行くんでしょう？」
「うん、まあ・・・」
オレには本命どころか高校に行けるかどうかも判らなくなってしまった。
「もし本命に失敗したら、一緒の高校だね。」
「うん・・・そうだな・・・」
もしそんなことになったら、一緒のセーラー服で登校という事になってしまう。そんな事態だけは避けたかった。
「・・・長谷川さんは？本命は合格しそう？」
「まあまあ上手く出来たと思うんだけど。でも合格通知をもらうまではわからないわ。」
「合格することを祈ってるよ。」
それはオレの切実な本心だった。

―――――――――――――――――――――――――――――――
―――――――――――――――――――――――――――――――
――

全員そろっての夕食後、オレは例の話を切り出した。
本当は妹はいない方が良かったが、何度も同じ話をするのも恥ずかしい。どうせなら一度に済ませた方が楽だと考えたわけだ。
「ちょっといいかな・・・」
三人の目が一斉にオレに向くとさすがに言うのをやめようかという気になってくる。
「なに、有希？」
まっ先に聞いたのは母だった。
「実は今日・・・合格通知をもらったんだけど・・・」
「合格したのか！良かったじゃないか。」父が言うと
「良かったねぇ、お兄ちゃん！」と妹も言った。

「・・・それが・・・そうとも言えなくて・・・」
オレが母に教頭から預かった手紙を渡すと、手紙を開く母に頬を寄せるようにして父も手紙を横から覗いた。
「なになに～？何て書いてあるのぉ？」
妹の麻衣も両親の後ろから覗こうと右に行ったり左に行ったりしている。

手紙を読んだ両親はいつになく真面目な顔でオレの顔を見た。
「これって、どういうこと？」
「お前、女として入学するのか？」
「え～お兄ちゃん女になるの～？！」
やっぱり思ったとおりの反応だ。
「入学するなら、そういうことになるらしい・・・」
四人ともしばらく黙り込んでしまった。

最初に口を開いたのは母だった。
「でも・・・いいんじゃない？わたしは有希がそうしたいなら、そ

れでいいと思うわよ。」
すると父も
「そうだな。今から他に行ける高校もないだろうから、向こうさんが受け入れてくれるなら、それも良いんじゃないか？」
これは思ってもみない反応だった。オレは内心、両親は反対してくれるだろうと思っていたのだ。
「え？とうさんもかあさんもオレが女として入学してもいいの？」
いやいや、そうじゃない！こんな言い方ではオレ行きたがってるみたいじゃないか！内心そう思いながらも、これを受け入れなければ中学浪人だということも頭に浮ぶ。オレは実際、自分自身でどうしたらいいのか、まったく判らなくなっていたのだ。だから本当は両親に反対してほしかった。そして何か別の道を考えてほしかったのだ。

　しかし、事態はまったく違う方向へ動きだしてしまった。
「そうかぁ、有希もとうとう女学生になるのか・・・」
父は腕組みをしてなぜか感慨深げだし
「有希も女の子として通うんなら、見た目は良いとしても、もう少し丁寧なしゃべり方しないといけないわね。」
などと母はもうオレが女になることに決まったような口ぶりだ。
「あたしもお兄ちゃん、あのセーラー服似合うと思う！」
麻衣までそんなことを言うしまつだ。
三人は、あっけにとられるオレを尻目に、オレが女になることを肴に大いに盛り上がっていた。
オレはいたたまれなくなり、二階の自分の部屋にさっさと引き上げてしまった。

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――

一一

１０時をすぎたころ、妹が階段を上がってオレの部屋の前を通り、自分の部屋へ入ってドアを閉める音がした。オレはベッドに横になったまま、壁に耳をつけ気配をうかがっていると、しばらくして“カチカチ”電気を消す音がした。どうやら寝たようだ。

オレはそのまま寝転がっていたが、妹が寝静まったのを確認すると静かに起き上がった。そっとドアを開けて階下をうかがう。すると静かな中にも人が動く気配があった。オレは音を立てないように部屋を出てドアを静かに閉めると、ゆっくりと音をたてないように階段を降りていった。

「有希、どうしたの？」

いつの間にかリビングにいたオレに母が気づく。

「もう寝たのかと思った。」

「とうさんは？」

「書斎に籠ってるわ。何かいいアイデアでも思いついたんじゃない？」

「ふ～ん・・・・」

オレは気のない返事をした。

「なにか言いたいことがあるんじゃないの？」

母にそう聞かれたが、オレは何が言いたいのか自分でも良く判らなかった。ただ、母ならオレが何を言いたいのか判るのではないかとぼんやりとだが考えていた。

「有希、ちょっといらっしゃい。」

母はそう言ってオレを両親の部屋へ連れていった。

母は真っ暗な部屋へ入っていくと白い壁に反射するように置かれた白熱灯のライトだけをつけた、するとオレンジがかった明かりの

中で壁に掛けてあるセーラー服がオレの目に飛び込んできた。
「この前、有希が白鴻女学園を受験した後、急に気になって引っ張り出してみたの。白線が少し黄ばんでたけどクリーニングしたらだいぶきれいになったわ。」
母はそう言って自分の青春が詰まっているであろう制服を愛おしそうに撫でた。

オレはまるで吸い込まれるように部屋へ入り、壁のセーラー服に近づいていった。なぜか床が柔らかくなったような感覚がして足元がおぼつかない。頭は思考を止め、まるでこの部屋だけが異空間のように現実味を失ってしまったようだ。
オレは夢を見ているのだろうか・・・本当のオレは2階で寝ていて、階段を降りてきたのは夢の中のオレなのではなかったのか？
オレはいつの間にか母と並んで壁のセーラー服を見つめていた。
「有希・・・ちょっと着てみない？」
「え？！」
驚いてはみても、それも現実感がなかった。
「有希はもう入学することに決めてるんでしょう？」
そう言われるとそんな気もする。オレはいったいどうしたいんだろう・・・
「だったら一度着てみた方がいいんじゃない？入学したら毎日着て行くんだから。」
「うん・・・」
オレはいつの間にかそう答えていた。

着ているスウェットの上下を脱いでいく。なんだか手の感覚もまるで自分のものじゃないみたいだ。オレはブリーフ一枚だけになった。
「そのままでもいいけど、着にくいかもしれないわね。ちょっと待ってて・・・」

母は自分のタンスの引き出しを開けてスリップを持ってきた。それを手にとったオレはそのツルツルする初めての感触に身体が熱くなってきた。

どっちが前か解らずにいると、母が両手にスリップを裾からたくし上げ、オレに手を通すように促した。オレは両側の肩ヒモに腕を通すと、真ん中に頭を入れてかぶるようにした。そして身体にそって滑らせながら降ろし、やっと着ることができた。細身の母のスリップは少し小さく、腰とお尻の部分が少し窮屈だった。

オレがスリップを着ると、母はセーラー服をハンガーごと降ろしてベッドにそっと置き、スカートを外して横のジッパーを降ろしオレの足元に開いた。オレが片足ずつスカートに足を通すと母はスッと持ち上げて腰の横の部分に付いたホックを留め、ジッパーを上まで上げた。

こんどは上着だった。これも横のジッパーを上げた状態ではどこがどこなのかわかりにくかった。オレは母の指示に従って右腕を通し、左腕を通し頭を入れた。しかしその状態ではまだ不安定だった。横のジッパーを降ろし、胸の三角のペラペラした部分をホックで留めて裾を少し引っ張ると、やっとセーラー服の形に安定した。そして両方の袖のホックを留めたが、母の制服ではさすがに手首の部分がきつかった。

最後は三角に折ったスカーフを衿の下に通し、胸元でリボンのように結ぶと完成だった。

だが、母はしきりにスカートの腰の位置を気にしている。

「やっぱり有希は男の子だから腰の位置が違うのねぇ。サスペンダーを付けた方がいいかもしれないわ。白鴻の制服は女の子でも腰の位置が低い娘はスリップが見えないようにサスペンダーで調節するのよ。」

母はとりあえずちょうどいい場所でスカートを待ち針で固定すると少し離れてオレの全身を見た。

「やっぱり思ったとおり似合ってる。かあさんが若いころにそっくりよ。・・・ちょっと待って・・・」
母はベッドの脇に置いたバッグから携帯を取り出して写メを写した。

「さあ、こっちに来てごらんなさい。」
母は後ろからオレの肩を両手で支えて部屋の片隅へと連れていく、オレはまるで歩き方を忘れたようにフラフラと肩を支えられながら誘われていく。そしてオレと母は姿見の前に立った。

そこにはセーラー服を着た少女がいた。もしも後ろに両肩を支えている母がいなければ、その手の感触をオレの肩が感じていなければ、その少女が自分なのだとは、とても信じられなかっただろう。
「ほら可愛いでしょう。」
母の手がオレの頭を撫でると、鏡の中の少女は恥じらいに頬を紅潮させた。
オレの耳の中ではドクドクと心臓の音が鳴り響いていた。胸元に目を移すとセーラー服の左胸が鼓動で大きく波打っている。オレは喉がカラカラで声を発することも出来そうになかった。股間もまたブリーフの中でギンギンに硬くなりドクドク脈打っている。
「どう?かあさんが言ったとおりでしょう。」
「・・・ぅ・・うっ・・・」
オレは返事をしようとしたが、やはり上手く声が出なかった。オレはゴクリと喉を鳴らした。
「これなら有希が男の子だと思う人はいないと思うわよ。安心した?」
オレが小さくうなずくと、鏡の中の少女もコクリとうなずいた。

第3話　決断　オレは女子になる！

朝になって目を覚ますと、昨日のことを思い出した。
あれは夢だったのだろうか？それともオレは本当にセーラー服を着てしまったのだろうか？
「あっ！」
布団の中で少し身体を動かしたオレは股間に違和感を覚えた。スウェットの中に手を入れてみるとブリーフが濡れていた。
「あーぁ・・・」
慌てて布団をめくりスウェットとブリーフを脱いだ。オレは久しぶりに夢精していた。ブリーフの中には精液がドロリと溜っている。
オレは急いでブリーフに付いた精子をティッシュで拭き取って、汚れたペニスも拭いた。

拭き終ったブリーフをもう一度穿いたが、濡れたブリーフはなんとも気持ちが悪い。かといって夢精したことを知られるのも恥ずかしいから穿き替える事もしたくなかった。仕方なくブリーフの中にティッシュを忍ばせて自然に乾くのを待つことにした。

しかし、中1でオナニーを知ってからは夢精などしたことがなかったのに、よほど興奮する夢でも見たのだろうか？そういえばセーラー服を着たオレは股間を硬くしていたことを思い出した。やはりあれは夢だったのか？セーラー服を着る夢を見て興奮したのだろうか？それはそれで恥ずかしいことだと思った。オレには女装趣味などない。

オレが一階へと降りて行くと、母と妹はすでに起きていた。
「おはよう・・・」
オレがいうと、母も妹も「おはよう」とかえす。いたって普通の朝

だった。
やはりあれは夢なのか?

そんなことを考えていると、朝食の用意をしていた母が
「有希、昨日の写メ送っといたから。」という。
「写メ?」
「ほら昨日セーラー服着て写したやつよ。有希の携帯に送っておいたから。」
「え?」
やはりあれは夢じゃなかったのか!オレが驚いて立ち尽くしていると
「え?!お兄ちゃんセーラー服着たの?!あたしにも写メ見せて!」
妹は無神経にはしゃぎだした。
それを聞いた途端、オレは言い様のない恥ずかしさと同時に、無性に悔しさがこみ上げてきた。

「・・・うっ・・・あ・・あれ・・・?」
急にオレの目から涙があふれだした。
「あ!お兄ちゃん泣いてる~!おかあさん、お兄ちゃん泣いてるよぉ!」
麻衣の声が大きく響く。オレはオレで、なぜ自分が泣いているのか自分の気持ちが良く判らなかった。ただ涙が後から後から溢れてくる。
「麻衣、あなたちょっと自分の部屋に行ってなさい。」
母は妹を2階へ追いやると、オレのところに来て、オレの身体を抱きしめた。
「有希・・ごめんね。かあさん悪かった。有希がそんなに不安だったって気付かなかった・・・」
「・・・うっ・・ううっ・・・」
オレ自身も気付かなかった。オレは不安だったのか?たしかにそうなのかも知れない、オレはこのところ感じていた胸を締め付けるよ

うな漠然とした不快感が、不安からきたものだと思うと少し落ちついてきた。母親の胸で泣くなんて子供のころ以来だった。オレはしばらくの間、赤ん坊のように母の胸で泣いた。

　泣いて落ちついたオレに母が言った。

「有希、あなたが嫌なら白鴻に行かなくてもいいのよ。一年間勉強して来年またどこかを受けてもいいし、何かやりたい事があるならそれでもいいし・・・」

オレは少しの間考えてみたが、昨日セーラー服を着た時に感じた気持ちに嘘はつけなかった。

「・・・ううん・・・オレ行くよ・・・昨日の事が本当にあったのなら、オレ昨日決めたから・・・」

「ほんとにそれでいいの？」

「うん。」

オレははっきりと頷いた。もう迷いは無くなっていた。オレは・・・

オレは・・・

「それじゃぁ、かあさん今日、白鴻に連絡しておいていい？」

「うん。」

オレは笑顔で頷いた。

　オレは・・・女子高生になるのだ。

―――――――――――――――――――――――――――――
―――――――――――――――――――――――――――――
――

　オレは登校するとすぐ、担任に白鴻女学園に行くことにしたこと

を告げた。
「そうか・・・大変だろうが頑張れよ。卒業までは校長も全面的に協力するといってたからな。」
「はい。よろしくお願いします。」
何をしてくれるのかは判らなかったが、オレは深々と頭を下げた。

　昼ごろに母から連絡があり、明日いちど母と共に白鴻女学園に行くことになった。
携帯電話を切ってから、ふと今朝のことを思い出した。オレはもう一度携帯を開き、母が送った写メを見た。

　そこにはセーラー服を着たオレが写っていた。
写メのオレは髪の毛が少々短すぎる以外は女の子にしか見えない。オレはオレがこんなに女っぽいなんて、今までまったく知らなかった。おそらく、とうさんも、かあさんも、麻衣も知っていたに違いない。だからオレが女子高生になると言っても驚きもしなかったのだろう。

　そういえばオレは今朝、麻衣の言葉に泣いてしまったのだった。悪いことをしてしまったと思った。きっと麻衣も気にしているに違いない。オレは帰ったらすぐ麻衣に謝ろうと思った。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーー

　家に帰ると玄関に妹の靴があり、帰ってきているのを確認したオレは麻衣の部屋に行こうと階段を上がりかけた。

しかし、途中で気が変わり、両親の部屋に向かう。ドアを開けてみると誰もいなかった。壁にはあのセーラー服がきれいに掛かっている。

オレは壁の方へ近づき、ハンガーを掴んでセーラー服を降ろした。手にしたセーラー服は思ったよりしっかりとした生地で重みがあった。

オレは詰め襟の学生服を脱ぎ、ベルトを外してズボンも脱いだ。そしてカッターシャツも脱ぎ、シャツとブリーフだけになった。タンスの引き出しに目が向かう・・・しかしさすがに母の下着を勝手に着るのは気がとがめた。結局シャツの上から着ることにした。

ハンガーからスカートを外して穿いてみる。これはそんなに難しくはなかった。ただどちらが前か良く判らなかったが、確か母が左側で留めたのを思い出して、左にホックを留めてジッパーを上げた。

上着はそれよりずっと難しかった。何といっても衿がペラペラしているし、脇のジッパーを開けて両腕を袖に通し、被ってみたが頭がつっかえてしまった。訳が判らずもう一度脱いで見てみると、胸の三角の部分のホックを留めたままにしていたのに気がついた。

今度は胸の部分も外して着てみると、ちゃんと頭が出てきた。胸の三角の布を衿の内側に2箇所のホックで留める。そして脇のジッパーを下げて何とか着ることができた。

そこまでは何とかなったものの、スカーフがどうにも決まらない。青いスカーフを三角に折って衿の下に通してみるが、肩の部分を通して前に持ってくると上手く衿の中に納まらない。オレは思い出して昨日の写メを見てみたが、写真ではスカーフは衿の中にきれいに

納まっていた。結局それは最後までどうすればいいのか解らなかった。仕方なくオレはそのままくくってしまった。

鏡の前に立ってみると、昨日とは違って妙に現実味があった。昨日は少し薄暗い中で見たためか、まるで少女にしか見えなかったが、今見てみるとそこにいるのはやはりオレ以外の何者でもない。しかも鏡の中のオレは、まるで茹だったように真っ赤な顔をしていた。

オレはベッドに座り込んで、しばらく気持ちを落ち着けようとした。ふと見ると、フレアスカートの中で足が開いていて妙にだらしなくみえた。オレは急いで足を閉じたが、こんどはスカートの中で素足の太ももが触れて変な感じだ。それに、足を閉じると股間の物の存在を改めて感じてしまう。

そうだ、オレは女装してるんだ。
そう思うとなんだかいたたまれなくなってくる。男がセーラー服を着るなんてありえない。もし今誰かに見られたら・・・そう思うとすぐにでも脱いでしまいたくなった。

しかしオレはこの恰好で3年間くらしていかなければいけない。しかも女ばかりの中で、自らも女として・・・そう考えると自分のした決断がおそろしく無謀なことのように思えてくる。
「・・・はぁ・・・」
思わずため息が出た。

もう一度、鏡の前に立ってみたがやはり結果は同じだった。昨日の鏡の中の少女は魔法が解けて、ただの女装した男の子になってしまった。男のオレが取って付けたようにセーラー服を着ているだけだった。その姿は惨めでだらしなく、スカートはずり落ちて上着との間にシャツが見えてしまっている。オレは女になれると本気で思

っていた自分が馬鹿に思えてきた。

本当はセーラー服を着た姿で、妹に朝のことを謝るつもりだったが、こんな姿ではとても無理だ。今すぐ脱いでしまおう。そして女学校に行くなんてやめよう。

そう思った時、2階から階段を降りてくる足音が聞こえてきた。その軽い足音は階段を降り玄関のあたりでしばらく止まると、こっちに向いて歩きだした。

「お兄ちゃん・・・帰ってるの・・・？」

ヤバい・・・すぐに着替えなければ！

頭ではそう思っていても、身体が金縛りになったように動かなかった。足音はどんどんこの部屋に近づいてくる。

足音は部屋の前で躊躇するように止まった。

“トントン”とドアをノックする音・・・

「お兄ちゃん・・・いるの・・・？」

小声で聞く妹の声。

（このままドアを開けずに行ってくれ！）

オレはまったく動けないまま、心の中で必死に祈っていた。

しばらくそのまま何も起きなかった。オレの願いが通じたかと思った瞬間、小さくドアが開き妹の顔がのぞいた。オレは目が合う前にうつむいて目を硬くつぶった。

終った・・・もう妹に謝るどころの話ではない。今のオレは妹から見れば、ひとりでこっそりセーラー服を着ていた変態兄貴に見えるに違いない。

オレはうつむいたまま、時間が過ぎるのをひたすら待った。このまま妹が幻滅して去っていくのをひたすら待った。

しかし時間が経ってもドアが閉まる音は聞こえなかった。もしかして妹はドアを開けたまま行ってしまったのではないだろうか・・・そう思いそっと目を開けてドアの方を見たオレは、いきなり目の前にいた妹に心臓が止まりそうに驚いた。

「・・・あ・・あぁ・・・・」

オレは何か言い訳しようとしたが、言葉がまったく出てこなかった。妹は黙ってオレを見ている。オレは目を逸らしたかったが、それも出来なかった。軽蔑の言葉でもいい・・・何か言ってくれ・・・！そう思った時、やっと妹が口を開いた。

「・・・お兄ちゃん・・・やっぱり似合ってる・・・」

それは思ってもみない言葉だった。

「・・・そ・・・そんな・・・そんな・・はずは・・・」

オレはやっとかすれた声でそう言った。

しかし妹は少しはにかんだような笑顔でオレを見たまま

「・・・ううん・・お兄ちゃん可愛いよ！」と言った。

「・・・ダ・・ダメだよ・・・こんなの・・ただの女装だ・・・女になんか・・見えるはずがない・・・」

「お兄ちゃん、ちょっと座って！」

オレは言われるままドスンとベッドに腰を降ろした。ヒザがガクガクしてまるで操り人形にでもなったみたいだ。麻衣はオレを座らせると、着ているセーラー服をあちこちいじりだした。衿を後ろにずらしたり、両肩をつまんで持ち上げたり、上着の裾を引っ張ったり。そしてスカーフをほどくと、きれいに細く折り上げ、衿に通して強めに前方に引っ張ると、胸の前できれいに結んだ。

「立ってみて！」

オレが立つと妹は上着の裾をめくり、スカートの腰の部分をクルク

ルと折り曲げると、グイッと上に引っ張り上げた。そして上着の裾を整えると、オレを鏡の前に引っ張った。

オレは思わず目を閉じてしまった。正直見たくなかった。また女装したオレを見て惨めな気持ちになるのはまっぴらだった。

「お兄ちゃん、目を開けて！ほらっ可愛いでしょう？」

オレはその声にコワゴワ目を開いてみた。するとそこにはさっきとは全然ちがうオレの姿があった。多少ボーイッシュには違いないが、それは女の子に見えなくはなかった。

どうやら今度は妹が魔法をかけたらしい。オレは驚いて麻衣を見おろした。

すると麻衣はこう言った。

「お兄ちゃん、女の子の服はね、ただ着ただけじゃダメなの。いつも気を使って服がきれいに見えるように着てなきゃいけないのよ。」

たしかにさっきまでとは全然違って見える。

「お兄ちゃんみたいな着方じゃ変に見えてもしかたがないわ！衿はグチャグチャだし、肩の位置は合ってないし、スカートの腰の位置もぜんぜん違うんだもん。お兄ちゃんはやっぱり女の子とは少し体型が違うんだから、普通の娘よりもっと気を使わなきゃ！」

オレは麻衣に言われてはじめて服を着るにも気を使わなければいけないと知った。

「・・・お兄ちゃん・・・今朝はごめんね。・・・あたしなんか騒いじゃって・・・」

そんな・・・謝らなければいけないのはオレの方だ。

「いや・・・麻衣は気にしなくていいんだ・・・オレちょっと気持ちが参ってたみたいで・・・それに・・・恥ずかしかったし・・・」

オレは麻衣の頭を撫でてやった。

「着かた教えてくれてありがとう。」

オレが言うと、麻衣は

「ううん、またわからないことあったら聞いて！」
と言って微笑んだ。

「そうだ！お兄ちゃん、おとうさんにも見せようよ！」
オレはそれを聞くとさすがにうろたえた。
「・・・い・・いや・・・やめよう・・・はずかしいよ・・・」
「何いってるの！どうせ女子高生になったら毎日着るんじゃない。
そんなに恥ずかしがってたらダメよ！」
たしかに妹の言うとおりだった。どうせそう遠くないうちに父にも
見せることになるのだ。

麻衣はオレをリビングで待たせると、書斎に父を呼びに行った。
戻ってきた麻衣の後ろには、マスクを外しながらリビングへ入って
くる父がいた。
父は驚いたように目を見開いてオレを見た。
「有希か？驚いたな・・・」
オレは恥ずかしさに頬が熱くなるのを感じながら聞いた。
「・・・オ・・オレ・・・変じゃないかな・・・」
「いや・・・お前がこんなに美人だとは思わなかったよ。出会った
ころのかあさんにそっくりだ。」
そういえば母もそんなことを言っていた。
「・・・オレ・・・信じていいのかな・・・ほんとに・・・女の子
に・・・見えるのかな・・・？」
「ああ、十分女の子に見えるよ。なあ麻衣。」
「うん、お兄ちゃんきれいだもん。自信もっていいと思うよ。」
オレはすごく恥ずかしくて、そして何だか嬉しかった。

第４話　困惑　オレが病気?!

次の日、朝からオレはドキドキしていた。今日は母と一緒に白鴻女学園に行くことになっている。昨日の事で少しは精神的に落ちついたとはいえ、まだまだ女になる自信はなかった。

オレは学生服を着て、母が運転する車で白鴻女学園へ向かった。白鴻女学園に学生服を着て行くのはこれが最後かもしれない。

白鴻についてはじめて今日も普通に授業がある日なのだと思い出した。校庭には白鴻女学園の女生徒たちが体育の授業をしていた。オレの中学では体育の授業の時、女子たちはモモまであるスパッツを穿いていたが、白鴻の女生徒たちは体操服に昔ながらのブルマーを穿いていた。その股の形はパンツと変わらず、年上の女子高生の艶かしい太モモが丸出しになっている。角度によっては力を入れた時に内股が凹んでブルマーとの間にすき間が出来、パンティーまで見えそうになる。

オレはこんな体操着を着なければならないのかと思うと、また心配になってきた。

オレと母が正面の入口から入ると受け付けで用件を聞かれた。母はただ校長先生と会う約束になっている事を告げた。

しばらく待っていると、バーコードの教頭が現れた。教頭と母の挨拶が終ると、教頭はオレたちを校長室へ案内した。

校長室に入るとそこには白髪の校長先生がいた。こっちは教頭とは違い白髪だがフサフサだ。それに痩せている教頭とは違い、かなり太っている。

「やあ、よくいらっしゃいました。戸田君でしたね。」
「はい。戸田有希です。」
オレは校長に挨拶した。

「さっそくですが、有希君の入学に関してお話します。ご存知のとおり我が校は女子校なので、有希君にも女子として入学していただくのはすでにお話したとおりです。」
「はい・・・」
母とオレは同時に返事をした。
「ただですね、有希君が男の子だとバレなければいいのですが、もしもバレた時の事も考えておかなければなりません。その件について教頭から説明いたします。」
校長にそう言われ、教頭は自分の横に置いて用意していた分厚い封筒の中身を出して、テーブルの上に置いた。

「えーそれでですねぇ、考えたのですが、有希君は性同一性障害ということにして頂きたいのです。」
「性同一性障害？」
「はい。性同一性障害とは、体は男の子なのに、心は女の子という病気です。」
「え？それってニューハーフとかですか？」
「まあ、そういう人もいますが、もう少し違う意味合いのものですかねぇ・・・ま、そこらへんはお互い、追々勉強するということで・・・」
どうも教頭も良くは解ってないようだ。

「有希君が当校を受験したのはこちらにも責任がありますので、こちらで出来るだけサポートさせて頂くつもりです。しかし、有希君が男とバレてしまい騒ぎにでもなれば、当方としても収拾出来なくなる可能性もあります。そうなった時には有希君は性同一性障害で

あるという設定で行かせて頂きたいのです。」
なんだかドラマの設定みたいだと思った・・・さしずめオレは役者ってことになるのだろうか・・・

「最初からそう設定しておけばイザという時に慌ててボロを出す心配も少なくなると思いますし、当校といたしましても人権に配慮する学校という良いイメージに持って行くことも出来ると思うのです。」

「なるほど、それはいい考えですね。それなら有希を安心してお任せできます。」
母はそう言ったが、演じるのはオレなのだ。オレとしてはとても安心という訳にはいかない。
「つきましては、これが性同一性障害に関する資料ですので、イザという時のために良く読んでおいて下さい。」

そう言って渡されたのは例の分厚い封筒の中身だった。一番上には『性同一性障害に関する資料』と書いてあった。
「ちなみに本当の事を知っているのは、校長と教頭の私だけです。他の先生方は有希君が女の子でないことは知っていますが、全員有希君のことを性同一性障害者だと思っています。」
これはやっかいな設定になってきた。生徒の間では本当の女を演じ、先生との間では性同一性障害の男の子が女を演じているということになるか?何がなんだか良くわからなくなってきた。

「ところでお母様、有希君の名前はどうされますか?学校の中では女の子の名前に変えることも出来ますけど。」
「そうですねぇ・・・有希はどうしたい?変えた方がいい?」
「う~ん・・・そのままじゃダメかなぁ?女の名前でもおかしくない気がするけど・・・」
「そうねぇ、時々間違ってユキって呼ばれることもあったわね。」

そういえばそんなこともあった・・・

「僕このままでいいです。」

なんだか面倒なことになってきたのに、名前まで間違わないように注意するのは大変だ。

「解りました。それではそのまま有希さんということで行きましょう。」

教頭はいとも簡単にそう言った。

「それではこれから家庭科室の方に行きましょう。家庭科の先生が採寸を行って下さることになっていますので。」

「採寸？」

オレは思わず聞き返した。

「あ、そうだ。言い忘れていましたが、ご迷惑をおかけしていますので、有希君の制服等は当方で用意させて頂きます。制服を作るための採寸です。」

校長室を出るとちょうど休み時間になっていた。その結果、家庭科室に行く途中で多くの生徒たちとすれ違うことになってしまった。女生徒たちがオレたちをジロジロ見ている。それはそうだ、学生服の男の子と母親が教頭先生と一緒に女子校の中を歩いているのだから、何事かと思われても仕方がない。オレは律儀に学生服を着てきたことを後悔していた。もっとも彼女たちがいくら興味を持ったとしても、まさかオレが女として入学してくるなんて突飛な想像をした人は一人もいないだろう。

家庭科室に入ると一人の女の人がいた。その人が家庭科の松本たか子先生だった。

「こんにちは戸田さん、今まで男の子として生きてきて辛かったでしょうね。」

オレはそう言われてドキッとした。何の心の準備も無いまま、いきなり性同一性障害の設定に突入していたのだ！
「は、はい・・・」
オレは何とか気持ちを落ちつかせようとした。

「私はちょっと用がありますのでこのへんで・・・松本くん、終ったらお二人を駐車場まで案内してあげて下さい。それじゃ有希君、お母様、私はこれで、また何かご不明の点がありましたら電話ください。」
そう言って教頭は帰っていった。
「戸田さんは名前はそのままにしたの？」
「はい。愛着もあるので。」
「そうよね、それに有希って女の子の名前でもカッコイイものね。」
オレは何とか笑顔でごまかすしかなかった。まだ性同一性障害がどういうものかも良くわかっていないのだ。
「それじゃ上着を脱いでみて」
オレは言われるままに学生服の上着を脱いでカッターシャツになった。

すると松本先生がいきなりオレの脇に両手を入れてバストを計りだした。オレの体に頬が触れ、オレの心臓は一気に速さを増した。
メジャーを前で合わせた先生が
「そんなにドキドキしないで、目盛りが合わないわ。」
と冗談っぽく言うと、オレの股間が充血し硬くなっていく。

や、やばい・・・心が女なのに女に興奮してたらおかしいじゃないか！
オレは必死に萎えそうな事を頭の中で考えた。

松本先生は性同一性障害に興味があるのか採寸しながら色々聞い

てくるので、オレは気がきじゃなかった。
「戸田さんは家では女の子の服を着てるのかしら?」
「は、はい・・・」
いきなり聞かれ口から出任せで答えてしまった。その時、前に立っている母と目が合い急に恥ずかしくなって顔が赤くなった。しかし採寸中の先生はそのことに気付かなかったので助かった。
「下着はどうしてるの?女ものなの?」
「い、今はブリーフです・・・」
これではいつもは女ものを穿いていると言ってるようなものだろうか?
「ブラジャーもする?」
ほら、やっぱりパンツは女ものだと思われてしまった!
「まだ、したことないです・・・」
これは本当のことだ。
「あら、そうなの。それじゃサイズを教えておいてあげなきゃね。」
先生はメモ帳にサイズを書きながら
「あなたのサイズは70のAね。70っていうのはアンダーバスト、あなた場合胸の下の部分ね。Aはカップの大きさ。もっともAでも余っちゃうでしょうけど・・・」
そこまで言って急に先生の顔色が変わった。
「あ、ご、ごめんなさい!気にしてるわよね。」
そして後ろを振り返り
「お母様、申し訳ありませんでした。有希さんを傷つけるつもりはなかったんです!」
必死に謝る先生を母がなだめている。
オレはいったい何が起こったのか判らなかった。オレはぜんぜん傷つけられたような気はしなかったが・・・

松本先生は結局それ以降あまりしゃべらなかった。
オレたちは採寸が終ると先生に駐車場まで送ってもらった。先生は

最後まで恐縮し、何度も謝っていた。
車が動き出すとオレは母に聞いた。
「あの先生何を謝ってたのかな？」
「ふふっ、有希は男の子だから解らなかったのね。ブラジャーのＡって一番小さいサイズなの。有希には当然胸は無いから先生はＡでもぶかぶかだって言ったんだけど、それは女の子にとってはすごい侮辱なのよ。」
「へ～・・・」
オレは返事をしてはみたもののそれでも良く解らなかった。
「男の子はよく胸が小さい女の子にペチャパイって言うでしょう？」
「うん・・・」それはオレも一回や二回・・・いやもっと言ったことがある。
「先生は悪気はなかったんだけど、思わずあなたがペチャパイだって言ってしまったようなものなの。心が女の子だと思ってるから傷つけたと思ったのね。」
オレはその説明でやっと先生が謝っていた意味がわかった。しかし、オレは胸が無くても当たり前だと思っていたが、性同一性障害の人は男でも胸が無いのがショックなのだろうか？
「有希もブラジャー買わなきゃね。Ａの７０。」
胸も無いのにブラジャーをするのかと思うと、なんだかオレは複雑な気持ちになった。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーー

　オレと母は、そのまま車で中学へ行った。白鴻での話をうちの中学にも伝えなければいけなかったからだ。

オレと母は校長室で校長と担任に、さっき白鴻で話してきたことをそのまま伝えた。すると校長が

「いや私も、もしバレた時のことが心配だったのですが、性同一性障害とはうまいことを考えたものですなあ。」とやけに感心していた。

「あー今後は、当校でも卒業まで有希君が白鴻女学園に行っても困らないようにサポートするつもりなのですが、うちもその性同一性障害という設定に乗せてもらいましょう。」

オレと母は意味がわからず顔を見合わせた。

「あー実は、白鴻女学園といえばお嬢様学校ですから、有希君がその中に入っても困らないように、当校のマナーに詳しい三吉先生にお嬢様教育をしてもらおうと思っていたところなんです。」

「あら、それは有り難いですわ。」

母はそう言ったが、オレはまったく有り難くないと思った。なにしろ三吉といえば口うるさくて有名な家庭科の教師だ。男のオレはほんの少ししか習ったことはなかったが、女子たちは三吉のことを影でクソババアと呼んでいたくらいだ。

「あーただ三吉先生に頼むとしても、なぜ男子の有希君を女として教育するのか理由に困っていたんです。しかし、有希君が実は性同一性障害だったということにすれば、高校からは女として生きていくのだからという十分納得できる理由になります。」

なんだかどんどん面倒な方向に行ってる気がしてきた。オレは逆らうことが出来ない大きな潮流に呑み込まれてしまったみたいだ。

だが回りはもう勝手に動き始めている。オレは情けないことに、舞台の上でストーリーも判らないままおろおろしている役者だった。オレに出来ることといえば何とか早くストーリーを知ることくらいしかなかった。

とはいえ、この舞台に本当にストーリーがあるのかどうかもオレには想像すら出来なかった。

第5話　教育　オレは女にされていく

オレの中学も多分にもれず小子化の影響で教室がいくつか空いている。そのうち家庭科準備室の一室がオレのために用意された。オレはこの教室で女になるための教育を受けることになる。校長はお嬢様教育と言ったが、そんなのは女の子が受けるもので、男のオレにとってはお嬢様より前に、まず女の子にならなければならない。

受験も進んで、3年生はもうほとんど授業は行われていなかった。特に家庭科は他の学年もそんなに授業はなかったから、オレはほとんど毎日三吉先生に教育されることになった。

まずいことに三吉先生はオレが性同一性障害だと知らされていたから、オレは自ら進んで女になりたい少年ということになっている。おかげで三吉の女性化教育は容赦がない。

オレはただちょっとしたマナーを習うだけだと思っていたが、そんな生易しいものではなかった。まずこの教室に入ると女子の制服に着替えるように強制された。もっとも強制と感じているのはオレが本当はその気がないからで、三吉はオレがずっと女子の制服を着たくてたまらなかったと思っているのだ。だからオレは嫌がるそぶりも見せることもできない。

「これはあなたの為に用意したものよ。卒業生のお古だけど結構きれいでしょう?」

「ほんとに・・・着てもいいんですか?」

「ええ、もちろんよ。あなたずっと着たかったんでしょう。この制服はもうあなたの物だからいつでも着ていいのよ。」

「わあ、ありがとうございます!」

もちろん着たいハズはなかったが、喜んでいるように見せねばならない。

オレは高校のセーラー服を着ることにはすでに観念していたが、まさか中学のセーラー服まで着ることになるとは思ってもみなかった。これまでの中学生活の3年間ごく普通に、時にはドキドキしながら見ていたセーラー服に袖を通すのは変な感じだった。

中学の制服は、清楚な白鴻女学園のものよりずっと可愛らしいデザインをしている。衿と胸元には3本の白い線が縫い付けてあり、スカーフは赤い色でくくらずに胸元の筒状のものに通すだけだ。白い筒には中学のマークが入っている。

オレはこの部屋の鍵を渡されていつでも入ることが出来た。もうひとつの鍵は三吉先生だけが持っているから、鍵をかければ三吉先生以外誰も入ってくる心配はない。窓にもカーテンを閉めていたから、オレはここでは安心して女の子になることが出来る。

この部屋に入ると、まずオレは学生服を脱いで女性物の下着をつける。ブリーフを脱いでパンティーを穿く。さすがに小さいパンティーでは勃起した時にまずいので、学校ではお腹まであるものを穿いている。ブラジャーも母に買ってもらった中学生らしい白いブラジャーだ。ホックを前で嵌めて後ろに回せば簡単だが、練習なのだから出来るだけ後ろで留めるように言われている。

ブラジャーには金属のワイヤーが入っているが、オレの胸には引っかかるものがないから、腕を上げたりするとすぐにずり上がってしまうのが悩みの種だ。
ただ着けてみてもペタンコで何とも様にならない。仕方なくカップの中にストッキングを入れてみた。
その上に白いスリップかレースがついたタンクトップを着る。実

際にはTシャツなど着ている女子も多いらしいが、オレの場合、女らしくなるためにやっているのだからと、女の子っぽい可愛らしい下着しか与えられていない。

中学の制服のスカートは、外見は白鴻女学園のと同じようなプリーツスカートだったが、ワンピースのようになったジャンパースカート形式だった。このスカートは丈が変えにくいから、スカートを短くしたい女子には不評だったが、女子とは腰の位置が違うオレにはスカートだけのものよりずっと着やすかった。

上着は衿が大きめで袖も少しふっくらと作られていて、高校の制服より少女っぽいため男のオレが着てもなんとなく可愛いく決めやすい。赤いスカーフはくくる必要がなく簡単だ。練習に着るにはちょうどいいかもしれない。この制服の前の持ち主は胸が大きめだったようで、オレのAカップにストッキングを突っ込んだ胸では少しだぶついてしまう。ブラジャーをBかCにして多めに詰め物をしたら丁度いいかも知れないが、母に大きいブラジャーを買ってくれなんて恥ずかしくて言えるハズもない。

オレはこの制服を着て、立つ姿勢や、座った時の足の形や、歩き方や、その他ちょっとしたこまかな事を、いちいち三吉に指摘されて直された。下にあるものを取る時もヒザを開いてはいけないとか、カップを持つ時に小指を立てるのはやりすぎだとか、椅子に座る時は背中をつけてはいけないとか、うるさいことこのうえない。

言葉も三吉の前では女言葉をしゃべらなければならなかった。しかも文法まで指摘される始末で、クラスの女子だってこれほど丁寧なしゃべり方をする者などいないだろう。

家庭科準備室には調理場もあるし、ミシンやアイロンも置いてあ

る。三吉はオレに料理や裁縫や編み物まで教えるつもりらしい。料理は嫌いじゃないが、裁縫などはほとんどやった事がない。

三吉はお茶や華道や書道もたしなむらしい。そんな事までオレに教えるつもりなのだという。どうせ卒業までだと思っていたが、オレは甘かったようだ。卒業した後も、春休みになっても教えてくれるらしい。まったく有り難い話だ。

こんなに大変な思いをするのなら、ちゃんと受験勉強をして普通に男として高校に通えば良かったと思うが後の祭りだった。追加入試をやるところもあるらしいから、今からでも間に合うかもしれないとも思ったが、回りが全部オレのために動いているのに、今さらそんなことはとても言えなかった。

三吉は本気で入学までに男のオレをお嬢様に仕立て上げるつもりらしい。

――

家では家で、母が用意した女の子の服を着なければならなかった。女の子の服といっても、Tシャツにパンツのように男のものと大差ない形のものもあったが、そういうのは少ないうえ、ご丁寧にデザインや色が可愛いものを用意してくれていた。

毎日着るものが用意されていたから、自分の好みで選ぶことも出来なかった。しかしこれもオレが女の子の服に慣れるために、やっ

てくれているのだから文句をいうことも出来ない。
オレはその日置いてあった服がどんなに着たくなくても着るしかないのだ。

ワンピースなどは比較的着やすかった。しかしブラウスにスカートとなるとやはりスカートの位置がどうしても下になり、ともするとブラウスの裾がはみ出してしまう。また、着やすいかと思っていたパンツスタイルも案外むずかしかった。女の子と比べたらお尻が小さいからか、どうしても上手く着こなせず男っぽさが出てしまう。

家ではどうしてもくつろいでしまうが、そんな時に指摘するのは妹だった。
「お兄ちゃん、またヒザが開いてる！女の子なのにみっともないよ！」
さすがに妹にまで言われるとオレもつい文句も言ってしまう。
「麻衣だって足開いてるじゃないか。」
「だってあたし子供だも～ん！」
まったく子供のくせに口だけは達者だ。
「麻衣ももうすぐ中学生なんだから、女らしくした方がいいんじゃないのか？」
おれがそう言うと
「う～ん・・・じゃあ、あたしも女らしくするから、お兄ちゃんもその男ことばをやめなさいよ！」
とめざとく指摘してきた。

たしかに三吉には家でもちゃんとした言葉でしゃべるようにと言われているのだが、これればかりは守れずにいた。良い機会かもしれない。
「わかったわよ。わたしもちゃんと女言葉で話すから、麻衣も女らしくしなさいよ。」

「あはは・・・お兄ちゃんもやれば出来るじゃない！」
そう言うと急いで自分の部屋へ走って行った。
「まったく・・・なんて妹なのかしら・・・」
まったく女子校に行くのが決まってからというもの、妹にはおちょくられっぱなしだ。

「有希、麻衣も本当は心配してるのよ。あれでもあなたが女らしくなれるように協力してくれてるんだから。」
「ほんとに？・・・そんなふうには見えないけど・・・」
「本当よ、あなたの服、麻衣も選んでくれてるんだから。優しくしてあげて。」
なるほどそういう事だったのか、かあさんが買ったにしては、どうりで子供っぽい服が混じってると思った。おおかた自分が着たい服を選んだのだろう。今日のこのブラウスとスカートとカーディガンも・・・

「わかった・・・わたし謝ってくる・・・」
オレは階段を上がって奥の麻衣の部屋のドアをノックした。
「麻衣、開けてもいい？」
「・・・うん・・・」
返事を聞いてからオレはドアを開けた、麻衣はベッドに腰掛けていた。
「なに？お兄ちゃん・・・」
「麻衣、さっきはごめん・・・オレ・・いやわたし麻衣も協力してくれてるなんて・・・知らなかったから・・・」
オレは今着ている少女マンガの主人公が着るような胸元にヒラヒラがついたブラウスと、ピンクで白いレース飾りがあるスカートと、レモン色のカーディガンを指して言った。
「これも麻衣が選んでくれたんでしょう？」
麻衣はコクリとうなずいた。

「・・・おかあさんに聞いたの？」
「うん・・・でもこれが麻衣が選んだものだとは聞いてないよ。ただ・・・可愛いデザインだから麻衣が選んだんじゃないかって思ったの。」
「気に入った？」
「・・・うん・・・」
「うそ！」
「うそじゃないわ・・・まあ、本当はもう少し大人っぽい方がいいけど・・・」
「・・・お兄ちゃん！」
急に麻衣はオレに抱きついてきた。
「どうしたの？麻衣・・・」
「お兄ちゃんって、女ことば上手なんだね。」
「ふふっ・・・学校で習ってるからね。すっごく厳しい先生なのよ。」
麻衣はスカートに顔をうずめたまましばらく経ってから言った。
「じゃぁ・・うちでは男ことばのままでいいよ。あたしもうあんなこと言わないから。」
妹の気遣いが嬉しかった。しかし・・・
「ううん・・・いいの・・本当は先生にも、家でも女ことばでしゃべりなさいって言われてたのよ。でもなんだか恥ずかしくて・・・だから麻衣が言ってくれて嬉しかったの。」
オレは思わず微笑むと、麻衣にも笑顔が戻った。
「お兄ちゃんってすごいね。」
「どうして？」
「だってお兄ちゃんどんどん女らしくなっていくんだもん・・・麻衣、お兄ちゃんのこと・・・お姉ちゃんって呼ぼうかな？」
オレはいきなりそんなことを言われドキッとした。オレはそんなに女らしくなっているのだろうか？自分ではよく判らなかったのだが。
「どっちでも、麻衣が好きな方でいいわよ。」

「う～ん・・・じゃぁ・・・お姉ちゃんって・・呼んでいい？」
麻衣は少し照れたように頬を赤くして言った。
「いいわよ、麻衣。」
オレたちはいつのまにか姉妹になってしまったようだ。まあ、姉妹になってもきょうだいであることには変わりはない。
「わたしも麻衣の良いお姉ちゃんになれるように努力するわね。」
「あたしも・・・お姉ちゃんがもっともっと綺麗になれるように協力する！」

オレは自分でも自覚のないまま、どんどん女にされていく・・・

オレにはもはやこの潮流を止める術は無かったし、止めたいのかどうかさえ解らなくなっていた。

第6話　男女　性同一性障害って何？

オレは女になるための勉強とは別に、性同一性障害についても勉強しなければいけなかった。

そもそもオレは勉強をしなかったからこんなめに遇っているというのに、今さらこんな分厚い資料を憶えなければならないとは主客転倒も良いところだ。こんなに勉強熱心なら他の高校にだって行けたかも知れないと思う。

性同一性障害の勉強をしなきゃいけないのは、もしオレが入学してから男だとバレた時に、性同一性障害だという逃げ道を作っておくことになったから、オレは性同一性障害について詳しく知っていなければならなかったのだ。

しかも面倒なことに先生たちはすでに、オレが体は男の性同一性障害者だと知っている。だから先生の前ではオレは女の子になりたがっている女装男ということになる。

とはいえ、オレは家で毎日、高校から渡された性同一性障害の資料を読んでいると、それまで漠然と思っていた性同一性障害のイメージとはだいぶ違うらしいことが解ってきた。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーー

性同一性障害とは簡単にいえば、体の性別と、本人が心で感じている性別が違ものを言うらしい。体は男なのに心は女の場合と、体は女なのに心は男の場合がある。オレが演じるのは前者のほうだ。

性同一性障害は一応病名だが、別に障害を持った人が健康に問題があるわけではない。身体的にはきわめて健康なのだ。そういう意味では病気扱いするのは問題がありそうなものだが、性同一性障害者の中には、自分は病気なのだと思うことで精神的に落ちつく人も多いという。そのうえ、家族や回りの人たちも、病気なのだからと言われると納得しやすいものらしい。本当は違うのだが、精神病のように考えた方がわかりやすいようだ。

性同一性障害とおかまやニューハーフは別だという人もいるが、おかまやニューハーフあるいはホモの片方（時には両方）も性同一性障害という人もいる。中には自分自身でただの女装趣味だと思っている人でも本当は性同一性障害かもしれないらしい。

それどころか普通に男らしく育ち、普通に女が好きで、ちゃんと女の人と結婚して子供までいても、潜在的に性同一性障害のひとまでいるという研究者もいる。

なんだか良く解らない話だが、こういうことらしい。性同一性障害というのは多くの場合産まれた時からのものなのだが、男として生まれれば、親も男らしく育てるし、自分も本当は女っぽい心を持っていても、男らしくしなければいけないと思う。そのうち男としての性格を身に付けて、そのまま男として生活していくのだそうだ。

実際に女でも男の中で育てば男っぽくなったりするから、心が女でも男らしく育てられれば男らしくなってしまうし、体が男なのだ

から男らしくても何も問題ない。

よく格闘技とか男らしいスポーツをする人でおかまやホモの人がいると聞くが、それも子供のころ男なのにナヨナヨしていたから、親に男らしいスポーツをやらされたことが原因かも知れない。

オレは不思議に思っていたのだが、おかまの人の本名が、今どき珍しいほど男らしい場合が多いが、これも男らしい名前をつけたという事は、親が男らしく育ってほしいという思いの現れだから、それに反発する形で性同一性障害が発現するのかもしれない。もし男か女か判らないような名前をつける親の元で育ったら、案外そこまで確固として自分のことを女だとは思わなかったかもしれない。

女の体で男の心を持った性同一性障害の人はほとんどの場合男っぽく、愛する相手も女にほぼ決まっているらしい。自分の心は男だが、男のことが好きな“ホモ”のような人はまずいないらしい。

しかし男の体で女の心を持った人の場合は、普通の女性にあることは全てありうるという。どういうことかといえば、性格がすごく男っぽい人もいるし、自分は女だと思っていても女にしか興味がない“レズ”みたいな人もいるし、中性的な人もいるし、どっちもOKな人もいる。

そういえばテレビで見るおかまやニューハーフの人には、けっこう男前な人がいるが、それは水商売の性同一性障害者だからかもしれない。だって水商売で女を売りにしている人は、本当の女でも性格は男っぽい。つまり良く見るおかまやニューハーフの人は水商売という環境に向いた性同一性障害者なのだ。だから、すごく女っぽい性同一性障害者にはそういう世界にも踏み込めず悩んでいる人も

いるのだそうだ。

　そう聞くと男で女の心を持った性同一性障害者は、なんだか適当に思えるかもしれない。しかし良く考えてみれば、見るからに男らしいのに、自分は女だとしか認識できないということは、それだけ純粋だし、深刻なのだと言える。ただ見た目が納得しにくいので損をしているのだ。女性にも綺麗な子もブスな子もいるように性同一性障害者だって見た目で判断するのは差別なのだ。女にしか見えないから認める。女に見えないから認めないというような種類のものではない。しかし、そういう意味では世間での認識はまだまだのようだ。

　読んでいると、オレは少し性同一性障害というものに興味が出てきた。それは理科とか生物とかは比較的好きだったからかも知れない。性というものは興味深い。

ーー

　性同一性障害になる原因はまだはっきり解っていないらしい。

　一説ではもともと生物はメスの体が基本で、オスは有性生殖のためにオス化したものだという。ほとんど同じ体をお腹の中にいる間にホルモンの作用で脳や、内性器や、外性器をそれぞれの性にしていくらしい。ただし、それぞれの変化させる時期は決まっていて、その時期にちゃんとホルモンが出なかったり、量が少なかったりすると上手く変化せず、そのまま次の段階へ進むのだそうだ。

ドイツの研究では母親の体内にいる時に、母親が強い緊張状態にあったりすると、ホルモンが上手く出ずにそういう子供が多く産まれるという。戦争の後に産まれた子供にそういう子が多かったという研究結果もあるらしい。

また、アメリカの調査では潜在的な性同一性障害者は１００人に２人いるという話だ。ということは５０人クラスなら、２クラスに１人いる計算になる。そうはいってもオレの回りには性同一性障害の人なんて一人もいなかった。とはいえ、潜在的なのだからいたとしても判らないわけだし、自分でも性同一性障害なんて気付かないのだから、もしかしたら、オレが性同一性障害の可能性だって無い訳ではないということになる・・・のだろうか？

オレは性同一性障害の人が自分が女だと気付くのは思春期を向かえてからかと思っていたが、ほとんどの人が物心ついたころかららしい。小さいころは単に女の子の服などを着るのが好きだと思っていたら、思春期になって男の子を好きになると、自分が普通と違うと気付くのだという。ただ、女の人でも恋愛に対する執着度は人それぞれだから、性同一性障害の人でも男が好きにならない人は、たんなる女装マニアと自他共に認識している場合もありえる。

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――

しかし、物心ついた頃から自分は女だと思っているというのは、どんな感じなのだろうか？

小さい頃は親も寛大だろう。男の子なのに多少女の子っぽくても小さいうちは可愛いだけだ。しかし大きくなってくると親も男なら男らしくしなさいとか言うに違いない。そんなふうに言われれば、自分が女の子の服を着たいと思っても、それを我慢しなければいけないのだと考えるようになる。

我慢するうちにそれに慣れてしまえば良いのかもしれないが、慣れなければずっと隠すことになるのだろう。学校でもそんなことがバレれば虐められるかもしれない。本当の気持ちを隠したまま、違和感のある体で生きていくのはさぞかし辛いだろう。

そう考えるとオレはなんだか性同一性障害の人が可哀相に思えてきた。そんな人たちがもし今のオレの立場ならすごく喜ぶのではないだろうか？

だがオレもまた、彼等とは逆に男であることを隠して生きていかなければいけないという可哀相な立場だ。替われるものなら替わってやりたいくらいだ。男なのにセーラー服を着て、女のふりをしたり、性同一性障害者のふりをしなければならない。

やりたくもないのに裁縫やら、編み物やら、お茶やら、お花やら、書道やら教え込まれて、お箸や、テーブルマナーや、はては御中元、御歳暮、お祝、香典まで・・・これではまるで花嫁修行のようだ。

こんなことをされたらオレは白鴻女学園に入学する頃には、さぞかし良家のお嬢様のようになっていることだろう。

一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一
一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一
一一

注意：ここで書いている性同一性障害に関する記述は、大筋では医学的認識にそっていますが、私独自の見解も多く含まれています。
間違っていることは書いていないつもりですが、正確な医学的認識を知りたい方はＷｉｋｉｐｅｄｉａでも参考にしてください。

第7話　着物　オレ淑やかになる

オレは朝起きると着ていたネグリジェを脱いで、きれいに畳んで置いてあるブラジャーを手に取る。そして夜の間外していたブラジャーをしてパンストを詰め込む。その上にスリップを着てから、カッターシャツを着て学生服のズボンを穿き、詰め襟の学生服を着る。

夜寝る時はパジャマの時もあるが、ネグリジェの時もある。パジャマは花柄や赤いチェックなど可愛らしいものがほとんどだ。ネグリジェはさすがに恥ずかしかったが、寝る時だけなので何とか堪えられるというものだ。ただ夜中にトイレに行く時は、できるだけ家族に見つからないように行くしかなかった。それでもたまに父とがちあったりすると顔から火が出る思いだった。

女ものの下着を着て、その上に男らしい学生服を着るのはどうにも変な感じだ。世間には背広の下に女ものの下着を着る趣味のサラリーマンもいるというが、オレにはまったく理解できない。

すでに卒業式は終っていた。オレはちゃんと男として中学を終えて卒業証書も貰った。同級生たちは高校の入学式までしばしの休みに入っていたが、オレだけはまだ中学に通っていた。

オレは他の学年の生徒が登校した後にこっそり登校すると、そのまま例の家庭科準備室へ向かう。

部屋に入るとオレはいつものようにセーラー服に着替える。男のオレは卒業したが、女のオレはまだ中学生なのだ。学生服とカッターシャツを脱ぐと、そこにはすでにブラジャーをしてスリップを着

ているから、すぐに制服を着ることが出来る。もう体育の授業や、ふいに脱ぐ必要がくる可能性もないため、家からそのまま着て来ても問題ない。もちろん下もパンティーを穿いている。ちなみにブラジャーには詰め物をしたままだったが、学生服はＡカップの胸くらいではまったく目立たなかった。注意しなければいけないのは交通事故ぐらいのものだ。こんな恰好で事故にあったら、いくら何でも恥ずかしすぎる。

しかしセーラー服は高校のものに変わっていた。着かたに慣れなければいけないからだ。まだオレ自身の制服は出来ていなかったから母の制服を借りていた。きつかった袖だけはホックをずらしてもらった。スカートには吊りヒモをつけて腰の位置を調節したが、後ろが×になった吊りヒモをつけたフレアースカートというものは、昔の小学生のスカートのようで、上着を着なければまったくさまにならない。

オレはセーラー服に着替えたら大人しく椅子に座って本など読みながら三吉先生を待つ。本も三吉先生が選んでくれた、女の子の気持ちが良く表現されているという作品だ。最初は何が面白いのか良く解らなかったが、最近ではそこそこ楽しめるようになってきた。というよりは本を読む面白さが判ってきたと言った方が良いかもしれない。以前のオレは小説などほとんど読まなかったからだ。

そして先生が来るとオレは栞を挟み、本を閉じて机に置くとスッと立ち上がる。

鍵を開けて先生が入ってくると、オレはきちんと両手を前に揃えてお辞儀をする。

「おはようございます。三吉先生。」

「おはようございます。」

今日の先生は珍しく着物姿だった。先生はオレの挨拶に満足したようにうなずくと、持ってきた荷物を机に置いた。

「戸田さん、今日はお茶のお作法の仕上げをしましょう。」
そう言って大きな紙の包みを開けるとそこには桜色の着物が入っていた。
「この着物は私が若いころに着ていたものなのよ。どう？あなたにピッタリじゃないかしら？」
「え？この着物をわたしが？」
「ええ、そうよ。あなたもずいぶんお作法が上達してきたから、今日は仕上げに着物を着てお稽古しましょう。」
オレたちは準備室の隅に置いたタタミの所に行くと先生は言った。
「さあ、制服を脱ぎなさい。そのままじゃ着物は着られないわよ。」
「はい。先生」
オレはセーラー服を脱ぐときれいに畳んで椅子の上に置いた。そういうところも先生はちゃんと見ていて、悪いところはすぐに直される。おかげでオレは自然な仕草で上手に畳めるようになっていた。
先生が何も言わないのは、ちゃんと出来ている証拠なのだ。

「戸田さん、下着も脱ぎなさい。着物を着る時は下着は付けないものなのよ。」
オレは言われるままスリップを脱いでブラジャーも外した。胸に詰め物をしているのを見られるとさすがに恥ずかしい。
「先生・・・パンツはちょっと・・・」
すると先生の眉がピクリと動いた。
「そうだったわね。近頃の戸田さんはすっかり女性の仕草が自然に出来るようになってるから、先生もついつい戸田さんが男の子だったこと忘れてしまうわ。」
先生はそう言ってオレに足袋を渡した。

渡されたオレはしゃがんで足袋を履こうとしたがどうやって履けばいいか判らなかった。
「戸田さん、こうやって履くんですよ。」
先生は足袋を半分に折り曲げると、オレの足の爪先をしっかりと入れ、曲げた部分を伸ばして踵を覆いこはぜを留めた。
「片方は自分で履いてごらんなさい。」
「はい。」
オレは先生がやったようにして何とか履くことが出来た。

先生はオレの身体に肌着を合わせ、裾よけを巻き腰の紐を結ぶ。その上に長襦袢を着物のように前で合わせて帯で締める。着物は中に着るものも疎かには出来ないそうだ。肌着や長襦袢をちゃんと着ておかないと着物を綺麗に着ることが出来ないのだ。そして桜色の着物を羽織らせると衿の部分や袖の位置などを合わせながら着付けしていった。そして最後に名古屋帯を締めて出来上がり。着物を着るのもなかなか大変だ。結構時間がかかる。

すっかり着付けが終ったオレを見て先生は嬉しそうにオレを見た。
「やっぱり思ったとおりだわ。戸田さんにはこの色が似合うと思ったのよ。きれいよ戸田さん。」
先生は全身が映る鏡の前にオレを連れて行って見せてくれた。
「ステキ・・・」
オレは思わずそう呟いて急に恥ずかしくなって言葉を付け足した。
「あ、あの・・着物がですけど・・・」
鏡の中のオレの頬に赤みがさす。

オレは着物を着たのは初めてだったが、すっかり虜になってしまった。まるでオレじゃないみたいだ。髪も簡単に前髪をピンで留めただけだったが、おでこが出ていて初々しい。そこにはこれまで見た事がない淑やかなオレの姿があった。

「もう少し時間があれば自分で着付け出来るように教えてあげたかったんだけど、さすがに時間が足りないわね。」
先生は残念そうな顔をした。
「先生、わたしもぜひ憶えたいです。もしよろしければ、高校に入学しても時々習いに伺ってもいいですか?」
先生はその言葉を聞いて微笑んだ。
「もちろんよ戸田さん、私、土日は自宅でお茶の教室をやってるから、ぜひいらっしゃい。私もあなたは筋がいいからこのままでは勿体ないと思っていたのよ。」
それから先生は何かを思いついたように顔を輝かせた。
「そうだ!この着物は戸田さんにあげるわ。」
オレは驚いた。
「そ、それはいけません。だってこんな大切なもの・・・いただくわけには・・・」
断ろうとするオレをなだめるように先生は言った。
「いいのよ。私が持ってても着ないから、私が着るには若すぎるのよ。」
「でも・・・」
オレだって着物が高価なものだという事くらい知っている。それにこの着物には先生の若い頃の思いでが詰まっているハズだ。
「大丈夫、実はこの着物は私の先生から頂いたものなの。先生が若い頃着ていたものを頂いたのよ。」
「それなら・・・余計いただけません。」
先生は首を振った。
「あなたは大切な教え子なのよ。だからぜひ貰ってちょうだい。お願いするわ。」
「そ・・・そんな・・・」
「いいわね。」
「・・・はい。」
そうまで言われては、オレも承諾するしかなかった。

オレも最初は三吉先生をこうるさいおばさんだと思っていたが、良く知るとすごく優しいところもある人だった。とても女子が呼ぶようなクソババアなどではない。しかしそれもオレが習う態度を見せるようになってからのことだった。きっと習う態度が出来ていない人にはうるさく言うしかないのかもしれない。オレは三吉先生を尊敬するようになっていた。

「あ、先生・・・申し訳ありませんけど・・・わたしの全身を携帯で撮っていただいてもいいでしょうか？母にも見せたいんです。」
「ええ、いいわよ。」
先生にオレの携帯で着物姿を写してもらった。かあさんに見せたらきっと喜ぶだろう。

ーー

オレは先生から料理も習った。三吉先生が得意なのは和食だったから、主に煮物とか、酢の物とかが多かった。料理はもともと得意だから、料理の授業は楽しかった。先生にも上手だと褒めてもらった。
オレは結構舌には自信があったから、微妙な味の違いも良くわかる。
裁縫もまあまあだった。図工とか物を作るのは得意だったから似た感覚でやることができた。ミシンをかけるのもすぐにマスター出

来た。しかし編み物だけはなかなか上手くいかなかった。どうも苦手な数学に似ているからかも知れない。短い時間ではマフラーを20cmほど編むのがやっとだった。

　しかし全体的には良くできた方のようだ。オレは案外女の子の勉強の方が得意なのかもしれない。先生が言うにはクラスの女子よりもずっと上手にできたという事だった。オレもそう言われると期待にそえたようで、なんだか嬉しかった。

――

　その日の“お嬢様教育”が終って学校の出口へと向かっていると、前からどこか見覚えがある女生徒が歩いてくる。
「あれ？戸田君、どうしたの？」
それは一緒に白鴻女学園を受験した長谷川順子だった。
「なんで戸田君が学校にいるの？」
オレは不測の事態を何とか回避しようと、頭の中はフル回転だ。
「長谷川さんこそ、なんで学校にきたの・・・」
以前と同じようにしゃべろうとしたが、このところ女言葉でばかり話しているから思うように言葉が出て来ない。
「わたしは・・・本命に落ちちゃって・・・」
オレは心臓が一瞬止まったかと思った。まさか白鴻に来るんじゃないだろうな！
「それで追加試験を受けたから結果を報告に来たのよ。」
「え、それでどうだった？」
「何とか受かってた。」

「そ、それは良かったね。」
オレはほっと胸をなで降ろした。
「戸田君はなんで学校にきてるの?」
「オ、オレは・・・実はオレも本命落ちたんで、追加受けてさ。」
オレも長谷川の話を聞いてでたらめな話を作り上げた。
「あ!そうか・・・白鴻は共学なくなったって言ってたもんね。」
「そ、そうそう!」
オレは焦ったが、それは追加入試を受ける口実には良いかもしれない。
「だから、他のところを受けたんだ。」
「へぇ・・・そうなんだ。それで受かったの?」
「う、うんまあ、ギリギリね。」
「どこ?」
「え?!」
「どこ受けたの?」
「そのぉ・・・県外の全然有名じゃないところだから、あんまり言いたくないんだ・・・」
「そう・・・そうかもね・・・わたしもちょっと遠いとこなの・・・」

しばしの沈黙がおとずれた。オレは何とか早くこの場から逃げ出したかった。もちろんこれ以上話しているとボロが出そうだというのもあったが、それ以上に学生服の下に付けている女性ものの下着が気になっていた。バレるはずはないとは思いながらも、この状態で知り合いと話すのはさすがに緊張した。
「戸田君・・・なんか雰囲気変わったね。」
「え?!そ、そうかなぁ・・・あ、髪が伸びたからじゃないかな?このところ切ってなかったから・・・」
「・・・・・・」
長谷川は少し首をかしげてオレを見つめている。

「あ、ご、ごめん！オレちょっと急ぐんだ・・・それじゃ！」
オレはそれだけ言うと走ってその場を逃げ出した。このままいたらどんな事になるか判ったものじゃない！

それにしても長谷川が他の学校に合格したのがわかったのは不幸中の幸いだった。

第8話　美容　オレは綺麗になっていく

入学式も近くなってくると、受験の時に切ったのを最後に伸ばし続けていた髪も、だいぶボサボサになってきたので、オレは母の妹がやっている美容院に行くことになった。もちろんちゃんと事情は連絡済みだ。

オレは家ではずっと女の子の服を着ていたし、学校では制服のセーラー服を着ていたが、女の子の恰好で外に出るのは初めてだったので、母も大人しめのワンピースとハーフ丈のコートを選んでくれた。それでも恥ずかしくてついつい顔を伏せてしまう。それになんだかスカートの中に風が入ってスースーするのが変な感じだ。オレは変態の女装男に見えていないだろうかと心配になってきた。

親戚に女として女子校に行くことを知られるのは恥ずかしかったが、知らない店に行って事情を説明するよりはよほどマシだ。それに母の妹だけあって、そういう事にあまり抵抗がないらしい。

「おばちゃん、こんにちは。」

オレが店に入って行くと叔母は初めオレだと気付かなかったようだ。

「有希ちゃん？本当に有希ちゃんなの？」

叔母は何度も本当にオレかを確かめた。親戚の叔母が判らないのなら、少しは自信を持っても良さそうだ。

「有希ちゃんきれいになったわねぇ。それになんだか雰囲気も女性らしくなってない？」

「おばちゃん・・・声が大きいよぉ・・・お客さんにわたしが男だってバレちゃうじゃない・・・」

叔母は小さな声で「ごめん、ごめん。」と言った。

椅子に座ると叔母が

「どんなふうにする？」
と聞いた。オレは女の子の髪型は良く判らなかったから、出来るだけ切らずに、女らしくしてほしいとだけ言った。ただ、白鴻女学園はパーマも染めるのも禁止なのは念を押しておいた。

とはいえ、多少伸びたといっても、いろんな髪型に出来るほどの長さではないから、おのずとやれることは限られてくる。それにオレは髪を伸ばそうと思っていたから、伸びかけの時に変にならないような髪型にして欲いとお願いした。

「でもおばちゃん、有希ちゃんが女の子になりたかったなんて知らなかったから、姉さんから聞いた時は驚いたわ。」
「う～ん・・・そういう・・・」
そういう訳でもないんだけど・・・言おうとしてやめた。だって勉強が出来ずに他に行ける学校が無かったなんて、親戚でも恰好悪くて言えない。
「女になって女子校に行くなんて・・・変じゃないですか？」
オレは聞いてみた。
「確かに最初聞いた時はどういうことかと思ったけど、でも今の有希ちゃんを見てたら全然変じゃないと思うわ。有希ちゃんが女になりたいって気持ちが伝わってきたから。」
「・・・・・・」
そう言われると、ちょっと複雑な気分だ。今のオレはいったいどう見えているのだろうか？オレはどんどん自分が判らなくなってくる。

最近のオレは女の子らしくなったと言われると、なんだか嬉しくなるようになっていた。
オレはそもそも女にならなければ高校に行けないから女になろうと頑張っている。だから女の子に見えるのは結構なことのハズだ。

しかし、女らしくなったと言われて喜んでいるオレは、ただそれだけの理由で喜んでいるのだろうか？それとも女らしくなった事そのものに喜びを感じているのだろうか？

オレはもともと女になりたいと思ったことも無ければ、女装癖もない、それが今ではこうして女の子の恰好で出歩くようになり、今まさに女性的な髪型にしてもらおうとしている。いったいオレは何なのだろうか？

「有希ちゃん、有希ちゃん・・・」

オレを呼ぶ声にハッとした。オレはいつのまにか眠っていたようだ。

「あ、ごめんなさい・・・」

そういえば学校では女になるための教育、家では性同一性障害の勉強でかなり疲れが溜っていたようだ。それに慣れない女の子の恰好も常に緊張を強いられていて、知らず知らずのうちに身体に力が入ってしまう。

「有希ちゃん、こんな感じでどう？」

オレは鏡の中の自分を見て驚いた。さっきまでただ伸びっぱなしだった髪の毛がきれいに整えられていた。受験の時に良い印象にするため少し刈り上げていた襟足は逆に少し刈り込んで、ボーイッシュではあるが、ちょっとしたモデルのような髪型だ。ショートボブといった感じに近いだろうか？

「ありがとう、おばちゃん・・・！」

「気に入ってくれた？有希ちゃんは首筋がきれいだから、こんな髪型も良く似合うのよ。」

オレは嬉しかった。これなら女の恰好で外を歩いても恥ずかしくなさそうだ！

「有希ちゃんはこの後時間あるの？」
「？」
「この近くにおばちゃんの知り合いがやってるエステがあってね、さっき電話してみたら今時間空いてるから来てみたらって？」
「え・・・でも・・・わたしあまりお金持ってきてないんだけど・・・」
「それは心配ないわ、招待券があるから今日はタダでやってくれるわよ。」
「・・・どうしようかなぁ・・・」
「実は姉さんにも相談されてたのよ。有希ちゃんもだいぶ女らしくなったけど、まだムダ毛のお手入れとかは難しいんじゃないかって。」
そう言われてドキッとした。オレはそれほど毛が濃い方ではなかったが、それでもスネ毛などは少しは生えている。それに脇毛の処理の仕方なんか全然しらない。他にも女なら知っていて当たり前な身体の手入れ法も何も知らなかった。そういうことは三吉先生にも教えてもらってないし、母に聞くのも恥ずかしいし、妹の麻衣はそういうことに関してはまだまだ子供だ。

オレは考えても見なかったが、さすがにスネ毛をはやした女子高生なんてイヤだし、着替えの時に脇毛を見られたら恥ずかしい。
オレはエステに行きたい気持ちもあったが、裸を見られたらさすがに男だとバレてしまうだろう。いや、先方がすでに知っていたとしても、今の女らしくなった髪型では、それも逆に恥ずかしい。
「あの・・・エステの人は・・・わたしが男だってこと知ってるんですか？」
「ええ、一応話しておいたから心配いらないわ。」
「でも・・・普段は男の人なんて来ないんでしょう？」
「なんだ、そんなこと心配してたの？今時は男の人も結構来てるみたいよ。それに有希ちゃんみたいなニューハーフの娘も良く来るっ

て言ってたわ。」
叔母の認識ではオレはニューハーフになっているようだ。もっとも今のオレの姿では否定することもできない。
「それじゃぁ・・・行ってみようかな・・・？」
「それがいいわ！おばちゃん連絡しといてあげるから、今から行ってらっしゃい！」
叔母は笑顔でそう言った。

ーーー

叔母に紹介されたエステは、ビル全体がエステという大きなところだった。
オレがドキドキしながら入っていくと、受け付けには女の人がいた。
「いらっしゃいませ。」
「あ、あの・・・紹介されて来たんですけど・・・」
オレはどう言っていいか判らなかった。
「戸田有希さまでしょうか？」
「あ、はい、そうです。」
「ちゃんと御予約入ってますよ。2階へどうぞ。」
そう言って横のエレベーターに案内された。

ひとりでエレベーターに乗っていると不安がつのってくる。
ドアが開くときれいなエステシャンが出迎えてくれた。ピンクの看護婦のような衣装を着ている。
「いらっしゃいませ、戸田有希さま、こちらへどうぞ。」
そう言って通されたのは、ピンクのカーテンで仕切られた個室だっ

た。オレは思わず聞いてしまった。
「あ、あの・・・わたし・・・男なんですけど・・・だいじょうぶなんですか？」
するとエステシャンは笑顔で
「大丈夫ですよ。ここはあなたのような方も多くいらっしゃいますから。」
と言った。
「でもあなたのように若い方は珍しいですね。ほとんどがお仕事をされている方たちが多いですよ。」
「そうなんですか・・・」

オレは言われるままに服を脱いだ。美容院で髪を女の子っぽくしたために、裸になると男の身体なのが恥ずかしい。そしてピンクのタオル地のガウンのようなものを羽織らされた。下はパンツだけで、それもTバックのように後ろが紐状で前の部分も、やっと本体が隠れるくらいしかない。毛が横からはみだしまくっているが、これで良いのだろうか？

オレはそのままベッドに寝かされた。こうなったらもうまな板の上の鯉状態だ。
「それではムダ毛のお手入れからいたします。」
エステシャンはオレが着ているガウンの裾をはだけるとスネ毛に何か暖かいものを塗りだした。何だろうと思っていると、しばらく放置してから上に布を貼りつけると一気に剥がした！
「うがあっ！」
オレは思わず近頃出したことがなかったほど男らしい声を上げてしまった。
「あ、痛かったですか？最初は少し痛いですけど、しばらく続けていると毛が細くなって痛くなくなってきますから。」
少しなんてものではなかったが・・・

「・・・クッ・・・」
もう片方の足の時には必死に我慢していた。足の毛が全部抜かれるころには、オレはあまりの痛さに涙ぐんでしまった。

腕の毛も同じように抜き終ると、今度はワキ毛だった。ワキ毛は軽く剃ると、何やらピリピリする感覚がしだした。
「あの・・・何をしてるんですか？」
オレが聞くとエステシャンは
「これは永久脱毛ですよ。」
と言う。
オレは焦った。だってオレが女でいるのは高校生の3年間だけなのだ。それなのに永久脱毛なんかされたら、男に戻った時に困るのではないか？
「あ、あの・・・永久脱毛ってやったらもう生えてこないんですか？」
「やったところは毛根が焼けるので生えて来ませんけど、ほかにも休眠している毛根がたくさんあるので、完全に生えなくするには1カ月おきに何回か通っていただかなければなりません。」
オレはそれを聞いて少し安心した。もう来なければ良いわけだ。ワキ毛が少し少なくなったところで、そんなに困る事もないだろう。

ワキ毛はもともと、まだそんなに生えていなかったから、永久脱毛は手際よく進んでいった。たぶんまだまだいっぱい毛根は残っているに違いない。とはいえ、きれいになったワキを鏡で見せられると、なんだか心地良いのはなぜなのだろう？

最後は股の毛だ。パンツからはみ出しそうな部分をきれいにシェーバーで刈ると、その部分をまた永久脱毛していく。こっちは男に戻った時でも他人に見せる部分じゃないから安心してやってもらった。

処理が終ると全身のマッサージなどスキンケアをやって一応は終ったようだ。

「それではこちらへどうぞ。」
「え?まだあるんですか?」
「爪のお手入れがありますので。」
「え?でも学校ではマニキュアとか禁止だし・・・」
「あ、そういうのもご要望があれば致しますが、今日は形を整えて、きれいにするだけですので心配いりませんよ。」
「あ・・そうなんですか・・・・」
何も知らないオレが恥ずかしかった。
爪の形を女性らしく整えて、何度も磨き上げると、マニキュアも塗ってないのにピカピカになった。爪がきれいになると、指も手もきれいに見えることをオレは初めて知った。

「次は3階へどうぞ。」
そう言って連れてこられたのは化粧の道具がたくさん置いてある部屋だった。女の匂いが鼻をくすぐる。
「あらぁ?!あなたが有希ちゃん?あなたのおばさんが言ってたとおり、ほんとに可愛らしい方ね。」
その人はオレの手をしっかりと握った。かなり力が強そうだ・・・
「あ、こ、こんにちは・・・」
この人がおばさんの知り合いの人らしい。まさか男だとは考えもしなかった。そういえばテレビでもメイクの人は男が多いみたいだった。それにちょっとオネエっぽい・・・・
「あのぉ・・・わたし・・・こんど高校生なんです。・・・化粧はちょっと・・・」
「あら?きょうび高校生でもお化粧のしかたくらい知ってなくちゃ

！」
オレは無理矢理に椅子に座らされた。
「あの・・・高校生なのであまりいじらないで下さいね。」
「わかってるわよぉ！でも今どきこんな眉毛の女子高生なんていないわよ！」
そう言って眉の形を描きだした。

一応オレの希望を聞いてくれて、細くなりすぎないようにしてくれた。そのうえで、無駄な部分の毛を抜いたりはみ出した部分をカットしいたりして、自然できれいな形に整えてくれた。
化粧の仕方も高校生らしい、ナチュラルに見えるメイクを中心に、自分でもやれるようなメイクのやり方を教えてくれた。
「有希ちゃんは素顔でも可愛いから、やりすぎないようにしなくちゃね。」
そう言って化粧をしているのが判らないようなアイラインの引き方や、自然なチーク入れ方や、眉毛の描き方など一通り教えてもらった。
最後に自分で練習できるようにと試供品の化粧品を一式くれた。

化粧は取っても良かったが、そのまま帰ることにした。
オレは深く考えなかったが、女性に見える髪型をしたら、もう男の恰好は出来ないのだった。これからは何処に行くにも女の子でなければいけないのだ。それに気付くとちょっとした喪失感を感じた。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーー

「おばちゃん、ただいま。行ってきたわよ。」
終ったらもう一度寄るように言われていたので、オレは叔母の美容院に帰ってきた。
「まあ！有希ちゃん、いちだんときれいになったわねぇ！さすが二光さんだわ、もう有希ちゃんを男の子と思う人なんかひとりもいないわよ！」
オレはそれを聞いたとたん、嬉しい反面、すごく悲しい気持ちがこみ上げてきた。
「・・・うっ・・・おばちゃん・・・そんなこと・・・いわないでぇ・・・・」
オレは思わず泣き出していた。
「どうしたの？！有希ちゃん・・・おばちゃん何か悪いこと言った？」
「・・・ううん・・・ううん・・・」
オレは何度も泣きながら首を振った。髪型、エステ、化粧、いろんなことが一度におこってオレは自分の心がコントロール出来なくなっていた。それにもう男には戻れないという思いが重なり、よけい心を不安定にしていた。オレはこんなに泣き虫だっただろうか？
「どうしたの？有希ちゃん、何か心配があるんだったら、おばちゃんに言ってごらん。」
「わたし・・・わたし・・・もう男に戻れない・・・・」
オレはついに不安を口にしてしまった。しかし叔母はオレの頭を抱いて言った。
「有希ちゃん、誰でも成長する時には不安になるものなのよ。いくら有希ちゃんが女の子の心を持っていたとしても、これまでずっと男の子として暮らしてきたんだもん。急に女の子になるのは不安になって当然よ。」
そして優しく背中を叩きながら励ましてくれた。
「でもね、有希ちゃんはもう立派な女の子よ。産まれた時からの女の子にだって負けないくらい可愛いわ。」

そう言ってオレの顔を上げさせた。
「おばちゃんがどうしてここに戻って来てって言ったかわかる?」
オレは首を横に振った。
「おばちゃんね、有希ちゃんの卒業記念に写真屋さんで写真撮ってもらおうと思ってるの!」
「写真を?」
「そうよ、有希ちゃんこんなにきれいになったんだもん、記念に残しておかないと!」
「・・・うぅっ・・・ありが・・とう・・・」
オレはそれを聞くとまた涙が溢れてきた。それが嬉しいからなのか、悲しいからなのかオレには良く判らなかった。
「ほら、有希ちゃん、そんなに泣いたらせっかくのお化粧が崩れてしまうわよ。」
「・・・うん・・・」
オレはすすり上げながらも何とか涙を止めようと努力した。

「有希ちゃん、これなんかどう?」
それは真っ赤なドレスだった。袖が大きくふくらんで、腰が細くくびれている。スカートは多くのヒダヒダで豪華な感じだ。
オレはその実、ドレスは気に入ったが、それが自分に似合うかどうかは見当もつかなかった。
「・・・そんなの・・・似合わないんじゃないかなぁ・・・」
「そんなことないわよ。あの、これに合う靴ありますか?有希ちゃん足のサイズはいくつだったかしら?」
「25cmです・・・」
男としては小さい方だが、女としては大きいのではないかと恥ずかしかった。
すると写真館のスタッフは、光沢のある、これも真っ赤な靴をもっ

てきた。
履いてみるとオレの足にピッタリだった。かかとはハイヒールではあるが太くて少し低めなのが嬉しい。

ドレスを着たオレはショートカットの髪が可愛い女の子になっていた。入るか心配していた細い腰も無理なく背中のジッパーを上げることが出来た。化粧を直して、最後に横に赤い薔薇がついた、赤いチョーカーを巻くと出来上がりだった。
「チョーカーは首が短いと似合わないけど、有希ちゃんは良く似合うわね。」
鏡に映った赤いドレスのオレはボーイッシュな髪がよけいに女の子っぽさを醸し出していた。スカートを膨らます白いパニエから突き出た足が妙にこっぱずかしい。

カメラの前でポーズをとらされると、恥ずかしさに顔が紅潮してしまう。
カメラマンは何度も足の位置や、前に揃えたレースの手袋をした手の位置や、姿勢などを直される。その少女っぽいポーズが更にオレを緊張させた。
「有希ちゃん、そんなに緊張しないで。深呼吸してごらん！」
叔母に言われ大きく深呼吸してみると、ふくらんだ胸がブラジャーの存在を感じた。その瞬間、妙に気持ちが落ちついてきた。

オレ・・・ブラジャーしてるんだ。もうオレ女なんだ・・・あと何日したら女子校に通う女の子なんだ。
おれは自然に三吉先生に教わった立ち姿を思い出した。体の力が抜けて自然に笑顔が戻った。
“カシャッ！”カメラマンはその一瞬を逃さずシャッターを切った。

第9話　卒業　女子としての卒業

髪を整え女性らしくなったことで、女性の恰好で外を歩くことが出来るようになった。しかしそれは逆にいえば、もう男として外を歩くことが出来なくなったということだった。

おかげで、今日からは中学へも制服で通わなければいけなくなった。もちろんオレは正式には卒業しているのだから、私服で通ってもいいわけだが、さすがに中学に私服で通うのは目立ちすぎる。もう在校生も春休みになっていたが、クラブ活動などで出てきている生徒も少なくないからだ。

そのため、オレはもはや着ることもないだろうと思っていた中学のセーラー服で通うことになってしまった。中学の制服で中学に通うのは、一見何の問題もないように思えるが、実際はかなりのリスクを伴う行為だ。この間の長谷川のように、卒業生が来ることも無いとはいえない。通学路で元同級生と会うかもしれないし、それに在校生の中にもオレのことを知っている者もいるかもしれない。いくらオレが女に見えるようになったと言っても、もともとつい最近まで知っていた者まで騙せるかどうかはまったく自信がない。そもそもオレは人からどう見えているのか相手を通じてしか知る術はないのだ。鏡や写真で女っぽく見えたとしても、あまりあてに出来るものではない。

そんな訳だから先は短いとはいえ、オレの中学への登校は結構大変になってしまった。出来るだけ人に会わないようにして家庭科準備室に入り、今度は高校の制服に着替える。やはり出来る限り高校の制服には慣れておきたかったのだ。

　ところで、白鴻女学園で用意してくれたオレの制服もすでに出来ていた。やはり自分のサイズに合わせた制服は母のお古と違い着心地がいい。スカートのウエストも合わせてあるのでズレにくい。それでもやはり吊りヒモは必要だったが。

――

　制服で待っていると三吉先生がやってきた。
「おはようございます、三吉先生。」
「おはようございます。あら？戸田さんどうしたの？」
オレは少し照れながら
「昨日、母の妹がやってる美容院で整えてもらったんです。」
先生はまじまじとみつめながら
「でも・・・それだけじゃないわね。」
「ええ・・その叔母の勧めでエステに行ったら、化粧のやり方も教えてもらって、眉毛も整えてもらったんです。」
「そうでしょう、ずいぶん垢抜けたので驚いたわ。これならもうすぐにでも女子高生になれるわね。」
「そんなことないです。わたしまだまだ先生に教えて頂かなければ・・・」
「あら？戸田さんらしくないわね。何か心配なことでもあるの？」
オレは先生に素直に自分の気持ちを打ち明けてみることにした。
「先生・・・わたし不安なんです・・・わたし本当に女子校でやっていけるんでしょうか？・・・わたし白鴻女学園で女としてやっていけるか自信がないんです・・・」
すると先生はオレの両肩をしっかり掴むと力強く言った。

「戸田さん、あなたは今年卒業したどの女子よりも女らしいわよ。それに私が教えたこともしっかり出来るようになったじゃない。あなたは私にとって自慢の教え子なのよ。」
先生はうつむくオレの顔を上げさせた。
「実はね、戸田さん、今日で私の授業は終りなの。」
「え?」
オレは驚いた。
「そんな・・・わたし・・・まだ憶えなきゃいけないこと・・・たくさんあるんじゃないですか?」
「ええ、そうね。戸田さんが憶えなきゃいけないことは沢山あるわね。」
「・・・それじゃ・・・どうして・・・」
「でもね。それは高校生活の中で憶えていけばいいことなの。中学生のあなたはもう卒業なのよ。」
「でも・・でも・・まだ入学式までには何日かあります・・・だから・・・」
先生はにっこり微笑んで言った。
「この何日かは入学の準備や、心の準備に必要なの。自信を持ちなさい。今のあなたに必要なのは自信を持つことだけなのよ。」
「・・・・・・」
オレはもう何も言えなかった。卒業・・・なにか心に熱いものがこみ上げてきた。
「先生・・・これまでご指導・・・ありがとうございました。」
オレは深々と頭を下げた。

「戸田さん、私たちもう会えない訳じゃないのよ。高校生活に慣れたらお茶を習いにいらっしゃい。待ってるわよ。」
「・・・はい・・・」
オレはこんな素晴しい先生に出会えたことを感謝せずにはいられなかった。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーー

　オレはまた中学のセーラー服に着替えて校庭に出た。手に持った袋には、高校の制服が入っている。おそらくもう中学に来ることもないだろう。よほどのことでもない限りは・・・

　オレは最後に校長先生と教頭先生にも挨拶してきた。二人ともオレの変わりように驚いたようだった。白鴻女学園に行ってもしっかりやるようにと言われた。オレはこれまでのサポートのお礼を言って校長室を出た。

オレにはもう一人会わなければいけない人物がいた。
オレは校庭を見回してその人物を探す。その人は校庭の隅のベンチで部活動を監督していた。
「井原先生！」
オレは精一杯の女らしさで呼びかけた。担任の井原先生はオレを見ても全然だれだか解らなかった。
「先生、わたしです。戸田有希です！」
オレが言うと担任は驚いて口をパクパクさせている。きっと言葉が出ないのだろう。
オレは先生に近づいて前に立った。なんだかすごく照れくさい。
「戸田？お前本当に戸田なのか？」
先生は立ち上がるとオレの回りを一周して全身を舐めるように見た。
「先生・・・やめてください・・・恥ずかしいです。」
「いやあ・・・驚いたなぁ・・・もうすっかり女の子じゃないか！」

オレは恥ずかしくてどんな顔をすればいいのか判らなかった。顔が熱くなってくる。

オレは先生の横に座った。担任の井原とはずっと男子としての付合いだったのに、今は女子としてセーラー服を着て隣に座っている。

「なんか変な感じですね。セーラー服で会うなんて・・・」

オレは照れた女の子がするようにスカートの中でひっつけたヒザに両手をはさんだ。

「お前が女として白鴻女学園に行くと言った時、俺は内心無理じゃないかと思ったんだが・・・」

先生はまたオレを見つめる。オレはすごく恥ずかしくて思わずうつむいてしまう。とても正視できない。

「先生・・・わたし・・・本当に女の子に見えますか?」

「ああ、男の頃を知っているオレでも、今の戸田を見ると男の頃のお前を思い出すのが難しいよ。人間やれば出来るもんだなあ。今まで何度も生徒に言ってきた言葉だが、今ほど実感したことはない。」

「ふふっ・・わたし、これでもけっこう苦労したんですよ!実は今でもまだ自信がないんです。女としてやっていけるのかなって・・・」

オレはいったい何を言っているんだろう。元担任の井原とどうしてこんな会話をしているのだろうか?

「でも先生と話したら、少し自信が持てた気がします・・・だって先生さっき、わたしだって全然気付かなかったでしょう?」

「戸田・・・お前、本当に性同一性障害だったんじゃないのか?」

オレは首を傾げた。

「先生・・・わたし・・・最近・・・良くわからないんです。なんか自分が良くわからない・・・」

オレはベンチを立ち上がると先生に少ししなを作って見せた。オレ

にこんな仕草が出来るとは思わなかった。だが今は先生に対する感情を素直に表すとそうなっていたのだ。もう先生と男同士の会話は出来なかった。

「先生・・・憶えてますか？・・・わたしに白鴻女学園を紹介してくれたの先生なんですよ。あの時もし先生が白鴻女学園を紹介してくれなかったら、たぶん今のわたしはいないんです。」

オレは先生がどんな顔をするのか怖くて背中を向けた。オレはいったい何を言おうとしているんだ？

「先生・・・先生が・・・わたしを女にしたんです。」

振り返るとスカートが風をはらんで膨らんだ。オレはスカートを押さえながら思った。オレ女らしく見えているかな・・・？

「わたし・・・今日が卒業式なんです。今日からわたし・・・女なんです！」

オレはなぜか先生に、最後に女らしいオレの姿を焼きつけていて欲しかった。

「さようなら先生！」

―――

　オレは女として担任に会ってなんだか少し吹っ切れた気がした。女の子の恰好をしていても、もううつむかずに歩くことが出来た。今ならもし誰か知ってる人にあっても、それはそれで何とかなりそうな気がする。

　そんな気持ちで帰っていると、前から歩いてくる人がいるのに気付いた。心臓が速く打ちだす。

それは仲が良かった鈴木だった。バレるかもしれないと思いながらも自然にすれ違った。

鈴木はまったくオレに気付かなかった。オレはほっとして、そして少し淋しかった。もう鈴木と会うこともないのだろう。オレはもう鈴木が知っているオレではない。

オレには今日から女の子としての新しい生活が始まるのだ。これから誰かと友達になったとしても、それは男のころのオレを知らない人なのだ。

心が開放された気分だった。新しい生活にはまだ不安はあったが、それでもワクワクしている自分もいる。中学のセーラー服を着ている自分がなんだか自然に思えてくる。

もしこの姿で中学生活を送っていたら、いったいどんな感じだっただろうか?オレは女として受け入れられただろうか?鈴木とは女として出会い女として友達になったのだろうか?・・・それとも・・・

想像の世界では、中学生活の中のさまざまな場面でセーラー服のオレがいた。オレはいつのまにか想像の中で女として中学の3年間をやりなおしていた。するとオレの心に熱いものがこみ上げてくるのだった。

オレは女子として中学を卒業し、女子として白鴻女学園にかよう・・・来週から・・・来週からオレは女子高生なのだ!

第１０話　入学　女になったオレ

入学までの数日は三吉先生が言ったとおり慌ただしく過ぎていった。週が開けるともう入学式だった。

入学式には来なくて良いというのに母もついてきた。さすがに息子が女の子として入学するのは心配なのかもしれないと思ったからむげにも断れなかった。もっとも、実際に白鴻女学園に近づいてみると、ほとんどの生徒に母親がついてきていたから恥ずかしくはなかったが。オレには女子校の入学式というのはあまりイメージできなかった。

母親と一緒に歩くセーラー服の女子たちに混じって、男のオレがセーラー服を着て歩いているのはどうも変な感じだった。だがそれはオレ自身が感じているだけで、回りの女子たちはまったくオレに注意を払うものはいなかっただろう。

一歩あるくたびにオレの胸が上下して、ブラジャーの肩ヒモに力が加わる。今は以前とは違い胸にはヌーブラが張り付いているのだ。丸めてカップに突っ込んだストッキングはほとんど重さは感じなかったが、シリコンで出来たヌーブラは、実物に触感も重さも近いらしい。おかげでオレの胸にしっかりと張り付いたヌーブラは、オレが一歩一歩あるくたびにオレの胸の肉を引っ張り、ブラジャーを下に引き下げるのだ。

これはなんとも妙な感じだった。まるで本当にオレの胸が大きくなったみたいだ。そういえば胸が大きな女子は走ったりすると胸が千切れそうに痛いというのを聞いた事があったが、本当にこのヌー

ブラが実物の重さに近いとすれば、この程度のAカップでこんな感じでは、DとかFとかになると大変なことになるのではないだろうか？

学校に着くと父兄や生徒は入学式会場の講堂へ入っていく。まわりは当然女子ばかりで圧倒されそうだ。母と別れて前方に並べられたイスの方へと歩いていく。まわりの少女たちは全員、真新しいセーラー服が慣れない感じで初々しい。みんなまるで制服をただ着ているだけで、まったく体と馴染んでいない。そんな中では事前に練習していたオレの方がよほど着こなしているみたいだ。

ふと別れた母を見てみると、誰か女性と話している。良く見ると以前オレの採寸をしてくれた松本たか子先生のようだ。

先生はオレの母に何度もペコペコ頭を下げている。たぶんまだオレの胸がペチャパイだと言ったことを気にしているのだろう。もちろんオレは男だから胸のことなんか何とも思っていないから別に気にしてないのだが、性同一性障害の人は心が女だから男でも胸が無いことを気にするようだ。

しかし考えてみれば、オレはこの学校では生徒に対しては女ということになってるし、先生に対しては性同一性障害ということになっている。ということは、どちらにしてもオレはやはり胸がないことを気にしなければいけないと言う事になるのだろうか？そうだ、オレは考え方も女でなければならないのだ。

オレはたしかに女のしぐさや言葉づかいは習ってきたし、女の子の服の着かたにも慣れてきた。しかし考え方は女なわけではないし、母や、妹や、三吉先生とは話したことはあったが、他の女性と女として話したことはほとんど無いのだ。しかも、オレのことを全く女

だと思っている人とは一人も話したことがない！オレはそんな重大な事実にいまごろ気付いてしまった。

　そう思ったとたん、まわりの女生徒たちからの圧倒的な圧力にはねつけられそうになった。いまやオレのまわりは女で埋め尽くされていた。オレはこの女だらけの世界で、本当に生活していけるのだろうか？

　いつの間にか入学式は始っていた。椅子に座ったオレのまわりには見知らぬ女生徒たちが座っている。彼女たちとまったく同じセーラー服に身を包んではいても、オレだけが男だという事実を思い知らせるように、オレの股間がムクムクと膨らんでいく・・・股に挟み込み、きついガードルで締めつけていなければ、きっとパンティーから頭を出してしまっただろう。オレは気が遠くなり校長の長い話もうわの空で聞いていた。

―――――――――――――――

―――――――――――――――

――――――――――

　長い式が終った頃には、オレは心底グッタリと疲れていた。式の間中、膨張したくとも押さえ付けられていた股間は感覚を失い、漏らしてしまったのではないかと思うほど熱く蒸れていた。今日は式だけしかないことがせめてもの救いだった。

　父兄席にいる母のところへ戻るのがやっとだった。今は母が無理にでもついて来てくれたことに感謝していた。もしオレ一人だったら、どうしていいか判らず途方にくれていたかも知れない。

「有希？大丈夫？顔色悪いわよ。」
「・・・う・・・うん・・・ちょっと休めば・・・」
母はオレを自分が座っていたイスに座らせると、どこかへ行った。

戻ってきた時には松本先生と教頭先生が一緒だった。
「え？あなた戸田さんなの？」
松本先生はオレを見て驚いていた。思えば先生と会った時は、オレはまだ学生服を着た男子中学生だったのだ。
「先生、どこか休めるところはないでしょうか？」
母が聞くと教頭がオレの肩を抱いて校長室へ連れていってくれた。

オレはしばらく校長室の長椅子に寝かされていると、そのうちだいぶ落ちついてきた。
急にドアが開いた。
「いやあ、戸田君すまなかったねぇ。私の話が長かったかな？」
校長が笑いながら入ってきたので、オレは慌てて起き上がり、立とうとした。
「あーいいからいいから、そのままそのまま！」
校長は両手で座るように言ったので、オレは座ったままお辞儀をした。
「いやあ、それにしても驚いた！この前会った時とは全然別人だねえ、すっかり女の子になったんだねぇ。」
校長はしきりに感心していた。
「これなら、君が見た目で男だとバレる心配はないですね。いやあ良かった！それに我校の制服も良く似合っていますよ。」
オレは校長にそう言われて、なくしかけていた自信が少し戻ってきたような気がした。

「戸田君、いや戸田さん、もし困ったことがあったら、遠慮せず私か教頭に相談しなさい、入学させたからには出来る限り力になる

からね。」
「あ、ありがとうございます。」
そういえば母がいないことにふと気付いた。
「あの・・・母はどこに行ったんでしょうか?」
オレが聞くと
「ああ、お母様はいま職員室にいますよ。先生方に君のことをよろしくとお願いしたいそうですから。」
母はそんな事もするために一緒に来たのかと思うと、オレはつくづく自分のことしか考えてなかったのだと思った。
「先生方は君のことを性同一性障害だと思っていますからね。その点をお願いしているのでしょう。」
校長は言った。
「良いお母様ですね。」
「はい。」
オレは頬を赤らめてそう答えた。

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

母が戻ってくると、オレたちは校長先生にお礼を言って校長室を出た。
「有希、先生たちには、かあさんからちゃんとお願いしておいたから、明日から安心して学園生活を楽しみなさい。」
「・・・うん・・・ありがとう・・おかあさん・・・」
校庭に出ると、式が終って帰っていく生徒と母親たちが校門へと歩いていく。

オレたちもその中に混じって歩いて行くと、校門のところで人集りが出来ていた。
なにをやっているのかと思って見てみると、校門の白鴻女学園の名前をバックに写真屋さんが撮影しているのだった。オレは母の腕をつかんで引き止めた。
「おかあさん・・・わたしたちも撮ってもらおうよ。」
オレが言うと、
母は「え?いいの?」と言う。
「なんで?」と聞くと、母は撮ってもらいたかったが、オレが嫌がると思って言わなかったそうだ。

たしかにちょっと前のオレならそうだったかも知れない。だが、オレは自分はまだまだ子供だとつくづく思ったし、女の子としてもまだまだ未熟なのだと思い知らされていた。困った時には誰かに助けてもらわなければ、オレひとりでは何も出来ないだろう。

三吉先生も言っていたではないか、これから先は高校生活の中で憶えていくのだと・・・いっぱしに女の子になった気でいた自分が恥ずかしかった。いくらセーラー服が上手く着こなせていたとしても、オレはまだぜんぜん女ではないのだ。これから女になっていくためにも、今のオレの姿を残しておきたいと思った。

「かあさん・・・わたし・・・まだ子供でいていい?」
「あたりまえじゃない、あなたはまだまだ子供よ。いつでも大人を頼りなさい!」
そういって母は微笑んだ。

桜の花が咲く下で、オレは母と並んで校門をバックに写真を撮ってもらった。

そこには母の横で少しはにかんだ、女になったばかりのオレが写っていた。

第１１話　教室　女の中のオレ

初めての登校日、オレはセーラー服の列の中を歩いている。

通学路、２年生、３年生も加わった全校生徒の登校は学校へ近づくほどに密度を増していく。その中でオレはといえば、まるで着ているセーラー服が外界と自分を隔てるバリアーのように感じていた。同じ姿をしてはいても、オレだけブラジャーの中にヌーブラを忍ばせ、ともすれば威きり立とうとするペニスをガードルで股間に押さえ付けている。

昨日の入学式で懲りたので、朝起きるとすぐにオナニーして一発抜いていた。これから女になるためにまず射精するというのは、若干矛盾する気もするが、現実的な問題解決法としては仕方がないことだった。朝立ちしたオレのモノをパンティーをはいた股間に挟み込むには、まず一度抜いて鎮めるのが一番実用的な方法だった。

校門を入ると、靴箱のところにそれぞれのクラスを書いた紙が貼られていた。それによるとオレのクラスは３クラスあるうちの３組だった。靴箱にはすでにオレの名札が貼ってあった。黒い革靴を靴箱に入れ、バッグから出した上履きを履く。この白鴻女学園は入った年ごとにゴムの部分の色が決まっている。オレたちは３年間ずっと赤だ。オレとしては出来れば黄色か、緑の方が良かったと思う。なぜなら中学では男子と女子で青と赤に別れていたからだ。つくづく運命はオレを女っぽい方向に導きたいようだ。

教室に入ると机の上にも名前が貼ってあった。あいうえお順のようだ。出来ればあまり目立たない位置に座りたかったが、それも叶わなかった。た行のオレは真ん中より少し向こうだ。しかも悪いこ

とに前後の位置も真ん中だ。これには正直まいった。これでは前も後ろも常に気をつけていなければならない。

まだあまり座っている人はいなかったが、手持ち無沙汰なオレは仕方なく椅子に座った。机の横にカバンとバッグを掛ける。するとまわりの席にもポツポツと女生徒たちが座り出した。

しばらく経つと担任の先生がやってきた。女生徒たちが全員席についていく。全員女の中、男はオレひとりだ。

「みなさん、おはようございます。私がこのクラスの担任の山口智佳〈やまぐちともか〉です。これから1年間よろしくお願い致します。」

先生はなかなか快活そうな女の人だ。歳は２０代後半か３０代過ぎくらいだろうか?ポロシャツにパンツというラフな服装の上にジャージを羽織っている。体育の先生だと一目でわかる。

「あ、それと机に貼ってある名前は、みなさんが名前を憶えるまで剥がさないでください。それでは出席をとります。安部まさ美さん・・・・」

先生は次々に名前を呼んでいく。オレの列に入ると緊張してきた。

「・・・戸田有希さん」

「はい。」

オレは返事をした。

オレは女言葉を使うようになって、自然に少し高い声を出すようになっていた。声変わりはしていたが、それほど野太い声ではない。しかし、女としてはやはりハスキーな方だろう。少し高めに出さなければ、どうも女言葉は話しにくかった。

先生はオレが性同一性障害だと知っている（思っているというべきか）が、まったくそんな素振りは見せなかった。他の生徒とまっ

たく同じに扱ってくれるのはありがたいが、いざという時に助けてくれるのかちょっと心配だ。体育は特に気にかけてもらわないと困ることもありそうな気がする。

　オレは特別体育が得意という訳でもないが、女の中ではやりすぎる恐れもある。かげんがわからないから、あまり色々やらされたくなかった。それに夏になれば水泳もある。オレは当然授業に出ることが出来ない。胸はないし、体型も違う。それに股間が膨らんできたらどうしようもない。水着の女子ばかりの授業ではそうなる可能性は大きい。早めに何か休む理由を考えておいた方が良さそうだ。

―――――――――――――――

―――――――――――――――

――――――――――

　授業はあまり難しくなかった。やはりお嬢様学校だけあって勉強には重きを置いていないのかもしれない。勉強が苦手なオレでも何とかついていけそうだ。

　そのうえ女子校なので、家庭科や調理実習など女として生きて行くうえで大切なことを授業で習うのも特徴だ。いわゆる花嫁修行のようなものだが、これではさすがに生徒数がジリ貧になるのも仕方がないことかもしれない。今どき高校を卒業してすぐに結婚する人も少ないだろうし、他の大学に行くにもこの授業内容では難しいだろう。大学へ行く人は、ほとんどが白鴻女子短大に進むのもうなずける。

　しかし、これでは就職も難しいのではないだろうか？ここを卒業

したら男に戻るオレとしては、勉強がラクだと喜んでばかりもいられないかも知れない。なんとなくこの学校に来てしまったが、いったいこの先どうなるのかという不安が募ってくる。オレは女子大まで行く気はない。

とはいえ、それはまだ3年も先の話だ。今のオレには早く女生徒たちに馴染むことの方がずっと重要なのだ。

それにしても家庭科や調理実習は三吉先生に習っていたから助かった。もし習ってなかったら、最初からついていけなかっただろう。授業くらいで戸惑っていては、女に慣れるどころの話ではなくなってしまう。

女子校に来て驚いたことはトイレだった。初めて入った時には一瞬戸惑ってしまった。考えてみれば当たり前の事だが、両側に個室が並んでいるのは、男用のトイレにしか入ったことがなかったオレにとっては奇妙な光景だった。そもそもトイレが一つしかないのが不思議に思えた。トイレは必ず男用と女用が並んでいるというのが当たり前のことだと思っていた。

この学校には男用のトイレは職員室近くの男性職員用しかない。これを見ると本当に共学にするつもりがあったのかどうかさえ疑わしい限りだ。もし共学になっていたら、急遽男子用を作るつもりだったのだろうか？

ただ、トイレが個室しかないのはオレには有り難いことだった。入ってしまえば後は細かいことに気にする必要はない。なにしろ女が個室でどういう行動をするかなんて知りようがないから、ただあまり早くしすぎないことや、大きな音を立てないようにすることく

らい気をつけていれば良かった。オレにとってはトイレは唯一安心できる場所だった。
　ドラマでは女の子が男として男子校に入学するというのがあったが、実際にはあれは難しいだろうと思う。男が常に個室に入っていてはすぐに疑われてしまうに違いない。あれは作り話だからなんとかなるのだ。
　ただ、男はチャッチャと適当に手を洗って出てくるが、女はそういう訳にはいかなかった。ただ手を洗うだけでなく、鏡の前で長い時間何かやっている。前髪をしきりにさわっているが、オレにはそれが何をしているのかまったく解らなかった。

―――――――――――――――
―――――――――――――――
――――――――――

　オレは常に女に見えるように緊張していなければならなかった。それに同年代の少女たちに合わせなければならないし、そのうえこの白鴻女学園の女生徒たちは中学の時の女子たちとも少し雰囲気が違って戸惑った。さすがに今どきお嬢様でもないにしても、それでもこの白鴻の生徒はどこかおっとりしているようだ。まあ、しっかり者ばかりよりは、オレとしてはバレにくくて良かったかも知れないが、つかみどころがないぶん話を合わせるのは少々難しかった。
　もっともそんなオレの思いとは裏腹に、クラスメイトたちはやたらとオレに話しかけてきた。
「戸田さんって、名前はゆきさんなの？ゆうきさんなの？」

「戸田さんは何のクラブに入るのかしら?背が高いからスポーツが良いんじゃない?」
「戸田さんってスタイルいいけど。モデルかなにかやってらっしゃるの?」
オレは次々に発せられる質問にいちいち答えなければならなかった。それは嬉しい反面、気疲れも多かった。何かマズイことを言ってしまわないかと気が気じゃない。

なぜ急にこんな質問をされるのかと不思議に思ったが、話しているうちにだんだん理由が判ってきた。オレは自分では自分に自信がないからまわりを気にしているが、まわりの女生徒たちはオレのことなんか、ただの女生徒のうちの一人だと思っているだろうと考えていた。しかし、まわりの女子たちもオレのことを見ていたらしい。

オレは他人からどう見られているのか良く判らなかったのだが、彼女たちの話を総合すると、どうやらオレは少なからず目立っているようなのだ。男としては決して大きくない１６３ｃｍという背も、１５０ｃｍ以下の娘も多いこの学校では大きめだし、スタイルも良く見えるらしい。

十分に伸びなくて何とか形にしてもらったこの髪型も、彼女たちに言わせるとモデルのようだということだった。たしかにオレは男だから体型はスレンダーには違いないが、そんなにスタイルがいいとはどうしても思えない。

それにしても入学式の時から、可愛い娘がいると思っていたという娘や、中にはオレが具合が悪くなって連れて行かれたのまで見てた娘がいたのには驚いた。なんとも気恥ずかしい限りだ。女は意外に他の娘のことを見ているものらしい。

これではオレが考えていた、出来るだけ目立たないようにしたい

という願いは、とても叶えられそうにない。

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――

　白鴻女学園では必ずどこかのクラブに入らなければいけない決まりらしい。しかし、オレは校長と教頭からくれぐれも言われていることがある。それはスポーツのクラブには入らないようにということだった。

　もしスポーツのクラブに入って大会なんかに出た日には、もし男だとバレた時に大変な問題になる恐れがある。性同一性障害だと言っても通用しない可能性が大きいらしい。だからオレには文化部しか選択肢がないのだ。

　オレは2週間の間にどこのクラブにするか決めなければならなかった。

第12話　再会　オレの秘密がバレた?!

オレは昼休みになると、購買でサンドイッチとコーヒー牛乳を買って、中庭のベンチでひとりで食べていた。目の前には芝生の広場があって、背が低い木で囲まれた芝生には真ん中には百葉箱が置いてある。伝統ある学校だけあって、なんだか懐かしい景色だ。

入学式から3日たっていたが、教室や食堂にいると、何かと話しかけられ気疲れしてしまう。食事の時くらいのんびりしたかった。

「戸田君?」

急に名前を呼ばれ振り向いたオレは自分の目を疑った。そこにいたのは長谷川順子だった。

オレは知らん振りをするしかなかった。オレはまたサンドイッチを食べだしたが、内心はドキドキだ。長谷川はそれでもオレを見ている。

「戸田有希君だよね?」

どうもこれ以上無視することは出来そうにない。そうはいってもここでバレてしまっては元も子もない。まだ入学したばかりだというのに。オレは他人のふりをすることに決めた。

「わたし?戸田有希ですけど?」

同姓同名の別人だと思ってくれるだろうか?オレはいまごろになって、せめて名前を変えておかなかったことを後悔した。

「戸田君、なんで戸田君がこの学校にいるの?それに何よその恰好!」

オレはなに食わぬ顔で自分の服を見てから、長谷川に視線を移す。

「この学校の制服よ。それがどうかした?それにあなた誰なの?」

長谷川は面くらったような顔をして、オレの顔を見つめた。オレは目をそらしたかったが、そんな事をすれば嘘をついていると言ってるようなものだ。
「信じられない・・・別人のふりする気？」
なんだか怒っているようだ。
「わたしこの３日間ずっと見てたんだから！入学式の時は似てるなって思っただけだったけど、名前聞いたら同じじゃない、どうなってるの？」

長い沈黙が続いた・・・
「・・・はぁ～・・・」
オレは溜めていた息を吐き出した。もう騙せそうにない。
「何ではこっちのセリフよ。なんで長谷川さんがここにいるのよ。」
「あきれた・・・やっぱり戸田君なのね・・・」
「長谷川さん追加試験に合格したって言ってたじゃない。なのにどうして白鴻に来てるのよ。」
「だって・・・戸田君だって・・・」
どうやらこっちに先手を打たれて、長谷川は少し戸惑っているようだ。
「わたしは最初から白鴻女学園しか受けていないもの。」
「だって・・・戸田君も追加を・・・」
「あれは嘘なの！わたしは最初から白鴻女学園に来ることに決めてたんだから。」
これは本当のことだ。ただし女として入学するとは思ってもみなかったが。
「でも・・・なんで戸田君女の子みたいな恰好してるの？それになんで女ことばでしゃべってるの？キモチ悪い！」

さすがにオレも気持ち悪いと言われては良い気はしない。

「長谷川さん、性同一性障害って知ってる？」
長谷川は戸惑いの表情を浮かべている。
「・・・なんとなく・・・聞いたことはあるけど・・・」
「わたしね、性同一性障害なのよ。」
「え？」
「わたし・・・体は男だけど心は女なの。そういう病気なの。」
わざと病気という言葉を使った。一般的には病気と言った方が納得しやすいらしいからだ。

「・・・だって・・・戸田君、中学の時は男だったじゃない・・・」
「あの時も心は女だったの！」
「そんな・・・だって普通の男の子だったじゃない・・・」
「だからぁ、バレないように男のフリをしてたんじゃない。」

「ほんとなの？」
「うん。」
オレはうなずいた。
「それじゃぁ・・・今の戸田君が・・・本当の戸田君なの？」
「そうよ。」
長谷川はにわかには信じられないようだった。本当は嘘なのだから無理もないが、オレとしてはどうしても信じてもらうしかない。

「性同一性障害って・・・じゃぁ・・・戸田君は男の人が好きなの？」
それは短絡的な発想だが、今ここで、長谷川に対し性同一性障害とは無数のパターンがあって・・・などと性同一性障害のレクチャーをしてる場合でもない。
「まあ、そういうことになるわね。」
「じゃあなんで女子校に来るのよ！おかしいじゃない！」
なかなか鋭い質問だ。だがオレはこんな時のために性同一性障害と

はどういうものかミッチリ勉強しているのだ。性同一性障害の知識にかけては結構なものだ。

「長谷川さんは女の子が好き？違うでしょう？男の子のことが好きなんでしょう？」

長谷川はコクリとうなずいた。

「女子校に来るのは女の子が好きだからじゃなくて、自分が女だから来るんでしょ？」

長谷川の目が泳いでいる。頭の中で必死に論理を考えているらしい。

「わたしは女なの、だから女子校に来たのよ。あなたと同じように。」

「わたしと・・・同じ・・・？」

「そう、体だけは男だけどね。」

「それじゃぁ・・・戸田君はずっと女の子になりたかったっていうの？」

「なりたいんじゃなくて、女だったの。」

「でも男じゃない。」

初めて性同一性障害の話を聞いてすぐに理解できる人などそうそういないだろう。長谷川が混乱するのも無理はない。

しかし、どうやら長谷川も少しトーンが落ちてきた。

「ねえ、長谷川さんも少し座らない？」

オレはお尻をずらしてベンチに空きを作った。長谷川は一瞬躊躇したが大人しく座った。これは良い徴候かもしれない。オレのことを気持ち悪いと思っていたら、女は決して座らないだろう。

「長谷川さん・・・わたしね、ずっと辛かったんだ。心では自分のことを女だと思ってるのに、男として生きるのが・・・」

これは一世一代の大芝居だ！いまオレの演技力が試されているのだ。

「それで・・・この白鴻女学園が共学になるって聞いて・・・男と

してでもいいから・・・せめて女子校に行きたいと思ったの・・・」
長谷川は黙って聞いている。だが横にいる長谷川がどんな顔をしているかはオレには見えない。
「・・・そしたら共学が中止になっちゃって・・・わたしどうしていいかわからなかった・・・ここしか受験してなかったし・・・それで学校に事情を説明したら・・・だったら女の子として入学しないかって・・・」
なんだかオレもこの役に入り込んできているようだ。
「・・・わたし・・・すごっごく嬉しかった・・・本当に女の子として入学できるなんて・・・」
オレは長谷川を見た。
「・・・わたし・・・女の子として生きたいの・・・だから・・・」
オレの目はすでに潤んでいた。

「え?・・・じゃぁ先生も・・・知ってるってこと?」
「うん・・・」
胸の奥から熱いものがこみ上げてくる。オレは性同一性障害者に共感しているのだろうか?
「・・・戸田君・・・ごめん・・・わたしぜんぜん知らなかったから・・・」
一旦理解すれば女は性同一性障害者に寛大だ。男とはまったく違う反応をするという。それは気持ちが女だということで男よりも無害感があるからだろうか。その点男の差別的な反応とはまったく違う。男は見た目が女に見えればその限りではないが、男であることが判る性同一性障害者に対しては決して心を許すことはないらしい。もし受け入れる男がいたとしたら、その人も性同一性障害者ではないかと疑ったほうが良い。
「いいよ。気にしてないから・・・ただ、このことは黙っててほしい。わたし、普通に女の子として生活したいの。」

「・・・わかった・・・」
長谷川は納得してくれたようだ。
「でも・・・わたしには、普通にしゃべってくれない？」
「普通って？男言葉でってこと？」
「そう・・・」
「それは無理よ。だってそんなところを他の人に見られたら変に思われるじゃない。」
「そうか・・・そうよね・・・」
オレには長谷川が何を思っているのか良くわからない。

「戸田君・・・」
「それも止めてくれない？」
「え？何を？」
「その“君”っていうの。」
「あ、そっか・・・」
長谷川はあまり乗り気ではないようだが言い換えた。

「戸田さん・・・あなた結構有名になってるの知ってる？」
「え？！」
今度はオレが驚く番だった。
「わたしの１組でもみんな知ってるよ。」
「ウソでしょう？なんで？」
クラスの中では仕方ないとしても、オレはできるだけ目立たないようにしているのに、ふたつ先の１組にまで知られているとは思わなかった。
「有名って・・・なんでそんなことに・・・？」
「なんでって・・・わたしは戸田君が男だって知ってるから・・・キモチ悪と思うけど・・・」
なんかいちいち気にさわる言い方をするやつだ。
「知らない人が見たら・・・可愛いんじゃないの？」

「可愛い？」
長谷川の口からこんな言葉が出るとは思わなかったからオレは正直驚いた。
「オレって可愛いの？」
思わず男言葉が出てしまい焦った。しかし長谷川は気付かなかったようだ。
「だから言ってるでしょう・・・わたしは気持ち悪いって・・・」
長谷川はなんだか居心地が悪そうにしている。
「男がセーラー服なんか着て・・・気持ち悪いに決まってるじゃない！」
そう言うと長谷川は急に立ち上がり、そのまま去っていこうとしている。
「あ、長谷川さん！」
オレが慌てて呼び止めようとすると、長谷川は振り返って言った。
「安心して！戸田君のこと、みんなには言わないから。」
オレはそれを聞いて少しだけ安心した。

しかし、その思いはすぐに消えてしまった。
長谷川がオレのことを性同一性障害だと納得したとしても、オレが男だということは知っている。それはいつ口を滑らさないとも限らないということではないのか？

それにオレの方も長谷川の前では、さっきみたいについ男言葉など使ってしまわないとも限らない。それでなくても、長谷川に対しては、他の生徒と違って性同一性障害者として振る舞わなければならないのだ。もちろんどっちも女を演じるには違いないかもしれないが、オレの中では少し心構えが違ってしまうのは仕方がない。

相手がオレを女と思っているか、男と知っているかは、オレにとっては大きな問題なのだ。

それにしても、オレが有名になっているとは困ったことになった。
注目されればされるほど、バレる確率も上がるのではないだろうか？オレはいつまでバレずにいられるのか心配になってきた。

第１３話　災難　一難去ってまた一難

入学式から6日、やっとやって来た土日をオレはほとんど家でゴロゴロして過ごした。食べて寝る以外はなにもしたくなかった。女ばかりの中で過ごす最初の一週間は緊張の連続で、オレはそうとう精神的に疲れていたようだ。

長谷川順子が白鴻女学園に入学していたというハプニングはあったが、それも何とか切り抜けることができた。おかげで長谷川からいろんな情報を得られたのは良かったが、中学時代男として話した相手と、こんどは性同一性障害者として話をするのは結構頭が混乱してくる。しかもオレは中学時代から実は心は女だったことになっているから、中学のころの話にも、うかつに調子を合わせるのは危険だった。

男として話したことも、実は女であることを隠して話していたという事だし、長谷川はオレが男を恋愛対象として見ていると思っているから、そうなると中学の男友達との関係も微妙なことになってしまう。これは早いうちに性同一性障害といってもいろいろあると訂正しておこうかとも思ったが、しかしオレが女を好きだとわかると、かえって警戒心を持たれてしまうかも知れず難しい問題だった。オレは出来れば今の長谷川との関係を壊したくはなかった。

それはもちろんバラされたくないということもあったが、それ以上に今のオレにとっては長谷川は唯一気がおけない存在になっていたからだ。長谷川となら中庭のベンチで昼食を一緒に食べることもそれほど緊張しなかった。もちろん会話には細心の注意を払わなければいけなかったが。

――――――――――――――――
――――――――――――――――
――――――――――

そんなわけだから、オレは疲れてグッスリ眠ってしまったようで、月曜の朝、寝坊してしまった。起きた時には、いつもの電車に間に合わない時間だった。次の電車なら何とか間に合うが、それに乗り遅れると遅刻してしまう。

オレは急いで着替えると、朝食も食べずに走って駅に向かった。

電車には何とか間に合ったが、この時間の電車はいつもの電車より混んでいた。特に一番階段に近いドアに駆け込んだため、もっとも混んだ車両に乗り込んでしまったようだ。まわりには白鴻や他の学校の生徒も多かったが、サラリーマンの姿も多い。その時オレはいつもは後方の女性専用車両に乗っているのを思い出した。その方が空いているからというのが理由だった。

オレは蒸し暑い中でだんだん気分が悪くなってきた。いつもは食べている朝食を食べなかったのもあっただろうし、必死で走ったのも関係していただろう。胸はブラジャーで締めつけ、下にはきつめのガードルをはいているのも原因だったかも知れない。そのうえ今朝は急いでいたので、一発抜くことも出来ず、いつものように股間に挟み込むことも出来なかった。おかげで今やオレのモノはガードルの中で小さなパンティーから頭を出してしまっていた。

まわりは女生徒の匂いやＯＬがつけた香水の匂いで頭がクラクラしてくる。後何駅かで着くという時に、オレはお尻のあたりに違和

感をおぼえた。

最初はただカバンの角でも当っているのだろうと気にしなかったが、それはオレのスカートをはいた股の部分に、足の間へと執拗に分け入ってこようとしているようだった。しかししばらくするとそれは当らなくなった。オレはやっぱりただカバンが当っていたのだと思ったが、間もなく今度は人の手がオレのお尻を触りだした。オレはその時になって、それが痴漢なのだと気がついた。

オレの尻を触っていた手は次第に股間に近づき、お尻の割れ目を上下に擦りだす。オレは何とかして避けようと思ったが、こうもギュウギュウ詰めではほとんど動けるスペースもない。相手もそれが解っていてやっているのだ。途中の駅で降りようにも快速のこの電車は止まらない。

もちろん男のオレは触られたとしても実害があるわけではない。しかし、オレには知られてはいけない秘密がある。おかげで痴漢だと声をあげることも出来ない。もしそんなことをしてオレが男だとバレたら、オレまで変態だと思われるのがおちだ。

それに実際にはオレもそんなことが出来る状態ではなかった。オレは痴漢というものがこんなに怖いものだとは思ってもみなかった。見えない相手に体を触られる恐怖は男のオレでもこんなに怖いのだから、女だったら何の抵抗も出来なくて当たり前だと思った。こんな状態では声など出せるハズがない。

痴漢の手は次第に大胆になり、オレのスカートをたくし上げていく。男はオレの背中にぴったりと体を張り付けているようで、その様子は他の人からは見えないみたいだ。男の手はスカート越しではなく直にオレの足を触りだす。そして手のひらを縦にして拒もうと

しっかり閉じたオレの太股の間に分け入ってきた。いくらしっかりと閉じていても柔らかい太モモでは完全に防ぐことなど出来なかった。

オレの太モモの間に完全に挟まった手を男はゆっくりと回転させていく、オレも必死で股を締めるが、徐々に男の手のひらが上を向き、オレが女だったらそこに存在するであろう割れ目の部分を執拗に指で嬲りだす。しかも親指は肛門の位置を探っている。

オレにとってせめてもの救いだったのはガードルをはいていたことだ。もしパンティーだけだったら割れ目の方は心配なくても肛門には指を突っ込まれてしまったかもしれない。ただ、オレには割れ目はないが、女にはないものがある。オレとしてもそれを触られるのだけは阻止したかった。

オレの片手はカバンで塞がっているから、もう片方の手で何とかするしかない。オレは吊り革をつかんでいた手を何とか降ろそうとした。

「あっ・・・すみません・・・」

サラリーマンの肩に手があたりオレは小さな声で謝った。こうも満員では上げた手を降ろすのもままならない。オレが手を降ろすあいだにも数人に邪魔そうに睨まれた。これではオレの方が痴漢に間違われそうだ。セーラー服を来た男が痴漢していたのでは完全に変態だ。

それでも何とかオレは股のところまで手を降ろすことができた。オレは執拗な攻撃に硬く勃起したものを、スカートの上から手でしっかりとガードした。今となれば股間に挟んでいなかったので逆に助かった。

しかし、男はオレを女だと思っているから、何とか割れ目を探り当てようと、オレの股間を探り続けている。当然そこにあるものは揉みくちゃにされていた。そこを触られた女がどんな気持ちがするのかは知らなかったが、男のものは決して気持ち良いものではない。

（うっ・・・）

思いきり指で玉を押しつぶされ、思わず声が出そうになる。オレは歯を食いしばって男が玉を潰すのを必死で堪えるしかなかった。

やっと駅に着き、乗客に押し出されるようにドアから出たオレは、痴漢の姿を追おうとしたが、もう痴漢は人込みに紛れてしまったようで判らなかった。もっともすぐ近くのサラリーマンがその男だったとしてもオレには判らなかっただろうが。

すぐにでも駅のトイレでオレの股間がどんなことになっているのか確認したかった。男に弄ばれた玉が痛くて堪らない。しかしそんなことをしていたら遅刻してしまうだろう。あまり目立ちたくないオレは遅刻は避けたかった。オレは痛む股間を気にしながらも走って学校へ向かった。

―――――――――――――――

―――――――――――――――

―――――――――

何とか始業時間に間に合ったオレは、すぐに椅子に座って息を整えた。股間はズキズキと痛みが増しているような気がする。そのうえ硬く勃起したものは一向に勢いが衰えず。ガードルの中でドクドクと脈打っている。オレは自分が痴漢に遇って興奮しているようで恥ずかしかった。実際には土日もオナニーせず、今朝もまた急いで

いたため抜かなかったのも大きく関係していたに違いない。

授業が始っても興奮は衰えなかった。なにせまわりは女だらけ、設定では性同一性障害ということになっているが、オレは普通に女に性的魅力を感じるのだ。こんなに興奮した状態では、だいぶ慣れてきた教室に充満した女の匂いにさえも身体が自然に反応してしまう。

ドクドクと息づくそれは、勝手にガードルに自身を擦り付け、次第に感覚をなくしていく。オレは気分の悪さもあいまって顔から血の気が引いていくのがわかった。

（あっ・・・）

オレのペニスがガードルの中に、盛大に精子をブチまけた瞬間、オレは失神して机に突っ伏してしまった・・・

意識が戻った時にはオレはベッドに寝かされていた。ベッドのまわりはカーテンで囲われている。

「あっ！」

オレは自分が何でここにいるのか思い出した。教室で倒れてしまったのだ。オレが慌てて股間に手をやると、パンツの中には何やらゴワゴワしたものが入っている。オレはベッドに起き上がり驚いた。

オレはブラジャーをしていなかった。もちろんガードルもはいていない。着けているのは今朝着てきたスリップだけで、パンツはオレがはいてきたものではなかった。股間には厚くガーゼが当てられ、しっかりとテープで固定されている。股間の痛みはだいぶ和らいでいた。

オレの秘密がバレてしまった・・・そう思って呆然としていると、カーテンが少し開いて女の顔が覗いた。
「きゃっ！」
オレはとっさに布団で体を隠した。とっさの時に男っぽく驚かないように練習したのが役にたった。
「ごめんなさい、気がついたみたいね。」
「・・・は・・はい・・・」
オレは誰か解らないから恐る恐る答えた。
「戸田さん、気分はどう？」
「あ・・・だいぶいいみたいです。」
カーテンを開けて入ってきた女は白衣を着ていた。
「わたしはこの白鴻女学園の専属医の白石です。戸田さんのことは知っているから安心して。」
オレは黙ってうなずいた。
「体も他の人は見てないから安心していいわよ。やっぱりあなたみたいな人は出来ないわよね。」
「え？」
オレは何のことか判らなかった。
「大丈夫よ、あなたが入学して来るって聞いて、ちゃんと性同一性障害について勉強しておいたから。校長先生から言われて資料も集めたし、先生方とも全員で勉強会も開いたのよ。」
「・・・・・」
「先生方もちゃんと資料を読んで勉強しているから、今日も対処に役にたったわ。あなたが倒れたのですぐに隣の教室で授業をしていた斉藤先生に運んでもらったの。」
オレはだんだん解ってきた。資料というのはおそらくオレがもらったあの資料のことだろう。それはオレにとっては都合がいいことだった。同じ資料で勉強しているということは、オレの知識とみんなの知識が同じということだから、オレの性同一性障害者としての行

動が、みんなの知識と一致しているということだし、それだけ疑われる可能性が低くなる。

「あなたのような人の中には自分でオナニーすることができない子もいるのは知ってるわ。大変よねえ。」

それはオレも知っている。自分でオナニーすることが出来ず、常に夢精するまで放っておくのだそうだ。自分でするなんて屈辱的に感じるものらしい。実際にはオレの場合ほぼ毎日しているのだが、否定して疑われてもはじまらないから言わなかった。

「ちゃんと処置はしておいたから。でもね、気になるのは解るけど、あまり乱暴に扱わない方がいいわよ。ずいぶん腫れていたわ。炎症を起こしたら大変よ。」

そうか、この先生はオレが自分で玉を潰したと思っているようだ。たしかに資料にも書いてあった。性同一性障害の人は、時にイヤで叩いてしまったり、身体の中に押し込んで女の子の股間のようにする時に、誤って痛めてしまったりすることがあるらしい。オレがそんな行為をしていたと思われるのは心外だが、性同一性障害ということになっている以上そういうことにしておいた方が良さそうだ。それに痴漢に潰されたというのもまた別の意味で恥ずかしい。

「ごめんなさい・・・わたし・・・」

オレはこんな時は、はっきり言わないのが良いと気付いていた。相手に勝手に気持ちを判断してもらった方がボロが出なくていいのだ。

「いいのよ。あなたが謝らなくて、あなたの辛さは良く判るわ。」

まあ、先生がわかるのはオレの辛さのごく一部だろうが。

「それで先生考えていたんだけど、少し薬を使った方が良いんじゃないかな?戸田さんさえ良ければだけど。」

「薬・・・ですか?」

「そう、戸田さんは女の子だから、なかなか男の子の処理は難しいでしょう?」

「・・・はぃ・・・」
どうも先生が言ってる意味が良くわからない。
「いくら心は女の子でも、身体が男だとどうしても影響してくるでしょう。だから男の子の働きを少し薬で押さえれば、戸田さんも生活しやすくなると思うのよ。」
「そんなこと出来るんですか？」
「ええ、パッチを貼るだけの簡単な方法なの。これを身体の皮膚が柔らかいところ・・・例えばモモの内側とか、お腹とかに貼っておけば、男の子の働きを押さえてくれるのよ。」
「そうなんですかぁ・・・」
それは直径２ｃｍほどの絆創膏のようなものだった。

たしかにオレは毎日、朝一回抜いてはいても、一日に2、3回堪らなくなる時がある。それを薬で少しでも押さえることが出来れば、だいぶ学園生活は楽になるだろう。
「それに戸田さんはガードルで押さえているみたいだけど、いつもガードルをはいていると血行が悪くなって体にも良くないの。また今日みたいに倒れてしまうかも知れないわ。」
「でも・・・ガードルをはかないと大きくなった時に困るんじゃないですか？」
「大丈夫だと思うわよ。そんなに大きくならないハズだから、心配ならしばらくはガードルをはいてみて、大丈夫なようだったら止めればいいでしょう？」
「そうですね・・・」
オレもたしかにずっとガードルをはいてるのは大変だと思っていたところだったから、先生がすすめる薬を使ってみることにした。
「じゃあ、これね。毎日お風呂の後に貼り替えればいいから。同じところに貼るとかぶれる恐れもあるから、少しずつ違うところに貼るといいわ。」
「はい。」

この絆創膏のようなものを貼るだけでいいならカンタンそうだ。

―――――――――――――――
―――――――――――――――
――――――――――

　昼休み中庭のベンチに座っていると長谷川がやってきた。
「あなた今日倒れたそうだけど大丈夫なの？」
「ええ、ちょっと具合が悪くなっただけだから。」
まさか遅刻して満員電車に乗ったら痴漢に遇い、教室で射精して失神し保健室に運ばれたなんてカッコ悪くて言えるハズがない。

　そのうえ今でもオレの股間には玉の腫れを引かせるための、メントールを塗ったガーゼが貼り付けられているのだ。ゴワゴワする股間がまるでアノ日の女の子のようだ。そういえば白石先生にアノ日をちゃんと設定した方が良いだろうと助言を受けていた。そうして規則正しく体育を休んだりしないと、怪しまれるかもしれないらしい。女のふりをするのも大変だ。近いうちに白石先生と相談してそういうことを詳しく詰めようということになっていた。そういう細かなことに女は意外に気がつくものらしい。

「あなたどこのクラブに入るか決めたの？」
「ううん・・・まだ決めてない。」
オレはまだどのクラブに入るか決めてなかった。正確にはそれどころではなかったのだが。
「あなたスポーツが良いんじゃないの？」
「いや、スポーツはだめなの。」
「どうして？」

「だって体が男だと有利じゃない。もし大会とかに出てバレたら大変だから・・・」
「そっか・・・あなたもいろいろ大変ねぇ。」
長谷川はオレのことを“あなた”と言うようになっていた。どうもオレのことを“さん”づけで呼ぶのはまだ抵抗があるらしい。

「わたしはお茶か、お花なんかどうかと思ってるんだけど。」
「え?あなたそんなのに興味があるの?」
「うん・・・」
オレは着物を着れるようなクラブがいいなぁと漠然と考えていたのだ。
「お花にしようかな?」
お茶は三吉先生に習いたいので、違うやり方だったら困ると思った。

「お花かぁ・・・」
長谷川はしばらく考えていた。
「じゃぁ、わたしもお花にしようかな?」
「なんで?長谷川さんは自分が好きなところに入ればいいじゃない。」
「だって、わたしも迷ってるんだもん。特にやりたい事もないし・・・」
「ふ~ん・・・そうなんだぁ・・・」
オレには長谷川の考えていることは、どうも良く判らなかった。

第１４話　設定　女の子の気持ち

次の日からオレは絶対に女性専用車両に乗るようになった。痴漢されても男だから実害はないかと思ったが、実害は男の方が上かもしれない。もっとも男のオレが女性専用車両に乗ること自体が罪かもしれないが、そうそう何度も玉を潰されてはかなわない。

白石先生からもらった薬を使いだして４、５日すると効果が出始めて、オレは勃起に悩まされることもなくなった。どうやらもうガードルも必要なさそうだが、心配なのでもうしばらくガードルは穿いていたいと思う。

最近困っていることといえば、ワキ毛を剃っていたら、だんだんワキがヒリヒリしてきたのだ。鏡に写して見ると赤くなっている。

オレはエステに行くと永久脱毛されて毛がなくなってしまうと思い、あれ以来行かなかったが、そうも言ってられなくなってきた。仕方なくお母さんに相談したら、あっさり行ってきなさいと言われてしまった。

次の日曜日にエステに行くと、

「あー、カミソリ負けですね。戸田さまは敏感肌のようですね。そういう方は生えかけの毛の刺激も良くないんですよ。」

そう言ってエステのお姉さんはオレのワキから次々に毛を抜いていく、抜いたところにはもう生えないのだと思うとちょっと複雑な心境だ。オレは男に戻った時、ワキ毛がなくてどうするつもりなのだろうか？しかしこれから３年間処理し続けることを考えれば、永久脱毛も悪くないかという気になってくる。

なにしろオレは女になるので精一杯で、女でさえも面倒なムダ毛の手入れまで手が回らないのだ。それに男に戻っても毛はそんなに重要じゃない気もする。近頃では毛が多い男を嫌う女も結構多いと聞くし、裸になる機会などそんなに多くないように思う。

この日は脱毛だけにした。お金のことは気にしなくていいと母は言ったが、あまりお金を使っては申し訳ない気がした。エステは結構お金がかかるのだ。まあ、今度の時はやってもらおうと思った。

エレベーターで一階に降りると、そこにはちょうど二光さんが帰ってきたところだった。

「あらぁ！有希ちゃん来てたの？」

「は、はい・・・」

どうもおネエキャラの人って個性が強烈だ。前に来た時は知らなかったが、二光さんはテレビにも出たりする有名な人らしい。

「有希ちゃんったら、前に会った時より一段ときれいになってるじゃない！肌のつやも良くなって！」

二光さんがオレの頬をなでまくるので、オレは何も言えなかった。

「もっとゆっくりしていけばいいのに～、またいらっしゃいね。」

そう言うとエレベーターに乗り込んで行った。今日はこの前と違って化粧をしていたから、なんとなく綺麗に見えた。なんかすごい人だ。

オレも一度くらいは本気の化粧をしてみたい気になってくる。

―――――――――――――――
―――――――――――――――

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

クラブは結局、華道クラブに入部した。どういうわけか長谷川順子も一緒だ。まあ、オレのことを知っている人がいる方が、少しは心強いかもしれない。

オレはお花も一応、三吉先生に教わっていたので、順調な滑り出しだったが、長谷川は結構手こずっている。座り方から、ハサミの持ち方から、いちいち指導されている様は、まるでお嬢様教育を始めたころのオレみたいだ。

オレの方はと言えば、先生にも大胆で良いなどと褒められたが、それはオレが男だからに違いない。先生はオレが本当は男と知っているから点が甘いのだろう。

「もう・・・あんた何でいきなりそんなに出来るのよ！これじゃぁどっちが女だかわかりゃしないわ・・・」

ふたりきりになると長谷川は一緒のクラブにして失敗したとばかりに悪態をついた。

「ふふっ・・・だってわたし習ってたもの。」

「どこで？」

「教えない！」

春休みにお嬢様教育を受けていたことを教えても良かったが、今はまだ言いたくなかった。

「うわっ！キモチわる～！！」

長谷川も決して負けてない。なんだか最近、長谷川の方が男っぽいくらいだ。長谷川ってこんなヤツだっただろうか？中学のころはクラスが違ってほとんど話したことはなかったが、もっと大人しい女の子のイメージを持っていたのだが・・・

「それにしてもあなたも良くやるわよねぇ。見たわよぉ」
「え？なにを？」
「体育の時間よ。あんた休んでたでしょう。」
「あぁ・・・うん・・・」
オレはバツが悪かった。女のふりをするのは良いとしても、アノ日のふりをして体育を休むのは、なんだか気が咎めるし、すごく恥ずかしい。

別にオレのことを女と思っている人に対しては、当たり前のことなので構わないのだが、先生たちはオレが男だと知っているのだから、男のオレが「アノ日なので休ませてください」なんて言うのはおかしいに決まっている。もちろん白石先生がちゃんと話してくれているというのは判っているし、先生方も納得してくれているとは言うが、それでもやはり恥ずかしかったし、変に思われていないか心配だった。

それを長谷川にまで指摘されてはオレとしても立つ瀬がない。
「だって・・・長谷川さんは知ってるけど・・・みんなはわたしのこと女だと思ってるんだから・・・」
「わかってるわよ！そんなこと。それでも気持ち悪いんだからしょうがないでしょ！」
長谷川は何かというとオレのことを気持ち悪いという。そんなことは解っているが、あらためて言われるとちょっと腹が立つ。

「巾着まで持っちゃって、トイレに入るの見たわよ。」
そりゃぁオレだって恥ずかしいに決まっている。中学の頃は女子も巾着なんか持ってなかったと思うが、高校に来てみるとみんな生理用品を入れた巾着を持っているのだ。女子校だからかも知れないが、

男の先生もいるというのに平気なのだ、どうやら女子校では先生は男のうちに入っていないらしい。よほどカッコ良ければどうか判らないが。しかしみんなが持っている以上、本当はオレには必要なくても持ってなくてはいけない。

「仕方がないじゃない、白石先生に言われてるんだから。ほら・・・」

オレは生徒手帳にはさんだ印をつけたカレンダーを見せた。それがオレのアノ日のサイクルだ。白石先生が医者として、おかしくないように考えて多少ずらして印を付けてくれているのだ。

「わたしは、これに合わせてアノ日にならなきゃいけないの。」

「へ～・・・」

長谷川はしげしげとカレンダーを見ていたが、真面目な顔になって言った。

「女のふりするのも大変なのねぇ・・・」

そんな風に言われると、なんだか憐れみを受けてるような気がしてくる。とはいえ、こんな話を出来るのも長谷川だけだし、ありがたいと言えなくはない。ただオレが性同一性障害という設定でなければもっと打ち解けることも出来るかもしれないのだが。

「でもいいの・・・こういうのもわたしは嬉しいんだから・・・」

オレはあくまで女の子になりたいと思ってなければならない。そういう人ならアノ日のふりをするのも嬉しいハズなのだ。それを長谷川が理解出来ようが出来まいがオレは性同一性障害者として発言しなければならない。

「ほんと、あなたって健気よねぇ・・・」

また険がある言い方をする。

「長谷川さんって、わたしのこと馬鹿にしてるの？なんかいちいち突っかかるような言い方するけど。」

「そ・・そんなことないけど・・・」
長谷川は少し言い淀んだ。
「なんかねぇ・・・男の頃のあんたを知ってるから、変な感じなのよ・・・それに・・・」
「それに？」
「それにさぁ・・・みんなあんたのこと可愛いっていってるし・・・あんたは平気なんだろうけど、わたしは秘密を共有させられて困ってるのよ。あんたのこと知ってるのに話合わせなきゃいけないんだからね。」

そうか、オレは自分のことで精一杯で考えたことも無かったが、長谷川はこの事を誰にもいえない立場になっているのだ。オレは大変だけど、先生方がサポートしてくれるからいいが、長谷川はオレのことを知りながら、オレ以外の誰にも話せずにいたのだった。
「・・・ごめん・・・わたし自分のことしか考えてなかった・・・長谷川さんの大変さなんて考えたこともなかった・・・ほんとごめんなさい・・・」
オレは長谷川に頭を下げた。本当に申し訳ないと思った。

オレは自分の勝手で女として入学したのだからどんなに苦労しても仕方がないことだったが、長谷川はこの事についてはオレのわがままの被害者なのだ。
「ちょっと・・・戸田君、どうしたのよ急に・・・そこまで謝ることないじゃない。」
「・・・だって・・・わたし協力してもらってるのに・・・ぜんぜん感謝してなかった・・・長谷川さんは被害者なのに・・・」
「被害者？！なんでそうなるのよ！」
長谷川はなぜか怒っている。

「戸田君！わたし戸田君に協力はしてるけど、被害者なんて思って

ないからね！だって嫌なら戸田君のこと無視すればいいだけの事じゃない。」

言われてみればたしかにそうだが、オレには長谷川の気持ちは良く解らないのだからどうしようもない。

「あんたそれでも女なの？恰好だけ女らしくしても、ちっとも女の子の気持ちわかってないじゃない！」

痛いところを突かれた。オレはたしかに女の子の気持ちなんて解らない。いくら女性の気持ちを書いてある小説を読んでも、本当のところは何もわかってないと言っていい。

「わたし・・・やっぱり女の子になんてなれないのかな・・・」

オレはやっぱり自信がない。女のふりをするのも、性同一性障害のふりをするのもなんだか無理な気がしてきた。

「やっぱり・・・男が女子高生になるなんて・・・無理なのかな・・・」

オレはなんだか悲しくなってきた。それにすごく情けない。そんな思いが重なって涙があふれてきた。オレは女になってすっかり泣き虫になってしまったようだ。それもまた情けなかった。

「ちょっと・・・戸田君・・・」

長谷川は慌てたように、泣き続けるオレの肩を揺すっている。

「戸田君・・・ごめん・・・」

長谷川はオレの頭に手を回して自分の胸に抱きとめた。オレの顔を長谷川の柔らかい胸が包み込む。オレにもこんな柔らかな胸があったらいいのに・・・

「意地悪なこと言ってごめん・・・有希は女の子だよ・・・すっごく可愛いよ・・・」

長谷川がオレの頭を撫でている。これでは男と女が逆ではないか？

「・・・長谷川さん・・・」

でも今は二人ともセーラー服を着た女の子なのだ。そんなこと考え

る方がおかしいのかも知れない。
「長谷川さん・・・わたし女の子の気持ち・・・わかるようになるかな・・・？」
「なるわよ。有希ならきっとなれるわ！」
長谷川はさらにオレをきつく抱きしめた。
「だって・・・こんなに可愛いんだもん・・・」

オレには長谷川の気持ちがまったく解らなかった。

第１５話　麻衣　オレの可愛い妹

「お姉ちゃん！」
学校からの帰り、家の近くで妹の麻衣が急に後ろから抱きついてきた。
「あ、麻衣、お帰り。」
麻衣は制服姿。少し大きめの真新しいセーラー服が可愛らしい。オレも着たことがある中学のセーラー服だ。
「お姉ちゃん少し髪伸びたねぇ。最初お姉ちゃんってわからなかったよ。」
オレはもう少し髪を伸ばそうと思っていた。ショートが似合っていると言われるが、女の子ならやっぱり伸ばしてみたい。

「どうしたの？麻衣。」
麻衣はちょっと照れたようにオレの腕に抱きついてくる。こうして男のオレは高校のセーラー服、妹は中学のセーラー服を着て一緒に歩いているのも、よく考えてみれば奇妙な光景だ。
「お姉ちゃんって、どんどんきれいになっていくね。」
「え？！」
オレは妹にそう言われてドキッとした。
「なんか高校に入ってから、またきれいになったっておかあさんも言ってたよ。」
「ほんと？」
妹にそんなことを言われて、オレはどんな顔をすればいいのか良くわからなかった。

妹がオレのことを“お姉ちゃん”と呼ぶようになってから、どういうわけかオレたちの関係もすっかり変わってしまった。妹の麻衣はまるでオレのことを本当の姉であるかのように接してくるため、

オレも自然に姉として振る舞うようになってしまう。麻衣が少し前までは兄であったオレに対し、なぜそんな風に接することが出来るのかオレには良く解らなかった。

ただ姉妹のように接するようになってから、以前のように言い争うこともなくなり、オレは良い姉を演じているし、麻衣もオレの言うことは良く聞くようになっていた。その姿は傍からから見れば、ほんとうに仲がいい姉妹に見えるかもしれない。

「麻衣だって、中学生になってずいぶんお姉さんになったじゃない。セーラー服もすごく似合ってるわよ。」

「ほんとう?!嬉しい!」

麻衣は恥ずかしそうに頬を赤らめている。オレはそんな可愛い妹が大好きだ。兄妹の関係の頃は麻衣を煩わしく感じたこともあったが、姉妹の関係になってからはほんとうに素直に可愛いと思えるのだ。

「あたしもお姉ちゃんみたいに、きれいになれるかなぁ。」

「そんな・・・麻衣は本当の女の子なんだから、わたしなんかよりきれいになるに決まってるじゃない!」

「そんなことないよ。お姉ちゃんって自分のことが良くわかってないんだもんなあ。」

「自分のこと?」

たしかにその通りかもしれない。他の人からも言われるが、オレは自分のことが良く判っていないらしい。しかし、自分が判らないオレには、何が判らないのかも良く判らないのだ。おそらくそれがオレの自信のなさにつながっているのではないかという気がしていた。

「お姉ちゃんって、自分で思ってるよりずっときれいだし、ずっと可愛いんだよ。」

「そんなあ・・・そんなことないわよ・・・」

妹の口から可愛いなんて言葉を聞くとは思ってもみなかった。
「ううん、お姉ちゃんってすごく可愛いよ。もっと自信もってよ。」
そんなこと言われてもオレは困ってしまう。男のオレが可愛いわけないではないか。

「それは・・・男としてはってことでしょう?」
「ちがうよ。だってあたしお姉ちゃんのこと男なんて思ってないもん。」
「え?!そうなの?」
いったいいつからそんな事になっているのだろうか?
「そうだよ、あたしだけじゃないよ。おかあさんもそうだと思うよ。」
なんだかいつのまにか周りが変わってしまい、オレだけ置き去りにされているような気がしてくる。

「わたしいったいどうなっちゃうのかなぁ・・・」
「どうって?」
「だって今は女の子として生活してるけど、高校卒業したら男に戻らなきゃいけないのに・・・」
「え~!お姉ちゃん男にもどっちゃうの?」
「それはそうでしょう?だってずっと女の子でいるわけにはいかないだろうし・・・」
「あたしは女の子のままでいいと思うけどなぁ。」
妹はそうしなよと言わんばかりにオレの顔を見上げている。しかし、これればかりはいくら可愛い妹の頼みでもきけるハズもない。
「良いわけないわよ!だって高校卒業したらどうするの?大学に行くかもしれないし、就職するかもしれないじゃない。ずっと女のままでいられるわけじゃないのよ。」
「う~ん・・・でも・・・高校生の間に女の子になっちゃうかも・・・だって3年もあるんだもん!」

「そんなバカなぁ・・・！」
麻衣はなんて荒唐無稽なことを考える娘なのだろうか？男のオレが女子高に通ったからといって女になるハズがないではないか。
　いくらオレが多少女らしくても、たとえ男としては可愛い方だったとしても、男のオレが自然に女になるハズがない。

―――――――――――――――
―――――――――――――――
――――――――――

「ただいま〜！」
オレと妹は家の鍵を開けて玄関に入ったが、家の中はひっそりと静まりかえっていた。
母はまだ帰っていない。母の仕事は時間が不規則で遅くなる日も多かった。父はいたとしてもたいていは書斎に籠りっきりだ。客が来てもめったに出ることはない。

　オレは自分の部屋に入ると、セーラー服を脱いで、普段着に着替える。もちろん普段着も女性ものだ。オレはもう男ものの服を着ることはまったくなくなっていた。本当は女性ものの服の着こなしにも慣れたので、男ものの服を着てもいいのだが、オレは家で男ものを着ていたら、いつか外でもボロが出そうで怖かったのだ。

　それに最近のオレは女ものの服に慣れすぎたのか、男ものの服を着るのが、逆に恥ずかしくなってしまった。オレが家で男に戻れば、妹や家族も戸惑うかもしれない。オレはこの数カ月の間に築き上げた今の家族の関係を壊したくはなかった。オレにとって今の家族関

係は心地よいものだった。たとえオレが男でいられないとしても。

セーラー服の難点は脱ぎにくいことだった。特に暖かくなってくると汗をかいた後は特に脱ぎにくい。それに暑い時はひたすら我慢するしかない。これではブレザーの制服が増えるのも無理はないと思った。男としては断然セーラー服の方が良いのだが・・・いくら男の憧れのセーラー服でも、自分で着てしまっては仕方がない。なかにはセーラー服を着るのが趣味の男もいるようだが、オレにはそんな趣味はない。ただ制服だから着ているだけだ。

オレは脱いだセーラー服をハンガーに掛けると、部屋着のワンピースに着替えた。少し長くなった髪を後ろでくくる。まだ横はくくれるほどの長さがないため、ピンで留めねばならなかった。台所に行ってエプロンをして料理に取りかかる。男のころから時には料理をすることもあったが、女になってからはほとんど毎日するようになった。もともと料理は嫌いじゃなかったけど、これも女の子らしくなるための勉強でもある。やっぱり女の子は料理が得意な方がいい。

しばらくすると麻衣が2階の自分の部屋から降りてきた。

「お姉ちゃん、手伝おっか・・・」

妹が料理を手伝うなんて珍しいことだ。

「どうしたの?急に手伝うなんて・・・いいよ、いつもわたしがやってるんだから。」

それでも麻衣はとなりから離れようとしない。

「ねえ、お姉ちゃん・・・」

「なに?」

「お姉ちゃんって、なんで料理が得意なの?」

「え？」
オレは急に聞かれて戸惑った。
「べつに・・・昔からやってるし・・・」
オレはジャガイモの皮を剥きながら呟いた。

オレには料理を初めてした記憶がない。たぶん物心つく前からやっていたのではないだろうか？オレが小さいころは母も家にいたから、良く母のとなりで小さなエプロンをして、台に乗って料理の手伝いをしていた記憶がある。しかしさすがに昔のことだから、細部の記憶はあいまいになっている。

「ねえ、あたしにも手伝わせて。」
「そうね・・・じゃぁ手伝ってもらおうかな？」
オレは、さいしょ麻衣がオレに気兼ねして手伝うと言い出したのかと思ったが、どうもそうではないようだ。麻衣も料理が出来る女の子になりたいのかも知れない。
「それじゃぁ、そこの皮を剥いたジャガイモを賽の目に切って。」
「賽の目って？」
オレが麻衣に賽の目切りのやり方を教えると、麻衣は嬉々としてジャガイモを切りだした。

「なんだ、二人とも帰ってたのか。」
書斎から出てきた父がマスクを外しながら言った。
「今日は二人で食事の仕度とは珍しいな。」
麻衣は急に手伝いをしているところを見られてバツが悪いのか何も言わなかった。
「お父さん、もう少しかかるんだけど・・・」
「ああ、気にしなくていいよ。」
父はリビングのソファーに座ってこっちを見ている。
「しかし、そうやってると有希が小さい頃を思い出すなあ・・・い

つも女の子の恰好にエプロンをして母さんの手伝いしてたもんな。」
オレはドキッとして思わず手を止めた。あいまいだった記憶が急に鮮明に蘇ってきた。

そうだ、あのころはまだ麻衣も産まれてない頃だったから、オレはいつも母に女の子の服を着せられていたのだ。小さなエプロンの下には女の子の服を着ていたのだ。そのころオレがどんな気持ちで女の子の服を着ていたのかはまったく憶えていない。まだ小さかったから自分でもわからないまま着せられていたのではないだろうか?

ふと振り向いてみると、父はもう書斎へ戻ったのかいなくなっていた。いつも勝手な人だ。
「お姉ちゃんって、小さいころから女の子みたいだったんだね。」
麻衣が言ったがオレには良くわからなかった。
「わからないの・・・小さいころのことは良く憶えていないから・・・」
オレはいつごろまで女の子の服を着ていたのだろうか?麻衣が産まれてから自然に着なくなったような気がするが、それもまた曖昧な記憶だった。

いや、待てよ・・・麻衣が産まれた時ならオレはまだ3才だ。3才の子が料理の手伝いをするだろうか?3才では台に乗っても流しに手が届かないのではないのか?台が高かったのか?そんなに高い台に小さな子を乗せるとは思えない。それではオレはもっと大きくなるまで女の子の服を着ていたことになる。

どうやらオレはかなり大きくなるまで記憶がないようだ。今まで気にしたこともなかったが、考えてみると不思議な気がする。
「どうしたの?お姉ちゃん。」
麻衣に言われて我に帰った。

「なんかボーッとしてたよ。具合わるいの？」
「ううん・・・ごめん・・・ちょっと考えごとしてた・・・」
オレはまた料理に戻ったが、頭の中では昔のことを思い出そうとしていた。しかし、やはり昔の記憶は、はっきりとは思い出せなかった。

オレは自分のことをもっと知りたいと思い始めていた。

第１６話　趣味　オレのアイドル

「戸田さんは芸能人では誰が好きなの？」
岡本直美〈おかもとなおみ〉が聞くと、佐倉千里〈さくらちさと〉は
「ニースでは誰が好き？」と重ねて聞く。
オレはアイドルグループのニースは名前くらいは知っていたが、メンバーの名前など知らない。
「えっと・・・ニースって誰がいたっけ？」
オレが聞くと、佐倉はすかさずＪＩＮＯＮのニースが出ているページを開いた。

オレは単純に女の子になることだけを考えていたが、彼女たちの話題についていくのは並み大抵のことではなかった。三吉先生の“お嬢様教育”が楽に思えるくらいだ。特に教室では、別のクラスの長谷川も助けてはくれないから、オレひとりで対処するしかない。
「えっと・・・・」
オレはニースのメンバーを見たがどれも似たような顔で誰が誰だか良く判らない。真ん中にいるヤツがなんだか見た事があるような気がして、その男を指さした。
「あ！戸田さんも山上君が好きなんだ？！」
佐倉は嬉しそうに奇声をあげた。
「わたしも山ペーが好きなの！一緒だね。」

そうだ思い出した。どうも見た事があると思ったら、こいつは山上といって前に永澤ますみとドラマに出てたやつだった。もちろんオレは山上ではなく永澤ますみが出てるから見ていたのだが・・・
「岡本さんは西喜怒君のファンなんだって！でもニースといったらやっぱり山ペーだよねえ！」
佐倉はオレと同じ趣味なのが嬉しいようだ。

「原口さんはカツーンの亀有君なんだよねぇ！あっ！じゃあ、戸田さんも今日のドラマ見るんでしょう？」
「え？・・う・・うん・・・」
オレは適当に返事をするしかなかった。今日、山上のドラマがあるなんて全然知らなかった。

岡本と佐倉と胸が大きな原口弘子〈はらぐちひろこ〉は良くオレに話しかけてくる女子だった。しかし彼女たちがオレを友達と思っているのかは、オレには良くわからなかった。ただ彼女たちは、教室ではやたらとオレに話しかけてくるし、帰りにハンバーガー屋に誘われたりしたから、たぶん友達なのではないだろうか。

最近、彼女たちは食堂にも良く誘うから、オレは中庭で昼食を食べることも少なくなった。おかげでクラブ以外ではなかなか長谷川にも会えない。

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

久しぶりに彼女たちを振り切って中庭で食べていると、長谷川がやってきた。
「あれ？今日は取り巻きが一緒じゃないんだぁ・・・」
なんかあいかわらず嫌味な言い方だ。
「取り巻きってなによ。」
オレも長谷川には多少強気に出ることが出来る。とはいえ秘密を握られていては、それもあまり当てにはならないが・・・
「あのいつも有希にべったりの３人組のことじゃない。」

「ああ・・・あの人たちはただの友達よ。」

「有希は相変わらずわかってないわねぇ。あの3人は有希のことが好きなんじゃない！」

「好きって・・・女どうしで好きっていったら友達ってことじゃないの？」

長谷川は、まったくわかってないと言わんばかりに首を振った。

「そりゃぁ有希は男の子にしか興味がないのかもしれないけど、女子校では有希みたいな女の子もモテるの！」

「わたしみたいって？」

「あーもうっ！イライラする！！」

オレには何で長谷川がイライラしているのか見当がつかない。

「有希みたいにボーイッシュで可愛い女の子ってことよ！」

そう言った長谷川の顔は真っ赤だ。しかしそんなことを言われたオレも真っ赤になっているに違いない。

「わたしが？そりゃぁ男だからボーイッシュかも知れないけど・・・」

オレには自分のことが判らない。

「わたしってそんなに可愛いかなぁ・・・」

「知らないわよ！！」

長谷川は完全に怒ってしまったようだ。

「ねえ、パン買ったのなら一緒に食べましょうよ。」

オレがベンチの片方を勧めると、まだ怒っているのか長谷川はドスンと勢い良く座った。

あの一件以降も長谷川は前と全然変わらなかった。変わったのはオレのことを有希と名前で呼ぶようになったことくらいだ。

「ねえ、有希・・・あんた最近また女らしくなってない？」
長谷川がオレの顔を見ながら言った。
「髪が伸びたからでしょう？」
オレがそう言っても長谷川は納得いかないというように首をかしげている。
「髪はたしかにそうだけど・・・でもなんか違うのよねぇ・・・」
「ちょっと・・・そんなに見ないでよ・・・恥ずかしいじゃない！」
オレはそんなに見つめられたら恥ずかしくてパンなんか食べてられない気分だ。
「その唇、リップかなんか塗ってる？」
「ううん・・・何も塗ってないわよ。あ、コロッケパンの油でも付いてるんじゃないかな？」
オレはナプキンで口をぬぐった。

「変だわ・・・やっぱりなんか変・・・有希ぜったい前より女っぽくなってる！」
「あのねぇ・・・わたしが女っぽくなって何が悪いのよ！なんかいけないみたいな言い方じゃない？」
「いけなくはないんだけど・・・」
長谷川は少し離れてオレの爪先から頭まで一通り見てから言った。
「やっぱりなんか違う・・・前はセーラー服着てても、わたしから見れば確かに戸田君だったのに、だんだん戸田君らしさが無くなってきてる・・・」
オレらしさ・・・？オレらしさってなんだろう？

「いいじゃない・・・わたし女の子になりたいんだから・・・」
そうは言ったものの、長谷川の言うことも気になった。
女の中で生活しているだけで女っぽくなっていくものなのだろうか？麻衣が言ったように3年間で女になってしまうなんて事は無いとは思うが、なんだか心配になってきた。オレはこのまま、どんどん

女になっていくのだろうか？

―――――――――――――――
―――――――――――――――
――――――――――

「あれ？お姉ちゃんこのドラマ見るの？」
「うん・・・見ないと話が合わなくなっちゃうから。」
「いいなぁ・・・あたしも見たいなぁ・・・もう中学生なんだから１０時に寝なくてもいいんじゃないかなぁ！」
「ビデオ録っといてあげるから寝なさい。こんどお母さんに聞いてあげるから。」
「ほんとう？絶対よ！」
「うん。」
うちの親は勉強しろとかはうるさくないが、寝る時間とかには結構うるさい。

オレはその日、仕方なく山上が出るというドラマを見てみた。『鼻より団子』みたいな女の子向けのドラマだったら困ったなぁと思っていたが、意外にも救命医療の硬派なドラマだった。

それに今人気の若手女優も出ている。これなら男のオレでも楽しめそうだ。
しかし、山上のファンなんて言ってしまったからか、どうも山上のことばかり気になってしまう。それになんだかカッコいい。山上は男のオレから見てもなかなかカッコいい男だった。オレはドラマに引き込まれると同時に、山上のことがなんだかすごく気になった。

―――――――――――――――
―――――――――――――――
――――――――――

「戸田さん昨日の山ぺー見た？」
「見た見た！山上君カッコ良かったねぇ！」
次の日、オレたちは昨日のドラマの話題で盛り上がった。あんがい男と女でも同じドラマの話題で盛り上がれるものだ。
「プロポーズの時は可愛かったけど、今回はシブくていちだんと男っぽいからドキドキしちゃった！」
佐倉は山上の良いところを的確に表現するから、オレもつられていろいろ話をした。クラスメイトとこんなに話をしたのは初めてじゃないだろうか？なんだかいくら話しても話が尽きなかった。

―――――――――――――――
―――――――――――――――
――――――――――

「でね、もうダメっ！って時になって山上君が現れるわけよ。それがすっごくカッコいいの！長谷川さんも絶対見た方がいいって・・・・」
オレは長谷川が不思議な顔でオレのことを見ているのに気付いて話を途切らせた。
「どうしたの？長谷川さん。」
長谷川はオレのことをまじまじと見つめて言った。

「わたし、これまでは半信半疑だったんだけど・・・有希って本当に男のことが好きなのねぇ・・・」
「え?!」
オレはいきなりそんなことを言われて驚いた。
「そ、そんなんじゃないのよ。だって山上君って男にも人気あるんじゃない?」
「そんな話、聞いたことないわよ。」
「そうかなぁ・・・男から見てもカッコいいと思うけどなあ・・・」
オレはなんとか疑いを晴らそうとしたが、なんだか状況が変だ。

「だいたい、なんで有希が否定するのよ。あんた男が好きなんでしょう?」
そうだ、あやうくオレが性同一性障害だという設定を忘れていた。
オレは男が好きで良いのだ。
「いや、だってなんか恥ずかしいし・・・これまで秘密にしてから、その癖がなかなか取れないのよ。」
「ああ、なるほどね。」
どうやら長谷川も納得してくれたようだ。

「有希ってあんな男が好きなのかぁ・・・なんか意外だなぁ・・・」
「いや、ただ山上君がカッコいいってだけで、好きとかそういうことじゃ・・・」
「何もわたしにまで照れなくていいじゃない。山上君は女の子に人気あるから有希が好きでも良いんじゃない?好きなんでしょう?」
「・・・う・・うん・・・」

オレは山上のことが好きなのだろうか?たしかにカッコいいとは思ったが、好きとかそういうのとは違うと思っていた。しかし、そういえば前のドラマの時は、オレは山上を見ても何とも思わなかったではないか!

でも今回のドラマは男が見ても面白いのではないだろうか?そのドラマの主演だったから山上のことをカッコいいと思ったのではないのか?

でも考えてみれば、オレは昨日のドラマで女優のことはほとんど気にしていなかった。山上ばかり見ていたではないか?でも山上はカッコいいし、それにすごく可愛いのだ!

可愛い?男が男を見て可愛いなんて思うだろうか?それともオレは好みも女になってきているのだろうか?たしかに最近のオレはおかしいのかも知れない。いろんな人に女っぽくなっただの、可愛くなっただの言われることも多かった。

オレはこれまで女になろうと頑張っていたから、女っぽくなるのは当たり前だと思っていたが、最近は慣れてきたからそれほど頑張ってもいない気もする。それでもオレはどんどん女っぽくなっているというのだろうか?髪が伸びたとかそんな問題ではないのだろうか?オレ自身はバレない程度の女っぽさで十分だと思うのだが・・・

「有希・・・わたしが有希のこと男だって知ってるからって、無理しなくてもいいよ。最近やっと、わたしも有希のこと女の子だって思えるようになってきたから。」

長谷川はそう言ってくれたが、オレ自身はなかなか納得いくものではなかった。

オレは心まで女になっていくのだろうか? たしかにオレは女の子の気持ちがわかるようになりたいと思ったが、それはこういうことなのだろうか?

なんか違う気がするがオレにはどうすることも出来なかった。オ

レは今の状況を止める術は思いつかなかった。

第17話　異変　オレの身体に何が？

オレは初めての夏服に袖を通す。真新しい白いセーラー服は清楚で大人しい印象だが、少し大人っぽい感じもして男のオレが着るにはちょっと勇気がいる。スカーフは真っ黒だが、そこがまたこの制服を高貴な感じにしていた。

オレは裸になってヌーブラを胸に貼り付ける。ふつうは両胸に貼り付けたうえで真ん中で留め、胸に谷間を作るようにするものだったが、オレの場合は無い胸をかさ上げするためのものだから、プラスチックの留め具は切り取っていた。ヌーブラを反対に凹ませて、出っ張った方をオレの平たい胸に当て、空気が入らないように引っ付けていくと吸盤のように貼り付くのだ。

しかし、このところ困ったことが起こっていた。

「痛っ！」

ヌーブラを胸に貼り付けようとすると、なんだか乳首のあたりが痛むようになってきた。最初はそれほどでもなかったが、だんだん痛みは増していた。

そして今日はとうとう両方とも赤く腫れてしまった。オレの乳首は乳輪のあたりから腫れてしまい少し触れただけでヒリヒリする。ずっとヌーブラを付けていたせいだろうか？それともバイ菌でも入ってしまったのかも知れない。仕方なくブラだけ着けてみたが、かえって擦れて痛かったので、我慢してまたヌーブラを付けてブラをした。着けてしまえばこの方が楽だった。

オレはせっかくの夏服最初の日にこんなことになってブルーな気分になってしまった。

ーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーー

そういえばこんなことがあった。

「いらっしゃい戸田さん。」

オレが家庭科室に行くと松本たか子先生が待っていた。オレは夏服の採寸をするために松本先生に呼ばれていたのだ。

「さあ、服を脱いで。」

家庭科室に鍵をかけて松本先生はオレに言った。オレはセーラー服の上着を脱いで、スカートも脱ぐと、ブラとパンティーの上にスリップだけを着た姿になった。

「戸田さんもすっかり女の子になったわねぇ。前に採寸した時はまだ男の子っぽいと思ったけど、今はこうして下着だけになっても女の子にしか見えないわ。」

「せ、先生・・・そんなに見ないでください・・・恥ずかしい・・・・
」

「あ、ごめんなさい！なんかあんまり可愛いからつい・・・ね・・・・
」

先生は慌てて採寸に取りかかった。

「あら？すこしサイズが変わってるわね。やっぱり計り直して良かったわ。」

「さいきん・・・少し太ったみたいなんです。」

オレは照れくさかった。なんだか最近、身体に脂肪がついてしまったのかムチムチしてきたのだ。女子校に来てあまり激しいスポーツをしなくなったからだろうか？

「そうねえ・・・太ったって感じでもないけど・・・」
先生は採寸を終えるとオレに言った。
「やっぱり戸田さん、少し女っぽい体型になってるわね。」
「え?」
「いつも見てて思ってたのよ。最近の戸田さんは少し体つきが変わってる気がするなって。だから改めて採寸した方がいいと思ったんだけど。」
「どうしてかしら・・・」
「そうねぇ・・・女の子ばかりの中にいたから、戸田さんも女性ホルモンが多く出るようになったのかも・・・」
オレは驚いた。そんな話聞いたことがない。
「そんなことってあるんですか?」
「さあ?先生も聞いたことないけど・・・」
なんだ・・・先生も知らずに言っていると知ってオレは少し安心したのだった。

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

「こんにちは先生。」
オレは保健室に白石先生をたずねた。先生には薬も貰わなきゃいけないから、おりにふれてオレの身体を看てもらっている。
「どうしたの?お薬もうなくなった?」
「いえ、そうじゃないんですけど、ちょっと痛いところがあって・・・あの・・・胸が・・・」
「あら・・・ちょっと見せて。」

先生は診察室にカーテンをした。

　オレは夏服のセーラー服を脱ぎ、ブラジャーも外すと、そっとヌーブラを剥がした。

先生はオレの腫れた乳首を見てから言った。

「なるほどね・・・これは乳腺が発達してきてるのよ。病気じゃないから心配いらないわ。」

「・・・乳腺・・・ですか？」

「そう、男の子にも女の子と同じで、お乳を出すための乳腺があるの。ホルモンのバランスが変わるとそうなるのよ。」

「・・・ホルモンが・・・？」

「大丈夫、しばらくすれば落ちついてくるから、そうなったら痛くなくなるわ。」

オレはそれでも心配だったから聞いてみた。

「男でもお乳が出るようになるんですか？」

先生は残然そうに首を振った。

「たぶん、そこまではいかないと思うわ。戸田さんには悪いけど。」

先生はオレのことを性同一性障害だと思っているから、オレがお乳が出るようになりたいと思っているかもしれないが、オレはそれを聞いて正直ほっとした。

　女っぽくなるだけならまだしも、男のオレが母乳を出すようになってはかなわない。それではまるっきり女だ。

――――――――――――――

――――――――――――――

――――――――――

白石先生が言ったとおり、胸の痛みは次第におさまってきた。しかし腫れは引いたが、腫れて膨れた状態はなかなか元には戻らなかった。それに痛くはないものの、なんだか突っ張るというか、胸の筋肉から乳首まで一本のヒモで繋がっているみたいな変な感じだ。特に走ったりして揺れると、その突っ張りが乳首をツンツン引っ張るようだ。しかし、痛みはなくなったため、あまり気にはしなかった。

「いらっしゃい有希ちゃん。」

何度かエステに通ううちにエステのお姉さんとも仲良くなったので、お姉さんもオレのことを有希ちゃんと呼ぶようになっていた。たぶん二光さんがオレのことをそう呼ぶから、みんなそう呼ぶようになったんじゃないかと思う。

オレはいつものように、ピンクのガウンに着替えてベッドに横たわる。エステで脱毛してもらうようになって、カミソリ負けで赤くなっていた部分もきれいに治っていた。お姉さんの話では、オレのワキ毛の永久脱毛処理はほとんど終ったらしい。これからはたまに一本生えてきたやつを脱毛すればいいらしい。オレのワキにはもう一生毛は生えないというわけだ。高校卒業後、男に戻ってもワキ毛の無い男として生きていかなければならない。それは少々困った事態だが、今現在できることは何もない。ワキ毛の無い男よりも、ワキをカミソリ負けで真っ赤にした女の方が恥ずかしい。

それにワキ毛はどうせそんなに見えないから大きな問題ではない。オレはそれよりもっと男に戻った時に困る可能性があることを始めてしまっていた。それは全身の永久脱毛だった。しかしこれも仕方がないことなのだ。オレのアレルギー体質は全身に及んでおり、足や腕もカミソリ負けしてしまうのだ。テープで抜いても後が赤くなってしまう。それでオレは決断せざるを得なかったのだ。お姉さん

が言った、最近は男性も毛がない方がモテるという言葉だけが、オレにとって唯一の救いだった。

脱毛が終り全身をマッサージしてもらっているとお姉さんが言った。

「有希ちゃん、だいぶ体つきが女性らしくなってきたわね。」

「え？」

あまりに普通に言われたので、オレは訳がわからず聞き返した。

「なんのことですか？」

「女性ホルモンのことよ。だいぶ効いてきたみたいね。」

「効いてきたって・・・？」

「あら？有希ちゃん、ホルモン治療始めたんでしょう？ホルモンは若いうちから始めた方がいいのよ。有希ちゃんくらいの歳からだったら、まったく女の子と区別がつかないくらいになるかもしれないわ。」

「わたし・・・ホルモンなんて・・・」

「恥ずかしがることないのよ。ここには有希ちゃんみたいな男の人も結構来てるから、パッチのことも知ってるの。」

「わたしみたい・・・？　パッチ・・・？」

オレは脇腹に貼っている肌色のパッチを見た。

その瞬間、このところオレの身におこっていた事態がすべて繋がった。

オレは自分でも知らないうちに女性ホルモンを摂取させられていたのだ。白石先生からもらったパッチは、ただ勃起をしなくなる薬だと思っていたが、実は女性ホルモンだったのだ。

これで勃起をしないだけでなく、射精もしなくなったうえ、すっり小さくなってしまったことも、オレの胸が腫れたことも、体型が変わってきたことも全て説明できるのではないだろうか。白石先生

はなんでそんな薬をオレにくれたのだろう？オレを女にしてしまうつもりだったのだろうか？

――

次の日、オレは登校するとすぐに保健室へ向かった。

「先生！」

「あら、戸田さんどうしたの？こんな朝から。」

オレは怒っていた。オレは先生のせいで、危うく女になってしまうところだったのだ。

「先生・・・先生がわたしにくれたパッチって・・・女性ホルモンじゃないんですか？」

「そうよ。エストロゲンという女性ホルモンなのよ。」

先生は事も無くそう言った。まったく悪びれた風もない。

「あの・・・このパッチのせいでわたしの身体は女っぽくなってるんですか？」

「そうなの。戸田さんの歳から使えば、見た目はまったく女の子と同じになれるわよ。性器以外はね。」

そんな・・・勝手に・・・

「も、もしも、今薬をやめたら、男に戻るんですか？」

「そうねぇ・・・身体つきはある程度戻るかもしれないけど、機能は戻らないわ。」

「・・・機能・・・？」

「そう。一度女性ホルモンを投与すると、もう男性の機能・・・つまり精子を作る機能は衰えてしまうの。」

「・・・じゃあ・・・子供も出来ないってこと・・・？」
すると白石先生は驚いた顔になった。
「もしかして・・・戸田さん子供作るつもりだったの？！」
「・・・・・」
オレはなんて言っていいかわからなかった・・・
「・・・どうしよう・・・わたし・・・てっきり戸田さんは男でいるのが嫌だとばかり思って・・・」
「い、嫌なのはそうなんだけど・・・」
そうなのだ、オレは性同一性障害ということになっているのだから、女にされても怒る筋合いではない。しかし、オレは本当は性同一性障害ではないのだ。将来は女の人と結婚もしたいし、子供だって欲しいと思う。高校生になったばかりのオレには、はっきりとは想像しにくかったが・・・
「ごめんなさい・・・戸田さんが子供を作ってから女になりたいと思ってるなんて・・・知らなかったから・・・」
「先生・・・わたし・・・もう男には戻れないってことですか？」
「そうね・・・身体は戻るでしょうけど・・・どうしよう・・・わたし・・・大変なことを・・・」
白石先生はすっかり取り乱してしまっている。それはすなわちオレの身に起こっていることが、すでにどうにもならない状態なのだと言っているようなものだ。
「それじゃ、わたしがいま薬を止めても、もう元には戻らないって事ですよね・・・」
先生は黙ってうなずいた。

　オレはいったいどうすればいいのだろうか？これはまったく予想もしない事態だった。オレはいままで女の子になる努力はしていたが、本当に女になろうと思っていたわけではない。もちろんこの白鴻女学園を卒業したら男に戻るはずだった。

それがどうしたことだろう・・・オレの身体はすでに女になりかけている。女性ホルモンの影響で乳腺が発達し始め、身体には女性特有の脂肪が付き始めている。肌も少女のようにきめが細かくなり、潤いを増していた。

それとは逆に、オレの男の象徴はすっかり萎びてしまい、いまや何の役にもたたなくなってしまった。オレはあまりのショックに呆然としてしまい涙さえ出なかった。

「先生・・・このことは黙っててもらえますか?校長先生にも教頭先生にもまだ言わないでください。」
「・・・もちろん・・・言わないわ・・・」

オレは少し冷静になって考えたかった。今は頭の中が混乱して何も考えられなかった。
「先生・・・わたし・・・今日は帰ります・・・具合が悪くなったから帰ったと言っておいてください・・・」
「・・・うん・・・わかった・・・」
白石先生は心配そうな顔をしたが、オレの頼みを聞いてくれた。

オレがイスから立とうとすると、先生がオレの腕をつかんだ。
「戸田さん・・・くれぐれも・・・早まらないで・・・」
オレは一瞬、何を言っているのかわからなかったが、先生はオレが自殺でもしないかと思っているようだ。
「あ・・大丈夫です・・・ただちょっと・・ひとりで考えたいので・・・」
オレはしっかり掴んだ先生の手を放してもらい保健室を出た。

第１８話　感情　オレの身体が女になる？

オレはいつの間にか家に帰っていた。家までどうして帰ったのか憶えてないくらい気が動転していたのだろうか。オレは二階の自分の部屋に入ると鍵をかけた。誰かが入ってくることは無いと思ったが、とにかく閉じこもりたい気分だった。

制服を着たままベッドに倒れ込む。もうこのまま男に戻れないのだと思うと自然に涙が出てきた。正確には体は男に戻るかもしれないが、もうオレの身体には男としての機能は戻ってこない。

薬を止めれば、身体はまた男に戻るかもしれない。とはいえ身体だけ男に戻って何になるというのだろうか？こんな身体では彼女も出来ないし、結婚も出来ない。たとえ出来たとしても、子供を作ることは出来ないのだ。

オレはいつしか泣きじゃくっていた。枕が涙で濡れていく。オレはいったい何を考えていたのだろうか？男が女子校に入って女の子として生活するなんて、冷静に考えれば有り得ない話ではないか。第一、女として卒業しても、それはあくまで女のオレであり、大学に行くにしても、就職するにしても、男のオレはあくまで中卒ではないのか？なぜ今までそんなことにも気付かなかったのだろうか？オレは自分のあまりの馬鹿さに悲しくなってしまった。

オレはベッドから起き上がると鏡の前に立ってみた。女になってから置いた全身が映る縦長の大きな鏡だ。冷静になって見てみれば、鏡に映ったオレは確かに以前のオレではなかった。髪が伸びただけではない。制服を着ていてもオレの身体が女らしい凹凸を帯びてい

るのがなんとなくわかる。そういえば、以前は苦労していたスカートの腰の位置も最近はあまり気にならなくなっていた。

オレは今日はじめて着た夏服のセーラー服を脱いでベッドに置いた。スリップを脱ぎ、ブラジャーを外す。そして胸に貼りついたヌーブラをゆっくり剥がした。そこにはまだ幼い小さくとがった乳房があった。乳輪のまわりが少しとがっているだけだったが、それは太ったとかいうのとは明らかに違う、思春期の膨らみ始めた少女の乳房に違いなかった。

パンティーをはいた腰つきも男のそれとは違っている。以前は裸でパンティーをはくと、なんだか海パンのようでとても見られたものではなかったが、今では腰のあたりについた脂肪がオレの身体を女性らしく見せている。お尻も少し大きくなっているみたいだ。そういえば最近イスにすわるとお尻がグニャグニャすると思っていた。それもお尻についた脂肪のせいだったのだ。

なぜこんなに変わっていることにオレは気付かなかったのだろう。たしかに裸で鏡に全身を映したことはほとんどなかった。鏡に映して見るのは、服や髪型だけで、自分のことをしげしげと見ることなどなかった。女になった自分の姿などそんなに見たいものではないからだ。きっとそのせいで今まで自分の身体の変化に気付くことがなかったのだろう。

いや、それは違うかも知れない。気付く機会は何度もあったはずだ。女らしくなっただの、可愛くなっただの、いったい何人に言われたと思う・・・長谷川にも言われたではないか。それをオレは考えまいと無視し続けていたのだ。オレはどこかで女っぽくなるのを恐れていたのかもしれない。

オレは胸の小さな膨らみをそっと触ってみた。それは確かに男のころのオレには無かった柔らかな突起だった。良く見れば小さな突起の裾野にはなだらかな膨らみが続いている。乳腺というものが広がっているのだろうか・・・このまま薬を続けていれば、乳腺は発達し続け、女の子のように胸が大きくなっていくのだろうか？

股間に手を伸ばすと、そこには小さく萎んでしまったペニスが付いている。もう随分長い間勃起することもなく、射精もしていない。そもそもしたいという気持ちにもならなかった。オレはパンティーを降ろしてみた。一糸まとわぬ裸になったオレの姿は、まるでこれから大人の女になろうとする思春期の少女のようだった。その儚気な印象の中で股間にあるものだけが、逆にオレの身体にそぐわないような気さえしてくる。

オレはいったいどうすれば良いのだろうか？今のオレに与えられた選択はそんなに多くないように思える。

薬を止め男に戻り女学生を続けるか。男に戻って来年男として受験し直すか。それともこのまま薬を続けて女の子の身体になるか・・・

男に戻ったとして子供が出来ない身体でやっていけるのだろうか？もちろん結婚したからといって必ず子供が出来るわけじゃない。もちろん最初から子供が出来ない人もいるだろう。自分に問題がなくても奥さんの方が出来ない可能性もある。そもそも結婚するのかどうかもわからない。

このまま薬を使い続けて、仮に完全に女に見える身体になったとしても、どっちみち男のオレに子供を産むことなど出来るハズがな

い。そもそも子供が出来るか出来ないかがどれほど重要かなど、高校生になったばかりのオレにわかるハズもないのだ。

――――――――――――――――――――――――――――――――――――

オレは普段着のサマードレスを着てリビングに降りるとソファーにグッタリと座り込んだ。スカートの中で足が開いてだらしない感じだが、今のオレには関係ないように思える。なんだか一気に疲れてしまったようだ。それにどうせ見ている人もいないのに、女のふりをするのもバカバカしい気がしてしまう。

「おや？有希、帰ってたのか？」

オレはその声にハッとして、慌てて居住まいを正した。厳しく躾けられた身体が勝手に反応してしまう。オレはどれだけ真面目な性格なんだ・・・

「とうさん、いたの・・・」

「いや、今書斎から出てきたところだけど。有希・・・どうかしたのか？」

「とうさん・・・とうさんはオレが女になったらどう思う？」

父はヨッコラショとばかりに向側のソファーに腰掛けた。

「女になるって、今のままってことか？」

「いや・・・そうじゃなくて・・・」

オレはなんて言ったらいいのか判らなかった。

オレは立ち上がり腕を後ろにまわすと、サマードレスの腰のリボンをほどいた。両手を首の後ろに回し背中のジッパーを降ろす。

「とうさん・・・オレの身体・・・見て・・・」
オレはそのままサマードレスを脱いで、パンティーだけの姿になった。
父は驚いて目を見開いた。
「どうしたんだ?その身体は・・・」
「オレ・・・もう・・・女になりかけてるんだ・・・」
オレは父にこれまでのいきさつを全て話した。

「それは困ったな・・・有希、おまえはどうしたいんだ?」
「オレ?」
「おれはおまえが好きなようにすれば、それでいいと思っている。おまえの人生だからな。」
「そんな・・・オレまだ高校生になったばかりだよ・・・これから先のことなんて・・・オレにはまだ判らないよ・・・」
父はしばらく考えてからこう言った。
「お前は子供が出来ないことを気にしているが、それはもう悩んでどうこうなることじゃないんだな。」
「・・・うん・・・」
確かにその通りだ・・・いまさら悩んでみても機能は戻ってこない・・・
「それじゃ、勉強し直して来年別の高校を受験するか?良く考えてみるんだ。」
オレは来年受験し直して、男として他の学校に行くというのは、あまりイメージできなかった。なんだか男としてのオレがイメージしにくい。女に慣れすぎてしまったのだろうか?
「それじゃ、このまま白鴻女学園に行くとしたら、身体を男に戻すのと、女になるのとどっちがいい?」
そう言われると、オレはなんだかいまさら男に戻って女学校に通い続けるのも意味が無い気がしてくる。ずっとブラジャーの中にヌー

ブラを忍ばせているよりは、女の身体になれるのならその方が良いのではないのだろうか？

「でも・・・卒業したら男に戻らなきゃいけないんじゃないの？」

「別にそう決めてかかる必要もないだろう。有希が女として生きたいのならそうすればいいとおれは思うけどな。」

「オレが女として生きる？ずっと？そんなことできるの？」

「それはおまえの努力次第だろう。まあ、男が男として生きるよりは、女として生きる方が努力は必要かもしれないな。だが、どんな人生でも人間が生きていくには努力は必要だ。ただ、同じ努力でもやり甲斐があるかどうかで大きく違うだろうな。」

やり甲斐？オレはその言葉に引っかかった。オレにはこれまで男として生きてきてやり甲斐など感じたことはなかった。しかし女の子になる努力にはやり甲斐ともいえるようなものを感じてはいなかっただろうか？なぜ勉強も出来なかったオレが女になることには、こんなに一生懸命になれたのだろうか？女子校にしか行くところが無かったからか？本当にそれだけなのだろうか？

「とうさん・・・オレ・・・ほんとに女になれると思う・・・？」

「有希は今でも十分女らしいぞ。」

「オレ・・・女になってもいいの？」

「ああ、おまえの人生だ。おれにとってはおまえが男でも女でも、大切な子供であることに変わりはない。」

オレはいつの間にか涙ぐんでいた。

「と・・とうさん・・・」

オレが抱きつこうとすると父は慌ててオレを制止した。

「有希・・・とにかく服を着なさい。」

「あっ！」

オレは自分が裸なのを忘れていた。

「へへッ・・・ごめん・・・わたしったら・・・なんかはしたないね・・・」

オレは照れながら急いでサマードレスを着なおした。

オレは自分でも何でこんな考えに至ったのかは良く解らなかった。ただ、父に言われて思ったのは、今さら男に戻ることにはあまり意味を見出せないということだった。もっとも女になることに意味があるかどうかは判らない。ただこれまで女として過ごしてきたなかで、今まで男として生きてきて感じたことがなかった何かを感じたのも事実だった。それが何なのかオレは確かめてみたかったのかも知れない。

なぜか今やめてしまってはいけないような気がした。そんなことを思うのもオレには初めての経験だった。

第19話　記憶　オレが知らないこと

オレが女になると決めたことは、まだ母や麻衣には言わないでほしいと父に言った。オレは自分でちゃんと報告したかった。それは男としてのオレの最後のけじめのようなものだったかもしれない。

夕飯が終り、母と一緒に後片づけをする。父はそうそうに書斎に籠り、麻衣は二階で勉強をしている。なんだか洗いものが少なくなってくると、だんだん不安になってくる。いったい母に何と言ったらいいのだろうか？いくら女子校に行くのは賛成した母でも、オレが女になると言ったら反対するかも知れない。今まで息子だったオレが娘になるなんて親なら反対しても仕方がない。これまでのように、ただ女装するのとは訳が違うのだ。

女になる。本当にそんなことが出来るのだろうか？時間がたつと自分でも不安になってくる。女性ホルモンで身体は女らしくなれるとはいっても、ちゃんと女になれる保証などない。それにたとえ身体は女らしくなったとしても、本当の女になれるわけではない。オレがなぜ女になるという選択をしたのかも、いまだに釈然としなかった。オレはもともと性同一性障害でもないしオカマでもない。ただなりゆきで女子高生になってしまっただけなのに・・・

「どうしたの有希、さっきから黙ったままじゃない。」

「・・・う、うん・・・」

そういえばいつもはおしゃべりしながら洗いものをするのに、今日はずっと黙っていれば不思議に思われてもしかたがない。

「あの・・・かあさん・・・この洗いものが終ったら話があるんだけど・・・・」

「なに？今じゃだめなの？」

「うん・・・ちゃんと話たいの・・・」
「そう・・・わかった。」
母はそれきりずっと黙っていた。オレだんだん緊張してきた。

洗いものも終り、いざ話をするとなるとやっぱり言いにくい。でもこれは言わなければならないことだった。
「かあさん・・・わたし・・・女になってもいいかな・・・?」
「いまさら何言ってるの?有希はもう女の子じゃない。」
「うん・・・それはそうだけど・・・そういう意味じゃなくて・・・」
やはりいざとなると良い言葉が思い浮かばない。
「今は女の子になったっていっても、だだ女装してるだけじゃない?」
「まあ、そうね・・・」
「わたし・・・女の子の服を着るだけじゃなくて・・・身体も女の子になりたいの・・・」

オレにはどんなに言いにくくても、打ち明けねばならないことがある・・・
「かあさん・・・驚かないで聞いてね・・・」
なかなか勇気が出ない・・・オレは硬く拳を握りしめた。
「わたしね・・・もう身体が・・・女の子になりかけてるの・・・ごめん・・・うぅぅっ・・・」
オレは思わず泣き出してしまった。せっかく男に産んでくれたというのに、女になろうとするなんて、なんだか母に対して申し訳ない思いでいっぱいだった。性同一性障害の人が親にカミングアウトする時もこんな気持ちなのだろうか・・・

「かあさん・・・みて・・・」

オレは泣きながら母の前で裸になった。いつか初めて母のセーラー服を着た時も、母の前で裸になったが、今のオレの身体はあの時のものとは違っている。胸には幼く膨らみはじめた乳房があり、身体つきは大人になりかけた少女のように、女らしい凹凸ができはじめている。

母はしばらく何も言わなかった。しかし、次に口を開いた時、母の口から出た言葉は予想もしないものだった。

「かあさんね、有希が女子校に通うって言い出した時、いつかはこんな日が来るんじゃないかって思ってた・・・」

母はいったい何を言っているのだろうか?オレが女になると言い出すことを予想していたというのだろうか?オレ自身、決めたのは今日だというのに・・・

「有希・・・あなた思い出したの?」

「・・・なにを・・・?」

「昔のこと・・・小学校の2年生のころ、この家に引っ越してくる前のこと・・・」

「引っ越し・・・?」

そういえばなんとなく憶えている。オレは小学校低学年のころ確かに引っ越してきたように思う。ただはっきりとは憶えていないし、前の家のことはほとんど憶えていない。

「やっぱり思い出したわけじゃないのね・・・ちょっと待ってなさい・・・」

母は寝室に行って何かを持って戻ってきた。

それは数冊のアルバムだった。しかしこのアルバムをオレは見たことがない。

「有希は自分の小さいころの写真が無いのを不思議に思ったことな

い？」

たしかにオレの写真はある時期から極端に少なくなっている。兄と写っている小さいころの女の子の服を着たオレの写真はあるものの、麻衣が生まれてから後は入学とか特別な行事の時の物しかない。オレは、それは麻衣が生まれてオレへの興味が麻衣へと移ったからだと思っていた。母は女の子が欲しかったのだ、オレは妹が生まれるまでの仮の女の子でしかなかったのだ。

「それは・・・わたしに興味がなくなったからでしょう？・・・麻衣が生まれてから・・・わたしはもう女の子でいる必要もなくなったし・・・・」

「有希・・・やっぱりそんなふうに思ってたのね・・・そうじゃないかとは思ってたけど・・・」

母は少なからずショックを受けているようだった。

「でもそれは違うわ・・・これをご覧なさい。」

母はアルバムのうちの一冊をオレの方に向けると表紙を開いた。

「・・・これ・・・これって・・・わたし・・・？」

そこにはオレが見た事が無いオレの写真が貼ってあった。写真のオレは3才よりもずっと大きかったが女の子の服を着ている。なぜこんな写真があるのだろうか？

「な・・・なに・・・この写真・・・・」

オレは次々にページをめくった。どのページにも女の子の服を着たオレが写っている。しかし、写真は折れてシワだらけのものや、破れているものも少なくなかった。

「どうしたの・・・この写真・・・」

母は悲しそうな顔で言った。

「これは有希が自分で捨てた写真よ。」

「わたしが？どうして？そんなの憶えてないよ・・・」

最近オレには抜け落ちている記憶があるように感じていたが、これ

がそのころの写真だというのだろうか？
「きっと辛すぎて忘れていたのね。あなたの昔の記憶は自分で作り上げたものなのよ。」
「そんな・・・うそよ！・・・たしかに・・・部分的に憶えてないところはあるけど・・・」
「有希はかあさんが女の子が欲しかったから、有希に女の子の服を着せたと思ってるんでしょう？」
「・・・うん・・・そうじゃないの・・・？」
「たしかに物心つかないくらい小さいころはそうだった。生まれる前から、もう女の子用のを用意してたしね・・・」
母はアルバムをめくりながら昔のことを思い出しているようだ。
「でもね・・・有希が物心つくころにはもう女の子の服を着せるのはやめようと思ったのよ。でも男の子用の服を着せるとすぐに嫌がって脱いじゃうの・・・お父さんはわたしが女の子の服を着せたからだって言ったわ・・・」
オレはそんな話は聞いたことがない。

「あなたも幼稚園に入ったころからは、幼稚園には制服もあったから、なんとか外では男の子の服を着てくれるようになったけど、家の中ではやっぱり女の子の服ばかり着ていたの。どんなにわたしたちがやめなさいって言ってもやめなかった。」
「・・・そんなの・・・ぜんぜん知らない・・・」
オレは自分も知らない自分の過去のことを聞かされて頭の中はパニックになっていた。
「・・・じゃあ・・・なんで・・・写真を？・・・なんで・・・わたし・・・女の子の恰好しなくなったの・・・？」

「・・・あれは有希が小学校の2年生のころよ・・・急に友達が家に来ちゃったの・・・あなたが女の子の恰好してるのを見た友達は学校でみんなに言いふらしたのよ・・・それ以来・・・みんなが有

希をいじめだしたの・・・」
いじめられた?オレが?
「それはもうひどいいじめだったわ・・・いくらわたしたちが学校に言っても収まらなかった・・・それで有希は自分が女の子の恰好で写った写真を破いて捨ててしまったの・・・」
母はそのころの事を思い出したのか、昔のオレの写真をいとおしそうに撫でている。
「それからよ・・・有希が女の子の服を着なくなったのは・・・よほど悔しかったんでしょう・・・それでも結局いじめはなくならなかったから・・・それで、引っ越すことにしたの・・・」
しかし、それが本当だとしても、オレはなぜ憶えていないのだろうか?

「記憶を自分で作ったって・・・どういうこと・・・」
「この家に引っ越してきてから、あなたは変なことを言うようになったわ。わたしたちも最初は訳がわからなかったけど、だんだん有希が辛いことを忘れるために新しい自分になろうとしてるんじゃないかと思ったの。だから私たちもあなたの話に合わせることにしたのよ。そうして出来上がったのがあなたの昔の記憶なの。」
オレはそれを聞いてもまだ信じられなかった。
「でも・・・何で小さいころのは捨てなかったのかな・・・?」
「有友が一緒に写ってるからじゃないかと思うわ。あなた有友兄さんのことが大好きだったから。」
「じゃぁ・・・麻衣との写真は・・・?」
母がアルバムをめくると、そこには麻衣とオレが写った写真があった。写真のオレたちはまるで姉妹のようだ。しかしオレはどの写真でもしかめっ面をしている。
「有希は麻衣のことがあまり好きじゃなっかったから・・・麻衣と写ってる写真は捨ててしまったのね・・・大きくなってからの写真だということもあるとは思うけど・・・あなたは麻衣が生まれたせ

いで自分が女の子でいられなくなったと思ったんじゃないかな・・・」

自分が写っているからといって麻衣の写真まで捨ててしまったなんて、オレはなんて自分勝手なのだろう。オレは麻衣に対してなんてことをしたのだろうか・・・

「・・・うぅっ・・・わたし・・・麻衣に・・・なんてヒドイこと・・・」

オレは自分のしたことが許せなかった。そういえばオレは男のころはちっとも麻衣を可愛がってなかった気がする。あんなに可愛い妹を嫌っていたなんて・・・

「・・・わ・・・わたし・・・うぐっ・・・なんで・・・」

「有希・・・」

母はテーブルを回ってオレの横にくると裸のオレを抱きしめた。

「有希・・・もういいのよ・・・自分を責めちゃダメ・・・小さい有希には堪えられないことだったの。だからわたしたちも、あなたに話を合わせてきたのよ。」

「・・・でも・・・でも・・・」

母はさらにきつくオレの身体を抱きしめてくれた。

「いいの・・・もう過ぎたことなのよ・・・今は有希もこうして本来の自分になる決心をしたんだから・・・」

「・・・本来の・・・自分・・・？」

「そうよ・・・有希はずっと心の奥では女の子になりたかったんだと思うわ。」

「・・・そんな・・・」

オレにはまだ良くわからなかった。自分のことなのに全然わからない。

「もう無理しなくていいのよ・・・あなたはずっと男になろうと無理してた・・・今の有希はずっと素直になったじゃない・・・」

そういえばオレは家族といつも少し距離を感じていた。自分でもそ

れが何なのかわからなかったが、オレは男でいようとして自分自身に閉じこもっていたのだろうか・・・

「かあさんね・・・このごろ有希と麻衣が仲良くしてるの見て嬉しかったのよ。ものすごく嬉しかった・・・あなた良いお姉さんになったわね。」

「・・・うううっ・・・うぐっ・・・」

オレは泣きじゃくっていた。オレは麻衣のことが大好きだ。その気持ちはずっと昔から同じだったと思う・・・だが男のころのオレはその気持ちを表すことが出来なかった。今は姉妹になってやっと自分に素直になれるようになったのだ。

「有希・・・麻衣にはまだこのことは黙ってなさい。」

「・・・ど・・・どうして・・・」

「麻衣はまだ子供よ、もう少し大きくなるまでこのままにしておいた方が良いと思うの。今のあなたくらいになったら・・・その時、有希にも心の準備ができてたら告白すればいいわ。」

そうか・・・今のオレでもなかなか自分の知らなかった過去を受け止めきれずにいる。麻衣がそれをどう思うかわからない・・・

「うん・・・わかった・・・」

今はまだこの良い状態を続けた方がいいのかも知れない。

「でも・・・有希、このごろきれいになったと思ってたら・・・こんな訳があったのねぇ・・・」

母は裸のオレを見てそう言った。

「もっともっときれいになると思うわ。」

母はオレのまだ小さな胸にそっと触れた。

「・・・あっ・・・」

思わずオレの口から恥ずかしい声が出てしまった。まるで女の子の声みたいだ。

「あ、ごめんね。なんだかあんまり初々しかったから・・・」

オレは自分の胸がこんなに感じるのを初めて知った。オレはたぶん真っ赤になっていると思う。顔が熱くてたまらない。
「かあさん・・・わたしも・・・かあさんみたいに美人になれるかな・・・」
母はオレの頭をくしゃくしゃにして言った。
「なに言ってるの！有希はわたしが若いころよりずっと可愛いのよ。」
オレは母に抱かれてすごく幸せな気持ちになっていた。その気持ちを感じているのが男のオレなのか女のオレなのか、それはオレ自身にも解らなかった。

―――――――――――――――
―――――――――――――――
――――――――――

ATから

第一章を読んで下さってありがとうございます。
このごろ「こんな小説も読んでいます」っていうのが出るようになって、最近読み始めた方も多いようなのでこの文を書いています。
ここまで読んで下さって面白いと思っていただけたら、ぜひ感想などいただけると嬉しいです。（まだまだ先は長いので・・・）
ただ、感想のところでは現在の話題も話しているので、ネタバレになるかも知れないのでご注意ください。
私も返事でネタバレなことを書いてしまわないとも限らないので、

どこまで読んだところか書いて下さると助かります。

２００９．１２．７

2章　第20話　心機　新しい始まり

オレは自分の部屋の姿見の前で制服を着ている。
夏服に変わってから、もう1週間くらい経っていたが、今日はこれまでとは全然気持ちが違っていた。
プリーツの黒いスカート・・・白いセーラー服の上着・・・衿と半袖には白い線が2本縫い付けられている・・・衿の下に折りたたんだ黒い光沢のあるリボンを通し胸元で結ぶ。

オレはこれまでも高校に入学してから毎日、同じようにセーラー服を着て、この鏡の前に何度も立った。しかしオレは今日始めて自分の姿を本当の意味で見た気がした。

これまでのオレは女子校に通うために女のふりをしていたに過ぎない。だがこれからは違う。女になるのが手段から目的へと変わったのだ。これからもオレが女になる努力を続けるのは変わらないが、それはもう女子校に通うためではない。本当の女に近づくためであり、女子校に通うのはそれがオレが入学した学校だからだ。

女になる・・・そう考えると身支度も自然に念入りになってしまう。男とバレなきゃいいというだけでなく、女として綺麗でいたいと思う。ちょっとしたリボンのゆがみさえも気になって結び目を調節した。

だいぶ伸びた髪の毛をとかしながら、まじまじと自分の顔を見つめる。しかし何しろ自分の顔だ、他人から可愛いだのと言われても、どうにもピンとこない。たしかに昔より頬もふっくらし、少しは女っぽくなったような気もするが、それでも可愛いとは思えなかった。髪が長くなっても、ホルモンで女っぽさが出てきても、オレはあく

までオレだ。

　そっと制服の上から胸を押さえてみる。ブラジャーとヌーブラ越しにでも、男のころには無かったかすかな膨らみが感じられる。昨日、母の手がふれた時の感覚を思い出し顔が熱くなった。女の子のような声を上げてしまったのを思うと恥ずかしさが込み上げてくる。腰からお尻の方へと手をずらすと、そこにも以前とは違うふくよかさがあった。しっかりオレの身体に合わせて誂えてもらった夏服は、もはや吊りひもさえ必要なかった。お尻から腰にかけて付いた脂肪がしっかりとスカートをオレの腰へと固定してくれている。

　ああ・・・何なのだろうかこの感じは・・・オレはこんなに自分の身体を大切に思ったことはなかった。まるでオレの身体であってオレの身体でないような不思議な感じだ。首から下が見知らぬ少女の身体のようで、なんだかすごく愛おしい。これは男のオレが感じていることなのだろうか？

　ふと気付くとオレの心臓が大きくドクドクと脈打っている。それにともないセーラー服の胸元も大きく上下していた。そうだ、これは紛れもなくオレの身体なのだ。オレは訳も判らないまま手足をこすって自分の身体としての感覚を確かめていた。

――――――――――――――――

――――――――――――――――

――――――――――

「おはようございます。先生・・・」

オレは学校に着くと、すぐに保健室の白石先生の元へ行った。
「戸田さん?!　どう?気持ちは・・・落ちついた?」
「はい・・・だいぶ。」
「そう・・・よかった・・・」
白石先生は心底ほっとしたようだった。
「で、どうする?お薬はもうやめにするんでしょう?」
「いえ・・・実は両親とも相談したんですけど、このまま続けたいと思うんです。」
「そう、でもそれだと戸田さんの身体はどんどん女の子に近づいちゃうけどいいの?」
「はい。わたし、あのパッチが女性ホルモンだって知らなかったから驚いてしまったんですけど、このまま薬を続けたら女の子に近付けるのなら、その方がいいと思って。それに今さら男の身体になんて戻りたくない・・・」
オレは最後に自分の口から出た言葉に驚いた。オレはそんなふうに言うつもりだったっけ?
「わかったわ、戸田さんがそのつもりならお薬は続けましょう。」
「ありがとうございます。」
「あら、戸田さんがお礼を言うことないのよ。私はいつでも戸田さんの味方なんだから。これからも困ったことがあったら何でも私に相談してね。」
「はい。」

「あの・・・ひとつ聞いてもいいですか?」
「ええいいわよ、なに?」
「薬を続けると、わたしの身体ってどれくらい女の子に近づくんでしょうか?」
「そうねぇ・・・私も実際には経験ないからはっきりしたことは言えないんだけど、今の年齢ならかなり女の子に近づくはずよ。戸田さんもすでに二次性徴は始ってるんだけど、まだ始ったばかりだか

らこれ以上は進まないと思うし、それにお薬はじめてからそんなに経ってないのに、もう女の子の徴候も出はじめてるくらいだから、案外早く女性化するかもしれないわ。」

「そうですか・・・」

なんだか聞いていると少し不安になってくる・・・オレはいったいどんな女の子になるのだろうか?

「え?嫌なの?」

「い、いえ・・・嫌じゃないんです・・・女の子になるのは嬉しいんですけど・・・なんか自分がなくなっちゃうような気がして・・・すこし怖いんです・・・」

「そうか・・・そうかも知れないわね・・・でもね、いくら身体が女の子になっても戸田さんでなくなる訳じゃないのよ。あくまで心は戸田さんのままだと思うわ。」

オレの心のまま?それはどういうことなのだろうか?今のオレのまま身体だけが女になるのだろうか?

女になる決心をしたといっても、今のオレは男のままだと思う。昨日の母の話を聞いた後では、自分が性同一性障害者でないとは言い切れないような気もするが、やはりオレは女はおろか、オカマでもニューハーフでもゲイでもないと思うし女装趣味もない。確かに男の服を着なくなって久しいが、それは女でいるためであり、好きで着ている訳ではない。事実オレはまだ一度も女の子の服を自分で買ったことはないし、どんな服が着たいとか思ったこともない。

「わたし・・・ホルモンで身体が女になったら、心も女になるのかと思ってました・・・」

「あら?でも戸田さんは今でも女の子じゃないの。先生は戸田さんが男の子だって知ってるからアレだけど、知らなかったら女の子にしか見えないわよ。」

失敗したと思った・・・オレは心は女でなければいけなかったの

だ。それなのに心が女になるとか、ならないとか、心配するべきではないのだった。オレは頭の中がこんがらがっている。

先生はオレが女に見えると言っているが、それはオレが演技をしているからだ。決して自然にそうしている訳ではない。たとえ最近ではあまり考えなくても女の子っぽい言動が出来ていたとしても、それは心から出た言葉でも、心からやった行動でもないように思う。ただそうするように教え込まれ、それが身についてしまっただけなのだ。

「・・・ほんとうは・・・わたしの中にも・・・男の部分があるみたいなんです・・・だから心配なんです・・・身体が女になったとき・・・わたしがどうなってしまうのか・・・」

それは控えめではあるがオレの本心だった。設定上は言ってはいけないのかも知れなかったが、今のオレは言わずにはいられなかった。

白石先生はしばらく考えてから口を開いた。

「戸田さんが言ってることは先生にも何となく解るわ・・・」

先生はオレの手をそっと握った。

「戸田さんはきっと女になったら、完璧な女にならなきゃいけないと思ってるんじゃないかしら?」

「?」

「でもね、生まれた時から女でも完璧な女なんていないと思うわよ。先生だって女で生まれたけど、男っぽいところもいっぱいあるわ。女の子もみんな親から“女らしくしなさい”って言われ続けてやっと女をやってるの。中には生まれながらに女っぽい人もいるだろうけど、多くは教えられてやってるのよ。」

そうなのか?!オレはそんなふうに考えたことがなかったから驚いた。てっきり女は教えられなくても女っぽいのだと思っていた。

「その点、戸田さんは偉いと思うわ!男の子らしく育てられても女の子の心を持ち続けていたんだから。」

それは違う!そう思う反面、自分が男として普通に育ってきたのに

も関わらず、女になる教育を受けて今では普通に女の子の中で女として生活している事を考えると、それでも良いのかという気持ちにもなってきた。それと同時にオレをこんなに女らしく教育してくれた三吉先生に対して感謝の気持ちを新たにしていた。

「それに女性ホルモンは少しは脳にも影響するはずだから、今よりは女っぽい考えになるかも知れないわね。もちろん確証はないし、個人差も大きいみたいだからあまりあてには出来ないかもしれないけど・・・」

「わかりました・・・先生・・・ありがとうございました。わたし、少し気持ちが楽になりました。」

オレは保健室を後にした。もうすぐ授業が始る時間だ。

――――――――――――――――――――――――――――――――

昼休み中庭のベンチでやきそばパンを食べていると長谷川がやってきた。

「有希、昨日は早退したみたいだけど大丈夫なの？」

「あ、うん・・・もうだいじょうぶ。」

「そう・・・良かった。」

長谷川はそう言うとベンチのとなりに腰を降ろした。

「でも有希って本当うかつよねぇ。」

「え？なにが？」

「あんた中学が二中だって言ったそうじゃない。」

「うん・・・それがどうかした？」
「あんた馬鹿じゃないの？わたしまであんたのこと聞かれたんだからぁ！」
馬鹿？なんでオレがそんなふうに言われなきゃいけないんだ！
「それの何がいけないの！」
長谷川と話すと、どうも喧嘩ごしになってしまう。

「だから馬鹿って言ってるのよ！ほんと何考えてるんだか・・・有希は中学の時と同じ名前使ってるんだから、もし卒業アルバム見られたらアウトじゃないの！」
「あ！そうか・・・」
確かにそうだ。アルバムを見られたらオレが男だと判ってしまう！
「ど、どうしよう・・・」
「ほらね。な～んにも考えてないでしょう？ちゃんとわたしが言っといてあげたわよ。あんたは卒業間際に転校してきたって。」
「はあ？」
何のことだかさっぱりわからない。
「だからぁ、あんたは卒業アルバムの写真を写した後に転校してきたから、卒業アルバムには載ってないの。」
「でもわたし載ってるよ。」
「それは同姓同名の別人だって言い張るしかないでしょう？」
「そんなの通るかなぁ・・・」
「通すのよ！通すしかないじゃない！それとも実は男だって告白するつもり？まあ、わたしはそれでもいいんだけどね？」
長谷川はいやらしく笑った。

「それは困るよ・・・わたしやっと女になる決心したのに・・・」
「なにそれ？」
「あ～っと・・・そうじゃなくて・・・やっと女として生活できるようになったのに～・・・」

あやうく長谷川には関係ないことを言ってしまいそうになって焦った。
「とにかく言い張るしかないんだからね。後は自分で考えておきなさいよ。」
「え?考えるって何を?」
「どこから転校してきたかとか、なんで転校してきたかとか、そんなもろもろの事よ!」
オレは長谷川に言われっぱなしで自分が情けなく思えてきた。なんだか泣きたい気分だ。オレは思わず長谷川の腕をつかんで懇願していた。
「そんなぁ・・・長谷川さんも一緒に考えてよぉ・・・」
「もうっ!!　そんな可愛い顔して頼んでもダメよ!　わたしには通用しないんだから!!」
長谷川は怒ったように腕を振り払うとベンチを立った。
「ほんと、ちゃんと考えておきなさいよ。で、考えたらわたしにも教えてよ!ちゃんと統一しておかないと話が合わなくなるんだからね!」
「う、うん・・・わかった・・・」
すっかり意気消沈してしまったオレはそう言うのがやっとだった。

第２１話　転校　作られる過去

自宅に帰るとすぐに父の書斎へ直行した。ふだんは何を考えているかわからない全く頼りにならない人だが、こんなことを相談できるのは父くらいしかいない。

“コンコン”

「入っていいぞ」

書斎という名の納戸の引き戸をノックすると、中からくぐもった声が答え、オレはそっと引戸を開けた。

「なんだ？有希」

「あの・・・ちょっと相談があるんだけどいい？」

「ああ。」

「ねえ、その前にマスクを一枚貰っていい？」

オレは父からマスクを受け取ると、耳にかかった髪をかきあげてゴムひもを耳にかけた。

「実はね、わたしクラスで中学は二中に行ってたって言ってしまって、それを聞いた長谷川さんが、もし卒業アルバム見られてもわたしが男だってバレないように、卒業間近に引っ越して来たって言っちゃって・・・」

「でも卒業アルバムを見られたらどっちみち判ってしまうんじゃないのか？」

「そうなんだけど・・・それは同姓同名の別人だって言い張るしかないって・・・」

「なるほど・・・。」

「それでどこから越してきたかとか考えなくちゃいけなくなって・・・」

父はしばらく考えてから何かノートに書きだした。
「まず・・・どこから越してしたか・・・熊本はどうかな?おれの田舎だから、そこにいたことにすればいい。」
「うん・・・」
「お前は向こうの名前を残すために、ひとり熊本の実家に養子になっていたのかもしれないな・・・おれが婿養子だからな。」
「え?!」
「だが、子供がずっと出来なかった姉夫婦に子供が出来、居場所のなくなったお前は本当の家族の元に帰ってきた。この家の事だな。」
「・・・・」
「帰ってきて、こっちの中学に行くと同じ名前の戸田有希という少年がいた。と言っても、その時はまだお前の名字は佐藤だけどな。」
「・・・・!」
「で、中学はそのまま佐藤で、高校進学に合わせて戸田に戻す・・・と、こんな感じでどうだ?」

「・・・なんか・・・そんなに面倒な設定にしなくても・・・」
「そうか?じゃあ親の転勤で引っ越してきたことにするか?」
「・・・そんな簡単でいいのかなぁ・・・」
「いいんじゃないのか?引っ越しの理由なんてそんなに無いだろう。」
「そうかな・・・でもこの家にはもうだいぶ住んでるし・・・もしクラスの人の知り合いが、この近所にいたりしたら・・・」
「だからお前だけが帰ってきた事にしたんじゃないか。」
「あ、そういうことなんだ・・・なんか訳わからなくなってきた・・・」

「じゃあ、これを元に自分で考えてみたらどうだ?決まったらかあさんや麻衣にも教えとくんだぞ。」
父はそう言ってノートを破いてオレに渡してくれた。

「だいたいこういうのはややこしくしておいた方がいいんだ。他人は簡単に理解できないと、考えるのが面倒になるからな。それに後から言い逃れもしやすい。」
父はそう言ってマスクの中で笑った。

「それにしても・・・とうさんって婿養子だったんだ?」
「なんだ、有希は知らなかったのか?」
「うん。」
「婿養子だから母さんのお母さんの名字も戸田なんじゃないか。」
「言われてみればそうだけど・・・あんまり気にしたことなかった・・・」
どうもオレは何ごとにも無関心すぎるのかもしれない。
「かあさんの家は女二人姉妹だったしな、麻弓さんは先に結婚してたから、おれが養子に入った訳だ。」
「ふぅん、そうなんだ・・・」
「まあ、おれはそういうことは気にしない方だしな。」

オレはそのあと、どういう設定にすればいいか考えてみたが、頭の中が混乱するばかりでまったく結論が出なかった。どうやらオレはこういう事を考えるのには向いてないようだ。仕方なく父が考えたのを、そのまま使うことにした。

「おはよう有希」
駅の改札を出たところで同級生の佐倉千里(さくらちさと)が声をかけてきた。
「おはよう千里」

オレも自然に挨拶を返す。
最初は同級生の女の子との会話には緊張したものだが、さすがに最近では自然に話せるようになってきた。彼女たちにしてもオレのことを、ことさら女らしい性格とは思っていないようだったから、最初の頃思っていたほどは女らしい言葉づかいに気をつける必要もなかった。

白い上着に黒いスカートという白鴻の夏用のセーラー服を着た女生徒の中に、男のオレがひとり混ざって登校するのは、よくよく考えれば奇妙なことではあったが、これもオレにとってはすで日常の光景になっていた。夏服の半袖からのびた腕も、もう脱毛が済んでいたから毛のせいで男だとバレる心配もない。オレはあまり運動も得意じゃないし、そんなに黒くなるタチでもなかったから、大方の同級生たちと比べても違和感はなかった。

「ねえ！きのうの山ペー見た？」
「みたみた！最後が可哀想だったねぇ。」
佐倉とオレはどちらもニースの山上のファンだから気が合うのだ。もっともオレの方は山上しか知らなかったから口から出まかせでファンだと言ってしまったのだったが、どうも最近では山上のことが本当に気になるようになってきてしまった。だから今日もオレたちは昨日のドラマ『救命ヘリ』の中で、普段は感情を表にあらわさない山上が、育ててくれたおばあちゃんが痴呆症になったのを見て初めて泣いた感動シーンで盛り上がっていたのだ。
佐倉はにわかファンのオレと違って驚くほど山上の事に詳しいので尊敬してしまう。まあオレの場合、男性アイドルのファンということだけでなく、女の子としても駆け出しなのだから仕方がないと言ってしまえばそれまでだが、女になると決めた以上は彼女たちを見習っていかなければならない。

校門には毎日、風紀検査のために若い先生と古株の先生が二人で立っていた。もともとお嬢様学校だから服装の乱れには厳しいのだ。もっともそれはオレにとっては都合が良いことだった。男のオレにはセーラー服を着ることだけで大変なのに、スカートを短くしたり、腰を細くしぼったりと、制服を改造するのはさすがに荷が重い。だから制服をそのまま着ていればいいこの学校の校風は有り難かった。そもそもオレの制服は特別誂えなのでオレの体のサイズにピッタリだし、おかげでオレは校門で呼び止められたことは一度もなかった。

「おはようございます。」

今日もいつものように校門の前で一旦立ち止まり、カバンを両手で前に持って丁寧にお辞儀しながら挨拶をして通り過ぎようとすると古典の長山鏡子（ながやまきょうこ）先生に呼び止められた。長山先生はこの学校での三吉先生のような存在で、年齢はたぶん６０才くらいで先生のうちでは一番の古株だ。生徒の風紀にも厳しいらしくオールドミスなどと悪口をいう生徒もいた。

「戸田さんは髪を伸ばしていらっしゃるの？」

「あ、はい・・・」

「それなら髪が衿にかかってるからくくらないといけないわね。校則では衿にかかったらくくる事になってるのはご存知でしょう？」

「はい・・・わかりました・・・」

オレはそう言ってお辞儀をし、その場を離れた。

先生たちは皆オレが男だと知っているのだから、そのオレが性同一性障害だからといって、セーラー服を着て登校したり、ブルマーで体育をしたり、髪を伸ばしたりするのを変に思われていないか気になるところだが、さすがにそれを聞く気にはなれなかった。ただ、比較的良く会話をする担任の山口先生や、家庭科の松本先生は、内

心どう思っているのかは解らないにしても、同級生の女の子たちと同じようにオレと接してくれているし、オレが習っているうちでは唯一の男の先生である現国の斉藤明先生も、オレに他の女生徒と同じように接してくれていた。おかげでオレも女の子として過ごすことができたし、時々自分が男であることを忘れていることさえあった。オレがいうのも何だが、先生たちはよくみんなこんな状況を自然に演じているものだと思う。これも校医の白石先生が、ちゃんと性同一性障害について説明してくれたおかげなのかもしれない。

「有希髪のばすの？」

「うん・・・そう思ってるんだけど・・・」

「わたしは有希は短い方が似合ってると思うんだけどなぁ。」

「う～ん・・・でもわたしずっと短かったから、高校に入ったら伸ばそうと思ってたのよ。」

「でもおさげにするのって嫌じゃない？」

オレには良く判らなかった。そもそもオレにとっては女の子の恰好をすること自体が恥ずかしいのだから、髪型くらいはどうということもないのだ。そもそもオレはおさげにしたこともないし、おさげがカッコ悪いイメージがあることも知らなかった。

「でもわたしおさげになんてした事ないから、どうすればいいのか良くわからないのよねぇ・・・」

「やっぱり有希って変わってるわねぇ。そんなのただくくるだけじゃない。」

女の子にとっては普通のことかもしれないが、オレにとってはそうでもない。家ではひとつにくくることはあったが、ふたつにくくるのはどうすれば良いのか良くわからない。

「おはよう！ねえ誰かゴム持ってない？有希の髪くくるんだけど。

」
教室に入るとすぐに佐倉が言った。
「あ、あたし持ってるよ！」
同級生がカバンから出した黒いゴムが入った袋をもらった佐倉は
「有希うしろ向いて」
そう言ってオレを後ろ向きに椅子に座らせると、ペンシルを上手に使って真ん中から分けて両脇でくくってくれた。いつのまにかオレたちのまわりはクラスのみんなに取り囲まれていた。女の子はこういうことには行動が速い。

「立って立って！あっ思ったより可愛い！」
佐倉が言うとみんなうなずいた。どうやらオレのおさげは姿は変ではないようで安心した。
「絶壁だと似合わないけど有希は頭の形がいいから！」
「ほんと有希ってどんなスタイルも似合うよねぇ。私服も見てみたいなぁ！」
「そ、そんな・・・普通よ・・・」
オレは恥ずかしくて仕方がなかった。オレとしては普通に女の子に見えれば十分で、それ以上である必要などないのに・・・いつのまにかクラスの注目をあびてしまっている。

「これが噂のぉ・・・」
長谷川がしげしげとオレを見ながらつぶやいた。
「な・・なによ・・・」
こういう時の長谷川には、オレもつい身構えてしまう。

「有希って何しても話題になるんだからすごいよねぇ・・・ただ髪をくくっただけなのに・・・」
そう言いながらも、横から後ろからオレのことをジロジロ眺める。
「なんかねぇ・・・モミアゲとか、後れ毛とか、細かいところも女っぽいのよねぇ・・・有希って。」
「そ、そうかな・・・」
オレはそんなこと気にしたこともなかった。まったくオレは自分のことでさえ、まわりの人に言われて初めて気づく始末で情けないかぎりだ。もっとも自分の後れ毛を気にする男もいないと思うが・・・

「それで?考えてきたの?」
「うん・・・一応・・・」
オレはポケットから紙を取り出して長谷川に渡した。
「コピーしてきたんだ、有希にしては気がきくじゃない。」
長谷川はオレが考えた（本当はほとんど父が考えたのだが・・・）設定を書いた紙をひらきながらつぶやいた。母や妹にも見せなければいけないから途中のコンビニでコピーしてきたのだ。

しばらく見ていた長谷川だったが、顔を上げるとうさん臭そうな顔でオレを見た。
「これ有希が考えたの?」
「う、うん・・・」
「本当?よく有希がこんな複雑なこと考えられたわねぇ・・・」
オレはウソをつくのは苦手だ。どうせすぐにバレてしまう。
「・・・ほんとは父さんが考えたんだけど・・・」
「やっぱりねぇ、有希がこんなややこしいこと考えられるハズないと思ったのよ!」
まったく失礼なことをいうヤツだが、本当のことだから怒ることも出来ない。

「ふ～ん・・・有希のお父さんって何してる人？」
「・・・小説家・・・みたいな感じ？」
「え？！有希のお父さんって小説家なの？」
「いや・・・小説って言っても・・・」
「ねえ、どんなの書いてるの？」
「知らない・・・読んだことないし・・・」
「そうなの？」
「うん・・・」
「そんなもんなのかなぁ。お父さんが小説家なんてカッコイイじゃない。」
「冗談じゃない！わたしの父さんが小説家なんて・・・他の人には言わないでよ！」
「う、うん・・・言わないけど・・・」
長谷川もあまりのオレの剣幕に驚いたようだった。オレは本当に父親が小説なんか書いてるのを知られたくはない。特に理由はないのだが・・・

「お父さんが小説家なんて嫌だよ・・・べつにとうさんは嫌いじゃないけど・・・小説家っていってもぜんぜん売れてないし・・・」
「そんなもんかなぁ・・・それにしても有希のお父さん難しいこと考えたわね。」
「なんか、こういうのはややこしくしておいた方がいいんだって言ってた。理解しにくい方が良いんだって・・・」
「ふ～ん、で有希は理解してるの？」
「え？！」
「だって有希が理解してなきゃダメじゃない。」
「まあ・・・そうなんだけど・・・」
オレは父の田舎にも一回しか行った事がないし、家系のこととか良くわからなかった。そもそも家族のことさえ良く知らないのが最近わかってきたところだ。

「有希、ちゃんと理解しておきなさいよ。あんたが理解してないんじゃ話にならないんだからね。」
「う、うん。」
「なんか頼りないなぁ。有希って男のころからこんなだったの？」
「・・・・」
「わたし中学のころの有希は良く知らないけど、けっこう普通の男の子じゃなかったっけ？」
自分でも良くわからなかった。オレは中学のころはたしかに普通に男として生きていたと思うのだが、最近ではそれもだんだん曖昧なものに思えてきた。

そもそもあの頃のオレは自分が普通の男であることを疑ったことなどなかった。今の長谷川が思っているように性同一性障害でもなかった。しかし最近わかってきた事実をつなぎ合わせてみると、それもはなはだ怪しく思えてくるのだ。ときどき母が残してくれていたアルバムを見ながら昔のことを思い出そうとするものの、いまだにほとんど思い出すことが出来ないでいた。

そのうえ男のころの事さえ怪しくなってきたとあっては、オレとしても自分がいったい何なのかわからなくなっても仕方のないことかもしれない。しかし、このことは長谷川にも言うことはできない。オレは中学のころから心は女の子だったことになっているのだから。
「あのころは・・・きっと無理して男っぽくしていたからよ・・・」
「あ、そうか。そうよね、有希はあのころから心の中は女の子だったんだもんね・・・なんかわたし頭の中がこんがらがってるみたい。」
長谷川もこんがらがってるかもしれないが、オレの方がもっとこんがらがってるに違いない。

いつかはオレもすべてのことを思い出す時が来るのだろうか？その時のオレはどうなっているのか、今は想像することさえ出来ない。女になる決心をしたオレっていったいどういう人間なのだろうか？それに女になるってどういうことなのだろう。オレにはまだ女になるということが、どういうことなのか良くわからない。それなのにオレのまわりはどんどんオレを女にする方向へと動いているような気がする。そしてそれを心地よく感じ始めているオレがいる。オレっていったい何なのだろう。

第２２話　恩師　オレの大切な人

「こんにちは」
オレは引き戸を開けて挨拶をする。出迎えてくれた三吉先生は着物姿。
「いらっしゃい戸田さん」
オレは衿無しで胸元を柔らかな巾広のリボンで結ぶタイプの白いブラウスに、紺のちょっと長めのスカートでいつもより清楚にみえる服装を選んでいた。細いエナメルの光沢がある同色のベルトに付いた金の金具がアクセントになっている。白いブラウスなので透けないようにベージュの下着をつけていた。

玄関を上がり、ヒザを揃えてしゃがみ、脱いだ茶色の革靴をきれいに揃える、その手つきや仕草を見られているのを感じながら・・・振り返った時の先生の笑顔で、ちゃんと出来ていたらしいことを知って安心した。

このごろはだいぶ女の子でいることにも慣れてきたが、三吉先生に会うとオレはいつも背筋が伸びる気持ちになる。オレが今こうして女の子として暮らしていけているのも三吉先生のおかげなのだ。もし先生がオレを女の子として教育してくれなければ、オレははるかに苦労しただろうし、今ごろはとっくに男だとバレてしまっていたかもしれない。

「すみません先生、あまり来ることが出来なくて・・・」
オレは先生にお茶を習うと言ったのに、高校に入学してから、まだ今日で３回目だったのだ。
「いいのよ、戸田さんも大変なんでしょう？気苦労も多いんじゃないの？」

「いえ・・・そんな・・・」
「それにうちは少し遠いでしょう?」
「いえ、電車に乗ればすぐですから・・・」
そうは言ったが、たしかにそのこともオレがなかなか先生のもとを訪ねにくい原因のひとつではあった。先生の家は駅から少し離れたところにある。オレは学校への道にはさすがにもう慣れたが、それ以外・・・たとえば街などへは、まだ女の子の恰好で行くのが少し怖かったのだ。人が多いところは特に苦手になっていた。もし大勢の人がいるところで男だとバレてしまったらと考えるとオレは上手く対処できる自信がなかった。

お座敷に入ると先生はオレに向き直り言った。
「戸田さんったら、また女らしくなったんじゃない?」
「そんなぁ・・・少し髪が伸びたからじゃないですか?」
オレはつい恥ずかしさに頭に手をやった。そこには出がけに母が付けてくれた黒くて細いカチューシャがあった。

オレはいまだに髪をうまくまとめることが出来ない。学校の時はただ髪をとかすだけで良かったが、さすがにこんなきれいな恰好をした時は、それだけではマズかったようだ。だから出がけに母に呼ばれて鏡台の前に座らされ、髪に霧吹きで水をかけてドライヤーを使って毛先をきれいに巻かれてしまった。そして最後の仕上に薄く化粧をされ、このカチューシャを付けられたのだ。オレは化粧をしたり、女の子のアクセサリーを付けるのはどうにもこっぱずかしくて落ちつかない・・・
「それに・・・今日は母が・・少しお化粧をしてくれたんです・・・」
「似合ってるわよ、戸田さんはお母様に愛されてるのね。」
「そ、そんな・・・」
オレはこういう時、どんな顔をすればいいのかわからない・・・

「それじゃ着替えましょうか」
「はい・・・」
オレはドキドキしながら胸元のリボンをほどく・・・三吉先生はオレの身体におきた変化をまだ知らない。この前に来た時はまだこんな身体ではなかったのだ。

緊張からか手がふるえてボタンが外しにくい。やっと外してブラウスを脱ぎ、スカートも脱いでスリップ姿になる。伸びた髪の毛に気を使いながらスリップを脱ぐと、もうオレはブラジャーとパンティーだけの姿になった。

前に来た時にはヌーブラを剥がすのが恥ずかしかったが、今はもうヌーブラは着けていない。急に胸が小さくなってはマズいので厚めのパットを入れてはいたが、もうオレの胸はヌーブラを着ける必要はなくなっていた。まだまだ幼いものではあったが、オレの胸にははっきりと判るほどの膨らみが出来ていたのだ。それは明らかに男の胸とは違っていた。

両手を後ろに回してホックを外す・・・いったいこんなになってしまったオレの身体を見て、先生はどう思うだろうか?先生もオレのことを性同一性障害だと思っているのは知っている。しかしどの程度理解してくれているかはオレには良くわからなかった。身体まで女になろうとしているオレを見て、これまでとは違う気持ちを持つとしても不思議ではない。世間では心が女であることは許せても、身体まで女になるのは違うと考える人も少なくないのだ。特に高齢の人ほどその傾向は強いらしい。

オレはブラジャーを外すと同時に、思わず片手で胸を隠すようにした。そしてそのまま先生に背を向けて、ふたつにたたんだブラジ

ャーを、同じくたたんだスカートとブラウス、そしてスリップの上にそっと置いた。

オレが立ち上がるとすぐに先生は肩から肌着をかけてくれて、そのまま前で合わせて腰をひもで縛ってしまった。オレには先生がオレの身体のことに気づいたかどうかわからなかった。

着物の着付けは、手順はだいたい憶えたものの、まだ自分で着ることは出来ないから、先生に着付けてもらいながら憶えていた。たくし上げたところを手で押さえておくように言われたりしながら少しづつ憶えていく。帯を巻く前までは何とか手伝ってもらいながら出来るようになってきた。

「戸田さん、手伝ってあげるから帯を自分で巻いてごらんなさい。」

「はい・・・」

オレはあまり自信はなかったが、やってみるしかない。帯を肩にかけてから体に巻いていく・・・以前と違い胸が膨らんでいるのを感じる。

「あ、そんなに強く巻いたらダメよ。もう少しゆるくてもいいの。」

帯の巻き方は難しい。強く巻くと苦しくなるし、ゆるすぎると着くずれてしまう。他人に着付けてもらうと着くずれないように強く巻くが、それでは着物を着たとは言えないのだそうだ。着物も立ったり座ったりすると着くずれるのが当たり前で、それを直しながら着るのが正しい着かたらしい。そのためには、まず自分で着れるようにならないとダメなのだそうだ。

オレは先生に教えてもらいながらやっとの事で帯を締め、帯締めで固定して出来上がった。

「うん、初めてにしてはまあまあね。こんどは一度一人で着てみましょう。」

「はい。」

着物は着方も難しいし、立ち振るまいも難しかったが、着物を着る

とより女っぽくなれる気がするのが嬉しい。今日は先生が髪をアップにしてくれた。その重さが髪が伸びたことを自覚させてくれる。

「戸田さんは首すじが綺麗だからアップにしても良く似合うわねぇ。」

長谷川がオレの後れ毛が女っぽいと言っていたのを思い出し、急に恥ずかしくなってしまった。

先生がオレの身体のことに気づいたかどうかわからなかったが、やっぱり三吉先生にはちゃんと言わなければいけないと思った。

「先生・・・実はわたし・・・からだも・・・」

オレが言おうとすると、先生はオレが言うのを止めて

「いいのよ。戸田さんは女の子なんでしょう?それでいいんじゃない?」

と笑顔で言ってくれた。

「先生、この前から気づいてたわよ。着付けしてるとね太ったとか、痩せたとか体型の違いはすぐ判るものなのよ。」

そうか、先生はオレよりも先に気づいていたのだ。オレの身体はオレ自身が気づく前から少しづつ女の子へと近づいていたのだった。

「先生・・・ごめんなさい・・・」

なんか自分が情けなくてしかたがない。オレは自分のことが何にも解ってないのだから・・・

「ほらほら、戸田さんは泣き虫ねぇ。これからお稽古なのに目が腫れてしまうわよ。」

先生はそう言ってハンカチで涙を拭いてくれた。先生のハンカチは少しお香の薫りがした。

「こんにちは」

玄関で生徒さんの声がして、先生はオレの手にハンカチを握らせて玄関へ出ていった。オレは急いで涙を拭た。

「あら、有希ちゃん来てたの？」

生徒さんのお姉さんたちはオレより１０才は年上だ。みんなそれほど真剣に習っている訳ではなく、いわゆる花嫁修行のようなものらしい。だから三吉先生もオレに対する時ほど厳しくはないようだった。生徒さんはお弟子さんというよりもお客さんのようだ。オレは先生に言われて道具を揃えたりという手伝いもしていた。そして準備が済むと生徒さんたちの末席に座り一緒にお稽古に参加する。

初めてここに来た時は、生徒さんもオレがまだ何も知らないと思ったらしく、すぐに出来ていることを驚いていた。生徒さんに前からやってるのか聞かれてオレが口ごもっていると、中学で茶道のクラブだったのだと先生が助け舟をだしてくれた。だからオレはここでは中学校のころからクラブ活動で三吉先生に習っていたことになっている。まあ、実際も似たようなものかもしれないが。

「有希ちゃんは今日もお着物なのね。」

「はい、自分で着れるように先生に習ってるんです。まだまだダメですけど・・・」

生徒さんたちがオレのことを男だと知っているのかどうかわからなかった。ただ皆さんオレと普通に女として接してくれている。オレにとってもここでは妹のように扱われるのが新鮮だった。学校では同級生やせいぜい先輩との付合いだし、家では姉であり娘だったから、妹的な扱いをされるのはここだけなのだ。

お稽古が終ると生徒さんのひとりがオレに声をかけた。

「有希ちゃん、またお茶に行かない？」

お姉さんが言っているお茶とはケーキ屋さんのことだ。どうやら生

徒さんたちは、お稽古の後にケーキ屋さんに行くのが楽しみなのだ。この前の時にオレも連れて行かれたのだが、おとなの女の人のおしゃべりに付合うのは、まだ女になりたてのオレにはかなり荷が重かった。それに今日は先生に身体のことを知られるのを心配したりして、なんだか疲れてしまっていた。苦いお茶の後のケーキには未練があったが、ちょっと用事があるからと遠慮した。

―――――――――――――――

―――――――――――――――

――――――――――

お稽古が終って電車で帰る間も、オレは頭の中でお茶のお作法や、着付けの手順など思い返していた。今度行った時には自分で着物を着なければいけない・・・もちろん三吉先生もオレが完璧に着れるなどとは思ってないだろうが、できればオレに一人で着てみるように言った先生の期待を裏切りたくはない。

椅子に座って物思いにふけっていると、ふと誰かの視線を感じた。ゆっくりと視線の方へ顔を上げて驚いた。オレの前に立っていたのは長谷川順子だった。

「有希・・・よね？」

「う・・ん・・・」

オレはこんなところで長谷川に会うとは思わなかったからひどく焦った。それに今日のオレは制服ではない・・・こんな清楚な恰好のうえ、薄く化粧までしているのだ。髪もきれいに整えている・・・

「やっぱり有希なのね。なんか似てるな・・・とは思ったんだけど。」

長谷川は遠慮なしにオレの顔をのぞき込むが、オレは恥ずかしくて

長谷川の顔を見ることができない。今日は長谷川も私服だが、Tシャツの上に長袖のシャツを羽織り、下はジーンズをはいている。お互いに制服以外で会ったことがないから、私服で会うだけでもバツが悪いというのに、今日はどうみてもオレの方がずっと女らしい恰好をしている。

「有希・・化粧してる?」

「う、うん・・・」

顔が熱い・・・たぶん真っ赤になっているに違いない。長谷川にこんな姿を見られるなんて・・・オレは恥ずかしくて今にも泣き出しそうだ。

「有希、どこか行った帰りなの?こんなにおめかしして。」

おめかしなんて言わないでほしい・・・そんなことを言われると顔をあげることができない。

「どこ行ってたの?」

矢継ぎ早に聞かれ、オレはやっとのことで答えた。

「お・・お茶・・・」

「ん?お茶?」

「う・・うん・・・お茶の・・・お稽古・・・」

「へ~・・・有希お茶の稽古なんかやってるんだぁ!」

「・・・・・」

オレは両手を硬く握りしめて、早く降りる駅に着くことだけを願っていた。

「ねえ、有希これからどこか行くの?」

「え?　家に・・帰るところだけど・・・」

「家で用事ある?」

「・・・ううん・・・」

「じゃあ、まだ時間ある?」

「う、うん・・・まあ・・・」
オレは質問の意味がわからず、適当に答えていた。
「ねえ、それじゃちょっとうちに来ない？」
「ん・・・？・・・ええっ！！」
オレは驚いた。なんでこんな話になっているんだろう？
「うちって長谷川さんの家？」
「そう。」
「・・・なんで？」
「べつに、何でってこともないけど・・・うち次の駅で降りてすぐなのよ。」
「・・・！！」
次の駅はオレが降りる駅でもある。駅に近いということは長谷川の家はオレの家ともそう遠くないことになるではないか。

考えてみれば同じ中学だったのだから家が近くても不思議ではない。しかしオレは自分の家を友達に知られるのが嫌いなのだ。その理由のひとつがオレが引っ越す前の家で起きたことのトラウマだったとしても、理由は他にもある。今でもあまり知られたいとは思わない。

オレは混乱した頭で考える。オレも家に帰るためには次の駅で降りなければいけない。もっと先のふりをするかとも考えたが、戻ってくるためのお金がない。先の駅から人込みの中を女の子の恰好で歩いて帰ることは避けたかった。このあたりにはオレの知り合いもいるかも知れない。長谷川の家が駅に近いとすると、オレの家に帰るにはその前を通らなければいけないかも知れない。道が反対だったりすれば良いが、それだとオレの家の方向がわかってしまう。

「長谷川さんの家って、他にだれかいるの？」
「たぶんお母さんがいると思うんだけど。」

オレは長谷川の家族構成は知らなかったが、父親がいたら嫌だと思っていた。日曜日だから父親がいてもおかしくない。だいたい男の方が女装に対して厳しいみたいだからだ。

「・・・い・・行ってもいいけど・・・」

「あ、着いた。行こう！」

長谷川はオレの手を引っ張って電車を降りた。長谷川の手が柔らかくて少しドキドキした。もっともオレが男だったらいざ知らず、女になるのだからドキドキしても意味がない。とはいえ今でもオレの心の多くの部分は男のままだ。こんなに無防備に手を握られるとさすがにドキドキしてしまうのも仕方がない。

長谷川の家は改札を出て3分ほどのところにあるマンションだった。よくこれまで登校時に会わなかったものだ。マンションといってもそんなに立派ではなく、昔ながらの感じだった。エレベーターで6階へ上がる。

「ただいま」

長谷川はドアを開けてオレを招き入れた。

「・・・おじゃまします・・・」

オレも長谷川について恐る恐る入っていく。

「おかえり」

ダイニングキッチンらしき方向から声がした。オレはペコリと会釈した。

「あら、お友達？」

母親とおぼしき女性の質問に長谷川が答えた。

「ママ、このこが戸田有希くんよ。偶然電車で会ったから連れてきたの。」

長谷川はオレのことを“くん”付けで紹介した。それは母親もオレが男だと知っているということなのだろうか？

「まあ・・・あなたが戸田・・さん？」
長谷川の母親はオレを見て少なからず驚いているようだ。
「順子に聞いてたけど・・・こんなに淑やかな・・・お嬢さんだとは思わなかったわ。」
かなり言葉を選んでいるのを見ると、やはりオレが男だと知っているようだ。男のオレがこんな女の子の恰好をしているのを奇異に思っているに違いない。
「ママ、今日の有希はいつもより特別しとやかなのよ。ねぇ。」
長谷川にまでそんなことを言われるとオレはいたたまれなくなってくる。
「長谷川さん・・・わたし・・やっぱり帰る・・・・」
「ち、ちょっと・・・」
長谷川が急いでオレの腕をつかんだ。
「ちょっと！ママが変なこと言うから、有希恥ずかしがってるじゃない！」
どっちもどっちだ・・・どうせ長谷川もオレを母親に見世物にするために連れてきたに決っている。

「ご、ごめんなさいね戸田さん・・悪気はなかったのよ・・・順子からいつも可愛いとは聞いてたけど、戸田さんがこんなにきれいな人だとは思わなかったものだから・・・」
「ママったら！また変な言い方する・・・有希は繊細なんだから！」
長谷川が帰ろうとするオレを引っ張っていく。思いのほか力が強い・・・ストッキングをはいているオレと裸足の長谷川ではフローリングの床では踏ん張る力が違いすぎる。
「有希、とにかくわたしの部屋に入ろう。ね？」
そう言って無理矢理オレを部屋に連れ込んだ。

オレは長谷川の部屋に入っても、顔を上げることが出来ず正座し

たままうつむいていた。
「ゆ、有希、ヒザくずしてよ・・・」
そう言われてもオレの骨格は男のものだ。女なら楽になる横座りも男のオレにはよけい辛いだけなのだ。正座の方がよほど楽だった。まさかこんな恰好であぐらをかく訳にもいかない・・・
「有希・・・ごめんね。有希がそんなに嫌がると思わなかったのよ。」
「長谷川さんの・・・お母さん・・・わたしが男だって・・・知ってるんでしょう・・・？」
「うん・・・でも変なふうには思ってないわよ。有希が思ったよりきれいだったから舞い上がっちゃったんじゃないかな・・・」
「うそよ・・・わたしがきれいな訳ないじゃない・・・長谷川さんもわたしのことバカにしてるんでしょう・・・」
「そんなぁ・・・」
「わたしなんかと一緒にいたらお母さんが心配するわよ。こんな変態とひとつの部屋にいたら・・・」
「そんな・・・変態なんて・・・そんなこと思ってない・・・・・・・・・」
なんか長谷川の様子か変だ。
「有希ったら、ヒドイよ・・・そんなふうに思ってたなんて・・・うっうくっ・・・」
あれ？長谷川が泣いてる？！泣きたいのはオレの方なのに・・・
「な、なんで長谷川さんが泣くのよ！」
女の子に泣かれるとどうしたらいいかわからない・・・こんな時はオレはまだまだ男だと思い知らされてしまう・・・
「ね、ねえ・・・泣かないでよ・・・」
なんだかオレは一気にトーンダウンしてしまった。女の涙に男は弱いものだ。
「わたし・・・有希が変態なんて思ってないよ・・・」

「う、うん・・・わかったから・・・わかったから・・・」
そうなのだ。長谷川がオレのことをそんなふうに思ってないのは解っていたではないか・・・オレは自分のバカさが恨めしかった。長谷川もまたオレにとって大切な存在だったハズなのに・・・
「ゴメン・・・オレが悪かったよ・・・ほんとゴメン・・・」
「・・・？」
「オレもほんとに長谷川さんがそんなふうに考えてるなんて思ってないから・・・」
「・・・オレ？」
長谷川が不思議そうにオレを見上げた。
「有希、今オレって言ったよね」
「・・・・！」
オレは自分でも気づかず、自分のことをオレと言ってしまったのか？！
「あ・・あ・・・わたし・・・そんなこと言った・・・？」
「言ったよ・・・」
オレは狼狽した・・・これではオレがほんとは性同一性障害ではないとバレてしまう・・・

しかし、長谷川の反応は意外なものだった。
「有希にもまだ男っぽい部分があるんだね・・・もうすっかり女の子になっちゃったのかと思ったけど・・・」
「そ・・そりゃあ・・・ずっと男だったわけだし・・・わたしだって急には・・・」
「・・・ちょっと安心した・・・有希も頑張って女の子になろうとしてるんだ・・・」
「あ、あたりまえじゃない・・・女の子になるのも大変なのよ・・・心は女でもずっと男の子として生きてきたんだし・・・」
長谷川もいつしか泣き止んでいた。
「そうよね・・・わたし、有希があんまり女っぽいから・・・もう

女の子になり切っちゃったのかと思ってた・・・」
そんなハズがないではないか。こんな女の子の恰好をしたって、髪を伸ばしたって、化粧をしたって、そんなに簡単に女になれるハズがない。たとえオレが本当に性同一性障害だったとしてもそんなに簡単ではないのではないだろうか？

「ごめんね長谷川さん、今日わたしちょっと気持ちが不安定だったのよ。でもだいぶ落ちついたから・・・」
オレは深く息を吸って気持ちを落ちつけた。こうすると胸を締め付けるブラジャーの存在をあらためて感じる。オレはもう女になることに決めたのだ。もう後戻りはできない。たとえそんなオレに対してヒドイことを言う人がいたとしても、オレは女になるしかないのだ。

それにいま思えば、長谷川のお母さんだってオレのことをバカにしていた訳ではないのかも知れない。お母さんはオレが男だと知っていたのだから、いろいろ想像していたに違いない。だからオレが急にこんな似合わない恰好で来てしまったから言葉に窮してしまったのかも知れないではないか。
「・・・わたしってバカだな・・・いまだに女の子になりきれないんだから・・・こんな似合わない恰好までして・・・」
「そんなことないよ、有希はそんな服も似合うんだってビックリしたもん。だってこれまで制服しか見たことなかったし・・・だからせっかくこんなきれいな恰好してるから、ついお母さんにも紹介したくなって・・・」
そういうことだったのか・・・しかしそんなことなら、もう少し似合う恰好の時にしてほしかった。そしたら長谷川のお母さんにも奇異に見られずに済んだかも知れないのに・・・

第２３話　順子　彼女の部屋で・・・

むりやり長谷川順子の部屋に連れ込まれたオレだったが、なんだか変なことになってしまった。
ふたりとも次の言葉を口にすることが出来ないまま時間が過ぎていく・・・部屋には重い空気が充満している感じだ。

最初に口を開いたには長谷川だった。
「・・・ねえ、化粧・・・自分でしたの？」
「・・・今日は・・・かあさんが・・・」
「今日はってことは有希も化粧出来るの？」
「・・・まだ・・少し練習してるだけだけど・・・」
「そうなの・・・」

何か話さないと沈黙が怖い・・・
「は、長谷川さんは？化粧する？」
「わたしは・・・まだしたことない・・・」
「そうなんだ・・・」
男のオレが化粧をして、女の子の長谷川がしたことないなんて、なんか変な感じだ。
「有希、眉毛も整えてるじゃない。それもお母さんにやってもらってる？」
「・・・これは・・・エステで・・・生えてきたら自分でもやるけど・・・」
「エステ？有希エステに行くの？」
「・・・う・・うん・・・時々・・・」
なんでオレはこんな話をしているのだろうか？
「わたしまだ体のお手入れとか上手に出来ないから、エステでやってもらってるの・・・それにわたしカミソリとか使うとカミソリま

けしちゃうし・・・アレルギー体質なのよ。」
「え?じゃあ・・もしかして永久脱毛とか?」
「・・・うん・・・肌が弱い人には一番良いんだって・・・」
「すごいな~有希は・・・」
なぜか長谷川は感心したように言った。
「すごくないよ・・・ちゃんと出来ないから行ってるだけだし・・・」
「そんなことないよ、有希は一生懸命女の子になろうとしてるんだもん。」
そりゃあオレは男だから、頑張らないと女の子になんてなれないが・・・そんなの当たり前のことではないか。

「みんな有希のこと可愛いとかキレイとか勝手なこと言ってるけど、有希がこんなに努力してるなんて知らないんだもん。」
「そんな・・・こんなの大した努力じゃないって・・・」
なぜ長谷川はこんなことを言うのだろう・・・
「なんか・・・長谷川さんって変わってるよね・・・」
「え?!なんで?」
「だってわたしが男だって知ってるのに・・・普通に接してくれるし・・・まあ、気持ち悪いとは思ってるんだろうけど・・・」
「気持ち悪いなんて思ってないわよ。」
「うそよ・・・だってまえに言ったじゃない。わたしのこと気持ち悪いって・・・」
「あ、あれは・・・あれはまだ最初のころでしょう? たしかに言ったかもしれないけど、あのころはまだ有希の・・・病気のことか良くわからなかったから。今は思ってないわよ。」
病気か・・・オレは病気という見方は好きじゃないが、これはオレ自身が言ったことだからしょうがない。

「わたしも少しだけど勉強したのよ・・・」
長谷川はそう言って本棚から一冊の本を持ってきた。それは性同一性障害に関する本だった。
「有希は自分のこと病気って思ってるの？」
「・・・ううん・・・」
「やっぱりそうなんだ・・・だって有希は前向きに女の子になろうとしてるもんね。」
「・・・・」
「わたしが理解しやすいように病気って言ったんでしょう？」
「・・・うん・・・」
「有希ってやさしいんだね。」
「そ・・そんなことないけど・・・」
なんかおかしなことになってきた。オレは長谷川が読んだ本には何と書いてあるかわからないから迂闊なことを言えない。

「ねえ、前から聞きたかったんだけど・・・有希は身体も女の子になりたいって思ってるの？」
「・・・・？！」
オレはドキッとした。長谷川は知らないが、オレの身体はすでに女の子になりかけている・・・しかし、それを言って長谷川がどんな反応をするかは予想もできない。
「な・・なんでそんなこと聞きたいの・・・？」
「・・・だって・・・この本に、身体も女の子になりたい人と、身体は男のままがいい人がいるって書いてあったから・・・」
「どう思う？」
「え？なにが？」
「わたしはどっちだと思う？」
長谷川がどう思っているか判らない以上、オレも慎重にいくしかない。
「有希は・・・違ったらゴメンね。　有希は身体も女の子になりた

いんじゃないかと思う・・・」
「・・・・」
オレはどう答えたら良いのだろうか？
「違う？」
「・・・ううん。」
「やっぱり・・・だって有希はこんなに前向きだし、ちゃんと女の子になっていってるもんね。」
オレはどうしたらいい？今この身体のことを言ってしまうべきなのだろうか？しかし、それはあまりに危険な気もする。“なりたい”と“なってる”とはかなりの違いがあるかもしれない。

「有希はこれからどうするの？」
「どうって？」
「有希は高校のあいだは女の子として生活するんでしょう？」
「・・・うん。」
「でも卒業したらどうするの？」
「・・・わからない・・・」
「わからないの？」
「だって・・・わたし、まだ女の子になるので精一杯だもの・・・3年も先のことなんか考えられない・・・」
「そっか・・・」
「でも・・・わたし、もう男の子には戻りたくないの・・・」
「・・・・」
「だから・・・身体も女の子になれるんだったら・・・なりたい・・・」
オレは何を言っているんだろうか・・・いくら相手が長谷川とはいえ、しゃべりすぎではないだろうか？
「もちろん完全にはなれないだろうけど、見た目だけでも女の子になれれば・・・そうすればこんな服も似合うようになるかもしれないし・・・」

「有希ったら、ほんと自分のことがわかってないんだね。有希はもう見た目もじゅうぶん女の子なのに。」
「そんなことないよ・・・そりゃあバレないくらいには女の子に見えてるみたいだけど・・・」
「また、そんなこと言ってる。」
“コンコン”その時ドアをノックする音がした。オレは一瞬ビクッとした。オレはいつからこんなに神経質になったのだろうか・・・これも自信のなさの現れなのだろうか？
「あ、待って！」
長谷川は急いで立ち上がりドアへと向かう。オレの気持ちに気づいているのだろうか？
「紅茶だって、飲んで飲んで！」
母親とコソコソ話たあと、長谷川は持ってきたお盆から、オレの前に紅茶が入ったカップを置いた。しかし、今オレはそれどころではなくなっていた。ずっと正座していた足が痺れていたのだ。
「ゴ・・ゴメン・・・あ・・あし伸ばしていい・・・？」
「あ、だから足くずしてって言ったのに！」
「ううっ・・・だって・・女の子みたいな座り方できないのよ・・・」
オレは床のカーペットの上に足を伸ばした。紺のスカートから伸びたストッキングをはいた足が、なんだかオレのものじゃないみたいだ。オレの足ってこんなにほっそりしていただろうか・・・
「ゴメンね、男の子って足くずせないって知らなかったから・・・」
「男が足くずすって言ったら、あぐらかくことだからね・・・まさかこんな恰好であぐらかけないでしょう？」
オレはジンジンと痺れた足を手で押さえて痛みに堪えていた。
「あ～ぁ・・・なんか情けない・・・わたしこんなことで女の子になれるのかな・・・」
こんなよそいきの恰好で足を投げ出している姿を想像すると、ほん

とにオレは情けなくなってくる。
「そんな・・・女の子だって足くらい痺れるわよ・・・」
長谷川は見当違いな慰め方をしてくれた。しかし、オレがなりたいのはこんな女の子ではないのだ。もっと・・・ちゃんとした女の子になりたい・・・どういう女の子かは、はっきりとは想像できないけど・・・

「有希・・・」
長谷川がオレの両肩に手を置いて軽くゆすった。
「有希は真面目すぎるのよ。そんなに完璧な女の子なんかいないわ。もう少し楽に考えてもいいんじゃない？」
「・・・・」
確かにそれはあるかも知れない。オレは元々男だから、どうしても理想の女の子を想像してしまう。でも男のオレが理想の女の子になんてなれるハズがないのだ。ましてやオレの理想になど・・・？

そうか・・・オレはオレ自身の理想を目指していたのだろうか？
オレが女の子になるからといって、オレの理想の女の子にならなければいけない訳じゃないのに・・・
「長谷川さん・・・女の子ってなんなのかな・・・わたしまだ良くわからないの・・・」
「そんなの・・・わたしにもわからないわ。」
「・・・・」
「でも・・・有希は有希のままでいいんじゃないの？有希のまま女の子になればいいんだと思うよ。」
オレのまま？　だってオレは男じゃないか・・・そういえば白石先生も言っていた。身体が女になってもオレでなくなる訳ではないと・・・あれはこういうことだったのだろうか？
「有希はもう女の子だよ。だってもう2ヶ月以上も女の子として女子校に通ってるじゃない。そんなこと女の子じゃないと出来ないわ

よ。もっと自信持ってよ！」
「・・・・」
　言われてみれば確かにそうかも知れない・・・オレは入学以来、女の子として女子校に通っている。それにもちろんお世辞も入っているだろうが、みんなオレのことを可愛いとか言ってくれる。
「わたし・・・自信持っていいのかな・・・」
「あたりまえじゃない。有希はみんなが言うように可愛いし、今日の有希はすごく綺麗よ。」
オレは・・・オレはどうすればいいのだろうか・・・オレは可愛いのか？　オレは綺麗なのか？　オレにはとてもそんなふうには思えない。しかし、もう少し・・・もう少しは自信を持ってもいいのかもしれない・・・いつかは自信を持って、オレは女だと言えるようになる日が来るのだろうか・・・

―――――――――――――――
―――――――――――――――
――――――――――

　紅茶を口にしながらチラチラ部屋を観察してみたが、長谷川の部屋はあまり女の子っぽい部屋ではなかった。白い小さなテーブルがあり、ベッドがあり、小さめのタンスの上に小さな鏡、部屋の片側には大きな本棚がある。オレの部屋にあるような全身を映せる鏡もないし、女の子の部屋にありそうなヌイグルミもない。ただ、ところどころにフクロウの置き物がある。
「長谷川さんフクロウが好きなの？」
「うん、置き物がね。なんか可愛いじゃない。」
まあ、たしかにフクロウの置き物はちょくちょく見かけるから、好

きな人は好きなのだろう・・・

「長谷川さんって一人っ子？」

「うん。」

「お父さんは？」

「大阪。いま単身赴任なの。」

「そうなんだ・・・」

「有希は？兄弟いるの？」

「うん、兄さんと妹が・・・」

「え？！」

長谷川はなぜか驚いたようだった。

「お兄さんと妹って・・・有希のこと・・・どう思ってるの？　その・・・カミングアウトとかした？」

「さあ・・・兄さんは京都にいるから、私が女になってからまだ会ってない・・・妹とは・・・もうすっかり姉妹になっちゃった。」

「姉妹？」

「うちの家族はちょっと変わってるのよ。妹はもうずっとわたしのことお姉ちゃんって呼んでるし・・・」

「へ～・・・」

「かあさんも・・・最近わたしのこと男と思ってないみたい・・・」

「お父さんは？」

「とうさんは・・・もともと何考えてるかわからない人だから・・・放任主義っていうのかな・・・」

「へ～・・・わたしのうちと全然違うね。わたしのパパは普通のサラリーマンだし、ママは専業主婦だもん。」

「その方がいいよ・・・うちのかあさんは夜遅くなる時もあるし、とうさんは書斎に籠りっきりだし・・・」

「お母さんも仕事してるの？」

「うん・・・なんかお店の内装とかやってるみたい。」

「すご～い！内装デザイナー？カッコイイじゃない！」

「なんか良くわからないよ・・・」
褒めてくれるのは嬉しいが、オレには正直どういう仕事なのか良くわからない。

「ごはんとか誰が作るの？」
「かあさんがいる時はかあさんが作るけど、いないときは私が・・・このごろは妹も手伝ってくれるけど・・・」
「あっ、だから有希料理が出来るんだ！」
「うん・・・でも料理は小さいころからやってるけど・・・けっこう好きだから・・・え？でもなんで長谷川さん、わたしが料理得意だって知ってるの？クラス違うのに。」
「有希のことはわたしのクラスにも伝わってくるのよ。」
「・・・・・」
「このまえ髪をくくった日もすぐに話題になってたよ。」
まったく何でオレはこんなに目立っているんだ？　可愛いとか言われるのもまんざらお世辞でもないのだろうか？　オレが可愛いなんてみんなどういう見方をしてるんだろう？
「有希、今度わたしにもお化粧のしかた教えてよ。」
「そ、そんな・・・ダメよ・・・わたしもまだ練習中だし・・・」
「有希が上手に出来るようになったらでいいから。」
「そんなの・・・いつになるか・・・」
オレもいつかは、自分でお化粧をして、自分で選んだ服に身をつつみ、いそいそと街へ出かけたりするようになるのだろうか？　そんなの考えただけで恥ずかしくなってしまう。　でも女になるってそういうことではないのか？　ほんとうに男のオレにそんなことが出来るようになるのだろうか？　そして・・・・・！

「有希？　どうしたの？　顔が赤いよ。」
「う・・うん・・・何でもない・・・」
オレは何を考えているのだろう・・・いつか山上みたいな男の子と

デート出来るのか・・・なんて！
顔が熱い・・・心臓が早鐘のように打っている・・・オレは思わず股間に手をやった。ぜったい立っていると思った・・・男とのデートを想像して勃起してしまうなんて・・・ガードルも無しに小さなパンティーで、こんなスカートをはいた状態で勃起したら大変なことになってしまう！

しかし、手で押さえた股間はまったく何の変化もなかった。オレの股間は薬のパッチを貼りだしてから、まったく立たなくなっている。同時にそういうことが起きる時のような感情もなくなっていた。それなのに・・・この激しい感情は・・・身体中の血液が急に沸き立ったようだ。
「ご・・ごめん・・・わたし帰る・・・・」
「え?！どうしたの有希?」
オレは長谷川の母親への挨拶もそこそこに、逃げるように家へと帰った。

第２３話　順子　彼女の部屋で・・・（後書き）

これまでこの話は、私のＨＰから遅れて転載という形をとってきましたが（別に他意はなく、単にこちらへ投稿しようと思った時すでにだいぶ進んでいたということです。）ですが、少し前に書いた話に頂いたコメントに返事を書くのは案外難しいことに気づきまして（笑）それで追いつかせようと思っています。なのでしばらくは１日おきくらいに掲載することになると思いますので、よろしくお願いいたします。そのかわり追いついたらペースが落ちたり、長期休載とかあるかもしれませんが、ご容赦下さい。

第２４話　女心　オレの心の中

「有希・・どうしたの？何かあった？」
ドアの向こうで母の声がする。帰って来るなり自分の部屋に閉じこもってしまったオレを心配しているようだ。
「・・・何でもないの・・・ごめん・・・しばらく一人でいさせて・・・」
母を心配させるのは気が引けたが、今は一人になりたかった。

オレはベッドに仰向けに倒れ込んだまま、ずっと天井を見るともなく見ていた。オレには自分の身に起こったことが理解できなかった。いや、理解できない訳ではない。正確に言えば理解したくなかったのだ。

オレは女の子になろうと努力してきた。そして少しずつだが女の子に近づいている。身体も女性ホルモンの助けを借りて、こちらも少しずつ女性化してきた。
しかしオレはまだ女の子になるということが、どういうことか本当の意味では解ってなかったとしか言い様がない。長谷川や白石先生はオレのままで良いのだと言った。それは確かにそうかも知れないが、あくまでそれは他人ごとだ。オレ自身にとっては、オレのまま女の子になるというのは、言葉で言うほど簡単なことではないという気がしてきた。

オレはオレでありながら女になっていく・・・きっと心も少しづつ女の子になっていくに違いない。しかもこれまでのように努力して、教育されて女の子になるのとは違い、心はどこから女になるのかオレ自身にも見当がつかない・・・ある日突然オレの心の中に女の子の部分が出現するのだ。今はまだ、こうしてそれを感じている

男のオレがいるが、それもいつまで続くか解ったものではない。オレの心に女の子の部分が出来た時、その部分の男のオレは無くなってしまうのだろうか・・・それが増えていけばいずれは男のオレはいなくなってしまうのかも知れないではないか？

今日オレの身体を襲った激しい動悸は、オレの心の中に女の子の部分があることを自覚させるに十分だった。オレはたしかに男とのデートを想像して興奮してしまった。

いや、これまでオレは自分自身の心の変化に気づかないフリをしていたのかも知れない。オレはもうずっと前からニースの山上のことが気になって仕方がなかったではないか！　同じ山上ファンの佐倉と山上の話をするときのオレは、まるでアイドルに恋する女の子そのものではなかったか・・・オレはこのまま少しづつ女の子になっていくのだろうか？　それともある時、一気に女になってしまうのか？

オレはベッドから起き上がると鏡の前に立ってみた。少し乱れた髪を手で整える。

リボンが胸元を飾る白いブラウス、紺の長めのスカート、前髪と後ろをドライヤーできれいにカールさせた頭には細い上品なカチューシャ、顔には薄く化粧をしている・・・オレはこんな恰好で外を歩いていたのかと思うと、いたたまれない気持ちになってくる。

オレは急いで似合わない服をベッドの上に脱ぎ捨て、部屋着のサマードレスに着替えた。

オレは部屋着に着替えると、髪を後ろでくくって洗面所に行った。
ヘアバンドで前髪を上げて化粧を落とす。
クレンジングをしていると、ドアが開いて妹が入ってきた。
「あ、お姉ちゃんいたの？」
「・・・うん・・・」
オレは顔を洗いながら返事をした。洗い終ってふと顔を上げると、鏡越しの光景に驚いた。
「麻衣！何で脱いでるの？！」
「え？だってお風呂に入るから・・・」
妹は不思議そうな顔をする。
「ちょっと、カーテン閉めてから脱いでよ。恥ずかしいじゃない・・・」
「だって狭いんだもん。　あたしはお姉ちゃんに見られても、ぜんぜん恥ずかしくないよ。」
「わたしが恥ずかしいのよ・・・」
オレは急いで脱衣所と洗面所を仕切るカーテンを閉めて洗面所を出た。

「有希・・・大丈夫？」
「うん・・・」
母の心配は良く判るが、さすがに今のオレの悩みは家族とはいえ他の人に相談できるものではない気がした。
「何か心配ごとがあるなら、かあさんに言ってみて。」
オレの肩をつかんだ母の手に押され、ブラジャーの肩ヒモについた長さを調節する部分を肩に感じる・・・母のなにげない仕草が、オレが男なのにブラジャーをしているという事実を思い出させる。
「うん・・・でも・・・何でもないから・・・」
オレはそう言って夕飯の手伝いを始めた。

手を動かしながらも、オレはさっき見た妹のはだかを思い出していた。妹ももう中学生、小さなころ一緒にお風呂に入って見た体とは違い、胸も少し膨らみ始めていた。それはまさに今のオレの身体のようだった。オレはいま、大人の身体へと変わり始めた妹と同じ経験をしているのだ。しかし同じ経験といってもその内容はかなり違う。少女から大人の女性になり始めた妹に比べ、オレは男からいきなり女になろうとしているのだから・・・オレは麻衣より年上だが、女としては遥かに未熟に違いない・・・なにしろ麻衣は生まれた時からずっと女になるための準備をしてきたのだ。急に女の子になろうとしているオレとはぜんぜん違う・・・

「有希？」

母に声をかけられて我にかえった。オレは知らない間に手を止めてしまっていたようだ。

「有希、今日はかあさんだけでやれるから、有希は休んでらっしゃい。」

「・・・うん・・・」

オレはかあさんの言葉に甘えて料理をやめて自分の部屋に戻った。

「・・・・！」

ベッドの上には脱ぎ捨てられたブラウスとスカートとスリップが散乱したままになっていた。

「いけない・・・シワになっちゃう・・・」

オレは慌ててハンガーの下に付いたクリップにスカートをはさみ、ブラウスをかけた。

「・・・・」

そのハンガーを壁にかけようとして手をとめた・・・何なんだろうこの感じ・・・オレは何て自然に女らしい行動をとってるんだ？このハンガーをつかんだ手つき・・・まるでオレの手じゃないみたいだ・・・

ハンガーを壁にかけてベッドに座っていると、誰かがドアをノックした。母かと思ったが、ノックしたのは麻衣だった。
「お姉ちゃん、入っていい?」
「・・・うん・・いいわよ・・・」
麻衣はオレの部屋に入ってくると、ベッドに座ったオレのとなりに腰を下ろした。
「ねえ・・お姉ちゃん・・好きなコいる?」
「え?!」
オレはいきなりのことに驚いた。
「好きなコって・・・好きな男の子ってこと?」
「うん。」
なんでいきなりこんなことを聞くのだろうか?
「わたしは女子校だから、男の子はいないし・・・」
まあ、しいていえばオレは男なのだが・・・
「そっか、そうだよね・・・」
麻衣は何かオレに聞きたいことがあるようだ。
「え? もしかして麻衣、好きなコいるの?」
「・・・うん・・・ちょっと・・・」
「え? 誰? 同じクラスのコ?」
妹はコクリとうなずいた。

そうか、麻衣も好きな男の子が出来る年頃になったのか・・・オレは妹の成長が嬉しくもあり、ちょっと淋しい気持ちもした。
オレはこの頃どうだっただろうか・・・麻衣にオレの体験が参考になればいいのだが・・・しかし、そう考えたオレは奇妙なことに気がついた。オレは中学のころ好きな女の子がいただろうか?考えてみればオレは誰かを好きになったような記憶がない・・・

「ごめん麻衣・・・わたし恋のことは良くわからないの・・・」
オレは正直に言うしかなかった。

「わたし恋したことないのかも知れない・・・」
「ほんと？　お姉ちゃん。」
「うん・・・」

オレは性同一性障害のことを思い出していた。生まれた時から自分の性に違和感がある人も多いが、気づかずに成長した性同一性障害者は男の子を好きになって初めて気づく場合が多い。しかし、ことさら好きな男の子が現れなかった場合、自分でも気づかないまま大人になってしまう人もいるらしい。いや、潜在的な性同一性障害者がいることを考えると、そういう人の方が多い可能性があるという人もいる。そういう人の場合、女性に対する関心の低さが特徴だと言われている。その反面、女性アイドルに自分を重ねたりする人もいるらしい。それは一見ほかの男のファンと同じように見えるが、内心自分がそのアイドルになりたいと思っているので、そういう人にはお店のニューハーフになる人も少なくないらしい。

オレはやはり性同一性障害なのだろうか？　オレには特定の好きなアイドルなどはいなかったが、漠然と可愛いなと思うアイドルや女優はいた。しかし他の同級生のように恋心をいだいたことはなかった気がする。オレが過去に女装を頑に拒んだのはどうやら本当のようだから、アイドルに自分を重ねるまではいかなかったのかも知れない。オレは今でも自分が性同一性障害だという気がしないし、女装をしたいとも思わないが、それはオレの過去のトラウマと関係があるのだろうか？

「でもさぁ・・・」
麻衣の声がオレの物思いを破った。
「お姉ちゃん、このまえニースの山上君が好きって言ってたよね。」
オレはいきなりそう言われてドキッとした。
「・・・う・・うん・・・」

急に心臓がドキドキと激しく打ちだす。
「そういうのも恋なんじゃない？」
「・・・そ・・そうかな・・・で・・でも・・・」
オレはしどろもどろになってしまった。これではオレの気持ちが筒抜けになってしまう・・・
「そっか・・お姉ちゃんはまだ女の子になってそんなに経ってないんだもんね。まだ恋がよくわからなくても当たりまえかもね。」
麻衣がオレの手をにぎる。驚いたことに麻衣がにぎったオレの手は、麻衣の手よりも白かった。
「お姉ちゃんもきっとこれから恋すると思うよ。だってお姉ちゃんも女の子なんだもん。それにあたしよりずっと女っぽいし。」
もうやめて・・・オレはどうすればいいのかさっぱりわからなかった。自分の気持ちがまったく思うようにならない。
「麻衣・・・わたしが男の子を・・・好きになっても・・いいのかな・・・」
「いいに決まってるじゃない！お姉ちゃんそんなこと心配してたの？」
「・・・う・・うん・・・」
「可愛いなぁ、お姉ちゃんって。恋しようよ。あたしも頑張るからさ。」
「・・・う・・うん・・・」
妹になぐさめられて、オレは今どんな顔をしているのだろう・・・ものすごく顔が熱い・・・恥ずかしさと期待で顔が爆発してしまいそうだ・・・

夕食が終って洗い物をしていると母が言った。
「有希はいきなり女になろうとしてるんじゃないかな?」
「え?」
「有希は高校生はもう大人だと思ってるかも知れないけど、かあさんくらいになって考えると高校生ってまだまだ子供なのよ。」
「・・・・」
「有希はまだ大人にならなくていいの。有希はまだ女の子になったばかりなんだから、女になる前にまず少女になったらどうかな?」
「・・・少女?」
「そう、高校生って大人になるための大切な時期なの。大人になるための準備をする時期・・・でも有希はまだそこまでも行ってないんじゃないかな?」
「・・・うん・・・」
「だからまず少女になるの。今の麻衣みたいに少女であることを楽しみなさい!」
「わたし・・・少女になんて・・・なれるかなぁ・・・男なのに・・・」
「なに? 有希はまだ自分のこと男だと思ってるの?」
「・・・だって・・・」
「有希は女の子なのよ。もう決めたんでしょう?」
「・・・うん。」
「だったら自信持たなきゃ!有希はこれから思春期を迎える少女なの。友達と遊んだり、お買い物したり、恋をしたり、いろんな経験しなさい。いろんなこと経験しておかないと大人の女性にはなれないわよ。」
「・・・うん。」

そうか・・・オレは女としては今の麻衣と同じくらいの年齢なのかもしれない。そう思うと、少し気持ちが楽になった。
オレは立派な女の子にならなきゃいけないとばかり考えていたが、

それは間違いだったのかも知れない。オレはまだ高校生・・・まだ子供でいいのだ。

オレが少女になる・・・？　それはドキドキするような考えだった。

男のオレが少女になんかなれるのか・・・それはまだ判らない・・・しかしこの胸の高鳴りが、これからのオレの進む道を予感させていた。

第２５話　レナ　オレの過去を知る女？

「いってきます。」
オレがそう言って家を出ようとすると、麻衣がオレを呼び止めた。
「お姉ちゃん、また後ろが曲がってる！」
「え？ほんと・・・？」
オレは慌てて頭の後ろに手をやってさわってみたが、どうなっているのか良くわからなかった。
「有希、いらっしゃい。直してあげるわ。」
母に言われて、両親の部屋の母の鏡台の前に座らされた。

髪が長くなって校則により二つに分けてくくるようになったのはいいのだが、オレはなかなか自分で上手に分けることが出来なかった。手探りで真ん中から分けたつもりでも、中心でなかったり、曲がったり、ヒドイ時には左右が混じってしまったりすることもしばしばだった。何度か気づかずに学校へ行って恥ずかしい思いをしたこともある。

母にクシの尖った方できれいに分けてもらいながら、オレは情けない気持ちでいっぱいだった。
「有希も年頃なんだから部屋に三面鏡があった方がいいかも知れないわね。」
「・・・・」
部屋で三面鏡に向かい髪を整えている自分の姿を想像すると、なんだかすごく恥ずかしくなってくる。
「・・・いいよ・・・三面鏡なんて・・・長谷川さんの部屋にもそんなのなかったし・・・」
「あら有希、長谷川さんのお宅に行ったの？　かあさんに言わなかったじゃない。」

「・・・そ・・そうだっけ・・・」
オレはとぼけるしかなかった。母はあのオレが部屋に閉じこもった日に長谷川の家に行ったことを勘づいただろうか・・・？
「でも有希は、長谷川さんと違って女の子の経験が少ないんだから、女の子が普通に出来ることも難しいでしょう？」
「・・・うん・・・」
確かにそうなのだが・・・
「こんど買ってあげるわ。いいわね。」
「・・・うん。」
オレには断る理由がない・・・

「ねえ、かあさん・・・こんどの日曜日、麻弓おばさんのところに行ってきていい？」
麻弓おばさんとは、長山麻弓〈ながやままゆみ〉といって母の妹で美容院をやっている。
「いいわよ。だいぶ毛先が乱れてきたものね。かあさん電話しといてあげる。」
「うん・・・ありがとう・・・」
オレは入学前に行って以来、髪を切っていなかったから、さすがに少しバサバサして整えにくくなってきていたのだ。
「そういえば、このまえ電話した時、麻弓が写真が出来てるって言ってたわよ。」
オレはドキッとした。
「有希、写真撮ってもらったの？」
「・・・う・・うん・・・」
真っ赤なドレスを着て写ったのを思い出し、鏡の中のオレは顔を赤らめた。
「どんな写真？」
「・・・う・・うん・・・貰ってきたら見せるよ・・・」
「そう、楽しみにしてるわ。さあ、出来た！　いってらっしゃい。」

母はそう言ってオレのセーラー服の背中でポンと叩いた。
「・・・うん・・いってきます。」
オレは恥ずかしくなって、靴を履くのももどかしく急いで玄関を出て行った。

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

数日後の日曜日、オレは母が予約を入れてくれた時間に、おばさんがやっている美容院に行った。

この前の長谷川の家での一件以来、オレは外に行く時の私服に悩むようになってしまった。まえは母が用意してくれた服をただ着ていたが、あれ以来、自分には似合わないのではないかという思いが、どうしても頭を離れなかった。だから今日はいっそのこと制服で行こうかとも思ったが、母の強力な反対にあい、仕方なく母が選んでくれた薄いクリーム色の袖なしのワンピースと短いボレロの上着というセットを着てきた。なんか上品なお嬢様が着る服みたいで恥ずかしい・・・こんなのが似合う男がいるとは、とても思えない・・・

「おばちゃん、こんにちは。」
オレが入っていくと叔母が笑顔で迎えてくれた。
「まあ、有希ちゃん。いちだんと女の子っぽくなったじゃない！」
母の妹だからそんなお世辞も言ってくれる・・・
「その服、自分で選んだの？」
「・・・ううん・・かあさんが選んでくれた・・・」
「そう、さすが姉さんね。清楚で可愛らしくて有希ちゃんのイメー

ジにピッタリだわ。」
「・・・そんな・・・こんなの似合わないわよ・・・」
オレは恥ずかしくてうつむいた。

「有希ちゃん、髪はこのまま伸ばすの?」
「はい・・・できればもう少し伸ばしたいんですけど・・・」
「そう、だったら前髪と後ろをキレイに揃えて、毛先だけゆるくパーマかけようか。」
「え・・・でもパーマは学校で禁止だから・・・」
「それはオシャレなパーマのことでしょう?毛先を少しだけかければ、髪も自分で整えやすくなるわよ。それに後ろはくくるんでしょう?わからないわよ。」
「う〜ん・・・それじゃ・・・お願いします。」

オレの前髪が目にかかるくらいのところでキレイに揃えられていく・・・いったいどんな感じになるのかとドキドキする。後ろもキレイに揃えたところで、プラスチックの板にベトベトしたもので髪を張り付け、前髪と後ろを太いカーラーで巻かれてパーマ液をつけられた。

パーマがかかる時間を待っていると叔母が写真を持ってきてくれた。
「どう?有希ちゃん、可愛く撮れてるでしょう?」
そこにはヒザ丈の真っ赤なドレスを着たオレの姿があった。スカートを広げる白いパニエ、少し黒めのストッキングをはいた足には赤い靴、肩が広めに開いた首には赤いバラの飾りが付いたチョーカー、そして短かめの黒い髪・・・そこに写っていたオレは、女の子らしい恰好をしていても、まだ今のオレよりずっと男の子っぽさが残っていた。
「有希ちゃん、このころと比べてもずっと女っぽくなってると思わ

ない？」
「・・・うん・・・」
オレ自身はこの頃と今とで、そんなに変わった気はしなかったが、こうしてみるとオレは確実に女の子に近づいている気がする。
「良かったでしょう？写真撮っておいて。」
「・・・うん・・ありがとう・・おばちゃん・・・」
オレは叔母の心使いが嬉しかった。思わず目頭が熱くなる・・・こんな時が来るとこを叔母はわかっていたのだろうか？
「おばちゃん・・・わたしこのごろ少し・・気持ちが落ち込んでたの・・・本当に女の子になれるのかなって・・・」
「きっと有希ちゃんは自分のことが良く見えていないんだと思うわよ。有希ちゃんは自分で思ってるよりずっと可愛いし、姉さんの若いころそっくりで美人なのよ。」
「・・・そんな・・・だって・・・」
オレはいったいどう考えればいいのかよくわからなかった。だって写真を写したころも、みんなオレのことを可愛いなんて言ってくれたではないか！でも今その頃の写真を見てみると、今よりずっと男っぽい・・・それじゃぁ今のオレは・・・？

「さあ、有希ちゃん。出来たわよ！どう？」
鏡に写ったオレは、前髪がふんわりと軽くカーブを描き、長い髪の毛は驚くほどきれいにまっすぐ・・・毛先にかけてゆるく内側に丸くなっている。なんだか来た時より長くなったように見えた。
「・・・なんでこんなに・・・きれいなの・・・？」
オレはさらさらの髪の毛をさわってみた。
「ふふっ、ストレートパーマをかけたから前よりまっすぐになってるの。」
「ストレートパーマ？」
それでこんなにきれいにまっすぐなのか・・・たしかにきれいで可

愛らしい、お嬢様のような髪になっている・・・しかし・・こんな髪型がオレに似合うのか？

「・・・お・・おばちゃん・・・こんなの・・・わたし・・似合わないわ・・・」

「そんなことないわよ。清楚で可愛い有希ちゃんにはピッタリだと思うけど？」

叔母はそう言って後ろを二つに分けて両手でくくったようにして見せた。

「ほら、こうするとこれまでとあまり変わらないでしょう？学校でもパーマかけてるなんて気づかないわ。」

たしかに叔母の言うとおりかもしれないが・・・しかし・・・

「女の子はね、学校では真面目にみせても、普段はおしゃれするものなのよ。有希ちゃんも休みの日はおしゃれして遊ばなきゃ！」

「・・・う・・うん・・・」

「お母さん！もうユウ来てる？」

そう言って店に入ってきた女の子を見てオレは驚いた。それはイトコのレナだった。

オレとレナは同じ歳、同じ学年だ。オレが小さいころは家も近かったから良く遊んだものだ。小学校のころは家が美容院だから茶髪にしてパーマをかけてずいぶんオシャレをしていた記憶がある。オレの家が引っ越して以降は法事などの時に数回会っただけで、ほとんど話をしたこともない。

「遅かったじゃないレナ。」

「なんだ、ユウもう帰っちゃったの？」

オレは思わずうつむいた。ひさしぶりに会うイトコと、こんな姿で

会うなんて・・・どんな顔で会えばいいのか見当がつかない・・・
「何いってるの?有希ちゃんここにいるじゃない。」
オレは思わずビクッとした。
「え?」
レナが近づいてきて、オレの顔をのぞき込む・・・チラッと目を上げたとたんレナと目が合ってしまい慌ててそむけた。
「ユウ・・・?　ほんとにユウなの?」
オレはうつむいたままコクリとうなずいた。

いきなり“ユウ”などと子供のころの呼び方をされてもオレはどう対応していいのかわからない・・・
「あんた何驚いてるの。有希ちゃんはもうすっかり女の子だって言ったじゃない。」
「それはそうだけど・・・こんなに・・・」
こんなに・・・変態になったとは・・・そう思っていることは言わなくたってわかってる。
「こんなに・・・女の子みたいになってるとは思わなかった。」
レナの言葉が胸に突き刺さる・・・
「ユウ!立って見せて!」
オレはガクガクする足で立ち上がる。それでも立ち仕草に気を使ってしまうのが悲しい・・・
「可愛い!こんなに可愛くなってると思わなかった!」
声が大きいよ・・・他のお客さんもいるのに・・・あいかわらずの遠慮の無さだ・・・

「ユウ、良かったもう大丈夫なんだね。やっと戻って来たんだね。」
「?」
こいつ何を言っているんだ?
「どういうこと、レナ?」
叔母も不思議そうに聞き返す。

「だって、ユウずっと言ってたもんね。女の子になりたいって。」
「え?!」
オレは思わず声を上げた。
「なに?ユウはおぼえてないの?」
「・・・うん・・・」
「どうして?」
「・・・よく・・わからない・・・」
「へ〜　そうなんだぁ。」

「もうカットは終ったの?」
「ええ、可愛くなってるでしょう。」
「うん!すっごく似合ってる。その服とも合ってるね。でも、ちょっとおとなしすぎるかもしれないけど。少し色を抜けば軽くなるのに。」
「有希ちゃんの学校はあんたの学校と違ってお嬢様学校なのよ。あんたみたいな茶髪になんか出来ないの!」
「へ〜　そうなんだ。でもその方がユウには合ってるかも知れないね。だってユウは昔からおとなしかったもん。」
オレはそんな二人の話をいたたまれない気持ちで聞いていた。レナがオレのことをそんなに知っているなんて、オレはまったく知らなかった。

「それじゃ行こうか!」
「え?どこへ?!」
「天神〈てんじん〉よ。これから行くんでしょう?」
「まさか?!」
天神は県でも一番の繁華街・・・九州でも一番に違いない。オレが住んでいる地域からみれば、いつもお祭りみたいに人が多い。しかも今日は日曜日!こんな日に行ったら何人もがオレのことを男だと

気づいてしまうに違いない！
「有希ちゃん、行ってらっしゃいよ。」
「そんな・・・無理よ・・・もしあんなとこで・・・男だってバレたら・・・」
「平気よ！こんなに女っぽくてバレるはずないじゃない！もしバレたとしても堂々としてればいいのよ。何かあったらわたしが守ってあげるから！」
レナはそう言ってオレの腕をしっかりとつかんだ・・・そんな・・・女に守ってもらうなんて・・・

「有希ちゃん、実はね、これは姉さんに頼まれたことなの。」
「え？！　かあさんが・・・？」
「そう、姉さん有希ちゃんが人が多いところに行けないって心配してたのよ。それに洋服も自分で買ったことないんでしょう？有希ちゃんも女の子なんだから、着たい服を自分で買わなきゃ！」
「・・・そんな・・・」
オレは今にも泣き出してしまいそうな気持ちだ。母の心配は良くわかる・・・しかしまだオレは人が多いところは怖いし、自分が着たい服なんてないのだ・・・

しかし結局オレは断ることが出来なかった。ここで断ってしまっては母に会わせる顔がないような気がした・・・それではあまりに情けないではないか・・・

第２６話　天神　県で一番の繁華街

日曜日の天神〈てんじん〉は思ったとおりのすごい人出だった。

しかしそれ以前に、天神に近づくにつれて多くなっていく電車の乗客に、すでにオレは参っていた。情けないことにオレは横に座ったレナに手を握っててもらわなければ逃げ出してしまったかも知れない。汗でビッショリになったオレの手をレナはずっと握っていてくれた。

途中、向かいの席に座った中学生くらいの男の子数人にじっと見られているような気がして焦った。横のコとコソコソ話をするたびに、オレは男とバレているのではないかとビクビクしていた。こんなところでオレのことを男だと言いだされたらたまったものではない・・・

電車を降りるとレナは、まるで足にクサリにつながった鉄球でも引きずっているように、重い足どりのオレの手を引いて歩いてくれた。オレは女の子の手をこんなに頼もしく感じたことは今まで一度もなかった。

長いコンコースを歩き人でいっぱいの自動改札を抜ける。

レナに手を引かれオレは小股で一生懸命ついていく・・・今日の靴は少しかかとが高くて歩きにくい・・・「ねぇ・・・レナ・・・怖いよ・・・」

オレが思わず、つないだレナの手を強く握ると、レナも握り返してきた。

「ユウ、気がついた?」

「え？・・・なにを？」
「さっき電車の中で前の席に中学生くらいの男のコが何人かいたじゃない。」
「・う・うん・・・」
「あのコたちユウがあんまり可愛いからずっと見てたのよ、気がついた？」
・・・まさか・・・
「・・そ・そんなハズないよ・・きっとわたしのこと男じゃないかって話てたのよ・・・そうに決まってる・・・」
それにもしレナの言うようにウワサをしていたのなら、それはきっとレナが可愛いからだろう・・・
「ふふっ・・ユウっておもしろいね。そんなふうに思ってるんだ？」
レナは可笑しそうに笑ってつないだ手をブンブン振った。
「ちょっと・・・やめてよ・・・恥ずかしいよ・・・」
「あははっ・・・」
恥ずかしがるオレを意にも介さず、レナは両手を振って歩いていく。
オレは引きずられるようについて行くしかなかった。

レナはオレを連れてイムズに向かう。イムズといえば天神にいくつもあるファッションビルのうちのひとつ、その中でもオシャレな店が入っている。レナはいったい何処に向かっているのだろうか・・・オレは怖さと同時に少しの興味も混じって心臓がドキドキしていた。

しかし、こともあろうにレナがオレの手を引いて入ろうとしたのは女性物の下着の店だった。
「ちょ・・ちょっと・・・」
オレはレナの手を引っ張って店に入るのを拒んだが、そのままズルズルと引きずり込まれてしまった。いくら歩きにくい靴だといっても、オレってこんなに力がなかったのだろうか・・・これではとて

も本気で拒んでいるようには見えない・・・
店には色とりどりのブラやパンティーが山のように陳列されている。
男のオレが入るにはあまりに場違いな所だ。
「ユウのサイズは？」
「え・・ええと・・・Ａカップ・・・Ａの７０・・・」
「そうなの？どうせパット入れるんならもう少し大きいカップの着ければいいのに。」
レナはオレの胸が膨らみ始めていることを知らない。ただパットで膨らませているだけだと思っているのだ。
「いいの・・・パットであまり大きくしたらバレちゃうし・・・」
「そうかなぁ。でもＢくらい買おうよ！ね？！」
「う・・うん・・・まあ・・・」
たしかにオレも少し大きなカップのブラジャーもしてみたい気持ちはある・・・しかしこれまで恥ずかしくて母に買ってほしいとは言えないでいた。そんなわけでオレは嫌々ながら買うのに同意するふりをした。

いざ自分で自分が着ける下着を買うとなるとドキドキをとおり越してバクバクだ・・・こういうのを心臓が口から飛び出しそうというのかも知れない。オレがおそるおそる手にとったのはピンクのブラとパンティーだった。
「ユウってそういう可愛いのが好きなんだ！」
急にレナに言われてビックリした。
「そ・・そんなわけでも・・ないけど・・・」
「いいじゃない、ユウに似合ってると思うよ。」
レナがブラジャーをいきなりオレの胸にあてたから、オレは飛び上がりそうに驚いた。
「や・・や・・やめてよ・・・は・・恥ずかしいじゃない・・・」
「なんで？似合うかどうか見てるだけよ。」

すると店員がオレたちの様子を見ていたのか声をかけてきた。
「お客様、よろしかったら試着してみませんか?」
こんなところで下着を試着するなんてとんでもない!オレは慌てて言った。
「い・・いえ・・いいです・・・これ買います・・・」
オレは持っていたブラとパンティーを店員に押しつけた。店員が不必要に思えるほど時間をかけて袋に入れてくれるあいだ、挙動不信にならないように必死で普通に装って、やっとのことでレジを済ませた。お金を渡す時、異常に手が震えていたから変に思われたに違いない・・・

ふと気がつくとレナの姿がない!オレはまるで迷子の子供のように、泣きそうになりながら店の外をキョロキョロ探していると、吹き抜けになった中央の待ち合い所で手を振っているレナを発見した。オレはチョコチョコとレナに駆け寄った。今日の靴は少しかかとが少し高いうえ、床が石畳になっていて歩きにくかったのだ。ともすると転びそうになる・・・なんだか女の子みたいな走り方になってしまう・・・
「もう・・なんで待っててくれないの?」
「ユウ自分で下着買えたじゃない。えらいえらい!」
レナはオレの質問には答えず、オレの頭をなでなでした。
「うぅぅ・・・」
オレは緊張と恥ずかしさで泣きそうだ・・・パニックで頭がクラクラする・・・オレは待ち合い所のベンチへとへたり込んだ。

「ヒ・・ヒドイよ・・待っててくれてると・・思ったのに・・・」
「ごめんごめん、ユウに初めての買い物は一人でしてほしかったのよ。」
「はぁ・・・もう・・緊張したぁ・・・」
オレはぐったりとベンチに背をあずけようとしたが・・・

「きゃぁっ！」
オレはそのまま後ろの植え込みにひっくり返ってしまった。ベンチに背もたれがなかったのに気づかなかったのだ。
「ユウ！大丈夫？！」
「う・・うん・・なんとか・・・」
後ろが植え込みで良かった。そうでなかったら頭から床に落ちていたかも知れない。しかし自分の姿を見てみると、それほど良くもない状態だった。オレは大きく足を開いてスカートはめくれあがりパンツが丸見えになっていたからだ。
「うわっ！」
オレは急いでスカートでパンツを隠そうとしたが、そのまま床にずり落ちてしまった。

オレはもう本当に泣いていた。きっとものすごく情けない女の子に見えているに違いない。みんなこんなオレを嘲笑しているに決まってるからまわりを見ることも出来なかった。
「レ・・レナぁ・・・」
手を引っ張って起こしてくれたレナに、オレは思わず抱きついてしまった。
「ユウ、だいじょう、だいじょうぶ・・・泣かないの！」
レナはそう言ってオレをなぐさめながら、オレの服の汚れをパンパンとはたいてくれた。
「あ～ぁ・・・汚れちゃったね。」
手の甲で涙を拭いながら見てみると、床に落ちた腰の部分が植え込みの土で汚れてしまっていた。
「うぐっ・・・ど・・どうしよう・・・」
オレが途方にくれているとレナが
「そうだ！このままじゃどうしようもないから、これから買いに行こうよ。そのまま着替えちゃえばいいのよ！」
「えぇ！」

「だって、このままじゃ嫌でしょう？」
「・・・う・・うん・・・」
「ほら、涙ふいて。こんなところで泣いてたら目立っちゃうよ。」
レナがハンカチで涙をふいてくれた。
「ううっ・・・」
オレは必死で泣きやもうとした。こんなところで目立ちたくない・・・もし女の子の服を着て泣いているのが男だとバレたら、それこそみっともないなんてもんじゃない！

レナはとなりのビルへと通じる通路へ、なんとか泣きやんだオレを引っぱっていった。

ここコアは天神でもどちらかといえば若い女の子の服を売っているところ・・・奥のほうに本屋さんがあったし、他のビルへの通路にもなっていたから、オレも男の頃に通ったことはあるものの、もちろん店には入ったことはない。どちらかといえば足早に通り過ぎるといった感じだった。

レナはそのうちのひとつの店に入っていく。オレはこんなに女の子の服にかこまれて、逃げ出したい気持ちになるのを必死で押さえていた。
「ユウはどんなのが好きなのかなぁ？」
レナはオレの恰好を頭から足まで見ながら言った。
「この服はユウが選んだの？」
「・・・ううん・・・かあさんが・・・」
「へ～、ユウ自身はどんな服が着たい？」
「・・わ・・わからない・・・」
「なんで？」
「だって・・わたし・・女の子になったばかりだし・・女の子の服

のこと・・まだ良くわからないから・・・」
「そうなの？　それじゃ、今日はユウが自分で着たいのを選んでみようよ！」
「・・そ・・そんなの・・無理だよ・・・」
オレはレナの積極的な態度に思わず尻込みしてしまう。
「そうかぁ・・・じゃぁ、わたしが選んであげるわ。」
オレはそれを聞いてホッとした。
「そのかわり、ユウはわたしのを選んでよ！」
「え？！」
「お互いに、相手に似合いそうな服を選ぶの。それなら出来るでしょう？」
「・・・う・・うん・・・」

なんだか妙なことになってしまった・・・オレがレナの服を選ぶなんて・・・しかし、少なくとも自分のよりは選びやすそうだ。だって、オレは自分がどんな服が似合うかなんて、さっぱりわからないのだから。
店内にはところ狭しと女の子の服がかかっている。オレは依然としていたたまれない気持ちではあったが、しかしレナに似合う服を探すと思うと、少しワクワクしないでもない。

レナはどんな服が似合うだろうか・・・レナはそんなに女女した感じではないから、少し男の子っぽい恰好も似合いそうだ。
「いろんな服があるんだなぁ・・・」
オレはいろいろ手にとってみながら、店内を物色していった。この店はコギャルみたいなコが着るようなハデな服が多いようだ。
「あ、これなんか良いんじゃないかなぁ・・・」
それはビニールっぽい素材で出来た白い上着と、股上が短い同じ素材のパンツがセットになっている。上着は袖ナシのジャケットで両胸のポケットがポイントになっている。しかし良く見るとポケット

に見えた部分はただの飾りで本当のポケットではなかった。女の子の服って変わってる・・・パンツにはカッコいい大きめのバックルが付いたベルトがセットになっていて、お尻の両脇にもポケットが付いている。こっちは本物のポケットだった。裾は大きめに折り返しになっていて、裏地がグレーのチェックなのが可愛い。

「ユウ、選んだ？」

「・・・う・・うん・・・」

そう言われると、急にこれで良かったのか？という気持ちになってきて、思わず後ろに隠した。

「あっ！良いじゃない！ユウけっこうセンスあるんだね。」

「・・そ・・そうかな・・・」

なんだか照れくさい・・・

「わたしが選んだのはこれよ！」

そう言って見せたのはショッキングピンクでエリが胸から肩まで大きく開き、エリの部分にクチャクチャした同色の飾りが付いている。スカートは黒いミニスカートでたくさんヒラヒラが付いて大きく膨らんでいる・・・

「そ・・そんなの着れないよ！」

オレは目の前が真っ暗になりそうだった。そんな服を着たら今着けているブラじゃ肩ヒモが見えてしまうし、そんなミニスカートじゃ、いつパンツが見えてしまうかわかったもんじゃない！だいたい男のオレにそんなセクシーな服が着れるわけないじゃないか？！

きっとレナはオレが男だということを忘れているに違いない！オレはレナの耳元で小声で言った。

「レナ・・わたし男なんだよ・・・こんなの着れるわけないじゃない・・・」

「大丈夫よ。これはユウが自分に自信ができた時に着ればいいの！」

「え？・・・で・・でも・・この服・・着替えなきゃ・・・」

オレは汚れたワンピースの裾を少し持ち上げて見せた。
「大丈夫だって言ってるでしょう?これからユウが着るのはこっちなんだから!」
レナがそう言ってオレに突き付けたのは、オレがレナのために選んだ服だった。

「ま・・待ってよ・・・これはレナに似合いそうなのを・・・だましたのね・・・」
「いいの!ユウにも似合うって!」
「で・・でも・・わたしこんな髪型だし・・・」
「もう!髪なんかどうにでもなるの!さっさと着替えてらっしゃい!」
オレはレナに更衣室へ押し込まれてしまった。

どうすればいいのだろう・・・オレはパニックになりそうだ。着て来た服は汚れてしまってるから、このままという訳にもいかない・・・レナに頼んで他のにしてもらおうかとも思ったが、考えてみればこの店にはおとなしい服は無かったような気がする・・・レナはきっと最初からこうするつもりだったのだろう・・・他のを頼んでもっとセクシーな服を選べれてはかなわない・・・

これをオレが・・・?
狭い更衣室の中で、オレはその服を前に立ちつくしていた。
「ど・・どうすればいいの・・・」
オレはこんなに短いパンツは男のころだって穿いたことがない。これはストッキングをはいたままで良いのだろうか?オレは服を来たままパンツだけ穿いてみた。スカートはこういうことが出来るのが便利だ。しかし、穿いてみるとストッキングは脱ぐしかないとわかった。パンティーストッキングのパンティーの重なった部分がパンツの裾から出てしまうのだ。

オレは仕方なくストッキングを脱いでからパンツを穿いた。短いパンツから伸びる生足が恥ずかしい・・・レナは、もしオレがスネ毛の処理をしてなかったらどうするつもりだったのだろう・・・それともオレがムダ毛を処理してるのを知っているのだろうか?考えてみれば、エステを紹介してくれたのがレナの母親なのだから知っていたってておかしくない・・・?・・・そういえばエステのお姉さんはオレの身体が女性化してきてることを知っている・・・だとすれば二光(にっこう)さんも知っているかもしれないし、二光さんと知り合いのおばちゃんが知っている可能性だってあるじゃないか!いや、そんな回り道をしなくたって、かあさんが言ったかも知れない・・・

「ユウ、まだ?」

オレが悩んでいる間にけっこう時間が経っていたようだ。

「ごめん・・・もうちょっと・・・」

もう悩んでいるヒマはない・・・意を決してオレは短いボレロを脱ぎ、下のワンピースを頭から脱いだ。そしてスリップも脱ぐと上はブラだけになった。更衣室の鏡に、ブラジャーをして下には短いビニール素材のパンツを穿いたオレが映る・・・清楚な髪型がよけいエッチな感じだ・・・オレはいたたまれず、急いでパンツと同じビニール素材の上着を着た。

「ユウ、もう開けていい?」

「・・う・・ううっ・・・」

焦ったオレは良いと言ったつもりは無かったが、レナはカーテンを開けてしまった。

「あ、いいじゃない!」

「・・い・・いや・・・だけど・・・」

オレはどうすればいいのかわからず言葉につまった。何しろ着てみてはじめてわかったが、上着は短かめでちょっと油断するとお腹が

見えてしまうし、袖ナシのワキがけっこう開いているからブラの横の部分が見えてしまう・・・

「・・ブラ・・・見えちゃうし・・・お腹も・・・」

「いいのよ、見えても。そういうデザインなんだから。」

「・・そ・・そんなぁ・・・」

女の子ならブラが見えるのも可愛いかもしれないが、オレは男なんだぞ・・・男が見せブラするなんて・・・

「いいから、いいから。」

レナはそう言ってオレを更衣室から引きずり出す。するとそこにはショップの店員さんがいて、オレが着た服のタグを切ってくれた。そしてオレが脱いだ服を袋に入れるために持っていく。とりあえずいつものクセでたたんでおいて助かった・・・店員さんがオレの服と、レナが選んだ服をそれぞれ別の袋に入れ、手提げの袋に入れてくれた。

「レジはもう済ませたから。」

オレはレナに連れられて店を出た。こんなに足を出して歩くなんて・・・恥ずかしさになかなか足を大きく踏み出せない・・・

「レ・・レナ・・・ダメだよ・・・こんなの着て歩けない・・・」

「ユウ、もっと自信もって!ちゃんと背筋伸ばさないと、そんな猫背になってたら背中が出ちゃうわよ。」

「・・・ううっ・・・」

「堂々としてないと、よけい目立っちゃうじゃない!」

「・・・う・・うん・・・」

オレはもうレナの言いなりだった。完全に主導権を握られている。

「ねえ・・どこ行くの・・・?」

オレが聞いても、レナは答えずズンズン歩いていく・・・

「ねえ・・レナぁ・・・」

オレは不安でたまらなかった。レナはオレのことを守ってくれるって言わなかったっけ?

次にレナが連れてきたのは女の子が身に着ける小物ばかりを売っている店だった。どれも手頃な値段のものばかりだ。でもこんなのを身に着けるのはコギャルくらいのものではないのだろうか？

「ユウ、ちょっと付けてみて。」

そう言ってレナはキラキラした黒とピンクの細いカチューシャをオレの頭につけた。

「・・・ふたつも？」

「そうよ・・こういうのが流行ってるの。ほら可愛いでしょう？」

レナはオレを鏡のところに連れていった。

「・・・う～ん・・・」

オレには良くわからない・・・ふたつもつけるなんてヘンじゃないのだろうか？

しかしオレはレナの言うままに買わされて、その場で頭につけられてしまった。

「可愛いよ、ユウ。」

そんなこと言われてもオレは嬉しくなんかない・・・

「アイス食べて行こうよ。」

レナはオレの手を引っぱって、すぐ近くの店に入っていく。そこはコーンをその場で焼くことで有名な店だった。いつも前を通るとワッフル生地を焼く美味しそうな甘い匂いがしている。しかし、さすがに男が入るのは勇気がいるから、オレはこれまで入ったことがなかった。

「ユウは何がいい？」

「わ・・わたし・・バニラ・・・」

「じゃぁ、バニラとチョコね。」

なんかレナといるとオレの方が女の子みたいだ・・・

「はい。」
オレにバニラの方を渡して、椅子へと連れて行く。オレは情けないことに言われるままに着いて行くだけだ・・・

アイスは思った以上に美味しかった。女の子っていろいろ美味しいものを食べているんだなぁと思う。オレも食べすぎて太らないように注意しなきゃ・・・男が女の子になるだけでもヘンなのに、そのうえデブではあまりに情けない・・・
「でもユウって変わらないね。」
「え?」
「だって昔からユウって優柔不断だったじゃない。」
「そ・・そうかな・・・」
「そうよ。」
レナはオレの昔のことをどれくらい知っているのだろう?
「ユウは女の子になったってことは、今でもお嫁さんになりたいとか思ってるの?」
「えぇ?!」
オレは驚いてアイスを落としそうになった。
「ユウ昔言ってたじゃない。大きくなったらお嫁さんになりたいって。」
「そ・・そんなこと・・言わないよ・・・」
「ユウほんとに憶えてないの? いつから憶えてないの?」
「たぶん・・・引っ越す前のことは・・・ほとんど憶えてないみたい・・・」
「え~? それじゃわたしのことも憶えてないの?」
「レ・・レナのことは・・憶えてるけど・・・でも・・・・」
「でも?」
「ほとんど憶えてないのかも・・・だって自分では忘れてるなんて思ってなかったし・・・なにを忘れてるのかも正直わからないし・・・」

「そうなの・・・じゃぁわたしが思い出させてあげるよ。」
「え?!」
それはある意味ありがたい気もするが、怖い気もする・・・だってレナが言ってることが本当だという保証はどこにもないのだ。
「い・・いいよ・・・今は・・まだいい・・・そのうち思い出すかも知れないし・・・」
「まあ、ユウがそういうならいいけど。」

アイスを食べ終り、街を歩く・・・最初は恥ずかしかったが、だんだん慣れてきた。考えてみればボーイッシュともいえる服を選んだのだから、最初着ていた服よりもしかしたらマシかもしれない。女の子になってパンツ姿で外を歩くのは初めてだ。ワキからブラがチラチラ見えてしまうのは、さすがに恥ずかしかったが・・・ワキ毛を処理していたのがせめてもの救いだ・・・

「ねえ、ゲームセンターに寄って行こうよ。」
「え?ゲーム・・・?」
そういえばゲームセンターなんかずいぶん行ってない・・・
「別にイヤならいいんだけど。」
「ううん、行く!」
オレたちはゲームセンターで遊びまくった。なんだか久々に楽しくて男に戻ったみたいだ。パンツスタイルなのもスカートに気を使う必要がなくて良かった。オレが男だったらこういうのもデートになるのだろうか?　結局オレは男としてデートしたことは一度もなかった・・・これから女の子としてデートすることなんかあるのだろうか?　女の子として・・・それはオレが男とデートすることを意味しているのか?・・・オレはそんな考えを頭から振り払おうと、さらにゲームに熱中した。

「クレーンゲーム？」
実はオレはクレーンゲームはやったことがなかった。ぬいぐるみにまったく興味がなかったからかもしれない。というよりオレはぬいぐるみという物が嫌いだった。出来ればさわりたくない・・・でも今日は楽しさも手伝ってやってみようかという気になった。それにレナも一緒だし、レナが欲しいのかも知れない。
「やってみる！」
オレは挑戦してみたものの、初めては取れるハズもない・・・キてぃちゃんのぬいぐるみを持ち上げることも出来なかった。
「ユウったらヘタだなぁ。」
レナは「こういうのが取りやすいのよ。」と言いながらボタンを操作する・・・キてぃちゃんが吊り上げられ・・・あっという間に取ってしまった。
「はい、ユウにあげる。」
オレは急にキてぃちゃんのぬいぐるみを渡されてドキッとした。
「・・・い・・いいよ・・レナが取ったんだから・・・」
そう言ってオレはぬいぐるみをレナに返そうとした。ぬいぐるみなんかさわりたくもない・・・？
「わたし得意だからいっぱいあるのよ。だからユウにあげる。」
「・・ほ・・ほんと？　もらっていいの？」
オレの？　自分のぬいぐるみを持つなんて初めてだ。なぜか判らないけどすごく嬉しい・・・こんなに・・・こんなにキてィちゃんって可愛いものだったのか？ぬいぐるみを見つめるオレにレナが言う。
「ユウは昔から可愛いものが好きだったもんね。」
レナは事も無げに言うが、オレにとっては初めて知ることばかりだ。
「わたし・・ぬいぐるみとか・・好きだったの？」
「うん、いっぱい持ってたよ。」
「そ・・そう・・・」
オレにはそんな記憶はまったくない。いや・・・かすかにあるのは頑にぬいぐるみを嫌う記憶・・・オレは自分の女の子っぽい趣味を

否定するために、わざと可愛いものを遠ざけていたのかも知れない。
そうでなければこんなに・・・こんなに心がときめくハズがない！

「ユウ、プリクラ撮ろうよ！」
「う・・うん。」
オレはプリクラも初めてだ。彼女でもいれば撮ることもあるのだろうが、男だけでは撮ることなどないし・・・中に入るとレナが慣れた手つきで次々に操作する、フレームを変えたり、何か書込んだり、なんだかオレまで心がワクワクする・・・オレとレナは何枚も写した。いつしかオレもすっかり女の子のような気持ちになっていたようだ。その時は自分でも気づかなかったが、後で出来たプリクラを見て思った。プリクラの中のオレとレナは、まるで仲の良い女の子どうしのようだった。

「・・・う～ん・・・・」
帰る前にレナとゲームセンターの女性トイレに入ったオレは便器を前に戸惑った・・・和式だ・・・
オレはもともと男のころから自宅の洋式トイレではオシッコを座ってしていたから、これまではオシッコを座ってすることには何の戸惑いもなかった・・・しかし和式は別だ・・・オレはこれまで和式トイレでオシッコをするためだけに座ったことなどない・・・

オレは観念してビニール素材のパンツとパンティーをヒザまで下ろして便器へと座り込む・・・別にウンコをする時は男でも座るのだから同じことなのだが、オシッコをするためだけに座るとなると何か変な感じだ・・・不思議に自分が女の子なのだと思い知らされてしまう。

なんかあまりに情けないので、いっそのことウンコもしようかと

も考えたが、今は出たくなかっし、レナの方まで臭ってしまったら恥ずかしい。仕方なくオレはそのまま始めた・・・オレの今ではしょぼくれてしまったところからショボシヨボとオシッコが出てくる・・・なんだかチンコが萎びてしまってから、オシッコの出方も勢いがない気がする・・・

終ったオレは男のころの名残りで小さなものプルプル振ってから、トイレットペーパーで拭いた。オレは女になってから終った後は拭くようになっていた。だって女の子がパンティーに染みをつくるなんて、なんかイヤだった。男はなにかのはずみにパンツが見えてしまうなんてことはないが、女の子のスカートはいつ捲れてしまうか何とも心もとない気分なのだ。そんな時、もしパンティーに染みがあるのを見られたりしたら、いくらなんでも恥ずかしすぎる・・・

トイレが終って個室の中で服をチェックしたオレは個室のドアを開けた。するとそこにはすでに待っている女の人がいた。オレは男だとバレてしまわないかと心配で、急ぎすぎないことを心がけながら手を洗い、髪を気にするふりをしてから、そそくさとトイレを出た。女の子は男のようにチャッチャと手を洗えないのがめんどうだが、最近はそういうことにもだいぶ慣れてきた。

レナはまだのようだった。トイレから少し離れたところでひとりで待っているとオレは急に不安になってきた。ここはゲームセンター、ちょっと不良っぽい男の子もけっこういる・・・もしこんなところで男だとバレてしまったらと思うと、いたたまれずに体が縮こまってしまう・・・

ふと気づくと、ちょっと離れたところにいる二人組の男の子がオレのことを見ているような気がする・・・オレがうつむいて知らな

いふりをしていると、二人がオレの方へ歩いてくる！

だんだん近づいてくる二人の目的がトイレであることを願っていたが、オレの願いは叶えられなかった。

「ねえ、君可愛いね、ひとり？　誰かまってるの？」

「・・・あ・・い・・いえ・・・」

オレは何て言ったらいいのかわからず適当に答えた。男だとバレたらどうしよう・・・オレの心臓が早鐘を打つ・・・

「ねえ、これからカラオケ行かない？」

「・・・い・・いや・・・」

オレはどうしたらいいのだろう・・・女子校に通いだしてからは男と話をすることもほとんどなかったから、男の子にこんなに近くで話かけられるだけでも緊張するのに・・・これは・・・これはナンパではないのか？

オレはパニックをおこしそうだった。足がガクガク震えて逃げることも出来ない・・・ど・・どうしよう・・どうしよう・・・怖い・・・・

「ちょっと！あんたたちユウに何してんのよ！」

急にレナの声がした。

「あ、君このコの友達？いまカラオケ行こうって話してたんだよ！」

「イヤよ！わたしたちもう帰るんだから。」

レナはオレの肩を抱いて二人の男から連れ出してくれた。怖くて足が震えてうまく歩けない・・・

「ねえ、ちょっと待ってよ！」

「きゃっ！」

オレは男に腕をつかまれ悲鳴をあげた。

「もう！しつこいなあ！」

レナはオレの腕をつかんだ男の手を引き離すと、オレの背中を抱いて走って店を出た。オレはガクガクする足で必死についていくだけ

だった。

「・・あ・・ありが・・とう・・レナ・・・」

オレは怖くて震える声でレナにお礼を言った。レナは本当にオレを守ってくれたのだ。やっと安心したら涙が出てきた・・・

「もう、泣かないの！ユウはもう女の子なんだから、あれくらいのナンパうまく断らなきゃダメじゃない！」

「・・う・・うん・・・でも・・怖くて・・・」

「ユウは可愛いんだから、これからもいっぱいナンパされると思うよ。」

「・・そ・・そんなぁ・・・」

それじゃひとりで街になんか来られないじゃないか・・・

「ちゃんと自分で断れるように強くならなきゃ！」

「・・・う・・うん・・・」

オレはそんなに強くなれるだろうか・・・レナにしっかりと肩を抱かれて歩きながらオレは思う・・・オレは女の子になってすごく弱くなってしまった・・・それともオレはもともと弱い人間だったのだろうか・・・？

まだ震えが止まらない心もとない足で必死に歩きながら、オレは股の部分に違和感をおぼえていた・・・男にナンパされて・・・怖くてちびってしまったのだ・・・こんなこと恥ずかしくて誰にも言えない・・・・

もしレナがいてくれなかったら・・・オレはいったいどうなっていたか想像さえ出来ない。あの場にへたり込んでお漏らししてしまったかも知れない・・・もしそんなことになっていたら、もう女の子として生きていけない・・・

「・・レ・・レナ・・・わたし・・強くなれる・・・？」

「なれるわよ！ユウが自分は女の子だって自信を持てばね。女の子ならもっと自分の可愛さに自信持たなきゃ！ね？」

「・・・う・・うん・・・」

オレは自分に自信を持ちたい・・・そして可愛い女の子になりたい・・・・でも・・どうすればそうなれるのか・・・オレにはさっぱりわからなかった。

第27話　色気　オレにあるハズがないモノ

「・・・ただいま・・・」
オレは玄関を開けて小声で言うと家の中をのぞき込んだ。誰もいないようだ。心配なのは母と妹で、父はいたとしてもめったに出くわす心配はない。

オレは今の姿を家族に見られるのが恥ずかしかった。レナと一緒の時はまだ良かったが、レナが最寄りの駅で降りてしまってからは、オレは急激にいたたまれなくなってきた。椅子に座っているとヒザをしっかり閉じていないと、短いビニール素材のパンツでは股の奥まで見えてしまいそうだ・・・かといって立つのも自信がなかった。こんなに太モモまで出した生足を他人に見られるかと思うと、オレは卒倒しそうな気持ちになる。結局オレは、座って足を閉じ、出来るだけ服を買った時に入れてくれた袋で必死に足を隠していた。

オレがコソコソ玄関を上がって、二階の自分の部屋に行こうとしていると
「有希？帰ったの？」
と奥から母の声がした。
「ヒッ！」
オレは緊張して体が固まってしまう・・・急いで部屋に行きたいのに、なぜか足が動かない・・・
「有希？あら！いいの買ったじゃない。」
玄関に出てきた母にそう言われ、オレはどうしたらいいのかわからなかった。
「ごめんね、有希・・・かあさんダマすみたいなことして・・・」
「・・・ううん・・いいの・・楽しかったし・・・」
オレは早く自分の部屋に逃げ込みたかった。

「かあさん、有希に服買ってあげてたけど、今の若いコがどんな服着たいのか良くわからなかったから。でも有希はこういうのが着たかったのね。」
「・・ち・・ちがうよ・・・そうじゃないの・・・」
オレは慌てて否定した。こういうのを着たいと思われてはかなわない。
「どういうこと?」
「これは・・・わたしがレナに選んであげた服なのに・・・レナがわたしに着せたの・・・」
「あら、そうだったの・・・でも有希もすごく似合ってるじゃない。」
「・・そ・・そうかな・・・」
オレは顔が熱くなった。かあさんの言うことは信じたい・・・オレはこういうのも似合うのか?

「そういえば、有希、麻弓に写真もらってきた?」
「・・・う・・うん・・・」
写真というのは前に赤いドレスを着て写ったやつだ。こんな写真をかあさんに見られたくなかったが、見せると言っていた手前仕方がない。
オレは母に二の腕をつかまれてリビングへと連れていかれてしまった。

「こ・・これ・・・」
オレは写真屋さんの袋に入ったまま母に渡した。
「どれどれ・・・」
母は袋から台紙を取り出す。写真屋さんで写した写真は、お見合い写真のような折畳み式の、ダ円形のフレームがついた台紙に入っていた。母が開くのを恥ずかしくて見てられない・・・

「わぁ！可愛く撮れてるじゃない。ねえ？」
「そ・・そう・・・？」
オレはそんなこと言われても嬉しくなんかない・・・
「でも、このころはまだ有希もちょっと男の子っぽいわね。髪も短いし。」
「・・・うん・・・」
オレもそう思う。
「こうして見ると感慨深いわねぇ・・・有希も今では立派な女の子だもの。」
「・・・・・」
そんなことない・・・オレはまだまだ全然女の子なんかじゃないのに・・・
「これ、お父さんや麻衣にも見せよう？」
「・・・・！」
オレは正直イヤだった。いくらなんでもこんなドレス姿で写った写真を、父や麻衣に見られたくない。しかし、そんなことオレには言えなかった。だって今ではこんなに恥ずかしい自分になっているのに、少し前のまだ男っぽさが残る写真を見られるのが恥ずかしいなんて言えた義理ではない・・・

「ねえ、かあさん・・・」
「ん？」
「わたしって・・小さいころ・・ぬいぐるみとか好きだった？」
「そうね。けっこうたくさん持ってたわよ。全部有希が自分で捨てちゃったけど。」
「そう・・・」
やっぱりレナが言っていたことは本当だったのか・・・
「レナがね、わたしが小さいころ可愛いものが大好きだったって・・・」

「そう。それで思い出した？」
「・・・ううん・・・でも・・・これ・・・」
オレは袋からキてぃちゃんを取り出して、胸に抱きかかえた。
「キてぃちゃん？」
「・・・うん・・・なんか・・こうしてるとすごくドキドキするの・・・なんか・・ことばでは言えない感じ・・・」
「そう・・・きっと有希にも女の子の気持ちが出て来たんじゃないかな？」
「これが・・・？・・・女の子の気持ち？」
「胸がキュンとするんでしょう？」
「・・・・！」
これが胸がキュンとするという感覚なのか・・・？　言葉では知っていたが、どんな感情なのかは知らなかった。言われてみれば、たしかにそんな感じだ！

「女の子ってね、男の子と違って理屈じゃないの。いきなり胸がいっぱいになっちゃうものなの。」
「胸がいっぱいに？！」
「そう、突然感情に支配されちゃうのよ。有希もそんな感じが解るようになって来たんじゃない？」
そうなのか？オレにはまだ良くわからなかった。でも、考えてみたら、このぬいぐるみを持った時の感覚や、プリクラを写していた時の感覚は、それに近かったかも知れない・・・

よく女の子は何を見ても“可愛い！”とはしゃいだりするが、あれはこういう感覚から来るものなのだろうか？　オレはそんなこと考えたこともなかった。オレもいつかは何を見ても“可愛い！”と言うようになるのだろうか・・・そんな自分は見たくない気がする・・・
「わたし・・・女の子に近づいてると思う？」

「なに？有希は自分でそう思わないの？」
「・・・ううん・・・よくわからない・・・」
「有希はもう女の子にしか見えないわよ。後は自分の気持ちだけなんじゃない？」
自分の気持ち・・・それはオレが一番よくわからないものだ・・・

―――――――――――――――
―――――――――――――――
――――――――――

やっと自分の部屋に入ったオレはパンツを脱いでみた。ちびってしまったパンティーには染みが出来ていたものの、生地が二重になっている部分で何とか食い止めていた。新しく買った服にまで染みてなかったので助かった。

一度こんなことがあると、またいつかちびってしまうのではないかと心配になってくる・・・最近のオレのモノは、ただでさえ常に縮こまっていて、いつも小さなパンティーで潰されているためか、あまり感覚もなくなっていた。そんなだからオシッコをする時も勢いがないし、どうにも残尿感に似たものを感じていた。そんな矢先の今日の出来事だ・・・トイレに行ったあとなのにちびってしまうなんて・・・

それにしても怖かったな・・・男に言い寄られてるのがあんなに怖いとは思ってもみなかった。もちろんそれはオレが男だとバレないかという心配もあっての事だったと思うが、それでもあんなことがあると男の子と話すのが怖くなってしまう・・・オレってこんなに怖がりだったなんて思わなかった。男としても女としても情けな

いと思う・・・

しかし、そんな怖い思いをしたり、レナに振り回されてしまったにも関わらず、今日は久しぶりに楽しかった。またレナと遊びたいと思っている自分がいる・・・でも、どうしてオレはこんなにレナに心を許しているのだろうか？　レナがオレのことを良く知っているからなのだろうか？

「うぁっ・・・」

オレは急に恥ずかしさに顔を両手で覆った。レナが言った言葉がよみがえってきた・・・

「オレ本当に言ったのかなぁ・・・お嫁さんになりたいなんて・・・」

オレは小さいころレナとどんな話をしたのだろう・・・まったく憶えていない。どんな話をしたのか知りたいような気もするし、知りたくないような気もする。オレは昔、女の子の服を着ていただけでなく、気持ちも女の子だったのだろうか？

性同一性障害者は自分が他の人と違うと感じた時から、自分を出さなくなるのだという。もしオレがそうなら、家族にも心を開いていなかった可能性が高い。オレは幼馴染みだったレナだけに心を開いていたのだろうか・・・だからオレは久しぶりに会ったのに、あんなにレナに頼り切ってしまったのか・・・オレとレナはずっと昔からそういう関係だったのか？　そういえばレナはオレがぜんぜん変わってないと言っていたけど・・・

脱いだ服をベッドに置いたまま、部屋着に着替えるため、染みたパンティーを替えようとして手をとめた。あの袋が気になってしょ

うがない・・・

オレは大きな手提げ袋から白いビニールの小袋を出した・・・袋を開けブラジャーとパンティーを取り出す・・・オレが自分で買ったブラとパンティー・・・初めてのBカップ・・・

下着は光沢があるピンクで可愛いレースがついている。パンティーを穿いて股間に付いたモノを後ろに押し込む・・・まだオレの腰は女の子のようには大きくない・・・それでもおかしくないくらいには女性化してきている。

していたブラを外し、今日買ったものを着けてみる・・・やっぱりだいぶブカブカだ。オレはふと思い出して、タンスの引き出しから入学したころから着けていたヌーブラを出してきた。いったんブラを外してヌーブラを着けてみる・・・久しぶりに着けてみると、いつの間にかオレの胸がだいぶ大きくなっていたことに、あらためて気がついた。ヌーブラを着けるとずいぶん存在感がある・・・

ヌーブラをした上からBカップのブラを着けてみるとピッタリ合っていた。そっと両手でさわってみる・・・Bカップの胸ってこんな感じなのか・・・オレの胸もいつかはこれくらい大きくなるのだろうか？

「もっと大きくなりたいな・・・」

思わずそう呟いてしまった自分に驚いた。オレは考え方も女の子になってきているのだろうか？

ついでにレナがオレのために買った服を出してみた。ショッキングピンクの服に黒いヒダヒダの広がったミニスカート・・・さすがにこんなの着れるハズがない・・・

でも・・・ちょっとだけなら・・・・

オレは誘惑に勝てなかった。ミニスカートを穿いてみる・・・足が出てて恥ずかしい・・・服を着てみると肩まで開いているからブラのヒモが見えてしまう・・・こういう服を着る時はどんなブラを着ければいいのだろう？

全身を鏡に映してみたが、やっぱりさまになっていない・・・そりゃぁそうだ・・・男のオレにこんなセクシーな服が似合うハズがないのだ・・・オレにこんな服を着れる時が来るなんて考えられない！・・・どうやったって着こなせないと思った。

諦めてもう脱ごうと思った時、だれかがドアをノックした。

「有希、入っていい？」

「・・あ・・だ・・だめ・・・」

オレは慌てて脱ごうしたが、ふと部屋を見渡してムダだと思った。とてもちょっとの間に片付けられそうにない・・・それに母なら・・そんなに恥ずかしくないし・・・

「・・い・・いいよ・・入っても・・・」

“ガチャッ”

ドアを開けた母はなぜかカメラを持っていた。

「あら、ファッションショーしてた？　ずいぶんハデな服も買ったのね。」

「ちがうよ・・・これはレナが選んだんだ・・・わたしが自信持てるようになったら着ればいいって・・・」

オレはチラッと鏡に映った自分をあらためて見た。

「でも・・いくら自信持ったって・・・わたしがこんな服着れるようになんて・・・ならないよね・・・」

「そんなことないと思うわよ。今でもけっこう似合ってると思けど・

・ただ・・・」
母はオレのそばに来ると
「ちょっと見せてね。」
そう言ってオレの服の胸元を伸ばしてのぞき込んだ。
「え?!な・・なにするのっ?かあさん・・・」
「有希、ちょっと上脱いでごらん。」
「う・・うん・・・」
オレは訳も判らず言われるままに上を脱いだ。母はオレのブラに手を伸ばす。
「ほら、こうすると肩ヒモが取れるタイプのブラもあるのよ。」
母はそう言ってオレのブラの胸元から肩ヒモを外した。
「へ〜・・そんなになってるの・・・」
オレは自分が買ったブラジャーが肩ヒモが取れるようになっていたなんて知らなかった。
「後ろ向いて・・・」
オレが後ろを向くと背中のヒモも取り去った。肩ヒモが無いとヌーブラの重さを妙にリアルに感じる・・・
「さ、服を着て・・・」
オレが服を着ると、母は肩の位置を調節してくれた。
「こういう服は少し後ろめに着ないと、だらしない感じになるのよ・・・スカートももう少し上に穿きなさい。」
母がオレのスカートを少し上にずらす。パンツまで見えてしまいそうだ!
「そんなに?!恥ずかしいよ・・・」
「こういうセクシー服を着る時は、恥ずかしがってちゃダメよ。堂々としてなきゃ。」
「う・・うん・・・」
スカートを上にあげた分、上の服にシワを作ってたるませる・・・
こんなに気を使わなくちゃいかないのか・・・
「さあ、見てごらん。さっきよりだいぶ良い感じでしょう?」

「・・うん。」
たしかにさっきまでは、まったくサマになっていなかったが、今はそれなりに着こなせてる気がする・・・着方のせいかBカップの胸が強調されて色っぽくさえある・・・着ているのがオレじゃなければ結構いい感じだ。

「写してあげるからそこに立って。」
「え?!いいよ・・写さなくて・・・」
オレは慌てて拒否した。何もこんな姿写さなくたって・・・
「かあさんね、さっきあの写真を見てて思ったの。時々写しておけば、時間が経って見た時に有希がどれくらい女の子らしくなったか自分でも解るんじゃないかなって。」
「・・・・」
たしかにそうかも知れない。どうも写真というものは自分でも冷静に見ることが出来るような気がする・・・
「だから、ね?」
「う・・うん・・・」
オレは観念して写してもらうことにした。母はデザインの仕事をしてるから写真を写すのも上手だし・・・キレイに撮ってくれるかも知れない・・・
「有希、もっと可愛くポーズとらなきゃ!」
「ええっ?!」
オレはどうすればいいかわからない・・・
「ほら、足をこう重ねて・・・ちょっとななめ向いて・・・背筋を伸ばして・・・」
「は・・恥ずかしいよ・・かあさん・・・」
「ほら、笑って!」
「うぅっ・・・」
笑顔がひきつってしまう・・・それでも母に何枚も写されていると、だんだんプリクラを写した時の感覚がよみがえってきて、自然にポ

ーズをとれるようになってきた。

結局オレは、そのあとレナのために選んだ方も着替えさせられて写されてしまった。

第２８話　協力　オレのいない所で

昼休み、中庭のベンチで昼食を食べたあと、オレは携帯を取り出して見ていた。
そこには昨日撮ったプリクラが貼ってある。レナがオレの携帯の裏側に無理矢理貼ったものだ。プリクラの中のオレはすっかり女の子を謳歌しているように見える。あらためて見るとちょっと恥ずかしい。

でもプリクラってこんなに楽しいとは思わなかった。女の子たちが夢中になるのも無理もないと思う。またレナと撮りたいなぁ・・・
長谷川はプリクラとか好きかな・・・？

急に影になったので顔を上げてみると、そこには長谷川がいた。
「有希、ニヤニヤしながら何見てるのよ？」
「あ、長谷川さん・・これ・・・」
オレはとなりに座った長谷川に、携帯に貼ったプリクラを見せた。
「有希ずいぶん楽しそうじゃない。」
「うん・・・」
長谷川はプリクラの中のオレを見ながら言った。
「有希ってこんなに楽しそうな顔するんだ・・・」
「それは・・・わたしだって楽しい時は楽しそうな顔するわよ。」
なぜか長谷川は学校では妙に突っかかってくる。
「このコ誰？取り巻きでもないみたいだけど。茶パツだし・・・」
「またそんなこと言う・・・イトコのレナよ。可愛いでしょう？」
「イトコ？　有希こんなイトコがいるなんて言わなかったじゃない。」
「うん・・・言わなかったけど？　そりゃぁ、わたしにだってイトコくらいいるわよ。親戚もいるんだし・・・」

「それはそうだけど、ずいぶん親しそうじゃない。」
「それがね、レナとは幼馴染みなんだけど、小2の時に引っ越してからはほとんど会ってなかったのよ。それが昨日久しぶりに会ってみたら、すっごく楽しくて・・・天神はちょっと怖かったけど、レナは頼りになるから・・・」
「天神が怖い？」
「あ・・うん・・・」
そういえば長谷川にはこういう話はしてなかった。
「実はね、わたし女の子になってから、街とか人が多いところが苦手になっちゃったの。・・・もし男だってバレたらどうしようって思うと・・・なんか怖くて・・・」
「へ～・・だから有希は、その頼りになるレナちゃんに懐いてるわけか。」
「なつくって・・・そんなふうに言わないでよ・・・」
オレとレナはただ仲がいいだけだ・・・たしかにオレはレナに守ってもらったけど・・・

「ねえ、長谷川さんはプリクラとか撮るの？」
「そりゃぁ・・・撮ることはあるけど・・・」
「じゃあ、こんど一緒に撮ろうよ！」
「え？！　イヤよ有希となんか。」
「え～どうして？」
「こんなに懐かれたら迷惑なのよ。だいいち有希、私と人込みになんか行けるの？」
「そ・・それは・・・」
たしかに言われてみればそうだけど・・・
「もし何かあったら・・・長谷川さん守ってくれる？」
「え？！」
長谷川は驚いたような顔をした。
「わたしが？・・・有希を？・・・」

「うん・・・」
「あんた、ばっかじゃないの？何でわたしが有希を守らなきゃいけないのよ！あんた男でしょう？なんで男のあんたが女に守ってもらおうとしてるの？！」
そりゃあ確かにそうだけど・・・オレだってどうすればいいのかわからないのだ・・・
「もう知らないわ、あんたはせいぜいレナちゃんに守ってもらえばいいじゃない！」
長谷川は吐き捨てるようにそう言うと行ってしまった・・・オレだって情けないとは思うけど、自分ではどうすることも出来ないのだ。

――――――――――――――――
――――――――――――――――
――――――――――――

「なるほど・・・それはきっと不安神経症だと思うわ。」
「不安神経症？」
オレは白石先生の元を訪れていた。こんなことを相談できるのは先生しかいない。
「不安神経症ってなんですか？」
「有希ちゃんはパニック障害は知ってる？」
オレは首を横にふった。パニック障害なんて聞いたこともない・・・
「パニック障害っていうのはね。健康にはまったく問題なのに、人込みや渋滞や電車の中なんかの逃げることが出来ない状況になると、動悸が激しくなったり、息が出来なくなったり、このまま死ぬんじゃないかという恐怖に襲われる精神的な病気なの。」

人込みに行った時のオレに少し似ているかもしれない・・・
「わたしがその・・・パニック障害なんですか?」
「ううん、有希ちゃんの場合はパニック障害とは言えないと思う。でもこのままひどくなるとパニック障害にならないとも限らないわ。」
「・・・・」

「でも、そんなに心配しなくていいのよ。普通ははっきりした理由がわからないから困るんだけど、有希ちゃんの場合は自分が本当は男だってバレないかというのが不安なんだから、原因はわかってるでしょう?」
なるほど、たしかにそうだ。
「だから、そのレナさん?そのコが有希ちゃんを守ってくれるんだったら、どこか行く時はしばらくそのコに一緒に行ってもらったらどうかな?」
「・・・はい・・・」
「街は怖かったけど、また行きたいって思ってるんでしょう?」
「はい。」
「だったら、そのコを信頼してもいいと思うわよ?」
でも、あまりレナにばかり頼って嫌われないだろうか・・・

「1組の長谷川さんでもいいんじゃない?彼女は有希ちゃんのことを知ってるんでしょう?」
「はぁ・・・」
「どうかしたの?」
「さっき長谷川さんに聞いたら、なんか迷惑だって言われて・・・」
「あら、だって長谷川さんは有希ちゃんの味方してくれてたじゃない。」
「はい・・・でも・・わたしが甘えすぎたのかも・・・」
きっとオレのせいなのだ・・・オレがあまりに情けないから・・・

「長谷川さんは、まだわたしのこと男だって思ってるのかも知れない・・・だから気持ち悪いって思ってるみたい・・・」
「そうなの？・・・それは困ったわねぇ・・・」
オレの情けない様を不憫に思ったのか、先生は
「先生、長谷川さんに会って話してみようか？」
「・・・・」
長谷川はオレの助けになってくれるだろうか・・・

「それじゃ、このお薬あげておくから、人込みに行く時に飲んでおくと少しは落ちつくはずよ。」
「はい・・・」
「そして、自分に自信を持つことね。有希ちゃんはこの学校でもクラスメイトにだって男だとバレたこと無いでしょう？」
「・・・・」
「だったら、街で会ったばかりの人にバレる訳ないじゃない。」
「・・・！」
「それに、仮に気がついた人がいたとしても、その人がいきなり街中で「この人男です！」なんて大声で言うと思う？」
「・・・ううん・・」
「だったら気にすること無いんじゃない？」
そうかも知れない・・・オレは自意識過剰になっていたのだろうか・・・？

「でもね、焦ることないのよ。少しづつ自信を持っていけばいいの。ずっと女の子の心を隠して生きてきたんだから、有希ちゃんの心の中に男の子の部分があるのは当たり前なのよ。少しづつ心を女の子に開放して、少しづつ自信を持っていけばいいの。わかる？」
「・・・はい・・・」
オレにもなんとなく解る気がした。オレは心に女の子の部分が多く

なるのは、男の自分が乗っ取られてしまうような気がして、言い様のない怖さを感じていたが、先生が言った開放という言葉に気持ちが少し軽くなった。オレの心の奥底に閉じ込められていた女の子の心が出てくるのは、男のオレが乗っ取られるのとは違うのかも知れない。その女の子もまたオレ自身なのではないだろうか？

でも・・・その女の子のことをオレは知らない・・・それでもオレと言えるのだろうか・・・

―――――――――――――――

―――――――――――――――

――――――――――

「長谷川さんいるかな？」

「え～と・・・あ、長谷川さ～ん！白石先生が呼んでるわよ！」

呼ばれた長谷川はドアのところまで小走りでやってきた。

「あの・・・何ですか？」

「ちょっと保健室まで来てもらっていいかしら？」

「・・・はぃ・・・」

二人は保健室に入ると、白石がきりだした。

「長谷川さんは戸田さんの本当のこと知ってるんでしょぅ？」

「あ、はい・・・」

「あなたは戸田さんのこと気持ち悪いと思ってるのかしら？」

「いえ・・・そんなこと思ってません！」

「でも、戸田さんは長谷川さんに嫌われたと思ってるわよ。」

「あっ・・・」

「心当たりある？」

「・・・はい」
「どうして戸田さんにヒドイこと言うの？」
「・・・ヒドイって・・・ヒドイのは有希の方です・・・わたしに守ってほしいなんて・・・」

「長谷川さんは戸田さんと昔から友達だったの？」
「いえ・・・良く話すようになったのは、この学校に入ってからです。わたしが二中に転校してきたのは2年生の終わりの方だったし、クラスも違ったから、有希のことはほとんど知りませんでした。」
「じゃあ、男の子のころの戸田さんのことは、あまり知らないってこと？」
「はい。」
「それじゃぁ、戸田さんのことを初めて意識したのは、この学校に入ってからなの？」
すると長谷川は思い出そうとするように目をふせた。
「意識？・・・有希を初めて気にしたのは・・・ここを受験するときだったと思います。」
「それで？」
「わたしたちの中学は受験の時、朝いちど学校に集まってから、一緒に試験会場に行くんです。」
「うん。」
「それで集まった生徒の中に有希がいて、わたし男の子がいると思わなかったから・・・共学になるって話は聞いてたけど・・・ちょっと変わってるなって思って・・・」
「戸田さんが受験することは知らなかったの？」
「はい、有希は女子高を受験するのが恥ずかしいって言ってて、他の人には言わないでほしいって言うから、わたし一緒に受験したみんなに有希のこと黙っててあげてって言ったんです。みんなっていってもわたしと有希の他は3人だけなんですけど・・・」

「そうなの・・・それじゃそういうのがあって戸田さんと仲良くなったんだ?」
「う~ん・・・仲良くっていうか・・・廊下で見かけたりした時に、あ、戸田君だって思うくらいで・・・」
「戸田さんは昔から女の子っぽいところはあったんでしょう?」
「・・・いえ・・そんなふうには思いませんでした。ただ・・・卒業してから学校に行ったとき・・・あ、わたし本命の高校に落ちたので、二次試験受けたんです・・・それで合格の報告をしに春休みに中学に行ったんです。そしたらちょうど有希も来てて・・・たしか有希もこの白鴻が共学じゃなくなったから二次試験受けたって・・・でも・・・有希は本当は受けてなかったみたいなんです・・・あれ?なんで有希あのとき中学にいたんだろう・・・?・・・あ!それで、その時に有希見て思ったんです。なんか雰囲気が変わったなって・・・今思えば女っぽかったのかも・・・」
「そう・・・戸田さんは昔から女の子っぽかったのかと思ってたんだけど。」
「ぜんぜん!普通の男の子でした。でも、有希は隠してたっていってたけど・・・」
「たぶん小さいころに女の子っぽさを出しちゃいけないと思う出来事があったのかも知れないわね・・・」
「・・・・」
「じゃあ、戸田さんはなんであんなに女の子っぽいのかしら?」
「・・・わかりません・・・」
「でも、白鴻には女の子として入学するつもりで受験したんでしょう?」
「・・・よくわからないんですけど・・・違うと思います。有希は男としてでもいいから女子校に行きたかったって言ってましたから・・・」
「そうか・・・それで共学化が中止になったから・・・女の子として・・・」

「ええ・・有希、女の子として入学できることになって嬉しかったって言ってました。有希・・・あんまり勉強できないみたいなんです。それでここだけしか受験してなかったみたいで・・・」
「あ～それで・・・たぶん推薦で受けてたのね。推薦のコは他を受けないことも多いわ。」

「白石先生は男の子のころの有希は知らないんですか?」
「ええ、私が戸田さんと会ったのは入学してからだから。男の子のころの戸田さんに会ってるのは校長と教頭だけじゃないかしら・・・あ、たしか家庭科の松本先生も会ったことあるって言ってたわ。」
「松本先生が?」
「戸田さんが入学のことを相談しに来た時、制服の採寸するために会ったんですって。」
「・・・それっていつごろですか?」
「さあ・・・良くわからないけど、最初に会った時には普通の男の子だったのに、入学式の時にはすっかり女の子になってて驚いたって言ってたわ。」
「・・・・」
「きっと家ではずっと女の子の恰好してたんじゃないかしら?」
「そうでしょうか・・・」

「今日、長谷川さんに来てもらったのはね、戸田さんがスムーズに女の子になるために長谷川さんも協力してくれないかと思って。」
「協力・・・ですか?」
「そう、でも特別なことじゃないの。長谷川さんも戸田さんを本当の女の子と思って付合ってくれないかしら?」
「え・・でも・・・」
「私が思うには、長谷川さんは戸田さんに女の子になってほしくないんじゃないかな?」

「・・・・」
「長谷川さんが男の子として接すると、戸田さんもなかなか女の子になりきれないみたいなのよ。もちろん戸田さんのことを男だって知ってるから難しいとは思うんだけど、出来るだけ女の子だと思って接してくれないかな?」
「・・・はぁ・・・」

「今の戸田さんはね、男の子と女の子の心が同居したような状態で精神的に不安定になってるの、だから人込みに行ったりすることに恐怖心が出てきてるのよ。」
「あ・・それは有希に聞きました。」
「でも、戸田さんは女の子として楽しみたいとも思ってるの。だから信頼できる人に協力してほしいのよ。」
「・・・だけど・・・有希にはレナっていうイトコが・・・」
「もちろんレナさんにも協力してもらうけど、あなたにも協力してほしいの。」
「・・・・」
「だって戸田さんはあなたのことをすごく信頼しているのよ。だから戸田さんと女の子どうしとして遊んだりしてくれないかな?」
「・・・・」
「戸田さんは高校生だけど、女の子の楽しみはほとんど知らないの。」
「でも・・・実は・・・わたしも・・あまり女の子らしい遊びとかしたことないんです・・・ずっと転校が多くて、あまり友達もいなかったし・・・」
「まあ・・そうだったの・・・それじゃぁ、あなたも一緒に楽しんではどうかしら?」
「・・はぁ・・・」
「あまり深く考えないでいいから、普通に接してくれればいいの。女の子としてね。」

「・・・はい・・・・」

第２９話　好意　女なら許される？

「最近暑いよねぇ・・・」
「ほんとほんと・・・」
岡本直美〈おかもと　なおみ〉と原口弘子〈はらぐち　ひろこ〉は足を大きく開き、スカートを広げて下敷きでパタパタあおぎながら股の奥へと風を送っている。三角の胸あてもホックを外してしまい胸の谷間が見えていた。
白鴻はお嬢様学校だという噂だが、これではとんだお嬢様達だ。さすがにオレと佐倉千里〈さくら　ちさと〉はそんなはしたないマネは出来なかった。
　男がいないというだけで良くもこんな恰好が出来るものだ。もしオレが男のころだったら、こんな女生徒の姿を見たら幻滅していただろう・・・ほんとうに女で良かった・・・

「でも、有希はいつもシャンとしてるよねぇ。暑くないの？」
岡本が言った。
「そりゃぁ暑いけど・・・」
オレだって暑くないワケがない。まだ梅雨も開けてないのにこの暑さでは、真夏が思いやられる・・・外見には涼し気なセーラー服がこんなに夏に向かないとは思わなかった。
「有希もわたしも上品だからそんなこと出来ないの！」
と佐倉が言い返す。オレが上品かどうかは知らないが、たしかに佐倉のそんな姿は見たくないかもしれない。
「だけどさぁ、何でうちの学校はプールがないのよ！」
原口は自分の大きな胸をわしづかみにして
「あんたたちに水着で私のナイスバディを見せてあげたいわ。」
すると岡本はすぐさま言った。
「あんたのデカ乳は着替えの時にいつも見てるわよ！」

たしかに暑い最中にプールがないのはツライかも知れないが、オレにとっては好都合意外のナニモノでもない。もしプールなんかあったら、オレは毎回理由をつけて休まなければならないだろう。オレが水着なんて着られるハズがないのだから・・・

「でもさあ、さいきん有希の胸少し大きくなってない？」

「あ、わたしも思った！」

岡本と原口に胸を注目されて、オレはドキドキしながら何とか良い言い訳を探した・・・しかしオレが上手い言い訳を考えだす前に佐倉が言った。

「きっと、有希はまだ成長しきってなかったのよ。だって前は少しボーイッシュな感じだったけど、最近女っぽさが増してるもん。なんか色っぽさも出て来た気がする。」

「そ、そんなことないわよ・・・胸は・・・たしかに少し大きくなったかも知れないけど・・・」

たしかにオレの胸は大きくなっていた。以前はまだＡカップに足りずパットを厚めにして対処していたが、最近はＡカップではキツくなりはじめていた。

「有希はいつもお下げにしてるから、髪をほどいた時のギャップが良いのよ。髪をお下げにしてないとけっこう色気もあるんだから。ね！」

そんなことを言われるとオレは相変わらずいたたまれなくなってしまう・・・オレに色気なんかあるハズがないのに・・・みんなこんなことを言ってオレが恥ずかしがるのを楽しんでいるに決まっている。現にオレは顔が熱くてたまらない・・・きっと真っ赤になっているに違いない・・・

「戸田さんは課題は何にするか決めた?」
裁縫の授業で松本たか子先生に聞かれた。
「部屋着のサマードレスを作ろうかと思ってるんですけど・・・」
「あら、けっこう大変よ。でも、まあ戸田さんなら大丈夫かしら。」
「どうせ作るなら、実際に家で着るのを作ってみたいんです。」
「そう、それじゃわからないことがあったら先生に相談してね。」
「はい。」

オレは裁縫はけっこう好きだ。もともと図工は得意だったし、デザイン関係の仕事をしている母の血もあるのかもしれない。ミシンで縫うのも他の女の子と比べても上手な方だと思う。オレは女になって何事にも自信が持てなかったが、こういうことには結構自信を持てた。こういうのは別に男も女も関係ないからだ。料理や裁縫は女の方が上手なんて決めつける方がどうかしている。

みんなは既製の型紙を使って作るみたいだが、どうもどれも恰好悪くて実際には着たくない代物だった。たぶんみんな実際に着ようなんて思ってないのだろう。でもそれじゃあ、せっかく作るのに勿体ない・・・
「先生、布とかどこに売ってるんですか?自分が好きなのを選びたいんですけど・・・」
「そうねぇ、大橋〈おおはし〉に良い布屋さんがあるんだけど行ってみる?」
「あ・・はい・・・」
「それじゃ待ってて・・・地図描いてあげるから。」
松本先生は駅からの地図を描いてくれながら
「先生ね、戸田さんみたいにやる気があるコがいると嬉しいわ。み

んなただ言われるからやってるだけなんだもの。戸田さん手芸部に入れば良かったのに・・・」

そんなこと言われてもオレは困ってしまう・・・オレはこんなことでも頑張らなければ勉強はからっきしダメなのだから。そもそもこんな遊びみたいなものが授業なのが有り難いくらいだ。それにこの先女の子として生きていくには数学や英語より使いでがありそうだし・・・とはいえオレの場合は結婚して奥さんになることなどないのだから、そのへんは微妙な感じだが・・・？・・・ってオレは奥さんになりたいのか？

授業が終ってクラブに行くとまだ長谷川しか来ていなかった。もっとも、華道部は1年生はオレと長谷川の他は井川聡子〈いがわさとこ〉だけだし、2年も3年も二人づつしかいない弱小クラブだった。ちなみに井川聡子は背が低くて、ちょっと暗い感じのコだ。

白鴻には畳の部屋がひとつしかないから、この部屋は華道部と茶道部で日を分けて使っている。とは言っても華道部が使うのは週に1回だけだった。お茶をたてればいい茶道部と違い、華道部は花がなければどうにもならない。だから近所の花屋に開きすぎた花を安くわけてもらっても週に一回がやっとなのだ。その貴重な花をオレたちは出来るだけ長い状態で活け、だんだん短くしながら練習していくのだった。

長谷川が人がいないのを確かめてから、オレの耳もとで小声で言

った。
「有希・・・あんた最近パット入れすぎじゃない？」
「そ、そんなことないと思うけど・・・」
「あんまり大きくしてバレたらどうするのよ・・・」
他のみんなはオレを女だと思っているから、大きくなったと思うだろうが、長谷川はオレに胸があるなんて思ってもいないのだから仕方がない・・・オレは適当にごまかすしかないのだ。しかしいつまでも隠しておくことは出来ないと思う。いつかは・・・たぶん近いうちに・・・オレの身体のことを打ち明けなければならない日が来るだろう。

顧問の嶋田晶子先生〈しまだ　あきこ〉と先輩たちが来て稽古を始める。
嶋田先生は調理実習の先生で日本的な美人だ。いつもアップにした髪型が上品で色っぽい。先輩たちも華道部を選ぶだけあってみんな上品な感じだ。そんな中ではオレと長谷川だけ若干違和感があるかもしれない・・・

とはいえ、最初はどうなるものかと心配していた長谷川も、最近では、なかなか上手に活けられるようになってきた。井川よりも筋がいいかも知れない。井川はどうも大胆さが足りないようで、メリハリがない活け方になってしまっている。

華道部を選んだ時は、着物とか着れるのかと思ったが、それはまったくの計算違いだった。いつも制服のままだ。オレは先生に姿勢がいいと良く言われる。でもそれはオレがちゃんとした正座しか出来ないからというのもあるだろう。オレは女の子のように自然に足をくずして、お尻で畳に座るなんて芸当は出来ないのだ。もしそんな姿勢を続けていたら、痺れどころの騒ぎではなくなってしまう・・

・

練習が終り片付けていると、井川がオレに近づいてきた。
「戸田さんって何やっても完璧なんですね・・・」
「え?!」
オレは驚いた。井川はあまり自分から話さないから、オレのことをそんなふうに思っているなんて考えてもみなかった。
「・・・わたしが完璧なんて・・・冗談でしょう?」
「いいえ、戸田さんは綺麗だし、何でも出来るし、完璧じゃないですか。」
「そ・・そんな・・・勉強はぜんぜんダメよ!国語以外はね。」
「そういうことじゃないんです。女として完璧なんです。」
「はぁ?!」
オレがふと視線を感じて振り返ると、長谷川が可笑しそうにしていた。
「そうよ、有希は女として完璧なのよ!」
長谷川は絶対厭味ったらしくそう言った。
「もう・・なんでそうなるのよ・・・」
オレは花器を洗いながら言った。
「わたしはまだまだなの・・・まだまだ女としては半人前なのよ・・・?!」
・・・しまった!長谷川に言われたのに気が散って井川がいるのを忘れていた!今の言い方はおかしくなかったか?
「戸田さんってすごく謙虚なんですね。そういうところがまた素敵です。」
なんか変には思ってないみたいで助かったが、謙虚なところが素敵なんて言われると、どうにも複雑な気分だ・・・オレはただ自信がないだけなのに・・・

「ねえ、長谷川さん今日これからヒマ？」
「特に用事はないけど・・・なんで？」
「・・・もし・・良かったらだけど・・一緒に大橋に行ってくれないかな？と思って・・・」
「大橋？何しにいくの？」
「・・・裁縫の実習で使う布を買いに行きたいんだけど・・・やっぱり無理よね・・・」
「有希は・・・なんで勝手に諦めるかなあ、用事ないって言ってるじゃない！」
「だって・・・」
オレは長谷川が行ってくれない気がしたのだ・・・

「行ってあげるわよ。」
「ほ・・ほんと？ほんとに行ってくれるの？」
「うん、でもなんでわざわざ買いにいくのよ。学校で用意してるじゃない。」
「でも・・・自分が気に入った布を使いたいの・・・」
「ふ～ん・・・まあいいわ。」

オレは長谷川と電車で大橋に向かった。大橋はオレたちの家に最寄りの駅を通り越すことになる。
「ねえ、長谷川さんは何作るか決めた？」
「うん、巾着袋。型紙があったじゃない。」
「え～巾着？・・・」
巾着はいくつか見本があったうちのひとつで、簡単に作れるやつだ。

袋を縫って裏返し、両方から引っ張って閉じるヒモを通すだけなのだから。

「・・・あんなの面白くないよ！なんでそんなの作るの？」

「あのねえ、女の子だって裁縫が苦手なコもいっぱいいるの！みんな有希みたいに裁縫が上手なわけじゃないのよ。」

「・・・・！」

そうか、オレは裁縫や料理は男とか女とか関係ないなどと言いながら、オレ自身は女の子なら裁縫くらい出来て当たり前だという気持ちでいたようだ・・・オレはなんて自分勝手なんだろう・・・

「ご、ごめん・・・わたしそんなつもりじゃなかったんだけど・・・でも、イヤなこと言っちゃった・・・」

オレはこんな女の子にはなりたくないのに・・・

「いいのよ。有希が他のコよりずっと得意なのは知ってるから。」

「でも・・・」

「ほら、そんなにイジイジしないの！有希は女の子なんでしょう？ちょっとくらい自分勝手でもいいのよ。」

「・・・そんな・・・」

長谷川に、そんなこと言われると、ちょっと照れくさい・・・

「・・・なんか・・・長谷川さん、今日はやさしいね・・・」

「何いってんのよ。わたしはいつもやさしいの！」

「そ、そうよね・・・ちょっといじわるなだけよね・・・」

「何処がよ。こうして買い物にも付合ってるじゃない。」

「う・・うん・・・ありがとう・・・」

オレはなんだか嬉しくて長谷川の肩にもたれかかった。

「もう！懐かないでよ、うっとうしい！」

長谷川は口ではそう言ったが、嫌がってはいないみたいだった。

「好きだよ、長谷川さん・・・」

オレは思わず、これまで思っていたことを口に出してしまった。

「な、なに言ってんのよ・・・」

長谷川は急に体を固くした。オレはまずいことを言ってしまったのだろうかと心配になってきた時
「わたしだって・・有希のこと・・嫌いじゃないよ・・・」
そう言って長谷川はオレの手を握ってくれた。
なんか・・・すごく照れくさい・・・それに・・すごく嬉しかった。
もしもオレが男だったら、すっごくドキドキしていたに違いない・・・女になった今でもこんなにドキドキしてるのだから・・・

松本先生に描いてもらった地図を見ながら行くと、思ったよりずっと大きな店だった。いろんな布がたくさんある。
「わ～・・こんなにたくさんあるんだぁ・・・」
オレはいろいろ見てまわり、柔らかい布でできた、小さなピンクのバラの花がいっぱいプリントされた布を見つけた。
「これ可愛いなぁ・・・これにしようかなぁ・・・」
オレが迷っていると長谷川が言った。
「有希、あんた自分が着ること考えて選んでる?」
そう言われてみると、これをオレが着るにはちょっと恥ずかしい気もする・・・
「う～ん・・・じゃぁ・・・こっちにしようかな・・・」
もうひとつ気になっていた、似たような素材の淡いブルーのチェックの布を体に当ててみる。
「うん、そっちの方が有希に似合いそう。」
「そうかな・・・う～ん・・・でも・・・」

オレは結局、バラ柄の方も諦めきれずに、両方買ってしまった。
電車に乗ると帰宅する人たちで満員だった。満員電車はちょっと苦手だ・・・
「長谷川さん、今日はついてきてくれてありがとう・・・」
「いいよ、べつに用事もないし。」

ドアの脇にオレが入り、長谷川はオレをガードするように立ってくれている・・・

「有希・・大丈夫?ダメそうになったら言ってよ。」

「うん・・・」

長谷川の心配してくれる気持ちは有り難かったが、なんだか長谷川が一緒だと、満員電車でもあまり恐怖心は感じなかった。

これじゃ男と女が逆みたいで情けない・・・でも病気では仕方がない・・・オレは長谷川に守ってもらいながら、ちょっと嬉しかった。背はオレのほうが少し高いけど、長谷川はすごく頼りになる・・・多少情けなくいてもいいかな・・・オレも女の子なんだし・・・

「ねえ、有希はどこで降りるの?」

「あ・・次だけど・・・」

「え?わたしと同じ駅なの?」

「うん・・・」

オレは小さくうなずいた。

「この間、言わなかったじゃない。」

「うん・・・なんか言いそびれちゃって・・・」

いまさら隠すわけにもいかないし・・・隠す必要もない気がした。

電車を降りて改札を出るまで長谷川はオレと手をつないでいてくれた。そこまでしなくてもいいのだが、オレも今日はその好意に甘えてみた。

「有希はどっちなの?」

「こっち・・・」

オレの家は長谷川の家とは反対の方角だ。

「近いの? 送っていこうか?」

「え、いいよ・・・いつも通ってる道だし・・・」

さすがにそこまでしてもらってはオレとしても立つ瀬がない・・・

「今日はほんとありがとう・・・」
「うん、じゃあね！」

オレは長谷川と別れて家へと帰りながら、幸せな気持ちに包まれていた。なんだか長谷川はレナとは違う安心感があると思う・・・オレは自分がこんなに長谷川のことが好きだったなんて知らなかった・・・

第３０話　写真　夢みる乙女たち

とうとうオレの部屋にも三面の鏡台がやってきた。白い、鏡の部分が楕円形の可愛いやつだ。楕円の部分が三重になっていて、開くと頭の後ろも見ることが出来る。

もっとも鏡を見ながらやると手が逆になってしまうから、思ったほど簡単ではなかった。でも、とりあえずちゃんとなっているか確認できるだけでも良しとしよう・・・

引き出しには、二光〈にっこう〉さんに貰った化粧品を入れてみたが、まだまだがら空きといった感じだ。横の小さい引き出しにはアクセサリーなどを入れるようになっていたが、オレは自分のアクセサリーはほとんど持ってない。とりあえず、この前買ったカチューシャを入れておいた。

鏡の前に座るとなんだか変な感じだ・・・白いフレームで縁どられた楕円形の鏡に映ったオレは、いつもより少し女っぽく見えるから不思議だ。髪をほどいてブラシで梳かしてみる・・・なんだか女の子みたいでこっぱずかしい・・・部屋には鍵を掛けておいた。もしこんな姿を麻衣なんかに見られたらきっと恥ずかしさで死にたくなるかもしれない・・・そのうちオレが、この鏡に向かってお化粧などするようになるのかと思うと、恥ずかしくて、いたたまれなくて、なんだかドキドキしてくる・・・

「ねえねえ、有希さぁ、モデルとか興味ないの？」
いきなり岡本に聞かれて、オレは戸惑った。
「え？！」
「だって、有希スタイル良いし、顔だって可愛いじゃない！」
「な、なにを？急に・・・」
すると岡本は地元のファッション誌の後ろの方を開いて言った。
「九州ＪＩＮＯＮで読者モデルを募集してるのよ、有希応募しない？」
「え？い、いいよそんなの・・・わたしあまり興味ないし・・・」
「でもさ、有希が好きなニースの山上くんに会えるかもしれないよ。」
「え？！ほんと？」

オレは俄然、興味を持って、よくよく聞いてみると、それは岡本の思い違いだった。岡本はただ地元版のＪＩＮＯＮが、ニースが良く載っているＪＩＮＯＮ本誌と同じ出版社だからという、単純な考えで言っていただけだったらしい。出版社が同じだからといって、そんなに都合のいいことはおこるハズがない。そもそも出版社が同じでも地元誌はこっちで作っているに決まってる。

しかし、岡本がオレに声をかけたのは口実だったらしい。どうやら自分が応募したいからのようだった。だけど自分だけじゃ心細いから、みんなに声をかけていたようなのだ。
「まあ、弘子や千里も応募するなら・・わたしも送ってもいいけど・・・」
こんなのどうせ採用されるハズがないから、オレはとりあえずそう言った。

「でも写真がいるって書いてあるじゃない、どうするの？」
オレが聞くと、岡本もそこまで考えてなかったみたいだった。
「それじゃぁ、わたしが写してあげる。明日カメラ持ってくるから。」
オレは写真は、まあまあ上手だったから、カメラマンをかって出た。
なんか他人ごとだから楽しくなってくる。どうせ合格するハズないけど、せいぜい可愛く撮ってあげよう・・・

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー
ー　ー
ー

家に帰ると、母にカメラを貸してくれるように頼んだ。母は2台持ってたからどっちか貸してもらおうと思ったのだ。
「ねえ、かあさん、明日カメラ貸してくれない？」
「あ、ごめん有希、カメラ一台壊れちゃって、明日はかあさんも使わなきゃいけないのよ。」
「・・・そうなの・・・それじゃしょうがないね・・・」
なんか約束しちゃったのに、どうしよう・・・困ったな・・・写メってわけにもいかないだろうし・・・
「そうだ、フィルムの方ならあるけど、それでもいい？」
「あ・・うん・・それでいいよ。」
ほんとはデジカメの方が失敗が無くていいけど、フィルムのやつでも無いよりはマシだ。

「使い方わかる？」
「うん・・・たぶん・・・」

そんなに難しいタイプじゃなかから大丈夫だ。だいぶ前だけど使ったことあるし。

「真ん中の丸いところに顔を入れて、写せばピントが合うから。もし他のところにピントを合わせたい時は、シャッターを軽く半押ししてピントを合わせて、そのままずらしてシャッター押せばいいから。」

「うん、わかった。」

「フィルム入ってないから、忘れないように買って行きなさいよ。多めの枚数のを買っておきなさい。」

「うん、ありがとう。」

－－－－－－－－－－－－－－

－－－－－－－－－－－－－－

－－－－－－－－－

次の日、オレは学校へ行く前にフィルムを買って行った。フィルムを入れてフタを閉めると巻かれているような音がする・・・どうやらちゃんとセットされているようだ・・・フィルムのカメラはいろいろ心配がつきない・・・ちゃんとなっているのか不安でたまらない。

「はい、チーズ！」

オレは岡本、原口、佐倉を校舎の壁をバックに写してあげた。送るのには全身と上半身の写真が必要だ。

「ほら、もっと笑わなきゃ。採用されないよ！」

良い表情を撮るのは意外に大変だった。３６枚撮りのフィルムを買っておいて良かった。足りなくなるところだった。

「じゃ、次あたしが有希を撮ってあげるよ。」

岡本がオレからカメラを奪った・・・
「う・・うん・・・」
本当はオレはいいのだが、みんなで送ることになってしまっているので、断るわけにもいかない・・・
「有希、ガチガチじゃない、なに引きつった顔してるのよ!笑いなさい!」
今度はオレが言われる番だった。さっきまでの楽しさが一転苦しみに変わってしまった。だって女の子のように笑って写真に写るなんて・・・しかもポーズまで要求される始末だ・・・
「あははっ、ほら有希、もう一枚!」
“カシャッ”とシャッターの音がした次の瞬間“ジーーー”と音がしだした。
「な、なにこれ?」
オレはほっとした。フィルムが無くなって自動で巻き戻し始めたのだ。
「な~んだ・・・もっと有希の写真撮ろうと思ったのに・・・」
岡本は残念かも知れないが、オレは助かった!このまま何枚も写され続けたら、オレは緊張しすぎて倒れてしまったかもしれない・・・

「それじゃプリントしておくから。」
オレはさっさとカメラを奪い返して言った。もしもフィルムを買って来て続きの撮影をしようなんて言われたらかなわない。

オレは帰りに駅前のＤＰＥ店に寄ると、同時プリントを頼んだ。出来上がるまでに1時間もかかるらしい。オレはいったん家に帰ろうかとも思ったが、またあらためて来るのも面倒なので、近くのハンバーガー屋で時間をつぶす事にした。本でも読みながら待つのも悪くない。

フィルムの写真は現像したりと面倒だが、出来上がるまでのドキドキ感もたまには良いかもしれない。ちゃんと写っているか、目をつぶったりしてないか、心配はつきない・・・こういう楽しみはデジカメにはないと思う。

本を読みながら待っていると、1時間なんて案外早く経ってしまうものだ。本に夢中になっているうちに、もう出来上がっている時間になっていた。

急いでDPE店に行って、写真がオレのだと間違いないことを確認してから、急いで家に帰ってきた。家族に見られると恥ずかしいので、自分の部屋に直行しドアに鍵をかけた。

「おっ・・なかなか可愛く撮れてるじゃない・・・」

オレは岡本、原田、佐倉と写した順に見ていった。佐倉なんかちょっと見方によっては、上京したての陰気なグラビアアイドルなみに見えなくもない・・・

そろそろオレの写真だと思うとドキドキしてきた・・・あんまり可愛く撮れていて、もし採用されたりなんかしたらどうしよう・・・などと有り得ないことまで心配になってしまう。そんなこと絶対にないのに・・・

「なんだこれ・・・」

いざ自分の写真を見たオレはガックリきてしまった。まったくのピンボケだ・・・後ろの壁にピントが行ってしまったのもあれば、ぜんぜんどこにピントが合っているのか判らないモノもある。そして肝心のオレはといえば、目鼻も良く判らないほどボケてしまっている。きっと写してくれた岡本は、いつもシャッターに指を乗せておくクセがあるに違いない・・・

ちょっとがっかりしたものの、考えてみればどうせ採用されるハズがないのだから別にかまわない・・・
「・・・まあ・・いいか・・・」
オレはひとり納得した。採用されたらどうしようかなんて考えていた自分がバカみたいに思えてきた。

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

「有希、写真は？ちゃんと写ってた？」
「うん、みんな可愛く写ってるわよ。」
オレは3人に写真を渡した。
「あれ？有希のは？」
「あ、わたしのは家に忘れてきちゃった・・・」
オレは岡本が責任を感じても可哀想なので、ピンボケ写真を持ってこなかったのだ。それにもう一度写そうなんて言われてもかなわない・・・
「ダメだな有希は、みんなで一緒に送ろうって言ったのに！」
「ご、ごめん・・・」

「まあ、いいわ。それじゃみんなで書類に書込もう。」
ご丁寧に、もう4人分のコピーした書類が用意されていた。オレたち4人はワイワイ言いあいながら、一緒に書類に書込んでいった。

けっきょく写真を持って行かなかったオレがポストに出す役にな

った。オレは自分のは出すまいかとも考えたが、もしも何かのはずみでバレたりしたら困ると思い、やっぱり出しておくことにした。どうせあんな写真では採用されるハズがないと思うと気楽なものだ・・・

家に帰ったオレは書類と写真を封筒に入れると、４人分の封筒をポストに出しにいった。

第３０話　写真　夢みる乙女たち（後書き）

この話をもって、現在書いている話はすべて掲載しました。
今後は、これまでのようにはコンスタントに掲載できないかも知れませんが、まだまだ続きますので、今後とも末永く読んで頂ければ嬉しいです。

第３１話　告白　オレが秘密にしてたこと

その日、オレはエステが終って着替えていた。こんなにちょくちょくエステに来るハメになるとは、最初に来た時には思ってもみなかったが、オレの身体がカミソリまけで真っ赤になってしまう事が判ってからは、仕方なくエステで脱毛してもらうしかなかった。もっとも、最初は毛が無くなっては、男に戻った時に困ると思って躊躇していたが、女の子になると決めてからはもうお任せで必要なところ以外は全て抜いてもらっている。

オレも最近では、もうあまり隠さずに着替えるようになっていた。だってビキニラインの毛まで抜いてもらっているのに恥ずかしがるのもヘンだ。

オレがブラを着けていると、それを見たエステのお姉さんが言った。

「あら？有希ちゃん、ブラのサイズが合ってないんじゃない？」

「え？そ、そうですか？」

たしかに最近は少しきつくなってきたかな？とは思っていたが、オレにはどれくらいが丁度良いのか良く判らなかった。

「ほら、もうアンダーが浮いちゃってるじゃない。」

そう言われて見てみると、確かに胸の間から床が透けて見えていた。

「あ、ほんとだ・・・」

オレはいままでそんなことも気づかなかった。

「合わないブラ着けてると胸の形が悪くなっちゃうわよ。」

「え？！ほんと？」

オレはそんな話は聞いたことがなかったが、エステのお姉さんが言うのだから間違いないのだろう・・・せっかく膨らんできた胸が変な形になったら大変だ！

家に帰ると、自分の部屋で服を脱ぎ、ブラを外してまじまじと自分の胸を見てみた。そんなに大きい感じはしないが、以前に比べれば確かに大きくなっている。

「やっぱりもうAカップじゃ小さかったのか・・・」

オレは母に買ってもらったものを使っていたが、タンスの奥に隠しておいたレナと街に行ったときに買ったブラを取り出してみた。

Bカップのブラジャーはカップのものとは違って“カップ”と言われる理由が良くわかる・・・丸みが全然違っている・・・オレはそっとブラの肩ヒモに腕を通し、カップを自分の胸に当ててみた。

もうオレにとってブラをするのは当たり前のことになっているから、近頃では初めて着けた時のようにドキドキすることも無くなっていたが、さすがにあらためて違うカップのブラを着けると思うと少しドキドキする・・・それにこのブラはいつも学校に着けて行ってる物のような素っ気無い白いブラではない。ピンクでレースが付いた可愛いやつなのだから余計になんか恥ずかしい。

手を後ろに回してホックを留める。今ではホックも簡単に留められるようになった。まだ中学生のころ最初にブラジャーを着けた時は、一段のホックでもなかなか留められなかったのに、今は二段のやつでも簡単に留めることが出来るようになっていた。自分ではなかなか気づくことが出来ないが、こういうことはオレもだいぶ女の子に近づいているのかもしれない。

Bカップのブラを着けてはみたものの、どうも収まりが良くない・・・考えてみればオレは全然胸がない時からブラを着け始めたから、正しいブラの着け方というのを知らなかった。オレはふと思い出して、ベッドの下からティーン誌を取り出した。これは妹の麻衣が買ってリビングにほったらかしていたやつを、オレが黙って部屋に持ってきてそのままになっているのだ。まあ、本当のことをいうと、

この本にはこれから大人になっていく女の子のための特集がしてあったから、いつか役に立つかも知れないと思い、こっそり貰っておいたのだが・・・

　たしかブラジャーの着け方も載っていたハズだと思い開いてみると、思った通りちゃんと絵付きで載っていた。オレはいったん後ろのホックを外してから、説明にあるように上半身を前に倒して前屈みになり、カップの中に胸を収めてみる。驚いたことに前屈みになると、オレの小さな胸でも少し重みで垂れることを知った。前屈みのままホックを留めてから上半身を起こすと、Ｂカップのブラにバストがちゃんと収まっていた。

「わぁ・・・」

オレはなんだか嬉しくなった。まだ谷間というには程遠いが、オレの胸にはしっかりとした二つの隆起ができ、その間にはハッキリと判る程度のくぼみが出来ている・・・そっとブラの上から両手を当ててみる・・・

「やわらかい・・・」

カップの中にしっかりと捕えられた胸が、ブラの手触りの良さと相まって、オレの手の中でマシュマロのようにふわふわしている。ブラがない部分を指でそっと突いてみると、信じられないような柔らかな弾力があった。

「女の子の胸ってこんなに柔らかいんだ・・・」

オレには、それが自分の身体に着いているのが不思議な気がした。

―――――――――――――――

―――――――――――――――

――――――――――

「ねえ、かあさん・・・」オレは夕食後の洗い物をしながら、横にいる母に言った。
「なに？」
「・・・あのね・・今日・・エステのお姉さんに・・ブラが合ってないんじゃないかって言われて・・・合ってないブラ着けてると・・形が悪くなっちゃうんだって・・・」
「あら、有希は知らなかったの？」
「・・・うん・・・それでね・・こんどブラを買ってくれる時は・・Bカップがいいなって・・・思って・・・」
「そう、かあさんは別にかまわないけど・・・そろそろ有希も自分で買ってみたら？」
「え？！」
オレは母がそんなふうに言うとは思わなかったからビックリした。
「もちろん、まだ無理そうなら、かあさんが買ってきても良いんだけど・・・有希ももう女の子になってだいぶ経つんだし、自分のものは自分で買ったほうが良いんじゃない？」
「・・・う・・うん・・・」
「なんだったら、またレナちゃんについて来てもらったら？　かあさんから頼んであげようか？」
「い、いいよ・・・」
オレは慌てて断った。レナはオシャレな娘だから、そういう点では頼りになるが、今オレが欲しいのはオシャレなやつじゃなく、学校で制服の下に着けるための普通の白いブラなのだ。だいいち学校では白以外の下着は禁止されている・・・まあ、そんなにしょっちゅう検査があるわけじゃないから、こっそり着けているコも少なくなかったが・・・オレはわざわざ校則違反をする気はない。
「下着買うためだけについて来てもらうのも悪いし・・・」
「だったら洋服も買ってきたら？」
「うっ・・それはまた今度でいい・・・下着は天神じゃなくても売ってるし・・・」

「それじゃ長谷川さんに頼んでみたら?」
「長谷川さんに・・・?　長谷川さんついて来てくれるかなぁ・・・」
「このまえ大橋について来てもらったんでしょう?」
「うん・・・」
「だったらついて来てくれるんじゃない?」
「そうかなぁ・・・」
長谷川も何考えてるのか良くわからない時があるからちょっと心配だけど、他に頼める人もいない・・・オレのことを女の子だと思っている友達には、一人で下着を買いに行けないなんて言ったら変に思われるだろうし、どんなの買えばいいのか相談するのも変かもしれない・・・その点長谷川なら・・・ただし長谷川はオレに女の子のような胸があることは知らないのだ。そんな状態で一緒に下着を買いに行っても大丈夫だろうか?

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

休み時間に長谷川をつかまえたオレは、きょう下着を一緒に買いに行ってくれないかと頼んでみることにした。
しかしいざ頼もうとすると言い出しにくい・・・
「あの・・・長谷川さんってさ、下着とかどこで買ってるの?」オレは何気なさを装って聞いてみた。
「う~ん・・・だいたいダイエーとかだけど・・・そんなに特別なところには行かないわよ。」
「今日さ・・・下着買いに行くのついて来てくれない?」

「え?!有希と・・・?　それって女物よね・・・」
長谷川は一瞬、困ったような顔をした。
「あ、やっぱり無理だよね。わたしこんな恰好してるけど・・・本当は男だし・・・」
そりゃそうだ・・・女の子の長谷川が、男のオレが女物の下着を買いに行くのに付合うなんてイヤに決まっている。布を買いに行くのとは訳が違うのだ。

「いや・・・けど・・・何で急に?」
「それが・・・今まではかあさんが買ってきてくれてたんだけど・・・そろそろ自分で買いなさいって・・・」
「へぇ・・・有希のお母さんって案外冷たいのね。」
「そ、そんなことないよ!すごく優しいよ。でも・・わたしもずっとかあさんに頼ってる訳にもいかないし・・・でも何処で買えばいいのか判らないし・・・」
「ふ~ん・・・でも下着って何を買うのよ。」
「・・・ブラ・・・」
「・・・なんか変じゃない?何で急にブラ買わなきゃいけないの?」
「それは・・・いままではAカップのだったけど・・・Bカップのが欲しくて・・・」
それを聞いた長谷川は、呆れたというように首を振った。
「有希ねえ・・・言ったでしょう?あんまりパット入れすぎたらバレるって!」

これではラチがあかない・・・
「ち・・ちょっとつきあって・・・」
オレは長谷川の手を引っ張って行った。
「ねえ、どこ行くのよ?」
「保健室・・・」
「保健室?」

「有希ちゃん、どうしたの？」
オレが保健室に入ると白石先生が言った。でも今日は白石先生に用がある訳ではないのだ。
「あら？長谷川さんまで・・・」
「先生、ちょっとカーテン閉めさせて下さい・・・誰か来たら教えてくださいね！」
オレはそう言って、ベッドの方へ長谷川と一緒に入りカーテンを閉めた。

「有希、なんなのよ。急に・・・」
「いいから、ちょっと見てて・・・」
オレは白いセーラー服の上着を脱いだ。
「あ！有希ったら、こんな可愛いブラしてる！」
長谷川はオレの胸を指さして、校則違反だとばかりに声をあげた。
「そ、そこじゃなくてさ・・・なんか・・・気づかない？」
「ん？・・・」
しばらくワケもわからず見ていた長谷川だったが・・・
「え～～？！」
と突然大声をあげた、やっと気づいたみたいだ。

「どうなってんの？豊胸？」
「シー！声が大きいよ！！」
オレは長谷川を黙らせてから、ブラを外して見せた。長谷川はオレの胸を見て目が点になっている。
「どうして・・・有希に胸があるの？　性転換？」
「そういう訳でもないんだけど・・・」
胸は見せたものの、オレが何て言っていいか困っていると、カーテンが開いて白石先生の顔がのぞいた。
「私から説明しましょうか？」

とりあえずオレはまた上着を着て、長谷川と一緒に白石先生の前の椅子に座った。
「戸田さんはね、今お薬で身体を女の子に近づけていってるの。」
「薬で？」
「女性ホルモンを投与すると男の子でも女の子の身体つきに近づくものなのよ。」
「それで胸が？」
「そう、個人差があるんだけど、戸田さんには良く効いたようで、胸も女の子みたいに乳腺が発達してきたの。」
「それじゃ・・・あの・・・下の方も・・・？」
オレは股間に長谷川の視線を感じて恥ずかしくなった。

「下はまだ男の子のままよ。まだお薬だけだから。」
「それじゃ、薬を止めれば有希はまた男に戻るんですか？」
「いいえ、ここまで来ては・・・それに戸田さんはもう女の子になる決心をしているの。」
「え？有希・・・ほんとう？」
「うん・・・」
オレはコクリとうなずいた。

「それって・・ここを卒業しても一生女のままってこと？」
「うん・・・」
さすがに決心したとはいえ、あらためて聞かれると恥ずかしい気持ちになってくる。男が女になるなんて絶対ヘンに決まってる・・・
「なんで言ってくれなかったの・・・？」
「え？」
「前に体も女の子になりたいのか聞いたじゃない。なんであのとき

言ってくれなかったの？」
「あ・・だって・・・長谷川さんが・・本当に受け入れてくれるか解らなかったし・・・でも・・だんだん隠せなくなってきちゃって・・・」
オレは悲しくなってきてしまった。長谷川さんを信用していなかった訳ではなかったが、やっぱりどんな反応をされるか怖かったのだ。
「長谷川さんに嫌われたらどうしようって思ったら・・・なかなか言い出せなくて・・・」

「長谷川さん、解ってあげて。戸田さんもいろいろ悩んでるの。なかなか世間には認めてもらえないことだから。ね？」
長谷川は黙ってうなずいた。
「ありがとう、これからも戸田さんの力になってあげてね。」
白石先生はそう言うと、長谷川の手を握った。

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

「ねえ、有希・・・」
「・・・なに？」
「有希は・・その・・・下の方も・・・女の子にするのかな？」
「それは・・・まだわからない・・・」
「ほんとなの？　このまえもわからないって言ってのに、もう女の子になってたくせに・・・」
「こんどは本当・・・ほんっとに本当！」
さすがにオレもまだそこまでは考えていなかった。下をどうにかするには手術が必要になるだろうし・・・それに・・・オレは女の子

のそこが、どんなふうになってるのかまだ知らないのだ。性教育の授業で習った以外は、実際に見た事はなかったから、リアルに想像しにくい。

それに・・・それに、そこを女の子にしてどうしようというのだ・・・

「それじゃ、放課後は有希のブラを買いにいきますか！」

「え?!行ってくれるの?」

「当たり前じゃない、わたしも有希がどんなブラ買うか興味があるし！」

「もう・・・またそんなイジワルなこと言うんだから・・・」

オレはそう言って長谷川と手をつないだ。

オレにもだんだんわかってきた・・・どうやら長谷川は本気でイジワルな事を言ってるわけじゃなさそうだ。たぶんこれが長谷川さんの照れ隠しなんじゃないだろうか?

「今日はクラブもないし、制服のままじゃなんだから、いちど家に帰って着替えてから行かない?」

その長谷川の提案は、オレにとっても都合が良かった。

「うん・・わかった・・・」

慣れない所に行く時は、オレには少々準備が必要なのだ。

第３２話　売場　下着を選ぶオレ

オレと長谷川は３０分後に駅で落ち合うことにして、お互いの家へと私服に着替えに帰った。

しかし考えてみれば長谷川はオレの家を知らない。長谷川の家は駅に近いマンションだから良いが、オレの家は駅から１０分近くかかってしまうことを忘れていた。

「ただいま・・・」

なるべく速歩きで帰って、玄関の鍵を開けて家に入ると、家の中には誰の気配もなかった。妹の麻衣はまだ帰ってないか、帰ってからどこかへ出かけたのだろう。誰の気配もないとはいっても父はたぶんいると思うし、オレが帰ってきたことも判っているハズだ。なぜなら父の書斎とは名ばかりの納戸には、玄関に仕掛けたカメラの映像が見られるようになっているからだ。音も聞こえるし、必要なら父の声もスピーカーから出すこともできる。なんでそんなふうになっているかといえば宅急便など来た時に困るからだ。玄関の鍵はリモートで開けられるし、脇の靴箱の上にはヒモにつないだ印鑑が置いてある。宅配の業者に自分で印鑑を押してもらおうという計算だ。ほとんどの場合はこれで上手く行くらしい。オレも昔は父のことを対人恐怖症のようなものかと思ったこともあったが、どうやらそういう訳ではなく単に書き物を止めて出て行くのが面倒なだけらしい。

オレはそのまま玄関脇の階段を上がって自分の部屋に入った。制服のセーラー服を脱いで何を着ようかと思いオレは手を止めた。いったい長谷川はどんな服を着て来るのだろうか？オレたちはまだ１回しか私服の状態では会っていないから長谷川がどんな服で来るのかは、あまり想像できない・・・

前に会った時は、ジーンズにTシャツの上にチェックのシャツを羽織るというラフな恰好だった。いつもあんな恰好なのだろうか？長谷川がラフなのにオレが女の子っぽい恰好では何だか恥ずかしい・・・しかしオレはジーンズは穿きたくなかった。オレは女の子のように骨盤が広くないから、パンツスタイルは女の子としてはいまいち着こなせない。オレはどうしようかと迷っているうちに時間が経ってしまったことに気がついて焦りだした。

「いいや・・・これにしよう・・・」

オレは白に茶系の淡いチェック柄のワンピースを選んだ。丸い衿が少しアンティークっぽい感じだ。前のボタンを開けて足を通し、すこし膨らんだ袖に腕を通してから急いで並んだボタンを留めた。同じ生地で出来たベルトの端を白いプラスチックのバックルに通し、先端のホックを留めた。

もう時間がないから急いで出かけようとして、大事なことを忘れているのに気がついた。

オレはスカートを捲ってパンティーを脱ぐと、タンスから取り出したナプキンの袋を破いてパンティーにセットした。もしもまた漏らしてしまった時の用心のためだ。

これは白石先生の提案だった。白石先生が言うには、不安神経症がひどくなってパニック障害にならないためには、あらかじめ心配事を減らしておくのが重要だということだった。一度漏らしてしまうと、同じような状況になった時に、また漏らしてしまうのではないかと心配になるのが良くないらしい。そのために、もし漏らしても大丈夫という準備をしておけば、心配の種がひとつ減るというわけだ。もちろん漏らさなければそれで良いし、そのまま緊張そのものをしなくなるまで続ければ、いつかは無くても大丈夫になるらしい。ちなみに先生は多めに漏れても良いように、多い日用というの

を用意してくれた。先生が水を使った実験を見せてくれたが、かなりの量でも十分染み込んでくれるのが解りオレは安心した。

裏側のテープを剥がしてパンティーに固定してから穿き、ちゃんと位置が合っているか確かめてみる。オチンチンを後ろ向きに挟んでいるので、少し後ろめに付けないといけない。もっとも今のオレのオチンチンは、シワシワでまったく元気がないからそんなに後ろまではいかないのだが・・・

緊張しそうな時に飲んでおく薬は、前もって学校で飲んでおいた。少し前に飲んでおかないといけないからだ。

準備が終ると、オレは小さなバッグを肩にかけて急いで階段を降り、靴箱からかかとが低めの白いサンダルを出して履くと急いで駅に向かった。もうすでに待ち合わせの時間になっている！　本当は髪も何とかしたかったのだが、とてもそんな時間はなかった。

小走りで駅に着くと、もう長谷川は来ていた。

「ご、ごめん・・・待った？」

オレが聞くと、長谷川は「そんなに待ってないよ」と首を振った。

長谷川の私服はやはりジーンズにTシャツだった。セーラー服の時とは違い、私服の長谷川は少しボーイッシュな感じさえする。

それにひきかえオレは、シックなワンピースにお下げときている・・・せめて長谷川も、もう少し女の子っぽい服を着てくれればいいのに・・・

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――

ダイエーの下着売り場に行ったオレは、抱いていたイメージとの違いに少し戸惑った。オレはなんとなくレナに連れて行かれた天神のランジェリーショップのような感じを想像していたのだが、色とりどりだったランジェリーショップとは違ってダイエーの下着売り場は白とベージュだらけだ。

考えてみれば当たり前のことだし、まだオレが男のころにも通りすがりに見たことはあったと思うのだが、あのころはまさか自分が女性物の下着を着けるようになるなんて思わなかったから、まったく気にしていなかった。

きっとランジェリーショップで売ってるような下着は勝負下着というやつなのだろう。今のところオレには下着で勝負をする機会は無さそうだ。だいたい女の子がいつどんな時に勝負をしているのかもオレはまだ良く知らない・・・・

しかしこんなに多くてはみんな同じように見えて、どんなのを選んだらいいのかさっぱりわからない。オレはちらっと長谷川を見て助けてもらおうかと思ったが、長谷川にはそんな気持ちはなさそうだし、オレとしてもこんなことで助けてもらうのはシャクな気もするのでやめにした。

オレはゆっくり歩きながら、どんなのが良いのか考えていると、カップの下にレースが付いていて、上半分が透けているのが目とまった・・・胸が無かったころはこういうのは着けられなかったなぁと思い手を伸ばした時

「ふ～ん・・・」と長谷川のうなずく声がして思わずオレは手を止めた。

オレはそのまま何ごともなかったように歩き続ける・・・次に目にとまったのは全体にレース模様で飾られたやつだった。真ん中の部分に小さなリボンが付いている。オレが手にとると長谷川が言った。

「有希は可愛い感じのが好きなんだぁ・・・」

「え?!い、いや・・そういうわけでも・・ないんだけど・・・」

オレは思わず手にとったブラをまた置いてしまった。

「べつにいいじゃない、どうせ下着なんて普段は見えないんだから。」

それはそうなのだが・・・普段は見えないといっても、どんな下着を着けるかで多少気分も違う気がするし・・・

「わたし・・どんなの買えばいいのかな・・・」

「そんなに深く考えないでいいんじゃないの？　有希が好きなの買えばいいのよ。」

「好きなの・・・？」

「そう、とにかくいいかなって思うのを買ってみて、あんまり着けないようなら、またこんど違った感じのを買えばいいじゃない。」

「そっか・・・」確かにオレは深く考えすぎなのかも知れない。女の子は下着まで気を使わなきゃいけないと聞いたが、普段着ける下着にはそこまで気を使う必要はないのかも・・・

「そうよね・・好きなの買うしかないもんね・・・」オレはそう言って自分を納得させた。

オレは目にとまったものをいくつか手にとっていった。オレが選んだブラはシンプルなものではなく、レースをあしらったようなタイプが多かった。長谷川に指摘されたのはシャクだが、オレはやっぱり可愛いのが好きみたいだ。最初は全部同じように見えたブラだったが、良く見ると色々違いがあって、選びだすと何だか楽しくなってきた。

「なんかこんなにあると迷っちゃうな・・・」オレは思わずそう口に出していた。
「ふふっ、有希ってやっぱり可愛いね。」
オレは焦った。長谷川にそんなこと言われると、なんだかドキドキしてくる・・・
「そ、そんなふうに言わないでよ・・・」
「だって有希がブラ選んでるの見てたら、すごく女の子っぽいんだもん。すっごく真剣に選んじゃってさ。」
「うぅっ・・・」オレは恥ずかしくてうつむいた。そんなこと言われたら選べないじゃないか・・・

「は、長谷川さんは・・どんなのしてるの・・・？」
オレが聞くと、急に振られた長谷川は少し戸惑ったようだった。オレは長谷川とはクラスが違うから体育などで体操着に着替える時に見る機会もない。
「わたし？　わたしは・・・もっとシンプルなのかなぁ。だって学校にしていくんでしょう?だったらオシャレしても仕方ないし・・・」
長谷川は無造作に何の飾り気もないブラを取り上げて言った。
「わたしはこういうのをしてるけど・・・」
言われてみるとたしかに着替えの時に見る同級生のブラはそういうのが多いかもしれない・・・じゃあ、オレはいままで他のコよりも可愛いブラを着けていたという事になるのだろうか?
「でも有希は可愛いのを着けたいんだったら、そうした方がいいんじゃないかなぁ。」
「そ、そう・・・？」
でもさすがに、いまさらそう言われても「はいそうですか」とばかりにと可愛いのばかりを選ぶのも難しい・・・オレは結局、長谷川がしてると言ったような、レースも何も無いツルツルのブラも買ってしまった。

他にも白いブラウスの時に透けないようなベージュのも買ったが、スポーツタイプのは今までのでも当分間に合いそうなので買わなかった。スポーツをする時は少しきつめくらいの方が都合がいい。オレは急に胸が大きくなってしまったためか、いまだに走ったりした時に胸がゆれる感覚に慣れなかった。

昔はヌーブラをした時に、重さの感覚が本物のようでリアルな気がしたが、実際に自分に胸が出来てみると、その感覚はヌーブラとはかなり違っていた。なにしろ本物の胸は上下の動きがハンパじゃない！肉そのものが揺れるうえ、それ自体に感覚があるからたまらない。こんな大したことない大きさでこれなのだから、もっと大きかったらどうなってしまうのだろうか・・・オレはもうこれくらい十分だと思った。

ついでにパンティーやスリップなんかも買って売り場を離れると、長谷川が言った。

「せっかく来たんだから他も見ていこうよ。わたしも良いのがあったら買いたいしさ。」

「う、うん・・いいよ・・・」

オレは自分のことでいっぱいいっぱいだったから、下着を買うことしか考えていなかったが、たしかにせっかくダイエーに来たのだから他を見るのも悪くない。そういえばオレはこういうところで女物の服を見たことはなかった。男のころは女性服売り場なんか長居するものではなかったし、レナと行った天神の店はオシャレな服しか売っていなかった。

「でもさぁ、有希っていろんな服着るのね。」

「え？・・・どういうこと・・・？」

「だってこの前は清楚なお嬢様風だったじゃない。今日はカントリ

ー少女みたいよ。お下げも可愛いし・・・」
そういって長谷川がオレの頭をさわったから、オレはまるで首根っこをつかまれた子猫みたいに思わず身を縮めた。
「ちょ、ちょっとやめてよ・・・恥ずかしいよ・・・」

たしかにオレは普通の女の子よりも、いろんな服を着ているのかもしれない。そもそも、女の子の服に慣れるためにいろんなタイプの服を母が用意してくれていたし、オレには発言権もなかったから選り好みなど出来る状況じゃなかった。もっとも発言権があったとしても、オレには着たい女の子の服などなかったのだが・・・そういえば最近は、やっと持ってる服の中から、自分で着る服を選べるようになってきた・・・これって少しはオレも女の子っぽくなったということなのだろうか？

「でも長谷川さんがいけないんだよ・・・」
「え？！なにが？」
「長谷川さんがもっと女の子らしい恰好してくれれば、わたしも同じような服着れるのに・・・」
相手がレナならオレよりずっとオシャレだから、オレはもっと可愛い服でも着ることができるのだ。
「だって、わたしはこういう恰好が好きなんだもん。有希みたいに可愛い服は似合わないし。そんなこと言うんだったら、有希がジーンズ穿けばいいじゃない。」
それを言われるとオレも困ってしまう・・・オレがジーンズなんか穿いたら男だとバレる確率が高くなる気がするし、それにオレはやっぱり女の子はスカートの方が可愛いと思う。でもそう思うのはオレがまだ男だからなのだろうか？
「わたしは・・・ジーンズは穿きたくないの・・・」
「なんで？」
「だって、女の子に近づいたっていっても、やっぱり体型は女の子

とはちがうんだもん・・・」
「そうなの?そんなふうには見えないけどなぁ・・・」

「長谷川さんは普段はスカートは穿かないの?前もジーンズだったけど・・・」
「うん、ほとんど穿かない。だって面倒じゃないスカートって。」
「そうかなぁ?　そんなに面倒でもないと思うけど・・・」
なんだか男のオレがスカートの方がいいと言うのも変な気もするが・・・
「だって、スカートの方が可愛いじゃない?女の子っぽいし・・・」
「だから有希は可愛いから、そうやって可愛い服着ればいいじゃない。わたしは似合わないから着ないの!もう放っといてよ。」

長谷川さんにそう言われてしまい、オレはシュンとしてしまった・・・たしかに男なのに女の子の恰好をしてるオレが言えることではなかったのかも知れない。オレが女の子の恰好をしているより、長谷川さんがスカートを穿かない方が世間ではずっと普通のことなのだ・・・
でもどうして女の子は男っぽい恰好をしてもいいのに、男の子はスカートを穿いてはダメなのだろうか?元々はスカートも男の服だったらしいのに・・・とはいえオレは決して女の子の服を着たくて着ているワケではないのだが・・・

「ごめん・・・長谷川さん・・・」オレは素直に謝った。
「女の子の恰好してるわたしが言うことじゃなかったよね・・・」
すると長谷川さんはオレの肩を抱き寄せた。
「あやまることないよ。わたしはこういう服装が好きだし、有希は可愛い服が好きなだけでしょう?」
「う、うん・・・」
なんだか女の子の長谷川さんにこんなふうにされるとオレはドキド

キしてしまう・・・これはオレの中の男の部分がドキドキしているのだろうか？　でも長谷川さんには妙な信頼感を持ってしまうオレもいる・・・こんなに抱き寄せられたりしたら・・・・・

それにさっきから何だか変な気がしていたが、普段はオレの方が長谷川より少し背が高いのに、今日は同じか、少し長谷川の方が高い気がする・・・良く見ると長谷川のスニーカーはずいぶん厚底になっているようだ。オレの方はあまり背が高くならないように、かかとが低いのを履いてきたから背丈が逆転してしまったらしい・・・

オレたちは女の子どうしのように服を見てまわった。しかし長谷川さんがTシャツなんかを選んでいる間もオレはずっとドキドキしていて、何も考えられないような状態だった。オレは結局、男のころには女の子とデートしたことは一度もなかったが、もしデートしていたらこんな感じだったのだろうか？

おなじ女どうしでもレナとの時はこんな感じではなかった気がする。オレはレナとも女の子のように遊んだり買い物をしたりしたが、あの時はもっと心を開放できるような感じがあった。でも今は・・・なんだか心を開放するのが怖い・・・オレは長谷川さんの前で女の子になってしまうのが怖かった。

長谷川さんは、もうオレのことを女の子だと見てくれているのかも知れない。だけどオレ自身はまだ女の子になりきれているワケではないのだ。オレはあくまで男として物事を考えているし、教えられた女の子らしい行動をしているにすぎない・・・しかし・・ときどきオレは自分でも気づかないうちに女の子として振る舞ってしまう時がある。でもその時のオレが本当にオレなのかは、オレ自身にもよくわからなかった。オレは長谷川さんの前で、よくわからない

自分を出すのが怖かったのだ。長谷川さんがオレのことをどう思っているのか知ることができたらいいのに・・・・

「有希、何ボ～ッとしてるのよ。」
「あ、ご、ごめん・・・」
「これ似合うか聞いてるのに！」
「あ、うん・・似合うんじゃないかな・・・」
「なんか気持ちが入ってないなぁ。」
「ご、ごめん・・・」
「もう・・謝らなくていいから・・・有希もわたしにひっついてこないで自分が着たそうなの探してきたら?」
「う、うん・・そうする・・・」
オレはそう言ってトボトボと店内を歩きはじめた。でもダイエーにはあんまりオレが着たいような服は見当たらない・・・うろうろしているうちに、いつにまにか呉服売場の方に来てしまった。

「あ、着物だぁ・・・きれいだなぁ・・・」
オレも少しは着付けも出来るようになってきたから、自分で着ることを想像しながら見ることも出来る。ぶらぶら見ていると、オレはある一角に目が止まった。
「浴衣だ！」
そこには二人のマネキンが青とピンクの浴衣を着ていた。他にもいくつかのマネキンが浴衣を着て立っている。
「浴衣着てみたいなぁ・・・」
帯の締め方なんかを見てみると、着物より簡単に着れそうだ。最近はいろんなのがあるようで、バラの花のような西洋風の柄のものや、襟元がレースになってるやつまであった。そういうのもたしかに可愛いけど、でもオレは浴衣は普通の昔ながらの日本風の方がいいと思う。

考えてみれば、もうすぐ7月だし浴衣の季節なのだ。こんなの着て花火とか見にいけたらいいなぁ・・・などと考えながら眺めていると、いきなり肩をたたかれた。

「有希なに見とれてるのよ。」

「あ、長谷川さん・・・ちょっと・・・」

「浴衣？　有希浴衣着たいの？」

「う、うん・・・長谷川さんは？浴衣とか持ってるの？」

「ううん、有希は？」

オレも首を横に振った。

「長谷川さんは浴衣着て花火とか行きたくない？」

「う～ん・・・でも、なんか面倒くさそうだなぁ・・・」

「またぁ？」

オレはちょっとあきれてしまった・・・長谷川さんってかなりの面倒くさがりみたいだ・・・

「でも浴衣ってけっこうするのねぇ。」

長谷川に言われて値段を見てみると、いいなって思えるのは大抵2万とかするようだ。安いのもないわけじゃないが、柄がいまいちだ・・・

母に浴衣が欲しいって言えば買ってくれるかも知れないが、女の子になるためにずいぶん服も買ってもらったし、そのうえ浴衣が欲しいなんて言えない・・・それに浴衣なんて、そんなに何回も着るものじゃないし・・・

でもやっぱり着てみたい気持ちは頭から離れなかった。そういえば母が大切に残しておいてくれた、オレが小さい頃の写真には麻衣と一緒に浴衣を着たやつもあった。あれはいつの写真なのだろうか・・・なんだか田舎のような風景だったが・・・それがいつ何処で写した写真なのか、オレにはまったく記憶がなかった。

第３３話　風呂　母の思い

夕飯が終って食器を洗っていると、横にいた母がオレに聞いてきた。
「有希、きょう下着買ってきたんでしょう？」
「う、うん・・・」
オレは照れくささを隠して、なんとか平然を装った。
「えらいじゃない、長谷川さんはついてきてくれた？」
「うん・・・ついてきてくれた・・・」
「ちゃんと自分で選べたの？」
「う、うん・・・選んだよ・・・でも・・わたしが選ぶと・・可愛いデザインのばかり選んじゃって・・・」
「・・・・」
「それでね、長谷川さんはどんなの着けてるのか聞いてみたら、レースとか付いてないシンプルなやつなんだって・・・だから・・・そういうのも買った・・・」
「そう・・・」
「長谷川さんってちょっと変わってるの。普段はスカートとかはかないんだって、たいていジーンズにTシャツとか、けっこう男の子みたいな恰好してるの。学校の時とはずいぶん雰囲気がちがうんだ。」
「・・・・」
「だから、わたしの方が女の子っぽくなっちゃうから困るのよねぇ・・・」
「いいじゃない、有希の方が女の子っぽくても。」
「え～・・・だって・・・本当の女の子より、わたしの方が女っぽいなんて・・・恥ずかしいよ・・・長谷川さんもヘンに思うかもしれないし・・・」
「かあさん、長谷川さんはそんなこと思わないと思うけど？」

「うん・・・まあ・・・そうかもしれないけど・・・」
オレには長谷川の気持ちは良くわからないのだ・・・
「有希ももうBカップのブラしなきゃいけないくらい、女の子らしい身体つきになってるんでしょう？　もっと自信を持っていいんじゃない？」
「・・・だ・・だって・・・」
オレは何だか恥ずかしくなってきて、洗う食器がなくなったのを良い事に、その場を逃げ出すことにした。
「あ、わたし・・・お風呂に入ってくる・・・」
オレは濡れた手を拭くのもそこそこに台所を離れた。

――――――――――――――――
――――――――――――――――
――――――――――――

オレはグッタリと風呂につかっていた。今日はなんだか疲れてしまった。こういうのを気疲れっていうのだろうか・・・女の子になるのも楽じゃない・・・

ふと目を落とすと、湯舟につかった自分の体がそこにある・・・胸までつかったお湯がちょうどオレの乳房の頂点を通る位置にあり、水面の形がオレの胸の隆起を如実に表していた。オレは急にいたたまれなくなり慌てて肩までお湯に沈めた。

自分の変化ってものは、なかなか自分では気づかないもののようだ。いつの間にかオレは胸が大きくなっただけじゃなく、乳輪も、乳首も、まえよりずっと女らしい形になっていた。しかし、その下に目を落とすと、そこには小さくなってしまったものの、男の子の

ものも付いている。
　これさえ無ければオレも女の子になれるのだろうか?でも身体だけ女になったとしても、それだけでは女の子にはなれない気がする。やっぱり心も女の子にならなきゃ意味が無い・・・でも心が女の子になるってどういうことかオレには良くわからない・・・どうやったら心も女の子になれるのだろうか?・・・でもオレは本当に心まで女の子になりたいと思っているのだろうか?

　乳首の変化は形だけではなく、男のころには何も気にしなかったような刺激にも背筋がゾクッとすることがある。
　そっと乳首をつまんでみた・・・が、思ったほどの感覚はない。ふいにクラスメイトの手がかすったりした時に、思わず声が出そうになるほどの刺激を感じる事はあるものの、やっぱり自分でさわっても、それほどの感覚は得られないようだ。くすぐったさと同じようなものなのだろうか?他人にさわられるとくすぐったいが、自分でさわってもくすぐったくないし・・・

　そんなことを考えながら、しばらくさわっていたら、なんだか固くなってきた・・・女の子はみんなこうなるのだろうか?・・・考えてみればオレは女の子の身体のことは良く知らない・・・生まれた時から女の子だったら、成長にも自然に対処できるのかも知れないが、オレは15才になって急に女の子になってしまったから、どうにも自分の身体なのにしっくりこないところがある・・・

　それに女の子のようになったとはいっても、女の子の身体のことが、そのままオレにも通用するのかどうかもわからない・・・オレの身体は男でも女でもない中途半端なものなのだ。いまだにオチンチンを念入りに洗っている時は、なんだか複雑な気分になる・・・とはいえ女の子なのにチンチンを臭くしてたら余計恥ずかしいから、男だったころよりも念入りに洗ってしまうのだ・・・

ふと、オレは脱衣所のすりガラスの向こうに誰かいるのに気がついた。麻衣？それともかあさん？・・・でもなんで服を脱いでるの？・・・オレが入っているのに気づいていないのだろうか？・・・かあさんにはさっきお風呂に入ることを言ってきたのに・・・

「有希、入っていい？」
母の声がしてオレは驚いた。
「え？！なんで・・・！」
「かあさんも一緒に入っちゃイヤ？」
オレはどう返事をしたらいいのか困ってしまった・・・かあさんになんか入ってきてほしくはないが、あえてイヤというのもどうだろうか・・・？
「い、いやじゃないけど・・・」
オレがそう言うと、もう母は扉を開けてしまった。
「キャッ！」
オレは慌てて鼻までお湯に沈めた。

入ってきた母は裸だった。母の裸を見るのは小学校の５年生のとき以来だ。ひとりでお風呂に入るようになったのはもっと前だったが、小５の時、図工で指を切った時、頭など自分で洗えないので母が手伝ってくれたのだ。当時もすでに母と入るのは恥ずかしかったが、今はそれとは比較にならない・・・オレはもう１５才だし・・・身体はこんなに恥ずかしい姿になっている・・・

「か、かあさん・・・どうして・・・？」
母は４５才だが、身体は歳を感じさせないくらいに綺麗だった。胸の形が少しオレのに似てる気がする。腰は柳腰で美しい曲線を描い

ている・・・その下の茂みは・・・オレはさすがに見ることが出来ずに目をふせた・・・

「だって、有希の体もだいぶ女の子になったんでしょう?かあさんにも見せてくれない?」

「そ、そんなぁ・・・」

オレは思わず両手でお湯の中の胸を隠した。母はいったい何を考えているんだろう・・・オレはいったいどうすれば良いのだろうか・・・

「かあさん・・・恥ずかしいよ・・・」

「なんで?前にも見せてくれたじゃない。」

母はそう言いながら、体にお湯をかかり完全に風呂に入る準備に入っている・・・

「だって・・・あの時は・・・」

あの時は、オレも一世一代のカミングアウトだったワケだし、オレの身体もまだ今ほど女っぽくはなかった・・・

「あんまり聞かないようにしてるけど、かあさんだって心配なのよ。有希がちゃんと女の子としてやっていけてるのか。」

「ちゃんとやってるよ・・・やってるから一緒に入んなくていいってぇ・・・」

オレは伸びた髪をアップにして髪留めで挟んだ姿など、母親には見られたくはないのだ・・・

「ねえ、有希、あがってかあさんに見せて。女の子になった有希の体。」

「ううっ・・・」

オレは恥ずかしさに真っ赤になっているに違いない・・・だって胸元まで赤くなってるのだから・・・しかし、ここまできてしまっては、オレもどうしようもなかった。

「まだ・・・女の子じゃないんだけどなぁ・・・」

オレはゆっくり風呂から立ちあがった。唯一助かったのはオレのチ

ンチンが立たないということだろう・・・こんな状況、男のころだったら絶対チンチンが立ってしまったに決まっている・・・

オレは最初、胸を押さえながら立ちはじめたが、すぐに下に手をやった・・・今の身体で隠すべきは、やっぱり下の方だ・・・かあさんだって下は見たくないに違いない・・・

「ど、どう・・・かな・・・？」

恥ずかしい・・・恥ずかしいが、オレもオレ自身の身体が、他の人から見てどれくらい女の子に見えるのかは、知りたくない訳じゃない。

「へ、変じゃない・・・？」

「ぜんぜん変じゃないわ、すごくきれいよ。」

「そ、そんな・・・」

自分の母親にそんなことを言われたら、オレはどうしていいかわからない・・・

「服着ててもなんとなく判ってたけど、こうして見ると、やっぱりあのころよりずっと女っぽくなったわねぇ。」

オレは足がガクガクして、とても立っていられず、しゃがみ込んでしまった。

「も、もういいよ・・・わたし・・恥ずかしくて堪えられない・・・」

「うん、ごめんね有希。ありがとう・・・」

母はオレの頭を、子供にするようになでてくれた・・・まあ、オレはかあさんの子供には違いないけど・・・

「有希、髪が伸びたから洗うの大変じゃない？」

「う、うん・・・まあ・・大変はたいへんだけど・・・」

たしかにオレは女の子になってから、徐々に風呂に入る時間が伸びていた・・・その中でも髪を洗うのにはけっこう時間がかかる。

「今日はかあさんが洗ってあげるわ。」

「え?!　い、いいよぉ・・・」
「ほら、後ろ向いて!」
オレは言われるままに後ろを向いた。恥ずかしかったから後ろを向けるのはオレとしてもありがたい。

母はオレの頭から髪留めをはずすと、髪を丁寧に手櫛で梳かしていく・・・背中にオレの濡れた髪があたる冷たい感触に思わず乳首が固くなった・・・
(こういうことでも固くなるんだ・・・)
オレは変なことに感心していた・・・後ろを向けば恥ずかしくないかと思ったが、母が何をやっているのか判らない分、よけいドキドキする・・・

母は手にシャンプーをつけてオレの頭になじませていく・・・オレはじっとされるがままだ・・・
「有希の頭洗うの久しぶりね、たしか有希が手を怪我した時だから5年ぶりくらいかしらね?」
「え?かあさん憶えてるの?」
「当たり前じゃない、有希にとっては“5年も”前かも知れないけど、かあさんにはついこの前みたいな気がするわ。」
母はオレの頭を洗いながら話を続ける・・・
「あのころは可愛い男の子だったのに、今ではこんなに素敵な女の子になってるんだから不思議よねぇ。」
「す、素敵なんかじゃないよ・・・」
「いいえ、有希は素敵な女の子よ。もう自分の中に秘めていた女の子の気持ちを隠す必要はないの。」
「そ、そんなの・・・ないよ・・・」
オレは慌てて否定した。オレは女の子の気持ちを隠してなんかいない・・・
「かあさん知ってるのよ。有希がわざと女の子の気持ちから自分を

遠ざけていたこと。有希男の子だったころ女の子を好きになったこと無いんじゃない？」

「あ、あるよ！女の子見て可愛いなって思ったし、好きなアイドルだって・・・」

「じゃあ、デートしたいとか、キスしたいとか思った？」

「そ、それは・・・・」

オレには良く解らなかった・・・たしかにあの頃のオレは男友達の話に合わせて、デートしたいとか、キスしたいとか言ってはいたが、その実、そういう気持ちはピンとこなかったのも事実だ・・・

「思春期の男の子はみんなそういうこと思うものなのよ。有希のはそれとは違うんじゃない？」

「・・・・」

「かあさんね、有希が女の子を見て思っていた気持ちは憧れなんじゃないかと思うわ。」

「あ、憧れ・・・？！」

オレはそんなふうには考えてもみなかった。憧れなんて・・・そんな・・・

「憧れなんて・・・そんなこと思ってないよ・・・」

オレはそうは言ったものの、まるで自信はなかった・・・たしかにオレにとってデートとか、キスとかいっても、あまり感情を伴ってはいなかったからだ・・・

「そ、それに・・・わたし今でも女の子といるとドキドキするよ・・・今日も・・長谷川さんと買い物してると、まるでデートしてるみたいな気分になっちゃって・・・ずっとドキドキしてた・・・」

オレは何とか否定しようと思わぬことを口走ってしまった・・・

「そう・・・そのとき有希は男の子として長谷川さんとデートしてる気持ちだった？」

「・・・・」

オレは長谷川といる間、ずっと女の子の気持ちになるのが怖かった・

・・それはオレが男だったということではないのだろうか？　でも・・・なんでデートしてるような気持ちの時に女の子になりそうな気がしたのだろう・・・

「・・・わ、わからない・・・」

「かあさんね、有希みてると、有希は長谷川さんのことが好きなんだなって思うのよ。」

「う、うん・・好きだよ。だって長谷川さんって頼りになるし、いろいろ助けてくれるもん。」

「でも、それって男の子が女の子を好きになる理由かしら？」

「それは・・・」

たしかに男としては情けない気はするが・・・オレは母が何を言いたいのか良く解らなかった。

「かあさん、な、何が言いたいの？　はっきり言ってよ・・・」

「有希はね、きっと、女の子として長谷川さんが好きなのよ。」

「そんなことないよ！　だって長谷川さんは女の子だもん。女の子が女の子を好きになるなんて・・・」

「有希・・・女の子ってね、少し男の子っぽいところがある女の子を好きになることもあるのよ。」

そりゃあ宝塚とかを女の子が好きなのはオレも知ってるけど・・・そういえば長谷川も、オレの友達がオレのことを好きなんだとか言ったことあるけど・・・

「でも・・・長谷川さんはそんなんじゃないよ・・・べつに男っぽいわけじゃないもの・・・ただ・・ちょっと女の子っぽくない時があるだけで・・・」

オレはいったい何を言っているのだろうか・・・自分で言ってることがわからなくなってくる・・・

「ううっ・・・もう・・かあさん・・そんなこと言わないでよぉ・・・」

オレは自分の気持ちをコントロール出来ず、思わず泣き出してしま

った・・・
「そんなこと言われたら・・・長谷川さんと話せなくなっちゃうじゃない・・・」
「ごめん有希、かあさんがわるかった・・・ごめんね・・・」
母はオレの身体を後ろから抱きしめて、頭を撫でながら言った。
「有希はまだそんなことまで考えてたくないのね・・・」
「う・・うん・・・」
オレはだんだん女になるのが不安になってくる・・・女の子になるってどういうことなの・・・？

「そうだ！　有希、きょうは下着だけ買って帰ってきたの？」
「うくっ・・・そ、そうだけど・・・」
「かあさんお金多めにあげてたじゃない、お洋服も買ってくれば良かったのに。」
「・・・う・・うん・・・でも・・わたし・・まだ良くわからないの・・・自分がどんなの着たいのか・・・」
「そうなの？このごろ有希も自分で好きなの着てるみたいだから、自分の好みがわかってきたのと思ったんだけど。」
「・・うん・・・なんとなくはわかるんだけど・・・たくさんあると判らなくなっちゃうの・・・」
「そうなの・・・」
「・・それにね・・・ダイエーにはわたしが買いたいのが・・・あんまりないみたい・・・」
「あら？　ヘンねえ、かあさん有希の服けっこうダイエーで買ってるわよ。」
「え？　ほんと？」
それじゃ、オレが探せなかっただけなのか・・・
「有希探しかたがわからなかったんじゃないかな？　今度かあさんと行こうか？」

「う、うん・・・」
母と娘として買い物に行くなんて恥ずかしいけど、どういうところで買えばいいのかオレも知っておかないといけないと思うし・・・
オレもそろそろ自分の服は自分で買えるようにならないと・・・

「・・・きょうね・・・あちこち歩いてたら、いつも間にか呉服売場に行っちゃって、そしたら・・・浴衣も売ってたよ・・・もう夏だもんね・・・」
「あら有希、浴衣着たいの？」
「ううん・・・そんなことないよ・・・」
オレは慌てて否定した。そんなつもりで言ったわけじゃない・・・
「だって・・浴衣なんて・・そんなに着る機会ないもんね・・・それに・・長谷川さんも持ってないって言ってたし・・・」
オレが浴衣を着たいと思ってること、かあさんにバレてしまっただろうか・・・
「かあさんも有希の浴衣姿みてみたいけどなぁ。」
「い、いいよ・・・そんなの・・・」
「ほら、うつむいて、お湯かけるから。」
「あ、うん・・・」
母がシャワーで頭を流しだして、オレは話が途切れたことにほっとした。

その後、母はオレの背中も洗ってくれたから、オレもかあさんの頭を洗ってあげようとしたのだが、上手く洗えず結局母には自分で洗ってもらった。考えてみればオレは他人の頭を洗ったことがなかった・・・ひとの頭をあらうのは案外難しい・・・

母親と一緒に小さな湯舟に浸かるのはすごく恥ずかしかった。おまけに今は女どうし・・・お互い裸ときている・・・こんな状況で黙っているのも堪えられなかった。オレは何か話題を探していた・・

・
「・・・ねえ、かあさん・・・昔の写真で、わたしと麻衣が浴衣で写ってるのがあったけど・・・あれってどこで写ったのかなぁ・・・？」
「あぁ、それはおばあちゃんのところじゃないかしら？」
「おばあちゃん？　でもかなり田舎みたいな感じだったけど・・・」
「西新〈にしじん〉のおばあちゃんじゃなくて、熊本のおばあちゃんのことよ。おとうさんのお母さんのこと。」
「あっ・・・そうか・・・」
そういえばとうさんの実家は熊本だって言ってた・・・
「あれ？でもわたし熊本に行ったことあるの？」
「ええ、あれは何年生だったかしらね・・・夏休みに1週間くらい行ってたことあったのよ。お盆に行ったんだけど、有希が帰りたがらなかったから・・・有希だけ残ったの。あの写真はたぶん向かえに行ったときのじゃないかしら、お祭りを見て帰ってきたから。」
「お祭りだったんだぁ・・それで浴衣着てたのね・・・あれ？でもわたし女の子の浴衣着てたよ？」
「ふふっ、おばあちゃん有希のこと女の子だと思ってるかも知れないわね。」
「まさか・・・」
「だってあのころ有希は女の子の服着てたのよ。熊本とはあまり付合いもないし・・・有希もあれ以来行ってないでしょう？」
たしかにそうだけど・・・でもふつう自分の孫の性別くらい知っているのではないだろうか・・・
「じゃあ・・・もしかしたら・・・今でも女の子だと思ってるかもしれないの？」
「そうかもね、でも今はもう女の子だと思われてた方がいいじゃない。有希はもう女の子なんだから。」
「え～・・・・」
まあ、とうさんの実家には行く機会もないと思うけど、もし行かな

きゃいけなくなった時は、女の子だと誤解されてた方が、今となっては都合はいいかも知れないが・・・

「でも・・・何でわたしだけ残ったのかしら・・・」

「さあ、それはかあさんも知らないけど、向こうで友達でも出来たんじゃない？」

「・・・・」

オレにはまったく記憶にないことだった・・・

第３４話　勉強　オレが得意なこと、苦手なこと

「なかなかいいんじゃない？良く出来てるわ。」
オレは家庭科の松本たか子先生に褒められて嬉しかった。裁縫の課題としてはサマードレスは難しい方かも知れないが、オレは裁縫はけっこう得意だったから十分提出期限に間に合った。
「でもこれ課題の型紙使ってないでしょう？」
「あ、はい・・・やっぱりまずかったですか？」
「ううん、大丈夫よ。だってこっちの方が難しいじゃない。」
オレはそう言われてほっとした。
「型紙買ったの？」
「いえ・・実は、うちで着てるサマードレスを真似したんです。ただ、背中がチャックになってたりして難しそうだから、少し身ごろをたっぷりめにとってかぶるようにしたんです。」
背中は頭が入るように少し開いて、ボタンに輪っかをひっかけて留めるようにしていた。腰はリボンを一周させて前でくくるようにしていたから、少し腰の部分が広くても大丈夫だ。
「そういう工夫は大切よ。なかなか売り物みたいには出来ないものね。」
裾とか細かいところを見られると、ちょっとドキドキしてしまう。目立たないけど少し曲がってしまったところもあるから・・・

「そうだ、戸田さんちょっと着てみせてくれない？」
「え？！ここでですか？」
「大丈夫、そこの鏡が置いてあるところのカーテンを閉まれば更衣室のかわりになるから。」
オレは先生に言われたとおり、準備室のすみっこにあるカーテンの中で着替えた。大きな全身が映る鏡があるから更衣室代わりには十分だ。

「こんな感じなんですけど・・・」
オレは恥ずかしいのを我慢してカーテンから出た。
「いいじゃない！さわやかな感じが戸田さんに合ってるわ。」
先生にさわやかなんて言われると、オレはすごく照れてしまう。何と言っても、松本先生はオレが男だったころを知っている数少ない人物なのだ。先生はこんなオレのことをいったいどう思っているのだろうか・・・

「じゃあ、ちょっとそこに立ってみて、写真うつすから。」
「え？」
「服は本人が着た状態がいちばんだからね。採点の時に参考になるようにみんな撮ってるのよ。」
「はあ・・・」
オレは仕方なく手を後ろに組んでニッコリ微笑んだ。どうせ写真にうつるなら可愛く写りたい・・・

「でも戸田さん最近、体型が女っぽくなってない？　あ、もちろんいいのよ。戸田さんは女の子なんだから・・・」
実はオレも悩んでいた・・・松本先生はオレの制服のことなど任されている・・・たぶん冬服になる前にもういちど採寸することになるのではないかと思っていた。オレの制服はみんなのとは違い、オレの身体にぴったり合わせて作られているので、胸が大きくなった分きつくなるかも知れないのだ。次に採寸する時には、いずれオレの身体の変化に気づくことになる・・・

「先生、実は・・・わたしホルモン治療っていうのやってるんです・・・それで・・・実際に女の子らしい身体つきになってきてるんです・・・」

「あっ・・・そうだったの・・・それで・・・」
先生はやっと納得したという顔をした。
「それじゃ、その胸も・・・本物なの？」
「は、はい・・・Ｂになっちゃって・・・」
「そう・・・でも良かったじゃない。身体も女の子になれば学校でも生活しやすいでしょう？」
「はい・・・それはそうですね・・・」
まあ、先生が思うほど簡単な話でもないのだが、先生が受け入れてくれたのは嬉しかった。松本先生はオレにとっては、ちょっとしたお姉さんのような人だから、そんな先生には嫌われたくないのだ。

「ねえ、その袋は何なの？」
「あ・・これは・・・」
オレは思わず口ごもった・・・これは先生に見てもらうかどうか迷っていたのだが、課題のを見てもらったら、こっちはもういいかという気持ちになっていたのだ。
「これは・・・もう一着作ったのがあって・・・でも・・・長谷川さんにも柄がわたしには似合わないって言われたんです・・・だからもういいんです・・・」
「どんなの作ったの？気になるじゃない。ちょっとだけでいいから先生にも見せて。」
「は、はあ・・・」
オレは気乗りしなかったが、持ってきてしまった以上仕方ない・・・
オレは袋の中からもう一着の服をとり出した。

それは長谷川に似合わないと言われたけど、あきらめきれずに買ってしまった花柄の布で作ったワンピースだった。白地に小さなピンクのバラの花が全体にちりばめられている。バラは短い枝と葉っぱも一枚ついているが、服全体としてはピンクっぽく見える。
「可愛いじゃない！なんだ、こっちはちゃんと背中をチャックにし

てるじゃないの。」
「あ、一応やってみたんですけど・・・だいぶ曲がっちゃったから・・・」
「でも初めてなんでしょう?初めてでこれくらいできれば上出来よ。だいたいチャックは縫い付けにくいから。チャックを縫い付ける時は両面テープを使うと上手に縫えるのよ。こんど教えてあげるわ。」
先生は細かなところをいろいろ指摘してやり方を教えてくれた。

「じゃあ、これも着てみせてよ。」
「え?!・・・これはいいですよ・・・課題で作ったのじゃないし・・・」
「いいじゃない、先生、戸田さんが着たところ見たいなぁ。」
「うっ・・は、はい・・・」
オレは本当は着たくないのだが、松本先生にそう言われては断れない・・・この服は可愛く作りすぎてしまったから、オレ自身、着るのが恥ずかしいのだ・・・このワンピースもサマードレスの型を利用したのだが、背中がチャックで開く分、腰をつめたし、腰の位置を少し上にあげてみた・・・そしてスカートにギャザーを大きめにとってふっくらさせた。それはオレの体型の男っぽい部分を目立たなくするためにやってみたのだが、結果はすごく少女っぽいシルエットになってしまい、自分でも着るのが恥ずかしくなってしまったのだ。

更衣室代わりのカーテンの中で着替えてみる・・・首の後ろのホックがなかなか引っかからない・・・縫い付け方が悪かったようなのだ・・・何とか留めて背中のチャックを上げる・・・腰の部分でキュッと締まるのが何ともいえない・・・腰に付けた巾広のリボンを背中で結ぶ・・・最初のころは背中で結ぶとどうしても結び目が縦になってしまい、ずいぶん三吉先生に特訓されたものだ・・・おかげで今ではちゃんと結ぶことができる・・・腰の位置は本当のオ

レの腰よりも８ｃｍほど上にしているため少し太めになってしまったが、スカートのふくらみがそれを補ってくれる。
「はぁ・・・」
オレはカーテンの中でため息をついた。やっぱりオレには似合わない・・・オレもいつかはこんな可愛いデザインの服が似合うような女の子になれるのだろうか・・・しかしオレは女になっていったとしても、歳もとっていく訳だから、可愛い服はずっと似合わないままかもしれない・・・せめて麻衣くらいの歳に女の子になっていれば、こういう服も似合ったのかもしれないが・・・

オレは意を決してカーテンを開けた。
「ほら、わたしにはぜんぜん似合わないでしょう？」
「何いってるの、すごく似合ってるじゃない！可愛いわぁ・・・戸田さんは大人っぽいのも可愛いのも、何でも似合うのねぇ・・・」
「そ、そんなぁ・・・」
お世辞でもそう言ってもらえると嬉しいけど、さすがにこっぱずかしい・・・
「上履きだと変ねえ・・・ちょっと先生のサンダル履いてみて・・・」
オレは先生のサンダルを借りて履いてみた・・・ちょっときついが何とか入った・・・
「いいわねぇ。じゃあこっちも撮っておきましょう。」
「そ、そんな・・・こっちは撮らなくても・・・」
「いいから、いいから！」
先生がカメラをかまえると、オレは自然にポーズをとってしまった・・・どうもときどきかあさんに写されているからクセがついてしまったようだ・・・オレって恥ずかしい女になってなきゃいいけど・・・

―――――――――――――――
―――――――――――――――
――――――――――

「有希はもう裁縫の課題提出したんだね。」
「え？何で知ってるの？」
オレはいきなり長谷川に言われて驚いた。きのう提出したばかりなのに何で知ってるのだろう？
「だって、家庭科室の前の廊下に貼ってあるわよ。」
「貼ってあるって・・・何が？」
「何がって、有希の写真よ。ブルーのチェックのと、花柄のと2枚。」
「え〜・・・そんなこと先生言ってなかったよォ・・・」
採点のためだって言うから仕方なく写したのに・・・
「ふふっ、先生もあんまり有希が可愛いから、みんなにも見せたくなったんじゃない？　花柄のなんか少女趣味でヘンに似合ってたわよ。」
「もう・・・長谷川さんはなんでそんなふうに言うのかなぁ・・・」
長谷川さんは相変わらず意地が悪いことを言う・・・しかし、それは今のオレにとっては有り難かった。母にあんなことを言われてから、どうしても長谷川さんのことを意識してしまう・・・こんな時に優しくされたりしたら堪ったものじゃない。
「そういえば、有希は期末試験の勉強はやってるの？」
「・・・期末試験？！」
「なに突拍子もない声出してるのよ。やっぱりやってないんだ・・・あんた頭悪いんだから、ちゃんとやっとかないと赤点になっちゃうわよ。」

「そ、そうか・・・期末かぁ・・・」
オレは裁縫に夢中で期末試験が近いことをすっかり忘れていた。入学当初は女子校の勉強は案外簡単だと思っていたが、教科書が進むうちにあっという間に置き去りにされていた。中間試験では何とか赤点は免れたが、今度ばかりはヤバイ感じだ・・・

「どうしよう・・・」
「し、知らないわよ！・・・そんな可愛い顔して見つめないでよ！！」
オレはべつに可愛い顔なんかしてないのに・・・
「ねえ、長谷川さん教えて？」
「イヤよ！いまからやったって遅いんじゃない？」
「だから・・・ヤマだけでいいから・・・っていうかヤマだけ教えて！」
「あのねえ・・・・」
「２０点採れればいいのよ！」
「それじゃ赤点ギリギリじゃない。」
「いいのよ、赤点でさえなきゃ・・・」
オレは中学のころからだいたいそんな感じなのだ・・・
「あんた、そんな低い志でどうするのよ。女の子だってバカじゃしょうがないわよ。」
「ううぅ・・・」
オレはぐうの音も出なかった・・・そもそもオレは志なんて持ったこともない・・・こうなったら恥も外聞も気にしてられない・・・
「ねぇ・・・長谷川さん・・・」
オレは自分に可能な限り可愛い感じで言ってみた。オレはこれまでの付合い中で、なんとなく長谷川が断りにくい頼み方に気づいていた・・・長谷川はオレに甘えられると断れないのだ。たださすがに女の子に対して可愛く甘えるなんて・・・オレは恥ずかしいからあまりやりたくはないのだが・・・

「もう・・・だからそんな目で見ないでって言ってるでしょう！・・・しょうがないなぁ・・・」

思ったとおり長谷川も、何とか勉強を教える気になってくれたようだ。

「でも・・・有希はわたしに何してくれるの？」

「え？」

それは思ってもみない質問だった。

「だって、わたしが有希にしてあげるばっかりで、有希は何もしてくれたこと無いじゃない・・・それじゃ不公平よ。」

「そ・・そうか・・・」

言われてみれば確かにそうだ・・・オレは長谷川さんに助けてもらうばかりで、長谷川さんに対しては何もしてあげたことがない・・・でも・・オレが長谷川さんにしてあげることなんてあるのだろうか？

「じゃ、じゃあさ、何かしてほしいこと言ってよ。わたしに出来ることなら何でもするから・・・」

「何でも？」

「う、うん・・・」

そう返事はしたものの、なんかイヤな予感がする・・・

「何でもかぁ・・・何にしようかなぁ・・・」

楽し気な感じが何か無気味だ・・・

「じゃあねぇ、有希が一日男の子に戻るってのはどう？」

「はあ？！」

オレは驚いた・・・まさかそんな要求をされるとは思ってもみなかった・・・

「そ、それでけは勘弁してよ・・・こんなナリして男の子になんて戻れないよ・・・」

オレは思わずお下げにした髪をつかんだ・・・それにオレはせっかく女の子に慣れてきたのに、また男の子の恰好をしたら、男の気分

に戻ってしまうのではないかと怖かった。もう身体も女の子になってきて、いまさら男になんか戻れないのに・・・

「それ以外だったら何でもするからさぁ・・・男の子だけはやめて・・・」

オレの懇願に、長谷川はため息をひとつついた。

「しょうがないな・・・それじゃ、もう有希には断る権利はないんだからね。」

「え?・・・う・・うん・・・」

権利なんて・・・なんかえらいことになってきた・・・ただ勉強教えてもらうだけなのに・・・

「よし!決めた!!　有希は一日わたしの彼女になってデートするの!」

「え?彼女・・・?」

彼女といえば女・・・でもオレはもともと女の子だし・・・女の子が彼女って・・・

「それって・・・わたしは普通じゃないの・・・?」

「そうよ、いいでしょう?　普通なんだから。」

「う、うん・・・まあ・・・」

たしかにオレは今は女の子だから、彼女になるのはそう難しいことじゃなさそうだけど・・・彼女って・・・?

「わたしが彼女ってことは・・・長谷川さんが・・・彼氏・・・?」

「べつに彼氏じゃなくてもいいじゃない。」

・・・ってことは・・・?・・・母が言った言葉が脳裏をよぎる・・・

「・・・長谷川さんって・・・もしかして・・・女の子が好きなの・・・?」

「ふっ・・・まさか・・・」

でも・・・なんかヘンだ・・・

「ねえ・・・わたしは何したらいいの?　ただ一日長谷川さんとデ

ートするだけでいいのかな・・・？」
でも女どうしでデートって・・・どういうこと・・・？

「そうよ。ただ一日デートすればいいの・・・ただし、あの花柄のワンピースを着てだけどね。」
「そ、そんなぁ・・・」
オレは奈落の底に突き落とされたような気がした・・・だってあの服は家の中でさえ恥ずかしいくらい少女っぽいのに・・・あんなの着て外になんか出れないよぉ・・・
「・・・ひ、ひどい・・・」
オレの気持ちをよそに、長谷川は嬉しそうだ・・・
「あ～楽しみだなぁ・・・あんな可愛い恰好の有希とデートするなんて・・・それに彼女だから、すっごく可愛く甘えたりするんだろうな・・・ほんと楽しみ・・・どこに連れてっちゃおうかなぁ・・・」
やっと長谷川の魂胆が読めた・・・オレは目の前が真っ暗になった・・・意地悪だ・・・これは単なる意地悪に違いない・・・長谷川はオレが困ったところを見たいのだ・・・長谷川はＳってやつに違いない・・・そうに決まってる！

オレは何とか力を振り絞って最後の抵抗を試みた・・・
「でも・・・それはわたしが赤点じゃなかったらだからね・・・」
「わかってるわよ、ちゃんと良い点とらせてあげる。」
長谷川のニヤリと笑った顔は、オレを震え上がらせるに十分だった・・・

第３５話　準備　初めてのお化粧

期末テストは長谷川のおかげで上々の出来だった。オレとしては赤点さえとらなきゃ良かったのだが、長谷川の教え方が上手だったことと、ヤマがみごとに当ったことで、必要以上の点をとることができた。もしオレが、長谷川がヤマをはってくれたところを、全てちゃんと憶えていれば８０点くらいとれたかも知れないが、オレにそんな記憶力があるハズがない・・・とはいえ長谷川が言うには、ちゃんと授業中にテストに出るところは教えているから、ノートをしっかりとっていれば何の問題もないらしい・・・さすが頭が良いやつは言うことが違う・・・

とりあえず追試を受けずに済んだのは有り難いことだが、それはオレにとっては屈辱的なデートが決定したと言う事なので、とても手放しで喜ぶ気持ちにはなれなかった。

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー
ー　ー
ー

答案を返してもらった日の夕食後、オレは憂鬱な気分で洗い物をしていた。

「有希、今回のテストはずいぶん良い点だったじゃない。」

「う・・うん・・・まあ・・・」

「今度の日曜日かあさんとダイエーに行こうか？ご褒美をふんぱつしてあげるわよ。」

オレとしても正直そっちに行きたいと思ったが、そういう訳にもい

かなかった。
「・・実は・・今度の日曜はダメなんだ・・・長谷川さんに勉強教えてもらったお返しに・・・デートしなきゃいけなくなって・・・」
「あら、デートって長谷川さんと？」
「・・う・・うん・・・それがさ・・・ヒドイんだよ・・・わたしは可愛らしい恰好で行かなきゃいけないんだ・・・たぶん長谷川さんは男の子っぽい服装で来るつもりだよ・・・」
「いいじゃない、有希もそのうち男の子とデートしなきゃいけないんだから、予行練習のつもりでいれば？」
「そ、そんなぁ・・・」
かあさんも自分の息子によくそんなヒドイことが言えるものだ・・・
「もう着て行く服は決めたの？」
「それが・・・長谷川さんに決められちゃってるんだ・・・家庭科の実習のときに一緒に作ったワンピースじゃなきゃダメなんだって・・・頼むから別のにしてって言ったのに聞いてくれないの・・・」
「実習って・・・あの水色のチェックの？」
「う、ううん・・・」
オレはあの花柄の方のワンピースはさすがに恥ずかしくて母にも見せてなかった。
「実は、あれと一緒に、もう一着作ってたんだ・・・」
「どんなの？」
「それが・・・花柄ですっごく可愛いくて・・・わたしには全然似合わないんだ・・・長谷川さんわたしに似合わない服着せて笑い者にしようと思ってるに決まってる・・・」
「かあさん、長谷川さんはそんな気持ちじゃないと思うけど。」
「かあさんは長谷川さんがどんなに意地悪か知らないから、そんなこと言えるんだよ・・・」
「とにかくデートなんだし約束したのなら、有希も可愛くしていかなきゃいけないわね。」

「う、うん・・・」
オレはこんどの日曜日のことを考えると憂鬱でたまらなかった。何でも言うことをきくなんて言わなきゃ良かった・・・

―――――――――――――――

―――――――――――――――

――――――――――

「はあ・・・」
オレは昨日の晩からため息が止まらなかった。とうとう日曜日になってしまった・・・長谷川は何度聞いてもどこに行くのか教えてくれなかった。

　うじうじ考えていても始らない・・・早くしないと待ち合わせの時間が来てしまう・・・まだまだ十分に時間はあったが、今日はやることが多いのだ・・・

　オレは洗面所に行き、ヘアバンドで前髪を上げてから、ソープで念入りに顔を洗った。そしてトイレに行く・・・男だったら全部仕度が終ってからトイレに行くところだが、女はそうはいかない・・・女は服が乱れるのを嫌うし、パンティーだけじゃなくストッキングとか穿かなきゃいけないから、後から行くのは面倒なのだ。外で行きたくなった時は仕方がないが、服装のチェックが大変だから女の子は出来るだけトイレには行きたくないものだということを、オレも女になって初めて知った。

　緊張しないための薬を飲んで部屋に上がるとパンティーとブラを選ぶ・・・やっぱりデートの日は揃いの下着を着るべきだろう・・・

ひとに見せるものじゃないが、そのほうが気分が良い。オレは薄いブルーの下着を選んだ・・・本当はピンクの可愛い下着にしたいところだが、白っぽい服ではピンクは透けやすい。その点ブルー系は透けにくいのだ。

パンティーの中にナプキンを忍ばせるのを忘れてはいけない。バッグにも予備をちゃんと入れておく・・・ナプキンをするようになってから、今のところちびったことはないものの、オレにはまだまだ緊張してもちびらないという自信がないのだ。そして最後はストッキング・・・今日は肌色よりも少し白めのものにした。それにしてもパンティーストッキングというものは、なかなか穿きにくいものだ・・・がに股になったりしながらパンティーの部分を上げる姿は、とても男の子には見せられない・・・

スリップを着たら、いよいよワンピース・・・背中のチャックを開けて足を入れる・・・チャックの長さが少し足りなかったようで、お尻を入れる時少し引っかかる・・・女の子だったらつかえてしまうかも知れないが、オレは女の子に比べればお尻は大きくないから大丈夫だ・・・両手を後ろに回して首のホックを留める・・・背中のチャックはまず片手で下の部分をつかんで出来るだけ上げておく・・・そして首のホックの部分を引っ張ってからチャックを引き上げる・・・オレはそんなに身体が柔らかい訳じゃないから、これは結構大変な作業だ・・・女の子でも背中のチャックを上げられないコもいるのではないだろうか・・・？

腰のリボンを背中で結べば完成だ・・・変になっていないか三面鏡に映して確かめてみる・・・大丈夫そうだ・・・

「はあ・・・」

オレは全身を鏡に映して、またため息をついた。こんな恰好で外に出なきゃいけないと思うとゾッとする・・・こんな恰好、家族にだ

って見せたくないのに・・・

いくら何でもこのままじゃと思い、オレは洋服ダンスを開けて上に羽織れるものを探した。春用のカーディガンはちょっと暑いだろうか・・・探してみたが今の時期に着れそうなものがあまりなかったので仕方なくあきらめた。

鏡台の椅子に座り、引き出しを開けて化粧道具を取り出す・・・今日は化粧もしてくるように命令されている・・・いつもより念入りに顔を洗ったのはそのためだ。オレも二光さんに化粧を教えてもらって、何とか出来るようになってはいるものの、化粧をする機会はまだあまりなかったし、した方がいい時も母にやってもらっていたから、自分一人でした化粧で外出するのは初めてなのだ・・・意地悪にもほどがあるってものだ・・・

しかし何でも言うことをきくと約束してしまった以上仕方がない・・・オレはファンデーションからとりかかる・・・でもあまりケバい化粧はしたくないから薄化粧バージョンでいくことにする。もっとも薄化粧といっても簡単なわけじゃない・・・ただ薄いだけではダメで、薄いなりにメリハリがなければいけないから難しい・・・

まぶたを持ち上げてアイラインを引く・・・薄くて目を大きく見せるテクニックは、睫毛より内側の部分にアイラインを引くのだと教えてもらった・・・しかしこれがけっこう痛い・・・女の子って大変だ・・・目尻の方を濃いめに・・・下まぶたは薄く描いて筆でぼかす・・・あんまり下を黒くしてしまうとタヌキのようになってしまう・・・

そしてビューラーで睫毛を上げる・・・これもなかなかコツを憶えるまでは大変だった・・・慣れないころは間違ってまぶたを挟ん

でしまったり、強く挟みすぎてカクッとなったりしたものだ・・・
クルッと可愛く巻いたら、マスカラをつける・・・繊維が入っているから、ゆっくりとつけると睫毛が長くなる優れモノ・・・これで1．5倍増しだ！

くちびるは少し大きめに口紅を塗って、思わずキスしたくなる感じの、ぷっくりくちびるにする方法も習ったけど、さすがに今回はやめにした・・・長谷川とキスする訳じゃなし、普通にピンク系を塗ってグロスで仕上げた。

眉はあまり上げすぎないように・・・際は一本一本描く要領で・・・

最後は少し下めに、軽くチークを塗って完成だ。きれいメイクなら頬骨にそって斜め上に、可愛い感じなら頬骨の少し下めに水平に・・・間違えてもほっぺたに塗ってはいけない、そんなことをしたらおてもやんみたいになってしまうのが関の山だ。

化粧が終ったオレの顔・・・習ったとおりにやってはみたが、自分ではいまいち良く出来たかどうかわからない・・・オレはハンドバッグを手にしてリビングに降りた。

「お姉ちゃん！どうしたの？」
オレは妹の麻衣がいないことを願っていたが、願いは叶えられなかった・・・
「今日のお姉ちゃん、すっごく可愛いよ！どっか行くの？」
恥ずかしくてたまらないオレに、母が追い討ちをかける・・・
「有希は今日デートなのよ。」
かあさんったら・・何も麻衣にそんなことまで教えなくてもいいじ

ゃない・・・

「か、かあさん・・・お化粧ヘンじゃない？」
「全然ヘンじゃないわ、上手にできてるわよ。」
「え？お姉ちゃん自分でお化粧したの？！すご～い！」
麻衣は子供の遠慮なさで、覗き込むように見つめてくる・・・
「でも、有希その髪で行くつもり？」
「ダ、ダメかな・・・」
「ダメじゃないけど、そんな可愛い恰好にいつものお下げじゃ勿体ないわ。いらっしゃい、やってあげるから。」
「う・・うん・・・」
オレは、なかば強引に母の部屋に連れていかれた。来なくていいのに麻衣までついて来る・・・

母は、後ろを真ん中から分けてお下げにしたオレの髪を留めた輪ゴムを外してブラシで梳かす・・・麻衣が興味津々で見ている・・・
母はオレの髪をミストで湿らせてから、太めのコテで巻き始めた・・・

「ち、ちょっと・・・何してるの・・・？」
「だってこの恰好だと、頭もボリュームを持たさないと服に負けちゃうでしょう？」
そんなの・・・オレは別に・・・負けてもいいと思うんだけど・・・

コテで髪の毛を挟んでしっかりと巻き、コテを外すと綺麗なカールがついていた・・・オレの髪に次々に縦巻きのカールがつけられていく・・・
全体にカールをつけると、後ろをいつものように真ん中から分けてから、櫛でキツく引っ張るように持ち上げ、いつもより上の方でゴムで留める・・・もう片方も同じようにすると、オレの頭はクルク

ル巻いた髪を耳よりずっと上でくくり、両脇に垂らした可愛らしい女の子の髪型にされてしまった！

「か、かあさん・・・こんなのいやだよ・・恥ずかしすぎるってぇ・・・！」

「いいからいいから・・・」

母は半べそのオレをよそに、前髪も軽く巻いてさらに可愛くしていく・・・そして最後に髪をくくったゴムの上から赤いリボンで結んだ。これではいくら何でも少女すぎる・・・！

「こ・・こんなんじゃ外に出れないよ・・・」

しりごみするオレに母が言った。

「有希、約束したんでしょう？可愛くしていくって。」

「そ、それはそうだけど・・・」

これはいくらなんでもやりすぎではないだろうか？

「か、かあさん・・・せめて何か上に羽織るのを貸してよ・・・わたしが持ってる服にはいいのがなくて・・・」

母は洋服ダンスを開けて、あれこれ探していたが

「かあさんのじゃ有希が着るには大人っぽすぎるわねぇ・・・そうだ麻衣、この前買ってあげたサマーカーディガンがあったじゃない、あれ有希に貸してあげてくれない？」

「うん、いいよ！」

麻衣は走って階段を駆け上がり、自分の部屋から白いレース編みのサマーカーディガンを持ってきた。

それはサマーカーディガンといっても、丈の短かめのものだった。袖は半袖にしては少し長めで広がっている・・・レース編みなので、そんなに暑くなさそうだ。麻衣のものなのでオレに着れるサイズか心配だったが、前を留める必要もないし、ゆったりしたデザインで十分に着れるサイズだった。

サマーカーディガンを着ることで、ワンピースの方は少し隠すことが出来るのは有り難いことだったが、それを着たオレの姿は、より可愛さがアップしている気がした・・・どうしたものかと思ったが、わざわざ貸してもらったのに、やっぱりやめたとは言いにくい・・・それに全体的なコーディネイトとしては悪くない気もする・・・オレが可愛い恰好をすることには抵抗があるものの、コーディネイトが悪いよりは良い方がいいに決まってる。こんな可愛い髪型なら、これくらいの方が良いのかも知れない。中身がオレじゃなきゃ良いのに・・・

「わたし・・・変じゃないのかなぁ・・・」
「ぜんぜんヘンじゃないよ！お姉ちゃんすっごく可愛いよ！」
「そうよ有希、自信もって行って来なさい。」
「う・・うん・・・」
「もうすぐ時間よ。長谷川さんもう待ってるかもしれないわ。」
「え?！デートの相手って長谷川さんなの?男の子じゃないの?」
麻衣はオレが男とデートすると思っていたのだろうか?・・・しかしオレは今は女の子なのだから、男とデートする方が当たり前なのかも知れない・・・でもそういう事ってオレには良くわからない・・・

「長谷川さんとデートするのって・・・ヘンかな・・・」
「そんなことないよ。ただお姉ちゃんが可愛い恰好してるから、なんとなく男の子とデートするのかと思っただけ・・・女の子どうしだってデートしていいと思うよ。」
「有希、そんなに深く考えないで、女の子どうし楽しんできなさいよ。」
「う、うん。そうだよね。」
そう言われてオレも少し気持ちが落ちついてきた。どうしたって逃げるわけにはいかないし、オレも逃げたくはない・・・オレも女に

なると決めた以上、男の子とのデートは避けて通れないのかもしれない・・・それなら長谷川さんとデートしてみるのも悪くないのかも知れないではないか・・・長谷川さんはオレが本当は男だと知った上で、女の子としてデートしてくれるのだから有り難いと思わなければいけないのかも知れない・・・それでもオレの恥ずかしと思う気持ちには変わりなかったが・・・

「それじゃ、行ってくるね。」
「お姉ちゃん頑張ってね！」
「う、うん・・・」
麻衣の応援してくれる気持ちは嬉しかったが、オレには何を頑張ればいいのか見当がつかなかった。
「いってらっしゃい有希。」
「うん、行ってきます。」
母と妹に見送られ、オレは長谷川と待ち合わせをしている駅へと向かった。

第３６話　デート　彼女になったオレ

駅に近づいても、すぐには長谷川が来ているかどうか分からなかった。しかし改札の脇に立っているのが長谷川だと気づいた時、オレは絶望的な気持ちになった。

Ｔシャツにジーンズというのは前の時と変わらないが、今日の長谷川は肩にとどくかどうかという長さの髪の毛をアップにして野球帽の中に隠していた。荷物は背中のリュックに入れているようだ・・・もちろん足には厚底のスニーカーを履いていた。いかにしてオレを、より女っぽく見せようかと工夫しているようにしか思えない。

オレが近づくと長谷川も気づいて手を振った。

「有希、遅かったじゃない。急行いっちゃったわよ。」

「う、うん・・・ごめん。ちょっと手間取っちゃって・・・」

「有希、ちゃんと自分でお化粧した？」

「うん・・したよ。」

オレは長谷川に、お化粧は自分でしてくるようにと念を押されていたのだ。

「ほんとう？お母さんにやってもらったんじゃないの？」

「ち、ちがうよ！髪はかあさんにやってもらったけど・・・」

もっともオレとしては、かあさんにやってもらったことを後悔していたのだが・・・

「そっか、どうりで可愛い髪型してると思った。有希もとうとう自分の可愛さに目覚めたのかと思ったよ。」

「そ、そんな・・・目覚めたって・・・」

オレは自分がこんな恰好は似合わないということを、ちゃんと知っている。

「それじゃ、行こうか。」

そう言うと長谷川は自分だけさっさと歩いていく・・・
「ちょっと・・・待ってよ・・何処に行くの？」
オレはまだ何処でデートするのか知らされていない・・・
「あ、まだ言ってなかったっけ、三井グリーンランドよ。」
「三井グリーンランド？！」
オレはそれを聞いて少し驚いた。

三井グリーンランドといえば熊本にある遊園地だ。もっとも熊本といっても福岡との県境に位置しているからそんなに遠くはない。西鉄大牟田線の終着駅である大牟田駅からバスにのれば２０分ほどで着く距離だ。オレは小学校のころ一回だけ行ったことがあるが、三井炭坑の跡地につくられた三井グリーンランドは広大な敷地にアトラクションが点在している、ちょっと変わった遊園地だった。しかし、なにしろ広いからデートにはあまり向かない気がするのだが・・・

「なんで三井グリーンランドなの？」
オレは不思議に思って聞いてみた。
「いま仮面レンジャーショーやってるのよ。」
「仮面レンジャー？！」
仮面レンジャーといえば５人の仮面ヒーローが悪と闘うやつだ、というのは何となく知っているが、オレはそういうのにはあまり詳しくない。
「え？長谷川さんそういうの好きなの？」
「まあ・・ね・・・」
「へ～・・・」
人って見かけによらないものだ・・・長谷川さんにそんな趣味があるなんて思いもしなかった。

オレたちは二日市で普通から特急に乗り換えるために待たなきゃいけなかった。オレが遅れなければ急行でそのまま大牟田まで行けたのかもしれないが・・・ホームで並んで立っていると、かかとが低いサンダルを履かされているオレと、厚底のスニーカーを履いている長谷川の背丈の違いが妙に気になる・・・背が高い長谷川のとなりにいると、なんだか本当に長谷川の彼女になってしまったような気さえしてくる・・・

「今日は有希はわたしの彼女なんだから、女の子らしくしなきゃダメよ。」

「そんなとこ・・・言われなくたって・・・」

わざわざ言われなくてもオレはいつでも女の子らしくしている・・・

「そうじゃないでしょう?彼女なら何言われても“はい”って言うことときかなきゃダメじゃない。」

「・・・・」

いまどきそんな素直な女の子がいるのだろうか・・・オレは疑問に思ったが、今日は長谷川に従わなきゃいけないことになっていた・・・

「・・・はい・・・これでいい?」

「なんか不服そうね。ちゃんと女の子らしい言葉づかいしてよ?」

「いつもしてるじゃない。・・・あ・・・はい・・・」

オレは長谷川に睨まれて、慌てて言われたとおりの返事をした。

二日市からオレたちの学校がある久留米をとおり、柳川を過ぎれば次が大牟田だ。オレは久留米より先にはほとんど行ったことがなかったから、柳川の先が単線になっているなんて知らなかった。柳川を過ぎると窓の外には一面、田んぼばかりが広がっていた。ここまで来ると福岡もずいぶん田舎だ・・・

「あ、そうだ。運賃立て替えてもらってたね。」
オレが運賃を長谷川に渡すためにサイフをバッグから出そうとすると、長谷川はオレの手を押さえた。
「有希、今日は有希はわたしの彼女なんだから、そんな心配しなくていいの！」
「で、でも・・・悪いよ・・・」
「それにもっと可愛くしゃべりなさいよ。」
「あ・・ご、ごめん・・なさい・・・」
どうもやりにくい・・・女の子ならいつもやってる事なのに、あらてめて彼女なんて言われると、どんなふうにしゃべったらいいのか分からなくなってくる・・・

特急は二人掛けの席だから、長谷川と二人きりな感じがして緊張してくる・・・そもそも彼女ってのはこんな時なにするんだろうか？どんな話をすれば良いんだろう？・・・そんなことを考えていると、長谷川はリュックの中からカメラを取り出した。
「ち、ちょっと・・・なんなの？」
オレは急にカメラを向けられて戸惑っている間に、長谷川はシャッターを押していた。
「有希ったら、驚いた顔しちゃって！ほら見て。」
液晶画面に再生された自分を見て、オレは真っ赤になってしまった。

写真のオレはまるで女の子みたいだった。オレってどうして写真に写すとこんなに女の子みたいに見えるのだろうか・・・
「今日は有希の写真をたくさん撮ってあげるわ。」
「え？！」
「だって今日は有希が女の子になってから初めてのデートでしょう？だったら思い出に残した方が良いじゃない。」
「そ・・そんな・・・デートって言っても長谷川さんも女の子じゃない。」

「あら、じゃあ有希は初めてのデートは男の子としたかったんだ？」
「い、いや・・・そういうわけじゃないけど・・・」
「いいのよ、わたしだって解ってるわよ。有希が本当は男の子とデートしたい事くらい・・・でもね、いきなり男の子とデートしたら有希どうしていいか判らなくなっちゃうわよ。」
そりゃそうだ・・・オレは男のころもデートはしたことなかったし、長谷川の彼女を演じている今でも十分どうしていいか判らないのだから・・・とはいえオレは別に男とデートしたいなんて思っていない。

しかしオレは、長谷川がオレのことを本当は男だと知っていると思っているから、ついオレも忘れがちになってしまうのだが、長谷川は実際にはオレのことを、ずっと昔から女の子になりたいと思っていた性同一性障害者だと思っているハズなのだ。だから長谷川がオレは本当に男のことが好きだと思っていても不思議ではないし、オレ自身そんなことを言った憶えもある。

だが、最近ではオレもなんとなく男の子を好きになる感覚は解らないではないにしても、さすがに男とデートしたいとまでは思わない。いつか・・・いつかそんな気持ちになることもあるのかも知れないが、今はまだとてもそんな気持ちにはなれない・・・

オレとしても昔の話を聞かされると、本当は自分でも性同一性障害じゃないとは言い切れないのだが、なにしろ小学校の2年生の途中から中学を卒業するまで、ずっと自分のことを普通の男の子だと信じて生活してきたのだ。しかもそれ以前のことは良く憶えていないから、オレはどうしても、自分が性同一性障害という自覚を持てない。

普通の性同一性障害者なら、小さい頃から女の子になりたかった

り、思春期になって男の子を好きになる事で、自分が普通とは違うと気づくのだろうが、オレの場合は、まず女の子になるのが先だったから、どうも女のふりをしなきゃいけないという意識が強い気がする。そのくせ今では身体まで半分女の子のようになってしまい、ふりをするどころの騒ぎではなくなってしまっている。オレはもう一生、女として生活しなきゃいけないのだと思うと、あらためて自分のした決断がとんでもない事のように思えてきて、その事実の重さに押し潰されそうになってくる。

「有希！　何ボ～としてるの。もう着いたわよ！」

オレがちょっと物思いにふけっている間に、電車は大牟田駅に着いていた。オレは長谷川に手を引っ張られるようにして電車を降りた。大牟田の駅はＪＲの駅と隣どうしだから、向こうにはＪＲの列車が停まっている。

「有希キョロキョロしてないで、もうバスが来てるわ！」

オレは長谷川に急かされてグリーンランド行きのバスに乗った。日曜日ということもあり乗客は結構多かったが、オレたちは何とかイスに座ることができた。

しかし考えてみれば遊園地に行くのなんて久しぶりだ。そう思うと何だか楽しくならないでもない・・・ただオレが男のままだったら良かったし、女の子でもせめてこんなナリじゃなければもっと楽しい気持ちになれたのかも知れないが、今のオレは分不相応なほど可愛らしい恰好をしているし、長谷川の彼女ときている・・・これではせっかくの楽しい気分もだいなしだ・・・

――――――――――――――――――――――――――

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

そんなことをぼんやり考えながらバスの窓から外を見ていると、遠くに観覧車が見えてきて、すぐにジェットコースターも視界に入ってきた。

「見て見て！長谷川さん、ジェットコースターよ！」

「ここはね、日本で一番ジェットコースターが多いんだって。」

「へ～すごいねぇ・・・」

だだっ広いだけかと思っていたが、けっこうすごい所のようだ・・・広すぎるからアトラクションの多さが目立たないのかも知れない・・・

「ねえ有希・・・今日はその長谷川さんって言うのやめにしない？」

「え？だって長谷川さんは長谷川さんじゃない・・・あ！・・・」

そうだ、今日は長谷川が言う事は何でも素直にきかなきゃいけないんだっけ・・・

「・・・じゃあ・・・何て呼んだらいい？・・・順子さん？」

「わたし順子って名前あまり好きじゃないの。それに“さん”付けもイヤ！」

ワガママだなぁ・・・

「・・・それじゃあ・・・ジュンっていうのはどう？」

「・・・ジュンか・・・それなら・・まあいいかな。」

「良かった。じゃあ今日は長谷川さんのことジュンって呼ぶわね。」

「じゃあ・・わたしのことは何て呼ぶ？　いとこのレナはわたしのことユウって呼ぶけど・・・」

「・・・有希はそのままでいいのよ。その方が可愛いんだから。」

「そうかなぁ？・・・あ・・はい・・・」

今日はオレは長谷川の言いなりにならなきゃいけないんだった・・・しかしそんな従順な女の子なんて見たことない・・・それをオレが

やらされるなんてヒドイ災難だ・・・まあ、元はといえばオレの頭の悪さが原因なのだが・・・

バスは遊園地の前へと入っていく。長谷川が二人分のお金を払いオレは整理券だけを入れて降りた。

「ねえ、は・・じゃなくて・・ジュン・・・入園料くらいはわたしにも払わせてくれない？わたしもかあさんにお小遣いもらってきてるし・・・」

「ダメよ。」

「そんな・・・ジュンは良いかもしれないけど、ジュンのお母さんに悪いわ・・・」

「何いってるの？これはわたしのお小遣いをためたものだからお母さんは関係ないの！」

それじゃ余計気を使うよぉ・・・でもあまりしつこく言っても長谷川が怒り出しても困るし・・・

「わかった・・・今日はわたし彼女だもんね・・・」

「そうよ。女の子がそんなこと気にしちゃダメよ。」

長谷川だって女の子なのに・・・やっぱり長谷川は彼氏気分なのだろうか・・・？

入園料とフリーパスのセットを二人分は結構な値段だった・・・オレは長谷川がデートしようと言い出した時は、てっきりオレに意地悪して喜ぶつもりだろうと思っていたが、そんなことのためにしてはかなりの出費ではないかと思う・・・長谷川は本気でオレとデートしたかったのだろうか・・・？

仮面レンジャーショーの会場はかなりの人だかりで驚いた。オレはこういうのは子供のためのものだとばかり思っていたが、どうやらそうでもないらしい。もちろん子供たちも沢山いるが、お母さん

も大勢いるし、カメラを手にしたオタクっぽい一団や、着飾った若い女の子たちも沢山いた。女の子たちはどう見ても遊園地に遊びに来る恰好ではない・・・こんなコたちが大勢いるなら、オレの恰好もそれほど奇異にも見えないかも知れない。

ほどなく仮面レンジャーショーが始った。悪い怪人が出てきて何やら言っているが、話を知らないオレには何のことか良く判らなかった。続いて仮面レンジャー5が出てきた。そのとたん、子供だけではなく、お母さんたちまで黄色い声援をおくりだしたからオレは驚いた。

それにしても仮面レンジャーの役の人はアルバイトの人がやってるのだろうが結構イケメンだ。

「ねえジュン、あの仮面レンジャー役の人たちアルバイトにしてはカッコイイわね。」

「なに言ってるの有希、あの人たち本物なのよ。」

「え?!ほんと?」

オレはこういうのは、てっきり子供だましのショーだと思っていたから、本当の役者さんがやってるなんて思いもしなかった。本物だからこんなに人が集まってるのだと初めて気がついた。

オレはこういうヒーローものはたいてい、赤がわかりやすいイケメンで、青がクールで影があるイケメン、緑がノッポのやさしいヤツで、黄色が太っちょの力もち、そしてピンクが女の子だと相場が決まっているのだと思っていた。

しかしこの仮面レンジャー5は、赤と青とピンクはそのとおりだったが、黄色も女の子で、緑は可愛い系の男だった。

子供とお母さんたちはだいたい赤のファンらしい。女の子たちは

青か緑だろうか、オタクっぽい人たちはどうやらお姉さん系のピンク派と妹系の黄色派に別れているらしい。

長谷川さんはいったい誰がタイプなのだろうか？赤か青？それともピンクか黄色だったりして・・・十分その可能性もありそうだ。

オレは思い切って聞いてみた。

「ねえ、ジュンはこの中の誰かが好きなの？」

「わたしはグリーンが好きなのよ。どっか男の子の頃の有希に似てると思わない？」

そう言われても、自分のことは良くわからない・・・そのうえ男だった頃のことなんて、ずいぶん昔のことのような気がする・・・

「有希は誰がカッコイイと思うの？」

急に聞かれてオレは戸惑った・・・何と答えればいいのだろう・・・

「う～ん・・・しいていえば・・・赤の人かなぁ・・・」

「やっぱり！　有希ってああいう感じが好きそうだもんね。」

そうなのか？オレはわかりやすいイケメンが好きそうに見えるのだろうか？・・・しかし言われてみれば系統としてはニースの山上君に何となく似てるかもしれない・・・もちろん山上君には遠く及ばないけど・・・

それにしてもオタクの男の子たちは・・・なかにはオジサンっぽい人もいるけど・・・ずいぶん熱心にピンクや黄色の女の子の写真を写している。オレだって少し前までは男の子だったのだが、あのオタクのコたちの気持ちは良くわからなかった・・・オレは女の子のアイドルなんかにも、そんなに熱心になったことはない気がする・・・

かといって女の子たちのようにレッドの人なんかを見て“キャーキャー”いう気持ちも良くわからない・・・そういえば長谷川も女の子なのに“キャーキャー”言わないなぁ・・・オレはチラチラと

横にいる長谷川を見て思った。グリーンの男が好きだと言ったくせに、グリーンの見せ場にも他の女の子たちみたいに“キャーキャー”言わない。

それに見ていてだんだん判ってきたのだが、どうもオレも顔負けの可愛い恰好をしたコたちがグリーンのファンらしい・・・長谷川とはずいぶんタイプが違う気がする・・・

「ねえ、ジュンももっと前に行ってきたら?」

オレがそう言うと長谷川は

「わたしはいいのよ。それに今日は有希とデートなんだし・・・」

「そんな、気にしなくていいわよ。わたし待ってるからもっと前で見てきてよ。みんな写真写してるじゃない、ここからじゃ遠いでしょう?」

「ううん、後で撮影会があるからいいの。」

「そうなの・・・?」

なんか長谷川って変わってる・・・初めて会った中学の頃は、ごく普通の女の子だと思っていたけど、なんか知るほどに変わった女の子だと思えてくる・・・

いつの間にか舞台では役者さんに変わって、変身後の仮面レンジャーのスタントが行われていた。こうなるとノリノリなのは子供と一部のオタクくらいのものだ・・・

「ジュンはこういうのに良く来るの?」

「う〜ん・・たまにね。わたしは追っかけたりしないから。」

「へ〜・・・」

「もしかして、有希は仮面レンジャーとか嫌いだった?」

「ううん・・・でもあんまり知らないから・・・」

「そうなの?昔は男の子だったのに?」

「・・・・」

そう言われてもオレにも良くわからない・・・
「あ・・ごめん・・・そっか・・・有希は昔から心は女の子だったから、こういうのは興味なかったんだ?」
「・・・そ・・そう・・なのかなぁ・・・」

「でも長谷・・いや・・ジュンだって女の子じゃない、女の子だから興味ないってことは無いんじゃない?それに・・・」
オレはあたりを見回して
「女の子のファンも結構いるじゃない。」
「それはそうだけど・・・小さいころはそんなに見てなかったわよ。最近のヒーローものは俳優がカッコイイからよ。」
「そ・・そっか・・・」
言われてみれば確かにそうかもしれない・・・そう考えればデブやノッポがいないのもうなずける・・・
「有希もレッドがカッコイイって言ってたじゃない。」
「う・・うん・・・」
別にそういうつもりで言ったわけじゃないんだけどな・・・でも否定するのも変だし・・・
「そろそろ行ってた方がよさそうね。」
そう言って長谷川はオレの腕をつかんだ。

「ほら、行くよ有希!」
まだショーの途中なのに、勝手がわからないオレの手を長谷川が引っ張っていく。
「ど・・どこいくの?」
「撮影会よ!早く行って並ばなきゃ!」

長谷川のおかげでオレたちはかなり前の方に並ぶことができた。

列に並んだのはイケメン目当ての女の子と、スーツを着たスタントには興味がないオタクの人たちだけで、子供たちはまだショーに夢中だった。

「有希、わたしとグリーンの写真撮ってよ！失敗しないでね！」

長谷川は慌てて帽子を脱ぎ、髪の毛を整えている・・・もしかしてこれのために連れてこられたのか？・・・オレはそう思った。

「ま、まかせてよ、写真は上手なんだから！」

デジカメならそうそう失敗するものではない。

「わたしが撮ってもらったら有希のも撮ってあげるからね。」

「え？・・・い・・いいわよ・・わたしは・・・」

「遠慮しなくていいから！レッドとのツーショット撮ってあげるわよ。」

「え？！」

なんかヘンなことになってきた・・・別にオレはレッドとツーショットを撮ってほしいなんて思ってないのに・・・

ショーが終り撮影会が始った。数人づつがステージに上がって一緒に写真を撮ってもらっている。だんだんオレたちの番が近づいてくると、オレにとっては別にどうでもいいことなのに、さすがに緊張してくる。

オレたちの番が来て、オレは長谷川とグリーンのツーショットを撮ってあげた。近くで見るとグリーンの人はなかなか可愛い顔をしている・・・そういえば長谷川はオレが男だった頃になんとなく似ているって言ってた・・・オレってこんな顔だったっけ・・・？

しかしファインダーの中の長谷川の嬉しそうな顔を見てオレは少し安心した。長谷川もこうして見ると、やっぱり普通の女の子なんだと改めて思う。オレとのデートじゃなければ、長谷川ももう少し女の子っぽい恰好ができたのではないかと思うと、ちょっと悪い気

がした。

もっとも長谷川本人は全然気にしてないみたいだ。

「こんどは有希の番よ！」

長谷川はオレをレッドに押しつけるとカメラを構えた。

「え？！」

オレは急にレッドの人に肩を抱き寄せられてドキッ！とした・・・

「ほら、有希なに緊張してるの！笑って！」

すると急にレッドがオレの肩を力強く抱きしめて耳元でささやいた。

「ほら、笑って！」

そして片手でVサインを作った。この人オレのことを女の子だと思っているのだろうか・・・心臓がドキドキ鳴っている・・・仕方なくオレもVサインをして、無理矢理笑顔を作った。

「はい、チーズ！」

たぶんオレは真っ赤になっているだろう・・・オレは男に肩を抱き締められるのが、こんなにドキドキすることだとは思ってもみなかった・・・

それに・・・至近距離で見たレッドの横顔はすごくカッコよかった・・・レッドがオレの顔を見た瞬間、思わず顔を伏せてしまいハッキリと顔を見ることが出来なかったことを、すごく残念に思っていることに、オレ自身が驚いている・・・

撮影が終って、慌てて離れようとしたが、足がガクガクして上手く歩けなかった。

「あ！」

オレがつまずいて転ぶと思った時、逞しい腕が倒れようとするオレの体を抱き止めた。

「だいじょうぶ？」

「あ・・は・・はい・・・」

思わずレッドと目が合ってしまい、オレの心臓はドキドキを通り越

してバクバクになってしまった。
「あ・・ありがとう・・・」
抱き上げられてお礼を言ったが、なんか声が高くていつものオレの声じゃないみたいだ・・・オレは恥ずかしくて逃げるように長谷川の腕をとって小走りにステージを駆け降りて行った。

「あぁ・・・ビックリしたぁ・・・」
オレはしばらくハアハア息を整えてから長谷川に言った。
「でも良かったじゃない。レッドに抱いてもらうなんてそうそうないわよ。後ろの娘なんかすっごい顔で有希のこと睨んでたわよ！」
「そ・・そんなぁ・・・そんなつもりじゃ・・・」
「わかってるわよ。有希はそんなコじゃないもんね。」
そう言って長谷川に頭を撫でられると、なんだか情けなくて泣きたくなってくる・・・

ステージに目をやると、まだまだ長い列が続いていた。レッドも笑顔でファンとの撮影を続けている・・・レッドに抱き止められた時、腰をすくい上げるようにした手の指がわずかにオレの胸に触れた感触が、いまでもリアルに残っている・・・男に触られてのなんて初めてだ・・・服とブラを通してなのに、まるで胸に直に指が当ったような気持ちがした・・・

「有希だいじょうぶ？顔が赤いわよ。ちょっとベンチに座ったら？」
「う・・うん・・・」
オレを近くのベンチに座らせると
「ちょっと待ってて！」と言って長谷川はどこかへ行ってしまった。
トイレだろうか・・・オレも行けば良かったかなぁ・・・でもオレはしばらく動く気にはなれなかった。それに良く考えてみれば長谷

川と連れションなんて気まずいし・・・

そんなことをぼんやりと考えていると長谷川はすぐに戻ってきた。
「はい、これでも飲んで気持ちを落ちつけて。」
手にはふたり分の飲み物を持っている。どうやらトイレではなく、飲み物を買いに行ってたようだ。
「あ・・ありがとう・・・」
オレはストローに口をつけてジュースを飲むと、少し落ちつきを取り戻してきた。飲んで見てはじめて、すごくノドが乾いていたことに気づいた。

オレはバッグからハンカチを出して、顔の汗をそっと押さえた・・・お化粧をすると無闇に顔も拭くことが出来ないから面倒だ・・・女の子って何て不便なんだろうと思う・・・今はまだ高校生だから、そんなにお化粧をする機会もないけど、大人になると毎日しなきゃいけないのだと思うと、なんだか億劫になってくる・・・

もっともオレがどんな大人になるのかは、オレ自身にも良くわからない。だってオレが大人の女になるなんて、どう考えてもしっくりこないのだ・・・ただでさえ大人の世界なんて良くわからないのに・・・この先、いくら見た目が女の子になれたとしても、男のオレが女として生きていけるものなのだろうか・・・？

「ほら有希、これ見てよ。」
そう言われて長谷川の手の中のモノを見て、オレは思わず口に含んだジュースを噴き出しそうになった。オレはゴクリとジュースを飲み込んでから言った。
「え？　こ・・こんなの撮ってたの・・・？」
それは倒れそうになったオレをレッドが支えている写真だった。なんて決定的瞬間なんだろう・・・しかし次の写真はもっとすごかっ

た、なんとオレとレッドが見つめ合ってるではないか！　こうしてあらためて見ると、こんなに近かったのかと冷汗が出る思いだ・・・
「そ、そんなのより、ジュンのはちゃんと撮れてたの？」
「うん、ちゃんと撮れてるわよ、ありがとう有希。」
オレはそれを聞いてホッとした。長谷川のがちゃんと撮れてれば、正直オレのはどうでもいいのだ。

―――――――――――――――

―――――――――――――――

――――――――――

作者からのお願い。

なんだかご当地色豊かな話になってますけど（笑）知らない方もなんとなくそんな感じ、ということで読んでいただいてかまいません。けっこう適当なところも多いので（笑）また、福岡のことをよくご存知の方も、全然違う！とか言わずに、適当に読んで頂ければ幸いです。
あと、ここに出てくる三井グリーンランドは、現在は親会社が三井でなくなったので、ただのグリーンランドになっています。ただ私には三井が付いた方がなじみが深いのと、グリーンランドでは国の名前みたいなので、昔の名前にしています。ご了承下さい。

―――――――――――――――

―　―　―　―　―　―　―　―　―　―　―　―　―
―　―　―　―　―　―　―　―　―　―　―　―　―

おまけ「おぼえがき」２００８／０６／２１

このところ「オレは女子高生」的な話が書きたい気持ちがある。
ひょんな事から（笑）女子高に通うことになった男が、だんだん女になっていくという良くある話（笑）
ただ、どうせ書くのならひと味違うものにしなければ意味がない。
あくまで現実的にやりたいが、そもそも現実には有り得ないのが難しいところ。
とりあえず主人公は最初から女に見えるという設定にしないとどうにもならない。
最初からバレバレでは話が始まらない。
かといって入れ替わりや、変身にはしたくない。
それでは簡単すぎる。
男が女子高に入るのは何とか理屈をつけるとして、どうして男が自然に女になっていくのだろうか。
マッド・サイエンシストが出てきて改造なんてのはやりたくない（好きだけど、笑）
だれかの悪巧みでではなく、みんな良い人の中で、
善かれと思ってやった事で事態が動いていく。
ドタバタなし、Ｈあまりなし。
そんなヌルイ話、読みたい人いるのかなぁ・・・
いたら書いてみたいんだけど。

第37話　キス　デートといえば・・・

「もう3時か・・・せっかく来たんだから遊んでいこうよ。」
長谷川はそう言ったが、言われなくてもオレはもともとそのつもりだ。遊園地なんて久しぶりだし、オレはジェットコースターなんか乗ったことがないから、一度くらい乗ってみたいのだ。でも・・・
「その前に何か食べましょうよ。わたしお腹すいちゃった。」
「それもそうね。」
「ねえ、これだけはお金わたしに出させてくれない？　わたしが言い出したんだからいいでしょう？」
さすがに全部長谷川に出してもらっては、オレとしてもいまいち楽しめない・・・
「彼女だって少しくらい出してもいいんじゃない？」
「う～ん・・・」
それでもまだ長谷川は迷っているようだ・・・そんなにオレを自分のいいなりにしたいのか？
「わたしたち高校生なんだからさ、そんなに堅苦しく考えなくても・・・」
「・・・まあいいわ、でも食事代だけだからね。」
「はい！」
オレはありがとうの意味も込めて、わざと可愛く返事をしてみせた。

遊園地の中にあるレストランに入ったオレたちは、長谷川はスパゲッティー・ナポリタン、オレはオムライスをたのんだ。オレも一緒のスパゲッティー・ナポリタンをたのんだ方が、一緒に来るから良いかとも思ったが、麻衣が貸してくれたサマーカーディガンを汚してしまったら悪いし、それにスパゲッティーは上品に食べるのが難しそうだ・・・

しかしオレはすぐに後悔した・・・オレがたのんだオムライスが先に来てしまったのだ。

「有希、早く食べないと冷めちゃうわよ。」

「う・・うん・・・」

なんか一人では食べにくい・・・でもスパゲッティーとオムライスではオムライスの方が時間がかかりそうだし・・・

「じ、じゃあ・・お先にいただきます・・・」

「どうぞ。」

オレはスプーンを手にとると、タマゴを切るようにしてからスプーンですくって口に入れた。あまり大きくすくうと大口を開けなきゃいけないから、少なめにスプーンにすくわなきゃいけない・・・それにそっと口に入れるようにしないと口紅が取れてしまう・・・こういうのは三吉先生に口を酸っぱくして言われたことだ。

「へえ、有希って上品な食べ方するのねぇ。」

急に言われてオレはドキッとした・・・

「そ、そんなに見ないでよ・・・食べにくいじゃない・・・」

こんな恰好をして下品な食べ方をしたらよけい格好わるい・・・それに、もしガサツな食べ方をして男とバレたら大変だし・・・

そうこうしてるうちに長谷川がたのんでいたスパゲッティーも運ばれて来た。長谷川はフォークでくるくる巻くとパクリと大きな口を開けて食べている・・・わざとそんな食べ方をしてるのだろうか・・・それともいつも・・・？　出来ることならオレもそんな風に食べたいものだ・・・羨ましく思ったが、あんまり女の子らしい食べ方じゃない・・・でもオレは何も言わなかった。こんな遊園地のレストランでとやかく言うのもバカバカしい・・・それにそんなことを考えている場合でもなかった。この調子ではオレも早く食べないと、長谷川の方が早く食べ終りそうだ。

結局オレの方が数口遅かったが、何とか遅くなりすぎずに済んでホッとした。なんだか食事するだけなのにすごく気疲れしてしまう・・・これって女の子はみんなそうなのか・・・それともオレが女の子のふりをしなければいけないからなのか・・・？　まあ、彼女になるなんて初めての経験だから仕方がないのかもしれない・・・

食事が終って、約束どおりここはオレが清算した。とりあえず少しでもお金を払うことが出来て、オレの中の男の部分が多少気が楽になった。

「ちょっと待ってて、わたしお手洗いに行ってくる。」

オレが一人で行こうとすると

「あ、わたしも！」と長谷川もついてきた。

しまった・・・これじゃ長谷川と連れションだ！これからオレはトイレで化粧直しもしなきゃいけないというのに・・・こうなったら長谷川が入っている間に済ませてしまうしかない・・・イザとなったら男のオレの方がオシッコは早いに決まってる！

トイレは思いのほか小さく、個室が三つしかない・・・しかも奥のひとつは故障中だ・・・これでは長谷川と隣同士になってしまうじゃないか・・・長谷川だって気まずいんじゃないのか？

オレは個室に入ると急いでスカートを捲り上げ、ストッキングと一緒にパンティーを下ろしてしゃがみ込んだ。

「ううぅ・・・」

こんな時に限って、縮こまったヤツからなかなかオシッコが出てこない・・・と、となりの個室からチョロチョロと音が聴こえてきた。となりで長谷川がオシッコをしているのだと思うと、なんだか急に

男に戻ってしまったような気がしてドキドキしてくる・・・オチンチンを指でつまんでいる状況ではなおさらだ！

今もし誰かに扉を開けられたりしたら、オレは変態と言われても何も言い逃れできないだろう・・・あらためてそう考えると、いつもは普通にやっていることなのに怖くなってくる・・・こんなことでは余計オシッコなど出るものではない・・・オレが何とか落ちつこうと深呼吸していると、となりからカラカラとトイレットペーパーの音がした。

「・・・そうか・・・」

ここは長谷川が出るのを待つことにした。もしウンコをしていたと思われたら心外だが仕方がない・・・布がこすれる音がして、おそらくジーンズのジッパーを上げる音・・・そして水が流れ、ドアが開き・・閉まる・・・

手を洗う音がして、どうやら長谷川は出て行ったようだ・・・外で待つ気らしい・・・それともオレももう出たと思ってるだろうか？　でも長谷川だってこっちの様子は何となくわかるハズだからそれはないだろう。

オレはやっと落ちついてきて、無事にオシッコを済ますことができた。用心のためにしているナプキンも若干汗で湿っているだけだから代える必要は無さそうだ。レッドとあんなことがあったのにチビらなかったのは、オレも少しは成長したと言えるだろうか・・・先っちょを拭いてしっかりとギャザーの間に仕舞い込む・・・

そうだ・・・オシッコが終ったからってのんびりしてる場合じゃなかった、オレはまだお化粧も直さないやいけないんだっけ・・・オレは急いでストッキングを上げた・・・こんな時パンティーストッキングというものは、なんて面倒なものなんだと思う・・・それにはいてる姿がみっともなくてイヤだ・・・それとも女の子はもっ

ときれいにはけるものなのだろうか・・・こんどそれとなく、かあさんに聞いてみよう・・・

水を流して個室を出ると、オレは手を洗うのもそこそこにバッグを開けた・・・オレはもともと男だから本当は手なんか洗わなくたって平気なのだ・・・

汗を拭いて薄くなってしまったファンデーションを整えて、少しチークも足した。マスカラは丈夫なやつを使ったから大丈夫そうだ・・・後は口紅を・・・その時急にドアが開いて誰かが入ってきた。

「なんだ、遅いと思ったら化粧直してたんだ・・・え?!」

・・・? 長谷川の様子がヘンなのに気づいてオレが振り向くと、長谷川が驚いたような顔をして立っていた。

「ど・・どうしたの・・・?」

「有希・・・スカートが・・・」

オレは鏡に映った自分の姿を見て顔が真っ赤になった・・・なんとスカートの後ろがストッキングの中に入ってお尻が丸出しになっている!

「うわっ!!」

白めのストッキングをとおしてペールブルーのパンティーまで透けて見えている! オレは慌ててワンピースのスカートをストッキングから引っ張り出した。

「ダメじゃない有希、もっと気をつけないと・・・」

長谷川もスカートを直すのを手伝ってくれた・・・

「ご・・ごめん・・・」

オレって何て情けない女の子なんだろう・・・自分で自分が嫌になってくる・・・もし長谷川が教えてくれなければ、お尻を丸出しにしたまま外に出るところだった・・・それじゃぁ、いくらお化粧を直してきれいにしたって意味がない・・・最悪だ・・・

「まあ、わたしが最初に見つけて良かったじゃない。」

そう言って長谷川がなぐさめてくれた。
「ううぅ・・・」
オレは返す言葉もなかった。

オレはもうとても化粧直しなどする気にはなれなかったが、なんとか口紅を直してトイレを出た。
「有希、そんなに落ち込まないでいいじゃない。誰かに見られた訳じゃないんだから。」
ガックリと肩を落とすオレを気にして長谷川がなぐさめてくれたが、オレの気持ちは晴れなかった。
「ほら、フラフラしないで、しっかりしなさいよ！」
「だって・・・長谷川さんが見たじゃない・・・あ・・ジュンが・・・」
「わたしならいいじゃない。学校では着替えの時、みんなに見られてるんじゃないの？」
「・・それは・・そうだけど・・・」
たしかにクラスではあまり気にしないが・・・クラスでの着替えの時には長谷川はいないし・・・
「それに、有希かわいいパンティーはいてるのね。」
オレは一気に顔が熱くなる・・・
「そ・・そんなことないよ・・・」
デートだからといって、よそ行きの下着を着けて来たなんて思われたら恥ずかしくてたまらない・・・それじゃぁ、なんか期待してるみたいじゃないか・・・

「もう有希ったら、いつまでもしょげてないで！ジェットコースターに乗ろうよ！　有希ジェットコースターに乗りたかったんじゃないの？」
「・・う・うん・・まあ・・・」

そう返事をしたがオレはジェットコースターには乗ったことがない・・・昔ここに来た時は小学校の遠足だったから、そういう乗り物には乗れなかったのだ。
「ほら！行くよ！！」
そう言って長谷川はオレを引っ張られていく・・・長谷川ってけっこう強引な人なんだなぁ・・・

ジェットコースターには結構長い列が出来ていた。
「結構並んでるわね。」
オレはあまり並ぶのは好きじゃない・・・それにこんな炎天下に並ぶなんて・・・
「これくらい普通よ。」
長谷川は全然気にならないようだ・・・
「暑いなぁ・・・」
こんなに暑くちゃ、せっかくお化粧直したのに意味ないよ・・・オレは汗を押さえながら思った。こんなこと男が気にするのはヘンだと思うが、オレは今は男じゃないのだから仕方がない・・・

それに、だんだん列が短くなってくると、オレは少しづつ緊張してきた。乗っている人たちの悲鳴を間近で聞かされてはなおさらだ・・・オレってもしかしたらジェットコースターは苦手なんじゃないだろうな・・・？　なにしろ乗ったことがないから正直わからない・・・今となってはそうでない事を祈るだけだ・・・

オレたちの番が来ると長谷川はさっさと乗り込み、オレをとなりに手招きする・・・ううぅ・・なんか怖いけど今さら止めるなんて言えない・・・
「有希、早く！」
オレは急かされて、やっとのことで乗り込んだ。真ん中より少し前の席だ・・・上からゴツイのが降りてきてオレの体をしっかりと固

定した・・・とりあえず落ちることは無さそうだ・・・しかし・・・

ブザーが鳴るとジェットコースターが走りだした。そしてだんだん高く登っていく・・・オレは両手で体を押さえている安全具を握りしめ、必死で両足を踏ん張った・・・と、前の方の車両が消えていく・・・一瞬どうなっているのか判らなかったが、すぐに理解した・・・というよりもうオレが乗った車両も落ちていた・・・

（ひぃぃぃ・・・！）

オレは悲鳴さえ上げられなかった。

（ぐうぅぅ・・・！）

Gがかかるところでは歯を食いしばって耐えた・・・そしてまた上がって落ちる・・・ふと横の長谷川が目に入ると、なんと両手を放してバンザイしている?!　まったく信じられない・・・オレは手の感覚がなくなりそうなほど握りしめているというのに・・・

気づいた時にはもう乗車したところに戻っていた・・・あっという間だったが、オレにとってはとてつもなく長く感じた・・・あまり踏ん張っていたから足の感覚が無くなっている・・・オレはなんとか気づかれまいと必死だった・・・これでも元は男だ・・・ジェットコースターが怖いなんて思われたくない・・・でも、もし化粧をしてなかったら、オレの顔は蒼白になっていただろう・・・

そんなオレの気持ちに気づいていないのか長谷川は楽しそうだ。

「面白かったねぇ!でももっとすごいのがあるのよ!」

なんで長谷川はこんなに平気なのだろう・・・そういえばこういう絶叫マシンは女の方が肝が座っていると聞いたことがある・・・そうなると・・・怖がってるということは、オレの心がまだ男だからなのだろうか?　なんとも情けない話だ・・・それならオレは女の方がいい・・・

それにしても長谷川はどこに向かっているのだろう・・・手を引かれながらフラフラ歩くオレの目に飛び込んできたモノを見て、オレは絶句した・・・こんどのジェットコースターは車体がない・・・ただイスだけがぶら下がって走っているではないか！

「も・・もしかして・・・これに乗るの・・・？」

「そうよ。あれ？有希・・・もしかして怖いの？」

オレは慌てて首を振った。

「こ・・怖くは・・ないけど・・・」

本当は男のくせに情けないやつだと思われたくないから、つい強がってしまった・・・

でも、また並ぶのがイヤだと言おうとしたが、ここはまだそんなに並んでいなかった・・・というより、怖すぎるから乗り手がないんじゃないのか・・・？

「よかったね、こんどは空いてて。」

「う・・うん・・・」

ちっとも良くない・・・こんなの乗りたくないよ・・・

「でも有希、悲鳴も上げないなんてさすがもと男の子ね。」

「そ・・そんなこと・・ないわよ・・・」

怖くて声も出なかったなんて・・・とても言えない・・・

すぐにオレたちの番が来た・・・乗ってみると改めてさっきのより格段に怖そうだと思う・・・足も踏ん張れないなんて・・・よくもこんなモノを考え出すものだ・・・

「や・・やっぱりやめる・・・ごめんジュン・・・ほんとは怖いの・・・」

こうなったらもう女々しいヤツだと思われてもいい・・・どうせオレは女の子なんだし・・・

「え？！だめよ、もう出ちゃうわよ！」

長谷川の言葉どおりブザーが鳴って動き出す・・・

「有希、怖かったら悲鳴あげなさい！その方が怖くないから！！」
「うぅっ・・はい・・・」
オレに悲鳴なんか上げられるかなぁ・・・

「キャ～～ッ！」
心配は無用だった・・・もっとも悲鳴を上げても怖いものはやっぱり怖い！！
「キャァ～～～！！」
足が踏ん張れない怖さは想像以上だ・・・カーブのたびにキ○タマが縮みあがっていく・・・こういう感覚って女の子にはないのだろうか・・・
「キャァ～～～！？？？？」
一気に落ちていく時、オレは股間に生暖かいものを感じた・・・しまった・・・もらしちゃったぁぁぁ・・・！
「キャァ～～～！！」
もうその後のことはほとんど憶えていない・・・オレはもう身体の力が抜けてしまい、意識も飛んでしまったようだ・・・

「ごめんね有希、ジェットコースターが苦手なら言えばいいのに。」
「だ・・だって・・・」
漏らしたオシッコは何とか染み込んでくれたようだ・・・多い日用にしてて良かった・・・
「わ・・わたし・・乗ったこと・・なかったの・・・」
「そうだったの？それじゃひとつ乗った後に言えばよかったじゃない。」
股間がゴワゴワしている・・・早く何とかしないと・・・
「情けないヤツだって・・思われたくなくて・・・」
「何いってるのよ。有希はもう女の子なんだから、情けなくないじ

ゃない。」
「そ・・それは・・そうだけど・・・」
なんかオレ泣いちゃいそうだ・・・でも今泣いたらマスカラが流れちゃう・・・そんなことを考えてしまう自分がまた情けない・・・

「ううぅっ・・・」
とうとうオレは泣いてしまった・・・
「有希、泣くことないじゃない・・・そんなに怖かったの？」
長谷川には今のオレの情けなさはわかるまい・・・ついこの間まで男だったというのに、キャーキャー悲鳴をあげたうえ、オシッコまで漏らしてしまったのだから・・・今のオレは男とか女とかに関係なく情けない・・・
それに・・・泣きながらもオレは、このあとトイレで化粧を直すついでに、ナプキンも取り替えようなんて考えている・・・泣きながらそんなことまで計算するなんて・・・オレって最低なヤツだ・・・

「どう？気持ちは落ちついた？」
「・・う・・うん・・・」
しばらく泣いたら、ようやく涙も止まった・・・
「ほら有希、目のまわりが真っ黒よ。」
「・・うん・・ごめんなさい・・トイレで直してくる・・・」
オレはそう言って、トイレに行き、オシッコが染み込んだナプキンを新しいものに取り替え、お化粧も直したのだった。

トイレから出ると、少し離れたところで長谷川が待っていた。
「ごめんね有希、もう帰ろうか？」
本当にすまなそうな表情なので、オレもなんだか悪いことをしてしまった気持ちになる・・・せっかく楽しもうとしてたのにオレのせ

いでこんな事になってしまった・・・
「ううん、怖いのじゃなかったら乗れるから。あの落っこちるみたいなのが苦手なの・・・」
「そう・・・？」
時計を見たら４時だった。
「それに・・今日は少し遅くなるかも知れないって言って来たから・・・」
なんだかオレ本当に彼女みたいなこと言ってるなぁ・・・遅くなるってヘンな意味にとられたらどうしよう・・・

「よし！じゃぁ怖くないやつに行こう！」
そう言って連れてこられたのはメリーゴーランドだった・・・
「い・・いや・・こんなのじゃなくても大丈夫よ。ゴーカートとかでもいいんだけど・・・」
「無理しなくていいから、有希やっぱりこういうのが似合うよね。」
それはどうかなぁ・・・だいいち子供しか乗ってないし・・・高校生が乗るものじゃないと思うが・・・
「ほら早く！係りの人が待ってるでしょう！」
仕方がない・・・でもこんなスカートじゃ馬になんて跨がれないし・・・横座りなんかやったことがないし・・・となると・・・どうしよう・・・お姫様が乗るような馬車しかないじゃないか・・・

そんなことを考えていたら、係りの人がオレをひょいと持ち上げて馬の背中に乗せてくれた。メリーゴーランドが回りだす・・・ところで長谷川はどこに乗っているのだろう・・・キョロキョロしたが長谷川の姿が見えない・・・
「有希！こっちこっち！」
その声の方を見ると、長谷川は外でカメラを構えている！
「ちょ・・ちょっと・・撮らないで・・・」
オレの声は音楽にかき消されて聞こえないみたいだ・・・こんな女

の子座りで馬に乗ってる写真なんか撮られたらたまったものじゃない・・・だがオレにはどうすることも出来ない・・・それにメリーゴーランドだってバカにしたものじゃなかった・・・回ってるうえに上下にも動くから、女の子座りに慣れてないオレは、落っこちないようにポールにつかまってないと振り落とされそうだ・・・

「有希！手を振って！」

バカ言っちゃいけないよ・・・そうは思ったが長谷川には若干負い目もあるし・・・オレは仕方なく引きつった笑顔で手を振った。

「ヒドイよ・・・なんでジュンは乗らないの・・・？」

「だって、わたしは似合わないもん。」

「そんなぁ・・・わたしだって似合わないわよ・・・」

「そんなことないって！」

そう言って見せられた画像のオレは、たしかにヘンに似合っていた・・・なんだか悔しい・・・それに、いやいや手を振ったのに、妙に嬉しそうに見える・・・きっとこんな服を着てるからだ・・・そうに決まってる・・・

「ジュンだってこんな服着れば似合うわよ！」

そうは言ってみたものの、どうにも想像できなかった・・・

オレたちはその後もゴーカートに乗ったりゲームをやったりして遊んだ。ちなみにゴーカートはけっこうスピードは出るものの、自分で運転するから平気なのだ。それに何より上下運動がないのがいい。

6時になって少し日が傾いてきたころ、長谷川がオレに聞いた。

「そろそろ帰る？」

「う・・うん・・・そうね・・・」

「じゃぁ最後にひとつ乗りたいのがあるんだけど。有希怖いかなぁ。」
「え？　またジェットコースター？」
「ううん、観覧車。デートの最後って言ったら、やっぱり観覧車でしょう？」
そうか・・・そういえばドラマでそういうのを見たことがある・・・
「でも有希がダメそうだったら止めてもいいわよ。」
オレは観覧車は乗ったことあるが、別に怖くはなかった。高さはちょっとお尻がズンとするけど、動きが速くないから平気だ。
「ううん、大丈夫。観覧車は乗ったことあるから。」
「そう、それじゃ安心ね。」

オレたちが乗ったゴンドラがゆっくり上がっていくと、夕日に輝く有明海が見えてきた。すごくきれいだ！
「なんか今日はいろいろあったけど楽しかったね・・・」
「有希、デートの時、観覧車に乗ったら何するか知ってる？」
「え？！」
なんかイヤな予感がする・・・
「・・・もしかして・・それって・・・」
オレは人指し指で唇にふれた。
「そう・・キスよ。カップルは一番上でキスするものなの。」
絶対というワケでもないと思うが・・・それにオレたちは女の子同士・・・
「それは・・・どうしてもしなきゃいけないの・・・？」
「どうしてもってワケじゃないけど・・・わたしはしたいのよ。」
「そう・・・わかった・・・」
考えてみれば女の子同士といっても、オレは元は男だし・・・そう考えれば普通の女の子同士よりは自然な気もする・・・とはいえオレは男としてもキスするのは初めてだ・・・

頂上に近づいていくと、だんだん緊張が増してくる・・・長谷川とキスするなんて・・・ドキドキしている自分が男なのか女なのか良くわからない・・・

「今日は有希が彼女なんだからね。彼女は目をつむって待つものよ。」

「は・・はい・・・」

オレは静かに目をつむり、くちびるをほんの少し尖らせた。

「有希、今日はありがとう・・・」

パシャッ！という音と明るい光に驚いて目を開けると、長谷川がカメラを構えて笑っていた。

「ハハハッ・・・有希ったら、可愛いキス顔するのねぇ。」

「ヒ・・ヒドイ・・・だましたのね?!」

オレは無性に腹が立った。オレがどれほどの覚悟でキスしようと思ったか、長谷川には解っていないのだ！

「な・・なんでこんなことするの?!わたし頑張ったのに・・・」

すると長谷川は意外なことを言いだした。

「有希、わたしがどうしてデートしようって言ったかわかる?」

「え?　仮面レンジャーショーを見たかったからでしょう?」

「まあ、それもあるけど・・・わたし気になってたのよ。最近有希、自分のしゃべり方が男っぽくなってるの気づいてた?」

「う・・ううん・・・」

オレはずっと普通に女の子らしくしゃべってるハズだ。

「わたし・・ちゃんと女の子らしくしゃべってるよ。」

「ほら！今“しゃべってるよ”って言ったじゃない。」

「あ！」

「このごろそういうこと多かったのよ。気づかなかったでしょう?」

「・・うん・・・」

「だから、わたし有希が男だってバレないか心配してたのよ。」

言われてみればそうだったのかもしれない・・・でも・・・

「それなら、もっと早く言ってくれればいいのに・・・なんでわざわざデートなんか・・・」
「わたし、有希に女の子として・・・彼女としてデートする気分を味わってほしかったの。そしたらもっと女の子らしくなるんじゃないかと思って。」
「・・・そんな・・・長谷川さん勝手だよ・・・わたしがどれだけ恥ずかしい思いしたか・・・」
オレの苦労なんか長谷川には全然わかっていない・・・
「でもね、有希もいずれは男の子とデートするんでしょう？それならもっと女の子らしくしなくちゃダメよ。有希はまだまだ男の子の気分が抜けてないんだから。」
「ううっ・・・」
オレには何も言い返すことが出来なかった・・・たしかにオレは自覚が足りないのかもしれない・・・
「わたしも協力するから、もっと女の子らしくなろう？」
「・・・う・うん・・・」
「“うん”じゃないでしょう？」
「・・あ・・はいっ・・・」
オレが返事をした時、もうゴンドラは下まで降りていた。
オレたちのデートは終った・・・

―――――――――――――――
―――――――――――――――
――――――――――

ＡＴからみなさんへ

この『オレは女子高生』はまだまだ続きますが、今年はいったんここまでで休止することにしました。どうしても１２月中にやらなきゃいけないことがあるので申し訳ありません。また来年よろしくお願い致します。

それと、この話もだいぶ長くなってきたので、これからという方は読みにくいのではないかと思い、適当なところで章で分けることにしました。だいたい話の変わり目になると思いますが、あくまで便宜上のものですので、第〇話というのは通しで行きたいと思っています。

第３８話　水泳　オレの水着なんてありえない！

「なるほどね、でもそれはあまり心配しなくていいと思うわよ・・・・はい、終り。」

白石先生はオレのお尻に刺した注射器の針を抜くと、アルコールを染ませた脱脂綿で押さえた。オレは針を刺した部分を脱脂綿で押さえて揉んだ。筋肉注射だからよく揉んでおかないと筋肉痛みたいになってしまう・・・

「ジェットコースターに乗ってオシッコを漏らしてしまうのは、そんなに珍しいことじゃないみたいよ。遊園地の管理室には、そういう人のための代えのパンツも用意してるって聞いたことあるから。」

「・・・そうなんですか・・・」

オレはせっかく直りかけている気がしていた不安神経症が、またひどくなったのではないかと思っていたのだが、どうやらそうではなさそうなので少しホッとした。

最近オレはパッチではなく女性ホルモンの注射をしてもらうようになっていた。それというのもオレのアレルギー体質のせいで、パッチを貼ったところが赤くかぶれてしまったからだ。それに痒くてたまらないから、つい掻いてしまうと、さらに真っ赤になって水膨れまで出来てきた。これじゃ着替の時にでも見られたら恥ずかしいから、コソコソ着替えなきゃいけない・・・身体の方はだいぶ女の子っぽくなってきたので、以前よりは大胆に着替をできるようになっているのに、これでは逆戻りだ・・・

筋肉注射はけっこう痛いけど、月に2、3回でいいらしいから毎日パッチを貼るより楽だ。それにかぶれた痒さよりずっとマシだ。痛さはその時だけだから我慢できるけど痒さは我慢できない・・・

飲み薬という手もあるらしいが、白石先生によれば飲み薬の方が

副作用なんかの問題が、注射やパッチに比べて大きいらしい・・・とはいえ、それは注射でも少しは副作用があるという事なのだろうか？　まあ、薬というのは、どんな薬でも基本的には身体には良くないのだと兄さんに聞いたことがある。薬は病気を直すためのもので、病気が直ったら止めなければいけないものなのだそうだ・・・

でも、オレの場合はもともと病気ではない。それなのにずっと薬を注射してもいいのだろうか？しかし薬を止めたら男に戻ってしまうし・・・オレはいまだに自分が女になるのはピンとこないところがあるものの、不思議に男に戻りたいとは思っていない。それはオレが自分で気づかなかっただけで本当に性同一性障害だったのかもしれないし、女子校で女の子として暮らしていくには、その方が楽だからなのかもしれない。それに・・・どっちにしてもオレはもう子供が作れない身体なのだから、いま楽な方を選ぶのは自然なことではないだろうか・・・

そもそもホルモンというものはバランスが重要らしい。実際には女にも男性ホルモンはあるし、男にも女性ホルモンがあるのだそうだ。ただお互いの量の違いで男らしい身体つきになったり、女らしい身体つきになったりするらしい。だからもともと男性ホルモンが多い男のオレが女の子の身体になるには、結構な量の女性ホルモンの投与が必要らしいのだ。ちなみに女性ホルモンを投与したからといって、身体が男性ホルモンを分泌するのを止める訳ではないらしい。

だけど、これは少々情けない話ではあるが、幸いオレは男にしては男性ホルモンが多い方ではなかったようで、それが案外速く女性化が進んでしまった原因らしい。普通はもう少しかかるのだそうだ。もっとも、オレはまだ若いからというのもあるようなのだが・・・話によると高校生からホルモンを投与するのは珍しいらしいのだ・・

・ただ、早いうちからやる方が、より自然に女の子らしくなるのだそうだ・・・

「それで?デートは楽しかった?」
「・・・は・・はぁ・・・」
急に聞かれたオレは気のない返事をしてしまった。
「何?楽しくなかったの?」
「・・・う~ん・・・良くわからないんです。長谷川さんの気持ちもわからないし・・・わたしの気持ちも・・・」
「そう?　長谷川さんってコも意外に不器用なところがあるみたいね。」
「はい、家庭科とか苦手みたいですけど・・・」
すると白石先生は笑って言った。
「フフフッ・・・手先のことじゃなくて、自分の気持ちを上手く伝えられないってことよ。」
「あ・・・そういうことですか・・・」
オレは勘違いしたのが恥ずかしくてうつむいた。
「まあ、そういう点じゃ有希ちゃんもあまり器用じゃなさそうだものね。」

たしかにオレはそういうことには器用じゃない。そもそもオレは女の子とつきあったこともないというのに、自分が女の子になってしまっているのだから器用なハズがないのだ。女の子がどんな気持ちでデートするのかも解らないし、長谷川の場合、相手も女の子なのだから余計ワケがわからない。女の子が相手では、オレは自分が女なのか男なのか良く解らなくなってくるのだ。とはいえ、男の子とデートしたいなんて全然思わないけど・・・

「先生思うんだけど、男とか女とかあまり深く考えないで楽しめば

良いんじゃないかな?」
「はぁ・・・でも・・・」

だけどこんな気持ちは、いまでは何でも話せる存在の白石先生にだって相談することはできない。なぜなら白石先生はオレの心はもとから女の子だと思っているからだ。まさかオレが頭が悪くてこの白鴻しか入れなかったから、女のフリをして入学したなんて思ってもいないだろう・・・いま冷静に考えればオレ自身もどうしてこんな選択をしてしまったのか解らないくらいなのだ・・・それが今や身体まで女の子になって、しかもずっと女として生きていくのだと、漠然とにしても考えているなんて・・・どう考えても普通じゃない。

それなのにオレのまわりは、どういう訳かオレが女になっても普通に廻っているから不思議だ。元からオレが男だと知らないクラスメイトは良いとしても、先生たちは男がセーラー服を来て女生徒の中に混じっているのに平気なのだろうか?それにずっと男の子として接してきた、とうさんやかあさんや、妹の麻衣の反応は不可解以外の何物でもない。いくら小さい頃オレが女の子の服を着ていたといっても、息子が女になっても平気なものだろうか?それとも内心はオレと同じように戸惑ったりしているのだろうか?

それに・・・生徒では唯一秘密を共有している長谷川は、本当のところオレのことをどう思っているのだろうか・・・オレには長谷川の気持ちは計りようがない。

「あっ!そうだ・・・わたし先生に相談しようと思っていた事があるんですけど・・・」
オレは白石先生に現実的な相談をしなければいけなかったのを思い出した。ウジウジ悩んでる場合ではなかったのだ。

「こんど水泳の授業があるんです。それでどうしようかと思って・・・」

この白鴻女学園にはプールがないのはオレにとっては救いだったのだが、授業自体は歩いて１０分ほどの所にある白鴻女子短大のプールを借りて行われるらしいのだ。回数はシーズンに数回と少なく、そんなにちゃんとした授業じゃない、ほとんど遊びのようなモノらしいのだが、女性モノの水着を着るなんてありえないオレにとっては数回でも大問題だ。

オレはスポーツはそんなに得意じゃなかったが、水泳はわりに出来る方だった。本当なら良い所を見せられると喜ぶところなのだろうが、しかし今となってはオレに水泳は無理なのだと思うと少し悲しい・・・オレだってちょっとは良いとこを見せたいのに・・・この学校に来てからのオレは、体育では結構なダメっぷりを発揮している・・・まあ、数学や英語はもっとダメだけど・・・

しかし白石先生は事も無く言った。

「アノ日だって言って休めば良いんじゃない？」

「で・・・でも・・・」

オレは生徒手帳のカレンダーに付けた印を見せた。

「まだアノ日は少し先なんです・・・」

「あ、そっか。有希ちゃんは知らなかったのね。女の子のアノ日はそんなに正確じゃないのよ。これくらいズレても全然問題ないの。」

「え、そうなんですか？」

「それにね、女の子は水泳がイヤな時は、本当はアノ日じゃなくてもアノ日だって言って休むものなのよ。だって誰も確かめることなんか出来ないでしょう？あくまで自己申告なのよ。」

「・・・そうなんですか・・・」

そういえば中学のころ、しょっちゅう休んでいる女子生徒がいたのを思い出した。オレはそういうことには疎かったから何で休んでい

るのか不思議に思っていたものだ。
「それにそういうことは有希ちゃんは心配しなくていいわよ。先生方はちゃんと解ってるから。」
「はぁ・・・そうですよね・・・」
考えてみればオレが女の子のフリをしているのは校長先生のお墨付きなのだった・・・そういえば最近、校長先生には全校朝礼の時以外は会ってない・・・たまには挨拶にでも行くべきだろうか・・・でも忙しかったら申し訳ないし・・・

「でも、今の有希ちゃんの身体つきなら水着でも着られるかもしれないわよ。股間はテーピングで何とかなると思うんだけど。」
「まさかぁ・・・」
そんなハズがないじゃないか！
「絶対ムリですよ！」
「そうかなぁ？もし有希ちゃんが水泳したいのならテーピングしてあげるわよ。」
「いいです、いいです！テーピングなんて・・・」
オレは先生にオチ○コをテーピングされている自分を想像して、恥ずかしさに耳まで真っ赤になった。もうオレのオチ○コは先生に見られてしまっているとはいえ、それはオレが気絶してる間の出来事だ。テーピングがどういうものかは解らないが、絶対ひっぱったりするに決まっている！いくら白石先生が気を許せる人だといっても、女の人にオチ○コを触られるなんて考えただけで恥ずかしい・・・
「わたし・・・そこまで水泳したいわけじゃないから・・・それに女性用の水着も持ってないし・・・」
だいたいオレが女性モノの水着を着るなんて想像さえ出来ない。女になってからオレにとっては想像できないことの連続ではあるが、それでも水着は絶対ありえない！
「まあ、有希ちゃんがイヤならいいんだけど、でも水着でも大丈夫だと思うのは本当よ。」

「ダメですダメです・・・絶対ダメです！」
オレは頑に否定した。

「はぁ・・・」
オレはプールサイドのベンチに座ってため息をついた。この暑さではプールで泳ぐクラスメイトが羨ましくなっても不思議ではない。一応ベンチの上にはテントが張ってあったが、熱風までは防いでくれない。何人かは休むコもいると思ったのに、休んでるのはオレひとりだった・・・オレは中学のころはプールを休んだことが無かったから、ひとりプールサイドで体操服でいるのは、なんだか変な感じだ・・・

うちの学校は水泳の授業はほんの数回だから、わざわざ学校指定の水着が無くほとんどが中学の時のスクール水着を着ていた。そのため出身校によって水着のデザインはまちまちだった。
スクール水着なんてみんな同じようなものだとばかり思っていたが、思いのほか色んなデザインがあるものだ。紺一色のものもいいが、白い縁取りがあるやつの方がカッコイイ。後ろが広く開いているのもいいけど、バッテンになっているのもちょっと色っぽくて可愛い。股間の部分が布で隠れているのはちょっと野暮ったいけど・・・ああいうのならオレの股間も隠してくれるかも・・・

「ばかばかしい・・・」
オレは慌てて自分の考えを否定した。白石先生があんなことを言うから、オレまで変なことを考えてしまった・・・どんな水着だって

オレに着れるハズがないのに・・・オレがこんな馬鹿な妄想をしてしまうのも、きっとこの暑さのせいだろう。

「有希～！」

原口弘子〈はらぐち　ひろこ〉がプールの中から手を振ったのでオレも小さく手を振った。

弘子は自慢していただけあって立派な巨乳だった。ふだんから着替えの時に見て知っていたが、水着だとまた大きさが際立って見える。それにしても大きな胸だ。オレの貧弱な胸がちょっと情けなく思えてくる・・・とはいえそれは贅沢というものだろう。本当は男のオレよりも小さな胸のコも少しはいるのだから・・・それにオレはＢカップの胸でも持て余しぎみなのに、あんなに大きかったら大変だ。オレにはこれくらいで十分だと思う・・・

佐倉千里〈さくら　ちさと〉はあまり水泳が得意じゃないようだ。バシャバシャやってるわりには全然進んでいない。でも佐倉は細身でスタイルがいいからスクール水着でも綺麗に見える。胸は・・・オレより少し大きい程度か・・・

長谷川はオレと同じ中学だからどんなスクール水着かは知っているが、長谷川はクラスが違うから水泳の授業で会う機会は無さそうだ。水泳大会なんてのがあれば水着姿の長谷川を見る機会もあるのだろうが、もともと水泳の授業が少ないうちの学校ではそういうのはないみたいだ。中学のころには見かけた事もあると思うのだが、オレは中学のころの長谷川のことはほとんど記憶にない・・・いまのように友達でもなかったし・・・となりのクラスだから名前は何とか知っていたが、ただたくさんの女子の中の一人にすぎなかった・・・

もっともオレとしても、ことさら長谷川の水着姿を見たいとは思

わない。男のころなら女子の水着を見ると興奮したかもしれないが、いまのオレはといえば、ただどんな水着が可愛いかとか、きれいに見えるとか思って見てるだけだ。色気を感じることもあるものの、それはあくまで素敵という範囲の話で、それ以上のものではない感じだ・・・オレにはそういう男の部分は無くなってしまったのだろうか?それともいつも女の子の中にいるから慣れてしまっただけなのだろうか?

しかしこの暑い中、ひとり見学していると、オレも泳ぎたくなってしまう・・・

「・・・テーピングってどんなふうにするんだろう・・・なんか剥がす時に痛そうだなぁ・・・」

そういえば女装なんかする人の中には股間を女の子のようにする“タック”というのをやる人もいると聞いたことがある。詳しいことは知らないが、玉を身体の中に押し込んで、オチ○コを股間にはさみ、袋を引っ張って瞬間接着剤で引っ付けるそうだ・・・そんなことで本当に女の子のようになるのだろうか?それに瞬間接着剤なんて、それこそ剥がれなくなったらどうするのだろう・・・

もっともオレには女装の趣味はない・・・それにオカマでもニューハーフでもないのだ。股間を女の子のようにしたいとも思わない・・・オレはただ成りゆきで女の子になることになってしまっただけなのだ・・・自分でもおかしなことを言ってるのは判っているのだが、実際にそうなのだから仕方がない・・・オレってやっぱり変なのだろうか・・・?

“ピピーッ”

先生の笛が鳴って時間が来たことを知らせた。白鴻女子短大までの行き来や着替えの時間を引くと正味３０分くらいしかない・・・みんなはプールを上がり更衣室へと向かう・・・オレも腰を上げて更

衣室へ向かった。みんなは水着を着替えるためだが、オレは体操服を着替えるためだ。

更衣室に入ると湿った空気が女の子の匂いで満たされていた。オレはもう女の子の匂いには慣れていたが、濡れた女の子が発する匂いはまた独特で一瞬オレは戸惑った。

「もう、有希！早く閉めてよ！」

「あっ、ご・・ごめん・・・」

みんなに言われてオレは慌ててドアを閉めた・・・まあ、ここは女子大だから男が通りかかることは少ないと思うが、プールの監視にはこの女子大の男の先生もいたから無理もない。

なんだかみんなが水着を着替えている中で、自分だけ体操服を着替えるのはやけに恥ずかしかった・・・なんだか初めてみんなの中で着替えた時の緊張を思い出す・・・あのころはまだ胸も偽物だったから今よりもずっと注意しなければいけなかった・・・いつ男だとバレないかとビクビクしていたものだ・・・

「有希残念だったね。この暑い中見学なんて。」

「う・・うん・・・まあ・・・」

岡本直美〈おかもと　なおみ〉に言われてオレはあいまいな返事をした。

「有希はアノ日だから仕方ないのよね。」

佐倉がそう言って助けてくれた。

「うん・・・」

オレは返事はしたものの、それ以上なんと言ったらいいのか判らなかった。

赤いジャージを脱ぎ、ブルマーを脱いでからスカートをはく・・・オレはもし誰かに見られても良いようにサニタリーショーツをはきナプキンをつけていた。

「有希はタンポンは苦手なの？」

岡本に聞かれてオレはドキッとした。
「う・・うん・・・タンポンはね・・・ちょっと・・・」
こんなのどう答えればいいのかわからない・・・だってタンポンなんて実物を見た事もないし・・・
「タンポンなら水泳だって出来るし、ナプキンより楽だと思うんだけどなぁ。」
そう言われても・・・オレにはそんなの入れるところがないし・・・
「有希はまだだから怖いのよね。」
「・・・まだ?」
弘子に言われたがオレには何のことか解らなかった。
「え? 有希まだなの?」
岡本にまで言われてオレは慌てて言った。
「う・・うん・・・わたし・・まだなの・・・」
オレは訳もわからないまま答えてしまった。

「そっか・・・それじゃタンポンはちょっと怖いかもねぇ。」
「う・・うん・・・」
なんかわからないが納得してくれて助かった。それにしても何がまだなんだろう・・・アノ日って言ってるんだから初潮のことじゃなさそうだし・・・

いったい何のことだったのかと考えながら高校までの道を歩いて帰っていると、佐倉がオレの耳元で小さな声で言った。
「有希、心配しなくてもいいのよ。わたしもまだだから・・・うちの学校はまだなコもけっこう多いみたいよ。」
オレも小声で聞き返した。
「ねえ、まだまだって何のこと言ってるの?」
すると佐倉は少し驚いた顔をした。
「有希ったら・・何の話かわからなかったの?」
「う・・うん・・・」

オレは正直にそう言った。いくら何でもそろそろ解っておかないとマズそうだ・・・

「ＳＥＸよ。ほかに何があるのよ。」

オレはそれを聞いたとたん大声を上げそうになるのを必死でこらえた・・・急激に体中が熱くなる・・・

「有希ってほんと変わってるわね。真っ赤になっちゃって！」

佐倉は可笑しそうに笑った。

たしかに言われてみれば、あの話の流れではＳＥＸ以外の何ものでもない・・・しかしオレが思うＳＥＸとタンポンは全然結びつかなかったのだ・・・だってオレは女の子のアソコのことなんて保健で習った知識くらいしかないのだから・・・

（そっか・・・オレって処女ってやつなんだ・・・）

オレは心の中でそう思った。これまでそういう事については考えたことがなかったが、こうなってしまった以上、オレは処女として言動に注意しなきゃいけないことになる。もっとも、どうせＳＥＸなんかしたことないから、処女にしといた方がボロが出なくて良い知れないが、なんだか奥手な娘みたいで気恥ずかしい気もする・・・とはいえ具体的に処女がどんなものかもオレには良く解らなかった。

それにしても処女には処女膜っていうのがあると聞いていたが、そんな膜があるのにタンポンなんか入るのだろうか・・・？　オレにはまだまだ女の子として知っておかなきゃいけない事がたくさんあるようだ・・・

第３９話　処女　オレが女だとしたら

オレは家に帰ってきて自分の部屋に入ると、すぐに部屋の鍵を閉めた。オレが今からやることを家族に見られたらたまったものじゃない・・・ベッドに腰掛けてカバンから大きな封筒を取り出した。それは白石先生からもらったものだった。

オレは水泳の授業が終ってから保健室に行って白石先生に生理とかタンポンについて聞いてみた。こんなことを聞けるのは先生しかいない・・・すると先生に放課後にもう一度来るように言われて、放課後行ってみるとこの封筒を渡されたのだ。本当は先生に教えてほしかったし、先生もそのつもりだったようなのだが、急に用事ができたとかで先生は出かけなくてはいけなくなってしまったのだ。それでオレは先生に“自習”しておくように言われてこの封筒を渡されたのだった。

封筒はきちんとテープで封をされていたものの、その膨らみ具合から中に入っているものが何なのかはオレにも予想がついた。開けてみると思ったとおり十数枚の書類の他に太めのスティックシュガーのような物が2本入っていた。それがタンポンだということはさすがにオレでも想像がつく。テレビのＣＭなどでも見たことがある・・・とはいえ知っていることと、実際に実物と手にするのとは大きな違いがあることを、オレはこれまでの女の子になる過程で思い知らされていた。白石先生には使ってみていいと言われていたが、オレにどうやって使えというのだろうか・・・

やはりナプキンやタンポンというものは男が手にするのはちょっとマズイ品物のような気がする・・・実際にナプキンを使っているオレが言うのもヘンだけど・・・

オレはナプキンに関しては他に都合がいいものがないから使っている・・・ナプキンでなければオムツということになってしまう・・・それならナプキンの方がまだマシというものだ・・・

だがタンポンはそれとは意味が違う。オレはタンポンなんか使う必要はない・・・入れる場所もない・・・でもクラスのみんなには、オレの身体にはそういうものが付いていることになっている。そうなればオレもそういうつもりで行動しなければいけないし、女の子なら当然知っていなければいけない事ならオレも知ってなくては不自然なのだ。

オレが持っている女性の性についての知識なんて中学の保健の時間に習ったことくらいしかない。それに、その時オレが将来女の子になるとわかっていれば女の子の身体のことも真剣に勉強していただろうが、そのころのオレはといえば、まさか自分が女の子になるなんて思ってもみなかったから、ほんの興味本位で聞いていただけだった・・・いまから思えばもっと真面目に聞いておけば良かった・・・

包装されたタンポンを手にとってみる・・・どうしようかと思ったが、2本あるからいいだろうと思い1本封を切って開けてみた。ココから・・・と書いてある点線の部分を引っ張ると簡単に破れた・・・中にはプラスチックの棒が入っていた・・・半分が細く、もう半分が太くなっている・・・なんだかニュースで見たロケットの先みたいだ・・・良く見ると太い方は先端がいくつかに別れて切れ込みになっている・・・中には・・・何か入っている・・・そして細い方の端からはヒモが出ている・・・細い糸が何本もより合わされて1本のヒモになっている・・・

形を見ればどうやって使うのか見当がつくのではと思っていたのだが、実際に手にしてみると、なんだか良くわからなかった。
こんな固いものを入れるのだろうか・・・それじゃあ、この先端の割れ目から血を吸収するのか？・・・このヒモは？

オレは自分で考えるのを諦めて、書類に目をとおすことにした。封筒から書類を取り出してみると、そこには女性の性器の図があった。図には各部分の名称が線を引っ張って書いてある。こういうのはオレも見たことがある・・・何となく次のページをめくったとたんオレは驚いて、思わず書類を放り出しそうになった・・・そこには大きな女性の性器の写真があった。

オレだって少し前までは男だったから、女の子のアソコがどうなっているのか想像したこともある。友達の家でHな雑誌も見たことはあるし、少しなら興味本位でアダルトビデオも観たこともある・・・しかしモザイク越しに見てオレが想像していたのとは、実際の写真はずいぶん違っていた・・・なんだか・・・すごく・・グロテスクだ・・・・・

妹の麻衣が小さいころ、一緒にお風呂に入った時に見たのとも違う・・・麻衣にはただの割れ目しかなかった・・・今はどうなってるか知らないけど・・・

オレは自分の身体にこういうのが付いているのかと思うと、なんだか背筋がゾッとした・・・それに良く考えてみればクラスのみんなにもこういうのがあるのだ・・・そう思うとなんだか変な気持ちになる・・・長谷川もこんなになってるのだろうか・・・？　オレは想像してる自分が恥ずかしくなった・・・これじゃ男の子みたいじゃないか！　どうやらオレにもまだ、少しは男の子の気持ちが残っているようだ・・・

気持ちを落ちつけて、書類をめくっていくと、タンポンのページが出て来た。タンポンの構造、使い方、身体の中に入っている状態などが数枚の書類に図解で書いてあった。

使い方を見て解ったが、どうやら細い棒で太い部分から中の物を押し出すらしい・・・良く見れば太い方にはへこんだ部分がある・・・ここをつまんで細い棒を押し込むらしい・・・

図では女の人がトイレで入れようとしているイラストが描いてある・・・立ってガニ股になって股間に当てているものや、洋式便器に座って股間にあてがっている絵をみると、なんだか見てはいけないものを見てしまったような気になる・・・たぶんこういうのは女の子が一番他人に・・・特に男の子にはみせたくないモノなのではないだろうか・・・女の子がトイレでこんな恰好でタンポンを入れてるところなんて、あまりリアルに想像したいものじゃない・・・

そういう気持ちは元は男のオレには想像しにくいものだが、パンティーストッキングを穿く時の恥ずかしい恰好などから少しは想像することが出来る・・・女の子には男には見せられないリアルな部分がけっこうあるものなのだ・・・

男のオレには使うことは出来ないが、マネごとくらいなら・・・オレはそう思ってセーラー服のスカートを脱いでみた・・・オレは思うのだが、セーラー服の上着を着て下はパンティーだけというのは、下着だけよりもHな感じがする・・・そんなことを思うのはオレが元男だからなのだろうか・・・

なんだかドキドキする・・・少し前屈みになって手に持ったタン

ポンをパンティーの上から股間にあててみる・・・ガニ股の足が何とも恥ずかしすぎる・・・オレはその方法をやめて、トイレに座ってやる方法に挑戦してみることにした。

ベッドに腰掛けて足を開き股間にタンポンをあててみた。しかし・・・女の子のアソコって、どのあたりにあるのだろう・・・オチ○コのあたりだろうか？　もう一度写真を良く見てみる・・・性器の下にはお尻の穴が写っている・・・お尻の穴って男も女も同じ位置ではないのだろうか？　オレはしばらく考えていたが、意を決して実際に見てみることにした。

鏡台の引き出しから手鏡を持ってきて、オレはパンティーを脱いだ・・・さすがにセーラー服の上着越しにオチ○コを見ると、情けない気持ちになってくる・・・自分が男だということを思い知らされる・・・それはずいぶん萎んでしまったとはいえ、女の子になったオレの身体の中で今でも独特の存在感を主張していた・・・

「はぁ・・・」

オレは思わず溜息をついた・・・オチ○コは女っぽくなったオレの身体では違和感があるとは思うが、これが無くなった方がいいのかどうかオレには良くわからない・・・それに、オレの股間が女の子のようになっていた方がいいのかも良くわからない・・・とりあえずニューハーフの人みたいに、自分の股間を女の子のように作り変えたいとは思わないのは確かだ。

おそるおそる鏡を股間に近づけていく・・・オレは自分のお尻の穴なんて見た事がなかった・・・が、思ったより・・きれいだった・・・きれいというのも変だが、写真の女の人の黒ずんだ肛門と比べると、そんなに黒くない・・・それにしてもお尻の穴って思いのほか下の方にあるものだ・・・写真と見比べてみると、どうやら女の人のアソコは男でいうと玉の袋があるあたりのようだ・・・

そういえば男も女も元々は同じモノを胎児の時にそれぞれの性に合わせて作り替えるのだと聞いたことがある・・・女の子のクリトリスというのは男の子のオチ○コになるところの名残りらしい・・・そう思って見ると、なんとなく位置が想像出来てきた・・・それに・・玉の袋の裏側の感じなんか、女性のアソコとなんとなく似て無くもない・・・

「なるほど・・・このあたりかぁ・・・」

オレは鏡を見ながらそのあたりをタンポンでツンツンしてみたものの、オレに出来るのはそこまでだった。

オレは手鏡を置いてタンポンを両手で持ってみた。真ん中の滑り止めの部分をつまんで細い方を押してみる・・・すると太い方の先端の切れ込みが広がって中のヤツが出てきた。さらに押すと、中のがムニュッと出てきた。ティッシュを圧縮したような感じだ・・・先端は丸く、片方からヒモが出ている・・・説明を読むと、このヒモを引っ張って取り出すらしい・・・それじゃぁ、女の子はタンポンを入れている間、このヒモを出したままなのだろうか・・・？なんだか奇妙な気がする・・・

「・・ふうぅ・・・」

オレはなんだか疲れてしまいベッドに座ったまま仰向けに倒れ込んだ・・・こんなのを身体の中に入れておくなんて男のオレには想像もできない・・・それに処女膜ってのがあるのにどうやって入れるのか書類を見ても良く解らなかった・・・処女膜ってのはもっと奥の方にあるのだろうか・・・？　オレは自習は諦めることにした・・・明日、白石先生に習った方が良さそうだ・・・

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

「どう?有希ちゃん自習はしてきた?」
先生に開口一番にそう言われ、オレは情けない返事をしてしまった・・・
「・・はぃ・・・」
「なに?どうしたの、元気ないじゃない。」
「だって・・・自習っていっても・・わたしには・・無いから・・・」
「それはそうだけど、開けてみなかったの?」
「あ、ひとつは開けてみましたけど・・・」
「それで?」
「あの・・押したら中のが出てきました・・・」
「なんだ、ちゃんと使ってみたんじゃない。」
「あ・・使うってそういう事だったんですか・・・?」
なんかオレがヘンなことを考えていたように思われそうで恥ずかしくなった・・・

「それじゃ模型を使って説明しましょうか。」
先生は女の人の下半身の模型を持って来た・・・あの部分は柔らかい素材でできているのか・・・なんか・・・けっこうリアルな感じだ・・・
「ここに・・・こうやって挿し込んで・・・この棒を押し込んで・・・そっと引き抜く・・・っと。慣れれば結構かんたんなのよ。」
そう言って先生は、模型を真ん中から半分に割った。片方は透明なプラスチックで仕切られていた・・・
「ほら、ここに入ってるのよ。」

そこには押し込まれたタンポンが入っていた。
「そして出すときは・・・こうやってゆっくりヒモを引っ張ると・・・」
すると模型の中からタンポンが出て来た・・・
「実際には経血を含んで膨らんでるんだけどね。有希ちゃん、水に浸けてみた?」
「い・・いえ・・・」
「それじゃ、やってみましょうか?」
「は・・はい・・・」
先生はガラスのコップに水を汲んでくると、ヒモとつまんでタンポンを水の中に浸けた・・・するとタンポンは水を吸ってあっという間に膨らんでいった・・・

しばらくして先生がコップの中からタンポンを引き上げた。
「こんなふうになるのよ。」
そう言って見せてくれたタンポンは、水で膨れてヘンテコな形になっていた・・・なんか・・・弓矢の羽根みたいな形だ・・・
「こんなふうに膨らむから、引っ張り出すときはゆっくりヒモを引っ張らなきゃいけないのよ。」
そう言われてもオレには引っ張り出す機会はなさそうだが・・・
「さわってみる?」
オレはおっかなびっくり受け取ってみると、思ったよりもしっかりと形を保っていた・・・引っ張っても形が崩れないし、ヒモも頑丈に付いていた・・・これなら千切れたりすることもなさそうだ・・・

「あの・・・先生・・・ひとつ聞いてもいいですか?」
「いいわよ。」
「あの・・・・」
しかしオレは言い出しにくくて思わず口ごもってしまった・・・

「なに?恥ずかしいことなの?」
「・・はぃ・・・」
「ふふっ・・先生に恥ずかしがることないじゃない。何でも聞いていいのよ。」
「・・はぁ・・・」
オレは意を決して切り出した。
「・・あの・・処女膜って・・・どこにあるんですか?」
「処女膜?」
「・・あの・・・膜があるのに・・・なんでタンポンが入るのかな?って・・・ふしぎに思って・・・」
「ああ、そういうことなの。」
先生は可笑しそうに微笑んだ。

「処女膜ってね、膜って言うけど、べつに塞がってる訳じゃないのよ。」
そう言って先生は模型の一部を指さした。
「ここが狭くなってるでしょう?」
「はぃ・・・」
「ここが処女膜って言われてるところなのよ。」
「・・これが・・・?」
それは膜という感じではなかった。
「これは医学的には筋膜といって直径2cmほどの穴があいた薄い筋肉の膜なの。」
「・・それじゃぁ・・どうして破けるんですか?」
「まあ、簡単に言うと、勃起した時のペニスより穴の方が小さいって事ね。だから性交時に切れてしまうの。一度破れると元には戻らないから処女膜なんて言われてるけど、医学的にはあまり意味はないのよ。」
こういう事を話すときの先生は、いかにもお医者さんっぽい。女の人の口から“ペニス”とか出てくると、さすがにオレもドキッとし

てしまうが、先生は恥ずかしくないのだろうか・・・

「元に戻らないとはいっても、ペニスが小さい場合とか破れ方が不十分だった場合は、怪我みたいなものだからまたひっつく場合もあるし、一度破けたと思っても、もっと大きなペニスが入ってくると、また出血する場合もある。逆に激しい運動とかすると、いつのまにか破れてしまったり、伸びてしまって血が出ない場合もあるのよ。」

「・・・・」

「タンポンを乱暴に引き抜いて傷つけちゃうこともあるしね。」

「・・・・・！」

オレは初めて聞く話に唖然としてしまった・・・なんだか聞いてはいけないことを聞いてしまったような気がする・・・オレには本当は必要ないことなのに・・・

オレにはそんなのが無くて良かったと思う・・・・

男の場合、ＳＥＸはオナニーの延長のような感じもするが、女の子にとってはきっと一大事なのだろう・・・だから処女とかバージンとか特別な名前で呼ぶのではないだろうか・・・まあ、男の場合も童貞なんて言うけど・・・オレもその童貞ってやつだけど・・・童貞と処女では特別感が全然違う。だいいち処女は良いことみたいに言われることもあるけど、童貞なんて褒められたもんじゃない・・・それなのにオレときたら童貞のまま処女になってしまうなんて考えてみれば、なんて情けない状況なのだろう・・・しかも本当の処女でもない・・・オレが処女なのは、あくまで設定上の話だ・・・オレには無くすモノなんて何もない・・・

「だいたい解ったかな？」

「あっ・・はい・・・」

急に物思いをやぶられてオレは慌てて返事をした。どうもオレは自

分の考えに入り込んでしまうクセがあるみたいだ・・・
「それと、有希ちゃんに言っておこうと思ってたんだけど、もうすぐ夏休みじゃない。」
「はい。」
「夏休みの間も週に一回くらい学校に来れる?」
「あ・・はい・・・来れると思いますけど・・・」
「それじゃ、月曜日は週明けで忙しいから、火曜か水曜でどうかしら?」
「はい、大丈夫だと思います。」
「良かった、ホルモンの注射は2週間に一回で良いんだけど、週に一回くらいは有希ちゃんの様子をみたいから。」
「はい・・・」
「都合が悪い日は先生に電話もらえば日にちずらすから。先生が学校に来てる日ならいつでもいいからね。」
「はい・・わかりました。」
様子をみるってどういうことか良くわからなかったが、オレはとりあえずそう返事をした。まあ、オレとしても週に一回くらい白石先生に会えるほうが安心できるというものだ。

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

それにしても、オレも良く女の子として一学期を乗り切ったと思う・・・この2か月ちょっとはオレの人生ですごく大きな2か月だったのではないだろうか・・・もしこうなることが最初から解っていたなら、オレはこんな人生は選ばなかっただろうと思う・・・この白鴻女学園を受験することもなかっただろうし、とうぜん女にな

ることもなかっただろう・・・

色々な、思いもしない偶然がかさなって、オレは女の子になってきた・・・これからどんなことが起こるかわからないけど、オレが男にもどることはもう無いのだろう・・・そう考えると少し淋しい気もする・・・男としてやり残したことも、いくつかあるような気がするし・・・

でも、もしオレがあのまま男だったら、いったいどうなっていたのだろうか・・・今のオレには男だった場合の自分がまったく想像できない・・・だいたいオレは男として何をしたかったのだろうか・・・なにか出来たのだろうか・・・？　情けないことだが男のころのオレは、今にくらべると何も考えてなかったような気がする。ただ漫然を生きていた・・・男であることが当り前のように・・・

しかし現実は全然違った・・・オレは男から女になり・・・今も女になる努力を続けている・・・この先、どんなことが起こったとしてもオレは女のままなのだ・・・まだまだ本当の女の子には程遠いかもしれないけど・・・今のオレは女になるしかないのだから・・・どうせなら頑張って可愛い女の子になりたいと思う・・・そんなことが可能なのかどうかオレにもわからないけれど・・・

もうすぐ女の子になって初めての夏休みだ・・・・

3章　第40話　祖母　オレのおばあちゃん（前書き）

3章　第40話　祖母　オレのおばあちゃん

「ねえ有希、明日から夏休みでしょう？」
オレはかあさんに聞かれて訳もわからないまま返事をした。
「うん・・夏休みだけど・・・どうして？」
「あさっては用事ある？」
「あさっては・・・ううん、特にないけど・・・」
運動部とかは夏休みの間も出なきゃいけないみたいだが、オレが入っている華道部はそういうのは全然ない。
「それじゃ、麻衣と一緒に西新（にしじん）のおばあちゃんの所に行ってきてくれないかなぁ。」
「おばあちゃんのところ？」
「そう、本当はかあさんが行こうと思ってたんだけど、どうしても外せない仕事が入っちゃって行けなくなったのよ。」
「そ・・そうなんだぁ・・・」
オレは西新のおばあちゃん・・・つまりかあさんのお母さんのことは嫌いじゃない・・・昔は近くに住んでいたから良く遊びに行ったものだ・・・でも・・・今のオレは以前のオレじゃないし・・・そんなオレを見ておばあちゃんがどう思うか心配だ・・・

「やっぱりまだ遠くには行きたくない？」
「う～ん・・・そういうわけじゃないんだけど・・・」
たしかに西新までは電車と地下鉄を乗り継がなきゃいけないから、それなりに時間はかかる。それはオレにとって緊張を強いるのは確かだ・・・しかし最近ではオレもだいぶ落ちついてきているし、白石先生にもらったお薬を飲んでおけば大丈夫だと思う・・・ナプキンもしておくつもりだから少しなら漏らしても心配ないし・・・
「おばあちゃん・・・わたしを見てどう思うかなぁ・・・ヘンに思わないかなぁ・・・」

「そんなこと心配してたの？大丈夫だと思うわよ。」
「そうかなぁ・・・」
かあさんにそう言われても、オレはどうにも半信半疑だった。だって男の子だった孫が急に女の子になってたらヘンに思わない方がおかしい・・・

「有希が無理ならお盆過ぎになるかもしれないけど、わたしが行くって言っておくけど。」
「ううん・・・わたし行ってくる・・・」
「そう？　大丈夫？」
「うん・・・たぶん。」
「それじゃぁ、お願いするわね。」
「うん。」
オレは本当はあまり行きたくはなかったが、ずっと女になった事を隠している訳にもいかないと思う・・・西新のおばあちゃんは優しいから、かあさんが言うように心配ないかもしれない・・・オレはそうであることを心の中で祈った。

オレが女になったことはいずれ親戚にはわかってしまうだろう・・・その点、西新のおばあちゃんはまだマシな方かもしれないと思う・・・とうさんの側の親戚とは疎遠だから、もし会わなくちゃいけなくなったらどうすれば良いのだろうか？　熊本のおばあちゃんなんてオレが小さな時に一回会ったきりだというのに・・・もちろんオレはその話を、のちに聞いたから知ってるだけで、その時のことはまだ小さかったから全然憶えていないけど・・・

しかしオレが女の子になると決めた時には、親戚付き合いのことなんて考えもしなかった・・・オレは自分が女の子になることだけを考えていたが、案外これから人付き合いで大変なことがいろいろあるのかもしれない・・・

―――――――――――――――
―――――――――――――――
――――――――――

「それじゃ、これでお供えもの買ってから行きなさい。」
「はい。」
「麻衣も有希のいうことをきくのよ。」
「は～い！」

かあさんはオレにお金をあずけると仕事に行った。すると食卓をはさんで座っていた麻衣が言った。
「ねえ、お姉ちゃん。おみやげは何買って行くの？」
「そうねえ・・・麻衣は何がいい？」
「なんばん往来！〈なんばんおうらい〉」
「さかえ屋かぁ・・・さかえ屋なら駅前にあるからついでに買えるわね。・・・でも麻衣って“なんばん往来”好きねぇ。」
「お姉ちゃんだって好きじゃない！」
「まあ、そうでけど・・・」
さかえ屋の“なんばん往来”というのはアーモンド粉のケーキをパイ生地で包み、下のほうにラズベリーのジャムが入っているお菓子だ。実はオレも麻衣もこの“なんばん往来”が大好きなのだ。ちょっと田舎っぽいところもあるが、それがまた堪らない・・・おばあちゃんのところは、いつも持って行ったお供えものを仏壇にあげて、残りをオレたちに出してくれる・・・だから自分が食べたいヤツを持っていった方がいいのを麻衣も知っているのだ。
「お姉ちゃんそろそろ出かける準備したほうがいいんじゃない？」

「え？　でもまだ1時間近くあるじゃない・・・」
「だって、お姉ちゃんこのごろ出かけるまでが長いんだもん！」
「え～？　そんなことないと思うけど・・・」
「長いよ～！　お化粧とか時間かかるんだからもう準備した方がいいって！」
「そ・・そんなぁ・・・・」
オレは麻衣にそう言われ、何も言い返すことも出来ずに、すごすごと洗面所へと向かった。妹にお化粧が長いなんて言われるとは・・・元男だったオレとしては情けないかぎりだ・・・男に言われるならまだしも、女の麻衣に言われるなんて・・・

でも、たしかに最近は、出かけるまでに時間がかかるようになってしまっているかも知れない・・・女の子は服を選んだり、お化粧をしたりと、いろいろやらなきゃいけないことが多すぎるのだ。それなのにオレときたら、まだ男のころの感覚が抜けきれないから、どうしてもギリギリになって準備を始めてしまう・・・結果、麻衣が言うように出かける予定の時間に遅れてしまうのだ・・・

顔を洗って二階のオレの部屋に行こうとリビングを通ると、麻衣はまだリビングでテレビを観ていた。
「麻衣もそろそろ準備したほうが良いんじゃないの？」
たまにはオレだってお姉さんらしいことも言ってみたい・・・
「あたしはまだいい、お姉ちゃんみたいにお化粧しなくていいし。」
「そ・・そう・・・」
オレはにべもなく妹に言い返されてしまった・・・
「き・・きょうは・・わたしもそんなにお化粧しないけどね・・・」
オレはそう言って二階へあがった・・・今のオレにはそれくらい言い返すのがやっとだった・・・麻衣は本当の女の子・・・女の子は生まれつき口が達者らしい・・・偽者の女の子のオレが適わないのも仕方がないのかもしれない・・・

オレは洋服ダンスを開けると、どれを着ようかと悩んだ・・・命日ってどんな服で行けばいいのか、かあさんに聞いておくべきだったと今さら思う・・・このごろはオレもだいぶ慣れて、あまり選んでもらうことも無くなってきてたから油断していた・・・麻衣にどんなにがいいか聞こうかとも思ったが、ちょっと癪にさわるのでやめにした・・・

やっぱり命日だからあまり派手なのや、可愛いのは避けるべきだろうと思う・・・でも葬式じゃないから黒い服もなんだし・・・

「そうだ・・・」

お茶を習いに行くときみたいな恰好ならいいのではないかと思い、オレは白いブラウスを選ぶことにした。ピンタックというのだろうか・・・左右に細いタックが数段入ったのを選んでみた。オレが持っている中では、ちょっとエレガントな感じかもしれない・・・だけど丸い衿と膨らんだ袖がそんな中にも少女っぽさも醸し出している。

部屋着のワンピースを脱いでブラとスリップを着ける・・・白いブラウスだからベージュのものを選ぶのは当然だ・・・男としてはブラウスから透ける白い下着も色っぽいものだと思うが、やっぱり見られる側としては下着が透けるのは恥ずかしい・・・

ブラウスのボタンを留めてから、両手の甲で髪の毛を衿から抜いた。オレは無意識にしたその仕草が、妙に女っぽくてドキッとした・・・

これは女になってからわかったことだが、男が色っぽいと思う女の仕草というのは、その多くが長い髪や、服装から自然に出てくる

仕草のようだ・・・スカートをはけば足を開いて座るわけにはいかないし・・・長い髪を扱うには、どうしてもそういう手つきになってしまうものなのだ・・・それが解っているのに無意識にやった自分の仕草にドキッとするのは、まだオレの中に男の部分が残っているからなのだろうか・・・

スカートは薄い茶色・・・黄土色?・・・いやカーキー色と言ったほうがいいのだろうか?ヒザ丈のAラインの物を選んだ。スキンカラーのストッキングをはいて、スカートを着けてみる・・・考えてみれば最初のころはストッキングをはく前にスカートをはいてしまい、やり直すことも多かった気がする・・・こういう手順も自然に出来るようになっていることに今さらながら気づいた。

鏡の前に立って全身を映してみた・・・我ながらいい感じではないかと思う・・・清楚な服は似合わないのはオレだって解っている・・・でもこういうのを着なきゃいけない時もあるのだから仕方がない・・・オレはこういう服の時は、自分に似合うかどうかよりも、服の組み合わせだけを考えることにしている。

化粧はしなくて良いかと思っていたが、やっぱり少しだけすることにした・・・オレが女の子になって初めて会うおばあちゃんに、どうせなら少しでもきれいなオレを見てほしい・・・おばあちゃんには女の子になったオレを受け入れてもらえないかもしれないけど、それでも少しだけでもマシなオレを見てほしいと思う・・・それに・・本心をいえば、このあいだ二光さんに教えてもらった、夏のすっぴんメイクっていうのを一度やってみたかったというのもあった・・・

ちょうど化粧を終えたころドアの外から麻衣の声がした。

「お姉ちゃん、まだ時間かかるの？」
「え？！」
オレは時計を見て驚いた。もう1時間経ってしまっている・・・これでは麻衣に時間がかかると言われても仕方がない・・・オレはドアを開けた。
「ごめん麻衣、あと髪だけなんだけど・・・」
「わぁ！お姉ちゃんそういう洋服着ると、いちだんときれいに見えるね。」
「な・・なにいうのよ・・・」
なんてお世辞を言う妹なんだろう・・・オレは少しあきれた・・・そんなの本気にするハズがないじゃないか・・・
「麻衣はもう用意できたの？」
「うん。」
麻衣は白いノースリーブのワンピース、衿、肩、裾に紺のライン。お腹の上のあたりに付いている同色の紺色の大きなリボンがポイントになっていて可愛い・・・オレは自分の考えたことに急に恥ずかしくなった・・・自分がその服を着ている姿を想像してしまったのだ・・・このごろ時々こういうことがある・・・たまたま見かけた女の人が着ている服を自分が着ている想像をしてしまうのだ・・・オレはそのたびに恥ずかしい思いをしてしまう・・・

「髪の毛ならあたしやってあげるよ。」
「そ・・そう？・・・じゃぁ・・お願いしようかな・・・」
オレは素直にやってもらうことにした・・・それというのもオレはまだ髪は上手くまとめることが苦手なのだ・・・
「どんなのがいいかなぁ・・・」
鏡台の前で妹に髪をセットしてもらうなんて、男のころには考えもしなかったことだ・・・いまだに男の部分も少しは残っているオレにとっては恥ずかしいかぎりだが、麻衣とこういう関係になれたことに嬉しさも感じているのが不思議だ・・・オレが男のころは、た

だうるさい妹だと思っていたのに・・・

麻衣はオレの髪の両サイドをそっと後ろに持っていく・・・
「よし、決めた！　お姉ちゃん髪留め持ってたよねぇ。」
「う・・うん・・・いくつかあるけど・・・」
オレはそう言って鏡台の横の引き出しを開けた・・・そこには髪留めやカチューシャなどが入っている・・・自分で買ったのもあるが、ほとんどはかあさんに貰ったものだ。

「これがいいかな・・・」
麻衣はその中から濃い茶色のものを選んだ。髪を霧吹きで湿らせてからドライヤーできれいに伸ばしていく・・・オレは学校ではお下げにしているし、家ではよく後ろで結んでいるから髪の毛に段ができてしまう・・・自分ではなかなか上手く取ることが出来ないが、麻衣は手際よくドライヤーとブラシで真直ぐにしていく・・・そして毛先と前髪をクルクルドライヤーできれいなカールをつけた・・・こういうのはかあさんにやってもらう時も恥ずかしいが、妹だとなおさら恥ずかしい・・・

そして麻衣は櫛でオレのサイドの髪を器用に分けるとクルクルとねじっていく・・・両サイドをねじると後ろでゴムで留めた。ブラシでその先をきれいに整え、ゴムの上から髪留めではさんだ。
「これでどう？」
「う・・うん・・ありがとう・・・」
こういうところはさすがに女の子だと思った。自分ではしないような髪型でもちゃんと見ているのだろう・・・にわか女の子のオレにはどうやったって太刀打ち出来そうにない・・・

「あれ？気に入らない・・・？」
「ううん、そんなことないよ・・・ただ・・・こんな清楚な髪型・・

わたしには勿体ないと思っただけ・・・」

「もう、お姉ちゃんったらまたそんなこと言ってる！」

麻衣は可笑しそうに言った。

「お姉ちゃんがきれいだから、どんな髪型でも似合うんじゃない。」

「そ・・そう・・・？　あ・・ありがとう・・・」

いくら何でもそれは言い過ぎだと思ったが、麻衣の心遣いが嬉しかった。オレはその勿体なさすぎる言葉を受け入れることにした。

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

オレたちは駅前のさかえ屋でお供え物のお菓子を買ってからおばあちゃんの家に向かった。オレの家から１０分ほどの駅、春日原〈かすがばる〉から天神までは西鉄電車で、天神から西新までは地下鉄で行く。時間的にはそれほどでもないが、人が多いところも通らなきゃいけないからオレとしてはちょっとキツい・・・

それに今日は麻衣とふたりきりで、何かあったら助けてくれるレナも、頼りになる長谷川もいない・・・逆に何かあったらオレが麻衣を守らなきゃいけない立場なのだ。そのうえこれから女になって初めて会う、おばあちゃんのところに行くとあっては緊張しないワケがない・・・

「お姉ちゃん大丈夫？」

電車のふたり掛けの席のとなりに座った麻衣にそう言われてオレはハッとした・・・自分でも気づかないうちに両手を握りしめていた・・・手の中は汗でびっしょりだ。麻衣がオレの手に自分の手を重ね

て言った。
「そんなに緊張することないよ。お姉ちゃんを見て男の子だと思う人なんていないよ！今までも気づいた人いないでしょう？」
「う・・うん・・・それはそうだけど・・・でも・・おばあちゃんは・・・」
おばあちゃんはオレが男だと知っているのだ・・・
「大丈夫じゃないかなぁ・・だってお母さんのお母さんでしょう？」
オレにはそれが大丈夫だという根拠としては、はなはだ頼り無く思えたが、麻衣にそう言われると少しは落ちつく気がした。

駅に着き電車を降りると、そっと麻衣がオレと手をつないだ・・・はた目には姉が妹の手をつないでいるように見えるかもしれないが、そうでないことはオレ自身が判っている・・・妹を守ろうなんて考えた自分が恥かしくなる・・・麻衣はそんなに弱いコじゃない・・・弱いのはオレのほうだ・・・

天神地下街へ降りて地下鉄に乗ると、おばあちゃんが住む西新までは駅４つ・・・いよいよ近づいてきてオレも更に緊張してくる・・・そんな中、麻衣の手がこんなに心強いとは思いもしなかった。

西新に着き、地上へ上がると、夏の日射しとムッとするような熱気が襲ってきた。
「暑いねぇ・・・」
オレはお供え物の包みを麻衣に持ってもらい、バッグからハンカチを出して、そっと汗を押さえた・・・おばあちゃんの家に行くには商店街を通るのが近道だ・・・しかし・・・

オレが躊躇していると、麻衣がオレの手を引っ張って商店街へ入

っていく・・・
「あ・・ちょっ・・・」
オレは一瞬拒もうとしたが、妹にそんな情けない姿を見せたくないという気持ちがそれを止めた・・・
西新の商店街は真ん中にリヤカーが店を開いているから、その左右の人込みはそうとうなものだ・・・買い物のおばさんたちをかき分けるようにして進まなければいけない・・・オレは人にぶつかるたびに男だとバレるのではないかとビクビクしていた・・・しかし、オレたちはバレることなく商店街を抜けることができた。

「あぁ・・ドキドキした・・・」オレがそういうと
「どうして?」と麻衣が聞いた。
「どうしてって・・・だって、あんな人込みで・・もし男だってバレたらどうするのよ・・・」
「お姉ちゃんったら、まだそんなこと心配してるの?」
「う・・うん・・・ゴメン・・・」
情けない兄だと思うだろうか・・・? しかし妹の反応は意外なものだった。
「バレるはずなんて無いのに、お姉ちゃん可愛いなぁ!」
麻衣はそう言ってオレの腕に手をまわして、しっかりと抱きつくようにひっついてきた。
「あたし、お姉ちゃんが女の子になって良かったって思うよ!」
「な・・なに・・・?」
オレは麻衣の気持ちを計りかねて戸惑った。
「ど・・どうして・・・?」
「だってぇ、お姉ちゃん女の子になって優しくなったもん。」
「そ・・そう・・・?」
「お姉ちゃん男の子のころは、自分のことしか考えてなかったもん。」
「・・・・・」

そうなのだろうか・・・オレはそんなに自分勝手だったのだろうか？　今となってはオレが男のころどんなヤツだったかなんて良くわからなくなってしまった・・・

「さあ、もうすぐそこだよ。早く行こう！」

「・・う・・うん・・・」

オレは腕を組んだ妹に、なかば引きずられるようにしておばあちゃんの家に向かった。

大通りは発展している西新だが、おばあちゃんが住んでいる裏通りは昭和の街なみが残っている。おばあちゃんの家は戦争でも焼け残ったというくらいの古い家だった。麻衣は滑りの悪い引き戸を開けて中に入ると大きな声で挨拶した。

「こんにちは～、おばあちゃん！」

すると奥からおばあちゃんが出てきた。歳は７０才くらい、髪には白髪の方が多いくらいだ。前に見た時より白髪が多くなっている。

「麻衣ちゃんね、ようきたねぇ。すっかり大きくなったやないね。」

オレはおばあちゃんと目が合い、引き戸の外で足がすくんだ。

「おや？そっちのお嬢さんはどなたね？」

「うふっ・・おばあちゃん、有希お兄ちゃんよ！」

麻衣の口から“お兄ちゃん”と紹介されオレはギクッとした・・・何と言っていいかわからなかった。

「・・あ・・あのぉ・・・」

「なんね、有希ちゃんね？　また女の子の服ば着るごとなったとね。」

「え・・う・・うん・・・」

オレは何とかそう返事をした。おばあちゃんが言った意味が良くわからなかった。

「さ、早う入りんしゃい。」

オレたち二人はおばあちゃんに言われるまま玄関を上がりお座敷へと通された。

「あ、あの・・おばあちゃん・・これ・・お供え物・・・」
「ありがとね、有希ちゃん、今あげるけん待っときね。」
「・・はい・・・」
オレはドキドキしながら座布団に座った・・・何度も来たことがあるのに初めて来たような気がする・・・おばあちゃんは、何ていうのか知らない足が付いたお盆のようなのにお供え物を乗せて来て仏壇に供えてお参りした。オレたちも見よう見まねで一人ずつ線香をあげてお参りを済ませた。

「さ、食べんしゃい。」
そう言っておばあちゃんはオレたちが持って来たお菓子を皿に乗せて持ってきてくれた。
「いただきま～す！」
麻衣はすぐにお菓子に手を出したが、オレはとても物を食べるような気にはなれなかった。

「お父さんとお母さんは仲ようしとうね？」
「・・う・・うん・・たぶん・・・」
べつに喧嘩してるところは見た事がないから仲は悪くないと思う。でもとうさんとかあさんが顔を合わせるのは食事の時くらいだから、あらためて聞かれると良くわからない・・・
「有希ちゃんは、ずっと女の子の恰好ばしとったとね。」
「ううん・・・高校生になってから・・・」
オレはもじもじしながらそう答えた。
「おばあちゃん、お兄ちゃんね、女子高生になったのよ。」
「なんね、女子高生に男の子がなれるとね？」
「・・あ・・そのぉ・・・」

オレは何と答えればいいのだろうか・・・
「お兄ちゃん、女の子になったんだもんね！」
「・・う・・うん・・・」
麻衣に言われてオレは思わず返事をした。

「そうね・・・有希ちゃんは小さいころから女の子の服ばっかり着せられとったもんねぇ。また麻希が無理矢理着させとうっちゃないとね？」
「ううん・・・違うよ・・・」
「お父さんとお母さんは何て言いようと？」
「ん？・・わ・・わたしがしたいようにしなさいって・・・」
「そうね・・・あのふたりらしかねぇ・・・」
「・・・・・」
とうさんとかあさんらしいかどうかオレには良くわからない・・・考えてみればオレはふたりの性格をそれほど良く知っているとは言えない気がする。特にとうさんの性格なんて良く知らない。

「麻衣ちゃん、ちょっと買い物ば頼んでもよかね？」
「うん、いいよ。」
「それじゃ、ジュースば買って来てくれんね。他にも麻衣ちゃんが食べたかとがあったら買って来ていいけんね。」
「うん、わかった！」

麻衣が買い物に出ていくと、おばあちゃんがオレに言った。
「有希ちゃんは女になりたいとね？」
「・・う・・うん・・・」
実際にはそうとばかりは言えない気もするが、ここはそういう事にしといた方が良さそうだ。なりゆきでこうなってしまったことを説明するのも難しい・・・
「子供のころとは違うとよ？」

「え?!」
「子供の頃は女の子の服ば着るだけやったろうけど、大人の女になるとは簡単じゃなかよ? ほんとに解っとうとね?」
「うっ・・うん・・・」
オレはそう言ったが、ほんとのところオレにも良くわからない・・・
「そうね、有希ちゃんが覚悟が出来とうとなら良かけどね。」
覚悟・・・そう言われるとオレにはまったく自信がなかった・・・

「そういえば思い出すねぇ、このあいだあんたが小学校に入る時、ピンクのランドセルば欲しがりよったもんねぇ。憶えとうね?」
「・・ううん・・・」
オレは首を横に振った。オレはそんなこと全然憶えていない・・・
それに“このあいだ”とはどういう事なのだろうか・・・
「あんた黒かランドセルばイヤって言って泣きよったとよ。有希ちゃんはあの頃から女の子になりたかったとかねぇ・・・」
「・・・・・」
おばあちゃんもまた、オレが知らないことを知っているようだ・・・
オレはやっぱり元々女の子になりたかったのだろうか・・・?
そういえば歳をとると時間が早く過ぎるのだという・・・おばあちゃんにとってはオレが小学校へあがる頃も“このあいだ”なのだろうか・・・? それならオレが男の子だった期間は、おばあちゃんの中ではほんの少しの間なのかも知れない・・・

「でも有希ちゃん、ちょっと見んうちに綺麗になったやないね、麻希が有希ちゃんぐらいの頃によう似とうよ・・・」
「そんな・・・わたし・・かあさんみたいにきれいじゃないもん・・・」
「なんね? 有希ちゃんは自分ば綺麗と思わんとね?」
「う・・うん・・・だって・・・」

オレは恥ずかしくてうつむいてしまった・・・オレがかあさんみたいに綺麗なハズがない・・・

「お化粧してるからよ・・・きっと・・・」

「なんば言いようとね。　女ならシャンとせんね、女の腐ったごたるのは男だけで良かとよ！」

「・・・・」

オレって女の腐ったような男なのだろうか・・・でも今は女だし・・・女だって腐ったのはイヤだけど・・・

「有希ちゃん、女は男のごと甘えちゃいかんよ。もっと強くならな。九州の女は強かとよ！」

「う・・うん・・・」

おばあちゃんにそう言われて、オレは自分がさらに恥ずかしく思えてきた・・・たしかにオレの中には女の子になったのだという甘えがあったかもしれない・・・オレだって情けない女にはなりたくない・・・でも・・・オレが強い女になんてなれるだろうか・・・情けない男が、強い女になんて・・・

「ただいま～！」

麻衣が帰ってきたことにホッとした。おばあちゃんと二人きりでは、オレはどんな話をすればいいかわからない・・・

その後も麻衣とおばあちゃんは仲良くしゃべっていたが、オレはとても話に入れず、黙って時々ジュースに口をつけるだけだった。

オレもいつかは麻衣のようにおばあちゃんと話がしたい・・・でも、そのためにはオレがもっと女らしくならなきゃいけないのだろう・・・女らしくて・・強い・・・・

帰りぎわ、オレはおばあちゃんに言われた・・・

「女になるって決めたとなら、立派な女にならんといかんね。」

「う・・うん・・・」

オレはあまり自信はなかった。オレはおばあちゃんはまだ、オレの

ことを女だと認めていないような気がした・・・オレもおばあちゃんが言うような立派な女にならなきゃと思う・・・でも立派な女ってどんな女の人なんだろう・・・

ーーーーーーーーーーーーーーー

ーーーーーーーーーーーーーーー

ーーーーーーーーーー

地下鉄を降りて、電車に乗ると少しホッとした・・・電車は学校に行く時に毎日乗っているから他のことよりは緊張しない・・・ラッシュアワーだとその限りじゃないけど・・・もちろんこれから家に帰れるという安心感もあるに違いない・・・

電車が走りだすとオレは麻衣に言った。

「わたしね・・・麻衣が急に“お兄ちゃん”なんて言うからビックリしちゃった・・・」

「あ、ごめんね、そんなつもりじゃなかったんだけど。」

「ううん・・・いいんだけど・・久しぶりだったから・・・・」

今日はオレもまだまだ女として未熟だと思い知らされた・・・おばあちゃんにはオレの甘えた気持ちを見透かされた気がした・・・

「あのねぇ、おばあちゃんにね、良いお姉ちゃんが出来て良かったねって言われたよ。」

「え?・・・いつ・・・?」

「え~と・・・お姉ちゃんがトイレに行った時かなぁ。」

おばあちゃんがそんなことを・・・?

「あたしが、お姉ちゃんが出来て良かったって言ったら、おばあちゃんも良かったねって。」

あぁ・・・そういうことか・・・おばあちゃんは麻衣に気を使ってそんな風に言ったのだろう・・・でも・・今はそういうことにしておこう・・・

「麻衣・・・お姉ちゃんもね、女になって良かったって思うよ。」
「ほんと?」
「うん・・・だって女の子になったから、麻衣と姉妹になれたんだもん。」
オレがそう言うと、麻衣はパッと顔を輝かせた。
「そうよね、あたしお姉ちゃんが男のころより、今の方がずっと好き。」
「わたしもよ麻衣・・・」
オレたちはお互い頬を擦り寄せた。こんなこと兄と妹じゃとても出来ないだろう・・・オレは麻衣のことが愛おしくてたまらなかった・・・オレは女になるけど、せめて麻衣を守れるくらいは強くなりたいと思った。

「お姉ちゃん・・・」
麻衣がおばあちゃんにもらった紙袋を開けると、オレたちがお供え物に持っていった“なんばん往来”が入っていた。
「え?! 麻衣ったら・・持ってきちゃったの?」
オレが驚いて聞くと
「違うよ、おばあちゃんが持って行きなさいって、お姉ちゃんひとつも食べてなかったからって。」
「・・・・」
「おばあちゃんね、お姉ちゃんがこれ好きなの知ってたんだよ。」
おばあちゃんは何もかもお見通しだったようだ・・・
「食べよう、お姉ちゃん。」
オレたちは電車の中でお供えに持って行ったお菓子を食べた。
「おばあちゃんって優しいね・・・」

それだけ言うと涙があふれてきた・・・オレは優しくて、ちょっと厳しいおばあちゃんが大好きだ・・・オレは今度おばあちゃんに会う時には、おばあちゃんに褒めてもらえるような、立派な女の子になれてたらいいなと思った。

―――――――――――――――
―――――――――――――――
――――――――――

おまけ『オレは女子高生』の世界

舞台

九州北部の架空の福岡県、主に架空の西鉄大牟田線沿線を中心に繰り広げられる物語。

―――――――――――――――
―――――――――――――――
――――――――――

登場人物

家族・親戚

戸田有希　〈とだ　ゆうき〉　この小説の主人公　現在、白鴻女学園高校１年　１５才　１月生まれ　身長１６３ｃｍ　足のサイズ２５ｃｍ　性格は優柔不断、物事を深く考えない、素直なところもあ

る。　勉強は国語と図工が得意、英語と数学が苦手、体育はそんなに得意じゃないが水泳はなぜか得意らしい。華道部。茶道も習っている。料理は昔からやっている。裁縫は習ってみたら得意だった。小学校２年まで家では女の子の服を着ていたらしいが有希自身は憶えていない。本当に性同一性障害なのかもしれない。父ゆずりのアレルギー体質。

戸田有正　〈とだ　ありまさ〉　有希の父　５３才　売れない作家（昔、芥河賞にノミネートされたことが一度だけあるらしい。現在はペンネームで三次元文庫にライトノベルを書いているらしい）婿養子で旧姓は佐藤　本家は熊本。有希は小さいころ一回だけ行ったことがあるらしい。

戸田麻希　〈とだ　まき〉　有希の母　４５才　空間デザイナー（店舗の内装とかのデザインをやるらしい）細身で美人らしい。歳より若く見えるらしい。

戸田麻衣　〈とだ　まい〉　有希の妹　現在、春日第二中学１年１２才　明るい性格　有希が女の子になってからは仲が良い。

戸田有友　〈とだ　ありとも〉　京都の薬科大　大学院２年生　成績優秀　２３才　有希の自慢の兄。まだ出演していない。

戸田ノゾミ　〈とだ　のぞみ〉　母方のおばあさん　西新のおばあちゃん　７０才くらい　優しいが厳しい部分もある。

長山麻弓　〈ながやま　まゆみ〉　母の妹　美容院を経営　有希をニューハーフだと理解している。エステサロン経営の二光さんとは知り合い。

長山レナ　長山麻弓の娘　有希のいとこで幼馴染み　有希と同学年
茶髪でオシャレ。活発。

―――――――――――――――

―――――――――――――――

――――――――――

白鴻女子短大付属　白鴻女学園〈しらとりじょがくえん〉伝統ある女子高　共学化を目指したが男は有希しか受験しなかった。また共学化には卒業生からも反発があったらしい。清楚で伝統的なセーラー服が特徴。

白鴻女学園の生徒（有希は３組）

長谷川順子　〈はせがわ　じゅんこ〉有希と同学年の１組　有希と同じ中学出身だが中学時代には親しくない。今は一番の親友で生徒では唯一有希が男だと知っている。有希と同じ華道部に所属している。フクロウの置き物を集めているようだ。読書家。仮面レンジャーが好きらしい（特に可愛い系の仮面グリーンがタイプらしい）性格は謎の部分も多い。小さいころから転勤がち、現在は母と二人暮らし、父は大阪に単身赴任中。

岡本直美　〈おかもと　なおみ〉３組のクラスメイト　ちょっと目立ちたがり屋。自意識が強い。

佐倉千里　〈さくら　ちさと〉３組のクラスメイト　大人しい　クラスメイトでは有希と一番仲がいい。

原口弘子　〈はらぐち　ひろこ〉３組のクラスメイト　胸が大きいのが自慢、色気がある。

井川聡子　〈いがわ　さとこ〉有希と同学年の２組　有希と同じ華道部　地味で背が低い。要領が悪い。綺麗で可愛く背が高い有希に憧れているらしい。

安部まさ美　〈あべ　まさみ〉３組のクラスメイト　出席番号一番のコ

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

白鴻女学園の先生〈先生は全員、有希が男の子で性同一性障害者だと思っている。校長と教頭だけは有希が性同一性障害ではないと知っている。〉

会長　白鴻道子〈しらとり　みちこ〉白鴻女学園創始者の孫　白鴻女子短大の校長でもある。まだ出演したことはない。

校長　有希のことは教頭にまかせている。事なかれ主義な面があるようだ。

教頭　石渡先生　有希が性同一性障害だという設定を考えた。

山口智佳　担任・体育　快活　３１才　有希のことを気にかけてはいるが、あえて他の生徒と同じように接している。

松本たか子　家庭科　２６才　有希の制服の世話などを任されている。校長と教頭以外では有希が男の子の頃に会ったことがある唯一の先生。有希にとってお姉さん的存在。有希の裁縫の才能を高く評

価している。

長山鏡子〈ながやま　きょうこ〉古典　６０才　風紀検査に厳しい。

斉藤明〈さいとう　あきら〉現国　２８才　有希が習っているうちでは唯一の男性教師。有希が倒れてとき保健室まで運んでくれた。

嶋田晶子〈しまだ　あきこ〉調理実習・華道部顧問　４０才くらい
ちょっと古風な美人

白石香帆〈しらいしかほ〉学校医　３４才　美人女医　善かれと思い有希に女性ホルモンを投与してしまった。有希にとって何でも相談できる頼れる優しい女性。有希のことは何でも知っているが、白鴻女学園に入学したいきさつまでは知らない。

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

春日第二中学　関係

井原〈いはら〉先生　中学の有希の担任　有希に白鴻女学園を紹介し、ある意味有希を女にした張本人。

三吉〈みよし〉先生　中学の家庭科教師　有希にお嬢様教育をした人物。躾に厳しいが真面目にやるコには優しい面も見せる。有希にとっては恩師であり、現在も先生の自宅でお茶や着物の着付けを習っている。女子の間でのあだ名クソババア。

鈴木　中学の仲が良い男友達。

一一一一一一一一一一一一一一一
一一一一一一一一一一一一一一一
一一一一一一一一一一

その他

二光〈にっこう〉　おかまのメイクアップアーティスト　４３才
全国に十数店のエステサロンを経営している。出身地の福岡には博多と春日原の２店舗がある。

第４１話　千里　オレの女ともだち

夏休みになって数日経ったけど・・・オレはといえば、あまり外にも行きたくないし、今日も自分の部屋でベッドに寝転がりながら、女の子の雑誌ＪＩＮＯＮ〈ジノン〉なんかをながめて過ごしていた・・・こういう雑誌で、いろんな可愛い服を見ると、なんとなく着てみたいと思うのはオレの心が女の子に近づいているからなのだろうか・・・？　しかし・・・オレは思うのだが、男だってこんなに毎日女の子の服ばかり着ていたら、今度はこんなのが着てみたいなんて思うのではないだろうか？　とはいえ、普通に女の子の服ばかり着ている男なんて、そうそう、いそうにない・・・女装好きの人だって、ふだんは男の服を着ているのではないだろうか？

オレはおばあちゃんに言われてから、女になるってどういうことなのか良くわからなくなっていた。いや・・これまでだって良くわかってるとは言い難かったが、それでも女の子の服を自然に着られるようになったり、女の子らしい仕草や言動が出来るようになれば、いずれは女の子になれるような気がしていた・・・でも、どうもそれは甘い考えだったようなのだ。オレが女の子らしいと考えていたのは、男のオレが考えた女の子らしさなのかもしれない・・・

でも、それが判ったところでオレにはどうすれば良いのか解らなかった・・・オレは元々男なのだから、どんなに頑張ったところで、全てはマネごとなのではないのだろうか？

オレは雑誌を横に置いて携帯を充電器から外した・・・電源を入れてメールを受信する・・・すると佐倉千里〈さくら　ちさと〉からメールが来ていた。

オレが普段は常に電源を切っているのはみんな知っているから、オレに連絡するにはメールを送るしかない。それはオレが電話嫌いだからということになっているが、本当はそうではなかった。オレの携帯は中学の時のままだったから、いきなり中学の頃の友達からかけてこられると困るからというのが本当の理由なのだ。もちろん誰がかけてきたかは表示されるから判るが、最近オレは男のころの声の出し方を、良く思い出せなくなっていた・・・だから電話では以前の男友達と話したくなかったのだ。

まあ、オレはそんなに友達が多い方ではなかったから、それほど心配する必要もないかもしれないが、用心するに越した事はない・・・実際一度、中学時代の友達の鈴木から会わないかとメールがあったが、オレは京都の学校に行っているから会えないとメールを返しておいた。元々オレは他県の高校を受験したことになってたし、会いたいと思ったところで今のオレでは会えるハズもない・・・京都にしたのは兄さんが京都の大学に行ってるからだ。

佐倉からのメールは来たばかりだった・・・“できるだけ早く電話して”と書いてある・・・

「何だろう・・・」

オレはすぐに佐倉に電話してみた。

「あ、もしもし・・・千里?」

「うん・・有希にしては早かったね。」

「う・・うん・・・たまたまだけどね・・・」

オレはだいぶ返事が遅いと思われているみたいだ・・・無理もない・・・

「それで?　どうしたの?」

「・・・有希も・・・来た・・・？」
「え？　来たって・・・何が？」
「ＪＩＮＯＮから・・・」
「ＪＩＮＯＮ？」
オレは思わずさっきまで読んでいた傍らの雑誌に目をやった・・・
いったいＪＩＮＯＮがどうしたのだろう・・・
「・・・ＪＩＮＯＮがどうかした？」
「え？有希は来てないの・・・？」
「だから、何がよ・・・！」
オレはだんだんイライラしてきた・・・佐倉はもとからあまりハキハキしているとは言い難いが、電話だとよけいハッキリしない・・・
いったいＪＩＮＯＮが何だというのだろう・・・

「前に送ったじゃない・・・読者モデルの・・・」
「あ～・・・アレね・・・」
オレはすっかり忘れていた・・・あんなの採用されるハズないと思ったし・・・ん？・・・ということは・・・？
「・・・もしかして・・・採用の通知が来たの？！」
「・・・うん・・・ていうか・・面接の通知だけど・・・」
驚いた・・・こんなことってあるんだなぁ・・・でも佐倉は可愛いから有り得ない話ではないかも・・・送った写真も可愛く撮れてたし・・・
「良かったじゃない！　行くんんでしょう？」
「・・・でも・・・有希にも絶対来てると思ったのに・・・」
「わたしに？！」
オレが採用されるハズはない・・・オレは美人でも可愛くもないし・・・だいいちあんなボケた写真では採用されるハズがない・・・これはみんなは知らないことだけど・・・
「わたしなんか無理に決まってるじゃない！」
「そんなことないよ・・・有希はわたしより可愛いじゃない・・・」

冗談じゃない・・・こんなこと言ってオレに佐倉の方が可愛いと言わせたいのだろうか・・・でもいいのだ、オレは本当の女じゃないから、こういう女の子の駆け引きに関しては心が広いのだ。
「千里の方が可愛いよ！」
女の子との付合いもけっこう気をつかう・・・

「それで・・・直美と弘子は？・・・聞いてみた？」
「・・・ううん・・・まだ・・・とりあえず有希に聞いてみようと思って・・・・」
「・・・・」
一番受かりそうもないオレに聞いてみたってこと・・・？
「・・・ねえ・・・有希から・・・聞いてくれない・・・・？」
「え？！　ふたりに？　わたしから？」
「・・・うん・・・・」
「う〜ん・・・なんか聞きにくいなぁ・・・・」
特に岡本は自分が受かりたくてみんなを誘ったみたいだから、もし採用の通知が来てなかったら気まずいことになりそうだ・・・とはいえ佐倉に自分で聞けとも言いにくい・・・
「・・・わかった、わたしから聞いてみるよ！」
「ありがとう有希！」
「うん、じゃぁ聞いてみるから。聞いたらまた電話するね。」
オレはそう言って電話を切った。ちょっと気が重いけど仕方がない・・・佐倉はオレにとっては一番仲がいい大切な女友達なのだ・・・長谷川を除けばだけど・・・もっとも、長谷川は友達という感じでもない・・・秘密を知られすぎてるからなぁ・・・

――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――

オレは岡本直美〈おかもと　なおみ〉と原口弘子〈はらぐち　ひろこ〉に電話をしたが、ふたりにも通知は来ていなかった。佐倉に通知が来たことを伝えると、原口は「よかったね」と言ったが、岡本はあきらかに不機嫌そうに「なんで有希じゃなくて千里なの？」と言った・・・なんでそこでオレの名前が出てくるのか解らないが、はっきり言って良いとばっちりだ・・・そのうえ岡本は一度４人で会おうと言い出した。

結局オレたちは集まることになったが、オレは正直、女のいざこざに巻き込まれたくはない・・・だが、心配はそれだけではなかった・・・オレはいったいどんな服を着ていけばいいのだろうか・・・？３人とは学校以外で会ったことがないから、どんな私服か見当がつかないのだ・・・もしみんながスポーティーな恰好で、オレだけ可愛い恰好だったりしたら最悪だ！

オレは意を決してタンスの引き出しを開けた・・・そこにはレナと買い物に行った時に買ったジーンズが入っていた・・・オレはパンツ類は穿きたくないと言ったのに無理矢理に買わされたやつだ・・・今となってはレナに感謝しなければいけない・・・

ジーンズは買ったばかりだからサイズもぴったりだ・・・実は男のころのジーンズもあったのだが、このあいだ穿いてみたらボタンが閉まらなくなっていたのだ。最初は太ったのかと思ったが、どうやら男のころよりお尻が大きくなったらしい・・・これも女性ホルモンの影響なのだろう・・・たしかに男だったころよりも丸くなった気がする・・・

女性用のジーンズは股上の短さがヘンな感じだ・・・女性用はど

れもこんな感じだとレナが言っていた。パンティーが見えるほどローライズではないけど、それでも小さめのパンティーを穿かなきゃいけない・・・オレは他人にパンティーを見せるつもりなんかない・・・

上は何を着ようかと思った時、長谷川の服装が頭に浮んだ・・・Tシャツ・・・？　でもオレはそこまで男っぽい恰好をしたら男に見えてしまうに違いない。結局オレは、上は少し可愛い感じの淡いピンクのフワッとしたのを選んだ。ベビードールって言うんだっけ・・・肩が大きく開いているのがちょっと恥ずかしいけど、袖も膨らんでて可愛いのだ。短かめのワンピースって感じだから過ってパンティーが見えてしまう心配もない・・・ただ、こういう肩が開いた服を着る時は、肩ヒモがあるブラをつけられないのが困るところだ・・・肩ヒモがが無いブラは落っこちそうで不安になってしまう・・・レナに言わせるとブラのヒモが見えてもいいのだそうだが、オレにはまだ見せブラはちょっと恥ずかしすぎてムリだ・・・出来るだけアンダーがしっかりしているのを選ぶしかない・・・

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー

オレたちは学校がある久留米〈くるめ〉のミスドに集まることにした。オレが少し遅れて行くと3人はもう来ていた・・・女のくせに早いやつらだ・・・

「あ！来た来た・・・有希！」

オレが店に入ると原口が「早く！」と言うように手招きした。どうやらすでにイヤな空気になってるようだ・・・岡本は腕を組んで膨れっ面だし、佐倉はシュンとしてしまっている・・・こんな空気をオレにどうしろって言うんだ・・・

「ご・・ごめん・・待った？」

オレは思わず気になっている髪の毛を手で撫でつけながら言った・・・今日は急だったし、かあさんも麻衣もいなかったから髪も自分でやるしかなかったのだ。だから両サイドを後ろで髪留めではさむだけという簡単な髪型だった・・・ヘンになっていないか気になる・・・

「ねえ有希、おかしいと思わない？　なんで千里だけ通知が来るのよ！」

岡本ははっきりモノを言うのもいいけど、佐倉の気持ちも考えないのだろうか・・・？

「・・・そんなことないと思うけど・・・だって千里可愛いもん・・・」

「・・・有希なら納得できるんだけど、千里だけってのがどうにも納得できないのよねぇ・・・」

またオレの名前を・・・こんなところでオレの名前を出さないでほしいのに・・・

「ね・・ねえ・・・弘子は？　どう思う？」

オレが助けてほしくてそう言うと、

「わたしは元々通知が来るなんて思ってなかったから・・・こういうのは編集部の人がどんなコが欲しいかで決まるんじゃないの？」

「そ・・そうよね・・・」

なんか味も素っ気もない答えだ・・・原口もちょっとは気にいらないのだろうか・・・？　まあ、いつもこんな感じといえば、こんな感じだけど・・・

すると佐倉が言い出した。
「・・・わたし・・・やっぱり・・・行かない・・・・」
オレが来る前にもいろいろ言われたのだろうか・・・なんか泣き出しそうな感じだ・・・
「え？　そんな・・・もったいないよ・・・行ってきたほうがいいって・・・・」
「でも・・・直美も弘子も・・・ついてきてくれないって言うし・・・」
何と！・・・ついてきてくれるように頼んだのか？・・・どうりで険悪なハズだ・・・
「でもさぁ・・・受かるかどうかはまだ判らないんだから・・・行くだけ行ってみたら？」
「・・・じゃぁ・・・有希がついてきてくれる・・・？」
「え？！　オ・・いや・・わたしが・・・？」
あまりの展開に危うくオレと言いそうになって慌てた・・・どうしてオレが行かなきゃいけないんだ・・・
「・・な・・なんでわたし・・・？」
オレが思わず岡本と原口を見ると、岡本が言った。
「そうね、有希がついていってあげればいいんじゃない？」
すると原口まで
「たしかに有希が行ったほうが良いって言うんなら、有希がついて行くのがスジかもね。」
「・・・・・！」
そりゃあ、スジなんて言われたら、たしかにそうかも知れないけど・・・オレはそんなとこ行きたくない・・・だって緊張するに決まってるし・・・
「ねえ・・・有希・・・」
佐倉は頼るようにオレを見つめる・・・うぅ～・・・オレってけっこう頼りないヤツなのに・・・困ったなぁ・・・でも佐倉にこんな目で見られると・・・オレとしても放っておけないし・・・

「わかったよ・・・ついて行くから・・・」
オレはそう言わないわけにはいかなくなっていた・・・こんなところで男気を出しても仕様がないのだが、女の子に泣きつかれると言うことを聞いてしまうのは男の性なのだろうか・・・オレだって女の子なのに・・・
「ありがとう有希・・・」
そう言って佐倉はオレに抱きついてきた・・・男ならこんなことされたら嬉しいのだろうが、オレも女の子だから別に嬉しくなんかない・・・それでもちょっとドキドキする・・・でもこれは仕方がないだろう・・・だってオレは男のころから女の子に抱きつかれたことなんて無いのだから・・・それに、女同士だってこんなにきつく抱きつかれたらドキドキくらいすると思う・・・

それにしても面接について行くなんて、困ったことになってしまった・・・

第４２話　面接　佐倉に付き添うオレ

雑誌ＪＩＮＯＮ〈ジノン〉の地方姉妹紙、九州ＪＩＮＯＮの編集部は薬院〈やくいん〉にあった。薬院は天神のひとつ前の駅だ。そんなところに九州ＪＩＮＯＮの編集部があるなんてちっとも知らなかった・・・

オレと佐倉は駅から少し歩いたところにある編集部が入ったビルの下までやってきた・・・編集部ってどんなところなのだろう・・・なんかドキドキする・・・佐倉も同じ気持ちのようで、オレたちふたりはしばらくビルの外で躊躇してしまい、なかなか中に入れずにいた。

しばらくすると向こうからふたりの女の子たちがやってくる・・・福岡市内のコだろうか・・・オシャレが板に付いているような気がして、なんだか気押されしてしまう・・・

オレは袖口とスカートの裾にヒラヒラしたレースで飾られた白い、でも少しクリームがかったシフォンワンピース・・・佐倉は七分丈の白いパンツにピンクのチェック柄の短いワンピースとちょっと子供っぽいが、それなりにオシャレはしていた・・・しかし、なにぶん風紀が厳しい学校だから髪は真っ黒だし、爪だって素のままだ・・・オレは軽く化粧していたが、佐倉にいたっては化粧もしていない・・・これじゃどっちが面接受けにきたのか判りゃしない・・・

佐倉がパンツスタイルで来るのなら、オレも下にレギンスでもはいて来れば良かった・・・スカートも短かめなのに生足で来てしまったのを少し後悔した・・・

ふたりはオレたちの前を通り過ぎるとビルの中に入っていく・・・

もしかしてこのコたちも面接に来たのかも・・・オレは急いで佐倉の手を取った。
「わたしたちも行こう。」
オレはふたりに遅れまいと佐倉の手を引っ張って、ふたりが待っているエレベーターのところまで行き、何くわぬ風を装って一緒にエレベーターが降りて来るのを待った。

１階にエレベーターが到着すると、オレたちはふたりの後から乗り込んだ・・・思った通り先に乗ったふたりも編集部がある階を押している・・・釦を押したコがオレたちを見たが、オレたちが同じ階に行くことを知るとピクリと眉が上がった・・・ふたりがオレたちをライバル視したとしても、それ以上の反応はなかった・・・あるいはまったく相手にされてないのかも知れない・・・たぶんそっちの確率の方が高そうだ・・・

編集部がある階に着いてドアが開く・・・オレたちがふたりの後に続いて降りると廊下にはすでにたくさんの女の子たちがいた・・・みんな面接を受けに来たのだろうか・・・２０人以上いるようだ・・・みんな可愛いコばかりだ・・・

編集部なんていうから、どんなところかと思ったが、普通のビルのワンフロアーのようだった・・・廊下に面していくつかのドアがあり、奥にあるつきあたりの部屋から人が出入りしているところを見ると、あそこが編集部なのだろうか？・・・ドアのすき間から机が並んでいるのが見える・・・

バッグから携帯を出して時間を見てみた・・・まだ少し時間がある。
「ねえ千里・・・ちょっと来て・・・・」
オレは佐倉の手を引っ張ってトイレを探した。

「なに？　有希トイレに行きたいの？」
何のんきなこと言ってるのだろう・・・
「あんた他のコたち見た？　みんなバッチリ化粧してるじゃない！」
「・・・だって・・わたしお化粧したことないし・・・有希もお化粧してるから驚いたくらいよ・・・」
二光さんは高校生はみんな化粧くらいするって言ってたけど、長谷川をはじめオレの学校にはしないコも結構いるみたいだ・・・
オレはトイレを見つけるとふたりで個室に入った。

「ちょっと有希・・・なにするの？」
のんきにもほどがある・・・オレは自分のバッグを佐倉のヒザに乗せて言った。
「お化粧に決まってるでしょう！ほら、前髪あげてて・・・」
オレは佐倉に自分の前髪を持たせると、バッグから乳液とファンデーションを出し、手の上でかるく伸ばして手早く塗っていった・・・
二光さんに教わったスッピンメイクの方法だ。これなら短時間に出来るし、佐倉の清楚な感じをいかすことが出来る・・・いくらバッチリメイクをしても、お化粧で個性が消えてしまっては何にもならない・・・まあ、これも二光さんの受け売りだけど・・・

チークは付け過ぎに気をつけて・・・アイラインは目尻の方に多めに・・・下まぶたには白いペンシルで少し明るめに・・・本当は眉毛も少し整えたかったが、ハサミも無いしここではどうしようもない・・・髪も何とかしたかったが、オレ自身が髪をセットするのは苦手だからこれもどうにもならなかった・・・それでも最初よりはずっと良くなったと思う。

ちなみにオレは後ろとサイドをアップにして、上でおだんごにしていた・・・もちろんかあさんにやってもらったのだが・・・こんなことなら佐倉も一度オレの家に連れてきて、かあさんにやっても

らえば良かった・・・でも、そんなことをしたら面接に行くこともバレちゃうし、オレも読者モデルに応募したのも知られてしまうから、どっちみち無理か・・・オレはかあさんには、ただ遊びに行くと言ってきたのだ。たぶん佐倉もそうじゃないかと思う。だって親に言ったら怒られそうだし・・・どうせ採用されるわけないのだから、親に話したりして怒られたりしたら、それこそ怒られ損だ・・・とりあえず面接だけ受けてみて、後は黙っていればいい・・・もし間違って採用されることにでもなったら・・・？　そのときはその時だ・・・

　オレたちがトイレから出ると女の人が、面接に来たコたちを廊下の片側に並ぶように言っている・・・オレたちも急いで一番最後に並んだ。

　女の人は並んだ女の子たちの最初から面接の通知を確認してから何か渡しているようだ・・・女の人はグレーのスーツに細めのオシャレなメガネをかけ、髪をアップにして後ろでまとめている。シャツの釦を2番目まで開けた胸元とタイトなスカートが色っぽい・・・なんかすごく仕事がデキそうな大人の女性って感じだ・・・

　近くに来ると、送られてきた応募用紙と写真で本人と確認した後、胸につけるための番号の札を渡しているのだと判った。オレの横で佐倉はすごく緊張してるみたいだ・・・オレもこんな場では絶対緊張すると思って、ちゃんとナプキンをつけてきていたが、佐倉が緊張しているせいか思ったほどの緊張はなかった・・・もちろんオレはただ付き添ってきただけだというのも大きいだろう。いくら何でも自分の面接だったら緊張しないワケがない。

　とうとう佐倉の番が来た・・・佐倉も他の女の子と同様に面接の通知を渡し、番号の札を貰って胸に付けている。女性の方は応募用

紙の上にその番号と同じ数字を赤いペンで書いていた。佐倉の手が震えて、なかなか上手く番号札が付けられないのを見て、手伝ってやろうとした時、オレは女性に声をかけられた。

「面接の通知持って来た？」

「え？！・・・」

オレは慌てた・・・考えてみれば付き添いのオレがここに居ていいのだろうか・・・

「あ・・あの・・・わたし、千里の付き添いで来たんです・・・あの・・ここに居ちゃダメだったら・・外で待ってますけど・・・・」

すると女性は笑顔になった。

「そうだったの、居てもいいけど・・・あなたは応募しなかったの？」

オレはチラッと佐倉を見てから言った。

「あの・・わたしも千里と一緒に応募したんですけど・・・受からなかったみたいで・・・」

すると女性はオレを上から下まで見た。

「そうねぇ・・・どうせ来たんだから、あなたも面接受けなさいよ。」

「え？・・・で・・・でも・・・」

オレは断ろうかと思ったが、応募しておいて断るのもヘンに思われそうだし・・・

オレがどうしようかと躊躇していると、佐倉もそれを察したのか

「有希、いっしょに受けようよ・・・そのほうがわたしも心強いし・・・」と言う・・・

それはそうかも知れないが・・・もちろん受けたとしても採用なんてされないとは思うが、万一受かってしまったらどうするんだ・・・？　オレは男なのに・・・

「あなた名前は？」

「あ・・戸田有希です・・・」
女性に聞かれ、オレは思わず答えていた・・・
「あら、男の子みたいな名前ねぇ。漢字は？」
「えっと・・戸田は・・扉の戸に田んぼの田・・・有希は・・有明海の有に希望の希・・です・・・」
「戸田・・有希・・と。それじゃ応募用紙探しておくから。」
そう言うとオレは番号札を渡された・・・佐倉の次の番号・・・どうやら最後らしい・・・
「あ・・はぃ・・・」
なんだかワケもわからないうちに、オレまで面接を受けることになってしまった・・・仕方なく番号札を胸に付けようとしたが、今度はオレの手が震えてなかなか付けられない・・・
「わたしが付けてあげる・・・」
佐倉がオレの胸に番号札を付けてくれた・・・さっきまで佐倉の方が緊張していたのに、あっという間に立場が逆転してしまったようだ・・・

佐倉の細い指が安全ピンを刺しているオレの胸元・・・ときどき佐倉の指が胸に触れる・・・そこにはブラジャーをしたオレの胸が・・・男なのに女性のように膨らんだオレの胸がある・・・だがオレを女の子だと信じて疑わない佐倉は、オレの胸に自分の手が触れてもまったく気にしない・・・もしオレが男だとバレてしまったら、佐倉はこんなオレをどう思うのだろうか・・・そんなことを考えていたら、オレはよけいドキドキしてしまう・・・
「有希すっごいドキドキしてる・・・だいじょうぶ？」
そう言って佐倉は、少しも躊躇することなくオレの左胸に手をあてた。
（あっ・・・）
オレは思わず出そうになった声を必死で押しとどめた・・・ブラの中で乳首が尖っていくのがわかる・・・

「・・だ・・だいじょうぶ・・・急にこんなことになっちゃって・・・ちょっと緊張してるけど・・・」
本当はちょっとどころじゃなかったが・・・オレは何とかそう言った・・

―――――――――――――――
―――――――――――――――
――――――――――

オレたち女の子は全員ひとつの部屋に入れられた・・・普段は会議室か何かだろうか、大きなホワイトボードが壁ぎわに置いてある・・・長い会議机が隅っこにあり、いくつかは折畳まれていた・・・なぜか長い机の上にはお菓子やジュースを置いてある・・・空けられた中央のスペースには、オレたちが座るためのパイプイスが多数並べてあった。オレが急遽面接することになったがイスの数は十分だった。オレと佐倉は隅っこに座り、他の女の子たちを眺めていた。

女の子たちは３人づつ呼ばれて部屋を出ていき、面接が終るとまた戻ってくる・・・だいたい一組１５分くらいかかっている・・・オレの番号は３２・・・とするとオレたちの番までは2時間半もかかる計算になる・・・
「有希・・あそこのお菓子食べていいみたいよ・・・」
見るとすでに数人のコたちがお菓子を食べ始めている・・・たしかに何もせずに3時間近くも待つのは辛いから、ああやって自由に食べられるようにお菓子を置いているのだろう・・・しかしみんな慣れてるみたいに見える・・・こういう面接に来たことがあるコも多いのかも知れない・・・
「何か持ってくるね・・飲み物は何がいい？」

「あ・・お茶・・・」

どうやらこういう時は女の子の方がキモが座っているらしい・・・オレはとてもお菓子を食べるような気持ちにならないが、女の子の佐倉は大胆にお菓子をとって戻ってきた・・・さっきまで緊張してたのが嘘のようだ・・・この様子なら面接も心配いらないのではないだろうか・・・なにせオレはもう佐倉の心配をしてる余裕はないのだ・・・

しかし、女の子の中に男のオレがひとり混じっているというのもヘンな感じだ・・・まあ、学校でも女生徒の中に男はオレひとりなのは同じだが、学校では同じメンバーだし、気が知れたクラスメイトだからオレもずいぶん慣れているが、こんなに他人ばかりの中だと学校とは全然ちがう・・・そんな中で女の子の恰好をしていると、すでにオレにとっては普通になったと思っていた女の子の服なのに、なぜか女装しているような気になってくるから不思議だ・・・

・・・？・・・オレはふと疑問が湧いてきた・・・この女の子たちはけっこう慣れてる感じだが、それはこのコたちが他の雑誌の読者モデルとかに応募して、面接したものの採用されなかったという事ではないのだろうか・・・？　他のコたちはオレや佐倉よりずっとオシャレだし可愛い・・・そんな彼女たちが採用されないのなら、オレたちが採用される可能性なんて無いんじゃないだろうか？

そんなふうに考えると、なんだか緊張していた自分がバカバカしく思えてきた・・・さいしょからオレたちなんか受かるハズがなかったのだ・・・

そう思うとオレもお腹が空いてきて、佐倉が持ってきたお菓子に手を出した・・・

―――――――――――――――

―――――――――――――――

――――――――――

　オレたちの番まですごくかかるような気がしていたが、お菓子なんか食べながら待ってると、気づいた時にはもう２５から２７番の人が呼ばれていた・・・次の次がオレたちの番・・・どうやら最後はオレと佐倉のふたりだけになりそうだ・・・

　でもこれは良いことかもしれない・・・だってもし万が一、佐倉が採用されるなら、オレが一緒の方が引き立て役になれるってもんだ・・・なにしろオレは採用される必要などないのだから。

　３０番までのコたちが帰ってきて、とうとうオレたちの番が来た・・・

　オレと佐倉は隣の部屋に入るとペコリと頭を下げた・・・なんか高校の受験の時を思い出す・・・あの時はまだオレは男だったのだが・・・

　イスに座るように言われ、オレたちは３つ並んだイスのふたつに座った・・・オレたちの前には男の人が一人と女の人が二人・・・男の人は短髪に鼻の下だけヒゲを生やしている・・・穴が開いたジーンズに洗いざらしのＴシャツ・・・その上にジャケットを羽織っている・・・目つきが鋭くてちょっと怖いかもしれない・・・女の人のうちの一人は派手は服に大きなイヤリング・・・下は黒いパンタロン・・・なんかセンスが良くてオシャレな感じだ・・・そしても

う一人の女の人はさっきの女性だった・・・女性は言った。
「あなたたちは友達なの？同じ学校だけど。」
「はい。」
オレたちは同時に答えた。
「友達４人で応募したんですけど、この佐倉さんだけ面接の通知が来て・・・」
オレはさりげなく本当は佐倉だけに通知がきていた事をアピールした。

「あれ？じゃあ君は？」
男の人がオレに聞いたが、それには女性が答えてくれた。
「このコは彼女の付き添いで来てたんだけど、どうせだから一緒に受けるように私が誘ったのよ。」
オレはどんな顔をしたらいいか良くわからない・・・

まず佐倉がいろいろ聞かれた・・・佐倉はハニカミながらもちゃんと答えている・・・オレはといえば隣でどうにも落ちつかなかった・・・
佐倉への質問が終り、オレの番がきた・・・佐倉の質問を聞いてオレの答えを用意していたのだが、オレへの質問は、いきなり思いもしなかったことだった。
質問したのは男の人だった・・・「戸田さん？君はなんでこんなボケた写真を送ってきたの？」
「あっ・・・」
オレは思いもしない質問に言葉を詰まらせた・・・言われてみれば確かにおかしな事だろう・・・読者モデルに採用されたいコがボケた写真を送ってくるなんて・・・それに・・・考えてみれば、採用してもらおうとしている人間がボケた写真を送るなんて失礼な話だ・・・

「・・・ご・・ごめんなさい・・・わたし・・読者モデルなんて採用されるハズないと思って・・・」
「それでわざとボケた写真を?」
「あっ・・違います・・・そうじゃないんです・・・あの・・・」
オレはどう言ったらいいのか迷った・・・だって横には佐倉がいる・・・あまり詳しく話すと岡本が写した写真がボケてたことがバレてしまう・・・
「あ・・あの・・・その・・・」
するとオロオロしているオレを見かねたのか佐倉が話だした。
「あのぉ・・わたしたち4人で応募したんですけど・・わたしたちの分は戸田さんが写してくれたんです。彼女は写真が上手だから・・・でも彼女の分は別の友達が写したからボケてたんじゃないかと・・・」
「そうなの?」
「ぁ・・はぁ・・・だいたい・・そんな感じ・・です・・・」
なさけない、消え入りそうな声しか出なかった・・・そんなオレの手を佐倉がそっと握ってくれた・・・“大丈夫だよ”とでも言うように・・・付き添ってきたのに、逆に励まされるなんて・・・オレってなんてダメなヤツなんだろう・・・

「まあ、写真のことはいいじゃない。ここに本人がいるんだから!」
女性がそう言ってくれてオレはホッとした・・・
「それもそうですね。」
どうやら男の人も笑って納得してくれたようだ・・・笑うと案外やさしい感じがした・・・男の人は佐倉の応募用紙を見ながら
「戸田さんは写真に興味があるんだ?」と言った。
「そ・・そんなんじゃないんです・・・ただ・・どっちかっていうと好きなだけで・・・」オレは慌てて手を振って否定した。それなのに佐倉ときたら、とんでもないことを言い出した。

「そんなことないじゃない！有希すっごく上手なんですよ。」
オレは一気に顔が真っ赤になってしまう・・・オレの話題なんか膨らませなくていいのに・・・もうどうしていいかわからない・・・

　すると今まで黙っていた、もうひとりの女の人がオレに質問した。
「そのワンピースは自分で選んだの？」
「い・・いや・・あの・・はい・・・お母さんと一緒に買いに行ったんですけど・・・なんか・・可愛かったので・・・」
「化粧は？自分でやった？」
「は・・はい・・自分で・・・髪だけお母さんにやってもらいました・・・」
なんでオレはこんなことを聞かれるんだろう・・・佐倉はこんなこと聞かれてなかったのにぃ・・・それともオレって自分で思っているよりヘンな恰好してるのだろうか・・・
「あ・・あの・・へ・・ヘンですか？　わたしの恰好とか・・お化粧とか・・・？」
オレが思わず聞くと、女の人は
「あっ、そうじゃないの、服のセンスも良いし、化粧も上手だから聞いたのよ。」と言った。
「わたしのお化粧も彼女がやってくれたんです。有希ってちょっと男の子っぽい感じもあるけど、すっごく女の子っぽいところもあるんです。」
佐倉までそんなことを言いだす始末だ・・・オレのことはアピールしなくていいってのに・・・審査員の3人まで妙に頷かなくても・・・

　オレはその後もいろいろ聞かれたが、何を聞かれたかも良く憶えていない・・・オレはとにかく早く終ってくれることばかり願っていた・・・

―――――――――――――――
―――――――――――――――
――――――――――

「有希受かるかもしれないね。」
女の子たちが大勢いる待ち合いの部屋に帰ってくると、佐倉がオレにそう言った。
「じょ・・冗談じゃないわよ・・・わたしが受かるハズないじゃない・・・」
まったく佐倉は何を言い出すんだろう・・・
「だって有希いっぱい質問されてたじゃない。時間もずいぶん長かったよ。」
「そ・・それは・・わたしたちが最後だったからじゃないの・・・？　きっと審査の人も終りだから気を抜いて長くなっただけよ・・・」
「もう・・・有希ったら自分の魅力を全然わかってないんだから・・・あんなボケた写真じゃなきゃ、有希にも面接の通知きてたのよ。わたしに来て有希に来ないなんて有り得ないもん。おかしいと思ったのよ・・・ちゃんと撮りなおせば良かったのに。」
まさか、そんなことは無いと思うけど・・・
「あの写真のこと・・直美に言わないでね・・・気わるくするといけないから・・・」
「有希がそう言うなら言わないけど。でも有希って優しいよね。」
「そ・・そんなことないわよ・・・」
オレは優しくなんかない・・・ただ写真がボケてた方が、間違っても受からないだろうと思っただけだ・・・でも編集部の人が不愉快な思いをすることまでは考えが及ばなかった・・・

オレたち最後の面接が終ってからけっこう時間が経っている・・・どうせ受かってないんだから早くしてくれないかなぁ・・・と思っていたら、やっとあのスーツの女性がやってきた。
「はい、これから審査に通った方の番号を発表します。」
女性は番号を呼んでいく・・・いったい何人くらい受かってるんだろうか・・・１０番までは３人だった・・・
「・・２６番・・２７番・・３１番・・・」
３１番・・・？
「え?!千里受かってるじゃない!」
オレは佐倉の手を両手で握って喜んだ。
「・・・３２番・・・以上の人はこの場に残ってください。番号呼ばれなかった皆さんは今回は残念だったけど、これに懲りずまた応募してくださいね。あ、あと残ったお菓子は持って帰っていいから。」
・・・？・・・３２番って・・・オレ・・・？
「良かった!有希も絶対受かると思った。」
こんどは佐倉が放心状態のオレの手を握ってブンブン振っている・・・
「・・・呼ばれた番号の人はもう少し待っててくださいね。それじゃ皆さん、今日はありがとうございました!」
女性はそれだけ言って行ってしまった・・・番号を呼ばれなかったコたちは好きなお菓子を持って帰っていく・・・
「・・・・・」
オ・・オレが・・？・・・読者モデルに・・・？
「・・ち・・千里・・・どうしよう・・・」
「なに言ってるの、有希は可愛いから受かって当然よ!　わたしの方が受かったのが不思議なくらいなんだから・・・」
・・・オレがモデルなんて・・・どうしたらいいのだろうか・・・

オレはやっぱり来るべきじゃなかったのだ・・・
「でも、わたしが受かったのも、きっと有希のおかげだと思うわ。有希がお化粧してくれたから。」
佐倉が受かるのは何の問題もない・・・だけどオレは本当は男なのだ・・・佐倉は知らないから喜んでいられるのだ・・・

男が・・男のオレが女の子の服のモデルになんて、なっていいハズがない・・・

第４３話　撮影　オレがモデルに？

結局残ったのはオレと佐倉を含めて１３人だった・・・結果からみれば３２人のうちの１３人だから、そんなに確率が低いわけじゃなかったようだ・・・どうりでオレまで受かったワケだ・・・

それに残ったコたちは帰ったコに比べるとちょっと地味な感じもする・・・案外、原口弘子が言ったように、編集部は読者モデルには本当のモデルとは違った感じを求めているのかも知れない・・・たしかにカッコいいモデルの人が着てると良い感じの服も、普通の人が着ると足の長さが違ったりして恰好がつかなかったりすることは良くある・・・その点、オレたちなら一般のコと同じで違和感がないに違いない・・・

とはいえオレは男だから違和感がないとは言えない気がする・・・それともオレってそんなに女の子に見えるのだろうか？・・・見えなくても困るけど、見え過ぎるのもちょっと複雑な気分だ・・・

「それじゃ、これからカメラテストをします。」

女性がオレたち残った女の子を集めてそう言った・・・カメラテスト？・・・それじゃここにいるコ全員が合格なワケじゃないのかな・・・？

「私、紹介が遅れましたが、九州ＪＩＮＯＮ編集長の佐々木です。よろしく。」

え？！この女の人が編集長だなんて思ってもみなかった・・・オレは勝手な想像で、編集長ってのは男の人だとばかり思っていたのだ。考えてみれば女の子の雑誌なのだから編集長が女性でも、ぜんぜん不思議じゃない・・・どうりで出来る女って感じがすると思った・・

・

「カメラテストって言っても堅く考えないでいいから。写メ撮るときくらいの楽な気持ちでね。」

さすがに女性は女の子の扱いに慣れてる感じだ・・・その場の緊張が少し和らいだ感じがする・・・

「こちらは面接にも参加してくれたカメラマンの進藤さんとスタイリストの永沢ケイコさん。」

「お・・おねがいします！」

オレたちは一斉に頭を下げた。

撮影するスタジオも同じフロアーの中にあった。オレはこういうのを見るのは初めてだ・・・思ったよりも小さい感じで、いろんな機材が所狭しと置いてある・・・とても全員は入れないから、オレはドアの外から覗いていた・・・

バックにはなぜか毛足がないカーペットが、壁から床へたるむ感じで天井から張ってある・・・見てると上から長くロール状に巻いた紙を引っ張り降ろしてきた・・・そういえば雑誌の写真ってバックと床の境目がないのが多いけど、こうやって撮っていたんだ・・・しかも紙は汚れたりハイヒールで穴が開いたりしたらトイレットペーパーのように切るようで、常にきれいな部分を使えるようになっている・・・オレは初めて見るシステムに感心した。

「いいねえ・・もうちょっと寄ってみようか・・・」

二人づつ撮影が開始された。みんな結構緊張してるみたいだが、カメラマンの言葉で徐々に笑顔が出て来る感じだ・・・

カメラのシャッターを押すたびに“バシャッ！”という音をたててフラッシュが光る・・・最初は何でカサがあるのかと思ったが、ストロボを反射するための物のようだ・・・

「ちょっと髪をさわってみようか・・いいねぇ・・・」
“ピー”という音がするとカメラマンはシャッターを切っている・・
・何の音だろう・・・カメラマンの前には白いハレパネが斜めに置
いてある・・・光を反射するためのものだろう・・・あごの下が影
にならないようにしているらしい・・・

「戸田さん、スタジオに興味があるみたいね。」
急に編集長の佐々木さんに声をかけられてビックリした・・・オレ
はよほどキョロキョロしていたのだろうか・・・
「・・は・・はぃ・・・こういうところを、実際に見るのは初めて
なので・・・」オレは小声で答えた。
「普段はもっと大きなスタジオで撮影するんだけどね、ここは差し
込みや、差し換えとかの撮影をするところなのよ。」
「・・・さし・こみ・・ですか・・・？」
「あぁ、差し込みっていうのはね、ぎりぎりに商品が来た時のこと
で、差し換えは急に商品が変わった時に写真を入れ替えることなの。
つまり急ぐ時にここで撮影してすぐに版下作業に回すのよ。」
オレには半分くらいしか意味がわからなかったが、とりあえず急な
時に使うスタジオだということなのだろう・・・

「・・いいよ・・可愛いねぇ・・もうちょと弾んだ感じでいってみ
ようか・・・そう・・いいねぇ・・」
佐倉がもうひとりの知らないコと撮影してるのを見てると、ほんと
カメラマンの言葉は大きいと思う・・・佐倉もずいぶん緊張がとれ
て良い表情になってきた・・・しかし・・番号順に撮影してたらオ
レだけ残ってしまった・・・どうするんだろう・・・そんな事を考
えているうちに、ふたりの撮影が終った・・・
「あっ、佐倉さんはそのまま残ってて！戸田さんと撮影するから！」
編集長がそう言ったのでオレはホッとした・・・ひとりで撮影なん

てことになったら恥ずかしくてちびってしまいそうだ・・・

　オレは佐倉の横に並ぶと緊張で足がガクガクした・・・すでに撮影している佐倉の落ちつきが頼もしい・・・

「じゃぁ、えっと・・戸田さんと佐倉さんだっけ、もっとくっついてみようか・・・」

オレが佐倉に引っ付くとシャッターが切られ3つのストロボが一斉に光る・・・目の前が緑色の光に覆われてすぐには目が見えない・・・

「ふたりで片足をあげてみよう・・・1・2・3・ピョン！・・・いいね可愛いよ！」

何度もストロボの光りに照らされていると、だんだん頭がクラクラしてきた・・・カメラマンさんに矢継ぎ早に色んなポーズを要求されると、自然にその言葉に体が反応してしまう・・・これじゃ緊張なんかしてる余裕もないってもんだ・・・

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

　撮影が終っても、オレはまだ頭がボーッとしていた。

「それじゃ、今後仕事が入ったら順次連絡しますので、よろしくお願いします。その日が都合悪かったら断ってもらっていいからね。すぐ他のコに都合聞くから・・・」

オレと佐倉も他の女の子たちと一緒に帰ろうとしていると、編集長に呼び止められた。

「戸田さんと佐倉さん、まだ時間いいかしら?」

「あ・・はぃ・・・?」

「ちょうどさっき言った、差し込みが入ってるのよ。ふたりにお願いしようと思って。」
「えぇ?!・・わたしたちが・・・?」
オレは佐倉と顔を見合わせた・・・あまり急なことで何も考えられない・・・
「いいでしょう?」
「あっ・・は・・はぃ・・・」
オレは思わず返事をしていた・・・

「ケイコちゃん!このコたちで例のやつ撮影するから、えっと・・佐倉さんにパンツの方、戸田さんはどことなく男の子っぽい感じもあるから、逆にガーリーな方がいいんじゃないかな。」
「髪はどうします?下ろしますか?」
「そうね、その方がいいかも。じゃそれでお願い。」
なんかすごいスピードで会話が行われていて、オレには何が起こっているのかついていけない・・・
「カネちゃん、衣装着終った方からメイクしてあげて!」
「はい。」
カネちゃんと呼ばれたのは背が小さな丸顔の女の人だった・・・メイクさんらしいが若いのか歳とってるのか良くわからない・・・ニキビがたくさんあるところを見ると若いのだろうか・・・

オレたちは慌ただしく衣装を渡され別々の更衣室に押し込まれてしまった・・・
「ど・・どうしよう・・・」
渡された服は袖が膨らんだ赤いTシャツ・・・スパンコールでアルファベットの文字が書いてある・・・結構ハデでオレがあまり着たことないタイプの服だ・・・スカートは・・・グレーのフレアーが3段になり、それぞれのフレアーの下の部分が銀色の線で縁取られている・・・かなりのミニだ・・・こんな服レナなら似合いそうだ

けど、オレにはちょっとどうかと思う・・・

だが、こうなってしまっては着るしかない・・・それにもし似合わなければ、オレたちをモデルに使うのを諦めてくれるかもしれないし・・・オレは意を決して着替えにかかった。

一応、着てみたものの、更衣室の中の鏡に映った自分を見てみても、似合っているという自信はなかった・・・なんとなくデザインがレナが買った服に似てる気がしたから、かあさんに言われたのを思い出しながら整えてみた（２７話参照）・・・こういう服を着る時は、胸を張って堂々としてなくちゃいけないと言われたっけ・・・しかし、問題があった・・・けっこう胸元が下の方まで開いてるから、家から着けてきたフルカップのブラではどうしても見えてしまうのだ・・・どうせ付き添いだからと学校で着けているブラをしてきていた・・・こんなことならハーフカップのオシャレなやつにしとけば良かった・・・

「戸田さん、着替えた？」
ケイコさんが呼んでいる・・・
「あ、はぃ・・あの・・・」
オレは更衣室のカーテンを少し開けて顔だけ出した・・・
「・・あの・・ちょっと・・下着が・・・」
「ん？　どうしたの？」
ケイコさんがカーテンのすき間からのぞいた・・・
「あ、ブラが見えちゃうのか・・・えっと、戸田さんサイズはいくつ？」
「・・・７０の・・Ｂ・・です・・・」
オレはなんだか恥ずかしくてうつむいた・・・モデルをやるのにＢカップなんて・・・
「どうしたの？」

「あっ・・わたし・・胸が小さいから・・・」
「なんだ、そんなこと気にしてたの？」
ケイコさんは笑って言った。

「だ・・だって・・・モデルさんって・・大きいんでしょう・・・？」
「そんなことないわ。あまり大きいと向かないくらい、Ｂカップの人も多いわよ。」
「・・そ・・そうなんですか・・・？」
オレはてっきりモデルの人は胸も大きくて立派なのだと思い込んでいた・・・そうでもないのだろうか・・・？
「ちょっと待ってて。」
ケイコさんはどこかへ行くと、しばらくしてハーフカップのブラジャーを持って来てくれた。
「こういうのを着けると大きく見えるわよ。けっこうグラビアのコなんかも、こういうブラを着けて大きく見せてるのよ。」
手渡されたブラを見ると、下の方のパットがずいぶん厚くなっている・・・
「上脱いでみて、着けてあげるから。」
オレは嫌がる間もなく、カーテンの中に入ってきたケイコさんにＴシャツを脱がされ、ブラも外されてしまった・・・
「あっ・・・！」
オレは思わず両手で胸を隠した・・・オレは他人に胸を見せたことなんかない・・・それに・・・今は膨らんでいるとはいえ、オレの胸が女の子の胸と同じかどうか自信がなかった・・・しかしケイコさんは全然気にしてないようだ・・・
「はい、手を通して・・・」
オレがおずおずと肩ヒモに両手を通すと、背中でホックを留めてくれた。
「ちょっとゴメンね。」

ケイコさんはそう言うと、いきなりブラの中に手を突っ込んできた・・・

「イテッ・・！」

オレの脇の肉ごとグイッと胸を引っ張って、無理矢理カップの中に収めた。オレは痛さに思わず男っぽい言葉を使ってしまい、慌てて口をつぐんだ・・・

「ゴメンゴメン、痛かった？」

ケイコさんはそう言いながら、もう片方の胸も同様に無理矢理カップに捻じ込むようにして押し込んだ・・・オレもこんどは何とか我慢した・・・

「どう？こういうブラを着けるとDカップくらいに見えるでしょう？」

そう言われて、オレは自分の胸を見て驚いた・・・オレの胸にしっかりと谷間が出来ている・・・たしかにDカップくらいに見えるかもしれない・・・オレはこんな便利なブラがあるなんて知らなかった・・・そういえばグラビアアイドルの水着の写真なんかは、普段より胸が大きく見えるがこういう底上げの水着なのだろうか？

あらためてTシャツを着てみると、こんどはちゃんとブラは隠れていた・・・それに大きく開いた胸元にくっきりと見える谷間のせいで、やけに色っぽくみえる・・・なんだか急に豊満になったみたいで、胸だけ見ると本当に女性のようだ・・・

それにしても乱暴に引き寄せられた胸がジンジンしている・・・オレは自分の身体とはいえ、胸なんかはどうしても怖ごわ扱ってしまうから、こんなに強く掴んだことなんか無かったのだ・・・ましてや他人に掴まれたことなんかあるハズもない・・・

オレが更衣室を出ると、すぐに化粧に取りかかる・・・佐倉の姿

が見えないがオレがブラの事で手間取ってる間に終ったのだろうか？・・・オレも手早く化粧され、髪も下ろしてゆるく巻かれていく・・・なんかドキドキする・・・鏡の中のオレがどんどん女っぽくなっていくようだ・・・こんなオレ見たことない・・・恥ずかしい・・・けど・・・少し嬉しいような気もする・・・オレだって・・女の子なんだからキレイになって嬉しくないハズがない・・・

「戸田さんは足のサイズはいくつ？」
「あ・・えっと・・２５です・・・」
「けっこう大きいのね。２５ｃｍのあったかな・・・」
「あ・・でも・・２４．５でも履けるかも・・・」
オレはさすがに女の子より足が大きい・・・２４．５ｃｍだとギリギリくらいだ・・・２４ｃｍだと・・・入らなくはないかもしれないが、指が曲がってしまう・・・

「ちょっと、これ履いてみて。」
オレはケイコさんが持ってきてくれた短いブーツ？を履いてみた・・・かなりキツイが履けなくはない・・・ずっと履いているなら問題だけど、撮影の間くらいは何とかなりそうだった。
「うん、２４ｃｍだけど何とかなりそうね。ごめんね、こんど戸田さんの撮影の時は大きめのを用意しとくから。」
「はぃ・・・」
オレとしては、わざわざ大きいのを用意するのは面倒だからと、呼ばれない方が有り難いくらいなんだけど・・・
意外にヒールが細くてグラグラする・・・こんなの履いてこけたら足首を捻挫しそうだ・・・オレは用心してつい立てを廻り込んでスタジオの方へ行った。

スタジオでは、すでに佐倉の撮影が始まっていた。佐倉は一人でちょっと頼りなさげだ・・・でも撮影用の衣装を着て、ちゃんと化

粧した佐倉はすごく可愛くなっている。白いパンツに紺のTシャツ、髪はアップにして帽子を被っている・・・ボーイッシュな恰好だが、細身の佐倉に意外に合ってる！　さすがプロの手にかかると、いつもの佐倉とは全然違う魅力が出ている。

「じゃあ戸田さんも入ってみようか。」
編集長の佐々木さんに言われてオレも佐倉の横に入った・・・
「わぁ、有希すっごくきれい！」
佐倉にそんなこと言われるとオレはドギマギしてしまう・・・
「そ・・そんなこと無いって・・・千里の方が可愛いわよ・・・・」

「千里ちゃんはポケットに片手入れて・・・有希ちゃんは彼女みたいに腕からめてみようか・・・」
カメラマンに言われてオレは佐倉のポケットに入れた腕にしがみついた・・・
「いいねぇ！もうちょとくっ付いてみようか・・・」
オレと佐倉は言われたようにするしかない・・・そうする間にもバンバンシャッターが切られてストロボが光る・・・
「次はコートお願い。」
佐々木さんが言うとスタイリストのケイコさんがコートを持ってきた・・・なんとアニマル柄だ・・・佐倉はヒョウ柄の短いコート・・・オレはダルメシアン柄？のハーフコートを着せられた・・・いままで気づかなかったが、どうやら秋モノらしい・・・さすがに雑誌の現場は実際の季節よりずっと早いようだ・・・

佐倉と二人の撮影が済むと、こんどはオレ一人の撮影だ・・・オレはこんなに沢山写すとは思いもしなかった・・・
「有希ちゃん、こんどはちょっと足開いてカッコよく立ってみて・・・」
カメラマンに言われたように少し外股で男っぽい立ち方をしてみた・

・・
「おっ！いいねぇ・・・腰に手をあててレンズを見て・・・そう！いいよ！」
オレがどっちの手か判らず“こっち？こっち？”と片手づつ手を変えると、そのつどカメラマンはシャッターを切った・・・どうやらあまり深く考えないでいいみたいだ・・・違えばまた何か言うだろう・・・オレはだんだん気持ちが落ちついてきた・・・なんだか撮影って楽しいかも・・・オレもいっぱしのモデルになったような気がしてくる・・・ほんとは素人同然だけど・・・

結局オレたちはコートやブーツを変えながら、かなりの枚数撮影した。
「有希・・大変・・・！」
佐倉に言われて初めて時間が7時になってる事に気が付いた・・・オレもすっかり夕飯の仕度があるのを忘れてた！　こんなに時間が経っているとは思いもしなかった・・・
「あ、あの・・すみません・・ちょっと電話してきます・・・」
オレはそう言って廊下に出て、かあさんに電話した。
「あっ・・かあさん？　ごめんなさい・・夕飯の仕度忘れてた・・・まだ天神なの・・・」
（遅くなりそうなの？）
「う・・うん・・・もう少しかかるかも・・・」
（わかったわ。父さんたちにはピザでもとっとくように言っておくから、心配しなくていいわよ。）
「うん・・ありがとう・・・」
（有希もなるべく早く帰って来なさい。）
「うん・・わかった・・・じゃあね・・・」
オレはそう言って携帯を切った・・・なんか夕飯の仕度をサボッて

しまったうえ、嘘をついたような気がして罪悪感を感じてしまう・・・

「千里は?家に連絡しなくて大丈夫?」

「うん・・たぶん・・・」

本当だろうか・・・面接なんて言わずに来てるハズなのに・・・オレは佐々木さんに聞いた。

「あの・・まだ撮影あるんですか?・・・わたしたちもう帰らないと・・・」

「あ、もう終ったわよ。ごめんね、急だったからね。」

「い・・いえ・・・」

オレたちは急いで着替えた・・・出てくると佐倉は化粧を落としてもらっていた・・・そうだ・・佐倉はこのまま帰ったらさすがにまずいだろう・・・オレも落としてもらおうかと思っていると佐々木さんに声をかけられた。

「戸田さん、いま撮影したの今日中に入稿しないといけないんだけど、名前とかどうする?ふたりは本名出してもいいの?」

「・・い・・いや・・それはマズイかも・・・」

オレは学校でも本名じゃない方が良かったかも知れないと思っているのに、誰が見るかわからない雑誌に本名で載るのはさすがにマズイと思う・・・?!・・・そういえばオレって女の子の姿で雑誌になんか載っていいのか?　もしかしたら中学のころの同級生とかも見るかも知れないのに・・・オレはいまごろになって事の重大さに気づいた・・・

「じゃあ、今回はただ高校生とだけ書いておきましょうか?」

「あ・・はぃ・・・あのぉ・・・写真・・・ちょっと見せてもらえませんか・・・?」

とりあえずどんな風に写っているのか見てみないと心配だ・・・オレだとバレバレだとさすがに困る・・・

「いいわよ、いま版下作業してるとこだから見てみたら?」
オレは佐倉がメイクを落としてもらっている間に編集部に行って見せてもらうことにした。

つきあたりの部屋に入ると、数人がパソコンに向かって何かやっている・・・のぞくとオレたちの写真を拡大して切り抜いているところのようだった・・・別の人は画面で文字を打っている・・・これじゃ今さらダメだなんて言える状況じゃなさそうだ・・・
「ちょっとこのコに写真見せてあげて。」
すると今切り抜きの作業をしていた人が、画面に全身が入るように縮小して見せてくれた。

オレはそれを見てホッと胸をなでおろした・・・プロのメイクとスタイリストのおかげで全然オレたちに見えない! これならクラスメイトでも気づかないだろう・・・素人がこんなにきれいに写るものかと驚いた・・・これじゃあ、誰だってモデルになれそうだ。

オレが安心して戻ると佐倉が待っていた。
「有希どうだった?」
「うん・・きれいに撮れてたよ。全然わたしたちじゃないみたいだった。」
時計を見るともう7時半になっている・・・これじゃ家に帰ったら8時を過ぎそうだ・・・オレたちは編集長さんやカメラマンさんたちに挨拶をしてから急いで駅に向かった。

第４４話　約束　女どうしの約束は・・・

オレは帰る途中の電車の中で、佐倉に今日のことは雑誌が発売されるまで黙っていようと言った。オレとしては出来るだけ問題を先送りしたかったのだが、佐倉にそういう訳にはいかないのではないかと言われてしまった。どうせ岡本はすぐにでも結果を聞きたがるだろうと言うのだ・・・たしかに言われてみればそのとおりだと思った・・・あんなに佐倉にだけ面接の通知が来た事を気にしていたのだから、結果を知りたがるに違いない。

しかし、そうだとすると厄介なことにならないだろうか？・・・佐倉が合格したのは良いとしても、ついて行ったオレまで受かってしまったのは、いくら何でもマズすぎるのでは・・・こんなことなら自分がついて行けば良かったなんて言い出すかもしれない・・・もしそんなことを言われたらと考えると、オレは言い訳する理由さえ思いつかない・・・

でも事が大きくなっては面倒だ・・・だからオレは岡本と原口はしかたないとして、他には黙っていようと佐倉を言い包めた・・・まだ雑誌が出版されるまでにはだいぶ時間があるだろうし、どうせオレたちの写真が載ったとしても、ズブの素人がそんなに大きく使われるハズがない・・・あの写真なら誰も気づかない可能性も高そうだし、もし疑う人がいたとしてもオレたちじゃないとシラを切ることも出来るだろう・・・

オレは佐倉にくれぐれも、まだ他の人には言わないようにと口止めして電車を降りた。

家に着くと玄関に入る前に、オレは深く深呼吸して気持ちを落ち

つかせた・・・
「た・だいま・・・」
オレは小さな声でいうと、そっとドアを閉めて2階の自分の部屋に向かおうとした。
「有希、帰ったの？　ちょっとこっちいらっしゃい！」
かあさんの声にオレはドキッとした・・・もしかして面接に行ったのがバレたんじゃないだろうな・・・もっともバレる原因はまったく思い当たるものが無いが・・・

オレがリビングに入ると、かあさんと麻衣がいた・・・
「お姉ちゃん、ピザ残ってるよ・・・？・・・・」
麻衣が不思議そうな顔でオレを見ている・・・な・・なんだ・・・？
「お姉ちゃん、その髪どうしたの？」
・・・しまった！オレは佐倉のことばかり心配して、自分はそのままなのをすっかり忘れていた・・・！
「なんかお化粧もいつもより大人っぽいね・・・」

ど・・どうしよう・・・オレはパニックになってしまいそうだ・・・

「あ・・あの・・こ・・これは・・・」
なにか良い言い訳を考えようとしたが、まったく思いつかない・・・
「有希・・・何があったのかちゃんと言いなさい。」
「・・・うぅっ・・・」
かあさんにそう言われてオレは言葉につまった・・・なんて言えばいいのだろう・・・
「なに？言えないことなの？」
「・・そ・・そんなこと・・ないけど・・・」
「じゃぁなに？こんな時間まで何してたの？」
もうダメだ・・・オレにはこれ以上かあさんに嘘をつくことは出来ない・・・

「・・あの・・あのね・・・実は・・だいぶ前に・・みんなで雑誌の読者モデルに・・応募してたの・・・・」
「読者モデル？」
「あ・・わたしは別に読者モデルなんて興味なかったんだけど・・・みんなで一緒に送ろうって言われて・・・断れなくて・・・」
「・・・それで？」
「・・そ・・それでね・・・この前、一緒に送ったうちの一人に・・面接があるって書類が来て・・・で・・そのコが誰かついて来てって言ったんだけど・・・みんなイヤだって・・・それで仕方なくわたしが行くことになって・・・」
オレはそこで言葉を止めた・・・かあさん怒ってるんだろうか・・・顔を見るのがこわい・・・チラッと麻衣の方を見ると、麻衣は興味津々のようだ・・・ひとの気も知らないでぇ・・・

しばらく様子をみてみたが、どうやらまだ許して貰える感じじゃなさそうだ・・・オレも腹を据えなきゃいけないみたいだ・・・
「・・・それで・・面接について行ったんだけど・・・なんだか良くわからないんだけど・・・わたしも面接受けることになっちゃって・・・それで・・・・えっとぉ・・・・」
「それでどうしたの？」
また言葉に詰まったオレをかあさんが促す・・・
「・・・それでぇ・・・千里が受かって喜んでたらぁ・・・わたしまで受かっちゃった・・・・」
オレはちょっと可愛く言ってみたが、一瞬のうちに静まり返ってしまった・・・あんまり効果はなかったみたいだ・・・

「・・・あ・・あの・・モデルっていっても・・読者モデルだし・・・・」
言い訳しようとしたがうまくいかない・・・

「・・ご・・ごめんなさい・・・」
オレはかあさんに頭を下げた・・・ほんとオレって何て軽率なんだろう・・・モデルなんて許してもらえるハズがないのに・・・面接を受けるように誘われた時に断わるべきだったんだ・・・・
「モデルになるの?!お姉ちゃんスゴイじゃない!」
「ち・・違・・・読者モデ・・・」
ほんとそんなんじゃないんだ・・・麻衣はカンタンに考えてるんだろうけど・・・
「素敵じゃない、せっかく合格したんだったらやってみれば? かあさんも良いと思うわよ。」
「・・・・!」
オレは自分の耳を疑った・・・かあさん今なんて言った・・・?
「・・・あ・・あの・・・」
「有希やってみたいんでしょう?だったらやってみればいいじゃない。」
「・・・い・・いや・・あの・・・」
オレは別にモデルなんてやりたい訳じゃない・・・そりゃぁちょっとは興味はあるけど・・・

「・・で・・でも・・わたしなんて無理じゃないかなぁ?」
「でも合格したんでしょう?無理かどうかは向こうの人が決めるんじゃない?」
「・・そ・・それは・・そうだけど・・・」
なんかそう言われるとそんな気もしてくる・・・
「それにさっき有希も言ってたじゃない、モデルっていっても読者モデルだって、だったら楽しんでやってみれば良いんじゃないかしら?」
「・・・うん・・・・」
なんか・・かあさんに言われると妙に納得してしまう・・・

「・・あ・・でもさぁ・・・男が・・女の子のモデルなんてやっていいのかなぁ・・・」
「あら、雑誌社の人に言わなかったの？」
「・・い・・言えないよぉ・・だってずっと千里がいたし・・・そんな時間もなかったし・・・」
やっぱり言わなきゃいけなかったのだろうか・・・
「有希がずっと黙ってようと思うんなら言わなくてもいいかも知れないけど、一応言っておいた方がいいと思うけどな。」
「・・や・・やっぱり・・・？」
オレどうしたらいいんだろう・・・
「・・・実はね・・・もう撮影しちゃったの・・・」
「あら。」
「・・あ・・でも・・全然違うよ・・・雰囲気が・・・たぶん誰もわたしたちだって判らないと思うんだ・・・」
「そうかしら？」
「・・プロのカメラマンってすごいよねぇ・・・ぜんっぜん違うの・・・」
「そう？　でも早いうちに言っておいた方がいいわよ。」
「・・う・・うん・・そうする・・・」
オレは自分の考えの浅さに情けなくなってシュンとしてしまった・・・それに・・佐倉にあれだけ口止めしたのに、オレがバラしてたら世話ない・・・

「でも、お姉ちゃんがモデルなんて、クラスのみんなに自慢しちゃおうかなぁ！」
「・・そ・・それはやめて・・・モデルじゃないの・・“読者”モデルなんだから・・・」
そんなこと言いふらされたらたまったものじゃない・・・それに・・・
「・・・それに・・麻衣の中学はわたしが行ってたとこなのよ？・・・

・そこでわたしがモデルになったなんて言ったら、わたしが女になってるのバレちゃうじゃない・・・」

「あっ、そっか！」

まったく麻衣ときたら何てこと考えるんだろう・・・

しかし・・・意外な展開だった・・・きっとモデルなんて言ったら絶対に反対されると思っていたのに、逆にやることをすすめられるなんて・・・オレとしては怒られれば、それを理由にやめることも出来たのに・・・かあさんが雑誌社に断わりの電話でもしてくれれば願ったり叶ったりだったのに・・・

でも・・・それとは裏腹に、オレの中には読者モデルをやってみたいという気持ちが芽生えてきているのも否定できなかった・・・いろんな服を着るのは、ちょっと自信がないけど・・・でも撮影している間は不思議に恥ずかしい気持ちもなくなっていた・・・それに・・・モデルの仕事は普通の生活では、なかなか知ることができない女の子の色んなことを勉強することが出来るような気がする・・・オレだってどうせ女になるのなら、女の子のことをもっと知りたい・・・・

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ピザを少し食べて、お風呂に入ったオレは湯舟の中に自分の胸をさわってみた・・・オレは女の子の胸なんてさわったことないから

比較できないが、けっこう柔らかい・・・

今日、スタイリストのケイコさんにつかまれた痛さがまだ少し残っている・・・でもあんなふうに胸をブラに入れるなんて知らなかった・・・雑誌には脇のお肉も入れ込むなんて書いてあるけど、オレには具体的にどうするのか良くわかっていなかったと思う・・・

オレはこれまでどちらかといえば、自分の胸にあまり触れないようにしてきた・・・女の子の雑誌にはマッサージのやりかたとか書いてあるけど、そんなこと怖くて出来なかったのだ・・・でも、そういう事もこれからはやっていかなきゃいけないと思う・・・少しつかまれたくらいで痛がるようでは女の子失格だ・・・こんどエステに行ったら、胸のマッサージのやりかたを習ってこようと思う・・・そうすれば・・・もう少しは大きくなるかもしれないし・・・オレは自分の胸はBカップで十分だと思っていたが、最近はCカップくらいあっても良いのかなという気持ちになってきた・・・やっぱり胸の谷間って魅力的だ・・・

お風呂からあがって部屋で髪を乾かしていると、佐倉からメールが来た・・・もし問題がおきてもすぐに対処出来るように電源は入れておいたのだ・・・開いてみると電話がほしいという・・・何か問題でもあったのだろうか・・・

「千里?どうしたの?」

オレが聞くと、やっぱり岡本から電話が来たらしい・・・

「それでね、わたしと有希が合格したって言ったら・・・」

オレのことも言っちゃったのか・・・どうせ編集長にオレが男だって言えば、オレはやめなきゃいけない可能性が高いから言わなくても良かったかも知れないのに・・・

「直美・・なんて言ってた・・・?」
「有希に電話するって・・・電話なかった?」
・・・・・・
「あ、お風呂に入ってたから、その間にかかってきてたかも・・・」

「わたし・・有希に謝らなきゃいけなくて・・・お父さんに遅くなったこと問いつめられて・・面接に行ったこと言っちゃったのよ・・・なんか反対されそうだったから、有希もいっしょに合格したことも言っちゃった・・・二人の方が反対されないような気がして・・・そしたら何とか許してくれた・・・」
・・・何でオレが一緒なら許してくれるんだろう・・・でもオレが一緒だから許してくれたんだったら・・・オレがやめなきゃいけなくなったら佐倉はどうなるのだろうか・・・

とりあえず他には言わないようにと言って電話を切ると、急いで履歴を見てみた・・・やっぱり岡本から電話があったようだ・・・メールでなく、いきなりかけてきたところをみると、そうとう怒っているのだろうか・・・?
「・・あ・・あの・・・」
「有希?あんたどうなってんのよ!なんで有希まで受かってるの?」
「・・え・・えっと・・それは・・・」
オレはどう言ったらいいのだろうか・・・自分でもなんでこんなことになってしまったのか良く判らないのに・・・
「・・実はわたしにも良くわからないのよ・・・ついて行っただけなのに、編集長にいきなりわたしも面接受けるように言われて・・・」
「それで受けたら合格したって言うの?」
「・・・そぅ・・・」
「そんな都合がいい話ってある?」
「・・い・・いやぁ・・・ある?って言われても・・・」

オレは回転の悪い頭を必死で回転させて、なにか納得できそうな理由を探そうとした。

「・・あ・・あのさ・・・なんか、芸能人の話で聞いたことない？・・・友達といっしょにオーディションに行ったら・・自分だけ受かっちゃった・・・みたいなの・・・」

「有希そんな話信じてるの？」

「・・い・・いや・・・べつに信じてたワケじゃないけど・・・実際にあるのかなぁ・・・とか・・・」

「有希・・・あんたわたしのことバカにしてるの？」

オレは驚いた・・・なんでそんなふうに考えるんだろう・・・

「・・そ・・そんなハズないじゃない・・・」

オレはもうどうしていいかわからなくて泣きそうだ・・・もう・・・いっそのこと泣いちゃおっか・・・そう思った瞬間、オレの目から涙があふれてきた・・・

「・・うっ・・・ご・・ごめん・・・」

「・・な・・なに？・・・有希・・泣いてんの？」

「・・だ・・だって・・・」

「泣くことないじゃない・・・」

「・・んくっ・・・だって・・・わたしも・・良くわからないんだもん・・・」

「・・ちょっと・・泣かないでよ・・有希・・・」

それでもオレが泣きじゃくっていると

「・・ねえ・・・あしたもう一度みんなで会おうよ・・久留米の駅前のミスドよ・・いい？」

「・・・うっ・・・う・・うん・・・」

なんとかそういう話で電話を切った・・・

明日どうなるかは解らないけど、この場は何とかなったみたい・・・女の涙って、相手が女の子でも通用するのだろうか・・・でも・・

・オレは泣くことで事態を収拾してしまったことに言いようのない嫌な気持ちになってしまった・・・もちろんオレの涙は嘘じゃなかったと思うけど・・・これまでにも泣いてしまったことはあったけど・・・今日は・・・なんだかカンタンに泣いてしまったような気がする・・・オレは涙を武器にしてしまったのだろうか・・・オレ・・そんな女の子にはなりたくないのに・・・

でも・・・本当にオレにはどうしたらいいのか判らなかったのだ・・・

第４５話　親友　オレが片付けなきゃいけないこと

前回は遅れてしまったから今日は早めに来たらオレが一番最初だった・・・クラスメイト相手に化粧もする必要ないし、前回の経験から服もそんなに悩む必要もなかったから早く着きすぎてしまったようだ・・・オレはジュースでも飲みながら待っていた。

最初に来たのは原口だった・・・原口って制服でもそうだけど、私服だとよけいに胸とお尻が強調されて女っぽい・・・

「おはよう、有希。」

「あ・・おはよう・・・」

原口はドーナツがふたつ乗った皿とコーヒーを持って来て、オレの前のイスに座った・・・オレもドーナツ頼めば良かった・・・来た時はとても食べられる気分じゃなかったのに、なんか目の前に置かれると食べたくなってくる・・・

「有希、半分食べる？」

「え、いいの？」

「いいよ。」

弘子はそう言ってチョコレートのドーナツを半分に割ってオレにくれた・・・オレはよっぽどモノ欲しそうな顔をしてたのだろうか・・・

「でも、有希も大変ねぇ。」

「え？」

「だって有希が文句言われる筋合いないじゃない。面接受けることになるなんて誰も思わなかったんだから。」

「・・まあ・・そうだけど・・・」

原口はどこか達観したようなところがあると思う・・・

「それに直美がついていったからって、面接受けるように言われた

かどうか判らないじゃない。」
「ううん・・誰だって受けるように言われたと思うわよ・・・だって、わたしが言われたくらいだから・・・」
すると弘子は真剣な顔で言った。
「そういうとこ有希も良くないよ。誰もそんなふうには思わないわよ。」
「・・・・・？」
オレがどういうことか意味がわからず、聞き返そうとした時に佐倉がやってきた。

「おはよう・・・」
ひとことだけ言って、佐倉はオレのとなりに座った。急に気まずい空気になった・・・ドーナツが喉につかえそうになる・・・ジュースを飲み込んだ音がやけに大きく感じる・・・

弘子はいったいどう思っているのだろうか・・・この前は自分は最初から受かるなんて思わなかったようなこと言ってったけど、それが本心かどうか判らないし・・・すると佐倉がオレの方を向いて言った。
「有希が一緒に受かって、ほんとよかったぁ・・・」
「・・な・・なんで・・・？」
顔が近いよ・・・こんなに近くで話されると、女の子になった今でもドキドキするオレって変なのだろうか・・・だってオレは男のころは女の子と付合ったこともなかったから、女の子とこんなに近くで話すことなんてなかったのだから仕方がない・・・学校のような慣れた状況ならオレもこんなことはないけど、こうしてお互い私服だったりすると、オレの中の男の気持ちが頭をもたげてくるみたいだ・・・
「だって、わたしひとりだったら、お父さんも許してくれなかったと思うし・・・」

「・・そうなの・・・？」
オレにそんな影響力はないと思うけど・・・すると原口が佐倉に聞いた。
「千里はモデルやりたかったの？」
「・・う～ん・・最初は良くわからなかったけど・・・今はやりたいと思ってる・・・有希も一緒だし・・・」
「そうなんだ・・・」
オレってそんなに頼りにならないと思うんだけど・・・

弘子はオレたちの味方になってくれるのだろうか・・・それならオレは心強いけど・・・でも、それだと直美が可哀想な気もするし・・・オレはとにかく丸く収まってほしい・・・だってみんな大切な友達だし・・・こんなことで友情にヒビが入るなんてオレはイヤだ・・・オレは3人のことを親友だと思っているのだから・・・長谷川には悪いけど、この女の子どうしの関係は、オレが男だと知られていては出来ない関係だと思う・・・この中にいる時は、オレも普通の女の子でいられる気がするのだ・・・

最後にやってきた岡本は、あきらかに不機嫌そうだった。弘子のとなりに座った岡本はオレに向かって言った。
「ねえ、どういうことか説明してよ！」
「あ・・えっと・・電話でも言ったけど・・・わたしも良くわからないの・・・気がついたらこんなことになってて・・・」
「そんなの信じられると思う？」
「・・う～ん・・・どうかなぁ・・・」
ほんと、こんなことオレに聞かれても困ってしまう・・・オレだってどうして自分を合格にしたのか編集長に聞きたいくらいなのに・・・
「千里は？　有希面接の時どんな恰好で来てた？」

「え？・・・それは・・・可愛かったけど・・・・」
千里はちらっとオレの方を見て言った。

「ほら、有希ったら付いて行くなんて言って、受ける気で行ったんでしょう！」
「・・そ・・そんなことないよ！」
オレは大きく手を振って否定した。そりゃあファッション誌の編集部に行くんだから、少しはオシャレして行ったけど・・・でも変な恰好で行くワケにもいかないし・・・
「もうっ・・・有希がこんな抜け駆けみたいなことするなんて思わなかった。」
「・・そ・・そんな・・・抜け駆けって・・・・」
それはいくら何でもひどすぎないだろうか・・・オレは悔しくて涙があふれてきた・・・今日は絶対泣かないって決めてたのに・・・

「有希、また泣く気？　あんた泣けば済むと思ってない？」
「・・そ・・そんなこと思ってない・・・今日は・・泣かないようにしようって・・・思ってたんだもん・・・・」
まばたきしたら今にも涙がこぼれそうだ・・・そんなオレを助けてくれたのは原口だった。
「直美ったら、有希泣かせたの？」
「な・・泣かせたって、電話してたら有希が勝手に泣いただけよ・・・」
岡本はちょっとたじろいだものの、自分は悪くないという態度をとおしている・・・
「だいたい直美も有希がついていくことに賛成したんじゃなかった？」
「それは・・そうだけど、有希がこんな抜け駆けすると思わなかったし・・・」
すると千里も言ってくれた。

「ほんとにそんなんじゃないのよ。向こうの人が勝手に受けるように言ったんだから。断れる感じじゃなかったのよ、ねえ有希。」
「・・うっ・・うん・・・・」
オレは泣きながらうなずいた・・・

「ほんとかしら・・・」
まだ懐疑的な岡本に、さらに千里は言った。
「そもそもわたしに面接の通知がきて、有希に来なかったのおかしいと思わない?」
「・・・・・」
「直美だって、有希なら納得できるとか言ってたじゃない。」
「そんなこと・・・言った・・・?」
「たしかに言ってたわね。」
弘子もそう言ってくれた・・・千里がさらに続けた・・・
「有希は最初から受かるハズだったのよ。誰が見たって一番かわいいんだから!」
そ・・それは言い過ぎでは・・・
「だいたい有希に面接の通知が来なかったの直美のせいなのよ・・・」
「・・・・!」
千里のやつ・・・まさか言っちゃうつもりじゃ・・・
「なんで・・・わたしのせいなのよ!」
「有希が黙っててっていうから言わなかったけど、直美が写した写真、有希の顔ボケてて見えなかったんだから!」
「そうなの?!」
弘子もそれには驚いたようだった・・・

「・・で・・でも・・なんで・・・写し直せば良かったじゃない!」
「直美も知ってるでしょう? 有希は自分がどんなに可愛いか良く

わかってないの。だからどうせ受からないなんて思って、そのまま送っちゃったのよ。」
「・・ほんとなの？・・有希・・・」
「・・・うっ・・うん・・・」
オレが自分のこと可愛いのをわかってないって所はどうかと思うけど、写真のことはほんとうだ・・
「だから実際に有希を見て、可愛いから面接受けるように言われたんじゃない。」
「・・・・・」
こんどは岡本が黙ってしまった・・・

「直美が有希に謝らなきゃいけないんじゃないの？」弘子が言うと
「な・・なんでわたしが・・・」
直美はそう言ったものの、オレに謝ってくれた・・・
「・・ご・・ごめん・・有希・・・」
「・・・ううん・・・いいの・・・」
オレは嬉しくって、また涙があふれてきた・・・直美もほんとは素直なコなのだ・・・
「・・直美ぃ・・・わたしこそ・・何かごめんね・・・」
やっぱりオレたちは友だちだ・・・
「・・直美のほうが・・モデル・・なりたかったのにぃ・・・」
「・・そ・・そんなの・・もういいよ・・・有希が可愛いのはわかってたしね。」
「・・・ううっ・・・」
オレは可愛くなんかないのに・・・直美だって可愛いのに・・・オレは直美に申し訳ない気持ちでいっぱいだった・・・

ーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーー

―――――――――

何とか話が収まって、友情も壊れずに済んだようでホッとした・・・また泣いちゃったのは反省したい気持ちだけど・・・今回はどうしようもない気持ちで泣いてしまったのだから、ある意味仕方がないと思う・・・だれだって、悔しかったり、悲しかったりすれば泣いてしまうと思うし・・・

しかし、良く考えてみればオレにとっては余計やっかいな事になったような気もする・・・オレと佐倉がモデルをやるのに納得してくれたのは良いけど、オレがモデルをやれるかどうかは、まだわかっていないのだ・・・どう考えたって、オレが男だとわかれば断られる可能性の方が大きいだろう・・・

でも・・やっぱり編集長には言わなきゃマズいと思う・・・だって後でバレて大事になったら、それこそ大変だ・・・オレはこの前もらった名刺の番号に電話した。

「はい、佐々木です。」

「・・あ・・あの・・昨日、面接していただいた・・戸田有希ですけど・・・」

「あぁ、戸田さん。どうしたの?」

「・・あの・・実は・・昨日言わなきゃいけなかったんですけど・・言えなかったことがあって・・・もう一度・・会っていただけないかと思って・・・」

「あら、そう・・・電話じゃダメなの?」

「・・あ・・えっと・・出来れば実際に会って話したいんですけど・・・今日忙しいんだったら、また今度でもいいんですけど・・・」

「そう・・でも早い方が良いんでしょう?」
「・・はぃ・・・」

「それじゃ、もう少ししたら食事するから、食べながらで良かったらどう?」
「・・え・・でも・・迷惑じゃ・・・」
「ああ、大丈夫よ。食事しながら仕事の話することも良くあるから。モデルさんとも良く食事しながら話するわよ。」
「・・あ・・じゃぁ・・お邪魔します・・・わたし今、久留米にいるので・・・30分くらいで行けると思うんですけど・・・」
「それじゃね、薬院に着いたらまた電話くれる?」
「・・はぃ・・わかりました・・・よろしくお願いします・・・」
オレは電話を切ると、急いで改札を通ってホームへ向かった・・・
ちょうど特急が来るところだ・・・

オレが薬院の駅に着いて電話をかけると、編集部のビルの下で待っているように言われた。ビルの一階には大きな文房具店が入っている。ちょっとショーウインドウを覗いていると、後ろから名前を呼ばれた・・・
「戸田さん!こっちよ。」
オレは慌てて編集長の方へ駆け寄った・・・
「・・あ・・こんにちは・・・」
「近くの喫茶店だけどいい?」
「・・あ・・わたしは・・どこでも・・・」
オレは編集長の後をついていった。

「えっと・・わたしはシーフードパスタ。戸田さんは何がいい?」
「・・あ・・わたしは・・さっきドーナツ食べたから・・いいです・・・」

「そう？　でもひとりじゃ食べにくいなぁ・・・パフェでも食べたら？ここのパフェ美味しいらしいわよ。食べない？」
「・・あ・・えっと・・・」
「もう入らない？」
「・・そ・・そんなことないですけど・・・」
「じゃあ食べなさいよ。ね？」
「・・は・・はい・・じゃぁ・・いただきます・・・」
オレはあまり食べたい気分でもなかったが、こう勧められては断るのも失礼な気がした・・・たしかに何も食べてない人の前で、自分だけ食事するのは気まずいかもしれない・・・

お昼時ということもあり、たのんだパスタとパフェはすぐにきた。
「どうぞ、食べて。」
「・・ぁ・・はぃ・・・」
オレは長いグラスに入ったイチゴパフェを長いスプーンで一口すくって食べた・・・その瞬間、その美味しさに驚いた！　そもそもオレは男だったからパフェなんかそんなに食べたことがなかったから、こんなに美味しいとは知らなかった・・・
「美味しい？」
「はい！おいしいです！」
「良かった。モデルさんたちが美味しいって言ってたのよ。」
そうか・・・ここのパフェが特に美味しいのかもしれない・・・

オレが夢中で食べていると
「ところで、話って何かしら？」
「うぐっ・・・」
オレは思わず喉を詰まらせてしまった・・・
「・・ぁ・・す・・すみません・・わざわざ時間とっていただいたのに・・・」
「それはいいんだけどね、戸田さんの子供っぽいところも見れたし。

」
オレはそんなこと言われると思わなかったから、一気に顔が熱くなった・・・
「ふふっ・・戸田さんっていろんな表情もってるのね。」
「・・あ・・えっと・・・」
「化粧してないとこんなに幼い感じだと思わなかったわ。この前とは別人みたいね。」
「・・・・・・」
やっぱり化粧して来るべきだっただろうか・・・
「・・へ・・変ですか・・・？」
「ううん、そういう意味じゃないの。可愛いなって思って。」
オレはもう恥ずかしくてたまらない・・・・

でも恥ずかしがってばかりもいられない・・・オレは話をしに来たのだから・・・
「・・あ・・あのぉ・・この前写した写真・・・載せるの止めることって出来ますか・・・？」
「あ、今朝もう色校済んじゃったけど・・・」
「・・いろ・・こう・・・？」
「あっ、色校っていうのは写真の商品の色が、印刷でちゃんときれいに出てるかとか、あと文字の間違いとか直すことを言うの。この後、最終の校正があるけど、そこではよっぽどの事がないと写真の入れ替えとかは出来ないのよ。」
「・・そ・・そうですか・・・」
「なに？ご両親に反対された？　結構あるのよね、戸田さんと一緒に採用したコも、もう3人やめたいって言って来てるわ。まあ、だから多めに採用するんだけど。」
・・・どうりでオレなんかが採用されたワケだ・・・
「・・あの・・お母さんは賛成してるんですけど・・・」
「じゃあ、お父さんが？」

「・・・いや・・お父さんもたぶん反対しないと思うんですけど・・・」
「それじゃぁ、何が問題なの？」

なんか本当のことを言おうと決心して来たのに、いざその時になると何て言えばいいのかわからなくなってくる・・・
「・・あ・・あのぉ・・わたし見て・・・なんか変じゃないですか・・・？」
「・・・さあ・・・普通の女の子にしか見えないけど・・・いや・・普通よりは相当可愛いわね。」
「・・・い・・いや・・そういう事じゃないんです・・・」
この後に及んで可愛いなんて言われら、よけい言い出しにくくなってしまう・・・どう言えばいいんだろう・・・
「・・わたしぃ・・心の中では・・自分のこと・・オレって言ってるんです・・・」
「そう・・・？　まあ、実際に自分のこと僕とか俺とか言う女の子もたまにいるみたいだから、別に心の中ならオレって言っても良いんじゃない？」
編集長はそう言った後「それとも・・・もしかして性同一性障害とか・・・？」

オレはドキッとした・・・まさかそんなに単刀直入に来るとは予想してなかった・・・
「自分が女の子だと受け入れられないの？　でも変ねえ・・・そういうコってあまり女の子っぽい恰好したがらないんじゃないのかしら？」
「・・・・・？」
なんか話が変だ・・・もしかして逆に思われているのだろうか・・・
「・・あ・・あの・・わたし身体は女の子だけど・・心は男の子ってワケじゃないんです・・・」

「でしょうねぇ、とてもそんな風には見えないわ。」
「・・あのぉ・・その逆なんです・・・」
「逆？」
編集長はどうも要領を得ないみたいだ・・・もう言うしかない・・・

「・・あの・・わたし・・・本当は男なんです・・・・」
「え？どういうこと？」
ううっ・・・恥ずかしい・・・男だとバラすのがこんなに恥ずかしいとは思ってもみなかった・・・そういえばオレが女の子になってから、男とバラすのは初めてだった・・・
「・・わたし・・身体っていうか・・・戸籍が男なんです・・・」
さすがに身体が男とは言いにくかった・・・ずいぶん男の頃とは変わっちゃったし・・・
「えっと・・・それって、戸田さんが本当は男だってこと？」
「・・はぃ・・・」
どうやらやっと解ってくれたみたいだ・・・
「嘘でしょう？　だってあなた胸があるじゃない。撮影の時、胸が開いた服だったから谷間が見えてたわよ。」
「・・そ・・それは・・ホルモンで・・・」
「本当？　読者モデル断るために、そんな嘘ついてるんじゃないの？」
「・・う・・ウソじゃありません・・・」
しかし、考えてみれば、オレが男だと証明するものは戸籍と保険証と・・・あとは股間のアレぐらいしかない・・・今は戸籍も保険証も持ってないし・・・かといって股間のアレを女の人に見せるのは・・・さすがにイヤだ・・・もっと立派ならまだしもオレのは萎びてちっちゃくなってしまっているし・・・まあ、そんな話でもないけど・・・

「・・あの・・・どうやったら信じてもらえますか・・・？」

オレとしても、もうどうしたらいいのかわからない・・・
「う〜ん、言われてみれば・・・少し男の子っぽい感じはあったけど・・・でもそれはあくまで女の子としてはってレベルだしねぇ。そこがまた可愛いワケだし。」
「・・うぅ・・・やっぱり・・アソコ見せなきゃダメですか・・・？」
「・・・アソコ・・・？」
「・・こ・・ここはまだ男のままなんです・・・」
オレは股のところを指さして言った・・・
「・・あっ・・わかったわ、信じる。」
やっぱり股間なんて見たくないに決まっている・・・だから信じるとは言ったけど、本当に信じてくれたかは疑わしい限りだ・・・

「つまり、戸田さんが男だから、読者モデルになるのはダメなんじゃないかと思ってるワケでしょう？」
やけに簡単に言ってくれたが・・・まあ、早い話はそういうことだ・・・
「・・はぃ・・・」
オレはコクリとうなずいた・・・
「それじゃ、私がここで、戸田さんが男でもいいわよって言えば、何も問題ないのよね？」
「・・そ・・それは・・・・」
「戸田さんは女の子にしか見えないし、女の子の服も良く似合う。それなら女の子の服のモデルやっても何の問題もないんじゃない？」
「・・で・・でも・・・もしわたしが男だってバレたら・・・そちらに迷惑が・・・」
「大丈夫よ、戸田さんみたいな可愛いコ誰も男の子だなんて思わないし、もし万が一バレたとしても、全然問題ないと思うわよ。」
「・・・・・？」

「戸田さん、ファッション誌の目的はね、服を良く見せることが第一なの。あくまでメインは服なのよ。だから戸田さんが着て服がきれいに見えるなら、ファッション誌としては問題ないと思うの。戸田さんがやりたくないのなら別だけど。」

オレは・・・どうなのだろう・・・

「戸田さんはやりたいんでしょう?」

「・・・・・」

「この前の撮影の時もいい表情してたじゃない。」

「・・そ・・そうでしょうか・・・」

オレはそんな表情してたんだろうか・・・オレじゃないみたいとは思ったけど・・・

「楽しそうだった。そういうのは大切なことなのよ。」

「・・わたし・・写真は・・写すのは好きなんですけど・・・写るのは苦手だと思ってたんです・・・でも・・・なんかああやって写されてると・・頭の中がポーッとしちゃって・・・」

「良いんじゃない? 写すのが好きな人って、本当は写るのも好きなんだと思うわよ。ただ写す相手の良いところばかり見ちゃうから、自分に自信がなくなってしまうんじゃないかな? 戸田さんは? 自分に自信ある?」

「・・ううん・・自信なんて・・あるわけ・・ないです・・・」

オレはとんでもないというように手を振った・・・オレは男のころからそうだったけど、女の子になってからは本当に自信がなくなってしまっている・・・

「もっと自分に自信持たなきゃ!戸田さんは可愛いし、素敵だと思うわよ。」

「・・・・・」

「もし戸田さんが、どうしてもやりたくないって思うのなら仕方ないけど、私はやめてほしくないんだけどな。」

「・・・・・」
オレは・・・オレは・・・
「どう？　やりたくない？」
「・・わたし・・やりたい・・・・」
オレは全然自信はないけど・・・出来るのならやってみたい・・・
「そう、じゃ決まりね。やりましょう！」
「・・・はぃ・・・」
でも、ほんとにオレでいいんだろうか・・・

「でも驚いたわ。戸田さんが男の子だなんて。」
「・・はぁ・・・」
やっぱりオレって全然男に見えないんだろうか・・・
「一緒に来てた佐倉さん？あのコは知ってるの？」
オレは首を横に振った・・・
「じゃあ、学校は？　先生たちは知ってるの？」
「・・はぃ・・」
「それじゃ、学校には女の子として通ってるってこと？」
「・・はぃ・・」
「へぇ～・・スゴイわね。いつから女の子として暮らしてるの？」
スゴイかどうかは知らないけど・・・
「・・高校生になってから・・です・・・あ・・中学の最後の方からかな・・・」
「その前は男の子だったんだ？」
「・・はぃ・・たぶん・・・」

「たぶんってどういう事？」
「・・あ・・わたし・・・小さいころ・・小学校2年生の頃までは女の子みたいだったらしいんですけど・・そのころのことは全然憶えてないんで・・・記憶にないんです・・・」

「ふ～ん・・そんなことってあるのねぇ。」
「・・・・・」
「でも、今は女の子だってことは、やっぱり自分のことを女の子だと思ってるんでしょう？」
「・・は・・はぃ・・・」
「それじゃなんで心の中で自分のこと“オレ”って呼んでるのかしら？」
「・・・・・！」
しまった・・・オレは自分が男だと告白することで頭がいっぱいで、そこまで気がついてなかった・・・たしかに言われてみれば変かもしれない・・・
「・・あ・・あのぉ・・・そこが難しいところで・・・自分が女だって思うことと・・・それとはまた別というか・・・」
どう言い訳すればいいだろう・・・オレは頭の中で性同一性障害のことを必死で思い出していた・・・このごろは慣れてたから、あらためて気にしたことなんてなかった・・・
「・・性同一性障害って・・身体が男で心が女の場合は・・性格が女の子らしいとは限らないんです・・・」
「どういうこと？」
「身体が女で心が男の人は・・性格も男らしいし、女の子しか愛せない場合がほとんどらしいんですけど・・・わたしみたいに・・・身体が男で心が女の場合は・・・女の人にいろんな性格の人がいるように・・・いろんな人がいるんです・・・」

「えっと・・・じゃあ男らしい人もいるってこと？」
「女の人に男っぽい性格の人がいるみたいに・・・ですけど・・・」
「・・・・・」
「女の人でもみんなが女らしいワケじゃないでしょう？」
「そうねぇ・・・私なんか良く性格は男っぽいって言われるわね。」
「でも、女の子のオシャレもするし、愛するのは男性でしょう？」

「・・・そうね・・男っぽい性格だからって、女の子が好きって訳でもないわね・・・まあ、嫌いでもないけど・・・」
「そう、そういうことなんです・・・心が女なんて言うと女っぽいって思われるんですけど・・・ほんとうは脳が女なんだと思うんです・・・だからどんなに男っぽくても女なんです・・・」
なんかオレうまいこと言ってないだろうか・・・
「だから・・・わたし・・・男の子として育ってしまったから・・・どうしても男っぽいところが抜けなくて・・・」
これは間違いなく本当のことだ・・・
「じゃあ戸田さんは男の子っぽい女の子なんだ。」
「・・・ま・・まあ・・そういうことに・・なります・・・」
「そっか・・そういうところが余計に魅力的なのね。」
「・・・そ・・それはどうかなぁ・・・?」

「それで? 戸田さんはどっちが好きなの?」
「・・どっちというと・・?」
「恋愛の対象は、男の子なの? それとも女の子?」
うぅっ・・・どう答えればいいのだろう・・・
「・・・男の子が・・好きです・・・」
なんか自分で言ってて恥ずかしい・・・顔から火が出るって表現があるけど、まさにこんな感じなのだろう・・・
「・・・あ・・・で・・・でも・・・わたし・・まだ恋愛とかしたことなくて・・・ほんとうは良く解らないんです・・・」
やっぱり本音が出てしまう・・・オレはまだ恋愛なんて語れない・・・恋も愛もしたことないのだから・・・
「・・・男の子のアイドルだったら・・誰が好きかとか・・そういう感じなんです・・・」
「ふふっ・・・可愛いわねぇ・・・私も仕事柄いろんな女の子を見てきたけど、戸田さんみたいな可愛い女の子はそんなにいないわよ。
それなのに自分のこと男っぽいなんて・・・とてもそんなふうには

見えないわ。」
「・・そ・・そんな・・・」
オレは可愛いなんて言われると、すごく居たたまれない気持ちになってしまう・・・

編集長の携帯が鳴って、オレはホッとした・・・このまま話続けていたら、またボロが出ないとも限らない・・・
「戸田さん、ごめんね、編集部に戻らなきゃいけないの。」
「・・いぇ・・・」
オレにとってはその方がありがたいくらいだ。
「それじゃ、細かいことはまた今度話しましょう。」
「・・はぃ・・・」
「あ、戸田さんはパフェ食べてからでいいからね。」
そう言って編集長の佐々木さんは急いで会社に戻って行った。

そういえば、いつのまのかパフェを食べるどころではなくなっていた・・・あらためて食べようとしたが、アイスはもうほとんど溶けていた・・・

―　―　―　―　―　―　―　―　―　―　―　―
―　―　―　―　―　―　―　―　―　―　―
―　―　―　―　―　―　―　―　―　―
―　―　―　―　―　―　―　―　―
―　―　―　―　―　―　―　―
―　―　―　―　―　―　―
―　―　―　―　―　―
―　―　―　―　―
―　―　―　―
―　―　―
―　―
―

おまけ・架空の西鉄大牟田線案内

○＝特急停車駅（急行も停車）　●＝急行停車駅

・久留米以降は急行はありません　・普通駅は省いています

○福岡（天神）ー　ー天神の中心部のビルの中にある駅。駅ビルには架空の三越が入っている。

○薬院ー　ー　ー　ー　ー　九州ＪＩＮＯＮの編集部、駅の下にミスドと大きな本屋〈マンガも充実〉

・平尾ー　ー　ー　ー　ーレナの家

●大橋ー　ー　ー　ー　ー　急行停車駅では一番大きい。市街地へ向かうバスのターミナルでもある。有希が行った手芸店〈西沢〉がある。

●春日原ー　ー　ー　ー　有希、長谷川の家がある。おばさんの美容院、二光のエステもココ。駅前にはさかえ屋、マックがある。

●下大利ー　ー　ー　ー

○二日市ー　ー　ー　ー

●朝倉街道ー　ー　ー　急行停車駅だが、雰囲気は普通駅のようだ。三吉先生の家

●筑紫ー　ー　ー　ー　ー

●小郡ー　ー　ー　ー　ー

●宮の陣ー　ー　ー　ー

○久留米ー　ー　ー　ー　白鴻女学園　駅前にミスド、マック

○花畑ー　ー　ー　ー　ー

○大善寺ー　ー　ー　ー　佐倉千里の家

○柳川ー　ー　ー　ー　ー

○新栄町ー　ー　ー　ー

○大牟田ー　ー　ー　ー　三井グリーンランド

第４６話　奈々　初めての少女マンガ

夏休みはまったり過ごそうなんて思ってたのに、なんだか次々に問題がおきてしまい、ちっとものんびり出来なかった・・・今日は久々に部屋でゴロゴロして過ごしている。

明日は白石先生に会うために学校に行かなきゃいけないから、今日は一日家で過ごそうと思っていた。

“コンコン”

ドアをノックする音・・・たぶん麻衣だろう・・・今うちにはとうさんと麻衣しかいない・・・とうさんがオレの部屋に来るなんてまずないことだ・・・

「お姉ちゃん、入っていい？」

「どうぞ」

オレはベッドにうつぶせに寝転がり、雑誌を読みながら返事をした。

「ＪＩＮＯＮ〈ジノン〉見せてもらっていい？」

「いいわよ。」

オレはいま見ていた雑誌を渡そうとした・・・

「あっ、読んでたならいいけど・・・」

「ううん、いいの。もう一通り見たから。」

麻衣は雑誌を受け取ると床に座って広げた。

「ちょっと・・・ここで見るの？」

「ダメ？」

「べつに・・・いいけど・・・」

そうは言ったものの、どうも納得できなかった・・・だって麻衣は、あまりオレの部屋に入りたがらなかったのに・・・

「ねえ・・あんた前はわたしの部屋に入るのイヤじゃなかった？」

「・・う・・うん・・・だって・・・」

麻衣は言いにくそうに言い淀んでる・・・
「だって何？」
「・・だって・・・お姉ちゃんの部屋・・臭かったんだもん・・・」
「え？！」
オレの部屋が・・・？
「・・ど・・どんな臭い・・・？」
「・・・男の子臭いっていうのかなぁ・・・なんか・・・」
驚いた・・・オレは自分の部屋が臭いなんて思ったことは一度もない・・・

「でも、今はすっかり女の子の匂いになってるよ！」
「・・そ・・そうなの・・・？」
オレはまったく気づかなかった・・・だいたい自分の臭いなんて、なかなか自分では気づけないものだ・・・
「あ・・でもそれって化粧品の匂いじゃない？」
「違うよ・・だってお姉ちゃん自身がいい匂いするもん・・・」
オレはビックリして自分の身体をクンクンにおってみた・・・しかし、やっぱり自分ではよくわからなかった・・・
「お姉ちゃん、自分で気づかなかったの？」
「・・・うん・・・」
「お風呂の後とか、前と全然においが違うよ。お姉ちゃんが入った後は女の子の甘い匂いがするもん！」
「・・・・・」
たしかに女の子って甘い匂いがするけど・・・高校に入ってすぐの頃は、教室中が女の子の匂いで頭がクラクラしたものだけど、最近はそんなことも無くなっていた・・・オレはてっきり慣れただけだと思っていたけど、もしかして自分も同じ匂いがするから気にならなくなっていたのだろうか・・・これも女性ホルモンのせいなのかな・・・
「お姉ちゃんもすっかり女の子になったんだね。」

「・・そ・・そうなのかな・・・・」

「あっ、そういえばお姉ちゃん『ＮＡＮＡ』もう読んだの？」

「・・あ・・うん・・・」

『ＮＡＮＡ』はレナにすすめられたマンガだった・・・女の子の気持ちが良く描けているのだと言ってすすめてくれたのだ・・・

オレは三吉先生にすすめられた女の子の気持ちがよくわかるという小説を読んでいたのだが、せっかくすすめてくれた三吉先生には悪いけど・・・どうも今の時代には少し古いのではないかという気がしてきた・・・こんなのばかり読んでいたらオレは明治時代の女学生みたいになってしまいそうな気がする・・・

それでレナに聞いてみたら少女マンガをすすめられた。でもオレは少女マンガなんて読んだことがなかったから、どんなのを読んだら良いのかわからないと言うと『ＮＡＮＡ』がいいと言われたのだ・・・

その話を麻衣にすると、なんと麻衣が持っていたので借りて読んでみたというわけだ・・・

「どうだった？ナナかっこいいでしょう？」

「・・どっちの・・・？」

「ナナに決まってるじゃない！ハチじゃないよ！」

「・・・そ・・そっか・・・」

たしかにハチはかっこいいってキャラじゃない・・・でもオレは正直どっちのナナにも感情移入できないでいた・・・こんな女の子いないだろうと思う・・・少なくともオレのまわりにはこんな女の子はひとりもいないから、どうにも実感が持てないのだ・・・それに・・・こんなマンガを小学生が読んでいいのだろうか・・・高校生のオレにだって、ちょっと刺激が強いのに、麻衣は小学生のころから読んでいたなんて・・・まあ、オレがとやかく言うことでもないか

もしれないけど・・・

奈々は高校生のころから不倫したりだらしがないし・・・ナナもタバコ吸ったり、同じバンドの男と同棲してセックスしてるし・・・それに男の方も全然女の子の気持ちが解ってないし・・・こういうのはレナみたいなコなら感情移入も出来るのかもしれないけど、オレみたいな女の子にはとても無理だ・・・それともオレが本当の女の子じゃないから解らないのだろうか・・・

「麻衣こんなのわかる？　理解できるの？」

「うん、わかるよ。」

ほんとかなぁ・・・中学生になったばかりのコにこんな恋愛がわかるのだろうか・・・

「そうだ・・この続きは？」

たしかにオレには気持ちは理解できないけど、3巻がちょうどいいところで終っているから気になるのだ・・・章司のやつまさか幸子を選ぶつもりじゃないだろうなぁ・・・ハチも厄介なコだけど、オレは幸子もどうかと思うぞ・・・

「あたし3巻までしか持ってないよ。」

「なんで?!」

「・・その後は友達に借りて読んだから・・・」

「えぇ～・・またその友達に借りれないの?」

「だって・・小学校の頃の友達だもん・・・」

「もうっ・・・続きが気になるじゃない・・・この後どうなるの?」

「・・・えっとねぇ・・・どうだったっけ・・・」

「あっ、やっぱり言わないで!」

オレは慌てて続きの話をしようとする麻衣を止めた・・・せっかくマンガなのに言葉で聞いたらだいなしだ・・・仕方ない・・・買うしかないか・・・でも少女マンガなんて買うの恥ずかしいな・・・

「麻衣は今日どこか行くの？」
「ううん・・・」
「じゃぁ、お昼作ろうか？」
「うん！」
「何がいい？」
「そうめん！」
「そうめんか・・いいね！」
そういえばつゆが無くなってたなぁ・・・
「そうめんならつゆ作らなきゃ・・・ちょっと時間かかるけどいい？」
「うん、あたしも手伝うよ！」
「そう？」
オレたちは昼食を作るために部屋を出た・・・なんかこういう時にふと思うことがある・・・オレたちって本当に姉妹らしくなってきた・・・

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー
ー　ー
ー

「有希ちゃん、調子はどう？　気分が悪くなったりしてない？」
「はい。」
オレは精神的にはいろいろあるけど、身体は元気そのものだ・・・
「今日はちょっと血液取るけど、検査するだけだから心配しないで。」
そう言って白石先生は大きな注射器を取り出した。
「・・・・・」

オレは注射とかは平気な方だけど、ときどきやるこの血液検査だけはちょっと苦手だ・・・だって針も太いし、注射器の中に赤黒い血がたまっていくのを見るのは、あまり楽しい気分じゃない・・・

「このごろはどう？　なにか楽しいことあった？」

「・・えっとぉ・・・」

読者モデルのことを話そうかと思ったものの、こればかりは言っていいものかどうか良くわからなかった・・・

「・・特に楽しいことは・・・」

「そう・・・夏休みだからどこか旅行とか行かないの？」

「う～ん・・・かあさんは忙しいし・・・とうさんはあまり外には出ないから・・・そんなに旅行とか行ったことないんです・・・」

「そうなの・・それはつまらないわね・・・」

「ううん・・そんなことないですよ・・・わたし、そんなに旅行とか行きたいと思わないし・・家でお料理とかするのも楽しいし・・・」

「ふふっ・・・有希ちゃんってほんとに女の子らしいのね。」

「・・そ・・そんなこと・・・」

だってオレは男のころからやってるし・・・

「普通ですよ・・・」

でも・・今のオレが女の子らしいのなら、オレって男としては普通じゃなかったのかな・・・オレはごく普通の男の子のつもりだったんだけど・・・

「有希ちゃんはお裁縫も得意なんでしょう？」

「え？・・なんで知ってるんですか？」

オレは白石先生にはそんな話をした記憶はない・・・

「家庭科教室の前に有希ちゃんの写真があったじゃない。なんでかと思って松本先生に聞いてみたら、あのワンピースも有希ちゃんが作ったって言うから。私はそういう女の子っぽいことは苦手だった

から尊敬しちゃうわ。」
「・・そ・・そんな・・・」
白石先生がオレを尊敬するなんて・・・オレはただそれくらいしか取り柄がないだけなのに・・・
「やっぱり有希ちゃんは女になるべくして生まれてきたのねぇ。」
「・・・・・」
そうなのだろうか・・・オレはただ偶然が重なってこんなことになってるだけだと思うんだけど・・・でも・・・偶然だけで男が女になることなんて、めったにないことだとは思う・・・だけどそれを運命なんて言っていいのかはオレにもよくわからない・・・

「そういえば、有希ちゃんのお兄さんって薬科大に行ってるんだったわね。」
「はい・・・大学院で研究してるみたいです・・・」
といってもオレには大学院がどんなものか知らないけど・・・
「なにを研究してるのかしら?」
「さぁ・・・そういう話はしないから・・・あまり会えないし・・・」
「夏休みは帰って来るんじゃないの?」
「・・さぁ・・・お正月も帰ってこなかったから・・・わからないです・・・」
「どうしたの? 顔が真っ赤よ?」
「・・あ・・わたしまだ・・女の子になってから・・兄さんに会ったこと・・ないんです・・・兄さんにはすごく会いたいけど・・・兄さんに会うの・・・恥ずかしいんです・・・それに・・ちょっとコワイ・・・」
こんな姿になってしまったオレを見て・・・兄さんはどう思うんだろう・・・

「有希ちゃんはお兄さんのこと好きなのね。」

「・・それは・・・兄ですから・・・」
オレは兄さんのことは好きだし、すごく尊敬している・・・オレと違って頭が良いし・・・優しいし・・・
「心配いらないと思うわよ。お兄さんだって今の有希ちゃん見たら可愛いって思うだろうし、好きになっちゃうかも知れないわよ。」
「・・そんなぁ・・・兄弟なのに・・・」
「そっか・・そうよね、ゴメン変なこと言っちゃって。」
「・・そうですょ・・・そんなこと・・・」
・・・そんなこと・・あるわけない・・・・だって・・オレたちは兄弟なんだから・・・男どうしの・・・

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

“ぶるる・・ぶるる・・”
オレのカバンの中で携帯が鳴っている！　電源切るの忘れていたようだ・・・見ると編集長の佐々木さんからだった。
「もしもし、戸田です・・・」
「あ、戸田さん、良かった、つかまって・・・」
「・・ど・・どうしたんですか？」
「それが、急な撮影が入っちゃって・・今から来てくれないかな？」
「え？！　今からですか・・・」
一度家に帰って着替えて・・お化粧してとなると、けっこう時間がかかってしまう・・・
「来れない？」
「い・・いえ・・そんなこともないですけど・・・急ぐんですか？」
「ええ、出来るだけ早く来てほしいんだけど・・いま佐倉さんもこ

っちに向かってもらってるのよ。」
「え・・千里も・・・？」
千里が行くのならオレが行かないわけには・・・だって、千里の両親はオレが一緒だから認めてくれたって言ってたし・・・オレにも責任がある・・・
「・・じ・・じゃぁ・・いま久留米なんですけど・・・特急じゃないから・・1時間くらいかかるかもしれませんけど・・・」
「いいわよ、待ってるから出来るだけ早く来て・・・でも、電源入れててくれて助かったわ・・佐倉さんが戸田さんは電源入れてないって言ってたから、つかまらなかったらどうしようかと思った・・・それじゃね。」
「・・あ・・はい・・・」

オレは急行の席に座ると考えた・・・こんなことがあるのなら、いつも電源を切っておく訳にはいかない・・・いっそのこと携帯の番号やメールアドレスも変えてしまった方がいいかもしれない・・・どうせ中学の友達から連絡が来ても、こんなナリではどっちみち会えないし・・・そろそろ男のころの友達とは決別した方が良さそうだ・・・いつも電源を切っていては千里たちにも迷惑をかけてるみたいだし・・・オレにとっては今の友達の方がずっと大切なのだ・・・

薬院の駅に着いて、電車を降りると奇妙な感じがした・・・いつも制服で行動してるところなら何でもないのに、いつもは制服で来ないところだと何だか落ちつかない・・・なんか初めてセーラー服を着て外に出たときの気恥ずかしい感覚がよみがえってくるようだ・・・

けっきょく制服で来てしまったけど、なんかこんな恰好で編集部

に行くの恥ずかしいな・・・でも、そうも言ってられない・・・急がなきゃ・・・

編集部に着くと、もう千里は撮影を始めていた・・・オレも急いで着替えてメイクをしてもらう・・・撮影が始まるとオレの気持ちは一気に女の子らしくなり、カメラマンさんの言葉につられて可愛いポーズをとってしまうオレがいる・・・それでも時々、我に返ってしまい恥ずかしさが顔に出てしまうが、そんな時にかぎってカメラマンさんが褒めてくれるから、よけい恥ずかしくなってしまうのだ・・・

「・・ふぅ・・・疲れたぁ・・・」

撮影が終り、着替えたオレたちはソファーでぐったりしていた・・・撮影はテンションが上がる分、あとから疲れがくるみたいだ・・・それに今日は急だったのもあるのだろう・・・

今回はオレもちゃんとお化粧を落としていた・・・だって撮影のお化粧でセーラー服を着るなんて無理だ・・・

「有希、制服だったんだね。学校に行ってたの？」

「・・う・・うん・・・」

「クラブか何か？」

「・・うん・・・まあ、そんなところ・・・」

白石先生のところなんて言ったら、何でって聞かれるのがオチだ・・・何か別の話題にしないとボロが出そう・・・

「千里さぁ・・『ＮＡＮＡ』って知ってる？」

「『ＮＡＮＡ』？　あのマンガの？」

「・・そう・・・」

「そりゃ知ってるわよ。知らない人なんているの？」

「・・そ・・そうか・・・そうよね・・・」

女の子なら誰でも知ってるようなマンガなんだぁ・・・オレは聞い

たこともなかったのに・・・

「有希、『ＮＡＮＡ』好きなの？」

「・・う・・うん・・・まあ・・・」

ここはとりあえず好きだということにしといた方が良さそうな気がする・・・

「ちょっと意外かも・・・」

「・・ど・・どうして・・・？」

オレが好きではマズかったのだろうか・・・

「なんかそんな気がして・・・あっ・・でも有希ってなんとなく奈々に似てるかもしれないね。」

「え？“なな”って・・・どっちの・・・？」

「ハチの方。」

「え？！　わたしが？　わたしあんなワガママじゃないよ・・・」

それにイケイケでもないし・・・オレはもう少ししっかりしてる・・・

「たしかに有希は、どっちかって言えば古風な感じだけどね。」

「・・・・・」

やっぱりオレって古風な女の子になりかけてたんだ・・・まあ、イケイケよりはマシだけど・・・

「でも、ときどき挙動不審なところとか、ハチっぽいじゃない。」

「・・きょ・・挙動不審・・・？」

「あと・・服のセンスとかも似てるんじゃない？」

「・・・・・」

たしかにハチは可愛い服着てるかな・・・そういうところが似てるのは、ちょっと嬉しいかも・・・

「有希は何巻まで読んだの？」

「・・えっと・・・3巻・・・」

「なんだぁ、読み始めたばっかりなんじゃない。」

「・・実は・・そうなの・・・いとこにすすめられて・・・」
「そっか・・有希は昔の小説ばっかり読んでるものね。」
「・・う・・うん・・・」
そうだ・・・せっかく薬院まで来たんだから、千里について来てもらおう・・・
「帰りに・・続きを買いたいんだけど・・ついてきてくれない？」
「もちろんいいわよ。駅の下におっきい本屋さんがあるの知ってる？」
「・・薬院の？・・ううん・・知らない・・・」
「マンガもいっぱい揃ってるみたいよ。」
「・・そうなんだ・・じゃ・・そこに行こう・・・」
わざわざ天神まで行かずに済んで助かった・・・

「ふたりともありがとう、急だったから助かったわ。」
「・・い・・いえ・・・」
オレたちはソファーから立ち上がっておじぎをした・・・オレたちはまだ高校生だから、こんな時、どう言ったらいいのか良くわからない・・・
「戸田さん制服だったのね。急いで来てもらってごめんね。」
「・・いえ・・夏休みだし・・ヒマですから・・今日はちょっと学校に用事があったんですけど・・・」
「あ、そうだ！あなたたちは名前どうする？」
「なまえ・・ですか・・・？」
「本名でもいいのかしら・・・本名は困るっていうコもいるから。」
そうか・・・オレはやっぱり本名じゃない方がいい・・・学校も名前を変えておけば良かったと思ってるくらいなのだから・・・
「・・わ・・わたしは・・本名じゃない方がいいなぁ・・・」
オレがそう言うと、千里は・・・
「わたし・・どうしよう・・・」という・・・

「千里も名前・・変えたほうがいいよ・・・」
だってオレだけ変えても千里が本名じゃバレバレだ・・・
「有希がそのほうがいいんなら・・・でもどんな名前にしたらいいのかな？」
「そうよね・・・」

「あなたたち、あだなとか無いの？」
「・・わたしは・・普通に千里って呼ばれてるし・・・」
「あ・・わたしはいとこにはユウって呼ばれてるけど・・・」
「ユウか・・それ良いんじゃない？　戸田さんどこに住んでたんだっけ？」
「春日原・・です・・・」
「じゃぁ、春日ユウなんてどう？」
そんなにカンタンでいいのだろうか・・・そういえば、久留米出身のなんとかくるめって芸能人がいたけど・・・
「それじゃ、千里は大善寺チリ・・・？」
「いやだぁ、そんな名前！　有希はそれでいいの？」
「・・わたしは・・どうでもいいっていうか・・・」

「佐倉さんは好きな芸能人とかいない？」
「あ、わたしはニースの山上くんが・・・」
「じゃぁ・・山上・・・山上さくらなんてどうかしら？　ちょっと宝塚っぽいかしら？」
「！」
オレだって山上くんが好きなのに・・・オレも山上が良かったかも・・・山上ユウ・・・？　ちょっと変かな・・・
「わたしそれにします！」
あっ、決めちゃった・・・
「じゃ、佐倉さんは“山上さくら”で、戸田さんは“春日ユウ”でいい？」

「あ・・あの・・やっぱり“春日ユウ”ってちょっと・・・」
千里の方は可愛いけど・・・“春日ユウ”ってあんまり可愛くない気が・・・
「有希ったら、どうでもいいって言ったじゃない。」
「・・う・・うん・・言ったけど・・・」
それもそうだな・・・オレはべつに本気でモデルになろうとしてるワケじゃないし・・・
「あ・・じゃぁ・・それでいいです・・・」
なんかあまりこだわってると、本気でモデルを目指してるみたいに思われたら大変だ・・・でも・・・なんか簡単につけすぎた気もするけど・・・

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー
ー　ー
ー

「有希、こっちよ。」
千里に手を引かれて入ったところに本屋はあった・・・駅の下にミスドがあるのは知ってたけど・・奥に本屋さんがあるのは知らなかった・・・

「・・・・・！」
本棚に並んだ『ＮＡＮＡ』を見て驚いた・・・１９巻もあるんだ・・・オレが４巻を手にとると、千里が言った・・・
「有希、お金ないの？」
「ううん・・・」
「それじゃ、何巻か買えばいいのに。」
「・・そっか・・・」

たしかに1巻だけじゃ、すぐに読んでしまいそうだ・・・オレはけっきょく6巻まで買うことにした。

レジに並ぶ時は、やっぱり恥ずかしかった・・・女の子の服や下着を買うときも恥ずかしいけど・・それとはまた少し違う・・・オレは男としては結局借りる機会はなかったけど・・たぶんAVを借りる時って・・こんな気分なんじゃないだろうか・・・千里がいてくれて助かった・・・

家に帰って『NANA』を読みだしたオレは、いきなりストーリーに没頭してしまった・・・

千里が、オレがハチに似てるなんて言ったからだろうか・・・これまでは感情移入できなかったのに、急に親近感を持ってしまったようだ・・・いきなり章司が幸子と抱き合うところを見ちゃうなんて・・・ハチが可哀想すぎるよ・・・

なんだかだんだんハチが可愛く思えてくる・・・こんなに良い子だったなんて・・・わがままで、世間知らずで、どうしようもないところもいっぱいあるけど・・・本当は素直で自分に正直な娘なのだ・・・オレはハチのことが大好きになってしまった・・・

・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・

でも・・読みすすめるうちに・・・だんだん辛くなってきた・・・

ハチの健気さが痛々しい・・・女の子のどうしようもない感情に流されていくハチを見てられないよ・・・

6巻を読み終えた時には、もう涙が止まらなかった・・・切なすぎる・・・やっぱりこんなマンガは、オレにはまだ刺激が強すぎるみたいだ・・・続きを読むのが怖くなってしまぅ・・・

レナのやつ・・・よくもオレにこんなマンガすすめたものだ・・・女の子になるのが怖くなったらどうするつもりだよ・・・・

第４６話　奈々　初めての少女マンガ（後書き）

２月１６日の午前１０時３０分ごろメッセージを下さった方へ
メッセージありがとうございました。
私は文章にはそんなに自信がないので励まされました。今後も頑張って続きを書いていきたいと思います。
返事の送り方が判らなかったので、こういう形で失礼いたします。

第47話　浴衣　レナと長谷川

「もしもし、レナ？」
「どうしたのユウ・・」
「・・あの・・こんどね、携帯替えようと思って・・それで番号も変わるから、まえもって言っておこうと思って・・・」
「？・・何で番号まで変えちゃうのよ・・面倒じゃない・・」
「・・だって・・今は中学の友達からかかってきたら困るから電源切ってるじゃない・・」
「うん・・」
「でも・・それじゃ不便だから・・もう変えちゃおうと思って・・・」
「そっか・・それもいいかもね・・どうせ会えないもんね・・」
「うん・・・」
オレはもう男に戻ることなんて出来ないし・・・だけど・・もう昔の友達とも会えないのはやっぱり淋しい・・・でも・・だからこそ、オレは今の友達を大切にしなきゃいけないと思う・・・

「そうだ・・わたしユウに連絡しようと思ってたんだけど・・」
「・・な・・なに・・・？」
レナがオレに連絡するなんて・・・いったい何の話なんだろう・・・ドキドキする・・・
「こんど花火大会があるの知ってる？」
「・・えっと・・・筑後川？」
「違うわよ、筑後川はもっと先でしょう？　大濠よ！」
「・・あ・・そっか・・・」

大濠というのは、福岡市の中心部にある大濠公園のことだ。昔は福岡城の濠の一部だったという周囲2キロの大きな池みたいなもの

で、市民にとっては良いマラソンの練習コースにもなっている。ソラマメみたいな形の池には中心を通るような長細い島があり、いつもは自由に通れるのだが、花火の時は通行止めにして、そこから花火を打ち上げる。オレは小学生のころ一度だけこの花火大会に行ったことがあるが、すごく近くで上がるのですごい迫力だった記憶がある・・・川の向こうとかで上がる花火とは全然ちがうのだ・・・

「8月1日なんだけど、有希いっしょに行かない？」
「・・い・・行きたい・・・いっしょに行ってくれるの？」
「当り前じゃない、ひとりで行ってもつまらないし。じゃぁ、有希行くのね？」
「うん・・行く行く！」
花火大会なんて久しぶりだなぁ・・・なんだかワクワクしてきた・・・

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

「ただいま」
「お帰り、かあさん・・・？」
帰ってきたかあさんは大きな平べったい箱をふたつ持っていた。
「かあさん・・それなに・・・？」
「ふふっ・・・有希におみやげよ！」
「・・え？・・わたしに・・・？」
オレは箱を受け取って開けてみた・・・
「あっ・・浴衣だ・・・！」
そこにはピンクの地に金魚の柄の浴衣が折りたたまれて入っていた・

・・
「・・これ・・わたしが着ていいの？」
「もちろんよ、有希のために買ってきたんだから。」
「・・わぁ・・ありがとう・・・」
オレは前に、浴衣なんか着る機会が少ないから勿体ないと言ったけど、本当は着たくてたまらなかったのだ・・・かあさんはオレのそんな気持ちをわかっていたのだろうか・・・それともオレの内心思ってたことがバレバレだったのだろうか・・・

「じゃぁ、こっちは麻衣の浴衣？」
「ううん、こっちも有希のよ。」
「・・な・・なんで・・・？」
ふたつともオレのだなんて・・・どういうことだろう・・・？
「麻衣は浴衣よりお洋服の方がいいのよね。」
「うん、だってお姉ちゃんの服ばっかりで、あたしのはあまり買ってくれないんだもん！」
「・・・・・！」
・・そうか・・・オレは何も考えずに服とか下着とか買ってもらっていた・・・そのぶん麻衣が買ってもらえなかったなんて考えもしなかった・・・
「・・ご・・ごめん、麻衣・・・わたし全然気づかなかった・・・」

「麻衣！　何言ってるの、あなたのもちゃんと買ってあげてるでしょう？　ただ有希は季節に応じて新しく買わないと着るのがないから、あなたより少し多いだけじゃない！」
そう言われた麻衣は、いたずらっぽく舌を出した・・・
「有希は心配しなくていいのよ。麻衣は有希の服買うときも、大きくなったら自分がもらうつもりで選んだりしてるんだから。」
「・・・そうなの・・・？」
「・・うん・・・」

麻衣はちょっとバツが悪そうにうなずいた。
「・・ごめんね、お姉ちゃん・・・」
「いいのよ・・謝ることないわ。今でも着れるのがあったら着ていいよ。ちょっと大きいサイズでも麻衣が着れそうなのあるから。」
「ありがとう、お姉ちゃん！」
麻衣は嬉しそうにそう言った・・・妹の嬉しそうな顔を見るとオレも嬉しくなってくる・・・それに・・姉妹で服を貸し借りするなんて素敵なことだと思う・・・今はまだ麻衣はオレより小さいから、麻衣の服でオレが着れるのはあまりないけど・・・もう少し大きくなればオレも麻衣の服が着れるかもしれない・・・その時オレがもっと大きくなってなければだけど・・・オレはもうこれ以上大きくなりたくない・・・やっぱり女の子は小さい方が可愛いし・・・オレは今でも女の子としては少し大きすぎるくらいだ・・・

「・・あれ？・・・でも・・麻衣のじゃないんだったら・・何でわたしに二枚も買ってくれたの・・？」
「こんど花火大会があるでしょう？　有希も長谷川さんと行って来たらいいんじゃないかと思って。有希だけ浴衣じゃ長谷川さんが可哀想でしょう？」
「・・・え・・じゃぁ、ひとつは長谷川さんの分なの？」
「ええ、有希が一緒に行くんならね。」
「・・・・・・」
でも・・花火大会はレナと行く約束しちゃった・・・長谷川さんはレナと一緒でも行ってくれるかなぁ・・・
「どうしたの？　有希・・・」
「・・あ・・ううん・・なんでもない・・・ありがとう、かあさん・・長谷川さんもきっと喜ぶと思うよ・・・」
でも・・長谷川・・・あまり人付き合いがいい方じゃないみたいだしなぁ・・・

もうひとつの浴衣は紺地に朝顔の柄だった・・・こっちの方が大人っぽい感じだ・・・長谷川はどっちが好きだろう・・・やっぱり女の子だからピンクの方だろうな・・・

―――――――――――――――

――――――――――――――

――――――――――

「あら？　有希ちゃん、今日は浴衣なの？」
お稽古に来た三吉先生のお弟子さんがオレに言った・・・
「はい・・かあさんが買ってくれて・・・着物と少し違うから、先生に着かたを習おうと思って・・・」
「いい柄ねえ。ちょっと回って、うしろ姿も見せてよ。」
オレは恥ずかしかったが、先生に教えてもらった女の子らしい仕草で、両手の袖の端を持って少し持ち上げて、小股でちょこちょこと一回転して見せた・・・
「・・に・・似合ってますか・・・？　変じゃないですか・・・」
「すごく似合ってるわよ！・・・有希ちゃんは大人っぽいのも似合うのねぇ・・・」
オレには紺の浴衣は大人っぽすぎるってことかなぁ・・・

「・・わ・・わたしには・・こういう色はまだムリかなぁ・・・っ て思うんですけど・・・」
着てみると、紺の浴衣は白い朝顔の柄がシックで・・・帯は山吹色で、畳んだ状態で見るよりも、かなり大人っぽい感じだった・・・
「ううん、素敵よ。有希ちゃんの歳ならもっと華やかなのも可愛いと思うけど、有希ちゃんは首が細くて長いからこういう色も合うわ・

・・いつもよりずっと色っぽいわよ。」
・・オ・・オレが色っぽいなんて・・・そんなぁ・・・

三吉先生のお弟子さん達はオレのことを完全に女の子だと信じて疑わない・・・先生もオレの事を女の子として扱ってくれるから気づかないのだろう・・・それにお茶のお稽古には普段より女らしい恰好で来るから、それもあるのかもしれない・・・清楚なブラウスやワンピースを着た男の子なんているハズないと思っているのだろう・・・

浴衣は着物に比べると、ずいぶん着付けもカンタンだった。これなら長谷川さんに着付けるのも心配なさそうだ・・・オレひとりで十分やれる・・・
それよりも問題は、長谷川が一緒に行ってくれるかどうかだ・・・明日は登校日だし、長谷川には直接聞いてみようと思っている・・・電話では・・何て言えばいいのかわからないし・・・

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

「有希と会うのも久しぶりね。」
「・・う・・うん・・・」
なんだか久しぶりに会うと妙に気恥ずかしい・・・
「長谷川さんは？　もうどこか行った・・・？」
「どこかって？」
「旅行とかよ・・・夏休みじゃない・・・」

長谷川さんって、あいかわらずつっけんどんな感じだ・・・久しぶりに話すとよけいに感じる・・・
「お盆あたりは行くかもしれないけど・・まだどこにも行ってないわ。」
「・・そ・・そう・・・」
「・・・・・・」
なんだろう・・・なんか今日はやけに長谷川がオレを見てる気がする・・・

「なんか・・ちょっと見ない間に・・有希、感じが変わった気がする・・・」
「え?!　・・そんなことない・・と思うけど・・・」
オレはどこも変わってないハズだけど・・・
「なんか前より女っぽくなってる・・・まえは可愛い感じだったけど・・・ちょっと色っぽいっていうか・・・」
「・・そ・・そんな・・わたしが色っぽいハズないじゃない・・・！」
オレは男なんだから色っぽいハズなんてない・・・昨日も言われたけど・・・
「・・だって・・ついこのまえ幼いって言われたもん・・・」
「だれに?」
「・・あ・・それは・・・」
そういえばオレに幼いって言ったのは編集長の佐々木さんだった・・・佐々木さんのことはモデルのことに触れなきゃいけないから長谷川には言えない・・・話かえないと・・・

「・・ねえ・・そんなことよりさ・・長谷川さん・・花火大会があるの知ってる・・・?」
「大濠のでしょう?　知ってるけど?」
「・・い・・いっしょに行かない・・・?」

「だって・・花火大会ってけっこうな人出よ。有希だいじょうぶなの？」

・・そ・・そっか・・・わすれてた・・・・

「・・だ・・大丈夫じゃないかな・・・夜だし・・・」

「でも、帰りの電車なんかすごく混むのよ。有希知らないの？」

「・・そうかぁ・・・」

なんか・・そう聞くと怖くなってくる・・・

「・・だ・だ・だ・・・大丈夫よぉ・・・・」

「ぜんぜん大丈夫じゃないじゃない・・・だ・だ・だ・・って・・・」

「・・うぅっ・・・」

「わたしに面倒見させようと思ってない？」

「・・そ・・そんなこと思ってないよ！」

なんでそんなこと言うんだ・・・オレそんなことまったく思ってなかったのに・・・

「・・だって・・だってさ・・レナも一緒なんだもん・・・長谷川さんに面倒見てもらおうなんて思ってないよ・・・」

「え？・・・レナちゃんも一緒・・・そうなんだ・・・だったらレナちゃんに面倒見てもらうのね・・・勝手に二人で行けばいいじゃない・・・」

「・・そ・・そんな・・長谷川さんが一緒に来てくれないと・・困るのよ・・・」

「・・なんで・・・？」

「・・だ・・だって・・かあさんが・・・浴衣買ってきて・・・長谷川さんの分も・・・」

「なんで有希のおかあさんが、わたしの分まで買うのよ。」

「・・いや・・長谷川さんの分っていうか・・・わたしに二枚買ってくれて・・長谷川さんと行ってきたらって・・・」

「よけいなお世話よ・・・」

「・・ご・・ごめん・・・そうだよね・・・」
そうだ・・・たしかに長谷川さんにしてみれば・・・よけいなお世話に違いない・・・でも・・・
「・・でも・・かあさんは・・いつもわたしが長谷川さんに世話になってるから・・・それで・・・」
・・・それに・・・
「・・わたしも・・長谷川さんの浴衣姿・・見てみたいし・・・」
「・・そりゃぁ・・わたしだって有希の浴衣姿は見たいけどさ・・・」
「・・・!・・だ・・だったら・・・」
「でもレナちゃんと一緒はイヤ・・わたし知らない人苦手なのよ・・有希知らなかった?」
「・・い・・いや・・なんとなくそうかなぁ・・とは・・・」

「・・・じゃぁ・・じゃぁさ・・レナが一緒じゃなかったら・・行ってもいいってこと?」
「・・まぁ・・有希とふたりでなら・・・」
「じゃぁ・・レナは断るから・・・」
「・・・それじゃぁ、レナちゃんに悪いじゃない。」
「・・・い・・いいのよ・・・レナは他にも友達がたくさんいるし・・・わたしが断っても誰かと行くって・・・」
・・・たぶん・・・そうだと思う・・・
「わたしと二人でなら行くのよね・・そうでしょう・・・? 約束よ!」
「・・いいわよ・・・断れるならね・・・」
「・・うん・・・じゃぁ・・夜に電話するから・・・」
・・レナには悪いけど・・長谷川が浴衣着てくれないと、かあさんの思いが無駄になってしまう・・・

―――――――――――――――
―――――――――――――――
――――――――――

「・・あ・・レナ？・・・」
「どうしたの、有希？」
「・・あの・・花火大会のことなんだけど・・・」
「あぁ、１日は晴れそうで良かったね。」
「・・う・・うん・・そうなんだけど・・・」
「ん？　どうしたの？」
「・・そ・・それがね・・わたし・・行けなくなって・・・」
「え？どうして？」
「・・・あのぉ・・・」
本当のことなんて言えないし・・・
「・・え・・えっと・・学校のクラブで・・・」
「生け花の？　夜に？」
「・・い・・いや・・次の日の用意っていうか・・・」
「あ、展示会か何か？」
「そうそう！・・展示会の用意で・・・」
「・・・じゃぁ、しょうがないね・・わたしも行くよ。」
「え？」
「展示会よ。有希の生け花見たいし。」
「・・・・・！」

大変だ・・・！

「・・あ・・あの・・学校の行事だから・・・部外者は入れないの・・・・父兄だけっていうか・・・」
たのむから・・信じてほしい・・・ウソだけど・・・
「そっか・・それじゃ仕方ないね。」

「・・う・・うん・・・」
良かったぁ・・信じてくれた・・・
「・・ご・・ごめんね・・だから花火は・・・」
「うん、それなら仕方ないね。がんばってね。」
「・・う・・うん・・・じゃぁね・・・」

ごめんレナ・・・オレってヒドイやつだ・・・ウソついて約束破るなんて・・・でも・・・・・

いくら言い訳を考えようと・・・オレがレナと長谷川を秤にかけたのは間違いない事実だ・・・そしてオレは長谷川を選んでしまった・・・先に約束していたレナを断ってまで・・・もちろん浴衣のことは大きいと思うけど・・・でも・・・オレは・・・・こんなことならレナと約束するんじゃなかった・・・・

第４８話　花火　オレたちのカンケイ・・・

「・・あ・・あの・・戸田です・・・」

インターホン越しの会話でも気まずい・・・オレが長谷川の家にくるのはこれが2回目だ・・・機会がなかったというのもあるけど、どちらかといえば避けていたと言った方が当っていると思う・・・長谷川のお母さんはオレのことを男だと知っている・・・だから女装好きの変態だと思っているのだ・・・本当は来たくなかったが、どこかで長谷川に浴衣を着付けなきゃいけなかった・・・オレの家に長谷川を連れてくることを考えれば、オレが長谷川の家に行く方がまだマシな気がした・・・オレは自宅に友達に来られるのが好きじゃない・・・それに駅との地理的条件を考えてもオレが長谷川の家に行く方が自然だ・・・だけど・・・

「・・お・・おじゃまします・・・」

「・・いらっしゃい・・・」

オレを迎えに玄関に出てきた長谷川のお母さんが不自然なのは当り前だ・・・自分の大切な娘がオレみたいな変態とつきあっているなんて、誰だってイヤに違いない・・・

「・・良かった、また来てくれて。」

「え?」

お母さんはオレが来ることを嫌がってるハズなのに・・・

「まえに来たとき戸田さん・・誤解してたみたいだから・・・あの後、順子にも怒られたのよ。」

誤解・・怒られた・・・?

「私は戸田さんが順子と仲良くしてくれて本当に嬉しく思ってるの。順子はあまり友達を作るのが上手じゃないし、うちにも誰も連れてこないから。」

長谷川もオレと一緒で、友達に家に来られるのがイヤなのだろうか・

・・

「だからまた戸田さんが来てくれてすごく嬉しいの。」
「・・・そ・・そうなんですか・・・？」
長谷川のお母さんがオレを変態だと思ってると考えたのは、オレの誤解だったのだろうか・・・なんか良い人そうだ・・・
「戸田さんは着物の着付けが出来るんですって？」
「・・えぇ・・まあ・・・着物はまだ他の人に着付けできるほどは上手じゃないですけど・・・浴衣はカンタンだから大丈夫です・・・」

その時、いきなり長谷川の部屋のドアが開いた。
「なんか話し声がすると思ったら有希来てるじゃない！ママなんですぐ教えてくれないの？」
「・・あ・・わたしいま来たとこなの・・・」
オレは慌ててそう言った・・・またお母さんが長谷川に怒られたら可哀想だ・・・長谷川って怒るとズケズケ言いそうだし・・・
「浴衣もってきたから・・・着替えよう・・ね？」
オレは急いで、長谷川を押し込むようにして一緒に部屋に入った・・・

「さてと・・・」
箱を開けてピンクの浴衣を取り出した。
「どう？　可愛いでしょう？」
「うん、それ有希に似合いそうね。」
「・・・違うよ、これは長谷川さんが着るやつだよ。」
「えっ・・有希のは・・・？」
「・・わたしが着るのは・・こっち・・・」
オレはもうひとつの箱を開けて紺の浴衣を取り出して、肩から掛けてみせた。

「・・どうかなぁ？・・・ちょっとわたしには大人っぽすぎる気もするけど・・・」

「ダメよ！有希はこっちの方が絶対似合うわ。」
「・・でも・・長谷川さんは女の子だから・・こっちがいいかと思ったんだけど・・・」
「有希だって女の子じゃない！わたしはこっちがいい！」
そう言って長谷川は紺の浴衣を手に取った・・・
「・・あ・・でも・・それ・・もうわたしが一回着ちゃったよ？・・・少し汗ついてるし・・・イヤでしょう・・・？」
「それくらいかまわないわよ。わたしはこっちじゃないと着ないから・・・」
「・・・・・」
長谷川って、あんがい我がままだなぁ・・・
「・・長谷川さんがいいって言うんなら・・・わたしはそれでもいいけど・・・」
「じゃぁ、決まりね。」
どっちでもいいけど・・・早くしないと花火大会に遅れちゃう・・・

「じゃぁ、服脱いで・・・あ・・長谷川さんどんなブラ着けてる？　スポーツブラの方が着付けしやすいんだけど・・・」
「・・・そうなの？・・パンツ脱げなんて言わないでしょうね・・・」
「パンツは穿いてていいわよ・・線が出るからって穿かない人もいるけど・・わたしも穿いたまま着るし・・・」
オレの場合はナプキンつけなきゃいけないから、パンツを穿かないわけにはいかないんだけど・・・そういえば昔の人はパンツを穿かなかったのにアノ日はどうしていたのかなぁ・・・
「下着はスリップかキャミソールでいいよ。・・・あ・・わたし出てるから、浴衣羽織ったら呼んでね・・・」

オレはそう言って部屋を出ようとした・・・
「なんで出るの？　ここに居ていいのに。」
「え？」
だって・・・いくら何でもオレが居るところでブラを付け替えるのはマズイと思う・・・
「・・あ・・あの・・だってさ・・・」
「でも、有希いつも体育の時とかみんなと着替えてるんでしょう？」
「・・それは・・まあそうだけど・・・」
「だったら良いじゃない。」
「・・う・・うん・・・」
でも長谷川はイヤじゃないのだろうか・・・なんていってもオレは元は男なんだし・・・長谷川はそのことを知ってるんだし・・・
「・・じゃぁ・・・後ろ向いてるから・・・」
「・・・・・」
長谷川の裸を見るなんて・・・長谷川は良くてもオレの方が恥ずかしい・・・クラスのみんなとは慣れてるから、今さら恥ずかしいなんて思わないけど、それはきっとみんながオレのことを男だと知らないからだ・・・今考えると長谷川と同じクラスでなくて本当に良かったと思う・・・

着付けは順調に終った。長谷川は元男のオレと違い身体の凹凸が大きいから、その点が少し手こずったけど、だいたい上手くいったと思う・・・着付けしてみると、思ったよりも長谷川は女らしい体型なのを感じた・・・胸ももっと寄せ上げ効果のあるブラを着ければ、ずっと大きく見せることが出来るのに・・・教えてあげようかと思ったけど、そんなこと男から言われたらイヤかもしれないからやめておいた・・・

髪はアップにしようかと思ったけど、オレはあまり上手じゃない

し、長谷川のおかっぱ頭ではヘタにいじらない方が良さそうなので髪飾りをつけるだけにした。

長谷川の着付けが終ったら今度はオレの番・・・これなら十分間に合いそうだ・・・オレは自分の髪は家でやってきたから、あとは浴衣を着るだけだし・・・だって長谷川の部屋には小さな鏡しかないから髪をまとめるのは難しそうだ・・・それにオレはまだ髪をまとめるのは上手じゃないから、どうしても時間がかかってしまうのだ・・・今日の髪型は三吉先生に出来るだけ簡単なまとめ方を習って、何度か練習したから何とか上手く出来た・・・オレもそろそろ髪も自分でやれるようにならないと・・・かあさんにばかり頼ってる訳にはいかない・・・

着替えるためにワンピースの前ボタンを外していく・・・着物の時は前開きの服が便利だ・・・どうしても先に髪を整えることになるから、頭から脱がなきゃいけない服では、せっかくまとめた髪が崩れてしまうのだ。

オレは後ろを向いてワンピースを脱ぐと、急いで浴衣を羽織った・・・やっぱり長谷川がいるところで着替えるのはドキドキする・・・本当は部屋の外で待っててほしいところだが、長谷川が気にしないのにオレが見ないでほしいとは言いにくかった・・・そんなことを言ったら、オレの中にまだ男の部分が残っているのを知られそうで怖い・・・オレとしては長谷川にも女の子と思って接してもらう方が良かった・・・

「有希ってこうして見てるとほんと女らしいね・・・」

「・・そ・・そんなに・・ジロジロ見ないでよ・・・」

オレはただでさえ長谷川の目の前で着替えることに恥ずかしい思いをしてるのに、そんなことを言われたらたまったものではない・・・

「手つきとか仕草も女っぽいのよねぇ・・・」

それはそうするように習ったからだ・・・所作は女らしさの基本だと言われて、三吉先生に徹底的に教え込まれた・・・おかげで今どきの女の子としては、じゃっかん古風に仕上がってしまったかもしれない・・・でも着物を着た時にはそれが活きてくるけど・・・

　オレは前で淡いブルーの帯を結ぶと、形が崩れないように気をつけて結び目を後ろに回した。

「・・どう・・・？」

全身を鏡に映して変なところがないか確かめたいところだが、全身を映せる鏡が無くちゃ無理だ・・・

「すっごく可愛いよ。似合いそうだとは思ったけど・・・」

・・・大人っぽいのもどうかと思うけど・・・オレがこんな可愛いのを似合うとは思えない・・・とはいえ、長谷川はたしかに紺の浴衣の方が良かったかもしれない・・・思った以上に・・キレイだ・・・オレも女なのにちょっとドキドキする・・・

　オレは着てきたワンピースをたたんで、浴衣が入っていた箱と重ねて部屋の隅に置き、和風のバッグを持って言った。

「それじゃ、行きましょう。早く行かないと花火が始まっちゃうわよ！」

オレたちが部屋から出ると、長谷川のお母さんが感嘆の声をあげたので驚いた・・・

「戸田さん！なんて可愛いんでしょう・・・」

オ・・オレのことはどうでもいいから・・・親なら自分の娘のことを褒めてほしい・・・

「・・・順子さんもキレイでしょう？」

「そうね・・順子も素敵よ・・・馬子にも衣装ってこういうことよねぇ・・・」

それは褒めてるんだろうか・・・

「もう・・ママよけいなこと言わないでよ・・・」

でも長谷川さんはまんざらでもなさそうだ・・・良かった・・

「それじゃぁ、行ってきます・・」

「気をつけてね、戸田さん順子のことよろしくね。」

「・・は・・はぃ・・・」

どっちかといえば・・世話になるのはオレの方なんだけど・・・でも・・オレもしっかりしなきゃ・・・長谷川さんやレナの世話になってばかりはいられない・・・

大濠公園には西鉄電車で天神まで出て、市営地下鉄に乗り換えて大濠駅まで行く・・・西新よりは2つ手前の駅だ・・・電車はやはりすごい混みよう・・・

長谷川はオレの面倒は見ないなんて言ってたけど・・なにげに気にしてくれてるみたいだ・・・オレが揉みくちゃにされないように守ってくれている・・・オレとしては情けない限りだけど・・今は甘えておこうと思った・・・だって・・花火を見る前に気分が悪くなったら何にもならないし・・・

電車の乗客は花火を見にいく人が多いとみえて、オレたちの他にも浴衣の娘やカップルも何人かいた・・・それでもやっぱり浴衣の娘はそんなに多くはないから、思ったより人の目が気になる・・・オレは出来るだけうつむいて周りを見ないようにしていた・・・

天神に着いて電車を降りると長谷川が言った。

「みんな有希のこと見てたね。やっぱり抜きん出て可愛いからしょ

うがないわよね。」
「・・・そんなこと・・ないんじゃないかな・・・長谷川さんだってキレイよ・・・」
「ふふっ・・じゃぁ二人が可愛いからって事にしときましょう！」
「・・・・！」
少しくらいの意地悪な言い方は我慢しなきゃ・・・守ってもらっておいて強いことは言えないし・・・

地下鉄は2つ目の駅なのですぐだ・・・歩いて行けない距離じゃないけど、歩くとけっこう遠いし、下駄を履いていては長い距離を歩くのは難しいかもしれない・・・草履風の下駄なので、そんなに歩きにくくはないけど、さすがに長距離歩くと足が痛くなりそうだ・・・

大濠公園は丸い形をしてるから、どこからでも花火を見れるのが良いところだ・・・入口まで歩くとすごい人込みだった・・・それに不良が沢山たまってる・・・
「・・や・・やっぱり途中から入ろうよ・・・」
「でもあっちにお店とかいっぱい出てるわよ・・有希、夜店見たいって言ってたじゃない。」
「・・でも・・不良がいるじゃない・・・絡まれたらどうするのよ・・・」
「なに？　有希・・怖いの？」
「・・・・・」
そりゃぁ不良は怖いよ・・・でも・・怖がってるなんて知られたら馬鹿にされそうだ・・・
「・・べ・・べつに・・怖くはないけど・・・」
でも・・オレはまだナンパされた時のトラウマを克服したとは言い難い・・・普通の男でもイヤなのに不良だったらなおさらだ・・・こんなところでおもらししたら大変だ・・・ナプキン変えるにもト

イレが空いてるかどうか・・・

　不良ってなんでこんな邪魔になるとこに座り込むんだろう・・・嫌がらせなのだろうか・・・オレは出来るかぎり目を合わせないようにして不良たちの前を歩いた・・・猿と不良は目を合わせたらいけないらしい・・・誰かが言ってた・・・

　だけど近づいてみると警官も沢山いて、入口の車止めの柵を過ぎると不良はいなくてホッとした・・・警官の人がこっちには入らないように注意してるみたいだ・・・そういえば最近はお祭りで騒ぐ不良が問題になったるからなぁ・・・不良もなかなか大変な時代だ・・・

「あっ・・長谷川さん、サイリュームがあるよ。買おっかなぁ・・・」

「いいよそんなの・・お金がもったいないわよ・・・」

「・・・いいじゃない・・わたしが買うんだから・・・」

オレは青いサイリュームの腕輪を二つ買って、一つを腕にはめた・・・

「はい、こっちは長谷川さんの・・・」

「・・いいよ・・そんなの恥ずかしいじゃない・・・」

「え～・・でも暗いから・・・してた方がわかりやすいと思うけど・・・」

「・・わたしはいいから・・有希が二つしてなさいよ・・・二つしてる人なんてあまりいないから、有希がもし迷子になってもすぐにわかるわよ。」

「・・・・・」

もう・・・なんでそんな言い方するのかなぁ・・・

「あれ？　やっぱりお姉ちゃんだ！」

後ろからの声に振り返ったオレは一瞬のうちに氷りついた・・・そこには麻衣がいて・・・その横にはレナがいた！
「あら？・・・有希・・それと・・・長谷川さん？」
「・・あ・・ああ・・・」
オレはもうアワアワするばかりだ・・・どうしたらいいんだろう・・・なんでレナと麻衣が・・・？

「有希・・・もしかして・・・」
「・・そ・・そぅ・・・妹の・・麻衣・・と・・・いとこの・・レナ・・・・」
レナはニコニコして全然驚いていないみたいだ・・・
「やっぱり長谷川さんね、いつも有希がお世話になってるって聞いてるわ。」
「はじめまして・・レナさんの事も聞いてます・・レナさんにもずいぶん世話になってるってね。」
「そりゃ、わたしはいとこだから、とうぜん有希の面倒は見るわよ。」
な・・なんか・・大変なことになってる・・・？

「あれ？　・・・そういえば有希、生け花の展示会・・準備は終ったの？」
「！」
そうだ・・・すっかり忘れていた・・・いきなり会ったんで驚いたが、そもそもオレは今ここに居てはいけないんだった・・・！
「・・あ・・あの・・それが・・・思ったより早く終っちゃって・・・ねぇ、長谷川さん・・・」
オレは何とか長谷川が察してくれることを祈った・・・
「・・・あぁ・・うん・・・もっと時間かかるかと思ったんだけどねぇ・・・」
・・ホッ・・・話を合わせてくれたぁ・・・でも・・後が怖い・・・

「・・・そっか・・・早く終ったから・・・“急遽”お揃いで浴衣に着替えて来たんだ・・・」
・・疑ってる・・・そりゃそうだ・・・急に来たのに二人とも浴衣なんて・・・ありえない・・・

「お姉ちゃん！　そろそろ行かないと花火始まるよ。レナちゃんも！」
麻衣がオレの腕に抱きついてきてくれて助かった・・・
「・・・そ・・・そうよね・・・い・・行こうよ・・・レナ・・・と長谷川さん・・・」
・・・！・・・なんか長谷川がついでみたいになっちゃった・・・
「あ！　いいなぁこれ・・・」
麻衣はオレが手首に付けているサイリュームを見て言った・・・
「・・・あ・・・これ・・あげる・・・」
オレは仕方なく長谷川にあげようと思っていたサイリュームを麻衣に渡してしまった・・・でも・・どうせ長谷川はいらないって言ってたし・・・いいか・・・

歩きながら、何気なくレナがオレに聞いた・・・
「ねえ、有希今日もナプキンしてるの？」
「・・・！」
あまりに自然だったから一瞬呆気にとられたが、長谷川と麻衣が一緒なのを思い出しオレはあせった・・・
「・・・ナプキン？・・・有希がナプキンなんかするワケないじゃない・・・」
長谷川がそう言うのは当然だ・・・長谷川はオレがおもらしするなんて知らないのだから・・・
「あっ、長谷川さんは知らないんだぁ・・ゴメンね有希、わたし長谷川さんも知ってるのかと思って・・・」

「・・・いいよ・・もう・・・」
麻衣もいるのに・・なんでそんなこと言うんだよ・・・
「お姉ちゃんだってナプキンくらいするわよねぇ、女の子なんだから。」
麻衣はどこまで解って言ってるんだろうか・・・それとも助けてくれてるのかな・・・
「・・・・・」
長谷川さんは黙ってしまった・・・怒ってるんだろうか・・・いや・・男なのにナプキンなんかしてるオレの事を軽蔑したのかも知れない・・・

花火が始まると麻衣は無邪気に喜んでいたが、オレはとてもそんな気持ちにはなれなかった・・・長谷川さんとレナと一緒に見るのが、こんなに気まずいものだとは考えもしなかった・・・

しかし・・そもそも最初に3人で行こうと思ったのはオレだ・・・今にして思えばバカなことを考えていたものだ・・・長谷川とレナとでは、オレと共有している情報が違う・・・秘密にしている事も違うのだ・・・だからオレは軽率に会話することも出来なかった・・・ふたりいる所で話をすると、どこかでボロが出そうだ・・・

花火を見てるオレの両脇にはレナと麻衣が陣取っている・・・麻衣の向こうに長谷川がいて完全にのけ者みたいになってしまっている・・・せっかくオレは長谷川と浴衣で花火を見ようと思っていたのに・・・これでは台無しだ・・・もっとも・・こうなってしまっ

た原因はオレにあるのだが・・・

「お姉ちゃん、きれいだねぇ！」

麻衣が興奮してオレの浴衣の袖をしっかりつかんでいる・・・

「・・う・・うん・・・きれいね・・・」

ずっと見上げたままで、降り注ぐような花火を見ていると、なんだか頭がクラクラしてくるようだ・・・それともオレはこの異常な状況にクラクラしているのだろうか・・・だんだん何も考えられなくなりそうだ・・・

いつの間にかレナがオレの手を握っていた・・・

長谷川を誘わなければ、オレはレナとこうして二人で楽しく花火を見たのだろうか・・・長谷川のことなど考えることもなく・・・でも・・・今のオレは長谷川のことが気になってしようがない・・・レナも大切には違いないが・・あくまでいとこの関係だ・・・でも長谷川は違う・・・長谷川はオレにとって、たんなる友達でも親友でもない・・・もっと特別な存在なのだ・・・

オレはレナの耳もとで言った・・・花火の轟音のおかげで囁きでなくても他には聞こえそうにない・・・

「・・レナ・・・ごめん・・・展示会なんて嘘なんだ・・・このお詫びはきっとするから・・・わたし・・長谷川さんのところに行かなきゃ・・・ほんとごめん・・・」

オレはレナの手を放して長谷川の方へ行こうとしたが、麻衣が袖をつかんでいるのを忘れていた・・・

「・・麻衣・・ちょっと・・・」

オレが麻衣の手を袖から外そうとした時、すっと出てきたレナの手が麻衣と手をつないだ・・・

「・・・・・」

オレは少し離れて立っている長谷川のところへ急いだ・・・
「・・は・・長谷川さん・・・」
「・・・・・」
「・・・ごめんね・・・」
長谷川はしばらく何も言わずに花火を見ていた・・・

「・・・有希ったら最低ね・・・」
「・・うっ・・うん・・・」
オレはなんか泣きたくなってきた・・・
「・・嘘ついて断るなんて・・・まるで男みたいじゃない・・・」
思わずドキッとした・・・
「・・男なのに・・ナプキンなんかして・・・ほんと最低だわ・・・」
「・・・うん・・・」
オレには弁解のしようもない・・・それに・・・おもらしするからなんて言ったらよけい嫌われそうだ・・・

「・・ねえ・・サイリューム・・わたしにくれるんじゃなかったの？」
「・・あ・・でも・・・」
長谷川さん・・いらないっていったのに・・・
「・・ご・・ごめん・・麻衣に・・あげちゃった・・・」
オレが謝ると長谷川は
「じゃぁ・・有希のをちょうだい？」
「・・あ・・う・・うん・・・」
オレは急いで腕から外して長谷川に渡した・・・すると長谷川は青いサイリュームを腕にはめ、その手でオレの手をにぎった・・・痛いほど強く・・・

「・・わ・・わたしのこと・・嫌いになった・・・・？」
長谷川は何も言わない・・・
「・・そうだよね・・・嫌われたってしかたないよね・・・」
すべてはオレのせいなのだ・・・長谷川さんに嫌われたって自業自得だ・・・
「・・男ならね・・・」
「え・・・？」
「・・有希がもし男だったら・・嫌いになったかもしれないけど・・・有希は女の子でしょう？」
「・・う・・うん・・・」
「だったら・・・もういいよ・・・わたしたち友達でしょう・・・？」
「・・うん、うん！」
「これからはもっと相手の気持ちを考えて、慎重に行動しなさいよ。」
「・・・！」
オレはコクコクとうなずいた。何度も・・・
「有希って、ほんと女の子の気持ちがわかってないんだから・・・」
「・・・そう？」
「全然わかってないわよ。まだまだ男の子だわ。」
そう言ってオレに微笑んだ・・・オレは嬉しくて・・長谷川の腕に抱きついた・・・
「ちょっと・・有希・・やめてよ浴衣が着崩れちゃうじゃない！」
大丈夫よ・・・もし着崩れてもわたしが直してあげるから・・・
「・・長谷川さん、大好き！」
長谷川を好きな気持ちが、はたして女同士としてなのか、男女としてなのか、オレには良くわからなかった・・・でも・・オレにとってかけがえのない大切な存在なのだという事だけは解っている・・・

ただ・・オレはたしかに女の子の気持ちがわかってないのかもしれない・・・長谷川とレナがこの時どんな気持ちだったのか、オレにはちっとも解っていなかった。

第４９話　報告　フクザツな気持ち

花火が終っての帰りの電車は超満員だった・・・来る時はそれぞれの時間で来た人たちが、いっせいに帰るのだから当り前といえば当り前だけど、オレにとってはかなりの苦痛だった・・・

レナの家は天神から3つ目の平尾駅だからさっさと降りてしまい、オレと長谷川と麻衣は春日原まで向かう・・・レナと長谷川は結局なにも話さないままだったが、長谷川と麻衣はいつの間にやら仲良しみたい・・・長谷川は初めての人は苦手なんて言ってたのに・・・やっぱり女の言うことはあてにならない・・・

やっと春日原の駅についた時には、オレはもうヘトヘトだった・・・すし詰めの満員電車に乗っているとチカンされた時の記憶がよみがえってきて、いつお尻に手が伸びてこないかと身体に変な力が入ってしまうのだ・・・

駅に降りてふと思う・・・これから長谷川の家に寄って浴衣を脱がせなきゃいけないけど、こんな夜中に麻衣をひとりで帰すわけにもいかないし・・・このまま長谷川の家に連れていくしかなさそうだ・・・あまり気乗りしないけど・・・

そういえばレナは、もし偶然オレたちと遇わなかったら、ちゃんと麻衣をうちまで送ってきてくれたのだろうか・・・送ってくれたとは思うけど・・・なんか心配だ・・・

「ねえ、麻衣・・ちょっと長谷川さんの家に寄るけど・・いい・・・？」

「うん、いいよ。わたしも長谷川さんの家に行きたい！」

「・・別に・・遊びに行くワケじゃないんだから・・・長谷川さんの浴衣と、わたしの服も置いたままだから行くだけなの・・・」
「わかってるよ、そんなこと言われなくても！」
「・・・ならいいけど・・・」
「ふふっ・・・有希ったら、麻衣ちゃんには形なしね！」
「・・・・・」
オレはやっぱり男なのだろう・・女の子の口の達者さにはとてもかなわない・・・オレももっと女の子に近づけば、麻衣に負けないくらい口が達者になるのだろうか・・・なんかあまり期待出来そうにないけど・・・

「でも、やっぱり兄妹ねぇ、麻衣ちゃんもどことなく有希に似てる。」
「ほんと？　あたしもお姉ちゃんみたいにキレイになれるかなぁ！」
「・・・そ・・そうね・・・お姉さんより・・キレイになるんじゃない・・・？」
そりゃぁそうだ・・・麻衣は本当の女の子なんだから、男のオレよりずっとキレイにならなきゃオカシイってもんだ・・・

しかし家では麻衣に“お姉ちゃん”と呼ばれることには慣れてしまっていたが、こうして長谷川のまえで呼ばれると、どうにもいたたまれない・・・長谷川はいったいオレと麻衣をどんな兄妹だと思っているのだろうか・・・姉妹みたいな関係だなんて信じているだろうか・・・当のオレでさえ時々奇妙な感じがするというのに・・・
「ねえ・・麻衣ちゃんは・・そのぉ・・有希とは仲がいいのね・・・」
「うん、あたしお姉ちゃんのこと大好きだもん！」
「・・えっと・・それは・・有希が男の子のころから・・・？」
「！」
長谷川のやつ何てこと聞くんだよ・・・

「お姉ちゃんは女の子だよ！男なんかじゃないもん！」
麻衣は膨れっ面でそう言った。
「あ・・ごめん・・そうよね・・・有希は女の子だもんね・・・」
「そうよ！」
麻衣はオレのことを思ってそう言ってくれたのだろうか・・・オレも麻衣が本当のところどう思っているのか良くわからないところがある・・・前は兄だったオレのことを、完全に女の子だと思えるものだろうか・・・オレがもし、麻衣が急に男の子になったとしたら、男の子として見ることは出来ない気がする・・・やっぱりうちの家族はどこかヘンなのだろうか・・・

「有希！どこまで行くの？　行き過ぎてるわよ！」
「・・あ・・ごめん・・・」
物思いにふけってしまい、いつの間にか長谷川のマンションを通り過ぎようとしていた・・・そっか・・駅から近いんだった・・・

「ただいまぁ。」
長谷川の後に続いてオレたちも入っていく・・・
「・・ま・・またおじゃまします・・・」
「あら？　もしかして妹さん？」
「・・あ・・はい・・妹の麻衣です・・・」
「こんばんわ。」
麻衣もちゃんと挨拶してくれた・・・
「戸田さんにこんな可愛い妹さんがいるなんて知らなかったわ・・・さぁ、遠慮しないで上がって？」
オレたちは長谷川のお母さんにうながされて家の中に入った。

「それじゃ・・わたしたち着替えるから、麻衣はここでおとなしくしてるのよ。」
「もう・・わかってるよ。あたしもう中学生だよ！」

「・・そ・・そうよね・・・でも・・・・」
オレは麻衣の耳元で小声で言った・・・
「・・余計なことは言わないでよね・・・」
「うん、わかってるって！」
「・・それならいいけど・・・」
本当にわかってるんだろうか・・・オレのことではいろいろ秘密があるのに・・・心配だなぁ・・・

オレは長谷川の部屋で、長谷川の浴衣の帯をほどいていく・・・考えてみれば男が女の子の浴衣を脱がしているわけで、長谷川のお母さんにヘンに思われないか心配になってくる・・・
浴衣の前がはだけて下着が見えると、オレは急いで目をふせた。
「・・あ・・わたし後ろ向いてるからさ・・・着替えたら言って・・・」
「・・うん・・・」
後ろで長谷川が浴衣を脱ぎ、服を着る音を聴いてると、いたたまれない気持ちになってくる・・・

「着替えたけど・・・」
オレは長谷川が脱いだ浴衣をきれいに畳んだ。着物や浴衣はちゃんと畳んでおかないと、おかしなところにシワが出来てしまうと面倒だ。
「ねえ、有希・・・ひとつ聞いてもいい・・・？」
「・・い・・いいけど・・なに・・・」
いったい何を聞かれるのだろう・・・ただでさえドキドキしてるのに・・・
「・・有希・・なんで・・ナプキンなんかしてるの・・・？」
「・・あ・・そのこと・・・」

どうしよう・・・適当にごまかした方がいいだろうか・・・長谷川はアノ日と設定した日はオレがナプキンを持ってるのは知ってるし・・・でも・・また後からバレたら、また嘘をついたことになる・・・
「・・あ・・あの・・正直に言うけど・・・長谷川さん、不安神経症って知ってる?」
「・・・知らないけど・・・」（注：長谷川さんは白石先生からは有希の不安定な状態は聞いていますが、不安神経症という病名までは聞いていません。２８話参照）
「・・前にね、レナと買い物に行ったとき・・男の人にナンパされちゃって・・・」（２６話参照）
「ナンパ?!」
「・・う・・うん・・・それで・・わたし・・どうしたらいいのか判らなくて・・・怖くなって・・・気づいたらちびってたの・・・」
「え?・・・オシッコ?」
「・・うん・・・・」
恥ずかしくて顔から火が出そうだ・・・

「それでナプキンしてるの?」
「・・うん・・白石先生に聞いたら・・わたしその不安神経症って病気になりかけてるらしくて・・・それで同じような状況になるとまたちびっちゃうんじゃないかと思うから・・・その時、心配しなくていいようにナプキンをするようにすすめられたの・・・またちびっちゃうと、どんどんヒドくなっちゃうんだって・・・」
「そうだったの・・・じゃあ、それって病気なんでしょう?」
「・・うん・・まあ・・・」
「それじゃ、恥ずかしがることないじゃない。」
「・・うん・・まあ・・そうだけど・・・」
それは長谷川が女の子だからだ・・・男がナプキンするなんて、理由がどうであれ恥ずかしいに決まっている。

「有希、そういうこと言ってくれればいいのに。」
「だって・・・恥ずかしいんだもん・・・」
「でもレナちゃんには言ったんでしょう？」
「あ・・それは違うよ！　まえにレナと服を買いに行った時・・更衣室に一緒に入ったときに、わたしがナプキンしてるの気づかれて・・・それで・・・・気づかれもしないのに、わざわざ言わないよ・・・」
「そっか・・そうかもね。」
長谷川の声のトーンが心なしか優しくなった気がした・・・
「もう、あんまり秘密にしないでよね。」
「・・うん・・・」
でもオレにはまだまだ他人には言えないことがいっぱいある・・・いくら長谷川がオレにとって特別な存在だとしても、言えないことは言えない・・・

オレは一瞬、読者モデルのことも長谷川に言っておこうかと思ったが、それはさすがにやめておいた。だってこれは佐倉との話だし、まだ黙っておこうと言い出したのはオレの方だ・・・けっきょく親や岡本と原口にはバレてしまったけど、関係ない長谷川にまで言ってしまってはオレの信用に関わるってものだ。

長谷川が着ていた浴衣を畳んで箱に入れ終えてしまうと間がもたない・・・
「・・それじゃ・・わたし帰るね。」
「え？　有希は着替えないの？」
「家まで近いからこのままでいいよ。それに、かあさんにも見せたいし・・・」
「そうね、有希のお母さん、あんまり可愛いからビックリするんじゃない？」
「・・も・・もう・・やめてよぉ、そんなお世辞いうの・・・」

「ふふっ・・またそんなこと言ってる！有希はほんと変わらないわねぇ。」

・・・オレほど変わったヤツはそんなにいないと思うんだけど・・・

「麻衣、帰るわよ。」

「え、ちょっと待ってぇ・・」

見るとケーキを食べている・・・

「あ、戸田さんの分もあるから食べて行って。」

そう言って長谷川のお母さんがオレの分のケーキをテーブルに置いた。美味しそうなイチゴのショートケーキだ・・・

「有希も食べて行きなさいよ。」

たしかに断るわけにもいかないし、オレは女の子になってからは、以前より甘いものが好きになってしまっている・・・

「・・じゃぁ・・いただきます。」

けっきょくオレもケーキをご馳走になってしまった。

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

「美味しかったね、ケーキ。」

「・・うん・・・」

麻衣に返事をしながらも、長谷川と別れてからオレは不安になっていた・・・レナになんて言おう・・・冷静に考えてみれば怒っているのは長谷川ではなくレナの方だ・・・それなのにオレはレナを放り出して長谷川の機嫌をとってしまった・・・レナは怒っているに違いない・・・

「ねえ麻衣・・なんでレナと来てたの?」
「ん?なんでって?」
「だって、レナと花火大会に行くなんて言ってなかったじゃない・・・」
「だってレナちゃんから電話かかってきたの、お姉ちゃんが家を出た後だもん。」
「・・・そのとき・・わたしのこと・・なんか言った?」
「なんかって?」
「わたしが・・その・・長谷川さんと花火大会に行ったこととか・・・」
「あ、言ったよ。“お姉ちゃんいる”って聞かれたから。」
「そ・・そう・・・」
レナは最初から知っていたんだ・・・それなのに“展示会の準備終ったの?”なんて聞いて・・・どういうつもりなんだ?
「言わない方が良かったの?」
「・・ううん・・そんなことないよ。」
オレのために麻衣にまで嘘をつかすのは可哀想だ・・・麻衣は何にも悪くない・・・

家に帰るとオレはすぐに自分の部屋に向かった。レナに電話するためだ・・・
「・・あ・・もしもし・・レナ・・・?」
「うん。」
「・・あの・・今日はごめん・・・怒ってるよね・・・」
「・・・別に怒ってないよ。」
「・・ほんと・・・?」
怒ってないハズがないと思うんだけど・・・
「有希がウソついてるの、わかってたから。」

「え？いつから・・・？」
「最初からよ。有希ウソ下手なんだもん。」
「うっ・・・」
「でも浴衣デートしてるとは思わなかったけどね。」
「・・で・・デートじゃないよ・・・」
「そう？」
「そうよ・・女どうしなんだし・・デートのハズないじゃない・・・」
「・・・ふ～ん・・そうなんだ。」
そうだよ・・オレと長谷川がデートするハズないじゃないか・・・
一回したことはあるけど・・・あれはまた別の話だ・・・
「でも楽しみだなぁ、有希に何してもらおうかな・・・」
「え？！　なんのこと？」
「だって有希、お詫びに何でもしてくれるんでしょう？　言ったじゃない。」
「・・あ・・え？・・でも・・レナ怒ってないって・・・」
「わたしが怒ってないのと、有希がお詫びしたいのとは別でしょう？」
「そ・・そうなの・・・？」
「そうよ。有希の気持ちはありがたくいただくわ。何してもらうか考えておくから、楽しみにしてて。」
「・・・・・・」
なんかえらいことになってきた・・・怒ってないって言ってるけど・・やっぱり怒ってるに違いない・・・
「あの・・わたしに出来ることじゃなきゃダメよ・・・」
「わかってるから安心して、女の子なら誰でも出来ることしか言わないから。」
女の子なら・・・？　なんかすごくイヤな予感がする・・・

「有希、お帰り。麻衣も一緒だったのね。」
「・・うん・・・」
「浴衣、似合ってるわよ。ピンクの方にしたの？」
「うん、長谷川さんが紺の方がいいっていうから・・・」
「そう、写真とっておきましょうよ。」
「うん・・・」
オレは時々、可愛い服を着た時などに、かあさんに写真を写してもらっている・・・これもオレがしばらく経ってから見た時に、ちゃんと前より女の子らしくなっているのを自覚できるようにするためだ。だからオレは写してもらった写真をまだ見たことはない・・・

少し乱れていた髪を整えて、写真を写してもらう・・・オレも両手を前で揃えて、三吉先生に教えてもらった着物を着た時にキレイに見える姿勢をとる・・・せっかく写してもらうのだからキレイに写りたい・・・
「そうだ、さっき有友から電話があったんだけど・・」
「え？！　兄さんから？」
「こんどのお盆には帰ってこれるらしいわよ。」
「ほ・・ほんと？」
オレは嬉しいのと困ったのが同時におとずれて、どう言えばいいのか判らなかった・・・兄さんが帰ってくるのはすごく嬉しいけど、オレはもう弟ではない・・・いきなり女になって会うなんて、いったいどうやって接したらいいのか困ってしまう・・・

「どうしたの？　嬉しくないの？」
「・・嬉しいけど・・・兄さん・・女になったわたし見てどう思うかな・・・」
「そんなこと心配してるの？」
「・・そんなことって・・・」

オレにとっては重大なことだ・・・
「心配しないで、有友はそんなコじゃないわよ。有希が男の子でも女の子でも同じように接してくれると思うわよ。」
・・そうかな・・それならいいんだけど・・・でも、オレの方が同じように接することが出来るかどうか・・・
オレは兄さんのことが大好きなのに、もし女になったことで兄さんに嫌われたらと考えると悲しくなってしまうのだ・・・

―――――――――――――――
―――――――――――――――
――――――――――

おまけ「名前」について

このテの話では「めぐみ」「のぞみ」「いくみ」などの最後に“み”がつく名前が使われることが多く、また、「恵＝めぐみ→めぐむ」「望、希＝のぞみ→のぞむ」のように男から女に変わるに従い、読み替えを行う場合もある。
この「オレは女子高生」の主人公「ゆうき」も定番のひとつですが、他の名前の場合とは違う点があると思う。まずひとつは、他はどちらかといえば“女っぽい名前だけど男につける場合もある”のに対し、「ゆうき」という名前は“男っぽいけど女の子につける場合もある”名前だということ。それはたぶん語感が“勇気”を連想させ

るからだろう。
もうひとつは、漢字の組み合わせがいろいろあるということ。変換に「勇気」「有紀」「裕紀」「裕樹」などの他にも多くの組み合わせがある。そんな中で「有希」を選んだのは、あまり男っぽ過ぎず、女っぽ過ぎない感じが欲しかったから（個人的な感覚ですが）。

名字については、このテの話では特殊な名字にしないのが基本だと思う。『天使な小生意気』の「天使＝あまつか」のように物語との関連がある場合は別ですが、普通は「佐藤」「鈴木」「山田」などよくある名前にする場合が多い。
有希の名字を「戸田」にしたのはあまりに普通だと感情移入しにくいという理由で、良くは見かけないけど、そんなに珍しくもない、また、名前自体に例えば「白鳥」「早乙女」のような特別な意味を感じないということで選んでみた。
また、芸能人にイメージが比較的少ないというのも選んだ理由。「戸田恵子」と「戸田恵梨香」がいますが「戸田恵子」は有希とイメージがかぶらないし（笑）「戸田恵梨香」の場合は、あくまで「とだえりか」であり“戸田さん”というイメージが無いと思うので（これも個人的な感覚ですが）。

ちなみに、有希に自分のことを「オレ」と言わせたのは、「ぼく」「僕」「ボク」ではちょっと軟派すぎるし、「おれ」「俺」では男っぽすぎるという理由。もちろんこれも個人的な感覚ですけど。

もうひとつ「オレは女子高生」というタイトルは、大昔のドラマ「ボクは女学生」をもじって付けました。フォーリーブスの北公次という、今でいえばキムタクが女子高に入るという感じのドラマです。もちろん学生服のままでセーラー服なんか着ませんが（笑、でも宣伝写真では着てた。）大竹しのぶのデビュー作ということでも有名です。

第５０話　お盆　兄さんが帰ってくる

オレは三面鏡に向かって念入りに化粧していた・・・これから麻衣と一緒に兄さんを向かえに行くためだ。弟が兄さんに会うためにお化粧するというのも変な話だが、オレはもう見かけは女の子なのだから仕方がない。たとえ兄さんが女になったオレを認めてくれなくても、せめて少しでもキレイなオレを見て欲しい・・・こんなことを考えているオレはやっぱり変だと思う・・・

（兄さんに会うのに、こんな可愛いワンピースを着るなんてどうかしてる・・・）

そう思いながらもオレは白いレースがついたワンピースを選んでいた。可愛いなかにも清楚な雰囲気があるのが気に入っている。

しっかり化粧はするけど、厚化粧に見えては台無しだ・・・それにいかにもバッチリお化粧してると思われたら恥ずかしいし・・・できるだけ素肌っぽいメイクを心掛ける。

くちびるは二光さんに習った、少し大きめに塗る方法を試してみる・・・思わずキスしたくなるぷっくりくちびるだ・・・別に兄さんにキスされたいワケじゃないけど、可愛いから試してみるだけだ・・・

「お姉ちゃん、まだ？　もう時間だよ！」

「・・うっ・・うん・・・でも・・髪がまだなの・・・！」

オレは髪をどんなふうにまとめるか考えてなかった・・・苦手だからどうしても後回しにしてしまうのが悪いクセだ・・・

「有希！降りてらっしゃい。かあさんがやってあげるから。早くしないと有友〈ありとも〉ついちゃうわよ。」

「・・う・・うん・・・」

オレは素直に従った・・・どう考えても、そんなに短時間でやるなんてオレには無理だ・・・

髪をキレイにまとめてもらい、かあさんの車で博多駅まで送ってもらう。駅についたのは新幹線が到着する時間の少し前だった。何とか間にあってホッとした・・・

「かあさんはこのまま仕事に行くから、有友と一緒に帰りなさいね。天神でごはん食べてもいいから、有希、あずけたお金持ってる？」

「うん、ちゃんと持ってる。」

「それじゃぁ、気をつけてね。」

「はい、行ってらっしゃい！」

ロータリーを回って行くかあさんの車に手を振って見送ると、オレと麻衣は急いで新幹線のホームへ向かった。

エスカレーターを上がってホームに着くと、ちょうど新幹線が入ってくるところだった。

もうすぐ兄さんに会うのだと思うと心臓がドクドク鳴り出した・・・急に自分の恰好が恥ずかしくなってくる・・・こんな可愛い服を着なきゃ良かった・・・

「麻衣・・わたしの恰好・・おかしくない・・・？」

「ぜんぜんおかしくないよ。今日もお姉ちゃんすごく可愛いよ。」

「・・・・・・」

そんなこと言われると、よけい恥ずかしくなってしまう・・・

「・・兄さん・・どこらへんに乗ってるかな・・・もう少し後ろのほうかなぁ・・・」

オレが後ろの方を見た時、新幹線のドアから出て来る兄さんの姿が見えた！　１年前に会った時より髪が少し長い・・・

「に・・兄さん！」

オレたちが駆け寄ると、兄さんはこっちを向いて微笑んだ。その笑顔がなんとなくニースの山上くんに似てて思わずドキッとした。
「有友兄ちゃん、お帰り！」
麻衣はそのまま兄さんの腕に抱きついた・・・その無邪気さが羨ましい・・・
「麻衣、ただいま！」
兄さんは麻衣の頭を撫でている。オレはノドがカラカラでなかなか声が出ない・・・
「・・に・・兄さん・・お帰り・・・」
「ただいま、有希。」
「・・ご・・ごめんね・・オレ・・こんなになっちゃって・・・」
しまった・・兄さんとの習慣で、ついオレって言っちゃった・・・

「有希、綺麗になったじゃないか。一瞬誰かと思ったよ。」
「・・そ・・そんな・・・オレ・・何も変わってないよ・・・」
自分のことをオレと言うのを、麻衣が不思議そうに見ている。でも今さら変えられない・・・
「そうか？　ずいぶん変わったように見えるけどな。でも有希が変わってないって言うならそうなんだろう。」

「さ、行こうか。」
そう言って兄さんはオレの肩を抱いた。オレは緊張してもうガチガチだ・・・
「・・兄さん・・荷物ひとつ持つよ・・・」
オレは兄さんが持った大きなバッグを、なかば奪うように引き寄せた・・・
「いいよ、重いだろう。」
「ううん・・こんなの全然・・・」
しかしオレはその重さにふらついた・・・去年は全然平気だったのに・・・今年の荷物が去年より重いのか・・・それともオレに力が

無くなってしまったのだろうか・・・きっと靴のせいだ・・こんな踵の高いサンダルを履いて来なきゃ良かった・・・

「有希、重いだろう、片方持つよ。」

フラフラするオレを気遣ってか、兄さんはそう言った・・・

「・・うん・・・」

オレは仕方なくバッグの片方を兄さんにあずけた・・・まったく自分で持つと言っておいて、情けないったらない・・・

「麻衣、お願い・・・わたしのこと前みたいに・・お兄ちゃんって呼んでくれない・・・？」

麻衣と一緒にトイレに入ったオレは、麻衣にそう頼み込んだ。

「・・どうして・・・？」

「・・いまさら・・“わたし”なんて言えないのよ・・・有友兄さんの前だけでいいから・・ね・・？」

「・・・うん・・・わかった・・・」

麻衣はしぶしぶながらうなずいてくれた。兄さんの前でオレって言ってしまった手前、いまさら“わたし”なんて言い直すのが恥ずかしかった・・・

改札を出ると兄さんがオレに聞いた・・・

「有希は自分で化粧してるのか？」

「・・うん・・・男がお化粧するなんて・・変だよね・・・」

「有希は自分のこと男だって思ってるのか？」

「・・・だって・・・」

オレは何て言えばいいんだろう・・・

「お兄ちゃんね、ＪＩＮＯＮで女の子としてモデルもやってるのよ！」

「へ～すごいじゃないか。」

「・・そんな・・ただの読者モデルだよ・・・それにまだ発売され

てないし・・どうなるかわからないよ・・・」
麻衣もよけいなこと言わなくていいのに・・・
「でも、楽しみじゃないか。何月号に載るんだ?忘れないように見なきゃな。」
「・・あ・・でも九州版だから・・・京都じゃ売ってないんじゃないかな・・・」
「そうか、それは残念だな・・・」
兄さんには女の子のモデルやってるオレなんて見て欲しくない・・・
「あたしが写メに撮って送ってあげるよ!」
・・・麻衣ったら・・またよけいなことを・・・

オレたちは天神で食事をしてから家に帰った。食事の間も兄さんとはあまり話すことが出来なかった。やっぱり麻衣の前では男言葉でしゃべりにくかった・・・
「ただいま。」
兄さんが言うと書斎から父さんが出て来た・・・いつもはオレたちが「ただいま」って言っても出てこないのに・・・
「久しぶりだな有友。ビールでも飲むか?」
「いや、まだいいよ。」
「そうか・・・」

「・・あの・・とうさん・・お昼食べたの?」
「ああ。」
「そう・・ドーナツ買ってきたから、お腹すいたら食べて。」
「ああ、後で食べるよ。それじゃ、おれはまだ仕事が途中だから、有友はゆっくりしてなさい。」
「うん。」
父さんはまた書斎に入ってしまった・・・せっかく兄さんが帰ってきたのに・・・仕事じゃ仕方ないけど・・・

―――――――――――――――
―――――――――――――――
――――――――――

夕飯には、かあさんも帰ってきて久しぶりに全員そろっての食事だった。

食事が終ると、兄さんは父さんとお酒を飲みながら難しい話をしていた。オレは話に入っていけず、つまらない・・・それに・・兄さんとは男言葉で話してしまったから、家族といると話しにくくて仕様がない・・・女言葉で話すのに慣れてしまった家族の中で、男言葉で話すのもまた恥ずかしかった。おかげで今日のオレは無口だ・・・

食器を洗い終るとやることがないから、オレはお風呂に入ることにした・・・このままいても何も話せないし・・・

髪と体を洗って、湯舟につかっていると、今日兄さんを初めて見たときのことを思い出してきた・・・オレはいままで兄さんがニースの山上くんに似てるなんて思ったこともなかった・・・もちろん兄さんは普通の人だし、アイドルの山上くんと比べるなんて無理な話だけど、それでもなんとなく似てる気がする・・・もしかしてオレがなんとなくニースの中から山上くんを選んだのも、無意識に兄さんの面影を感じたからなのだろうか・・・

ふとスリガラスの向こうに人影が見えた・・・かあさんが何かしてるのだろうか・・・かあさんとはオレが女の子になってからは、

時々いっしょにお風呂に入るけど、今日は兄さんが来てるから、まさかそんなことはないだろうと思うけど・・・

「有希、入るぞ？」

「！！！」

兄さん？！　オレは慌てて湯舟に口まで身体を沈めた・・・入浴剤を入れててよかった・・・透明なお湯ではオレの胸が丸見えだ・・・

「有希と入るのも1年ぶりだなぁ。」

兄さんは身体にお湯をかけると、そのまま湯舟に入ってきた。

「・・兄さん・・酔ってるの？」

「ん？　まあ少しは酔ってるかな。」

「・・な・・なんで・・・？」

「何が？」

何がって・・・

「・・オレ・・もう兄さんとは・・入れないよ・・・」

「そんなことないだろう。いま入ってるじゃないか。」

「・・それは・・兄さんが勝手に・・・オレ・・もう女の子だから・・・兄さんとは入れないんだ・・・」

オレは見えないとは思いながらも、お湯の中で両手で胸を隠していた。

「・・ねえ・・兄さん・・・頼むから、一旦出てくれない・・？

そうじゃないと・・オレ出られないよ・・・」

「いいじゃないか、おれは別に見ないからさ。」

「・・・ズルイよ・・・もう・・・」

でもオレもそんなに長くは入っていられない・・・このままじゃ茹だってしまいそうだ・・・そろそろ出なきゃ・・・

オレは仕方なく、洗った髪をまとめて頭に巻いていたタオルをお湯に浸け、見えてはいけないところを隠しながら上がるしかなかっ

た・・・でもバスタオルじゃないから、どうしても限界がある・・・胸と股間を何とか隠すと後ろは丸見えだった・・・女になったオレの身体を兄さんに見られていると思うと、恥ずかしくて真っ赤になってしまう・・・

オレは湯舟から上がると、体も拭かないまま急いで脱衣所に駆け込んだ・・・

―　―　―　―　―　―　―　―　―　―　―　―　―

いったい兄さんは何を考えているんだろう・・・オレは自分の部屋でドライヤーで髪を乾かしながら考えた。

兄さんはきっと酔っぱらってて、自分でも何をやってるのか判らなかったのではないのだろうか・・・そう自分を納得させようと思ったが、どう考えてもそんなに酔ってるようには見えなかった。

思い出しただけでドキドキする・・・今日はもうこのまま寝よう・・・そう思って髪を乾かし終ったドライヤーを仕舞おうとしたとき、ドアの外で声がした・・・

「有希、開けてくれ！」

兄さん？　でも今は会いたくない・・・さっきの余韻がまだ残ってるし・・・それに・・・もう寝るつもりだったから、ピンクのベビードールを着ているし・・・ブラもしていない・・・こんな恰好じゃ恥ずかしすぎる・・・

「おい！有希、手がふさがってるんだ。早く開けてくれ！」

「・・・・・」
オレは覚悟を決めてドアを少し開け、外に顔だけ出した。
「なに？　兄さん・・・？！」
オレの目に入ったのは布団だった・・・兄さんが布団を抱えている・・・
「・・な・・なに・・・？」
「なにって、寝るのに布団は必要だろう。」
「・・・ま・・まさか・・ここで寝るの？！」
「まさかって、いつもここで寝てるだろう。元々はおれの部屋なんだし。麻衣の部屋で寝るわけにもいかないだろう？」
「・・それは・・そうだけど・・・」

たしかにオレが使っている部屋は、元は兄さんの部屋だった。この家に越してきた時は、オレと麻衣はまだ小さかったから、今の麻衣の部屋をふたりで使い、この部屋は当時高校生だった兄さんが使っていたのだ。この部屋に窓がないのもそのためだった。兄さんが大きな本棚で窓をつぶしてしまったのだ。この本棚は入れるのも大変だったから、今でもそのままになっている。兄さんの部屋だったころはギッシリ本が並んでいたが、今は・・・ほんの少しの本と・・オレのヌイグルミが並んでいる・・・

「この部屋もすっかり女の子の部屋になってるなぁ。」
「・・ごめんね・・こんなにしちゃって・・・」
「いいよ。もうこの部屋は有希の部屋なんだから。おれは帰ってきた時に寝るだけだ。」
・・・そんなふうに言われると・・・他のところで寝てほしいなんて・・・とても言い出せない・・・
「兄さん、ベッド使ってよ・・オレが布団で寝るから・・・」

「いや、おれは布団でいい。寮でも布団だからな。」
「・・そう・・・？」

透けていないだろうか・・・ブラをしていない胸が気になる・・・
「そうだ。有希は薬はどんなの使ってるんだ？」
「・・あ・・今は注射だよ・・・前はパッチを貼ってたけど・・・」
そういえば少し残っていた・・・オレは鏡台の引き出しを開けて残っていたパッチと薬を兄さんに見せた。
「あぁ、このパッチは避妊薬だね。」
「え？　でも・・オレ避妊なんて必要ない・・・」
「いや、避妊薬というのは成分は女性ホルモンなんだ。女性ホルモンを使った薬は本来、男を女にするための薬じゃないのさ。そういう用途の薬は作ってないから、他の薬を代用するんだ。」
「へぇ・・・そうなんだ・・・」
さすが兄さんは薬科大だけあって薬に詳しい・・・
「こっちは精神安定剤か。どれくらいの頻度で使ってる？」
「・・そんなには使ってないよ・・どっかに出かけて、緊張しそうな時だけ・・・」
「そうか、まあその程度なら問題ないだろう。あまり頻繁だと副作用の心配もあるけど。」
そういう薬だったんだ・・・たしかに特別な時以外は飲まないように言われていた。

「有希の学校の校医はなんて名前だっけ？」
「白石先生、白石香帆〈しらいし　かほ〉先生。女の先生だよ。」
「ちゃんと薬の説明はしてくれる？」
「・・う・・うん・・・でもオレには難しくて・・・でもいろいろ相談にも乗ってくれるし、優しい先生だよ。」
「そうか・・・」

「有希は女の子になっても男言葉でしゃべってるのか？」
「・・うっ・・ううん・・・ごめん・・兄さんの前だと・・恥ずかしくて・・・普段はちゃんと女の子らしくしゃべってるよ・・・」
「そう、ならいいんだけど。」
「・・うん・・こんど・・今度兄さんに会う時には・・ちゃんとしゃべれるようになってるから・・・もっと自信が持てるようになるから・・・今回だけは・・・」
「無理しなくていいよ。おれの前では昔のままでかまわない。」
「・・うん・・ありがとう・・・」
「有希も苦労してるんだろう？」
「・・そんなこと・・ないけど・・・」

兄さんはオレのことを気遣ってくれてるのか、オレが女になった理由とかは聞かなかった。聞かれたらどうしようと思っていた・・・だってオレ自身も・・理由なんて良くわからない・・・

オレは兄さんの前で男言葉でしゃべりながらも、気持ちはまるで恋する少女のようにドキドキしどうしだった・・・恥ずかしい気持ちが、よけいにオレを女の子らしい気持ちにしてしまうのだろうか・・・

寝るために電気を消すと、兄さんは疲れていたのか、お酒を飲んだせいなのか、すぐに寝息をたてて眠ってしまったようだ。でも、オレは気持ちがたかぶってしまい、なかなか寝つけなかった。

兄さんがオレのことをどう思っているのかは良くわからなかったけど、でも嫌われてはいないようだし、オレが女の子になる前と同じように接してくれている・・・おかしいのはオレの方なのだろうか？・・・恥ずかしくてたまらない・・・

きっと山上くんに似てるなんて思ってしまったから、そのせいで

意識しすぎているのかもしれない。オレは兄さんのことが好きだけど・・・でもそれは兄弟としてであって、兄さんのことを男性として好きなわけではない・・・明日はもっと普通に兄弟として接することが出来ることを願いながら、オレは眠りについた・・・

第５１話　密談　有友の目的

なかなか寝つけなかったせいなのか、オレが次の日、目が覚めた時には１０時を過ぎていた。兄さんを起こしては悪いと思って目覚ましをかけなかったのがマズかった・・・兄さんはすでに起きてしまったようで布団は部屋の隅にたたまれている。今日は兄さんに朝ごはんを作ってあげようと思ってたのに・・・

急いで部屋着に着替えてから１階に降りると、リビングには麻衣しかいなかった。

「あれ？　麻衣だけなの・・・？」

「うん。」

「・・兄さんは？」

「もう出かけちゃったよ。」

「・・どこに・・・？」

「なんか、人と会うんだって。」

「え～・・つまんないなぁ・・・」

１年ぶりなんだから、今日こそは兄さんと話しようと思ってたのに・・・いったい誰と会うんだろう・・・

―　―　―　―　―　―　―　―　―　―　―　―　―　―

―　―　―　―　―　―　―　―　―　―　―　―　―

―　―　―　―　―　―　―　―　―　―　―　―

―　―　―　―　―　―　―　―　―　―　―

―　―　―　―　―　―　―　―　―　―

―　―　―　―　―　―　―　―　―

―　―　―　―　―　―　―　―

―　―　―　―　―　―　―

―　―　―　―　―　―

―　―　―　―　―

―　―　―　―

―　―　―

―　―

―

西鉄大牟田線久留米駅を降り１５分ほど歩いたところに、白鴻女学園〈しらとりじょがくえん〉はあった。伝統ある学校らしい古い門は閉まっていて守衛に開けてもらわなければならなかった。本来

は自由な校風なのだが、昨今の物騒な事件を鑑みれば仕方のないことなのだろう。夏休みの今日は遠くでスポーツ部の声が聞こえる以外は、校舎はひっそり静まり返っていた。

円形の石組みの上には大きなソテツが植えられていて昔の学校といった風情がある。正面玄関はその横にあり、玄関を入ると受け付けでノートに名前を書き、渡された入校章を首から下げなければ部外者は校舎に入ることは出来なかった。とはいえ、すでに連絡してくれていたため手続きはスムーズだった。

職員室を横目に見ながら受け付けで教えられたとおりに進むと、少し奥まったところに保健室はあった。光沢のある黒い木の板に白いエナメルで保健室と書いてある、懐かしくもとりたてて特徴のないごく普通の佇まいだ。

ドアをノックすると中から女性の声が答えた。

「はい、どうぞ。」

引き戸を開けると、そこには白衣を着た女医の姿があった。ほんの少し栗色がかった髪をきっちりと後ろに束ね、前髪だけが斜めに垂れている。

「初めまして、戸田有希の兄の有友です。」

「いらっしゃい、私は有希さんの体調の管理など任されている校医の白石香帆〈しらいしかほ〉です。ここの場所はすぐにわかった？」

「はい、受け付けで聞いてきましたから。」

「良かった、ちょっとわかりにくい所だから。」

それは女医のせいではないだろうが、女医は申し訳なさそうにした。

「でも中庭の前でいい環境じゃないですか。」

「まあね、ただ保健室の場所がわかりにくいのはちょっと困りものだと思うのよ。」

女医は簡素なカップにコーヒーを入れて持ってきた。
「どうぞ。」
「ありがとうございます。」
女医は自分のコーヒーをひとくちを飲んでカップを置いた。
「有希さんから話を聞いてて会ってみたいと思ってたの。電話もらった時は少し驚いたけど。」
「すみません、急に電話して。」
「いえ、いいのよ。夏休みはわりとヒマだし・・・大学院生ですって？」
「はい。来年で卒業です。」
「卒業したらどこかの製薬会社に？」
「いえ、まだ研究中なので大学に残ろうと思っています。」
「そう・・何の研究してるの？」
「インフルエンザです。」
「ワクチン？」
「いえ、抗ウイルス剤です。あまり詳しい話はできませんけど。」
「そう・・・新型は出て来そう？」
「・・それぱかりは誰にもわかりません。今年出現するかも知れないし、１０年後かもしれない。ただ、いつか出現するのは確かですから。その時にはワクチンじゃ間に合いませんからね。」
「・・・・・」
「まあ、出現したらいかに早く隔離できるかでが勝負でしょう。あと空港でどれだけ食い止められるか・・・」

「あ、ごめんなさい。有希さんの話だったわね。何か心配なことでもあるの？」
「はい。単刀直入に言うと、そろそろ次の段階を考えた方が良いんじゃないかと思いまして。」
「・・次の段階？」
「昨日、有希の身体を見たんですけど、もうかなり女性化してます

よね。」
「見たの？」
「ええ、一緒に風呂に入って。」
「・・・無茶するわね。」
「でも兄弟ですから、風呂には以前からけっこう一緒に入ってましたし。」
「それはそうでしょうけど、有希さんは少し精神的に不安定なところもあるから、もう少し慎重に行動してほしいわ。」
「まあ、しかし他に方法もありませんし。有希もそんなに嫌がっていませんでしたよ。」
「でもねぇ・・・」

「まあ、それはそれとして、あまり長く女性ホルモンを使って副作用が出ないか心配なんです。出来るだけホルモン剤の使用は少なくした方が、長い目で見れば有希のためだと思うんですよ。」
「それは私も考えてたけど。この前の血液検査の結果は一応問題なかったけどね・・・でも良いのかしら？　実はそこまで決断していいものか迷ってたのよ。」
「決断は先生ではなく有希がすることだと思います。先生は有希にちゃんと説明してあげてください。有希は勉強はあまり出来ないようですけど、決して頭が悪い訳ではないんです。ちゃんと自分で決断出来ると思います。」
「ええ・・それはそうでしょうけど・・・」
「有希はもう女の子になる決心をしてるようですし、すでに後戻りは出来ないところまで来ているんでしょう？」
「ええ、そうね。」
「だったら、ちゃんと有希に決断させるべきだと思いますよ。有希のためにもそうした方が良い。」
「それはご家族の考え？　それともあなた個人の考えなの？」
「私個人の考えです。決めたら有希が自分で家族に言うと思います。

」

「・・わかった、考えとくわ・・・」

「でもあなたに会ってみて良く解った。有希ちゃんがお兄さんと会うの不安がってたワケ。」

「不安？」

「そう、きっと有希ちゃんはあなたのことが好きなんだと思うわ。」

「有希がおれを？」

「ええ、だってあなた、有希ちゃんが好きな男性のタイプにピッタリだもの。」

「有希とそんな話もするんですか？」

「いろいろ話すわよ。いまでは妹みたいな気がしてるくらい。夏休みはあまり会えないから淋しいわ。」

「妹ですか・・・おれにとっては今でも弟ですけどね。」

「・・・ほんとかしら？」

女医はいたずらっぽく微笑んだ。

―――――――――――――――

―――――――――――――――

―――――――――

「ただいま。」

兄さんが帰ってきた時には、もう夕方になっていた・・・オレは兄さんの声を聞いて、急いで玄関へ駆けていった。

「兄さん・・どこに行ってたの？」

「ごめん、ごめん、急に友達に会わなきゃいけなくなってさ。」

「もう・・・兄さん明日までしかいないんでしょう？」
「いや、帰るのは１６日だよ。」
「でも１６日はお昼までじゃない・・・そんなの１日に入らないよ・・・」
「そうふくれるなよ。それじゃ、明日どこかに連れて行ってやるよ。」
「え？！　どこに？」
「そうだなぁ、スペースワールドはどうだ？」
「スペースワールド？！　うん、行きたい！」
オレはスペースワールドと聞いて一気にテンションが上がった。だってスペースワールドはオレが男の子のころから、いちど行ってみたかったところだ。今は女の子になっちゃったけど・・でも・・そんなの関係ない！

「それじゃ、麻衣と三人で行こう。」
「・・あ・・うん・・・」
それはそうだ・・・麻衣も連れて行くのは当り前だ・・・なのにオレは兄さんと二人でデートにでも行くような気になっていた・・・オレって最低だ・・・

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

夜、オレの部屋でやっと兄さんと二人きりになった・・・今日は寝巻きがわりのベビードールは着ていない、だって兄さんにそんな姿を見られるのは恥ずかしすぎる・・・今日はちゃんとＴシャツを

着て、下にはホットパンツをはいていた・・・胸にはスポーツブラも着けている。　短いホットパンツから出た足が妙に女っぽくて、自分の足なのにドキッとした・・・こんな気持ちになるのはヘンだと思う・・・だって学校では体育の時、いつもブルマーをはいているのだから・・・

　オレはベッドに腰掛けて、布団の上にあぐらをかいてバッグから着替えを出している兄さんを見ていた・・・

「ねえ兄さん・・あの・・男と女ってどこが違うのかな・・・」

オレは以前から気になっていたことを聞いてみた・・兄さんなら知ってそうな気がしたから・・・

「そりゃ、いろんなところが違うだろう。」

「・・そうだけど・・・でもさ・・男と女は考え方も違う気がするんだけど・・・」

「そういうことか。それじゃ聞くけど有希は人間の心はどこにあると思う?」

「心?　えっと・・・心臓かな?・・・心のことハートっていうし・・・気持ちが動揺したりするとドキドキするし・・・」

オレはしょっちゅうドキドキしている・・・

「それは違うよ。心臓は血液を全身に送るためのただのポンプで、ドキドキするのは血液を大量に運んで体中の酸素濃度を上げるために馬力を上げてるだけなんだ。」

「・・・そうなの・・?」

なんだかそう言ってしまうと味も素っ気もない・・・

「現在では人間の心と言えるものは脳にあると言われてるんだ。」

「脳?」

「小脳の生物としての働きと、大脳の人間としての感情、それに貯えた情報や知識。そういうのが重なり合って心になるんだ。」

「・・・・・」

「だから性別の違いというのは動物としての考え方や行動の違いと、人間として生きてきた中で集めた情報の違いということになるかな。」
「・・・・・」
「解らないか？」
「・・うん・・・」
なんだかオレには難しすぎる・・・

「人間だけじゃなくて、生き物はだいたいオスは強くてメスは優しいだろう？」
「うん、そうかな・・・」
違う場合もある気がするけど・・・
「それはオスには種として強い遺伝子を残すという使命があるし、メスにはその子孫を大切に育てるという使命がある。もちろん人間はもっと複雑だし、文化によっても多様な考え方があるから一概には言えないけど、人間も一種類の動物としてみれば、他の動物と基本的には変わらないんだ。」
「・・・・・」
「ただ人間は他の動物とは違って文字や言葉を使って情報を共有することが出来る。そういう情報によって人間は、人間独自の男や女の定義をするようになってきた。」
「・・・どういうこと？」
「たとえば、有希は“女心と秋の空”って言葉、知ってるか？」
「うん・・・聞いたことあるかなあ・・・」
「これは女性が心変わりしやすいって意味の言葉なんだけど、でも昔は“男心と秋の空”って言ってたんだ。」
「へ～・・なんで？」
「源氏物語なんかを読んでもわかるように、昔の男はたくさんの女性と付合っていて、可愛い娘がいるとすぐ心移りしていたんだ。そのころの女性は男が来るのを待ってることしか出来ない時代だった

から、男が心変わりして来なくなっても我慢するしかなかったんだけど、今ではそんなことは無いだろう？　今の時代は男も女もどっちが恋愛の主導権を握ることも許されている。そういう同じ条件になってみたら女性の方が心移りするようになってことわざも変わっていったんだ。」

「・・・・・」

「つまり人間の場合、男らしいとか女らしいとか言うのは文化の部分が大きいんだよ。同じ日本でも時代が変わり文化や価値観が変われば、何を男らしさや女らしさとするかということも変わっていくということさ。」

「ふ～ん・・・」

なんとなくわかる気がする・・・でもオレが知りたいのはそういうことじゃない・・・

「でも・・あのね・・オレ、女の子の服着たり、女の子の仕草とか習って・・少しは女っぽくなった気がするんだけど、でも最近、このままで本当に女の子になれるのかなって思ってるんだ・・・」

「そうなのか？」

「うん・・オレ考え方とか男のままな気がするし・・・まわりのみんなはオレのこと女らしいって言うんだけど、自分では全然そんな感じがしないんだもん・・・さっきの兄さんの話でいうと、オレのは女の子の文化を習っただけなんじゃないのかな・・・動物としては男のままなんじゃないかな・・・」

「それは難しい問題だな。最近では男と女は脳が違うということは解ってきてるけど、どこがどう違うかまではまだはっきりとは解っていないんだ。ただ、使い方が違うらしいことは解ってきてるし、男と女は脳梁〈のうりょう〉の太さが違うという説もある。」

「のうりょうって？」

「脳梁というのは、左右に別れた脳をつなぐ橋みたいなものだ。それが女性の方が脳全体と比較して太いから、女性は左右の脳を一緒

に使うのが上手いと言われてるんだ。」
「・・・・・」
「解りにくいかな・・・例えば、男は電話をしてると他のことが手につかなくなるけど、女性は電話をしながらでも色んな用事が出来るのは、左右の脳を情報が行き来しやすいからだと言われてるんだよ。」
「・・・うん・・・」
そういえば女の子ってしゃべりながら鏡見たり、雑誌読んだり、他のことも同時にやってるのを良く見る気がする・・・オレはいつも女の子に囲まれて生活しているから、そんなこと気にもしなかったけど・・・オレ自身はどうだっただろうか・・・

「一説では性同一性障害の人にも、そういう女性型の脳の人がいるって聞いたことがある。あくまで一説ではだけどな。」
「え？　それじゃオレはどうなのかな・・・女性型なのかな・・違うのかな・・・」
「さあ、それは脳のCTスキャンでも撮ってみないと判らないな。」
「・・もし・・オレの脳が女性型じゃなかったら・・・オレ・・心までは女の子になれないのかな・・・」
「そうとは一概には言えないと思う。マウスを使った実験ではメスのホルモンをオスに注射すると、そのオスはメスのような行動をするようになったらしい。」
「じゃあ、人間でも女性ホルモンを注射すると・・・女として行動するようになるの？」
オレは女性ホルモンを打ってるけど、そんな風には感じない・・・
「それも一概には言えないよ。マウスには人間のような意味での自我はないが、人間は自分という存在を感じることが出来る。生まれてから親や他の大人に教えられてきた事柄や、自分で考えた事などで個人の自我が造られるワケだけど、だからたとえホルモンの影響があったとしても、それによってこれまでの自分を忘れてしまうわ

けじゃない。過去の自分を憶えているということは、いくらホルモンの影響を受けたとしても自分らしい行動をしようとするんじゃないかな。」

「・・・・・」

「ただし、全く影響がないわけでもないと思うよ。人間だってホルモンは脳に働きかけているからね。たとえ脳の中にある情報は同じでも、それを使ってどういう選択をするかには、知らず知らずのうちに影響を与える可能性は十分ある。」

「・・じゃあ・・オレも・・・？」

「ああ、以前より女性ホルモンが多くなってるのは間違い無いことだから、少しづつは変わってくるかもしれないな。例えば好みとか、性格とか影響が出て来るかも知れないよ。思い当たることはない？」

「う～ん・・・良くわかんない・・・そんなこと自分じゃわからないよ・・・」

オレはただでさえ自分のことが良く解ってないというのに・・・とはいえオレの部屋を見渡せば、以前とはずいぶん変わってしまっている・・・オレは女の子になったから自然にそうなったような気がしてたけど、もしかしたらこれも女性ホルモンのせいなのだろうか・・・最近のオレはいろんな色があれば、どうしても白とかピンクとかを選んでしまう・・・おかげでオレの部屋はすっかり女の子の部屋のようになってしまった・・・

「兄さん・・オレ本当に女の子になってもいいのかなぁ・・・」

「それはおれが決めることじゃないな。」

「・・それは・・そうだけど・・・オレ不安なんだ・・・最初のころは自分が女の子になることしか考えてなかったんだけど・・でも・・女の子になったら・・そのうち男の子を・・・好きになったりしなきゃいけないんじゃないかな・・・」

「べつにそうとは限らないと思うけどな。」

「・・うん・・でも・・オレ女の子なら・・やっぱり男の子を好き

になったりするんじゃないかと思うんだ・・・」
「まあ、そうかもしれないな。」
「・・でもさ・・オレ・・・男の子と付合ったりできるのかな・・・」
「有希は、だれか好きな男の子でもいるのか?」
「いないよ!　好きな男の子なんて・・いるわけないじゃない・・・
たとえばの話だよ・・・」
すると兄さんは立ち上がって、ベッドのオレのとなりに座った・・・
急に動悸が激しくなる・・・

「有希は真面目なんだね。」
「そ・・そんなことないよ・・・!」
「おまえはまだ高校生になったばかりだろう?　そんなに深く考え
ず、自分の気持ちに正直に行動すればいいんじゃないか?」
「・・でも・・・オレ・・付合ったとしても・・結婚とか出来ない
し・・・」
「そんなこと気にしてるのか?　高校生で付合って、そのまま結婚
するカップルなんてそんなにいないと思うぞ。」
「それは・・結果的にはそうかも知れないけど・・・」
「まあ、そうだな。最初から絶対結婚しないつもりで付合うものでも
もないかもしれないな。」
「・・でしょう?」
兄さんはオレの肩に手をのせた・・・ドキドキがバレそうで怖い・・
・
「でも、まだ好きなコはいないんだろう?　だったらそんなに頑に
ならずに、好きなコが出来た時に考えれば良いんじゃないかな?」
「・・・・」
「そう思わないか?」
兄さんがオレを抱き寄せる・・・
「・・あっ・・・」

オレは兄さんの肩に頭をのせるかたちになってしまった・・・もう心臓は早鐘のように打ち、目で見てわかるほどオレの胸はドクドクしている・・・脳に命令されて心臓が身体中に酸素を送っているんだ・・・次の行動に素早く対処するために・・・・次の行動・・・？

しかし、オレが次の行動に移ることはなかった・・・兄さんもオレを抱き寄せたままだった・・・それだけだった・・・

・・・べつに次の行動を期待してたワケじゃない・・・だってオレたちは兄弟なのだから・・・それでも少しガッカリしているオレって・・・やっぱりヘンだと思う・・・絶対ヘンだ・・・・

これも女性ホルモンの影響だったりするのだろうか・・・ホルモンがオレに女の子みたいな行動をとらせようとしてるとしか考えられない・・・そうじゃなきゃオレが兄さんに・・・少しでも何かを期待するなんて・・・ありえない・・・ありえないよ・・・

第５２話　別れ　兄さんが帰っちゃう

「ど、どうしたの？　お姉ちゃん！」
準備を終えてリビングに降りてきたオレを見て麻衣が驚いたように言った。
「ど・・どうもしてないけど・・・」
オレはしらじらしくシラを切ったが、麻衣がそう言うのは無理もないことだ。

いつものオレは、お出かけの時はたいてい可愛い服を選びがちだ・・女の子らしい服を着るのは今でも恥ずかしいけど、男だとバレたくないという気持ちがどうしてもそういう方向に行ってしまう・・・似合ってないのは重々承知しているけど、男だとバレるよりはずっとマシだ・・・

でも今日のオレの恰好は、Ｔシャツにジーンズ、そして長くなった髪はピンでまとめて野球帽の中に隠してした・・・そう・・今日のオレは男の子のような恰好なのだ。ブラもあまり胸を強調しないスポーツブラを着けている・・・なんか長谷川みたいな恰好だ・・・

久しぶりに男の子のような恰好をしてみると、かえって恥ずかしい気がするから不思議だ・・・お化粧をしてないのもなんだか頼りない・・・一度お化粧をしてしまうと、すっぴんだと裸になったみたいな気持ちになるなんて知らなかった・・・学校とかでは平気なのに・・いつもならお化粧をして行くようなところに化粧をせずに行くのは恥ずかしいなんて・・・人間の感覚って不思議だ・・・

今日オレがこんな男の子みたいな恰好をしたのには訳がある。オ

レは今日一日男の子で過ごすことにしたのだ。せっかく兄さんがスペースワールドに連れて行ってくれるというのに、オレときたら兄さんとデートするような気持ちになったり、麻衣が一緒に行くのを邪魔に思ったり・・・オレはそんな気持ちで行きたくなかった。だってそんな気持ちで行っても、ぜんぜん楽しめそうにない・・・兄さんがいるのは今日までなのに・・・明日はもう兄さんは大学に帰ってしまうのに・・・だから今日は昔のように男の子として・・兄さんと男どうしの兄弟として遊ぶことにしたのだ。

ただ、こうして男の子の恰好をしてみると、ちょっと困ったこともあった・・・男の子の恰好をしているのに、どうしても女っぽさが出てしまうのだ・・・Tシャツを着るとヘンに胸が強調されてしまうし、ジーンズも女性物のせいか妙に女っぽいシルエットになってしまうのだった・・・だからスポーツブラで出来るだけ胸を目立たなくして、少し大きめのTシャツで何とか女っぽさが出てしまう腰を隠していた。

それでも半袖から出た腕や、首まわりなど、いつの間にか筋肉が落ちてしまったせいか、すっかり男っぽさがなくなってしまっていることに改めて気付くシマツだ・・・どうりでホットパンツから出た足に女っぽさを感じたハズだ・・・何とも情けない限りだ・・・

「お姉ちゃん、今日それで行くの？」
「・・うん・・そのつもりだけど・・・」
「そっか・・・まあいいや、その方が“お兄ちゃん”って呼びやすいかも。」
「な、なんかごめんね・・“お兄ちゃん”なんて呼ばせて・・・」
急に呼び方を変えるなんて麻衣もやりにくいに違いない・・・
「いいよ、お姉ちゃんは“お兄ちゃん”でもあるわけだし、あたし

お姉ちゃんのそういう奥ゆかしいところ好きだし。」
「・・お・・奥ゆかしい・・・？」
麻衣は“奥ゆかしい”ってどういうことか知っているのだろうか？
　オレは奥ゆかしくなんかないと思う・・・

「あれ？兄さんは？」
「あ、さっきお母さんを会社まで送って行ったよ。もうすぐ帰ってくるんじゃないかなぁ。お母さんの車を使っていいってさ。」
それはオレとしては助かった。スペースワールドまでは電車と地下鉄とＪＲを乗り継がなきゃいけないから、オレは少し不安だったのだ。ずっとＪＲで行くこともできるけど、それも結構便が悪い・・・どちらにしても北九州の小倉まではけっこうかかる。
「良かったぁ・・・わたしちょっと不安だったのよ。」
「ふふっ・・・“お兄ちゃん”女の子の言葉になってるよ。」
「え？！・・・そうだった？」
もうオレは女言葉でしゃべるのが普通なってしまったようで、ついつい麻衣としゃべっていると女言葉が出てしまう・・・
「“お兄ちゃん”無理しなくてもいいのに。もう“お兄ちゃん”は女の子なんだから。」
「うぅ・・・でも・・・」
オレはもう決めたのだ。今日一日はオレは男の子なのだ！
「オ・・オレ・・“お兄ちゃん”だから・・・」
なんか男の子の恰好をしたことで、逆に女の子になっている自分を認識してしまったようだ・・・昨日まで自然に“オレ”と言えていたのに急に恥ずかしさが込み上げてきた・・・

――――――――――――――
――――――――――――――

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ドアが開いて兄さんの声がした。
「有希、麻衣！行くぞ！」
「は、はい！」
オレたちは急いで靴を履いて外に出た。
「おっ！有希、今日はずいぶんスポーティーだな。」
「・・う・・うん・・・遊園地だしね・・・」
「そうか、絶叫マシンとか乗らなきゃいけないもんな。」
ヒ～～・・・絶叫マシン？
「オ・・オレは絶叫マシンはいいよ・・・」
「なんだ、有希は絶叫マシンが怖いのか？」
「え？！」
麻衣もいるのに・・・こんな男の子みたいな恰好をしてるのに・・・
絶叫マシンが怖いなんて言えない・・・
「こ・・怖くなんかないけど・・・」
どうしよう・・・またチビッちゃったりしたら・・・一応・・多い日用のナプキンはしてるけど・・・

車で高速を小倉方面に向いながら、オレは兄さんに聞いてみた・・・
「兄さん・・兄さんは絶叫マシンとか好きなの？」
「ああ、特別好きって訳でもないけど、別に普通だと思うけどな。」
「普通・・・」
普通はああいうの平気なのだろうか・・・まあ、嫌いな人ばかりだったら遊園地も困るだろうけど・・・

「でも、あれだなぁ。有希はそういう恰好をしても十分女の子に見

えるんだな。」
「え?!」
「あ!あたしも思った!“お兄ちゃん”ってもうどんな恰好をしても女の子に見えるんだなぁって。」
「そ・・そんな・・・」
オレは男の子で居ようとして、こんな恰好までしてるのに・・・それでも女の子に見えるなんて・・・そりゃあ、ふだんなら女の子に見えるのはありがたいことなんだけど・・・なんだか複雑な気分だ・・・

「で・・でも・・今日は男の子として遊ぶんだ!そう決めたんだもん!!」
もう内心思ってるだけじゃダメだ・・・みんなちゃんとオレを男の子として扱ってくれなきゃ、オレどうしていいかわからないよ・・・
「そうなのか?わかったよ、それじゃ今日は有希は男の子だ。いっぱい絶叫マシンに乗ろうな!」
ううぅ・・・やっぱりそうなっちゃうのか・・・
「・・う・・うん・・た・・楽しみだなぁ・・・・」
なんかノドがカラカラになってきた・・・オレどうなっちゃうんだろう・・・

遠くにスペースワールドのシンボルにもなっているスペースシャトルが見えてきた。実物大のシャトルの模型はさすがに大きいようで、モニュメントのように遠くからでも良く見える。
男の子だったら・・・それにもう少し小さい頃だったら・・オレもそれを見てはしゃいだかもしれないが、さすがに今のオレはそこまでの気持ちにはなれなかった・・・出来ることなら、まだ男の子だった小学生のころに来たかった・・・あらためてオレの両親は、どこにも連れて行ってくれなかったのだと思う・・・

これがもし兄さんとふたりきりだったら・・・またそんな考えが頭をもたげてくる・・・
兄弟なのに・・兄さんと恋人どうしのようにいられたら・・・兄さんに女の子として甘えられたら・・・そんなバカみたいな考えが頭の中で膨らんでくる・・・

そんな気持ちにならないために今日はこんな男の子の恰好をしてきたというのに・・・オレってつくづくダメなヤツだ・・・恥ずかしいことにそんな妄想をしていたらブラの中の乳首がシコッてきてしまった・・・
「有希、気分でも悪いのか?」
「え?　ううん・・・大丈夫だよ・・・」
顔が赤くなっていたのだろうか・・兄さんにそう聞かれてオレは慌てて否定した・・・
「み・・見て!スペースシャトルがあんなに大きく見えてきた!」
兄さんにオレがこんな気持ちでいることを悟られたくない・・・オレは昔から兄さんが好きだったけど、それは兄弟として兄さんに憧れていただけだ・・・恋人になりたかったワケじゃない・・・オレのこんな気持ちを知られたら・・兄さんに嫌われてしまうかもしれない・・・だってこんな弟・・・気持ち悪いに決まってる・・・

入場して下から見上げたスペースシャトルは、さすがにすっごく大きくてオレはすっかり圧倒されてしまった。ちょっと怖い気さえする・・・麻衣も同じ気持ちのようで自然にオレの手を握ってきた。
「すごいね麻衣、こんなにおっきいんだねぇ。」
スペースシャトルなんてテレビでしか見たことなかったけど、こんなに大きかったなんてビックリだ。模型とはいえ実物大だと迫力が違う・・・

「お兄ちゃん、見て！」
麻衣が指さした方を見てオレはゾッとした・・・
「フリーフォールだよ！あれ乗ろうよ！」
「え？　麻衣怖くないの？！」
「怖いけど、そこがいいんじゃない。」
「そ・・そっか・・・」
こういうのは怖さを楽しむものなのか・・・オレはそんなのちっとも楽しくないと思うんだけど・・・

オレたち3人はいきなりフリーフォールに乗ることになってしまった・・・こんな状況で怖いから乗らないなんてとても言えない・・・それに今日はオレは男の子・・・よけい怖がることなんかできない・・・
体をガッチリ固定されると絶望的な気持ちになる・・・麻衣も緊張はしてるみたいだが、そんなに怖がってはいない・・・兄さんは全然平気みたいだ・・・なんか兄さんって男らしい・・・こんな時なのに思わず見とれてしまうオレって何なんだろう・・・怖さとはまた別のドキドキが混ざっているような気がする・・・

だんだん上がって行く・・・徐々に視界が広くなって頂上に着いた時にはスペースワールド全体・・いや、もっと向こうの小倉城まで見えてきた・・・足場のしっかりしたところからの眺めだったら感動するかも知れないが、これから一気に落ちるのでは、とてもそんな気持ちにはなれない・・・

“ガタン”と音がして、オレたちが乗ってる部分が前に出た・・・ドキッとした一瞬の後、一気に下に落ちていく・・・・
（ヒィ〜〜〜〜）
声も出ない・・・体が浮き上がる感覚にゾッとする・・・オレはこ

の感覚が大嫌いなのだ・・・お尻がズンとしてキンタマが縮みあがっていく・・・こういう感覚はぜったい男の方が不利だと思う・・・“ボワン”と空気の上にでも落ちたような感じで、少し弾むように止まった・・・たぶんあっという間だったのだろう・・・でもオレにはすごく長く感じた・・・股間は汗ばんではいるが、なんとかチビってはいないようでホッとした・・・

「お兄ちゃん！面白かったね、ふわっとしたよ！」

「・・う・・うん・・・」

オレは足がガクガクするのを隠すのに必死だ・・・

「こんどはどれに乗ろっか？」

ううぅ・・・勘弁してほしい・・・

「あ・・あんまり乗ると・・お金がかかるんじゃないかなぁ・・・」

「お兄ちゃん知らないの？フリーパスだからどれに乗ってもタダなんだよ！」

「え？・・・ほんと・・・？」

なんてこった・・・オレ死んじゃうよぉ・・・

「有希、イヤだったら乗らなくてもいいんだぞ？　おれと麻衣だけで乗ってくるから。」

そんなのイヤだ・・・絶叫マシンには乗りたくないけど、オレだけ仲間はずれにされるのはもっとイヤだ・・・

「の・・乗るよ・・・兄さんが乗るんだったら・・・」

ジェットコースターも三井グリーンランドに負けないくらいスゴイのばっかりだ・・・フリーフォールも怖かったけど、まだジェットコースターよりマシな気がする・・・だって“ズンッ”てするのが一回だけだし・・・ジェットコースターは何回も上下するのがたまらないのだ・・・時間も長いし・・・

上から体を固定するハーネスが降りてくると、やっぱり手の平が汗ばんできた・・・オレは麻衣に聞こえないように兄さんに言った・・

・

「に・・兄さん・・・手・・・つないでいい・・・？」

オレがそう言うと、兄さんは何も言わずにオレの手を握ってくれた・・・汗でびっしょりなのがバレるのは恥ずかしいけど背に腹は替えられない・・・でも兄さんに手を握ってもらうと少し落ちついてきた・・・

オレは兄さんに手を握ってもらったせいか、なんとかジェットコースターもクリア出来た・・・いや・・もちろん平気だったというワケではなく・・・あくまでチビらなかったというだけの話だ・・・オレにはそれだけでも十分な進歩だと思う・・・

スペースワールドというだけあって宇宙関係のモノもいろいろあった。月の石なんてのも展示してあったが、見た所そこらの石ころと大差ない感じだ・・・ちょっとガッカリした・・・

もっともオレはアトラクションに乗るよりは、こういうのを見てる方がいい。でも麻衣はまだいろいろ乗るつもりらしい・・・なんか麻衣ってたくましいと思う・・・オレより男の子っぽいかも・・・

オレっていったい何なんだろう・・・こんな男の子っぽい恰好までして、それでも女の子みたいな気持ちが抜けないなんて・・・半年前までは普通の男の子だったのに、今ではあの頃の自分がどんなだったかさえ良く思い出せない。オレはもう男じゃないんだ・・・

「兄さん・・ち・・ちょっと・・トイレ行ってくる・・・」

オレはトイレに駆け込むと鏡の前で帽子を取った・・・髪をまとめる為のピンを外して髪をおろす・・・この半年でだいぶ長くなった髪がハラリと落ちていつものオレに戻る・・・オレってそんなに女っぽいだろうか・・・やっぱり自分じゃ良くわからない・・・ブラシがないから手櫛で整えた・・・こんなことなら化粧道具も持って

くれば良かった・・・

「お・・おまたせ・・・」

「どうしたんだ有希、もう男の子はやめたのか？」

「・・う・・うん・・・」

なんかバツが悪い・・・

「へ、へンじゃない？　この恰好にこんな髪型・・・」

「べつにへンじゃないだろう。テーマパークなんだ、軽装の女の子だっていっぱいいるよ。」

「・・そ・・そうだよね・・・」

顔が熱い・・・

「に・・兄さんって・・女の子とこういうとこ来るの・・・？」

「いや、ほとんど研究室にいるからなぁ。」

「じゃぁ・・彼女とかいないの？」

「全然いないよ。」

「そ・・そうなんだ・・・じゃ・・じゃぁ・・・オレ・・今日は・・・彼女のかわりしてあげよっか・・・」

オ・・オレ何言ってるんだ・・・？！

「い・・いや・・冗談だよ・・・冗談・・・」

オレどうかしてる・・・兄さんにこんなこと言ってしまうなんて・・・

「有希、言っただろう？　自分の気持ちに正直になればいいって。」

「・・・・」

「お前は女の子になるんだろう？　有希にとって必要ならおれは彼氏の役でも何でもやってやるよ。」

「・・ひっ！」

兄さんが手をオレの腰にまわしてオレの体を引き寄せた・・・恥ずかしいけど・・・離れられない・・・

「に・・兄さん・・・」

恥ずかしくて顔を上げられない・・・とても兄さんの顔を見れない・・・

「お兄ちゃんたち恋人どうしみたいだよ。」

「・・・・・！」

麻衣に見られていたなんて思わなかった・・・

「そ・・そんな・・・やめてよ・・・」

「お姉ちゃんはやっぱり女の子の方が似合うよ。」

「ううぅ・・・」

オレどんな顔すればいいのかわからない・・・

その後のことは何だか夢の中の出来事のようで良く憶えていない・・・兄さんも麻衣もオレと女の子として接してくれて、オレは幸せな時間をすごしたような記憶だけが残っていた・・・オレはお酒は飲んだことないけど、酔っぱらったらこんな感じなのだろうか・・・

帰りの車の中ではいつの間にか眠ってしまっていた。

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー

ー　ー

ー

16日・・・とうとう兄さんが大学に戻ってしまう日、かあさんは仕事、麻衣は学校の用事があってオレだけが送って行くことになってしまった・・・でも、これはオレにとっては好都合だった。

オレは兄さんを駅まで見送るためにお化粧をした・・・服も胸元がフリルで飾られた可愛らしいワンピースを選んだ・・・もう兄さ

んの前で男の子のふりをするのはやめたのだ・・・まだ兄さんに女言葉は使えないけど・・・

「ごめん・・待った・・？」

「いや、まだ十分時間あるよ。」

「そ・・そう・・・良かった・・・・」

オレのせいで遅れたらいけないから、今日はすごく急いで準備した。でもいざ、お洒落をして兄さんの前に出るとやっぱり恥ずかしい・・・

「それじゃ行くか。」

「・・う・・うん・・・」

兄さんはこんな女の子になってしまったオレなのに、昔と同じように接してくれた・・・それなのにオレときたら、女の子みたいにドキドキしたり、男の子でいようとしたり、ジタバタしたあげく結局は女の子に戻ってしまった・・・

新幹線のホームに着くとオレはソワソワしだした・・・兄さんに言いたいことがある・・・でもそんなこと言って嫌われたらどうしようという思いで、なかなか口に出せないでいた・・・

「有希、さっきから黙ってどうしたんだ？」

「・・・ん？・・・うん・・・・」

どうしよう・・・

「・・じ・・じつはね・・・兄さんに・・頼みたいことがあるんだけど・・・」

「何だ？」

「あ・・あの・・オレさぁ・・・オレもいつかは・・男の子と付合ったりしなきゃいけないと思うんだけど・・・でも・・オレ・・まだ怖いんだ・・・」

ほんとにこんなこと頼んでいいんだろうか・・・

「それでね・・兄さんが・・・オ・・オレに・・・キ・・キスしてくれないかなぁ・・・」
「キス？」
驚いてる・・・兄さんが驚くのも当り前だ・・・
「オ・・オレ・・一回キスすれば・・少しは自信がつくんじゃないかと思うんだ・・・けどこんなこと・・他に・・頼める人もいないし・・・」
それは嘘だ・・・オレはファーストキスの相手は兄さんがいいのだ・・・でも、まさかそんなこと言えない・・・
「・・あ・・でも・・やっぱりイヤだよね・・・兄弟でキスするなんて・・やっぱりヘンだよね・・・」
やっぱり気持ち悪いに決まってる・・・こんなこと言わなきゃよかった・・・軽蔑されたかも知れない・・・

「おれでいいのか？」
「え？」
「おれは別にかまわないけど、有希はおれなんかのキスでいいのか？　あまり上手くないと思うけどな。」
「う・・ううん・・・兄さんがいいんだ！」
あっ！本当のこと言っちゃった・・・
「わかったよ。」
兄さんが両手をオレの肩にそっと添えた・・・オレはもうドキドキどころじゃない・・・今にも心臓が止まりそうだ！　オレはギュッと目をつむった・・・変な顔になってないか気になる・・・オレひょっとこみたいな顔になってなければいいけど・・・

兄さんの顔が近づいてくる気配がする・・・もうすぐだ・・・そう思った時、オレのおでこに柔らかいものが触れた・・・
（そんな・・・そこじゃない・・・）
「兄さん・・ずるい・・・？！」

オレがそう言って目を開けた時、兄さんの顔が目の前にあった！
次の瞬間、兄さんの唇がオレの唇に重なる・・・オレの身体は電気が走ったみたいに痺れて硬直した・・・頭は真っ白で何も考えられなかった・・・・

兄さんが唇を離した時には、オレはヒザが折れてベンチへとへたり込んでしまった・・・

「じゃぁ、行くからな。」
発車の合図が鳴る。
「・・うん・・・」
兄さんが帰っちゃう・・・また当分会えないと思うと、もっといろいろ話せば良かったと今さら思う・・・
「有希、こんど白石先生から大事な話があると思うから、ちゃんと自分で考えて決断するんだぞ。」
「え？　兄さん先生に会ったの？」
「ああ、お前のことも頼んできたから、先生の言う事を良く聞くんだぞ。」
「・・うん・・わかった・・・」
「それじゃな。」
新幹線のドアが閉まる・・・オレは兄さんに手を振った・・・

列車が行ってしまうと、オレだけがホームに取り残された・・・
まだキスした時の頭の痺れが残っている・・・キスがこんなに強烈なものだなんて思いもしなかった・・・そしてこんなに幸せで・・・せつないものだなんて・・・

それにしても兄さん・・・先生と何話したんだろう・・・大事な話って・・・

しばらくホームに佇んでいたが、急に不安に襲われた・・・そういえばオレひとりなんだ・・・今まで兄さんと一緒だったから忘れていたけど・・これからひとりで家まで帰るのだと思うと、急に怖くなってきた。オレまだひとりじゃあまり出歩けないのに・・・

第５３話　大事な話　オレが決断しなきゃいけないこと

「ユウ大丈夫なの？」
「・・うん・・ごめんね・・急に来てもらって・・・」
オレは結局、博多駅からひとりで帰ることが出来ず、レナに助けを求めてしまったのだ・・・でもレナも天神にいたとかで、すぐに来てくれて助かった・・・
「それはいいんだけど、なんか泣きそうな声で電話してくるからビックリしたじゃない。」
「・・うん・・・」
「なんで一人で博多駅なんか行ったのよ。」
「・・ひとりじゃないぃ・・・兄さんを送って行ったんだ・・・」
「え？　お兄さんって、有友さんのこと？」
「うん。」
「有友さん帰ってたんだぁ・・会いたかったなぁ・・・」
「え？　なんで？」
「だって、有友さんってちょっとカッコイイじゃない？」
「・・・・！」
レナが兄さんのことそんな風に思ってたなんて知らなかった・・・
「・・そうなの？　だったら言えば良かったね・・・お盆の間帰ってきてたんだ・・・」
でもほとんど時間がなかったから、レナと会ってる時間なんてなかったと思う・・・それにレナと会ってたらオレたちとの時間がなくなっちゃう・・・！・・・オレってなんてイヤなやつなんだろう・・・レナはこうしてオレを助けに来てくれたのに、オレはレナに兄さんが来てること言わなくて良かったと思うなんて・・・オレはもっと優しい女の子になりたいのに・・・

「そういえばさあ、ユウ“ＮＡＮＡ”読んだの？」

「あ・・うん・・・読んだけど・・・」
「どうだった？　キュンとした？」
「・・う・・うん・・ちょっと・・・」
たしかにオレはハチには感情移入してしまったけど・・・作品自体にキュンときたかどうかは良くわからない・・・
「ちょっとなの？　ユウどこまで読んだ？」
「えっと・・・6巻かな・・・」
「え？！　まだ6巻なの？」
「・・だ・・だって・・・わたしにはちょっと強すぎるっていうか・・・あんなの読んだら女の子になるのが怖くなっちゃうょ・・・」
「・・だめだなぁ、ユウは。　まだまだ女の子じゃないんだね。」
「・・・・・」
「だって女の子なら絶対キュンとくるハズだもん。」
「・・・そうなの？」
「そうよ！　“ＮＡＮＡ”読んでキュンとこない女の子なんていないわよ！」
そりゃぁ、レナみたいなコならそうかもしれないけど・・・高校生の女の子がみんなレナみたいなワケじゃないのに・・・
「ユウいまお金持ってる？」
「・・うん・・そんなにたくさんじゃないけど・・・」
「じゃぁ帰りに天神で続きを買って行こうよ。」
「・・う・・うん・・・」
まさかわざわざ来てもらったのに、イヤだなんて言いにくい・・・お金持ってないって言えばよかったかな・・・

　オレたちは天神に着くと福ビルから地下に入って、天神コアの地下にある福家書店に行って“ＮＡＮＡ”の１０巻まで買った。レナにはもっと買えと言われたけど、オレはとりあえずここまでといい張った。かあさんにあずかってるお金だし、あんまりたくさ

ん使うのもどうかと思う・・使っていいとは言われてたけど・・・
マンガ買っていいかどうかは良くわからないし・・・

「そうだ！　ユウこんどの金曜日ヒマ？」
「金曜日？・・２２日だっけ・・・」
こんど白石先生のところに行くのは１９日だし・・・お盆で兄さんが帰ってくるから１週間とばしてもらったから、こんどの火曜は絶対いかなきゃいけない・・まさかその間に兄さんが先生と会ってたなんて思わなかったけど・・それに兄さんは先生から大事な話があるって言ってた・・・
「２２日なら大丈夫だと思うけど・・・」
「じゃぁ、２２日に決定ね。」
「え？　な・・なにが？」
「海の中道に行くのよ。ユウは花火の時のお詫びがしたいって言ってたじゃない。」
べつに“したい”とは言ってないと思うけど・・・でもたしかに“する”とは言った・・・
「・・・海の中道でなにするの・・・？」

海の中道〈うみのなかみち〉といえば博多湾を囲むように突き出ている細長いところだ・・その先の志賀島〈しかのしま〉とはあとほんの少しのところで途切れていて橋で渡れるようになっている。

「まあ・・マリンワールドとか・・行こうかと思って。」
「マリンワールド？！」
マリンワールドは海の中道にある水族館だ。イルカのショーとか見ることが出来る。ラッコもいたんだったっけ・・・マリンワールドで遊ぶんだったらお詫びどころか、こっちからお願いしたいくらいだ。やっぱりレナは怒ってなかったんだと知って嬉かった・・・お詫びになんて言いながら、こんな楽しい提案してくれるなんて！

「ありがとうレナ、わたしマリンワールド行きたかったんだぁ！」
「そうなの？それは良かったわ。きっと楽しくなるわよ！」
そう言って楽しそうに笑った・・・オレはレナの笑顔の意味なんて考えもしなかった・・・

ーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーー

「・・お・・おはようございます・・・」
オレは保健室のドアをそっと開けて中に入った・・・なんか大事な話なんて言われると身構えてしまう・・・
「おはよう有希ちゃん。待ってたわよ。」

「先生・・兄さんと会ったんでしょう？」
「ええ、お兄さんから何か聞いた？」
「い・・いえ・・・先生から大事な話があるとだけ・・・」
「そう・・・」
なんか先生も言いにくそうだ・・・その大事な話っていうのを、兄さんがオレにしてたら良かったと思っていたのかもしれない・・・
でも・・それじゃ・・そんなに重大なことなの・・・？

白石先生はしばらく何か考えていたけど、意を決したように話しはじめた・・・
「あのね、有希ちゃんに使ってる女性ホルモンのことなんだけど・・・」
「・・はい・・・」

「今は有希ちゃんの身体には男性ホルモンもたくさんあるから、それを打ち消すくらいの女性ホルモンを投与しているの。」
「・・・・・」
「でも、それは身体にとっては危険なことでもあるの。薬を大量に投与すると肝臓や腎臓に負担をかけてしまうし、それに、女性ホルモンの投与自体が肝臓の機能を低下させる副作用があるとも言われてる。血栓症や肺塞栓の危険もあるの。今のところ血液検査の結果は、有希ちゃんはまだそういうことは心配ないんだけど、もし肝機能に変化が現れたらホルモンの投与を中止しなくちゃいならなくなるかも知れないの。」
「・・・・！」
オレは女性ホルモンを打ってるからこんなに女の子の身体に近づいている・・・もし止めてしまったら、また元の男に戻るのだろうか・・・

「・・先生・・・わたしどうしたら良いんですか？」
オレはいまさら男には戻りたくない・・・いや・・完全に戻れるのならまた話は別だが、いま女性ホルモンを止めたとしても、もはや完全な男には戻れないと思う・・・
「有希ちゃんの身体に男性ホルモンがたくさんあるのは、今でも睾丸で作り続けているからなの。」
「・・こうがん・・・？」
“こうがん”ってキンタマのこと・・・？
「そう、それでね、もし睾丸を・・摘出することが出来れば、女性ホルモンの投与も今よりずっと少なくて済むのよ。」
“こうがん”を“てきしゅつ”？
「・・あ・・あの・・それって・・・キンタマを取っちゃうってことですか？」
「まあ、平たく言えばね・・・」
先生の顔が少し赤らんだのを見て、オレはしまったと思った・・・

オレはいま女の子なんだ・・・先生はオレが男だということは知ってるけど、先生はいつもオレのことを、ほとんど女の子として見ているみたいなのだ・・・そんなオレの口からキンタマなんて言葉が出たら、いくら先生でもやっぱり恥ずかしいに違いない・・・はしたない感じに思われちゃったかな・・・

「わたし・・その・・やっぱり取ったほうがいいんですか?」
「まあ、そうね。副作用が出る前に摘出するに越した事はないわ。」
「・・・・・」
たしかに今のオレにとってキンタマは必要ないモノかもしれない・・・でもいざ無くなるのかと思うと、なんか「どうぞ取ってください」とは言いにくい・・・それに・・・
「それって・・・手術するんですよね・・・」
オレ馬鹿な質問してるだろうか・・・? でも先生は真剣に答えてくれた。
「もちろん手術だけど、でもそんなに大変な手術じゃないわ。局部麻酔だから危険も少ないし。」
「・・きょくぶ麻酔・・・?」
「ええ、その部分にだけ麻酔をかけるから、意識が無くなったりしないのよ。」
「・・・・・」
どっちかといえば意識は無くなった方がいいんだけど・・・でも全身麻酔は死ぬこともあるって兄さんに聞いたことがある・・・やっぱり死ぬのはイヤだ・・・

「・・・カンタンですか?」
「え?」
「その手術って・・簡単なんですか?」
「そうね、手術のうちではごく簡単な方かしらね。なにしろ・・とび出てるところだから・・・」

「・・・します・・・」
「ん？」
「手術します。」
「いや、まだ決めなくていいのよ。今日は話しただけだから。家に帰ってご両親とも相談しないと・・・」
「もちろん相談しますけど、わたしは手術すると思います・・・だって・・もうわたしには・・必要ないモノですから・・・」
もう役にたたないくせに・・男性ホルモンは出し続けているのでは、たまったもんじゃない・・・

「お兄さんが言った通りね。」
「・・なにがですか？」
「有希ちゃんは自分で決断できるコだって言ってたから。」
「・・・兄さんが・・そんなこと・・・？」
オレは兄さんがそういう風に見てくれてると知って嬉しかった・・・
でも、その後のことで評価が変わってないと良いけど・・・オレは兄さんに、ずいぶんダメなところを見せてしまった気がする・・・
「お兄さんと、どうだった？　楽しかった？」
「・・・はい・・・」
先生は兄さんに何か聞いたのだろうか・・・
「お兄さんって優しそうな人じゃない。有希ちゃんはお兄さんみたいな人がタイプなんでしょう？」
「え？・・そんなこと・・・」
何で先生わかるんだろう・・・オレが兄さんを好きなこと・・・
「だってどことなく山上くんに似てるじゃない。」
・・・そうか・・・先生もそう思っただけなんだ・・・まさかオレが本当に兄さんのことが好きで・・・キスまでしてもらったなんて・・・そんなことわかるハズないもん・・・
「そ・・そんなに似てないですよ・・・少ししか・・・」
「でもお兄さんのこと好きなんでしょう？」

「・・はい・・・それは・・兄妹ですから・・・・」
兄弟としてではなく、兄妹としてなのはオレだけの秘密だ・・・

「手術をするとして、本当はもっと早く言っておけば、夏休みの間に手術出来たんだけど、今からじゃ二学期に入ってからになっちゃうみたいなの。」
そうか・・・それじゃ学校を休まなきゃいけないのか・・・オレはあまり休みたくないけど・・・
「それで思ったんだけど、有希ちゃんは体育祭は出たい？」
「体育祭？」

うちの学校は夏休みが終ったらすぐに体育祭の準備が始まるらしいのは聞いていた。たしかオレたちは一年生と三年生の時が体育祭で、二年生の時が学園祭だという話だった・・・オレは学園祭が２回の方が良かったが、こればかりは入学した年の巡り合わせなのでどうにもならない・・・
「体育祭がどうしたんですか？」
「有希ちゃんが体育祭やりたいんだったらアレだけど、もし出なくてもいいんだったら、その間に手術したらどうかと思ったのよ。それなら勉強にも影響が少ないでしょうし。」
「！」
それはオレにとっても好都合だ・・・オレは体育祭にはあまり乗り気じゃない・・・オレはもともと体育はそんなに得意じゃなかったけど、女の子になってからはまったく苦手になっていた・・・最初のころはなぜだかわからなかったけど、最近ではそれが女性ホルモンによって筋肉が少なくなってしまったせいらしいと気付いていた・・・筋肉が少なくなったのに以前を同じように動こうとするから、すぐにコケてしまったりするのだ・・・近頃ではドジっコみたいな

イメージまで付きはじめている・・・これじゃぁ、男だからスポーツは頑張らないようにと気を使っていたのがバカみたいだ・・・今じゃ頑張ってもなかなか女の子にさえかなわないシマツだ・・・女の子になったんだから良いようなものの、元は男のオレとしては何とも情けない話だ・・・

「わたし、体育祭は出なくてもいいです・・・あまり得意じゃないから・・・」
「そう？　それじゃその方向で考えましょう。」
「・・はい・・・」
でもオレ・・かあさんやとうさんに何て言おう・・・女の子になるのは許してくれたけど、さすがにキンタマを取っちゃうなんて許してくれるだろうか？　でも言うしかないんだ・・・

――――――――――――――
――――――――――――――
――――――――――

その日、かあさんが帰ってくると、とうさんも来てもらってふたりの部屋で話をした。麻衣にはまだ言わないつもりだ・・・こんな話、中学生の女の子には聞かせられない・・・

「そうか・・おれは別に反対する理由はないと思うが・・かあさんはどうだ？」
「わたしも有希が決断したのなら、その気持ちは尊重したいと思うけど・・こればかりは女のわたしには良くわからないわ。」
そうか・・・たしかにかあさんにはタマを取るのがどういうことかピンとこないかも知れない・・・

「そんなに大変な手術じゃないらしいんだ・・・入院しなくてもいいくらいらしいよ・・・」

なんかオレ・・手術したがってるように見えるかな・・・べつにオレは手術をしたいワケじゃない・・・オレはオカマでもニューハーフでもないから股間を女の子みたいにしたいとは思っていない・・・だけど副作用とかあるのなら・・どうせ有っても仕方がないのだから取っちゃった方がいいかな・・・と思ってるだけだ・・・

「とうさん・・・手術してもいい?」

「ああ、おれは構わんよ。もうお前は女なんだから好きなようにすればいい。」

そうはっきり言われると、ちょっと複雑な気持ちだ・・・突き放されたみたいな気もするけど・・・でも、これはとうさん流にオレのことを信頼してくれてるんだと思う・・・

「じゃぁ、こんど白石先生に言うね・・・手術するって・・・」

オレは正直、少しは反対されるかと思っていたから、賛成してくれてホッとした・・・ちょっと拍子抜けしたくらいだ・・・でもふたりがオレが女の子になることを認めてくれてると再確認できたような気がして嬉しくなった・・・

「どうしたんだ?　有希・・」

嬉しさに涙ぐむオレにとうさんが言った・・・オレ、悲しくて泣いてるように思われちゃったかな・・・

「・・うぅっ・・とうさんと・・かあさんが・・・わたしを信頼してくれてるのが・・嬉しくて・・・」

「なに言ってるの。わたしたちはいつも有希のこと信頼してるわよ。まあ、勉強に関しては少し心配だけどね。」

「・・うっ・・うん・・・」

そりゃそうだ・・・オレ・・女の子になるだけじゃなくて・・もっと勉強も頑張らなきゃいけない・・・だって、せっかく女の子になっても・・バカな女の子じゃ悲しい・・・

「わたし・・いろいろ頑張るから・・・頑張って素敵な女の子になるから・・・・」

本当にそうなれるかどうかはオレにもわからない・・・でも・・・それくらいの気持ちは持ってもいいんじゃないかと思った・・・

――――――――――――――――

――――――――――――――――

――――――――――

おまけ「ドラマ化を妄想してみる」

もし評価・感想のところを読んでくれてる人なら知ってるかもしれませんが（誰もが見れるところなので、どうしても書いている者としては、みんな読んでいるような気持ちになってしまうのですが、普通ああいうところは書込んだ人以外はそんなに読まないのではないかという気がします）この話では有希の顔の特徴などはわざと書かないようにしています。というか私自身、有希の顔を想像しないようにして書いています。

その理由としては、文章で人物の顔を表す場合、顔の輪郭、目鼻立ち、その他のパーツをいくら事細かに書いてみても、作者の頭の中にある顔を読者に伝えるのは不可能だと思うからです。簡単に伝える方法としては「芸能人の誰々に似ている」「誰と誰を足して２で割ったような」というようなのがありますが、それではその芸能人のイメージに引っ張られてしまいます。また細かな点を書けば書くほど読者のイメージを限定する結果になりかねません。

評価のところで「重要な人物は一人一人直ぐに外見の説明を入れるべき」とのご指摘を受けたこともあります。私もその方が親切だとは思うのですが、実際に有希の顔は説明のしようがないのです。そもそも男のころはちゃんと男に見えたのに、女になるとそこらの女の子よりも可愛いなんてありえません（笑）でも、もともと女の子によく間違えられるようなコだったというような設定にはしたくなかったのです。

こういうことが出来るのは文章だけだからであって、マンガなどでは見た目はまったく女の子にするしか方法がないので、たいてい自分のことをボクとかオレとか呼ばせることで読者に男であることを常に意識させなければなりません。

まあ、そいう事なので、ドラマにした時の主人公といっても、それが私が考える有希のイメージというワケではなく、あくまで元が男の子だったという感じが出せる人ということですのでお間違えなく。

この話が、例えばカツラを被って女になりすまし、時々男に戻るというような話であれば、多少無理はあっても男の子の役者を使いたいところなのですが（最近は女装男子もいますし・・・）この「オレは女子高生」の場合女の子になってからは、なりっぱなしなので、無理に男の役者を使う意味はあまりないと思う。

今の日本の女優で、元は男の子だったというような役が出来そうなのは「相武沙季」以外にはいない気がする。演技はそんなに上手くはないけど、こういう役は“それらしさ”が一番重要なので。

それにたどたどしい演技はあんがい有希っぽいかもしれない（笑）水泳をやってたらしいので体つきもしっかりしているし、こういう話の主人公としては少し高めに設定した１６３ｃｍという身長も、「相武沙季」は１６５ｃｍと有希より高いくらいで頼もしい（笑）男の子の時代は実際の男の子の体を使い、カット割りでそれっぽく

見せたい。ただ、だんだん女の子に近づくのは難しいかも知れない。いや、それ以前に女の子の胸はテレビじゃ映せないかな？いっそそういうのは見せずにやっても良いのでは？

「相武沙季」を使う場合、一番問題なのは年齢、どう考えても高校生役をやるには今がギリギリ限界だろう・・・

とまあ、こんな勝手な妄想をしているＡＴですが（笑）みなさんはどんなふうに妄想しているのでしょうか？そんな話も聞かせていただけると嬉しいです。

これまでのおまけの場所

３６話　制作おぼえがき　０８．６．２１

４０話　『オレは女子高生』の世界　人物、舞台設定など

４５話　架空の西鉄大牟田線案内

４９話　名前について

第５４話　罰　レナが考えたオレへの復讐

今日はレナとマリンワールドに行く約束の日・・・なぜかレナはうちまで迎えに来るという・・・オレは朝８時ごろからレナが来るのを待っていた。

レナが来たのは８時半になった頃。なんか大きなバッグを肩から下げている・・・レナは来るなりオレを引っ張って、オレの部屋に入った。

「ユウ、わたしが選んであげた服は？」

「え？」

オレはいきなりの事でワケがわからずうろたえた・・・

「最初に天神に行った時に買ったじゃない。あのショッキングピンクのヤツよ！」（２６話参照）

「あぁ・・あれ・・・」

オレは言われるままに洋服ダンスに掛けていた服を取り出した。

「どうするの？この服・・・」

「ユウが着るに決まってるでしょう。」

「え？」

オレは驚いた・・・だってこれは・・・

「これはレナが・・わたしがもっと自分に自信を持てたら着ればいいって・・・」

「そんなこと言った？」

「言ったよ！」

「もし言ったとしても、あれから３か月も経ってるじゃない。」

「・・うぅ・・・」

そんなに経ったっけ・・・？

「でも・・わたし・・まだ自信ないよ・・・」

「何言ってんの？　着なきゃ自信なんて持てるハズないじゃない！」
「・・・・・」
なんか言ってることが前と違う・・・

「とにかく着なさい。ほら！」
「ちょっと待ってよ・・・ほんとにこれじゃなきゃダメなの？」
「ダメよ！」
これは罰だ・・・そうに違いない・・・レナはやっぱり花火のことで怒ってたんだ・・・それでこんなの着せてオレに恥ずかしい思いをさせて復讐しようとしてるんだ・・・

「・・・わかったよ・・・着ればいいんでしょう？」
何でも言うことを聞くと言ったのはオレだ・・・イヤだけど・・・とても断われない・・・
「じゃぁ・・下で待っててよ・・・」
「いいじゃない女同士なんだから。更衣室にも一緒に入ったことあるから恥ずかしくないでしょう？」
「あれは・・レナが勝手に入ってきただけじゃない・・・」
いきなり入ってきたから・・・オレがもう女の子の身体なのも・・・ナプキンしてるのもバレちゃったんじゃないか・・・

オレは仕方なく肩ヒモが外せるタイプのブラを探してヒモを取った・・・
「・・・・・」
レナの前で裸になるなんてやっぱり恥ずかしい・・・でもレナは出て行く気はまったくないようだ・・・これも罰なのかも知れない・・・オレは出来るだけレナから胸が見えないように部屋着を脱いで、急いでブラを着けた。

しかし、モデルの撮影で似た服を着た経験があったのは有り難か

った。そうでなければこんな服、着こなすのにも苦労しただろう・・・モデルをやることは思ってたよりオレにとってプラスになるかもしれない・・・

3段にフレアーになった黒いスカートの腰を調節し、ヒラヒラがついた衿が肩まで開いたショッキングピンクのシャツの肩の位置を整えた・・・こういう服は着こなさなきゃカッコよく決まらない・・・

「どう？これでいい？」

オレは腰に片手を添えて撮影でやったようなポーズを取ってみせた。

「いいじゃない！　なかなか着こなせてる。ユウったら実はこっそり着てたんじゃないの？」

「そ・・そんなことないわよ・・・」

モデルのことはまだ言えない・・・でも雑誌が発売されたら、ＪＩＮＯＮはレナも見てるんだからバレてしまうかも知れない・・・いくらバッチリお化粧してるからオレに見えないといっても、いとこだったらオレだとバレないとも限らない・・・

「じゃぁ、次は化粧ね。」

そう言ってレナは自分のポーチから化粧品を取り出した。

「え？・・・お化粧なら自分でするわよ・・・」

こんな色っぽい服だからとレナに濃いお化粧されたらたまらない・・・それにどうせならいつも使ってる化粧品の方がいいし・・・

「ダメよ。今日は普通のお化粧じゃダメなのよ。」

「・・・どうして？」

「まだ言えない・・・」

「・・・・・」

レナのやつ・・・なんか企んでる・・・？

「あんまりケバいお化粧しちゃイヤだよ・・・」

「わかってるって。」

レナが持ってきた化粧品はオレが持ってるファンデーションより少

し厚塗りになるみたいだ・・・
「出来たわよ。別にケバくないでしょう?」
「・・うん・・・」
たしかにそんなに濃い化粧じゃない・・助かった・・・少しは気を使ってくれてるみたいだ・・・
「じゃぁ、行こう!」
「・・う・・うん・・・」
オレはマリンワールドに行くのには乗り気だったが、この恰好ではさすがにテンション下がっちゃう・・・こんな恰好じゃ目立ってしまいそうだ・・・これはかなりの罰ゲームに違いない・・・レナもヒドイこと考えてくれたものだ・・・

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー
ー　ー
ー

電車で天神につくと博多駅に行くために地下鉄に乗り換える・・・
オレが地下鉄の方に行こうとすると、レナがオレの手をつかんだ。
「ユウ、そっちじゃないよ。」
「え?　でも地下鉄じゃ・・・バスで行くの?」
「違うわよ、買わなきゃいけないものがあるの。」
「・・・なに買うの・・・?」
「来ればわかるわよ。」
なんか不敵な笑みだ・・・また何か企んでるのだろうか・・・
レナは天神コアのエスカレーターを上がっていく・・・いったい何を買うんだろう・・・
「ね・・ねぇ・・・買い物ならまたこんどすればいいじゃない・・・

」
「これから必要なものを買うのよ。」
「必要なもの？」
何だろう・・・水族館に必要なものって・・・イルカのショーとかで濡れるといけないからビニールの雨ガッパでも買うのかな？

「ここよ。」
「・・・・！」
そこは水着売場だった・・・ワンピースとかビキニとか色とりどりの女性物の水着が売られている・・・
「・・・なんで？　なんで水着なんか・・・マリンワールドに行くんじゃないの・・・？」
「もちろんマリンワールドにも行くわよ。でもその前に暑いから海浜公園にあるプールで遊んで行こうと思って。」
「・・そ・・そんな・・・無理よ・・・」
オレに女性物の水着なんて着れるワケないじゃないか！　そりゃぁオレの身体もだいぶ女の子っぽくなってきたけど、股間にはチンチンがあるし、まだタマも付いている・・・そんな状態で水着なんて・・・
「だいじょうぶよ。」
「だ・・大丈夫なワケないじゃない・・・だって・・わたし・・付いてるんだよ！」
「ユウは知らないんだろうけど、水着の股の部分って結構しっかりしてるのよ。女の子だって割れ目が見えたりしたら恥ずかしいんだから。それに下に水着用のサポーターも着ければ万全よ！ユウのなんか目立たないって！」
・・・そりゃぁ、オレのはそんなに大きくないし・・・女性ホルモンを使うようになってからは、すっかり縮んでしまったけど・・・
それでも・・・
「・・いくらわたしのが小さくても・・・見ればわかっちゃうよ・・

・」

「だいじょうぶだって！　女の子だってそこそこ“ふっくら”してるコもいるんだから。」

「そんなぁ・・・」

いくら女の子が“ふっくら”してたって・・・“もっこり”してるのとはレベルが違うんじゃないのかなぁ・・・？

「さあ、入るよ。」

レナは嫌がるオレを引っ張って店の中に入っていく・・・こんなところ・・いるだけでもいたたまれない・・・

「・・ビ・・ビキニはやめてよ・・・」

もう観念しているのが悲しい・・・でもオレはレナには元々かなわないし・・・今回はオレのお詫びでもあるから・・・お詫びに何でもするって言ってしまったから・・・せめて少しでもマシな状況を願うしかない・・・

「わかってるわよ。いくらわたしでもユウにビキニ着させるほどイジワルじゃないわ。」

「・・・・・！」

やっぱりオレ・・イジワルされてるんだ・・・

「ワンピースでも素敵なのいっぱいあるんだから。これなんか色っぽくていいんじゃない？」

そう言ってレナが手にとったのは黄色に大きなハイビスカスの柄がついた、背中が腰まで大きく開いた水着だった。

「・・こ・・こんなの無理よ・・・」

「そうね、ユウにはこんな大人っぽいのは似合わないわね。」

その水着をふたたび掛けたのでオレはホッとした。レナも少しはわかってくれてるようだ・・・

「ユウには大人っぽいのより、もっと可愛いのが似合いそうだもんね。」

・・・やっぱりわかってない・・・
「これがいいわ！これ着てみてよ。」
「・・・・・！」
それは今オレが着ている服よりもっと鮮やかな濃いめのピンクで、肩にかかる部分が無くて胸元がゆるいカーブを描いている・・・肩ヒモは白くて後ろでバッテンになっている・・・形だけみればスクール水着に近いかも知れないが、全体的なイメージはずっと女っぽい・・・
「・・だめよ・・・こんなの着れない・・・」
尻込みするオレだったが、レナはそんなこと気にもせず更衣室へと連れていく・・・
「さっさと着てみて。下にこれはくのよ。」
そう言って水着とサポーターを渡され、更衣室に押し込まれた・・・

オレは更衣室の中でひとり困りはてていた・・・しかし・・もはや観念するしかなさそうだ・・・それに実際に着て見せれば・・レナだってオレが女性物の水着を着るなんて無理だってわかってくれるかも知れないし・・・
オレはまずスカートとパンティーを脱いでサポーターをはいてみた・・・けっこうピッチリしている・・・
「・・・・・」
チンチンを股間に押し込んでみると思ったより“もっこり”しなかった・・・
上を脱いでブラを外し、水着を着る・・・肩ヒモをして、胸をカップの中に収めた・・・下からサポーターがはみ出ていないか確認する・・・大丈夫みたいだ・・・

「レ・・レナぁ・・・一応着たけど・・・」
オレはカーテンから顔だけ出すと、そこには店員もいて驚いた。
「どれ、見せて！」

レナがいきなりカーテンを開けたので、オレは慌てて両手で股間を隠した・・・店員さんにオレが男だとバレたらどうしようと焦った・・・

「いいじゃない！可愛いわよユウ。すっごく似合ってる！」

そしてオレの耳に口を近づけて、小さな声で言った・・・

「アソコも全然目立ってないわよ。」

「・・うぅ・・・」

それは良いことなのだろうか・・・女の子になったオレにとっては・・・タマも取っちゃう決心までしたオレにとっては良いことに違いない・・・でも水着を着ても目立たないなんて元男としてはちょっと悲しい・・・

店員さんが気付いていないかとチラッと見てみるが、別におかしな素振りは見せていない・・・オレが男だと気付かれていないのだろうか・・・

「ユウこれにしなさいよ。」

そしてまたオレの耳に近づいてこっそり言う・・・

「これにしなかったらビキニにしちゃうわよ。」

「・・そんなぁ・・・」

それじゃぁ、これに決めなきゃダメってことじゃないか・・・レナはさらに追い討ちをかけてくる・・・

「ねえ店員さん、彼女すごく似合ってますよねぇ。」

「ええ、お似合いですよ！」

・・・店員が似合わないなんて言うハズない・・・そう解っていても「お似合いです」なんて言われるとオレとしてはなんだか絶壁から突き落とされたような気持ちになってしまう・・・こんな気持ちになるのはオレの心の中にはまだ男の気持ちが残っているからなのだろうか・・・

「・・う・・うん・・・これにする・・・」

オレには選択権がない以上、もっとヒドイことにならないうちに手を打った方が利口だ・・・オレの気持ちなんてレナにはお見通しのようだし・・・

「うん、それがいいわよ！」

レナの笑顔が憎たらしい・・・オレの気持ちを知っててこんな罰を与えるなんて・・・

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

「ねえ・・ウソよね・・・？」

「なにが？」

「この水着着てプール入るなんて・・・買っただけなんでしょう？こんなの買わせて、わたしを恥ずかしがらせる罰だったんでしょう？」

「なに言ってんの？　水着買っただけじゃ意味ないじゃない。」

「・・・・・」

「もちろんプールに入るわよ。」

「・・だって・・タオルとか持ってきてないわよ・・・」

「ユウは心配しなくて大丈夫よ。わたしがちゃんと持ってるから。」

そう言ってレナは肩から下げてる大きなトートバッグを叩いてみせた・・・最初からそのつもりだったんだ・・・

「そのお化粧もウォータープルーフなのよ。」

「・・うぉーたーぷるーふ・・・？」

「水に入っても取れないやつ。だからそのままプールに入れるわよ。」

「・・・・・」

こりゃぁ、何がなんでもオレをプールに入れる気らしい・・・オレも腹をくくるしかないのか・・・

海の中道海浜公園は国営の公園だ・・・遊園地のようなものだが、せいぜい観覧車があるくらいで絶叫マシンとかはない、どちらかといえば自然や花壇の花とかを楽しむための家族で楽しめる公園だ・・・そんな施設の中にサンシャインプールがある・・・

外から見たプールは夏休みということもあり、かなりの混みぐあいに見える・・・この公園の性格上、家族連れがほとんどのようで、カップルとかナンパ目的の男の子は少ないみたいだ・・・それはオレにとっては幸いなことだが、逆に派手な水着を着た女子高生のオレたちが目立ってしまうのではないかという心配もある・・・

「レナぁ・・やっぱりやめようぉ・・・絶対バレるって・・・」
オレは最後の抵抗を試みてみた・・・だってもし女性の更衣室で男だとバレたら・・・オカマだと思われるならまだしも、変態や痴漢と間違われたら大変だ・・・女性の更衣室をのぞくために女の子のふりをしてたなんて思われたら・・オレ立ち直れない・・・・
「なに言ってんの、ユウが男だとバレるハズないじゃない。」
「・・な・・なんでよ・・・」
「だって、ユウは女の子の中でもかなり可愛い方なんだから、もっと自信持ちなさい！」
レナはそう言ってオレの背中を“バシッ”と叩いた。
「イタッ・・・」
これって頑張れという意味なんだろうか・・・自分でこんなヒドイことしてるくせに・・・

女子更衣室の中も子供とお母さんでいっぱいだ・・・なかには中

学生くらいの女の子もいるが、高校生らしき人はいなかった・・・
こんなところで絶対男だとバレることは出来ない・・・オレに出来ることは、できるだけ女らしく振るまうことくらいだ・・・

「ひゃっ！」
ロッカーに荷物を入れていると、急に足にさわられてオレは思わず声を上げてしまった・・・野太い声にならなくて良かった・・・見ると小さな男の子がオレの足にしがみついている・・・オレの声で気づいたお母さんらしき人が慌ててやってきた・・・
「あっ・・ごめんなさいね、この子すぐきれいなお姉さんになついちゃうんです・・・」
引き離そうとするが、男の子はオレの片足にしがみついて離れようとしない・・・オレは男の子の頭をなでて言った・・・
「ごめんね、お姉ちゃん着替えなきゃいけないの。離してね？」
すると男の子は納得してくれたのか、やっとオレから離れてくれた。
「ありがとう。」
オレが言うと男の子は恥ずかしそうにお母さんの影に隠れてしまった。

「あぁ・・びっくりした・・・」
親子が行ってしまうとオレはホッとした・・・どうやらお母さんにも男の子にもオレが男だとバレなかったみたいだ・・・
「ユウもやるじゃない。あの男の子ユウに惚れちゃったかもね。」
「な・・なにワケわかんないこと・・・」
オレが男だとバレなかったとしても、オレに惚れるハズないじゃないか・・・レナったら、なにかといえばオレを女っぽい方に持っていこうとするんだから・・・

オレはカーテンの中で水着に着替えた・・・しっかりとサポーターの中に入れ込んでいるせいか、オレの股間は全然目立たない・・・こんなに目立たなくなるものなのか・・・？　これはオレのがすごく小さいってことなのだろうか・・・まあ、いまとなっては大きくなくて良かったかもしれないけど・・・男だったら彼女が出来た時にガッカリされたかも・・・

「ユウ！着替えた？」

レナに声をかけられて我に返り恥ずかしくなった・・・オレなんて想像をしちゃったんだろう・・・それに・・・彼女とHしてる想像のオレがなんで女なんだろう・・・オレ自分でもワケわからなくなってるのかな・・・

オレはカーテンを開けて出ていった。

「ねえレナ、本当におかしくない？」

恥ずかしくて足が震える・・・

「バッチリよ。」

「うしろ・・サポーターはみ出てない？」

「だいじょぶ、ユウ可愛い！　なんか可愛すぎてイジワルしたくなっちゃう。」

「キャッ！！」

急にレナに胸をつかまれてオレは両手で胸を押さえて屈み込んだ・・・良く胸が大きなクラスメイトがこういうことやられてるのは見たことがあるけど、オレがやられたのは初めてだ・・・

「・・うぅ・・・やさしくしてょ・・・」

いまでも十分イジワルなのに・・・これ以上イジワルされたら・・・

オレ泣いちゃいそうだ・・・

「ほら、こっち来て、座って。」

オレはレナにベンチに座らせれると、背中を向けるように言われた・・・

「な・・なにするの・・・？」
「プール入るのに、こんなに長くちゃ邪魔でしょう？」
そう言ってレナはオレの髪の毛をまとめてくれた・・・両側に丸くまとめた髪型は何だか中国娘みたいだ・・・恥ずかしいな・・・こんなのオレに似合うのかなぁ・・・

プールサイドに出てみると、やはり家族連れでいっぱいでオレは足がすくんでしまった・・・
「ユウ、なにしてんの！」
レナに引っ張られ太陽の下に出ていく・・・こうなったら早く水に入った方が安心できそうだ・・・
レナは白いビキニだ・・・オレもいつかはこんなの着れるようになるのだろうか・・・プールサイドを歩くと人の目が気になる・・・なんかやたらお父さんに見られてる気がする・・・こんな鮮やかな色の水着じゃあたりまえか・・・

プールに入ると少し緊張も解けてきた・・・やっぱり股間が見えないだけでだいぶ違う・・・久しぶりにプールに入ったから泳ぎたい気分だったが、アナウンスで飛び込んだり、クロールしたり、潜水したりしてはいけないと言っている・・・たしかにこんなに混んでいたら危ないかもしれないが、それじゃお風呂と大差ない気がする・・・オレは水泳はスポーツで唯一けっこう得意なのに、クロールや潜水出来ないんじゃストレスたまっちゃう・・・

ふと少し離れたところに浮き輪で浮いている子供が目についた・・・さっきオレに抱きついてきた男の子だ・・・あたりには、あのお母さんも、お父さんらしい人もいない・・・ひとりで大丈夫なのだろうか・・・でもたぶんプールサイドから見てるんだろう・・・レナが変なこと言うからなんか気になっちゃう・・・男の子はオレと

目が合うと手を振っている・・・さっき抱きついたのがオレだとわかってるみたいだ。

しばらくプールに入っていると、なんだか水着も気にならなくなってきた。こんなに混んでいたらオレのこと見てる人なんていないと思う。オレとレナはけっこう楽しく過ごしていた・・・暑いから水の中は気持ちがいい！　これでいっぱい泳げれば最高なんだけどな・・・

「あれ？」
「どうしたの？　ユウ。」
「男の子がいない・・・」
「だれ？」
「わたしに抱きついた子・・さっきまでいたのに・・・」
「もう上がったんじゃないの？」
そうだろうか・・・でも・・・なんかヘンだ・・・

「！」
浮き輪？・・・浮き輪が浮いてる・・・裏返し・・・？　その時オレの脳裏に昔の記憶らしきものが蘇ってきた・・・オレ浮き輪で遊んでて溺れたことがある・・・？
「レナ！監視員呼んできて！」
オレはそう言うなり一気に水の中に潜った・・・たくさんの足が重なっている・・・その先に・・・オレは夢中でプールの底に沈んでいる男の子の方へ向って泳いでいった。目は開けているが虚ろで意識はないようだ・・・全然動かない・・・

オレが男の子を水面に抱え上げた時には、もう監視員の人が来てくれていて、オレから受け取った男の子をプールサイドへと引き上

げた・・・

プールサイドにはすぐに人だかりが出来て、オレたちは人垣のすき間から、監視員が人工呼吸するのをみていた・・・慌てて駆けつけたお母さんが大きな声で男の子の名前を叫んでいる・・・

「・・大丈夫かなぁ・・・」

心配して見ていると、男の子は咳をして水を吐き出した・・・どうやら助かったようだ・・・たぶん溺れて間がないハズだから、もう心配ないだろう。

そうだ・・オレこんなところにいたらダメだ・・・

「レナ、行こう！」

「え？」

オレはレナの手をとって急いで更衣室へ戻った。あんなところにいて誰が助けたとかいう話になったら大変だ・・・ただでさえ他人に注目なんかされたくないのに、こんな水着を着た状態で注目されてしまったら・・・オレまた緊張して漏らしちゃうかもしれない・・・そんなことになったらお漏らし女子高生として有名になってしまう・・・いや、それならまだマシな方かもしれない・・・男なのに女の子の水着を着て、そのうえお漏らしなんてことになったら完全に変態だ！

「早く着替えて！」

「なんでそんなに急いでるのよ。」

「もう・・いまのところはまだ、わたしが男だってバレてないみたいだけど、注目されたらバレるかも知れないでしょう？」

「・・そうか・・そこまで考えなかった・・・ユウってそういうことには気が回るのね。」

「バレないように必死なのよ！」

オレが必死にバレないようにしてるから、いまだに女の子として生活していけてるんじゃないか・・・

でもレナもやっと事態の深刻さをわかってくれたようで、オレたちは急いで着替えてプールを出た。

――――――――――――――――

――――――――――――――――

――――――――――――――――

――――――――――――――――

――――――――――――――――

――――――――――――――――

――――――――――――――――

――――――――――――――――

――――――――――――――――

――――――――――――――――

「でもユウのこと見直したわ。」

「え？　なんで？」

「だって、男の子が溺れてるのに気づいて、すぐに助けに行ったじゃない。」

「あぁ・・べつに大したことじゃないよ、水泳得意だし・・・どっちみち監視員の人がすぐ来てくれなかったら、わたし人工呼吸とか出来なかっただろうし・・・」

「でもスゴイよ！カッコよかった。」

「・・・・・」

男のころなら“カッコいい”って言われたら嬉しかったかも知れないけど、女の子になった今では“カッコ良さ”はあまり重要じゃない気がする・・・

オレたちはその後、マリンワールドに行ってイルカのショーを見たり、ラッコがエサを食べるのを見たりして過ごした。

オレはあんな水着を着させられた後のせいか、色っぽい服もそんなに気にならなかった。

罰だったのかも知れないけど、救助したりしたけど、結果的には

楽しかったと思う・・・

　それにしても気になるのは、男の子がいないのに気づいた時にオレの脳裏に蘇ってきた記憶だ・・・あれはいったい、いつの記憶なのだろう・・・かなり小さいころのような気がするが、なにしろオレは溺れていたから何が何だかわからない・・・プールではない気がするが・・・海なのだろうか・・・オレの記憶では小さいころに海で泳いだことはないけど・・・

「どうしたの？　ユウ・・・」

「・・ん・・いや・・何でもないよ・・・」

でも・・レナはオレが忘れていることも知っているのだから、もしかしたら溺れたときに一緒にいたかも・・・

「ねえレナ、もしかして、わたしが小さいとき溺れたの知ってる？」

「・・・ううん、知らない。」

「そう・・・」

「なに？　どうしたの？」

「いや・・プールで男の子が溺れてるって思ったとき、わたし溺れたことあるような気がしたのよ。」

「昔のこと思い出したの？」

「ううん・・わからない・・・気のせいかも・・・」

でも、あの溺れた苦しさを伴った記憶が、オレの思い違いだとは、どうしても思えなかった。

――――――――――――――

――――――――――――――

―――――――――

オレは夕飯のあと、かあさんに聞いてみた。オレがもし溺れていたら、かあさんが知らないワケがない・・・

「ねえ、かあさん・・・わたし小さいころ、海かどこかで溺れたことある？」

「え？　有希は溺れたことなんかないと思うけど？」

「・・そう・・・」

「どうかしたの？」

「・・今日ね・・・昔のこと思い出したような気がしたんだ・・・なんか・・溺れたことがあるみたいな気がして・・・」

「そうなの？」

「・・でも・・気のせいかも・・・だってもしわたしが溺れてたら、かあさんが知らないハズないもの。」

「まあ、そうね。」

せっかく昔のことを思い出したと思ったのに・・・ちょっと残念・・・でも・・オレは昔のことを思い出すのが少し怖い・・・だって・・もし思い出したとき、それが今のオレを変えるほどの記憶だったりしたら・・・オレはどうすればいいのかわからない・・・

だからオレは残念に思ったと同時に・・少しホッとしたのだった。

第５５話　二学期　新学期そうそう問題が！

「おはよう有希！」
「あ、おはよう！」
登校中のオレの肩をたたいたのは千里だった。千里とは前から仲が良かったが、読者モデルをやるようになってからは、以前よりずっと仲良くなった気がする。それは秘密を共有しているということも関係しているかも知れない・・・

「ねえ有希、二学期始まったらすぐに体育祭の準備が始まるって知ってた？　まだ暑いのにね。」
「・・うん・・・」
でもオレは体育祭には出ないことになっている・・・その間に手術するからだ・・・でもまさか本当のことなんか言えるハズない・・・それに、まだどういう理由にするかも決めていないから、オレは何と言っていいかわからない・・・ヘタなことは言えないのだ。

「なんかポールダンスっていうのやるらしいわよ。」
「ポールダンス？」
ポールダンスって・・あのポールにつかまりながらセクシーに踊るやつだろうか・・・でも女子校の体育祭であんなダンスするとは思えないし・・・
「ポールダンスってどんなの？」
「わたしも良く知らないんだけど、高いポールからリボンみたいのが垂れてて、それをみんなで編んでいくみたいよ。」
「・・ふ～ん・・・」
なんかさっぱりわからない・・・

「でも、有希ちょっと焼けたね。」

「あ・・うん・・・ちょっとね・・・」
プールに行ったからなんだけど、そんなこと言ったら水泳の授業を休みにくくなりそうだ・・・まだ1回だけ水泳の授業があるけど、オレはもちろん休むつもりだ。レナとプールに行った時は運良くバレなかったけど、学校でクラスメイトの前で水着になるなんて、いくらなんでもヤバすぎる。
「このまえ海の中道に行ったから、少し焼けたかも・・・」
「海の中道？　何しに？」
「あ、水族館とか・・・」
「え？　水族館で焼けたの？」
「いや・・あの・・水族館に行く前に海浜公園でちょっとウロウロしたのよ・・・」
オレってウソが下手だなぁ・・・つくづく思う・・・

校門の前では新学期そうそう服装検査をしていた・・・夏休み開けで服装が乱れていないかチェックしているのだろう・・・でもオレはまったく変わっていないし、そもそも服装を乱そうなんて考えはないから心配ない。

オレたちは挨拶をしてそのまま行こうとしたのだが、なぜかオレだけ長山鏡子〈ながやま　きょうこ〉先生に呼び止められてしまった。
「戸田さん、あなた髪は伸ばしてらっしゃるの？」
「あ・・はい・・・」
オレはそろそろ切ろうかと思っていたのだが、編集長の佐々木さんにしばらく切らないように言われてしまったのだ・・・でもオレはちゃんとお下げにしているし・・・何か問題があるのだろうか・・・
「まあ、校則にはっきりした決まりはないですが、それ以上伸ばすのなら三つ編みにした方がいいんじゃないかしら？　あまり長いお

下げはみっともないですよ。」
「・・は・・はい・・・」
でもオレ・・・三つ編みなんて出来ない・・・お下げだってやっと上手に出来るようになってきたばかりなのに・・・

「どうしよう・・・」
「どうしたの？　有希。」
「わたし、三つ編み出来ないんだ・・・」
「あ！そっか・・有希お下げも苦手だったもんね。」（２１、２５話参照）
「う・・うん・・・」
「わたしも三つ編みはやったことないなぁ・・・だれかに教えてもらったら？」
「・・うん・・・」
でも・・・そんなにすぐに上手に出来るとは思えないし・・・かあさんも最近は忙しいみたいだから、毎朝やってもらうのも気が引ける・・・

今日は始業式だけで授業はなかったから、放課後オレは職員室に向った。
「失礼します。」
オレは職員室に入ると長山先生のところに行った。
「あ・・あの・・先生・・・」
「あら？　戸田さん、どうなさったの？」
なんか長山先生ってちょっと怖いイメージがあるから緊張する・・・
「・・あの・・今朝、先生に髪を三つ編みにするようにって言われたんですけど・・・」
「ええ。」
「・・わたし・・三つ編み出来ないんです・・・」

「あら？　そうなの？」
「はい・・ずっと髪の毛は短かったから・・・実は・・お下げもやっと上手に出来るようになったばかりで・・・最近まで、おかしな時は母に直してもらったりしてたんです・・・」
「そうなの・・・それで？」
「それで・・あの・・三つ編みのやり方教えて頂けないかと・・・」
「なんだ、そんなことなの？　もちろんよろしいわよ。」

「それじゃ、まず先生がやってみましょうか？」
「あ・・はい・・お願いします・・・」
オレは髪をまとめてもらう時に左右に細い三つ編みを作ったことはあったけど、お下げを三つ編みにするのは初めてだ・・・どんな感じになるかドキドキする・・・似合わなかったらどうしよう・・・

先生はオレの髪をほどいてきれいに梳かしていく・・・
「戸田さんは真直ぐで綺麗な髪してるわね。」
「そ・・そんなこと・・・」
真ん中から分けた髪を、さらに3つに分けて、手際良く編んでいく・・・あまり親しくない長山先生に面と向ってやられるとかなり照れる・・・
「どうかしら？　先生は似合ってると思うけど。」
「は・・はい・・・」
髪を三つ編みにしたオレは、なんか昔の女子高生みたいだ・・・でもそんなに変じゃないかも・・・
「あなたは近頃の若い娘ではめずらしくお淑やかな雰囲気を持ってらっしゃるから、三つ編みも可愛らしくて良いと思うわよ。」
「・・・・・」
お淑やかなんて・・・そんな風に言われると恥ずかしくて顔が赤くなっちゃいそうだ・・・

「それじゃ、練習してみましょうか。」
「あ・・はい・・・」
先生はイスの背に3本のヒモをくくりつけて、三つ編みのやり方を教えてくれた。いくつかやり方があるらしいが、一番普通の方法を教えてもらった。　3本のヒモを並べて、右の1本を真ん中と左の間に入れる・・・そしてこんどは左のヒモを真ん中と右の間に入れる・・・見てると案外簡単そうだ・・・
「やってごらんなさい。」
「・・はい・・・」
しかし、いざやってみるとそんなに簡単ではなかった。
「あ、下からもってきてはダメよ。常に上から持ってこないと。」
「・・はぃ・・・」
上から・・上から・・注意しながらやってみる・・・あれ・・・？・・なんかヘンだ・・・
「2回同じ側から持ってきちゃダメでしょう?」
「あ・・はぃ・・・」
思いの他むずかしい・・・

何度かやっているうちに、なんとか出来るようになってきたが、出来上がりは先生がやったようには綺麗じゃなかった・・・先生がやると綺麗に整っているのに、オレがやると網目が不揃いだし、なんだかヨレヨレだ・・・
「常に同じ強さで編まないとそうなってしまうのよ。それにもっと丁寧に編まないといけないわね。」
「・・は・・はぁ・・・」
「髪を編むにはまだ時間がかかりそうですね。」
「・・・・・」
なんか情けなくなってくる・・・
「わかりました。それじゃ、しばらくヒモで練習しなさい。そして上手に出来るようになったら髪を編みましょう。それまでは今のま

までいいわ。」
「え?」
「三つ編みが上手に出来るようになるまで、お下げのままでいいですよ。」
「あ・・ありがとうございます・・・」
それは助かった・・・でもちゃんと練習して出来るだけ早く三つ編みできるようにならなくちゃ・・・

「そういえば、戸田さんは茶道も習ってるんですって?」
「い・・いえ・・習ってるっていうか・・お手伝いするついでに教えていただいてるだけで・・・」
「なぜ茶道部に入らなかったの?」
長山先生は茶道部の顧問だからこんなことを聞くのだろうか・・・?
「はぁ・・あの頃はまだ習うことは決めてたんですけど・・実際に習ってなかったので・・流派とか違うといけないと思って・・・それに華道も習いたかったですし・・・」
「そうなの。どなたに習ってらっしゃるのかしら?」
「中学の時の家庭科の先生で・・・わたしの恩師なんです。」
「・・・戸田さんはどこの中学だった?」
「春日二中です・・・」
「え? 春日二中の家庭科の先生っていえば・・三吉さんじゃなかったかしら?」
「・・はい・・そうです・・三吉先生をご存知なんですか?」
「ええ、三吉さんとは同じ先生に習った仲なのよ。」
「え?! そうなんですか・・・?」
オレは驚いた・・・三吉先生と長山先生が知り合いだったなんて・・・

「三吉さんとはだいぶ会ってないけど・・お元気かしら?」
「はい! ついこの前も習いに行ったばかりです。」

「そう、それは良かったわ。・・・でも・・・えっと・・・どう言ったらいいのかしら・・・戸田さんは・・中学のころは男の子だったんでしょう？」
「あっ・・は・・はい・・・」
「でもさっき恩師と言わなかったかしら？」
「・・は・・はい・・・」
「男の子なのに三吉さんに習ってらっしゃったの？」
「あっ・・」
そういうことか・・・

「あの・・わたし・・心は女だったんですけど・・ずっと男として生活してきたから、やっぱり女の子らしく出来なくて・・・それで高校生になる前に、三吉先生にいろいろ教えていただいたんです。」
「まあ、そうだったの・・・どうりでしっかりした躾けが出来ていると思ったわ。」
たしかに三吉先生にはそうとう躾けられたけど・・・でもおかげでこうして女の子として生活していけてるのだからオレはすごく感謝しているのだ・・・
「先生ね、戸田さんのこと本当は男の子だと聞いていたから、どんな子なのかと思ってたら、女性らしくて他の子たちにも溶け込んでるから感心していたのよ。」
「え？！　・・そうなんですか？」
まさか長山先生がオレのことをそんな風に見ていたなんて思いもしなかった・・・ひとの考えてることなんて話してみないとわからないものだ・・・
「でも・・わたし、それほど女性らしくないです・・・ただ仕草とかしゃべり方で女性らしく見せてるだけで・・・」
「いいえ、そんなことないわ。仕草やしゃべり方は重要ですよ。自分では見せてるだけだと思っていても、真面目にやっていれば、ちゃんと身になっていくものです。」

「・・そ・・そういうものでしょうか・・・」
オレにはどうも良くわからない・・・オレのやっていることとの先に・・本当の女の子があるのかどうか・・・このままで本当に女の子になれるのかどうか・・・
「・・わたし・・内面ももっと女の子らしくなりたいと思うんですけど・・・どうすればいいのか良くわからないんです・・・」
「先生は性同一性障害ってどういうものか良くわからないけど、あなたはそのままで良いんじゃないかしら？」
「そのまま・・？」
「人間って急には変われないものよ。それに戸田さんを見てると変わる必要はないように思うけど？」
「・・・・」
「戸田さんは男だからとか女だからではなく、あなた自身が魅力的なのよ。それを自分で解ってないだけだと思うわよ。」
「・・・・」
「あえて直すところがあるとすれば、オドオドしたところは良くないですね。もっとしっかりしなくては。」
「・・は・・はい・・・」
でも・・オレが魅力的なんて・・・そんなことないと思うけど・・・長山先生がオレにお世辞言うとも思えないし・・・
「心配しなくても、あなたはちゃんと成長していると思いますよ。女性としてだけでなく、ひとりの人間としてもね。」

ーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーー

「あれ？　有希じゃない。どうしたのよ、三つ編みなんかして。」
部室に寄ったら長谷川も来ていた・・・
「一瞬だれかと思ったわよ。」
「・・へ・・ヘンかな・・・？」
「ううん、可愛いわよ。」
いや・・別に可愛くなくても良いんだけど・・・

「ほんと・・戸田さん可愛い！」
「うわっ！・・い・・井川さん・・いたの・・・？」
井川聡子〈いがわ　さとこ〉は存在感がないから、居るのに気づかない時が良くある・・・急に現れるから心臓に悪い・・・（２９話参照）長谷川とは秘密の話も多いのに・・・
「戸田さんって、どんな恰好でも似合うから羨ましいです。」
「・・そ・・そう・・・？」
井川聡子と話していると、どうも調子が狂ってしまう・・・オレはどっちかといえば苦手なタイプだ・・・
「自分でやったんですか？」
「い・・いや・・長山先生にやってもらったんだけど・・・」
「長山先生？」長谷川が驚いたように言った。
「なんで長山先生なんかにやってもらったの？」
「いや・・髪が長くなったから、三つ編みにしなさいって言われたんだけど・・・三つ編みなんて出来ないから・・・習いに行ったのよ。」
「へ～・・・大変ねぇ。」
「あ・・でも、ヒモで練習して、上手に出来るようになってからで良いって言ってくれたから・・・長山先生ってけっこう良い人よ。」

「早く三つ編み出来るようになって下さいね。」
「え？　なんで・・・？」
「だって戸田さんが三つ編みやってる姿なんて・・想像しただけで

ワクワクしちゃいます。」
「・・や・・やめてよ・・井川さん・・・」
井川さんったら・・・いったいどんな想像してるんだろう・・・
「でも有希もどんどん女子力が上がっていくわね。」
長谷川がニヤニヤしながら言った・・・
「・・・・」
長谷川は、オレが長谷川と井川の両方がいるところでしゃべるのが苦手なのを知ってるようで、すぐにこういうイジワルな言い方をしてくる・・・きっとオレが困るのを楽しんでるに違いない・・・

―――――――――――――――
―――――――――――――――
――――――――――

次の日から体育祭の練習が始まった。オレは出ないのだから練習もやらなくていいかと思ったが、どうもそうはいかないみたいだ・・・白石先生と話したのだが、突然親戚のお葬式とかで休むことになったのだ。最初は盲腸か何かの手術をすることにしようかと計画していたが、それだと傷がないのを見られてもマズいので、手術するというのは止めようということになったのだ。おかげで、オレは体育祭の直前まで練習しなきゃいけなくなってしまった・・・

体操服に着替えるため、スカートを脱いでエンジ色のブルマーをはく・・・オレは体育の日は必ずガードルをはくことにしている・・・それは股間の膨らみを隠すためだ・・・オレのがいくら小さいからといっても、ブルマーは生地が柔らかいから膨らみが目立たないか心配なのだ・・・

夏服のセーラー服の白い上着を脱いで、体操着を着ようとすると、急に岡本に声をかけられた。
「有希、プール行ったの？」
「え？！」
オレは驚いた・・・プールの話なんてしなかったのに・・・
「な・・なんで？」
「だって、背中に水着の跡がついてるよ。白い跡がバッテンになってる。」
「！」
気づかなかった・・・考えてみれば焼けてるのだから、水着の跡がついていても全然不思議じゃない・・・オレはなんでそんなことに気づかなかったのだろう・・・
「有希は水泳が苦手なのかと思ってた。」
「・・そ・・そんなことないけど・・・」
「じゃぁ、こんどのプールは出るんでしょう？」
「えっ・・・それは・・・」
えらいことになってしまった・・・水着の跡を見られては、いまさら泳げないとは言いにくい・・・
「・・う・・うん・・・泳げないことはないんだけど・・・」
「楽しみ！有希の水着見たかったんだぁ！」
・・・なんで・・・どいつもこいつも・・・オレに興味津々なんだよ・・・どうしよう・・・スクール水着なんて着れないし・・・そもそもそんなの持ってない・・・

「それではポールのリボンを持ったら赤と白交互に並んでください！絡まっていたらちゃんとほどいてね！」
うちのクラスの担任の山口智佳〈やまぐち　ともか〉先生がメガホンで指示を与える・・・オレたちは言われるまま、真ん中に立てた

ペンキで白く塗られた高いポールのテッペンから垂れた紅白のリボンを持つと、ポールを中心に円になって広がった。
「赤のリボンを持った人は時計回り、白の人は逆に進みます！」
オレたちは紅白のリボンを持った者どうしで向かい合うかたちになった。
「それじゃ、まず赤のリボンを白の人がくぐって下さい！　くぐったら今度は逆に白のリボンを赤の人がくぐります！」

ポールダンスというのは、正確には『メイ・ポールダンス』というヨーロッパのお祭りの時にやるダンスの事だった。5月にやるから『メイ・ポールダンス』というらしい・・・やっぱりあのセクシーなダンスじゃなかった・・・当たり前か・・・

オレたちは言われるまま手を上げたり下げたりして踊りながら、前から来る人をくぐっては、今度は自分が手を上げて下を通すというのを繰り返す・・・するといつの間にかポールに巻き付いていく紅白のリボンが綺麗に編み込まれていた・・・なんとなく三つ編みに似てるかもしれない・・・なんか楽しい・・・！

「それでは今と逆に動いてリボンをほどいて下さい！　次は本番と同じ音楽を流してやってみます！」

「なんかポールダンスなんてかったるいよねぇ。」
「・・う・・うん・・・」
着替えの時、オレは岡本に言われてそう答えたが、実はけっこう楽しくて、本番でやれないのを少し残念に感じていた。女子校の体育祭ってどんなのか知らなかったが、メイポールやフォークダンスや、どうやら競技というよりは見せるものが多いみたいだ・・・こうい

うのならオレもやりたかったかも・・・でも体育祭の日はオレは手術で休まなきゃいけない・・・

こんなにみんなで練習してるのに、急にオレだけ抜けるのも気が引ける・・・みんなに迷惑かけなきゃいいけど・・・

でもそんなことより、オレにとってはもっと大きな問題が・・・

「有希どうしたの？　なんか元気ないね。」

「・・そ・・そんなことないよ！」

千里に聞かれてオレは慌てて笑顔を作った・・・

「心配なことあるんだったら、わたしに相談してね。」

「・・う・・うん・・・本当に何でもないの。」

千里の気持ちは嬉しいが、これぱかりは相談できる問題ではない・・・いったいどうすればいいのだろうか・・・プールの日はあさってなのに・・・

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

「はぁ～・・・」

何度もため息が出てしまう・・・中庭のベンチで牛乳を片手にカレーパンを食べながら、何とか妙案はないものかと考えていたのだが、いくら考えても良い案など浮ぶハズもない・・・

「なに一人でため息ついてるのよ。」

「あ・・うん・・・」

長谷川がやってきてベンチのとなりに座った。

「どうしたのよ有希、元気ないじゃない。」
「・・う・・うん・・・」
長谷川に相談してみようか・・・こんなこと相談できるの長谷川しかいないし・・・でも相談されたって長谷川にもどうすることも出来ないだろうけど・・・

「え?!　プール?」
「う・・うん・・・」
「あんたに水着なんて着れるわけないじゃない!」
「そうなんだけど・・・」
なんか言いにくいな・・・
「実は・・レナとプールに行って・・・焼けて水着の跡がついてるの岡本に見られちゃったの・・・」
「はあ?　あんたプールで水着着たの?」
「・・う・・うん・・・で・・でも、好きで着たんじゃないよ・・・罰なんだ・・・」
「バツ?」
「・・うん・・夏休みの花火大会のお詫びに・・・何でもするって言ったら・・・こんなことになっちゃって・・・」
「レナちゃんも大胆なことするわねぇ・・・」
「イジワルなのよ・・・」

「それで、こんどの水泳の時間は休めなくなっちゃって・・・」
「どうする気?」
「・・いや・・・どうしよう・・・」
「でもさ、有希、水着着れたワケでしょう?」
「・・・う~ん・・・まあ・・・」
全然気づかれなかったけど・・・
「有希のクラスはいつがプールの日なの?」

「えっと・・あさって・・・」
「わたしのクラスは明日よ。」
「へ～・・・それが・・・？」
「明日、わたし帰ってすぐに洗って乾かすから・・・有希は忘れないようにサポーター持ってきなさいよ。」
「？・・・どういうこと？」
「だから、わたしの水着を貸してあげるって言ってるのよ。」
「え？！　そ・・そんな・・・・」
オレが長谷川の水着を着るなんて・・・絶対ムリだ・・・だいいち長谷川はオレが着るのイヤじゃないのだろうか？

「大丈夫よ。わたしの方が背は少し小さいけど、そんなに体格も変わらないし。」
「そ・・そんなことじゃないよ・・・長谷川さんはイヤじゃないの？」
「何が？」
「・・だ・・だって・・・わたし・・・・長谷川さんは自分の水着を・・・そのぉ・・・男が着るなんて・・・イヤじゃないの・・・？」
「いや・・そう言われるとなんか・・・でも、有希はもう男じゃないじゃない。」
「・・そ・・それはそうだけど・・・でも・・・」
「心配しなくていいわよ。わたしはもう有希のこと男なんて思ってないから。」
「・・・・・」
「それに、有希はわたしと同じ中学だったこと知られてるから、水着が違ったら怪しまれるかも知れないわよ。」
「！」
それは考えなかった・・・
「それとも中学のスクール水着自分で買う？　中学の近所の文具店

で売ってるはずだけど？」
「・・・うっ・・・それは・・・」
「でしょう？　だったらわたしのを使いなさいよ。」
「・・・ほんとにいいの？」
「良いから言ってるんじゃない。」
「・・・・・」
なんだか妙なことになってきた・・・それにしても、長谷川ってオレのこともう男だと思ってなかったんだ・・・
「・・じゃぁ・・・貸してもらおうかなぁ・・・」
「そうしなさい。今年はもう終りなんだから、新しく買うのもったいないわ。来年になったら古くなったからって自分の水着を買えば良いじゃない。」
「・・うん・・・」
そういう問題でもないと思うんだけど・・・

　水着はなんとか貸してもらうことになったとはいえ・・・オレには他にも問題が・・・知らない人の中ではバレなかったけど・・・クラスメイトの中ではもっと慎重にやらないと・・・もしもバレたらタダでは済まない・・・オレが男だとバレたら・・・この学校にもいられなくなるかもしれないし・・・そんなことになるのはイヤだ・・・オレはもうこの学校が好きになってしまっているのだから・・・

第５６話　水着　オレがスクール水着を着るなんて

「こんにちは先生。」
「あら、いらっしゃい。どうしたの？　手術のことが心配になった？」
白石先生はオレの様子がおかしいことに気づいたのかだろうか・・・
「・・い・・いえ・・・そのことじゃないんですけど・・・」
「そう？　じゃぁなに？　何か心配事でもあるんでしょう？」
「・・あの・・・先生・・前に・・わたしの・・そのぉ・・・股間を・・テーピングしたら・・水着も着られるんじゃないかって・・・言いましたよね・・・」（３８話参照）
「言ったかしら？」
「え？！　憶えてないんですか？」
「ごめんね、忘れちゃったみたい。でも確かにそうかも知れないわね。有希ちゃんの体型なら、もう水着だって着られるんじゃないかしら？」
「あの・・そのことで相談に来たんです・・・」
「？」
「実は・・こんどのプールの時間に水着にならなくちゃいけなくなって・・・」
オレは事のいきさつを先生に話した。

「そうだったの。つまり、知らないに人ならもし有希ちゃんが男だってバレてもその場限りだけど、学校でバレたら大変だから絶対バレないようにしたいのね？」
「はい・・・」
「じゃぁ、今からやってみましょうか？」
「え？　いまからじゃなくていいです！　プールの授業はあさってだから・・・」

「でも先生もペニスのテーピングなんてしたことないから、いきなりやって上手く出来るかどうかわからないわよ。」
「・・・・そっか・・・」
確かにそうかもしれない・・・授業の前の少しの時間にやらなきゃいけないから、先生だってうまく出来るか心配なのだろう・・・経験ないことなんだから無理もない話だ・・・
「・・じゃ・・じゃぁ・・・お願いします・・・でもなんか恥ずかしいな・・・」

先生は保健室のドアに鍵をかけて、窓のカーテンも閉めたてくれた・・・こんなところにいきなり誰か入って来たり、もし窓から見られてたら大変だ・・・・

オレは先生の前で制服のスカートを脱いだ・・・そして白いコットンのパンティーに手をかけたが、なかなか下ろすことが出来なかった・・・いざとなるとやっぱり女の人の前に股間をさらすのは恥ずかしい・・・手が震えてしまう・・・すると白石先生がオレの手をそっと押さえて言った・・・
「やっぱりやめようか？　なにかプールに入れない理由を考えましょう。」
オレは首を横に振った・・・やると決めたのに逃げたくはなかった・・・それに変にプールに入れないと言い訳すれば、それはそれで怪しまれるかも知れない。
「そう・・それじゃ有希ちゃんはじっとしてて、先生が脱がしてあげるわ。」
「・・・・・」
先生がパンティーに手をかけると、オレは怖くてきつく目を閉じた・・・オレのパンティーが下ろされていく・・・恥ずかしくて死にそうだ・・・

「大丈夫よ、有希ちゃん。」
先生が震えているオレの太モモをさすって言った。
「先生、男の人のココも何度も見たことあるから平気よ。学生のころ解剖もしちゃったし。」
「・・・・・」
先生は平気でもオレはぜんぜん平気じゃない・・・でも先生まで恥ずかしがってるよりはマシかもしれないけど・・・でも・・解剖って・・・・
「ほら、目を開けて。」
オレがそっと目を開けると、もうパンティーは足元までおろされていた。
「足を上げて。脱がなきゃテーピング出来ないわ。」
オレは片足を上げようとして、思わずよろけてしまった・・・足がガクガクしていうことをきかない・・・
「大丈夫？　先生の肩につかまっていいわよ。」
「・・はぃ・・・」
オレは遠慮がちに先生の肩につかまると片足づつ上げてパンティーを脱いだ・・・

やはり一度見られてる白石先生の前でも、股間を丸出しにしているのは顔から火が出る思いがする・・・それに、セーラー服の上着にスカートを穿いてないというのは、いちばんエッチな恰好だ・・・パンツをはいていてさえエッチなのに、今はパンツもはいてない・・・そのうえオレの股間には男の子のモノがついているのだから、こんなにみっともないことはないのだ・・・

先生は肌色のテーピング用のテープを持ってきて、しばらくオレの股間をながめていた・・・
「ちょっと後ろ向いてくれる？　前からだとやりにくそうだわ。」
「・・・はい。」

オレが後ろを向くと先生が言った。
「有希ちゃん、もう少し足を開いて。」
オレはそう言われて足を少し開いた・・・
「ごめん、もう少し開いてくれない？　そうじゃないとテーピング出来ないわ。」
「・・あ・・・はい・・・」
なんか女の子になってからは、あまり足は開かないようにしてるから、いざ開いてと言われても、なかなか開くのが難しい・・・先生に「もう少し・・もう少し・・」と言われて開いていくうちに、ついにガニ股のようになってしまった・・・セーラー服で、下半身丸出しで、そのうえガニ股なんて・・・死にそうに恥ずかしい・・・

　オレのもはや勃起しなくなってしまったチンチンは、いまや恥ずかしさのためか、寒くもないのに縮こまってしまい、まるで小学生サイズになっている・・・先生は元のオレのモノを見たことがあるから、もともとこのサイズだと思われないのがせめてもの救いだろう・・・
「ヒッ！」
いきなり股間に伸びてきた先生の手にさわられて、オレは思わず声をあげてしまった・・・
「あ、ごめん。痛かった？」
「あ・・いぇ・・・ちょっとビックリしただけです・・・」
「痛かったら遠慮なく言ってね。」
「はい・・」
先生はオレのを後ろに引っ張ったりしているが、なかなかテーピングしてくれない・・・

「イッ・・・」
「あ、痛かった？」
「ち・・ちょっと・・・」

いきなりタマを押されて痛かった・・・
「有希ちゃん、睾丸を自分で仕舞ってくれない？」
「え？・・・しまう・・・？」
「そう、上の方に押し込めるハズだから。」
「・・・・」
オレはそっと自分のタマを押してみた・・・どこに入るんだろう・・・
「あまり強くしないで、ゆっくりでいいからね。」
「・・はい・・・」
オレは要領がわからずなかなか入らない・・・だいたい入れるところなんてあるのだろうか・・・せめてタマを取った後なら良かったのに・・・
「あっ！」
少し手前に押してみると、タマは“ポコッ”と身体の中に入った。
「そうそう、その要領で両方入れた状態で押さえてて。」
「・・はい・・」
オレが両手で玉が出てこないように押さえていると、先生はチンチンを後ろに引っ張ってテープで留め、タマの皮でチンチンを包むようにしてまたテープで留めた・・・するとオレの股間には何もなくなってしまった・・・
「こんな感じで良いんじゃないかしら？」
「・・・・・」
でもこれじゃぁ・・・
「あ・・あの・・・もしオシッコしたくなったら・・・」
「オシッコは無理ねぇ・・・もしどうしても我慢出来なかったらプールの中でしちゃいなさい。」
「え？！　水が汚くなっちゃうんじゃ・・・」
「大丈夫よ、プールには塩素がたくさん入ってるから。けっこう中でするコ多いけど問題ないわよ。」

「・・・・・」
そういうものだろうか・・・でもやっぱり汚いから出来るだけしないように我慢しよう・・・
「明後日はオシッコしてからここに来た方がいいかもしれないわね。」
「・・・・・」
なんか水着を着るのも思ったより面倒だ・・・

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

とうとうプールの日がやってきた・・・朝、オレは長谷川に呼び出されて紙包みに入った水着を、こっそり手渡された。でもなんだか水着が入っているにしては大きい・・・オレが中をのぞいてみると、バスタオルのような物まで入っている。
「バスタオルは持ってきたよ。」
「有希、どうせ普通のバスタオルだけ持って来たんでしょう?」
「・・うん・・・」
「そんなのでどうやって着替えるつもり?」
「・・・でも・・保健室で着替えて、そのまま下に着ていくから大丈夫だと思うけど。」
「あんた、ほんと考えが足りないわねぇ。終った後も濡れたままセーラー服を着るつもり?」
「あ・・・!」
そうか・・・終った後のことまで考えてなかった・・・男なら海パンだからバスタオルを腰に巻いてはきかえることが出来るけど、水着じゃそうもいかない・・・

「だから頭から被って着替えられるのを持ってきてあげたのよ。有希は普通のバスタオルで着替えるなんて器用なことは無理でしょう？」

「・・うん・・・」

確かに長谷川の言うとおりだ・・・

「でも・・これは？」

一緒に入っていたビニールに入ったままの真新しい水泳帽を指さして聞いた。

「あぁ、それは買ってきたのよ。」

「なんで？」

「だってわたしのは横のところに名前を書いてるんだもん。昨日気づいて慌てて買ってきたのよ。」

「・・そっか・・・ありがとう。」

わざわざ買ってきてくれるなんて、長谷川って意外に親切なんだ・・・

・

「サポーターは持ってきたんでしょうね？」

「うん、ちゃんと持ってきたわよ。」

「なら万全ね。あとは有希がちゃんと女の子らしく出来るかどうかだけね。」

「うっ・・うん・・・」

「あ！あんたムダ毛の処理はしてきたでしょうね？」

「うん・・あたりまえじゃない・・・」

というかオレはエステでちゃんと永久脱毛してもらっているのだ。

もちろんまだ残ってる毛根もあるから、昨日ちゃんと生えていないかどうか確かめたけど。

「・・・有希って、変なところが女っぽいのよねぇ・・・」

それはオレが女の子になるために頑張っているからだ・・・最初から女の子の長谷川には、この苦労はわからないのだろう・・・

「でもわたしも有希の水着姿みたいなぁ。」
「・・い・・いいよ・・見なくて・・・」
「でもわたしの水着なんだから見る権利はあるんじゃない？」
「権利・・・？」
まさか権利なんか主張されるとは・・・やっぱり長谷川から借りなきゃ良かったかな・・・

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー
ー　ー
ー

オレは3時間目の授業が終ると、急いで保健室へ向った。長谷川の水着は保健室であずかってもらっている。

保健室に着くと鍵を閉めて急いで股間にテーピングしてもらった。このまえよりもスムーズに出来てホッとした・・・やっぱり一度やってみたのが良かったようだ。
その上から肌色の水着用のサポーターを穿き、長谷川から借りた水着を着る・・・オレたちの中学の水着は紺一色のごく普通のスクール水着だ・・・白い線があるとか、下の部分に布があるとかいう特徴は何もない。

やっぱり長谷川が着ていた水着を、オレが着ているのだと思うとヘンな感じがする・・・出来るだけ考えないようにしないとドキドキしてくる・・・これはまだオレの中に残っている男の部分なのだろうか？　股間の膨らみはまったく目立たない。テーピングしなくても何とかなっていたのだから当り前か・・・念入りにテーピング

をした今では女の子の中でもペッタンコな方かもしれない・・・ここまでやらなくても良かったかも・・・

「ちょっと屈伸してみて。」

先生にそう言われてオレはその場で屈伸した。

「大丈夫そうね。テープは見えてないわ。動いてみて痛くなかった？」

「はい、大丈夫です。」

「有希ちゃん、後ろ向いてみて。」

オレが後ろを向くと、先生は水着のおしりの部分を引っ張り上げた。

「うわっ・・・な・・なにするんですか・・・」

「あ、ごめん。どこまで食い込んだらテープが見えるか心配だったのよ。」

「・・・・・」

食い込む・・・？

「そうとう食い込まないと見えないみたい。でも有希ちゃんもあまり食い込まないように注意してね。女の子の水着って意外に食い込むものだから。」

「はい・・・」

でもオレには食い込むような割れ目はないんだけどな・・・

オレがプールに行くため水着の上から制服を着ようとした時、いきなり誰かがドアをノックした。

「だれ？今ちょっと取り込み中なんだけど・・・」

先生はそう言いながら、手振りでオレにベッドの中に隠れるように指示した。オレは慌ててカーテンを引いてベッドの中に潜り込んだ。息をひそめているとドアの向こうから声が聞こえた・・・

「あの・・長谷川です。」

「あ、長谷川さん？　待ってて、いま開けるから。」

なんで長谷川が・・・やっぱり権利を行使しに来たのだろうか・・・

オレの水着姿を見て笑うつもりかもしれない・・・

ドアがすべる音がして長谷川が入ってきたようだ。先生がまた鍵をかける音がする・・・

「あれ？　有希は？」

オレはイヤイヤながらベッドを出て、カーテンから顔をのぞかせた。

「なに？　わたしの水着姿を笑いに来たんでしょう・・・？」

「なに言ってるのよ、笑うわけないじゃない。人聞き悪いわねぇ、そんなつもりで水着貸したんじゃないわよ！」

「・・そ・・そうなの・・・？」

「さっさと出てきて見せてよ。」

「・・う・・うん・・・」

オレは渋々カーテンを開けて出ていった・・・

「すごい！こんなに似合うんだぁ・・・」

「そ・・そんなことないよ・・・」

オレは恥ずかしくてたまらない・・・なんだか裸を見られてるみたいな気がして思わず胸と股間を両手で隠していた・・・

「有希って思ったより胸あるのねぇ。」

「そ・そ・そんな・・・」

オレは慌てて両手で胸を隠した。

「足も細くてきれいだし・・羨ましいわ。」

こんどは足のことを言われて、オレは慌てて両手を下げて足を隠そうとしたが、いったい何処を隠せばいいのかわからずアタフタすることしか出来なかった・・・

「有希ったら、そんなに恥ずかしがらなくていいじゃない。」

「・・だ・・だって・・・」

恥ずかしいに決まってるじゃないか・・・男が女の子の水着を着てるんだから・・・？・・・でも長谷川はもうオレのことを男だと思ってないって言ってたから、オレが恥ずかしがるのを理解できないのだろうか・・・？

「可愛いなぁ・・・有希どんどん可愛くなってるんじゃない？」
「そんな・・・やめてよ・・・」
オレそんなこと言われたら、どんな顔すればいいかわからないよ・・
・
「長谷川さんの言うとおりだと思うわ。有希ちゃん夏休み開けてから一段と女の子らしくなった気がする。」
「・・そんな・・・」
本当だろうか・・・もしかして読者モデルなんかやったからかも知れない・・・オレの心の中にはまだ男の部分も多いのに、見た目だけ女っぽくなっているなんて・・・これじゃぁ、どんどん外見と中身が離れてしまうんじゃないのだろうか・・・心配になってくる・・
・

「そろそろ行かないと、プールに遅れてしまうわよ。」
「あ！そうだった・・・」
オレが慌てて制服を着ようとすると、
「あ、ちょっと待って！」
長谷川はそう言って、ポケットから携帯を取り出した。
「写メとらせて！」
「な・・なんでよ・・そんなの撮らなくていいって・・・」
「だって、お母さんに見せなきゃいけないんだもん。」
「お母さんに？」
「きのう有希に水着を貸すって言ったら、お母さんも見たいって言ってたの。」
そう言いながらもう携帯をオレに向けている・・・
「水着貸したんだから、写メ撮る権利もあるでしょう？」
また権利・・・？　どこまで権利があるんだろう・・・
「もうっ・・1枚だけだからね・・・」
オレは手に持っていた制服を置いて、かるく身体を斜めにして足を閉じた・・・どうせ写されるのならきれいに見える方がいい・・・

制服を着て保健室を出ようとすると先生がオレに言った。
「終ったら股間のテープはそのままにして来なさいね。ちゃんとリムーバースプレーをかけてからじゃないと、勝手に自分ではいだら皮が剥けちゃうわよ。」
「はい・・・」
オレは皮が剥けたのを想像して思わず身震いした・・・すごく痛そうだ・・・

―――――――――――――――
―――――――――――――――
――――――――――

オレは歩いて１０分ほどの所にある白鴻女子短大に小走りで向った。うちの高校にはプールが無いから短大のプールを使わせてもらう。おかげで水泳の授業の回数が少ないのは、オレにとっては良いことだ。水泳部などもこの短大のプールで練習しているらしい。とはいえ、うちの学校はお嬢様学校だからスポーツには力を入れていないらしく、大会などには無縁なようだ。みんな楽しくスポーツをするといった感じらしい。

更衣室に入ると、もう残っているのは数人だけだった。
「有希どこ行ってたの、遅かったじゃない。」
「あ、ちょっとトイレに・・・」
オレは適当にごまかしながら、すでにほとんど着替えているクラスメイトが全員出て行くのを待った・・・やっぱり制服を脱ぐだけとはいっても恥ずかしい・・・それに、家から制服の下に水着を着てきたと思われるのもどうかと思うし・・・

でも考えてみれば、終った後はみんなと一緒に着替えなきゃいけないのだから大変そうだ・・・もし長谷川が気を利かせてポンチョのようにかぶれるヤツを持って来てくれなかったら、いったいどうなっていたのだろうか・・・考えただけで寒気がする・・・パンツをはく時に股間に貼ったテープなんか見られたら最悪だ・・・

オレは制服を脱いで水着姿になり、お下げをほどいて上に持ち上げピンで留める・・・かあさんに習って何度も練習したから結構短時間で上手く出来た・・・そして白いゴムの水泳帽をかぶる・・・男の子もこういう帽子をかぶる学校もあるみたいだが、オレが行っていた小学校も中学校も男の子は丸くてアゴの下でヒモで留めるタイプだったから、まさかオレがこういう水泳帽をかぶることになるなんて思いもしなかった・・・このテの水泳帽って首筋が妙に色っぽく見える・・・オレは自分の首筋がそんな風になってるのを想像してゾッとした。

水着からサポーターがはみ出してないか・・・間違ってもテーピングのテープがはみ出していないことを確かめてから、オレは急いでプールに向った。

「有希遅い！」

岡本の声と同時に、いっせいに全員が振り返りオレを見た。

「あわわ・・・ご・・ごめん・・・」

まさか全員が準備体操せずに待ってるなんて思わなかった・・・オレはこっそりとみんなに混じろうと思ってたのに・・・

「これで全員か？　それじゃ準備体操始めるぞ！」

たくましい体つきの浅黒い大学の体育の先生がやるのを真似しながらオレたちも準備体操をした。動いてみるとたしかに女性の水着というものはお尻がはみ出してくる・・・どうりで女子はいつもお尻

の部分を親指で“クリッ”とお尻にかぶせてるハズだ・・・オレも後でやってみよう・・・

体操が終りやっとプールに入ることが出来る・・・女性モノのスクール水着は恥ずかしいが、久しぶりの水泳だからちょっとテンションが上がってしまう・・・水泳は唯一オレが得意なスポーツなのだ。

女の子になって、この学校に来てからというもの、オレは体育は手を抜きぎみだったし、そのうち女性ホルモンの影響か、一生懸命にやっても、なかなか女の子にもかなわなくなってしまった・・・みんなはオレのことを女だと思ってるから、ちょっとドジなだけだと思ってるようだが、実はオレは結構気にしているのだ・・・オレだってみんなに少しは良いとこを見せたい・・・

「1レーンは飛び込み用で、2レーンは戻ってくるヤツに開けておけよ!たらたら泳ぐヤツは3から5レーンを使え!」

体育の先生が言っている・・・飛び込んでいいのか・・・レナと行ったプールでは飛び込むどころか、まともに泳げなかったから、オレはかなり欲求不満になっていた。

もう女の子になったのだから水泳は出来ないと諦めていたのに、一度プールに入ったらまた泳ぎたくなってしまったのだ。もう我慢の限界だ!

「わたしちょっと飛び込んでこよっかな・・・」

「え?有希飛び込めるの?」

千里が驚いた顔で聞いた。

「有希、水泳は苦手なのかと思ってた・・・」

「実は、けっこう得意なの。」

オレはプールから上がって第1レーンのところに行った・・・みんな飛び込むのはイヤみたいで1レーンと2レーンは誰もいない。

「おっ!おまえ飛び込むのか?」

「あ・・はい・・・」
「よし!やってみろ!　ホイッスルを吹いたら飛び込めよ。」
オレは飛び込み台に上がると、ホイッスルと同時に飛び込んだ。
やっぱり泳ぐのは気持ちがいい・・・女性用の水着は抵抗がありそうにみえたが、案外そうでもなかった・・・泳いでいるぶんには、けっこう快適だ・・・ただ、男のころと比べると、胸とかあるぶんスピードが出ない気もする。

オレがターンしてそのまま第2レーンに入り戻ってくると、いつの間にかみんなオレのことを見ていたみたいで、水から顔を上げたとたん、いきなり拍手されて驚いた・・・その時になってはじめて目だつようなことをしてしまったのを後悔した・・・オレは注目なんかされたくなかったのに・・・オレは目立たないようにしていたことをすっかり忘れていた・・・いいとこなんて見せなくてよかったんだ・・・

「君、自己流だが、女の子にしてはなかなか良い泳ぎじゃないか。」
「は・・はあ・・・」
先生に褒められても、もう嬉しくない・・・
「水泳部に入らないか?」
「い・・いえ・・・わたしはいいです・・・」
時間になったのを良い事にオレは急いで岡本や千里のところに走っていき、一緒に更衣室に戻った。
「有希ってほんとに水泳得意だったのね。」
「・・うん・・・」
「どうしたの?　なんか元気ないね。」
「う・・ううん・・そんなことないよ。　久しぶりに泳いだから、ちょっと疲れただけ・・・」

オレは長谷川から借りたポンチョ型のバスタオルを頭からかぶって着替えた・・・やっぱりこれがなきゃ、どうにもならなかった・・・これなら中で水着を脱いで、そのままパンツやブラも着けることが出来る・・・
着れないのは頭からかぶらなきゃいけないセーラー服の上着だけだ。

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

オレは股間をテーピングしたまま保健室に戻る。もう昼休みの時間だから、そんなに急ぐ必要もない。
保健室のドアを開けると、そこにはなぜか長谷川もいた・・・
「あ、帰ってきた。」
長谷川はオレのところに駆け寄ってきた。
「どうだった?上手くいった?」
「・・う・・うん・・・」
「なに?　どうかしたの?」
「どうもしてないよ・・・ただ・・目立っちゃっただけ・・・」
「いいじゃない目立ったって。」
「ダメよ!　目立ったら男だってバレるかも知れないじゃない・・・」
なぜか長谷川はあきれ顔だ・・・
「有希、まだそんなこと言ってるの?　あんた今までででも十分目立ってるのに全然わかってないのね。」
「・・・・・」
オレはそんなに目立ってるつもりはない・・・

「まあまあ、有希ちゃんも疲れてるでしょうから、長谷川さんはお昼でも食べてくれば？」
「え？　有希と食べようと思ってたのに・・・」
「有希ちゃんは、これからもう少しやらなきゃいけない事があるの。長谷川さんがいると出来ないのよ。」
「・・・・・」
そういえば長谷川はオレが股間にテーピングしてるのを知らないんだっけ・・・
「じゃあ・・中庭にいるから・・・」
そう言って出て行こうとしたが、振り返ってオレに聞いた。
「パン・・何がいい？　よかったら買っとくけど・・」
「あ、じゃあ何か惣菜パン買っといて。それと牛乳。」
「うん、わかった。」

長谷川が出て行くと白石先生が言った。
「長谷川さん、有希ちゃんのこと心配して待ってたのよ。」
「・・・そうなんですか？」
オレは長谷川が何を考えてるのか、ちっとも良くわからない・・・
先生は長谷川の気持ちがわかるのだろうか・・・？
「長谷川さんも自分の気持ちを伝えるのが上手じゃなさそうだから、有希ちゃんたち見てると心配になっちゃうのよ。」
「え？」
「有希ちゃんも、もう少し長谷川さんに優しくしてあげたら？」
「・・・そんな・・・」
どっちかといえばオレの方が振り回されてる気がする・・・優しくして欲しいのはオレの方だ・・・

オレは股間のテープにリムーバースプレーをたっぷりかけてから剥がしてもらった。
まあ、少し落ち込んじゃったけど、これで問題はひとつ解決だ・・・

とりあえず今年はもう水泳の心配はしなくて済む。　そう考えると気持ちも少しは晴れるってものだ。

・・・次は・・タマを取らなきゃ・・・それを考えると晴れた気持ちも、また少し落ちてしまった・・・

第57話　雑誌　とうとう発売に・・・

初めて学校で水着になったせいか、今日はなんだか疲れてしまった・・・水着はちゃんと洗ってから長谷川に返そうと思っていたのに、長谷川は強引にそのまま持って帰ってしまうし・・・オレだって洗濯くらい出来るのに・・・それとも自分の水着をオレに洗濯されるのがイヤなのかな・・・

「ただいま・・・？」

家に帰ると郵便受けに大きな封筒が入っていた・・・

「なんだろう・・」

取り出してみると、オレ宛てのだ・・・差出人は・・・九州ＪＩＮＯＮ編集部？

「編集部から連絡かなぁ・・」

でも連絡なら携帯に来るハズだし・・・わざわざ郵便で送って来るとも思えない・・・それにずいぶん分厚いし。

オレは玄関にカバンを置いて、その場で封筒を開いてみた。

「あ！　ＪＩＮＯＮの新刊だ・・・」

それは九州ＪＩＮＯＮの今月発売のヤツだった。あさってが発売日の6日だから楽しみにしてたけど、まさか発売日より前に送ってくれるとは思わなかった。

「買わなくて済んで儲かっちゃった。」

オレは玄関を上がるのももどかしく、靴も脱がないまま座り込んでペラペラめくってみた・・・オレたちどんな感じに載ってるんだろうか・・・もちろん小さい写真だろうとは思うけど、それでも自分が雑誌に載るなんてワクワクする・・・

しかしオレはそのページを見たとたん、思わず雑誌を取り落としそ

うになった・・・

「う・・うそ・・・・」

信じられない・・・

なんと1ページが丸々オレたちのページになっていた・・・しかも真ん中に大きく使われている写真はふたりで写ったのではなく、オレひとりのやつだ・・・なんで・・・？

「うわっ！」

いきなり携帯が鳴ったのでビックリした。かけてきたのは千里だった・・・

「もしもし・・」

「あ、有希？　有希のとこにも来てる？」

「・・ＪＩＮＯＮ？」

「うん・・・」

「・・うん・・来たよ・・・千里のとこにも来たの？」

「うん、ビックリしちゃった。」

「わ・・わたしも・・・」

・・・もしかしたら・・オレだけ大きく載ったから怒っているかもしれない・・・

「ごめんね・・」

「？　なんであやまってるの？」

「・・だって・・・ごめん・・わたしだけ大きく載っちゃって・・・」

「そんなのぜんぜん平気よ！　だって有希すてきだもん！」

「・・・・・」

たしかに素敵な服だけど・・・

「それにわたしがこんなに大きく載ってたらハズカシイし・・・」

・・そんなの・・・・オレだって恥ずかしいよ・・・

「でも、どうする・・？」
千里がそう言ったがオレには何のことかわからなかった。
「どうするって？」
「だって・・これじゃすぐバレちゃうじゃない！」
「・・？・・けっこうお化粧してるからバレないんじゃないかなぁ・・・」
「有希・・それ本気で言ってる？」
「・・・うん・・」
「誰がどう見たって有希にしか見えないわよ！」
「そ・・そうかなぁ・・・」
こんなにきれいなコが、実はオレだなんて思うかな・・・
「・・・ほんと有希って変わってるわねぇ。」
「・・そ・・そう？」
オレの目には、オレも千里もぜんぜん違って見えるんだけど・・・
ほんとにオレたちって判るのかな？

「でも・・・どうしようもないんじゃない？」
「それはそうだけど、有希ってほんとのんきな所あるよね。」
たしかにオレは他人にはよくのんきだと言われるけど、オレとしては、そんなにのんきに構えてるつもりはない・・・
「学校で問題になったりしたらどうする？」
「・・・どうしよう。　何か良い案ある？」
「あるわけないじゃない！」
「・・やっぱり・・・？」
オレにだって良い案なんてない・・・こんな時、相談できるのは・・・

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

「ねえ、とうさん・・入っていい?」
「有希か?　いいぞ。」
オレは納戸を改造した書斎の引き戸を開けて中に入った・・・もちろん息は止めている・・・
「・・マフク一枚ちょうらい・・・」
オレは貰ったマスクを着けると、やっと大きく息を吸った。
「ちょっと相談があるんだけど・・・」
オレはこれまでのいきさつをとうさんに話した。

「ほう・・なかなか美人に撮れてるじゃないか。かあさんの若いころを超えたかもしれんな・・・あ、これはかあさんには内緒だぞ。」
とうさんはオレの写真が載っているページを見ながら言った。
「・・そ・・そんなの言わないよ!」
だいたい美人に撮れてるのは、プロのメイクさんのお化粧が上手いからだし・・・
「そんなの見なくていいからさ、わたしどうしたらいいと思う?」

「そもそも、お前はどうしたいんだ?」
「え?　わたし?」
「お前はモデルをやりたいと思ってるのか?」
「えっと・・・出来るのならやってみたいけど・・絶対やりたいってほどでは・・・」
「それじゃ、もし学校でダメだと言われたら、やめても良いのか?」
「・・・うん・・まあ・・・」
「だったら何も問題は無いじゃないか。」

「・・でも・・・千里が・・・」
「千里ちゃんがどうしたんだ?」
「千里はモデルやりたいんじゃないかと思うんだ・・・でも千里の両親はわたしが一緒だからモデルやることを許してくれたって言ってたし・・・」
「それじゃ、両方がモデルをやるか、両方がやめるかしか選択肢が無いって事か?」
「・・う~ん・・・そうなのかなぁ・・・」
でもオレは・・・
「千里だけでもやらせてあげたいんだけどな・・・」

「それなら、そうちゃんと言えばいいだろう。」
「でも、千里はオレと一緒じゃなきゃいけないって・・・」
「それはおまえの問題じゃなんじゃないか?」
「?」
「千里ちゃんがご両親を説得するか、両親の言いなりにやめるかは千里ちゃんの問題だよ。お前の問題じゃない。」
「・・・そうかなぁ・・・」
理屈はそうかも知れないけど・・・でもオレたちは友達だし・・・
「だいいち学校は、お前も千里ちゃんもモデルをやることを許してくれないかも知れないじゃないか。千里ちゃんだけ許してくれる確率がどれくらいあるのかな?」
「そういえばそうか・・・」
考えてみれば、学校がモデルをやることに反対するとしても、オレが男だから反対するわけじゃないだろう・・・
「だったら・・学校がどう言うかわからなきゃ、どうしようもないじゃない・・・」
「まあ、そういう事だな。」
「・・・じゃぁ・・結局わたしはどうしたらいいの?」
「そうだな・・・おそらく雑誌が発行されたら先生たちの耳に入り、

ふたりとも呼び出されるだろう。そしたら、お前は自分の気持ちを正直に言えばいい。判断するのは学校で、お前じゃない。」
「・・わたしの気持ち・・・？」
オレの気持ちは・・たとえオレがやめなきゃいけなくても、千里だけでもやらせてあげたいというのが正直な気持ちだ・・・それを言えばいいのだろうか・・・
「まあ、お前が学校を辞めてでもモデルをやりたいのなら話は別だが。」
そんなつもりはない・・・オレは白鴻女学園が好きだし、モデルといってもあくまで読者モデルで本当のモデルじゃない・・・オレはそんなもののために学校を辞めたくはない。

―――――――――――――――
―――――――――――――――
――――――――――

次の日は体育祭の練習などであわただしく過ぎて行き、あっという間にＪＩＮＯＮの発売日が来てしまった。
朝、オレが久留米の駅で電車を降りて、学校への道のりを登校していると、後ろからいきなり声をかけられた。
「戸田さん！ＪＩＮＯＮ見たわよ！スゴイじゃない！！」
となりのクラスのそんなに知らないコに声をかけられたので驚いていると、その後も2年生やら3年生やらいろんな人に声をかけられた・・・どうやら千里が言ったとおりバレバレなようだ・・・それに・・何でみんなオレのこと知ってるんだろう・・・出来るだけ目立たずに学園生活を送って来たオレとしては、そっちの方もビックリだ・・・

校門では今日も風紀検査をやっている・・先生にはまだ知られていないようだが、まわりのコたちがオレのことをチラチラ見るから誰かが先生に言うんじゃないかとヒヤヒヤしながら通り過ぎた・・・

クラスに着いたら着いたで、みんなに取り囲まれてしまった・・・手にＪＩＮＯＮを持っているコまでいる・・・こりゃタダでは済みそうにない・・・千里はまだ来てないみたいだけど大丈夫だろうか？

しかしオレたちだとバレたのも驚きだけど、今日発売なのにもうみんな知ってるのも驚きだ・・・雑誌なんか帰りに買えばいいものを・・・オレはいつも帰りに買っているのに・・・

「み・・みんな良くわたしだってわかったわね・・・」

「？　そりゃわかるわよ、だってどう見たって戸田さんじゃない。」

「・・・・」

わからないと思ったオレの目がおかしいんだろうか・・・みんなはお化粧してるオレなんて見たことないハズなのに・・・良くわかるなあ・・・

「この写真、いつ写したの？」

「えっと・・夏休みに入ってすぐの頃だったかな・・・」

「わたし知ってる！　前に岡本さんたちと応募したんだよね。」

「え・・そうだけど・・・」

そんなことまで知ってるの？・・・岡本が言ったのかな・・・女の子って何でも話しちゃうんだなぁ・・・

「わたし戸田さんはぜったい採用されると思ってたよ。だって最初に会った時からモデルさんかと思ったもの！」

それはオレが他のコより背が高いからじゃないのかなぁ・・・？

そうこうしてるうちに千里たちも登校してきた。千里も取り囲まれてしまったが、騒いでるみんなを一緒に来た原口がおさめてくれ

たので助かった・・・こういうとき原口は落ちついてるから頼りになる。そんなこと思ってたら原口がオレのところにやってきて小声で言った・・・

「でも有希、どうするつもり？　こんなに騒ぎになってたら先生の耳に入るのも時間の問題よ。」

「・・うっ・・うん・・・」

今年のプールの授業も終って、あとはタマを取るだけだと思ってたのに・・・まさかこんな事態になるなんて・・・どうしてこんなに問題ばかり起きるんだろう・・・

　始業時間になり担任の山口智佳〈やまぐち　ともか〉先生が来て、やっとみんな席についた。どうやら山口先生もモデルのことは、まだ知らないみたいだ・・・まあ、先生はＪＩＮＯＮを読むような歳でもないし・・・

ーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーー

　３時間目が終った中休み、急に校内放送が流れた。

“・・１年３組の戸田有希さん・・１年３組の戸田有希さん・・至急、校長室まで来てください・・・くりかえします・・・・・”

　オレだけ？・・・とうさんはふたりが呼ばれるだろうって言ってたけど・・・なんでオレだけ呼ばれるんだろう・・・

放送を聞いた千里がオレのところへやってきた。

「有希・・わたしも一緒に行くから・・・」

しかし、呼ばれたのはオレだけだ・・・それに、千里や他のみんな

は知らないだろうが、オレと校長は知らない仲でもない・・・オレひとりの方が、せめて千里だけでもモデルをやらせてもらえないかと頼みやすいかも知れない・・・校長も男のオレを入学させたくらいだから案外話がわかる人かもしれないし・・・

「いや・・呼ばれたのはわたしだけだから、とりあえず一人で行ってくる・・・千里は心配しなくていいから・・・ね？」

オレだって親友の千里のためなら、少しは男らしいことも出来るのだ・・・女になっておいて言うのもなんだけど・・・

校長室へ行くために廊下を歩いていくと、みんなオレのことを見ている・・・きっとモデルのことで怒られに行くと気づいているのだろう・・・１組の前を通るとき、教室の窓からのぞく長谷川と目が合った・・・なんか怒ってるみたいにニラんでる？・・・オレ何か長谷川が怒るようなことしただろうか・・・でも今はそんなことに気を使ってるヒマはない！

「失礼します・・・」

校長室に入ると、そこには校長先生と教頭先生がいた。

「戸田君、これは何だね？　君はまったく何を考えているんだね！」

「あっ・・・」

いきなり校長先生に言われて見たテーブルの上にはＪＩＮＯＮが置いてあり、オレたちが載ってるページが広げられていた。

「・・ご・・ごめんなさい・・・」

オレは低く頭を下げた・・・

「・・やっぱり・・モデルなんかやったらダメですか・・・？」

「そんなことを言ってるんじゃないんだよ、まあそれも問題だがね。君はここを卒業したら男に戻らなきゃいけないのに、こんな事をしていたら男に戻れなくなるかも知れないよ。」

「・・あ・・・はぃ・・・」

そうか・・・校長先生はオレが女になることにしたのを知らないんだ・・・オレはてっきり白石先生から聞いて知っているとばかり思っていた・・・

「それに何だねこの・・胸は！特殊メイクか何かかね？」

「あ・・あの・・・」

どう言ったらいいのだろう・・・オレの身体がもう女の子になってきてるのを言ってしまってもいいのだろうか・・・すでにタマまで取ることにしてるのに・・・きっとそれも校長先生は知らないのだろうし・・・

「あ・・あの・・・実はわたし・・・女になるつもりなんです・・・」

「え？！」

驚く校長先生に代わって、いままで黙っていた教頭先生が口を出してきた。

「戸田君ねぇ、君が性同一性障害だというのは、当校に入学するための口実でしょう？　なぜ君が女にならなきゃいけないんですか？」

「そ・・それは・・・」

どこまで言っていいのだろう・・・校長先生と教頭先生がどこまで知っているのか良くわからないと、オレも何を話していいのかわからない・・・

「・・あの・・・入学のときはわからなかったんですけど、わたし・・どうやら本当に性同一性障害なのかも知れないんです・・・」

「なにを言ってるんですか！あのころの君は普通の男の子だったでしょう？」

「・・たしかに・・そうなんですけど・・・わたし昔の・・小さいころの記憶が無いんです・・・母の話だと、そのころのわたしは家では女の子の服を着ていたって・・・」

「・・・・・・」

「だから、わたし・・もしかしたら性同一性障害なのかも知れない

な・・・って・・・」
そう話すと校長先生も教頭先生も黙ってしまった。　オレもしかしてマズイこと言ったかなぁ・・・

「・・それで・・あの・・・この胸も・・実は本物なんです・・・」

「・・・・・・」

二人は同時に雑誌の写真とオレを見比べた・・・言っちゃ悪いけど・・何だか間抜けな表情で思わず笑いそうになるのをこらえた・・・

「どういう事かね。」

「あ・・えっと・・・わたしの身体・・・ホルモン療法で、だいぶ女の子みたいになっちゃってるんです・・・」

「・・・女性ホルモンってやつかね？」

「・・・はい。」

「女性ホルモンなんか自分で飲んだのかね？」

「・・あ・・え～っとぉ・・・白石先生に頼んで打ってもらったんです・・・」

オレは白石先生がちゃんと説明もせずに、オレに女性ホルモンを投与したことは言わなかった・・・もしかして白石先生の責任になったりしたら可哀想だし・・・あの時はオレもどうしようかと悩んだけど、今となっては、あれも運命だったのかなと思っているのだから。（１７話～１９話参照）

「・・教頭先生、白石先生を呼んできなさい！」

「は、はい・・・いますぐに・・・」

教頭先生は慌てて保健室へ白石先生を呼びに行った・・・

「戸田君、そういう事は私たちにも言ってくれないと困るねえ。」

「・・はぃ・・・すみません・・・」

「本当に君は女の子になりたいと思っているのかね？」

「あ・・はい・・そのつもりです・・・もうすぐタマも取ってもら

うことになってるんです・・・」
「タマ？」
「あ・・えっと・・・その・・睾丸を・・・」
「君・・・そんな事をしたら、もう絶対に男に戻れなくなるんじゃないか？　ちゃんと考えたのかね？」
「・・・はい・・・でも・・どうせもう子供は作れないんです・・・女性ホルモンをやめても・・・」
「・・・・・」
「それなら女の子になった方が良いと思って・・・このまま睾丸を付けたままだと、女性ホルモンをたくさん打たなきゃいけないから・・・そうすると、副作用とか出るかもしれないって・・だからもう取っちゃった方がいいと思ったんです・・・」

「君がそのつもりなら私がとやかく言う事でもないかも知れないが・・・しかしねえ・・」
校長先生もいきなり言われたから、どう考えればいいのかわからないのかも知れない・・・だけど白石先生の前でヘンなことを言われても困ってしまう・・・そんなことをされたら、すべてが台無しだ・・・
「あのぉ・・校長先生・・・」
「何だね？」
「白石先生はわたしのことを元々、性同一性障害のコだと思ってるのをお忘れなく・・・白石先生の前で性同一性障害は入学するための口実だなんて言わないで下さいね。」
「・・・・！」
驚いてる・・・やっぱり忘れていたようだ・・・オレの大変さを少しは思い知っただろうか・・・
「教頭先生も忘れてないかしら・・・」
そう言った時、ドアが開いて教頭が白石先生を連れて戻ってきた。
「校長先生、白石を連れてきました！」

「教頭・・ちょっと・・・」
校長は慌てて教頭を引っ張って外に連れ出した・・・白石先生にマズイことを言わないように打ち合わせようというのだろう・・・そうこなくちゃ困る・・・この間に、こっちも打ち合わせておかなきゃ・・・

「白石先生、もう校長先生にはわたしが女になることも、タマを取ることも言いました。それと女性ホルモンは、わたしが先生に頼んで打ってもらったことにしていますから、そういうことで話を合わせてください。」
「で、でも有希ちゃん・・ホルモンを投与したのは先生の責任だわ。」
「ダメです・・もし本当のことを言って先生が辞めさせられたりしたらどうするんですか？　そんなことになったらわたしが困るんです！　先生がいなくなったら、わたしどうしていいかわからない・・・」
オレは必死で目で訴えた・・・少し潤んでいるみたいだ・・・女の子になってからどういうワケか、こんな時ウルウルきちゃうのだ・・・
「・・わかったわ。有希ちゃんに話を合わせればいいのね？」
オレはコクリとうなずいた・・・これならなんとかなるかもしれない・・・だってこの場ですべてを把握しているのはオレだけだ・・・校長や教頭だって、白石先生にオレを性同一性障害だと偽って入学させたことを知られたら困るだろう・・・これをうまく利用すれば、せめて千里だけでもモデルをやることを許してもらえるかもしれない。
「あれ？これ有希ちゃんじゃない？」
「！」
白石先生がテーブルに広げられたＪＩＮＯＮを指さして言った。そういえば白石先生はＪＩＮＯＮのことは知らないんだっけ・・・オ

レもだいぶ混乱している・・・しっかりしなきゃ・・・
「あ・・あの・・わたし元々このことで呼ばれたんです・・・」

しばらくしてから校長と教頭が戻ってきた。
「いやいや、待たせたね。」
けっこう時間がかかってくれて、こっちとしても助かった・・・
「え～っと・・・それで戸田君が女性になりたいという件だが、戸田君が白石先生に女性ホルモンを打ってくれと頼んだと？」
「はい。」
オレはすぐに返事をした。
「君に聞いてるんじゃない、白石先生に聞いてるんだ。先生それで間違いないんだね？」
白石先生はチラッとオレを見てから答えた。
「はい。間違いありません・・・」
「あの、わたしが白石先生に嘘ついたんです！　校長先生にもわたしが女の子になること言ってるって。」
「そうなのかね？」
校長に聞かれた白石先生は「はい」と答えた。

教頭は黙って聞いている・・・とりあえず校長だけで話を進める作戦のようだ・・・
「それで？　睾丸まで取ってしまうというのかね？」
「はい。睾丸を付けたままでは、戸田さんの身体には普通の男性と同じだけの男性ホルモンが放出せれ続けてしまいます。そうなると、それを打ち消すための女性ホルモンも大量に投与しなければなりません。今はまだ問題ありませんが、この状態を長く続けていると副作用が出る危険が大きいのです。」
「このことはご両親にも了解は取っているのかね。」
「はい。戸田さんのご両親も了解していますし、京都の薬科大にい

るお兄さんにも賛成してもらっています。」
「そうか・・・それなら他人の私たちが口をはさむ問題ではなさそうだ。我々としても戸田君が女性になるのなら学園生活での苦労も少なくなるだろうから、反対する理由はないかも知れんな。」
「はい。」
オレと白石先生は同時に答えた。

「それで・・・睾丸を取るというのは・・手術はいつするか決まっているのかね?」
「はい。もし支障が無ければ・・といってももう予約済みなんですけど8日に入院して、その日か次の日に手術という事になると思います。体育祭をはさんで出来るだけ勉強に支障が出ないように配慮しました。」
「え? 戸田君は体育祭には出ないんですか?」
急に教頭が口をはさんできた。
「あ・・はい・・そのつもりですけど・・・」
オレは何で教頭が急に出て来たのかわからず、あいまいに答えた・・・

「それは残念ですねえ・・・」
「教頭、何が残念なのかね?」
「いやぁ・・戸田君のダンスが本番で見られないのは何とも・・・戸田君のダンスは優美というか何というか・・・」
「そ・そ・・そんなことないですよ・・・」
教頭先生がそんなこと考えながらオレのダンスを見ていたなんて・・・想像しただけでゾッとする・・・そりゃぁ、オレは三吉先生についていって、踊りのお師匠さんに少し日本舞踊の手ほどきも受けたから、多少動きは良かったのかもしれないけど・・・日本舞踊は着物を美しく着るためには知っておいた方が良いと言われたからやってみただけだ・・・
「ほう・・それは残念だねえ。今度の練習の時にでも観てみようか

ね。明日まだ練習するんだろう？」
「い・いえ・・いいです・・見なくて・・・」
オレは恥ずかしくて顔が真っ赤になってるに違いない・・・なんか調子が狂ってしまう・・・オレは急いで話題を変えた・・・

「あ・・あの・・それじゃわたしが女になるのは認めて下さるんですね？」
「まあ、そうだな。我々が反対する事でもなさそうだ。」
「じゃぁ・・えっと・・このことなんですけど・・・」
オレはＪＩＮＯＮを指さして言った。
「わたしは辞めてもいいから、佐倉さんだけでもモデルを続けさせてもらえませんか？」
「あぁ、その事なんだがね、会長と協議した結果、モデルをやる事自体は認めても良いのではないかという事になったのだよ。」
「へ？！」
「いや、実は当校もここ数年、生徒数が減り続けていてねぇ、どうもお嬢様学校という堅いイメージが敬遠されているらしくて、なんとかしなければと考えていた所なんだ。」
「・・・・・」
「聞くところによると、この雑誌は若い娘にたいそう人気があるらしいじゃないか？　これはなかなかイメージアップになるのではと教頭が言い出してだね。」
「そうなのだよ戸田君！　私が進言したんだ。」
「それでまあ、会長が編集部とやらに電話したところ、こちらの要望も聞いてもらえるという事だったのでね。」
「え？　要望って・・・」
「我が校としては、やはり白鴻の生徒があまり過激な服装で雑誌に出られては困るのだよ。それに髪を染められたりしても困る。そういう話をした所、向こうも君たちには清楚なままでいてもらうつもりだと言うのでね。ただ問題は君の事だったのだよ。そのぉ・・・

なんだ・・・つまり君が女になるつもりだと言うのなら、もうそれも問題はない。ぜひモデルをやりたまえ。」

なんか白石先生がいるせいで話しにくそうだ・・・つまりオレが卒業して男に戻るのに支障がないか心配してくれたということなのだろう・・・

「あ、あの・・ただの読者モデルなんですけど・・・」

「読者モデル、結構じゃないかね。なあ教頭！」

「そうですよ！こうなったら戸田君たちには、どんどん当校を宣伝してもらわなければ！」

「は・・はぁ・・・」

なんかおかしなことになってきた・・・オレたちが読者モデルをやることは学校公認になったという事なのだろうか・・・まさかこんなことになるなんて・・・

「そ・・それじゃ・・よろしくお願いします・・・」

オレは頭を下げて白石先生と一緒に校長室を出た・・・

「でもスゴイじゃない、有希ちゃんがモデルなんて！」

「・・・読者モデルですよ・・・たいしたことないんです・・いっぱいいるんですから・・・」

「だけど読者モデルでも選ばれたってことは、有希ちゃんが女の子として認められたってことでしょう？」

「？！」

「それってやっぱりスゴイことじゃない？　先生うれしかったわ。」

・・・オレはそんなふうには考えたことなかった・・・選ばれたってことは、女の子として認められたってことなのだろうか・・・たしかに女の子に見えなかったら選ばれなかっただろうけど・・・なにしろ女の子の服のモデルなんだから・・・でも・・・

「なんか大変なことになっちゃったなぁ・・もし学校にバレたらやめればいいと軽く考えていたのに・・・」

「ふふっ、有希ちゃんは有希ちゃんらしくやれば良いんじゃない？
学校のことは置いといて楽しみなさいよ。綺麗だったわよ、さっきの雑誌の写真。」
「・・うぅ・・・」
そんなに言われると恥ずかしくなってしまう・・・だってあれはお化粧できれいにして貰ってるだけなのに・・・でも大好きな先生にそう言われると・・ちょっと嬉しいかも・・・
「先生も帰りに買っちゃおうかな！」
「・・！・・いいですよ・・・買わなくて・・・・」
オレ・・恥ずかしくて死んじゃいそうだ・・・

第５８話　手術　オレが無くしたモノ・・・

なんだか思わぬことになってしまったけど、モデルの件も何とかなって、千里にも感謝されるし・・・なんかオレとしても良いとこ見せられたみたいで悪い気なしなかった。もっとも今後のことを考えると心配がないワケじゃない・・・2年生や3年生にまで知られてしまって、どこにいても気が抜けないし・・・なんか入学したころに戻ったみたいな気分だ・・・

オレが疲れてトボトボ帰っていると、急に後ろから頭を叩かれた。
「痛っ！」
慌てて振り返ると長谷川だった・・・そういえば何か怒ってるみたいだったっけ・・・
「・・な・・なに・・・？」
長谷川は何も言わずに通りすぎていく・・・鞄になにか入れた？・・・ノート？・・あれでオレの頭を叩いたのかな・・・
「ちょっと・・痛いじゃない・・・なに怒ってるの？」
すると長谷川は、くるっと向き直ってオレに言った。
「有希ヒドイよね・・・」
「え？・・なにが・・・？」
「・・・自分で悪いと思ってないんだ？　最低ね・・・」
オレ・・何か悪いことしただろうか・・・ぜんぜん思い当たることがないんだけど・・・
「・・わたしが何か悪いことした？」
「モデルって何よ・・・みんなにチヤホヤされてさ・・・男のくせに女の子のモデルなんかやって・・・バッカじゃないの！」
・・そ・・そうか・・・みんなはオレが男だと知らないから素直に

喜んでくれたけど、長谷川は男だと知ってるから喜べないのか・・・
それとも・・男のオレがモデルになったんで妬いてるのかな・・・？

「あのさぁ・・・長谷川さんが喜べないのはわかるけど、そんなに怒ることないでしょう？」
「・・有希、ホントなんにもわかってない！　わたし他のコから有希がモデルやってること聞いたのよ！」
「・・？・・そう？」
べつにいいじゃん・・・みんなだって今日知ったんだし・・・
「・・・夏休みになってすぐだったそうじゃない・・・」
「あ・・撮影したの？　そうだけど・・・それが何か？」
「・・わたしが・・どんな気持ちだったかわからないの・・・？」
「・・・・・」
オレにはちっともわからない・・・
「・・・言ってくれなきゃわからないよ・・・」
だって・・そもそもオレは長谷川の気持ちなんて理解できたためしがないんだから・・・
「有希ったら・・男の子みたいなこと言うのね・・・」
・・だってオレ男だし・・・女の子の気持ちなんてわからないよ・・・

「有希、花火大会のあと言ったこと憶えてないの？！　もうわたしに秘密にしないって言ったじゃない！」
「あっ・・・」
それで怒ってるのか・・・たしかにオレはあのときモデルのことも言うべきかどうか迷ったけど・・・（４９話参照）
「夏休みに入ってすぐだったら、花火大会よりも前よね・・・？」
「・・うん・・・」
「だったら何であのとき言ってくれなかったの？」
だってあれは・・・

「・・で・・でも・・読者モデルのことは千里との秘密だったし・・・長谷川さんだって誰かに、自分との秘密をバラされたら嫌じゃないの？」

「・・・それは・・・・そうだけど・・・」

「千里とわたしは親友だもん・・・親友との秘密は・・いくら長谷川さんが親友以上の存在でも、やっぱり言えないよ・・・」

「・・そ・・そっか・・・」

少しは落ちついてきたのかな・・・

「わかってくれる？　わたし長谷川さんのことすっごく大切に思ってるんだよ・・・」

「・・・ごめん・・有希・・・」

わっ・・・なんか泣きそうな顔してる・・・！

「え？・・・い・・いいのよ・・わかってくれれば・・・」

「・・それじゃ他にも・・秘密にしてることあるんだね・・・」

「え？！　ま・・まあ・・・」

それはオレには言えないことはたくさんあるけど・・・タマのことだって・・・

「いいじゃない・・誰だって秘密の一つや二つあると思うわよ。それとも全部知らなきゃ友達じゃない？」

「・・・・・」

黙ってる・・・なんか気に入らないみたいだ・・・

「・・はぁ・・やっぱり言っちゃおうかな・・・」

「・・・・？」

「・・わたしね・・・あさってから一週間くらい休むの・・・」

「え？　なんで？」

「・・タマをね・・取ることにしたの・・・」

「・・・たま？」

「・・キ・・キン・・タマ・・・」

「え？！・・ダメよ・・・有希、性転換する気・・・？」

「違うよ！　タマだけだよ・・・今までと何も変わらないと思うよ・・・たぶん・・・」

オレは長谷川にタマを取らなきゃいけない理由を話して聞かせた・・・でも長谷川が納得してくれたかどうかはわからなかった・・・だけどこれはオレの問題だ・・・いくら長谷川が取らない方がいいと言っても、どうしようもないことなのだ・・・もう取ることは決まっているのだから・・・

「有希も・・いずれは性転換するのかな・・・」

「そ・・そんなつもりはないけど・・・」

オレはニューハーフでもオカマでもない・・・ただ女の子になろうとしているだけだ・・・でもそれって同じことなのだろうか・・・女の子になるには性転換しなきゃいけないのだろうか・・・でも・・・いまのオレにはまだ股間を女の子みたいにするなんて想像できない・・・タマを取るのは・・・ただ薬の副作用が出るのが心配なだけだ・・・

でも長谷川はオレのことを性同一性障害だと思っている・・・オレ自身も本当はそうなのかも知れないと思っている・・・だけどオレの心の中では、いまでもオレは自分のことを男だと思っている・・・それでもオレは性同一性障害といえるのだろうか・・・？

いや、オレは性同一性障害のことを勉強したからそういうことも有りえるのは知っている・・・でも知っているのと心からそうなのとはだいぶ違うと思う・・・オレが忘れてしまっている子供の頃のオレは、心も女の子だったのだろうか・・・？　いつかはオレも心から女になる日が来るのだろうか？　そうなってしまうのも怖い気がする・・・でもずっと心が男のままだとしたら・・それも怖い・・・

「わたしは性転換なんかしないと思うよ・・・だって・・何のためにするのかわからないし・・・」
「・・そうだね・・・有希はまだ男の子と付き合ったことないんだもんね・・・」
「?!」
そうだ、長谷川はオレが男を恋愛対象として見ていると思ってるんだった・・・まあ、オレがそう言ったんだけど・・・
「長谷川さんは・・わたしが男の子と付き合っても平気なの?」
「?・・・どういうこと?」
「・・いや・・・気持ち悪いとか思わないのかなって思って・・・元は男だし・・・」
今でもだけど・・・
「有希ったら女の子のモデルまでやるのに、まだそんなこと言ってるの?」
「・・だって・・・」
「有希はどこからどう見ても女の子よ。有希に告白されたら男の子も断れないんじゃない?」
「・・ま・・まさか・・・」
「有希はそんなこと心配しないで、さっさと取ってきたらいいのよ!」
「え?　いいの?」
「だってもう決めてるんでしょう?」
「・・う・・うん・・・」
なんかヘンな感じだな・・・オレは男の子と付き合うためにタマを取るわけじゃないのに・・・タマを取っても投与する女性ホルモンが減るだけで、何かが変わるワケじゃない・・・たぶん・・・

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

「それじゃ剃毛〈ていもう〉するから動かないでね。」

「・・はぃ・・・」

看護師さん〈女〉がオレの股間にムースを吹き付け、チンチンを指でつまんで持ち上げながら、オレのアソコの毛をジョリジョリ剃っていく・・・女の人にこんなことされるなんて、たまらなく恥ずかしい・・・でも男の人だったらもっと恥ずかしいかも知れないけど・・・オレはエステでもお姉さんにビキニラインを整えてもらっているから、やっぱり女の人の方がいいか・・・

オレが病院に着くと午前中に検査をして、午後から手術になった。簡単とはいっても手術は手術だから、かあさんも仕事を休んで付いて来てくれている・・・それにオレはまだ未成年だから、保護者がついていないと手術できないのだそうだ。前の晩からごはんを食べていないからお腹が減ってきたけど我慢しなきゃいけない・・・仕方ないからお水を飲んでごまかした・・・

剃毛が終ると、こんどは麻酔だった・・・

「麻酔打つから、最初はチクッとするかもしれないけど・・・」

「・・は・・はぃ・・・」

オレは身構えてはみたものの、どこに力を入れればいいのかわからなかった・・・最初の一回は少し痛かったものの、すぐに痺れてきて感覚がなくなり、その後は何回打ったのかもわからない・・・まるで股間全体が無くなってしまったような感じだ・・・

「じゃぁ、カテーテルを挿入します・・・」
「・・は・・はぃ・・？」
かてーてる？　そうにゅう？　何のことかわからないまま返事をすると、看護師さんはオレの股間に何かしている・・・しばらく何の感覚もなかったがいきなり背筋に“ゾワッ”とする感覚があって、やっとオレは何をされたのか想像がついた・・・どうやらチンチンに何か挿されたらしい・・・たぶん奥のほうはまだ麻酔が効いていなかったのだろう・・・すごくヘンな気持ちがする・・・

しばらく麻酔が効くのを待って手術が始まった・・・部分麻酔で意識はしっかりしているから、大きく足を開いた恰好を先生や看護師さんに見られるのが恥ずかしい・・・
「それじゃぁ、始めるよ。」
「あっ・・はい・・・よろしくお願いします・・・」
先生と看護士さんは、なにか専門用語とか話しながらオレの股間をいじっている・・・でもまったく感覚はなく何をされているのかわからない・・・

もっとも、手術の前にちゃんと、どんなふうに袋のどのあたりを切るのかとか、タマをどんなふうに取り出して、動脈と精管とかいうのを切り離して止血するとか詳しく説明してくれたから、どんなことが行われるのかは想像できる・・・といっても、あまり想像したい光景じゃない・・・本当は説明なんかしなくていいのに、手術の時は説明しなきゃいけない決まりなのだそうだ・・インなんとかコンセントっていうらしい・・・とはいえ、切るのも少しだし、案外簡単な手術らしいこともわかったから、聞いて良かったのかもしれない・・・

「・・戸田さん・・戸田さん・・終りましたよ・・・」

「・・う・・ん・・・？」
オレはいつの間にか眠ってしまったようだ・・・起きた瞬間、自分がどこにいるのかわからなかったが、すぐに病院だと気がついた。
「え？　もう終ったんですか・・・？」
看護師さんが優しく言った・・・
「ええ、手術は成功ですよ。５時ごろまで寝てて、麻酔が切れたらお家に帰っていいですからね。」
「・・はぃ・・・」
本当にそんなに早く帰れるんだ・・・説明は受けていたけど半信半疑だった・・・だって手術なんていうから、もっと大事かと思っていた・・・

看護師さんと入れ替わりに、かあさんが入ってきた・・・
「有希、具合はどう？　痛い？」
かあさんは思いのほか心配そうな顔してる・・・やっぱり簡単とはいえ手術だから心配してくれたのだろう・・・
「ううん・・全然なんともないよ・・・」
麻酔が切れたら痛くなるかも知れないけど、オレはそんなかあさんに心配かけまいと、明るくそう言った。
「そう？　良かった・・・」
かあさんはちょっと涙ぐみながらオレの手を握ってくれた・・・すると、オレにも手術が終ったのだという実感が湧いてきて、自然に涙があふれてきた・・・
「・・あ・・あれ？・・・ごめん・・痛いんじゃないよ・・・なんか知らないけど涙が・・・！」

オレはその時になって初めて、タマがなくなるというのが自分で思っていたより大きなことだったのだと気がついた・・・オレの股間にはもうタマはないのだ・・・そう思うと涙がとめどなくあふれてくるのだった・・・

「有希、泣かないでいいのよ・・・これでまた少し、有希は女の子に近づいたんだから。」
「・・う・・うん・・・」
でもオレにはそれが嬉しいことなのか、悲しいことなのか良く判らなかった・・ただ解っているのは、オレはもう取り返しがつかないことをしてしまったということだけだ・・・今のオレにはただ涙を流すことしか出来なかった・・・決して後悔しているワケじゃないけど涙はなかなか止まらなかった・・・

夕方になって麻酔が切れると少し痛みも感じるようになってきたけど、痛みはそれほどでもなかった・・・少し奥のほうがズキズキするくらいだ・・・
「気持ち悪いかもしれないけど、ちょっとだからガマンしてね。」
看護師さんはそう言ってオレのチンチンをつまんだ・・・
「はうっ・・・」
一気にチンチンに挿し込まれていたチューブを引き抜かれて、オレはたまらずうめいてしまった・・・数時間チューブを入れたままにされていたチンチンが、なんともいえない感覚だ・・・かあさんもいるのに恥ずかしい・・・

ベッドに起き上がってはじめて、オレは自分がオムツをしているのを知ってあせった・・・考えてみればチンチンにはチューブを通してたから漏らす心配はなかったけど、お尻の方はそうはいかない・・・オムツの中にウンチをしてなかったのがせめてもの救いだろう・・・でもこんな姿、かあさんには見られたくなかったな・・・女子高生がオムツなんてさまにならない・・・

お医者さんに傷口を見てもらい、ガーゼを張り付けてもらってか

ら帰ることなった・・・ガーゼの上からサニタリーショーツをはいて服に着替える・・・ガーゼで保護されているからタマがなくなっている感覚は、まだ良くわからなかった・・・なんかナプキンをしてる時みたいだ・・・抜糸とかしなきゃいけないと思っていたけど、自然に溶ける糸だから必要ないらしい。２日後にもう一度看てもらって、問題なければもう来なくていいということだった。２日後といえば体育祭がある日だ・・・練習だけして本番に出ないなんて、みんなに恨まれてないか心配だ・・・

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

２日後は午前中に病院に行って看てもらったが、順調に傷も塞がっているということでホッとして帰ってきた・・・もう病院に行く必要もないし、痛みもほとんど無いから、明日から学校に行くつもりだ・・・運動は一週間くらいは理由をつけて休むつもりだけど、学園生活にはもうほとんど支障はなさそうだ・・・

オレは最初はタマを取るということは、袋も切り取ってしまってツンツルテンになってしまうのかと思っていたけど、実際には袋はそのまま付いていた・・・鏡に映して見てみると、袋の裏側の真ん中の部分が２ｃｍほど切られている・・・傷口はひとつでも両方とも出せるものらしい・・・

袋が付いているといっても、もうタマが入ってないから縮んでしまいほとんど存在感はない・・・なぜ袋はそのまま残すのかというと、今後股間を女の子のように造る時に必要なのだそうだ・・・淫

唇という部分を袋で代用するらしい・・・ちなみに穴の部分はチンチンの皮を裏返しにして造る方法と、大腸を使って造る方法があるという話を病院の先生が説明してくれた・・・チンチンの皮を使うのが簡単らしいが、大腸を使って造った方が“ぐあい”が良いらしい・・・“ぐあい”って何か聞いてみると、男の人が入れた時の気持ち良さの違いだそうだ・・・そんなの・・オレの知ったことじゃない・・・・

ただこういう手術は、今回のタマを取る手術とは比べ物にならないくらい難しいものらしく、けっこう危険な手術で場合によっては死ぬこともあるのだそうだ・・・・オレにはそこまでして股間を女の子にする人の気持ちは全くわからない・・・

夕方になって、もうとっくに体育祭は終っただろうな・・・と思っていると、玄関のチャイムが鳴った。　とうさんはいるけど、どうせ出ないだろうからオレは階段を降りて玄関に行った。

「はい・・どなたですか？」

「あの、長谷川ですけど・・・」

え？！　長谷川さん・・・？

「ど・・どうしたの？」

「有希なの？　お見舞いに来たんだけど。」

「え？」

オレはドアを少し開けて顔だけ出した・・・

「来なくていいのに・・・どうせ明日は登校するんだから・・・」

オレは友達が家に来るのは好きじゃないのに・・・

「なんでわたしの家知ってるの？」

「そりゃぁ住所がわかってるんだから、だいたいどのあたりかくらいわかるわよ！」

そっか・・・

「ねえ、入れてよ！」
「え～・・・」
でも、せっかく来てくれたのに追い返すワケにもいかないし・・・
「うん・・いいけど・・・」
オレはそのまま自分の部屋に長谷川を招き入れた・・・リビングにいたらとうさんが書斎から出て来るかもしれないし・・・長谷川はオレのとうさんに興味があるみたいだけど、オレは会わせたくないのだ・・・とうさんのことは尊敬してるけど、父親が三流小説家なんてやっぱり恥ずかしい・・・

「へ～・・ここが有希の部屋ぁ？・・・なんか女の子の部屋って感じね。」
「・・・・・」
たしかにオレの部屋は、いつの間にかすっかり女の子の部屋になってしまってる・・・長谷川の部屋よりずっと女っぽい・・・なんて言っても問題なのは、存在感たっぷりの白いダ円形の鏡台だろう・・・こんなの男の子の部屋には絶対にない・・・
「ち・・ちょっと待ってて・・なんか飲み物もってくる・・・」
オレはいたたまれなくなって、急いで部屋を出て階段を降りていった・・・

ジュースとクッキーを持って部屋に戻ると、長谷川はカバンからビデオカメラを取り出していた・・・
「どうしたの？　カメラなんか・・・」
オレが不審に思ってそう聞くと
「ママに頼んで撮ってもらったのよ。有希メイポール見たがってたでしょう？」
「え？！　撮ってきてくれたんだ？　ありがとう。」
オレは長谷川のとなりに座ってビデオカメラの小さなモニターをのぞき込んだ・・・

「わあー、すごいじゃない！」
何本もの高いポールに、音楽に合わせて紅白のリボンが規則正しく編まれていく様は、まさに壮観以外の何ものでもない！こんなにキレイならオレもやりたかったのに・・・でもやってる本人は全体がどうなってるかなんてわからないんだけど・・・

オレのクラスも写ってる・・・千里は女の子らしくて可愛くダンスしてる・・・岡本はあまり嬉しくなさそうだ・・・嫌がってたもんなぁ・・・原口はこうしてあらためて見ると胸が大きいから、体操服を着ているとちょっとエッチな感じだな・・・普段はこの女の子たちの中にオレも女子の体操着を着て混じってるのだと思うと、なんだか不思議な気がする・・・
「あっ、長谷川さんだ！」
長谷川もあらためて見ると凹凸がしっかりしてて、思ったより女らしい体つきしてる・・・いかにも女子高生って感じだ。
「わっ！・・・わたしのは見なくていいの！」
長谷川は慌てて自分が写ってるシーンを速回しで飛ばしてしまった・・・
「あ～・・・長谷川さんのところも見たかったのに・・・」
「カメラ貸しといてあげるから、そんなに見たいんなら後で見てよ・・・」
「・・・うん・・・」
たしかに自分が写ってるところを見られるのは恥ずかしいかも知れないな・・・

ビデオを見終ると、長谷川は言いにくそうにオレに聞いた。
「それで・・・手術は・・・大丈夫だったの？」

「あ・・うん・・ほとんど何ともなかったよ。」
「なんか・・喪失感とか・・ないものなの？」
「・・喪失感・・・？」
オレはその言葉を聞いて、あの手術の後から続いている物悲しいような、なんともいえない感情の正体がそれなのかも知れないと思った・・・別に後悔してるワケでもないのに、なにか空しいようなスッキリしない気持ち・・・
「・・そういうのは・・少しあるかも・・・」
これまでずっとあったモノが無くなった・・・ただそれだけのことなのに・・・どうせもう必要ないモノなのに・・・頭では解っているのに・・・それでもなぜか少し悲しい・・・無くしてしまったことがただ悲しいのだ・・・こういうのを喪失感というのかも知れない・・・
「・・でも・・大丈夫よ・・・きっとすぐに慣れるから・・・？！」
そう言ったとたん、オレの目からまた涙があふれ出してきた・・・

「・・有希・・・」
「あ・・いいの・・な・・なんでもないの・・・ただ・・ただ・・・」
言葉につまるオレを長谷川はギュッとしっかり抱きしめてくれた・・・こんなこと・・・恥ずかしいハズなのに・・・なぜか心が安らいでいく・・・まるで心の中の氷が溶けていくみたい・・・

・・もう少しこのまま長谷川に抱かれていたい・・・こんな時だもん・・・少しは甘えてもいいよね・・・

第５９話　裏表？　オレに似合うかは別問題

タマが無くなって初めての登校は、さすがに緊張してしまう・・・もっとも、知っているのは白石先生と校長と教頭と、あとは長谷川さんだけだから、本当は緊張する必要などないのだけど・・・クラスのみんなは、オレはお葬式に行ったと思ってるから、だれもオレがタマを取ってきたことなど知るハズもない・・・ただオレ自身の気持ちの問題だ・・・

家にいる時は、あまり気づかなかったけど、こうして今までどうりの生活をしてみると、タマが無いというのは妙にスッキリしているものだ・・・それに昨日まではガーゼをつけていたけど、今日はもうガーゼもつけてないからタマがない感覚がよくわかる・・・股間の感覚というのは、ほとんどがタマの感覚だったのだと知った・・・チンチンがこんなに感覚がないモノだったなんて・・・これなら体育の時に、もし股間にボールが当ったらどうしようとか心配しなくて済みそうだ。これまで女の子は足を閉じて座らなきゃいけないのが、オレとしてはけっこう大変だったけど、タマが無いとそれもあまり気にならない・・・

ただ、困ったのが股間の痒(かゆ)さだ・・・手術の時に剃った毛が、短く生えてきてチクチクして痒くてたまらない・・・思わず掻いてしまいたくなるが、必死でガマンするしかない。　だって女子高生がスカートの上から股間を掻いてたりしたら、はしたなくって仕様がない・・・

オレは悪いことにアレルギー体質だから刺激には弱い・・・でも、だからといって擦れないようにするとガニ股になってしまうからそれも出来ない・・・おかげでオレの股間は真っ赤になってしまった・

・・早くパンツの生地から飛び出ないくらい毛が伸びてくれないと、たまったもんじゃない・・・

昨日あんなことがあったから長谷川と顔を合わすのが気まずい・・・長谷川が抱きしめてくれたおかげで、オレも気分がスッキリしたから感謝してるけど、女の子になぐさめてもらうなんて男としては情けない気がする・・・いくら今はオレも女の子だといっても、長谷川はオレが男だと知ってるのだから、やっぱり情けないヤツだと思われてそうな気がする・・・もっともオレは女の子になってからこっち、長谷川には情けないところを見られっぱなしだ・・・考えてみれば長谷川とは中学のころは親しくなかったワケだから、案外もともと情けない男の子なのだと思われてるかも知れないが・・・

今日は昼休みまで上手いぐあいに長谷川とは出会わなかった・・・1組と3組だからこんな日も珍しくはない・・・オレもあんまり教室から出なかったし・・・

「失礼します・・・」

オレは職員室の戸を開けてお辞儀をした・・・職員室に入るのはやっぱり緊張する・・・学級委員とかやってるコなら別かもしれないけど、オレみたいに出来の悪いコは職員室には良い思い出はあまりない・・・中学の頃の職員室の思い出といえば、赤点をとってしまった時に呼び出されて怒られたくらいだ・・・

それが今は職員室に三つ編みのやり方を習いに来るようになるなんて・・・人生ってわからないものだ・・・

「あの・・長山先生・・・こんな感じでいいでしょうか・・・？」

オレは家で編んできたヒモを長山先生に見てもらった。手術の後、

じっとしてなくちゃいけなかったから、三つ編みの練習をしていたのだ・・・おかげでだいぶ上手になった気がする。
「なかなか上手に編めるようになりましたね。それでは次は髪を編んでみましょうか？」
「・・はい・・・」
オレはまず、お下げにした状態から編むことにした・・・ふたつにくくらずに編むのは難しいらしい・・・

まず片方の髪の束を三つに均等に分けなきゃいけないが、その段階からもう難しかった・・・なかなか同じくらいに別けられない。
なんとか分けてみたものの、二本の手で三本の髪の束をあやつるのは想像してたよりずっと難しかった・・・ヒモみたいに一本一本がはっきりしていないから、どうしても別の束から混じってしまうのだ・・・そうならない為には両手の指を駆使しなければならない・・・

とりあえず後ろ手で編みだして、途中で前に持ってきて編んでいると先生に止められた。
「戸田さん、途中で編み方が逆になってますよ。」
「え？」
鏡で良く見てみると、たしかに途中でよじれてしまっている・・・
「後ろから持ってきたときに手が逆になってしまったのよ。」
オレはまた髪の毛をほどいて、今度は最初から前で編み出した・・・
最初の方が編みにくいけど、これなら手が逆になることもない・・・
すると長山先生が、オレが編んだヒモを見せながら言った。
「戸田さん、三つ編みには表と裏があるのを知ってますか？」
「・・い・・いえ・・知りません・・・」
表と裏って何だろう・・・
「こうやって正面から見たときにＶの字のように内側に向って編まれているのが表、逆に外側に向っているのが裏なのよ。」

「・・・・・」
「表の方が見た目に綺麗だから、正面から見た時に表側を見せるように編まなきゃいけないのよ。」
オレは鏡で自分が編んだ髪の毛を見てみたが、ちゃんと表になっている・・・
「・・あの・・ちゃんと出来てるみたいですけど・・・」
「そうかしら?編んだ後はどうするの?」
「・・えっと・・こうやって・・・」
オレは編んだ髪の毛を背中の方にやった・・・
「そうよね、でも今見えているのはこちら側なのよ。」
そう言って先生は背中側に見えている面をひっくり返してオレに見えるようにしてくれた。
「あっ・・・」
たしかに逆になっている・・・
「三つ編みを編むときは自分から見てじゃなく、他の人から見たときに表になってなきゃいけないのよ。」
そういうことなのか・・・他の人にどう見えるかなんて考えてなかった・・・

「それでは、もう一度編んでみましょう。」
オレはまた髪をほどいて、今度は逆に編もうとした・・・しかしこれが思ったより難しい・・・今までは上に上に持って来ていたのに、今度は下に下に編んでいかなきゃいけないのだ・・・ただでさえ髪の毛がバラバラになって難しいのに、編み方まで逆ではなかなか上手くはいかなかった・・・
「難しいようね。」
「・・はぃ・・・」
「それじゃぁ、こうして練習してはどうかしら?」
先生は長い三本のヒモを真ん中で結んでオレの両肩に掛けた・・・
「この状態で編んで手の動かし方を練習しましょう。」

たしかにこれで練習すればやりやすそうだ・・・とりあえずヒモで編めるようにならないと、髪の毛を編むのは難しそうだし・・・オレが編んだ髪は他の束から髪の毛が混じってしまって、ぜんぜんキレイに編めていなかった・・・

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

オレが昼休みの残りの時間を、中庭のベンチに座って三つ編みの練習をしていると、向こうから長谷川がやってくるのが見えた・・・オレは長谷川と顔を合わすのが恥ずかしくて、知らないふりをして編み続けていた・・・

「有希、なにやってるの？」

「あ・・三つ編みの練習・・・」

「へ～・・・」

なんだか見てられるとやりにくい・・・

「そんなに見ないでよ・・やりにくいじゃない・・・」

「なんでそんなふうに肩から掛けてやってるのよ。」

「あ・・これ？　こうやって前で編むと・・・こう・・後ろにやった時に編み目が逆になっちゃうの・・・だから前で編むときは、編み目をまえもって逆に編まなきゃいけないのよ・・・」

「へ～・・・知らなかった・・有希、詳しいのね。」

「そんなことないよ・・・出来ないから練習してるんだもん・・・」

「でも他のコなら今どき三つ編みなんてって思うけど、有希は何やっても可愛いからいいよね。」

「そ・・そんな・・別に可愛いと思ってやってるんじゃないよ！長くなったから三つ編みにしなさいって言われてるんだ・・・それに

ＪＩＮＯＮの編集長に言われてるから、しばらく髪も切れないし・・・」
オレは好んで三つ編みにしたいと思ってるワケじゃない・・・

「有希はえらいね。」
「え？・・・な・・何よ急に・・・」
「こうやって女の子になる努力してるじゃない。」
「・・・・・」
「モデルもやっちゃうし・・・アレも取っちゃうし・・・」
「・・・・！」
「わたしなんか全然努力してないのに・・・」
「そりゃそうでしょう？　長谷川さんは最初から女の子なんだから、努力なんかする必要ないじゃない。」
「でも今は有希の方がぜんぜん女っぽいわよ・・・」
「そ・・そんなことないよ・・・」
だって長谷川はこんなこと言ってるけど、女っぽくする気なんてなさそうだし・・・

「長谷川さんだってさ、もっと可愛い服とか着ればいいんじゃない。」
「だってわたしは有希みたいに可愛い服なんか似合わないもん。」
「そんなことないよ・・長谷川さんだって・・に・・似合うかもよ・・・」
でも正直・・あんまり想像できないかも・・・
「有希、今やっぱり似合わないと思ったでしょう！」
「そ・・そんなことないよ・・」
バレちゃったかな・・・長谷川ってなにげに察しがいい・・・
「・・ただ・・想像できなかっただけ・・・だっていっつも男の子っぽい恰好してるから・・・」

「でもさ・・似合わなく思えても、着てれば似合ってくるかもしれないわよ。」
オレだって似合わないのにずっと女の子の服を着ているんだから・・・

「それにさ、女の子の服って着こなしでぜんぜん変わるんだよ。ただ着ればいいってもんじゃないの。」
あれ?・・・なんか長谷川のようすがおかしい・・・
「・・・さすがモデルね・・・言うことが違うわ・・・」
「あ・・そ・・そんなんじゃないの・・・」
なんかまた怒らせちゃったかな・・・オレ自分が言われてきたこと言っただけなのに・・・でも・・・やっぱり男にこんなこと言われたら腹が立つかも・・・
「ご・・ごめん・・・そんなつもりで言ったんじゃないの・・・わたしがいつも言われてることなのよ・・・だから・・・」
「有希は自分が出来ることは、本当の女の子ならみんな出来ると思ってるみたいだけど、そんなもんじゃないのよ!」
そうかなぁ・・・オレくらい努力すれば誰だって出来ると思うけど・・・でもそんなこと言ったらまた怒っちゃいそうだ・・・
「う・・うん・・ごめん・・・もう言わないよ・・・」
こんな時は素直にあやまるのが一番だ・・・特に相手が女の子の場合は・・・まあ、あやまれば良いってもんじゃないって言われることもあるけど・・・長谷川はあんがい許してくれる。

「べつに謝らなくてもいいわよ・・・ところでさぁ・・有希、もう平気なの?」
「え?　なにが?」
「手術の後よ。」
「あ・・うん・・・ちょっと痒(かゆ)いけどね・・・」
「痒い?　痛いんじゃないの?」

「あ・・ちょっとはズキズキするけど・・でも平気・・もう体も洗えるし・・シャワーだけで、お風呂に浸かるのはまだだけど・・・」
お風呂のことなんか言うと、裸を想像されそうで恥ずかしい・・・
「痒いのは、手術のために剃った毛が短く生えてきてるから・・・チクチクするの・・・」
「そう・・・」
長谷川は何か言いたそうにしている・・・

「有希、あしたから放生会〈ほうじょうや〉が始まるの知ってる?」
「放生会?」
もうそんな時期なのか・・・放生会というのは筥崎宮〈はこざきぐう〉で行われる博多の秋のお祭りだ。生き物を供養するためのものらしい。どんたく、山笠と並んで博多の三大祭りなんて言われている。他の地方では〈ほうじょうえ〉というらしいが、博多では〈ほうじょうや〉と呼ぶ・・・理由は知らないけど・・・

「無理そうだったらいいんだけど・・行かないかなぁと思って。」
オレの身体を気づかってくれてるみたいだけど、もうそんなに悪くないし・・・
「いつまでやってるの?」
「18日までだったかな。」
「だったら間に3日も休みがあるね・・・行けると思うけど・・・」
その時、オレは良いことを思いついた。

「そうだ、また浴衣着て行こうよ!まだ一回しか着てないし。」
オレは三吉先生のところでは何度か着たけど、外で着たのは花火大会の時だけだ・・・たぶんこれを逃すともう今年は着る機会も無さそうだし・・・
「うん、いいんじゃない? あ、そうだ・・有希このまえわたしが着た紺の方を着て来てよ。あっちの浴衣着た有希も見てみたいし。」

「・・・いいけど・・・長谷川さんはピンクのはイヤじゃないの？」
「わたしは着ないわよ。」
「え～・・・なんで？」
「だって窮屈だし、面倒臭いじゃない。」
「そんなぁ・・・」
せっかく長谷川と着ようと思って言ったのに・・・オレだけなんて・・・
「じゃぁ・・わたしもやめる・・・」
「ダメよ！有希は着てきなさいよ。」
「なんでぇ・・・」
相変わらず我がままだなぁ・・・長谷川って優しいんだか、イジワルなんだか良くわからない・・・そういえば長谷川ってＢ型だったっけ・・・血液型の性格判断ではＢ型の女の子とＯ型の男の子は相性いいって聞いたことがあるんだけど・・・でもオレはもう女の子だからなぁ・・・こういう場合どうなんだろう・・・
「わかったわよ・・いいよもう・・わたしだけでも着ていくから・・・」
本当はふたりで着たかったけど、長谷川は言い出したらきかないし・・・こうなったら紺の浴衣に合わせてちょっと色っぽくしちゃおうかなぁ・・・髪も大人っぽいカンジでアップにしてさ・・・・・あれ？　オレ何てこと考えてるんだろう・・・オレに色っぽさなんて似合うハズないのに・・・
　でもあの浴衣に少女っぽい髪型じゃ似合わないし・・・オレには似合わないかも知れないけど、浴衣に合う髪型じゃなきゃおかしい・・・だからやるのだ・・・決して自分が色っぽさを出せるなんて思ってるワケじゃない・・・！
「でも・・なんで長谷川さん放生会に行きたいの？」

「有希、東京ケーキって知ってる？」
「東京ケーキ？　知らない・・・」
オレはそんなの聞いたこともない・・・
「わたしも知らないんだけど、ママがね、食べたがってるの。その東京ケーキっていうの。」
「へ～　うちのかあさんも知ってるかなぁ・・・」
「どうかな、ママの話だと有名らしいんだけど。」

「・・で・・その東京ケーキっていうのを買いにいくワケ？」
「うん・・もちろんそれだけってワケじゃないわよ。露天もいっぱい出てるから遊べばいいじゃない。有希そういうの好きでしょう？」
「・・うん・・まあ・・・」
そりゃぁ、嫌いじゃないけど・・・オレどんなイメージ持たれてるんだろう・・・でも・・“東京ケーキ”っていうのがどんなのか知らないけど、オレもなんだか“東京ケーキ”ってのを見てみたくなってきた。
「じゃぁさ、一応今度の土曜日ってことにしといて、もし天気は悪かったりしたら次の日にしない？」
オレがそう提案すると、
「そうね、じゃそうしようか。」
長谷川も同意してくれた。

“東京ケーキ”ってどんなのかな・・・おいしいのかなぁ・・・
なんだか楽しみになってきた・・・

「ねえ、かあさん・・今度の土曜日に長谷川さんと放生会行っていい？」
「いいわよ。」
「浴衣着て行こうと思ってるの、今年はもう最後になりそうだし。」
「あら？　でも放生会から衣替えの季節だから、本当は単衣（ひとえ）を着るのが正しいのよ。」
「えっ・・そうなんだ・・・じゃぁ浴衣着ちゃダメなの？」
「う～ん・・でも有希くらいの歳なら浴衣でもおかしくないかも知れないわね。」
「でも、浴衣着てるのがわたしだけだったら恥ずかしいな・・・」
「それは大丈夫だと思うわよ。たぶん浴衣の人も少なくないはずよ。」
「だったら・・・やっぱり浴衣で行こう。だってせっかく買ってもらったんだもん！」
それに紺の浴衣は外では着てないから、一度は着ないと浴衣がかわいそうだ。

「放生会には有希が誘ったの？」
「ううん・・長谷川さんがね、お母さんが“東京ケーキ”っていうのを食べたがってるんだって。かあさんは“東京ケーキ”って知ってる？」
「知ってるわよ！　懐かしいわねぇ、良かったらかあさんにも買ってきて。」
「う・・うん、いいよ。実はわたしも話聞いて食べてみたかったの。みんなの分買ってくるよ。でもどんなのかなぁ？」
「どう言ったらいいのかな・・丸いのよ。」
「え？！　丸いの？」
松露饅頭（しょうろまんじゅう）みたいなものかな？
「片方だけ焼けててね。」

「へえ～・・・」
どんなのかな・・なんかおいしそう・・・

「でも、有希もだいぶ外出も平気になってきたみたいね。」
「あ・・・そういえば・・・」
オレはいつのまにか遠出をしてもそんなに緊張しなくなっていた・・・今でも一応、お薬を飲んで、ナプキンも忍ばせてるけど、前はそんなにしてても今よりずっと緊張していた気がする・・・
「外に連れ出してくれる、長谷川さんやレナちゃんのおかげかも知れないわね。」
それはどうだろう・・・長谷川にもレナにもイジワルなことばかりされてる気がするけど・・・でも、そのおかげで普通のことには緊張しなくなってきてるのかも知れない・・・だって水着なんかに比べたら少々のイジワルなんかなんでもない・・・ちょっと恥ずかしさを我慢すればいいだけだ・・・

「長谷川さんもレナも・・もう少し優しくしてくれたらいいんだけどなぁ・・・」
「有希、人に優しくしてほしかったら、自分から相手に優しくしないとダメなのよ。有希は長谷川さんやレナちゃんに優しくしてる？」
「・・・・・」
そういえば白石先生にも同じことを言われた気がする・・・（５６話参照）
「でも・・優しくするって・・どうしたらいいのかわからないな・・・」
「そうね、それはみんなが思ってることなんじゃないかしら？　とにかく有希はいろんなことに気付かなきゃいけないわね。」
「気付く・・・？」

それって・・いったいどういうことなんだろう・・・オレは何か

に気付いていないのだろうか・・・気付くと優しく出来るのだろうか・・・

第６０話　放生会　博多の三大祭りのひとつ

オレは紺地に白い朝顔の柄の浴衣を着て長谷川の家に向っていた・・・さすがに真っ昼間から一人で浴衣を着て歩くのは緊張する・・・ドキドキするから早く着こうと、どうしても早足になってしまう・・・

長谷川のマンションのドアの前で息を整えた・・・玄関のチャイムを押すと待っていたかのように、すぐにお母さんが開けてくれた。

「有希ちゃん、いらっしゃい！　まあ～・・今日もきれいねぇ・・・」

「・そ・・そ・・そんなことないです・・・」

いつの間に長谷川のお母さん、オレのこと“有希ちゃん”って呼ぶようになったんだろう・・・

「その浴衣、このまえ順子が着せてもらった浴衣じゃない？　あんまり素敵だから、順子が着たのと同じものとは思えないわ。同じ浴衣でも有希ちゃんが着ると映えるわねぇ・・・」

「・・そ・・そんなぁ・・・」

なんか長谷川のお母さんってオレのこと褒めすぎだ・・・そんなにお世辞を言われると照れくさくてしょうがない・・・

「それにしても、今日は少し大人っぽくない？」

「あ・・はぃ・・・髪型とか・・帯とか・・・ちょっと・・・」

今日はかあさんが仕事に行く前に、髪をきれいにセットしてもらったのだ。前髪だけ下ろして後ろとサイドをアップにしてもらった・・・そして帯も可愛い蝶結びではなく、おとなしめの文庫結びにしていた。浴衣というものは帯の締め方でずいぶんイメージが変わるものだ。オレはまだこの２種類しか出来ないけど、来年は他の締め方も三吉先生に教えてもらおうと思っている。

「もう秋に入ったから、本当は浴衣じゃいけないらしいんですけど・・・まだあまり着てなかったから・・・それで少し大人しい感じにしてもらったんです・・・あんまり・・わたしには似合わないかもしれないけど・・・」

「そんなことないわよ。すごく似合ってるわ！　さ、入って・・・」

オレはすぐに長谷川と出かけようと思っていたのだが、お母さんにそう言われては断るのも失礼な気がする・・・それに長谷川の準備が、まだ出来てないのかもしれないし・・・

「順子、有希ちゃんいらっしゃったわよ。」

お母さんが長谷川の部屋に呼びかけると、引き戸が勢い良く開いて長谷川が出てきた。

「ママ！なんですぐに教えてくれないのよ！有希が来たらすぐに教えてって言ったでしょう?!」

「ご、ごめんなさい・・・」

なんかお母さんは悪くないのに怒られて可愛そうだなぁ・・・長谷川ってお母さんにいつもこんな感じなのだろうか・・・

「ママまた有希に変なこと言って困らせてない？」

「変なことなんて言ってないわよ、今日もきれいねって言っただけよ・・・」

「言ってるじゃない！有希はそういうこと言われると傷付くのよ！！」

なんか親子のケンカなんて見てられない・・・長谷川だって同じようなことオレに言ってるじゃないか・・・

「は・・長谷川さん、わたし何も困ってないからさ、もうそのくらいにしてよ・・・」

「・・・・・」

「それにさ、わたしもそういうこと言われるのに、だいぶ慣れてきたみたいだし・・・読者モデルなんかやったからかも知れないけど・

・・」
「え？　有希ちゃん、モデルさんもやってるの？」
「い・・いえ・・・ただの読者モデルですけど・・・」
「すごいじゃない・・・何の雑誌に載ってるの？　おばさんも見てみたいわ！」
「あ・・九州ＪＩＮＯＮ〈ジノン〉ですけど・・・別に見なくても・・・」

「順子は知ってたの？　有希ちゃんがモデルやってること。」
「・・うん・・・」
「何で言ってくれないのよ。このコは何にも話してくれないんだから・・・順子は買ってないの？　その雑誌！」
「・・買ってない・・・」
「もう・・・ダメねぇ・・・どうしてお友達が載ってるのに買わないのよ！」
長谷川のお母さんって結構テンション高いな・・・これじゃ長谷川と合わないハズだ・・・専業主婦だから退屈してるのかなぁ・・・お父さんもずっと単身赴任みたいだし・・・

「それはそうと・・・長谷川さん、その恰好で行くの？」
長谷川はいつもと一緒でチェックのシャツにジーンズと女の子っぽさが全くない服装だ・・・
「・・そのつもりだけど・・・」
「長谷川さんも、もう少しオシャレすればいいのに・・・」
「そうなのよ！　有希ちゃんからも言ってちょうだい・・順子ったら可愛い服を買ってあげても着ないんだから・・・」
「よけいなお世話よ！　有希もそれ以上言ったら、もう困っても助けてあげないからね！」
「そ・・そんなぁ・・・」

長谷川に見放されたら、オレ困っちゃうよ・・・
「わかったよ・・もう言わないから・・・放生会行こう?」
長谷川を怒こらせると面倒だ・・・こういう時はこっちが折れるに限る・・・

「それじゃ、お母さん行ってきます。」
何も言わないでさっさと出て行く長谷川のかわりに、オレが長谷川のお母さんに挨拶をしてドアを閉めた。長谷川はオレを待たずにどんどん行ってしまう・・・
「待ってよ、長谷川さん!」
オレは急いで小走りに長谷川を追いかけた・・・だけど浴衣と草履ではなかなか早く走れない・・・
「ねえ、まだ怒ってるの? もう少しゆっくり歩いてよ・・・急いだら浴衣の裾がはだけちゃう・・・」
「・・・有希ったら、言うことまで女の子みたいね・・・」
「・・そ・・そんなこと言ったって・・・」

オレが思うに、人間の行動って服装によるところも大きいようだ・・・オレは女の子の服を着るようになって、それを痛切に感じていた・・・女の子の服には自由度が少ないものが多いから、そういう服を着るとどうしても動きが小さくなってしまう・・・スカートだと足を開いたらおかしいし、ブラウスだと激しい動きをしたらすぐにスカートから裾が出てしまう・・・そうならないように動くことが女らしい行動につながっている部分も大きいのではないだろうか・・・洋服でもそうなのに、着物となると一段と動きが制限される・・・おかげで今日のオレはよけいに女っぽい行動しかできない・・・浴衣を着て大股開いて走るなんて無理に決まってる・・・

「長谷川さんはジーンズだから平気でしょうけど、わたしは浴衣な

んだからそんなに早く歩けないのよ・・・」
「・・わかったわよ・・ゆっくり歩けばいいんでしょう?」
「うん・・・」
長谷川はやっとオレの歩調に合わせてくれた・・・そのあとをチョコチョコついて行く浴衣のオレ・・・これじゃまるでオレが長谷川の彼女みたいだ・・・長谷川も浴衣を着てくれれば・・・いや、せめてもう少し女の子らしい恰好をしてくれたら・・・女の子どうしの友達として歩くことが出来るのに・・・
「ねえ、手つないでいい?」
「な・・なに甘えてんのよ有希・・・」
「いいじゃない、女どうしなんだから。」
「もう・・・しょうがないなあ・・・」
長谷川はそう言って照れくさそうに手を差し出した・・・なんか長谷川ったら本当に男の子みたいだ。
「ふふっ・・・」
考えてみると、レナとはよく手をつなぐけど・・・長谷川と手をつなぐなんてあまりないことだ・・・長谷川の手はレナの手みたいに冷たくない・・・それに少し大きくて頼りがいがあるかも・・・もっとも大きさでいえばオレの方が少し大きいかな・・・
「こうして見ると有希の手って、けっこう華奢(きゃしゃ)なんだね。女の子の手みたい。」
「・・そ・・そうかな・・・?」
たしかにオレの手は男としては華奢かもしれないが・・・それを女の子から言われるのはちょっと微妙だ・・・それにオレの手の方が長谷川よりは少し大きいのに・・・とはいえ、もう女になってるクセに、ちょっとの違いをいちいち主張するのもどうかと思う・・・男のころは手の小ささは少しイヤだったけど、オレはもう女なんだし、女の子みたいな手でもいいのだ・・・

―――――――――――――――

―――――――――――――――

――――――――――

天神からは地下鉄で箱崎へ向う・・・お宮の名前は筥崎なのに駅や地名は箱崎だ・・・へんなの・・・

「あ、もう来てるよ。」

オレがホームに入って来た電車に乗ろうとすると、長谷川がオレの腕をつかんで止めた。

「これじゃないわよ。貝塚行きに乗らないと途中までしか行かないわよ。」

「そうなの？」

オレはあまり地下鉄には乗らないし、行くとしても博多駅の方向だから、箱崎の行き方はあまり知らない・・・

　2本ほど見送ると、次に入ってきたのが貝塚行きだった。車両の色が違うのは、たぶんＪＲから乗り込んできたやつだからだろう・・・乗ってみるといつもの車両とは臭いも違う・・・

シートに座ると長谷川がオレの耳もとで小声で言った。

「・・有希・・今日もナプキンつけてる？」

「・・・う・・・うん・・・・」

なにもそんなこと聞かなくてもいいのに・・・長谷川さんもレナと一緒でオレを恥ずかしがらせるのが好きなのかなぁ・・・

「もし漏らしちゃったら言ってよね。すぐ取り替えたいでしょう？濡れたままだと気持ち悪いのよね。」

「・・・・・？」

なんだ・・・気を使ってくれてるのかな？・・・たしかに漏らすものは違うけど、ナプキンが濡れた気持ち悪さは女の子の長谷川は良く知ってるに違いない・・・

「ありがとう・・・でも・・たぶん大丈夫よ・・用心のためにつけてるだけだから・・・」
やっぱり長谷川って、なにげにやさしいところもある。

「ねえ有希、モデルの撮影って大変だった?」
「うん・・まあ・・何度も着替えなきゃいけないのとか、ずっとテンション上げとかなきゃいけないのは大変だけど・・・でもけっこう楽しいよ。」
「プロのモデルさんとも会ったりした?」
「ううん・・わたしはまだちゃんとした撮影が間に合わなかった時とかに呼ばれただけだから・・・」
「そうなんだ・・・でも有希きれいに写ってたね。」
「え?　長谷川さん見たの?」
「そりゃぁ、見たわよ!」
・・・長谷川はオレがモデルやってると聞いただけで、実際には雑誌は見てないのかと思ってた・・・さっきもＪＩＮＯＮ買ってないって言ってたし・・・だって長谷川はオレのこと男だと知ってるんだから、女の子としてモデルやってる姿なんて見たくないんじゃないのかなぁ・・・

「佐倉さんより有希のほうが大きく載ってたね。やっぱり有希の方が可愛いからよね?」
「そ・・そんなことないよ・・たまたまわたしが着た服が大きく載せるやつだったんだよ・・・」
それにオレより千里の方が可愛いし・・・
「それにさ・・書類が来たのは千里の方なんだよ。わたしはただ付き添いで行ったら、たまたま受けるようになったっていうか・・・」
「へ〜・・・そういうの芸能人の話で聞いたことあるけど、本当にあるのねぇ・・・」
実際はそんなのんきな話じゃなかったけど、長谷川はあの時のゴタ

ゴタを知らないからなぁ（４４、４５話参照）・・・知ってるのはオレたち４人だけだ・・・

「でもよく学校が認めてくれたよね。」

「え？！」

「だってさぁ、学校は有希の本当のこと知ってるんでしょう？　それで良くモデルやること認めてくれたね。」

「ど・・読者モデルだけどね・・・」

ここは大事なところだ・・・本当のモデルと読者モデルでは全然ちがう・・・

「なんかね、うちの学校もお堅いイメージが強すぎると思ってるらしくて、ＪＩＮＯＮは人気の雑誌だから、うちの学校の生徒が出てたら少しは柔らかいイメージになるんじゃないかって思ったらしくて・・・」

「じゃあ、有希たちは学校の宣伝しなきゃいけないんだ？　責任重大ね。」

「そ・・そんなんじゃないと思うけど・・・」

オレとしては、そんな責任もちたくない・・・オレは自分のことだけで精一杯なのに・・・

そんな話をしているうちに次が箱崎だというアナウンスが流れた。オレは慌てて電車を降りるためバッグを忘れないように肩に掛けて降りる準備をした。オレはなにげに大きめのカゴバッグを持ってきていたが、長谷川は何も持ってないからオレが大きめのを持ってきて良かった。おみやげも買わなきゃいけないのにバッグも持たずに来るなんて・・・

駅から参道までは歩いてすぐだった。参道といってもお宮までは１ｋｍもあるらしい。その参道の両側に露店が延々続いているのだ

から壮観だ・・・人の混みようもただ事じゃない・・・長谷川が自然にオレの手をとってくれた・・・これじゃイヤでも手をつないでいないとはぐれてしまいそうだ・・・

人混みは苦手だけど、ここまで混んでると逆にオレのことなんて誰も見てないんじゃないかと思えてくる・・・

「すごい人混みだね・・・長谷川さん放生会に来たことあるの？」

「2回くらい来たかなぁ、たぶん小学校のころだったから良く憶えてない・・それに夜来たし・・昼間はだいぶ感じが違うわね。」

そうか・・・夜のほうが提灯とかに明かりがついてキレイかもしれないなぁ・・・まだ昼間は暑いし、人が多いから少しホコリっぽい・・・

「有希なにかやりたいのある？」

「う～ん・・・」

参道は広さも結構あるから向こう側のお店は人に遮られてよく見えない、こっち側も人垣からのぞくようにしないと何のお店だかわからない始末だ・・・人の間からのぞいていくと、金魚すくいや、カメすくい、うなぎ釣りに、ヒヨコ釣り・・・これじゃどこが放生なんだかって感じだ・・・

でもオレとしてはさっきから、美味しそうな匂いが気になっていた・・・

「ねえ、遊ぶのもいいけどさ、何か食べようよ。」

「それもそうね・・何にする？　イカ焼き？　とうもろこし？　リンゴ飴はやめた方が良いわよ、美味しそうに見えるけど中のリンゴが酸っぱいから。」

リンゴ飴は最初から考えてなかったけど・・・イカ焼きも美味しそうだし、とうもろこしも食べたいなぁ・・・女の子が両方食べたいなんて言ったら・・・やっぱりはしたないかな・・・オレとしては両方食べたいんだけど・・・

「あ・・あのぉ・・・イカ焼きも、とうもろこしも食べたいんだけど・・・」

「え、有希もなの？　わたしも両方食べたいなって思ってたのよ、気が合うわね。」

驚いた・・・長谷川もけっこう食べるんだ・・・

「でも少し空けたほうが美味しいんじゃない？　最初はどっちにする？」

う～ん・・・どっちがいいかなぁ・・・

「・・イカ・・かな？」

「やっぱり？　実はわたしもイカがいいと思ってたの！」

なんか・・オレたちって案外気が合うのだろうか・・・

歩きながらイカ焼きを食べるなんて、三吉先生が見たら怒られそうだ。オレは６０歳近い三吉先生に女の子としての教育を受けたから、オレのイメージする女の子はちょっと古いみたいだ・・・今どき女の子が食べながら歩いても普通だと思うのだが、どうしてもオレの中には、こんなことをしたら“はしたない”のではないか？という気持ちがある・・・でもオレも読者モデルなんかやるのだから、もう少し今風の女の子にならなきゃいけない気がする・・・だいたい“はしたない”なんて言葉、いまどき使ってるコもいないと思うし・・・オレは先生に何度も言われたからついつい使っちゃうだけだ・・・

でもお祭りの時に食べるのって何でこんなにおいしいのだろう・・・そんなに良いイカを使ってるワケでもないんじゃないかと思うのだが、妙においしい！　それとも大量に仕入れるから、意外に新鮮なやつだったりするのだろうか？　あんがい市場から安くて良いやつを仕入れているのかも知れない・・・

「おいしいね、有希！」

「うん。」
たぶんふたりで一緒に食べているから、よけいおいしいんだと思う・・こうして長谷川と手をつなぎながら歩いていると、なんだか気持ちが落ちつく気がする・・・それは長谷川にはオレが男だとバレないか気にする必要がないからだと思う・・・クラスで千里たちといても・・・たとえオレが千里たちのことを親友だと思っていても、やっぱり心のどこかではオレが男だとバレないようにいつも緊張していなければならない・・・でも長谷川にはそれがないから、こんなに気持ちが楽にいられるのだと思う。

「見て有希！あんな小さい子も浴衣着てるわよ。」
「ほんとだ！かわいいね！」
浴衣を着た小さな女の子が、お母さんに手を引かれてチョコチョコ歩いている・・・
「有希も子供のころあんな感じだったのかなぁ？」
「え？！」
「子供のころの有希って可愛かったんだろうなぁ。写真とかないの？小さいころの。」
「ど・・どうかなぁ・・・見たことないなぁ・・・」
本当は妹の麻衣と一緒に浴衣を着た写真もあるけど、オレの記憶がないころの写真なんて無いのと同じだ・・・

「でもいいなぁ・・・」
「え？　なにが？」
「だって、有希はいま幸せなんでしょう？」
「・・ど・・どういうこと？」
「だってさ、有希はずっと女の子になりたかったんでしょう？　それが今はこうして女の子になったんだもん。すっごく幸せなんじゃない？」
「・・あっ・・そ・・そうよね・・・」

たしかに長谷川の言うとおりだ・・・オレがもし長谷川が思ってるように、小さいころから女の子になりたかったのなら、いまのオレは女の子になったことをすごく喜んでなきゃいけないことになる・・・とはいえ、それはオレの感覚とはかなり違っている・・・

「・・・た・・たしかにそうなんだけど・・・でも・・わたしずっと女の子の気持ちを隠してきたじゃない？　それに、男の子のころは男らしくしなさいって言われてたし・・・だから、じっさいは長谷川さんが思ってるほどは嬉しくないっていうか・・・いや・・嬉しいのはすごく嬉しいんだけど・・・単純に幸せとは感じられないっていうか・・・」

「・・・・・」

「・・・い・・いろいろ・・大変なのよ・・・心の中はさ・・・」

「そうなんだ・・・こんなに女らしくなってるのに・・まだ男の子の気持ち残ってるの・・・？」

「そ・・そりゃぁ・・・少しはね・・・だってずっと男の子として生きてきたんだもん・・・半年やそこらじゃね・・・・」

「それなのにこんなに女の子らしいなんて、有希ってすごいね。」

「・・・す・・すごくなんかないよ・・・だって女の子にはずっとなりたかったんだから・・・だから・・最初から女の子だったより・・女の子らしく出来るんじゃないかなぁ・・・」

・・・こんなふうに言って・・・屁理屈に聞こえてなきゃいいけど・・・

「それじゃ、有希もたまには男の子に戻ってみたいなんて思うことあるの？」

「・・・そ・・それは・・・」

もちろん無いワケじゃない・・・オレはたしかに女の子になる決心はしたし、もうタマも取っちゃったけど、それですべて男の子だった頃の気持ちが無くなるワケではない・・・オレの心にあるのは、小さいころの女の子になりたかったという封印してしまった記憶で

はなく、普通に男の子として小学校、中学校と成長してきた記憶なのだ・・・もちろん今のオレには昔の男の子の記憶だけではなく、女子高に入学してからの女の子としての記憶もある・・・そのうち数カ月分は女性ホルモンの影響を受けた、より女の子に近い記憶なのかもしれない・・・それでもやっぱりオレの心の中には、まだまだ男の子の部分が少なくない・・・だから時々は男の子だった頃が懐かしくなる時だってある・・・

　でもそれを長谷川に言っていいワケがない・・・長谷川が思っているオレと本当のオレは違うのだから・・・

「・・も・・戻りたいとは思わないよ・・・す・・少しは・・男の子のころはどうだったかなぁ・・・とか懐かしくなる時はあるけど・・・だ・・だって女の子って洋服とか、お化粧とか、いろいろ大変だしさ・・・」

「ふ～ん・・・だったらさ、もし有希が良かったらだけど、今日は一日男の子でいてもいいわよ。」

「え?!　・・・そ・・それは変だよ・・・だってこんな浴衣着てさぁ・・・こんな髪だし・・・こんな男の子なんていないよ・・・」

「なに言ってんの?ここにいるじゃない。　それに見た目なんて関係ないわよ、だって有希は有希だもん。心だけ少し男の子の気持ちに戻ってみたら?っていってるの。その方が楽しめるんじゃないって。・・・それに有希ったら、さっきから男の子みたいなしゃべり方になってるわよ。」

「・・えっ・・・そうだった・・・?」

オレ・・長谷川がオレのこと男だと知ってるから油断しちゃったのかな・・・

「有希が頑張ってるのはわかるけど、あんまり頑張り過ぎても疲れちゃうでしょう?だから今日は無理してない普段の有希でいていいよ。」

「・・・・・」

・・・でも・・普段のオレって・・・あらためて言われると良くわからない・・・だってオレは家でも女の子として生活してるし、今では女の子でいることも、けっこう普通のことになってしまっている。

「長谷川さんの気持ちは嬉しいんだけど・・・わたしそんなに無理してるワケじゃないんだ。家でもこんな感じなのよ。」

「そう?・・・ならいいんだけど、とにかく今日は無理しないで。せっかくのお祭りなんだし、今日はわたしたち二人だけなんだから、言葉づかいが男の子っぽくなってもいいし何も気にしなくていいからね。」

「・・うん・・・」

そうか・・・つまり今日はオレたち二人なんだから、秘密を共有している者どうし気を使わずに楽しもうということなのだろう。それならオレとしても望むところだ。

「ねえ有希、金魚すくってよ。」

「え?・・・やってもいいけど・・・そんなに上手じゃないよ?」

「いいから、金魚ほしいんだもん。」

「!・・・長谷川さん、金魚持って帰るの?」

「有希がとってくれたらね。」

「持って帰るんだったら今じゃない方がいいよ・・・だって持って歩いてたら弱っちゃうよ?」

「あっ、そっか・・・じゃあ帰る前にやろう。有希ちゃんとおぼえててよ!」

「・・う・・うん・・・」

長谷川さん高校生にもなって金魚がほしいなんて変わってる・・・金魚すくいの金魚なんてすぐ死んじゃうんじゃないかな・・・

参道は金魚すくいや、ヨーヨー釣りや、綿菓子や、風船屋なんかの店が並んでいるが、少し脇道に入るととたんに雰囲気がいかがわしくなってきた。店も見世物小屋とかおばけ屋敷とか、そんなのが並んでいる・・・見世物小屋の看板には気味の悪い絵で牛女だの蛇女だの河童だのが描いてあり、なんだかここだけ昭和な雰囲気だ・・・

「見て！蛇女だって、ヘビ食べてるよ。本当に食べるのかなぁ・・・」

おじさんが大きな割れたマイクの音で何かガナリたてている・・・何を言ってるのか聞き取りにくいけど、どうも嘘だったらお金を返すと言ってるみたいだ・・・お代は見てのお帰りみたいなもんだろうか・・・？

「ねえ長谷川さん、なんか面白そうじゃない？　嘘だったらお金は返してくれるんだって！」

「・・・や・・やめなさいよ・・・嘘に決まってるじゃない・・・それにお金だって返してくれるハズないわよ・・・」

まあ、そうだろうけど・・・出て来る人は誰も返してもらってないみたいだし・・・

「でもさぁ、どんなインチキなのか見てみたくない？」

「・・・い・・イヤよ・・・もったいないわ・・・」

たしかにインチキと判ってるのに７００円はもったいないかな・・・でもなんか変だ・・・長谷川さんったら何かソワソワしてるし、つないでる手が汗びっしょりだ・・・もしかして長谷川さんこういうのが苦手なのかな？

「長谷川さん・・もしかしてこういうの怖いんじゃないの？」

「・・・こ・・怖くないわよ・・・」

やっぱり手が震えてる・・・こんなのが怖いなんてなんか可愛いなぁ・・・ちょっとイジメちゃおうかな・・・だって長谷川には結構

イジワルなこととされてるし・・・実は、オレはこういうの全然平気なのだ！

「だったらさ、お化け屋敷に入ろうよ！５００円だからちょっと安いし、お化け屋敷は嘘とか本当とか言うようなもんじゃないし。」

ふふふ・・・怖がってる怖がってる・・・

「怖くないんでしょう？　だったらいいじゃない。」

「・・だって・・・有希泣いちゃうかもよ・・・」

「わたしが？　大丈夫よ、わたしは平気だから。もし怖かったら、わたしにしがみついてもいいわよ！」

長谷川の性格ならこんな風に言ったら断れないだろう・・・オレが怖がってないのに、自分が怖がってるなんて許せないに違いない・・・

「・・な・・なに言ってるのよ・・・有希がわたしにしがみつくんじゃないの・・・？」

強がっても声が震えてる・・・

「じゃあ入ろうよ！」

「・・・・・！」

オレはなかなか入ろうとしない長谷川を引っ張って、お化け屋敷の中に入っていった・・・

「ギャ～～！！」

案の定お化け役の人が飛び出してくると、長谷川がオレの腕にしがみついてきた。たぶんアルバイトのお兄さんなのに何でこんなのが怖いんだろう。

「ハハハ・・大丈夫だよ。怖くないって・・・」

でも長谷川はさらにきつくオレにしがみついてくる・・・

「ち・・ちょっと・・・そんなにしがみついたら歩けないよ・・・」

小さいコなら良いだろうけど、長谷川はオレとそんなに体格も変わらない・・・体重はもしかしたらオレの方が軽いかも・・・そんな

長谷川にしっかり抱きつかれてはたまらない・・・これがもしカップルなら男は喜ぶかも知れないが、オレは女だから長谷川に抱きつかれても、べつに嬉しくもない・・・

「・・・ちょっとぉ・・浴衣がはだけちゃうよ・・・」

それに重い・・・

こんなことなら入らなきゃ良かったと後悔してきたころ、やっと出口が見えてきた・・・でもこういうのは出口の間際に最後のドッキリがあるに決まってる！

最後はどこから来るんだろうと思っていたオレは思わず足を止めた・・・出口までの道に・・・何かいっぱい敷き詰められている・・・

「・・うそ・・・！」

オレはそれが何かわかった途端、背筋に冷たいものが走り、思わず身震いした・・・

「・・・む・・・虫だ・・・」

それは一面のイモムシだった・・・もちろんゴムの偽物なのはわかっている・・・でも・・いくら偽物とわかっていてもオレはイモムシはダメなのだ・・・ほとんどの虫は平気だけど、イモムシや青虫や毛虫だけはムシズが走るのだ！・・・だってグニョグニョして・・・ヘンな足がいっぱいあるんだもん・・・！！！

「・・ゆうきぃ・・・」

長谷川が泣きそうな声でオレを急かす・・・でも今や泣きそうなのはオレの方だ・・・体の震えもハンパじゃない・・・

そのとき後ろから幽霊役の人いきなり長谷川に飛びかかってきた・・・

「キャァ〜〜〜！」

驚いた長谷川はオレの浴衣をつかんだまま一気に出口に向って走りだした。

「だめぇ・・・」
オレは必死で引き止めようとしたが、馬力じゃとても長谷川にかなわない・・・オレは引きずられるようにイモムシの中に足を踏み込んだ・・・そのとたん草履の裏に“グニュッ”というイヤな感触が・・・
「ヒィーーーー！」
こうなったらもう止まってられない・・・オレも長谷川に抱きつきながら足の裏のイヤな感触を振り払うように必死で走った・・・もうどっちがどっちに抱きついているのかさえわからなかった・・・

出口に近づき足の裏の感触が無くなったことにホッとした瞬間、オレたちの頭の上から何か落ちて来た！
「・・・・！」
イモムシだ！　イモムシがオレの頭や肩に乗ってる！！！
オレは頭がクラクラして思わずその場にへたり込んでしまった・・・

第６１話　祭の後　男のオレ、女のオレ

「・・有希・・大丈夫・・・？」
長谷川が上から心配そうに、オレをのぞき込んでいる・・・
「・・・うん・・・・」
意識がはっきりしてきて、オレにもだんだん今の状況はわかってきたけど・・・情けなくてまともに長谷川の顔を見ることが出来なかった・・・

オレは小屋の裏手の長椅子の上に寝かされていた・・・少し離れたところから見世物小屋のスピーカーの音が聞こえている・・・
「・・幽霊の人が運んでくれたのよ・・・有希ったら平気なんじゃなかったの？」
「・・・ご・・ごめん・・・長谷川さん・・・」
長谷川がお化けとか苦手と知って、イジワル心で無理矢理誘っておいて・・・オレの方が気を失うなんて・・・
「苦手なのに何で入ろうって言ったのよ。」
「・・・お化けは・・平気なんだけど・・・お化け屋敷にイモムシなんて・・・反則だよ・・・」
「・・有希イモムシが苦手だったんだ・・でもあれってゴムのやつよ。」
「・・知ってるけど・・・でもダメ・・・」
生理的なイヤさって理屈じゃないのだ・・・

オレだって少しは男らしいとこ見せようと思ったのに、これじゃまったく逆効果だ・・・せっかく今日は男の子でいいって言ってくれたのに・・・そういえばかあさんにも、優しくしてほしかったら自分から優しくしなさいって言われてたのに・・・イジワルされた

から仕返ししようなんて・・・オレって最低だ・・・・

それにひきかえ長谷川は、あんなに怖がっていたのに、さっきオレの様子を見に来た幽霊の人と平気で話してたみたいだ・・・

「・・・長谷川さんこそ・・幽霊とか怖いんじゃなかったの・・・？」

「あ、さっきの幽霊役の人？　お化け屋敷ってああいう場所が怖いんじゃない、こんな明るいところじゃ怖くないわよ。」

「・・・そうなの？」

オレは今でも、もしイモムシを見せられたら悲鳴をあげてしまいそうなのに・・・なんか長谷川さんって逞(たく)ましい・・・

「起きれる？」

「・・う・・うん・・・」

オレはゆっくりと、寝かされていた長椅子から起き上がりながら、こっそりお尻の下の方をさわってみた・・・大丈夫みたいだ・・・

実は腰が抜けたようになった時、少しだけオシッコをちびってしまったのだ・・・でも、今日は浴衣だし、トイレもすぐに無いかもしれないと思って、多い日の夜用を忍ばせていたから助かった・・・多くても横や後ろに漏れないような、早い話がオムツのようなやつだ・・・おかげでしばらくこのままでも問題なさそうな感じ・・・少し重くてゴワゴワするけど、長谷川に漏らしてしまったことを告白するよりはずっとマシだ・・・

「あっ！君もう大丈夫なの？」

急に幽霊の人が現れたので、オレは慌てて浴衣の裾の乱れを直した・・・

「・・は・・はぃ・・・あ・・ありがとうございました・・・もうだいじょうぶです・・・」

オレはペコリとお辞儀をした・・・つい女の子っぽい仕草をしてしまう自分が恥ずかしい・・・となりで長谷川が見てるのに・・・でもオレが男だと思われるよりは、か弱い女の子だと思われる方がずっとマシだ・・・だって・・男がお化け屋敷で気絶したなんて情けなさすぎる・・・

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

参道に戻って歩き出してからも、なかなか長谷川と目を合わすことが出来なかった・・・オレ・・軽蔑されてしまっただろうか・・・

すると長谷川がいきなりオレの手をとって言った・・・

「そんなに落ち込まなくて良いじゃない！もう忘れましょう？　まだとうもろこしも食べてないし、金魚だってすくってないんだから！　それに肝心の東京ケーキだって。」

「・・うん・・・」

「ほら、元気出しなさいよ！」

長谷川に肩を抱き寄せられると、なんだかその気持ちが嬉しくて泣きたくなってきた・・・

「・・長谷川さん・・・」

「ん？」

「・・ごめんね・・・せっかく言ってくれたけど・・わたし・・もう男の子には戻れないみたい・・・」

「有希そんなこと気にしてたの？　いいわよ、有希はそのままでいいのよ。」

「え？　このまま？」
「そう。言ったでしょう？男の子でも女の子でも有希は有希なんだから。」
「・・うん・・・」
なんかすごく嬉しい・・・こんなこと言ってくれるのは長谷川さんだけだ・・・
「わたし・・・長谷川さんのこと好きよ・・・もちろん女の子どうしとしてだけど・・・」
「わたしだって有希のこと好きよ。もちろん女の子として！」
「うん・・」
そうだ・・・オレたちは女の子どうしなのだ・・・男の子としてとか、女の子としてとか、変な気負いなど元々必要なかったのだ・・・
そう思うとなんだか肩の荷がおりたような気がした・・・

それからのオレは素直にお祭りを楽しめるようになった。
ヨーヨーを釣ったり、ビー玉を落として大きなカルメラ焼きをゲットしたり、とうもろこしを半分づつ食べたり・・・まるで子供のころに戻ったように楽しんだ・・・

「あっ！　あれじゃない？東京ケーキって！」
おじさんが穴があいた鉄板の上で小さなタコ焼きのようなものを焼いている・・・しかしソースとは違う甘い匂いが漂っている！
オレたちが走り寄ると、おばさんが焼き上がったやつを、ひとつづつ爪楊枝にさしてくれた。それは４ｃｍくらいの丸さで半分が焼けて茶色くて、半分は鉄板で焼けてないから黄色い色をしている。
タコ焼きみたいにまん丸じゃなく平たい。

食べてみるとホットケーキのような食感で、それをもっと甘くし

たような感じだった。なんだか素朴な味だ・・・オレはこんなの嫌いじゃない・・・

「おいしいね、長谷川さん！」

「うん。」

オレたちは顔を見合わせて微笑んでいた。なんだか思わず笑顔になってしまう味だ・・・

結局、長谷川さんは2人分、オレはかあさんと、とうさんと、麻衣と食べるために3人分買った。5人分はけっこうな量だ・・・やっぱり大きいバッグを持ってきて良かった。長谷川が持ってくれているカゴバッグに包みを入れた・・・

「長谷川さん、わたしが持つわよ。重いでしょう？」

「まだいいわよ。有希はまだやることがあるでしょう？」

「？・・・あっ、金魚すくい？」

そういえばもう陽も西に傾いている・・・あたりも少し暗くなりはじめていた・・・

「そうね、もう帰らなきゃいけないもんね・・・」

いざ帰るとなると急になごり惜しくなってくる・・・なんで楽しい時間ってすぐに終っちゃうんだろう・・・

オレたちは駅に近い参道の出口のところで金魚すくいをすることにした。

「有希、元気がいいのをとってよ。」

「・・うん・・・」

でも、だいたい元気がいいのはとりにくいものだ・・・モナカはふやけてくるし・・・水に浸けたら小さいヤツがモナカをつつきにくる・・・やっと元気なヤツに狙いをつけてすくおうとしたら、モナカが針金から外れてしまった・・・

「あぁ・・・」

オレが落胆してると、長谷川がお金をはらって新しいやつをオレに

手渡した・・・2回分もあったらもっと良い金魚が買えたのに・・・でももったいないから今度こそ頑張らなきゃ・・・

ジャマな浴衣の袖のたもとを脇にはさんで腕をまくった。もう選り好みなんてしてられない・・・オレはとりやすそうなのからとっていき、結局小さいヤツを3匹だけすくうことができた・・・

「ごめんね、小さいのしかすくえなくて。」

「いいわよ。それにけっこう元気そうよ。」

金魚が入ったビニール袋を見ながら嬉しそうな長谷川を見てると、オレもなんだか嬉しくなってくる・・・

「長谷川さん・・今日は連れてきてくれてありがとう。」

「ううん、ついてきてもらったのはわたしの方だし、それに今日はいっぱい有希の笑顔が見れから嬉しかったよ・・・」

「え？　わたしそんなに笑ってた？」

「うん。有希ってなかなか4人組でいるときみたいな笑顔、わたしに見せてくれないじゃない？　でも今日の笑顔はあの3人もたぶん見たことないと思う・・・有希ほんと楽しそうだった！」

そんなふうに言われると、なんか恥ずかしくなっちゃう・・・

「だって・・長谷川さんは誰とも違うんだもん・・・」

長谷川はオレにとって誰にも代えられない特別な存在なのだ・・・

「わたし、長谷川さんのこと好きだから・・・」

だからもっと優しくしてほしい・・・

「なによ・・なんか今日の有希いつもより女の子じゃない？」

「・・そ・・そうかな・・・？」

でもオレも本当はわかってる・・・長谷川の優しさはそんなんじゃないんだ・・・長谷川はオレが困ったときにスッと助けてくれる・・・そんな・・どこかお姉さんみたいな優しさなのだ・・・

そんな長谷川にオレも優しく接したい・・・でもどういうのがオレの優しさなのか・・・笑顔なんかじゃない・・・長谷川にオレは何をしてあげればいいのか・・・オレにもまだわからなかった・・・

――――――――――――――――

――――――――――――――――

――――――――――――――――

「有希ちゃんお帰りなさい、放生会楽しかった？」
「はい！」
長谷川のお母さんに迎えられてオレは元気に返事をした。だって今日は本当に楽しかったから。
「あ、そうだ・・・」
オレは肩に掛けたバッグから東京ケーキの包みをふたつ取り出して、まだ温かい包みを長谷川に手渡した。長谷川はそれをお母さんに何も言わずに渡した・・・
「なに？　おみやげ？！」
お母さんはちょっと驚いたように包みを見た。
「あら？　懐かしい・・・これ東京ケーキじゃない！」
お母さん嬉しそう・・・でもちょっと変じゃない？　だって長谷川はお母さんに頼まれて買いに行ったハズなのに・・・

そうか！　きっと長谷川は、お母さんが懐かしがるのがわかってて、わざと黙って買ってきたのではないだろうか・・・だからお母さん、こんなに喜んでるんだ・・・

なんかいつも文句ばかり言ってるのに、本当はお母さん想いなと

ころをかいま見れて、オレもなんだか嬉しかった・・・それに協力できたのも、また嬉しい・・・

オレはすごくあったかい気持ちになって家路についた・・・オレも早く帰って家族の笑顔が見たくなった。

―
―　―
―　―　―
―　―　―　―
―　―　―　―　―
―　―　―　―　―　―
―　―　―　―　―　―　―
―　―　―　―　―　―　―　―
―　―　―　―　―　―　―　―　―

おまけのあとがき

今回ちょっと短かったのでおまけです。

「放生会編」のテーマは何も起きない話でした。まあ、実際にはそこそこ起きてますけど、事件を起こすのが目的の話ではないという意味です。しかし何も起きない話は難しいです。普通、話を作る時は書くべき目的があってそこに行かすのですが、今回はまず放生会に行かせてみて、そこで起きたことを書いてみました。とはいえ、お化け屋敷の話は前にも一度書こうと思ったことがありまして（スペースワールドで麻衣と入る予定だった）でも書いてみると展開が変わってしまったので止めていたのが、ここでより最適な形でやれて、そして最後は有希の笑顔につなげられて良かったと思います。前に笑顔の有希が見たいと言って下さった方がいたのが気になってたので、どこかで有希の本当の笑顔を描きたいと思っていたのです。

今回、唯一のキーワードだった“東京ケーキ”は、有希は長谷川がサプライズ的なものを狙ってお母さんにプレゼントしたと思っているようですが、本当はお母さんがテレビのニュースで放生会の様子を見てポロッと言ったのを聞いて、それを有希を誘うために利用しただけなんです。実はこの話ではこういう有希の勘違いがけっこう沢山あります。とはいえ、そういう部分は、有希のやつ勘違いしてるんじゃないの？なんて深読みしていただいても、そのまま読んでいただいてもかまいません。この話では伏線などバレてもバレなくても良いように書いていますので。

なにも起きない話なんてのが書けるのはネット小説でなければまず無理だと思うので、これからも時々やれたら良いなぁと思います。難しいですけど（笑）

それと先日、評価・感想のところで東京ケーキを「なんで親は知ってて子が知らないんでしょうか」という質問に答えたので、同じ疑問を持ってる方もいるかもしれないので転載しておきます。

東京ケーキをなんで子供は知らないのかというと、どちらかといえば質素で、子供が食べたがるようなお菓子ではないからです。昔のあまり美味しいお菓子がない時代に、有希たちのおばあさんの世代が食べたがったお菓子なので、お母さんたちは、そのお母さんに買ってもらったから知っているけど、お母さんはあえて長谷川さんたちには買い与えなかったのだと思います。有希はそもそもあまり連れていってもらったこともないので当然知りません。お母さんたちも子供のころはそれほどでなくても、今になって懐かしくなったのではないでしょうか。

みなさん疑問に思ったことがあったら、遠慮なさらずどんどん聞いて下さって結構ですのでよろしくお願いします。

０９．９．２０

『オレは女子高生』支援ページを作ってみました。ただ普通のサイトなのでケイタイで見てる方は見れないかも知れませんが、あくまでオマケなのでご勘弁願いたいと思います。

東京ケーキについてはココで紹介しています。
その前に注意！ここは１８禁サイトの中にあります。他のページへはリンクしていませんが、ページの上部にエッチなバナーが出ます。そういうのが苦手な方、ご家族がいるところで見ている方、会社で見ている方など、どうぞご注意下さい。

ｈｔｔｐ：／／ｅｍｉｔｈｉｙａｎ．ｈ．ｆｃ２．ｃｏｍ／ｃｏｌｕｍｎ／ｊｙｏｓｉ／０８０６２３－００．ｈｔｍｌ

4章　第62話　スタジオ　オレが知らないことばかり

今日は23日で祭日だったけどＪＩＮＯＮの撮影が入ってしまった。オレと千里は博多駅から少し行った所にあるカメラマンさんのスタジオにやってきた。そこは倉庫街の一角で、とてもこんなところに写真スタジオがあるとは思えないような所だった・・・

スタジオの建物も外見は他の倉庫とほとんど変わらない。でもスタジオの名前が入ったプレートを頼りに建物の中に入ってみると、そこはちゃんとした写真スタジオになっていた。すごく広くて天井も高い・・・天井近くには鉄骨で組んだキャットウォークという通路があって人が通れるようになっている・・・カメラマンさんの話ではあそこから撮影することもあるそうだ・・・そんなの想像しただけでキンタマが縮み上がってしまいそうだ・・・まあ、オレにはもう縮み上がるようなタマは無いけど・・・

でもそこは大きなものを撮影するためのスタジオだった・・・たしかにモデルを撮影するには大きすぎる。正面のシャッターを開けて大きな物も簡単に運びこめるし、車なんかもそのまま入れられるから倉庫を改造したスタジオは便利なのだそうだ。

オレたちモデルが撮影に使うのは隣接した小さなスタジオだった。正確には大きな倉庫の中を区切って作られている。天井も高すぎるので2階が作られていて、2階には事務所と撮影用の服などを置く倉庫があって、オレたちが着替えやメイクをするところも、その一角にあった。

小さなスタジオといっても倉庫全体から見ればの話で、ＪＩＮＯ

Nの編集部にあったスタジオと比べれば、その何倍もある大きさだ。
オレは他のスタジオは見たことがないけど、かなり大きい方ではないかと思った。

実は今日は本物のモデルさんの撮影もあるらしい・・・だから今日はオレたちも、ちゃんとしたスタジオにやって来たのだ。もっともオレたちの撮影は午前中で済ましてしまい、午後からモデルさんの撮影が始まるらしい。

「おはようございます！」
オレたちはスタジオの入口で挨拶をして中に入った。すでに来ていた編集長の佐々木さんがオレたちを見て言った。
「おはよう、ふたりとも早かったわね。」
「あ、はい・・来たことない所だったので、迷ったらいけないと思って・・・」
「すぐにわかった？」
「あの・・倉庫だと思わなかったから、ちょっとウロウロしましたけど・・・」
「そうか、外見は倉庫みたいだって言っておけば良かったわね。」
「あ、いえ・・でもすぐわかりましたから。」

「そういえば、あなたたち評判良かったわよ。」
「え？」
「ＪＩＮＯＮに載ったあなたたちの写真見て、読者から誰ですか？って何件か電話があったのよ。まだ名前書いてなかったじゃない？」
驚いた・・・オレたちが評判良いなんて・・・なんでこんな普通のコがＪＩＮＯＮに出てるんだ！っていう苦情の電話なら解るけど・・・

今日はなんとクリスマス用の撮影だった・・・まだ10月にもなってないのに、もうクリスマスなんて・・・でも考えてみれば12月号が発売されるのは11月だし・・だったらもう撮影しないと間に合わないことになる。

でもこうして季節を先取りして色んな服を着れるのは、女の子として未熟なオレにとっては、すごくありがたいことかも知れない・・・今年の流行りなんかもいち早くわかるし、いざ冬になった時に、どんなのを着ればいいか迷わなくて済むってもんだ。

オレたちはフワフワの白いファーがついた可愛いコートや、黒いタイツに素敵な赤いワンピースなど、クリスマスっぽい洋服を着て撮影した。学校との約束もあり、オレたちにはあまりセクシーな服は着せられないから、可愛い服が中心になるのは、どちらかといえば可愛いの好きなオレとしては嬉しい限りだ。たぶん千里もオレと同じ気持ちだと思う。

オレたちの他にも雑誌で知っている読者モデルのコと一緒の撮影だから、オレたちは邪魔にならないようにしなければいけなかった。そうするように言われたワケじゃないけど、やっぱりオレたちは新米だから迷惑をかけちゃいけないと気を使ってしまうのは当然だ。

新米だからってイジメられたらどうしようと思っていたのだが、でもみんなすごく優しくて安心した。みんな地元のコだから友達になれるかも知れない。

ーーーーーーーーーーーーーー

ーーーーーーーーーーーーーー

―――――――――

予定どおりにお昼前には、オレたち読者モデルの撮影は終って一旦休憩に入った。でも若いカメラアシスタントの人たちは、この間に午後からの撮影の準備をするために動き回っている・・・これじゃお昼ゴハンを食べる時間もなさそうだ・・・

オレはスタジオの隅っこに座ってそんな様子を見ていた。なんかスタジオの雰囲気って好きかも・・・

千里は今日は用事があったらしくて、午前中だけは無理を言って出て来たそうで、撮影が終ると急いで他のコたちと一緒に帰ってしまった。今も残ってるのはオレだけだ。オレはどうしてもプロのモデルさんを撮影してるところが見たかったので、編集長に頼んで少しだけ見学させてもらうことにしたのだ。

「あれ？　ユウちゃんまだいたの？」

カメラマンの進藤さんがそう言いながらオレの横に座った。

「あ・・あの・・モデルさんの撮影を見せてもらおうと思って・・・一応、佐々木さんにお願いしたんですけど・・もし邪魔だったら帰りますけど・・・」

「いや、いいよ、ユウちゃんはなかなか勉強熱心なんだね。」

もうオレも名前が決まったから、モデルの名前で呼ばれるようになったみたいだ・・・でもオレはまだ慣れてないから、なんかこそばゆい感じがする・・・レナにも“ユウ”って呼ばれてるけど、モデルとしての名前だと思うと気分が違う・・・それにこんなふうに大人の男の人から呼ばれたこと無いし・・・

「あの・・わたし、どんな風に撮影するのか興味があって・・・」

「そういえばユウちゃんは、面接の時に写真が好きだって言ってたよね。」
「あ・・はぃ・・・」
まさかそんなこと憶えてるなんて思わなかった。でも、考えてみればボケた写真を送ってくるコなんていないだろうから、ヘンなコだと思って記憶に残っていたのかもしれない。

「ユウちゃんパン食べる?」
「あ・・いえ・・・」
「遠慮しなくていいよ、3つあるから。どれがいい?」
「あ・・じゃあ・・コレ・・・」
オレはクリームパンをもらった。それと缶コーヒーも・・・進藤さんは最初は目つきが鋭いから怖い人に見えたけど、実際はすごく優しい人だ。

「でも、ここすごいですね! あっちのスタジオもあんまり大きいからビックリしちゃいました。ここって進藤さんのスタジオなんですか?」
「いや、俺たちカメラマン5人で借りてるんだ。東京にはこういう感じの貸スタジオがたくさんあるんだけど、福岡にはほとんど無いからね。だから俺たちで使うスタジオを作ったんだよ。他のカメラマンに貸すこともあるよ。」
「そうなんですか・・・」
「ユウちゃんは良く写真うつすの?」
「い・いえ・・わたし自分のカメラも持ってないし・・・お母さんのを時々借りて写すだけで・・・それにデジカメだし・・・」
「え? ユウちゃんはデジカメじゃダメだと思ってるの?」
「・・・ダメっていうか・・・なんか、写真に詳しい人って・・フィルムのを使ってるみたいだから・・・」
「そんなことないよ。俺が使ってるのだってデジタルだよ。」

「あっ・・そうですよね・・・わたしプロのカメラマンさんって、みんなフィルムのカメラ使うと思ってたから、最初見た時は少しビックリしました・・・」

「まあ、芸術的な写真なんか撮るカメラマンはそうかも知れないけど。それに俺たちもポスター用の大きな写真を写す時は今でもフィルムのカメラも使うよ。普通の人が使うような３５ｍｍじゃなくて、ブローニーっていう巾が６ｃｍあるヤツとか、４×５インチの１枚づつ写すヤツとかね。用途によって使い分けるんだ。デジタルじゃ、まだそこまでの画素はないからな。でも雑誌の写真なら今はデジタルで十分だよ。それに撮影してすぐに使えるしね。」

「そ・・そうなんですかぁ・・・」

なんか半分くらいは良くわからなかったけど、いろいろ使い分けるものだってことは解った・・・

「ユウちゃんは、俺たち商業カメラマンにとって一番大事なことって何かわかる？」

オレはいきなりそう聞かれて考えた・・・

「・・えっと・・・シャッターチャンスとか・・・」

「まあ、それは大事だよね。他には？」

「・・えっとぉ・・・モデルさんのいい表情とか・・・ですか・・・？」

「もちろんそういう事も大事だけど、一番大事なのは失敗しないことなんだ。」

「・・・・！」

オレは意外な答えに驚いた・・・

「あの・・プロの人でも・・失敗とかするんですか？」

「もちろんアマチュアよりはずっと少ないだろうけど、プロだって常に注意していないと失敗することもある。でもほとんどの仕事が失敗は許されないから大変なんだ。」

「・・・・・」

「まだフィルムのカメラしか無かったころは、撮影は今よりずっと大変だったよ。まず何枚もポラロイドで撮影して、露出や色を見て、ポーズをデザイナーとチェックして、そしてやっと撮影するんだけど、それでも現像が上がってくるまでは心配が絶えなかった。ストロボがひとつだけ光ってなかったり、思ってもみない物が写り込んでいたり・・・モデルさんが目をつぶってる事もある。ひどい時は着付けの人が着せた着物の合わせが逆になってたことだってある。プロでも忙しい現場では、普段は有り得ない失敗をすることがあるんだ。」

「・・・・・」

「そんな時いつも思ってたのは、写した写真がすぐに見れたらどんなに良いかって事なんだよ。」

そうか・・・オレはただ雰囲気だけで、フィルムの方がカッコイイみたいに思ってたけど、プロの仕事ってカッコイイとかそういうものじゃないのかも知れない・・・

「それにユウちゃんたちを写す時、たくさん写すだろう?」

「はい。」

「でもフィルムのころは、こんなに枚数を写せなかったんだよ。フィルムだと現像するのにもお金がかかるからね。予算があるから枚数も限られてたんだ。」

「・・そっか・・・」

オレはそんなこと何にも考えてなかった・・・

「俺たち商業カメラマンの仕事ってのは、こうして印刷物になって初めて完成するんだ。」

そう言って進藤さんはオレにＪＩＮＯＮの表紙を見せた。

「この表紙の写真はモデルさんの一番いい表情の写真じゃないんだよ。」

「え?!」

「他にもっと良いのもあったんだけど、でもデザイナーが選んだのはこの写真だった。」
「・・・どうしてですか？」
なんで表紙なのに一番良い表情のを使わないんだろう・・・モデルさんだって良い表情のを使った方が喜ぶと思うけど・・・
「雑誌の表紙には文字を入れるスペースが必要なんだよ。ほら、こうやってデザイナーがあらかじめ描いたラフスケッチに合わせて撮影するんだけど、まったく同じという訳にはいかないからね。だからたくさん撮影した中から選んで、その写真にまた文字を合わせていくんだよ。」
たしかに見せてくれたラフスケッチと実際の表紙とでは文字が入ってる場所が違っている・・・
「たくさん撮影しても、全てが良い写真というのはなかなか無いんだ。」
なるほど・・・難しいものなんだなぁ・・・オレは写される側だけど、そういうことを知ってるとたくさん写すからって、一枚一枚おろそかに出来ないと思った。なんか責任重大だな・・・まあ、オレは表紙とか無いのがせめてもの救いってもんだ・・・

―　―　―　―　―　―　―　―　―　―　―　―　―　―
―　―　―　―　―　―　―　―　―　―　―　―　―
―　―　―　―　―　―　―　―　―　―　―　―
―　―　―　―　―　―　―　―　―　―　―
―　―　―　―　―　―　―　―　―　―
―　―　―　―　―　―　―　―　―
―　―　―　―　―　―　―　―
―　―　―　―　―　―　―
―　―　―　―　―　―
―　―　―　―　―
―　―　―　―
―　―　―
―　―
―

そろそろスタジオの準備も整ったころ、モデルの人たちがやってきた・・・やっぱり本物のモデルはすごい・・・オレたち読者モデルとはスタイルが全然違うし、足の長さなんかスゴイ！
それに実際に見るとみんな背が高い・・・みんな１７０以上あり

そうだし、そのうえ踵が高いパンプスを履いてるから１８０ｃｍくらいあるかもしれない・・・

　みんなＪＩＮＯＮで見たことある有名な人ばかりみたいだから・・・なんか急に恥ずかしくなってきちゃった・・・オレはバレないようにに隅っこで大人しくしてよう・・・そう思った時、モデルのひとりと目が合ってしまった！　オレは跳ね上がるように立つとペコリとお辞儀をした・・・目が合ったのに挨拶しないと失礼に思われそうだ・・・

「あ・・こ・・こんにちは・・・」

なんか声が震えてる・・・

「あれ？　あなた九州ＪＩＮＯＮに載ってた読者モデルのコじゃない？」

「あ・・は・・は・・はぃ・・・」

あっ！この人あの難しい漢字の人だ・・・えっと・・そうだ、蟹原さん！　カニちゃんって呼ばれてる人だ！　でも蟹原さんがなんでオレのことなんか知ってるんだろう・・・

「ほら、見て！あのコよ。」

蟹原さんがそう言うとみんな集まってきた！

「あ、ほんとだ。」

「みんなであなたが載ってるの見て、可愛いねって言ってたのよ。」

「そ・そ・そ・そんなぁ・・・」

緊張してまともにしゃべれない・・・本物のモデルさんがオレのこと可愛いなんて・・・いや・・たぶん背が小さいからだと思うけど・・・だって、こうして近くで見ると見上げるようだ・・・

「名前なんていうの？」

「あ・・か・・春日ユウ・・・です・・・よ・・よろしくお願いします・・・」

なんか変な名前で恥ずかしい・・・こんなことなら、もっと良く考

えて名前つければよかった・・・
「ユウちゃんか。今日はユウちゃんも一緒に撮影するの?」
「ま・ま・ま・・・まさか・・・」
オレはめっそうもないとブンブン首を振った。
「あ・・あの・・今日は・・みなさんの撮影を見て・・・べ・・勉強させて頂こうと思って・・・あっ・・じゃ・・邪魔にならないようにしますから・・・」
「え〜　なんか緊張するね。」
そ・・そんな・・・蟹原さんが緊張するなんて!
「わわわ・・わたしなんか・・いないと思ってください!・・・・も・・もし邪魔だったら・・すぐ帰りますから・・今すぐ帰ります・・・」
オレなんかがいるために蟹原さんに緊張させるなんて・・・とんでもない話だ・・・

「あ、おはよう!みんなもう来てたの?」
編集長の佐々木さんが来てくれて助かった・・・オレこのままモデルさんたちに囲まれていたら、緊張しすぎてまたちびっちゃいそうだった・・・
「おはようございます!」
モデルのみんなが一斉に挨拶したから、つられてオレまでお辞儀しちゃった・・・
「そうそう、今日はユウちゃんがみんなが撮影してるとこを見てみたいって言うから、いいわよって言ったんだけど・・・いいかしら?」
「もちろん!一緒に撮影しても良いんじゃないですか?」
そう言って蟹原さんがオレの肩を抱き寄せた・・・!・・・オレの肩に・・カニちゃんの胸が当ってる・・・!!　オレが男だったらチンチン立ってたところだ・・・いや・・逆に畏縮しちゃったかな・・

・

「まあ、そういうことも今後はあるかもしれないけど、ユウちゃんはまだ始めたばかりで慣れてないからね。」

ないない！・・・今後もなにも・・・そんなことあるハズがない！

「今日は見学だけね。」

「も・も・もちろんです・・・わたしなんて・・・」

それに佐々木さんはオレが本当は男だと知ってるんだから、男が女の子のモデルをやってるだけでもオカシイのに、モデルさんと一緒に撮影したいと思ってるなんて思われたら、調子にのるなって怒られるのがオチだろう・・・

「み・・みなさんの・・邪魔にならないようにしてますから・・・」

「ユウちゃんって謙虚なんだね！」

そう言って蟹原さんは、さらにオレを抱きしめた・・・蟹原さん気さくすぎだよ・・・オレどうしていいか判らなくなっちゃう・・・

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー

ー　ー

ー

今回から章が変わっていますが、前にも書きましたが章分けはあくまで便宜的なもので、べつに意味はありません。だいたい２０話ぐらいを目安に章分けしています。

第６３話　本屋　そっとのぞいて見てみると

「有希きのうどうだった？どんなモデルさんが来てたの？」
教室に入ってくるとすぐに岡本が聞いてきた。一緒に来る途中に千里から聞いたのだろうか？　昨日早く帰ってモデルさんに会えなかった千里も興味津々のようだ。すでに来ていてオレと話をしていた原口も興味はあるのかも知れないが、別段そんな素振りは見せなかった。
「・・ＪＩＮＯＮにいつも出てるモデルさんだったよ・・・蟹原さんも来てた・・・」
「え？！　カニちゃんも来てたの？　いいなぁ、どんな人だった？　話した？」
「・・う・・うん・・少しだけ・・・」

「どうした？　有希ったらカニちゃんと話したのに嬉しくないの？」
オレだって蟹原さんと話したのは嬉しかったけど・・・でもオレは手放しでは喜べなかった。だって蟹原さんたちの撮影の様子を見ていると、自分がいかにモデルの仕事を軽く考えていたのかを思い知らされてしまったのだ。
「だって・・あんまりスゴイから・・・背もすごく高いし、スタイルも良いしさ・・・それに撮影に対する姿勢が全然違うの・・・」
「それは仕方ないよ。あっちはトップモデルなんだから！」
そりゃあ、岡本が言うようにあっちはトップモデルだし、オレたちは読者モデルだから、比べることは出来ないとは思うけど、同じ雑誌に載るのだから、やっぱり読者モデルだからと甘えていてはダメなのではないかと思うのだ。

「でも有希だってスタイルはいいじゃない。」
「そ・・そんなことないよ・・・それは普通のコよりは少し大きい

かも知れないけど・・・」
すると原口が言った。
「背のことじゃないわよ。有希は全体のバランスが良いの。モデルさんが着ると普通の人が着たのとずいぶん違ってしまうけど、有希が着ると自分が着たのが想像しやすいし、それでいてその服がすごく良く見えるのよ。この前のＪＩＮＯＮ見てあらためて思ったわ。」
「・・そんなぁ・・・」
原口のヤツいくら何でも褒め過ぎだ・・・オレそんなにスタイル良くないし・・・オレが着た服が良く見えるなんて・・・だってオレ・・男なのに・・・
「有希って何でそんなに自信がないのかなぁ？」
岡本は不思議そうに言ったが、オレに言わせれば当り前のことだ・・・男が女の子になった自分に自信なんか持てるハズがない・・・でもみんなはオレを女だと思ってるからオレの気持ちはわからないのだろう。

なんか居心地が悪いから話をそらそうと思った。
「・・千里はどうだったの？　ちゃんと時間どうりに帰れた？」
「あ・・うんまあ・・・」
「なに？　なんかまずいことでもあった？」
「うん・・・やっぱりうちの両親はわたしが読者モデルやること、あまり良く思ってないみたい・・・」
「え？　そうなの？」
「どうも認めてくれたのは、学校にバレたらすぐに辞めさせられると思ったからみたいなの・・・でも学校も認めてくれちゃったものだから・・・」
「え～・・・それじゃ辞めちゃうの？」
「ううん、わたしは頑張るつもりだけど、あまり頻繁には行けないかもしれない・・・」
「そうなんだぁ・・・」

もとはといえば千里たちの巻き添えでオレも読者モデルになってしまったのに、オレの方は、かあさんなんかオレが読者モデルやること、けっこう喜んでくれてるのに・・・まあ、うちの場合は読者モデルなんかやればオレも女の子のいろんな洋服が着れて早く慣れることが出来るからというのが理由だろうけど・・・千里のうちではあまり喜ばれていないなんて上手くいかないもんだなぁ・・・せっかく学校もオレたちが雑誌に載ること認めてくれたっていうのに・・・

「でもいいの・・有希が頑張って雑誌に載ってくれればわたしも嬉しいし。」

・・・千里ってホント良い性格してる・・・自分が載れなくてもオレが載ってれば嬉しいなんて・・・この前だって千里よりオレの方が大きく載ってるのに、自分のことみたいに喜んでくれてたし・・・

でもなんか変じゃない？・・・なんでオレが千里のために頑張らなきゃいけないんだ？　オレはもともと読者モデルになりたいなんて思ってなかったのに・・・こんなこと言われたらオレも頑張らないワケにはいかなくなっちゃうじゃないか・・・

オレは女の子でいるだけでも、けっこう頑張ってなきゃいけないのに、そのうえ読者モデルまで頑張るなんて・・・だいたい元々オレはそんなに頑張り屋じゃない・・・だから行ける学校がなくて、こんなことになっているのに・・・もしかしたら、これはオレがこれまで頑張らなかったことに対する罰なのだろうか・・・？　もし神様なんてヤツがいてオレにこんな罰を与えているのだとしたら、いくらなんでもやりすぎじゃないだろうか？　まあ、オレは神様なんて信じちゃいないけど・・・あんがいこういうのを自業自得というのかもしれない・・・

―――――――――――――――
―――――――――――――――
――――――――――

「有希カニちゃんに会ったんだって？」
「え？　もう知ってるの？」
放課後、部室に行くと長谷川に聞かれた・・・なんで長谷川には何
も言ってないのに知ってるんだろう・・・
「そりゃぁ、有希のことなんか知りたくなくても耳に入るわよ。」
「でも長谷川さんも蟹原さん知ってるんだ？　ファッションなんか
興味ないのに。」
「なんか失礼な言い方ね。わたしだってカニちゃんくらい知ってる
わよ！ファッションだって・・それなりに興味あるし・・・」
「うそだよ！そんな話したこと無いじゃない。」
「そりゃぁ・・有希みたいな女の子らしい恰好はしないけど・・・
わたしだって興味くらいは・・・」
「へぇ～・・知らなかった・・・」
なんか長谷川が言うことって、どこまで本当なんだか良くわからな
いんだよなぁ・・・長谷川が本当に女の子のファッションに興味が
あるんだったら、一緒に買い物とか行けるんだけど・・・

「そういえば有希まだ三つ編み出来ないの？」
「ん？　あ、だいぶ出来るようになったけど・・・」
「ほんと！　じゃぁ、やって見せてよ。」
「え？！　ここで？」
「ダメなの？」
「いや・・ダメってことはないけど・・・」
「ならいいじゃない、やってよ。」
「う・・うん・・・」

なんか変なことになちゃったなぁ・・・これもオレに対するイジワルのひとつなのだろうか・・・？　まあ、これくらいなら別にかまわないけど・・・

　オレはお下げをほどいて手櫛で整えてから、人さし指で真ん中から分けた・・・そういえば昔は鏡も見ずに、こんな風に上手に真ん中から分けるなんて出来なかった・・・しょっちゅう真ん中からズレたり片側からもう片側に混じってしまったりしたものだ・・・そのたびにかあさんに直してもらっていたのに。それが今では何のこともなく出来るようになっている・・・オレもいつの間にか、ずいぶん女の子の仕草が自然に出来るようになってきたものだと思う・・・かあさんも最近は忙しいみたいだから、オレもいつまでも甘えてはいられないし・・・

ふたつに分けた髪の毛が混じらないように片方を前に持ってきておいて、もう片方を今度は3つに分ける・・・だいぶ練習したからほぼ等分に分けられるようになった・・・そして3つの束が解けないように注意しながら、力の入れ具合が同じになるようにして慎重に編んでいく・・・本当は根元もゴムでくくった状態からの方が簡単だけど、今はゴムが2つしかないからそのまま編むしかない・・・でも・・オレはこういう編み方の方が可愛いと思う・・・

前に持ってきて編む方が簡単だけど、最初だけは後ろで編んだ方がきれいに編める・・・ただ、注意しないと途中から前に持ってきた時に手が逆になってしまい、編み方が変になってしまう・・・最初のころはこれには結構苦労したものだ・・・でも、なんとか最後まで編むことが出来た・・・最後にゴムでくくって完成だ。
オレはもう片方も同じように編んでから、両手の甲で両方の髪を後ろにやった。

「・・どうかなぁ・・・ヘンになってない・・？」
「すごいじゃない！上手に編めてるわよ。ねえ井川さん。」
「え？！」
オレが後ろを向くと、いつの間にか井川が立っていた・・・
「・・・井川さんいたの？！」
気付かなかった・・・痩せてるから足音がしないのかなぁ・・・
「ほんと戸田さんすごく上手でしたよ。キレイに編めてます・・・」
「そ・・そう・・・ありがとう・・・」
「それに・・なんだか編んでる手つきが色っぽくてドキドキしました・・・」
「ま・・またまたぁ・・・」
なんか井川ってオレのこと女の子として買いかぶりすぎじゃないだろうか・・・手つきが色っぽいなんて・・・

「有希、明日から三つ編みで来なさいよ。」
「えっ・・明日から・・・？」
「もうお下げじゃ少し長過ぎるわよ。」
でも・・たしかに三つ編みが出来なかったから待ってもらって、もう２０日以上経っている・・・とりあえず出来るようになってるのなら、すぐにでも三つ編みで登校するべきかも・・・オレは女の子として校則を破るつもりはないし・・・案外これは三つ編みにする良い機会かも知れない・・・もしかしたら長谷川はオレにきっかけを作ってくれたのかな・・・
「・・うん・・じゃぁ・・明日から三つ編みにしてくる・・・」
「それがいいわ。有希は三つ編みも似合ってるから大丈夫よ。」
「・・うん・・・」

大丈夫って言われてもなぁ・・・新しいことをやるのは、やっぱりちょっと恥ずかしい・・・それにうちの学校でも三つ編みにしてるコって少ないし・・・三つ編みなんて、かなり女っぽいことに違

いない・・・日本人の男で三つ編みにしてる人なんて、髪が長い人でもほとんどいない・・・
　こんなに女の子ばかりの中で、男のオレが他のコより女っぽいことをするのは、さすがに抵抗がないワケじゃない・・・オレは女の子になればいいだけで、べつに女の子より女っぽくなる必要などないのだ。

　でも読者モデルなんかやるためには、そうも言ってられない・・・女の子の代表として雑誌に載るのだから、オレだって出来るだけ女の子っぽくしなきゃいけないことになる・・・そもそも髪を伸ばしてるのだって編集長に言われてるからだし・・・もしかしたら佐々木さんはオレが男だと知っているから、もっと女の子っぽくするために髪を伸ばすように言ったのだろうか・・・？

―――――――――――――――
―――――――――――――――
――――――――――

　ある日、学校からの帰り道、本屋さんの前を通っていると、雑誌を見てる長谷川がいた。
オレはこっそり近づいた・・・いったいどんな雑誌読んでるんだろう・・・この前はファッションにも少しは興味があるみたいなことを言ってたから、こっそりファッション雑誌を立ち読みしてるのだろうか・・・

でも近づいてみると、そこはファッション雑誌のコーナーじゃなかった。芸能雑誌のコーナーだ・・・そういえば長谷川ってどんな芸能人に興味があるのかな・・・男の子のアイドルの話なんかはオレ

が一方的にするだけで、長谷川からはそういう話はしたことがないし・・・

オレはそっと後ろからのぞいてみると、やっと何の雑誌を読んでいるのかわかった・・・長谷川のヒミツが見れるかとワクワクしていたオレはがっかりした・・・なんか仮面レンジヤーに関する記事みたいだ・・・

「・・仮面レンジャーかぁ・・・」

「うわっ！　有希・・・」

こんなに驚く長谷川ってあまり見たことないから、ちょっと面白かった。

「い・・いつからいたの？」

「ん？　いま来たとこ・・・また仮面レンジャーなの？」

長谷川って女の子なのに仮面レンジャーが好きなんてちょっと変わってる。でもまあ、俳優がイケメンだから実は女の子のファンも多いのかも知れないけど・・・でも・・・たしかにイケメンには違いないけど、ニースなんかのアイドルと比べたら、やっぱりそれほどでもない気がする・・・

「あんた仮面レンジャーのこと馬鹿にしてるの？」

「え・・いや・・そんなことないけど・・・」

長谷川がオレのことを“あんた”なんて言う時は、けっこうムカついてる時だ・・・こんな時はあんまり逆らわない方がいい・・・

「そ・・そうだ、長谷川さんはグリーンの人が好きだったのよね。」

「“儀我”の時はね。」

「ギガ？」

「有希と三井グリーンランドで見たのは“仮面レンジャー儀我”今やってるのは“仮面レンジャー星徒”よ。」

「セイト？」

・・・仮面レンジャーにもいろいろあるんだ・・・

「“星徒”は惑星の名前なのよ。まあ、色はそんなに変わらないけど、グリーンは“ジュピター”だったり。」
「へ・・へぇ～・・・」
なんかオレには何がいいのか良くわかんないや・・・そういえばオレってこういうの小さいころからあまり興味がなかったもんなぁ・・
・

長谷川はこういう話、だれかとしたりするのだろうか・・・？
それとも、だれとも好きなものについて話したり出来ないでいるのだろうか・・・もしそうだったら、なんか可哀想だ・・・でも・・・
「・・ごめんね・・・わたしこういうの良くわからないから・・・聞いてあげられなくて・・・」
オレの話はいつも聞いてもらっているのに・・・
「べつにいいわよ、有希は興味無いんでしょう？」
「・・う・・うん・・・まぁ・・・」
「でも、有希が好きそうな俳優もけっこういるんだけどなぁ・・・」
「え？」
「だって、有希はイケメンが好きなんでしょう？」
「そ・そ・・そんなことないよ・・・」
オレはただ・・・山上くんなんかは男から見てもカッコイイから・・・だから好きなだけだ・・・べつにイケメンだから好きなワケじゃない・・・

「わたし・・べつにイケメンが好きなワケじゃないわよ・・・」
「そうかなぁ？」
「そ・そ・・そうよ・・・そうに決まってるじゃない・・・」
「ふふっ・・まあどっちでもいいけどね・・・」
なんかイヤなカンジだ・・・ぜんぜん信じてないみたい・・・
「でも、有希ってどんな男の子に恋するのかなぁ・・楽しみだね。」
「・・・・・！」

オ・・オレが・・・恋・・・・？　男の子に・・・・？

それは・・・いつかはオレにも・・そんな時が来るのかと想像したことはあるけど・・・実際にそんな日が来るなんて・・・そんなこと考えられない・・・だって・・そもそもオレを好きになってくれる男の子なんているワケないし・・・

違う違うっ！　オレ何考えてるんだ・・・オレが男の子を好きになるハズがないのに・・・オレは女の子にはなるけど、だからってそれと男の子に恋をするのは別の問題だ・・・オレと男の子が付き合ったって何の意味もない・・・

でも・・もし兄さんみたいな人に付き合って欲しいと言われたら・・・その時は・・・・・

「有希、どうしたの？　ほっぺた真っ赤にして。」

長谷川に言われてオレはハッとした・・・

「えっ？」

「有希ったら好きな男の子のこと想像しちゃったんじゃないの？真っ赤になっちゃって可愛いなぁ。」

「・・・・・・」

オレには何も言えなかった・・・オレは自分でも、自分の気持ちが良く解らない・・・いや・・解りたくない・・・今はまだ・・・・

オレはまだ女の子にもなれていないのに・・・

第６４話　男の子　もしもオレが男だったら・・・

オレはまた編集部に呼ばれて電車で向っていた。今日は普通の日だから制服のままだ・・・制服で化粧もせずに編集部に行くのはやっぱり照れる・・・

今日は初めてオレひとりだけの撮影だから、いつもより緊張する・・・やっぱり千里がいないと心細い・・・なぜひとりかというと、特集用の撮影なのだ。

緊張している理由は他にもある・・・今日撮影する特集というのが、バレンタイン特集で男の子と一緒の撮影なのだ・・・まだ１０月だというのにバレンタインなんて早すぎるのではないかと思ったが、１月発売号だし、特集などは少し早めに始めるのだそうだ・・・

それより、なぜオレがバレンタイン特集なんかのモデルをやる事になったかというと、読者のインターネット投票とかいうのがあるらしく、読者モデルのなかでオレが一番人気だったというのだ・・・まったく世の中どうかしてる・・・いくら何でもオレが一番可愛いなんてことはないハズだから、オレが一番普通で親しみやすかったのではないかと思う・・・でもオレってそんなに親しみやすいのだろうか？

１０月から制服はまた冬服になった。４ヶ月ぶりに着てみると、少し胸の部分がキツイ感じだ。もともとＡカップくらいの胸に合わせて作ったセーラー服なので、キツイのも当然といえば当然なのだが、夏服に衣替えした頃よりも少しだけ大きくなったような気もする・・・エステで教えてもらったマッサージの効果だろうか？　そ

れともタマを取ってしまったことも関係あるのだろうか・・・オレの胸は以前よりも丸くなったような気がする。そして・・・ずいぶん柔らかくなってきた・・・

　そんなこともあって制服の面倒をみてくれている松本たか子先生には、新しい冬服を作ってはどうかと言われたが、オレは少しキツくてもそのまま着ることにした・・・だって1年も経たないうちに新しい制服に変えるなんてヘンに思われそうだ・・・キツイといってもそんなに困るほどではないし・・・

　それにしても、うちの学校の黒っぽいセーラー服に三つ編みでは、なんだか昭和の女子高生みたいではないだろうか？　三つ編みにすると、お下げよりは大人っぽくなるかと少し期待していたのだが、オレの場合はあまり印象は変わらなかった・・・ひとによっては、よけい子供っぽくなったなんて言われるシマツだ・・・

　ただ、良かったこともないワケじゃない。学校から帰って、三つ編みをほどいて軽く梳かすと、ちょっとウェーブがかかって大人っぽい髪型になるのだ。ソバージュって言うのだろうか・・・なんかそんな感じだ・・・妹の麻衣にもなかなかの評判なのだ・・・

―――――――――――――――
―――――――――――――――
―――――――――

　編集部に着くと、まだ男の子のモデルが着いてないとかで先に着替えることになった・・・まあ、男と女では女の子の方がいろいろ時間がかかるから、遅れて待たせるよりは良かったと思う。だって

オレは単なる読者モデルだからホンモノのモデルさんを待たしちゃ失礼だ・・・

今日はバレンタイン用だから、いつもより可愛らしい衣装だった。白い手編みのセーターに赤いチェックのミニスカート・・・ミニスカートは恥ずかしいけど、下に黒いタイツをはくのがせめてもの救いだ・・・そして茶色の皮のブーツに白い厚めのハーフコート・・・マフラーとベレー帽はお揃いのピンクだ・・・ちょっとオレには可愛いすぎないだろうか・・・？

メイクはいつもより少し幼い感じで、マスカラは多めに・・・口紅は薄いピンク系で軽く、境い目がわからないくらいに・・・そしてグロスで膨らみを出す。寒い時期の設定だからチークは多めにつけてほっぺの赤さを強調した。髪はオレの髪の毛にほんの少し茶色の入った付け毛を足してボリュームを出し、前髪はサイドに流して半分おでこを出してベレー帽をかぶせた・・・オレはおでこが少し広くて丸いから、おでこを出すとよけい子供っぽくなってしまいそうで恥ずかしい・・・

今回はこれまでの撮影と違って特集だから、全体のレイアウトのラフスケッチが出来ていた・・・扉ページとかいくつかは、ちゃんとオレがやるべき女の子のイラストが描いてある・・・まえにスタジオでカメラマンの進藤さんが見せてくれた表紙のやつと同じだ・・・扉は女の子がリボンで結んだチョコの箱を抱いて胸をときめかせているようす・・・見開きには男の子に恥ずかしそうにチョコを渡す女の子・・・男の子に後ろから肩を抱かれて微笑む女の子・・・そして願いが通じたように男の子と抱き合う女の子！

担当のデザイナーさんがオレにレイアウトを見せながら色々説明してくれた・・・しかし、これをオレがやるのかと思うとゾッとす

る・・・こんな可愛い女の子の役がオレに出来るのだろうか・・・
編集長はオレが男だって知ってるんだから、インターネット投票なんかちょっと操作して他のコを一番にしてくれたら良かったのにと思う・・・オレにはこんな役はいくら何でも荷が重い・・・でも千里にも応援されちゃったし・・・やるからには頑張らないワケにはいかないんだけど・・・

なかなか男の子が来ないから、先にオレひとりの部分を撮影することになった。今の時期には暑めの恰好だけど、スタジオは冷房が入っているから平気だ・・・スタジオはライトの熱とかあるし、季節と違う服を撮影するから涼しいくらいが丁度いい・・・暑いとせっかくのメイクも流れちゃうし・・・

扉用の撮影は上半身だけだから、片側に半円に穴を開けたレフ板の、半円部分に体を入れての撮影だった。オレの下には白いレフ板、上には天井のようにトレーシングペーパーが張ってある。トレーシングペーパーは上からの光をやわらかくするため、レフ板は下から光を反射させてアゴや鼻の下が濃い影にならないようにするためだ。

オレは胸にチョコを抱き、これから男の子に渡すのを想像してドキドキしている女の子・・・もちろん実際には包みにチョコは入っていないけど、ちゃんとあの有名な呉服町（ごふくまち）の「チョコレートショップ」で包んでもらった本物だ・・・特集の一番最初に紹介されてるのも「チョコレートショップ」のチョコ。やっぱり福岡のチョコレート専門店っていったら「チョコレートショップ」に違いない。

オレは本当の女の子じゃないから、女の子がチョコを渡す気持ちなんてわかるハズもないけど、仕事なのだからと一所懸命にニース

の山上くんに渡す想像なんかしてみたが、どうも上手くいかなかった・・・だって山上くんなんて会ったこともないし・・だから想像にも現実味がない・・・進藤さんのシャッターを押す手も留まりがちだ・・・なんか上手く出来ない自分が情けない・・・

「ユウちゃん、好きな人誰でもいいから想像してごらん！」

進藤さんはそう言うけど・・・そんなこと言ったって・・・・・

（・・・・！）

その時オレの頭の中に現れたのは、なぜか有友兄さんの顔だった・・・そのとたん、オレはたまらなく恥ずかしくなった・・・なんで兄さんなんだよ・・・

いきなりカメラのシャッターが押されストロボが光った。

「いいよ、ユウちゃん、その表情！」

な・・なんで・・・？　オレはどうしていいのかわからず、オロオロするばかりだったが、なぜか進藤さんはシャッターを切り続けていた・・・

扉の撮影が終って画像をチェックしているところを見せてもらった。

「ユウちゃん、最初は緊張してたみたいだけど、途中からすごく良くなったよ。チョコを渡したいけど、恥ずかしいみたいな微妙な表情が良く出てた。」

オレはその写真を見てまた恥ずかしくなった・・・

「恋人でも想像したの？」

「そ・・そんな・・・恋人なんかいません・・・」

まさか兄さんを想像したなんて、口が裂けたって言えない・・・それにオレは急に兄さんを思い出してビックリしただけだ・・・それがたまたまそんな表情に見えたのだろう・・・

でも写真のオレは一応女の子に見えたから少しだけ安心した・・・
ラフスケッチのイラストみたいに可愛くないかも知れないけど、今のオレにはこれが精一杯だ・・・それなのにデザイナーさんったら、イメージ通りなんて言ってる・・・そんなこと言ってオレの調子を上げようとしてるのだろうか・・・まあ、そう言われたら・・お世辞だって判ってても・・悪い気はしないけど・・・

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー
ー　ー
ー

その後、オレひとりの全身のポーズなど写して休憩に入った・・・
男の子のモデルはまだ来ない・・・いったい何してるのかなぁ・・・
オレお腹が空いちゃった・・・

モデルの仕事は時間がかかると少し辛い・・・お腹が空いてもほとんど食べられないんだもん・・・だって、食べてお腹が出たりしたらカッコ悪い・・・だからお腹が空いたらお水を飲んで我慢するのだ・・・それも少しだけ・・・飲み過ぎたらトイレに行きたくなったりして迷惑かけてしまう・・・

廊下のイスに座って待っていると、向こうでエレベーターのドアが開く音がした。振り向くとスーツ姿の男の人の後ろからラフなシャツにジーンズの男の子が出てきた・・・あの人が一緒に撮影する男の子なのかな？　オレより年上みたい・・・

スーツの人が佐々木さんにペコペコお辞儀をしてる・・・謝って

るみたいだ・・・オレも立ち上がって近くに行ってみた・・・
「すみません、飛行機が遅れまして・・・」
そっか・・飛行機が遅れたんなら仕方ないや・・・この人・・マネージャーさんかなぁ？　ふと顔を上げると男の子と目が合ってしまった・・・！・・・この人知ってる・・ジノンボーイの道端純平（みちばたじゅんぺい）だ！　テレビや雑誌では見たことあるけど・・・実際に見ると思ったよりカッコいい・・・それにすごく背が高い・・・なんか慌てて目をそらしちゃった・・・

　オレがもし男だったら、こんなカッコいい男の子を見せられたら、自信を無くしてしまったかも知れない・・・オレ・・ほんと女で良かった・・・
「ユウちゃん、こちら今回の恋人役の道端純平くん。知ってるでしょう？」
「・・あ・・こ・・こんばんわ・・春日ユウです・・・」
なんか照れくさい・・・考えてみたら若い男の子を相手に、女の子として話すなんて初めてだ・・・オレちゃんと女の子に見えてるかな・・・

「あれっ！　君、読者モデルのコだよね。」
「あ・・はい・・・」
「純平くん良く知ってるじゃない。ユウちゃんまだ始めてそんなに経ってないのに。」
「姉妹紙も編集部で毎月チェックしてますよ。だって、ユウちゃんダントツで可愛かったじゃないですか。」
「そ・・そんなっ・・・」
いきなりそんなこと言われたら・・・耳まで赤くなっちゃいそうだ・・・
「ユウちゃんはまだ慣れてないから、純平くんリードしてあげてね。

」

「はい、まかせてください！」

・・リ・・リードなんて・・・佐々木さんはオレが男だって知ってるクセに・・・なんでそんなこと言うんだろう・・・それに、純平って案外調子がいいヤツみたいだ・・・自分だってそんなにベテランってワケじゃないだろうに・・・でもオレが新米なのはそのとおりだし・・・ちょっとはリードしてもらわなきゃいけないかな・・・

「あ・・あの・・よろしくお願いします・・・」

オレはペコリと頭を下げた・・・恥ずかしい・・・心臓がドキドキしてきた・・・

撮影が始まってもドキドキは、なかなか治まらなかった・・・チョコを持ってる手が震えてしまう・・・オレはもう何がなんだかわからず、ただただカメラマンの進藤さんや、デザイナーさんの指示に従ってポーズをとったり、目線を変えてみたりといった有り様だ・・・こんなことで撮影になるのだろうかと思ったが、進藤さんは順調にシャッターを切っている・・・どうなってんだろう・・・

デザイナーさんがオレたちに指示を出す。

「それじゃ、純平くんはチョコを右手で持って、それでユウちゃんの背中に手をまわして、そうそう・・それで、ユウちゃんは純平くんの胸にもたれかかる感じでほっぺたをつけて・・・」

ヒィ〜〜・・・どうしよう・・・こんなの恥ずかしすぎる・・・

「・・・？」

オレが頬をつけた純平の胸もドキドキいっていた・・・こいつもけっこう緊張してるんじゃないのかな？　そっと見上げてみると純平のヤツ目が泳いでる！　なんだ・・・ふたりとも緊張してるんだ・・・そう思うとちょっとは気が楽になってきた。　なんだよ・・まかせてくださいなんて言ってたクセに・・・

半身の撮影ではオレが前に立って、チョコを胸に抱くオレを後ろから純平が肩に手をかける・・・オレが震えてるのバレてしまうだろうか・・・でも、純平の手も震えてる・・・

（ふふっ・・純平ってけっこう純情なヤツなのかな・・・）

「いいよ！ユウちゃん！　純平くんも笑って！」

オレ、自然に笑顔になってたみたいだ・・・振り向いてみると純平も笑ってる・・・でもちょっと引きつってるかな・・・

「純平くん、ユウちゃんを抱きしめるような感じで手をまわしてみて！軽くでいいからね。」

そりゃそうだよ・・・強く抱かれちゃたまらない・・・でも軽くだって抱かれるなんてイヤだなぁ・・・　純平の腕がオレの肩を離れて降りてくる・・・

「あっ、ごめん・・・」

ちょっとオレの胸に手があたって、すぐに純平が謝った。でも手編みの厚めのセーター着てるし、ブラもしてるから全然問題ない・・・だけど男の子は自分の手が女の子の胸の膨らみに当ったら、やっぱりドキッとしちゃうだろうな・・・

「・・大丈夫です。そんなに当たってないから・・・」

だからって・・さわっていいってことじゃないぞ・・・オレは心の中でつけ加えた・・・

なんとか撮影が終った時にはもう9時になっていた。家には今日は遅くなるって言ってきたけど、こんなに遅くなるとは思わなかった・・・

「遅くなっちゃったわね。純平くんとユウちゃん、これから食事に行かない？」

せっかくの佐々木さんの誘いだったし、お腹もペコペコだったけど、さすがに男の子と食事に行くのは辛い・・・それに今日はすごく疲れてしまった・・・なんか頭がクラクラしてる・・・

「あ・・すみません・・わたし帰らないと・・かあさんも心配してるかも知れないし・・・」

「それもそうね。それじゃ気をつけて帰ってね。あっ！ちょっとまって・・・」

そう言って佐々木さんはコンビニのおにぎりが入った袋をオレの手に握らせた。

「お腹空いてるでしょう？　電車の中ででも食べて。」

「あ・・ありがとうございます。」

「えっと・・道端さん・・お世話になりました・・・」

オレがお辞儀をすると純平は

「ユウちゃん、また一緒に撮影があるといいね。」と笑顔で言った。

なんかその笑顔が憎たらしい・・・自分だってけっこう緊張してたくせに・・・ほんと調子がいいヤツだ・・・でも・・時々ちょっと憎めないところもある・・・しまった・・こんなこと考えてたらまたドキドキしてきた・・・

「じ・・じゃぁ・・・失礼します！」

オレは急いでエレベーターに乗り込んだ。

駅に着いて電車に乗っても、まだドキドキは止まらなかった・・・

せっかく貰ったおにぎりも食べるどころじゃなかった・・・もう・・

なんでオレこんなにドキドキしてるんだよ・・・

第65話　メール　成長する女の子

家に帰るとピザが取ってあった・・・オレは編集長の佐々木さんにもらったおにぎり2コを食べたが、まだ少しお腹が空いていたので、ピザを一切れだけレンジで温めて食べた・・・本当はもう一切れくらい食べたかったけど、もう夜も遅いからやめておいた・・・だってモデルなんかやってるのに太っちゃったら大変だ・・・ただでさえホルモン療法なんかやってると太りやすい体質になるっていうし・・・女の子でいるのも大変だ・・・

かあさんはまだ帰ってなかった・・・仕事が忙しいらしく、このごろすごく遅くなる時もある・・・だからオレが夕飯を作らなきゃいけないのに、あまりモデルの仕事が増えるとオレまで夕飯を作れないから、とうさんや麻衣に申し訳ない・・・オレがギリギリでも帰って来れれば作り置きで何とか出来るけど、麻衣に夕飯の仕度を頼むのはまだ無理そうだ・・・

お風呂に入って落ちつくと、食事を断って帰って来てしまったことが、本当に良かったのかどうか心配になってきた・・・せっかく誘ってくれたのに・・・オレ失礼なことしたんじゃないだろうか・・・

「有希、入ってるの？　かあさんも入っていい？」
「あ・・うん・・いいわよ・・」
かあさんやっと帰ってきたのか・・・かあさんも疲れてるだろうから、一緒に入れば時間が早く済むだろう・・・オレももうすぐ上がるし・・・
「有希と入るのも久しぶりね。」

入ってきたかあさんが言った。そういえば確かに久しぶりだ・・・
それだけオレとかあさんの時間がズレているという事なのだろう・・・
・
「わたし、もうあがるところだから、かあさんゆっくり入ってよ。」
オレはかあさんと入れ違いに湯舟から出ようと立ち上がった・・・
「有希ちょっと待って・・・少し見ないうちに有希もすっかり女の子らしい身体つきになったのねぇ。男の子の硬い感じがなくなったし、胸もきれいな形だわ。」
・・・・・!
「もう・・かあさん・・そんなこと言わないでよ・・・恥ずかしいじゃない・・・」
かあさんは湯舟から上がろうとするオレの腕をつかんだ・・・
「有希まだいいじゃない。もう少し一緒に入ろう?」
「・・う・・うん・・いいけど・・・狭くない?」

女の子になってからは時々かあさんとお風呂に入るようになったけど、今でも湯舟に向かい合って入るのはさすがに恥ずかしい・・・まあ、お風呂だから顔が少しくらい赤くなっても気付かれることはないだろうけど・・・
「今日はバレンタインの撮影だったんでしょう? どうだったの?」
「・・う・・うん・・・ちょっと・・疲れちゃった・・・」
「男の子と撮影だったんでしょう? どんなコだった?」
「・・かあさん・・道端純平(みちばたじゅんぺい)って知ってる?」
「道端・・純平・・?・・あ、あのコかしら・・・ほら、日曜日の朝やってる・・・なんて言ったっけ・・“波瀾なんとか”っていうのに出てるコじゃない?」
「・・うん・・そう・・・」
・・かあさん良く知ってるなぁ・・・
「良かったじゃない、けっこう可愛いコじゃなかった?」
「・・!・・べ・・べつに良くないよ・・・普通だよ・・・そんな・

・可愛いなんて・・・」
まあ、見た目はちょっとカッコいいかも知れないけど・・・べつにオレの好みじゃないし・・・

「ねえ、かあさん・・・わたし、撮影が終ってお食事に誘われたんだけど・・・もう9時すぎてたから断って帰ってきちゃったの・・・失礼だったかなぁ・・・」
「食事に誘われたって、道端純平くんに？」
「ち・違うよ！！　編集長の佐々木さんだよ・・・ま・・まあ・・純平も一緒みたいだったけど・・・」
純平に誘われたのなら、オレだって断ったことを気にしたりなんかしないと思う・・・女の子は男の子に誘われてもカンタンについて行っちゃいけないんだ・・・だって三吉先生が言ってたもん・・・
「有希はまだ高校生でしょう？　夜遅いんだから断ったって失礼じゃないわよ。編集長さんも怒ってなかったでしょう？」
「・・うん・・たぶん・・・」
怒ってるようには見えなかった・・・おにぎりもくれたし・・・
「だったら気にすることないわよ。こんどもう少し早い時間に誘ってくれたら行ってきなさい。」
「・・うん・・わかった・・・」
やっぱりかあさんに聞いてみて良かった・・・かあさんはちゃんとオレにも良くわかるように言ってくれるから嬉しい。かあさんはオレの憧れと言ってもいいと思う・・・その気持ちはオレが女の子になってからずっと強くなってきた。オレも大人になったらかあさんみたいな女の人になれるといいけど・・・

―――――――――――――――
―――――――――――――――
―――――――――

お風呂から上がって部屋に行くと携帯にメールが来てた・・・千里かと思ったけど知らない番号だ・・・

開いてみると、なんと道端純平からだった！

なになに・・・「・・・ユウちゃん今日の撮影楽しかったよ・・・」

・・・？何言ってんだコイツ・・・

「・・・今度は一緒に食事でもしよう」

・・・だって！　最後にハートマークまでついている・・気持ち悪っ・・・何考えてんだアイツ・・・

いったい何で純平のヤツ・・オレのアドレス知ってるんだろう・・・誰が教えたのかなぁ・・・佐々木さん？　それともメイクのカネちゃんかな・・・

放っておこうかとも思ったけど、仕事の付き合いでもあるし、一応は返事しないとマズイかもしれない・・・でも女の子として男の子に送るメールなんて、どんなこと書いたらいいのか見当もつかない・・・オレはレナに頼んでメールの文章を考えてもらうことにした。

しかしレナから来たメールを見たオレは驚いた・・・「わたしも楽しかったわ・・・また一緒の撮影があるといいですね・・・ぜひお食事に誘ってください」って・・・こんなメール送ったらオレが純平に気があるみたいに思われちゃう・・・

結局オレは自分で考えなきゃいけなくなってしまった。

「えっと・・・道端さん本日はお世話になりました・・・こんな機会はあまりないと思いますが・・・また一緒の撮影があったら・・・

その時はよろしくおねがいします・・・」
こんな感じでいいのではないだろうか・・・これなら純平だって社交辞令だと思うだろう・・・純平とふたりで食事なんて考えただけでゾッとする・・・ちょっと想像しただけでまたドキドキしてきた・・・

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

お昼、長谷川と中庭のベンチでカレーパンを食べていると携帯のバイブが鳴った・・・
「・・・またメールだ・・・」
携帯の画面を見てみると・・・やっぱりだ・・・
「どうしたの有希、誰から?」
長谷川が横からのぞいてきた。
「・・・純平・・・」
「じゅんぺい? 誰それ。」
「長谷川さん知らないかな? ジノンボーイの道端純平って・・・」
「知ってるわよ! 仮面レンジャー星徒の“マース”じゃない。」
「えっ・・・そうだったの?・・・マースって?・・・火星の?」
「そうよ。」
「・・・じゃぁ・・・赤の人?」
「そう。」
「・・・だったら・・・もしかして・・・主役じゃない?」
「そうよ。有希知らなかったの?」
「・・・うん・・・」
アイツそんな主役するようなヤツだったんだ・・・

「ねえ、もしかして・・その純平くんからのメールなの？」
「うん・・・」
「ウソでしょう？」
「・・・ウソじゃないもん・・・」
「なんで？　なんで有希に純平くんからメールが来るのよ！」
「・・この前の撮影で一緒だったの・・・バレンタインの・・・」
長谷川が知らないのは、オレが純平と一緒に撮影したことを誰にも言わなかったからだ・・・誰にも言わなければ、長谷川だって知ってるハズがない・・・だって長谷川の情報源はウワサなのだから・・・どうもオレのウワサはすぐに広まってしまうみたいなのだ・・・

もうバレンタインの撮影から1週間ほど経つというのに、いまだに純平からは毎日・・多い日は1日何回かメールが来ている・・・ホントしつこいやつだ・・・最初の時いらい、返信せずに放っているのに・・・

そのくせ自分が仮面レンジャーの主役やってるなんて一言も言わないなんて・・・なに気取ってるんだよ・・・そんなのやってるんなら少しくらい自慢すればいいじゃないか・・・いつもどうでもいいような事ばっかり書いてきてさ・・・そういえばドラマの撮影とか書いてたっけ・・・あれが仮面レンジャーのことだったのかも知れない・・・純平の役なんて、どうせちょい役だとばかり思ってた・・・

「いいなあ有希、純平くんと知り合いなんて。」
「そんなんじゃないわよ・・・ただ1回いっしょに撮影しただけだもん・・・」
「でも仲良くなってメールしてるんでしょう？」
「ち・・違うよ・・・わたし返信してないし・・・最初1回だけは社交辞令で返信したけど・・・」

「なに？　有希ったらじらしてるの？」
「そ・そ・そんな・・・じらしてるなんて・・・」
オレはじらしてなんかいない・・・ただ返信してないだけだ・・・
「でも純平くんはずっと送ってくれてるんでしょう？　それなのになんで返信しないのよ。」
「だって・・・男の子とどんなメールすればいいのかわからないんだもん・・・へんなこと書いたら気があるみたいに思われても困っちゃうし・・・」
「・・・・・」

「わたし・・純平みたいなのタイプじゃないし・・・」
「ヒドイなぁ・・・有希ったら・・・あんたあんがい小悪魔なのね。」
「ここ・・・小悪魔？　わたしが？」
なんでそうなっちゃうんだよ・・・だってオレ男だぞ・・・でも・・・今は女の子だから・・・これって放置してるってことになるのかなぁ・・・
「少しくらいは返信しないと、純平くんじらされて逆に燃え上がっちゃうかもよ。」
「ま・・まさか・・・」
そんなことになったら大変だ・・・
「有希がメールしないんなら、わたしがしたいくらいよ！」
「え？！　長谷川さんもしかして純平のこと好きなの？」
「いや・・べつに好きってほどじゃないけど・・・仮面レンジャーはみんな好きなのよ・・・」
「ふ～ん・・・」
そっか・・・長谷川のやつ少し純平のこと好きなんだな？・・・だからオレに純平からメールが来るの羨ましいんだ・・・なんか長谷川に羨ましがられるなんて、ちょっと良い気分かも・・・

「・・じゃぁ・・ときどきは返信しとこうかなぁ・・・」
だって、オレが純平のことじらしてるなんて思われたらたまったもんじゃない・・・
「それがいいわよ。それにタイプじゃなくても少しは男の子とつき合っておかないと、有希のことだからいざタイプのコが現れた時に上手くつき合えないわよ。」
「つ・つ・つき合うなんて・・・わたしそんな気ないけど・・・」
「今はそうかもしれないけど、この先どうなるかわからないじゃない？」
そんなぁ・・・
「わ・・わからなくないよ・・・わたし男の子となんかつき合わないもん・・・」

「・・・・？　なんか有希・・ちょっと考え方変わったね・・・」
「え？」
「だって、まえは男の子とつき合えるのか心配してたじゃない。」
「そ・・そうだっけ・・・？」
オレ・・そんなこと言ったっけ・・・？
「有希って、もっと女の子らしい考え方じゃなかった？」
「・・・・・」
オレは自分では全然変わった気がしない・・・ていうか、オレは男だった頃ともそんなに変わってないと思う・・・そうか・・オレは自分の内面が女の子だと信じさせるために、長谷川には男の子とつき合いたいなんて言ってたのだろう・・・それがいつの間にか女の子でいることに慣れてしまい、普通のオレを出してしまっていたのだろうか・・・だからっていまさら軌道修正するのもヘンだ・・・
なんとか言い訳しないと・・・

「わ・・わたしだって・・考え方が変わることがあってもいいじゃない・・・」

「それはそうだけど。」
「いまは・・・あまり男の子とつき合いたいとか思わないの・・・だって・・わたしもう女の子だし・・・女の子でいることと、男の子とつき合うことは別でしょう?」
「・・・・・」
「女になってすぐの頃は、女の子ってこうでなきゃって気持ちが強かったんだけど、いまは女の子だからこうしなきゃいけないとか、女の子だからこんなことやっちゃいけないとか、そんなこと無いんじゃないかと思うの・・・わたしはもう女の子なんだし、わたしがやれば女の子がやったってことじゃないのかなぁ?」
「なんか・・・有希成長したね・・・」
「え?」
「モデルなんか始めたからかな? だいぶ女の子でいることに自信が出てきたんじゃない?」
「そ・・そんなことはないと思うけど・・・」
オレはまだまだ自信なんかない・・・いつもオドオドしっぱなしだ・・・近頃じゃもう自信を持つことなんて半分あきらめてしまっている・・・

「わたし、自信なんてないよ・・・でも自信がなくても・・やらなきゃいけないことがいっぱいあるんだ。」
「・・・・?」
「わたし女の子になれたらそれで幸せなんだと思ってたけど、いざ女の子になってみたら、女の子には女の子としてやるべきことがあるんじゃないかと思い始めたの。ただ女の子でいるだけじゃダメなんじゃないかと・・・」
「・・・・・」
「だから、男の子とつき合いたいとか思わなくなったのかも知れない・・・」
なんか上手いこと言ってる気がするけど・・・オレ変なこと言って

るだろうか・・・

「・・・うん・・なんかわかる気がする。やっぱり有希、女の子として成長してるよ！」

「・・そ・・そうかなぁ・・・」

もしそうだったら嬉しい気もするけど・・・でもちょっと怖い気もする・・・女の子ってオレにはまだ良くわかってないのに、そんな気持ちのまま女の子として成長しちゃっていいのだろうか・・・？

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

家に帰ってから、オレは純平にメールを打った。

「ずっと返信しなくてごめんなさい・・・道端さんって仮面レンジャーの主役やってるそうですね・・・仮面レンジャーが好きな友達に・・・道端さんと知り合いだと勘違いされて羨ましがられました・・・またいつか会えるといいですね」

どうせ純平は東京だし、仕事も忙しそうだから会うことなんてないと思う・・・でも、もしまた一緒に仕事をすることがあった時には、気持ち良く仕事がしたい・・・オレと純平はあくまで仕事のつき合いなのだ。

第６６話　三吉　先生はお見通し？

今日は久しぶりに三吉先生のところにお茶を習いに来ている・・・このごろ土日が撮影になる日が何度かあったから、なかなか来ることが出来なかった。

着物を着て先生のお手伝いをしていると、気持ちが引きしまる感じが心地いい・・・

「戸田さん、今日は手伝いはいいから、皆さんとお稽古しなさい。」

「はい・・」

オレは着物の裾が乱れないように立ち上がり、腰を低くしてお弟子さんたちの後ろを通って末席に座り、お弟子さんたちと一緒にお稽古を受けた。オレも一通りのお作法は出来るようになったけど、まだまだ全然ダメだ・・・それなのに、このところ休んでばかりなのは気が引ける・・・

「戸田さん、今日はどうしたの？　少し心が乱れていたみたいだけど。」

お稽古が終って先生にそう言われた。

「あ・・すみません・・・」

先生はやっぱりすごい・・・お茶のお稽古を見ただけで、オレの気持ちまでわかるなんて・・・

「何か心配ごとでもあるの？」

「いえ・・・わたし・・このごろお稽古休んでばかりだから・・・なんだか申し訳なくて・・・」

「そんなこと気にしてたの？　戸田さんも忙しいんでしょう？　モデルの仕事も始めたそうじゃない。」

「・・ごめんなさい・・・先生・・・」

「あら、どうして謝るのかしら？」
「・・だって・・・先生にせっかくお淑やかな女の子になれるように・・いろいろ教えていただいたのに・・・読者モデルなんか始めてしまって・・・」
モデルなんて淑やかさとはかけ離れてる気がする・・・

「戸田さん、たとえモデルをやっていても、淑やかでいることは出来るのではないかしら？」
「・・・それは・・そうかも知れませんけど・・・モデルなんかやってると流行りの服とか着なくちゃいけないし・・・」
「戸田さん、淑やかさとは心の持ちようのことだと思うのよ。先生が戸田さんに教えたのは、あくまで先生が良いと思う女の子像なの。でもあなたは現代の女の子なんだから、いま流行りの服装を着ても何も問題ないんじゃない？」
「・・・でも・・」
オレは先生に教えてもらった女の子が、少しづつ消えていくようで悲しかった・・・出来ることなら先生が良いと思うような女の子でいたいと思うのに・・・オレはいつの間にか・・・おかしな言い方だけど・・・オレっぽい女の子になってる気がする。

「大丈夫よ。戸田さんは卒業の時に私が言ったことを憶えてる？」
（９話参照）
「・・・・？」
「私はあなたが女の子として高校生活で困らないようにと考えて、いろいろ女の子として必要なことやマナーを教えたの。あなたは心は女の子でも、実際には男の子として生活してきて、女の子としての教養は身に付けていなかったから。でも高校に入ったら、そこでまた新しいことを憶えていけば良いのよ。それは先生には教えることは出来ないから、あなたが自分で憶えていかなくちゃいけないの。それに戸田さんは今も十分お淑やかだと思うわよ。」

「それは・・・先生の前ではそうしてるだけで・・・わたし、学校のみんなといる時はこんなじゃないんです・・・」
「それでいいのよ。ちゃんと場所をわきまえて言葉や仕草を使い分ければいいの。年中お淑やかにしてたら疲れてしまうわよ。」

「あなたの学校の長山先生も、戸田さんのこと良くやってると褒めてたわよ。三つ編みも習って出来るようになったそうじゃない。」
「え？　長山先生に会ったんですか？」
「ええ、先日わたしたちのお茶の先生の米寿のパーティーがあって、そこで会ったのよ。あの方は厳しい人だからめったに褒めたりしないのに、戸田さんはよほど気に入られたようね。」
三吉先生だってけっこう厳しいと思うけど・・・でも、たしかに見た感じの怖さでは長山先生の方が上かもしれない・・・長山先生がオレのことをそんな風に見てるなんて思いもしなかった・・・
「あの方もマナーに厳しい人だから、あなたはちゃんとお淑やかに出来てるのではないかしら？」

そうだろうか・・・？　オレは昔よりは自分のことも少しはわかるようになってきた気もするけど、でもやっぱり良くわからない所も多い・・・そもそもオレはどんな女の子になりたいんだろう・・・それも最近は良くわからなくなってきた・・・もちろんなりたいようになれるワケじゃないだろうけど、なにか目標がないと気持ちが落ちつかないのだ・・・

「わたし・・・どんな女の子になればいいんでしょうか？　このごろ良くわからないんです・・・」
「戸田さん、あなたは男の子だったからそんな風に考えるのかも知れないけど、あなたは、あなたらしくしてれば良いんじゃないかしら？」
「わたしらしく・・・？」

「そう、誰もあなたに、こんな女の子になりなさいなんて強制できるものじゃないわ。」
でも・・・オレは何か目指すものが欲しい・・・オレの中にも女の子の部分はあるのかも知れないけど、それがどんな女の子なのかオレにもわからないし・・・知らない間に女の子になってしまうのも、なんだか怖い・・・

「・・・わたし、このままでいいんですか？　このまま女の子になってしまって・・・」
「いいのよ。あなたはちゃんと素敵な女性になっていると思うわ。」
「そ・・そうでしょうか・・・」
でもオレにはそんな実感はない・・・女性？・・・女性って大人の女の人ってことだろうか・・・
「女性なんて・・・わたしまだまだ子供です・・・まだ何にも出来ない・・・」
「戸田さん、自分が子供だとわかるのは、大人になってきた証拠なのよ。」
「・・・・・！」
「戸田さんはもう大人になりつつあるのよ。これからは一歩づつあなたらしい女性になっていけば良いの。」
オレらしい女性？・・・オレはまだ心はこんなに男のままなのに・・・このまま女になったら、いったいどうなってしまうのだろう・・・

ーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーー

「ただいまぁ！」

あれ？　麻衣いないのかな・・・麻衣も中学生になって忙しいのか土日も家にいないことが多い・・・とうさんはいるだろうけど・・・流しに空になった食器が置いてあるから、作っておいたお昼ゴハンは食べたみたいだ。

　オレは自分の部屋に入ると服も着替えないままベッドに座って携帯を開いた。

「あ、来てる来てる・・・いま撮影の合間？　へ～・・仮面レンジャーの撮影やってんだ・・・でも合間にメールなんかしてていいのかな？　あっ写メも・・・ミドリのジュピターと一緒だ！・・・ジュピターの古池鉄平〈ふるいけ　てっぺい〉って長谷川の好みかも知れないな・・・可愛い感じの男の子が好きだって言ってたし（３６話参照）・・・こんなの長谷川が見たら喜ぶんじゃないかと思うけど・・・純平とメールしてるのは秘密にしてるからなぁ・・・」

　オレはいまだに純平とメールを続けている・・・もちろん純平が送ってくるのに、いちいち返しはしない・・・あんまり送って気があると思われても困るし・・・それでも毎日１回か２回は返している・・・だって長谷川が言ったみたいにオレがじらしてると思われたら迷惑だ・・・

「・・・ユウちゃんは何やってるの？・・・か・・・」

オレはメールを打った・・・

「・・・わたしはお茶のお稽古から帰ってきたとこ・・・純平くんも撮影頑張ってね・・・っと・・・」

これでちっとは純平のヤツも元気が出るかな・・・なんかオレがメールするとアイツ元気が出るらしい・・・なんか単純なヤツだ・・・オレより少し年上だけど、あまりそんな気がしない。

　オレも最初は緊張してメールしていたが、最近ではあまり自分が

女の子だと考えないようにしてからは、そんなに緊張することもなくなった。純平とはどうせ会うこともないし、オレもそんなに女の子らしくする必要もないと思う・・・オレはもう男とのつき合いは無くなってしまって、少し淋しかったから純平とのメールは思ったより楽しいのだ・・・あっちはどう思ってるか知らないけど、オレは男同士のつもりでメールしてる・・・まあ、さすがに男言葉は使えないけど・・・

―――――――――――――――

―――――――――――――――

――――――――――

次の日、急に撮影に呼ばれて行くと、晴れ着を着ての撮影だった。元々やるハズだったモデルさんがカゼ引いたとかで急にオレにまわってきたらしい。オレたち読者モデルはけっこう便利に使われるみたいだ・・・でも晴れ着を着れるのはちょっと嬉しい。

メイクスペースに行くと、赤い綺麗な振り袖が掛けてあった・・・これをオレが着るのだろうか・・・なんかワクワクしてくる。そういえば昔の写真に七五三の赤い着物を着たオレの写真があったのを思い出した・・・オレはその時のことは憶えていないが、あの時もこんな気持ちだったのかも知れない・・・

美容師さんが来ていてオレの髪を結い上げてくれる。こういうのはやっぱりヘアメイクさんより、やり慣れた人の方が良いのだろう。

オレは前開きのブラウスに着替えてから鏡の前に座る・・・髪を結う時は前開きの服じゃなきゃ、結った後脱げなくなって大変なこ

とになる・・・

前髪だけを残してサイドと後ろをアップにする・・・オレの髪もだいぶ長くなったからこういう髪型には便利だ。ボリュームを出すために頭のてっぺん黒いカツラを丸めたようなのを乗せて、その上からオレの髪の毛を被せるようにして結い上げていく。

髪を結って化粧をしたら次は着付けだ・・・オレは振り袖を着るのは初めてだが、たぶんやり方は普通の着物とそんなに違わないのではないかと思う。

晴れ着も同じ美容師さんが着付けてくれるみたいだ・・・

「あら？　あなた着付け出来るの？」

「え・・はい・・少しだけ・・・どうしてわかったんですか？」

「だって、ちゃんと着付けしやすいところで持ってくれてるから。」

「あ・・そっか・・・」

オレは無意識にやっていたのだが、そんなことで着付け出来るとわかるんだと感心した。

「着物を着慣れてる人には着付けも楽なのよ。」

美容師さんはそう言って手際よく着せていく・・・オレも手順は知っているから順調だった。

やっぱり振り袖は華やかで良い・・・三吉先生の所で着せてもらっている大人しい着物も素敵だけど、女の子なら誰でも振り袖は着てみたいものだと思う。普通は成人式の時に着るのだろうか・・・オレはまだ１５歳なのに、仕事で着られるなんて何だか得した気分だ。

デザイナーさんからの指示で撮影は進んでいく・・・オレは正月用の扉ページのために正座して両手をつき新年の挨拶を撮影したほか、小さなカット用に羽根つきしたり、凧を持ったり、おもちを食

べたり、書き初めしたりといろんなバージョンを撮影した。オレは習字はあまり得意じゃないから、書き初めはちょっと恥ずかしかった・・・

今回は小さいカット用だったから結構気楽な撮影だったし、時間もそんなにかからなかった。

「あの・・それじゃ、お先に失礼します！」

「あっ！ユウちゃんちょっと待って・・・」

撮影が終って帰ろうとすると、カメラマンの進藤さんに呼び止められた。何かと思って待っていると進藤さんは何か箱を持ってきた・・・

「これあげるよ。」

見るとそれはデジカメだった・・・

「ユウちゃん自分のカメラ持ってないって言ってただろう？」

「え・・でも・・・」

オレはどうしていいか判らずに困った・・・そりゃぁオレは自分のカメラは欲しいけど・・・そんな高いものもらっていいのだろうか・・・

「遠慮しなくていいよ、これは貰い物だから。こういう仕事してると使ってみてくれって貰うことがあるんだ。」

「でも・・それをわたしが貰ってもいいんですか？」

「あ、もう試した後だから。使い方もカンタンだし、結構いい写真が撮れるよ。」

「・・・そ・・そうですか。」

でもなんか悪いなぁ・・・何でオレなんかにくれるのだろう・・・

「ユウちゃんは写真に興味があるんだろう？それなら自分のカメラを持ってた方が良いよ。」

「・・ほんとに・・いいんですか？　貰っても・・・」
「もちろん、そのかわり写したら見せてくれよ。」
「はい！」
オレのカメラなんて・・・なんかすごく嬉しい・・・
「ありがとう、進藤さん！　わたし・・大事に使いますね！」

「あっ、これは他のモデルのコには内緒だよ。ユウちゃんをひいきにしてるみたいに思われたらやりにくいからね。」
「あ・・はい・・・わかりました・・・」
なんかそんなふうに言われると、オレのことひいきしてるみたいにも聞こえるけど・・・まさかそんなこと無いのはオレにもわかってる・・・

第６７話　金魚　長谷川の思い

秋はあっという間に過ぎて行き、期末テストが終ればもう冬休みだ。長谷川のおかげで勉強が出来ないオレもなんとか授業についていけてる。それはありがたいことだと思う・・・でも、本当はもっと感謝しなきゃいけないんだけど、教え方が優しくないから、いまいちそんな気になれない・・・

「ねえねえ有希、クリスマスパーティーは弘子の家でやるって決まったよ！」

まえから岡本はクリスマスパーティーをやろうって言ってたけど・・・でも・・・

「・・弘子の家って・・・神社じゃなかった？」

「そうよ。だから広いお座敷があるのよ。結婚式とかやらなきゃいけないから。」

いや・・・それはそうだろうけど・・・

「・・神社でクリスマスパーティーなんかやっていいの？　だって違う宗教じゃない・・・」

「まあ・・言われてみればそうだけど、でも弘子の家じゃ毎年クリスマスのお祝いやるって言ってたわよ。」

「ふ～ん・・・そうなんだぁ・・・」

なんかヘンな気がするけど、毎年やってるんならいいのかな・・・考えたらオレたちだってキリスト教じゃないけどクリスマスやってるし・・・

――――――――――――――

――――――――――――――

―――――――――

「また間違ってるじゃない、なんで解らないのかなぁ。」

「うぅっ・・・」

オレは数学は苦手だし、嫌いだ・・・どうしても必要に思えないのだ・・・だってオレは大人が問題を解決するのに方程式を使っているのなんて一度だって見た事がない・・・

「・・・こんなの出来なくても生活できると思うんだけどなぁ・・・大人だってみんな出来るワケじゃないと思うし・・・」

「屁理屈はいいから、とにかく憶えなさい！こういうのはただ憶えればいいの！」

なんかこういうとこ女の子って割り切ってると思う・・・何に使うのかとか、どういう時に使うのかとかいう事には、あまり疑問に思わないみたいだ・・・勉強はあくまで勉強ということなのだろうか・・・オレはいくら勉強で成績が良くたって、実際に使えないと意味がないと思う・・・これはオレが男だからそう思うのかなぁ・・・？

「もう、有希またボ～っとしてる！ちゃんと気合い入れて勉強しないと時間ばっかり過ぎちゃうわよ。」

「・・はぃ・・・」

勉強の時の長谷川は鬼のようだ・・・だいたいこんなに勉強出来るのに、なんでうちの学校に来たんだろう・・・だって他のところに追加入試受けて、受かったって言ってたのに（7話参照）・・・そのことを何度か聞いたこともあるけど、いつも適当にはぐらかされてしまう・・・まあ、それでも長谷川がうちの学校に来てくれたのはオレにとっては色々ありがたいことなんだけど・・・

「・・ふわぁ・・・疲れたぁ・・・死ぬぅ・・・」

やっと勉強が終ってオレは大きく伸びをしながら、仰向けに床に倒れ込んだ・・・

「おおげさなこと言わないでよ、いつもやってないからたまに頭使うと疲れちゃうのよ。」

・・・そうかもしれないけど・・・オレだって他のことには、けっこう頭使ってると思う・・・たぶん脳の使うところが違うんじゃないかな・・・今度兄さんが帰ってきた時にでも聞いてみよう・・・

「のど乾いたでしょう？　なんか飲み物持ってくるね。」

「・・・うん・・・」

長谷川が部屋を出ていき、冷蔵庫を開ける音がする・・・

ここは長谷川の部屋、勉強するときはいつもオレが長谷川の家に来る・・・オレはやっぱり自分の家に友達が来るのは好きじゃない・・・それが小さいころの、オレが憶えていないトラウマによるものなのか、単にとうさんと友達が鉢合わせするのがイヤなのかは、オレにもよくわからない・・・たぶんその両方じゃないだろうか・・・

長谷川の部屋は女の子の部屋にしては殺風景なほうだと思う・・・初めてこの部屋に来た時と比べてもほとんど変わらない・・・フクロウの置き物が1つか2つか増えただけだ・・・

でも今は初めてこの部屋に来た時と大きく変わったところが一つだけある・・・それは窓辺の棚の上にある水槽だ・・・

オレは起き上がって水槽のところへ行き横からのぞき込んだ・・・そこには3匹の金魚が泳いでいる・・・それは放生会の金魚すくいでオレがすくったやつだ・・・どうせすぐに死んじゃうかと思ったのに、今でもちゃんと生きている・・・けっこう元気そうだ・・・

水槽は金魚鉢とかプラスチックのケースではなく、小さいけど熱

帯魚とか飼うガラス製のちゃんとしたやつだ・・・ブクブクも入ってる・・・露店の金魚を飼うにしては、ちょっと本格的すぎやしないだろうか・・・？

「おまたせ。」

長谷川がお盆にジュース乗せて入ってきた。

「金魚？　少し大きくなったでしょう？」

「うん・・・」

たしかにすくった時よりも一回り・・・いや二回りくらい大きくなっている・・・

「ねえ、エサやっていい？」

「いいわよ、有希がエサやりたがると思って今朝はあげてないから。でもひとつまみだけよ、やりすぎちゃいけないんだって。」

「うん。」

オレはエサを入れた箱からひとつまみ取って、水面にパラパラとまいた。

「ふふっ・・・食べてる食べてる・・・」

金魚は一斉に水面に上がってきてパクパク食べ出した・・・なんか魚の顔って正面から見ると面白い・・・

「なんか有希、すごく楽しそう。」

「そりゃぁ、動物がエサ食べるの見るのって面白いじゃない。」

でも、ひとつまみのエサはすぐに食べてしまった・・・

「ねえ、もう少しやっちゃだめ？」

「ダメよ、やりすぎると水が悪くなっちゃうんだから。」

「ふ～ん・・・」

つまんないなぁ・・・金魚もまだ食べたそうなのに・・・

「でもさぁ、こんなにちゃんと飼うんだったら、金魚すくいのじゃなくて金魚屋さんで買えばよかったのに・・・そしたらもっと大きくてキレイなのが買えたと思うよ。」

「それじゃ普通で面白くないじゃない。」
「そうかなぁ・・・」
まあ、すくってきた金魚は個性はあるかもしれないけど・・・ちょっとヒネた顔してるし・・・
「有希だって自分ですくったやつだから、よけい興味があるんじゃない？」
「・・・・・」
まあ、そうかもしれないな・・・オレは別にとくべつ金魚が好きなワケでもないし・・・

長谷川が出してくれたジュースをストローで飲んでると、急に長谷川が真面目な顔で聞いた・・・
「ねえ、有希・・・ちょっと聞いてもいいかな・・・」
「う・・うん・・・いいけど・・何・・・？」
なんだろう・・・急にあらたまって・・・
「有希は心は女の子なんでしょう？」
「う・・うん・・まあ・・・」
「でも時々、男の子っぽい時もあるよね？」
「え・・・？」
いきなり・・・何言い出すんだろう・・・
「あっ、大丈夫、わたし知ってるから・・・性同一性障害の男の子って、心が女の子でも男っぽいコもいるのよね？　本で読んだわ。」
「う・・うん・・・」
「本当の女の子に女っぽいコもいれば男っぽいコもいるように、性同一性障害の男の子にも女っぽいコもいれば男っぽいコもいるって書いてあった・・・」
「・・・・・」
長谷川のヤツいったい何を言いたいんだろう・・・
「それで聞きたいんだけど・・・有希はどうなの？」

「えっ？・・・どうって・・・？」
「有希は男の子のことが好きなのは知ってるけど、女の子も好きだったりするのかな？・・・と思って。」
「・・・・！」

いきなり何てこと聞くんだよ・・・オレ何て答えればいいのだろうか・・・女の子が好きなんて言ったら警戒心を持たれてしまいそうだし・・・それにオレはまだ良くわからないのだ・・・
「えっと・・・それは・・好きっていうのは・・・恋愛の対象としてってこと？」
「うん。」
そういうことならやっぱり・・・
「・・わたしは・・・男の子だけ・・・かなぁ・・・」
うわぁ・・・自分で言ってて恥ずかしくなるぅ・・・でも・・こう言う以外にないじゃないか・・・
「やっぱり・・そうよね・・・純平くんともメールしてるもんね。」
「えっ！・・・なんで知ってるの？」
「知ってるわよ。だって有希ったら、最近しょっちゅう嬉しそうにメール見てるじゃない。」
「・・・・・」
オレが？・・・嬉しそうに・・・？　そりゃぁメールが来れば見るけど・・・
「有希ったら、ほんと恋する女の子って感じだもん。バレバレよ！」
「そ・そ・・そんなぁ・・・」
オレはそんなんじゃない・・・純平とのメールはたしかに楽しいけど・・・それは決して女の子っぽい気持ちではない・・・ましてや、恋なんて・・・
「わ・・わたし・・そんなつもりでメールしてるんじゃないよ・・・ただ・・友達として・・・」

「有希って元は男の子だった割には、ぜんぜん男の子の気持ちがわからないのね。いくら女の子の方は友達だと思っても、男の子はそんなふうには思わないわよ。」
「うそ・・・」
「やっぱり有希って男の子っぽい時もあるけど、心は完全に女の子なのねぇ・・・どうせ友達だなんて言って、つれないメールばっかり送ってるんじゃないの？　それじゃ純平くんも堪んないわね。」
「そんな・・・」
なんか長谷川にそんなこと言われると悲しくなってしまう・・・
「・・わたしそんなんじゃないのに・・・ヒドイよ・・・」
「あっ・・・ごめん有希・・そんなつもりじゃなかったのよ。　でもね、自分では気付いてないのかも知れないけど、有希は純平くんのことが好きなんだと思うよ。」
「・・・・・」
オレ・・そんなんじゃないもん・・・絶対ちがうもん・・・ヒドイよ・・・
そんなこと言われたら・・・もう・・メール出来なくなっちゃうじゃないか・・・

「ね・・ねえ・・・有希はクリスマスは？・・・どうするの？」
長谷川は黙ってしまったオレの機嫌をとるように、急に話題を変えた・・・
「・・・・・」
騙されないぞ・・・
「ねえ、有希・・」
「・・弘子のとこ・・・」
「え？」
「・・・原口さんの家で・・パーティーやるの・・・」
「あっ・・そうなんだ・・・」

「・・長谷川さんは・・・？」
「あ・・わたしはお母さんと・・ケーキ食べるだけ・・・もし有希が予定がないのなら・・お母さんが一緒に食べないかって言ってたから・・・」
「・・そうなんだ・・・」
一瞬、長谷川もパーティーに誘おうかとも思ったけど、すぐにやめた・・・長谷川が友達でもないコの家でやるクリスマスパーティーに来るハズないし・・・もし来たとしても、そしたらお母さんがひとりになっちゃう・・・
「・・弘子の家は神社だから・・・広いお座敷があるんだって・・・」
「そう・・・」
なんだか急に部屋が静かになったようで、金魚のブクブクの音だけがやけに大きく感じた・・・

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー
ー　ー
ー

『オレは女子高生』１周年を迎えて　（私のＨＰに掲載した日、０８．６．２３から数えての１年です。）

本日、この『オレは女子高生』は1周年を迎えました。たくさんの皆様に読んでいただけて嬉しく思っています。ここではこれまで感想を下さった方への返事で書いた事や、なんとなく感じている事など、思うままにいろいろ書いていきたいと思います。

正直なところ、当初は自分でもこの話がこんなに長い話になるとは思っていませんでした（笑）しかもまだ1年生の2学期・・・いったい何話になるのやらという感じです。

この話を書こうと決めた時にまず考えたのは、コメディにしない、エッチのためのエッチな展開にしない、あり得ない展開にしない、などですが、まあ、もともと無理な話だからあり得ないことも多いけど、そんな中でも実際ならどうかということを常に頭に置いて展開を考えています。だから最初は無視しようかと思っていたホルモンによる副作用も、やっぱり避けては通れないのでタマを取ってしまいました。あくまでタマを取るのが目的ではないので、手術などもかなりあっさり書いたつもりです。（私としては？）

この話は普通のフェチな話ですが、実は私のＨＰで書いてきた猟奇系小説と同じ手法で書いています。というか、この手法でなら書けるのではないか？と思ったのが始まりなんです。なので実は『オレは女子高生』では、猟奇系小説で培ってきた、普通の小説では使わないようなトリッキーな手法をふんだんに使って書いています。たぶんどこがそれだか読んでも判らないのではないかと思いますが、変に気持ちを揺さぶられる方がいるとすれば、たぶんその手法によるものだと思います。

男の子の時代をあまり書かなかったためか（書いても面白くないの

で書かなかったんですが）読んでる皆さんの中には有希のことを女っぽい男の子だと思っている方も多いようですが、私自身は有希はごく普通の男の子として書いています。もちろん料理が好きだったり、裁縫が得意だったり、普通は女の子が得意なことを得意だったりもしますが、それはことさら女っぽいというよりは、趣味の問題だと思っています。特に裁縫は図工などが好きだったから、その流れでやってみたら得意だったということだと思います。それにお母さんの影響なのか、デザイン的なセンスも悪くないみたいだし、服のセンスもだんだん良くなってるみたいです。ただ、ＴＳで良くあるケンカが強かったり、男勝りな感じにはしたくないと思っていました。

有希の外見、特に顔についてはわざとどんな顔か書いていません。この事については前にも書いたので細かい理由はここでは書きませんが（５３話のおまけ参照）まったくの女の子としてでも良いし、男の子が女装しているみたいに想像しても良いし、読む方が自由に想像して下さってかまいません。もちろん自分に置き換えて妄想して下さっても大丈夫です（笑）私が思うには、純粋に女の子になりたい気持ち（Ｈ目的でない）がある方が、この話に一番適した読者ではないかと思います。そうでなくても、多少ともフェチな要素がある方でないと理解しにくい部分もあると思います。

この話は一見ＴＳのような体裁は取っていますが、普通のＴＳモノのように、男に戻れるのか？とか、男とバレそうになってハラハラ、ドキドキ・・・とか、ライバルが出てきて・・・とか、そういうＴＳモノの基本となるドタバタはありません。ただ有希が勝手にジタバタしてるだけです（笑）これを楽しんでいただくには、やはり有希の立場に立って読んでいただくのが一番だと思います。

これがもし、もともと女になりたいコだったら、ただの性同一性障

害のコの話になってしまいますが（笑）有希の場合、本当に性同一性障害なのかはまだ良くわかっていません。母親やレナが言うことでしか有希が性同一性障害ではないのか？という事実がないからです。ですが有希が性同一性障害かどうかは、実はこの話にとってはあまり大きな問題ではないんです。もちろん話としては、有希の過去のことは重要なんですが、この話は有希というちょっと頼りない少年が、何の因果か偶然に女の子になるしかない状況になったことで、一人の女性として人間として成長していくという話でもあるのです。（なんと野心的なテーマでしょう、笑）有希は色々な人と出会うなかで、素敵な大人の女性へと成長するのではないかと思います。もちろんストーリーとしては、ちゃんと着地するハズです。私は基本的に“話は終ってナンボ”という考えの人間なので（笑）

この話は有希という、他の人よりはだいぶ視野の狭いコを通して書いているので、表現的には、実際のこの話の世界とは、常に少しズレています。有希が考えたり、疑問に思ったり、納得したりしているのも、あくまで本人がそう思っているだけなのかも知れません。もちろん、実は有希が知らないところで、誰かの企みによって有希が女にされている、なんてことは無いですけど（笑）みんな良い人とはいえ、それぞれがそれぞれの思惑で動いているのもまた事実です。

普通小説では登場人物は話を進めるために目的を持って出て来るものですが、この話では私がストーリーと呼んでいる大きな決まっている流れ以外の、私がエピソードと呼んでいる部分に関しては、登場人物がどういう言動をするかによって決まってくるという方法をとっています。だから登場人物が不用意なことを言ってしまうと大変な事態になることもあります。そういう書き方なのに、これまで入れなきゃいけない情報をすべて取り込めているのは、自分でも奇跡的だと思います（笑）とにかくストーリーはちゃんと高校卒業に

向って進んでいますのでご心配なく・・・最後まで書き上げることが出来ればの話ですけど（笑）

この話には伏線っぽいことが結構たくさんありますが、それはたぶんすべてが伏線です。なかなか活かされないみたいに見えるかも知れませんが、最終話までにはすべて回収するハズなので気長に待ってて下さい（笑）ちなみにこの話、まだまだ序盤なのです。

おぼえがきでは（３６話のおまけ参照）ヌルイ話と書いているので、本当にゆるゆるの話だと思ってる方もいるかも知れませんが、ヌルイのはあくまで、これまで私のＨＰに書いてきた猟奇系や凌辱系のものと比べての話で、実はこの話はそんなにヌルイ話はありません。これまで誰も小説で書いたことがないような事にまで踏み込むつもりです。もちろんハッピーエンドで終るのは確かですが、それはあくまで有希にとってのハッピーエンドであり、誰から見てもハッピーエンドと言えるかどうかは判りません。

現在この話を読んでいるみなさんのほとんどは、実はこの話がどういう話なのかまだ解っていないと思います。少なくともこの話は有希がモデルになって活躍する話ではないですし、男の子と恋話になっていく話でもありません。女の子たちと楽しくやっていくという話でもありません。もちろんその場その場ではそういう展開もあると思いますが、目的はかなり別のところにあるのです。作者としては出来るだけ多くの方が、最後までこの話についてきてくれることを願うばかりです・・・でもくれぐれも無理はしないでください。辛くなったら読むのを止めて下さって結構です。

なんか箇条書きになってすみません。これからも頑張って続きを書きますのでよろしくお願いいたします。

（この文は私のＨＰの５周年の時に書いたものに、加筆修正したも

のです。）

○この1年の更新履歴

●09.6.23　『オレは女子高生』67話をUP
●09.6.21　『オレは女子高生』66話をUP
●09.6.13　『オレは女子高生』65話をUP
●09.6.9　『オレは女子高生』64話をUP
●09.6.7　『オレは女子高生』63話をUP
●09.5.31　『オレは女子高生』62話をUP
●09.5.24　『オレは女子高生』61話をUP
●09.5.22　『オレは女子高生』60話をUP
●09.5.10　『オレは女子高生』59話をUP
●09.5.5　『オレは女子高生』58話をUP
●09.5.1　『オレは女子高生』57話をUP
●09.4.19　『オレは女子高生』56話をUP
●09.4.9　『オレは女子高生』55話をUP
●09.4.3　『オレは女子高生』54話をUP
●09.3.30　『オレは女子高生』53話をUP
●09.3.28　『オレは女子高生』52話をUP
●09.3.21　『オレは女子高生』51話をUP
●09.3.7　『オレは女子高生』50話をUP
●09.3.6　『オレは女子高生』49話をUP
●09.3.2　『オレは女子高生』48話をUP
●09.2.23　『オレは女子高生』47話をUP
●09.2.21　『オレは女子高生』46話をUP

●09.2.13　『オレは女子高生』45話をUP
●09.2.6　『オレは女子高生』44話をUP
●09.1.31　『オレは女子高生』43話をUP
●09.1.23　『オレは女子高生』42話をUP
●09.1.16　『オレは女子高生』41話をUP
●09.1.13　『オレは女子高生』40話をUP
●09.1.9　『オレは女子高生』39話をUP
●09.1.1　『オレは女子高生』38話をUP
●08.11.28　『オレは女子高生』37話をUP
●08.11.24　『オレは女子高生』36話をUP
●08.11.3　『オレは女子高生』35話をUP
●08.10.30　『オレは女子高生』34話をUP
●08.10.27　『オレは女子高生』33話をUP
●08.10.22　『オレは女子高生』32話をUP
●08.10.16　『オレは女子高生』31話をUP　ここから「小説家になろう」へ一本化
●08.10.6　『オレは女子高生』30話をUP
●08.9.29　『オレは女子高生』29話をUP
●08.9.24　『オレは女子高生』28話をUP
●08.9.18　『オレは女子高生』27話をUP
●08.9.17　『オレは女子高生』26話をUP
●08.9.15　『オレは女子高生』25話をUP
●08.9.13　『オレは女子高生』24話をUP
●08.9.11　『オレは女子高生』23話をUP
●08.9.8　『オレは女子高生』22話をUP
●08.9.4　『オレは女子高生』21をUP
●08.8.21　『オレは女子高生』20をUP
●08.7.18　『オレは女子高生』19をUP
●08.7.15　『オレは女子高生』18をUP
●08.7.13　『オレは女子高生』17をUP

●08.7.12　『オレは女子高生』16をUP
●08.7.10　『オレは女子高生』15をUP
●08.7.8　『オレは女子高生』14をUP　この日から「小説家になろう」へ転載開始
●08.7.6　『オレは女子高生』13をUP
●08.7.4　『オレは女子高生』11．12をUP
●08.7.2　『オレは女子高生』10をUP
●08.6.30　『オレは女子高生』9をUP
●08.6.30　『オレは女子高生』7、8をUP
●08.6.28　『オレは女子高生』6をUP
●08.6.27　『オレは女子高生』5をUP
●08.6.27　『オレは女子高生』4をUP
●08.6.26　『オレは女子高生』3をUP
●08.6.25　『オレは女子高生』2をUP
●08.6.23　『オレは女子高生』1をUP
●08.6.21　制作おぼえがき

第６８話　Ｘマス　楽しさのゆくえ

西鉄久留米駅に集まったオレたち３人は、駅前のバス停からバスに乗って八女にある原口の実家に向っていた・・・いつも学校に行くのとは反対の方向だ・・・もよりのバス停までは３０分くらいかかるらしい・・・でもなんか遠足みたいで楽しい。

もし期末テストで赤点だったら補習があってヤバかったけど、長谷川のおかげで苦手な数学と英語もなんとか合格点を取ることができた。これで心おきなくクリスマスパーティーを楽しむことが出来る。

とはいえ、楽しい反面オレにとっては結構ドキドキだ・・・だって今日はお泊まりもするから、学校で一緒にいる時よりもずっと気が抜けない・・・仲良しの４人だから、つい気を抜いてボロを出さないとも限らない・・・オレももう女の子でいることには慣れてるから大丈夫だとは思うけど、それだからこそ用心するに越したことはない・・・・

バスの窓から見える景色は、一面の刈り取られた田んぼばかりが広がっていたが、やがてきれいに畝状になったお茶の畑が多くなってきた・・・さすが八女はお茶所だ・・・原口ってこんなところから通ってたんだぁ・・・こんなところから毎日通うなんて、街中に住んでいるオレにはあまり想像できない・・・

バスは空いていた・・・乗ってるのはオレたち３人の他は、おばあさんがひとりだけだったが、途中の停留所で降りてしまったから、その後はオレたちだけになってしまった。朝夕は何本かあるみたい

だけど、今みたいな昼間は1時間に1本しかないのも頷ける・・・

しばらく走って行くと右手の茶畑の向こうに、こんもりとした森が見えてきた・・・まるで小さな島のようにも見える。

「ねえ有希、あそこがそうみたいよ。」

千里に言われて良く見ると、森の上に建物が立っているのが見えた・・・ただの森ではなくちょっとした山のようだ・・・遠くからだから小さく見えたが、近づくほどに大きくなってくる。

神社前のバス停で降りると、原口が迎えに来てくれていた。

「いらっしゃい。結構かかったでしょう?」

「うん、でも楽しかったよ。遠足みたいだった。」

あっ・・でも原口は毎日通ってるんだから、こんなこと言ったら失礼だったかな・・・

「だったら良かった。同じような景色ばかりだから、有希たち退屈したんじゃないかと思って。」

二人はどうか知らないが、オレはあまり退屈とかしない性格だ。

神社までは長い石の階段が続いていた・・・階段を登りきると正面に古いが立派な神社があった。　ここらへんでは、けっこう由緒正しい神社らしい・・・

オレたちは一応、鈴を鳴らして神様にお参りしてから原口の家に入った・・・せっかく神社に来たのにクリスマスだけやったのでは罰が当たりそうだ・・・

「いやあ、良く来たね、寒かったでしょう。」

神主の恰好をした原口のお父さんが、オレたちを社務所と一緒になった家に招き入れてくれた・・・優しそうな人だ・・・ちなみに原口にはお母さんはいない・・・小さいころに死んじゃったらしい・・

・

「あら、いらっしゃい。今用意してるところだからもう少し待ってね。」

この人はたぶん叔母さんだ・・・お父さんの妹さんが神社の仕事を手伝ってるって言ってた・・・

「あの・・わたしも・・お手伝いします・・・」

「大丈夫よ、あなた達はお客さんなんだから、お座敷で座ってて。」

そう言ってオレたちは二階の広いお座敷に通された。

ふと見ると、窓から見える冬枯れの大きな木に、木の枝を集めて作ったような１ｍほどの大きな丸いものが付いている・・・なんだろう・・・神社だし、なにか縁起物かな？

「ねえ、千里・・・あれ何かなぁ？」

千里は窓の方に目をやると、すぐに答えてくれた。

「あれはカチガラスの巣よ。有希知らないの？」

「・・う・・うん・・・」

「カチガラスってお腹が白くて、尻尾が長いカラスなのよ。カチカチって鳴くの。ここらへんにはいっぱいいるわよ。」

「へぇ～・・そうなんだ・・・」

オレはそんなの見たことない・・・それにしても大きな巣だ・・・そのカラスもでっかいのだろうか・・・

「どうしたの？　有希。」

料理を運んできた原口が窓から外を見ていたオレに聞くと、オレより先に岡本が答えた。

「有希はカチガラスが珍しいんだって、そこらにいないか探してるのよ。」

「なんだ、そのうち来るわよ。しょっちゅうそこらへんウロウロしてるから。有希も料理運ぶの手伝ってくれない？」

「・・あ・・うん・・・」
そんなでっかい鳥がウロウロしてるのかな・・・来るなら早く来てくれないともうあたりは暗くなり始めてる・・・

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

料理が並んでケーキのろうそくに火をつけたところで、オレはみんなをカメラで写してあげようと思ってかまえると
「私が撮ってあげるから、君も一緒に写りなさい。」
と、お父さんはそう言ってオレのかわりにみんな揃った写真を写してくれた。
「ありがとうございます。」
オレはお父さんからカメラを受け取って、いま写したやつを見てみた。
「ちゃんと撮れてるかな？」
「はい。バッチリです！」
こういう時にデジカメは便利だ。進藤さんにもらったカメラは、扱いはカンタンだけどなかなか良く撮れる。かあさんのカメラよりもキレイに写るみたいだ。かあさんのもだいぶ古いからなぁ・・・

「いくよ？　せ～の・・メリークリスマ～ス！！」
オレたちは一斉にクラッカーを鳴らした。
「それじゃケーキ切るよ！」
原口がケーキを切り分けて、お皿に乗せてくれた。

オレはシャンパンを鳴らしてみんなに注いであげた・・・もちろ

んオレたちはまだ高校生だから本物じゃなくてジュースみたいなヤツだ。
「ルネッサ～ンス！」
「あははっ・・有希ったら！」
お笑い芸人のギャグをやったら千里に笑われてしまった・・・急に恥ずかしくなって顔が熱くなる・・・
「じゃぁみんな一緒にやろうよ！」
岡本がそう言ってくれたから助かった・・・
「せーの、ルネッサ～ンス！！」

ケーキを頬張りながらつくづく思う・・・女の子って何て楽しいんだろう・・・男同士でクリスマスパーティーなんか、そうそうやらないし、やったとしてもこんなに楽しくないと思う。グッズもいろいろ用意してるし、お料理も美味しいし最高だ！

ケーキを食べていると、ポケットの中で携帯のバイブが鳴った・・・オレはみんなにわからないようにこっそり開いてみた・・・やっぱり純平だ・・・

オレは長谷川に言われて以来、純平からのメールに返信していなかった・・・オレはただの友達としてメール交換していただけなのに、本当は純平のことを好きなんじゃないかなんて言われたから、オレはどんなメールを送ったらいいのかわからなくなってしまったのだ・・・
“ユウちゃん・・・なんで最近返信してくれないの？”
メールの最後に書かれた言葉に胸がつまる思いがした・・・オレだって返信したい・・・だけど・・・オレはまだ、女の子として男の子と向き合うことが出来ない・・・オレはまだ女の子になりきれていない・・・

「有希、どうしたの？」
「ううん・・なんでもない・・・」
オレは千里に聞かれて慌てて携帯を閉じた・・・
「ちょっと、かあさんからメールが来てただけ・・・」
オレはまたケーキを食べて、出来る限りの平静を装った・・・

・・・純平に、オレがじらしてるなんて思われたらどうしよう・・・
オレ・・全然そんな気はないのに・・・それとも軽い気持ちでメールしていたオレが悪かったのだろうか・・・純平のヤツ、オレのことヒドイ女だと思うかな・・・・もしそんなふうに思われたらと考えると悲しくなる・・・・

「メリークリスマ～ス！」
オレの物思いは、その大きな声で破られた。見ると原口のお父さんがサンタの恰好で入ってきた・・・神主なのにこんな恰好していいのだろうか・・・？　でもオレの心配をよそにお父さんはノリノリだ・・・
「君たちにサンタさんからのプレゼントだよ！」
そう言ってお父さんは袋からプレゼントを出してオレたちにくれた。
「ありがとう・・・お父さん。」
「違うよ、わたしはサンタさんだよ！」
どうやらあくまで言いはるつもりらしい・・・横目でちらっと見ると、原口がうんざりしたように顔をそむけている・・・
「・・あ・・ありがとうサンタさん・・・」
オレが仕方なくそう言うと、お父さんは嬉しそうに帰っていった・・・

「なんのプレゼントかなぁ？」

オレが言うと、原口は
「あまり期待しない方がいいわよ。」
とつれない返事だ・・・

「・・・開けてみていいかなぁ・・・」
なんか形といい重さといい、本みたいだけど・・・開けてみると・・
やっぱり本だった・・・
「・・・・・?」
「それ、お父さんの本なの・・・自費出版していっぱい余ってるの
よ・・・貰ってあげて・・・」
「・・う・・うん・・・」
それはお父さんの半生を書いた本らしかった・・・なんか・・・こ
んなの貰っても困っちゃうなぁ・・・
「ごめんね、お父さんみんなにあげてるの・・・ほんと困ってるの
よ。」
「・・だ・・大丈夫よ・・・ちゃんと持って帰るから・・・」
こんな言い方ヘンだったかな・・・持って帰りたくないと思われた
ちゃったかも・・・つい本音が出ちゃった・・・

その後、サンタさんから元に戻ったお父さんと叔母さんも加わっ
てパーティーは続いた。お父さんはちょっと変わってるけど面白い
人だ・・・オレのとうさんとは全然ちがう・・・なんというか・・・
陽気な人だ・・・
叔母さんは面倒見が良くて、オレたちにお料理をどんどん進めてく
る・・・オレそんなに食べれないよ・・・

原口っていつも落ちついているのに、こんな環境で育ったなんて
ちょっと不思議な気がした。
「弘子のお父さんって面白い人ね。」

オレがいうと
「女子高生が3人も来たから浮かれてるのよ。」
そう言ってフライドチキンにかぶりついた。でもほっぺた赤くて照れてるのが良くわかる・・・なんかいつものクールな原口と違って可愛い・・・

「ねえ、有希撮って～」
岡本の声にそちらを見ると、お父さんと腕を組んでいる・・・お父さんはとんがり帽子に、岡本が冗談で買った鼻メガネをつけている・・・そのうえビールで酔ってしまったようで顔が真っ赤だ・・・
「あはは・・・」
なんか似合いすぎ・・・オレがカメラを向けるとふたりでピースサインを作った。お父さんったら裏ピースなんかしちゃって最高だ！

「有希も撮ってあげるよ！」
岡本はオレの手からカメラを奪うとオレをお父さんに押しつけた。お父さんはオレにも腕を組んできて、片手でCみたいな形を作ってオレの方に差し出した・・・
「・・・？」
オレが何のことかわからずにいると
「ほら！ユウキちゃんもこっちの手でやってごらん！」
えっ？・・・オレは意味もわからずに言われるまま同じようにすると、お父さんはオレの手に自分の手を引っ付けてきた・・・
「ハハハッ・・・いい！それ最高！はいチーズ！」
なんか岡本のヤツ・・・テンション高いな・・・オレは仕方なく笑顔を作った・・・

写した写真を見てオレは真っ赤になってしまった・・・オレとお父さんの手が重なってハート型なっている・・・お父さんったら・・・もしかして女の子がいっぱいいるお店にでも通ってるんじゃない

だろうか・・・だっていくら何でも慣れてる感じだ・・・

しばらくするとお父さんと岡本は寝てしまった・・・どうやら岡本もビールを飲んでいたらしい・・・どうりでテンション高かったハズだ・・・

パーティーも自然にお開きになっていた。オレももう食べれないし・・・お腹いっぱいだ・・・

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

「有希、千里と一緒にお風呂に入らない？」

「・・・・！」

オレは誰かと一緒にお風呂に入るなんて絶対ムリだ・・・

「あ・・あの・・・わたし今お腹一杯で・・・後で入ってもいいかな？」

「そう？　もちろんいいけど・・・」

すると眠っていると思っていた岡本がムックリ起き上がった。

「あたしも入るゾ～！」

どうやらまだ少し酔ってるみたいだ・・・

「じゃあ・・わたしは後片付けとかあるから、千里、直美と一緒に入ってくれる？」

「うん、いいわよ。じゃ、行こっか。」

千里はまだ少しフラフラした岡本を連れてお風呂に行った。大丈夫なのかな・・・

「じゃぁ、有希は後でわたしと入ろうね。」

「え？　あ・・う・うん・・・」
どうしよう・・・大変なことになってしまった・・・こんなことお泊まりだって聞いた時に、ちょっと考えれば予想できたハズなのに・・・オレってなんてバカなんだろう・・・

「はぁ・・・いいお湯だったよ。」
千里と直美が上がってくると、オレの心臓はドキドキと鳴りだした・・・どうすればいいんだろう・・・
「有希も入ってきたら？」
「う・・うん・・・」
どうしよう・・・どうしよう・・・なんとかごまかさないと・・・

原口が片付けを終えて戻ってきた。
「有希終ったわよ、入ろっか？」
「あ・・あの・・・ごめん・・・わたし・・・後で・・ひとりで入っちゃダメ・・・？」
「え？　どうして？」
「あのぉ・・・わたし・・・他の人と入るの恥ずかしいの・・・」
オレはとっさにウソをついた・・・でも・・友達なのに・・こんなこと言ったら変に思われるかな・・・
「なんだ、そうだったの？　それなら早く言えばいいのに。」
原口はべつに変には思わなかったようで、それじゃ先に入ると言ってお風呂に行った・・・なんとか助かったみたいだ・・・

「有希ったら、女どうしなのに裸になるのが恥ずかしいの？」
「うっ・・うん・・・ごめん・・・」
「謝らなくていいけど、早く克服しないと修学旅行のとき困るわよ。

」

「・・・・！」

修学旅行?！　そんなこと考えたこともなかった・・・言われてみれば確かにそうだ・・・でも・・オレが女の子と一緒にお風呂になんて入れるハズがない！　プールとはわけが違うのだ・・・サポーターやテーピングでもごまかすことは出来ないだろう・・・

でも・・・2年生の時に行く修学旅行のことはまた後で考えよう・・・とりあえず今日はなんとかバレずに済んだのだから・・・

原口が出てきてオレの番だ・・・

「有希が最後だからゆっくり入ってきていいわよ。お父さんあのまま寝ちゃったから。」

「う・・うん・・・」

オレは寝巻き用に持ってきたスウェットの上下を持って急いでお風呂に行き、素早く脱衣所で服を脱いでお風呂に入った。もちろんカギをかけるのも忘れない・・・

ここのお風呂は神社らしく木で出来ている・・・うちよりもずっと大きくて足も伸ばすことが出来る!これなら二人で入っても全然窮屈じゃなさそうだ・・・

のんびりお風呂に浸かりながら思った・・・お風呂に一緒に入るように言われた時はさすがに緊張したが、でも今日はすごく楽しかった・・・あんまり楽しすぎて、なんか家でお母さんとふたりでクリスマスを祝っている長谷川に申し訳ない気がする・・・今日心おきなく楽しめたのも、長谷川が勉強を手伝ってくれたおかげだというのに・・・

オレにはもうひとつ気がかりなことがある・・・それは純平のこ

とだ・・・オレは正直、純平にメールを送りたい・・・純平のメールが来るたびにオレは胸が締め付けられる思いがするのだ・・・でもこれは本当に友達としての気持ちなのだろうか・・・それとも・・・オレは自分でも気付かないうちに、長谷川が言うように女の子の気持ちでメールしていたのだろうか・・・？

「あぁ・・どうしたらいいの・・・」

でもいくら考えても、良い考えは浮ばなかった・・・いつの間にかずいぶん湯舟に浸かっていた・・・なんかのぼせてしまいそうだ・・・ただでさえ純平のことを考えるとドキドキするのに・・・

オレはお風呂を上がり、脱衣所に出ると洗面台で濡れたタオルを絞って体を拭いた・・・洗面台の大きな鏡に写ったオレの姿は、もうすっかり女の子のようだ・・・胸はまだまだ小さくてBカップには違いないが、幼さはなくなり少し丸みを増している・・・小じんまりした乳首も、最初のころの腫れた感じはなくなって、触っても痛くはない・・・感覚がないワケじゃないけど・・・痛いという感じではない・・・

ただ・・・股間だけはオレが男だったころの名残りが付いている・・・お風呂に入った後だから、いつもより伸びて垂れ下がっている・・・なんか女の子の身体とのギャップがイヤな感じだ・・・

オレは情けない気持ちになってしまい、さっさとパンツをはこうとパンティーを手に取った・・・

“ガラッ・・・”

その時いきなり脱衣所への引き戸が開いた音に、オレはとっさにパンティーを持った手で体を隠した・・・

「あっ、ごめん有希・・・？」
振り向いたオレは、そこに原口がいるのを見て驚いた・・・だが驚いたのはオレだけではなかった・・・

原口は慌てて戸を閉めた・・・
オレは一瞬、何が起こったのかわからなかった・・・だが、すぐに事の重大さが解ってきた・・・寒くもないのに身体が震えだした・・・同時に足もガクガクする・・・オレはそのまま力がなくなり脱衣所の床に座り込んだ・・・

オレは裸で原口と向かい合ってしまった・・・しかもとっさに胸を隠してしまった・・・オレは・・・隠すところを間違えたのだ・・・

第６９話　神様　星空の下で・・・

もうダメだ・・・まさかこんなことで・・・

オレだっていつかバレんじゃないかと思って注意していたけど・・・それなのに・・・こんな単なる不注意で・・・・・

お風呂に入る時は、あんなに急いで入ったのに・・・なんでオレのんびり自分の身体なんか見てたんだろう・・・

きっと今ごろ、お座敷に戻った原口はみんなに今見たことを報告しているに違いない・・・オレが戻った時には、もうこれまでのオレたちの関係は無くなっていて、オレを見るみんなの目は冷たいものになっているだろう・・・いや・・・そんな生易しいものではないかも知れない・・・オレはただ騙していただけじゃなく、女の恰好をしてみんなの中にもぐり込んでいた変態だと思われても仕方がない・・・どんなことを言われてもオレには言い逃れのしようもない・・・

オレは甘く考えていたのかも知れない・・・たしかに学校ではオレを男と知って受け入れてくれている・・・もしバレた時には性同一性障害のコを受け入れている優しい学校ということで行くことになっている・・・でもそれはあくまでオレと学校の関係だということを今ごろ気がつくなんて・・・

いくら学校は認めてくれても、みんながオレを認めてくれるとは限らない・・・それに・・もし・・・もしみんなが認めてくれたとしても、それはオレが大切に思っている今のオレたちの関係とは違

ったものになってしまうだろう・・・もう女の子同士の関係などありえない・・・

悲しい・・・悲しすぎて・・泣きたいのに涙も出ない・・・身体がガタガタ震えて止まらない・・・

「・・有希・・・？」

床に座り込んで放心状態でいたオレは自分の耳を疑った・・・

「・・有希・・・聞いてる？」

「・・・・！」

・・・原口？・・・原口がまだ引き戸の向こうにいたなんて・・・

てっきりもう戻ってしまったと思っていたのに・・・

「・・有希・・心配しないで・・誰にも言わないから・・・・」

「！」

少しだけ戸が開いて原口の手が出てきた・・・タオル・・・？

「・・乾いたタオル・・・ここに置いとくから・・・」

・・・そうか・・・わざわざタオルを持ってきてくれたんだ・・・

それで・・・

オレはどうすればいいんだろう・・・原口は誰にも言わないと言ったけど・・・本当だろうか・・・？

・・・なんで・・？・・オレ・・・みんなをダマしてたのに・・・

でも・・ずっとここにいるワケにもいかない・・・原口が持ってきてくれたタオルを手に取る・・・きっと自分が出る時に濡れたタオルで体を拭かなきゃいけなかったから、オレのために持ってきてくれたのだろう・・・拭いてみたが、もう体はほとんど乾いていた・・・

パンティーをはいて股間に男のモノを押し込む・・・女の子になってからずっとやっている事だけど、今日は無性に情けなく思える・・・それは自分が男だということを隠す動作だからだろうか・・・

スウェットを着るとまた情けなくなった・・・どうしてこんなピンクのヤツを持ってきてしまったのだろう・・・グレーのとか持ってないけど、買ってくれば良かった・・・せめてもの救いは、いつものベビードールじゃないことだ・・・やっぱりみんなの前では気恥ずかしいからやめたんだけど、男がベビードールを着るなんて、それどころの騒ぎじゃない・・・たぶん死にたくなっただろう・・・

―――――――――――――――
―――――――――――――――
――――――――――

オレがコワゴワお座敷に入ると、もう布団が敷いてあった・・・
「有希遅かったね、温ったまった？」
「う・・うん・・・」
いつもと変わらない千里の反応にオレは一瞬戸惑った・・・本当に原口は何も言ってないらしい・・・

オレの布団はどうやら千里の横だった・・・その向こうに岡本、原口の順だ・・・原口と離れてて少しホッとした・・・でもそれも少しだけだ・・・だって、男だから千里に何かするんじゃないかと原口に思われてるかもしれない・・・

岡本はもう寝息をたてて眠っていた・・・原口は・・・とても目

を合わすことなんて出来ない・・・
「トイレは一階に降りてつきあたりだから。寒いからここにガウン置いとくね。」
そう言って枕元にガウンを置いた音がした・・・原口は表面上はどこも変わったところは感じられない・・・
「それじゃ、電気消すよ。おやすみ。」
「おやすみ・・・」
千里は言ったが、オレは言えなかった・・・のどがカラカラで声が出なかったのだ・・・

しばらくすると横に寝ている千里の寝息も聞こえてきた・・・原口ももう眠っただろうか・・・ここからでは遠くてわからない・・・

布団の中に入っているのにまだ身体の震えが止まらない・・・寒いというより身体の感覚が無くなってしまったような気がする・・・布団の中で両腕で身体を抱いてみてもちっとも温かくはならなかった・・・

全然眠れむない・・・もう何時間経っただろうか・・・いや・・・まだ数分しか経ってないような気もする・・・うぅっ・・・なんだかおしっこしたくなってきた・・・そういえば寝る前トイレに行ってなかった・・・

なんとか我慢していたが、それもそんなに続かなかった・・・
（・・どうしよう・・・）
トイレに行きたいけど・・・原口はもう寝ただろうか・・・そっと起き上がってみた・・・原口のほうを見てみたが、むこうを向いているからよくわからない・・・でもたぶん寝てるんじゃないだろう

か・・・もうだいぶ経ってるハズだし・・・オレはそっと布団を抜け出した・・・

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

「ハァ・・・」

おしっこをして紙で拭く・・・オレがおしっこのあと拭くようになってもう1年近く経つだろうか・・・女の子になって可愛いパンツを汚したくなかったからだが・・・洋式だと目の前にあるし自然にトイレットペーパーに手を伸ばしてしまう・・・でもここのトイレは和式だった・・・オレはめったに使わない和式トイレに座ってするのは、いまだに慣れない・・・おしっこのためだけに座るのが、なんか変な感じがするのだ・・・

トイレを出てもお座敷きに戻る気になれなかった・・・ふと縁側に出てみると今日は思ったほど寒くはない・・・オレは原口が用意してくれていたガウンは着てこなかった・・・だって男が自分のガウンを着るなんてイヤじゃないかと思う・・・

縁側に座って見上げると一面に星が輝いていた・・・オレはこんなにいっぱいの星を見た事がない・・・なんでこんなに星がキレイに見えるのだろう・・・星が降ってくるよう・・なんて表現があるけど、こういうのを言うのだろうと思った・・・星空をバックにカチガラスの巣が付いた大きな木がシルエットになって浮び上がっている・・・

「・・・！」
急に誰かの足音がしてオレは身を縮めた・・・こんな時間に誰だろう・・・
「おや、ユウキちゃんかい？」
原口のお父さん・・・？
「あ・・はぃ・・・」
オレは何とか返事をした・・・こんなところにいてヘンに思われたかな・・・もう酔いは醒めたんだろうか・・・
「どうしたのかな？　寒くない？」
「あ・・だいじょうぶです・・・なんか・・星がキレイだったから・・・」
「なるほど、このあたりは街からも遠いし、街灯もほとんど無いからね。」
そうだったのか・・・それでこんなに星が・・・

「私も座ってもいいかな？」
「あ・・はぃ・・・どうぞ・・・」
お父さんはオレのとなりに座った・・・でもなんか気まずいな・・・
「ここからもっと山の方に行くと星野村という所があってね、そこならもっと星が良く見えるという話ですよ。星の文化館という所には大きな天体望遠鏡もあるらしい。」
「へえ～　そうなんですか・・・」
なんか行ってみたいな・・・オレは天体望遠鏡なんて見たことない・・・

なんか話さないと・・・間が持たない・・・
「あ・・あの・・ひとつ聞いてもいいですか・・・？」
「いいですよ。何かな？」

「あの・・・お父さんは神主さんなのに・・・クリスマスとか・・やってもいいんですか？」
「ああ、そのこと・・・日本の神道にはね、日本古来の神様もいれば、中国やインドの神様もいる。それに日本には八百万（やおよろず）の神様がいると言われていてね、全てのものに神が宿っているという考えなんです。だからキリスト教の神様を受け入れても何ら問題はないんですよ。」
・・・ほんとだろうか・・・なんか都合が良すぎる気もするけど・・・

「ところでユウキちゃんは神様を信じていますか？」
「え？！」
オレは急にそんなことを聞かれたので面くらった・・・
「えっと・・・良くわからないです・・・」
「そうか・・・ユウキちゃんは神様ってどんな存在だと思ってる？」
「・・・えっとぉ・・・なんか・・願いごとを叶えてくれたり・・・悪いことしたら罰を与えたり・・・」
オレは上手く答えることが出来なかった・・・だって神様のことなんてそんなに考えたことない・・・

「ユウキちゃん、実は神様は二人いるんですよ。」
「え？！　ふたり？」
「まあ、二人という言い方は解りにくいかもしれませんが、一般的に神様と言った場合二つの神様をごっちゃにしている場合が多いんです。」
「・・・・・」
お父さんいったい何が言いたいんだろう・・・

「ひとつめの神様はね、この世界というか宇宙全体を作った神様。自然の神様と言っても良いかもしれないね。ユウキちゃんは知って

ますか？この地球がある銀河系には２０００億の星があるんだそうですよ。」
「へぇ～」
なんか２０００億なんて言われても想像しにくい・・・
「でも宇宙全体には、そういう２０００億の星が集まった銀河が、また何千万個もあるといわれている。それも人間が観測することが出来る範囲だけだから、実際の宇宙はどこまで広がっているかまだわからないらしい。」
「・・・・・」
「そういう宇宙の全てを作ったのが神様なんです。すごいでしょう？」
「・・・・！」
なんか、話が大きすぎて、あんな答えしか出来なかったことが恥ずかしくなった・・・

「もうひとつの神様はね。我々人間の中にいるんです。」
「え？　わたしたちの中に？」
「そう。我々一人ひとりの中に神様がいるんですよ。心にいると言ってもいいし、科学的に言えば脳の中、あるいは遺伝子の中にいると言ってもいい。」
「遺伝子の中？」
「そう。」
・・・でも・・・それってヘンじゃないかなぁ・・・だって・・・
「あの・・・でも・・それじゃぁ・・神様がいっぱいいるってことですか？　だってわたしたち一人ひとりの中にいたら・・・」
「そうとも言えないよ。ほとんどの人はあまり考えたこと無いかもしれないけど、私たち人間は一種類の動物なんです。世界中の人々がどんな肌の色をしていたとしても、みんな一種類の動物なんですよ。」
「・・・・・！」

「それは、例えばネコがライオンやトラなどネコ科の動物の中の一種なのと同じように、人間はサルの仲間の一種類にすぎない。研究者によっては人間はゴリラやチンパンジーとほとんど同じだと言っています。」

「・・・ほんとですか？」

「まあ、違った意見の研究者もいるだろうけどね。大事なのは人間も動物の一種だということなんですよ。」

「・・・・・」

もちろんオレだって人間が動物だということは知ってるけど・・・あらためて言われるとなんかちょっと怖くなってきた・・・だって人間と動物ってけっこう違うみたいな気がする・・・オレもゴリラやチンパンジーと一緒なのだろうか・・・

「ユウキちゃん、動物にはみんな自分を守る本能があってね、どんな下等なアメーバのような生き物だって自分が食べられそうになれば逃げるように本能で決められているんです。自分でも理由は解らなくてもそう決められているから逃げるんですよ。」

「・・・・・」

「人間にもその本能は脈々と受け継がれていてね、人が死にたくないと思うのもその本能が思わせているんです。」

「・・・・・」

「ユウキちゃんも世界中にいろんな宗教があるのは知ってるでしょう？」

「はぃ・・・あっ・・でも・・良くは知りませんけど・・・」

「その宗教にはいろんな神様がいるでしょう？　仏教やキリスト教やイスラム教やヒンドゥ教やユダヤ教、世界にはいろんな宗教があっていろんな神様がいる。でもね、そういう宗教が出来る前から人間は宗教を持っていたんです。おそらく人間という生き物が生まれた時から宗教も生まれたと思う。その証拠に世界のどんな未開な土地に住んでる人でも宗教は持っている。そしてその考えは私たちが

聞いても納得できるだけのものがある。決して幼稚ではないんです。
ユウキちゃんは、なぜこんなに世界中に宗教があると思う？」
「・・・・・」
オレは考えてみたけど良くわからなかった・・・

「・・よくわかりません・・・」
「それはね、私たち人間の中に、もともと宗教の元になるものがあるからなんです。」
「・・・・・」
「その宗教の元になっているのが、人間が、いや生物が死にたくないと思う本能なんですよ。」
「え？！」
「それは本来、生物すべてに備わっていた生きるための本能なんですが、人間は他の生物より頭が良くなってしまったために“明日”のことを想像出来るようになってしまったんです。」
「あしたのこと・・・ですか？」
「ユウキちゃん、すべての生き物の中で“明日”のことを想像出来るのは人間だけなんですよ。他の動物は今のことだけを考えて生きているにすぎない。」
・・そうだろうか・・・
「・・あの・・でも・・・動物も冬のためにエサを貯えたりするんじゃないですか？」
「なかなか良いところに気がついたね。たしかにその通りだけど、それはダーウィン流に言うと、たまたまそのような本能を身に付けた生き物が、他よりも生き残ったにすぎないということらしいですよ。」
「・・そ・・・そうなんですか・・・？」
「もちろん人間の“明日”を想像する能力も、その延長上にあるのかも知れないけど、少なくとも動物は明日自分が死ぬかも知れない、なんてことを考えて悩むことは無いと思いますよ。」

・・・なるほど・・・言われてみればそうかも知れない・・・動物が何を考えてるかなんてわからないけど、たしかに、あまり動物は明日のことを心配しているようには見えない・・・冬の前にリスがドングリを貯えるのも、自然に本能のままにやっているのかもしれない・・・

「つまり、人間が宗教というものを作ったのは、自分がいつか死んでしまう存在だということを知ってしまったからなんです。怖くて何かに救いを求めた、そして出来たのが宗教なんですよ。」

「・・・・・・」

「でも、死にたくないという気持ちから生まれているから、自分たちを殺そうとする存在があれば、それは敵であり、それがもし人間であれば、相手が信じている宗教は邪教ということになってしまう。宗教というものは人間が考えたものだから、どうしても自分たちの民族にとって都合がいいものになってしまうんです。だから違う宗教どうしで戦争が起きるし、もし自然が人間にとって脅威であれば、自然というもうひとつの神様が作ったものを破壊する方向に向ってしまう。それも仕方がないことなんです。」

「・・・・・・」

・・オレはそんなこと考えたこともなかった・・・なんか・・胸が苦しくなってきた・・・

「・・・なんか・・・悲しい・・・」

「そうだね。人間は悲しい生き物なのかも知れないね。仏教ではお釈迦様は、人間には“生老病死”の四つの苦しみがあると言った。そしてお釈迦様はその苦しみから人間を救う道をみつけたと言われている。それが“諸行無常”という考えなんです。全てのものは移ろい行くものだということを“納得する”ことこそが人間が救われる道だという話なんです。もっともこの“納得する”というのがも

のすごく難しいんだけどね。」
そう言ってお父さんは笑った・・・オレは良くわからないけど、たしかに“納得する”のは難しそうだと思った・・・だっていくら“納得”したって死ぬのは怖い・・・

「あ、済まなかったね、退屈な話だったでしょう？」
オレは首を横に振った。
「いいえ、よくはわからなかったけど・・・だけど・・・」
「いいんですよ。言葉にすると余計わからなくなる。なんとなくでも感じることが出来ればいいんです。どうせ答えは簡単には出ないんだから。私だって“納得”なんて難しくていまだに出来ませんよ。それが出来た時が“悟った”ということなんだからね。」
「！」

「そろそろ戻った方がいい。風邪を引くといけないからね。」
「はい・・・でも・・・もう少しだけここにいます・・・」
「そうかい？　それじゃ出来るだけ早く戻るんだよ。」
「はい。」

お父さんの話を聞いた後では、星空もさっきよりずっと深みを増した気がした・・・宇宙を作った神様と人間の中の神様・・・どっちが本物の神様なんだろう・・・でも人間を作ったのも宇宙を作った神様だとしたら、その人間の中の神様も、宇宙を作った神様が作ったものだと言えないだろうか・・・そんなことを考えていたら、なんだかよけいにわからなくなってきた・・・

――――――――――――――
――――――――――――――

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

「有希、お父さんと何話してたの？」
「あっ・・・弘子・・・・」
いつの間にか原口がいたことに全然気づかなかった・・・
「・・か・・神様の話・・・」
「お父さんったらまたそんな話して、お酒飲むとすぐそんな話するのよ。退屈だったでしょう？」
「・・う・・ううん・・・なんか・・為になった気がする・・・よくわからないけど・・・」
「そう？　ならいいけど・・・」
そう言って原口はお父さんが座っていたところに座った！

「・・ごめん・・・」
「なに？」
「・・見たでしょう・・わたしの・・・？」
「うん・・まあ・・・」
「・・わたしね・・・弘子たち騙してたのよ・・・」
「・・・・」
「・・男なのに・・女の子のふりしてたの・・・気持ち悪いって思うでしょう・・・？」
「そんなことないわよ。」
「ウソ・・・」
「それは・・ビックリはしたけど、気持ち悪いなんて思わないわ。」
・・本当だろうか・・・普通、気持ち悪いと軽蔑するんじゃないだろうか・・・

「有希って、性同一性障害っていうのなの？」
「・・うん・・・」

オレにはそれが単なる設定なのか、本当に性同一性障害なのか確信はないけど・・・
「ちょっと聞いたことあるけど、そういう子って心は女の子なんでしょう？」
「・・う・・うん・・まあ・・・」
「だったら、有希は女の子なんじゃない。」
「・・・・・」
「わたしは今でも有希のこと女の子だと思ってるわよ。」
「・・ほ・・ほんと・・・？」
「うん、それにわたし有希のこと大好きよ。有希は真面目だし、優しいし、思いやりがあるし。わたしが有希を好きなのは、男だとか女だとかそういうことじゃなく、有希のそういうところが好きなの。それに時々は頼もしい時もあるしね。」
「・・・・・」
そりゃぁ、男だからちょっとは頼もしいかも知れないけど・・・
「わたしは誰にも言わないからね、安心して？　有希もその方が良いんでしょう？」
「・う・・うん・・・」
そりゃぁ・・オレは女の子でいられる方がいい・・・だってオレはもう男の子には戻れない・・・

「うぅっ・・・」
身体が震えた・・・少し緊張が解けたのか急に寒くなってきた・・・
「有希寒いんじゃないの？　なんでガウン着てこなかったのよ。」
「・・だって・・・うわっ！」
オレは思わず体をのけぞらせてしまった・・・だって原口が自分のガウンを開いてオレを包み込もうとしたから・・・
「逃げなくていいじゃない。ほら入って・・・」
原口は片手を脱いだガウンの中にオレを入れてしまった・・・

「こんなに冷たくなってるじゃない！カゼ引くわよ。」
オレの手を握る原口の手が温かい・・・オレの凍えた手をさすってくれた・・・

「でも、やっとわかった。有希がそんなに自信がないワケ・・・」
「・・うっ・・・」
「こんなに綺麗で可愛いのに、何で自信がないんだろうってずっと不思議だったのよ。」
「・・だって・・・」
オレは綺麗でもないし可愛くもない・・・自信なんか持てるハズがない・・・
「でもそういうところも可愛いけどね。有希は自分で思ってるよりずっと女の子らしいのよ。」
「・・・・・」
オレはそんなに女の子らしくないと思う・・・まだ心は男のままだし・・・胸も小さい・・・それに・・・アソコには女の子には付いてちゃいけないものが付いている・・・タマは無いけど・・・

「ねえ、有希。このこと先生は知ってるの？」
「うん・・知ってる・・・」
「みんな？」
「うん・・・」
「他には？　生徒で知ってる子いる？」
「・・・1組の・・長谷川さんだけ・・・」
「あ、そっか。長谷川さんって有希と同じ中学だったものね。」
「うん・・・」
「それで長谷川さんと仲良しなんだ。」
「・・うん・・・」
「昔から仲良しなの？」

「・・ううん・・高校生になってから・・・中学のころはあまり知らない・・・」
「そうなの？・・それじゃ、有希と仲良しだから同じ高校に来たんじゃないの？」
「・・うん・・・たぶん・・・」
オレは長谷川がなんで白鴻に来たかなんて知らない・・・たぶん遠くの学校に行くのはイヤだったんだと思う・・・
「でも、いいいなぁ、長谷川さんは男の子のころの有希を知ってるんだね。」
「え？」
「わたしも会ってみたかったかも。」
「そ・・そんな・・・会わなくていいわよ・・ぜんぜん普通だから・・・」
オレはどちらかといえば、何のとりえもない男の子だったと思う・・・それが女の子になったとたん、オレの人生は全然変わってしまった・・・べつにこういうのを望んだワケじゃないのに・・・

「でも大変だったね。　クラスでは誰も知らない中で頑張ってたんでしょう？」
「・・う・・うん・・まあ・・・」
「これからは困ったことがあったら、わたしに言ってよね。」
「・・うん・・ありがとう・・・」
原口って優しい・・・そんなこと言われたら目が潤んできちゃう・・・

「でも・・これまでも・・弘子はわたしのこと・・いろいろ助けてくれたよ・・・すっごく感謝してる・・・」
「そう？　だったら嬉しいな。」
そう言って原口はオレの身体をギュッと抱きしめてくれた・・・

「それじゃ、戻ろうか？」
「・・ね・・ねえ・・弘子・・・本当に・・・本当にまだわたしと・・友達でいてくれるの・・・？」
「あたりまえじゃない。有希とはずっと友達よ。女どうしのね。」
「・・そ・・そんな・・・」
「有希、わたしたちはこれまでどおり友達なんだから、もうこんなこと聞いちゃダメよ。」
「・・う・・うん・・ごめん・・・」
オレはあふれ出す涙を止められなかった・・・原口の気持ちが嬉しかった・・・それに・・・いつもクールな原口がオレのことをそんなふうに思っていたなんて・・・他人の気持ちって聞いてみなきゃわからないものだとつくづく思う・・・

お座敷に戻ると原口はとんでもないことを言った。
「有希、一緒に寝ようよ。」
「・・・！　そ・・そんなのダメよ・・・だってわたし！」
原口は人さし指でオレの唇をふさいだ・・・
「有希は女の子なのよ。女の子どうしなんだから同じ布団で寝ても平気でしょう？　こんなに冷たくなってるのに、ひとりで寝たら風邪ひくわよ。」
「・・うっ・・うん・・・」
そんなふうに言われたら、オレも断れなくなってしまった・・・女の子どうしだから・・・いいのかな・・・オレはちっとも平気じゃないけど・・・

オレが原口の布団に入ると、布団のなかはまだ温かかった・・・
「有希、あっち向いて。」
「！」

そりゃそうだ・・・いくら一緒の布団に寝るのはいいとしても、やっぱりここは背中合わせに寝るべきだろう・・・しかしオレの思いと原口の思いは少し違ったようだ。

「ち・・ちょっと・・・」

「いいから・・・」

原口はオレの肩に手を置いて、オレの背中にぴったりと密着してきた・・・原口の大きな胸が背中に当たってる・・・

「あったかいでしょう?」

「・・・う・・うん・・・」

・・・でも・・こんなことされたら・・・オレ眠れないよ・・・・

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー

ー　ー

ー

眠れないと思っていたのに、どうやらオレはすぐに眠ってしまったようだ・・・起きた時にはもう朝になっていた。　オレは岡本の大きな声で起こされた・・・

「弘子、なんで有希と一緒に寝てるの?!　わたしだって有希と寝たかったのに!」

「ふふっ・・役得よ。ね、有希。」

「・・・・・」

オレはそんなこと言われても、何て言ったらいいのかわからない・・・

「役得って、あんた何の役よ!ねえ千里。」

そんなこと言われたって千里も何と言っていいかわからないだろう・・・

「いいじゃない、こんどの時に直美と寝れば。その次はわたしね。」

「！」
それはないだろう・・・オレと寝たって何にも良いことなんてない・・・

「よ・・夜中寒かったから・・・一緒に寝ただけよ・・・」
オレは慌てて言い訳した・・・だってお泊まりのたびに誰かと一緒に寝なきゃいけなくなったら、たまったものじゃない！
「じゃぁ、こんどはわたしが温めてあげる！　有希のお母さん役でもいいわよ！」
そう言って岡本がオレに抱きついてきた！
「ちょっとぉ・・・」
岡本はどさくさに紛れてオレのほっぺたにキスしてきた・・・
「やめてぇ・・・お母さんはいるからいいよ・・・」
オレってどんだけみんなに好かれてんだよ・・・そりゃぁ嫌われるよりはずっといいけど・・・出来ることなら男のころに好かれたかった・・・男のころは女の子になんて全然モテなかったのに・・・

でもオレがもし男だとバレても、みんな弘子みたいにオレのこと受け入れてくれるかなぁ・・・それだったらいいけど・・・でもそれはムシの良い考えだと思う・・・誰もが弘子みたいに心が広いとは思えない・・・オレはこれからもバレないように、これまで以上に気をつけなきゃいけないと思った・・・弘子は特別なんだ・・・

オレは弘子とお父さんは似てないと思ったけど、あんがい似てるのかも知れない。神様の話をするお父さんと弘子は少し似てる気がする・・・いつもあんな話を聞いてるから、弘子はどこか達観してる感じがあるのかも知れないと思った・・・

帰りも階段の下のバス停まで原口が送ってきてくれた。

「あ、見て有希、あれがカチガラスよ。」

原口が指さした方を見てみると、一羽の鳥が刈り取られた田んぼの畦にとまった。

「あれが?!」

オレはカラスっていうからどんなゴツイ鳥かと思ったけど、そんなに大きな鳥じゃなかった・・・ハトより少し大きいだろうか・・・全体的に黒いけど、お腹が白くて、羽は青く光ってて、部分的に白い模様がある・・・それに尻尾がすごく長い! エレガントな感じさえする綺麗な鳥だった・・・こんな鳥があんな大きな巣を造るなんてスゴイ!

「あっ!」

カチガラスが飛んで行く・・・飛ぶと羽のところが真っ白だ!

「良かったね、見れて。」

「うん。あんなキレイな鳥と思わなかった・・・」

もうすぐバスが来る時間だ・・・

「ねえ弘子・・・あの字・・なんて読むの?」

オレはさっきから気になっていたことを思い切って聞いてみた。鳥居のところに書いてある“鵲神社”の鵲という字が読めなかったのだ。

「ああ、あれ? あれは鵲(カササギ)って読むのよ。」

「かささぎ?」

「カササギってカチガラスのことなのよ。」

「え?! ホント?」

「有希知らない?“かささぎの渡せる橋におく霜の・・・”っていう歌。」

「・・百人一首の・・・?」

「そう、七夕の時に織姫と牽牛が天の川を渡るために、二羽のカササギが羽を広げて橋を作るんだって。その伝説からついた名前らしいわよ。」

「へぇ・・・そんな話があるって知らなかった・・・」

なんかロマンチックな話・・・ただ織姫と牽牛が会うだけでもロマンチックなのに・・・カチガラスも粋なことするもんだなぁ・・・

そんなことを考えていたら遠くのカーブをバスがゆっくり曲がって来るのが見えた。

「それじゃ、気をつけて帰ってね。」

「うん、じゃあね！」

オレたちがバスに乗ると、また乗客はオレたちだけだった・・・椅子に座るとなんだかホッとした・・・なんか今回はいろんなことがあってまだ頭が少し混乱してるみたいだ・・・

それに・・・オレたちは帰りぎわ、原口のお父さんにアルバイトを頼まれてしまった・・・それはお正月の巫女さんのアルバイトだ・・・岡本は原口とは中学からの友達だから去年もやったらしい・・・今年はアルバイトが集まらなかったとかで、急遽オレたちが頼まれてしまったのだ・・・まあ、とくに予定はなかったし、千里も乗り気だったから断ることも出来ずに、オレまでやるハメになってしまった・・・

でも・・・男が巫女なんかやっていいのだろうか・・・神様に怒られなきゃいいけど・・・

第７０話　正月　縁結びの神社

「かあさん、サトイモはこれくらいの大きさでいいの？」
「そうね・・それでもいいけど、もう半分にした方が良いわね。」
「うん、わかった。」
オレは輪切りを半分に切ったサトイモを、もう半分に切った・・・

今日は大晦日、オレとかあさんはお正月のためにおせち料理を作っている・・・このサトイモはがめ煮のためのものだ。がめ煮というのは正式には筑前煮というらしいが、福岡では普通がめ煮という・・・理由は知らない・・・

がめ煮の材料は他にニンジン、大根、コンニャク、ゴボウ、カシワなど・・・カシワとはトリ肉のことだ・・・それをお醤油と砂糖、料理酒と少しのカツオだしなどを入れて煮る・・・

お雑煮のための汁も作らなきゃ・・・あとカツオ菜も茹でなきゃいけない・・・カツオ菜とは福岡のお雑煮には絶対必要な菜っ葉だ・・・独特の味がする菜っ葉なのだが、これがなきゃ福岡のお雑煮にならない・・・

ブリをあぶって入れる家もあるけど、うちではお雑煮にもカシワを使っている。ブリは高いし、上手くあぶらないと生臭くなっちゃうから難しい・・・

他にもカズノコとか昆布とか黒豆とかタマゴ焼きとか色々作らなきゃいけないから大変だ。今年は麻衣も少し手伝ってくれてるけど、正直まだ邪魔になることのほうが多い・・・でも手伝いたいという気持ちを削いじゃ可哀想だ・・・だって誰でも最初はヘタクソなのが当り前だ・・・

実は今回おせち料理を作る前に、オレはかあさんから小さなノートを渡された・・・そしてかあさんはオレに、そのノートにおせちの材料や、分量などを書いておくようにと言った・・・

それを言われた時、オレはよほどポカンとしていたのだろうか、かあさんは古い自分のノートを見せてくれた。もう表紙もボロボロのそのノートには、色んな料理のレシピが書いてあった・・・かあさんが言うには、しょっちゅう作る料理はそうでもないが、おせち料理などは年に1回しか作らないのもあるから、書いておかないと忘れてしまうのだという・・・オレもそれはたしかにそうかも知れないと思った。

それにかあさんが言うには、今からちゃんとノートにとっておけば、お嫁に行く時に慌てることがないということだ・・・かあさんはオレがお嫁に行くと思っているのだろうか・・・でも、オレは反論することが出来なかった・・・だってオレは女の子になるんだし・・・ぜったいお嫁に行かないというのもヘンな気がする・・・

でも、オレはたぶんお嫁には行かないと思う・・・だって仮にオレの心が完全に女の子になったとして、お嫁に行きたいと思ったとしても、オレなんかをお嫁にもらいたい男なんていないと思う・・・だって、オレは赤ちゃんなんか産めないし・・・それにオレはお嫁に行きたいとは思わないんじゃないだろうか・・・

オレは、かあさんのノートをそのまま写せばいいんじゃないかと思ったが、自分でやりながら書くのがいいのだと言われてしまった・・・その方が後で見た時にわかりやすいらしい・・・そういえば長

谷川も勉強の時にそんなことを言っていた・・・

ノートは片側だけに書いておけば、もう片側にお嫁に行った家でのやり方や、旦那さんの好みに合わせた味付けなんかを書けるからいいのだとか・・・かあさんもそうしてきたのだろうか・・・でもとうさんは養子だから、かあさんがお嫁に行ったワケじゃないかもしれないけど・・・でもやっぱりとうさんの好きな味に合わせたのかも知れない・・・女の子はやっぱり男の人に合わせた方がいいのかな・・・

かあさんのノートは紙の表紙だからボロボロになってしまったから、オレには表紙がプラスチックのやつを買ってくれた・・・なんだかこう至れり尽せりにやられると、オレも言われたとおりにやらないワケにいかない・・・オレだってかあさんの期待には、出来るだけそいたいとは思ってる・・・オレは本当の女の子じゃないからムリなことはムリだけど、だからこそ出来ることはやりたいと思う・・・

「有希、もうだいたい終ったから、少し寝ておいた方がいいんじゃない？　今夜は寝られないんでしょう？」

「・・・う・・・うん・・・・」

そうだった・・・神社の巫女のアルバイトは初もうでの人が相手だから、聞くところによると夜中から忙しいらしい・・・オレはけっこう田舎の神社だから初もうでの人も少ないんじゃないかと思っていたが、織姫と彦星の伝説から縁結びの神様としてカップルに人気の神社らしいのだ・・・お参りすると長続きするらしい・・・ほんとかなぁ・・・

オレはかあさんの言葉に甘えて、少し仮眠することにした。

―――――――――――――――
―――――――――――――――
――――――――――

「ありがとう来てくれて。」
弘子はオレたち３人に言った。でもオレたちは友達だ、困った時には助け合うのが友達ってものだ。

　オレたちは社務所に入り、巫女さんの着物に着替えた・・・白と赤の組み合わせが可愛い・・・巫女さんの衣装なんてめったに着るもんじゃないから、なんだか嬉しくなってしまう・・・ちょっとコスプレみたいだ・・・
「やっぱりこういうのは有希が一番似合うね。」
千里が言うと、岡本も
「巫女さんは有希みたいに髪が長い方が良いわよね。」なんて言った・・・
今やオレの髪は４人の中ではダントツに長くなってしまった・・・長い髪は洗ったり、乾かしたり、いろいろ手入れとか、元々男のオレにはけっこう大変だけど、編集長の佐々木さんに切っちゃダメだって言われてるから切ることが出来ない・・・この前もそろそろ切ってもいいんじゃないかと思って聞いてみたけど、もう少し伸ばすように言われてしまった・・・もう肩甲骨が隠れるくらい長くなっちゃった・・・

　でも髪が長くなってくると、それだけで自分でも少し女っぽくなった気がするから不思議だ・・・長い髪は後ろでまとめたり、三つ編みにしてる時はそうでもないけど、家でそのままでいる時などは、

ものを食べる時や、うつむいた時など、邪魔になってなにげなくやった仕草が、フとした時に自分でも知らず知らずに女っぽい動きをしてしまっているのに気がつく時がある・・・だから女性は髪が長いほうが女らしいと言われるのかもしれない。

「大丈夫よ、あんたたちも付け毛があるから。まあ、イヤなら付けなくてもいいけど。正式には長い方がいいんだけど、今時そんなにうるさくないから。」

でも結局みんな付け毛をつけることになった・・・オレとしては、オレだけ目立たなくて良かったと思った・・・それに、それが正式ならやった方がいいと思う。神聖な仕事なんだし・・・

もっとも巫女なんて言っても結局のところ、オレたちの仕事はおみくじとかお守りとか縁起物を売る仕事だ・・・そういう意味では普通のアルバイトと大差ないが、やっぱりそこは巫女だから、お淑やかな感じに見えなきゃいけないらしい・・・まあ、お淑やかならオレの得意とするところだけど・・・おかげで手ほどきを受けた弘子の叔母さんにも褒められてしまった・・・すでに男だと知られてしまった弘子の前で、女らしさを褒められるのはさすがに気まずい・・・

「有希、バレンタイン特集見たわよ。」

二人きりになった時、弘子はオレの耳元でささやいた・・・

「！」

九州ＪＩＮＯＮはいつもの月なら６日が発売日だけど、今月は新年号だからもう発売になっているのだ・・・千里と岡本にはここに来るまでにさんざん冷やかされてしまった・・・ただでさえ、あんなに女の子っぽい写真は恥ずかしいのに・・・純平と一緒なんてよけ

い恥ずかしい・・・

それにオレは純平との写真を見ると、いたたまれない気持ちになってしまった・・・純平からのメールはクリスマスを最後に来ていない・・・たぶんもう来ないのだと思うと悲しかった・・・オレは返信しなくても、純平からは来るような・・・なんとなくだけど、そんな気がしていたのだ・・・そんなハズないのに・・・いくらなんでもムシが良すぎる・・・

「純平って誰かと思ったら、まさか道端純平くんだったなんて、有希もやるじゃない！」

急に弘子がそう言ったのでオレは驚いた・・・

「・・ど・・どうして・・・純平のこと知ってるの・・・？」

「ふふっ・・ナイショ！」

「！」

弘子ったら・・・まさか長谷川に聞いたのだろうか？・・・でも今は冬休みだから弘子と長谷川が会うとは思えない・・・

「ね・・ねぇ・・・なんで弘子が知ってるのよ・・・？　ねぇ・・教えてよ・・・」

「うふふっ・・有希、寝言で“じゅんぺ～い”って切ない声で言ってたからよ。」

「！！！」

そんな・・・あの日・・・オレ寝言で言っちゃったのか・・・？

切ない声で・・・？！

「まさか有希と純平くんが付き合ってたなんてねぇ。」

「そ・・そんな・・・付き合ってなんかないよ・・・ただメールしてただけ・・・」

「メール？　どんなメール？」

「ふ・・ふ・・ふつうのメールよ・・・それに・・・もう終っちゃ

ったもん・・・」

「え？　どうして？」

「・・・たぶん・・・わたしがずっと・・返信しなかったから・・・」

「・・なんで返信しないの？」

「・・いいの・・・もういいのよ・・・」

なんかこんなこと話してたら、オレ涙が出てきそうだ・・・オレはもう女だから、男の子とは友達になんてなれないんだ・・・

「あっ・・ごめん有希、もう聞かないから。ね？」

「・・う・・うん・・・」

なんか弘子に気を使わせちゃったかな・・・これはそんなに大したことじゃないのに・・・ただオレと純平の友情が終っただけだ・・・それもたぶんオレが一方的に思っていた男どうしの友情が・・・

紅白歌合戦が終ると、遠くのお寺でつくで除夜の鐘の音が聞こえ出した・・・そろそろ初もうでの人たちが来る時間だ・・・

―――――――――――――――

―――――――――――――――

――――――――――

年が開けるとすぐに近所の人たちがお参りに来だした・・・

最初は人数も少なくてそんなでもなかったが、時間が経つごとにお参りに来る人数も増えてきて、おみくじに書いてある番号の品物との交換とかも結構大変になってきた・・・交換するものは鯛とか

フグとかのハリボテや、羽間弓などの縁起ものなどだ・・・オレは何でフグが縁起がいいのかと思ったら“フグ”と“福”をかけてあるらしい・・・そういえば福岡ではフグのことをフクと言ったりするもんなぁ・・・

まあ、交換はおみくじの番号を間違えないようにすればいいけど、お金をもらって、おつりを返すのはけっこう大変だった・・・オレはあまり計算は得意じゃないし・・・考えてみればオレは物を買ったことはあるけど、売るのは初めての経験だ・・・

他にもお守りとか、ダルマとか売るものは沢山ある・・・でも忙しいからとバタバタしてはいけない・・・そこは巫女だから、厳(おごそ)かじゃなきゃいけないのだ・・・巫女のアルバイトも結構大変だ・・・

「うぅぅ・・・疲れたぁ・・・」

少し人数が少なくなったのを見計らって、二人づつ休憩することにした・・・オレは疲れてしまってお座敷に倒れ込んでしまった・・・オレは自分がこれほど販売に向いてないとは思わなかった・・・

「有希、大丈夫？」

「うん・・・なんとか・・・」

岡本に言われて、オレはなんとか返事をした・・・なんか・・・オレって情けない・・・

「初めてだからよ。慣れたらなんてこと無いと思うわよ。そういえばわたしも去年はけっこう大変だったかも。」

「・・・そうなの・・・？」

岡本はこういうのには向いてるみたいだけど・・・元気がいいし・・・他人と話すのも得意そうだから・・・

それにひきかえオレは全然ダメだ・・・あんまり上手に話せない

から販売の仕事とかは向かないみたい・・・これならまだモデルの方が向いてる気がする・・・モデルも大変なのは同じだけど、やってて楽しいし・・・どういうふうに雑誌になるのかも興味深いし・・・

考えてみれば読者モデルをやることになったのも岡本のおかげだった・・・もし岡本が応募しようと言わなければ、オレも読者モデルなんてやらなかったと思う・・・本当は岡本がやりたかったハズなのに、オレと千里だけが受かってしまって・・・

「はい、有希。」
岡本がお茶を入れてくれた・・・
「あ、ありがとう・・・」
熱いお茶を飲むと少しホッとした・・・さすがに八女だ・・・いいお茶使ってる・・・
「・・ふう・・おいし・・・」
「落ちついた?」
「うん。」
なんか、お茶を飲んだらもう少し頑張れそうな気持ちになってきた。
オレって思いのほかゲンキンなやつなのかも・・・

もうそろそろ弘子と千里と交代する時間だと思っていたら、千里がオレを呼びに来た。もう交代の時間かな?
「有希、お母さんと妹さんが来てるわよ。」
「え?!!」
なんでわざわざ?・・・オレが社務所の方に行くと、かあさんと麻衣がいた・・・
「あ、お姉ちゃん!」

麻衣が大きな声で言うからオレはドキッとした・・・だってもう弘子はオレが男だと知っている・・・それなのに妹が“お姉ちゃん”なんて言うのをヘンに思わないか気になってしまう・・・弘子はあの事件の後も、オレが男だと知らなかった頃とまるで変わらない態度で接してくれるが、オレの方はやっぱり意識してしまう・・・これまではみんなといる時は、オレも一人の女の子として自然にいられたけど、弘子に知られてしまってからは、どうしても弘子がオレのことをヘンな目で見ていないか気になってしまいうのだ・・・もちろん今のところ弘子はそんな態度をとったことはないし、オレは弘子がそんなコだとは思ってないけど・・・

「有希が巫女さんをやるって聞いて、どんな感じになるのかと思ったけど、けっこう似合ってるんじゃない？」

「・・・そ・・そうかなぁ・・・」

かあさんにそんな風に言われると・・・なんかすごく照れくさい・・・

「で・でも・・・なんでここに来たの？　いつもはおばあちゃんの所に寄ってから愛宕神社に行くのに・・・」

「だって、せっかく有希がいるんだから来た方がいいじゃない？愛宕神社には明日行くわよ。」

「・・そ・・そう・・・」

べつにオレがいるからって来なくていいのに・・・恥ずかしいよ・・・

「それじゃ頑張りなさいね。」

「うん。」

「お姉ちゃん、キレイだよ。」

「もう・・そんなこと言わないでいいから・・・」

麻衣はすぐオレのことをキレイとか言って冷やかすから困っちゃう・

・・かあさんと麻衣はお参りをして帰っていった・・・それと巫女姿のオレの写真を写して・・・まあ、オレたち４人と麻衣も一緒に写してくれたから、記念になるとは思うけど・・・

「ごめんね、忙しいのに・・・」
オレは原口に謝った・・・
「ぜんぜん大丈夫よ。良いおかあさんじゃない。それに妹さんも可愛いし。」
「・・うん・・まあ・・・」
たしかに麻衣はすごく可愛いと思うけど・・・
でもオレはアニキだからかなり贔屓(ひいき)めに見てると思う・・・

「有希ってお母さん似なのね。」
と千里が言うと、岡本も
「わたしも思った！　お母さんがキレイな人だから有希もキレイなんだね！」
「そ・そ・・そんなことないよ・・・」
かあさんはきれいだけど・・・オレはかあさんみたいにキレイじゃない・・・そりゃぁ、オレもかあさんみたいにキレイだったら嬉しいと思うけど・・・オレだってかあさんみたいな素敵な女の人になりたい・・・

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー
ー　ー
ー

夕方になって参拝の人も少なくなると、原口のお父さんが言った。
「今日はもういいですよ、きみたちのおかげでずいぶん助かった。

きみたち初詣ではまだなんでしょう？　忘れないようにお参りして帰りなさい。」

「はい。」

そうだ、オレたちはまだ初もうでをしていなかった・・・三が日はアルバイトでここに来るけど、やっぱりお参りは一日にした方が絶対ご利益がありそうだ・・・

オレたちは４人並んでお参りした・・・みんなは何をお願いしているのだろうか・・・でも、オレはまず神様に言わなきゃいけないことがある・・・

（神様・・・男なのに巫女なんかやってごめんなさい・・・）

これはやっぱりお願いをする前に、一言あやまっておかなきゃいけないと思う・・・そのうえで願いを聞いてもらえるなら・・・

（神様・・・これ以上わたしが男だとバレませんように・・・）

これはオレにとっては切実な願いだ・・・でも・・もうひとつお願いしてもいいかな・・・

（それと・・・それと、純平が怒っていませんように・・・そしてまたメールくれますように・・・もし・・もし純平からまたメールが来たら必ず返信しますから・・・オレ頑張って女の子になりますから・・・）

でも・・たぶんもう純平からメールが来ないことはわかってる・・・純平はたぶん怒ってると思う・・・だってオレずっとメール返さなかったんだもの・・・これはただの願掛けみたいなものだ・・・もし・・・あくまでもし願いが叶うならの話だ・・・神様だって、こんな身勝手な願いなんて叶えてはくれないと思う・・・だいいち神様にメールなんて意味わかるのかなぁ・・・

社務所に帰って着替えようとして携帯に目がいった・・・メール？

開くと・・・なんと純平からだった・・・

“ユウちゃん　あけましておめでとう　ユウちゃんに迷惑になっちゃいけないと思って　メールするの我慢してたけど　新年のあいさつくらいだったらいいよね？”

そんな・・・オレが勝手に返信しなかっただけなのに・・・オレはぜんぜん迷惑なんて思ってないのに！

オレはすぐに返信してしまった・・・

“純平くん　あけましておめでとうございます　迷惑だなんて思っていません　ぜひまたメールしてください　こんどは必ず返信します”

オレはもう男とか女とかどうでもいいと思った・・・オレはまた純平とメールしたい・・・その気持ちがオレの中の男の部分なのか、女の部分なのか・・・オレには良くわからなかった・・・でもそれがもし女の部分でもいいと思った・・・オレは純平とメールしたい・・・その気持ちだけで十分ではないだろうか・・・オレが女の子になってもうすぐ1年・・・女になるのを怖がってばかりはいられない。

オレは純平に返信してからふと思った・・・

もしかして神様はオレの願いをきいてくれたのだろうか・・・？

そういえばここは縁結びの神社だ・・・オレと純平が結ばれるなんてことは絶対ないけど、こんどは出来るだけ長く友達でいたい・・・

そのためだったら・・・オレは女の子としてメールしてもいいと思

った・・・

もう神様とも約束しちゃったし・・・

第７０話　正月　縁結びの神社（後書き）

最近アクセス解析が壊れているようで、みなさんがどれくらい読んで下さっているのかわからないので困っています。早く直ってくれないかなあ。

第７１話　チョコ　オレの秘めた想い（前書き）

最後にお知らせと、最新の設定を加えた人物紹介＆西鉄沿線を載せています。

第71話　チョコ　オレの秘めた想い

「有希は？　バレンタインのチョコ誰にあげるの？」千里がオレに聞くと
「バッチリよね、ＪＩＮＯＮでバレンタイン特集やってたくらいだから。」
と岡本が言った・・・
「で・・でも・・写真撮っただけだから・・・バッチリなんて・・・」
そういえばオレはチョコをあげる立場なんだった・・・前はもらう立場だったから、あげることなんて考えてなかった・・・もっともオレはもらったこともないけど・・・

「千里は？　誰にあげるの？　チョコあげるような人いるの？」
オレにはチョコをあげる人なんて思い当たる人がいない・・・純平ならあげてもいいけど、アイツは東京だし・・・メールじゃチョコは送れないし・・・それにアイツはどうせファンからいっぱいもらうだろうから、オレからあげる必要なんかないと思う・・・
「やっぱりおつき合いがある人にはあげた方が良いんじゃないの？」
「おつき合い？・・・たとえば？」
「たとえば？　そうね・・カメラマンの進藤さんとか・・・」
「！」
そうか・・・そういうのもあったんだ・・仕事のつき合いか・・・
オレは進藤さんにはデジカメももらったし、チョコくらいお返ししなきゃいけないのかも・・・だったら他の編集部の人にもあげなきゃいけないし、カメラアシスタントの人にも・・・？　なんかお金かかりそう・・・女の子って大変だなぁ・・・

「直美は？　だれかあげるの？」

「まあ、何人かはね、本命はいないけど・・・」
「ほ・・本命?・・・千里はいるの?本命・・・」
「わたしもいないわよ。」
「弘子はどうなのかなぁ?」
弘子は大人っぽいから・・もしかしたら・・・?

「弘子は大学生の彼氏がいるじゃない。有希知らなかった?」
「え?!　ぜんぜん知らなかった・・・」
大学生の彼なんて・・・なんかすごい・・・考えてみたらオレは恋愛の話は出来るだけ避けてるもんな・・・
「あれ?でもそんな彼がいるんだったら、クリスマスは彼と過ごしたかったんじゃないのかな?」
「たぶん彼氏も大学生だから忙しかったんでしょう?」
そんなものかなぁ・・・オレだったら弘子みたいな素敵な彼女がいたら、どんなに忙しくても会いたいと思うんだけどなぁ・・・でもあんがい弘子の家は神社だから、おつき合いにはうるさいのかも・・・

「でもさぁ、有希はあげるより、もらう方なんじゃない?」
「え?!」
オレはドキッとした・・・まさか岡本のヤツ・・・弘子からオレのこと聞いたんじゃ・・・?
「だって有希のこと好きなコって結構いると思うわよ。」
「わ・わ・・わたし女なのに・・・も・もらうワケないじゃない・・・」
「そんなことないわよ!　有希はモデルもやってるし、密かに憧れてるコもいると思うわよ。」
「・・まさかぁ・・・」
そんなことはないと思う・・・オレに憧れるなんて・・・そんなのヘンだ!

―――――――――――――――

―――――――――――――――

――――――――――

　オレが保健室へ行こうとして職員室の前を通っていると、中から出てきた教頭先生とハチ合わせしてしまった・・・

「おっ、戸田君じゃないですか！元気にしてるようですね。」

「あ・・こんにちは、教頭先生。」

「体の具合は大丈夫ですか？　お股の方とか・・・」

「は・・はい・・おかげさまで・・・」

そんなこと女の子に聞かないでほしい・・・でも教頭先生はオレのことを男だと認識してるのかも・・・

「時に・・・戸田君は・・・チョコなどは贈る主義ですか？」

「え？」

「あ、いえいえ・・・何でもありません・・・それでは失礼。」

教頭先生はそう言って行ってしまった・・・なんなんだろう・・・チョコを送るシュギ？

「アハハハ・・・」

保健室で今あったことを話すと、白石先生はいきなり笑った。

「ハハ・・・有希ちゃん、それって教頭先生、有希ちゃんからのバレンタインチョコが貰いたいんじゃない？」

「え？！　まさか・・・」

だって教頭先生はオレが男だって知ってるんだから・・・そんなオレからのチョコなんて欲しがるハズがない・・・

「でも、有希ちゃんは教頭先生にはお世話になってるんでしょう？」

「はぁ・・・まあ・・・」
「だったら、一応、義理でもチョコあげといた方が良いんじゃない？」
「で・・でもぉ・・・」
オレが教頭先生にチョコをあげるなんて・・・考えただけでゾッとする・・・もらう方だってそうじゃないのだろうか・・・
「わたしなんかにもらっても・・嬉しくないんじゃないかなぁ・・・」
「そんなことないわよ。オジサンは女の子からのチョコは義理でも嬉しいものよ。」
「・・・・・」
でもオレ・・・教頭先生にとって女の子なのかなぁ・・・そもそもオレの性同一性障害という設定を作ったのは教頭先生なのに・・・
「あ、そうだ！　もし教頭先生にチョコあげるんだったら、校長先生にも教頭先生より少し上等なのをあげなきゃダメよ。そういうのは大人の世界では大事なことなんだから。」
「・・・・・」
そんなもんなのかな・・・たしかにオレは校長先生と教頭先生にはいろいろ世話になってる・・・読者モデルの件も許してもらったし・・・本当に女の子になることも許してもらった・・・だったらここは女の子として義理を通さないといけないのかも知れない・・・
「でも有希ちゃんも、だいぶ精神的にも安定してきたんじゃない？」
「そうでしょうか・・・？」
「だってこの頃は出かける時もナプキンしてないんでしょう？　最近はお薬もあげてないし。」
「あ・・はい・・・」
「これもモデルさん始めたのが良い結果になっているのかも知れないわね。」

「はぁ・・・」

たしかにオレが出かける時に、おもらししちゃった時の用心にナプキンをしなくなったのは、モデルの仕事を始めてからだ・・・もちろん遠出をする時には、もしものことがあったらいけないから着けるけど、天神に遊びに行くくらいでは着けなくなった・・・精神安定剤も飲んでいない・・・兄さんにあまり飲むと良くないと聞いたのもあるけど・・・

でも、たしかに読者モデルを始めたのも一因だと思うけど、他にももっと大きな原因があると思う・・・それは先生が知らない純平の存在だ。別に先生に秘密にしてるワケじゃないけど、いろいろあったから言いそびれてしまったままになっているのだ・・・純平とメールしてるおかげか、オレはだいぶ男の子と接するのが怖くなくなってきた。もちろんお仕事でカメラマンの進藤さんや男性のデザイナーさんと話す機会が増えたのも大きいと思う。オレはまだまだ女の子としての自信はないけど、バレたらどうしようという恐怖はだいぶ少なくなった気がする。

もしかしたら弘子がオレが本当は男だとわかっても受け入れてくれたから・・・というのもあるかも知れない。みんなが弘子みたいに優しくはないかも知れないけど、でも・・心のどこかでバレたらバレたで仕方がないという気持ちも持てるようになってきた。これからずっと女の子として生きていくのだから心配ばかりもしていられない・・・

「先生は？　誰かにチョコあげるんですか？」

「わたしはどうかなぁ、たぶん誰にもあげないと思うけど。昨年もあげなかったし。」

「先生、恋人とか、おつき合いしてる人いないんですか？」

「ええ、残念だけど。」
先生はキレイで素敵な人なのに・・・でもキレイすぎて声をかけにくいのかも・・・オレも男の頃だったら気後れしてしまってしゃべれないかも知れない・・・今は女どうしだから平気だけど・・・

「有希ちゃんは？　本命の男の子いないの？」
「まさかぁ・・・いないですよ・・・」
一瞬、純平のことを話そうかと思ったけど言えなかった・・・だって本命なんて言われたら言えなくなっちゃう・・・純平とはそんな関係じゃないもん・・・
「でも・・あげなきゃいけない人は結構いるみたい・・・お仕事でお世話になってる人にもあげなきゃいけないんだって・・千里が言ってた・・・」
「フフ・・・女の子も大変でしょう？」
「はぃ・・・」
三吉先生にもお中元やお歳暮のことは教わったけど、バレンタインのことなんか習わなかったもんなぁ・・・オレには女の子として憶えなきゃいけないことが、まだまだたくさんある・・・

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

最初はチョコを買うのはレナと一緒に行こうかと思った・・・レナなら気がねもいらないし、色々教えてもらえる・・・でもやっぱり千里と行くことにした・・・千里と行けば編集部の人とか誰にあげればいいのか相談しながら買うことができる・・・それにどういうのをあげれば良いのかもわからないし・・・レナでは恋人や同級

生への義理チョコならいいけど、そういう仕事関係のことは良く解らないと思う。

天神イムズのソニープラザに行くと、いつもと違ってバレンタイン用のチョコであふれていた。外国のオシャレなチョコがたくさんだ・・・男の頃はこういうお店は恥ずかしいから避けてたけど、女の子になってからはレナに連れられて時々来るようになった。可愛い雑貨とかぬいぐるみとかあるから・・・でもバレンタインは初めての経験だからわからないことだらけだ・・・

「可愛い！　こういうの良いんじゃない？」
「う・・うん・・・」
「これは？　値段もお手頃だし良いんじゃない？」
「う・・うん・・・」
「こんなのいくつか多めに買っておけば、アシスタントさんとか何人いるかわからないから良いかもね？」
「う・・うん・・・」

「・・・？　どうしたの有希？　なんか今日おとなしいね。」
「そ・・そうかな・・・そんなことないと思うけど・・・」
たしかに今日のオレは大人しいと思う・・・しゃべるとボロが出そうでしゃべれないのだ・・・考えてみれば千里とはあまり買い物したことがなかった・・・買い物したとしても本とか最初から買うのが決まってるものばかりだ・・・レナや長谷川ならオレが男だと知ってるからいいけど、千里が相手では相談しにくいのを忘れていた・・・ヘタなこと聞いたら女の子なのにそんなことも知らないのかと思われそうだ・・・
「う・・うん・・・これいいかもね・・・」
なんだかオウム返しになっちゃう・・・

でもみんなにあげるには、あるていど安くないとお金が足りなくなってしまう・・・幸い義理チョコ用の見栄えが良くて安いのも多いから助かる・・・
「それじゃ、ここらへんのを被らないように買おうよ。」
「うん・・・」
オレたちは同じものにならないように買っていった。

「進藤さんには少し高いのにしないといけないわよね。」
「う・・うん・・そうね・・・」
千里が選んだのは少しだけ高いやつだった・・・
「わたしは・・これにしようかなぁ・・・」
オレは千里が選んだのより、もっと値段が高いやつを選んだ・・・
「え？　でも有希・・そんなのあげたら本命だと思われちゃうんじゃない？」
「そ・・そっか・・・」
確かに本命だと思われても困るけど、オレはカメラとか貰っちゃったしなぁ・・・千里はこのこと知らないし・・・オレはもう少し安いやつに取り替えた・・・
「有希、もしかして進藤さんのこと好きなの？」
「！・・ううん・・・そんなんじゃないの・・ただ・・缶コーヒーもらったりしたから・・・」
「・・・・・？」
「千里がいなかった日に・・ちょっと相談とか乗ってもらったりしたから・・・」
「なんだ、そうだったの。お礼の意味もあるのね？」
「そ・・そう・・お礼、お礼・・・」

だいたい買い終ったオレたちは、レジに向って歩きだしたが、オレは千里のコートの袖を引っ張って止めた・・・
「ね・・ねえ・・・もしも・・もしもの話なんだけど・・・チョコ

あげたい人と会えない時は、どうすればいいと思う?」
「・・・まあ、違う日にあげてもいいんじゃない? ちょっと遅れてとか、早めにとか・・・」
「で・・でも・・当分あえなかったら?」
「う〜ん・・・本当はちゃんと会ってあげたいけど、仕方ない時は郵便で送るとかするんじゃない?」
「・・・ゆうびん・・・」
そっか・・・郵便で送るのか・・・

「あ、ちょっと待ってて・・・すぐ戻ってくるから・・・」
オレは急いで戻ると、本命用の可愛いピンクのハート型のチョコを手に取って戻った・・・
「ご・・ごめん・・・」
「・・・有希ったら、やっぱり本命のコがいるんじゃない!」
「ち・・ちがうよ・・・これは・・と・・とうさんにあげようと・・・」
「そっか、お父さんね・・・」
こんな嘘は通じないことはわかってる・・・だってオレはたぶん真っ赤になってるハズだ・・・こんなに顔が熱いんだもん・・・

でも千里はそれ以上追求したりはしなかった。たぶんオレのバレバレの嘘を信じたフリをしてくれたんだと思う・・・

ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー
ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー
ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー
ー ー ー ー ー ー ー ー ー ー
ー ー ー ー ー ー ー ー ー
ー ー ー ー ー ー ー ー
ー ー ー ー ー ー ー
ー ー ー ー ー ー
ー ー ー ー ー
ー ー ー ー
ー ー ー
ー ー
ー

オレが買った本命チョコはもちろん純平のためのものだ・・・と

うさんなんかにあげるハズがない・・・とうさんにはあげるとしても義理で十分だ。

なぜ純平にチョコを送ろうと思ったかというと、いま次に出るドラマのために何かスポーツの練習をやってるみたいなのだ・・・どうやらスポーツ選手の役らしい・・・主役じゃないけど、結構重要な役らしく、他の仕事をしながら夜中に練習しているみたいなのだ・・・強がってあまりハッキリとは書かないけど、そうとう疲れているらしい・・・役者って仕事も大変なものだ・・・だからオレもメールだけじゃなく、少しは女らしく励ましてやろうと思ったのだ。バレンタインは良い機会だと思った。

でも良く考えたらオレは純平の住所を知らなかった・・・わかっているのはメールアドレスだけだ・・・事務所の住所なら調べればわかるだろうけど・・・事務所に送っても他のファンのチョコに紛れてしまいそうだ・・・純平に聞く?・・・でもそれじゃサプライズにならないし・・・サプライズ?

オレなに考えてんだろう・・サプライズなんて・・・ファンのコはもっと立派なのを送るのかも知れないのに・・・そんなことを考えていたら、なんだか送るのをためらわれてきた・・・純平・・こんなのじゃ喜んでくれないかも・・・オレ馬鹿みたいだ・・・こんなことで純平を元気づけられるなんて思って・・・オレ・・メールしてるだけで調子に乗ってるのかも・・・だって他にもメールくらいしてるかも知れないじゃない・・・

オレは結局、純平の事務所に送ることにした・・・気づかなかったらそれでもいい・・・オレは純平とメール出来るだけでも幸せなのかも知れない。

―――――――――――――――
―――――――――――――――
――――――――――

お知らせ

実世界では有希が好きな山上と純平が共演する月９ドラマ『ブザー・ビート』が始まりました。すでに一回目が放送されましたが、有希がドキドキしそうな展開です（笑）

山上と純平とは先輩後輩の仲でしょっちゅう一緒にいるので有希も目が話せないと思います。

そのうえ、もし『オレ女』をドラマ化したら有希役をやってほしいと言ってた相武紗季ちゃんまで出演しているという、なかなかの『オレ女』系ドラマとなっています（笑）みなさんもお時間あれば観てくださると、より『オレ女』が楽しめるかも知れません。（ちなみに今回の話で純平が練習してるのは、このドラマのためです）

―――――――――――――――
―――――――――――――――
――――――――――

おまけ『オレは女子高生』の世界　第2弾

舞台

九州北部の架空の福岡県、主に架空の西鉄大牟田線沿線を中心に繰り広げられる物語。

架空の西鉄大牟田線案内

○＝特急停車駅（急行も停車）　●＝急行停車駅
・久留米以降は急行はありません　・普通駅は省いています

○福岡（天神）ー　ー天神の中心部のビルの中にある駅。駅ビルには架空の三越が入っている。
○薬院ー　ー　ー　ー　九州ＪＩＮＯＮの編集部、駅の下にミスドと大きな本屋〈マンガも充実〉
・平尾ー　ー　ー　ー　ーレナの家
●大橋ー　ー　ー　ー　急行停車駅では一番大きい。市街地へ向かうバスのターミナルでもある。有希が行った手芸店〈西沢〉がある。
●春日原ー　ー　ー　ー　有希、長谷川の家がある。おばさんの美容院、二光のエステもココ。駅前にはさかえ屋、マックがある。
●下大利ー　ー　ー　ー
○二日市ー　ー　ー　ー
●朝倉街道ー　ー　ー　急行停車駅だが、雰囲気は普通駅のようだ。三吉先生の家
●筑紫ー　ー　ー　ー　ー
●小郡ー　ー　ー　ー　ー
●宮の陣ー　ー　ー　ー

○久留米ー　ー　ー　ー　白鴻女学園　駅前にミスド、マック
　原口弘子の家はここからバスで３０分の八女
○花畑ー　ー　ー　ー　ー
○大善寺ー　ー　ー　ー　佐倉千里の家
○柳川ー　ー　ー　ー　ー
○新栄町ー　ー　ー　ー
○大牟田ー　ー　ー　ー　三井グリーンランド

登場人物

家族・親戚

戸田有希　〈とだ　ゆうき〉　この小説の主人公、元はごく普通の男の子　現在、白鴻女学園高校１年　１６才　１月２５日生まれ　血液型Ｏ型　身長１６３ｃｍ　足のサイズ２５ｃｍ　髪は７１話現在、肩甲骨が隠れるくらい。学校では三つ編み。性格は優柔不断、物事を深く考えない、素直で正直者。　勉強は国語と図工が得意、英語と数学が苦手、体育はそんなに得意じゃないが水泳はなぜか得意らしい。華道部。茶道も習っている。料理は昔からやっている。裁縫は習ってみたら得意だった。小学校２年まで家では女の子の服を着ていたらしいが有希自身は憶えていない。本当に性同一性障害なのかもしれない。小さい頃に溺れたことがあるらしい。父ゆずりのアレルギー体質。

戸田有正　〈とだ　ありまさ〉　有希の父　５４才　売れない作家（昔、芥河賞にノミネートされたことが一度だけあるらしい。現在

はペンネームで三次元文庫にライトノベルを書いているらしい）
婿養子で旧姓は佐藤　本家は熊本。有希は小さいころ一回だけ行ったことがあるらしい。

戸田麻希　〈とだ　まき〉　有希の母　４６才　空間デザイナー（店舗の内装とかのデザインをやるらしい）細身で美人らしい。歳より若く見えるらしい。

戸田麻衣　〈とだ　まい〉　有希の妹　現在、春日第二中学１年１３才　明るい性格　有希が女の子になってからは仲が良い。

戸田有友　〈とだ　ありとも〉　京都の薬科大　大学院２年生　成績優秀　２４才　有希の自慢の兄。ちょっと変わった性格かも。

戸田ノゾミ　〈とだ　のぞみ〉　母方のおばあさん　西新のおばあちゃん　７０才くらい　優しいが厳しい部分もある。

長山麻弓　〈ながやま　まゆみ〉　母の妹　美容院を経営　有希をニューハーフだと理解している。エステサロン経営の二光さんとは知り合い。

長山レナ　長山麻弓の娘　有希のいとこで幼馴染み　有希と同学年　茶髪でオシャレ。活発。

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー
ー　ー
ー

白鴻女子短大付属　白鴻女学園〈しらとりじょがくえん〉伝統ある女子高　共学化を目指したが男は有希しか受験しなかった。また共

学化には卒業生からも反発があったらしい。清楚で伝統的なセーラー服が特徴。

白鴻女学園の生徒（有希は3組）

長谷川順子　〈はせがわ　じゅんこ〉有希と同学年の1組　血液型B型　有希と同じ中学出身だが2年生終りのころ転校してきたので中学時代の有希のことはあまり知らない。今は一番の親友で生徒では原口弘子と共に有希が男だと知っている。有希と同じ華道部に所属している。フクロウの置き物を集めているようだ。読書家。仮面レンジャーが好きらしい（特に可愛い系の仮面グリーンがタイプらしい）性格は謎の部分も多い。小さいころから転勤がち、現在は母と二人暮らし、父は大阪に単身赴任中。

岡本直美　〈おかもと　なおみ〉3組のクラスメイト　ちょっと目立ちたがり屋。自意識が強い。

佐倉千里　〈さくら　ちさと〉3組のクラスメイト　大人しく性格がいい。　クラスメイトでは有希と一番仲がいい。有希と一緒に読者モデルをやっている。

原口弘子　〈はらぐち　ひろこ〉3組のクラスメイト　胸が大きいのが自慢、色気がある。八女の「鵠神社」の一人娘。父は神主、母は死んでいない。叔母さんが神社を手伝っている。68話で有希が男だと知った。

井川聡子　〈いがわ　さとこ〉有希と同学年の2組　有希と同じ華道部　地味で背が低い。要領が悪い。綺麗で可愛く背が高い有希に憧れているらしい。

安部まさ美　〈あべ　まさみ〉３組のクラスメイト　出席番号一番のコ　ただ名前を呼ばれただけ。

―――――――――――――――

―――――――――――――――

――――――――――

白鴻女学園の先生〈先生は全員、有希が男の子で性同一性障害者だと思っている。校長と教頭だけは有希が性同一性障害ではないと知っている。〉

会長　白鴻道子〈しらとり　みちこ〉白鴻女学園創始者の孫　白鴻女子短大の校長でもある。有希を女の子として入学させることには同意している。まだ出演したことはない。

校長　有希のことは教頭にまかせている。事なかれ主義な面があるようだ。

教頭　石渡先生〈いしわたり〉　有希が性同一性障害だという設定を考えた。有希が読者モデルを始めると、生徒数拡大に利用しようとするなど抜け目がない。

山口智佳〈やまぐち　ともか〉　担任・体育　快活　３１才　有希のことを気にかけてはいるが、あえて他の生徒と同じように接している。

松本たか子　家庭科　２６才　有希の制服の世話などを任されている。校長と教頭以外では有希が男の子の頃に会ったことがある唯一の先生。有希にとってお姉さん的存在。有希の裁縫の才能を高く評価している。

長山鏡子〈ながやま　きょうこ〉古典　６０才　風紀検査に厳しい。有希の中学の三吉先生とは茶道の同じ先生の弟子どうし。

斉藤明〈さいとう　あきら〉現国　２８才　有希が習っているうちでは唯一の男性教師。有希が倒れてとき保健室まで運んでくれた。

嶋田晶子〈しまだ　あきこ〉調理実習・華道部顧問　４０才くらい　ちょっと古風な美人

白石香帆〈しらいしかほ〉学校医　３４才　美人女医　善かれと思い有希に女性ホルモンを投与してしまった。有希にとって何でも相談できる頼れる優しい女性。有希のことは何でも知っているが、白鴻女学園に入学したいきさつまでは知らない。

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

春日第二中学　関係

井原〈いはら〉先生　中学の有希の担任　有希に白鴻女学園を紹介し、ある意味有希を女にした張本人。

三吉〈みよし〉先生　中学の家庭科教師　有希にお嬢様教育をした人物。躾に厳しいが真面目にやるコには優しい面も見せる。有希にとっては恩師であり、現在も先生の自宅でお茶や着物の着付けを習っている。女子の間でのあだ名クソババア。

鈴木　中学の仲が良い男友達。有希が携帯の番号を変えてしまった

ため音信不通。

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

九州ＪＩＮＯＮ〈ジノン〉関係

佐々木編集長〈女〉３０代後半　スーツに細めのオシャレなメガネ、髪はほとんどアップ、仕事が出来る女という感じ。

カメラマン　進藤〈しんどう〉　４０代　短髪に鼻の下だけヒゲを生やしている、洗いざらしのシャツに穴が開いたジーンズ。鋭い目が一見怖そうにも見えるが本当は優しい。

スタイリスト　永沢ケイコ〈ながさわ　けいこ〉　２０代後半？サイケで派手な服が好き　オシャレ

メイク　カネちゃん　背が小さな丸顔の女の人、若いのか歳とってるのか良くわからないがニキビがたくさんあるところを見ると若そう

モデル　蟹原ユリ〈かにはら　ゆり〉　ニックネームはカニちゃん。トップモデルの一人。

ジノンボーイ　道端純平〈みちばた　じゅんぺい〉有希のことが好きらしい。有希も気になっている。メール交換中。現在の仮面レンジャーシリーズ星徒で“マース”役もやっている。

ジノンボーイ　古池鉄平〈ふるいけ　てっぺい〉仮面レンジャー星徒で“ジュピター”役

－－－－－－－－－－－－－－－
－－－－－－－－－－－－－－－
－－－－－－－－－－

その他

二光〈にっこう〉　おかまのメイクアップアーティスト　４３才
全国に十数店のエステサロンを経営している。出身地の福岡には博
多と春日原の２店舗がある。

男性アイドル事務所Ｊニーズ
アイドルグループ「ニース」のメンバー　山上　通称“ヤマペー”。
有希が好きなアイドル
メンバーは他に西喜怒な
ど。

アイドルグループ「カツーン」のメンバー　亀有

キてぃちゃん　可愛いネコのキャラクター、ねいぐるみを手にして
から有希のお気に入りに。

－－－－－－－－－－－－－－－
－－－－－－－－－－－－－－－
－－－－－－－－－－

これまでのおまけの場所

３６話　制作おぼえがき　０８．６．２１
４０話　『オレは女子高生』の世界　人物、舞台設定など
４５話　架空の西鉄大牟田線案内
４９話　名前について
５３話　ドラマ化を妄想してみる
６１話　「放生会編」おまけ
６７話　１周年を迎えて

第７２話　バレンタイン　女の子のしあわせ

今日はとうとうバレンタインデー・・・チョコをカバンの中に忍ばせて登校するのは、なんかドキドキしてヘンな感じだ・・・男の子にチョコを贈ろうとする女の子もこんな気分なのだろうか・・・

でも女の子がチョコを贈る時の気持ちはなんとなくわかる・・・オレはもう2日前に、進藤さんや編集部の人たちにはチョコを渡してしまったからだ。今日は撮影がなかったし、その後もいつ撮影が入るかわからないから、千里が遅くなるよりは先に渡した方がいいんじゃないかと言ったからだ・・・オレもそう思ったし、もし遅れてあげようとしてオレだけに撮影が入ったりしたら、オレ一人でチョコを渡さなきゃいけなくなる・・・それはさすがに恥ずかしい・・・やっぱり千里が一緒じゃなきゃオレだけじゃ渡せない・・・

でもみんな思いのほか喜んでくれたから、オレもなんだか嬉しくなった。だっていろいろ考えて選んだチョコだから、喜んでもらってくれるとオレとしても恥ずかしいのを我慢してあげた甲斐があるってもんだ。オレは他人にプレゼントなんかあげたこと無かったから、喜んでくれるとあげた方も嬉しいものだとは知らなかった。なんだか幸せな気持ちになった。

オレはもらったことが無いからわからないけど、あんがいもらった男の子よりも、あげた女の子の方が嬉しいものなのかも知れない・・・だから女の子はチョコをあげたがるんじゃないだろうか・・・もっとも、それならオレも男だったころに誰かくれても良かったのではないかと思うけど・・・やっぱりあげたい男の子じゃなきゃ意味がないのかも知れないな・・・オレは全然モテなかったもんなぁ・・・

学校に着いて上履きを出そうと靴箱を開けると何かが崩れてきて、オレは慌てて両手でおちそうになったモノを押さえた・・・
（え？・・チョコ？・・・うそ・・・なんでオレの靴箱にチョコが・・・？）
そういえば昨日、岡本が言っていたことを思い出した・・・オレに憧れてるコもいるって・・・ホントだったんだ・・・？
「有希、たくさんもらったね。」
「あっ・・・千里・・・どうしよう・・・」
「どうしようって、べつにどうもしなくていいんじゃない？」
「で・・でも・・・」

「あっ！わたしにもあった！」
「え？！」
「ほら！」
千里は自分の靴箱の中にあったチョコを嬉しそうにオレに見せた・・・２コ？・・・オレのは・・１０コ以上ありそう・・・
「でもなんで・・・わたしたちも女なのに・・・」
見ればけっこう高そうな感じだ・・・これはどう見ても義理チョコじゃない・・・包装してあっても雰囲気でなんとなくわかる・・・
オレも買ったから・・・・

「それは有希がカッコイイからじゃない？　それに可愛いし、素敵だし・・・」
「そそそ・・そんなことない・・・」
オレは慌てて口を挟んだ・・・ほっといたらオレのことを色んな言葉で褒めそうな勢いだ・・・
「でもやっぱりスゴイなぁ、有希は・・・わたしは２つだもん。」
「そ・・それは・・わたしがお・・男っぽいからじゃないかな・・・

？」

「ふふっ、そうかもね。有希って時々男前な感じあるもんね。」

「うぅっ・・」

そういうのは男のころに言われたかった・・・女の子になって男前なんて言われてもちっとも嬉しくない・・・

「ほんと時々だけどね。」

・・それもどうなんだろう・・・

「でも・・どうしよう・・・こんなに持てないよ・・・それにみんなに見られたら恥ずかしいし・・・」

「あ、ちょっと待って・・・」

千里はカバンを開けて小さくたたんだエコバッグを出した・・・

「これ使っていいよ。」

「あっ・・ありがとう・・・」

さすが女の子って用意がいいなぁ・・・何か荷物が出来た時のために、いつもカバンに入れてるのかなぁ・・・オレも見習わなきゃ・・・

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー

ー　ー

ー

オレは昼休みに、こっそり紙袋を持ってあるところに向った・・・

“コンコン”

「はい、どうぞ」

オレは返事を聞いてドアを開けた・・・

「おや、戸田君じゃないかね。どうしたんだい今日は。」

「シ・・失礼します・・・」
校長室に恐る恐る入っていくと、観葉植物の影になっていた方の椅子に教頭先生もいた・・・これは都合が良いかも・・・
「あ・・あのぉ・・・」
「何ですか戸田君、はっきりしなさい。校長先生に用事じゃないんですか?」
教頭先生に言われ、オレは恥ずかしさをこらえて袋からチョコを出した・・・絶対間違わないように校長先生のは黄色のリボンのやつだ・・・

「校長先生・・これ・・・」
そう言ってチョコを差し出したものの、言葉が続かなかった・・・だって・・・何て言ったらいいのかわからない・・・
「これは何かね?」
どうしよう・・・気づいてくれない・・・!
「校長、今日はバレンタインデーじゃないですか!」
「おお、なるほど。」
ナイス!教頭先生・・・
「それで?戸田君が私に?」
「あ、はい・・あの・・常日頃お世話になっているので・・・」
なんか堅すぎだろうか・・・でも相手は校長先生だからなぁ・・・

「う~む・・・どうしたものかねぇ・・・生徒からバレンタインチョコを貰うというのは・・・」
こ・・これは予期しなかった反応だ・・・やっぱりマズかったのだろうか・・・
「いいじゃないですか校長。戸田君は生徒ですが半分男の子ですし・・・問題ないんじゃないですか?」
「なるほど・・・それもそうだね。それじゃ遠慮なく頂いておくよ。こりゃぁ女房に自慢出来そうだな、ははは!」

「ハハハ・・・」
教頭先生のおかげで助かった・・・

「あの・・それと・・教頭先生にも・・・」
オレはもう一つの青いリボンのやつを教頭先生に差し出した。
「なに？　私にもあるのかね？！」
「はい・・・」
・・・欲しそうにしてたクセに・・なんかしらじらしいなぁ・・・
教頭先生に渡したチョコは校長先生のとは一目で大きさが違うことがわかるようにした・・・ハッキリ上下関係がわかるようにするべきだと白石先生が言っていたから・・・教頭先生にもちゃんと通じているようで“うんうん”とうなずいている・・・良かった自分のが小さいからとスネないで・・・さすが大人だ・・・

「いやぁ・・それにしても戸田君は女の子の素質があるんですね・・・ねえ校長先生。」
「まったくまったく。君が女の子としてちゃんとやっていけそうで私も嬉しいよ。」
「あ・・ありがとうございます。」
オレはペコリと頭を下げた・・・校長先生と教頭先生も心配してくれてたのかなぁ・・・まあオレが女になったのには二人も少しは責任があるし・・・とうぜんか・・・
「そうだ、戸田君このことは他の生徒には内密にたのむよ。」
「・・・・？」
「やはり女生徒にバレンタインチョコを貰うのは問題になるといけないのでね。それに一部の生徒を贔屓にしているなんて思われても困る。」
「あ、はい・・・」
それはオレとしても賛成だ・・・オレだって校長や教頭にチョコをあげたなんて、みんなには知られたくない・・・これはあくまで女

の子としての義理なのだ・・・

―――――――――――――――

―――――――――――――――

――――――――――

「有希チョコいくつもらったのよ。」
「え？！　なんで長谷川さん知ってるの？」
いきなり長谷川に言われて驚いた・・・オレ、みんなにはバレないようにしてたから、千里以外は知らないハズなのに・・・
「そりゃぁ知ってるわよ！　うちのクラスでも有希にチョコあげるって言ってたコいるし。」
「ほ、ホント？」
「みんなモノ好きよね。有希にチョコなんて・・・あ、でも有希は本当は男の子だから合ってるのか・・・」
「・・・・・」
まあ、合ってるといえば合ってるけど・・・でもみんなはオレを女だと思ってるんだから、やっぱり間違ってると思う・・・
「そんなことよりさ、有希またわたしに隠してたことあるんじゃない？」
「え？」
「有希、わたしに隠し事しないって言ったよね。」
「う・・うん・・・」
まさか・・・弘子のことか？・・・でも何で長谷川・・・オレが本当は男だと弘子にバレたこと知ってるんだろうか・・・弘子が言ったのかなぁ・・・でも弘子はそんなに口が軽いとも思えない・・・
「ゴメン・・・やっぱりさ・・バレたなんて言いにくくて・・・」

「え？　バレたって？」
「・・・？　弘子にわたしが男だってバレたことじゃないの？」
「バレたの？！　何でそんな大事なこと言わないのよ！」
「いや・・・だからゴメンって・・・」
「ゴメンじゃないわよ・・・なんで？　いつバレたの？」
「あのぉ・・・クリスマスの日に弘子の家に泊まったって言ったじゃない・・・あのとき・・・」
「もう1ヶ月以上前じゃない！」
「うん・・・」
「・・・それで？」
「え？　それで・・・って？」
「だからぁ、原口さんはどうしたのよ！　あんたなんでバレたのに普通に生活してるの？」
「あ・・・えっと・・・それは・・わたしにも良くわからないんだけど・・・弘子は心が広いっていうか・・・・」
「・・・それで・・今でも友達なの？」
「うん・・・」

「でも・・なんか信じられないわ・・・なんで有希が男だと知って普通でいられるの？」
「それは・・・わかんないけど・・・でも長谷川さんだってそうじゃない。わたしが男でも普通に接してくれてる・・・」
「だって、わたしは最初から有希が男だって知ってるから・・・」
「あ、そっか・・・でも男のわたしが女の子になってるのと、女の子だと思ったわたしが男だったのと・・・似たようなものなんじゃないかな・・・」
「・・・・・」
長谷川も黙ってしまった・・・これればかりは、どう思ったかなんて弘子本人じゃなきゃわからないことだ・・・

「そうだ・・・隠してることって何？・・・そのことじゃなかったら、他に隠してることなんかないわよ・・・」
いや・・・小さなことならあるけど・・・校長と教頭にバレンタインチョコあげたのも言ってないし・・・
「あぁ・・・なんかそれ聞いたらどうでも良い気がしてきたけど・・・誕生日のことよ・・・」
「誕生日？」
「有希、先月の２５日誕生日だったでしょう？」
「あ、うん・・・」
「何で教えてくれないのよ。」
「え・・だって・・・長谷川さん聞かなかったし・・・わたしも長谷川さんの誕生日も知らないもん・・・」
「・・・わたしは６月２８日よ・・・憶えててよ。」
「う、うん・・・」
後で手帳に書いておかなきゃ・・・長谷川って６月生まれなんだ・・・オレより半年もお姉さんなんだなぁ・・・

「はい。」
長谷川はオレにキレイにラッピングした小さな箱を差し出す・・・
「え？・・・長谷川さんもチョコを・・・？」
「違うわよ、なんでわたしが有希にチョコあげなきゃいけないのよ・・・気持ち悪いこと言わないでくれる？　あんた女なんでしょう？」
「う・・うん・・・」
なにも、そこまで言わなくても・・・
「お誕生日のプレゼントよ。」
「誕生日の？」
そっか・・・長谷川・・オレに誕生日プレゼントをくれるつもりだったから、オレが誕生日言わなかったの怒ってたのか・・・
「・・あ・・ありがとう・・・うれしい・・・」

なんか突然のことで驚いたけど・・・やっぱりプレゼントはもらう方もうれしいものだ・・・でも・・これはプレゼントをもらったからうれしいだけじゃなくて・・・長谷川の気持ちがうれしいんだと思う・・・なんか少し目が潤んできちゃった・・・

「・・開けていい？」
「いいわよ。」
オレがリボンをほどいて包みを開けると、中からピンクの箱が出て来た・・・可愛い箱だな・・・なんだろう・・・

箱の中にはネックレスが入っていた。
「あっ！これ・・・」
「有希これ可愛いって言ってたでしょう？」
「・・うん・・・」
それはキてぃちゃんのネックレスだった・・・ハートの中にキてぃちゃんの顔があり、まわりのハート型のリングにはピンクのキラキラしたラインストーンが並んでいる・・・オレが雑誌で見て可愛いと言ってたやつだ・・・長谷川さん憶えててくれたんだ・・・

「ありがとう、長谷川さん！」
こんな可愛いアクセサリーなんて・・・オレにはもったいないかも知れないけど・・でもすごくうれしい・・・
「つけてみていい？」
「あっ、待って・・つけてあげる。」
オレは首筋が出るように三つ編みを前に持ってきた・・・長谷川がオレの首の後ろで留めてくれている・・・なんかくすぐったい気持ち・・・こういうのって女の子どうしって感じがする・・・

「どうかなぁ？」

「うん、似合ってる。有希可愛いから・・・」
またまたぁ・・・なんか長谷川に言われても素直に喜べないないよ・・・でも今日は信じておこうと思う・・・だってこれは長谷川がくれたんだもん・・・自分があげたモノを素直に喜んでもらえないと悲しい・・・
「ありがとう・・・セーラー服だとちょっとヘンかな・・・」
キてぃちゃんはオレのお気に入りのキャラクターだ。男のころは何とも思わなかったのに、女の子になってぬいぐるみを手にしてから急に好きになってしまったのだ。でもかあさんやレナの話ではオレは小さいころは、ぬいぐるみとか好きだったらしい・・・（26、27話参照）オレは全然憶えていないけど・・・オレって元々可愛いモノが好きだったのかなぁ・・・

「でも良かった、有希が喜んでくれて。」
「そりゃぁ喜ぶよ。だって嬉しいんだもん！」
長谷川って時々優しい・・・イジワルなことされると何で？って思うけど・・・オレは優しい時の長谷川は大好きだ・・・いつも優しかったらいいんだけど・・・でもそのためにはオレも変わらないといけないのかも知れない・・・

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー
ー　ー
ー

放課後教室に戻ると弘子が待っていた・・・
「有希どこ行ってたの。もう帰っちゃったかと思ったけど、カバンがあったから待ってたんだけど。」
「うん・・ちょっと部室の方に行ってたから・・・」

なんだろう・・・弘子だけがオレを待ってるなんてあまりないことだ・・・

「帰りにマックに寄っていかない？」

「う・・うん・・いいわよ・・・」

弘子・・・オレに相談事でもあるのかな・・・？　でもオレってそんなに他人に相談されることなんか無いんだけどな・・・

駅まで歩きながらも、弘子はあまりしゃべらなかった・・・なんか心配がつのってくる・・・

マックに着いてセットをたのんだ・・・

「有希それどうしたの？」

「え？　あっ・・これ・・・？」

よくネックレスに気づいたな・・・セーラー服の中に入れてたのに・・・チェーンの部分が見えてたのか・・・

「これね・・長谷川さんにもらったの・・・誕生日のプレゼントだって・・・」

「見せて？」

「う・・うん・・・」

オレは胸当ての中からネックレスのトップを取り出して見せた・・・

「可愛いね、有希っぽい。」

「そ・・そう・・・？」

ほんとかなぁ・・・男がそんなの着けて・・・なんて思われてないかな・・・

「でも、なんで今ごろ誕生日プレゼントなの？　有希の誕生日、先月だったじゃない。」

「うん・・長谷川さんに言ってなかったから・・・だって聞かれなかったし・・・」

「ふふっ・・なんか有希っぽいね。」

オレっぽいって何だろう・・・聞かれないと言わないのがオレっぽ

いのかなぁ・・・

「それで・・なんか相談とかあるの？」
「相談って？」
「いや・・だって弘子なんか少し様子がヘンだし・・・」
「あ、やっぱり？」
「も・・もしかして・・・彼のこととか・・・？」
「違うわよ。有希にそんなこと相談しても答えられないんじゃない？」
「うっ・・うん・・まあ・・・」
なんだ・・・わかってるんじゃない・・・オレが頼りにならないの・・・

「これよ。」
「え？　弘子にはプレゼントもらったじゃない・・・」
オレは3人には、もう誕生日プレゼントはもらってる・・・
「わたしのは誕生日じゃないわよ。どうしようかと思ったけど・・・バレンタイン。」
「チョコ？！　わたしに？　弘子が？」
「有希イヤがるかなと思ったんだけど、買っちゃったし。やっぱりイヤだった？　有希は女の子だもんね。」
「イ・・イヤじゃないけど・・・」
弘子はオレのことどう思ってるんだろう・・・やはり男だとバレたら今までどうりというワケにはいかないのかな・・・
「有希がその・・ね・・もちろん有希のことは女の子だと思ってるのよ？　でもなんだか有希にもあげたくなって。」
「うん、ありがとう。いいよ気にしてないから。」
オレは弘子からチョコを受け取った・・・人の気持ちって単純に割り切れるモノじゃない・・・弘子だって気持ちが混乱してるんだと思う・・・オレだってもう1年以上たつのにまだ混乱することも多

いし・・・

ーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーー

オレは家に帰ると、靴箱に入っていたチョコを開けてみた・・・チョコを贈る気持ちはオレにもわかるから、包みも丁寧に開けてしまう・・・男のころだったらこんなにキレイに開けなかったと思うけど、女の子がどんなにラッピングにも気を使うか知ってしまうと、とても雑な開け方なんて出来ない・・・明らかにお店のじゃなく自分で包んだのもある・・・それだけ気持ちがこもっているということだと思う・・・オレなんかのために申し訳ない気がする・・・もう男でもないのに・・・

もしもオレに愛の告白なんかのメッセージが入っていたらどうしようかと思ったが、そういうのはなかったからホッとした・・・いや、正確にはそんな感じのもあったけど、名前が書いてないからそんなに本気じゃないんだと思う・・・だって女どうしだもん・・・女どうしで愛し合うなんてオレに出来るハズがない・・・

弘子のチョコを開けるのは、かなりのドキドキだ・・・あ、メッセージカード・・・

“　有希　これからも友達よ　仲良くしようね　”

弘子・・・短いけど素敵なメッセージだ・・・オレもこれまでどおり仲良くしたい・・・女どうしとして・・・

たぶん弘子がチョコをくれたのには、深い意味なんか無かったんだと思った・・・ただ・・・あれ以来、弘子の前では少しぎこちなかったから・・・このことを伝えたかったんだろう・・・オレも弘子の前でも、もっと自然に女の子でいなきゃいけない・・・弘子にだけ男と知られてる状況ではちょっとムズカシイけど・・・

夜、純平からメールが来た・・・

“　ユウちゃん　チョコありがとう　ユウちゃんのはなぜか　スグにわかったよ　”

・・純平・・“　春日ユウ　”って名前に・・気づいてくれたんだ！息ができないほど嬉しい！　死んじゃいそう・・・苦しいよぉ・・・

オレは携帯を握りしめてベッドの上を転がり回ってしまった！

オレはチョコをあげる女の子の気持ちがわかったと思っていたけど、それはとんでもない間違いだった・・・“　本命　”は全然ちがう・・・！　こんな気持ちになるなんて思ってもみなかった・・・なんだかフワフワして・・まるで身体がなくなってしまったようだ・・・こういうのを“天までのぼる”なんていうのかもしれない・・・

オレは今ほど女の子になって良かったと思ったことはなかった・・・！

純平はオレにとっては、いまや特別な男の子だ・・・

オレも・・出来ることなら・・純平の特別な女の子になりたい・・・

・

そんなの・・オレには無理なのはわかってるけど・・・・

第７３話　ひな祭り　女の子の節句

今日は長谷川がオレのウチに来て勉強を教えてくれている・・・いつもはオレが長谷川の家に行くから、こういうことはあまりない・・・今日はなんか長谷川の部屋は都合が悪いらしい・・・

「ねえ順ちゃん、ここはどうしたらいいの？」
「あ、ここはｙは６－ｘでしょう？　だから、ここのｙに６－ｘを代入すればいいの。」
「あ～そっか・・・」
「・・・・・」
なぜか麻衣まで勉強を教えてもらっている・・・まあ、オレは勉強に関しては、まったくダメなお姉ちゃんだから長谷川が教えてくれるのはありがたいけど・・・しかし、いつから麻衣のやつ長谷川のこと順ちゃんなんて呼ぶようになったんだろう？　なんかすっかり長谷川になついてる・・・もともと麻衣は人なつこいところはあるけど・・・

オレが男だったころには、そんな麻衣の調子の良いところを疎ましく思ったこともあったけど、オレも女の子になってみると、そんなところも可愛く思えるから不思議だ・・・逆にそんな屈託のなさがうらやましいくらいだ。オレみたいな優柔不断な女の子は可愛くないと思う・・・オレももっと麻衣みたいに素直になれたらいいのに・・・

「麻衣ちゃんって、有希より勉強できるのねぇ。有希はいくら言っても憶えないのに。」
「うっ・・」
オレは自分が出来ないのはしょうがないと思ってるけど、麻衣と比

較されるのはさすがにこたえる・・・歳もだいぶオレの方が上なのに・・・

「でも、お姉ちゃんはお料理やお裁縫は得意だもんね。この前なんかおかあさんも、いつでもお嫁さんに行けるねっていってたもん！」

「そ・・そうなの・・・・？」

麻衣ったら・・・そんなこと言ったら・・長谷川さん引いてるじゃない・・・

「もう・・麻衣はそんなこと言わなくていいから！」

「そっか・・じゃぁ有希がお嫁に行く時には、わたしも結婚式に呼んでもらわなきゃ。」

「もう・・・長谷川さんまで・・・」

そんなイジワル言って楽しいのかなぁ・・・オレがお嫁さんに行くなんて・・ありえないんだから・・・

恥ずかしいなぁ・・・こんなことになったのも長谷川の部屋で勉強できなかったからだ・・・

「ねえ、なんで今日は長谷川さんの家じゃダメだったの？」

「・・・いま・・ちょっとわたしの部屋狭いのよ・・・」

「な・・なんで・・・？　いつも何もないのに・・・」

「何もないって失礼ねぇ、そりゃ有希の部屋みたいに可愛い鏡台とか、ぬいぐるみとか、そういうのはないけど・・・本箱もベッドもあるじゃない。」

「フクロウとか？」

「え？！ふくろうってなに？　順ちゃんふくろう飼ってるの？」

「ちがうよ麻衣・・・置き物のフクロウよ。長谷川さんフクロウの置き物集めてるのよね？」

「べつに集めてるんじゃないけど、いいのがあったら買ってるだけよ。」

「だったらさ、なんで狭いの？」

「・・雛人形飾られてるのよ・・・」
「雛人形？」
「ひな人形？」
オレたちは二人同時に言ってしまった・・・だって長谷川が雛人形を飾るなんて、なんか意外な気がしたのだ・・・麻衣もそう思ったのかも知れない・・・

「そんな・・二人でハモることないじゃない・・・」
「あ・・ゴメン・・・」
「お雛様は毎年飾らないとダメなのよ！」
長谷川・・ちょっと怒っちゃったかな・・・
「な・・なんでダメなの・・・？」
「毎年一回は箱から出して空気にふれさせて、また片付ける時に防虫剤とか入れ替えるの。そうしないと虫が喰っちゃうのよ。」
「・・・そうなの？」
知らなかった・・・うちには雛人形はないからなぁ・・・うちのとうさんやかあさんは、あんまりそういう縁起物には興味がないみたいだ・・・せいぜい初詣でに行くくらいか・・・オレも端午の節句とか祝ってもらった記憶がない・・・もっともオレの記憶なんてあてにならないけど・・・

「いいなぁ、順ちゃんち雛人形があって。」
そっか・・・オレはにわか女の子だからいいけど、麻衣は雛人形がうらやましいのかも知れないなぁ・・・
「本当はお母さんのだけどね。でもいずれはわたしが受け継がなきゃいけないんだろうけど、けっこう邪魔なのよねぇ・・・」
邪魔なんて・・・なんかお雛様が可哀想だなぁ・・・でもまあ、マンションでは片付けておく所も少ないのかも知れない・・・長谷川のところは何度か引っ越ししたみたいだし・・・そのたびに持ってきたからそんな風に考えたのかも知れない・・・

「ねえ順ちゃん、こんど見に行っていい？」
「・・う～ん・・・いいけど・・・あさってまでしか飾らないわよ。」
そっか・・・あさっては3月3日だもんなぁ・・・
「え～・・・もう少し飾っておけばいいのに。」
「麻衣、お雛様はすぐに片付けないといけないのよ。」
「え？・・なんで？」
「早く片付けないと結婚するのが遅くなっちゃうんだって。」
「へ～、有希良く知ってるじゃない。」
「うん・・まあ・・・」
実は三吉先生から聞いたんだけど・・・

「じゃあさ、今日お勉強が終ったら行っていい？」
「麻衣、そんな急に行ったら迷惑よ。」
「あ、ウチならいいわよ。麻衣ちゃんいらっしゃいよ！」
「ほんと？　お姉ちゃんも一緒に行こうよ・・・」
「え～・・・ほんとに迷惑じゃない？　お母さんもいるんでしょう？」
「うん、いると思うけど。でもママは喜ぶと思うわよ。だってママ有希のこと大好きみたいだし。」
「・・・ほんとう？」
「ほら、お姉ちゃん！行こうよ！！」
「う・・うん・・・」
行っていいのなら、最初から長谷川の家で勉強すれば良かったのに・・・オレは少しくらい狭くてもかまわない・・・

――――――――――――――
――――――――――――――

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

「ただいま。ママ、有希たち来たわよ。」
「お、おじゃまします・・・」
「あら、有希ちゃんいらっしゃい。麻衣ちゃんも来てくれたの？」
「おばちゃん、こんにちは。」
「今日は有希ちゃんの家で勉強するんじゃなかったの？」
「もう終ったの。ウチにお雛様飾ってるって言ったら、麻衣ちゃんが見たいっていうから。」
「あらそう？　ちょっと狭いけど、ゆっくり見て行って！」
なんかあんまり迷惑じゃなさそうなのでホッとした・・・

「わあ！」
長谷川の部屋に入ったとたんオレは思わず歓声をあげた。どんなお雛様かと思ったらすごい本格的なやつだ！おかげで長谷川の部屋はすっかり占領されてしまっている。これじゃぁ邪魔と言いたくなるのもわからないでもない・・・
「素敵ねぇ、麻衣・・・」
「うん・・・きれい！」
お雛様だけじゃなく、タンスとか牛車とか小物も素敵だ・・・オレはすっかりお雛様に魅了されてしまった・・・考えてみたらオレはちゃんとお雛様を見たことがない気がする・・・オレは男の子だったからこういうのには興味がなかったし、友達の家でも女の子の兄弟がいる人はいなかったから見なかったのだろうか・・・よく遊びに行ってた鈴木の家も弟しかいなかったし・・・

「そうだ！　麻衣・・お雛様の前で写真撮らせてもらったら？」
「え？」
オレと違って麻衣はいずれはお嫁に行くのだから、お雛様の前で写

真うつしたら、なんかご利益がありそうな気がする・・・そこまでじゃなくてもボーイフレンドと上手くいくとか・・・お雛様にそんなご利益があるのかどうか知らないけど・・・とにかく悪くはないと思う・・・

「お母さんいいですか？」

「もちろん良いわよ。あっ、ちょっと待って・・・」

お母さんは押し入れから座布団を出してきてくれた。

「ほら麻衣、座って・・・」

オレは無理矢理、麻衣をお雛様の前に正座させて写真をうつした。

こんなことならもっと女の子らしい服を着てこさせればよかったなぁ・・・

「じゃぁ有希も撮っときなさいよ。わたし写してあげるから。」

「え？　わたしはいいわよ・・・」

だってオレはお嫁に行かなくてもいいんだもん・・・

「有希ちゃん、そんなこと言わないで撮っておきなさい。麻衣ちゃんも写したんだから。」

うぅっ・・・お母さんにまで言われると・・・オレとしても断りにくい・・・オレももっと可愛い服、着てくれば良かった・・・お化粧もしてないし・・・

「撮るわよ！」

「う、うん・・あ、待って・・・」

オレは慌ててヒザ立ちしてスカートのシワを整えてから、また正座した・・・オレは三吉先生に女の子としてのたしなみを教えられたから、こういうことは気になってしまうのだ・・・

「いいじゃない！こうして写すと有希の雛人形に見えるんじゃない？ほら。」

「・・・・・」

画面にはお雛様をバックに女の子のオレが写っている・・・
「これなら有希もお嫁に行けるかも知れないわね。」
「・・・・！」
な・・なんてこと言うんだ・・長谷川は・・・・　イジワル言うにもほどがある・・・麻衣だけならともかく、お母さんもいるのに・・・お母さんにまで、オレがお嫁に行きたがってると思われたらどうするんだよ・・・
「も・・もう・・・わ・わたしがお嫁に行くハズないじゃない！」
長谷川のお母さんが冗談だと思ってくれたら良いんだけど・・・

「有希ちゃんが男の子だったら、順子と結婚してもらえるのにねぇ。」
な・・なにを?！　言おうとしたら長谷川が先に口を開いた・・・
「ママ変なこと言わないでよ！有希は女の子だから友達なんだからね。もし有希が男の子だったら興味ないわよ！」
そ・・そうなの？　長谷川はオレが女だから友達でいてくれるのか・・・？　オレが男のままだったら、長谷川とは友達じゃなかったんだ・・・？
「だって有希は女の子になったからこんなに可愛いけど、男の子の頃はすっごく普通だったもの。」
「あはは・・・そうよ、お姉ちゃんって男だったころは全然パッとしなかったもんね。」
ま・・麻衣まで・・・？

そりゃぁ・・・オレは女になってしまったけど・・・男のオレはもういないけど・・・それでも男の頃のオレをそんな風に言われるのは悲しい・・・オレは男としてそんなにダメだったのだろうか・・・？

「どうしたの、有希?」

「・・・・」
「泣いてるの？」
「・・・・」
他人にはオレの気持ちなんてわからないんだ・・・オレは今では女の子になったことを後悔はしていない・・・ときには女の子になって良かったと思うことさえある・・・それでもオレの心の中にはまだ男の部分も少なくないのだ・・・

　オレのことを性同一性障害だと思っている人から見れば、オレは女の子になれて幸せなことばかりだと思うのかも知れないが、オレ自身は自分のことをそんな風には思っていない・・・オレは決して女の子になりたくて、なったわけじゃない・・・でもみんなはオレが好きで女の子になったと思っているから・・・男の頃のオレを悪く言っても、オレは気にしないと思っているのだろう・・・でも麻衣までそんなこと言うなんて・・・麻衣がオレのことをどう思っているのかは、正直オレにも良くわからないところがある・・・

「ふたりとも、そんな風に言っちゃ可哀想でしょう？　男の子のころも有希ちゃんは有希ちゃんなんだから。」
「え・・でもわたしたちは有希が女の子になって良かったって言ってるのよ？」
「それはそうでしょうけど、男の子のころだって有希ちゃんには違いないんだから、自分のことを悪く言われて嬉しい人はいないでしょう？」
うぅっ・・・さすがお母さんは大人だ・・・良くわかってる・・・
「そっか・・・ごめん有希・・・」
「・・ううん・・・」
「ごめんね、お姉ちゃん・・・」
「ううん・・いいの・・・わたしこそゴメンね・・・なんか急に悲しくなっちゃって・・・」

オレは手の甲で涙をぬぐった・・・別に・・二人に悪気がないのはわかっている・・・オレがみんなに本当のことを隠してるから仕方がないのだ・・・もっとも今では何が本当なのかオレ自身にも良くわからない部分も多いのだが・・・

でも、お雛様の前で写真を写してもらったのは、オレもけっこう嬉しかった・・・オレも女の子として認められたような気がする・・・昔から続いている行事にはそんな効果もあるのかも知れない・・・

だからといって、オレもお嫁に行けるなんて思わないけど・・・

オレも最近では、そんなに気をつけなくても女の子でいられるようになっている。クラスでも普通に女の子たちとしゃべってるし、女の子たちが楽しむことを、同じように楽しく感じることが出来るようになってきた。それでもオレの中には男のころと同じオレがいる・・・でも女の子として楽しんでいるオレと、男のオレは、別のオレなのかどうか良くわからない・・・

オレの中の男の部分も、いつかは消えてしまうのだろうか・・・？

でも・・オレの中の男の部分が小さくなっているような気はしない・・・それでもオレは以前よりは女の子に近づいてるような気がする・・・これっていったいどういうことなのだろう・・・？

男のオレは残ったまま、オレは女になっていくのだろうか？

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

長谷川の家から帰る途中、オレはふと気になって麻衣に聞いたみた。

「そいいえばさ、麻衣はバレンタインのチョコあげたの？」
「ううん。あげてないよ。」
「え？　誰にもあげてないの？」
「うん。」
「だって・・麻衣・・好きな男の子がいるって言ってなかった？」
「あぁ、ずっと前の話でしょう？　ちょっとカッコイイなって思ってたけど、もう飽きちゃった。」
「そ・・そうなの・・・」
なんだ・・・そうなんだぁ・・・・
中学生の恋なんて・・あんがいそんなものかも知れないなぁ・・・
オレには女の子としての中学生の経験なんて無いから良くわからないけど・・・オレが中学生の頃は、まだまだ子供だった気がする・・
・

「ねえ、麻衣はさ、わたしのこと“お姉ちゃん”って呼んでるけど、本当にわたしのこと女だと思ってるの？」
「う〜ん・・どうかなぁ・・・」
「どうかなぁって・・・自分のことじゃない。」
「そうだけど・・・もちろんお姉ちゃんが本当は“男”だってのはわかってるけど・・でもあたしお姉ちゃんの方が好きだもん！」
「・・・・・」
「あっ、男の頃のお姉ちゃんが嫌いってワケじゃないよ。ただ・・
今のお姉ちゃんの方が優しいし・・・男の頃より、今の女の子にな

ったお姉ちゃんの方が本当のお姉ちゃんって気がするの。」
「本当のお姉ちゃん・・・？」
「うん・・・うまく言えないんだけど・・・お姉ちゃんはこっちが本当っていうか・・・」
「・・・・・」

なんだか良くわからないけど・・・オレには女の子の方が合ってるってことなのだろうか・・・？

それじゃ男の頃のオレは何だったんだって気もするけど・・・でも今は女の子なんだから、女の子の方が合ってるのを喜ぶべきなのかなぁ・・・なんかフクザツな気分だ・・・

そんなこと言いながらも、純平のメールにはまるで女の子になってしまうオレがいるのだが・・・オレっていったいどうなってるんだ・・・？

おまけ「ヒロイン」について

このテの話には、ほとんどの作品に幼馴染みの女の子が登場します。たいてい男勝りで、強い女の子の場合が多いと思います。そうでもない場合でも主人公が女っぽい分、引っ張っていけるようなタ

イプの娘が多いようです。（主人公が女になっても性格は男のままの場合は女の子も普通です。そういう場合はヒロインは主人公が男だった頃に恋心を抱いていた娘という設定がほとんどです）

この『オレは女子高生』でのヒロインはやっぱり「長谷川」なのだろうと思います。　ただ、先に言った女の子の設定には合わない部分も多いです。「長谷川」は幼馴染みではないし、男のころの有希の事もあまり知りません。なぜそんな設定にしたかというと、あまりに知ってる設定にすると、次第におせっかいババアのようになってしまったり、主人公を動かすのに邪魔になったりすることも多いからです。最後に主人公が男に戻ってヒロインと引っ付く場合はそれでもいいのですが、この『オレは女子高生』では有希は男には戻らないから邪魔になるだけなのです。

この話では、普通ヒロインに求められる設定を、数人に割り振っています。

まず「長谷川」は有希が男だと知ってる意外は、あまり有希のことを知りません。長谷川の有希に関する知識はほとんどが高校に入ってからのものです。有希も長谷川には初めに男として会っているので、男としての意地もあるから、なかなか甘えることができません。

「レナ」は小さいころは近くに住んでいた幼馴染みである反面、有希が男らしく生きようと決めてからはあまり会ったことがありません。なのでレナの中では有希は小さいころの女の子として遊んでいたイメージと、今の有希がつながってるのです。レナにとっては有希が男の子だった時代は内心淋しい思いをしていたかもしれません。レナの有希に対する態度は小さいころを引きずっているので、有希もレナには安心して甘えることができるのです。（ときどきイ

ジワルされますけど、甘えられる分、長谷川のイジワルよりマシなのでしょう）もともと小さいころからレナの方が主導権を握っています。

「佐倉千里」は有希の一番の女友達です。ただ男であることは知られていないので、有希もまったく打ち解けるということは出来ません。いつも本当は男だということを隠しているのを悪いと思いながらつき合っています。また千里は女らしい性格なので、ふたりになると有希は自分の男っぽさが目立ってしまい、ついボロを出してしまうのではないかと不安になってしまいます。だから一番の女友達だと思っているのに、最後の所で打ち解けることができないのです。

「原口弘子」は女どうしの友達でしたが、男だとバレてしまったためちょっと微妙な関係になってしまいました。有希は原口の前で女の子らしいことをやるのは気が引けてしまいます。原口は有希に対し以前と変わらない態度で接していますが、内心どう思っているのかはわかりません。

そんなワケで有希はそれぞれの女の子たちと違うスタンスでつき合わなければなりません。

普通このテの話では主人公とヒロインはずっと一緒に行動しますが、この話ではクラスメイトの千里、弘子、直美の3人といる時以外は、それぞれのコと別に行動しています。また撮影などでは有希が1人になることも多く、今後は自発的な行動も増えていくのではないかと思うので、それが女の子たちと有希の間にどういう新たな関係を作っていくのか私も大いに興味があります（笑）

まあ、ここまで書いてきて思うのは、つまるところこの話にはハ

ッキリしたヒロインはいないということかも知れません。あえて言うならヒロインは有希なのかも・・・

ーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーー

これまでのおまけの場所

３６話　制作おぼえがき　０８．６．２１
４０話　『オレは女子高生』の世界　人物、舞台設定など
４５話　架空の西鉄大牟田線案内
４９話　名前について
５３話　ドラマ化を妄想してみる
６１話　「放生会編」おまけ
６７話　１周年を迎えて
７１話　『オレは女子高生』の世界　第２弾（架空の西鉄大牟田線案内付き）ドラマ『ブザー・ビート』のお知らせも

第７３話　ひな祭り　女の子の節句（後書き）

今回ぜんぜん話が膨らまなくて苦労しました。途中でボツにしようかとも思いましたが、捨てるにもオシイところもあったので時間をかけて細かいところをツメてみました。
まあ、こういう内容が少ない話が出来るのも、ネット小説ならではという気がします（笑）
短いのでおまけを書いてみましたが、これまた上手く書けず、書き直しました（苦笑）

第７４話　お返し　本当のオレの気持ち

「１年３組の戸田有希さん・・・１年３組の戸田有希さん・・・至急校長室まで来てください・・・くり返します・・・１年３組の・・・・・・」

お昼休みにいきなり校内放送で呼び出されて驚いた・・・何かマズイことでも起こったのだろうか・・・たしか前に呼び出された時はモデルをやったのがバレた時だった・・・あの時は呼び出される理由がわかっていたからまだ良かったけど、今回はまったく思い当たるフシがない・・・いったい何なんだろう・・・

オレは急いで校長室まで行くと、ドアの前で息をととのえ、制服が乱れていないか確認した・・・やっぱり校長室に入るのは緊張する・・・何で呼ばれたかわからないとあってはなおさらだ・・・

「・・失礼します・・・」

ドアをノックしてオレが入ると、校長先生はニコニコしながら待っていた・・・悪いことじゃないのかな・・・？

「やあ、戸田君よく来たね。」

別に・・・呼ばれたから来たんだけど・・・

「まあ、掛けたまえ。」

「あ、はぃ・・・」

オレは恐る恐る来客用のソファーに座った・・・緊張するなぁ・・・教頭先生がいれば少しはマシだけど・・・校長先生と二人だけなんて・・・

「先日はバレンタインのチョコをありがとう。」

「あ、いえ・・・」

義理チョコだけど・・・

「ときに、今日は聞くところによるとホワイトデーというものらしいね。」
「あっ・・はい・・・」
そういえばそうだった・・・
「実は女房に言われてねぇ。チョコをもらったのならちゃんとお返しするものだってね。」
「はぁ?」
「だから君にこれをと思ってね、まあ私には良くわからないから女房に買って来てもらったんだがね。」
「え?・・え?!　わたしに・・・?」
まさか校長先生からチョコのお返しをもらうなんて思いもしなかった・・・あのチョコはあくまで義理だし・・・まあ、校長先生用だから、義理といっても上等なやつだけど・・・

「あ・・ありがとうございます・・・」
オレはどうしたら良いのかわからなかったけど、とにかく受け取ることにした・・・だって校長先生の奥さんがわざわざ買ってきてくれたのに、もらわない訳にはいかない・・・

でも・・校長先生からもらってもいいのかなぁ・・・

オレは校長室を出ると、急いで誰にも見られないようにして保健室に逃げ込んだ・・・保健室が近くて助かった・・・
「どうしたの?　有希ちゃんそんなに慌てて?」
「あ・・あの・・・これ、放課後まであずかってもらえませんか・・・?」
「なに?これ。」

「校長先生にいただいて・・・バレンタインのお返し・・・」
「へ～・・・校長先生もやるわねぇ。お返しなんて・・・」
「わ・・わたしはべつに・・・お返しなんてよかったんだけど・・・」

「いいじゃない、貰っときなさいよ。校長先生だって、まさか本気にしてる訳じゃないだろうし。」
「あ・・当り前ですよ・・・本気にされたら困っちゃう・・・」
だいたい校長先生はオレが男だと知ってるんだから、本気にするハズがない・・・

「でも、有希ちゃん校長先生にチョコあげてたのね。」
「あっ・・はい・・・だって教頭先生だけってワケにはいかないだろうし・・・」
「それで？　教頭先生からお返しは？」
「ううん・・・教頭先生からはもらってません・・・あ・・でも放課後までにくれるのかも・・・」

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー
ー　ー
ー

けっきょく教頭先生はお返しをくれなかった・・・まあ、オレはお返しを期待してあげたワケじゃないから別にいいんだけど・・・
でもちょっとオレの中では校長先生の株があがったかな・・・奥さんの株かもしれないけど・・・

しかし、オレ自身はこのままで良いんだろうか・・・女の子たち

からチョコもらったのに・・・
もっとも靴箱に入っていたチョコには名前を書いてあるのは無かったから、お返ししようにも出来ないんだけど・・・

何で自分が贈ったとわからないチョコをくれるのか不思議に思っていたら、千里に「芸能人にあげるのと同じような気持ちなんじゃない？」と言われた・・・ただあげただけで嬉しいんだろうって・・・オレにはそういう気持ちは良くわからないけど、オレとしては名前なんか無くて助かったのも事実だ・・・だって誰がくれたのか判ったら、オレそのコとどう接すればいいのかわからない・・・

しかし、芸能人にあげるような気持ちなら、オレよりもＪニーズとかのアイドルの男の子にあげればいいと思う・・・カッコイイ男の子なんていっぱいいるのに、何で女のオレなんだろう・・・

でも・・・弘子にもらったチョコはどうしたらいいのかな・・・オレとしてはお返しくらいしてもいいんだけど、そんなことしたら弘子がチョコをくれたことに変な意味が出来ちゃいそうでコワイ・・・弘子がオレにチョコをくれたことに深い意味はないのだから、オレはお返しなんかしなくていいんだろうと思う。

オレは正直、ホワイトデーなんて忘れていた・・・だってバレンタインデーにチョコをあげるのは見たことあるけど、ホワイトデーに男の子がお返ししてるのなんて見たことがない・・・男の子ってもらうことには真剣だけど、お返しのことなんて考えてないんじゃないのかなぁ・・・みんなコッソリあげてるのだろうか・・・？

忘れていたのに、校長先生がお返しなんてくれるものだから、オ

レもお返しもらえるのか気になってしまう・・・純平・・・オレにお返しくれるかな・・・オレはべつに期待はしてないけど・・・もらえればその方が嬉しいに決まってる・・・だって・・・それって純平がオレのこと思ってくれてるってことでしょう？・・・

でも・・・良く考えたら純平はオレの住所なんか知らないんだっけ・・・オレは純平みたいに事務所に入ってるワケでもないし・・・だったら、もし送ろうと思っても無理な話だ・・・

いいんだ・・・オレはお返しなんて最初から期待してなかったし・・・オレと純平は恋人でも何でもない・・・ただのメル友だ・・・だからいいんだ・・・メールさえもらえればそれでいい・・・

――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――

・・・期待せずに１２時近くまで待ってたけど、今日は純平からのメールは来なかった・・・ドラマも近いし・・・たぶん忙しくてオレなんかにメール送る時間なかったんだと思う・・・絶対毎日来るというワケじゃないし・・・今日来なかったとしても何の不思議もない・・・

でも、今日は欲しかったなぁ・・・・ついこれまでにもらったメールを開いて眺めてしまう・・・

オレの方から送ればいいんだけど・・・なんかいつも純平のメー

ルに返信してるから、オレから送ったら催促してるように思われそう・・・純平はオレと違って忙しいんだから、純平が時間がある時にくれるだけでいいと思ってたのに・・・もしかしたらオレってワガママなのかなぁ・・・

オレたちはメールしてるから、なんとなく純平と親しくなったような気がするけど、実際に会ったのは初めて一緒に撮影した時の一回きり・・・純平は東京でオレは福岡・・・それに純平は役者もやってるからモデルの仕事自体そんなに多くない・・・そんな状況では今後も九州ＪＩＮＯＮの撮影でこっちに来ることなんてまず無いだろう・・・その時オレが呼ばれる可能性はさらに少ないと思う・・・

せっかくお正月からまたメール出来るようになったのに・・・これではいつまで続くか心配になってくる・・・オレはまだ高校生だから、そうそう東京なんて行けないし・・・

それに・・・もし純平に会えることがあったとしても、オレはどうしたらいいのかわからない・・・オレはメールだから女の子として話せるけど・・・実際に会っても、メールの時と同じ女の子でいられるのか自信がない・・・だって・・・メールのオレは・・・もうオレじゃない・・・いつの間にかすっかり女の子になってしまっているのだ・・・純平がメールのオレを期待したら、きっと幻滅するに違いない・・・オレはあんなに可愛い女の子じゃないから・・・純平とメールしてるのはオレじゃなくて“春日ユウ”だもん・・・

ーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーー

―――――――――

数日後、オレは撮影のためにスタジオに行った・・・行ってはじめて撮影の内容を聞き大いにあせった・・・水着の撮影なんて・・・オレはタマはないけどチンチンはあるんだから・・・無理に決まってる！

どうりでムダ毛の処理をしてくるように念をおされたハズだ・・・オレはエステでムダ毛の処理はしてもらってるので、大丈夫だと思って撮影の内容も聞かずに安うけあいしてしまった・・・あのとき水着の撮影だと聞いていたらオレは断ったのに・・・

こっそり編集長の佐々木さんに聞いてみた。佐々木さんはオレが本当は男だと知ってるんだから、オレを呼ばなきゃいいのに・・・でも佐々木さんはオレには“パレオ”付きのをまわしたから大丈夫だと言って平気な顔してる・・・“パレオ”って何だろう・・・

実際にオレが着る水着を見て意味がわかった・・・“パレオ”って水着の上に巻くスカートみたいなヤツだ。たしかにこれなら股間は隠れるけど、でも・・・“パレオ”付きの水着はほとんどがビキニだ！！　オレ・・・ビキニなんて着れないよぉ・・・ワンピースの水着だってギリギリなのに・・・

だけど・・今さらやめるなんて言えそうにない・・・今日は千里も一緒だから急にやめるなんて言ったら迷惑かけるし、何より、なぜやめるなんて言い出したのか怪しまれかねない・・・オレは千里には怪しまれたくない・・だってオレにとって一番の女の子の友達なのに、男だなんてバレたらもう生きていけない・・・

「こんなに早く今年流行の水着きれるなんて、なんだか得した気分ね。」
「う・・うん・・・」
オレはとてもそんな気分にはなれないが、ここは話を合わせるしかない・・・
「・・・素敵よねぇ、だけどわたしスタイルに自信ないなぁ・・・ビキニなんて着たことないし・・・」
「なに言ってるのよ、有希が自信ないんだったら、わたしなんかどうすればいいの？」
千里はオレの手を強く握って言ってくれた・・・
「有希はスタイルもいいんだから、もっと自信もっていいのよ。」
「・・うん・・・」
それが本当だったらいいんだけど・・・自信なんてもてないよ・・・

更衣室で水着に着替える・・・裸になって鏡に映ったオレの身体・・・たしかに昔よりはずっと女の子らしくなったと思うけど・・・ビキニなんて着れるだろうか・・・

胸はあいかわらずBだけど、最初にBカップのブラをつけた頃と比べれば、今のブラはパットの厚さがだいぶ薄いから、実際は少し大きくなっている・・・固い感じもなくなり、ほどよく下がってきた・・・だからエステのお姉さんにも、お風呂の時にちゃんと胸を持ち上げるようにして洗うように言われてる・・・普通に洗ってるとオッパイと胸の境い目がうまく洗えないんだって・・・　前はブラのカップに胸を入れる感じだったけど、今は多少持ち上げる感じも加わった・・・だから前より少し重さを感じる・・・

去年の夏に水着をきた時はサポーターをつけたけど、今日はサポーターもない・・・それに、あったとしてもビキニではサポーター

がはみ出てしまうかもしれない・・・オレを助けてくれるのは、さっきスタジオの隅っこに置いてあったのを、こっそり持ってきたガムテープだけだ・・・これで何とかするしかない。

ガムテープをチンチンに張り付けて、後ろに引っぱる・・・引っぱりすぎて痛くなってもいけないから、そこは用心しなきゃいけない・・・後ろはうまくお尻の割れ目に隠すように注意しながら貼った・・・片寄ってビキニのパンツからはみ出たら大変だ・・・

貼ってみると思いのほかスッキリしてしまった・・・前に水着をきたときは、まだタマがあったけど今は無いからか・・・？　オレのは普通の男の人と違って立つ心配もない・・・

ビキニのパンツを穿いたら、思ったよりも目立たなかった・・・いや・・全然目立たないと言ってもいい・・・少しホッとした・・・これにパレオが付けば股間にヘンなものがついてるのがバレる心配は無さそうだ・・・

でもオレの心配は股間だけじゃない・・・そもそもオレの身体はビキニを着ても女の子に見えるのだろうか・・・？　ビキニのブラはパンツと同じ生地だが、中のカップが案外しっかりしてた・・・脇の方が少しパットが厚めだから、オレの小さい胸でもいい感じだ・・・少し大きく見える・・・

オレはパレオを腰に巻きつけて更衣室を出た・・・

「さ・・佐々木さん・・・おかしくないですか・・・？　女の子に見えないんじゃ・・・」

「全然問題ないと思うけど？　ユウちゃんは自分でおかしいと思う？」

「わ・・わかりません・・・」
オレには自分の姿を冷静に見ることなんて出来ない・・・

「ここは？」
そう言って佐々木さんはパレオをめくってオレの股間を見た・・・
オレは慌てて股間を押さえようとしたけど間に合わなかった・・・
「こっちも全然大丈夫じゃない。ユウちゃん本当に付いてるの？」
「つ・・付いてますよ！」
こんなこと言い張ってもしょうがないけど・・・つい男としての見栄が出てしまった・・・今のオレには無くたっていいモノなのに・・・なんかバカみたい・・・

いざ撮影に入ると、オレも恥かしいなんて言ってられず、進藤さんの言葉に応えるので精一杯・・・いつの間にかいつもの調子で撮影していた・・・水着もたくさん着替えなきゃいけないから、自分が女の子に見えるかなんて気にしてる余裕もない・・・

今日はぜんぶ千里とツーショットでの撮影なので、着替えるのが遅れると千里や進藤さんを待たせてしまう・・・どんなに慌ただしくても、撮影のときは笑顔を作らなきゃいけないから、モデルの仕事も楽じゃない・・・撮影が終るころにはもうクタクタだ・・・

でもオレはへばってもいられなかった。撮影したのを見せてもらわなきゃ安心できない・・・
「・・・・・」
写真のオレはちゃんと女の子に見えるようだ・・・股間も引っぱって貼りつけたせいか、千里より平たいくらいだ・・・髪が長くなったせいか、千里と比べてもオレの方が女っぽく見えなくもない・・・いったいどうなってるんだろう・・・進藤さんの撮影が上手なせい

もあるんじゃないかなぁ・・・

モニターから顔をあげると、佐々木さんと目が合った・・・すると佐々木さんは手でＯＫというようにサインを作ってみせた・・・オレの心配はとりあえず何とかなったみたいで一安心・・・でも、もう水着の撮影なんてまっぴらだ・・・

オレと千里が着替えて帰ろうとすると、オレだけ佐々木さんに呼び止められた。

「はい？」

オレは小走りに佐々木さんのところまで走っていった・・・ガムテープを剥がした股間が少しヒリヒリして痛い・・・

「あぶなかった、あやうく忘れるところだったわ！」

そう言って佐々木さんはオレに箱を渡してくれた・・・ゆうパック・・・？

「2、3日前だったかしら・・編集部に届いてたのよ。こんど撮影の時に渡そうと思って。」

オレは佐々木さんの言葉も途中から耳に入らなかった・・・

宛名には“道端純平”の文字・・・・

「ハ・・ハサミありますか・・・？」

オレは急いでゆうパックの箱を開けた・・・中には可愛い瓶に入ったキャンディー・・・これってバレンタインのお返しだ・・・純平、編集部に送ってくれてたんだ・・・！

「・・うぅっ・・・」

オレは嬉しくて思わず泣いてしまった・・・

オレは自分にウソをついていた・・・期待してないなんてウソだ・・・ただ期待するのがコワかっただけなのだ・・・

オレは純平に恋してしまったのかもしれない・・・

男のオレが・・男の子に恋しちゃってもいいの・・・・？

第７５話　春休み　桜の開花も間近

今年は暖かくなるのが早いみたいで、電車の窓から見える春日原（かすがばる）の桜並木も蕾がふくらんできて、日に日に木全体がピンクっぽくなっている。

期末テストが終れば春休み・・・春休みが終って新学期になれば、オレも2年生だ・・・

なんだかオレが高校2年生になるなんて信じられない・・・ついこのあいだまで何にも考えてない中学生だったのに・・・オレはこの1年でずいぶん成長したような気がする・・・ただし女の子としてだけど・・・

オレももう１６才・・・だからいつまでも女の子っぽい趣味ばかりじゃなくて、もっと女らしくならなきゃいけないのかなぁと思う・・・少しづつでも大人っぽい服や、お化粧なんかも憶えていきたい・・・オレにだってそれくらいの自覚はある・・・

でも・・それなのに・・・オレときたら・・・このところ気候が暖かい日が増えてきたせいなのか・・・なんだか最近、気持ちが落ちつかない・・・なんだかモヤモヤする・・・

授業中もぼんやり窓の外を眺めてしまい、先生に注意されたことも何度かある・・・オレはもともと勉強は良く解らないから、授業中はボーッとしがちだけど（そんなだからいつまで経ってもダメなのだと長谷川には言われるけど・・・）それともちょっと違う感じだ・・・

男の頃だったらこんな時、オナニーでもすれば少しは気持ちも晴れるのではないかと思うのだが、今のオレにはそれも無理だし・・・こんな時はちょっとだけ男だった頃がなつかしく思えることもある・・・射精のときの快感は今でも忘れることができない・・・今になって思えば、男って単純なところが良かった・・・

聞くところによると女の子もオナニーをすることがあるらしいけど・・・それがどういうものかは良く知らないけど、たぶんそれも女の子のアソコがあってこそだと思う・・・女の子として半端なオレにはそれもない・・・まあ、オレは女になってまでオナニーしたいとも思わないけど・・・

―――――――――――――――
―――――――――――――――
――――――――――

春休みに入る少し前から、オレはムダ毛の手入れをしなかった。オレのムダ毛はほとんど永久脱毛してしまったが、それでも時々眠っていた毛が生えてくるから、それはシェーバーなどで剃らなきゃいけない。もっともオレはカミソリ負けしてしまうから、もっぱら電気シェーバーだ。

おかげで春休みに入ってエステに行く頃には、ワキやビキニラインにポツポツと毛が生えてきた。これをまた永久脱毛するワケだ・・・

脱毛は少ないからすぐに終り、体をマッサージしてもらっている

と、エステのお姉さんが言った。
「有希ちゃんの肌、性転換してからキメが細かくなったわねぇ。」
「え？わたし性転換なんかしてないですよ！　ただ・・タマを取っちゃっただけです・・・それも去年の秋だし・・・」
「あ、そうなの？　有希ちゃん最近またキレイになってきたから、性転換したんだとばかり思ってたわ。」
「・・・・・」
オレはまだ高校生だから性転換なんかするハズがない・・・もっとも高校生じゃなくてもオレは性転換なんかしない・・・だってそんなの必要ないし・・・
「そっか・・だったらどうしてかな？　モデルを始めたのが影響してるのかも知れないわね？」
「モデルっていっても・・読者モデルですけど・・・」

たしかに読者モデルを始めたことは、オレに女の子としての自覚を持たせるのには役立ってるかも知れない。だって普通では着ないくらい多くの服を着ることが出来るし、自分で買うと好きなタイプが決まっちゃうけど、モデルは仕事だから与えられた服は苦手でも着なきゃいけない・・・そうやっていろんな服を着てるうちに、オレも少しづつ苦手意識が少なくなってきた。　だけど、それと肌とは関係ないような気がするけど・・・

実は今日の本当の目的は、エステではなく二光（にっこう）さんにメイクを教えてもらうためだった。エステを終えたオレは3階の化粧ルームへ行った。
「こ・・こんにちは・・・」
「あらぁ～有希ちゃん、お久しぶり～！」
二光さんは男だけど女の人の恰好をしてる・・・俗にオネエって言われるような人だ。でも体も結構ゴツイから女の人には見えない・・

・とくにテレビに出るときなんか以外では、お化粧もあまりしてないから、近くで見るとちょっとキツイ・・・・　まあ、オレにはそんなこと言う資格はないんだけど・・・

「ＪＩＮＯＮ見てるわよ～！　有希ちゃんすっかり女の子になっちゃって～！」

「そ・・そんなことないですよ・・・写真で綺麗に撮ってもらってるだけで・・・」

雑誌のオレは、実際のオレとはだいぶ違う・・・雑誌のオレはあくまで“春日ユウ”だ・・・

オレは高校生だからこれまで、どちらかといえば子供っぽい、素肌っぽいメイクを心がけてきたのだが、読者モデルの仕事をするようになってから、もう少しちゃんとした大人のメイクも出来るようになりたくなってきた・・・だから今日は二光さんにもう少し大人っぽいメイクを教えてもらいに来たのだ・・・

二光さんは、まず下地を作ってから、説明しながら顔の半分だけをメイクをしてくれた・・・普通はメイクをすると、その人の個性が無くなってしまったりするものだけど、二光さんは個性を殺さずに綺麗なメイクをする達人だ！　オレの個性はどうだかわからないけど、やっぱり撮影の時のメイクとは全然ちがう！　いつもの“春日ユウ”とは違うから、なんだかこっぱずかしい・・・大人のメイクをしたオレなんて・・・なんかヘンな感じだ・・・

「今やった要領で、こっち半分は有希ちゃんがやってみて～。」

「はい。」

オレはまだお化粧していない顔の半分を、教えてもらいながら完成させた。

「いいわよ～！上手じゃない有希ちゃん！」

「そ・・そうですか・・・？」
なんかそんなに褒められると照れくさい・・・
「眉尻をカットすればもっと自由度が高くなるんだけど～眉尻半分カットしない？」
「そ・・それはちょっと・・・」
オレの学校も少し眉を整えるくらいなら大丈夫だけど、さすがに細眉やカットしすぎるのは無理だ・・・それに眉を半分もカットしたら、メイクした時はいいだろうけど、学校ではお化粧なんて出来ないから、眉毛が半分無いヘンな顔になってしまう・・・

「やっぱりそうよねぇ～」
二光さんはちょっと残念そうだ・・・もっと完璧にやりたいのだろう・・・でも高校生のオレにはそれは無理だ・・・
「そうだ！有希ちゃん、明日の夜は用事ある？」
「明日の夜？・・・べつに無いですけど・・・」
「それじゃぁ、一緒にお花見しない？　組合いのお花見があるのよ～」
「組合い・・・ですか？」
何の組合いだろう・・・美容組合いかな・・・？

「組合いって言ったらアタシたちの組合いよ～オ・ネ・エ組合い～！」
「あっ・・・」
そっちの組合いかぁ・・・
「有希ちゃんみたいなコもたくさん来るわよ～！」
「え？　わたしみたいな・・・？」
オレみたいな高校生がたくさんいるなんて聞いたことがないけど・・・
「中洲や三丁目のお店のコもいっぱい来るのよ～」
「・・・・・」

中洲は博多と天神の中間にある歓楽街・・・大人が遊ぶところというイメージが強い・・・道沿いはまだいいけど、奥の方はかなりコワイ人がいっぱいいるらしい。オレみたいな高校生が行くにはちょっとコワイところだ・・・

三丁目とは天神三丁目のことで“親富孝通り”を中心にした若者中心の飲み屋街だ・・・ちなみに親富孝通りは昔は“親不孝通り”と書いていたらしい・・・昔は通りの先に予備校があって、親不孝な若者が遊んでいたからだそうだ・・・今は予備校が無くなって、ちょっとお客が少なくなってしまったとか新聞に書いてあったっけ・・・

お店のコというのは、たぶんニューハーフバーっていうところで働いている人のことだと思う・・・二光さんはオレのこともニューハーフだと思っているのだろうか・・・？　オレはべつにニューハーフじゃないんだけどなぁ・・・

「愛島ハルカちゃんっていう“みつまめ姫”でトップのコも来るって話よ～？」

「みつまめ姫？！」

“みつまめ姫”っていったら確か三丁目にあるニューハーフパブのことだ・・・地元のテレビ番組で見たことがある・・・なんかショーとかすごいらしい・・・そこのトップの人が？！　トップっていうくらいだからキレイな人なんだろうなぁ・・・オレもちょっと見てみたいかも・・・だって高校生じゃそういうところへは行けないもん・・・

「・・わたしも・・お花見行きたいなぁ・・・」

「来なさいよ～！有希ちゃんなら大歓迎よ～！」

「・・でも・・かあさんが許してくれるかなぁ・・・夜なんて・・・

」
「それじゃ、お母さんが許してくれたら来なさいよ！　もし許してくれそうになかったら、アタシに電話ちょうだい！アタシから説得してあげるから～！」
「・・うん・・・」
でもオレはそこまでかあさんに逆らいたくはない・・・二光さんには悪いけど、他人に説得してもらってまで行きたいとは思わない・・・

―――――――――――――――
―――――――――――――――
――――――――――

「こんにちは！おばちゃん。」
「いらっしゃい有希ちゃん、待ってたわよ。」
麻弓（まゆみ）おばちゃんはかあさんの妹・・・春日原の駅の近くで美容院をやっている。そして麻弓おばちゃんはレナのお母さんだ。
「おばちゃん、今日はレナはいるの？」
オレは椅子に座ると、ケープを首に巻きに来たおばちゃんに聞いてみた。休みなんかの忙しい日はレナもお店を手伝ってるって言ってたからだ。
「今日はここには来てないのよ。」
「じゃぁ・・家にいるのかな？」
「どうかしら？　天神にでも行ってるんじゃないの？　休みだからって遊んでばっかり・・・」
「ハハハ・・・」
レナらしいなぁ・・・レナは買い物が好きだから、しょっちゅう天

神に行ってる・・・レナの家がある平尾（ひらお）は天神にも近いし。

おばちゃんはオレの髪を両手ですくうようにして手にとって言った。

「有希ちゃんの髪も長くなったわねぇ・・・それにすっかり女らしくなって・・・」

「な・・なに？　おばちゃん・・・」

急にそんなこと言われたら恥ずかしくなっちゃう・・・

「去年の今頃じゃない？　有希ちゃんがウチに来たの。」

「あっ・・うん・・・」

そういえばそうか・・・正確に言えばもう少し後だけど・・高校に入学する何日か前だから・・・

「あの頃の有希ちゃんも十分女の子らしくて可愛かったけど、今の有希ちゃんはすごく綺麗よ。」

「・・そんなぁ・・・お化粧してるからよ・・きっと・・・」

「うふふ・・・そういうとこは変わらないわね。」

そうだよ・・・オレはぜんぜん変わってない・・・見た目はだいぶ女の子らしくなったと思うけど・・・

「それで？　今日はどうするの？　少し短くする？」

「ううん・・・いつもと同じで、後ろと前髪を揃えてください・・・まだ切っちゃいけないって言われてるの。」

「そう？　わかったわ。」

おばちゃんはそう言ってオレの髪を濡らして、きれいに梳かしていく・・・オレの髪はストレートパーマをかけているから真直ぐだ・・・本当はパーマはダメなんだけど、真直ぐな分には文句は言われない・・・それに今のオレは学校では三つ編みにしてるから、ほとんど関係ない。今でもストレートパーマをかけてるのはモデルをやるときに便利だからだ。三つ編みの型がついても霧吹きで簡単に取ることが出来るのだ。

カットが終って髪を洗うときおばちゃんが言った・・・
「少しお化粧がとれちゃうかも知れないけど・・いい?」
「あ、だいじょうぶです・・どっちみちこの服にはちょっと合わないから・・・だから取っちゃっていいんです。」
オレはいつもの可愛いめの服を着ていたから、大人っぽいメイクをしたら合わなくなってしまった・・・
「そんなことないと思うけど・・・このメイクでも変じゃないわよ。」
「そ・・そうですか・・・?」
でもオレはやっぱりヘンだと思う・・・この服にはいつものすっぴんメイクの方がいい。

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー
ー　ー
ー

「ねえ、かあさん・・・お花見に行っちゃダメ?」
オレは夕食の後、かあさんにお花見に行っていいか聞いてみた・・・
「でもお店の人たちって、お酒飲むんじゃないの?」
「・・う・・うん・・・飲むかも知れないけど・・わたしは飲まないよ!だって高校生だもん!絶対飲まない・・約束するから・・・」
「でもねぇ・・・夜遅くなるんじゃない?」
「・・う~ん・・・何時までかは聞かなかったけど・・・そんなに遅くならないんじゃないかなぁ・・・遅くなりそうだったら、わたしだけ帰ってくるからさ・・・いいでしょう?」
「有希・・宴会ってね、そんなに簡単に思うようにならないのよ?

絶対お酒すすめる人がいるし、帰ろうとしても止める人がいるの・・・有希はちゃんと断れる？」

「うん、大丈夫よ。わたしもう１６才よ？！」

オレはもう子供じゃない・・・まあ、大人というにはちょっと頼りないけど・・・

「そう？・・・じゃあ・・・わかったわ、行っていいわよ。」

やったあ！

「ありがとう、かあさん！」

「でも、約束よ。お酒は飲んじゃだめ、それと遅くなりそうだったら帰ってくること。」

「うん、わかってる！　ちゃんと約束守るから！」

オレはかあさんがオレのことを信用してくれたのがすごく嬉しかった・・・オレは絶対かあさんとの約束を破ったりしない！

「夜はまだ寒いから、コートも持っていかなきゃダメよ。」

「うん、わかってるよ。」

明日なに着て行こうかなぁ・・・お店のニューハーフの人ってどんな恰好で来るんだろう・・・オレも可愛いの着て行こう！

この前買った春物の白いふわふわのワンピに・・・ピンクのカーディガンのアンサンブルなんてどうかなぁ？・・・ちょっと子供っぽいかなぁ・・・・

第７６話　夜桜　オレたちの宿命？

オレはさんざん悩んだすえ、白いワンピースはやめて、やわらかい綿素材の、衿と袖が細かなレースで飾られた白い半袖のシャツの上から、ヒザ下くらいまであるピンクの小花柄のキャミソールワンピ・・・そして荒く編んだタップリめの白い春物のカーディガンで行くことにした。

小花柄のキャミソールワンピはオレが持ってる服のうちでは大人っぽい方だ・・・今日来るのはみんな大人の人たちばかりだから、オレもあまり子供っぽい服だと浮いちゃいそうだし・・・でもあまり大人っぽい恰好も恥ずかしいから、カーディガンは少し可愛めのでまとめてみた。

髪は昨日洗ったあと、湿ったまま三つ編みをして、かるいウェーブをかけてみた・・・昨日麻弓おばちゃんに良いやりかたを教わってきたのだ・・・いつものようにふたつに三つ編みしたよりも綺麗にウェーブがかかる方法・・・４つに分けて、特に後ろを編み込むのは少し難しかったけど、オレにとって三つ編みは毎日やってるから慣れたものだ・・・おかげで素敵なウェーブが出来た。

これで真っ黒じゃなく、レナのように茶色の髪なら、もっと軽い感じになるのだろうが、校則があるから仕方ない・・・学校だけなら休みの間だけ茶髪にすることも出来るだろうけど、編集長の佐々木さんにも染めるのは止められてるからやれない・・・まあ、髪が黒いと重たい感じはするけど、清楚な感じを出すには向いていると思う・・・今日のオレは普段は清楚な女の子がちょっと背伸びしてみたって感じだろうか・・・？

早めに夕食の準備を済ませたオレが、着替えて出かけようとしたところに、かあさんが帰ってきた。
「あっ・・かあさん・・・今日は早かったね・・・」
かあさんはオレの恰好を頭の上から足の先まで見ると言った・・・
「有希・・あなたそんな恰好で行くつもり?」
「え?・・だ・・だめ?」
オレは慌てて自分の恰好を見てみたが、それほど悪いとは思えない・・・ちょっとオレには大人っぽいかも知れないけど、もうオレだってこれくらいのオシャレしてもいいんじゃないかと思う・・・

「かあさん夜は寒くなるって言ったでしょう?!　コートはどうしたの?」
「あ・・そっち・・・」
そういえばそうだった・・・でも・・・
「だ・・だけどさぁ・・・今日は暖かいから・・・いらないかなって・・・?」
「なに言ってるの!　天気がいい日の方が夜は冷えるのよ。ちょっと待ってなさい。」
かあさんは階段を上がってオレの部屋に行ったかと思ったら、冬用の白いコートを持って降りてきた・・・
「これ持って行きなさい!」
「え~・・・」
こんなの着たらせっかくのオシャレが台無しだよ・・・もう春なのに・・・このコートはエリがフェイクファーになっていかにも冬用だ・・・ロングとは言えないまでも、けっこう丈が長いからワンピースが全部隠れちゃうし・・・

「かあさん・・・もっと薄いのじゃダメ?」
「ダメよ。その服で行くのならね。もっとあったかい服なら薄いコートでもいいけど?」

「・・・・・」

せっかく悩んでこの服にしたのに、いまさら他の服にするなんてイヤだ・・・それに、いまからまた選んでたら遅くなっちゃう・・・

「有希、かあさんの言うこと聞くって言ったでしょう？　イヤならお花見は中止ね。」

「え～・・・」

そりゃないよ・・・せっかく二光さんが誘ってくれたのにぃ・・・

「・・・わかった・・・コート持って行けば良いんでしょう・・・」

オレは少しふくれながら、仕方なくコートを持って行くことにした・・・せっかく可愛いバッグも持ったのに・・・こんなコート入れたらパンパンになって台無しだよ・・・かあさんオレのこと心配しすぎだ・・・

――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――

「こ・・こんばんは・・・すみません、遅れちゃって・・・」

「ぜ～んぜん大丈夫よ～！　ヤダー有希ちゃん今日は大人っぽくない～？」

「あ・・お・・おかしいですか・・・？　似合いませんか・・・？」

「その逆よ～　すっごくステキ～！」

・・それなら良かった・・・二光さんが言うなら間違いないだろう・・・ちょっとホッとした・・・

「メイクも自分で工夫してるじゃない。そういうの大切よ～！」

「あ・・・」

さすがにオレにはこのまえ教えてもらったメイクは大人っぽすぎる

かなぁと思って、アイラインを少し濃いめにして、チークは少し下につけて、ちょっと少女っぽさを増してみたのだ・・・さすがに二光さんにはすぐに見抜かれてしまった・・・

「あの・・お花見はどこに行くんですか?」
「すぐそこよ!　桜並木~」
あ・・あそこなんだ・・・いつも電車から見えるとこ・・・すぐ近くじゃない・・・
「だったら良かった・・・かあさんにあんまり遅くならないようにって言われてるの。」
自分でも帰れるところなら安心だ。西公園とかだったら電車だから遅くなったら帰りにくいけど、桜並木ならひとりで歩いて帰れる。

「あ・・あの・・・二光さん・・その恰好で行くんですか?」
二光さんは真っ赤なドレスに毛皮のハーフコート姿だ・・・
「そうよ~　ステキでしょう~?」
「・・はぃ・・・」
ステキはステキだけど・・・いくらなんでもお花見には派手すぎないだろうか・・・?

二光さんと4人の従業員のお姉さんたちと一緒に桜並木に着くと“組合い”の人たちはすぐにわかった・・・だって、全員二光さんばりの派手な衣装の一団がいれば、どんなに人が多くたって目立ってしまう・・・まるでお芝居でもやってるみたいな華やかさだ・・・あの中に入るなんてちょっと・・・いや、かなり恥ずかしいなぁ・・・

「にっこ~　こっちよぉ~~」
全員がオレたちに手を振っている・・・けっこう混んでいるのに、

あの人たちのまわりだけ、なぜか少し空いている・・・・
「まった～」
「ううん～　あたしたちも今きたとこ～」
みんな二光さんみたいなしゃべりかただ・・・
「混んでたんだけど～　あたしたちが来たら少し空けてくれた～
みなさんやさしくな～い？」
・・・たぶん・・・みんな恐れをなして逃げたんじゃないのかな・・
・ちょっと気の毒・・・

「にっこ～　そのコだれ～」
「あ！　このコが有希ちゃんよ～　可愛いでしょう～？」
「え～！　あなたがユウキちゃんなの～　女の子かと思った～！！」
「・・あ・・こ・・こんばんは・・・と・・戸田有希です・・・」
オレは自己紹介してペコリと頭を下げた・・・
「かわい～～　食べちゃいたい～」
オレが頭を上げると同時に、ツルツルの青いドレスを着た大きな人
が抱きついてきた！
「ううぅ・・・」
なんて腕っぷしだろう・・・苦しぃ・・・！

「ちょっとぉ～　やめなさいよ～　ユウキちゃん潰れてるじゃない
～～！」
「あっ！　ごめんなさ～い・・・あんまりかわいいから～」
「・・い・・いえ・・・」
助かった・・・なんとか潰されずにすんだ・・・
「こっちいらっしゃい！　ユウキちゃんビール飲む～？」
「あ・・あの・・　わたしまだ高校生だから・・・お酒は・・・」
「あら、残念～　ユウキちゃんマジメなのね～！」
オレはビールを断ってジュースをもらった・・・別にかあさんに言
われてからじゃなくて、オレだってビールくらいちょっと舐めたこ

とはあるけど・・・あんなの全然おいしくない・・・苦いだけだった・・・どうして大人はあんな苦いの飲むんだろうと思う・・・

最初はみんなちょっと怖かった・・・もちろん綺麗な人もいるけど、ほとんどはモンスターみたいな人たちだ・・・オレも女の子としてはちょっと大きい方だと思ってたけど、この人たちはそんなもんじゃない！さっきオレに抱きついた人なんかガタイも良くてプロレスラーみたいだ・・・

でもしばらく話してるとみんな良い人たちばかりだった。それにいつもお客さんを楽しませてるからか、話の内容も面白い・・・時々エッチな話の時は、オレにはついていけなかったけど・・・だってオレ・・・男のエッチも、女のエッチも良くわからないから・・・

「ねぇ～　ユウキちゃんって高校生なのにもう豊胸してるの～」

「あ・・これ・・自分のなんです・・・ホ・・ホルモンで・・・」

「ウッソ～　ホルモンだけでこんなに女の子になったの～～？」

「あんたたち何いってるのよ～　有希ちゃんはもとから女の子みたいだったのよ～！」

「・・・・・」

二光さんはそう言ったけど・・・オレだって昔は普通の男の子だったんだけどなぁ・・・でもはじめて二光さんに会った時は・・・もう女の子だったっけ・・・（８話参照）

「ユウキちゃんはもう下の工事は終ってるの～？」

「え？　こうじ・・・？」

「おマタを女の子にしたのかってこと～」

「あ・・ま・・まだです・・・あ・・タマは・・・ないですけど・・・」

「ヤダ～　タマなしサオ付きなの～　可愛い～～！　アタシそういうの萌えるの～！」

「あっ・・や・・やめてぇ・・・」
いきなり股間を触られてオレは必死で身をよじって股間を隠そうとした・・・

「コラッ！　有希ちゃん虐めちゃダメでしょ～！」
二光さんが怒ってくれて助かった・・・なんかオレ・・・この人たちの中にいると本当の女の子みたいな気がしてくる・・・それでいて股間のこととか聞かれるから・・・オレはすごく恥ずかしくなってしまう・・・ニューハーフの人ってけっこう男らしい・・・そういえば性同一性障害と、男らしい女らしいということとは関係ないんだったっけ・・・オレが女の子になってすぐのころ勉強したことだ・・・（6話参照）

「そういえばハルカちゃんは～？」
「ハルカちゃんは人気者だからまだお店みたいよ～　でももうすぐ来るんじゃないかしら～」
ハルカちゃんって・・・二光さんが言ってた“みつまめ姫”でトップっていう人だろう・・・オレもさっきからどの人だろうって思って探してたんだけど・・・まだ来てなかったんだ・・・どうりでそれらしい人がいなかったハズだ・・・

「ううっ・・・」
冷たい風が吹いてきて体がブルッと震えた・・・あたりが暗くなって急に冷えてきた・・・オレはバッグに丸めて入れていたコートを出して羽織った・・・
「あったかい・・・」
もしコートを持ってきてなかったら、きっと身体が凍えてしまっただろう・・・かあさんが言ったとおりだった・・・本当に冬用ぐらいでちょうど良かった・・・

「ユウキちゃん寒いんじゃない～　お酒飲んだら温ったまるわよ～」
ひとりのキレイめのニューハーフの人が言った・・・
「あ・・ごめんなさい・・・わたしまだ１６才だから・・・」
「そおぉ？　お酒飲むと楽しいわよ～！」
・・・見てれば楽しそうなのはわかるけど・・・オレはかあさんとも約束したし・・・だいいち未成年はお酒飲んじゃいけないんだ・・・

手首を返して時計を見ると、もう時間は９時をまわっていた・・・みんなはもう酔っぱらってオレのことなんか放ったらかしで盛り上がってるし・・・もう帰ろうかなぁ・・・でも愛島ハルカって人がどんな人か見てみたいし・・・

さすがに１０時をまわって、オレが帰ろうかと思っていると、並木に面した道に真っ黒な立派な感じの車が止まった。
「ありがとう～　またね～！」
車から降りた女の人はドアを閉めると車が見えなくなるまで手を振っていたが、見えなくなるとクルッと振り向いてこっちにやってきた・・・
「二光さ～ん・・・おまたせ～」
「も～う、ハルカちゃ～ん！　遅かったじゃない～」
あっ・・あの人がハルカさんなんだ・・・ハルカさんはふらふらしながら歩いてくる・・・すでにだいぶ出来上がってるみたいだ・・・

ハルカさんは来るなりオレと二光さんの間に割って入ると、どっかと腰をおろした・・・お店で一番の人って聞いてたから、どんなにキレイな人かと思ってたけど・・思ったほどでもなかった・・・

キレイさと人気とは、また別なのかも知れない・・・もっとも他の人たちに比べればずっとキレイだけど・・・

「もうっ！　二光ったら～　なんでこんなヘンピなところで花見するのよ～　市内にいっぱい花見出来るところあるじゃない！」
「ごめんね～　今年は有希ちゃんも来るから近場にしたのよ～」
え?!　オレのために近くでやってくれたんだ・・・ハルカさんを見たら帰ろうと思ってたのに・・・そんなの聞いたら帰りにくくなっちゃう・・・

「有希ちゃん?　どこにいるの?　その有希ってコは!」
「ハルカちゃんのとなりにいるじゃない～」
「あ・・こ・・こんばんわ・・・」
オレは慌ててハルカさんに挨拶した・・・
「え?　あんたが?」
ハルカさんはオレのことをジッと見てる・・・なんかキツそうな人だな・・・
「可愛いでしょ～　これでも男の子なのよ～!」
「男?・・・あんた何才なの?」
「あ・・１６才です・・・」
「じゃあ中卒か～・・・」
「え?」
「違った?　じゃあ高校中退なんだぁ～」
「え?!」
この人・・・なに言ってるんだろう・・・中退って・・・?

「なにいってんの～　有希ちゃんは現役の女子高生なのよ～!」
二光さんがそう言うと、ハルカさんはコワイ顔でオレのことを見た・・・目がすわってる・・・
「女子高生?　あんたもしかして女子校に通ってんの?!」

「あ・・はぃ・・・」
「良く学校が認めたわね・・・で？　どんな恰好で行ってるの？
あ、制服じゃない学校？」
「い・・いぇ・・・セーラー服で・・・セーラー服が制服だから・・
・」
「な・・何でそんなことが許されてるの？！」
・・・？・・・どういうことだろう・・・

「にっこ～　ちょっと来て～　このコったら～」
「なに～」
二光さんが向こうに行ってしまうとハルカさんがオレに詰め寄ってきた・・・
「ねえ、あんたさっきから何なの？」
え？・・・なんなのって・・・それはこっちのせりふだ・・・
「あ・・あの・・なにがですか・・・？」
「だから～　何で男がセーラー服着て女子校に通えるのかって聞いてんのよ！」
「あ・・それは・・・みんなわたしのこと女の子だって思ってるから・・・」
「なに？　だれもあんたが男だって知らないの？」
「いや・・・先生は知ってるし・・・あと2人知ってるコもいますけど・・・」
「信じらんないわ・・・時代が変わったの？」
それはオレにもわからないけど・・・

「それじゃぁ、あんたは女子校で女の子としてヌクヌクと暮らしてるってこと？」
「べ・・べつに・・ヌクヌクとは・・・」
「それがヌクヌクとじゃなきゃ何なのよ！　あんた“オカマ”とか馬鹿にされたことあんの？　無いんでしょう？！」

「・・は・・はぃ・・・」
だって・・・オレはオカマじゃないし・・・
「あんた、あたしが男子校でどれほど苦労したか解らないでしょう！」
「・・・・・」
それはわからないけど・・・でも・・・オレだって女子校でけっこう苦労してる・・・・

「・・・？　あんたジュース飲んでるの？」
「あ・・はい・・・」
「お酒飲みなさいよ！　花見でジュースなんておかしいわよ！」
「いや・・・でも・・・わたしまだ未成年だから・・・」
「なに気取ってんのよ！　高校生だったらみんなお酒くらい飲んでるわよ？！」
・・そうだろうか・・・そんなことないと思うけど・・・
「あたしなんか中学のころはもう飲んでたわよ！　ほら、飲みなさいよ！　いまのうちから鍛えといた方がいいって、どうせお店に入ったら飲まなきゃいけないんだから！」
「お店？　あ・・あの・・ニューハーフの・・・？」
「そうよ！　あんたもどうせ卒業か中退したらお店に勤めるんでしょう？」
「い・・いぇ・・・そのつもりは・・・」
「？・・・なに？　あんたオカマが働けるところが他にあるとでも思ってるの？」
「え？」
「まさか普通にＯＬでもするつもりだったんじゃないでしょうね？」
「・・・ＯＬ・・かどうかは・・・わからないけど・・・女の人の仕事しちゃダメなんですか・・・？」
「は？！　あんた馬鹿じゃない？　あたしたちみたいなオカマ雇ってくれるところなんて、あるワケないじゃない！！」

「そ・・そんなぁ・・・」

オレは正直、卒業した後のことはあまり考えてなかった・・・まだまだ先のことだと思っていたから・・・でも・・オレももう2年生・・・3年生になればイヤでも進路のことを考えなきゃいけない・・・オレは中学の時もそれでシッパイしたのに・・・また同じことやってるのか・・・？　オレ成長したと思ってたけど・・ぜんぜん成長してないじゃない・・・

「ほら！飲みなさいよ。これくらい飲めないと恥ずかしいわよ！」

「・・・・・」

コップになみなみと注いでくる・・・これ何だろう・・・日本酒・・・？

（ちょっとだけなら・・・）

ちょっと口をつけてみると、ビールみたいに苦くなかった・・・？

「・・・・・」

一口飲んでみたが、案外マズくない・・・ちょっと美味しいかも・・・

「なんだ、あんた飲めるんじゃない！ほらもっと飲みなさいよ！」

まだ半分残ってるのに、またいっぱい注いでくる・・・仕方なく飲んでると、身体がポカポカ温かくなってきた・・・

それからオレはハルカさんの苦労話を延々聞かされた・・・なんだか聞いているうちにウンザリしてきた・・・だって男子校で虐められた話とか・・・親に勘当されたとか・・・性転換したのに男に振られたとか・・・そんなのオレ知らないよ・・・

だいたい好きで女になったクセに・・・そんなに文句ばかり言うことないじゃないか・・・・

「あんた聞いてるのぉ・・・？　あたしはねぇ・・・あんたみたいにヌクヌクと暮らしてるヒト見るとイライラすんのよ・・・！」
あげくの果てに・・・オレを批判するようなことばかり・・・オレだってヌクヌクなんかしてない・・・！
「あんた・・・あたしがどんだけ・・・苦労したらわからないでしょ～・・・」

「もう！うるさいなぁ・・・あんたは好きで女になったんだろう？！ならいいじゃないか！・・・オレなんか・・・女になるつもりなんかなかったのに・・・！！」
「なにワケわかんないこと言ってんのよ・・・！」
“バシッ”ハルカが平手でオレの頭を叩いた・・・！
「痛っ・・・おまえ自分だけが苦労してると思ったら大間違いだぞ！・・・オレだってなりたくもないのに女の子にさせられて苦労してるんだ！！」
「イタイ～　髪の毛引っ張るな～！　この～！！」
「オレはあんたみたいに好きで女になったんじゃない！」

オレたちはたがいの髪を引っ張り合った・・・

もう何がなんだかわからなかった・・・

「イヤ～！　大変！ケンカよ～！　ユウキちゃんとハルカちゃんがケンカしてるわ～～！」
だれかが大きな声で叫んでいた・・・・

――

―――――――――

・・・・・・？

（オレのへや・・・？）

アレ？　お花見って今日だったっけ・・・お花見に行ったような気がするけど・・・じゃあ・・・夢だったのかな・・・？

目覚まし時計を見ると１０時だった・・・

「・・もう起きなきゃ・・・お花見は夕方からだけど・・・麻衣ととうさんにお昼作ってあげなきゃいけないし・・・」

ベッドから起き上がったとたん、頭が締め付けられるように痛くなって、またベッドに倒れ込んだ・・・

（・・ううぅ・・・なにコレ・・・）

なんだか一度イタくなると、目を開けてるのも辛くなってきた・・・

頭がガンガンするぅ・・・

病気かなぁ・・・動けなくてグッタリしてると誰かが階段を上がってくる音が聞こえてきた・・・麻衣かな・・・

でもドアを開けてのぞいたのはかあさんだった。

「有希？　目がさめた？」

「・・・かあさん・・・あたまイタイぃ・・・・」

「なに情けない声出してるの！　ただの二日酔いよ。」

「・・ふつかよい・・・？」

・・アッ！・・・アレやっぱり夢じゃなかったんだ・・・オレ・・

かあさんとの約束・・・破っちゃった・・・？

「・・・ごめんなさい・・・お酒飲まないって・・約束したのにぃ・・・」

かあさんはベッドの脇に座ると、オレの前髪を上げておでこに手をあてた・・・

「かあさん言ったでしょう?お酒ことわるの難しいって。」

「・・うん・・・」

結局かあさんが言ったとおりになってしまった・・・コートのこともそうだし・・・オレは何もわかってなかった・・・自分だけ大人になったつもりでいたのが恥ずかしい・・・

「・・かあさん・・・ごめんなさい・・・もうお酒飲まない・・・」

「いいのよ有希、だれでも失敗するんだから。また同じ失敗しなければいいのよ。」

「・・うん・・・」

「じゃぁ待ってなさい、冷えピタ持ってきてあげるから。」

「・・あっ・・かあさん・・・きょう・・お仕事は・・・?」

「これから行くわよ。有希が起きるまで待ってたの。今日は少し余裕があったから。」

「・・・・・」

オレのせいでかあさんに迷惑かけちゃった・・・オレって最低だ・・・

「お昼は作っておいたから、今日は大人しく寝てなさい。」

そう言ってかあさんはオレのおでこに冷えピタを貼ってくれた・・・

「・・はぃ・・・」

「オレンジジュース置いておくから、のどが乾いたら飲みなさいね。果物のカンヅメも置いとくから起きれるようになったら食べなさい。」

「・・うん・・ありがとう・・・かあさん・・・」

「じゃあ、かあさん仕事に行くからね。」

そう言って部屋から出ようとして立ち止まり、かあさんは言った・・・

・
「それから、良くなったらちゃんと二光さんにお礼言っておきなさいね。二光さん有希のことおぶって連れて来てくれたんだから。」
「え？・・ほんと？」
　オレ酔って寝ちゃったのかなぁ・・・ハルカさんにお酒飲まされたのは、なんとなく憶えてるんだけど・・・なんだか良く思い出せない・・・

―――――――――――――――

―――――――――――――――

―――――――――

ＡＴから

第４章を読んで下さってありがとうございます。
このごろ「こんな小説も読んでいます」っていうのが出るようになって、最近読み始めた方も多いようなのでこの文を書いています。
ここまで読んで下さって面白いと思っていただけたら、ぜひ感想などいただけると嬉しいです。（まだまだ先は長いので・・・）
ただ、感想のところでは現在の話題も話しているので、ネタバレになるかも知れないのでご注意ください。
私も返事でネタバレなことを書いてしまわないとも限らないので、

どこまで読んだところか書いて下さると助かります。

２００９．１２．７

5章　第77話　2年生　オレが上級生？

次の日、二日酔いもおさまって、オレは二光さんにお礼をするために電話をした・・おぶって家まで連れて来てくれたこと・・・けど二光さんはオレがお酒を飲んでしまったことに責任を感じてるって言っていた・・・悪いのはオレの方なのに・・・

お花見の時のこと・・・二光さんに聞いてわかったのは、オレとハルカさんがケンカしたってことだった・・・酔っぱらって寝ちゃったワケじゃなかった・・・二光さんたちが気づいて止めてくれたらしいけど、オレにはなぜケンカになったのか見当がつかない・・・二光さんたちもなぜオレたちがケンカになったのかは、わからないそうだ・・・

ハルカさんがオレにお酒を飲ませたんじゃないかと思うんだけど、それもはっきりとは憶えていない・・・いったいどっちからケンカしかけたんだろう・・・オレは男の頃からそんなにケンカとかする方じゃないんだけど・・・酔っぱらってハルカさんに何かイケナイこと言っちゃったのかなぁ・・・もしハルカさんに会うことがあったら謝らなきゃ・・・でもオレ・・ハルカさんの顔あまり憶えていない・・・

しかしオレは二日酔いというものが、あんなに辛いものだとは思わなかった・・・一日中頭がガンガンして起きれなかった・・・もうオレはお酒は飲まない・・・少なくとも大人になるまでは・・・かあさんとも約束したし・・・もうかあさんとの約束は破りたくない。

－－－－－－－－－－－－－－－
－－－－－－－－－－－－－－－
－－－－－－－－－－

「もう桜も散っちゃったね。」
春休みが終って登校中、長谷川が言った。
「うん・・」
今年はずいぶん早く花が咲いたから、その後気温が下がって思ったよりは長く咲いてたけど、さすがに新学期まではもたなかった・・・もうすっかり散って葉っぱが出てきてる。

去年はオレの入学式の日に、まだ桜が咲いていたのに・・・やっぱり入学式には桜が咲いてた方が雰囲気がある。　そういえば、入学式の日に校門のところでかあさんと二人で写真撮ったっけ（１０話参照）・・・一度見たきりだけど・・・あの写真かあさんが持ってるのかな・・・今見るとあの頃のオレは、まだだいぶ男っぽいかも知れない・・・

「なんか入学してから一年も経つなんて信じられないなぁ・・・」
「有希もしっかりしなきゃね、新入生が入ってきたら、わたしたち先輩になるんだから！」
長谷川に言われてハッとした・・・そうだ・・オレたちは新入生から見たら上級生になるんだ・・・

入学式は明日だ・・・オレたちは休みだけど・・・
「華道部には何人入ってくるかしらね。」
「・・うん・・・」
華道部はあまり人気がないから、新入生が入ってくれるか心配だ・・・もし一人も入ってこなかったら、オレたちがまた今年も後片付け

とかしなきゃいけない・・・今年の定員は４人・・・本当は華道部の定員は１学年３人だけど、３年生は２人しかいないから４人入ることが出来る・・・でも４人も入部希望者がいるとは思えない・・・華道部に定員が決まっているのは花の調達が大変だからだ・・・

「でも、新入生って可愛いだろうなぁ・・・まだ制服に着られてる感じが可愛いのよね・・・」

「そうね。でも有希は最初からキッチリしてたよね。」

「そ・・そうだっけ・・・」

そういえばオレは中学の頃からウチの学校の制服に慣れていたし、元々オレの身体に合わせて作ってもらったからブカブカ感もなかった・・・おかげで今は少し窮屈になってしまったけど・・・まあ、オレの場合は胸が大きくなったからなんだけど・・・腰とお尻も少し大きくなったけど、こちらはスカートがギャザーだから問題ない。

「でもさぁ・・有希は何で入学してすぐの頃から女の子らしかったの？　中学の頃は普通の男の子だったのに・・・」

・・・長谷川は今でも不思議に思ってるんだな・・・オレが高校生になって急に女の子になってたこと・・・長谷川ともう長いし、そろそろ言っちゃおうかなぁ・・・

「あのね・・実はわたし、高校に入学する前に女の子の教育受けてたのよ。」

「え？　女の子の教育？」

「うん。もちろん心ではずっと自分のことを女の子だと思ってたけど、ずっと男として生活してきたじゃない？　だから入学することが決まってから三吉先生に女の子として困らないように、いろいろ教えてもらったの。」

「え～　三吉に？」

「うん・・」

「有希よく三吉なんかに習ったね・・・怒られたんじゃない？」
「まあ・・最初の頃は怒られたりもしたけど・・・でもちゃんと躾けどうりに出来てれば怒ったりしないよ。先生わたしにはすごく優しいもん。」
「そっか・・・それで有希はワンちゃんみたいに三吉に躾けられちゃったんだ。」
「そ・・そんなぁ・・・」
長谷川のヤツ・・・そんな言いかたすることないじゃないか・・・
ヒドイよ・・・ワンちゃんって・・・

「し・・躾けっていっても犬のとは違うよ・・・女の子としてちゃんとしてるってことなのよ・・・」
「でも有希は三吉に習って女の子のマネが上手になったんでしょう？」
「マ・・マネ・・・？」
そりゃぁ、最初はマネだったかも知れないけど・・・今はけっこう自然に出来てると思う。
「・・マネかもしれないけど・・マネも大事なんだよ？“学ぶ”っていうのはね“まねぶ”っていうのが語源で、最初はマネすることが重要なんだって・・・」
これも三吉先生の受け売りだけど・・・
「ふ～ん・・・有希にしては難しいこと知ってるわね。」
オレにしてはって・・・そりゃオレは数学や英語はダメだけど、国語は長谷川と同じくらい出来るんだ・・・あんまり勉強してない分、勉強して出来てる長谷川より上だと思う・・・あんまりバカにしないでほしい・・・

「わたしお茶も習ってるって言ったでしょう？　あれも三吉先生に習ってるのよ。」

「え！　じゃあ今でも三吉に会ってるの？」
「うん・・2週間に一回くらいだけど・・・長谷川さんも行く？」
「イヤよ、三吉のとこなんて・・・中学の時だけでうんざりしてるのに・・・」
ヒドイこと言うなぁ・・・そんなだから長谷川は、お花だっていつまでたっても大雑把な活け方しか出来ないんだ。

「あ～・・でもスッキリした。有希が女の子になってた理由がわかって。」
「・・・・？」
「白石先生にも教えてあげよう！」
「え？　白石先生に？」
「だって、白石先生も不思議に思ってるみたいだったのよ。有希が女の子らしいこと。」
「そ・・そうなの？」
そんなの白石先生なら聞いてくれたら教えたのに・・・オレに気を使ってたのかな・・・

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー
ー　ー
ー

朝から新学期の全校集会・・・3年生がいなくなった分人数が少ないからちょっと淋しい感じだ・・・でも明日には1年生が入ってくるんだけど・・・
「本日から諸君も2年生と3年生、2年生は上級生として、3年生は最上級生としての自覚を持ってこれからの1年を過ごしてほしいと思います。ついては・・・・」

校長先生の長い話が終ると、こんどは教頭先生の番・・・

「え～今日は、本年度から本校で教鞭をとっていただく新しい先生を紹介いたします。え～手前におられる先生が数学を教えて下さる若村一樹〈わかむら　かずき〉先生、その向こうにおられる先生が英語を教えて下さる高島亜矢子〈たかしま　あやこ〉先生です。みなさんも・・・・・」

新しい先生かぁ・・・この人たちもオレのこと聞いたのかな・・・なんか新しくオレのこと知ってる人が増えるのは、ちょっと気まずい気がする・・・でも先生には知っておいてもらわないと困ることもあるだろうし・・・仕方がないことなんだけど・・・オレのことヘンに思わないか気になる。

「ねえ有希、新任の先生ってちょっと良いと思わない？」

全校集会が終って千里に聞かれて驚いた・・・だって千里はオレと同じで山上くんが好きなのに・・・あの先生は全然タイプが違う・・・

「・・千里は山上くんみたいなカッコイイ人が好きなんじゃないの？」

「まあ、そうだけど。でも山上くんはアイドルとして好きなんだし・・・有希は付き合うのも山上くんみたいなカッコイイ人じゃないきゃダメなの？」

「・・ダ・・ダメってワケじゃないけど・・・」

・・・純平はどうかな・・・山上くんとはだいぶタイプ違うかなぁ・・・オレはそもそも山上くんみたいな人がタイプなのかどうかさえ良くわからない・・・

それに・・・なんでオレ・・純平のことなんか考えてるんだよ・・・
純平はただのメル友なのに・・・最近はめっきりメールもくれないし・・・お仕事が大変なのはわかってるけどさ・・・
「そうだね・・・好きになる人がみんな同じタイプなワケじゃないもんね・・・」
でもあの先生はどうかなぁ・・・オレは全然興味ない・・・案外長谷川なんかタイプじゃないのかな・・・ちょっと可愛い感じだし・・・仮面レンジャーの古池鉄平になんとなく近い気がする。

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

「何でウチの学校、クラス替えとかないのかな？　あったら有希と一緒のクラスになったかも知れないのにね。」
「・・・！・・・う・・・うん・・・」
長谷川はオレと同じクラスになりたいのかな？・・・オレとしては長谷川とは今くらいの距離感が一番いいと思うんだけど・・・それに長谷川とオレと、千里や弘子や直美のうち誰かが一緒のクラスになったりしたら、オレはやりにくくてしょうがないんじゃないかと思う・・・

「でも、長谷川さんと一緒のクラスになっても、今みたいにはしゃべれないと思うわよ。」
「なんで？」
「だって、クラスの中だと誰が聞いてるかわからないじゃない。わたしもポロッとヘンなこと言っちゃうかも知れないし・・・」

「そっか・・・そうかもね。」
「でもさ、長谷川さん何でわたしと同じクラスになりたいの？　今でも部室で毎日会ってるじゃない。」
「だって別のクラスの雰囲気って良くわからないじゃない。有希がクラスの中でどんな風にしてるのか興味あるのよ。」
「興味？　わたし・・べつに普通にしてるだけだけど・・・」
「それよ！　普通に女の子として他のコと接してるのに興味があるのよ。」
「・・・・？」

「だって、有希わたしといる時は、他のコといる時と違うでしょう？」
「そ・・そうかなぁ・・・」
「そうよ！　有希はわたしといる時は少しだけ男っぽいもの。」
「・・・・・」
そんなことないと思う・・・長谷川はオレが本当は男だと知ってるから、そんな気がするだけじゃないかなぁ・・・

「じゃあさ・・長谷川さんは、もっとわたしに女の子らしく接してほしいの？」
「そ・・そういうワケじゃないわよ・・・ただ・・・」
「ただ？」
「ちょっと距離を感じるだけ・・・」
「きょり？！」
オレと長谷川に距離なんて・・・何いってんだろう・・・？
「わたし、良く家に行くのって長谷川さんとこだけよ？　わたしの家に来たことあるのも長谷川さんだけだし・・・」
オレの家に入れるなんて、オレとしては距離という点ではかなりの狭さだ・・・男の友達だって自分の家には呼んだことないのに・・・
まあ、長谷川の場合は勝手に来ちゃったせいもあるけど・・・（5

8話参照）

「でも、家に来るっていってもテストの前に勉強に来るだけじゃない。」

「・・・そうだっけ・・・？」

そういえばそうかなぁ・・・だって長谷川の家に行っても金魚見るくらいしかやることがないし・・・お母さんと話すのは楽しいけど、あんまりお母さんと話してると長谷川の機嫌が悪くなっちゃうし・・・

「じゃぁさ・・何すればいい？　何かしたいことあるなら言ってよ。」

「なにそれ？　有希男の子みたいな言い方するのね。」

「え？！」

オレ・・普通に言っただけなのに・・・

「有希、他のコにはそんな言い方しないでしょう？」

「そ・・それは・・・みんなは長谷川さんみたいに・・・」

オレは言いかけて、あわてて口をつぐんだ・・・

「なに？　わたしみたいに何よ！」

「・・・・・」

「言いなさいよ！怒らないから。」

本当に怒らないかなぁ・・・

「・・は・・長谷川さんみたいに・・き・・気難しくないし・・・・」

「あんた、わたしのこと気難しいって思ってるの？！　ずいぶんヒドイこと言うのね！　有希にそんなこと言われるなんて思わなかった・・・」

長谷川はそう言うなり行ってしまった・・・ヒドイって・・・いつもオレにヒドイこと言ってるのは長谷川の方なのに・・・ワケわかんないよ・・・

―――――――――――――――

―――――――――――――――

――――――――――

あ～ぁ・・・なんか長谷川とは上手くいかないな・・・オレはべつに長谷川のこと嫌いじゃないんだけど・・・どっちかと言えば好きな方なのに・・・やっぱり男と知られてると、友達でいるのも難しいのかなぁ・・・オレは教室で窓から外を眺めながらぼんやりと考えていた・・・

「あれ？　有希まだいたの？」
「あ・・弘子・・・」
「クラブは？　もう終った？」
「う・・うん・・・うちの部はミーティングとかあんまりないし・・・」
本当は行かなかったんだけど・・・長谷川と顔合わせたくなかったし・・・

「弘子は？　きょうどし部・・・終ったの？」
「郷土史研究部よ。うちも大したことやってないから。どっちみち新入生が入ってこないと予定もたてられないし。」
「・・・・・」
弘子も変わってるな・・・郷土史なんて・・・神社のコだからそういうのに興味があるのかなぁ・・・
　弘子はポケットから携帯を出して見た・・・
「ねえ有希、ミスド寄っていかない？　わたし今からじゃバスの時

間に間に合わないから。」
「あ・・うん、行く！」
弘子とはオレが男だと知られてから、ちょっとやりにくいところはあるけど・・・でもオレの気持ちはともかく、弘子は前と同じようにオレと接してくれる・・・弘子は優しいからオレも安心していられるのかも知れない・・・

弘子はきなこのポンデリングをたのんだから、オレも同じやつにした・・・弘子って結構こういうのに詳しい・・・オレはあまり詳しくないから弘子と同じのにしてれば間違いない・・・弘子とオレは味の好みが似てるみたいだ。
「有希さっきは何か元気なかったじゃない。どうしたの？　長谷川さんとケンカでもした？」
「あ・・・う・・うん・・・」
オレそんなに顔に出てたのかなぁ・・・弘子ってけっこう鋭い・・・
「わたしで良かったら聞いてあげるわよ。何があったの？」
オレは仕方なく弘子にさっきあったことを話した・・・こんなこと話せるのは弘子しかいないし・・・

「ふ～ん・・・長谷川さんって案外女っぽいとこあるのねぇ・・・」
「え？　そんなことないと思うけど・・・私服なんかいっつも男の子みたいよ・・・」
「ふふっ・・でも、有希だって私服は女の子らしいの好きなのに、性格はちょっと男の子っぽいところあるじゃない？」
「そ・・それは・・・」
そりゃぁ・・オレは元々男だし・・・男の子っぽいところはあるかも知れないけど・・・

「有希は長谷川さんとこうしてミスドとかマックとか来たことある？」

「・・ううん・・・ないと思う・・・」

「だったら今度さそってみたら？」

「・・・・・」

「長谷川さんも、有希がわたしたちとしてるようなことを、したいんじゃない？」

「そ・・そうかなぁ・・・」

長谷川ってそんなに単純じゃないと思うんだけど・・・

でも・・こんどためしに誘ってみようかな・・・

第７８話　新入生　オレって人気者？

昨日の入学式が終って、今日からオレたちも本格的に授業が始まる。

　駅からの通学路には新入生もいっぱいだ・・・やっぱり１年生は初々しくて可愛らしい。
オレも去年の今ごろは、女の子の中であんなにドキドキしながら登校していたのに（１１話参照）今ではこうして普通に女の子として登校している・・・あの頃はまだ胸にはシリコンで出来たヌーブラを付けていたのに、今のオレは身体まで女の子になってしまった・・・チンチンはまだ付いてるけど・・・それだけが今でも残る男の名残りだ・・・

　とはいえ、いくら慣れたといっても、フとした時に女の子でいる自分に恥ずかしくなる時もある・・・オレにはまだ男の子の心も少ながらず残っているのだ・・・この男の子の心がいつかは無くなるものなのか、それともずっとオレの心の中に残り続けるのか・・・それはオレにも・・白石先生にもわからない。

　白石先生は内科の先生だから心の問題は専門外なのだそうだ・・・だからといって知らない精神科の先生のところに行くのも気がのらない・・・だってオレは精神病じゃないし・・・それにたぶんお医者さんでも、心のことなんてわからないんじゃないだろうか・・？

―――――――――――――――

―――――――――――――――

――――――――――

「・・先日教頭先生から紹介されましたが、今日から数学の授業を担当する若村一樹〈わかむら　かずき〉です。本日は皆さんの学力を知っておきたいので小テストを行おうと思います。」

“え〜〜〜”

オレもみんなも不満げな声をあげた・・・そりゃそうだ、いきなり初日からテストなんて・・・それに、ちゃんと授業したところから問題を出してくれないと解るハズがない・・・先生はウチの学校を何だと思っているのだろう？　進学校か何かと勘違いしてるんじゃないだろうか・・・？

思ったとおりオレのテストの出来は散々だった・・・たぶんみんなも似たようなものだと思うけど・・・こんなのいきなりやられて出来るコなんてそんなにいないと思う・・・長谷川なら出来るかも知れないけど・・・

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

「有希のクラスも数学あったでしょう？　テストやった？」

「・・うん・・・」

「どうだった？　ちゃんと出来た？」

「・・出来るワケないわよ・・・」

「なんで？　これまで習ってきたことばかりだったじゃない。」
「・・そ・・そうだった？」
オレには全然わからなかった・・・同じ問題なんかあったっけ・・・

「有希がちゃんと理解してないからよ。だからまったく同じ問題じゃなきゃ出来ないのよ！」
「・・うぅっ・・・」
それを言われると立場がない・・・それが出来れば苦労しないんだけど・・・わからないんだもん・・・
「それで？　どれくらい出来たの？」
「・・・・・」
「出来なかったの？」
「・・うん・・・」
「全然？」
「・・うん・・・」
「答え合わせしてみようか？」
「！」
「なによ？」
「・・そんなの・・おぼえてないよ・・・」
「どうして憶えてないの？」
「・・・長谷川さんは勉強が出来るからおぼえていられるんだよ・・・わたし解らないで適当に書いたのにおぼえてるワケないじゃない・・・！」

「有希、自分が出来ないのに、そんなに偉そうに言うことないでしょう？」
「・・え・・偉そうになんて・・言ってないょ・・・本当のことだもん・・・」
「・・・・・」
長谷川は黙ってしまった・・・たぶんオレのバカさに呆気にとられ

てしまったのだろう・・・オレだってこれじゃダメなのはわかってるけど・・・興味が持てないものっておぼえられないんだ・・・

放課後クラブに行くと何やら部室の前が騒がしい・・・新入生？
「あ、長谷川さん・・・何でこんなに・・・！！」
女の子たちにプリントを配っていた長谷川に声をかけようと、そこまで言ったとき、集まったみんなが一斉にこっちを向いた！
「あ！春日さん！！」
オレはアッという間に女の子たちに取り囲まれてしまった・・・
「あ・・あの・・・」
どうなってんの・・・これ・・・

「春日さんいつもＪＩＮＯＮ見てます！」
「え・・あ・・ありがとう・・・」
「学校ではいつも三つ編みなんですか？」
「う・・うん・・そうなの・・・」
「やっぱりスタイルいいですね！」
「そ・・そんなことは・・・ないと・・・」
何なんだろう・・・いったい・・・

オレが囲まれたまま、どうしたらいいのかわからずにいると、長谷川が
「それでは皆さん！　今週中にプリントの記入欄に全て記入して、顧問の嶋田（しまだ）先生のところまで持ってきてください！　それと、最後の志望動機の欄には、華道部になぜ入りたいのかをしっかり書いてください。ただし、定員は４人だけなので、必ず今週中にプリントを提出してください。決定したらその段階で募集は打ち切ります！
わかったら解散！」

長谷川が解散宣言しても、女の子たちはオレの回りをなかなか離れようとしない・・・
「ほら、皆さん！“春日さん”が困ってますよ！」
は・・長谷川までオレのことを“春日さん”なんて・・・恥ずかしいじゃない・・・

　女の子たちが帰って行くと、長谷川がオレの肩をツンツンつついて言った・・・
「“春日ユウ”ちゃんったら、すごい人気じゃない！」
「え？！」
「みんな“春日さん”目当てに華道部に入部しようとしてるんだから。」
「ま・・まさかぁ・・・」
でも取り囲まれちゃったしなぁ・・・
「心配しないで。あんたに夢中なだけのコは落とすように先生に言っといてあげるから。」
「・・・・・」
まさか、こんなことになるなんて思ってもみなかった・・・確かに九州ＪＩＮＯＮの読者モデルの人気投票で１位だったとか聞いてはいたけど・・・ぜんぜん実感してなかった・・・オレが人気者なんて・・・世の中どうかしてる・・・

―――――――――――――――
―――――――――――――――
――――――――――

その後、噂に聞いた話では、今年はオレがいる学校だということで、昨年よりは受験者が多かったらしい・・・もちろんオレがいる学校だからというのは、あくまで噂だけど、受験者が増えたのは事実だった・・・まあ、ウチの学校は若干経営難らしいし・・・オレとしても学校に貢献できたのなら嬉しいけど・・・そんなことで志望校を決めてしまっていいものだろうか？・・・もっともウチの学校はスベリ止めに受けるらしいから、県立や有名私立に落ちたコが来てるんだろう・・・それならついでにオレがいるからという事かも知れない。

「え～・・昨日やったテストを返します。だいたい皆さんの学力と、この学校の水準がかなりヒドイことも解りました。」

「・・・・・」

なんかウチの学校をバカにされたみたいで腹が立った・・・ウチの学校は勉強よりも、もっと女の子として大切なことを教えてるんだ・・・新任の大学出たての先生にそこまで言われる筋合いはないと思う・・・

「・・・しかもひとケタの点数しか取れなかった人もいます。その人は放課後私のところに来なさい。では出席番号順に返します。安部・・・」

ひとケタっていったい何点かなぁ・・・オレはもう少し出来たんじゃないかと思うんだけど・・・

「戸田・・・」

「はい。」

オレは先生のところへ行って、返してもらったテストを見た瞬間、目の前が真っ暗になってしまった・・・ひとケタってオレ？・・・

しかも2点?!・・・これはいくら何でもヒドすぎる・・・せっかくオレが受験者数アップに貢献できたとしても、これでは逆に学校のイメージを落としてしまいそうだ・・・

「有希、何点だった?」
「・・・・・」
千里に聞かれたけど、カッコ悪くていえないよ・・・
「・・・悪かったの?　でも安心していいよ。わたしも35点だったから・・・いきなり問題出されてもわからないって・・・」
「・・・・・」
オレは黙って千里にテスト用紙を渡した・・・
「え?　2点?!　ひとケタって有希だったの・・・?」
「うん・・・」
恥ずかしくてたまらない・・・それに・・正確に言えば0点だ・・・だって、正解したのはａｂｃｄのうちどれかを当てはめる問題で、オレが当てずっぽうに書いたところだったから・・・

「それじゃ、放課後行かなきゃいけないじゃない・・・」
「・・うん・・・」
・・仕方がない・・・怒られるかなぁ・・・ひとケタの人ってオレの他には、いったい何人いたんだろう・・・

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー
ー　ー
ー

オレは放課後、職員室に若村先生を訪ねた・・・

「失礼します・・・」
若村先生の机はどこだろう・・・キョロキョロしていると松本先生に声をかけられた。

「あら戸田さん、誰かに用事?」
「あ・・あの・・若村先生は・・・?」
「えっと・・・若村先生なら・・たしか窓際の向こうの端だけど・・・いないみたいね。」
「あ、そ・・そうですか・・・」
いないんなら帰っちゃおうかな・・・怒られるのイヤだし・・・

「あ、じゃあ・・けっこうです・・失礼します・・・」
オレが帰ろうとしてドアを閉めようとすると、いきなり後ろから肩をつかまれた!
「きゃ・・あ・・先生・・・」
「ちゃんと来たね、ちょっと待ってて。」
先生は自分の机に行って何かファイルを取ってきた・・・
「ここじゃなんだから生徒指導室に行こう。」
え?!　生徒指導室・・・?　オレ・・なんか指導されるのか・・・?

生徒指導室に入ったオレたちは机をはさんで向い合って座った・・・先生はファイルを開いて何か書類を取り出した。
「戸田、お前カンニングしてるのか?」
「え?!」
「1年生の時のテストの成績を見たが、今回のテストとの差がひどすぎるだろう。」
「うっ・・・で・・でも・・カンニングなんかしてません!　絶対してないです!!」

オレがカンニングなんかするハズがない・・・だってオレは勉強なんか出来なくてもいいと思っているのだから・・・ただ赤点取るといけないからテストの前だけ必死に暗記してるだけだ・・・

「それじゃ、この点数の違いはどう説明するんだ?」

「それは・・・先生はこの学校のことを良く知らないんじゃないですか?」

「どういうことだ?」

「ウチの学校は勉強よりも、女の子として大切なことを教わる方が重要なんです。」

「まあ、女子校だからな。そういう面はあるだろう。しかしそのために進学率が低く年々受験者が減っているのは君も知っているんじゃないか?」

「そ・・それは・・・」

オレがこの学校を受験したのも、それが原因だし・・・オレはある意味その被害者だ・・・今ではそんなことは思っていないけど・・・

「あ・・あの・・わたしテストの前だけ友達に教えてもらってるんです・・・ヤマだけ憶えるって感じで・・・」

「それにしては出来てるじゃないか?」

「あの・・ウチの学校は授業で習ったことが、ほとんどそのまま出るから・・・だから・・・」

「なるほど・・そういうことか。どうりでお前だけじゃなく、みんなこれまでの点数と差があったはずだ。」

「信じてもらえました? わたしがカンニングしてないって・・・」

「ああ、それは信じよう。理屈も通ってるしな。」

「・・・よかった・・」

カンニング疑惑が晴れてホッとした・・・

「だが、この点数はマズイな。」

「あ・・はぃ・・・」
それはさすがに自分でも思う・・・うぅっ・・・情けない・・・
「この2点もアヤシイものだな。偶然当っただけじゃないのか?」
「・・・はぃ・・」
オレはうつむいたままうなずいた・・・
「ごめんなさい・・・」

「まあ、俺に謝ってもらっても仕方ないけどな。こんな成績じゃ将来困るのはお前だぞ? この学校ではいいかも知れないが、卒業したらどうするつもりだ?」
「・・・・・」
卒業したら?・・・あれっ?・・・なんか前にもこんなこと言われたような気がする・・・
「お前は普通じゃないんだろう? だったら他の人よりずっと努力しなきゃいけないんじゃないのか?」
「・・うぅ・・・」
“普通じゃない”という言葉が胸に突き刺さる・・・たしかにオレは普通じゃない・・・本当の女の子でもないし、今や男の子でもない・・・

「・・先生は・・・わたしのこと知ってるんですよね・・・?」
「・・性同一性障害のことか?」
「・・はぃ・・・」
「一応この学校に赴任することが決まった時点で関連書類を貰って、その後、同時に赴任した高島先生と一緒に、校医の白石先生から細かいレクチャーは受けたけどね。」
「そうですか・・・ 先生は・・あのぉ・・わたしのこと・・変だと思いますか?」
「・・・まあ正直な話、どんなコだろうとは思ってた。写真で見た限りでは普通の女の子みたいだったし。」

写真見たんだ・・・どんな写真かなぁ・・・学生証のかな・・・？

「実際にこうして会ってみても、とても男には見えないけどね。」

「・・・・・」

なんかヘンな感じだ・・・この学校では先生たちはオレのことを普通に女の子として扱ってくれるから・・・オレに面と向って“男には見えない”なんて言う先生はいない・・・

「普通に女の子として接してほしいという事で、正直少し心配していたんだが、君なら心配なさそうだよ。」

「そ・・そうですか・・・？」

「それより心配は勉強の方だ。」

「・・うっ・・はぃ・・・」

「君には補習が必要だな。」

「え・・そんなぁ・・・」

オレ・・これでもけっこう忙しいんだけどなぁ・・・でも・・これも自業自得か・・・

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

お礼

先日気が付いたのですが、トップページの「出版されたら買いたい

作品」のところに、この『オレは女子高生』が表示されるようになりました。現在は１９位ということになっています。

この作品を掲載はじめた時には、まさかこんなところに載るようになるとは思わなかったので（なにしろマニアックな内容なので）２０位に表示されてるのを発見した時はビックリしました。これも皆さんが支持して下さったおかげです。ありがとうございます。

出版されることは無いにしても、常にトップページに表示されていれば、それだけ多くの方に見ていただけるのではないかと思うので嬉しく思っています。

評価・感想のところも３００を超える感想やご意見をいただいています。良い評価を下さった方も、批判的な意見を下さった方も、わざわざ労力を使いご意見下さったことを有り難く受け止めています。

これからも頑張って『オレは女子高生』の世界を書き続けていきたいと思います。

第79話　補習　オレって女らしい？

オレは放課後、生徒指導室で若村先生に数学の補習を受けることになった・・・何人かいるのかと思ったらオレだけだった・・・
「これは・・・えっと・・・あれ？・・・」
「そういう時はカッコの中を先に計算するんだ。」
「あ・・そっか・・・」
先生はオレの横に座って、付きっきりで教えてくれている・・・意外に熱心な先生だ・・・

「なんか・・先生って教えるの上手ですね。」
「そりゃどうも。君に褒められてもって所もあるけどな。」
「あ・・すみません・・・」
そうだよなぁ・・・オレは他人の評価なんか出来るような立派な人間じゃない・・・

「でも・・先生に教えてもらうと良くわかるから・・・」
「そうか？　まあ、これは中学生の問題だからな。」
「あ・・そうなんですか・・・」
だからわかりやすかったのか・・・

オレはこれまで長谷川に教えてもらってテストはなんとか出来てたから、まさか自分がこんなに出来ないとは思ってもみなかった・・・
「あの・・先生・・ひとつ聞いてもいいですか・・・？」
「なんだ？」
「先生・・なんでこんなに熱心なんですか？」
「それはまあ、この学校の学力を上げるために呼ばれたからね。」
「え？　そうなんですか？」

「俺は大学の頃から進学塾で教えてたから、卒業したらそのまま塾の講師をやろうかと思ってたんだけど、ここの白鴻会長に誘われてね。」
「・・そうなんですか・・・」
「まあ、塾で教えるのにも疑問は感じてたしな。」
「ギモン？」
「塾では大学に合格させるのだけが目的だからね。俺はもっと数学の面白さを知って欲しいんだ。」
「オモシロさ・・・？」
数学に面白さなんてあるのだろうか・・・？

「数学は本来楽しむためにあると思うんだ。俺も昔は数学なんか大嫌いだったけど、中学で数学の先生に面白さを教えてもらってから興味を持ったんだ。」
「へぇ～」
なんかそんな話を聞くと、ちょっと親近感がわくなぁ・・・でも、オレに数学の面白さなんかわかるとは思えないけど・・・

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

「有希！何してたのよ、遅いじゃない！」
「あ・・ごめん・・・」
オレはまだ長谷川に補習を受けなきゃいけなくなった事を言ってない・・・なんかまたバカにされそうで・・・言いそびれてしまってる・・・

「有希もどのコがいいか選んで？」
「え？　何の話？」
「入部希望者よ、先生がみんなにも選んで欲しいんだって。参考にしたいそうよ。気になるコがいたら下の方に名前書いておいてって。」
「へぇ・・・」
オレたちの後輩になるんだもんなぁ・・・どんなコがいるんだろう・・・オレとしては素直なコがいいけど・・・

パラパラ見てみたけど、こんな書類だけではどんなコかなんて良くわからない・・・せめて写真があれば良いんだけど・・・

「ん？」
なんかこのコ・・他のコと違った感じだ・・・
「ねえみて、このコ面白くない？“中学までは女らしいことを何もしなかったので、高校では女らしさを身に付けたいと思います”だって。」
「へぇ～有希そういうコが気になるんだ？　でも、確かにどんなコか気になるわね・・・わたし名前書いとこう。」
「あっ！ズルイ・・わたしが見つけたコなのに・・・」
オレも急いで長谷川の名前のよこに自分の名前を追加した。

高校から女らしくなりたいなんて・・・なんだかオレ自身と重なって感じる・・・オレも高校から女の子になったし・・・まあ、オレの場合は女の子になっただけで、女らしいとは言えないと思うけど・・・他の人には女らしいと言われることもあるけど、オレとしてはそんなことないと思う。

「有希が先輩として女らしく教育してあげたらいいかもね。」

「！・・そんなぁ・・・」
なんでオレなんだよ・・・長谷川さんったら、みんながいるところでそんなこと言うことないのに・・・
「そうね、戸田さんはこの部で一番女らしいし、お花活けるのも上手だし、良いんじゃない？」
先輩も・・・？
「そうですよね、戸田さんなら女らしいから適任だと思います。」
もう・・井川さんまで・・・どうもみんなオレのことを実際以上に女らしく思ってるみたいだ・・・まあ・・オレが女らしいと言われて怒る筋合いもないんだけど・・・女らしいと言われたら喜ばなきゃいけないのはわかってるんだけど・・・なんか素直に喜べないんだよなぁ・・・

―――――――――――――――
―――――――――――――――
――――――――――

「あ、ね・・ねえ・・長谷川さん・・あのぉ・・・マックかミスド寄ってかない？」
駅に近づいたときオレは思い切って言ってみた。
「なによ、急に。」
「いや・・おなか空いたかなぁって・・・」
「もう帰るんだから家で食べれば？　それに今ごろ食べたら晩ゴハンが入らなくなるわよ。」
「そっか・・そうよね・・・」
今日は入部希望者のことで、みんなでワイワイやってたから少し遅くなっちゃったもんなぁ・・・それに・・・考えたらマックなんかに入るのって、誘われてばかりでオレから誘ったこと無かったっけ・

・・オレこういうのヘタかも・・・

けっきょくオレと長谷川はそのまま電車に乗って春日原（かすがばる）まで帰ってきた・・・

「じゃぁね、有希。」

「・・うん・・バイバイ・・・・」

なんかうまくいかないな・・・でも・・長谷川さんの機嫌も直ってるみたいだから・・・まあ、いいか・・・

「ただいま・・・」

麻衣はまだ帰ってないみたいだ・・・靴がない・・・麻衣はいつも靴をぬぎっぱなしにするから、すぐわかるのだ・・・麻衣ももう少し女らしくすればいいんだけど・・・

オレの部屋に入って、制服を脱いで部屋着に着替える・・・ちょっと制服が脱ぎにくい・・・今の時期はまだいいけど、これから暖かくなってくると、汗ばんで制服が脱ぎにくくなるのがイヤだ・・・セーラー服の冬服は汗ばむとすごく脱ぎにくいのだ。

携帯を開いてみたが、やはりメールは来ていない・・・純平ったらこの頃ぜんぜんメールくれない・・・お仕事が忙しいのはわかってるけど・・・少しくらいオレのことも気にしてくれてもいいのに・・・オレから送っても催促してるように思われたらイヤだし・・・もう少し待ってみよう・・・

洗面所で手と顔を洗ってから、台所に行って夕飯の準備にとりかかる・・・やっぱりマックなんかに寄らなくて正解だった・・・夕飯が遅くなっちゃうところだった・・・

「きょうは何にしようかな・・・あんまり時間がないからパスタに

するか・・・」
冷蔵庫を開けて材料を出していると玄関が開く音がした。

「ただいまぁ。」
「あ、麻衣お帰り。」
麻衣は自分の部屋に行ってから、すぐに着替えておりてきた・・・
「お姉ちゃん、手伝うよ。」
そう言って剥いて洗っておいたサラダ用のキャベツをさわろうとしたから、オレは慌てて麻衣に言った。
「麻衣、手洗ってきた?」
「あっ、まだだった。」
洗面所に行く麻衣にオレは声をかけた・・・
「ちゃんと石鹸で洗わなきゃだめよ!」
「うん、わかってる!」

麻衣ったら・・・手を洗わないままサラダなんか作ったらバイキンがついちゃうよ・・・かあさんは今日も遅くなるかも知れないのに・・・食中毒にでもなったらどうするんだよ・・・

でも・・このごろ麻衣も良くお料理を手伝うようになってきた・・・少しは女の子としての自覚が出てきてるのかも知れない・・・それは良いことだ・・・やっぱり女の子はお料理が上手な方がいいと思う。

「お姉ちゃん、その服かわいいね。」
「あ、これ?」
この服はこのまえレナと天神に行ったときに買ったやつだ・・・ピンクに白のドット柄が気に入ってる・・・お腹のところの黒いリボンがワンポイントになってて可愛いのだ。大きめのポケットが横にふたつ付いてるのも部屋着としては便利でいい。

「でしょう？　これ着やすいし、素材も気持ちいいのよ。でもノースリーブだからまだちょっと早いかも・・今日は暖かいからいいけど・・・」

本当は夏用に買ったんだけど・・・女の子って買ったらすぐ着たくなっちゃう・・・寒くなったら上に何か羽織ればいいし・・・

「ふたりとも帰ってたのか。」

「あっ、とうさん・・・もうすぐ出来るから待ってて。」

「ああ、おれは急がなくていいよ。」

とうさんはそう言ってソファーに座った。

「しかし、有希もずいぶん女らしくなったな。」

「な・・なによ・・急に・・・」

とうさんったら・・・そんなこと急に言われたらドキッとするじゃないか・・・

「わ・・わたしだって・・もう2年生になったんだから、少しは女らしくもなるわよ・・・」

「そうか・・そうかも知れないな。もうそんなに経つんだな。」

「・・うん・・・」

なんかあらためて言われると変な感じだ・・・きっと、とうさんは書斎に籠りっきりだから、あんまり時間が経った感覚が無いんじゃないのかな・・・

「あたしもそう思うよ。お姉ちゃんが女の子になってもうそんなにた経つんだなぁって！」

もう・・・麻衣まで生意気なこと言って・・・

「お姉ちゃんがどんどん女らしくなっちゃうから、あたしがいつまで経っても女らしくないみたいに思われるのよ。」

「そんなことないわよ。麻衣だって以前に比べたら女らしくなってるわよ。」

まあ、少しだけかも知れないけど・・・もともと麻衣は女の子なんだから、男のオレが女らしくなるよりは、ずっと簡単だと思う・・・

でもとうさんに「女らしくなった」なんて言われるとちょっと嬉しい・・・とうさんはあまり思ってること言わない人だから・・・とうさんが言うのだったら、オレも本当に女らしくなってるのかも知れないと思える・・・

オレだって女の子なんだから、女らしくなったと言われて嬉しくないハズがない・・・ただ、なかなか自覚が持てないのだ・・・オレって本当に女らしいのだろうか・・・？　それって素敵な女性に近づいてるってことなのだろうか・・・？

オレって、いったいどんな女の人になっていくんだろう・・・でも・・オレは自分がどんな女の人になりたいのかも良くわからない・・・それに・・願ったようになれるとは限らないし・・・

―　―　―　―　―　―　―　―　―　―　―　―　―

―　―　―　―　―　―　―　―　―　―　―　―

―　―　―　―　―　―　―　―　―　―　―

―　―　―　―　―　―　―　―　―　―

―　―　―　―　―　―　―　―　―

―　―　―　―　―　―　―　―

―　―　―　―　―　―　―

―　―　―　―　―　―

―　―　―　―　―

―　―　―　―

―　―　―

―　―

―

おまけ「文章」について

これまで私の文章について、ご意見や、ご批判をいただくことがあったので、そういう事も含めて私ＡＴと『オレは女子高生』の文章についてお話したいと思います。

私は高校を卒業した頃から、ときどき短編などを書いてきました。ほとんどＳＦっぽい内容のものでした。本格的に長編小説を書き出したのは５年ほど前に自分のＨＰを作ってからです。

誰でも文章を書く人は、自分の文章と言えるものを持っていると思います。

私も昔、短編を書いていた頃は、自分の文章を持っていたし、今よりもちゃんとした文章を書いていたと思います。実際に当時書いたものを見てみると、今よりずっと上手に書いています。

それが、５年前に自分のＨＰで小説を書き出して、自分の頭に中にある自分だけの世界を書こうとした時、それまで自分が書いてきた文章が、誰かの文章をマネたものだった事に気付いてしまいました。これまでのように何処かで読んだことがあるような作品を書くことは出来ても、自分の頭の中にしかない話を書くには、誰かの文章ではなく自分の文章でなければ書けないのだと気付いたのです。

それから私は“上手に”書こうとすることをやめました。もちろん上手であるに越したことはないでしょうが、文章としてキレイに整えようとする事で、自分の頭の中にある世界とズレが生じるのをどうする事も出来ませんでした。もし私にもっと文章力があれば可能なのかも知れませんが、今の私には無理でした。

それで私はヘタでもとにかく自分の頭の中にある世界をストレートに書くことに専念してきました。しかしその結果、自分の文章と言えるものが無くなってしまったのです。短編なら何とかなりますが、長編の場合は、毎回作品ごとに書き方が変わってしまうし、書いている途中でもだんだん変わってきてしまいます。この話も最初

の頃と今とではずいぶん違っていると思います。（この話では最初の方はわざとＴＳ小説っぽい書き方をしていますので、そういう意味ではかなり変わっていると思います。）

ただこの『オレは女子高生』の場合、他にはない特殊な事情もあるので、ここからは『オレは女子高生』の文章について書きたいと思います。

まず最初に、もっとも皆さんからご批判や、ご指摘が多い“・・・”について。

この話では“・・・”を多用しています。それは登場人物の話し方や、間の取り方を表現する方法が他に無いためです。正式な“…”ではなく“・・・”を使っているのは単なる“…”ではなく“・”一つから“・・・・・”５つ（ほとんどは４つまでですが）までの点の数で会話の間を表現するためで、実際にその文字分の間と考えてもらって構いません。

私は文章を読む時に、ほとんどの場合、実際のしゃべりと同じ速さで読むのですが、もしかしたら文字として速読する方にとっては読みにくい文章なのかも知れませんが、そういうことなのでご理解いただけたらと思います。“・・・”は…という記号ではなく実際の間の長さなのです。

他にも普通は「」の中の言葉には最後に“。”は付けないものですが、この話では“・・・”で終ることも多いので、きっちりしゃべっている時には“。”で終るようにしています。

この話は、ほとんどの部分が口語なので、出来るだけしゃべりに

忠実に書こうとしています。私の個人的な考えでは、正しい口語の書き方というのは存在しないと思っているので、読みやすい範囲内で出来るだけ個々の登場人物が話している通りに書くようにしているつもりです。

また、この話では会話の部分以外は有希のモノローグになっているので、有希が使わない、あるいは有希の言葉に合わない漢字は使わないようにしています。それはその時の有希が男っぽいか女っぽいかでも変わってくるので、必ずしも一定ではありません。

そういうワケで、どうしても平仮名が多くなってしまうので、カタカナを使ったり色々読みやすいように工夫をしています。

たまに振り仮名をつけているのは、皆さんが読めないと思っているわけではなく、本当は使いたくないけど平仮名では単語が判別しにくい時などです（贔屓とか、笑）

一番困っているのは“かあさん”“とうさん”という呼び方で、ときどき平仮名に埋もれてしまいます。でもこればかりは有希の呼び方なので、読みにくいと思いますがご容赦願えたらと思います。

なんかうまく書けませんでしたが、とりあえずそういう事です・・・また気付いたことがあったら書き足すかも知れません。

もし皆さん「ここは何でこんな書き方なの？」とか文章についての疑問や、この話自体についての疑問などあればお答えしたいと思いますので、どうぞ感想・評価やメッセージなどでご質問ください。（ただしメッセージはここで書いておられる方にしか返事できませんので、その他の方は感想・評価でお願いします。）

これまでのおまけ（その他）の場所
３６話　制作おぼえがき　０８．６．２１
４０話　『オレは女子高生』の世界　人物、舞台設定など
４５話　架空の西鉄大牟田線案内
４９話　名前について
５３話　ドラマ化を妄想してみる
６１話　「放生会編」おまけ
６７話　１周年を迎えて
７１話　『オレは女子高生』の世界　第２弾（架空の西鉄大牟田線案内付き）ドラマ『ブザー・ビート』のお知らせも
７３話　「ヒロイン」について
７８話　「出版されたら買いたい作品」のお礼

第８０話　お誘い　オレがどんたくに？

今日は三吉先生のところに来て、いつものようにお茶を習うつもりだったのだが、とんでもないことになってしまった・・・いつもは先生の後ろで控えているか、お弟子さんたちの末席でついでに習わせてもらっていたのに、今日はいきなり先生に、お弟子さんたちにお茶を点てるように言われたのだ。

最初は驚いたけど、とにかくやってみなさいと先生に言われて、オレはやってみることにした。とはいえオレはまだちゃんとお茶の点て方を習ったワケではない・・・なんで先生はいきなりオレにやらせようというのだろう・・・

緊張はしてるものの、意外なことにドキドキはしていない・・・妙に心は落ちついている・・・

道具を持つ手もスムーズに動き、まるで先生が後ろからつかんで、動かしてくれているような気さえする・・・

お茶を入れ終えて、三吉先生のほうを伺うと、先生は笑顔でうなずいてくれた。

「戸田さん、どうでしたか？　初めてお茶を点てた感想は。」

「はい・・最初は驚きましたけど、思ったより緊張しませんでした。」

「そして、思ったより良く出来たんじゃない？」

「・・それは・・・良くわかりません・・・」

「生徒さんたちも美味しかったって言ってましたよ。」
「・・そうですか・・・？」
そんなふうに言ってもらえるとオレも嬉しくなってくる・・・

「皆さんの言うように、私から見ても良く出来てましたよ。」
「・・ありがとうございます・・・」
三吉先生に褒めてもらえるなんて・・・女の子としてこれほど嬉しいことはない。
「まさに“門前の小僧習わぬ経を読む”といったところね。」
「モンゼン？のコゾウ？」
いったい何のことだろう・・・

「戸田さんは聞いたことないかしら？“門前の小僧習わぬ経を読む”というのはね、お寺の近所でいつも遊んでいた子供が、習ってもいないのにいつの間にかお経を読めるようになっていたっていうような話から出来た諺なのよ。つまり、もちろん習うことはもちろん大切だけど、そういう環境にいることも重要だって事なの。」
「・・・・・」
「あなたが今日ちゃんと出来たのは、私がいつもやっている事をしっかり見ていたって証拠なのよ。」
「・・・・・」
なんか・・・そんなこと言われると・・・オレ・・・

「あらあら、どうしたの戸田さん？　泣くことないでしょう？」
先生はオレの背中をポンポンたたいて、なだめてくれている・・・
「うぅっ・・だって・・・うれしくって・・・」
「上手に出来たのがそんなに嬉しいの？」
「ううん・・そうじゃないんです・・・先生に褒めていただいたのが・・・うれしくて・・・」
「あら、泣くほど嬉しいなんて、私ったらよほど戸田さんのこと褒

めてなかったみたいね。」
「あ・・ごめんなさい・・・わたし・・そんなつもりじゃ・・・」
オレが慌てて謝ると、先生は笑ってオレの頭をなでながら言ってくれた・・・
「冗談よ、あなたの気持ちはわかってるわ。戸田さんは本当に素直な娘ね。」
「うぅっ・・・」
オレはそんなに素直なコじゃない・・・先生はオレのことを買いかぶりすぎだ・・・オレ・・先生の前だからちゃんとしてるだけなのに・・・

三吉先生の気持ちに応えるためにも、普段からもっとちゃんとした女の子にならなくちゃいけないと思った・・・

オレは脱いだ着物を衣紋掛(えもんか)けにかけて汚れていないか確かめながら形を整え、帯は型がつかないようにハンガーにタオルを巻いてから掛け、手で両端を持ってシワを取りながら、両手でパンパンと叩いてきれいに伸ばす・・・着物は着た後にちゃんとお手入れをしておかないと悪くなってしまうのだ・・・そのかわりちゃんとお手入れしておけば何十年だって着られる。

こうして半日ほど干して湿気を飛ばしてから、たんすの中にしまうのだ・・・すぐにしまうと湿気が付いたままだから、他の着物に悪かったり、カビが生えたりするらしい・・・大切な着物がそんなことになったら大変だ・・・

オレが着物を干し終えたころ、先生がお茶を入れてくれた・・・
これは抹茶じゃなくて普通の煎茶(せんちゃ)だ。もっとも普通のお茶といっても油断は出来ない・・・普通のお茶には普通のお茶のマナーがある

のだ・・・先生はそういうところもちゃんと見ている。

そんなことに注意しながらお茶を飲んでいると、先生は思い出したようにオレに言った。

「そうだ、あやうく忘れるところだったわ・・・」

「・・・？」

「戸田さんは5月の3日と4日は、もう予定入ってるかしら？」

「いえ・・今のところは・・ないですけど・・・？」

「前に伺った日本舞踊のお師匠さんがね、戸田さんに“どんたく”のパレードに出てもらえないかって言ってるのよ。」

「え？　パレード・・ですか・・・？」

「みんなで花笠音頭を踊るそうなんだけど、人数が足りないんですって。戸田さんが用事があるか、そういうのに出るのが嫌なら私から断っておくけど・・・」

「えっと・・どうしよう・・・踊りなんて・・・」

そんなのオレに出来るかなぁ・・・オレはただ着物の着こなしが上手になるからと、少しだけ手ほどきを受けただけなのに・・・やれるものならやってみたいけど・・・

「踊りは簡単だそうよ。この間の戸田さんくらい舞えてれば大丈夫だって話だったけど。」

「そ・・そうですか・・・？」

“どんたく”というのは“博多どんたく”のことだ。夏の“博多山笠”秋の“放生会”とならんで博多の三大祭りと呼ばれている。毎年ゴールデンウィークには全国でも一番の人出だとテレビで言ってるけど、地元のオレとしては何が楽しくてそんなに見に来るのか良くわからない・・・

オレもそんなに知らないんだけど“博多どんたく”の期間は、市

内のあちこちに舞台が出来て歌とか踊りとか披露したり、芸能人も来るらしい。それに“花自動車”というキレイに飾りつけた大きなバスみたいなのが市内を回る・・・昔、市内電車っていうのが走ってた頃は“花電車”だったらしいけど、電車が廃止されてからは“花自動車”になったと聞いたことがある・・・“花自動車”は昼間ももちろんキレイだけど、夜は電飾が灯いてもっとキレイだ。

パレードには学校とか、会社とか、お役所とか、色んな団体が出るようだから、踊りのお師匠さんのところも出るのだろう・・・パレードはかなり長い距離だから・・・何キロだったっけ・・・踊りながら歩くのは大変そうだ・・・

「あの・・ちょっと返事を待ってもらえますか？　2日だけなら休日だから大丈夫だと思うけど、踊りの練習とかしなきゃいけないだろうし・・・時間がとれるかどうか、学校とか雑誌の撮影とか聞いてみないといけないから・・・」

「それはそうね。それでは少し返事を待ってもらいましょう。」

――――――――――――――

――――――――――――――

――――――――――

「あ、もしもし、佐々木さんですか？　わたしユウです。」

「あらユウちゃん、ちょうど良かったわ。電話しようと思ってたとこなの。」

「え？」

「実は“どんたく”のことなんだけど、ウチの雑誌からモデルさん

たちでパレードすることになったの。それでユウちゃんとさくらちゃんにも出てもらおうと思ってるのよ。」
え～・・・そんなぁ・・・なんて間が悪いんだろう・・・

「あのぉ・・・実はわたしも“どんたく”のことで電話したんです・・・わたし日本舞踊のお師匠さんにパレードに出てほしいって言われてて・・・」
「あら、それは困ったわねぇ・・・ウチもユウちゃんには出てほしいんだけどなぁ。」
「・・そう言われても・・・」
「それじゃさ、かけもちで出られないかしら?」
「え?!」
かけもち?
「“どんたく”にはウチの雑誌も協賛してるから運営側にも顔がきくのよ。その日本舞踊とウチのパレードとの時間を開けてもらえばいいわ。ね? そうしましょう?」
「あ・・わ・・わかりました・・・でも・・もうちょっと待ってもらえますか? 学校のこともあるので・・・」

なんかエライことになってきた・・・オレ、安うけ合いしちゃったかな・・・でも・・学校が出ていいって言うかわからないし・・・もしダメだと言われたらどっちも出れないし・・・

もし学校が出てもいいと言ったとしても、若村先生が踊りの練習でときどき補習を休むかも知れないことを許してくれなければ、日本舞踊のお師匠さんには断ってもらってＪＩＮＯＮだけに出ればいいか・・・ＪＩＮＯＮはただ手をふりながら歩くだけらしいから、練習はいらないみたいだし・・・休日だけなら補習もないから若村先生の許可も必要ない・・・若村先生は補習を休むの許してくれそうな気がしない。

―――――――――――――――
―――――――――――――――
――――――――――

“コンコン”ドアをノックすると中から返事があった。
「どうぞ。」
オレはドアを開けて恐る恐る中に入る・・・校長室って何度入っても緊張する・・・
「あの・・戸田です・・・」

「おや、戸田君、どうしました？」
「あれ？　教頭先生・・・あの・・校長先生は・・・いらっしゃらないんですか？」
「ああ、校長先生は今日は出張でいませんよ。だから私が留守番をしてるんです。」
「・・そうですか・・・困ったなぁ・・・」
「何かな？　校長先生でなければダメなのかな？　私じゃ役不足ですか？（注1）」
「い・・いえ・・・そんなことは・・・」
そうだ・・校長先生には、困ったことがあったら教頭先生にお願いするように言われてるし・・・教頭先生の方がオレとしても話やすい・・・
「あの・・ちょっと相談があって・・・」
オレは日本舞踊のことと ＪＩＮＯＮのことを教頭先生に話してみた。
「なるほど、それは良いですね、ぜひやりなさい。」
「え？！　ど・・どっちをですか・・・？」

「両方ともですよ。ちゃんと時間はズラしてくれると言ってるんでしょう?」
「あ・・はい・・・」
「それなら問題ないんじゃないですか?」
「ま・・まあ・・そうですけど・・・」
なんか・・こんなにあっさり認めてくれると・・・ちょっと気が抜けちゃうな・・・

「校長先生には私から報告しておきますよ。戸田君は踊りが上手だから良いところは伸ばさないとね。」
「!・・・そ・・そういうんじゃないんです!わたし・・ただ人数が足りないからお手伝いするだけで・・・」
「解ってますとも!でも何事も経験ですからね。頑張ってきなさい。」
「・・はぃ・・・」
なんか教頭先生には調子狂っちゃうなぁ・・・軽いっていうか・・・

「あ、でも日本舞踊の方は出られないかも知れないんですけど・・・」
「ん?　それはなぜですか?」
「あ・・あの・・わたし・・・いま数学の補習受けてるんです・・・だから補習をお休みする許可をもらえなかったら、日本舞踊の練習は出来ないから、お断りしなきゃいけないと思ってて・・・」
「誰ですか、君に補習をしてるのは!　私から便宜を計るように言ってあげましょう。」
「あっ・・いえ・・いいんです・・自分で言います。もしダメだって言われたら、わたしそれでもいいんです・・・」
オレはそんな権力を使うようなマネは嫌だ・・・それに・・元はといえばオレのために補習してくれてるんだから・・・教頭先生に言いつけたみたいに思われたらかなわない・・・

その日の放課後、若村先生に補習を受けながら、オレはなかなか言い出す機会を見つけられずにいた・・・もうすぐ計算も終っちゃうし・・・早く踊りのお師匠さんに返事しなきゃいけないから今日中に聞いておかなきゃいけないのに・・・

「・・あ・・あのぉ・・・」
「何だ？　また解らないのか？」
「い・・いえ・・そうじゃないんですけど・・・」
なんか言いにくいな・・・どう言えばいいんだろう・・・
「あの・・補習は・・毎日やらなきゃダメですか・・・？」
「そうだな。毎日やるに越したことはないが、何か用事でもあるのか？」
「いえ・・・用事っていうか・・・」

「なんだ、ハッキリ言えよ。」
「はぁ・・あの・・こんどの“どんたく”に出ないかって誘われてて・・・」
「どんたくに？」
「はい・・・」
「お前が？　どんたくで何するんだ？」
「あの・・パレードなんですけど・・日本舞踊で花笠音頭を踊るのと・・・あと・・先生は男の人だから知らないかも知れないけど、わたし九州ＪＩＮＯＮっていう女の子の雑誌で読者モデルやってるので、その関係と・・・」
「なんだ、ふたつも掛け持ちするのか？　大変だな。」
「あっ、でもまだハッキリ返事してないので、もし補習お休み出来ないなら日本舞踊の方は、お断りしようと思ってるんです・・・」

「いや・・お前もだいぶ頑張ってるし、少しは理解出来てきたみたいだからな。」
それはたぶん先生の教え方が上手だからだ・・・
「少しなら休んでも問題ないだろう。」
「え？　ほんとですか・・・？」
「ああ。しかしお前が日本舞踊やモデルなんかやってるとは知らなかったよ。」
「あ・・いえ・・日本舞踊はお茶の先生に着物を着た時の動きが上手になるからって、連れて行ってもらっただけで・・習ってるワケじゃないんです。それにモデルもただの読者モデルだし・・・」
「そうか、まあ良いじゃないか。俺はお前があまりに数学ができないから、何にも出来ないヤツかと思ったぞ。」
「そんな・・先生ヒドイ・・・わたしだって得意なこともありますよ！　国語はまあまあだし、お料理やお裁縫は他のコよりずっと出来るんです。」
英語は数学なみにダメだけど・・・
「そうか、お前は女の子より女らしいんだな。」
「そ・そ・・そんなことは・・ないですけど・・・」
先生ったら・・そんなこと言われたら・・・オレ・・ドキドキするじゃないか・・・

「それじゃ、俺もどんたくを見に行こうかな？」
「え？！」
「俺はカメラが趣味なんだ。写してやるよ。」
「そ・・そんな・・いいですよぉ・・・わざわざ見に来なくたって・・・」
「別にお前だけ見る訳じゃないよ。」
「あ・・なんだ・・・」
って・・・別にがっかりするのは変だろう・・どんたくは大きなお

祭りなんだから・・オレなんかオマケに決まってる・・・
「パレードなんて、人がいっぱいだから・・わたしなんかどこにいるかわかりませんよ・・・きっと・・・」
「そうか？・・じゃぁ俺を見つけたら判るように手を振ってくれよ。」
「・・イヤです・・そんな・・・みんなで踊るのにひとりだけ手を振るなんて・・・目立っちゃうじゃないですか・・・」
先生が写してやるなんて言い出したんだから、自分でオレを見つければいいんだ・・・もしオレを見つけられなかったら後で文句言ってやる！

ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー
ー　ー

「有希遅いよ！早く早く！」
「ご・・ごめん・・・」
あ・・そうか・・今日は新入部員が入ってくる日だった・・・
「え～　今遅れてきたこの人が、ウチの部のエース戸田有希さんです。またの名を“春日ユウ”とも言いますが、学内でそう呼ぶのは禁止します！」
「え？」
先輩ったら何言ってるんだろう・・・禁止って・・・

新入部員は４人になるかと思ったけど３人だった。たぶん一度に４人も増えると、教えるのが大変だからじゃないだろうか？
「それじゃ、部員全員が揃ったところで、新入部員のみなさんに自

己紹介をしていただきます。」
“パチパチ・・・”オレたちは拍手した。

2人の新入部員はいかにもお花をやりそうな、おとなしい感じのコたちだった・・・そして最後のコの自己紹介・・・
「えっと、中野御里(なかの みさと)です。えっと、あたしはこれまであまり女の子らしいことをしなかったので、かあちゃんに・・あっ・・お母さんに高校に入ったらひとつくらいは女らしいことをするように言われてて、それでこの部に入りました。よろしくお願いします！」
“パチパチ・・・”
あのコ入ったんだ・・・なんか面白そうって思ったコ・・・やっぱり髪も短くて、ちょっと男の子っぽい感じもするなぁ・・・でも良く華道部に入ろうと思ったなあ・・・ほかにも女の子らしい部はあると思うんだけど・・・

「ねえ、長谷川さん、先輩が言ってた“学内で春日ユウって呼ぶのは禁止”って・・・あれどういうことかな？」
「ふふふっ、有希なんにも知らないのね。この学校の生徒で、あんたにモデルのこと聞いて来るコいる？」
「・・・・」
そういえばいないけど・・・
「いないけど・・・みんな興味ないんじゃないかなぁ・・・」
「バカねえ、そんなワケないでしょう？　みんな有希がこの学校で生活しやすいようにって、モデルの話はしないようにしてるのよ！ウチの部だけじゃなく他の部でも言ってるわよ。」
「・・ほ・・ほんと・・・？」
オレ全然しらなかった・・・みんなそんなに気を使ってくれてたんだ・・・・

「あんたみんなに好かれてるのよ。ありがたく思いなさい。」
「・・・・・」
そんなぁ・・・そんなこと聞いたら・・・なんかうるうるしちゃうよ・・・

「でもさ、あのコ面白いそうなコね。」
「え？　だれ？」
「あの中野さんってコよ。あのコいつも、お母さんのこと“かあちゃん”って呼んでるのかしら？」
「ハハハ・・・でも小さい頃からだろうから良いんじゃない？　長谷川さんが“ママ”って呼ぶのも結構イメージにないわよ・・・！」
しまった・・・！
「なんでわたしが“ママ”って呼んじゃいけないのよ！」
「・・あ・・あの・・・いけないなんて言ってないじゃない・・・ただ・・イメージにないって・・・」
やっぱり怒らせちゃった・・・
「知らなかったわ、有希がそんなふうに思ってたなんて！」
「・・・い・・いや・・・思ってないよ・・・だから呼び方はどうでも良いんじゃない？って・・・」
もう・・・なんでオレ・・不用意に長谷川が怒るようなこと言っちゃうんだろう・・・仲良くしたいのに・・・

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

注1：教頭先生は「役不足」という言葉を間違った意味で使ってい

ます。わざとなのかも知れませんが学校の先生としてはどうかと思いますね。まあ、教頭先生のことだから知らない可能性もあるかも（笑）

第81話　練習　教えるのって難しい

♪　ぼんちかわいやねんねしな～　しながわじょろしゅはじゅうもんめ～　じゅうもんめ～のてっぽだま～　たまやが～かわへスッポンポン～♪　（注1）

どんたくのお囃子に合わせてみんなで踊りの練習・・・オレはてっきり日本舞踊を習ってるお弟子さんばかりかと思ったのだが、来てみると小さな子供もいっぱいだ・・・一番下はまだ5才だという話だ・・・

両手にしゃもじを持って叩きながら踊る・・・踊りはカンタンだったからすぐに憶えてしまった・・・ただ、子供たちにも教えなきゃいけないのが大変だ・・・オレはあんまりそういうのは得意じゃない・・・

実は小さな子の中には男の子も何人かいる。今はまだ練習だから普通の恰好だけど、本番では女の子の着物と同じ恰好をするらしい・・・そんなことして女の子の恰好に興味を持たないかちょっと心配だ・・・オレみたいになってしまわなきゃいいけど・・・

「こうして・・こうして・・チョチョンでパッ！ってやるの、わかった？」

「・・うん・・・」

男の子が恥ずかしそうにするのが可愛い！　オレのことキレイなお姉さんと思ってくれたら嬉しいな・・・

小さな子を手取り足取り教えていると、自分で言うのも何だけどオレもずいぶん良いお姉さんな気がしてくる・・・まあ、実際ずいぶん年上だけど・・・オレはこれまであまり年上らしいことをしてこ

なかった・・・麻衣にもお兄さんらしいことなんてしなかったし・・・オレたち兄妹はいつもケンカばかりしてた気がする・・・でもオレも女の子になったんだし、麻衣にとっても優しいお姉さんでいたいと思ってる。

「戸田さん、忙しいのにありがとうね。」
練習が一息ついて日本舞踊のお師匠さんがオレに声をかけてくれた。
「い・・いえ・・そんな・・・わたしも誘っていただいて嬉しいんです！こちらこそ、かけもちなんて失礼じゃなかったかなって・・心配してたんですけど・・・」
「そんなことないわ。戸田さんみたいに素敵な娘なら、みんな誘いたくなって当然よ。」
「そ・・そんなぁ・・・」
なんかそんなこと言われると照れくさいなぁ・・・

「あ・・あの・・わたし着物着るの大好きだから、こういうの楽しいです。早く本番の着物で踊ってみたいです。」
「そう、戸田さんならきっと似合うと思うわ。戸田さんは着付けも自分で出来るんでしょう？」
「はい、あ・・でもそんなに上手じゃないですけど・・・」
「そうなの？　三吉さんはもう一人前だって言ってたけど？」
「え？！　三吉先生が？」
三吉先生がオレの知らないところでオレのこと褒めてくれてたなんて・・・なんかすっごく嬉しい・・・
「本番の時の子供たちの着付けも手伝ってもらえないかしら？」
「あ、いいですよ。わたしで良かったら。」
なんか三吉先生が褒めてくれてたと知ったら、ちょっとは自信が出てくるってもんだ・・・

注1：お囃しは漢字で書くとこうなります。「ぼんち可愛いや寝んねしな　品川女郎衆は十匁　十匁の鉄砲玉　玉屋が川へスッポンポン」
ハッキリ言って、歌詞は博多にもどんたくにもほとんど関係ありません（笑）

―――――――――――――――

―――――――――――――――

――――――――――

　華道部では新入部員に、オレたち2年生がひとりづつ付いて教えることになった。そういえば昨年はオレたちも2年生・・今の3年生に教えてもらったっけ・・・もっともオレたちの時は2年生はふたりだったから、最初から基礎が出来てたオレはあまり教えてもらってない気がするけど・・・

「あっ！　ちょっと・・そんなに切っちゃダメよ。もったいないじゃない。」
いきなり真ん中あたりで茎を切ろうとした中野御里（なかのみさと）を慌てて止めた。
なぜかオレは中野さんを教える係にされている・・・
「もっと長めから始めないと少ししか練習できないわ。」
「あ、すみません・・・」
しまった・・・強く言い過ぎたかなぁ・・・中野さんシュンとしちゃった・・・もっと優しく教えなきゃ・・・
「あの・・ここらへんで切って・・・」
“パチン”オレが指で差したところを中里さんがハサミで切る・・・

「次はこのへんで・・・」
“パチン”
「これは？　どこで切ったらいいですか？」
「ここらへん・・・」
“パチン”
・・・これじゃダメだ・・・こんな教え方じゃ練習にならないよ・・
・中野さんが自分で考えてやらなきゃいけないのに・・・

それにひきかえ、長谷川さんや井川さんは上手に教えてる・・・
オレの方が活けるのは上手なのに・・・中野さんがヘタなのもある
とは思うけど、オレの教え方にも問題があるんだろうか・・・？
「う～ん・・・じゃあさ・・ちょっとわたしがやってみるから、中
野さんは見ててくれる？」
「あ、はい！」
オレは中野さんから花を受けとると、下の方の葉っぱを2、3枚取
ってから、その花を活けるために、いままで活けていた花を剣山か
ら引き抜いた。
「あっ・・」
「ん？　どうかした？」
「あ、いえ・・何でもないです。」

「まず中心になる花を決めるでしょう？　中心って言っても真ん中
じゃないわよ。少しずらして・・・」
一番背が高い花を活ける・・・
「次はこれくらいに切って・・・こんな感じね・・・」
「・・・・」
「で、外側にこんなふうに・・・」
オレは花の向きや高さを見ながら活けていった・・・丁度良い高さ
に切れば綺麗に活けられるけど、そんなことをすると、ちょっとし
か練習できないから難しい。

「わあ！　すごいですねっ戸田さん。」
“パチパチ”手をたたいてる・・・のんきなコだな・・・もう元気になっちゃって・・・
「中野さん、ちゃんと見てた？」
「あっ・・はい！　見てました。」
なんかあやしいなぁ・・・本当かなぁ・・・

「じゃぁ、やってみて？」
「・・はい。」
言うなり中野さんはとんでもないところで茎を切ろうとしたから、オレはまた慌てて止めた・・・
「あ～・・ダメダメ・・・全然見てないじゃない！」
「・・見てましたけど・・・」
もうっ・・・
「あのね、ただ眺めてただけじゃダメなの！ちゃんと自分でやる時のことを考えながら見なきゃ。」
「あ、そっか・・はい、わかりました！」
・・・返事だけは元気良いんだけどな・・・本当にわかってるのかなぁ・・・

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー
ー　ー
ー

「有希、何よさっきの教え方は！」
「え？　ダメだった？」
「あんなに厳しいこと言ったらミサトちゃん辞めちゃうわよ。２ヶ

月は他の部に変わることも出来るんだから！」
オレ・・そんなに厳しく言ったかなぁ？
「だってさ、やって見せたのに、ちゃんと見てないんだもん・・・」
「まだ慣れてないんだから仕方ないでしょう？」
「そ・・そうかな・・・」
だって三吉先生も見て憶えるものだって言ってた・・・

「それにミサトちゃんがせっかく活けてたの抜いちゃうし。」
「え？　だってただ刺しただけだったよ。」
「それは、有希から見ればただ刺しただけに見えたかも知れないけど、ミサトちゃんだって自分なりに頑張ってたかも知れないじゃない。だいたい途中でやめさせるなんて失礼よ！」
「そ・・そんなに言わなくたって・・・」
オレだって一生懸命に教えてたのに・・・

「ま、仕方がないのかもね、有希は得意だから出来ない人の気持ちなんてわからないのよ。」
なんだよそれ・・・長谷川だって勉強が出来ないオレの気持ちなんて、わかってないくせに・・・
「わかったわよ・・もっと優しく教えればいいんでしょう？　今度はうるさく言わないもん！」
ちゃんと教えようと思ったから、ちょっと厳しく言っちゃったかも知れないけど、言わないくらい簡単だよ・・・

―――――――――――――――
―――――――――――――――
―――――――――――

「はぁ・・・」

「有希どうしたのよ？　ため息なんかついて。」

「あ、ご・・ごめん・・べつに弘子といるのが退屈なんじゃないよ！」

このごろ何故か帰りに弘子と一緒になって、ついミスドやマックに寄ってしまう・・だから今日もミスドに寄っちゃったのだ。

それにオレも弘子といると安心出来るし・・・何しろ秘密がバレないように気をつかう必要がないのが嬉しい・・・弘子はオレが本当は男だと知っても、長谷川みたいにイジワルなことなんか言わないし・・・

「わかってるわよ、そんなこと。　踊りの練習なんかで疲れてるんじゃない？」

「そ・・そんなことないよ。踊りの練習は楽しいよ。」

「それじゃ、　また長谷川さんとケンカでもした？」

「あ・・違うの・・いや・・それもちょっとはあるかな・・・新入部員に教えてるんだけど、教え方が悪いって言われちゃって・・・わたし、どんなふうに教えたらいいのか良くわからなくて・・・」

「へえ～　有希がそんなことで悩むなんて、なんか意外だわ。」

「え？　なんで？　わたしだって悩むよ！」

オレって悩みなんか無いみたいに思われてるのかなぁ・・・

「だってさ、中野さんにも上手になって欲しいんだもん・・・だから真剣に教えてたのに・・・それを厳しすぎるなんて言うから・・・」

「でも、有希はそれでいいと思ってるんでしょう？」

「うん・・まあ・・・だって三吉先生は見て憶えるんだって言ってたもん・・・あ、三吉先生ってわたしのお茶の先生なんだけど・・・」

「だって有希は活け花上手なんだし。　有希がいいと思うんだったら、それでいいんじゃない？」
「・・そうかなぁ・・・」
「他の人の言うことなんか気にしなくていいわよ。それは憶えるのに早い遅いはあるでしょうけど、有希らしく教えた方がいいと思うわ。そのコまだ始めたばかりなんでしょう？」
「うん・・・なんかね、女らしくないから、女らしいクラブに入りなさいってお母さんに言われたんだって。ちょっと変わったコなの・・・あ、でもけっこう可愛いんだよ。ちょっと男の子っぽい感じもあるけど・・・」

「それじゃ、有希が教えるのにピッタリじゃない？　有希も男の子だったのに、今はこんなに女らしくなったんだから。」
「・・でも・・それとは違うと思うけどなぁ・・・だって中野さんがいくら女らしくないって言ったって、あのコは本当の女の子だもん・・・もともと女の子なんだから女らしくなるなんて簡単じゃないの？」
「それは違うわよ。これまで女らしくしてこなかったコが、急に女らしくなろうとしても、そんなに簡単なことじゃないわ。女の子でも誰もが有希みたいに女らしくなれるワケじゃないわよ。」
「そ・・そうかな・・・」
そんなふうに言われると・・なんか照れくさい・・・オレってそんなに女らしくないと思うけどなぁ・・・
「だって有希は男の子のころからずっと自分のことを女の子だと思ってたんでしょう？」
「・・ぁ・・うん・・・・」

そりゃぁ弘子はオレのことを、元々心は女の子だったと思ってるだろうけど、でも本当はそうじゃない・・・オレはこれでも昔は普通の男の子だった・・・少なくとも自分ではそう思っている・・・

女の子にモテるようなカッコイイ男の子じゃなかったけど、決して女っぽくはなかったし、女の子の服を着せられていた小さいころを別にすれば、女の子に間違えられたこともない・・・そんな普通の男の子でも頑張ってこうして女になったんだ・・・女の子が女らしくなるなんてそれより難しいハズがない・・・

でもこれは弘子にも言えないことだ・・・弘子はオレが女の子になったいきさつまでは知らないんだから・・・弘子はオレが性同一性障害だから好き好んで女の子になったと思っているのだ・・・

「有希やっぱり少し疲れてるんじゃない？　元気出しなさいよ。ほら、半分あげるから。」

弘子はエンゼルショコラをふたつに千切って半分オレの皿に入れてくれた。

「あ、ありがと・・・」

弘子ってほんと優しいな・・・オレも弘子みたいに他人に優しく出来るような女の子になりたいんだけど・・・どうしたらそうなれるのか全然わからない・・・

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー

ー　ー

ー

「戸田も頑張ってるみたいだな。」

「え？　なんですか？・・・」

補習中、急に若村先生に言われたけど、オレは何のことかわからなかった・・・

「このまえ高島先生（注2）にＪＩＮＯＮって雑誌を見せてもらっ

たんだ。お前言ってただろう？　俺は知らないだろうって。」
「あ・・・べつにわざわざ見なくてもよかったのに・・・」
なんか照れくさいなぁ・・・
「お前モデルの時は、ずいぶん感じが変わるんだな。」
「え・・どんなふうに？」
「あんなに大人っぽくなるとは思わなかったよ。すごい人気らしいじゃないか。」
「そ！・・そんなこと・・ないですけど・・・」
先生ったら・・なんでこんなこと言うのかなぁ・・・

「モデル・・読者モデルのときはお化粧してるし・・・髪だって・・こんなじゃないから。」
オレは三つ編みにした髪をつまんで振ってみせた。
「そうだな。普段のお前は結構地味な感じだもんな。」
・・地味って・・・
「わたし、そんなに地味ですか？」
「いや、モデルをやってる時のお前と比べてだけどな。」
そりゃぁ・・読者モデルやってるときと比べれば、普段のオレは地味かもしれないけど・・・女の子にそんなこと言うのはどうかと思う・・・もう少し言葉を選んで欲しい・・・

「戸田は最初のころ思ったより、ずっと頑張り屋なんだな。」
「・・そんなことないけど・・・」
「でも数学もだいぶ理解してきたじゃないか。」
「それは・・先生の教え方が上手だからじゃないですか？」
「まあ、それはあるだろうけどな。」
「もう・・先生ったら・・・」
やっぱり先生なんかになろうと思う人って、自分に自信があるんだろうなぁ・・・オレみたいに自信がない人間には、他人にものを教えるなんて難しい・・・

「あっ、そういえば先生・・写真が趣味だって言ってましたよね。どんなの写すんですか？」
「そうだなぁ、ほとんど景色が多いかな・・あとネコなんかいると良く写すよ。」
「え～かわいい！　先生ネコすきなんですか？」
「ああ、ネコって何か自由な感じがするだろう？」
たしかにネコは犬みたいにクサリでつながれてないもんなぁ・・・まあ、最近は家の中だけで飼う人も多いみたいだけど・・・だからこそ外にいるネコは、それだけで自由と言えるのかも知れない。
「そういうのに憧れてるのかな。」
「え？　ネコにですか？」
「人間ってなかなか自由に生きられないだろう？」
「・・・・・」
それはオレにも良くわかる・・・だって、オレほど自由じゃない人も少ないと思う・・・男なのに女として生きていかなきゃいけないんだから・・・

「こんな話、戸田に言ってもわからないかな？　戸田はけっこう自由そうだもんな。」
「え？　まさか・・・そんなことないです！　なんでそう思うんですか・・・？」
「だって戸田は自分に正直に生きてるだろう？　それって自由に生きてるって言っていいんじゃないのかな？」
「・・・・・」
先生から見ればそうなるんだろうか・・・オレが自分に正直に生きてるなんて・・・とんでもない誤解だ・・・そんなふうに見られてると思うとなんか切ない・・・

「そ・・そうだ・・わたしも写真うつすの好きなんですよ。先生はどんなカメラ使ってるんですか？　わたしは普通のデジカメなんですけど・・・」

「俺のは一応一眼レフだよ。」

「スゴイ！じゃあ・・フィルムのカメラなんですか？」

「イヤ・・そこまでマニアじゃないよ。一眼レフって言ってもデジタルのやつなんだ。」

「あっ、でも写真ってデジタルかどうかよりも、何をどう写すかが大切なんだって！　ＪＩＮＯＮで写してもらってるカメラマンさんが言ってましたよ。」

「そうか、そうかも知れないな。でも俺のはそんなレベルじゃないよ。ただ趣味で写してるだけだからね。」

「そ・・そんなこと言わないでくださいよ。わたし・・どんたくで先生が写してくれるの楽しみにしてるんですから。」

「なに言ってるんだ。　ほら、早くやらないとクラブに遅れるぞ！」

そう言って先生はオレの頭を軽くポンポンとたたいた。

「あっ・・いけない・・・」

おしゃべりに夢中で補習中だったの忘れてた・・・オレは慌てて計算に戻った。　今日は花がある日だから早くクラブに行って中野さんに教えなきゃいけないのに・・・

でも、オレはなかなか問題に集中できなかった・・・時間が経つごとに心臓のドキドキが大きくなってくる・・・

オレは先生に頭を優しくたたかれた時・・なんか背筋がゾクっとした・・・べつにイヤな感じじゃないけど・・・なんか女の子として扱われてる気がした・・・先生ってオレのこと、どんなふうに見てるのかな・・・オレのこと本当の女の子と同じように見てくれて

るのだろうか・・・

注２：高島亜矢子〈たかしま　あやこ〉若村と同じ今年赴任してきた英語の先生。有希は高島先生には習っていない。若村とは同じで、今年大学を卒業したて、２２歳。

第８２話　博多どんたく港まつり（正式名称）

とうとう５月３日・・・どんたく当日だ・・・準備は十分やったつもりだけど、やっぱりイザとなったら緊張する・・・

パレードは午後１時から・・・オレが日本舞踊の人たちと出るのは２時ごろだけど、その前に舞台で踊らなきゃいけなくなったから大変だ・・・パレードのことは聞いてたけど、舞台の話は直前に知らされた・・・なんか話が違う・・・

そんなだからＪＩＮＯＮの佐々木編集長とも電話で確認するしかなかった・・・本当は午前中に会って打ち合わせするハズだったのに・・・佐々木さんもこういうことは思うようにいかないものだって言ってくれたけど、約束を破るみたいで申し訳ない気がする・・・

ＪＩＮＯＮのパレードにはモデルの蟹原さんも来るらしい。今日東京での仕事が終ってから来るそうだからＪＩＮＯＮの方のパレードは結構おそい時間になりそうで、オレにとっては好都合だ。オレは４時半ごろまでに博多駅の方に戻ればいいらしいけど、着替えとか、お化粧の時間を考えたら、たぶんそれでもギリギリじゃないだろうか・・・？　衣装は編集部で用意してくれてるらしい・・・どんな衣装かな・・・可愛いのだったらいいけど・・・

オレは朝から日本舞踊のみんなと合流して着物に着替えた。着替えるのは仮設のテントの中で、ごった返してて大変だ・・・とにかく大人だけテントの中で着替えて、子供は外で着替えさせる・・・オレも大急ぎで３人の子供の着替えを手伝った・・・オレたちの隊の着物は、年輩の人たちは白地に紫の市松模様、オレたち娘や子供

たちは白地にさわやかな青と空色が混じった市松模様だ。実際に本番の着物を着るとテンションも上がって来る。最後に体育館に集まっての合同練習の時、初めてこの着物を着た時は感激したものだ。

花笠はピンクの花飾りで、上の方は赤、そしててっぺんには黄色い飾りが付いている。赤地に“祭”と書いてあるうちわと、拍子木みたいに打ち鳴らすためのおしゃもじは、練習では普通のだったけど本番はキレイな朱塗りのやつだった。踊りによってうちわとおしゃもじを持ち替えなきゃいけないのが大変だ・・・使わない時は帯に挟んでおく。

気が付くと、もう博多駅本舞台の上では博多華丸・大吉の司会で進行していた・・・ゲストに森口博子も来てる・・・やっぱり福岡出身のタレントが福岡のイベントに来ることが多いのだろう。百道（ももち）の方の舞台には氷川きよしが来てるらしい。森口博子の歌なんて初めて聞いたけど、思ったより上手だな・・・でも聞いた事ない歌だ・・・

「次、私たちの番よ！準備はいい？」

え？もうオレたちの番？　森口博子の歌聞いてる場合じゃなかった・・・歌が終るとオレたちは追い立てられるように舞台に上がった・・・舞台での踊りは直前に練習しただけだから間違えないか心配だ・・・

小さい子供たちが一番前、オレたち高校生や中学生の娘たちはその後ろ、一番後ろがお姉さんとおばさんたち・・・オレはヘタなんだからもっと端っこで良かったのに・・・なんか真ん中の目立つところになってしまった・・・オレが“春日ユウ”だからって・・・みんな気を使いすぎだ・・・

音楽が鳴りだした・・・踊りで気をつけるのは、振り付けはもちろんだけど、裾さばきとか、顔の向きとか
、手つきの優雅さとか・・・オレの踊りなんて所詮つけ焼き刃だから、ポイントを教えてもらっただけだ・・・でも手つきを色っぽくなんて・・・オレに色っぽさを求めても無理だと思う・・・でも出来るだけでも頑張らなきゃ。

前の子供たちが時々間違えるから、オレもつられないように必死でやってるうちに、踊りはあっという間に終ってしまった・・・
「いやぁ素晴しい踊りやったね！　ところでこの隊には“九州ＪＩＮＯＮ”でモデルさんばやりようコがおるっちゃろう？　どのコかいな？」
なんで華丸さんがオレのことを?!　みんながオレの方を向く・・・
「あっ!あんたが春日ユウちゃんね。やっぱモデルさんは可愛かねぇ！」
オレのことなんか・・言わなきゃ誰も気付かないのにぃ・・・顔が赤くなっちゃう・・・
「あ・・わ・・わたしは・・ただの読者モデルですけど・・・」
もう・・・オレのことなんかどうだっていいのに・・・
「ユウちゃんは“九州ＪＩＮＯＮ”の隊でもパレードに参加するとやもんね？」
え？・・・なんで知ってるんだろう・・・あっ・・・そうか・・・九州ＪＩＮＯＮもどんたくに協賛してるって佐々木さんが言ってたっけ・・・それじゃオレも少しくらい宣伝しとかなきゃいけないのかな・・・
「あ・・あの・・九州ＪＩＮＯＮの隊はだいぶ遅い時間なんですけど・・・蟹原さんも来てくれるんですよ。」
観客の若い女の子から大きな歓声があがった・・・やっぱり蟹原さんは人気がある！

「へ～カニちゃんも来るとね。そりゃ楽しみたい！」
　オレはやっと開放されて演舞台を降りた・・・なんかドッと疲れた・・・
「やっぱり春日さんって人気ありますね。」
中学生のコに言われてオレは恥ずかしくなった・・・
「そ・・そんなことないわよ・・・蟹原さんが来るから宣伝しなきゃいけなかったのよ・・きっと・・・」
「春日さんって謙虚なんですね。」
け・・謙虚って・・・オレは自分が実際どれほどの人間か知ってるから・・・オレなんて大したコじゃない・・・お化粧しなきゃ地味だし・・・

―――――――――――――――
―――――――――――――――
――――――――――

　なんか簡単にお昼を済ませたりバタバタしてるうちに、もうすぐパレードが始まる時間だ・・・市長の挨拶とか始まった。
　どんたくには雨がつきものだ。少なくとも2日のうち1日は雨が降るというのがジンクスになっていると言ってもいい。でも今日は晴れたから良かった・・・
　音楽が鳴りだしパレードが始まった。最初は市長や県知事、その後にミス福岡のコなんかが続く・・・聞くところによると、昨日どんたくの前夜祭があってミス福岡が決まったらしい・・・初めてがどんたくのパレードなんてどんな気持ちなんだろう・・・？　緊張

してるんじゃないかなぁ・・・

♪　ぼんちかわいやねんねしな～　しながわじょろしゅはじゅうもんめ～　じゅうもんめ～のてっぽだま～　たまやが～かわへスッポンポン～♪

陽気なお囃子に合わせて松囃子の人たちがしゃもじを叩きながら行進する・・・松囃子というのはどんたくの発祥になったものらしい・・・お揃いのはっぴを着て、頭には“にわか”のお面を被っている。中にはお面で顔を隠して陽気に踊っている人もいる・・・なんか俄然“どんたく”っぽくなってきた。

元々“どんたく”というお祭りは、江戸時代にはこの“にわか”というおかしなお面で顔を隠して、町人たちが御上や武士のことを“博多にわか”という今でいうところのダジャレのようなもので面白おかしく皮肉ったという無礼講のお祭りだったらしい・・・オレはそういうことは知らなかったけど、オレがどんたくに出ると言ったら弘子が教えてくれた・・・弘子は郷土史研究部なんて入ってるくらいだから詳しいみたいだ・・・今でも“博多にわか”の伝統は細々と続いているらしい・・・さっきも演舞台でも年寄りがやっていた・・・初めて聞いたけど、あんまり面白くなかった・・・そもそもダジャレってそんなに面白くないし・・・

「みなさん並んで～！」

日本舞踊の先生に言われて、もうすぐオレたちの番が来たことがわかった・・・もっと時間があると思ったのに・・・急に言われてドキドキしだした・・・

でもそんなにドキドキしてもいられない！オレたちの前の子供た

ちを並べるのもオレたちの役目なのだ。
「みんな並んでね・・・あ、君はこっちでしょう?」
男の子を列に並ばせる・・・男の子なのに女の子の着物きせられてるのが可愛い！　まあ、考えてみればそれはオレも同じなんだけど・・・この子は自分が女の子の恰好をしてるのわかっているのだろうか・・・？　お母さんが自分の子供の晴れ姿を写してる・・・大きくなって女の子の着物きてる写真を見たとき、このコたちどう思うのかな?

♪　ぼんちかわいやねんねしな～　しながわじょろしゅはじゅうもんめ～　じゅうもんめ～のてっぽだま～　たまやが～かわへスッポンポン～♪

前の隊が出て行ってオレたちの番だ・・・みんなでおしゃもじを叩いて調子を合わせる・・・
「行くよ・・・はい！」
♪　ぼんちかわいやねんねしな～　しながわじょろしゅはじゅうもんめ～　じゅうもんめ～のてっぽだま～　たまやが～かわへスッポンポン～♪
踊りながら行進が始まった！　子供たちに合わせるから、かなりゆっくりだ・・・あんなに練習したのに子供たちの踊りがもうバラバラだ・・・

もうこうなったらジタバタしても始まらない・・・オレたちだけでもちゃんとやらなきゃ！

♪　ぼんちかわいやねんねしな～　しながわじょろしゅはじゅうもんめ～　じゅうもんめ～のてっぽだま～　たまやが～かわへスッ

ポンポン～♪
パレードしながらついつい口ずさんでしまう・・・ひっきりなしにエンドレスでお囃子を流されると、なんか頭がハイになってきちゃうみたい・・・自然に身体が動いてしまう・・・どうやらみんな同じみたいで子供たちまで、いつの間にか踊りが合ってきてるから不思議・・・

博多駅から天神までは2キロ以上あるらしいから・・・最初はそんなに歩けるか不安だった・・・オレはともかく小さな子供もいるし・・・でも心配ないみたい・・・どういうワケか疲れを感じない・・・

沿道にはものすごい数の人たちが溢れている・・・何しろゴールデンウィーク一番の人出なのだ・・・２００万人も来るらしい・・・こんなに沢山の人に見られたら、いつものオレだったら恥ずかしくなりそうな気がするけど、今日はお祭りの雰囲気に呑まれているのか平気で踊ってる・・・カメラで写してる人もたくさんいる・・・こんなに人がいたんじゃ若村先生が来てくれたとしても、とても気づけそうにない・・・先生はオレに気づいてくれるかな・・・いつもと違う恰好だし、お化粧も着物に合わせて和風だし・・・でも・・・本当に来てくれてるのかな・・・

中洲の橋のところに差しかかると細くなった歩道にたくさんのカメラマンがいるのが見えた。橋の上から写すと向こうが見晴らしが良いから穴場なのだろう・・・テレビでも中洲を紹介する時には必ず映すところだから。

橋の上に行くと急にシャッターの音が激しくなった・・・なかにはストロボを焚(た)いている人もいる・・・たぶん進藤さんが言っていた日中シンクロってやつだ・・・ここは見晴らしが良くて後ろから太陽があたっているから逆光になっている・・・影が前になってる

し・・・だから明るいけど絞りを小さくして、暗くなった分ストロボを焚いて被写体を明るくするのだ。　ただ気をつけなきゃいけないのはストロボを使うにはシャッタースピードを遅くしなきゃいけないから、動きが早い被写体の場合ブレてしまう危険があるらしい・・・オレたちの踊りくらいなら大丈夫なのかな・・・？

でも・・オレがこんなところで全然知らない人たちから写真うつされるなんて・・・なんかヘンな感じ・・・しかもこんな恰好で・・・さすがに恥ずかしさが、ちょっぴり頭をもたげてくる・・・でもオレは頑張ってそんな気持ちを振り払った・・・どっちみちこんなところでやめることなんて出来ないし・・・

オレが出来るだけカメラのシャッター音を気にしないようにしていると、橋が終るところに差しかかったとき、ふと一人のカメラマンに目が止まった・・・若村先生だ！

オレの方を写してるような気がするけど・・・本当に気づいているのかな？　こんな恰好してるオレに気づいてくれるかな・・・？

確かめてみようかなぁ・・・　先生は望遠レンズを使ってる・・・オレを写してるなら結構アップで見えてるハズだし・・・

オレは一瞬だけ片手で2本のおしゃもじを持ち、空いた方の手で軽く先生に向って手を振ってみた・・・すると先生もカメラから顔をあげて笑顔で手を振ってくれた！

（やっぱり気づいてくれてたんだ・・・）

なんか嬉しくて胸が高鳴る・・・つい綺麗に踊ろうと意識しちゃう・・・せっかくアップで写してくれてるんだし・・・オレ・・顔が赤くなってたら恥ずかしいなぁ・・・

！！

先生の近くに来たとき、オレが先生の方を見てみると、先生はオレの方を指さして、となりにいる女の人に何か話してる・・・だれだろう・・・あの人・・・　きれいな人だけど・・・

　先生はその後も時々先回りしてオレのことを写してくれたけど、その時はもうあの女の人はいなかった・・・オレはずっと気になったままパレードを続けていた・・・

　天神に近づいて遠くにゴールも見えてきた。

「有希～！」

急に大きな声で呼ばれて、声がした方を向くと、弘子と直美だった！　ふたりがオレに手を振っている！　オレも思わずおしゃもじを持ったまま両手を振ってしまった。

ふたりも来てくれたんだと思うと嬉しくて目頭が熱くなってきた・・・

「千里も頑張ってたよ～！」

直美が大きな声で教えてくれた。ＪＩＮＯＮの読者モデルも宣伝とかするために舞台に出ていたのだ・・・オレはそっちには出れないから、内心千里がちゃんとやっているのか心配してたんだけど、それをふたりも感じていたのかも知れない・・・おかげでその後はオレも安心して踊りに専念することが出来た・・・あの先生と一緒にいた女の人のことは、相変わらず気になっていたけど・・・

―――――――――――――――

―――――――――――――――

―――――――――

天神にあるゴールに到着した時には、もう3時半を回っていた。普通に歩けば３０分くらいの道のりだけど、踊りながら、それも子供の足に合わせてということを考えれば1時間３０分で来れたのは早い方じゃないだろうか？　良く子供たちが一人も脱落しなかったと思う・・・とはいえオレはこれからまた博多駅にある出発地点に戻らなきゃいけない・・そしてまた同じ道のりを歩かなきゃ・・・それなのにゴールした途端、気が抜けてしまったのか、足が棒のように疲れていることに気がついた・・・すぐに戻らなきゃいけないのに・・・

「有希～！」
弘子と直美が人をかき分けて来てくれた・・・
「有希、すぐに戻らなきゃいけないんでしょう？」
「・・ぅ・・うん・・・」
「それなら地下鉄がいいわよ。混んでるけどちゃんと時間どおりに着くから、上を行ったら渋滞で間に合わないわ！」

オレは踊りの先生へのあいさつもそこそこに、着物のままふたりに連れられて地下鉄へ向った・・・着物では階段が降りにくい・・・なんとか地下鉄に乗り込んだけど思ったとおり混んでいる・・・でもとりあえず乗ってしまえば着くことが出来るからホッとした・・・本当は座りたかったけど、このさい贅沢は言ってられない・・・着物で乗り込むのはさすがに恥ずかしかったけど、ふたりがいてくれるから何とか大丈夫だ・・・本当にふたりが来てなかったらどうなったことか・・・オレひとりじゃ遅れてしまったかも知れない・・・オレってこういうとこ本当にダメだと思う・・・

それにホッと出来るのは弘子がいるからというのもある・・・弘子がいてくれるとオレも安心して女の子でいられる気がする。　弘

子にオレが男だとバレたときには、もうダメだと思ったけど、今思えばあの時バレていて良かったのかもしれない。弘子はこうして直美といる時や他のコといる時も、他の人たちにはわからないようにオレのことを気づかってくれる。

昔は弘子のことを少しクールでとっつきにくく感じたこともあったけど、あの一件以来オレたちはよりわかりあえるようになった気がする。ほんとに何が幸いするかわからない・・・

・

博多駅につくと人波に揉まれながらエスカレーターに乗り、やっとのことで改札を出た・・・もう4時過ぎてる・・・急がなきゃ・・・

駅のまわりは人でいっぱいで、どこに行けばいいのかわからない・・・千里たちを探してキョロキョロしていると向こうにいる派手な集団の人と目が合った・・・どういう団体だろう・・・まるでリオのカーニバルみたいだ・・・

すると驚いたことに、そのうちの一人がオレに向って大きく両手を振りながら近づいてくる・・・でもオレにあんな知り合いなんていない・・・たぶん後ろの人に振ってるんじゃないだろうか・・・？　オレは振り向いてみたけど、それらしい人はいないかった・・・

不思議に思いながらまた前を向くと、その人が手を振りながら大きな声で言った。

「ユウちゃ～ん！！」

え？・・・やっぱりオレ？

「おひさ～！」

その人は駆け寄ってきてオレに抱きついた！

「え？！・・あ・・あの・・・」

「え～！もしかしてユウちゃん、あたしのこと憶えてないの～？！」
「え・・えっと・・・エ？」
だれ・・・？　このひと・・・

「あたしよ～　ハルカ！　愛島ハルカよ～」
「あ・・ハ・・ハルカさん・・・」
そうか・・・なんとなく思い出した・・・でもオレたちケンカしたんじゃ・・・？
「あ・・あの・・あの時はごめんなさい・・・」
「あ～ケンカのこと？　いいのよ！　あたしもケンカのことなんか憶えてないもの！　ユウちゃんも憶えてないんでしょう？」
「は・・はい・・・」
「だったらなかったのと同じよ！でしょう？ね？」
「あっ・・はい・・・」
そうか・・・そういう考え方も出来るかも・・・

「ユウちゃん、そんな恰好してこれからパレード？」
「い・・いえ・・これはもう終って、これから着替えてからＪＩＮＯＮの隊に合流するんです・・・」
「ＪＩＮＯＮってモデルのコたち？」
「はい！」
「だったらあっちに居たわよ。」
「え！ホントですか？　良かった・・探してたんです！」
「そう。それじゃ頑張ってね！　あたしたちも頑張るわよ～！！」
そう言うと陽気にサンバのリズムでお尻を振って、後ろに広がった大きな羽根を激しく揺らせた。

「あの人、有希の知り合い？」
「あ・・うん・・ちょっとね・・・」

「あの人ニューハーフ？」
直美に聞かれて戸惑った・・・そういえば普通の女の子にニューハーフの友達なんてそうはいない・・・どうしよう・・・怪しまれちゃう・・・

「有希、二光さんと知り合いだからでしょう？」
急に弘子が言った・・・
「！・・あ・・うん・・そうなの・・・」
「あっ、そうか！有希って二光さんにお化粧習ってるって言ってたもんね。」
「そう・・・読者モデル始めてからね・・・」
そういえばお化粧の話した時に、二光さんのことは言ってたんだったっけ・・・読者モデル始めてからって言うのはウソだけど・・・
弘子がとっさに言ってくれて助かった・・・オレだけじゃアワアワしちゃって怪しまれるとこだった・・・
「ほら、早く千里のとこに行こう！」
弘子がオレの手をつないで引っ張った・・・オレは弘子の手をギュッと握って“ありがとう”と伝えた・・・ホント感謝してる！

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

向こうに千里がいるのが見えて、オレは手を振った。
「千里～！」
「あ、有希！　なんとか間に合ったね。」
千里は白いブラウスで青い花柄のスカート。
「千里、この服かわいいじゃない！　清楚で千里らしい！」

「そう？　有希の服はこれよ。有希も早く着替えておいで。」
「うん。」
オレは服が入った紙袋を千里から受け取った・・・オレのはどんな服なんだろう・・・千里と似たやつかな・・・？

駅のトイレで紙袋を開け、入っていた服を取り出してみた。
「か・・かわいい！」
それはピンクっぽい小花柄のシフォンワンピースで胸と腰のところに細いリボンが付いている・・・オレがシフォンワンピを好きなの知ってて用意してくれたんだろうか・・・？　オレは急いで着物を脱ぐと、その服に着替えた。

トイレの個室から出ると弘子と直美が待っててくれた。
「わあ！　有希似合ってるわよ。」
直美が言うと、弘子も笑顔でうなづいた・・・男なのにこんな服が似合うなんて・・・弘子に見られるとなんか恥ずかしいな・・・

靴は白いサンダルで踵がけっこう高い・・・オレこういう踵が高いの苦手なんだよなぁ・・・でもやっぱりヒールは高い方が足が長く見えてカッコイイから我慢しなきゃ・・・でもこんな靴でまた２キロ以上も歩けるかなぁ・・・

「有希はやくしないと、お化粧も直すんでしょう？」
弘子に言われハッとした・・・そうだお化粧も直さなきゃいけなかったんだ・・・もちろん髪の毛もこのままじゃ変だ・・・
「あ！しまった・・・わたしお化粧道具ロッカーに入れたままだ！」
「え？！　なにしてんのよ有希、もう間に合わないわよ？！」
「ど・・どうしよう・・・」

するといきなりドアが開いて小さい女の人が駆け込んできた。

「良かった！ここにいたのね！」
「カネちゃん？！」
メイクのカネちゃんだ・・・
「ど・・どうしたの？」
「さくらちゃんに聞いてきたのよ。メイクまだなんでしょう？」
「あっ、はい・・それが・・道具をロッカーに入れたままで困ってたんです。」
「それじゃ良かったわ。ここじゃやりにくいから外に出ましょう？」

オレたちはトイレの外に出て、どこか座れるところがないか探したけど、人がいっぱいでとても座れるとこなんて無かった・・・仕方なく壁際にしゃがみこんで、お化粧をしてもらうことにした・・・
カネちゃんが前髪をピンで留めて、手際良くクレンジングで和風のメイクを落とす・・・そして新たにファンデーションを塗り、いつものメイクをしてオレをモデルにしていく・・・チラッと目を上げると弘子と直美が興味深そうにみつめていて、思わず慌てて目線を下げた・・・顔が熱い・・・

あっという間にメイクを終えると今度は髪の毛だ。結い上げた髪をほどいて霧吹きで湿らせながら伸ばしていく・・・オレはストレートパーマをかけてるから、わりと伸ばしやすいけど、さすがに短時間では難しいみたいだ・・・
「これくらいが精一杯ね・・・ユウちゃんの綺麗な髪には程遠いけど・・・」
「大丈夫よ。ありがとう・・わたしひとりじゃどうにもならなかったわ。」
「そんな・・あ、メイクは遠くからでも綺麗に見えるように、いつもより少し濃いめにしてるから。」
「ありがとうカネちゃん！」
オレはカネちゃんにお礼を言うと、急いで千里たちのところに戻っ

た。

「あ、有希、カネちゃん間に合った？」
「うん！　カネちゃんが来てくれてすごく助かった。こんどちゃんとお礼しなきゃ・・・」
「有希の服も可愛いじゃない。有希そういうの好きでしょう？」
「うん・・でも・・ほんとに似合ってるかなぁ・・・」
「似合ってるわよ！　だいたい有希が似合わない服なんてないでしょう？」
「そ・・そんなことないよ・・・」
いくらなんでもそれは言い過ぎだ・・・

「ユウちゃん久しぶり、元気にしてた？」
「か・・蟹原さん？！」
蟹原さんがオレのこと憶えていてくれたなんて・・・！
「あ・・げ・・げんきです！　よ・よ・・よくわたしのことなんか・・憶えてましたね・・・」
「うふふ、忘れるはずないわよ。わたし可愛いコが大好きなの！」
「そ・・そんな・・かわいいなんて・・・」
なんか嬉しくて目眩がしそうだ・・・お世辞でも嬉しすぎる・・・！

「いたいた、ユウちゃん！」
「あ、佐々木さん。」
「うちのパレードの後ろからオープンカーでついていくから、ユウちゃんは蟹原さんと一緒にオープンカーに乗ってね。みんなに笑顔で手を振ってればいいから。」
「え？・・蟹原さんと？！」
「だってユウちゃんは一回歩いてるから疲れてるでしょう？」
そしてオレの耳もとで

「それにユウちゃんヒールが高い靴苦手でしょ？」
「あ・・」
バレてたのか・・・オレがハイヒール苦手なこと・・・女の子の靴って同じサイズでも巾が細いから、オレの足では窮屈なのだ・・・それに長く履いてると爪先に全体重がかかって痛くなってくる・・・たしかにこんな靴では2キロは歩けないかも知れない・・・

「で・・でも・・わたしが蟹原さんの横になんて・・・良いのかな・・・」
「良いに決まってるじゃない。わたしも一人じゃちょっと恥ずかしいなって思ってたの。ユウちゃんが一緒なら楽しいわ！」
「！」
蟹原さんがそんなふうに言ってくれるなんて・・・オレもなんであんなコが蟹原さんの横に？って思われないように頑張らなきゃ・・・！

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

パレードが始まると、オレは蟹原さんに迷惑かけないように、笑顔でいっぱい手を振った・・・
車の前には千里も歩いてる・・・千里キレイだな・・・1年生のころよりずっとキレイになった気がする・・・オレも少しはキレイになってるのかな・・・なんか自分のことは全然よくわからない・・・

もうあたりは少し暗くなってきた・・・写真をうつす人たちはみんなストロボを焚いている・・・みんな蟹原さんを写してるのはわかってるけど、こんなにストロボが光ってるとオレまでその気にな

ってきちゃう・・・

もうすぐ中洲の橋だ・・・もうさすがに若村先生はいないと思う・・・でもついつい探しちゃうのは仕方がない・・・出来ることならモデルのオレも見て欲しいし・・・読者モデルだけど・・・

「あっ！」

さっき先生がいたあたりを見たとき、先生の姿を見つけて思わず声が出てしまった・・・

「どうしたのユウちゃん？」

「あ・・いえ・・ちょっと知ってる人がいたから・・・」

やっぱりイザとなると恥ずかしい・・・笑顔が引きつっちゃいそう・・・でも頑張って先生に向って笑顔で手を振った・・・

あの先生と一緒にいた女は・・・もういなかった・・・

おまけ　「文章って難しい・説明編」

文章を書いていて特に難しいと感じることに「説明」があります。とはいえ誰もが共通の認識を持っている物の場合はそう難しくありません。例えば「机」などの場合、学校のスチールパイプの机、木

製の勉強机、オフィスのスチール机、などと書けばだいたいどんな机か解ると思います。

でも、これが服装となるとそうはいきません。例えば、詰め襟の学生服なら誰もが同じような物を思い浮かべると思いますが、セーラー服では簡単じゃありません。デザインがいろいろあるからです。その他の服となると、作者が思い浮かべているのを読者に伝えるのは至難の技なのです。ファッション用語を多用すればイメージの精度を上げることは出来るかも知れませんが、その用語を知らなければイメージすることが出来ません。

それで少しそういう部分を補うために『オレは女子高生』支援ページを作ってみました。ただ普通のサイトなのでケイタイで見てる方は見れないかも知れませんが、あくまでオマケなのでご勘弁願いたいと思います。

ココです。

その前に注意！ここは１８禁サイトの中にあります。他のページへはリンクしていませんが、ページの上部にエッチなバナーが出ます。そういうのが苦手な方、ご家族がいるところで見ている方、会社でご覧の方など、どうぞご注意下さい。読者の方から忠告をいただいたので、急ぎ対処させていただきました。

ｈｔｔｐ：／／ｅｍｉｔｈｉｙａｎ．ｈ．ｆｃ２．ｃｏｍ／ｃｏｌｕｍｎ／ｊｙｏｓｉ／０８０６２３－００．ｈｔｍｌ

―――――――――――――――
―――――――――――――――
――――――――――

これまでのおまけ（その他）の場所

３６話　制作おぼえがき　０８．６．２１
４０話　『オレは女子高生』の世界　人物、舞台設定など
４５話　架空の西鉄大牟田線案内
４９話　名前について
５３話　ドラマ化を妄想してみる
６１話　「放生会編」おまけ
６７話　１周年を迎えて
７１話　『オレは女子高生』の世界　第２弾（架空の西鉄大牟田線案内付き）ドラマ『ブザー・ビート』のお知らせも
７３話　「ヒロイン」について
７８話　「出版されたら買いたい作品」のお礼
７９話　「文章」について

第８３話　若村　オレの先生

どんたくの２日目はパレードが午後３時からなので、とても舞踊とＪＩＮＯＮを両立できなかった。だからオレは舞踊は午前の演舞台だけにして、パレードはＪＩＮＯＮだけにさせてもらった。だってＪＩＮＯＮにはお世話になってるし、今日は蟹原さんもいないから、オレも少しは貢献しないと・・・まあ、オレなんかじゃ何のたしにもならないと思うけど・・・

今回は車じゃなくて歩きだから、オレも千里と一緒に歩いてパレードした。佐々木編集長が言ってくれたのか、スタイリストのケイコさんはオレの靴を踵が低いのにしてくれたから、オレも足が痛くならずにパレードを終えることが出来た。

２日目はかあさんも仕事が終ってから麻衣と来てくれた。ゴールデンウィークで休みだけど、かあさんの仕事は休み明けに発注元に届けなきゃいけないとかで、日曜や祭日でもなかなか休むことが出来ないのだ・・・パレードが終ってから、かあさんはオレたちを食事に連れて行ってくれた。

オレがかあさんに友達を紹介するのは初めてだから何か照れくさかった・・・かあさんは長谷川とも会ったことがない・・・でもかあさんは、とうさんと違って社交的な人だから、みんなとすぐに仲良くなってしまう・・・オレがちょっと人見知りなのはとうさんの遺伝なのかなぁ・・・

ーーーーーーーーーーーーーー

ーーーーーーーーーーーーーー

―――――――――

「えっと・・・円柱の表面積は・・・円の面積は直径×直径×3．14だから・・・えっと・・・あれ？」

どんたくが終って連休があけると、また毎日の補習が始まった・・・

「直径は円周の時だろう？」

「あっ！・・・そっか・・・」

「お前は3．14の意味が解ってないな？」

「え？・・・意味・・ですか・・・？」

3．14に意味なんてあるのだろうか・・・

「それじゃ、三角形の面積はどうやって出すんだ？」

「底辺×高さ÷2・・・」

「じゃぁ、何で“2”で割るんだ？」

「えっと・・・何でって・・・」

そんなこと考えたことなかった・・・

「そうだな・・・」

先生はカバンの中から三角定規を取り出した。そして対称じゃない不揃いな方の三角形を机に置いた・・・

「これの面積を出す時はどうする？」

「・・・えっと・・ここが底辺だから・・・」

オレは一番長い部分を差した・・・

「・・・この底辺と・・ここの高さを・・・」

底辺から直角の頂点までを指でなぞって・・・

「掛けてから・・・2で割ります・・・」

「まあ、そうだな。もちろんそれでも答えは出る。でも理解してるとは言い難いな。」

「・・・・・」
先生は何が言いたいんだろう・・・
「それじゃ、三角形をこう向けたらどうだ?」
先生は直角の部分を下にした・・・
「底辺が一番長い部分とは限らないんだぞ?」
「はあ・・・」

「この状態だとここが底辺だろう?」
そう言って2番目に長い部分を差した・・・
「・・・・・」
「そして、高さはここ。」
それは一番短い辺だ・・・
「ここととここを掛けて出る面積は?」
「・・・あっ!・・この四角です!」
縦の辺と横の辺を掛ければ四角の面積だ・・・!
「そうだな。じゃあ何で2で割るんだ?」
「・・・そうか・・・四角の面積を出したから、それを半分にするんですね?」
「そういうことだ。」
そっか・・・そういう意味があったのか・・・オレはただなんとなく憶えてた・・・

「それじゃ、円の場合、半径に半径を掛けると、どの面積が出る?」
「えっと・・・この面積です・・・」
オレは半径を一辺とする正方形を指で描いた・・・
「そうだな? それじゃ3.14じゃなく4を掛けたらどうなる?」
「えっと・・これの4倍だから・・・」
ちょうど円を取り囲むような四角を描いた・・・
「そうだ。でも4を掛けると少し円より余るよな?」
「・・・はい・・・」

「つまり3．１４を掛けるということは、この半径に半径を掛けて出来た小さな正方形が3．１４コ・・・まあ、ほぼ3コでだいたい円になるということなんだ。」

「・・・・」

正方形が3．１４コ？・・・ほぼ3コ？

「三角形は、まず四角を作って半分にした。円は四角を作って3．１４倍した。同じことさ。まあ、厳密に言えばもっと難しいんだけど、そんなふうに考えると、3．１４が単なる数字じゃなく、意味があることが解るだろう？」

「はい・・・なんとなく・・・」

「それじゃぁ、円柱の筒の部分はどうやって出す？」

「ここは・・広げると長方形だから・・・高さは書いてあるけど・・・そっか・・円周が長さになるんだ・・・」

円周の計算はどうやるんだったけ・・・

「そうだ・・・直径×3．１４だ！・・・でも・・何でまた3．１４なんだろう・・・」

「円周率というのは、まず正六角形を描いてみる・・・そして頂点どうしを結ぶ直線を描くと６つの小さい正三角形が出来るだろう？」

「はい・・・」

「正三角形は全部の辺が同じ長さだから、頂点どうしを結ぶ直線は正三角形の辺２つ分。まわりは？辺６つ分だな？つまり直線の３倍という事になるだろう？」

「あ・・はい・・・」

「つまりこの正六角形が内接する円を周りに描くと、正六角形の周りの長さは直径×３ということになる。それじゃあ、直径を正百角形くらいにすると？・・・限り無く丸に近づくだろう？それを計算して出したのが円周率、およそ3．１４ってことなんだ。」

「・・・・・」
なんか不思議な感じがする・・・周囲が直径の3．１４倍で、面積も半径×半径の3．１４倍・・・？　でも若村先生の教え方って、なんか実感できる気がする・・・

「戸田は手芸なんか得意らしいじゃないか。こういうのを知ってると役に立つんじゃないのか？」
「？・・・でも・・・実際にこんな形を作る時は、面積なんか出しませんよ？」
「どうするんだ？」
「えっと・・・紙で作るなら・・まず円の半径を出して、サークルカッターで切るんです。そして高さと・・・あ、ここは円周が出てた方が便利ですけど・・でも円周より少し長くしておかないと、のりしろが必要ですから。そして上下の円に巻き付けるんです。」
「なるほど・・・」
「でも実際はこれじゃダメですよ。」
「どこがダメなんだ？」
「だって計算だけなら問題ないけど、実際に作るにはペラペラの紙じゃ形が作れないもの・・・だから厚みがある紙を使うでしょう？　そしたら円を切る時に紙の厚みを引いておかないと、紙の厚みの分直径が大きくなってしまうんです。それに上下の円もだいぶ厚みがないと貼れないし・・・紙の厚さってバカに出来ないんです。」
「なるほど、お前は考え方が現実的なんだな。」
「・・・・？」
オレが現実的？・・・でも現実に作るんだったら現実的じゃないと・・・

補習が終って片付けていると

「あ、そうだ、これを渡しておかなくちゃな。」
そう言って若村先生は三角定規を直していたカバンから、差し込み式のアルバムを出してオレにくれた。

開くとそれはどんたくの写真だった。
「え、もう出来たんですか?」
先生・・オレがまだ遠くにいる時から気づいてたんだ・・・パラパラめくると先生をみつけて手を振った時の写真が出てきた!・・・なんか・・・オレ・・恥ずかしそうな顔してる・・・こんな写真・・自分で見るの照れくさいなぁ・・・
「これなんか可愛く撮れてるだろう?」
先生がその写真を「可愛い」なんて言うもんだから、オレはなんかドキドキしてきた・・・
「・・せ・・先生・・私に気づいてたんですね・・・気づいてないかと思って手を振ったのに・・・」
気づいてたのなら、こんなことしなきゃ良かった・・・

「でも・・先生・・写真うつすの上手ですね。」
「そうか? いつもプロに撮ってもらってるお前にそう言ってもらえると嬉しいよ。ま、お世辞でもね。」
「そんなぁ・・お世辞じゃないですよ。だってプロのカメラマンさんって、ちゃんとしたスタジオで撮影するし・・・それにロケでもレフとか持つアシスタントの人がいるもん!」
ＪＩＮＯＮの撮影でロケは一度しかしてないけど、アシスタントの人が大きなレフ板を持っていたので驚いた・・・
「それに逆光だけど自然な感じだし・・・バックが白く飛んでて逆にいい感じ・・・絞り開けぎみなんですよね。」
「戸田は写真のことも詳しいんだな。」
「そ・・それほどじゃないですけど・・・」
なんか・・・嬉しいけど・・すごく恥ずかしい・・・

「あ・・そういえば・・先生・・橋のとこにいるとき・・・横にいた女の人って知り合いなんですか・・・？」
オレは気になっていたことを、何気ない風を装って聞いてみた・・・
「なんだ、見てたのか？　踊りながらだから判らないかと思ったよ。」
「わ・・わかりますよ・・・だって・・なんか耳打ちしてたもん・・・」
「実は、あの人は俺の婚約者なんだ。」
「え？！」
一瞬先生が何を言ったのかわからなかった・・・
「大学の同級生でね、大学の時からの付き合いなんだ。今度の夏休みに結婚するんだよ。本当はまだ内緒だったんだけどな・・・まだ他のコには言わないでくれよ。」
「・・あ・・は・・はぃ・・・」
そっか・・・先生・・・婚約者がいたんだ・・・オレ・・そんなこと考えもしなかった・・・

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

♪　ぼんちかわいやねんねしな～　しながわじょろしゅはじゅうもんめ～
ふと気づくといつの間にか口づさんでしまう・・・2日間エンドレスでずっと聴いていたから常に頭の中で鳴ってるような気がする・・・

「せんぱ～い！」
後ろから声をかけられて、振り向くと後輩の中野御里だった。
「あ、ミサトちゃん・・・」
「せんぱい、どんたくのお囃子歌ってましたね。」
「あっ・・聴いてたの？・・恥ずかしなぁ・・・」
「恥ずかしくないですよ！あたしも頭から離れませんから！」
「え？！　ミサトちゃんもどんたく行ったの？」
「あたし、家が博多区だから近くなんです！せんぱい綺麗でビックリしました！」
「え！　ど・・どっちを見たのかしら・・・舞踊のほう？」
「どっちもですよ！　でもＪＩＮＯＮの時はホント綺麗で・・・みんながせんぱいのこと言ってるのが良くわかりました！」
「・・・わたしのこと言ってるって？」
「有希せんぱいのこと素敵だって言ってるから・・・あっ！　あたしも素敵だって思ってましたよ！・・・だけど・・あたしはファッション雑誌なんか見なかったから・・せんぱいがモデルのときあんなに綺麗だって知らなくて・・・」
「・・読者モデルだけどね・・・」

「ミサトちゃんはそんなふうにならないでね？」
「え？」
「今までどおり普通に接してってこと・・・」
「あ・・はい！　わかってます！　モデルさんの時の名前は厳禁なんですよね。」
「そ・・そういうワケでもないけど・・・」
それはオレのまわりが勝手に気を使ってるだけだ・・・まあ、オレとしてもその方が“春日ユウ”って騒がれるよりはありがたいけど・・・

「でも、あたし有希せんぱいに教えてもらってるからハナが高いです！」
「・・・ごめんね・・わたしの教え方わかりにくいでしょう・・・？」
「そ・・そんなことないですよ！　ちょっとキビシイけど・・でもせんぱいが活けたお花すごく綺麗だから、やりがいがあります！」
・・・ミサトちゃんって・・・なんて良いコなんだろう・・・

「あっ・・せんぱい知ってました？　数学の若村先生もどんたくに来てたんですよ。あたし見かけたんです！」
「知ってるわよ。さっきコレもらったの。」
オレは何げにさっきもらったアルバムを見せてしまった・・・嬉しくて誰かに見せたい気持ちがあったのかも知れない・・・
「わぁ！スゴ～イ！　先生・・せんぱいを写しに来てたんですか？！」
「う・・うん・・まあ・・・それだけじゃないと思うけど・・・」
「いいなあ・・・せんぱい、どれか1枚もらっちゃダメですか・・・？」
「え？・・・い・・いいけど・・・」
オレの写真なんかもらってどうするんだろう・・・
「コレ！いいですか？」
「あ・・それは・・・」
それはあの先生に手を振った時の写真だった・・・先生が可愛いと言ってくれた写真・・・
「ほ・・他のじゃダメ・・・？」

「え～・・・」
「コレがいいの？」
「はい・・・」
「う～ん・・・じゃぁいいよ・・・あげる。」

「わぁ！ありがとうございます！」
そんな目で見られたら・・・断れないよ・・・ミサトちゃんったら・
・案外おねだり上手なんだな・・・また先生に焼き増ししてもらえ
ばいいか・・・

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

帰ろうと学校の門を出たところで少し先を歩いている長谷川を見
つけて、オレは走って追いかけた・・・
「長谷川さん！」
「あっ・・有希・・・」
オレと長谷川は並んで歩き出す・・・オレが女の子になって1年以
上たち、こういうことも自然に出来るようになった・・・昔みたい
にいちいちこんなことでドキドキしてたら身が持たない。

オレにとってセーラー服も普通に制服という意識しか持たなくな
っている・・・人間って慣れるものだ・・・毎日着てたら、男がセ
ーラー服を着るのも普通になってしまう・・・
「長谷川さん・・もうすぐ夏服だね・・・」
「そうね、有希は冬服と夏服どっちが好き？」
「そうだなぁ・・・デザインは冬服の方が好きだけど・・・でも今
は早く夏服になってほしいかな？」
「もうけっこう暑いもんね。」
「・・それもあるけど・・この服ちょっとキツイのよ・・・胸が・・
・」
「・・・有希まだ胸大きくなってるの？」

「・・うん・・少しだけど・・・」
「Cカップになった?」
「ううん・・まだだけど・・パッドが厚めのならCカップでも着けられるよ。」
「ふ〜ん・・・Cカップになったら・・わたしと一緒だね・・」
「え?・・そうなの・・?」
なんかそんなこと聞くと、オレの身体もずいぶん女の子になったんだなぁ・・と思う・・・良く考えたらオレより胸が小さい女の子だってオレのクラスにもいるんだから・・・

「あれ?　それどうしたの?」
オレは長谷川の携帯のストラップがキてぃちゃんになってるのに気がついた。
「ご当地もの?　ちょっと見せてよ。」
「・・・う・ん・・いいわよ・・・」
なんか長谷川はしぶしぶみたいにオレに携帯を渡した。
「可愛い!・・・なにこれ?」
ん?・・・おしゃもじ持ってる・・・?
「あれ?・・これってどんたくじゃないの?」
「そ・・そうよ・・・」
「へぇ〜・・こんなのあるんだぁ・・・」
「・・有希も欲しい?」
「え?　あるの?」
「あるわよ。ふたつ買ったから・・有希が欲しがるんじゃないかと思って・・・」
そう言ってカバンから同じストラップを出してオレにくれた。

「ありがとう・・わたしも付けよう・・・おそろいだね。」
「・・・・・」
「あれ?　でも・・これっていつ買ったの?」

「・・・・・」
「長谷川さんもどんたく行ったの？」
「・・うん・・・有希も見たわよ・・・」
「え〜！　なら言ってくれればいいじゃない・・・いつなの？　4日なら終ってからかあさんが食事に誘ってくれたのに・・・麻衣だっていたのよ。」
「わたしはいいわよ・・どうせみんな一緒だったんでしょう・・？」
「うん・・・まあ・・・」
そっか・・・長谷川は弘子や千里や直美と一緒はイヤみたいだもんな・・・長谷川もけっこう人見知りみたいだし・・・オレもそういう気持ちわからなくもない・・・

――――――――――――――――
――――――――――――――――
――――――――――

「ふふっ・・・可愛い・・・・」
家に帰り部屋着に着替えてからベッドに寝転んで、長谷川にもらったストラップを眺めた・・・長谷川はオレがキてぃちゃんを好きなの知ってるから、ついでに買ってきてくれたのだろう・・・長谷川もときどき優しい時がある・・・

でも、長谷川もオレのパレード見てくれたのだと知って嬉しくなった・・・せっかく踊り練習したんだし・・・やっぱり長谷川にも見てほしかった・・・ちょっと恥ずかしいけど・・・
「あっ・・・そうだ・・・」
オレはカバンから若村先生にもらったアルバムを出した・・・さっ

きは急いでパラパラ見ただけだから、帰ったらゆっくり見ようと思っていたのだ・・・

写真に写ったオレを見ると、なんかヘンな感じがする・・・オレって何で写真に写るとこんなに女の子っぽいんだろう・・・なんかオレじゃないみたいだ・・・先生の写し方がうまいから、オレが上手に踊ってるみたいに見える・・・

ＪＩＮＯＮの時はもう暗くなり始めてたから、絞りを開けるだけではたりなくて、シャッタースピードも遅いのだろう・・・なかには少しブレてるのもあるけど、自然な感じで悪くない・・・メイクのカネちゃんが言ってたように、たしかにいつもよりメイクが濃いめだ・・・蟹原さんと一緒に手を振ってるなんて・・・なんかバチが当りそう・・・・

「・・あれ・・・？」

アルバムの上に急に水滴がたれてきて驚いた・・・

「・・・雨もり？」

でも今日は晴れていて雨なんか降る気配もなかった・・・それにウチは雨もりなんかしない・・・

「え？！・・・涙・・・？」

いつの間にかオレの目から涙が出ていた・・・なんでオレ泣いてるんだろう・・・涙が後から後から溢れてくる・・・

・・・どうやらオレは若村先生のことを好きになり始めていたのかも知れない・・・だから先生に婚約者がいるのを知って悲しくなってしまったのだろうか・・・なんか・・身体は涙を流してるのに・・心がついていかない・・・悲しむオレを感じているオレは本当のオレなのか・・・？　それとも泣いているオレが本当のオレなのか・・・？

・・！・・・

「ううぅっ・・・あぁ～ん・・・！」

急に悲しみが込みあげてきた・・・やっぱり・・どっちもオレだ・・・オレが泣いているんだ・・・悲しいんだ・・・悲しいよぉ・・・

いつのまにオレは先生のことを好きになっていたんだろう・・・泣くほど好きだったなんて・・・これじゃまるで女の子じゃないか・・・

オレがこんな気持ちになってしまったのも・・純平が最近ぜんぜんメールをくれないのが悪いんだ・・・純平のヤツ・・なんでメールくれないんだよ・・・純平に会いたい・・・・

―　―　―　―　―　―　―　―　―　―　―　―　―

―　―　―　―　―　―　―　―　―　―　―　―

―　―　―　―　―　―　―　―　―　―　―

―　―　―　―　―　―　―　―　―　―

―　―　―　―　―　―　―　―　―

―　―　―　―　―　―　―　―

―　―　―　―　―　―　―

―　―　―　―　―　―

―　―　―　―　―

―　―　―　―

―　―　―

―　―

―

今回も読んで下さってありがとうございました。

ところで皆さん『オレは女子高生』支援ページ見た方どれくらいいるのでしょうか？

どうでしたか？　実は今でもこういう事はするべきじゃないのだろ

うかと迷っているんです。
文章だと表現しにくい部分も、写真ではわかりやすいですが、逆にイメージを限定してしまうのではないかと・・・それにすでに皆さんが持っているイメージを壊してしまうのではないかと・・・それが心配なのです。
それに私のイメージにピッタリの写真も無いので、かなり妥協してますし・・・
ぜひ皆さんのご意見をうかがいたいと思っています。（特に服のイメージについて）

第８４話　彼氏　オレが知らない弘子のこと

「有希、一緒に帰ろう！」
「うん。」
このごろなぜか帰りに弘子と一緒になることが多い・・・
「またミスドかマックに寄ってくの？」
「有希がつき合ってくれるならね。」
「うん、いいよ。だってバスが来るまで時間があるんでしょう？」
それにオレもお腹空いたし・・・女の子は体型のことも気をつけなきゃいけないけど・・・やっぱり空腹には勝てない・・・ホルモンを投与したりタマを取っちゃったりすると太る人も多いらしいけど・・・オレはあんまり太らないみたいだし・・・

「弘子！」
校門を出たところで後ろから男の声がした。見ると一台の車が停まっていて、若い男の人が顔を出している・・・
「あ・・有希、ゴメン・・今日はやっぱり一人で帰ってくれる？」
「う・・うん・・・いいけど・・・」
誰だろう・・・あの人・・・

弘子は声をかけた男の人と車で行ってしまった・・・なんだか親しそう・・・もしかしてあの人が弘子の彼氏・・・？　大学生って言ってたけど・・・（７１話参照）

なんかオレは弘子が男の人の車に乗って、オレを置いて行ってしまったのがショックで、結局何も食べずに帰ってきてしまった・・・なんか食欲なくなっちゃった・・・

オレは何もする気がおきず、部屋着に着替えただけで、ひとりベッドに寝転がった・・・頭がゴチャゴチャしてて何を考えたらいいのかわからない・・・

「・・弘子ってすごいなぁ・・・」

大学生の彼氏と付き合ってるなんて・・・エッチとかもするのかな・・・なんかこんなこと考えてるオレが恥ずかしい・・・心臓がドキドキしてきた・・・

オレが男だったころはまだ中学生だったから、もちろんエッチなんかしたことない・・・いや、中学生でするヤツもいるのかも知れないけど、オレは女の子と付き合ったことさえないから、当然エッチなんかするハズがない・・・

オレは男としてエッチしないまま女の子になって・・・でも・・今のオレがいくら女の子に近づいたと言っても、この身体ではエッチなんかできない・・・別にしたいワケじゃないけど、もし・・・もしも・・したくなったとしても出来ないのだ・・・したくなることなんか、まず無いと思うけど・・・

でも最近オレにもオレ自身のことが良くわからない時がある・・・だって・・・まさか若村先生に婚約者がいたからって泣いてしまうほど・・・先生のこと好きになってたなんて・・・自分でもぜんぜん気づかなかった・・・オレはあんなに声をあげて、心から泣いたのは初めてのような気がする・・・ああいうのも失恋っていうのだろうか・・・？　ちょっと違う気もするけど・・・

先生とはその後も何とか気持ちを切り替えて、補習を見てもらってるけど、いつの間にか問題そっちのけで先生のことを考えている時がある・・・

ーーーーーーーーーーーーーーー

ーーーーーーーーーーーーーーー

ーーーーーーーーーー

「お前もとりあえず中学の問題はだいぶ理解してきたみたいだな。期末テストが楽しみだよ。」

「そ・・そんな・・・出来るかなぁ・・・」

まあ、テストの前は長谷川にヤマを教えてもらうから、出来ないことはないだろうけど・・・

「戸田、先生に約束してくれないか？」

「？」

「今度の期末テストは友達に教えてもらわないって。」

「え？！　そ・・それは・・・」

それじゃ赤点取っちゃうかも・・・

「俺はお前の今の実力を知りたいんだ。ヤマを教えてもらって出来が良くても結局は自分のためにならないんだぞ。」

「・・・・・」

「たとえ前回より点数が悪くても、自分で取った点数の方が価値があるだろう？」

「・・・取れれば・・いいですけど・・・・」

だって中学の数学が出来たからって・・・高校の数学が出来るかどうか・・・

「今のお前の理解度なら、ある程度の点は取れるはずだよ。」

「・・う～ん・・・そうかなぁ・・・」

「戸田、もっと自分に自信を持て！　モデルの時はあんなに自信たっぷりに手を振って微笑んでたじゃないか。」

「ど・・読者モデルですけど・・・でも・・わたし自信なんかありません！　あの時も内心ドキドキしてたんですからぁ・・・」
「そうなのか？　とてもそんなふうには見えなかったけどな。」
「・・わたしいつもドキドキなんです！」
あっ！
「・・・ねえ・・先生・・・わたしがテストでそこそこの・・・４０点くらい取れたら・・・なんかご褒美ください・・・それなら少しは自信が出そうな気がする・・・」

「目標が４０点？　それじゃ低すぎないか？」
「ぜ・・ぜんぜん低くないですよ！　だってわたしヤマを教えてもらっても５０点代がほとんどだもん・・・わたしには４０点でもすっごく高いハードルなんです！」
「そうか？・・・まあ、良いだろう。ご褒美は何がいいか考えておくよ。」
「ほんと？！」
「でも、テストの結果が出るまで、ご褒美が何かは秘密だ。」
「え～・・・先生ズルい・・・」
「良いじゃないか、そっちの方が楽しみがあるだろう？」
「そんなぁ・・・」
目標がわからないと、どう頑張ったらいいんだか・・・
「そのかわりとっておきのご褒美を考えといてやるよ。」
「・・わ・わかりました・・・頑張ってみます・・・」
もしつまんないご褒美だったら怒ってやる！　でもその前に良い点とらなきゃ・・・

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

「ねえ、有希・・若村先生ってさ、高島先生と付き合ってるのかな？」
「え？」
直美に聞かれてオレは何と答えたらいいのか困った・・・
「だってこの前、すごく親しそうに話してたわよ！」
「ふたりとも今年一緒にウチの学校に来たから・・・それで話やすいんじゃない？」
先生は婚約者がいるんだから、高島先生とはヘンな仲じゃないと思うけど・・・このことは他の人には言っちゃいけないって言われてるし・・・
「そう？　でも階段のところでコソコソ話してたのよ。」
「先生に限ってそんなことないと思うけどなぁ・・・」
「あれ？　有希やけに先生のことかばうね・・・もしかして有希、若村先生のこと好きなんじゃないの？」
「・・そ・そ・そんなことないわよ・・・」

「あ、顔が赤くなってる・・・やっぱりそうなんじゃない？！」
ヤバイ・・・オレすぐ顔に出ちゃうんだよなぁ・・・
「ち・・違うよ・・わたし先生のことなんか好きじゃない・・・だって先生には婚約者がいるんだもん！」
「婚約者？！」
あっ！しまった・・・言っちゃった・・・
「あ・・あの・・これはまだ言っちゃいけなかったの・・みんなには黙ってて？　お願い！」
「まあ、有希にお願いされたんじゃ言えないけど・・」
「あ、ありがとう直美！」
「でも、そのかわり、何で有希がそんなこと知ってるのか教えて。」
「あ・・うん・・・」

仕方がない・・・これまで恥ずかしいことだから、ひた隠しにしてきたけど・・・

「あのね・・わたし若村先生に放課後・・補習うけてるの・・・」
「え？　補習？」
「わたし・・実は数学が全然わからないの・・・」
「それは知ってるけど。」
「え？」
オレが数学できないの知られてたのか・・・うまく誤魔化してたつもりだったのに・・・
「英語も苦手でしょう？」
「・・うん・・・」
英語が苦手なのは知られてても驚かない・・・だって先生に当てられても全然読めないもん・・・

「・・恥ずかしいなぁ・・・バカなの全部知られてたなんて・・・」
「べつにいいじゃない。有希には他のコより得意なこともいっぱいあるんだから。」
「そう言ってもらえると・・ありがたいけどさ・・・」
「それで？　補習の時に聞いたの？」
「うん・・あっ・・そうじゃなくて、どんたくの時、先生もその婚約者の人と来てたのよ・・チラッと見ただけだけどキレイな人だったよ。」
「へ～、若村先生、有希を見に来てくれたのかな？」
「・・それだけじゃないと思うよ・・だってゴールデンウィーク一番の人出だっていうじゃない。」
「・・・まあね。」

べつにオレは何もやましいことなんか無いんだけど・・・でもオ

レの気持ちを悟られてしまうと困るし・・・だって直美はおおざっぱなところもあるけど、妙に直感がスルドイところもあるし・・・だからオレは何とか話を逸らそうとした・・・

「そ・・そういえばさぁ・・・直美は弘子の彼氏って知ってるんでしょう?」

「何度か会ったことあるけど・・そんなに良くは知らないわよ。」

「どんな人だった?」

「う〜ん・・・けっこう普通の感じの人よ。家が近所で昔から知り合いみたい。わたしは弘子とは中学からだから昔のことは知らないけど・・・今は遠くの大学に行ってるから遠距離らしいけど。」

「そうなんだぁ・・・」

「でも何で有希、急に弘子の彼氏のことなんか聞くの?」

「あ・・このまえ帰りに来てたのよ、校門のところに・・・で、弘子もその人の車に乗って帰っちゃったの。」

「へえ〜そうなんだぁ・・・ゴールデンウィークなら解るけど今ごろ帰ってきたなんて変わってるわね?」

そういえばそうだな・・・なにかあったのかな?

「でも、あんまり詮索しない方がいいわよ。弘子そういうの好きじゃないから。」

「うっ・・うん・・詮索なんてしないよ!・・ただ見ちゃったから気になっただけ・・・」

あっ・・そういうのを詮索って言うんだっけ・・・オレだってあまり自分のことを詮索して欲しくない・・自分がやられてイヤなことは人にもやっちゃいけないんだ・・・

でも、気になっちゃうな・・・弘子、あのあと彼氏とどこに行ったんだろう・・・まさか本人には聞けないもんなぁ・・・せっかく弘子と前よりずっと仲良くなったのに、そんなこと聞いて気まずくなったら嫌だもん・・・

第85話　プレゼント　レナと買い物

「ねえ、かあさん・・わたしがＪＩＮＯＮの読者モデルでもらったお金って・・いくらくらい貯まってるの？」

オレは読者モデルをして貰うお金は、かあさんが作ってくれた銀行の口座に振込んでもらっている・・・銀行口座なんかオレは持ってなかったから、かあさんに頼んで作ってもらったのだ。でも、その時かあさんに約束させられたことがある・・・それはこのお金は使わないということだった・・・将来のために貯めておきなさいって・・・

オレはおこづかいは、そのつど買いたいものがある時にもらっている・・・それはオレがどうしても自分のお金だと思うと使っちゃうからだ・・・だから読者モデルをして貰ったお金は使っちゃいけないと言われてしまったのだ。まあ、オレも別に困りはしないと思って使わないと約束した・・・通帳はかあさんが管理してるからオレは自分がいくら貰っているのかも知らない・・・

「どうしたの？」

「・・あのぉ・・少し使っちゃダメかな？」

「あのお金は使わないってかあさんと約束したでしょう？」

「・・うん・・・そうなんだけど・・・」

「それに有希が買いたいものがある時は、かあさんお金あげてるでしょう？　それじゃ足りないの？」

「ううん！　足りなくないよ。」

「だったらどうして、あのお金使いたいの？」

「・・うん・・・もうすぐ長谷川さんの誕生日なんだけど・・・なにかプレゼントを買おうと思って・・・かあさんに貰ったお金で買うのはちょっと違うかなぁって・・・」

「なんだ、そういうことだったの。それならそうと言えばいいじゃない？」
「・・うん・・・」

「いくらくらいいるの？」
「・・う～ん・・・まだ何を買うか決めてないから・・・」
「それじゃ2万円くらい持って行ったら？」
「2万円？！　ちょっと多いんじゃないかな・・・」
オレがもらったキてぃちゃんのネックレスは4，200円のやつだから2万円では高すぎだと思う・・・オレたちはまだ高校生だし、そんなに高いものを贈っても逆に気を使わせてしまいそうだ・・・でも長谷川には色々世話になってるし、少しは高めでも良い気もするけど・・・
「何も2万円の物を買わなくてもいいのよ。多めに持って行った方が安心でしょう？　余ったらまた通帳に戻せばいいじゃない。」
「・・そっか・・そうよね・・・」
たしかにその通りだ・・・オレってどうも考え方が単純だ・・・

「まだ決めてないって言ったけど、どんなのかも決めてないの？」
「・・うん・・・レナと一緒に買いに行こうと思ってるの。レナならどんなの贈れば喜んでくれるかわかるんじゃないかと思って・・・だってわたしどんなの贈ったらいいのかわからないし・・・」
「そう・・でもちゃんと最後は自分で決めるのよ。有希が贈るんだから。」
「・・うん・・わかった・・・」
そうは言ってみたけどオレには難しそうだな・・・

ーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーー

―――――――――

今日は長谷川さんの誕生日プレゼントを買うために、レナに一緒についてきてもらった。だけどレナはあちこち遊びまわるだけで、全然プレゼントを選んでくれない・・・でもレナの機嫌をそこねて、選ぶの手伝ってくれなくなっても困るから、オレもなかなか言い出しにくい・・・

二人でマックで買ったフィレオフィッシュを天神の警固公園で食べてたら、ハトやカラスが集まってきた・・・カラスって近くで見ると大きいなぁ・・・ここは以前はタバコを吸う人いっぱいだったから、オレたちにとっては煙がけむくて、こんなふうにゆっくりする事なんて出来なかった・・・今は禁煙になったからそんな心配はない。　もっとも、タバコを吸う人がゆっくり出来るところがどんどん減っているのは、ちょっと気の毒な気もするけど・・・

「ユウは“博多一番太鼓”って知ってる?」
“博多一番太鼓”？　なに?太鼓なの?　あ、おみやげのお菓子だったっけ?」
「ちがうちがう!それは熊本の“陣太鼓”でしょ?　“博多一番太鼓”って名前のわらび餅屋さんよ。」
「あ・・そういうこと・・・それなら知らない・・でもわらび餅なら食べたことあるよ。スーパーで買ったことあるもん!」
あのプルプルしたのにきな粉がまぶしてあるヤツだ。

「フフフッ・・甘いわよユウ。あんなスーパーのと一緒にしちゃダメよ!“博多一番太鼓”のわらび餅は特別なんだから。」
「そ・・そうなの・・・?」
あんなものに、そんなに味の違いがあるのだろうか・・・ただ冷た

くてプルプルしてるだけなのに・・・
「これから食べに行こうか！」
「え？！　今マック食べたばっかりなのに？」
「デザートみたいなもんよ。」
そう言うとレナは携帯を取り出して何処かにかけだした・・・
「あ、おじちゃん？いまどこらへんにいるの？」
おじちゃん・・・？
「あっ大名(だいみょう)のあたり？　明治通りを天神の方に向ってるの？　うんわかったありがとう！」
レナは携帯を切ると言った・・・
「ユウ、大名だって、行こう！」
「え？　大名？！」
わざわざわらび餅を食べるために大名まで行くっていうのだろうか・・・？　まあ、そんなには遠くないけど・・・今食べたばかりなのに・・・

　でもレナは食べることに関しては折れない性格だ・・・少々のことでは諦めないのだ・・・
オレたちは新天町(しんてんちょう)のアーケードの中を通ってカメラのキタムラのところの信号に出た・・・向いは西鉄グランドホテルだ。信号が青になって渡ろうとする・・・
「ユウ！あぶないよ！！」
レナに手を引っ張られてなかったら、あやうく車とぶつかるところだった・・・
「なんで青なのに・・・」
「ここはカーブが大きいから直進に見えるけど、車から見ると左折なのよ。けっこう飛ばして来るから用心しないと危ないの。」
こっちの方にはほとんど来ないから、そんなの知らないよ・・・危ないなぁ・・・こういうところは車が用心するべきじゃないのかなぁ・・・

車に用心しながら信号を渡って、しばらくすると“チリン・チリン”と音が聞こえてきた。
「あ！来た来た！」
レナが指さす方を見ると、腰が曲がった小さなおじいさんがリヤカーを引いた自転車を漕いでやってくる・・・
「・・・あれが・・わらび餅屋さん？」
「そうよ、きっと美味しくてビックリするわよ！」
「・・・・・」
ほんとかなぁ・・・わらび餅なんてたいした味もないのに・・・

「おじちゃん、モナカの２つちょうだい！」
そう言ってレナは２００円をおじさんに渡した。
「はいよ・・！」
おじいさんは自転車から降りると、リヤカーの箱のフタを開け、穴が開いたオタマで白くて半透明の１、２ｃｍの丸いのをすくって四角いモナカの上に山盛りにのせ、上からきなこをかけてからモナカで挟み、つまようじを一本モナカに刺すとレナに渡した・・・そして同じように作ったもうひとつをオレが受け取ると、おじさんはまた自転車を漕いで行ってしまう・・・

「さあ、食べよう！」
「え？　ここで？！」
「そうよ、せっかく冷たいんだから、早く食べないと温くなったら美味しくないわよ。」
「う・・うん・・・」
立ったままも何なので、オレたちは区役所の前の花壇のフチに座った。

オレはモナカのフタを取って、わらび餅を2、3コつまようじで

刺して口に入れた・・・
「・・・！」
ほんとうだ！スーパーで買ったのとは全然ちがう！！　冷たくて、ほんのり甘くて・・・こんな美味しいなんて！・・・それに、これが１００円なんて信じられない！
「どう？　美味しいでしょう？」
「・・うん・・すごく美味しい！」
オレはまた、つまようじで刺して口に放り込んだ・・・

「ユウ、そんなチマチマ食べないでガブッと行くのよ。こんなふうに！」
そう言ってレナはモナカに挟んだままかぶりついた・・・！
ううっ・・・女の子が道の真ん中で、そんなかぶりつく姿を見せるなんて・・・三吉先生が知ったら怒られそうだけど・・・でもレナも一緒だしいいか・・・
　オレはなんとか自分を納得させて、レナがやったようにモナカごとかぶりついた・・・
「！！！」
その美味しさったら・・・たしかにチマチマ食べたのとはまた違う美味しさがある！
「どう？」
「うん。美味しい！」
オレはもうこんなところで食べるのも気にならなくなり、男の子みたいにガブガブと食べてしまった・・・オレも昔は男だったんだし・・・たまには許してもらえるんじゃないかと思う・・・

　わらび餅を食べて満足したのか、レナもやっと長谷川の誕生日プレゼントを選ぶのを手伝ってくれた。だけど・・・

「長谷川さんってどんな趣味なの？」
そう聞かれたけど、オレは長谷川の趣味なんて良く知らない・・・
もう1年以上仲良くしてるけど、いまだに長谷川がどんなのが好き
なのか良くわからない・・・

「趣味っていったら・・・フクロウか・・仮面レンジャーくらいし
か・・・」
「フクロウ？　仮面レンジャー？　長谷川さんってそんなのが好き
なの？」
「・・う・・うん・・・ちょっと変わってるのよ・・・」
「う～ん・・・」
レナは腕組みして考え込んでしまった・・・
「それじゃぁ何が良いかわからないじゃない。ユウねぇ、こういう
ことは前もってそれとなく欲しいもの聞いとくものなのよ？」
「・・・そうなの・・・？」
そっか・・・言われてみればその通りかもしれない・・・

「なんか思い出さない？欲しがってたものとか、欲しそうなものと
か？」
「そう言われても・・・」
「服とかは？」
「でも、長谷川さんはわたしとかレナとは服の好みが全然違うから
なぁ・・・」
「じゃぁ、アクセとかは？」
アクセサリーか・・・でも長谷川がアクセサリー付けてるのなんて
見たことないし・・・それにオレがアクセサリーもらったのに、オ
レもアクセサリーじゃマネしたみたいだし・・・

「ユウはあいかわらずだね。女の子ならもっとそういうとこ普段か
ら気をつけないと！」

「・・うん・・・」
オレってほんとダメだなぁ・・・こういうことに全然気がきかないもんな・・・男のころはあまり気にならなかったけど、やっぱり女の子は気がきかないといけない・・・
「どうしようか？　なんか長谷川さんが持ってるもので古いのとかないの？　新しいの欲しそうなやつとか？」
古いの・・・？
「あっ・・そういえば・・」
オレはあることを思い出した。

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー
ー　ー
ー

夜、もう寝ようかと思って、その前にちょっと携帯を開いてみた。
「あっ！　純平からだ！」
久しぶりのメールに、慌てて開いてみると・・・

“　ユウちゃん　このごろあまりメール出来なくてゴメンね　今日まえに話したドラマの制作発表があったよ　だからもう秘密にしなくていいんだ　バスケのドラマでニュースの山上さんの後輩役なんだ　明日の「めざましテレビ」で放送されるから見てね　”

や・・山上くん?!　そんな・・・純平が山上くんと一緒のドラマに出るなんて！
・・・オレ・・どっちを見ればいいんだよ・・・
でも・・バスケットのドラマなんだ・・・それじゃ純平バスケッ

トの練習してたのかぁ・・・純平のヤツ・・バスケット上手になったのかなぁ・・・カッコイイところも見てみたい・・・もちろん山上くんのも見てみたいけど・・・

“　純平くん　メールありがとう　あしたの「めざましテレビ」ぜったい見るよ　ドラマも楽しみにしてるから頑張ってね！　”

第８６話　誕生日　家族もいろいろ

今日は６月２８日・・・長谷川の誕生日だ。　カバンの中にプレゼントを隠してるから、なんかドキドキする・・・別に同じクラスじゃないからバレる心配はないけど・・・べ・・べつにバレてもいいんだけど・・・

「有希今日クラブでしょう？」

「うん。」

弘子が聞くから何も考えず軽く答えた。

「今日、一緒に帰らない？」

「あ・・ごめん・・・今日は・・ちょっと・・・」

「あっ、いいのいいの・・気にしないで。」

弘子なんかいつもより元気がないみたい・・なにかオレと話したいことでもあったのかな・・・でも今日は帰りに長谷川にプレゼントを渡すつもりだから・・・ごめん弘子・・・

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

「う～ん・・・」

「どうしたの？　ミサトちゃん。女の子がお花活けながら腕組みなんかしちゃダメよ。」

「あ・・すみません。」

ミサトちゃんは慌てて手を下ろした。

「なんだか上手くいかなくて。」

「どれどれ・・？」
ミサトちゃんってアンスリュームとかハデな花が好きだなぁ・・・
オレとは色使いが全然違う・・・
「アンスリュームは難しいのよね。針金使ったりすると形を決めやすいんだけど・・・そういうのはオアシスじゃないとやりにくいから・・・こんなふうにしたらどうかな？」
オレはアンスリュームの硬い茎をしごいて立たせてみた。長い時間はもたないだろうけど何時間か・・・2時間か3時間くらいなら大丈夫だと思う・・・

「すごい！そんなふうにするんですね。」
「べ・・別にすごくはないけど・・・」
ミサトちゃんって表現がちょっとオーバーなところがある・・・だけど、そういうところも含めて、付き合うほどに素直な良いコだとわかってきた。ウラオモテがないっていうか・・・オレはけっこう好きなタイプだ。

「こんな感じでどうですか？」
なかなか大胆だけど悪くない・・・なによりミサトちゃんらしさが出てるところがいいと思う。
「いいんじゃない？　明るい感じでいいと思うわよ。」
ミサトちゃんの嬉しそうな顔を見てるとオレも嬉しくなってくる。
1ヶ月半ほど前には全然できなかったのに、今では新入部員の中で一番上達が早いと思う・・・オレの教え方もまんざら悪くなかったってことじゃないだろうか？

それに個性的なのも良いところだ。みんなが同じような活け方しても面白くない。ミサトちゃんみたいなコがいると、華道部も活気が出る気がする。

ただ、ミサトちゃんがこの華道部に入った目的・・・女の子らしくなる・・・ということが実現しているかどうかはオレには良くわからない。花が上手に活けられれば女らしいというワケでもないし。

　最近オレは人間ってそう簡単には変わらないのではないかと思いはじめている・・・オレなんかもう長いこと女の子やってるのに、いまだに男っぽさが抜けないし・・・まあ、それはオレの主観であって、みんなはオレのことを女っぽいだの、可愛いだの言うんだけど・・・

そりゃぁ・・・オレだって女の子なんだから、ちょっとは可愛くないと困っちゃうけどさ・・・でも人から見たらそうなのかも知れないけど、オレはまだ自分が女の子になれたという気がしないのだ・・・それはきっと心がまだ女の子じゃないからなのだと思う。

―――――――――――――――

―――――――――――――――

――――――――――

「有希、今日うちに寄ってかない？」

「え？　長谷川さんちに？」

それは・・・オレにとっても好都合だけど・・・どこでプレゼント渡そうかと迷っていたから・・・

「来なさいよ。お母さんが有希も連れて来なさいって言ってたから。」

「お母さんが？」

お母さんがそう言ったのならよけい行かないワケにはいかない・・・だってオレ長谷川のお母さん好きだもん。やさしくて・・・それにオレのこと男だって知ってるのに、本当の女の子みたいに接してくれ

る。

長谷川のお母さんはオレのかあさんと違って専業主婦だから、オレが長谷川の家に行くとたいていお母さんもいる。そしてオレが私服で行ったりすると、いろいろ服のことを聞いてきたりする・・・長谷川があまり女の子らしい服を着ないから、オレが可愛い服とか着ているのを見るのが嬉しいみたいだ。

それに・・これはオレとしては恥ずかしいんだけど、毎月九州ＪＩＮＯＮを買ってくれているらしい。ＪＩＮＯＮは若い女の子の雑誌だから、お母さんが興味あるような服は載ってないと思うんだけど、オレが載ってるから買ってるみたいなのだ・・・長谷川からそのことを聞いた時、オレはなんか申し訳ない気持ちになってしまった・・・

「ただいま！　ママ～　有希連れてきたよ！」
「有希ちゃん、いらっしゃい。待ってたわよ！」
「こんにちは。」
「今日は順子のために来てくれてどうもありがとう。」
長谷川のため・・・？　長谷川を見ると慌てたように目をそらした・・・なんか変だなぁ・・・

「今年は有希ちゃんが来てくれるっていうから、大きいケーキも買っておいたわよ。」
そっか・・オレ長谷川の誕生日に呼ばれたのか・・・でも大きいケーキって言ったけど・・ことさら大きくもない普通のやつだ。生クリームの誕生日に良く食べるケーキ・・・
「せっかくだからロウソク消しましょう？」
「い・・いいわよ・・ワザワザそんなことしなくても！」

「何いってんの？　長谷川さん・・普通するじゃない。」
「で・・でも・・・」
何なんだろう？　長谷川のヤツなんか恥ずかしがってるみたい・・・

「有希ちゃんも言ってるじゃない、せっかく丸いケーキなんだから、ほら！」
お母さんが大きいローソク1本と小さいローソク7本をケーキに刺して火をつけた。長谷川さんもう17才になるんだ・・・なんか17才って大人って感じがする・・・オレは16才になってだいぶ大人な感じがしたけど、17才って響きはまたいちだんと大人な感じだ・・・

もしかして長谷川は誕生日を祝ったことがないのだろうか？　そんな人いないと思うけど・・・

長谷川がローソクの火を消すと、オレは手をたたいて言った。
「誕生日おめでとう！」
「おめでとう順子。」
「・・・ありがとう・・」
なんだろう・・このぎこちない感じは・・・

「やっぱり丸いケーキっていいわね。ウチではこういうのやったことないから。」
「え？・・・そうなんですか？」
オレは驚いた・・・じゃあこれまではどんな誕生日だったんだろう？
「ウチでは三角のケーキをいくつか買って、好きなのを食べてたのよね。」
「へ～・・・」
そんな家があるなんて知らなかった。誕生日っていったら丸いケーキを買うものだと思ってたのに・・・

「有希ちゃんの家は3人兄妹だったでしょう?でもウチはほら、順子ひとりだから。」
「あっ・・・」
そうか・・・オレそんなこと考えもしなかった・・・
「それにウチのお父さんは合理的なことが好きな人だから。好きなのを食べた方が良いだろうってね。」
「へ〜・・・」
まあ、そう言われてみればそんな気もするけど・・・でも誕生日ってイベントなんだし・・・合理的とかいう問題でもないと思うなぁ・・・

「でも今年はお父さんも帰ってこれなかったし、有希ちゃんが来てくれるって言うから、さあ食べましょう。」
そう言ってお母さんはケーキを切り分けてくれた。でもなんだか変だな・・・長谷川の話じゃ、お母さんがオレに来てほしいって言ったって言ってたのに・・・

「有希ちゃんのは大きめに切っといたから、甘いもの好きだったでしょう?」
「あ・・はい!わたしケーキとか好きです。」
オレは男のころはそんなに甘いものは食べなかったんだけど、女の子になってから三吉先生の生徒のお姉さんにケーキ屋さんとかに連れて行かれたり、モデルの人たちとお食事したりして、すっかり甘いものが好きになってしまった・・・でもこれはオレが女になったからではなく、もともと好きだったけど、男のころはあまり食べる機会がなかったからじゃないかと思う・・・

「うふっ・・・」
ケーキは間に黄桃が挟まってた・・オレ黄桃大好きなんだ・・・生クリームと一緒になるとなお美味しい!

「有希ちゃんって本当に美味しそうに食べるわね。」
「だって、ホントにおいしいんですもの！」
あ・・ケーキ食べながらしゃべってるせいか、お姉さんたちとしゃべってる時みたいな言葉づかいになっちゃった・・・
「それに食べ方もきれいだし・・順子も有希ちゃんの半分でも女の子らしくしてくれたら嬉しいんだけど・・・」
「マ・・ママ・・・変なこと言わないでよ！　有希は男なんだからね！」
「順子！あんた何てこと言うの？　そんなふうに言ったら有希ちゃんが傷付くでしょう？！」
「・・・・・」
「ごめんね、有希ちゃん。順子も悪気があって言ってるんじゃないのよ。だっていっつも有希、有希って・・・」
「ママッ！やめてよ！！」
うわぁ・・・なんか険悪なムードになってきた・・・
「あ・・あの・・・誕生日なんだし・・・言い合いは止めたほうが・・・」
「あっ・・そうよね。ごめんね有希ちゃん、気を使わせて。」
「い・・いえ・・・」
でも長谷川黙っちゃった・・・お皿に当るフォークの音だけして、すごく気まずい・・・

「そうだ・・・」
オレはカバンを開けて、長谷川へのプレゼントを取り出した・・・いま渡した方が良さそうに思えた。このヘンな空気を変えるためにも！
「長谷川さん、お誕生日おめでとう！」
「あ・・ありがとう・・・有希、憶えてたんだ・・・」
「そりゃぁ憶えてるよ！　長谷川さんわたしが忘れてると思ってたの？」

「だって・・有希、朝から何も言わないし・・・」
「あ、ごめん。いつ渡そうかと緊張してたから・・・」

「あら？　あなたたち、なに言ってるの？　順子、昨日有希ちゃんが来るからって言ってたじゃない？」
「マ・・ママは黙っててよ！」
「・・・・・」
もしかして・・長谷川さんがオレを誕生日に呼ぶってお母さんに言ったのかな・・・？　それなのにオレにはお母さんが呼んでるって言うなんて・・・なんで？
「ねえ・・開けてみてよ。長谷川さんが気に入るかどうかわからないけど・・・」
ドキドキする・・・気に入ってくれるかな・・・

「わあ！時計じゃない！」
オレが選んだプレゼントは腕時計だった。金のフレームで細い茶色のベルト・・・結構オシャレなやつだ。
お母さんがのぞき込んで言った。
「素敵な腕時計じゃない。高かったんじゃないの？」
「いえ・・そんなことないです。」
本当はちょっと高かったんだけど、長谷川にはオレも気に入ったのを贈りたかったし、レナもこれが良いって言ってくれたし・・・それにオレが読者モデルをしてもらったお金だから、ちょっと高くてもいいと思った。

ケーキを食べて少し長谷川の部屋で金魚を見ていると、長谷川が言った・・・
「有希、良くわたしが時計欲しいのわかったわね。言ったことあっ

たっけ？」
「ううん、でも長谷川さんの時計ちょっと古いみたいだったから・・・」
「あれ、お母さんに借りてたの・・有希ちゃんと見てるんだね。」
「う・・うん・・まあね・・・」
本当はレナが言ってくれなかったら思い出せなかったと思うけど・・・
「そっか・・お母さんのだったのか・・・」
どうりでデザインも古かったハズだ・・・

「有希ってセンスいいんだね、モデルやってるんだから当り前か。」
「・・読者モデルだけどね。」
「ありがとう、大事にするね。」
なんか・・・今日の長谷川って素直だな・・・まあ、プレゼントして怒られても割に合わないけど・・・でも気に入ってくれてホント良かった。これもレナがついて来てくれたおかげだ。オレだけじゃどうなったことか・・・

「それじゃお母さん、失礼します。」
「あ、有希ちゃん待って。」
オレが帰ろうとすると長谷川のお母さんに呼び止められた。
「これ麻衣ちゃんにもあげて？　わたしたち二人じゃ食べ切れないから。」
そう言ってケーキが入った箱を渡された・・・
「で・・でも・・せっかくの誕生日ケーキだし・・・」
「いいのよ有希、麻衣ちゃんと食べて。」
「そ・・そう・・？」
なんか悪いなぁ・・・

「今日は来てくれてありがとう・・・今年はお父さんも帰って来れなかったから、有希が来てくれたて嬉しかったよ。」
「う・・うん・・わたしなんかで良かったら、いつでも来るけどさ・・・」
そっか・・・長谷川はお父さんが帰って来ないから、オレを連れてくるってお母さんに言ったのかも知れないな・・・それだったら言ってくれればいいのに・・・

　でもオレが行ったことで長谷川が嬉しく思ってくれたのならそれでいいや・・・プレゼントも喜んでくれたし・・・オレとしては上出来だ。

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー
ー　ー
ー

ちょっとあとがき

ただの誕生日なのにめんどくさい人たちですみません（笑）
長谷川さんは、なかなか本当のことを言おうとしないので、どうしてもめんどくさい事になってしまいます。

本編ではなかなか語られませんが、長谷川のお父さんは銀行の管理職をしています。性格はカタく合理的なことを好みます。何度か支店を転勤して、そのたびに長谷川さんも転校していました。現在は

大阪支店に単身赴任中です。

いつかこの設定が生きてくることがあるのでしょうか？（笑）

第87話　弘子　オレと弘子のカンケイ

7月に入った・・・7月っていえば、もう夏って気がしてたけど、まだ梅雨が続いてる・・・でも、今日は久しぶりの晴れ間だ。

だけどオレの気持ちはいまひとつ晴れなかった・・・このごろ弘子が元気がない気がするのだ・・・

千里や直美に聞いてもいつもと変わらないっていうけど・・・たしかに弘子はもともとクールなところがあるから、そんなには違わないかも知れない・・・でもオレにはやっぱりどこか元気がないように見えるのだ・・・

少し前までは、帰りに良く一緒になっていたのに・・・このごろはちっとも一緒にならない・・・オレが帰る時には、もう帰ってしまっている・・・もしかして、この前断ってしまったから避けられてるのだろうか？　弘子がそんなことするとは思えないけど・・・

オレもヒマなら自分から一緒に帰ろうって誘うんだけど、このところクラブとか期末テストに向けての勉強とかで忙しくて、つい人のことにまで気が回らなくなってしまう・・・またマックかミスドで話聞いてあげたいのに・・・もっともオレが話を聞いたって、何かしてあげられるとも思えないけど・・・だってオレはいつも弘子に聞いてもらう方だったし・・・

でもオレだって・・・少しは役に立つことも出来るかもしれないし・・・

―――――――――――――――
―――――――――――――――
――――――――――

　ろうかの窓から何気なく、久しぶりに晴れた空を見ていると、中庭を挟んでコの字形になった校舎の屋上に人がいるのが見えた。

？・・・屋上に人がいるのなんて見たことない・・・いったいだれだろうと思って良く見ると、そこにいるのは弘子のようだった・・・

(弘子・・・あんなところで何してるんだろう・・・まさか！)

オレは一瞬、弘子が良からぬ事を考えているんじゃないかとギョッとしたが、良く見れば柵も高くてとても乗り越えられそうにない。

　こんな不吉なことが頭をよぎるのも、このところの弘子が元気がなかったせいだろう。

今思えば、弘子の様子が少しヘンなのは、帰りにあの男がむかえに来た後からのような気がする・・・

何でもないとは思うけど、オレはどうしても放っておけず屋上へと急いだ。

　屋上へ出るドアは開いていた・・・そっとのぞいてみると弘子はまだ柵のところで遠くを眺めているようだ・・・

「弘子？」

オレが呼びかけると、弘子は何げないふうで振り返った・・・

「あ、有希・・どうしたの？」

「・・どうしたのって・・・それはこっちのセリフよ！」

オレは急いで弘子のところに駆け寄った。
「なんでこんな所にいるの？　心配したじゃない・・・」
「え？　あっ！　もしかしてわたしが飛び降りようとしてると思った？　まさか、なんでそんなことすると思うの？！」
弘子はそう言って笑った・・・だけど・・やっぱりいつもの笑顔とちがう・・・

「弘子、最近ちょっとヘンだよ・・・何か悩みがあるなら言って？」
オレは弘子の手を握った・・・
「ね？　わたしたち友達じゃない！　弘子はどう思ってるかわからないけど、わたしは弘子のこと親友だと思ってるのよ？」
「わたしだって有希のこと親友だと思ってるわよ。」
「だったら・・・」
「でも・・これはわたしの問題だから・・・有希にも、みんなにも関係ないことなのよ。」
「そ・・そんなぁ・・・ちょ・・ちょっと座って話そう？」

オレは屋上に置いてあるベンチに弘子を座らせて、オレもとなりに座った・・・
「ねえ・・あの人のことなんでしょう・・・？」
「あの人？」
「・・あのぉ・・・まえに校門のところに来てた人・・・車の・・・あの人って弘子の・・彼氏・・なんじゃない？」
「あ、そうか・・あの時、有希も居たんだったね。」
「やっぱり！あの人彼氏なんでしょう？　あの人のことで弘子なにか悩んでるんじゃないの？」

「まあ・・だけど・・もう終ったから。」

「え？」
一瞬、何のことか解らなかった・・・
「あの人とはもう別れたの。」
「え？・・なんで？！」
「有希には関係ないでしょう？　有希ってそんなに詮索好きだったっけ？」
「あ・・・」
そういえば直美に言われてたんだ・・・弘子は詮索されるの好きじゃないって・・・（８４話参照）

でも・・ここまで聞いて引き下がるワケにはいかない・・・だって・・オレにも何かしてあげられることがあるかも知れないし・・・
でも・・・
「やっぱり・・わたしじゃ頼りないのかな・・・だってわたし・・本当の女の子じゃないもんね・・・」
「有希・・・そういうことじゃないのよ・・・」
弘子はふぅっとため息をついた・・・
「有希・・わたしの家って神社だったでしょう？」
「・・・うん・・」
「わたしは一人っ子だから、わたしが結婚する人は、神主になって神社を継いでくれる人じゃなきゃいけないのよ。」
「え？」
「彼のことは好きだし、出来るのなら結婚したいと思ったこともあったけど・・・彼に神社を押し付けることは出来ないの。」
「・・・あの人がイヤって言ったの？　だから別れたの？」

「ううん・・・いや、そういうことになるのかな？　でも彼が神主になる気がないことは最初から判ってたのよ。でも好きだったから・・・」
「・・か・・彼は・・弘子のこと好きじゃなかったの？」

「たぶん・・好きだったんじゃないかな。」
「だったら神主になればいいじゃない！　弘子が言えないならわたしが頼んであげる！　弘子のために神主になって下さいって！！」
「そんなの無理よ。神主になるにはそれなりの大学にいかなきゃいけないし・・まあ他にも方法はあるけど・・・結構たいへんなの・・・それに彼も他にやりたい事があるんだし・・・」
「じゃ・・じゃぁ・・神社は誰かにやってもらったら？　それで弘子は彼と一緒になれば・・・だって、江戸時代じゃないんだから、絶対継がなきゃいけないワケじゃないんでしょう？　家の仕事を継がない人なんていっぱいいるよ！・・・たぶん・・・」

「有希、そんな簡単なことじゃないの。普通の職業とは違うのよ。神社は地域のモノでもあるの、わたしだけの気持ちじゃどうにもならないの。」
「・・そ・・そんなのおかしいよ！　地域のせいで弘子が犠牲になるなんて・・・うぅっ・・・」
オレは悲しくなってしまった・・・オレしっかり弘子のために考えなきゃいけないのにぃ・・・
「有希、あなたが泣くことないじゃない。」
「・・だってぇ・・・」
「わたしは犠牲になるなんて思ってないわよ。わたしはちゃんと神社を守っていきたいの。」
「・・でもぉっ・・・」
言葉が出てこなかった・・・オレは何を言ったらいいかわからなかった・・・オレにはこういうことについて言うべき言葉がない・・・
「有希・・・」
次の瞬間、いきなり弘子がオレの胸に抱きついてきて、オレは金縛りにあったみたいに動けなくなった・・・

「・・もうっ・・・諦めてたのに・・・有希が泣くから・・・わた

しまで泣きたくなっちゃうじゃない・・・！」
「・・あ・・あの・・えっと・・・」
オレはなんとか弘子を慰めようと思ったけど・・・言葉がみつからない・・・
「・・あの・・わたし・・・こういう時・・なんて言ったらいいのか・・・」
「・・・何も・・言わないで・・・」
「・・あ・・う・・うん・・・」
やっぱりオレ・・何もしてあげられない・・・親友が泣いているっていうのに・・・

弘子はいつも落ちついてて存在感がある・・・だけど今オレに抱きついてすすり泣く弘子は、すごく小さく見えた・・・いくら落ちついていても弘子も高校生の女の子なんだ・・・

「・・うっく・・有希って・・やさしいね・・・」
「・・・・・」
「・・・有希がいてくれて・・良かった・・・こんなこと・・他の人には・・言えないから・・・」
「・・・弘子・・・」
「・・・こうしてると・・なんだか落ちつく・・・有希ってやっぱり・・他の女の子とは違うね・・・」
「・・そ・・それは・・・男だから・・・」

弘子は急に顔を上げた・・・頬が涙で濡れてる・・・
「あ・・ごめん・・・そういうつもりじゃ・・・」
「ううん、いいの・・・それで少しでも弘子の気持ちがやすらぐのなら・・・」
オレはそう言って弘子をギュッと抱きしめた・・・

弘子の役に立てるのなら・・・オレのことなんかどうでもいい・・・

「・・・有希・・・もし・・有希が男の子のままだったら・・・わたし有希のこと・・・好きになったと思うよ・・・」

そ・・そんな！　そんなこと言われたら・・・オレどうしたらいいか・・・

「・・・有希の心臓の音・・・ドキドキいってる・・・」

ド・・ドキドキどころか・・バクバクだよ！

「・・ありがとう有希・・・心配してくれて・・・」

「う・・うん・・・」

「・・有希・・・」

「・・ん・・？」

「・・もっと・・・強く抱きしめて・・・？」

「！・・うっ・う・・うん・・・」

オレは言われるまま弘子を強く抱きしめた・・・

弘子って思ったより華奢なんだなぁ・・・胸が大きいからそんな感じしないけど・・・

「んっ・・」

「あっ・・ご、ごめん！・・痛かった？」

「・・ううん・・・大丈夫・・・」

オレ・・・どうしたらいいんだ・・・？

「弘子・・・わたしたち親友よね？」

「うん・・・」

「だったら一人で悩んでないで・・何でも相談してよね？」

「・・・・・」

「そんなに・・役に立てないかも知れないけど・・・」

「・・ふふっ・・・有希って変わらないね・・・そういうとこ・・・

」

「・・あっ・・ごめん・・・」

もう・・・こんな時なのに・・・なんでオレって自信持って言えないんだろう・・・

「・・・ううん・・・有希のそういうとこ・・・好きよ・・・」

え?!

「・・わ・・わたしも・・・弘子好きだよ・・・」

あっ!

「ち・・ちがうの!・・・男としてじゃなくて・・女の子として・・・!」

「有希・・・」

弘子に逆に強く抱きしめられた・・・弘子の顔がオレの胸を押しつぶす・・・全神経がそこの部分に集まったみたいに感じた・・・胸が熱い・・・

「・・わかってる・・・有希は女の子よ・・やさしい女の子・・・」

「・・そ・・そんなことないけど・・・」

もう・・・何がなんだかわからないよ・・・オレ・・・

オレたちはしばらくの間、抱き合っていた・・・もうどっちが抱きついているのかわからなかった・・・たぶんどっちもだったと思う・・・

弘子とそうしていると、なんだかオレは男の子に戻ったような気がした・・・もっともオレは男の子のころには、女の子と抱き合ったことなんか無かったけど・・・

もしかしたら、弘子も同じような気持ちだったのかも知れない・・

・オレのこと男っぽく感じていたのかも・・・だからオレが男だったら好きになってた・・・なんて言ったんじゃないだろうか・・・

だけどオレはもう男の子には戻れない。もうタマも無くなってしまった・・・そんなオレでも今は男の気持ちでいられるのが嬉しかった・・・見た目はお互い夏服のセーラー服を着た女の子だけど・・・弘子のためになってあげられるのなら・・・

「弘子・・・」

オレは男として弘子を強く抱きしめた。

第８８話　七夕　星に願いを・・・

「ねえ有希、今度の7日の夜に弘子のところで七夕祭りがあるの知ってる？」
「あ、うん・・聞いた・・・」
千里に聞かれたけど・・・オレはこの間、屋上で・・・あの後に聞いたのだ・・・
「有希も行くんでしょう？」
「・・う～ん・・・どうしよう・・・夜遅くなっちゃうし・・・バスもなくなるんじゃない？」
「それなら心配ないわよ。弘子の叔母さんが駅まで車で送ってくれるって！」

オレはできれば断りたかった・・・弘子とはあんなことがあって、まだそんなに経ってないから、ちょっと気まずいのだ・・・教室では弘子の方は、以前と変わらずいたって普通にしてる・・元気になったようで安心したけど・・・オレはなかなか吹っ切れない性格なのだ・・・どうも弘子の前だとぎこちなくなってしまう・・・

「ねえ、有希も行こうよ。」
「うぅ・・どうしようかなぁ・・・」
もし長谷川に誘われたんだったら、雑誌の撮影があるとか適当なこと言って断れるかも知れないけど、相手が千里ではそんなウソは通じない・・・だって千里も編集部に行くからバレちゃうかも知れないし・・・
「どうしたの？　なにかマズいことでもある？」
「ううん・・そうじゃないんだけど・・・」
「もしかして、弘子とケンカでもしたの？　この何日か有希ちょっとヘンよ。」

「・・・・・」
やっぱりぎこちないのバレてたのか・・・オレ、ウソつくのヘタだもんなぁ・・・

「ケ・・ケンカなんかしてないよ！」
どっちかといえば、その逆だ・・・あの時のオレはどうかしてたのだ・・・男みたいな気持ちになっちゃうなんて・・・
「行く・・みんな行くんでしょう？　だったらわたしも行くよ。」
もうこうなったら腹をくくって行くない・・・もし断ったら、オレと弘子に何かあったと思われてしまいそうだ・・・

―――――――――――――――
―――――――――――――――
――――――――――

7月7日・・・弘子の神社に来たのは、結局オレだけだった・・・

千里や直美が行くからって言ってたから、オレも行くことにしたのに・・・イザ行く時になったら、千里は夜遅くなるから行っちゃダメだって、家の人に言われたとかで来れなくなってしまった・・・そんなのもう許可もらってると思ってたのに・・・だって雑誌の撮影の時だって、夜遅くなる時は来れないんだもん・・・撮影は遅くなる日も多いから、最近はだんだんオレだけの日が多くなってる・・・元々は千里が読者モデルやりたがってたんじゃなかったっけ・・・？

　直美はカゼひいちゃったらしくて学校も休んでた・・・どうせ直美のことだから、お腹でも出して寝てたんじゃないのかな？

オレはひとりで行くのも気まずいから、ミサトちゃんも誘おうかと思ったけど、ミサトちゃんも最近忙しそうだし・・・クラブが終ったら急いで帰ってしまう・・・それに、やっぱり夜遅くなるのはマズいと思う・・・親御さんも心配するだろうし・・・いくら先輩のオレが一緒だっていっても、一年先輩なだけだもん・・・大人から見れば、高校の1年生と2年生なんて同じようなものだと思う。とても保護者とはいえない・・・

ウチの親は、そういうとこはあまりうるさくない。もちろん連絡もぜずに夜遊びなんかしたら怒られるだろうけど、ちゃんとした理由があれば許してくれる・・・もっともそれはオレが本当の女の子じゃないからかも知れないけど・・・女の子だったら、やっぱり親は心配すると思う・・・

それなのにウチのかあさんなんか「また泊めてもらえば?」なんて言うしまつだ・・・いったい何考えてるんだか・・・

「有希、来てくれてありがとう!」
弘子は今日は巫女さんだ。
「う・・うん・・・まさか二人とも来れなくなるなんて・・・」
「そうだね。でも有希だけでも来てくれたから嬉しいわ! 有希には絶対来てほしかったから。」
「・・・・?」

神社には近所の人たちがたくさん集まっていた・・・金魚すくいと、ヨーヨー釣りと、綿菓子のお店も出てる・・・ちょっとした夏祭りみたいだ・・・

七夕祭りだから子供もいっぱいいる・・・やっぱり短冊に願いごとをするのは、大人より子供の方が似合ってる。　だって子供の方が夢が無限に広がってるから・・・オレくらいになるともう夢よりも、しっかり現実を見なきゃいけない年齢だ・・・もっともオレは現実といっても将来のことなんて見当もつかない・・・だってまだオレは女の子になるだけで精一杯だもん・・・でも・・オレももう2年生・・・少しづつでも将来のことを考えないといけないのかも知れない・・・

オレと弘子が話していると、いろんな人が弘子に話かけてくる・・・

そうか・・弘子が言ってた地域の人ってこの人たちのことなんだ・・・みんな弘子より年上の大人の人たちなのに、弘子に対して高校生ではなく大人に話すような話し方をする・・・弘子はこの神社の娘として、この地域の人たちから信頼されているんだと思う・・・きっとみんな弘子がこの神社を継ぐことを疑っていないのだろう・・・そして弘子もそれに応えようとしている・・・弘子はずっとそういう思いを受けながら成長して来たのだろうか・・・

オレは弘子に神社を継がなくてもいいんじゃないかと言ってしまったことが恥ずかしく思えた・・・部外者のオレにはそんなことを言う資格なんかない・・・たとえ親友どうしであっても・・・

「弘子・・この間はごめんね・・わたし勝手なこと言って・・・弘子はこの神社にとって必要な人なのね。」

「有希・・」

「わたしったら何にも知らないのに、あんなこと言っちゃって・・・」

「ううん、有希が心配してくれた気持ち解ってるから・・・あ、ちょっとごめん！」

弘子はそう言って、今は神主の恰好をしたお父さんの方に戻って行った・・・

「・・はぁ・・・」

弘子と二人で話して、この何日か緊張していた気持ちが、なんだか少し落ちついた気がした・・・

短冊をもらって、何か願いごとを書こうとしたけど、何を書いたらいいのかわからなかった・・・オレの願いって何だろう・・・

「有希、まだ書いてないの？」

「あ・・うん・・・なに書けばいいのかな・・・」

「“彼とうまくいきますように”って書いたら？」

「彼？　わたし彼なんていないよ？」

「あら？　純平くんは彼じゃないの？　仲直りしたんでしょう？」

「そ・・そんな・・・仲直りって・・・」

それじゃまるでオレと純平が恋人同士みたいじゃないか・・・オレたちはそんなんじゃない・・・メル友だ・・・男と女だってメル友はメル友だと思う・・・

「・・わ・・わたしと純平は・・ただのメル友よ・・・だって1回会ったきりだもん・・・」

「そう・・・？」

オレは悩んだあげく、やっと短冊に願いごとを書いた・・・それは切実なオレの気持ち・・・

「素敵な女性になれますように？・・・でもそんな願いごと書いても意味ないんじゃない？」

「え？・・なんで・・・？」

そりゃあ、オレが素敵な女性になんてなれないかも知れないけど・・・意味ないってのはヒドイと思う・・・

「だって有希は今でも素敵な女の子じゃない。もう叶ってるわよ。」
「！・・もう・・そんなイジワルなこと言わないでよ・・・」
「ごめんごめん。・・・でも本当のことなんだけどな。」
弘子も冗談キツイよ・・・

「弘子は？　なんて書いたの？」
「秘密！」
「え～！　ズルイ・・・」
結局、弘子は何て書いたか教えてくれなかった・・・笹に結んだのをこっそり見てやろうかと思ったけど、やっぱりやめにした・・・だって本当に知られたくないことだったら困るから・・・親友にだって知られたくないことの１つや２つあるものだ・・・

もうすぐ９時になる。今日は星がきれいに見えるように、９時になったらこの一帯の電気を全て消すことになっているらしい。境内の真ん中に大きなビニールシートが張ってあるのは、みんながそこに座って星を見るためだ。もし立ったままで真っ暗になったら人にぶつかって危ないらしい・・・そんなに真っ暗になるのだろうか・・・？

オレもサンダルをぬいでビニールシートに上がり、どこに座ろうかと考えていると、急に手をとられた・・・
「一緒に見よう。」
オレは弘子に手をつながれて、お父さんたちがいる方に引っ張っていかれた。オレと弘子は手をつないだまま、隣り合って座り夜空を見上げた・・・

しばらくして秒読みが始まった・・・

「・・・5・・4・・3・・2・・1・・0！！」
社務所や神社の本殿を照らす電灯が消された・・・同時に遠くに見える街の明かりも消えて行く・・・するとあたりは真っ暗になった。
横にいる弘子の顔もほとんど見えない・・・

「有希、目をつむってみて。」
「え？　どうして？」
「いいから。」
オレは訳もわからないまま目をつぶった。

しばらくそうしていた・・・いったい何なのだろう・・・
「ね・・ねえ・・まだ・・・？」
「うん、もういいわよ。目をあけて空を見て？」
「？」
オレは半信半疑なまま空を見て驚いた！　さっきの倍・・・いや、それ以上に星が増えている！！
「どう？　すごいでしょう？」
「う・・うん・・・」
弘子の方を見ると、さっきは見えなかった弘子の顔が見える・・・
そうか・・暗さに目をならすためだったのか・・・

「ん？　あれなに？」
星空に細い光りがチラチラしている・・・
「あれは山の方で誰かがビームライトで照らして説明してるのよ。ほら、今指してるのが織姫って言われてる“こと座のベガ”・・・今のが彦星で“わし座のアルタイル”よ。」
「へぇ～・・・」
「今2つの星の間を長く動かしてるでしょう？　あれは天の川だって言ってるんじゃないかな？」
「え？　あれが天の川？」

なにか白い絵具を溶かした水でも流したみたいに薄く夜空にのびている・・・そういえば英語ではミルキーウェイって言うと聞いたことがある・・・こういうことだったのか・・・

「今年はちょうど新月だから天の川が良く見えるのよ。月が出てると月の明るさで見えないこともあるの。」

「わたし天の川って初めて見た・・・きれい・・・」

なんか幻想的にも見える・・・こんなの見たら昔の人が織姫と彦星が年に一回だけ天の川を渡って会う、なんてロマンチックな話を考えてしまうのもわかる気がする・・・

弘子はその後も誰かが照らすビームライトの光りに合わせて説明してくれた・・・オレは弘子がこんなに星のことに詳しいなんて知らなかった。そういえば弘子のお父さんも星の話をしてくれたっけ・・・お父さんが詳しいから弘子も知ってるのかもしれないな・・・

「有希知ってる？　天の川って銀河系なのよ。」

「え？・・・でも・・銀河系って丸いんじゃないの？」

たしか絵では円盤のような形をしていたと思うけど・・・

「横から見てるからよ。だって私たちがいる地球も銀河系の中にあるんだから。」

「・・・あ、そうか・・・」

円盤を横から見たら、たしかに細い線のようになる・・・

「だからわたしたちは天の川を見てると思ってるけど、本当はわたしたちも天の川の中にいるのよ。すごいと思わない？」

「・・・う・・うん・・・」

なんだかもうオレのイメージを超えている・・・そんな壮大な話を聞いていると頭がボーッとしてきた・・・

———————————————

———————————————

——————————

「有希・・有希・・・」
「・・・ん？・・あれ？」
「有希ったら寝ちゃうんだもん。」
「・・あ・・ごめん・・・いつのまにか・・・」
もう電気が灯いていた・・・見上げてみたけど天の川も消えていた・・・
「・・なんか・・星見てたらボーッとしちゃって・・・」
「疲れてたんじゃないの？　このごろ有希、忙しそうだったから。」
「・・う・・うん・・・そうかも・・・」
たぶん違うと思うけど、弘子にはそう答えておいた・・・だってオレ自身よくわからなかったから・・・

なんとか最終の電車に間に合う時間だったので、弘子の叔母さんに駅まで送ってもらうことにした。
弘子は泊まっていったら？って言ってくれたけど、お泊まりの用意なんかしてないし・・・弘子はパジャマとか貸してくれるって言ったけど・・・オレは今日は帰りたかった・・・なんだがひどく疲れてしまったのだ。

だけどすごい星だったなぁ・・・あんなすごいの長谷川さんにも見せてあげたかった・・・

駅に向う車の中で弘子の叔母さんに話しかけられた。
「今日はどうだった?キレイだったでしょう?」
「・・はい・・・でも、なんかわからないけど・・疲れちゃいました・・・」
「きっと星に酔ったんじゃないかしら。」
「・・星に・・・?」
「長い時間、降り注ぐような星を見上げてると、お酒に酔ったみたいな気持ちになることがあるそうよ。」
「へぇ〜・・・知らなかった・・・」
「まあ、有希ちゃんはお酒に酔ったことなんてないでしょうから判らないわね。」
「・・・・・」
オレは高校生だから、本当はお酒に酔ったことなんかあったらいけないんだけど、でもお花見の時に一度だけある・・・だから星に酔うと言われてみれば、そんな気もしないでもない・・・あの時は次の日、二日酔いで苦しかった・・・もう絶対お酒は飲むまいと思うほど・・・でも星にはいくら酔ったって二日酔いはしないと思う。
「おばさん・・弘子って神社の跡継ぐんでしょう?・・・なんかすごいなあ・・・そんなこと言えるなんて・・・わたしは将来のことなんて・・・」
「有希ちゃんは?　なにかやりたいことないの?」
「・・よくわかりません・・・」
「今のままモデルをやるのもいいと思うけど、普通に結婚して、お母さんになるのもいいんじゃない?　有希ちゃんなら良いお母さんになると思うけど?」
「!」
オレはお母さんになんかなれるハズがない・・・モデルだって・・ただの読者モデルだし・・・でも叔母さんに悪気がないのはわかってる・・・叔母さんはオレが男だなんて思ってもいないんだから・・

・

・・・でも・・お母さんは絶対無理としても・・・お嫁さんになれるかな・・・

・・・オレ・・なんてこと考えてるんだろう・・・そんなこと無理に決まってる・・・男がお嫁さんなんて・・・だいたい相手は誰なんだよ・・・

!!・・・純平の顔が浮んで、オレは慌てて頭を振って打ち消した・・・純平はそんなんじゃない・・・!

「有希ちゃん!　起きて、駅に着いたわよ!」

「・・・・!」

オレはまた眠ってしまったようだ・・・夢だったのか・・・

「大丈夫?　ひとりで帰れる?」

「あ・・大丈夫です・・・送ってくださって、ありがとうございました。」

オレは叔母さんにお礼を言って、急いで駅に駆け込んだ・・・最終に間に合わないといけなかったのもあるけど・・・変な夢を見たのが恥ずかしかった・・・べつに叔母さんに知られたワケじゃないけど・・・

あんな夢見るなんて・・・オレやっぱり疲れてるのかな・・・それとも本当に星に酔ってしまったのかも知れない・・・

第89話　欠伸　睡眠不足のワケは

「・・ふぁ～・・・」

駅の改札を抜けながらオレが大きなあくびをしたしていると、後ろから肩を強くたたかれた。

「うわっ！・・びっくりした・・・」

「有希ったら、なにあくびしてるのよ！　モデルの“春日ユウ”がそんな大あくびしてるの見られたら恥ずかしいわよ！」

「うぅ・・読者モデルよ・・・」

長谷川さんって、時々こんな言い方してオレを困らせる・・・たぶん困ったオレを見て楽しんでるんだと思う・・・悪趣味なんだょ・・・オレがモデルのこと言われるの恥ずかしいって知ってるくせに・・・

「勉強がんばってるみたいね。」

「あ・・う・・うん・・・」

たしかに勉強もやってるけど・・・寝不足なのはビデオを見てたからだ・・・一昨日初回が放送された純平が出てるドラマを昨日もまた見てしまった・・・だって山上くんが主役だし、後輩役の純平と一緒のシーンなんか見てると、もうたまらないくらいに嬉しくなってしまう。

でもトップアイドルの山上くんと共演してる純平を見てると、嬉しい反面、不安にもなってくる・・・

なんだか純平が遠くへ行ってしまうようで・・・それにドラマは恋愛モノだから、山上くんが彼女に浮気されちゃったり、気になる女の子が新たに現れたりで、作り話だとわかっていても、オレはもうドキドキしっぱなしだ・・・そのうえ、タイルバックというのだろうか？・・最初の歌の時に流れる映像には、純平が寛治谷（かんじや）とかいう

変な女と仲良くしてるシーンがある・・・純平ったらあんな女と付き合うことになっちゃうんだろうか・・・たとえドラマでもなんかイヤだ・・・

なんか・・今晩もまた観てしまいそう・・・でもリビングのテレビじゃ「また見てるの？」って言われそう・・オレの部屋にテレビがあったらなぁ・・・

そうだ！・・・はやくＤＶＤに焼いておかなきゃ・・・もし麻衣が間違って消しちゃったら大変だ！

「有希、あんたいつウチに来るのよ。　早くしないと期末に間に合わないわよ。」

「あ・・そのことだけど・・今度の期末は英語だけでいいよ。」

「え？　なんで？　数学もしなくちゃ赤点になっちゃうじゃない。」

「う・・うん・・そうかも知れないけど・・・でも自分でやらなきゃいけないんだ・・・」

「・・・・？」

自分の力で４０点以上とらなきゃ先生との約束がダメになっちゃう・・・教えてもらって良い点とっても、どうせ先生には見抜かれそうだし・・・それにみんなは知らないだろうけど、若村先生はこれまでの白鴻の先生達みたいに、授業でやったことをそのまま出したりしないハズだ・・・それだと長谷川のヤマもあてにならない・・・たぶんみんな以前より成績が落ちてしまうんじゃないだろうか？

それにオレの場合、最悪赤点だったとしても、今でも補習やってるから何も変わらない・・・

「まあ、いいわ。それじゃ明日にでもウチに来る？」

「・・うん。　お・・お願いします・・・」
オレこんなことやってたら、いつまで経っても長谷川に頭が上がらないな・・・

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

「・・・・・」
さっきからミサトちゃんが花を活けながら、こっそりあくびをしてる・・・ミサトちゃんも期末が近いから夜遅くまで勉強してるのだろうか・・・？　本当はオレがたしなめなきゃいけないんだけど、オレも今朝、長谷川にたしなめられたばかりだから気が引ける・・・

そんなことを考えながらきっかけを無くしていると、なんとミサトちゃんはハサミと持ったままウトウトしだした！　オレはハサミをそっと押さえてからミサトちゃんに言った。
「ミサトちゃん。ハサミもったまま居眠りしたら危ないわよ。」
「あっ・・す・すみません！　先輩・・・」
そう言ってしばらくは眠気と闘っていたが、またウトウト居眠りを始めた・・・
「ミサトちゃん、今日はもうやめよう？　ね？」
「・・・すみません・・・先輩・・・」
ミサトちゃんはしょげてしまったけど仕方がない・・・あのまま続けて手でも切っちゃったら大変だ・・・

「ミサトちゃん、さっきはどうしたの？　居眠りなんかして・・・

」

オレはミサトちゃんをマックに誘った。オレはこういうとこに誘うのは断られた時の気まずさを考えると本当は苦手なんだけど、ミサトちゃんなら後輩だから、先輩のオレの誘いを断ることなんて出来ない。　それにミサトちゃんはあまり気を使わなくていい感じのコだからオレでも誘いやすいのだ・・・こういうことの練習にはもってこいだ・・・

「すみません、昨日寝てないんです。」

「え?!　そんなに勉強してるの?」

「あ・・いえ・・山笠だったから・・・」

「!」

そうか・・・今朝は山笠の本番だったんだ・・・そういえばニュースでやってた。　山笠は朝早いからオレはまだ見たことがない・・・一度だけ練習で昼間に走る“追い山馴し〈おいやまならし〉”を見たことがあるだけだ。

「そっか、ミサトちゃん山笠見に行ったんだぁ。」

「あ、いえ・・あたしんち川端だから父ちゃ・・お父さんとお兄ちゃんが山を舁(か)くんです。」

「え?　そうなの?」

「あたしも中学に入るまでは子供山笠を舁いてたんですよ!」

「へえ〜　女の子もやるんだ。」

「はい!　昔は女の子はダメだったみたいですけど・・・あたしも締め込みして舁いてました。」

「え?!・・・締め込みって・・・フンドシじゃないの?」

「まあ、そうですけど。」

「・・女の子が締め込みなんて・・・恥ずかしくなかった?」

オレだったら男のころでも人前でフンドシなんてするのは恥ずかしいと思うけど・・・

「恥ずかしいと思うコは途中でやめるんですけど、あたしはギリギリの6年生までやってました。だって締め込み出来なくなったら山昇けませんから。」
「・・・・！」
「でも6年生までやってたのは、あたしだけでしたけど。」
そう言いながらミサトちゃんは笑った・・・

なんか・・・ミサトちゃんって逞しい・・・前から少し大胆なところのあるコだとは思ってたけど・・・まさか女の子がフンドシして平気なんて・・・もしかしてミサトちゃんって本当はオレより男っぽいんじゃないだろうか？・・・イヤ・・今のオレよりは断然男らしい・・・

「でも有希先輩、ズルイと思いませんか？　男の子は中学、高校とずっと山昇けるのに、女の子は小学生までなんて！」
「・・そ・・そうね・・・」
ズルイって・・・でも女子高生のフンドシってのも・・・どうかと思うけど・・・
「おまけに山をやめた途端、急に女らしくしろなんて！　だったら小さい頃から山なんかさせなきゃいいのに・・・」
「・・・・・」
たしかにそれはそうだな・・・今は男も女も同じ権利があるっていうけど、こういうことは昔のままだ・・・子供のころだけ女の子も参加できるってのも解らなくはないけど・・・ミサトちゃんの言い分ももっともだと思う・・・

「それで？　ミサトちゃんは何やったの？」
「山を昇く男衆のために、おにぎり作ったり、お茶出したりとか・・・手伝いだけです。　まあ、これも山の大切な仕事なんですけど・・

・」

「でも、ミサトちゃんは今でも山笠・・担ぎたいんだ？」

「そりゃもちろんです！　でも女衆は完全にサポートだけで女は舁き手の詰め所にも入れないんですよ。今は無いですけど、あたしが小さいころはまだ「不浄の者立入るべからず」って書いた立て札が立ってました。」

「ふじょうの者？」

「不浄の者って、女と喪中の人のことなんです。女は穢れてるからって。立て札は無くなったけど、今でも女は詰め所には入れないんですよ。山は女人禁制の祭りだから・・・」

「・・にょ・・女人禁制・・・？」

そんな考え今でもあるんだ・・・女人禁制って言葉・・・なんかイヤな感じだなぁ・・・それに・・女は穢(けが)れてるなんて失礼だよ・・・オレは男だったから良く知ってるけど、だいたいは女より男の方が汚い・・・女の子の方が絶対清潔だもん！

「先輩、こんど写真見てくださいよ。あたしの締め込み姿！」

「え？　見たい見たい！」

オレ・・女の子の締め込み姿なんて見たことない・・・すっごい興味がある・・・でも・・なんかこれって・・男の感情なのかな・・・？　もしそうだったらミサトちゃんに対して申し訳ない気がする・・・ミサトちゃんはオレを女だと思っているから見せてくれるのだろうから・・・

「・・そういう写真ってさ・・男の子に見られたりしたら・・恥ずかしい？」

「いえ？　べつに恥ずかしくないですよ。だってその恰好で走ってたんですから。」

「あ・・そっか・・そうよね・・・」

なんだ・・・そりゃそうだよなぁ・・・それならオレが見たって平気だ・・・オレの気持ちがどっちでも関係ないってことだ。　それ

に、べつにオレは厭らしい気持ちで見たいわけじゃない・・・ただミサトちゃんの勇姿が見たいだけなんだ！

「あ～ぁ・・・あたしも男の子だったらな・・・」

「え？　ミサトちゃんって男の子になりたいの？」

「あっ・・いえ、そういうのじゃないんです。　先輩！あたしオナベじゃないですよ！　ただ、男の子だったら今でも山昇けたのになぁ・・って思ってるだけです。」

「そっか、山笠を担げるのは男だけだからってことね。」

「そうですよ！あたし変態じゃないですから。」

・・変態・・・もしミサトちゃんにオレが本当は男だとバレたりしたら、やっぱりオレも変態だと思われるんだろうな・・・みんなが弘子みたいに受け入れてくれるとは思ってなかったけど・・・実際に“変態”と聞くと、絶対にバレてはいけないのだと思い知らされる・・・

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

次の日、学校の帰りに長谷川の家に寄った。英語を教えてもらうためだ。今日はクラブが無い日だし、晩ご飯も作りおきして麻衣に温めてもらえば良いように用意してきたから、遅くなってもかまわないのだ。

勉強が一段落したとき、今日のことを思い出した・・・

「そうだ・・長谷川さん知ってた？　ミサトちゃんって山笠に出てたんだって。」
「へ～、そうなの？」
「それも女の子なのに締め込みして、男の子に混じってやってたのよ。すごいと思わない？」
「ウソでしょう？　有希知ってるの？締め込みってフンドシのことよ、女の子が締め込みなんかするワケないじゃない！　有希ったらミサトちゃんにからかわれてるんじゃないの？」
「そう思うでしょう？　でも今日見せてもらったのよ。写真！　本当に締め込みしてたんだから！」
「へぇ～・・・ほんとなの？・・もしかしてわたしをダマしてるんじゃない？」
「もう・・長谷川さん疑り深いなぁ・・・」

「それがね、わたしも女の子が締め込みなんて変なんじゃないかと思ってたんだけど、実際に写真を見たらすごく可愛いの！　全然エッチな感じじゃないのよ。」
「へぇ～・・・」
「髪の毛も今より短いし、後姿もね、お尻がキュッとしてて凛々しい感じで・・・」
「ふ～ん・・・」
「わたしも見に行けば良かったなぁ・・・山笠・・・来年行こうかなぁ・・・」

「なに？　有希そんなに女の子のお尻が見たいの？」
「そ・・そんなんじゃないよ・・・ただ可愛いなって・・・それにほとんどは男の人なのよ！女の子は少ないの。」
「あっ・・そうか、有希が見たいのは男の子の方なんだ！」
「な・・そんな・・・」
「だって有希は男の子が好きなんでしょう？」

「そ・・それは・・そうだけど・・・」
でもそれはあくまで設定の話で・・・あれ？・・じゃぁオレは女の子が好きなのか？・・・でも山上くんとか見るとドキドキするし・・・純平は・・・純平はメル友だ・・・男と女のメル友・・・恋人じゃない・・・！・・・なんでオレわざわざ恋人じゃないなんて否定してるんだろう・・・オレ・・純平と恋人になりたいのかな・・・？

「有希まだ男の子に素直になれないの？」
「えぇ～！」
「だってこんなに女らしくなってるのに、相変わらず奥手な感じだし。」
お・・奥手って・・・長谷川だって恋人なんかいないクセに・・・
「まあ、そういうところも有希らしいんだけどね。あんまりのんびりしてると純平くんも他のコのこと好きになっちゃうわよ！　向こうはきれいな芸能人にいっぱい会ってるんだから。」
「そ・・そんなぁ・・・」

純平が他のコを好きになるなんて・・・そんなの考えただけで悲しくなる・・・でもオレには純平を束縛する権利なんかない・・・オレたちは恋人じゃないし・・・オレは男の子と恋人になんてなれないし・・・だってオレ本当は男だもん・・・

オレどうすればいいんだろう・・・

山笠参考資料：ｈｔｔｐ：／／ｗｗｗ．ｎｉｓｈｉｎｉｐｐｏｎ．ｃｏ．ｊｐ／ｎｅｗｓ／ｙａｍａｋａｓａ／２００４／ｒｅｎｓａｉ／ｃｙｕｇａｋｕ／＃０４

―――――――――――――――
―――――――――――――――
――――――――――

おまけ「Ｑ＆Ａ」

先日ＢＢＳで質問にお答えしたので、せっかくなのでこちらにも転載しておきます。もしみなさんも疑問などありましたら、遠慮なく感想のところにでも書いて下さい。

●前に長谷川さんがクラス替えの話をしていましたが、この学校の学科などはどうなっているのでしょうか？
○この学校には“何学科”というものは存在しません。昔の女子校には多かったですが、まあ良いお嫁さんになるための学校のようなものです。　大学に進学するにしても、同じ系列の短大に進むしかなく、それが近年生徒数が減少している原因です。短大もお裁縫とかをより詳しく教えるような花嫁修行学校です。中には服飾の専門家になる人も少数ですがいます。

●家族や友人などは有希のことをなんと呼んでいるのでしょう？ユウ、ユウキ、ユキ？
○ほとんどの人は「ユウキ」と呼んでいます。漢字で“有希”と書いているところはすべて「ユウキ」と読んでください。　ＪＩＮＯＮ編集部やモデルさんなど芸名？で付き合っている人たちは“春日ユウ”と思っているので「ユウ」と呼びます。　あとイトコのレナだけは小さいころ呼んでいた略称の「ユウ」で呼んでいます。
この小説の中で「ユキ」という呼び方をする人はいません。

●読者モデルの給料は以前、雀の涙程度と言ってたような気がしますが少なくても使っていないので結構溜まっているのでしょうか？
○“雀の涙”というのは誤解を与えたかも知れないですね。安めのアルバイト（時給７００円？）くらいだと思います。ただ、ページによっても単価は違うので、特集とかもやることがある有希は、もう少しもらっているかも知れません。いずれにしても有希は自分がいくらもらっているのか知りません。

●有希の友人で既にセックス等の経験がある人はいるのでしょうか。
○少なくとも弘子と直美は経験済みのようです。（３８話の最後の方参照）

●直美のスタイル設定などはあるのでしょうか？これまで言及が無かった様なので
○直美はスタイルはそんなに特徴はありません。細身でもなく、太ってもない。胸はＣくらいだと思います。ただ細身でない分胸は大きめに見えます。どっちかといえば直美は性格重視です。性格は熱しやすく冷めやすい、おおざっぱ、目立ちたがり、だけどサバサバした良いコって感じです。

●有希が読者モデルから本物のモデルになることは可能なのでしょうか？
○この話で今後、有希が本物のモデルになるのか？ということだったら微妙です。
現実世界での話なら、元男で女の子のモデルをやっているコは現にいるので可能だと思います。出版社と読者が認めればですけど。

●有希に対する周囲の女の子の対応が同性愛ぽいのですが自分の勘違いでしょうか？
○女子校ってところは多分にそういう部分があります。ちょっとカ

ッコいいコや、男っぽいコはモテるし、可愛らしいコがモテる場合もあります。（可愛らしいコはイジメられる場合もあるでしょうけど）

有希はカッコいい部分と可愛らしい部分を合わせ持っているので、みんなから好かれているんだと思います。

●有希の現在の髪の長さは？

○少し前に肩甲骨が隠れるくらいという表現があったので、現在はそれより少し長いと思います。具体的には腰から１５ｃｍくらい上じゃないでしょうか？たぶんこれ以上は伸ばさないと思います。伸びたら切りそろえる感じで。

●弘子、直美、千里の髪型、長さは？

○長谷川を含め髪をくくってるコはいないので、みんな肩につかない長さなのは確かですが、個々の髪型は細かく設定していません。長谷川は有希がおかっぱと表現しているので、とりあえず前髪は切っているということだと思います。弘子は前髪は作ってないと思います。ワンレンって感じでしょうか？ちなみに千里は有希より髪が短いので、一緒に撮影するときは不本意ながら有希の方が女らしい衣装を着させられることが多いです。（笑）

●結局、弘子は彼との関係を切ったの？

○そうみたいですね。切ったというよりは話し合って決めたんだと思います。

●学校内に有希の情報が頻繁に漏れているようなのですが、だれが広めているのでしょう？

○なんかみんなが噂してるようですね。可愛いからどうしても目立ってしまうんだと思います。別に誰かが広めているという訳ではありません。それに、噂は外見とか何処でどんなことしてたとかいう

他愛もないことがほとんどで、秘密まで漏れているわけではありません。

●弘子と直美は中学が一緒で友人だそうですが、千里とはどういう風に知り合ったのでしょう。また、なぜ三人は有希に声を掛けたのでしょうか？

○弘子＆直美と千里はこの学校で出会ったので、基本的に有希と弘子＆直美との関係と同じです。なぜ三人が有希に声を掛けたのかは、気が合いそうに思ったんじゃないでしょうか？まあ、たまたま入学してすぐ声をかけたというだけかも知れません。だいたい友達関係ってそんな感じじゃないですか？　ちなみに１１話で有希に話しかけてるのがこの３人です。直美、弘子、千里の順です。まだ慣れてないので探り探りしゃべっていますね（笑）みんなそこそこ緊張してるんです。

●千里の親は特別、厳しい方なのでしょうか？

○そうみたいです。基本、モデルをやることにもあまり良く思っていないようです。この話では家柄など結構古い感じになっています。一番今風なのは長谷川の家族だと思います。有希の家はあまり一般的とはいえないので古いとも新しいともいえませんけど、おばあさんまで遡ると結構古いです。

●有希、直美に意外と失礼な想像していますね。

○クリスマスに弘子の家にお泊まりした時に寝相が悪いのを見たのかも知れないですね（笑）直美はあまり細かい性格ではありません。

●『ゆびさきミルクティー』というコミックはご存知でしょうか？私は有希の外見は、その主人公である女装少年に似ているかなと思っています。名前もユキと似ていますし。

○『ゆびさきミルクティー』は知っています。名前は別にマネした

訳じゃないですけど（笑）7巻までしか出版されていないので残念に思っていましたが、やっと続きの8、9巻がでるそうで、すでに新刊もａｍａｚｏｎに予約しています（笑）有希の外見はどのように想像して下さってもかまいません。顔は私自身も（あえて）まったく想像せずに書いています。主人公の背を低く設定していないところなんかは似てるかも知れません。基本的に女っぽくないところも。　有希という名前は“勇気”を連想させるどちらかといえば男っぽい語感の名前として設定しています。なので“ユキ”と読むのは間違いです。この話で有希のことを“ユキ”と呼んでる人はいません。漢字は中性的なイメージです。

第９０話　結果　期末テスト

「お～い、静かにしろ～、期末テストを返すぞ！」
昨日の期末テストがもう返ってくるのか・・・若村先生はテストを返すのが早い・・・それは採点するのが早いってことだから、それだけ教育熱心だってことなのだろう・・・オレは先生が夜遅くまでかかっても、出来るだけ早く採点しようとしてるのを知っている。

ただ、生徒から見れば、テストはあまり早く返してほしくないというのも本音だ・・・せっかく期末テストが終ってホッとしてるのに、すぐにテストが返って来たらそんな気分もだいなしだ・・・

「戸田！」
あいうえお順で呼ばれてオレの番がきた・・・
「はい。」
オレは先生のところに行ってテストを受け取ると、すぐに点数を見た・・・やった！４６点だ！　オレが先生を見上げると、先生も軽くうなづいてくれた。

「有希どうだった？」
「まあまあ・・・」
「わたしは悪かった・・・５５点よ・・・」
「・・・・・」
千里・・オレよりいいじゃないか・・・でもいいんだ・・・たとえ４６点でもオレには大きな点数なのだ！　だって４０点以上だからご褒美があるんだもん！

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

―――――――――――――――
――――――――――

放課後、生徒指導室までの道のりはスキップしたくなる感じだった・・・こんなに気持ち良く生徒指導室に通ったのは初めてだ！・・・だってご褒美もらえるし・・・もうすぐ夏休みだし・・・

指導室に着いたら、まだ先生は来てなかった。　オレは椅子に腰掛けて、何を貰えるのか想像しながら若村先生が来るのを待っていた。もちろん高いのなんか期待してない・・・ただ先生からのプレゼントが欲しいだけだ・・・

“ガラッ”
戸が開いて若村先生が入ってきた。思わず手に何か持っていないか見てしまう・・・自分のはしたなさに恥ずかしくなった・・・
でも先生はいつものカバンしか持っていなかった・・・

「今回はまあまあだったな。」
「・・・・」
「まあ、お前にしては良く出来た方かな？」
「そ・・そうですよ・・・千里だって５５点だったんだから・・・」
「まあな。」

「・・・あのぉ・・・先生・・・憶えてます？」
「ん？　何のことだ？」
「え・・・先生・・・わたしが４０点以上とれたら・・・」
「あぁ、ご褒美のことか。」
「はい！」

「しかしなぁ、４６点だぞ？」
「え？・・・でも・・・」
そ・・そりゃぁ、大した点数じゃないことは判ってるけど・・・
「・・でも・・約束・・ですよね・・・」
「う～ん・・・まあな・・・」
なんか・・おかしな雲行き・・・
「正直もう少しとれると思ったんだけどな。」
「え？！・・・」
「今回はおあずけだな！」
「えぇ～！・・・わたし頑張ったのにぃ・・・」

オレはご褒美のこともあったけど、先生に認めてもらいたい気持ちで頑張って来たのに・・・約束を破るなんて・・・オレは先生に裏切られた気がして悲しくなってきた・・・
「おいおい、そんな泣きそうな顔するな。ウソだよ。」
「・・？・・ウソ・・・？」
「ああ、ちゃんとご褒美は用意してるから安心しろ！」
「・・ダ・・ダマしたんですか・・？」
そんなのズルイよ・・・先生のクセに女の子の心をもてあそぶなんて・・・

「ほら、これがご褒美だ！」
そう言って先生はカバンから封筒を出してオレにくれた・・・なんだろうこの封筒？・・・中には厚紙みたいなものが入っている感じ・・・
「俺の結婚式への招待状だよ。夏休みに入ってすぐにすることになったんだ。」
「け・・け・・結婚式？！」
オレは呆然としてしまった・・・先生の結婚式に招待するのがご褒美？！・・・なんか・・微妙だ・・・

「なんだ、嬉しくないのか？」
「い・・いえ・・そういうワケじゃないけど・・・」
「けど？」
「あ・・わたし・・先生の友達でも親戚でもないし・・・それに・・わたし結婚式なんて行ったことないし・・・」
「そうか、初めてだから不安なのか？　経験しとくのも悪くないと思うぞ。」
け・・経験って・・・？
「大丈夫、心配するな。お前は生徒代表だ！」
「え？・・生徒代表？！」
・・・オレが？

「まあ、ひとりじゃ何だし、招待状を2枚入れておいたから誰か仲が良い友達を誘っておいで。」
「あ・・・はぃ・・・」
困ったなぁ・・・招待してくれたのは嬉しいけど・・・オレなんかが生徒代表でいいのかなぁ・・・それにオレ・・結婚式に着て行く服なんか持ってないし・・・こんなご褒美なんて考えもしなかった・・・

それに・・・いったい誰を誘えば良いんだろう・・・

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー
ー　ー
ー

誰に一緒に来てもらうか、のんびり考えてるゆとりは無かった。
結婚式は２５日・・・もう1週間くらいしかない・・・

衣装は撮影でお世話になってるスタイリストのケイコさんに聞いたら、良い貸衣裳のお店を教えてくれた。あとは一緒に行ってくれる人だけだ・・・

最初は千里を誘おうかと思ったけど、良く考えたらオレの本当のことを知ってる人の方が都合が良さそうだ。じゃぁ弘子？・・・だけど千里や直美を誘わず弘子だけ誘うと、千里や直美が文句言うかも知れない・・・そうなるとあとは一人しかいない・・・

「ねえ・・いいでしょう？　長谷川さん・・一緒に行ってよ。」
「いやよ。何でわたしが先生の結婚式に行かなきゃいけないの！べつに親しくもないのに。」
「それはそうだけど・・・」
「だいたい、何で有希が生徒代表なの？」
「そ・・それは・・・」
まさかテストが出来たご褒美なんて・・・とても言えない・・・

「・・それはね・・わたしが・・ウチの学校の生徒で一番・・親しいからじゃないかな・・・？」
「え？　有希、若村先生と親しいの？」
「う・・うん・・まあ・・・」
「なんで？」
「えっと・・それは・・・」
なんかもう黙ってられる雰囲気じゃない・・・
「実は・・・先生に数学の補習受けてて・・・」
「あっ・・そうだったの？　だから教えるの英語だけでいいって言ってたんだ？」
「・・うん・・・」

「おかしいと思ったんだぁ、有希が４６点もとるなんて・・・わたしだって少し点数下がったのに。」

「ね？　だからさ、お世話になってるから行かないワケにはいかないのよ。ついて来てよ・・・」

「でもわたし、そういうとこに着ていく服持ってないんだけど・・・」

「あ、それは大丈夫！　わたしも持ってないから、こんど一緒に貸衣裳を借りに行こう？　良いとこ教えてもらったから！」

「う～ん・・・どうしようなかぁ・・・」

うぅ・・何としてでも長谷川について来てもらわなきゃ、オレひとりで行かなきゃいけなくなっちゃう・・・何か長谷川を説得する良い方法は無いかなぁ・・・

あっ！そうだ・・・

「あのさ・・もし長谷川さんがついて来てくれるなら・・・お礼に長谷川さんが喜びそうなこと、してあげてもいいんだけどなぁ・・・」

「・・・なに？」

「ついて来てくれる？」

「・・・そのお礼によってはね・・・」

ふふっ・・・うまく食い付いてきたみたい・・・

「夏休みにさ、また三井グリーンランドで仮面レンジャーショーがあるの知ってる？」

「ええ、知ってるわよ。」

「それにさ、前のシリーズと今のシリーズの仮面レンジャーのメンバーが来るのも知ってる？」

「え？　知らない！　ほんとに来るの？　両方とも？」

「うん・・まだハッキリした日にちは決まってないらしいけど、来

るのは本当よ！　だって純平が言ってたんだもん。」
「それで？」
「それでぇ・・もし長谷川さんが先生の結婚式について来てくれるのならだけど・・・純平にたのんで長谷川さんを楽屋に入れてあげる！」
「えええ～っ！！！」

長谷川ったらビックリしてる・・・本当は何もなくても楽屋に連れて行ってあげるつもりだったけど、このさい利用しちゃった。
良いよね・・ウソも方便なんて言うしさ・・・・
「絶対でしょうね、有希、約束よ？！」
「うん、約束する！」
「・・約束破ったらヒドイわよ！」
「・・・・・」
なんかコワイ・・・特別待遇してもらうのにそんな言い方はないと思う。

「もう・・信用しないんだったらいいよ・・・別の人誘うから・・・本当は白鴻のコがいいんだけど、何ならレナでもいいし・・・レナなら喜んでついて来てくれるもん！」
「あ・・ま・・待って！　信用する！　信用するから！！」
「そう？　だったらいいけど・・・」
ふふふっ・・・慌てちゃって・・・今回はオレに主導権があるのだ！　いつもオレがイジワルされてるから良い気味だ・・・

「それじゃ、結婚式の2、3日前にフォーマルドレス借りに行こうね。」
「・・う・・うん・・・」
なんか楽しくなってきた・・・！　ドレスを着た長谷川なんて見たことないからすっごく楽しみだ！　どんなのが似合うかな・・・

－－－－－－－－－－－－－－－
－－－－－－－－－－－－－－－
－－－－－－－－－－

今日は1学期最後のプールの日。といってもウチの学校にはプールが無いから大学のプールを借りるため、1シーズンに3、4回しかプールの授業はない。まあ、それはオレにとっては好都合なのだが、わりと体育が苦手なオレにとって、もともと水泳だけは得意だったのに残念だ・・・

もっとも今のオレは水着姿をじっくり見られるのも困るのだが・・・

1回目は、ちょうどオレの生理の日と重なったから見学したけど、今回はもう生理も終ったから授業を受けなければいけない・・・生理といっても単なる設定なんだけど、これが結構重要なのだ・・・

去年は長谷川の中学の時の水着を借りたけど、今年は自分のスクール水着をちゃんと買った・・・また長谷川のを借りるのも悪いし・・・今年はちょっと古くなったからという言い訳も出来ると思う・・・それに中学時代に女子が着ていたのと同じ水着を着るのは、やっぱりちょっと抵抗があった・・・セーラー服なんか着てるオレが言うのもヘンだと思うけど、セーラー服は高校のだからちょっと違うのだ・・・男のころに女子のものと思っていたモノを身につけるのは、さすがに今でも抵抗がある。

オレが買ったスクール水着は白い線の縁取りが入ってて、白い肩

ヒモが後ろでバッテンになっている、スクール水着としてはスマートなやつだ。中学の水着よりちょっと大人っぽい。
髪を上の方で束ねて白いゴムの帽子をかぶる・・・近頃じゃ髪の毛の扱いも上手くなったから、これくらいのコトは簡単だ。オレもいつのまにかずいぶん女になっている・・・

オレは２５ｍプールを泳いでいた・・・みんなは真剣に泳ぐ気はないみたいで、ほとんど水遊びのような感じだから、泳ぐためのレーンはいつも空いている・・・だからオレは心置きなく泳ぐことが出来た。
「ふぅ・・・」
ターンをして戻ってくると、見学している千里と目が合って、オレは笑顔で手を振った・・・千里は今日は生理だから見学なのだ・・・オレも女の子になってずいぶん経つから、最近では千里たちの生理のタイミングもだいたい判るようになってきた・・・もし早い段階で白石先生がオレの生理日を決めてなかったら、いまごろはバレてたかも知れない・・・女の子が他人の生理をそんなに把握してるなんて、あのころのオレは考えもしなかった・・・

ちなみに弘子と直美はタンポン派だけど、千里とオレはナプキン派なのだ。やっぱりまだ経験がないとタンポンを使うのはちょっと敬遠してしまう・・・これもオレのはただの設定なんだけど・・・

去年は股間をテーピングしてたけど（５６話参照）今年はもうやめにした。テープを剥がしたあとが少しヒリヒリするのがイヤなのもあるけど、何よりサポーターだけで十分だという気持ちになったのが大きいと思う・・・オレのチンチンが立たないのは、もう十分に経験済みだし、いちいち白石先生にテーピングを頼むのも面倒なのでやめたのだ。

やめてみたら全然問題なかった・・・それにテープなんか無い方が泳いでても快適だ・・・

オレの泳ぎは一応クロールだけど、体育の先生に言わせると自己流らしい・・・オレは何で自分が泳げるのか、誰に習ったのか全然記憶にない・・・これはオレに小さい頃の記憶が無いというだけでは説明できない・・・だってとうさんも、かあさんも、オレが誰から泳ぎを習ったのか、いつから泳げるのか知らないのだから・・・それにこうして泳いでいると、何だかなつかしい気持ちになる・・・そして昔のことを思い出しそうな気がしてくるのだ・・・

思えば小さいころ溺れたのを思い出したのもプールの中だった・・・あの時は溺れた子供を見たから思い出したのだろうか？（５４話参照）・・・また小さいころと同じようなシーンに出会えば思い出すのかも知れないと思ったが、あれ以来思い出したことは何ひとつ無い・・・それにあの記憶さえも本当のことかどうかオレには知る術はない・・・小さいころのことは早く思い出したい気もするけど・・・思い出すのが怖い気持ちもある・・・

それにしても・・・なんだろうこの感じ・・・水の中だというだけじゃない・・何か包み込まれるような気持ち・・・

その時“ピーッ！”という授業の終りを知らせる笛がなった・・・

せめてもう少し泳いでいたかった・・・

お礼

みなさま、サイトが新しくなって、たくさんお気に入りに登録して下さってありがとうございます。

前に比べて感想が使いにくいという声もあるようですが、「良い点」か「一言」にこれまで通り書き込んでいただければいいのではないかと思います。もちろん「悪い点」があったら「悪い点」に書き込んで下さい（笑）

この話はまだまだ続きますので、今後ともよろしくお願いいたします。

第９１話　衣装　夏休みのはじまり

オレの女子校生活２度目の夏休みは、若村先生の結婚式で始まった感じだ。

夏休みに入って早々、ケイコさんに教えてもらった貸衣裳屋さんに、長谷川と一緒にドレスを借りに行った・・・お店に入ると、あまりの衣装の多さに圧倒された・・・大人用から子供用まで綺麗な衣装がたくさんある！ドレスだけでも正式な席のためのものや、パーティー用や、ちょっとしたお呼ばれのためのものなど、いろんなタイプがある！

オレたちは結婚式に出席する時に着るようなカラーフォーマルドレスのところに連れて行ってもらった。そこまで行く途中も色とりどりのドレスがいっぱいで、ついキョロキョロしてしまう・・・ＪＩＮＯＮの撮影ではもっとカジュアルなのが多いから、こういうドレスは着ないもんなぁ・・・

カラーフォーマルのところも、キレイで可愛いドレスでいっぱいだった・・・

「わぁ・・見て！　長谷川さん・・・素敵～・・・」

「・・・・・」

「こんなにあったら迷っちゃうね・・・どんなのがいいかなぁ・・・」

「有希ったら・・ノリノリね・・・」

「え？　なに長谷川さん冷めてるの・・・？　こんなに素敵な服がいっぱいあるんだから、女の子ならテンション上がっちゃうのが普通じゃない？」

オレは本当は男だけどこんなにワクワクしてるのに・・・女ならこ

ういうのも着てみたいって思うのが普通じゃないのだろうか？

オレはあれこれ見てまわって、良さそうなのをいくつか選んでみた。

「ほら、このピンクのなんか長谷川さんに似合うんじゃない？」

「じょ・・冗談でしょ・・・そういう可愛いのは有希が着なさいよ！」

「・・・そう？　わたしはこういうのが良いかなって思うんだけど・・・」

そう言ってオレは水色のドレスを体に合わせ、ちょっとポーズをとって見せた。

「そんなシンプルなのダメよ！　有希はもっと可愛いのじゃなきゃ・・・それに有希にはブルーは似合わないわ！」

「・・そうかなぁ・・・」

結構いいと思うんだけどなぁ・・・オレって自分で言うのもなんだけど爽やかなのも結構いけると思う・・・

「有希は絶対ピンクなの！」

「そ・・そんな決め付けなくても・・・」

「待ってて、わたしが有希にピッタリなドレス選んであげる。」

・・長谷川さんにそんなセンスあるんだろうか・・・ヘンなの選ばないか心配だなぁ・・・

「これなんかいいんじゃない？　有希に似合いそう。」

そう言って見せたのは、スカートが3段になっているピンクのドレスだった・・・腰のところにリボンが付いている・・・キラキラしたラメが入った素材で、少し大人っぽいけど女の子っぽさもあってオレでも着れそうだ・・・あんがい悪くない・・・胸の部分はヒダが作ってあるから、ふっくらしてて胸が小さいオレでも気にならない感じだ。

「どう？　気に入ったでしょう？」
「・・うん・・まあ・・・」
長谷川が選んだってのがちょっと癪だけど・・・たしかに気に入ったかも・・・長谷川って意外にオレの好みわかってるのかな・・・？
「有希、着てみてよ！　やっぱり実際に着てみなきゃ良くわからないから。」
「う・・うん・・・」
オレはドレスを持って更衣室に入った・・・

ドレスはたいてい衿が大きく開いてるから、今日は肩ヒモが無いビスチェタイプのブラをしてきた。普通のブラで肩ヒモが無いやつだと、オレの体はスレンダーだから、なんだかずり落ちそうで頼りないけど、ビスチェタイプなら身体で支えるから安心感が違う・・・肩ヒモが無くてもポロッと出る心配が無いのだ。よほど飛び跳ねたりすればべつだけど・・・

ドレスを着て鏡に映して見ながら思わずポーズをとってみた・・・けっこういい感じだ・・・

「ねえ、どうかな？」
オレは更衣室のカーテンを開けて外に出た・・・
「あっ・・良いじゃない！　ちょっと回って後ろも見せてよ。」
「うん・・」
オレは少しずつ回って、くるりと一周してみせた・・・なんか千里なら平気だけど、長谷川にこうして見せるのは恥ずかしいな・・・
「可愛い！素敵よ有希、これに決めちゃいなさいよ！」
「え・・・でもせっかく来たんだし・・・他のも着てみたいんだけど・・・」
「・・それもそうか・・・じゃぁいろいろ着なさいよ。わたしが写

真撮ってあげるから。」
そう言ってオレに向けたのは、オレのデジカメだった。いつの間に・・・
「そ、それわたしの・・・」
そう言うより早く、長谷川はオレのドレス姿を撮った・・・オレのカメラなのに・・・勝手に使うなんて・・・
でもまあいいか・・・写しておくのも悪くないかも・・・かあさんにも見せてあげたいし・・・オレのドレス姿・・・

その後オレは、まるで着せ替え人形みたいに色んなドレスを着せられて写真に撮られた・・・着替えは雑誌の撮影で馴れてるつもりだったけど、さすがに１０枚目くらいになると、ドレスは着るのもけっこう大変だから疲れてしまった・・・
「ねえ・・わたしばっかりじゃなくてさ、そろそろ長谷川さんのも選ぼうよ・・・もう疲れちゃった・・・」
「それもそうね・・・でもわたしはもう決めてるから。」
「え?！　どれ?」
「これよ！　有希がピンクだからちょうど良いでしょう?」
それはあざやかな青いドレスだった・・サテン地で光沢がありちょっと大人っぽいシルエットだ・・・後ろが編み上げになってるのが少しセクシーな感じ・・・こんなの長谷川に似合うかなぁ・・・オレはこの際だから長谷川にも可愛いのを着せたかったんだけど、自分でこれが良いって言ってんだから、とりあえず着せてみようと思った・・・それに疲れちゃったから、長谷川のを選ぶ気力も薄れてしまったし・・・

長谷川は更衣室に入ったまま、なかなか出て来ない・・・何してるんだろうと思っていると、中からオレを呼ぶ声がした。
「・・有希・・・ちょっと・・・」

「なに？」
「これ一人じゃ着れない・・・」
「？　ちょっと開けるよ？」
更衣室のカーテンを開けて中をのぞくと、長谷川が後ろに手をまわしてあたふたしていた・・・そうか、編み上げが自分じゃ出来ないんだ・・・

「有希、後ろくくって！」
・・・でもそれ以前に問題が・・・
「長谷川さん・・ブラの肩ヒモが出てるわよ。」
「仕方ないじゃない！　こんなに肩が開いてると思わなかったんだから・・・」
まあ、そうか・・・馴れてないんだから仕方ないか・・・
「ちょっと待ってて。」
オレは店員さんのところに行って、肩ヒモが見えないブラが無いか聞いてみたら、ちゃんとビスチェを用意してあった。オレはそれを持って長谷川のところに戻った・・・

「長谷川さん、これ借りてきた。」
「あ・・ありがとう・・・」
オレがカーテンのすき間から手渡すと、長谷川がドレスを脱ぐ音が聞こえてきた・・・
「まだ？　長谷川さん・・・」
「もうちょっと待って・・・」

しばらくしてカーテンから恥ずかしそうに顔をのぞかせた。
「有希・・ちょっと手伝ってくれない？」
「ん？」
オレがカーテンから中をのぞくと長谷川がビスチェの後ろのホックを留められなくて苦労してる・・・そうか・・オレのビスチェより

ちゃんとした長いやつだから、後ろのホックも多くて留めにくいんだ・・・たぶんブライダル用じゃないだろうか・・・オレも最初にビスチェをした時は、なかなか上手く留められなかったもんなぁ・・・そういや女の子になったばかりの頃は普通のブラのホックさえ留めるのに苦労したっけ・・・今では何の苦もなく留められるのに・・・

オレはビスチェのホックを留めながらふと思った・・・そういえば今の長谷川ってビスチェとパンティーだけなんだ・・・ドレスは足元に落ちている・・・鏡に目を移すと、鏡に映った長谷川と目が合ってしまった！

「見ないでよ！」

「あ、うん・・・ごめん・・・」

オレは撮影の時に他のコの下着姿なんか良く見るから、あまり気にならないけど、長谷川はやっぱり恥ずかしいんだな・・・もっともそれはオレが男だと知ってるからかも知れないけど・・・

オレはホックを留めると、鏡の方を見ないようにしながら、床のドレスを上げて長谷川に着させた・・・そして背中の編み上げをきれいに編んで結んであげた。

「もう見てもいい？」

「うん・・」

オレはそっと鏡に映った長谷川を見て驚いた・・・長谷川・・思ったより似合ってる・・・こういうの“　孫にも衣装　”っていうんじゃないだろうか？（注）

「長谷川さん似合ってる！　キレイよ！」

「そ・・そう・・・？」

ほっぺを赤くして恥ずかしそうにしてるのが可愛い・・・いつもの長谷川じゃないみたいだ。

「長谷川さん、女らしいのも似合うんじゃない！」
これでおかっぱの髪をもう少し何とかして、お化粧でもすれば、見違えるようにキレイになりそうだ・・・オレはあれこれ長谷川の髪をいじってみたけど、このままではどうにもならなかった・・・長さが中途半端だし、アップにしても前髪が微妙だ・・・仕方なくそのまま写真を写してあげた。

「う～ん・・・あ！そうだ。長谷川さん明日時間ある？」
「・・うん・・まあ・・あるけど・・・」
「じゃあさ、明日わたしのおばさんがやってる美容院に行こうよ。このドレスに合うように切ってもらおう？　ね？」
「・・でも・・・」
「いいじゃない、夏休みに入ったばかりだから、もし気に入らなかったら夏休みの間にまた伸ばせばいいじゃない！」
「・・・・・」
「ね？　そうしよう？　長谷川さんだって、もっとこのドレスに合う髪型の方がいいでしょう？」
「・・うん・・・」
「決まった！　明日絶対よ。」

やっぱり長谷川を誘って良かった。長谷川の違う一面を見れるなんて・・・こうなったらうんと可愛くしちゃうんだ！　俄然ワクワクしてきた！

注：有希は“　孫にも衣装　”と言っていますが、本当は“　馬子にも衣装　”の間違いです。
「馬子にも衣装　」とは馬の世話をしているようなつまらない

者でも、身なりを整えればそれなりに見えるという意味ですが、もちろん有希はそこまでの意味では使っていません（間違ってるくらいなので、笑）長谷川でもキレイなドレス着ると案外可愛く見えると感心したのではないでしょうか？

――――――――――――――
――――――――――――――
――――――――――

次の日、オレは長谷川を連れておばさんの美容院に来た。来る前に長谷川に電話したら「やっぱりこのままでいい」なんて言うもんだから、逃げないようにお母さんに見張っておいてもらったのだ。長谷川は思いのほか力が強いから、嫌がるのを無理やり連れて来るのは大変だった・・・

美容院の前まで来ると、長谷川が言った・・・
「・・ここ有希のおばさんのお店だったんだ？」
「そうよ。　あ！もしかして来たことあった？」
駅前だし、近所に住んでる長谷川が来たことあってもぜんぜん不思議じゃない・・・
「ううん・・・あるのは知ってただけ・・わたし美容院って来たことないから・・・」
「え？・・・じゃぁ・・・いつもどうしてるの？」
「・・・お母さんに・・切ってもらってる・・・」
「え～！！」
いまどき女の子が高校生にもなって、ファミリーバーバーなんて聞いたことないよ・・・だからいつも中途半端な髪型だったのか・・・
「そっか・・でも初めてだからって緊張しなくていいよ。おばさんってレナのお母さんだし。」

「え?!」
あっ・・そういえば長谷川ってなぜかレナとは反りが合わないんだったっけ・・・一回しか会ってないけど、だいたいわかる・・・
「・・まあいいからいいから、入って入って!」
オレは長谷川が何か言い出す前に、急いで扉を開けて長谷川を押し込んだ・・・

「おばちゃん、こんにちは!」
「あら、有希ちゃんと長谷川さん、待ってたわよ。」
もちろん予約を入れておいた。
「いらっしゃい有希!」
「あっ・・レナもいたんだ・・・」
そっか・・夏休みだからお店手伝ってるんだ・・・

レナは最近、卒業したら美容師の学校に行くんだって言ってる・・・レナが実家を継ぐなんてガラじゃない気もするけど、実家の仕事が美容院だからなぁ・・・レナはオシャレも好きだから結構向いてるかも知れない・・・
でも・・今日はいない方が良かった気がする・・・長谷川さん・・帰るなんて言い出さなきゃいいけど・・・とにかく早いとこ話を進めなきゃ・・・

「おばちゃん、これが着て行くドレスの写真。」
オレは昨日のドレスを試着した写真をプリントして持って来ていた・・・実際に着るドレスを見てもらった方が似合う髪型にしてくれそうだったから。
「良いドレスじゃない!　そうねえ・・長谷川さんは・・前髪は切れる長さがないから、今流行りのボブ風のおかっぱが良いんじゃないかしら?　少し茶色にした方が良いと思うんだけど?」

「え？　でも学校が・・・」
長谷川が校則のことを言おうとしたからオレは慌てて止めた。
「いいじゃない、今夏休みなんだから。登校日までにまた黒く染めればいいでしょう？」
長谷川はオレみたいに読者モデルの仕事があるワケじゃないから、学校に行かなきゃ問題ない。
「そうかな・・・」
「そうよそうよ、やっちゃいましょう！」
だってあの青いドレスには、黒い髪だと沈んじゃいそうだ・・・

「ユウはどうしするの？」
レナに聞かれたけどオレはいつものとおりだ・・・
「わたしは伸びた分だけ切りそろえて。」
「でもユウも色抜いた方が、このピンクのドレスに合うんじゃない？」
「え・・・でも・・わたしはＪＩＮＯＮのこともあるしさ・・・少し重いかも知れないけど、アップにするから黒くてもいいよ。」
オレがそう言って断ろうとすると、長谷川が口を挟んできた・・・
「有希も茶色にしなさいよ！　わたしに言ったじゃない。また黒く染めれば問題ないって。」

「長谷川さんは関係ないでしょ！ユウのことなんだから。」
オレはレナの言葉を聞いて一瞬身体が凍りついた・・・そんな言い方したら長谷川が怒っちゃうよ・・・オレはとっさに言ってしまった・・・
「あっ、レナ・・やっぱりわたしも茶色にする！　その方が良いよね長谷川さん？」
長谷川は何も言わなかった・・・やっぱり怒ったのかな・・・
でも髪の色を抜くことになってしまってどうしよう・・・でも、ま

あいいか・・・実はオレも一回レナみたいに茶髪にしてみたいと思ってたんだ・・・

準備のためにレナとおばさんが奥に行くと、長谷川がオレの方に乗り出して怒った口調で言った・・・

「有希、レナちゃんがいること知ってたんでしょう?」

「し・・知らないよ・・・そりゃぁ・・休みの日に時々手伝ってるのは聞いてたけど・・今日いるとは思わなかった・・・」

「・・・ほんとかしら・・・」

ふたりが戻ってきたためここで話が途切れてオレはホッとした。

本当は気づいても良かったのに・・・オレっていつもどこかヌケてる・・・

「あれ?　レナがわたしの髪切るの?」

「そうよ?」

「で・・でも・・レナ出来るの?　それに美容師の免許がなきゃお客さんの髪、切れないんじゃなかった?」

「そうだけど、ユウはお客さんじゃなくて“いとこ”だからいいのよ。」

「そ・・そんな・・・わたしだってお金はらうんだからお客さんじゃない!」

「だから、今日はお金はいらないわよ。」

「えぇっ・・・」

お金いらないのは儲かったけど・・・でも・・・

「わたしはレナのいとこだけど・・“春日ユウ”でもあるんだからね?　変にしないでよ?」

「わかってるわよ“春日ユウ”さん!」

そう言ってオレの肩をポンとたたいた・・・うぅ・・なんかムカつく言い方・・・そっと長谷川を見てみるとオレたちの会話を聞きな

がらニヤッと笑っていた・・・なんか長谷川さんとレナって・・・
少し似てるかも・・・イジワルなところが・・・

オレたちは結局ふたりとも髪を茶色にされてしまった・・・長谷川は濃いめの栗色で少し淡いところもあって上手く立体感が出ている・・・髪の形は昔オレが女の子になってすぐの頃に近い感じだ・・・前髪とサイドと後ろを内巻きにカールさせている・・・後ろが短かめでサイドが長めだ・・・なるほどあの青いドレスに合いそうだ。

オレは・・・思ったより薄い茶色にされてしまった・・・ビックリしてレナに聞いたら、レナのやつ適当なこと言って誤魔化してるみたいだった・・・もしかして失敗したんじゃないだろうか・・・？　だってレナの髪より薄いなんて・・・ピンクのドレスには合うかも知れないけど・・・

これじゃＪＩＮＯＮのこともあるし、終ったらすぐ黒くしなきゃ・・・

「それじゃ、結婚式がんばってきなさい！」
おばちゃんったら・・・オレたちが結婚式するワケじゃないんだから・・・
店を出ると長谷川が言った。
「本当に茶色にしちゃっていいのかな？」
「・・うん・・・まあ、学校にこのまま行かなきゃいいんじゃない？」
「でもさ、結婚式には校長先生と教頭先生も来るんでしょう？」
「！」
そうだ・・・忘れてた・・・ドレスに合わせることばかり考えてて、

どうせ夏休みだからと思ったけど・・・問題の結婚式が先生のだということを忘れていた・・・どうしよう・・・たしかにマズいかも・・・

「・・・は・・長谷川さんは気にしなくていいわよ・・・わたしが何とかするから・・・」

何とかって言っちゃったけど・・・どうすりゃいいんだろう・・・

――――――――――――――――――――――――――――――――――

　オレは若村先生に電話しようとして、やっぱりやめた・・・明日結婚式でバタバタしてるだろうに、オレたちの髪のことなんかで煩わせたら悪い・・・やっぱりこういうことはあの人に・・・

「あ・・もしもし・・教頭先生ですか？　わたし戸田有希です・・・」

「ああ、戸田君か・・・何か用ですか？」

「あ・・あの、明日の若村先生の結婚式のことなんですけど・・・」

「ああ、戸田君も生徒代表で出席するそうじゃないですか。もうひとりは・・ええと・・・」

「長谷川さんです。」

「あっ・・そうそう、長谷川くんだ・・・それで？何か話があるんでしょう？」

「・・あのぉ・・・わたしたち出席のためにドレスを借りたんですけど・・・」

「ほほう！」

「・・それで・・美容院で髪型をドレスに合わせてもらったんですけどぉ・・・」
「ほうほう！　いいねぇ。」
「それがですね・・・いつの間にか髪を茶色にされてしまって・・・」
本当はウソだけど・・・こういう時はバカ正直に言えばいいってもんじゃない・・・

「大丈夫でしょうか・・・？　校則ではダメなんですよね・・・」
「う～ん・・・たしかに校則ではダメですが・・・学校ではないですからねぇ・・・」
「え？　じゃあいいんですか?!」
「だけどねえ・・・私だけなら良いんだが・・・校長先生と・・会長も来られるからねぇ・・・」
「え？　会長も?!」
そんなの聞いてない・・・会長って入学式の時にしか見たことないけど・・・コワい人なのかなぁ・・・見た感じは優しそうなオバサンだったけど・・・“会長”ってくらいだからなぁ・・・

「しかし、今から黒くするのは無理なんでしょう?」
「あ・・はい。」
たぶん・・・
「それじゃ仕方ないですね。私から会長と校長にはそれとなく伝えておきましょう。」
「ほ・・ほんとですか?!　ありがとうございます教頭先生!」
やっぱり教頭先生って話がわかる人だ!
「期待してますよ。君のドレス姿!」
「え・・は、はい・・・」
期待って・・・そんなに期待されるほどのもんじゃないと思うけど・・・

なんか期待に応えなきゃいけないのかなぁ・・・せいぜい綺麗にして行くことくらいしか出来ないけど・・・

第９１話　衣装　夏休みのはじまり（後書き）

『オレは女子高生』支援ページに有希と長谷川のドレスをＵＰしています。

ここは１８禁サイトの中にあります。他のページへはリンクしていませんが、ページの上部にエッチなバナーが出ます。そういうのが苦手な方、ご家族がいるところで見ている方、会社でご覧の方など、どうぞご注意下さい。

ｈｔｔｐ：／／ｅｍｉｔｈｉｙａｎ．ｈ．ｆｃ２．ｃｏｍ／ｃｏｌｕｍｎ／ｊｙｏｓｉ／０８０６２３－００．ｈｔｍｌ

第９２話　結婚式　オレの気持ちはどこへ・・・（前書き）

『オレは女子高生』支援ページに有希と長谷川のドレスをＵＰしています。

ここは１８禁サイトの中にあります。他のページへはリンクしていませんが、ページの上部にエッチなバナーが出ます。そういうのが苦手な方、ご家族がいるところで見ている方、会社でご覧の方など、どうぞご注意下さい。

ｈｔｔｐ：／／ｅｍｉｔｈｉｙａｎ．ｈ．ｆｃ２．ｃｏｍ／ｃｏｌｕｍｎ／ｊｙｏｓｉ／０８０６２３－００．ｈｔｍｌ

第９２話　結婚式　オレの気持ちはどこへ・・・

オレは化粧道具をバッグに入れて長谷川の家に急いでいた。もう少し早く家を出るつもりだったのに念入りにお化粧をしていたら少し遅くなってしまった・・・何しろ生徒代表だから、あまりお化粧が濃く見えちゃいけないし・・・でもオレはモデルの・・読者モデルの“春日ユウ”でもあるのだから、もしオレのことを知ってる人がいたら、ちゃんとお化粧していないと恥ずかしい・・・

それに・・・先生の奥さんになる人は、どんたくの時にチラッと見ただけだったけど、きれいな女の人だった・・・べ・・べつにお嫁さんに張り合う気持ちなんか無いけど・・・オレだってお化粧すればキレイだってことを先生に見せたかった・・・

借りたドレスは長谷川の家に置いている。オレの家より長谷川の家の方が駅に近いから・・・あんなドレス着て一人で歩くなんて堪えられない・・・だからオレが長谷川の家に行って、長谷川にお化粧してあげて、それから二人でドレスを着て出かけるという段取りになっている。

「お母さんこんにちは！」

「いらっしゃい有希ちゃん。待ってたわよ・・・髪の色が薄いとまるでお人形さんみたいねぇ。可愛いわぁ・・・」

は・・恥ずかしい・・・お人形さんなんて・・・

「・・ご・・ごめんなさい・・ちょっと遅くなっちゃって・・・すぐ準備するから、順子さん呼んでもらえますか？」

オレが急いでダイニングに行き、メイクの準備をしていると、お母さんがオレが来たことを伝えて、長谷川が部屋から出て来た・・・

「え？　長谷川さん・・髪は？　跳ねてるじゃない！」
「・・有希がやってくれるんじゃないの？」
「・・もう・・・」
すぐお化粧出来る状態かと思ったのに・・・
「・・顔は？　ちゃんと洗った？」
「顔くらい洗ったわ！　失礼なこと言わないでよ！」
・・・まぁ・・いっか・・・

ドライヤーまで持って来てなかったからお母さんに借りた。
「じゃぁ、ここに座って？」
長谷川をダイニングの灯りが当るところに座らせる・・・霧吹きで髪に水を吹きかけて、ブラシで梳かす・・・跳ねてるところは念入りにドライヤーを当てながら梳かした・・・長谷川の髪って思ったより硬めなんだな・・・なかなか跳ねが直らない・・・

やっと跳ねた部分を整えて、後ろとサイドをブラシで巻きながらドラーヤーで温めて内巻きにする・・・そして前髪をヘアクリップで上げてメイクにかかる・・・
昨日おばさんの美容院で眉毛もだいたい整えてくれてたから助かる・・・眉毛までやってたら時間がなくなっちゃうところだった・・・自分のお化粧ならもう馴れてるけど、他の人にメイクするのは数えるくらいしかやったことがないからちょっと緊張するな・・・

下地を整えてファンデーションを薄く伸ばす・・・ちょっと肌が荒れてる・・・やっぱり洗い方が良くないんだと思う・・・お化粧をしない方が肌はキレイだと思ってる人も多いけど、どうしても顔を洗う回数が少ないし、ちゃんとした洗い方を知らないから逆に荒れてる場合も多いらしい・・・これはエステのお姉さんの受け売りだけど・・・

そしてアイライン・・・目はアイラインの引き方でずいぶん印象が変わるから重要だ・・・

「長谷川さん・・ちょっと動かないで・・・」

アイラインを引いてる時に動かれると、やりにくいし目玉に当りそうで怖い・・・口紅は長谷川にはオレが使ってるピンク系は合わない感じだから、肌色に近い少しくすんだ色にした・・・その方が大人っぽいドレスにも合っている。

頬に軽くチークをのせて完成だ！　チークもオレより少なめに・・・

前髪を留めていたヘアクリップを取って、ドライヤーとブラシで前髪に丸みをつけた。

「出来たよ。どう？」

鏡を見た長谷川は

「自分じゃわからない・・・」と言った。

まあ、初めてお化粧した時ってそんなもんだ。オレも自分じゃないみたいって思ったのを思い出した・・・

長谷川の部屋で、長谷川が青いドレスを着るのを手伝ってから、オレも自分のピンクのドレスを着た。部屋から出るとお母さんがオレたちを見て歓声をあげた。

「可愛いわぁ！有希ちゃん！・・有希ちゃんのイメージにぴったりねぇ。」

「あ、このドレス順子さんが選んでくれたんです・・順子さんも・・ほら素敵でしょう？」

「ほんと！順子も良いじゃない？　馬子にも衣装ね。」

お母さんったら・・オレと同じこと言ってる。

だいぶ予定より時間が過ぎてしまった・・・でも長谷川が予定をだいぶ早めにしてたから助かった・・・オレが予定を立ててたら遅

れちゃったかも・・・オレっていっつもギリギリで予定たてちゃうもんなぁ・・・

「じゃぁ、お母さん行って来ます。」

オレたちが家を出ようとすると

「あ、ちょっと待って・・・」

お母さんに呼び止められた・・・

「遅れたらいけないからタクシーで行きなさい。順子にお金あずけてるから。」

「え・・でも・・・」

すると長谷川も

「有希、そうしよう？　わたしこの恰好で電車に乗るの恥ずかしいよ・・・」

まあ・・たしかにオレもドレスで電車に乗るのは恥ずかしいけど・・・

「じゃ・・じゃぁ・・そうします。」

オレたちは結局、お母さんの言うとおり式場までタクシーで行くことにした。

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

タクシーで着いた式場は正面に白い教会がある素敵なところだった。

式は昼の3時から、今日は“先負”という日で、お昼からが縁起がいいらしい・・・本当は結婚式だから“大安”が良かったんだろ

うけど、うまく休日と合わなかったそうだ・・・夏休みなのだから、べつに休日じゃなくても良いんじゃないかと思ったけど、参列者全員が学校関係じゃないから、やっぱり休日じゃないと都合が悪いらしい。たしかに家族や親戚には会社勤めの人も多いだろう。

式場に入ってみたけどオレは結婚式なんて初めてだからどうすればいいのか良くわからなかった・・・どこかに受付けがあって、そこにご祝儀を渡さなきゃいけないんだけど・・・

オレは先生の結婚式に呼ばれたのだから・・・それにこれはオレへのご褒美でもあるのだし・・・ご祝儀なんかいらないのではないかと思ったのだが、かあさんに言わせるとそういうワケにはいかないらしい・・・披露宴に出席すれば、お料理とか出されるのだから、少なくともその分は渡さないといけないそうだ・・・オレはそんなこと何も考えてなかった・・・

オレはまだ高校生だから、結局かあさんからとしてのご祝儀をあずかってきた・・・中には3万円入っている。どうやら長谷川も同じようにお母さんからのご祝儀をあずかってきていた・・・額は知らないけど・・・なんかオレが誘ったばっかりに、長谷川のお母さんにまで気を使わせてしまったみたいで申し訳ない気がした・・・なんだか大人の世界は難しい・・・

「有希、あそこじゃない？」

長谷川に言われて見ると、長い机のところに二人座っていて、来た人が何かしている・・・すぐ横に若村先生と奥さんになる人の名字を書いたカンバンみたいのが立っていた・・・たぶんあそこだ・・・オレたちはそこに行ってご祝儀を渡して名前を書いた・・・

（しまった・・・緊張してヘタクソな字になっちゃった・・・）

自分でも気づかなかったけど、思った以上に緊張しているらしい・・

・名前を書こうとしたら手がブルブル震えていて驚いた・・・

しかしあたりは知らない人ばかりだから、オレたちは何処にいたら良いのかさえわからない・・・それに・・どうやら学校の関係だから男の人が多いみたいで、あたりは真っ黒けだ・・・キレイなドレス姿のオレたちは浮きまくっているんじゃないだろうか・・・どこかに“新婦のご友人”とかそういう人がいないかなぁ・・・さすがに新婦の友人は真っ黒じゃないと思う・・・

オレは教頭先生の姿を探してキョロキョロしていた・・・教頭先生まだ来てないのかなぁ・・・電車で行くつもりで準備してたから、タクシーで来たら早く着きすぎたみたいだ・・・

「君たち、なんて恰好をしてるんだね！」
そう言われて振り返ると、そこには校長先生がいた！
「あ、校長先生・・・こ・・こんにちは・・・」
「どうしたんだね、その服は！」
「え？・・・ちょっと・・派手すぎました？」
「何を言ってるんだね。君たちは生徒代表なんだよ？　制服で来なきゃ駄目だろう！」
「え！・・・そ・・そうなんですか・・・？」
オレ・・・そんなの知らなかった・・・何で誰も教えてくれなかったんだろう・・・

「それに・・・その髪は・・・」
「あ・・・やっぱりマズかったですか・・・？」
「マズいなんてもんじゃない。ウチの学校は茶髪禁止なのは知ってるだろう、そんな・・・不良のような髪で・・・」
すると後ろにいたオバサンが校長先生をとめた・・・

「まあまあ校長、不良というのは言い過ぎじゃないかしら?」
「しかし・・白鴻会長・・・」
え?!　このオバサン・・・会長さんだったんだ・・・どうりでなんとなく見たことあるような気がした・・・

「戸田さんと・・長谷川さんだったかしら?」
「あ、こ・・こんにちは!!」
オレたち二人は同時にあいさつした・・・
「夏休みだから良いと思ったの?」
「・・・はい・・・でも・・こんなに薄い色にするつもりじゃなかったんです・・・」
「そうね、ちょっと抜き過ぎたわね。まるでお人形みたいだわ。」
「・・ごめんなさい・・・」
オレは本当に反省した・・・なぜ抜け過ぎたとわかってたのに、すぐに染め直さなかったんだろう・・・
「あ・・あの・・実は・・教頭先生に相談したんですけど・・・」
「あら、そう?　校長、教頭先生はどこなの?」
「え・・えっと・・・それがですねぇ・・・もう来ているはずなんですが・・・」
会長に言われると、校長先生はいつになくあたふたしている・・・
校長先生のこんな姿始めて見た・・・いつもは偉そうに落ちついているのに・・・会長ってそんなに偉い人なんだ・・・

「あ!」
向こうから走ってくるのは教頭先生だ・・・本当はもっと早く来るハズだったのに遅れちゃったんだな・・・教頭先生ったら・・俺に任せとけって感じだったのに・・・やっぱり頼りにならないなぁ・・・
・
「ど、どうもすみません!」
「教頭!遅いじゃないか!」

「いや・・・道が混んでまして・・・」
なんか言い訳クサイな・・・オレが半ばあきれて様子を見ていると、ふいに教頭先生と目が合った。
「おや！どこのお嬢さんかと思ったら、戸田君じゃないですか！いや～素晴しい！」
「教頭！君が戸田君にこんな恰好をするようにそそのかしたのかね？！」
「え？　ま・・まさか・・・」
教頭先生は状況が飲み込めず、どうしていいのか判らないようだ・・・
「戸田君は君に相談したと言っとるんだぞ。」
「あ、そのことでしたら、え～・・昨日戸田君から電話を受けまして・・・今日お二人のお耳に入れておこうと思ったのですが・・・なにしろ道が混んでまして・・・」
教頭先生はしどろもどろだ・・・なんか教頭先生に責任押しつけたみたいで悪いことしちゃったな・・・

「まあまあ、二人ともそんなに騒ぐことありませんよ。」
そして白鴻会長はオレたちの方を向いて言った・・・
「戸田さん、長谷川さん、さすがにその恰好では我が校の生徒代表としての出席は無理ですね。」
「え・・・そんなぁ・・・」
これは先生にもらったご褒美なのに・・・オレも若村先生の結婚式見たかったのに・・・

すると長谷川が、もう泣きそうになっていたオレの肩をしっかりつかんで言った・・・
「有希、仕方ないよ。わたしたちが悪かったんだから・・・」
それはそうだけど・・・オレは自分が情けなかった・・・それに・・

長谷川にまで恥かかせちゃった・・・
「ごめんね、長谷川さん・・・」
「いいよ有希、今日は若村先生におめでとうだけ言って帰ろう？」
「・・うん・・・」

「あらあら、だれも披露宴に出ちゃダメだなんて言ってないわよ。」
「え？」
「生徒代表という訳にはいかないけど、若村先生と式場の方に頼んで、奥様のお友達に混ぜてもらいましょう。それなら良いでしょう？」
「・・は・・はい・・・！」
オレは嬉しさと、白鴻会長の優しさに、涙があふれてきた・・・会長はそんなオレの肩をそっと抱いて、耳元で言った・・・
「戸田さん、綺麗になったわね。見違えたわよ。」
「・・ううん・・・わたし・・まだまだなんです・・・」
「そんなこと無いわ。もうすっかり女の子じゃない。素敵よ。」
「・・・・・」
オレは何度も首を振り続けた・・・オレはまだまだだ・・・女の子としても・・・ひとりの人間としても・・・

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

オレは急いでトイレで化粧直しをしていた・・・涙で流れたお化粧じゃ若村先生に会えない・・・
「良かったね有希、先生の結婚式に出られるようになって。」
「うん・・・」

まだどうなるか良くわからないけど・・・
「ごめんね、長谷川さん・・・わたしの早とちりでドレス着せちゃって・・・」
「でもさ、結婚式にセーラー服っていうのも、なんか変よね。」
「・・うん・・・」
たしかに・・・セーラー服って一張羅みたいなもんだから、あんまりキレイとは言えないし・・・披露宴でセーラー服ってのもどうかと思う・・・でも、やっぱり生徒代表だと制服なのかなぁ・・・

「お化粧直しは済んだ？」
「あ・・はい・・すみません・・お待たせしました・・・」
「それじゃ行きましょうか。」
オレと長谷川は会長といっしょに新郎の控え室に行った・・・もうすぐ若村先生にドレス姿のオレを見てもらえると思うとドキドキしてくる・・・べ・・べつに先生に見せるためにドレス着たワケじゃないけど・・・

会長がドアをノックすると中から先生の家族らしい人が開けてくれた。先生は紋付袴っていうのか・・そんな感じのを着ていた・・・

会長が
「若村先生、結婚おめでとう。」
というと、先生は急いで立ち上がって言った。
「ありがとうございます、会長。」
オレたちも揃って
「おめでとうございます、先生。」
「なんだお前たちだったのか?!　どこのお嬢さんかと思ったぞ!」
「ご・・ごめんなさい・・」
「いや、謝る必要はないけどな。」

「ううん・・わたしたち制服で来なきゃいけなかったみたいなんです・・・こんな恰好で来ちゃったから生徒代表じゃなくなっちゃった・・・」

「そうなのか？　それは残念だったな・・・俺も気づかなかった・・・」

「それでね若村先生、この子たちを私たちの席に座らせる訳にはいかないから、奥さんのお友達のところに混ぜてあげてくれないかしら？」

「あ！そうですね・・・それじゃサユリに聞いてみましょう。」

先生は別の控え室にいる奥さんに電話して承諾をとってくれた・・・

奥さん・・サユリさんっていうんだ・・・若村サユリか・・・けっこう合ってるかも・・・

しばらくすると、係りの人が呼びに来た。

「それじゃ、会長ふたりをよろしくお願いします。」

「はい、行ってらっしゃい。」

先生と家族の人たちは係りの人と何処かに行ってしまった・・・オレは長谷川に聞いてみた・・・

「先生どこに行ったのかな？」

「式じゃないの？」

「じゃぁ、わたしたちも行かなきゃいけないんじゃないの？」

するとそれを聞いていた会長が教えてくれた・・・

「あなたたちは行かなくていいのよ。式は親族だけで行うものなの。」

「あ・・そうなんですか？」

「三三九度っていうのじゃない？」

「そっか・・・」

そういうのテレビで見たことしかないけど・・・奥さんも着物なんだろうな・・・

「私たちは披露宴会場に行っておきましょう。」
オレたちは会長に連れられて披露宴の会場へ向った。

披露宴会場は思ったより広くて驚いた・・・こんなにいっぱいお客さんが来るんだ・・・丸いテーブルがたくさん並んでいる・・・

オレと長谷川が案内された席は、２つある新婦の友人の席だ・・・ちょっと窮屈なのはオレたちが急に同席しちゃったからだろう・・・迷惑がられてなければいいけど・・・

「この子たち新郎の一樹さんの教え子なんだけど、皆さんと同席させていただいていいかしら?」
「はい、サユリから聞いてます。ほら、ふたりともこっち来て!」
「お・・おじゃまします・・・」
オレたちは進められた席に座った・・・

「あなたモデルのユウちゃんでしょう?」
「あ・・はぃ・・読者モデルですけど・・・」
「ほらやっぱり!　似てるからそうじゃない?って言ってたのよ!」
「髪染めたの?　ＪＩＮＯＮの時は黒かったでしょう?」
「あ・・はぃ・・夏休みだし・・染めてもいいかなって思ったんだけど・・校長先生に怒られちゃって・・・」
「ちょっとくらい良いじゃないねぇ。そうだ!ユウちゃんいっしょに写真うつしてくれない?」
「あ・・い・・いいですけど・・・」
なんか急に撮影会みたいになってしまった・・・みんな奥さんの友達だから２０代のはずだけどＪＩＮＯＮ見てるのかなぁ・・・

ふと気づくと長谷川がひとりで退屈そうにしてる・・・

「あ・・もうこのへんで良いですか？　もうすぐ先生たちも来るかもしれないし・・・」
オレは何とか言い訳して長谷川のとなりの席に戻った・・・
「有希、ずいぶん人気じゃない。」
「な・・なんかみんな知ってるみたいね・・・ＪＩＮＯＮって１０代の読者がほとんどなのかと思ったんだけど・・・そうでもないみたい。」
「有希ったら、嬉しそう・・・」
「そ・・そんなことないよ・・恥ずかしいし・・・」
でも・・恥ずかしいけど・・たしかにちょっと嬉しいかも・・・
「そ・・それにさ・・写真うつるんだから笑顔になるのは普通でしょう？」
「そりゃそうだけど・・・なんか有希ってほんとにモデルなんだなぁって・・・」
「ど・・どくしゃ・・」
「読者モデルだって言うんでしょう？　わかってるわよイチイチ言わなくても！」
「・・なら・・いいけど・・・」
オレは本当のモデルじゃない・・・本当のモデルってのは蟹原さんみたいな人のことを言うんだ・・・オレなんか蟹原さんの足元にも及ばない・・・

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー
ー　ー
ー

「お待たせいたしました。新郎新婦のご入場です。」
司会の人が言うと、扉が開いて二人が入ってきた・・・みんないっ

せいに拍手をしだしたから、オレも慌てて拍手した・・・
お嫁さんは白い着物・・・白ムク・・だったっけ？　大きな帽子みたいのを冠ってるうえ、恥ずかしそうにうつむいているから顔が良く見えない・・・少しだけ見える顔はまっ白けだ・・・

ウチの校長先生があいさつを始めたがイヤな予感は適中した・・・
いつまで経っても話が終らない・・・朝礼の時と一緒だ・・・

あんまり長いからお嫁さんがどっか行っちゃった・・・それでもまだ話してる・・・じっと耐えている若村先生を尻目に、みんなだんだん食事に手を付け出したから、オレたちもいただく事にした・・・しかし若村先生がウチの学校に来てまだ４ヶ月も経ってないのに、良くそんなに話すことがあると感心しちゃう・・・

校長先生の話がやっと終わりに近づいたころ、お嫁さんが戻ってきた・・・こんどは赤い着物だ・・帽子もないから顔もちゃんと見える！　でも時代劇みたいなカツラをかぶっているから、どうも前にチラッと見た時とは違った印象だ・・・キレイだけど、あんなに厚化粧じゃ良くわからない・・・

「有希、このエビ美味しいよ！　早く食べないと冷めちゃうわよ。」
「あ・・う・・うん・・・」
お嫁さんのこと見てて、新しい料理が来てたの気づかなかった・・・
「ずっとお嫁さんばかり見てるね。そんなに気になるの？」
「そ・・そんなこと・・ないけど・・・」
オ・・オレは着物が好きだし・・・だから気になっちゃうだけだ・・・べ・・べつにお嫁さんが気になってるワケじゃない・・・

今度はスピーチは続いてるのに、ふたり一緒に出て行ってしまっ

た・・・ふたりに話してるのに変なの・・・後でビデオで見るからいいのかなぁ・・・

しばらくして戻ってくると洋装になっていた。若村先生は白いタキシードで、お嫁さんは真っ白なウェディングドレス・・・やっと先生の奥さんになる人の顔が良く見えた・・・やっぱりキレイな人だ・・・

「それではこれよりウェディングケーキに入刀します。みなさまお写真をお撮りになる方はどうぞ前の方へお越しください。」
司会者の人が言った。
「ねえ、わたしたちも見に行かない？」
「わたしはいいわ・・有希ひとりで行っておいでよ。」
「・・そう？　じゃぁ・・行ってこようかな・・・」
だってオレは・・ウェディングドレスを着たお嫁さんを近くで見てみたかった・・・

素敵だなぁ・・・近くで見ると、ビーズでいっぱい飾られてて豪華ですごく綺麗だった・・・いいなあ・・・ウェディングドレスを着るのは女の子の憧れだって言うけど・・・オレは着る機会はないから、よけい憧れるのかも知れない・・・オレも一度でいいから着てみたい・・・

そういえば・・前にレナが言ってたことがある・・・オレが小さいころ、大きくなったらお嫁さんになりたいって言ってたって（26話参照）・・・オレ・・本当にそんなこと言ってたんだろうか・・・もしかしたら今でもその頃の気持ちが残っているからウェディングドレスを着たいなんて思うのだろうか・・・オレがお嫁さんになんかなれるハズないのに・・・

前に出てきたついでに胸元に忍ばせてたデジカメを先生たちに向けた・・・女の子の服にはポケットがあまりないからブラの間は重要な隠し場所なのだ・・・電車に乗る時なんか、無くしちゃいけないキップなんかをブラにはさんでおくことが良くある・・・進藤さんに貰ったデジカメは薄くて軽いから、胸の谷間に隠すにはちょうどいい・・・まあ、オレにはたいした谷間も無いけど・・・

ケーキにナイフを刺したまま動かないでいる先生たちを液晶の画面に入れていると、画面の中の先生がオレの方を見て微笑んでくれた！・・・なんか急に胸が熱くなってしまい、オレは画面から目を上げないままカメラのシャッターを切り続けた・・・

「有希、どうだった？」
席に戻ったら長谷川がオレに聞いた・・・
「う・・うん・・・」
まさかウェディングドレスを着たいと思ったなんて言えるハズない・・・
「キレイだったよ・・・先生も・・幸せそうだった・・・」
「有希ったら、うっとりして見てたじゃない。もしかして自分もウエディングドレス着たいとか思ったんじゃない？」
「そ・・そんな！・・・そんなハズないじゃない！」
オレは自分の気持ちを見透かされたような気がして慌てて否定した・・・
「ムキになっちゃって。図星だった？」
「わ・・わたしが結婚なんか出来ないの知ってるでしょう？」
「そうかなぁ？　べつに結婚したって良いんじゃない？」
「・・そんな・・もう・・バカにしないでよ・・・」
長谷川のイジワルにはホント困っちゃう・・・長谷川って時々いきなり核心を突いてくるから気が抜けない・・・

それにしても・・・先生が笑顔を向けてくれた時、オレは思わず泣きそうになるのをこらえるのに必死だった・・・とても顔をあげて、直に先生の顔を見ることが出来なかった・・・オレは今でも先生のことが好きなんだろうか・・・

でも・・これは知られちゃいけない感情なのだ・・・オレは自分の気持ちに気づいてからも、ずっと先生には気づかれないように隠してきた・・・オレたちは先生と生徒・・・恋愛感情なんか持っちゃいけない・・・

それに・・・先生はオレが男だと知っているのだ・・・男が自分のことを好きと思ってるなんて知ったら気持ち悪いに違いない・・・オレだって昔はそう思ってた・・・でも今は・・・自分の気持ちが良くわからなくなってきた・・・

オレがひとりでモヤモヤした気持ちでいる間も式は順調に進み、二人でそれぞれのテーブルをまわって、テーブルの上に置かれたロウソクに火をつけるキャンドルサービス・・・先生たちは二人でひとつの火がついた棒を持って、テーブルをまわってくる・・・前の方は偉い人の席だから先生ったらガチガチに緊張してるのがわかる・・・棒の先の火がチラチラ震えている・・・

それでも、オレたちがいる後ろの方のテーブルまで来たころには、だいぶ緊張もとれて笑顔が出てきたみたいだ・・・若村先生の男友達のテーブルでは、大きな声でひやかされて恥ずかしそうだ・・・先生・・耳が真っ赤になってる・・・

とうとうオレたちのテーブルまでやって来た・・・

「サユリおめでとう！」
奥さんの友達たちが口々にお祝の言葉を言っている・・・オレも・・
先生に何かお祝を言わなきゃ・・・でも言葉が出てこない・・・
ロウソクに火をつけながら、先生がオレに微笑みかけてきた・・・
「戸田、さっき写してた写真、俺にもくれよな。」
「せ・・せんせい・・・」
・・・先生・・・優しすぎるよ・・・そんな言葉かけないで・・・

オレはもう我慢が出来ず、涙が溢れてきた・・・こんなとこで泣いたらヘンに思われちゃう・・・でもどんなに頑張っても、涙を止めることは出来なかった・・・

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー
ー　ー
ー

「有希・・大丈夫？」
「う・・うん・・・なんとか・・・」
オレたちは披露宴会場を抜け出して小さな化粧室に来ていた・・・
会場の外で長谷川が泣いてるオレをどうしていいか困っていると、
式場の人がここに連れてきてくれた・・・
「・・へ・・ヘンに・・思われたかな・・・」
「別に・・ヘンには思わないと思うけど・・・ただ結婚式に感動して泣いたと思うんじゃない？」
「・・・・・」
それだったらいいけど・・・
「でも・・違うのよね？」
「・・・・・」

オレ・・・なんて言ったらいいのか・・・

「でも、気づかなかったなぁ・・・有希が若村先生のこと好きだったなんて・・・」

「！」

そんな・・いきなり・・・？

「大丈夫よ、誰にも言わないから。」

「・・ほ・・ほんと・・・？」

「でも、またひとつ有希のヒミツ握っちゃった！」

「！・・・いぢわる・・・」

でも・・・この気持ちを知ってもらってホッとしてるオレもいた・・・こんな気持ち・・・ひとりで抱えるには大きすぎる・・・正直、長谷川になら知られてもいいと思った・・・長谷川なら安心していられる・・・イジワルだけど・・・それでもオレにとって長谷川は特別だ・・・

「きっと勉強見てもらってる間に好きになっちゃったのね・・・わたしもそんな有希の気持ちわかるよ。」

「・・・・？」

「親身になってもらうと好意持っちゃうのも仕方ないんじゃない？」

「・・でもぉ・・・」

オレは生徒だし・・・まだ高校生だし・・・それに・・・それに・・・男だし・・・

「有希ってホント心は女の子なのねぇ。感心しちゃうわ。」

「・・・・？」

・・・オレは・・・見た目は女の子かも知れないけど・・・心はまだ男だと思う・・・それなのに長谷川ったら・・・オレの心が女の子だなんて・・・

「今の有希見てると、もう男の子の部分なんて無いんだなって・・・」

「・・そ・・・」

・・そんなことない！と言いそうになって、慌ててやめた・・・オレにはまだ男の部分がいっぱい残ってることを主張したって何の意味もない・・・オレに男の子の部分なんて無くてもいいものなんだ・・・

「ほら、有希、さっさと化粧直しちゃいなさい。早く会場に戻らなきゃ、本当にヘンに思われてしまうかも知れないわよ。」

「！」

・・そんなことになったら大変だ・・・オレは急いでお化粧を直しはじめた・・・

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

披露宴会場に戻ると、奥さんの女友達たちに冷やかされた・・・結婚式で泣き出しちゃうなんて純真だって・・・オレは純真なんかじゃない・・・でも・・先生のことを思って泣いちゃったと思われてないだけマシか・・・

・・ここは純真な女の子ということにしておこう・・・

披露宴を終わりに近づいてきた・・・奥さんの友達たちは二次会

の相談なんかはじめてる・・・
オレたちは二次会には行かないから、なんだかもうすぐ終っちゃうのが淋しい・・・

「ユウちゃん、もうすぐブーケトスよ！」
「・・ぶーけ・・とす・・？」
「え！　ユウちゃんブーケトス知らないの？」
「・・はぃ・・・」
「ブーケトスってね、花嫁が後ろ向きで投げたブーケを受け取った人が次に結婚するって言われてるのよ！」
「・・じゃぁ・・わたしには関係ないかも・・・だってまだ高校生だし・・・」
「いいじゃない、ユウちゃんも参加しなさいよ！」
「・・はぁ・・・」
あんまり乗り気しないな・・・結婚なんて出来ないのはオレ自身が一番わかってることだし・・・

でもなんかオレも参加することになってしまった・・・それに・・・どういうワケかオレが一番真ん中だ・・・オレのところにブーケが来ちゃったらどうしよう・・・横の長谷川が取ってくれたらいいけど・・・

花嫁が後ろを向いてブーケを高く投げた・・・どうしよう・・・
オレの方に落ちてくる・・・
思ったより遠くじゃない・・・このままじゃ床に落ちちゃう！

思わず出した手に、ブーケがすっぽり落ちて来た・・・しまった・・
・取っちゃった・・・
みんなに拍手されて照れくさいったら・・・オレには必要ないモノ

なのに・・・！

するとサユリさんがブーケを受け取ったオレを抱きしめてくれた・・・うぅ・・・そんなことされたら・・オレまた泣いちゃいそうだ・・・でも・・なんだか嬉しい・・・

オレ・・本当はわかってた・・・先生と結婚するサユリさんに嫉妬してるって・・・でも今は素直に言える・・・

「サユリさん・・先生とお幸せに・・・」

嫉妬しちゃってごめんなさい・・・

第９３話　変化　いつまでも同じモノなんてない

「あ！　千里ひさしぶり～」
エレベーターからＪＩＮＯＮの編集部がある階に降りると、すでに来ていた千里が見えて思わず駆け寄った。
「オーバーね、まだ一週間しか経ってないじゃない。」
「そうだけど・・・」
夏休みは、なかなかみんなに会えないから、千里とは撮影で会えるのが嬉しい。千里の笑顔を見るとこっちまで嬉しくなってくる。

「・・ん？　どうかした？」
笑顔が・・・なんかいつもと違う感じがしたけど・・・
「ううん・・どうもしてないわよ。・・そうだ、有希・・若村先生の結婚式はどうだった？」
「あ、うん！すっごく良かったよ！　いろいろあったけど・・・」
「いろいろ？」
「・・うん・・・ドレスに合わせて髪を染めちゃったら・・・校長先生に怒られちゃって・・・」
「そんなの当り前じゃない！　有希ったら相変わらずうっかりやさんね。」
「へへへ・・・」
なんか照れくさい・・・オレってうっかりやさんなのかなぁ・・・

「もう黒くしちゃったのね。有希の茶髪も見たかったなぁ！」
「あっ、写真あるよ。見る？」
オレはドレスを着た茶髪の写真を見せてあげた。
「可愛いね！有希、茶髪も似合うのね。あ、でも有希は何でも似合うのか。」
「そ・・そんなことないけど・・・」

「あ、これ長谷川さんじゃない。」
「うん、長谷川さんも素敵でしょう？　意外に似合っててビックリした？」
「ホント・・・マゴにも衣装ね・・・」
ふふふっ・・・みんな言ってる！

「若村先生の奥さんもキレイだったよ。ウェディングドレスもすっごく素敵だった・・・ビーズとか刺繍が綺麗でね、キラキラしてるの！」
後でかあさんに聞いたら、けっこう重いって言ってたけど・・・
「有希も着たくなったんじゃない？　ウェディングドレス。」
「・・う・・うん・・ちょっとね・・・」
「有希なら素敵なお嫁さんになれると思うわよ。」
「そ・・そんな・・・」

オレがお嫁さんになんてなれないことは、オレ自身が一番良くわかっている・・・
「・・わ・・わたしなんて・・全然ダメよ・・・」
「そう？　でも有希はお料理もお裁縫も得意で女の子らしいし、それでいてサバサバしたところもあるから、結婚したら良い奥さんになると思うわよ。」
「そ・・そうかなぁ・・・」
・・！・・な・・なにその気になってんだ・・・オレは・・・
「わたし、まだまだ結婚なんて良くわからないの・・・だってまだ男の子と付き合ったこともないんだもん。」
「そっか、そうだったね。・・・ウチは女子校だから出会いもないものね。」
「う・・うん・・・」

もっとも、共学だったらオレは女の子にはなっていないんだけど・・

・でも本当にそうなのだろうか？・・・共学でも男の子のことを好きになったりしなかっただろうか・・・？　オレには自分がもし男の子のままだったらどうだったのかなんて想像さえ出来なくなっている・・・男の頃のオレってどんなコだったっけ・・・？

「ユウちゃん、もっと近寄って！」
カメラマンの進藤さんに言われ、オレは頬がくっつきそうなくらい千里に近寄った・・・千里の髪からシャンプーの香りがした・・・千里の肩に手を乗せてポーズをとる。

オレが読者モデルの仕事を始めたのは、ほんの偶然のことだったけど（４２話参照）、今ではこうして撮影してもらうのが楽しくなっている。

撮影では色んな素敵な服や可愛い服が着れるし、普段はやらないようなお化粧や髪型もしてもらえる・・・撮影をしている間、オレはオレであってオレでないような・・・そんな感じなのだ・・・だから、普段なら恥ずかしくなってしまうような洋服なんかも、あんがい平気で着れるし、ちょっと大胆なポーズや可愛すぎるポーズだってとることが出来る・・・後で雑誌になった写真を見て恥ずかしくなることもあるけど・・・

千里と撮影してると楽しくて、時間が経つのも忘れてしまう・・・

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

「おつかれさまでした～」
オレたちは撮影が終ってお化粧を落とすと来たときの服に着替えてろうかに出た・・・
「あぁ、疲れたね。」
でも心地よい疲れだ・・・
「帰ろっか、千里。」
オレがエレベーターの方に向かおうとすると、千里が・・・
「有希、ちょっと待っててくれない？　わたし編集長さんにちょっと話があるの。」
「・・・うん・・わかった・・ここで待ってるね・・・」
オレは編集部に入っていく千里を見送ってから、ろうかの長椅子に座った・・・いったい何の話だろう・・・そういえば千里・・・今日少し様子がヘンだったけど・・・

千里が編集部に入ってからずいぶん時間が経っていた・・・千里なにしてるんだろう・・・お腹すいちゃったなぁ・・・ふと時計を見ると、もう9時になっている・・・千里・・帰らなくていいのかなぁ・・・千里のおウチは遅くなるとうるさいらしいのに・・・

あまり遅いので心配になってきた・・・編集部をのぞきに行こうかと思ったとき、やっと千里が出て来た・・・
「千里ぉ、遅いよ！　何の話だったの？」
「・・うん・・・」
・・・なに？・・・この感じ・・・なんか悪い話だったのだろうか・・・？
「・・有希・・・まだ時間ある？」
「・・・うん・・・今日は遅くなるかも知れないから、夕飯は妹に

頼んできたけど・・・」
たぶん麻衣はピザでもとるんじゃないかと思うけど・・・
「でも、わたしお腹すいちゃった・・・何か食べたい・・・」
「それじゃ、マックかミスドでも行く？　薬院駅のところの・・・」
「・・それもいいけど・・・近くの喫茶店にしない？　前に佐々木さんに連れて行ってもらったんだけど、パスタとか美味しいの。」
「・・うん・・いいよ。　そこにしよう。」

　オレたちは編集部の近くの喫茶店に来た。前に来たときに佐々木さんが食べていたパスタがすごく美味しそうだったのだ・・・あれから何度か来たことあるけど・・お昼に来るとどうしてもパフェをたのんじゃうのだ・・・

「ね？　美味しいでしょう？」
「うん・・・」
「お昼はパフェも出してて、そっちもすごく美味しいのよ！　こんどまた来よう？」
「・・・・・」
・・どうしたんだろう・・・千里・・・

「・・ねえ、千里・・何か話したいことがあるんじゃない？　今日の千里ちょっとヘンだよ？」
「・・・・・」
「撮影の時も、ときどきうわの空だったしさ・・・」

「・・・有希・・・さっきわたし編集長のところに行ったじゃない・・・？」
「・・うん・・・」
「あれね、実は・・読者モデルをやめること伝えに行ったの・・・」

「え?!」
オレは一瞬、千里が何を言ったのか解らなかった・・・やめる・・・?・・・え?千里・・・読者モデルをやめちゃうの?
「・・ど・ど・・どうして・・・?」

「有希にも話したことあったでしょう?　ウチのお父さんはわたしが読者モデルやるの、あまり良く思ってないの・・・」
「・・・それは・・・なんとなく知ってたけど・・・」
「わたしこの前の期末テスト、あまり成績良くなかったじゃない・・・だからやめるように言われたのよ・・・」
「・・そ・・そんな・・・だって千里・・・悪かったって言っても・・わたしより良かったじゃない・・・」
「まあ・・有希よりは少し上だったけど・・・・」
・・・そりゃぁ・・オレより上だったからって・・ぜんぜん自慢にはならないけどさ・・・

「・・でも・・それじゃ・・撮影を少し減らしたりして・・・勉強すればいいじゃない・・・」
「・・・それがダメなの・・・本当は一学期でやめなさいって言われてたの・・・今日も最後だからって無理言って来たのよ・・・」
「・・・なんで?・・なんでダメなの?」
「・・・わたし・・受験勉強しなきゃいけないから・・・」
「・・・・・」
・・・受験?・・・

「・・受験って・・・千里・・白鴻短大に行くんじゃないの・・・?」
「・・・うん・・・」
「なんで?!」
「・・・高校は本命に落ちちゃったから・・白鴻に来たけど・・・

大学はちゃんとしたところに行きなさいって言われて・・・」
「・・・ちゃんとした・・・？」
「そう・・４年制の・・もう少し有名なところ・・・」
・・・そんな・・・そりゃぁ・・みんなはオレみたいにウチの学校しか受けてないってワケじゃないのは知ってるけど・・・本命に落ちたから来てるのは知ってるけど・・・でも・・・・
「・・・それじゃ・・千里とは高校卒業したらお別れなの・・・？」
「・・・・・」
「・・わたし・・・ずっと友達だって思ってたのに・・・」
「友達は友達よ・・・ただ・・ちょっと離れちゃうかも知れないけど・・・」
「・・・そんなぁ・・・」
オレたちはずっと親友だって思ってたのに・・・ずっと一緒にいれる気がしてたのに・・・

だいたいオレが読者モデルになったのも、千里がなりたいと言ったからだ・・・それなのに千里がやめちゃうなんて・・・そんなの絶対ヘンだ・・・！
「・・わたしが・・千里のお父さんにお願いしてあげる！　読者モデル続けさせて下さいって！」
「有希・・・」
「だって千里、読者モデルやりたいんでしょう？　勉強しながらだってやれるわよ！」
「ダメなの・・もう編集長にもやめるって言ってきたし・・・」
「そんなの・・・今から行って、やっぱりやりますって言えばいいのよ！　行こう？　いますぐ行こう？！」

「・・有希、わたしね、本当は読者モデルには・・・そんなにこだ

わってないの・・・」
「え?!」
なに言ってんの?・・千里・・・
「・・・わたしはね、もともと受けるつもりなかったの・・・受かるなんて思ってなかったし・・・でも有希が受けるだけ受けてみたらっていうから・・・そしたら受かっちゃって・・・・」（４１話～４３話参照）
「え?　じゃ・・じゃぁ・・千里はやりたくなかったの?　無理してやってたの?!」
「ううん!・・・無理してたワケじゃないわ・・・有希と一緒の撮影は楽しかったわよ。・・・どんたくのパレードも楽しかった・・・有希がいなかったら、わたしだけじゃこんな体験できなかったと思う・・・」
「・・だったら・・・」
「でも、それは有希がいたからなの。有希が一緒にいてくれたから、わたしも楽しくやってこれた・・・」
「・・・だったらいいじゃない!・・・これからも楽しくやっていけば・・・わたしも一緒にやってあげるよ!」
「ごめん有希・・・もう決めたことなの・・・」
そんな・・・そんなのイヤだよ!　千里がやめちゃうのにオレだけ読者モデルやるなんて・・・

「・・・じゃぁ・・・わたしもやめる・・・」
「え?」
「わたし・・・千里がやりたいんだと思ってたから一緒にやることにしたのに・・・でも千里がやめちゃうんなら、わたしがやる意味ないもん!」
「有希・・・」
「やめる!　わたしもやめる!!」
「ダメ!有希はやめないで・・・」

「どうして？　自分だってやめるのに・・・なんでわたしがやめちゃダメなの？」
「・・・だって・・有希は向いてるもの・・・」
「・・向いてない・・・ぜんぜん向いてないよ！」
そもそも男が女の子のモデルやってるんだから、向いてるハズないじゃないか！

「有希は自分のことがわかってないのよ。有希は向いてるよ。撮影のときすっごく楽しそうだし、いろいろ研究してるじゃない。」
「・・それは・・・」
それは、オレは蟹原さんみたいな本物のモデルとは全然体型が違うから・・・だから少しでも良く見えるように・・・出来るだけキレイに見えるように頑張ってるだけだ・・・
「だから有希はやめないで・・・わたし・・有希が頑張ってるから・・・わたしも受験頑張ろうと思ったのよ？」
「・・・・・」
・・ズルイ・・・千里はズルイよ・・・そんなふうに言われたら・・・オレ・・やめられないじゃないか・・・！

「有希は続けてくれるよね！・・・ね？」
「・・ぅ・・うん・・・」
「良かった・・絶対よ。有希はやめないでね。わたしの分まで頑張ってよ！」
「・・・・・」
「有希・・そんな悲しい顔しないでよ！　読者モデルやめるだけで、二学期が始まればまた会えるんだから！登校日だってあるし、べつに学校やめるワケじゃないのよ？」
「・・・・・」
そりゃそうだけど・・・それでも千里との時間が少なくなるのは確かだと思う・・・大学受験するんだったら、塾とか行かなきゃいけ

ないかもしれないし・・・そしたらこれまでみたいにマックやミスドでおしゃべりする時間だって無くなっちゃうかも知れない・・・

なんで人は変わっていくんだろう・・・そりゃぁオレだって永遠に続くものなんて無いのは解っているつもりだ・・・それでもやっぱり変わってしまうのは悲しい・・・みんな・・・弘子や直美や・・・長谷川も変わってしまうのだろうか・・・

・・・オレも・・いつかは変わっていくのだろうか・・・オレは女になって・・・それからどうなるのだろう・・・オレも変わらなきゃいけないのだろうか・・・？

オレは女の子になってしまったけど・・・もうこれ以上変わりたいとは思わない・・・オレは素敵な女の子になりたいけど・・・それだけじゃダメなの・・・？

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー

ー　ー

ー

おまけ『オレは女子高生』の世界　第3弾

舞台

九州北部の架空の福岡県、主に架空の西鉄大牟田線沿線を中心に繰

り広げられる物語。

架空の西鉄大牟田線案内

○＝特急停車駅（急行も停車）　●＝急行停車駅
・久留米以降は急行はありません。　・普通駅は基本的に省いています。

○福岡（天神）ー　ー天神の中心部のビルの中にある駅。駅ビルには架空の三越が入っている。
○薬院ー　ー　ー　ー　九州ＪＩＮＯＮの編集部、駅の下にミスドと大きな本屋〈マンガも充実〉
・平尾ー　ー　ー　ー　ーレナの家
●大橋ー　ー　ー　ー　急行停車駅では一番大きい。市街地へ向かうバスのターミナルでもある。有希が行った手芸店〈西沢〉がある。
●春日原ー　ー　ー　ー　有希、長谷川の家がある。おばさんの美容院、二光のエステもココ。駅前にはさかえ屋、マックがある。
●下大利ー　ー　ー　ー
○二日市ー　ー　ー　ー
●朝倉街道ー　ー　ー　ー　急行停車駅だが、雰囲気は普通駅のようだ。三吉先生の家
●筑紫ー　ー　ー　ー　ー
●小郡ー　ー　ー　ー　ー
●宮の陣ー　ー　ー　ー
○久留米ー　ー　ー　ー　白鴻女学園　駅前にミスド、マック
　原口弘子の家はここからバスで３０分の八女
○花畑ー　ー　ー　ー　ー
○大善寺ー　ー　ー　ー　佐倉千里の家

○柳川ー　ー　ー　ー　ー　ー
○新栄町ー　ー　ー　ー　ー
○大牟田ー　ー　ー　ー　ー　三井グリーンランド
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

登場人物

家族・親戚

戸田有希　〈とだ　ゆうき〉　この小説の主人公、元はごく普通の男の子　現在、白鴻女学園高校２年　１６才　１月２５日生まれ　血液型Ｏ型　身長１６３ｃｍ　足のサイズ２５ｃｍ　髪は７１話現在、肩甲骨が隠れるくらい。学校では三つ編み。性格は優柔不断、物事を深く考えない、素直で正直者。　勉強は国語と図工が得意、英語と数学が苦手、体育はそんなに得意じゃないが水泳はなぜか得意らしい。華道部。茶道も習っている。料理は昔からやっている。裁縫は習ってみたら得意だった。小学校２年まで家では女の子の服を着ていたらしいが有希自身は憶えていない。本当に性同一性障害なのかもしれない。小さい頃に溺れたことがあるらしい。父ゆずりのアレルギー体質。千里と一緒に読者モデルをやっている。モデルの名前は“春日ユウ”。ジノンボーイの純平とは“メル友”

戸田有正　〈とだ　ありまさ〉　有希の父　５４才　売れない作家（昔、芥河賞にノミネートされたことが一度だけあるらしい。現在はペンネームで三次元文庫にライトノベルを書いているらしい）婿養子で旧姓は佐藤　本家は熊本。有希は小さいころ一回だけ行っ

たことがあるらしい。

戸田麻希　〈とだ　まき〉　有希の母　４６才　空間デザイナー（店舗の内装とかのデザインをやるらしい）細身で美人らしい。歳より若く見えるらしい。

戸田麻衣　〈とだ　まい〉　有希の妹　現在、春日第二中学１年１３才　明るい性格　有希が女の子になってからは仲が良い。

戸田有友　〈とだ　ありとも〉　成績優秀　２４才　有希の自慢の兄。京都の薬科大の大学院を卒業したが研究のため大学に残ってインフルエンザの抗ウイルス剤の研究をしている。ちょっと変わった性格かも。

戸田ノゾミ　〈とだ　のぞみ〉　母方のおばあさん　西新のおばあちゃん　７０才くらい　優しいが厳しい部分もある。

長山麻弓　〈ながやま　まゆみ〉　母の妹　美容院を経営　有希をニューハーフだと理解している。エステサロン経営の二光さんとは知り合い。

長山レナ　長山麻弓の娘　有希のいとこで幼馴染み　有希と同学年　茶髪でオシャレ。活発。

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

白鴻女子短大付属　白鴻女学園〈しらとりじょがくえん〉伝統ある女子高　共学化を目指したが男は有希しか受験しなかった。また共

学化には卒業生からも反発があったらしい。清楚で伝統的なセーラー服が特徴。

白鴻女学園の生徒（有希は3組）

長谷川順子　〈はせがわ　じゅんこ〉有希と同学年の1組　6月28日生まれ　血液型B型　有希と同じ中学出身だが2年生終りのころ転校してきたので中学時代の有希のことはあまり知らない。今は一番の親友で生徒では原口弘子と共に有希が男だと知っている。有希と同じ華道部に所属している。フクロウの置き物を集めているようだ。読書家。仮面レンジャーが好きらしい（特に可愛い系の仮面グリーンがタイプらしい）性格は謎の部分も多い。小さいころから転勤がち、現在は母と二人暮らし、父は大阪に単身赴任中、銀行の管理職。

岡本直美　〈おかもと　なおみ〉3組のクラスメイト　ちょっと目立ちたがり屋。自意識が強い。

佐倉千里　〈さくら　ちさと〉3組のクラスメイト　大人しく性格がいい。　クラスメイトでは有希と一番仲がいい。有希と一緒に読者モデルをやっていたが、2年生の一学期で受験勉強のためやめた。モデルの名前は“ 山上さくら”

原口弘子　〈はらぐち　ひろこ〉3組のクラスメイト　胸が大きいのが自慢、色気がある。八女の「鵲神社」の一人娘。父は神主、母は死んでいない。叔母さんが神社を手伝っている。68話で有希が男だと知った。クラブは郷土史研究部。彼氏がいたが別れた（87話参照）

井川聡子　〈いがわ　さとこ〉有希と同学年の2組　有希と同じ華

道部　地味で背が低い。要領が悪い。自分と違い、綺麗で可愛く背が高い有希に憧れているらしい。

安部まさ美　〈あべ　まさみ〉３組のクラスメイト　出席番号一番のコ　ただ名前を呼ばれただけ。

中野御里〈なかの　みさと〉有希の１年後輩　女らしさを身につけるように“かあちゃん”から言われているらしい　博多っ子　小学生のあいだは締め込みをして子供山笠に参加していた。　父と兄は山のぼせ（山笠に夢中で他のことが手につかない人のこと）

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

白鴻女学園の先生〈先生は全員、有希が男の子で性同一性障害者だと思っている。校長と教頭だけは有希が性同一性障害ではないと知っている。〉

会長　白鴻道子〈しらとり　みちこ〉白鴻女学園創始者の孫　白鴻女子短大の校長でもある。有希を女の子として入学させることには同意している。９２話の若村先生の結婚式で初めて登場。優しく機転がきく面を見せている。

校長　有希のことは教頭にまかせている。事なかれ主義な面があるようだ。

教頭　石渡先生〈いしわたり〉　有希が性同一性障害だという設定を考えた。有希が読者モデルを始めると、生徒数拡大に利用しようとするなど抜け目がない。

山口智佳〈やまぐち　ともか〉　担任・体育　快活　３２才　有希のことを気にかけてはいるが、あえて他の生徒と同じように接している。

松本たか子　家庭科　２７才　有希の制服の世話などを任されている。校長と教頭以外では有希が男の子の頃に会ったことがある唯一の先生。有希にとってお姉さん的存在。有希の裁縫の才能を高く評価している。

長山鏡子〈ながやま　きょうこ〉古典　６１才　風紀検査に厳しい。有希の中学の三吉先生とは茶道の同じ先生の弟子どうし。

斉藤明〈さいとう　あきら〉現国　２９才の男性教師。有希が倒れてとき保健室まで運んでくれた。

嶋田晶子〈しまだ　あきこ〉調理実習・華道部顧問　４０才くらい　ちょっと古風な美人

白石香帆〈しらいしかほ〉学校医　３５才　美人女医　善かれと思い有希に女性ホルモンを投与してしまった。有希にとって何でも相談できる頼れる優しい女性。有希のことは何でも知っているが、白鴻女学園に入学したいきさつまでは知らない。

若村一樹〈わかむら　かずき〉有希が二年生の時入ってきた数学の先生　会長に誘われ塾講師を蹴って白鴻に来た。写真が趣味で良く写すのは風景や猫など。今年大学を卒業したて、２２歳。奥さんの名前はサユリ。

高島亜矢子〈たかしま　あやこ〉有希が二年生の時、若村と同時に

赴任してきた英語の先生。有希は高島先生には習っていない。若村と同じで、今年大学を卒業したて、２２歳。

―――――――――――――――
―――――――――――――――
――――――――――

春日第二中学　関係

井原〈いはら〉先生　中学の有希の担任　３５、６才くらい　有希に白鴻女学園を紹介し、ある意味有希を女にした張本人。

三吉〈みよし〉先生　中学の家庭科教師　６０才近い　有希にお嬢様教育をした人物。躾に厳しいが真面目にやるコには優しい面も見せる。有希にとっては恩師であり、現在も先生の自宅でお茶や着物の着付けを習っている。女子の間でのあだ名クソババア。

鈴木　中学の同級生　仲が良い男友達。有希が携帯の番号を変えてしまったため音信不通。

―――――――――――――――
―――――――――――――――
――――――――――

九州ＪＩＮＯＮ〈ジノン〉関係

佐々木編集長〈女〉３０代後半　スーツに細めのオシャレなメガネ、髪はほとんどアップ、仕事が出来る女という感じ。

カメラマン　進藤〈しんどう〉　４０代　短髪に鼻の下だけヒゲを

生やしている、洗いざらしのシャツに穴が開いたジーンズ。鋭い目が一見怖そうにも見えるが本当は優しい。

スタイリスト　永沢ケイコ〈ながさわ　けいこ〉　２０代後半？
サイケで派手な服が好き　オシャレ

メイク　カネちゃん　背が小さな丸顔の女の人、若いのか歳とってるのか良くわからないがニキビがたくさんあるところを見ると若そう

モデル　蟹原ユリ〈かにはら　ゆり〉　ニックネームはカニちゃん。トップモデルの一人。

ジノンボーイ　道端純平〈みちばた　じゅんぺい〉２１才　有希のことが好きらしい。有希も気になっている。メール交換中。現在の仮面レンジャーシリーズ星徒で“マース”役もやっている。

ジノンボーイ　古池鉄平〈ふるいけ　てっぺい〉仮面レンジャー星徒で“ジュピター”役

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

その他

二光〈にっこう〉　おかまのメイクアップアーティスト　４４才
全国に十数店のエステサロンを経営している。出身地の福岡には博多と春日原の２店舗がある。

愛島ハルカ〈あいじま　はるか〉天神三丁目にあるニューハーフパ

ブ“みつまめ姫”でトップのニューハーフ。歳は20代後半から30代前半らしい。

男性アイドル事務所Jニーズ
アイドルグループ「ニース」のメンバー　山上　通称“ヤマペー”。
有希が好きなアイドル　　　メンバーは他に西喜怒など。

アイドルグループ「カツーン」のメンバー　亀有
キてぃちゃん　可愛いネコのキャラクター、ねいぐるみを手にしてから有希のお気に入りに。

――――――――――――――
――――――――――――――
―――――――――――――

これまでのおまけ（その他）の場所
36話　制作おぼえがき　08．6．21
40話　『オレは女子高生』の世界　人物、舞台設定など
45話　架空の西鉄大牟田線案内
49話　名前について
53話　ドラマ化を妄想してみる
61話　「放生会編」おまけ
67話　1周年を迎えて
71話　『オレは女子高生』の世界　第2弾（架空の西鉄大牟田線

案内付き）ドラマ『ブザー・ビート』のお知らせも
７３話　「ヒロイン」について
７８話　「出版されたら買いたい作品」のお礼
７９話　「文章」について
８２話　「文章って難しい・説明編」
８５話　ちょっとあとがき　長谷川の誕生日とお父さん
８９話　「Q&A」

第９４話　友達　オレの大切なもの

オレはその日帰るとすぐに弘子に電話した・・・弘子ならきっと千里を説得してくれそうな気がした・・・

「ね？　弘子からも言ってよ・・・千里に読者モデル続けるように・・・」

「それは無理よ、千里が決めたことでしょう？」

「でも・・読者モデルやりながらだって・・・勉強出来ると思わない？」

「出来るかも知れないけど、もし千里が大学落ちたらどうするの？　有希責任とれる？」

「・・せ・・責任なんて・・・」

そんなのオレにとれるハズがない・・・

「・・責任は取れないけどさ・・・もし落ちたらウチの短大に行けばいいじゃない！」

「有希、あなた自分がなに言ってるかわかってる？　いくら友達だからって他人の人生を勝手に決めちゃだめよ。」

「・・・・・」

「・・・弘子も知ってたの？　千里が他の大学受験するって・・・」

「うん、でもわたしもついこの前に聞いたばかりよ。」

「・・何で・・わたしには言ってくれなかったのかな・・・」

「有希には最後の仕事が終ってから決めてたんじゃない？　だって今日も無理言って来たって言ってたんでしょう？」

「・・うん・・・」

「有希には今度撮影の時に言おうって思ってたのよ。」

「でも・・それなら撮影の前に言ってくれたら、わたしも最後の撮

影だって気持ちでやれたと思うのに・・・それなのにわたし・・・これが最後だなんて知らずに、いつもと同じように撮影しちゃった・・・」

「・・・それでいいのよ。」

「良くないよ！　知ってたらもっと頑張ったのに・・・」

「そうかしら？　撮影の前に聞いたら、有希泣いちゃって撮影にならなかったんじゃない？」

「・・そ・・それは・・・」

そんなこと・・・やってみなきゃわからないけど・・・でも・・そうかもしれない・・・・

「・・でも・・わたし・・千里が読者モデルやりたいんだと思ってたのよ・・・なのにわたしがやれって言ったからなんて・・・イヤならイヤって言ってくれればいいのに・・・」

「それは違うと思うよ。千里だって有希と一緒に撮影するの楽しいって言ってたわよ。」

「だったらやめなくていいじゃない・・・！」

「有希、千里だって悩んだと思うよ？　だから悩んで出した答えに有希が口出すことなんて出来ないわ。」

「・・・そ・・そんな・・・友達でも・・・？」

「うん。」

「・・・親友でも・・・？」

「そうよ。」

「・・・・・」

「親友だったら応援してあげなきゃ。」

「・・・・・」

「有希もほんとは解ってるんでしょう？　どうにもならないこと・・・」

「・・・ううぅ・・・」

・・オレにはどうにも出来ないけど・・・弘子なら何とかしてくれるかも知れないと思ったのに・・・
「千里だって、有希のこと、これからも応援してくれると思うわよ。」
「・・応援なんていらない・・・わたしは千里と一緒にやりたいの！　ひとりで読者モデルやったって楽しくないよ・・・」
「でも有希、これまでだってひとりで撮影したこと何度もあったんじゃないの？」
「・・うん・・・」
「楽しくなかった？」
「・・・そりゃ・・楽しいときもあったけど・・・」
「だったら続けるべきじゃない？」
「・・・・・」
「それに、読者モデルやめたら道端くんと会えなくなるかもよ？」
「え？！・・で・・でも・・純平とはメールで・・・」
それに・・・こんど会うことになってるし・・・
「道端くんと連絡は取れるでしょうけど、良く考えてみなさいよ、道端くんは芸能人でジノンボーイなのに、読者モデルやめたら有希はタダの女の子になっちゃうのよ？　それでも道端くんと会う自信あるの？」
「・・・！」
・・それは・・・困る・・・オレは今でも自分に自信がないのに・・・

そもそも純平はオレのことを読者モデルの“春日ユウ”だと思っている・・・それがただの女の子の“戸田有希”になってしまっても友達でいてくれるだろうか・・・純平は本当のモデルで、オレはただの読者モデルとはいえ・・・たったひとつの共通点なのに・・・それがなくなったら・・・もしかしたらオレのこと嫌いになっちゃうかも・・・

「・・純平と会えなくなるのは・・イヤ・・・」
「そうでしょう？　だったら続けなきゃ。」
「・・・・」
「もし続けてみて、やっぱりやめたいって思ったら、その時また考えればいいでしょう？」
「・・・うん・・・」
オレはやっぱり読者モデルはやめたくない・・・けど、千里がやめてしまってひとりになっても続けていけるか自信もなかった・・・これまでもひとりの時はあったけど、ずっとひとりというのはやっぱり違うと思う・・・

――――――――――――――
――――――――――――――
―――――――――

「ただいま～・・・って言ってもだれもいないか・・・あら？　有希・・・」
「・・・おかえり・・かあさん・・・」
「まだ起きてたの？」
「・・・うん・・・かあさん遅かったね・・・お仕事忙しいの・・・？」
「まあね、大きなのが入ってるからね。」
「・・そう・・・」
「どうした？　元気ないじゃない。」
「・・・・」
「何かあった？」
「・・・千里がね・・読者モデルやめるって・・・」

「だから有希、そんなにふて腐れてるの？」
「・・！・・ふて腐れてなんかないよ・・・」
「そう？　だったらいいけど。」

「・・・かあさん・・ご飯は？」
「食べてきたわ。」
「・・そぅ・・・お酒・・飲んでるの？」
「少しだけよ。」
かあさんは自分の部屋へお化粧を落としに入っていった・・・

お化粧を落とし、髪をほどいて部屋着に着替えてきたかあさんがオレに聞いた。
「有希、お風呂は？もう入った？」
「ううん・・今日はいい・・・明日も休みだし・・どこにも行かないもん・・・」
「ダメよ！女の子がお風呂に入らないなんて。今日撮影だったんでしょう？　汗かいたんじゃない？」
「・・・・・」
「女の子がダラダラしないの！　ちゃんとお風呂に入らないと疲れがとれないわよ。」
かあさんはオレの手を引っ張っていく・・・オレ・・女の子じゃないのに・・・

かあさんは自分が服を脱いで裸になると、オレに言った・・・
「ほら、有希。あなたも服脱ぎなさい。」
「・・・・・」
オレがなかなか脱がないでいると、かあさんはオレのワンピースの前ボタンを外して床に降ろし、キャミソールを頭まで持ち上げて脱がす・・・そしてブラジャーの背中のホックまで外してしまった・・

・

「ほら、入るわよ。パンティーくらい自分で脱ぎなさい！」

「・・やっぱり入らなくていい・・・わたし女の子じゃないもん・・・」

「何いってるの？　あなた女の子になるんじゃなかったの？」

「・・・・・」

「それじゃ、男の子に戻る？」

「・・・戻りたくたって・・戻れないじゃない・・・」

オレはもうタマも取ってしまった・・・もう男には戻れないのだ・・・

「そんなことないわよ。有希が男の子に戻りたいのなら、戻ってもいいのよ？」

「で・・でも・・・タマが・・・」

「もちろんもう完璧な男の子には戻れないでしょうけど、女の子になったって完璧な女の子にはなれないのよ？　だったら同じことじゃない？」

「・・・！」

・・言われてみればそのとおりだけど・・・

「どう？男の子に戻る？」

オレは首を横に振った・・・そりゃぁ・・たしかに同じことかも知れないけど・・・やっぱり違う・・・だってオレは元は完璧な男の子だったのに・・・女の子になるためにタマまで取っちゃったんだ・・・それを・・いまさら不完全な男に戻って何になるというのだろう・・・

こうなったら・・もう入るしかない・・・オレも観念してパンティーを脱いで裸になった・・・

かあさんと一緒に湯舟に向かい合ってつかる・・・ウチのお風呂は二人で入るにはやっぱり小さい・・・かあさんと近すぎてドキドキする・・・こうして向かい合わせて見ると・・オレの胸とかあさんの胸はなんとなく似てる気がする・・・乳首の大きさや色は・・・だいぶ違うけど・・・オレのはかあさんみたいに黒ずんでいないし・・・飛び出てもいない・・・オレたちが赤ちゃんのころ吸ったからこんなになっちゃったのかな・・・

「有希、久しぶりに髪洗ってあげようか?」

「・・いいよ・・・自分で洗うから・・・かあさん疲れてるんでしょう?」

「遠慮しないで、かあさんが洗いたいのよ。」

かあさんは無理矢理オレを座らせて、髪にシャンプーをかけた・・・

「・・・かあさん・・酔ってるの?」

「酔ってないわよ。」

かあさんはそう言ったけど・・やっぱり少し酔ってると思う・・・

今日のかあさん少しヘンだ・・・

「それで?　佐倉さんは何でモデルを辞めるって?」

「・・・千里・・・別の大学に行くんだって・・・」

「そう、だったらそろそろ受験勉強しなきゃいけないわね。」

「そうなの?」

「だいたい2年生の二学期くらいから始めるんじゃない?　もっと早い人もいるくらいよ。」

「・・そうなんだ・・・」

オレなんか高校に入って、1年たってやっと馴れてきたと思ってたのに・・・もう大学のこと考えてるなんてすごいな・・・

「有希は?　将来のこと考えた?」

「え？」
「そろそろ有希も将来のこと考えてもいい年齢でしょう？」
「・・それは・・そうかも知れないけど・・・」
・・でもオレはまだ女の子になる自信さえ揺らいでいるのに・・・
女の子になって、その先のことなんて・・・
「・・・わたし・・まだ・・良くわからないの・・・」
オレはいったい何になりたいのだろう・・・

「有希も佐倉さんみたいに白鴻以外の大学に行きたいなら行っていいのよ。今は高卒や短大卒じゃ就職難だっていうし。」
「・・・・・」
「お金なら心配しなくていいわよ。」
「・・でも・・わたし勉強出来ないし・・・」
そもそも勉強出来なかったから、こんなことになってるんだし・・・
勉強出来てたらオレは女の子にはなってないんだ・・・たぶん・・・
「でも有希、若村先生に教えてもらって、数学はだいぶ解るようになってきたって言ってたじゃない。」
「・・・そうだけど・・それはわたしとしてはってことで・・・」
「でも、もっと勉強したら、もっと出来るようになるかも知れないじゃない？　まだ1年半もあるんだから。」
「・・そうかな・・・」
オレにはあまり自信がない・・・だって今でもけっこう勉強してこの程度なんだもん・・・

「有希はモデルになっても良いんじゃない？　けっこう人気なんでしょう？」
「・・・そんなの無理だよ・・人気って言ったって、あくまで読者モデルだからだもん・・・　かあさんは本物のモデルに会ったことあるの？　蟹原さんなんて背も高いしスタイル良くて、わたしなんかと全然ちがうんだから・・・」

「そうかな？」
「そうよ！　ものすごく素敵なんだから・・・」
オレがモデルになんてなれるハズない・・・

「だったら・・・高校卒業したら専門学校に行って、ウチのデザイン事務所に就職する？　有希ならちゃんとデザインの勉強すれば上手くなると思うわよ。」
「・・・・・」
それは・・ちょっといいかも・・・
「デザインの業界なら高卒のコも結構多いわよ。大抵はそのあと専門学校に行ってるけどね。」
「・・専門学校・・・」
でも・・・オレはまだ何をやりたいかなんて決められない・・・まだ女の子にもなり切れてないのに・・・いつかなり切れるのかどうかもわからないけど・・・

かあさんはオレの髪を洗い終るとシャンプーを流し、リンスをしてからトリートメントをつけてシャワーキャップを被せてくれた・・・髪を脱色して少し荒れてしまったから、トリートメントは重要だ・・・

「かあさんの髪、わたしに洗わせて？」
「それじゃお願いしようかな。」
なんか髪を洗いっこするなんて、母と娘って感じがする・・・息子じゃこんなこと、とても出来ない・・・こういう時は女の子っていいなと思う・・・女の子になってからは男の頃よりずっとかあさんを近く感じるようになったのが嬉しい・・・

オレって少しマザコンなのかなぁ・・・

「かあさん・・わたし千里が読者モデルやめて受験勉強するって言ったのに、どうにかして考えを変えさせようとしてた・・・でもそれってダメだよね・・・わたし千里の気持ち全然考えてなかった・・・」

「・・・・・」

「弘子が言ったの・・・親友なら応援してあげなきゃダメだって・・・わたし千里のこと応援してあげようと思う・・・」

「そうね。」

「・・・読者モデルも、千里がやめるんならわたしもやめるって言ったけど・・・もう少しやってみる・・・弘子もその方がいいって言うし・・・」

・・・それに・・・純平とのこともあるし・・・オレは純平に嫌われるなんて絶対イヤだ・・・

「有希は良い友達がいてしあわせね。」

「うん・・・」

オレには素晴しい友達がいる・・・これもオレが女の子になったからなのだ・・・オレがもし男のままだったら、弘子や千里や直美とは出会えなかった・・・

「有希は“友達は一生の財産”って言うの知ってる?」

「・・・一生の財産・・・?」

「そう、特に若いころの友達ってね、一生続くものなの。どんなに歳を取っても会うとすぐにその頃に戻れちゃうのよ。」

「へえ・・そうなの・・・」

「でもね、若い頃の友情は、ちょっとした事で簡単に壊れてしまう・・・だから大切にしなきゃね。」

「・・・うん・・・」

オレは千里たちと、ずっと親友でいたい・・・だから・・今は少しくらい淋しくても我慢しなきゃいけないと思った。

オレのつまらない我がままのせいで・・・一生の友達を無くしたら悲しすぎる・・・

第９５話　感涙　千里が思っていたこと

登校日、久しぶりに学校に来てみると、けっこう色んなクラブがもう学園祭の準備をしていた。
オレたち華道部は早めに活けても枯れてしまうから、前もってやっておくことが出来ないけど、前もってやれるクラブはもう始めてるらしい・・・せっかく夏休みなのに大変だ・・・

ウチの学校は学園祭と体育祭が1年おきにある、だから入学した年によって体育祭を2回やる人と学園祭を2回やる人がいる・・・
オレたちは体育祭を2回やる方だ・・・だから学園祭は今回きりなのだ・・・
オレはどちらかといえば文化系の人間だから学園祭が2回の方が良かったと思うけど、こればかりは仕方がない・・・

千里と会うのはあれ以来だけど・・・やっぱりちょっと気まずい・・・オレは千里が読者モデルをやめることには一応は納得したけど・・・オレに何も相談することなく決めてしまったことについては、やっぱりまだ納得しきれていない・・・

一緒に読者モデルやってたんだし・・親友だったらまっ先に相談してほしかった・・・そりゃぁオレは頼りにならないかも知れないけど・・・話を聞くくらいは出来ると思う・・・それとも親友だと思ってたのはオレだけだったのだろうか・・・？

オレたちがまだわだかまりがあると感じたのか、弘子がこっそりオレに聞いた。

「有希まだ千里のこと怒ってるの？」
「・・ううん・・・怒ってないけど・・・ただ千里の気持ちが良くわからないっていうか・・・」
「だったら直接聞いてみれば？」
「そ・・それは・・・」
それが出来れば苦労はしないんだけど・・・オレと千里は何でも話せる仲だと思ってたのに・・・まあ、オレの秘密は話せないけど・・・それ以外は女の子どうし何でも話してきたつもりだ・・・

「でも早めに話しといた方がいいわよ。そうしないと夏休み会えない間にどんどん気まずくなってしまうかもしれないよ。」
「う～ん・・・そうかなぁ・・・」
オレもそんな気がしないでもない・・・でもどうすればいいのか・・・

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

結局オレはろくに千里と話をしないまま帰ることになってしまった・・・オレってほんと意気地なしだと思う・・・

学校から駅までの道をトボトボ歩いていると、後ろからオレを呼ぶ声がした・・・見ると千里が走ってくる！
「・・有希・・一緒に帰ろう？」
「・・う・・うん・・・」
しばらく並んで歩きながら、何かしゃべろうと思ったけど、なかなか言葉が出てこなかった・・・

「有希、今日ヒマ？」
「うん・・べつに用事はないけど・・・」
「だったら、ちょっと寄ってかない？」
「・・うん・・・」

オレたちは駅前のミスドに入った・・・オレたちが寄るところといったらマックかミスドくらいのものだ。
「有希、まだ怒ってる？」
「・・怒ってないよ・・・」
「やっぱり怒ってるのね・・・」
「怒ってないったら！・・ただ・・・」
「ただ・・・？」

「・・・・」
「言ってよ有希・・・何でも聞くから。」
「・・・わたしたちって・・親友じゃないの・・・？」
「もちろん親友よ！」
「だったら・・何で大事なこと相談してくれないの？！」
「だって・・・有希に読者モデルやめること相談したら反対するでしょう？」
「・・そ・・それは・・・」
あたりまえだ・・・反対するに決まってる・・・だってオレは千里のために読者モデルになったようなモノなんだから・・・

「わたし、有希に泣いて反対されたら、それでもやめるって言う自信ないから・・・」
「！・・・泣かないよ・・・泣くわけないじゃない・・・」
「そうかなぁ？　有希ってすぐ泣いちゃうじゃない。」
・・・たしかに・・それは否定できないけど・・・オレってどんだけ泣き虫と思われてんだよ・・・

「・・・読者モデル・・千里がやめたいからやめるの？・・・それとも・・お父さんがやめるように言ったからやめるの・・・？」
「・・どっちもかな・・・」
「どっちもって・・それじゃ・・千里もやめたいってこと？」
「やめたいってわけでもないけど、勉強に専念したいから。」
「そんな・・・千里は良い大学に行って将来何になりたいの？・・・大学に行かなきゃなれないモノなの？」
「・・・何になりたいって・・・特にはないんだけど・・・」
「ないの？　だったら何でよその大学なんか・・・」

「・・そっか、有希の家はご両親が会社員じゃないものね。」
「？・・それがなにか関係あるの・・・？」
「有希のご両親は良い会社に入らなきゃダメなんて言わないでしょう？」
「・・・うん・・」
「それはご両親が会社員じゃないからよ。親が会社員だとわたしもどこかの会社に入るもんだと思い込んでるし、わたし自身もそう思ってる・・・わたしは有希みたいにキレイでも可愛くもないし、特に何か上手い特技もないから・・・どこかの会社に勤めなきゃいけないの。」
「そ・・そんなことないよ！　千里はわたしよりキレイだし、わたしよりずっと可愛いよ！」
「ふふ・・ありがとう、そんなこと言ってくれるの有希だけよ。でもね、有希は読者の人気1位でしょう？わたしはずっと下の方なのよ。」
「・・そ・・それは・・・それはみんなの見る目がないのよ！　わたし知ってるもん！・・・千里はすっごく可愛いくて良いコだってぇ・・・・ううぅ・・・」

「ほら有希、また泣いた！」
「・・ご・・ごめん・・・」
・・でもオレ・・・悲しいんだもん・・・人ってどこかの会社に入るために大学に行くものなの・・・？　何かやりたいことをやるもんじゃないの・・・？　それともオレの考えが甘いのかな・・・でも・・かあさんはオレがやりたいようにしなさいって言ってくれるのに・・・他の家ではそうじゃないのかな・・・
「有希、わかって欲しいの。　みんなが有希みたいに完璧じゃないのよ。」
「・・完璧？　わたしが？・・・そんなのウソだよ！　わたし全然完璧なんかじゃない！」
「あ、ごめん・・・完璧ってのは言い過ぎたかも・・結構ドジなところもあるし、こんなに泣き虫だもんね。」
そう言って千里は可笑しそうに笑った・・・

「有希・・わたしね、読者モデルの審査・・受けるつもりじゃなかったって言ったでしょう？」
「・・うん・・・」
「でも何で受けることにしたと思う？」
「それは・・・わたしが受けた方が良いって言ったからだって・・このまえ言ったじゃない・・・わたしが無理に受けさせたって思ってるんでしょう・・・？」
「それは違うよ・・わたしもあの時うまく言えなかったんだけど、書類審査でわたしだけ通って有希が落ちるはずないって思ってた・・・だから有希が付いて来てくれるっていうから、編集部の人も有希を見たら放っておかないと思ったのよ。」
「・・・・・」
「実際に有希もすぐ受けることになったじゃない。わたし有希が読者モデルに受かること祈ってたの・・・まさかわたしまで受かるとは思ってなかったけど。」

・・・そんな・・・オレはあの時、千里を受からせてあげようと必死だったのに・・・千里はオレを受からせようとしてたなんて・・・そんなの全然知らなかった・・・（４２話参照）

「だから有希は読者モデル続けて？」

「・・でも・・・わたしがＪＩＮＯＮに載ってるの見て・・・辛くならない？」

「そんなことないわよ！　わたし有希が雑誌に載ってるの見るとすっごく嬉しいのよ。」

「・・ほ・・ほんと・・？」

オレだったら・・自分がやめたのに、友達が続けてるの見ると辛いと思うんだけど・・・それを嬉しいなんて・・・千里ってどんだけ良いコなんだよ・・・

「わかった・・いつまでやれるかはわからないけど・・・続けてみる・・・」

「大丈夫よ！　有希だったら読者モデルじゃなくて本当のモデルにだってなれるわよ。」

「・・・・！」

・・それは・・いくら何でもオレのこと買いかぶりすぎだ・・・

「・・それは無理・・・わたしそんなにキレイじゃないもん・・・」

「そんなことないわよ。　有希はキレイで可愛いよ。　わたしが知ってる女の子の中で一番素敵なんだから！　もっと自分に自信持って？」

・・・自信なんて・・持てないよ・・・オレ・・男なんだから・・・

・・・でも・・千里の本当の気持ちを聞けたようで少しホッとした・・・オレは千里のこと何でもわかってるつもりでいたのに・・全然わかってなかった気がする・・・千里はオレが思ってたより・・もっと良いコだった・・・

「・・・じゃぁ・・・これまで通り・・・千里のこと親友だと思っていいの・・・？」

「もちろんよ！だってわたしたち親友じゃない！」

「・・・うぅっ・・・」

・・・また涙があふれてきた・・・嬉しくて涙が止まらない・・・

　やっぱりオレって泣き虫だ・・・

ーーーーーーーーーーーーーーー

ーーーーーーーーーーーーーーー

ーーーーーーーーーー

ＡＴからひとこと

この『オレは女子高生』はあくまで有希が理解している世界で成立っています。しかも有希は頻繁に勝手な理解や、思い違いをしてしまいます。だから有希以外の登場人物の本音は有希との会話から想像するしかありません。

今回、千里の気持ちを書くべきか迷ったのですが、千里がこれまでどういう思いで行動していたのか書いておくことにしました。有希も理解できないみたいだったし、このまま先に行くのは可哀想だったので・・・

第９６話　彼女　オレと“春日ユウ”

「・・ご・・ごめん！・・待った？」
「ううん、さっき来たとこ。もう有希とも長いからね、いっつも遅れるのわかってるから少し遅めに来ることにしてるの。」
「・・・・・」
オレ・・そんなふうに思われてるんだ・・・・
「有希ったら、今日はずいぶんおめかししてるじゃない！　そんなにおめかししてるから遅れるのよ。」
「・・だ・・だって・・・純平はわたしのこと“春日ユウ”だと思ってるんだもん・・・“春日ユウ”がヘンな恰好なんて出来ないでしょ？」
今日のオレは読者モデルの“春日ユウ”・・・長谷川と友達の“戸田有希”じゃないのだ・・・どこがどう違うってワケじゃないけど・・・オレの中では・・なんとなく違う・・・
「へ～　有希もそういうこと気にするんだぁ！」
「そ・・そりゃ気にするよ！　純平に嫌われたくないもん・・・」
「・・・・・」

でも・・やっぱり長谷川と一緒のときに“春日ユウ”でいるのは・・・ちょっと恥ずかしいな・・・

だって“春日ユウ”は普段のオレよりファッショナブルだし・・・可愛いのだって、少し色っぽいのだって、いろんな服を着こなしちゃうのだ・・・だからこんな・・さわやか少女な感じの、スソがフリルになってるミニスカートだって・・・撮影ならなんでもないんだけど・・こんな恰好で長谷川といるのはさすがに気まずい・・・太いベルトも今風の女の子らしいから・・・ジーンズの長谷川といると、オレの恰好がよけい引き立っちゃうし・・・

「あんたよっぽど純平くんが好きなのね。」
「そ・・そんなんじゃないけど・・・」
「だって、すっかり恋する乙女じゃない。」
「ま・・まさかぁ・・・」
オレが？・・・恋する乙女・・・？

「ち・・違うよ！　純平とはタダのお友達だし・・・それに・・まだ一回しか会ってないし・・・」
「いいからいいから、そんなに恥ずかしがらないで！　好きな男性に嫌われたくないからオシャレするなんて、有希も女の子らしくなってきたなって思っただけよ。」

・・オレが女の子らしいなんて・・・でも今のオレには否定することも出来ない・・・だってオレは女の子らしくならなきゃいけないんだし・・・純平は“春日ユウ”のオレが好きなんだもん・・・“春日ユウ”はオレよりずっと女らしい・・と思う・・・

　やっぱり今日のオレは“春日ユウ”になり切れてない・・・それでもオレは“春日ユウ”でいなければならない・・・だって純平が好きなのはオレじゃなくて読者モデルの“春日ユウ”なんだ・・・

―――――――――――――――
―――――――――――――――
―――――――――

　電車で大牟田に着いて、バスで三井グリーンランドへ・・・昨年来た時と同じ道のりなのに・・なんか違って感じる・・・大きな観覧車が見えて来たらもうすぐだ。

純平に会えるのは嬉しいハズなのに、バスが近づいてもうすぐ会えるのだと思うとだんだん緊張してきた・・・胸がドキドキする・・・出来ることなら逃げ出したい気分だ・・・

前回は長谷川に無理やり連れてこられたけど、今回はオレが長谷川を連れて行く立場だ・・・楽屋に連れて行ってあげるなんて、あんな約束しなきゃ良かった・・・オレだけでもドキドキするのに・・・長谷川のことまで考えてる余裕なんてない・・・

オレっていつもそうだ・・・簡単に約束しておいて後で後悔する・・・長谷川がいるところで・・オレ・・どんな顔して純平と会えばいいんだろう・・・

そんなオレの気持ちなどお構いなしに、バスは三井グリーンランドに着いてしまった・・・バスを降りる長谷川は嬉しそうだ・・・オレの気持ちも知らずに・・・

昨日、純平へのメールで、楽屋へはショーが終ってから行くと言っておいた。始まる前じゃ忙しいだろうし・・・だけど今回は日帰りしなきゃいけないらしく、あまり時間はなさそうだった・・・ドラマの撮影とかあるから大変なのだろう・・・残念だけど仕方がない・・・

今年のショーは2回分の仮面レンジャーが出るから、観客も去年よりかなり多いみたいだ。オレは仮面レンジャーにはそんなに興味がないから何てことはないけど、仮面レンジャーファンの長谷川はかなり興奮しているみたいだ・・・

「ねえ長谷川さん、もっと前で見て来たら?」

「有希も行こう！」
「わ・・わたしはいいわよ。ここで見てるから・・・」
だって前の方で見ていて純平と目が合ったりしたら、オレどうしていいかわからない・・・
「そんなこと言わないで行こうよ！」
「いいから、長谷川さんだけ行っておいでって。」
「そう？・・じゃぁ・・行ってくる！」

前の方に走っていく長谷川を見てると、なんだか普段より子供っぽく感じる・・・よっぽどこういうのが好きなんだなぁ・・・オレには良くわからないや・・・オレの目的は純平だけだもん・・・

「みんな～！こんにちは～！！」
舞台に司会の女の人が出て来た・・・こういうところはいかにも子供向けって感じだ・・・
お姉さんがひとしきり子供たちを楽しませたところで悪役軍団が登場！下っ端がお姉さんを捕まえてしまった。お姉さんは大きな悲鳴をあげて、なかなか迫真の演技だ。
「ぐわっはっは！この会場は我々が占拠した！おまえらの命は我々のものだ！」
そう言って悪役の親玉は手で大きく会場全体を指し示した。
「助けて～！　みんな～仮面レンジャーを呼んで！」
お姉さんの声に会場の子供たちが一斉に叫ぶ・・・
「仮面レンジャー～！仮面レンジャー～！！仮面レンジャー～！！！」
「ぐわっはっは！いくら叫んでも無駄だ！仮面レンジャーなど来るものか！！」
一瞬、静まり返る会場・・・

「待てぃ！ドクロ男爵！」
聞き覚えのある声と共に飛び出して来たのは純平だった！後ろから他のレンジャーたちも駆け付けてくる。
“キャ～！！”
ファンの女の子たちから純平に声援が・・・
・・結構ファンがいるんだ・・・でもそんな人気者の純平がオレの友達だなんて・・・考えただけで嬉しくなってくる・・・この大勢の人の中でも純平の友達なんてたぶんいないだろうから・・・ちょっと優越感さえ感じちゃう！

オレが久しぶりに実際に見た純平に“ポ～ッ”となってる間に、舞台の上ではもう変身して仮面レンジャーになっていた。もちろん中の人は別人だ・・・

“ブルブルッブルブルッ”
その時いきなり携帯が震えた・・・慌ててみて見ると純平からのメールだ！
「・・楽屋に戻ったよ・・・いまから来ない？・・・みんなに紹介するよ・・・」
え！・・・どうしよう・・・長谷川は前の方に行ったまま、どこにいるかわからないし・・・オレは急いで返信した・・・
「・・ごめんなさい・・・友達がどこにいるのかわからないの・・・」
するとまたすぐにメールが返ってきた・・・
「・・ユウちゃんだけおいでよ・・・友達はあとで連れて来ればいい・・・」

それもそうだ・・・オレもその方が都合がいい・・・だって久しぶりに純平と会うから緊張してるのに、長谷川まで一緒じゃよけい緊張しそうだ・・・

「・・わかった・・・これから行くね・・・」
メールを送ると、すぐに返ってきた。
「・・警備員には伝えておくから・・・名前言えば通してくれるよ・・・」
オレは楽屋へと急いだ・・・なんだか胸が高鳴る・・・

「あ・・あの・・わたし春日ユウです・・・」
名前を言うと警備員さんはすんなり楽屋に入れてくれた・・・
「久しぶり、ユウちゃん！」
純平の笑顔・・・爽やかすぎる・・・！
「あ・・ひ・・久しぶりです・・純平さん・・・あ・・それと・・・みなさん・・・」
オレはみんなに向ってペコリとお辞儀をした。

すると純平がオレの肩を抱いて言った・・・
「鉄平は知ってるだろうけど、この人は九州ＪＩＮＯＮでモデルやってる春日ユウちゃん、俺の彼女だよ！」
・・え？　カ・・カノジョ？！・・・オレが・・・？
「あ、まだ会うのは2度目なのに図々しいかな？」
「・・う・・ううん・・・そんなこと・・ないけど・・・」
・・けど・・・本当に純平はオレのこと・・・彼女だと思ってるんだろうか・・・？

「そうだ！ユウちゃんにプレゼントがあるんだよ。」
そう言って純平はバッグの中から大きな封筒を取り出した・・・
「ユウちゃん山上くんのファンなんだろう？　今ドラマで一緒だから山ペーのサインもらって来たよ。」
「え？」
封筒から出してみると、色紙に山上くんのサインが書いてあり“ユウちゃんへ”とオレの名前まで書いてある！

「あ・・ありがとう！」

・・でも・・純平どうしてオレが山上くんのファンだって知ってるんだろう・・・オレは純平が気にするといけないから言わなかったのに・・・誰から聞いたんだろう・・・でも・・オレのこと彼女だと思ってるんなら・・自分の彼女がドラマで共演してる人のファンなんてイヤじゃないのかなぁ・・・で・・でも・・嬉しい・・・山上くんのサインをもらったことよりも、純平がオレのことを気にしてくれてたのが嬉しかった・・・

あっ！そういえば・・・オレは自分がオシャレすることばかり気になって何も持って来なかった・・・オレも純平になにかプレゼント持ってくれば良かった・・・オレってなんて気がきかないんだろう・・・女の子が気がきかないなんて最低だ・・・

「ご・・ごめん純平くん・・・わたしプレゼント何も持ってこなかった・・・」

「何いってんの？　ユウちゃんが来てくれただけで十分プレゼントだよ！」

ひぇ～～～！！　な・・なんてこと言ってくれるんだよぉ・・・女の子がそんなこと言われたら・・・どんな気持ちになるか判って言ってるの・・・？！

“ヒューヒュー！”

鉄平くんをはじめレンジャーのみんながオレたちをはやしたてるから、オレはたぶん顔が真っ赤になってると思う・・・心臓バクバクで頭真っ白だ・・・！　オレ・・どうしたらいいのかわからないよ・・・・

「あ、ユウちゃんごめん。そろそろ出番だ！」

ショーが終って握手会の時間だ・・・もうそんなに時間経ってたのか・・・オレも楽屋を出て舞台の方へ戻っていった。

なんだか頭がクラクラしてる・・・純平ったら・・・オレのこと彼女だなんて・・・本気で言ったんだろうか・・・そんなこと言われてオレなんて言えばいいのかわからなかった・・・オレ・・彼女になってもいいのかな・・・

！・・・オレなに考えてんだろう・・・そんなの良いワケない・・・だってオレ・・・男だし・・・男が彼女になんてなれるワケない！

「いた！有希どこにいたの？　探したじゃない！」
「・・あ・・ごめん・・・」
「有希も握手会行くんでしょう？」
「・・あ・・わたしはいいよ・・・行かない・・・」
だってオレが握手に行くなんて・・・やっぱり他人行儀でヘンだと思う・・・
「・・だって・・後で楽屋でしてもらえばいいじゃない・・握手・・・」
「それはそうだけど・・握手会はまた別よ！」
「そうなの？　じゃぁ長谷川さんだけ行っておいでよ。わたしのことは気にしないでいいからさ！」
オレはそう言って背中を押した。
「・・・うん・・じゃぁ、行ってくる！」
ふふっ・・・今日の長谷川は素直で良いなぁ・・・

前にここに来た時は長谷川に振り回されたけど、今回はオレの方が主導権を握っているから気持ちが良い。なんていっても今日の長谷川はオレには逆らえないのだ！　もっともオレは長谷川みたいにイジワルじゃないから、何かあったからといって長谷川を楽屋に連れて行かないなんてことはしないけど。

握手会はまだ終らない・・・今回は純平がやっている今放送中の仮面レンジャーと前の仮面レンジャーの2作品のレンジャーが来てるから、握手会も時間がかかっているのだろう・・・早く終らないかなぁ・・・純平との時間が無くなっちゃうよ・・・

今日は純平はすぐに帰らなきゃいけないのに・・・ドラマの撮影もあるしすごく忙しいらしくて、今日の夜の飛行機に乗らなきゃいけないのだ・・・

とはいえ、もし純平が長い時間いれたとしても、オレはどうすればいいかわからないけど・・・でも、あまんまり時間がないのも悲しい・・・

長谷川は戻って来たけど、握手会はまだ続いてる・・・もう夕方になってきた・・・

「長いね・・これじゃ楽屋に行ってもあんまり時間が無いんじゃないかな・・・ごめんね長谷川さん・・・」

「べつに有希のせいじゃないじゃない。みんな人気があるから仕方ないわよ・・・」

でも長谷川はそう言いながらも、けっこうイライラしてるみたいだ・・・そりゃそうだよなぁ・・・役者さんみんなと楽屋で会える機会なんて、そうは無いもん・・・

「あ！　もうすぐ終るみたいよ！」

見ると壇上から降りていくお客さんの後には、新たに上がってくるお客さんはいないようだ・・・

みんながお辞儀をして手を振りながら舞台のソデに降りていく・・・

「有希！行こうよ！」

「ま・・待ってよ長谷川さん・・・純平からメールが来るから・・・服とか着替えなきゃいけないでしょう?」
「そうか・・そうよね・・・」
長谷川さんったら、ソワソワしちゃって・・・

２０分ほど待っただろうか・・・だいぶ日も傾いてきたころやっと純平からメールが来た。
オレたちが急いで楽屋に行くと、みんな着替えて待っていてくれた。
さっきは隊員の恰好だったから普段着だと雰囲気ちがう・・・オレは普段着のみんなの方がいいな・・・長谷川は隊員のままの方が良かったかも知れないけど。

長谷川はずいぶん舞い上がってるみたいだ・・・アワアワしちゃって何言ってるのか良くわからない・・・こんな長谷川初めてだ・・・
「長谷川さん、ちょっとユウちゃん借りるよ。」
純平がそう言ってキャップを目深にかぶってから、オレの手を引っ張っていく・・・
「ち・・ちょっと・・・どこ行くの純平くん・・・!」
楽屋から外に出ると純平が言った。
「走るよ!」
「えっ、え?!」
純平がオレの手をとって走りだす・・・

「ね・・ねえ・・何処に行くの・・?　時間ないんじゃないの・・?」
・・そ・・そんなに早く走らないでよ・・・オレ・・かかとが高いサンダルはいてるのに・・・純平が走って行く方向にあるのは・・・か・・観覧車?!・・・夕焼けの空にそびえている・・・

この観覧車って・・・まえに長谷川と乗った・・・

係りのおじさんがゴンドラの扉を開けると、先に乗り込んだ純平は、オレの手を引っ張るようにゴンドラの中へ引き入れた・・・

おじさんが扉を閉める・・・ゴンドラはゆっくりと動いていく・・・

ゴンドラの中には・・・オレと純平ふたりきりだ・・・

「はぁ・・はぁ・・はぁ・・・」

まだ息があがってる・・・純平ったらあんなに走るんだもん・・・

「ごめんねユウちゃん、きつかった?」

「・・う・・うん・・ちょっと・・・でも・・平気・・・」

オレはどうにか息をととのえた・・・

「でも、なんとかファンのみんなにはバレずに来れたみたいだね。もうだいぶ暗くなってるからバレないだろうと思ってたけど。」

そうか・・・それで走ったのか・・・そういえばまだファンの人たちが残ってるかも知れないもんなぁ・・・

「さっきはごめんね。ユウちゃんのこと、みんなに彼女だって紹介して・・・迷惑だった?」

「・・ううん・・・ただ・・ビックリしたけど・・・」

そんなこと言うから・・またドキドキしてきた・・・

「ユウちゃん、肩抱いていい?」

「・・・う・・うん・・・」

ヒ〜・・・純平の腕がオレの肩にまわってくる・・・・

「・・ねえ・・・純平くん・・わたしのこと・・・ほんとに・・彼女だと思ってるの・・・?」

「ユウちゃんが許してくれるなら。」

・・・オレは・・・

「・・わたし・・まだ良くわからない・・・」

「そうか・・だったらもう少し友達のままいよう？　それなら良いだろう？」
「・・う・・うん・・・」
・・オレは思わずはにかんでしまった・・・オレを思う純平の心づかいがうれしかった・・・
「・・純平くん・・・ひとつ聞いてもいい・・？」
「なに？」
「・・純平くんは・・わたしがもし・・・読者モデルをやめちゃったら・・・どうする・・？」
「え？　ユウちゃんモデルやめるつもりなの？」
「ううん！　そうじゃないんだけど・・・もし、わたしが読者モデルやめたら・・・純平くん・・わたしのこと嫌いになっちゃうかなって・・・」
「ハハハ・・・そんな訳ないだろう！　俺はユウちゃんがモデルだからじゃなく、純粋で素敵なコだから好きなんだよ。」
そう言って純平はオレの肩に置いた手でギュッと抱き寄せた・・・
（あっ・・・）
オレは純平の言葉と、抱き寄せられたことで、これまでの不安が一気に吹っ飛んでしまった・・・心臓が高鳴って・・・耳の奥がドクドクいって・・・頭の中がジンジン痺れていく・・・
「・・純平くん・・ひとつ・・お願いしていい・・？」
「なに？」
「・・わたしね・・本当の名前は“春日ユウ”じゃないの・・・戸田・・有希っていうの・・・」
「ユウキちゃん？」
「・・男の子みたいな名前でしょう・・？　ヘン・・・？」
「ちっともヘンじゃないよ！　ユウキちゃんか・・・いい名前じゃない。」

「！」

・・あぁ・・・純平がオレの名前を呼んでる・・・今・・オレは“戸田有希”として純平のとなりにいるんだ・・・それがこんなに嬉しいことだなんて・・・！

「これからは・・・ふたりの時は有希って呼んで欲しい・・・あっ！純平くんがイヤならユウのままでもいいけど・・・」

「もちろんイヤじゃないよ・・・」

いつの間にかゴンドラは頂上に近づいていた・・・

「・・・？」

オレの肩を抱いた純平の手が、かすかに震えている・・・？　ま・・まさか・・・！

次の瞬間、純平はオレをさらに抱き寄せると、もう片方の手をオレの後頭部にまわした・・・こ・・これって・・・・！！

「ユウキ・・・」

名前を呼ばれると、オレは思わず目を閉じていた・・・さらに抱き寄せられていく・・・

・・あっ・・・オレの唇に純平の唇がふれる・・・やわらかい・・・オレはどうしたらいいのか判らず、ただ硬直していた・・・身体が震える・・・

（・・あぁ・・純平・・・）

頭の中は真っ白で、何も考えられなかった・・・身体の感覚もなくなっていく・・・ただかさなり合った唇だけがリアルに温かかった・・・まるで・・オレの身体がなくなって・・唇だけになってしまったみたいだ・・・

ふたりの唇が離れた時・・・もうゴンドラは終りに近づいていた・・・

オレは純平に抱かれたまま・・・この時がもう少し続いてくれたらと願っていた・・・オレ・・こんなに幸せな気持ちになっていいの・・・？

せめて今だけは・・もう少しこのままでいたい・・・・

・・・もしオレが女の子だったら・・・純平の彼女として・・・この幸せがずっと続くのだろうか・・・

今ほど自分が本当の女の子だったらと思ったことはない・・・オレ・・なんで男なんだろう・・・女だったら良かったのに・・・！

―――――――――――――――

―――――――――――――――

――――――――――

ATから

やっとここまで来ました・・・感慨深いです・・・

あの長谷川と観覧車に乗った時からほぼ1年かかって、やっとあの時のフリが生きました（３６話、３７話参照）話を書いてからも１年かかっています・・・長過ぎです（笑）

フリと書きましたが、実際にはこの話のフリとして、あのキスの回を書いたワケではありませんでした。ただ予感のようなものはありましたが・・・

1年前は、ほとんど罰ゲームのように化粧や可愛い服を強要?されていた有希が、自ら純平のためにオシャレをするようになるなんて、作者としても嬉しい限りです。
久ぶりに書いててドキドキしました（笑）このドキドキがみなさまにも伝わっていれば嬉しいです。

まだ夏休みは続きますが、このさき有希がどう成長するのか楽しみです。

物語りは夏ですが、実世界では冬。これからさらに寒くなる時期なので、みなさまもインフルエンザなどに気を付けて、年末年始を健康にお過ごしください。

あっ、ちなみに『オレ女』の世界では新型インフルエンザは出現していません（笑）薬はお兄ちゃんが研究中です！

第９７話　余韻　いつもと違うオレ

オレと純平が観覧車の長くて短い１５分が終わり楽屋に戻ってくると、もうお別れの時になっていた・・・純平は忙しい中、無理してオレと二人きりの時間を作ってくれたのかも知れない・・・オレはもう少し純平といたかったが、そんな我がままは言えなかった・・・最後に長谷川のために、みんなと写真をうつしてもらった・・・

帰りのバスの中でもオレは何も話せなかった・・・長谷川・・オレたちがいない間、うまくやったのだろうか・・・？　結局ただ楽屋に連れて行っただけで、ロクに紹介も出来なかったけど・・・もっともみんなの事はオレより長谷川の方が詳しいハズだけど・・・

電車に乗ると、やっと長谷川が口を開いた。
「有希、さっきの写真ちゃんと撮れてた？」
「・・うん・・・」
オレはみんなと写した画像をデジカメに表示して見せた・・・この画像の前には・・オレと純平のふたりで撮ってもらった写真も入っている・・・長谷川は知らないけど・・・
「有希、今日はありがとうね。レンジャーのみんなと写真撮れるなんて夢みたいよ。」
「そう・・だったら良かった。」
オレは長谷川が喜んでくれていたと知ってホッとした・・・ほったらかしにしちゃって、怒ってたらどうしようと思ってたから・・・
「みんな色々話してくれたし・・・こんな体験出来たのも有希のおかげよ。」
「ううん・・わたしは何も・・・純平のおかげよ・・・」

「有希の方はどうだったの？」
「・・えっ・・・な・・なにが・・・？」
「純平くんと観覧車に乗ったんでしょう？」
「え？！　な・・なんで知ってるの？」
「みんな知ってたわよ。純平くんが有希を連れて戻ってくるまで、みんな忙しいなか待っててくれたんだから。」
「・・そうだったの・・・」
やっぱり・・純平、わざわざオレとの時間を作ってくれたんだ・・・

「な・・なにもないよ・・・ただおしゃべりしただけ・・・」
「そうなの・・・まあそうでしょうね・・有希がそんなに上手くやれるワケないもんね。」
「そ・・そうよ・・・」
長谷川も舞い上がってるから、なんとか信じたみたいだ・・・いつもだったらもっと疑り深いし、根掘り葉掘り聞かれただろう・・・
今日あったことはオレと純平だけの秘密だ・・・誰にも言えないし・・・言いたくない・・・・

・・もししゃべってしまうと・・せっかくの純平との時間が・・夢のように消えてしまいそうな気がする・・・・

もうあれから1時間くらい経ったのに・・・まだ全身に純平の感覚が残ってる・・・純平が抱いた肩・・・純平がふれた頭・・・そして・・・唇・・・今でもまだオレの唇に・・純平の唇が触れてるみたいに感じる・・・前に・・兄さんにキスしてもらったけど（52話参照）・・・あの時はこんなことはなかったと思う・・・これが・・・彼とのキスというものなのだろうか・・・・

・・・！・・オレったら・・・純平のこと“彼”なんて・・・純

平とはまだ友達でいようって約束したばかりなのに・・・これも純平がオレのこと“彼女”なんて言って・・キスなんかするからだ・・・だから・・オレ・・こんなヘンな気持ちになってるんだ・・・

だって・・・あんなことされたら・・・誰だって恋人みたいな気持ちになってしまうに決まってる・・・！

「・・有希だいじょうぶ？　顔真っ赤よ？」

「え？！・・そう・・・？」

オレは思わず顔をこすってしまい、慌てて手を止めた・・・あぶないあぶない・・・お化粧がくずれるところだった・・・女の子って気が抜けないのだ・・・・

お化粧がオレの顔色も隠してくれればいいのに・・・オレってすぐ気持ちが顔に出てしまうみたいだ・・・

吹き出た汗をお化粧が取れないように注意しながらハンカチで押さえる・・・

「・・き・・きょう・・暑いね・・・」

「今は冷房が入ってるからそうでもないんじゃない？」

「・・でも・・暑いよ・・・」

「それは有希の体が火照ってるからじゃない？」

「・・そ・・そうかな・・・」

ほ・・火照るって・・・オレ火照ってるの・・・？

「なんだか有希が中学のころ男だったなんて、今じゃ信じられないね。」

「・・そう・・・？」

「わたし、最近は有希が男だったころの顔なんか思い出せない・・・」

・・それは・・オレだってそうだ・・・昔の自分の顔なんて良く憶えてない・・・

はじめて長谷川のことを意識したのは高校の入学試験の日（2話参照）・・・たぶん長谷川がオレのことを意識したのもあの時だと思う・・・あの頃はまだ確かにオレは男の子だった・・・だって女子校だけど共学になるからってことで、男の子として登校するつもりだったんだから・・・

・・それが今じゃ女の子の恰好して・・・身体も女の子みたいになって・・まだオチンチンは付いてるけど・・・男の子に“彼女”なんて言われて・・勝手に恋人気分になってる・・・オレって頭オカシイのかな・・・

・・それともオレ・・・頭まで女の子になってきてるんだろうか・・・

・・オレの身体は昔よりずっと女性ホルモンが多い・・・タマを取ってからは女性ホルモンを打つ回数も、量も少なくなった・・・だから女性ホルモンは少なくなったけど、タマがなくなって男性ホルモンも少なくなってるから・・・決して女性ホルモンの影響が少なくなったワケではない・・・血液検査の結果を見ながらホルモンを打ってるから・・・オレの身体には女の子に必要なだけの女性ホルモンがあるのだ・・・

・・そういえば去年兄さんが言っていた・・・女性ホルモンのせいで好みや性格に影響が出てくるかも知れないって・・・（51話参照）

人間はネズミみたいに簡単じゃなくて、過去の自分を憶えてるし、自我があるからホルモンの影響は出にくいらしい・・・でも・・オレは過去の自分をだんだん忘れてきているってことは・・・それだけホルモンの影響が出やすいってことではないだろうか・・・？

オレはいつのまにか心も・・・脳さえも女の子になってきているのだろうか・・・？

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー
ー　ー
ー

駅で長谷川と別れ、家に帰って夕食をたべて・・・お風呂に入ったあともまだオレはどこか“ポーッ・・・”としたままだった・・・

お風呂から上がって、自分の部屋で長い髪を乾かす・・・こうしてあらためて見るとオレの髪もずいぶん長くなったものだ・・・少し前まではＪＩＮＯＮの編集長の佐々木さんに伸ばすようにいわれていたけど、今では腰から１０ｃｍくらい上で切りそろえている・・・これくらいがオレに合った長さみたいだ・・・

髪が長いこともオレを女らしくしているのかも知れない・・・三つ編みをしている時はそうでもないけど、下ろしているときは髪の毛がバラつかないように動いていると、どうしても女らしい動きになってしまう・・・おかげでオレはいつのまにかそういう動きが身に付いてしまったみたいだ・・・

髪が乾いたから寝ようと思ったけど・・なんだか眠れそうにない・・・まだ身体が熱い感じが続いている・・・お風呂に入ったからだと思いたかったが、時間が経ってもなかなか冷めなかった・・・

純平はもう寝ただろうか・・・さっきお互いに“おやすみメール”を送ったから・・・きっともう眠ったと思う・・・明日はまた朝からドラマの撮影だって言ってたし・・・疲れてないかな・・・“頑張って”だけじゃなくて“身体に気をつけて”って書けば良かったかなぁ・・・その方が・・女の子らしく思われた気がする・・・

・・今日は自分では可愛い恰好をしたつもりだけど・・・もっといろんなオレを見せたかった・・・こんなに離れてなければ・・もっと逢って・・いろんな服を着たオレを見せられるのに・・・！

クローゼットを開けると、女の子になってから買った服が並んでいる・・・最初のころはかあさんが買って来てくれてたけど・・今は自分が着たい服を選んで買っている・・・オレは女の子っぽい可愛い感じの服が大好きだ・・・

・・今日の服も素敵な服だったけど・・もしオレが“春日ユウ”ではなく“戸田有希”だったら・・・もっと違った服を選んでいたと思う・・・オレが読者モデルじゃなくて・・タダの高校生の女の子だったら・・・もっとふわふわの可愛い服を着て・・純平のまえに立ってたと思う・・・

オレは結局、夜がふけるまで、クローゼットから服を出して着てはまた脱いで、いろんな服を着て楽しんだ・・・純平がその服を着たオレを見て、どう思うか想像しながら・・・・

今日のオレは・・やっぱりどこかヘンだ・・・・・

第９８話　遺跡　八女古墳群

オレはベッドに寝転んでＪＩＮＯＮを見ていた・・・まだ8月なのに、もう雑誌では今年の秋の流行もやっている・・・秋物特集にはオレも載っていて・・・自分が雑誌に載ってるなんて、なんかヘンな感じがして今でもまだ慣れない・・・

今年の秋冬はモコモコが流行るみたいだ・・・エリとかソデとか・・・あとブーツとかにもモコモコした暖かいファーを付けるのだ・・・撮影で着てみたけどなかなか良い感じだった・・・オレはこういうのも可愛くて好き・・だってモコモコなんて女の子しか出来ないファッションだもん・・・

こういう流行のモノをいち早く着られるのは読者モデルになって良かったと思う点だ。特にオレは・・女の子の流行には疎いから、まえもって着てみられるのはありがたいのだ。おかげでオレはクラスでもファッションリーダーみたいに思われてるフシがある・・・たぶんこれも読者モデルなんかやってるせいだと思うけど・・さすがにそこまで思われるのはオレには荷が重い・・・それでもなんとかアドバイスくらいは出来ているのはスゴイことだと思う・・・なんせオレはホントは男なんだから・・・男のころはファッションなんて全然興味なかったのに、今では女の子の読者モデルなんて・・・いったいどうなってんだろう・・・・

・・・ここ数日オレは何もする気がおきずゴロゴロしてる・・・純平と逢ったあと、撮影でも入っていれば気分も変わったと思うんだけど・・・なんかモヤモヤしたまま過ごしている・・・こんなことじゃいけないとは思うけど・・・どうにもならないのだ・・・な

んか身体が熱っぽいような・・・もしかして夏カゼかと思ったけど、計ってみても熱は無かった。

今年の夏休みは千里は塾に行ってるし、レナは実家でアルバイトしてるから・・・ＪＩＮＯＮの撮影とかない日は退屈だ・・・長谷川はヒマかも知れないけど、長谷川とは女の子どうしとして遊ぶ気にはとてもなれないし・・・長谷川の前では、オレは今でも“元男”の女の子だから・・・

そんなことを考えていると、突然オレの携帯が鳴った・・・かけてきたのは？・・・弘子だ！

「有希？」
「うん、どうしたの弘子・・・」
「有希、明日なにか用事ある？」
「ううん・・べつにないけど・・・」
「そう、それじゃ一緒に遺跡観にいかない？」
「い・・いせき・・・？」
いせきって・・・あの昔のやつだろうか・・・？・・・吉野ヶ里とか・・・？
「あ、有希はそういうの全然興味なかったっけ？」
「・・う・・うん・・あんまり・・興味はないけど・・・」
「そっか・・有希は・・アレだから興味あるかと思ったんだけど・・・」
アレ・・・？
「・・じゃ直美とふたりで行くわ。ごめんね。」
「あっ！　待って！！・・でも行ってもいいよ。どうせヒマだし・・・」

直美も行くんならオレも・・・だって千里が遊べないのに・・・
弘子と直美が仲良くして、オレだけ仲間はずれなんてイヤだ・・・
！　それでなくたって弘子と直美はもともと中学が一緒で仲良しな
んだから・・・

「無理しなくていいよ。興味ないとつまらないでしょう？」
「ううん！行くよ！　だって観たことないもん。観たら興味が出る
かも知れないし・・・」
「・・それもそうか・・・じゃぁ明日の朝８時に久留米の駅前で待
ってるから、いつもみたいに遅れないでよね。バスの時間があるん
だから、遅れたら置いていっちゃうわよ。」
「・・う・・うん・・わかった・・・」
・・あぶないあぶない・・遅れないように早起きしなきゃ・・・
「明日は晴れるみたいだから帽子かぶって来た方がいいわよ。」
「うん、かぶっていく！」

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

次の日オレは５時半に起きた・・・だって、もし遅れて置いてい
かれたら大変だ！・・・それにお弁当も作らなきゃいけないし・・・

本当はお弁当はいらないって言われたんだけど、どうせ麻衣とと
うさんのお昼を用意しておかなきゃいけないし・・・少しだけ作っ
て行こうと思う・・ちょっと小腹が空いた時にでも食べればいいし・
・・なんかお弁当作るなんてピクニックみたい・・・ゴハンだと重
いからサンドイッチにした・・その方がつまみやすいし。

早起きしたのに、けっきょく出かけるのはギリギリになってしまった・・・今日はＵＶ対策だけで、お化粧はしなくていいから十分時間はあると思ったのに・・・お弁当に時間かけすぎてしまった・・・オレってほんと時間配分がヘタクソだ・・・

急いで駅に走って何とか急行に間に合った・・・おかげで久留米の駅に着いたのは７時４５分・・・良かった・・これなら置いてかれないですみそうだ・・・

オレが駅に着いてすぐ直美がやってきた。

「直美～！」

オレが手を振ると、直美は驚いたような顔をして走ってきた・・・

「・・有希・・・あんたそんな恰好で来たの？」

え？！　オレ変な恰好してるかな？　オレは自分の姿を首が回るかぎりで見まわしたけど、べつにおかしなところは無さそうだった・・・腰の後ろでくくったリボンも曲がってないみたいだし・・・これが縦になってるとカッコ悪いんだよなぁ・・・

「なに？　どうしたの？　なんかヘン？」

すると直美はあきれたように言った・・・

「有希、わたしの恰好見てごらん？」

・・？・・・シャツに、チノパンに、スニーカー・・・頭には・・キャップをかぶってる・・・

「わかった？　遺跡めぐりに行くのに何でそんな避暑地のお嬢様みたいな恰好で来るかなぁ・・・」

「・・！・・ご・・ごめん・・・知らなかった・・・なんかピクニックみたいなつもりになっちゃって・・・そんな感じじゃなかったの？」

「・・・しょうがないなぁ・・有希は・・・弘子がなんて言うかな？」
「・・ううっ・・弘子・・怒るかなぁ・・・・」
「さあね・・・」
・・・オレってなんて空気が読めないんだろう・・・白いノースリーブのワンピースに、ニットの半袖ボレロ・・・足はヒモのサンダルだし・・・帽子も白くてツバが広いお嬢様風だ・・・いつでも可愛い恰好すりゃいいってもんじゃないのに・・・

だって・・オレ遺跡なんて行ったことないんだもん・・・言ってくれなきゃわからないよ・・・

弘子はけっこうギリギリにやってきた・・・どうせオレがまた遅れてると思ったんじゃないだろうか・・・それともオレが遅れるつもりで早めの時間を言ったのかも知れない・・・
「弘子ぉ、有希こんな服で来ちゃったよ!ちゃんと言っておかなかったの？」
「・・・そっかぁ・・帽子のことしか言わなかったね・・・まさかこんな可愛い恰好で来ると思わなかったわ。」
・・・オレはその言葉の裏に“男のクセに”という意味があるような気がしてしまった・・・弘子はオレが男だと知ってるからって・・オレ・・意識しすぎかな・・・？

「・・ご・・ごめん弘子・・・」
「どうしようか・・今から着替に帰る時間もないし・・・」
「わ・・わたし大丈夫よ！　平気だから!!」
・・・だって・・着替えるっていってもオレ女の子らしい服しか持ってないし・・・ジーンズは2本持ってるけど・・・でも出来ることならジーンズははきたくない・・・男っぽい恰好をすると、今でも男にバレないか不安になるから・・・・

「まあ、いいじゃない。有希があぁいって言ってるんだから。もしへばっちゃったら自分のせいよ！」
「・・うぅ・・うん・・・」
直美って相変わらずズケズケ言うなぁ・・・こういうとこはちょっと苦手だ・・・実をいうとオレたち４人の中では、オレは直美との関係が一番ビミョウなのだ・・・もともと弘子を通じての友達って感じだし・・・なんかオレとはずいぶん性格が違うし・・・弘子と千里は間違いなく親友だけど、直美は・・友達だけど親友とは言い難い・・・？　あんまり二人っきりで話したこともない・・・だって男の子の趣味もずいぶん違うし・・・オレは直美が好きだっていう西喜怒くんの良さは良くわからない・・・ホントどこが良いんだろう・・・

―――――――――――――――

―――――――――――――――

――――――――――

　オレたちは待ち合わせた久留米の駅前からバスに乗って石人山古墳〈せきじんさんこふん〉って所に向った。やっぱりなんか遠足みたい・・・高校に入ると遠足なんかなかったから久々な感じで楽しくなってくる。
ただ、３人っていうのはあまり都合が良くなかった。バスの座席は２人がけだから、ひとりがあぶれてしまう・・・オレはついて来ただけだから気をきかせて二人を一緒に座らせて、オレは二人の後ろの席に座った・・・バスは空いていたから弘子と直美は一番後ろの長い席に座ろうと言ってくれたけど、オレは後ろの方に座ると酔っ

てしまうことがあるから前の方が良かったのだ。

バスで古墳までは３０分くらいだった。古墳って上からの写真しか見たことがなかったけど、実際に見ると山だ・・・直美が言った意味がやっとわかった・・・こんなとこサンダルじゃ大変そうだ・・・ウェッジソールでかかとが低めのを履いてきたのがせめてもの救いだろう・・・でもペタンコってワケでもない・・・

「有希、本当に大丈夫？」

「・・だ・・大丈夫よ・・・」

・・たぶん・・・だって直美に無理なんて言ったら置いていかれちゃう・・・何としても登るしかない・・・

弘子の話だと、この石人山古墳っていうのは前方後円墳らしい・・・歴史の教科書に載っている図ではカギ穴みたいな形をしたヤツだ・・・横から見ると山にしか見えないけど・・・

上までは一応整備された道があったから何とかなったけど、完全な山道だったら音をあげていたかも知れない・・・だけどやっぱりサンダルではキツい・・・ヒモになってるから食い込んで足が痛くなった・・・でもこれくらい我慢しなきゃ・・・

オレだって、これでも昔は男だったんだ・・・これくらいのことで泣き言いってたら弘子に笑われちゃう・・・

石室というところの前には石人が立っていた・・・石人っていうのは石を人の形に彫って作った像で、ハニワみたいなものらしい・・・ここの石人が昔から有名だから“石人山古墳”というそうだ。で

も人の形っていってもかなりのっぺりしてて、なんとなくそんな形に見えるだけだ・・・

「ねえ弘子・・なんか石人っていうけど・・これ本当に人の形なの？　良くわかんないじゃない・・？」

「昔はもっとはっきりしてたのよ。でも江戸時代から明治にかけてご利益があるって噂になって、みんなが削っちゃったの。」

「へえ・・・そうなんだ・・・」

もったいないことするなぁ・・・

「でも昔の人が描いた絵が残ってるから、どんなのだったかは解ってるのよ。下の資料館に絵があるし復元した像もあるわ。」

「・・これってもしかして卑弥呼とか関係ある？」

「たぶん関係ないと思うわよ。卑弥呼は2世紀で、ここは5世紀の中ごろだからね。それにここは地元の豪族のお墓っていわれてるし。」

「へえ～・・・」

弘子って女の子なのに良く知ってるな・・・

家型石棺〈いえがたせきかん〉っていうのを見てから下におりて来たころにはもう足が痛くてフラフラだった・・・だけど二人には気づかれないように頑張った・・・だってオレのせいで楽しい雰囲気が壊れてしまったら申し訳ない・・・オレはついて来ただけなのだから・・・

「ねえ弘子・・・これからどうするの・・・？」

まだお昼にもなっていない・・・もう帰るのかなぁ・・・お弁当が無駄になっちゃう・・・

「もちろん次の古墳に行くわよ！」

「え？！　次の古墳？　古墳ってまだあるの？」

「何言ってるの！　まだまだいっぱいあるわよ。八女古墳群ってい

ってね、この近くだけでも6、7コあるのよ！」
「・・・まさか・・全部に行くの？」
「まあ・・全部に行ってもいいけど・・・有希行きたい？」
「！・・・わたしは・・ほどほどでいいよ・・・」
どうしよう・・・途中で歩けなくなったら・・・

次のところは岩戸山古墳ってところだそうだ・・・北部九州では最大らしい・・・オレはこっそり直美に聞いてみた・・・
「・・・直美・・歩いていくの？」
「そうみたいね。」
「どれくらい歩くの？」
「う～ん、どれくらいかな？　ねえ弘子、岩戸山までどれくらいだっけ？」
直美が前を行く弘子に聞くと
「３ｋｍとちょっとよ。」
「３ｋｍ？！」
・・・そんなに歩くの・・・？
「３ｋｍっていってもそんなにかからないわよ。」
・・・そうかなぁ・・・女の子にとっては結構な距離だと思うけど・・・

オレは観念して歩きだした・・・
「有希、本当に大丈夫なの？」
「・・う・・うん・・大丈夫よ！」
直美に聞かれたけどオレは強がって言った・・・ほんとはもう足が痛くてたまらない・・・でも・・遅れないように頑張らなきゃ・・・

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

――――――――――――――――――

――――――――――――

　でも途中で我慢できないほど痛くなってきて、岩戸山古墳の下にある資料館に着いたろこには、情けないけどオレはもう歩けなくなっていた・・・

「弘子、有希もう歩けないよ。マメが潰れちゃってる！」

直美にサンダルを脱がせてもらうとオレの足はもうボロボロだった・・・サンダルのヒモがあたる部分には沢山マメが出来ていて、いくつかは潰れて皮がめくれていた・・・これじゃサンダルも履けそうにない・・・

「ほんとだ・・・早く言えばいいのに！」

「・・・ご・・・ごめん・・・まさかこんなになってると・・・思わなかったから・・・」

「どうする？　弘子。」

「・・・そうねぇ・・・叔母さんに車で来てもらおうか？　薬も持ってきてもらわなきゃ、持ってるバンドエイドじゃ足りないわ。」

「それがいいかもね。」

「ちょ・・・ちょっと待って・・・そんなの迷惑じゃない・・・？　叔母さんだって忙しいんじゃないの・・・？」

「大丈夫だと思うわよ。神社って夏場はヒマだし、それにどうせ有希歩けないでしょう？」

「・・・ううぅ・・・・」

たしかに弘子の言うとおりだ・・・

　弘子が叔母さんに電話すると1時間くらいで来られるそうだった・・・

「弘子、待ってる間に観てきたら？」

「でも・・・」
「わたしのことは気にしないで・・・弘子行ってっきて。せっかく来たんだから・・・本当はもっと他の所にも行くつもりだったんでしょう？」
「・・そう？・・じゃぁちょっと行ってこようかな？」
「うん、　行ってきて！　わたしここで待ってるから。」
オレは精一杯の笑顔で弘子を送り出した。

でも直美と二人っきりというのも気まずいな・・・
「有希も我慢しないで言えばいいのに。だいぶ前から痛かったんでしょう？」
「・・うん・・・」
オレは認めないワケにはいかなかった・・・まだやせ我慢しようかと思ったけど・・こんなになってしまっては・・・
「・・でも・・二人と一緒に行きたかったの・・ホントよ！」
「わかってるわよ。弘子もわたしも。」
そう言って直美はオレの頭をなでてくれた。

「でもヒドイことになっちゃったね。しばらく靴履けないんじゃない？」
直美はオレの裸足の足を見て言った・・・
「あ、蚊にも喰われてるじゃない！」
「・・ほんとだ・・・」
思わず掻こうとしたオレの手を直美が止めた・・・
「掻いちゃダメよ！跡が残っちゃうじゃない。」
そう言ってリュックの中からムヒを出して塗ってくれた・・・
「？・・・このムヒ・・スースーしないね？」
「ムヒベビーだからね。」
「・・でも・・スースーする方が痒みが引く感じがしない・・・？」

「まあ、そうかもしれないけど。これのほうが臭いがしないからね。」

・・・そうか・・女の子がムヒの臭いプンプンさせてるのって、ちょっと恥ずかしいかも・・・それに・・・

「これ・・お料理の時にも良いかもしれないね。わたし臭いがするのって、お料理に臭いがつきそうでイヤなの・・・わたしも今度これ買おうかな・・・」

「ふふっ」

「なに？」

「有希って、すぐにお料理とかに結びつけるから女の子らしいなって思って。」

「や・・やめてよ・・・急にそんなこと言われたら顔が赤くなっちゃうじゃない・・・」

「有希はモデルなんだから足とか大事にしなきゃダメでしょう？」

「・・う・・うん・・・読者モデルだけどね・・・」

直美に読者モデルのことを言われるとオレもつらい・・・

「・・直美・・・ごめんね・・・」

「え？　何が？」

「・・だって・・ほんとは直美が読者モデルになりたくて応募したのに・・・」

「え～？有希まだ気にしてたの？！」

「・・うっ・・だって・・・」

・・・そうだ・・オレはこんなこともあって・・・直美と少し距離があったのかもしれない・・・

「そんなこともう気にしないでよ。確かに最初はそうだったけど、あんたたちがやってるの見てたら、わたしじゃたぶんムリだったなって思ってるのよ。」

「そ・・そんなことないよ！　わたしが出来るんだもん、直美だって出来るわよ！」

「・・・有希、そういうとこ良くないよ。」
「え？」
「そんなこと他人に言ったらバカにしてるって思われるわよ？」
・・そんなぁ・・・オレは・・・
「・・ごめん・・わたしそんなつもりで言ったんじゃないの・・・
本当にそう思ったの・・・うぅ・・・」
オレは急に悲しくなって涙があふれてきた・・・オレは直美をバカになんてしていない・・・
「有希、泣かなくていいよ。わたしたちは有希が本気で言ってるの解ってるから・・・」
「！！」
オレは突然の出来事に驚いた！　直美ったらオレのほっぺにキスするなんて！！
「・・ダ・・ダメよ・・汗かいてるから汚いよ・・・」
「女の子の汗なんて汚くないよ。」
そう言って直美はもう一度キスした・・・あんまり驚いて涙も止まっちゃった・・・

女の子どうしってこんな感じなのだろうか・・・？　でも・・千里も弘子もオレにキスなんかしない・・・
「有希って可愛いからキスしたくなっちゃうわ。」
・・そんな・・・キスなんかされたら・・・ますます気まずくなっちゃう・・・早く弘子おりてこないかなぁ・・・

またキスされたら大変だから・・何か話さないと・・・
「・・あ・・あの・・直美もこういうのに興味あるの？」
「こういうのって？　古墳のこと？」
「うん・・・だって・・詳しいみたいだし・・・」

「それほどでもないよ、でも昔から弘子に連れてこられてたからね。普通より多少は知ってるかも。」
「・・そ・・そう・・・」
オレは弘子と直美が・・どんな中学時代を送っていたのか知らない・・だからオレがいくら頑張っても二人の間には入っていけないモノがある気がする・・・

「・・直美は中学の頃から弘子と友達なんでしょう?」
「まあね。」
「・・どうして友達になったの?」
「どうしてって・・・どうしてかなぁ・・・友達ってそんなに考えてなるもんじゃないし・・・」
・・そういえばそうかも・・・オレたちも最初は何気ない、あたりさわりのない話をしてて（11話参照）、そのうち好きなアイドルの話なんかで盛り上がっちゃって（16話参照）、いつの間にか親友といえる存在になっていた・・・直美は少しニガテなところもあるけど・・キスなんかするし・・・それでも大切な友達には違いない・・・

やっと弘子がおりてきた・・・

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー
ー　ー
ー

弘子がおりてきて、しばらくすると弘子の叔母さんが車で向かえに来てくれた。

「すみません・・おばさん・・・」
なんか申し訳ない気持ちでいっぱいだ・・・
「いいのよ気にしなくて・・・でも思ったよりヒドイわね。一応、薬は持ってきたけどお医者さんに行った方が良さそうじゃない？」
「・・え・・でも・・保険証とかないし・・・」
それにたとえ保険証があったとしても、オレはお医者さんには行きたくない・・・だって・・・オレが本当は男だとバレてしまう・・・

「大丈夫よ、お金なら出しておくから。」
「・・でも・・やっぱりいいです・・・」
二光さんも言っていた・・・ニューハーフの人が一番困るのが病気になった時だって・・・オレはニューハーフじゃないけど・・・身体の状態はニューハーフみたいなもんだ・・・
「・・・そうだ！　有希、白石先生に診てもらったら？　それならいいんじゃない？」
弘子に言われてハッとした・・・そうだ・・白石先生なら大丈夫だ・・・
「・・・学校に寄ってもらっていいですか・・・？」
「もちろんいいわよ。」

学校へ向いながら白石先生に電話すると、すぐに来なさいと言ってくれた・・・もし居なかったらどうしようと思ったけど、居てくれて助かった・・・

学校に着くと歩けないオレを叔母さんがダッコして保健室まで運んでくれた・・・叔母さんって意外に力持だ・・・
「ユウちゃんって華奢に見えるけど、思ったよりしっかりしてるのね。」
「・・うぅ・・・」

「あ、ごめんね。女の子にこんなこと言ったら失礼よね。」
「・・い・・いえ・・・」
・・・だって・・男だもん・・・身体がしっかりしてるのは仕方がない・・・骨だって女の子と比べれば、やっぱり太いと思う・・・

「わぁ・・やっちゃったわね。」
白石先生はオレの足を見るなり言った・・・
「剥がれた皮は切っちゃうけどいい？」
「・・はぃ・・・」
「それじゃ、まずきれいに洗いましょう。」
先生はオレをイスに座らせたまま、足を洗面所に上げさせて水道の水で洗った・・・オレ・・スカートなのに・・・こんな恰好するなんて・・・はしたない恰好だけど・・治療だからしかたない・・・みんなが外にいてくれて助かった・・・

マメが潰れて剥がれた皮を切り取るときは、オレは怖くて思わず目をつぶってしまった・・・
目を開けたときには、もうキレイに切り取られていた・・・剥き出しになったところが痛々しい・・・実際に痛いし・・・
先生はそのまま何もせずに、ワセリンっていうのをベタベタ塗って、ラップのようなものでぐるぐる巻いてしまった・・・
「・・あのぉ・・・消毒とかしなくて良いんですか・・・？」
「これは新しい治療法なの。消毒せずに乾かないようにしておくと皮膚の再生が早いのよ。」
「へえ～・・・そうなんですか・・・」
「それにもうあまり痛くないでしょう？」
「？・・・そういえば・・・」
さっきまでジクジク痛かったのが、あまり痛くなくなっている・・・

「今日はお風呂には入らない方がいいわね。」

「・・あ・・はぃ・・・」
・・今日はずいぶん汗をかいたから入りたいけど・・・この足じゃ仕方ない・・・拭くだけで我慢しよう・・・
「明日は自分で洗って、ワセリンを塗ってからこのシートで巻いておいて。先生がやるの見てたから出来るでしょう?」
「はい・・たぶん・・・」
「それで、あさってまた来てくれる?経過を見たいから。」
「・・でも・・歩けるかな・・・」
「立ってみて? どう?」
オレはそっと立ってみると、思ったより平気だった・・・何とか自分で歩ける・・・
「あっ・・大丈夫みたいです・・・」
さっきまで歩けなかったのに・・・白石先生ってスゴイ!

「有希、大丈夫だった?」
保健室に入ってきた直美が、まっ先にオレに聞いた・・・
「うん・・白石先生に治療してもらって少しなら歩けるみたい・・・」
オレはラップのようなフィルムでグルグル巻きにした足を指して言った・・・
「そう、良かったね。心配したよ。」

その時、直美のお腹が“ぐう〜”と鳴った!
「あっ、ごめん・・・ちょっとお腹すいちゃって・・・」
でも、そのおかげでみんなで笑って一気に場がなごんだ気がした。
「そういえばもうお昼過ぎてるわね。」
白石先生に言われて気がついた・・・オレそれどころじゃなくて気づかなかった・・・
「すみません・・・わたしのせいで・・・あっ!そうだ・・・わた

しサンドイッチ作って来てたんだ・・・」
オレはバッグから朝早く起きて作ったサンドイッチを取り出した。

「・・直美食べて？　みんなも食べて下さい・・・あまり多くないけど・・・」
オレはみんなにサンドイッチを勧めた・・・すると食べた白石先生が
「美味しい！これ有希ちゃんが作ったの？」と言うと、
みんな口々に“美味しい”って言ってくれた。

「うん、すごく美味しい！　有希ってホント料理とか女の子っぽいとこ上手だね。」
直美に言われたけど・・・オレはちょっと複雑な気持ちだった・・・
だって先生も弘子もオレが男だって知ってるんだもん・・・そこで
女の子っぽいって言われても・・・なんか恥ずかしい・・・・

何とか歩けるようになったから、電車で帰ると言ったけど、けっきょく叔母さんはオレの家まで送ってくれた・・・本当はまだ歩くのは痛かったから助かったけど・・・

玄関まで連れていってくれると、そのまま3人は帰っていった・・
・お茶でも飲んでいって言ったけど、さすがに遠慮されてしまった・・・たしかにこんな足じゃなぁ・・・満足におもてなしなんて出来ないと思われて当然だな・・・

でも、今日はほんとにみんなに迷惑かけてしまった・・・元気になったら何か埋め合わせしなきゃいけないな・・・

第９９話　治癒　空いた時間・・・

今年の夏休みは、足にマメが出来て潰れてしまったため、ずいぶん時間を無駄にしてしまった・・・ＪＩＮＯＮの撮影も一回お休みして迷惑かけてしまったし・・・でもこんな足では靴なんか履けないし、ましてハイヒールなんて絶対無理だから仕方がない・・・

もっとも全てが無駄だったワケでもない・・・夏休みになって怠けぎみだった勉強をする時間が出来たから・・・若村先生が英語の勉強のためにと、高島先生に相談して借りてくれたというＤＶＤもやっと観ることが出来た。本当はこれまでも観る時間はあったんだけど、英語の教材ということでちょっと敬遠してしまっていた・・・でも観てみると面白かった。ＮＨＫの番組を録画したもののようで“チャロ”っていう犬が主人公の物語りだ。

ただ少々問題なのは、話にすっかり引き込まれてしまうことだ・・・迷子になったチャロの話に泣いちゃって、こんなことじゃ英語の勉強にならないんじゃないかと思うんだけど・・・

ＤＶＤといえば、純平も出演してる山上くんのドラマも、時間があるとつい何度も観てしまう・・・あまり観てると麻衣にバカにされそうだから、麻衣がいない時に観るんだけど・・・主人公の山上くんがヒロインと付き合うのはいいとして・・・

・・・本当はイヤだけど・・そうじゃないとドラマにならないし・・

・

・・・でも純平までヒロインの友達のヘンな女と付き合う必要はな

いと思う・・・だいたい女の子ふたりで住んでいるアパートの部屋に間借りするなんて・・ドラマだってありえない！　純平ったら、どんだけ安全なヤツだと思われてんだよ・・・

“ピンポン”
玄関のチャイムが鳴ってドキッとした・・・オレは慌ててリモコンでＤＶＤのスイッチを切った・・・麻衣が帰って来たのかな・・それとも・・・

「こんにちわ」
「・・長谷川さん・・・また来たの・・？」
「またって失礼ねぇ、有希が歩けなくて困ってるから、わざわざ面倒見に来てあげてるのに。」
「・・・・・」
・・・たしかに最初の頃はオレもあまり動けないから多少は有り難かったけど・・・最近じゃオレがお昼を作ってあげるシマツだ・・・おかげで長谷川は毎日オレの家に入り浸っている感じ・・・家族にでもなったつもりだろうか・・・まあ、オレや麻衣の勉強を見てくれるのはちょっと助かるけど・・・

「もうだいぶ良くなったんじゃない？」
「・・うん・・もうほとんど痛くない・・・昨日は普通にお風呂に入ったし・・・」
「そう・・良かったね。」
「・・うん・・・だからもう長谷川さんの世話にならなくていいかも・・長谷川さんも忙しいんでしょう・・・？」
「何いってんの、遠慮しなくていいのよ。わたしとあんたの仲じゃない！」

・・・どんな仲だよ・・まったく・・・

“ピンポン”

またチャイムが・・・

「あ、いいよ、有希は座ってて。」

そう言って長谷川が玄関へ出ていった・・・

「あ、長谷川さん今日も来てたの？」

麻衣の元気な声がした・・・たぶん今日も中学のプールで泳いで来たのだろう・・・女の子なのにもう真っ黒けだ・・・

「・・わたしも泳ぎたいなぁ・・・」

女の子になってから、すっかり泳ぐ機会がなくなってしまった・・・もっとも、機会があったとしてもそんなに泳ぐ気はしない・・・だって水着は恥ずかしいし・・・焼けちゃうし・・・

「有希、泳ぎたいの？　足が直ったら一緒にプール行こうか！」

「・・いいよ・・・長谷川さんとなんて・・・」

「何でわたしとじゃイヤなのよ！　去年はレナちゃんと行ったクセに。」

「え？！　何で長谷川さんが知ってるの？」

「有希が言ったんじゃない。日焼けの跡見られちゃって、それでわたしの水着貸してあげたんでしょう？」（５５話参照）

「あ・・そうだっけ・・・」

・・そういえば・・去年は長谷川のスクール水着を借りたんだった・・・

「ホント行こうよ！有希の水着姿見たいし、ピンクの水着持ってるんでしょう？」

「えっ・・・ピンクの水着のことなんかしゃべってない・・・あ！

麻衣が言ったのね？」

「えへへ・・・」
麻衣はバツが悪そうに笑ってる・・・もう・・麻衣ったら何でもしゃべっちゃうんだから・・・
「・・うぅ・・持ってるけど・・・行かない！」
「なんで？」
「・・また日焼けしちゃうもん・・・」
「・・有希そんなこと気にしてるんだ。」
「！・・だって・・変な跡が残ったら・・・撮影のとき迷惑かけちゃうじゃない・・・」

「そっか。有希はモデルだもんね。」
「・・違うよ・・読者モデルだよ・・・」
「いいじゃない、そんな細かいこと言わなくても。」
「ダメよ・・・長谷川さんは知らないかも知れないけど・・本当のモデルさんは全然ちがうんだから・・・」
オレと蟹原さんのようなモデルさんとは比べることなんて出来ない・・そんなことしたら失礼だよ・・・

「そろそろお昼ね・・麻衣は、お昼なに食べたい？」
「そうめん！」
「また？・・長谷川さんは？・・そうめんでいい？」
「いいわよ。わたしは何でも！」
・・食べるのが当然って感じだし・・・まあ３人分も４人分もたいして違わないけど・・・

―――――――――――――――
―――――――――――――――
―――――――――

「もうすぐ夏休みも終りだね。」
「・・うん・・今年は兄さんが帰って来れなかったからつまらなかったな・・・」
でも、帰って来てもこの足じゃ何処にも行けなかっただろうけど・・・
「お姉ちゃんは有友兄ちゃんのことが好きだもんね！」
「！・・ち・・ちがうよ・・・ただ兄さんとして尊敬してるだけよ！」
「だから好きなんでしょう？　尊敬してるって好きってことでしょう？」
「？・・ま・・まぁ・・そうなのかなぁ・・・」
そっか・・麻衣は男女としての“好き”という意味で言ったんじゃなかったのか・・・

「麻衣ちゃん、お姉ちゃんはね、お兄さんに恋してるって麻衣ちゃんが言ったと勘違いしたのよ。」
「え？　そんなハズないよ！　だって兄弟なのに恋なんて・・・」
「そ・・そうよ！　長谷川さん麻衣に変なこと言わないでよ・・・」
麻衣はまだ子供なんだから、わざわざそんなこと教えなくていいのに・・・それに・・麻衣の前だからって、長谷川までオレのこと“お姉ちゃん”なんて呼ぶことないじゃないか・・・

「でも、有希のお兄さんって京都にいるんでしょう？」
「・・うん・・そうだよ・・・」
「だったら１１月の修学旅行の時に会えるんじゃない？」
「・・・そっか・・でもそんな時間あるのかなぁ・・・修学旅行ってみんなで同じ所まわるんじゃないの？」
「それは良く知らないけど、少しくらいは自由時間もあるんじゃな

い？」

「・・そうかなぁ・・・」

だったらいいけど・・・オレも去年より少しは女らしくなってると思うし、そんなところも兄さんに見てほしい・・・恥ずかしいけど・・・

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

一週間も経つと足の痛さはなくなって、何とか靴も履けるようになったから久ぶりにエステに行くことにした。今日は二光さんもいるらしいから、秋のメイクも習っておこうと思う・・・やめなきゃいけなかった千里の分も読者モデルとして頑張らなきゃいけないし・・・

「それじゃ・・行ってくるね、長谷川さん・・・」

「いってらっしゃい！」

長谷川ったら・・なんか今日も普通にいるし・・・オレもう靴だって履けるのに・・・

「・・長谷川さん・・あんまりウチにばっかり来てたら・・お母さんが心配してるんじゃないの？」

「大丈夫よ。有希の家に行くって言ったら、お母さんも来たいって言ってたわよ。・・・それにお父さんも帰ってきてるしね。」

「え？！　お父さんが？　長谷川さん・・そんなこと言わなかったじゃない！」

「そうだった？・・まぁいいじゃない、エステ行くんでしょう？

早く行きなさいよ。予約の時間に遅れるわよ！」
「・・う・・うん・・・帰る時は勝手に帰っていいからね。」
「わかったから、さっさと行ってらっしゃい！」
「・・うん・・じゃ行ってくる・・・」
なんで長谷川に送り出されなきゃいけないんだか・・・家族でもないのに・・・

エステをやって、爪の手入れをしてもらってから、3階の二光さんのところへメイクを習いに行く・・・エレベーターのドアが開くと二光さんが待ち構えていた・・・
「有希ちゃん！久しぶり～！！」
「・・うっ・・・」
・・く・・くるしい・・・二光さん力強すぎ・・・
「元気にしてた～？」
「あ・・はぃ・・足の皮が剥けて大変だったけど・・・」
「え～っ、どうしたの？　痛そう～～！」
オレは二光さんに、足にマメが出来たいきさつを話しながらメイクを教えてもらった。

「有希ちゃんもずいぶん大人のメイクが似合うようになってきたわねぇ。」
「・・そ・・そうですか・・・？」
「うん、だいぶ色気が出て来たわよ～！」
「・・わたしがぁ？　そんなことないと思うけど・・・でも嬉しい・・・」
たとえお世辞でも、そんなこと言われて嬉しくない女の子はいないと思う・・・

「そうだ！　有希ちゃん今度の日曜日もう予定入ってる？」
「・・いえ・・予定は・・特にないですけど・・・」
「ハルカがね、有希ちゃんとケンカしちゃったお詫びしたいって言ってたのよ。」
「・・お詫び・・ですか・・・？　でも今年のどんたくで会ったとき、ハルカさんもケンカしたこと憶えてないって・・・」
「まぁ、そうかもしれないけど、ケンカになったのは事実なんだし、ハルカちゃんの方が年上なんだから責任感じてるんじゃないの？」
「・・そうなのかなぁ・・・わたしの方が悪かったのかも知れないのに・・・」
「憶えてないんだったら、どっちでもいいんじゃない？　ようは有希ちゃんを誘いたいってことだと思うわよ？」
「・・誘う？　どこか行くんですか？」
「コンサートよ！　あたしも一緒に行くんだけど、ハルカのお店も休んで“みつまめ姫”のコ全員で行くらしいわよ！　楽しそうでしょう～！！」

・・コンサート・・・？・・オレ・・コンサートなんて行ったことない・・・でも・・たしかに楽しそうかも・・・
「・・あの・・だれのコンサートなんですか？」
「もちろん永遠のアイドル聖子ちゃんよ～！！！」
「・・セ・・セイコちゃんって・・松田聖子のこと？」

・・松田聖子はオレの学校がある久留米の出身だから、少しは馴染みもあるといえばあるんだけど・・・セイコちゃんは・・微妙だなぁ・・・だってセイコ“ちゃん”なんて言ってるけど・・オレのかあさんと同じくらいの歳じゃないだろうか・・もしかしたら少し上かも・・・二光さんやハルカさんにとっては永遠のアイドルかもしれないけど・・オレから見れば・・言っちゃ悪いけどオバサンだ・・・

「あたしはもう武道館で一回観たんだけど～　今年のコンサートも最高だったわよ！」
「・・そ・・そうなんですか・・・？」
・・毎年行ってるのかな・・？
「あら？　有希ちゃんは聖子ちゃん好きじゃないの？」
「あ・・えっとぉ・・・好きとか嫌いとかないですけど・・・あんまり知らなくて・・・」
「そっかぁ・・有希ちゃんくらいの歳のコは知らないのかもしれないわね～・・でもね、聖子ちゃんはあたしたちみたいな心の女の子は、みんな憧れる存在なの。だから有希ちゃんもきっとコンサート観たら好きになるわよ！　行きましょう～！」
・・どうしよう・・・別に用事もないから行ってもいいんだけど・・
・

「・・でも・・わたしくらいのコっていないんじゃないですか？」
オジサンやオバサンばかりだったらちょっと気まずいかも・・・
「なにいってるの？！　有希ちゃんくらいの若いコもいっぱい来るわよ！　お母さんと一緒に来る2世代ファンも多いのよ！」
「・・そ・・そうなんですか・・・？」
そういえば８０年代のアイドルが好きな中川翔子も、松田聖子のことを“神”って言ってたなぁ・・・
「あたしや有希ちゃんみたいなニューハーフのコも来ると思うわよ！　なんたって聖子ちゃんはニューハーフにも大人気なんだから！」
「・・・・・」
・・でもオレは・・ニューハーフじゃないんだけど・・・・

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーー

「ただいまぁ・・・」
と言っても、たぶん麻衣はまだ帰ってないだろうから誰もいないけど・・・まあ、とうさんは書斎にいるんだろうけどいちいち出てくることはない・・・でもたぶんモニターで観てると思うし、もしかしたら声も聞こえてるかも知れないから一応は声をかけておくのだ・・・

「お帰り有希。ますますキレイになった？」
「えっ・・長谷川さん・・まだいたの・・・？」
てっきりもう帰ったと思ってた・・・
「いたら悪い？」
「・・べ・・べつに悪くはないけど・・・長谷川さんのお父さんが帰って来てるんでしょう？・・だったら家にいた方がいいんじゃないの？」
「いいのよ、お父さんうるさいし・・有希の家の方が広くて快適だもん。」
・・快適って・・・オレのために来てくれてたんじゃないの？

「長谷川さんのお父さん・・うるさいって・・コワイ人なの？」
「・・コワイってワケじゃないけど、ちょっと気まずいのよ。」
「え？　どうしてお父さんと気まずいの？」
「・・うちはお父さん単身赴任してるでしょ？　単身赴任してると、帰ってくるとイロイロうるさいのよ。」
「ふ～ん・・・でもお父さんと気まずいなんて・・なんかヘン・・・」
長い間会ってないんだったら、お互いに話すこととかあるんじゃな

いかなぁ・・・
「あのね、お父さんと気まずいなんて、別に珍しくないの！　有希の家が変わってるのよ。放任主義っていうか・・・」
「・・・・・」
・・・まあ・・たしかにウチ放任主義なところもあるかも知れないけど・・・とうさんもかあさんもオレたちにあまりうるさく言わないし・・・でも、助けてほしいことがあれば、ちゃんと助けてくれるから放任って感じでもないと思う・・・

「・・もしかして・・長谷川さんも・・お父さんに、ちゃんとした大学に行くように言われたりするの？」
「・・どういうこと？　ちゃんとしたって。」
「・・だって・・千里はお父さんにそう言われたって言ってたよ。・・だから勉強しなきゃいけないからって読者モデルもやめちゃったんだもん・・・長谷川さんは千里より勉強が出来るんだから、４年制の大学に行くように言われないのかな？って思ったんだけど・・・」

「・・・・・」
あっ・・・長谷川さん黙っちゃった・・・怒ったのかな・・・
「・・・有希はどうするのよ。」
「え？」
「有希は高校を卒業したらどうするの？って聞いてるのよ！」
・・オ・・オレの話・・・？
「・・わ・・わたしは・・まだ良くわからない・・・わたし女の子になるだけで精一杯だもん・・・」
「あんたまだそんなこと言ってるの？　もうすぐ2年生の2学期よ？」
「・・う・・うん・・・それはわかってるけど・・・」
・・でもオレはまだ女になるってどういう事か良くわかってないの

だから、先の進路のことなんて考えられなくても仕方がないと思う・・・

「もうすっかり女の子のくせに、あいかわらずハッキリしないわねぇ。」

「・・うぅ・・ゴメン・・・」

「・・わたしも言われるわよ。大学どうするのかって。」

「え？　やっぱり？！　それでどうするの？」

「・・・だから・・うるさいから逃げて来てるんじゃない・・ここに・・・」

「あっ・・・そういうこと？・・・」

「まだ決めたくないのよ・・・」

「・・そ・・そうだよね・・・それに長谷川さんなら頭がいいから、ちょっと勉強すればどこでも行けるもんね！」

「・・あんたそれイヤミ？　わたしがそんなに頭いいワケないでしょう？　ウチの学校の偏差値が低いからそう見えるだけよ！」

「・・そうなの？」

・・・そっか・・他のとこに落ちたから白鴻に来てるんだもんなぁ・・・？・・・でも・・長谷川はどこかに受かったって言ってなかったっけ・・・（7話参照）

「・・・あのぉ・・・まえから思ってたんだけど・・・イヤだったら別に言わなくていいんだけどね・・・長谷川さんどこかに受かったって言ってなかったっけ？・・・なんで白鴻に来たの？」

「あぁ・・そのこと・・・」

「ほんと言いたくないんだったら、言わなくていいよ？」

「べつに隠してるワケじゃないし・・・入試が終ってすぐにお父さんの転勤が決まっちゃったからよ。」

「・・・・？」

「お父さんと一緒に行っちゃったら、また向こうで入試しないといけないでしょう？」
「あ・・うん・・・」
「だからこっちの学校に行きたいって無理いったワケ・・・それに本当はわたし福岡が気に入ってたし・・・他のとこ行きたくなかったからワザとゴネたんだけど・・・」
・・・そうだったのか・・・そんなことが・・・
「まあ、そんなワケでもうひとつ受かった学校は遠かったから、お母さんと二人だけだから近い学校の方が良いだろうってことで白鴻に来たのよ・・・わかった？」
「うん・・・わかった。・・でも良かった・・ずっと不思議に思ってたの。」
「・・・・・」

「でも・・わたしは長谷川さんがウチの学校に来てくれて良かったって思ってるよ。」
「・・・ほんとに？」
「うん！」
「わたしも白鴻に有希がいて良かったかなぁ・・」
「え？　ほんと？」
・・長谷川がオレがいて良かったって思ってるなんて・・・嬉しい！
「だって有希がいると退屈しないからね。いつ男だってバレるかワクワクするし！」
「え？！・・・そ・・そんなぁ・・・」
「ふふふっ、冗談よ！　いつもバレないように協力してあげてるでしょう？」
「うぅっ・・・」
・・・たしかにそうだけど・・・長谷川のヤツ・・・オレをからかって面白がってるに違いない・・・

「・・そうだ・・・有希今度の日曜ヒマ？　もう足は大丈夫なんでしょう、せっかく夏休みなんだからどこか行かない？」
「あ・・ごめん・・・今度の日曜はダメなの・・・」
「何か用事があるの？」
「・・うん・・・さっきエステでね・・二光さんにコンサート行かないかって誘われて・・・」
「コンサート？！　誰の？」
「・・・セイコちゃん・・・」
「セイコちゃんって松田聖子？」
「・・そう。」
「有希、松田聖子のファンなの？」
「ううん！・・・違うよ・・でもせっかく誘ってくれたから・・・わたしが行かないとチケット余っちゃうんだって。」
「へえ～」
「でも二光さんやハルカさんの憧れの人なんだって・・あ、ハルカさんっのはニューハーフパブの人なんだけど・・・・ニューハーフの人はみんなセイコちゃんが好きなんだってさ・・・」
「じゃぁ、有希も気に入るんじゃない？　有希だってニューハーフみたいなもんなんだから。」
「！・・わたしはニューハーフじゃないよ！・・ただ女の子になりたいだけで・・・」
「知ってるわよ。だから“みたいなもん”って言ったでしょう？」
「・・・そっか・・」

・・・たしかに“みたいなもん”って言われたら・・オレには否定のしようがない・・・

・・・オレは決して自分がニューハーフだなんて思ってないんだけど・・・

第１００話　聖子　女の子の憧れ？（前書き）

この１００話は本来あるべき歌詞がすべて消されています。
でもそれでは申し訳ないので、私のＨＰの「オレは女子高生支援ページ」で見ることが出来るようにしました。
ｈｔｔｐ：／／ｅｍｉｔｈｉｙａｎ．ｈ．ｆｃ２．ｃｏｍ／ｃｏｌｕｍｎ／ｊｙｏｓｉ／０８０６２３－００．ｈｔｍｌ
ただし１８禁サイトの中にあるのでご注意ください。上の方にＨなバナーが出ます。

第１００話　聖子　女の子の憧れ？

とうとう日曜日がやってきた・・・今日は二光さんやハルカさんたちとコンサートに行く日だ。

二光さんにコンサートには可愛い服を着てくるように言われた・・・セイコちゃんに負けないようなって言われても・・・オレそんなの持ってないし・・・だからオレが持ってるうちでは一番フリルが付いた可愛いのを着てきたつもりだ・・・おかげで恥ずかしくてたまらない！

白いワンピースでスカートには二段のレースのフリル・・・上半身も三段のフリルになっていて、肩が全部出ている・・・だからなんだか落っこちちゃいそうで、常に肩が出過ぎていないか気になってしまう・・・腰は黒いリボンで絞める形だ・・・

レナとお店で見たとき、可愛くて二人で盛り上がってしまい、つい買っちゃったヤツだ・・・雑誌の撮影とかならこれくらい平気だけど、さすがに普段に着る勇気がなくてまだ着ないでいた・・・なんか・・パーティーでもあったら・・・なんて思ってたのに・・・まさかこんなに早くこの服を着る機会が来るとは思わなかった・・・

コンサートがあるのはマリンメッセ・・・福岡の施設ではどちらかといえば新しい方だ・・・オレはまだ行ったことがない・・・

名前に“マリン”とついているだけあって海の近くらしい・・・

天神から臨時のシャトルバスに乗ろうとすると、バス停にはオレ

と同様コンサートに行くらしい人たちが並んでいた・・・ほとんどが３０代か４０代の女の人だ・・・みんなそれなりにお洒落してるけど・・やっぱりオレみたいなフリフリの服を着た人はいないみたいだ・・・失敗したかなぁ・・・いつもみたいなシフォンワンピにしておけば良かった・・・シフォンワンピだって十分可愛いし・・・

　マリンメッセに着いてバスから降りると、会場の前はセイコちゃんのファンでいっぱいだった。オレはあたりを眺めてみて少しだけホッとした・・・フリフリの人も結構いる！　なかには本物のセイコちゃんかと見紛うような人までいる！　でもいくらなんでもやりすぎじゃないかなぁ・・・ファンに囲まれて撮影会みたいになってるし・・・

　オレは二光さんやハルカさんが来るのを待たなければいけない・・チケットはまだもらってないから一人では会場の中に入れないのだ・・・なんか落ちつかない・・・だって二光さんたちが来たときにすぐわかる所にいなきゃいけないけど・・こんな恰好で目立ってないか気になる・・・気のせいかも知れないけど、オレのこと見ながら通り過ぎていく人もいるような・・・こんな恰好してるからかな・・・

するとオレと同じ歳くらいの女の子が二人で近づいてくる・・・ま・・まさかオレじゃないよなぁ・・・

「・・あの・・春日ユウさんじゃないですか・・・？」

あ・・バレちゃった・・・

「・・・ぁ・・はぃ・・そうですけど・・・」

・・・雑誌の時とはお化粧違う感じにしてたのにな・・・本当はお化粧しなきゃいいんだけど・・よそ行きの時はやっぱりお化粧したいし・・・それに・・もしもお化粧してない時に“春日ユウ”だとバレてしまったらそれこそ恥ずかしいし・・・素顔の“春日ユウ”

なんて見せられない！
「きゃー！！　やっぱりユウちゃんよ！」
「・・！」
・・ビ・・ビックリしたぁ・・・急に大きな声出すんだもん・・・
「わたしたち春日さんファンなんです！写メ撮ってもらってもいいですか？！」
「・・あ・・い・・いいですけど・・・」
・・どうしよう・・・オレまで撮影会みたいになっちゃった・・・

「春日さんも聖子さんのファンなの？」
「・・あ・・えっと・・わたしは知り合いに誘われて・・・」
「じゃぁ聖子さんのコンサート初めてなんですかぁ？」
「・・う・・うん・・初めて・・・」
「うわぁ！　それじゃすっごく感動すると思いますよ！　ねぇ！」
となりのコに同意を求めてワイワイやってる・・・なんか同じくらいの歳だけどウチの学校の生徒とは、だいぶノリが違うなぁ・・・
やっぱりウチって今でも少しはお嬢様学校って感じなのかな・・・

二光さんたち早く来てくれないかなぁ・・・オレひとりじゃ、どうしたらいいかわからないよ・・・

？・・・向こうの方から大きめのワゴン車がやって来る・・・なんかハデな車だ・・・もしかして？
すると向こうもオレに気がついたようで、ワゴン車を運転してる人が手を振った・・・二光さんだ！　助手席ではハルカさんも手を振っている！　オレも思わず手を振っていた・・・

ワゴン車はオレの前に停まるとドアがスライドして、中からニューハーフ・・・っていうかオカマと言った方がピッタリな感じの人

もいるけど・・・そんな・・たぶんハルカさんと同じお店“みつまめ姫”の人たちがドヤドヤ降りてきた・・・ス・・スゴイ・・・みんなスゴイドレス着てる・・・これに比べたらオレの恰好なんて大したことないような気さえしてくる・・・

そういえば・・この人たち・・お花見にもドレスで来る人たちだもんなぁ・・・すっかり忘れてた・・・

「それじゃぁ、駐車場に停めてくるから待っててね～！」

二光さんはワゴン車を停めに行った・・・

「ユウちゃ～ん！　ひさしぶり～～！」

「ひゃっ！」

急に大きな人が抱きついてきてビックリした・・・

「・・ぁ・・お・・お花見のときの・・・？」

「あらぁ！　ユウちゃんあたしのこと憶えててくれたの～～！　うれし～！」

・・むぎゅぅ・・・作り物のおっぱい大きすぎだ・・・息が出来ないよぉ・・・

「ちょっとあんた～　またユウちゃん潰してるでしょ～～　離れなさ～い！」

2、3人が止めてくれて、なんとか助かった・・・

「・・はぁ・・・苦しかった・・・」

「ごめんねユウちゃん、大丈夫だった？」

「あ、ハルカさん・・・こ・・こんにちは・・・今日は誘って下さってありがとうございました・・・」

「もうっ！ユウちゃんったら他人行儀ねぇ！　でも行儀がいい娘は好きよ。」

「・・・あの・・この人たち・・ユウちゃんの知り合い？」

！！・・・さっきのコたちまだ居たんだ・・・どうしよう・・・普通の女子高生の“春日ユウ”にニューハーフの友達がいたらヘンに思われるかなぁ・・・

「・・あ・・えっと・・・この人たちは・・・」

オレがどう説明したらいいか口ごもっているとハルカさんが女の子たちに言ってくれた・・・

「あなたたちも二光って知ってるでしょう？　ユウちゃんは二光にメイクを習ってるの！　あたしたちは二光と友達だからユウちゃんとも知り合いなのよ～！」

「すご～い！　ユウちゃんってメイク上手だと思ったら、ちゃんと習ってるんですね！」

「そりゃそうよ！　ユウちゃんはモデルさんなんだから習ってるわよ～！」

・・・ハルカさん・・女の子を丸め込むの上手いなぁ・・・もうすっかり仲良しな感じになってるし・・・女の子って意外にニューハーフの人には抵抗ないって聞いたことあるけど・・本当なんだぁ・・・

オレは女の子たちと離れてからハルカさんにお礼を言った。

「あの・・さっきはありがとうございました・・・」

「ユウちゃん、あれくらいのことサラッと言えなきゃニューハーフなんてやってけないわよ！　ウソでも出まかせでもペラペラ言えるようにならなきゃ！」

「・・はぃ・・・」

・・・まったくだ・・・オレはニューハーフじゃないけど・・・バレちゃいけないという点ではニューハーフより大変かも知れない・・・オレは一生、男だとバレないように生きていかなきゃいけないのだ・・・いっそ本当にニューハーフになった方が良いのだろうか・・・？

「お待たせ～！」
車を停めに行った二光さんが戻ってきた。
「それじゃ行こう、ユウちゃん！」
ハルカさんはオレの手をとって会場とは違う方に歩いていく・・・
「あの・・どこ行くんですか？」
「あれよ！　聖子ちゃん応援するならウチワ買わなきゃ！」
「・・う・・うちわ・・・？」
「聖子ちゃんウチワがないと“フレッシュ・・・・・”が地味になっちゃうでしょう？」
「・・・・・」
“フレッシュ・・・・”？　オレは聖子ちゃんのことは全然知らないから、何のことだかさっぱりわからない・・・

会場の横の広場には体育祭の時のようなテントが張られていて、そこでコンサートのパンフレットやポスターや聖子ちゃんグッズが売られていた・・・すごく混んでたけどニューハーフ軍団が入って行くと、さすがに回りが空く・・・女の人の集団パワーもスゴイけど、そんな中でもニューハーフ軍団のパワーは負けてない・・・そもそも見た目がスゴイし・・・一緒にいるのがハズカシくなってくる・・・オレまでニューハーフと思われないか心配だ・・・

ハルカさんはパンフレットとか色々な物と一緒に買ったウチワをひとつオレにくれた・・・
「あ・・わたし・・・」
オレが慌ててお財布を出そうとすると、オレの手を押さえて言った。
「いいから、あげるわよ！」
「・・あ・・すみません・・・」
・・なんか悪いなぁ・・・コンサートのお金も出してないのに・・・

「綾乃！　モール持ってきた？」
「あります～、リャンメンも持ってきましたよ～！」
・・・モール？　リャンメン？
「ほら、ユウちゃんもウチワのまわりにリャンメンつけて！」
オレはハルカさんがやってるのを見ながら、ウチワのまわりにグルッと両面テープをつけた・・・
「出来たらこうやってモールを付けるのよ！」
そう言ってハルカさんはウチワのまわりに、パーティーの飾り付けなんかに使う金色のモールを巻いていった・・・オレも見よう見まねでモールを巻いた・・・
「目立ってる方が聖子ちゃんがこっちを見てくれるからね！」
あ・・そういうことか・・・たしかに沢山のお客さんがいるんだろうから、目立ってないと見てくれないのかもなぁ・・・

お揃いのウチワの準備も整うとオレたちニューハーフ軍団は、入口で手荷物の検査なんかをしてから会場に入った。

マリンメッセはすごく広かった・・・オレたちの席はアリーナの真ん中あたりだ・・・お客さんはほとんどが女の人で、男はカップル以外ではほとんどいない・・・

みんなオシャレしてて、なかにはテレビで観た昔の聖子ちゃんばりにブリブリな服を着てる人もいるけど、ニューハーフ軍団はそんな中でも異常に目立っている・・・こんだけ目立ってれば、ウチワにモールなんか付けなくても十分に聖子ちゃんの目を引きそうだ・・・

オレはハルカさんと二光さんに挟まれて居心地が悪いったらない・・・

「・・あ・・あの・・ちょっとトイレ・・・」
オレは理由をつけてホールから外に出た・・・まあ、トイレに行きたいのもウソじゃないけど・・・

女の子は早めにトイレに行っておかないと、こんな時はトイレが混むから大変なのだ・・・最初から女の子なら、それが普通だと思ってるんだろうけど・・・オレは男だった経験があるから長い時間待たされるのは堪らないのだ・・・

トイレに行くと、ここマリンメッセのトイレは大きくて驚いた！
普通は男より女の方がトイレに時間がかかるのにも関わらず、トイレのスペースは同じだから、個室しかない女性用は一度にできる人数が男性用より少なくなってしまう・・・これは男のころには考えもしなかったが、女の子になってみて痛切に感じたことのひとつだった・・・でもここはスペースも大きいうえ、トイレ自体が男性用の3倍くらいもある！　だから全然混んでなかった・・・トイレに並ばなくていいなんて感激だ！　ここを設計した人は女の子のことを良くわかってる！

オレがトイレに感激して席に戻ると、もうすぐ始まる時間になっていた。“カメラ、録音機材の使用禁止”や“携帯電話の電源はお切り下さい”などのアナウンスが流れだす・・・オレも慌てて携帯の電源を切った・・・

場内が暗くなってレーザー光線が光り出すと、会場のあちこちから“セイコー”という野太い声がしだした・・・一見女の人ばかりみたいだけど男もそれなりにいるらしい・・・親衛隊ってやつだろうか・・・

そんなことを考えていると、“せーの”という掛け声に合わせてニューハーフ軍団も“聖子コール”を始めたからたまらない・・・すっごい大きな声だ・・・声もほとんど男に戻ってるし・・・挟まれたオレはどうすれば良いんだろう・・・・

「ほら！　ユウちゃんも声出して！」

「え！・・・えっと・・・・」

・・うぅ・・恥ずかしいよぉ・・・

「・・せ・・いこぉ・・・・」

オレ女の子になってから、そんなに大声なんて出したこと無いし・・・だいいちオレはファンでもないのにぃ・・・でも場内はどんどん声が大きくなっていく・・・もう女の人も負けていない・・・

“　セイコー！　セイコー！！　”

コールと拍手で割れんばかりだ・・・会場が一体になった時、レーザー光線が当っていた幕が落ちると、スポットライトの中に聖子さんがいた！　場内のお客さんは、その瞬間に一気に立ち上がって、オレも遅れて立ち上がった・・・

ヘッドマイクを付けた聖子さんは檻みたいなモノの中・・・と思ったら、真ん中の棒につかまって踊りだした・・・これって・・・ポールダンスってヤツ？・・・なんかオレが思ってた聖子さんのイメージとずいぶん違うな・・・こんな色っぽいのもやるんだ・・・衣装もすごくセクシーだし・・・

“　（本来はここに歌詞を引用していました）　”

オレを挟んだニューハーフ軍団も、腰をクネクネして一緒に踊り出す・・・ノリノリだ・・・考えてみたらニューハーフの人ってこんなダンスもするのかも知れないなぁ・・・オレはニューハーフパ

ブなんて行ったことないから良く知らないけど、テレビでそういうのを観たことあるような気がする・・・だって・・パブってたぶんお酒飲んでエッチなことするところだもん・・・

“（本来はここに歌詞を引用していました）”

歌が終って聖子さんが舞台にいなくなっても、まだ曲は続いていてダンサーの人たちが踊っている・・・聖子さんがいないと会場は少しトーンダウンした感じだけど、ニューハーフ軍団だけはまだハイテンションだ・・・理由はたぶんダンサーの男の人だろう・・・たしかに・・ちょっとカッコイイかも・・・

「ユウちゃん、聖子ちゃんはねぇ、衣装替えの間もこうやって楽しませてくれるのよ！　あたしたちもダンスするからすごく勉強になるのよ！」

ハルカさんは踊りながらそう教えてくれた・・・そうなんだぁ・・・ただ男の人がカッコイイからってだけで盛り上がってるワケじゃないんだなぁ・・・

・・でも・・オレもべつに聖子さんのファンじゃないから、ダンスだけでも十分楽しい・・・こんなの観たことないし・・・それにまわりがノリノリだと、なんだかオレもつられて楽しくなってくる・・・

次に聖子さんが出て来た時は黒いパンツスタイルだった・・・そしてダンサーの男の人や女の人と踊る・・・聖子さんって踊りも上手なんだな・・・こんなに踊れる人だとは思わなかった・・・

次に舞台が変わると、しとやかな感じでピンクのネグリジェのよ

うな衣装・・・ダンスも激しいものから一転バレエに風に・・・

“　（本来はここに歌詞を引用していました）”

・・・うぅ・・・なんかせつない歌・・・オレが純平からのメールが来ないか待ってる時の気持ちにかぶっちゃうなぁ・・・

聖子さんのバラードって女の子の気持ちであふれている・・・別れた彼のことを考える女の子のことを歌った曲を聞いていると、オレも切ない気持ちになってしまう・・・

何曲かのバラードの後は、今度はお姫様のようなスカートが大きく広がった空色の素敵なドレス・・・

“　最後のデートなら明るく決めたいわ　無理して笑えば空から降るのよ涙・・・”

明るい曲調だけど別れの歌・・・無理して明るく振る舞う女の子の気持ちを思うと切なくなっちゃう・・・

“（本来はここに歌詞を引用していました）”

・・・きっとこの男の人は女の子の気持ちなんてわかってないんだろうな・・・なんか聖子さんの歌って・・言葉が直接入ってくる・・・

曲が終ってあいさつ・・・聖子さんは歌は素敵だけど、しゃべるとすごく気さくな感じの人だった。ファンのみんなの声にも応えて

くれる。地元の福岡だから久留米弁でしゃべってくれたりして・・・なんかしゃべり方がなんとなく弘子の叔母さんに似てる気がする・・・ちょっと親近感を持ってしまった・・・

何曲か知らない歌・・・ハルカさんの話では聖子さんが若い頃の歌らしい・・・でもそんな古い感じじゃないなぁ・・・そしてその後は『赤いスイートピー』・・・これならオレも知ってる・・だって有名だもん。

「それでは皆さんも一緒に、大きな声で歌って下さいね・・・」

“（本来はここに歌詞を引用していました）”

・・・みんな歌ってるから、オレも思わず口ずさんでしまう・・・

“（本来はここに歌詞を引用していました）”

・・・半年も手を握らないなんて・・・この人どういうつもりなんだろう・・・女の子の片思いなのかも知れないけど・・・それにしたって・・・・

今度のドレスは白くてスカートがせまくなった細いやつ・・・これも素敵だな・・・

“（本来はここに歌詞を引用していました）”

この歌も聴いたことある・・・眠れない夜は別れた彼の温もりを思い出して、そっと瞳を閉じてみるなんて・・・なんかすごくせつない歌だな・・・

“　（本来はここに歌詞を引用していました）　”

「・・あれ？　この歌って・・・」

「ユウちゃん聴いたことないでしょう？　『続・赤いスイートピー』っていうのよ。」

ハルカさんがそう教えてくれた・・・オレは『赤いスイートピー』に続編があったなんて知らなかった・・・

“　（本来はここに歌詞を引用していました）　”

「・・・・・」

“　（本来はここに歌詞を引用していました）　”

・・・う～ん・・・なんか大人の歌だな・・・オレには良くわからない・・・

・・・運命なんて・・・オレには・・・・

・・なんかこういう歌を聴くと・・・オレが女の子として幸せになれるのか不安になってくる・・・オレって男の人から見て、どんな女の子なんだろう・・・？

聖子さんが舞台から消えて、しばらくはダンサーの紹介なんかが続いた・・・この後、舞台は暗転・・・そしてまた“聖子コール”が・・・音楽が始まるとみんな一斉に立ち上がった！

舞台のカーテンが開いて、大きな“ＳＥＩＫＯ”という文字の前に出て来た聖子さんを見た瞬間、オレたちは思わず叫んでいた・・・

「かわいい～！！」
聖子さんは髪をショートにして、赤に白いチエックが入ったミニスカートのワンピース！　赤いソックスにはフリルがついてる・・・すっごく可愛いぃ・・・こんな恰好も似合うなんてスゴイ・・・とてもかあさんより年上とは思えない・・・

「ほら、ユウちゃんウチワの出番よ！」
「あ、は・・はぃ・・」
オレは慌てて飾りを付けたウチワを手に持って、みんなと一緒に応援した・・・

“（本来はここに歌詞を引用していました）”

歌が終ってお客さんたちの“かわいい”という声に照れてる聖子さん・・・でもホント可愛い・・・昔はすごく可愛かったって聞いたことあるけど、今でも十分可愛いくて素敵だと思う・・・

「セッイコちゃ～ん！！」
歌が終るとニューハーフ軍団が一斉に叫んだからたまらない・・・聖子さんも思わず気にとまっても不思議じゃない・・・

“　あら？　またいらしたの？　二光さんは武道館にもいらして下さって・・・”
聖子さんは声のした方を探してオレたちを見つけると、悪戯っぽくそう言った・・・そっか・・もう何回も来てるから・・・それにさすがに二光さんは有名人だから知ってるんだ・・・

聖子さんに声をかけられるとニューハーフ軍団も派手なウチワを振って大もりあがり・・・そんなことしたら他のお客さんにまで目立

っちゃうよぉ・・・

“　みなさんすっごくお綺麗で・・・でも二光さんの横のコは本当の女の子みたいね？　”

！・・オレのことだ・・・オレは恥ずかしくて思わずウチワで顔を隠した・・・だってお客さんまで振り向いてオレのこと見るんだもん・・・

「聖子ちゃん！　このコは本当の女子高生なのよ～！」

“　あら、どうりで可愛らしいと思ったわ　”

・・うぅ・・・聖子さんがオレのこと可愛いなんて・・・恥かしくて顔が熱くなっちゃう・・・

“　それではいつの間にやら始まりました　リクエストコーナーの時間がやってまいりました！　”

「リクエスト？」

「聖子ちゃんがみんなのリクエストに応えて歌ってくれるのよ！」

「へえ～・・・」

・・・みんなこの時を待ってたように、歌ってほしい歌のタイトルを書いた紙を頭の上に掲げてる・・・

“　大切なあなた・・・未来の花嫁・・・天国のキッス・・・硝子のプリズム・・・どれがいい？　”

オレは『天国のキッス』はＣＭで流れてるから知ってるけど・・他のは知らないな・・・

“　じゃあ・・『天国のキッス』と『未来の花嫁』ね！　”

『未来の花嫁』ってのはオレは知らないけど・・・みんなは良く知ってる曲みたいだ・・・すごく喜んでる・・・

“　（本来はここに歌詞を引用していました）”

・・・なんか若村先生の結婚式の時のこと思い出すなぁ・・・

“　（本来はここに歌詞を引用していました）　”

・・・なんか可愛い歌・・・聖子さんの歌に出てくる女の子ってみんな可愛いなぁ・・・オレもそんな女の子になれるかなぁ・・・

“　（本来はここに歌詞を引用していました）　”

オレもみんなと一緒に歌った・・・知ってるとこだけだけど・・・オレも知ってたらもっと歌えたのに・・・

　コンサートは終盤に入りヒットメドレー・・・ハルカさんの話では聖子さんがアイドルの頃の歌・・・どれも可愛い歌ばかりだ！

“　（本来はここに歌詞を引用していました）　”

オレもハルカさんや二光さんがやってるのを見ながら、同じようにウチワで応援した。

“　（本来はここに歌詞を引用していました）　”

やっぱりウチワがあると応援しやすい・・・

“（本来はここに歌詞を引用していました）”

「セイコ！！」

“（本来はここに歌詞を引用していました）”

・・・あ！　フレッシュ・・・・ってコレだったのか！

“（本来はここに歌詞を引用していました）”

最後の歌を歌い終えた聖子さんは、ひとしきり挨拶をすると手を振りながら舞台のセリを降りていった・・・ほどなく会場は“　アンコール　”の声に包まれた・・・“　アンコール　”は次第に時間が経つと“　セイココール　”に変わっていく・・・

“　セイコ！　セイコ！セイコ！　”

出て来た聖子さんは黄色い衣装・・・スカートがフワフワでひよこみたいだ！

“（本来はここに歌詞を引用していました）”

なんか力強い歌・・・こっちまでウチワを振る手に力が入っちゃう・・・

“　最後はこれ！　２０ｔｈ　Ｐａｒｔｙ！　”

“（本来はここに歌詞を引用していました）”

「・・・・・？」

“（本来はここに歌詞を引用していました）”

・・・これって色んな歌の歌詞が混じってるみたいだ・・・なんかおもしろい・・・どういう歌なんだろう・・・

「ユウちゃん、この歌は聖子ちゃんが２０周年の時に作ってくれた歌なのよ！　みんなの思いでの歌なの！」

・・・そうなんだ・・・だから色んな歌の歌詞が入ってるんだなぁ・・・

みんなで思いでの歌で盛り上がって、コンサートは終った・・・

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー

ー　ー

ー

コンサートの余韻も消えないまま、ホールから出てくると、そこで聖子さんのＣＤやＤＶＤを売っていた・・・オレはなんとなく気になって、ふと立ち止まった・・・

「なになに？　ユウちゃんＣＤ買うの？」

「ぁ・・えっと・・・ちょっと聞いてみたいなって思って・・・でもどれ買ったらいいかわからないな・・・」

「何か気に入った曲ないの？」

「・・えっと・・・そうだ・・あのリクエストの時の結婚式の・・・」
「あっ！　『未来の花嫁』ね！　良い曲よねぇ～　聖子ちゃんファンならみんな大好きな曲よ！」
ハルカさんがそう言うと、二光さんもみんなも“うんうん”とうなずいている・・・
「ユウちゃん目が高いわぁ！　あの曲はね・・これに収録されてるわよ！」
そう言って渡されたのは『Ｃａｎｄｙ』というアルバムだった・・・
「・・キ・・キャン・・・」
「キャンディーよ！　聖子ちゃんのアルバムの中でも良い曲ばっかり入ってるのよ～」
「・・そ・・そうなんですか・・・」
・・キャンディーか・・・可愛い名前だなぁ・・・

「・・じゃぁ・・・これにしようなか・・・」
「そうしなさい！　あたしが買ってあげるわ！」
「え・・いいですよ・・わたしおこづかいもらって来たから・・・」
オレは急いで断った・・・だって連れて来てもらったうえＣＤまで買ってもらったんじゃ申し訳ない・・・ウチワも買ってもらったし・・・
「いいじゃない！　あたしとユウちゃんの友情の印よ～！」
「・・う・・・」
・・そんなふうに言われると・・・なんだか断りにくい・・・
「ね？　あたしに買わせて？」
「・・はぃ・・・」
ここはオレが折れるしかなさそうだ・・・オレは高校生・・・ハルカさんから見ればオレなんて、まだ子供なのかも知れない・・・
「はい！」

ハルカさんは袋に入れてもらったＣＤを渡してくれた・・・
「あ・・ありがとうございます。」
オレはこれをハルカさんからのプレゼントだと思うことにした・・・
プレゼントだったら喜んでもらった方がいいと思う。

オレは思った・・・聖子さんってすごく可愛くて女らしいけど、おしゃべりすると何処か面白くて男の子っぽいところがあったりして・・・そういうところが女の子だけじゃなくニューハーフの人にも人気がある理由ではないだろうか？　ずっと見てると、なんだか自分が聖子さんになったみたいな気持ちになるんだと思う・・・
・・だって・・・オレもちょっとだけ・・あんなドレス着てみたいなって思ったくらいだもん・・・

（著作権侵害と引用を混同する間違った考えのせいで、歌詞を引用出来ずわかりにくくてすみません。）
――――――――――――――――
――――――――――――――――
――――――――――

今回は、私が網膜剥離になってしまい、ずいぶん時間がかかってしまって申し訳ありませんでした。まだまだ万全とは言えない状態なので、今後も無理のない範囲で書いていきたいと思っています。

この１００話はコンサート全体を文章で書くという無茶な話だっ

たので、全然上手く書けてなくてすみません。もし興味がある方は発売中のＤＶＤ
Ｓｅｉｋｏ Ｍａｔｓｕｄａ Ｃｏｎｃｅｒｔ Ｔｏｕｒ ２００９「Ｍｙ Ｐｒｅｃｉｏｕｓ Ｓｏｎｇｓ」
をご覧いただくとより楽しめる内容となっております（笑）ちなみに去年のＤＶＤは福岡のコンサートを収録しているので、久留米弁でしゃべりまくる聖子さんがご覧いただけます。興味がある方はどうぞ。

あと、そのうち「オレ女支援ページ」に有希がコンサートに着ていった服とか載せようと思っていますが、いつになるかわかりません。気長にお待ちいただけると有り難いです。

これより下の文は記念に残しておきたいと思います（笑）

―――――――――――――――
―――――――――――――――
―――――――――

網膜剥離になってしまい、しばらく書くことができなくなってしまいました。
すみません。
他に確実にお知らせする方法がなかったのでこういう方法をとりました。
ずいぶんお待たせしているので、とりあえず書いてるところだけ載せておきます。

２００９．１２．３０

－　－　－　－　－　－　－　－　－　－　－　－　－　－　－

皆様、明けましておめでとうございます。

心配かけてしまって申し訳ありませんでした。また励ましのお言葉ありがとうございます。一日一回だけ目を通し勇気づけられてました。

皆様への個別の返事が難しいので、現在一番上のココに代表として書かせていただきます。

暮れも押し迫った１２月２９日早朝、これまで気づかなかった黒いモノが目の隅に・・・もしや網膜剥離か？と思ったものの、私はもともと飛蚊が多いタチ・・・それにもう近所の病院は正月休みに入っていた。

しかしもし本当に網膜剥離だったら正月明けまで待ってる時間は無いし・・・そんなことを考えていた次の日の早朝、目覚めてすぐに目に中に墨のようなものが広がった・・・これはもう出血に間違い無い。大急ぎでネットでまだやっている眼科を探して、どうにか３０日の午前中までやっている病院を見つけて行ってきた。

結果はやはり網膜剥離・・・それも結構ヒドイらしい・・・その日のうちにレーザーでまだ剥がれていない網膜の部分を焼きつけてくっ付けるという処置をした。これでまだ剥がれてくるようなら手術しかないという話で、手術となるとかなり大変らしい。

とにかく2、3日は絶対安静にして、出来る限り目玉を動かさないようにということ。テレビは観ていいが（むしろテレビを観てる間は目玉があまり動かないのでオススメという話）本を読むのはＮＧ。

激しい動きもダメ！
結局テレビとか年末に買ったコロンボのＤＶＤとか観て過ごしてました。まあ、それも疲れるので寝たりして・・・こんなに寝たのは久ぶりでした。

おかげで昨日の再検査の結果は大丈夫ということで一安心。もう本も読んでもいいそうですが、まだすぐに疲れてしまいます。墨みたいな血の固まりもたくさん浮いてるし、家の中では白っぽく濁っていますが、外に出て明るくなるとまるで灰が降っているように、小さな黒い血の点が無数に舞っているような状態です。なので今は片目を塞いでタイピングしています。
また、もう片方の目も調べなきゃいけないかったりするので、小説の続きを書くのはもう少し先になりそうです。すみません。書けませんが、その間に物語りの整理したりしたいと思います。

また書けるようになったらよろしくお願いいたします。私も出来るだけ早く再開したいと思っています。
２０１０．１．５

なおこの文は、出来るだけ皆さんの目にふれるように、いくつかの所に同文を貼付けておきます。

6章　第101話　方針　思わぬ知らせ

「弘子、トイレ行かない？」
千里が弘子に聞いた・・・
「あ、いいよ。有希は？」
「うん、わたしも行く！」
オレも行こうと思っていたところだ・・・ちょうど良かった・・・
「待って、わたしも行くから。」
直美も加わって、結局4人で揃ってトイレに行くことになった。

今日は夏休みが終って最初の日・・・始業式だけで授業はない。
3人に会うのは久しぶりだからなんだか楽しい・・・
女の子が連れションするのは、ちっとも珍しくない・・・だけど今のオレたちの場合少し事情が違う・・・

夏休みが終り、二学期が始まって登校してみると、オレたち2年生のクラスがある2階のトイレが工事中になっていたのだ・・・だからオレたちは別校舎の1年生のところか、3階の3年生のトイレに行かなきゃいけなくなってしまった・・・別校舎はちょっと遠いから3階のトイレに行くんだけど、ふだん3年生が使っているところに2年生が一人で行くのはさすがに勇気がいる・・・だからオレたちはみんなで行きたがってるワケなのだ・・・

それに・・特にオレの場合“春日ユウ”がトイレに来た・・・なんて思われそうでよけい恥ずかしいし・・・まあ、それはオレが気にしすぎなのかも知れないけど・・・でも、1年生のところに行くと絶対見られてる気がするのだ・・・だからまだ3年の方がマシなのだ。

それにしても何でトイレの工事なんかしてるんだろう・・・別に詰まったりしてたワケでもなさそうなのに・・・たしか最後の登校日には工事してなかった・・・オレはその後一回だけ白石先生に会いに来たけど、2階へは上がらなかったから、その時もう工事していたかどうかはわからない。

始業式も終ってクラブに寄ってから帰ろうと思った・・・9月の中ごろには学園祭が始まるから準備しなきゃいけないし・・・そんなことを考えていると、オレを呼び出す校内放送が・・・校長室に来なさいって・・・なんだろう・・いったい・・・オレ何かマズイことやったっけ・・・？

他の生徒が校長室なんかに呼ばれたら、みんな何の用事なのか不思議に思うだろうけど、オレの場合は読者モデルをやることを学校に許可してもらったりしているのを、みんな知ってるからそんなに興味を持たれないのはありがたい・・・でもオレ自身は校長室に呼び出されるとドキドキする・・・だってオレは何で呼び出されるのかわからないのだから・・・読者モデルのことなら良いけど、もっと重要なことかも知れないし・・・オレにはみんなが知らない校長や教頭と共有してるヒミツがあるから・・・

“トントン”
校長室のドアをノックすると中から
「どうぞ、お入りなさい」と女の人の声がした。

？・・・オレはてっきり校長先生の声がすると思っていたから一瞬とまどった・・・

オレがドアを開けお辞儀をして中に入ると、そこには白鴻会長の姿があった・・・それに校長先生と教頭先生・・・それに白石先生までいる・・・

白鴻会長に会うのは若村先生の結婚式いらい2回目だ・・・やさしい人だけど・・やっぱり緊張する・・・

「戸田さん、そんなに硬くならないでいいのよ。そこに座って。」
「あ・・はぃ・・・」
会長に勧められるままオレはソファーに腰掛けた・・・白石先生のとなりだ・・・オレたちの前には会長と校長と教頭が座っている・・・ただごとじゃない感じ・・・なんかイヤな予感がする・・・・

話し始めたのは会長だった・・・
「今日は戸田さんに謝らなければいけない事があるの。」
「・・・・？」
・・なんだろう・・・会長がオレに謝るなんて・・・
「・・実は来年度から我が白鴻女学園は共学になる事に決まったの。」
「え?!」
「戸田さんの希望だったとはいえ、共学化に失敗して戸田さんには女生徒として入学してもらったのに、本当に申し訳ないと思ってるわ。ごめんなさい。」
そう言って白鴻会長が深く頭を下げると、校長と教頭も揃って頭を下げた・・・オレはあまりのことに頭が真っ白になってしまった・・・オレの希望?・・・そうか・・会長はオレが性同一性障害で女の子になりたがってる思ってたんだ・・・

校長と教頭はオレと目が合うとバツが悪そうに目で合図を送ってきた・・・さすがに会長をダマしているのはバツが悪いのだろう・・・

オレも話を合わせなくちゃいけないってことだ・・・

「戸田さんも知ってるかもしれないけれど、我が白鴻女学園は生徒数が減少しているの。それに今後は少子化の影響もあって各高校で生徒の取り合いになりそうなのよ。今のままでは最悪の場合廃校になってしまうかもしれない・・・」

「・・は・・廃校・・・?!」

「そう・・・だから来年度からは共学化して、大学受験にも力を入れていくことになったの。若村先生や高島先生など若い教え方の上手い先生に来ていただいたのも実はその為だったのよ。」

「・・・・・」

「本当はまず、戸田さんの意見も聞かなきゃいけなかったんだけど、ごめんなさいね。」

「・・い・・いぇ・・・そんな・・・」

オレの意見なんて・・・オレにそんなこと聞かれたって何て言ったらいいのかわからない・・・それにオレの意見で学校がどうこうなるもんでもないだろうし・・・廃校になっちゃったら、それこそ何にもならないし・・・

「それじゃ戸田君、白鴻会長は忙しいから、後のことは私たちから説明しましょう・・・」

オレはその後、校長先生と教頭先生から共学化についていろんな話を聞くことになった・・・会長がいなくなると急に元気が出て来たみたい・・・でも白石先生もオレのこと性同一性障害だと思ってるんだからまだ気は抜けない・・・

教頭が言うには、来年はオレの行ってた中学からは男子生徒を入学させないから心配ないとのこと。

まあ、オレは中学では全然有名じゃなかったし、2年下のコがオレのことを知ってる可能性は低いかも知れないけど・・・たしかに男子の中にはオレのことを知ってるヤツもいないとは限らない・・・

女の子にも知ってる人がいないとは言えないけど、中学の頃のオレはといえば自分で言うのも何だけど、まったく冴えない男の子だったから、そんなオレのことを2年も下で憶えていて、しかも女の子になったオレを見て気がつくコなんているとは思えない。

学校名が白鴻女学園から白鴻学園に変わること・・・
これは当り前だろう・・・男の子も通うのに女学園はおかしい・・・
でもオレが受験した時にはそんな話は無かったよなぁ・・・ほんとに共学にする気があったのだろうか・・・？

制服がセーラー服からブレザーに変わること・・・男女共ブレザーに変わるらしい・・・今では多くなったブレザーとスカート、ブラウス、セーターなど自由に着こなせるタイプになるのだ・・・

セーラー服は実際に着てみると案外不便なことも多いから、そうなるのは時代の流れなのだろうと思う・・・だけど伝統の制服が無くなってしまうのは淋しい気がする・・・かあさんも母校の制服が変わってしまうと知ったら悲しむのではないだろうか・・・

だから、せめて2年間だけでも、息子のオレがかあさんと同じセーラー服を着れたのは良かったかも知れない・・・もしオレが来年入学する歳だったら、かあさんと同じ制服は着れなかったのだから・・・あっ・・・でもそれだったらオレは女の子になる必要もないから、女生徒の制服は着ないのか・・・なんか頭がこんがらがってきた・・・

「それで戸田君には頼みたいことがあるのですが、新しい学校案内のパンフレットを作るから、君と佐倉君にモデルをやってもらおうと思っているんです。」
「え？　わたしと千里が？！」
「君たちは雑誌のモデルもやってる訳だから、君たちに頼むのが最適だろうという話になったのですよ。」
教頭先生ったら・・・急にそんなこと言われても・・・
「・・あのぉ・・・本当にわたしたちでいいんですか？・・・モデルっていってもただの読者モデルなのに・・・」
「またまた！　君も相変わらずだねぇ。若い者がそんなに謙遜するもんじゃないですよ。」
「・・で・・でも・・・」
・・オレべつに謙遜なんかしてない・・・
「もう今度の土曜には撮影しないと間に合わないそうですから、よろしくお願いしますよ。」
「え？　土曜日？！」
今日は月曜だから・・・土曜日までは４日あるけど・・・
「・・・制服とかどうするんですか？　このままでいいんですか？」
「ああ、新しい制服はもう君たちの分は用意しているから心配ないですよ。」
・・・もうっ・・・急な話なのに・・・そういうとこは準備がいいんだから・・・これじゃイヤでもやらないワケにいかないじゃないか・・・

まあオレも学校にはいろいろ世話になってるし、モデルくらいやってもいいんだけど・・・本当にオレでいいのかなぁ・・・でも新しい制服はちょっと着てみたいかも・・・みんなより一足早く着れるのは少し嬉しいかもしれない・・・

「あ、それから共学化の事はまだ他の人には内密に頼みますよ。生

徒の皆さんには学園祭が終ってから発表するつもりですからね。」

「・・はぃ・・・」

・・オレうそつくのイヤだなぁ・・・学園祭まではみんな忙しいからまだ言わない方がいいのかも知れないけど・・・でもオレの気持ちはどうなるんだ・・・

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

「でも学校も勝手よね。有希ちゃんの時は共学化中止にしちゃったんでしょう?・・・あ、でも有希ちゃんにとってはそっちの方が都合が良かったのか?こうして女の子として入学出来たんだから・・・」

校長室を出てから白石先生にそう言われたけど、オレはどう答えたらいいのか良くわからなかった・・・

「・・そ・・そうですね・・・」

オレは当たり障りのない言葉でお茶を濁した・・・

　オレは女の子になると決めた今でも、これが一番良いことだったのかどうかは判らないでいる・・・ホルモンで身体が女の子に近づいていて、男性の機能が元に戻らないと知った時（１７話～２０話参照）オレにはもう女の子になるしかないように思えた・・・

あの頃はまだ、これからの長い学園生活を女の子として送っていくのだから、女の子になった方が良いと思った・・・でも今、高校生としての生活も半分ほど過ぎて思うのは、あんなに早く結論を出して良かったのか?ということだった・・・

なにしろあの頃は高校生活も始まったばかりだったし、まだ学校以外のことなんて考えられなかったけど・・・でも一年とちょっと経ってオレたちも将来のことなんかも考えなきゃいけない年齢になってしまった・・・オレはこの先いったいどうするのだろう・・・女の子として大学に行くのだろうか？　女性として就職できるのだろうか？　それともハルカさんのようにニューハーフになる・・・？

それはちょっと違うと思う・・・オレはニューハーフじゃないし・・・女性としての将来がオレにはまったく見えてこないのだ・・・

でも・・だからといってオレはべつに後悔しているワケじゃない。オレは女の子になっていろんなことを経験してきた・・・それはほとんどが男の子だったら経験出来なかったことだと思う・・・女の子になって良かったと思ったことも一つや二つじゃない・・・いっぱいある。

その際たるものは、千里、弘子、直美という親友が出来たことだ。

中学の頃のオレは、身体だけは男の子としては完全だったかも知れないが、今思えばただ男の子だったというだけのような気がする・・・もしあのまま・・男の子のままでいたら、きっと今でも何も変わっていなかったのではないだろうか・・・

・・・今だにオレはまだ女の子になりきれないでいる・・・だけど今のオレはあの頃の男の子のオレとも違う・・・心はまだ男の子のままな気もするけど・・でも女の子の部分も確実に増えていると思う・・・そしてその境い目がだんだんあやふやになっている気がするのだ・・・昔は男のオレが無くなってしまうようで怖いと感じた時もあったけど、今は男でも女でもオレには違いないと思えるよう

になってきた・・・

・・・そしてオレは昔のオレより、今のオレの方が好きだ・・・

しかしそれはそれとして・・・校長と教頭には少し腹がたつのも事実だ・・・普通の男の子だったオレを女の子として入学させておいて、今さら共学にするなんてちょっと問題だと思う・・・性同一性障害なんてウソまでついて入学させたクセに・・・それに入学案内のパンフレットのモデルまでやらせるなんて図々しくないだろうか？・・・それでいてちっとも悪びれてないし・・・

・・・まあ、今はオレも自分が本当に性同一性障害なのかも知れないと思ってるし、女の子になることにしてるから良いようなものの、もしオレが男のままで、女の子しか入学できないからって仕方なく女生徒してるんだったら、いったいどう責任を取るつもりだったんだろう・・・？　共学になったからって急に男には戻れないだろうし、男の子もいる中でひとりだけ女の子でいさせるつもりだったのだろうか・・・？

ほんと大人って勝手だ・・・

「あっ！」

オレはあることに気がついた。

「もしかして2階のトイレ工事してるのって関係あるんですかね・・・」

「たぶんそうだと思うわよ。有希ちゃんが校長室に来る前にトイレを改装してるって話してたから。共学になったら男子用のトイレが必要になるでしょうからね。」

「・・・・・」
オレの時はそんなの無かったのに・・・今度は本気ってことなのかな・・・じゃあオレの時は本気じゃなかったっていうのか？

「あ～ぁ・・・これからどうなっちゃうのかな・・・わたしウチの学校のほんわかした雰囲気好きなんだけど、共学になったら変わっちゃうんじゃないかなぁ・・・」
「まあ、少しは変わるかもね。」
「・・進学にも力入れるって言ってましたよね・・・そしたらお料理やお裁縫を習う時間も少なくなるのかな・・・」
「・・なんかそう考えると悲しくなっちゃう・・・いいお嫁さんになるには大切なんじゃないの・・・？
「・・若村先生は知ってたのかな・・共学になるの・・・」
「さあ、それはどうかしらね。進学に力を入れるのは知ってたかも知れないけど、共学になるのは知らなかったんじゃないかな？」
・・・だったらいいけど・・・オレは若村先生のこと好きだから・・・知ってて黙ってたなんて思いたくない・・・

「でも、そんなに急に変わったりしないんじゃない？　あんまり心配することないわ。ほら、元気だして！」
「・・うん・・・」
でもやっぱり心配だ・・・それに・・みんなは共学になるって知ったらどう思うのかな・・・

――

―――――――――

ATから

今回から新しい章になりました。これまでの章は、ただ読みやすいように20話前後で分けていたので、ほとんど意味はなかったのですが、今回の章はかなり意味があります。これからこの『オレは女子高生』は大きく動き出すのです。

それなのに目の問題で、ゆっくりしか書けないのがもどかしいです。でも無理しないように最後まで書いていきたいと思いますので、みなさん引き続き読んでいただけると嬉しいです。

それから、たくさんお気に入りに登録して下さって有難うございます。質問や希望などもいただけると嬉しいです。これからは話の流れが早くなりそうなので、希望など聞かせていただければエピソードも増えて少しはじっくり進められるかもしれません（笑）

今回は少し短いですけど、もう書き始めてるの気づいていない人もいるようなので早めにUPしました。

第１０２話　推薦　なんでオレなんかが？

「おはようございます。」
校門のところに服装検査のために立っている長山先生に挨拶して通り過ぎようとした時
「あ、戸田さん、ちょっと・・」
・・え？オレどこか服装にマズイところがあったかな・・・慌てて先生のところに行くと・・・
「戸田さん、ちょっとあなたに用があるから、昼休みお食事が済んだら職員室に来てくれないかしら？」
「・・ぁ・・はぃ・・・」
なんだろう・・・長山先生には三つ編みを習ったり、三吉先生と知り合いだと知ってからは、だいぶ平気になったけど、厳しい先生だからやっぱりちょっと怖い・・・オレに用って何だろう・・・心配だな・・・

「失礼します。」
昼休みになってパンを食べてから職員室に行くと長山先生が待っていた・・・ちょっと遅くなっちゃったかな・・・
「こちらにいらっしゃい。」
「・・はぃ・・・」
なんだろう・・・怒られるんだろうか・・・べつに怒られるようなことした憶えはないけど・・・

「戸田さん、あなた着物の着付けが出来るんでしょう？」
「あ・・はい・・一応三吉先生に習ったので・・・」
「実はあなたにお願いがあるのだけど、学園祭のとき茶道部はお茶

会を開くことになってるのですが、着付けを出来るのが私だけで、とても間に合いそうにないので戸田さんに着付けを手伝っていただけないかと思って。」

「あ・・でも・・嶋田先生にも聞いてみないと・・・」

「嶋田先生にはもう許可はもらっているのよ。」

「え?・・そうなんですか・・・だったら・・お手伝いしてもいいですけど・・・」

「良かった。それじゃお願いしますね。」

「あ・・はい・・・」

顧問の先生どうしで話がついてるんだったら、オレがどうこう言うことじゃない・・・それに華道部は前の日に花を活けて飾るだけみたいだから、たぶん当日はヒマだと思うし・・・なんか生け花のデモンストレーションなんかもやるらしいけど、たぶんそういうのは3年生がやることになるだろうし・・・オレは適当に案内とかしてればいいんだと思う・・・

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

「・・お久しぶりです・・先生・・・」

「おぅ!　久しぶり、ちゃんと宿題してたか?」

「はい・・ちゃんとしましたよ。」

本当は怠けぎみだったんだけど・・歩けなかった間にやっちゃったのだ・・・

「少し難しい問題も入れてたんだけどな、ちゃんと出来てるじゃな

いか。」
「あ・・ところどころ長谷川さんに教えてもらいましたけど・・・」
「長谷川か。長谷川と仲が良いんだな。」
「はい、長谷川さんはクラスは違うけど、わたしと同じ中学だから仲良しなんです。」
“仲良し”って言い方が適当かどうかは微妙だけど・・・いつもイジメられっぱなしだし・・・でもオレは長谷川のことが好きだ。・・イジワルなところ以外は・・・

「夏休みはどこか行ったのか?」
「あ・・旅行とかは行かなかったけど・・・楽しいことは色々ありましたよ。」
「どんなことだ? 楽しかったことって?」
「え・・・それは・・・」
オレが一番楽しかったのは・・・やっぱり純平とのことだけど・・・そんなの恥ずかしくて言えない・・・
「・・ヒミツです・・・」
「なんだよ、真っ赤な顔して。」
「え?!」
オレは慌てて両手でほっぺたを覆った・・・オ・・オレ・・すぐ顔に出ちゃうから・・・

「もしかして彼氏でも出来たのか?」
「ま・まま・・まさか! わわ・わたしに彼氏なんて・・・」
「ハハハ、お前はわかりやすいヤツだな。良いじゃないか隠さなくたって。」
「うぅ・・・はぃ・・・だって・・なんか恥ずかしかったんだもん・・・」
「お前は可愛いヤツだなぁ。」
そう言って先生は小さい子にするようにオレの頭を撫でた・・・う

ぅ・・・先生オレのこと子供だと思ってるのかな・・・オレもう大人なのに・・・そりゃぁ先生より年下だけどさ・・・子供扱いはイヤだ・・・

「・・・先生は？　どこか遊びに行ったんですか？」
「お前なぁ、俺は教師だぞ？　夏休みっていってもお前たち生徒と違って休みなんて無いんだ。研修とか2学期からの準備とか忙しいんだ。」
「・・・そうなんですか・・・奥さんとどっか行ったのかと思った・・・」
「まあ、お盆に実家には戻ったけどな、それくらいだ。」
「へぇ・・・先生の実家ってどこなんですか？」
「長崎の佐世保だよ。」
「させぼ・・・」
オレ長崎は行ったことないからなぁ・・・どんなとこなんだろう・・・
・
「・・なにか名物とかあるんですか？」
「そうだなぁ・・皿うどんとか、ハンバーガーくらいかな。」
「ハンバーガーが？」
ハンバーガーなんて何処にだってあるのにな・・・ヘンなの・・・

「あっ！　お前バカにしてるな？　佐世保バーガーって言って有名なんだぞ！」
「そうなんですか？！」
知らなかった・・・
「店によって色んな種類があって、すごく美味しいんだぞ！」
「へえ～・・・」
なんか・・そう言われると食べてみたくなるなぁ・・・いつか行く機会があったら食べてみたい・・・

「・・あの・・先生・・・共学のこと聞きましたか?」
「ああ、そうらしいな。」
「・・先生は・・・前から知ってたんですか・・・?」
「いや、俺もこのあいだ聞いたばかりだよ。」
「・・・ほんとうですか・・・?　だって・・共学にして・・進学に力入れるために・・先生と高島先生に来てもらったって・・・」
「あぁ・・そのことか。たしかに、これからは進学に力を入れるとは聞いていたけど、共学の話は知らなかったよ。本当だ。」
「・・そうなんですか・・・よかった・・・」
知っててオレに黙ってたワケじゃないんだ・・・もっとも、知ってオレに言わなくても、オレが腹を立てる筋合いはないんだけど・・・

「これからどうなっちゃうのかな・・・」
「どうって?」
「わたし、この学校の校風が好きなんです・・・のんびりしてるし・・勉強よりお料理やお裁縫に力をいれてるとことか・・・せっかく勉強教えてもらってる先生には悪いけんだけど・・・」
「まあな、同じというワケにはいかないだろうな・・・」
「それに・・女の子ばかりで仲良くやってきたのに・・・男の子が入ってくるなんて・・・」
「しかしお前も・・・あっ!・・すまん・・つい・・・」
「・・・いいんです・・・男のわたしがそんなこと言うのヘンですよね・・・」
「いや、そんなことは無いんじゃないかな・・・お前はこの学校の中でも女らしい方だし・・・」
「・・・・・」
・・そうだろうか・・・オレってそんなに女らしいのかな・・・でも・・先生が・・オレのことそんな風に思ってくれてたなんて・・・

「でもな、校風ってものはそう簡単には変わらないと思うぞ。」
「・・・・・」
「何年か先はともかく、少なくとも、お前が卒業するまでに大きく変わることは無いんじゃないか？」
「・・・・・」
・・・そうか・・・オレはなんだかんだ言っても共学になって1年後には卒業しちゃうんだ・・・そう考えるとすごく短い気がする・・・
・
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー
ー　ー
ー

先生と話してたら知らない間に時間がたっていた・・・クラブに行かなきゃいけないのに遅くなっちゃった・・・

「有希！　あんたどうするのよ！」
部室に行く廊下でバッタリ会った長谷川に、手を引っ張られて校舎の裏まで連れてこられた・・・だけどオレには何のことかさっぱりわからなかった・・・
「・・どうするって・・なにが？」
「あんた掲示板見てないの？」
・・・もしや共学のことか？と思ったけど、あのことは学園祭が終ってから発表するって言ってたし・・・
「掲示板？　見てないけど・・・なにかあったの？」
「なにのんきなこと言ってるの！　あんた学園祭クイーンのコンテストにノミネートされてるわよ！」

「え?!」
なにそれ・・・そんなの知らないよ・・・オレは一瞬のうちに血の気が引いた気がした・・・

「・・わ・・わたし・・そんなの立候補してないよ!」
「そりゃあんたは立候補してないでしょうけど、誰かが推薦したんでしょう? わたしは驚かないわよ誰があんたを推薦したって。」
「・・そ・・そんなぁ・・・そんなの困るよ・・・」
だって・・そんなのに出たら目立ちゃうし・・・オレどうしたらいいんだろう・・・
「・・・わたし、取り消してもらってくる! どこに行けばいいのかな?」
「それは無理みたいよ。だって本人の希望は聞けないって書いてあったもの。」
「え?」
「だから、推薦されたら本人がイヤだからって言っても取り消せないんだって。」
「・・・そんなのおかしいよ・・・わたし出たくない・・・恥ずかしいよ・・・どうせクイーンになんてなれないだろうし・・・」

「それはどうかなぁ? だって全校生徒の投票で決まるのよ? あんた人気があるんだからクイーンになれるかも知れないわよ?」
「・・ま・・まさかぁ・・・」
オレがクイーンになんてなれるワケない・・・男なのに・・・
「なに言ってんのよ。あんた人気モデルの“春日ユウ”でしょう?」
「・・・読者モデルよ・・・」
「どうでもいいけど・・・有希はのんきだから気付いてないかも知れないけど、あんた結構な人気なのよ?」
「・・そ・・それほどでもないと思うけど・・・」
なんか長谷川にそんなこと言われると照れちゃうな・・・

「でもさぁ・・・本人が出たくないって言っても聞いてもらえないんだったら・・・どうしようもないじゃない・・・」
「まあね。」
「じゃぁ、なんで長谷川さん・・わたしにどうするの？なんて聞くの？」
「だから歌のことよ。コンテストで歌わなきゃいけないのよ。」
「え？！・・・歌？」
「あんたが歌ってるのなんて聞いたことないけど歌えるの？　もしかして音痴なんじゃない？」
・・オ・・オレ歌なんて歌えないよ・・・だってオレふだんから高めの声出してるから・・・これ以上あんまり高い声出ないもん・・・
「他にもいろいろ女性としてのマナーとかあるみたいだけど、そういうのは有希は大丈夫でしょう？　有希は女らしさにかけては誰にも負けないものね。」
「！・・・そんな言い方やめてよ・・・」
長谷川さんったら相変わらずそんなイジワルな言い方するんだから・・・
「・・そうだ！　ねえ長谷川さん、だったら歌がヘタならクイーンにならなくて済むんじゃない？」
これは良い考えだと思う・・・歌がヘタだって思われるのはちょっと恥ずかしいけど・・・クイーンなんかに選ばれるよりはマシかもしれない・・・
「それもそうね、その方が良いかも知れないわね・・・だってクイーンになったらウエディングドレス着せられちゃうらしいし。」
「・・え？・・ウエディングドレス？！」
「そうよ？」
「・・・そっか・・・クイーンはウエディングドレス着るんだ・・・」

「？・・・あんた・・・もしかして・・ウエディングドレス着たいの？！」
「そそそ・・そんなことないよ！」

「・・・やっぱり着たいんだ。」
「・・うぅっ・・・」
・・長谷川にはウソつけないなぁ・・・
「・・・だって・・・長谷川さんはいつか着ることもあるだろうけど・・・わたし・・・ウエディングドレスなんて・・・たぶん着れないもん・・・」
・・・オレだって女の子になったんだから・・・一度くらいウエディングドレス着てみたいって思ってもバチは当らないと思う・・・だってウエディングドレスって女の子の憧れだって言うし・・・オレも一度くらいは着てみたい・・・

「・・・そっか。有希も女の子なんだもんね。」
「・・・・・」
「それじゃ練習すればいいじゃない。それとも有希、本当に音痴なの？」
「・・音痴じゃないと思うけど・・・高い声が出ない・・・」
「そうか・・有希って少しハスキーなところあるもんね。」
・・・それは元々男なんだから仕方がない・・・声変わりもしてたと思うし・・・もっとも白石先生の話では、オレくらいの年齢ではまだ完全な声変わりじゃないらしいけど・・・オレは女性ホルモンを投与するのが早かったから良かったって・・・そういえばオレはハルカさんたちニューハーフの人みたいな野太い声は出ないけど、それはオレがまだそんなに声変わりしてなかったってことなのかも知れない・・・

「そういえば有希、このまえ聖子ちゃんのコンサート行って感動し

たって言ってたじゃない！　聖子ちゃんの歌うたえば？」
「だ・・だめだよ・・・難しいもん・・・それに結構高いとこあるし・・・」
「だったら何か歌えそうなの探しときなさいよ。」
「・・う・・うん・・・」
・・なんか軽く考えてたけど・・学園祭って大変なんだなぁ・・・
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

「有希お風呂入ってるの？」
「あ、うん・・かあさんお帰り。」
「かあさんも入っていい？」
「うん、いいよ。」
かあさんとお風呂に入るのは久しぶりだ・・・

「有希は？　もう体洗ったの？」
「うん・・もうすぐ出ようかと思ってたとこ・・・」
かあさんは体を流してから湯舟に入ってきた・・・オレは片側に寄って、かあさんが入るスペースを開けた・・・
「かあさん今日は少し早かったね。」
「そうね、このごろ忙しかったからね。」
かあさんは仕事を家に持って帰らない・・・だからオレはかあさんがどんな仕事をしているのか良く知らない・・・
「・・かあさん疲れてるんじゃない？」
「ふふっ、大丈夫よ。やりがいがある仕事だからね・・・それよりごめんね、夕飯いつも有希にまかせっぱなしで・・・」

「ううん！　わたしのことは心配しないで。わたし好きでやってるんだから。出来ない時はデリバリーで我慢してもらってるし・・・でも・・なんか、とうさんも麻衣もデリバリーでも全然平気で張り合いがないくらい・・・」
「ふふふ、有希ったら主婦みたいなこと言ってるわね。」
「！・・そんな・・主婦なんて・・・」
オレまだ高校生なのに・・・そんなに所帯じみたこと言ってるかな・・・

「ねえ、かあさん・・・」
「なに？」
「あのね・・これはまだ本当は言っちゃいけないんだけど・・・ウチの学校・・来年から共学になるんだって・・・」
「あら、ほんとなの？」
「うん・・だって、会長さんと校長と教頭がそろってわたしにそう言ったんだもん。」
「そう、それじゃ間違いないわね・・・」

「それでね、名前も白鴻学園に変わっちゃうし、制服もセーラー服じゃなくなっちゃうの。だからこんど、わたしと千里がモデルになって新しいパンフレットを作るんだって・・・」
「そう・・新しい制服は？」
「わたしと千里の分はもう用意してるんだって・・・なんか準備万端って感じでしょう？」
「有希の時は上手くいかなかったから、今度はしっかり準備したんでしょうね。」
「・・うん・・・たぶんそうだと思う・・・」

「・・でも・・かあさん悲しくない？　かあさんが着てた制服が無くなっちゃうなんて・・・」

「そうね、少し淋しい気もするけど、仕方がないことなのかもね。みんな少しづつ変わっていくのよ。」
「わたしね、かあさんと同じ制服を着れて良かったって思ってるの・・・もしわたしが2つ年下だったら、かあさんと同じ制服は着れなかったんだもんね。」
「有希・・・」
「あっ・・ちょっとかあさん・・・」
オレは急にかあさんに抱きつかれてビックリした・・・

「・・有希は優しい子ね・・・」
「そ・・そんなことないけど・・・」
・・かあさん・・胸が当ってるよ・・・
「かあさん有希のそういうとこ大好きよ・・・昔から優しい子だったけど・・女の子になってもっと優しくなったわね・・・ひとのこと思いやれるようになった・・・」
「・・そ・・そうかな・・・自分じゃ良くわからないけど・・・」
・・ううぅ・・・なんか恥ずかしいな・・・オレはかあさんが身体を離した隙に急いで立ち上がった・・・
「・・もう・・あったまったから出るね・・・」
オレは前を隠すのももどかしく、急いで脱衣所へと出てしまった・・・

オレは早くこの場を離れたくて、急いでタオルで体を拭いた・・・なんか身体が熱い・・・お風呂に浸かっていたから当り前だけど・・・それだけじゃない感じがした・・・

オレが寝巻き変わりのベビードールを着て脱衣所を出ようとすると、お風呂場からかあさんの鼻歌が聞こえてきた・・・なんか楽しそう・・・
“　ふんふふんふん　ふんふふん・・・　”

・・・これ・・・かぁさんが良く歌ってるやつだ・・・なんていう
歌なんだろう・・・

ーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーー

またまた悪い知らせですみません。
網膜剥離が進行してしまい、大学病院で手術することになりました。
こんなこと言うと、みなさんに「パソコンやるのがはやすぎたんだよ！」
と言われそうですが（笑）先生に聞いてみたところ関係ないとのこと。
まあ、仮に一因だったとしても、その程度で剥がれるならいずれ剥がれていたということです。

まだ手術がいつからかはハッキリわかっていませんが、たぶん来週になると思います。
一週間ほど入院する予定です。
無事に手術が済んで退院した後は、３ヶ月経てば再発は普通の人が網膜剥離になるのと
同じレベルになるとのこと。
なので今度は先生がパソコンやっても良いよ、と言っても３ヶ月は書かないことにします！

この話は私にとって大切な作品になっているので、絶対書き上げる

つもりです。
なのでみなさま時々感想とかはげましのお便りなどいただけるとありがたいです（笑）
しばらく経てば画面を眺めることくらいは出来ると思うので。
ここに書きにくかったら
ｈｔｔｐ：／／ｅｍｉｔｈｉｙａｎ．ｂｂｓ．ｆｃ２．ｃｏｍ／
にでも・・・ただし１８禁ですのでご注意を。

それでは、また5月になったらお会いしましょう。
２０１０．１．２２

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

とりあえず2週間の入院を終えて今日帰ってきました。
有希の誕生日に入院して1週間の予定でしたが、再手術で伸びてしまいました。
ですが、まだまだ安静が必要です。

入院中もこの話のことをいろいろ考えて、思いつたことやより具体的になったことなどメモしていました。
すぐにでも書きたいのですが、いまは心を鬼にして静養したいと思います（笑）

絶対に続きを書きますので待っていて下さい。
もしまたお知らせがあればこの１０２話に付け足します。
それでは・・・
２０１０．２．８

第１０３話　歌　かあさんの思い出（前書き）

この１０３話は本来あるべき歌詞がすべて消されています。
でもそれでは申し訳ないので、私のＨＰの「オレは女子高生支援ページ」で見ることが出来るようにしました。
ｈｔｔｐ：／／ｅｍｉｔｈｉｙａｎ．ｈ．ｆｃ２．ｃｏｍ／ｃｏｌｕｍｎ／ｊｙｏｓｉ／０８０６２３－００．ｈｔｍｌ
ただし１８禁サイトの中にあるのでご注意ください。上の方にＨなバナーが出ます。

第１０３話　歌　かあさんの思い出

「有希なに歌うか決めたの？」
弘子と直美と三人で入ったマックで直美に聞かれたけど、オレはまだ学園祭クイーンのコンテストで何を歌うか決めかねていた・・・
「まだ・・はっきりとは決めてないんだけど・・・」
「“はっきりとは”ってことは、なんとなく思ってる曲はあるんじゃない？」
「あ・・うん・・・」
「どんな曲？」
「お母さんが良く歌ってるうたなんだけど・・・なんていう歌か聞きそびれちゃって・・・」
「どんな歌なの？わかるとこあるんだったら歌ってみてよ。」
「え？・・ここで？！」
こんなとこで歌うなんて恥ずかしいなぁ・・・
「ちっさい声でいいから。」
「う・・うん・・・えっとね・・・“乾いた空に続く坂道～”っていう歌なんだけど・・・」
「あ・・なんか聞いたことあるね・・・ずいぶん昔の歌じゃない？」
「・・たぶん・・・だってお母さんが好きな歌だから・・・」

「ねえ有希、もう少しサビの部分とかわからないの？」
それまで黙って聞いていた弘子に言われてオレは先の歌詞を思い出してみた。
「たしか・・・“んんんん～　んんん～”とかじゃなかったかな・・・」
「あ～やっぱり、だったら岡村孝子の『夢をあきらめないで』よ！昔女の子二人で歌ってた人。」
「へぇ～・・弘子良く知ってるね。」

「わたし昭和の歌ってけっこう好きなの。」
・・・郷土史とか古墳とか好きだから・・歌も昔のが好きなのかな・・・？
「たしか昔の曲集めたＣＤに入ってたと思うから。明日持って来てあげる。」
「あっ・・ありがとう、助かる！」
弘子ってやっぱり頼りになる！

「でも、たしかに有希の声に合ってるかも知れないわね。有希の声ってちょっとハスキーなところあるから。」
「う・・うん・・・あんまり高い声出ないの・・・」
・・弘子はオレが男だって知ってるから、こういう時に何気にフォローしてくれるのが嬉しい・・・もともと男だからしようがないけど、女の子になるんだったらもう少しかわいい声が良かったな・・・
すると直美が
「でもそこも有希の魅力だと思うけどね。」
と言ってなぐさめてくれた・・・直美はオレが男だって知らないからなぁ・・・そんなふうになぐさめられると・・嘘ついてるのが・・ちょと切なくなってしまう・・・

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

「ふ～ん・・・それで原口さんにＣＤ借りたんだ。」
「うん。」
「でも原口さんって変わってるわね、昔の歌のＣＤ持ってるなんて。」

「で・・でも・・テレビでも昭和の歌が好きっていうタレントさんとかいるじゃない！」
「まあ、それはそうだけど・・・」

だいたい何で最近、長谷川はウチにしょっちゅう来るんだろう・・・夏休みにオレの足の皮がむけた時に来てから、なんだかよく来るようになってしまった・・・オレの足は治ったし、うまくいってないっていう長谷川のお父さんも大阪に戻っちゃったって言ってたのに・・・

「これ、もう1枚はカラオケになってるじゃない。」
「あ・・うん・・・」
「有希、歌ってみてよ！」
「え？！・・イヤだよ・・・」
「なんで？」
「だって・・・恥ずかしいよ・・・」
「でも練習しなきゃいけないでしょう？」
「そうだけど・・・ひとりで練習するからいいよ・・・」

「何いってるの！あんた全校生徒の前で歌わなきゃいけないのよ？わたしの前で歌うの恥ずかしがっててどうするのよ！」
「うぅっ・・・」
確かにそうだけど・・・そんなこと言われると、オレ本当にみんなの前で歌えるのか心配になってきた・・・
「ほら、歌ってみて。」
そう言って長谷川はカラオケのＣＤをかけて、オレに歌詞カードを渡した・・・
「・・もぅ・・・強引だなぁ・・・」
オレはどうも長谷川の強引さには逆らえない・・・
・・うぅ・・・ドキドキするぅ・・・

オレは恥ずかしさをこらえて必死で歌った・・・

「・・も・・もういいでしょう・・？」

オレは恥ずかしくて、いたたまれなくなり1番だけでやめてしまった・・・

「・・あとは・・ちゃんと練習しとくからさ・・・」

「・・・有希・・音痴じゃないじゃない！」

「？・・わたし・・音痴なんて言ったっけ？」

たぶん長谷川が勝手に音痴だと決めつけてたんだと思う・・・

「でも・・おとなしい感じの歌い方で有希っぽいのは良いんだけど・・もっと感情込めて歌った方が良いんじゃない？　こう・・なんていうか・・綾香みたいにさ！」

「・・あ・・綾香・・？」

・・オレ歌手じゃないから、あんなに感情たっぷりに歌えない・・・

「無理言わないでよ・・わたしあんなに上手くないのに・・・それなのにあんなに上手そうにしたら恥ずかしいよ・・・」

「でも少しは手振りとか入れた方が良いわよ。ただつっ立って歌うだけじゃ変じゃない。」

「・・うぅ・・い・・今はただ歌っただけだから・・・本番はもう少しちゃんとやるよ・・・」

「だったら本番のつもりで歌いなさいよ。ほら、もう一回！」

「えぇ～！　また歌うの・・・？」

結局オレは何度も歌わされるハメになってしまった・・・

まあ、おかげで最後の方は、だいぶ恥ずかしくなくなってきたけど・

・・長谷川の前では・・・

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

次の日の朝、オレが教室に入ると千里が駆け寄ってきた。

「直美に聞いたわよ。有希『夢をあきらめないで』歌うんでしょう？」

「・う・・うん・・・」

「なんか有希らしい！　すっごく似合ってると思うよ。」

「そ・・そうかなぁ・・・」

・・オレはただ・・オレの声でも歌いやすそうだと思って選んだだけなんだけど・・・

「ねえ、今日わたし塾ないから、みんなでカラオケに行こう？　有希の歌聴かせて？」

「えぇっ！！　カ・・カラオケ・・・？」

・・・でも・・・やっぱり練習しておいた方がいいのかな・・・ウチではマイクもないし・・・

「・う・・うん・・・でもクラブの方も準備があるから・・遅くなってお父さんに怒られない・・？」

「大丈夫よ。学園祭の準備で遅くなるからって電話しとくから！」

「・・そう？」

・・・まあ・・これもある意味、学園祭の準備と言えなくもないけど・・・

「じゃぁ、わたしも電話しとこう・・・」

もう入部してから5か月もたつから、ミサトちゃんもお花を活けるのがずいぶん上手になってきてる。
「有希せんぱい、どうですか・・？」
「いいんじゃない？　だいぶさまになるようになってきたね。」
「本当ですか？！」
「うん。それに原色系の花を使うのもミサトちゃんらしいし。」
まだ少し荒いところもあるけど、どうしてもまとめてしまうオレと違って、大胆なところもミサトちゃんの良いところだと思う。そういうところは無理にセオリー通りにやらせるより、自由に伸ばしてあげたい・・・

「せんぱいは学園祭でデモンストレーションやるんでしょう？」
「え？・・わたしはやらないと思うけど・・・そういうのは3年生がやるんじゃない？」
「でも先生が言ってましたよ。2年生に優先的にやらせるって。だってせんぱい達は今年しか学園祭ないんでしょう？」
「・・まあ・・そうだけど・・・」
・・・そっか・・・今の3年生は1年生の時にも学園祭を経験してるんだっけ・・・だからオレたち2年生を優先するってワケか・・・
　でもオレは茶道部の着付けも手伝わなきゃいけないし、学園祭クイーンのこともあるから・・・なんか思ったより忙しくなりそうだなぁ・・・

―――――――――――――――
―――――――――――――――
――――――――――

今日はカラオケでいっぱい歌わされて疲れてしまったから、帰ってお風呂に入ったあとベッドに大の字に横になったら、いつの間にか眠ってしまったようだ・・・夜中2時ごろ目がさめてトイレに起きると、居間に電気がついていた・・・とうさんかな・・・？

「あ、かあさん・・お帰り・・・」
「あぁ有希、ただいま。まだ起きてたの？」
「ううん・・トイレに降りて来ただけ・・・かあさんは？　いまごろ帰ってきたの？！」
「さっきね。今日は取引先との会議とかあったから遅くなっちゃったのよ。」
「・・そうなの・・・」
・・仕事って大変なんだなぁ・・・こんなに遅くなるなんて・・・

「あっ、そうだ・・・かあさんが良く歌ってるのって『夢をあきらめないで』っていう歌なんだね。」
「そうよ。有希、良く知ってるわねぇ。昔の歌なのに。」
「・・うん・・・こんど学園祭でね・・あの歌うたうことになったの・・・」
「へぇ、カラオケ大会でもやるの？」
「・・・う・・うん・・・まあ、そんなところ・・・」
オレはなんだか恥ずかしくて、かあさんには学園祭クイーンのことは言ってなかった・・・

「いつ？　1日目？　2日目？」
「2日目・・」
「2日目だったら日曜日でしょう？　かあさんも応援に行こうかしら。」

「！・・い・・いいよ・・・来なくても・・・忙しいんでしょう？
無理しなくてもいいって・・・」
「でも、かあさんも久しぶりに学校に行ってみたいし、それに今の制服は今年が最後なんでしょう？　見納めに見ておきたいわ。仕事はやりくりすればどうにかなるわよ！」
「・・・・・」
・・そんなふうに言われると、来ちゃダメだなんて言えない・・・
でも、かあさんに学園祭クイーンコンテストに出てるところなんか見られたら・・・オレどうしていいかわからないよぉ・・・それに・・もし優勝しちゃったら・・ウエディングドレスまで着なきゃいけないのにぃ・・・

・・べ・・べつにオレは・・自分が優勝するなんて・・そんなこと思っちゃいないけど・・・でもみんなオレが優勝するに違いないみたいに言うし・・・かあさんにオレのウエディングドレス姿なんか見られたらどうしよう・・・

「有希、実はね『夢をあきらめないで』は・・おとうさんが昔かあさんに贈ってくれた歌なのよ。」
「え?！　とうさんが?」
「そう・・かあさんがまだデザイン事務所に勤めてたころ、仕事で悩んでたときに贈ってくれたの。それで、かあさん今の会社立ち上げることにしたのよ。」
「へぇ〜・・・そうなんだ・・・」
いつも歌ってるあの歌が、かあさんにとってそんなに大切なものだったなんて知らなかった・・・それにしても・・とうさんがそんな気が利いたことするなんて・・・なんだか信じられない・・・

「だからその歌を有希が歌ってくれるなんて、かあさんすごく嬉し

いわ。」
「・・う・・うん・・・」
・・なんか・・・そんな話きいたら・・オレももっと大事に歌わなきゃいけない気がしてきた・・・

―――――――――――――――
―――――――――――――――
――――――――――

ＡＴから

少しづつ書いていたらだいぶ長くなったのでＵＰすることにしました。
なのでまだ“復活”とかそういうのではないです（笑）
また少しづつ書いて貯まったらＵＰします。
目は少しづつ良くなっているようです。
剥離していた部分もボンヤリとですが見えてきました。
すべてが少しづつです・・・
２０１０．３．１４

第１０４話　土曜　パンフレット

土曜日の朝、オレは久留米の駅で千里と待ち合わせた。

千里は今日も塾だったけど休んでくるらしい。学校のパンフレットに娘が載るなんて名誉なことだから、読者モデルをやることには良い顔しなかったお父さんも許可してくれたようだ・・・だいたいお硬い人ってのは名誉とか、そういうのには弱いみたいだし・・・教頭先生から直々に電話で頼まれたとあっては、塾を休むのも簡単に許してくれたみたいだ・・・

駅で落ち合ったオレと千里は、新しい制服ってどんなのだろうとか話しながら学校に向った。

学校に着いて、守衛さんに生徒手帳を見せてから校門を入ると、学校の中は静まりかえっていた・・・いつもなら休みの日だって運動部なんかは出て来てるからグランドの方から声が聞こえてくるのに・・・

「なんかシンとしてるね・・・」

千里がポツリと言った・・・ほんとうに・・静まりかえった学校は、いつもより大きくて、威圧的な感じさえする・・・

実のところ今日は学園祭の準備なんかもあるから、いつもの休みより学校に来たい生徒が多かったから、今日は誰も来ちゃいけないと言われて、みんなは不満タラタラだった・・・だけど共学化のことはまだ秘密だから、みんながいるところで新しい制服を着て撮影するワケにはいかないから仕方がない・・・

「・・失礼します・・・」
校長室に入ると、そこには教頭先生だけがいた・・・
「いやぁ、戸田くん、佐倉くん良く来てくれたねぇ。」
・・なんか・・今日の教頭先生はちょっと偉そう・・・
「・・あの・・校長先生は・・・？」
「あぁ、校長は教育関係の集まりでいないんですよ。今日の撮影はすべて私に一任されてるから、まあ、堅苦しいのはやめて和気あいあいといきましょう。」
「・・は・・はぁ・・・」
・・・まあ、オレも校長よりは教頭の方が気を使わなくていいから良いようなものの・・・教頭先生に一任しちゃって大丈夫なのかなぁ・・・ちょっと心配だ・・・

「撮影は1時間後くらいから始めるから、それまでに家庭科室で新しい制服に着替えてきなさい。家庭科室に松本先生がいるからね。」
「あ、あの・・・」
「なんだい？戸田くん。」
「・・あの・・少しお化粧してもいいですか？　もちろん素肌に見えるくらいの薄いメイクですけど・・・」
「そうだねぇ・・・まあ、良いでしょう。でもはっきり化粧してるように見えるのはダメだからね。」
「はい、わかってます！」

せっかく撮影するのにメイク無しじゃ顔色が悪く写っちゃう・・・高校生だから素顔でも良いようなものだけど、スナップじゃないんだから、やっぱりお肌は整えた方がいいに決まってる！

「でも有希ってすごいね。」

「え？　なにが？」
「だって教頭先生と普通にしゃべってるんだもん。緊張しないの？」
「！」
・・そうか・・千里はオレと教頭先生のカンケイなんて知らないんだもんなぁ・・・
「・・あ・・あの・・教頭先生とは・・読者モデルのこととかで何度か話してるから・・・それに校長先生よりは話しやすいし・・・」
・・だってオレは教頭先生がけっこう軽い人なのも知ってる・・・みんなの前ではしっかりしてそうに見せてるけど・・・

家庭科室に入ると誰もいなかった・・・
「・・松本先生がいるって言ってたのに・・・準備室かな・・・？」
家庭科準備室への扉のノブを回してみると鍵はかかっていなかった。
オレはそっと開けて中をのぞいてみたけど松本先生はいない・・・
他を探してみようとドアを閉めようとしたとき、壁に掛かっているモノが目に入った！
「あっ！制服だ！」
そこにはたぶんオレたちが着るための女子の制服が2着と、おそらく男子用の制服が1着掛かっていた。

新しい制服はシンプルで、わりと良くある感じかも知れないけど、ずっとセーラー服を着てきたオレたちには新鮮だ・・・
ブレザーはカーキー色で胸のポケットの所には校章をデザインしたワッペンが付いている・・・スカートは赤系のチェックのフレアースカート・・・胸元に結ぶらしい赤いリボンが肩から掛けてある・・・近づいて上着をめくってみると、ブラウスが掛かったハンガーの下の部分に、クリーム色の毛糸のベストがふたつ折りにして掛けてあった・・・
「けっこう可愛いじゃない！　ねぇ千里。」

オレたちはお互いに顔を見合わせた。
「千里に似合いそう！」
「有希の方が似合うんじゃない？」

オレは思わずハンガーを降ろして自分の体にあて、片手で袖をつかんで合わせてみた・・・
「どう？」
「うん、似合ってる！」
「千里もあててみて？」
オレはハンガーに掛かったままの制服を千里の体にあててみた・・・
「可愛い！　これどっちがどっち用とかあるのかな？」
まあ、オレと千里はそんなにサイズが違わないから、どっちでも着れそうな感じだけど・・・

「気に入った？新しい制服。」
急に後ろから声がして、ドアの方を見ると松本先生が立っていた。
「あっ、松本先生・・はい！気に入りました！　ねえ千里。」
「うん。」
「そう？それは良かった。あなたたちが気に入ってくれたのなら、他の生徒も気に入ってくれると思うわ。・・・私はもう少しウチの学校の個性があっても良かったかな？って思うんだけど・・・」

まあ、たしかにそんなに個性はないかも知れないけど、ここらへんの学校では同じブレザーでも紺系がほとんどだから、こういうカーキー色ってのは目立ちそうだ。でも目立つのがイヤってコもいるかも知れないなぁ・・・下校中に買い食いなんかしてたら「白鴻の生徒が・・・」って言われちゃいそうだし・・・

でも、目立つ方が逆に不良にならなくて良いかもしれない・・・それに、セーラー服の学校はここらではウチだけだったから、もとも

と目立ってたっていえば、目立ってたからそんなに違わないかも・・・

「それじゃ、二人とも着てみる？」
「はい！」
オレたち二人は夏服のセーラー服から新しいブレザーの制服に着替えるため、準備室の端っこにあるカーテンの仕切りに入った・・・なんか・・こうして千里と着替えてると、二人で読者モデルやってた時を思い出す・・・

オレは汗で湿って脱ぎにくいセーラー服を脱いだ・・・セーラー服の上着って脱ぐときに髪が乱れるから困っちゃう・・・新しい制服になるとこんなこともなくなりそうだ・・・

ブラウスを着てスカートをはいて横のチャックを閉める・・・オレにとっては最初からこの制服でなくて良かった・・・男の子の身体は腰が小さいから、ブラウスにスカートというのは着こなしにくいし、くびれが無いからブラウスがすぐにずり上がってしまうのだ・・・学校って環境は結構大きな動きをすることも多いから余計ずり上がってしまうと思う・・・今ではオレも少しはお尻に脂肪がついて大きくなったし、身体全体が柔らかくなったから、そんなにずり上がることもなくなった・・・

ブラウスの上にカーキー色のジャケットを羽織って、赤いリボンをブラウスの衿に通したものの、リボンの結び方がよく判らなかった・・・
「・・あのぉ・・先生・・・このリボンどうやって結べば良いんですか？」
オレがカーテンから顔をのぞかせて松本先生に聞くと、先生は「結んであげる」とオレに出てくるように言った・・・

「その前にベストを着てね。今の時期には暑いでしょうけど、パンフを配るのは秋以降だから。」
「あっ・・そっか・・・」
オレは急いでジャケットを脱ぐと、ブラウスの上にクリーム色のVネックのベストを着た。
先生はオレの胸元にリボンを結びながら言った・・・
「でも、戸田さんのこんな姿見ると感慨深いわね・・・」
「えっ・・・?」
「だって初めて会った時はおと・・」
「!!」
オレは慌てて“シー”と言うように唇に人指しゆび当てて黙らせてから先生の耳元で小さな声で言った・・・
「・・カーテンの向こうに千里が・・・」
すると先生はハッとして“ごめん”と顔の前で手を合わせた。・・
松本先生ったら・・・千里にオレが男だってバレたらどうするんだよ・・・ビックリしちゃった・・・
千里は一番の親友だと思ってるけど、もしオレが男だと知っても、弘子みたいにオレを受け入れてくれるかどうかなんてわからない・・・たぶんそうはいかないだろう・・・弘子の場合は特別なんだと思う・・・

着替えが終ってから千里に軽くお化粧をしてあげた・・・その後オレも自分のお化粧をしていると千里が言った・・・
「有希、またお化粧上手くなったんじゃない?」
「・・そ・・そうかなぁ・・・」
オレは自分では良くわからなかった・・・まあ、ときどき二光さんに習ってるから・・上手くなってても不思議じゃないけど・・・
「・・そ・・そんなに見ないでよ・・・恥ずかしいじゃない・・・」

お化粧をしてるところを人に見られると、なんだか気はずかしい・・・千里だけならまだしも松本先生まで興味深げに見てるからなおさらだ・・・だって先生にはオレがお化粧してるところなんて見せたことないし、それに先生はオレが本当は男だって知ってるんだからよけい恥ずかしい・・・

先生は時計を見て言った。

「そろそろ男の子のモデルさんが来る頃だから見てくるわ。あなたたちはここで待ってて。」

「え?男の子も一緒に撮影するんですか?」

「そうよ。だって共学になるからパンフレットを新しくするんでしょう?」

「・・・そういわれてみれば・・・そうか・・・」

オレは久しぶりに千里と二人で撮影できると楽しみにしてたんだけど、知らない男の子が一緒じゃ緊張しちゃうな・・・

「ねえ有希、男の子ってどんなコかな?」

「・・うん・・・」

壁に掛かってる制服がその人が着るものだとすると、そんなに大きな男の子じゃなさそうだ・・・だってブレザーもオレたちのとそんなに大きさが変わらないくらいだし・・・

「カッコいいモデルさんだといいね。」

「・・・プロのモデルさんなのかなぁ?」

「そうじゃない?だって先生もモデルさんって言ってたし。」

「そっか・・そうよね・・・」

でもプロのモデルさんとじゃ・・釣り合わないんじゃないだろうか・・・オレたち雑誌に出てたって言ってもただの読者モデルだし・・・

準備室に戻ってきた松本先生が連れてきた人を見てオレは驚いた・・・

「・・て・・鉄平くん・・・？！」

純平と同じジノンボーイの古池鉄平〈ふるいけ　てっぺい〉だ！

「久しぶりユウちゃん！」

「え・・お・・男の子のモデルさんって・・・鉄平くんなの・・？」

「うん、そうだよ。」

ビックリだ・・・まさか鉄平くんが来るなんて・・・

でも千里はもっと驚いたみたいだ・・・何しろ千里は鉄平くんに会ったこともないし・・・オレと鉄平くんが会ったことあるのも知らないんだから・・・

「え・・？・・有希・・鉄平くんと知り合いなの・・？」

「・・あ・・あの・・前に一度会ったことがあって・・・ＪＩＮＯＮの編集部で・・・」

オレはとっさにウソをついた・・・だって仮面レンジャーショーの話になったら、長谷川のこととか、純平のこととか面倒な話になりそうだ・・・

「・・あの時・・千里いなかったっけ・・・？」

オレは何とか話を合わせてもらおうと、鉄平くんに目くばせした・・・純平とオレのこと・・・秘密だって知ってるのかな・・・

「たしかあのとき編集部にいたの、ユウちゃんだけだったと思うよ。」

鉄平くんが話を合わせてくれてホッとした・・・

「佐々木編集長に学校から男の子役のモデルがいないかって相談があったらしいよ。それで僕がくることになったんだ。」

・・・そこいらの男の子じゃなく鉄平くんに頼むなんて・・・どうやらウチの学校の共学化もかなり本気らしい・・・オレの時とはえ

らい違いだ・・・

後でこっそり鉄平くんはオレに耳打ちしてくれた・・・
「本当は純平の方が良かったかも知れないけど、純平はドラマが佳境に入って忙しそうだからね。」
それはオレも知っている・・・ドラマの撮影って結構ギリギリのスケジュールでやってるらしい。
「それに僕の方が新入生っぽいでしょう？　なにしろ僕は中学生役だって出来るからね。」
そう言って鉄平くんは笑った・・・確かに鉄平くんは実際の歳より幼く見えるから1年生の役でもやれそうだ・・・本当はオレより年上だけど・・・

制服に着替えた鉄平くんは屈託ない笑顔で・・本当に新入生みたいだった・・・

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー
ー　ー
ー

「それじゃ始めましょうか。」
三脚にカメラを取り付けたカメラマンが、校門の前に立ったオレたち三人に指示を始めた・・・カメラマンといってもＪＩＮＯＮの撮影をしてくれてる進藤さんとはずいぶん違う・・・カメラマンというよりは“写真屋さん”って感じだ・・・たぶん卒業アルバムなんかを作るとこの人なんじゃないだろうか？

雑誌の撮影に馴れてるオレたちには、なんだか勝手が違う・・・でも雑誌の時と違って、オレたちもテンション上げたり、無理にはじける必要もないからすぐに馴れてきた。

やっぱり夏に冬服での撮影は大変だ・・・しょっちゅう汗を押さえなきゃいけない・・・千里は自分でやってるけど、鉄平くんの汗はオレが拭いてあげなきゃいけない・・・今日はメイクさんなんかいないから・・・

雑誌の撮影も季節を先取りするのは同じだけど、ほとんどスタジオでの撮影でロケはあまりない。あったとしてもメイクさんやヘアアレンジの人がいるからいいけど、今日はカメラマンと助手の人ふたりだけだ・・・助手の人もひとりで露出計ったり、レフ板を持ったりと忙しそうだ・・・

教頭先生の指示のもと、オレたちは各特別教室をまわっては、ウチの学校の特徴なんかを紹介する写真を撮っていった。

時々“そういえば受験の前にもらった学校案内のパンフレットにもこんな写真があったっけ・・・”なんて思うと懐かしくもあり、なんだか不思議な気持ちにもなる・・・あの時はまさか、オレが女の子になるなんて思ってもみなかった・・・

「ユウちゃん今日は三つ編みじゃないんだね。」

撮影の合間に鉄平くんに言われた・・・そういえば前に鉄平くんに会った時はゆるく三つ編みしてたっけ・・・もしかしたら純平に送ったセーラー服のオレの写メを見たのかもしれない・・・

「・・今は髪の毛が長いコは校則で三つ編みにしなきゃいけないから、いつもは私も三つ編みんですけど・・・新年度から少し校則も

ゆるくなって、腰より上なら三つ編みにしなくて良くなるんです。
だから・・そういうのもアピールする意味で今日は三つ編みじゃないんです。」

なんか鉄平くんにまじまじ見つめられると照れちゃうな・・・
「三つ編みのユウちゃんも可愛かったけど、こういう髪型も清楚な感じで良いね。」
「そんな・・・」
・・オレの髪型なんか気にしてくれるなんて・・・鉄平くんって優しいな・・・

「そういえばユウちゃんって、本名はユウキっていうんだね。」
「・・あ・・はぃ・・・なんか・・男の子みたいでしょう・・・？」
「そんなことないよ。ユウちゃんの凛とした感じに合ってて良いんじゃない？」
「・・・そ・・そうかなぁ・・・・」
・・なんかすごく嬉しい・・・だってオレ・・有希って名前好きだから・・・それを鉄平くんに褒めてもらえるなんて・・・

「ユウちゃんは好きじゃないの？」
「ううん、好きよ。　有希って名前、わたしのお父さんとお母さんの名前からひとつづつ字をもらったものなの・・兄妹で両方からもらったのはわたしだけだから・・小さいころから自慢だった・・・兄さんと妹に悪いから心の中で思ってただけだけど・・・」
「ユウちゃんって優しいんだね。」
「・・そんなことないです・・小さいころは妹とケンカばっかりしてたし・・・」

ほんとうに・・・まだ男の子のころのオレは、妹の麻衣とケンカばかりしていた・・・なにかにつけ麻衣のことが気に入らなかった

のだ・・・今になって考えると・・・もしかしたら、オレは自分が女の子でいられないのに、麻衣は女の子でいられることが妬ましかったんじゃないだろうか・・・

そんなふうに思うようになったのは、ごく最近のことだ・・・オレはやっぱり小さい頃から女の子になりたかったのかも知れない・・・

―――――――――――――――

―――――――――――――――

――――――――――

　撮影は午後2時ごろに終った。あとは校舎とかの外観などを大きな写真機で撮影するらしい。

　鉄平くんはもう帰ってしまった。もう少し一緒にいたかったし、純平のことなんかも聞きたかったけど、鉄平くんも忙しそうだし、千里が一緒じゃ純平のことも聞けない・・・

「鉄平くんって、案外気さくな人ね。」

「・・うん・・・」

「それに優しいし、わたしちょっとファンになっちゃった。」

・・ほんとうに鉄平くんは優しいと思う・・・純平だって優しい・・・

・

・・もしも・・オレが男の子のままだったとして・・・オレはあんなふうに優しく出来るだろうか・・・絶対に無理だと思う・・・

「でも、有希ってほんとすごいね。」

「え?・・なんで?」

「だってさ、教頭先生とも普通にしゃべってるし、鉄平くんとも仲良さそうにお話してたじゃない。有希いつのまにか大人っぽくなってビックリした。」
「・・そ・・そんなことないよ・・・まだまだ子供だもん・・・」
オレなんて・・まだまだだ・・・
「ううん、有希大人になった。鉄平くんのとなりに座ってるところなんて、まるで恋人どうしみたいだったわよ。」
「な・・なにいってるの！わたしそんなんじゃないもん！！」
オレが好きなのは純平だ！　鉄平くんは純平の友達なんだもん・・・
「有希なにムキになってるの？　ただそんなふうに見えたってだけじゃない。」
「・・あ・・そっか・・ごめん・・・」
・・・オレ・・それでも・・鉄平くんとそんなふうに見えたなんてイヤだ・・・オレの恋人は純平だけなんだ・・・

！・・・オレ・・・なんてこと考えてるんだ・・・純平のこと・・・
オレの恋人だなんて・・・オレたちまだ友達どうしでいようって決めたのに（９６話参照）・・・

「そういえば、着替えのとき松本先生となに話してたの？」
「え？」
「初めて会ったときは・・・“おー”・・とか何とかって言ってたじゃない。感慨深いとか何とか・・・」
「！！」
・・千里・・・聞こえてたんだ・・・なんとか誤魔化さないと・・・
「・・あ・・あの・・えっと・・ム・・ムネの話・・かな・・・」
「ムネ？」
「・・う・うん・・・わたしのムネが“おー”きくなったって・・・
そんなでもないのにね・・・前が小さかっただけで・・・」

「そういうことだったの？　確かに有希大きくなったもんね。入学した頃はわたしより小さかったのに、今はわたしより大きくなっちゃって・・・」

・・・実際には・・入学したころはまだオレには女の子みたいな胸は無かった・・・男の子の胸に厚めのヌーブラを貼り付け、それでもAカップに足りなくてパッドが入ったブラをしていたのだ・・・それが今じゃ女性ホルモンやタマを取った影響かCカップになってしまい、Bカップの千里の胸より大きくなってしまった・・・

「・・ご・・ごめん・・・」

「有希が謝ることないじゃない？」

「・・ま・・まあ・・そうだけど・・・」

・・でも・・ホルモンで大きくなったなんて・・・なんだかズルしてるような気がする・・・

「有希ったらいつも相手のこと気づかってるよね・・ほんと優しいんだから。」

「！・・そ・・そんなことないよ・・・」

・・・オレは優しくなんかない・・・ただ女の子になろうとしてるだけ・・・だって女の子は優しい方がいいと思うし・・・でも・・オレなんてまだまだだ・・・

「わたし有希がうらやましいって思うことあるよ。」

「え？　千里が？」

・・千里がオレをうらやましいなんて・・・千里の方がずっと可愛いのに・・・そりゃぁ胸はオレのほうが少し大きいかもしれないけど・・・

「有希って素直だし、みんなに好かれてるじゃない。」

「・・・・・」

「わたしも有希みたいに素直になれたらなって・・・」

「・・・・・」

・・・オレってそんなに素直だろうか・・・そんなことないと思う・・・

・・・オレはぜんぜん素直じゃない・・・

―　―　―　―　―　―　―　―　―　―　―　―

―　―　―　―　―　―　―　―　―　―　―

―　―　―　―　―　―　―　―　―　―

―　―　―　―　―　―　―　―　―

―　―　―　―　―　―　―　―

―　―　―　―　―　―　―

―　―　―　―　―　―

―　―　―　―　―

―　―　―　―

―　―　―

―　―

―

補足：この世界の古池鉄平〈ふるいけ　てっぺい〉は現実世界の似た人ほどの有名人ではありません（笑）ＪＩＮＯＮ読者か、仮面レンジャーのファンなら知ってるという程度でしょうか。

第１０４話　土曜　パンフレット（後書き）

支援ページに新しい制服のイメージをＵＰしています。
支援ページはこちら　ｈｔｔｐ：／／ｅｍｉｔｈｉｙａｎ．ｈ．ｆｃ２．ｃｏｍ／ｃｏｌｕｍｎ／ｊｙｏｓｉ／０８０６２３－００．ｈｔｍｌ

なお支援ページは１８禁サイトの中にあります。
上の方にＨなバナーが出ますのでお気をつけください。

第１０５話　学園祭　１日目・学園祭の朝

“ふぁ～・・・”
「有希またあくび？」
「・・だって眠いんだもん・・・」
「眠いのはわたしも一緒よ。昨日一緒に帰ったんだから。」
「そりゃそうだけど・・・」
「女の子が大あくびなんかしてたら恥ずかしいわよ。あんたお淑やかなのが取り柄なんじゃないの？」
・・またそんな言い方・・・長谷川ってどうしてこうケンのある言い方するんだろう・・・
「・・いいじゃない・・まだ電車の中ガラガラなんだから・・・」
今日はいつもより早く学校へ向っている・・・

オレたちは昨日の放課後から夜まで学園祭の準備に追われていた・・なにしろ活け花は日持ちがしないから、他のクラブみたいに何日も前から準備できなくて思ったより大変だった。だから昨日は９時までかかってお花を活けていたのだ・・・まあ、おかげで良い感じに出来たと思う。

ミサトちゃんのヤツなんか意外に良い出来でみんな驚いたくらいだ。芯に針金を差し込んで円にしたアンスリウムを２つ合わせて、まるでミッキーの耳みたいで可愛いかった。大胆さと原色の色使いがミサトちゃんらしくていい。先生にも褒められてて、教育係のオレとしてもすごく嬉しかった。

それから帰って遅い夕飯を食べて、お風呂に入ったり髪を乾かしたりしてたら寝るのは１時になってしまった・・・それで今日はまた残りの準備のために５時に起きたのだから眠くないハズがない・・

・

「それ？　三吉先生に貰ったっていう着物。」
「うん、そう。」
・・中学の卒業の時にもらった・・・三吉先生が若いときに着ていたという可愛い桜色の着物・・・先生もそのまた先生からもらった物だそうだ・・・
オレが着物を持ってるってことで、オレだけ活け花のデモンストレーションを着物でやることになってしまった・・・だからこの前の日曜日に三吉先生のとこから持ってきたのだ・・・
「有希の着物姿見るのって初めてだね。浴衣は見たことあるけど。」
「・・・・・」
「なんか楽しみだな。」
「・・べつに・・長谷川さんを楽しませるために着るんじゃないよ・・・」
「わかってるわよ。み～んなに見せるためでしょう？」
「・・うぅ・・・そんなこと言われると・・なんか恥ずかしくなってくるじゃない・・・」
ホントに長谷川ってイジワルなんだから・・・オレがそんなこと言われるの苦手なのわかってるくせに・・・

「歌の練習はした？」
「ううん・・・お風呂でちょっと歌ってみただけ・・・」
「ダメじゃない、ちゃんと練習しないと！」
「・・コンテストは明日なんだから・・いいじゃない・・・」
・・なんか近づいてくると、やっぱりオレなんかが学園祭クイーンのコンテストに出ちゃいけないんじゃないかと思えてくる・・・もともとは花嫁さんコンテストなのに・・・だから優勝した人はウエディングドレス着るんだし・・・ほんとうは男のオレが出ていいよ

うなコンテストじゃないんだ・・・

でも・・コンテストは他薦だけで、辞退することも許されてないんだから、どうしようもない・・・先生はみんなオレが男だって知ってるんだから、本当は辞退させたいんじゃないかと思うんだけど、この決まりのせいでどうすることも出来ない・・・

なんでそんな決まりなのかと思ったら、白鴻がお嬢様学校だった昔は自ら立候補する人なんかいなかったし、推薦されてもみんな恥ずかしがって辞退してしまうからなのだそうだ・・・オレにとっては迷惑な決まりを作ってくれたものだ・・・こんな決まりがなきゃ、すぐに辞退してたと思う・・・

だけど・・出るんだったら優勝したい・・・だって優勝しないとウエディングドレス着れないし・・・

オレだってせっかく女の子になったんだから・・・一生に一度くらいはウエディングドレスを着てみたい・・・この前、優勝者が着るウエディングドレスを見せてもらったけど、真っ白でビーズや刺繍がすっごくキレイでほんとに素敵だった・・・これをオレが着るかも知れないと思うとドキドキしたものだ・・・

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー
ー　ー
ー

学校に着くとオレたちは直接、華道部の展示をしている教室に向った・・・オレや長谷川の教室は他のクラブが使ってるからだ。

教室の半分がオレたち華道部のスペース・・・壁を大きな和風の布で隠して、その前に並べた机の上もキレイに布で覆い、その上に活けた花を並べた。床にはデモンストレーション用の畳を2枚敷いている。

ほとんどの作業は昨日終っているから、今朝はしおれた花がないか確認するのと、途中で時間がなくなった照明を調節する作業だけだ。

でもオレはのんびりしてもいられない・・・1年生に始まる前にやっておくことの指示を出して、後は先輩や長谷川たちに任せてオレは茶道部に向った・・・なんか自分のクラブをほったらかしにするようで心苦しいけど・・・オレは茶道部の顧問の長山先生に、茶道部のみんなの着物の着付けを手伝ってほしいと頼まれているのだから・・・華道部の顧問の嶋田先生もに了解済みなのだから仕方がない・・・

「・・失礼します・・・」

茶道部の部室に入ると、もう長山先生が着付けを始めていた・・・

「あぁ、戸田さん待ってましたよ。ちょっと帯持ってくださる?」

「あっ・・はい!」

オレは急いで駆け寄ると、先生がやっている着付けを手伝いはじめた・・・茶道部は華道部と違って人数が多いから大変だ・・・

着物は簡単な物で旅館の仲居さんが着るようなヤツだ・・・着付けもそんなに難しくないから、オレと先生とでドンドン片付けていった。

「戸田さん、クラブが違うのに手伝ってくれて有難う。」

部長さんにそんなふうに言われると、なんか照れくさい・・・先生に頼まれて手伝ってるだけだし・・・

「ううん、全然大丈夫、気にしないで。」

「明日のコンテストわたしたち全員、絶対戸田さんに投票するから頑張ってね！」

「・・う・・うん・・ありがとう・・・」

なんだかおおごとになってきたなぁ・・・やっぱりコンテストなんてオレには荷が重い・・・でもみんな応援してくれてるから頑張らなきゃ・・・

「春日さんに着付けてもらうなんて感激です！」

1年生にそう言われてドキッとした・・・このコたちにとってオレはやっぱり読者モデルの“春日ユウ”の印象が強いのかも知れない・・・でも学校では面と向ってこの名前で呼ばれることはほとんど無いから、いきなり言われるとビックリしてしまう・・・

「・・べつに、大した事じゃないから・・・」

そう言っても、まだ見つめられるとオレの方が困惑してしまう・・・みんなオレのこと良いように考え過ぎじゃないのだろうか・・・読者モデルなんて全然たいしたもんじゃないのに・・・オレは下級生に憧れてもらえるような、そんなステキな女の子じゃない・・・もし、そんなふうになれたら嬉しいことだけど・・・

茶道部の全員の着付けが終ると、長山先生がオレに言った。

「戸田さんもお着物に着替えるんでしょう?」

「あ、はい・・・」

「だったら手伝ってあげましょうか?」

「・・えっと・・でも・・・」

「遠慮しなくて良いですよ。自分で着付け出来るといっても、手伝ってもらった方が楽でしょう?」

「はい・・それは・・そうですけど・・・」
「だったらお着物を持ってきなさい。手伝ってあげるわ。それに御髪〈おぐし〉も整えなければいけないでしょう?」
「・・はぃ・・それじゃお願いします。」

オレは急いで着物を持って戻ってきた。先生はタトウ紙（着物を包むための紙）を開いて着物を手に取るとオレに言った。
「良い着物ねえ。」
「あ、この着物・・三吉先生に頂いたものなんです。先生が若い頃に着ていたって・・・」
「あら、そうだったの・・・それなら私も見たことがあるかも知れないわね。」

本当は着物を着る時は下着をつけないものだけど、オレの場合そうもいかない・・・オレは着物を着る時にはいつも腰と股のところにレースを使って線が出ないようになった、お尻を包み込むようなタイプのショーツをはくことにしている・・・

でも先生の前でショーツ一枚になるのはさすがに恥ずかしい・・・オレは急いで襦袢をつけた・・・

先生に手伝ってもらって着物を着て、髪の毛も結ってもらった。三つ編みをほどいて梳かしてから後ろをアップにして結い上げる・・・
「戸田さんは綺麗な首をしているから、こうやって結い上げるのも似合うわ。」
「!・・そんな・・・」
「着物や日本髪は首が長くて綺麗な人ほど似合うんですよ。戸田さんはスタイルも良いから・・・ほら、どうかしら?」
・・鏡に映っているオレは、まるでオレじゃないみたい・・・前に

撮影で振り袖を着たときにも思ったけど、オレは着物を着るといつもより女度が上がるみたいだ・・・

「やはりあなたは着物を着馴れてるだけあって、こうしてただ立っている姿も佇まいが違いますね。」

「・・？・・そうでしょうか・・・？」

オレには良くわからない・・・ただ普通に立ってるだけなのに・・・

「足の閉じ方や肩の落し方でわかるんですよ。それに袖や裾のさばき方もしっかり出来てるわ。」

「・・そ・・そうですか？・・・ありがとうございます。」

なんかそういうふうに言われると、オレに女の子としてのたしなみを躾けてくれた三吉先生に感謝しなきゃいけないなと思う・・・もちろんいつも感謝はしてる、だけど・・・オレは三吉先生にはどれだけ感謝しても足りない気がするのだ・・・

「もうすぐ時間ですよ。あなたのクラブに戻った方がいいわ。タトウ紙はここに置いておきなさい。」

「はい、それじゃ戻ります。」

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー

ー　ー

ー

茶道部が使っている教室を出ると、オレは華道部の教室とは反対の方向に向った・・・実は着物姿を保健室にいる白石先生にも見てもらいたかったのだ。

ところが保健室の近くまで来た時に、面倒な人に見つかってしま

った・・・
「おや、戸田君じゃないか！　どうしたんだねその恰好は。」
「あ・・教頭せんせい・・・」
「一瞬だれかと思ったよ！　でもすぐに戸田君だとわかりましたよ、こんな美人は我が校には君しかいないからねぇ。君は着物も似合うんですねぇ。」
・・そこまで言うと・・お世辞にしてもヒドすぎる・・・
「あの・・華道部のデモンストレーションで・・着物で活けるんです・・・」
「なるほど、それはいいですねぇ。そうだ！　ぜひ着物姿を校長先生にも見て頂きなさい！」
「え?!」
・・・そんなぁ・・白石先生に見てほしかったのに・・・時間なくなっちゃうよ・・・
・・でも・・教頭先生に言われては仕方がない・・・オレたちは保健室を素通りして校長室へ向った・・・
「校長先生！　どうです、素晴しいでしょう?」
「おお！　誰かと思ったら戸田君じゃないか。どうしたんだね、そんな恰好をして。」
「戸田君はこの着物姿で活け花をいけるそうですよ。」
「それは私も見てみたいものだが、校長がウロウロすることも出来ないからな。そうだ石渡君、君がビデオで録画しておいてくれたまえよ。」
「そうですね！そうしましょう！」

え?!・・・なんでそんなことに・・・?
「そういえば戸田君、先日はパンフレットの撮影ご苦労だったね。」
「あ、はい・・・」
「さっそく見せてもらったが、なかなか良い写真だったよ。あの・・

何と言ったかね、あの男の子は・・・」
「あ、古池鉄平くん・・」
「そうそう、彼もなかなか良かったよ。新入生という感じが良く出ていた。」
・・・本当は鉄平くんの方が年上なんだけどな・・・でも確かに新入生っぽかったけど・・・
「君たちのおかげで、今回は無事に共学化出来そうだよ。」
「・・い・・いえ・・そんな・・・」

・・しかし、そういうことオレに言うかなぁ・・・この人たちオレを女の子にしたこと、いったいどう思ってるんだろう・・・まあ、いつのまにかオレが好き好んで女の子になったみたいになってるけど・・・

オレは今の自分の恰好を思いだして溜息をついた・・・こんな恰好をしていては文句を言える筋合いではない・・・今のオレはまるで女の子なのだから・・・

「戸田君は明日のクイーンコンテストにも出るそうだね。」
「あ・・はぃ・・・」
「我々もぜひ君に投票しよう。なあ教頭!」
「そうですね、我々教師の票は生徒１０人分ですからね。」
「・・・・・」
・・なんで二人とも・・こんなにノリノリなんだろう・・・オレのこと男だって知ってるのに・・

その時、始まりを知らせるチャイムが鳴った。
「お、もう時間だ。戸田君もはやく戻りなさい。」
「・・あ・・は・・はい・・・」

・・・なんだよもう・・・保健室に行く時間がなくなっちゃった・・
・白石先生、見に来てくれるかなぁ・・・

第１０６話　学園祭　１日目・花より団子？

「有希おそい！　どこ行ってたのよ、もう始まってるのに！」
「ご・・ごめん・・ちょっとね・・・」
・・校長と教頭が相手じゃしょうがない・・・着物だから階段昇るのに手間取っちゃった・・・

「うわぁ！　有希先輩ステキです！」
「ぁ・・ありがとうミサトちゃん・・・」
「先輩ってなに着ても似合うから羨ましいです。」
「・・そ・・そんなことないって・・・着物はお茶の教室で着てるからさ。いつも着てると自然に着こなせるようになるのよ。」
オレだって女の子の服を着こなすのは、けっこう必死なのだ。何でも似合うなんて冗談じゃない・・・

「有希、見てよ！　あれ筑富〈ちくとみ〉工業の生徒じゃない？」
長谷川が窓から下を見ながら言った。筑富工業高校っていえば、この近所では不良が多いので有名な男子校だ・・・筑富の生徒なんて、本来なら守衛さんに止められて白鴻の敷地内に入ることさえ出来ないハズだけど・・・今日は学園祭だから誰でも入ることが出来る・・・だからやって来たのだろうか・・・
「・・筑富かぁ・・・」
ガクランなんて今どき珍しいほど分りやすい不良スタイル・・・あんな恰好して恥ずかしくないのが不思議だ・・・
「筑富ってイヤだねぇ。前の学園祭の時も騒いで大変だったのよ！」
３年生の先輩が言った・・・そういえば先輩たちは１年生の時に学園祭を経験してるんだ・・・
「戸田さん気をつけなさいよ！　アイツら可愛いコ見るとすぐちょっかい出すんだから。」

「・・うぅ・・はぃ・・気をつけます・・・」

・・オレ男なのに、ちょっかい出されちゃかなわないよ・・・だけど、ああいう人たちはお花なんて興味がないだろうから、ウチのクラブには来ないんじゃないかな・・・？

・・でも・・やっぱりウチの学校の中に男子がいるのは、どうも違和感がある・・・・思えばオレが初めてこの学校に来た時も詰襟の学生服だったから・・ずいぶん違和感があったんじゃないだろうか・・・（４話参照）

もっとも、そんなオレに違和感をもった生徒がいたとしても、あの時の男の子が今のオレだとわかる人はいないだろう・・・知っているのは校長と教頭と、採寸をしてくれた松本先生くらいのものだ・・・

でも来年から共学化すれば、ウチの学校にも普通に男の子がいるようになるのだと思うと、なんかすごくヘンな感じだ・・・しばらく馴れそうにない・・・

みんなはまだ共学化のことを知らないから良いだろうけど・・・共学化のことを知ってるオレとしては、なんとも複雑な気分だ・・・オレは本心では、男子なんかにウチの学校に入って来てほしくない・・・これまで女の子ばかりで仲良くやってきたのに、男子が入ってきたら、そんな雰囲気がぶち壊しになってしまいそうな気がする・・・千里も同じ気持ちじゃないのかな・・・

――

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

「・・なんか・・人が集まってきたね・・・」

3年生の部長がお花を活けだすと、急に生徒たちが集まってきた・・・

「みんなそんなに活け花に興味があるのかなぁ？」

それほど人気のクラブじゃないと思ってたけど・・・

「何いってるの？　みんなあんたの番を待ってるに決まってるじゃない！」

「え？・・まさかぁ・・・」

そりゃぁ、セーラー服より着物の方が雰囲気はいいだろうけど・・・

そんなに着物で活けるのが見たいかな・・・まあ、わざわざ着物きた甲斐はあるけど・・・

先輩が活けるのが終ると拍手がおきた。オレたちも一緒に拍手した・・・やっぱり部長さんは上手だ・・・繊細なところが良いと思う・・・オレもそういうとこ見習わなきゃ・・・

次はオレの番・・・本当はもう少し後の予定だったんだけど、ずっと着物でいるのもどうかと思って早くしてもらったのだ。オレだって校庭で出してるお店に行ってクレープとか食べたいし・・・それには着物じゃヘンだし、大事な着物を汚しちゃったら大変だ・・・

オレが畳に座るとスゴイ拍手がおこってビックリした・・・そんな期待するようなもんじゃないんだけどな・・・

“　ふぅ・・・”

・・オレは深呼吸をして気持ちを落ちつけた・・・みんなが見てる

ところで活けるのは、ちょっと緊張するけど、こういう時こそ平常心が大切だ・・・いつも三吉先生に言われてること・・・

着物で活けるのは初めてだけど、お茶の時と気をつけるところはそんなに変わらない・・・華道は活けた花も良くないといけないけど活ける姿勢も大事だ・・・葉っぱをむしる動作も、ハサミで茎を切る動作も、剣山に刺す動作も・・・どれひとつ疎かにはできない・・・

でも、わかっていても実際にやるのは簡単じゃない。ハサミで切ったり、剣山に刺したりするのは、けっこう力がいるから・・・オレは元々は男だから、普通の女の子より力は強いハズだけど、それでも涼しい顔をして力を入れて剣山に刺すのは案外むずかしい・・・

オレは平盆にピンクのスカシ百合を中心に、ナデシコやキキョウなど秋の花でまとめてみた。出来上がって、みんなの方に正面を向けると一瞬、静まりかえった・・・

（・・うっ・・・良くなかったかな・・・けっこう良い出来だと思ったんだけどなぁ・・・）

そう思った時、やっと大きな拍手が沸きおこって、オレもホッとした・・・だって、オレのせいで華道部の評判が落ちたら困っちゃうもん・・・着物まで着てそんなことになったらカッコ悪くてたまったもんじゃない・・・

見学のみんなにお辞儀をして、オレの番は終った・・・

「・・ふぅ・・・緊張した・・・」

「でも有希すごく良かったよ。なんか新たな一面を見たって感じ！」

「・・そ・・そう・・？」

長谷川にそんなこと言われると嬉しいけど、なんだか恥ずかしくな

ってくる・・・

「有希がこんなに女らしくなるなんてねぇ・・・」
「・・な・・なによ・・ヘンなこと言わないでよ・・・」
「いいえ、すごく女らしかったですよ。」
「うわっ！・・・井川さん・・居たの・・・？」
井川さんって存在感が薄いっていうか・・・いつのまにか居るんだよなぁ・・・

「わたしは戸田さんは昔から女の子らしい人だと思ってたけど、この頃は大人っぽさも出て来た感じで・・・」
「・・そ・・そう？・・・ありがとう・・・」
・・昔のオレは男の子だったんだけどな・・・まあ、井川さんは知らないから仕方がないけど・・・
「・・でも・・それって、たぶん着物のせいじゃない？」
「違いますよ！　夏休み明けたら戸田さん急に大人っぽくなってて驚いたから・・・夏休みに何かあったんじゃないですか？」
「！！！」
オレは観覧車の中での純平とのキスを思い出して顔が熱くなった・・・真っ赤になってなきゃいいけど・・・

「有希ったら何で耳まっかにしてるのよ。そんなに恥ずかしがるようなことなんか無いくせに！」
長谷川はオレが男だって知ってるから、オレが男の子と何かあるなんて思いもしないのだろう・・・オレだってまさか、あんな事になるなんて思いもしなかった・・・
「・・な・・何もないよ・・・足の皮が剥けただけ・・・それだけよ・・・」
・・長谷川にはキスのことは知られたくない・・・長谷川はオレが男の子を好きだと思ってるから、オレと純平がキスしたと知っても

何とも思わないかも知れない・・・でもオレはイヤなのだ・・・

オレは女の子になろうとしてるけど、決してオカマやニューハーフではない・・・オレは男の子なら誰とでも付き合いたいワケではなく、純平は特別なのだ。　オレは純平が良いヤツだから好きなのだ！

だけどこんな気持ち・・他の人はわかってくれない気がする・・・たとえ仲良しの長谷川でも・・・

「戸田さんはいる？」
「あ・・嶋田先生・・・」
「戸田さん、ちょっといいかしら？」
「あ、はい。もうわたしの番は終ったので・・・」
・・何だろう・・・

「戸田さんは着物でお茶たてるの得意なの？」
「・・得意っていうか・・ときどき時間がある時にやらせていただくくらいですけど・・・なんでですか？」
「今さっき長山先生に会ったんだけど、茶道部のみんな着物は初めてだから、お作法がうまく出来ないらしいの。だから戸田さんに着物でのお作法を見せてもらえないかって。」
「え！」
・・でもそうかも知れないな・・・初めて着物きてお茶をたてるのは、袖のさばき方とかむずかしいかも・・・
「戸田さんがやりたくないなら先生からお断りしておくけど・・・」
「・・い・・いえ・・いいです、やります！・・茶道部に行けばいいんですよね？」
嶋田先生だって、長山先生に断るなんてイヤに決まってる・・・オ

レがやれば済むことなら・・・

「・・あのぉ・・部長さん・・・」
「あっ！戸田さん来てくれたの？」
「・・はぃ・・でも・・本当にわたしなんかがやっていいんですか？・・茶道部でもないのに・・・」
「いいに決まってるじゃない！　戸田さんなら大歓迎よ！」
「・・そ・・そうなの・・？」
「みんな着物なんて着たことないから、どうやっていいかわからないのよ。」
「わたしも、どれくらい出来るかわからないけど・・・何しろ門前の小僧だし・・・」
「もんぜんの・・小僧？」
「あっ・・いいの・・気にしないで・・・」
とにかく三吉先生が、ちゃんと出来てるって言ってくれたことを信じてやるしかないや・・・

「長山先生、戸田さんが来てくれました。」
「戸田さんごめんなさいね、そちらも忙しかったんじゃない？」
「いえ・・まあ・・わたしの番は終りましたから・・・」
「そう？　それじゃぁ早速みなさんにお手本を見せてくれる？」
「・・お・・お手本なんて・・・わたしちゃんと習ったこともないんですよ？！」
だって門前の小僧だもん・・・
「大丈夫、三吉さんもしっかり出来てるって言ってたわよ。」
「！・・そ・・そうですか・・・？」
三吉先生がオレのことそんなふうに言ってくれてたなんて・・・嬉しいけど・・でも、そんなこと聞いたら、よけい緊張してきた・・・だって、オレがちゃんと出来ないと三吉先生に恥をかかせることに

なっちゃいそうだ・・・
ううぅ・・・緊張する・・・みんなオレが出来ると思ってるのに・
・・もし失敗したらどうしよう・・・

・・・そうだ・・たしか三吉先生が言ってた・・・緊張するのは
自分を良く見せようとして、実力以上の力を見せようとするからだ
って・・・これまでやってきたことを、ただそのままやればいいん
だって・・・

・・三吉先生は間違ったことなんて言わない・・・出来てないの
に出来てるなんて言うハズない・・・オレはいつもやってる通りに
やれば良いんだ・・・それが平常心ってことじゃないだろうか・・・
？

ーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーー

「戸田さん、お疲れさま。みなさん感心してたわよ。」
「・・そうですか？・・だったら良かった・・・」
「まだまだ荒削りな所もあるけど、姿勢も良かったし、毅然とした
所が良かったですよ。もちろんお味も。」
「・・あ・・ありがとうございます。」
なんか日頃厳しい長山先生に褒められると、すごく嬉しい。
それに三吉先生に恥をかかせなくて済んだようでホッとした・・・

あとはオレたちのクラブに戻って、制服に着替えてクレープを食べに行くだけだ！
さっきからクレープを焼くいい匂いが漂ってきて、お茶をたててる時もお腹が鳴りそうで内心、心配していたのだ。・・・
・・・でも焼ソバもいいし・・お好み焼きも捨て難い・・・たしか直美が、バレー部は“広島風お好み焼き”のお店を出すって言ってたもんなぁ・・・オレ“広島風”って食べたことないし・・・あぁ・・お腹空いて、ついつい早足になってしまう・・・

「おい！あいつなんや？！着物やら着とうぜ！」
急に野太い大きな声がして、オレは思わず振り向いた・・・ち・筑富〈ちくとみ〉のヤツらだ！！
「おっ？こいつなかなか美人やなかや？！」
「あっ・・や・・やめてください・・」
オレはつかまれた腕を振り払おうとしたが、工業高校の男子の力は強くてビクともしなかった・・・

「俺らに付き合ってくれんや？よかろうもん。」
「・・や・やめて・・放してください・・・」
いくら力を入れても引きずられるばかり・・・オレはなんとか、その手から逃れようと、もう片方の手を振り回したら、男の一人に当ってしまった・・・
「何や、俺たちが悪もんみたいやなかか！　気取っとうっちゃなかゾ！」
急に男が凄んでオレの着物の衿をわしづかみにして引っ張った・・・
「キャッ、イヤ！！」
はだけて胸が・・・いや・・それ以前に着物が痛んじゃう！

まわりのみんなの“先生を呼んで”とか“警備のおじさんを”とか言ってる声が聞こえる・・・でも女の子たちにはどうすることも出来ないで遠巻きにしてるだけだ・・・

オレは怖くてたまらなかった・・・男のころだって、たぶんこんな不良にはかなわないのに・・・今は女の子なんだ・・・かなうハズがない・・・オレどうしたら・・・

「ちょっとアンタたち！先輩イヤがってるじゃない！手を離しなさいよ！！」

え？！　小さな女の子がいきなりオレと不良の間に入ってきた・・・

オレは一瞬なにが起こったのかわからなかった・・・

「・・ミ・・ミサトちゃん・・・？」

オレはいつの間にかミサトちゃんの後ろにいた・・・

「アンタたち女の子にこんなことして良いと思ってるの？！」

「なんや？このチビ！」

男がまたオレに手を出そうとするのをミサトちゃんが必死に防いでくれている・・・

「・・ミ・・ミサトちゃん・・・危ないよ・・」

「大丈夫です先輩、あたしこういう人には馴れてるんです！」

・・そんなこと言っても・・・相手は不良なのに・・・怖くないの・・・？

「コラ！　お前たち何してるんだ！」

やっと警備のおじさんが来てくれて、不良たちは悪態をつきながらも退散していった・・・

「有希先輩、大丈夫ですか？」
「・・う・・うん・・・」
・・恐怖でドキドキしてるけど、なんとか平気を装った・・・でもまだ手がぷるぷる震えてて、ぜんぜん平気そうには見えないだろう・・・声も震えてるし・・・
「・・あ・・ありがとう・・ミサトちゃん・・・怖くなかった・・？」
「いえ、あたしは大丈夫です。あんな不良なんてヤマの男には全然かなわないんですから。」
・・山笠の男の人が・・どんなに強いか知らないけど・・・ミサトちゃんは女の子なのに・・・
「・・でも・・ミサトちゃん女の子なんだから・・やっぱり危ないわ・・・」
「あたし、有希先輩と違って昔から男の子みたいって言われてましたから。」
「・・・・・」
・・そりゃぁ・・昔はそうかも知れないけど・・・
「女の子らしい有希先輩はあたしの憧れなんです。またあんなヤツらが来たら、あたしが先輩を守ってあげます！」
「・・・・・」
・・うっ・・・そう言ってくれるのは嬉しいケド・・・元男だったオレとしてはフクザツな気分・・・女の子に守ってもらうなんて・・・
「・・あ・・でも・・ミサトちゃん・・なんでここに・・？」
「先輩を呼びに来たんです。そしたらあの人たちに絡まれてたから。」
「わ・・わたしを呼びに？」
「はい！　有希先輩にもう一度活けてほしいって、教頭先生が。」

「・・・教頭先生が？」
・・なんでまた・・・教頭先生が・・・？
「教頭先生、先輩が活けるところをビデオで録画しようと思ってたのに忘れちゃったみたいです。」
「それで・・もう一回活けろって？」
「はい。」
・・・オレが朝活けたとき教頭先生もいたハズなのに・・・ぁ・・・あっ・・・校長先生と約束してたヤツだ・・・何で忘れるかなぁ・・・もうっ・・・しょうがないなぁ・・・・・でも・・・・拍子抜けしたせいか震えが止まっちゃった・・・
「それじゃ仕方ないね・・・あ〜ぁ・・・もう着物脱いでクレープ食べに行こうと思ってたのに・・・」
「あ！　それだったらあたしが買ってきてあげますよ！」
「ホント？！」
「はい。トッピングは何がいいですか？　イチゴの生クリームとか？」
「うん！　それでいい。ホントにいいの？　買ってきてもらって・・・？」
「はい、じゃぁ先輩はクラブの方に戻っててください。先輩が活け終るころには持って行きますから。」
「ありがとう！ミサトちゃん！！」
オレは嬉しくって思わずミサトちゃんを抱きしめていた。
・・あぁ・・・なんていいコなんだろう・・・ミサトちゃんって・・・オレが男だったら絶対ミサトちゃんみたいなコと付き合うんだけどなぁ！

―――

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

「やぁ・・戸田くん、すみませんねぇ。もう一回活けてもらうなんて。」

「・・い・・いえ・・教頭先生の頼みなら・・・」

オレは校長と教頭の助けがなければ学園生活を送っていけない・・・だから教頭の頼みなら聞かないワケにはいかないのだ・・・

「いやね、君の活けてる姿を見てたら、ついカメラを回すのを忘れてしまってね・・・このままでは校長に顔向け出来ないからね、私の頼みを聞いてくれてホント助かりましたよ。」

「・・そ・・そんな・・・」

大袈裟だなぁ・・・お花活けるくらい何でもないのに・・・

とはいえ、残ったお花が少なかったから、さっきオレが活けたヤツをバラしてやり直すことにした・・・でも、同じのをもう一度活けても面白くないし・・・違う活け方するには茎を切っちゃってるから長さが足りない・・・

見るとけっこうハデな花があまっている・・・そうだ・・オレがミサトちゃんなら・・・って感じで活けてみようかな？　そう思うとなんか楽しくなってきた・・・！

ミサトちゃんならどう活けるだろう・・・難しくて誰も使わなかったインコアナナス・・・これを中心にしよう！

チラッと横目で見たら、今度は教頭先生もちゃんと写してるみたいだ・・・いつの間にか、また大勢みんなが見物に集まってる・・・

“ふぅ・・”それじゃ始めようかな・・・

オレは姿勢を正して、みんなに向ってお辞儀をした・・・

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――

「ありがとうミサトちゃん！　おいしい！」
ミサトちゃんが買ってきてくれたクレープはまだあったかくて、冷たいイチゴと生クリームと相まってすっごくおいしかった。着替える時間がもったいなくて、着物だけ脱いで襦袢のままだ・・・ちょっとはしたないけど、食欲には勝てない・・・
「あはは、先輩っていつもは女らしいのに、時々男の子みたいな顔しますよねっ！　そんなところも可愛いんですけど。」
「・・ミ・・ミサトちゃん・・・」
「あっ・・ごめんなさい・・先輩にこんなこと言っちゃって・・・」
「ううん・・いいんだけど・・・」
・・だって・・オレほんとは男なんだもん・・・

「そうよね、有希にはそういうところもなくちゃね！」
そう言って長谷川がオレのほっぺたをつっつく・・・
「さっきの活けた花も男前なカンジで大胆で良かったわよ。」
「・・・・・」
「あたし感激しました！　あれってあたしにお手本を見せてくれたんですよね！」
「・・ま・・まあ・・そういうワケでもないんだけど・・・もしわたしがミサトちゃんだったら、どんなふうに活けるかなって思って・・」

「そうか・・女らしい有希が男の子っぽい気持ちで活けたんだ？」
「・・・・・」
長谷川のヤツ・・・ミサトちゃんがいるから言い返せないと思って・・言いたい放題だ・・・オレただでさえ言い返せないのに・・・

「ミサトちゃ～ん？いる～？」
先輩の呼ぶ声が・・・
「あ、は～い！」
「ちょっと手伝って～」
「は～い！」

ミサトちゃんが先輩に呼ばれていなくなると長谷川が言った・・・
「そういえば有希、筑富のヤツらに絡まれたんだって？」
「え？　もう知ってるの？！」
「知ってるわよ、たぶんもう学校中に広まってるんじゃない？」
「え？・・まさかぁ・・・」
「ほんとよ、あんたの噂なんかアッという間に広まるんだから！」
「・・そ・・そんなぁ・・・」
・・なんでだろう・・オレ恥ずかしいよ・・・

「でもミサトちゃんに助けてもらうなんて情けないわねぇ・・・あんた元は男なんでしょう？」
「！・・だ・・だってさ・・・わたし着物きてたんだよ？　そんな恰好じゃ動けないからケンカなんて出来ないじゃない・・・それに女の子が不良とケンカなんて・・・」
・・まあ・・本当は着物じゃなくたって、男のころだって不良とケンカなんかしたら、ぜったい負けちゃっただろうけど・・・
「・・それに大事な着物なのに・・・もし破けたりしたら・・・」

オレとしては何とか言い訳するしかない・・・

「それもそうか、有希が不良とケンカなんてピンとこないわね。」

「・・そ・・そうよ・・・」

・・なんか・・また長谷川にバカにされちゃったみたいだ・・・いくら今は女の子だといっても、やっぱり男が男に絡まれて、何もできないなんて情けないよなぁ・・・でも本当に怖かったんだもん・・

・

・・仕方ないよ・・・オレ女の子なんだから・・・

第１０７話　学園祭　１日目・素敵な先輩

３階のすみっこの教室・・開けっ放しの戸からのぞいてみたけど、教室の中はガランとしてた・・・
「あ、有希きてくれたんだ。」
「・・うん・・他の人は・・？」
「ここはわたしだけで十分だから、みんなは出払ってるの。ごらんの通りお客さんもいないし・・郷土史なんて興味あるコ少ないからね。」
「・・そんなこと・・ないと思うけど・・・」
「何いってるのよ、有希だってそんなに興味ないんでしょう？」
「・・う・・うん・・まあ・・・ゴメン・・・」
「有希が謝ることないの！興味なんて人それぞれなんだから。」
「・・うん・・・」
・・そりゃそうだけど・・・弘子が好きなものだから共有したい気持ちはある・・・

・・たしかにオレは郷土史にはあまり興味がない・・・ほとんどの女の子は興味ないんじゃないだろうか？・・・こういうのは、どちらかといえば男の子のほうが興味があると思う・・・
「・・でもさ・・来年になれば入部する人も増えるかも知れないじゃない。」
「どうして？」
「・・あっ！」
そうだ・・まだ弘子は共学化の話・・知らないんだった・・・
「ううん！・・何でもない・・・」

「・・有希、何か隠してるんじゃない？」
「え？！」

「だって、このところあんまりしゃべらないし。」
「・・そ・・そうだっけ・・・？」
「そういえば千里もちょっとヘンなのよね・・・」
・・うっ・・・弘子スルドイなぁ・・・そっか・・千里もヘンなのか・・・まあ無理もないけど・・・千里だって共学化はショックだったハズだし・・・おまけに秘密にしなきゃいけないなんて・・・

あたりを見回してみたけど、オレたち以外には誰もいないみたいだし・・・弘子は口が堅いから言っちゃおうかな・・・
「・・あ・・あのね・・実は・・・」
「有希、言わなくていいよ。秘密なんでしょう？」
「・・あ・・うん・・まあ・・・」
「だったらいいわよ。」
「・・う・・うん・・・ありがとう・・・」
・・うっ・・やっぱり弘子って優しい・・・
「・・も・・もう少し待ってて・・そしたらわかるから・・・」
「そう？」
学園祭が終れば、校長先生から共学化のことが発表されるハズだ・・・発表されたらみんな大騒ぎになるんじゃないだろうか・・・

「あっ！　ここ夏休みに行ったとこだよね。」
「そうそう。石人山古墳〈せきじんさんこふん〉よ。有希よく憶えてたね。」
「・・だって・・わたしが見たのココだけだもん・・・あの時はごめんね・・わたしのせいで2つしか行けなかったもんね・・・」
「ふふっ・・有希って相変わらず気にしいよね。そんなに終ったこと気にしなくていいのに。」
「だってさ・・これのために古墳めぐりしてたんでしょう？」
「まあ、そうだけどね。でも古墳はずっと同じだから、急ぐ必要も

ないし。」

・・言われてみればそうか・・・千年以上そのままなんだもんね・・

・

「有希は古墳にロマン感じない？」

「え？　ロマン・・・？」

正直・・オレはあまり感じないなぁ・・・

「こういうのはね、ただ見える物だけを見るんじゃないの。この後ろに広がってる永い歴史を感じるのが大事なのよ。」

「・・れきし・・・」

・・たぶん弘子の頭の中には、オレには想像も出来ないような世界が広がってるんじゃないだろうか・・・オレの頭の中なんてオシャレと純平のことでイッパイいっぱいなのに・・・

　オレはこの学校に入って、間近で女の子を見てて思ったんだけど・・・女の子って案外現実的だ。

男のころは女の子ってロマンチックなことが好きだから、さぞかしロマンチックなこと考えてるんだろうと思ってたけど、実際は男の子の方がずっとロマンチックな気がする。

　女の子のロマンチックは恋愛関係に限られているみたいなのだ。

最近は歴女なんていう歴史好きの女の子達もいるみたいだけど、ほとんどの人はゲームやドラマのキャラクターで想像してるにすぎない気がする・・・

　そういえば、前にとうさんが言ってた・・・女の子はコレクションをしないんだって・・・例えばお菓子で動物のオマケが付いたやつなんか、男ならまず個々の好き嫌いは別にして全種類集めようとするけど、女の子は好きなヤツしか集めないそうだ・・・べつに好

きでもない虫とかトカゲとかのフィギュアには見向きもしないらしい・・・たしかにオレのまわりの女の子たちも、可愛い物とか、好きな物にしか興味がない・・・

その点、男は何でも集めたがる・・・とうさんが言うには、コレクションというのはロマンなんだそうだ・・・ただ集めた物だけが大事なんじゃなくて、集めたことで見えてくるバックグラウンドが大事なんだって・・・そういうのを想像するのは男は得意なんだけど、女は苦手なんだそうだ・・・

それが本当なら、弘子って意外に男っぽいところがあるのかも知れない・・・だって太古の歴史にロマンを感じるなんて女の子にしては珍しい・・・何かのキャラクターに影響されてるって感じでもないし・・・

でも・・オレはどうなんだろう・・・考えてみればオレは何かをコレクションしたことなんか無いし・・・それなのにキてぃちゃんの物なんかはついつい買って集めてしまう・・・だって可愛いんだもん・・・無条件に欲しくなっちゃう・・・

オレってやっぱりもともと女っぽいのかなぁ・・・

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

「あ、いたいた！」

「？　直美・・千里も・・・」

「有希のとこ行ったらいなかったから、弘子も一緒に探してもらおうと思ったんだけど、有希も来てたんだね。」
「どうしたの直美？　何か用事？」
「用事ってほどでもないんだけど、有希も一緒に見てまわらないかと思って。それに有希、広島風お好み焼き食べたがってたじゃない。もう食べた？」
「ううん・・まだ食べてない・・・なんか朝からバタバタしてたから・・・クレープは食べたんだけど・・・」

「そういえば有希、男の子に絡まれたんでしょう？　大丈夫だった？」
そう直美が言うと、弘子が驚いた・・・
「え？！　それどういうこと？」
そっか・・弘子はずっとココにいたから知らなかったんだな・・・ていうか・・長谷川が言った通りだ・・もうみんな知ってる・・・なんでオレの噂ってすぐに広まるんだろう・・・
「・・男の子っていうか不良よ・・・わたしがね・・着物なんか着てたからじゃないかと思うんだけど・・筑富〈ちくとみ〉工業の不良に絡まれちゃって・・・」
「・・それでどうしたの？」
「・・・ミサトちゃんが助けてくれた・・・」
「ミサトちゃんって・・あのちっちゃいコ？」
「そうそう、ミサトちゃんって体は小さいんだけど、不良にも全然負けてないの・・・小さい頃から山笠なんかやってたから、意外に男勝りなとこあるみたい・・・」
「背は高いけど女らしい有希とは正反対だね。」
・・うぅ・・・オレは本当の男だったのになぁ・・・でも・・直美にそんなこと言われても今のオレの有様では反論もできないし・・・そもそも反論するのもおかしい・・・

「最近有希ってほんとに女らしくなってきたもんね。昔は時々男の子みたいなとこあったけど。」
・・ち・・千里まで・・・
「千里なに言ってるの？　有希は昔から女の子らしかったじゃない。」
「まあ・・直美に比べればね・・」
・・え?!・・オレって直美にも男の子っぽさで負けてたってこと?・・・たしかに直美は大雑把なところがあるけど・・・

今となってはもうどうでもいいことかも知れないけど・・・なんか複雑な気分だ・・・

「でも有希って奥ゆかしいよね。着物だったから絡まれたなんて、絡まれたのは有希が可愛いからに決まってるのに。」
「・・そ・・そんなことないって・・・」
直美のヤツ・・オレのこと可愛い可愛いって言い過ぎだ・・・恥ずかしくて身体が熱くなってきた・・・
「有希がまた男の子に絡まれちゃいけないから、わたしたちが一緒にまわってあげようって探してたのよ。」
「そ・・それは・・どうも・・・」
・・たしかに・・オレもひとりで歩きまわるのはちょっと不安だったから、弘子のところに来たんだけど・・・
「でも、弘子がいなくなるとココに誰もいなくなっちゃうから・・1年生が帰って来るまで待ってようよ?」
どうせなら弘子も一緒に4人で見てまわりたい。広島風お好み焼きだって4人で食べた方が美味しいと思うし・・・
「そうね、じゃ少し待ってようか。」

「そういえばさ・・・」

誰もお客さんのいない郷土史研究部の展示スペースのすみっこでイスに座って話していると、直美が急に小声になって話だした・・・
「わたしたちの教室がある2階のトイレ、今工事中じゃない?」
「うん・・・」
「あそこの中のぞいたコが言ってたらしいんだけど・・・半分を男子トイレに作り変えてるんだって!」
「ほんと?」
弘子は言ったけど、事情を知ってるオレと千里は黙って顔を見合わせただけだった・・・
「何で男子トイレなんか作ってると思う?」
直子の問いにオレも千里も何と言っていいかわからないでいると、弘子が・・・
「それは共学化に向けてでしょう。」と事もなげに言った・・・

!・・オレは驚いて“何で知ってるの?”と口から出そうになって、慌てて言葉を飲み込んだ・・・
「共学化の話なんて聞いてないわよ?」と直美が言うと・・・
「わたしだって聞いてないけど、そう考えるのが合理的じゃない?わたしたちの時だって・・本当は共学になるはずだったんだから・・・ただ・・・男子の受験者がいなかっただけで・・・」
オレに気を使ったのか、弘子は何度か言葉を詰まらせた・・・

するとそれまで黙っていた千里が・・・
「あ、でも男子で受験したコもいたわよ? 受験のとき学生服着たコがひとりいたもの。」
!・・・まさか千里が男のころのオレを見ていたのか?・・オレの他にも受験した男子がいるなら別だけど・・そんな話は知らないし・・・もちろん千里もそれがオレだとは気づいてないんだろうけど・・・
「へ〜そうなんだ・・・知らなかった。 でもそのコも他の学校に

受かったのかな？　もし落ちてたら女の子の中にひとりでいなきゃいけないなんて悲惨よね。」
「まさかぁ、共学じゃなくなったんだから男の子が入学するわけないでしょう？」
・・・直美と千里の会話を聞いてたら気分が悪くなってきた・・・
動悸が早くなって汗が噴き出す・・・

・・！・・・その時、弘子がそっとオレの手を握った・・・弘子の“大丈夫だよ”って気持ちが伝わってくる・・・・・　オレは今ほど、弘子がオレを男だと知ってて良かったと思ったことはない・・・もし弘子が勇気づけてくれなかったらオレは緊張しすぎて気絶していたかも知れない・・・

「でもさ、共学化も良いかもね。」
「え？！」
直美がそう言ったから、オレは思わず大きな声を出してしまった・・・
・
「なに？　有希はイヤなの？」
「・・う・・うん・・・だって・・・男の子なんか入ってきたら・・・ウチのほのぼのした校風も変わっちゃうかも・・・」
・・・オレ・・なんてこと言ってるんだろう・・・弘子に・・自分も男なのにって思われてるかも・・・
「でも共学になったら有希の好みの男の子も入ってくるかも知れないじゃない！」
「・・そ・・そんなのいいよ・・・それに・・そんなカッコイイ男の子なんてここいらには・・いないじゃない・・・」
・・それに・・オレには純平がいる・・・
「まあ、それもそうだね。」

・・・でも、ほんとうは・・オレが共学化がイヤなのは・・・男の

子もたくさんいる中で・・自分だけ女の子でいることに平気でいれるかどうかわからないからだ・・・学年が違うから、あまり話すこともないとは思うけど・・・もしクラブに男の子が入ってきたりしたら・・オレどうすりゃいいんだよ・・・もっとも華道部には男の子なんか入って来ないだろうけど・・・

それにしても、みんなはそれほど共学化に反対じゃないようで驚いた・・・オレはてっきりみんな共学化なんて嫌がるものだとばかり思ってたのに・・・

でも考えてみたら、そもそもオレたち2年生は共学化を知ってて受験したんだし、3年生もオレたちの受験のとき共学になると思ってたんだろうから、共学化を発表してもオレが思ったような騒ぎにはならないのかも知れない・・・ただ2年間時期がズレてしまっただけで・・・

イヤがってるのはオレだけなのかな・・・

――――――――――――――
――――――――――――――
――――――――――

「原口先輩、戻りました！」

50分ほど過ぎた頃、やっと郷土史研究部の1年生2人が帰ってきた・・・ちなみに郷土史研究部には3年生がいない・・・弘子が入部した時、2年生がいなかったからだ・・・もし弘子が入部してなかったら、廃部になっていたのかも知れない・・・今年は2人も入

部して顧問の先生も喜んでいたそうだ。

オレがいる華道部もそんなに人気ないけど、郷土史研究部と比べるとだいぶマシだ・・・それに今年はなんだか入部希望者が多かったし・・・長谷川はオレがいるからだなんて言ってるけど、本当のところはどうだか・・・・

「!!ユウちゃ・・戸田さんもいらしてたんですか?!」
「あっ・・ごめんね、違うクラブなのにマッタリしちゃって・・・」
「そ、そんな!戸田さんなら大歓迎ですぅ!」
「・・・・・」
・・・オレなら歓迎って・・・誰なら歓迎しないんだろう・・・

「わたしたちちょっと出てくるから、あなたたちで留守番できる?」
「あ、はい・・・」
「まあ、そんなにお客さんも来ないと思うけど、もし誰か来たら案内してあげて。」
「はい、わかりました・・・」
先輩の弘子に返事をしたのはいいけど、なんか言いたそうにモジモジしてる・・・

「どうしたの2人とも?」
「・・・・・」
なんか2人で押しつけ合って、なかなか言い出そうとしない・・・
「何なの?はっきり言ってよ。」
「・・あ・・あのぉ・・・写真撮ってもらっていいですか・・・?」
「え?!　写真?　わたしがあなたたちを?」
「・・あ・・えっと・・戸田さんと・・・」
え?!オレ?
「あんたたちねぇ、有希にそういうのはダメって言ってるでしょう

？」
「・・そ・・そうですよね・・・」
・・なんか怒られてる・・・オレのせい・・？　オレはかまわないんだけどなぁ・・・

「ねえ、わたしと写真撮りたいってこと？　わたしはべつにいいけど・・・？」
「有希、一回ＯＫしちゃって、みんなと撮らなきゃいけなくなったらどうするの？」
「・・・でも・・弘子の後輩なんだし・・・今日は学園祭だから良いんじゃない？」
「・・あんたたち誰にも言わない？」
「はい！」
「みんなに自慢しちゃダメよ？」
「はい！！」
「有希、一緒に撮ってあげてくれる？」
「うん、いいよ。わたしなんかでいいんなら。」

オレは弘子の後輩と一緒に写真を撮ってあげた・・・
「・・でも、なんでわたしなんかと撮りたいの？」
「！・・そんな・・わたしたちユ・・戸田さんのこと尊敬してるんです！」
「尊敬？！」
「い・・いつもＪＩＮＯＮ見てます！」
・・あぁ・・・読者モデルの“春日ユウ”のことか・・・
「尊敬するなら読者モデルのわたしなんかより、蟹原さんとか本物のモデルの方が良いのに。」
「い・・いぇ・・・戸田さんが良いんです！」
・・・ふふっ・・ほっぺ赤くしちゃって可愛い！・・・たぶんこのコたちはモデルさんのような雲の上の存在よりも、オレみたいにど

こにでもいるようなコの方がいいのかも知れない・・・そんなオレが読者モデルなんかやってるから親しみを感じてるんだろう・・・きっとそうだ・・・

「あ・・戸田さん・・明日のクイーンコンテスト応援してます！絶対優勝してくださいね！」

「・・う・・うん・・・ありがとう・・・」

・・なんか・・みんなに応援されてるな・・・オレ・・・

「みんな楽しみにしてるんですよ、戸田先輩のウエディングドレス姿！」

「・・・・・！」

・・べ・・べつに・・みんなに見せたいワケじゃないんだけどなぁ・・・

「さっきのコたち可愛かったね、ほっぺた真っ赤にしちゃって。よっぽど有希のこと好きなのね。」

「・・千里ぉ・・そんなんじゃないわよ・・わたしじゃなくて“春日ユウ”が好きなのよ・・・」

「有希、あのコたち何で郷土史研究部に入ったか知ってる？」

・・弘子ったらおかしなこと聞くなぁ・・・

「・・・それは郷土史研究に興味があるからでしょう？」

「違うわよ、わたしが有希と友達だってどこかで聞いたからよ。」

「え？！・・まさかぁ・・・」

「ほんとよ。だってあのコたちそんなに郷土史に興味ないもの。まあ、わたしも利用させてもらったんだけど・・・だって今年入部者がいなかったらわたし一人になっちゃうから・・・」

・・・利用？・・弘子が・・オレを？

「・・・わたしと友達なのが何かに利用出来るんだったら・・べつにかまわないけど・・・」
「ありがとう有希、あのコたち今頃きっと大はしゃぎしてるわよ。」
・・・そうだろうか・・・そんなことないと思うけど・・・

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

バレー部が出してるお店に行っていると、まだだいぶ遠いのにソースのいい匂いが漂ってきた！
「あぁ・・美味しそうな匂い！　でもさ、なんで広島風なのかな？」
「バレー部の大森先輩の家が広島風お好み焼き屋さんやってるのよ。お父さんが広島の人なんだって。」
「へぇ・・そうなんだ・・・」
「だからお店と同じ味らしいわよ。」
・・それは楽しみだなぁ・・・

「先輩！来ましたよ」
「直ちゃん！え？戸田さんも来てくれたの？」
・・直ちゃん・・・？　直美のヤツ親しいのかなぁ・・・

さすがにバレー部の人だけあって背が高い・・１８５？・・いやそれ以上ありそうだ・・・オレもこの学校の女の子の中では背が高い方だけど・・そんなオレでもまったくかなわない・・・
「戸田さんは？具は何にする？」
「あ・・えっと・・・」
いろいろあって・・どれも食べてみたいけど・・・どれにしよう・・

オレこういうのなかなかひとつに決められないんだよなぁ・・・

そんなオレの気持ちを察してくれたのか千里が助けてくれた。

「有希、いろいろ食べたいんならミックスにしたら？」

「あ、そっか・・じゃぁミックスで。」

「戸田さんが食べてくれるんなら気合い入れて作らなきゃね！」

大森先輩はクレープみたいに薄く伸ばした生地の上に山盛りのキャベツを乗せた・・・そんなに？・・いくら何でも乗せすぎじゃないだろうか・・・？

お肉・・エビ・・麺・・そんなのを横で別に焼いて、その上にタマゴを落してから、キャベツの乗った生地を器用にその上にひっくり返してグイグイ押さえつける・・・そしてキャベツがしなったところで半分に折ってパックに入れてから、ソースを塗って、青のりとカツオブシをふって出来上がりだ！

「わぁ！　美味しそう！」

・・もう我慢できない！

オレたちは急いで屋上に行って、４人で食べることにした。本当は屋上には入れないんだけど、弘子が鍵を預かってるから入れる・・・あそこなら誰もいないからゆっくり食べれそうだ・・・

「あっ！　あれユウちゃんじゃない？！」

「どこどこ？・・あ！ほんとだ！！」

声に振り返ると、いつの間にかオレたちはたくさんの女の子たちに囲まれていた・・・

「ユウちゃん！わたしたちと写真撮って！」

制服じゃないところを見ると、他の高校のコたちのようだ・・・

「ど・・どうしよう・・・」

2人か3人なら写真撮るのなんて全然いいけど、こんなにいたんじゃとても無理だ・・・みんなと撮影してたら、他のコも集まって来そうだし・・・それに時間がかかったら・・せっかくのお好み焼きが冷めてしまう・・・

　オレたちが揉みくちゃにされて困っていると、誰かが大きな声で言った・・・
「ちょっとアンタたちやめなさいよ！春日さん困ってるでしょう？」
それはお好み焼きを焼いていたバレー部の大森先輩だった・・・
「みんな聞いて！　ウチの学校では春日さんにも普通に学園生活を送ってほしいから、写真とかみんな我慢してるの！　あなたたちも春日さんのことが好きなら、春日さんが困るようなことするのはやめてほしい。」
・・な・・なんか言葉は丁寧だけどスゴイ迫力・・・背が大きいからってダケじゃない・・・なんだか大森先輩には有無を言わさない力がある・・・おかげでみんな静かになってしまった・・・

「さ、春日さん行きなさい。」
そう言って先輩はオレの肩を押してくれた・・・肩をつかんだ手が大きい・・・
「あ・・ありがとうございます・・大森せんぱい・・・・」
オレは何とかお礼を言って、急いでその場を離れた・・・後ろでは集まったコたちに広島風お好み焼きを売り込む大森先輩の声がしていた・・・

―――――――――――――――
―――――――――――――――
――――――――――

屋上に行ったオレたちはベンチに座って、それぞれがたのんだお好み焼きを袋から取り出した・・・

「はい有希、お茶。」

「ありがとう！」

パックを開けてお箸を入れる・・・中のキャベツもホクホクだ・・・

オレは一口ほおばって思わず言っていた・・・

「おいしぃ・・・！」

大森先輩が作ってくれた“広島風お好み焼き”は想像以上においしかった・・・さすがお父さんがやってるお店と同じって言うだけある・・・

「有希の少しくれない？　わたしの食べていいから。」

「あ、うん・・」

オレのを直美が食べて、直美のをオレが食べる・・・女の子って取り替えっこが好きだ・・・

「あ！　直美のおもちが入ってる！」

「そうよ、美味しいでしょう？」

「うん！」

いろいろ入ったミックスもおいしいけど、おもちが入ったのもおいしかった・・・腹持ちも良さそうだ・・・

「わたしのイカも美味しいよ。」

千里にそう言われると・・・そっちも食べてみたくなる・・・

「ほんと？　ちょっと貰っていい？」

「いいわよ。」

・・なんかもうみんなで食べあいっこだ・・・こういうことが出来るのも女の子どうしだからだよなぁ・・・こうして仲良し４人でいるのは本当に楽しい・・・

「見て！　飛行機雲がいっぱい！」
弘子の声に空を見上げると、きれいな青空にいく筋かの飛行機雲がタテヨコに走っている・・・
「まるで空の交差点みたいみたいね。」
「・・うん・・・」

こんな時間がずっと続けばいいな・・・

きっと明日も晴れそうだ・・・

第１０８話　学園祭　２日目・オレの女らしさ

「有希、今日はちゃんと歌の練習して来たんでしょうね？」
「・・う・・うん・・一応・・・」
「一応って・・誰かに聴いてもらった？　麻衣ちゃんかお母さんか。」
「・・ま・・まさかぁ・・・」
「なんでよ、ちゃんと歌えてるかどうか聴いてもらえばいいのに。」
「そんな・・恥ずかしいよ・・・」
「どうして？　どうせ今日はみんなの前で歌うんじゃない！」
「・・それは・・そうだけどさ・・・」
・・・そうなんだよなぁ・・・全校生徒の前で歌うなんて・・・オレに出来るんだろうか・・・

「・・やっぱり・・自信ないなぁ・・もう優勝なんかしなくても・・・」
・・今はとにかく早く終ってほしいって気持ちでいっぱいだ・・・コンテストなんか無かったらもっと楽しい学園祭だったのに・・・いろいろ食べたりしてさ・・・今日で学園祭も終りなのに・・コンテストに出なきゃいけないから・・あまり自由な時間も無さそうだ・・・
「何いってるのよ！　優勝してウェディングドレス着たいって言ったのはあんたでしょう？」
「うぅっ・・・」
・・たしかにそうなんだけど・・・オレどうしてあんなこと言っちゃったんだろう・・・
「わたしはあんたがウェディングドレス着れるように言ってあげてるんじゃない！」
「・・そ・・それはどうも・・・」

・・・でもなぁ・・・長谷川に言われたからって・・・優勝できるワケでもないし・・・頑張るのはオレなんだもん・・・みんなも頑張れって言ってくれるけど・・・正直オレには荷が重い・・・

こんなこと話してるだけでも緊張してくる・・・なんか話をそらさないと・・・

「そ・・そうだ・・長谷川さんは・・何か食べた?おいしいのあった?」

「有希、昨日から食べることばっかり言ってるね。」

「・・だって・・たくさんお店出してるから・・おいしいのがあったら食べたいじゃない?」

「わたしはカキ氷たべたわよ。あまり時間なかったしね。」

カキ氷・・・まあ暑かったけど・・・

「わたしはね“広島風お好み焼き”食べたよ。」

“広島風お好み焼き”?どんなの?」

「あのね・・クレープみたいな薄い生地に、たっくさんキャベツを乗っけて、中に色んなの入れるの。」

「なにそれ?なんか美味しくなさそう・・・」

「そ、そんなことないって!すっごくおいしかったよ。わたしは色んな具が入ってるミックスを食べたんだけど、おもちのもイカのもおいしいよ!長谷川さんも食べてみたら?」

「なんで食べてないのまで美味しいってわかるのよ。」

「あっ、みんなで少しづつ食べっこしたから・・・」

「・・・そっか・・あんた午後は見かけなくなったと思ったら・・仲良し4人組でいたんだ・・・」

「・・うん・・べ・・べつにいいじゃない・・・」

「何もいけないなんて言ってないわよ?」

「・・・・・」

・・・言ってないけど・・・なんかイヤそう・・・

長谷川ってどういうワケかオレたち４人が仲がいいのが気に入らないみたいなのだ・・・言わないけど感じる・・・仲間はずれにされたみたいな気がするのだろうか？・・・でも誘ったって一緒に来ないくせに・・・クラスが違うから気まずいのかも知れないけど・・・

・・それに・・もし長谷川が仲間に入っても、なんか楽しくなさそう・・・だって長谷川ってすぐ不機嫌になるんだもん・・・オレと二人の時ならいいけど・・・千里たちと一緒の時に不機嫌になられたらかなわない・・・絶対そうなっちゃうと思うし・・・そんなことになったらオレが責任感じちゃう・・・

「それじゃ、わたしもミサトちゃん連れて食べに行こうかな。」
「え？！」
「だって美味しいんでしょう？“広島風お好み焼き”」
「う・・うん・・・」
「わたしもミサトちゃんと食べっこしようかなぁ・・・」
「？・・いいんじゃない？　ミサトちゃんも喜ぶと思うよ。」
「・・いいんだ？・・ミサトちゃんと食べっこしても・・・」
「？？・・・いいよ？」
「あ～ぁ・・やっぱりやめた！」
「え？！」
・・なんだよ・・・ワケわかんない・・・

「ミサトちゃんもわたしとじゃつまらないだろうし・・・」
「・・・なんで？」
「だってミサトちゃんはあんたのことが大好きなんだから。」
「・・・・・」

「あんたといる時のミサトちゃんはホント楽しそうじゃない。」
「・・そ・・そうかなぁ・・？」
「そうよ。それにあのコ生徒手帳にあんたの写真入れてるのよ！あんたのすっごく可愛い写真・・・」
「・・あっ・・どんたくの時のかな・・？」
そういえばミサトちゃんにあげたっけ・・・若村先生が写してくれた写真・・・オレも気に入ってる写真だったから、後から焼き増ししてもらったけど・・・（８３話参照）

「・・・ミサトちゃんだけにあげたんだ？　どんたくの時の写真。」
「・・あげたっていうか・・欲しいって言われたから・・・長谷川さんだって欲しいんだったらあげるよ？」
「いらないわよ！・・・あんたの写真なんか。」
「・・・だったらいいけど・・・」
変なヤツだな・・・長谷川って時々めんどくさい・・・今日はこんな言い合いしてる場合じゃないのに・・・

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

「有希～！」
「きゃぁ！！・・・な・・直美ぃ・・・」
オレは思わず大きな声をあげてしまった・・・直美ったら、いきなり後ろからオレの胸をつかむんだもん・・・
「・・ちょ・・ちょっとやめてよぉ～・・」
「ふふっ、有希が油断してるからよ。」
「・・油断って・・学校だもん、油断してるわよ・・・」

前は直美のターゲットといえば弘子だったけど、最近オレまでやられるようになってきた・・・弘子はやられても馴れてるのか平然といなしてるけど・・・オレの場合そうはいかない・・・相手も女の子とはいえ胸を揉まれるなんて！

「・・もうっ・・弘子とやってればいいじゃない・・なんでわたしに・・・？」

「だって有希のほうが反応が女の子らしくて可愛いんだもん！」

「・・うぅっ・・・」

・・オ・・オレは・・女の子の胸に馴れてないだけだ・・・痛いし・・くすぐったいし・・恥ずかしいし・・・

「・・でも・・なんで直美がここにいるの？」

この教室は学園祭クイーンコンテストに出る人の控え室になってるのに・・・

「わたしは有希のお世話をするために来たのよ。」

「お・・お世話って・・・」

・・・そんなこと言って・・・オレが急にコワくなって逃げないか見張ってるんじゃないだろうか？・・・ここまできて逃げたりしないのに・・・オレはそんなに無責任じゃない・・・

・・・そりゃぁ・・逃げれるものなら逃げ出したい気分だけど・・・

しばらく直美にちょっかい出されながら待っていると、コンテストに出場する他のコたちも入ってきた・・・オレの他にはコンテストに出るのは４人だ・・・

「あっ！　戸田さん、もう来てたんだ！」

「・・あ・・はぃ・・・」

・・・みんな推薦されるだけあって可愛い人やキレイな人ばかりだ・・みんな3年生だから大人っぽいし・・・こんな素敵な女の子の中にオレなんかが入っていいのか心配になってくる・・・

「気合い入ってるわね。みんな戸田さんのこと応援してるから、私たちに遠慮しないで優勝しちゃっていいからね！」

「えぇっ？！」

・・・どうして？・・・みんなオレのライバルじゃないの・・・？

「私たちは戸田さんと違って、棄権できなくて仕方なく出ることになったんだから。」

・・・オ・・オレだってそうなんだけどなぁ・・・オレは好んでコンテストに出ると思われてるのかな？・・・だったら何だか自信満々の恥ずかしいコみたいじゃない・・・

「そ・・そんなこと言わないでください・・・みんなも手抜かないでやってください・・・」

「それはみんな力いっぱいやるわよ！どうせ私たちが頑張ったって戸田さんにかなわないのは判ってるから気が楽だわ。」

「こういうの“胸を借りる”って言うんじゃない？」

「・・・・・」

・・・オレのこと、どんだけ買いかぶってんだよ・・・“胸を借りる”って・・オレ横綱じゃないし・・・

オレだって女らしくするのは、けっこう必死なんだ・・・なにしろ男なんだから・・・

みんなオレのことをよく女の子らしいって言うけど、みんなは本当の女の子なんだから、オレくらい頑張ればオレよりずっと女の子らしくやれると思う・・・だってオレはみんなが言うほど女の子らしくないし・・・考えてることだって男の頃とそんなに変わらないと思う・・・

まだ時間があるから、念のためもう一度コンテストの内容に目を

通しておいた方が良さそうだ・・・コンテストで審査されるのは、お裁縫とお料理と歌・・・元々は良いお嫁さんコンテストなのに、なんで歌まで歌わなきゃいけないのかは謎だ・・・お裁縫とお料理だけじゃつまらないからじゃないかって話だけど、本当のところは良くわからない・・・

お裁縫は巾着袋をミシンで縫って、アップリケを縫い付ける・・・布の色とかアップリケのデザインは自由だ・・・上手に出来ればいいらしい・・・

お料理は肉じゃが・・・みんなに食べてもらうワケにはいかないから、審査員の先生方に食べてもらう・・・生徒のみんなは見た目で判断するらしい・・・ということは味だけでなく見た目も大事ってことだ・・・なんで肉じゃがなんだろうって思ったけど、直美に言わせれば肉じゃがは男の人が好きなお料理らしい・・・ほんとうだろうか？

オレが男の子のころは、肉じゃがよりハンバーグとかスパゲッティの方が断然好きだったけどなぁ・・・もしかしたら校長先生や教頭先生たちくらいの歳の男の人が好きなのかも知れない・・・

オレは普通の肉じゃがでは面白くないから、少し変わったのを作ろうかと思っている・・・ウチで試しに作ってみたけど、麻衣にもとうさんにも好評だったヤツ・・・

「有希は歌は練習してたけど、他は大丈夫なの？」

「・・う～ん・・たぶん・・・」

だって歌以外はけっこう得意だし・・・オレはどういうワケか女の子がやるようなことが性に合ってるみたいなのだ・・・

お料理はかあさんが忙しいから男の子の頃から手伝ってて得意なんだけど、他のことは高校に入ってやってみたら案外上手だった・・・いや・・その前に三吉先生に習っていたからかも・・・先生の教え方がうまかったに違いない・・・三吉先生に褒められると、もっと頑張らなきゃって気持ちになったものだ・・・だってオレは男の子の頃は、そんなに褒められたことなんか無かったし・・・

・・でも、いま考えると・・・あの頃はオレも女の子になったばかりだったから、先生もオレのこと大目に見てたんじゃないだろうか？・・・だってあの頃のオレがそんなに褒められるほど上手に出来てたとは思えない・・・少し前までは普通の男の子で、女の子らしいことなんてやったこと無かったんだから・・・

・・それなのに今のオレは、本物の女の子からも女の子らしいなんて言われるシマツだ・・・よっぽど三吉先生の教え方が上手だったとしか考えられない！

オレはきっと三吉先生に褒められたことで、調子にのってどんどん女の子らしさが身に付いてしまったのだろう・・・褒められて伸びるタイプだったのかも・・・

思えば・・咳やクシャミをする時は手で口を隠すとか、座る時はスカートの裾を押さえるとか、ものを食べる時に音をたてないとか・・・他にもいろいろ三吉先生に教わった・・・おかげで上品な立ち居振る舞いが出来るようになったし、麺なんかを食べる時もズルズル音をたてなくなった・・・逆にテレビなんかで音をたてて食べてるのを見ると気になってしょうがない・・・音をたてて食べるのがおいしいと思ってる人もいるみたいだけど、少なくとも女の子はやめた方がいいと思う・・・

そういえば三吉先生は言っていた・・・一度しっかり身に付いたものは簡単には忘れないんだって・・・確かにオレは今でも三吉先生に教わった女の子としてのたしなみを自然にやっている・・・たぶんそんなところがオレが女らしく見えるところなのだろう・・・そうでなければ、本当は男のオレが女らしく見えるワケがないのだ・・・

第１０９話　学園祭　２日目・コンテスト開始

そろそろコンテストが始まる時間になってきたと思ったら、校内放送で全校生徒に呼びかけが・・・

“１０時より体育館で学園祭クイーンコンテストが始まります。皆様１５分前には体育館に集合して下さい。”

・・ううぅ・・・いよいよ始まるのか・・・緊張するなぁ・・・・緊張したら・・オシッコしたくなっちゃった・・・

「・・ね・・ねえ、直美・・トイレ・・ついてきてくれない・・？」

「いいわよ、もうすぐだから急いで行ってこよう。」

「・・うん・・・」

トイレの個室にかけ込むと、オレは急いでスカートをたくしあげて、パンティーを下ろし便器に座った・・・でも・・急いでるのになかなか出ない・・・

本物の女の子は緊張した時どうなるのか知らないけど・・・オレにはおちんちんが付いてるから、緊張でいつもより縮こまっていて、なかなかオシッコが出てこないのだ・・・ただでさえ萎びたみたいになってるのに・・・

オレは皮に固く埋もれてしまったオチンチンを、指で剥いてシコシコしごいた・・・こうすれば少しは早く出そうな気がする・・・女の子がやるようなことじゃないのはわかってるけど仕方がない・・・

セーラー服のスカートを捲ってオチンチンをしごくなんて・・・はしたなくて恥ずかしい・・・出来るだけ考えないようにしなきゃ・・

・

・・早くやらなきゃいけないけど・・でも静かにやらないと・・・

となりに入ってる直美にシコシコやってるのがバレたら大変だ・・・

“ガチャッ”

となりのドアが開く音がして、洗面所に行き手を洗っている音がする・・・オレも急がないと・・・

「有希～まだ？」

「も・・もうちょっと・・・」

「急がないと始まっちゃうよ。」

「・・うん・・・」

・・急ごうにも・・・緊張してるせいかチョロチョロとしか出てこない・・・そのうえ終ったかなと？思ったらまた出てくる・・・こういう時って残尿感がなかなか無くならないんだよなぁ・・・

何とか出し終って、オレはスカートのポケットから包みを取り出した・・・こんなに緊張するんじゃ・・やっぱりしておかないと・・

・

・・取り出したのはナプキン・・それも多い日用・・・

今ではオレも女の子でいることにも馴れたから、このところ設定上のアノ日以外はあまりナプキンはしなくなってたけど・・・今日みたいな特別な日はどうしても、もしお漏らししちゃったらどうしようかと気になってしまう・・・

実際にナプキンにお漏らししちゃったことはほとんどない・・・２回くらいしかないけど（注１）・・・でもこれはオレにとっては・・いつのまにか緊張するときの“お守り”みたいになってしまった・・

・

袋を開けて広げ、後ろのテープをはがす・・・そしてパンティーの少し後ろの方に貼付ける・・・そしてパンティーを上げてから、オチンチンを股の間・・ちゃんとナプキンの上に来てるか確認してから挟み込む・・・

男の子がこんなふうにしたら、もし立っちゃった時に大変だけど・・・オレはもうタマも無いし、女性ホルモンも打ってるから、オチンチンが立っちゃう心配はない・・・

「ごめん・・待たせて・・・」

「ううん、いいよ。有希アノ日だったんだ?」

「え?!」

「いや・・袋やぶる音がしてたから。」

「あっ・・そっか・・・」

・・直美ってヘンなところに気がつくんだよなぁ・・・それにけっこう遠慮なく言っちゃうし・・・

「大丈夫なの? 気分悪かったりしない?」

でも、こんなふうに気を使ってくれる優しさもある。

「うん、平気!・・ほら・・わたしって軽い方だから・・・」

「そうだったね。有希ってアノ日でも普段とそんなに変わらないもんね。」

「・・うん・・・」

・・・そりゃぁ、オレのアノ日はあくまで設定上のアノ日だから・・・他のコみたいに気分が悪くなったり、お腹が痛くなったりするハズがないのだ・・・

「もうすぐ始まるよ。急いで戻ろう！」
「うん！」
ナプキンしたら少しは落ちついてきたみたい・・・やっぱりオレにとっては“お守り”の効果があるのかも・・・

（注１）有希がナプキンにお漏らししたのは、３７話と６１話。

―　―　―　―　―　―　―　―　―　―
―　―　―　―　―　―　―　―　―　―
―　―　―　―　―　―　―　―　―　―
―　―　―　―　―　―　―　―　―　―
―　―　―　―　―　―　―　―　―　―
―　―　―　―　―　―　―　―　―　―
―　―　―　―　―　―　―　―　―　―

体育館のステージの裏に着いた時には、もう開始５分前になってた・・・
「はぁ・・はぁ・・間に合った・・・」
カーテンのすき間からのぞくと、もう全校生徒や学園祭を見に来た父兄の人たちお客さんも集まっていた・・・結構な人数だ・・・ステージの上には審査する先生方・・・校長先生や教頭先生がいるのは知ってたけど・・・白鴻会長までいらしてるなんて知らなかった・・・

“ただいまより学園祭クイーンコンテストを開催いたします。ノミネートされたみなさん、ご入場ください！”
司会の松本先生に呼ばれてオレたちはステージに上がった・・・全校生徒に見られるなんて足がすくみそうだ・・・

もっとも、緊張してるのはオレだけじゃない。みんなも自ら立候補したワケじゃないんだから当り前だ・・・ウチの学校はそんなに自己主張の強いコはいないのだ・・・

“最初の課題はお裁縫です。みなさんには巾着袋を作っていただきます。制限時間は４０分ですので頑張って下さい！”

・・・４０分はちょっと短いな・・・巾着袋だけなら十分だけど、アップリケも付けるとなるとギリギリだ・・・

オレは赤い布を選んでミシンで縫い始めた・・・底がマチになってるヤツを作りたいから少し厚めの布を選んだ・・・そして両脇をジグザグミシンで始末していく・・・

最初はみんなが見てる前だから緊張してたけど、作業にかかるとだんだん気にならなくなってきた・・・少しぎこちなかった手も自然に動き出す・・・

・・布を半分に折ってヒモを通す部分を残して両側を縫う・・縫い始めと縫い終りは、しっかり何度か返し縫いする・・・

・・ヒモは両方から引っ張る形式のだし、太めのヒモを使うから折り目の部分は広めにとっておかなきゃいけない・・・ここは注意しないとヒモを２本通したらキツキツになってしまうのだ・・・

・・底は７ｃｍくらいを三角に折ってしっかり縫う・・・縫ったら切り取って裏返し・・・ヒモを通す折り目を作って出来上がり。

時計を見るともう１５分経っている・・・ふと見ると、みんなはマチとか作ってないから、もう袋は作り終ってアップリケに入ってる・・・さすが推薦されるだけあってみんな女の子らしいコばかりみたいだ・・・オレも急がなきゃ・・・

オレが付けるアップリケは大好きな“キてぃちゃん”にした・・・“キてぃちゃん”の絵の上にトレーシングペーパーを置いて、濃いめのエンピツで形を描いていく・・・それを裏返して白いフェルトの上にのせて、強めにエンピツの線をなぞるとフェルトの上に線が写る・・・エンピツの黒い線がついても、こっちは裏側になるから心配ない・・・

・・3分の2ほどを縫い付けて、中に薄く綿を入れて少しふっくらさせる・・・アップリケは縫い目が大事だから丁寧に、同じ間隔で縫い付けなきゃいけない・・・縫い目も込みで作品なのだ・・・

・・最初は体も作ろうと思ってたけど・・・赤い袋ではどうせ目立たないし・・・時間もないから顔だけにした・・・その分丁寧に縫い付けたい・・・

・・リボンを縫い付けて・・・黒いフェルトを切って作った目を木工用ボンドで貼付けたら出来上がり・・・ボンドがはみ出して汚くならないように、爪楊枝で薄く塗ってずれないように貼付ける・・・

出来上がった時には時間ギリギリだった・・・体を作ってたら間に合わなかったかも・・・危ない危ない・・・

“お裁縫の次はお料理です。みなさんには肉じゃがを作っていただきます！制限時間は1時間です。”

お料理するのに与えられているのは、1人にカセットコンロ1つだけ・・・それをいかに上手に使って手際良く作るかも審査のポイントらしい・・・それにここは体育館だから水もそんなに自由に使

えない・・・お料理するにはあまり適した環境じゃないから、ちゃんと順序を考えてやらなきゃいけないのだ・・・

“それでは始め！”

合図でオレはジャガイモの皮をむきだした・・・みんなも同様にジャガイモからむいている・・・オレはお料理は得意とはいえ、ノミネートされたみんなも上手なコばかりだろうから少しも気を抜けない・・・

ジャガイモを6つに切って面取りして水にさらす・・・そしてお醤油、お砂糖、お酒、みりんで作った汁に、トリ肉の脂身を取って漬け込んだ・・・

だいたい肉じゃがは関東は豚肉を使い、関西は牛肉を使うらしい・・・九州ではいろいろだけど、どちらかといえば牛肉が多いと思う・・・でもオレが今日作ろうとしてるのは少し変わったトリ肉の肉じゃがなのだ・・・

タマネギはクシ形に切って、ニンジンは半月形・・・しらたきも適当な長さに切っておく・・・

そして鍋でタマネギ、ニンジン、しらたきを油で炒め・・・一旦取り出してから汁を入れてトリ肉を煮る・・・そしてまたトリ肉を取り出してから・・・ジャガイモ、タマネギ、ニンジン、しらたきを入れて、鶏ガラでとったダシ汁を混ぜて煮立たせる・・・ダシ汁だけは持って来ていいというルールなのはありがたい・・・ダシからとっていたら1時間じゃ間に合わない。

オレの“トリ肉じゃが”のポイントは、トリ肉を一緒に煮込まないということだ。お野菜と一緒に煮込んじゃうとダシが出ちゃうし、

固くなってしまう・・・

・・鍋が煮立ったら中火にして２０分くらい・・・カセットコンロだからもう少しかかるかも・・・アクを少しだけ取って・・焦げ付かない注意しながら煮詰めていく・・・完成間近になったら別にしておいたトリ肉と彩りのサヤエンドウを入れて、もう一息煮詰めて出来上がり。

ジャガイモにクシを刺してみたらホクホクで良い感じみたい・・・照りもあって、汁もちょうどいいくらいに染み込んでる・・・先生方に人数分の小鉢に取り分けて、ニンジンとサヤエンドウを上に乗っけて完成だ・・・こういうのは見た目も大事だと思う・・・我ながら、なかなかの自信作だ！

第１１０話　学園祭　２日目・学園祭クイーン（前書き）

この１１０話は本来あるべき歌詞がすべて消されています。
でもそれでは申し訳ないので、私のＨＰの「オレは女子高生支援ページ」で見ることが出来るようにしました。
ｈｔｔｐ：／／ｅｍｉｔｈｉｙａｎ．ｈ．ｆｃ２．ｃｏｍ／ｃｏｌｕｍｎ／ｊｙｏｓｉ／０８０６２３－００．ｈｔｍｌ
ただし１８禁サイトの中にあるのでご注意ください。上の方にＨなバナーが出ます。

第１１０話　学園祭　２日目・学園祭クイーン

午前中のお裁縫とお料理が終って昼の休憩・・・このお昼休みの間に先生たちは審査も行ってるらしい・・・

実際にお料理を食べる先生たちはいいけど、生徒のみんなは見るだけで、どの肉じゃがが美味しそうか判断しなきゃいけないから大変だ・・・料理で一番大切なのは味だと思うんだけど、とても全員の分を作ることは出来ないから仕方ないのだろう・・・まあ、そのために見た目が良いように、ウチでは普段は入れないサヤエンドウを入れたんだけど・・・緑が入ってるとニンジンのオレンジ色との対比で全然華やかさが違う！

「有希～　陣中見舞いに来たわよ！」

「弘子、千里も来てくれたの？　ありがとう！」

オレが直美が買ってきてくれたタコ焼きを食べて、少しホッとしていたら弘子と千里が控え室に来てくれた。

「有希にお客さん連れてきたよ。」

「え？！」

弘子と千里に案内されて入ってきた人を見て、オレは驚いた！

「三吉先生！！」

まさか先生が来てくれるなんて思いもしなかった！

「戸田さん、頑張ってるみたいね。」

「せ・・先生・・いついらしたんですか？」

「今さっき、残念ながら戸田さんがお裁縫やお料理をしているところは見ることが出来なかったけれど、作品は拝見させていただいたわ。上手に出来てたじゃない？お料理も美味しそうだったわよ。」

「あ、ありがとうございます。」

三吉先生に褒めていただけるなんて・・・すっごく嬉しい・・・

「今回は長山さんにも、ぜひにと言われていたのよ。」

「・・長山先生に・・・？」

「この学校も来年からは変わってしまうかも知れないからって・・・」

「あっ・・・」

・・そうか・・・長山先生はずっとこの白鴻女学園で教鞭をとっているんだから、共学化を残念に思う気持ちはオレなんか足元にも及ばないに違いない・・・それで三吉先生に女学校として最後の学園祭を見て欲しかったのだろう・・・

・・でも・・今はみんながいるから、このことにはふれられない・・・

「それに、あなたの学校での女学生としての生活も一度見ておきたかったから。」

「・・・・・」

「長山さんもあなたのことを褒めてらしたわよ。素直で真面目で真摯な生徒だって、素敵な女性に成長してるって言ってらしたわ。」

「そ・・そんな・・・」

「あの方はめったに褒めない人だから、わたしも教え子のことを褒めていただいて嬉しかったわ。」

「・・そんな・・・先生が嬉しいだなんて・・・嬉しいのはわたしの方です！」

三吉先生と長山先生に褒めてもらうなんて・・・光栄だけど、オレには勿体ないことだと思う・・・だってオレはまだまだダメなところもいっぱいある・・・先生たちに褒められるような立派な女の子じゃない！

「お友達も皆さん素敵な方ばかりね。あなたが幸せな学園生活を送

っているのを見て先生も安心したわ。」
「・・はい・・・」
「皆さん、これからも戸田さんのことをよろしくね。」
先生の言葉に
「はい、わたしたち親友ですから。」
弘子が言うと、千里も直美も頷いた・・・

オレは弘子が親友だと言ってくれたことに胸が熱くなった・・・
弘子はオレのことを男だと知っているのに・・・もちろんいつもオレたちは親友だと言ってるけど・・・尊敬する三吉先生の前で、はっきりとオレたちが“親友”だと言ってくれのが、たまらなく嬉しかった・・・

「それでは私は失礼するわね。皆さんのお邪魔になるといけないから。」
「そ、そんな・・邪魔じゃないです！」
「いいのよ。長山さんとも久しぶりに話したいこともあるし。」
「・・も・・もう・・帰ってしまうんですか・・・？」
「いいえ、ちゃんと最後までいますよ。戸田さんの花嫁姿はぜひとも見なくてはね。」
「そ！・・それはまだ・・・着れるかどうか・・・」
オレはそう言ったけど・・先生はそのまま笑顔で控え室を出て行ってしまった・・・

・・三吉先生にまで期待されたら・・・オレも絶対優勝出来るように頑張らないワケにはいけないな・・・なんだか責任重大だ・・・

「そういえば有希、進藤さんが来てたの気がついた?」

「え?!　進藤さんが?」
千里に聞かれたけど、オレはまったく気づかなかった・・・なにしろオレはコンテストの課題をやるのに必死だったから、まわりのことを見る余裕なんてなかったのだ・・・
「・・ううん・・・全然知らなかった・・・」
「だれだれ?　進藤さんって、有希の恋人か何か?」
「ち・・違うわよ・・・九州ＪＩＮＯＮのカメラマンさんよ。」
・・もうっ・・直美ったら・・・すぐヘンなふうに考えるんだから・・・

「・・でも・・・どうして来たのかな・・・進藤さん・・・」
「編集長に頼まれたんだって。」
「佐々木さんに?」
「うん、有希が優勝したらクイーンコンテストの様子をＪＩＮＯＮに載せるかも知れないから写真うつしてるんだって。」
「え?!」
・・オレそんな話聞いてない・・・それに何で佐々木さんがオレがコンテストに出るって知ってたんだろう・・・
「・・そんなことしなくていいのに・・・」
「いいじゃない、みんな有希のことが好きなのよ。」
「・・そ・・それは・・ありがたいけど・・・」
・・好きって・・・なんでオレなんかを好きでいてくれるのか、オレには良くわからない・・・男の頃は全然女の子になんか相手にされなかったのに・・・女の子になったオレは何故かみんなに好かれている・・・

「あっ!　もうこんな時間・・わたしたち体育館に戻るから、午後も頑張ってね。」
「う・・うん・・」

・・あぁ・・午後はとうとう歌の審査だ・・・三吉先生や進藤さんまで見てると思ったら・・・緊張しそうだな・・・

――――――――――――――

――――――――――――――

――――――――――

オレが歌うのは一番さいご・・・

・・みんなはやっぱりオレみたいに昔の歌じゃなく、最近の歌をうたうようだ・・・

・・一青窈・・・青山テルマ・・・ＪＵＪＵ・・・どれも難しい歌なのにみんな上手に歌うものだ・・・

それなのにオレときたら・・・もともとカラオケなんかほとんど行かないし・・・全然上手じゃないときてる・・・これじゃ優勝なんてムリかもしれない・・・

ステージの下には千里が言ったとおり進藤さんがカメラを手に写真を撮っている・・・午前中もああしていたのかも知れないけど・・・オレはまったく気づかなかった・・・よっぽど夢中でやっていたのだろう・・・

“次は2年３組の戸田有希さんです・・曲は『夢をあきらめないで』・・・”

・・うぅっ・・・とうとうオレの番だ・・・曲がかかると同時にオレはステージに歩み出た・・・

前奏が流れる中、震える足でステージの中央まで歩いていく・・・目の前には沢山の人たち・・・こんなにいっぱいの人の前でオレが歌うなんて・・・自分でも信じられない・・・

「有希～！」

？・・・誰かが大きな声でオレの名前を呼んで手を振ってる・・・見ると・・・長谷川だ！

・・長谷川が目立つことするなんて・・・不思議に思ってふと隣に目をやると、そこにはかあさんがいた！・・・それに麻衣とレナも・・・

・・麻衣とレナはともかく・・かあさん・・本当に来てくれたんだ・・・忙しいから無理だと思ってた・・・オレも来なくていいって言っちゃったし・・・

・・・そうだ・・・この歌はかあさんにとって・・とうさんとの想い出の歌だったんだ・・・そんな大事な歌・・・オレも一生懸命歌わなきゃ・・・そう思うと不思議に落ちついてきた・・・もうすぐ前奏が終る・・・

・・“ラララ～ララ～ララ～　ラララ～ララ～ララララ～”（注：『夢をあきらめないで』を歌っています）

・・・入り方はなんとかうまくいった・・・

・・このまま押さえてうたえれば・・・なんとかなるかも・・・

“ラララララ・・ララ・・ラララ～ララ～ラ～ララ～ラララララ～～！”

・・うわっ！・・声が上ずっちゃった・・・

“あなたの夢を～あきらめないで～・・・あなたらしく輝いてね～～”

・・そうか・・・とうさんは、かあさんらしく生きて欲しいって思って、この歌をかあさんに贈ったんじゃないのかな・・・

・・オレも・・オレらしく生きれるだろうか・・・でも・・・オレらしいってどういうことだろう・・・

“ラララララ～ララララ～・・ラララララ～ララ～ラララララララ～～”

・・・この歌って・・・別れの歌だったんだ・・・おたがいの夢のために愛する人と別れるなんて・・・そんなことオレに出来るだろうか・・・

“ラララララ～ララ～ラ～　ラララララ～ララ～ラ～　ラララララ～ララ～ラララララララ～～”

・・・オレも・・・この歌の女の人みたいに・・・別れても相手のことを思いやれる・・・そんな優しい女性になれたらいいな・・・

・・オレは大人になったら・・・いったいどんな女の人になるんだ

ろう・・・

ーーーーーーーーーーーーーーー

ーーーーーーーーーーーーーーー

ーーーーーーーーーー

「有希、おつかれ！」

「あ、千里・・・弘子・・・わたしの歌・・・どうだった？・・・ヘンじゃなかった・・・？」

「ううん、上手に歌えてたわよ！」

「ほんと？」

千里はそう言ってくれたけど・・・オレに気を使ってるんじゃないのかな・・・

「本当に上手だったわよ。ちょっと声が裏返っちゃったところもあったけど、それも有希らしくて良かったよ。」

「・・・うぅ・・・」

・・・たぶんあの時だ・・・弘子はやっぱり正直に言ってくれるなぁ・・・

「あの、手をこう・・・広げるところとか、振りも良かったわよ。」

「・・・それは・・・言わないで・・・恥ずかしいから・・・」

あれは長谷川に言われてやっただけだ・・・やりながら恥ずかしくて顔から火が出るかと思った・・・

「・・・もう投票は終ったの？」

オレが聞くと弘子が・・・

「うん、今集計してるみたいよ。」
「・・どんな感じ・・・？」
「うん・・有希のぶっちぎりかと思ったけど、みんなも頑張ってたから・・・けっこう接戦みたい。」
弘子がそう言うと、直美が気を使ってか
「料理と裁縫だけなら有希がぶっちぎりだったと思うけどね。」と言った。
「・・・・・」
・・やっぱり・・・オレの優勝が決まってるみたいなこと言ってたけど・・・みんなだってそんなに違わないハズだもん・・・だって2年生はオレだけだし・・・みんな推薦された人たちなんだから・・
・

「・・そういえば・・さっきかあさんと妹が来てた・・・それにいとこも・・・」
「ほんと？」
「・・うん・・・ステージから長谷川さんといるのが見えたんだけど・・・」
「だったらまだ長谷川さんと一緒にいるかも知れないね、探してこようか？」
「あっ、いい・・今はまだ会いたくないから・・・」
・・千里の気持ちはうれしいけど・・・かあさんと会うのは優勝かそうじゃないか決まってからの方がいいと思う・・・オレも変な緊張しなくていいし・・・

それに・・長谷川さんが一緒なら学校の中も案内してくれると思う・・・もっともこの学校はかあさんが通ってた頃と、そんなに変わってないハズだから、かあさんには案内なんて必要ないかも知れないけど・・・

―――――――――――――――

―――――――――――――――

――――――――――

いよいよ集計が終って発表の時・・・

オレたち５人はステージの上に横一列に並んで、緊張しながら発表を待っている・・・

“今年の学園祭クイーンを発表します！”

すると照明が暗くなってドラムロールがなりだした・・・な・・なんか・・本格的だ・・・

ドラムロールの中・・スポットライトが流れてオレたちに光を当てていく・・・ライトの光以外なんにも見えなくて・・・なんだか夢の中にいるみたいに現実味がなくなっていく・・・心臓のドクドクなる音だけが耳に響いてる・・・

“・・発表します・・・学園祭クイーンは・・・・・”

ドラムロールが止んで、動いていたライトが止まった・・・なんか・・まっ白だ・・・

“・・・２年３組の戸田有希さんに決定しました！”

・・・えっ?!・・・オレ・・・?
同時に会場から大きな拍手が沸き起こった・・・一緒にコンテストを受けたみんなもオレのまわりに集まってきた・・・でも・・・オレはライトで照らされたせいか・・頭の中がまっ白で何が起こってるのか良くわからなかった・・・

・・みんながオレの顔に何かを押し当てる・・・?!・・・ハンカチ?・・・オレ・・泣いてるのか・・・?

いきなりマイクが差し出された・・・
“・・戸田さん・・今の気持ちは?・・・・”

「・・・あ・・ありがとう・・ございました・・・みなさんの・・応援の・・おかげです・・・」

・・・オレは胸がつまってしまって・・それだけ言うのが精一杯だった・・・・

（著作権侵害と引用を混同する間違った考えのせいで、歌詞を引用出来ずわかりにくくてすみません。）

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ＡＴから

学園祭編、1話が短くてすみません。
いろいろ難しくて書くのに時間がかかってしまって・・・
それに私は書いたら出してしまわないと、なかなか次のアイデアが出て来ないタチなので（笑）
次の話に専念するためにも、早めに放出しています。

目の方は、もうかなり良いですが、今後も無理せず更新していきたいと思っています。

第１１１話　学園祭　２日目・未来の花嫁

「戸田さんおめでとう！！」
「戸田さんが優勝するって信じてたよ！」
「・・あ・・ありがとう・・みんな・・・」
・・・とうとう優勝しちゃった・・・けっこう接戦だって言ってたからムリなんじゃないかと思ってたのに・・・
・・聞いた話では、先生とお客さんの票はオレがダントツに多かったらしい・・・お客さんはオレが“春日ユウ”だから入れたんだと思うけど・・・先生たちはオレが本当は男だと知ってるのに何で入れたんだろう・・・案外、オレが男なのに頑張ってるから同情で入れてくれたのかも知れない・・・もし同情票だったらなんだか他のみんなに申し訳ないな・・・
・・まあ、生徒のみんなの票でもオレが少し多かったみたいだけど・・・

「持ってきわよ。」
松本たか子先生は布団袋のような大きな物を持って、今ではオレと直美たちしかいない控え室に入ってきた・・・
「それじゃ戸田さん、着替えましょうか?」
・・あ・・あれにドレスが入ってるのか・・・
「・・はぃ・・・」
・・ついにこの時が来てしまった・・・
「あなたたちは少しの間出ててくれる?」

「はい。じゃぁ、わたしたちは手分けして有希のお母さんたちを探してきてあげる。」

「・・あ・・う・・うん・・・」

・・かあさん・・息子のウエディングドレス姿なんて・・・喜んでくれるかなぁ・・・

・・優勝者が着るウエディングドレス・・・長谷川には自分から着たいなんて言ってしまったけど・・・今のオレには喜んでいいんだか、どうなんだか良くわからない・・・

・・最初は自分が着ることだけしか考えてなかったけど・・・その恰好でみんなの前に出なきゃいけないし・・・それにかあさんや、麻衣や、レナにまでオレのウエディングドレス姿を見られてしまう・・・進藤さんも写真に撮るだろうし・・・そうなったら、ＪＩＮＯＮにまで載せられてしまうかも・・・そんなことを考えていたら頭がパンクしそうになる・・・

・・でもこれはもう決まったこと・・・優勝しちゃったからには着なきゃいけないし・・・オレも読者モデルをやることで、いろんな服を着こなせる自信は昔よりずっとある・・・ウエディングドレスだって着こなせると思う・・・ただ・・・この恥ずかしさだけはどうしようもない・・・

・・オレの中にはまだ男の心が残っている・・・ていうか男のころと何も変わっていない気もする・・・そんなオレがウエディングドレスなんか着て恥ずかしくないハズがない！

・・・でも・・・一方では着たい気持ちがあるのも事実だ・・・ウエディングドレスを着れると思うと・・妙にワクワクする・・・恥ずかしいけど・・・すごく着てみたい・・・それはオレの女の子の

部分がそう思っているのだろうか・・・

！・・・でもそんなオレの不安も、袋を開けて中から現れたウエディングドレスを見たとたん、一気に吹き飛んでしまった・・・

「・・わぁ・・やっぱり・・素敵だなぁ・・・」

「ふふっ、戸田さんそんなに見とれてないで、あなたが着るんだから。」

「あっ・・はぃ・・・」

・・そうなんだ・・・この素敵なドレスを・・オレが着ていいんだ・・・！

「それじゃ、これがインナーね・・・ビスチェと、ストッキングと、ガーターと・・・あ、戸田さんガーターの付け方わかる?」

「・・・い・・いぇ・・・」

さすがにオレもガーターなんか付けたことない・・・

「じゃぁ、ストッキングとビスチェ付けたら教えて?あとはやってあげる。」

「・・はぃ・・・」

先生が控え室を出るとオレは制服を脱いで・・・スリップとブラも取ってパンティー1枚だけになった・・・

今日はオレが買っておいた白いパンティーの中でもレースたっぷりの、とびっきりカワイイ新品のヤツをおろしてきたんだけど・・・なんだかこうなることを期待してたみたいで恥ずかしい・・・

・・そしてストッキング・・モモのところに巾広のレースが付いている、白いストッキングをはいた・・・こうして見るとオレの足も

女の子らしくなったもんだなぁ・・・スラッとしてる・・・

それからビスチェ・・下の部分にはストッキングを留める為のガーターがぶら下がっている・・・

・・うぅっ・・・意外に硬いなぁ・・・それにうしろのホックが多くて留めにくい・・・

「・・せ・・先生・・・・」

「なに？」

「・・あのぉ・・うしろが留めにくくて・・・・」

「あ、ごめんね。手伝うわ・・」

そう言って松本先生は控え室に入ってきて、後ろ向きのオレの背中のホックを閉めようとした。

「う～ん・・一番内側でも良さそうね・・・戸田さん、ちょっと息吐いてくれる？」

「・・はぃ・・フゥ～・・・」

オレが息を吐き切った時、先生はビスチェを引っ張って一番上のホックを留めた・・・

「うぐっ・・・」

「あっ！　キツかった？　大丈夫？」

「・・ち・・ちょっとキツいけど・・・大丈夫です・・・」

「じゃぁ、もう少し息止めててね・・・」

そう言うと先生は、息を出したまま止めて必死でお腹を引っ込めているオレの、背中のホックをグイグイ留めていった・・・

「うぅぅ・・・！　ふぅ・・・」

ビスチェでキツく締めつけられて息がしにくい・・・オレは胸で何度かあえいで息を整えた・・・ウエディングドレスを着るのも楽じゃない・・・

「少し苦しいかも知れないけど我慢してね。」

・・そっか・・・オレは女の子にしては少し大きめだからなぁ・・・

「・・もしかして・・・入らないかも知れませんか？」
「ううん、このビスチェが入れば大丈夫よ。」
「・・よかった・・・」
「内側まで閉まらなかったコでも大丈夫だったから・・・戸田さんって結構細いのね。」
・・男にしては細いのかも・・・
「ウエストは細めにしといた方が綺麗に見えるからね。たとえ入ったとしても、ドレスがパツパツじゃカッコ悪いでしょう？」
・・たしかに・・そうかも・・・

それからビスチェから下がったガーターでストッキングを留めた・・・ガーターなんて初めてだし、大人っぽい感じで照れちゃうな・・・

「それじゃドレスを着ましょうか・・よいしょ・・・」
先生はドレスを出して広げ、後ろのジッパーを開けた・・・
「はい、戸田さん足入れて・・・」
オレは先生が持っているドレスに足を通し、袖へと手を通した・・・
「・・・けっこう重いんですね・・・」
「そうでしょう？　ウエディングドレスってビーズとか付いてるから見た目より重いのよね。生地も多いし。」
先生はオレの後ろにまわって、背中のジッパーを上げた・・・するとキュッと締って体に密着したせいか、いくらか軽くなった気がした・・・

ヒジまである白い手袋と、まっ白なハイヒール・・・
「どうかな？　わぁ！まるで戸田さんに誂えたみたいじゃない？」
「・・・・・」
・・鏡に映ったウエディングドレス姿のオレ・・・胸元は広く肩まで開いて・・・横を向くと背中も大きく開いている・・・まっ白なドレスに刺繍やビーズがキラキラ光って・・・オレ・・まるでお姫

さまになったみたいだ・・・

“トントン”
ドアを叩く音・・・
「有希？もう着替え終った？」
・・弘子の声・・・
「・・う・・うん・・入っていいよ。」
でもドアを開けてまっ先に入って来たのは弘子じゃなかった！

「有希ちゃ～ん！　なんてカワイイのぉ！！」
「・・に・・二光さん・・！」
・・なんで二光さんがここに？！
「有希ちゃん、なんで言ってくれなかったの～？　麻弓さんに（レナの母親で有希のお母さんの妹）有希ちゃんがクイーンコンテストに優勝してウエディングドレス着るって聞いて～　だったら絶対あたしがメイクするって来ちゃったの～！」
「・・そ・・そんな・・わたしが優勝するって決まってないのに・・・」
「でも優勝したんでしょ～？」
「・・ま・・まあ・・そうなんだけど・・・」

「でも・・なんで弘子が・・・？」
「たまたまそこで有希のこと聞かれたから連れて来てあげたの。二光さんのウワサは有希に聞いてたし。」
「なに～？　有希ちゃんったら、お友達にあたしのウワサなんかしたの～？」
「いや・・ウワサっていうか・・ときどき二光さんのエステに行ってるって話を・・お化粧習ったり・・・」
「なんにしても有希ちゃんがあたしの話してるなんて感激しちゃう～！！」

・・なんか・・二光さんがいると調子狂っちゃうな・・・

「あっ！　でも学校でお化粧なんてダメなんじゃないですか？　ねえ、松本先生？」

「厳密にはそうだけど、学園祭クイーンなんだから特別に良いんじゃない？」

「そうよね～先生！こんなに綺麗なドレスなのにメイクもしないなんてオカシイわよぉ～！」

・・ホントかなぁ・・・後で怒られないかなぁ・・・

・・でも・・二光さんにキレイにしてもらえるなら・・・後で怒られたっていいか・・・

「今日は腕によりをかけちゃうわよ～・・プロの技で有希ちゃんを世界一カワイイ花嫁さんにしてあげる～！」

・・うぅ・・・目が本気だ・・・ちょっとコワイかも・・・オレどんなにされちゃうんだろう・・・

二光さんが持って来たメイク道具を広げて、松本先生と弘子が見守る中、ウエディングドレス姿のオレにメイクをしていく・・・もちろんドレスが汚れてしまわないようにケープをかけて・・・

オレも二光さんの経営するエステでお化粧を教えてもらうとき、二光さんにメイクしてもらうこともあるけど・・それはオレがするためのお化粧法を習うためで、二光さんに本気のメイクをしてもらうのは初めてだ・・・どんなメイクになるのか・・ドキドキするし・・・ワクワクする・・・

二光さんのメイクが進むにつれて、松本先生と弘子の表情が驚きに変わっていく・・・もしかして・・とんでもない派手なメイクな

んじゃないだろうな・・・

念入りに目もとのメイクが終って・・・くちびるにはピンク系のルージュにたっぷりのグロス・・・ほっぺたには薄くチークを広げてるみたい・・・

メイクが終ると、上げていた前髪を下ろし、後ろはアップにしてまとめてる感じだ・・・そして頭の上にベールをのせた・・・

「できたわ～！　有希ちゃんステキよ～～！！」

「・・・・・」

・・鏡を見てオレは驚いた・・・松本先生と弘子が驚いていた理由が良くわかった・・・

・・そこにいたオレは、まぎれもなくオレだけど・・・オレとは思えないくらいキレイな女性になっていた・・・

（・・ス・・スゴイ・・これが・・プロの技なのかぁ・・・）

一見ノーメイクにも見えるその顔は、でもしっかりとメイクしてあって、大人の女性のようにも見えながら、少女のような可愛さも秘めている・・・普段のオレとはもちろん違うし・・読者モデルのオレとも違う・・・それなのにオレらしさもしっかりと残っているのがスゴイ！

「素晴しいわ！」

松本先生が感嘆の声を上げると、弘子も言った・・・

「有希きれい！　こんなに綺麗な花嫁さんなんて見たことないよ！」

「・・あ・・ありがとう・・・」

・・オレは自分を鏡で見て、こんなにきれいだと思ったのは初めてかもしれない・・・でも・・これはきっと二光さんのマジックなん

だと思う・・・だって・・オレなのに・・オレじゃないみたいなんだもん・・・！

「有希いる？　お母さんたち連れてきたよ！」

直美と千里がかあさんたちを連れて控え室に入ってきた・・・そしてオレを見た途端、みんな石になったように固まってしまった・・・

「・・ど・・どうしたの？・・みんな・・・」

オレが言うと、最初に声を上げたのは麻衣だった・・・

「お姉ちゃん？」

「・・う・・うん・・・」

・・な・・なんか・・照れくさいな・・・

「すごい！お姉ちゃんキレイ！」

「ユウったら、どうしちゃったの？こんなに女らしくなって・・・っていうか女らしいのは元々だけど・・ユウがこんなに大人っぽくなるなんて！」

「・・や・・やめてよレナ・・・そんなに言われると恥ずかしいよ・・・」

「ユウのお嫁んさんになりたいって夢が叶ったね。」

「・・う・・うん・・・相手はいないけど・・・」

うわっ！・・オレ・・なに恥ずかしいこと言ってんだろう！・・ここにはオレのこと男だって知ってる人もいっぱいいるのに・・・

「有希、あなたもいつの間にかこんなに素敵な女性になってたのね・・・かあさんちっとも気づかなかったわ。」

「か・・かあさん・・・なんかヘンよ！・・・みんなも！」

どうしちゃったんだよ・・いったい・・・

「みんな二光さんのメイクの魔法にかかってるのよ！　わ・・わた

し・・何にも変わってないのに！」
・・なんか・・・みんなヘンなこと言うから・・・悲しくなっちゃうじゃない・・・オレはオレなのに・・・

「有希・・ごめんね。かあさんそんなつもりで言ったんじゃないのよ。かあさん有希のこと褒めてあげたかったの。」
「え？！」
「立派に成長したんだなって・・有希は有希よ、みんなわかってるわ・・・」
そう言ってかあさんはオレを抱きしめてくれた・・・
「・・か・・かあさん・・・」
・・みんなも“うんうん”とうなずいてる・・・
「・・あ・・ありがとう・・みんな・・・」

・・なんだろう・・この気持ち・・・胸が熱くなってくる・・・

ふとまわりを見ると、麻衣がいて、レナがいて・・・弘子、千里、直美がいて・・・松本先生と二光さんまでいる・・・

そしてオレはウエディングドレスで・・・かあさんに抱かれて・・なぜか涙ぐんでる・・・

なんだか・・まるで・・・本当の結婚式みたいだ・・・

あと・・となりに純平がいてくれたらなぁ・・・？！

・・オレ・・何てこと考えてるんだ！　そんなこと絶対ありえないのに！　オレが純平のお嫁さんになんて・・・オレって何てバカなんだろう・・・

？・・・あれ？・・・・でも・・何かが足りない気がする・・・？・

・・そうだ！・・・長谷川がいない！

「・・長谷川さんは？　かあさんたちと一緒じゃなかったの？」
「あれ？　さっきまでいたのに？　どこに行っちゃったのかな？」
麻衣があたりをキョロキョロ見まわした・・・
「あ、いいよ。長谷川さん、クラブの用事があるんだと思うから・・・」

・・でも・・たぶん違うと思う・・・ここにはいたくなかったんだ・
・・長谷川はこういう場が好きじゃない・・・

・・でも・・・オレは長谷川にもいてほしかったな・・・

「あら～有希ちゃん、せっかくの完璧なメイクが涙で台無しぃ～！」
「あっ・・・ごめんなさい・・・二光さん・・・」
「大丈夫よ～　有希ちゃんのためなら何度でも直してあげるぅ～！」
「・・あ・・ありがとう・・二光さん・・・」
・・せっかく素敵にメイクしてもらったのに・・・
・・もう泣かないようにしなきゃ・・・

――――――――――
――――――――――――――
――――――――――――――

“　それでは今年の学園祭クイーンに登場していただきましょう！　”

・・ステージのソデ・・閉まっているカーテンのこちら側で待っていると、急にそんなアナウンスが聞こえてきてドキッとした・・・ステージが見えないから、よけいに緊張がこみあげてくる・・・

体育館に大きな拍手が響く・・・

・・オレはウエディングドレスで・・両手で小さなブーケをしっかり持って・・・カーテンがひらくのを待っている・・・

“　学園祭クイーン戸田有希さんです・・・どうぞ！！　”

・・カーテンがひらくと・・そこには赤いジュータンが・・ステージの中央まで続いていた・・・

・・そして・・目の前には・・逆光の中、白いタキシードを着た背の高い男の人が・・オレに向って手をさしだす・・・

「？」

オレがどうしていいか解らずにいると、その男の人が小さな声で・・・

「戸田さん、手をとって。」

「え？・・・あっ・・・大森先輩？！」

その人はあの“広島風お好み焼き”の・・・バレー部の大森先輩だ

った！
・・あまり背が高くて、髪も短かめだから・・男の人かと思った・・
・

「・・なんで・・先輩が・・・？」
「最初から私がエスコート役やることに決まってたの、でも戸田さんがクイーンで良かった。さ、お手をどうぞ、花嫁さん。」
「！」
・・オレは差し出された先輩の手の上に、そっと右手を重ねた・・・
そして先輩に導かれてステージの中央へ向う・・・

・・なんか・・オレ本当の花嫁さんになったみたいだ・・・

中央まで来ると、オレは先輩と並んで立った・・・

・・こうして・・背が高い先輩の横に立っていると・・なんだか・・
自分が本当の女の子のように思えてくる・・・

ステージの下では進藤さんがカメラをかまえて、オレたちを写している・・・横の方に目をやると、白石先生がハンカチで目尻を押さえていた・・・泣いてるのかな・・・？

・・長谷川はどこにいるんだろう・・見渡しても長谷川を見つけることは出来なかった・・・長谷川・・オレのこと見てくれてるかな・・
・・

・・それにしても・・・恥ずかしくてたまらない・・・

・・顔が燃えるように熱い・・・オレ・・今どんな顔してるんだろう・・・

“きゃ！”

いきなり先輩がオレの腰に手をまわし、オレは体を引き寄せられて、思わず小さな悲鳴をあげてしまった・・・

「・・せ・・先輩・・・？」

「戸田さん、すごく可愛いよ。」

・・ヒィ～！！・・・先輩・・なんでそんなこと言うの・・・オレ照れちゃう・・・

・・見上げると、先輩もオレの方を見おろしていた・・・オレはドキッとして思わず目をそらせてしまった・・・

・・先輩・・・カッコ良すぎだよ・・・

・・そんなに強く引き寄せられたら・・・オレもついつい・・先輩に身をゆだねてしまいそう・・・

・・・ほんと・・今日のオレ・・どうかしてる・・・

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

「今日は後片付けまで手伝ってくれてありがとね。」

帰り、駅で長谷川と別れた後は、オレと麻衣のふたりだけ・・・か

あさんはオレのウエディングドレス姿を見てから、会社に戻ったらしい・・・麻衣は残って学園祭の後片付けを手伝ってくれたのだ。

「ううん、楽しかった。お姉ちゃんの学校っていいとこだね。あたしも高校は白鴻に行こうかなぁ。」

「でも・・来年からウチの学校、共学になっちゃうから・・・雰囲気も変わっちゃうかもしれないよ。」

「そうなの?なんか残念。」

「うん・・どうなるかは、なってみないとわからないけどね・・」

「でも、今日のお姉ちゃんスゴくキレイだった!それにスッゴク可愛かったよ!」

「あ・・ありがとう・・・」

・・妹に“可愛い”なんて言われるのもどうかと思うけど・・・

「お姉ちゃんのとなりにいた背が高い人、カッコ良かったね。」

「あぁ、大森先輩ね。」

「あの人、お好み焼き焼いてた人だよね。」

「?・・麻衣・・良く知ってたね・・・」

「うん、お好み焼き食べたもん。順ちゃんが連れてってくれたよ、美味しいからって。」

「・・長谷川さんが?」

・・・長谷川のヤツ・・・食べないなんて言ってたクセに・・・麻衣に奨めたりして・・・長谷川ってほんと変わってる・・・

「食べたの麻衣だけ?」

「ううん、みんなで食べたよ。おかあさんもレナちゃんも一緒に。」

「じゃぁ、長谷川さんも?」

「うん。」

・・・長谷川のヤツ・・・ほんとは食べたかったんだな?　素直じ

ゃないんだから・・・

「でもさぁ、お姉ちゃんいいなぁ、ウエディングドレスなんか着れて。」

「麻衣も着てみたい？」

「そりゃ着てみたいよ！」

「でも麻衣は大きくなったら結婚する時に着れるからいいじゃない。」

「それはお姉ちゃんだって同じでしょう？」

「え？・・わたしはダメよ・・・結婚なんて・・・」

「どうして？」

「・・どうしてって・・・」

・・・麻衣はオレのこと何だと思ってるんだろう・・・オレが結婚なんて出来るワケないのに・・・

「お姉ちゃん、今は性転換っていう手術すれば、男の人でも女になれるんだってよ。」

「・・・・・」

「お姉ちゃんも手術すればいいのよ。」

「・・そ・・それはそうだけど・・・」

・・でも・・それは本当の女の人とは違う・・・形を変えるだけでは本当の女にはなれない・・・

「そんなに心配しなくても、お姉ちゃんキレイなんだから絶対に結婚できるよ！」

「う・・うん・・・」

そりゃぁ、今は戸籍を女に変えれば、男の人と結婚だって出来ることはオレも知ってる・・・だけど・・そんなニセモノの女と結婚する男の人なんて、そんなにいないと思う・・・

・・それに・・もし仮にそんな男の人がいたとしても・・・オレは結婚したいとは思わない・・・だって・・オレは赤ちゃんを産むことが出来ないんだから・・・

・・もちろん・・病気とかで子供が出来ない女の人もいると思うけど・・・女の人だけど出来ないのと・・男だから出来ないのでは・・だいぶ違うと思う・・・

・・もしも・・男の人が赤ちゃんが出来なくてもいいと言ったとしても・・・オレには耐えられそうにない・・・

・・・だからこそ・・今日はウエディングドレスを着ることができて・・・そしてみんなに祝福されて・・・恥ずかしかったけど・・ほんとうに嬉しかった・・・オレはウエディングドレスなんて着れないと思ってたから・・・

「どうしたのお姉ちゃん？　ニヤニヤして。」

「・・あ・・・ううん・・何でもない・・・」

たぶん、今日のことは、オレにとって一生忘れることのできない思い出になるんじゃないかと思った。

第１１２話　朝礼　共学化へ・・・

「え～　みなさん、夏休みが明けてからの、学園祭の準備から本番までお疲れ様でした。」

月曜日の朝、朝礼で校長先生のあいさつ・・・本当なら昨日は日曜日だったのだから、今日は休みたいくらいだ・・・でも学園祭の準備のせいで勉強がはかどらなかったみたいだからなぁ・・・そう言って若村先生がボヤいてたし・・・

「今日からは気持ちを切り替え、勉学に打ち込んで下さい。特に３年生にとって２学期は大切な時期となります。進学や就職に向けて最後の仕上をしなくてはなりません！　また、２年生は何かと気持ちが弛みやすい時期ですから、将来の目標に向って気持ちを引き締めましょう！」

・・そう言われてもなぁ・・・将来の夢なんてオレには良くわからないし・・・第一・・・まだ学園祭の余韻でボーッしてる・・・みんなそうじゃないだろうか？

「・・・さて、今日はみなさんに大事な知らせがあります。」

・・も・・もしかして・・・みんなも少しザワザワしてる・・・

「え～　当校は創立以来、一貫して健やかな女子を育むことを目的とし、女子校としてやってきましたが、来年度からは共学化することになりました。」

“え～！”と驚きの声は上がったものの、その声は思いのほか少なかった・・・
やっぱりみんな、そうじゃないかと思っていたのだろう・・・やっぱり来たって感じか・・・

「え～　では詳しい話は教頭から・・・」

校長先生に代わって教頭先生が壇上に上がる・・・

「今、校長先生からお話があったとおり、来年から男子が入学して来ます。　つきましては制服も現在のものから、新しい制服へと変わります。」

これには全員ガヤガヤしだした・・・

「もちろん、在校生であるみなさんは、そのままの制服で結構なのですが、現在の制服が小さくなったり、古くなって買い替えようという場合は、新しい制服を着ることになります。」

・・ガヤガヤがさらに大きくなる・・・

「ついては速やかな変更のためにも、在校生が買い替える場合に限り、学校から半額を補助することに決まりました。」

・・もうそうとうワイワイ言って、教頭先生の話も聞こえないくらいだ・・・

「みなさん静かに！　来週から冬服になりますが、入学案内のモデルにもなってくれた2年3組の戸田君と佐倉君が新しい制服で登校

してくれます。」

“え～っ！！”・・オ・・オレと千里が？！

・・みんなの視線も一斉にオレたちの方に集まった・・・なんかオレいたたまれない・・・

「特に戸田君は現在も雑誌のモデルをやっているうえ、今年の学園祭クイーンでもありますから、みなさんの良いお手本になってくれると思います。」

“ひぃ～”・・なんてこった・・・そんなことなら、前もって言っておいてほしかった・・・オレ急に注目されたら・・恥ずかしくて仕方ない・・・

・・千里だってそうだと思う・・・

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー

ー　ー

ー

朝礼が終って教室に戻ったら、オレと千里はみんなに取り囲まれてしまった・・・オレたちが共学化のことを知ってて黙ってたことを、怒って吊るし上げるつもりじゃないだろうな・・・

「戸田さんと佐倉さんは知ってたの？」

「・・う・・うん・・まあ・・・」

「入学案内っていつ撮影したの？」

「・・あのぉ・・学園祭の前なのに誰も来ちゃいけないって土曜日

あったじゃない？・・あの日・・・」
「新しい制服もう着たんでしょう？どんなだった？」
「・・う・・うん・・結構いい感じだったわよ。カーキー色のジャケットと赤いチェックのスカートで、胸にはリボンが付いてるの・・・リボン結ぶのがちょっと難しいかな・・・？」
「へ〜　楽しみ！」
・・なんか・・みんな興味津々だ・・・べつに怒ってなかったみたい・・・よかった・・・

「でも、来週から2人だけ新しい制服なんてイヤじゃない？」
「・・うん・・・それは・・・」
オレは千里と顔を見合わせた・・・オレも千里も決して目立ちたがりじゃないから・・やっぱり2人だけ違う制服なんて恥ずかしい・・・
「だったらわたしも新しい制服にしちゃおうかな？　半額補助してくれるって話だったし！」
直美が言うと、みんな同調した・・・これは・・案外早く新しい制服が浸透するかも・・・そうなるとオレとしてはありがたいんだけど・・・

「早く戸田さんたちの新しい制服姿見たいわね。」
「うん、うん。」
「そ・・そんな大したもんじゃ・・・ねえ千里・・・」
・・もう・・オレどうしていいかわかんないよ・・・でも・・みんな怒ってなくて良かった！

ーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーー

「白石せんせ～ぃ・・あっ、お弁当ですか？」
「有希ちゃん！　いいわよ、どうぞ遠慮しないで。」
「・・すみません・・じゃぁ・・・」
オレは保健室に入ってドアを閉めた・・・

「・・わたしもここで食べていいですか？」
「いいわよ。お茶入れようか？」
「い、いえ・・パンなので・・・牛乳があるから・・・」
オレはさっき売店で買ったマヨウインナーの袋を開けてひとくち食べた・・・

「先生・・お弁当自分で作るんですか？」
「いいえ、恥ずかしい話だけど、お母さんが作ってくれるの。」
「へ～・・お母さんが？！」
「学生の頃から作ってもらってたら・・そのまま続いてしまってるの。なんだか今さらいらないなんて言いにくくて・・」
・・先生ってオレから見るとすごく大人っぽいけど、お母さんにとっては先生は子供なんだなぁ・・・なんか不思議な感じ・・・でも、お母さんにお弁当いらないって言えないなんて、先生やさしいなぁ・・・

「有希ちゃん・・私に用があるんじゃないの？」
「あ・・用ってほどじゃないんですけど・・・昨日先生・・泣いてたみたいだから・・どうしたんだろうって思って・・・」
「あぁ、ごめんね。有希ちゃんのウエディングドレス姿見てたら、なんだか妹がお嫁に行っちゃうみたいな気持ちになって。」
「え？　先生・・妹がいるんですか？」
「いいえ、いないんだけど、だから有希ちゃんを見ると妹みたいな

気持ちになるのかな？」

・・先生がオレを妹みたいに思ってくれてるなんて・・なんか嬉しい・・・オレも先生のことお姉さんみたいに思ってるから・・・

「わたし・・実は学園祭の時・・先生に着物きた姿見てほしかったんですけど・・ここに来る途中に教頭先生に捕まっちゃって・・・」

「でもビデオで見たわよ。活け花やってるところ撮ってもらったんでしょう？」

「・・そうなんですか？・・だったら良かった・・・」

・・たぶん教頭先生が写してたヤツだ・・・

「有希ちゃんが活け花やってるところ初めて見たけど、すごくお淑やかで見違えちゃったわよ。」

「・・お・・お淑やかなんて・・着物だったからそう見えただけですよ・・・着物だと動きが制限されるから、自然に女らしい動きになっちゃうんです・・・」

「そうなの？先生は着物きたこと無いから良く判らないけど、それだけじゃないと思けどな？」

「・・そうですか？」

「優雅な仕草だったわよ。」

「・・あ・・ありがとうございます。」

・・なんか・・先生にそんなふうに言われると照れちゃうなぁ・・・

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

放課後、クラブに向っていると、いきなり後ろから腕をつかまれた・・・

「あ、長谷川さん・・・」

「あんたねぇ・・・」

・・な・・なんか・・機嫌が悪いみたい・・・長谷川が“あんた”なんて言う時は、たいてい機嫌が悪い時だから・・・

「・・なに・・・？」

「あんた、何で共学になること知ってたのに、わたしに教えてくれなかったのよ！」

・・あ・・怒ってる人・・いた・・・

「わたしに言う機会くらいあったんじゃない？」

「・・だ・・だってさ・・・秘密だったんだもん・・・長谷川さんだけじゃないよ？　誰にも言ってないし・・・」

「・・原口さんにも？」

「うん。」

「ほんと？」

「うん、ほんと。直美にも言ってない。」

「・・・じゃぁ・・しょうがないか・・・」

「うん・・」

しょうがないって何だよ・・・

「でも、あんた運が良かったわよね。」

「え？　何が？」

「だって、わたしたちが入学するのがもし来年だったら、あんた男の子のままで入学しなきゃいけなかったじゃない？」

「？・・えっと・・・」

「わたしたちの時は共学が中止になったから、あんたは女の子として入学出来たんでしょう？」

「あ・・あぁ・・そっか・・そうよね・・・」

・・そうだった・・長谷川はオレが最初から女の子になりたかったと思ってるんだ・・・なんかややこしいなぁ・・・

考えてみれば・・長谷川はオレのこと、中学のころから女の子になりたかったコだと思ってるんだもんなぁ・・・そんなふうに見たら・・オレってどんなコに見えるんだろう・・・

・・・長谷川とは中学の頃はほとんど面識がなかったから、何とも思わないのかな・・・

・・そもそも長谷川って・・オレのことどう思ってるんだろう・・・オカマとかニューハーフみたいに思ってるんだろうか?・・・まあ、そう思われても仕方ないけど・・・

オレは自分のことをオカマとかニューハーフとは思っていない・・・オレは・・・行きがかり上、女の子になってしまっただけで・・・小さい頃のことは憶えてないけど・・・中学の頃は普通の男の子だったハズだ・・・男の子を好きになったこともないし・・・それなりにこっそりとＡＶを観たこともある・・・女の子に興奮してオチンチンが立っちゃったことだって何度もある・・・

・・だから・・もしオレが高校に男の子として入学していたら・・・それはそれで普通に男の子のまま、平凡な生活をしていたと思う・・・もっと先のことはわからないけど・・・たぶん女の子にはなってなかったんじゃないだろうか・・・?

・・それなのに今は女の子になって・・・そのうえ女の子から憧れられたりして・・・

・・ほんと人生って不思議だ・・・オレの場合が特に不思議なんだ

ろうけど・・・

「あっ！　有希先輩！！」
部室の戸を開けるとミサトちゃんが、飛びつくようにオレのところに走ってきた・・・
「ウチのクラスでも先輩の話題でもちきりですよ！」
「え？　わたしの・・・？」
「はい。早く新しい制服着た先輩が見たいって！」
「そ・・そうなの・・・？」
そんなに新しい制服に興味があるのかなぁ・・・そんなに期待してたら、案外ふつうだからガッカリするんじゃないかな・・・

「あたしも新しい制服に買い替えようかなぁ！」
「え？！　でもミサトちゃん・・まだ新しいし、小さくなってないんじゃない？　勿体ないわよ・・・」
「・・・そうなんですよねぇ・・お母さんが“あんたは小さいけん高校に入ったら大きくなると！”とか言って大きめなの買うから・・・なのにあたしこの1年全然大きくなってないし・・・あたしも有希先輩みたいに背が高くなりたいです！」
「そんな・・女の子は小さい方が可愛いよ！　わたしももう少し小さかったら良かったって思ってるのに。」
「そうなんですか？」
「うん、ミサトちゃんすごく可愛いもん。」
オレがそう言うと、ミサトちゃんは嬉しそうに笑った・・・ほんと可愛いんだから・・ミサトちゃん。
・・ミサトちゃんはオレの自慢の後輩だ！

――――――――――――――――――――――――――――――

―――――――――――――――
――――――――――

　弘子のバス待ちのためオレも電車を見送って、駅の下にあるバスターミナルのベンチでおしゃべり・・・弘子は家までのバスが少ないから大変だ・・・でも弘子にとってはそれが普通になってるから苦にはならないらしいけど・・・

「有希の秘密ってやっぱり共学のことだったのね？」
「・・うん・・・バレてた？」
「なんとなくね、でも入学案内の写真を千里と撮ってたとは思わなかったけど。」
「あっ、でもね・・入学案内はわたしたちだけじゃないのよ。なんと男の子役は古池鉄平くんなの！」
「古池鉄平ってあのテレビにも出てる？」
「そう！スゴイでしょう？　わたしもビックリしたもん。鉄平くんって純平と友達なんだよ！」
「へ～　じゃいろいろ純平くんの話聞けたんじゃない？」
「あ・・でもあまり時間なかったし・・純平もドラマで忙しいから最近は会ってないみたい・・・」
・・ほんとはオレもいろいろ聞きたかったんだけど・・・

「でも・・本当に共学になっちゃうのね。」
「うん・・わたし大丈夫かなぁ・・・」
「なんで？」
「だって・・いままではまわりも女の子ばかりだったから良かったけど・・・身近に男の子がいるようになると・・・わたしもつい男っぽい話し方とかしちゃうんじゃないかって心配なの・・・」
「それは大丈夫なんじゃない？」

「どうして？」
「女子校よりも共学の学校の方が、女子は女らしくなるって聞いたことあるわよ。」
「ほんと？」
「うん、一般論だけど。」

・・それは知らなかったなぁ・・・
「やっぱり女どうしだと恥ずかしくないことでも、男の子がいると恥ずかしいって気持ちが芽生えるんじゃない？」
「へ～・・そんなもんかなぁ・・・」
・・そういえば・・入学したてのころは、女の子どうしが平気でエッチな話とかしてるから驚いたことがある・・・そういう女どうしだと平気な会話も、男の子がいると出来ないってことはあるのかも・・・暑いからってスカートをバタバタやったり出来ないだろうし・・・生理用品のどれが使い勝手が良いなんて話は男の子の前ではとても出来ない・・・

・・じゃぁオレも今より女らしくなっちゃったりするのだろうか？
でも・・それは本当の女の子の場合の話で、オレには当てはまらないんじゃないかという気がする・・・だって・・オレは男の子に女らしいと思われたいワケじゃない・・・ただ男だとバレたら大変なだけで・・・
「有希は心配しなくても、今までどおりで大丈夫よ。　わたしたちから見たって有希は女らしいんだから。」
「・・・・・」
「男の子なんかが見たってわからないわよ！」
「・・・・」

・・本当にそうならいいけど・・・男の子と女の子では見るところが違うかも知れないし・・・女の子から見れば女らしく見えても、

男の子から見るとそうは見えない可能性もある・・・オレは男だったからわかるんだけど、女の子が可愛いっていうコが、男から見ても可愛いことってあまりないように思う・・・

「でも不思議よね。有希がウチの学校で一番女らしいなんて。」
「そ・・そんなことないよ！」
「だって有希、学園祭クイーンじゃない。それって一番女らしいってことでしょう。」
「あ・あれは・・けっこう接戦だったし・・・」
「接戦だったのは歌のせいよ。別に有希がヘタなわけじゃないけど・・みんな上手だったし、最近の歌だったじゃない？　岡村孝子はみんな知らないから、きっとそのせいよ。」
「・・・・・」
・・そうだったのか・・・どうりで先生に評判が良かったハズだ・・
・歌が古かったせいか・・・

「有希たち来週から新しい制服だからまた目立っちゃうわね。」
「・・うん・・・」
「でもみんなは楽しみにしてるわよ。」
「そんなに新しい制服が見たいの？　そこまで目新しい感じじゃないじゃないから、あんまり期待してるとガッカリするよ？」
「何いってるの。みんなが見たいのは新しい制服じゃなくて、それを着た有希を見たいのよ。」
「・・・そうなのかな？」
・・みんなも物好きっていうか・・・

「千里も有希の制服姿、似合ってて可愛かったって言ってたわよ。」
「ほんと？　千里が？」
「うん。」
「千里だって似合ってたし、すごく可愛かったわよ！」

「そんなにムキにならなくたって解ってるわよ。だから二人が選ばれたんでしょう?」
「・・うぅ・・・」
・・そんなのオレにはわかんないよ・・・教頭先生に聞いてみないと・・・

「あっ!バスきた。じゃぁね有希。」
「あ、うん・・バイバイ。」

「・・オレも帰ろっと・・・」
オレは弘子が乗ったバスを見送ってから、オレも電車のホームに向った・・・

第１１３話　休日　レナとオレ（前書き）

前回の１１２話、５月３１日夕方までに読んだ方へ、
２番目の点線以下の白石先生の部分を書き足しています。

第113話　休日　レナとオレ

“ピンポ～ン！”
「はい？」
玄関のチャイムを鳴らすとレナの声が・・
「レナ～　わたし・・有希。」
「入って、開いてるから。」

オレがドアを開けて入ると、玄関にレナが待っていた。
「どうぞ、ユウ。」
「おじゃまします～す・・」
と言っても家にはレナしかいないんだけど・・・レナのお母さんは春日原〈かすがばる〉の駅前にある美容院にいるから・・・ここは天神から2つ目の駅・平尾〈ひらお〉に近いところ・・レナのお家なのだ。

サンダルを脱いで家に上がろうとするとレナが言った。
「あっ！　グラディエイター買ったの？」
「うん。　このまえ撮影の時に履いて、可愛かったから似たヤツを・・・」
グラディエイターというのは細い革ヒモで出来たブーツみたいな形のサンダルだ。古代ローマ時代、奴隷の拳闘士って人が履いてたサンダルを元にしたデザインらしい・・たしか同じ名前の映画もあったんじゃないかな・・・そんな奴隷が履いてたデザインが、現代の女の子にはオシャレに感じるのだから不思議だ・・・もっとも女の子にかかったら何だって“かわいい～！”ってなっちゃうんだけど・・・
「そのマキシワンピもいいね。」
「そう？　良かった。」

やっぱり足元まであるノースリーブの小花柄マキシワンピースを合わせたのは正解だったかな・・・

「でも、ちょっと清楚すぎかな？　それにせっかくのグラディエイターが隠れて見えないじゃない！」

「・・そっか・・わたしもそれは思ったんだけど・・・」

「まあ、上がってよ！」

「うん・・」

・・本当はグラディエイターを履くのが少し恥ずかしくて、長いマキシで隠してしまったのだ・・・撮影でスタジオで履くのは平気だったけど・・いざ実際に街に履いて行くと思うと尻込みしちゃった・・・やっぱり切り替えのセットワンピにすれば良かったかなぁ・・・マキシワンピはオレには少し大人っぽすぎるし・・・

「これなんかどうかな？」

レナが渡してくれたのは半袖のGジャンだった・・・

「ほらユウみたいな大人しいコは、マキシワンピにはこれくらいハードな方が可愛いよ！　これならグラディエイターにも合うでしょう？」

「うん・・」

・・・ほんとうだ・・・さすがレナだなぁ・・・オレもオシャレにはだいぶ自信がついてきたけど・・レナに比べるとまだまだだ・・・

「それと帽子・・・ウエスタンとカンカン帽、どっちがいいかな？」

レナはオレの頭にウエスタンとカンカン帽を交互に被せてみて

「やっぱりウエスタンね。これ貸してあげる。」

「ありがとう。」

オレはどうしても女の子らしくまとめてしまうクセがあるから、レナの大胆なコーディネイトは為になる！　でも、なかなか真似出来ないんだよなぁ・・・

「レナは？どんな服で行く？」
「う～ん・・ユウがウエスタン風だから、わたしもウエスタンにしようかな！」
レナはタンクトップに、革のピラピラが付いたジャケットとセットの革のミニスカート・・・こっちは本格的なウエスタンだ・・・レナはこういうボーイッシュなのが良く似合う！

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

平尾から電車で天神へ・・・考えてみたらレナと買い物するのは久しぶり・・・今年は夏休みもレナはおばさんのお店の手伝いしてたから、オレと遊ぶ時間もあまりなかったし・・・オレの方もいろいろあったし・・・

「これもいいなぁ・・これも・・あっ！これも可愛いなぁ・・・」
「もう、ユウはいっつも迷うよね。」
「だって、どれも可愛いんだもん・・・」
・・ほんと女の子のランジェリーって卑怯だ・・・シンプルなのも、レースのも、リボンが付いたのも・・ピンクのも、水色のも、黄色もの・・・どれも可愛くてなかなか選べない・・・
「そんなに迷うなら全部買っちゃえばいいじゃない！」
「でも・・おこづかいが・・・」

かあさんから預かってるオレのおこづかいでは、そんなにいくつも買うことは出来ない・・・こういうランジェリーショップの下着はダイエーなんかで売ってるやつと違って高いのだ・・・
「・・ねえ・・レナだったら・・どれがいい？」
「わたしはそんな少女趣味じゃないわよ。」
「・・うぅ・・・」
・・たしかにレナが好む下着はオレよりずっと大人っぽい・・・少し色っぽいのが好きみたいだ・・・

「ユウもこういうのにしたら？」
そう言ってレナがオレに見せたのは、黒いレースのランジェリーだった・・・
「そ・・そんなの・・似合わないよ・・だいいち着る時ないし・・・」
「ユウはまだまだ子供だなぁ！」
「こ！・・子供でいいもん！」
・・オレは少女趣味と言われたって・・やっぱり可愛いのが好きだ・・・
「・・やっぱりこのピンクのにしよっと！」
オレは急いでブラとパンティーのセットを選んだ・・・どちらもピンクに白のレースが付いてて可愛い・・・

「ユウはそういうのが好きだね。まあ似合ってるけどさ。」
「・・・・・」
オレはまだ女の子になって2年も経ってないから、大人の女なんてのはピンとこない・・・まだ高校生なんだから可愛いのが好きでもいいと思う・・・色っぽいのは大人になってから着ければいい・・・・・レナだってオレと同じ歳なんだから、大人ぶってるだけじゃないのだろうか・・・？

・・それに・・オレだって・・もう少し大きくなったら・・色っぽい下着だって似合うようになると思う・・・

でも、レナと買い物するのは楽しい。レナは幼なじみだしイトコだから気がねもいらない・・オレのことも良く解ってくれる・・・時々イジワルな時もあるけど・・それは長谷川のと違って、オレのためを思ってやっているみたいだし・・・

・・でも・・それがわかるのは大抵後になってからなんだけど・・・

レナはオレが忘れてしまった、オレの小さい頃のこと・・オレがまだ女の子の恰好をしてた頃のことを憶えているから、オレに対してその頃と同じように・・・オレと女の子どうしのように接してるみたい・・・だからオレもレナの前では、安心して女の子でいられるような気がするのだ・・・

とはいえ、小さい頃から順調に高校生に成長したレナと違い、オレの場合は小さい頃のことは憶えていないし、その後は普通の男の子だったから、レナとは同じ歳だけどオレの方が妹みたいに扱われてしまうのはどうしようもない・・・それともオレとレナの関係は昔からそうだったのだろうか・・・？

「これなんかどう？　ユウが好きそうな感じだけど。」

オレの体に服を当てて、鏡越しにオレに話かけた・・・

・・さすがレナ・・オレの好みを良くわかってる・・・オレはこういう柔らかい感じのフェミニンなのが好きだ・・・

「ほら、可愛いじゃない！」

「うん・・いいけど・・ちょっと高いかなぁ・・・」

女の子の服って・・可愛いから色々ほしくなっちゃうけど・・どれもけっこう高い・・・

「ユウはモデルやってるんだからお金あるんじゃないの？」
「でも、読者モデルだから・・それにお仕事で貰ったお金は使わない約束なんだもん・・・」
・・だからオレが使えるお金は、かあさんに貰ったものだけだ・・・
もちろん高校生のオレにとっては十分に貰ってるけど・・服や靴なんか買えばすぐなくなっちゃう・・・
「ユウってモデルの仕事でいくらくらい貰ってるの？」
「知らない・・かあさんが持ってる通帳に振込んでもらってるから・・・」
「いくら貰ってるかくらい聞けばいいのに。」
「かあさんに？」
「お母さんでも、ＪＩＮＯＮの人にでも。」
「そんなぁ・・聞きにくいよ・・・」

・・かあさんがオレが読者モデルをして貰ったお金を使わないようにと言ったのは、たぶん男の子の頃のオレはお金の使い方がヘタで、あるとすぐに使ってしまったからだと思う・・だけど、自分がお仕事して貰ったお金を使わずにおいて、かあさんに貰ったおこづかいを使っていると思うと、なんだかあまり使っちゃ悪いような気がして・・オレは最近はあまり無駄づかいしなくなった気がする・・・もしかして・・かあさんはこうなることもわかってたのだろうか・・・？

「やっぱり・・もう少し安いのにする・・・これ可愛いけど・・・」
・・可愛いからってこんな高いの買ってたら・・お金なんてすぐなくなっちゃう・・・
「じゃぁ他のお店に行こうか？」

「うん。」
・・探せばもっと安くて良いのがあるかもしれないし・・・レナと一緒にいろんなお店を見てまわるのも楽しい・・・
・・男の頃は、かあさんや麻衣がいろんなお店を見てまわるのが、何でかわからなかったけど・・・今はかあさんたちの気持ちが良くわかる・・・男の人には似たような服に見えても、それぞれに違うのだ・・・それに、女の子にとっては見てまわること自体が楽しい！
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
「はぁ・・疲れた・・・」
地下街の真ん中にあるアートコーヒーでアイスコーヒーを飲みながら言うと
「そう？　わたしは全然疲れてないけど。」
レナはそう言って笑った・・・どうも女の子は買い物をすると疲れるより元気になるみたいだ・・・そういう点ではオレはまだまだ男っぽさが残っているのかも知れない・・・いろんなお店を見てまわって買い物をすると、楽しいけどすごく疲れてしまう・・・
「そういえば、このまえの学園祭の時さぁ。」
「うん・・」
「ユウをエスコートしてた背が高い人、あの人カッコ良かったよね。」
「あ、うん・・大森先輩ね・・・」
「ユウったら、すっごい寄り添っちゃってさ！」

「えぇ？！　そうだった・・？」
「チラチラ見上げる目つきが恋する乙女って感じだったよ。」
「！・・・そ・・それは・・・先輩が背が高いから・・・どうしたって上目づかいになっちゃうのよ・・・」
「そうかなぁ？　ほっぺた赤らめちゃって、ユウもあの人のこと好きなのかと思った。」
「ま！・・まさかぁ・・・先輩も女の人なのに・・・あれは・・ウエディングドレスなんか着て恥ずかしかったからよ・・・」
・・オレも女の子になったのに・・・女の人を好きになってたら世話ない・・・

「別におかしくないと思うけど？　だって女の子がカッコいい女の子を好きになることなんてフツウにあることよ。」
「それは・・そうかも知れないけど・・・」
・・でも・・自分が女の子になっておいて・・・女の子を好きになるなんて・・・そんなのありえないと思う・・・
「ユウは相変わらず考え方がカタイね。女の子どうし好きっていったって、なにもエッチな関係になるワケじゃないんだから。」
「・・・・・」
「ユウの学校は女子校なんだし、ただカッコいい先輩に憧れて、一緒にいたいって思うくらいいいじゃない。友達とはちょっと違うくらいの感じで。」
「・・・・・」
・・そりゃそうだけど・・・オレにはそんな気持ちはない・・・

「それに、ユウだってバレンタインに女の子からチョコもらったって言ってたじゃない。」
「そ・・それは・・・」
・・オレのことを好きっていうコはいるけど・・それはオレがモデル・・・読者モデルなんかやってるから・・そういうところに憧れ

てるんだと思う・・・あくまで“春日ユウ”に憧れているのだ・・・

「・・それとは違と思うけど・・・そういう意味でなら、わたしだってモデルの蟹原さんに憧れてるもん・・・でも・・それは好きっていうのとはちょっと違うの・・・」

・・憧れっていうのは・・その人に少しでも近づきたいって気持ちなんだと思う・・・近づきたいって言っても、実際に近くに行きたいとか、おつき合いしたいって意味じゃなく・・・自分を高めるための目標みたいな・・・

・・女の子としてもまだまだなオレが、トップモデルの蟹原さんを目標にするなんて・・・おこがましいかもしれないけど・・・モデルとしてではなくて、女の子として少しでも近づきたいと願うくらいはいいと思う・・・

・・願いなんて・・そう簡単に叶わないことくらい・・誰だって知ってる・・・

「でも、ユウがあんなにウエディングドレス姿が似合うなんてね。やっぱりユウは女の子になるために生まれてきたんだね。」

「・・・・!」

「ほら見て!　わたしユウの花嫁姿、待ち受けにしちゃった!」

そこにはウエディングドレスでブーケを持って微笑むオレの姿が・・・!

「え?!　や・・やめてよ・・恥ずかしいよ・・・」

・・自分のウエディングドレス姿なんて、冷静に見ると耐えられない・・・死にたくなるくらい恥ずかしい・・・

「・・そんなの・・いつ撮ったのよ・・・」

「大丈夫よ、ユウは自分で思ってるよりずっと可愛いんだから！」

「・・うぅ・・・」

・・レナったら・・なにが“大丈夫”なんだか・・・ちっともわからないよ・・・

第１１４話　新制服　目立っちゃって大変！

「ごめん、待った？」
「ううん・・そんなに・・・」
千里が早めに来てくれて良かった。待ってる間オレひとりではすごく心細かった・・・

やっぱりみんなの中でオレだけ新しい制服じゃ目立ちすぎる・・・今は駅で他の学校のコもいるからまだいいけど・・白鴻に近づけばみんなウチの学校の生徒ばかりになってしまう・・・そうなったら目立つのは今の比じゃない・・・だから久留米の駅で千里と待ち合わせしていたのだ・・・千里もオレと同じ気持ちだと思うし・・・

ただ、ふたりになったからといって、多少心細さが少なくなるだけで、目立つのは変わりはない・・・いや・・ふたりだから逆に目立ってしまうかもしれない・・・何しろ新しい制服は全生徒の中でオレたちだけなのだから・・・

学校へ向うと案の定オレたちは注目の的になってしまった・・・みんな優しいから気を使ってくれてるのはわかるけど・・・チラチラでも見られると、やっぱり気になる・・・

＞ｉ７９６４―１２４９＜

新しい制服はブラウスにスカートだから、女の子の千里は良いだろうけど、オレには少し着こなしにくい・・・意識してスカートを

ハイウエストぎみにはかないと腰の位置が低めになってしまう・・・まあ、昔に比べればオレの身体つきも少しは女らしくなっているから、そんなに難しくはないけど・・・

スカートって、ただ自分の腰の位置に合わせてはけばいいってもんじゃないから難しい・・・少し上めにはいたり、下めにはいたりするだけでスタイルがずいぶん違って見えてしまう・・・これはモデルさんから教えてもらったんだけど、モデルさんがすごく足が長く見えるのは、もちろん実際に長いのは確かだけど、そういうテクニックも使っているのだ・・・ただ、スカートのデザインによっても違うから難しい・・・

「やっぱり・・二人だけじゃ恥ずかしいね・・・」

「うん・・」

千里も恥ずかしそうに、うつむきかげんだ・・・千里もオレと一緒で、目立ちたがり屋じゃないもんなぁ・・・ここは・・オレが何とかしないと・・・

「で・・でもさ・・わたしたちが恥ずかしそうにしてたら・・なんかせっかく新しい制服なのに良く見えないわよ。もっと自信もって歩こうよ！」

「うん、そうよね。　有希は読者モデルなんだし・・わたしもやってたんだもんね。」

「・そ・・そうよ・・・」

・・そう言われると・・オレもつらいけど・・・オレだって全然自信なんてないし・・・でも頑張んなきゃ・・・

オレたちは何とか背筋を伸ばして頑張って歩いていたら、いつの間にかもう校門のすぐ近くになっていた・・・こんなことにも気づかないなんて・・オレも思った以上に緊張してるらしい・・・

「お早うございます！」
校門のところで服装チェックをしている長山先生に、ふたり揃って丁寧に挨拶した。
「戸田さん、佐倉さん、お早うございます。　二人は今日から新しい制服ですね。」
「はい。」
「二人で皆さんのお手本になるように、きちんとした着こなしをお願いしますね。」
「は・・はい！」
・・なんか・・長山先生に期待されてると思うと・・よけいに責任を感じるな・・・緊張するけど・・でも決してイヤな感じじゃない・・こういうのを“身が引き締まる思い”っていうのだろうか？

「戸田さん、少しリボンが曲っていますよ。こっちにいらっしゃい。」
そう言われてオレが近づくと、長山先生はオレの胸元のリボンを直してくれた・・・
「あ、すみません・・ありがとうございます。」
オレは両手を前に揃えてお辞儀をした・・・
「目立つところだから気をつけなさいね。」
「はい！」

「長山先生って有希には優しいね。」
「・そ・・そうかな・・・いろいろ教えていただいたり・・学園祭の時もお手伝いしたりしたからかな・・？」
・・それに・・三吉先生と知り合いだからってのもあるかも知れないな・・・

ーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーー

「可愛い！あたしもこっちの方がいいなぁ！」
「有希たちが着てるから可愛いんじゃない？」
「こうして見ると、これまでのウチの制服ってすごい地味だねぇ！」
・・さすがにウチの学校の生徒は気づかいが出来てるから、外ではチラ見だけで済んだけど・・・教室ではみんなに取り囲まれてしまった・・・みんな思い思いに好き勝手なこと言ってる・・・
「でも、ウチのクラスに二人ともいるから、わたしたち鼻が高くない？」
「そうね、1組と2組に自慢しちゃおうか！」

「ち・・ちょっとみんなやめてよ・・・そういうのダメだよ・・・！」
・・そんな挑発して、オレたちが恨まれちゃったら大変だ・・・
「そっか、そうだね。有希は学園のアイドルだもんね！」
「そ・そ・・そんなんじゃないけど・・・」
・・オレは・・アイドルなんかじゃない・・・ただの女の子・・を目指してるコだ・・・

「ねえ、ちょっと二人で立って回って見せてよ！」
「ええっ？！」
オレたちふたりはみんなの前で立たされた・・うぅっ・・みんな友達とはいえ・・緊張するなぁ・・・
「ほら、回って！」
「・・うん・・」

みんなに促されて、オレたちが“クルッ”と一回転して見せると、みんないっせいに拍手してくれた・・・拍手と歓声の多さにふと見ると、いつのまにか廊下からも他のクラスのコたちが見ていた・・・オレはあまりの恥ずかしさに一気に顔が熱くなった・・・それは長谷川の姿も見えたからかも知れない・・・オレたちは思わず恥ずかしさに、手で顔を押さえてしまった・・・

―――――――――――――――
―――――――――――――――
――――――――――

昼休みになって売店でパンを買うと、オレは逃げるよう保健室にやってきた・・・さすがにみんなに見られてると疲れちゃう・・・でも来る途中で長谷川に捕まってしまった・・・

「有希はいいよね。」
「え？　なんで？」
「だって、有希はどんな服でも似合うじゃない！」
「そ・・そんなことないって・・・いろいろ着こなすのに努力してるんだから・・・」
「でも元が良いから、着こなすのも楽でしょう？」
「ま・まさかぁ・・・」
長谷川のヤツ・・オレが女の子らしくするために、どんだけ頑張ってると思ってんだ・・・

ふと白石先生に目をやると、オレたちの会話を見ながら微笑んでいた・・・

・・白石先生・・オレが本当は男なのに長谷川とこんな話してるのを、可笑しがっているんじゃないだろうか・・・たしかにオレのことを男だと知ってる人にはヘンな会話かもしれない・・・

「ふふっ・・二人を見てると、まるで姉妹みたいね。」
「え?!　わたしたちが?」
オレと長谷川は同時に言ってしまい、気まずくなった・・・

・・ウソだ・・オレたちはちっとも似ていない・・・どちらかといえばオレと長谷川は正反対じゃないかと思うくらいだ・・・
「・・わたしたち・・全然似てないと思うんですけど・・・」
オレが言うと先生は
「あ、ごめん。そういう意味じゃなくて、二人は仲がいいなって思って。」
「・・・・・」
・・オレたちは仲がいいだろうか?・・・確かに仲が悪くはないし、長谷川のことは嫌いじゃないけど・・・オレ・・そんなこと考えたこともなかった・・・

　オレと長谷川はこの学校に入学してから、ずっと一緒にいるから、あまりお互いのことを考えなくなっちゃったのかも知れない・・・・なんだか・・いるのが当り前で・・・そういう意味では姉妹ってのも当ってるのかも・・・

「姉妹だったら有希が妹だね?」
「・・そんなぁ・・・」
「だって頼りないじゃない。」
「それは・・そうかも知れないけど・・・」
・・でも長谷川がお姉さんだったらイヤだなぁ・・いっつもイジメられそうだ・・・今でもイジメられてるけど・・・

・・でも・・レナといても妹あつかいされちゃうし・・・オレって妹キャラなのかなぁ・・・

「でもさぁ、有希ってさすがモデルよね。教室でクルクル回って見せるなんてね。」

「！・・べ・・べつに、モデルだからじゃないもん・・・それにクルクルなんて回ってない・・・“クルッ”て回っただけで・・・」

“クルクル”でも“クルッ”でもどっちでも同じじゃない。」

「ち・・違うよ！」

・・“クルッ”は一回で“クルクル”は何回もだ・・・全然ちがう！

「いいわねぇ、先生にもその“クルッ”っていうの見せてくれない？」

「えぇ？！」

・・そんなぁ・・・白石先生に頼まれたら断れないよ・・・

「い・・一回だけですよ・・？」

オレはその場で立ち上がって“クルッ”と回って見せた・・でも早く終らせようと思って回転を速くしたのがシッパイだった！

「キャッ！」

オレは浮き上がったフレアースカートを慌てて両手で押さえつけた・・新しい制服はスカートがセーラー服のスカートより短いから気をつけなきゃいけないの忘れてた！

「ハハハ・・・有希のパンツ見えちゃった！」

「え！　ウソ！！」

・・そんな・・長谷川にパンツ見られるなんて・・・

「有希ちゃん大丈夫よ、見えてないから。　長谷川さんもイジワルしないの！」

「すみません・・」
「もう・・長谷川さんったら・・ウソつくなんてヒドイよ！」
「ごめんね有希、スカート押さえる仕草があんまり可愛かったから。」
「・・・・・」
・・長谷川のヤツ・・イジワル言うにもほどがあるよ・・・
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
・
数日後・・新しい制服のこともやっと少しは落ちついてきた頃・・
・
「戸田さん！」
放課後、ひとけのない廊下で急に名前を呼ばれて振り向くと・・・
「あ、大森先輩・・こんにちは・・・」
「制服、似合ってるね。」
「あ・・ありがとうございます・・・」
・・どうしたんだろう・・こんなところで・・・オレに用事かな？
・
「新しい制服だと戸田さんが見つけやすくていいね。どこにいてもすぐわかるよ。」
「・・ウッ・・・」
・・先輩・・そんなにオレのこと見ないでほしい・・・顔が熱い・・
・
「ほっぺが赤いわよ、戸田さんってホント可愛いよね。」
「・・い・・いぇ・・そんな・・・」

・・なんか・・レナがあんなこと言ったせいかな・・・先輩に見つめられると・・ヘンに意識しちゃう・・・

「あ・・あの・・わたしになにか用ですか・・？」
「あっ、そうだった。　私、戸田さんに頼みがあるんだけど・・」
「な・・なんですか・・・？」
・・大森先輩が・・オレに頼みなんて・・・いったい何だろう・・・

「戸田さんは私がバレー部だって知ってるよね？」
「あ・・はい・・部長さんでしょう？」
「そうなんだけど、今度の土曜日ウチの体育館で、私たち3年生の引退試合があるんだ。　戸田さんも観に来てくれない？」
「え？！　わたしがですか・・・？」
・・なんでオレなんだろう・・・

「土曜日は用事ある？」
「い・・いぇ・・用事は・・ないですけどぉ・・・」
「バレーは嫌い？」
「い・・いぇ・・そんなことないです・・・」
・・べつに・・ことさら好きってこともないけど・・・
「観に来るのイヤかな？」
「い・・いぇ・・イヤってワケじゃないですけど・・・」

「それじゃ来てくれるね。」
「あ、はい・・」
・・あ・・ついＯＫしちゃった・・・
「ありがとう。　１０時からだから、絶対良い試合するからね。」
「・・はい・・・」

・・なんか・・妙なことになっちゃったな・・・でも学園祭の時に

ウエディングドレスのオレをエスコートしてもらったりしたこともあるから・・断るのもどうかと思うし・・断る理由もないし・・・

・・でも・・引退試合だからって・・なんでオレなんだろう・・・べつに親しいワケでもないのに・・・

・・オレひとりじゃなんだから・・長谷川も誘っちゃおうかな・・？

第１１４話　新制服　目立っちゃって大変！（後書き）

新制服の画像をためしに入れてみました。
たまには新しいこともやってみないと・・と思いまして（笑）
みなさんにもちゃんと見えてるでしょうか？
携帯だとどんな感じに見えるのかな？なんて思ってます。
賛否などありましたらご意見下さるとありがたいと思っています。

（個人的には小説に挿絵を入れるのは、挿絵ありきで書いた小説以外ではイメージを狭めてしまう恐れがあるのであまり好ましく思っていないのですが、今回はイメージに合った画像があったので挿入してみました。ちなみに元の画像の体型を有希っぽく加工しています。かなり雰囲気が出てると自負しているのですが（笑）

第１１５話　試合　先輩の気持ち

明日は大森先輩の試合の日・・・オレは長谷川を誘ったけど用事があると断られてしまった・・・弘子や直美にも聞いてみたけど・・みんな都合が悪いらしい・・・千里は最初からムリだとわかってたから聞かなかった・・だって塾があるから・・・

結局、仕方なく1人で行くことにした・・・だけど大森先輩は、先輩っていっても、ただ同じ学校の上級生というだけで・・オレの直接の先輩じゃないし、親しいワケでもない・・・オレは特別バレーにも興味はないし・・・なんか気乗りしない・・・

・・でも行くと言っちゃったから・・いまさら行かないとも言えないし・・・

・・それに・・試合に誘われて以来・・先輩はオレと廊下で目が合うとニッコリ微笑んでくれる・・・オレは新しい制服だから目立ってて遠くからでもすぐわかる・・だから良く目が合っちゃうのだと思うんだけど・・・オレの方も先輩に微笑みかけられれば下級生だから丁寧にお辞儀するし・・・はた目にはそれなりに仲良く見えちゃうかも・・・なぜか先輩と目が合うとドキドキするのだ・・・

・・レナにあんなこと言われたせいかな・・・大森先輩を見上げるオレの目が・・恋する乙女だったなんて・・・そんなこと言われたら先輩のこと見るとドキドキしたって不思議じゃない・・・

・・あの学園祭の時は状況が状況だったから・・先輩は男装で・・オレはウエディングドレスで・・・だから・・そんなふうに見えたんだと思う・・・オレはあの時のことは頭がボーッとしてて良く思

い出せないけど・・・

そうだ・・明日は登校日じゃないんだから前の制服で行こうかな・・・だって、観客の中で目立ちたくないし・・・こっそり観て、そっと帰ってこよう・・・

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー
ー　ー
ー

・・たいへん・・遅くなっちゃった・・・

昨日のうちに前の制服を用意しておけば良かったのに・・いつもより遅くていいからって、朝になって洋服ダンスから出してたら、電車に1本乗り遅れてしまった・・・オレっていっつもこんな感じだ・・・

駅から学校までは走ると結構ある・・・それにすっかり忘れてたけど、この制服は小さいんだった・・・胸の部分がピッチリで、走ると胸の三角布のホックが外れてしまう・・・オレは片手で押さえながら学校へと走った・・・

警備員さんに生徒手帳を見せて校門の中に入ると、体育館の方から大きな声が聞こえてきた・・・もう始まっちゃったのかな・・・急がなきゃ・・・

ウチの学校の体育館はそんなに大きくないから、バレーボールの

コートを作ると、まわりにはあまり空きがない・・・観戦するには体育館をコの字形に囲むようになってる、2階の通路から観ることになる・・・通路にのぼると結構たくさんの人が応援していた・・・向い側の通路にいる生徒は紺のブレザーを着ているから、対戦相手の学校の生徒のようだ・・・ウチの学校の応援より人数が多い・・・ウチはスポーツはあまり盛んじゃないからなぁ・・・

オレは階段からすぐのところから応援することにした・・・ここなら他のコの応援の邪魔にならないだろうし・・・なにしろオレは初めて観にきたんだから・・・

試合はウチの学校が負けていた・・・点は取り返すどころかどんどん広がっていく・・・

向こうのスパイクは決まるのに、大森先輩のスパイクはことごとく拾われてしまう・・・それに向こうはブロックも上手いけど、ウチのブロックは全然防げていない・・なにしろウチのチームは圧倒的に背が低いから、向こうの選手にとってはまったく障害にならないのだ・・・あんまり向こうのボールがブロックした手をかすめていくから指を傷めないか心配になってくるくらいだ・・・

“　白鴻ファイトォ！”
“　大森せんぱいファイト！！”

・・ウチの応援も心なしか元気がない・・・こう一方的に負けていては仕方がないかも知れないけど・・・その点向こうの応援は元気いっぱいだ・・・

向こうの応援はいろんな名前を呼んでいる・・・どうやら強い選

手がたくさんいるらしい・・・ウチのチームは大森先輩ひとりが頑張っている・・・でもバレーボールはひとりだけ強くてもどうにもならない・・・

1セットは簡単に取られてしまいコートチェンジ・・・ウチのチームは向こう側になり、オレがいるところからも顔が見えるようになった。

大森先輩のサーブからだ・・・オレもいつのまにか両手を組んで祈るような気持ちになっていた・・・

“先輩のサーブが入りますように・・・”

・・顔を上げて先輩の方を見ると・・なんと先輩もオレのことを見ていた！・・・そしてニッコリ微笑むと、放ったサーブは相手チームのコートに突き刺さった！

やった！

“せんぱ〜い！！”

オレもみんなのように両手を口にあて、いつしか大きな声で応援していた・・・

――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――

試合は先輩の頑張りも空しく、あっけなく負けてしまった・・・

・・練習試合とはいえ・・先輩の引退試合だというのに・・・なんだか悲しくなっちゃう・・・

それなのに先輩は笑顔で相手チームの選手と握手してる・・・悔しくないの？・・・オレはこんなに悔しくて・・悲しいのに・・・

大森先輩は対戦相手や向こうの監督に頭を下げて・・・チームメイトにねぎらうように声をかけたり、肩を抱いたり・・・

・・そして2年生と1年生から3年生に小さな花束が渡された・・・これで引退なんだ・・・

・・でもオレは気持ちがおさまらず・・・涙があふれてきた・・・オレには関係ないハズなのに・・・先輩の気持ちを考えると・・・涙が止まらない・・・

“　戸田さん！”

・・オレを呼ぶ声・・・涙で霞んだ目で声の方を見おろすと、大森先輩がオレに手招きしていた・・・

“　せ・・先輩・・・？”

オレは慌ててセーラー服のソデで涙を拭いた・・え・・えっと・・・先輩がオレのこと呼んでる・・・行かなきゃ・・・

オレは急いで下に降りていった・・・

「戸田さん来てくれて嬉しいよ。」

「・・せんぱい・・うぅっ・・・」
・・どうしよう・・我慢しようと思ったのに・・・やっぱり涙があふれちゃう・・・
「何で泣いてるの？」
「・・だって・・先輩の引退試合なのに・・・」
「あぁ、負けたから？　それで泣いてくれてるの？」
・・オレが声も出せないままうなずくと・・・先輩はオレを抱きしめて頭をポンポンしながら言った・・・

「戸田さんは優しいんだね。でも泣かなくてもいいのよ。ウチが負けることは最初からわかってたんだから。」
「え？！」
・・ど・・どういうこと・・・？
「向こうのチームは全国大会にも出るようなチームなんだから、本当はウチなんかとは練習試合も出来ないようなところなの。」
「・・・・・」
「向こうには私と中学で一緒にやってたコがいてね、可愛がってた後輩だから特別に試合をセッティングしてくれたのよ。」
「・・・・・」
「だから泣かないで？」

・・・オレは恥ずかしかった・・・先輩の気持ちも知らずに・・勝手に悔しがったりして・・・オレは何にもわかってない・・・！
オレって何てバカなんだろう・・・

「・・ご・・ごめんなさい・・・わたしったら・・なんにも知らないで・・・」
「いいのよ、謝らないで。戸田さんの気持ち嬉しかった。」
「・・・！」

「大きな声で応援してくれてたね、聞こえてたよ！」
「・・せんぱい・・・」
・・オレはその優しい言葉に・・先輩に胸に顔をうずめて・・たくさん泣いてしまった・・・

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

「有希っ！おはよう！」
「あっ、直美、おはよう！」
「昨日は残念だったね。ウチ負けちゃったんだって？」
「うん・・残念だったけど・・・でも試合出来ただけでいいんだって。」
「そうなの？」
「うん、相手チームには大森先輩と中学で一緒にやってた後輩の人もいるんだって、だから対戦できて先輩も嬉しかったみたい・・・」
「そうなんだ・・でも最後なんだから勝った方が良かったのにね。」
「うん・・わたしもそう思う・・・」

・・でも・・どんな時でもお互いに手加減なしで試合するのが、スポーツマンってものなのだろう・・・あまりスポーツやらないオレには、そういう選手の気持ちは良くわからないけど・・・

「それで？　試合の後はどうしたの？」
「ん？　そのまま帰ってきたけど・・・先輩は“追い出し会”ってのに行っちゃったし・・・」

「なんだ、有希も一緒に行けば良かったのに！」
「そ・・そんなのダメよ・・・わたしはバレー部とは何の関係もないんだから。」
「そっか・・それじゃ先輩のウチにでも行ってあげれば？　せっかく試合に呼んでくれたんだから。」
「・・先輩のウチ？」
「うん、お好み焼き屋さんだから食べに行けばいいんじゃない？」
「・・でも・・どこなのか知らないもん・・・」
「高宮駅の近くだってよ。」
「・・高宮・・・」

・・高宮はレナの家がある平尾駅よりひとつ手前の駅だ・・・天神からは3つ目の駅・・・近くに大きな高校があるから、安い食べ物屋さんが結構あるらしい・・・駅前には１００円ラーメンのお店もある・・オレは1回だけ食べたことあるけど１００円なのに普通においしかった。

「・・じゃぁ・・行ってみようかなぁ・・・」
・・実はあの広島風お好み焼きを、もう一度食べたいと思っていたのだ・・・でも先輩のウチだから、なんだか行きにくいし・・だからちょうどいいかも・・・
「直美どこらへんなのか知ってる？」
「駅の近くってくらいしか知らないけど、先輩に直接聞いてみればいいじゃない。」
「えっ・・直接・・・？」
・・う～ん・・・ちょっと恥ずかしいかも・・・食いしん坊に思われたらどうしよう・・・

・・それに・・女の子ひとりでお好み焼き食べに行くなんて・・へンじゃないかなぁ・・・

第１１６話　お店　大森先輩が喜ぶこと

大森先輩のお店・・直美には先輩に直接聞けばいいって言われたけど・・・なかなかそんな機会はなかった・・・

遠くから先輩を見かけることもあったし、教室を移動してる時にふと廊下で目が合うこともあったけど・・・なかなかオレから聞きに行くなんて出来ないし・・・それに・・みんながいるところじゃ・・なんか気まずい・・・

何日かたった午後・・放課後にクラブへ行こうとしていると、中庭のベンチにぼんやりと腰かけている大森先輩を見かけた・・・

（あんなところで何してるんだろう・・・）

・・なんだか・・少しさみしそう・・・

「・・こんにちは・・先輩・・・」

「戸田さん?・・あ、そっか・・ごめんね、ここ戸田さんの指定席だったね。」

「い・・いえ・・そんなことないです！　誰が座ったっていいと思います！」

・・オレ・・なに言ってんだろう・・・当たり前のこと言って・・・

でも・・先輩やっぱり元気ない気がする・・・あの試合・・本当は負けたくなかったんじゃないかな・・・

「・・あの・・・横に座ってもいいですか?」

「もちろんよ。　どうぞ座って！ここは戸田さんの席なんだから。」

「そんな・・・」
・・どうりで・・いつもこのベンチ空いてると思ったら・・・そんなウワサが立ってたのかぁ・・・オレの指定席なんて・・・そりゃ確かに、よくここでお昼食べてるけど・・・べつにオレの席ってワケじゃないのに・・・みんな気を使いすぎだよ・・・

「・・ふぅ・・・」
横で先輩がためいきをついた・・・
「・・どうしたんですか?・・・なんか・・元気ないみたい・・・」
「そっか・・そう見えるのかぁ・・・なんか引退したら気が抜けちゃってね。」
「・ぁ・・・」
・・そういうことか・・・そうかも知れないな・・・スポーツ頑張ってたのに急にやめちゃったから・・・

「・・先輩は・・進学するんですか・・・?」
「ううん、卒業したらウチの店を手伝おうかと思ってる。」
「そうなんですか!?　そうですよね、先輩が作ったお好み焼き、すごくおいしかったもの!」
「あはは・・私なんてまだまだだよ。」
「そんなことないです!　ホントにすっごくおいしかったですよ!」
「そう?　ありがとう。料理上手な戸田さんに褒められるなんて光栄だね。」
「・・・・!」
・・そんな・・・オレの料理なんて、ただの家庭料理なのに・・・

「でも・・それだったら受験勉強とかしなくていいから・・引退してもクラブに行って練習につきあってもいいんじゃないですか?　みんな喜ぶと思いますよ?」
「戸田さんってほんとに優しいね。　実は・・私もそうかと思って、

ここ何日か行ったんだけど・・なんかこれまでとは違うのよね・・・
」
「・・・・？」
「みんななんかよそよそしくて・・・」
「・・そんな・・ヒドイ！」
「でもね、良く考えたら私だって引退した先輩がいつまでも居座ってたら、これまでと同じようには出来ないと思うんだ。みんなもきっと、どうして良いかわからないのよ。だから思った、引退したらキッパリと身を引かなきゃいけないんだって・・・」
「・・・・・」
・・そんなもんだろうか・・・引退しても先輩が練習を見にきてくれたら嬉しいんじゃないかなぁ・・・？　オレにはそういうのは良くわからないや・・・
・・・でも・・・だから先輩・・こんなところでボンヤリしてたんだな・・・かわいそう・・・オレに何か出来ることないかなぁ・・・
・・でも・・・オレなんか・・先輩が喜びそうなことなんて・・何も出来ないし・・・
「あっ、そうだ！　わたし先輩に聞こうと思ってたんですけど・・・
」
「・・なに？」
「先輩のとこのお店の場所・・わたしまた“広島風お好み焼き”が食べたくて・・・」
オレがそう言うと、大森先輩は急に顔を輝かせた・・・
「本当？！　だったらぜひ食べに来てよ！　私の父さんが焼いたお好み焼きは、私が焼いたのなんかよりずっと美味しいから！」
「わぁ！食べたいです！」

・・先輩のでも十分おいしいかったのに・・それ以上？！
「だったら、今度の日曜の午前中はどう？　午前中は母さんがいないから私もお店手伝ってるから！」
「日曜は大丈夫です！・・良かった土曜日だったら撮影入ってるから・・・」
「だったら決まりね？　生徒手帳貸して、店の場所の地図書くから。」
「あ、はい。」
オレは胸のポケットから生徒手帳を出して先輩に渡した・・・
・・でも良かった・・・先輩少し元気が出たみたい・・・
「それじゃこれ、高宮の駅からすぐだから。待ってるわよ。」
「はい、ありがとうございます。　絶対行きます！」
「だけど、戸田さんって面白いコね。」
「え？」
「だっていつもは学校でも一番って言っていいくらい女らしいのに、食べる話になると、まるで男の子みたいな顔するんだから！」
「・・うっ・・・」
・・そうなのか？・・・気をつけないとヤバいな・・・
「でも、そんなところも戸田さんの魅力よね。」
「・・・・・」
・・もぅ・・オレってそんなところに魅力があるのかなぁ・・・ワケわかんないよ・・・

――――――――――――――

――――――――――――――

―――――――――

お店は先輩が描いてくれた地図のとおり駅からすぐのところだった。

「・こんにちは・・」
「いらっしゃい!!」
引き戸を開けるなり大きな声・・・
「あ・・あの・・」
・・この人が先輩のお父さんかな・・・先輩はどこだろう・・・？

「あ！　戸田さんいらっしゃい！」
店の奥から出てきた先輩を見てほっとした・・・オレこういうお店にあまり来たことないから・・・
「なんね、加織〈かおり〉の友達やったとね。どうぞ座ってください！」
「・・はぃ・・・」
オレはすすめられるままカウンター席についた・・・

「戸田さん何がいい？」
「あ・・えっと・・じゃぁ肉玉を・・」
「肉玉ね、父さん肉玉お願い！」
「はいよぉ!!」
お父さんはさっそく鉄板の上に、流れるような手さばきで生地を伸ばし、大量のキャベツを乗せて焼きだした。

・・お店はそんなに大きくない・・新しくはないけど・・そんなに古くもない感じ・・・

・・オレ・・こういうお店にこんな恰好で良かったかなぁ・・・

・・先輩のところだから、普段着るような可愛いのじゃ失礼だろうし・・・でもお好み焼き屋さんだから、あまりかしこまった恰好も変だろうし・・・

・・いろいろ悩んで、結局おとなしい感じの黄色いワンピースに、白いニットのボレロを合わせてきた・・ボレロはスソの両脇から出てるリボンを真ん中で結ぶのが可愛いデザイン・・・でも・・ちょっと場違いだったかも・・・

お昼には少し早いから、まだお客さんはオレだけだ・・・なんか緊張するなぁ・・・

お好み焼きは、となりでブタ肉を炒めて、その上から玉子を割り、両手に持ったヘラでその上に、キャベツを下にしてお好み焼きを裏返す・・・お肉が焼けるいい匂い・・・

「戸田さんはいつもそういう服着てるの?」

「あ・・いつもはもう少しフワッとした・・可愛い感じのが多いです・・」

「へぇ〜　それでもすごく可愛いのに、もっと可愛いの着るんだ?」

「・・あ・・はぃ・・・」

・・なんか・・そんなふうに言われると恥ずかしいな・・・

「さすがモデルさんね。」

「おっ!あんたモデルさんね?どうりで綺麗な娘さんやと思った!」

「そ・・そんなモデルなんて・・わたし・・ただの読者モデルです・・」

「読者でもモデルはモデルやろ?!」
・・そんなぁ・・・
「父さん！　戸田さんは今どき珍しいほど奥ゆかしいコなんだから、そんなこと言わないでよ！」
・・うぅ・・・先輩だって・・・最初にモデルって言ったの先輩なのに・・・

またお好み焼きを裏返し、ハケでソースを塗ってから二つに折り曲げ、お皿に乗せてからまた上からソースをハケで塗る・・・ソースのいい匂いがあたりに漂う・・・かつおぶしを振りかけて出来上がり！
「はい、お待ちどうさま！」
「わぁ・・おいしそう・・いただきます！」
かつおぶしが踊ってる！

オレが食べようと割り箸を手にした時、いきなりお店の戸が開いてジャージ姿の男の子たちがいっぱい入ってきた！
オレは一瞬ビクッとした・・・だって・・学園祭の時不良に絡まれたのもあって・・急にたくさんの男の子が、さほど大きくないお店にドヤドヤ入ってきたのだから・・・オレが少しだけ不安になるのも仕方がないことだ・・・

いつの間にか12時を回っていて、お昼の時間になっていた・・・今日は日曜日だから学校は休みのハズだけど・・・たぶん運動部の人たちだと思う・・・だってみんな逞しい身体してる・・・

「いらっしゃい!!」
お父さんが威勢のいい声をかけると、男の子たちは次々に注文して

いく・・・

「父さん、お店混みそうだから、戸田さんは私の部屋で食べてもらうね。」

そう言って先輩はカウンターを回ってオレのところに来ると、食べようとしていたお好み焼きのお皿とお水を両手に持った・・・

「ね、戸田さん、お店狭いから私の部屋に行こう?」

「・・あ・・はぃ・・・」

オレは言われるままに先輩の後について、お店の奥にある急な階段をのぼっていった・・・

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

「・・あの・・いいんですか?・・先輩のお部屋に・・?」

「いいのよ、気にしないで!」

先輩は部屋に入ると、丸い小さなテーブルに、持ってきたお好み焼きとお水を置いた・・・

「戸田さん男の子苦手そうだったから。違った?」

「あ・・少し・・苦手かも・・・」

・・オレは高校性になってから、女子校だからまわりは女の子ばかりだし・・お仕事で出会う男の人はみんな年上だから・・同じ年代の男の子とは、どう接すればいいかわからなくなってしまった・・

・そのうえたまに出会うとナンパされたり、絡まれたりするから・・

・男の子ってちょっと怖い・・・

「もう少し待っててね、母さんが帰ってくるまで店手伝わなきゃい

けないから。遠慮しなくていいから食べてて。」
「あ、はい・・ありがとうございます・・・」
・・“かあさん”だって・・・オレと同じ呼び方だ・・・なんか親近感がわいちゃうな・・・

先輩が部屋を出て階段を降りていくと、オレは部屋を見渡してみた・・・
「ここが先輩のお部屋かぁ・・・」

あまり女の子っぽいお部屋じゃない・・・まあ、先輩の雰囲気には合ってるけど・・・逆にピンクピンクしてたり、ぬいぐるみでいっぱいだったらイメージ崩れちゃうかも・・・でも長谷川の部屋のような殺風景な感じでもない・・・それなりに色んな物がある・・・だけど、どこか硬い印象を受けるのは、黒っぽいものが多いからだろうか・・・？

「あっ、いけない・・　あったかいうちに食べなきゃ！」
せっかくのお好み焼きが冷えたら大変だ・・・割り箸を割って・・・
「いただきま～す！」
オレはお好み焼きに箸をつけた・・・

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー
ー　ー
ー

「あ～　おいしかった！」
確かに、お父さんが作ったお好み焼きは、先輩が作ったのよりおいしかった・・・生地の微妙な厚さとか・・焼き加減が違うのだろう

か・・・でも先輩のだっておいしかった・・お父さんとは年季が違うんだから少しくらい負けてたって当り前だと思う・・・

「戸田さん、もう食べ終った?」
「あ、はい・・おいしかったです!」
「足りた?　もう一枚焼いてこようか?」
「い・・いえ・・もうお腹いっぱいです・・」
・・ほんとうは・・もう少し食べたいけど・・・大食いな女の子だと思われたら恥ずかしいし・・・

「そう?　ならいいけど。」
大森先輩はそう言って、オレのすぐとなりに座った・・・こんなに近くに来られると・・ドキドキするな・・・
「足崩したら?　正座してたら痺れてるんじゃない?」
「あ・・はぃ・・・」
・・お茶のお稽古のおかげでだいぶ正座にも馴れたけど・・そろそろ痺れてきたところだった・・・オレは足を横に崩した・・・だけど・・こういう姿勢は骨格が男のオレには少しツライ・・・あまり長時間だと正座の方がマシなくらいだ・・・
「そんなんじゃなくてさ、伸ばせばいいじゃない。」
「あ、はぃ・・・」
・・オレとしてはありがたいけど・・・ここは先輩の言葉に甘えちゃおうかな・・・オレはスカートを直しながら足を伸ばした・・・

「戸田さんは“ユウちゃん”って呼ばれるのは嫌い?」
「・・い・・いえ・・全然嫌いじゃないです・・・だって名前が有希だから“ユウちゃん”って呼ばれることも多いし・・イトコもわたしのこと“ユウちゃん”って呼びますよ。」
・・それに読者モデルの“春日ユウ”でもある・・・

「じゃぁ、私も“ユウちゃん”って呼んでいい？」
「あ、はい・・もちろんです！」
・・みんなは気を使ってるのかも知れないけど・・先輩がそう呼びたいならオレは別にかまわない・・・

「ユウちゃん・・・」
え？！・・先輩の手がオレの肩に・・・？
「あ・・あの・・・せんぱい・・・？」
オレは先輩から体を離そうとした・・だけど先輩の力は強くてビクともしない・・・しっかりオレの肩をつかんだ手は大きくて強くて・・まるで男の人の手みたいだ・・！

「私、ユウちゃんのことずっと見てたよ。」
「え！？」
・・ど・・どういうこと・・・？
「ユウちゃんが入学してきた時から・・」
「・・・・・」
「でも、ユウちゃんはノーマルみたいだから・・ずっと我慢してたんだけど・・」
・・ノ・・ノーマルって・・・？

「学園祭の時、ユウちゃんのことエスコートしてから・・我慢できなくなった・・・」
「え・・ちょ・・ちょっと・・せんぱい・・ど・・どうしたんですか・・・！？」

・・こ・・これは・・なんか良くない予感が・・・・

第117話　先輩　ノーマルとマイノリティー

・・・先輩の部屋でふたりきり・・・なんか・・ヘンなムードになってきた・・・

「ユウちゃん、私のこと嫌い？」
「・・い・・いぇ・・嫌いじゃないけど・・・」
「だったら・・・」
・・ひぃ～！　先輩の手がオレのムネに！！
「・・で・・でも・・そういう意味じゃなくて・・・わたしたち・・女の子どうし・・・」
「だからいいんじゃない？　男なんて乱暴で自分勝手なだけよ。」
「そ！・・そんなこと・・ないと思います・・・」
・・だって・・・純平は優しいもん・・・

「なに？　ユウちゃんは男の人知ってるの？」
「・・い・・いぇ・・知りません・・けど・・・」
「だったらわからないでしょう？　女の子のことは女の方が良くわかってると思わない？」
「・・・・・」
・・それは・・そうかも知れないけど・・・でも・・・

「・・わ・・わたし・・そんなんじゃないんです・・・！」
「解ってるよ、ユウちゃんはノーマルなんでしょう？　でも大丈夫。ユウちゃんは何もしなくていいから、おとなしくしてれば・・・」
「・・そ・・そんな・・・」
・・先輩は・・何もわかってない・・・先輩にオレがどう見えてるか知らないけど・・・オレはとてもノーマルとはいえない・・・

「・・い・・イヤ！　先輩・・放してください！」
オレは必死に先輩の手を振り払おうとしたけど・・先輩の力は強く手を振りほどくことは出来なかった・・・
「・・うっ！・・・・」
・・ムネをつかんだ先輩の手に力が入り、オレは痛さに恐怖をおぼえた・・・
「きゃァ！」
そのまま床へと押し倒されて・・オレは小さな悲鳴をあげた・・・

・・手足をバタつかせて何とか逃げようとしたけど・・・仰向けのオレの上に大きな先輩がのしかかっていて・・両腕も押さえられてしまった今では・・文字どおり手も足も出なかった・・・

「ユウちゃん・・・」
先輩の唇がオレの口に・・・
「・・んんっ・・・」
オレは唇を固く閉じて、顔を左右に振りなんとか逃れようとした・・・でも・・それも失敗した・・・先輩の唇はオレの唇にベッタリ引っ付いたまま離れない・・・何とかオレが防げたのは舌だけだった・・・先輩の舌がオレの唇を押し開こうとしても、オレは必死で唇とじて拒みとおした・・・

「そんなにイヤ？　ユウちゃんが優しすぎるからいけないのよ。」
オレはもう身動き出来なかった・・・あまりの出来事に身体の力が抜けてしまったのか・・・恐怖で硬直してしまったのか・・・オレにも良くわからなかった・・・

先輩がちょうちょに結んだボレロのスソをほどく・・・

黄色いワンピースのオレのムネに先輩の両手が・・・
「・・ぁっ・・」
オレは小さく声をあげてしまった・・・心臓の鼓動が耳に響いてる・
・・鼓動のリズムに合わせて、オレのムネに乗せた先輩の右手が小
さく上下する・・・
「ユウちゃん・・可愛いよ・・」
そう言いながら先輩は、ムネの丸さを確かめるように、オレのムネ
に両手を這わせる・・・

・・・うぅっ・・・先輩・・・何でこんなこと・・・オレ先輩のこ
と良い人だと思ってたのに・・・
・・目から涙があふれて・・・目尻から耳へと流れていく・・・
「・・先輩・・・もうやめて・・・」
オレは必死に訴えたけど・・先輩の行動は止まらなかった・・・

・・先輩の右手がオレのムネから離れて・・・ゆっくりと下の方へ
動いていく・・・スカートの上から太ももをさすった手が内側へ・・
・
「・・だ・・だめぇ!」
・・そ・・そこは・・・そこを触られてしまったら・・・オレは・・
・

・・オレは股間を隠すように足を重ねた・・・何で今日はナプキン
してこなかったんだろう・・・もしナプキンをしていたら・・もし
かしたら・・・もしかしたら誤魔化せたかも知れないのに・・・

・・でも・・なんにも無い状態では・・パンツの上からでも・・オ
レが普通の女の子じゃないとわかってしまう・・・

・・そうなったら・・・もう・・何もかもオシマイだ・・・!

先輩の手がスカートをたくしあげながら上の方へと動いていく・・・

「あぁ！」

とうとう先輩の手がオレの股間に・・・！

・・大きな手のひらでオレの股間を包み込むと、指が何かを探すように昔タマがあったあたりを、探っている・・・

「・・・？！」

探っていた先輩の手が急に止まった・・・オレはもう・・両手で顔を覆い、ギュッと目をとじて時間がたっていくのを堪えることしか出来なかった・・・

・・永遠にも思える時間・・・股間を包んだ手が暖かい・・・オレのはもう立たないのだけが・・せめてもの救いだろうか・・・・

・・・それも・・・今となっては・・何の意味もないけど・・・・

「・・・ユウちゃんって・・・・」

・・“男の子なの？”・・・という言葉を待つのがツライ・・・・

「・・・ユウちゃんって・・・・両性具有〈りょうせいぐ・ゆう〉・・・っていうの・・・？」

・・え？・・・りょうせい・・ぐゆう？

オレはそれが何かわからなかった・・・だけど・・・たぶん違うと

思う・・・オレは小さく顔を左右に振った・・・

「じゃぁ・・何なの・・コレ・・？」

「・・・・・」

・・そんなの・・・聞かれたって・・言えるハズない・・・

「なんなのコレ！」

「あぅ！」

・・先輩に強くつかまれ・・少し痛かった・・・でも、もしタマが付いてたらこんな痛さじゃ済まなかっただろう・・・

「・・ごめんなさい・・・ごめんなさい・・・」

・・オレには謝ることしか出来なかった・・・何もかも許して欲しい・・・男なのに女子校に入学したことも・・女の子だとみんなを騙していたことも・・先輩の気持ちも知らずにココに来てしまったことも・・・

・・でも・・もう遅い・・・男だとバレてしまったら・・・もう学校へは通えない・・・もし・・学校を辞めさせられなかったとしても・・・女の子としての生活はもう戻ってこないのだ・・・それを思うと悲しくて・・涙が後から後から溢れてくる・・・

・・でも・・・オレはもう男になんて戻れない・・・これからどうしたらいいんだろう・・・

「・・ごめんなさい・・・先輩・・ごめんなさい・・・」

「戸田さん・・もう泣かないでいいから、ちゃんと説明して。」

「・・・うぅっ・・・」

・・この期に及んで説明なんて・・・意味がないように思えるけど・

・・

「もう泣かないの！　鼻水が出てるよ。」

「・・うぐっ・・・」

・・渡されたティッシュで鼻水を押さえた・・男だとバレてしまったのに・・ハナをかむのはやっぱり恥ずかしい・・・

「どういうこと？　戸田さんって女の子じゃないの？」

「・・うっ・・はぃ・・ジュルッ・・・」

「まだジュルジュルいってるじゃない、ちゃんとかみなさい。」

「・・・・・」

・・もういいや・・・男だとバレちゃったんだもん・・・

“・・ビ～ッ！！・・・”

オレはティッシュで思いきりハナをかんだ・・・人前で思いきりハナをかむなんて・・久しぶりだ・・・

・・でも・・なんか・・思いきりハナをかんだせいか・・少しスッキリしたかも・・・

・・これはもう・・・先輩にすべて正直に話すしかない・・・その結果がどうなるかは、わからないけど・・・

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

「それじゃ、戸田さんは性同一性障害なんだ？」

「はぃ・・」
・・本当に正直に言えば、いまだに自分が性同一性障害かどうかは半信半疑だけど・・・これはわざわざ先輩に言う必要はないと思う・・・学校での設定は、あくまでオレは性同一性障害だから・・・

オレは必死でバレた場合の設定を思い出していた・・・いつの間にか、もうバレることはないような気持ちになっていたから・・・このところ思い返すことはなくなっていた・・・

「・・みんなに・・言いますか・・？　・・わたしが本当は男だって・・・」
「言わないよ。」
「え?!・・なんで・・・?」
「言わない方がいいんでしょう?」
「・・そ・・それはもちろん・・・そうですけど・・・」
「だって、学校を騙して入学してるのならダメだけど、学校が認めてて、先生も知ってるんなら私がとやかく言う問題じゃないでしょ?」
「・・はぁ・・・」
・・まぁ・・言われてみればそうだけど・・・

「・・先輩は・・怒ってないですか?　わたしが騙してたこと・・・」
「べつに怒ってないわよ。　戸田さんが女の子じゃなかったのは残念だったけどね。」
「・・うぅっ・・・」
・・オレが女の子だったら・・・あの後いったいどうなってたんだろう・・・

「・・でも・・わたしのこと・・キモチ悪いとか・・思わないですか・・・？」

「キモチ悪いとは思わないよ。まあ、性同一性障害の人の中にはキモチ悪い感じの人もいるかも知れないけど、戸田さんは見た目も女の子だし・・今でも男の子だって信じられないくらい。」

・・人を見た目で判断するのはいけないことだって言うけど・・・

オレは見た目が女の子っぽくて良かった・・・

「それに、私だってマイノリティーには違いないし。私のことだってキモチ悪いと思う人もいるんじゃない？」

「そ・・そんな！　先輩はキモチ悪くありません！」

「ありがと、でもそんな人もいるよ。きっと・・・」

・・そうなのかな・・・確かに女の子どうしで愛し合うのは普通とは言えないけど・・・でも先輩は全然キモチ悪くない・・・オレが女の子だったらされたことを想像すると・・ちょっとコワいけど・・

・

「でも、その胸は？　本物みたいな感触だったけど、豊胸手術とか？」

「い・・いぇ・・一応ほんものです・・・女性ホルモンで・・・」

「女性ホルモン？　いつからやってるの？」

「・・えっと・・入学して・・少ししてから・・・」

「じゃぁ、入学式の時は、まったくの男の子だったの？！」

「・・はぃ・・」

・・たしかにあの時はまだ身体も男の子だった・・・エステでちょっとキレイになってたけど・・・

「それじゃ、戸田さんって元々女の子っぽかったんだ？」

「・・・・・」

・・それはオレにも良くわからない・・・今と比べれば、当時はや

っぱり男の子っぽかったんじゃないかと思うけど・・・みんなにはバレなかったところを見ると・・・そこそこ女の子っぽかったのかなぁ・・・

「・・あの・・・先輩も・・性同一性障害なんですか？」

「どうかな？　調べたことは無いけど、たぶん違うと思う。　戸田さんみたいに・・・その・・“異性装”っていうの？　そういうのはしたいと思わないから。」

「・・・・・！」

・・“異性装”なんて言われると・・・なんかヘンな感じ・・・でも“女装”って言われるよりはマシか・・・オレは普通に女の子の服を着てるだけだから・・“女装”なんて言われたら悲しくなっちゃうもん・・・

「あっ、でも制服以外ではスカートはあまりはかないか・・・いつもこんな・・ジーンズにTシャツとかばっかだし、こういうのも“異性装”なのかな？」

・・たしかに女の子の場合は、私服ではスカートをはかなくても誰も文句は言わない・・・まあ“女の子らしい恰好をしなさい”ぐらいは言われるかも知れないけど・・・ジーンズしかはかない女の子がいたって“男装”なんて言う人は1人もいない・・・

・・でもそれが男の子だったら・・・スカートばかりはく男の子は絶対ヘンタイと言われるだろう・・・まさにそれがオレなんだけど・・・そういう点では女の子の方が性同一性障害かどうかわかりにくいかも知れない・・・先輩は本当のところどうなんだろう？

「だけどスカートがイヤって訳じゃないし、制服なら全然平気よ。」

・・・それを言うならオレだって・・・パンツスタイルがイヤなワケじゃない・・・ただオレの場合、骨格が違うのはどうしようもないから、パンツだとバレないか心配なだけだ・・・

「せ・・先輩は・・男の子はキライなんですか・・・？」

「嫌いってほどでもないけど、恋愛の対象にはならないかな。」

・・・それって・・・レズっていうのだろうか？　そういうのにも色々あるっていうし・・・どちらも女の子の気持ちの場合もあるし・・・片方は男の子の気持ちの場合もあるらしい・・・先輩はどっちなんだろう？・・・見た目は・・・女の子らしいとは言えないけど・・・

「でも、ユウちゃんって不思議なコね。男の子だと判ってもまだ抱きたい気持ちが消えない。」

「え！？」

先輩がまたオレの肩に腕をまわしてきたから、オレは思わず身構えた・・・

「大丈夫よ。さっきみたいなことはしないから。」

「・・うぅ・・はぃ・・・」

・・オレの力じゃ、どう頑張ったって先輩にかなわないのはもうわかってる・・・ここは先輩の言うことを信じるしかなさそうだ・・・

・・先輩の手がオレの肩を引き寄せ・・・オレは先輩に身をゆだねた・・・というか・・そうなってしまった・・・

「ユウちゃんの体・・柔らかいね。これも女性ホルモンのせい？」

「・・さ・・さぁ・・・」

・・うぅ・・肩から腕をさわる手つきがエッチな感じ・・・あっ・・・

先輩の顔が・・・オレの髪に・・・

「三つ編みじゃないと女らしさが際立つね・・匂いも女の子みたい・

・やっぱり男の子なんて嘘なんじゃない？」
・・！・・先輩の手がまたオレの股間に・・・！
「ぁ・・ダメッ・・・」
オレは思わず先輩に背中を向けるように身をよじった・・・
「もう反応まで可愛いんだから！　冗談よ。」
そのとたん背中から強く抱き締められ、オレは身動き出来なくなってしまった・・・
「ユウちゃん・・しばらくこうしてていい？」
「・・うぅ・・はぃ・・・」
・・っていうか・・ガッシリ固められて・・動けないし・・・
「私が男の子にこんなことするの、ユウちゃんだけよ。」
「・・・・・」
・・うれしいような・・・うれしくないような・・・

「ねえ、ユウちゃんが女の子じゃないって、知ってるコはいるの？」
「・・・ぁ・・弘子・・同じクラスの原口さんと・・・1組の長谷川さんだけ・・・」
背中越しに聞かれて、オレは正直に答えた・・・
「直ちゃんは？」
「・・あ・・直美は・・・知りません・・・」
「そっか・・直ちゃん知らないんだ・・」
「・・・・・」
・・先輩と直美って・・親しいのかな・・・でもこのウチの場所は知らなかったし・・・

「2人には、ユウちゃんから言った？」
「・・ううん・・・バレちゃいました・・・」
「でも黙っててくれてるんだ？」
「・・はぃ・・・」

「いい友達だね。」
「はい！」

「それじゃ私で3人目か・・・」
「・・・・」
「ユウちゃんの秘密を知ってる3人に入れるなんて光栄よね。」
「・・そ！・・そんな・・・」
「私も言わないよ、だから安心していいから。」
「・・・・・」
「だってユウちゃんが女の子でいられなくなったら可哀想だし、ユウちゃんも女の子でいたいんでしょう？」
「・・・はぃ・・・・」
「それにユウちゃんが男の子になるなんて想像しただけでゾッとする！」
「・・・・！」
「ずっとこのままでいてよね、ユウちゃん。」
「・・は・・はぃ・・・」
・・・どっちみち・・オレにはそうするしかないんだけど・・・

「私は来年で卒業するけど、もしそれまでに困ったことがあったら相談してよね。出来るだけ力になるから。」
「・・・ぁ・・はい！」

・・・良かった・・・やっぱり・・先輩は優しい人だ・・・女の子が好きなのはちょっと変わってるけど・・・そういう感情も、オレと千里たちが親友だというのと、そんなに違わないのかもしれないし・・・

・・こうして先輩に抱かれていると・・・オレも少しは先輩の気持ちがわかるような気もする・・・なんだか自分が女の子じゃないの

が残念なような・・・

・・オレが本物の女の子だったら・・・先輩どんなふうに可愛がってくれたのかなぁ・・・

！・・オ・・オレ・・・何てこと考えてるんだ！・・・自分の恥ずかしい考えに、一気に身体が熱くなった・・・

「どうしたのユウちゃん？　顔が赤いよ。」

「・・せんぱい・・・」

・・うぅ・・なんか・・ドキドキしてきた・・・

「・・わたしも・・先輩のこと好きです・・・も・・もちろん・・エ・・エッチな意味じゃないですけど・・・」

「ユウちゃんったら！」

「あっ・・」

・・先輩に前から抱きしめられると・・・先輩の腕の中で・・・オレももう少しこのままでいたいと思った・・・もしかして・・オレにもそのケがあったりして・・・？

第１１８話　嫉妬　オレの乙女ごころ

（・・あ～ぁ・・・なんか学校に行くの・・おっくうだなぁ・・・）

・・昨日・・大森先輩はバラさないって言ってくれたけど・・・でもやっぱり心配だ・・・

・・今日・・学校に行ったら・・・みんなにオレが・・男だってことがバレてたりして・・・もしそんなことになったら最悪だ・・・

（・・ふぅ・・・）

・・・今日は何度もためいきが出てしまう・・・電車が久留米へ近づくごとに・・不安が膨らんでいく・・・

（・・あ～ぁ・・・イタッ・・）

・・あまり仰向いてたら、電車がゆれて窓ガラスに後頭部がコツンとぶつかってしまった・・・

「あれ？」

上を向いたオレの目に飛び込んで来たのは、電車の中吊り広告だった・・・週刊主婦・・・？

「！！！」

その記事の内容にオレの目は釘付けになった・・・！

“　熱愛！　道端純平　”

・・ウソ～！！・・・相手は？・・あっ！・・・このまえ終ったバスケのドラマで恋人役だった人だ・・・カンジヤって人・・・

・・純平のヤツ・・・オレって彼女がいるのに何やってんだよ・・

！

・・・ま・・まぁ・・オレたちはまだ恋人じゃないから・・・彼女とは言えないけど・・・だけど、彼女みたいなものだ！

・・でも・・週刊誌の記事なんて・・ほとんどウソだって言うし・・・この記事も絶対ウソだと思う！・・純平がそんなことするハズない！・・・でも“火のない所に煙はたたない”って言葉もあるし・・・

・・あとで純平にメールで問い正してやろうかな・・・

・・ん？・・これってもしかして・・・嫉妬？

・・・やっぱりメールするのはやめた・・・週刊誌の記事にいちいち嫉妬するような・・そんな女の子と思われたくない・・そんなのオレがなりたい女の子じゃない・・・！

・・オレはもともと男だったから、男の子が嫉妬深い女の子を好きじゃないのを知ってる・・・

・・オレは純平のこと・・信じてるんだもん・・・

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー
ー　ー
ー

学校に来てみたら、これまでとまったく変わらなくて、どうやら

オレの取り越し苦労だったようだ・・・
・・なんか・・先輩のこと疑ったみたいで・・申し訳ないことしちゃった・・・

教室に入ると直美がオレを見つけてやってきた・・・
「有希、きのう先輩のところに行った?」
「うん。」
「どうだった?」
「うん、おいしかったよ! 学園祭のとき食べたのもおいしかったけど、同じ材料でも作る人が違うと味も変わるのね。」
「そう・・わたしも食べに行こうかな?」
「ぅ・うん・・」
「今度お店の場所教えてね。」
「うん・・・」
・・なんだよ・・直美のヤツ・・・オレの時は自分で聞けって言ったクセに・・・まあ、オレは優しい女の子だから教えてあげるけどさ・・・

「でも・・直美は大森先輩と仲がいいんじゃないの?」
「?・・そうでもないけど?」
「ホント? だって先輩・・直美のこと・・直ちゃんって・・・」
「あ~・・大森先輩ってみんなにフレンドリーみたいよ。」
「・・・・・」
「だって、学園祭で何が美味しそうか調査してたら、バレー部が出す“広島風お好み焼き”が美味しいって聞いて、それでバレー部のコに聞いてたら、先輩が来て・・・で、ぜひ有希と食べに来てって言うから。」
「なんだ・・そうだったの・・・」
・・・そういえば先輩・・オレのことも“ユウちゃん”って呼びたがったもんなぁ・・・みんなにそうなのか・・・

・・・でも良かった・・・オレ・・もしかして直美と先輩がヘンな
関係だったらどうしようかと思った・・・オレって勘ぐりすぎだな・
・・心配して損しちゃった・・・

―――――――――――――――
―――――――――――――――
――――――――――

「お前もだいぶ理解出来てきたみたいだから、もう補習は必要な
さそうだな。」
「え・・！？」
「なんだ、嬉しくないのか？」
「い・・いぇ・・嬉しいです・・・」

・・だけど・・若村先生に二人っきりで教えてもらうのも今日で最
後だと思うと・・・ちょっと淋しいかも・・・

「そうですよね・・わたしもだいぶ成長したし・・・」
「何言ってるんだ、まだ気を抜いたら駄目だぞ！　お前の学力はせ
いぜい中2レベルなんだからな？」
「え〜？！　まだそんなとこですかぁ？」
「だいたいウチの学校の学力は平均よりかなり下なんだ。」
「・・・うぅ・・・」
・・・そうだった・・・でなきゃオレなんか入学できなかったし・・
・
「安心するのは早いぞ！　またテストで赤点だったら補習するから

な。」
「はぃ・・」
・・また赤点取っちゃおうかな・・そしたらまた先生と・・・
・・でもそんなことしたら先生をガッカリさせちゃうな・・・それもイヤだ・・・先生に失望されちゃったら悲しいもん・・・

「そうだ、学園祭の時の写真を渡してなかったな。」
「え、写真？」
「まあ、プロのカメラマンに撮ってもらってたから、俺のなんかいらないかも知れないけどな・・・」
「そ、そんなことないです！」
プロの進藤さんは確かに上手だけど、アマチュアにはプロにはない良さがあると思う。あったかいっていうか・・・

「あ、お裁縫してるとこ・・・お料理も・・・」
・・先生こんなの撮ってくれてたんだ・・・なんか・・オレ一生懸命って感じだな・・・
（うわっ・・・）
・・ウエディングドレスの写真も・・・なんか恥ずかしい・・・
オレは思わずアルバムを閉じた・・・

「せ・・先生は・・どれが良く撮れてるって思いますか？　あ、わたしがじゃなくて・・写真として・・・」
「写真としてか・・そうだな・・・」
先生はそう言いながらパラパラとアルバムをめくっていく・・・いったいどんなのを選ぶんだろう・・・
「これなんか良いんじゃないか？」
「！！」
・・それは・・オレが上目づかいで大森先輩を見上げてる写真だっ

た・・・！

「この何ともいえない恥ずかしそうな表情が良いと思わないか？」

・・・オレ・・なんて顔してるんだ・・・恥ずかしそうな・・でもすごく嬉しそうな・・・まるで本当の結婚式みたいだ・・・レナに“恋する乙女”なんて言われちゃうハズだな・・・これじゃ何にも反論できない・・・

「しかし、お前があんなにウエディングドレスが似合うとは思わなかったよ。」

「！！！」

「あの時は、すごく綺麗だったなぁ。」

・・あの時はって・・・まるで・・いつもはそうじゃないみたいな言い方・・・

「・・先生の奥さんのときと・・どっちがキレイでした？」

（・・こんな質問・・ちょっとイジワルかな・・・）

・・でも、若村先生は一瞬ピクッとしたけど、すぐに答えた・・・

「まあ、ウチの女房かな？」

「・・・・・」

・・・ちぇっ・・・結局ノロケられちゃった・・・

・・きっと・・先生・・奥さんのこと大好きなんだろうなぁ・・・

・・・オレなんか・・勝ちめなさそうだ・・・べつに・・勝ちたいワケじゃないけど・・・

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

「こんにちは、先生。」
「あ、有希ちゃんいらっしゃい。　この前の血液検査の結果出てるわよ。」
「・・・・！」
「心配ないわよ、安定してるから。」
「そうですか・・良かった・・・」
・・体調は何ともないから大丈夫だと思っていても・・・やっぱり検査結果は気になってしまう・・・

「あのぉ・・・わたしちょっと心配なことがあるんですけど・・・」
「あら、なに？」
「来月、修学旅行があるでしょう？　わたしも行きたいんですけど・・お風呂をどうしようかと思って・・・」
「あー　そのことね。」
「1日くらいなら風邪ぎみとか言って入らないことも出来るかも知れないけど・・さすがに何日もは・・・」
・・修学旅行の間ずっとお風呂に入らなかったら、汚いヤツだと思われちゃう・・・

「そのことは私も考えてたのよね。　ちょっと良いかもしれない案があるんだけど・・・」
「え？　どんな案ですか？」
「それはね・・・」

白石先生が考えた方法を聞いて、オレもこれなら上手くいくかも知れないと思った・・・さすがお医者さんだけあって考えることが違う・・・

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

夜、そろそろ寝ようかと思っていると、純平からメールが来た・・
・

“　有希　週刊誌見た？　あんなの全部ウソだから　心配しなくていいよ　”

・・ほら、やっぱりウソじゃない・・ただの共演者のひとりなのよ・
・・純平があんな女なんか好きになるハズないもん・・・

オレもすぐ純平にメールを返した・・・

“　心配なんかしてないよ　わたし純平のこと　信じてるから　”

・・オレはいちいちあんな記事に嫉妬するような女じゃないのだ・・
・そんな女じゃ嫌われちゃう・・・

・・・でも・・本当は少し気になる・・・いいわけかも・・なんて・
・・

・・そりゃ・・オレだって女の子なんだから・・・あんな記事見たら・・少しくらい気になったって当り前だ・・・

・・だって・・純平のこと好きなんだもん！

第１１９話　巨峰　オレとミサトちゃん

今日のクラブの後片付けはオレとミサトちゃんが当番・・・いつもは長谷川も待っててくれたりするけど、今日は用事があるからって帰ってしまった・・・

“　ラ・ラ・ラ　ララララ　ラ～ララ～　”

「有希先輩、その歌だれの歌なんですか？」

「あ、これ？　聖子ちゃんの歌・・『黄色いカーディガン』っていうの。」

・・オレ、この歌かわいいから好きなんだ・・・

「へぇ～　先輩、聖子ちゃん好きなんですか？」

「うん・・まあ・・・ミサトちゃん聞かないでしょう？」

「はい。」

「わたしたちと世代が違うもんね。わたしも知らなかったんだけど・・夏休みに知り合いの“お姉さん”たちにコンサート連れて行ってもらって・・・それで、ちょっと気に入っちゃって・・・」

「でも・・有希先輩が鼻うた歌うなんて珍しいですね。どうしたんですか？　なんか楽しそう！」

「・・そうだった？・・実はね、今度ブドウ狩りに行くの！」

「え？！　ブドウ狩り？　長谷川先輩とですか？」

「ううん、弘子たちと。弘子の親戚がブドウの農家やってるから。もう時期も終りだから自由に採っていいんだって！」

「いいなぁ・・あたしも行きたいな。」

（あっ・・）

・・しまった・・オレったら・・調子にのって羨ましがるようなこ

と行っちゃった・・・ミサトちゃんそんな目で見ないでよぉ・・・
「・・だ・・だったら・・弘子に聞いてみようか？　ミサトちゃんも一緒に行っていいかって・・・」
「ホントですか先輩！」
「あ、でも絶対行けるかどうかはわからないよ？　聞いてみないと・・・」
・・・オレ・・安うけあいしちゃったかなぁ・・・

「ねえ弘子、今度のブドウ狩りミサトちゃんも連れて行っちゃダメ？」
「ミサトちゃんか・・車の後ろ3人になっていいなら良いけど？」
「わたしはいいよ！　あ・・でも直美はイヤかなぁ・・・狭くなるから・・・」
・・でもミサトちゃんは小さいから大丈夫じゃないかな・・・
「それじゃ、直美に聞いていいって言ったら、いっしょに連れて行っていいよね？」
「うん。」
・・たぶん直美はダメだとは言わないと思う・・・良かった・・・
ミサトちゃんに、やっぱりダメだったなんて言いにくいもんなぁ・・
あんなに喜んでたのに・・・

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

「わぁ！　これがブドウ畑？！　なんか低いね。」

川沿いの道路が高いのか、ブドウの棚が道路と変わらない高さにある・・なんか変なの・・・

　オレたちは弘子の叔母さんが運転する車で、ブドウの産地・田主丸〈たぬしまる〉にやってきた。巨峰が初めて出来たところらしい、地元では〈たのしまる〉と言う人が多い。

　今日はオレもピンクのトレーナーにサロペットジーンズ・・・髪はポニーテールにまとめ、靴はスニーカーと動きやすい恰好だ・・・古墳の時はシッパイしちゃったから、今回も田舎だから同じシッパイをしないように気を付けた・・・
・・サロペットジーンズはレナに借りたものだ・・レナとオレじゃ足の長さが違うけど・・・スソを切らずにはいてたから少し伸ばせばオレの足にも合った・・・それに今日のスソは上げぎみだ・・借りたのに畑の土で汚したらいけないから・・・

　道路に車を停めて階段を降りていくとブドウ棚の下に出た・・・棚はかなり低くて時々屈まなきゃ頭を擦りそうだ・・・

「おぉ、よう来たね。」
このおじさんが弘子のお父さんのイトコらしい・・・どことなく似てる・・・
「こんにちは！」
オレたち４人は揃ってあいさつした。
「こら可愛か娘さん達やね。成っとるブドウはもう終りやけん、全部持って行っていいけんね！」

「え？　全部～？！」
ブドウ狩りは初めてのオレとミサトちゃんは驚きの声をあげてしま

った・・・だって・・たしかに少ないとはいえ、まだかなりの数が成っている・・・とても全部は採れそうにない・・・！
・・でも、弘子と直美は前にも来たことあるらしいから、オレたちの反応を面白そうに見てる・・・

「余ったとはほかす（捨てる）とやけん、遠慮せんでいいけんね。」
「はぁい！」
オレたちはカゴとハサミを借りてブドウ摘みにかかった・・・

ブドウには全部、紙の袋が被ってる・・・下からのぞくと白く粉を吹いたおいしそうな巨峰が見える！・・オレは巨峰大好きだ。ブドウの中で一番おいしいと思う！
ハサミで茎の部分を切って、カゴに入れようとすると、実がボロボロ外れて落っこちた・・・やっぱりもう熟れすぎてるんだなぁ・・・ひとつぶ口に入れると少し柔らかいけど、すごく甘くておいしかった！
・・でもやっぱり柔らかいのは巨峰らしくない・・・でも、なかには巨峰らしいパリパリのもまだたくさんある！どんどん採っちゃおう！

「・・うぅ・・重い・・・」
・・いつのまにかカゴいっぱいだ・・・タダだからって調子にのって採りすぎちゃったかな・・・こんなに持って帰っても食べれないかも・・・こんなとこ三吉先生に見られたら怒られちゃうな・・慎みなさいって・・・

・・オレは食べることになると、どうも男の子の頃のクセが出てしまうのだ・・・慎み深さを忘れちゃう・・・もっと注意しないと・・
・

「有希先輩いっぱい採りましたね！」
「・・うん・・・」
・・ちょっと恥ずかしいなぁ・・・ミサトちゃんにイヤシイやつだって思われてないかな・・・
「かあさんと妹にも食べさせてあげたいから・・・」
「あたしももう少し採った方がいいかな・・」
「う・・うん・・・その方がいいよ！　食べきれなかったらご近所に配ればいいじゃない。」
「そうですね！　じゃぁ、あたしももう少し採っちゃおう！」
・・なんか・・オレだけ沢山だったら恥ずかしいからって・・・焚き付けちゃったかな・・・

――――――――――――――――
――――――――――――――――
――――――――――

「ふふ・・ミサトちゃん、おいしいね！」
畑の中にある木で出来たテーブルとイス・・そこで採ったばかりのブドウを食べるなんて最高だ！
「有希先輩かわいい！　ほっぺたにタネが付いてますよ！」
「え？　ほんと？！」
オレは慌てて頬をこすってタネを落した・・・
「先輩っていつもそんな可愛い恰好するんですか？」
「う・・ううん・・・」
オレが慌てて否定すると、直美が・・・
「今日の有希のテーマはカントリー娘よね。」

「な・・直美・・・」
「ミサトちゃん、いつもの有希はね、もっと可愛いわよ！　フワフワのシフォンワンピなんかすごく似合うのよね！」
「もう・・直美やめてよ・・・」
・・たしかにシフォンワンピは好きだから良く着るけどさ・・・
「でもさ、ミサトちゃんと有希って何となく似てるよね。」
「え～似てないよぉ！」
「似てませんよ！」
オレとミサトちゃんは同時に言った・・なに言うんだよ・・直美のヤツ・・オレたちが似てるハズないじゃないか！
「だって、有希は女らしいけど時々大胆なときあるじゃない？　ミサトちゃんもこんなにちっちゃくて可愛いのに男の子っぽいところがあるんでしょう？　なんか似てるじゃない！」
「・・そ・・そうかなぁ・・・」
・・まぁ・・言われてみればそんなことろも無いとは言えないけど・・ミサトちゃんは確かに男の子っぽいところがあるし・・・オレはもともと男だし・・・するとミサトちゃんが・・
「あたしと先輩が似てるなんてダメです。　先輩はあたしの憧れの女性なんですから！」
「・・ミサトちゃん・・・」
・・オレはミサトちゃんに憧れてもらえるような・・そんな素敵な女の子じゃないのに・・・
「ミサトちゃんは有希のことが好きなのね。」
・・弘子まで・・・
「はい、あたし先輩のこと大好きです！」
・・・ミサトちゃんってホント素直なコだなぁ・・・何のてらいもなくこんなこと言うんだもん・・・言われた方が照れちゃうよ・・・

帰りぎわ、おじさんの奥さんがスーパーの袋を下げてきた・・・
「あんたたち柿も持っていかんね?甘かよ。」
「え、良いんですか?」
・・田主丸は柿も有名だからなぁ・・ツヤツヤしておいしそうな柿・
・・

オレたちは持ちきれないほどの巨峰の他に柿までもらって帰った・
・・

ー　ー
ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

「今日は楽しかったぁ、叔母さん連れて来てくれてありがとうございました。」
帰りの車でオレは弘子の叔母さんにお礼を言った。
「あたしも関係ないのに、ありがとうございました!」
ミサトちゃんもお礼を言うと・・
「いいのよ、気にしなくて。みんな弘子の友達なんだから。」

弘子の叔母さんは優しい人だ。オレたちが持ちきれないほどブドウを採っちゃったから、家まで送ってくれることになった・・・オレんちでも遠いけど、ミサトちゃんの家まではそうとう距離があるのに・・・悪いことしちゃったなぁ・・・

・・でも・・叔母さんには悪いけど・・こうして車内で・・ミサト

ちゃんを真ん中にしてオレと直美・・助手席に弘子がいて・・みんなでお話しながら帰るのもすごく楽しい・・・

・・本当は千里も一緒ならもっと楽しかったと思う・・・だけど千里がいたらミサトちゃんは来れなかったんだけど・・・難しいな・・・そうだ！・・明日こっそり学校に巨峰を持っていって千里にもおすそ分けしようかな？

・・・・・・・・

「・・どうしたの？　急に静かになって・・・」

「弘子みて・・」

「あ、有希たち寝ちゃったんだ。　ふたりとも今日はずいぶんはしゃいでたから・・・」

「有希ったら・・普段は女らしいのに、寝顔はまるで子供みたいね。」

「ほんとだ、今日の服装のせいもあるんじゃない？」

「ミサトちゃんも・・マツゲ長くて、くちびるもふっくらしちゃって・・ツンツン・・・」

「やめなさいよ直美、さわったら起きちゃうわ。　疲れてるんだから寝かせといてあげなさいよ。」

―――――――――――――――
―――――――――――――――
――――――――――

２周年を迎えて

『オレは女子高生』は今日６月２３日で私のＨＰで公開してから２周年になりました！
いつも読んで下さっている皆様ありがとうございます。
こんなに長く続けられているのも、皆様のおかげだと思います。
ご意見や感想など頂けなければ、続けられなかったか、あるいは手っ取り早く終らせていたかも知れません。

私はどちらかといえば短編の方が得意なので、こんな１００話以上もある話を書けるなんて思ってもみませんでした。それなのに気づいたら１１９話・・・まったく驚きです！
ちなみにこの話は高校を卒業するまでの話だと思うので、ほぼ１年半に１００話費やしてるので、２００話くらいになるかも知れません。それまで飽きずに読んで下さると嬉しいです。

有希も近頃ではずいぶん女らしくなってますが、まだ有希自身は自分の女らしさが良くわかっていないので、そこらへんの書き方が難しいです。　私の文章力の限界はとっくに超えているので、ほとんど有希まかせで書いています（笑）

去年の暮れから網膜剥離になってしまって、ずいぶん長く書けない時期があったのに、待っていて下さって本当にありがとうございました。今回この話について物語の展開上書けないことも多いので、網膜剥離記でも書こうかと思ったのですが（笑）せっかくの２周年

なのでやめにしました。網膜剥離記はまたヒマな時にでも書きたいと思います。目のほうは万全とは言えないですが、とりあえず治る分は治ったみたいです。後は治らないか、ものすごくゆっくりと回復する部分もあるのかも知れません。

このサイトがリニューアルした頃にはランキングで最高３５位くらいだったのですが、書けなかったこともあったりして、現在は１３４位になっています。でも、これでも最近みなさんがお気に入りに登録して下さったりしたおかげで、だいぶ上がってきたのですが（笑）

それにこのサイトで人気の作品は、ファンタジーの異世界モノがほとんどなので、ファンタジーでも異世界でもないこの話としては頑張ってる方だと思います。

最初はこれほど皆様に支持していただけるようになるとは思わなかったので、これほど沢山の方々に読んでいただけて嬉しく思っています。

最近ふと思うのですが、昔よく感想を下さった方々は今も読んで下さっているのでしょうか？もしずっと読んで下さっているなら、今の『オレは女子高生』にどんな思いをもっているか聞いてみたい気がします。

なんかせっかくの２周年なのに取り留めのないことばかり書いてすみませんでした。いろいろ書きたいことがあったのですが、イザ書いてみると上手く書けませんでした。書ける時に「おまけ」にでも書きたいと思います。

今後も『オレは女子高生』を読んで下さると嬉しいです。ありがとうございました。

第１２０話　計画　オレたちの作戦

「こんにちわ、お母さん！」
ドアを開けてくれたお母さんにオレはあいさつをした・・・
「いらっしゃい有希ちゃん、さぁ上がって。」
「はい。」
なんか長谷川の家に来るのは久しぶりだな・・・お母さんも元気そう・・

「あの・・長谷川さんは？」
「ごめんね、順子は天神に行ってるのよ。修学旅行に必要なものを買いに行くって。」
「そうですか・・・」
・・まぁ・・今日はべつに長谷川がいなくてもかまわないんだけど・・・

「・・でも・・今日はコレ持って来ただけだから・・・」
「なあに・・それ？」
「ブドウです。今日ブドウ狩りに行ってきたから・・おすそわけで・・・」
「あら、ありがとう！　巨峰ね、いいの？こんなに沢山。」
「はい！食べきれないくらい採ってきちゃったから・・もう終りだからどれだけでも採っていいって言われて・・調子にのっていっぱい採っちゃった・・・あ、もしかしたら痛んでる所もあるかも知れないから、そういうのは捨ててくださいね。」
・・なかにはブヨブヨのも混じってるかも知れないもんなぁ・・・

「あと、これ・・柿も。」
「まあ、ありがとう。　順子ももうすぐ帰って来ると思うから待っ

てたら？」
「・・あ・・どうしようかな・・・でもいつになるかわからないんでしょう・・・？」
・・どうせ明日になれば学校で会うんだし・・・オレが待とうかどうか迷っていると・・・

“ガチャガチャ・・ガチャガチャ・・・”

・・玄関の方で音がしたと思ったら・・・長谷川がドアを開けて帰ってきた。
「ママ、カギ開いてたわよ！」
そう言いながら長谷川はリビングへと入ってきた・・・

「おかえり長谷川さん・・・」
「なんだ、有希来てたの？　だから開いてたんだ。」
・・・長谷川は両手に荷物を持っている・・・修学旅行に必要なものって・・・いったい何買ったんだろう・・・
「有希ちゃんがブドウ持って来てくれたのよ！」
「へえ～」
「長谷川さん・・修学旅行に持っていくって・・・なに買ったの？」
「ドライヤーが古くなってたからドライヤーと・・・あとは下着とか・・タオルとか・・・」
「・・ドライヤーは古かったら仕方ないけど・・・下着なんか・・わざわざ買わなくたって・・・」
「フン・・わたしは有希みたいにキレイな下着たくさん持ってないのよ！」
・・・なんか・・・カンにさわる言い方だなぁ・・・

「順子！　なに？そんな言い方して！　いつも有希ちゃんにそんな言い方してるの？！」

・・ほら・・お母さんに怒られちゃった・・・
「ち・・違うの、お母さん・・きっと長谷川さん買い物して疲れてるのよ・・・」
オレはそう言いながら長谷川の部屋の戸を開けて一緒に入った・・・

「なのよ有希！　良い子ぶっちゃって。」
「・・べつに・・良い子ぶってないけどさ・・・」
・・だって・・あのままにしてたら、長谷川さんたち言い合いになっちゃうと思ったから・・・オレ、長谷川もお母さんも好きだから・・ふたりの言い合いなんか聞きたくない・・・

「有希出てってよ！　着替えるんだから。」
「・・いいじゃない・・女の子どうしなんだから・・・それにわたしは長谷川さんなんか見ないよ、金魚見てるから。」
「・・・・まあ・・いいけど・・・」
・・フフフ・・小さい鏡で長谷川が着替えてるの見えてるのに・・・こういうの“知らぬが仏”って言うんだな・・・

・・ダンガリーのシャツを脱ぐ・・・あ～ぁ・・学校と同じブラしちゃってさ・・休みの日くらい可愛いブラにすればいいのに・・・それとも持ってないのかなぁ・・・

・・ジーンズを脱いで下着だけになる・・長谷川って案外きれいな後ろ姿だ・・・お尻もふっくらしてる・・・ああいうお尻は羨ましいなぁ・・・

・・千里や弘子はいつも一緒に着替えてるから何とも思わないけど・・クラスが違う長谷川の下着姿なんて見たことないから・・なんか恥ずかしくなってきた・・・

「・・は・・長谷川さん・・・金魚・・大きくなったね！」
・・オレは耐えきれなくなって、なにげない風を装って言った・・・
「そう？　わたしはいつも見てるから同じように見えるけど？」
「ううん！　だいぶ大きくなってるよ！」
・・でもブチのヤツは相変わらずヘンな顔してるなぁ・・・正面から見ると可笑しくなっちゃう・・・

Tシャツとスウェットに着替えた長谷川が、金魚を見てるオレ横に来た・・・もっと可愛い部屋着ないのかなぁ・・・もっとも・・・長谷川がベビードール着てるのなんか想像すると笑っちゃうけど・・・

「有希はもう修学旅行の準備は済んだの？」
「ううん・・まだ・・だってまだ1週間もあるじゃない・・・」
「あんた相変わらずのんきねぇ・・・もう1週間しかないってのに！」
「・・・・・」
・・長谷川が気が早いんだと思う・・・それにオレは下着なんて買わなくていいもん・・・ドライヤーだってウチで使ってるので十分だしさ・・・

「・・それで？・・あんたお風呂なんかどうするつもりなの？」
「あ・・それはね・・白石先生が良い方法考えてくれたから・・・たぶん大丈夫だと思う・・・」
「へ～・・・どんな方法？　教えてよ。」
「・・う・・うん・・・実はね・・・」

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

「なるほど・・それは良い方法ですね。　ぜひやってみなさい！」
オレは白石先生と一緒に、教頭先生に“お風呂作戦”のことを話に来ていた。やっぱり教頭先生には話しておかないと、もし大事になったらいけないと思って・・・

「そうだ、修学旅行については、戸田君に話しておかなきゃいけない事があったんですよ。」
「・・な・・なんですか・・・？」
・・なんだろう・・・あらたまって・・・
「実は校長とも話し合ったんですが、修学旅行には戸田君と佐倉君にも、前の制服で行ってもらえればと思ってるんです。」
「え？・・どうしてですか？」
「やはり修学旅行では同じ制服でないと変でしょう？」
「・・はぁ・・・」
「別の学校の生徒が混じってるように見えても困ります。それに、集合写真を撮ることもあるから、全員同じ制服の方が良いと思ってね。」
「ぁ・・そうか・・・」
・・たしかに・・修学旅行の写真で二人だけ違う制服ってのはイヤかも・・・

「・・あっ！・・でも・・・」
「どうしました？戸田君・・」
「・・あの・・わたしの前の制服・・・小さくなってるんです・・・」
・・このまえバレーの試合のときは何とか着たけど・・・あれで修学旅行はちょっとキツイ・・・すぐ胸当てが外れちゃうし・・・
「そうですか・・では松本先生に聞いてみなさい。たしか君の制服

は作ってあったはずですから。」
「え？・・・そうなんですか・・・？」
・・なんで・・・古い制服まで作ってあるんだろう・・・まあ、ほんとだったらありがたいけど・・・

「はい、戸田さんの制服。新しく作ってて良かったわね。無駄になったかと思ったけど。」
「はぃ・・・でも・・なんで新しい制服だけじゃなくて、前の制服まで作ってあったんですか？」
「共学化はだいぶ前から話があったらしいんだけど、制服も新しくするって決まったのは、だいぶ後になってからだったから、もう戸田さんの制服は作ってしまってたのよ。だって前のシーズンから少し小さかったでしょう？」
・・そういうことだったのか・・・学校も準備が良いんだか悪いんだか・・・まあ、今回はそのおかげで助かったけど・・・

「着てみて、もし合わないところがあったら直してあげるから。」
「はい。」
オレはカーテンの中に入って今着ているブレザーの制服を脱ぎ、真新しいセーラー服にソデを通した・・・新しいブレザーの制服も可愛いけど、このセーラー服も伝統を感じて良いものだ・・・オレは２通りの制服を着れて得したかも・・・

「どう？大きすぎたりしない？」
「はい！ぴったりです！」
・・そりゃぁ、オレのために誂えたんだもんなぁ・・・そんなに合わないハズがない・・・
先生はソデや脇のところをつまんで確かめた・・・
「うん、良いみたいね。　この制服の戸田さんも、やっぱり清楚で

良いわねぇ・・・」
「・・！・・そんなぁ・・・」
「ううん、わたしが見た生徒の中で戸田さんが一番似合ってたわよ。」
「そんな・・・ありがとうございます・・・」
・・・そんなこと言われると・・・お世辞とわかってても嬉しいな・・・

「そうだ、戸田さんにお願いしていいかしら?」
「え・・な・・なんですか・・・?」
「三つ編みほどいたところ見せてくれないかな?」
「・・・いいですけど・・・でも・・ほどいてもバサバサになっちゃいますよ?」
「大丈夫、大丈夫。スチームドライヤーがあるから。」
・・いや・・そこまでやらなくても・・・でも松本先生にも世話になってるからなぁ・・まあいいか・・・

オレは三つ編みをほどいて手櫛でほぐした・・・普通の三つ編みは、ほどいても良い感じのウェーブにはならない・・・良い感じにするには、三つ編みするのを4つほどに増やして、もっと上の方から編み込まなきゃいけない・・・
「あら、でもこのウェーブも悪くないわよ? 戸田さんだからかしら・・・やっぱり何でも似合うわね。」
・・せ・・先生・・・いくらお世辞でも褒めすぎだ・・・

・・先生はオレのウェーブがかかった髪にミストをかけて、スチームドライヤーで梳かしてきれいに伸ばしてくれた・・・
「うん、やっぱりこの方が清楚でいいわ! いつかこの制服で三つ編みじゃない戸田さんを見てみたかったの。」
「・・はぁ・・・」

・・まあ・・あるていど長くなってからは、校則でずっと三つ編みだったからなぁ・・・でも・・オレの伸ばした髪なんかでいいんなら、いつでも見せてあげたのに・・・

・・結局、先生はそんなオレの姿を写真に撮りたかったみたいだ・・・この制服の写真を残しておきたかったのかな・・・でもモデルがオレなんかで良かったんだろうか？・・・まさか本気でオレが一番似合ってるなんて思ってないだろうに・・・

「あっ・・そうだ・・新しい制服を頼んだコってどれくらいいるんですか？」

・・まだ着てるコは見かけないけど・・・学校が補助してくれるから買うつもりってコは何人か知ってる・・・

「2年生には結構いるわよ。だけど補助金を用意するのが少し遅れたみたいなの。もうすぐ出来てくるコもいるはずだから、修学旅行あけくらいには着てくるコもいるかも知れないわね。」

「そうなんですか！」

それは良かった・・・さすがにオレと千里ふたりだけ違う制服なのは恥ずかしかったから・・・

「あと、リボンを結ぶのが大変そうだから、留めるだけでいいのになるみたいよ。」

「あ、そうなんですか？」

たしかにこのリボンをキレイに結ぶのは難しいもんな・・朝急いでる時なんかは結構大変だったりする。

「戸田さんたちのも用意しておくからね。」

「はい、ありがとうございます。」

千里にも教えてあげなきゃ・・・

ーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーー

「・・つっ・・うぅぅ・・・」
「どうしたの有希？」
「・・直美・・・今朝からね・・なんか・・頭が痛くて・・・気分も悪いし・・・」
「いま有希アノ日よね。」
「・・う・・うん・・・」
「だったら生理痛じゃない？　有希はいつもは軽いみたいだけど、体調によって違うかもしれないし・・」
「・・うん・・・」
・・・オレの生理はウソだから・・・生理痛ってことはないんだけど・・・

「ツライんだったら、今日の体育は休んだら？」
「・・うん・・でも・・それほどでもないから・・・」
「そう？　だったらいいけど・・我慢できなくなったらすぐに言いなよ。」
「・・うん・・・」
・・直美やさしいな・・・

「はい、準備運動！　起立！」
「ヤー！！」
・・・音楽に合わせて県民体操・・・まあ、ラジオ体操みたいなものだ・・・“ヤー”というのは立つ時の掛け声だ・・・何で言うのか知らないけど・・・

・・何となく頭痛は治まっていたのに・・準備運動してるとまたクラクラしてきた・・・

「はい、ジャンプ！」
・・音楽に合わせてジャンプ・・・あっ・・・なんだか・・頭が真っ白に・・・・・

・・・・・・

「有希！？」
「先生！有希が倒れた！」

・・・みんなの騒いでる声が・・遠くで聞こえる・・・・

「職員室に斉藤先生がいるはずだから誰か呼んできて！」

・・・山口先生が叫んでる・・・

・・・オレは・・倒れたまま動けなかった・・・

ーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーー

「有希！」

「あ、長谷川さん・・・」
「どうだった？　ちゃんと出来たの？」
「・・う・・うん・・たぶん・・・」
「たぶん？　なんか頼りないなぁ・・・」

「大丈夫よ、長谷川さん。みんな信じてるから。」
「白石先生が言うなら問題ないんでしょうけど・・有希の演技なんて心配なのよねぇ・・・」
「・・・・・」
・・失敬なこと言うなぁ・・・みんなは知らないだろうけど・・・
オレはいつも女の子の演技してるようなものなのに・・・

実は今朝から頭が痛いと言ってたのはウソだったのだ・・・このことを知ってるのは先生の他は弘子と長谷川だけ・・・みんなをダマすのは気が進まないけど・・このさい仕方がない・・・・

「有希！大丈夫だった？」
「あっ、弘子！　うん大丈夫みたい。　千里も直美も信じてたよ！」
・・千里と直美はオレが斉藤先生に抱っこされて保健室に運ばれるのについて来てくれた・・・そしてオレがベッドに寝かされている間に、白石先生から「たぶんただの貧血だから心配ない」と聞かされていた・・・

「長谷川さんも来てたの？」
「・・・・じゃ・・わたし戻るね。」
「・・う・・うん・・・ありがと・・長谷川さん・・・」

・・長谷川って・・・どうも弘子のこと好きじゃないみたい・・・
弘子だけじゃない・・千里や直美のことも・・・まあ・・確かに3

人はオレにとっては親友だけど・・・長谷川には何の関係もないもんなぁ・・・クラスも違うし・・・だから嫌いっていうより気まずいんだと思う・・・オレもその気持ち何となくわかるし・・・

「戸田さんはこのまま放課後まで寝てなさい。で、原口さんはクラスに戻ったら、みんなには心配ないっていっておいて。それで、心配ないけどお風呂とか急に血圧が上がるから気をつけなきゃいけないって、それとなく吹聴しておいてね。」

「はい、わかりました。じゃぁね有希。」

「うん。」

・・弘子はクラスに戻って行った・・・

みんなにお風呂が危険だと思わせておいて、そして修学旅行の時は心配だから、一緒に来てくれる白石先生とお風呂に入る・・・それが先生が考えてくれた方法だ・・・

・・白石先生には裸を見られちゃうけど・・・オチンチンまでテーピングしてもらった仲だから・・・それでも少し恥ずかしいけど、それくらいは我慢しなきゃ・・・だって、オレもみんなと一緒に修学旅行行きたいもん・・・

「弘子・・ちゃんとやってくれるかなぁ・・・」

「心配ないわよ、原口さんはしっかりしてるから。」

「そうですね。」

・・・そうだった・・オレなんかが心配することないんだ・・弘子は信頼できるコだもん・・・

「でも、有希ちゃんも良いお友達持ったわね。」

「はい！」

・・本当に・・みんなオレのこと本気で心配してくれる・・・あんないい親友達がいるなんて・・・

・・オレはなんて幸せな女の子なんだろう！

第１２０話　計画　オレたちの作戦（後書き）

報告・・前回の話ＵＰしてすぐに読んで下さった方へ、最後の方に千里に関することを少し書き足しています。

第１２１話　修学旅行１　フェリーで一泊

出発の朝、オレたちは体育館に集まって、まず荷物の検査をしなきゃいけなかった・・・持って行っちゃダメなものは、この場に置いていかなきゃいけないらしい・・・これじゃせっかくの楽しい気分も半減しちゃう・・・

世間ではウチの学校はいまだに“お嬢様学校”なんて言われることもある・・・オレも入学前はそんなふうに思ってたけど・・・実際には“お嬢様”なんて言える人は、たぶんそんなにいない・・ひとりもいないかも・・・とはいえ、他の学校に比べれば不真面目なコは少ないから違反の物をわざわざ持ってくるコは少なかった。ゲームを持って来たコが何人かいたくらいだ・・・でも・・ゲームはダメって言っても携帯のなら規制出来ないし・・あまり意味ないような・・・まあ、規則だから仕方がないけど・・・

あと、校則で禁止されてる色モノの下着を持って来てたコもいたけど、こちらは注意されただけで済んだ・・・だって下着を置いて行ったら替えがなくなちゃうからなぁ・・・注意だけで済むんだったらオレももっとカワイイ下着を持って来れば良かった・・・下着は外からは見えないけど、女の子はカワイイ下着を着けてるだけで気持ちも弾んでしまう・・そういうもんなのだ！

「有希のセーラー服って久しぶりだね！」

直美・・・

「うん。」

「セーラー服も新しく作ってたんだね。」

「・・う・・うん・・・共学になるなんて知らなかったから・・夏

休みの間に作ってたんだけど・・無駄になってたの・・・」
「じゃぁ、修学旅行のおかげで無駄じゃなくなったね？」
「うん。」
・・実際、直美の言うとおりだ・・こんなことが無けりゃ、オレは作ってるのも知らなかったんだから・・・

「でも、有希ほんとうに大丈夫なの？　このまえ倒れたじゃない。」
「うん・・たぶん大丈夫、あれからは平気だから・・・でもお風呂で倒れたら危ないから、みんなとは入れないの・・白石先生が一緒に入ってくれるって・・・」
「いいなぁ、白石先生・・わたしも有希と一緒に入りた～い！！」
そう言ったが早いか、直美がオレの脇腹をくすぐりだした・・・
「ギャハハハ・・・や・・やめて・・なおみぃ・・・！」

「ほらそこ！　じゃれ合わない！！　楽しいからって浮かれてたらダメよ！」
「ハアハア・・・」
・・・もうっ・・直美のせいで山口先生に怒られちゃったじゃないか・・・
「修学旅行は遊びじゃないのよ？　勉強の一環なんですからね！多少は気持ちが弛むのも仕方がないけど、あまり浮かれすぎないこと！　わかった？」
「は～い！！」
オレたちは一斉に返事をした。　そんなこと言われなくてもみんなわかってる！　わかってないのは直美くらいのものだ・・

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

学校から2台の観光バスで北九州の新門司港へ。ウチの学校は1クラス４０人弱だから、２台のバスではギリギリだ・・・補助席も使わなきゃいけない・・・しかも3クラスのうち、1クラスは半分づつに別れなきゃいけないから、各クラスが変わりばんこに半分になる・・・

・・半分になる時は“あいうえお順”だから、オレたち４人も２人づつに別れなきゃいけないのがイヤだ・・・まあ、どっちみちバスは２人席だし、バスに乗ってる間だけだからそんなに変わらないかも知れないけど・・・

オレたちのクラスがバスに乗り込むと、後から２組が乗って来た・・・こうなると、どうしても半分のクラスのコが助手席に座ることになってしまう・・・

「あ、井川さん！　ここ座ったら？」

オレは最後の方に乗ってきた井川さんをオレのとなりの補助席に誘ってあげた。

「いいの？戸田さんの横に座って・・・」

「？・・もちろんよ！」

オレだってあまり知らないコがとなりに座るより、クラブで一緒の井川さんの方がいいに決まってる！

「荷物貸して、棚に上げるから。」

「ありがとう、戸田さん。」

女の子たちの中ではオレは背が高い方だから、こういう時は便利なのだ。どっちにしろ井川さんは背が低いし、補助席のところからでは、とても荷物を棚には上げられそうにない。

バイパスを通って北九州へ・・・こうやってみんなでバスに乗ってると、まるで遠足みたい・・・浮かれるなって言われたって無理な話だ！

直美がバスガイド役になって、みんなで歌ったり笑ったりしてすごしたおかげで、北九州まではけっこう長い距離だったけど退屈することなく楽しく過ごすことができた。

でも・・そうは言っても北九州までは長かった・・・

「井川さん大丈夫だった？　補助席だったから疲れたんじゃない？」

「そんなことないわよ、戸田さんたちのクラスって楽しいのね。みんなすごく仲が良くて！」

「・・そう？・・まぁ、今日はいつもよりずっと浮かれてるけどね。」

・・オレはずっとこのクラスだからわからないけど・・・クラスによって雰囲気って違うのかなぁ・・・そんなこと考えたこともなかったけど・・・

「わぁ！　おっきいなぁ・・・」

フェリーなんてテレビでしか見たことなかったけど・・・実際に見るとものすごく大きい！　高さも長さもオレの想像を遥かに超えてて圧倒される感じだ・・・

最初は新幹線で行けば何時間かで行けるのに、船の中で一泊するなんてもったいないと思ったけど・・・こんなのに乗れるのなら悪くないかも・・・それに船の中で寝るなんて、この先経験できるかどうかわからない！

「コラ！　あんた何ボケッとしてんのよ？」
「あ、長谷川さん・・おっきいよねフェリー・・・」
「なに当り前のこと言ってるの、あんたのクラスもう乗り込んでるわよ！」
「え？！」
見ると、タラップのところで千里たちが、オレがいないのに気づいて手を振って呼んでいる！
「いけない！　あ、ありがとう長谷川さん・・」
オレは慌ててみんなのところに走っていった・・・
――――――――――――――
―――――――――――――
―――――――――
「気づいたら有希がいないからビックリしたわよ！」
千里に言われた・・・
「ごめん・・・あぁ・・・恥ずかしかった・・・」
「何してたの？」
「う・・うん・・・あんまりフェリーが大きいから見てたら・・・みんなもう行っちゃってて・・・」
「ふふっ、有希らしいね。」
・・弘子にそう言われてよけい恥ずかしくなった・・・オレの考え過ぎかも知れないけど・・・弘子に“有希らしい”なんて言われると・・男の子っぽいって言われてるような気がする・・・
・・たしかに・・フェリーの大きさに熱くなってるのオレだけみた

いだし・・・女の子ってフェリーなんか興味ないのかな・・・オレってこういうところはまだ男の子の気持ちなんだろうか・・・？

　フェリーの客室は5人づつ・・・オレたちは離ればなれにならないように、安部さんを引っ張り込んで5人になった。オレたちのクラスはみんな仲良しだけど、安部さんは特に明るいコだから一緒にいても気兼ねがいらない。

部屋に荷物を置くと、オレはそそくさと部屋を出てデッキに向った・・・さっき汽笛が鳴ったからもうすぐ出発だと思う・・・どうせなら船が動き出すところを見てみたい！

　でもデッキに出てみると、もう船は動き始めていた・・・全然揺れないからわからなかった・・・

「・・な～んだ・・・」

岸からはもうだいぶ離れてる・・・いつの間にか、あたりは夕焼けで海がオレンジ色に染まっている・・・手すりにつかまって下をのぞくと、船の横をすごい勢いで水が後ろへ流れていく・・・ずっと見てると、なんだか吸い込まれそうな・・ヘンな気持ちになってきた・・・

「なんだ、有希こんなところにいたの？」

「・・弘子・・・」

「どうしたの、感傷に浸っちゃって。」

「・そ・そんなんじゃないよ・・・ただ夕陽がキレイだから見てただけ・・・」

「ほんとだ、キレイね！」

・・なんだか昔みた絵本の景色みたいだ・・・なんていう絵本だったかなぁ・・沈みそうな船をクジラが助けてあげる話で・・お礼に楽器をあげるんだったっけ・・・

「ほら有希、あれ関門橋でしょう？」
「あ、ほんとだ・・・」
大きな吊り橋の関門橋が遠くに霞んでみえる・・・関門橋を見るのは小学校の社会科見学いらいだ・・・
・・ふと横を見ると弘子の顔も夕陽に照らされて・・なんだか・・いつもよりずっと大人びて見えた・・・
「ん？　どうかした？」
「・・ううん・・弘子がすっごく綺麗だったから・・・」
「・・・何いってるの、夕陽見てたら男の子の気持ちがよみがえってきちゃった？」
オレは慌てて首を振った・・・！
「・・そ・・そんなことない・・ぜったい違うよ！」
・・オ・・オレはそんなつもりで言ったんじゃ・・・
「わたし、弘子のこと好きだけど・・それは女の子どうしとして好きなの・・・ホントよ！」
弘子はオレが本当は男だと知ってて、それでも女の子どうしの親友でいてくれる・・・それなのにオレが男の気持ちで弘子を見てるなんて思われたら・・そんな悲しいことはない・・・
「ふふふ・・冗談よ！　ごめんねからかって・・有希は女の子だもんね。」
「・・弘子・・・」
「だって、有希は学園祭クイーンなんだから、女の子の中の女の子じゃない！」
「・・・・・」
・・そうまで言われるのは・・・ちょっと抵抗があるけど・・・
「・・少し寒くなってきたね、中に入ろう？　もうすぐ夕食の時間

よ。」

「・・うん・・・」

・・もう夕陽も海の向こうに隠れてしまい、あたりは紫色に変わっていた・・・10月ももう終りだから、陽が落ちると急に風が冷たくなってきた・・・

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

食堂に入るといい匂いが漂っていた・・・この匂いはカレーだ！カレーライスの他にはサラダとエビフライ・・・ちょっと質素だけど船の中だからこんなものだと思う・・・それに女の子は小食だからこれくらいで十分だ。

カレーライスもエビフライも普通においしい・・・

「あれ？　有希しっぽ食べないの？」

「え？・・直美・・エビのしっぽなんか食べるの？」

「カリカリして美味しいよ！」

「へ～・・・」

・・オレはしっぽは食べたことないなぁ・・・あたりを見ても残してるコばかりだし・・・

「有希食べないんだったら貰っていい？」

「え？！　う・・うん・・・」

「ありがとう！」

そう言うと直美はオレがお皿の端に残していたエビのしっぽを食べてしまった・・・そんな・・ひとの食べ残しまで食べるほどおいし

いのかなぁ・・・
「・・まだ・・残してる人いっぱいいるよ？」
「もういい、そんなにしっぽばっかり食べてもしょうがないしね。」
「・・・・・・」
・・なんだよ・・・オレのだけ食べてさ・・・ほんと直美って変わってる・・・

夕飯が終ったころにはもう、あたりは真っ暗だった・・・もう瀬戸内海に入ってるんだと思うけど、島も何も全然見えない・・・遠くに街の灯りらしいものがチラチラ見えるだけだ・・・

またこっそりデッキに出てみようかと思ったけど、これじゃどうせ何にも見えないからやめにした・・・夜はデッキに出ないようにって先生にも言われてるし・・・景色も見えないのに怒られたらバカみたいだ・・・

結局みんなで小さな部屋に戻ってもやることが無いから、トランプでもやりながら寝るまでの時間をつぶした・・・

９時・・消灯の時間・・・いつもならまだ早いけど誰も文句は言わなかった・・・船の上ではやることもないし・・・

ただ、お風呂に入れないことには、みんな不満そうだった・・そりゃ女の子が１日お風呂に入れないなんて考えられないことだろう・・・もっともオレは元々男だったから、お風呂に１日くらい入らなくたって、どうってことないけど・・・

・・でも、さすがに下着はみんなと同じようにはきかえた・・・オ

レだって女の子として、それくらいの自覚はある・・・

　オレもこの頃はいつも女の子に囲まれて生活しているから普段は感じないけど・・・小さな部屋に5人も女の子がいて・・みんなお風呂に入っていないとなると・・・部屋は女の子特有の甘酸っぱい香りがしている・・・

「安部っち～！」
「ち・ちょっと岡本さん・・！」
・・もうっ・・また直美が何かやってる・・・

「千里～！！」
「・・直美・・放してよ！」
・・まったく・・何やってるんだか・・・

「有希～！！！」
・・うわっ・・来た！
「ちょ・・やめてよ直美・・・」

“くんくん・・”

「わたしやっぱり有希の横がいい！」
・・えぇ～！・・・オレは・・弘子がいいのに・・・
「だって有希が一番いい匂いなんだもん！」
「・・・・・！」
・・オ・・オレが・・・？！
「有希ってホント甘～い匂いがするんだから・・・」

「そ・・そんな・・！」

オレは慌てて自分のＴシャツのエリを持ち上げて“クンクン”匂ってみた・・・臭かったらどうしよう・・・

「・・・べ・・べつに・・何も匂わないじゃない・・・」

「当り前でしょう？　自分じゃ自分の匂いはわからないのよ。」

・・・それもそうか・・・でも・・そ・・・それじゃ・・・

「有希はね、女の子独特の甘〜い匂いがするの！」

「・・・・・」

・・そういえば・・・ずっと前に麻衣も言ってたような気がする・・・オレの匂いが女の子の匂いになったって（４６話参照）・・・でもそれは、男の子の頃と比べてのことだと思っていた・・・まさか・・オレは女の子の中でも・・女の子らしい匂いがするってことなのだろうか・・・？

「・・・そ・・・それって・・・臭くないよね？」

「もちろんよ！　いい匂いって言ったじゃない！」

「・・・うぅ・・・・」

・・・まぁ・・・それなら・・いいか・・・・・臭くないのなら・・・

けっきょく直美はオレの横で、ベッタリとオレに引っ付くようにして寝てしまった・・・おかげでオレは緊張してなかなか寝つけなかった・・・

――――――――――――――――――――――――――――――

ーーーーーーーーーー

補足：有希が「昔みた絵本の景色みたいだ」と言っているのは『うみのがくたい』という絵本です。

第１２２話　修学旅行２　飛鳥～奈良の大仏

「・・有希・・・」

「・・・・・」

「・・有希・・有希・・・」

「・・・うぅん・・・」

「・・有希！」

「・・・んぅ・・かあ・・さん・・・？」

「・・有希！・・なに寝ぼけてるのよ・・もう朝だよ！」

「・・・んんっ・・？・・んぎゃ！」

オレはほっぺをツネられて痛さで目が覚めた・・・

でも、目は覚めたけど・・・

（あれ？・・オレどっち向いて寝てんだ？・・・ん？・・・ここオレんちじゃない・・・？）

・・オレは、すぐにはここがどこかわからなかった・・・

「有希！」

「・・あれ？・・・なんで直美が？」

「・・まだ寝ぼけてるの？」

「？」

「わたしたち修学旅行に来てるのよ！　フェリーの中で寝たんでしょ？」

「あ！」

・・そうだった・・・やっと思い出した・・・ここは船の中だったんだ・・・

昨日の夜は、直美はひっついてくるし、微妙に床は揺れてるしで・・・なかなか寝つけなかったんだっけ・・・目が覚めてもまだ眠たい・・・

「・・弘子ぉ・・もう大阪に着いたの？」

「ううん、まだよ。　でも、もうすぐ朝食だから有希も早く着替えなきゃ！」

「あ・・うん・・・」

オレは慌ててエンジのジャージを脱いで、セーラー服へと着替えることにした・・・

「？・・そういえば・・千里と安部っちは？」

「もう先に洗面所に行ったわよ。たぶん混むだろうから・・・」

「・・そっか・・・」

・・弘子と直美は待っててくれたのか・・・それじゃオレも急がなきゃ・・・

「有希も起きたし、直美も行ってくれれば？」

「そうだね、じゃ先に行ってる！　有希も急ぎなさいよ！」

「うん。」

Tシャツの上からセーラー服をかぶる・・・ブレザーの制服に比べて、やっぱりセーラー服は着にくいなぁ・・・かぶったら衿の中から髪を出して・・胸当てのホックを留める・・・

「有希、衿が裏返ってるわよ。」

そう言って弘子がオレのセーラー服の衿を直してくれた・・・

「あ・・ありがとう・・」

・・なんかこういうとこ・・弘子ってお母さんっぽいんだよなぁ・・

・

「そんなに焦らなくてもいいから。髪の毛もバサバサよ？」
「あ！・・うん・・・」
・・うぅ・・なんか子供扱いされてるみたいで恥ずかしい・・・いくら急いでるからって・・・これじゃ女の子失格だ・・・
・・女の子なら遅れたって、身だしなみはちゃんとするものなのに・・・

ジャージのズボンを脱いで・・スカートをはく・・・横のホックを留めて、忘れないようにチャックを上げた・・・これ・・よく忘れちゃうんだよな・・・黒いスカートの横がパカッと割れて、白い下着が見えるから目立っちゃって余計ハズカシイのだ・・・

寝る時ほどいていた髪を梳かして三つ編みにする・・・頭の後ろで真ん中から、人さし指でサッと分けて・・3つにした髪を手早く編んでいると・・・
「有希、三つ編みするの早くなったね。」
「あ、うん・・毎日やってるから・・・休みの日はやらないけど・・・」
「校則でしなくて良くなったら、三つ編みしないんでしょう？」
「・・うん・・たぶん・・・」
「三つ編みの有希も可愛いんだけどな・・・」
「・・・べつに・・絶対しないってワケでもないわよ？」
・・・オレも三つ編みキライじゃないし・・・夏なんかは涼しくていい・・・でもいつも同じじゃ飽きちゃうし・・選択肢が広がるのは良いと思う・・・
「出来た！　お待たせ、わたしたちも行こう。」
オレたちは小走りで洗面所に向った。

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

―――――――――――――――
――――――――――

朝食は2枚のお皿に、ロールパンが2つと、ウインナーとポテトサラダだけだった・・・女の子にはこれくらいで十分かも知れないけど・・・オレにはすこし少ないかな・・・昨日の晩も少なめだったし・・・オレの胃袋はまだ男の子気分が残ってるみたいだ・・・

パンは真ん中に切れ込みがあるとこを見ると、ウインナーを挟めってことなのだろうか・・・？
みんなもやりだしたから、オレもパンにウインナーとポテトサラダを挟んで食べた・・・味は悪くない。

朝食が終わると、部屋に戻って荷物をバッグに詰めてフェリーを降りる準備をはじめた・・・汽笛が鳴ってるとこを見ると、もうすぐ港に着くみたいだ。

“コンコン！”

ノックの音・・・

「はい！」
オレたちが返事をすると、ドアが開いて担任の山口先生が顔をのぞかせた・・・

「準備は出来た？」
「はい。」
「そしたら、もう一度忘れ物がないか確認してから、甲板に集合ね

！」

「はい！　わかりました！」

オレたちはもう一度、部屋中を見回して忘れ物がないのを確かめてから、部屋を出て甲板に向った。

甲板に出てみると、今日もいい天気で修学旅行びよりだ・・・ホント晴れて良かった！・・せっかくの修学旅行なのに雨なんか降ったら最悪だもん・・・

「戸田さん！　具合はどう？」

「あ、おはようございます・・白石先生・・・」

「頭クラクラしたりしない？」

「はい、大丈夫です。」

「もし具合が悪かったら、すぐ先生に言いなさいね。」

「はい。」

・・白石先生がわざわざみんなの前でオレに聞いたのは、お風呂のことがあるからだ・・・オレがあまり元気そうだと、みんなとお風呂に入らないのを変に思われるかも知れないから・・・今は元気だけど具合悪くなるかも知れない感じを出しておかなきゃいけないのだ・・・

・・オレも少しは具合悪そうにした方がいいのかも知れないけど・・・楽しいからついつい浮かれちゃう・・・

船って岸壁に着くのに、けっこう時間がかかるんだな・・・もうすぐそこなのに、なかなかくっ付かない・・・タラップの場所を合わせるのが難しいのだろう・・・

やっとくっ付いてフェリーを降りると、バスも向こうから降りてきた・・・今日はオレたち3組が半分づつに別れる番だ・・・

「有希～！離れたくないよぉ～」
直美が冗談っぽくオレに抱きつくから・・・
「わたしも！」
オレも冗談で抱きついてあげた。

「あはは・・じゃぁね！」
オレと弘子は、直美と千里に手を振って、別々のバスに向った・・・
直美たちは長谷川がいる1組と、オレたちは井川さんの2組と一緒だ。

オレたちは早く乗ったから2人一緒に座れた・・・補助席だと弘子と離ればなれになる可能性が高いから、急いで乗って席を確保したのだ！　席に向う途中ですでに座席に座っていた井川さんを見つけて、小さく手を振った・・・

“ぇ皆様・・これからこのバスは・・奈良の飛鳥へ向います・・・飛鳥には飛鳥神社・・石舞台古墳・・酒船石などが有名で吉野山を望む景観は・・・”

バスガイドさんが話だすと、みんな静かに聞いている・・・ホント2組って大人しいんだなぁ・・・

「ねえ、弘子・・酒船石ってなにかな?」
「あぁ、酒船石っていうのはね、大きな石に丸く彫り込んだ部分があって、それをつなぐように溝が彫ってあるやつよ。祭事に使ったモノらしいけど、正確にはどう使ったのかは解ってないの。」

「へ～・・・」
・・なんか・・良くわからないけど・・・やっぱり弘子ってこういう事に詳しいんだなぁ・・・
・・でも・・バスに揺られてると・・・
・・・昨日あまり寝れなかったせいか・・・
・・なんだか眠くなってきた・・・・
「・・有希・・降りるわよ!」
「?!」
・・弘子に体を揺すられて目を覚ますと、もう前の方は降り始めていた・・・
「・・・いけない・・・いつのまにか眠ってた・・・」
バスを降りると公園みたいな広い場所だった・・・
バスガイドさんに連れられて歩いていくと、広場の真ん中に大きな石が積み重なってた・・・
“これが石舞台古墳です。一説では7世紀初頭の権力者で、大化の改新で滅ぼされた、蘇我入鹿の祖父でもある蘇我馬子の墓ではないかといわれています・・・”
「・・弘子と行った古墳は山みたいだったのに、これは石だけだね・・・」
「ここも元は他の古墳と同じように土が盛ってあったらしいけど、いつの時代か土が無くなって石だけが残ってるのよ。」
「・・へぇ・・・そうなんだぁ・・・」

・・それにしても大きな石だなぁ・・・近くで見ると落ちてきそうで怖いくらいだ・・・

・・あんまり大きいから自然にこんな形になってたのを、人間が利用したんじゃないかという気もするけど・・間近で石を良く見ると人が切った跡がある・・・それじゃ、やっぱり人間がこんなふうに積み上げたんだろうなぁ・・・昔の人ってスゴイと思う・・・

次に行ったのは飛鳥寺・・・

“飛鳥寺は蘇我馬子によって建立されたと伝えられる日本最古の仏教寺院です・・ご本尊は「飛鳥大仏」の名で親しまれています・・後世の仏像より面長な顔が大陸からの影響を感じさせます・・・”

・・・たしかに面長で・・ちょっとオジサンくさい感じ・・・オレが思う大仏の顔とはだいぶ違う・・・

・・・弘子は熱心に見てるけど・・オレはこういうのあんまり興味ないなぁ・・・

・・奈良っていえば鹿だと思うんだけど・・ここらへんにはいないのかな・・・？

お寺を出てバスに向って歩いていると・・・

「どうしたの有希？　さっきからキョロキョロしてるけど。」

「あ・・うん・・・鹿いないのかなって思って・・・」

「鹿？・・・そうねぇ・・次に行くのは東大寺だから、奈良公園にはいると思うわよ。」

「ほんと？！」

・・なんか鹿が見れると思うと楽しくなってきた・・・いっぱいいい

るのかな？・・・オレは仏像より鹿のほうがいい！
「有希そんなに鹿が見たいの？」
「・・そ・・そういうワケでもないけど・・・奈良の鹿って有名じゃない・・だから・・・」
「鹿せんべいをあげるといいわよ。鹿が貰おうと思って“おじぎ”するんだって。」
「へぇ～“おじぎ”？」
・・鹿って頭いいのかなぁ・・・そんな芸が出来るなんて・・・

“・・・ここ吉野山は秋の紅葉も美しいですが、春の桜はことに有名で、平安の歌人・西行法師も“願はくは　花の下にて春死なん　そのきさらぎの望月のころ”と歌を詠んでいます・・・”
バスの窓から見える景色を見ながらバスガイドさんの話を聞く・・・紅葉もまだもうひとつみたい・・・なんか退屈だなぁ・・・
「・・ねえ弘子、2組ってホント静かだね・・・」
「そうね、有希が歌ってあげたら？」
「！・・じょ・・冗談じゃないよ・・・」
・・・オレが歌うくらいなら・・まだ静かな方がいい・・・歌なんかうたいたくないもん・・・

―――――――――――――――
―――――――――――――――
――――――――――

　「・・う～んっ・・・・やっと着いた！！」
オレはバスを降りると、大きく伸びをした・・・

“ぇ東大寺は聖武天皇が建立したお寺で、二度の戦火にあい消失したため、現在の大仏殿は江戸時代に再建されたものです。聖武天皇の時代は現在のものより間口が3分の1ほど長かったと言われています・・・”

「あれが東大寺?!」
「東大寺の南大門よ」
「南大門?」
「ほら、左右に金剛力士像が立ってるでしょう?」
「あ・・ほんとだ・・・」
・・金剛力士像ってのは聞いたことがある・・・手前に金網があって見にくいけど・・近づいて良く見ると口を開けて怖い顔をしてる・・・

「これは口を開けてるから阿形〈あぎょう〉であっちが吽形〈うんぎょう〉口を閉じてるの。良く“あうんの呼吸”とか言うでしょう?あれはここから来てるのよ。」
「へ~・・・弘子って何でも知ってるね・・・」
「これくらいは常識よ。」
「・・そぅ・・・」
・・弘子にとっては常識かもしれないけど・・オレはぜんぜん知らない・・・

南大門を抜けると、もうひとつの門・・・その先に大きな建物が見えてきた・・・
「あれが大仏殿よ。」
「すごいおっきいね・・・」
「昔はここの左右にも七重塔があったそうよ。高さが１００ｍもあったんだって。」

「ひゃ・・１００m?!」
・・よく木でそんな高い塔を造れたなぁ・・・でも・・そんなのが建ってたらずいぶん壮観だっただろうなぁ・・・また建てればいいのに・・・
「そのうち東塔は再建する計画があるみたいよ。」
「へ～・・・」
建ったら見たいなあ・・・

大仏殿に近づくと、その大きさがさらに感じられた・・・中に入っていくと薄暗い中に巨大な大仏が座っていた・・・

“ぇ大仏は正式には盧舎那仏坐像〈るしゃなぶつざぞう〉と言います。造られたのは天平時代ですが、その後何度も補修され、現在の大仏は頭は江戸時代、胴体は鎌倉時代に造られたもので、当初のままの部分は台座、腹、指の一部など、ごく一部が残るにすぎません・・・”

「へ～・・・部分部分で造った時代が違うんだ・・・」
「最初に造った時は金メッキでピカピカだったらしいわよ。」
「へ～・・・」
・・・これが金ピカだったなんて・・・そうとう豪華だろうなぁ・・・でも・・ちょっとやりすぎな気もする・・・オレはこれくらいがいいと思う・・・だって、今でも大きくて圧倒されるのに・・これが金ピカだったら威圧感がありすぎる！

“ぇこの柱に開いている穴は大仏様の鼻の穴と同じ大きさになっていて、穴をくぐると無病息災のご利益があると言われています。どなたか通ってみてはどうですか?”

バスガイドさんに言われても、誰も自分が通るとは言わなかった・・・そりゃそうだ・・みんなが見てる目の前で穴をくぐるなんて恥ずかしいもん・・・それにオレたちスカートだし・・・しかも穴はかなり小さい・・・もし引っかかって出られなくなったら大変だ・・・

「有希入ってみたら?」

「わ・・わたしが?!」

いきなり弘子に言われてビックリした・・・だって、オレはウチの学校では体も大きい方なのに・・・あんな小さな穴に・・・?

「ねえ、やってみてよ。あっちから引っ張ってあげるから!」

「えぇ・・でも・・・」

・・スカートでこんなとこくぐったら・・・パンツ見えちゃうんじゃないかなぁ・・・

「戸田さんがくぐるんだって!」

「ほんと?すご〜い!」

みんなにも聞かれてたみたいで、だんだん声が大きくなっていく・・・

「戸田さん!戸田さん!戸田さん!」

・・そ・・そんな拍手までされると・・・やらないワケにいかないじゃない・・・

「戸田さん!戸田さん!戸田さん!」

・・2組のコまで・・・? 2組はおとなしいんじゃなかったっけ・・・?

「ほら、みんなも応援してるんだから! やらないと収まらないわよ。」

・・うぅ・・弘子がこんなこと言うなんて・・よっぽどやってほしいのかなぁ・・・

・・どっちにしても弘子の言うように・・このままじゃ収まりそう

にない・・・
「・・やるわよ・・・やればいいんでしょう・・・？」
・・もうっ・・新品のセーラー服なのに・・・汚れないかなぁ・・・
・・

柱の穴は下が地面に接するように開いている・・・何とか通れるかどうかって大きさだ・・・頭から入ろうとしたけど・・こんな入り方じゃ中で動けなくなりそう・・・
「・・・・・」
・・うぅ・・・自分がしてる恰好を想像すると恥ずかしくて顔が熱くなってくる・・・四つん這いになって・・お尻を上げてるなんて・・・
・・・でも早くしないと他の観光客も集まってきそう・・・ウチの学校のコだけならまだしも、他の学校のコ・・・もしも男の子なんかにこんな恰好を見られたら・・オレ恥ずかしくて死んじゃう・・・！

手を前にして・・手から穴に・・・出来るだけ肩幅を狭くしながら頭を入れる・・・な・・なんとか入ることが出来た・・・肩が通れば何とかなりそう・・・だってオレは女の子に比べれば、お尻は大きくないから・・・
「・・あれっ・・・・？」
もうすぐ頭が出そうだと思ったのに・・・地面にべったり寝ちゃったら・・動けなくなった・・・！
・・がに股になって踏ん張れば出れるかも知れないけど・・・女の子がそんな恰好できない！

「・・た・・たすけて！・・弘子・・引っ張ってぇ！」
オレは助けてもらおうと手をバタバタさせたけど、なかなか助けてくれない・・・弘子なにしてんだよ・・・！？

「・・ちょっと！」
顔を上げて穴の向こうをのぞくと、弘子が穴に詰まってるオレを携帯で写メ撮ってた！
「・・弘子・・・助けてよぉ！」
「ごめんごめん、わかったから・・手かして。」
・・弘子はオレの手をつかんで引っ張ってくれた・・・でも弘子だけじゃムリだったから片手づつ2人で引っ張ってもらい、やっと出ることが出来た・・・だけどいっぱい写メ撮られてしまった・・・

「ホコリがついちゃった・・・」
オレが制服の前をはたいてホコリを落していると・・・
「うしろも汚れてる！」
弘子はオレの背中とお尻をはたいてくれた・・・
「ヒドイよ弘子・・・なんですぐに助けてくれなかったの！？」
「だって、直美や千里にも見せてあげたいじゃない？」
「そ！・・そんなのわざわざ見せなくていいって・・・」
・・オレ・・あんなことしたって知られるだけでも・・はずかしいのに・・・

正倉院なんかを見てから奈良公園に向っていると、前のバスの組が待っていた！
「千里！直美！」
オレは嬉しくなって駆け寄った・・・やっぱり4人でいる方がいい！
「ねえ直美、こっちの組は誰が柱の穴通ったの？」
弘子が聞くと・・・
「あんなの通るコなんていないわよ！　まさか弘子たちの組は誰か通ったの！？」
「えっ・・・」
・・・やっぱりそうとう恥ずかしい事だったんだ・・・こんな感じ

じゃ・・まさかオレがやっちゃったなんて言えない・・・

「やっぱり通ったんだ？　弘子、誰が通ったのよ！」
「ふふっ、有希が通ったのよね！」
「！！！」
弘子ったらヒドイよ！・・・言っちゃうなんて・・・元はといえば弘子のために通ってあげたのに・・・
「ほんとに？！　有希が通ったの？」
「・・・う・・・うん・・・・・」
「わあ！見たかったぁ！　ねえ、千里。」
「うん・・でも勇気あるね、みんなの前であの穴を通るなんて。」
「そうよ、有希がんばったのよね。」
そう言って弘子はオレの頭をヨシヨシした・・・

「・・弘子が通れって言ったのに・・・」
オレの言葉も聞こえないくらい、３人は弘子の携帯を見ながら盛り上がってる・・・オレが穴に詰まってる写真を見られるなんて・・・

・・・オレ・・もう泣いちゃいそう・・・

第１２３話　修学旅行３　奈良公園～旅館

「あっ！　鹿だ！！」
弘子が言ったとおり奈良公園には鹿がたくさんいた！　やっぱり奈良はこうでなくちゃ！

“鹿にはお菓子などあげないで下さい！　エサをあげる時はかならず“鹿せんべい”を買ってあげましょう。　なおオス鹿の角は切ってありますが、角切りの時に逃げた個体もいるかもしれませんから、もし角がある鹿がいたら近づかないようにして下さい！”

公園のおじさんの説明が・・・角があるヤツは危険なんだ・・・あたりには角がある鹿はいないようだけど・・つつかれないように気をつけなきゃ・・・

「“鹿せんべい”ってどこに売ってるのかな・・・」
探してると・・・
「有希、あれじゃない？」
直美が言う方を見ると、向こうでおばちゃんが売っていた・・・１５０円か・・・そんなに高くない・・

売店には無防備に売り物の“鹿せんべい”が積んであるけど、まわりにいる鹿は食べようとしない・・・鹿ってお行儀いいんだな・・・やっぱり頭いい動物みたいだ。
テレビで見たけど、サルはおみやげ物なんかも盗んでいくみたいだもん。

・・へぇ・・・収益の一部が鹿の保護に役立ってるのか・・・

「おばちゃん、鹿せんべいちょうだい！」
「気をつけてあげなさいよ。すぐ食べはるからね。」
「・・はい。」
お金を渡し、おばちゃんから鹿せんべいを受け取って、おせんべいを束ねてある紙を外そうとしたら、いきなり鹿がオレに寄ってきた・・・
「・・あっ・・ちょっと待って・・・」
鹿におせんべいを一気に食べられないようにと、おせんべいを持った手を高く上げた。
「あ・・ほんとだ！」
鹿がおじぎしてる！弘子が言ったとおりだ！可愛いなぁ・・・

「えっ？！！」
そう思ったのもつかのま・・急におじぎしてた鹿が大きく伸び上げってきた！！
（ひ～～ぃ！！！）
慌てて後ろに逃げようとすると、いつの間にか後ろにも鹿が・・・！
「・・わぁ！・・えっ！・・えっ？！」
オレは知らないうちに鹿たちに取り囲まれていた・・・それどころかまだまだ鹿が集まってくる・・！

（・・ど・・どうしよう・・・）
鹿はオレの手からおせんべいを奪おうと必死に伸び上がってくる・・・オレの体に前足を掛けそうな勢いだ・・・
「痛イッ！！」
いきなり背中に衝撃が！・・・見ると切られた角が切り株みたいになったオスの鹿が、オレの背後から頭突きしたらしい・・・こ・・こいつら・・・全然おとなしくないじゃない！
「あっ！・・な・・なに？！」
一匹の鹿がオレのポケットに口を突っ込んでる・・・

「・・そ・・それは・・・ダメェ・・・・！」
鹿はオレのスカートのポケットから、東大寺で貰ったパンフレットを引っ張り出して食べてしまった・・・

最初は可愛いと思ってた鹿だけど、こう集まってくるとだんだん怖くなってきた・・・実際オレの足をガンガン蹴ってくる！
「キャァ～！！！」
オレはもうどうしたらいいのか判らなくなって泣きそうだ・・・！
「有希！危ないわよ！早くエサをあげちゃいなさ～い！」
弘子に遠くから言われて、オレは慌ててエサを投げた・・・でも束のまま遠くに投げすぎてオレのまわりの鹿は気づいてない！　まだオレからエサを貰おうと必死で押してくる・・・
「キャァ～！・・もうエサないのに～！！　助けて～～！」

すると売店のおばちゃんが・・・
「シカに手を広げてみせなさい。もう持ってないよって！」
「！！」
オレは急いでおばちゃんに言われたとおり鹿に向って手を広げて見せた・・・
「？！」
すると一瞬で鹿の動きが止まったかと思うと、ゾロゾロとオレから離れていく・・・どうやらエサがもう無いとわかったみたいだ・・・こんなところは聞き分けが良いんだなぁ・・・頭が良いんだか悪いんだか・・・

「有希、大丈夫だった？」
鹿がいなくなり弘子たちが駆け寄ってくると、急に怖さが込み上げてきた・・・
「・・弘子ぉ・・・ふぇ～ん・・・」

「泣くことないじゃない・・鹿に会うの楽しみにしてたのに・・・」
「・・だ・・だって・・・あんなに凶暴だと思わなかったもん・・・草食動物なのにぃ・・・」
「有希がいつまでもエサをあげないからよ。」
「・・でも・・頭突きされたし・・・足も・・見てよこれ・・・」
オレは鹿に蹴られた足を見せた・・・

「ほんとだ！少し蒼くなってる！　白石先生に観てもらった方がいいんじゃない？」
千里が心配そうに言うから・・オレは慌てて言った。
「だ・・大丈夫だよ・・心配しないで・・」
・・オレ・・弘子に甘えすぎたみたいだ・・・千里を本気で心配させちゃった・・・
・・たしかに鹿は怖かったけど・・泣きそうだったのも本当だけど・・・今はそんなに心配してもらうほどじゃない・・・だってオレ・・本当は男の子だもん・・・これくらいの蒼アザくらい何てことない！
「ほんとに大丈夫なの？」
「う・・うん・・もう平気！」
オレは笑顔で千里に言った。

“記念撮影しま～す！　１組から集まってくださ～い！”
奈良公園でいつも撮っている、地元の写真屋さんに集合写真を写してもらうらしい・・・１組が撮影用のヒナ壇に並んでいく・・・長谷川も・・・
・・オレも同じクラスだったら長谷川と一緒に写れたんだけどな・・
・

でも、もしオレが長谷川と同じクラスだったら・・・弘子や千里や直美とは、たとえ同じクラスだったとしても、今みたいに仲良くは

なれなかった気がする・・・オレが長谷川と同じクラスだったら・・
オレは長谷川に頼ってしまったんじゃないだろうか？　もしそうな
っていたら今のオレはいなかったと思う・・・

・・だって、今のオレは・・もちろん長谷川の影響もあると思うけ
ど・・オレの中のほとんどの女の子の部分は、弘子や千里や直美と
の関係で出来てきたと思うのだ・・・オレがこんな女の子になった
のは、弘子たちのおかげだと思う・・・

・・やっぱり男の頃のオレを知っている長谷川とは・・本当の女ど
うしにはなれない気がする・・・たぶん長谷川もそうじゃないだろ
うか・・・？

“次は３組の人　集まってくださ～い！”
２組が終ってオレたちの番だ・・・
担任の山口先生が一番前の中心に座って、オレたちは４人は右側に
並んだ・・・

「はい写しますよ！　あっ？！」
写真屋さんがシャッターを切ろうとすると、急に鹿が前を横切って
行った！
「あははは・・・」
なんかそれがものすごく可笑しくて、みんなしばらく笑いが止まら
なかった・・・

その後、笑いをこらえ写ったけど・・ヘンな顔になってなきゃい
いけどな・・・

―――――――――――――――
―――――――――――――――
――――――――――

　バスで奈良公園をあとにして、オレたちは今夜泊まる旅館に向った・・・今回は千里たちと入れ替わって、オレたちが１組と一緒にバスに乗った・・・偶然前の席が長谷川だ・・・

「でも有希ケガしなくて良かったね。まだ痛い？」
バスに乗ると弘子がオレの足を見ながら言った・・・
「ううん・・・だけど・・東大寺のパンフレット・・鹿に食べられちゃった・・・」
「あ、パンフレットならわたし余分に貰ってきたから後であげるわよ。」
「・・そうなの？　ありがとう・・・」
・・本当は・・パンフレットがそんなに惜しかったワケじゃないんだけど・・・せっかくだから貰っておこっかな・・・麻衣に見せてあげたいし・・・

なんかオレ・・・修学旅行に来てから弘子に甘えすぎかなぁ・・・
いや・・そうでもないかも・・・だって弘子に東大寺ではイジワルされちゃったもん！
・・・あんな恥ずかしい思いしたんだから・・少しくらい甘えたってバチは当らないと思う・・・

旅館に着いてバスを降りると、急に腕を引っ張られた。

「？！　なに？あ！長谷川さん・・・」
「あんたどっかケガしたの？」
「ううん・・なんで？」
「さっき後ろで話してたじゃない！」
「あぁ・・ちょっと鹿に足を蹴られただけ・・でもたいしたことないから・・・」
「なんだ、心配して損した。」
「あ・・うん・・・でも長谷川さんが心配してくれるなんて珍しいね。」
「何寝ぼけたこと言ってるのよ！いつも心配してあげてるじゃない！」
「うっ・・うん・・・」
・・そうかなぁ・・・結構イジメられてる気がするんだけど・・・
まあ、時々助けてもらうことはあるか・・・
「だけど、あんた普段あんなに甘えた話し方してるの？“鹿に食べられちゃった〜”だって・・・」
「！・・そ・・そんな言い方してないもん！」
「してたわよ、相手が原口さんだからって甘えちゃってさ！」
「・・・・・」
・・長谷川のヤツ・・ヒドイこと言うなぁ・・・たしかに・・ちょっとは甘えてたかもしれないけど・・・そこまで甘た声じゃなかったと思う！
・・だいたい長谷川は、オレが弘子たちと仲良くしてるのが気に入らないんだ・・・絶対そうだと思う！

――――――――――――――
――――――――――――――

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

「あ～疲れた・・・」

今日はかなり歩いたから、足が痛くなっちゃった・・・靴下も脱いじゃおう・・・

「ふう・・・あ！」

靴下で隠れてたところにも蒼アザが出来てた・・・しかもかなり濃い・・・鹿のヤツ何てことしてくれるんだ・・・しばらく消えそうにないじゃないか・・・！・・・そういえば・・修学旅行から帰ったら、すぐ撮影が入ってるんだった・・・マズイなぁ・・・

荷物を部屋に置いて、セーラー服からエンジのシャージに着替えたら、やっと夕食だ！　朝も昼も少なめだったから、オレもうおなかペコペコだよ・・・

広いお座敷に入ると、テーブルの上には野菜や肉が乗ったお皿があって・・真ん中には土鍋が・・・晩ご飯はお鍋みたい・・・これならたくさん食べれそう！

“ぐぅ～”

しまった・・待ってたら・・お腹が鳴っちゃった・・・

「有希、今おなか鳴った？」

「あ・・うん・・・」

・・うぅ・・恥ずかしい・・・

「いっぱい食べていいからね！」

「・・う・・うん・・・」

・・でも・・女の子ってどれくらい食べていいんだろう・・・考えてみたらオレは泊まりがけで旅行に来るのは中学の修学旅行いらい

だし・・・まして、女の子になってからは初めてだから・・こんなときに女の子がどれくらい食べるかなんて気にしたこともなかった・・・あんまりたくさん食べたら男の子みたいだって思われちゃうかなぁ・・・

「あ～・・おいしかった！」

・・あ～・・喰った喰った・・・けっきょく我慢できずにいっぱい食べてしまった・・・だってみんながオレの鉢に入れてくれるんだもん・・・もうおなかパンパンだ・・・

「有希、食べ過ぎじゃない？これからお風呂なのに。」

「あっ・・う・・うん・・そうだった・・・」

千里に“お風呂”と言われてドキッとした・・・

「・・でも・・わたしは千里たちより少し後だから・・・」

・・オレはみんなが入った後で、白石先生と入ることになっている・・・これはクラス全員が知ってることだ・・・

「そうだったね・・でも有希、全然元気そうだし・・わたしたちと一緒に入ってもいいんじゃない？」

「え？！・・で・・でも・・・」

・・オレがみんなと一緒にお風呂に入るなんて・・絶対に無理だ・・・

「・・お・・おおきいお風呂は特に危険なんだって・・・血圧が変わると急に倒れることがあるいらしいから・・・」

「そう・・残念ね・・」

「・・う・・うん・・・」

・・・オレだって入れるものなら、みんなと一緒に入りたいけど・・・これればかりはどうしようもない・・・

３組の番になって千里たちがお風呂に行くと、オレは畳の床に寝っころがった・・・食べ過ぎて座ってるのもキツイ・・・

・・こんなに食べちゃうなんて・・・どうもオレ・・修学旅行だからって気がゆるんでるのかもしれない・・・もう少し女の子なんだって自覚をもってなきゃ・・・

・・これから一緒にお風呂に入る白石先生だって・・オレが男だってことは知ってるけど・・オレの中身がこんなに男の子のまんまだなんて知らないんだから・・・白石先生はオレの心は女の子だと思っているのだ・・・

・・それは先生の言葉の端々でわかる・・・白石先生はオレのことをすごく女の子らしいコだと思っている・・・たしかに最近はだいぶ女の子らしくなったんじゃないかと自分でも思うけど・・・でも先生が思っているような・・ずっと女の子になりたくてたまらなかったってワケじゃない・・・小さいころはどうだったのか憶えてないけど・・・

・・・・・・・

・・・・

―――――――――――――――
―――――――――――――――
――――――――――

「有希！　また寝てたの？」

「？！・・・直美・・・」

・・・いつの間に眠ってたんだろう・・・
「わたしたちもうみんな上がったから、有希もお風呂の準備しといた方がいいんじゃない？」
「・・うん・・・」
・・いよいよか・・・オレはタオルとか石鹸とかシャンプーとか、お風呂に入る準備をした・・・

「戸田さんいる？」
「あっ、はぃ・・！」
「用意出来てるなら、お風呂行きましょうか？」
「はぃ・・」
とうとう来たか・・・
「・・じゃ・・じゃぁ・・行ってくるね・・・」
「気をつけてね！ゆっくり入っておいで。」
「う・・うん・・・」
・・弘子が言うと、みんなも笑顔で“いってらっしゃい”と言ってくれた・・・なんか・・みんなをダマしてるのが心苦しい・・・もっともオレは入学して以来ずっとみんなをダマしてるんだから・・・あらためてこんなこと思うのはヘンかもしれないけど・・・

・・・そういえば・・・オレ・・女の子がどんなふうにお風呂に入るかなんて知らないなぁ・・・ウチ以外では弘子の家で入っただけだもん・・・それに・・あの時もひとりだったし・・・バレちゃったし・・・

・・・なんかこんなこと考えてたら不安になってきた・・・

「どうしたの有希ちゃん、黙り込んじゃって。」

「あ・・な・・なんか不安で・・・」
「大丈夫よ、だれも入って来ないから。先生たちもみんな知ってるし、私が一緒なんだから安心していいわよ。」
「・・はぃ・・・」
・・先生には悪いけど・・・他の人と一緒に入ること自体が不安なんだよなぁ・・・女の子ってどこから洗うんだろう・・・女の子も股間を洗ってお風呂に浸かるのかな・・・オレの場合は・・オチンチンを洗わないワケには・・・

そんなこと考えてる間にお風呂に着いてしまった・・・
更衣室でジャージの上は脱いだけど・・・シャツを脱ぐ手が止まってしまう・・・

・・白石先生にはもう全部見られてるんだから、恥ずかしがることないんだけど・・・お風呂となるとまたちょっと違う・・・
「・・・・・!」
いきなりオレの横で先生がセーターを脱ぐと、紫のブラが目に飛び込んできた!
・・・白石先生ったら・・セクシーな下着つけてるんだな・・・でも大人っぽくてカッコイイ!

「有希ちゃんそんなに見ないでよ、先生だって下着見られるの恥ずかしいんだから。」
「あ・・す・・すみません・・・」
・・・そうだよな・・・オレは先生に下着姿も・・身体も何度も見られてるけど・・・先生はオレに下着姿見られるの初めてだもん・・・先生だって恥ずかしくても不思議じゃない・・・

オレも意を決して白いTシャツを脱いで上半身はブラだけになった・・・そしてジャージの下も脱ぎ下着だけに・・・先生のと違って、

白い学校用のヤツだけど・・・一応、ちょっとレースがついた可愛いのをおろしてきた・・・

先生は下着を取るとタオルを伸ばして、軽く前を隠す感じにした・・・

（・・そっか・・ああやるんだ・・・）

オレも急いでブラを外して、パンツを脱ぎ、先生と同じようにタオルで前を隠した・・・もちろんオレの身体は先生と違うから、下もしっかりと手で押さえた・・・これから一緒にお風呂に入るのに、オチンチンなんか見えちゃったら先生だってイヤだと思う・・・先生でもお風呂と診察はまた別じゃないだろうか・・・？

オレは先生がやるのを真似ながら、つかる前にお湯を体にかけて、前を洗ってから湯舟につかった・・・やっぱり女の子として入るのに・・・隠してオチンチンを剥きながら洗うのは情けない気分だ・・・

「ふうぅ・・こんなに歩いたの久しぶりだから疲れたわ・・・」

「・・そうなんですか？」

「有希ちゃんたちみたいに体育の時間もないしね、運動不足なのよ。」

・・先生ってキレイな胸してるなぁ・・・

「先生はいつも修学旅行について来るんですか？」

「いいえ、今年が初めてよ。」

「え？　そうなんですか？！」

「私が修学旅行について行くには、学校に別の先生に臨時で来てもらわなきゃいけないから大変なのよ。それに女子校だから男の先生じゃマズいでしょう？」

・・たしかに女の先生じゃなきゃイヤだな・・・

「・・じゃぁ、いま学校には代わりの先生が来てるんですか?」
「そうよ、ちょうど私の知り合いで休んでる先生がいたから、修学旅行の間だけ来てもらってるの。」
「へぇ・・・」
けっこう大変なんだなぁ・・・
「今年は有希ちゃんのこともあるから、私も来ることにしたのよ。」
「え!?　わたしのために?!」
・・そうだったのか・・・オレのためについてきてくれたなんて・・
・
「す・・すみません・・・わたしのために・・・」

「そんな、有希ちゃんが気にすることないのよ、私も修学旅行なんて久しぶりだから楽しませてもらってるわ。大人になってからの修学旅行もなかなか良いわね。」
「・・・・・」
「それにね、私あなたのこと本当の妹みたいな気がしてるの。」
・・ホントに?!・・・オレのことそんなふうに思ってくれてるなんて、すごく嬉しい!・・・先生はオレのオチンチンまで見てるのに・・・妹なんて・・・
「だからこうして一緒にお風呂に入れるのも楽しいわ。」
「わ・・わたしも先生のこと・・お姉さんみたいな気がします・・」
・・先生は話しやすいし・・いつもオレのこと親身になってくれる・・
・
「わたし先生のこと大好きです!」
「有希ちゃんにそう言ってもらえると先生も嬉しいわ。」
・・それに・・オレは先生のこと・・すごく尊敬してる・・・
・・お医者さんとしても・・女性としても・・・

「有希ちゃんもこうして見ると、もうまったく女の子と変わらないわね・・」
「え?・・そ・・そんなことないけど・・・」
・・こんな状況で先生にマジマジと身体を見られると・・すごくドキドキしてくる・・・
「・・わ・・わたしには・・女の子には無いモノが付いてるし・・・」
「そうね、もうそこだけが有希ちゃんが男の子だった名残りなのよね・・」
「・・・・・」
・・オレには・・そこダケという感じはしないけど・・・

「有希ちゃんもいつかは取りたいと思ってるんでしょう?」
「!!・・・は・・はぃ・・・でもまだ・・・」
・・オレは正直そこまでは考えていない・・・手術も怖いし・・・だってタマを取るよりずっと大変な手術らしいし・・・
「やっぱりなかなか決心つかないわよね・・」
「あ・・は・・はぃ・・・」
「・・・・・」
「・・あの・・それに・・・手術って難しいんでしょう・・・?」
・・オ・・オレ・・なんてこと聞いてんだ・・・
「そうみたいね・・私もそういうことは詳しくないから、今度詳しそうなお医者さんに聞いておいてあげるわ。」
「あ・・ありがとうございます・・・」
・・・こ・・これじゃ・・オレ・・手術したがってるみたいじゃないか!?・・・なんでこんな話になっちゃったんだろう・・・

上がって身体を洗っていると先生が・・・
「有希ちゃん髪洗ってあげるわ。」

「え？・・いいですよぉ・・先生に洗ってもらうなんて・・・」
「いいから洗わせて？　さっき言ったでしょう？　有希ちゃんのこと妹みたいに思ってるって。」
「あ・・」
「いい？」
「・・はぃ・・・」
・・でも先生に髪を洗ってもらうなんて悪いなあ・・・あ・・そうだ！

「そのかわり・・わたしにも先生の髪の毛洗わせてください！」
「じゃ洗いっこね？」
「はい！」

オレたちは、お互いの髪を洗いっこした・・・

・・こんなことしてると・・・なんか本当に姉妹みたいな気がしてきた・・・！

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

「・・ただいまぁ！」
「おかえり有希、どうだった？」
「あ、いいお湯だったよ・・・」
「そうじゃなくって、白石先生と入ってよ！」
直美にそう言われてドキッとした・・・
「あ・・えっと・・・」

・・どう言ったらいいんだろう・・・？
「先生って綺麗だった？」
「！・・・う・・うん・・・あたりまえじゃない・・・」

「ふ～ん・・いいなぁ有希、わたしも白石先生の裸見たいなぁ！」
「・・も・・もぅっ！・・・直美のエッチ・・・わたしそんな目で先生のこと見てないよ！」
「本当？　もったいないじゃない！」
・・そんな・・・もったいないなんて！・・・・でも・・たしかに先生はもったいないくらいキレイだったけど・・・

・・でも・・オレが先生のことそんなふうに言うのは失礼な気がする・・・だって直美なら同じ女性として白石先生のことをキレイと言ってもヘンじゃないけど・・・オレは・・女の子として先生をキレイだと思ったのか・・それとも男の子の気持ちが少しでも入っているのか・・自分でも良くわからないから・・・

「明日はわたしも有希たちと一緒に入れないかな・・白石先生に頼んでみようかな？」
「！！・・ダ・・ダメよ！　絶対ダメ！！」
「なんで有希がそんなにイヤがるの？　本当はわたしたちと入るのがイヤなんじゃない？」
「そ・・そんなことないけど・・わたしは倒れるといけないから特別にって・・・」
・・直美本気で言ってるんだろうか・・・？

「コラ直美！」
急に弘子が後ろから直美の首に抱きついて・・・
「有希をからかっちゃダメでしょう？」
「あはは・・冗談よ！冗談！　だって有希を困らせると面白いから

！」

「！・・直美・・本気じゃなかったの？！」

・・直美・・オレのことからかうなんて・・・オレ・・本気かと思って心配したのに・・！

「まだ騒いでるの？」

山口先生の見回りだ！

「あと１０分で消灯時間だから、寝る準備しなさい！」

「・・はぃ・・・」

・・え？・・もうそんな時間？！・・オレまだ髪乾かしてないのに～！

「・・もう・・直美のせいで髪乾かすの忘れてたじゃない・・・」

オレは慌ててドライヤーで髪を吹かした・・・

「ごめんごめん！わたしも手伝ってあげるから！」

「うぅ・・ありがとう・・・」

・・直美って時々ヘンなことするけど・・こういう優しいところもあるんだよなぁ・・・

「あ！・・ちょっと直美・・冷たいヤツでやってよ！　熱で髪がいたんじゃうから・・・」

ーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーー

ＡＴから　おわびなど

長くかかってすみません・・・７月は２話しかＵＰ出来てないですね。
たぶん次回も大変そうですが、せっかくの修学旅行をカンタンに済ませたくないので、
時間がかかるかも知れないけどお許し願いたいです。

書けてないのは体調のせいではないのでご安心下さい。
目の方も７月２３日の再診で一応終りました。
あとは近くの眼医者さんで時々観てもらえばいいそうです。

あ、それと「大変そうだからそっとしておこう」と思って下さってる方もいるみたいですが、
いろんなこと言って下さってかまいませんので（笑）
私の場合、質問とか意見とか催促とか？して下さる方が書けるタチなんです。
答えたりしてる時に、良くエピソードが浮んだりするので（笑）

第１２４話　修学旅行４　京都観光１日目

“　きょうと～　おおはら　さんぜんい～ん・・・”
バスガイドさんに昔の歌を教えてもらって一緒に歌いながら三千院へ向う・・・あたりは田んぼとかあって、けっこう田舎な感じ・・・・この歌は有名な歌らしいけどオレは聞いたことがない・・・でも弘子は知ってるみたいだ・・・

今日はオレたちのクラスは全員いっしょのバスだ。オレたち４人は早く乗り込んで後ろの長い席を陣取った。
オレの横には千里と直美・・直美の向こうには弘子が座ってる。今日は長谷川のクラスが半分こっちのバスに乗ってるけど、その中に長谷川の姿はなかった・・・まあ、居たとしてもオレとは離れたところに座るんじゃないかと思うけど・・・

（あぁ・・それにしても・・おなか空いてきた・・・）
旅館の朝食は、小さいお茶碗に軽くごはん一杯と、ゆで玉子と、味付け海苔と、お吸い物だけ・・・お吸い物は最初、お椀にダシの粉末が入ってたから「インスタントかな？」って言ったのを、仲居さんに聞かれて怒られてしまった・・・ちゃんとした旅館ではインスタントなんか出さないんだって・・・でも確かにあの粉末はダシの素みたいだったし・・はっきり言って味は長谷園のインスタントの方がおいしいくらいだった・・・それとも京都はうす味だからだろうか・・・？　オレはずっと九州だから、しっかりした味じゃないと食べた気がしない・・・

昨日はけっこう歩いたのに、あれっぽっちの朝ご飯じゃ足りないよ・・・せめてもう少しお茶碗が大きかったらなぁ・・・

「どうしたの有希、なんか元気ないね。」
「あ、ごめん・・なんか・・おなか空いちゃって・・・」
千里に聞かれて慌てて言った・・・せっかくの修学旅行なのに元気ないなんて思われたら悲しい・・・
「・・朝ご飯少なくなかった?」
「そうね、少し少なかったかな?」
「でしょう!」
ほら!・・小食の千里が少ないんだったら、オレが足りるハズないもん!　オレは元々男の子なんだから!

「有希、そんなにおなか空いてるならコレ食べる?」
そう言って直美がバッグからキレイに包んである箱を取り出した。
「!・・ダ・ダメよ・・それ直美のお土産でしょう?」
「いいわよ、また買えばいいし。京都の方が美味しいのありそうじゃない!」
「ダメだったら・・あ〜っ!!」
直美はオレが止めるのも聞かず包みをビリビリやぶいてしまった・・・

「ほら、みんなで食べよう!」
「もう・・直美ったら・・・」
・・むいちゃったら食べなきゃ仕方ないじゃない・・・これじゃ、もうお土産にはならないもん・・・
「ほら!有希食べてよ!」
「・・うん・・ありがとう・・・」
・・結局オレたちは直美が奈良で買ったおみやげをもらって食べた・・・ラングドシャのクッキーの間にクリームが挟まってるヤツで結構おいしかった・・・お土産によくあるタイプだけど・・・
お菓子だから量的には少ないけど、甘いものを食べるとお腹が落ちつく!　女の子ってみんなそうだと思う。

バスを降りて石の階段をのぼっていく・・・

“　ぇ、三千院は“苔寺”とも言い、沢山のコケが生えている事でも有名なお寺です・・・”

・・う～ん・・・オレはコケにはあまり興味ない・・・

細い階段をのぼっていくと小さなお寺が・・・これが三千院？

なんか有名なわりに地味だなぁ・・・コケもそんなに多い感じしないし・・・

バスガイドさんの話では、今はコケを見るにはいまいちらしい・・・コケは梅雨とか雨が多い時の方がキレイなんだそうだ・・・コケは湿気があるところに生えるもんなぁ・・・

・・秋の三千院は紅葉がキレイらしいけど・・・それもいまいちだ・・・入る時にもらったパンフレットの写真では、地面に落ちた一面の真っ赤な紅葉がすごくキレイなんだけど・・・たぶん写真は一番良い時に撮ってるんだろう・・・

バスに帰ってから弘子に聞いてみた。

「ねえ弘子、三千院ってどうだった？」

「そうねぇ、素敵だったけど・・・どうして？」

「・・なんか・・どこが良いのかなって思って・・・有名だからステキなんだろうけど・・・」

「でも、有希がそう思わなかったのなら、それで良いんじゃない？有名だからって誰もが良いと思わなきゃいけない訳じゃないでしょう？」

「・・・それは・・そうだけど・・・でも、せっかく来たんだから・

・・どこが良いのか知りたいし・・・」
「まあね、だいたいああいう所は修学旅行なんかで大人数で行っても、そんなに良さはわからないいんじゃないかな？　わたしもまた来ることがあったら１人か、２人くらいで来たいと思うわよ。」
「・・・・・」
・・そっか・・・そうかもしれないな・・・あんなひっそりとしたところは、大勢でドヤドヤ行くべきじゃないのかもしれない・・・

「ちょっと！なにコソコソ話してるのよ。みんなで話そう！」
「あ・・う・・うん・・・」
・・修学旅行に来てから・・直美はいつにも増して強引だなぁ・・・
「有希、弘子と何の話してたの？」
「あ、三千院って地味だねって話してたの・・・」
・・ニュアンスはちょっと違うけど・・・
「そうね、だいぶ地味だったね。　でも次は金閣寺だからきっと派手よ！　楽しみね！」
「・・そ・・そうだね・・」
・・確かに金閣寺は地味じゃないだろうな・・・
・・建物が金ピカなんて・・なんか期待しちゃう！

———————————————
———————————————
——————————

「わぁ！すごい！！」
金閣寺ってほんとうに金ピカだ！　広い池の向こうにあるのに、遠

くからでも良く見える！

・・近くで見ると四角い金箔を貼ってあるのがわかる・・・3階建てなんだぁ・・・1階は黒くて、2階と3階が金色だ・・・

「すごいね！すごく昔に建てられたのにピカピカなんだもん・・・」

「有希知らないの？　金閣寺は60年前に一度焼けて建て替えたのよ。」

「え？　ホント？　戦争で焼けたの？」

「ううん、焼けたのは戦後よ。理由は良くわからないけどお坊さんが放火したの。三島由紀夫の小説にもなってるわ。」

「へ～・・・」

・・お坊さんなら、お寺は大事なハズなのに・・・なんで放火なんかしちゃったんだろう・・・

「今の金閣寺はそのあと建て替えたもので、金箔は20年くらい前にも一度貼り替えてるのよ。」

「へ～・・・」

・・弘子は何でも知ってるなぁ・・・金閣寺にそんな歴史があったなんて、全然知らなかった・・・

「前の金箔はすぐに剥げてきたから、今貼ってるのは普通の金箔の5倍の厚さなんだって。」

「へぇ～　それでピカピカなんだぁ・・・」

・・貼り替えたっていってもオレたちが産まれる前だ・・・それでもこんなにピカピカだなんて・・やっぱりスゴイ！

・・それにしても・・5倍の厚さかぁ・・・いったい、いくらくらいかかったんだろう・・・一千万円くらいかなぁ・・・いや、二千万円くらいかかったかも・・・（注）

「でもさ、金閣寺って実際に近くで見ると思ったより小さいね。写真で見たときはもっと大きいと思ってた・・・」

「そうね・・たしかに・・・」
弘子もそう言った・・・弘子だって実際に見るのは初めてだもん・・
・

・・でも・・弘子はいろいろ知ってるから・・オレと同じように初めて見ても・・やっぱりオレとは感じかたは違うのだろう・・・オレももう少し京都とか奈良のこと・・勉強してくれば良かったかな・・・そしたらもっと楽しめたかも・・・

オレたちはとりあえず変わりばんこに金閣寺をバックに記念撮影をした・・・これは大事だ！　帰ったら麻衣にも見せなきゃいけないもん！

さあ、金閣寺の次は銀閣寺だ！　なんか気合いが入ってきた！

注：本当は当時の値段で（改修全部で）７億４千万円もかかったそうです。有希の金銭感覚はこのていどなんですね（笑）

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー
ー

「？？」
・・・こ・・これが銀閣寺・・・？　全然銀色じゃない・・・真っ黒けだ・・・
弘子が一番見たがってたから、どんな素敵なお寺かと思ったのに・・・ちょっとガッカリだ・・・

銀閣寺は正式には「慈照寺」〈じしょうじ〉と言うらしい・・まあ、金閣寺も正式な名前じゃないみたいだけど・・・
銀閣寺と言われるのにはいろんな説があるらしいけど・・弘子はオレに、おじいさんが建てたのが金閣寺だから、それに対して銀閣寺って呼ばれてるんだって教えてくれた。

「金閣寺みたいに派手じゃないけど、庭と一体になった感じが最高なのよ。」
「へ～・・」
金閣寺はまわりも広々した感じだったけど・・こっちはかなり狭い感じだけどな・・・
「あれなに？山みたいの。」
庭の目立つところに、白い台形のヘンテコなものがある・・・ずいぶん大きい・・・
「あれは向月台〈こうげつだい〉、まわりの地面の波みたいな模様が銀沙灘〈ぎんしゃだん〉、白い砂で建物に光りを反射させるのが目的みたいよ。」
「へ～・・」
・・それでも真っ黒だけど・・・

「有希、“わび”とか“さび”とか感じない？」
「う～ん・・・良くわかんない・・・」
・・オレはまだ１６歳だし・・そういうのは難しい・・・高校生なのに“わび”とか“さび”感じるなんて弘子の方が変わってるんじゃないかと思うけどな・・・
「有希はお茶とかお花やってるから、解るんじゃないかと思ったんだけど。」
「・・・・・」
・・たしかに・・お茶とかお花にも・・特に器とかにはそういうの

はあるみたいだけど・・・オレは女の子らしさを学ぶためにやってるから・・・まだそういうのは良くわからない・・・あまり考えたことないっていうか・・・三吉先生にも、そんなことまで教えてもらってないし・・・

「銀閣寺はね、元々は銀箔を貼る予定だったけど、完成する前に義政が死んでしまったからとか、幕府の財政が厳しくなったからとか言われてるけど、わたしはそうは思わないの。」

「・・・・・・」

「だって全体的に質素だし、それに銀は金と違ってすぐ錆びてしまうから、銀箔なんて貼るはずがないわ。」

「ふ～ん・・そうなんだ・・・」

・・言われてみればそうかもしれないな・・・かあさんも銀のスプーンはすぐくすんじゃうって言ってた・・・それは昔の人だって知ってただろうから・・建物の外壁には貼らなかったかも・・・

弘子の話を聞いてると、オレも銀閣寺はこれで良いのかな?って気もしてくるから不思議だ・・・

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー

ー　ー

ー

次は清水寺かぁ・・・今日は清水寺で最後だ・・・だいぶ陽も傾いてきた・・・

・・清水寺って写真で見ると大きそうだけど、実際はどうなのかな・・・？　京都のお寺って奈良と比べると全体的にこじんまりしてる

気がするから・・清水寺も案外小さいのかも・・・

ん?・・1組の組み合わせが替わったかな?　あっ!　やっぱり・・長谷川が乗って来た!

目が合ったから軽く手を振ったけど知らんぷりだ・・・ちょっとくらいリアクションしてくれればいいのに・・・つれないなぁ・・・

清水寺までは長い坂道になっていた・・・こんなに上にあるのか・・・たしかに写真じゃ山みたいなところだったもんなぁ・・・

途中には首がくるくる回るお地蔵さんとか、両方口を開いた狛犬とか、弁慶の足型がついた石とか、弁慶が指で木を削った跡だとか・・・いろんなヘンテコなものがあった・・・弁慶の足型なんて50cmほどもあるのに、別に置いてある鉄下駄はそんなに大きくない・・・どうせなら大きさを合わせておけばいいのに・・・

もしかして清水寺ってインチキなところ・・?　なんて思っていたら、清水寺の舞台に着くと、その大きさと景色に圧倒された・・・

「すご〜い!」

・・これが清水の舞台?!　もっと良く見ようと柵の近くへ行こうとすると・・なんかヘンだ!

「!・・ひ・・弘子・・・ここ傾いてない?」

・・なんか・・舞台が外に向って斜めになっていてるような気がする・・・

「有希、心配しなくてもいいのよ、わざとそうなってるんだから。」

「・・わざと?」

「そう、舞台の部分には屋根がないから、雨が降ったときに建物の中に水が流れてこないように、外に向って斜めになってるの。」
「へぇ～・・・でも・・外に向って傾いてると・・なんか・・・」
「大丈夫よ。欄干も丈夫に出来てるから。そんなに弱かったらとっくに崩れてるわよ。」
「・・うぅ・・そりゃそうだけど・・・」
・・壊れないとは思うけど・・やっぱり欄干まで行くのはちょっと怖いな・・・

「・・て・・手つなごうか・・？　ね？ね？！」
オレはとっさに弘子と直美の手をつないだ・・・
「有希ったら、怖いんじゃない？」
直美がいじわるなこと言う・・・
「そ・・そんなことないけどさ・・・み・・みんなで見た方が楽しいよね！」
みんなで手をつないで欄干のところまで行って下をのぞいてみる・・・やっぱり高い・・・
「・・清水の舞台から飛び下りるなんていうけど・・こんなとこから飛び下りたら死んじゃうね。」
「そうでもないみたいよ。昔から飛び降りた人は何百人もいるらしいけど、８割くらいは助かってるみたいだし。」
「え～！　本当？」
「飛び下りて死ななかったら望みが叶うって伝説があるから、江戸時代にはずいぶん飛んだって話よ。」
「・・ゆ・・勇気あるなぁ・・・」
・・っていうか・・・無謀なだけだと思う・・・
「有希もやってみたら？　何か望みが叶うかも知れないわよ。」
「！・・い・・いいよ・・わたしそんなに望みないもん・・・」
・・オレの望みは・・・とりあえず卒業まで無事に女の子として過ごすことくらいだ・・・それだけでも大変なのに・・・こんなとこ

から飛び下りるなんてまっぴらだ！

・・飛び下りたら・・本当の女の子になれるっていうのなら・・・
ちょっとは考えるけど・・・そんなの神様でもきっと無理だ・・・

・・でもこの欄干、本当に丈夫だなぁ・・・全然グラグラしない・・・
？・・・あ、長谷川だ！・・・へっぴり腰で下をのぞいてる・・・ふふっ・・イタズラしちゃおうかな？　いつものお返しだ！
「ちょっと待ってて・・」
オレはみんなから離れて、そっと長谷川の後ろから近づいた・・・
下を見るのに夢中で全然気づいてない・・・長谷川のヤツ驚くかな？

「わっ！！」
長谷川の背中を軽く押すと・・・
「ぎゃぁ～！！！」
あまりの声の大きさに、こっちのほうがビックリした・・・長谷川はしゃがみ込んでしまった・・・
「・・ご・・ごめん・・長谷川さん・・・」
「・・？・・ゆ・・有希・・なの・・・？」
最初は放心状態だったけど・・だんだん正気に戻るとともに怒った顔になってきた・・・ヤ・・ヤバイ・・・

「有希・・あんたよくもこんなヒドイことするわねぇ・・もし落ちたらどうするつもりよ！」
「・・あ・・あ・・あの・・丈夫だから・・大丈夫よ・・・そ・・それにさ・・もし落ちても・・８割の人は死なないんだって・・・」
「もし２割に入ったらどうするのよ！」
「・・そ・・そうよね・・２割に入ったら・・死んじゃうかな・・・

？」
「・・・・・」
「・・あっ・・そ・・そんなに怒らないでよ・・・そんなに怖がる
と思わなかったんだもん・・・だ・・だってさ・・長谷川さんジェ
ットコースターだって平気じゃない・・・」
「ジェットコースターは安全に作ってあるから平気なのよ！　こん
な木で出来たのとは違うわ！」
「・・うぅっ・・・」

「長谷川さん、もう許してあげてよ。有希だってそんなに悪気があ
ったわけじゃないんだから。」
「原口さん・・・当り前じゃない・・こんなこと悪気があってやら
れたらたまらないわよ！」
そして長谷川はオレの耳元でこう言った・・・
「もしも、またこんなことしたら、明日付き合ってやらないからね。
」
「え！？」
・・そ・・それは・・困るよぉ・・・
「も・・もちろんしないよ・・・絶対しない！」
・・・うぅぅ・・・なんかオレ・・いつまでたっても長谷川に頭が
上がらないなぁ・・・

「・・だ・・だから約束だよ？」
「・・・・・」
長谷川は何も言わずに行ってしまった・・・あ〜ぁ・・また長谷川
怒らせちゃった・・・

―――――――――――――――
―――――――――――――――

―――――――――

結局、長谷川はその日のホテルに着くまで、オレとは目も合わせなかった・・・もちろんホテルに着いてからも・・・

・・なんかケンカみたいになったままじゃ、晩ご飯もいまいちおいしくない・・・とはいえ・・いっぱい食べたけど・・・だって今日もたくさん歩いてお腹空いてたんだもん・・・

みんながお風呂に入ったあと、オレもまた白石先生と入る・・・昨日は初めてだったから、すごく緊張したけど・・今日はたぶん昨日よりマシだと思う・・・

昨日は恥ずかしくて、なかなか目を上げられなかったけど・・今日はちゃんと向き合えた・・・白石先生ってほんとキレイだ！　髪をアップにしたうなじも色っぽい・・・

「有希ちゃんも、だいぶ馴れたみたいね。」

「あ・・はい・・・」

先生と並んでお湯に浸かって、お互いの胸を見比べる余裕も出て来た・・・やっぱり・・白石先生の胸はオレのと違って大人っぽい・・・そんなことを考えながらゆっくりしていると・・・

？・・・脱衣場の方で声が聞こえる・・まさか・・誰か入ってくるんじゃ・・・？！

“ガラッ”

いきなり戸が開いて、入ってきたのは山口先生と松本先生だった・・

・な・・なんで・・・・？

お風呂に浸かってて暖かいのに・・身体がガタガタ震えだした・・・

「・・ど・・どうして・・・先生たちが・・・」

「有希ちゃん、大丈夫よ。落ちついて。」

白石先生はオレの肩に手を乗せて言った・・・オレの身体・・こんなに震えてるのに・・大丈夫なワケない・・・

「ふたりとも有希ちゃんのこと知ってるのよ?だから心配いらないの。」

・・それくらい・・オレだってわかってる・・・わかってるけど・・そういうことじゃないのだ・・・オレは恥ずかしくてたまらないのだ！

いくら山口先生と松本先生が、オレのことを本当は男だと知っていても・・・オレの裸なんて見せたことないのに・・・松本先生が採寸してくれる時だって、裸じゃなくて下着の上からだもん・・・

ふたりは体にお湯を浴びてこっちに入ってくる・・・オレは慌ててタオルで股間を押さえた・・・タオルをお湯に浸けちゃいけないなんて言ってられない！・・・もしオチンチンが見えちゃったら大変だ！！

山口先生はオレのとなりに来た・・・松本先生はその向こう・・・

「戸田さん楽しんでる?」

「え?！」

急に担任の山口先生に言われて戸惑った・・・

「修学旅行、楽しんでる?」

「あ、修学旅行・・はぃ・・楽しいです。」

・・そっか・・・修学旅行のことか・・・お風呂のことかと思ってドキドキした・・・

「高校の修学旅行は一生に一度きりだからね。」
「・・・・・」
「戸田さんのこと、あまり構ってあげられなくてごめんね。」
「え?!」
「もし、戸田さんがクラスに馴染めないようだったら、その時は助け舟を出そうと思ってたんだけど、戸田さんはすぐに皆に溶け込めたみたいだったから。」
「あ、はぃ・・」
「先生も下手に構いすぎない方が良いんじゃないかと思って、出来るだけ他のコたちと同じように接することにしてたのよ。」
「・・はぃ・・それは感じてました・・・」
山口先生は男のオレを決して特別扱いしないけど、いつも見守ってくれてる気がしてた・・・

「それにしても・・体育の時にも感じてたけど、戸田さん女の子らしい身体つきになったわねぇ。」
「・・・・!」
「さすがに入学当初はまだ細くて男の子っぽい身体つきだったけど、今じゃもう誰も女の子じゃないかもなんて疑う人はいないわよ。」
「・・そんな・・・」
・・そうかも知れないけど・・オレのアソコにはまだオチンチンが・・・すると松本先生まで・・・
「ほんと、戸田さんは女らしくなったわ。初めて会った時は普通の男の子に見えたから、こんなコが女の子の中に混じって大丈夫なのか心配したこともあったけど・・今では白鴻のクイーンだものね。ウェディングドレス姿の戸田さんはホント綺麗だった。」
「!!」
・・そ・・それは・・言わないでほしい・・・あの日のことを思い出すと・・オレは今でも恥ずかしさが込み上げてくるのだ・・・

「戸田さんは心の底から女の子だったのねぇ。」
「でも、さすがにプールに入るって言った時はどうしようかと思ったけど、白石先生が大丈夫だって言うからやってみたら全く問題なかったもの。正直、先生も驚いたわよ。」
「・・うぅ・・」
・・・だってオレ・・泳ぎたかったんだもん・・・
・・でも・・先生たちもいろいろ気にかけてくれてたんだなぁ・・・
そんなにオレのこと気にしてくれてるとは知らなかった・・・

――――――――――――――
――――――――――――――
――――――――――

お風呂から上がって部屋に戻りながら、オレはなんだか嬉しい気持ちになっていた・・・

・・急に先生たちが入ってきた時は驚いたけど・・・今は先生たちとお風呂に入れて良かったと思う・・・山口先生や松本先生がオレのことをどんなふうに思ってるのかも聞けたし・・・それに裸を見られたのは恥ずかしかったけど・・・少し秘密が減ったような感じがして・・・なんとなく気持ちが楽になったような気がする・・・

「有希おかえり！　ねえねえ、みんなで明日の自由行動の予定考えてたんだけど、有希はどこか行きたいとこある？」
「あ・・あの・・ごめん・・・わたしみんなと行けないの・・・」

「え？　どうした？具合でも悪いの？」
直美に心配そうに聞かれ胸が痛かった・・・言いにくいなぁ・・・
前もって言っておけば良かった・・・

「・・あの・・そうじゃなくて・・他のコと・・・」
「あっ、もしかして長谷川さん？」
「・・う・・うん・・・」
弘子に聞かれて、オレは仕方なく本当のことを言った・・・
「でも有希、自由行動は４人以上じゃないとダメなのよ？　長谷川さんもわたしたちと一緒に行けばいいじゃない。」
「あ・・それは・・もう許可もらってるの・・・」
オレがそう言うと、千里が・・・
「あっ！わかった。有希、お兄さんに会うんでしょう？」
「！！！」
「たしか、だれか保護者がついてれば４人以下でもいいって言ってた！」
「そうなの？有希・・」
「う・・うん・・そうなの・・・」
・・本当は兄さんと会うことは言いたくなかったんだけどなぁ・・・
だってみんなも会いたいなんて言われたら・・オレどうすればいいのかわからないもん・・・

「いいなぁ・・ねえ、わたしたちもお兄さんに会わせてよ！」
！・・やっぱり直美が言い出した・・・
「長谷川さんだけズルイわよ！」
「ぁ・・ぁ・・で・・でも・・・」
すると弘子が・・・
「直美、有希をお兄さんと水入らずで会わせてあげよう？」
「え～・・水入らずって・・・長谷川さんも一緒じゃない！」
「長谷川さんもお兄さんと知り合いなんじゃないの？　ねえ有希？」

そう言いながら、弘子はオレにそっと目で合図した・・・
「あ、う・・うん・・そうなの・・長谷川さんは中学のころから兄さんに会ったことがあるの・・だから・・・」
「・・なんだ・・そうなの・・・だったら仕方ないか・・・」
どうにか直美も納得してくれたみたいだ・・・みんなにウソつくのは気が進まないけど・・・この場合は仕方ないと思う・・・
結局、オレは長谷川さんと一緒に兄さんに会い、直美たちは安部っちっも一緒に４人で京都を観光することになった。
・・それにしても・・オレって弘子に男なのがバレてから助けられっぱなしだなぁ・・・いつかちゃんとお礼いわないと・・・
―――――――――――――――
―――――――――――――――
――――――――――
「戸田さんいる？」
「あ、白石先生・・どうしたんですか？」
・・もうすぐ寝る時間なのに・・・まあ家ではまだ全然起きてる時間だからかまわないけど・・・
「ちょっと用があるんだけど一緒に来てくれないかしら。」
「・・はぃ・・・」
・・いったい何だろう・・・
「・・ごめん・・ちょっと行ってくる・・・先生が見回りに来たら電気消しててていいから・・・」

オレは女の先生たちの部屋に呼ばれた・・・でも他の先生はいなかった・・・部屋にはオレと白石先生だけだ・・・

「あの・・なんですか？用事って・・・」
「今日はお風呂に先生たちと入ってみてどうだった？」
「あ・・けっこう恥ずかしかったです・・・」
「実はね、山口先生と松本先生には、私が頼んで入ってきてもらったのよ。」
「え？！・・・ほんとですか・・・？」
「ごめんね、黙ってこんなことして。」
「い・・いえ・・わたしも・・恥ずかしかったけど・・ちょっとホッとしたっていうか・・・わたしって秘密のことがすごく多いから・・先生たちに今のわたしを知ってもらって少し気が楽になりました。」
「そう？　だったら良かったわ。」
そういって白石先生はニッコリ笑った・・・

「今日ふたりに一緒に入ってもらったのはね、有希ちゃんの身体を見てもらうのが目的だったの。」
「？？」
「修学旅行中お風呂に入るのは明日で最後でしょう？」
「・・はぃ・・・」
「だから最後１回だけでもみんなと入ったらどうかと思ったの。」
「え！？・・・わたしが・・・みんなと・・・？」
「だってせっかくの修学旅行なのに、有希ちゃんだけみんなと入れないんじゃ思い出が少なくなっちゃうでしょう？」
「・・そ・・それは・・そうですけど・・でも・・・」
・・・そりゃあ・・オレだって入れるものならみんなと入りたいけど・・・そんなの無理じゃないだろうか・・・？

「私が見た限りでは、有希ちゃんの身体はもう女の子と見分けがつかないくらいだと思ったんだけど、私はずっと見てるから、他の人が見てもそうなのか知りたかったの。」
「・・・・・」
「ふたりは体育と服飾の先生だから、あのふたりと私が見て問題なければ大丈夫だと思ったのよ。」
「・・そ・・・それで・・？」
「ふたりとも全く問題ないって。有希ちゃんを見て男の子だって思う人なんていないだろうって言ってたわ。」

「・・で・・でも・・・わたし・・・アレが・・・」
・・いくらオレのがちっちゃくなってても・・タオルで十分隠れるとしても・・・もしタオルのすき間なんかから見えてしまったらどうするんだろうか・・・？
「ペニスのこと？　それなら心配いらないわ。　前に水泳のときテーピングしたでしょう？」
「あ、はぃ・・・」
「あの時は先生も良くわからないままやっちゃったけど、もっといい方法があるのよ。」
「・・いい方法・・・？」
「そういうのに詳しい先生に教えてもらった“タック”っていう方法なんだけど、接着剤で付けちゃうの！」
「せ・・接着剤・・・」
・・・それはぜったい・・・ヤバイと思う・・・そういうのやる人がいることは話には聞いたことがあるけど・・・もし取れなくなっちゃったら・・・

「大丈夫よ、接着剤っていっても普通のじゃなくて手術用の接着剤でね。溶剤もあるから剥がすのも簡単なの。」
「・・・・・」

「今の有希ちゃんはあの頃と違って睾丸も無いから、そんなに大変じゃないはずよ。のぞき込まなければまずバレることはないって。どう？やってみない？」

「・・あ・・あぶなくない・・・？」

「全然危なくないわよ。それにテーピングみたいに痛くないらしいし・・・まあ、これは私も経験ないから解らないんだけど・・・一応私の手に付けて、どんな感じかは試してみたから。ちゃんと溶剤で取れたし、皮膚も大丈夫だったわよ。　ほら、ここ見て！」

そう言って先生は親指と人さし指の間のところを見せてくれた・・・

「ね、何ともないでしょう？　何ならもう一度やってみましょうか？」

「・・い・・いいです・・・わたし先生のこと信じてますから・・・」

「そう？　それじゃやってみる？」

「・・・・はい。」

・・オレはやってみることに決めた・・・修学旅行に来る前は、来れるだけで嬉しくて、お風呂なんてどうでもいいと思ってたけど・・・みんなのお風呂上がりの楽しそうな様子を見てると・・オレはなんだか仲間外れになってしまったような気がしてたのだ・・・

・・弘子や千里や直美や・・みんなと一緒に入れるなんて・・なんだか夢のよう！

・・・接着剤ってのは・・ちょっと怖いけど・・・それでもやってみる価値はあると思う・・・！

第１２５話　修学旅行５　京都２日目・自由行動

「じゃぁね、有希！」
「お兄さんによろしくね！」
「う・うん・・じゃぁね・・・」

弘子たちが旅館の部屋を出てから、オレも長谷川の部屋に向った・・・昨日はあれからちゃんと謝って、一緒に行ってくれること確かめたけど・・・まさか黙っていなくなってないだろうな・・・

オレはそっと長谷川がいるはずの部屋の戸を開けた・・・
「あ、有希。もう準備できた？」
「う・うん・・・」
・・良かった・・いた・・・
「それじゃ行こうか。」
「・・うん・・・」
・・それに怒ってないみたいだ・・まだ昨日のこと怒ってたらどうしようかと思ったけど・・・長谷川ってこういうとこはいいんだよな・・・いつまでも引きずらないっていうか・・・そのかわり急に怒ったりするのは困るけど・・・麻衣は長谷川はＢ型だからだって言ってた・・だから急に機嫌が悪くなっても気にしない方がいいんだって・・・
Ｂ型だからってのはどうだかわからないけど、気にしない方がいいってのはその通りみたいだ・・・

「お兄さんとはどこで待ち合わせてるの？」
旅館を出ると長谷川に聞かれた・・・
「ここまで車で来てくれるって、もうすぐ着くと思うよ。」

・・兄さんと会うのは嬉しいけど・・でも、前に会ったとき・・別れ際にキスなんかしちゃったから・・・なんか会いづらい・・・だから長谷川について来てって頼んだんだけど・・・

・・それに今回はちゃんと女の子らしくしなきゃいけないし・・・前みたいに、とっさに男言葉になっちゃったらいけないから・・・長谷川もいればその心配もないと思ったんだけど・・・これはこれで緊張するなぁ・・・長谷川のヤツ・・兄さんに余計なこと言わなきゃいいけど・・・

少しの間、旅館の前で待ってると、向こうから白い車が近づいてきた・・・運転してるのは・・兄さんだ!
オレたちの前まで来ると、車を降りてきた・・・久しぶりに会うからドキドキする・・・
「ごめんごめん、少し遅くなった。車借りる約束してたヤツがなかなか来なくてさ。」
・・に・・兄さん・・・なんかいつもよりカッコ良くない?!
「あ、そ・・そんなに待ってないよ・・わよ・・」
・・わぁ!・・緊張してヘンになっちゃった!
「・・に・・兄さん・・髪切ったの?」
「あぁ、あんまりボサボサだったんでね。今日は有希の友達も一緒だっていうし、少しはマシな恰好しないと、と思ったんだけど・・・ちょっと切りすぎたかな?」
「ううん!そんなことない!・・兄さんステキよ・・」
・・な・・なんかオレ・・ヘンに女っぽくなってない?・・・意識しすぎてるのかな・・・

・・なんだか・・女言葉使い始めたころみたい・・・いちいち考え

なきゃ話せない・・・最近は全然気にせずしゃべれてたのに・・・
「君が長谷川さん?」
「は・はい!」
「いつも有希のこと助けてくれてありがとう。」
「に・・兄さん・・そんなことないよ!　けっこう長谷川さんにはイジメられてるもん!」
「な!有希なに言ってるのよ!わたしがいつ有希をイジメたっていうの?」
「・・そんな・・いつもイジメるじゃない・・・」
「あんたねぇ・・昨日自分がしたこと忘れたの?」
・・あっ・・ヤバイ・・・思い出させちゃった・・・
「お兄さん!　わたし昨日有希に清水寺から突き落とされそうになったんですよ!」
「ほんとか?　有希・・」
「・・うぅ・・ほんとだけど・・・でも突き落とすなんてオーバーよ・・・ただ、ちょっと背中を押しただけ・・・欄干があるから落ちるワケないのに・・・」
「でも有希が押したのは本当なんだろう?」
「・・う・・うん・・・」

「有希、そんなことしたらダメじゃないか!」
「・・・・・」
「ごめんね長谷川さん、有希を許してくれないかな?」
「は・はい!　もう許してます。　ただ・・有希がイジメるなんて言うから・・・」
・・!・・な・・なんだよ・・長谷川のヤツ・・・自分だけ良い子ぶっちゃってさ・・・
「有希は長谷川さんに、ちゃんと謝ったのか?」
「・・うん・・・」
・・オレは・・実際なんども謝った・・・

「そうか？　でももう一度ちゃんと謝っておくんだ。女の子にそんなヒドイことしたんだからな。」
・・そんなぁ・・・オレだって女の子なのにぃ・・・
「・・うぅ・・長谷川さん・・ごめんなさい・・・」
・・兄さんったら・・長谷川さんの言うことだけ信じるなんて・・・
ヒドイよ・・・
「わかったよ有希、もう許してあげる。」
・・くぅっ・・・長谷川の勝ち誇った態度・・・なんてヤツだ・・・
・・きっと昨日から・・兄さんに告げ口するつもりだったんだな?!

「ふたりはどこか行きたいとこある?」
「あ・・わ・わたしは・・京都のこと良くわからないから・・兄さんが連れていってくれるとこでいい・・・」
・・オレはどこでもいいのだ・・兄さんと一緒ならどこでも・・・
「長谷川さんは？　行きたいとこない?」
「あ、わたし前にテレビで観たんですけど、人力車に乗ってるの・・あれどこだったかな・・・」
「人力車か・・竹林とか通ってなかった?」
「あ！　はい、竹林とおってました！」
「それはたぶん嵐山だと思うよ。それじゃ嵐山にする?」
「はい！」
「有希も嵐山でいい?」
「・うっ・・うん・・・」
・・・オレは確かにどこでもいいって言ったけど・・・長谷川の言うことばかり聞くなんてさ・・・なんか癪にさわる・・・

「ねえ、兄さん・・嵐山って何があるの？　お寺？　仏像?」
・・正直、京都はお寺とか仏像ばっかりだから、昨日一日で飽きち

ゃったんだよなぁ・・・オレは弘子みたいに歴史にはあまり興味がないし・・・
「まあ、お寺も仏像もあるだろうけど、一番有名なのは渡月橋かな。」
「・・とげつきょう?」
「桂川っていう川に架かってる木の橋だよ。嵐山の写真にはたいてい渡月橋が載ってるんだけどな、知らないか?」
「ううん・・知らない・・・」
・・橋?・・・橋なんか見て面白いのかなぁ・・・
「渡月橋って、たしか観光ガイドに載ってた・・・」
長谷川はバッグからガイドブックを取り出した・・・そんなの持ってたんだ・・・
「ほら有希、これよ!」
「・・・・・」
・・なんだ・・・有名な橋って言うから、よっぽど変わった橋なのかと思ったら・・ふつうの橋だ・・・
「あ、見て、この橋を願い事しながら渡ると願いが叶うっていう伝説があるんだって!」
「!」
「でも絶対振り返ったらダメなんだってよ。」
「へぇ〜・・・」
・・なんか面白い・・・そんな伝説があるから有名なんだな・・・
(注)

「あ!この写真、さっき長谷川さんが言ってた人力車っていうのじゃない?」
「ほんとだ、載ってるね。」
「ねえ兄さん、人力車って誰でも乗れるのかな?」
「たぶんそうだろう。」
「いいなぁ・・乗ってみたいなぁ・・こういうの・・・」

・・こんなのに・・・兄さんと二人で乗ったら・・・絶対楽しいと思う！

「ねえ、兄さんいいでしょう？」

「あぁ、嵐山に着いたら探してみよう。」

「うん！」

・・やったぁ！・・・兄さんと人力車だ！

注：渡月橋には他にもいくつか伝説があります。一番伝統的な伝説は、１３歳になると渡ったところにある神社にお参りに行き、帰りに振り返るとせっかく授かった知恵が落ちちゃうというもの。

―――――――――――――――

―――――――――――――――

――――――――――

「二人ともここで待ってて、駐車場に停めてくるから。」

「うん。」

・・ここが嵐山かぁ・・・たしかに広々としたまわりの景色もいいけど・・・あたりはお店だらけだ・・・観光客もいっぱいで・・・外人もたくさん来てる！

向こうの方に見える橋が、たぶん渡月橋だろう・・・けっこう遠いな・・・

「有希、お兄さんのこと好きなの？」

「？　そりゃそうだよ、兄妹なんだもん。」

・・長谷川ったらヘンなこと聞くなぁ・・・そっか・・・長谷川は一人っ子だからわからないのかな？

「そんなこと聞いてないわよ、男性として好きかってこと。」
「！！・・な・・なんで・・そんなこと聞くの？！」
「だってさ、なんか態度がヘンじゃない？」
「そ・・それは・・兄さんとは1年以上会ってないんだもん・・少しはヘンになるよ・・・」
「兄弟なのに？」
「そ・・そりゃそうよ・・兄妹だってそんなもんよ・・・」
・・だって・・兄さんとは・・兄さんが大学に入ってからは、年に1、2回しか会ってないし・・・それに・・・オレが女の子になってからは・・まだ2回目だ・・・

「お待たせ、それじゃ行こうか。」
「うん！」
「長谷川さんはどこ行きたい？」
「ちょっと・・ここらへんブラブラしていいですか？」
「あぁ、そうだね。観光だしね。」
「わたしまだ、あまりお土産とか買ってないから、なんか良いのないかと思って・・・」
「そっか、嵐山はいろんな店があるからね、昔ほど多くないみたいだけど芸能人の店なんかも人気らしいよ。友達から頼まれて沢山買うコもいるらしい。」
「あ、わたしはそういうのは・・・」
「あのね、長谷川さんは芸能人じゃなくて戦隊モノが好きなの。変わってるでしょう？」
「有希！よけいなこと言わないでよ！」
「・・・・・」

「わたしは有希みたいにアイドルオタクじゃないだけよ。」
「！・・アイドル・・オタク・・・？！」
・・オレは・・アイドルオタクなんかじゃない・・・そ・・そりゃ・

・山上くんは好きだけど・・べつにグッズとか買わないし・・ただテレビで見たりするだけだ・・・純平は・・アイドルじゃなくてモデルで俳優だし・・・それに・・オレは純平のファンじゃない・・・オレは純平の彼女・・みたいなものだ・・・
・・だいたいオタクっていうなら・・戦隊モノ好きの方がずっとオタクだと思う！

・・いくつかお店を回ったけど・・長谷川さんのお土産はなかなか決まらない・・・
「わたしお土産っていっても両親に買うだけだから・・・」
「長谷川さんは一人っ子？両親と住んでるの？」
「いえ・・今は母だけです・・父は単身赴任で・・・」
・・なんか・・兄さんったら・・長谷川さんとばかり話してる・・・
「母には何か美味しいものでも買っていきたいんですけど・・・」
「それじゃ桜餅なんかどうかな、嵐山の名物らしいよ。渡月橋の近くに店があるみたいだから、食べてみて決めたら？」
「あっ、じゃぁそうしようかな・・・」

オレたちは橋の近くにある桜餅のお店に入った・・・桜餅なんて福岡にもあるのに・・・なにも京都で食べなくたって・・・
お店の人に頼んで待ってる間も、兄さんは長谷川さんと楽しそうにお話してる・・・オレだって兄さんと話したいのに・・・でも・・なんか上手く話に入っていけない・・・

運ばれてきた桜餅は、桜の葉っぱに包まれたヤツと、全体がアンコのヤツの２種類だった・・・オレたちはまず葉っぱがついた方を手にとった・・・
・・オレが知ってる桜餅は一枚の葉っぱを横にして巻いてあるけど・

・・これは二枚で上下から挟んである・・・それに餅米がピンクじゃなくて、真っ白だ・・・
・・お店の人が葉っぱごと食べるとおいしいっていうから、そのまま食べると・・・
（あれ？・・アンコが入ってない・・・）
餅米でアンコを包んであるんじゃなくて、中まで白い餅米だけだった・・・こんな桜餅食べたことない・・・ヘンなの・・・

アンコのやつは中に餅米が入っていた・・・これもピンクじゃない・・・
「美味しいね有希。」
「・・う・・うん・・・」
「わたしコレお土産に買っていこう！　有希もお母さんと麻衣ちゃんに買っていったら？」
「・・・うん・・・・」
「？・・どうしたの？　なんか元気ないね・・お腹でも痛いんじゃない？」
「・・ううん・・なんでもない・・・」
「有希、どうかしたのか？」
「・・なんでもないって・・・」
・・ただ・・なんかつまんないだけ・・・

「お兄さん、わたし少しそのへん見てきていいですか？」
「あ、もう店出る？」
「いえ、少しひとりで見てきたいので・・」
「そう？　じゃおれたちはここに居るから行っておいで。」
「はい。」
・・長谷川はひとりで出ていった・・なにか欲しいのがあったのかな・・・オレたちには買ったの見られたくないものとか・・・？

「・・兄さん・・人力車は・・？」
「あぁ、さっき店の人に聞いたら、歩いてれば向こうから声かけてくれるらしいよ。」
「・・・・・」
「長谷川さんが帰って来たら二人で乗ってくればいい。」
「え？・・兄さんは？」
「おれはここで待ってるよ。」
・・そんなぁ・・・オレは兄さんと乗りたいのに・・・

「有希・・お前さっきから何膨れてるんだ？」
「・・！・・ふ・・ふくれてなんて・・ないもん・・・」
「お前、全然変わらないな。」
「え？」
「昔からおれが麻衣のことを気にかけてると、有希はいつも機嫌が悪くなったからな？」
「！！」
「今もおれが長谷川さんに気を使ってたから嫉妬してたんだろう？」
「・・うぅっ・・・」
・・たしかに・・そうかもしれない・・・オレは兄さんと長谷川さんが仲良く話してるのを見て嫉妬してたのかも・・・

「長谷川さんも一緒にって言ったのは有希だろう？」
「・・うん・・・」
「おれたちは兄弟なんだから、有希より長谷川さんに気を使うのは当り前だと思わないか？」
「・・ぅ・・うん・・・」
・・・兄さんの言うとおりだ・・・オレって・・なんて我がままなんだろう・・・オレは・・ひとに優しく出来るような女の子になりたい思ってたのに・・・これじゃ男の子のころと何にも変わらない・

・・
「・・ご・・ごめん・・兄さん・・わたしってダメなままだね・・・」
「そうでもないよ。昔の有希はもっと強情だった。」
「・・・・・」
「素直に自分が間違ってたと認められるのは、だいぶ成長した証拠だと思うぞ！」
そう言って兄さんはオレの頭をクシャクシャした・・・
「ちょ・・ちょっと兄さん・・髪が乱れちゃう・・・！」
・・そう言いながらもオレは嬉しくてたまらなかった・・・なんか・・昔のまんまだ・・・オレたちは、オレが男でも女でもそんなの関係ないのかも知れない・・・だってオレたちは“きょうだい”なんだもん！

「ごめんなさい！お店が混んでて時間かかってしまって・・」
「いや、全然構わないよ。それより有希と二人で人力車に乗ってきたら？」
「えっと・・でも・・・」
「行こう、長谷川さん！　兄さんはここで待ってるって。」
「そ・・そう・・？」
・・オレは兄さんのことばかり考えてたけど・・兄さんとは会えただけで十分だ・・・兄さんとオレはまた会うことが出来る・・・だけど・・山口先生が言ったように、高校の修学旅行は一生に一度きり・・・オレにも長谷川にも・・・

「ふふっ・・」
オレは長谷川と腕を組んだ・・・
「な・なによ？」
「今日は長谷川さんがついて来てくれて良かった！」

「ウソ・・ほんとは原口さんの方が良かったんじゃないの？」
「そんなことない・・長谷川さんがいいの！」
・・オレにとって・・長谷川はみんなとはちょっと違う・・・でもこんなこと長谷川には言えない・・・
「・・弘子たちとはずっと一緒だったし・・せっかくの修学旅行なんだから、一日くらい長谷川さんといたいもん！」

「こんにちは！　ねえ、君たち修学旅行？　人力車乗ってみない？」
うわっ！ちょっとカッコイイお兄さんがオレたちに声をかけてきた！　長谷川に目をやると・・まんざらでもなさそう・・・
「は・・はい・・・」
「乗る？　３０分コースで８０００円やけど。」
「え？！・・８０００円ですか・・・」
オレと長谷川は目を合わせた・・・無いワケじゃないけど・・オレたちのお小遣いではかなりキツイ・・・お土産があまり買えなくなっちゃう・・・
「１０分で２０００円のコースもあるけど、やっぱり嵯峨野を回るコースの方が断然いいよ。景色がキレイなところで写真も写してあげるよ！」
「嵯峨野・・？」
「嵯峨野ってのはこの一帯のこと、昔の人の別荘や、有名な竹林なんか通るコールだよ。」
・・・長谷川が言ってた竹林は３０分コースじゃなきゃ通らないのか・・・
「ど・・どうしよう・・長谷川さん・・・」
「あの、８０００円って１人でですか？」
「あ！　違う違う、二人で８０００円。」
「・・だったら４０００円づつじゃない、有希乗ろう？」
「・・うん・・」

・・４０００円なら・・なんとかなりそうだ・・・

「それじゃ・・お願いします・・」

「おっ！有り難うございます！　さ、こっちこっち！」

俥夫のお兄さんが、オレたちを人力車のところに連れていってくれた・・・そこには黒い人力車が・・屋根が付いてる・・これが人力車かぁ！

お兄さんが人力車の下から出してくれた踏み台に足を乗せて人力車の上に・・・オレたちが椅子に座ってスカートを整えると、お兄さんが赤い布をひざの上にかけてくれた・・・なんか・・かなり前のめりだなぁ・・・

「じゃぁ、行くよ！」

「！」

お兄さんが引く体勢に入ると、車が後ろに傾いて丁度いい姿勢になった・・・引くときに丁度いい角度になるように作ってあったんだ・・・

走りだすと思ったより揺れなくて、あんがい乗り心地が良かった・・・歩いてるときより目線が高いせいか、まわりの景色がよく見える！

俥夫のお兄さんは時々人力車をとめて説明してくれる。

「ここは松尾芭蕉の弟子が別荘にしてた庵〈いおり〉で、昔はまわりに柿の木が沢山あったらしいよ。」

「へ～・・藁葺き屋根だぁ・・・」

「正確には茅葺きらしいけどね。」

「茅葺き？」

「カヤってのはススキのことだよ。」

「へ～・・・」

・・なんかひっそりしてていい感じ・・・こういうの・・弘子が言

ってた“わび”とか“さび”っていうヤツかな？

ほかにもたくさんある昔の人の別荘を見ながら、オレたちを乗せた人力車はゆっくりと進んでいく・・・

「有希・・」

「ん？なに？」

「有希、ほんとはお兄さんと乗りたかったんじゃない？」

「ううん・・だって修学旅行だもん・・兄さんとじゃ修学旅行にならないよ！」

「・・・・・」

「今日は兄さんに会えただけでいいの・・」

「・・・・・」

「あっ、見て！竹林よ！」

人力車は細い竹林の中の道を観光客とすれ違っていく・・・竹の上から木漏れ日が射してきて、すっごくステキ！

いろいろ景色がいいところで俥夫のお兄さんに、長谷川とふたりで記念撮影してもらった・・・

・・なんか楽しいな・・・長谷川といるとなぜだか気持ちがラクになれる時がある・・今日はまさにそんな感じだ・・・

・・・どうしてなのかと思ったけど・・やっぱり長谷川には隠し事が少ないからじゃないかと思う・・・弘子はオレが男だって知ってるけど・・でも心は完全に女の子だと思っている・・・長谷川もそれは同じかも知れないけど・・だけど中学の頃の男の子のオレも知っているから・・ずいぶん違うと思う・・・

・・これで・・長谷川がオレにイジワルしなきゃ・・もっといい関係になれると思うんだけどなぁ・・・

楽しかった人力車での散策ももうすぐ終り・・・そのとき長谷川がスカートのポケットから何かを取り出した・・・
「有希、これさっき買ったんだけど、ひとつあげる。」
「?・・あ、ご当地キてぃちゃん?!もらっていいの?」
「うん、いいわよ。有希にあげようと思って買ったんだから。」
「うわぁ!ありがとう・・舞妓さんだぁ・・・」
・・だだでさえ可愛いキてぃちゃんが・・舞妓さんの恰好してるなんて・・可愛いすぎる!!
「舞妓さんの恰好って可愛いよね・・長谷川さんは舞妓さん見た?」
「ううん、見なかったわよ。」
「わたし舞妓さん見たいなぁ・・・」

渡月橋のところまで戻ってくると、橋のところで兄さんが待っていた。
「兄さん見て!これ長谷川さんにもらったの、可愛いでしょう?キてぃちゃんちゃんが舞妓さんになってるの。」
「あぁ、長谷川さんありがとう。」
「い・・いえ・・有希キてぃちゃん集めてるみたいだから・・」
「あ、ねえ兄さん、舞妓さんってどこにいるの?」
「え?」
「だって京都っていったら舞妓さんでしょう?でもわたしたちまだ1回も舞妓さん見てないのよ!」
「舞妓さんか・・・舞妓さんっていったら祇園じゃないかな? おれも見たことはないから判らないけどな。」
「え~! 兄さんずっと京都にいるのに、舞妓さん見たことないの?!」
「おれは京都の大学にいただけで、ほとんど研究室にいたからな。観光なんてしたこと無いんだ。」

「え・・そうだったんだ・・・」
オレは、兄さんは京都に住んでるんだから、いろんなこと行ったのかと思ってた・・・
「それじゃ、このあと祇園に行ってみるか？　行っても舞妓がいるかどうか判らないけど。」
「うん、行く！」
・・兄さんはそういうけど・・オレはなんか会えそうな気がする！
「じゃ、その前に橋を渡ってきたらどうだ？　さっき車の中で言ってただろう、伝説とかなんとか。」
「あっ！そっか・・願い事が叶うんだ！」

オレと長谷川さんは渡月橋を渡って向こう岸へ・・けっこう長い橋だ・・・ガイドブックには木の橋って書いてあったけど・・木で出来てるのは欄干だけみたい・・・

・・そして橋を渡った先にある、法輪寺ってところでお参りをした・・・願い事は・・“本当の女の子にして下さい”って言いたいところだけど・・・オレだって神様も仏様もそんなの無理なことくらいわかってる・・・だから“せめて無事に女の子として卒業できますように・・・”ってお願いした・・・これくらいなら神様も叶えてくれるかも・・・

・・長谷川もずいぶん熱心にお願いしてたけど・・何をお願いしたんだろうな・・・・

だけど・・なんていっても重要なのは帰りの橋で振り返らないこと・・・ここで振り返っちゃったら台無しだ・・・
「有希、振り返っちゃダメよ！」

「う・うん・・わかってる・・」

・・帰りの橋が長く感じる・・・だいたい人間って、やっちゃダメだと言われると、やりたくなっちゃうものなのだ・・・うぅ・・意識すればするほど・・頭が無意識に回ってしまいそう・・・

「有希！あとちょっとなんだから我慢しなさい！」

「うん・・」

オレはやっとのことで我慢して、振り返らずに橋を渡れた・・・

・・・これで・・女の子として卒業できるといいけどなぁ・・・

－－－－－－－－－－－－－－－

－－－－－－－－－－－－－－－

－－－－－－－－－－

ATから

2日目も1話で書くつもりだったのですが、長くなってしまったので続きます。あと1回で終るかどうかもアヤシイです（笑）

ところで、最後の日は大阪なのですが、有希たちをUSJに行かせてやりたいなぁと思っています。

でも、私はUSJには行ったことも無いし、内容もテレビでたまに見る程度でほとんど知りません。

なので修学旅行生が行きそうなアトラクションとか、どういう順番

が良いとか、面白いところとか、ついやっちゃう失敗とか、有希たちにやって欲しいこととか、そういうのあったら教えていただければと思っています。時間はだいたい朝から4時ごろまでだと思います。

ただし、それでも書けない感じなら、手っ取り早く済ますか、別の所に行くか、書かない可能性もありますのであしからず・・・

第１２６話　修学旅行６　京都２日目・祇園

「ここが祇園?!」

・・オレは京都のことは良く知らないけど、それでもここが京都っぽいのはわかる・・・町並みが時代劇みたいで昔の日本のようだ・・

・

大きな道はさすがにアスファルトになってて、あたりにはお土産物屋が並び観光地らしい感じだけど・・・石畳みの細い路地の奥には、なにか別の世界がありそうな・・そんな雰囲気に満ちている・・

・

「でも・・舞妓さんはいないね・・」

「そうだな、時間が早すぎるのかも知れないな。」

「・・そうなの?」

「舞妓は酒の席に呼ばれるんだから、こんなに昼間からは外を歩いてないんじゃないかと思うんだ。」

「そっか・・・」

・・言われてみれば・・そうかもしれない・・・まだ昼の２時だもんなぁ・・・

「・・やっぱり舞妓さんには会えないかなぁ・・・」

「有希、まだガッカリするのは早いわよ。探してみればいいじゃない。」

「うん・・そうだね!」

せっかく来たんだもん・・歩いてれば長谷川が言うように舞妓さんに出会えるかも知れないし・・・

「長谷川さんも会いたいでしょう?」

「まあね、わざわざ来たんだからね。」
「？・・なんか・・あんまり興味ないみたい・・・」
「そんなことないわよ。私だって見れるものなら見てみたいし・・
有希ほどじゃないかもしれないけど。」
「ふ～ん・・・」
・・オレは着物が好きだからかなぁ・・・だって舞妓さんの着物っ
て独特だし・・すごく可愛いんだもん・・・

「あれ？　なんかあそこ人が集まってる・・・」
小さな橋のところに人集りが・・・なにやってんだろう・・・
「長谷川さん、行ってみよう？」
オレたちは駆けよって、人垣のすき間からのぞいてみた・・・するとそこには・・・！
「あっ、舞妓さんだ！　長谷川さん舞妓さんよ！」
「ほんと、居るのね・・」
みんな写真うつしたり、一緒に撮ってもらったりしてる・・オレも舞妓さんと一緒に写りたいなぁ・・・
「ね・・ねえ、長谷川さん・・わたしたちも一緒に撮ってもらおう？」
「え？・・わたしはいいよ、有希だけ撮ってもらえば？」

オレたちが話していると兄さんが・・・
「せっかくの記念なんだから、長谷川さんも一緒に撮ってもらいなよ。おれが写してあげるからさ。」
「そ・・そうですか・・？」
兄さんに言われると、長谷川さんもその気になってきたみたい・・
なんか長谷川・・兄さんの前だと素直だな・・・
「ね？　長谷川さん一緒に撮ってもらおうよ！」
「う・・うん・・」

「あ・・あのぁ・・わたしたちと一緒に写真撮ってもらっていいですか？」
オレが舞妓さんに頼むと、横にいた着物を着た男の人が・・・
「舞妓さんはもう行かなきゃいけない時間だから、君たちで終りだよ。」
「・は・・はぃ・・・」
オレたち二人は舞妓さんと一緒に、兄さんに写真を写してもらった・・・でも良かった・・もう少し遅かったら写真撮ってもらえないところだった・・・

舞妓さんは、さっきの着物の男の人に傘をさしてもらいながら帰っていった・・・
「兄さん見せて！　ちゃんと撮れた？」
写真はしっかり撮れていた・・・
「舞妓さん可愛かったね・・顔がまっ白でさ・・・」
・・白塗りの顔に、赤いおちょぼ口・・・目尻にも紅をさしてて・・・幼い感じなのに色気もある・・・
「ピンクの着物もステキだったなぁ・・帯も長くて・・あの帯どうなってるんだろう・・・」
ちょっと見ただけでは、どうなってあんな風に垂れてるのか良くわからない・・・
「舞妓さんこれからお座敷でお仕事なのかな・・・」

「・・有希、盛り上がってるとこ悪いんだけど・・あの人は本物の舞妓さんじゃないよ。」
「え？！」
「あの舞妓さんカツラかぶってただろう？　本物の舞妓さんは自分の髪の毛を結い上げるんだ。」

「・・じゃぁ・・あの人は・・・？」
「たぶん観光客が舞妓さん体験をしてたんだと思うよ。」
「・・・・・」
・・なんだ・・そうだったのか・・・
「・・そんなのがあるんだ・・知らなかった・・・でも・・本物じゃなくても会えないよりはマシか・・・ねえ、長谷川さん・・」
「そういう体験が出来るんだったら、有希もやってみれば？　自分でやれば着物とか帯がどうなってるのか解るわよ！」
「・・そ・・そんな・・・」
・・オ・・オレが舞妓さんに・・・？

「それは修学旅行の思い出になって良いんじゃないか？　有希と長谷川さんでやってみたらいいよ。」
「え？！　わ・・わたしはいいです！」
・・長谷川さんったら・・自分はイヤなのにオレにだけやらせようなんて・・・
「わたし長谷川さんもやるんだったら、やってもいいわよ！」
フフッ・・・兄さんもいるからいくら長谷川が強気でも反撃できないだろう・・・

「あ、で・・でも・・わたしたちお金が無いから・・さっきの人力車で使ってしまって・・もう自由なお金は・・・」
・・・そっか・・しまった・・長谷川の言うとおりだ・・・もうこれ以上使ったら、お土産買えなくなっちゃう・・・
「なんだ、それは心配しなくていいよ。お金はオレが出すからさ。」
「え！・・ほんと？　兄さん・・お金あるの？」
「あぁ、ほとんど研究所と寮の往復でお金は使わないからな。それぐらいは平気だよ。」
「だったら、何も心配ないじゃない！　やろうよ長谷川さん！」
「で、でも・・有希はモデルだから平気かも知れないけど・・わた

しは・・」
「わたしだってただの読者モデルよ。長谷川さんとそんなに違わないって！　長谷川さんがやらないんなら、わたしもやらないよ！ねえ、やろう？」
「・・・・・」
・・だって・・オレも長谷川が舞妓さんになったら、どんなになるのか見てみたいし・・・ちょっと笑っちゃうかも！
・・オレだってほんとは恥ずかしいけど・・・舞妓さんの着物にも興味があるし・・・それになにより・・いつも強気の長谷川が困ってるのが面白い！・・・この際もっと困らせたくなっちゃう！！
―――――――――――――――
―――――――――――――――
――――――――――
「や・やっぱりわたしはいい！」
「長谷川さん・・もうここまで来たんだから、やらなきゃダメよ！」
オレは長谷川を引っ張ってお店の中に入った・・・ここは置屋〈おきや〉ってところらしい・・・置屋っていうのは舞妓さんの芸能事務所みたいな所のようだ・・・
　舞妓さん体験をさせてくれるところは、本物の舞妓さんとは関係なく、ただ貸衣裳で写真を撮る感じのところが多いみたいだけど・・・ここは本物の舞妓さんもいるところがやってるらしい・・・だから本格的なのだそうだ・・・
「いらっしゃい、ようおこしましたなぁ。修学旅行どすか？」

置屋のおかみさん？みたいな人が向かえてくれた・・・京都弁が独特で物腰がやわらかい・・・こういうのを“はんなり”っていうのだろうか・・・オレが今回の修学旅行で会った中で一番“はんなり”してる！

「あ、よ・・よろしくお願いいたします・・・」

・・こう丁寧に言われると・・オレも無意識に両手を揃えて深々とお辞儀してしまう・・・そういうのは三吉先生に厳しく躾けされたからなぁ・・・

「いやぁ、あんたはん、いい挨拶しなはるなぁ。若いコにしては珍しいわぁ。」

おかみさんはそう言うと、オレと長谷川を別々の部屋に入れた・・・オレにはおかみさんが、長谷川にはもう少し若い人が一緒だ・・・

オレはセーラー服を脱いでハンガーに掛けると、下着の上に襦袢を羽織ってから、舞妓さんのお化粧をしてもらう・・・

「あんたはん、お名前はなんて言わはるの？」

「あ、有希です。」

「ゆうきちゃん？　じゃぁゆうちゃんやね。」

「あ、はい・・」

「ゆうちゃんは、まず床山さんに御髪〈おぐし〉を結ってもらいましょ。」

普通、舞妓さん体験の場合はカツラを使うらしいけど、オレはおかみさん（舞妓さんたちからは“お母さん”と呼ばれてるそうだ）の薦めで自分の髪で結うことにした。オレの髪は黒いし、長さもあるからということだ・・・もちろん少しは足さなきゃいけないだろうけど。

オレが床山さんに結ってもらうのは、まだ新米の舞妓さんがする髪

型で“割れしのぶ”というヤツ・・・後ろに丸くした部分を二つに割って、赤い針刺しみたいな筒状の飾りをその割れ目から見えるように入れる可愛い髪型だ。

髪が結えたらお化粧・・・顔をペースト状のおしろいを水で溶いて真っ白に塗っていく・・・着物の衿から見えてる首の部分まで真っ白に塗ってしまう・・・後ろは襟足をかたどったように2本塗り残すのが京都風らしい・・・

・・顔がキレイに塗れたら口紅を・・上は薄く・・下も小さく塗るのが新米舞妓さん風だそうだ・・・

アイラインは控えめにクッキリと・・・目尻に紅をさして指で境い目をボカす・・・

・・現代のお化粧でも、少しピンク系を使うことはあるけど・・こんなにあざやかな赤は使ったことがないから、なんだか新鮮・・・舞妓さんの化粧って白と赤と黒の3色だけなのだ。

・・眉毛はほとんどオレの眉毛そのままでいけてる感じ・・眉毛にも赤を使うのが意外だった・・・それが深みと温かさを出すそうだ・・・

・・・なんだか・・・自分顔が舞妓さんになっていくのは不思議な気持ちがする・・・

髪とお化粧が終って着物を着る・・・着付けてもらってるとおかみさんが・・・

「あら？　ゆうちゃん着物きるの馴れてはる？」

「あ、はい・・お茶の時にいつも着てるので・・着付けも習いまし

た。」

「やっぱり！　どうりでサマになってるとおもうたわ。」

・・オレが着せてもらった着物は水色に白い花の模様で、可愛い中にも清楚な感じがする着物だ・・・金銀の糸で織ってある帯の上の、赤い帯揚げが水色の着物と良いアクセントになってる・・・

後ろに垂らした帯は“だらりの帯”と言うらしく、昔はまっすぐ垂らしていたけど、今は交差させるようにするのが流行してるそうだ・・・

もともと舞妓は１０歳から１３歳くらいの子供で、それ以上になると芸妓になっていたのが、今では早くても中学を卒業してからで、ほとんどは高校を卒業してから舞妓になるそうだから、それにつれて舞妓のファッションも変わっているらしい・・・２０代になっても舞妓をするため、より幼く見えるような工夫が必要なようだ・・・京都ではそんな幼い子を“おぼこ”と言い、幼いようすを“おぼこい”と言うらしい・・・

・・着物の肩や袖が糸で縫い上げられてるのも、昔は大きくなった時に下ろすためにしていたものの名残りらしい・・・それもまた舞妓さんの可愛らしさを表現している・・・

最後に“花かんざし”や髪飾りを付けて、舞妓さんの出来上がりだ！　・・・オレも“おぼこ”くなれたかなぁ・・・？

・・・しかし・・・オレが修学旅行で舞妓さんになるなんて・・・想像もしなかった・・・

ーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーー

「お連れさんはカツラやから、もう出来て待ってはりますよ。」
え・・長谷川、もう出来てるんだ・・・なんか・・こんな恰好で長谷川に会うの恥ずかしいなぁ・・・あ・・でもそれは長谷川も同じか・・・

　オレは照れ隠しも手伝って、障子を開けてちょっと舞妓さんっぽいポーズをとってみた・・・
「長谷川さん、お待ちどうはん・・・」
・・うわっ・・・長谷川呆れて固まってる・・・やりすぎたかな・・・？
「ほ・・ほんとに有希・・？」
「・・う・・うん・・・」
「ビックリした！　本物の舞妓さんかと思った！」
「そ・・そんなこと・・・は・・長谷川さんだって同じじゃない・・・」

　長谷川は黒地の着物でちょっとお姉さん舞妓風だ・・・カツラも“おふく”という結いかたでオレの“割れしのぶ”より少しおとなしい感じ・・・花かんざしも、オレが付けてる小さな花の集まりからたくさんヒモ状の飾りが垂れてるのと違い、大きめの花で垂れがないものになっている・・・全体的に大人っぽい・・・
・・・オレがやってる新米舞妓が2、3年すると、こういう先輩舞妓になるのだそうだ・・・お化粧も着物の着かたもオレとは少しずつ違う・・・

「有希すっごく似合ってるわよ！　さっきの舞妓さんよりずっとキレイ！」
「そ・・そうかな・・・」
・・な・・なんか・・長谷川にそんなこと言われると照れるな・・・
オレも・・なんとなく・・そうかな？とは思ったんだけど・・・
「長谷川さんも可愛いよ。意外に似合ってる！」
「・・意外？」
「あ・・そうじゃなくて・・長谷川さんお化粧とかしないから・・・
どんなふうになるのかな？って思ってただけで・・・」
「変じゃない・・？」
「ぜ・・全然ヘンじゃないって！」
・・ヤバイ、ヤバイ・・また長谷川を怒らせるところだった・・・
「・・有希・・わたし・・かなり恥ずかしいんだけど・・・」
「・・わたしだって恥ずかしいよ！　でもさ・・“旅の恥はかき捨て”って言うじゃない？」

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

「兄さん、どう？　似合ってる？」
「おっ、可愛いじゃないか二人とも。」
「そうどすかぁ？」
オレは冗談っぽく舞妓さんのマネをして踊りのポーズをとってみた・・・
「有希、なかなか様になってるじゃないか。」
「えへへ・・・」

・・だって、着物の仕草を出来るのも兄さんに見せたいし・・日本舞踊はかじっただけだけど・・・

「ゆうちゃんたち、まだ時間あるさかい外でも歩いてきたら？」

「え？・・いいんですか・・・？」

・・どうせ写真うつすんでも、部屋の中より祇園の町をバックに写した方が、着物も映えるに決まってる！

「わ、わたしはイヤよ有希・・・」

「え～行こうよ・・・ねえ、兄さんからも言って！」

・・だって長谷川・・兄さんの言うことには素直なんだから・・・

「長谷川さん、おかみさんもせっかくああ言ってくれてるんだから、少し出てみようよ。何枚か撮影したらすぐ戻ってくればいいじゃない？」

「・・・・・」

「地元じゃないんだから、知ってる人に会う心配も無いよ。」

「そ・・それもそうですね・・・」

・・・兄さんって、説得が上手だなぁ・・・言うことがいちいちもっともだからかな・・？

オレと長谷川は舞妓姿で外に出てみた・・・足には高い履物（これも“おぼこ”というらしい）を履く・・・木をくり抜いて作ってあって、新米のオレのには中に鈴が付けてあるから、歩くたびに可愛い音がする・・・

・・オレは着物に馴れてるけど・・それでも履物の丈が高いと歩きにくい・・・だから着物に馴れない長谷川は、すごく歩きにくそうだ・・・

「長谷川さん、着物の時はもっと内股にしなきゃ・・ヒザをくっつけたままくらいの気持ちで歩くの。こんなふうに・・・・」
オレは長谷川に、実際に歩いて見せてあげた。
「わかった？・・そうそう！　そんな感じ！」
まだまだ下手だけど、さっきよりはだいぶマシだ・・・

「有希、そこらへんに立ってごらん。」
オレは置屋をバックに立った・・・
「ほら、ポーズとって！」
「・・こんな感じ？」
オレは可愛く小首をかしげてみた・・・
「そうそう・・可愛いよ。」
「・・兄さんったら・・カメラマンみたい！」
・・まあ・・そんなふうに乗せてくれた方がオレも恥ずかしくなくていいけど・・・

長谷川も同じように撮ったけど、やっぱり長谷川はカタいなぁ・・・
「もう少しあっちで撮ろうよ。」
さすがに大通りに出ると、さっきの舞妓体験の人みたいに撮影会になったら大変だけど・・・あの角のあたりなら・・・

オレは通りに面した角のところで写したら、すぐに終わりにするつもりだった・・・ところが・・・
「あっ！見て、見て、舞妓さんよ！」
？・・なんか・・聞き覚えのある声・・・！
振り返ると、なんと弘子たちが！！　大きな声の主は直美だ・・・
「ねえねえ、一緒に写真撮ってもらえないかな！」
・・うわっ・・・ヤバイ・・・長谷川は完全にうつむいてしまっている・・・しまったなぁ・・・バレたらどうしよう・・・オレは噂

になってもいつものことだから仕方ないけど・・・長谷川はイヤだろうなぁ・・・

「すみませ～ん！　一緒に撮ってもらえませんか？」

・・・やっぱり来ちゃった・・・直美のやつ・・・

「舞妓さん可愛いぃ～！」

・・でも・・まだオレたちと気づいてないみたい・・・ここは舞妓さんになりきるしかなさそうだ・・・

「い・・いいどすぅ～・・・」

・・ま・・舞妓さんって・・こんなんだったっけ・・・？

「あ、君たち、舞妓さんはもう仕事に行かなきゃいけない時間だから、一枚だけだよ。」

・・とっさに兄さんが、さっきの光景をマネして助けてくれた・・・

「わぁ！　ありがとうございます！」

直美はみんなを手招きして、弘子と千里と安部っちを呼んだ・・・

うぅ・・・みんなと舞妓さん姿で記念撮影なんて・・・ど・・どうしよう・・・

・・あっ！・・オレが緊張してちゃダメだ・・・長谷川を助けなきゃ！・・元はと言えばオレが通りに面したところで撮影しようって言ったせいかも知れないし・・・

オレは長谷川こっそりの手を握って、耳元で言った・・・長谷川の手が震えてる・・・

「大丈夫だよ・・みんな気づいてないみたいだから・・・」

オレは何とか長谷川を励まして、みんなとの写真は無事に写すことが出来た・・・

・・みんな本物の舞妓さんと撮影出来たと思って喜んでた・・・これは絶対バレないようにしなきゃいけないな・・・でないとみんな

をガッカリさせてしまう・・・

―――――――――――――――
―――――――――――――――
――――――――――

　「兄さん今日はありがとう・・・・」

とうとう兄さんともお別れだ・・・今日はいろいろあったのに・・なんかあっという間だったような気がする・・・

・・またしばらく会えないのかと思うと・・なんだか悲しくなっちゃう・・・

「有希も久しぶりに会って、ずいぶん女の子らしくなってたから、おれも驚いたよ。」

・・うぅっ・・・兄さん・・なんで別れ際にそんなこと言うの・・・？

「・・あ・・そ・・それは・・こんな・・セーラー服着てるからじゃない？・・・き・・きっと・・そうよ・・・」

「そうかもな・・それじゃな有希。　長谷川さん、これからも有希が世話になると思うけど、よろしくね。」

「は・はい！」

「・・に・・兄さん・・こんど・・いつ帰ってくるの？」

「・・そうだな・・研究の都合もあるから、ちょっと判らないな。正月は無理だと思う、母さんにもそう言っといてくれ。」

「・・う・・うん・・わかった・・・」

・・なんか・・オレ・・泣きそう・・・でも長谷川の前で泣いたら・

・ヘンに思われちゃう・・・

オレはなんとか涙をこらえて、兄さんの車を見送った・・・

「有希って、よっぽどお兄さんのことが好きなのね。」
「え?!　そ・・そんなこと・・・」
「隠さなくてもいいわよ。　有希いまにも泣きそうな顔してるじゃない!」
・・長谷川・・・
「・・うぅぅ・・・そ・・そんなこと・・言わないでよぉ・・・・」

・・せっかくこらえてたのに・・涙が溢れてきちゃった・・・

第127話　修学旅行7　京都2日目・タックとお風呂

「ちゃんと時間どうりね。」
オレはみんなが自由行動から帰ってくるより前に、白石先生のところに行くように言われていた・・・
「・・あの・・山口先生たちは?」
「心配しなくていいわよ。彼女たちにはしばらく入らないように言ってあるから。」
「・・・・・」
「大丈夫。念のために鍵も掛けておくから。」
・・だったら・・大丈夫か・・・いきなり誰かが入ってくることもなさそうだ・・・でも・・・

床にはもうビニールシートが広げられてて、準備は出来てるみたいだった・・・
「・・あのぉ・・・ほんとうに接着剤なんかで着けちゃって・・・大丈夫なんでしょうか・・・?」
「それは大丈夫よ。この前も言ったでしょう?　私の手で試してみたって。」
「・・あ・・はぃ・・・」
・・でも・・オレのはオチンチンだからなぁ・・・オレにはもう必要ないモノかも知れないけど・・・取れなくなったら・・さすがに困るし・・・

「トイレは行って来た?」
「・・はぃ・・」
「“タック”してもトイレは行けるみたいだけど、やりにくいみたいだからね。」

「・・そ・・そうなんですか・・・」
・・“タック”ってどんな感じなんだろう・・・

「それじゃ脱いでくれる？　裾が邪魔になるといけないから一応上も脱いでね。あ、ブラはしててもいいわよ。」
「・・はぃ・・・」
・・オレは白石先生の前でセーラー服とシャツを脱いで、ブラとパンツだけになった・・そしてそのパンツもそっと脱いだ・・・うぅ・・・緊張するなぁ・・・

「それじゃ、座って足広げて。」
「・・・・・」
オレが足を開くと・・先生はカミソリを手に持って・・・
「・・せ・・せんせい！　な・・なにするんですか?!」
「少し毛を剃るけど良いでしょう？　接着するときに毛があると面倒だから。」
「あ・・そうですか・・・」
・・あぁ・・ビックリした・・・
「見えるところは剃らないからね。」
白石先生はそう言ってオレの袋のあたりの毛を剃ってしまった・・・

「消毒するから、ちょっと冷たいけど我慢してね。」
・・うわっ・・ひゃっこい・・・

「先生ちょっと用意してるから、その間に有希ちゃん、自分でペニスと袋の皮を伸ばしといてくれる?」
「・・の・・のばすんですか・・・?」
「袋で包まないといけないから、有希ちゃんの縮こまってるからね。」

「・・は・・はぃ・・・」
・・たしかに・・オレのはタマを取ってからは、すっかり縮こまってるけど・・・伸ばすなんて・・・

オレは仕方なく、自分で袋の皮をつまんで伸ばした・・・でも・・こんなこと・・女の子がやることじゃない・・・
「・・こ・・こんな感じでいいんですか・・・？」
「いいわよ。ペニスの皮も伸ばしてみて？」
「え・・は・・はぃ・・・」
・・オレは言われるままに、自分でオチンチンの皮を両手でつかんで引っ張ってみた・・・
「そうそう・・そのまま伸ばしてて・・・はい、離していいわよ。」
先生はオレの皮を引っ張ったまま、オチンチンの先を包むようにして、そのまま輪ゴムで留めた・・・まるで・・茶巾寿司みたいだ・・・

「有希ちゃん痛くない？」
「・・は・・はぃ・・・そんなには・・・」
「痛かったら言ってよね。先生にはわらないから。」
「・・はぃ・・」
「それじゃ立ってみて。」
オレが立ち上がると・・・
「ちょっと引っ張るわね。」
先生はオレのオチンチンを後ろに引っ張った・・・
「やりにくいな・・有希ちゃん、もう少し足をひらいてくれる？」
「あ、はぃ・・」
オレは先生のいうように足をひらいたけど・・・こ・・これじゃガニ股だぁ・・・は・・恥ずかしぃ・・・
「とりあえずこの状態で引っ付けるわね・・」
先生はオチンチンを引っ張ったまま、スポイトで接着剤を股間との

間に流し込み、しばらくオチンチンを股間に押さえつけていた・・・

「もういい頃ね・・・」

先生がゆっくり手をはなすと・・オチンチンは股間にくっついていた・・・瞬間接着剤みたいなものだから、あまり時間はかからないみたい・・・

「それじゃ、陰嚢の皮を伸ばしていくわね。」

「・・・はぃ・・・・」

・・先生って・・ときどき医学用語使うのが・・逆にエッチな感じがする・・・

・・両側からいっぱいに伸ばした袋の皮の部分でオチンチンを包むようにして、前の方から少しづつ接着剤を流し込んでいく・・・接着剤を流し込んだ後は透明なビニールのテープで仮り留めし・・その後ろもまた同じようにくっつけていく・・・

「有希ちゃん、痛くない？　痛かったら言ってよ？」

「・・はぃ・・そんなに痛くないです・・少し・・つっぱりますけど・・・」

「これでいいかな・・・もう大丈夫だと思うけど、念のためあと5分くらい待ってみましょう。」

「・・はぃ・・」

・・・裸にブラだけの状態で待つ5分は結構長い・・・

「もうそろそろいいかな?」

そう言って白石先生は、最初に接着した前の方からテープを慎重に剥がしていく・・・

「上手くいったみたい・・しっかり接着してるわ!」

・・・先生・・なんか嬉しそう・・・

「大成功よ有希ちゃん！　本当に女の子みたいになってるわ！」
「・・・・・」
「後は接着剤が付かないように留めてた輪ゴムを外すだけ・・・」
そう言ってオレの股間をモゾモゾしてる・・・

「あら・・？」
「・・ど・・どうしたんですか・・・？」
「輪ゴムの部分にも接着剤が付いちゃったみたい・・取れないわ・・・」
「えっ・・・取れなかったら・・どうなるんですか・・・？」
「オシッコできないわね。」
「・・・ってことは・・・オシッコしなければいいってことじゃないですか？」
「まあ・・そうだけど。　でも、もししたくなったら困るでしょう？」
「・・大丈夫だと思いますけど・・・さっき行ってきたし・・・」
「・・ダメよ！　それじゃ完璧じゃないわ！　ハサミで切りましょう・・」
・・ハ・・ハサミ・・・？！

「有希ちゃん、座って足を大きく開いて・・もう少し向こう・・影になってる・・・」
「・・せ・・せんせぃ・・怖いです・・・」
「大丈夫、大丈夫。」
・・ほんとかなぁ・・・間違えてヘンなとこ切らないかなぁ・・・？
・・先生は綿棒に接着剤を溶かす液をつけて・・オレの股間のとこで何かしてる・・・だ・・大丈夫なのかなぁ・・・
「もうちょっと待ってね・・・ピンセットでつまんで・・・ハサミで・・！　ほら取れた！」

先生は勝ち誇ったように、無事に取ることが出来た切れた輪ゴムを見せてくれた・・・そんなのオレに見せられても・・・

「ほら、見て！」

先生はそう言って手鏡でオレの股間を見せてくれた・・・

「え・・す・・すごい・・・」

・・オチンチンが無くなっちゃった・・・オレの股間はツルツルになってて・・少し後ろの方にオチンチンの先っちょの皮だけがのぞいている・・・これが“タック”なの・・・？

「立ってみて・・どう？」

「・・・・・」

・・・前から見たら・・・割れ目みたいになってる・・・これなら・・オレにオチンチンがあるなんて・・よほどのぞき込まない限りわからないだろう・・・

「・・これだったら・・大丈夫かも・・・」

「自信ついた？」

「・・う・・うん・・ちょっとだけど・・・」

パンツをはくと、まったく女の子と変わらなくなった・・・さわってみても全然わからない・・・女の子って・・こんな感じなんだぁ・・・

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

「あっ！　戻って来た！　有希たちどこ行ったの？」

直美に聞かれてオレは・・・
「・・嵐山に・・人力車にも乗ったよ・・・・」
「お兄さんと？」
「ううん、長谷川さんと・・」
「楽しかった？」
「うん！」

「嵐山だけ？」
「ぁ・・えっと・・・」
・・ど・・どうしよう・・言わない方がいいかなぁ・・・でも・・
後からバレたらよけい怪しまれるかも・・・
「・・祇園にも・・行ったよ・・」
「え？！　有希たちも祇園に行ったの？　わたしたちも行ったわよ！」
「・・そ・・そうなの？」
「わたしたち舞妓さんに会ったの！　写真も撮ってもらったのよ。」
「・・わ・・わたしも・・・」
「ほんと？！　じゃぁ同じ舞妓さんかなぁ？　ねえ、見せて見せて！」
「・あ・・う・・うん・・・ち・・ちょっと待ってね・・・」
オレは慌ててデジカメの中の舞妓さんと写った写真を探した・・・
兄さんが写したオレや長谷川の写真を見られたら大変だ！

「・・こ・・これ・・・」
「あ、ほんとだ！　でもこの舞妓さん、わたしたちが一緒に撮ってもらった舞妓さんと違うわね。」
・・そりゃそうだ・・・それはオレたちだもん・・・
「有希が写してもらった舞妓さんより、わたしたちが写してもらった舞妓さんの方が可愛いかったわよ！」
「！！」

・・それはちょっと・・嬉しいかも・・・
「わたしたちのも見せてあげる！　弘子ぉ、カメラどこやった？」

すると弘子が・・
「有希、はやくジャージに着替えた方がいいわよ。今日は一緒にお風呂に入るんでしょう？」
「あ、う・・うん・・・急がなきゃ・・・」
・・助かった・・・弘子うまい具合に話をそらしてくれた・・・
「え？！　有希、ほんとなの？」
「・・う・・うん・・・白石先生がね、調子いいみたいだから・・最後くらいみんなと入りなさいって・・・」
「わぁ！　よかったね！」
「・・うん・・でも貧血で倒れないように用心しなきゃ・・・」
「それなら大丈夫よ！　だって有希ぜんぜん元気じゃない！」
・・・うぅ・・・オレ修学旅行中、貧血って設定・・忘れぎみだったもんなぁ・・・元気すぎたかも・・・

急いでセーラー服を脱いでエンジのジャージに着替える・・・今はいつものように股間の膨らみを気にしなくていいから、着替えも大胆にできる・・・まあ・・オレのオチンチンなんてすっかり縮んじゃって・・いつもだって気にするほどの膨らみじゃないんだけど・・・

着替えが終ってお風呂の準備をしていると弘子がこっそりと・・・
「・・有希・・本当に大丈夫なの？」
「・・う・・うん・・・思ったより問題なさそう・・・」
「・・だったらいいけど・・用心した方がいいわよ・・」
「・・うん・・わかってる・・・」
・・弘子が協力してくれるのがありがたい・・・もし弘子がいなけ

れば、オレがみんなとお風呂に入るなんて無理だったと思う・・・
たとえ股間が女の子みたいになったとしても・・オレひとりでは、
とてもそんな勇気はない・・・

「あ、でも有希・・他の人と入るのイヤじゃなかったの？」
・・千里に言われて思い出した・・・
「・・あ・・うん・・・・」
・・そうだったな・・・オレ・・みんなと入れない理由にそんなと
こ言ってたんだったっけ・・・（６８話参照）
「あ・・でも・・もう平気・・・だってみんなとも長いじゃない！・
・だから・・ちょっとは恥ずかしいけど・・わたしもみんなと入り
たいもん！」

「３組～お風呂入っていいわよ！」
山口先生が知らせにきた・・・いよいよオレたちの番だ・・・山口
先生と目が合って、オレは小さくうなづいた・・・

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー
ー　ー
ー

みんなとワイワイお話しながらお風呂に向っていても・・内心は
ドキドキだ・・・

・・まさか修学旅行で・・オレがみんなとお風呂に入ることになる
なんて・・・思ってもみなかった・・・

「有希とお風呂に入れるなんて楽しみだなぁ！　夢が叶った～！」

「そ・・そんな・・オーバーなこと言わないでよ・・直美・・・」
「だってさ、有希がスタイル良いのは知ってるけど、何にも着てない有希は見たことないんだもん！」
・・な・・直美のヤツ・・・興味津々じゃない・・・
「ひ・・弘子ぉ・・直美がヘンなこと言うよぉ！」
オレはあくまで冗談っぽく弘子の後ろに隠れた・・・出来るだけ直美に近づかないようにしよう・・・普段からオレのムネさわったりするのに・・・何されるか、わかったもんじゃない・・・直にさわられたりしたらたまんないよ・・・

「直美、有希はただでさえ恥ずかしいんだから、そんなこと言っちゃダメよ！」
「そうよ！　やっぱり入らないなんて言い出したらどうするの？」
弘子に続いて千里も言ってくれた・・・もっと言ってやって！
「そんなこと言って、あんたたちも有希と入るの楽しみなクセに！」
「それはそうだけど・・・」
・・ち・・千里・・・何で黙っちゃうんだよ・・・？　そんなことないって言い返せばいいのに・・・

！！・・・脱衣所に入ると、いきなりみんなの裸が目に飛び込んできて“ドキッ！”とした・・・や・・やっぱり・・学校の更衣室とは全然ちがう・・・
「あっ、有希！　今日は先生と一緒じゃなくていいの？」
「・・うん！・・最後だからみんなと入っていいって！」
「良かったね！」
「・・みんな・・・」
・・みんな・・オレが一緒に入れること喜んでくれるんだ・・・なんか嬉しい・・・そっか・・直美もそんな気持ちで言ったのかも・・・照れくさいからあんなふうに言ったに違いない！

「わ・・わたしもみんなと入れて嬉しいわ！」
「有希も早く脱ぎなさいよ！」
「う・うん・・」
・・・そうだよな・・・あんまりモジモジしてたらヘンに思われちゃウかも・・・

ジャージのジッパーを下げて上を脱ぐ・・そして下も脱いで・・シャツも・・・
ブラとパンツはもちろんお揃いだ・・オレは校則は守る方だから、白の下着だけど・・・今日のはほんの少し白いレースに紛れて、ピンクの細いリボンが飾りに付いてる可愛いやつだ・・・生地もちょっとツルツルしてる・・・

下着姿は普段の体育の時にも、着替の時に見られてるけど・・・場所が違うと・・気持ちもだいぶ違う・・・なんか・・みんなに見られてるようで恥ずかしい・・・

・・ふとまわりを見ると、体をタオルで隠してるコはひとりもいない！
（・・ど・・どうして・・？）
オレたちくらいの女の子は、白石先生くらいの歳の人と違って、タオルで体を隠したりしないのだろうか・・・？
（・・どうしよう・・・）
・・オレは・・上はともかく・・下を隠さないワケにはいかない・・
・かといって男みたいに下だけタオルを巻くのもヘンだろうし・・・

・・オレは結局、たたんだままのタオルを手に持って、股間を隠した・・・
「有希、なにタオルで隠してるのよ！　エイ！」

オレは手に持ったタオルを直美に取られてしまった！！
（ヒィ～～～！！！）
・・ヤ・・ヤバイ！！！
「なぁんだ・・隠してるから、よっぽど毛が濃かったりするのかと思ったら・・ココもすっごい上品じゃない！」
・・うぅ・・だってビキニラインは永久脱毛で女の子らしい形に整えちゃったんだもん・・・
「直美やめなさいって！」
弘子が急いで直美からオレのタオルを取り返してくれた・・・
「いいじゃない、女どうしなんだからぁ・・隠さなくても・・」
「有希はあんたと違ってお淑やかなんだから隠すの！　ねえ有希！」
「・う・うん・・・・」
・・こ・・こりゃぁ・・女の子のお風呂って・・大変な世界だ・・・

「でもモデルの春日ユウの裸を見れるなんて、ウチの学校でも2年3組だけの特権よね！」
「・・そ・・そんなぁ・・・」
・・直美・・無茶苦茶いうなぁ・・・
「・・それにわたし・・読者モデルだし・・・」
「もう有希ったら、またそんなこと言ってる！」
「・・だって・・そうなんだもん・・・」
「そんなことないの！　有希はみんなのアイドルなんだから！」

「な・・直美・・・わたしたち・・友達じゃないの・・？」
「え？」
「・・だって・・さっきから・・わたしのこと・・モデルとか・・アイドルなんて・・・」
「あ・・そういうつもりで言ったんじゃないのよ。」
「ほら、直美が調子に乗ってはしゃぐから・・有希傷付いちゃったじゃない・・」

「・・ごめん有希・・今日は有希も一緒に入れるのが嬉しくて・・つい・・・」

・・そっか・・・直美も嬉しくて、舞い上がってただけなんだ・・・それなのにオレったら・・・

「・・直美・・気にしないで！　わたし・・こんなにたくさんの人とお風呂に入るの初めてだから・・ちょっと不安になってたのかも・・・」

「仲直りしたらさっさと入りましょう！　ずっとみんなで脱衣所にいるつもり？」

・・千里！・・・白くてキレイな身体だなぁ・・・胸はオレより小ぶりだけど・・・桜色の乳首が可愛い！

・・あっ！・・いけない・・これじゃオレも直美とおんなじだ・・・

「そ・・そうよね・・入ろう入ろう！」

「そしてみんなで洗いっこしましょうよ！」

え？・・あ・・洗いっこ・・・？！

・・こ・・股間だけは阻止しなきゃ・・・いくら女の子みたいになってても・・さわられたらバレてしまう・・・

・・でも・・心配はオレの思い過ごしだったみたいだ・・・

オレたちはお風呂に入って、みんなで胸の大きさを比べたりして楽しく過ごした・・・４人で比べた結果は、もちろん弘子が１番大きく、次が直美・・そしてその次がオレで、オレたちの中では千里が一番小さかった・・・

・・なんか・・オレは女性ホルモンで大きくなったのに・・千里よ

り大きくなっちゃって申し訳ない気持ちでいっぱいだ・・・でも千里の胸は形が良くて可愛いという結論に達したから許してほしい・・・

・・弘子は大きいけど、その分重さで下がっちゃうのが自分では気に入らないらしい・・・直美はDカップでパンパンに張ってる感じ・・・女の子の胸ってホント人それぞれだ・・・ちなみにオレの胸は・・・みんなが言うには理想的な形なんだって・・・そんなこと言われると・・・お世辞にしても、ちょっと嬉しい・・・

洗いっこも、オレが思ったようなことはなく、背中だけだった・・・考えてみたら当り前だ！　前を他の人に洗われるなんて・・オレだけじゃなく、誰でも恥ずかしいハズだもんな・・・

・・オレの背中は弘子が洗ってくれた・・・直美が洗おうとするのを、なかば強引に奪った感じだ・・・このままじゃ、ちょっと直美に悪いから、オレが直美の背中を洗ってあげることにした・・・

「どう？これくらいの力でいい？」

「うん！　有希が洗ってくれるんならどんなに強くてもいいわよ！」

「もう・・直美ったら・・まじめに聞いてるのに・・・」

・・オレはちょっとイジワルして、強めにゴシゴシ洗ってやった。

だって、強くていいって言ったのは直美なんだから！

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

（あぁ・・みんなと入れて楽しかった！）

脱衣所でパンツをはいてしまえばこっちのもんだ・・・あとはゆっくりブラをしてっと・・・

・・肩ヒモを両腕に通し・・少し前かがみになってカップに胸を入れてから・・後ろ手に・・・

「有希、留めてあげるよ。」

急に直美がオレの手からブラの先を奪って、ホックを留めてくれた・・・そんなの自分で出来るのに・・・

「あ、ありがとう・・」

すると直美が後ろを向いて言った・・

「わたしのも留めて!」

・・そういうことか・・どうりでヘンだと思った・・・あっ!・・・直美の背中・・真っ赤になってる・・・強く洗いすぎたかなぁ・・悪いことしちゃったな・・・

「直美、そんなんじゃダメよ!ちょっと前かがみになってみて?」

前かがみになった直美のアンダーバストにしっかりワイヤーを合わせて・・・

「はい、立って!」

ゆるまないように注意してホックを留めた。

「有希上手ね、わたしにもやって?」

・・え・・弘子まで・・・?・・もうブラしてるのに・・・?

「う・うん・・いいけど・・」

ブラのホックを外して前かがみに・・・こうして見ると・・弘子の胸ってさらに大きく見える・・・なんか・・砲弾みたいだ・・・スゴイ・・・!

オレは重力で下がった胸に下からカップを入れ込むようにあてがって・・ワイヤーをアンダーに・・?

「弘子・・ブラ少し小さいんじゃない・・？」
「そう？」
「はい、いいよ、立って？」
・・やっぱりそうだ・・・ちゃんとカップに入れると、カップの上に少しお肉の膨らみが出来てる・・・弘子はEカップって言ってたけど・・ちゃんとした下着屋さんで計ってもらったら、たぶんFカップくらいあると思う・・・

自分で勝手にブラを買って着けてると、あんがい身体に合ってないブラを着けてるものなのだ・・・オレの場合は良くわからないままレナに下着屋さんに連れていかれて、正しい下着の選び方や着け方を教えてもらったけど、そういうことをやったことない女の子って意外に多いのだ・・・

・・長谷川だってCカップで、オレと同じなんて言ってるけど・・・どうみてもオレより大きいハズなのだ・・・たぶんちゃんと身体に合ったサイズのブラを着ければ、Dカップくらいあると思う・・・
・・だけど・・こんなこと・・長谷川に教えることなんて出来ない・・・だって・・女の子なら・・男のオレにブラのことなんか教えて欲しくないと思うハズだもん・・・
・・オレだって・・もしも男の子に・・女の子の下着のことなんか教えられたら・・恥ずかしくて死にたくなっちゃうと思う・・・

ーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーー

オレは白石先生のところに行く前に、どうしても試してみたいことがあった・・・

ジャージのズボンとパンツを下ろして・・トイレにしゃがむ・・・
（ほんとうに・・このままの状態で・・出来るのかな?）
しばらくしゃがんだままでいたけど・・・なかなか出そうで出ない・・・

・・んんんん・・・・あっ!
ちょっと息んでみたら・・・チョロチョロ出て来た・・・な・・なんか・・ヘンな感じ・・・オシッコもらしちゃったみたい・・・

一度出始めると、なんとなくコツがわかってきた・・・思いっきり体の力を抜いた方が良さそうだ・・・
・・あうううぅ・・・
・・思わず声が出ちゃいそう・・・女の子ってこんな感じなのかなぁ・・・

・・袋の皮で締めつけられてるせいか、なかなか止まらない・・・
やっと止まったかと思うとまた出てくる・・・
何分かかかって終ると、トイレットペーパーで拭いた・・・いつもオレはパンツが汚れないようにオチンチンの先を拭くけど・・・ずいぶん感じが違う・・・ほんとに女の子になっちゃったみたいな気分だ!

トイレが出来ることを試してから白石先生の部屋へ向った・・・

“トントン!”

ドアをたたいて返事があった・・ドアを開けると、そこには白石先生だけじゃなく、山口先生と松本先生もいた・・・
「どうだった、戸田さん。お風呂は楽しかった?」
担任の山口先生に聞かれた・・・
「あ、はい！　すごく楽しかったです！」
「それは良かったわ。　それじゃ、私たちは外に出てるから・・・」
そう言って山口先生と松本先生は部屋を出ていった・・・

「誰にもバレなかったでしょう?」
「はい！」
「じゃ、早速取りましょうか・・」

「あ・・あの・・先生・・・」
「なに?　有希ちゃん。」
「・・あの・・これ・・取らなきゃダメですか・・・?」
「え?」
「・・あの・・今晩と・・明日まで・・このままじゃダメかなって・・思って・・・」
「あっ、有希ちゃん気に入っちゃった?」
「・・・・」
・・オレは恥ずかしくて・・黙ってコクリとうなずいた・・・

「そうねぇ・・聞いた話じゃ1週間くらいそのままにしておく人もいるみたいだけど、医者の立場からはあまり薦められないわ。どうしても不潔になっちゃうからね。」
「・・・じゃぁ・・やっぱりダメですか・・・?」
「でも、今日と明日だけなら問題ないと思うわよ。」
「そ・・そうですか!?」
「一応見せてくれる?　もし赤くなってたりしたら、かぶれる可能性があるから取った方がいいと思うのよ。」

「・・・・・・」
・・オレは先生の前でパンツを脱いだ・・・
「大丈夫みたいね。痒かったりしない？」
「はい・・今のところは・・・」
「それじゃ、このままにしましょうか？　明日博多駅についたら、私と一緒に学校まで来てくれる？　そこで外しましょう。」
「はい！　先生ありがとうございます！」
・・このまま・・アソコも女の子のままで1日過ごすなんて・・・
なんかすごくドキドキする・・・！

「でも、もし痒くなったりしたらすぐ先生に言わなきゃダメよ？」
「はい、わかりました！」

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

オレたちの部屋に戻ろうと廊下を歩いていると、途中の自動販売機があるところのイスに弘子が座っていた・・・
「有希、ずいぶん早かったわね。　もう終ったの？」
「ううん・・まだそのままなの・・・」
「え？！どうして？」
「・・それは・・・せっかく女の子みたいになってるのに・・・なんだか勿体なくて・・・」
「でも・・そのままでいいの？」
「うん！　白石先生も明日までなら大丈夫だって言ってくれたよ！」
「そうなの、だったらいいけど。　それじゃ部屋に戻ろうか！」

「あ、ちょっと待って・・弘子たち・・舞妓さんと写真撮ったって言ってたじゃない？」
「撮ったわよ。」
「その写真・・後でわたしにもちょうだい？　あ、修学旅行終ってからでいいから・・・」
「あぁ、そんなこと？　いいわよ、だってあの舞妓さん有希たちだもんね！」
「えぇ～～！！！　ど・・どうしてわかったの・・・？」
「そりゃわかるわよ！　でも、みんなは気づいてないみたいだけど。」
「・・・・・」
「それにしても有希はともかく、良く長谷川さんまで舞妓さんの恰好したわね。」
「あっ！・・そのことは・・長谷川さんには言わないで・・・絶対怒るから・・・」
「解ってるわよ。言わないから安心して。」
「・・うん・・ありがとう・・・」
・・バレたのが弘子で良かった・・・もしバレたのが直美だったら大変だったかも・・・

「でも、あの舞妓さんが有希たちだってことは、あの写真を撮ってくれた男の人が有希のお兄さんってことよね！」
「あ、う・・うん・・・」
「けっこうカッコイイじゃない、有希のお兄さん！」
「・・そ・・そんなことないよ・・・」
「有希が好きなタイプってお兄さんだったのね。」
「そ・そ・・そ・・それは・・・」
「ふふっ、有希ったら顔まっかよ！」
・・うぅ・・・これじゃバレバレだ・・・なんでオレってこうなん

だろう・・・

「いいじゃない、お兄さんのこと好きなんて素敵よ。」

「！・・ち・・違うよ・・兄さんのことは・・尊敬してるだけ・・それだけよ・・・」

・・実際・・オレは昔から兄さんを尊敬している・・・それは本当だ・・・

・・でも・・女のオレは・・尊敬だけじゃ・・満足できないみたい・・・

第１２８話　修学旅行８　大阪・ＵＳＪ

「有希・・そんなに怖がらないで・・・」
「・・純平・・・」
オレは下着だけの姿でベッドの上で震えていた・・・あおむけのオレの上からは覆いかぶさるように、裸の純平がのぞき込んでいる・・・
「・・で・・でも、純平・・わたし・・・」
「大丈夫だよ・・やさしくするから・・・」
「・・んぅ！・・・」
・・キス・・頭の中がとろけてしまいそうに甘い・・・あぁ・・身体がしびれて動けない・・・
「さわるよ？」
・・え！？・・まさか・・オレ本当は・・女の子じゃないのに・・・！
「・だ・・だめ・・だってわたし・・・」
・・オレの制止も聞かず・・純平が・・パンツの上からオレの股間に指をあてた・・・
「あっ！」
・・女じゃないのバレてしまう！・・・でも純平はオレのモノに気づかないのか、オレのアソコをさわり続けている・・・
「・・ど・・どうして・・・」
・・純平の手がパンツの中に入ってくる・・・ダメ！・・・いくら何でも直にさわられたら・・・！
「あんっ！」
・・その瞬間・・純平の指がオレの中に入ってきて・・・オレは思わず声をあげていた・・・

・・どうして？・・・オレ・・女の子になっちゃったの・・・？

・・それとも・・・本当は女の子だったのかしら・・・？

「・・・有希・・有希・・・」

「・・んぅ・・・」

「有希！・・もう朝だよ・・・」

「え？・・直美・・？」

「有希ってホント寝起きが悪いね・・」

「・・・・・？」

・・・あ・・そうか・・・オレたち修学旅行に来てたんだ・・・

・・なんか・・すっごい変な夢みちゃったな・・・オレが女の子になっちゃうなんて・・・

「今日は最終日だよ。いっぱい楽しもうね！」

「・・・ぁ・・う・・うん・・・」

・・そうだった・・今日で修学旅行も終りなんだ・・・

・・あ～ぁ・・なんかオレ・・この修学旅行でねぼすけのイメージが付いちゃったかなぁ・・・普段はこんなじゃないのに・・・たぶん修学旅行だから疲れてるんだと思うんだけど・・・

・・そうか・・・きっと疲れてたから・・あんな夢も見ちゃったのかも・・・

トイレの個室に入ってジャージのズボンとパンツを下ろす・・・オチンチンをつまもうとして・・・えっ！！・・・オチンチンがない！（！！・・どうなってんの？！・・オレのオチンチンが！！！・・夢が本当に？！）

・・・あっ・・・そうだ・・オレ・・昨日タックしたままだったんだ・・・すっかり忘れてた・・・

・・これのせいで・・女の子になっちゃった夢なんか見たのかなぁ・・・でも・・純平があんなことするなんて・・・なんか思い出しただけで・・顔が熱くなってくる・・・

・・女の子のようになったオレの股間・・あらためて見ると・・不思議な感じだ・・・

・・ちょっと痒い・・・

オシッコする要領は昨日1回やってわかってる・・・だけど・・やっぱり出にくい・・・
オチンチンが圧迫されてるから、いつものようにはいかない・・・少しづつチョロチョロ出てくる感じだ・・・

「有希、先に行ってるわよ！　有希も急ぎなさいよ！」
・・弘子の声・・・
「あ・・うん・・・」
・・オレも早く部屋に戻って着替えなきゃ・・・朝ご飯に遅れちゃ

う・・・！

（・・うぅんんん・・・・）

下っ腹に力を入れるとオシッコが勢い良く出てきた・・・うぅぅ・・

・女の子って大変だなんだなぁ・・・

終って・・急いでトイレットペーパーで“しずく”を拭いて外に出ると、千里が待っててくれた！

「あ、待っててくれたの？・・ごめんね・・遅くなって・・」

「ううん・・有希、便秘なの？」

「え？」

「だって・・小さい声で唸ってたから・・」

・・・ヤバイ！・・・思わず声が出ちゃってたのか・・・女の子のトイレって個室だから・・どうも気を抜いちゃうんだよなぁ・・・気をつけないと・・・

「・・べ・・便秘じゃないんだけど・・ちょっとね・・・」

・・うぅ・・恥ずかしい・・・ウンチしたと思われちゃったかな・・・

・・まあ、女の子は男の子みたいにウンチしたことを、はやしたてたりしないからいいけど・・・何で男の子はウンチしたコに厳しいんだろう・・・

オレはとりあえず念入りに手を洗ってからトイレを出た。

オレたちの部屋に戻っていると・・・！

「あっ・・」

「・・どうしたの有希？　何かトイレに忘れた？」

「・・ううん・・・何でもない・・・」

・・マズイなぁ・・・まだオシッコが残ってたみたい・・・少し漏れちゃった・・・お気に入りのパンツなのに・・染みになっちゃうよ・・・

・・タックしてると最後まで出にくいから・・・外でトイレに行った時もヤバイかも・・・今日はユニバーサル・スタジオ・ジャパンに行くから・・・もしかしたらジェットコースターみたいなのに乗るハメになるかも知れないし・・・絶対にナプキンしてた方が良さそうだ・・・

――――――――――――――
――――――――――――――
――――――――――

「うわぁ・・・ここがＵＳＪかぁ・・・あ！　セサミストリートのキャラクターだ！」

青いクッキーモンスターがおどけてオレに抱きついてきた！

「きゃぁ～　アハハ・・可愛い！」

・・でも・・黄色いビッグバードはデカくて・・ちょっとコワいなぁ・・・

「有希、のんびりしてると少ししか乗れないわよ！」

「あ・・うん！」

・・そうだった・・弘子に言われて思い出した・・・ＵＳＪはいっぱいアトラクションがあるから、上手に回らないといけないんだっけ・・・せっかく安部っちがうまく回る順番を考えて来てくれたんだから・・・

今日は平日だからそんなに混んでないけど・・それでも時間を有効に使わないといけないって、昨日みんなと話したんだった・・・何せ夕方にはオレたちは新幹線に乗らなきゃいけないんだから・・・・

・・今日も泊まりだったら良かったのに・・・
「有希、さっきのクッキーモンスターに入ってる人、男の人かもよ！」
「・・・・！」
「有希が可愛いから抱きついたんじゃない？」
「そ・・そんなことないって・・・」
・・たとえそうだとしても・・・こういうとこではソレは言わない約束だ！
・・だって・・そんなこと考えたら・・・恥ずかしくなってくるじゃない・・・

――――――――――――――――
――――――――――――――――
――――――――――――

最初にオレたちが乗ったのは「ジュラシック・パーク・ザ・ライド」だ。
うっそうとした雰囲気の熱帯雨林が再現されてて・・・本当に映画の「ジュラシック・パーク」の世界に入ったみたい・・・ボートに乗って恐竜探検ツアーへ出発だ！
水面から見上げる恐竜は大きくて・・まるで本物みたい・・・ボートが進むにつれて、いろんな恐竜が現れてくる・・・
・・ジュラシック・パークはまだオレが男の子だったころ、友達の鈴木の家で観たことがある・・・鈴木は映画が好きだったから、良

くビデオやＤＶＤを借りて鈴木の家でいっしょに観たものだ（時々はお父さんが隠してたＡＶも観たけど・・・）・・・映画館にも何度かいっしょに行ったこともある・・・

・・そういえば女の子になってからは、映画のＤＶＤもあまり観てないし・・・映画館なんて１回も行ってない・・・いろいろ忙しくて、そんな余裕なかったもんなぁ・・・

「ぎゃあぁぁ・・・！！！」

・・物思いにふけってたら・・いきなりＴレックスが襲いかかってきて・・思わず絶叫してしまった・・・

・・出口が見えてきた・・もう終り？・・・そう思った瞬間、乗ってたボートがピタッと止まった・・・

「ぎゃあぁぁ・・・！！！」

ものすごい角度で滑り落ちて、みんなで大絶叫！！

・・気づいた時にはみんなびしょ濡れだった・・・

・・どうしよう・・こんなに濡れちゃって・・・今日はそんなに寒くないのが救いだ・・・

「あっ！　みてみて！　有希すごい顔！」

ヒドイ！・・落ちる瞬間の顔が写されてるなんて！・・・オレ・・大口開けて叫んでる・・・

「あ！　でもみんなも同じじゃない！」

ヒドイ顔なのはオレだけじゃなかった！　みんなすごい顔で写されてる！

「アハハハ・・ほんとだ！」

オレたちは可笑しくて、みんなで笑った。

―――――――――――――――

―――――――――――――――

――――――――――

「さぁ出発進行！　皆さん手を振って行きましょう。行ってきまーす！」

こんどのアトラクションは「ジョーズ」だ。

「こんにちは皆さん、アミティハーバーツアーへようこそ。今回は私が皆様のツアーガイドをさせていただきます。どうぞよろしくお願いします！」

“パチパチ・・・”みんな拍手・・・ジョーズなのに、なんか楽し気な雰囲気だ・・・

「皆さんご存知でしょうか１９７５年ここアミティに巨大なサメが現われ人々は次々と襲われました。その話を元にあのスティーブン・スピルバーグ監督がＪＡＷＳと言う映画を作りこの村は一躍有名になりました。今でもボートにはライフルを設置することが義務付けられていますが今はサメが出ることはありません。楽しく行きましょう。ところで皆さんこのツアーに・・・」

・・そこで突然・・無線が鳴り出した・・・！

「ザー！緊急事態発生！こちらアミティ３救援を頼む。何かがボートの下に・・・襲ってきた・・・ギャー！」

・・なんか芝居がかってるなぁ・・ちょっと笑っちゃう・・・

「・・まぁ大丈夫我々はこのままツアーを続けて行きたいと・・・・
・・・アミティ6から本部へアミティ3が沈没している場所は灯台の近く。まさか…サメ！サメを発見！」

・・ジョーズの背びれがこっちに向ってくる・・・！

「サメだってボートの下に潜った！」

「落ち着け、ライフルを使うんだ！」
ジョーズをライフルで撃とうとすると、どこかに行ってしまった・・
・

・・でもまたすぐに背びれが・・・
「アイツだ～早く逃げないと。そうだボートハウスに避難しましょう。・・・あれ？エンジンがかからないどうなってんだこのポンコツ動け？！」

すると無線が・・・
「アミティ6こちらブロディ所長後10分で到着する」
「後10分？それじゃ皆サメの餌ですよ・・・わー！！」

“キャ～！！”　急にジョーズが水面から出て来た！クルーがライフルをかまえて・・・
“バン！”
「あ？！　すみません間違えてガソリンポンプ撃っちゃいました。次の爆発が来る前に一か八かあの炎を突っ切ります皆さんつかまっててください」

“キャ～！”　ボートが急発進！してオレたちはお互いに抱ついた・・・なんでガソリンポンプなんか撃っちゃうんだよぉ！

「なんとか炎もおさまった。陸に上がればもう大丈夫です。ですがあの高圧ケーブルには触らないでください。触ったら感電死してしまいます」

・・するとまたジョーズが襲ってきた！

「また来たどうしよう。そうだ！あの高圧ケーブルにひっかけ感電させよう！」

・・高圧ケーブルが当ったジョーズは水の中に沈んでしまった・・・

「何処だー！何処に隠れた・・・わー！見て皆さん真っ黒焦げだー！」

・・・あ～ぁ・・ジョーズが真っ黒に焼けてる・・・

「こちらブロディ所長だ。全員無事か？」

「はい！全員無事です。皆さんなんとかあのサメやっつけました。これも勇気ある皆さんのおかげです。でもさっき見た大きいお魚さんのことは誰にも言わないで下さい。こんなこと知られたらアミティにだれも遊びに来ませんからね！」

「アハハ・・・緊迫感あるけど、なんかマヌケで面白かったね！」

直美に言われて、オレも同感だった。

「うん、ジョーズだからもっとコワイと思ったんだけど。」

「有希たち平気だったの？　わたし結構コワかったわよ！」

・・千里は女の子だなぁ・・・あのくらいでコワイなんて・・可愛い！

でもこんなのやると・・オレも「ジョーズ」って映画を観てみたくなっちゃった！・・・「ジョーズ」は昔の映画だから観たことなかったから・・・

「あ！　あれバックに写真撮ろうよ！」
オレたちはシッポを上にして吊り下げられたジョーズの前でみんなで記念撮影をした。

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

「ねえ、安部っち、次は何だっけ？」
「次はねぇ・・ウォーターワールド！」

・・「ウォーターワールド」って・・・たしかケビン・コスナーだったっけ・・・観たような気もするけど・・あまり憶えてないなぁ・・・

「あ！・・長谷川さん・・井川さんも？」
「ウォーターワールド」に向って歩いてたら、長谷川と井川さんにバッタリ会ってしまった・・・
「有希・・・」
・・長谷川のヤツ・・こんなとこで会ったのイヤそうだな・・・

「・・あ・・あの・・長谷川さんたち・・何か乗ったの？」

「ううん、ただ二人で歩いてただけ。」
答えたのは井川さんだった・・・
「戸田さんたちは？」
「わたしたちは「ジュラシック・パーク」と「ジョーズ」に乗ったよ！　これから「ウォーターワールド」に行くとこ・・・井川さんたちも別に予定がないんなら・・一緒に行かない？」
・・長谷川に言っても来なさそうだから・・オレは井川さんに言った・・・

「いいの？」
「いいわよ、ねえ弘子。」
「もちろん、大人数の方が面白いし。クラスが違ってもイヤじゃなかったらだけど？」
「イヤじゃないわよ、わたしたちあぶれてたんだから・・・ねぇ長谷川さん！戸田さんたちと一緒させてもらいましょう？」
「・・わ・・わたしはどっちでもいいけど・・・」

・・結局、長谷川もこの場の雰囲気に負けて、オレたちと一緒に回ることになった！

・・普段なら長谷川とオレたちが一緒なんて考えられないけど・・・井川さんもいるし・・何よりここはＵＳＪなんだから、みんなで楽しまなきゃ損ってものだ！

「ウォーターワールド」は観てるオレたちの前を水上バイクとかモーターボートが走りまわり、あちこちで爆破や銃撃戦！すごい迫力だ！　美女を救い出すストーリーは、女の子のオレたちでもワクワクする！・・長谷川と井川さんも楽しそう・・・

最後は大爆発の中を水上飛行機が、オレたちに向って飛び出してきてビックリした！

その後もオレたちは、安部っちが調べてくれてた順序で「バックトゥ・ザ・フューチャー」「スパイダーマン」のアトラクションに乗ったり、みんなでチュロスも食べて大満足だった！

今日はＵＳＪで、弘子、千里、直美、安部っち・・それに長谷川と井川さんまで・・・みんなで楽しめてホント良かった！

・・それに・・・ちょっぴり心配してたお漏らしもしなくて済んだし・・・

・・もしかしたら・・タックで窮屈になってるから出にくかっただけかも知れないけど・・・

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー
ー　ー
ー

でも・・こんな映画の中に入るような体験すると・・・楽しみながらも・・どうしても映画好きだった鈴木のことを思い出して仕方がなかった・・・

・・・鈴木のヤツどうしてるかなぁ・・・オレが携帯を替えてから音信不通になっちゃったから・・・

・・もっとも・・携帯替えなかったとしても・・・この声じゃ電話なんて出来ないけど・・・

・・オレはもう・・男の子のころどんな声で話してたか忘れちゃったもん・・・

・・アイツ・・・何の連絡もしないオレのこと・・・冷たいヤツだって恨んでるかも知れないな・・・

第１２９話　修学旅行９　新幹線

「集合!!　みんな戻った～?　各クラスの学級委員、全員いるか確認できたら報告して!」

「山口先生!　原口さんたちがいません!」
「・・原口さんたちって、他には?」
「岡本さんと、戸田さんと、佐倉さんと・・・あと安部さんもいません!」
「・・その組み合わせだと・・たぶん一緒ね。」

「山口先生!　２組は井川さんがいません!」
「１組は長谷川さんがまだです!」
「井川さんと長谷川さん?　集合時間に遅れるようなコじゃないのに・・誰か携帯にかけてみてくれる?」

「・・・先生～!　原口さんたち今こっちに走ってるそうです!
あ、長谷川さんと井川さんも一緒って言ってま～す!」
「じゃぁ、早く戻ってくるように言って!　急がないと新幹線に間に合わないわよ!」

「あっ!　来た来た!　早く～!!」
・・!・・・やっと出口が見えてきた・・・みんなが呼んでる・・!
「・・ハァハァ・・井川さん・・・急いで・・・・」
オレもけっこう体力ないけど・・・井川さんはもっとないみたい・・
・もうフラフラだ・・・

オレは井川さんの手を握って、励ましながら必死に走った・・・

・・こんなことになったのは、安部っちがキッチリしすぎてるから
だ・・・もう時間がないっていうのに全部行かなきゃイヤだってぃ
うから・・・まあ・・オレも乗りたいって言ったんだけど・・・
・・・だってＵＳＪに来て「スパイダーマン」に行かないなんてあ
り得ないもん！・・・それってＴＤＬに行ってミッキーを見ないよ
うなもんだ・・・

―――――――――――――――
―――――――――――――――
――――――――――

オレたちはバスの座席に座ってやっと一息ついた・・・
「はぁ・・何とか間に合って良かったね。」
「もう、有希ったらのんきなんだから・・・新幹線に乗り遅れたら
どうするつもりだったのよ。」
・・そんなぁ・・千里・・・オレのせいみたいに・・・
「・・まあ・・でも間に合ったんだし・・・ねえ直美！」
「そうよ千里、もう過ぎたことなんだから気にしないの！」
「わたしたちはいいけど・・長谷川さんたち、みんなに悪そうにし
てたじゃない。」
「・・そ・・そうだった・・？」
・・オレ、間に合って良かったって思っただけで、長谷川たちのこ
とまで気にしてなかった・・・たしかにオレたちは５人で遅れたか
ら仲間がいるけど・・長谷川たちはクラスで１人だけ遅れちゃった
んだもんなぁ・・・クラスのみんなに責められるかも・・後で長谷
川と井川さんに謝っておかなくちゃ・・・

「はい、みんな聞いて！　新幹線は貸しきりじゃなくて普通のお客さんも乗ってるんだから騒いじゃダメよ！　まだ気を抜かないの、家に帰るまでが修学旅行ですからね！」
「はぁ～い！」
・・・そんなこと先生に言われなくたってわかってる・・・小学生じゃないんだから・・・
「あなた達は白鴻女学園の生徒として最後の修学旅行なんですから、最後まで恥ずかしくない行動をとって下さい！」
・・・そっか・・・来年からオレたちの学校は女学校じゃなくなるんだ・・・来年のミサトちゃんたちまでは修学旅行も女の子ばかりだけど・・・名前からはもう女という文字が消えて白鴻学園になってしまう・・・

「ねえ千里・・来年はどれくらいの男の子が入学してくると思う？」
「さぁ・・わからないけど・・いきなり半数は無いんじゃない？」
・・そうだよなぁ・・急に共学にするって言ったって、元女子校に入学したいなんて男の子はあまりいないと思う・・・オレだって勉強が出来ればウチの学校には入学してないんだもん・・・
「じゃぁさ・・男の子の入学が少なかったらどうするのかな？　クラスに何人かづつ？　それとも男の子は1クラスにまとめるのかなぁ・・・」
「そんなのわたしに聞かれても判らないわよ。」
「・・そ・・そうよね・・・」
・・こういうことは・・教頭先生にでも聞いた方がいいのかも知れない・・・

―――――――――――――――
―――――――――――――――

―――――――――

ホームに新幹線が入ってくると・・なんだかワクワクしてきた・・

・

オレは新幹線に乗るのは初めてだ・・・だからどうしたってテンションが上がっちゃう！・・・でもこういうのは男の子の頃に体験したかったな・・・女の子じゃ乗り物にワクワクするコなんて少ないから・・・この気持ちを共有できない・・・

・・ひとりで盛り上がってたらバカみたいだから・・オレもとりあえず気持ちを押さえて、みんなと同じように平静を装った・・・

「弘子、わたし窓際に行っていい？」

「いいわよ。」

・・もうあたりは少し暗くなりはじめてる・・・早く走らないかなぁ・・・いくら速くても景色が見えないんじゃ面白くない・・・

「有希、なんか楽しそうね。」

「だって、新幹線に乗るの初めてなんだもん！」

「へえ、そうなの？」

「・・うん・・」

走り出すと・・やっぱり新幹線は速いと実感した・・・途中の駅なんかあっという間に過ぎてしまう・・ホームにいる人、危なくないのかなぁ・・・新幹線同士がすれ違うときもスゴイ迫力だ！

新幹線に乗ってしばらくすると、なんだかザワザワしだした・・・

・・どうしたんだろうと思って、みんなの声に聞き耳をたてていると・・どうやら芸能人が乗ってるらしい・・そんなので騒ぐなんて恥ずかしいなぁ・・でも誰が乗ってるんだろう?・・ちょっと気になるかも・・・

　すると直美がオレたちの席にやってきた・・・
「ねえ、隣の車両に芸能人が乗ってるみたいよ?　トイレに行ったコが見たんだって!」
「そうみたいね・・」
・・弘子は興味が無いのか、つれない感じだ・・・
「わたしたちも行ってみない?　トイレに行くフリして!」
「イヤよ、行きたいんだったら直美ひとりで行ってくれば?」
「・・いや・・それは・・・」
そりゃ直美だってひとりじゃ恥ずかしいと思う・・・

「有希は?　トイレ行きたくない?」
「ううん・・わたしもいい・・・」
・・オレは股間をタックしてるからか、今日はあまりトイレに行きたくならないのだ・・それに新幹線の中のトイレじゃ、やりにくいかも知れないから・・一応、新幹線に乗る前に駅で行ってきたし・・
・
「・・そう・・じゃわたしもやめとく・・・」
そう言って直美は自分の席に戻っていった・・・オレもそれがいいと思う・・・

　それからまたしばらくすると・・オレたちの後ろの席でコソコソ話す声が聞こえてきた・・・
「ねえねえ、道端純平って知ってる?　隣の車両に乗ってる芸能人って道端純平らしいわよ・・・」

・・！・・純平が?!・・この新幹線に・・?
「道端純平って誰だっけ?」
・・え・・知らないの・・・?
「ほら、山上くんのドラマに出てたじゃない・・後輩役やってたＪＩＮＯＮボーイの・・・」
「あぁ・・なんとなく憶えてるけど・・・」
・・なんとなくか・・・純平もまだまだだなぁ・・・だいぶ有名になってきたと思ったんだけど・・・
・・でも・・オレとしては・・純平があまり有名になりすぎるのもイヤだ・・・だって有名になって・・山上くんみたいな、みんなのアイドルになってしまったら・・・オレのことなんか忘れちゃうかも知れない・・・

・・それにしても・・純平がこの新幹線に乗ってるなんて!・・・なんていう偶然だろう・・・
「・・・有希・・」
弘子が他のコに聞こえないように小さな声で・・・
「・・・会いたいんでしょう?　行ってきたら?」
「!!」
「・・めったに会えないんじゃないの?」
「・・・それは・・そうだけど・・・」
・・でもまわりには他の人もいるだろうし・・・ウチの学校のコに見られてもマズイし・・・

・・修学旅行の間、オレと純平はメールしないことにしていた・・もしも誰かにメールしてるとこを見られたらいけないから・・・だから今日純平がどこにいるのかオレは知らなかった・・・

・・そういえばこのまえ、純平がこんど出演するドラマのＰＲで、まだいつかわからないけど福岡にも来るかも知れないって言ってた・・でもたぶん強行スケジュールだから会えないだろうって・・・それが今日だったのかな？・・・だったら博多駅でチラッと顔を合わせることも出来るかも知れない・・・

・・オレはそれでも十分だ・・・でも・・会えるかな・・・

　オレが本当は会いたい気持ちを隠して座っていると、長谷川がオレたちの席までやってきた・・・

「有希、ちょっと来て・・」

「え？　なに・・？」

「いいから、早く・・」

「・・・・・」

・・なんだろう・・長谷川のヤツ・・・

「有希、行っておいでよ。」

「・うん・・」

・・なんか用があるみたいだし・・・長谷川がオレを呼びに来るなんてあまりないことだし・・・

　オレは長谷川に自動販売機がある出入り口のところに連れていかれた・・・

「長谷川さん・・さっきはゴメンね・・・」

「え？　何が？」

「あの・・集合時間に遅れちゃって・・・クラスのみんなに責められなかった？」

「そんなのどうでもいいのよ！　そんなことより、あんた純平君に

会いたいんでしょう？」
「え？！」
「あんた純平君がこの新幹線に乗ってるの知らないの？」
「・・いや・・後ろでコソコソ話してるのは聞いたけど・・・」
「せっかく同じとこにいるのに、あんた会えなくて平気なの？」
・・・平気なんかじゃない！・・・オレだって会いたいに決まってる・・・
「・・でも・・迷惑かもしれないし・・・それに・・もしかしたら博多駅でチラッとでも会えるかもしれないし・・・」

「あんた何のんきなこと言ってんのよ！　ウチのクラスで握手してもらったコがいてね、どこに行くのか聞いたら広島に行くんだってよ！」
！・・博多まで行くんじゃなかったんだ・・・
「広島はもうすぐよ。急いでメールしなさいよ！」
「え？！　メールって・・何で・・？」
「あんたがココにいること教えてないと、他の出口から出ちゃうかも知れないでしょう？！」
「え・・ココで会うの・・？」
「もちろん話は出来ないと思うけど、会うだけでもいいじゃない！」
「・・うっ・・うん・・・でも・・メールしなくても・・こっちに来るかも知れないし・・・」
「それでもココにいることは知らせておかないと、あんたがいることに気づかないかも知れないでしょう？　まさかこんなとこにいると思わないだろうから。」
・・うぅ・・たしかに・・気づかれなかったら悲しいな・・・

「ほら、早く！」
「・・わ・・わかったわよ・・・」
オレは急いで純平にメールを打った・・・電源切ってなきゃいいけ

ど・・・

“　有希です　いま修学旅行の帰りで　純平と同じ新幹線に乗ってます　進行方向のドアの近くにいます　純平の顔だけでも見たい　”

「あんた素っ気ないメール送るわね・・ハートとか付ければいいのに？」

「・・そんな・・・ハートなんて・・・」

・・そんなの・・長谷川が見てるのにムリだよ・・・オレだっていつもは・・もう少し女の子らしいメールだもん・・・

“ブルル・・ブルル・・”

「あっ・・来た！」

“　ビックリした！　こんな偶然あるんだね　もうすぐ降りるから早めにそっちに行くよ　有希に会えるの楽しみだよ　”

「きゃぁ～・・有希に会えるの楽しみだって！！」

「・・・ほら、メールしといて良かったじゃない。」

「う・うん・・」

・・オレだって楽しみだよ純平！・・・でも・・少しだけでもおしゃべり出来たらなぁ・・・

・・さっきまでは、会えるだけでいいって思ってたのに・・・会えるとわかったら・・やっぱりおしゃべりもしたい！・・・オレってこんなに欲張りだったっけ・・・

“　次は～広島です　お降りの方はお忘れ物のないように・・・”

“ウィ～ン”
自動ドアが開いて何人かの後、純平が出て来た！　オ・・オレここにいるよ！

・・オレと目が合ったとたん純平が
「あれ？　きみユウちゃんじゃない？」
「・！・あ・・は・・はぃ・・・」
え！！！・・なんでオレに話かけるの・・！！　マネージャーさんが怪訝な顔してるじゃない！
すると純平はマネージャーさんの方を見て・・・
「憶えてない？　ほら、九州ＪＩＮＯＮで去年のバレンタイン企画のとき一緒だった春日ユウちゃんだよ！」
「ああ！　あの時の・・たしか読者モデルの・・」
「あ・・はい！　読者モデルの春日ユウです！」
オレは慌ててペコリとお辞儀をした・・マネージャーさんには印象良くしとかなきゃ・・だって・・また一緒に撮影したいもん・・印象悪くちゃ呼ばれなくなっちゃう・・・

・・でも・・そっか・・読者モデルの春日ユウなら・・純平と話してもおかしくないんだ・・気づかなかった・・・
「ユウちゃん・・今日は何で制服なの？」
・・純平がしらばっくれて聞くから・・・
「あの・・いま修学旅行の帰りなんです。」
・・オレもしらばっくれて答えた・・・

「修学旅行どこだったの？」
「奈良と京都・・それと今日はＵＳＪに・・」
「楽しかった？」
「はい！」

・・何気ないうわべだけの会話・・・なんか・・ほんとの気持ちを隠してお話するなんて・・ドキドキする！・・・純平も同じ気持ちだろうか・・・

・・でも・・ほんとの気持ちは言わなくても・・目を見つめただけで・・気持ちが通じてる気がするから不思議だ！！

新幹線が駅に着いてスピードを落していく・・・もうすぐ純平ともお別れだ・・・あぁ・・もう少しこのままでいられたら・・・

・・そのとき純平が・・・
「それじゃ！　また一緒に撮影出来たらいいね！」
そう言って純平が右手を差し出した！
「ぁ・・は・・はい！！」
・・オレは慌てて汗ばんだ手をスカートで拭いて・・純平の手を両手で握った！

・・オレが手を離すと・・純平は開いたドアからホームに降りて行った・・・・

・・乗客が乗ってきて・・純平の姿が見えなくなる・・・

・・乗って来た乗客が自分の席に行き・・新幹線が走りだすと・・ここいるのはオレたちだけになった・・・

「・・はぁぁ・・・ドキドキした・・・」
「もうっ・・・ドキドキしたのはこっちの方よ！　まさか話しかけてくるなんて思わないじゃない・・・」

「・う・うん・・」
「でも、あんた本当に純平君のことが好きなのね。なんか見つめあっちゃって、二人だけの世界って感じだったわよ。」
「そ・・そんなぁ・・・」
・・そんなこと言われたら・・オレ真っ赤になっちゃうよぉ！・・・っていうか・・すでに真っ赤だと思う・・・顔が熱い・・・

座席に戻ると弘子が・・・
「どうだった？上手く会えた？」
「う・うん・・話も出来た・・少しだけど・・・」
「そう！　良かったじゃない。」
「うん・・」
・・ホント良かった・・・
「・・広島までだったから・・もう降りちゃったけど・・・」
「長谷川さんに、ちゃんとお礼言った？」
「あっ・・」
・・そういえば・・・オレ・・お礼言うの忘れてた・・・だってドキドキしすぎて・・頭がボーッとしてたんだもん・・・
「・・後でお礼言わなきゃ・・・」
・・だって・・純平とお話し出来たのは長谷川のおかげだ・・・それに長谷川がいなきゃ・・会うことも出来なかったハズだ・・・

――――――――――――――――――――――――――――――――――

博多駅に着くとオレは長谷川の元へ駆け寄った・・・
「長谷川さん・・あ、あの・・ありがとう・・・わたし嬉しかった・・」
「いいわよ、お礼なんて・・・わたしも道端くんに会えたしね！」
「え?!・・まさか・・長谷川さんも・・純平のこと・・・?」
「バカね、違うわよ。　わたしは仮面レンジャーファンだから！」
「あっ・・そ・・そっか・・・」
・・・ビックリした・・・長谷川も純平のこと好きだったら・・どうしようかと思った・・・

「それじゃここで解散するけど、それぞれまっすぐ家に帰ること！　寄り道しちゃダメよ、わかった?!」
「は〜い！」

修学旅行はここで終り・・・博多駅で解散だ。　福岡に住んでるコも多いから、学校まで戻ると時間がムダになっちゃうから・・・

「有希、途中まで一緒に帰ろう！」
直美がオレの腕に抱きついてきた・・・
「あ・・ごめん・・わたしちょっと寄らなきゃいけない所があって・・・」
「え〜！　寄り道しちゃいけないのよぉ！」
「そ・・そうだけど・・・どうしても・・・」
・・そうだ！　良いイイワケ思いついた！
「かあさんが車で迎えに来てくれることになってるの・・・」
「え?　有希のお母さん来てるの?」
「あっ・・たぶんまだだと思う・・少し遅れるって言ってたから・・・」
「そうか・・それじゃ仕方ないね。」

・・ふう・・・なんとか誤魔化せたみたいだ・・・

「じゃあね有希、また来週～！」
「じゃぁね～・・バイバ～イ！」
オレは弘子たちと別れると、白石先生に描いてもらった地図を見ながら駅の裏手に向った・・・

「ここらへんかなぁ・・・」
立体駐車場って言ってたけど・・・
「有希ちゃ～ん！こっちよ！」
「あっ、先生・・」
オレは手を振る先生の元へ走っていった・・・
「ちょっと解りにくかった？」
「い・いえ・・そんなことないです・・・ここらへん来たことなかったから・・」
「それじゃ行きましょうか、ちょっと待ってね車降ろすから。」
「はい。」

・・降りてきた車は真っ赤な小さめの車だった・・・
「！・・これ先生の車ですか？」
「そうよ。」
「かわいい！！・・これ・・何ていう車なんですか？」
「スズキのスイフトスポーツっていうの。結構気に入ってるのよ。」
「ほんと・・ステキです・・・」
・・先生にすごく合ってると思う・・・だって白石先生もステキだもん！

ハッチバックを開けてもらい荷物を入れて、オレは先生のとなりの助手席に座った・・・これから先生と一緒に学校へ戻るのだ・・・

タックを外してもらわなきゃいけないから・・・

「あれ？・・・でも先生・・どうしてあそこに車留めてたんですか？」

・・だって・・先生もオレたちと一緒にフェリーで行ったのに・・・

「昼間のうちに母に持って来てもらったのよ。荷物もあるし電車だと大変でしょう？　車なら帰りも有希ちゃんを家まで送れるし。」

「え？　そんな・・いいです、わたし電車で・・・」

「いいじゃない遠慮しなくても。それとも、先生とドライブなんてイヤ？」

「そ・・そんなことないです！　先生とドライブしたいです！」

・・だってオレ・・白石先生のこと大好きだもん・・・大好きな先生とドライブ出来てイヤなハズがない！

「先生、学校には車で来ないんですか？」

「家が近くだからね。歩いた方が健康にもいいでしょう？」

「・・そうですね・・・」

・・先生の家って学校の近くだったんだ・・・そういえばオレ・・先生の個人的なことって全然知らないなぁ・・・

「・・さっき先生・・お母さんに車持って来てもらったって言ってたけど・・・先生ってご両親と住んでるんですか？」

「ええ、ウチも内科の病院なのよ。元々は父が白鴻会長と知り合いだったから、頼まれて白鴻の指定医をやってたんだけど、女子校だから女の先生の方がいいだろうってことで私が学校医をすることになったの。」

「へぇ～・・そうだったんですか・・」

・・そりゃぁ・・女の子はたとえお医者さんでも、男の人に裸なんか見られるのは恥ずかしくてイヤだ・・・女の先生の方が、ぜったい安心出来ると思う・・・

「わたしも学校医が先生で良かったです。もし男の先生だったら女の子のこととか相談できないし・・・」
「でも、私じゃ男の子のことは相談に乗れないけど？」
「そんなのいいんです！　男の子のことはわたし自分でわかってるし・・・」
「そうね、だったら有希ちゃんはきっと素敵な女性になれるわね。」
「え？！・・どうしてですか・・？」
「だって普通の女の子は、男の子の気持ちなんて良くわからないじゃない？　でも有希ちゃんは女の子の気持ちも男の子の気持ちも解るんだから。」
・・そっか・・そういう考え方もあるんだ・・・
・・もっとも・・オレも男の子のことは、中学で体験したことまでしかわからないけど・・・大人の男の人の気持ちまでは良くわからない・・・

　オレはこれまで白石先生とは学校でしか会ったことなかったから、質素なブラウスに地味めのスカート・・そしてその上に白衣を着ているという印象しかなかった・・・でも今回、修学旅行に一緒に行って、パンツスタイルやカジュアルな恰好の先生を見て、これまでよりもっと親近感が湧いてきた・・・

・・いま、となりでハンドルを握る白石先生も、なんか大人の女性って感じでカッコイイ！

・・オレも先生のような素敵な女性になれたらいいなぁ・・・

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーー

　学校に着いた時にはもう8時になろうとしていた・・・オレたちはこんなとこでもし教頭先生なんかに会ったら面倒なので、すぐに保健室に入って鍵を閉めた・・・

「それじゃ制服脱いでね、汚れるといけないから。」
「はい。」
オレはセーラー服を脱いで下着だけになった・・・上はキャミソールだ・・・

　先生は準備が出来ると言った・・・
「じゃぁ、パンツも脱いで。」
・・オレがパンツを脱ぐと・・・
「あら？　赤くなってるじゃない！　痒くなかった？」
「あ・・ちょっと・・痒かったです・・・」

・・実は新幹線で純平と別れたころから、かなり痒くなっていた・・・でも女の子がスカートの上から股間を掻くなんて出来ないから、時々こっそりとポケットに手を入れて掻いていたのだ・・・
「かぶれちゃってるじゃない・・少し汁も出てるわ。痒かったら言いなさいって言ってたじゃない！」
「・・うぅ・・ごめんなさい・・・」
「しょうがないわね・・・接着剤を溶かすリムーバーが滲みるかも知れないけど、少しの間我慢しなさい。」
「・・はぃ・・・」

先生が脱脂綿に染み込ませた液体をオレの股間に当てた瞬間、オレ

は痛さで飛び上がりそうになった・・・
「滲みるでしょう?」
「・・はぃ・・・」
・・すごく滲みるのを我慢してると、割れ目みたいになっていたオレの股間が少しづつ開いてきた・・・開きは少しづつ大きくなり、隠れていたオチンチンが見えてくる・・・

・・先生はオチンチンの脇にも脱脂綿を押しつけて接着剤を剥がしていく・・・接着剤と一緒に皮が剥けないように慎重にやるから引っ付ける時より時間がかかる・・・

・・両側から寄せていた袋の部分が外れ・・股間と引っ付いていたオチンチンの裏側の接着剤が溶けると・・・オレの股間にオチンチンが戻ってきた・・・

・・股間に“ぷるん”とオチンチンが飛び出した瞬間・・オレはひどく違和感を感じてしまった・・・

これまでオレは、女の子みたいな身体にオチンチンが付いているのを鏡で見た時なんかに、違和感を感じることはあったけど・・・オチンチン自体に違和感を感じたことは無かった・・・だってオレにはずっとオチンチンがあったから・・あるのが当り前だったし・・・

・・でも・・一度股間からオチンチンがなくなった感じを経験したからなのか、オチンチンが戻ったことにガッカリしてしまった・・・

・・もうオチンチンなんて無くていいのに・・・

・・オレはオチンチンを取って、股間を女の子みたいにしてしまう人の気持ちが解らなかったけど・・・今なら解るような気がする・・・

「はい、もと通り！　接着剤もキレイに拭き取って、ちゃんと消毒したからもう大丈夫。」
「・・・・・」
「あ、でも掻いちゃダメよ!掻くとヒドくなっちゃうかも知れないから。」
「・・はぃ・・・」
「ん？　どうかした？」
「あ、い・・いぇ・・何でもありません・・・」
・・・こんな気持ち・・・恥ずかしくて・・・先生にだって言えない・・・

オレはまたセーラー服を着て、先生の車で家まで送ってもらった・・・
「どうしたの有希ちゃん、急に静かになって・・」
「あ・・いぇ・・なんか疲れちゃったみたい・・・」
「だったら寝てていいわよ。近くについたら起こしてあげるから。」
「・・ぁ・・はぃ・・・」
・・オレは先生の言葉に甘えて・・家の近くまで寝たふりをしていた・・・

・・オレはなんだか自分が恥ずかしくて仕方がなかった・・・

・・オレはニューハーフじゃないのに・・・オチンチンなんか無くてもいいなんて思うの・・絶対ヘンだ・・・

・・でも・・・女の子になるって・・・もしかしたら・・そういうことなのだろうか・・・？

・・・オレもいつかは・・・そういうこと・・するのだろうか・・・

・・そしていつか・・・男の子と・・あの夢みたいなことを・・・・？

―――――――――――――――

―――――――――――――――

――――――――――

ATから

二か月にわたってお送りした修学旅行編、お楽しみいただけたでしょうか？

感想への返事でも少し書きましたが、この話は現在「起承転結」でいえば「承」が終わったところです。

次回の7章から「転」に入りますので、話は大きく動き出すハズで

す。

それについては、いろいろ問題も多くて、ずいぶん考えたのですが、やはり最初に考えたストーリーを変えるべきではないし、どんな形になっても完全なものをお送りするべきだという結論に達しました。

今は何のことかわからないと思いますが、とりあえずそういうことですので、今後ともよろしくお願いいたします。

7章　第130話　自信　オレはほとんど女の子?!

今日は久しぶりに博多湾に面した港の近くの倉庫街にある、進藤さんのスタジオでの撮影だ。
修学旅行の翌日だからちょっと疲れてるけど、もう雑誌は新年の特集だから休むワケにはいかない。雑誌の撮影は2か月以上早いのが普通だから、ちょっと遅れぎみなのだ。

蟹原さんと一緒の撮影も久しぶりで・・・緊張するけど嬉しい・・・

「ユウちゃん、もうちょっと蟹ちゃんに寄り添って・・そうそう・・で、ハジけた感じ！　そうそう！」
オレは進藤さんの指示に合わせて蟹原さんの肩につかまって体を寄せ、片足を“ピョン”と跳ね上げた。
進藤さんに写してもらうようになって長いから、簡単な指示でもどういうことをすればいいのか、だいたいわかるようになってきた。

オレは読者モデルだから、本当のモデルさんとの撮影の時はあんがい出番は多くない。オレたち読者モデルはオマケだから、時々混じって撮影するだけでいいのだ。だからオレの出番じゃない時はモデルさんたちの撮影を見学してポーズの勉強をさせてもらう。東京から来たモデルさんたちはホント洗練されてて、福岡のモデルさんともまた違う・・・ポーズも自然ですごく上手だから、お手本としてはこれ以上ないって感じだ。

ひとつの衣装の撮影でも、次々にいろんなポーズをとっていく・・・ひとつポーズをとるたびにシャッターが切られてストロボが光る・・

・撮影ってなんだか独特の空間だ・・・

・・ストロボがバシバシ焚〈た〉かれる中で撮影してると・・なんだか不思議な気分になってきて・・オレもいつのまにかモデル気分になってしまい、いろんなポーズをとってしまう・・・その時は頭がボーッとしてしまって・・あまり憶えてないから、後で写した写真を見ると恥ずかしくなってしまう・・・

蟹原さんたち本物のモデルはオレなんかと違って、後で恥ずかしくなったりしないんだと思っていたけど、蟹原さんも少しはそんな感じもあるらしいと知って驚いた・・・やっぱり本物のモデルさんにとってもスタジオ撮影は独特な感じなのだろう・・・でもこうして撮影してる蟹原さんを見てると、すごくキレイで、可愛くて・・・後で恥ずかしくなることがあるなんて、とても信じられないくらいだ・・・

蟹原さんはキレイでカッコイイ人だけど、すごく気さくで優しい人だ・・・それに蟹原さんもオレと同じ九州の出身だから、オレと話していると時々地元の方言が出たりして親近感を持ってしまう・・・まぁ、オレが勝手にそう思ってるだけなんだけど・・・

本物のモデルさんとの撮影は結構大変だ・・・みんな背が高いうえにヒールが高い靴を履いてるから、オレもかなり高いヒールのを履かなきゃいけない・・・ヒールが高いと足が長くキレイに見えるのは確かだけど、ヒザをしっかり伸ばすだけでも大変なのに・・・それでいて背筋を伸ばしてキレイに立たなきゃいけないから、長い時間立っているとふくらはぎがつりそうになるし、指に全体重がかかってすごく痛くなる・・・だから撮影の後は外反母趾にならないように、蟹原さんにいただいた外反母趾対策のサポーターみたいな

やつを付けて寝るようにしている・・・

「お疲れさまユウちゃん！」

蟹原さん・・！

「あ、お疲れさまです・・・」

「ユウちゃん、ちょっと見ないあいだに大人っぽくなったんじゃない？」

「そ・・そんなことないです！」

・・オレが・・大人っぽいだなんて・・・

「クリスマスコレクション、ユウちゃんも出るんでしょう？」

「クリスマス・・コレクション・・・？」

「九州ガールズコレクションのことよ。ユウちゃんも出るんじゃないの？」

「・・い・・いぇ・・・知らないです・・・」

・・何だろう・・・九州ガールズコレクションって・・・ファッションショーかな？・・・だったらオレなんか出るハズない・・・

「な～んだ、てっきりユウちゃんも出るんだと思って楽しみにしとったとに・・」

「わ・・わたしなんて・・まだまだです・・・」

・・・だってオレはただの読者モデル・・・素人だもん・・・蟹原さんと同じ舞台に立つなんて・・そんなことあるハズがないのだ・・・

「それじゃねユウちゃん。また一緒に撮影しようね！」

「はい！」

蟹原さんたちは福岡での撮影が終るとすぐに、また東京へと戻っていく・・・人気モデルって大変だなぁ・・・

「ユウちゃんお疲れさん、はいコレあげるよ。」
「あ、進藤さん・・ありがとうございます！」
オレはカメラマンの進藤さんが差し出した缶コーヒーを両手で受けとった・・・あったかい！・・・スタジオは天井が高いから、なかなか暖房もきかなくて冬はけっこう寒いのだ・・・撮影中は忙しくて気が張ってるからそんなでもないけど、終ってしばらくすると寒くなってくる・・・
今は１１月のはじめだからまだいいけど、今日は少し寒いからあったかい缶コーヒーを飲むとホッと落ちつく・・・

「ユウちゃんたち昨日まで修学旅行だったんだろう？」
「はい。」
「どうだった？楽しかった？」
「あ、はい。すごく楽しかったです！」
・・それに・・昨日は純平にも会えて・・少しお話も出来たし・・・本当はもっとお話したかったけど・・そんな贅沢は言ってられない・・・純平もだんだん有名になってきて忙しいんだから・・・

「写真は写した？　写したなら見せてよ。」
「あっ・・はい・・」
オレは急いでバッグからカメラを取り出した。写した写真を進藤さんに見せるのは、このデジカメをもらった時からの約束だから、オレはこれまでも時々進藤さんに写真を見てもらっている。（６６話参照）
「ユウちゃんの写真もだいぶ良くなってきたね。これなんか面白いよ。」
「あ、銀閣寺・・」

「ユウちゃんは独特のアングルだからね、なかなか向月台ごしには撮らないよ。」
「あ・・なんか珍しかったから・・・」
・・うぅ・・なんか・・独特なんて言われると・・恥ずかしいなぁ・・・

「おっ！　舞妓さんじゃない！」
「あ・・でも・・その人、本物の舞妓さんじゃないんですよ。」
「そうなんだ？」
「わたしも本物の舞妓さんだと思って写させてもらったんですけど、実は観光客の人が舞妓さん体験してたんです。」
「へ～・・　あれ？　この舞妓さんはユウちゃんが撮ったんじゃないね。アングルが全然違う・・・」
「あっ！・・それは・・・」
・・それは・・オレの舞妓さん姿・・・兄さんが撮ったヤツだ・・・

「何見てるの？」
「あ・・佐々木さん・・」
「編集長、見てくださいよ。ユウちゃんが写した修学旅行の写真見せてもらってたんだけど、この舞妓さん可愛いでしょう？」
「あら！　ほんとね。舞妓さんなんてテレビでしか観たことないけど、こんなに可愛い舞妓さんじゃなかったわよ。」
「・・・・・」
「あれ？　でもこのコ・・ユウちゃんに似てない？」
「！！」
・・バレちゃった・・・？！
「あ、そういえば・・たしかに似てるね・・これユウちゃんなの？」
「・・うぅ・・はぃ・・・わたしです・・」
「やっぱり！　どうりで可愛いはずだわ！」
「・・そ・・そんな・・・」

・・可愛いって言われるのは嬉しいけど・・・舞妓さん姿は恥ずかしすぎる・・・
・・それに・・・こんな写真を撮ってるなんて・・・ノリノリでやったと思われそうだ・・・

「だからユウちゃんが写したんじゃないんだね。これは誰が写したの？」
進藤さん・・やけに聞いてくるなぁ・・・もう許してよ・・・
「あ・・兄さんが・・・」
「え？　なんで？修学旅行にお兄さんも一緒なの？」
「あ・・兄さんは京都に住んでるんです・・だから自由行動の日に・・・」
「そういうことか・・もうひとりの舞妓さんは友達？」
「・・その人は・・長谷川さん・・時々わたしが撮った写真に写ってるんですけど・・・」
「あぁ、あのコか、舞妓姿だとずいぶん違って見えるね。」
「はい・・孫にも衣装なんです・・・」（注）

「長谷川さんのはカツラだけど、わたしのは自分の髪を結ってもらったんです！」
「なるほど、良く見るとやっぱりユウちゃんの方が自然だね。」
「はい。」
・・せっかく自分の髪で結ったんだから、これは言っておかなくちゃ・・・

「あっ！　そうだ・・忘れるところだった！コレ・・修学旅行のおみやげです！」
オレは紙の袋を佐々木さんに渡して・・・
「生八ッ橋ですけど・・編集部のみなさんと食べてください。」

「わぁ、ありがとう。私、生八ッ橋好きなのよ！」
「！・・だったら良かったです。　それと・・進藤さんにも・・・・」
オレはもう1つの包みを進藤さんに渡した・・・
「同じ生八ッ橋ですけど・・・」
「俺にも？　ありがとう、後でスタッフといただくよ。」
「あ・・はぃ・・・」
・・そっか・・スタッフの人もいるんだから・・もう少し多いのを買ってくれれば良かったなぁ・・・
・・オレって・・いつまでたっても気が利かないヤツだ・・・女の子は気が利かなきゃいけないのに・・・

「・・そういえば・・さっき蟹原さんが言ってたんですけど・・・クリスマスコレクションって・・・」
「あ、九州ガールズコレクションのことね。12月6日に若い女の子だけのファッションショーがあるのよ。九州で一番大きなファッションショーになる予定なの！」
「へ～・・そうなんですか・・・」
「でもゴメンね。ユウちゃんはまだ読者モデルだから・・・」
「あ・・いえ・・そういう意味で聞いたんじゃないんです！・・ただ・・どういうのかなって思って・・・」
「佐々木さん、ユウちゃんは結構人気あるんでしょう？　出してあげればいいじゃない！」
「・・そうねぇ・・・」
「あ！・・いぇ・・本当にいいんです！！・・わたしなんかまだまだなんだから・・・」
オレは慌てて否定した・・・

・・オレなんかが出ちゃったら、本物のモデルさんに申し訳ないもん・・・

「でも・・クリスマスコレクションなのに12月6日にやるんですか？」
・・クリスマスコレクションならイブにでもやればいいのに・・・
「クリスマスコレクションは、みんながクリスマスに着ていく服を紹介するイベントだから、早めにやらないと困るでしょう？」
「あ・・そういうことか・・・」
「その場でモデルさんが着てる服を携帯ですぐに買えるのよ！」
「へ～・・そうなんですか・・スゴイ・・・わたしも行こうかなぁ・・」
・・ファッションショーなんて見たことないから、すごく興味がある！

「あ、もしお手伝いすることがあったら言ってくださいね！　わたし何でも手伝いますから！」
「そうとう忙しくなると思うから、その時はお願いするわね。」
「はい！」
・・オレはもちろんファッションショーなんて出れないけど・・少しでもお手伝いできたらすごく嬉しい！

「？・・佐々木さん、それ・・ＪＩＮＯＮの新刊ですか？」
「そうだ！　ユウちゃんに見せようと思って持ってきたんだった。これ見て！」
「えっ！！　こ・・これ・・・」
「そうよ。ユウちゃんが学園祭クイーンになったのを紹介してるの！」
「・・・・・」
・・そんな・・もっと小さく載せると思ってたのに・・・１ページ

も使わなくても・・・

「・・な・・なんか恥ずかしいです・・・」

「そんなに恥ずかしがらなくてもいいじゃない、名誉なことなんだから。」

「・うぅ・・」

「そうだよ、ユウちゃんがダントツで可愛かったんだからね。」

・・そ・・そんなぁ・・・進藤さんまで・・・

・・でも・・さすが進藤さんだ・・・オレなのに・・すごく可愛く撮れてる！　まるでオレじゃないみたい・・・きっと着てるウエディングドレスのせいだと思うけど・・・

「ユウちゃんったら、まるで本物の花嫁さんみたいね。」

「そ・・そんなことは・・・」

・・佐々木さんはオレのこと・・本当は男だって知ってるんだから・・そんなこと言わなくてもいいのに・・・男が花嫁さんになんてなれるハズないんだから・・・

「わ・・わたしなんてまだまだです・・・」

すると進藤さんが・・・

「ユウちゃん、そんなに謙遜するもんじゃないよ。ユウちゃんは九州ＪＩＮＯＮの読者モデルの中でも一番の人気なんだから。もっと自信持たなきゃ！」

「・・・・・」

「ユウちゃんは勉強熱心だし、自分に自信を持てばもっと良くなると思うんだ。」

「・・・・・」

・・進藤さんは・・オレのこと女の子だと思ってるから・・自分に自信を持てなんて簡単にいうけど・・・オレが持たなくちゃいけないのは自分に対する自信だけじゃなくて・・女の子としての自信な

のだ・・・男のオレが女の子として自信を持つなんて・・・そんなに簡単なことじゃない・・・

「そうね、ユウちゃんの問題はそこよね。ユウちゃんは自分に自信を持つことだけ、他はもう十分なんだから。」

「え?!」

・・オレを男だと知ってる佐々木さんが・・そんなこというなんて・・・

「ユウちゃんは十分に可愛い女の子なんだから、後はありのままの自分を受け入れればいいのよ。」

「・・ありのまま・・・?」

「そう、ありのまま。今のままの自分でいいんだって気づくことが大事なの。」

「・・だ・・だって・・わたしまだ・・・」

「ほら、そういうとこ!　ユウちゃんは自分に対する評価が低すぎるのよ。　まあ、もっと高いところを目指してるのは解るけど、今の自分に対するちゃんとした評価が出来ないと、これから自分に必要なところも見えてこないんじゃなかな?」

「・・・・・」

・・オレ・・今のままでいいっていうのだろうか?・・・オレはもっともっと女の子らしくならなきゃいけないと思ってたけど・・・オレ・・女の子として自信を持ってもいいのだろうか・・・?

・・そういえば・・オレは修学旅行のお風呂でも・・みんなと裸で接しても怪しまれなかった・・・

・・オレ・・あの時は修学旅行の雰囲気にのまれてて・・なんとなくあんなことしちゃったけど・・・アレって・・もしかして大変なことしちゃったんじゃないだろうか・・・?

・・・オレって・・・まだオチンチンがあること以外は・・もう女の子だってこと・・・？

・・そんなふうに考えてもいいってことなのかな・・・・

・・オレ・・自信を持って女の子だって言っていいの?!

（注）有希は「馬子にも衣装」を間違って使っています。毎回ですけど（笑）

ＡＴから

今回はお待たせしたのに短くてすみません。
もう私のＨＰのＢＢＳとこちらの活動報告でお知らせしたので、知ってる方も多いかも知れませんが、そういうとこを見てない方もいると思うので、ここでちゃんとお知らせしておきたいと思います。

実は９月１２日に父（８７才）が倒れまして、夜中にトイレに行った時倒れたのですが、その時に頭を打ったらしく硬膜下血腫でした。すぐに手術して血腫はとり除いたものの、１０日経った現在も意識が戻らないまま入院中です。

今のところは何の変化もなく、今後どうなるのかはまったく解らない状況で、今日明日にも死ぬかもしれないし、数週間、あるいは数カ月、もしかしたら数年このままかもしれません。
仮に意識が戻ったとしても、年齢を考えれば死ぬまでリハビリをするだけの生活になるのではないかと思います。

そんな中、現在時間が自由になるのは家族の中で私だけで、しょっちゅう病院に行かなければなりません。別に行って何するワケでもないのですが・・・

ただ、父のことについては私自身そんなに悲しんではいませんので、みなさんもあまり心配しないで下さい。本人も余生をもてあましてる感じでしたし・・・

そういうワケなので、この『オレは女子高生』もなかなかこれまでのようには書けなくなりそうです。でもこの話は私にとって大切な作品になっているので、絶対最後まで書くつもりですので、更新のペースは落ちるかも知れませんが長い目で見ていただければと思います。

それと余談ですが、病院は久留米にあるので、バスセンターなんかに座ってバスを待っていると
（ここで有希と弘子がバスを待ちながらおしゃべりしたのかぁ・・・）とか
（あのミスドで読者モデルのこと話したんだなぁ・・・）などと感慨深いです。
私が知ってる久留米は１５年くらい前なので、だいぶ雰囲気違うですね。今後そんなシーンがあったら、もう少しリアリティーを出せ

るかも知れません。
でも実際はちょっと汚いです（笑）マックも無いみたいです・・・
まあ、あくまで架空の久留米なのでその辺は気にしないでいきましょう！

第１３１話　日常　でも以前とはちょっと違う

月曜日から金曜日までの修学旅行が終って、土曜日はスタジオ撮影・・・おかげで疲れちゃったけど、昨日の日曜日ゆっくりしたから、もうすっかり元気が戻った。女子高生は元気がとりえなのだ。

今日からはまた、いつもの学園生活が戻ってきた。

修学旅行の間はずっとセーラー服だったから、１週間ぶりに着る新しい制服は、なんかヘンな感じがする・・・やっぱり入学以来ずっと着てきたセーラー服は、しばらく着なくてもすぐに慣れるけど・・新しい制服はそうはいかないみたいだ・・・たった１週間着てないだけで、また少し恥ずかしくなちゃった・・・

久留米の駅を降りて学校への道を歩いていると・・・

「わっ！！」

（！）

いきなり後ろから背中を叩かれて驚いた！

「びっくりした？　有希。」

「なんだ直美かぁ・・え？！」

振り向いたオレの目に入ってきたのは思いもしなかった光景だった・・・

「ど・・どうして・・？　弘子まで！！」

「どう？　今日からわたしたちも新しい制服よ！」

「・・でもそんなこと・・ふたりとも言ってなかったじゃない！」

「アハハハ・・・」

ふたりは顔を見合わせて笑ってる・・・

「有希を驚かそうと思って黙ってたのよ。」
弘子が可笑しそうに言った・・・オレふたりにダマされてたのか・・
・でもこれは嬉しい驚きだ！

「だけど、新しい制服に替えたのは、わたしたちだけじゃなかったみたいね。」
弘子にそう言われてまわりに目を向けると・・・学校に近づきほとんどが白鴻の生徒になっているなか・・修学旅行の前はほんのチラホラだった新しい制服を着たコが、今日はかなり多くなってる！
「みんな修学旅行を区切りにしてたんじゃない？」
・・・そっか・・・何か区切りがあると替えやすいかも知れないな・・・
「制服が出来てきたのもみんな同じころなんじゃない？　わたしたちも修学旅行の少し前だったから。」
・・そうなんだ・・・結構みんな新しい制服を申し込んでたんだなぁ・・・

やっぱり新しい制服を買ったのは2年生が多いみたいだ・・・3年生はもう来年卒業だし・・1年生は古くなってないから、まだ買い替える必要ないし・・・

「でも・・こんなに一気に増えるなんて思わなかった・・・」
「これも有希と千里のおかげなんじゃない？　有希たちが素敵に着こなしてたから、みんな早く着たくなったんだと思うわよ！」
「そ・・そんなぁ・・・」
・・ほんとうは今なら学校が半額援助してくれるからだと思うけど・・・

「でも・・ふたりとも似合ってる！」
「ありがとう。有希や千里ほどじゃないけどね。」

「そ・・そんなことないよ！　わたしより似合ってるわよ！」
「もう・・有希ったら、またそんなこと言って！」
直美がいきなりオレの肩に覆いかぶさってきた・・・
「ちょ・・ちょっと・・重いよ直美・・離れてよぅ・・・・」
・・何なんだよ・・直美のヤツ・・・まだ修学旅行気分が抜けてないんじゃないか？！

・・でも・・新しい制服のコが増えるのは大歓迎だ！・・・だってこれまでオレたちだけ目立つみたいで恥ずかしかったし・・・たぶん千里も同じ気持ちだったと思う。

・・だいたい・・オレは目立っちゃいけないハズなんだけどなぁ・・
・学校ぐるみで目立たせちゃってどうしたいんだろう・・・

・・目立ってもバレないオレもどうかと思うけど・・・

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

久しぶりの勉強のせいで放課後になったころにはグッタリ疲れてしまった・・・修学旅行とはまた違う疲れだ・・・

若村先生や、英語の高島先生のおかげで少しは勉強も出来るようになってきたけど・・・オレはやっぱり勉強は苦手だ・・・アタマが痛くなってくる・・・

こんなときは早く部室に行きたくなってしまう・・部室はなんだか落ちつくのだ・・・

部室の戸を開けたとたんオレは驚いた！

「は・・長谷川さん！」

「何よ！　そんなに驚かなくてもいいじゃない。」

・・驚くなったって・・・それは無理な話だ・・・

「だ・・だって・・長谷川さんまで新しい制服にしてるなんて思わなかったんだもん・・・」

・・なんか・・長谷川が着ると・・弘子たちと違って少し違和感がある・・・長谷川はセーラー服の方が似合ってたかも・・・でも・・そんなこと言ったらまた怒られちゃう・・・

「に・・似合ってるわよ・・長谷川さん・・・」

・・でも・・なんかヘンなんだよなぁ・・・どこがヘンなんだろう・・・

そっか！・・長谷川はふだんあまりスカートをはかないから、いまいち着こなせてないんだな・・・まあ、男のオレでも着こなせてるくらいだから、毎日着てればそのうち馴れてくると思うけど・・・

「でも・・スカートはもう少し上にはいた方が可愛いよ！」

「ちょっとやめてよ！」

オレが直してあげようとしたら、長谷川に手を振り払われてしまった・・・

「・・自分でやるからいいわよ・・・」

長谷川はスカートを持ち上げたけど・・・それじゃ上げ過ぎだ・・・

「も・・もうちょっと下の方が・・・」

「もうっ！有希が上げろって言ったんでしょう！」

「そ・・そりゃぁ言ったけど・・・」

・・もう長谷川のことは放っとこう・・・どうせオレの言うことなんか聞いてくれないんだから・・・

「せんぱ～い！　お帰えりなさ～い！！」
「あっ・・ミサトちゃん！？」
・・なんと、ミサトちゃんまで新しい制服だ！！
「ミサトちゃんのセーラー服はまだ新しかったのに・・・どうして？」
「だって！　早く有希先輩と同じ制服着たくて！」
・・そんなぁ・・オレのせい・・・？

「1年でも新しい制服にしたコ、結構いるんですよ！」
「そ・・そうなの・・？」
・・なんか・・責任感じちゃうなぁ・・・まだ新しかったし、着れる大きさだったのに・・・無駄遣いさせちゃって・・おうちの人に恨まれそう・・・

・・でも・・ミサトちゃんも着こなしがイマイチだ・・・なんか・・男の子がスカートはいたみたい・・・

まあ、セーラー服がよほど着こなしやすかったのかも知れないけど・・・セーラー服って体型もそんなに目立たないし・・・まだ身体に凹凸がなかった男のオレでも最初から何とかなったくらいだから・・・

「だけど・・新しい制服って着馴れてないせいか・・なんか落ちつかないんですよね・・・」
そういえばミサトちゃんも普段はスカートとかはかないって言ってたなぁ・・・女の子らしさを身に付けたいって華道部に入ってきた

くらいだから・・・（８０話参照）
「ミサトちゃん、ちょっと直してあげようか？」
「はい！お願いします！」
そう言ってミサトちゃんはピンと立って両手を広げた・・・
・・ミサトって素直だなぁ・・・長谷川もこれくらい素直だったらいいんだけど・・・

オレはミサトちゃんのカーキ色のブレザーを脱がせて、赤いチェックのスカートのホックを外すと腰骨の位置を確かめてから丁度良いところに持ち上げた。
「リボンはキレイに結べてるね。」
「あ、これは最初から結んであるんです。」
「え？　あっ・・ほんとだ・・・」
オレのと違って結んだ形のを留めればいいようになっている・・・確かに結ぶのは難しいし、朝なんか大変だもんなぁ・・・オレもこういうのに変えようかな・・・

「上着はただなんとなく着るとだらしなくなっちゃうから、肩のところを合わせて着るとカッコよく着れるのよ。そうしてると自然と姿勢も良くなるしね！」
ミサトちゃんを長谷川の方に向けて見せてあげた・・・
「どう？　さっきより良くなったでしょう？」
「・・ほんとだ・・あんた大したもんね・・・」
・・長谷川が認めるなんて珍しいな・・・
「だって先輩はモデルさんだから！」
「そ・・そんなことないって・・それにわたし読者モデルだし・・・」
「でもみんな先輩のこと普通にモデルさんだと思ってますよ！」
「え？！　ウソぉ・・・」
・・オレはあくまで・・素人の読者モデルなのに・・・本当のモデ

ルみたいに思われたら困っちゃうよぉ・・・

「わたしは読者モデルなんだから、みんなと変わらないのよ。」

「普通の人だったら自慢すると思うのに、先輩ってすごく謙虚なんですね！」

「・・・・・」

オレは全然謙虚じゃない・・・男なのに女の子として読者モデルやってるだけでも申し訳ないのに・・・本物のモデルさんと一緒にされたんじゃたまらない・・みんなきっと本物のモデルさんがどんなにステキか知らないんだ！

ーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーー

クラブが終るとオレはさっさと部室をあとにした・・・長谷川なんかと一緒に帰ってあげないんだ！　ぜんぜん素直じゃないんだもん！　ひとがせっかくカッコいい着こなし方教えてあげようと思ったのにさ・・・

ミサトちゃんのことは認めたクセに、自分はいいなんて・・・長谷川だって少し直せば可愛くなるのに・・・

「あれ？　弘子まだいたの？」

教室にカバンをとりに行くと弘子がいた・・・

「帰ろうと思ったらまだ有希のカバンがあったから。もうクラブ終った？」

「うん。今終ったとこ・・」
「それじゃ一緒に帰ろうよ。　あ、長谷川さんと帰るんだった？」
「ううん！　弘子と帰る！　長谷川さんは置いてきちゃったから。」

どうせ八女へのバスの時間があるから、久留米の駅まではお話しながらゆっくり歩いて帰る・・・どれだけ話しても女の子の話はつきることがない・・・オレもずっと女の子の中にいたせいか、いつのまにかみんなと同じように話せるようになってしまった。　入学したころはみんなの話についていくのがやっとだったのに・・・

「それでね、長谷川さんにカッコいい着こなし方を教えてあげようと思ったのに、自分でするからいいって言うのよ！　だからミサトちゃんにだけ教えてあげたの。　そしたら長谷川さんったら“あんた大したもんね”だって！　そのクセ自分はあくまでしなくていいって言いはるのよ。なんかハラたつと思わない？！」
「フフッ、長谷川さんって意外に強情なとこあるのね。」
「意外なんかじゃないのよ！　弘子が知らないだけ。　長谷川さんって強情の固まりみたいな人なんだから！」
「強情の固まり？　有希ったらヒドイこというのね。」
「ヒドくないわよ！　本当のことなんだもん！」
・・おかげでオレは、いつも苦労してるのだ・・・

「たしかにこの制服はセーラー服と比べると着こなしは難しいかな？」
「でも弘子はちゃんと着こなせてるわよ！」
「・・でも・・ちょっと胸が目立っちゃって恥ずかしいのよね・・どうしてもブレザーの胸元が開いちゃうし・・・」
「そんなぁ！胸が大きいのはステキじゃない！」
「そう？・・わたしも修学旅行のとき有希の胸見て、素敵だなって

思ったわよ。」
「え?!　わたしのが?」
・・オレの胸は弘子みたいに大きくないし・・・たぶん同じCカップって言ってる長谷川よりも小さいのに・・・
「大きければ良いってものじゃないわよ、わたしは有希みたいな綺麗な形の胸に憧れるな・・」
「そんなのおかしいよ!　わたしの胸なんて貧弱なだけだもん!」
「そんなことないわよ。有希の胸ってけっこう魅力的だって直美も言ってたよ!」
「え?!　直美が・・?」
・・なんか・・そんなこと聞いたら・・明日直美に会うのが気まずいなぁ・・・

「でも、長谷川さんって今でも有希のこと男の子だと思ってるのかしら?」
「え?・・どうして?」
「だって女どうしなら、そんなふうにはイヤがらないんじゃない?」
「・・そうかなぁ・・・」
長谷川がオレのことを?・・・そうなのかなぁ・・・

「弘子は?」
「?」
「弘子はわたしのこと・・男の子だと思ってる?」
「わたしは・・有希のことは女の子だと思ってるわよ。　わたしは女の子として有希と出会ったし・・あとで・・本当は男の子だって知ったけど、でも有希はあくまで有希でしょう?」
「・・うん・・・」
「今さら有希のこと男の子だって思おうとしたってムリよ!　だってウチの学校でも1、2を争うくらい女の子らしいのに!」

「・・うぅ・・・」
・・そういうふうに言われると・・ちょっと恥ずかしいけど・・・
学園祭クイーンなんかなっちゃったから・・言い訳もできない・・・

「長谷川さんは有希が男の子の頃を知ってるから、なかなか女の子として見れないんじゃないかな？」
「今でも？」
・・だって・・オレたちはもう1年半も一緒にいるのに・・・それにオレが男の子の頃を知ってるっていっても、ほとんど話したことなんてないし・・・話したのは・・たぶん入試の時が初めてだったんじゃないかと思う・・・
「そんなことないと思うけど・・・だってもう普通に女の子どうしって感じだし・・長谷川さんだってわたしが男だったころなんか、そんなに知らないハズだもん！」
「有希がそう思ってるだけなんじゃない？」
「そんなことないって！　ぜんぜん話したことも無かったのよ！」
「そう・・だったら何でそんなにイヤがるのかしらね。」
「だから意固地なのよ！」
・・長谷川にも困ったものだ・・・

「そうだ、忘れるところだった。」
駅の近くで弘子はカバンの中からアルバムを出した・・・
「はい。修学旅行のときの写真。」
「あ・・わざわざ焼いてくれたの？・・ありがとう・・・」
そういえば、オレはまだ何もしてなかった・・・
「ごめん・・わたしの方はまだ・・土曜日はスタジオ撮影だったし・・昨日は疲れちゃってて・・・」
「いいよ、気にしないで。　安部っちに渡しておけばいいんじゃない？　そのうち安部っちがまとめて思い出ＣＤアルバム作るって張

り切ってたから。」
「ほんと？・・でも修学旅行ですっかり“安部っち”が定着しちゃったね。」
「直美のせいよ。直美が修学旅行の時ずっとそう呼んでたから。」
・・ほんと直美って誰にでも馴れ馴れしいんだから・・・そこが直美のいいとこでもあるんだけど。

・・もう駅に着いてしまったけど・・まだ弘子とお話したい気分だ・・・写真も一緒に見たいし・・・

「わたしも弘子が乗るバスが来るまで一緒にいよっと！」
「遅くなるんじゃない？　お夕飯作らなくていいの？」
「大丈夫よ。帰ったら一気に作っちゃうから！」
・・だってほとんど毎日のことだもん・・少しくらい遅くなったって・・・

・・でも・・デジカメだとカメラで見れるからなかなかプリントしないけど・・こうして見るとプリントもいいもんだと思う・・・なんか実際に写真があるのって安心感があるし・・・

・・オレも今度プリントしようかな・・・長谷川はカメラ持ってなかったから長谷川のお母さんにも見せてあげたいし・・・三吉先生に見せるのもプリントした方が良さそうだ・・・

「あ・・コレ・・舞妓さんの時のヤツ・・・」
「有希があんまり堂々としてるから、みんないまだに気付いてないみたいね。」
「そんな・・堂々となんてしてないわよ・・・この時は心臓バックバクだったもん！」

「でもサマになってる。」
「・・そうかな・・？」
・・たしかに写真のオレは・・すっかり舞妓さん気分で写ってる・・
・きっと読者モデルなんかやってるから、写真に撮られるのに馴れちゃったのかもしれない・・・緊張が顔に出なくなったのかな・・・？

・・でも・・長谷川まで舞妓さんになってるのが笑える・・・白塗りの顔でもすごく緊張してるのがわかる・・・

・・そういえば・・長谷川、お母さんに舞妓さんになったこと言ったのかなぁ・・・たぶん言ってないような気がする・・・お母さんに長谷川の舞妓さん姿を見せてあげなきゃ！　お母さん絶対喜ぶと思う！

・・だって・・オレのかあさんもすごく喜んでたもん・・・オレは・・かなり恥ずかしかったけど・・・

・・八女行きのバスが来た・・・
「じゃぁね、有希。」
「うん、バイバイ！」
弘子が行ってしまったから帰ろうかと思ったけど・・考えが変わった。

オレはその場で携帯を出して・・・
「・・・あ、とうさん？　わたし有希・・うん・・今日ちょっと遅くなりそうだからデリピザでもいい？・・うん・・わたしの分もとっといて・・・うんうん・・そんなに遅くならないから、じゃぁ・・・」

オレの都合でデリバリーで済ませるのはちょっと悪い気がするけど・・・そう思ってるのはオレだけみたいだからたまにはいいと思う・・・麻衣なんかピザの方が嬉しそうだし・・・

オレはその足で、バスセンターから見えるところにあるＤＰＥショップに入った。

「いらっしゃいませ。」
「あの・・プリントお願いしたいんですけど・・・」
「フィルムですか?データですか?」
「あ、データで。」
「はい、データカードはお持ちですか?」
オレがカメラからカードを取り出して、お店の人に渡すと・・・画面に中の画像が写しだされた・・・

「修学旅行のお写真ですか?」
「はい・・」
「それではこのフォトブックにしてはいかがしょう?」
「・・フォトブック・・・?」
「はい、あなたのお写真が本になるんです。こんな感じに・・・」
お店の人にフォトブックというのを見せてもらったら、本当の写真集みたいでスゴク素敵だった。
「え・・これ・・どんな写真でも本に出来るんですか?」
「はい、デザインも選べますよ。」
モミジとかちりばめた秋っぽいのなんか修学旅行に合いそうだ!
「・・これにしようかなぁ・・・あ・・でも・・時間かかるんですか?」
「通常は2週間ほど、お時間いただいております。」
「に・・2週間ですか・・・」
・・それじゃ全然間に合わないや・・・これから持って行くのに・・

・

「あ、時間がないので、やっぱり普通のでいいです・・・」
「はい、それでは画面からプリントしたいお写真をお選び下さい。」
オレはその中から長谷川が写ったヤツを選んでいった・・・もちろん舞子さん姿も。

「出来上がるまで３０分ほどかかりますが・・・」
「あ、近くで待ってます。」
オレはすぐそこのミスドで待ってようかと店を出ようとして、良いことを思いついた。

「あの、すみません！　もう一度選び直していいですか？　それとやっぱりフォトブックも頼みたいんですけど・・・」

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

「あら、有希ちゃんどうしたの？」
「あ、お母さんコンバンハ・・・あの・・はせ・・順子さんいますか？」
「ごめんなさい、順子はいまお風呂に入ってるの。」
「あ、いいんです。　順子さんに用事じゃないので。」
オレはさっき出来上がった修学旅行の写真を入れたアルバムを、長谷川のお母さんに渡した・・・

「これ、修学旅行の時の写真です。」

「あら、わざわざ持って来てくれたの？　ありがとう、どうぞ上がってちょうだい。」
「あ、今日は持って来ただけだから・・・」
「いいじゃない、さあ上がって！」
「・・・・」
オレはお母さんに腕をつかまれて、押し切られる形で家に引っ張り上げられてしまった・・・

「でも有希ちゃんはさすがに新しい制服も似合ってるわねぇ。　順子もなかなか有希ちゃんみたいにならないって言ってたわよ。」
「・・そうですか・・・」
・・なんだ・・長谷川も自分でわかってるんだったら、あんなに意固地にならなくてもいいのに・・・

「上手に撮れてるわね。　ぜんぶ有希ちゃんが写したの？」
「はい、だいたいは・・・」
・・カメラ持ってるとどうしても写してあげるばかりで、自分が写った写真が少なくなってしまうのが困ったものだ・・・今回の修学旅行も弘子たちが写してくれたのが無かったら、オレの写真はずいぶん少なかったと思う・・・
「？・・この男の人は？」
「あ、それ・・わたしの兄さんです。」
「あっそう、そういえば順子が言ってたわ。有希ちゃんのお兄さんがカッコ良かったって。」
「？！」
・・長谷川がそんなことを・・・？　オレにはそんなこと一言もいわなかったのに・・・

「あら！舞妓さんじゃない！　順子は舞妓さんに会ったなんて言ってなかったけど・・・でも可愛いわね。」

「あ・・その舞妓さん・・わたしと順子さんなんです・・・」
「え?!　ほんとに?」
お母さんは写真をマジマジとみつめて・・・
「・・たしかに言われてみれば・・順子と有希ちゃんに似てる気がするけど・・・」
お母さんったら・・・半信半疑な顔してる!

そのときお風呂のところの戸が開いて・・・
「なんだ、有希が来てたんだ・・なんか声がするから誰かと思った。」
・・シャンプーのいい匂い・・・
「有希ちゃんが修学旅行のときの写真持って来てくれたのよ。」
「・・そんなの・・わざわざ持ってこなくても学校で渡してくれていいのに・・・」
「順子、なんで舞妓さんになったことママに教えてくれなかったの?」
「エ?・・あっ!　あの写真まで?!」
長谷川は慌ててお母さんが持ってるアルバムを奪い取ってしまった・・・

「は・・長谷川さん・・お母さんまだ見てるのに・・・」
「あんたなに勝手なことしてるのよ!」
「え?・・でも・・・」
「順子!　有希ちゃんがせっかく写真を持って来てくれたのに、そんなこと言っちゃダメじゃない!」
「そんなの頼んでないのに・・有希もこんな写真まで持ってこなくていいでしょう!?」
「・・こんな写真って・・・舞妓さんの・・?」
「そうよ!」

「だ・・だって・・お母さんも見たいと思って・・・・」
「そうよ、可愛いじゃない！　パパにも見せたらきっと喜ぶわよ。」
すると長谷川はものすごく怒って・・・
「パパには絶対言わないでよ！　言ったらもう口利かないから！」
そしていきなりオレの手をつかんで・・・
「用事が済んだのならさっさと帰りなさいよ！」
オレはまだ靴もちゃんと履いてないのに、玄関のドアから押し出されてしまった・・・

「もう・・・なんだよ長谷川のヤツ・・・」
お母さんのために持ってきたのに・・・お母さんも喜んでたじゃない・・・
そんなに舞妓姿見られるのイヤだったのかなぁ・・・長谷川さんにしては可愛くなってたのに・・・

そっとドアに耳をあててみたけど、もう声は聞こえなかった・・・
自分の部屋に入ったのかな・・・

・・マズイなぁ・・・また長谷川のこと怒らせちゃったみたいだ・・・

第１３２話　照れ　オレはそんなに変わってない

オレはお茶室の畳の上に正座して濃茶の粉が入った茶入の小壺から茶杓〈ちゃしゃく〉でお茶を茶碗に入れると、茶湯釜〈ちゃのゆがま〉から竹の柄杓〈ひしゃく〉でお湯をゆっくりと注いでから茶筅〈ちゃせん〉で手際よく泡立てる要領でかき混ぜた・・・そして生徒さんへと茶碗を差し出す・・・

・・茶道はそれぞれの動作の流れも重要だ・・・一連の動作が滞りなく優雅でなければいけない・・・こういうところは日本舞踊に似てる気がする・・・

オレは三吉先生には、茶道はほとんど習ってないけど、先生のやることを見てたから何となく出来るようになっていた。ときどきこうして生徒さんの前でお茶を点〈た〉てるように言われることがある。いつも突然だからオレとしても気が抜けない・・・言われるのはたいてい着物を着たときが多いけど、今日のように着物を着てなくても突然言われる時があるから、いつも心の準備だけはしてなくちゃいけないのだ。

・・先生が言うには突然言われて出来ないようではダメなんだって・・・

今日のオレの服装は白い長袖のブラウスに濃紺のヒザ下のスカートという清楚なお嬢様風・・・お茶の時は大体いつもこんな感じの服装だ・・・普段レナとお買い物に行くときのような可愛い服装では、先生に“いまどきの女の子”みたいに思われそうだし・・・今日みたいに、そのままお茶のお稽古をすることもあるから、やっぱ

りお稽古の時はこういう服装でないといけない・・・

髪も服装に合わせて清楚な感じの髪型・・・左右を後ろにまとめて髪留めで留めたり、細い黒系のカチューシャをするなど大人しめの髪型が多い・・・せいぜいお洒落しても左右を細い三つ編みにするくらいだ。

お稽古が終ると、お茶の道具を後片付けするのがオレのいつもの仕事・・・

「先生かたづけ終りました。」
先生がいる部屋の襖は開いていた・・オレは先生から少し見えるくらいの場所で、板張りのろうかにスカートが乱れないように注意しながら正座して、お道具の片付けが終ったことを報告する・・・
「戸田さん、こちらにいらっしゃい。」
「はい。」
オレは中腰のまま敷居をまたいで畳の上に・・・
「ご苦労さま。今日も良いお手前でしたよ。」
「ありがとうございます。」
オレは畳に両手をついて深くお辞儀をした・・・

お道具の後片付けを頼まれるのは、それだけ信頼されてるという事だと思う・・・お茶の道具には高価なものも少なくないし・・・オレも信頼にこたえるためには、壊したり傷つけたりしないように丁寧に扱わなきゃいけない。

「あの・・先生に見ていただきたい物があるんですけど・・・」
「あら、何かしら?」
「あの・・これなんですけど・・・」

オレはそっと1冊の本を差し出した・・・三吉先生はそれを手にとって丁寧に表紙をめくる・・・

「これは京都ですね。」
「はい・・・」
「戸田さんもこの間、修学旅行で京都に行ったのではなかった?」
「はい・・奈良と京都・・それと大阪にも行ってきました・・・」

先生はページをめくりながら・・・
「京都は素敵ねぇ・・・私ももう一度は行ってみたいわね・・・」
「・・・・・」
「あら、可愛い・・舞妓さん。」
「!!」
「戸田さんと同じくらいの歳じゃないかしら・・?」
「・・あのぉ・・・その舞妓さん・・わたしなんです・・」
「え? 戸田さん?」
「はい・・」
「・・どうして戸田さんが本に載ってるの? あ、わかった。モデルさんの仕事ね?」
「い・・いぇ・・それ・・実は本じゃなくて、アルバムなんです・・・全部わたしが修学旅行で写した写真なんです。 あ・・舞子さん姿のは兄さんが写してくれたんですけど・・・」
「アルバム?!」
先生は不思議そうにページに指をはさんだまま、表紙を見たり裏をみたり、写真の部分がさすったりしている・・・
「はい。 フォトブックっていうので、DPE屋さんで自分が写した写真を選んで本みたいに印刷してもらえるんです!」
「へ〜・・・先生にはそういうの良くわからないけど・・・時代ねぇ・・・」
ふふっ・・先生ったらビックリしてる!

「それにしても、この舞妓さんが戸田さんだなんて・・驚いたわ。」
・・そんなにじっくり見られると・・・ちょっと恥ずかしいな・・・
「戸田さんももう立派な女性になったのねぇ・・中学生の頃は男の子だったのが信じられないくらい・・・」
「・・三吉先生のおかげです。」
「そんなことないですよ。私はただ戸田さんが女の子として生活するのに困らないようにお手伝いしただけ。今の戸田さんの女らしさは、あなた自身の努力の賜物よ。」
・・先生にそんなふうに言っていただけると・・・オレも誇らしい気持ちになってくる・・・オレって本当に女らしくなれてるんだなって・・・

・・・だって・・三吉先生はおせじなんか言わないもん。・・でも・・・

「努力なんて・・・わたしはただ・・先生に教えていただいた通りにやってただけで・・・やっぱり先生のおかげだと思います。」
・・これはオレの正直な気持ちだ・・・もし先生がオレに女の子としての振舞いを教えてくれてなければ、今のオレは無かったと思う・・・オレの女の子の基本には、やはり先生が教えてくれた女の子としての“たしなみ”があるからだ。
「なんにしても、戸田さんはもう立派な女性なのよ。自信を持ちなさい。」
そう言って先生はオレの肩を抱き寄せて、そっと頭を撫でてくれた・・・
「戸田さんは私の自慢の生徒なのよ。これまで沢山の生徒を教えてきたけれど、あなたほど私の教えをちゃんと自分のものにしてる生徒はいないわ。」
「・・先生・・・」

・・オレは・・もっともっと女らしくなって・・・そしてステキな女性になって・・・先生の期待に応えたい・・・

ーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーー

・・はぁ・はぁ・・・遅くなっちゃった・・・

お店のドアを開けて中に入ると、キョロキョロあたりを見まわした・・・お姉さんたちは・・・
「ユウちゃん！こっちこっち！」
「あっ、すみません遅れちゃって・・・」
「いいのよ、いつも片付け大変ね。」
「ううん、片付けもお稽古のうちだから・・・」
・・それにオレは生徒さんのお姉さんたちみたいに月謝払ってないし・・・後片付けくらいやらないとバチがあたるってもんだ・・・

オレは着ていたコートを脱いでふたつに折り椅子の背に掛けた・・・衿と袖口と裾に白いフワフワのファーがついたクリーム色のコート・・・お稽古に関係ないコートくらいは可愛いのを着たい・・・でもコートを脱ぐと清楚なブラウスとスカートには茶色のブーツが少し不釣り合いなのがタマにキズだけど・・・
「ユウちゃんは何がいい？」
「あ・・みなさんは・・もう食べ終ったんですか？」
「みんなこれからよ、ユウちゃんが来るまで待ってたの。」
「え・・そうなんですか・・なんかすみません・・・じゃぁ・・わ

たしこの“黄桃のスペシャルロール”がいいです。」
・・けっこう遅れてしまったのに・・オレを待っててくれるなんて・
・・お姉さんたち優しいなぁ・・・

三吉先生のところでお茶を習った後に、こうしてケーキ屋さんで一息いれることがあって・・時々オレもおよばれする・・・苦いお茶と和菓子の後は、洋菓子も食べたくなっちゃうのだ。
男には同じ甘いモノでも、女の子にとっては和菓子とケーキはまったく別の食べ物なのだ！　オレも女の子でいるうちに、いつの間にかそういうのがわかるようになっちゃった。

生徒さんのリーダー格は一番長い前田さん・・・今日は初めて習いにきた中嶋さんの歓迎会も兼ねている・・・本当は何かにかこつけてケーキ食べたいだけだと思うけど・・・

「戸田さんはいつから習ってるの？」
中嶋さんに聞かれて・・・
「わたしは習ってるっていうか・・・三吉先生は中学の家庭科の先生だったから、その縁で卒業した後もお手伝いさせて頂いてるんです。」
「中嶋さん、ユウちゃんは私たちと違って先生のお弟子さんなのよ。」
「そ・・そんな・・わたしは弟子なんて、そんな大げさなのじゃないんです！　ただの見習いです・・・」
「でも先生にお手前をまかされるなんてスゴイじゃない。」
「う・・それは・・・」
・・たしかにまかされるのは光栄なことだけど・・・それと弟子とは話が別だ・・・

「でも、ユウちゃんっていつも清楚でキチッとしてるよね。最近の

女子高生には珍しいんじゃない？」
もうひとりの古株、武田さんがそう言った・・・
「そんなことないです！　こういう恰好はお茶の時だけで・・普段はもっと高校生っぽい恰好してますよ！」
「そうなの？　ユウちゃんってあのお嬢様学校の白鴻女学園の生徒だから、いつもそういう清楚な恰好してるのかと思った。」
「・・そんな・・昔はどうか知らないけど・・今の白鴻はお嬢様学校じゃないですよ。　それに来年からは共学になっちゃうし・・・」
・・あ・・これ言って良かったんだっけ・・・でももう中学には入学案内をくばってるハズだから・・いいのかな・・・
「えっ？！　白鴻女学園が共学になるの？」
「はい、だから名前からも“女”がとれてただの“白鴻学園”になるんです。」
「へぇ～・・それじゃユウちゃん、可愛い男の子の後輩に告白されたりするかも知れないわね？」
「ま・・まさかぁ・・・」
「いやいや、ありえない話じゃないわよ。今どきの男の子は年上の優しいお姉さんが好きなコも多いみたいよ！」
「・・・・・」
・・そ・・そんなことになったらどうしよう・・・ぜったい無いとは思うけど・・・

「中嶋さん知ってる？　ユウちゃんってＪＩＮＯＮでモデルもやってるのよ！」
中堅の田所さんまで！・・そんなことわざわざ言わなくても・・・
それに情報が間違ってるし！
「ち・・違いますよ！　ＪＩＮＯＮじゃなくて“九州ＪＩＮＯＮ”で、モデルじゃなくて“読者モデル”です！」
・・ここはちゃんと言っておかなきゃ・・・本誌のＪＩＮＯＮと、姉妹誌の九州ＪＩＮＯＮじゃ全然格が違うし・・・オレはモデルさ

んのように完璧なスタイルじゃない・・・読者モデルは普通の女子高生の体型だから良いんだと思う・・・読者のコたちが自分に置き換えて参考にしやすいから・・・

「え？　ユウちゃんって・・あの“春日ユウ”ちゃんだったの？！　なんか雰囲気違うから全然気づかなかった！」

・・そりゃぁ・・・普段のオレは地味なコだもん・・・読者モデルの時みたいにお化粧もしてないし・・・

「あの可愛くて可憐な“春日ユウ”ちゃんが、こんなに質素で清楚なお嬢様だったなんて・・・でもそういう上品なところが雑誌の可愛い写真からも滲み出てるのかも・・・」

・・中嶋さんがそう言うと3人ともそうだと言うように“ウンウン”とうなづいた・・・オレはただ、こういう服を着てるだけで・・清楚でもお嬢様でもないのにぃ・・・オレはあまりに照れくさくて、うつむいたままケーキの残りを頬張った・・・

・・みんなオレのこと良いように言い過ぎなんだもん・・・オレは女の子にはなったけど・・まだまだそんなにステキな女の子じゃない・・・そうなりたいと思って努力はしてるけど・・・

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

「とうさん、おまたせ。　はい、麻衣も・・・」

オレは出来たてのスパゲティーミートソースをふたりの前に置いた・・・

オレも自分の分のスパゲティーを麻衣の横に置いてソファーに座る・

・・

「いただきま～す！」

今日もかあさんは仕事で遅くなるからオレたち3人で夕食だ・・・

このごろずっと3人だけの夕食が続いてる・・・

粉チーズをパラパラ振って、ふと、とうさんを見ると・・・

「あ！・・とうさんまた混ぜてる・・・ミートソースは混ざってるところと混ざってないところがあるのが美味しいのに・・・！・・・麻衣まで・・・？」

とうさんと麻衣は何かと混ぜる派だ・・・オレはあまり混ぜない方がいろんな味が楽しめていいと思うんだけど・・・

「だって何もついてないところなんて美味しくないじゃない！」

「そんなことないよ！　何もついてないところがあるから素材の美味しさが楽しめるのよ。」

「素材っていっても、ただの小麦粉じゃない・・・」

「だから小麦粉の美味しさよ！」

「小麦粉なんて美味しくないよ！」

・・もうっ・・なんにもわかってないんだから・・・

「有希、お前が言うこともわかるけど、食べ方は人それぞれで良いんじゃないか？」

「・・・・・」

「みんな自分が美味しいと思うやりかたで食べてるんだ。食べ方を押し付けるのは良くないと思うぞ。」

・・たしかに・・とうさんが言うとおりかも知れない・・・オレだって他人の食べ方を押し付けられるのはイヤだ・・・

「・・・そうだね・・ごめんなさい・・・」

・・だけど・・自分が作ったお料理だから、やっぱり美味しい食べ方で食べて欲しいと思うのが当然じゃないだろうか・・・でも・・それはオレの我がままなのかな・・・

ーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーー

“　今日はお茶のお稽古に行って　そのあとお姉さんたちと　ケーキを食べました　おいしかったよ。　明日も朝からドラマの撮影大変そうだけど頑張ってね。　それじゃおやすみ純平　”

最後に赤いハートマークを入れて送信した・・・

・・純平も忙しそうだけど頑張ってるみたいだ・・・ドラマの撮影はスケジュールが押してて大変らしい・・・それでも、よほど忙しい時以外は、1日1回はメールをくれる・・・

・・オレも1日の終わりには必ず毎日メールする・・・

なんだか修学旅行のとき会って以来・・あの時のことを思い出すとドキドキしてくる・・・みんながいるところでオレたちだけの秘密の時間なんて・・・ああいうのを“しのび逢い”っていうのかな・・・ちょっと違うか・・・

・・本当は純平と・・もっともっとメールして・・・純平のこと・・もっともっと知りたい・・・

・・だけどオレたちはまだ恋人どうしじゃないから・・これくらいがちょうどいいんだと思う・・・

・・あまりメールしたら・・・オレ・・歯止めがきかなくなりそうだし・・・それに・・純平も忙しいから・・・あまりメールしてウザイ女の子だと思われちゃったら悲しい・・・

寝る前にトイレに行こうと1階に降りると、ダイニングのテーブルにうつぶせて、かあさんが寝ていた・・・

「かあさん・・かあさん・・・」

何度か肩を揺すると、かあさんは薄く目を開けた・・・

「・・?・・ゆうき・・・」

「かあさんいつ帰ったの？　こんなところで寝てたらカゼひくよ！」

「・・そうね・・・ちょっと伏せてたら寝ちゃったみたい・・・」

「かあさん・・お仕事忙しいの？」

「うん、ちょっとね、今追い込みに入ってるの・・・でももう少しだから・・・」

・・かあさん・・ずいぶん前から忙しそうだけど・・・どんなお仕事してるんだろう・・・

「何か食べる？　ミートソースが少し残ってるからスパゲティー作ろうか？」

「ありがとう、でも夕食は食べてきたからいいわ。」

「・・そう？　だったら早くお風呂に入って寝た方がいいよ。」

「うん、そうするわ・・」

「わたしお風呂沸かしてくるね、少し冷めてると思うから。」

オレがお風呂の方へ行こうとすると・・・

「有希、お父さんたちの夕飯の仕度いつもありがとうね。」

「・・ううん、気にしないで。わたしお料理は好きでやってるんだから。」

「・・有希もすっかり女の子ね・・・」

「！・・そんなことないよ・・わたしお料理は男の子のころからやってるじゃない！」

「・・そっか・・そうだったわね・・・」

「そ・・そうよ・・・わたしそんなに変わってないよ・・・」

・・オレの内面はみんなが言うほどには変わっていない・・・

「うん、有希は昔から優しい子だったものね。」

「・・・じゃ・・じゃぁ・・お風呂沸かしてくるから・・・」

オレはお風呂を追焚きするために急いで向った・・・

あらためてかあさんに、あんなこと言われると・・・オレ照れちゃうよ・・・

補足：この話は現在２００９年の１１月中旬です。

―　―　―　―　―　―　―　―　―　―　―　―　―

―　―　―　―　―　―　―　―　―　―　―　―

―　―　―　―　―　―　―　―　―　―　―

―　―　―　―　―　―　―　―　―　―

―　―　―　―　―　―　―　―　―

―　―　―　―　―　―　―　―

―　―　―　―　―　―　―

おまけ・イヌ型とネコ型

小説やドラマでは同じ人物は同じ話し方をするのが普通のようで

す。
でもこの『オレは女子高生』では話す相手によって話し方も変わります。とくに主人公の有希はいろんな人と出会うため、いろんな話し方をしています。実際の社会では、友達と話すとき、先生と話すとき、親と話すとき、それぞれ話し方が違うのが当り前だと思います。

たとえば有希が好きな山上くん（実世界では山下くん）が医者の役をやっていたドラマでも、仲間うちで自分のことを「オレ」と言うのはかまわないのですが、患者さんにも「オレ」と言うのはどうも違和感があると思うのです。

ただ、この『オレは女子高生』ではそれだけではなくて、有希の性格によるところも大きいと思います。

私は人間には大きく分けてイヌ型とネコ型がいると思っているのですが、イヌ型は自分を中心に関わりのある人たちを“序列”で分けるタイプで、こういう人は誰とでも比較的同じような話し方をします。せいぜい自分より上か下かくらいの分け方です。
それに比べてネコ型の人はそれぞれの人と“個別”に関係を作るタイプで、こういう人は相手によって話し方が変わります。

有希は典型的なネコ型で、それぞれの人と個別に関係を作るので、別々の所で知り合った人が同じ場面で一緒になると、自分をどう表現すれば良いのか判らなくなってしまいます。
この人にとって自分はお姉さん、この人にとって自分は妹、この人にとって自分は先輩、この人にとって自分は後輩とそれぞれの関係でいるので、先輩と後輩に囲まれてしまうと、上手く立ち回れなくなってオロオロしてしまうのです。

それに引き換え、直美などは典型的なイヌ型なので人付き合いが上手です。弘子もどちらかといえばイヌ型でしょうか・・・ミサトもイヌ型かな？

千里なんかはどちらでもない普通の娘だと思います。

この話でやっかいなのは長谷川もネコ型だということ・・・普通こういう話のヒロインはイヌ型なのですが、この話は主役もヒロイン（長谷川にヒロインって言葉は似合わないですけど、笑）もネコ型なので、いろいろ面倒なことが起こってしまいます。

読む方によっては、有希はそれぞれの人に上手に甘えてるようにも見えるので、八方美人のように感じる方もいるかも知れませんが、それは有希が極度のネコ型のせいなのです。

―　―　―　―　―　―　―　―　―　―　―　―　―

―　―　―　―　―　―　―　―　―　―　―　―　―

―　―　―　―　―　―　―　―　―　―　―　―　―

―　―　―　―　―　―　―　―　―　―　―　―　―

―　―　―　―　―　―　―　―　―　―　―　―　―

―　―　―　―　―　―　―　―　―　―　―　―　―

―　―　―　―　―　―　―　―　―　―　―　―　―

これまでのおまけ（その他）の場所

３６話　制作おぼえがき　０８．６．２１

４０話　『オレは女子高生』の世界　人物、舞台設定など

４５話　架空の西鉄大牟田線案内

４９話　名前について

５３話　ドラマ化を妄想してみる

６１話　「放生会編」おまけ

６７話　１周年を迎えて

７１話　『オレは女子高生』の世界　第２弾（架空の西鉄大牟田線案内付き）ドラマ『ブザー・ビート』のお知らせも
７３話　「ヒロイン」について
７８話　「出版されたら買いたい作品」のお礼
７９話　「文章」について
８２話　「文章って難しい・説明編」
８６話　ちょっとあとがき　長谷川の誕生日とお父さん
８９話　「Ｑ＆Ａ」
９３話　『オレは女子高生』の世界　第３弾（架空の西鉄大牟田線案内付き）

第１３３話　男前　ヘンなのはどっち？

「ユウちゃん！」
「あ、大森先輩・・こんにちは。」
オレがひとりでベンチで昼食のサンドイッチを食べていると、大森先輩がやってきた・・・
「横、座っていい？」
「あ・・はぃ・・」
・・オレは急いで脇によけて先輩が座る場所をあけた・・・先輩が腰掛けると少しベンチが傾く・・・やっぱり身体が大きいだけあって重いんだな・・・

「ユウちゃん、よくここで食べてるけど、ひとりが好きなの？」
「いぇ・・そういうワケでもないんですけど・・・」
・・オレは入学した当初、昼休み教室に居づらくて・・・何となくここで食べるのが習慣になってるだけだ・・・天気が良い日は気持ちがいいし・・・
・・でも、みんなが言ってるような指定席なんかじゃないし・・・となりに誰か来たって別にイヤじゃない・・・そうはいってもオレが食べてる時に平気でとなりに座るのは長谷川くらいのものだけど・・・

それに・・以前はよくこうして中庭のベンチで食べてたけど、このごろは弘子や千里と食べることも多いし・・・ここで食べることはずいぶん少なくなったと思う・・・最近はお弁当を持ってくることも多いから・・・パンと違ってお弁当はみんなで食べた方がおいしい・・・

「ユウちゃん、あれから全然ウチに来てくれないじゃない。」
「あ、すみません・・・なんか・・いろいろ忙しかったから・・・」
・・実際にこのところ忙しかったのは事実だけど・・・ほんとはそれだけじゃない・・・先輩とはあんなことがあったから・・行きにくいというのが本当のホンネだ・・・

先輩の家はレナの家とひと駅しか違わないから・・本当ならレナも連れて行って美味しいお好み焼きを食べさせてあげたいところなんだけど・・・先輩は女の子が好きだし・・・レナも可愛いから・・・先輩とレナは会わせたくない・・・だって先輩とヘンな関係になっちゃったら大変だ・・・レナも女の子どうしが好きになってもフツウなんて言ってたし（１１３話参照）・・・オレ・・レナと先輩がエッチな関係になっちゃったら、どうしたらいいかわからないもん・・・

「今日はユウちゃんたちのクラブ、お花活けない日でしょう?」
「あ、はい・・」
・・オレたちの華道部はお花の調達が難しいから、実際にお花を活けるのは週に2回だけ・・・他の日は部室で今度活けるお花をイメージしてイラストを描いたり・・のんびりしたりしている・・・でも、先輩よくそんなこと知ってるなぁ・・・
「だったら、今日はクラブ休んで私に付き合ってくれない?」
「あ・・えっと・・たぶん大丈夫だと思いますケド・・・」
・・で・・でも・・なんで・・・?

「あの・・どっか行くんですか・・・?」
「ううん、一緒に帰ろうと思って。」
「え・・それだけですか?」
「まあ、途中でミスドに寄るくらいはいいでしょう?」

「あ・・はぃ・・・」
・・・帰りにどっか寄るのは良くあることだからいいけど・・・でも相手が先輩だと・・緊張しそう・・・

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

放課後オレは、長谷川に今日はクラブを休むことを伝えて、中庭で待ち合わせた先輩のところに急いだ・・・先輩はオレがいつも座るベンチに座っていた。
「せ・・先輩！　お待たせしました。」
「ううん、ユウちゃんならいくらでも待てるよ。　じゃ行こうか・・・」
（うわっ！）
ベンチから立ち上がると見上げるような高さだ！　近くで立つと先輩って本当に背が高いなぁ・・と改めて思う・・・

「デカイって思ってるんでしょう?」
「あ、い・・いぇ・・そんなことは・・・」
「私なんてバレーやってなかったら、ただのバカデカイ女だもんね。」
「そんなことないです・・先輩はカッコイイです・・素敵です・・・」
・・けっこう先輩に憧れてるコもいるみたいだし・・・

「私くらいの背だと、女の子はみんな小さすぎるのよね。　その点ユウちゃんならちょうど良いんだけどな。」

そう言って先輩はオレの肩に腕をまわして・・・
「！！」
・・ほんの少し抱き寄せられた気がした・・・

・・そりゃぁ・・オレは男だったから・・・普通の女の子より少し背は高めだけど・・・
・・でも・・たしかに・・先輩がもし男の子だったら・・・オレたちの背はちょうどいいかもしれない・・・こうして肩を抱かれて歩いてると、まるで男の人と歩いてるみたいだもん・・・包容力もあるし・・頼りがいがあるっていうか・・・
・・まあ、横を見るとセーラー服なんだけど。

「でも、私は来年卒業で良かったかも知れない。」
「え？　何でですか？」
「だって、私にその新しい制服は似合いそうもないじゃない？」
「そ・そんなこと・・ないと思いますけど・・・」
「まあ、このセーラー服もそんなに似合ってないけどね。」
「・・・・」
・・たしかに・・・先輩にスカートは似合わない気もする・・・髪も短髪だし・・・
「あ、でも先輩だって似合うんじゃないかと思いますけど・・」
だって先輩はスラッとしてるからブレザーは似合いそう。
「そのスカートでも？」
「あ・・そっかぁ・・・あっ！　ごめんなさい！そういうつもりじゃ・・・」
・・これじゃ似合わないって認めてるようなものだ・・・
「大丈夫よ。私自分で似合わないって言ってるんだから、そんなに気を使わなくていいわよ。」
「・・はぃ・・・」
・・うぅ・・・オレってどうしてこう気を利かないんだろう・・・

正直なばかりじゃいけないのはわかってるんだけど・・・

「そういえば男の子の制服はどういうの？　同じようなデザインなの？」

「あ・・はい、そうです。違うのはこのリボンが同じ色のネクタイになるのと、下がグレーのズボンなんです。」

「どうせ新しい制服にするのなら、女の子でもズボンかスカート選べるようにすればいいのに。私以外にも女の子でスカートが似合わないコっていると思うんだけどな。」

「あ・・そうですよね・・最近はそういう学校もあるみたいだし・・・わたし教頭先生に言ってみようかな・・・」

「教頭先生？　ユウちゃんって気弱そうに見えて意外に勇気あるんだね。」

「え？」

「だって、あの教頭に直訴するなんて勇気あるじゃない！」

・・“あの教頭”？　先輩・・教頭先生にどんなイメージ持ってるんだろう・・・けっこう軽い人なんだけどな・・・みんなは知らないのかな・・・？

「あ・・わたし教頭先生とはちょっと親しいっていうか・・・女として入学する時にいろいろお世話になったから・・・」

・・ホントはあの時は、教頭先生に女にされたようなものだけど・・・今となってはそこらへんのいきさつは、もうどうでもいい話だ・・・

「そうか。先生たちは全員ユウちゃんが男の子だって知ってたんだよね。」

「はい。」

「そうじゃなきゃ、いくらユウちゃんが女らしくても女の子として入学するなんて無理だもんね。」

「は・・はぃ・・・」

・・もし隠して入学しようとしても、戸籍なんか見られたら男だってことはすぐにバレちゃう・・・

駅に着いてオレたちはバスセンターの近くのミスタードーナツへ・・・いつも弘子たちと来たときに座る、窓際の席に座ろうと思ったら、先輩が奥のソファーの方に行ってオレを呼んだ・・・

先輩が座ったソファーのテーブルをはさんだイスに座ろうとしたら、先輩はソファーの方に手招きする・・・オレも先輩のとなりに？普通は向き合って座ると思うんだけど・・・でも先輩の機嫌をそこねちゃいけないし・・・だってオレのことバラされたら大変だもん・・・先輩はそんなことしないと思うけど・・・

・・オレは先輩に言っておかなきゃいけないことがあった・・・

「先輩・・ありがとうございます。」

「なに？　あらたまって。」

「先輩・・わたしが男だってこと、みんなに黙っててくれたから・・・」

「そんなこと当り前じゃない。ユウちゃんはもう女の子だし、心はずっと女の子だったんでしょう？」

「・・うぅ・・はぃ・・・」

・・正直・・オレが女の子と言えるのかわからない・・・まだオチンチンも付いてるし・・・それに心がずっと女の子だったというのはウソだ・・・少なくともオレの記憶の中ではオレは普通の男の子だったと思う・・・オレが憶えていない昔のことはオレにもわからないけど・・・

「私ユウちゃんが男の子だなんて、いまだに信じられないのよね。」

「・・でも・・あのとき先輩・・さわったでしょう・・・？」
「まあ、たしかに女の子じゃない“感触”はあったけど、実際に見たわけじゃないから。」
「え！？」
・・まさか・・・先輩・・オレのオチンチン見せろってこと・・・？
「アソコ以外は女の子なんだから、エッチな目的じゃなきゃ私たち付き合えるんじゃないかな？」
「え・・でも・・わたし・・女の子どうしなんて・・・」
・・やっぱり女の子どうしで恋人みたいなおつき合いはヘンだと思う・・・オレはちゃんと男の子とおつき合いしたいし・・・
・・あれ？・・オレは今は女の子だけど・・本当は男なんだから・・おつき合いの相手が女の子でも、そんなにおかしくないのかな？・・・男の子とおつき合いしたいって言う方がヘンなのかも・・・
・・オレも・・先輩と同じくらいヘンなのかな・・・？
・・でも・・オレは実際に純平のことが好きだし・・・こんなこと・・考えるのも恥ずかしいけど・・・純平に恋している・・・
・・オレはこれまで、出来るだけ自分の純平への気持ちに気づかないフリをしてきた・・・オレはまだ高校生だし・・・東京と福岡じゃめったに会えないし・・・それになにより・・・オレたちホントは男どうしだし・・・
・・でも修学旅行の帰りに偶然逢ってから・・・純平のことを考えるとドキドキして・・・メールしてもドキドキして・・・テレビに急に純平が映ったりすると・・・ドキドキを通り越してバックバクで・・・息も出来なくなっちゃう・・・

・・これって・・・みんなが話してる“恋”した時とおんなじだ・・
・オレ・・純平に恋しちゃったんだ！

・・こんなオレに・・先輩のことをヘンなんて言う資格はないのかも知れない・・・オレもかなりヘンなんだから・・・

・・でも・・ヘンでもいい・・・オレは純平のことが大好きなんだ！

・・・だから先輩と・・女の子とつき合うなんて考えられない！

「・・ごめんなさい・・・わたし・・先輩が女の子を好きなように・・・わたしは男の子が好きなんです・・・」
オレが正直にそういうと・・先輩は・・・
「やっぱりね。そうだと思ったんだけど、あんまりユウちゃんが可愛いから諦めきれなくてさ。」
そして先輩はこう付け加えた・・・
「ユウちゃん、誰か特定の好きな人がいるみたいね。」
「・・うぅ・・はぃ・・・」
・・一瞬迷ったけど・・先輩にウソはつけなかった・・・
「どんなひと？カッコイイの？」
「・・はぃ・・それもあるけど・・・優しくて・・すごく思いやりがある人なんです・・・」
・・純平は・・・オレがもし男の子のままだったとしても・・・やっぱり好意をもったんじゃないかと思う・・・それくらい良いヤツだ・・・

・・もしかしたら純平は・・オレが男の子だったらあんなふうになりたかった・・・理想の男の子なのかもしれない・・・

・・実際には男の子の頃のオレは・・・純平の足元にも及ばない・・

情けないヤツだったから・・・

「・・そんなに素敵な恋人がいるんじゃ仕方ないか・・・私なんてお呼びじゃないって感じだね。」

「・・そ・・そんな・・・わたし・・ホントに先輩は素敵だと思います！　ただ・・おつき合いとかは出来ないだけで・・・先輩にこんなこと言うのは失礼かも知れないけど・・・お友達としてっていうか・・学校の先輩と後輩としてなら・・・」

「それじゃ今日からは友達になろう？　それなら良いでしょう？」

「はい！」

先輩みたいな素敵な人と・・友達になるのイヤなはずがない！

・・エッチな関係なら困っちゃうけど・・・

ミスドを後にして、オレたちは一緒に急行電車で楽しくおしゃべりしながら帰った・・・先輩はオレの家がある春日原を越して大橋で普通に乗り換える。

オレたちに共通の話題はお料理だった・・先輩もおウチが食べ物屋さんやってるからか、お料理は得意みたいだ・・・そもそもお料理って女性だけもものじゃないし・・・お店屋さんのシェフなんかは男の人の方が多いくらいだし・・・

・・先輩はやっぱり少し男っぽいところがあるのかも知れない・・・仕草もどこか男っぽいし・・・考え方もサバサバしてるみたいだ・・・もしかしたら男の頃オレよりも男っぽいかも知れない・・・

・・だから先輩が女の子を好きになるのは、そんなにヘンなことじゃないのかも・・・女の子は可愛いし・・・多くの男の子みたいに

無神経でもない（純平はそうじゃないけど）・・・でも・・先輩を見てると・・性同一性障害とか・・そういうのとはなんか違う気がする・・・

・・・先輩はオレと違って・・身体は女のままだ・・・だから・・いつか・・素敵な男の人が現れたら・・男の人が好きに変わるかも知れないと思う・・・まだ先輩はそんな人に出会ってないだけなんじゃないだろうか・・・？

・・だって先輩・・すごく良いお母さんになりそうな感じだもん・・・男前なお母さんがいても全然ヘンじゃない・・・オレのかあさんだって少しそんな感じもあるし・・・

・・女の子から見て素敵な女性って・・だいたいそんなところがあると思う・・・

“　かすがばる～　かすがばる～　次のおおはしでは普通に接続します・・・”

「それじゃ先輩、さようなら。」
オレは席と立つとペコリお辞儀をした・・・
「じゃぁねユウちゃん、また一緒に帰ろう。ウチにもまた食べに来てよね！」
「はい！」
オレはホームに降りて電車が動きだすと、車内の先輩にもういちどお辞儀をした・・・

近いうちにまた先輩の家にお好み焼きを食べに行こうと思う・・・

・・良く考えたら、オレは男なんだから・・先輩が何かしたくても・

・するところが無いから・・何も心配ないんだった。

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー

ー　ー

ー

おまけ　有希と純平

今回は大森先輩との話を書いていたつもりが、純平の話もかなり入ってしまいました。なんだか有希が純平への気持ちを再確認してしまったみたいで（笑）

この小説を読んで下さっている皆様の中には、有希は自分でまだ女の子として自信がないとか言いながら、なんで純平とは恋人気分になってるのか疑問に思っている方もいるかも知れないと思います。それで今回純平の話が出たついでといっては何ですが、これまでの経緯を説明しようかなと思いました。

本当はこういう事は本編を読む中でわかるように書かなきゃいけないんでしょうけど（笑）この話は有希が理解してないことは書きにくいので、なかなか書くことが出来ないので蛇足かもしれないけど説明することをお許し下さい。

（６４話）
まず純平との初めての出会いはバレンタイン特集のスタジオ撮影。
このとき有希は実物の純平を見て
「オレがもし男だったら、こんなカッコいい男の子を見せられたら、自信を無くしてしまったかも知れない・・・オレ・・ほんと女で良かった・・・」
と言っています。これ以前にも有希はニースの山上くんを素敵だと思ったりしてるので、このときすでに女の子目線も入っているのかも知れませんが、有希自身はあくまで普段の自分として、自分が男だったころと比較してそう感じているんだと思います。

でもその後の撮影で純平に後ろから抱きしめられて、ちょっとドキドキしてしまうんですけど（笑）

（６５話）
出会ったその日、家に帰ってから純平から届いたメールに社交辞令な返事を書いた有希は
「純平とふたりで食事なんて考えただけでゾッとする・・・ちょっと想像しただけでまたドキドキしてきた・・・」
と言い、男の子としては男どうしが恋人どうしみたいに食事をするのを想像して“ゾッ”としていますが、ドキドキがどこから来ているのかは良く理解していないみたいです。

１週間後、毎日メールを送ってくる純平に有希はメールを返さず
「ホントしつこいやつだ・・・最初の時いらい、返信せずに放っているのに・・・」
と言い、長谷川に仮面レンジャーの主役をやってることを知らされて
「仮面レンジャーの主役やってるなんて一言も言わないなんて・・・なに気取ってるんだよ・・・（中略）いつもどうでもいいような事ばっかり書いてきてさ・・・（中略）純平の役なんて、どうせちょ

い役だとばかり思ってた・・・」
と同じ男の子として虚勢をはりながらも、内心はドラマの主役をやってることに、純平を見直すとともに、ちょっぴり尊敬の気持ちも芽生えてきました。

そして“ またいつか会えるといいですね”とメールした有希は
「どうせ純平は東京だし、仕事も忙しそうだから会うことなんてないと思う・・・でも、もしまた一緒に仕事をすることがあった時には、気持ち良く仕事がしたい・・・オレと純平はあくまで仕事のつき合いなのだ。」
と言い訳しながらも、また仕事で会えたらいいなという気持ちになっている。

（６６話）
長谷川にメールを返信しないと、じらしてると思われるかも知れないと言われた有希は、毎日1回か2回は返信するようになる。

メールをしながら、いつしか男どうしでメールしているような気持ちになる有希・・・
「純平とはどうせ会うこともないし、オレもそんなに女の子らしくする必要もないと思う・・・オレはもう男とのつき合いは無くなってしまって、少し淋しかったから純平とのメールは思ったより楽しいのだ・・・あっちはどう思ってるか知らないけど、オレは男同士のつもりでメールしてる・・・」
なんて言いながらも、ドラマの撮影で疲れぎみの純平を
“ 純平くんも撮影頑張ってね”
などと女の子らしく励ましてあげながら
「オレがメールするとアイツ元気が出るらしい・・・なんか単純なヤツだ・・・」
と男の子目線で分析するしたたかさも・・・（笑）

（６７話）
しかし、そんな有希を見た長谷川に
「有希ったら、ほんと恋する女の子って感じだもん。バレバレよ！」
などと言われ
「そんなつもりでメールしてるんじゃないよ・・・ただ・・友達として・・・」
と反論するも
「有希って元は男の子だった割には、ぜんぜん男の子の気持ちがわからないのね。いくら女の子の方は友達だと思っても、男の子はそんなふうには思わないわよ。」
「やっぱり有希って男の子っぽい時もあるけど、心は完全に女の子なのねぇ・・・どうせ友達だなんて言って、つれないメールばっかり送ってるんじゃないの？　それじゃ純平くんも堪んないわね。」
「自分では気付いてないのかも知れないけど、有希は純平くんのことが好きなんだと思うよ。」
などと指摘されたあげく、自分の中の男の子まで否定されてしまい、純平とこれまでのようにメール出来なくなってしまった。

（６８話）
急にメールを返さなくなった有希に来た純平のメール
“ユウちゃん・・・なんで最近返信してくれないの？”
の言葉に胸が詰まる思いの有希。
「まだ女の子として男の子と向き合うことが出来ない」
という男の子の気持ちと
「純平に、オレがじらしてるなんて思われたらどうしよう・・・（中略）オレのことヒドイ女だと思うかな・・・もしそんなふうに思われたらと考えると悲しくなる・・・」
と乙女心もにじませる。

メール出来ないことでよけいに純平への気持ちが大きくなってきたのかも知れません。

（７０話）

有希が返信しなくなったため、有希に嫌われたと思い純平からのメールもなくなってしまった。

「オレはもう女だから、男の子とは友達になんてなれないんだ・・・」

「ただオレと純平の友情が終っただけだ・・・それもたぶんオレが一方的に思っていた男どうしの友情が・・・」

と必死に自分を納得させようとする男の子の気持ちと、縁結びの神様に

「またメールくれますように・・・もし純平からまたメールが来たら必ず返信しますから・・・オレ頑張って女の子になりますから・・・」

とお祈りしてしまう女の子の気持ち。

そして願いが届いたことで

「男とか女とかどうでもいいと思った・・・（中略）オレは純平とメールしたい・・・その気持ちだけで十分ではないだろうか・・・オレが女の子になってもうすぐ１年・・・女になるのを怖がってばかりはいられない。」

と女の子として純平とつき合う（？）決意をしたのです。

とまあ、こうした経緯から、有希の中では“女の子になる”ことと“女の子として純平とつき合う”ことは少し違うのかも知れません。

女の子としてはまだいまいち自信を持てない有希ですが、純平の前では自然体でいられるので、有希の中の女の部分が自然に出てくる

のだと思います。

そして（96話）の再会で“ユウちゃん”から“有希”と呼ばれるようになり、よりいっそう自分らしい女の子でいられるようになったんだと思います。

描ききれなかった有希の気持ちご理解いただけたでしょうか？

――――――――――――――
――――――――――――――
――――――――――

これまでのおまけ（その他）の場所

36話　制作おぼえがき　08．6．21
40話　『オレは女子高生』の世界　人物、舞台設定など
45話　架空の西鉄大牟田線案内
49話　名前について
53話　ドラマ化を妄想してみる
61話　「放生会編」おまけ
67話　1周年を迎えて
71話　『オレは女子高生』の世界　第2弾（架空の西鉄大牟田線案内付き）ドラマ『ブザー・ビート』のお知らせも

７３話　「ヒロイン」について
７８話　「出版されたら買いたい作品」のお礼
７９話　「文章」について
８２話　「文章って難しい・説明編」
８６話　ちょっとあとがき　長谷川の誕生日とお父さん
８９話　「Q&A」
９３話　『オレは女子高生』の世界　第3弾（架空の西鉄大牟田線案内付き）
１３２話　イヌ型とネコ型

第１３４話　ＣＤ　オレたちの思い出

「それでね、こんどの日曜日にマリンメッセである九州ガールズコレクションは福岡でも一番大きなファッションショーなんだって。」
「へ～すごいね、みんなで行こうか！」
直美はけっこうノリノリだ。　登校してすぐでも女の子はファッションの話には夢中になってしまう。

「あ、でもね、わたしは裏方のお手伝いするかもしれないから、一緒には見れないかもしれない・・・」
「何で有希は出ないの？　ＪＩＮＯＮで一番人気なんじゃない！」
「そ・・それは・・九州ＪＩＮＯＮの読者モデルの中ではそうかも知れないけど・・・ファッションショーには東京から来たモデルさんがいっぱい出るんだもん。わたしなんかが出られるハズないわよ。」
・・オレはそんな大きなファッションショーのお手伝い出来るだけで満足なんだ。

「おはよう！　これ出来たよ！」
安部っちはクラスに入ってくると一直線にオレたちところに来た。
「もう出来たんだ？見せて！」
直美は安部っちからＣＤを受け取ると・・・
「なかなか良いじゃない！もう少しかかると思った。」
「ちょっと大変だったけど、あんまり遅くなると記憶が薄くなるといけないから早い方が良いと思って。　はい、これ戸田さんの分。」
「ありがとう。スゴ～イ！」
・・ちゃんとオレたちの写真でジャケットまで作ってある！

「それとこれも。」
そう言って安部っちは、あと2枚のＣＤをオレに差し出した・・・
なんだろう・・・？
「ＵＳＪなんかで長谷川さんと井川さんも写ってるから、ふたりの分も作ってきた。」
「わぁ！」
・・安部っち気がきくなぁ・・・
「戸田さんから渡しといて。クラブで会うでしょう？」
「うん、ありがとう。ちゃんと渡しとくから！」
・・きっとふたりとも喜ぶだろうなぁ。

「あ、そうだ・・これって・・ＤＶＤで観れるの？」
「ううん、パソコンで観て。」
「あ、うん・・わかった・・・」
・・パソコンか・・オレ・・パソコン持ってないんだよなぁ・・・
長谷川のウチにも無かった気がするし・・・

・・学校で自由に使えるパソコンは・・たしか図書室に何台かあったハズだけど・・・

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

「長谷川さんのウチってパソコンあったっけ？」
クラブが終って昇降口へ向いながら長谷川に聞いてみた・・・
「ウチはパソコン無いわよ。有希も持ってないでしょう？」
「うん・・」

「せっかく貰ったけど何処で観ようか・・・」
そう言って長谷川は手に持ったCDをペラペラ振ってみせた・・・
「あ、じゃぁ今から図書館行く?」
「でもあそこはヘッドホンで聞かなきゃいけないから、一緒には観れないわよ。」
「・・そっか・・・」
ふたりで別々に観るのもなぁ・・・なんかヘンな感じだし・・・

「それに私が写ってるっていってもUSJのとこだけでしょう?だったら観なくていいわよ。有希ひとりで観てきたら?」
「え~・・」
・・ひとりで観るなんてつまんない・・・どうせだったら長谷川と観たいなぁ・・・長谷川だって修学旅行は一緒だったんだから、自分が写ってなくたって面白いと思う・・・

どうしようかと考えていると、オレはいい考えがうかんだ!
「あっ!そうだ。良いこと思いついちゃった!」
オレは昇降口とは反対の方向へ、長谷川の手を引っ張った。
「ちょっと、どこ行くのよ!」
「いいから、いいから・・・」

「先生こんにちは。」
「あら、有希ちゃんどうしたの? 長谷川さんまで?」
白石先生はいつもと変わらない笑顔で向かえてくれた。
「あの・・先生にお願いがあるんですけど・・・」
「なに?」
「あの・・少しパソコン貸してもらえないかと思って・・・」
「・・パソコンか・・・ごめん、パソコンは貸せないわ。ここで必要なものだから。」

「ほら有希、だからダメだって言ったじゃない・・・」
「うぅ・・」
・・やっぱり長谷川の言うとおりだったのかな・・・
・

「あ、あの・・ここでこのＣＤの画像を観せてもらうだけなんですけど・・・それでもダメですか？」
「なぁんだ、何処かに持って行く訳じゃないのね。だったら良いわよ。何のＣＤなの？」
ほら、やっぱり大丈夫じゃない。　白石先生は優しいんだもん！
「修学旅行のなんです。安部さんがみんなの写真を集めて作ってくれて。」
「良いわねぇ、先生も観ていい？」
「はい！もちろんです。」
修学旅行は白石先生も一緒に行ったんだから、先生だって観たいと思う・・・それに、もしかしたら先生も写ってるかもしれないし・・
・

　パソコンのトレイにＣＤを入れると、モニターに映像があらわれた・・・「修学旅行の思いで」というタイトルのバックには嵐山の風景・・・これってオレが写したヤツだ・・・
イメージに使うから景色とかも貸してって言われて、オレが持ってた嵐山とか京都の町並みとかも渡してたけど・・・こういうふうに使うのかぁ・・・

タイトルの後には次々とオレたちの画像が写り変わっていく・・・自然に画像が入れ替わったりして・・なんかすごくちゃんと作ってある。ＢＧＭまで入ってて本格的だ！
「安部さんってこういうの上手なのね。」
白石先生も感心してる・・・安部っち・・なかなかやるなぁ・・・
「そういえばＵＳＪの順路とかネットで調べてくれたから、結構こ

ういうのに詳しいみたい・・・」
オレはあまり詳しくないから、こんなの見ると尊敬しちゃう・・・

「！」
画面が動画に変わった・・・
「・・これ奈良公園の時のだ！」
シカが撮影中に前を横切って爆笑してるところ・・・こんなとこ誰が撮ってたんだろう・・・
「あ、白石先生も写ってる！」
奈良の旅館で写したやつだ・・・私服の先生って学校にいる時よりも若くみえる・・・

画像は修学旅行の行程に合わせているみたいで、長谷川はなかなか出てこない・・・退屈してるんじゃないかと思ってチラッと見てみたら、あんがい楽しそうに観てる・・・よかった・・・

奈良から京都・・・長谷川はたまに画面のはしに写り込んでることはあるけど、それ以外はほとんどオレたちばかりだ・・・まあ、オレたちの写真を集めたんだから当り前だけど・・・

「あ・・嵐山だ・・・」
景色が流れていく・・・するとその中にオレたちの写真が！・・・
人力車に乗ってるオレと長谷川だ・・・こんなのまで渡してたっけ・・・？
「・・有希こんな写真までみんなに見せんだ・・・」
「あ、ごめん・・・景色なんかを渡したハズだったんだけど・・・混じってたみたい・・・」
「・・まあいいけど・・・」
・・？・・長谷川がそんなに怒ってないみたいでホッとした・・・
長谷川って怒るタイミングが判らないから困っちゃう・・・

京都の町並み・・・

「・・・あんた・・まさか舞妓の写真まで渡してないでしょうね？」

「そ・・それは大丈夫！」

オレと長谷川の舞妓さん姿は注意してたから絶対渡してない！・・・

だってまた長谷川に怒られたくないもん・・・

みんなの京都の写真は見たやつもあるけど、見てないやつも多い・・

・この日、オレはみんなと行動してないから、どんなことがあったのかは話で聞いただけだ・・・だから・・なんかオレの知らない弘子たちがいるようで・・面白いけど・・このとき一緒にいられなかったのがちょっと淋しい気もする・・・

・・オレも長谷川や兄さんといたのに・・みんなとも一緒にいたかったなんて・・オレって・・ちょっと我がままかな・・・

「あ！！」

長谷川の大きな声にオレはもの思いから覚めた・・・？・・何事かと思って画面を見ると！

・・ヤバイ・・・みんなと写った舞妓さん姿のオレたちの写真だ・・

・でも・・これは・・・

「あ・・あの・・これは仕方ないわよ・・・だってわたしが渡したんじゃないもん・・・」

・・これればかりは弘子たちが写したものだから、オレに言われてもどうしようもない・・・

「・・そっか・・・仕方ないわね・・・」

・・？・・長谷川にしては簡単に納得したなぁ・・・お母さんに見せた時はすごく怒ったのに・・・まあ、このＣＤはオレたちだけが観るものだから、そんなに気にならないのかも知れないな・・・何にしても怒られなくて良かった！

「なになに？　舞妓さんがどうかしたの？」
あ・・いけない・・後ろから白石先生が観てること忘れてた・・・
「い・・いえ・・何でもないです・・・こっちの話で・・・」
とりあえずゴマカシとこう・・・
「先生、この舞妓さん有希なんですよ！」
（！！）
「ほんと？！　なんで先生に教えてくれなかったの？」
「い・・いえ・・わざわざ言うほどのことじゃ・・・」
・・なんで長谷川のヤツ言っちゃうんだよぉ！・・しかもオレのことだけ・・・
「でもみんなには内緒にして下さいね。有希が恥ずかしがるから。」
え？！・・・どうしてそうなっちゃうんだよ！・・そんなこと言うんならオレだってもう1人が長谷川だってバラしちゃうぞ！

「先生、あのね・・！・・・」
オレがしゃべろうとすると長谷川が睨んでる・・・それって長谷川のことは言うなってこと・・・？
「あ・・そうです・・この舞妓さん・・わたしなんです・・・」
「大丈夫よ、医者には守秘義務があるんだから。みんなには秘密にするわ。」
「・・・・・」
「でもすごいじゃない！　こっちの本物の舞妓さんより可愛いわよ。」
先生は長谷川の方を指して言った・・・自分の舞妓姿よりオレの方が可愛いって言われて、長谷川はちょっとイヤそうな顔してる・・・
良いきみ！こういうのを自業自得って言うんだ。

画像はＵＳＪになって長谷川と井川さんも出て来た・・・長谷川

も自分が出てくるとやっぱり嬉しそうだ。
「あはは・・有希すごい顔してる！」
「うぅ・・」
ジュラシックパークの最後に水に落ちた時のだ・・・安部っち・・
こんなのまで入れなくていいのに・・・恥ずかしいなぁ・・・

でもオレとしては、この思い出ＣＤに長谷川も写ってて良かった・・
・長谷川はすぐに怒るし、イジワルなこともするけど・・・オレは
長谷川のことが好きだ。　ＵＳＪで長谷川と井川さんがあぶれてた
ことに感謝しなきゃ。

ＣＤは博多駅で最後にみんなで写した写真で終っていた・・・

「あれ？　これ何かな？」
再生が終ったと思ったら画面に、もう一度再生の下の方に“シーク
レットファイル”というのがあるのに気づいた・・・
「有希、クリックしてみようよ。」
「え？　う・うん・・・」
安部っち・・こんなこと言ってなかったのに・・・修学旅行と関係
あるファイルなのかな？

“ポチッ”

再生のボタンを押すと音楽が鳴り出した・・・この曲・・たしか何
かのＣＭの曲だ・・・
“　時をこえて　きみを愛せるか・・・”
「小田和正ね。」
白石先生が言ったので思い出した・・・たしかにそんな名前の人だ
ったと思う・・・

でも出て来た映像を観てオレはビックリした・・・オレの昔の写真だ！

・・画面には“有希グラフィティ”の文字・・・な・・なんだこれ・・・！

まだ入学したての頃のオレ・・・髪も短くて・・・まだ少し男の子っぽい・・・セーラー服でみんなと写る顔も緊張してるみたいだ・・・

・・ＢＧＭに合わせて画像は次々に変わっていく・・・

・・だんだんオレも女の子に馴れてきて・・・クラスにも普通に馴染んでくるのがわかる・・・オレも自然な笑顔になってきて・・このころのオレはもう女性ホルモンを始めてただろうか・・・？　たぶんオチンチンも立たなくなって・・女の子でいるのが楽になってきた頃だと思う・・・

・・そしてセーラー服は夏服に・・・ちょうどオレが女になる決心をした頃・・・胸も少しづつ膨らんできて女の子らしい身体つきになってきた頃だ・・・髪も伸びてお下げになってる・・・

「有希ってあまり変わってないと思ってたけど、今と比べるとまだ幼い感じね。」

長谷川がそう言った・・・たしかに・・自分で言うのも恥ずかしいけど・・この頃のオレって・・なんか初々しい感じだ・・・

・・髪が三つ編みになってるのを見ると・・まだ夏服だけど夏休みの後らしい・・・読者モデルのお仕事を始めて少したった頃・・・この頃はもう胸には何も入れてない・・・まだ小さいけど自分の胸

だ・・・読者モデルを始めたからか、笑顔にも余裕が出てきた感じがする・・・それとも女の子でいるのが当り前になったからだろうか・・・？

！！・・プールの写真・・・スクール水着のオレ・・こんなの誰が写してたんだろう・・・この時は股間にテーピングしてるハズだけど・・写真からは不自然な感じはまるでない・・・みんなに比べればあまり凹凸がない身体だけど・・・それでも女の子に見えるから不思議だ・・・もうホルモンの影響で女の子っぽい身体になってたんだと思う・・・女の子としては・・もう少し腰のくびれが欲しいところだけど・・・

・・そしてまた冬服に・・・たしかこのとき初めてオレは自分の胸が、ヌーブラでかさ上げしてた時より大きくなったことに気づいたんだ・・・冬服のセーラー服の胸の部分が少しきつくなってて・・・写真ではよくわからないけど・・・

・・あ・・弘子の家でのクリスマスパーティー・・・オレにとっては弘子に男だとバレてしまった日だ・・・バレた時は頭が真っ白になって・・・もう何もかも終りだと思った・・オレにとっては苦い思い出だ・・・でも・・今あらためて考えてみると・・この時バレたから・・その後のピンチを弘子に助けてもらうことが出来た・・・修学旅行のお風呂だって、弘子がいてくれなければ、とてもみんなと一緒になんて入れなかっただろう・・・長谷川も時々オレのこと助けてくれるけど、クラスが違うとどうしても限界がある・・・

・・次々に映し出されるオレの学校での日常・・・オレが知ってる写真もあるし、誰が写したのか知らないのもある・・・

・・どんたくのパレード・・・若村先生の写真じゃない・・・誰が

写したんだろう・・・

・・学園祭・・・お花を活けてたり・・お茶を点〈た〉ててたり・・いろんなオレが写っている・・・

・・最後はクイーンコンテスト・・・裁縫・・お料理・・・そしてウエディングドレス・・・エスコートの大森先輩の横で微笑むオレ・・・なんか・・これって結婚式のビデオみたい・・・

「すごいじゃないコレ！　有希の女の子としての歴史がつまってる感じ・・・」

「・・ほ・・ほんとねぇ・・・・」

「え?!」

・・なんで?・・白石先生・・泣いてるの・・・?

「・・ごめんね・・先生なんだか妹の結婚式みたいな気がしちゃって・・・・」

「・・・・・」

「有希ちゃんのことはずっと見てきたから、こんなふうに観せられると感動しちゃって・・・」

・・せ・・先生・・・そんなこと言われたらオレも・・・

・・一気に涙があふれてきた・・・

「・・せんせい・・・」

・・オレと先生はふたりで大泣きしてしまった・・・こんなとこ長谷川に見られるの恥ずかしいけど・・・涙はなかなか止めることが出来なかった・・・本当に結婚するワケじゃないのに！

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

「・・白石先生が感動するのも解るわ・・わたしだって少しはウルッときたし・・・」

駅への帰り道で長谷川がボソッとつぶやいた・・・

「ほ・・ほんと？」

・・長谷川がオレの移り変わりを観て感動するなんて・・ちょっと信じられない・・・

「何よその顔・・わたしが感動しちゃいけないっていうの？！」

「そ・・そんなことは・・ないけど・・・」

「あんたはどう思ってるか知らないけど、わたしだって有希のことずっと見てきたんだからね。」

「・・そっか・・・」

・・たしかに・・オレは長谷川にはいろいろ見られてる・・・

「それにわたしは男の頃のあんたも知ってるんだからね！　有希が女になってからしか知らない白石先生より感動するかもしれないでしょう？」

「・・まぁ・・そうかも・・・」

・・でも・・長谷川はなりゆきでオレのこと気にかけてくれてるけど・・・そんなにオレのことなんか気にしてないと思うんだけど・・・

・・でも・・今日は怒らなかったから良かった・・・舞妓さん姿の写真なんか出たときは、正直怒るに違いないと思ったんだけど・・・もしかしたら、お母さんに見られたのがイヤだったのかな？・・・お母さんは喜んでたのに・・・オレだったら、かあさんが喜んでくれたらオレも嬉しくなっちゃうんだけどなぁ・・・

「あっ！　でも・・あんなわたしの移り変わりなんか観たら・・みんなにわたしが男だってバレないかな?！　だって・・最初の方は男の子っぽかったでしょ?」
「ぜんぜん！　そんな心配しなくても、有希は最初から女の子っぽいわよ。まあ、子供っぽかったのが少し女らしくなってきたって感じにしか見えないんじゃない?」
「・・そ・・そう・・・?」
・・だったらいいけど・・・オレって最初から女の子っぽかったのかな・・・たしかに・・男っぽかったらバレてるよな・・・

“ブルルル・・ブルルル・・”
「あ、電話だ・・・」
携帯を見るとかあさんからだった・・・

「もしもし・・」
「あ、有希?　今どこにいるの?」
「・・もうすぐ久留米の駅だけど・・・」
「それじゃあと３０分くらいで家につく?」
「えっと・・３０分じゃギリギリかも・・・」
「そう・・・じゃぁ、１時間後にかあさん一度家に帰るから、出かけないで待ってて。ちょと有希に話があるから。」
「・・うん・・わかった・・・」
・・なんだろう・・オレに話って・・・電話で言えばいいのに・・・電話では言えないことなのかな?

「どうしたの?」
・・長谷川に聞かれても・・オレだって何のことだかわからない・・
・
「ううん・・かあさんが話があるから、家にいるようにって・・・」

・・かあさんがこんな電話してきたことなんて、今までなかった気がする・・・いったい何なんだろう・・・

―――――――――――――――

―――――――――――――――

――――――――――

　かあさんがウチに帰ってきたのは、オレがウチに着いてから４５分ほど経った時だった・・・
「ごめん有希、遅くなった。」
「ううん、別にいいけど・・・」
オレも夕飯の仕度しながら待ってたし・・・
「かあさん、今日はずいぶん早いんだね。」
「いや、また会社に戻らなきゃいけないの。」
・・なんだ・・このごろいつも帰りが遅いから、今日こそは一緒に晩ごはん食べようと思ってたのに・・・

「有希に頼みたいことがあって、あさっての金曜日なんだけど、有希学校休めない？」
「え？！　学校を休むの？」
・・かあさんがオレに学校を休めなんて・・・オレは別にかまわないけど・・・そんなこと言われたことない・・・
「わたしは・・いいけど・・・なんで？」
「かあさんの会社のコがインフルエンザにかかっちゃって出てこれないらしいの。だから有希に手伝ってもらいたいのよ・・・」
「え・・で・・でも・・わたしにかあさんのお仕事なんて・・手伝えるかなぁ・・・」
オレはかあさんがどんな仕事してるか知らないけど・・・オレに手

伝えることなんか無さそうな気がする・・・

「大丈夫よ。有希、写真うつすのは得意でしょう？」

「・・うん・・まあ・・・」

「有希はかあさんの横についてて、かあさんがココ撮ってって言ったところを写してくれればいいの。」

「・・それって難しくないの？」

「難しくないわよ。会社のコだってそんなに写真が得意な訳じゃないし、有希だったら安心して頼めるわ。」

「・・そう・・・」

オレだってかあさんが困ってるなら助けてあげたいし・・・学校なんて1日くらい休んだってどうってことない・・・特にウチの学校は・・・

「わたしは学校休んでもいいわよ。」

「それじゃお願いね。学校には明日かあさんから適当な休む理由を電話しておくから。」

「う・・うん・・・」

「じゃぁ、かあさん会社に戻るわね。」

「うん・・気をつけてね。」

・・かあさんはまた急いで会社に戻っていった・・・かあさんのお仕事も大詰めだって言ってたけど・・・あんまり忙しすぎて・・体とか壊さないといいけど・・・かあさんは頑張り屋さんだからなぁ・・・

・・とうさんとは大違いだ・・・

第１３５話　仕事　はじめてのお手伝い

金曜日、今日はかあさんのお手伝いで学校を休んだ・・・かあさん公認で学校を休むなんてめったにないと思う。　お仕事の手伝いなんて緊張するけど・・こんなこと初めてだから、なんだか少しワクワクしてくる・・・

かあさんはオレを休ませる理由として、西新〈にしじん〉のおばあちゃんが病気になったからと学校に言ったらしい・・・かあさんったら・・おばあちゃんは元気なのに、病気にしちゃうなんてちょっとヒドイと思う・・・おばあちゃんは自分のお母さんなのに・・・
（西新のおばあちゃんについては４０話参照）

でもかあさんは“嘘も方便”なんて言って平気な顔してる・・・オレたちには嘘つくのはダメだって言うくせに・・大人ってけっこう勝手だ・・・

今日のオレはいつものようにスカートじゃない・・・作業現場だからパンツじゃなきゃいけないのだ・・・スカートだと引っかかったり、大きな板が倒れたりすると風でめくれちゃうこともあるらしい・・・オレだって作業してる人たちにパンツ見られたらたまらないから、オレの体型ではパンツスタイルはちょっと苦手だけど・・このさい仕方がない・・・

髪もゴムで後ろでひとつにまとめて、邪魔にならないようにしてきた。お化粧もかなりおさえめだ・・・

作業現場は寒いらしいから、レギンスの上からレディースのジーン

ズをはいて、上にはレモンイエローのセーターと赤いカーディガン。衿元にモコモコがついたハーフコートと、足にはスエードの短く折り返したブーツを履いてきた。おかげで今、かあさんの車の中では少し暑い・・・オレは狭い軽の助手席で、シートベルトを外してコートを脱ぎ、後ろの座席に置いた・・・

「ねぇかあさん、作業現場ってどこなの？　遠いの？」
「マリンメッセよ。有希も行ったことあるんじゃない？」
「・・マ・・マリンメッセ・・・？」
・・マリンメッセっていえば・・・あさってにはクリスマスコレクションが始まるのに・・・まさか？！
「かあさんがやってる仕事って、もしかして九州ガールズコレクションなの？」
「そうよ、有希知ってたの？」
「知ってるわよ！　わたしこれでも読者モデルよ？　わたしも編集長に頼んで裏方のお手伝いさせてもらうんだもん。」
「・・そうだったの、ごめんね。このごろかあさん忙しくて有希の話、聞いてあげられなかったわね。」
「う・・ううん・・それはいいんだけど・・・ただビックリしただけ・・・」
・・だって九州で一番大きなファッションショーにかあさんが係わってるなんて・・・かあさんがそんなスゴイ仕事してるなんてオレぜんぜん知らなかった！

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――

マリンメッセは博多港の近く・・・まわりが海だから風が強くて寒さもかなりのものだ・・・やっぱりコート着てきて良かった。足もブーツじゃなきゃ寒かっただろう。このブーツは短いけど、上の折ってる部分を伸ばすと長くなる・・・そうすると今は飾りのモコモコが内側になるからあったかいのだ。

マリンメッセは夏休みに聖子さんのコンサートを観にきたところ・・・あんな大きなところにどんな舞台が出来てるんだろう・・・？

警備員さんに通行証を見せて、コンサートの時とは違う裏のほうの通用口から中に入る・・・

マリンメッセの中はもうかなりファッションショーの舞台が出来ていた。舞台からはウォーキング用の通路が長く突き出ている・・・テレビでは観たことあるけど・・ウォーキング用の通路ってこんなに長いんだ！・・・もしオレが沢山の人が見てる中、こんなとこ歩かなきゃいけなかったら緊張して足がすくみそうだ・・・しかも先っちょでポージングするなんて・・・モデルさんって大変だなぁ・・・

「・・これ・・かあさんの会社が作ったの?!」

「ううん、作ったのは発注した舞台制作が専門の会社よ。かあさんの会社ではこの舞台のデザインをやったの。」

「へぇ〜・・・そうなんだ・・・」

・・でもスゴイなぁ・・・こんなのデザインするなんて・・・

「・・それで・・わたしは何を写せばいいの?」

「これからかあさんの会社でデザインした通りに出来てるかどうか確認していくから、もし発注と違う所があったら写真に撮っておいて、直せるところは本番までに直してもらうし、直せないところは今度やるときに注意しておくの。」

「そうなんだ・・・」
「出来が良くなくてもそのままにしておくと、どんどん職人さんの仕事が雑になっちゃうからね。」
「へぇ〜・・・」
・・なんだか仕事って大変なんだなぁ・・・

舞台はほとんど出来てるけど、回りはまだ資材や足場があって雑然とした感じだ。舞台の上も汚れないようにシートが張ってある。

その中をかあさんは図面やイメージイラストを見ながら、大きなところから細かなところまで注意して見ていく・・・どんどん現場監督さんに指示を出しながら、オレに写しておくように言っては、次々に進んでいくからオレも遅れないように撮影しながら懸命について行かなきゃいけなかった・・・思ったより大変だ・・・

かあさんはいつもの優しいかあさんと違って、男の人とも対等に話をしたり、手を抜いてるところがあったりすると、躊躇なくやり直させる・・・現場の人にも少し怖がられてるみたいで・・・なんか別の人みたい・・・でも・・仕事中のかあさんってちょっと怖いけど・・カッコイイ!

「ここもう少しなだらかなRに出来ないかしら? こういうデコボコがあると光が当った時に目立つのよね。」
「そうですね・・・もう一度アクリルを張り替えさせましょう。おい!ちょっと!」
現場監督さんは作業する人を呼んで、やり直しの手順を話す・・・

その後、かあさんと監督さんは隅の方に置かれたテーブルに図面を置いて、何か難しい話を始めた・・・オレはしばらくかあさんの後

ろで立ってたけど、あまり長いので退屈してきた・・・

「・・あの・・ちょっとあっちの方見てきてもいい？」

「いいけど、あまり遠くに行っちゃダメよ。それと作業の邪魔にならないようにね。」

「うん、わかってる。」

オレはかあさんの許しをもらって舞台の方を見に行った・・・実はさっきから気になってたことがあったのだ。

それは舞台の左の方にある、青い丸い球状のモノだった・・・最初は大きなクス玉かと思ったけど・・上から吊ってないから違うみたい・・・

近くに行ってみると、それは花だった・・・見てると吸い込まれそうな、深みのあるあざやかな青いバラで出来ている・・・どうやらオアシスで大きな球を作ってあり、それに活け花の要領で挿してるみたい・・・

大きな高い脚立に乗ったオバサンが、その大きな青い球にオレンジや白や緑の花を付け足している・・・いったいコレなんだろう・・・

オレがしばらく下から見上げていると・・・

「そこ！そんなとこでボケッと立ってたら危ないわよ！！」

オレはいきなり大声で怒鳴られて驚いた。

「あ、は・・はい・・」

「もっとあっちにいなさい！　あっち！！」

その人はハサミを持った手で向こうの方を指した・・・

「あ・・はぃ・・ごめんなさい・・！」

オレは謝って、すぐにその場から離れた・・・あぁ・・ビックリし

た・・・

少し離れたところから見ていると、その人はエプロンをしたアシスタントらしい女の人にも怒鳴りちらしながら、必要な色の花を持ってこさせたりしている・・・

オレは最初その人のことを、エプロンしてるし、髪も茶色で長いからオバサンだと思ったけど・・・どうやら男の人みたいだった・・・

オバサンみたいな男の人は、アシスタントの女の人に持ってこさせた花を脚立の上で受け取ると、ハサミで手際よく茎を切り、葉っぱを落しては、青いバラの間に挿していく・・・

「あっ！！」
しばらく見ていると、オレにもそれが何かわかってきた・・・花で作った大きな地球だ！

青いバラが海の部分で、陸や雲を白やオレンジの色の花で作っているのだ・・・
「・・すご～い・・・」
これも活け花なのだろうか？・・でも・・こんなの見たことない！！
「・・沼の坊？・・それとも花月流・・かな・・・」
オレはしばらく時間が経つのも忘れて、花の地球が出来ていくのを眺めていた・・・

「！」
ふと我に帰って時計を見ると、もう４０分も経っていた・・・
「いけない！・・そろそろかあさんのとこに戻らなきゃ・・・」
急いでかあさんのところに戻ってみると、かあさんはまだ現場監督

さんと話していた・・・もう少しかかりそうな感じだ・・・
（・・な～んだ・・・こんなことならもう少し見てれば良かった・・・）

―　―　―　―　―　―　―　―　―　―　―
―　―　―　―　―　―　―　―　―　―　―
―　―　―　―　―　―　―　―　―　―　―
―　―　―　―　―　―　―　―　―　―　―
―　―　―　―　―　―　―　―　―　―　―
―　―　―　―　―　―　―　―　―　―　―

「戸田さん！」
向こうから呼ぶ声がして振り返ると、背が高くて浅黒い男の人がこっちへ歩いてくる・・・胸をはだけたシャツにオシャレなスーツと高そうなコート・・・
「フジタさん！　おはようございます。」
かあさんはイスから立ち上がって挨拶した・・・かあさんはその人と親しいみたいだ・・・誰なんだろう・・このひと・・・
「舞台見ましたよ。いやあ！良いじゃないですか！スバラシイ！ランウェイを鏡張りにするなんてワンダフルな発想ですよ！」
男は両手を広げて大袈裟に舞台の方を見渡した・・・
「ありがとうございます。」
かあさんの態度はさっきまでとは違って丁寧だ・・・この人・・偉い人なのかな？

「おや？　こちらのお嬢さんは？」
「あっ、このコは娘の有希です。今日は会社のコが風邪で出て来れなかったので手伝いを頼んで・・・有希、こちらはプロデューサーのジミー・フジタさん。」
「こ・・こんにちは・・戸田有希です・・」
・・かあさんがオレのことを“娘”と紹介してくれたからちょっと

驚いた・・・でも・・こんな恰好じゃ“息子”と紹介するのも変だろうけど・・・

「ほお～　戸田さんにこんな大きな娘さんがいるなんて知りませんでした！　それに可愛らしい！　あさって舞台に出演するモデルかと思いましたよ！」

・・なんか・・この人調子がいいこと言う人だなぁ・・・

「何歳？」

「あ、１６歳です・・」

「高校生？」

「はい・・」

・・なんでオレの歳なんか聞くんだろう・・・あ・・高校生なのに平日にこんなとこにいちゃマズかったかな・・・？

「娘もモデルやってるんですよ。ね、有希。」

・・かあさん！・・そんなことわざわざ言わなくていいのにぃ・・・

「ホント？」

「・・はぃ・・あ！・・いぇ・・読者モデルですけど・・・」

「どこの雑誌？」

「あ・・えっと・・九州ＪＩＮＯＮです・・・」

「九州ＪＩＮＯＮ？・・・九州ＪＩＮＯＮはチェックしてるけど・・君みたいなコいたかなあ？」

・・ほらやっぱり・・・オレなんて全然知られてないんだもん・・・オレのこと知ってるのは同年代の女の子くらいだと思う・・・

「君、本名でやってる？」

「いぇ・・雑誌では“春日ユウ”って名前です・・・」

「え？！　君ユウちゃんなの？」

「？・・はぃ・・・」

・・な・・なんだろう・・そんなに驚いたりして・・・

「ユウちゃんって戸田さんの娘さんだったんですか?!　驚いたなあ!」
「・・・・・」
「いやあ、どっかで見た顔だと思ったんですよ!　ユウちゃん、雑誌の時とは雰囲気変わるんだねえ。」
・・そりゃぁ・・今日はお化粧も少ししかしてないから・・・ブスだって言いたいのかな・・・?
「ユウちゃんが普段はこんなに可愛くて清楚な娘だとは思わなかったよ!」
「!・・そんな・・・」
・・この人・・やっぱり調子がいい人だ・・・初めて会ったのにこんなにオレのこと褒めるなんて!

「それじゃあ、ユウちゃんもあさってのショーに出るんだね?」
「いえ!　わたしは出ません・・・わたし読者モデルだから・・・裏方のお手伝いはさせていただくつもりですけど・・・」
「そんなのもったいないよ!　演出がモデルが足りないって言ってたから君も出るといいよ。」
「え?!」
「九州ＪＩＮＯＮは確か・・編集長は佐々木女史だよね。　彼女なら知ってるから私から話しておこう。　演出にも話つけておくからね。」
「え!・・そ・・そんな・・わたしは・・・」
・・そんなこといきなり言われても・・・オレ困っちゃうよ・・・
「有希、せっかくのお話なんだから、やってみたら?」
「・・そんなぁ・・・」
・・かあさんまで?!・・・オレ・・どうしたらいいんだろう・・・

あんなとこモデルさんみたいに歩けないよぉ・・・

「あらぁ！　フジタちゃん来てたの？」
あ！・・さっきのオバサンみたいなオジサンだ！！

「刈谷先生！　見ましたよお、生花で地球を作るなんて！スゴイ発想じゃないですか！」
「あら、あれは戸田さんが考えたのよ。　あたしはただ言われた通りに活けただけ！」
「そんなことないですよ！刈谷先生でなければ、あんなにイメージ通りに出来ませんわ。」
「あら！戸田さんもお上手ねえ。」

「・・・！」
・・刈谷先生？・・・それじゃぁ・・この人があの有名な華道家の・・刈谷章之介〈かりたに　しょうのすけ〉？

・・名前だけは聞いたことあったけど・・・こんな人だとは知らなかった・・・

「先生、こちら戸田さんの娘さんだそうですよ。」
「え？ホント？！　戸田さんったらこんな可愛らしいお嬢さんがいたのね！」
先生がオレを見つめたのでドキッとした・・・さっき怒られちゃったから・・・
「あ・・さっきはごめんなさい。」
「ん？　何のこと？」
「・・あ・・あの・・さっき・・お花のところで怒られたから・・・」

「あぁ、あれアナタだったの？　ごめんね。あたし花活けてる時は気がたってるから、ついつい怒鳴りつけちゃうのよね！」
「有希！　怒られたって、あなた何かしたの？！」
「！・・あ・・あの・・・」
・・かあさんに強く言われて、オレはすっかり怖じ気づいてしまった・・・オレはかあさんの仕事の邪魔をしてしまったのだろうか・・・かあさんの期待を裏切ってしまったかも知れないことに、オレはどうしたら良いのかわからなくなってしまった・・・でも、そんなオレを助けてくれたのは刈谷先生だった・・・

「戸田さん、娘さんは悪くないのよ。見てただけなのよね、興味があったんでしょう？」
「ぁ・・はい・・・」
オレは慌てて答えた・・・たしかにオレは興味があった・・・だってあんな活け花見たことないし・・・
「ただ見てるところがちょっと近かったから、ハサミでも落としたら危ないと思って怒鳴っちゃったのよ。」
「そうなの？有希・・」
「うん・・」
オレはコクリと頷いた・・・

「あら、あなたユウキって名前なの？」
「・・はい・・・」
「何だか男の子みたいな名前ね！」
「！！」
オレがふいを突かれて、どう言えばいいのか迷っていると、プロデューサーのフジタさんが・・・
「このコは“春日ユウ”って名前でモデルやってるんですよ！」と言い
「いま、今度のショーに出演するように言ってたところだったんで

すよ、ね！」
フジタさんはオレに向って同意を求めてきた・・・でもオレは・・・
「あ・・あの・・わたしはまだ出演するとは・・・」
「あら？　どうして？」
刈谷先生がオレに聞くので、オレも正直に答えた・・・
「あの・・わたしまだモデルじゃなくて・・ただの読者モデルだし・・ファッションショーなんて・・・」
「なにそれ？　謙遜？　謙遜なんて美徳じゃないわよ！」
先生は急に険しい顔に・・・オレ・・なんか悪いこと言ったかな・・・？
「・・謙遜じゃないです・・・わたし・・自信がないんです・・・」
・・オレはそもそも女の子として自信がないのに・・・モデルとしての自信なんてあるハズない・・・雑誌のお仕事は楽しいけど・・ファッションショーは・・・オレにはムリだと思う・・・
「でもあなたにとってこれはチャンスじゃない？　チャンスなんて何処にでも転がってるものじゃないのよ！」
・・それは・・そうかも知れないけど・・・
「・・でも・・・」
“でも”じゃないの！チャンスはね、その時につかまないと、過ぎてしまってからじゃもう遅いの。」
「・・・・・」
「自信が無くてもやってみる勇気が必要なのよ。これからあなたも大人になっていくと、そういう事にたくさん出会うことになるのに、そんな時いつも逃げるつもりなの？」
「・・逃げるなんて・・・」
・・オレはべつに逃げてるワケじゃない・・・ただ・・ちょっと不安なだけだ・・・

・・でも・・これって・・逃げてるってことなのだろうか・・・？

　オレが決めかねているとフジタさんが・・・
「ユウちゃん、大きな舞台は誰でもコワイんだよ。あのカニちゃんだって最初のころはファッションショーの前は緊張して震えてんだ。」
「え？・・蟹原さんが？！」
「そうだよ。でもコワイからってやらなかったらそれでお終いだ。でもやれば、たとえ失敗しても何かが残る。」
・・うぅ・・・フジタさんって調子いい人だと思ったけど・・・それだけじゃないみたい・・・なんか・・説得力があるっていうか・・
・
「やるよね。ユウちゃん！」
「・・はぃ・・」
・・オレは思わずそう言っていた・・・

「よし！決まりだね。　それじゃそういうことで！　話は全部つけておくから、明日9時からリハーサルだから遅れないようにね！」
「ぇ・・ぁ・・はい・・・」
「それじゃ刈谷先生、戸田さん、あとは良きにお願いします！」
そう言うなりフジタさんは足早に行ってしまった・・・

・・なんか・・勢いで返事してしまったけど・・・大変なことになっちゃった！

・・・オレがファッションショーに出演するなんて！！

第136話　昼食　刈谷先生とオレ

プロデューサーのフジタさんが行ってしまうと、刈谷先生がかあさんに・・・

「戸田さん、今からアレ回そうと思ってるの。いっしょに見て下さる？」

「あ、もう回せるんですか？」

「まだ午後から少し手直しすると思うけど・・・一度回してみようと思って。」

・・・回すって・・いったい何を回すんだろう・・・

先生は携帯でどこかに電話をかけた・・・

「ちょっと電源入れて回してくれる？照明もつけてね。」

すると、向こうの方に見える花で出来た地球が照明で照らされた！

「わあ！きれい！」

オレは思わず声をあげてしまった・・・それほど光に照らされて浮びあがった花の地球はきれいだった・・・まるで本当に宇宙に浮んでるみたい・・・

「ユウちゃん気に入ってくれた？」

「あ、はい！」

さすが大掛かりな活け花を得意とする花月流の先生だけある！

先生が向こうにいるアシスタントの人に手を回して合図すると、ゆっくりと花の地球が回りだした・・・

「すごい・・本物の地球みたい・・・」

「綺麗でしょう？これはユウちゃんのお母様の考案なのよ。」

「・・・・・」

・・すごいなぁ・・・かあさんの仕事って・・・でも考えたのはかあさんでも、こんなにステキな形で現実に活けちゃう刈谷先生はも

っとスゴイと思う・・・さすが花月流の家元だ！

　オレがすっかり回転を続ける地球に見惚れていると、先生が・・・
「ところで戸田さんはこのあと時間ある？　もうそろそろお昼だし、いっしょにお食事でもどうかしら？　まあ、近所のファミレスだけど・・・」
「あ～・・すみません、私はすぐに会社に戻らないと午後からの指示が間に合わないので。」
「そうなの、残念ねぇ・・・ユウちゃんもいっしょに戻らなきゃいけないのかしら？」
「いぇ・・・有希にやってもらう事はもう終ったので、カメラのデータさえあれば・・・」
「それじゃ、ユウちゃんだけ借りてもいいかしら？」
そう言って先生がオレの腰に手を回してきたので、オレはビクッとしてしまった・・・
「ねぇユウちゃんいっしょにお食事しない？」
「え・・ぁ・・あの・・・」
オレはどう返事をしていいかわからなくて、助けを求めてかあさんを見た・・・

「有希を？　ご迷惑じゃないかしら？」
「迷惑なんてとんでもない！　お食事はたくさんで食べた方が美味しいわ。ユウちゃんも一緒だと楽しいと思うんだけど？」
「有希・・行く？」
「えっと・・・」
・・どうしよう・・・オレなんかがこんな大先生と一緒にお食事なんかしていいのだろうか・・・？

「ユウちゃんはお花に興味がありそうじゃない？　なんだか花を見

る目が違うわ。」
「あ、はい・・わたし少し活け花やってるんです！学校のクラブ活動ですけど・・・」
「あら！やっぱりそうなの？　どうりで目が真剣だと思ったわ！お食事しながらクラブ活動の話も聞かせて？」
「ぁ・・は・・はぃ・・・」
・・なんか・・こんな大先生のお誘いじゃ断りづらい・・・それにオレも・・先生に活け花の話・・聞きたい気もするし・・・だってこんな偉大な先生と活け花の話できるなんてめったになさそうだ・・・

オレはかあさんにカメラを渡しながら言った。
「かあさん、大事に扱ってよ？」
・・このカメラは進藤さんにもらった大切なカメラだから・・・
「わかってるわよ。有希こそ、くれぐれも刈谷先生に失礼のないようにね。」
「うん。」
「それじゃ先生、有希のことよろしくお願いします。」
「心配しなくても大丈夫よ！　捕って喰おうなんて思ってないから！　ほほほ・・冗談じょうだん！」
そんなことを言って刈谷先生は笑った・・・当り前だ・・捕って喰われちゃたまらない！

―――――――――――――――
―――――――――――――――
―――――――――

刈谷先生がオレを連れていってくれたのは、近くにあったファミレスだった。
「ごめんね、こんなとこで。」
「いぇ・・」
オレはてっきり他のアシスタントみたいな人も一緒なのかと思ってたら、どうやらオレと先生の二人だけで食べるみたい・・・緊張するなぁ・・・

「本当はフランス料理なんかだったら良かったんだけど。行きつけのお店はまだ開いてないから・・」
「そ・そんな！　わたしまだ高校生だから・・フランス料理なんて・・ファミレスで十分です！」
・・実際オレは、マックとかミスドばかりで、ファミレスもそんなに入らないし・・・いきなりフランス料理なんか連れて行かれたら、緊張しすぎてノドに通らないと思う・・・

「ユウちゃんは何がいい？」
先生にメニューを渡されて・・・
「あ・・えっと・・・わたしはコレを・・・」
オレは“ハンバーグステーキセット”を頼んだ・・・でも・・このメニューはちょっと男の子っぽかったかな・・・？
「それじゃ・・あたしはこの“寒い季節のキノコパスタ”お願い。」
・・うぅ・・・オレもそういうオシャレなのにすれば良かった・・・女の子が“ハンバーグステーキセット”って・・・
・・オレも女の子になってずいぶん経つけど・・食い意地だけはなかなか男の子の頃のクセが抜けない・・・

「ユウちゃんは学校で活け花のクラブって言ってたけど、どんなの活けてるの？　いま写真とか持ってない？」

「あ！はい、持ってます・・・！」
・・オレはバッグの中を見て思い出した・・・
「・・しまった・・カメラかあさんに渡したんだった・・・全部あの中にあったのに・・・」
・・オレってなんてドジなんだろう・・・

「それは残念ね、楽しみにしてたのに。他には持ってないの？」
「・・・あ・・そうだ、写メで撮ったのなら・・・画質はいまいちですけど・・・」
オレは学園祭の時に、デジカメの他にも携帯で押さえておいたのを思い出した・・・
「それでも良いわよ。見せて！」
「えっと・・これです・・あんまり良いのじゃないんですけど・・・」
オレは携帯で写しておいた写メを画面に出して、刈谷先生に渡した・・・

「あら、ユウちゃんって見かけと違って意外に大胆なのね。でも悪くないわよ。アナナスなんて難しい花使った割に上手くまとまってる。」
「あ・・あの・・それは2回目に活けたヤツで・・良い花が残ってなかったんです・・・」
・・なんか・・こんなこと言ったら言い訳みたいかな・・・こんなことなら最初のも写メ撮っとけば良かった・・・
「これだけ？　他には無いの？」
「あ・・どうだったかな・・・」
・・オレ普段はデジカメで写すからなぁ・・・

「こっち来て。」
・・先生に横に座るように手で呼ばれた・・・いいのかな・・・オ

レは先生のとなりに恐る恐る座ると、携帯を受け取って、他に写真がないか探しだした・・・次の画像を出した時・・・

「それは？」

「あ・・これは・・後輩のミサトちゃんってコの作品なんです。学園祭の時の・・・」

「面白い感性のコね・・」

「はい！ミサトちゃんはわたしが教育係りしてるコなんです。少し男の子っぽいところがあるけど、すっごく良いコなんです。」

「ふ～ん・・男の子っぽいの？」

「はい。今でも山笠に出たいなんて言ってて。可愛いんです！」

「そうなの・・」

携帯に撮ってた写メをいろいろ見てみたけど、やっぱり活け花の写真はほとんど無かった・・・でも写メを見ながら先生がいろいろ聞くので、オレも学校のことや友達のことなんかを話した・・・

「・・すみませんでした・・あまり写真撮ってなくて・・・」

「いいわよ、また今度で。」

・・また会うことなんて無いと思うけど・・・刈谷先生って最初に思ったよりも優しい人みたいだ。

お料理が来ても、食べながら色々話をした・・・大先生と食べながらおしゃべりなんて緊張する・・・

・・でも・・オレの学校の話なんてつまらないんじゃないかな・・・？

「ほんとユウちゃんとおしゃべりしてると楽しいわぁ！」

「・・そ・・そうですか・・・？」

「だって、わたしユウちゃんみたいな女子高生とお話する機会なんて無いから。」

「あ・・そうですよね・・・」

・・そっか・・オレの話ってワケじゃなくて、オレくらいの女の子としゃべるのが楽しいんだな。　そうとわかると少し気持ちが楽になってきた・・・

「先生ってきれいなネイルしてるんですね！」
「あら！　気づいてくれた？」
・・そりゃ気づくに決まってる・・・だってオジサンがキラキラのスワロフスキーなんか付けてるんだもん！
「ラインストーンがきれいですね。」
「ほほほ・・これラインストーンじゃなくてダイヤなのよ！」
「えっ！！ほ・・ホンモノですか？」
「ユウちゃんみたいに可愛いコなら、ラインストーンでもいいんでしょうけど、あたしみたいなオジサンはアクセサリーくらい本物じゃなきゃね。」
「・・・・・」
・・うぅ・・なにも・・言葉が見つからない・・・

「ユウちゃんは？ネイルやらないの？」
「あ・・わたしは・・学校で禁止されてるから出来ないんです・・・」
「モデルの時はどうしてるの？」
「・・読者モデルの撮影のときも、ネイルとか髪も染めない約束で学校に許可してもらってるから出来ないんです・・ほんとは・・少し興味あるんですけど・・・」
「そうだったの。モデルで黒い髪なんて珍しいと思ったのよ。」
「・・・・・」
「でもユウちゃんにはその髪も似合ってるわね。」
「そ・・そうですか？！」
「ええ、なかなかモデルで清楚なコっていないから良いんじゃない？」

「あ・・ありがとうございます。」

「ユウちゃんもネイルに興味あるなら、あたしみたいに付け爪にすれば？」

「あ、それ付け爪なんですか？」

「そうよ。あたしは邪魔な時もあるから、そんな時は剥がしちゃうの！」

・・そっか・・付け爪ならオシャレした時だけ付けられるんだなぁ・・・オレもやってみようかな・・・？

「それにしても、ユウちゃんお母様に良く似てるわねぇ。」

「え？　そうですか？」

・・そういえば・・とうさんもずいぶん前に、かあさんが若い頃に似てるって言ってたっけ・・・（３話参照）

「ユウちゃんは綺麗で才能のあるお母様を持って幸せね。」

「あ・・はい。・・・でも・・わたし今日まで・・母がどんな仕事してるのか全然知らなかったんです・・・」

「そうなの？　仕事を家に持ち込まない方なのね。」

「・・はぃ・・たぶん・・・」

「お母様はね、デザインやアイデアも素晴しいけど、フジタちゃんから聞いた話ではプレゼンも上手らしいわよ！」

「・・ぷれぜん・・・？」

「あ、プレゼンっていうのはね、クライアントの前で他の競合の会社と比べて、自分の会社のデザインやアイデアがいかに優れてるかを説明することを言うの。いくらデザインが良くても、それがクライアントにとってどんなに良いかが伝わらないといけないのよ。」

「・・そ・・そうですか・・・」

・・くらいあんと・・とか・・きょうごう・・とか・・・良くわからない言葉だったけど・・・とにかくかあさんはスゴイらしい！

オレもかあさんが褒められて嬉しかった。

そろそろ食事も終りに近づいたとき、先生はオレが思いもしなかった事を言った・・・

「ところで、ユウちゃんっていつから女の子やってるの？」

「え？！」

あまりに普通に言われたのでオレは一瞬なにを言われたのかわからなかった・・・そして次の瞬間その質問の意味を理解して、頭が真っ白になった・・・バレた？！・・・でもそんなハズは・・・

「い・・いつからって・・わ・・わたし最初から女です・・・」

オレは何とか誤魔化せることを願ってそう言った・・・でも刈谷先生は自分の考えに確信を持っているようだった・・・

「ふふふ・・あたしね、ユウちゃんみたいなコを沢山見てきたから判るのよ。」

・・オレみたいなコ？・・・それってニューハーフの人のことだろうか・・・？

・・オレみたいなコが・・そんなにいるとは思えないけど・・・

「そ・・そんな・・わたし女の子です！　信じて下さい・・・」

オレは泣き出しそうな目で訴えた・・・

「女の武器？　そんなのあたしには通用しないわよ。　他の人は騙せたかも知れないけど、あたしを騙そうったって無駄・・・男の子がどんなに上手く女に化けても何となく判るのよね。」

「・・・・・」

・・弘子にバレた時はオチンチンを見られたし・・大森先輩の時は実際にさわられたからバレたけど・・今日はバレるようなことは何もなかったハズなのに・・・

・・やっぱり・・パンツスタイルがダメだったんだ・・・こんなことなら無理してでもスカートはいてくれれば良かった・・・たとえパ

ンツを見られたとしても・・男だとバレるよりはずっといい・・・
「・・な・・何で・・わかったんですか・・・」
「まあ、カンみたいなものね。」
「・・カン・・？」
・・これまでは普通の状態なら誰にもバレなかったのに・・・ただのカンで？

「それで？　いつから女の子やってるの？」
「・・・高校に・・入ってから・・です・・・」
「途中から？」
「あ・・いぇ・・入学の時から・・・あ・・その前から・・練習はしてましたけど・・・」
「練習？」
「あ・・あの・・女の子になる練習・・・」
「ふ～ん・・でも変ねえ・・普通ユウちゃんみたいなコは男のふりしてても、小さい頃から心は女の子ってコが多いんだけど。」
「あ・・でも・・それまでは心が女の子だってバレないように・・男らしくしてたし・・女の子の服も着なかったから・・いきなり女子校に入って戸惑わないようにって・・・」
「なるほど・・そういう訳ね・・・」
・・こんな説明で・・納得してくれたかな・・・

「どんな練習したの？」
「・・えっと・・・女の子の服に慣れることから始めて・・女の子の言葉づかいとか・・立ち居振る舞いとか・・行儀作法とか・・あとお茶とお花も少し・・あ、着物も・・・」
「だから高校生なのにお行儀がいいのね。」
「・・・・・」
・・だって・・オレは女の子はお行儀がいい方がいいと思う・・・
三吉先生もそう言ってた・・・

「身体は？」
「え？！」
「何かやってないとそんな女らしい身体にならないでしょう？」
「・・うっ・・はぃ・・女性ホルモンを・・・」
「胸は？　豊胸？それともパットか何か入れてる？」
「ち・・違います・・・ホルモンで・・・」
「ホルモンだけでそんなに？」
「あ・・いぇ・・睾丸も・・手術で・・・」
「そうなんだ・・・早かったから良かったのね。　普通は２０歳すぎてからだから、そんなに女の子らしくはならないわよ。」
「・・・・・」
「オチンチンは？」
「・・・オチンチンは・・まだ付いてます・・・」
「そうなの・・」
・・こんなこと・・・初めて会った人に言っちゃって良かったのかな・・・でも・・バレちゃったから・・仕方ないか・・・

「・・でも良かったわね。」
「へ？」
「早くから始められて良かったわねって言ってるの。」
「あ・・はぃ・・」
「よほどまわりのご理解があったんでしょうね。」
「・・はぁ・・まぁ・・・」
・・ほんとは・・ただの成りゆきなんだけど・・・これは学校に迷惑がかかったらいけないから・・言えない・・・

「だけど、あたしユウちゃんみたいなコがファッションショーに出るなんて楽しみだわ！」

「・ぇ・・わ・・わたし・・もうムリです・・・」
「あら？　さっきは決心したと思ったんだけど？」
「・・だって・・・女じゃないってバレてしまったら・・もう・・・」
「あ、もしかしてあたしにバレたこと気にしてるの？」
「・・は・・はぃ・・・」
・・・当り前だ・・気にするに決まってる・・・

「気にすること無いわよ。これまでバレなかったんでしょう？」
「・・うっ・・まぁ・・・」
「だったら大丈夫じゃない！　ファッションショーには出なさい。チャンスなんだから。」
「・・でも・・もし・・先生みたいな人が・・他にもいたら・・・」
「大丈夫よ！あたしくらいユウちゃんみたいなコに詳しい人がいたとしても、そういう人はユウちゃんが女の子じゃないって判っても世間にバラしたりはしないわよ！」
「！・・・先生も・・黙っててくれるんですか・・・？」
「当り前でしょう？　何でわざわざそんなことバラさなきゃいけないの？」
「・・・・・」
「心のままに自分らしくいられるなんて素敵な事じゃない！　誰にも邪魔する権利なんてないわ。」
・・・たしかに・・先生もすごく“自分らしい”かも知れないけど・・・

・・でもなぁ・・どうしよう・・・オレ自信もないし・・・
「・・・・・」
「なに？　まだ心配そうね。そんなにファッションショーが不安？」
「・・はぃ・・・」
・・オレは正直に答えた・・・なぜか刈谷先生には・・ウソつけな

い雰囲気がある・・・
「あ!それじゃこうしましょう?　ユウちゃんがファッションショーをちゃんとやり遂げたら、ご褒美にあたしクリスマスのディナーに誘ってあげる!さっき言ってたフランス料理のお店よ!」
「・・・・・!」
「もちろんクリスマスプレゼントも用意するわ。どう?これでもやる気出ない?」
「!・・・あ・・いぇ・・・・」
・・プレゼント?!・・・それにフランス料理なんて・・食べてみたいけど・・・だけど・・・

「あ・・あの・・・先生・・何でわたしに・・そんなこと・・してくれるんですか・・・?」
「それはユウちゃんのこと気に入ってるからに決まってるじゃない!　あたしユウちゃんみたいなコ大好きなの!ユウちゃんみたいに自分に正直に生きてるコが。」
・・オレが自分に正直かどうか良くわからないけど・・・そう言われると・・ちょっと嬉しいかも・・・
「どう?やる気出てきた?」
「ぁ・・はぃ・・少し・・・」
「良かった!　早くユウちゃんが花道歩くところ見たいわぁ。」
・・うぅ・・・どうしよう・・・ほんとにオレに出来るのかなぁ・・・

・・それに刈谷先生・・・信用してないワケじゃないけど・・・ほんとに黙っててくれるんだろうか・・・?

第１３７話　リハ　ふみ込んだ大人の世界

今日は九州ガールズコレクションのリハーサルの日・・・早めに会場のマリンメッセに着くと、まだモデルさんは来ていなかった。ちょっと早すぎたみたいだ・・・

誰もいない控え室を出て会場の方に行くと、昨日はまだ足場とかあったのに、もう全部きれいに片付けられていた・・・昨日はすごく寒かったけど、今日は暖房が入っているようでそんなに寒くない・・・

舞台から突き出たランウェイの近くにはパイプイスがたくさん並べてある・・・もう本番が出来そうだけど、舞台とランウェイの上だけは汚れないようにシートが掛かったままだ・・・

オレは昨日かあさんと見たところをいくつか見てみたら、あのあと直したようでちゃんとキレイに直っていた。黒いアクリルがすこしデコボコしていた所も、今はキレイな曲線になっている。

オレが控え室に戻って隅っこの方に座っていると、９時に近づくにつれてモデルさんが続々とやってきた・・・雑誌で見た有名なモデルさんもいる・・・ＣｅｎＣｅｎとかの専属のモデルさん実際に見れるなんて感動ものだ！

しばらくすると控え室は出版者の人や、ブランドの人や、モデルさんのマネージャーらしき人でごった返してきた・・・あちこちで名刺交換してる・・・オレ名刺なんて持ってないなぁ・・どうしよう・・まあオレに名刺渡す人なんかいないか・・・

人が多くなってくると、なんだか心細くなってきた・・・早く誰

か知ってる人が来ないかなぁ・・・あたりをキョロキョロ見回していると・・・
「あっ！」
オレは人をよけながら近づいていった・・・
「佐々木さん！」
「あ、ユウちゃん、そんなところにいたの？　ＪＩＮＯＮの楽屋はこっちよ。」
「え？そうだったんですか？！」
・・なんだ・・どうりで知らない人ばかりだと思った・・・

「フジタさんから事情は聞いたわ。まさかユウちゃんのお母さんが舞台のデザインしてるなんて知らなかった。」
「わたしもです。かあさんがどういう仕事してるのか聞いたことなかったから・・・」
「でも、ユウちゃんはモデルとしては一番下だから、有名なブランドの服は割り当てられないと思うけど我慢してね。」
「あ、はい・・もちろんです・・・わたしが出るだけでも申し訳ないのに・・・有名なブランドの服なんか着たらバチが当っちゃう！」
「ふふふ・・ユウちゃんったら相変わらずね。でも自分の仕事をしっかりしてたら、見てる人はちゃんと見てるから。頑張ってね！」
「はぃ・・」
・・オレのことなんて見てる人・・そんなにいないと思うけど・・・
まあ、少なくとも弘子たちは見てくれるか・・・昨日オレも出ることになったって電話したら、明日はみんなで見に来るって言ってたし・・・

・・長谷川はヒマだったら行くとか言ってたけど・・・たぶん来てくれると思う・・・いつも何だかんだ言いながら、こっそり来るんだもん・・・長谷川ってそういうヤツなんだ。

　ＪＩＮＯＮの楽屋に行くと知ってる人がいっぱいいてホッとした・・・
「ユウちゃん！　出演することになったんだって？良かったね！」
オレを見るなり蟹原さんが駆け寄ってきて、オレの両手をとって喜んでくれた！
「はい・・」
オレとしては出演することが良かったかどうかわからないけど・・・
蟹原さんが喜んでくれるのは嬉しい！
「ユウちゃん、わからないことがあったら何でも聞いてね、私が教えてあげるから！」
「あ・・ありがとうございます！」
・・蟹原さんってなんて優しいんだろう・・・でも・・気持ちは嬉しいけど・・みんな忙しいんだから迷惑かけないようにしなきゃ！・
・・オレはあくまでオマケみたいなものなんだから・・・
　蟹原さんたちが着るのは一流ブランドの服だから、ブランドのデザイナーさんとも綿密な打ち合わせがあるみたいだ・・・どんな風に着てほしいかとか、いろいろあるみたい・・・それに蟹原さんは自分がプロデュースしてる服もあるから、その打ち合わせもあるのかも・・・
・・でも・・オレが着る服はまだ来てなかった・・・明日は届くはずだからって・・・本当にちゃんと届くのかな？・・・もし届かなかったらどうするんだろう・・・
ーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーークー

時間が来てモデルさんたちは舞台裏へと移動して行く・・・もうすぐリハーサルが始まるのだ・・・

舞台裏はたくさんの衣装を掛けたハンガーでごった返していた・・・どこで着替えるんだろう・・・

・・どこかに更衣室があるのかと思ったけど・・それもないみたいだ・・・ごく簡単なカーテンを張ったところはあるけど、肩から上は見えてるし・・・とてもここに集まったモデルさん全員が使うには少なすぎる・・・もしかしてここで次の衣装に着替えるのだろうか？・・・

・・まさかね・・こんなところで下着姿になっちゃったら恥ずかしいもの・・デザイナーさんには男の人だっているんだから・・・

だけど・・人気のモデルさんは何回も着替えて舞台に出なきゃいけないから大変だ・・・その点オレは1着か。多くても2着くらいらしいからまだ気が楽だ・・・

“パン！パン！”

手を叩く大きな音にみんなが注目すると・・そこにはボウズ頭に濃い眉毛、褐色の顔にするどい眼光の男の人が立っていた・・・

「私が今回のクリスマスコレクションの演出の宮川〈みやがわ〉です。今から簡単に1人1人のウォーキングを見て、午後からは明日と同じ形でリハーサルを行うことにする！　明日はＤＪが入る予定だが今日は順番だけ確認するからそのつもりで。以上！」

・・・演出の人って・・フジタさんみたいな人かと思ったら・・・
なんか・・怖そうな人だなぁ・・・
・・オレ・・雑誌だけしかやってないから・・ウォーキングなんて
やったことないけど・・大丈夫かな・・・

各雑誌の専属ごとに演出家の前をウォーキングで歩いていく・・・
一番先端に行ってポージング・・・そして戻ってくる・・・

その間、演出家の宮川さんは「もっと大股で！」だの「もっとダイナミックに！」だの指示を出す・・・でもモデルさんは演出家の言うことを気にしてる感じはない・・・みんな自分に自信があるからだろう・・・こういうのプロ意識っていうのだろうか・・・

ＪＩＮＯＮの番が来て、ひとりづつ歩いていく・・・蟹原さんはさすがにウォーキングも上手だ・・・歩く姿も自信満々・・・ポージングもすごくサマになってる！

「次、ユウちゃんの番よ、しっかり！」
佐々木さんにポンと軽く背中を叩かれた・・・え？・・・も・・・もうオレの番？！

・・うぅ・・歩こうと思うのに・・なかなか足が前に出ない・・・
ヒールも高いし・・緊張で足がガクガクだ・・・

・・何とか歩き出したけど・・足はあいかわらずガクガクして・・
スムーズに歩けない・・・なんだかオレ・・歩き方を忘れてしまったみたい・・・

「ストップ、ストーップ！！」
演出の宮川さんの大きな声に驚いて立ち止まると・・・
「お前、何だその歩き方は！素人か？！」
「・・・・・」
・・こ・・こわい・・・
「名前は！」
「ぁ・・か・・春日ユウです・・・」
オレは何とか勇気を振り絞って答えた・・・
「春日ユウ？　聞いたこと無いな。どこの専属だ？」
「ぁ・・あの・・九州ＪＩＮＯＮ・・です・・・」
「チッ、地方モデルか・・・ん？・・お前か？　フジタが捩じ込んだ読者モデルは！」
「ぁ・・は・・はぃ・・たぶん・・・」
・・捩じ込んだって・・・そんな・・・

「確かにモデルは不足してるが、こんなのじゃ役に立たねえよ！フジタの奴、何考えてんだ？」
「・・・・・」
・・たしかに・・オレは・・素人みたいなもんだけど・・・そんなふうに言わなくても・・・
「お前は戻って練習してろ！午後のリハまでにマシになってなきゃ出演は中止だ！」
「・・・・！」
・・そ・・そんな・・・オレはそれでもいいけど・・・これじゃオレ・・みんなの期待に答えられない・・・

・・いや・・そんな問題じゃないかも・・・オレが出演できなくなったりしたら・・フジタさんや・・佐々木編集長や・・かあさんにも迷惑がかかるんじゃないだろうか・・・？

・・刈谷先生にまで励ましてもらったのに・・・

スゴスゴと舞台ソデに戻ったオレは、もう悲しくて悔しくて泣きそうな気分だった・・・だけど・・・泣いてる場合じゃない・・・オレも舞台に立つ以上・・本当のモデルさんと同じように出来なきゃいけないんだ・・・読者モデルだってことに甘えてちゃダメなんだ！

でも佐々木さんの顔を見ると、オレはもう我慢出来なかった・・・

「・・うぅ・・佐々木さん・・ごめんなさい・・・」

「大丈夫よ。あのひと本当はお芝居の演出家だから厳しい言い方するけど、ほんとに出演中止にしたりしないわよ！」

「・・で・・でも・・・わたしちゃんと出来なかったから・・・」

「初めてなんだから気にしないの！　まだ時間があるんだから、午後のリハーサルまで練習しましょう！」

「・・うぅ・・はぃ・・・」

・・だけど・・オレに出来るかなぁ・・・でも・・頑張らなきゃ・・

・

・・そうじゃなきゃみんなに迷惑かけちゃうもん・・・

「ユウちゃん、わたしも教えてあげるから、練習しよう？」

「・・は・・はぃ・・・」

・・蟹原さん・・・オレ・・頑張ってみる・・・

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

「イチ、ニ、イチ、ニ・・・・」
・・蟹原さんの手拍子に合わせて歩く・・・それだけなのに難しい・・・
「顔は前の遠くを見る感じで！　アゴをもう少し引いて！」
「・・・・・」
「腕は無理に振らなくていいから、自然に体について動く感じ！」
「・・・・・」
「う～ん・・・どうしてもヒザが曲っちゃうね。」
「うぅ・・」
・・オレはハイヒールに馴れてないから・・ヒザが曲がってしまって、気にすれば気にするほどおサルさんみたいな歩き方になってしまう・・・こんなことなら普段からハイヒール履いて馴れておけば良かった・・・
「撮影の時はちゃんと立ててるのにね・・・」
「・・・・・」
・・撮影のときは歩かなくていいから・・なんとか立ててるけど・・・

「そうだ、ユウちゃん靴脱いでみて！」
「え？・・・ぁ・・はぃ・・・」
・・蟹原さんに言われてハイヒールを脱いで裸足になった・・・何するんだろう・・・
「それで爪先で立ってみて！」
「・・・・？」
・・言われたとおり爪先立ちしてみる・・・
「そのまま歩いて。」
「・・・・・」

・・オレは言われるまま爪先立ちで歩きだした・・・
「そうそう、それで頭から糸で吊られたイメージして！」
・・・糸で吊られたイメージ？

オレは頭のてっぺんから吊り下げられたような想像をしてみた・・・
「そして1本の線の上を歩くつもりで足を出して！」
「・・・・・」
・・なんか・・鳥みたいな歩き方だなぁ・・・オレ・・鶴にでもなったみたいだ・・・
「そうそう！上手よ！その感じを憶えててね。」
「・・は・はぃ・・」
・・いったい・・これが何になるんだろう・・・

「それじゃまた靴履いてみよう。さっきの感覚は忘れないでね。」
「・・はぃ・・・」
もう一度ハイヒールを履いて歩きだす・・・
「さっきの爪先で歩いた要領で、靴は履いてるけど爪先だけで立ってるつもりで歩いてみて！」
「・・・・・」
・・うぅ・・難しいな・・・爪先で歩く感じは同じだけど・・ハイヒールはかかとが付いてるから逆に歩きにくい・・・いや・・待てよ・・・あくまで“爪先で歩く感じ”で・・でもかかとを無理に上げる必要はないのかも・・・そう考えると、かかとがある分歩きやすいかも・・・！

「足は無理に前に出さなくていいから、爪先で後ろに蹴る感じ、そうすると自然にもう片方の足が前に出るから・・・そうそう！その調子！きれいになってきたよ！」
「・・・・！」
・・ほ・・ほんとかなぁ・・・蟹原さんって褒め上手過ぎないだろ

うか・・・？　オレ・・ちゃんと歩けてるのかなぁ・・・？
「ちょっとリズム付けてみて！　はい、イチ、ニ、イチ、ニ・・・・・」
・・オレは蟹原さんの手拍子に合わせて、リズミカルに足を動かしていった・・・
「上手い上手い！完璧！！」
「！！！」
・・なんとなくわかってきたかも・・・鹿みたいな感じで颯爽と歩けばいいんだ！・・・そういえば・・キレイな女の人の足のことを“カモシカのよう”なんて言うもんなぁ・・・

その後、歩きながらコートを脱いだり、その脱いだコートを肩にかけたり、ポージングの練習もした・・・
蟹原さんも忙しいのにオレの練習にずっと付き合ってくれて・・・
蟹原さんってやっぱり優しい！

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー
ー　ー
ー

午後になって、本番のリハーサルが始まる前に注意があった・・・
「これからのリハーサルは本番と同様に行います！」
演出助手の人から説明が・・・
「本番のＤＪのかわりに、今日は私が名前を呼びますので、呼ばれたら舞台に出て下さい！・・なお今回のリハーサルまでは舞台のシートは掛けたまま行いますが、本番では床が鏡張りになりますので、見えても良い下着でお願いします！」

・・それを聞いて少しざわついたけど、その声はすぐに収まった・・
・そういえば・・フジタさんがそんなこと言ってたなぁ・・・鏡張りだって・・・

・・あの時はまさかオレが出ることになるとは思わなかったから何げなく聞いてたけど・・・オレも・・パンツ見られちゃうんだ！・・・かあさん何てデザインしてくれたんだよぉ・・・

音楽が大音量で鳴りだすと・・またドキドキしてきた・・・

！！・・あれはもしかしてテレビカメラ？　午前中はなかったのに・・・まさかテレビで中継するのだろうか・・・？
！！！・・2階からも撮ってる！・・・あんなとこから撮られたら・・パンツまで写っちゃうじゃない！

・・でも・・テレビ中継なんて聞いてないし・・・それにもしテレビ流すにしてもオレなんか流すハズがない・・・きっとあれは蟹原さんたちトップモデルを写すためのカメラなんだ・・・そして福岡でこんなファッションショーがあって蟹原さんたちが出演しましたって流すんだと思う・・・だってオレそういうの、めざましテレビで見たことあるもん！

最初のモデルさんが歩いていく・・・最初はモデル紹介をかねて雑誌ごとだ・・・後ろの大きな画面いっぱいに雑誌の表紙が映し出される・・・同じウォーキングも音楽があるとまた一味違う・・・より颯爽と見えてカッコイイ！

ＣｅｎＣｅｎ、ｍｏｎ－ｍｏ、そしてオレたち世代に人気のＳｉｘ

ｔｅｅｎ・・雑誌ごとに次々と切れ目なくモデルさんが出て行く・・・

長いランウェイを1人で歩くのは人気モデルで、他の人は1人が先端に行ったころにランウェイを歩きだし、ちょうど中間あたりですれ違う・・・仲がいいモデルさんはその時にハイタッチしたり・・・いいなぁ・・オレもあんなことてみたいけど・・オレは誰も知らない地方モデル・・しかも本当のモデルじゃなくて読者モデルだし・・・とてもあんなこと出来る立場じゃない・・・

同じブランドの服の場合は2人で歩いて行く場合もあるみたいだ・・先端で仲良く2人でポージング・・・まるでファッション雑誌そのままでステキ！

そうこうしてるうちにＪＩＮＯＮの番・・・本誌ＪＩＮＯＮ、関西ＪＩＮＯＮ、そして九州ＪＩＮＯＮの順・・・オレは九州ＪＩＮＯＮでも一番最後の方・・・

本誌ＪＩＮＯＮトップはやっぱり蟹原さんだ！　歩き方もキレイだし・・途中で見せるちょっとした仕草や笑顔が可愛い！

オレは蟹原さんたちみんなの歩き方をしっかり見ていた・・・もうすぐオレもあそこを歩かなきゃいけないんだ・・・

今日は衣装が間に合わなくて自分のシフォンワンピだけど・・本番では売り物の服なんだから・・オレが着ちゃったためにその服が売れなかったら申し訳ない・・・だって会場のお客さんがその場で携帯から買えるから、ファッションショーの本番中にも何着売れたかわかっちゃうんだもん・・・

関西ＪＩＮＯＮが終って九州のモデルさんたち・・そして最後がオ

レだ・・・うぅっ・・緊張するぅ・・・

・・ダメだダメだ・・・こういう時こそ平常心が大切なんだ・・・
そうでないと出来ることも出来なくなっちゃう・・・いつも三吉先生に言われてることだ・・・

・・あの怖い演出さんが見てるけど・・・気にしないようにしよう・・・だって本番でオレを見るのは演出の宮川さんじゃなくてお客さんだもん！・・・それにお客さんが見てるのはオレじゃなくてオレが着てる服だし・・・服を良く見せるのなら雑誌と同じだ！

“・・次は春日ユウ・・・”
演出助手さんに名前を呼ばれて、オレは舞台に出ていった・・・

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー
ー　ー
ー

「・・うぅぅ・・・緊張したぁ・・・」

・・2回の出番が終って楽屋に戻ると・・緊張が切れてしまってヘナヘナと床に女の子座りでヘタリ込んでしまった・・・
・・颯爽とまではいかなかったけど・・なんとかやれたような気がする・・・といっても・・途中から頭がボーッとして・・良くわからなかったんだけど・・・

「ユウちゃん頑張ったね。良かったわよ！」
佐々木さんにそう言われて少しホッとした・・・
「演出の宮川さんも、まあ良いだろうって言ってたわよ。」

「！・・ほ・・ほんとですか？！」
・・よかったぁ・・・みんなに迷惑かけることにならなくて・・・
「本番も今日と同じようにやれば問題ないから。でも本番では1回衣装着替えなくちゃいけないからそのつもりでね。」
「ぁ、はい！」
・・そうだった・・本番では1回目が終ったら、舞台の裏で着替えなきゃいけないんだ・・・
・・今日、モデルの人たちが着替えるの見てたら、そこら中で下着だけになって着替えてるから驚いた・・・男の人もいるのに・・みんな恥ずかしくないのかなぁ・・・でも急いでるから、そんなこと言ってられない感じだった・・・オレも・・恥ずかしいけど頑張らなきゃ・・だってこれはお仕事だもん！

だいぶ経ってから蟹原さんが戻ってきた。
「ユウちゃん上手く歩けてたじゃない！」
「そ・・そうですか？・・・自分では良くわからないんですけど・・・」
「大丈夫よ。誰でも最初はそんなものなんだから！」
・・蟹原さんがそう言ってくれると・・ちょっと自信が持てる気がする！
「明日も頑張ってクリスマスコレクション成功させようね！」
「はい！」
・・成功というより・・オレは失敗しないようにしなきゃいけないけど・・・もうここまで来たら・・頑張るしかない・・・
・・どんなに自信がなくても・・一生懸命やるしかないんだ！

第１３８話　本番　九州ガールズコレクション

とうとう九州ガールズコレクション・・通称クリスマスコレクションの当日だ。

本番が始まるのは夕方６時からだけど・・今日のオレは朝から大忙し・・・休みなのに朝から学校に行かなければならなかった・・・

なぜかといえば、また白石先生に“タック”をしてもらうためだ・・・“タック”をするのは修学旅行のとき以来だ・・・（１２７話、１２９話参照）

“タック”は長い時間やってるとアソコが痒くなっちゃうから・・あまりやりたくないんだけど・・・今日は大勢の人の前で下着にならなきゃいけないかも知れないし・・・だからオチンチンが目立ったりすると困るのだ・・・まあ、オレのオチンチンはもう全然目立たないくらい小さくて・・フニャフニャだから平気だとは思うけど・・・用心するに越したことはないと思う・・・

それに・・舞台の床は鏡張りだからいつものようにナプキンも出来ない・・・ナプキンはオレにとっては緊張する時のお守りみたいなものなのに・・・正直きのうも緊張してオシッコちびりそうになった・・・

・・幸いちびらなかったけど・・ナプキンをしているという安心感が無かったらどうなっていたか・・・

・・それでまた白石先生に頼んで“タック”してもらうことにしたのだ・・・これなら下着の上からオチンチンがあるの気付かれる心

配は無いし・・・何よりオシッコをちびってしまう心配も無さそうだし・・・
・・だって普通にオシッコしようとしたって圧迫されてなかなか出て来ないんだから・・・そう簡単にはちびらないと思う・・・
・・・それに・・これは白石先生にも言ってないけど・・・“タック”してると少しだけ気持ちが大胆になれる気がするのだ・・・裸でみんなとお風呂に入れたことを考えれば・・ファッションショーの緊張もあれ以上ってことはないような気がする・・・今回は下着になることはあっても、パンツを脱ぐことは無いんだから・・・

―――――――――――――――
―――――――――――――――
――――――――――

お昼すぎに天神から会場のマリンメッセ行きのバスに乗ると、早々と会場へ向うオレと同年代の女の子が何人もいた・・・同年代の彼女たちならオレが“春日ユウ”だとバレる恐れもあるけど・・・今日のオレはまだお化粧もしてないし、黒ブチのダテ眼鏡に帽子を目深にかぶっているから、まずバレる心配はないだろう・・・

こんな変装みたいなことをしてるのは、もし会場に着いてみたら、もう女の子がいっぱいいたら困るからなのだが、オレの心配は当っていた・・・バスがマリンメッセに着いたら、あたりはクリスマスコレクションが始まるのが待切れない女の子たちでいっぱいだった！

オレは女の子たちに見つからないようにそっと裏口に向う・・・

こんなにたくさん人がいる中で、たぶんオレなんかに気付くコはいないと思うけど・・・ちょっと自意識過剰かな・・・？

もうすぐ裏口というとこまで来たときに、裏口の近くに数人の女の子がいるのが見えた・・・たぶん蟹原さんみたいな有名なモデルさんが来るのを待っているのだろう・・・オレが何気なく女の子たちの前を通ると・・・

「あ・・あの・・ユウちゃんですよね！」

「え？！　ぁ・・はぃ・・・」

なんでバレたんだろう・・・こんな地味な恰好してるのに・・・

「変装ですか？みんなに囲まれたら大変ですもんね。」

「ぁ・・う・・うん・・・」

「でもユウちゃん眼鏡も似合ってて可愛い！！」

「ぁ・・ありがとう・・・」

変装みたいなことしてるから・・よけい目立っちゃったのかな・・・

失敗したなぁ・・・

「ユウちゃんもファッションショー出るんでしょ？」

「うっ・・うん・・ちょっとだけど・・・」

「どんな服着るんですか？！」

「ぁ・・それはまだ・・わからないの・・・昨日はまだ届いてなかったから・・・あ、それに・・わたしはオマケで出演させてもらうみたいなものだから・・あまり期待しないで・・・」

「そうなんですか・・でも頑張ってください。わたしたち応援してますから！」

「！・・うん・・・」

・・なんか・・嬉しいな・・・オレなんかを応援してくれるなんて！

オレは彼女たちに頼まれて一緒に写真を撮ってから、裏口から会場の中に入った・・・

マリンメッセの中にはスタッフの人はたくさんいたけど、まだモデルさんは少なかった・・・ＪＩＮＯＮの楽屋に行ってみたら、スタイリストのケイコさんとメイクのカネちゃんが来ていた。ケイコさんもカネちゃんも準備に忙しそうだ・・・

「ユウちゃんもう来たの？」

カネちゃんに言われて・・・

「ぁ・・なんだか落ちつかなくて・・・」

「そっか！ユウちゃんにとっては初めてのファッションショーだもんね。決まったのも急だったし。」

「ぅ・・うん・・・」

・・オレ・・早く来ちゃってジャマだったかな・・・

するとケイコさんが・・・

「会場でも見て来たら？ユウちゃんのお母さんがデザインしたんでしょう？さっき見て来たけど凄かったわよ！」

「え・・ほんとですか？！」

・・昨日はまだシートが掛かってたり、万全じゃなかったからなぁ・・・オレは早くかあさんがデザインした舞台を見たくて、急いで会場の方に向った・・・オレが楽屋にいてもジャマなだけだし・・・

舞台ソデからのぞいてみると、本当に舞台の表面が鏡張りになっていた・・・たしかにスゴイ！

・・でもこの上をスカートで歩く身としては・・ちょっと微妙だ・・・スカートも短いかも知れないし・・・

・・タックもしたし・・見えていいパンツもはいてるけど・・・決して見せたいワケじゃない・・・パンツが見えて嬉しい女の子なん

ていないと思う・・・なんでかあさん・・こんなデザインにしたんだろう・・・？

「！」

オレがいる舞台ソデとは反対側にある花の地球を見てみると、そこには刈谷先生がいた！

オレは小走りで刈谷先生のところに行った・・・

「刈谷先生こんにちは！」

振り返った先生はオレを見ると急に笑顔になった・・・

「あら！ユウちゃんもう来てたの？！」

「ぁ・・はい！」

・・やっぱり早く来すぎたのかな・・・

「・・あの・・先生は何してらっしゃったんですか？」

「あたしは痛んだお花を新しいのと差し換えてたのよ。生花はすぐ痛んじゃうから大変なのよね。いま終ったところよ！」

「あ、そうだったんですか・・・」

「でも残念だわぁ・・あたしもユウちゃんの晴れ姿見たかったけど、今からすぐに東京に戻らなきゃいけないの・・・」

「ぇ・・東京に？」

・・やっぱり偉い先生は忙しいんだなぁ・・・

「だけどユウちゃんに会えて良かった！　実はね、渡したい物があったの。　誰かにあずけておこうかと思ってたんだけど・・ちょっと待ってて？」

先生はそう言うと、花の地球の近くに置いていた大きなエルメスのバッグを持ってきた・・・

「はい、コレあげるわ。」

先生がバッグから出した透明なプラスチックの箱の中身は、すごく可愛いピンクの付け爪だった！　キラキラのラインストーンも付

いている！！
「ユウちゃんこの前やってみたそうだったから、急いで作ってもらったの！」
「え？！ステキ～！　こんなキレイなの・・もらっていいんですか？」
「もちろんよ！　ユウちゃんのために作らせたんだから。　こんな可愛い色はあたしには似合わないでしょう？」
「・・・」
・・そもそも・・オジサンにネイルが似合うかどうかは・・微妙だけど・・・でも先生は普通のオジサンとはちょっと違うからな・・・

「ユウちゃんは正直ね。図星って顔してる！」
「あ・・そ・・そういうわけじゃ・・・！」
・・オレったら・・なんて失礼なこと考えてるんだ！　何でオレ・・すぐ顔に出ちゃうんだろう・・・
「いいの、いいの！　本当のことだものね。」
それから先生はオレの耳元で、ないしょ話のように・・・
「綺麗にネイルするとね、女の子は自信が出るものなの。ユウちゃんもやってみたら魔法がかかるのがわかるわよ！」
「！！」
「じゃぁね。また会いましょう。今度はもっとゆっくりとね！」
先生はそう言うとアシスタントの人たちを引き連れて会場を出ていった・・・

・・刈谷先生ってやっぱりいい人だなぁ・・このまえ会っただけのオレに、こんなステキなネイルを作ってくれるなんて！　・・オレ・・ネイルが欲しいなんて一言も言ってないのに・・・でも・・気になってるのが顔に出てたのかな・・・？

・・・こんな可愛いネイルがオレの指に付くなんて・・・考えただ

けでワクワクしてくる！！

・・でも・・ネイルで自信が出るなんて・・・ほんとかなぁ・・・
ちょっと信じられない・・・魔法なんて大げさなこと言っちゃって・
・・それくらいのことで自信が持てたらどんなにいいか・・・

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

「ねえ、カネちゃん・・こういうの付けるのって時間かかるの？」
「あ、ネイルチップ？そんなにかからないよ。　まだみんなが来るまで少し時間があるから付けてあげようか？」
「え、いいんですか？」
「いいよ。そこ座って。」
オレがイスに座るとカネちゃんは、小さなメイクテーブルを持ってきてオレの前に置き、付け爪に接着剤を付けてオレの爪に貼付けた・・・

「あ、あの・・これって簡単に外せるんですか？　明日は学校だから付けて行けないんです・・」
「大丈夫よ、そんなに強い接着剤じゃないから。自分で外せるように、あとで剥離剤あげるね。」
「ありがとう・・カネちゃん。」
次々にオレの指がキレイにネイルしたようになっていく・・・なんか・・ネイルすると指までキレイで長くなったように見えるから不思議だ・・・

「あら？　ネイル？　綺麗なスカルプチャーね、どうしたのこれ？」
楽屋に帰ってきたケイコさんに聞かれたけど、さすがに刈谷先生にもらったなんて言いにくい・・・
「あの・・ちょっと知り合いにもらったんです・・・」
「へ～　良かったね。可愛くてユウちゃんのイメージにぴったりじゃない！」
「！・・そ・・そうですか・・・？」
・・やっぱり刈谷先生ってスゴイなぁ・・ちょっと会っただけなのにオレにぴったりのを作ってくれるなんて・・・オレみたいなコが好きって言ってたけど・・だからオレに合うイメージがわかっちゃうのかなぁ？

「はい、出来上がり！」
「あ、ありがとうカネちゃん！」
オレは思わず両手を目の前に広げてみた・・・なんか・・・オレの手じゃないみたい！　まるで可愛い女の子の手だ！！
「見てケイコさん！こんなになっちゃった！」
手のひらを返してネイルをケイコさんの方に向けた・・・
「うんうん、良かったね。似合ってるわよ。」
「うん・・・」
・・なんか・・刈谷先生が言ったことがわかる気がする・・・ネイルをすると自信が出るって・・・

・・なんだかオレ・・ほんとに魔法にかかったみたいに気分が高揚してきた・・・

「可愛いなぁ・・・」
指を曲げてネイルを見て・・・また指を伸ばして見る・・・これがオレの手だなんて・・・信じられない！

「ユウちゃん！」
「あっ！蟹原さん・・おはようございます！」
「どうしたのユウちゃん、今日はやけに嬉しそうじゃない！」
「あ・・コレ！わたしネイル初めてなんです！だから。」
「そうだったんだ！わたしも初めてネイルした時は嬉しかったなぁ・・・でも、それだけ元気があったら、今日のクリスマスコレクションも乗り切れそうね！」
「あ・・は・・はぃ・・・」
・・うぅ・・そうか・・ネイルですっかり浮かれてたけど・・・こんなに浮かれてる場合じゃなかったんだ・・・
・・そういえば！・・オレが着る服ってもう来てるのかな？
「あの・・ケイコさん・・わたしが着るのって来てますか？」
「来てるわよ！これと・・これかな。」
「！！」
・・コ・・コレをオレが着るの？！

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

５時３０分に開場すると沢山の女の子たちが会場になだれ込んできた・・・６時に近づくとステージの裏にいるオレたちにも、お客さんたちの待ち切れないという雰囲気が伝わってくる・・・オレも心臓がバクバクしてきた・・・

6時になり会場の照明が暗くなると、お客さんのざわめきがいっそう大きくなっていく・・・早く始めろと言うように拍手する人や、目当てのモデルさんの名前を呼ぶ声がどんどん大きくなってステージ裏まで響いてくる！

みんなもう1回目の衣装を着てスタンバイは済んでいた・・・あとは始まりの合図を待つだけだ・・・

音楽が鳴りだすとお客さんたちは一気にヒートアップした！
“ドン！”という大きな爆発音と共に、アリーナに銀色のリボンが飛び出す！
それが始まりの合図だ！

“　九州～　ガ～ルズコレクショ～ン！！　まずはＣｅｎＣｅｎからＭＡＬＩＣＯ～！”
ＤＪの人に名前を紹介され、最初のモデルさんが上手〈かみて〉から歩き出す。

最初の方に登場するのはみんな人気モデルさんたちだ！モデルさんたちは一流ブランドの新作を着てランウェイを歩いて行きカッコ良くポーズを決めて戻ってくる・・・その時には下手〈しもて〉から別のモデルさんが歩き出すって感じだ・・・

青い花の地球も、ライトの中まるで本物の地球のようにゆっくりと回ってる・・・かあさんが言ってたけど、協賛の会社がエコに熱心だから、こういうイメージにしたらしい。

“　ＪＩＮＯＮトップモデル　蟹原ユリ～！”
蟹原さんの写真と名前が後ろの巨大モニターに映し出される！

オレのひいき目かもしれないけど・・蟹原さんが登場すると一段と声援が大きくなった気がした・・・やっぱり蟹原さんはスゴイ人気だ！

蟹原さんはトップブランドで自らがプロデュースした真っ赤なドレスだ・・・大人っぽくてステキだなぁ！

自分で服をプロデュースするなんてほんとスゴイと思う！

　オレは蟹原さんが戻ってくるのを舞台のソデで待ってて、次の衣装への着替えを手伝う・・・オレも出演するとはいっても、それはあくまでオマケみたいなもの・・・蟹原さんをはじめモデルさんたちのお手伝いをするのもオレの大事な仕事だ。

ステージではカッコ良く歩いてるモデルさんも、舞台裏ではてんやわんやの大騒ぎ！　大急ぎで次の服に着替えなきゃいけない・・・あまりに忙しくてオレもドキドキしてなんていられなくなってきた！　馴れないネイルのせいでチャックを上げたりボタンを留めたりするのも大変だ！　こんなことならネイルなんかしなきゃ良かったかなぁ・・・

バタバタ着替えて舞台ソデまで走って行っても、ステージ上ではそんな舞台裏はまったく想像出来ないほど颯爽と歩いてる・・・プロのモデルさんってスゴイなぁ・・・ほんと尊敬しちゃう！

「ユウちゃん、もうすぐ出番よ！早く舞台ソデに行ってなさい！ユウちゃんは下手〈しもて〉だから間違えないようにね！」

「は・・はい！」

オレは佐々木さんに言われて初めて、自分の出番が近いことを知った・・・急いで蟹原さんの背中のチャックを上げてから・・・

「あ・・すみません蟹原さん・・わたし・・いきます！」
「こっちはいいから、早く行っておいで。しっかりね！」
「はい！」
「あ！ユウちゃん待って、こうした方が可愛いよ！」
蟹原さんは、オレが頭に巻いてテッペンで結んだワイヤー入りのバンダナの先を、横向きから上向きに変えた！
！・・・これじゃウサ耳みたいじゃない！・・蟹原さん・・なんてことするんだよ！
「ほら、ユウちゃん急いで！」
「あ、は・・はぃ・・・」
オレは仕方なくそのまま、急いで下手の舞台ソデに移動した・・・

でも・・舞台ソデにスタンバイしたとたん、さっきまで忘れていた緊張がぶり返してきた・・・うぅ・・・足が震えるぅ・・・ど・・どうしよう・・・なんか・・目が霞んだようになって良く見えない・・・

そのとき・・ギュッと握った手のひらが、いつもと違うのに気付いた・・・
（？）
そっか・・・オレ・・ネイルしてたんだ・・・いつもより長くなった爪の先が手のひらに当ってたんだ・・・
（！！！）
ネイルが目に入った瞬間、オレは“ドキッ”とした・・・キレイに飾られたオレの爪・・・可愛いネイルのせいでいつもよりずっと女の子らしい手に見える・・・

なんか・・心臓はドキドキするけど・・・さっきまでの緊張とはあきらかに違う・・・フワフワしてた気持ちが落ちついてきて・・足

の震えもいつの間にか止まってる・・・

・・急に空気が澄んだように、まわりが鮮明に見えだした・・・！

“ＧＯ！”

背中をポンと押されて、オレはステージへ歩き出した・・・自然に足が前に出る・・・ステージの中央に着いてお客さんの方を向く・・・なんか・・不思議に気持ちが落ちついている・・・

ステージから突き出たランウェイへ歩き出そうとするとＤＪの人が・・・

“　地元九州ＪＩＮＯＮ　人気読者モデル～　春日ユウ～！”

（！！）

・・な・・なんてこと言うんだよ・・・そんなこと言ったらみんなシラケちゃうよ・・・まあ、お昼に裏口にいたコたちくらいは応援してくれるかも知れないけど・・・

しかしオレの予想に反してお客さんからは大きな声援が返ってきた！

「ユウちゃ～ん！」

「かわいい～！！」

口々に声援を送ってくれてる！！　・・お客さんあったかい！

・・オレの衣装は白い光沢のあるポリエステルのワンピース・・スカートのスソには白いフワフワが付いている・・・肩からは、これも縁にぐるっと白いフワフワが付いた、ワンピースと同じ素材のケープ・・・ケープを首にくくるヒモの先には白いポンポンが付いてて、まるで白いサンタさんみたいな服だ！

足には太モモまでの白いタイツ・・・白い編み上げのブーツはかか

とは高めだけどハイヒールみたいに歩きにくくない・・・

・・そしてオレのトレードマーク、ストレートの長い黒髪の頭には針金入りバンダナのウサ耳が2本・・・

両側をたくさんのお客さんが埋め尽くしたランウェイを歩く・・・なんだろう・・この感じ・・・なんだかまわりが良く見える・・・まるで視界が広がったみたい・・・

・・女の子たちはみんな携帯を手にしてる・・・この服買ってくれるコいるかなぁ・・・

（！！）

・・あ、弘子がいる！・・直美に・・千里も！・・・千里・・勉強があるのに来てくれたんだ！

こんなにたくさんの中にいるのに、なぜかすぐに気が付いた・・・

・・あ・・さっきの裏口にいたコたちが手を振ってる！・・・オレはそのコたちに向って手を振ったら、まわりのコまでピョンピョン飛び跳ねて喜んでくれた！・・・そんなに喜んでくれるなら反対側も手を振っちゃえ！

・・もうすぐランウェイの先端・・・ポージングするところだ・・・そのとき思いもしなかった人が目に飛び込んできた！

あ！・・長谷川とミサトちゃん！・・それに・・横にいるのは白石先生だ！！・・・まさか白石先生まで来てくれるなんて・・・

オレは先端まで行くと、軽く横を向いて正面の片足を曲げ、片手は腰、もう片方の手は顔の横で広げた・・・

（ステキなネイルがみんなに見えるといいけど・・・）
・・・オレ・・可愛くポージング出来てるかなぁ・・・

・・でも・・お客さんの反応は・・悪くないみたいだった・・・

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

「ユウちゃん決まってたよ！」
ソデに戻ると、次の出番のためにスタンバっていた蟹原さんがオレに言ってくれた！
「あ・・ありがとうございます！」
オレ・・すっごく嬉しい！　蟹原さんに褒めてもらえるなんて！！

「わ・・わたし、急いで次の衣装に着替えてきますね・・・着替えたらまた戻ってきてお手伝いします！」
オレは着替えのため、急いでＪＩＮＯＮの楽屋に戻った・・・オレの着替えは少ないから、ジャマにならないように楽屋に置いていたのだ。

・・こんどの衣装はちょっと恥ずかしいなぁ・・・これってパーティーでのコスプレ用みたいだし・・・

・・でも・・贅沢は言ってられない・・・オレは他のモデルさんたちとは違うのだ・・・まだ素人みたいなものだし・・こういうのはオレみたいなコが着なきゃな・・・

オレは簡単なカーテンの仕切りに入って、ポンポンが付いたヒモをほどいてケープを外し・・背中のチャックをおろして衣装を脱いだ・・・そしてタイツも脱ぐ・・・

ふと気になって厚めの見えてもいいパンツを見てみたけど・・タックした股間はまったく問題ないようだ・・・いまのところ痒くもない・・・

こんどのは白いストッキング・・・モモのところで留まるように、黒い巾広のレースのゴムバンドが付いている・・・

そしていよいよ黒いメイドの衣装・・・胸元の白いレースのヒラヒラが可愛い・・・でも・・オレがまさかメイド服を着るなんて思いもしなかった・・・

・・そりゃぁ・・メイドさんの服は可愛いから・・女の子なら一度くらい着てみたいって思うものだけど・・・さすがに大勢の人のまえで着るのは恥ずかしい・・・でも今はそんなこと言ってられない!!

オレは意を決してメイド服の背中のチャックを開けて足を入れる・・・そして上にあげると膨らんだ袖に腕を通した・・・

・・うぅ・・・鏡が無いから良くわからないけど・・・似合ってるんだろうか・・・？

・・まあ・・似合ってても・・それはそれで恥ずかしいけど・・・

背中のチャックを上げて、腰をエプロンの白いリボンで結ぶ・・・

結び目・・ちゃんとなってるかな・・・？

・・あとはカチューシャ付きの白い頭飾りをつければ出来上がりだけど・・・鏡がないと髪がクシャッとなりそう・・・

カーテンを開けるとカネちゃんがいた。

「！・・ユウちゃん可愛い～！！」

「そ・・そう？・・似合ってるかな・・・？」

軽くポーズなんかとってみたりして・・・

「すっごく似合ってるよ！　あ、カチューシャ付けてあげる！」

オレは背が低いカネちゃんが届くように背をかがめた・・・

「ねぇ、後ろのリボンちゃんと結べてる？」

「一応結べてるけど・・もっと綺麗に結び直してあげるわよ！」

カネちゃんはそう言うと、オレが結んだのをほどいて、もう一度結び直してくれた・・・

「ほら、見える？　リボンは広がるように結んだ方がチョウチョみたいで可愛いでしょ？」

「ホントだ！」

まるでオレの背中に白いチョウチョがとまってるみたいだ！　オレが結んだのと全然ちがう！！

「じゃぁ、またお手伝いに行ってくるね！」

「あっ、ユウちゃん靴忘れてるよ！」

「あ・・いけない・・・」

オレは編み上げブーツを脱ぐのをカネちゃんに手伝ってもらって、用意してあった黒いエナメルの靴に履き替えた・・・ちょっと厚底だけど、これもハイヒールじゃない・・・せっかく練習したのに・・

あのハイヒールでのウォーキングの練習はいったい何だったんだろう・・・？

・・それにしても・・・服を着るときも、靴を履くときも・・何かにつけてネイルが目に入る・・・そのたびに何故だか元気が出てくるような気がする・・・これが・・刈谷先生が言ってた魔法なのだろうか・・・？

・・女の子ってお化粧でも自分に魔法をかけることは出来るけど・・お化粧は鏡で見なければ自分ではわからないから、しばらくするとせっかくかかった魔法も解けてしまう・・・それどころか時間が経つと崩れていないかの方が気になってくる・・・

・・でも・・ネイルはいつでも自分で見れるから・・・気分が落ちてきたらすぐに見て、また気分を上げることが出来るみたいだ・・・刈谷先生が言ってた意味がやっとオレにもわかってきたかも！

「蟹原さん、またお手伝いします！」

「ユウちゃん？メイドさんじゃない！可愛い！」

「そ・・そんな・・・」

・・これはさすがに・・褒められても恥ずかしい・・・

「そんな恰好で着替え手伝ってくれると、本当のメイドさんみたいね。」

「！・・そっか・・そうですよね！」

・・たしかにその通りだ・・・オレはユリお嬢様の着替を手伝うメイドって感じだ！

「そうだ・・ユウちゃん聞いた？　さっきユウちゃんが着てた服、すごく売れてるらしいわよ！」

「・・ま・・まさかぁ・・・」
「ホントよ！　佐々木さんが言ってたんだから。」
「！！！」
・・そんなの・・ちょっと信じられないけど・・・もし本当だとしたら・・たぶん値段のせいだと思う・・だってオレが着たのはブランドものじゃないから・・お求めやすい値段だからじゃないかな？

蟹原さんたちの着替えを手伝っていると、あっという間にオレの番になってた・・・急いで舞台のソデに向うとオレの他にもメイドさんの恰好をしたモデルさんがいた・・・ピンクと水色のメイドさんだ！
・・オレは読者モデルだからいいけど・・本当のモデルさんはこんなパーティー用のコスプレなんかイヤじゃないのかなぁ？・・・でも・・このモデルさんたちも見たことない顔だから・・あまり有名じゃない人なのかも・・・

「ユウちゃん！」
もうすぐオレたちの番というときに、佐々木さんが走ってきた・・・
「？」
「モデルさんでコスプレはイヤだって急に言い出したコがいるんだけど、ユウちゃん着てくれない？」
「あ・・はぃ・・でも・・どんなのですか・・・」
「それがちょっと私にも今連絡が来ただけだからわからなくて・・・」
・・オレはもうメイド服着ちゃってるし・・・いまさらイヤとは言えない感じだ・・・
「いいですけど・・」
「良かった！じゃぁソデに戻ったら裏に走ってきて、またすぐに出なきゃいけないみたいだから。」

「ぁ・・はい・・・」

“　クリスマス・パーティーコーナ～～！”

あ！もうオレの出番！！・・・オレは黒だから最初なのだ・・・でも・・メイド服なんてお客さんに引かれちゃったらどうしよう・・・

オレが音楽に合わせてステージに出ていくと、いきなりスポットライトに照らされた！

するとお客さんはオレの予想に反して大盛り上がりだ！

・・一瞬足がすくんだけど・・すぐにネイルを見て気持ちを落ちつけた・・・オレはモデルなんだって自分に言い聞かせる！

ステージ中央で止まって軽くポーズをとり、ランウェイへ歩きだす・・・オレが真ん中くらいに来たときに次のモデルさんがランウェイに入ってくるハズだ・・・

“チラッ”と目を落すと、自然に振れるオレの指先の可愛いネイルがチラチラ目に入り、オレに自信と落ちつきを与えてくれる・・・

ランウェイの先まで来ると、片手にお盆を持ったように手を上げて“いらっしゃいませ”のポーズをとった。

お客さんの歓声を背中に受けながらランウェイを戻っていく・・・ふと前から来た水色のメイドさんを見ると、鏡になった床にスカートの中が映ってる！・・・けっこうミニだからパニエの中のパンツが丸見えだ・・・オレもあんなふうに見えてるのかと思うと、恥ずかしさで顔が熱くなってくる・・・

・・でもオレは恥ずかしさに負けずに、何とか舞台ソデにハケるま

でしっかり教えられたモデルウォークで通すことが出来た・・・

　ステージから見えなくなると、急いで舞台裏へ走っていく・・・
なんかオレもモデルさんになったみたいだ！・・・といっても次に着るのもパーティー用のコスプレだけど・・・でも・・モデルさんがイヤがるってどんなのだろう・・・

オレが走って佐々木さんのところに行くと、佐々木さんが済まなそうな顔してた・・・
「ゴメン・・ユウちゃん・・・こんな服だった・・・」
「！！！」
佐々木さんがオレに見せたのは・・・なんと・・バニーガールだ！！
・・・これはさすがに・・プロのモデルさんはイヤがると思う・・・
「どうしようユウちゃん・・」
「・・しょ・・しょうがないですよ・・時間が無いから急がなきゃ！」
・・もう今さらイヤとは言えない・・・

「ユウちゃんこっち！」
モデルさん用のカーテンに佐々木さんと2人で入ると、佐々木さんがエプロンのリボンをほどいて、オレのメイド服のチャックを降ろして脱ぐのを手伝ってくれた・・・

急いでメイド用の白いストッキングを脱いで、黒い網タイツにはきかえる・・・こんな色っぽいのオレにはムリだよ・・・佐々木さんがパンスト状になった網タイツを持ってくれて・・オレは右足をその中に入れようとすると・・・
「ユウちゃん！パンツもこのTバックにはきかえなきゃ・・・あ！・・」

そう言ったとたん、佐々木さんの顔色が変わった・・・
「・・忘れてた!どうしよう・・」
え?!・・佐々木さん・・もしかしてオレが男だって忘れてたってこと?!

・・もうっ・・こうなったらヤケくそだ!・・どうせ佐々木さんには男だって知られてるんだから・・・
「・・だ・・大丈夫です・・・」
オレは一気にパンツを降ろした・・・まさか・・佐々木さんに“タック”してるの見られるなんて・・・オレ・・変態と思われるかも・・・
急いで黒いTバックにはきかえた・・Tバックってヘンな感じだ・・・なんだかパンツをはいてるような・・はいてないような・・・お尻の真ん中にヒモの感覚だけがあるせいか、裸の時よりお尻が飛び出てるようで気になる・・・
!・・網タイツに足を入れようと前を見ると・・佐々木さんはオレのアソコを見ないように、うつむいていてくれた。

オレは網タイツに足を入れて引き上げ、股に弛みが出ないように注意してはいた・・・
「佐々木さんもういいですよ。」
「じゃぁ・・次はコレ・・」
・・いいと言ったのに佐々木さんはまだうつむいている・・・たぶん・・オレに気を使ってくれてるんだと思う・・・前がふくれてるとでも思ってるんだろうか・・・

・・黒いバニーの衣装・・・お尻のとこに白いポンポンがウサギの尻尾のように付いている・・・肩が全部あいてて、背中も出てるから・・これじゃブラも出来ない・・・

ワンピースの水着のような形の衣装に足を入れ腰まで上げた・・・！・・・横が腰骨のあたりまで見えてて水着ならかなりのハイレグだ！

・・ブラを外して衣装を胸まで上げる・・・こういう服はどうやって胸からズリ落ちないようになってるのかと思ったら、魚釣りの糸のような透明な肩ヒモが付いていた・・・でも・・長い時間着てたら肩に食い込んで痛そうだ・・・

「もう着た？」
「はい。」
オレがそう返事をすると、佐々木さんはやっと顔を上げてくれた。
「！・・全然・・わからないわね・・・」
「はぃ・・」
タックしてるから・・・まあ・・してなくても同じようなものだけど・・・でもさすがにタックしてなきゃ、こんなハイレグはキツイと思う・・・
「ユウちゃん大丈夫なの？」
「はぃ・・なんとか・・」
「それじゃハイヒールと・・耳ね。」
オレは赤いハイヒールを履き、黒いウサギの耳が付いたカチューシャを付けた・・・
・・両腕にカフスをはめ・・・最後に白い衿の部分だけに黒い蝶ネクタイが付いたヤツを首の後ろで留めてもらって・・・バニーガールの出来上がりだ・・・

・・こんなことやっちゃって・・校長先生や教頭先生に怒られないかな・・・教頭先生は喜ぶかも知れないけど・・・

「しっかりね！」

「はい！」
・・もう・・こうなったらやるしかないじゃない・・・こんなの着て恥ずかしがってたら・・よけい恥ずかしい！
でも・・カーテンを開けて外に出ると、みんなが一斉にオレを見たから一瞬怯んだ・・・
「ユウちゃんカッコイイじゃない！」
「こんなに似合うと思わなかったわ！」
「・・あ・・ありがとうございます！」
オレはやっぱり恥ずかしくて舞台ソデへ走っていった・・・途中馴れないハイヒールで転びそうになったけど、何とか転ばずにすんだ・・・ハイヒールでのウォーキング・・やっぱり習っておいて良かった！

オレが舞台ソデに着いた時には出番ギリギリになっていた。
合図で何事もなかったように歩き出す・・・ヒザを伸ばして颯爽と・・・シカになった気分で・・・一旦ステージに立ったら読者モデルなんて言ってられない・・・オレはこのバニーガールの衣装を買ってもらうために、精一杯この衣装をステキに見せなきゃいけないんだ！
オレが恥ずかしがってたら・・誰も買いたいなんて思わないだろう・・・だから堂々としてなくちゃ！

「ユウ～！」
あっ、レナだ！　レナも来てくれたんだ・・・オレに手を振っている・・・オレもレナに向って微笑むと、気持ちが通じたみたいで、さらに大きく手を振ってくれた。
！・・・レナの横には麻衣とかあさんも・・・それにレナのおばちゃ

んまでいる?!

みんな見てくれてるんだ・・・気付かないけど他にもクラスのコや白鴻のコがいるかも知れない・・・そう思うと恥ずかしいけど・・・誇らしい気持ちにもなる・・・オレはいま・・一流モデルの人たちと同じ舞台に立っているのを見てもらってる!

ポージングは思いきりカッコ良く決めてみた!

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー
ー　ー
ー

「お疲れさまユウちゃん」

「・・はぁ・・カネちゃん・・・ホント疲れちゃった・・・」

楽屋に戻ると一気に疲れが押し寄せてきた・・・オレの出番はこれで終り・・・思いがけず3つも着ることになってしまった・・・

九州ガールズコレクションももうすぐ終り・・・オレがお手伝いすることも無さそうだ・・・

「ユウちゃんいる〜?」

ん?・・・蟹原さんの声・・・?

「ぁ、蟹原さん?・・・もうすぐ最後の出番じゃないんですか?」

「そうなんだけど、ブランドの人が最後にユウちゃんにも、わたしがプロデュースしてる服を着てもらえないかって言ってるの!わたしと2人で出て欲しいんだって!」

「え?!」

・・そんなの・・願ってもないことだけど・・・

「い・・いいんですか・・・わたしで？」

「ユウちゃんにご指名なのよ！　これもユウちゃんが着た服がいっぱい売れたからよ！」

「！！」

・・ホントに売れてたんだ・・・？！・・オレが着た服・・・

「いいわね？」

「は・・はい！！」

・・蟹原さんと・・・しかも蟹原さんプロデュースの服を着て一緒のステージに立つなんて・・・こんな夢みたいな話・・イヤなハズがない！

オレは蟹原さんと一緒に急いで舞台裏に戻った・・・

「ユウちゃんが着るのはコレよ。」

「！・・可愛い！！　こんな可愛いの着ちゃっていいんですか？！」

それはピンクのワンピースでハイウエストぎみのお腹の部分には黒い大きなリボンが付いている！

「このデザインはわたしよりユウちゃんの方が似合いそうだから。」

「そ・・そんな・・・」

「さ、早く着て。すぐに出番よ！」

「あ、はい！」

オレは急いでワンピースに着替えた・・・靴は白いハイヒール・・・

蟹原さんは白いトップスとピンクのスカートが1つになった切り替えワンピ・・・ミニのスカートには裾に2段のフリルが付いている・・・

・・オレの体型では・・背が高くて足も長い蟹原さんとじゃ見劣り

しちゃうだろうけど・・・オレはそれでもかまわない・・・オレ・・蟹原さんが大好きだもん！　蟹原さんの役にたてるなら何だってする！

それに・・オレは普通の人と同じような体型の読者モデルとして、この服をみんなが着ても可愛いってことをアピールすれば良いんだと思う・・・たぶんそれがオレの役目なのだ。　みんなが蟹原さんみたいにスタイルが良いワケじゃない・・・

“　最後は～　蟹原ユリ　ア～ンド　春日ユウ～！！”

ＤＪの声に合わせてオレたちは上手と下手から歩きだし、ステージ中央で並んで一緒にランウェイへ踏み出した・・・ステージ際の女の子たちがみんな手を振っている・・・

「ユウちゃん・・」

蟹原さんの声に見上げると・・蟹原さんは笑顔でオレにも手を振るように目で合図した・・・そしてオレたちはまわりの女の子たちに両手を振りながらランウェイを歩いていった・・・もうパンツが見えても気にならない・・・

振り続けるオレの両手には刈谷先生からもらった、ラインストーンがキラキラ光るピンクの可愛いネイル・・・そして・・・オレの股間は・・誰も知らないけど・・“タック”で女の子のようになっている・・・それがオレに密かな自信を与えてくれる・・・

そして・・オレは今・・・憧れの蟹原さんと同じステージに立っている・・・女の子のオレにとって・・こんなに幸せなことがあっていいのだろうか？！

ランウェイの先端にくると、蟹原さんはオレの腰を抱き寄せて、微笑み合ってから最後のポージングをした・・・かあさん、麻衣、レナとおばちゃん・・・弘子、千里、直美・・・長谷川、ミサトちゃん、白石先生・・・みんなの楽しそうな顔が見える・・・

・・こんな・・みんなを楽しませるステージに立てるなんて・・・オレはなんて幸せな女の子なんだろう！

最後にモデルさんたち全員でステージに集合し、みんなでランウェイを歩く・・・そして始まりの合図と同じ盛大な爆発で、あたりは銀色のリボンと紙吹雪に包まれて、九州ガールズコレクションは大成功のうちに幕をおろした。

第１３９話　結果　頑張ったご褒美は・・・

「カンパ～イ！！」
「お疲れさまで～す！」
「お疲れさま～！」

九州ガールズコレクションの打ち上げは、すぐに東京に帰らなきゃいけないモデルさんもいるから、舞台裏で簡単に行われた。ビールもあるけど、オレは未成年だからもちろんオレンジジュースでの乾杯だ。

「やあ～　ユウちゃん！」
！・・いきなり両肩をつかまれてビックリした・・・
「ぁ・・フ・・フジタさん・・！」
「ユウちゃん頑張ってたじゃない！　どうだった？　初めてのファッションショーは？」
「ぁ・・すごく・・緊張しました・・・」
「そう？　初めてにしてはサマになってたみたいだけど？」
「！！・・そ・・そんなことないです・・・リハーサルでは演出家の宮川さんに怒られちゃったし・・・」
「ハハハ・・気にすること無いよ。アイツはいつも若い子をイジメるんだ、それが宮川のテなのさ。」
「・・・そう・・なんですか・・？」
「そうさ、ちょっと厳しいこと言って出演者の気持ちをシメるのが、アイツのいつものテなんだよ。舞台が専門だからね。」
「・・でも・・宮川さん・・わたしのこと・・フジタさんが“ 捩じ込んだ”って・・・」
「アイツそんなこと言ったの？　わかった、後で代わりに叱っといてあげるよ。」

「あっ！ダメです・・あの時はホントにわたしがダメだったんだから！」

「あ～　フジタさん！　ユウちゃんイジメてるんじゃないですか？」

！・・蟹原さん！

「カニちゃ～ん・・・人聞きが悪いこと言わないでよ！　私はユウちゃんのこと褒めてたんだからね。　ねえユウちゃん！」

「ぁ・・はい！」

「ホント？　ユウちゃんはわたしの妹分なんだヘンなことしたら承知しないわよ！」

！・・オ・・オレが・・蟹原さんの妹分！？

・・蟹原さんがそんなこと言ってくれるなんて・・・冗談でも嬉しい！！

「あっ！　そうだ。ブランドの人が、その服ユウちゃんにあげるって。」

「え？・・ほ・・ほんとですか？」

この・・ファッションショーの最後に着た、蟹原さんプロデュースの可愛い服を・・オレに？！

「うん。ユウちゃんのおかげで沢山売れたみたいよ！」

「！！・・そ・・そんなぁ・・・」

・・それはきっと・・蟹原さんと一緒だったからだ・・・そうに決まってる！

「こういう結果がすぐに出るのは良いよね。実力がはっきり判る！」

「・・・・！」

・・フジタさんまで・・何てこと言うんだよ・・・服が売れたのはこの服が可愛かったからだ・・・べつにオレが着たから売れたワケじゃないと思う・・・

・・でも・・ほんの少しでも売り上げに貢献できたのなら・・・嬉しいけど・・・

「そういえばフジタさん、テレビカメラが入ってたけど、あれどこのカメラ？」

蟹原さんの質問にフジタさんは・・・

「ああ、あれはＴＮＣだよ。明日めざましテレビで放送されるってさ。」

「！！」

・・やっぱり・・めざましテレビだったんだ・・・だってそういうの時々見るもん！・・・オレは映んないだろうけど・・蟹原さんは映ると思うから、ぜったい録画しとこう！

――――――――――――――――

――

打ち上げが終ってから、レナとおばちゃんが中洲〈なかす〉の居酒屋さんで今日のファッションショーの成功のお祝をしてくれた。

さすがにもう遅いからみんなは帰ってしまったけど・・・

「今日のユウはホント可愛かったよ！」

「・・そんなに何回も言わないでよぉ・・・わたし恥ずかしいよ・・・」

・・レナったら・・さっきから何度も言うんだもん・・・照れくさ

いったらない・・・

　レナのとこはお家で商売してるせいか、夜遅くこういうお店に来ることも珍しくないらしい・・・おばちゃんはオレのかあさんほどうるさくないからなぁ・・・本当は今日もかあさんは、オレも麻衣と一緒に連れて帰りたいみたいだったけど、今日だけは特別だからっておばちゃんが言ってくれたから、かあさんも折れてオレもレナと一緒に、この居酒屋さんでモツ鍋を食べれることになったのだ。前からレナに聞いてて食べてみたかったから・・・

　だいたい、かあさんは心配しすぎだと思う・・・オレも来年の１月には１７歳になるんだから・・・そんなに子供みたいに心配しなくても良いのに・・・だってレナなんか・・・

「ユウもビール飲めばいいのに！」

・・ビールなんか飲んでる・・・

「・・うっ・・ううん・・わたしはいい・・・」

・・さすがにお酒は・・・ダメ！

・・だって・・せっかくかあさんが居酒屋さんでモツ鍋食べに来ること許してくれたのに・・・お酒まで飲んじゃったら・・オレ、かあさんに信用なくなっちゃう・・・だってオレはかあさんとお酒は大人になるまで飲まないって約束したんだもん（７６話参照）・・・それに・・もし学校にバレても大変だから、絶対飲まない方がいいと思う。　白鴻はレナの学校よりずっと厳しいんだから・・・

　でも・・レナはもうビールなんか平気で飲むし・・こういう所にも馴れてるのに・・・オレは中洲の居酒屋さんなんて初めてだから・・なんだかレナのことが、いつもより大人っぽく見える・・・それに比べて・・オレはやっぱり子供みたいだ・・・なんか・・レナにまで子供あつかいされてそうで情けなくなる・・・オレだって・・

ホントはビールくらい飲めないワケじゃないのに・・・

土鍋の中のおダシが沸騰しだすとお店の人が来て、白菜やニンジンやエノキ・・そしてモツを入れる・・・煮えてきたらモツ鍋の出来上がりだ！
おいしそうな匂い！

テレビなんか見てると、福岡の人はみんなモツ鍋食べてるみたいに言ってるけど、オレはモツ鍋を食べるのは初めてだ・・・どんな味か興味あるけど・・・モツって少し気持ち悪いのも入ってるなぁ・・・あの使い古した雑巾みたいなヤツ何なんだろう？・・エアコンのフィルターみたいなヤツもあるし・・・

「ユウ、その服って最後にカニちゃんと一緒の時に着てた服でしょう？」
「うん、そう！　蟹原さんがプロデュースした服なんだけど、ブランドの人がわたしにくれたの！」
・・嬉しかったから・・そのまま着てきちゃった・・・
「ユウに似合ってるもんね。」
「・・そ・・そう・・？」
「リボンの飾りも可愛いし。」
「うん。」
ホントに・・ピンクのワンピースに、お腹の部分の大きな黒いリボンがすごく可愛い！
「ユウのおかげでたくさん売れたからご褒美なのかもね！」
「・・・・！」
・・もうっ・・レナったら・・・すぐそんなこと言うんだから・・・
・・レナって本当に考え方がポジティブだ・・オレはなかなか、そんなふうにはなれない・・・

「さあ、食べましょう。」
おばちゃんが煮えたモツと野菜を小鉢についでくれた・・・
「いただきます！」
オレは、それがどこの部分だかわからないけど、白いモツを食べてみた・・・
「おいしい！！」
すっごくおダシがしみてる！コリコリしてて・・ちょっと貝みたいな感じもする。

「有希ちゃんモツ鍋は初めてなんでしょう？　遠慮しないでいっぱい食べなさい。」
「はい！」
・・言われなくたって・・・おいしいからいっぱい食べちゃいそうだ！

あ・・雑巾みたいなヤツ・・・これはいまいち食欲をそそられないけど・・・オレは意を決して口に入れた・・・
「！！」
・・ちょっと臭みがあるかな・・・それに・・ノドに引っかかって・・なかなか飲み込めない！
オレは急いでウーロン茶で流し込んだ・・・

「わたしもユウが着てたの見てカッコ良かったから、メイドとバニーガールの衣装買っちゃったわよ！」
「え～！！」
・・ま・・まさか！・・・そんな人いるんだ・・・こんな身近に・・
・

「・・メイドはまだ良いとしても・・バニーガールなんて何で買うの?!」
「?・・だってクリスマスパーティーなんかで着たらウケそうじゃない!」
「・・そ・・それは・・ウケるかも知れないけど・・・」
・・オレはいくらウケても・・バニーガールは着ないなぁ・・・恥ずかしすぎるもん・・・
・・でも・・オレはその恥ずかしい衣装を・・・何千人もの前で着ちゃったんだよなぁ・・・思い出しただけでも恥ずかしくて・・顔が熱くなってくる・・・
「麻衣ちゃんも有希ちゃんのこと素敵だって、ずっと言ってたわよ。」
「え・・おばちゃん・・それほんと?」
「ええ、もう有希ちゃんは麻衣ちゃんにとって理想のお姉さんみたいね。」
「!!」
・・オレが・・麻衣の理想のお姉さん?!
・・・たしかに・・麻衣はオレが女の子になってから・・オレのこと“お姉ちゃん”って呼んでくれてるけど・・・オレが理想なハズないと思う・・・だって・・オレは本当は・・お兄ちゃんなんだから・・・
・・それとも・・麻衣はもうオレのこと・・女だと思ってるんだろうか?・・・まさかなぁ・・・
「あぁ・・おいしかった!」

・・ちょっとヘンな味のもあったけど・・でも全体的にはすごくおいしかった！
「お母さん、シメに麺入れてもらおう！」
「そうね、有希ちゃんまだ入るでしょう？」
「あ・・はい・・少しなら・・・」
・・なんて言って・・実はまだ腹七分くらいだった・・・オレも女の子になって少しは小食になった気もするけど・・・でも男の子のころの食い意地はなかなか消えるものじゃない・・・特においしいものの場合は・・・

お店の人がザルに麺を盛ってきた・・・太めのチャンポン麺みたい・・・そして残った汁の中へ・・・
・・小鉢にとって食べてみると・・・
「！！！」
チャンポンのダシを海鮮じゃなくお肉にしたみたいな味で・・これまたすごくおいしい！
オレたちは、あっという間に食べ尽くしてしまった。

“ブルブルブル・・・”
「あ・・メールだ・・！」
それは刈谷先生からのメールだった・・・

“　ユウちゃん　ショーは大成功だったみたいね　フジタから聞いたわよ　約束どおりフランス料理をご馳走するから　クリスマスは空けておきなさい　”

「フランス料理なんてスゴイじゃないユウ。」
「う・・うん・・・」

「でも刈谷先生って誰？」
レナが言うと・・・
「刈谷先生って、あの刈谷章之介〈かりたに　しょうのすけ〉のこと？」
「あ・・おばちゃん知ってますか？」
「知ってるわよ！お昼のテレビ番組にも出てるわよ。刈谷章之介に見初められるなんて、ユウちゃんすごいじゃない！」
「え？お母さんその人、有名な人なの？」
「そうよ、すごく偉い華道の先生！」
「さすがユウだね！」
「・・・・・・」

・・でも・・本当にいいのかなぁ・・・あんな大先生とフランス料理なんて・・・たしかに約束したけど・・・社交辞令だと思ってた・・・

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

「お姉ちゃん、おはよう！」
「あ、おはよう麻衣。」

朝食を作りながらも、テレビが気になってチラチラ見てしまう・・・
昨日から録画はセットしてるんだけど・・・

朝食を食べながらも気持ちはテレビに釘付けだ・・・たしか・・
もうすぐ芸能コーナーのハズじゃなかったっけ・・・

“え～　きのう福岡マリンメッセで九州ガールズコレクションが行われて、カニちゃんこと蟹原ユリさんが登場、ファンを湧かせました。”

「お姉ちゃん！昨日のだよ！」

「う、うん・・・」

・・やっぱり・・蟹原さんは素敵だなぁ・・・モデルウォークがカッコイイ！　きのうは舞台ソデからしか見れなかったけど・・・オレも客席で見たかったなぁ・・・

「お姉ちゃんも出るかな？」

「・・まさかぁ・・わたしは出ないわよ・・・」

・・だって・・オレはそんなテレビに出るようなモデルじゃないもん・・・読者モデルだし・・・

“～そして最後は、カニちゃんブランドの服で登場・・・”

「！！」

「あっ、お姉ちゃん！」

・・紹介は蟹原さんだけど・・・オレも一緒に写ってる！

“　となりのコも可愛いですね、だれなんでしょうね？”

“え～・・大塚さん、このコは地元のモデルさんみたいですよ。”

「！！！」

きゃ～～・・軽部さんがオレのこと言ってる～！！　テレビでオレのこと話してるなんて・・・なんかヘンな感じ！

“え～　次わぁ～　韓国のアイドルの話題です・・・”

九州ガールズコレクションの紹介はそれだけで終りだった・・・あんなに短かったのに・・・オレまで映るなんて・・・信じられない

！！

・・これは・・オレにとっては永久保存版だ！！

・・録画してて良かった・・・

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー　ー

ー　ー　ー

ー　ー

ー

「有希！めざましテレビ見たよ！」

「ぁ・・う・・うん・・・」

「カニちゃんと一緒なんてスゴイじゃない！」

「・・そ・・そんなことないけど・・・」

・・なんか・・クラスに入るとみんなに言われて・・すっごく照れくさい・・・みんな教室に入ってくると一直線にオレの所に来て言うんだもん・・・見てないコも混じって大騒ぎになってしまった・・・

本当は・・オレは教室にカバンを置いたらすぐに保健室に行くハズだったのに・・・だって・・オレ・・まだタックしたままだから・・・

・・昨日は白石先生に取ってもらう時間がなかったのだ・・・

結局タックを取ることが出来たのは昼休みになってからだった・・

・おかげで授業中も痒くてたまらなかった・・・もう当分タックはコリゴリだ・・・

保健室では人に見られないように鍵をかけて、用心のためカーテンの中でタックを外してもらう・・・強力な接着剤だから、剥離剤を染み込ませながら、少しづつ外さなきゃいけないから時間がかかる・・・

「先生、昨日は見に来て下さってありがとうございました。」
「クラブのコたちが帰ってからだったから３０分くらい過ぎてしまったけど・・・」
「ううん、わたしは最初の方は出てなかったから。」
「でも、有希ちゃんがバニーガールの恰好で出てきた時は驚いたわよ！　あまり大人っぽく見えたから最初は有希ちゃんだと判らなかったくらいよ！」
「・・うぅ・・あれは・・突然着なきゃいけなくなってしまって・・・もし先生にタックしてもらってなかったら大変なことになってたかも・・・」
「それじゃ、やってた甲斐があったわね。また少しカブレちゃったけど。」
「・・はぃ・・・」

やっと接着剤が外れると、オチンチンや袋に付いた接着剤を、脱脂綿に染み込ませた剥離剤できれいに取っていく・・・オチンチンは白石先生にはもう何度も見られてるけど・・・女の先生にオチンチンをつままれるのは・・何度やってもやっぱり恥ずかしい・・・

「はい、終ったわよ。」
「・・ありがとうございます・・・」
・・オレのオチンチン・・ヨードチンキで真っ茶色だ・・・

「パンツが黄色くなるかもしれないから、ガーゼ付けておく？　それともナプキンの方がいい？」
「あ・・ナプキンでいいです・・・」
オレは保健室に常備しているナプキンをもらい、パンツに引っ付けてからはいた・・保健室には女の子が急に生理になったコのためにナプキンが常備してあるのだ・・・

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー
ー　ー
ー

「失礼します・・」
挨拶して保健室のドアを閉め、教室に帰ろうとすると・・・

「おや、戸田君じゃないか。」
・・しまった・・バッタリ教頭先生に出会っちゃった・・・教頭先生って良くここらへんウロウロしてるんだよなぁ・・・

「・・こんにちは・・教頭先生。」
オレは両手をそろえて礼儀正しくお辞儀をした・・・とりあえず、ちゃんとしておかなきゃ・・・
「戸田君！　君きのうファッションショーに出たそうじゃないか？」
「あ・・はぃ・・・」
「そういうことは前もって報告してくれなきゃ困るんだけどね。」
「ぁ・・すみません・・出るハズじゃなかったんですけど・・急に決まってしまって・・・」
「それに・・なんだ・・かなり色っぽい恰好もしたそうじゃないか？」

「ぁ・・バレてました・・・？」
「バレないと思ってたのかね？」
「・・は・・はぁ・・・」
「まあ、校長には私から適当にとりなしておいたがね。」
「ぁ・・ありがとうございます！教頭先生！」
・・教頭先生ってやっぱり頼りになるなぁ・・・臨機応変っていうか・・・

「ところで・・その時の写真なんかは撮ってないのかね？」
「？・・あ・・忙しかったので・・撮ってません・・・」
「そ・・そうか・・・」
？・・・なんか教頭先生・・元気なくなっちゃった・・・
「あの・・なんか・・必要でしたか・・？」
「いやいや、まあ・・いいんだ・・・これからはちゃんと前もって報告するようにね、頼んだよ！」
「はい、以後気を付けます！」
・・あぁ良かった・・怒られなくて・・・

ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー
ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー　ー

「・・ここが2乗になって・・答えは・・こうなる。解ったか？」
「は～い！」
「それじゃ、前に出てこの問題を解いてみろ！・・だれにしようか？・・じゃぁ岡本！」
「え～～っ！」

・・直美、当てられちゃって可哀想・・・急に当てられてテンパっちゃってる！

・・・！・・若村先生が机の間を通ってこっちに来る・・・オレも当てられたら大変だ！・・知らんふり、知らんふり・・・

「戸田！」

「！！！」

・・ヒ～・・あんな問題わかんないよぉ・・・

「今朝めざましテレビに出てたじゃないか！」

「！！」

「お前も頑張ってるんだな。」

「！！」

きゃ～！！　若村先生に褒められちゃった！　今日は良いことがいっぱいだ！！

「あとは木曜からの期末試験を頑張るだけだな！」

「！！！！」

・・・しまった・・・期末試験のこと・・すっかり忘れてた・・・！

・・いつまでもファッションショーのことで浮かれてる場合じゃなかった・・・

・・うぅ・・また長谷川に教えてもらわなきゃ・・・

―――――――――――――――

―――――――――――――――

――――――――――

ATから

いつも読んで下さってありがとうございます。
今回の話は、めざましテレビに映ったりするのは、あまり先の展開には関係ありません。
テレビに出たために有名になったり、東京進出・・・という展開はまずありませんので、
そういう期待はしないでいただきたいのです。

「それなら書かなきゃいいだろう！」と言われるかも知れませんが、ファッションショーで頑張った有希に、ちょっとしたご褒美をあげたいという
作者の親心とでも思っていただければありがたいです（笑）
私、めざましテレビの大ファンなもので・・・

第１４０話　母親　オレの将来・・・

“トントン、トントン・・・”

かあさんは台所でジャガイモを切っている・・・

リビングから見る、お料理するかあさんの後ろ姿・・・こんな光景

久しぶりだ・・・

こんな時間にかあさんがいること自体久しぶりだから、今日もオレがお料理してかあさんにはゆっくり休んでいてもらおうと思ったんだけど・・かあさんは自分がやると言ってきかなかったのだ・・・

かあさんが作ってるのはコロッケ・・・何が食べたいか聞かれたから、オレはコロッケがいいと言った・・・オレはかあさんのポテトコロッケが大好物なのだ！

かあさんのコロッケはお店のみたいに俵形や平たいのと違って、玉子をもう少し大きくして軽くつぶしたような丸いダ円形をしている・・・具はジャガイモとニンジンと合挽き肉・・・それにメリケン粉、玉子、パン粉の順でつけてから、たっぷりの油でこんがりと揚げる・・・その揚げたてのホクホクのコロッケに、ウスターソースをかけて食べるのが最高なのだ！

なんだかこうして見ていると・・・昔のことを思い出す・・この家での光景だから・・たぶん小学校3、４年くらいだろうか・・・よくお料理してるかあさんに後ろから抱きついて困らせたっけ・・・オレって甘えん坊だったのかな・・・？

「ふふふ・・」

オレはそっとかあさんに近づいて、後ろからギュッと抱きしめた・・・

「！・・ちょっと有希！　何やってるの、包丁もってるんだから危ないでしょう！？」
「うふふ・・・だって嬉しいんだもん！」
・・・かあさんっていい匂い・・・昔とおんなんじ匂いだ・・・
「もうっ・・やめなさい、子供じゃないんだから！」
・・・あの頃と違うのは・・・オレの方がかあさんより大きいことと・・・オレが女の子になっちゃったこと・・・

「ねえ、やっぱりわたしにも手伝わせて？　待ってるの退屈なんだもん・・・」
「・・そう？　それじゃニンジンをみじん切りにしててもらおうかな。」
「うん、まかせて！」
オレは包丁と小さめのまな板を用意してニンジンの皮をむきだした・・シッポの方からアタマの方へ向って軽くむいていく・・・
「有希もお料理上手になったわねぇ。かあさんより手際良いんじゃない？」
「・・そ・・そんなことないよ・・・」
・・たしかに・・学校でも習ってるから・・まだ男の子だった頃よりはずっと上手になってるとは思うけど・・・

大きな仕事してるかあさんもカッコ良くてステキだったけど・・・
オレはやっぱりウチでお料理してるかあさんの方が好きだな・・・
オレがずっと見てきたかあさんは、こういうかあさんだもん・・・

「そうだ、有希は明日かあさって時間ある？」
「うん・・日曜日は用事ないけど・・・」

・・期末テストも今日で無事に終ったし・・・そんなに良い点じゃなかったけど・・・
「だったら天神に買い物に行きましょうか？」
「え？　いいけど・・何を買いに？」
「有希、クリスマスイブは刈谷先生とお食事に行くんでしょう？」
「うん。」
「だったら、失礼のない恰好で行かなきゃ。」
・・え・・でも・・・
「・・わたし、蟹原さんからもらった服で行こうと思ってたんだけど・・・」
「有希。刈谷先生はすごく偉い先生なのよ？　それにパーティーじゃないんだから、もっとシックな服じゃなきゃダメよ！　洋服にはＴＰＯってものがあるんだから。」
「え～・・蟹原さんの服・・着たかったのに・・・」
「こんど弘子ちゃんたちが、早めのクリスマスパーティーしてくれるんでしょう？　蟹原さんの服はその時に着なさい。」
「・・う・・うん・・・」
・・あの服・・可愛かったし・・刈谷先生からもらったネイルにも合ってると思ったんだけどなぁ・・・

・・でも・・新しい服を買ってくれるんだから・・まあいいか・・・かあさん、どんな服を買ってくれるのかなぁ・・・オレももうすぐ１７歳だし・・少しは大人っぽい服でもいいんじゃないかな・・・？

・・フランス料理なんか食べるんだから・・・オレだってちょっとくらい大人の女性に背伸びしてもいいと思うんだけど・・・

「あっ！コロッケだ！」
麻衣が嬉しそうに言った・・・

「かあさんが作ってくれたのよ。」
「そうか、かあさんのコロッケは久しぶりだな！」
・・とうさんも嬉しそう！

・・オレはかあさんのコロッケが大好きだけど・・とうさんも麻衣も、かあさんのコロッケが大好きだ・・・
オレが作るときは、揚げ物は時間がかかるから、ふだんはスーパーで買ったコロッケだからなぁ・・・スーパーのコロッケもそれなりにおいしいけど・・・やっぱりかあさんのコロッケにはかなわない！

・・ソースをたっぷりかけてひと口食べると、変わらないかあさんの味が口いっぱいに広がる・・・なんでかあさんが作るとこんなにおいしいんだろう・・・

・・オレはまだちゃんと教えてもらってない、かあさんのお料理がたくさんある・・・コロッケの味付けもいつか教えてもらわなきゃ・・・

オレはレナと良く行くお店の中ではシックな服も置いているお店にかあさんについて来てもらった。
「かあさん、これなんかどう？」
オレは黒っぽい色のステキなドレスを身体にあててみた・・・背中が大きく開いてて大人っぽい・・・こういうの一度着てみたかったんだ！

・・でも、かあさんは、まったくとりあってくれなかった・・・
「そういう服は有希にはまだ早いわよ。」
かあさんはさっさとお店を出ていく・・・
「・・・・・」
「それに今日は刈谷先生とのお食事に着ていく洋服を買いにきたんだから忘れないで。」
「・・う・・うん・・・」
・・オレは忘れてなんかないんだけど・・・雑誌の撮影では色んな服を着たけど・・偉い先生とお食事に行く時の服なんてシチュエーションのはなかったからなぁ・・・

かあさんがオレを連れていったお店はZサイド〈ジーサイド〉の中にあるお店だった・・・Zサイドはデパートだから、いつもオレやレナが行くようなお店とはずいぶん雰囲気が違う・・・なんか高級そうだけど・・全体的に色が無い・・・良く見ればピンク系とか淡いブルーとかもあるけど・・他のモノトーンに埋もれてしまった感じだ・・・

「・・スーツ・・?」
「そうよ、有希はこういうちゃんとした服は持ってないでしょう?」
「・う・うん・・・」
「これなんか良いんじゃない?」
「・・・・・」
・・かあさんが選んだのは、グレーのツイードスーツだった・・・なんか・・・PTAのお母さんが着る服みたいだ・・・

「・・こ・・こんなの・・わたしくらいのコが着たらヘンじゃないの?」
「そんなことないわよ。」
「・・そうかなぁ・・・」

「まあ・・有希には少し大人っぽいかも知れないけど、あなたももうすぐ17歳になるんだから、ちゃんとした時に着られる服も1着くらい持ってないとね。」

「・・・・・」

・・大人っぽいっていうより・・おばさんっぽいの間違いなんじゃないだろうか・・・？

「とにかく試着してみなさい。」

店員さんが、かあさんが選んだ服を持って試着室まで案内してくれた・・・オレはいまいち乗り気じゃなかったけど・・着てみて似合わなければ、かあさんも諦めると思うし・・・とりあえず着てみることにした・・・

試着室に入ってスカートとセーターを脱いで、ブラウスの上からスーツを着る・・・だからかあさん・・今日はブラウスを着るように言ったんだ・・・

「・・・・・」

・・う～ん・・・なんか・・思ったほどヘンじゃないかも・・・オレってあんがい着こなしちゃうんだよなぁ・・・

・・でも・・オレくらいのコがクリスマスに着るには地味すぎると思う・・・

オレが試着室のカーテンを開けるとかあさんが・・・

「あら、似合ってるじゃない！　有希もこういうシックなのが似合う歳になってたのねぇ。」

「・・・・・」

・・でも、この大きな衿と・・・ヒザ下丈のスカートは絶対ナイ！

「ねぇ・・かあさん・・もうちょっと他のも見ていい？」

「・・いいけど？」

・・オレはお店の中を見てまわった・・・そしたら、結構オレにも似合いそうな可愛いスーツもあるじゃない！

「コレいいかも・・・」

オレが選んだのはピンクと白のチェックのスーツで、衿にはキャメル色の取外しできるファーが付いてる・・・合わせや、飾りポケットとスカートのスソは白いレースで飾られている・・・そしてスカートはタイトでヒザ上２０ｃｍ・・ちょっと短いけど・・足が一番キレイに見えるスカート丈だ！

「かあさんコレ着てみていい？」

「有希・・それはちょっと・・」

「いいじゃない！　着てみるだけ・・ね？」

・・絶対オレにはこっちの方が似合うと思う！・・かあさんだって、どんなに似合ってるか見れば許してくれるかも知れないし・・・

試着室で着てみたら、やっぱりこっちの方が断然オレには似合っていた・・・撮影以外でこんなに足を出すのはちょっと恥ずかしいけど・・でもタイツをはくから大丈夫だと思う。

「見て、かあさん！」

オレはかあさんにも良く見えるように少しづつ１回転してみせた・・・だって後ろの腰のあたりにある小さなリボンの飾りがワンポイントになってるのが、また可愛いかったから・・・

「有希、やっぱりそういうのはダメよ。　今日は可愛い服を買いに来たんじゃないの！」

「・・だってぇ・・・」

・・オレはもう１度、自分の姿を鏡にうつしてみた・・・やっぱり・・どう考えてもオレにはこの方が似合ってる・・・刈谷先生だって、可愛い方が好きなんじゃないかなぁ・・・もう鏡の中のオレは膨れっ面だ・・・

「有希、いいかげんにしなさい。ダメなものはダメよ！」
「・・うぅ・・・」

するとオレたちのやりとりを見ていた店員さんが・・・
「あの・・これなどはいかがでしょう？　お母様のご要望通りシックですし、お嬢様のような可愛らしい方にもお似合いですよ。」
「・・・・？」
店員さんが持ってきたのは、白と黒の小さな千鳥格子のツイードのスーツだった・・・衿なしの衿と合わせの部分が黒でアクセントになっている・・・スカートはヒザ上１０ｃｍくらい・・・スソの少し上に黒い線があって、そこから下が軽く波打って広がっているから実際よりも長さが気にならない・・・たしかに・・オレくらいの若いコにも似合いそうだ・・・
「有希・・着てみる？」
「うん。」
どうやらかあさんも悪くない反応だ・・・オレは店員さんから服を受け取って、可愛いスーツから着替えてみた・・・

右を向いたり、左を向いたりして、自分の姿を鏡にうつして見る・・・後ろ姿も良い感じだ・・・オレのトレードマークの長い黒髪に・・ちょっとした飾りが付いたカチューシャなんかしたらお嬢様っぽくて可愛いかも・・・オレってお嬢様っぽい恰好も似合うって良く言われるし・・・
さっきのお洋服も可愛かったけど・・あの服にはオレの黒い髪は少し重かった・・・でもこの服にはピッタリな感じだ・・・オレはカーテンを開けてかあさんに言った。

「・・どうかな、かあさん・・わたし、このお洋服けっこう気に入ったんだけど・・・」
「・・まあ・・これなら失礼にならないかな・・有希は気に入った

の？」
「・・ぅ・・うん・・・」
「それじゃ、コレにする？」
「うん！」
やっとかあさんとオレの意見が合うお洋服がみつかった！
・・それにしても、店員さんってさすがだなぁ・・・オレたち2人の会話を聞いて、ピッタリなお洋服を選んでくれるなんて！
・・・女の子のお買い物って大変だけど・・すごく楽しい！

お洋服を買って、建物を出ようと1階に降りる・・・デパートの1階って何故かお化粧品のお店が入っている・・・オレはお店の前を通るとき、ガラスに貼ってあるポスターが気になった・・・

キレイな女優さんがさりげない仕草で手を見せている・・・マニキュアのポスターだ・・・

オレは思わず前を歩いているかあさんのソデをつかんでいた・・・
「・・かあさん・・マニキュアも買っていい？」
「マニキュア？　でもマニキュアは学校で禁止されてるでしょう。」
「うん・・だから・・学校にはして行かないから・・・」
「・・・・・」
「そんな赤いのじゃなくていいの、塗ってるかどうかわからないくらいの薄いピンクのでいいから！」

「有希はまだ子供なんだから、マニキュアはしなくていいんじゃない？」

・・・オレ・・もう子供じゃないもん・・・かあさんだって前に、もう子供じゃないんだからって言ったのに・・・

「ねえ、お願い！　学校には絶対して行かないから！」

「・・そうねぇ・・・じゃあ薄いやつよ？」

「うん。」

やったぁ！　オレ、このまえネイルしてから、マニキュアしてみたかったんだ！

　オレたちがお店に入ると、お店のお姉さんがいろいろ商品のことを教えてくれた。

いっぱい色があって迷っちゃう・・・濃い赤からオレンジ系・・そしてピンク・・・ピンクにも透けないのや透けるのがあったり、パールが入ってるのもある・・・パール系のピンクってステキだなぁ・・・でもオレには大人っぽいかも・・・可愛いビンに入った色とりどりのマニキュアは見てるだけでテンションあがっちゃう！

オレが決めかねて迷っているとお姉さんが・・・

「何色か塗ってみましょうか？　ご自身の爪や肌の色との相性もありますから。」

「あ・・はい・・・」

・・そっか・・・たしかにそうかも・・それに透けてるのなんかは爪の色が透けるワケだし・・個人個人で違うのかも・・・

オレが手を出すと・・・

「あら、お嬢さんキレイに手入れしていらっしゃいますね。」

！・・・オレ・・エステで手入れしてるし・・・教えてもらって自分でも磨いたりしてるから・・・褒められると嬉しくなっちゃう！

お姉さんはオレの爪にピンク系のマニキュアをいくつか塗ってくれ

た・・・透けるタイプはムラにならないように塗るのが難しいらしい・・・

親指以外の指すべてに違うのを塗ってみると、それぞれの違いが良くわかる・・・

「かあさん、どれがいいと思う？」

「これくらいが大人しくていいんじゃない？」

「え？！・・コレ・・・？」

・・コレはピンクというより・・肌色に近い・・・

「・・わたしは・・こっちの方がいいと思うんだけど・・・」

「それは少しピンクすぎない？」

「・・・・・」

・・オレは絶対こっちの方が可愛いと思うんんだけどなぁ・・・そう思っていると店員のお姉さんが・・・

「お母様？　お嬢様は色がお白いから、これくらいのピンクの方が清楚に見えますよ。」

「・・そうかしら？」

「そ・・そうよ、かあさん！」

・・お姉さんナイスコメント！・・・だってオレ・・清楚さには定評があるんだから！

結局かあさんもピンクのマニキュアで納得してくれた。

お姉さんにピンクのマニキュアを塗ってもらう・・・今つけているマニキュアをとるため、除光液を染み込ませたコットンを指先に巻いていき、少し時間をおいてからこするようにして取っていく・・・こうやって取ると簡単に取れるんだ・・・？

きれいに取り除いた後に、買うことにしたマニキュアを塗る・・・

オレの爪がキレイになっていくのを見てると、すごくワクワクしてきた・・・

「かあさん見て、かわいい色！」
すべての指の爪にピンクのマニキュアを塗ると、オレの手は思った以上に可愛くなった！
「あっ！まだ動かさないで。乾くまでしばらくかかりますから。」
「あ・・はぃ・・・」
・・そっか・・乾くまで時間がかかるんだ・・・フーフー吹いて速く乾かしたいところだけど、キレイな光沢を出すには自然に乾かすのが一番なんだって・・・完全に乾くまでしばらく何も出来ないなんて女の子のオシャレって大変だなぁ・・・だけどこういうことも女らしさには大切なんだと思う・・・

・・女の子って・・男の子と違っていろいろ不自由なことが多い・・・男の子はしないブラしたり・・パンツの上にストッキングをはかなきゃいけないし・・お化粧もしなきゃいけない・・・

でも・・オレは元々は男の子だったから余計に感じるのかも知れないけど・・そういう不自由なことも含めて女の子なんだと思う・・・ブラしてると激しい動きをするとムネがはみだしそうになるし、お洋服もすぐ着崩れちゃうから、着崩れないように動かなきゃいけない・・・髪が長いとバサバサにならないように注意する・・・そういう細かなことが自然に女の子らしさを身につけさせるんじゃないかと思う・・・

だから女の子でも、ラクな恰好ばかりして、髪も短くしてたりすると、どうしても女の子らしくならないんじゃないだろうか・・・？

・・オレは女の子になってからは、ほとんどスカートしかはかない

し・・・髪も長くしてるから・・・いつの間にか女の子らしさが身についちゃったんだ・・・だからみんなオレのこと女の子らしいって言うんだと思う・・・

マニキュアが乾くとテカリも少し落ちついていい感じになった。

「・・・かわいい・・・」

・・なんだかワケもわからず嬉しさが込み上げてくる・・・こんなときすごく思う・・・オレ・・女の子になってホント良かった！

・・もし男のままだったら・・・こんな気持ちとても味わえなかったハズだもん・・・

買い物が済んでオレとかあさんはコーヒーショップに入った・・・かあさんはコーヒー・・オレはバニラアイスを頼んだ・・・冬だけど暖かいお店の中で買い物してたから暑くなっちゃった・・・

・・スプーンを持つオレの手にはピンクのマニキュアが光ってる・・・

「かあさん、コレ・・ありがとう。」

するとかあさんは・・・

「・・かあさん、マニキュア塗ってる有希見てたら、有希がまだ小さかった頃のこと思い出しちゃった・・」

「？・・・わたしが小さかったころ？」

「そう、有希小さい頃よくマニキュアしてたのよ。幼稚園に行くの

にマニキュア落すのイヤだって泣いて大変だった。」
「・・へぇ・・・」
・・オレは全然憶えてない・・・オレは今の家に越してくる前のことは憶えてないから当然だけど・・・
・・小さいころのオレも・・マニキュア塗ると今みたいに幸せな気持ちになったんだろうか・・・？

「有希は将来どうなりたい？」
「将来・・・？」
「もうあなたも2年生なんだから、そろそろ将来のことも考えてるんじゃない？」
「・・・・・」
・・たしかに・・そろそろ考えなきゃいけない時期なのは確かだけど・・・オレの場合は普通の女の子とは違うからなぁ・・・
「大学に行きたい？　もし会社に入るのなら、大学には行っといた方がいいけど。」
「・・・・！」
・・だけど・・オレは女の子として生活はしてるけど・・・本当は男だから大学に行ったら男として入学しなきゃいけないのかなぁ・・・でも・・オレは見かけがもう女の子だし・・・今さら男には戻れないし・・・

「・・ごめんなさい・・わたし・・まだ考えてないの・・・」
「そう・・もし有希がやりたいならだけど、有希は素質があると思うから、かあさんの仕事手伝ってもいいわよ。」
「え？かあさんの仕事・・・？」
・・かあさんの仕事はこの前知ったばかりだし・・・あんな大変そうな仕事・・オレに出来るのかなぁ・・・

「まあ、その前にデザインの専門学校に行ってもいいし・・」
「・・うん・・・」
・・そういえば・・かあさんもデザインの専門学校に行ったって聞いたことがある・・・
「・・わたしも将来のことは考えないといけないのは・・わかってるんだけど・・・」
・・オレはどうしてこうなんだろう・・・中学の時もギリギリになるまで高校のことなんか考えなかったし・・・おかげでオレ・・女の子になっちゃったんだけど・・・

「・・わたしってダメだね・・オシャレのこととかは真剣になれるのに・・勉強のこととか・・将来のこととか・・そういうのは良くわからなくて・・・」
・・なんか・・こんな自分が情けなくなってくる・・・
「有希、自分がダメだなんて思うのは良くないわよ。オシャレのことに真剣になれるのなら、そういう道に進むことだって出来るじゃない。」
「・・・・!」
「苦手なことを克服するのも大切なことだけど、得意なことを伸ばすのも忘れちゃダメよ。」

・・そっか・・・オレは将来っていわれて、みんなと同じような将来を考えてた・・・でもオレにはオレの将来があるんだ・・・それは他の人とは違うのかも知れない・・・

「でも、有希とこんな話をするようになるなんて、有希も成長したのね。」
「・・だってわたし・・来年には17歳になるんだもん・・・」
「そうね、でもかあさんから見れば、まだまだ子供なんだから、悩

んだり困ったことがあったら何でもかあさんに相談してよね。」
「・・うん・・・」
・・オレは自分では、もうずいぶん大人になった気がしてたけど・・
・オレはまだ子供なのかも知れないな・・・もう少しだけ・・かあ
さんに甘えていてもいいのかな・・・？

・・でも・・それじゃいけないのもわかってる・・・いつまでも子
供のままではいられない・・・

・・だから・・もう少しだけ・・・

「・・かあさん・・・」
「なに？」
「・・こんど時間があるとき・・コロッケの作り方教えて？　わた
しもひとりで作れるようになりたいの！」
・・かあさんがいない時でも父さんや麻衣に作ってあげたい・・・
「いいわよ。有希が知りたいことは何でも教えてあげる。」
「ありがとう、かあさん！」
「でも有希は呑み込みが早いから、すぐにかあさんの方が抜かされ
そうね。」
「！・・そんなこと・・・」
・・そんなことない・・・だって・・だれにも言ったことないけど・
・・かあさんはオレの理想の女の人なんだもん・・・

・・オレはかあさんのことが大好きだ！

第１４１話　感謝　ずっと変わってほしくないもの

　オレは地図を見ながら細い道を歩いてた・・・弘子が描いてくれた駅からの地図なんだけど・・・喫茶店ってどこかなあ・・ここらへんのハズなんだけど・・・

オレがクリスマスは刈谷先生とお食事だから、今年はみんなとクリスマスパーティー出来ないと残念がっていたら、弘子たちが早めにクリスマスパーティーをやろうと言ってくれたのだ。知り合いのお店を借り切ってくれたらしいんだけど・・・

　どうせなら駅に集まってから行けばいいと思うのに・・・みんなバラバラに行くなんて・・・知らないところだから良くわからないよ・・・

？・・ここかな？・・・小さな喫茶店に“貸し切り”の文字が・・・どうやらここで間違いないみたいだ！

・・まだ誰も来てなかったらイヤだなぁ・・・

オレが恐る恐るドアを開けると・・・中は薄暗かった・・・まだ入っちゃいけないのかなぁ・・・

・・やっぱり外で待ってようかと思った途端、急に電気がついて・・・！

“パン！パン！パン！”

！・・な・・なに・・？

・・いきなりクラッカーを浴びせられ、あっけにとられてるオレに・
・・

“　有希！モデルデビューおめでとう！！
”

「え？・・な・・なんで・・？」

「アハハハハ・・・」
・・少し落ちついてくると・・みんないるのが目に入ってきた・・
みんな可笑しそうに笑ってる・・・弘子・・千里・・直美・・安部
っち・・それにミサトちゃんまで！？

「・・モ・・モデルデビューって・・・今日は・・クリスマスパー
ティーじゃないの？」
すると直美が・・・
「もちろんクリスマスパーティーだけど、有希のファッションショ
ーのお祝いも兼ねてやろうってことになったのよ！」
「え？！・・そんなの全然しらなかった・・・」
「当り前よ！有希には内緒で進めてたんだもん！」
・・そうだったのか・・・だからこのところみんな、何だかヨソヨ
ソしかったんだな・・・？

「ホントはすぐにファッションショーのお祝いしたかったんだけど、
期末テストが近かったでしょう？　それに有希はクリスマスは予定
があるって言うから、だったらもうクリスマスと一緒にしちゃいま
しょうって事になったのよ。」
・・千里・・・勉強もあるのに・・・
「・・長谷川さんと井川さんも呼んだんだけどね、用事があって来
れないって。井川さんなんかホント残念がってたわよ。」
・・そっか・・・やっぱり長谷川は来なかったんだ・・・用事なん

て言ってるけど、ほんとはウソだと思う・・長谷川はみんなでワイワイやるの好きじゃないみたいだからなぁ・・・井川さんの方は残念がってたってことは・・ほんとに来たかったのかも知れないけど・・・

「ミサトちゃんは来てくれたんだね。ありがとう！」
「お礼を言うのはあたしの方です！先輩のモデルデビューのお祝いに呼んでもらえるなんてすっごく嬉しいです！」
「・・・・！」

「・・で・・でもさっきから・・わたしのお祝いって・・・わたしべつにモデルデビューなんてしてないのよ？　今もわたしは読者モデルなんだもん・・ただファッションショーに出ただけで・・・」
「有希がそう言うのはわかってるわよ。でもわたしたちから見ればスゴイことなんだから素直にお祝いさせてよ！」
「ぁ・・ぅ・・うん・・・」
・・・そうかもしれないな・・・オレは何でも堅苦しく考えすぎなのかも知れない・・・あくまでクリスマスのついでなんだから、今日はそういうことにしておいた方が良いのかも・・・

“カンパ～イ”
シャンパンで乾杯・・・もちろんオレたちはまだ未成年だからアルコールが入ってないヤツだ。
・・オレの友達にはレナみたいに、お酒飲むような悪いコはいない。

オードブルが運ばれてきてパーティーの始まりだ！・・・なんかすごくおいしそう！！

・・クラッカーの上にレタスとお魚が乗ったやつ・・・こんなの初めてだ・・・サーモンかな？

「！・・おいしい！　ミサトちゃんコレおいしいよ！」

「ほんと！　美味しいですね！」

？！・・あれ・・？

「ミサトちゃん・・その服・・・」

「あ、やっと気付いてくれました？　これガールズコレクションの時、先輩が着てた服なんですよ！」

・・あの白いサンタさんみたいな服だ！　かなり売れたって言ってたけど・・ミサトちゃんも買ってくれたんだ・・・ミサトちゃんは背が低いからオレが着た時と感じが違ってて気付かなかった・・・オレが着た時はもっとスカートがミニだったからなぁ・・・でも・・・

「ミサトちゃん似合ってる！　わたしより似合ってるわよ！」

「それはないです！　あたし着たのはいいけど恥ずかしくて・・ぜんぜん先輩が着た時みたいにならないから・・・」

「ううん。ホントに可愛いわよ！　サイズも合ってるし・・」

・・きっとミサトちゃんの方がこの服にはちょうどいいんだと思う・・・どうりでオレが着た時スカートが短いと思ったんだ・・・

「なんか先輩にそう言ってもらうとウソでも嬉しいです！」

「もう・・ミサトちゃんったら、ウソじゃないのに・・ミサトちゃんは可愛いんだから自信もっていいのよ！」

「はい、先輩！」

・・いい笑顔・・・ミサトちゃんってホント素直なコだなぁ・・オレだったらこんなに素直に受け入れられないと思う・・・ほんとは

オレが他の人に自信持てなんて言える立場じゃないんだけど・・・つい言っちゃった・・・

「先輩の服はカニちゃんと一緒の時に着てた服でしょう？」
「うん、そう！　蟹原さんがプロデュースした服なの！」
刈谷先生とのお食事に着て行っちゃダメだって、かあさんに言われたから今日着てきたのだ・・・この前買ったマニキュアも練習がてら塗ってきた・・・

・・マニキュアを自分で塗るのは思ったより大変だった・・・特に、左手の爪に塗るときはまだいいけど・・右手の爪は左手で塗らなきゃいけないから難しい・・・こういうことは自分でやってみるまでわからなかった・・・練習してみて良かった。

「おまたせ！ケーキだよ！！」
直美と千里がおっきなクリスマスケーキを持ってきてテーブルに置いた。
「わぁ！生クリームだ！」
「有希は生クリームのケーキが大好きだもんね！」
「うん！」
オレはバタークリームよりも断然、生クリーム派だ！・・・そんな派閥があるのならだけど・・・

「このケーキ、みんなで作ったんだよ！」
「え？！　ホント？」
・・よくこんなの作れたなぁ・・・
「スゴイね！　売ってるのかと思った・・」
「まあ、スポンジは買ったやつだけどね。」
「そうなんだ・・でもスゴイ！」

・・そりゃそうだよなぁ・・こんな大きなの焼くには大きなオーブンがいるもん・・・

電気を消して薄暗くして・・ローソクを立てて・・火をつける・・・すると弘子が・・

「ほら、有希消して！」

「え？　わたしが？」

「そうよ、今日は有希が主役なんだから！」

「しゅ・・主役って・・・」

今日はみんなのクリスマスなのに・・・

「やっぱり・・みんなで消そう？　わたしそっちの方が嬉しい！」

「・・そう？・・どうする？みんな・・」

「戸田さんがそう言うならそうしようよ。」

安部っちが言うと・・

「そうしよう！その方がみんなの想い出になるんじゃない？」

そうだよ！千里いいこと言うなぁ！・・千里ってオレと性格が近いからオレが言いたいことを、すぐにわかってくれる。オレたちって、みんなの中では女の子らしい方だから・・・ってオレが言うのもへンだけど・・・オレはただ女の子らしい性格を演じてるだけなんだ・・・

「じゃぁいくよ！　せ～の！」

“フーー！！”

オレたちは直美の合図でいっせいに息を吹きかけてローソクの火を消した！

“メリ～クリスマ～ス！！”

“パン！パン！”

そして残りのクラッカーを鳴らした！　オレもクラッカーやりたかったんだ！

　ケーキを切り分けてお皿にのせる・・・生クリームにイチゴがたくさんのったケーキを頬張ると・・・

「おいしい！　すごくおいしいよ！　お店のよりおいしいみたい！」

「・・戸田さんおおげさ・・きっと作りたてだからよ。さっきここの厨房借りて作ったんだから！」

「え?!そうだったの？」

・・どうりでおいしいと思った！・・確かに作りたてだから冷たさはないけど、クリームがすごくおいしい！　スポンジもフワフワでいくらでも食べられそう！

「ちょっとイチゴ入れすぎたかもね。」

「う～ん・・でもこれくらい入っててていいんじゃない？」

「余らせてもしょうがないしね。」

「千里が泡立てた生クリーム最高！」

・・なんか・・こんな会話きくと・・みんなで作ってるところが思い浮かぶなぁ・・・オレも一緒に作りたかったかも・・・

・・でも、みんなで作ってくれたことはすごく嬉しい！

「でもさぁ、有希はもうモデル確定だね！　ずっとモデルやっていくんでしょう?」

「え?!」

直美に言われたけど・・・だけどオレはとてもそんな気持ちにはなれない・・・オレはモデルになるには背も低いし・・・それより何

より・・モデルになった後でもし男だとバレたら大変だ！

・・佐々木さんだって読者モデルだから許してくれてるけど・・本当のモデルになるなんてムリだと言うに決まってる・・・

・・オレも最近では、女の子でいることに少しは自信も持てるようになってきたかも知れないけど・・・それはあくまで“女の子でいることに”だ・・・どんなにオレが女の子として自信を持ったとしても・・本当に女の子になれるワケじゃない・・・

・・これまでは運が良かっただけかも知れないし・・・長谷川も、弘子も、佐々木さんも、大森先輩も、刈谷先生も・・・オレが男だと知っても黙ってくれてるけど・・・でも、もし今後ほかの誰かにバレたとして・・その人がこれまでの人たちみたいに良い人とは限らない・・・もしバラされたら・・オレはもう女の子としてはいられない・・・

・・もしみんなにバレて、それでも女の子でいることを許されたとしても・・・オレは今までどおりの女の子ではなく・・元は男の子だった女の子になってしまうだろう・・・それでは同じ女の子でも全然ちがう・・・

「どうしたの有希？　急に黙っちゃって。」

「あっ、ううん・・何でもない・・・」

・・いけない・・せっかくのみんなで居れる楽しい時間なのに・・・

「・・モデルなんて、わたしになれるかどうかわからないけど・・頑張ってみようかな？」

「そうよ！有希はわたしたちの中ではもう立派にモデルなんだから

！」

「わたしは読者モデルやめなきゃいけなかったけど、有希がこのままモデルになってくれたら、わたしもすごく嬉しい。」

・・ち・・千里・・・

「・う・・うん・・・」

・・千里にそんなふうに言われたら・・頑張らないワケにいかないじゃない・・・

「それじゃ、もう1回みんなで乾杯しようか？」

「何に？」

「もちろん、モ・デ・ル・の有希によ！」

・・そ・・そんなぁ・・・直美・・・

「賛成～！　注ごう注ごう！！」

・・安部っちまで・・・？

みんなでシャンペンが少なくなったグラスに注いでいく・・・

“せ～の！”

“カンパ～イ！！”

“か・かんぱい・・”

・・オレも仕方なく乾杯しちゃったけど・・・でも・・・

・・その後オレはみんな、ひとりひとりに乾杯の祝福をうけてしまった・・・こんなことしたら・・この場のノリじゃ済まなくなっちゃいそう・・・！

「先輩！あたしも応援してます！！」

“カンパ～イ！！”

「あ・・ありがと・・ミサトちゃん・・」

・・うぅ・・・ミサトちゃんそんなキラキラした目で見ないでほしい・・・オレ・・どうしたらいいのかわからないよ・・・

・・なんか急に不安な気持ちになってきた・・・するとオレの背中に暖かい手がそっとふれて・・・小さな声・・・

「有希、気にすることないわよ。」

「・・ひろこ・・・」

「有希はこれまでどおりしてればいいのよ！みんな有希のことが好きなだけなんだから。だから応援したいの。」

「・う・うん・・！」

・・弘子・・・ホントのオレの気持ちをわかってくれるのは弘子だけだ・・・

「ありがとう弘子！」

オレはあんまり嬉しくて思わず弘子に抱きついてしまった・・・

「あ～！弘子が有希に抱きついてる！」

直美が叫んだかと思うとオレに向って抱きついてきた・・・！

「きゃ～！」

「ズルイ！あたしも！」

！・・・安部っちまで・・？！

「・・・ち・・ちょっとぉ！！」

・・たすけて～！！・・シャンペンがこぼれちゃう～・・・

・・困惑しながらも・・オレはこんなみんなとの楽しい時間が、いつまでも続いてほしいと思っていた・・・

・・でも・・オレたちも来年は3年生・・・ずっと同じではいられないこともわかっている・・・

・・それでも今・・このひととき・・友達たちとワイワイやってい

られることが嬉しかった・・・

・・もしオレが女の子になってなかったら・・こんな素晴しい友達たちと出会えなかったのだと思うと・・オレはホントに女の子になって良かったと思える・・・

・・オレたち・・白鴻を卒業しても・・時々こうして会うことが出来るだろうか・・・？

・・その時・・オレはどうなっているんだろう・・・今はまだ想像もできないけど・・・・

おまけ　文章って難しい・文章と言葉編

私はこの『オレは女子高生』を書き出してから、痛切に感じるようになった事があります。
それは“文字”というものは“文章”を書くためには十分でも、“言葉”を書くためには十分ではないという事です。

元々日本は中国から漢字と文法を輸入して、当初は日本語を中国語に訳したような状態で書いていたようです。その当時は文字を書けることがひとつのステイタスだったので、誰にでも書けない難し

いモノだということも問題ではなかったのです。

だから最初は歌も中国の文法で詠んでいたのですが、その後、女性などが使うために難しい漢字のかわりに漢字を簡略化した“かな”を作りだし、日本の言葉にそのまま宛てて歌を書くようになったところ、その方がより日本人の心をそのまま書けるということに気付き、徐々に（歴史的な時間でみれば一気にかも）“かな”文字が浸透していきました。

しかし、そのような経過を経ても、日本語は“話し言葉”と“書き言葉”を分けてきました。それがそもそも話し言葉で書くのが無理だったのか、わざと違えたのかは私には解りません。でも近代までずっとそうしてきたようです。

明治以降、何度か“言文一致”などで“言葉”と“文章”を一緒にしようという考えはあったり、過去の文豪たちも“言葉”を書く挑戦をしてきましたが、今でも成功してはいません。それは言葉そのものが時代と共に大きく変わる性質のものだからかも知れません。

“文章”には個性はあっても一定の決まりがあります。だから誰が書いた文章も同じ時代のモノであれば、ほとんど同じ感覚で読む事が出来ます。ですが“言葉”となるとそうはいきません。もちろん普通の小説などで使う“言葉用の文章”はありますが、それでは個性を出すことが出来ないため決まりきった人物像しか表現出来ないのです。ですが普通の小説では意味が通じれば良いのでほとんど問題ありません。

現在の小説で“言葉”を書く努力をしている分野は、主に「ライトノベル」と「官能小説」だと思います。
それは「ライトノベル」ではより“個性”を出すため、「官能小説」

ではよりリアルに表現するためだと思います。それと“言葉”の比率が多いというのもあるかも知れません。

この『オレは女子高生』に話を戻すと、この話はほとんど全てが“言葉”で出来ています。それに登場人物が異常に多いのでそれぞれの“個性”を出すのが大変です。

そのうえ主人公の有希はしゃべり言葉は女、心の言葉では男、でも同じ人物に感じるように書かなきゃいけません。しかもだんだん女の比率が多くなってきます。そのため色々な小技を使って工夫をしています。

また、有希はあまり漢字を使わずにしゃべっているようで（笑）あまり漢字を使えないので苦労しています。有希の言葉に漢字を使うと、どうもイメージが違ってしまうので、打ってはみても消すことも多いのです。代表的なのが「事」「訳」「解る、判る」など。それらは男の子の頃は使っていましたが、女の子らしくなってからはほとんど使っていません。まあ、このあたりになると私の個人的な“気分”なのかも知れず、そのニュアンスがどれだけ読者の皆様に伝わるかどうかは判りませんけど。（笑）

そんな訳なので当初は「読みにくい」とご批判も多かったですが、この書き方のおかげでより伝わっている部分も少なくないと思うので、私自身は間違ってなかったと思っています。そもそもこの書き方でなければ『オレは女子高生』は書けなかったと思います。

蛇足：誤解を与えてはいけないので書いておきますが、私は「ライトノベル」を読むのは苦手です。理由はいくつかありますがあえて書きません（笑）「官能小説」はモノによっては好きです。ついでに言うと「アニメ」もほとんど見ません。某有名なアニメに“有希

”という名前の人物がいることは後になって知りました。なので真似した訳ではありません（笑）

これまでのおまけ（その他）の場所

３６話　制作おぼえがき　０８．６．２１
４０話　『オレは女子高生』の世界　人物、舞台設定など
４５話　架空の西鉄大牟田線案内
４９話　名前について
５３話　ドラマ化を妄想してみる
６１話　「放生会編」おまけ
６７話　１周年を迎えて
７１話　『オレは女子高生』の世界　第２弾（架空の西鉄大牟田線案内付き）ドラマ『ブザー・ビート』のお知らせも
７３話　「ヒロイン」について
７８話　「出版されたら買いたい作品」のお礼
７９話　「文章」について
８２話　「文章って難しい・説明編」
８６話　ちょっとあとがき　長谷川の誕生日とお父さん
８９話　「Ｑ＆Ａ」
９３話　『オレは女子高生』の世界　第３弾（架空の西鉄大牟田線案内付き）
１３２話　イヌ型とネコ型
１３３話　有希と純平

第１４２話　イブ　大人のお食事・自粛版

オレは刈谷先生とのお食事に出かけるための準備を急いでいた・・・オレはすぐ準備に手間取って遅くなってしまうんだけど、まさか刈谷先生を待たせるワケにはいかない・・・

お洋服はこの日にために、かあさんに買ってもらった、白黒の小さな千鳥格子の清楚なツイードスーツ・・・店員さんにすすめられて、最終的にはオレもかあさんも気に入った服・・大人しい印象だけど、スカートの下のところが少し広がってるとこなんかは、オレみたいな若い女の子が着るにもいい感だ。

今日のブラとパンツは白い光沢がある生地にピンクのリボンが線状のアクセントになってる・・もちろんおろしたての上下お揃い・・・誰かに見せるワケじゃないとしても・・特別な日にはブラとパンツをお揃いにするのは女の子にとっては常識だ！・・こんなことは三吉先生には教わらなかったけど、現代の女の子の身だしなみなのだ。

下着の上からスリップ・・そしてハイネックの白いセーター・・・スカートは後ろにチャックがあるから、前でホックを留めてチャックを上げてからお腹を少し引っ込めてクルッと後ろに回す・・・ちょっと横着なやり方だけど・・これは楽ちんなだけじゃなくチャックをするのを忘れない点でも良いのだ・・・女の子が後ろのチャックをパックリ開けてる姿なんて、とても見られたもんじゃない・・・

タイツは最初、白いのをはいてみたけど・・なんだか子供っぽくなってしまった・・これじゃ入学式の小学生みたいだ・・・それに白は足が太く見えちゃう・・・

次に黒いタイツをはいてみたら、大人っぽいのはいいんだけど服もモノトーンだから・・クリスマスには少し地味すぎる気がする・・・もう少しどうにかならないかなぁ・・・

そこでオレは・・・前にレナに進められて買ったものの、まだはいてなかった赤いのがあったのを思い出した。これいいかも・・・少し黒っぽい落ちついた赤のタイツ・・・はいてみたらなかなか良い感じ・・・クリスマスっぽい！

ちょっと派手かもしれないけど・・今日はクリスマスイブなんだから、これくらいの派手さはいいんじゃないだろうか・・・これにエナメルの黒い靴を合わせると可愛いと思う！

髪をきれいに梳かしてから先の方をクルクルドライヤーで少し丸める・・・うん、良い感じ、良い感じ！
細い黒のカチューシャは、左側に黒い小さな羽根と、黒いリボンで造ったバラの花の飾りがついている今年流行りのヤツだ・・・派手になりすぎず、オレの清楚なイメージにピッタリだと思う！

全身が映る鏡の前で後ろも確かめてみる・・・完璧！　今日のオレは、まるでどこかのお嬢様って感じだ！

あっ！そうだ・・ネックレスを忘れていた・・・これじゃ首元が淋しい・・・
オレはアクセサリーボックスを開けてみたけど、この恰好に合いそうなのがない・・・オレが持ってるネックレスはどれもオモチャみたいなものだから・・・

・・誕生日に長谷川からもらったキてぃちゃんのネックレスも、こ

の服装には子供っぽすぎる・・・

・・どうしよう・・かあさんのを借りて行こうかなぁ・・・勝手に借りたら怒られるかな・・・

小さなハンドバッグを手に階段を駆け降りると・・・

「あ！かあさんいたの？」

「有希、今から行くところ？」

「うん。・・ねぇかあさん・・こんな感じでいいかな？」

かあさんの前でクルリと回ってみる・・・

「そうねぇ・・まあ、いいんじゃない。そのタイツはちょっと派手だけど、クリスマスだからそれくらいはいいかな？」

「良かった！」

・・ダメだって言われたらどうしようかと思った！

「かあさんも今日はクライアントの会社でパーティーがあるから、着替えたらまた出かけるけど、今夜はかあさん遅くなると思うし、麻衣も友達の家に泊まるらしいから、有希、帰ってきたらちゃんと戸締まりしておいてね。」

「うん、わかった。　あ、そうだ・・かあさんが持ってるネックレス・・どれか貸して欲しいんだけど・・・」

「いいわよ。どんなのがいい？」

・・どれがいいかなぁ・・・かあさんのネックレスはどれも大人っぽくてステキだ・・・この服に似合いそうなのは・・・

「これがいい！」

「え、それ・・？」

オレが小粒の真珠のネックレスを指さすと、かあさんは一瞬、困っ

たような顔をした・・・
「まあ、いいわ。つけてあげる・・・」
かあさんはオレの首に両手をまわし、髪の毛をよけながら首のうしろでネックレスを留めてくれた・・・なんか・・かあさんに面と向ってこんなことされるなんて・・少しドキドキする・・・

「いいわね。似合ってる・・」
そしてかあさんは急に優しい顔になって・・・
「・・有希もこういうのが似合う年頃になったのねぇ・・・このネックレスね、おとうさんと結婚して初めて買ってもらった物なのよ。」
「え?!」
・・そ・・そんな大事なもの・・・?
「だ・だったら他のでいいよ。そんな大切なものって、わたし知らなかったから・・・」
「いいのよ。今日は有希にとっては特別な日なんだから、そんな日にこのネックレスをつけてもらえるなんて、かあさんも嬉しいわ。おとうさんもそうだと思うわよ。」
「・・・・うん。」
・・なんか・・・そんなふうに言ってもらえると・・オレもすごく嬉しい・・・

「そうだ。有希、写真撮ってあげる。」
「あ、うん。」
オレはバッグを持った両手を前で合わせてお嬢様っぽいポーズをとってみた。

かあさんは時々こうしてオレの写真を撮ってくれるけど・・その写真はまだ見たことない・・・かあさんのパソコンにでもたまってるのかな・・・?　こんどヒマな時にでも見せてもらおうかな?

オレが出かけるため、手首とエリにフワフワのフェイクファーがついた白いコートを着ようとすると、かあさんが後ろから持ってくれた・・

「あ、ありがとう・・」

オレはかあさんが持ってくれたコートのソデに手を通す・・・

「忘れものない？」

「うん・・」

・・もうバッグの中身は昨日から用意してる・・・

「いってらっしゃい。くれぐれも刈谷先生に失礼のないようにね。」

「うん。わかってる！」

昔、三吉先生に教えてもらったフランス料理の時のマナーも何度も確認し直したし・・・それに大切なのは、わからないことがあったら遠慮なく聞くこと・・・オレはまだ高校生だし、知らないからって恥ずかしく思う必要はないらしい・・・

オレは可愛いエナメルの靴を履いてホックを留めると、玄関で見送るかあさんに言った・・・

「それじゃかあさん、行ってきます！」

「気をつけて行ってらっしゃい。」

「うん！」

玄関を出て扉を閉めると・・・

・・なんだかオレ・・まだ知らない大人の世界に行くようで・・ワクワクしてきた・・・！

先生との待ち合わせ場所は天神の昭和通りのところ・・・百道〈ももち〉にあるテレビ局でのお仕事が終ってから通りがかりにひろってくれる事になっている・・・今日は外は少し寒いな・・・

“ブルブルブル・・・”

「あ・・刈谷先生からのメール・・」

急いで開くと・・・

“いま仕事が終って　高速でそちらに向ってるところ　もう少し待ってなさい　”

えっと・・・

“はい、わたしも今きたところです　待ってます　”

・・・送信。

ふふっ・・なんかこうして待ってると・・だんだんドキドキしてくる・・・でも決してイヤなドキドキじゃない・・期待のドキドキって感じだ！

街はクリスマス一色・・どこのショーウィンドゥもクリスマスの飾り付けで賑やかだ・・ガラスには雪の結晶やサンタがトナカイのソリに乗る姿が白いスプレーで縁どられている・・・空はうす曇り・・・天気予報では夜には雪が降るかもしれないって言ってた・・・ホワイトクリスマス？・・それも素敵かも！

・・積もるのかなぁ・・・まあ、福岡ではたくさん積もることは、あまりないけど・・・

「ユウちゃん！」

え・・？

どこ？・・ふいに遠くでオレを呼ぶ声・・あちこち見回していると・・・

「ユウちゃん！こっちよ！」

「あっ！」

黒い車が反対車線で停まっていて、その車の窓から刈谷先生が手を振っていた・・・！

オレは急いで行こうと思ったのに、なかなか信号が青にならなくてイライラする・・・赤から青にかわった瞬間、オレは先生のところへ駆けていった。

「・・せ・・せんせい・・こんにちは・・・ごめんなさい、こっちだったんですね・・・」

「ユウちゃん、そんなに急がなくてもいいのに。危ないわよ。」

「・・で・・でも・・先生を待たせるなんて・・そんな！」

「ふふふ・・ユウちゃんに待たされたって怒ったりしないわ。さあ、そんなことより乗って！」

「あ、はい！」

オレは先生が開けてくれたドアから、先生のとなりの座席に乗り込んだ・・・車はすぐに滑るように走り出す・・・

「寒かったでしょう？」

「い・・いえ・・それほどでも・・・」

「そう？　耳が赤くなってるけど？」

「あ・・」

オレは恥ずかしくて両手で耳をゴシゴシこすった・・・
「ふふ・・そんなにこすったら、よけい赤くなっちゃうわよ。」
「ぁ・・はぃ・・・」
「おかしい、ユウちゃんってホント可愛いコね！」
・・うぅっ・・・恥ずかしい・・・せっかく今日は大人っぽくて清楚なイメージだったのに・・・これじゃ清楚が台無しだ・・・オカシナなコって思われちゃったかな・・・

「今日はユウちゃんのために最高に美味しいお店を予約したから期待していいわよ。」
「！・・でも・・わたしまだ高校生なのに・・そんな良いものなんてもったいないです・・・」
「あら、若いうちから良いものを食べておいた方がいいわよ。若い時に食べた味は忘れないものなの！」
「・・はぁ・・・」
・・なんか・・偉い先生に言われると説得力があるなぁ・・・納得しちゃう・・・

お店は博多区のほうの奥まった所にある小さなフランス料理店だった・・・見た目はそんなにスゴイお料理を出すお店には見えない・・・

「こ・・ここですか？！」
「ふふふっ・・見かけで判断しちゃダメよ！　ここはすごく腕のいいシェフがやってるお店なんだから。普通はなかなか予約も取れないお店なのよ！」
・・先生は足早にお店に入っていく・・・オレも遅れないようについていくと・・・

「いらっしゃいませ。刈谷先生と戸田様。」
「！！」
・・と・・戸田様だって・・・？
お店の人が先生とオレを席まで案内してくれる・・・
「戸田様、コートをどうぞ。」
「あ・・はぃ・・」
オレが慌ててコートを脱ぐと、その人はコートを丁寧に腕にかけてから、椅子を引いてオレを座らせてくれて、オレが座ると椅子をちょうどいい位置まで前に押してくれた・・・
・・うわぁ・・すごいレディーファーストだぁ！　・・オレこんなの初めて！
お店の中はテーブルも椅子も、ランプや置いてある調度品も全てがステキで・・・
・・刈谷先生もステキなスーツ・・たぶん高いブランドものなんだろう・・・こんな中にいたら、オレのにわかお嬢様なんてすっかり霞んでしまいそう・・・
・・先生はここの常連みたいだ・・・かあさんが言ってた意味がやっとわかってきた・・・刈谷先生はきっとオレたちとは違う世界の人なんだなぁ・・・
「ユウちゃん、今日はずいぶんシックにまとめたのね。」
「あ・・はぃ・・かあ・・じゃなくて・・・母が今日のために買ってくれたんです・・」
「そうだったの。どうりで大人びてると思ったわ。お母様の趣味だったのね。」

「あ・・いえ・・母はもっと地味なのをって言ったんですけど・・お店の人と相談して・・・」
「ふ～ん・・そうなんだぁ。でもその赤いタイツはユウちゃんの発想よね？」
「あ・・はい！」
「クリスマスらしくて良いじゃない？ステキよ！」
・・ス・・スゴイ・・オレ刈谷先生に褒められちゃった！

「あ・・ありがとうございます！」
・・先生・・オレがこだわったところをすぐに言い当てるなんて・・
・

「だけど、その時代遅れの安物のネックレスはいただけないわねぇ・・・」
「あ・・」
・・これ・・かあさんがとうさんに貰ったネックレスなのに・・・
「でもちょうど良かった。　はい、クリスマスプレゼント！」
「え！・・わ・・わたしに？！」
「開けてみて？　気に入ると思うわ。」

オレが細長い包みを開くと・・それはステキなシルバーのネックレスだった・・・こ・・これって・・カルティエ？！
「あ・・ありがとう・・ございます・・・」
「気に入った？」
「は・・はい・・」
「じゃぁ、つけてあげるわ。」
「えっ？！」
先生はオレの後ろにきて髪を分けると、かあさんがしてくれたネックレスを外そうとしてる・・・
「あ・・でも・・それは・・・」

「いいから、いいから。」
先生はかあさんの真珠のネックレスを外すと、先生がプレゼントしてくれたシルバーのネックレスをオレの首にはめてくれた・・・可愛いクロスが付いている・・・

・・仕方がないよ・・先生のプレゼントだもん・・・
オレはかあさんから借りたネックレスを、そっとハンカチに包んでバッグにしまった・・・

・・先生はオレの髪を両手ですくって後ろに戻し、前からオレを眺めるように見て言った・・・
「やっぱり若いユウちゃんにはこの方が似合ってるわ!」
「・・ありがとうございます・・・」
・・プレゼントは嬉しいけど・・なんかオレは複雑な気分だった・・
・かあさんのネックレスだって・・時代遅れかも知れないけど・・
ステキだったのに・・・

お料理の前にお店の人がボトルを持ってきた・・・白ワイン・・・?
・・先生にうやうやしくラベル見せると先生はうなずく・・・するとお店の人は馴れた手つきでコルクの栓を慎重に抜いて、グラスに少しだけ注いだ・・・

先生はそれをひと口飲んで満足そうにうなずくと、お店の人はふたつのグラスに、その白ワインを注いでいった・・・

「ユウちゃんも飲むでしょう?」
「い・・いえ・・わたしわたしまだ未成年ですから・・・」

「あら？　ユウちゃんって真面目なのねぇ、でも真面目なだけじゃつまらないわよ！」
「・・ぅ・・でもぉ・・・」
・・オレはかあさんとお酒は飲まない約束してるし・・・
「ユウちゃんはワイン1回も飲んだことないんじゃない？」
「・・はぃ・・・」
「あのね、ワインなんてお水みたいなものよ。ヨーロッパではお水が美味しくないから子供でもワインを飲んでるくらいなの。」
「・・・・・」
「それにね、フランス料理はワインを飲むつもりで味付けしてるから、ワインなしでは折角のお料理が台無しよ？」
「え・・？！」
「最初は魚料理だから白ワインなの。白ワインは赤みたいに渋くないし、ジュースみたいな味なのよ。ちょっとだけ飲んでごらんなさい。」
・・なんか・・断れる雰囲気じゃない・・・かあさんもまさか刈谷先生がワインすすめるなんて思わなかっただろうから・・・こういう時にどうしたらいいのか教えてくれなかったし・・・
・・でも・・ジュースみたいだっていうし・・・
「じゃぁ・・ちょっとだけ・・」
オレはほんのひと口だけ飲んでみた・・・すると口いっぱいにフルーティーな味が広がった！
「おいしい！」
・・甘味はないけどほんのり甘い感じもして・・ほんとにジュースみたい・・いや・・ジュースよりずっとおいしいかも！　お酒って感じじゃない。
「そうでしょう！　ユウちゃんはきっとワインの美味しさが判るコ

だと思ってたわ！」
「・・はい！」
・・オレってワインの味がわかるコなのかな?！・・なんだか少し大人になった気分・・・お酒にもこんなに飲みやすいのがあるなんて全然しらなかった・・・こんなお酒だったらいくらでも飲めそう！

魚料理が運ばれてきて食べてみると・・・たしかにどこかボヤけた味だ・・・でもワインをひとくち口に含むと、お互いに味を引き立て合う感じだった。　やっぱりワインに合わせた味なんだなぁ！

「どう?ユウちゃん。」
「はい、おいしいです、先生！」
・・おいしくてすぐに無くなっちゃった・・・フランス料理って量が少ない・・・お皿にちょこっとしか乗ってこない・・・でも・・それだから・・いろんな味を楽しめるのかも・・・すぐ食べちゃわないように上品に食べなきゃ・・・

「ユウちゃんはお食事のマナーも良く出来てるわね。誰かに教わったの?」
「はい。中学の時の先生に・・・今もその先生にお茶を習ってるんです。」
「そうだったの・・どうりで高校生なのに上品に食べてると思ったわ・・・」
・・ほんとに三吉先生に習っておいて良かった！・・フランス料理のお作法を習ったときには、まさか役に立つことがあるなんて思わなかった。

お料理は先生が言ったとおり、どれもすっごくおいしい！

「ユウちゃん、今日はネイル綺麗に塗ってきたのね。」
「あ、はい！　ホントは先生に頂いたのを付けてこようかと思ったんですけど・・この服には合わないかと思って・・・」
「そうね、その方が合ってるわ。」
・・良かった・・先生にもらったのを付けてないこと文句いわれなくて・・・
「？・・先生は今日はネイルしてないんですね。」
「あぁ・・今日はこの後にまだ仕事が残ってるから付けてこなかったの。」
「そうなんですか。」
・・先生ってネイルを取るとけっこう深爪なんだな・・・あれ・・でもこの前は付けたまま活け花やってたのになぁ・・・

「それはそうとユウちゃんさぁ、さっきからあたしのこと“先生”って呼んでるけど、それやめにしない？」
「え？・・でも・・どうしてですか？」
「だって、ユウちゃんはあたしの弟子じゃないでしょう？」
「・・はぃ・・・」
「だったら先生なんておかしいじゃない？」
・・たしかに・・言われてみればそうだけど・・・だけど・・・

「・・でも・・みんな刈谷先生のこと“先生”って・・・」
「それは仕事だからよ。みんなあたしのこと持ち上げてるだけなの。」
「・・はぁ・・・」
「でもユウちゃんとあたしは友達なんだから、先生なんて言われるとあたし悲しくなっちゃうわ。」
「・・そ・・そんなぁ・・・」

・・オレと先生が“友達”なんて・・・！

「えっと・・じゃぁ・・なんて呼んだらいいですか？・・刈谷さんとか・・・？」

「それじゃ他人行儀よ・・・そうねぇ・・何がいいかな？・・・そうだわ！“おじさま”なんてどうかしら？」

「！！・・お・・おじさま？！」

「そう、それがいいわ！“刈谷のおじさま”なんてカッコイイじゃない？」

「・・そ・・そんな・・・そんな呼び方したら・・わたし先生のお弟子さんに怒られちゃいます！」

「あたしの弟子はユウちゃんと関係ないでしょう？」

「・・それは・・そうですけど・・・」

・・でも・・おじさまなんて呼び方・・なんだかドラマのお金持ちの家の娘みたいだ・・・

「あたしはユウちゃんのこと、なんて呼ぼうかしら・・・」

「え？・・わたしは・・ユウのままでいいですけど・・・？」

「でも、“ユウちゃん”って呼ぶ人はたくさんいるでしょう？」

「・・はぃ・・それは・・名前が有希だし・・雑誌のお仕事もユウでやってるから・・・」

「でしょう？　みんなと同じ呼び方なんて面白くないわ。まあ、普段はユウちゃんでいいけど・・・」

「・・・・・」

・・偉い人って・・いろいろ難しいこと考えるんだなぁ・・・

「ユウキちゃんじゃ男の子っぽいし・・・ユウ・・コ・・・！・・・そうよ！“ユウコちゃん”がいいわ！」

「ゆ・・ゆうこ・・？！」

「ユウちゃんは女の子らしい名前で呼ばれたこと無いでしょう？

子付けで呼ばれたいと思ったことあるんじゃない？」
「な・・ないです・・そんなの・・・わたしユウコなんてイヤです！」
「それじゃ“トダコ”がいい？　あたしたちの世界では名字に子をつけるのも流行ってるのよ！」
・・トダコなんて絶対イヤだ・・・デラックスな人みたいだし・・・
それならまだユウコの方がマシだ・・・

「・わ・・わかりました・・・ユウコでもいいです・・・」
「そして、あたしのことは“おじさま”よ？」
「・・うっ・・はぃ・・・」
「あとはねぇ・・・」
え！？・・・まだあるの？！

「ユウちゃんはやっぱり真面目すぎかな？」
「・・・・？」
「いまどきの女子高生が自分のこと“わたし”なんて言わないわよ。」
「・・・・・」
「あたしといる時は、自分のことを今風に“ユウわぁ”って言いなさい！」
（！！！！！）
「そ・・そんな！」
そんなの今風でも何でもないよ！
「・・そんな言い方する女子高生はわたしのまわりにはいません・・・そんなのハシタナイだけです！」
「あら、高校生がハシタナイなんて、古い言葉知ってるのねぇ？」
「・・ふ・・古くないです・・・」
・・オレは三吉先生に教わったんだ・・・女の子が自分のことを名前で呼ぶのはハシタナイことだって・・・！

「ダメよ、もう決めちゃったんだから。ほら、言ってごらん“ユウわぁ”って。」
「・・・・・」
「あたしといる時だけで良いんだから、ほら！」
「・・うぅ・・ユ・・ユウわぁ・・・」
「そうそう！そっちの方が絶対かわいいわ！」
「・・・・・」
・・うぅ・・・これじゃ三吉先生に顔向けで出来ないよ・・・オレ泣きたくなってきた・・・

その後、お肉料理には赤ワインも出てきて、白と違って少し渋いけど、お肉には良く合ってた・・・
・・なんか・・オレ・・だんだん気持ち良くなってきた・・・
・・先生とお話しながらおいしいお料理を食べてると・・なんだか現実感がなくて・・さっきはイヤだった呼び方も次第に気にならなくなってきた・・・なんか・・お嬢様ごっこみたいで面白いかも・・・

「ユウちゃん、お酒ってお料理に合うと美味しいでしょう？」
「はい、おじさま。ユウはお酒がこんなにおいしいって知らなかった・・・」
「そうでしょう？　これからもあたしがユウちゃんに色んなこと教えてあげるわよ！」
「ホント？　おじさま・・・」
「あたしは嘘なんて言わないわ。ユウコちゃん！」
・・うふふ・・ユウコだって・・・なんかオレ・・本当にお嬢様に

なっちゃったみたいだ・・・

・・？・・なんだろう・・・オレ椅子に座ってるのに・・フラフラしてる・・・

デザートが出てきた時には眠くて座ってるのがやっとだった・・・

「・・バニラあいす・・おいし・・・・・・」

“カチャン！”

・・・手に力が入らなくなって・・・スプーンが床に落ちてしまった・・・・

・・・もう・・・眠くてたまらない・・・・

「斉木？　ユウちゃん酔っちゃったみたいだから、お店の前に車つけて！」

・・・先生・・・電話・・・？・・・・・

・・気付くと・・・オレはベッドに寝ていた・・・

（・・・あれ・・オレどうしたんだろう・・・ここどこ・・？）

・・でも・・意識はぼんやりとしてまだ夢の中のようだ・・・な

んだか・・まぶたが重い・・・そっか・・・オレ・・ワイン飲んで酔っぱらったんだ・・・どうしよう・・かあさんとの約束・・やぶっちゃった・・・

・・頭では起き上がろうとするけど・・身体がいうことをきかない・・・

・・それにしても・・ここどこなんだろう・・・ホテル・・？

・・ふと気付いたら・・ベッドの横に誰かいる・・！

（！）

・・目だけで追うと・・そこに立っていたのは刈谷先生だった・・・

（・・わかった・・オレが酔っぱらっちゃったから・・・刈谷先生が泊まってるホテルに・・連れてきて寝かせてくれたんだ・・・先生に迷惑かけちゃったなぁ・・・）

「ユウちゃん大丈夫？」

「・・うぅ・・・」

・・しゃべろうとしても・・声が出ない・・・

・・先生は寝てるオレを抱き上げて・・スーツの上着を脱がしてくれた・・・先生に介抱してもらうなんて・・こんな失礼なこと・・かあさんに知られたら怒られちゃう・・・

・・スカートの後ろのホックを外して・・チャックを開ける・・・お腹苦しいの良くないから？・・・え？・・先生・・スカートまで脱がさなくていいのに・・・

「ほら・・セーターも脱いで・・・」

（えぇ！・・な・・なんで・・・？）

・・先生はハイネックのセーターを脱がせにくそうに無理矢理に・・

・

（・・いたっ！・・先生・・手がヘンに曲って痛い・・・）

・・結局オレは無理にバンザイさせられてセーターも脱がされてしまった・・・

・・オレはスリップに赤いタイツ姿・・・

・・先生はタイツも脱がしてしまう・・・

・・タイツまで脱がされたら・・パンツが見えちゃう・・・

（・・うぅ・・先生にパンツ見られちゃった・・・）

・・スリップも脱がされ・・オレはブラとパンツだけに・・・

「ユウちゃん、可愛いお揃いの下着つけてるのね。あたしに見て欲しかったんじゃない？」

・・！・・そんなんじゃない・・・誰にも見られなくたって・・大切なときにはお気に入りの下着をつけるのは女の子として当然のマナーだ・・・！

・・だから今日は・・真っ白にピンクのリボンがアクセントになった・・可愛いお揃いのブラとパンツをつけてきただけなんだ・・・

・・それなのに・・・

「・・んっ・・・！」

・・ブラを外されてオレのムネがあらわになる・・・確かに楽にはなったけど・・先生にムネを見られるなんて・・・

（・・先生・・なんで・・・）

「・・可愛いおっぱい！　乳首も幼くて・・・まだ誰にもイタズラされてないのね。」

（！・・イタズラ？！）

・・さすがにオレだって・・ここまでくれば・・これが“介抱”じゃないことくらい察しついてきた・・・
（・・せ・・先生・・オレに何するつもり・・・？）

・・次に先生はオレのパンツの両腰の部分に手をかけて・・・
「さあ、パンティーも脱ぎましょうねぇ！」
（・・あぁ・・ダメぇ・・・）
・・先生はオレのパンツを脱がしていく・・・なんとかしたいけど・・身体が動かないんじゃどうしようもない・・・
「あら！ユウコちゃんったら男の子のクセにナプキンなんかして、イケナイ子ね！」
（・・うぅ・・そんなこと言わないでぇ・・・）
「ナプキンに小さな黄色い染みがついてるわよ。」
（・・そんなぁ・・・）
「オチンチンも皮被ってて可愛いわぁ・・食べちゃいたいくらい！」
（！！）

・・オレはとうとう全裸にされてしまった・・・
「ユウちゃん、立てる？」
「・・うぅ・・・」
・・先生はオレの腕を肩に掛けて・・どこかに連れていく・・・
・・オレは必死で歩こうとするけど・・・足がグニャグニャして力が入らず・・先生に引きずられるようにして連れていかれた・・・

・・先生がオレを連れてきたところは・・・お風呂・・・？

・・なんでお風呂なんかに・・・

～～～　これより自粛、以下『オレは女子高生・完全版』へ～～～

すでにノクターンノベルズに『オレは女子高生・完全版』としてＵＰしています。

ｈｔｔｐ：／／ｎｏｖｅｌ１８．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ４４４８ｐ／

ＡＴからお詫びと説明

展開について・・・

急な展開に驚かれた方もいると思います。
なぜこんな展開にしたのかとお怒りの方もいるかも知れませんが、これは最初から決まっていた展開なのです。
それは１周年（６７話参照）で書いたことを読んでいただければ、当時からこの展開のことを思って書いていたのが、おわかりいただけると思います。

とはいえ、私も少なからず悩みました。この話を書き始めてから２年数カ月、私にとっても有希は大切な存在になっているのです。他の展開には出来ないか？　こういう展開をやりたいのなら別の作品

でやれば良いのではないか？
しかし、私は何度もこのような話を書くつもりはないし、ここで展開を曲げれば、それは別の話になってしまいます。この話で描きたかった事が描けなくなってしまうのです。それは逆にこの作品にとっても、有希にとっても失礼な事だと思いました。

もし、こんな話は読みたくないと思った方がいても、それはそれで仕方ない事だと思います。ただ出来ることなら、もう読むのを止めようと思った方も、次回までは読んでみて下さい。判断はそれからして頂けるとありがたいです。

まだこの話は「起承転結」で言えば「転」が始まったばかりなのです。

掲載方法について・・・

今回このような変則的な掲載の仕方になったのは、ひとえに私の認識のズレと予測の甘さによるものだと思います。

私の認識では１８禁小説とは“人をエッチな気持ちにさせる事を目的とした小説”あるいは“人のエッチな気持ちを満足させるための小説”だと考えていました。そういう行為を書くとこ自体を禁止したものだとは思っていませんでした。行為そのものは実際にある普通のことだからです。

それに当初は、この小説がこれほど多くの皆さんに支持されるようになるとは思っていませんでした。ネットの片隅で細々と書いていくのに、そんな商業的な基準は関係ないと思っていたし、もし問題があれば自分のサイトへ引きあげればいいと軽く考えていたのです。

ですが、他人のサイトを利用させてもらい、多くの方に楽しんでいただいている以上、サイトの方針には従う必要があると考え、このような方法をとらせていただきました。

この話には多少エッチな感じのシーンも出てきますが、それは作品の性格上必要なシーンであり、これまでこの小説を読んできて下さった皆さんには、この話がいわゆる１８禁小説ではないことはわかって頂けるのではないかと思っています。もしもこれが１８禁小説だったら、こんなに長々と女子高生の楽しい日常なんか書いてるハズがありません。

しかし、直接の行為が必要になった以上、こちらのサイトにも迷惑がかかるので、ここで書くことは出来ません。よってこれからそういうシーンが必要な回は、ここでは“何が起こったか想像出来る範囲”で書き、「ノクターンノベルズ」で『オレは女子高生・完全版』として公開することにしました。

もちろんあちらでも必要な行為を書くだけで、無理にいやらしさを助長させるような表現はしないつもりです。どちらかといえば“あっさり”と書くつもりでいます。

ただ、私は元々が猟奇、凌辱系の作品を書いてきた人間なので、一般の方とは多少の認識のズレはあるかも知れません。

１８歳以下の方は読むことが出来なくなるので申し訳ない思いでいっぱいですが、とりあえず“何が起こったか想像出来る”ようには書くつもりですので、それでご容赦願いたいと思います。そして１８歳になったら読んでいただきたいと思います。

書き方について・・・

これまでもちょこちょこ出てきてましたが、今回はたくさん出てきた（）について説明させていただきます。

「」が普通の言葉での会話の部分で、（）は頭の中で言葉を発している部分と思って頂ければ良いと思います。

この小説は一人称で書いているので、本人の考えの部分とややこしいのですが、モノローグは“頭で考えている部分”であり、小説としては文字で書くしかないので文章で書いてはいますが、本当はただ考えている部分です。

対して（）は本当は言葉を発したいけど発することが出来ないということを表しています。

思わず頭の中で“言って”しまった時や、今回のようにしゃべれない状況で使っています。

もっとも、使い分けでところどころアヤシイところもありますが（笑）なんとなくそんな感じで読んでいただければ有り難いです。

第１４３話　聖夜　（前編）

「・・ううぅん・・・」
・・・もう朝・・・？・・・でも・・まだ眠い・・・・

「ユウちゃん目が覚めた？」

「うわぁ！！」
・・いきなり誰かの声がして・・オレは慌ててベッドから跳ね起きた・・・
（・・刈谷先生・・！？）
「あっ！！」
・・そして昨日のことを思い出した・・・オレは・・酔っぱらって先生に・・・服を・・・
「！！」
・・・自分がまだ裸なのに気がついて・・慌てて布団を引き寄せて胸を隠した・・・

・・先生はバスローブ姿・・・少し離れたところのソファーに腰かけてる・・・
「今日はもう帰っていいわよ。」

「・・・・・」
・・オレはあの後・・眠ってしまったのか・・・？
・・あの後って？・・・オレは何をされたんだろう・・・オレは先生に服を脱がされて・・・お風呂に・・・

「！！」
そう思ったとたん、オレはお尻に違和感を感じた・・・思い出した！・・・お尻の穴に先生のを・・・！！

オレは急に怖くなって、一刻も早くここを逃げ出したいと思った・・・このままいたら・・また何されるかわからない・・・！

あたりを見渡して、部屋中に脱ぎ散らかしたままになっている服や下着を慌ててかき集めた・・・でも・・先生に背中を見せるのが怖い・・・いきなり何かされたら・・・

「ユウちゃん！」
「ヒッ！」
急に声をかけられて飛び上がった！

「ベッドの下。」
先生に指さされてベッドの下の方を見てみると、オレのパンツが丸まって転がっていた！　オレが慌ててそれを拾うと、パンツにはナプキンが付いたまま・・・“小さな黄色い染みがついてるわよ！”・・昨日の先生の言葉を思い出して顔が熱くなる・・・

・・両手で服をかかえたまま、どうすればいいかわからずオタオタしていると・・・
「化粧室はあっちよ。」
そう言って先生は向こうを指さした・・・オレは逃げるように化粧室に駆け込んだ・・・

化粧室は思いのほか広かった・・・

・・化粧室の鏡にうつったオレは・・お化粧もくずれ・・髪もバサバサ・・・

・・酔いはまだ少し残ってるみたいだけど・・二日酔いにはなっていなかった・・・

「・・しまった・・バッグ持ってきてない・・・」

・・これじゃ・・お化粧直しができない・・今からお部屋にバッグを取りに戻るのもイヤだし・・・

！・・・オレ・・こんなときに・・何考えてるんだろう・・・お化粧の心配するなんて・・・そんなこと言ってる場合じゃないのに・・・

・・もう・・お化粧なんて・・どうでもいいのに・・・オレ・・女の子になりすぎちゃったのかな・・・

良く見ると化粧室には石鹸やブラシなど一応のものが揃ってる・・・

オレは急いでナプキンが付いたままのパンツをはき、パンツとお揃いのブラを着けた・・・裸のままではどうしようもない・・・

そして、キレイにたたんで置いてあったタオルで、おでこが出るように髪を巻くと石鹸で、崩れてしまったお化粧を全部落してしまった・・・もう自分を良く見せる必要なんてない・・・

赤いタイツをはき、スリップを着て・・髪をブラシで整える・・・

ハイネックのセーターを着て、ツイードスーツのスカートをはき、上着を着て・・オカシイところがないか確認する・・・

・・オレ・・なんて情けない顔してるんだ・・今にも泣き出しそう・・・

なんか・・化粧室から出るのが怖い・・・いきなり先生がいたらどうしよう・・・
オレがそっとドアを開けると、先生はいなかった・・・おそるおそる部屋に戻ると・・先生はさっきと同じようにソファーに腰かけていた・・・

「あら、化粧おとしちゃったのね。若い子はいいわねぇ、お化粧しなくても可愛いから。」
「・・・・・」
・・オレが先生に背中を見せないようにして、ベッド脇に置いているハンドバッグを取りに行こうとすると・・・
「安心しなさい、もう今日は何もしないから。」
と先生は言った・・・
・・安心なんて!・・昨日はあんなヒドイことしたクセに・・・

バッグを取りに近づいていると・・オレは足に何か踏んでビックリした・・・
「!?」
オレがハッとして足を上げると・・それは先生にもらったクロスのネックレスだった・・・拾い上げるとチェーンが切れている・・・
「ネックレス壊れちゃった? 気にしなくていいわ、そんなのまた買ってあげるから。」
「・・・・・」

オレが白いコートを着ると・・・
「もう帰る準備はおわった?」
「・・・・・」
・・オレは先生の質問に、黙ったままうなずいた・・・

すると先生は誰かに電話をかけて・・・
「斉木？　ユウちゃん帰るから、車をホテルの前につけて。」
それだけ言って電話を切ると・・・
「ユウちゃん、車で家まで送ってもらいなさい。」
「・・・・・」
・・オレは先生の車でなんて送ってもらいたくなかった・・・でもここが何処だかわからないし・・・とりあえず車に乗るしかないかも・・・

オレが最後に黙って先生を見ないまま、小さくお辞儀をして部屋を出ようとドアに向って歩きだしたとき・・・
「あっ、そうだユウちゃん、あたし福岡のテレビでレギュラー持ってて、2本どりだから隔週でこっちに来てるの！またこっちに来たら連絡するから。」

・・なに言ってんだ・・・オレはもう・・先生と会うつもりなんてない・・・オレはそのまま振り返りもせず、ホテルの部屋を出た・・・

・・部屋を出てひとりになると・・急に身体が震えてきた・・・怖かったのもあるけど・・・問題は他にもあった・・・

・・何の連絡もせずに・・一晩明かしてしまうなんて・・・かあさんになんて言い訳したらいいんだろう・・・

ホテルのエレベーターで1階のロビーを降りて初めて、オレはここがラブホテルだったことを知った・・・カベにはたくさんの部屋の写真があった・・・こういうのテレビで見たことある・・・

・・どうりでお風呂や化粧室が広いと思った・・・でも・・テレビドラマで見るような丸いベッドじゃなかったし・・カベもピンクじゃなくて・・なんか高級なホテルみたいだったから・・ぜんぜん気づかなかった・・・

ホテルを出ようとすると、ガラスのドアから見える外の景色が暗い・・・オレはバッグから携帯を取り出して電源を入れると、まだ２４日の夜１０時３０分だった・・・なんだ・・まだ今日だったんだ・・・

・・オレは一晩明かしてしまったワケじゃないと知って・・少しホッとした・・・

ホテルを出ると夕方乗った先生の車が待っていた・・・後ろのドアを開けてのぞき込むと、運転席には男の人が・・・この人がさっき先生が電話で言ってた“斉木”って人かな・・？そう思っていると、その人がいきなり大きな声で・・・

「さっさと乗りなさいよ！」

「あ・・は・・はぃ・・・」

その言葉使いでこの人もオネエっていわれるような人だとわかった・・・夕方乗ったときには話さなかったから全然きづかなかった・・・

オレが慌てて後部座席に乗り込むと・・・
「家はどこ？」
と、ぶっきらぼうに聞かれた・・・でも・・家まで送ってもらうなんて絶対イヤだ・・・
「・・天神までで・・いいです・・・」
オレがそう言うと・・・
「先生に家まで送れって言われてるのよ！ちゃんと送らないとこっちが怒られるんだから！」
「・・まだ電車があるから・・天神までで いいです・・・」
「あんたは良いでしょうけど、こっちが怒られるって言ってるの！」
・・オレは先生にもこの人にも家の場所なんて教えたくない！
「・・わたしが・・教えなかったって言えばいいじゃない・・・」
オレが腹立たしい気持ちを隠さずに言うと・・・
「なにもう・・可愛くないコ！」
そう言って、斉木って人は渋々車を走らせた・・・

しばらく走ると車の窓から道路の中央に並んだ大きなヤシの木が見えてきた・・・
（あ・・ここ大博通り〈たいはくどおり〉だ・・・）
・・ここまで来れば道はわかる・・・でも・・ここで降ろしてもらったら・・電車の最終にはとても間に合わない・・・

「あんたさぁ、そうやって先生に上手く取り入ったつもりでしょうけど、どうせすぐに飽きられて捨てられちゃうのがオチよ！」
「・・・・・」
・・なに言ってるんだろう・・この人・・・オレは今とても・・人と話をする気分じゃないのに・・・
「だから先生に気に入って貰えてるうちに、せいぜい高いモノでも

買ってもらうのね。」
「！」
・・なんだよコイツ・・オレの気持ちも知らないくせに・・・
「・・わたし・・そんなんじゃありません・・・」
「なぁに言ってんのよ。体で先生の気を引いといてさ！」
「！！・・・そ・・そんな・・・」
・・オ・・オレはそんなことしてない・・・！

「・・あ・・あれは・・先生が・・・」
「先生が無理矢理犯した？　笑わせないでよ！　一緒に高級なお料理食べて、さんざん酔っぱらっておいてさ！　それともあんたワザと酔ったふりしてたんじゃないの？」
「！！・・ち・・違います！・・・ワザとなんて・・・」
・・なんで・・あんなヒドイことされたのに・・・またこんなこと言われなきゃいけないんだろう・・・

・・お尻は痛いし・・・なんか・・悲しくなってきた・・・
「なによ。泣きそうなカオしちゃってさ！ウソ泣きでもする気？」
「！！」
・・オレは・・本当に泣きたい気持ちなのに・・・

・・オレはあんまり悔しくて・・唇を噛みしめて必死にたえた・・・

・・ク・・クソォ・・・絶対に泣くもんか！・・・これでも・・オレは男の子だもん・・・！！

天神の西鉄電車北口に着くと、オレは車が止まるのももどかしくドアを開けようとした・・すると・・・
「家まで送らなかったって先生に言わないでよ。ほんとに怒られるんだから！」

オレはドアを開けて車を降りると、閉める間際に、斉木って人に向って言ってやった・・・
「・・言いません！・・・もう先生には会いませんから・・・」
・・あんなことされると判ってて・・・ノコノコ会いにいくコなんていない！
・・せめてもの抵抗で・・ドアを荒々しく閉めてやった・・・だけど高級車だからか、全然大きな音はしなかった・・・

電車は最終の1つ前だった・・・こんなに遅い時間の電車なんて乗ったことなかったけど・・・けっこう混んでるもんだ・・・仕事帰りのサラリーマンやＯＬさん・・・それに忘年会の季節でもあるから少しお酒に酔った人もいる・・・

オレもまだ少し酔ってるのかも知れない・・・外はチラホラ雪も舞っているのに・・なぜだか身体が熱い・・・
・・かあさん・・もう帰ってるかな・・・どうしよう・・こんなに遅くなっちゃって・・・
・・朝帰りよりはマシだろうけど・・・

・・なんか・・たくさんの人の中で・・オレひとりだけが不幸に思えた・・・

・・オレ・・まわりの人からはどう見えてるんだろう・・・お食事

会帰りの女の子に見えるだろうか・・・？

・・こんなお嬢様みたいな恰好をしたコが・・・オジサンにあんなことされたなんて・・・誰が思うだろう・・・

春日原駅で電車を降りて、家に帰る人たちと一緒に改札を出たけど・・・オレはとてもこのまま家に帰る気にはなれなかった・・・お酒に酔ったまま帰るワケにもいかないし・・・

・・駅の待ち合い所のベンチに腰かける・・・しばらくするとあたりには誰もいなくなってしまった・・・

・・酔いがさめてきたのだろうか・・・体が寒くなってきた・・・！・・・駅の外を見ると雪が少し積もって白くなっている！

・・どうりで寒いワケだ・・・

（？）

ふと気付くと・・オレはかじかんだ右手をしっかりと握りしめてるのに気づいた・・・そっと開いてみると・・そこには刈谷先生からもらったネックレスが・・・

・・いつから握っていたんだろう・・・手の平には十字架の跡がクッキリとついていた・・・どうやらホテルの部屋を出た時から、ずっと握っていたみたいだ・・・車に乗って・・電車に乗って・・ｎｉｍｏｃａ使って改札も通ったのに・・・全然気付かなかった・・・（ｎｉｍｏｃａとは西鉄版ＳｕｉｃａのようなｉＣカード）

・・チェーンが切れてしまったネックレス・・・これを貰った時は

すごく嬉しかったのに・・・
・・先生にとっては大したものじゃないのかも知れないけど・・・
オレはすごく嬉しかった・・・

・・でも・・・それもオレにあんなことする為にくれたんだ・・・
おいしいお食事も・・プレゼントも・・・全部オレにあんなことするのが目的だったなんて・・・それなのに・・オレ喜んじゃって・・
浮かれちゃって・・・バカみたい・・・

・・だけど・・切れたのがかあさんのネックレスじゃなかったのが・・せめてもの救いかも知れない・・・かあさんの大切なネックレスが壊れなくてホント良かった・・・

？・・なんだか・・さっきからオナラがしたくてたまらない・・・
寒さのせいかな・・・

・・本当は・・女の子なら・・おトイレに行ってするべきだろうけど・・・そんな元気もないし・・誰もいないからここでしちゃおっかな・・・

“・・プリッ！！”

うっ！・・オナラをした途端、お尻から何か出て来た・・・一瞬ウンチかと思ったけど・・たぶん違う・・・

・・これはきっと・・先生の精液だ・・・

「・・ううぅ・・・・」

・・急に悲しさがこみ上げてきて・・涙があふれてきた・・・

・・我慢の糸が切れてしまったのか・・涙は次から次へとあふれてくる・・・

・・女の子が・・好きでもない人にバージンを奪われたら・・こんな気持ちなんだろうか・・・？

・・オレは本当の女の子じゃないから・・無くすものはないけど・・

・・それでもオレは・・何かを無くした気がした・・・・

・・悲しくて・・悔しくて・・後悔してもしきれない・・・

・・夢だったのだと思いたいけど・・先生のが染み込んだナプキンの冷たさが・・これが現実だとオレに教えているようだ・・・

・・オレはあんな事をされるために女の子になったんじゃない・・・でも・・男が女の子になるって・・・そういう事だったのだろうか・・・？

・・こんな気持ち・・ひとりではどうしようもない・・・でも・・こんなこと・・誰にも言えない・・・言えるハズがない・・・とうさんやかあさんにだって・・弘子たちにだって・・・長谷川にだって・・・

最終の下りが到着してまた人が改札を出てくる・・・でも誰もうつむいてベンチに座る女の子なんて気にかける人はいない・・・みんなさっさと家族が待つ家に帰っていく・・・

・・当り前だ・・クリスマスだもん・・・

・・この後、最終の上りが来れば電車は終り・・・そしたらここにも居られなくなるだろう・・・

・・それなのに・・涙は一向に止まろうとしない・・・

とうとう上りの最終が到着するというアナウンスがあった・・・
・・電車が近づく音・・・止まって乗客が降りてくる・・・そして発車のベルがなり電車が走り出す・・・

・・とうとう最終が行っちゃった・・・そう思った時、ひとりの男の人が駅に走り込んできた・・・涙を隠すためうつむいたオレには、スーツの足だけが見えた・・・その足は電車がもう行ってしまったのを知り急に力を無くして、改札の前で数歩あとずさった・・・

（・・あ～ぁ・・この人、最終に乗り遅れちゃったんだ・・・）
・・可哀想だけど・・・今のオレには他人のことを思いやる余裕なんてない・・・自分への後悔で頭がいっぱいなのだから・・・涙はあいかわらずあふれてくるし・・・

「君、どうしたの？」
「！！」
・・驚いたことに、スーツの男の人が声をかけてきた・・・
「君、高校生？　こんな夜遅く何してるの？　もう終電も出ちゃったよ？」
・・そんなの知ってる・・乗り遅れたのは自分のくせに・・・
「泣いてるの？　財布でも落した？　家この近く？　送って行こうか？」

・・もう・・うるさいなぁ・・・まさか・・この人もオレのこと・・
・？
・・もしかしたら・・送って行くとか言って・・・オレに何かする
つもりかも・・・！
「心配しなくていいよ、あやしい者じゃないから。俺はこの近くの
中学で教師をやってるんだ。」
（・・教師？・・・中学？・・・）
・・オレが手の甲で涙をぬぐいながら顔を上げると・・・

（！！！）
「・・井原・・せんせい・・？」
オレは驚きのあまり、思わず声に出してしまった・・・

「あれ？　君、春日二中の卒業生？」
「・・・ぁ・・えっと・・・」
・・まさか・・こんなところで井原先生に会うとは思わなかった・・
・
・・いや・・春日二中の先生が電車に乗るならこの駅からだから・・
不思議なことじゃないけど・・・でも先生は車使ってたハズなのに・
・・

「何年の卒業生？　君みたいなコいたかなぁ・・・」
「・・・・・」
・・うぅ・・どうしよう・・・こんな時に・・・

「・・あれ？・・・もしかして・・戸田か？」
「！！！！」
・・バ・・バレた・・・！！・・・どうしよう・・しらばっくれよ
うか・・・でも・・・

「・・うぅ・・はい・・・・」
・・オレは今の回らない頭では・・正直に答えることしか出来なかった・・・

「やっぱりお前だったか?!」
?・・なんか・・先生・・嬉しそう・・・
「戸田、女らしくなったな・・判らなかったぞ!・・しかし、どうしたんだ?何かあったのか?」
・・オレはバッグからハンカチを出して涙をぬぐった・・・良かった・・お化粧は取ってたから涙でマスカラが流れて目のまわりが真っ黒になってなくて・・・でも・・久しぶりに井原先生に会ったのに・・素っピンなんて・・・

「・・なにもないです・・ただ・・ちょっと悲しかっただけ・・・」
「・・・そうか。」
そう言って井原先生はオレの横に座った・・・
「もしかして、ツライんじゃないのか? 女として学校に行くの。」
「ううん!」
オレは大きく首を横に振った・・・
「わたし幸せなんです・・女の子になって・・・」
・・こんな涙顔で言っても・・信じてもらえないかも知れないけど・・・

「後悔してないのか?」
「・・後悔なんて・・・」
・・オレは女の子になったことは後悔してはいない・・後悔してるのは・・自分がバカなせいでこんなことになってしまった事だ・・・
「わたし・・女の子になって良かったって思ってるんです・・」
「・・そうか・・信じていいのか?」
「はい・・」

井原先生はしばらく思いつめたように黙っていた・・・そして口を開くと・・・

「俺はずいぶん後悔したよ。」

「え？」

「お前にあの学校を薦めたこと・・俺が薦めてなければお前も女として入学する事もなかったんだからな・・・」

「・・そ・・そんな・・・」

・・先生が後悔なんて・・・悪いのは勉強しなかったオレの方なのに！

「ごめんな、戸田・・・お前、最後に俺と会った日に何て言ったか憶えてるか？」

「？」

「お前は・・お前を女にしたのは俺だって言ったんだ・・・」（9話参照）

・・そういえば・・そんなこと言ったなぁ・・・

「俺、ショックでな・・もう教師を辞めようと思った・・・」

「そんな！」

「でもな・・俺には妻も子もいるから・・辞める勇気もなかった・・・」

・・良かった・・そんなことで先生が辞めないでいてくれて・・・

・・あれは確か・・女の自分に自信を持ちたいために言ったんだ・・・でも・・それが井原先生をそんなに苦しめてたなんて・・・

「・・ごめんなさい・・せんせい・・・」

・・オレは・・自分が軽い気持ちで言った事で・・先生がそんなに傷付いていたなんて・・ぜんぜん気付かなかった・・・なんてバカなんだろう・・・

「お前が謝ることないじゃないか。」
・・先生はそう言って・・オレの頭をなでてくれた・・・
「お前は何も悪くないんだぞ！」
「・・そんなことない・・そんなことないんです・・・！」
・・悪いのは・・・悪いのはオレなのに！・・・オレって最低だ！

「お前、今モデルやってるんだろう？」
「え？！　知ってたんですか？」
「うちの校長と教頭には、そっちの学校から時々近況をうけてるみたいだし、三吉先生も時々教えてくれるよ。俺はお前の担任だったからな。」
「・・・・・」
「お前が女の子として、ちゃんと生活していると聞いて少しはホッとしたけど、それでも俺の責任は消えないからな・・・」
「・・・・・」
「それとなく女子生徒に聞いてみたけど、お前モデルとしてもけっこう人気らしいじゃないか。」
「！・・・い・・いぇ・・・わたしは読者モデルだし・・プロのモデルさんと違ってみんなと同じ感じだから・・・親しみが持てるからだと思います。」
「そうか・・俺はお前が女の子になっても頑張ってると知って、ずいぶん誇らしかったよ。」
「・・そんな・・・」
・・オレはただ・・必死に日々を送っていただけなのに・・・
・・先生にそんなこと言われたら・・また涙が出てきそう・・・

「あのぅ・・すみません。もうここ閉めるとですけど・・」
ベンチに座るオレたちに駅員さんが声をかけてきた・・・

「戸田、もう帰らないと家族の人が心配するぞ。」
「・・はぃ・・・」
オレと先生はベンチを立って駅を出た・・・

「お前の家まで送って行くよ。」
「い・・いえ・・そんな・・ひとりで大丈夫です・・・」
「でも夜も遅いし、教師としても夜道をひとりで帰らせる訳にはいかないよ。」
・・それは・・そうかもしれないけど・・・
「・・今日はクリスマスなのに・・先生も早く帰らなくちゃ・・・」
「まあ、そうだけど・・この時間じゃもう子供たちは寝てるだろうから。」
「・・・・・」
「送らせてくれ、いいな?」
「・・はい・・」
・・オレは先生の好意に甘えることにした・・やっぱり暗い夜道は怖いし・・・それに・・ひとりになるとまた泣きそうだったから・・
・

道には雪が数センチ積もっていた・・・オレと井原先生は、オレの家までの１０分の道を黙って歩いた・・・

・・先生はオレのことどう思ってるんだろう・・・オレのクラスの担任だったんだから・・・やっぱりオレは先生にとって・・あの頃

の男の子のままなのだろうか・・・

・・でも・・前から来た車をよけるため・・オレを守るようにそっと肩を抱く仕草は・・・まるで女の子を扱うような優しさだ・・・

・・井原先生がこんな優しさを見せる人だなんて・・・あの頃のオレは知らなかった・・・

・・あぁ・・どうせなら・・・こんな素っピンの泣きはらした顔じゃなくて・・ちゃんとお化粧したキレイなオレを先生に見て欲しかった・・・

・・井原先生に会うのが・・こんなオレになっちゃう前だったら・・どんなに良かったか・・・

・・でも・・今は先生がいてくれる事が素直に嬉しかった・・・もし先生がいてくれなかったら・・オレは不安でどうなっていたかわからない・・・

・・もうすぐ家へと着いてしまうのが、たまらなく淋しい・・・もう少しだけ・・先生とこうして歩いていたい・・・

第１４４話　聖夜　（後編）

でも・・もうすぐ家に着くと思うと・・新たな不安が心をしめつけた・・・

・・かあさんに何て言おう・・こんなに遅くなっちゃって・・・

・・オレは刈谷先生にあんなことされたこと・・悟られないように振る舞えるだろうか・・・

なんだか足が重い・・・ちょっとでも家に着くのを遅らせたかった・・・

・・道路わきは車が跳ねのけた雪がたまって歩きにくい・・・オレの靴は可愛いのはいいけど底がツルツルだから・・こういう時には向かないようだ・・・

「きゃっ！」

雪で滑って転びそうになったオレを先生が支えてくれた・・・先生の腕がオレの腰に・・・

「どうした戸田、大丈夫か？　足こねなかったか？」

「・・は・・はぃ・・だいじょうぶです・・・」

・・ほんとは全然、大丈夫じゃない・・・先生がとっさにオレの腰を抱いた手が・・コート越しだから先生は気付かないかも知れないけど・・オレの胸に当っている・・・！

・・胸がドキドキする・・・先生は・・オレの身体も女の子みたいになってるって知ってるのかな・・・

オレの家が見えてきた・・・先生は家庭訪問で来たことがあるから知ってると思う・・・
（あれ？）
家の前に人影が・・・誰だろう・・・？

「・・・？」
「あ、有希・・やっと帰ってきた・・・」
・・長谷川・・？
「あんまり遅いから・・もし帰って来なかったらどうしようと思った・・・」
・・もしかして・・この寒い中・・ずっと外で待ってたのか・・・？

「え？　井原先生？・・・なんで有希と井原先生が？」
「あ、お前・・長谷川か？」
・・長谷川に・・せ・・先生とヘンな関係だって思われたら大変だ！
「あ・・あのね・・先生とは駅で偶然会って・・・もう遅いから送ってもらったの！」
オレは無理して明るい声で言った・・・

・・それにしても・・・
「どうしたの？　何で長谷川さんこんなとこにいるの？」
「・・だって・・有希が9時ごろには帰ってくるみたいなこと言ってたから・・・」
「あ・・うん・・・でも・・寒いのに・・中で待ってればいいじゃない。」
「・・来てみたら誰もいないんだもん・・・」
「え？！」
・・ウチに誰もいないなんてことがあるだろうか？・・・少なくともとうさんはいるハズなのに・・・

「・・インターホン押した？」
「押したわよ。」
「そう・・・」
・・ホントどうしたんだろう・・・

「それじゃ、俺は帰るよ。」
「あ、先生・・送っていただいてありがとうございました。」
オレは先生にペコリとお辞儀をした・・・
・・そして先生は長谷川に・・・
「長谷川が戸田と友達でいてくれてホッとしたよ。戸田はひとりじゃなかったんだな。これからも戸田のことよろしくな。」
「ぁ・・はい。」
「じゃぁな戸田、困ったことがあったら、俺で良ければいつでも相談にのるからな！」
「はい、ありがとうございます！」
・・先生はタクシーをひろうため、また駅への道を歩いて行った・・
・オレは先生の姿が見えなくなるまで見送っていた・・・

・・先生・・帰っちゃった・・・あ！そうだった・・長谷川・・・

「長谷川さん！　連絡くれれば良かったのに！」
「だって、つながらなかったわよ。電源切ってたんじゃないの？」
「あっ・・・」
・・そうだ・・食事の前からホテルを出るまで電源切ってたんだ・・
・
「で・・でもおかしいなぁ・・誰もいないなんて・・とりあえずおウチに入ろう？」

オレは鍵を開けてウチの中に入ると、玄関の電気をつけた・・・

「さ、入って・・！！」
明るい電気の下で見て驚いた・・・長谷川・・頭に雪が積もってる！・・・唇も紫色だ・・・
「ちょっと長谷川さん・・どうしたの?!」
・・オレは慌てて長谷川の頭に積もった雪を払い落した・・・長谷川のヤツ・・ホッペも耳も赤くて・・すっかり凍えちゃってる・・・
「誰もいないんだったら帰ってれば良かったのに・・・」
「・・有希の家に泊まるっていっちゃったから・・・」
「え〜?!」
・・いったい何考えてんだろう・・・変なヤツだなぁ・・・

「とにかくあがって！」
オレは長谷川を家にあげると、リビングのエアコンを強めにつけた。
「・・なんで泊まるなんて言うかなぁ・・・」
「・・いいじゃない。」
「まあ、いいけど・・でも来てみて誰もいないんだったらさぁ・・・」
「有希、わたしが泊まったら迷惑なんだ?」
「い・・いや・・迷惑ってことはないけど・・・」
・・なんかヘンだなぁ・・今日の長谷川・・・

オレが玄関でコートを脱ぐと・・・
「有希、今日はずいぶんおめかししてるじゃない。」
「あ・・お食事に行ったから・・」
「そういう清楚な感じって似合うよね。」
「・・・・・」
・・うぅ・・誉めてるのかも知れないけど・・・今そんなこと言われたって・・全然うれしくない・・・

「お風呂入れてくるから、とにかくお風呂に入って身体温めよう？」
オレは急いでお風呂のお湯を入れるボタンを押した・・・そして温かいスープを入れてあげた・・・あり合わせのカップスープだけど・・・
「はい、飲んで。」
長谷川は黙って両手を温めるようにカップを持って、少しづつ飲んでいた・・・

「なんか食べる？　お風呂に入ってる間に作っておこうか？」
「・・ううん・・いらない。」
「・・そう・・」
・・お腹すいてないのかな？

「あ、そうだ・・はいコレ！」
長谷川は急に思い出したように、持っていた包みをオレに渡した・・・
「？・・なに？」
「クリスマスプレゼントに決まってるじゃない・・・」
「・・・あ・・そっか・・ありがとう・・・」
・・それにしては・・・そっけない渡し方するなぁ・・・

・・オレだって・・長谷川へのプレゼント買ってあったのに・・・

「開けてみて！」
「・・うん・・」
包みを開いてみると、それはピンクと白のシマ模様のマフラーだった・・・
「あっ、マフラーだ！　ありがとう！！」
・・たぶん2、3千円のマフラー・・・センスもいまいちだけど・・
・オレはそれを見てホッとした・・・高校生らしいプレゼント・・

高い物じゃなくていい・・プレゼントは値段じゃないのだ！

・・オレには・・ブランド物のネックレスなんかより・・長谷川のプレゼントの方がずっと嬉しい！

「読者モデルの有希には、そんな安物じゃ物足りないかも知れないけど・・・」

「！・・そ・・そんなことないよ！」

オレはマフラーを巻いてみた・・・

「どう？　似合うかな・・？」

・・このツィードスーツにこのマフラーは・・正直合わないけど・・

・

「・・有希は何だって似合うに決まってるじゃない。」

「・・・・・」

・・それって・・誉められてるのかな・・・？

“ピピッ・・お風呂が沸きました！”

「あ！沸いたみたい、長谷川さん入って温まって！　着替えは置いておくからね。」

「有希は？」

「わたしは入って・・ぁ・・後でいいから。」

・・あぶなかった・・あやうく“入ってきた”って言うとこだった・・・

オレは長谷川を脱衣所に連れていって、戸を開けると中に押し込んだ。

オレは長谷川をお風呂に入れると、大急ぎでトイレに向った・・・

・・早く先生のが付いたままのナプキンを外したかった・・・

・・パンツを下ろすと・・ナプキンには吸い取りきれなかった刈谷先生の精液がベットリと付いていた・・・

「・・・・・」

オレはそのナプキンをパンツから外すと、汚物入れの中に捨てて、すぐにスーパー袋を取り出して固く結んだ・・・こんなもの誰かに見られたら大変だ・・！

・・そしてウォシュレットでお尻を洗う・・・とてもこんなもんじゃ気が済まないけど・・お風呂に入るまで待ってられない・・・

トイレを出てリビングに戻ると・・・

“プルルル、プルルル・・・”

あ、電話・・・オレが携帯を取るとかあさんからだった。

“有希？かあさんだけど”

「ぁ、うん。」

“かあさん今、北九州にいるんだけど、雪がひどくてちょっと帰れそうにないのよ”

「え！」

“途中の国道が凍結して通行止めなんだって。だから帰れないけど、しっかり戸締まりしておいてね！”

「・・かあさん帰ってこないんだ？」

“ごめんね有希”

・・・でも・・オレとしては・・今日かあさんと顔を合わせなくていいのはありがたいかも・・・

「あ・・うん・・大丈夫だから・・心配しないで・・・」

“刈谷先生とのお食事はどうだった？”

「あ・・えっと・・・おいしかったよ・・」

“粗相しなかった？”

「・・ううん・・大丈夫・・」
“そう、良かった。じゃぁね。”
かあさんはそう言うと急いでいるのかすぐに携帯を切ってしまった・・・

・・あ！・・しまった・・かあさんにとうさんが何処に行ったのか聞けばよかったなぁ・・・長谷川のことも言いそびれちゃった・・・もう1回こっちからかけてみようかな・・・でも・・今はあまりかあさんとしゃべりたくない・・・

“ガチャッ”
その時、玄関の鍵が開く音がした・・・
ドアを開けて入ってきたのはとうさんだった。

「！・・とうさん・・どうしたの？　スーツなんか着て・・・」
・・オレはとうさんのスーツ姿なんて見たことない・・・スーツを持ってることさえ知らなかった・・・
「ちょっと出版社の集まりがあってな。どうしても断れなかったんだ。」
「そうなの・・」
「ほら、おみやげ。」
「あ、ケーキ？」
・・そういえば・・今日はクリスマスだってのにケーキ食べなかったな・・・

「しかし、今日は冷えるな。風呂は沸いてるか？」
「あ・・あの・・お風呂は・・長谷川さんが入ってるの・・・」
「長谷川さんが来てるのか？　こんな夜中に？」
「あ・・長谷川さんね・・ウチに泊まりたいんだって・・・泊めてもいいでしょう？」

「向こうのお宅は知ってるのか？」
「・・長谷川さんは・・ウチに泊まるって言ってきたっていってた・・・」
「しかし・・・向こうのお宅には電話してみたのか？」
「・・ううん・・してない。」
「そうか・・それじゃおれが電話しよう。電話番号はわかるんだろう？」
「あ・・わたしの携帯からかける。」

オレは長谷川の家に携帯から電話した・・・
「あ、長谷川さんのお母さんですか？　わたし、有希です。　ちょっとお父さんに代わります。」
オレが携帯をとうさんに渡すと・・・
「あ、夜分失礼します。いえいえ、こちらこそ有希がいつもお世話になってます。　娘さんがウチに泊まるそうなので、一応お電話した次第で・・・」
・・良かった・・とうさんが電話してくれて・・・オレこういうとき何て言えばいいのかわからないもん・・・
「あ、そうですか。いえ、ウチは全然かまいませんよ。えぇ・・はい・・そうですか・・いえいえ、お気遣いなく・・それでは失礼いたします。」

「とうさん、どうだって？」
「ちゃんと言ってきてはいるらしいな。向こうもウチに電話したらしいぞ、かかって来なかったか？」
「あ・・わたし少し遅くなっちゃったから・・たぶんまだ帰ってなかったんだと思う・・・携帯も電源切ってたし・・・」
「そうか、それじゃ仕方ないな。　じゃおれは着替えてくる。」
「あ、うん・・」
とうさんは部屋に入ろうとして・・・

「そういえば、かあさんはまだ帰ってないのか？」
「あ・・さっき電話があって、雪で帰ってこれないんだって。」
「そうか。」
とうさんはそう言ってとうさんとかあさんの部屋に入って戸をしめた。

・・あっ・・そうだ・・長谷川の着替えを用意しなきゃ・・・
オレは2階の自分の部屋に上がって、長谷川に似合いそうなのを探してみた・・・やっぱり長谷川はスェットとかが良いのかな・・・
オレの部屋着みたいな可愛いのは嫌がるだろうなぁ・・・長谷川だって女の子らしいの着れば可愛くなると思うんだけど・・・

！・・そうだ・・あれがいいや！

オレは長谷川へのクリスマスプレゼントに買っておいたヤツを置いておくことにした・・・結構かわいい部屋着だし、そのままパジャマとしても使える。さすがにピンクは嫌がるだろうから、水色のにした。
ワンピース風だけど、下はズボンも付いてるから、長谷川さんでもそんなに恥ずかしくないと思う・・・オレも長谷川さんが着たとこ見たかったし、ちょうど良かったかも！

“トントン！”
一応かるくノックしたけど、まだお風呂に入ってるみたいだ・・・
そっと戸を開けて脱衣所に入ると長谷川のセーターとジーンズがたたんで置いてあった・・・ジーンズはさわってみると結構ぬれてる・・・

オレは用意した部屋着とパンツを置いて、かわりにぬれたジーンズ

とセーターを乾かすために持って出た。
ジーンズの裾はかなりびしょびしょだから、ちゃんと水分を取っておかないと、この気温では明日になっても乾いてないかも・・・オレはバスタオルを敷いた上にジーンズを置いてペーパータオルでパンパン叩いて水分を取ってから、エアコンの近くに干しておいた。

「ちょっと有希！」
急にお風呂の方から大きな声が・・・
「なに？　長谷川さん。」
「着替えこれしかないの？！」
「・・うん、それしかない！」
・・ウソだけど・・・

長谷川はブツブツ言いながらも着てる様子・・・どんなになるか楽しみ・・・
出てきた長谷川は思ったより似合ってた！　いつもより女の子っぽい！
「長谷川さん、可愛いじゃない！」
「もう、可愛くないわよ！　わたしはこういう服は有希みたいに似合わないんだから。」
「・・そりゃぁ・・わたしの方が似合うと思うけどさ・・・」
「有希！！」
怒った長谷川はオレの首を軽く絞めるマネをした。
「きゃ～！！」
オレも合わせて悲鳴をあげてたら、いきなりとうさんが部屋から出てきた！

「何だ？　ふたりとも何ジャレてるんだ？」
「あ、とうさん。」

「！・・あっ・・か・・帰ってたんですか・・・お・・おじゃましてます！！」
長谷川は慌ててオレの首から手を離した・・・長谷川のヤツ慌てちゃって・・・いい気味だ！

「とうさん、この服、長谷川さんに似合ってるよね！」
「ああ、可愛いんじゃないか？」
「・・・・・」
長谷川のヤツ真っ赤になってる！
「この服ね、長谷川さんへのクリスマスプレゼントなんだ！」
「え？！　プ・・プレゼントなら、何でいま着せるのよ。」
「・・だって・・長谷川さんだってつれない渡し方したくせに・・・それに・・わたしも自分のプレゼントを長谷川さんが着たとこ見たかったんだもん！」
「・・・・・」
・・長谷川は何か言いたそうだったけど、結局なにも言わなかった。

「あ、とうさん・・わたし先にお風呂入っていい？」
「ああ、おれは後でかまわないよ。」
「じゃ・・ちょっと入ってくる・・・」
・・オレもあんなことの後だから・・・早くお風呂で身体を洗い流したかった・・・

・・今日あったことすべてを洗い流せたらいいのに・・・

オレがお風呂から上がってから、オレたちはとうさんのおみやげの小さなケーキを半分づつ食べた・・・

「・・どうする？・・もう寝よっか・・・」

・・オレも正直、疲れてるから早く寝たかった・・眠ってあんなこと早く忘れたい・・・・

「そうね・・もう遅いしね。」

・・良かった・・・もっと起きてようなんて言わなくて・・・

「どうしようか・・麻衣の部屋勝手にも使って怒らないかな・・・」

「今日は麻衣ちゃんいないの？」

「うん、友達のおウチでお泊まり会だって。」

・・去年オレが弘子の家でお泊まりしたのが羨ましかったらしい・・

・

「わたしは有希の部屋でもかまわないわよ。勝手に麻衣ちゃんの部屋使うのも悪いし。」

「うん、それじゃそうしよう。」

・・オレも・・今日はひとりじゃちょっと不安だし・・・その方がいいかな・・・

「じゃ、じゃぁ・・布団持ってくるね。」

・・オレはお客さん用の布団をベッドのとなりに敷いて・・・

「どうする？　長谷川さんベッドと布団どっちがいい？」

「有希のベッドなんだから有希が寝たら？　わたしは家でも布団だから布団でいいわよ。」

「そう・・じゃそうしよう・・・それじゃ、電気消すね。」

・・長谷川が布団に入ると、オレは電気を消してベッドにもぐり込んだ・・・

・・・・・・

・・オレはすぐに眠ってしまいたかった・・だけど・・いざベッドに入るとなかなか眠れなかった・・・

・・真っ暗になると・・逆に目がさえてきて・・・そして・・今日のことが頭の中で何度もくり返し思い出される・・・オレは・・もう忘れたいのに・・・

・・長谷川が来てくれてたから・・オレもなんとなく平気な振りをしていられたけど・・・本当は全然平気じゃない・・・

・・なんでこんなことになっちゃったんだろう・・・オレが女の子になろうとしたから?・・・それともオレが本当の女の子じゃないから・・・?

・・いくら考えてもオレには良くわからない・・・

・・・オレはもう女の子になれる気がしない・・・でも・・・オレはもう男にも戻れない・・・

・・オレ・・これからどうすればいいんだろう・・・

「・・うぅ・・・」

・・押さえようとしても・・涙があふれてくる・・・でも必死で声を押し殺した・・・長谷川に気づかれちゃう・・・

・・でも無理だ・・・こんな悲しくて・・悔しい気持ち・・・とて

もコントロール出来るものじゃない・・・

「・・うぅぅ・・あぅっ・・・」

・・オレは掛け布団を頭からかぶって泣いた・・・こんな気持ち・・

もうどうにもならない・・・

「どうしたの？有希・・・」

「！！」

・・しまった・・長谷川・・起こしちゃった・・・

「・・ぐすっ・・な・・なんでもない・・・」

「なにかあったの？」

「・・なんでもない・・なんでもないの・・・うぅぅぅ・・・」

・・しゃべったら・・もう押さえられなくなってしまった・・・オレはもう完全に泣いていた・・・

「・・有希・・・」

！・・・長谷川が布団の上からオレの体を抱きしめてる・・・？

・・ギュッと抱きしめられると・・オレはもう我慢できなかった・・

・

「・・あぁぁん・・・」

・・こんなオレ・・長谷川に見られたくない・・・でもどうしようもない・・・

・・長谷川がオレの体から離れたと思ったら・・布団をめくろうとしている・・・いったいなにを・・・？

・・長谷川はそのままオレのベッドに入ってきた・・！

「・・有希・・なんで泣いてるの？」

・・丸まって泣いているオレの体を長谷川が背中から抱きしめた・・

・

「・・わたしのせい？」

！！

「・・ち・・ちがう・・・長谷川さんは・・関係ないの・・・！」

「・・じゃぁ・・何があったの？」

「・・いえない・・・いえないの・・・うぅぅ・・・・」

・・オレの体を抱く長谷川の・・柔らかい胸を背中に感じる・・・

「ねえ有希・・わたしじゃ相談できないなら・・誰かに相談したらいいじゃない・・・」

・・長谷川・・・

「井原先生も言ってたでしょう？　いつでも相談にのるって・・・」

「・・・・・」

「泣きたいようなことがあるなら、何でも相談すればいいの・・みんな有希のこと守ってくれるよ。」

・・・長谷川・・・いま・・そんな優しいこと言われたら・・・・

「・・長谷川さぁん・・・！」

オレはもう我慢できず長谷川の方に向き直り、恥ずかしさも忘れて長谷川に抱きついていた・・・

・・長谷川はそんなオレを強く抱き寄せてくれた・・・オレはそのまま長谷川の胸に顔をうずめて・・泣き続けることしか出来なかった・・・

・・もしこんな姿を誰かが見たら・・きっとオレの方が女の子みたいに見えることだろう・・・そんな考えが頭をかすめたけど・・・

もうオレは気にならなかった・・・

・・長谷川はオレが泣きつかれて眠るまで・・黙って抱きしめていてくれた・・・・

第１４５話　休業　いつものオレじゃない・・・

オレがベッドにもぐり込んでいると・・・
“トントン！”
オレの部屋のドアをノックする音・・・
「・・なに・・・？」
「有希、起きてるの？　お正月の準備で忙しいんだから手伝って！」
「・・ぅ・うん・・いまいく・・・」
かあさんに言われてオレはやっとベッドから出て、寒い部屋で急いで部屋着に着替えた・・・でも・・なんだか何にもやる気がしない・・・

オレはあのイブの日以来、食事なんかの時以外は毎日自分の部屋に閉じこもっていた・・・

・・なんであんな事になってしまったのか・・いくら考えても良くわからなかった・・・たぶん・・オレがかあさんとの約束を破ってお酒飲んだのがいけなかったんだ・・・オレがお酒さえ飲まなければあんな事にはならなかった気がする・・・

・・でも・・オレは本当の女の子じゃないから・・何を悲しんだらいいのか良くわからない・・・・

・・本当の女の子がこんな目にあったら・・・もっと、もっと・・ずっとショックだと思う・・・・

・・だって・・オレの場合はバージンを無くしたワケじゃないし・・・お尻だし・・・

・・でもオレは女の子じゃないから・・どっちの方が悲しい事なのかは・・オレには良くわからないけど・・・・

・・長谷川には恥ずかしいところを見られちゃったなぁ・・・あんなに泣いちゃうなんて・・・ベッドに入るまでは・・もう少し平気でいられると思ったんだけど・・・

次の日の朝、長谷川はあの日の夜のことは何も言わず、何も聞くことなく朝食を食べて帰っていった・・・あれでもオレに気を使ってくれたのかも知れない・・・

オレは何事もなかったような顔をして下に降りると、かあさんのお正月の手伝いをした。

・・つとめて何も考えないようにしながら・・・

・・幸いお料理をしてると、材料のこととか、調味料の分量とか・・色々考えなきゃいけないことがあるから、他のことは考えないで済むのはありがたい・・・昨年のお料理ノートを確認しながらおせちを作っていく・・・

「麻衣は？」

「友達と会うって出ていったわよ。」

「・・そう・・・」

・・麻衣ももう少しウチのこと手伝ってくれればいいんだけど・・友達と遊ぶので忙しいみたいだ・・・麻衣はオレなんかと違って、大きくなったらお嫁さんに行くんだから・・今からちゃんとお料理も覚えておいた方がいいのに・・・

去年かあさんからもらったオレのお料理ノートにも、この1年で

だいぶレシピが増えた・・・学校で習ったのもあるし、雑誌やテレビで観て自分で作ったものをメモしたのも多い。・・・でも・・かあさんのお料理ももっと知りたかった・・・この1年はかあさんのお仕事が忙しかったせいで、なかなか教えてもらえなかったから・・・

・・・・・

・・かあさんのお仕事のこと考えたら・・また刈谷先生のことを思い出してイヤな気分になってしまった・・・長谷川は誰かに相談したらって言ってくれたけど・・こんなことは誰にも相談なんて出来るハズがない・・・

“ブルル・・ブルル・・”

?!・・電話だ!

オレは急いでお料理でよごれた手を洗うと、ポケットの中の携帯を取り出した・・・あ!佐々木さんからだ・・・

「はい、ユウです!」

“あ、ユウちゃん?　良かった居てくれて　なかなか出ないから居ないのかと思った”

「す・・すみません・・お料理中だったから・・・」

“もしかして　今忙しい?”

「・・えっと・・まあ・・お正月の準備で忙しいですけど・・・」

“・・そうよね・・今からなんて無理かな?　急な変更が入ってしまって撮影お願いしたいんだけど・・・”

「え?・・今から撮影ですか・・・」

・・オレは正直・・撮影なんてする気分じゃない・・・出来ることなら断りたいけど・・・

「有希、行ってきていいわよ。」
！・・・かあさん・・・
「あちらも困ってるんでしょう？　お正月の準備はもうほとんど出来たし、かあさんだけで出来るから行ってらっしゃい。」
「・・う・・うん・・・」
・・うぅ・・・かあさんにまでそんなふうに言われると・・・なんか断れない雰囲気だ・・・

「・・あの佐々木さん・・それじゃ行きます。」
“そう、良かった！　ありがとうユウちゃん。出来るだけ早く来てね！”
「・・はい。」
・・ぜんぜんノリ気じゃないけど・・・このさい仕方ない・・・

オレは急いで部屋着を着替えると、髪は後ろでひとつにまとめ、お化粧もせずに家を飛び出した・・・どうせお化粧は向こうでするから必要ない・・・

西鉄電車に乗って、薬院で降りると、駅の近くの編集部があるビルに急いだ・・・エレベーターで九州ＪＩＮＯＮの編集部があるフロアーに上がる・・・

「あっ！　ユウちゃん、案外速かったね。」
ろうかで待っていたカネちゃんが、エレベーターから降りたオレを見つけて駆け寄ってきた。

「ハァ、ハァ・・・急いで来たから・・・」
オレは息を整えながら言った・・・

オレはそのまますぐにカネちゃんにメイクしてもらうためにメイク室に入った。
「あれ？　ユウちゃん寝不足？」
「え？！・・どうしてですか・・・？」
「なんかファンデーションのノリがいつもより悪いかなって思って・・」
！・・・確かに・・・このごろなかなか寝つけなかったけど・・・

「大丈夫、大丈夫！　そんなに気にするほど荒れてるわけじゃないから。いつもユウちゃんきめ細かい肌だから、ちょっと気になっただけ。」
カネちゃんはそう言ってファンデーションを塗っていった・・・
・・オレ・・これまで肌の調子なんて・・気にしたこともなかったのに・・・
・・肌って荒れるんだ・・・

撮影の衣装に着替えてスタジオに入ると、カメラマンの進藤さんはもう準備万端で待っていた。

・・オレはスタジオに入って白いホリゾント（バックの紙を床まで敷いて、バックとの境い目をなくしたもの）の前に立つと、気分も撮影モードになって行くのを感じてホッとした・・・いつもどおりだ・・・

“バシャ！・・バシャ！・・”

大きな音をたてて銀色の傘に反射したストロボが光る・・・オレはそのたびに、いつものように少しづつポーズを換えていく・・・

「ユウちゃん、もっと弾けた笑顔で！」

え？！

「・・はい・・」

オレは進藤さんにそう言われて、いつもよりもっと笑顔を作った・・

・

「ユウちゃん！　もっと自然に笑って！」

・・？・・

オレは言われたとおり自然な笑顔を作ったけど・・・

「ユウちゃんどうしたの？　笑顔がヘンだよ？」

・・ヘン・・・？

・・オレはいつもどおりにやってるのに・・・どこがヘンなんだろう・・・？

「おかしいなぁ・・・」

進藤さんはしきりに首をひねっている・・・

「・・やっぱり笑顔はやめよう・・真顔で・・クールに行こう・・・」

・・オレは笑顔をやめてカメラのレンズを見た・・・

“バシャ！・・バシャ！・・”

・・進藤さんはいつと違って・・オレにいろいろポーズを要求しなかった・・・どうしたんだろう・・なんか・・今日はいつもと違う・・

「はい、ＯＫ！　お疲れさま・・」

撮影は追加だったから衣装も少なくてすぐに終った・・・進藤さんは急いで、いま写した写真を編集に回すために出ていった・・・

・・前に聞いた話だと、今はデジタルだから良いけど、こういう急ぐ時は昔は大変だったらしい・・・大急ぎでスライドのフィルムを現像してたみたい・・・だけど今はせっかく便利になったのに、その分変更も多くなったらしい・・たぶん昔だったら今日みたいにバタバタ撮影して、すぐに入校するなんてことはあまり無かったんだろう・・・

・・オレは衣装を脱いで自分の服に着替えると、ろうかのイスに座って待っていた・・・するとなんだか不安な気持ちが膨らんできた・・・オレはいつもどおりやってるつもりだったのに・・・なんだか違うみたいだった・・・

・・笑顔がヘンって言われても・・・いつも別に考えて笑ってたワケじゃないから・・何がいつもと違うのかわからない・・・

「ユウちゃんお疲れ！　はい。」
進藤さんはそう言ってオレに缶コーヒーを差し出した・・・
「ぁ、ありがとうございます・・」
オレが温かい缶コーヒーを受け取ると・・・
「ユウちゃん、何かあった？　今日は元気ないじゃない。」
「え？！」
・・オレはそんな素振りは見せなかったつもりだけど・・・
「今日は笑顔が固かったよ。これまでは照れてる事はあったけど、こんなこと無かったよね。」
「・・そ・・そうですか？・・すみませんでした・・・」
「別に謝るほどの事でもないけど、来てすぐだったから気分が乗ら

なかったかな？」
「・・はぁ・・・」
・・そんなことは・・ないと思うけど・・・
「まあ、お正月楽しめばユウちゃんくらいのコはすぐに元気出るんじゃない？」
そう言って進藤さんはオレの肩をポンとたたいて・・・
「じゃあね、良いお年を！」
「あ、は・・はい・・」
そして・・
「・・進藤さんも・・良いお年を・・・」
オレは慌ててそう付け加えた・・・
・・進藤さんから見れば・・オレなんてまだ子供かもしれないけど・・
・・そんなにすぐ元気になれるほど・・単純じゃない・・・
「・・ふぅ・・・」
トイレに入って一息ついたオレは、手を洗うときにふと鏡に映った自分の顔が目に入った・・・いつものどおりのオレだけど・・・どこか違うのかなぁ・・・
・・笑顔を作ってみようとして・・・オレは戸惑った・・・
・・自分では笑ってるつもりなのに・・・ぜんぜん笑顔になっていない・・・
・・オレは何とか頑張って笑おうとしてみたけど・・・やればやるほどわざとらしい笑顔になってしまう・・・
・・オレ・・・笑えなくなっちゃった・・・

・・オレ・・どうしたらいいんだろう・・・自然に笑顔になれなきゃ・・読者モデルなんてやれない気がする・・・オレなんて本物のモデルさんみたいに素敵じゃないし・・元気なだけが取り柄なのに・・・

・・こんなんじゃ・・佐々木さんや、進藤さんにも迷惑かけちゃう・・・

どうすれば良いかわからないまま、ろうかに戻って長イスに座っていると・・・

「ユウちゃんお疲れさま、今日は助かったわ。今無事に入校したとこよ。」

編集部から出てきた佐々木さんは、ホッとした顔で言った・・・

「あ・・佐々木さん・・お疲れさまです・・」

「あら、どうしたの？　ずいぶん元気ないじゃない！」

「え?!・・そ・・そうですか・・・?」

・・やっぱり・・オレ・・そんなに元気ない顔してるんだ・・・

「ぁ・・あの・・佐々木さん・・・」

「なに?」

「・・わたし・・笑えないんです・・・」

「エ？　どういうこと?」

「・・・ちょっと・・悲しい事があって・・・そしたら・・笑えなくなっちゃったんです・・・」

「・・・・・」

「・・どうしたらいいのか自分でも良くわからないんです・・・」

佐々木さんはオレのとなりに座ると・・・
「もし私で良かったら相談に乗るけど？　男の子のこと？」
「・・ううん・・違います・・・相談できない事なんです・・・誰にも・・・」
「・・そう・・・言えないっていうなら無理には聞かないけど、もし言えるようになったら、いつでも相談に乗るからね。」
「・・はぃ・・ありがとう・・ございます・・・」
・・なんか・・心が締めつけられる・・・オレのまわりはみんな優しい人ばかりだ・・・きっとオレはそれに甘えていたんだと思う・・・みんなが良い人すぎて・・あんなヒドイ事する人がいるなんて思いもしなかった・・・

「・・佐々木さん・・わたし・・もう読者モデルやめさせてください・・・」
「ユウちゃん・・」
「・・笑顔もできないんじゃ・・撮影なんて・・・」
「・・ユウちゃん、私には止める権利はないけど、すぐに辞めるなんて決めなくてもいいんじゃない？」
「・・でも・・このままじゃ・・迷惑かけちゃう・・・」
「そんなことユウちゃんが心配しなくていいの。だれも迷惑なんて思わないわよ。もし迷惑な人ならこっちから辞めてもらうわ。　今は悲しくて笑えないかもしれないけど、ずっとそうとは限らないでしょう？　また笑えるようになったらやればいいんじゃない？」
「・・・・・」
「それまで少しの間だけお休みしてみたら？」
「・・ぅっ・・はぃ・・・・」
・・オレはとりあえずそう言ったけど・・・もう読者モデルをやろうって気持ちにはならないと思う・・・

・・なんだかもう・・何もかも・・疲れちゃった・・・

ＡＴから

たぶん今年最後の更新なのに、辛気くさい話で申し訳ありません。みなさんは有希が立ち直るような展開を期待していると思いますが、人間そう簡単には立ち直れないと思います。もう少し時間がかかると思います。

ずっと半年くらい遅れていたこの話ですが、作者が病気なんかしてる間に季節に追いついて（追いつかれて？）きました。おかげで季節の点では書きやすくなりました（笑）

年が明けてもしばらくは楽しい展開にはならないかも知れません。が、徐々にいろんな事が明らかになってくるハズです。子供のころは解らなかったことが大人になるにしたがい解ってくる事もあるでしょう。その時、有希も女の子としても、ひとりの人間としても、ひと皮もふた皮もむけることと思います。

そうなった時に有希は・・あるいはこの話は、どうなるのか？　作者の私にも書いてみないと判らない部分が多々あります。短編ならストーリーだけで進めることも出来ますが、長編ではそうはいきま

せん。個々のエピソードでは作者も思いもしない方向に進むこともありますし、思いもしなかった人物が急に主張しだしたりします（笑）もちろん作者の権限で無理強いすることも出来ますが、この話では出来るだけそういうことはせずにやってきたので、これからも出来る限りは自由にさせるつもりです。もちろんストーリーを変えるつもりは無いのでズレすぎたら強引に戻しますけど（笑）

それではまた来年もよろしくお願いいたします。

第１４６話　愛宕山　オレの願い

年が明けてもオレはウチの中でブラブラしていた・・するとかあさんが・・・

「有希、あんたヒマならおばあちゃんの所に行ってきなさい。」

「・・おばあちゃんのところ・・？」

「有希は去年のお正月も行ってないんだから。」

「・・・・・」

・・そういえば・・去年は弘子のところで巫女さんのアルバイトしたから（７０話参照）・・毎年行っていたおばあちゃんのところにはオレだけ行けなかったんだ・・・まあ、とうさんはもちろん行ってないけど・・・

「・・かあさんと麻衣は？」

「麻衣は友達のところに出かけてしまったし、かあさんは今日から仕事なの。」

「え？！まだ2日じゃない！　もうお仕事なの？」

「仕方ないでしょう？忙しいんだから。この不景気なときに仕事があるって有り難いことなのよ。」

「・・うん・・・」

・・そりゃそうかもしれないけど・・・かあさん・・今年も去年みたいに忙しいのかなぁ・・・

「行ってくれるわね？」

「・・ぅ・・うん・・・」

・・オレはぜんぜん乗り気じゃないけど・・・それにひとりで行くなんてつまらない・・・

・・レナもおばあちゃんの孫だから、レナを誘えればいいんだけど・

・レナのおウチは美容室だからお正月から忙しいし・・・長谷川は他人だから誘うのも変だし・・それにあんなことがあったから・・長谷川に会うのはちょっと気まずい・・・
・・やっぱりひとりで行くしかなさそうだ・・・

「ねぇ、かあさん・・今年もずっと忙しいの？」
「なに？急に。」
「だって・・今年はかあさんのお料理を教えてもらおうと思ってたのに・・・」
「有希はもう、お料理はだいたい出来てるじゃない。」
「そりゃぁ・・だいたいは出来るけど・・・かあさんと同じ味にはならないんだもん・・・」
「そう・・じゃあ、こんど細かい分量とか書いといてあげるから。」
「ほんと？！」
「それで作ってみて、わからない所があったら聞けばいいでしょう？　それでいい？」
「うん！」
・・それならたぶん出来そうだ・・・オレはずっとかあさんのお手伝いしてきたから、だいたいのことはわかってる・・・わからないのは細かな調味料の分量とか、隠し味とかだから。

西新〈にしじん〉のおばあちゃんのとこに行くのは、１年生の時の夏休みに麻衣とふたりで行って以来だ（４０話参照）・・・おばあちゃん元気かなぁ・・・

・・そういえば・・前に行った頃はまだ、女の子の恰好でひとりでは遠くに行くのは不安だったけど・・今はたいていのとこには行けるようになってる・・・それってオレも少しは成長してるってことなのかな・・・？

・・お土産はまた“なんばん往来”を買っちゃった・・・おばあちゃんへのお土産はオレにも出してくれるから、どうせならオレが食べたい物の方がいい。

地下鉄を西新の駅で降りておばあちゃんの家へ・・・まだ2日だから商店街のお店も閉まってて、通行人がまばらにいるだけだ。

おばあちゃんの家の古い軋む戸を開けて入ると、家の中なのに外と変わらないくらい寒かった・・・

「おばあちゃん・・明けましておめでとう・・」

「あぁ、有希ちゃんね。よう来たねぇ。」

「こ・・こんにちは・・」

「ほら、そげんとこにおったら寒かろうが、こっちに入りんしゃい。」

「・うん・・」

オレは障子を開けてお座敷に入った・・お座敷にはコタツもあって暖ったかい。

「・・おばあちゃん、どうしてこの部屋だけしか暖かくしないの？」

「ばあちゃんはここだけで十分やけん、他も暖ったためたら勿体無かろうもん！」

「・・うん・・まあそうだけど・・・」

おばあちゃんって倹約家だなぁ・・・年寄りだからかな？

「あ、これ・・・」
オレは持って来たお土産をおばあちゃんに渡した。
「ありがとね、有希ちゃん。」
おばあちゃんはお菓子を台所に持って行くと、お供え用に3つをお皿に乗せてお仏壇に供え、残りをお盆に入れてコタツに持ってきた。
「ほら、有希ちゃんも食べんしゃい。」
「うん。」
オレは遠慮なく“なんばん往来”をひとつ手に取って食べた・・・
やっぱりおいしい！

「みかんも食べんね？」
「うん・・あ、でも神社にお参りに行くんでしょう？　だったらもう行った方がいいんじゃない？」
「そうやねぇ、有希ちゃんが良いんやったら行こうかね。」
「うん・・」
・・お正月は混むだろうから、早めに行った方がいいと思う・・・

地下鉄の西新駅から2駅目の室見〈むろみ〉駅で地下鉄を降りると室見川の向こうに小さな山が見える。室見川にかかる橋を渡って小高い愛宕山〈あたごやま〉の上にある愛宕神社まで歩いて行く・・・

「おばあちゃん大丈夫なの？　疲れない？」
「何ば言いようとね、ばあちゃんば年寄り扱いしちゃいかんばい！

これぐらい何でもなかと！」
そう言っておばあちゃんはスタスタ歩いていく・・・オレも遅れないようについて行くのがやっとなくらい速い・・・おばあちゃんって年寄りだけどすっごい元気だ！

神社がある山へ上る道のふもとでおばあちゃんが・・・
「有希ちゃんはここに亀池があったとば憶えとうね？」
「・・亀池・・？」
「今は駐車場になっとうけど、何年か前までは亀が沢山おる池があったと。」
「・・・・・」
「有希ちゃんが小さか頃は、ようパンの耳ば持ってから亀にやりに来よったとよ。」
「へ～・・・わたし・・全然おぼえてない・・・」
なにしろオレは小さい頃の記憶はほとんどないから・・・小学校２年の時に今の家に越して来たけど・・それより前の記憶は無いようなのだ・・・３歳の頃のことは憶えていると思っていたけど、それも写真を見たり家族に聞いて知っている記憶の可能性も高い・・・

「・・それってわたしが何歳くらいの頃？」
「・・そうやねぇ・・・何歳やったかねぇ・・・ついこの前やった気がするけどねぇ・・・」
・・そういえば・・おばあちゃんくらいの歳の人にとっては、１０年くらいは“ついこの前”なのだ・・・
・・でもオレにとっては・・１０年前は小学校に入りたて・・・いや・・まだ幼稚園かな？

「でも・・去年は来れなかったけど、それまでは毎年来てたのに・・・亀池なんて見なかったよ？」
「冬は冬眠して居らんけんね。」

「あっ・・そっか・・・」
そういえばオレたちが来てたのはお正月だから、その時は亀はみんな冬眠してたのか・・・見たかったなぁ亀・・・何で駐車場にしちゃったんだろう・・・

愛宕神社は愛宕山の上にある小さな神社だ・・・ふもとから歩いて１０分くらいだろうか・・・

前にテレビで知ったけど、愛宕山って東京にもあるらしい・・・修学旅行で行った京都にもあった・・・同じ名前だけど・・そこと関係があるのかどうかオレは良く知らない・・・

お賽銭をあげてお祈りする・・・今年は５００円と少し奮発した・・神様に叶えてほしい事があるから・・・

・・今年の願いはただひとつ・・・もう刈谷先生に会わないで済みますように・・・

先生からはイブの次の日も、そのあとも頻繁にメールが来ている・・・でもオレは１回も返していない・・・だって・・あんな事されたんだから・・もう失礼と思われるかなんて気にする必要もないし・・・

・・オレはもう刈谷先生が何と言って来ても会うつもりなんてない！・・・このまま返事しなければそのうち先生も諦めると思う・・・

巫女さんが差し出した三方〈さんぽう・鏡もちなどを乗せる台〉に乗ったおみくじを引いたら・・大吉だった！・・・“今年は願いが成就する年”だって！　普段はおみくじなんてそんなに信じないけど・・・それでも今年はなんか良いことがありそう気がしてきた！

・・あんな事があったからって・・いつまでも塞ぎ込んでばかりはいられない！

神社の近くには梅ヶ枝餅〈うめがえもち〉を売っている出店があった。

梅ヶ枝餅は太宰府〈だざいふ〉が本場らしいけど、福岡ではお正月なんかはどこの神社でも出店が出ている。出店の近くに行くとお餅を焼く甘くいい匂いがただよってくる・・・

たい焼きを焼く時のような、鉄に４つのくぼみがあるやつに餅米の粉を溶いたのを流し込んで、しばらくしてから片方に平たくしたアンコを乗せて、パタンとはさむ。そしてまたしばらく焼いてから裏返して、裏側も焼くと出来上がりだ。

焼き立ての梅ヶ枝餅はまわりが少しパリッとしてておいしい。水分がなくなると固くなってしまうからビニールで包んであるせいで、持って帰って食べると、このパリッとした感覚は味わえない。

オレとおばあちゃんは出店で梅ヶ枝餅を2包み買った。　オレたちは展望台のベンチで1つの包みを開けて食べることにした・・・もうひとつはかあさんたちへのお土産だ。

「アチチ・・」
手に持つとまだアツアツだった・・・手が寒さでかじかんでいるせいもあるかもしれない・・・
ひとくちかじるとアンコの甘さが口に広がった。
梅ヶ枝餅はお店によってアンコが“つぶあん”のところと“こしあん”のところがあるけど、ここはこしあんだった。・・良かった、オレはこしあんの方は好きなのだ！　だってこしあんの方が甘さが上品なんだもん。

展望台の下には“ももち浜”が広がっている。　遠くには福岡タワーが青くそびえ、そのすぐ近くにはヤフードームのチタンの屋根が金色に輝いて見える・・・
・・ここは夜景もきれいだから夜はカップルも多いらしい・・・オレも・・こんなとこから・・純平と夜景を見れたらどんなに素敵だろう・・・

「有希ちゃんも、ちょっと見んあいだに女らしゅうなったやないね。」
「・・そ・・そうかな・・・」
「女らしゅうなるとは良かけど、つまらん女になったらいかんばい。」
「・・つまらん・・女・・・？」
・・それって・・どんな女の人だろう・・・
「おばあちゃん・・つまらん女って・・どんな人？」
「つまらん女っていうとは、つまらん男に引っかかる女たい。」

「つ・・つまらん男?!」
・・それって・・どんなひとだろう・・・?
・・こんなこと言うなんて・・おばあちゃんの旦那さんってどんな素敵な人だったんだろう・・・
「ねぇ、おじいちゃんってどんな人だった?」
おじいちゃんはオレが生まれる前に死んでしまったから、オレは額に入った写真でしか知らない・・・
「じいちゃんね。　じいちゃんはつまらん男やったばい!」
おばあちゃんはそう言って大笑いした・・・
・・でもそれじゃぁ・・おばあちゃんも“つまらん女”ってことじゃないの・・・?

「有希ちゃんは“髪結いの亭主”って言葉ば知っとうね?」
「・・かみゆいの・・ていしゅ・・・?」
オレはそんな言葉・・聞いたことがない・・・
「・・ううん・・知らない・・・」
「髪結いっていうとは、昔の人は髪の毛ば結うとったやろう?　だけん今で言う美容院みたいなもんたい。」
「・あっ・うん・・・」
「今は女でも男と同じように働けるけど、昔は女がやれる仕事は少なかったとよ。やけん“髪結い”っていうとは唯一女に出来て、しかも儲かる仕事やったったい。」
「へぇ〜」
・・そういえばレナの話じゃ、上手だと今でも美容院はけっこう儲かるみたいだ・・・

「ばってん女がお金ば持っとうと、つまらん男が寄ってくると。」
「・・・・・」
「しかもそげん男は見た目だけは良かったい!　だけんついつい引

っかかってしまうとよ。」
・・そういえば・・写真のおじいちゃんって昔の人にしては、わりとハンサムかも・・・

・・昔はおばあちゃんも美容院をやっていたから、そんな人に引っかかっちゃったのかなぁ・・・
「今でもそれは変わらんとよ。女がお金ば持っとうと、つまらん男が寄ってくると。　だけん有希ちゃんも気をつけないかんばい。」
「・・うん・・・」
・・でも・・・

「・・だけどさ・・おばあちゃんはおじいちゃんのこと・・好きじゃなかったの？」
「そりゃ好きやったくさ。好きやけん、どうしてもお金ば渡してしまうったい。それでよけい男はダメになると。」
「・・・でも・・なんでそんな人を好きになっちゃったの？」
「有希ちゃん、そげん男はね、女に好かれる方法ば知っとうとよ。時々すごく優しかことばしたりして、女ば喜ばすとが上手かと！」
「へぇ～・・・そうなんだ・・・」
・・なんか・・それってちょっとわかる気がする・・・女の子って優しくされるのに弱いから・・・

・・オレも・・そんな男の人にダマされないようにしなきゃ・・・

「そういえば、有正さんは元気にしとうね。」
「うん、とうさんは元気よ。」
「こっちには全然顔ば見せんけど、熊本には帰りようとね？」
「ううん・・帰ってない・・わたしが小学生の時に行ったきりだって言ってたから・・（３３話参照）」

「向こうのお母さんもそうとうの歳やろう？　確か９０近いっちゃないとね？」

「う～ん・・良く知らないけど・・・」

・・とうさんは田舎には帰りたくないみたいだ・・・だからオレたちもずっと熊本には行っていない・・こういうのを“疎遠”っていうのだろうか？

「事情もあるとやろうけど、時々は帰らんとね。お母さんもいつまでも元気じゃなかとよ。」

「うん・・・」

・・でも・・それはオレに言われてもなぁ・・・とうさんの事だからオレにはどうすることも出来ないもん・・・

「お父さんが行かんとなら、有希ちゃんが行ったらどうね？」

「え？！　わたしが？」

・・それは無理だと思う・・・だってオレ・・女の子になっちゃったし・・・

・・あれ？・・でも・・そういえばかあさん・・・熊本のおばあちゃんはオレのこと女の子だと思ってるかも知れないって言ってなかったっけ・・・？

・・あの頃はオレは女の子の恰好をしてたからって・・・あの時は何気なく聞いてたけど・・ほんとにそうなのかなぁ・・・でも・・そんな話とても信じられない・・・

「孫が会いに来るとは一番嬉しか事やけんね。」

「！・・おばあちゃんも・・わたしが来たら嬉しいの？」

「あたり前やなかね！　孫は一番可愛かと。」

そう言っておばあちゃんは、ヒザの上に置いたオレの手を握った・・

・温かいシワくちゃの手で・・・
「ばあちゃんは孫の成長ば見るとだけが楽しみやけん。」
（・・おばあちゃん・・・）
・・オレはこれまで、あまりおばあちゃんに会いに来なかったことを悔やんだ・・・お正月はお年玉をもらえるから来るだけで・・・正直めんどくさいとさえ思っていた・・・

「おばあちゃん、わたしまた来るね。」
「そりゃ嬉しかねぇ、待っとるけんね。」
「うん！」
・・なんか・・今日はかあさんに言われたから来たんだけど・・・おばあちゃんに会ったら元気が出て来たみたい！

・・今日はホントに来て良かった！

ＡＴから

皆様、新年明けましておめでとうございます。

世間は電子書籍元年とかいいますが・・去年観ていたテレビで電子書籍のことをやっていて、なんだかいまだに出版社の版権のことや

各メディアのシェア争いでゴタゴタしてるようで、ネットで小説を書いてる身としては、なんだか馬鹿馬鹿しく思えました。

しかし、なぜ人はそんなに“本”という形にこだわるのでしょう？
電子になってもページをめくらないといけないものでしょうか？
どうせ電子にするのなら、画像データで取り込むよりも、文字データにしてしまう方がずっと良いと思うのに・・・

とはいえ、私も印刷に近いところに身を置いていた者としては、“形”や“視覚からの情報”が重要なのも十分承知しています。文字も色々なフォントがありますし、それを作者や出版社の思惑どおりに表示しようとすれば、画像データの方が優れているのも事実です。装丁や紙質も重要で、同じ本が装丁を変えただけで売れる事も珍しくありません。某「なんとかの森」もあの濃い赤と緑の鮮烈な表紙でなければ、あれほど売れたかどうかわかりません。実際、当時私も表紙につられて買ってしまいそうになりました（笑）

まあ、そんなワケで、表紙というのは文字媒体の小説にとっては、まず最初の視覚データとして重要な訳です。ｉＰａｄでも表紙が無ければ本棚に並んでも恰好がつきません。なのでこの『オレは女子高生』にも表紙を作ってしまいました。（結局はそれが言いたかったのか・・・）

１話の最初に置いたので、おヒマな時にでも見ていただけると幸いです。本当は写真が良かったのですが、モデルもいないのでイラストで描いてしまいました。
ちなみにこの白鴻のセーラー服にこの髪はありえないので（三つ編みにしなきゃいけないから）あくまでイメージということでお願いします（笑）

それでは、今年も有希ともども、よろしくお願い致します。

第１４７話　決心　オレにはどうにもできない事

ここに来るのは夏いらいだけど（８８話参照）、久しぶりに来るとなんだか懐かしくて、気持ちがスッとする気がする。

弘子の実家の鵲神社〈かささぎじんじゃ〉は八女のお茶畑の中にぽっかり浮んだ島のような小高い丘の上にある。弘子の話では、どうやらここも古墳らしいということだ・・・八女には古墳がいっぱいあるから、ここが古墳でもおかしくないと思う・・・言われてみれば確かに前に弘子と行った古墳みたいなかんじの盛り上がり方だ。

今日は１月５日、もう三が日は過ぎたからお参りの人も一段落してるはず・・・今年は近所の人がアルバイトに来てくれたから、去年みたいにオレと千里まで巫女のアルバイトを頼まれなかったけど（７０話参照）、直美は今年も弘子と一緒に巫女さんをやってるはずだ・・・直美は中学の頃からお正月は巫女さんの手伝いをやってたらしい。

直美と弘子って結構タイプが違うけど仲良しだ・・・ふたりは中学からの友達だから、オレや千里とはまた違うふたりだけの絆を感じることがある。ふたりの間にはオレたちには割って入ることが出来ない部分があるような気がするのだ・・・そんな時・・オレはちょっと嫉妬に似たものを感じることもある・・・

階段をのぼって社務所をのぞくと弘子と直美がいるのが見えた。

「明けまして　おめでと～！」

「あっ、有希！　来てくれたの?!」

最初に反応したのは直美だった。

「うん！」
「明けまして　おめでとう。風邪はもう大丈夫なの？」
弘子に聞かれ・・・
「あ・・うん・・もう大丈夫・・・」
・・さすがにあんな事があった後だから、弘子たちに会う気になれなくて、お正月に行けない理由に、風邪をひいたと嘘をついていたのだ・・・

「治ったみたいだから来ちゃった。」
「寒かったでしょう。入って入って！」
「うん。」
オレが社務所に入ると直美が入ってきた。弘子や直美がいたところは、おみくじとか縁起がいいグッズを売ってるところだから、ガラスも無くて吹きっさらしだからかなり寒い・・・それは去年オレも経験済みだ。
それに巫女の衣装は薄いからよけい寒いのだ・・・まさか寒いからって巫女の衣装の上からコートを着るわけにもいかないし・・・巫女をやるのも大変なのだ。

案の定、直美も入って来るなりストーブに手をかざして冷たくなった手を温めた。
「他のアルバイトの人は？」
「昨日までだったから。」
「あ、そうなんだ・・」
「だいたい、忙しいのは毎年3日までだからね。」
「そっか・・そうよね。」
そういえば去年オレたちが手伝ったのも3日までだった・・・

「？・・有希・・なんかいつもと感じ違うね。」
「え？！・・そう？」

「うん、なんかちょっと大人っぽいっていうか・・・」
「あっ、きっとこの髪のせいよ。」
今日は気分を変えたくて、三つ編みウェーブを作ってきたのだ。
「ちょっと強く編んじゃって、思ったよりかかりすぎちゃったから・・だから大人っぽく見えるんじゃない？」
「そうかなぁ？　それもあるかも知れないけど、なんか雰囲気が・・・」
「いつもどおりだと思うけど・・」
・・今日はお化粧もしてないのになぁ・・・変だな・・・

「そういえば、風邪ひいたって言ってたけど、インフルエンザ？」
「ううん、年末忙しかったから、ちょっと疲れただけだったみたい。寝たら治っちゃったから・・」
「そっか、去年はファッションショーにも出たしね！有希忙しそうだったもん。」
「・・うん・・・」
・・ファッションショーか・・・あのクリスマスコレクションの時のオレは・・今から思えばすっかり有頂天になってた・・・忙しかったけど・・楽しくて仕方がなかった・・・なのに・・・

・・まさか・・あんな事に巻き込まれるなんて・・思ってもみなかった・・・

・・あの頃はまだ・・刈谷〈かりたに〉先生のこと・・尊敬できる人だと思ってたのに・・・

「寒かった～」
弘子が来たのはしばらく経ってから・・・
「あっちはもういいの？」

「うん、やっと叔母さんが代わってくれたから、せっかく有希が来てくれたんだし。」
「そんな、わたしのことは気にしなくていいのに。」
「いいのいいの、わたしもそろそろ暖まりたかったから。忙しいと寒さもそんなに気にならないんだけど、参拝の人が少なくなるとね。」
・・でも・・弘子は頑張り屋だなぁ・・・

「ねえ弘子、今日の有希なんか大人っぽいと思わない?」
直美ったら・・またそんなこと・・・
「・・そうね・・髪型のせいじゃない?」
「ほら、弘子も髪型だって言ってるじゃない!」
「う~ん・・やっぱりそうか・・・」
それでも直美は、なんか納得してない感じだ・・・

「でも、年末から風邪引くなんて災難だったね。」
「あ・・うん・・・」
「急に寒くなったからね。クリスマスの日は雪が積もってたし。」
「う・・うん・・・」
すると直美が・・・
「そういえばさ、有希イブの日に偉い先生と食事に行くって言ってたじゃない!」
「・・・!」
「どうだった?美味しかった?」
「あ・・う・・うん・・・おいしかったわよ・・・」
・・おいしかったのは確かだけど・・・あんな事があったから・・味なんて忘れちゃった・・・
「いいなぁ、フランス料理なんて!」
・・な・・直美・・・オレもう思い出したくないのに・・・

「や・・やめよう・・そんな話・・・もう終った事だし・・・」
「そんなことないわよ、また連れて行ってくれるかも知れない！」
「！！・・無い無い・・・絶対ない！」
・・オレはもう・・刈谷先生と食事なんて絶対にゴメンだ！
「でもその先生、有希のこと気に入ってたんでしょう？」
「ち・・違うよ！　ただ・・あの時だけのことよ・・・」
・・刈谷先生は・・オレのこと気に入ったフリしたのも・・おいしいお料理を食べさせてくれたのも・・全部オレにあんなことするためだったんだもん・・・
・・オレは・・直美が言うように・・先生に気に入ってもらったと思っていい気になって・・騙されちゃたんだ・・・オレがバカだったんだ・・・

3人でストーブを囲んでいると直美が・・・
「わたしたちも今年はもう3年生になるんだね。」
「そうだね。」
弘子が答える・・・
「・・・・・」
・・そうだよなぁ・・オレも高校3年生か・・・なんか実感がわかないけど・・・

「弘子、どうするか決めた？」
直美の問いに弘子は・・・
「うん、やっぱり神主になろうと思ってる・・・」
・・え？！・・神主？・・・オレは驚いた・・・いつの間にそんな話になったんだろうか・・・？
「とうとう決心したんだ・・」
「うん。」

・・な・・なに？・・この会話・・・？！

「か・・神主って・・・弘子が神主になるの？！」
「うん。前から考えてたんだけど・・」
「で・・でも・・弘子は女の子じゃない！」
「今時、女の神主も珍しくないわよ？」
「・・そ・・そうかも知れないけど・・・」
・・で・・でも・・決心なんて・・・弘子がそんなこと考えてたなんて・・・オレ全然しらなかった！
「・・なんでわたしには言ってくれないの？！」
「だって有希はそういう話は興味ないでしょう？」
「・・興味って・・・そりゃぁ・・神主さんのことは・・正直そんなに興味ないけど・・・弘子のことはわたしだって知りたいのに！」
「・・ごめん有希・・有希はファッションショーの事とかあったから、あまり心配かけたくなくて・・・」
「・・・ぁ・・・」
・・・そっか・・オレがひとりで浮かれてる間に・・・

「直美はどうするの？」
「うん・・まだ決めてないんだけど・・・来年から白鴻女子短大も4年制になるっていうし・・このまま行くのもアリかな？って気もするしね。」
「ふふっ・・それも直美らしいね。」
「・・・・・」
・・こんな会話・・・あたりまえのようにしてる二人を見てると・・
・なんだかオレだけ取り残されてしまったみたいな気がした・・・

・・中学の時と同じだ・・・オレがまだまだ時間があると思ってる間に・・・みんなはしっかりと自分の将来のことを考えている・・・

「わたし、有希がうらやましいなぁ・・」
「・・え?」
・・直美・・急になに言ってるの・・・?
「有希は卒業したらモデルの道が開けてるんだから。」
「!!!」
・・直美・・そんなこと考えてたの?!
「モ・・モデルなんて・・・わたしは読者モデルはやってるけど・・モデルになるなんて決まってないわよ?!」
「有希まだそんなこと言ってるの? 有希は雑誌でも人気なんだし、有希がモデルになりたいと思えばすぐにでもなれるんでしょう?」
「・・そ・・そんなぁ・・・」
・・モデルになるなんて・・そんな・・読者モデルになるような・・簡単なことじゃないのに・・・それに・・オレはもう読者モデルお休みするって言っちゃったし・・・
「に・・人気っていったって・・それは読者モデルだからであって・・・」
「ずいぶん女らしくはなったけど、そういうとこ有希はホント入学した頃から変わらないねぇ。」
「・・・・・」
・・直美・・・わたしのこと・・バカにしてるの・・?

すると弘子が・・・
「有希、落ちついて。 有希はまだ決めてないんでしょう? だったらそれでいいじゃない、まだ3年生になるまで3ヶ月あるんだし、直美みたいに白鴻女子大に行くなら3年生になってからでも十分間に合うんだから。有希が千里みたいに東京の大学に行こうって思ってるのなら別だけど。」
「・・・・・」

・・オレは・・いったいどうなりたいんだろう・・・女の子になっ

て・・その先は・・・？

「・・ごめんなさい・・・なんか・・二人がちゃんと将来のこと考えてるから・・わたしだけ仲間はずれみたいな気がして・・・」
「・・有希・・・」
「わたし・・なんか・・中学からずっと友達の弘子たちふたりがうらやましくて・・・わたしもそんな友達がいたらなって・・・」
「別に大した関係じゃないわよ。」
「そんな・・そんなことないわ・・弘子と直美は強い絆でつながってると思う・・・」
「有希は大げさに考えすぎなのよ。わたしと直美はただ出会ったのが中学の時だっただけで、有希や千里は高校で出会っただけじゃない。」
「・・それは・・そうだけど・・・」
すると直美が・・・
「それにさぁ有希だって、長谷川さんと中学からの友達じゃない！有希たちにも特別な絆を感じるわよ？」
「え？！　長谷川さん・・？」
・・長谷川は確かに同じ中学だけど・・オレたちは弘子たちとは全然ちがう・・・
「長谷川さんとは中学の時は友達じゃなかったもん・・・名前くらいは知ってたけど・・クラスも違ったし・・・」
・・それに・・中学の時はオレたちは男子と女子だったし・・・弘子たちみたいに女の子どうしじゃないから・・・オレたちが特別な絆があるように見えるなら・・それは秘密を共有してるからだと思う・・・

・・弘子も秘密を共有してるってことでは同じだけど・・・長谷川には男の子の頃のオレを知られてるから全然ちがう・・・

「・・なんかさ・・弘子と直美は将来はなれ離れになったとしても・・それでもつながってる気がするの・・・でもわたしは・・高校を卒業したら・・もう会えないみたいな気がして・・・」

・・！・・自分で言った言葉で気がついた・・・弘子たちはオレにとって・・女の子の全てなんだ・・・

・・オレは女の子になってすぐにみんなに会った・・だからみんなとの時間は・・オレが女の子になってからの時間と同じなのだ・・・オレは弘子たちといる自分以外に女の子の自分を知らない・・・だから弘子たちと離れた後の自分が想像できないんだ・・・

「有希は心配しすぎよ。わたしと弘子だって、弘子が神主の学校に行けば離れるんだし・・もし有希が白鴻の大学に進むのなら、わたしと一緒かも知れないじゃない。千里だって東京の大学に行っても卒業したら帰って来るかも知れないでしょう?」

「・・うん・・・」

・・たしかに・・直美の言うとおりだ・・・

「どっちにしてもわたしたちはずっと友達よ！　ねえ弘子。」

「そうよ有希、卒業してもずっと友達でいれるわよ。わたしたち“女どうし”なんだから、いつまでも友達でいよう?」

そう言って弘子はオレの手をにぎった・・・弘子は“女どうし”というとこをほんの少し強調した・・・

「・・あ・・ありがとう・・・わたし心配しすぎだったかも・・・」

・・きっと・・あんな事があったから・・・精神的に不安定になってたのかも知れない・・・だって・・オレたちの友情を疑うなんて・・・オレたちの女どうしの友情を・・・

「それにわたしも神主になったらここに戻って来るんだから、またこうして毎年お正月にも会えるわよ！」

「うん！わたしたち友達だもんね！」
・・そうだった・・オレたちは最高の女友達なのだ！

“　純平　このごろ簡単なメールばかりしてゴメンね　ほんとうは
少し落ち込んでたんです　でも今日弘子たちと会って　お話して
やっと元気が出ました　純平もお仕事がんばってね　”

送信しようとして・・最後にひとこと付け足した・・・

“　純平に会いたい　”

そして送信・・・・

・・・・

・・でも・・送信した後で、やっぱり付け足さなきゃ良かったと後
悔した・・・純平に心配かけたくないといつも思ってるのに・・・

・・純平だって忙しいんだから・・・“　会いたい　”なんて言わ
れたってどうしようもないのに・・・

・・オレはわがまま言って純平の重荷にはなりたくない・・そんな
女の子は最低だ・・・

・・でも・・女の子は淋しがりやなのだ・・・わかっていてもつい

ホンネが出てしまう・・・

・・会いたいよぉ・・純平・・・

オレは枕に顔をうずめて、足をバタバタさせた・・・なんでこんなに気持ちが思うようにならないんだろう・・・オレだって男だったんだから頭ではわかってるのに・・・時々どうしようもなく女の子の気持ちになってしまう・・・

・・そうなってしまったら・・男のオレにはどうにもならない・・・

“プルルル、プルルル・・・”

！・・電話・・・？

一瞬メールだけという、約束を破って純平が電話してきたのかと思った・・・でも純平はオレの電話番号は知らない・・・

携帯を見ると非通知だった・・・

「誰だろう・・・」

非通知だから出るのをやめようかと思ったけど・・・もしも大事な電話だったらいけないと思い直した・・・

「はい・・・」

“ユウちゃん？”

オレはその声を聞いた瞬間、心臓が止まるかと思った・・・それは刈谷先生の声だった・・・

“ユウちゃん、聞いてる？切っちゃダメよ！”

「・・は・・はぃ・・・」
オレは出来ることなら声を聞いてすぐに切りたかった・・・でも身体が硬直して動けなかった・・・
“明日テレビの収録があってそっちに行くから、この前のところで待ってなさい。あ、このあいだは道の反対側だったから、今度は間違えないようにね。”

・・オレは怖かった・・でも・・ハッキリ言わなきゃ・・・
「わたし・・行きません・・もう先生とは会えません!」
“ユウちゃんの気持ちは聞いてないの。来なきゃダメよ。”
「・・で・・でも・・・」
“ユウちゃん、あたしあなたのお母様のお仕事相手たくさん知ってるのよ。それってどういう意味だか解る?”
「・・・・?」
“あのね、あたしがひとこと言えば、お母様に仕事を回さないようにすることも出来るの。”
「!!・・そんな・・・」
・・かあさんはお仕事あんなに頑張ってるのに!
「そ・・そんなの・・卑怯です!」
“卑怯でも何でもいいの、ユウちゃんさえ、ちゃんと来れば何にも問題ないんだから。そうでしょう?”
「・・・・・」
“いいわね、この前と同じ時間に同じ場所。3分しか待たないから遅れないようにね!”

・・先生はそれだけ言うと電話を切ってしまった・・・

・・ヒドイ・・・かあさんに仕事を回させないなんて・・・そんなこと言われたら・・オレには断れないじゃないか・・・

・・オレのせいでかあさんの仕事が無くなっちゃったら・・かあさんだけじゃなくて・・会社の人も困るだろうし・・・オレだって困るし・・麻衣やとうさんだって・・・

・・いくら考えても良い考えは浮ばなかった・・・もうオレにはどうする事もできない・・・

・・先生はずる賢い大人で・・・そんな先生にかかっては・・・オレは子供なのだと思い知らされた・・・

・・仕方がない・・オレひとりが・・我慢すれば済むことなんだ・・・

・・オレはあまりに無力だった・・・

お詫び

刈谷章之介の読みを〈かりたに　しょうのすけ〉に変えました。
理由は何人かの方に、実在の人物を想像出来る名前で犯罪行為を書くのはいかがなものか?という意見をいただいたからです。私とし

ては気を使って同じ漢字はひとつも使わなかったのですが・・・
なので読みも変えてみた次第です。もし、もう前の読みかたに馴れ
てしまったと言う方は、そのまま読んで下さってもかまいません。
それと、実在の人物を想像しなくてもかまいません。出来ればもう
少しカッコ良い感じで想像していただいた方が有り難いです。

第１４８話　快感　女の子の気持ち・自粛版（前半）

「ちゃんと来たわね。」
「・・・・・」
「ほら、さっさと乗りなさい。いつまでもドア開けてると寒いじゃない。」
「・・・・・」
・・オレは何もいわず、黙って先生の車に乗った・・・
・・あの日と同じだけど・・・今の気持ちはあの時とは全然ちがう・・・
・・2週間前のオレはそのあと何が起こるかなんて知りもせず、刈谷先生と食事をすることにすっかりいい気になっていた・・・
「ちゃんと来たのはいいけど・・・なに?その恰好。」
「・・・・・」
今日はフード付きのトレーナーにジーンズ、その上に安っぽいジャンパーとラフな恰好で来た・・・
「あたしへの当てつけのつもり?」
・・うっ・・さすが刈谷先生・・オレの意図にすぐに気づいたみたいだ・・・
「せっかくホテルのレストランを予約したのに、そんな恰好じゃ入れないじゃない。」
「・・・・・」
「困ったコねぇ。」
・・オレは出来るだけ感情を出さないようにして言った・・・

「・・お食事なんて・・行かなくていいです・・・」
「あら、どうして?」
「・・だって・・先生はわたしに・・・・あんなことするのが目的なんでしょう?・・・だったら・・・」
「だったらすぐにやればいいじゃないって?」
そして先生は可笑しそうに笑った・・・

「今日のユウちゃんはずいぶん反抗的なのね。」
「あ・・当り前じゃないですか・・・」
「まあいいわ。 斉木!ホテルの前に例のお店に寄ってちょうだい。」
「・・はい。」
・・斉木っていう人はチラッとオレを見ると、交差点で車をUターンさせた・・・

「今日はね、ユウちゃんに素敵なプレゼントがあるのよ!」
「・・先生のプレゼントなんて・・いりません・・・」
「あらあら、あたしも嫌われたものね。でもユウちゃんもすぐに気に入ると思うわ。」
「・・・・」
「それとユウちゃん、この前の約束忘れちゃったみたいね。」
「・・・?」
「あたしのことは何て呼ぶんだっけ?」
「!」
・・この人・・まだそんなことを・・・?
「ほら、あたしのことは“おじさま”って呼ぶ約束でしょう?」
「・・・・」
「そして、自分のことは何て呼ぶんだった?」
「・・うぅ・・ユウ・・・」

「そう！憶えてるじゃない。」
「で・・でも！・・わたしイヤです・・・」
「嫌でも約束は守ってもらうわよ。」
「・・うぅ・・・」
・・オレは・・かあさんの為に何されても頑張るつもりだったけど・・
・・

「・・わたしに何してもいいから・・そんな恥ずかしいことまで言わせないで！」
・・オレたまらず先生に向って大きな声を出してしまった・・・
「大丈夫、恥ずかしいのは慣れてないからよ。慣れれば普通に使えるようになるわ。」
「・・そ・・そんな・・・」
・・先生は・・どうあってもオレに呼び方を強制するつもりらしい・・
・・オレは自分のことを“ユウ”なんて言いたくない・・そういうのは三吉先生にも“はしたない”って言われたし・・・でも悔しいけど・・オレには刈谷先生に逆らうすべはない・・・

車は高級なブティックの前に止まった・・・

お店の中に入ると、先生の姿を見るなり男の店員さんが急いでやってきた・・・
「刈谷先生いらっしゃいませ。今日は何をお探しに?」
・・どうやら先生はこのお店の常連みたいだ・・・すると先生は・・
・
「今日はあたしじゃないの。このコとお食事に行くんだけど、この恰好じゃホテルのレストランに入れないでしょう？　だからこのコに似合うドレスを見繕ってあげて。」
「かしこまりました。お嬢様にぴったりのドレスを何点か御用意い

たします。ちょっと！」
男の店員さんは女の店員さんを呼んで小声で言った。
「お嬢様にお似合いのドレスと靴を御用意して・・・」
「あの・・お靴のサイズは？」
「ユウちゃん、靴のサイズは何センチ？」
「あ・・わたしは・・・」
オレが自分のことを“わたし”と言った瞬間、先生はオレをきつくにらんだ・・・
「ぅ・・ユ・・ユウは・・２５ｃｍ・・・」
・・うわぁ・・顔から火が出そうに恥ずかしい・・・こんなの慣れるとは思えない・・・

あっという間にオレの前に１０着ほどの高そうなドレスと靴が並べられた・・・
「ウフッ・・なんだか『プリティ・ウーマン』みたいね！」
「・・ぷりてぃー・・うーまん・・・？」
「あら、ユウちゃんは『プリティ・ウーマン』観たことないの？」
「？」
「映画よ映画！　リチャード・ギアとジュリア・ロバーツの、現代のシンデレラストーリーよ！」
「・・・・・」
・・映画か・・・そういえばタイトルくらいは聞いたことあるかも・・・
・・でもオレが観たことある映画は、ほとんど映画好きの鈴木と観たヤツだから・・・ＳＦとかアクションとかホラーとか、そういう男の子が好きなのばかりだ・・・そもそも男の子ふたりでラブロマンスなんて観てたら気持ち悪い・・・
「ダメねえ、女の子なら『プリティウーマン』くらい観てなくちゃ！」
「・・・・・」

・・そういえば・・オレは女の子になってからは映画なんてほとんど観ていない・・・

「さあ、ユウちゃんはどれがいい？」

「・・・・・」

・・ドレスはどれも素敵だけど・・・けっこう高そうだ・・・

「わた・・ユウは・・こんな高いのじゃなくても・・・」

「お金の心配なんかしなくていいの！　好きなの選びなさい。」

「で・・でも・・お・・おじさま・・・」

・・こんな高級なドレスはセレブな人が着るもので・・オレみたいな女子高生には不釣り合いな気がする・・・

「・・ユ・・ユウには・・・選べません・・・」

「困ったわねぇ。それじゃあなた、このコに合ったのを選んであげて。」

「かしこまりました。それでは・・これなど如何でしょう？」

そう言って女の店員さんが選んだのは赤いドレスだった・・・スカートは短めで・・エナメルの黒いベルトがポイントになっている・・・他のより若いコ向けなヤツだった。

「いいわねぇ。ユウちゃんこのドレスに着替えなさい。あ、このコにお化粧もしてあげて。」

「はい。かしこまりました。」

オレは店員さんに連れられて行くと、お店なのに立派な化粧室があった・・・さすが高級ブティックだ・・何でも揃ってる・・・

赤いドレスに着替えると、オレはその素敵さにうっとりしてしまった・・・

素敵な服は撮影でもいっぱい着たことがあるけど・・・この服は生地から仕立てから・・全てが高級そうだ・・・

女の子の服ってファッション重視で、着心地は二の次だったりするのが多いけど・・・この服はそんなことない・・・すごく身体に馴染んでいる・・・

少しハイウエストぎみに黒いベルトが締まっていることで、オレのスタイルがいつもより良く見える・・・スカートの長さも、長過ぎず、短すぎず、ちょうどいい！

・・そして履かされた赤いハイヒールもまた、オレの足をきれいに見せていた・・・オレはハイヒールは苦手だけど・・これはすごく履きやすい・・・店員さんが履かせてくれる時にチラッと見えたタグには“フェラガモ”と書いてあるのが見えた・・・

・・高級な靴だとハイヒールでもこんなに履きやすいなんて知らなかった・・・普通のハイヒールはどうしても爪先に体重がかかってしまうけど、この靴はしっかりと踵をささえてくれてる感じで、足が爪先の方に滑っていかない・・・

着替えると、服が汚れないように長いケープをかけられて、お化粧にかかる・・・

・・この店員さん・・・お化粧もすごく上手だ・・・

・・なんか・・カンペキな感じで・・・ステキなお姉さんだなぁ・・・

下地の処理をして・・ファンデーションを塗っていると・・・

「？・・お嬢様・・間違ってたらごめんなさい。　もしかして春日ユウさんじゃありませんか？」

「ぁ・・・」

・・どうしよう・・言っちゃっていいのかな・・でも・・しらばっ

くれて後でバレても恥ずかしいし・・・
「・・は・・はぃ・・春日ユウです・・・」
「やっぱり！　先ほどからどこかでお見受けしたお顔だなって思ってたの！」
「・・・・・」
「まさか春日ユウちゃんが刈谷先生とお知り合いだったなんて思いませんでしたわ。先生のことおじさまっておっしゃってたけど・・先生とは御親戚？」
「ぃ・・いえ・・違います・・・」
オレは慌てて否定した・・・

「でも刈谷先生のような方とお知り合いなんて、先生って素敵な方でしょう？」
「・・は・・はぃ・・・」
・・オレも最初はそう思ってたけど・・・お姉さんは本当の先生のこと知らないから素敵なんて言えるんだ・・・

・・なんだかオレが春日ユウだとわかってから、お姉さんはいっそうお化粧に力を入れ出した感じだ・・・
「ユウちゃんにお化粧出来るなんて光栄だわ・・・」
・・そ・・そんな！
「・・光栄なんて！・・・わたし・・ただの読者モデルですよ！」
「読者モデルでも他のモデルさん以上に輝いてらっしゃいますよ。私、最初にＪＩＮＯＮで見た時からユウちゃんのファンだったんです。」
「！・・そんな・・もったいないです・・・」
・・まさか・・こんな高級ブティックのお姉さんがオレのこと見てくれて・・・そのうえファンなんて・・・お客さんへのお世辞にしても嬉しすぎる！

お化粧が完成して鏡に向くと・・・
「いかがですか？　お気に召さないところがありましたら、すぐにお直し致しますけど・・・」
「い・・いえ・・直すなんて・・・」
・・これがオレ？・・・二光さんのお化粧とも、カネちゃんのメイクとも違う・・・大人しくてお上品だけど・・しっかりお化粧されている・・・直すところなんてどこにもない・・・なんだかオレ・・本当のセレブなお嬢様みたいだ・・・
「・・ステキ・・ありがとうお姉さん！」
「ユウちゃんに気に入っていただけるなんて、すごく光栄ですわ！」
・・光栄なのはオレの方だ・・・こんなにオレのこと可愛くしてもらって・・・

・・こういう時・・女の子はすごい快感に浸れるのだ・・・こんな気持ちは男の子には絶対わからない！

「あら！　髪もアップにしたのね。ステキじゃない、見違えたわ！」
化粧室から出たとたん、刈谷先生の顔を見て、オレの舞い上がってた気持ちは現実へと引き戻された・・・これからオレの身に起こる事も忘れて浮かれちゃうなんて・・・オレどうかしてる・・・

「バッグも必要ね・・このコくらいの歳のコに人気のバッグってどんなのがあるのかしら？」
「そうですね・・これなんか如何でしょう？」
それはあざやかなピンクの可愛いバッグだった・・・でも・・プラダなんて・・・
「あら、可愛いじゃない！　じゃぁ、それいただくわ。すぐに使う

からタグは取ってちょうだい。」
「はい、かしこまりました。」
「！・・おじさま・・・あんな高いバッグ困ります・・・」
・・オレだってプラダのバッグが高いことくらい知っている・・・
それを先生なんかに買ってもらうなんて・・そんなの困る・・・
「さっきも言ったでしょう？　お金の心配なんてしなくていいって。」
「・で・・でも・・・」
「あたしユウちゃんの為だったら、もっと高いモノでも買ってあげるわよ。」
「・・・・・」
・・そんなこと言われても・・オレはぜんぜん嬉しくない・・・
・・だって・・・それと引き換えなのは・・・オレの身体なんだから・・・

そしてオレはキャメル色のコートも買ってもらってお店を出た・・
・来て着た服はお店の袋に入れてもらって・・・

・・それにしても・・いったい全部でいくらかかったんだろう・・・
お店の人は値段なんか言わなかったし・・先生はカードで払っちゃったから・・・オレにはいくらかわからなかった・・・

・・でも・・安くないことはオレにもわかる・・・バッグだけでも１０万くらいするだろうし・・・卑怯な事する先生に服を買ってもらうなんて・・・こんなことならちゃんとした服を着てくれれば良かった・・・

ホテルのレストランに入ると、ボーイさんが丁重にオレたちを席へと案内してくれた・・・

・・席はすでに準備されていて、テーブルにはまっ白なテーブルクロスが引いてあり、真ん中にはキレイな花が飾ってある・・・コートをボーイさんに預けて、オレたちは席に座った・・・

・・窓からは博多湾が一望できる・・・

「ユウちゃんもお酒飲むでしょう?」
先生にそう聞かれて、オレは首を横に振った・・・
「あら、飲まないの?」
「・・・お酒は・・もう飲みません・・・母と飲まないって約束してるんです・・・」
「お母様にバレちゃった?」
「・・いぇ・・・もっと前からの約束です・・・」
「でもこの前は飲んでたじゃない。」
「・・それは・・・」
・・あれは先生に騙されて・・・そう言い返したかったけど言えなかった・・・

「ユウちゃんは良い子なのね。高校生なのにお母様との約束を守るなんて。」
「・・・・・」
「でも、少しくらい飲んでおいた方が楽だと思うけど?」
・・らく?・・・なに言ってるんだろう・・・
「・・わたし・ぁ・・・ユウは・・絶対に飲みません・・・」

「・・まあ、ユウちゃんがそう言うのなら無理にはすすめないけど。」

・・この前は・・無理にすすめたクセに・・・

運ばれてくるお料理は、どれもキレイでおいしかったけど・・・この後の事を思うと細かな味まではわからなかった・・・普通ならノドも通らないかも知れないけど・・・さすが高級なお料理だ・・こんな時でもノドを通ってしまう・・・

お料理を食べ終ると、シェフの人がやってきて、先生としばらくお話をしていた・・・どうやらここも先生が良く来るところみたいだ・・・

先生がシェフにオレのことを紹介すると、シェフは「これまでで一番美しいお嬢様で・・・」なんてわざとらしく誉めた・・・

・・これまでも刈谷先生は・・オレみたいなコを何人もここに連れて来たのだろうか・・・

・・そのコたちはオレみたいに騙されて連れてこられたのだろうか？・・・それとも自ら進んで来たのだろうか・・・

・・おいしいお料理を食べるためや・・高いモノを買ってもらうために自分から来たコもいるのかも知れない・・・運転手の斉木って人も言っていた・・・捨てられる前に高いモノ買ってもらえって・・・

・・オレはそんなコと一緒にされたくない・・・だけど・・やってることだけ見れば・・オレもそのコたちと同じだ・・・

・・そんなことを考えると・・悔しくて・・でもオレは・・泣きたくなるのを歯を食いしばって耐えるしかなかった・・・

食事が終ると刈谷先生は、斉木さんに電話して車をホテルの前に横付けさせた。

これからの事を思うと、車に乗り込むオレの足は重かった・・・乗る時に運転席の斉木さんと目が合った・・その冷たい視線がオレの心臓を突き刺したような気がした・・・この人はきっとオレのことをバカにしてるんだと思う・・・もう先生に会わないって言ったのに・・・またノコノコ会いに来たって・・・

・・オレもモノを買ってもらうために来たと思ってるかも知れないな・・・実際に買ってもらったオレを見られてるし・・・

・・こんなオレじゃ・・もう斉木さんが言ったことに反論することも出来ない・・・・

車はこの前と同じラブホテルに入っていく・・・この前は酔って寝ている間に連れ込まれてしまったけど・・・今日は自分から・・・オレはこんなことするために女の子になったんじゃないのに・・・

部屋に入ると先生が、後ろからオレのコートを脱がしてハンガーに掛けた・・・
・・そしてドレスのチャックに手をかけられ、オレは慌てて先生から身を引いた・・・

「じっとしてなさい、あたし脱がしてあげるから。」
「・・いいです・・服くらい自分で脱ぎます！」
「そう？　それじゃ脱いでもらおうかしら。」
そう言って先生はゆったりとソファーに腰かけて足を組んだ・・・

・・オレは身体中が震えてきた・・・先生が見てる前で服を脱がなきゃいけないなんて・・・
・・手が震えて、なかなかベルトが外せない・・・やっと黒いベルトを外すと、赤いドレスの背中のチャックを下ろしていった・・・

・・はらりと落ちそうになったドレスを、オレは胸のところでしっかり押さえた・・・やっぱりイヤだ・・・脱ぎたくない・・・

そのまま動かないオレに先生が・・・
「どうしたの？　自分で脱ぐって言ったんでしょう？　それともあたしが脱がしてあげましょうか？」
「・・・・・」
「でも一度自分で脱ぐって言ったんだから、あたしに脱がして欲しいんだったら“脱がしてください”ってお願いしなきゃダメよ！」
「！！！」
・・そんな・・お願いなんて絶対しない！

・・オレは自分が女の子だということを忘れようと思った・・・男の子なら・・服を脱ぐなんて何でもないことだ・・・

・・オレは意を決して自分でドレスを脱いだ・・男の子ならドレスを脱ぐくらい平気だ！

・・・でも下着になった途端、またオレの中の女の子が顔を出してきた・・・ブラしてる男の子なんていない・・・それにオレの身体はもう・・ほとんど女の子だ・・・

「下着は脱がないの？」

「・・うぅ・・・」

・・こういうのを“まな板の鯉”っていうのだろうか・・・オレはもう先生の見てる前でブラを取るしかなかった・・・両手を後ろに回してホックを外す・・・そして肩ヒモから腕を抜いてブラを取ると床に落した・・・

・・先生の目が怖くて目を開けられなかった・・・オレはそのままパンティの両方の腰の部分に指をかけて・・出来るだけ股間が隠れることを願いながら、足を交差させながらパンティを脱いだ・・・

・・オレはもう裸だった・・・何も着けない姿でオレは刈谷先生の前に立っている・・・

先生がソファーを立って服を脱ぐ音が聞こえる・・・そして歩いてくる音・・・目を閉じていてもどんどん近づいてくるのがわかる・・・

「！！」

オレは両肩を手でつかまれてビクッとした・・・

「良く出来たわね、ユウコちゃん。」

「・・・ぅ・・・」

急に“ユウコ”と言われたのがショックだった・・・オレは有希で・・ユウでもあるけど・・・ユウコなんかじゃない・・・

「さあ、お風呂で身体の外も中もキレイにしましょ！」
オレは先生に肩を抱かれ連れて行かれそうになった・・・
「ぁ！・・ち・・ちょっと・・待ってください・・・」
オレは慌てて、家から着てきた服なんかを入れてくれたブティックの袋の中からバッグを出した・・・
「なに？　石鹸？」
「・・はぃ・・・」
「それ使いたいの？」
「・・・」
オレは黙ってうなづいた・・・

・・だって・・ホテルの石鹸は匂いがキツすぎて・・・ウチでお風呂に入ってもまだ匂いが取れなかったのだ・・・かあさんにバレないかヒヤヒヤした・・・だからウチで使っている石鹸を持ってきたのだ・・・

「そうね、ホテルの石鹸は匂いが強いものね。いいわよ、それ使って。」
「・・うぅ・・あ・・ありがとう・・ございます・・・」
「これくらいの事でお礼なんかいらないわよ。あたしとユウちゃんの仲じゃない！」
「・・・・！」
！・・・仲なんて・・・
「それに、あたしに対して敬語は必要ないわよ。だってあたしたちお友達でしょう？」
・・オ・・オレと先生は友達じゃない・・・オレは刈谷先生なんか大嫌いだ！

～～～　これより自粛、以下『オレは女子高生・完全版』へ

～～～

ｈｔｔｐ：／／ｎｏｖｅｌ１８．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ４４４８ｐ／

第１４９話　始業　オレと学校のみんな

今日から3学期・・・ほんとはみんなと会えるのは嬉しいハズなのに・・・今日は最低な気分・・・

・・昨日あんな目にあったのに・・すぐみんなと顔を合わせるなんて・・・

・・電車が駅につかないでほしい・・・今日ほど学校を休みたいと思ったことはない・・・

オレは昨日、ウチから着ていった服でラブホテルから帰ると、すぐに2階の自分の部屋に直行して、刈谷先生に買ってもらった服と靴とバッグをお店の袋に入れたままクローゼットの中に隠した・・・こんな高そうな物・・かあさんに見つかったら大変だ・・・

とうさんと麻衣には家を出る時にＪＩＮＯＮの撮影だとウソをついた・・・ふたりとも全然疑ってないのを見ると・・オレは心が苦しかった・・・

・・それに・・今はまだいいけど・・・ＪＩＮＯＮを辞めたってバレたら・・もうこのウソは通用しない・・・佐々木さんはお休みってことにしてくれたけど・・・こんな気持ちじゃ・・またいつか読者モデルを始められるとは思えない・・・

・・刈谷先生にはまた呼び出されるだろうし・・・オレどうすればいいんだろう・・・

・・それにしても・・・あの“エネマグラ”って何なんだろう・・・
男の子でも・・女の子の快感なんて・・・あれって本当なのだろう
か？

・・ふと気がつくと・・すぐあの事を考えている・・・

・・たしかに・・アレをオレの中に入れられると・・アソコが変な
気持ちになって・・・オチンチンから何かが出たと思った・・・

・・でも・・オチンチンからは何も出ていなかった・・・

・・先生は・・・あれが“ドライオーガズム”って言ったけど・・・
“ドライオーガズム”って・・いったい何なんだろう・・・

・・あれが・・本当に女の子の快感なのだろうか・・・

・・女の子って・・・男の子と・・すると・・・あんなふうに感じ
ちゃうのだろうか・・・？

・・イクって・・・あんなに・・・ヘンな感じなのだろうか・・・？

2012

「おはよう、有希！」
「！！」

学校への道で急に肩を叩かれてビックリした・・・
「ぁ・・おはよう、千里・・・」
「ひさしぶりね、有希、お正月弘子のところに行ったんだって？」
「・・うん・・・」
「わたしも行きたかったなぁ。一緒に行けたら良かったんだけど。」
「・・うん・・・」

「どうかした？　なんか元気ないね？」
「！・・そ・・そんなことないよ。　すっごく元気だもん！」
オレは今できる限りの明るさで言った。
「直美が言ってたよ。有希が将来のこと不安がってるって。それで元気ないんじゃないの？」
「ぅ・・それは・・ちょっとはあるかも・・・」
・・実際・・将来のことは不安だけど・・・今、オレの不安は将来より目の前にある・・・
・・でも・・千里やみんなには将来の不安だと思わせておいた方がいいかも知れない・・・

・・どっちみちあんな事・・・誰にも相談出来ないし・・・

「ウチの学校も、もうすぐ受験だけど、今年は男子もいるのかな？」
「・・うん・・どうかなぁ・・・」
・・そうだよなぁ・・・またオレの時みたいに、１人しか受験しなかったなんてことになったらそれこそ大変だ。
・・そんなことになったら学校だって困るだろうから、そこらへんは校長先生や教頭先生が、ちゃんとやってると思うけど・・・またオレみたいなコを出さないでほしいな・・・

・・こんなめに合うのはオレだけで十分だ・・・

「おはようございます！」
校門のところでお辞儀をして、風紀委員と長山先生の前を通っていく・・・
手には以前は無かったモノサシが・・・新しい制服はセーラー服よりスカートが短かめだし、もっと短くするのも簡単だからどうしてもチェックが厳しくなってしまうようだ・・・

・・オレは校則に違反してまでスカートを短くしたりする気はないから平気だけど・・・女の子ってどうしても可愛くアレンジしたくなるものだ・・・その気持ちはオレにも解らないこともない・・・

・・もっともオレの制服は、みんなのと違ってオレの体にピッタリ合わせて作ってあるから、アレンジする必要もないんだけど・・・

・・それに来年になったら髪が長くてもおさげや、三つ編みしなくても良くなるらしいから、もっと髪を伸ばすコも出て来るかも知れない・・・みんなおさげや、三つ編みするのが好きじゃないみたいだし・・・
・・オレとしてはもう髪の毛のチェックはしなくて良いような気がするんだけど・・・そこらへんはギリギリまで厳しくいくようだ・・
・長山先生らしいっていうか・・・

・・オレはおさげや、三つ編みも女の子らしくていいと思うけど・・
・それはオレが本当の女の子じゃないから思うのかも知れない・・・

・・本当の女の子だったら・・いちいち女の子らしいとか考えないのかも・・・

「有希、お早う！」
「おはよう！」
クラスに入ると、いつもどおりのみんながいて少しホッとした・・・
オレ・・案外みんなの前でも普通でいれそう・・・
・・でも・・あんな事があった次の日なのに・・・こんなに普通にしてていいのだろうか・・・？
・・みんなはオレがあんな目にあったなんて・・考えもしないだろう・・・
「戸田さん、休みどうしてた？　どこか遊びに行った？」
安部っちが人なつこい笑顔で話しかけてくる・・・
「特別なところには行かなかったわよ・・初詣でくらいで・・・」
「初詣でどこ行ったの？」
「あ・・愛宕神社と、弘子のとこ。」
「あ、そうか、原口さんのウチって神社だったね。」
「うん。」
「来年は受験だから、あたしも原口さんの所にお参りに行こうかな。」
「え？！安部っちも受験するの？」
「うん・・県内のどっか受けてみようかと思ってる。」
「じゃぁ・・受験勉強とかしてるの？」
「ううん、まだ！　とりあえず受けてみて、落ちたらウチの大学に行けばいいしね。」
「・・・・・」
・・なんか・・安部はのんきでホッとした・・・オレ以外にものんきなコがいたんだ・・・
「あ・・でも受験なら太宰府の方がいいんじゃない？　学問の神様

なんだから！」
「そっか！　それじゃ両方行っとこうかな？！」
「アハハ・・・その方がいいかも！」
・・オレも安部っちみたいに・・気楽にどこか受験してみようかなぁ・・・もしかして受かっちゃったりして・・・

「なに？　なんか楽しそう！」
「あ、直美・・安部っちがね、来年受験だから弘子の神社にお参りに行こうかなって言うから、受験なら太宰府の方がいいんじゃない？って言ってたの。でもそしたら両方行こうかって！」
「それじゃ神様が掛け持ちされたって怒るんじゃない？」
「え・・そうかなぁ・・・」
・・たしかに・・・神様も良い気はしないかも・・・
「弘子どう思う？」
「別にいいんじゃない？　神様はそんなことくらいで怒らないと思うわよ。それにお正月は三社参りが縁起がいいなんて言うくらいだし。」
「・・そっか・・・」
「日本の神様はそんなに了見狭くないから気にすることないのよ。」
「うん、そうよね。」
・・弘子が言うんなら間違いなさそうだ・・・

「有希先輩！あけましておめでとうございます！」
今日は始業式だけで授業は無いから、オレがクラブに顔を出してから帰ろうと、ろうかを歩いていると、オレを見つけたミサトちゃん

が駆け寄ってきた。
「あ、ミサトちゃん・・あけましておめでとう・・ミサトちゃんこれからクラブ？」
「はい！先輩は？」
「わたしもこれから行くとこ。一緒に行こっか？」
「はい！」
・・ミサトちゃんはいつも明るくていいなぁ・・・

クラブに着くともう顧問の嶋田先生が来ていた。
「嶋田先生、あけましておめでとうございます。」
オレたちはそろって丁寧に、先生にお辞儀をした。
「あけましておめでとう、戸田さんに中野さん。」
・・嶋田先生はいつもお淑やかで物腰が柔らかい素敵な大人の女性だ・・・調理実習の先生でもあるから、お料理も上手だし・・何で今だに独身なのか不思議なくらいだ。

「あなた達はいつも仲良しで、まるで姉妹みたいね。」
「そうですか？！・・あ、でもたしかにミサトちゃんといると妹といるみたいな気持ちになることはありますけど。わたし実際にも妹いますし・・」
「ほんとですか有希先輩？　実はあたしも先輩のこと・・お姉さんみたいな気がする時があるんです！　あたしはお兄さんしかいないから、先輩があたしのこと妹みたいに思ってくれてるなんてスゴク嬉しいです！」
・・そんな・・嬉しいのはオレの方だ・・・そんなにオレのこと慕ってくれて・・・

「そうだわ。戸田さん、お花あるんだけど活けてみない？」
「え？」

「お花屋さんがね、お正月用の余ったお花を持って来てくれたの。」
「へ～・・そうなんですか・・・」
・・オレもちょっと気分が滅入ってたし・・・お花活けたら気分も少しは良くなるかも・・・
「じゃぁ・・活けてみようかな・・？」

“ガラッ・・”
その時、部室の戸が開いて長谷川たちが入ってきた・・・
「先生、あけましておめでとうございます！」
「あけましておめでとうみなさん。丁度良かったわ、今から戸田さんがお正月のお花を活けて下さるから、みなさんも一緒に見学するといいわよ。」
！・・みんなが見てる前で活けることになるなんて・・・久しぶりだしちょっと緊張するなぁ・・・

（・・ふぅぅ・・・）
オレは呼吸をひとつして気持ちを落ちつけた・・・お華もお茶も平常心が大切だ・・・いつも三吉先生に言われてること・・・

・・雑念があっては良い活け花は出来ない・・・息を吹き出す・・・自分の中の不安な気持ちも追い出すように・・・

・・平盆にお正月の花を活けていく・・・

・・静かな部室に枝だを切るハサミの音がひびく・・・

・・活け花は出来上がったものだけでなく・・・活けてる姿勢や仕草も大切だ・・・何ひとつおろそかに出来ない・・・

・・背が高い松を背景に・・花が少し咲いた白梅・・赤い実がなってる千両や万両・・・手前には背が低い黄色い花の福寿草・・・

・・お正月らしい・・新年の慶びと・・・春を待ちわびながらも・・もうすぐそこまで来てる感じ・・・

・・そんな気持ちが伝わればいいんだけど・・・

活け終って先生とみんなに向ってお辞儀をすると、一瞬の間のあと、みんなが一斉に拍手してくれた。

「良かったわよ戸田さん、ずいぶん上達したわね。」

「あ・・ありがとうございます・・」

「少しの間に仕草のずっと女性らしくなったわ。」

「・・そうですか・・？」

「ええ、以前から戸田さんは女性らしい仕草は出来ていたけど・・何て言うんでしょう・・・意識してやるのではない、内から出てくるって言うのかしら・・そんな自然な大人の女性らしさが出て来たように思うわ。」

「・・・・・」

・・オレは・・前と変わらないと思うけど・・・

・・女性らしくなったって言われるのは・・女の子としては嬉しいハズなんだけど・・・オレはちょっと複雑な気分だ・・・

・・オレはまだ・・大人になんてならなくていい・・・

・・オレは・・・まだ女の子でいたいのだ・・・

「有希、もう大丈夫なの？」
「・・ぁ・・ぅ・・うん・・・」
・・長谷川に聞かれたけど、オレは平気なふりをした・・・
・・オレ・・あの夜・・長谷川の胸で泣いちゃったなんて・・・いま思い出しても恥ずかしくなってくる・・・
・・でも長谷川はあのことには直接ふれないでいてくれるのが・・オレとしてはありがたい・・・
「・・ごめんね長谷川さん・・心配かけて・・・」
「・・・・」
「・・あの時は・・ちょっと落ち込んでたけど・・・もう平気だから！」
「そう？　ならいいけど・・」
・・今日は・・なんか優しいな・・・
「でもさ、長谷川さんって変わってるよね・・」
「エ？　わたしが？！　わたしのどこが変わってるのよ！」
「・・だってさ・・しょっちゅうわたしにイジワルことするクセに・・ときどき優しかったりして・・・」
「わたしはいつも有希に優しくしてるわよ！」
「・・そうかなぁ・・・」
・・そんなことないと思うけど・・・

「変なのはあんたの方じゃない！」
「・・わたしが？」
・・オレは・・いたって普通だと思うけど・・・
「そうよ、男なのに女の子になっちゃってさ・・」
「・・そ・・それは・・・」
・・それを言われると・・・オレは何も言えない・・・

「今日も嶋田先生に“女性らしくなった”なんて言われていい気になっちゃって！」
「！！・・わたし・・いい気になんてなってないもん！」
「なってたわよ！“・・そうですか？”なんて嬉しそうにはにかんじゃってさ！」
「！！！」
・・それ・・オレのマネ？！・・オレは・・そんなナヨナヨしてないし・・・そもそもそんなことしてない！・・・はにかむなんて・・
・

・・オレはただ・・あんなこと言われて・・・恥ずかしかっただけだ！！

「・・わたしは・・女性らしいなんて言われても・・嬉しくないもん・・・」
「どうして？　女らしくなるのはあんたの望みでしょう？」
「うっ・・・それは・・そうだけど・・・」
・・でもオレは・・・
「・・わたし・・まだ大人の女の人になんてなりたくないんだもん・・・」

・・こんな気持ち・・産まれた時から女の子で・・・女の子として順調に成長してきた長谷川には・・わからないと思う・・・

「・・まだ・・女性らしくなんて・・ならなくていい・・・」

・・やっと最近・・女の子になれてきたかも知れないって思ってた矢先に・・・ムリヤリ女にさせられてるオレの気持ちなんて・・・

2022

第１５０話　昇天　オレどうなっちゃうの？・自粛版

「・・ぉ・・おじさま・・今日は・・フランス料理じゃないんですね・・・」
・・オレは・・恥ずかしいけど・・刈谷先生のことを・・“おじさま”と呼ばなければいけない・・・
「ユウちゃんはお酒飲まないし、ユウちゃんくらいのコにはイタリアンの方がいいんじゃないかと思って。もしかしてフレンチの方が良かった？」
「・・ユウは・・どっちでも・・・」
・・そしてオレは・・自分のことを・・“ユウ”と言わなければいけない・・・
「好きなの言っていいのよ？　どこでもユウちゃんが好きなところを予約してあげるから。」
「・・ユウは・・何でもいいです・・・」
・・だって・・オレは先生と食事をするために来てるワケじゃない・・・

「ユウちゃん、まだ怒ってるの？」
「！・・ぁ・・あたりまえです・・・」
「まあいいわ・・そのうちあたしに会うのが待ち遠しくなると思うわよ！」
「！・・ま・・まさか・・・」
・・そんなこと・・絶対ない・・・オレは先生がかあさんにイジワルするって言うから・・イヤイヤ来てるんだ！
・・自分から・・あんなことして欲しいなんて思うコはいない！

「でも、今日はちゃんとした恰好で来たじゃない。」
「・・うぅ・・それは・・・」

・・だって・・どうせ先生に反抗したって・・・この前みたいに着替えさせられちゃうし・・・オレは先生に高い服なんて買って欲しいワケじゃない・・・

「可愛いわよそのワンピース。でもちょっと子供っぽいかしら?」

「・・・・・」

・・どうせ・・オレは子供だ・・・

「ユウちゃんが場違いな服を着てきたら、またお洋服買ってあげようと楽しみにしてたのに。」

「!・・ユウはまだ子供だから・・あんな高い服・・困るんです・・・」

「あら、でもユウちゃん17歳なんでしょう? 17歳っていえばもう大人よ!」

「・・ユウはまだ16です・・・」

「あら?そうだったの。でも高校2年生なんだから、4月までには17歳になるんでしょう?」

「・・まぁ・・そうですけど・・・」

「だったらもう大人じゃない。」

「・・・・・」

・・オレも・・昔は17歳っていったら大人だと思ってた・・・だけど・・今オレには大人になる自信なんてない・・・

「若いっていいわねぇ。まだいろんな可能性があるんだから・・・」

「・・・・・」

・・もう男でもない・・女にもなれないオレに・・どんな可能性があるっていうんだろう・・・

・・こんなオレがなれるのは・・ニューハーフくらいしか・・・・

・・イタリアンは確かにおいしかった・・味もしっかりしてるし・・
・
・・先生が言うように・・オレにはまだフランス料理は早かったのかも知れない・・・

食事が終ると・・またオレは先生の車でラブホテルに連れてこられた・・・
・・どうせまた・・あんなことをされるんだ・・・

～～～　これより自粛、以下『オレは女子高生・完全版』へ～～～

ｈｔｔｐ：／／ｎｏｖｅｌ１８．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ４４４８ｐ／

すみません。今回は自粛版に載せられる部分がほとんどありませんでした。

第１５１話　再現　なんでこんなことに・・・

「ただいま・・・」
・・出来れば・・だれかいたとしても聞こえないように・・小さな声でいった・・・

・・もうすぐ１０時・・・かあさんも帰ってるかも知れないし・・・
・・でも・・今日もまだ帰ってないみたいでちょっと安心した・・・

玄関からそのまま2階の自分の部屋に向う・・・オレは・・先生に抱かれたそのままのオレで家族には会いたくない・・・
「！！」
ところが、階段を上り切ったところで部屋から出て来た麻衣と出くわしてしまった！

「お姉ちゃんお帰り！」
「ぁ、う・・うん・・・ただいま・・まだ起きてたの？」
「うん、トイレ行ってから寝ようと思って。お姉ちゃんも雑誌の撮影、遅くまで大変だね。」
「ぁ・・うん・・・」
・・麻衣はオレが撮影で遅かったと全然疑ってないようだ・・・

・・下に降りていく麻衣を見送りながら思った・・・

・・もしも麻衣が・・・オレが・・先生にあんなことされてると知ったら・・・オレのこと軽蔑するだろうか・・・？

・・あたりまえだ・・・軽蔑されるに決まってる！

・・麻衣はオレが読者モデルをやってることを誇りに思ってくれてるのに・・・そのオレがお尻に男の人のアレを突っ込まれて・・・ましてや・・イッちゃったなんて知ったら・・・どう思うか・・・

・・そんなこと・・考えただけで恐ろしい・・・

オレは部屋に入ると鍵を閉めてベッドに座った・・・

・・なんか・・体がだるくて・・・何もしたくない・・・もうこのまま寝てしまいたかった・・・

・・でも・・お風呂に入らなきゃ・・・

オレは部屋着を持ってお風呂に入るために下に降りた・・・

今日お風呂に入るのは3回目だ・・・あの後も入ったんだから・・もう入らなくていいようなものだけど・・・そのまま部屋着を着る気にはなれなかった・・・ましてベッドに入るなんて・・・

・・ウチのお風呂で洗い直さないと・・なんか気持ち悪い・・・

脱衣所でワンピースを脱いで・・ブラを外す・・・

「うっ・・」

・・胸の中のほうが痛い・・・あれだけ揉まれたんだ・・・痛いに決まってる！

・・でも・・オレの胸って・・ほんとに固いんだろうか？・・・そこそこ柔らかいと思うんだけど・・・

・・揉まれると・・もっと柔らかくなるのかな・・・？

・・大人の胸は・・すごく柔らかいんだろうか・・・？

「あぅっ！」

ふいに乳首に手が当たって思わず声をあげてしまった！

・・乳首が腫れてビンカンになってる・・・なんか・・少し大きくなったみたい・・・

・・腫れが引けば元に戻ると思うけど・・・こんなこと続けてたら・・いつか形が変わっちゃうかも・・・

「ふぅ・・・」

湯舟につかると・・少しホッとした・・・やっぱりウチのお風呂は小さいけど落ちつく・・・

アゴまでお湯につかっていると・・疲れもとれるようだ・・・

・・明日も学校だから・・お風呂からあがったらすぐに寝よう・・・

洗った髪を軽く乾かすと、すぐに電気を消してベッドにもぐり込んだ・・・

・・・ベッドに入ったけど・・・お風呂に入って疲れがとれたせいか・・眠気が去ってしまったようだ・・・なんだか目が覚めてしまった・・・

・・暗い部屋でじっとしていると・・・また・・今日のことが思い出されてくる・・・

・・オレ・・どうなっちゃったんだろう・・・オチンチンが起つなんて・・・

・・先生は言ってた・・・タマがなくても・・女性ホルモンを打ってても・・・興奮すれば起つものだって・・・

・・ほんとかなぁ・・・

・・でも・・たしかに起ってたし・・・

・・・・・

オレは起き上がると、また電気をつけた・・・
そしてねまき代わりのピンクのベビードールの上下を脱いで裸になる・・・

・・オチンチンは・・今はしぼんでいつもと同じだ・・・コレがあんなに大きくなってたなんて信じられない・・・

枕とクッションをカベに立て掛けてもたれかかると・・・オレは自分の胸を下からそっと持ち上げてみた・・・

・・そして・・先生がやったように・・ゆっくりと揉んでみる・・・

・・自分の胸を揉むなんて・・・ヘンな感じだ・・・

・・でも・・やっぱり自分のを自分で揉んだって・・・他人に揉まれたようには感じないと思う・・・

・・それに今は・・・お尻にも入ってないし・・・

「・・んっ・・・」
・・でもしばらく揉んでいると・・あの時みたいにアソコが固くなるような感覚になってきた・・・

「・・ぁっ・・」
・・だんだん・・ムズムズしてくる・・・

「・・ウ・・ウソっ・・・」

・・自分でやってるのに・・・感じるなんて・・・

・・お尻にも・・入ってないのに・・・！

「あぁっっ！」

アソコの感覚に耐えられなくなって、腹筋がギュッと締まった・・・

オレって・・こんなに腹筋あったっけ・・？

・・オレは・・・おそるおそる乳首へと指を近づけた・・・

・・でも・・さわるのが怖い・・・

・・震える指で・・そっとさわると・・・

「あぅっ！」

・・アソコがビクッとして、腹筋がまたギュッとなった・・・！

「あっ！・・あっ！・・あっ！・・」

・・先生がやったようにつつくと・・・そのたびにオレの乳首から

アソコへビリビリと電気が流れるよう！

胸を揉みながら乳首をさわると・・さらに激しい感覚に襲われた・

・・！

「・・あっ・・あんっ！・・・」

・・く・・くるしい・・・でも・・・気持ちいい・・・！

・・・・・・

・・考えてみれば・・・オレは女性ホルモンを打つようになって・・
・タマも取ってしまって・・・女の子のようにはなったけど・・・

・・同時に男の子の気持ち良さもなくなり・・・かといって女の子の喜びも知らないでいた・・・

・・オレには女の子にあるものが無いから・・・それは仕方がない事だと思っていた・・・

・・でも・・オレにもこんなに感じるところがあったなんて！

・・これって・・・ほんとうに・・・女の子の感じ方なんだろうか・・・？

・・女の子って・・・こんなに感じるんだろうか?！

・・女の子もオナニーするって聞いたことあるけど・・・こういうこと・・みんなやってるんだろうか?！

「ああっ！！」
ふと気づくと・・・オレのオチンチンがダラリと伸びて・・ピクピクしてる・・・?！

「・・あんっ！・・そんな・・・！」
・・ピクピクしながら・・・だんだん起っていく・・・

「・・あうぅ・・・！」

・・ついにオレのオチンチンは・・男の子の頃みたいに大きく固くなってしまった！！

・・もうギンギンだ・・・

「・・うぅぅ・・ヒドイよ・・・」

・・オレも女の子のように感じることが出来るとわかったのに・・・感じるとオチンチンも起っちゃうなんて・・・

・・これじゃ・・・女の子だか何だかわからないじゃない・・・！

「うぅ・・」

・・胸を揉むのをやめても・・なかなかオチンチンは元に戻らない・・・

・・何だろう・・この感覚・・・

・・起ってるのは男の子の頃と同じだけど・・・感覚はずいぶん違う・・・

・・男の子の頃は・・ただオチンチンだけが起ってる感じだったけど・・・今は・・もっと・・身体の奥の方から・・突き上げてくる感じだ・・・

・・男の子の頃より・・・ぜんぜん激しい！！

「・・ど・・どうしよう・・・」
・・オチンチンは全然静まってくれない・・・
・・男の子の頃なら・・・射精しちゃえば・・すぐに小さくなったけど・・・今のオレはそれも出来ないし・・・
「!!」
・・そういえば・・・イッちゃったらしばらくは萎んでたっけ・・・
・・そうか・・イッちゃえばいいんだ・・・
・・恥かしいけど・・・誰も見てるワケじゃないし・・・
オレはまた胸を揉みだした・・・そして乳首も・・・
「・・あぁ!・・・」
・・アソコにビンビン感じる・・・
「・・あん!・・・」
・・気持ちいい・・・
・・目をつむって揉んでいると・・・
「!!」
・・急に先生の顔が浮んでギョッとした・・こんな時まで先生が出て来なくていいのに・・・
・・オレが思い浮かべる顔は・・決まってる・・・
「・・あんっ・・ダメ・・純平・・・」
・・純平の手がオレの胸を・・・

「・・あっ・・イヤッ・・・」

・・そして乳首をつまんでクリクリやりだす・・・

「・・あん！・・気持ちいっ・・じゅんぺい・・・」

・・あぁ・・純平のだったら・・お尻にいれてもイヤじゃないょ・・

・

・・もちろん・・・そんなキタナイこと・・純平にさせられないけど・・・

・・でも・・想像だけなら・・・・

・・・・・

・・・・

・・でも・・ダメだ・・・

・・やっぱり・・自分の手では・・イクことは出来なかった・・・

・・女の子がイクのは・・男の子のように簡単じゃないみたい・・・

「・・うぅぅっ・・・」

・・なんだか悲しくて・・涙が出てきた・・・

・・オレ・・何やってんだろう・・・

・・純平まで汚しちゃうなんて・・オレ最低だ・・・・

・・純平が・・そんなこと・・するハズないのに・・・・

・・オレはオチンチンをギンギンにしたままベッドにもぐり込んで・・・

・・自然にオチンチンが落ちつくのを・・・

・・長い時間をかけて・・じっと待つしかなかった・・・

第１５２話　直美　不器用なともだち

若村先生が黒板を指して言っている・・・
「ここテストに出すからな！」

・・オレはそんな先生をボンヤリと眺めていた・・・昨日あんなことがあったってのに・・・勉強になんて身が入るワケがない・・・

・・それに・・昨日の夜は・・自分でするのに・・純平を思ってするなんて・・・いま考えても情けなくなる・・・
・・もう・・純平に申し訳なくて・・こんなことがあると・・メールしづらくなっちゃう・・・

・・純平はオレの恋人ってだけでなく・・・今のオレにとっては唯一の大切な男の友達なんだから・・・あんなことに使っちゃダメなんだ・・・

・・でもどうしようかな・・・オチンチン起つようになっちゃって・
・・もし学校で興奮して起っちゃったら・・・
・・まあ・・学校では・・そんなことは無いと思うけど・・・

・・体育の時は・・またガードルをはくようにした方がいいかも知れないな・・・

・・・・・

「コラ戸田！なにボ～ッとしてるんだ！」
「アテッ・・」

・・いつの間には若村先生が後ろに来てて、教科書で頭を叩かれた・・
「まだ正月気分が抜けてないんじゃないか?!」
「アハハハ・・・」
「うぅ・・」
・・もうっ・・最低だ・・・みんなには笑われるし・・・先生なんかキライだ!
・・オレの気持ちも知らないでさ・・・

授業が終ると弘子が・・・
「有希どうしたの?このごろ何か変じゃない?　今日も授業中もボ～ッとしてるし。」
「・・・・」
弘子が心配してくれるのはありがたいけど・・・今はそっとしておいてほしい・・・
・・相談できるような事なら・・弘子に相談したいところだけど・・
・オレの悩みは誰にも相談できないもん・・・
「・・ヘンじゃないよ・・・ちょっと考えごとしてただけ・・・」
「そう?　ならいいけど・・」
・・うぅ・・そんな心配そうな顔で見ないでほしい・・・相談したくなっちゃうじゃない・・・
・・でも・・こんなこと相談したら・・・オレがどんなことしたか知ったら・・・弘子はきっとオレのこと嫌いになっちゃう・・・
・・だって弘子は女の子だもん・・・お尻でしたなんて知ったら・・・引いちゃうに決まってる・・・
・・ホントは男のオレだって・・・誰かがお尻でＳＥＸしたなんて聞かされたら・・絶対に引いちゃうもん・・・

・・そんなことを・・自分がされたなんて・・・情けなくて泣きた

くなってくる・・・

今日はクラブも活動しない日だし・・・オレは部室には行かずにさっさと帰ることにした・・・今はなんだか長谷川とは会いたくない・・・
・・それにミサトちゃんとも・・・明るいミサトちゃんはいつもはオレを癒してくれるけど・・・今の汚れちゃったオレには・・あの屈託のない明るさは少し眩しすぎる・・・

もうすぐ駅だというところで、後ろから呼ぶ声がした・・・
「有希～！」
「・・ぁ・・直美・・・？」
直美は走ってオレに追いつくと・・・
「ハァハァ・・有希歩くの速いね・・なかなか追いつかなかった！」
「え？・・ずっと追いかけてきたの？」
「うん・・校門出て曲り角のあたりから・・・」
・・あんなところから？・・・どうりで息切らしてるハズだ・・・

「ハァ・・ちょっと・・ミスド寄らない・・？」
「ぅ・・うん・・いいけど・・・」
・・ホントは今日は早く帰りたいんだけどなぁ・・・でもしょうがないか・・・

オレたちはドーナツとコーヒーを持って奥の方のソファーに並んで座った・・・

「でも・・直美も今日はクラブなかったの?ずいぶん早いじゃない。」
「ウチはみんな遊びでやってるようなものだからね。誰も本気でやってないし・・レベルが違いすぎて本格的にやってる学校と試合なんて出来ないのよ。ウチのはただの羽根つきだもん!」
「そんなぁ・・」
・・まあ・・ウチの学校の運動部なんてみんな似たようなものだけど・・・
「有希は?」
「あ、ウチはお花が無い日はあまりやることがないの。それに・・今日はあまり気がのらなくて・・休んじゃった・・・」
「ふ~ん・・マジメな有希にしては珍しいね・・」
・・でも・・直美はもの事あまり深く考えないタチだから・・・こういう時は一緒にいて楽かも・・・

「あ・・そうだ・・・」
「なに?有希。」
「・・ぁ・・でも・・こんなこと聞くのヘンかも・・・」
「なによ!言ってよ、気になるじゃない!」
・・直美になら・・聞いてもいいかな・・・
「・・あのね・・直美は・・男の子と・・そのぉ・・経験あるでしょう?」
「うん、まあ・・」
「・・だったら・・あのぉ・・・・」
・・やっぱり聞きにくいなぁ・・・
「なによ、もったいぶっちゃって。」
「・・うん・・あのね・・・イク時って・・どんな感じなのかなって・・・」

「なになに?　有希もとうとうそういう事に興味が出て来たの?!」

「そ・そ・・そういうワケじゃないけど・・・ちょっと・・気になって・・・」
「いいじゃない、そんなに慌てなくても！　だいたい有希はそういう話に全然のってこないし、オクテすぎなんだから！」
「・・・・・」
・・だって・・女の子の性の話に入っていっても・・ついていけないし・・・ボロが出てもいけないから避けてたのだ・・・
「有希もやっとそういう事、知りたくなったんだね！」
「・・ぅ・・うん・・まぁ・・・」
「でもなぁ・・せっかくの乙女の夢を壊しちゃうのも悪いけど・・・そんなにイクもんじゃないわよ？」
「え？！・・そうなの？」
「レディース誌にもいろいろ書いてあるけど、本当にイク女の子なんてそんなにいないんじゃない？」
「・・そ・・そうなんだ・・・」

「男の人がよっぽど上手ならわからないけど、同年代の男の子じゃそんなテクないわよ。」
「・・じゃぁ・・直美も・・イッたことないの・・？」
「うん、せっかく有希が聞いてくれたのに残念だけど。正直そんなに気持ち良くもなかったなぁ。」
「え？　ホ・ホント？」
「男の子だって自分のことで精一杯って感じで、とても女の子を喜ばせるなんて無理なんじゃない？」
「え～・・・」
「がっがりした？」
「ぅっ・・うん・・まぁ・・」
・・直美・・イッたことないんだ・・・
・・女の子の直美もイッたことないのに・・・オレの方が先に女の

子みたいにイッちゃったなんて・・・ちょっと複雑な気分・・・

「有希がイキたいんだったら、ずっと年上のテクニシャンとするしかないんじゃない？」

「・・年上の・・・テクニシャン・・・」

・・それって・・・刈谷先生みたいな人のこと・・・？

「でもまあ、有希には無理よね。有希は最初からイクことなんか考えないで、優しい男の子にしてもらう方がいいんじゃない？」

「・・・ぅ・・うん・・・」

・・直美は・・オレがもうされちゃったなんて・・・思ってもいないだろうな・・・

・・しかも・・あんな卑怯で変態のオジサンに・・・

・・オレだって・・もしオレが本当の女の子だったら・・純平みたいな優しい男の子にしてほしかった・・・

・・でもそんなの無理だ・・・オレのアソコには・・女の子にあるものが無いんだもん・・・

「でも急にこんなこと聞くなんて、誰か気になるコでもいるの？」

「そ！・・そんな人いないわよ！」

「ホント？なんか慌ててるけど・・」

「ち・・違うって・・ホントそういうんじゃないの・・ただ・・雑誌に書いてあったから・・・」

「そっか、有希にこんなこと聞かれたからビックリしちゃったよ。でも有希ももうすぐ１７歳だもんね！」

・・直美はそう言ってオレの頭を軽くポンポンとやった・・・

「あん・・ちょっとぉ！」

・・直美ったら・・時々こんな男の子がするようなことするんだもん・・・女の子どうしでも・・こんなことされたら照れて・・ドキ

ドキしちゃう・・・

「ごめんごめん、有希って女の子のわたしから見ても、守ってあげたくなるくらい素直なんだもん。」

「え・・・」

「有希みたいな素直なコは、優しい男の子に一生守ってもらうのが一番なの！　悪い男になんかダマされちゃだめよ？　有希みたいなコは簡単に引っかかっちゃうんだから気をつけなきゃダメなんだからね！」

「・・ぅ・・うん・・・」

・・直美が・・オレのことそんな風に思ってくれてたなんて・・ちょっと嬉しいな・・・

・・もう・・ダマされちゃったかも知れないけど・・・

「でも有希に彼氏が出来たら、わたし妬けちゃうな・・・」

「え？・・なんで・・？」

・・直美は女の子なのに・・妬けるなんてヘンなの・・・

「だって有希のこと大好きなんだもん！有希を男の子になんて渡したくない～！」

「きゃっ！・・ちょっとぉ・・やめてよ直美・・・」

いきなり直美がオレに抱きついてきた・・腕が・・胸に当たってる！

（あんっ・・乳首・・感じちゃう・・・）

「！！」

・・いま・・オレのアソコがピクッってした・・！

（だ・・だめっ・・このままじゃオチンチン起っちゃうかも！）

オレは必死になって直美を突き放した・・・

「もうっ！直美すぐ抱きつくんだもん・・キライよ！」

・・オレは少し冗談っぽく・・でもキツく言ってやった・・・これ

くらい言ってやらないと直美はわからないんだ！・・・もしオチンチンが起っちゃったらどうするんだよ・・・

「ごめん！　有希が可愛すぎるのがいけないのよ。そんな小首かしげて見つめられたら誰だって抱きつきたくなるって！」

「！・・わたし・・そんなことしてないもん！」

「してるわよ！有希はそういう可愛いこと自然にやっちゃうんだから。」

「え？・・そ・・そうかなぁ・・・？」

・・オレ・・そんな可愛い仕草なんてしてるかなぁ・・・全然自覚ないんだけど・・・

「だから有希は心配なのよ。男の子の前でそんなふうに見つめたら、みんな自分に気があると勘違いされるわよ！」

「・・ま・・まさかぁ・・・」

「ホントよ！　ただでさえ有希、最近大人っぽくなっちゃって、女の色気まで感じるのに・・そんなに無防備なままじゃ危なっかしいのよ！」

「エ？！」

・・オレが・・女の色気・・？・・・まさかそんなこと・・・

・・そういえば・・直美はお正月、弘子のとこに行った時も言ってたなぁ・・・オレが大人っぽくなったって・・・

・・オレが大人っぽくて・・女の色気があるなんて・・・直美どうかしてるんじゃないだろうか・・・？

「・・直美ヘンよ・・わたしどっちかっていえば子供っぽい方だと思うわよ！」

「・・まぁ・・たしかに子供っぽいところもあるけど・・有希っていろんな面を持ってるから、そこがまた魅力的なんじゃない！」

「・・う～ん・・そうかなぁ・・・」
・・自分では全然わからない・・・だいたい自分の魅力なんて・・
自分じゃわからないものだと思う・・・
・・オレって・・そんな魅力的なコなのかなぁ・・・

「・・直美は・・どっちが好き・・？」
「ん？　どっちって？」
「わたしが・・子供っぽいのと・・大人っぽいの・・」
「あぁ、そういうこと・・う～ん・・・・・・」
・・直美・・そんなに真剣に悩まなくても・・・

「やっぱり無理よ。」
「え？」
「だってどっちも有希だもん。どっちか選ぶなんて意味ないわよ！」
「・・そう・・・」
「そうよ！　わたしだけじゃなくて、みんなそう言うと思うわよ！」
「・・みんな・・？」
・・みんな・・直美みたいに・・オレのこと思ってるのかな・・・
・・オレは・・ひとにどう思われてるのか・・良くわからない・・・
・・だってオレ・・自分のことだって・・良くわからないんだもん・・
・・

「あ！・・ごめん直美、わたしもう帰らないと・・晩ごはんの仕度しなきゃいけないし・・」
「あっ、そっか、ごめんね付き合わせちゃって。」
「ううん・・」
オレたちは席を立ってお店を出た・・・

「じゃぁね！」
「うん・・」
「有希も何があったか知らないけど元気出しなよ！」
「え？！」
・・直美はそう言うと手を振って行ってしまった・・・
・・直美・・もしかして・・わたしを元気づけようとして追いかけてきたの・・・？
・・それにしては・・なんだか良くわからなかったけど・・・直美ってちょっと変わってるから・・・
・・でも・・直美のおかげで・・ほんの少しだけど元気が出たかも！
・・・どうせ・・刈谷先生とまた会わなきゃいけないのは2週間後なんだ・・・
・・こんなことで・・いつまでも落ち込んでなんていられない・・！
・・あんな卑怯な人に・・オレの人生をめちゃくちゃにされちゃたまらない・・・
・・オレには元気づけてくれるたくさんの友達がいるし・・・
・・・優しい恋人だって・・いるんだから！

第１５３話　疑心　ウソ？本当？

今日は日曜日、久しぶりにかあさんも休みでウチにいるから何だか嬉しい。

明日は１月２５日・・・オレの誕生日。　オレもとうとう１７歳になる！

今日は一日早いけど、みんないるから、かあさんがケーキを買ってきてオレの誕生日をしてくれることになっている。

・・スゴイ楽しみ！

・・やっぱり誕生日には丸いケーキがいいなぁ・・・そしておっきいローソク１本と・・小さいローソクを７本立てて・・・

・・でもなぁ・・１７歳っていったら・・中学のころはすごく大人な感じがしたのに・・・いざ１７歳になってみると・・そんなに変わらない気がする・・・

・・それに・・オレはまだ大人の女性にはなりたいとは思わない・・・だって・・まだ女の子になって２年しか経ってないんだもん・・・オレはもう少し少女のままでいたい・・・

・・もう・・あんな事された後では・・無理かも知れないけど・・・

そろそろ下に降りてかあさんのお料理手伝おうかな・・・

“プルルル、プルルル・・・”

・・あれ？電話だ・・誰からだろう？・・あっ！もしかして長谷川かな？

携帯を見ると・・・

・・えっ？・・・刈谷・・先生・・・・

「・・もし・もし・・・？」

「ユウちゃん？　あたし！　今日これから出て来れるでしょう？」

「え？！・・・」

・・まだ・・あれから何日かしかたってないのに・・・

「・・で・・でも・・まだ2週間たってない・・・」

「あら、2週間たたないと会っちゃいけないの？」

「・・・ぃ・・ぃぇ・・そういうワケじゃ・・・」

・・そうだ・・オレは・・先生には逆らえないんだった・・・先生のいうこと聞かないと・・かあさんが・・・

「今日はこっちに仕事があったのよ。明日一番で東京に帰らなきゃいけないんだけど、ユウちゃんとお食事だけでもしようと思って。」

「ぁ・・はぃ・・・」

・・ウソだ・・・先生に限って食事だけだなんて・・ありえない・・
・

「このまえと同じイタリアンだから、そんなにかしこまった恰好じゃなくていいから。あっ、でもジーンズにトレーナーはダメよ！ユウちゃんがまたプリティ・ウーマンごっこやりたいのならそれでも良いけど！」

「！！」

・・それは絶対イヤだ・・・っていうか・・あんな高い服を買ってもらったら、隠し場所に困っちゃう！

「今日は斉木がいないから車がないの、でもこの前のレストランわかるでしょう？」

「ぁ・・はぃ・・」

・・だいたいの場所はわかるけど・・・

「それじゃ、６時に予約してるから、５分前には来なさいね。」

・・先生はそれだけ言うと一方的に切ってしまった・・・

・・・今日はオレの誕生日を家族みんなで祝ってくれるハズだったのに・・・

・・・・・

・・でも・・それよりもっとショックなのは・・・刈谷先生が福岡に来たら・・２週間たってなくても・・会わなきゃいけないって事だ・・・

・・いつ呼び出されるかわからないから・・これじゃ・・気が休ま

らない・・・

オレは下に降りると、料理をしているかあさんのうしろ姿に声をかけた・・・

「・・かあさん・・・」
「あ、有希、今日はあなたが好きなカラ揚げも作るわよ！」
「・・ぁ・・あの・・それがね・・急に佐々木さんから電話があって・・・撮影に来てくれないかって・・・」
「あら、そうなの？」
「・・うん・・・」
「何時から？」
「・・もう・・すぐに用意しないと・・・」
「それじゃ、有希が帰ってくるまで待ってるわ。」
「ぅ・・それが・・たぶん遅くなると思う・・・わたしは後でいいから・・みんな先に食べてて！」
「有希の誕生日なのに？」
「・・でも・・仕方ないよ・・お仕事だもん・・・」
「・・そうね、有希もずいぶん責任感が出てきたのね。」
そしてかあさんは・・・
「もう有希も１７歳だものね。そろそろ大人の自覚が出て来ても不思議じゃないわね。」
と嬉しそうに言った・・・
「・・・・・」
・・かあさん・・ごめん・・・

「それじゃケーキだけは有希が帰ってから切ることにしましょう。食べるのは明日でいいんだから。」

「・・ぅ・・うん・・ありがとう・・・」

・・オレはそう言うと急いで2階に上がった・・・何も知らないかあさんに・・ウソつかなきゃいけないなんて・・・

・・かあさんがウソとも知らないで喜ぶ顔をみてると・・・申し訳なくて・・悲しくて・・胸が痛くなる・・・

クローゼットを開けてオレは悩んだ・・・

・・服はどうしよう・・先生はああ言ってたけど・・やっぱりそれなりの恰好じゃなきゃ・・・

・・先生と会うためにオシャレするなんてイヤだけど・・また高い服に着替えさせられたらたまらないし・・・

・・そうだ・・蟹原さんにもらったワンピースなら・・・

・・このワンピースなら・・下着はぜったいピンクがいい！

・・お化粧は・・このあいだブティックのお姉さんがしてくれたのを真似してみようかな・・あ、でも時間が無いか・・いつものメイクでいいや・・・

・・あぁっ・・もう！・・ぜんぜん時間が足りない！！
・・先生・・女の子が準備に時間かかるの知らないのだろうか・・・

・・髪は・・今日は三つ編みしてなくて良かった・・・もし三つ編みしてたら伸ばすのに時間がかかるところだった・・・もう時間がないから可愛いカチューシャでごまかしちゃえ・・・

・・どうせ・・先生の目的は・・オレの身体なんだもん・・・

大慌てで用意すると、オレはいつもの茶色のバッグを持って出ようとした・・・だけどこの服には・・あのバッグの方がピッタリだ・・・

・・オレは急いでクローゼットの奥から、刈谷先生にもらったピンクのプラダのバッグを出して、いつものバッグから必要なものを移して部屋を出た。

・・先生に買ってもらったバッグを持って行くのは癪だけど・・このバッグ・・可愛すぎるんだもん・・・

階段を駆け降りて、急いでブーツを履く・・・

「・・かあさん、行ってきます！」
オレは無理して明るい声で言って家を出た・・・いつもの撮影の時と同じように・・・

電車で天神に着いたころには、もう時間も6時15分・・・5分前に着くには10分しかない！

・・しかたない・・・近いけどオレは駅前でタクシーを拾って、運転手さんにお店の名前を伝えた。

・・高校生にはタクシーなんて勿体無いけど・・・お店の場所がはっきり判らないからタクシーの方がいいと思った・・・かあさんにお小遣いもらったばかりだったから助かった・・・

タクシーがお店に着いた時はちょうど5分前だった・・・良かった・・やっぱり歩いて探してたら間に合わないとこだった・・・

お店に入るとウエイターの男の人が・・・

「お客様、ご予約でございますか？」

「・・あ・・あの・・刈谷先生の・・・」

「あ！　刈谷様のお連れの方でいらっしゃいますね。それではこちらへどうぞ・・」

オレはウエイターの人に案内されて、キレイなチェックのクロスが掛かったテーブルの席についた・・・先生はまだみたいだ・・・

腕を返して時計を見ると、もう6時を過ぎていた・・・これなら焦ってくることなかったかも・・・

刈谷先生がお店に来たのは６時１０分を回ったころだった・・・
「お待たせユウちゃん！」
「ぅ・・どうも・・・」
・・別に・・オレは先生に会いたかったワケじゃない・・・
「どうしたの？ご機嫌ななめね。お腹空いた？」
「！！」
・・急に呼び出されて・・機嫌がいいハズないじゃないか・・・それに・・オレはお腹が空いて機嫌が悪くなるほど子供じゃない！

「お料理の前に・・はい、お誕生日おめでとう！」
「え？！」
・・な・・なんで・・先生がオレの誕生日を・・・？
「ぁ・・ありがとう・・ございます・・・」
「開けてみて！」
「・・はぃ・・・」
オレがその細長い包みを開けると・・・
「・・あ・・・」
それはハートのチャームが付いたネックレスだった・・・キラキラ光ってるのは・・ラインストーン？・・・それとも・・・

「この前のネックレス鎖が切れちゃったから、また買ってあげるって言ってたでしょう？」
「ぁ・・」
・・そういえば・・・そんなこと言ってたけど・・・
「明日はユウちゃんの１７歳のお誕生日だし、ちょうどいいと思ったの！　どう？素敵でしょう？」
「・・はぃ・・・」
「この前のよりずっといいヤツよ！　付けてあげるわ。」

先生はオレの後ろにまわって髪の横から手を入れてきた・・・首筋

に手がふれてゾクッとした・・・

・・オレはハートのチャームを手にとってみた・・・
「どう？　それ本物のダイヤよ！」
「！！」
・・やっぱり・・・どうりで輝きが自然だと思った・・・

・・昔のオレなら・・こんなステキなネックレスをもらったら・・すごく喜んだと思う・・・

・・でも・・今はこれの代償が何なのか知っている・・・

「良く似合うわ！」
「・・ユ・・ユウは・・こんな高いのもらえません・・・」
「何いってんの？　ユウちゃんももう大人の仲間入りしたんだから、そろそろ本物を持たなきゃね。」
「・・・・・」
・・オレは・・まだ子供でいいのに・・・どうしてみんなオレを大人にしようとするんだ・・・？

お料理は相変わらずおいしかった・・・
「美味しいでしょう？ここのカルボナーラ！」
「ぁ・・はぃ・・・」

・・でも・・この後のことを思うと・・どんなにおいしいお料理も・・おいしさが半減しちゃう・・・

「・・どうしたの？　何でそんなにムッツリしてるのよ。」

「・・なんでも・・ないです・・・」
「なに？　ハッキリしないコねぇ。」
「・・・・・」
「言いたいことがあるんならハッキリ言いなさい？」
「！！・・だって・・・」
・・うぅ・・オレは先生には逆らえないのに・・・
「・・やっぱり・・いいです・・・」

「だって？どうしたの？言いなさいよ。」
「・・だって・・・」
・・うぅ・・・もう・・言ってやる！
「・・今日は・・家族みんなでわたしの誕生日してくれるハズだったのに・・・」
「あら、そうだったの？」
「・・・・・」
「それは悪いことしたわねぇ、誕生日は明日だから、今日はヒマだと思ったのよ。」
「・・普通の日は・・かあさんがお仕事で忙しいから・・・最近は日曜日に家にいることだって珍しいのに・・・」
「だったら電話した時にそう言えばいいじゃない。そうだと知ってたらあたしだって誘わなかったわよ？」
「・・そんな・・先生の誘いを断るなんて・・出来ないじゃないですか・・・」
「どうして？」
「・・どうしてって・・・そんなことして・・・かあさんの仕事がなくなっちゃったら・・・」

「なぁんだ。ユウちゃんったら、そんなこと心配してたの？」
「！！・・そんなことって・・・！」
「あたしそんなことしないわよ。」

「・・・・・」
「あたしそんなヒドイ人じゃないわよ?そんな力もないし。」
「!・・だって・・先生いったじゃないですか!　言うことときかないと・・かあさんの仕事がなくなっちゃうって!」
「そんなのウソに決まってるじゃない。」
「・・ゥ・・ウソ?!」
「だって、ああでも言わないとユウちゃん来てくれなかったでしょう?」
「・・それは・・そうだけど・・・」
「だからああ言っただけで、本当にそんなことするはず無いじゃない!」
「・・・・!」
・・ほんとうだろうか・・・刈谷先生が言うことなんて信用できない気がする・・・

「・・じゃぁ・・今日・・断っても良かったんですか・・・?」
「そうね。ユウちゃんとお食事できないのは淋しいけど、家族でお誕生日を祝うのなら、あたしも我慢しなきゃね。」
「・・・・・」
・・そ・・そんなぁ・・・

・・オレは・・なにが何だかわからなくなってしまった・・・先生は・・ほんとうのことを言ってるんだろうか・・・?

・・でも・・それじゃぁ・・・このお食事の後は・・・?

デザートを食べ終ると刈谷先生は言った・・・
「今日はごめんなさいね。家族でお誕生日祝うなんて知らなかったから。」
「・・ぃ・・いぇ・・・」
「お母様にもあたしが謝ってたって言っておいてね。」
「ぁ・・はぃ・・・」
・・どうせ・・かあさんは先生と会ったなんて・・知らないけど・・
・

・・先生と会うことなんて・・・かあさんに言えるハズない・・・
「あ、ちょっと！　タクシー呼んでくださる？」
！・・やっぱり・・・そのタクシーでオレも・・・
「今日は車が無いから、ユウちゃんもタクシーで帰ってね。」
そう言って先生はオレに1万円を渡そうとした！
「ぇ・・あの・・今日は・・しないんですか・・・？」
「あら、電話で言わなかったかしら？　あたし明日の朝イチで東京に戻らなきゃいけないの。ごめんねしてあげられなくて。」
「！！！」
・・オ・・オレは・・決してあんな事してほしくない！

「またこんどね！」
そう言ってオレの手に1万円をにぎらせようとする・・・
「・・ぃ・・いぇ・・いりません！・・電車で帰るから！」
「いいのよ、とっておいて。それにもう暗いからおウチまでタクシーで帰りなさい。」
「・・いぇ・・家まで帰っても・・たぶんこんなにお金かからないと思います！」
「いいからいいから、いくらかかるかハッキリわからないでしょう

？」

「・・ぅ・・それは・・・」

・・たしかに・・オレは家までタクシーでいくらかかるか知らないけど・・・

「・・じゃぁ・・こんど・・お釣は返します・・必ず・・・」

「まあそれでもいいわよ、今度ね！」

「・・ぅ・・・」

・・これじゃ・・また会う約束してるようなものじゃないか・・・

・・でも・・どうせ・・先生とは会わなきゃいけないんだ・・・

「今日も急だったのに美味しいお料理ありがとう。」

「いえ、先生なら何時いらっしゃっても最高のイタリアンをご用意いたします。」

先生はお店の偉い人やシェフたちが並んで頭を下げる前でタクシーに乗り込んだ・・・

「駅前の全空日ホテルまでお願い。」

先生は運転手に行き先を告げると・・後ろの方にいたオレを手招きした・・・

オレが慌てて駆け寄ると・・・

「それじゃね、ユウちゃん。ちゃんとおウチまでタクシーで帰るのよ。」

「・・はぃ。」

「今日も楽しかったわ、またね。」

こう言うとドアが閉まりタクシーは走っていった・・・

先生が乗ったタクシーが見えなくなると・・・
「・・ぁ・・あの・・わたし帰ります・・今日はありがとうございました・・・」
「どういたしまして、もうじきお嬢様のタクシーも来ますから。」
「え?!・・そうなんですか・・・?」
・・オレはやっぱり電車で帰ろうと思ってたのに・・これじゃタクシーで帰らなきゃいけない・・・
・・やっぱりウチまでタクシーで帰ろうかな・・・早く帰った方がかあさんも安心するだろうし・・・
タクシーはすぐに来て、オレまでお店の人たちに見送られたしまった・・・
一緒に食事した小娘のオレにまでお店の人が気を使うなんて・・・
刈谷先生ってよほどのお得意様なんだろうなぁ・・・それとも有名な人だからかな・・・?
オレはタクシーで家に向いながら考えていた・・・
・・先生が言ったことって・・本当なのかな・・・
・・かあさんの仕事のことはウソだったなんて・・・
・・でも・・オレには・・先生が言ったことが本当かどうか・・試してみる勇気なんてない・・・

・・かあさんのお仕事を賭ける勇気なんて・・・

・・でも・・先生はウソついてないのかも・・・

・・だって・・今日は・・本当にお食事だけで・・オレに何もしなかった・・・

第１５４話　氷解　本当のオレの気持ち・自粛版（前半）

タクシーの中でもオレはずっと先生のことを考えていた・・・刈谷先生はそんなに悪い人ではないのだろうか・・・

・・もちろん先生がオレにヒドイことをしたのは許せない・・・でも・・最初に会った時の厳しいけど・・優しい・・そんな印象は今でも心に残っている・・・

・・それに・・オレはあんなことをされて・・・気持ち良くなってしまった・・・

・・鏡にうつったアノときのオレの姿は・・・まるでＡＶに出てくる女の子のようだった・・・

・・自分が・・あんなに・・エッチなコだったなんて・・知らなかった・・・

・・オレは今まで生きてきた中で・・・あんなに激しい感覚を感じたことは無かった・・・

・・考えてみればオレは女の子になって・・嬉しいことの方が多かった気がするけど・・・女性ホルモンを打って・・タマを取ってしまい・・男の子の時のアノ気持ちいい快感が無くなってしまったのだけが・・ゆいいつ女になって淋しいと感じることだった・・・

・・女の子だって・・なんだかモヤモヤする時もある・・・

・・ときどき・・無性に男の子の頃が懐かしくなるのは・・そんな時だ・・・

・・でも・・もう男の子のような快感は・・女の子になったオレには無理なのだと思っていた・・・

・・だけど・・・・

・・女の子のように・・イッた時の感覚は・・・“快感”なんて言葉では・・とても表しきれなかった・・・

・・男の子の時の・・オナニーなんてメじゃない・・・

・・オレは・・刈谷先生がいなくても・・・あんな感覚を知ることが出来ただろうか・・・？

・・それとも・・先生がいなくても・・誰か別のひとに・・・・？

結局オレはそのままウチまでタクシーで帰ってきた・・・おかげで3千円近くかかってしまった・・・

オレは玄関のインターホンを押そうとして指を止めた・・・やっぱり自分で鍵を空けて、こっそりオレの部屋へ直行しよう・・・たぶん気づかないと思うけど・・この高いバッグを見られて面倒なことになったらいけないから・・・

“カチャ”
鍵の開く音にドキッとした・・・
こういう時の鍵を開ける音って・・やたら大きく感じる・・・

玄関でブーツを脱いで・・・こっそり2階のオレの部屋へ上がろうとすると・・・
「有希　帰ってきたの？」
・・か・・かあさんだ・・・
「ぅ・・うん・・思ったより・・早く終ったかな・・・」

かあさんは玄関まで来て・・・
「有希、ちょっと来なさい。」
・・・？・・・
「ぁ・・うん・・あのぉ・・着替えてからでいいでしょう？」
「いいから、そのまま来なさい！」
「・・ぁ・・はぃ・・・」
？？・・・かあさん・・なんか・・怒ってる・・・？

オレはコートを脱ぎながらリビングに入ると、ソファーにバッグを置いて、その上にコートをかけた・・このバッグ可愛いのは良いんだけど・・目立つからなぁ・・・

＞ｉ１８６４２―１２４９＜

「な・・なに？　かあさん・・・」
「有希、あなた今日どこに行ってたの？」
「ぇ？・・だ・・だから・・ＪＩＮＯＮの撮影で・・・」
「さっき佐々木さんから電話があったわよ。」
「え？！」

・・さ・・佐々木さんから電話?!・・ど・・どうして・・・・・

「・・ぇ・・えっと・・佐々木さん・・何て?」
「有希が元気にしてるか心配してかけてきて下さったのよ。」
「・・そう・・・ぁ・・あの・・今日は佐々木さん・・編集部にいなかったから・・会わなかったの・・だからかな・・?」
するとかあさんはコワイ顔になって・・・
「あなた去年から撮影は休んでるらしいじゃない。」
「ぇ!・・・ぁ・・あの・・・」
・・うぅ・・そんな話までしたのか・・・これじゃ誤魔化しようがない・・・

「麻衣に聞いたら、今年に入ってからも撮影で遅くなったことがあるって言ってたわよ? あなたわたしたちに隠れて何やってるの?!」
・・か・・隠れてって・・・オレだって好きでコソコソやってたワケじゃないのに・・・
「・・それに・・有希、そのバッグどうしたの?」
「え?!・・あ・・コ・・コレ?」
オレはコートの下のバッグを引っ張りだしながら、手の平でブランドのマークを隠した・・・
「・・コレね・・このまえ・・かあさんにもらったお金で買ったの・・・ご・・ごめんなさい・・無駄使いしちゃったかな・・・だって・・あんまり可愛かったから・・ねっ? 可愛いでしょう・・・?」

「そのバッグ“プラダ”よね? かあさんそんなに高いバッグ買えるほど、お金渡してないでしょう?」
・・マズイ!・・バレてた・・・
「・・・ぇ・・ぁ・・あの・・かあさんにもらったお金・・少しづつためてたから・・・」

「あなたがためてる訳ないでしょう？　全部お洋服に使ってるじゃない！」
「うっ・・・」
・・そうだよなぁ・・オレがお金ためるの苦手なのはかあさんも知ってるもん・・・

「どうしたの、そのバッグ！　正直に言いなさい！！」
「・・ぅっ・・も・・もらった・・・」
「貰らった？　だれに？！」
「・・刈谷・・先生・・・」
「刈谷先生に？！」
・・かあさんは先生の名前を聞くとものすごく驚いた・・・
「・・いつ貰ったの？」
「えっとぉ・・冬休みの・・最後の日・・・」
「あなた・・去年お食事に行った後も先生と会ってたの？」
「・・ぁ・・うん・・・」
「どうして・・そういうことかあさんに言わないの！」
「・・だって・・・」
「かあさんまた刈谷先生に会うこともあるんだからね、そういう事はちゃんと知っておかないとお礼言えないでしょう？」
「・・・・・」
・・オレだって・・言えるもんなら言いたかったけど・・・

「それで？　先生におねだりして買って貰ったのね？」
「！・・ち・・違うよ！　わたしおねだりなんかしてないもん！！」
「嘘言わないの！おねだりもしないのに先生がそんな高い物買って下さる訳ないでしょう！」
「・・ぅ・・ウソじゃないもん！　わたしはいらないって言ったけど・・無理矢理買ってくれたんだもん！」
「有希！！　なんでかあさんにそんな嘘つくの！」

「・・そ・・そんなぁ・・・」
・・も・・もとはと言えば・・・先生と会ってるのは・・かあさんのためなのに・・・
・・それなのに・・なんでオレが怒られなきゃいけないんだ！
「・・かあさん・・わたしのこと信じてくれないんだ・・・？」
「そんな話、信じられる訳ないでしょう？」
「・・・・」
・・なんだよ・・・オレは・・かあさんのために・・あんな事されて・・すごく辛くても我慢したのに・・・
・・オレの気持ちも知らないで・・・
・・オレは何だか無性に腹が立った・・・かあさんのためなのに・・そのかあさん本人に怒られるなんて・・・割に合わない・・・
・・こんなのどう考えたってオカシイ！
「・・ヒドイよ・・かあさん・・何にも知らないクセに・・・」
「あなたが言わないからでしょう？」
・・・・！
「・・もういいよ・・・かあさんなんか大嫌いだ！！」
オレは吐き捨てるように言うと、バッグを持って玄関へ走った・・・
「有希！」
オレを呼ぶかあさんの声も・・もうオレの耳には届かなかった・・・

・・気がつくと・・オレは片手にバッグ・・もう片方の手にはブーツを持って、タイツのまま走っていた・・・

・・止まって・・良く見るとタイツはもう穴が開いてボロボロだ・・
・

（うぅ・・足が冷たい・・・）
オレは急いでタイツに付いた汚れをはらうと・・手に持っていたブーツを履いた・・・

・・自分でも知らないあいだに駅まで来ていた・・・

（・・寒い・・・）
・・なんでバッグだけで・・コートを持って来なかったんだろう・・
・蟹原さんのワンピースだけじゃ・・凍えてしまいそうだ・・・

・・・・・・

・・これから・・どうしよう・・・

・・もうウチには帰れないし・・帰りたくない・・・

・・レナのとこは・・かあさんがまっ先に電話するだろうからダメだ・・・

・・長谷川のウチはこの近くだけど・・・あそこに行っても・・すぐに連れ戻されてしまうだろう・・・
・・長谷川のお母さんがウチに電話するだろうから・・すぐバレてしまう・・・

・・弘子のウチは・・もうバスがないし・・・千里も・・直美も・・

やっぱりダメだ・・・みんなに迷惑かけられない・・・

・・大森先輩？・・・先輩はいつでも来ていいって言ってたけど・・
・こんな夜中じゃやっぱり迷惑だろうし・・・夜中に行ったりしたら・・おウチの人が心配してウチに連絡すると思う・・・

・・どこか行けるところは・・・・

・・・・・

・・もう・・オレには・・行くとこがない・・・

・・どこに行けばいいのか・・思いつかない・・・

・・・・・

・・でも・・あそこなら・・・

・・・・

・・オレはバッグから携帯を出して電話した・・・バッグだけでも持ってきて良かった・・・お金もそんなに多くないけど・・・タクシーのお釣りもあるし・・・

“プルルル・・プルルル・・プルルル・・”
呼び出し音が永遠にも感じる・・・なかなか出てくれない・・・もし繋がらなかったら・・・オレが不安になってきた時！

“もしもし、ユウちゃん？どうしたの？”
「・・・！」
“ユウちゃん？”
「・・うぅぅ・・・」
・・オレは・・ホッとした途端・・涙が溢れだした・・・
「・・せ・・せんせい・・・」
・・まさか・・刈谷先生の声を聞いてホッとするなんて・・・
“？・・どうしたの？泣いてるの？”
「・・せんせい・・・せんせいのとこ・・・行っちゃダメですか・・・」
“え？！これから？　ダメってことは・・ないけど・・・”
・・長い沈黙・・・オレはまた不安になってくる・・・
“・・さっきも言ったでしょう？　あたし明日早いの・・・”
「・・や・・やっぱり・・ダメですよね・・・ご・・ごめんなさい・・・」
・・オレが携帯を切ろうとすると・・・
“待ってユウちゃん！”
「・・・・・」
“いいわよ、来なさい。”
「ぇ・・でも・・めいわくじゃ・・・」
“全然迷惑じゃないわよ！　ユウちゃん今どこにいるの？”
「・・春日原〈かすがばる〉の・・駅・・・」
“そこにタクシー停まってる？”
「・・うん・・・」
“そう、それじゃタクシーで来なさい。お金はある？博多駅のところだけど”
「・・はぃ・・たぶん・・・」

“そう、それじゃ今すぐにタクシーに乗って、博多駅前の全空日ホテルまで来なさい。あたしロビーで待っててあげるから、もしお金が足りなくても心配いらないからね。わかった？”

「・・はぃ・・・」

・・携帯を切ると・・また急に不安が込み上げてきた・・・

・・オレ・・なんで刈谷先生に電話しちゃったんだろう・・・

・・先生のところに行ったら・・また何かエッチなこと・・されるかも知れないのに・・・

・・でも・・それでもいい・・・かあさんのいる家に帰るよりは・・

・

・・・・・

・・とにかく・・このままこんなところにいたら・・凍えて死んでしまいそう・・・

オレが駅前に数台停まっている先頭のタクシーに近づくと、運転手さんが気づいてタクシーのドアを開けてくれた・・・

「お客さんどこまで？」

「・・ぁ・・あの・・博多駅前の・・全空日ホテルまで・・・」

オレがそう言うと、タクシーは勢い良く走りだした・・・

「お客さん、そんな恰好で寒くないの？」

「・・・・・」

・・寒いに決まってる・・・この服は可愛いけど・・・生地はペラペラで・・防寒にはほとんど意味がない・・・

「高校生？ホテルに親御さんがいるの？」

「・・・ぁ・・はぃ・・・」

・・もうっ・・オレに話かけないでほしいのに・・・

「お客さん、目の下黒いの付いてるよ！」

「え？・・あっ・・す・・すみません・・・」

・・涙でマスカラが流れてたのか・・・オレは慌てて化粧ポーチからファンデーションを取り出してフタをあけると、フタの裏に付いた鏡で見ながらティッシュで流れたマスカラをそっと拭きとった・・

・

・・運転手さんに指摘されるなんて・・・

・・恥ずかしくて・・オレはその後ずっとうつむいていた・・・

・・オレが泣いてたの・・・バレちゃったかも・・・

・・こんな夜中にオレみたいな女の子がひとりで乗るのが珍しいのか・・運転手さんは何かと話しかけてくる・・・

・・早くホテルに着いてほしかった・・・

・・オレは大人の人みたいに・・運転手さんと上手におしゃべりなんて出来ないんだから・・・

タクシーが大きなホテルの前に停まる・・・

オレは運転手さんにお金をはらってタクシーを降りた・・・お金が足りて良かった・・・

・・ホテルは立派で大きかった・・・もちろんラブホテルなんかじゃない・・・ちゃんとしたホテルだ・・・

・・オレはホテルなんか入ったことがない・・・緊張する・・・

・・それに・・こんな薄着の高校生が・・夜中に1人で入ったら・・なんか・・怪しまれないだろうか・・・？

・・オレは恐る恐る重いドアを開けて中に入った・・・

！！・・ホテルの人と目が合ってしまった・・・

・・どうしようかとオロオロしていると・・・

「ユウちゃん！」

声の方を見るとロビーのソファーに先生の姿があった・・・

「・・せんせい！」

先生はオレのところにくると・・・

「どうしたの、こんな恰好で・・コートは？」

「・・うぅ・・忘れちゃった・・・」

「お母様には言って来たの？」

「・・・・・」
・・オレはだまって首を振った・・・
「・・もしかして・・・家出？」
「！！」

・・・オレ・・家出しちゃったのか・・？

・・たしかに・・この状況は・・家出かも・・・

・・それじゃぁ・・オレはもう・・一生おウチに帰れないんだろうか・・・？

「ふふっ・・でも家出にしては軽装ね・・バッグひとつだし？」
「ぁ・・」
「まあいいわ、とにかく部屋に行きましょう。話はそれからね！」
「・・・・・」
「さぁ。」
・・刈谷先生はそう言ってオレの肩を抱き寄せた・・・

「あら、冷たい！寒かったでしょう？」
先生は抱いたオレの肩から腕にかけて手のひらでゴシゴシ擦った・・・
「・・・・」
・・オレは・・無性に悲しくて・・今にも泣いちゃいそう・・・

・・オレは先生に肩を抱かれてまま・・エレベーターに乗って上に向った・・・

ホテルの部屋は落ちついた雰囲気だった・・・もっともラブホテルと比べてだけど・・・

・・だって・・オレは修学旅行の時、大坂で泊まったホテル以外で・・ホテルなんか泊まったことないし・・・

・・あそこと比べたら・・はるかにきれいで大きな部屋だ・・・窓から博多の街が一望できる・・・

「それで？どうして家出なんかしたの？」

「・・それは・・・」

・・先生のせいだなんて言ったら・・怒るかな・・・

「大丈夫よ。どんな理由でも出て行けなんて言わないから。」

「・・わたし・・先生と会ってたのに・・雑誌の撮影だってウソついてたの・・・」

「あらまあ。」

「・・そしたら・・今日・・先生とお食事してる間に・・編集長からかあさんに電話があって・・・」

「それでバレちゃったの？」

「・・うん・・・」

「何でお母様に黙ってたの？」

「！！・・そんな・・だって・・先生とはしょっちゅう会わなきゃいけないのに・・何で会うのか聞かれたら・・どうしたらいいの？・・・エッチな事してるのに・・・」

「もしかしてその事も知られちゃったの？」

「ううん・・・」

オレは慌てて否定した・・・そんなのかあさんに知られたら・・オレ自殺しちゃうと思う・・・

「じゃぁ、あたしと会ったことで怒られて、家出して来たってわけ？」
「・・ううん・・・」
・・それだけなら・・オレも家を飛び出したかどうかわからない・・
・
「・・かあさん・・このバッグ・・わたしが先生におねだりしたんだろうって・・・」
「・・・・・」
「・・わたし・・おねだりなんて・・してないのに・・・」
「・・・・・」
「・・かあさん・・わたしが言うこと・・信じてくれないの・・・」
・・オレは・・かあさんのためを思って・・黙ってたのに・・・

「それじゃ、やっぱり家出の原因はあたしにもあるってことね？」
「・・そ・・それは・・・」
・・オレは思わず口ごもってしまった・・・
・・どうしよう・・先生まで怒らせたら・・・オレ行くとこ無くなっちゃう・・・

「わかったわ、あたしがお母様に電話して謝ってあげる。」
「え？！」
「それでいいでしょう？　バッグもあたしから買ってあげたって説明するから。」
「・・・・・」
・・でも・・かあさん・・先生が言うこと信じてくれるかなぁ・・・？

・・刈谷先生がかあさんに電話をかけだすと・・オレはいたたま

れない気持ちになってきた・・・

「あ、戸田さん？　あたし刈谷だけど・・・実はね、ユウちゃんがここに来てるのよ。」

「！！」

・・いきなりオレのことを言われてドキッ！とした・・鼓動が激しくなる・・・

「あ、いいのよ心配しないで、全然迷惑じゃないから・・・大丈夫よ！向かえに来なくても・・・」

・・え？・・ここまでかあさんが来るかもしれないなんて考えもしなかった・・・

「あたしのせいでケンカになっちゃったみたいでごめんなさいね！　バッグはあたしが勝手に買ってあげたのよ・・・そうそう本当なの・・・ユウちゃんはいらないって言ったんだけどね。　つい買ってあげたくなっちゃったのよ。だってユウちゃんとお食事するの楽しいんですもの！」

・・ホントだろうか・・・オレとの食事が楽しいなんて・・・

「でも高校生には少し高級すぎたかも知れないわね。あたし女子高生の知り合いなんていないから、良くわからなかったのよ。」

・・そうだよ・・こんなバッグ・・可愛いけど・・高校生には高すぎだ・・・

「ユウちゃんはとっても良いコよ。お淑やかだし、礼儀正しいし・・・ぜんぜん！我がままなんて言ってないわ・・・戸田さん心配しすぎよ！ユウちゃんももう大人なんだから・・・そうよ、もう１７歳になるんですものね！」

・・・なんか・・・かあさん・・先生になだめられてるんだろうか・・・？

「だからね、今日はユウちゃんはここに泊めるから・・・そうそう、今日はお互い気持ちもたかぶってるでしょうからね、あした冷静になってから話してごらんなさい？　そしたらきっと解り合えると思うわよ。だってユウちゃんは本当にお母様のことが大好きなんですもの！」

！・・そんなこと・・・かあさんに言っちゃって・・オレどんな顔してかあさんに会えばいいんだろう・・・

「ただ、明日あたしは朝イチで東京に戻らなきゃいけないから、ユウちゃんひとりで帰すけど大丈夫よね？・・・あまりユウちゃんを叱らないであげてね、悪いのはあたしなんだから・・・そう・・・わかったわ・・・それじゃね、おやすみなさい。」

・・・終ったみたいだ・・・

「・・せ・・先生・・・かあさん・・なんて・・・？」

「大丈夫よ、わかって下さったわ。ユウちゃんがおウチに帰っても叱らないように言ってあげたから。」

「・・ぁ・・ありがとうございます・・先生・・・」

「いいのよ、あたしにも原因があるんだから。」

「・・・・・」

・・たしかに・・そうだけど・・・・

「さあ、今日はここに泊まるんだから、まずお風呂に入って温まって来なさい。」

「・・ぁ・・・」

「それと？　ユウちゃん何か忘れてない？」

「え？」

「あたしのことは何て呼ぶんだっけ？」

「ぁ・・おじさま・・・」
「それで?あなたは?」
「ュ・・ユウ・・・」
「そう!　あなたはユウ、ユウコちゃんなの。」
・・!!・・・

・・なんか・・・この呼び方・・イヤだったハズなのに・・・今日は不思議とそうでもない・・・

「あたしといる時は、あなたは女の子になっていいのよ。ユウコちゃんなんだから。」
「・・ュ・・ユウコ・・・?」
「そうよ。ユウコちゃん!」
(ぁっ!)
・・そう呼ばれたとたん・・・オレの股間で何かがピクッって動いた気がした・・・

・・いったい・・なんなんだろう・・・オチンチンじゃないみたいだけど・・・

お風呂はラブホテルのみたいに大きくない・・・普通のお風呂だった・・・
・・お湯に浸かると・・・よほど身体が冷えてたみたいで手足がジンジンする・・・

・・やっぱり・・お風呂から上がると・・・またエッチなことされるんだろうか・・・?

・・先生のことだ・・たぶんすると思う・・・

・・でも・・・それはここに来る時に覚悟したハズだ・・・

・・でなければ・・・オレは先生のところには来なかった・・・

・・そういえば・・・オレ・・家を飛び出す時・・・かあさんのこと大嫌いだって言っちゃった・・・

・・オレ・・本当はそんなこと思ってないのに・・・

・・かあさん・・オレのこと・・・許してくれるだろうか・・・？

お風呂から上がると、脱衣所にはパジャマが置いてあった・・・

ホテルのパジャマみたいだ・・・

・・オレはパンツだけをはいて・・ブラはつけずにパジャマを着た・・・

・・どうせエッチなことされるんだから・・下着は必要ない・・・

・・本物の女の子なら・・パンツもいらないかも知れないけど・・・

オレにはオチンチンが付いてるから・・どうせ脱がされるにしても・・パンツがないと落ちつかない・・・

・・お風呂に入ったのに・・一度はいたパンツをまたはくのはどうかと思うけど・・・このさい仕方がない・・・こんどもし・・また家出することがあったら・・下着は忘れないようにしなきゃ・・・

・・でも・・オレは・・家出なんてしたくない・・・

・・・・・

・・だけど・・何かヘンな感じだ・・・お湯に浸かったのに・・・
ぜんぜん身体が温まった気がしない・・・

・・身体の中から・・ジワジワ冷えが戻ってくる感じ・・・

・・寒い・・・

パジャマで部屋に戻ると、先生もパジャマになっていた・・・光沢があって・・なんか高級そうなパジャマ・・・シルクかなぁ・・・？

「ユウちゃん、お風呂に入って落ちついた？」

「・・・・」

・・落ちついたかどうか良くわからなかったけど・・オレは黙ってうなずいた・・・

「あら、まだ心配そうな顔してるわね。何か不安な事でもあるの？」

・・先生は優しげに問いかける・・・

・・なんで・・今日の先生はこんなにやさしいの？・・・そんなにやさしくされたら・・オレ・・・・

「・・うぅぅ・・・」

・・いままで抑えていた感情があふれて・・涙がボロボロこぼれてきた・・・

「あらあら。」

・・先生はオレの近くに来ると、うつむいて泣きじゃくるオレをそっと抱き寄せた・・・

「・・・・！」

・・オレ・・どうかしてるんだろうか・・・先生に抱かれて・・こんなにホッとするなんて・・・

「どうしたの？　ユウちゃん・・」

「・・うぅっ・・・おじさま・・・ユウ・・かあさんに・・ヒドイこと言っちゃった・・・」

「なんて言ったの？」

「・・かあさんなんか・・大嫌いだって・・・」

「ふふっ・・大丈夫よ。本気じゃないことお母様だってちゃんと解ってるわ。」

「・・うぐっ・・ほ・・ほんと？」

「本当よ。母親ってそういうものなの！」

「・・うっ・・あぁぁん・・・」

・・オレはもうこらえきれずに・・・先生の胸で思いきり泣いていた・・・

「大丈夫、大丈夫・・ユウちゃんは本当に素直なコなのね。」

・・先生はそう言って・・オレの頭をなでてくれた・・・

「・・ぉ・・おじさま・・・」

「なぁに？」

・・オレ・・なんてこと考えてんだ・・でも止まらない・・・

「・・もっと・・ギュッてして・・・」

「こう？」

・・先生は・・オレの背中に回した手で・・オレを強く抱きしめた・・

「・・ぁ・・・」

・・なんだか・・こうしていると・・不思議に不安が和らいでいく

ようだ・・・

・・オレ・・本当に・・女の子みたいだ・・・

・・このまま・・女の子になっちゃって・・いいのだろうか・・・

・・ユウコって・・・どんなコなんだろう・・・

「涙は止まった？」

「・・ぅ・・うん・・・」

・・泣くだけ泣いたら・・少し落ちついた気がする・・・

「それじゃぁ、もう遅いから寝ましょうか？」

「！！」

「ユウちゃんはベッドで寝なさい。あたしはこっちのソファーで寝るから。」

「え？」

・・それじゃ・・・エッチなこと・・しないの？

先生はソファーに毛布を持ってきて寝る準備をしている・・・

「・・そ・・そんなの悪いです・・ユウがソファーでいいですから・・おじさまはベッドで寝てください！」

「いいのよ！　あたし忙しいときなんかは良く事務所のソファーで寝るんだから。」

「で・・でも・・明日朝早いのに・・・疲れちゃったら・・・」

「そんなこと気にしなくていいの。ユウちゃんこそ今日はベッドで

グッスリ眠って元気にならなきゃ、ね！」

「・・ぅぅ・・はぃ・・・」

・・けっきょく先生に押し切られて・・オレがベッドで寝ることになってしまった・・・

・・電気を消したホテルの暗い部屋・・・カベの小さな間接照明だけがオレンジ色に灯っている・・・

・・オレはベッドの中で身体を丸め、頭までうずめるようにして毛布にくるまっていた・・・

・・部屋は温かいハズなのに・・・寒くてたまらない・・・

・・なんだか・・・まるで身体の中に・・・氷のかたまりでもあるみたい・・・

・・こんな状態では・・とても眠れそうにない・・・

・・刈谷先生は・・もう眠っただろうか・・・・

オレはそっとベッドを出て・・ソファーで寝ている先生の近くに行ってみた・・・

「・・ユウちゃん？　どうしたの？」

・・・・

「・・おじさま・・・ユウ・・寒くて眠れないの・・・」

「暖房の温度もう少し上げましょうか。」

・・・・・

「・・おじさまも・・・一緒に・・ベッドで・・・・・」
「あら、ひとりじゃ淋しいの？　ずいぶん甘えん坊さんになっちゃったわねぇ。」
「・・・・・」
「いいけど・・・でもひとつのベッドで寝ちゃったら、あたしユウちゃんのこと我慢出来なくなっちゃうかも知れないわよ？」

「・・・・いいょ・・・」
！！・・オレは自分の口から出た言葉に驚いた・・・オ・・オレ・・なんてことを！
「・・もしかして・・ユウちゃん今日してほしかったの？」
「・・そ！・・そんなんじゃ・・ないけど・・・」
「いいわよ、そんなに恥ずかしがらなくて。」
「で・・でも・・やっぱいいです・・・おじさま・・明日早いんでしょう・・・？」
・・急にドキドキしてきた・・・オレ・・ほんとに・・してほしいって思ってるのだろうか・・・？

「ユウちゃんがやっとその気になってくれたんですもの、あたし今日は寝なくてもいいわよ！」
「え！」
「あ、でも困ったわね・・・今日はローション持ってきてなかったわ。」
「！！」
・・そ・・そんなぁ・・・ローションがなくっちゃ入らない・・・・・
？！・・・オレ・・がっかりしてる？・・・やっぱりオレ・・エッチなことしてほしいって・・思ってるんだ・・・！

「そうだわ！」

・・先生は何かを思いついたようで、自分のバッグの中をガサゴソ探している・・・
「あった！コレよ。」
「？？」
それはクリーム色のチューブのオ○ナイン軟膏だった・・・
「お花扱ってると手をケガしちゃう時があるから、あたし絆創膏とオ○ナイン軟膏はいつも持ち歩いてるの。」
・・それを・・・どうするんだろう・・・？
「昔いいローションが無かった時代はこのオ○ナイン軟膏をローション代わりに使ったものなのよ！　懐かしいわぁ。」
「そ・・それを？！」
「結構使えるのよ！　まあ、後味が少しローションよりもベタベタするんだけど・・・」
「・・・・・」
・・そんなの使って・・大丈夫なのだろうか・・・？
「お尻が切れちゃった時にもいいわよ、痔にも効くって宣伝してたでしょう？」
「・・・・・」
・・そうだっけ・・・？

オレはでベッドであおむけになった・・・先生がオレのパジャマのボタンを外していく・・・

「ぁ・・浣腸は・・・」
「ユウちゃん今ウンチ出たい？」
「・・ううん・・」
「だったら大丈夫、直腸にはウンチは詰まってないはずだから。」
「・・・・・」

「それに、ユウちゃんのウンチなら全然汚くないわ！」
「！！」
・・そ・・そんなぁ・・・ウンチは汚いに決まってるのに・・・
・・オレはついにパジャマのズボンも・・パンツも脱がされた・・・
・・先生も自分のパジャマを脱ぎすてる・・・
・・刈谷先生って・・見た目はオバサンみたいだけど・・・脱ぐとけっこう筋肉質だ・・・
・・ブリーフ姿を見ると・・なんだかドキドキする・・・
・
「ユウちゃん、足を開いて・・・」
・・オレは何度も躊躇しながら・・ゆっくりと足をひらいていく・・
・
・・恥ずかしくて・・・とても目なんか開けてられないから・・固く目をつむったまま・・・・
・・オレが・・・自分から・・先生を受け入れるなんて・・・・
・・まさか・・こんな日が来るなんて・・・考えたこともなかった・
・・・

～～～　これより自粛、以下『オレは女子高生・完全版』へ～～～

ｈｔｔｐ：／／ｎｏｖｅｌ１８．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ４４４８ｐ／

第１５５話　１７歳　オレって大人？

目が覚めた時には、もう朝９時になっていた・・・

ベッドには刈谷先生もいなくて・・テーブルにメモと、カードキーの下には２万円が置いてあった・・・

“ユウちゃん　ちゃんと家に帰りなさいね。　お母様もきっと待ってくれてるわよ。　今日も寒いからおウチまでのタクシー代置いておくわね。　あたしのコート置いていくから、カゼひかないようにして帰りなさい。　フロントにはあたしから言っておくから、ユウちゃんは帰る時にフロントにキーを返すだけでいいから。　それじゃまたね。”

・・先生・・・

・・昨日・・イッた後のことは良く憶えていない・・・でもオレの身体には・・まだ昨日の余韻が残っている・・・

・・なんだか身体中がだるくて・・・起きてすぐはヒザがガクガクして・・危うく倒れそうになった・・・

・・そういえば・・・昔・・オナニーをおぼえたてのころ・・・続けてやった時こんな感じだったかも・・・

・・・でも・・・決してイヤな感じじゃない・・・

・・先生はかあさんが待ってるって書いてるけど・・・オレは・・
家に帰っても・・かあさんは待ってないと思う・・ウチに帰る頃は
１０時ごろだろうから・・かあさんがいるハズがない・・・お仕事
で忙しいんだもん・・・

オレは忘れものが無いか確かめてから・・先生が置いていってく
れたトレンチコートを着て・・ホテルの部屋を出た・・・

・・歩くと・・昨日先生が言ってたように・・ローションと違って
お尻の中がニチャニチャする・・・ちょっと気持ち悪いかも・・・
何くわぬ風を装ってフロントでカードキーを返すと・・・なんか・・
オレもちょっぴり大人になったような気がした・・・

博多駅の前からタクシーに乗ってウチまで帰ってきた・・・カギ
を開けて入ろうとすると・・・

「あれ?・・閉まってる・・・」
もう一度カギを回すと、今度はちゃんと開いた・・・もしかして・・
最初からカギ開いてたのかな?!

・・ドアを開けると・・・そこにはかあさんが立っていた!

「有希、おかえり。」

「た・・ただいま・かあさん・・・」
・・てっきりもうお仕事に行ってると思ったのに・・・

「・・おかあさん・・会社は?」
「これから行くわ、有希が帰って来るの待ってたの。」
「ぁ・・うん・・・」
「上がりなさい。ずっと玄関にいる気?」
「・・ぁ・・ううん・・・」
・・オレはブーツを脱いで玄関を上がる・・・なんか・・気まずいなぁ・・・かあさんまだ怒ってるのかな・・・

・・恐る恐るリビングに・・・自分の家なのに・・・知らない家に来たような感じがする・・・
「有希、座りなさい。」
「・・はぃ・・・」
・・オレはかあさんと向い合わせに座った・・・でも・・目を合わせるのが怖くて・・顔をあげられない・・・
「有希、ごめんね、かあさん有希のこと信じてあげられなくて・・・今朝も刈谷先生から電話で有希のこと信じるように言われたわ。」
「・・・・・」
「でも、有希なんで刈谷先生のとこに行ったの?」
「・・ぅっ・・それは・・・わたし・・逃げ出しちゃったから・・・かあさんに連れ戻されるのが怖くて・・・それで・・・」
「それで先生のとこに?」
「・・うん・・・バッグのこともあったし・・・」
「ほんとにおねだりしたんじゃなかったのね。」
「うん・・」
「・・買ってもらったのはバッグだけ?」
「・・うん・・ぁ・・ううん・・・同じ日に・・ドレスと・・パンプスも・・・」

「それだけ？」
「・・あと・・昨日お誕生日のお祝にって・・ネックレスもらった・
・それだけ・・・」

「・・ふぅ・・・」
・・かあさんは大きく溜息をついて・・・
「かあさん有希のこと信じていいのね？」
「・・うん・・・」
「もう隠してること無いのね？」
「うん。」
・・オレはハッキリと返事した・・・

・・先生との事は・・隠してるワケじゃない・・絶対に言えないだけだ・・・

「・・おかあさん・・刈谷先生ね、２週間に１回テレビのお仕事で福岡に来てるの。わたし、その時に一緒にお食事しましょうって言われてるんだけど・・・またお食事しても良いでしょう？」
「・・なんで有希と？」
「先生ね、わたしみたいな若い女の子とお食事すること・・あまり無いから・・楽しいんだって・・・だから、ね？　おかあさん・・先生と会っちゃダメだって言わないで、お願い！」
「・・・・・」
「わたしも、先生といろんなお話したいの。活け花のお話とかスゴクためになるし・・・」

・・オレは・・ずるいコだ・・・かあさんが先生と会っちゃダメだと・・言えないことが解って言っている・・・
・・かあさんは・・お仕事の付き合いがある先生の誘いは・・断れ

ないと思う・・・

「ね？　おかあさん！」

・・でも・・心の片隅では・・・会っちゃダメだと言って欲しい気もしている・・・かあさんはそういう人であってほしい・・・

・・もちろん・・かあさんに会うなと言われても・・・オレは先生と会うのはやめないつもりだけど・・・

かあさんは長い時間考えていた・・・そして出した結論は・・・

「わかったわ。」

・・やっぱり・・そう言うに決まってる・・・

・・当り前のことだ・・・だって・・かあさんはオレと先生との関係を知らないんだから・・反対する理由がない・・・

・・でも・・・もし知ってたら・・・かあさんはどうしただろうか・・・？

「かあさん、有希のこと信じてるから。有希もかあさんに言えないような恥ずかしい事はしないでよね。」

「うん、しないよ。約束する。」

・・オレは・・恥ずかしい事なんてやってない・・・言わないのは・・それがかあさんのためだからだ・・・

「有希ももう17歳だものね。」

「？」
「かあさんが知らないあいだに、あなたもずいぶん大人になってたのね。」
「・・・・・」
「だけど、大人になるってことは、自分のことは自分で責任を取るってことなのよ。わかってる？」
「・・ぅ・・うん・・・」
・・正直・・まだピンとこないけど・・・

「でもね有希、これだけは忘れないで・・・17歳ってね、自分で思うほど大人じゃないの。まだまだ大人と子供のあいだなのよ。」
「・・・・・」
「だからこれからも、困ったことや悩んだりしたら、ひとりで考えないで何でもかあさんやとうさん相談していいのよ。」
「・・うん・・・」

・・なんかヘンだ・・・かあさんはオレのこと信じてくれてるのに・
・・今度はオレの方がウソついてるなんて・・・

・・なんだかオレ・・・イケナイことしてるような気がしてくる・・
・

「・・うっ・・うぅぅ・・・」
・・なんか・・すごく悲しい・・・これが・・大人なんだろうか・・
・？

・・大人になるって・・・こんなに悲しいことなの・・？

・・でも・・すべてをかあさんに言うことなんて出来ない・・・

・・こんなに辛いのが大人なら・・・やっぱりオレは大人になんてなりたくない・・・

「どうしたの有希?」

・・かあさんは泣いてるオレを抱きしめてくれた・・・

「・・おかあさん・・・」

「いいのよ、もう怒ってないから。」

・・そんなことじゃないの・・オレが泣いてるのは・・・

「・・おかあさん・・ごめんなさい・・・」

「大丈夫よ・・」

・・かあさんはそう言いながら、泣いてるオレの背中をポンポンとたたいた・・・

・・まるで子供にするように・・・

・・オレは17歳になったけど・・・女の子になってからは・・まだ2年も経っていない・・・

・・男の子だったオレが・・女の子に生まれ変わったのなら・・・女のオレはまだまだ子供だ・・・

・・それなのにオレのまわりは目まぐるしく動いていく・・・

・・4月になれば・・オレはもう3年生・・・・

・・オレも大人の女の人にならなきゃいけない・・・でも・・オレはどんな人になればいいのだろう・・・

・・それはたぶん・・・とうさんも・・かあさんも・・答えられないと思う・・・他のだれも・・・

・・だって・・他の人は・・オレのように男の子から女の子になっていない・・・

・・こんなオレの気持ちを相談出来るのは・・・悲しいけど・・・とうさんやかあさんじゃない・・・

「・・おかあさん・・・わたし・・おかあさんのこと大好きなの・・・女の子になってからずっと、おかあさんみたいな女の人になりたいと思ってた・・・」

「・・・・・」

「・・でも・・無理みたい・・・だって・・わたし・・本当の女じゃないんだもん・・・」

「・・ごめんね有希・・・女の子に産んであげられたら良かったのに・・・最初から女の子だったら苦労しなかったのにね・・・」

・・そうかも知れない・・かあさんは2人目は女の子が欲しかったのだから・・もしオレが女の子で産まれていたら・・もっと可愛がられて育ったのかも知れない・・・

・・でも・・・オレが最初から女の子だったら・・何の疑問もなく女の子として暮らしているのだろう・・・それはそれで幸せかも知れないけど・・・その幸せはオレが女の子になって感じた幸せとは違うと思う・・・

「・・でもね、おかあさん・・わたし・・女の子になったこと・・後悔してないよ・・」

「・・・・・」
「だってわたし・・女の子になって・・いろんなこと感じてきたの・・悲しいこともあったけど・・嬉しいこともたくさんあった・・・でもこれはわたしが男の子から女の子になったから感じることが出来たことだと思うの・・・」
「・・有希・・・」
「・・最初から女の子だったら・・苦労は少なかったかも知れないけど・・・それはわたしじゃないよ・・・途中から女の子になったからわかる女の子の幸せだってあるんだから!」

「・・有希・・あなたがそんな考え方するコだったなんて、かあさん知らなかった・・・」
「・・・・・」
・・そんなの・・オレだって知らなかったけど・・・
「あなたいつの間にそんなに大人になったの?」
・・かあさんったら・・目を潤ませちゃって・・泣きたいのはこっちなのに・・・
「・・おかあさん・・わたしまだまだ子供だよ!・・ちょっとは・・しっかりしてきたかも知れないけどね。」
「そうね。まだ子供っぽいところもあるけど、有希は男の子のころより、ずっとしっかりしてきたと思うわ。」
「・・そ・・そうかな・・・」
「そうよ。最近はなんだか女として自信も出て来たんじゃない?」
「・・そ!・・そんなことないけど・・・」
・・でも・・昔からみれば確かに・・少しは自信も出て来たかも・・
・
・・それは・・・女としていろんな体験をして来たからだと思う・・
・

・・男の子だったら・・絶対しなかった体験を・・・

「そうだわ。有希に渡さなきゃいけないモノがあるんだった！」
「？」
・・かあさんは自分の部屋に入って・・・出て来た時には綺麗な赤いリボンがかかった、平たくて長い箱を持っていた・・・
「有希、１７歳のお誕生日おめでとう！」
「ぁ・・ありがとう！・・おかあさん・・」
・・箱の形からすると・・たぶん・・・
「・・開けていい？」
「いいわよ。」

オレがリボンをほどいて箱を開けると・・・それはやっぱりネックレスだった！
「有希、かあさんの見てそういうの欲しがってたでしょう？　その話したらお父さんも、だったら真珠のネックレスが良いんじゃないかって・・・」
「え？　おとうさんが？！」
・・かあさんの真珠のネックレスもとうさんに初めてもらったって言ってたから・・そういう意味では・・これはかあさんのとお揃いだ！
「・・ホントありがとう・・ステキ・・・」

・・クリームがかった白い小粒の真珠がキラキラ光ってる・・・この輝きを見てると・・なんだかウエディングドレス着た時のことを思い出した・・・

・・あの時・・・このネックレスがあったら・・・もっとステキだったと思う・・・

「でもネックレス、刈谷先生とかぶっちゃったわね。」
「ううん！そんなことないよ。先生にもらったネックレスとは全然違うもの！」
「・・刈谷先生にはどんなの貰ったの？」
「ぁ・・えっとね・・・」
オレはピンクのバッグから、昨日お食事の時にもらったネックレスの箱を出し、開いてかあさんに見せた・・・

「！！・・・刈谷先生・・高校生にこんな高いものを？！　困った方ね・・・」
・・・！！・・かあさん・・・怒った・・・？
「・・ぁ・・で・・でもね・・おかあさん・・・わたし、こんなのもらうの当り前なんて思ってないから！　もうこんな高いモノ・・わたしにはもったい無いし・・もう買わないように言っておくから！」
「・・有希・・・」
「・・わたし・・高いモノなんて欲しくないの・・だってまだわたしには高級なモノの価値なんてわからないもん！」
「わかったわ有希、さっきも言ったでしょう？　あなたのこと信じるって！」
「・・ぅ・・うん・・・」

・・でも・・かあさんに“信じてる”って言われると・・ちょっとツライ・・・

・・かあさんを悲しませないためとはいえ・・・ウソついてるのは確かなことだから・・・

・・胸が苦しい・・・

・・オレは・・以前より少しは大人になった気がする・・・

・・世の中のことが・・少しだけわかるようになってきたと思う・・

・

・・でも・・これが・・大人になるってことなら・・・

・・オレは・・・大人になっても・・ちっとも嬉しくない・・・

かあさんが仕事に行ってしまうと、オレはひとりになってしまった・・・

・・とうさんはいるハズだけど・・・いつもどおり書斎にこもってるらしい・・・

・・とうさん・・どんな小説書いてるんだろう・・・オレはとうさんが書いた小説は読んだことがい・・・

・・家族が書いた小説なんて・・なんだか・・こっぱずかしいっていうか・・あんまり読む気がしない・・・

今から学校に行くのも、ちょっと気まずい気分でいたら、かあさんが今日は休むと学校に電話してくれていた・・・たしかに・・オ

レがいつ帰って来るかわからなかっただろうから・・・

・・かあさんはオレが帰って来るまで待っててくれたけど・・・何時くらいまでなら待っててくれただろうか・・・お仕事があるから昼までは無理だったんじゃないかと思う・・・

昨日の残りのカラ揚げをレンジで温めて、いいともを見ながらごはんを食べた・・・

・・冷蔵庫にはケーキもあったけど・・もうちょっと後で食べよう・・・

・・いいともはいつ見てもおんなじテンションだ・・・芸能人って、オレたちは何気なくテレビで見てるけど・・・きっとこの人たちも悩みとかあるんだろうな・・・それなのにいつも楽し気にテレビ番組やってるって・・良く考えたらスゴイことだと思う・・・

・・オレなんか・・ちょっとしたことで読者モデルやめちゃったし・・・今になって思えば・・・もうちょっと頑張れたんじゃないかと後悔し始めている・・・

・・オレは女の子になって・・少しは頑張り屋になった気がしてたけど・・・オレってやっぱりダメだなぁ・・・根っこのところは男の子の頃とちっとも変わってない・・・

いいともが終ってテレビを消すとヒマになった・・・なんだか普段なら学校に行ってる時間に家にいるのって・・なんか落ちつかな

い・・・祭日とかだったら何てことないのに・・・

・・ズル休みしてるみたいな気分になるからだろうか？

・・もっとも・・今日のオレは本当にズル休みみたいなもんだけど・・・

「あっ！！」

・・そういえば・・まだ昨日の下着のままだった！

・・オレは急いで自分の部屋に行って新しい下着に替え、服も部屋着に着替えた・・・

・・男の子のころなら前の日の下着くらい平気だったけど・・・やっぱり女の子になると、そういうこと気になっちゃう・・・

・・そして服はキレイにシワを伸ばしてハンガーに掛けた・・・蟹原さんにもらった大事な服だからクリーニングに出した方がいいかな・・・

・・刈谷先生に借りたトレンチコートもクリーニングして返さなきゃいけないから、いっしょに持っていこうと思う・・・

「そうだ！」

下着を脱いだついでに洗濯しておこう！・・・どうせヒマだし・・・

オレは1階に降りて脱衣所へ・・ウチの洗濯機はお風呂の脱衣所にある・・・

「あ・・昨日の洗濯物がそのままだ・・・」
・・かあさんオレが帰ってこないから心配して・・忘れちゃったのかも知れない・・・

「ちょうど良いから一緒に洗っちゃおう！」
洗濯物を洗濯機に入れていると・・・
「あっ！　これ麻衣のブラ?!」
・・麻衣のヤツ新しいの買ったんだ・・可愛いなぁ！　パンツとお揃いだ・・赤と白のチェックの生地がポイントになってて・・・すごく女の子っぽい！

・・麻衣ももうすぐ中学3年生だもんなぁ・・こういうの欲しくなっても当然だと思う・・・

・・オレも中学生の頃から女の子だったら・・こんな可愛いブラ付けたのかなぁ・・・今のオレにはちょっと子供っぽすぎる・・・

・・かあさんにはあんなこと言ったけど・・・男の子から女の子になって良かったという気持ちはウソじゃないけど・・・最初から女の子だったらって気持ちはやっぱりある・・それはどうしようもないことだ・・・もちろんただ想像するだけだけど・・・

「誰も見てないし・・ちょっと・・着けてみようかな?」
・・サイズを見ると・・・６５のＢか・・・麻衣のヤツいつの間にかＢカップになったんだ・・・そのうちオレも追い抜かれちゃうかも・・・オレの胸はＣより少し小さいくらいで止まっちゃったみたいだもんなぁ・・・今は小さめのメーカーのＣカップがちょうどいい・・・

・・まあ・・オレの胸がもし弘子みたいに大きかったら・・・きっと持て余しちゃうと思うけど・・・

オレは部屋着を脱いで・・パンツを脱ぐと・・麻衣のパンツをはいてみた・・・サイズはピッタリだ・・・

・・そして・・ブラも着けてみる・・・やっぱり麻衣のブラじゃホックが一番外側になっちゃうな・・・胸を寄せてカップに入れ込むと・・やっぱりパンパンだ・・・少しカップが持ち上がってしまうのは仕方がない・・・

・・兄さんが妹の下着なんか着けてたら変態だけど・・・オレはもう女の子なんだから・・それほど変態じゃないと思う・・・

・・だって・・麻衣だって最近は時々オレの服を着たりしてるもん・・・オレが麻衣の下着つけてみるくらいどうってことないと思う・・・

「どうかなぁ・・やっぱりオレにはこういう可愛いのは似合わないかなぁ・・・」

鏡にうつしながら、あっち向いたり、こっち向いたりして眺めていると・・・

“ガラッ！”

「きゃっ！」

いきなり引き戸が開いて、オレはとっさに悲鳴をあげてしまった！

「！・・なんだ、有希いたのか！」

「・・とうさん・・ビックリしたぁ・・」

・・そんなに悪いことしてたワケじゃないけど・・心臓がドキドキしてる・・・
「あ・・あの・・今日は学校休んじゃった・・・」
「ああ、別に1日くらい休んでもいいだろう。」
「・・うん・・・」
・・とうさんは昔からあまり勉強にはうるさくない・・・
「有希、あまりかあさんを心配させるなよ。」
「・・ぅ・・うん・・・」

・・とうさんに・・こんな恰好でいるとこ見られるの気まずいな・・
・
「ぁ・・とうさん、用事だった?」
「あぁ、ちょっと洗面所で顔を洗おうと思っただけだからいいよ。」
とうさんがそのまま出て行こうとしたので・・・
「あっ、いいよ使って! わたしは洗濯しようとしてただけだから・・・」
・・こんな恰好で洗濯ってのもヘンだけど・・・
「そうか、じゃちょっとだけな。」

・・顔を洗っているとうさんに話かけた・・・
「・・おとうさん・・」
「ん、何だ?」
顔をあげたとうさんに、乾いたタオルを渡しながら・・・
「あの・・ネックレスありがとう・・・お誕生日の・・」
「ああ、あれはかあさんからだよ。」
「うん、でもおとうさんが・・真珠のネックレスが良いんじゃないかって言ってくれたんでしょう?」
「まあ・・な。」
「わたしあのネックレス・・大事にするね。」
・・オレにとっては・・刈谷先生にもらったダイヤのネックレスよ

りずっと大切だ！
「ああ・・・」
とうさんはそれだけ言うと、さっさと脱衣所を出て行ってしまった・
・・とうさんって照れ屋なところあるから・・・

・・でも驚いたなぁ・・・まさか麻衣の下着つけてるところをとう
さんに見られるなんて・・・

・・まあ・・とうさんにはこの下着がオレのか麻衣のかなんてわか
らないと思うから・・・それだけが救いだけど・・・

・・そもそも下着姿を見られたことが恥ずかしかった・・・

洗濯機もかけて、ちょっと早いけど、そろそろ夕飯の準備でもし
ようかと思っていると・・・

“ピンポン！”

玄関のチャイムが・・・麻衣かな？・・でも麻衣ならカギで開ける
ハズだけど・・・

インターホンを取るとそこには・・・長谷川？！

オレは急いで玄関に行ってドアと開けた・・・
「どうしたの、長谷川さん?」
・・制服姿のところを見ると学校からの帰りに直接来たみたいだけど・・・
「あんたが病気だっていうからお見舞いに来てやったんじゃない!」
「ぇ・・ぁ・・ありがとう・・・」
・・そっか・・オレ病気ってことになってたんだ・・・

「なんか元気そうだけど・・あんたもう具合いいの?」
「ぁ・・うん・・頭が痛かったんだけど・・・午前中お薬飲んで寝てたら治っちゃった。」
「なんだ、大したことなかったのね。」
「うん・・」
「それじゃ明日は学校に来れるわね。」
「うん・・たぶん・・・」
・・ホントは何ともなかったし・・・

「せっかく来てくれたんだから上がってよ!ケーキもあるよ。」
「それって・・?」
「そう、わたしのお誕生日ケーキ。昨日食べたんだけど、かあさん大きなの買っちゃって、まだ残ってるから。」
「そんなのわたしが食べちゃっていいの? 麻衣ちゃんの分なんじゃない?」
「麻衣のは別にあるからいいいの。」
オレは冷蔵庫からケーキを2つ出して、紅茶も入れた。

「おいしいでしょう?」
「うん。」
「やっぱりケーキは生クリームよね!」
オレがおいしいケーキを頬張っていると長谷川が・・・

「あんたもずいぶん愛されてるわね。」
「え？　なにそれ・・」
「だって、こんな大きなケーキ買ってもらうなんてさ・・」
・・そういえば・・長谷川の家では誕生日でも三角のケーキを食べるって言ってたな・・去年オレが行った時も、長谷川は大きな丸いケーキって言ってたけど全然大きくなかったし・・でもそれは長谷川のウチが3人家族だからだと思うけど・・・（86話参照）
「・・わたしんちは長谷川さんちと違って5人家族だったし・・今は兄さんがいないから4人だけど・・でもかあさんはそのクセが抜けてないのよ・・・それに17歳のお誕生日だからじゃないかな？
なんか17歳って・・ちょっと特別な感じしない？」
「・・わたしはもうだいぶ前から17歳だけど・・別に何も特別じゃないわよ。」
「・・それは・・そうかも知れないけど・・・」
・・たしかに・・長谷川の誕生日は6月だから、もうずいぶん前から17歳だったんだなぁ・・・

・・長谷川はどうか知らないけど・・オレは17歳になっていきなり変わっちゃった・・・

ケーキを食べ終ると長谷川は学校指定の手提げバッグをゴソゴソしだした・・・何やってんだろう・・・
「あんたクリスマスと近いから困るのよねぇ・・・はい、お誕生日おめでとう！」
「ぇ！・・あ・・ありがとう・・」
・・プレゼント・・持って来てたんだ・・・？
「これたぶん持ってないと思うんだけど・・」
「なに？！　開けていい？」
「うん。」

・・キてぃちゃん関係のかな?・・・だって包み紙がソンリオのだもん!
「!!」
・・箱の中にはキてぃちゃんの目覚まし時計が入っていた!
「わぁ!わたしコレ欲しかったの!」
「ほんと?良かった!」
「お店で見て何度も買おうかと思ったんだけど、目覚ましは今使ってるのがあるし、なんだか無駄づかいするみたいで買えないでいたの・・・うれしい!」
・・これってキてぃちゃんの声で起こしてくれるんだ・・・
「これからきっと、毎日起きるたびに長谷川さんのこと思い出しちゃうね!」
「有希おおげさよ。」
・・でも長谷川もまんざらでもない顔してる・・やっぱりプレゼントって喜んでもらうとあげた方も嬉しいもんなぁ・・・

・・オレはすごく嬉しい!

「・・でも・・長谷川さん、よくわたしが欲しいのわかったね。」
「ふふっ・・実は麻衣ちゃんに聞いちゃったの。」
「!!」
・・そうか・・その手があったか・・・
「まあ、もっと欲しい物もあったかも知れないけど・・予算もあるしね。」
「ううん!」

・・プレゼントは値段じゃない!・・・それぞれくれる人の気持ちがこもってるのが一番だと思う!

・・だって・・みんなきっとオレのことを考えながら選んでくれたんだもん！

・・オレはその気持ちが一番うれしい！！

おまけ・今だから言える話

今回で7章は終りです。
この小説を書き出してしばらくしたころから、入院中もずっと考えていたシーンでしたが、
いざ書いてみると、正直ヒジョーに難しかったです。

6章の終りで、7章は「起承転結」でいえば「転」にあたると書きましたが
それはこういう事だったワケです。
18禁への部分的移行も苦渋の選択でしたが、
不完全な形で妥協するより良かったと思っています。

ただ、私自身はこの作品を18禁で掲載しなければいけないような作品だとは思っていませんし、
ましてや18禁作品を書きたいと思っているワケでもありません。
なのでHな話をご希望の方には期待にそえないと思います。

この話では、あくまで生活の中で必要なシーンとして書いているだけなんです。
ただ、有希は普通の女の子ではないので、普通のHなシーンとはちょっぴり違いますけど。

私としては、刈谷が必要以上に嫌われているのにも驚きました。
いや、嫌われること自体は正解なのですが、みなさんあまりの嫌いようなので、
そこまで嫌われては、有希の気持ちの変化を上手く表現できないのではないかと
心配したワケですが、どうだったでしょう・・・
やっぱりみなさんに説得力を持たせるまでにはいかなかったかも知れません。
それは刈谷の行為を犯罪とみるかどうか、
お尻ですることを特殊な事と思うかどうか・・・
など色んな要素が絡んでくると思いますので、取り方は人それぞれだと思います。

私は刈谷が良い人だったと言うつもりはありません。
そもそも私は、いついかなる状況でも、誰に対しても良い人なんていないと思っています。
良い人の中にも悪い部分はあるし、悪い人の中にも良い部分はあると思います。
生き物として正しいことも、人間としては間違っていると見なされることもあります。
時と場合により人は良くも悪くもなるのだと思いますし、
その善し悪しの絶対的な判断基準があるとも思いません。
それは時代によっても国によっても大きく違うからです。

たぶんこの章で読むのをやめた、あるいは一応読んではいるけど

お気に入りからは外したなんて方も多いと思います。
逆に最近知って下さって、お気に入りに登録して下さった方もいるようで、
全体的に見れば少しづつは増えているようです。
私としては、私自身が読みたい小説を書いているだけであり、
それこそが素人作家のやるべき事だと思っているので、
順位とかは気にせずやっていきたいと思っています。

読むのをやめた方がいる一方、１８禁の方で初めて知って読んで下さった方も
いると思うのですが、そういう方は当然１８禁のような展開になることを知ったうえで
読んでいるワケで、そういう方にとっては全然エッチでないこの長い話を
最初から読み続けてもらえるだけの力があるのかどうか、正直私にはわかりません。
もしそのような方がいたなら、どうだったか感想など聞かせていただけると参考になります。

ところでこの章で「転」は終って、次から「結」に入るかというとたぶんそれはないと思います。
この話はそれほど単純ではありませんし、まだ「転」は終っていないかも知れません。
そもそもこの話は、ここまでが「転」で、ここからだ「結」と言えるような
話でもないので・・・

これから共学になったり、他にもいろんなことがあると思うのでまだまだ続くと思いますが、これからも読んで下さると嬉しいです。

あとｐｉｋｉｖで「オレは女子高生」のイラストを書いて下さってる方々もありがとうございます。
私はこれまでも言っているとおり有希の顔など想像しないようにして書いているので、
似てるとか、感想とかあまり出来ませんが、みなさんがどんなふうに想像して下さって
いるのかわかるのは楽しいです。
この話は文章だけであることを利用して、シーンによって有希のイメージも
微妙に違えたりするので、イラストで描く場合でも、その絵によって顔が全然違っても
かまわないのではないかと思います（笑）

それと、この回を掲載後いただいた感想の中にこのようなものがありました。

「刈谷が行ったことは立派な刑事犯であり、強姦も淫行も適用される作者はこの程度なら犯罪では無いと考える非常識な人間なのか？」
という主旨のものです。

たぶん同じように思っている方も少なくないかも知れません。

私は頂いた感想に対する返事も、誰もが見られる場所である限り感想を下さった方個人ではなく、みなさんに見ていただくつもりで書いています。
ですが、いちいち他の方に対する感想を見ない方も多いと思います

し、
そもそも感想の所を見ない方もいると思うので、
私が書いた返事もここに載せておきたいと思います。

ただ、有希と同年代の娘さんをお持ちで、
イメージを重ねて読んで下さっていた方には本当に申し訳ないと思っています。
そういう方々に作者として言えることは、
小説は小説として読んで下さいという他ありません。

「刈谷が行ったことは立派な刑事犯であり、強姦も淫行も適用される作者はこの程度なら犯罪では無いと考える非常識な人間なのか？」

それに対する私の返事

そう思っていただいても一向にかまいません。
私はもともと猟奇犯罪ものを愛情を持って書いている人間なのでみなさんとはベースが違うかも知れません。

私は何ごとも行為や状況だけで判断しない人間です。

たとえば教師と生徒が恋愛関係になった時、それは良くない事とされます。
生徒が在学中にバレれば、教師も生徒もタダではすみません。
でもバレずに生徒が卒業してしばらく経ってから結婚すればそれは純愛ととられる場合もあります。

多くの人が未成年でタバコや酒を飲んでいるのに
未成年の芸能人がそれをやると大騒ぎ。
それもバレずにやっていれば、
２０歳になってすぐに大酒のみになっていても問題にされません。
時には「もう時効だから」なんて言いながら
未成年の頃から飲んでいた事を平気で暴露する人もいます。
それが許される社会なのに、未成年の間にバレた場合との
差が大きすぎると私は思います。
現実には麻薬に手を出した芸能人よりも復帰が難しい場合がほとんどです。
麻薬は立派な犯罪で、未成年のタバコや飲酒は犯罪ではないのにです。
（未成年のタバコや飲酒は本人の罪ではなく、飲ませた大人が罪になります。）

ドラマでは不倫のないドラマを探す方が難しいのに、
そのドラマに出演するような俳優が「不倫には文化的な側面もある」
というような発言をしただけで叩くのは私はおかしいと思います。
もし、実際に不倫していたとしても、それは個人間の問題で、
不倫が絶対許されない世の中なら、ドラマで不倫を扱うことは
出来ないはずです。
外国にはそういうドラマを流せない国もあると思います。

私はそういう本音と建前的な考え方はこの小説の中では使いません。
もちろん本音と建前は必要な事だし、あって当り前だと思います。

でもこの小説は主人公の有希の世界なんです。
この小説の中では有希の気持ちが一番大事なことなのです。
有希が許せば許されるし、許さなければ犯罪でなくても許されませ

ん。
もし有希が許したことが読者の方に理解出来ないのであれば
それは私の力の無さだと思います。
当事者の有希が許したのに、読者が許せないのは
おそらく有希の気持ちが読者に伝わっていないのだと思うからです。
もっとみなさんに伝わる文章を書けるように精進したいと思います。

それと、最後にもうひとつ言わせていただければ、
小説の中でも現実の犯罪がまったく許されないのなら
泥棒や海賊やヤ○ザをヒーローにした作品も
許されないということになると思います。
私はそういう作品は何の問題もないと思います。
（ヤ○ザものは嫌いですが、それは単なる好みの問題だと思います。）

これまでのおまけ（その他）の場所

３６話　制作おぼえがき　０８．６．２１
４０話　『オレは女子高生』の世界　人物、舞台設定など
４５話　架空の西鉄大牟田線案内
４９話　名前について
５３話　ドラマ化を妄想してみる
６１話　「放生会編」おまけ
６７話　１周年を迎えて
７１話　『オレは女子高生』の世界　第２弾（架空の西鉄大牟田線

案内付き）ドラマ『ブザー・ビート』のお知らせも
７３話　「ヒロイン」について
７８話　「出版されたら買いたい作品」のお礼
７９話　「文章」について
８２話　「文章って難しい・説明編」
８６話　ちょっとあとがき　長谷川の誕生日とお父さん
８９話　「Ｑ＆Ａ」
９３話　『オレは女子高生』の世界　第３弾（架空の西鉄大牟田線案内付き）
１３２話　イヌ型とネコ型
１３３話　有希と純平
１４２話　ＡＴから１８禁へのお詫びと説明
１４１話　文章って難しい・文章と言葉編

8章　第156話　節分　鬼は外、福は内

朝、駅から学校へ向う通学路で・・・

「おはよう有希！」

「あ、おはよう直美。」

肩をたたかれて振り返ると、直美の笑顔が・・・

「もう平気なの？」

「うん、昨日寝てたら治っちゃった。」

「良かった、このごろ有希元気なかったし、昨日休みだったからみんな心配してたのよ！」

「あ・・うん。」

・・ホント・・みんなに心配かけちゃったな・・・

「でも、なんか前より元気そう。」

「そ・・そう？」

「うん、明るくなった感じ！」

「へへ・・」

・・なんか・・直美にそんなふうに言われると・・照れちゃうな・・

・

「せんぱ～い！おはようございま～す！」

オレたち2人で歩いていると、後ろから声が・・・

「あっ、ミサトちゃんだ！」

ミサトちゃんはオレたちのところまで走ってくる・・・

「有希先輩、病気だったんじゃないんですか？もういいんですか？」

「うん、もう大丈夫！」

オレとミサトちゃんが話していると・・・

「あ！・・岡本先輩・・やめてくださ～い！」
直美がいきなり後ろに回ってミサトちゃんに抱きついた・・・
・・もうっ・・直美ったら・・誰にでも抱きつくんだから・・・
「ひぃ～！はなしてくださ～い！」
可哀想にミサトちゃんは離れようと必死にもがいてる・・・

「・・直美ぃ、もうすぐ校門なんだから、騒いでたら怒られるよ！」
厳しい長山先生にでも見つかったら大変だ・・・
「だってミサトちゃんって、ちっちゃくて可愛いんだも、ウッ！！」
・・あ～ぁ・・暴れてたミサトちゃんのヒジが脇腹に入っちゃった・・
・・

「ぁ、ご・・ごめんなさい！　岡本せんぱい・・・」
「ほら、直美がいけないのよ！　いっつも私にするみたいにヘンなことするから・・」
・・ミサトちゃんは確かに小さいけど・・オレと違って男勝りなとこあるんだから・・・

「・・うぅぅ・・きぃたぁ・・・」
直美は脇腹を押さえながら痛そうに言った。
「すみません・・せんぱい・・・」
「気にしなくていいよ、ミサトちゃんが悪いんじゃないから。直美がいけないんだもん。すぐ抱きついちゃうの！」
・・オレなんか胸まで揉まれちゃうんだもん・・・たまんないよ・・
・
「・・うぅ・・もうしない・・ミサトちゃんには・・・」
「？！」
・・それって・・オレにはするってこと？
・・しょうがないなぁ・・直美は・・・

・・直美ってちょっとレズっけがあるんだろうか・・・？
・・オレ・・入学した当初は、直美が弘子に抱きついてるのを見て・
・正直ふたりのこと疑ってたもん・・・

・・その後、ふたりはただ仲がいいだけだってわかったけど・・女の子って仲良しどうしってそういうことするなんて当時のオレは知らなかったし・・・
・・今の直美のターゲットは・・もっぱらオレになっちゃってる・・弘子よりオレの方がリアクションが面白いらしい・・・

・・でも・・それだけオレと直美も仲が良くなったってことなのかなぁ・・・

「ちょっと・・待ってよぉ！　有希～」
オレとミサトちゃんは直美のことは無視して校門を入っていった。

「有希、怒った？　そんなに無視しないでよ！」
オレたちがそのまま教室に入っていくと・・・

「どうしたの、ふたりとも。」
弘子が聞いたから、オレは弘子にかけよって・・・
「弘子ぉ、直美がミサトちゃんにまで抱きついちゃったの！」
「ふふ・・ミサトちゃんって可愛いものね。」
「！・・そんなこと言ってる場合じゃないのよ。ミサトちゃんは男勝りなとこあるんだから・・そんな女の子っぽいことは苦手なの・・

・おかげで脇腹思いきりヒジで小突かれちゃってさ・・・」
「直美も懲りないわねぇ。」

すると直美がブスッとして・・・
「だってさ、有希に抱きついたらキライになるなんて言うんだもん！」（１５２話参照）
「え?!　だからミサトちゃんに?・・あんなの冗談なのに・・」
「！・・冗談なの?!」
そう言うが早いか直美は・・・
「きゃぁ～!!」
背後からオレの胸をわしづかみにした！・・・あまりに急だったからオレはとっさに教室中に響き渡るほど大きな悲鳴を上げてしまった・・・おかげで大注目だ・・・恥ずかしいたらありゃしない・・・

「・・もうっ・・やめてよぉ！・・やっぱりキライになっちゃうわよ！」
「?!」
直美の手が弛んだスキにオレは直美から離れた・・・直美のヤツ・・意外にあっさり放してくれたなぁ・・・いつもはもっとしつこいのに・・・
「ふたりとも、いつのまにそんなに仲良くなったの?」
「え?」
・・弘子ったら何いってんだろう・・だいぶ前から・・こんな感じだと思うけど・・・

「ねえねえそんなことより、いま話してたんだけど弘子のとこで豆まきやるんだって。ふたりも行くでしょう?」
千里が言った。
「わたしも久しぶりにみんなと行こうと思ってるの！」

「？　豆まき？」
・・豆まきって・・あの・・鬼のお面かぶってやるヤツ？
「もうすぐ節分だもんね。子供のころは毎年弘子のとこでやってたけど・・でも学校終ってからじゃ間に合わないんじゃないの？」
・・そっか・・直美は行ったことあるんだ・・・
「それがね、最近は小学生も帰る時間が遅いから、今年は夕方からやることにしたのよ。」
「へ～そうなんだ。」
・・そうだよなぁ・・・オレたちのころはゆとり教育だったけど・・最近は小学生もけっこう大変そうだもん・・・

「クラブ終ってからじゃちょっと厳しいけどね。」
弘子がそう言うからオレは・・・
「クラブなんか休んじゃおうよ！　千里も一緒に行けることなんてこの頃なかったし・・・」
「ウチは大丈夫だけど・・・みんなはどうなの？」
弘子がそう言うからオレは・・・
「大丈夫大丈夫！全然大丈夫よ！　ねぇ！」
直美と千里に同意をもとめた・・・
「うん！」
ふたりとも大丈夫そうだ。ウチの学校はそんなにクラブ活動に必死じゃないから・・・

「それで？　豆まきっていつなの？」
「有希なにいってるの！　2月3日に決まってるじゃない！」
「2月・・3日・・・？　3日って何曜日だっけ？」
「えっと・・水曜日よ。」
「水曜日・・・」
・・その日は・・・刈谷先生がこっちに来る日だ・・・

「どうしたの有希?なにか用事があるの?」
「う・・ううん・・そんなこと・・ないけど・・・」

・・どうしよう・・・借りてるコートも返さなきゃいけないし・・・
それにオレも・・・先生に会って聞きたいことがある・・・

・・でも・・みんなと豆まきもしたいなぁ・・・いや・・豆まきはどうでもいいんだけど・・千里も一緒に行ける機会なんて・・これからもそんなに無いかもしれないのに・・・

オレがどうしたらいいのか悩んでいる間に、話はみんなで行くことで進んでいる・・・いつの間にか安部っちまで加わってるし・・・

・・これじゃ・・・オレだけ行けないなんて言えない・・・

・・オレもみんなと行きたいし・・・

・・でも・・先生とも2週間に1回しか会えないしなぁ・・・ホントどうしたらいいんだろう・・・

あ~・・どうしよう・・・こんなんじゃ授業にも身が入らないよ・・・

今やってるのは苦手な英語・・・3学期から産休で休んだ先生のかわりに、ウチのクラスも高島亜矢子〈たかしま　あやこ〉先生に教えてもらうことになった・・・高島先生は若村先生と一緒に昨年の4月からウチの学校に来た23歳の若い先生だ・・・先生が変わると教え方も変わる・・・高島先生は自分で作ったプリントをよく使うみたい・・・

「はい戸田さん、プリントの次の英文を訳して！」

うわっ！・・急にオレに来た！・・・高島先生って順番に当てないから気が抜けない・・・

「・・Ｔｈｅ　ｂｅａｒ　ｓａｉｄ・・え・・えっと・・・クマは・・言った・・逃げろ・・女の子は・・逃げた・・・？」

・・なんだコレ・・意味わかんない・・・

「ほら、よそ見してちゃわからないでしょう？」

「アテッ・・」

先生はポンと教科書でオレの頭を軽くたたいてから・・・

「クマさんは言いました、早く逃げなさい。女の子は逃げました。しかし、白い貝殻のイヤリングを落した事に気付きませんでした。これが正しい訳です。みんなが知ってる“森のクマさん”の英文ですよ！」

・・なんだ・・森のクマさんか・・・クマがしゃべるなんてヘンだと思ったんだ・・・

・・ホント英語はニガテだ・・・

放課後クラブへ行こうと片付けていると・・・

“ブルル・・ブルル・・”
携帯のバイブが・・・携帯を見ると・・・
！・・・刈谷せんせい・・・
・・どうしよう・・オレまだどうするか考えてないのに・・・
「・・もしもし・・・」
“あ、ユウちゃん？　昨日はどうだった？お母様許してくれた？”
「・・・ぁ・・はぃ・・たぶん・・・」
“そう、だったら良かった！　心配してたんだけど昨日は忙しくて・・仕事が一段落したら夜中になっちゃってたのよ。”
「ぁ・・いえ・・ユウは大丈夫です。お母さん・・おじさまと会うことも許してくれました・・・」
・・でも・・どうしよう・・今度会う時のこと・・・困ったなぁ・・・
「ぁ・・あの・・今度の2月3日は・・・」
“あ、そのことなんだけど・・”
「・・・ぁ・・はぃ・・・」
“実はそっちでの収録が2月3日じゃなくて4日になっちゃったのよ。”
「え？！」
“ごめんね、2月3日は浅草で節分の豆まきしなきゃいけなくて・・・”
「え？　おじさまも？」
“あら、どういうこと？”
「ぁ・・はぃ・・ユウも友達のおウチの神社で豆まきに誘われてて・・でもその日はおじさまに会う日だから・・どうしようかと思ってたんです・・・」

“そうなの？　だったらちょうど良かったじゃない。”
「はい。」
“お互い福が来るように豆まき頑張りましょうね。”
「はい！」

・・やったぁ！・・・これで弘子のとこで豆まき出来る～！
そういえば、テレビでよく芸能人の人とかスポーツ選手とかが豆まきやってるもんなぁ・・・

・・でも、あっけなく問題が片付いて、すっごいラッキーな気分だ！

“・・ララ～ン・・ランラ～ン”

「有希ずいぶんご機嫌じゃない？　スキップなんかしちゃって。」
「あ・・長谷川・・さん・・・」
・・うぅ・・・恥ずかしいとこ見られちゃった・・・よりによって長谷川に・・・
「そんなに飛び跳ねてるとパンツが見えちゃうわよ。この制服はスカートが短かめなんだから。」
「！」
・・そっか・・新しい制服はセーラー服の頃より、スカートが短いし軽くて広がりやすいからなぁ・・・

「なにか良いことでもあった？」
長谷川はそう言ってオレの顔を遠慮なしにのぞき込む・・・
「な・・なんでもないわよ・・・」
「そんなハズないでしょう？　有希がそんなに浮かれるなんて珍しいんだから！」
「うぅ・・・」

・・やっぱり長谷川にかかっちゃウソつけないな・・・

「豆まきするの・・・」

「豆まき？　それがそんなに嬉しいこと？」

「弘子の実家が神社だから、そこでやるのよ。行事なの。」

「ふ～ん・・」

「・・長谷川さんもやりたい？豆まき。」

「わたしはやらない。どうせあんたたち４人組で行くんでしょう・・？」

「今回は５人組だけどね。　安部さんも行くみたいだから。」

「・・へぇ～・・」

「だから長谷川さんが混じっても全然平気だと思うんだけど・・・」

「わたしは行かないって！」

・・長谷川って強情だからなぁ・・・オレの友達とは仲良くなりたくないみたいだし・・・修学旅行の時、ＵＳＪではけっこう楽しそうだったクセに・・・

・・まあ、オレもどちらかといえば人見知りな方だから・・そんな気持ちもわからなくもないけど・・・

「有希せんぱい！」

「あ、ミサトちゃん。」

階段を降りたところでクラブに行くミサトちゃんとバッタリ会った・・・

「あたしも行きますよ！」

「？・・どこに？」

「豆まきですよ！さっき岡本先輩に会って誘われたんです！」

「あ、そうなの？」

・・直美ったら・・ミサトちゃんまで誘うなんて・・今朝のお詫びのつもりかな？
ミサトちゃん嬉しそう。

　ミサトちゃんっていつも明るいなぁ・・・それに素直だし・・何にも悩みなんて無さそうに見える・・・
でも・・ミサトちゃんだって悩みもあるハズだ・・・悩みが無い人なんていない・・きっと、それを表に出すかどうかの違いなんだ・・・

だって・・ミサトちゃんは今でも男の子たちのように山笠を担ぎたいと思ってる・・・でもそれは女の子のミサトちゃんには許されないことだ・・・だから女らしくしようと思って努力してる。その大変さは女の子になろうとしているオレには良くわかる。

だけど・・ミサトちゃんは決して男の子になりたいとは思っていない・・・そこが本当に女の子になろうとしてるオレとは違うところだ・・・

・・ミサトちゃんは男の子と同じように山笠が好きなのに・・中学になった途端、女の子だけ出来なくなったのがイヤなんだと思う・・・そりゃぁ、中学生の女の子がフンドシするなんてありえないことだけど・・・それならフンドシしなきゃいいんだし・・・女の子がお神輿やってるお祭りだってあると思うし・・・

・・ただ・・山笠は普通のお神輿と違ってすごく重い・・・子供山笠と違って大人の山笠は1トンもあるから大人の男だって少し担いでは交代をくり返すらしい・・・だから女が担ぐのは元々無理なのだ・・・

・・でも・・大きくなったら女はダメだと言うのなら・・オレは最初からやらせなきゃいいのにと思う・・・

・・男の子も女の子も同じようにやらせておいて・・ある時期から女の子だけはダメというのではヒドすぎる！

「あっ！もしかして長谷川先輩も行くんですか？」
「え？・・・いや・・いかない・・つもりだけど・・・」
「え～・・そうなんですかぁ。一緒に行きましょうよ！」
「・・・・・」

・・ほら・・長谷川のヤツ意固地になっちゃった・・・
長谷川はそんなふうに言っても行くとは言わないと思う・・・

・・長谷川を誘うなら・・もっと違う方法を考えなきゃ・・・まだ2月3日までは日にちもあるし・・・

2月3日、オレたちは学校が終るとクラブは休んで、すぐに久留米駅のバスセンターに向った。

結局、長谷川もついてきた。どうやって意固地な長谷川をその気にさせたかというと、井川さんも誘ったのだ。

長谷川と井川さんはすごく仲が良いワケじゃないけど、お互い友達

が少ないどうしで何となくつながってる・・・井川さんの性格だと長谷川が行かないのに自分だけ行くとは言わない。だけどそう言われると長谷川は自分のせいで井川さんが行けないようで気になっちゃうのだ・・・長谷川ってそういうこと気にするから・・・

「お姉ちゃ～ん！」
もうバスセンターには麻衣が待っていた。
「麻衣ちゃん久しぶり！」
麻衣が長谷川以外のみんなと会うのは去年のお正月以来だから1年ぶりだ・・・（７０話参照）

「なんか有希に似てきたんじゃない？」
「え～！そうですか？」
直美ったら・・ホントにそんなこと思ってるのかなぁ・・・確かに麻衣もだいぶ成長したのは確かだけど、オレには似てないと思う・・・

「麻衣、こっちは安部まさ美〈あべ　まさみ〉さんと、井川聡子〈いがわ　さとこ〉さんと、中野御里〈なかの　みさと〉ちゃん。」
オレは麻衣が会ったことがない３人を紹介した。
「あ、姉がいつもお世話になってます。」
そう言って麻衣はペコリとお辞儀した・・・

え?！・・それって妹がする挨拶じゃないんじゃないの?・・麻衣のヤツ・・そんな言い方どこでおぼえたんだろう・・・
「麻衣ちゃんってしっかりしてるわね。有希よりしっかりしてるんじゃない？」
弘子が言うと、みんな可笑しそうに笑った・・・

・・うぅ・・そんなふうに言ったら・・学校でオレがしっかりしてないみたいじゃないか・・妹にそんなふうに思われたらどうするんだよ・・・

・・麻衣がしっかりとして見えるのは・・オレと違ってもの怖じしないからだと思う・・・

「お姉ちゃん、原口さんのところってどれくらいかかるの？」

・・そういえばお正月の時、麻衣はかあさんの車で来たんだったっけ・・・

「バスで３０分くらいかな・・バス、もうすぐ来ると思うんだけど。」

５分ほど経って八女行きのバスが到着して、オレたちは全員乗り込んだ・・・

でもこんなに大勢で行くことになるなんて思わなかったな・・・

バスは空いてたからみんな座れた・・・麻衣は長谷川にまかせて、オレは千里のとなりに座った・・・千里と何処かに行くなんて久しぶりだし・・これからだって何回あるかわからないから・・・

「・・千里・・ごめんね、いっぱい連れて来ちゃって・・・」

「べつに謝ることないでしょう？　たくさんで行った方が楽しいじゃない。」

「うん・・」

・・千里ならそう思ってくれるだろうと思ってたけど・・・もしかしたらオレたち仲良しだけで行きたかったかな？・・なんて思って、オレはちょっと心配してた・・・だけどやっぱり千里だ。　千里はそんなふうには思わないコだもん。

「節分の豆まきなんて久しぶりだなぁ。子供のころはお父さんが鬼のお面かぶってやったけど・・」

「そうなんだぁ・・」
「あれ?有希のウチではやらなかったの?」
「・・ぅ・・うん・・・」
・・オレのとうさんはそういうことやりたがらないから・・オレにはそういう思い出はない・・・

オレと千里が話してると後ろから弘子が・・・
「ほんとはね、お父さんが鬼の役するのは間違いなのよ。」
「え?どうして?」
「本当は、誰か家族とは別の人に鬼になってもらって、その鬼をお父さんがやっつけるのを子供に見せるのが正しいやり方なの。」
「へぇ〜・・そうなの?」
「だってお父さんに鬼役やらせてやっつけちゃったら、お父さんの威厳が無くなっちゃうじゃない。」
「・・いわれてみれば・・そうかなぁ・・・」
「元々はお父さんの強さを見せて、ちゃんとお父さんの言うことをきく子にするのが目的なの。秋田のなまはげみたいなものよ。まあ、今のお父さんは元から威厳なんて無いから、あまり関係ないかも知れないけど。」
「・・へぇ・・そうなんだぁ・・・」
・・だけど弘子もヒドイこと言うなぁ・・今のお父さんは威厳が無いなんて・・・もっともウチのとうさんも威厳なんて無縁な感じだけど・・・

・・でも・・小さい頃のそんな思い出があるなんて羨ましいな・・・
オレは思い出どころか小さい頃の記憶さえ無いし・・オレって小さい頃どんな子だったんだろう・・・

そんなことを考えているうちに弘子の実家の鵲神社前のバス停が

近づいてきた。神社はお茶畑のなかにある、こんもりとした小山の上にあり、ふもとのバス停から神社までは階段が続いている。

階段を上って神社に着くと、いきなりオレのまわりに6、7人の中学生くらいの女の子たちが集まってきた。

「ユウちゃんのファンなんです！サインください！」

「え？え？！」

・・そんなぁ・・オレ芸能人じゃないし・・サインなんてないのに・・・

「ど・・どうしよう・・サインなんて・・」

オレが困ってオロオロしていると安部っちが耳元で・・・

「普通に名前書いて、後ろにハートなんか付けてあげたらいいんじゃない？」

・・そんなんでいいのかなぁ・・・でも他に考えられないし・・・

オレは仕方なく、まわりに集まった女の子たちが持っていた色紙にマジックでサインしてあげた・・・

「・・ごめんね・・わたしサイン考えてなかったから・・・」

オレがそういうと・・・

「え？じゃぁ、あたしたちがユウちゃんのサインもらうの初めてなんですか？！すごい光栄です！」

と嬉しそうに言った。

・・光栄なのはこっちの方だ・・・ただの読者モデルなのに・・サインなんか欲しがってくれて・・・

・・それに・・オレはもう、その読者モデルでもない・・・このコたちもオレが読者モデルをやめたこと知ったら・・こんなサインなんか捨てちゃうと思う・・・それってなんか悲しい・・・

女の子たちへのサインが終って、社務所に入ると弘子の叔母さんが・・・

「ごめんねユウちゃん、おばちゃんついユウちゃんが来ること口すべらせてしまって・・プライベートだったのにねぇ・・・」

「い・・いえ・・別にかまいませんけど・・・」

・・プライベートなんて・・・オレは芸能人じゃないんだから、いつだってプライベートだけど・・・サインくらい全然かまわない。

ただサインなんて考えてなかったから困っただけだ・・・

「でも有希ってやっぱり人気あるんだね。わたしたちいつも一緒にいるから普通に思ってるけど、これってスゴイことなのよね！」

「そ・・そんな！・・直美ヘンなこと言わないでよ！」

「そうよ直美、わたしたちだけは有希と普通に友達でいなきゃ。」

「そんなことわかってるわよ！ただその普通に友達なのがスゴイっていってるの！」

「直美、あんたねぇ・・」

「ち・ちょっと！　そんな言い合いしないでよ。直美だってけっきょく友達だって言ってるんだから・・・」

「有希・・」

「ね、直美も・・あのコたちは何か勘違いしてるのよ。ただわたしがちょっと雑誌に載ってるから、有名な人だって思ってるんじゃない？　わたしみんなと同じ普通の女の子なのにね！」

・・オレのせいで弘子と直美がケンカみたいになるなんてイヤだ・・

・オレは弘子も直美も大好きなんだから・・・

何とかふたりもわかってくれてホッとしていると長谷川がオレの近くでボソッと・・・

「あんたもよく言うわねぇ。“わたしのためにケンカしないで～”

なんて。」
「！！・・・わたし・・そんなこと言ってないわよ！」
「言ってなくても、そう聞こえたわよ。あんたって意外にイイ女キャラなのね。」
「・・なにそれ・・・？」
・・長谷川のヤツ・・なんでそんなイジワルなこと言うんだろう・・
・意味わかんないよ・・・

・・オレはただ・・みんな仲良しでいたいだけなのに・・・

・・せっかく連れてきてあげたのに・・・そんなこと言うなら・・
長谷川なんか連れてこなきゃ良かった・・・

豆まきは神社の上から欄干越しに、下で待っている人たちに豆が入った小袋を投げる。
オレたちみんなで投げるのは人数が多いので、神主である弘子のお父さんと、弘子と直美と千里とオレが上から投げる係。安部っちや井川さんや麻衣たちは他のお客さんたちと一緒に下で受け取ることにした。

オレたち投げる人は神社で浄めのお払いをした後、制服の上から決まりの“かみしも”を着けて投げる・・・制服に“かみしも”というのは、ちょっとヘンな恰好だけど・・・これは神事だから仕方がない・・神事には決まった作法があるのだ・・・

「鬼は〜そと〜！　福は〜うち〜！」
オレたちはみんなに福が来るように願いながら、豆の入った袋を投げる。

「鬼は～そと～！　福は～うち～！」
・・麻衣はいくつか取ったみたいだ・・・出来るだけみんなに行き渡るように投げなきゃ、取れない人がいたら可哀想だ！　取れるかどうかも“運だめし”っていうけど・・・みんなに幸運が来た方がいいに決まってる！

「鬼は～そと～！　福は～うち～！」
？・・長谷川のヤツ・・・千里の方が近いのに、オレに向って手を上げている・・・イジワルなこと言う長谷川なんかに投げてあげないって思ってたけど・・・全然取れないのも可哀想だし・・・

「鬼は～そと～！　福は～うち～～！！」
オレは長谷川がいるあたりに、いくつかの袋をまとめて一緒に投げてあげた。すると長谷川は大きく飛び上がって袋をつかんだ！
・・長谷川のヤツ・・必死な顔しちゃってさ・・後でどんなにヘンな顔してたか教えてあげようっ！

「鬼は～そと～！　福は～うち～！」
オレたちは出来る限りみんなに行き渡るように、まんべんなく豆を投げて、節分の豆まきは終った。

「お姉ちゃん！３つ取れたから１つあげるよ！」
「あ！　ありがとう麻衣！」
・・オレも貰ってたけど・・やっぱり投げたのを取ったヤツの方が“御利益”がありそうだ！

「長谷川さんも取れた？」

「うん、２つ。わたしはお母さんにあげるわ。」
「そう・・・」
・・なんか・・長谷川のヤツ意外に嬉しそうだな・・・やっぱりへンな顔してたのは言わないでいてあげよう・・・

安部っちも、井川さんも取てたからホッとした・・・あんがい投げる方も責任重大だ・・・取れたか取れないかで、みんなの“福”を左右しちゃうんだから・・・

だけど、やっぱり今日はみんなで来れて楽しかった！

・・またこんな日があれば良いと思う・・・“福”が来るなら、オレはそういう“福”がいい！

ＡＴから

こんな大変な時に、こんなのんきな話を書いてＵＰするのもどうかと思ったのですが、
とりあえず安否のお知らせにもなるのでＵＰしてみました。

私は福岡に住んでいるので全く大丈夫です。

でもこの話を読んで下さっていた方の中にも被災にあわれた方もいるかも知れません。
家族や親戚が被害にあった方もいると思います。

そんな方々に対して言うべき言葉も書くべき文章も私は持っていません。
残念です。

私は、私に出来ることを、これまで通りやるしかないのだと思っています。

第１５７話　好転　思いがけない出来事

「・・ハァ・・ハァ・・・」

オレはベッドの上でグッタリと横たわっている・・・
なんとか息がととのってきた・・・でもオレのオチンチンの奥の方では・・まだ余韻でヒクヒクしている・・・

・・身体がアツイ・・・

あおむけに横たわるオレの横では・・刈谷先生も荒い息をついている・・・
オレと先生がこんな関係になってしまうなんて・・・ちょっと前までは考えもしなかった・・・

オレは今日お食事の時に、刈谷先生に約束してもらったことがある。

ひとつは、オレには物を買ってくれなくていいということ・・・オレは物が欲しいから先生とお付合いするワケじゃない。

もうひとつは、オレを早めの時間に帰して欲しいこと・・・だからお食事も豪華なのじゃなくていい・・・だってオレはまだ高校生だし・・高級な料理なんてもったいない・・・

・・それにあまり帰りが遅くなると、かあさんもオレたちのことを疑うかも知れない・・・

とりあえず先生と会うことを許してくれたけど・・かあさんだってオレと先生が何をしてるか知ったら、さすがに会わせてくれないと思う・・・

刈谷先生もオレの提案に、渋々みたいだけど約束してくれた。
先生だって会えなくなるよりは良いだろうし・・オレだって先生に会えなくなるのはイヤだ・・・だからこんなことしてるのは絶対にバレちゃいけない・・・

そして・・オレには先生に聞かなきゃいけない事があった・・・聞きにくいけど・・聞かなきゃいけないことが・・・

「・・おじさま・・・」
オレは思い切って、となりで横たわっている先生に話しかけた・・・
「・・なに？ユウちゃん。」
・・こんなこと・・ほんとに聞いてもいいんだろうか・・・先生怒らないかな・・・でも・・やっぱり聞かないワケには・・・

「・・ユウも・・・いつかおじさまに・・・捨てられちゃうの・・・？」
「どうしたの？　急に・・・」
「・・・・・」
「あ！わかった、斉木ね？　アイツが何か言ったんでしょう！」
「・・・・・」

あの日、刈谷先生の運転手をしている斉木さんからその話を聞いても（１４３話参照）、あの時のオレはもう先生と会う気もなかったし、今のような関係になるなんて思ってもなかったから、全然気に

も留めなかった・・・

・・でも・・今はすごく気になる・・・オレは・・刈谷先生に・・捨てられたくない・・・

「まあ、まわりの人から見ればそんなふうに見えるのかも知れないけど、あたしは捨てたつもりは無いわよ。ただ去る者は追わないだけ・・・ユウちゃんもあたしから離れたくなったら、そうしちゃっていいのよ。」

・・先生・・・

「・・そんな・・ユウはそんなことしません・・・」

オレはそう言って先生の腕にギュッとしがみついた・・・

「ユウちゃんったら、嬉しいこと言ってくれるじゃない。でもね、ユウちゃんもいつかはあたしから離れて行くの。それはわかってるのよ。」

「・・・・・」

・・そうなのだろうか・・・今のオレにはそんなこと考えられない・・・

・・でも・・ちょっと前のオレには・・今のこんな状況なんて考えられなかった・・・やっぱり先生が言うように・・オレの気持ちもまた変わってしまうのだろうか・・・？

「ユウちゃんは何も心配しなくていいのよ。あたしからはユウちゃんを捨てたりしないから。」

「・・・・・」

先生はオレの髪をなでながら・・・

「ユウちゃんはあたしといる時は、ただの女の子でいていいの。女の子らしくとか、良い子にしなきゃとか、そういうこと考えないで

いいのよ。有りのままのユウちゃんをあたしに見せて？」
「・・うん・・」
・・こんなこと言ってくれるの・・先生だけだ・・・
・・オレも・・先生の前では・・何も考えずに女の子でいられる気がする・・・

「それにしても、斉木のヤツろくなこと言わないんだから。もうあんなヤツ、クビにしちゃおうかしら！」
！！・・オレのせいであの人がクビになったら・・オレが告げ口したみたいに思われちゃう・・・
「そんな、ダメです！　あの人、すごく先生のこと尊敬してるんです！　だから・・・」
・・あの人だって・・きっと先生のことが好きだから・・・オレが先生に可愛がられてるのが気に入らないんだと思う・・・
「・・だから・・あの人クビにしちゃダメです・・・」
「・・わかったわ、ユウちゃんがそう言うのなら許してあげる。ユウちゃんって本当に優しいコね！」
「・・そんな・・おじさま・・・」

オレはもういちど先生の腕を強く抱きしめた・・・オレの胸の谷間に先生の腕が挟まってる・・・これじゃオレがどんなにドキドキしてるか・・先生にも伝わってしまうだろうか・・

「・・あんた、なんか感じ変わったわね。」
天神の福岡駅まで車で送ってもらっていると、運転手の斉木さんが後部座席のオレに話かけてきた・・・
「・・そうですか？」
・・オレはべつに変わったとは思わないけど・・・

「前はあんなにオドオドしてたくせに、今日はずいぶん平然としてるじゃない。何かあった？」
「・・べつに・・何も・・？」
オレはニッコリしてそう言った。
「何その言い方！ムカツク～！」
ふふ・・ムキになっちゃって・・・
「わたし先生とお付合いすることにしたんです。」
「！・・モノが目当てね！　何買ってもらうつもりなの？！」
「わたし何も買ってもらいません。」
「ウソばっかり！」

そのまましばらく黙っていたけど、斉木さんは急に
「もしかして、先生の身体が目当てなの？！」
「・・・・・」
「・・そうなのね！！」
「・・わたしはただ・・先生にいろいろ教えて欲しいだけです。・・わたしまだ・・何も知らないから。」

・・オレは身体も心も・・昔よりはずっと女の子らしくなったと思う・・・女の子がどういうものか三吉先生にも教わったし、白鴻で女の子たちと生活する中で女の子としての自覚も身に付いてきた・・・純平に恋をして、男の子へのドキドキ感や切ない気持ちも味わってきた・・・

・・でもオレは・・このまま女の子を続けても・・大人の女の人になれるとは思えない・・・

・・普通の女の子なら・・大人になれば自然に大人の女の人になるのかも知れないけど・・・オレは女の子らしさを身に付けただけ・・オレの心の中にはまだ男の部分がたくさんある・・・そんなオレが自然に大人の女の人になんてなれるワケない！

・・オレは昔・・オレの中の女の子の部分が増えていくと・・いつか男のオレは無くなってしまうのではないかと恐れたことがある・・・でも今はわかる気がする・・・オレの中の男の部分は・・たぶん無くならない・・・

・・たとえオレが女になっても・・オレがオレである以上、まったくの女になってしまうことはないだろう・・・

・・でも・・それでもオレは女にならなければならない・・・それを助けてくれるのは・・刈谷先生をおいて他にはいない気がするのだ。

・・先生は・・オレのことを全部知ったうえで・・・オレを少女のようにあつかってくれる・・・

・・そしてオレも・・先生になら・・・なぜか少女のように甘えられる・・・それはオレには新鮮な驚きだった・・・オレには少女の時代がなかったから・・・

・・もしかしたら先生は・・自分のことを“おじさま”と呼ばせ・・オレには自分のことを“ユウコ”の“ユウ”と呼ぶようにすることで・・・自然にこういう関係を作ってくれたのかも知れない・・・

「あんたちょっと変わってるわね・・」
「？」
「なんか・・これまでのコとは違うみたい。」
・・オレは・・先生がこれまでどんなオレみたいなコとお付合いしてきたか知らない・・・でも・・オレは・・・誰かと同じか、違うかなんてどうでもいい。

・・オレはあくまでオレなのだ。

あ！　いけない・・また携帯の電源切ったままだった。
開いてみると留守電が・・・佐々木さんからだ！

留守電には
“ユウちゃん、遅くなってもいいから今日中に電話くれる？　それじゃ待ってるから”
と伝言が入っていた・・・

佐々木さん・・まだオレのこと気にかけていてくれるのだろうか・・・この前だってかあさんに電話くれたし・・・そのおかげで刈谷先生と会ってたことがバレちゃったんだけど・・・

でも・・今はあれで良かったんだと思う・・・どうせいつかはバレただろうし・・・あのおかげで・・オレは刈谷先生の優しさに気付くことができた・・・

オレは急いで佐々木さんに電話した。

「ぁ、もしもしユウです・・」

「ユウちゃん、良かった電話待ってたの！　あさっての土曜日会えないかしら？　ちょっと話したいことがあるんだけど・・・」

「・・はい・・いいですけど・・・」

・・なんだろう・・話って・・・

「それじゃ、えっと・・お昼の2時ごろ編集部に来てくれる？」

「ぁ・・はぃ・・」

「じゃぁ待ってるわね！」

「はぃ・・」

・・あ・・もう切っちゃった・・・

・・佐々木さんって・・いつもテキパキした人だなぁ・・・まあ、いつも忙しいからってのもあるんだろうけど・・・

・・でもオレに話って何なんだろう・・・もしかして・・また読者モデルのお仕事させてもらえるとか・・・？

・・でもそんな都合がいい話は無いと思う・・・だって・・オレからやめたいって言ったんだもん・・・

・・あれから1ヶ月以上経つし・・・やっぱり・・もうきっちり辞めなさいって、言われちゃうのかも知れないなぁ・・・それも仕方がないと思う・・・

土曜日、オレは約束どおりに薬院にある九州ＪＩＮＯＮの編集部に行った・・・オレも読者モデルだった時は平気だったのに・・今はなんだか行きづらい・・・ひとりで乗ったエレベーターが編集部のある階で開く時、ちょっと怖かった・・・いきなり誰かに会ったらどうしようって・・・

エレベーターが開いても運良く誰もいなかった。編集部をのぞくと佐々木さんはいないみたい・・・

「あのぉ・・・」

「あら、ユウちゃん久しぶりじゃない！」

編集作業中のオペレーターの藤〈ふじ〉さんに・・・

「ぁ・・はぃ、お久しぶりです・・・あの・・佐々木編集長はいらっしゃいませんか？」

「まだ帰ってないわよ。もうすぐ帰って来ると思うからそこにでも座って待ってたら？」

「はぃ・・」

オレは藤さんに進められたとなりの席に座った・・・

「ユウちゃんお菓子食べる？」

「ぁ・・はぃ・・」

オレはもらったミニサラダを食べながら藤さんがやってることを見ていた・・・

・・パソコンの画面に写真を入れて・・四角いやつを広げて中に文字を打って・・あっという間にＪＩＮＯＮの紙面が出来ていく・・・すごい手の動きだ・・・

・・オレには何をやってるのか全然わからない・・・

「面白い？」
「ぁ・・はぃ・・・でも難しそうですね・・・」
「編集ソフトはちょっと難しいけど、慣れればそれほどでもないわよ。ＩｎＤｅｓｉｇｎはわかりやすい方だしね。」
「インデザイン？」
「ＩｎＤｅｓｉｇｎってのはこの編集ソフトの名前よ。」
「あ・・そっか・・・」
・・オレはパソコンのことは良くわからない・・安部っちならパソコン得意みたいだからわかるかも知れないけど・・・

「ごめん！打ち合わせが長引いちゃって。」
佐々木さんは編集部に入ってくるなり、オレを見つけて言った・・・
「ユウちゃん待たせちゃったわね。」
「あ、いえ・・お久しぶりです・・・」
オレはイスから立ち上げってペコリとお辞儀した。

「具合はどうなの？　前に会った時より、ずいぶん明るくなった気がするけど？」
「あ・・はぃ・・・前よりは・・・」
「あれ？　ユウちゃん病気だったの？」
いきなり藤さんに聞かれて・・・
「ぁ・・いぇ・・ちょっと落ち込んでただけで・・・」
オレは適当にごまかした・・・

「ユウちゃんちょっと来てくれない？」
「はい。」
オレが佐々木さんの後をついていくと、佐々木さんはスタジオに入っていった・・・
「ぁ！・・進藤さん・・お久しぶりです・・」

「ユウちゃん！どうしたの？またモデルやる気になった？」
「ぁ・・いぇ・・そういうワケじゃ・・・」
オレが慌てて否定しようとすると・・・
「ユウちゃん、ちょっと撮影頼めないかしら？」
「え？！・・そ・・そんな・・・」
・・佐々木さんったら・・いきなり何いうんだろう・・・
「ギリギリで間に合わないかもって言ってたのあったでしょう？」
「ああ、あれか、あれならユウちゃんにピッタリだけど・・」
「ね、ユウちゃんやってみましょう？」
・・え・・えぇ・・！
「・・あの・・わたし・・やってもいいんですか？」
「もちろんよ。ユウちゃんはちょっとの間お休みしてただけなんだから！」
「ぁ・・や・・やります！　わたし・・ホントはやりかたっかんです！」
・・また雑誌のモデルをやれるなんて！・・・なんだか夢みたいだ！！
まだ2月になったばかりだけど、雑誌の世界ではもう初夏の装い・・淡いブルーのフワフワのシフォンワンピに、ピンクのリボンがついた白いツバ広帽子・・・足元にはこれも白の編み上げのサンダル・・・こういう可愛いのオレは大好きだ！
・・オレ好みの服だと自然にテンションも上がっちゃう！
メイクルームに行くと・・・

「ユウちゃん？！」
メイクのカネちゃんが目を丸くして、オレに飛びつくように抱きついてきた！
「カネちゃん久しぶり！」
・・カネちゃんはオレよりお姉さんだけど、小さくて可愛い人だ・・
・決して美人じゃないけど・・女の子どうしならそんなの関係ない。
女の子は男の子と違って、女の子の中の色んな可愛さを見つけられるのだ！
「ユウちゃん絶対戻ってくると思ってた！」
「・・ほ・・ほんと？」
「うん、またユウちゃんのメイク出来るなんて嬉しいよ！」
「わたしもカネちゃんにメイクしてもらえて嬉しい！」

・・メイクさんって女の子を自分の手で可愛くメイクするのが好きみたいだ・・そのクセ自分はいつもノーメイクだったりする・・・いつも可愛いコを、より可愛くメイクしてるから・・自分にメイクしても満足できないのかも知れない・・・

カネちゃんにメイクしてもらうと、オレもまたＪＩＮＯＮのモデルの顔になっていく・・・

・・これまでもオレは読者モデルとして自覚を持ってやってた気でいた・・・だけど今になって思えば・・・オレはまだまだ読者モデルということに甘えていたと思う・・・ＪＩＮＯＮに載るということの責任を・・オレは良くわかっていなかった。

・・オレは読者モデルだから・・モデルと言われるのが恥ずかしかった・・・モデルと言えるのは蟹原さんのような素敵な人のことだと思っていた・・・でも雑誌に載ってしまえば、読者から見たらオレも蟹原さんと同じように見えるかも知れない・・・このまえ弘子

のところで会った中学生の女の子たちのように・・・

だったらオレの“読者モデルだから”という気持ちも、オレのことをモデルとして見てくれる、あのコたちにとっては失礼なことかも知れないし・・・オレは蟹原さんたちと一緒の雑誌に載る以上、同じモデルの気持ちでいるべきなのかも知れない・・・ＪＩＮＯＮを見てオシャレの参考にしている読者のためにも・・・

“バシャッ・・バシャッ・・”

大きな音をたてて傘に反射したストロボが光る・・・この感じ・・

１ヶ月少しぶりだけど・・すごく久しぶりな気がする・・・

進藤さんがシャッターを押すたびに少しづつポーズを変えていく・・

・スカートのスソをつまんでみたり・・バッグを肩にかけてみたり・

・青空を見るように上を向いてみたり・・・モデルのポーズはだいたいパターン化されている・・・

・・オレ・・ちゃんとキレイに笑顔が作れてるかな・・・

・・でも進藤さんの様子を見てると、いつもよりノってる感じだ！

「ユウちゃん片足跳ねてみようか！」

これもお決まりのポーズのひとつだ・・・オレは楽し気に片足をピョンと後ろに跳ねあげた。

「ユウちゃん良かったわよ！　もう大丈夫みたいね。」

撮影が終ると佐々木さんが言ってくれた。

「ありがとうございます！」
・・またモデルをやれるなんて・・ホント・・夢のよう・・・

「どうだった？　進ちゃん。」
データを編集部に持って行って、戻ってきた進藤さんに佐々木さんが聞くと・・・
「うん、良かったよ。ユウちゃん前より柔らかさが増したんじゃない？」
「・・？」
「あ、私もそう思った！　動きがなめらかになったわよね！」
「・・・・・」
・・オレには・・何が柔らかいのか、なめらかなのかわからないけど・・・良くなったのなら嬉しい。

「佐々木さん、アレやっぱりユウちゃんで決まりなんじゃない？」
「そうね・・ユウちゃんさえ良ければだけど・・・」
「？・・な・・何のことですか？」
「あのね、メンズジノンで若いコ用に紳士服の別冊を急遽出すことになってね。」
「あ、リクルート・・っていうのですか？」
「リクルートは就活用だけど、こんど出すのはフレッシャーズって言って、入社してから初めて買うスーツの紹介なの。リクルートよりもう少し高級で本格的なヤツよ！」
「へぇ～・・」

「最近は紳士服メーカーも女性用のスーツも作ってるんだけど、売れ行きはイマイチらしいの。紳士用のスーツが頭打ちだから女性用も売りたいらしいんだけどなかなかみたいで・・・」
・・そりゃぁそうだろうなぁ・・女の子が紳士服専門店にって・・・
なんか入りにくそうだもん・・・

「それでメンズジノンはジノンボーイ目当ての女の子もけっこう買うから、そこで女性用のスーツも力を入れてはどうかってことなのよ。」

「・・・・・」

「ただ、紳士服メーカーの方から茶髪のコはNGって言われてるらしくて、黒髪の短かめのコはいたんだけど、長髪でイメージに合うコがいないから、ユウちゃんはどうかってご指名だったの。」

「え？　ご・・ご指名？！」

「道端君が九州にイメージにピッタリのコがいるって向こうのカメラマンさんに言ってくれたそうよ。」

「！！・・純・・じゃなくて・・・道端さんが？！」

「ええ、ユウちゃんも去年一緒にバレンタイン特集の撮影したから知ってるわよね。」

「あ・・はい！」

・・ほんとは・・オレと純平は恋人どうしだけど・・・それは秘密だ・・・

・・純平がオレを推薦してくれたなんて！・・嬉しくてドキドキしてきた！

「ぁ・・えっと・・でも・・女の子は別に撮影するんですよね・・・？」

「いいえ、男の子と一緒の撮影もあるはずよ。」

「え？・・それじゃ・・道端さんも一緒に撮影するかも知れないんですか？」

「たぶんね、現役のジノンボーイは全員出るみたいだから。」

・・そんなぁ！・・また純平と一緒にお仕事出来るなんて！・・どうしよう！！

「撮影は今度の１１日の祭日、朝イチで東京に行って、次の日の朝イチで帰ってくるっていう強行軍なんだけど。」
「え？・・東京？・・朝イチ・・？」
・・オレ東京なんて・・一度も行ったことないのに・・・
「あ・・あの・・誰と行くんですか・・？」
「ひとりで行ってもらわなきゃいけないんだけど・・ムリかしら？」
・・ひとりで？！
「ぇ・・えっとぉ・・・ムリかどうか・・わたし東京に行ったことないし・・・」
・・うぅ・・不安だなぁ・・・でも・・純平には会いたいし・・・

「空港までは私が連れて行ってあげるし、向こうに着いてどうすれば良いかはちゃんと書いておくから大丈夫よ。」
「・・ぁ・・はぃ・・・」
・・本当に大丈夫かなぁ・・・オレ・・飛行機も乗ったことないのに・・・でも・・純平に会いたい！
「行ってくれる？」
・・うぅ・・心配だけど・・どうにか・・なると思う・・・
「はい！行きます！　行かせて下さい！」

・・だって・・・オレは純平に会いたい！

・・純平に会うためだったら・・初めての東京も・・初めての飛行機も・・オレは平気だ！

ＡＴからちょっとしたお知らせ

ファッションショーのシーンで、モデルさんが歩く突き出た部分をこの小説では「キャットウォーク」と表現していました。しかし最近は「ランウェイ」という表現が有名になってきたので書き換えています。そういうタイトルの映画も出来ましたし。

もともと「キャットウォーク」という表現は、天井が高い建物の天井付近にある通路に対しても使うので、すでにスタジオのシーンで使っているし、モデルが歩く部分には使いたくなかったのですが、書いた時に調べた限りでは「ランウェイ」という名前はいまいち使われていない感じだったので泣く泣く「キャットウォーク」と表現していました。なので「ランウェイ」に替えられて良かったです。すべて書き替えたつもりですが、もし残ってるところがあったら、報告いただけると有り難いです。

それと、１話で白鴻女学園を「清楚で伝統的なデザインのセーラー服が人気の女子校」と表現していた部分も書き換えています。けっこう普通のセーラー服だし、「人気の」という表現と「生徒数が減少している」という事実がちょっと合わないので（笑）

第１５８話　東京　ヒミツの関係

２月１１日の祭日、オレは朝一番の飛行機に乗るために福岡空港に来た。

福岡空港までは編集長の佐々木さんがついてきてくれることになってたけど、かあさんも心配だって言って、結局空港までかあさんの車で一緒に行くことになってしまった・・・

・・心配だからって・・・高校生にもなって・・お母さんがついてくるなんて・・・なんか・・佐々木さんにオレが過保護みたいに思われそうで恥ずかしい・・・

・・まあ・・オレだってひとりで東京に行くのは不安だから・・かあさんが心配する気持ちもわかるけど・・・

でもかあさんと佐々木さんは妙に気が合うみたいだ・・・オレはずっと家にいるかあさんしか知らなかったけど、お仕事をしてる時のかあさんは・・・なんとなく佐々木さんと雰囲気が似てるかも知れない・・・出来る女って感じで・・ちょっと尊敬しちゃう。

かあさんと佐々木さんは歳もわりと近いし・・・だから気が合うのかもしれない・・・空港への道のりも、オレをほったらかしてずっとふたりで楽しそうにしゃべっていた・・・ほとんどお仕事の話だから、オレには良くわからなかったけど・・・

今日のオレは珍しくパンツスタイルだ・・・電車を乗り換えたりする時に、何かで遅れたりして走ったりしなきゃいけないかも知れ

ないから、かあさんにパンツスタイルにしなさいって言われたからだ・・・

・・最近はオレもずいぶん体型が女の子らしくなってきたみたいで、レディス物のパンツも何とかはきこなせるようになってきたけど、本物の女の子と比べればやっぱり腰の張りが足りないし、お尻の丸みも少ないから好んではきたいとは思わない・・・撮影でどうしてもパンツをはかなきゃいけない時は、お尻を少しふっくらと見せるパッドを付けることもある。これはスタイリストのケイコさんに教えてもらった方法だけど、お尻が小さい女の子もけっこう使うものらしい。　本物の女の子だってお尻の大きさは人それぞれだ。

今日、オレも実はお尻パッドが内蔵されたショーツを着けている。レディスのスーツにはスカートのやつと、パンツのやつがあるらしいから、パンツをはく時にはこれがあった方が断然いい！　特に横を向いた時にお尻の形が良くなるのだ。

ケイコさんに聞いた話だと、ハリウッドの女優さんなんかは全身の形を整える下着を着ているらしい・・・お腹を引っ込め、ウエストは細く、お尻はカッコ良く出るように・・・それでいてすごく薄いから、服を着たら着けてることが全然わからないそうだ・・・テレビで良く観るレッドカーペットを歩いてる時なんか、ドレスの下にはみんなそういうのを着けているらしい・・・オレはそこまでしたいとは思わないけど・・・

今日はほとんど日帰りみたいなものだから、荷物は最低限のものだけをバッグに入れてきた・・・だけどそれとは別に紙袋がある・・・だって今日は2月11日・・・もうすぐバレンタインデーだからいろんなチョコをいっぱい買って、少しづつきれいにラッピングし

たヤツを沢山持ってきたからだ・・・スタジオに何人いるかわからないから多めに用意しないといけなかった・・・おこづかいも少ないのに・・女の子って大変なのだ・・・

・・もちろん純平用のも持ってきた・・他の人のと違って特別なヤツを・・・

空港では搭乗の手続きの仕方を佐々木さんに教えてもらいながら自分でやった・・だって帰りはひとりでやらなきゃいけないから・・・明日はまた朝一番の飛行機に乗って福岡に帰ってこなきゃいけないし・・・ちゃんと帰ってこれないと学校に遅れてしまう・・・

羽田空港に着いた時はひとりだったから、ちょっと心細かったけど、何とか自分で手続きも出来た。オレだってもう17歳だもん、これくらいひとりでも出来るのだ!

今日の撮影スタジオは目黒ってところにある。オレは東京の地理にはまったく詳しくないから、教えられたとおりに行くしかない・・・まあ、わからなくなったら連絡先も聞いてるから電話すれば何とかなりそうだ・・・

目黒に行くには・・・羽田空港から京浜急行の品川方面行きの電車に乗って・・品川で降り・・品川からはＪＲ山手線の渋谷・新宿方面行きの電車に乗って・・3つ目の目黒駅で降りる・・・

オレは東京ってどんなとこかと思ってた・・・ドラマなんかで見る東京はすごく都会でキレイなイメージだったけど・・・実際に来てみると山手線の駅なんか、オレがいつも乗っている西鉄電車の駅とそんなに変わらない・・・テレビに写すとキレイに見えるのだろうか？

目黒駅からスタジオまでは地図を描いてもらってたし、すぐ近くだったから迷わずに着けてホッとした。時間はかなり早めだけど、オレみたいな下っ端が遅れて行ったらヒンシュクものだ・・・

ドアを開ける前に、緊張でドキドキする気持ちを抑えるため、一度大きく深呼吸をした・・・

「ぉ・・おはようございま～す・・・」

スタジオのドアを開けて中に入ると、ちょっとした狭いロビーには男の人が・・・ピッタリとした黒い革のパンツに、茶色の革のジャケット・・・髪はチリチリで長めだけど・・なんか・・オシャレでカッコイイ感じの人・・・面長でなんとなく俳優の玉木宏に似てるかも・・・

「おはよう！君は・・ユウさんだね？」

「ぁ、はい・・春日ユウです！」

オレは丁寧にお辞儀をした・・・

「俺はカメラマンの宮城〈みやしろ〉今日はよろしく。」

そう言ってその人は、ジャケットの胸のジッパーを開けて、出した名刺入れから名刺を1枚オレに差し出した。

「あ！は・・はい・・」

オレは渡された名刺を受け取ると、慌てて自分の名刺をバッグから出して両手で持ってカメラマンさんに渡した・・・

・・うぅ・・名刺交換なんてやったことないから緊張するぅ・・・

この名刺は今朝、佐々木さんにもらったものだ。今日のためにわざわざ急いで作ってくれたらしい・・・そこには“九州ＪＩＮＯＮ専属モデル・春日ユウ”と書いてあった・・・

オレは本当は“専属モデル”じゃなくて“専属読者モデル”なんだけど、東京でナメられたら可哀想だと思ったのか“専属モデル”と印刷してくれたみたいだ・・・そんな気を使ってくれた佐々木さんに迷惑かけないように、オレも“専属モデル”らしく頑張らなきゃ！

・・だってオレのせいで九州ＪＩＮＯＮのモデルの評判が落ちたりしたら大変だ・・・

「たしかに純平が言ったとおり新人ＯＬのイメージにピッタリだね。」

「！！」

「高校生だっけ？」

「あ、はい・・２年生です・・」

「高校生にしては大人っぽいよね。」

「！・・そんなぁ・・・」

・・オレは・・自分ではそんなに大人っぽい方じゃないと思うけど・・・

「もうすぐみんな来るはずだから、そこらに座って待ってなよ。」

「あ・・はぃ・・・」

オレはソファーに浅く腰かけた・・・

「あと１時間くらいしたらクライアントが揃うと思うから、そしたら撮影だから。」

「クライアント？」
「各紳士服メーカーの人達だよ。紳士服の赤木とか、クタタとか。」
「あ・・・」
・・そっか・・いろんな紳士服メーカーの人も来るんだ・・・
「大きな紙袋だね。何が入ってるの？」
「ぁ・・えっと・・・」
・・そんなぁ・・いきなりカメラマンさんにつっこまれたら・・焦っちゃうょ・・・
「ぁ・・あの・・これよかったら・・・」
オレはカメラマンさんに良いヤツを渡した・・・チョコの包みは３種類あって・・良いヤツ・・普通のヤツ・・ちょっと小さいヤツ・・・包みは色々だけど、オレにはわかるようにリボンの色を変えている・・・赤いリボンが良いヤツだ。
「おっ！　もしかして義理チョコ？」
「・・はぃ・・・あ！・・ぃ・・いえ・・・」
・・オレったら・・焦って失礼なことを・・・こんな時どうすればいいんだろう・・・
「ぁ・・甘いものは苦手ですか・・？」
「イヤ、俺ってこう見えて結構甘党なんだよ。」
「・・良かった・・男の人って甘いもの苦手な人も多いから・・・」
チョコなんて本当は女の子のほうが欲しいくらいだ・・・
「もしかしてスタッフの分もある？」
「あ・・はい！　たくさん持ってきたので・・」
するとカメラマンさんが立ち上がって・・・
「お～い！春日ユウちゃんが義理チョコくれるから集れ！」
！！・・・そんなに大きな声で“義理チョコ”って・・実際“義理チョコ”には違いないけど・・・

スタッフの人には黄色いリボンの・・ちょっと小さいヤツだ・・・

・・こういうのってホント難しい・・カメラマンさんとスタッフさんがまったく同じだと、カメラマンさんが気を悪くしそうだし・・・でも一目で違いがわかっても・・なんだかオレが媚び売ってるように思われそうだし・・・

「おぉ〜！　ありがとうユウちゃん！」

でもスタッフの人たちはオレがチョコを渡すと、みんなおおげさに喜んでくれた・・・

・・東京の人って明るいなぁ・・・福岡の男の子はもう少しシャイだから、そんなに素直に喜ばないと思う・・・オレがもし男の子だった頃にバレンタインチョコなんかもらっても・・たぶん何も言えなかったかもしれない・・・まあ、男の頃のオレにはそんな機会は一度も無かったけど・・・

・・そんなオレが今は男の人にバレンタインチョコを配ってる・・・これって良く考えると不思議な感じだ・・・義理チョコでも喜んでくれるとオレも嬉しくなってくる・・・やっぱり渡す方の女の子にとっては、おおげさなくらい喜んでくれた方が渡しがいがあるってもんだ。

・・東京はスタッフの数が福岡よりだいぶ多かったから・・・チョコを多めに用意しといて良かった・・

撮影時間が近づくと男のモデルさんたちも次々にやってきた・・・全員で１０人ほど・・その中には純平の姿も・・・

でも純平はオレを見つけても、軽くオレにだけわかるくらいに微笑んだだけで、オレの前を通り過ぎて行った・・・オレたちが恋人どうしなのは他の人たちには秘密だから・・・これは仕方がないことだ・・・

・・だけど・・わかってもやっぱり淋しい・・・純平とお話できないなんて・・・

・・でも今日は仕事なのだ・・・少しくらい淋しくても元気に撮影頑張らなきゃ・・・だってせっかく純平がオレをカメラマンさんに推薦してくれたんだもん！　しっかりやらないと純平の顔まで潰しちゃう・・・

メンズモデルの人たちには青いリボンのチョコを渡したけど、スタッフの人と違って黙って受け取るか、軽く「ありがとう」って言うくらいだった・・・まあ、義理だからどうでもいいんだけど・・・

純平にもみんなと同じ青いリボンのを渡した・・・もちろん後でちゃんとしたのを渡すつもりだけど、みんながいるところでは無理だ・・・純平の方もみんなと同じで、軽く「ありがとう」って言っただけだった・・・でもオレを見る瞳は他のモデルさんたちと違って優しかったから少し安心した。

メンズモデルはオレたち女の子のモデルと違って、撮影までの時間をでひとりで過ごす人が多いみたいだ・・・

オレたち女の子のモデルは、撮影前もみんなでワイワイ盛り上がって、そのままのノリで撮影に入るのに・・・メンズモデルの人たちは同じ部屋にいる人も、みんなひとりで自分の世界に入ってる感じ・・・ただひとりを除いては・・・

「ねえ、君なんて名前？」
「・・春日・・ユウです・・・」
「こんど合コンやらない？　カッコいいヤツ集めるからさ！」
「！・・ぃ・・いえ・・けっこうです・・・」
・・コイツの名前はジョージ・・・ハーフだし顔はちょっと外人っぽくてカッコいいかも知れないけど・・・いくら何でも軽すぎだ！
「そんなこと言わないでさぁ！　メールだけでも交換しようよ！」
「・・わ・・わたし・・撮影が終ったらすぐ福岡に帰るから・・・」
「え？　きみ博多のコ？　どうりで可愛かっと思っとっとバイ！」
「！？」
・・・ムチャクチャな博多弁・・なんか・・悪気はないのかも知れないけど、バカにされてるような気がする・・・

・・オレがそんな誘いに乗るような軽い女の子だとでも思ってるんだろうか？・・・オレはこんな軽いヤツはきらいだ！
「・・し・・すみません・・もうメイクしなきゃいけないから・・・」
オレは適当な理由を言って、急いでその場を離れた・・・

オレと同じレディススーツの撮影をする、もうひとりの女の子のモデルはＪＩＮＯＮ本誌でも時々見かけるメグミさんだった・・・

メグミさんはオレと同じ黒髪で、前の方を少し長くしたショートボブだ。

・・そういえばオレに話が来たのは、髪が長いコと短いコが必要で、オレの髪が黒くて長髪だったからって佐々木さんが言ってたけど・・短い方のモデルがメグミさんだったなんて・・・

ふだんのメグミさんは森ガールっぽい服とか、そういう柔らかな自然な感じのイメージが強いモデルさんだから、ちょっと意外だったけど・・・案外ＯＬさんのイメージにも合ってるかも・・・

・・メグミさんはオレとは違うタイプだけど・・優しそうで、けっこう憧れてたから一緒に撮影できるなんて嬉しい！

「ぉ・おはようございます！」
オレは緊張してたけど、出来るだけ明るく挨拶した・・・だって第一印象って大切だ・・・
「？・・あんた誰・・メイクさん？」
「ぃ・・いえ・・今日一緒に撮影させていただきます。春日ユウです！」
「春日ユウ・・どっかで聞いたような気はするけど・・・」
・・眉間にシワが・・・メグミさん今日は機嫌が悪いのかな？・・・
「ぁ・・あの・・福岡で・・読者モデルやってます・・・」
「あ～・・はぃはぃ・・読者モデルのコね・・・」
「・・・・・」
・・雑誌の時と・・イメージ違うな・・・
「でもさぁ、わざわざ福岡から素人呼ばなくたって、東京にもモデルは沢山いるのにねぇ。」
「・・・・・」

・・なんか・・・これってイヤミ・・・？
「どうでもいいけど、今日は早く終りたいんだから、あんた撮影で足引っ張らないでよね。」
「・・ぅっ・・は・・はぃ・・・」
・・メグミさんがこんなイジワルな言い方する人だったなんて・・・ちょっとショック・・・

「？・・なに？　用が済んだら、さっさとどっか行ってよ。」
・・ぇ・・・
「ぁ・・あの・・わたしもここで・・メイクするみたいなんですけど・・・」
「はぁ？！　あんた素人でしょう？　なんであたしが素人と一緒にメイクしなきゃいけないのよ！」
「・・そ・・それは・・・」
・・そんなのオレだって知らないよぉ・・・たしかにこのメイク室は2人で使うにはちょっと小さい気もするけど・・今日はメンズが主役だから、女の子はあまり居場所がないのだ・・・

メグミさんはいきなりメイク台の上に置いた携帯を手に取って、どこかに電話しだした・・・
「ねえ、春日ユウって読者モデルのコが来てるんだけど、あたしと同じメイク室だっていうのよ？　どうなってんの？」
・・うわぁ・・・事務所に文句言ってる・・・どうしよう・・・そんなにオレと一緒が嫌なのかなぁ・・・
「え？！　専属モデル？　だって本人が読者モデルだって言ってるわよ！・・・そうなんだ・・じゃぁ・・しょうがないか・・」

電話を切ったメグミさんはオレを見て・・・
「あんた昨日づけで九州ＪＩＮＯＮの専属モデルになってるそうじゃない！」

「え？・・・そ・・そうなんですか・・？」
「なに？　あんた自分が専属モデルかどうかも知らないの？！」
「・・きゅ・・急だったから・・・」
・・名刺に書いてあった肩書きって・・本当だったんだ・・・
「のんきなコね・・・契約はきちんとしといた方がいいわよ。そういうのトラブルの元なんだから。」
「ぁ・・は・・はぃ・・・」

それからガサッとメイク台の上に広げた自分のメイク道具をどけて・・・
「ほらそっち使いなさい。」
「ぁ・・ありがとうございます・・・」
オレは遠慮しながら鏡の前に座った・・・そんなにイジワルな人でもないのかな・・・それとも読者モデルが嫌いなんだろうか・・・

・・そういえば・・鏡に向ったはいいけど・・今日はどんなメイクすればいいんだろう・・・
スーツにいつものティーン誌のメイクじゃ変だろうし・・オレまだ高校生だし・・ＯＬさんのメイクなんてやったことないからわかんないよ・・・

お化粧はちゃんとメイクさんがしてくれるから問題ないんだった。
焦って損しちゃった・・・
やっぱり今日はレディススーツってことでＯＬさん風にしなきゃいけないから、いつもよりメイクは薄め・・でも下地をしっかり作っ

ているから本当に薄いワケじゃない。あくまで薄く見えるお化粧だ・・・しかもお仕事をする時のメイクだから、いつもよりキリッとした印象だ・・・

　オレたちのメイクが終ったころ、スタッフの人が呼びにきた。どうやらクライアントの人たちが来たみたいだ・・・メイク室から出て行くと２０人ほどのスーツの男の人たちがいた・・・今日集まった１０社の紳士服メーカーの人たちは、それぞれがライバル会社だから名刺交換しながらも微妙な雰囲気だ・・・まだ１７歳のオレとしては・・ちょっと気後れしちゃう・・・

紳士服メーカーの人どうしの名刺交換が終ると、オレたちモデルをひとりづつ紹介してくれた・・・メンズモデルの人たちから始まって、もちろんオレが最後だと思ったら、なんとオレは最後から２番目で、最後はメグミさんだった・・・オレが一番下っ端なのに・・なんか気まずいなぁ・・・オレが九州ＪＩＮＯＮの“専属”だからだろうか・・・

オレは名刺交換なんて、さっきカメラマンの宮城さんとしたのが初めてだから、こんなに大勢の大人たちと名刺交換するなんてドキドキものだ・・・手が震えちゃう・・・だいたいモデルは名刺交換なんてあまりしないんじゃないかな・・・蟹原さんが名刺交換してるのなんて見たことないし・・・

向こうの名刺を丁寧にもらって、オレの名刺を渡す・・こういうのは今朝、佐々木さんに教えてもらったばかりだ・・・ふと見ると、オレのあとから名刺を渡してるメグミさんはにこやかにチョコを一緒に渡してる。　し・・しまった!!・・・オレ、メイク室にチョコ忘れちゃった・・・ど・・どうしよう・・・オレ・・気が利かない女の子だと思われちゃう・・・

でもどうしようもないままオレはメイク室まで戻ってきた・・もう・・せっかくチョコ持ってきたのに・・オレ何やってんだろう・・・

「どうしたのよ、急に落ち込んじゃって。」
「ぁ・・いぇ・・チョコ持って行くの忘れちゃって・・・クライアントの人に渡せなかったんです・・・」
「そんなの今から行って渡してくればいいじゃない？」
「ぇ・・で・・でも・・・」
「そんなに気が弱くちゃモデルなんてやってけないよ！あんた何歳なの？」
「・・じゅうななさいに・・なったばかりです・・・」
「なんだ、結構若いんだ。大人っぽいんだね。」
「・・そ・・そうですか・・・？」

「仕方ないな・・ほら行くよ！」
「え？・・ど・・どこに・・？」
「チョコ渡しによ！」
「え？・・え？！」
オレはメグミさんに手を引っ張られてクライアントの人たちの所に連れていかれた・・・メグミさん・・強引すぎる！

「すみませ～ん。このコがみなさんにチョコ渡すの忘れちゃったらしくてぇ。」
そう言ってメグミさんはオレをけしかけるようにお尻をポンと叩いた・・・
「あ・・あの・・すみません・・良かったらどうぞ・・・」
オレはみんなに頭を下げながら、なんとかチョコを配っていった・・・みんな偉い人なのに、ちゃんと受け取ってくれてホッとした・・・

メイク室に戻るとオレはメグミさんにお礼を言った・・・
「あの・・ありがとうございます！」
そう言ってオレは深々と頭をさげた・・・
「いいわよ別に・・そんなに落ち込まれて撮影に影響したら困るからよ。」
「ぁ・・はぃ・・は・・はやく終われるように頑張ります！」
「あれは冗談よ、まぁ、はやいに越したことはないけど。」
「ぁ・・はぃ・・」
・・メグミさんってイメージと違って、ちょっとツンツンしてるけど・・やっぱり優しい人なのかも！

今日の撮影は、いくらオレたちレディスにも力を入れるといっても、やっぱり紳士服はメンズが主役だから、オレたちはメンズの合間を縫っての撮影になる。

最初はグレーのレディススーツで、同じデザインだけどメグミさんがパンツ、そしてオレがスカートで一緒に撮影する・・・雑誌でのメグミさんって、いつもは女の子っぽい恰好が多いけど・・こういう服も似合うんだなぁ・・・それにスーツ着ると案外胸も大きい・・
・

・・それにしても・・オレがＯＬさんになったらこんな感じなのか・・・なんかレディススーツなんてスッゴク大人って感じがする！
オレはたぶん普通のＯＬさんにはなれないから・・撮影だけでもこういう恰好できるのは嬉しい。

・・こんなオレを見て・・純平はどう思うかな・・・

オレたちがスタジオに入ると、ちょうど純平が撮影している最中だった。スーツ姿の純平も男らしい感じでステキ！　キリッとしてて・・いつもより凛々しく見える！

「純平！フレッシュな感じで！」
すると純平は片手で拳を握り、弾けるような笑顔になった！

・・あぁ・・オレには純平の笑顔が眩しすぎる！　あんな笑顔見せられたら・・今すぐ駆けよって抱きつきたくなっちゃう！・・・そんなこと絶対に無理だけど・・・

「あんた純平のこと好きなの？」
「え？！・・ど・・どうしてですか・・？」
「だって目がハートになってるわよ。」
「え！え？！」
・・まさか・・オレと純平のこと・・バレちゃった？！

「純平ってちょっとカッコイイからねぇ。まあ、あたしの好みじゃないけど・・あたしはもっとガツガツしてる男がいいわ。」
・・なんだ・・ただオレが憧れてると思ったみたいだ・・・
「・・ガツガツって・・ジョージさんとか・・？」
「まさか！　たしかにガツガツしてるかも知れないけど、アイツは軽すぎよ！」
「あはは・・ほんと！」
「もしかしてあんたも合コンに誘われた？」
「ぁ・・はい、さっき。もちろん断りましたけど。」
「当り前よ！あんなヤツについて行ったらロクなことないわよ！」
ふふふ・・なんかメグミさんってそんなにイヤな人じゃなさそうだ。
こういうの“アネゴ肌”っていうのだろうか？

撮影が終って純平がスタジオから出ていくと、こんどはオレたちの番だ・・・

スタジオにはクラシックの音楽が流れている・・・オレたち女の子の撮影でも音楽を流すことはあるけど、たいていはアヴリルとかブリトニーとか女の子に人気の元気が出る曲が多い・・・こういうクラシックが流れる現場は初めてだ・・・

スーツの撮影も初めてだから、どんなポーズをとったらいいのか良くわからない・・・手を前に組んだり・・頬の横に手を添えてみたり・・腰に手を当ててみたり・・・メグミさんがやるのを真似しながら何とか最初の撮影を乗り切った・・・スーツのポーズってそんなに種類がないから逆に難しい・・・仕事をする時に着るものだから、あまり派手なポーズもとれないし・・・

「あんたスーツは初めて?」
「ぁ・・はぃ・・ポーズ・・変じゃなかったですか・・?」
「そうでもないよ。スーツとかフォーマルなんかは、だいたいポーズが決まってるからね。まあ、しいて言えば足にも気を使った方がいいと思うけど。」
「ぁ・・足・・・・」
・・そっか・・さっきは手にばかり気を取られて足にまで気が回らなかった・・・普段から気をつけてるから、そんなにヘンにはなってないと思うけど・・・次はもっと気をつけよう・・・

撮影用の衣装を脱いで、次の衣装を着る前に軽くあり合わせの上着を羽織って急いでトイレにいった。

用が済んでトイレを出ると、そこでバッタリ純平に出くわしてしまった・・・しまった!こんなあり合わせの恰好で純平に会うなんて・・・

「じゅ・・純平・・ス・・スーツも決まってたね・・・」

ヒィ~・・オレ何ヘンなこと言ってるんだ・・・!

「有希のスーツ姿も新鮮だったよ。」

「!・・そ・・そう?　ヘンじゃなかった?」

・・純平に“有希”と呼ばれると・・すっごくドキドキする!

「全然ヘンじゃないよ。　ちょっと会わない間に大人っぽくなったね。」

「!・・そ・・そんなことないわよ・・ス・・スーツ姿だからじゃない・・?」

「うん、そうかも知れないね。　そういえばさっき笑ってたけど何か楽しいことでもあった?」

「ぁ・・うん・・メグミさんが・・ちょっと面白いこと言ったから・・・」

・・まさか純平のことや、ジョージが軽いって言ってたなんて言えないよ・・・

「有希は今日こっちに泊まるの?」

「うん・・明日は朝イチで福岡に帰らなきゃいけないんだけど・・・今日はビジネスホテルを取ってもらってるの・・この近くらしいんだけど・・・」

「だったら撮影が終ったら送ってあげるよ。」

「ホント?!」

・・撮影が終るのは、たぶん夜になると思うから・・純平が送ってくれるならこれほど頼もしいことはない!

「あれぇ？　おふたりさん！　そんなところで何コソコソやってるのかな？」

！・・うぅ・・イヤなヤツが来た・・・ジョージだ・・・

「純平もやるねぇ！」

「そ・そういうんじゃないよ。ユウちゃんとは一度福岡で一緒に撮影したことがあったから、ちょっと近況でも聞いてただけだよ。」

「ほんとかなぁ？　な～んか親し気だったみたいだけど？」

そう言ってオレの顔を見る・・・オレ・・顔が赤くなってないかな・・・

「そうなんです。わたしたち1年前一度会っただけなんです。」

・・本当は純平と会うのは4度目だけど・・・でもそのうち1度は新幹線の中でちょっとお話しだけだ・・・

「そ・それじゃ！　わたし行かなきゃ・・」

オレはつれない素振りでその場を離れた・・・

・・もうっ！・・アイツさえ来なきゃ、もう少し純平とお話できたのに！！

メイク室に戻ると次のスーツに着替える・・・今度はオレがパンツの方だ・・・

「あんたパンツも似合うわね。」

「そ・・そうですか・・？」

・・オレは元々は男だから・・パンツが似合ってもあまり嬉しくはないけど・・・

・・でも・・モデルとしては・・いろんなのが似合うのは、ちょっと嬉しいかも・・・

・・だけど・・ＯＬさんはやっぱりパンツよりスカートの方がいいと思う・・・だって・・佐々木さんみたいにタイトスカートのスーツを着てテキパキ仕事をする女の人ってカッコイイ！

・・たしかにパンツの方が仕事はしやすいかも知れないけど・・仕事をする時だって女らしくいたい・・・こんなこと元は男のオレが言うのも変かも知れないけど・・・

今度はひとりづつの撮影だったから、オレも足元まで気をつけながらポーズをとった。

「いいよユウちゃん！もう少し笑ってみようか！」

オレはそう言われて少し唇の端を持ち上げ、だんだんと笑顔を作っていく・・・カメラマンさんはそんなオレを次々に連続で撮影していく・・・撮影はとにかく枚数を撮るから、急な動作は禁物・・・それはいつもの女の子の服で撮影する時も同じだ・・・決め顔ばかりしてると、後で見るとどれもこれも同じような顔になってて、雑誌を編集する人が困っちゃうのだ。

・・でも・・馴れてくると、ポーズが少ない分スーツの方が枚数も少なめで楽かも知れない・・・

・・ただ・・着ているスーツのメーカーの男の人が、ずっと撮影するところを見てるのは緊張するけど・・・こんなこと女の子の服の撮影では経験したことがない。

オレたちはお昼休みをはさんで撮影を続けた。

レディススーツは各社１種類づつだから、メンズの合間を縫っての撮影でも、オレたち女の子の撮影分は３時ごろには終ってしまっ

た。

あとは男の子とのイメージショットが残ってるみたいだけど・・・
それまではヒマだからスタジオの隅っこでメンズスーツの撮影を見ていた。少しでも純平を見ていたいってのもあるけど・・・オレはスタジオが好きなのだ。

今撮影しているのはジョージだ・・・

ジョージもこうしてスーツを着てカッコつけてるとなかなかサマになってる・・・ハーフだから足も長いし・・頭も小さい・・・

・・まあ、純平のカッコ良さには全然かなわないけど。

「ユウちゃんオレのこと気になってるんじゃない？」
「！・・違います！　わたし撮影してるの見るのが好きなだけです！」
「またまたぁ！」
・・もうっ！・・ちょっとでもカッコイイなんて思って損しちゃった・・・やっぱりしゃべったら台無しだ！

日も暮れてきて、やっと終りが見えてきたころ・・・待ちに待った時が訪れた！

・・オレと純平が一緒に撮影する時だ！
・・・正直オレは、もう純平との撮影は無いんじゃないかと思いはじめていたくらいだ・・・

ストロボがどんなふうに当たっているかを確認するための薄暗い灯りの中で、オレは純平のとなりに立った・・・緊張してなかなか純平の顔が見れない・・・

カメラマンさんは言った・・・

「同期の新入社員どうしで、お互い好意を持ってるけど隠してる感じでいこう！」

！・・そ・・そんなぁ・・・それってまさにオレたちの今の状況みたいじゃない・・・！

・・オレが緊張しながら見上げると・・そこにはオレを見下ろす純平の笑顔が！！

・・あぁ・・このまま抱きついちゃいそう・・・でもオレはその思いを必死でこらえた・・・

「いいよ！ユウちゃんその表情いただき！」

カメラマンさんはバシバシ撮影を続けながらオレたちにどんどん指示を出す・・・

会社で立ち話するイメージや、並んで会社のろうかを歩くイメージや・・・なんか・・こんなことしてると撮影ってこと忘れちゃいそうだ！

・・歩く純平の腕にオレが追いついて手をからめたところで撮影は終ってしまった・・・

「そこまでいくとやりすぎかな？　完全に付合ってるよ！」

カメラマンさんが言うとスタジオに笑いが起こった・・・オレは我に返って恥ずかしさに一気に顔が熱くなってしまった・・・一瞬だけど・・すっかり撮影だってこと忘れてた・・・

第１５９話　恋人　初めてのランデブー

すべての撮影が終ると、オレと純平はスタジオから少し離れたところでこっそり落ち合って、ＪＩＮＯＮ編集部がオレのために用意してくれたホテルへと歩いて向った。

「荷物持つよ。」
「え？　ぃ・・いいわよ・・そんな気を使わなくたって・・・」
「いいから貸して！」
「あっ！」
そう言って純平はオレの手からバッグを取った・・・
「いいだろう？これくらいさせてよ。」
「あ、うん・・ありがとう・・・」
キャ～・・純平ってなんて紳士なんだろう！

・・だけどお昼のお弁当の残りが入ってるから・・意外と重いかも・・ちょっと恥ずかしいなぁ・・・

「今日はパンツなんだね。」
「うん・・お母さんがね、電車とか乗り遅れそうになったら走らなきゃいけないからって・・だからスカート持ってこなかったの・・・」
・・純平と歩くのなら・・スカートも・・もっと可愛い服だって・・たとえ荷物になっても持ってくれれば良かった・・・

・・純平には・・可愛いオレを見て欲しいから・・・

東京の夜の道を・・純平と並んで歩くなんて・・・なんだかロマ

ンチック！

「有希は今朝こっちに来て、スタジオに直行したんだろう？」
「うん。」
「だったら東京見物も出来なかったね。」
「あ、うん・・・」
・・でもオレはこうして純平と並んで歩くだけで、じゅうぶん満足なんだけど・・・

「あ！　でもね空港からの電車の中からスカイツリーは見えた！」
「そうか、スカイツリーなら遠くからでも見えるからね。」
スカイツリーはまだ半分しか出来てないのに、それでもすごく高かった・・・完成したらまた見にきたいなぁ・・・　（注：この話は現在２０１０年2月１１日です）
「本当はお台場とかレインボーブリッジとかも見れたら・・友達にも自慢出来たんだけど・・・」
・・ホントは・・純平と一緒の撮影だけでも十分みんなに自慢できるだろうけど・・・オレは純平のことをみんなに自慢したいとは思わない・・・純平のことは・・オレの心の中だけに大切にしまっておきたい・・・

「・・明日は何時の便に乗るの？」
「６時２５分・・学校があるから始発に乗らなきゃいけないの・・・」
「・・残念だな・・昼の便なら俺も仕事は午後からだから少しは案内出来たんだけどな・・」
「！！」
・・そ・・そんなぁ・・・純平が東京を案内してくれるなんて・・・そんなことが現実になったら嬉しすぎる！

・・こんなことなら・・無理言ってでも学校休めばよかったかな・・
・

・・でも・・それは贅沢ってもんだ・・・今のこの状況だって・・
想像もしなかったほど幸せなことなんだから！

道が細くなると純平は自分は車道側を歩きながら、さりげなくオレを車から守ってくれる・・・純平ってなんでこんなに優しいんだろう・・・
・・あまり近くを車が通ったときは、片手をそっとオレの肩に置いてくれたけど・・・車が行ってしまうと、その手はすぐに離れてしまった・・・

・・オレは・・もっと永く抱いていてくれてもいいんだけど・・・
そんなに気を使わなくてもいいのに・・・

・・もしも純平に“ギュッ”てされたらどんなに心地いいだろう・・
・想像しただけで目眩がしそう・・・

ホテルはすぐ近くだった・・もしもオレひとりだったら近いのはありがたいけど・・・今はもう少し遠くても良かったと思う・・・
・・そうすればもっと純平と並んで歩けたのに・・・そしたら・・
さっきの撮影の時のように・・腕を組むタイミングだって見つけられたかも知れない・・・

ホテルの下までくると純平は・・・
「それじゃ俺はここで帰るよ。」

「ぁ・・」

オレは思わず純平の服のソデをつかんでいた・・・

「・・あ・・あの・・わたしホテルって初めてで・・チェックインの仕方とかわからなくて・・・」

「・・そう・・それじゃついて行ってあげるよ。」

「うん、ありがとう！」

・・ホテルが初めてなんてウソついちゃった・・・だけどまだ純平とお別れしたくない・・・だって今別れたら・・こんどまた・・いつ会えるかわからない・・・

・・結局オレはムリ言って・・純平に心細いからと部屋までついてきてもらった・・・

「見て純平！けっこう良い部屋！　ビジネスホテルだからもっとシンプルな感じかと思ったけど・・」

オレはどんな態度をとったらいいのかわからず、子供のようにはしゃいでみた・・・

・・でも・・これからどうしよう・・・

・・・それにオレは・・いったいどうしたいんだろう・・・

・・純平に・・ホテルの部屋までついてきてもらうなんて・・・これって・・もしかしてすごく大胆な行動じゃなかっただろうか・・・？

・・オレがそんな心配をしていると・・・

（あっ！）

・・後ろからオレの腰に純平の手が・・・手に持ったバッグが床へ

と落ちる・・・
「有希・・・」
純平の声が耳元で聞こえる・・・オレはまるで魔法にでもかかったように・・純平が回した腕の中で、ゆっくりと後ろを向いて純平に向き合うと・・少し背伸びをして純平の首へと手を伸ばした・・・
すると・・・

・・純平はオレへと顔を近づけ・・・オレはそっと目をとじる・・・

・・近づいてくる純平の温もりを肌で感じた次の瞬間・・オレの唇と純平の唇がふれた・・・
（！！）
・・あぁ・・唇が溶けていく・・・
・・オレもまるで誘われるように・・純平へと唇を重ねていった・・・

・・オレって・・いつからこんなことが・・自然にできるようになったんだろう・・・

・・恋をすると・・女の子は魔法にかかるのかもしれない・・・だって・・こんなに体がふわふわして現実感がない・・・
・・オレも女の子だからきっと・・・・

（！！）
・・オレの腰にまわした純平の手が・・少し震えながら下へとおりていく・・・するとオレの身体の奥の方でピクンと震えた！
「・・ダ・・ダメ・・・！」
オレは純平の胸に手を当てて・・突き放すようにして、純平の手から逃れた・・・

・・だってオレは・・女の子じゃない！
・・これ以上されたら・・・

「・・ごめん・・・わたし・・ダメなの・・・」
「そ、そうだよね、有希はまだ高校生だもんな。ゴメン、俺が悪かった・・・」
！・・そんな・・謝らないで純平・・・

・・そんなんじゃない・・・純平は何も悪くない・・・悪いのはオレの方なのに・・・

「・・ごめん純平・・わたし・・ホテルまで・・来てもらったのに・・・」
「大丈夫だよ有希、気にしてないから。　オレは有希の気持ち大事にしたいと思ってる。」
「・・・純平・・・」
・・純平は・・オレがまだ経験してないコだと思っているだろうか・・・

「・・ごめんなさい・・ごめんなさい・・・」
純平の手が・・うつむいて何度も謝るオレの顔を上げさせた・・・
「キスだけならいいよね？」
「・・うん・・・」
・・オレたちはもう一度唇を重ねた・・・オレが強く純平を抱きしめると・・純平もオレの身体を強く抱きしめてくれた・・・

・・どちらからともなく唇がひらきかけ・・そしてすぐに閉じた・・
・これ以上進んでしまったら・・お互い歯止めがきかなくなりそうで怖かったんだと思う・・・

・・もしかしたら・・魔法にかかってたのは純平も一緒なのかも知れない・・・

・・ゆっくりと唇を離すと・・離れがたいオレの気持ちをあらわすかのように・・グロスを塗ったオレの唇が純平の唇にまとわりついた・・・

オレはホテルのベッドに突っ伏して・・しばらく涙が止まらなかった・・・

・・純平は帰ってしまった・・・

・・もしもオレが本当の女の子だったら・・きっと迷うことなく純平に身をゆだねていただろう・・・でも・・・オレの股間には・・・女の子にあってはいけない物が付いている・・・だからそんなこと絶対に有り得ない！

・・オレの奥の方では・・今もまだピクピクと震えている・・・こんな時なのに・・オレの身体は純平のを受け入れたがっているのだろうか・・・？

・・でもまさか・・純平に・・オレのお尻に入れさせるなんて・・そんなキタナイことさせられない・・・純平はオレや刈谷先生なんかと違ってふつうの男の人なんだもん・・・

・・純平にヒドイことしちゃった・・・

・・でも・・純平はオレの本当のこと知らない・・・純平は優しいから・・今日のこと許してくれるかも知れない・・・だけど・・オレのこと・・きっとつまんない女の子だと思っただろう・・・

・・あの状況で突き放すなんて・・・そんなのありえない！

・・オレってなんてバカなんだろう・・・こんなことになるのは判りきってたんだから・・さっき・・ホテルの下で帰ってもらえば良かったんだ・・・

・・純平と並んで歩くだけで・・いつのまにか自分でも、本当の女の子みたいな気持ちになってしまうなんて・・・

・・オレ・・純平に嫌われちゃったかも・・・

・・もうオシマイだ・・・

“・・ぐうぅ・・・”

「・・・・・」

・・しばらく泣いたら急にお腹が空いてきちゃった・・・こんな時に何考えてんだろう・・オレのお腹・・・

でも女の子のモデルは撮影中はあまり食べれないから仕方がない・・

・今日も朝からあんまり食べてないんだもん・・・

・・お昼のお弁当の残りを持ってきてて良かった・・あれ食べよう・
・ほとんど食べてないもん・・・

バッグを開けるとそこには・・・
「！！！」
しまった！・・・純平にチョコ渡すの忘れちゃった・・・せっかく
チョコレートショップで美味しいチョコを買ってきたのに・・・

・・だけど・・もうオレの想いなんて・・・どうせ純平には伝わら
ないとかも知れないし・・・

・・チョコ・・食べちゃおうかな・・・

リボンに手をかけたけど、やっぱり食べるのはやめた・・・もしか
して・・・万が一ってことがあるかも知れない・・・

・・明日朝イチで帰るんだから・・そんな可能性がほとんど無いの
はわかってる・・・でも今のオレは少しでも可能性を信じたかった・
・・

・・もしも明日・・偶然にもまた純平に会えて・・チョコを渡せる
ような・・・

・・そんな偶然が起きたなら・・・オレはまだ純平の恋人でいられ
るかも知れない・・そんな気がするから・・・

オレはほとんど眠れないまま朝をむかえた・・・

・・何度も眠ろうとしたけど・・すぐに目がさめてしまった・・・

・・あんな事があったんだから仕方がないと思う・・・

・・まあ、枕が違ったせいかも知れないけど・・・

チェックアウトしてホテルを出ると、あたりはまだ真っ暗だ・・・

・・結局、純平にチョコ渡せなかったな・・こういうのを“自業自得”っていうのだろうか・・・歩いて駅へと向おうとすると・・・

「有希！」

（？）

振り向くとバイクのライトが眩しくて目を細めた・・・え？・・・だれ？！

バイクはオレの横まで走ってくると・・・

「良かった間に合った。」

そう言ってフルフェイスのヘルメットを取ると、そこには純平の顔が・・・

「・・な・・なんで・・・？」

「空港まで送るよ。俺少しでも有希と一緒にいたんだ。それに高速からの景色を有希に見せたくて・・」

・・そ・・そんな・・純平カッコ良すぎだよ！

・・それにひきかえ・・オレお化粧もしてない・・・純平にすっぴん見られちゃうなんて・・・

でもオレは恥ずかしさを我慢して純平をみつめた・・・
「・・いいの？」
「いいに決まってるじゃん・・もし有希がバイクはイヤなら仕方がないけど・・・」
「・・そ・・そんなことない！　バイクは初めてだから・・ちょっと怖いけど・・・」
・・でも純平と一緒なら平気だ！
「大丈夫だよ。安全運転で行くから。」
そう言って純平は笑った。

「ほら、被って。」
オレはバッグを肩から掛けると、純平から渡されたヘルメットを被って純平の後ろに乗った。
「ＯＫ？　寒くないかな？」
「大丈夫！コートがあるから。」
「それじゃ行くよ。しっかりつかまってて。」
「うん！」
オレが純平の腰に手を回してしっかりと抱き締めると、バイクは走りだした！

かあさんの言うこと聞いてパンツで来て正解だった。スカートじゃバイクに跨がれないところだった！

高速に入るとバイクは速度を上げて、オレはさらにしっかりと純平にしがみついた。

すごいスピードだけど・・そんなに怖くなかった・・・車より目線が高いせいかもしれない・・・もちろん純平と一緒だからなのは当り前だ。

風は冷たいけど純平の体が遮ってくれる・・・まるで空気に包まれてるみたいだ・・・ヘルメットから出たオレの長い髪が風ではためく・・・

オレはしっかり抱きついて頭を純平に押しつけてヘルメット越しに純平の背中を感じた・・・今ならどんなにしっかりと抱きついても恥ずかしくない・・・本当はヘルメット越しじゃなくオレ自身の頬で純平を感じたかったけど・・・それだと恥ずかしさに負けてしまうと思う・・・今のオレにはこれくらいがちょうどいい！

オレはこんな状況を作ってくれた純平に感謝した。

・・純平はオレにとって最高の恋人だ！

純平の背中にもたれてうっとりしていると“コンコン”とオレのヘルメットを純平が叩いた。

オレが顔を上げると純平が向こうを指さす・・・その方向に目をやると、まだ日が昇らない薄明かりの中、遠くにレインボーブリッジが見えた！　丸い展望台が付いたフジテレビもある！　その向こうには紫色の海が広がっている・・・

・・キレイ・・・純平・・この景色をオレに見せたかったんだ・・・
（ありがとう純平！）
オレは感謝の言葉の代わりに、強く純平を背中から抱きしめた・・・

・・愛してるよ・・純平・・・・

・・オレ・・また魔法にかかっちゃったのかな・・・

空港での別れ際・・・

「じゃぁ、気をつけてね。」
「・・うん・・あっ・・・」
オレはバッグから包みを出して・・・
「これ・・昨日渡そうと思ってたんだけど・・・」
「？・・バレンタインチョコ？　昨日もらったよ？」
「・・あれは・・みんなの前だから・・みんなと同じものだったの・
・・これは純平のために・・・」

・・純平はオレの恋人だから・・・

「ありがとう。大切に食べるよ。」
「うん！」
・・あぁ・・これ！・・・女の子はこういう瞬間が一番うれしいの！

・・純平の笑顔に・・頭がクラクラする・・・

オレは純平に見送られながら搭乗口へと向った・・・でも・・オ
レの背中はまだ純平を感じていた・・・

・・こういうのを“後ろ髪をひかれる”っていうのだろうか・・・？

1時間半ちょっとでもう福岡だ・・・やっぱり飛行機って速い・・
・
・・オレの身体には・・まだ純平に抱きついた感覚が残っているのに・・・もうこんなに遠く離れてしまったなんて・・・

・・フウ・・・
オレは溜息をひとつついて気持ちを切り替えた・・・バッグから携帯を取り出して・・・
「あ、おかあさん？　今、空港に着いたとこ・・・うん・・わかった・・・」
かあさんはもう近くまで来ているらしい・・・

しばらく待っているとかあさんの車が見えた。
「かあさん！」
オレが手を振ると、車はオレのすぐ前まで来て止まった・・・

オレがドアを開けると・・
「お帰り、有希。」
「ただいま！」
助手席に乗り込んで、バッグは後部座席に置いて、シートベルトをするとかあさんは車を走らせた。

「どうだった？」
「・・ぁ・・ぅ・・うん・・・」
・・純平とのことは・・かあさんにも言いたくないんだけど・・・
「撮影は順調に終ったの？」

「あっ・・そっち・・・うん順調だったよ！みんないい人だったし・・」
「ちゃんと失礼の無いように出来た？」
「うん、ちゃんと挨拶したし、名刺交換もしたよ！　クライアントの人に名刺いっぱいもらっちゃった！」
「大事にとっておかなきゃダメよ。」
「うん。」

「おかあさん、男の人の撮影ってね、わたしたち女の子とは全然ちがうのよ！　メンズのモデルさんってみんなすっごく静かなの！あ、ひとりだけウルサイ人もいたんだけど・・それで音楽もクラッシックなんかかかってるし、ポーズも大人しい感じだし。」
「もうひとり女の子がいたんでしょう？どんなコだった？」
「あ・・メグミさんっていう人なんだけど、最初は怖い人かな？って思ったんだけど、わたしが“専属モデル”だってわかると結構優しくしてくれた。　あっ！おかあさん、わたし専属モデルになってたのよ！」
「あら？昨日佐々木さんにもらった名刺に書いてあったでしょう？」
「う・・うん・・そうだけど・・・わたし、あれはただ名刺に書いてあるだけだと思ってたから・・・」

「昨日空港からの帰りに佐々木さんに聞いたけど、そのコはそういう上下関係に厳しいコだから、有希が困らないように専属モデルにして下さったそうよ。」
「・・そうだったんだ・・・」
・・内心そんなことじゃないかと思ってたけど・・・やっぱり・・・
「佐々木さんにお礼いわなきゃね。」
「うん！」
・・オレは佐々木さんには感謝しなきゃいけないことがいっぱいある・・・オレの我がままで読者モデルを辞めたのに、また復帰させ

てくれたし・・そのうえ専属モデルにしてくれるなんて！

・・それに・・・佐々木さんはオレが男だと知ったうえで・・オレが女の子のモデルをするのを許してくれる・・・

・・もしオレが読者モデルにならなかったら・・・オレが男だと知った時に辞めさせられていたら・・・そしたらオレが純平に会うこともなかった・・・

・・たとえオレが今のように女の子になっていたとしても・・・九州ＪＩＮＯＮの読者モデルになっていなかったら、今とは全然違っていたと思う・・・もちろんそれもひとつの可能性かも知れないけど・・今のオレから考えると・・そんなオレはオレじゃない！

・・純平を知らないオレなんて・・そんなの考えられない・・・

・・あぁ・・オレが本当の女の子だったら・・純平と愛しあえたのに・・・

・・女の子のオレが・・純平を受け入れるなんて・・・どんなにステキなことだろう・・・

・・・・・

「有希、着いたわよ。」

「ん・・？」

・・あっ・・オレいつの間にか寝ちゃったのか・・・

「かあさんはこのまま会社に行くから、有希もすぐ着替えて学校に

行くのよ。わかった？」
「・・ぅ・・うん・・・」
オレが車から降りると、かあさんは仕事に向った・・・
「いってらっしゃ～い！」
オレは車に手を振ってから、家に入ると制服に着替えるためオレの部屋へ急いだ。

・・もう2時間目が始まってる・・・急がないと3時間目に間に合わない！

「あ、有希！お帰り！」
教室のドアを開けると一番に気付いた直美が言った。
「た・・ただいまぁ・・みんなぁ～・・・ふぃ～・・なんとか間にあった・・・」
「どうしたの？そんなに疲れて・・・」
「・・全力で走ってきたから・・・」
「べつに間に合わなかったら4時間目からでも良かったんじゃないの？」
「・・だって・・出来るだけ早く来るようにって・・教頭先生に言われてたんだもん・・・」
「有希ってホント真面目だね。」
「・・・・・」
・・それに・・3時間目はオレが苦手な英語だし・・・高島先生は厳しいからノート点で稼いでおかなきゃ赤点取っちゃったとき大変なのだ・・・

「起立！礼！」
「Ｓｉｔ　ｄｏｗｎ　ｐｌｅａｓｅ　今日は前回配ったプリントの3章から、原口さん日本語に訳して。」
「はい・・タロウはオトヒメに魅了されて時間が経つのに気付きませんでした。」
「そうね、この場合“時間が経つ”より“時が経つ”と訳した方がいいわね。それじゃ次、戸田さん訳して！」

・・・・・・

「？・・戸田さん？　あら！ずいぶんぐっすり眠ってるわねぇ。いつもは頑張ってノートとってるのに。」
「先生、有希さっき東京から帰ってきたばかりなんです！　朝イチで帰ってきたからあまり寝てないんだと思います・・・」
「せっかく帰って来ても寝てるんじゃ意味ないけど・・・仕方ないわね、あなたたち今日やったとこ、ちゃんと教えておいてあげてね。」
「は～い！」

「それじゃ、代わりに岡本さん訳して！」
「エ！・・え～と・・・カメはタロウに言った・・早く帰りなさい・・・タロウは・・え～と・・驚きました・・？」
「タロウは我に返って驚きました。じゃぁ、クライマックスは・・安部さん！」
「わっ・・え～・・タロウはプレゼントの箱を持って・・・」

・・そのころオレは純平のバイクの後ろに乗って、東京の街を走っていた・・・

・・なぜか一番のお気に入りの蟹原さんにもらったワンピースを着て・・・・

・・なぜかヘルメットもなく・・・

・・純平の腰にしっかりと抱きついて・・・

・・頬をピッタリと純平の背中にひっつけて・・・

・・そして・・なぜかオレは本当の女の子だった・・・

第１６０話　義理　可愛い後輩・お茶と日本舞踊

「・ゆ・・有希せんぱい・・・ちょっと・・いいですか・・？」
「？・・なに？ミサトちゃん・・」
オレが部室に入ろうとすると急にミサトちゃんに呼び止められた・・
・ミサトちゃんが手招きする方に歩いていくと、廊下の隅っこに引っ張り込まれてしまった・・・

「な・・なに？どうしたのミサトちゃん・・」
「ごめんなさい、せんぱい・・他の人に見られると恥ずかしいから・・」
「・・・・・」
「コレ・・もらって下さい！」
そう言って差し出されたのは、赤い小さな紙袋・・手に持つヒモが金色で・・はしっこには小さなリボンが付いてる・・・ずいぶん可愛い袋だなぁ・・・
「これは・・？」
「あ・・あの・・あたしこういうことするの初めてなんです・・」
「・・もしかして・・・バレンタインの・・？」
「！・・・ぁ・・せんぱいにはいつもお世話になってるから・・その・・・」

あぁ、そうか・・お世話になってるから義理チョコか・・・オレが校長や教頭に渡すのとおんなじなんだな・・・たしかにオレはミサトちゃんの世話係りだけど・・・
「そんなに気を使わなくてもいいのに・・・」
「でも・・せんぱいは、あたしにとっては・・女の子のお手本だから・・・」
「・・・・・」

・・オレはミサトちゃんのお手本になんてなれないと思うけどなぁ・
・だってオレ自身がもっと女の子らしくならなきゃいけなんだから・
・・でも・・せっかくミサトちゃんがオレのために買ったチョコなんだし、ここは気持ち良くもらっておこうと思う。

オレは笑顔で言った。ミサトちゃん相手に笑顔になるのは全然難しくない！

「ありがとうミサトちゃん、それじゃ遠慮なくいただくね！」

「はい！」

ミサトちゃんも嬉しそう・・プレゼントは相手が喜んでくれると、渡したほうも嬉しいものだ。

・・早くミサトちゃんも自分の可愛らしさを自覚して、オレなんかじゃなく、バレンタインにチョコを渡したくなるような男の子に出会ってほしい。

「有希、今年もたくさんもらったね。去年の倍はあるんじゃない？」

「・・う・・うん・・・」

・・たぶん3倍くらいありそうだ・・・直接もらったのも入れると４０コくらいあるかも・・・

その日クラブが終って長谷川と一緒に帰ろうと靴箱を開けると、そこにはチョコがいっぱい詰まっていた・・・オレは他の人に見られると恥ずかしいから、靴箱に詰め込まれたチョコを、持ってきて

たバッグに急いで移した・・去年は千里にバッグを借りたから、今年はチョコをもらった時の用心に、ちゃんとバッグを持ってきてたのだ・・・でも多すぎてバッグがパンパンだ・・・なんでオレなんかにこんなにチョコくれるんだろう・・・

「ミサトちゃんにももらったよ！」

「え？ミサトちゃんが有希に？」

「うん・・あ、これは他の人には言わないでね。ミサトちゃんが恥ずかしがるといけないから。」

「・・言わないけど・・ミサトちゃんが・・有希にねぇ・・・」

「もちろん義理チョコよ？　お世話になってるからって言ってたもん。」

「ふ～ん・・・」

「まあ、お歳暮とかお中元みたいな感じじゃない？」

「・・・・・」

「でもミサトちゃんも義理堅いよね。同じクラブで後輩のお世話するのは当り前なんだから、そんな気を使わなくてもいいのにさ！」

「・・・わたしも・・有希にあげた方が良かったかな？」

「！・・・冗談やめてよ長谷川さん・・・逆にもらって欲しいくらいよ・・・」

「え？！　有希がわたしに？」

「うん・・だって麻衣とかあさんに手伝ってもらっても、こんなに食べられないもん・・レナにもあげようかなぁ・・・」

「・・あぁ・・そういうことね・・」

・・いくら女の子が甘いモノが好きだからって、こんなに食べられないよ・・・

「でも有希も東京弾丸ツアーから帰ってきたと思ったら、こんなに

チョコもらうなんて大忙しだね。」
「うん・・」
東京ではオレがチョコいっぱいあげてきたのに・・・
「人気者はツライわね！」
「だ・・だれが人気者なのよ・・・」
「あんたねぇ・・もう少し自覚しなさいよ？　あんたはウチの学校で一番人気者なんだから！」
「・・一番ってことは・・ないと思うけど・・・」
すると長谷川はうんざりした顔になって・・・
「ウチの学校でモデルなんかやってるのあんただけじゃない、それに学園祭クイーンだし、入学案内のパンフレットじゃアイドルみたいに写ってるし。」
「・・そ・・それは・・・」
・・うぅ・・そんなふうに言われると・・言い返せない・・・パンフレットであんなにオレの写真を大きく使うなんて思わなかった・・
・

「それに？　道端純平くんとは恋人きどりだしね！」
「！！」
・・オレと純平は“恋人きどり”じゃなくて“恋人”だ・・・と思う・・・
「東京で純平くんと会ったんでしょう？なにか進展でもあったんじゃない？」
「！・・バ・・バカなこと言わないでよ！・・東京に行ったのは仕事なんだから・・・ちゃんと偉い人たちと名刺交換とかしたんだからね！」
「ほんとに？」
「ホ・・ホントよ・・朝イチで行って、夜まで撮影して、朝イチで帰ってきたのに・・どこに進展する時間があるのよ・・・！」
「まあね。そりゃそうか・・」

「そ・・そうよ・・・」
・・ホントは・・ホテルでキスしちゃったし・・・バイクで送ってもらったけど・・・そんなこと長谷川に言うつもりはない・・・どうせ冷やかされるのがオチだもん・・・

「東京はどうだった?」
「う~ん・・・べつに羽田から目黒のスタジオに行っただけだし・・・まあ・・スカイツリーを遠くから見たのと・・・帰りの高速からレインボーブリッジとお台場が見えたくらいかなぁ・・・」
「?・・帰りは電車じゃなかったんだ?」
「!・・あ・・うん・・向こうの編集部の人が送ってくれたから・・・」
「へぇ~そうなの。」
「うん・・そう・・・」
・・うぅ・・危なかった・・・長谷川って時々スルドイんだよなぁ・・・うっかりバイクで・・なんて言ったら感づかれちゃったかも・・・

「わたしは福岡に来るまであちこち引っ越ししたから、関西とか北海道は経験あるんだけど、なぜか東京は行ったことないのよねぇ・・・」
「・・長谷川さんのお父さんって大坂に単身赴任してるって言ってたじゃない?」
「・・うん・・」
「これまでは一緒に行ってたのに、今回は違ったんだね。」
「・・もう引っ越したくなかったのよ・・有希は引っ越ししたことないんでしょう・・?」
「う~ん・・福岡の中でなら一回あるんだけど・・・」
「え!　あるんだ?」

「うん・・でも小さい頃だからあんまり憶えてないけどね。」
「学校も変わった?」
「うん・・」
「友達と別れるのイヤじゃなかった?」
「・・・それも・・忘れちゃった・・ずっと昔のことだもん・・・」
・・憶えてないけど・・でも・・たぶん友達と別れるのはイヤじゃなかったと思う・・・だってかあさんの話では、オレは友達にイジメられてたみたいだから・・・

・・なんかイヤな話になっちゃったな・・・長谷川さんもお父さんの話は好きじゃないみたいだし・・・何か別の話題に変えなきゃ・・・

「・・ホント、長谷川さんチョコいくつかもらってよ!」
「え~・・でも有希がもらったのに・・悪いじゃない?」
・・そう言いながらも顔はまんざらでもなさそう・・・
「悪くないわよ、わたしこんなに食べられないもん・・」
「そうか・・・それじゃ有希のウチで開けてからちょうだい?」
「え? なんで?」
「だって手紙とか入ってたら困るじゃない?」
「あ・・そっか・・・」
・・どうせ男の子に渡す時と違って大した手紙は入ってないと思うけど・・・オレが読まないまま長谷川に渡っちゃうのも申し訳ない気がする・・・

「それじゃ寄っていって! たぶん麻衣もいると思うから、好きそうなの持ってって。長谷川さんのお母さんにも持って行ってよ!」
「うん、そうしよっか!」
・・長谷川も甘いもの苦手じゃないから、たぶん食べたいんだと思う。 長谷川もこういうとこは女の子だなぁ・・・

・・あ、レナにもおいしそうなのをいくつか取っといてあげよう！

「どうぞ入って！」
「おじゃましま～す。」

オレたちはそのまま2階に上がり、オレの部屋に入る前に麻衣の部屋をノックした・・・
「麻衣いる？」
“ガチャ”
ドアが開いて麻衣の顔がのぞく・・・
「あ！順ちゃん！」
「麻衣ちゃん、久しぶり！」
・・麻衣は長谷川のことを順ちゃんと呼ぶ・・・これだけ聞くとオレより親しそうな感じだ・・・

「チョコもらったから麻衣にも好きなのあげるよ。」
「やった！お姉ちゃんがもらうチョコって美味しいんだよね！」
？・・・すると長谷川が・・・
「女の子どうしだから、見た目よりも味が美味しいチョコを選んでるんじゃない？」
・・そっか・・たしかにそうかも知れないな・・・男の子にあげるのはどうしても見た感じを重視するけど・・相手が女の子なら自分が食べて美味しいと思うのを贈りたいかも・・・

「長谷川さんも麻衣も丁寧に開けてよ？　くれたコに悪いから・・」
「わかってるわよ！」
「それで、手紙に名前が書いてあったら、ちゃんとチョコと一緒に分けておいてね。」
「はいはい。」
・・名前を書いてるコは後から何か言ってくるかも知れないから、そういうのは自分で食べておかないと困るかも知れない・・・

「ねえねえ見て！“愛しの有希お姉様へ”だって！」
「もう・・麻衣はそんなに詳しく読まなくていいから！」
「こっちにもあるわよ。“麗しの戸田先輩へ・・・毎日あなたを見かけるだけで幸せな気持ちになります”だってさ！　まるでラブレターね。」
「・・もうっ！・・長谷川さんまで・・・」

・・なんか・・文章が去年よりもおおげさになってる気がする・・恥ずかしいなぁ・・・こんなことならオレひとりで開ければ良かった・・・

「有希は男の子の頃はいくつくらいチョコもらってた？」
「・・・・・」
「ん？　どうしたの？」
「お姉ちゃんはチョコもらったことないもんね！」
「！！」
「・・・そうだったんだ・・ごめん・・」
「・・長谷川さんだってクラスは違うけど、わたしがどんなコだったか知ってるじゃない・・・」
・・オレは男の子の頃はモテたことなんて一度もない・・・きっと

オレのこと気にしてる女の子なんて、ひとりもいなかったんだ・・・

「・・そうかなぁ・・有希ってそんなにモテない感じだった？」

「モテるワケないじゃない！」

・・それなのに今はこんなにモテモテだ・・・オレも女の子だから今頃モテたって意味ないけど・・・

「だから、お姉ちゃんは女の子になって良かったんだよ！　お姉ちゃんは女の子のほうがずっとステキだもん！」

「・・ぅ・・うん・・・」

・・なんか・・そうハッキリ言われると・・素直に喜んでいいのかどうか良くわからない・・・

・・まあ・・オレが男の子に戻ることはもう無いんだから・・・喜んでいいんだろうけど・・・

長谷川が帰って、麻衣もいなくなってから、制服から部屋着に着替えたオレは、カバンの中から可愛い袋を取り出した・・・これはミサトちゃんにもらったチョコだ・・・ミサトちゃんのはたとえ義理チョコでも、オレにとっては他のと違う特別なものだ。

「あ、手紙が入ってる！」

小さな封筒を開くとふたつ折りの可愛いカードが・・・

“　有希先輩・・わたし先輩と出会えて本当に良かった・・先輩はわたしの憧れで、目標です・・ずっと有希先輩の後輩でいさせてください。”

・・ミサトちゃんったら・・わざわざこんなこと書かなくてもいい

のに・・・照れくさいじゃない・・・
・・ミサトちゃんはオレにとって、永遠に大切な可愛い後輩なんだから！
「・・おいしい！」
・・気のせいかも知れないけど・・もらったチョコの中でミサトちゃんのが一番おいしいと思った・・・

- - - - - - - - - - - - - - - - - - - -

「先生、お片付け終りました。」
「ご苦労様。　戸田さん、今日のお手前は大変良かったわよ。」
「え、そうですか・・ありがとうございます。」
三吉先生にお茶のお手前を誉めてもらうのはすごく嬉しい！
「以前よりも女性らしい、柔らかな手つきになってきたわね。」
「・・そうですか？」
・・オレには全然わからないけど・・・
「自分では気付かないかも知れないけど、身体つきも身のこなしもずいぶん女性らしくなってるのよ。」
「・・・・・」
「戸田さんは“たおやか”という言葉を知ってる？」
「・・いえ・・・」
「“たおやか”というのはね、お淑やかで、しなやかで、女性らしい様子を表した言葉なの。今の戸田さんはまさに“たおやか”という言葉が良く似合うわ。」
「そ・・そんな・・もったいないです・・・」

・・オレがいくら女の子らしくなったといっても・・そこまで女性らしくはないと思う・・・

「そうだ、戸田さんはこれから用事あるの？」
「いえ、べつにないですけど・・」
「一緒に日本舞踊のお師匠さんのところに行かないかと思って。」
「え、行ってもいいんですか？」
・・オレは日本舞踊のお師匠さんのところには、もうずいぶん行ってない。　元々オレが習ってるワケじゃなく、何度か三吉先生について行って、ついでに教えてもらってただけだから。
「それじゃ、着替えるから少し待ってて。」
「はい。」

「そうだわ、戸田さんも着替えなさい。」
「え・・でもわたし着物は・・・」
「私が若い頃着ていて今は着てない着物がたくさんあるの。戸田さんが着てくれると嬉しいわ。」
「わたしも嬉しいです！・・でも・・ほんとにいいんですか？」
「いいのよ。どれも私には若すぎて、もう着られないからものだから。」
「じゃぁ、着させていただきます。」
どんな着物があるのかなぁ・・すっごい楽しみ！

「戸田さんにはどれが似合うかしらねぇ・・この若草色のなんかどうかしら？」
「！！」
「今の戸田さんにはさわやかで良く似合うと思うわ！」
「・・ステキ！」

それは薄い緑色の着物で、小さな黄色い花のような模様が描かれている・・・こういう色を若草色っていうのだろうか？

「着物は季節によって変えるものなの。この着物は今の時期にはぴったりな着物よ。戸田さんはこの花何だか知ってる？」

「・・いぇ・・知りません・・」

「これはね“まんさく”っていう花なの。春一番に咲く花なのよ。」

「へぇ～・・そうなんですか・・・」

“まんさく”なんて名前の花、聞いたことないなぁ・・・

「まだ少し早いけど、ほんの少し季節を先取りするのが粋なのよ。」

「はい・・」

・・そういうのはオレにも何となくわかる・・・今の洋服でも女の子はいつも季節より少し早く、寒さや暑さを我慢して着るから・・・あれも一種の粋なのかな？

「先生、櫛借りていいですか？」

オレは着ていた桜色の着物を脱いで衣紋掛けに掛けると、襦袢のまま髪を一旦ほどいてきれいに梳かしてから、髪全体を片方の耳でまとめて手早く三つ編みにしてゴムで留めると、後ろでくるくる巻いてからピンで留めた・・・サイドバックってやり方だ。　アップは自分ではなかなかキレイに出来ないけど、これなら自分でも簡単に出来る！　ちょっとレトロな雰囲気が可愛いのだ。

そして三吉先生に借りた若草色の着物を着る・・・

「戸田さんも完璧に自分で着付けられるようになったわね。」

「・・そうでしょうか？・・」

・・たしかに着付けはずいぶん上手く出来るようになったけど・・まだまだ完璧とは言えないと思う・・・

「御髪〈おぐし〉も綺麗にまとまってるじゃない？　もうお茶以外で私が戸田さんに教える事は何も無さそうね。」

「そんな！・・わたしは完璧なんかじゃありません・・・まだ色々教えて下さい！」

・・オレはまだまだ三吉先生に教えてもらわなきゃいけないことがあると思う！

・・それに・・オレがハタチくらいになって・・もし・・大人の女性になれてたら・・・そしたら先生に・・大人の女性としての“たしなみ”をまた教えてほしい・・・

- - - - - - - - - - - - - - - - - - - -

ラジカセの音に合わせて、お師匠さんに横で指示してもらいながら踊る・・・

「はい、ここで扇子を開いて・・胸元に・・チン、トン、シャンで小首をかしげて、視線は斜め上・・・そう！上手よ戸田さん！」

　オレはしばらく日本舞踊のお稽古はやってなかったけど、少しやってみると勘が戻ってきた感じだ。日本舞踊は少しヒザを落した姿勢が基本だから、久しぶりだとモモとかふくらはぎに変な力が入ってしまって疲れる・・・

「戸田さんちょっと会わないあいだに大人っぽくなったわね。前は少し動きにぎこちない所もあったけど、ずいぶん女性らしいしなやかさが出てきたわ。」

「ぁ・・ぁりがとうございます・・」
・・なんだか最近よく“大人っぽくなった”って言われる気がする・・ほんとかなぁ・・オレは全然変わらないと思うんだけど・・・

「戸田さんは筋がいいんだから日本舞踊やってみたらどう?」
「・・はぁ・・でもなかなか来れないから・・・」
オレは土・日はＪＩＮＯＮの撮影が入ったりするから、お茶のお稽古も毎回は来れない・・・これまでもそうだったのに、専属モデルになっちゃったから・・これまでみたいに都合が悪いから撮影に行けないとか言いにくいし・・・まあ、これまでもほとんど断ったことは無かったんだけど・・・

佐々木さんは、オレが東京に行くのに読者モデルのままじゃバツが悪いだろうからって専属モデルにしただけで、オレはこれまでどおりの感じでいいと言ってくれたけど・・専属モデルって言われると、やっぱり責任は感じてしまう・・・

今でも結構忙しいのに習い事なんか始めたら、みんなやレナと遊ぶ時間がなくなっちゃう・・・

もともとオレが日本舞踊を教えてもらっているのは、着物の着かたが上手くなるためなのだ。日本舞踊での袖やスソさばきは普段でも役に立つ。

「そうね、戸田さんも今年は3年生だものね。大学はどうするの?」
「ぁ・・まだ迷ってるんです・・・白鴻女子も4年制になるっていうから、このまま白鴻でもいいかなって思うんですけど・・でも友達は他の所も受けるだけ受けてみればっていうし・・・」
・・でも・・他の大学を受けるとなると・・オレが男だってことがネックになりそうだ・・・白鴻以外の大学がオレを女の子として入

学させてくれるかどうか・・・

「それじゃ最後にもう一度、三吉さんと一緒に通して踊ってみましょうか。」
「はい。」
オレは三吉先生と並んで、お師匠さんの前でラジカセから出る音楽に合わせて最初から通して踊った。

おまけ・タイトルとサブタイトル

私は各話のタイトルは本当は無くても良いと思っているのですが、以前に書いた話で“１．２．３”と番号だけでタイトルを付けてなかったら、すぐに何話にどの話を書いたか判らなくなってしまったので、５話以上の小説にはいちいちタイトルを付けるようにしています。
書いた本人でさえ判らなくなるのだから、読者の方は「あの話はどこにあったっけ？」と思った時に、タイトルがないと、とてもじゃないが捜せないと思います。

タイトルはだいたい漢字２文字ですが、そうじゃないのもあるように、ことさらこだわっている訳でもなく、２文字くらいがちょうど良いと思っているだけです。

サブタイトルではもう少し内容を想像出来るような文にしています。

最初の頃はタイトルで内容が判っても構わなかったので、かなり直接的なタイトルを付けていましたが、5章あたりからはタイトルだけで内容が判ってしまうのも面白くないような展開になってきたので、タイトルもサブタイトルも両方とも2つか3つの意味を持たせるようにしています。

タイトルで何となく想像していただいて、読み終わった後で「そういう意味もあったのか・・・」と思っていただけると嬉しいです（笑）

私はこの付け方を“スターウォーズ方式”と呼んでいます。スターウォーズのタイトルってそういう付け方なんです。

ただ、おかげで最近はタイトルを付けるのが難しいです。使いやすい二字熟語もだんだん無くなってきますし（笑）つけようと思ったらもう前に使ってたりして・・・実は、前よりピッタリの回の時に、こっそり前に同じタイトルを使っていた回の方を変えたことも2、3度あります（笑）

その時はピッタリだと思っても、後から考えると「このタイトルはソコじゃないだろう！」ってのが出てくるんです。

ちなみに今回みたいな回が一番難しいです（笑）

今回は短い話2話分って感じなので。

－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－

－－－－

これまでのおまけ（その他）の場所

３６話　制作おぼえがき　０８．６．２１
４０話　『オレは女子高生』の世界　人物、舞台設定など
４５話　架空の西鉄大牟田線案内
４９話　名前について
５３話　ドラマ化を妄想してみる
６１話　「放生会編」おまけ
６７話　１周年を迎えて
７１話　『オレは女子高生』の世界　第２弾（架空の西鉄大牟田線案内付き）ドラマ『ブザー・ビート』のお知らせも
７３話　「ヒロイン」について
７８話　「出版されたら買いたい作品」のお礼
７９話　「文章」について
８２話　「文章って難しい・説明編」
８６話　ちょっとあとがき　長谷川の誕生日とお父さん
８９話　「Ｑ＆Ａ」
９３話　『オレは女子高生』の世界　第３弾（架空の西鉄大牟田線案内付き）
１３２話　イヌ型とネコ型
１３３話　有希と純平
１４１話　文章って難しい・文章と言葉編
１４２話　ＡＴから１８禁へのお詫びと説明
１４５話　ＡＴから年末のあいさつ
１５５話　今だから言える話（７章について）
１５７話　ＡＴから「ランウェイ」と１話での表現について

第１６１話　目眩　オレの身体に異変が?!

（?!）

朝、長谷川と一緒に学校に行く途中、電車の中でその異変はおきた・・・

（・・めまい・・?）

なんが頭がクラッとしたような・・・

（!・・また・・・）

でも、今度はめまいじゃないのがわかった。　揺れたのは頭じゃなくオレの身体みたいだ・・・

（!!・・ほらまた!）

それはオレの股間のあたり・・・どこだかハッキリはわからないけど・・・なんか揺れてるような感じが・・・

・・なんだろう・・コレ・・・

「?　どうかした、有希?」

「!　ぁ・・ううん・・何でもない・・・」

電車を降りるとそれはおさまっていた・・・いったい何だったんだろう・・・病気だったらイヤだなぁ・・・オレ、男だとバレるから病院には行きたくないのに・・・

「こんにちは・・」
「有希ちゃんいらっしゃい、待ってたわよ。」
オレは制服のブレザーを脱いで白石先生の前のイスに座ると、いつものようにソデをめくろうとした・・すると何かの書類を見ていた先生が・・・
「有希ちゃん、今回は注射は見送ろうと思うの。」
「え？　どうしてですか？」
・・オレは女性ホルモンの注射をしないと女の子でいられないのに・・・
「この前の血液検査の結果が出たんだけど、有希ちゃんの女性ホルモンの量が増えてるのよ。」
「え？！」
「最初は肝機能の低下を疑ったんだけど、どうも違うみたいだし、原因はまだ良くわからないんだけど。」
「でも・・ホルモンの注射打たなかったら・・わたしまた男っぽくなるんじゃないですか？」
「それは心配ないわよ。有希ちゃんの身体には十分な女性ホルモンがあるから。」
「・・・・・」
「有希ちゃんの身体の中で女性ホルモンを作る量が増えてるのかも知れないわね。それか女性ホルモンを異物として分解する量が減ったのか・・・」
「・・・・・」
「男の身体でも女性ホルモンは常に作られてるものなのよ。女の身体にも男性ホルモンがあるし、問題はそのバランスなの。有希ちゃんは睾丸が無いから元々男性ホルモンが普通の男の子よりずっと少ないし、たぶんその一部が女性ホルモンに転化したんだと思うの。

これも男性の身体の中で元々普通に起こってる事なのよ。」
「へぇ～・・」
「女性ホルモンはほんの少しでいいの。普通の女の子だって女性ホルモンよりも男性ホルモンの方が１０倍も多いんだから！」
「！！・・そうなんですか・・」
・・それは知らなかった・・女の子にも男性ホルモンがあるのは何となく知ってたけど・・・

「・・だけど・・何でそんなことになったのかなぁ・・・」
「・・それはちょっと先生にもわからないわ。ホルモンの製造には脳からの司令が大きく関係してるらしいことは解ってるんだけど、ホルモンの事ってまだ解らない事も多いの。」
白石先生もわからないんじゃしょうがないな・・・まあ、少なくなったら困るけど、多い分には問題ないんじゃないだろうか・・・

「・・あっ・・もしかして・・それと関係あるのかなぁ・・・」
「なに？」
「今朝ちょっと・・目眩みたいな感じがして・・・」
「どこか具合でも悪いの？」
「・・特に具合が悪いって感じでもないんですけど・・今朝、電車の中で・・・」

オレは今朝電車の中でおきた不思議な感覚を白石先生に説明した・・・
「何かしらね・・ちょっと看てみましょうか、服を脱いでくれる？」
オレはリボンをほどいてブラウスを脱ぎ、ブラも外した・・・
「ひゃっ！」
「あ、ごめんね冷たかった？」
胸に当てた聴診器が冷たくて、思わずヘンな声を出してしまった・・・恥ずかしい・・・

先生は聴診器で胸やお腹をあちこち探っている・・・あっ・・マズイ・・冷たい聴診器が当たった刺激で乳首が勃ってきちゃった・・
・
・・こうして見ると・・オレの乳首・・前より少し大きくなったような気がする・・・最近は昔より敏感になってきてるし・・・ちょっとイジりすぎだろうか・・・でも・・気持ちいいからついイジっちゃう・・・
「はい、後ろ向いて・・」
オレが先生に背中を向けると、“トントン”と叩きながら右、左と聴診器を当ててずらしていく・・・

「う～ん・・・特に問題はないみたいだけど・・・」
「・・そうですか・・・」
「血液検査の結果も女性ホルモンが多い以外は健康だったし・・有希ちゃんこのところ忙しかったみたいだから、少し疲れてるのかも知れないわね。それにこの2、3日急に温かくなったから、何人か体調崩したコも診察に来たわよ。」
「・・はぃ・・」
・・たしかにここ最近、2月にしては温かい・・・人間って寒いと病気になるものだと思ってたけど、急に温かくなっても具合悪くなるんだなぁ・・・

「とりあえず疲れが溜まってるのかも知れないからビタミン剤をあげておくわ。でもまた何かあったらすぐに来なさいね。」
「はい。」
・・結局オレは白石先生にビタミン剤だけをもらって帰ってきた・・
・
・・でも・・白石先生を疑うワケじゃないけど・・・ホントに大丈

夫なのかなぁ・・・

「おじさま、こんにちは。」
「ユウちゃんに会うの待ち遠しかったわよ！　さあどうぞ。」
オレが刈谷先生が開けてくれたドアから車の後部座席に入り、先生の横に座ると高級車は滑るように走りだす・・・

「あら？　ユウちゃん少し顔色が悪いんじゃない？」
「え？・・そうですか？」
・・なんでかな・・チークが少なかったかな？
「あ、でも校医の先生に、疲れてるんじゃないかって言われました・・先週から東京に行ったりして忙しかったから・・・」
「ユウちゃん東京に来たの？！いつ？」
「えっと・・先週の木曜日に行って、金曜日の朝イチで帰ってきたんです。」
「何のために？」
「ぁ・・雑誌の撮影で。」
オレは東京での撮影のことを先生に話した・・・もちろん純平のことは言わなかったけど・・・

「でもユウちゃんも水くさいわねぇ。東京に来てたのなら連絡くれればいいじゃない！　そしたらすっごく美味しいお店に連れて行ってあげたのに！」
「！・・ごめんなさい・・おじさま・・・だけど、ずっと撮影だったから時間もなかったし・・・」

・・刈谷先生がそう言うのもわかるけど・・・でも・・オレにとっては純平との大切な時間だったから・・・

「まあ、仕事だったら仕方ないわね。今度また東京に来ることがあったら連絡してよね。」

「はい。」

・・でももう東京に行くことなんかないと思うけど・・・

「それじゃ今日は元気が出るもの食べて、おもいっきり気持ち良いことしましょう！　そしたら疲れなんて吹っ飛ぶわよ！」

「！！」

・・もうっ・・おじさまったらエッチなんだからぁ・・・

先生は中洲にある“吉塚うなぎ屋”に連れて行ってくれた・・“吉塚うなぎ屋”っていったら福岡で一番おいしいって評判のお店だ！テレビで見たことある。

お店に入るとすぐに奥のお座敷に通してくれた・・・刈谷先生はどこのお店でも顔がきくようだ・・すごいなぁ・・・

・・お店はうなぎのいい匂いが漂っている・・・この匂い嗅ぐと急にお腹が空いてきた・・・

先生はビール・・オレはお茶を飲みながら、しばらく待っていると頼んだうな重が運ばれてきた・・・2段のお重とお椀とお漬け物・・・お重を開けると・・2つのお重にうなぎとごはんが別々に入っていた・・・

「わぁ、おっきい！」

ぶ厚いうなぎがお重にぎっしり入っている！

「これは近頃では珍しい天然うなぎよ。養殖ものと違って精がつく

わよぉ！　ほら、食べて食べて！」
「！！・・ぃ・・いただきます・・・」

ひとくち食べると、その違いはオレにもわかった・・オレが食べたことがあるうなぎのようにドギツイ脂っこさがなく、意外にさっぱりしている・・・でもすごく味があるし・・それにすごく香りがいい！
「すっごくおいしい！　おじさま、ユウこんなおいしいうなぎ食べたことないです！」
「そうでしょう？　このお店でも天然ものは、なかなか食べられないのよ。」
・・皮も少しパリッとしてて、あの独特のイヤな弾力感や、こってりしすぎた脂の感じがないから女の子でも皮までおいしく食べられる。

・・うなぎの肝とエノキに、香りつけの山椒の葉っぱが入ったお吸い物“肝吸い”もあっさりしておいしかった。
「山椒をかけてもまたオツな味になるわよ。」
「山椒・・？」
オレはうなぎに山椒をかけたことがない・・ちょっとかけてみようかな・・・

・・山椒の粉をパラパラかけて食べてみると・・なんだか大人な味だった・・・こういうのが“オツ”なのかなぁ・・・でも・・
「・・ユウは・・ちょっと・・・」
「まだユウちゃんには、この味は早かったかしらね。」
・・オレはまだオツってのは良くわからない・・・

「あ～おいしかった！」

「少しは元気出た？」
「はぃ。」
オレたちはうなぎを食べ終ると、いつものラブホテルへ直行した・・・

- - - - - - - - - - - - - - - - - - -

終ってひと息つくと先生が・・・
「やっぱり今日のユウちゃんなんかヘンね。」
「え？」
「なんだか元気ないし・・」
「・・・」
「それにいつもはもっと激しく感じるのに・・今日はときどきうわのそらって感じで・・・何か心配ごとでもあるんじゃない？」
「・・・！」
・・やっぱり先生には隠しごとは出来ないみたいだ・・・何で先生はこんなにオレのことが良くわかるんだろう・・・オレと・・ひとつになるから感じるのかな・・・

「・・実は・・ユウ病気かも知れなくて・・」
「！・・どこか痛いの？」
「ううん・・痛くないし・・校医の先生もどこも悪くないから疲れてるんじゃないかっていうんだけど・・・」
「でも気になるのね？」
「・・うん・・」
「どんな感じなの？あたしには相談できない？」
「・・ぃ・・いぇ・・そんなことは・・・」

オレは先生に、この2、3日電車に乗ると起こる不思議な現象を話してみた・・・

「なぁんだ、そんなことで悩んでたの？」

「！・・そんなことって・・・」

・・オレが病気じゃないかと不安だったのに・・“そんなこと”だなんて！

「ごめんね、ユウちゃんは悩んでたのに。でもそれは心配ないと思うわよ。」

「え？・・先生・・わかるの？！」

・・先生はお医者さんでもないのに・・・

「それはね、きっとユウちゃんのアソコが電車の振動で感じちゃったのよ！」

「！！！・・そんなことが・・？」

「身体が開発されてくると良くあることよ。」

「そ・・そうなの？　でも・・開発って・・なんですか？」

「ユウちゃんは実際にやるまでお尻で感じるなんて知らなかったでしょう？」

「・・はぃ。」

「そういう所は普通の状態ではなかなか感じないものなの。でも触られて気持ちいい所だってわかってくると、身体も反応しだして・・それをくり返すうちにだんだんその部分の筋肉が発達してきて、もっと感じるようになっていく・・・そういうふうになったら開発されたっていうの。」

「・・じゃぁ・・ユウも開発されたってこと？」

「そうね、思ったより早かったけど・・・もしかしてユウちゃん、自分でイジって気持ち良くなってたんじゃないの？」

「！・・そ・・それは・・・」

「あら！図星だった？　ユウちゃんったらイケナイ娘ね！」
そう言いながら先生はオレの胸をつかんで先っちょをコリコリした！
「きゃっ！　おじさま・・」
・・またするの・・でも・・さっきは気持ちが沈んでたからか、いまいち気持ち良くなかったし・・・こんどは安心して気持ち良くなれそう！

－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－

「でもあたし、ユウちゃんはタマタマが無いから開発されるかどうか心配してたのよ。」
帰り仕度を始めたオレに先生が言った・・・オレはブラのホックをはめようしていた手を止めて聞き返した・・・
「・・タマがないと・・ダメなんですか？」
「ううん、そういう訳じゃないけど、ときどき男の子の頃は感じてたのに、アソコを女の子に手術したら感じなくなったり、感覚が鈍くなるコもいるのよ。」
「へぇ～・・そうなんだ・・・」
「まあ、ユウちゃんの場合、すごく感じてるから大丈夫だろうとは思ってたけど！」
「・・・・・」

「こういうことに関しては、お医者さんも詳しくないだろうから、またわからない事があったらあたしに聞きなさいね。」
「はい！」
・・刈谷先生って色んなこと知っててすごいなぁ・・・あっ・・じゃぁ、あのことも・・・？

オレはブラのホックを留めて・・・
「おじさま、ユウね、この前の血液検査で・・女性ホルモンの量が増えてたの。」
「あら！　スゴイじゃない！」
「でもね、何でだか先生にもわからないんだって・・ホルモンは脳の司令で作るんだって先生は言ってたけど・・・」

「それじゃもしかしたら、ユウちゃんが女の子みたいに感じるようになったから、脳がユウちゃん自身を女の子だって認識しだしたのかも知れないわね。」
「！・・まさかぁ・・・」
・・そんなことってあるだろうか？・・だってオレは昔と全然変わってない・・・

・・あっ・・でも純平といるとき・・オレ・・自分が女の子みたいな気持ちになってたっけ・・・ホントにオレの脳は自分が女の子だって勘違いしてるのだろうか・・？

「ユウちゃんは女性ホルモンを投与しだして2年近く経つんでしょう？」
「・・はぃ。」
「だったらその間、ずっとユウちゃんの脳も女性ホルモンの影響を受けてたんでしょうから、少しづつ女の子の脳に近くなってても不思議は無いんじゃない？」
「・・そうかも・・・」
・・それじゃぁ・・女性ホルモンで刺激を受けたオレの脳が・・自分で女性ホルモンを作るようになったのだろうか・・・？

「それってユウちゃんにとっては良い事なんじゃない？」

「そ・・そうよね。」

・・だって・・オレは女の子になるんだもん・・・脳が女の子になって・・オレの身体が女性ホルモンを作るのは良いことだ！

駅へと向う車の中でオレは考えていた・・・

・・オレの脳が女の子に近づいてるなんて・・でもそう考えると納得できることも多い気がする・・・

・・純平とのことも・・・・

・・純平といるとき・・オレは自分が男だということをすっかり忘れていた・・・

・・オレだけど・・オレじゃないみたいな不思議な気持ち・・・

・・脳が女の子になって・・身体も女の子になって・・・そして・・オレもいつかはアソコも女の子みたいにするのかなぁ・・・？

！！・・オレなんてこと考えてるんだろう・・・これも・・女の子の脳が考えたんだろうか？

・・・そんなのありえない！

・・だってオレはニューハーフじゃないんだから・・・

第162話　サヤ　オレのファン?!

“バシャ!・・バシャ!・・”
カメラのシャッターを切るたびにストロボが光って大きな音をたてる。

「ユウちゃん、いいよその表情!」
・・撮影の現場は独特な雰囲気・・・

“バシャ!・・バシャ!・・”
「可愛いよユウちゃん!もっと弾んでみようか・・いいね!」
・・いつもカメラマンの進藤さんの言葉に乗せられて・・オレもモデルの自分に没頭してしまう・・・

“バシャ!・・バシャ!・・”
・・でも・・今日はちょっと没頭できない状況がある・・だからどうしても少し恥ずかしい気持ちが頭をもたげてしまうのだ・・・
「いいいよ!そのはにかんだ表情!」
・・それなのに進藤さんはいつもよりノリがいいみたい・・・

“バシャ!・・バシャ!・・”
「はい!これでラスト!」
“バシャ!・・バシャ!・・”
「オッケー!お疲れさま!」
・・ふうっ・・やっと終った・・・今日はいつもと違うから気疲れしちゃった・・・

「お待たせ、レナ。」

「スゴイねユウ！実際に撮影してるの見てると本当にモデルさんなんだね！」
「そ・・そんなことないけど・・今日は緊張しちゃった・・・」
今日はレナが撮影を見たがってたので見学させてもらったのだ・・
だからどうもオレはいつもの調子が出なかった・・・いつもはもう少し可愛い表情も出来るのに・・・

「プロのヘアメイクも見せてもらったし、ありがとうユウ！」
「いいわよ、お礼なんて・・」
・・なんか・・レナにお礼なんか言われると気持ち悪いなぁ・・・

「わたしもモデルさんにヘアメイクする仕事したいな・・」
「え？　レナはおばちゃんのお店でやるんじゃないの？」
「まあ、いずれはそうなるだろうけど・・でも、お母さんも従業員もいるし・・しばらくはこういう仕事してもいいかな？って思ってるの。」
「へえ～・・そうなんだ・・・」
・・レナいろいろ将来のこと考えてるんだなぁ・・・

「ねえ、でもなんでこのメイクじゃなきゃいけないの？」
これからレナと天神に行くってのに、レナはオレに雑誌の“春日ユウ”のメイクを落さないでと言うのだ・・このメイクじゃ気付かれないかなぁ・・さいきんは普段のメイクでも時々気付かれちゃうのに・・・
「いいからいいから！」
レナは何でこのメイクじゃなきゃダメなのか、ちっとも教えてくれない・・・何なんだろう・・いったい・・・

天神に着くと、改札を出たところでレナはきょろきょろして何か探してるようす・・・
「ねえ、レナ・・どこ行くの？　わたしお腹空いちゃった、何か食べようよ。」
「ちょっと待って・・・あっ！いたいた！」
レナはオレの手を握って走りだす・・・
「！・・ちょっとぉ・・どこ行くの？」

オレの手をひいて走って行ったところには、ひとりの女の子がいた・・・
「サーヤ、ごめんね待った？」
「・・ううん・・・」
サーヤと呼ばれた女の子は気のない返事をしながらも、目はオレを凝視している・・・なんだろう・・このコ・・・
「・・ほ・・ほんとに・・ユウちゃんだ！！」
そう言ったかと思うと、そのコは急に泣き出してしまった・・！

「な・・なに？・・どうしたのレナ？」
オレが驚いてレナの薄手のハーフコートのソデを引っ張ると・・・
「サーヤ、泣くことないじゃない。ほんとサーヤは感動屋なんだから！」
そしてレナはオレに・・・
「サーヤはねユウの大ファンなの！だからユウに会えて感動しちゃったのよ、ねサーヤ！」
するとそのコは泣きながら“うんうん”とうなづいた・・・

・・オレに会えたからって、そんなに泣くほど嬉しいなんて・・・

変わったコだなぁ・・・あっ！そっか・・レナったら、このコに会わせるからモデルのままのメイクでって言ってたんだな・・・

「このコは同じクラスの神崎沙耶〈かんざき　さや〉ちゃん。」
「は、はじめまして！神崎沙耶です。みんなにはサヤとかサーヤとか呼ばれてるの！」
「ぁ・・はじめまして・・えっと・・春日ユウです・・・」
オレは迷ったけど、本名じゃなくてモデルの時の名前を言った・・・
どうせレナもオレのこと“ユウ”って呼んでるし・・モデルの“春日ユウ”のファンなら本名は出来るだけ言わない方がいいと思う・・
・

「でも、憧れの春日さんに会えるなんて！レナが春日さんとイトコだったなんてビックリ！」
「そ・・そう・・・」
「あの・・春日さんのこと、ユウちゃんって呼んでいい？」
「う・・うん・・いいけど・・・」
「うれしい！　あたしのことはサヤかサーヤって呼んで？！」
「あ・・うん・・じゃぁ・・サヤちゃんって呼ぼうかな・・」
「わあ！ユウちゃんがサヤって呼んでくれるなんて、なんか友達みたい！」
・・なんか・・明るいコだなぁ・・・さすがレナの学校の友達だ・・・ウチの学校にはこういう感じのコはあまりいない・・・

サヤは丸顔で、髪はレナより少し薄い茶色、左右の高い位置でツインテールにしてる・・結び目には黄色いボンボン・・・オレたちと同じ歳だとするとちょっと幼い感じがする・・・
コートの下の服には見覚えがあった・・ＪＩＮＯＮでオレが着たこ

とある服に似てる・・・
「その服・・わたしが着たヤツじゃない？」
「！　そうなの！これユウちゃんが着てて可愛かったから探したの！」
「へ～・・なんか嬉しいな。ありがとう。」
「そんな！他にも持ってるよ！ユウちゃんが着てると全部可愛いから全部欲しくなっちゃうの！」
・・でも、そんなに買ったらお小遣い無くなっちょうんじゃないかな・・モデルとしては自分が着たものを気に入って買ってくれるのは嬉しいけど・・なんか責任感じちゃう・・・

「そうだ、ユウお腹が空いてるんじゃなかった？」
「あ・・うん。」
するとサヤちゃんが・・
「だったらブルーフォンセがいい！」
「ブルーフォンセ？」
「ユウちゃん知らないの？地下街の美味しいケーキ屋さんよ！」
「ぁ・・そうなんだ・・」
・・ケーキかぁ・・・オレはもっとゴハンっぽい腹持ちが良いのがいいんだけどな・・・でもこのコの頭にはケーキのことしか無さそうだ・・・まあお腹空いてるから何でもいいか・・・

「じゃぁ、そこにしようか。」
オレたち3人は地下街に向った・・・でも・・レナがニヤニヤしてるのが何か気になるんだよなぁ・・・また何か企んでるんじゃないだろうか・・・？

　サヤちゃんの話では、地下街のケーキ屋さん“ブルーフォンセ”は天神でも5本の指に入るくらいケーキがおいしいと有名なお店ら

しい。三越にもあるらしい・・・

オレたち3人はケーキセットを頼むことにした。ケーキセットはケーキとアイスにコーヒーか紅茶がついている。ケーキは1コからあるけどオレたちは2コのセットを頼んだ。ケーキ2コのセットは１０５０円・・・お得なセットにしてはちょっと高めかな・・・

ケーキはたくさんの中からどれでも2種類を選ぶことが出来る。そのケーキを見たとたんオレは一気にテンションが上がった！

「わぁ！　レナ見て！どれもおいしそう！」

「ほんとだ！」

「どうしよう・・こんなにある中から2つなんて選べないよ・・」

・・小さめのケーキはどれを見てもおいしそう！・・この中からたった2つだけ選べなんて拷問だ！

「・・う〜ん・・レナぁ・・どうしよう・・わたし決めれないよぉ・・」

「しょうがないなぁ、わたしが選んであげようか？　ユウは生クリームが好きだからこのイチゴのショートケーキと、チョコも好きだからこのチョコケーキがいいんじゃない？」

「・・うっ・・うん・・じゃぁそうしようかな・・・」

レナはいつも迷いがないから尊敬しちゃう！こういうところは優柔不断はオレと違ってすごく男っぽい。

「わたしはモンブランと、フルーツタルトにしよう！」

「え？モンブラン？！　いいなぁ・・モンブランも食べたいなぁ・・・」

「じゃぁ、ケーキ3コのセットに代えてもらう？」

「ぇ〜・・でもぉ・・・」

・・オレだけ3コなんて食い意地張ってるみたいで恥ずかしいな・・

初対面のサヤちゃんもいるのに・・・
「じゃぁ、わたしのをひとくちあげるわよ。」
「ほんと?!」
「うん、でもひとくちだけだからね!」
「うん!ひとくちだけ!」

サヤちゃんも少し悩んで、結局オレと同じケーキにした。
オレたちが席につくとサヤちゃんが・・・
「レナとユウちゃんってすごく仲いいのね!」
「ユウとは小さい頃から一緒だからね。」
「うん・・」

・・レナに話を合わせたけど・・ほんとは小さい頃一緒だっただけで、オレが小学校を転校してからは、中学を卒業してオレが女の子になるまでほとんど会ってない・・・
・・しかもオレは転校する前のことはほとんど憶えてない・・・でもレナは逆にオレが男の子だった頃のことはあまり知らないせいか、小さい時レナと一緒に女の子どうしのように遊んでいた頃のオレと、今の女の子になったオレが直結してるみたいなのだ・・・レナの頭の中ではオレはずっと女の子だったのかも知れない・・・

ケーキはすごくおいしかった!　オレとサヤちゃんは紅茶、レナはコーヒー。
「レナ、モンブランひとくち・・」
「ぁ、そうだったね。はい!」
レナはフォークでひとくち分を切るとオレの目の前に、オレはそれをパクリと食べた。
「あぁ、モンブランもおいしい!」
皮が混じった茶色っぽいのクリームは、甘すぎず、ほのかにブランデーの香りがして大人の味がした・・・

「こんなおいしいケーキのお店があるなんて知らなかった・・また来たいなぁ・・・」

・・今度来た時には、絶対ケーキ3コのセットを頼もう・・こんなにおいしいケーキなら3つくらいペロッと食べられそう！

しばらくはオレはサヤちゃんに質問攻撃にあっていたんだけど・・・

「そうだ！このまえケンジがさ・・」

レナがサヤちゃんにしゃべりだすと・・・

「え～！ホント？！」

急にオレをそっちのけで、ふたりで盛り上がりだした・・・

・・オレはしばらく二人のとりとめのない会話を聞いていたけど・・オレが知らないレナの学校の話ではちっとも面白くない・・・オレは女の子になってだいぶ経つけど、いまだにこういう女の子どうしの延々続くどうでもいいような会話は苦手だ・・・

幸いオレのまわりには、こういう会話をするコはいない・・・千里も弘子も直美もどうでもいいようなことはあまり言わない気がする・・・それとも・・オレたちの会話も知らない人から見ると、女の子どうしのどうでもいい会話なのだろうか・・・？

・・レナとサヤちゃんの長い話を聞いてると、オレは何だか妙な気持ちになってきた・・・

オレはレナとちょくちょく遊んでいて、レナのことは何でも知ってる気でいたけど・・・レナにも学校の友達がいて、オレが千里や弘子や直美と親友なように、レナにもオレが知らない仲が良い友達がいたのだ・・・それは当り前のことだけど・・・何だか気持ちが良くない・・・

・・これはたぶん嫉妬だと思う・・・いつの間にかオレは、レナを自分のモノみたいに思っていたのかも知れない・・・オレにもレナに見せない部分があるように・・レナだってオレに見せてない部分があっても不思議じゃないのに・・・

・・オレはレナのことを、ホントはほとんど知らないのかも・・・

－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－

「やっぱりユウちゃんはスゴイなぁ！　何着ても似合うんだもん！」

「そ・・そんなことないわよ・・・」

お店で服を試着すると、サヤちゃんが大げさに褒めるから、オレは恥ずかしくなってしまう・・・

「じゃぁ、今度はこれ着てみて！」

「ち、ちょっと待ってよ・・買うのはサヤちゃんなんだから、サヤちゃんが着なきゃわからないじゃない！」

「あたしはユウちゃんが着て可愛いのが着たいんだもん！」

「・・・しょうがないなぁ・・じゃコレが最後よ！」

「うん！」

・・オレはサヤちゃんからシブシブ服を受け取って試着室のカーテンを閉めた・・・自分の服は自分で着なきゃ、自分に合ってるかどうかわからないと思うんだけどな・・・

着ていた服を脱いで、新しい服を着る・・・フワフワのシフォンワ

ンピ・・大きめのベルトも爽やかで春らしい・・オレもこういうのは好きだ・・それに・・たしかにサヤちゃんにも似合いそう・・・まあ、オレとサヤちゃんでは身長が違うから、イメージは違った感じになるだろうけど・・・

「どう?こんな感じだけど・・」

「わぁ・・やっぱりユウちゃんが着るとステキ！　あたしもユウちゃんみたいに着こなせたらなぁ・・」

「そんなことないって！　サヤちゃん着てみてよ。絶対似合うから！」

オレは自分の服に着替えると、試着室にサヤちゃんを押し込んだ。

するとレナが小声で・・・

「フフッ・・サーヤって超明るいでしょう?」

「・・うん・・ちょっと明るすぎかも・・・」

「ユウったら振り回されっぱなしだもんね。」

「!!・・わかってるんだったら助けてくれればいいのに!」

「でもユウの学校ってみんな大人しいみたいだから、こんなコにも馴れておいた方がいいと思って。」

「・・まあ・・そうかも知れないけど・・・」

レナったら・・そのためにオレと会わせたのかな?・・・ホントはオレが困ってるの見て楽しんでるんじゃないだろうか?

「でも、あの服けっこう高いけど・・サヤちゃんお小遣い足りるのかな・・?」

「それは大丈夫だと思うよ。サーヤんちお金持ちみたいだから。」

「!・・そうなんだ・・・」

・・見た感じ・・あんまりお金持ちのお嬢様には・・見えないけど・・・でもたしかにバッグも靴もブランド物だ・・・

「じゃ～ん！　どう？」
サヤちゃんが効果音つきでカーテンを開けた。
「いいんじゃない？　可愛いよ！」
「でもなかなかユウちゃんみたいに着こなせない・・」
「大丈夫、大丈夫。もうちょっと肩の位置を少し背中の方にずらして・・ベルトはもう少し上のほうがいいかな？」
オレはサヤちゃんの服を直してあげた。
「背筋をのばして！　ほら、いい感じじゃない！」
「うん、サーヤすごく似合ってる！」
「ほんとだ！ちょっとさわっただけなのに、ユウちゃんってスゴイ！」
「そんなことないって・・だた何となく着るんじゃなくて、どんなふうに着ればもっとカッコよくなるか考えながら着ればいいのよ。」
「やっぱりモデルさんは違うね！」
「・・・・・」

・・ちょっと前なら“読者モデルだから”って訂正してたところだけど・・・専属モデルになっちゃったから言えなくなってしまった・・・でもやっぱり人から“モデル”と言われるのは照れくさい・・・

サヤちゃんがお会計に行ってる間にレナが・・・
「ユウも女の子に着こなしを教えられるようになったなんて、すごいよね！」
「もう・・冷やかさないでよ・・雑誌のお仕事でいろんな服を着てきたから、なんとなくわかってきただけよ・・・」
「冷やかしてなんていないわよ。ただ純粋にすごいなって思っただけ！褒めてるのよ？」
「・・そう・・ありがとう・・・」
・・レナがオレを褒めるなんて・・ヘンなの・・・

ショッピングが終るとレナが・・・
「これからどうする？」
「サーヤはカラオケ行きたい！」
「！」
・・オレはカラオケはイヤだなぁ・・・
「じゃぁカラオケにしよっか！」
「！！」
・・そんな！・・レナはオレがカラオケとか苦手なの知ってるくせに・・・なんで断ってくれないの？！

「ユウちゃんもＡＫＢとか好きでしょう？」
「！・・ＡＫＢは・・そんなに知らなくて・・・」
「そうなの？だったらサーヤが振りとか教えてあげる！」
「！！」
・・それって・・一緒に踊れってこと？

「・・ちょっと・・レナぁ・・」
「いいじゃない。サーヤはＡＫＢが大好きなのよ。踊りも完璧に踊れるんだから、ユウも教えてもらいなさいよ！」
「え～・・・」
・・ノリノリのサヤちゃん見てると・・カラオケ行くのイヤだって言えない空気だ・・・どうしよう・・オレ高い声でないし・・踊りなんて踊れないよ・・・

個室に入るとサヤちゃんはすぐに番号を入力しだした・・・よっぽどカラオケが好きなんだなぁ・・・
レナはジュースとか頼んでる・・・

前奏がかかるとサヤちゃんは・・・
「ユウちゃんも一緒に歌おう！」
「あっ・・」
オレの手を引っ張って無理矢理立たせた・・・歌うったって・・これ何て歌だろう・・ＡＫＢの歌っぽいけど・・・

サヤちゃんは振り付きで歌いだす・・
“ララララ～　ララララ～　・・・・　ラララ～”（注：ＡＫＢ４８の『会いたかった』を歌っています）
そして、歌いながらも、しきりにオレに一緒に踊るように催促する・・・！

助けてもらおうと思ってレナを見ると、手に持ったタンバリンを叩きながら楽しそうだ・・・

！・・そっか・・わかったゾ！・・・レナのヤツ・・これが目当てだったんだな？！
なんかニヤニヤしてたのは、最初からカラオケでオレにＡＫＢを歌って踊らせてやろうと思ってたんだ！
どうりで急にサヤちゃんみたいな押しの強いコを連れてきたワケだ・・・オレのファンだからって、オレも断れないだろうと思ってるんだ・・・

・・でも・・たしかに・・オレはこういう状況では断れない・・・
サヤちゃんも全然悪気はなさそうだし・・・

・・全部レナの策略だったなんて！！

（・・うぅ・・しかたない・・・）

・・こうなったら・・踊るしかなさそうだ・・・オレはサヤちゃんを真似ながら、少し遅れて踊りについていった・・・

“ララララ～　ララララララ～　・・・・　ラララ～”（注：ＡＫＢ４８の『会いたかった』を歌っています）

・・レナのヤツ・・オレの気も知らずに楽しそうに笑ってる・・・クソぉ・・もうヤケクソだ！

“ララララ～　ララララ～　・・・・　ラララ～”（注：ＡＫＢ４８の『会いたかった』を歌っています）

・・オレだって・・踊ろうと思えば踊れるんだ・・・日本舞踊のお師匠さんにもスジが良いって言われたんだもん！

「アハハ・・ユウ上手よ～！　可愛い！！」

レナはタンバリンを叩きながら、オレに声援を送ってくる・・・もうっ・・なんだよそれ・・・

・・でも・・なんか・・こういう何も考えないで歌って踊るのも・・女の子っぽくてちょっと楽しいかも・・・

“ララララ～　ララララ～　ラララ～”（注：ＡＫＢ４８の『会いたかった』を歌っています）

オレはサヤちゃんと一緒に、人さし指を突き出した！

（著作権侵害と引用を混同する間違った考えのせいで、歌詞を引用出来ずわかりにくくてすみません。）

第１６３話　バラ　３年生がいない部室

オレが放課後クラブに向っていると・・・

“　ララララ～　ララララ～　ララララ～　キャッ！”（注：ＡＫＢ４８の『会いたかった』を歌っています）

後ろからいきなり誰かにどつかれて、前につんのめりそうになった・・・

「！・・長谷川さん・・ちょっとぉ・・あぶないじゃない！転んだらどうするの？！」

「おおげさねぇ。それくらいで転ばないわよ！・・まあ、有希の運動神経なら絶対転ばないとは言えないけど？」

・・たしかにオレはそんなに運動神経は良い方じゃないけど・・・

「もうっ・・気をつけてよね・・足とか擦りむいたらモデルのお仕事に差し支えるんだから・・・」

「あ！・・もう“読者モデルだからぁ”って言わないんだね。そうか、専属になったからすっかりモデル気分なんだ？」

「・・そ・・そんな・・・」

・・長谷川のヤツ・・あげ足とるようなことばかり言って・・・

「わ・・わたしは・・お仕事は責任もってやりたいの！」

・・お金もらってやってるんだもん、学生だからって遊び半分じゃダメなのに・・・そういうとこ長谷川は全然わかってない・・・

「なに？なんか用なの？」

「べつに、有希がずいぶんごきげんみたいだったから。ＡＫＢなんか歌っちゃってさ、珍しいじゃない！」

！！・・イヤなところをイヤなやつに見られちゃったなぁ・・・

「・・め・・珍しくないよ・・わたしだって女子高生なんだからＡ

ＫＢくらい歌うわよ・・・」
「まあ・・そうかもしれないけど。でも有希がＡＫＢ歌ってるのなんて見たことないわよ。」
「・・・・・」
・・今日は妙に突っかかってくるなぁ・・レナとレナの友達とカラオケに行ったこと話してもいいんだけど・・でも長谷川はオレがレナと遊んだ話するの好きじゃないみたいだし・・・

もう・・面倒くさいから逃げちゃえ！

「あ！逃げた！」
オレは部室まで必死で走った・・・でも・・女の子って胸が弾むから走りにくい・・
「んっ・・」
・・それにスポーツブラじゃないと・・乳首がこすれて感じちゃう・・
・・長谷川の足音がグングン近づいてくる！
・・よく他の女の子はこんな胸で走れるよなぁ・・・尊敬しちゃう・・

「ほら捕まえた！」
オレは部室までもう少しというところで、制服の襟首をネコみたいにつかまれてしまった・・・
「にゃぁ～・・」
「可愛く鳴いたって許してあげないわよ！　なんで逃げるのよ！」
「・・だってぇ・・・」

「何してるんですか？　先輩。」
「あっ・・ミサトちゃん、助けてぇ！」
「長谷川先輩、また有希先輩のことイジメてるんですか？」
「イジメてないわよ！　わたしが話してるのに急に逃げるから、追

いかけて捕まえたの！」
「ハハハ・・ほんと先輩たちって仲が良いですね！」
に出てくる双子みたいだ・・・
オレと長谷川は同時に言ってしまった・・・これじゃまるでテレビ
「仲が良い？」「仲が良い？！」

「な・・仲なんて良くないわよ・・ねぇ長谷川さん・・」
「そ・・そうよね有希・・」
・・なんか・・オレたちって仲が良いんだかどうだか・・・
・・オレは長谷川のこと・・嫌いじゃないけど・・・長谷川はオレのこと・・どう思ってるのか良くわからない・・・
・・なんだかすごく優しい時もあるクセに・・・いつもはヘンなことで言いがかりつけてきて・・オレのことイジメるのを生き甲斐にしてるみたいだし・・・

「ミサトちゃん、長谷川さんなんか放っといて部室行きましょう！」
オレはミサトちゃんの両肩に手を置いて、後ろから押して歩いた。
「なんかって何よ！　なんかって！」
「きゃぁ～～！」
オレとミサトちゃんは走って部室に駆け込んだ。

－－－

オレたちが駆け込むと、もう井川さんが来ていた・・・

「どうしたの？なんか楽しそう！」
「あ・・井川さん・・」
・・いったいオレたちのどこが楽しそうなんだよ・・・
「・・先生はまだ？」
「今日は研修があって来れないから、戸田さんが来たら部長代理をやってもらってって。」
「え？・・わたしが？」
・・オレ・・仕切るのあまり得意じゃないんだけど・・・もう3年生はいないからなぁ・・・

「ほら、部長代理、どうするのよ、何とかしなさいよ！もうすぐ1年生も来るわよ。」
「・・・・・・」
・・うぅ・・長谷川のヤツめ・・オレが困ってるのを楽しんでるな・・・

「井川さん、花はまだ？」
「うん、まだ来てない・・」
「花が無いとどうしようもないわねぇ・・・」
・・う～ん・・デザイン画でも描いてようか・・・するとそのとき・・・

“　華道部の方・・お花屋さんが来ています・・正面玄関まで花を取りに来てください・・・”
え？・・いつもはお花屋さん部室に持って来てくれるのに・・放送で呼び出すなんて珍しいな・・・
「・・じゃぁ、わたし行ってくるね。」
オレは急いで玄関まで行った・・・

「あれっ？」

花を持ってきてくれたのは丸刈りの若い男の人だった・・・いつもはおばさんなのに・・・
「いつもありがとうございます。今日はおばさんじゃないんですね？」
「あ・・はぁ・・・」
「？」
・・オレの方を見ない・・なんか無愛想な人だな・・・

お花屋さんは何も言わずいきなりオレに花束を突き出した・・花を見るといつもと違って・・・
「わぁ！きれいなバラ！」
いろんな花の中に大きく開いた赤とピンクのバラがそれぞれ数本混じっている。
「でもバラなんて珍しいですね！」
「え！・・普通は入れないんですか・・しまったなぁ・・おれ良く知らなかったから・・」

・・普通は活け花用だから和モノが多いんだけど・・知らなかったのなら仕方がない・・・
「いえ、大丈夫です！練習用なので・・色んな花があっていいので。」
「あ・・じゃぁよかった・・・あ！そうだ・・」
男の人は一瞬オレと目が合うと、すぐに逸らしてウエストポーチから伝票を取り出した。
「・・これ・・サイン・・・」
「はい。」
オレが伝票にサインをすると、お花屋さんは目を伏せたまま、慌ててるように帰っていった。

何なんだろう・・照れ屋さんなのかな・・？

それとも、男の人だから女子校に来るのは恥ずかしいのかも知れない・・・

「有希、どうだったの？」
オレが部室に戻ると、長谷川がちょっと心配そうに聞いた。
「うん、いつものおばさんじゃなくて男の人だったから入れなかったみたい。」
・・さすがにウチは女子校だから、先生や用務員さん以外の男の人が、のこのこ校内を歩くことは出来ない決まりになってる。
「それより見て！　バラよ、きれいでしょう！」
「バラ？！バラなんて活けにくいわよ！」
「そうだけど・・たまにはいいじゃない。練習なんだからさ。」
・・オレはバラって結構すきだな・・女の子はみんな好きなんじゃないかと思うんだけど・・・

「ミサトちゃん、やってみる？」
するとミサトちゃんはブンブン手を振って
「わ、わたしはいいです。先輩がお手本を見せてください！」
「そう？」
・・それじゃ・・みんな尻込みしてるみたいだから・・オレが活けてみるか！

「じゃぁ、わたしはバラ使うから、みんな好きなの選んで！」
それぞれ活けたい花をとって、合いそうな器を選ぶ・・・
オレはバラだから、少し洋風な感じもする多少高さがある鉢を選んだ。

花器を前にみんなで正座してお辞儀・・・

「よろしくお願いします。」
みんなで黙々と活けていく・・・“パチン、パチン”とハサミで茎を切る音だけが響く・・・

・・オレはこの空間は落ち着けるから好き・・・

今日はお座敷は茶道部が使ってるから、部室の板の間に座布団を敷いて、その上に正座する・・・でも座布団は薄いから長く正座してると足が痛くなってしまうのだ・・・

いつもは狭い部室だけど、もう3年生がいないから、いつもより広々としてる。
・・来年はオレたちが3年生・・早いなぁ・・・なんか高校の2年間ってあっという間だった気がする・・・それにみんなと違って、オレの高校2年間は女になっての2年間でもある・・だからなおさらなのかも・・・

・・オレはこの短い間にいろんな事を経験してきた・・・女の子として入学して・・読者モデルになって・・タマをとって・・・学園祭クイーンになって・・ファッションショーに出て・・刈谷先生に・・・

・・でもオレにとってはそういうイベントよりも、日々の女の子としての生活の方が大切な思い出だ・・・弘子、千里、直美・・ミサトちゃんに・・安部っちやクラスのみんな・・そして・・長谷川・・・みんなオレにとって大切な人たち・・・

・・そして女の子のオレにとってもう1人の大切な人・・それはもちろん・・オレの恋人・・純平だ・・・

純平はほんとにステキなヤツだ・・オレが男の子のままだったらモデルになんかなってないから、純平に会うこともなかったけど・・・でももし出会っていたら・・・男のオレでも純平のことが好きになってたんじゃないかと思う・・・まあ、純平の方は男の子のオレになんか興味を持たなかったかも知れないけど・・・でも・・もし弟みたいな扱いしてくれたら・・オレはスゴク嬉しいと思う・・・

赤いバラの花の回りに短かめのピンクのバラ・・・ところどころに小さな白い花のカスミ草を・・・

・・あぁ・・オレが本当に女の子だったら・・・こんなステキなバラの花束を持って・・純平がプロポーズしてくれる未来だってあったかも！

・・でも・・そんなのオレには叶わない夢だってわかってる・・・

「せんぱい、スゴイです！まるで結婚式みたい！」
「え？」
・・言われてみると・・そんな感じもするかも・・・純平のことなんか考えてたからかな・・・
「ほんとね、有希の願望が現れてるんじゃない？」
「！・・そんなぁ・・・」
・・長谷川ったら・・無責任なこと言うなぁ・・・
「ちょ・・ちょっと！　みんなで見なくていいから！！」
みんなが見ようと集まってきたので、オレは恥ずかしくなって全部抜いてしまった・・・

「あ～　もったいない・・なんで崩しちゃうんですかぁ？　写メ撮

ろうと思ったのに・・・」
「いいの！　練習なんだから！」
オレは抜いたバラの花をミサトちゃんに押しつけて・・・
「取り替えよう！」
「え？！」
「何ごとも勉強よ。　ミサトちゃんも新しく1年生が入って来たら教えなきゃいけないんだから！」
「え～　あたしにはまだ無理ですぅ・・・」
またそんな自信なさそうに・・・

「そんなことないよ、ミサトちゃんのも良く出来てるじゃない。」
「ほんとですか？　ありがとうございます！」
ミサトちゃんはすぐに元気になるからいいよなぁ・・・
「もっと自信持たなきゃ、教えるのは自分の勉強でもあるんだから。」
これはオレが三吉先生に言われた言葉の受け売りだけど・・・オレもミサトちゃんに教えたのは、最初は大変だったけど、今では良い勉強になったと思う。
「・・はぃ。」
ミサトちゃんの活け方も最初の頃と比べたら雲泥の差だ。オレはそんな後輩を誇らしく思ってる！

「イテテテ・・・」
切り戻しながら3、４回も活けて終ったころには、みんな足が痛くなってる。ずっと正座だから痺れるのは当り前だけど、板の間の部室でやった時はお座敷の畳の時よりもヒドイ・・・

「ここも板の上に畳敷いたらいいのにね・・」
「そうね、有希が部長になったら先生に掛け合ってみたら？」

「え？　なんでわたしが部長なの？」
「だって、今も部長代理やってるじゃない。」
「・・それは・・先生に言われたから・・・」

すると急に長谷川が・・・
「有希が部長がいい人！」
「は～い！」「は～い！」「は～い！」「は～い！」
長谷川の声に全員が手をあげた・・・
「もうっ・・なんでそうなるのよぉ！」
「だって先輩が一番活け花じょうずだし、責任感も強いから適任だと思います。」
「ミサトちゃん・・・」
・・オレそんなに責任感が強い方じゃないと思うんだけど・・・
「それに戸田先輩は優しいから！」
「ブンちゃんまで・・？」（注：ミサトと同じ1年生。名前が“文〈ふみ〉”だから“ブンちゃん”と呼ばれている）

「ちょっと！ブンはわたしでも良いんじゃない？！」
「そりゃぁ、ブンちゃんも教育係の長谷川さんを推薦したいだろうけど・・長谷川さん怖いからよね！」
ブンちゃんはちょっと困った顔で苦笑い・・・
「ちょっと、有希！」
「ほら、そんなふうにすぐ怒るから！」
・・ふふふっ・・長谷川のヤツ良い気味だ・・・あっ・・でもまた後で仕返しされるかなぁ・・・ちょっと褒めとこうかな・・・

「・・まあ、それは冗談として・・やっぱり部長は長谷川さんが良いんじゃない？　仕切るの上手だから！」
「有希そんなふうに思ってるんだ？　わたしが仕切り屋だって？！」
「そ・・そうは言ってないじゃない・・しっかりした性格だから、

みんなのこと上手くまとめて・・・」
「同じことでしょう?!」
「・・・・・」
・・ほんと長谷川を褒めるのって難しい・・少なくともオレには無理だ・・・

長谷川との帰り道・・・
「・・井川さんは・・感じじゃないよなぁ・・・」
「?・・なにが?」
「だからさ・・さっきの部長の話・・・どっちにしてもわたしか長谷川さんのどっちかが部長になるのかなって・・だって3年生が部長って決まってるんだから・・井川さん抜けたら・・そういうことでしょう・・?」
「だから有希がやればいいのよ。」
「・・またそんなこと言う・・・ほんとのこと言うと、わたし雑誌の撮影とかで早く帰らなきゃいけないことも多いから・・そんな時わたしが部長やってると、みんなに迷惑かけないかと思ってるの・・・」
「・・なるほど・・それもそうね・・・」
こんどは長谷川さんも真面目に考えてくれてるみたい・・・

「それじゃぁ、有希が部長だとしたら、わたしか井川さんが副部長とかでいいんじゃない?」
「・・副部長かぁ・・・」
「それなら有希がいない時でも困らないでしょう?」

「う～ん・・でもさ・・それなら最初からわたしじゃない方が・・・」
「みんな有希がいいって言ってたじゃない。」
「・・それは・・そうだけど・・・」
・・なんでみんなオレがいいんだろう・・・オレは後輩を怒ったりしないからかな・・・

「まあ、先生とも話さないといけないけどね。」
「うん・・そうだね・・・」
・・長谷川の言うとおりだ・・これはオレたちだけで決める話じゃない・・・

・・でも・・部長なんて大変そうだから・・出来ればなりたくないなぁ・・・オレには他にもやらなきゃいけない事がたくさんあるんだもん・・・

「・・やっぱり長谷川さんが部長やってくれないかなぁ・・・」
「あんたね、部長ってのは人望がないといけないのよ！」
「・・そっか・・長谷川さんはそんなに人望ないもんね・・・」
！・・しまった！・・また余計なこと言っちゃった・・・

「有希っ！」
・・ヤバイ・・どうしよう・・とにかく逃げなきゃ・・！

「きゃっ！」
・・今度は走りだす前に首根っこをつかまれてしまった・・・

「あんたまた逃げようとしたでしょう！」
・・もうっ・・またこってりイヤミ言われそう・・・
「あんたの足でわたしから逃げようなんて百年早いわ。」

「・・うぅ・・・」

・・オレだって・・男の頃はもう少し早く走れたのに・・・
・・女の子特有の・・この感じやすい胸がいけないんだもん・・・
・・長谷川はきっと鈍感なんだ・・そうに決まってる！

“　まもなく1番ホームに福岡行き急行が到着します・・・”
「あ！・・長谷川さん、急がないと電車が来ちゃうよ！」
「わかってるわよ！」
オレたちは急いで駅へのホームを駆け上がった。

「あ～よかった・・間に合って・・・」
「あんたが余計なことするからよ！」
・・なに言ってんだよ・・いつも余計なことするのは長谷川さんなのに・・・

「！」
・・まただ・・座席に座ってしばらくすると・・また股間がムズムズしてきた・・・

このごろ電車に乗るといつもこうなっちゃう・・・初めてなった時は病気じゃないかと心配したけど・・刈谷先生にオレの身体が“開発”されたんだって聞いて・・冷静になってみると、たしかに乳首をイジった時に感じる感覚に似てるような気がする・・・

・・でも自分でイジッた時と比べても・・このムズムズは僅かなものだから・・これでオチンチンが立ってしまう心配はなさそうなの

で安心した。

・・電車に乗るたびに・・感じてオチンチンが立っちゃったんじゃ・・たまんない！

・・でも・・ちょっと気持ちいいかも・・・

「有希！」

「うわっ！・・な・・なに？」

「どうしたのよ？　そんなにおおげさに驚いて！」

「ぁ・・ううん・・ちょっとウトウトしてたみたい・・・」

「もうすぐ春日原よ。」

「あ・・うん・・ありがとう・・」

・・あ～びっくりした・・・電車の振動で気持ち良くなってたなんて・・長谷川には絶対知られたくない・・女の子にそんなこと知られたら変態あつかいされるのがオチだもん・・・

・・だけど・・たしか刈谷先生は・・オレが感じてる快感は、女の子の快感に近いって言ってた・・・

・・だったら・・女の子でも電車の振動で感じちゃうコもいるのかなぁ・・・

・・そんなこと・・誰にも聞けないけど・・・

ＡＴから

今回は卒業式だと思った方も多いと思います。
私もそうしようかと思っていたのですが、
ちょっと早い気がしたので、箸休め（笑）的に普段の有希たちを書いてみました。
普段の何も起きない話というのは書きにくいので、
こんな機会に普通の高校生らしい有希たちが書けて
作者としても良かったと思っています。

今回はじめてミサト以外の１年生が登場しました（笑）
この話はただでさえ登場人物が多いので、
必要ない人は基本的には出さないようにしています。
というか居ても書かない（笑）
２人の３年生は結局名前はわからないままでした・・・

ちなみにもう１人の１年生の名前は
望〈のぞみ〉みんなからは“ノンちゃん”と呼ばれています。
でも今後でてくるかどうかはわかりません（笑）

そろそろ『オレは女子高生』の世界　第４弾を
掲載した方が良いかも知れませんね・・・
９３話の第３弾からだいぶ登場人物も増えてるので・・・

第１６４話　卒業　最後の思い出

３月１日、今日は３年生の卒業式だ。

・・大森先輩とも今日でお別れ・・・まあ、先輩んちのお店に行けば、いつでも会えるんだけど・・・

この１週間くらい、３年生は実質的にはもう学校に来てなかったから、３日前から３年生の教室をオレたちで飾り付けをした。白とピンクのティッシュで花を作ったり、金色のモールや色紙を細く切って輪っかをつなげた鎖で教室を飾り付けるのは、なんだか小学生に戻ったみたいで楽しかった。

昨日は体育館のイスを並べたり、ざっと式の段取りを確認したりした。

体育館の後ろには父兄の方々が座っている・・といってもほとんどがお母さんだ・・・

オレたち２年生と１年生は、きれいに列を作って父兄の前を通り、順番に席につく・・・

オレたちが座ってしばらくすると、３年生の先輩方が入ってきた・・・その中にひときわ目立つのが大森先輩だ・・・なにしろオレたちの学校は背が高いコは少ないから、大森先輩は頭ひとつ・・いやそれ以上飛び出している。

全員揃ったところで２年生代表が・・・

「起立！」
オレたちは全員立ち上がって校歌斉唱。

筑紫平野に白鳥が～
舞うがごとき学び舎の～
健やかなりし乙女たち～
勉学いそしむその姿～
ああ～　麗しき～
白鴻女学園～

・・この馴れ親しんだ校歌も共学になったら変わってしまうのだろうか・・男の子もいるのに“乙女たち”はヘンだし・・・
・・仕方ないけど・・なんだか淋しい気もする・・・

オレたちの前に座っている3年生は全員セーラー服・・・でもオレをはじめ2年生と1年生は半分くらいがもう新しい制服になっている・・・確実にウチの学校は変わっている・・・

オレはセーラー服も好きだったけど・・立場上とはいえオレと千里が率先して、すみやかに新しい制服に替わるように進めているんだから、そのオレが悲しむのは筋違いというものだろう・・・

1年生が入学してきたら、みんな新しい制服だから、急にセーラー服は少なくなると思う・・・そうなるとまだセーラー服のコたちも、新しい制服に替えていくのではないだろうか？・・・来年オレたちが卒業する時は全員がブレザーになってるかも知れない・・・

それにしても・・こうして全校生徒が集まると・・ここに来て急にお下げのコが増えているのが良くわかる。

オレはべつに気にならなかったけど、みんなはお下げや三つ編みにしたくないらしい。　でも4月からは校則がゆるくなって、髪が長くても、お下げや三つ編みにしなくて良くなるから、今は我慢して伸ばしておこうという魂胆なのだ！　オレのまわりでも弘子と千里がお下げにしている。弘子は前髪も切りたくないみたいで今はピンでしっかり留めている。だからおでこが出てて何だか可愛い！

校歌が終ると2年生代表が祝辞を言う・・・

「今日ご卒業の3年生のみなさん、入学以来わたしたち後輩の面倒をみて下さってありがとうございました。先輩方のあたたかいご指導は一生忘れません・・・・」

2年生代表の祝辞を聞きながら、オレは内心ホッとしていた・・・実は最初、あやうくオレが2年生代表にさせられそうになっていたのだ。　教頭にオレがやってくれないかと頼まれたけど、3年生にはオレと同じ中学の人も何人かいるし・・代表は名前を呼ばれるから、もしかしたら父兄の中にはオレの名前を知ってる人がいると困るからと言って断ったのだ。

ほんとあの時断って良かった・・失敗が許されない式で、全校生徒の前で祝辞を言うなんて・・・オレには絶対ムリだ。

祝辞が終ると3年生代表の言葉・・・そして卒業証書授与式だ・・・

教頭先生が3年生の名前を1人づつ呼び、呼ばれた生徒は壇上に上って校長先生から卒業証書を受け取ると一礼し、オレたちの方に向きを変えてまた一礼・・・そして反対側の階段から降りてくる・・・そのくり返しだ・・・

校長先生の後ろで名前を呼び、校長先生へ卒業証書を渡す役目の教頭先生も、今日はタキシードのせいか・・いつもより立派に見える・・・“孫にも衣装”ってやつだろう・・・

（注：有希は“馬子にも衣装”を間違えています。いつになったら気付くのでしょうか・・・）

ときどき緊張してギクシャクしちゃう先輩もいるけど、ほとんどは何事もなく流れていく・・・

最初の方こそオレも緊張感を持って見てたけど・・・ずっと同じくり返しを見ていると・・・なんだか眠たくなってきた・・・

・・・・・・

・・・・・

・・・・

「戸田くん！」

「・・・・？」

「戸田有希くん！」
「ぁ・・はい！」

名前を呼ばれてオレは慌てて立ち上がった・・・

・・そうだ・・今日はオレの卒業式・・・中学生最後の日だった！

オレはあたふたと席を立ってパイプイスの間を抜けると、通路を歩いていく・・・
向こうのカベぎわには先生たちが並んでいる・・・担任の井原先生も・・三吉先生もいる・・・

・・オレは詰襟の学生服・・・髪の毛は校則より少し長め・・・ムースをつけてなんとかごまかしたけど・・今日のためにみんな散髪してきた中では目立ってないか心配だ・・・

？・・・でもなんか変な感じがする・・・歩くたびに肩や胸・・そして背中に違和感を感じた・・・
！！！・・しまった！・・オレ・・忘れて学生服の下にブラジャー着けてきてしまった！！
・・どうしたワケか・・４月から付けていくハズのヌーブラまで付けている！
・・どうやら・・この窮屈な感触では下も女の子のパンツをはいているようだ・・・オレどうしてしまったんだろう・・・

・・落ちつけ・・学生服の生地は厚いから・・みんなにはブラジャー着けてるのはバレないと思う・・でも・・ヌーブラの膨らみが目立たないとも限らない・・・身体中からどっとイヤな汗が噴き出し

てきた・・・

オレは胸の膨らみを隠すように少し猫背になって・・でもあまり猫背になりすぎると・・ブラが背中に浮き出ないか心配だ・・・通路の突き当たり、緊張しながら短い階段を壇上へと上がっていく・・・壇上では校長先生が笑顔で立っている・・・

オレが校長先生の前に立つと・・・

「戸田有希くん、あなたは当校の全課程を修了したことを、ここに証します。」

校長先生が差し出した卒業証書を、まず右手、そして左手と両手で受け取ると、折らないように半分に曲げて一礼・・・そしてみんなの方を向いて一礼すれば、後は壇を降りるだけだ・・・

するとその時、いきなり校長が・・・

「みなさん、戸田くんは今日を限りに男の子をやめ、４月からは女の子として白鴻女学園に通う事になってます。」

するとみんなは、なぜかオレに向って盛大に拍手をした・・・

（・・こ・・校長先生・・なんでみんなに言っちゃうの・・・？！）

「さあ戸田くん、学生服を脱いで、みなさんにその下に着けている女性物の下着を見せてあげなさい！」

（・・そ・・そんなぁ・・・下着のことなんか・・言わなきゃわからないのにぃ・・・それに・・なんで校長先生・・オレが女の子の下着つけてるって知ってるの？！）

オレがどうしていいかわからず躊躇していると・・

“オカマ！オカマ！！脱～げ！脱～げ！！”

いつの間にかみんなの拍手がオレをはやし立てるような罵声へと変わっている・・・

オレはその声を聞くと血の気が引いて・・・身体がガクガク震え出した・・・

・・も・・もう・・オレの人生・・オシマイだ・・・

・・・・・・

・・・・・

・・・・

？

・・何か・・オレの背中をツツいてる・・・・・

“有希・・有希・・”

・・オレを呼ぶ小さな声・・・・

？・・・あれ？・・・

“起立！”

！！・・オレはワケもわからないまま慌てて立ち上がった。

“有希！”

後ろで誰かオレの体を支えてる？

“蛍の光　斉唱！”

！！・・そうだ・・・卒業式だった！・・・これは3年生の卒業式だ！！

オレは一瞬のうちに目が覚めた！

ほ～た～るの　ひ～か～り　ま～ど～の～ゆ～き～～

・・気がつくと・・オレの両方の腕を弘子と千里が支えてくれていた・・・

ふ～み～よむ　つ～き～ひ　か～さねつ～つ～

・・後ろでツツいてたのは直美だったのか・・・オレが居眠りしてたから起こしてくれたんだな・・・

あ～け～てぞ　け～さ～は　わ～かれゆ～く～

“それではこれで卒業式を終ります。　卒業生退場！”

オレたちの横を通っていく先輩たちを拍手で見送った・・・

・・いつの間にか式は終っていた・・・オレ・・ずっと寝ちゃってたんだろうか・・・

・・それにしても・・あんな夢を見るなんて・・・

・・なんてイヤな夢だろう・・・目が覚めた今でも、まだあの時の恐怖をありありと思い出すことができた・・・

・・ブレザーの中の・・ブラウスが汗でびっしょりだ・・・

式が終ってオレたちの教室に戻ると直美が・・・
「ほんとビックリしたわよ。有希なかなか起きないんだもん！」
「・・ご・・ごめん・・・」
「最後はガタガタ震え出すし・・・大丈夫なの？どこか具合が悪いんじゃない？」
「ううん・・大丈夫！　ちょっと・・コワイ夢みちゃって・・・」
「夢？！　卒業式の最中に夢見るほどグッスリ寝るなんて、有希らしいって言えばらしいけど。」
「・・・・・」
・・オレってそんなキャラだっけ・・・？

「あ～あ・・４月になったらわたしたちが３年生になるのねぇ。」
弘子がしみじみ言うと・・・
「・・うん・・・」
オレもなんか感慨深い気持ちになってしまう・・・

・・あと１年・・・オレはどんな女子高生生活を送るのだろうか・・
・

「有希はこのまま白鴻女子大に進むことにしたんでしょう？」
千里がオレに聞く・・・
「うん・・今のところそのつもりだけど・・・」

・・オレもこのところ、自分の将来について考えてみたけど・・・
オレはみんなとは違うから、やっぱり他の大学を受験するのは現実的じゃない・・・女の子として受験するのは難しそうだし・・かといってオレは今さら男になんて戻れないし・・・

・・まあ・・もし仮にそんな問題がクリアされたとしても・・オレが学力的に受かりそうな大学なら・・白鴻だって大差ないから・・・

・・それにひきかえ・・千里はこのごろテストの点数もすごく良くなってきている・・・1年生の頃はオレとそんなに変わらなかったのに・・今ではまったく比べ物にならなくなってしまった・・・千里頑張ってるんだなぁ・・・

　開けっ放しの窓からは、かすかに3年生の教室から声が聞こえてくる・・・なんて言ってるのかはわからないけど・・きっと担任の先生がお別れの言葉なんか言ってるんじゃないだろうか?

・・泣いてる人もいるのかな・・・オレは自分の卒業式の時は泣くんだろうか・・中学の時は女の子になる勉強で忙しくて、卒業後も学校に来ることが決まってたから、とても泣くような感動はなかった・・・

・・でも・・オレは女の子になって、すっかり泣き虫になっちゃったから・・・卒業式では泣いちゃうかも知れない・・・
・・弘子や千里や直美と毎日会えなくなるなんて・・・それを想像すると今でも泣けちゃいそうだ!

・・オレは中学の時は、弘子たちみたいな親友はいなかったもんなぁ・・・ぜいぜい鈴木が仲が良かったくらいで・・・

・・そういえば・・鈴木のヤツどうしてるかな・・・もう2年間会ってないからだいぶ変わったかなぁ・・・オレが鈴木と最後に会ったのは・・オレが最後に中学校に行った日だ・・・中学からの帰りに偶然すれ違ったのだ・・・（9話参照）

・・もっともそれを知ってるのはオレだけで、鈴木はオレにすれ違ったことすら知らない・・・あの時のオレはセーラー服を着た女子中学生だったのだから・・・

・・あの春の日のことは今でもはっきり憶えている・・・暖かな日射しも・・さわやかな風も・・歩くたびに揺れる中学校のセーラー服のスカートも・・そして心臓のドキドキも・・・

・・あの時以来・・オレは鈴木に会えない女の子のオレになってしまったのだ・・・オレはもう鈴木と会うことはないだろう・・・もしどこかで会ったとしても・・鈴木はオレに気付かないに違いない・・・

・

オレが物思いにふけっていると、山口先生が教室に入ってきて・・

「みんな！もうすぐ3年生が帰るから、校庭で見送るわよ！」

「は～い！」

「このフリージアを3、4本づつ持っていって3年生に渡してね。なるべくみんなに、片寄らないようにね！」

「は～い！」

オレたちはひとり数本づつ黄色いフリージアを持って校庭へ向った。

オレたち2年生と1年生が校庭で待つ中、3年生たちが校舎から出てきた。

オレは長谷川たちと華道部の2人の先輩たちのところに行って花を渡した・・・でも長谷川と井川さんにとっては教育役の直接の先輩だけど、オレにとっては少し離れた存在だ・・・オレは最初からあるていど出来たから、オレたちが1年の時は2年生は2人だった関係で、オレは先輩たちにはあまり教わってないのだ。

長谷川たちはつもる話もあるに違いない・・・オレはそっとその場を離れた・・・

・・オレの手にはあと1本のフリージア・・・これを渡す相手は決まってる・・・あたりを見回すと、その人はすぐに見つかった。みんなより頭ひとつ出てるから・・・

「せんぱ・・・」

駆け寄ろうとしたけど、大森先輩はみんなに人気があるから、先輩のまわりは女の子たちに囲まれている・・・たぶんその多くはオレより前から先輩のことを良く知ってる人たちだろう・・・もしかしたら・・あの中に先輩と関係があるコもいるのかも・・・

（これじゃ近付けないや・・・）

オレが、やっぱり先輩にお花を渡すのやめようかと思っていると、先輩と目が合ってしまった！

先輩はオレに手を振ったので、オレはどうしたらいいのかわからずに、ただお辞儀をした・・・でも近づくことは出来なかった・・・

・・オレが無理に押し退けながら近づいても目立っちゃうし・・・
大森先輩が女の子を好きなのは知ってる人は知ってるみたいだから・
・・そんなことしてオレが先輩と何かあると思われても困るし・・・

（・・あ～ぁ・・けっきょく先輩に何も言えなかった・・・）
オレがしょんぼりして校庭をフラフラしていると・・・
「戸田さん、これ大森さんから・・」
「え?!　わたしに?」
それは小さな封筒だった・・・
「ぁ・・ありがとう・・」
・・この人・・たしか3年生の・・・何て名前だっけ・・・?
「じゃぁね・・モデルの仕事がんばってね!」
「ぁ、はぃ・・あっ!先輩・・このお花どうぞ!」
「ううん、それは大森さんにあげて。」
その人は、そう言ってすぐに戻って行ってしまった・・・

「・・先輩から手紙・・・?」
こっそり封筒を開けてみると・・・
“ユウちゃん、後で北校舎の裏で待ってて。”
とだけ書いてあった・・・

・・北校舎の裏っていったら・・細い通路のようなところだ・・通る人もめったにいない・・・
・・あんな人けのないところに・・なんで?

オレはみんなに適当な理由を言って別れ、ひとりで北校舎の裏で大森先輩を待っていた。

「ユウちゃん来てくれてありがとう。」

「い・・いえ・・・」

・・どうしたんだろう・・こんなところに呼び出して・・・

「・・先輩、ご卒業おめでとうございます。　あ、これ・・お花・・

・でも・・ちょっとしおれちゃった・・・」

「ううん、ありがとう！」

先輩はオレが渡した黄色いフリージアを胸のポケットに挿してくれた。

「ユウちゃんにね、お願いがあるんだけど・・」

「？」

「私、今日で卒業だし・・ひとつだけお願いしていいかな？」

「ぇ・・はぃ・・・」

・・なんだろう・・先輩がオレにお願いなんて・・オレに出来ることならいいけど・・・

「キス・・してもいい？」

「え？！」

・・キ・・キス・・・？

「・・わたしに・・？」

「イヤ？」

「・・ぇ・・えっと・・イヤってことは・・ないですけど・・・」

・・でも・・女の子どうしでキスなんて・・・先輩は女の子が好き

なのは知ってるけど・・オレは・・・
「ダメなら・・諦めるけど?」

・・でも・・女の子どうしだから別にキタナくないし・・先輩のこと・・嫌いなワケじゃないし・・・
「・・ぃ・・いいですけど・・ちょっとだけなら・・・」
「ありがとうユウちゃん! ほんとユウちゃんって優しいね。」
・・オレって断るの苦手なんだよなぁ・・・

・・まあキスくらいならいいか・・相手が女の子なら浮気にもならないだろうし・・・

大森先輩はオレのアゴを少し持ち上げて・・先輩の顔が近づいてくると、オレは思わず目をとじた・・・いくら相手が女の子でも・・キスは・・キンチョウする・・・
「!」
先輩の唇がオレの唇に・・・
「!!」
すると先輩はオレの頭を抱くように、後頭部を両手で押さえた・・・
ひっ・・先輩力が強いから・・全然動けない!・・それに先輩背が高いから・・オレは後ろに倒れそうになるのを先輩に支えられてる・・だから余計身動きとれない・・・
「!!!」
・・く・・くちの中に先輩の舌が!!・・こ・・これって・・ディープキス?!・・・

・・せ・・せんぱいの口は・・・ミントの香り・・・

・・ズルイよ・・オレは・・こんなことされると思わないから・・朝歯を磨いたっきりなのに・・・

「・・んんん・・・」
・・く・・苦しいよぉ・・・息ができない・・・！
「ん～ん～・・・！！」
オレの異変に気付いて、やっと先輩は放してくれた・・・
「・・うぅ・・はぁ、はぁ・・せんぱい・・ヒドイぃ・・・」
・・オレはなんだか悲しくて泣き出してしまった・・・自分でも良くわからない感情でポロポロ涙が溢れ出てきた・・・

「ごめんユウちゃん・・そんなつもりじゃなかったんだけど・・・」
「うぅぅ・・・」
「普通にやったつもりだったんだけどなぁ・・ユウちゃんには、まだこういうキスは早かったかな・・」
「うぅ・・・早いです・・・早すぎますぅ・・・」
・・純平だって・・オレには舌なんて入れなかったのにぃ・・・それなのに・・先輩が先に入れちゃうなんてぇ・・・

「ごめん、もう泣かないで？」
「ひぐっ・・うっ・・」
「じゃぁもう一回。今度は舌は入れないから、やさしくするから・・ね？」
「！・・・」
・・ね？・・・って言われても・・・
「いいでしょう？」
そう言って先輩は、親指でオレの涙をやさしく拭ってくれた・・・

「・・ぅ・・うん・・・」
・・もう舌を入れないなら・・・
「それと、キスする時は息止めなくていいからね、鼻から息すればいいから。」

「！！」

・・そっか・・さっきはいきなり舌なんか入れられたから・・我を忘れて息するの忘れてたんだ・・・

「・・せんぱい・・やさしくしてね・・・」

「まかせて、今度はユウちゃんがウットリするようなキスしてあげる！」

「！・・そんな・・せんぱい・・・」

オレが目をつむって・・閉じた唇をほんの少し突きだすと・・・

・・先輩の唇が・・そっとオレの唇へと重なった・・・

・・今度は約束どおり・・舌は入れてこなかった・・・

・・そのかわり・・唇をチュパチュパされちゃったけど・・まあ・・これくらいなら・・・

・・でも・・もしもこれが純平だったら・・オレは舌を入れられてもいいと思う・・・

・・だけど・・その時はちゃんと前もって言ってくれないと・・オレも歯を磨かないと口の中が変な味がしたら恥ずかしいし・・・

・・でも・・前もって舌を入れるなんて言われたら・・オレはそれこそ恥ずかしくって真っ赤になってしまうだろう・・・

・・女の子とキスをしながら・・恋人のこと考えるなんて・・・こ

れって先輩に対して失礼なことだろうか・・・

・・でも・・オレが本当にキスしたいのは・・やっぱり先輩じゃなくて・・純平なんだもん・・・

おまけ・感覚の表現

小説を書いていると文章では表現しにくい事がいくつかあります。主に感情とか感覚とか、自身では感じるものの目に見えないため、他人とは共有しにくいものが多いと思います。

この話ではそういうシーンが少なくないので、表現には毎回苦労します。

たとえば有希が電車の振動に感じるシーンなど。おそらく読んだ人の多くは「なんのこっちゃ?」と思っているのではないかと思います。ものすごく感じやすい女性なら、そういう経験もあるかも知れませんが・・・

文章で書けるのは基本的には説明だけで、その他の部分は作者と読者の共感を利用して表現するしかありません。

これが例えば“痛み”などの場合ならほとんどの人が経験している事なので「包丁で手を切って痛い」とか「注射がすごく痛かった」などと書けば、それぞれの人で感じる痛さに“程度の差”はあるも

のの、だいたいの“痛さ”は理解できると思います。

でもこれが性的な感覚となると、男の感覚は女には絶対にわからないし、女の感覚も男には絶対にわかりません。女性作家が描いたＢＬを男が読んでも、まったくピンとこないのもこれが原因だと思います。もちろん女性も男が描いたものを読んで同じことを感じていると思います。

たとえば男の作家の場合なら、表面的に目に見える部分から推測するか、女性本人から聞いて取材して書くしかありません。その場合でも言葉として表現しにくい以上、女性本人から聞いたとしても、男が自分の感覚として理解することは難しいと思います。

それでも、これが官能小説の場合なら、読者をエッチな気持ちにすることが目的ですから、女性の感覚も男に理解できる表現に置き換えて書いたり、とにかく目に見えるものをリアルに表現したり、抽象的な表現を多用したりして、エッチな気持ちをもりあげる事が出来ます。

でもこの『オレは女子高生』においては、読者をエッチな気持ちにするのが目的じゃないので、そういう表現は出来る限りしないことにしています。もちろんこれまで使われてきた日本語で書く以上、まったく使わないなんてことは無理ですし、もし仮にまったく新しい表現を考えたとすれば、それはたぶん多くの人には理解出来ない表現になってしまうと思うので、官能小説ならではの表現は使わず、普通の表現で書くというくらいでご理解ただければと思っています。

ただこの話は「フェチ小説」なので（そんな分野があるかどうか知りませんが）そういう事に関しては、多少理解しにくくても、出来るだけ正しい表現を心がけたいと思っています。もし有希と同じよ

うな経験がある方なら「そうそう！」と思うかもしれませんし、これから同じような経験をする方なら「これのことか・・・」と思っていただければ幸いです。ただこの話では小説としての都合上、実際よりはるかに時間を短縮しています。現実には有希のような感覚になるまでには数カ月から数年かかると思います。（ただし有希のように良い指導者？がいれば不可能ではない可能性もあります。）

ただし、女の子の心理については私も男なので、女性が読んで納得できるように表現できてるかどうかは疑問です。特にレズに関しては私は頭での理解でしかないので、深入りしないように注意しています（笑）

でも、幸いなことに有希は男の子なので、本当の女の子の心理ではないという点では助かっています。

またこれは最近思っていることですが、いわゆる“男の娘モノ”の場合はマンガなどでも、ＢＬ系もＧＬ系も一般のマンガも絵柄の違いはあるものの比較的違和感がないような気がします。それはおそらくマンガでの“男の娘”というものが男でも女でもないからではないかと考えています。

実際には“男の娘”はほぼ女の子の外見で描かれているので、それが現実的にはＢＬだとしても違和感が少ないし、でもその実は男の子なのでオチンチンがあっても“ふたなり”のような非現実感（もちろん“ふたなり”は現実に存在しますが、マンガでの表現は非現実的なものが多いと思います）も回避できます。

また多くの男女にとって“男の娘”は自分とは違う理解しなければならない存在ですし、たとえ読者が現実に存在している“男の娘”

自身であっても、まだまだ他の“男の娘”との共感言語を作るには至っていないので、すべての人がニュートラルな状態で理解しようとしているのだと思います。

そういう点でもこの話は、いろいろ難しいこともありますし、表現的にはかなり綱渡り的ではありますが、いろんな文章的な実験も出来るので書いてて楽しい作品です。私の文章の特徴でもある周りから書いていって、残った部分で表すという方法も、表現しにくいことを表すのには合っていると思います。

これまでのおまけ（その他）の場所

３６話　制作おぼえがき　０８．６．２１
４０話　『オレは女子高生』の世界　人物、舞台設定など
４５話　架空の西鉄大牟田線案内
４９話　名前について
５３話　ドラマ化を妄想してみる
６１話　「放生会編」おまけ
６７話　１周年を迎えて
７１話　『オレは女子高生』の世界　第２弾（架空の西鉄大牟田線案内付き）ドラマ『ブザー・ビート』のお知らせも
７３話　「ヒロイン」について
７８話　「出版されたら買いたい作品」のお礼
７９話　「文章」について
８２話　「文章って難しい・説明編」
８６話　ちょっとあとがき　長谷川の誕生日とお父さん

８９話　「Ｑ＆Ａ」
９３話　『オレは女子高生』の世界　第３弾（架空の西鉄大牟田線案内付き）
１１９話　２周年を迎えて
１３２話　イヌ型とネコ型
１３３話　有希と純平
１４１話　文章って難しい・文章と言葉編
１４２話　ＡＴから１８禁へのお詫びと説明
１４５話　ＡＴから年末のあいさつ
１５５話　今だから言える話（７章について）
１５６話　ＡＴから「ランウェイ」と１話での表現について
１６０話　タイトルとサブタイトル
１６３話　ＡＴから　普段の有希たち　１年生の名前

第１６５話　忘却　１年前の約束

「ねえ、あんたいったいいつウチに来るのよ！」
「え？」
・・オレ長谷川の家に行く約束なんかしたっけ？
「お母さんもあんたが来ると思って待ってるんだから！」
「・・あの・・何の話してるの？　わたし行く約束したっけ？」
「はぁ？！　あんた１年前にウチに来た時、来年も絶対来るって言ってたでしょう？」
「１年前？！」
・・そんな昔の約束なんて憶えてないよ・・・いったい何の約束だろう・・・

「あさってになったら片付けちゃうんだから、今日か明日しかないわよ！　わたしだって行き遅れたくないんだからね！」
・・行き遅れ・・？・・・・！！
「あ！　もしかして・・お雛様のこと？！」
「そうよ、あんた忘れてたの？」
「・・い・・いや・・そのぉ・・・」
「やっぱり忘れてたんだ？」
「・・うん・・・」

・・そうか・・すっかり忘れてた・・・１年も前のことなんて・・・
それでなくてもこのごろ色々あったし・・・

「・・長谷川さん・・もっと早く言ってくれればいいのに・・・」
「忘れてるなんて思わないし、あんた最近忙しそうだから遠慮してたのよ。」
「・・遠慮？・・長谷川さんが？」

「あんた・・わたしが遠慮なんかしないと思ってたの？　どうせ図々しい女だと思ってるんでしょう！」
「・・そ・・そんなことないよ・・・」
・・正直そう思ってるけど・・そんなこと言ったら火に油になるのは目に見えている・・・
・・でも困ったなぁ・・明日はちょうどひな祭りだけど・・刈谷先生と会う日だし・・・
「・・じゃぁ・・今日行く！」
「今日？！」
「・・だめ？」
「いや、いいけど・・じゃお母さんに電話しとくね。」
「うん。」
「麻衣ちゃんも来るでしょう？」
「いや・・最近いつもクラブとかで夕飯ギリギリに帰ってくるから・・・」
「そう・・」

「先輩！何の話ですか？」
「あ、ミサトちゃん・・今日ね、帰りに長谷川さんのウチで雛人形見せてもらうの。」
「え！　いいなぁ。あたしも行っちゃダメですか？」
「ミサトちゃんが？」
長谷川が驚いて聞き返した。・・たしかにミサトちゃんは雛人形に興味があるようには見えない・・・

「あたし長谷川先輩の家行ったことないし・・駅から近いんですよね！」
「まあ、有希のウチよりは近いけど、でも普通のマンションよ？有希のウチの方が一戸建てだから面白いと思うけど。」

「わたしのウチも面白くはないよ！　それにミサトちゃん、電車途中で降りなきゃいけないじゃない。」
「・・やっぱりダメですか・・？」
あ・・ミサトちゃん悲しそう・・これじゃオレたち二人で仲間はずれにしてるみたいかな・・・
「ううん、だめじゃないわよ。ねえ、長谷川さん！」
「う、うん。ミサトちゃんが来たいんだったら全然いいわよ。」
「ほんとですか？！　じゃぁ行きます！絶対行きます！」
良かった！　ミサトちゃんはすぐに元気になるからなぁ・・たぶん落ち込むことなんてないんじゃないだろうか？

あ・・でも急にふたりで押しかけて迷惑じゃないかなぁ・・・
・・まあ・・長谷川のお母さんは麻衣も行くと思ってるかも知れないから・・かわりにミサトちゃんを連れて行っても迷惑じゃないと思う・・・

（注：前年のひな祭りは７３話ですが「来年も来る」と約束したシーンは書いていません。）

電車に乗ってシートに座るとミサトちゃんが・・・
「でも先輩たちってすごく仲いいですよね！」
「・・そうかなぁ・・」
「そうですよ！　だって先輩たちって中学の時から仲良かったんでしょう？」
「いや・・中学の時はそんなに知らなかったけど・・わたしと長谷川さんはクラスも違てったし・・・」

「え？　そうなんですか？　てっきり中学の時から親友なんだと思ってました！」

・・だって中学の時は・・オレはまだ男だったし・・・

「じゃぁ、白鴻に入学してから仲良しになったんですね。」

「まあ・・そうなるのかな・・・ウチの中学から白鴻に来たのわたしたち二人だけだったし・・」

そう言いながら長谷川を見たけど、長谷川は何も言わなかった・・・

「それに長谷川さんは途中から転校してきたんだもんね。そういえば長谷川さんって、いつ転校して来たんだっけ？」

「中学2年の・・3学期。」

「そっか・・そうだ！最初のころは制服が違ったよね。」

「！・・有希よくそんなこと憶えてたわね・・」

「うん・・なんとなくだけど・・ウチの中学はセーラー服なのに、ひとりだけ紺のブレザーだったから。」

「転校が急だったから制服が間に合わなかったのよ・・」

「そうだったんだ・・」

・・ウチの中学は転校生は珍しかったから、制服が違うコがとなりのクラスにいたのは何となく憶えてる・・・でもオレは中学のころの長谷川のことはほとんど知らない・・・となりのクラスだったから名前くらいは知ってたけど・・・たぶん長谷川の方もオレについてはそんな感じだと思う。

・・なにしろ中学のころのオレは・・全然目立たなかったし・・・

まあ・・今となってはそれも良かったのかも知れないけど・・・

・・男のオレのその後を気にするヤツなんかいないだろうし・・・

男のオレがこの世からいなくなったって誰も気にしてないみたいだ・

・・・

「次ですよね、春日原。」
「うん。」
「あたし春日原で降りるの初めてです！」
「そっか、フツーは目的地以外の途中の駅では降りないもんね。」
「なんか降りたことない駅で降りるのってワクワクしますね！」
「へ～　そうなの？」
・・そんなもんかなぁ・・オレはあまり感じたことないけど・・・
まあ、もの珍しくはあるかな・・・ミサトちゃんはそういうのにワクワクするのかも・・・

駅に着いたら長谷川のウチまではすぐだ。線路沿いにのびる道を歩いていくとすぐにマンションが見えてくる。
「ただいま～」
「こんにちは～」

「おかえり、有希ちゃんいらっしゃい！」
「おじゃまします、お母さん。」
オレは入りにくそうにしてるミサトちゃんの背中を押して前に出した。
「あら？あなたがミサトちゃん？」
「あ、はい、はじめまして、中野御里です。」
「いつもウワサは聞いてるわよ。有希ちゃんに憧れてるそうね。」
「ちょっと！オカアサン！」
長谷川が慌ててそれ以上言うのを止めに入った。たしかに本人がいないところで言ったことをバラされたらたまらない！・・・それに・・オレもそんな話されると居心地がわるいし・・・

・・あれ？・・そういえば・・いま長谷川は“お母さん”って言った！　いつもは“ママ”っていうのに・・・
・・きっとミサトちゃんに“ママ”って言ってるのを聞かれるのがイヤなんだな・・・でも・・オレに聞かれるのは気にならなかったのかなぁ・・・まあ、オレはどっちでもいいけど・・・

「先輩、お雛様はどこにあるんですか？」
「長谷川さんの部屋よ。こっちこっち！」
ミサトちゃんを案内して部屋の戸を開けると、そこには去年と同じ大きなひな壇とお雛様が！
「ほら、ステキでしょう？」
「有希！　勝手にひとの部屋開けないでよ！」
「ぁ・・ごめん・・でもいいじゃない。どっちみち開けるんだから・・」
「散らかってるかも知れないでしょう！」
「そんな・・散らかるほど物置いてないクセに・・・」
「もうっ！よけいなこと言わなくていいの！」

ベッドとひな壇があるせいで長谷川の部屋はすごく狭い・・・
「立派なお雛様ですね！　ウチのはあたしが買ってもらったのだから新しくて・・なんか作りがチャチなんですよね・・」
「！・・ミサトちゃんちもお雛様あるんだ？！」
「はい、あれ？有希先輩のとこは無いんですか？」
「う・・うん・・・」
・・オレと兄さんは男の子だったから仕方ないけど・・麻衣には買ってあげれば良かったのになぁ・・・あ！・・そういえば鯉のぼりもウチには無かったっけ・・・まあ、町中じゃ上げるところも無いけど・・・

「ウチの両親はあんまりそういう縁起担ぎみたいなのは興味ないみたいなの・・・」
・・でも・・オレもこういうの飾りかったなぁ・・・オレにもし女の子が生まれたら、絶対に立派なお雛様を買ってあげるのに！・・・もっとも・・オレに子供なんて出来るワケないけど・・・
「そうだ！　来年はわたしも一緒に飾り付けさせてよ！わたしお雛様飾り付けたことないから。」
「いいわよ。でも今年みたいに忘れないようにしてよね！」
「ぁ・・うん・・」
・・今度は忘れないように、ちゃんとスケジュール帳に書いておこう・・・

「順子、ちょっと手伝って。」
「なに？」

長谷川がお母さんに呼ばれて部屋を出ていくと、オレはミサトちゃんを窓の方に連れていった・・・
「みて、この金魚わたし達が1年生のとき、放生会〈ほうじょうや〉でわたしがすくってあげたのよ！」（60・61話参照）
「え！そうなんですか？」
「今はずいぶんおっきくなっちゃったけど、最初はうんと小さかったの。ほら、これなんかヘンテコな顔してるでしょう？」
「ほんとだ、なんか歪んでますね。」
・・実はコイツは長谷川のお気に入りなんだけど・・・
「こんなちゃんとした水槽で飼うのなら、お店でもっとちゃんとした金魚を買えばいいのに、金魚すくいのが良いんだって・・変わってるでしょう？　長谷川さんって・・・」
「でもあたし長谷川先輩の気持ちもわかるかも・・きっと有希先輩がすくってくれた金魚だから大切に飼ってるんじゃないですか？」

「え～・・そうかなぁ・・・」
それはミサトちゃんの考えすぎだと思うけどなぁ・・・もしそうなら嬉しいけど・・・

「あんたたちお雛様見に来たんじゃないの？」
「あ、長谷川さん・・ミサトちゃんに金魚の思い出を話してたの。」
「放生会のこと？　それじゃ有希の浴衣姿のことも話してあげた？」
「え？！聞いてません！　有希先輩浴衣で行ったんですか？！」
「う・・うん・・まあ・・・」
「紺地に白い朝顔の柄で髪も大人っぽくアップにしちゃってさ！有希って着物とか浴衣がすごく似合うのよね！　あ、モデルだから当り前かな？」
「そ・・そんなこと・・・」
・・長谷川のヤツ・・オレを恥ずかしがらせて面白がろうって魂胆だな！
「ミサトちゃん、あとでその時の有希の写真見せてあげようか？」
「！」
・・そんなの見せなくていいって言おうとしたら・・・
「はい！ぜひ見せてください！」
・・もうっ・・ミサトちゃんったら・・オレの写真なんか見たって面白くないのに・・・

「花火大会の時のピンクの浴衣のもあるわよ！」
「あ！それも見せてください！」
・・長谷川のヤツ・・写真には浴衣姿の長谷川も写ってるハズなのに・・・長谷川はそんなの見られて恥ずかしくないのかな・・？
「そんなことよりケーキ食べよう。オカアサンが買ってたから。」

「さあ、座って。有希ちゃんたちが来るっていうから、急いでケー

キ買ってきたのよ！」
「そ・・そんな・・おかまいなく・・・」
・・でも・・せっかく買ってきたんなら・・・食べなきゃ失礼ってもんだよな！
「ほら！ちょうどお雛様のケーキがあったのよ。可愛いでしょう？」
「あっ！ほんとだ！」
・・ケーキがヒシ形になっていて菱餅を真似ている・・一番下が抹茶？真ん中が普通のスポンジで、一番上のクリームがピンクだ・・・その上に小さなマジパンで作ったお雛様とお内裏さまが並んでて、すっごくかわいい！！

「オカアサンったら、ホントこういうのが好きなんだから。こんなの美味しいの？」
「美味しいかどうかは食べてみなくちゃわからないわよ。有希ちゃんもミサトちゃんも食べてみて！」
「はい、いただきま～す！」
・・たしかにピンクのクリームがいちご味だとすると、抹茶の味とケンカしないか心配だ・・・オレはフォークでケーキを縦に切ってひと口食べた・・・
「おいしい！」
抹茶はそんなにケンカするほどの味はしない・・たぶん色合いのためのチョイスだと思う。
「ほんとですか！じゃぁ、あたしも・・・」
「あ！ちょっと待ってミサトちゃん！」
オレは慌ててバッグからカメラを取り出して・・・
「わたしの食べちゃったからミサトちゃんの写させて！お雛様とお内裏さま食べちゃうのって・・何か可哀想だから、せめて写真に・・・」
「有希先輩って可愛い！あたしだったら何も考えずに食べちゃうのに！」

すると長谷川のお母さんがとんでもないことを・・・
「有希ちゃんって女の子以上に女の子らしいのね。」
お母さん！なんてこと言うんだよ！！・・オレが男だってミサトちゃんは知らないのに！　長谷川もギョッとしてる・・・
「ほんと有希先輩って女の子のお手本なんです！」
・・え？・・・オレは長谷川と顔を見合わせた・・・ミサトちゃん・・気付いてない・・・？
「オ、オカアサン・・ちょっと・・・」
長谷川は慌ててお母さんを別の部屋に連れて行った・・・たぶんミサトちゃんがいるところで不用意なこと言わないように言ってるんだろう・・・戻ってくるとお母さんはミサトちゃんに見えないように“ゴメンナサイ”という仕草をした。

・・でも、どうやらミサトちゃんは、お母さんが言った“女の子以上に女の子らしい”というのを“普通の女の子よりずっと”という意味にとったみたいだ・・・とりあえずバレなくてホッとした・・・ミサトちゃんはオレのことを女の子の目標なんて言ってくれてるのに・・そのオレが本当は男だなんて知ったらどう思うか！

・・もしそんなことになったら・・オレ・・ミサトちゃんに嫌われちゃう・・・イヤ・・軽蔑されるかも・・・オレはミサトちゃんのこと大好きなのに・・そんなの悲しすぎる！！

「？・・先輩食べないんですか？」
「ぁ・・ううん・・食べるわよ。」
オレは慌ててケーキを頬ばった・・・

ケーキを食べ終ると・・・
「先輩！有希先輩の写真見せてください！」
・・ミサトちゃんやっぱり憶えてたか・・ケーキ食べてる間に忘れることを願ってたんだけど・・・
「うん、ちょっと待っててね。」
そう言うと長谷川は自分の部屋からミニアルバムを持ってきた・・・
「ほら見て、可愛いでしょう？」
「ほんとだ！すっごく似合ってる！」
「でも、この時は大人っぽく感じたけど・・今の有希と比べるとずいぶん子供っぽいね。」

するとお母さんも・・・
「ほんとねぇ・・しばらく見ない間に大人っぽくなってたからビックリしたわよ。」
「そ・・そんな・・・」
・・これは最近良くいわれる・・・大人っぽいならまだしも・・女性らしいとか・・色っぽいなんて言われることも・・・そんなことを言われるとオレはどうしたらいいのかわからなくなってしまう・・・オレってそんなに変わったんだろうか・・・？

「このピンクの浴衣も可愛いでしょう？」
・・花火大会の時のだ・・あのころの長谷川ってどんな感じだったのかな・・オレもこっそり横からのぞいてみると・・・
「あれ？　なんで長谷川さんは写ってないの？！」
「だってこれは有希セレクションだもん。有希の可愛い写真だけを集めてるのよ。」
「え？！」
・・そんなぁ・・なんでわざわざそんなの作ってるんだよ・・・
「・・長谷川さんのも見たいなぁ・・・」
すると長谷川は怖い顔で

「それは絶〜っ対ダメ！！」
・・なんでだよ・・オレのは勝手に見せてるクセに・・・

「そ、そんなふうに言わなくたって・・・」
・・長谷川って・・相変わらず意固地なヤツだなぁ・・・こんな感じになったら諦めるしかない・・長谷川を怒らせても何の得にもならないもん・・・

・・結局オレは、みんなでオレの写真を見て楽しむのを、恥ずかしさをこらえて黙って見ているしかなかった・・・こういう感じを“針のむしろ”っていうんだろうか・・・？

マンションから外に出ると、もうあたりは暗くなり始めていた。
オレはミサトちゃんとふたりで駅に向いながら・・・
「遅くなっちゃったね。おウチの人に怒られない？」
「大丈夫です。先輩の家に寄るから遅くなるかも知れないって電話しましたから。」
「そう、だったらいいけど・・」
「でも、今日は楽しかったな。写真も撮ってもらったし。」
「・・ぅ・・うん・・・」

・・去年と同じように3人一緒と、それぞれひとりづつお雛様の前で写してもらったけど・・・あの写真もまたオレのだけ別のアルバムに入れるんだろうか・・・？　長谷川のヤツ・・なんであんなことするのかなぁ・・・

「長谷川先輩ってホント有希先輩のことが好きなんですね！」
「え？！どうして？」
「だって有希先輩の写真だけ別にしてるなんて、いつも眺めてるってことでしょう？」
「ま、まさかぁ？！　長谷川さんが？」
・・なんか・・そんなこと想像しただけでキモチ悪い・・・
「や、やめてよぉ・・きっとわたしの写真みて面白がってるだけだと思うわよ？」
・・長谷川はオレのが本当は女装だって知ってるんだもん・・・とくに花火大会の時は・・まだタマも付いてたんだし・・・
「アハハ・・有希先輩がそう言うのなら、そうかも知れないですね！」
「・・そうよ・・きっとそうよ！」
・・だって・・長谷川は・・オレが長谷川を好きだと想うほど・・オレのことは想ってないと思う・・・
・・でなきゃオレに、あんなにしょっちゅうイジワルなこと言うハズがないんだもん！

春日原の駅に着くと・・・
「それじゃねミサトちゃん、気をつけて帰ってね。」
「はい、有希先輩も！」
オレたちは駅の前で手を振って別れた・・・ミサトちゃんは階段の前で振り返ると、見送るオレにもういちど手を振ってから階段を駆け上がっていった・・・ミサトちゃんって、ちっちゃいけどすごく元気だ。

オレはミサトちゃんを見てると、いつも元気を分けてもらえる気がする・・・

ミサトちゃんはオレにとっては、まるで妹のような大切な後輩だ！

・・ミサトちゃんもオレのこと・・お姉さんみたいに思ってくれたら・・嬉しいんだけど・・・

第１６６話　欲求　オレが欲しいもの・・・

「・・あン！・・おじさま・・そんなに吸っちゃ・・・んっ！」
・・先生に乳首を吸われると・・まだ股間に残るさっきまでの感覚がよみがえってくるように、オレの昔タマがあったあたりで何かがピクピク動きだす・・・これって電車に乗るとムズムズすることがあるアレと同じものだろうか・・・？

　刈谷先生はみんな偉い人だっていうし・・オレも刈谷先生のこと、偉い華道家の先生だと思うけど・・・こうして横向きに向かい合って寝転んで・・オレの乳首をチュウチュウ吸う先生を見ていると・・なんだか先生が子供みたいに思えてくるから不思議だ・・・

「あぅ・・」
ときどき強く吸われると・・まるで股間へと電気が走るような感覚に・・思わず声が出てしまう・・・まるで・・乳首から股間へ直接電線が繋がってるみたい・・・

・・オレは女の子の乳首がこんなに敏感だなんて知らなかった・・・
・・もちろん女の子になってこれまでも、それなりに感じてはいた・・ふいに何かがかすったりすると思わず声が出てしまうこともあった・・・でも・・こんなに股間へ直接響くようなことはなかった・・昔の感覚とはまるで別次元といっていい・・・

・・エッチなことを覚えて・・オレの身体も少しづつ変わっているみたい・・・

・・お母さんも・・赤ちゃんにお乳を飲ませるとき・・もしかして

こんなふうに感じてるんだろうか・・？
そういえば白石先生が言ってた・・お母さんは赤ちゃんがおっぱいを吸うことが刺激になって、女性ホルモンがさらに分泌されるんだって・・・すると母性がより強くなるんだって・・・

・・もしかして・・・オレの女性ホルモンが増えたのも・・刈谷先生がこんなことするせいなのかな・・・
・・でも・・もともと男のオレに・・母性なんてものがあるとは思えないけど・・・

「・・お・・おじさま・・あんまり吸わないで・・・感じちゃう・・・」
「・・いいじゃない・・感じちゃえば・・」
そういって先生はまたオレの乳首を強く吸った・・・
「・・あァ・・だって最近・・感じやすくなってるんだもん・・・」
電車に遅れそうになって走ったりすると・・乳首がこすれて困っちゃうのだ・・・このごろはブラも乳首に優しい、柔らかいのを選んでいる・・・

・・でも・・先生ったら、なんでこんなに赤ちゃんみたいにオレの乳首を吸うんだろう・・・

・・そういえば！・・昔テレビのワイドショーか何かで見たことがある・・・大人の男の人が赤ちゃんみたいになって・・保母さんみたいな恰好の女の人にお世話してもらう所が東京のどこかにあるんだって・・・
・・ハゲ頭のオジサンが女の人に赤ちゃん言葉であやしてもらったり・・・哺乳瓶でミルクを飲ませてもらったり・・・オムツを替えてもらったり・・・

オレはそんな所に行く人はすごく変態な人なんだろうと思ったけど・・実際にはちゃんとした会社の社長さんだったり偉い人も多いらしい・・・テレビでは、そういう人の上に立つ人はストレスもスゴイから・・心のバランスをとるために、時々こっそり赤ちゃんになって癒されるんだって言ってた・・・

・・もしかして・・刈谷先生もストレスがあるんだろうか？・・・だから赤ちゃんみたいにおっぱい吸うと癒されたりするのかな・・・？

・・オレなんかのおっぱいを吸って癒しになるのなら・・オレとしても吸われてる甲斐があるってもんだけど・・・オレのじゃ、あんまり期待出来ないんじゃないかな・・・

　すると突然、先生はオレの乳首を放したかと思うとつぶやいた・・・

「あ～ぁ・・つまんないわぁ・・・」

え?!・・先生・・オレといてもつまらないの・・？

「・・つ・・つまんないって・・どうして?」

「だってさ、ユウちゃん何もおねだりしてくれないんだもの。」

・・そ・・それは・・・

「・・ユウは・・物を買ってもらうためにおじさまと会ってるんじゃないから・・・でも、なんでユウがおねだりしないとつまらないの?」

「だってさ、あたしみたいな歳になると若いコに物を買ってあげるのが何よりの楽しみなんだもの・・ユウちゃんに何か買ってあげたいのよ・・・」

そう言って先生はスネたようにオレの乳首をツンツンつついた・・・

「あン・・おじさま・・・で・・でも・・ユウはおかあさんと約束したから・・先生にお洋服とか買ってもらわないって・・・」

「ユウコちゃんは良い子すぎるのが玉に傷ねぇ。そんなの黙ってればわかんないのに！」

「・・でもぉ・・身に付けてるとわかっちゃうもん・・おかあさん早く帰ってる時もあるから・・・」

「それじゃぁ、お洋服とかじゃなくて、お部屋の中で使うものならバレないんじゃない？」

・・オレの部屋の中で使うもの？・・たしかにそれだったらバレないかも知れないけど・・・

「何か欲しいもの無いの～？」

「う～ん・・欲しいもの・・？・・・あっ・・・・・」

「なになに？今なにか思いついたんでしょう？」

「・・ぁ・・いや・・でもぉ・・・」

・・いいのかなぁ・・おねだりしちゃって・・・バレなきゃいいってもんじゃない気もするけど・・・

「言っちゃいなさいよ！　何が欲しいの？！」

「・・ポータブル・・DVDが・・・」

・・言っちゃった・・・

「DVD？ユウちゃんのおウチDVDないの？」

「ううん、DVDはあるんだけど・・・リビングで観なきゃいけないから・・自分のお部屋で観るのに小さいポータブルのが欲しいなって思ってて・・・」

「あ～・・あのフタ開けると小さな画面があるやつね？」

「うん・・」

「あ、わかった！　ユウコちゃんったら！AVが観たいんでしょう！」

「エ！・・ち・・違います！！　好きなアイドルのドラマとか・・

そういうのを観たいんです！」
ニースの山上くんとか・・・もちろん純平のも・・・

「ほんとかなぁ？」
・・ま・・まだ疑ってる・・・
「ほんどです！　だって・・わたし女の子の中で暮らしてるから、もう女の子の裸なんか見ても何とも思わないもん！」
・・女子校でいちいち女の子の裸に興奮してたらたまったもんじゃない！・・入学したての頃ならそんなこともあったかも知れないけど・・・今はもうオレもほとんど女の子みたいなもんだし・・・

「やあねぇ、ユウちゃんったら、なに勘違いしてるの？」
「？」
「ユウコちゃんは女の子なのに、女の子に興奮してどうするのよ！　ユウコちゃんはエッチなことされてる女の子の側に立って観なきゃダメじゃない！」
「！！」
・・そ・・そういうふうには考えたことなかったけど・・・たしかに先生の言うとおりかも・・・
・・だけどどっちみち女の子がＡＶなんか借りれないもん・・・

「それっていくらぐらいするの？１０万？２０万？」
「そ・・そんなにしないと思います・・・２万くらいじゃなかったかな・・・」
「え～！そんなに安いの？」
・・先生はつまらなそうな顔・・・高い方が良いのかな？

「で・・でも・・プレゼントって本人が望むものが一番なんです・・・」
「まあ・・たしかにそのとおりね。わかったわ、今度会う時に買っ

といてあげる！」
「ほんと？」
「ええ、約束するわ。」
「ありがとう、おじさま！」
オレは嬉しくて思わず先生に抱きついていた・・・だって・・ずっと欲しかったんだもん・・ポータブルＤＶＤプレーヤー・・・

「ユウちゃん、もう一回しよっか？！」
「うん！」
オレはまた先生を受け入れるために仰向けに横たわって足をひらいた・・・
「ユウコちゃんってホントにエッチが好きなコね！」
「・そ・そんなぁ・・」
・・先生ったら・・そんなふうに言うと・・オレが・・なんかイケナイ子みたいじゃない・・・

斉木さんに車で福岡駅まで送ってもらって、ウチまで電車で帰る・・・
「あ～ぁ・・・」
電車の座席に座ってボンヤリしてると思わずため息が出てしまった・・・

“ユウコちゃんはエッチが好きなコ”かぁ・・・先生もヒドイことというなぁ・・・
たしかに・・先生といるときのオレはユウコだし・・・ユウコはエ

ッチなコかもしれないけど・・・わざわざ言うことないじゃない・・
・そもそも先生がオレにエッチなこと教えたんだし・・・

・・ユウコ・・有子？・・裕子？・・優子？・・・ユウコはもちろんオレだけど・・普段のオレとはやっぱり少し違う・・・ちょっとだけエッチで・・・ちょっとだけ大胆で・・オレよりもだいぶ甘え上手だ・・・

・・なぜかエッチなことをするときユウコだと思うと・・自分でも信じられないようなことでも出来てしまう・・・こういうのを“自己暗示”っていうのだろうか・・・？

・・オレって刈谷先生が言ったように・・暗示にかかりやすい性格なのかな・・・

・・でも・・ユウコという女の子だと思ったからといって・・自分にまったく無いものが出て来たりするだろうか？・・・それとも・・ユウコはオレの中に眠っていた女の子の部分なのだろうか・・・？

・・レナに聞いた話では・・小さい頃のオレはレナよりも女の子みたいだったらしい・・大きくなったらお嫁さんになるなんて言ってたみたいだし（２６話参照）・・・もしかしたら、そういう部分がオレの中に今でも残ってて・・ユウコという形で表れているんだろうか・・・？

・・まあ・・そんなことといくら考えたって・・憶えてないんだからわかるハズもないけど・・・

・・レナの話だってどこまで本当かわからないし・・・

・・だってあの頃はレナだって小さかったんだし・・忘れたり、思い違いしてる可能性だってあると思う・・・

・・まあ・・オレの見た目が女の子みたいだったのは・・写真もあるから間違いないんだけど・・・

“　次は大橋～大橋～　大橋では特急通過のため　しばらく停車します・・・”

・・そうだ・・こんどの時にポータブルＤＶＤもらったら・・隠すところ考えておかなきゃいけないなぁ・・・

・・かあさんは勝手にオレの部屋には入ってこないけど・・麻衣は時々勝手に入ってくるし・・・麻衣がかあさんに言ってしまわないとも限らない・・麻衣はすぐかあさんにしゃべっちゃうもん・・・

・・クローゼットも麻衣は開けるかもしれないし・・・ベッドの下は・・？

あ！・・あそこがいいかな・・兄さんの隠し戸棚！

　オレも最初は気付かなかったんだけど、兄さんが使ってた本棚の一部が隠し扉になってたのだ・・・兄さんが大学に進学するため京都に行って、兄さんの部屋をオレが使うようになったときは・・てっきり兄さんが本を忘れて行ったか、分厚くて重いから置いていったのかと思った・・・だけど一見本があるように見えて、実は扉に本の背表紙が貼ってあるだけで、中が空になっていたのだ・・・

・・兄さんがこんな所に何か隠してたのかどうかは知らないけど・・
・
大きさもちょうど良さそうだから、あそこに隠すことにしよう！
・・ただひとつだけ難があるのは・・兄さんが使ってた時は他の本に紛れてたんだろうけど・・今はそこだけ不自然に難しい本があるように見える点だ・・・マンガか何かの背表紙に替えた方がいいかな・・・それか雑誌を立てかけるとか・・・まあ、何とかなりそうだ。
・・ポータブルＤＶＤは前から欲しかったものだから、買ってもらえるのはすごく嬉しい・・・
ポータブルＤＶＤがあれば、麻衣に気兼ねなく自分の部屋でドラマをもう一回観ることも出来るし・・・
・・純平のシーンを何度もくり返し観ても恥ずかしくない・・・
・・でも・・いくらそんなに高くないからといって・・これってやっぱりかあさんとの約束を破ることになるのかなぁ・・・
・・だけど・・自分の部屋でだけ使ってればバレないと思うし・・・
・・バレなきゃ良いってものでもないだろうけど・・・バレるよりはマシだと思う・・・
・・だって、かあさんも言ってたもん・・“嘘も方便”だって・・・

“　特急通過しましたので　まもなく発車します　”

・・まあいいか・・オレは他の人が思ってるほど良い子じゃないんだもん！

今回は短い話だったので、久しぶりに設定集を載せたいと思います。とりあえず年齢が決まっている人は1歳づつ歳をふやしています。一応、登場人物はほとんど網羅しているつもりですが「あの人がいない！」とか、説明にこれも付け加えた方が良いのでは？とか、あの人の説明は間違っている！とかあったら、ぜひご一報いただけるとありがたいです。

それとひとつ報告ですが、ジノンボーイの古池鉄平の読みを〈ふるいけ　てっぺい〉に変えています。この人だけ読みがそのままだったのが気になっていたので・・・本文中のはまだ変えていませんが、そのうち変えようと思っています。とはいえみなさんはこれまでどおり読んで下さっても一向にかまいません。私もいまだに〈かりたに　しょうのすけ〉を昔の読み方で読んでいるくらいなので（笑）

おまけ『オレは女子高生』の世界　第４弾

舞台

九州北部の架空の福岡県、主に架空の西鉄大牟田線沿線を中心に繰り広げられる物語。

架空の西鉄大牟田線案内

○＝特急停車駅（急行も停車）　●＝急行停車駅

・久留米以降は急行はありません。　・普通駅は基本的に省いています。

○福岡（天神）‐‐‐天神の中心部のビルの中にある駅。駅ビルには架空の三越が入っている。

○薬院‐‐‐‐‐‐‐九州ＪＩＮＯＮの編集部、駅の下にミスドと大きな本屋〈マンガも充実〉

・平尾（普通）‐‐レナの家

・高宮（普通）‐‐大森先輩の家兼お好み焼き屋、近所に大きな高校がある。

●大橋‐‐‐‐‐‐‐急行停車駅では一番大きい。市街地へ向かうバスのターミナルでもある。有希が行った手芸店〈西沢〉がある。

●春日原‐‐‐‐‐‐有希、長谷川の家がある。おばさんの美容院、二光のエステもココ。駅前にはさかえ屋、マックがある。

●下大利‐‐‐‐‐‐

○二日市‐‐‐‐‐‐

●朝倉街道‐‐‐‐‐　急行停車駅だが、雰囲気は普通駅のようだ。三吉先生の家

●筑紫‐‐‐‐‐‐‐

・三国が丘（普通）‐

●小郡‐‐‐‐‐‐‐

●宮の陣‐‐‐‐‐‐

○久留米‐‐‐‐‐‐白鴻女学園　駅前にミスド、マック　原口弘子

の家はここからバスで30分の八女
○花畑－－－－－
○大善寺－－－－－　佐倉千里の家
○柳川－－－－－－
○新栄町－－－－－
○大牟田－－－－－　三井グリーンランド
－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－
－－－－－－－

登場人物

家族・親戚

戸田有希　〈とだ　ゆうき〉　この小説の主人公、元はごく普通の男の子　現在、白鴻女学園高校2年　17才　1月25日生まれ血液型O型　身長163cm　足のサイズ25cm　髪は肩甲骨が隠れるくらい。学校では三つ編み。
性格は優柔不断、物事を深く考えない、素直で正直者。勉強は国語と図工が得意、英語と数学が苦手、体育はそんなに得意じゃないが水泳はなぜか得意らしい。華道部。茶道も習っている。料理は昔からやっている。裁縫は習ってみたら得意だった。小学校2年まで家では女の子の服を着ていたらしいが有希自身は憶えていない。本当に性同一性障害なのかもしれない。小さい頃に溺れたことがあるらしい。父ゆずりのアレルギー体質。読者モデルだったが、東京での撮影を機に肩書きは九州JINON専属モデルになった。モデルの名前は“春日ユウ”。ジノンボーイの純平とは“メル友”だったがいつしか恋人に。

戸田有正　〈とだ　ありまさ〉　有希の父　55才　売れない作家

（昔、芥河賞にノミネートされたことが一度だけあるらしい。現在はペンネームで三次元文庫にライトノベルを書いているらしい）
婿養子で旧姓は佐藤　本家は熊本。有希は小さいころ熊本に一回だけ行ったことがあるらしい。

戸田麻希　〈とだ　まき〉　有希の母　４７才　空間デザイナー（店舗の内装とかのデザインをやるらしい）細身で美人らしい。歳より若く見えるらしい。

戸田麻衣　〈とだ　まい〉　有希の妹　現在、春日第二中学２年１４才　明るい性格　有希が女の子になってからは仲が良い。

戸田有友　〈とだ　ありとも〉　成績優秀　２５才　有希の自慢の兄。京都の薬科大の大学院を卒業したが研究のため大学に残ってインフルエンザの抗ウイルス剤の研究をしている。ちょっと変わった性格かも。

戸田ノゾミ　〈とだ　のぞみ〉　母方のおばあさん　西新のおばあちゃん　７０才くらい　優しいが厳しい部分もある。

長沢麻弓　〈ながさわ　まゆみ〉　母の妹　美容院を経営　有希をニューハーフだと理解している。エステサロン経営の二光さんとは知り合い。レナがお酒を飲むのを止めないなど、有希の母ほど真面目じゃない。

長沢レナ　長沢麻弓の娘　有希のいとこで幼馴染み　有希と同学年　茶髪でオシャレ。活発。

白鴻女子短大付属　白鴻女学園〈しらとりじょがくえん〉伝統ある女子高　共学化を目指したが男は有希しか受験しなかった。また共学化には卒業生からも反発があったらしいが、この４月からはいよいよ本格的に共学化することになった。清楚で伝統的なセーラー服が特徴だったが、共学後は男女ともカーキー色のブレザーに。共学化に伴い校名も「白鴻学園」に変わる。

白鴻女学園の生徒（有希は３組）

長谷川順子　〈はせがわ　じゅんこ〉有希と同学年の１組　６月２８日生まれ　血液型Ｂ型　有希と同じ中学出身だが２年生終りのころ転校してきたので中学時代の有希のことはあまり知らない。今は一番の親友で生徒では原口弘子と共に有希が男だと知っている。有希と同じ華道部に所属している。フクロウの置き物を集めているようだ。読書家。仮面レンジャーが好きらしい（特に可愛い系の仮面グリーンがタイプらしい）性格は謎の部分も多い。小さいころから転勤がち、現在は母と二人暮らし、父は大阪に単身赴任中、銀行の管理職。

岡本直美　〈おかもと　なおみ〉３組のクラスメイト　ちょっと目立ちたがり屋。自意識が強い。すぐ女の子の胸をさわる。バトミントン部だが部としての活動はあまり実体がないらしい。

佐倉千里　〈さくら　ちさと〉３組のクラスメイト　大人しく性格がいい。　クラスメイトでは有希と一番仲がいい。有希と一緒に読者モデルをやっていたが、２年生の一学期で受験勉強のためやめた。モデルの名前は“山上さくら”だった。

原口弘子　〈はらぐち　ひろこ〉３組のクラスメイト　胸が大きいのが自慢、色気がある。八女の「鵲神社」の一人娘。父は神主、母は死んでいない。叔母さんが神社を手伝っている。６８話で有希が男だと知った。クラブは郷土史研究部。彼氏がいたが別れた（８７話参照）有希の良き理解者。

井川聡子　〈いがわ　さとこ〉有希と同学年の２組　有希と同じ華道部　地味で背が低い。要領が悪い。自分と違い、綺麗で可愛く背が高い有希に憧れているらしい。

安部まさ美　〈あべ　まさみ〉３組のクラスメイト　出席番号一番のコ　通称　安部っち　修学旅行で同じ班になってから仲が深まった。ＰＣを使うのが得意らしい。

中野御里〈なかの　みさと〉有希の１年後輩　女らしさを身につけるように“かあちゃん”から言われているらしい　博多っ子　小学生のあいだは締め込みをして子供山笠に参加していた。　父と兄は山のぼせ（山笠に夢中で他のことが手につかない人のこと）有希は憧れの先輩であり女の子のお手本にしている。

大森加織先輩　バレー部　実家が“広島風お好み焼き”の店をやっている。父親が広島人。レズビアンらしい。男は好きじゃないはずだが女の子にしか見えない有希のことは気に入っているようだ。

文〈ふみ〉華道部の後輩　ミサトと同じ学年。名前が“文”だから“ブンちゃん”と呼ばれている

望〈のぞみ〉華道部の後輩　ミサトと同じ学年。名前が“望”だから“ノンちゃん”と呼ばれている

白鴻女学園の先生〈先生は全員、有希が男の子で性同一性障害者だと思っている。校長と教頭だけは有希が性同一性障害ではないと知っていたが現在では本当に性同一性障害だと思っている。〉

会長　白鴻道子〈しらとり　みちこ〉白鴻女学園創始者の孫　白鴻女子短大の校長でもある。有希を女の子として入学させることには同意している。９２話の若村先生の結婚式で初めて登場。優しく機転がきく面を見せている。

校長　有希のことは教頭にまかせている。事なかれ主義な面があるようだ。

教頭　石渡先生〈いしわたり〉　有希が性同一性障害だという設定を考えた。軽いところもあるが、有希が読者モデルを始めると、生徒数拡大に利用しようとするなど抜け目がない。

山口智佳〈やまぐち　ともか〉　担任・体育　快活　３３才　有希のことを気にかけてはいるが、あえて他の生徒と同じように接している。

松本たか子　家庭科　２６才　有希の制服の世話などを任されている。校長と教頭以外では有希が男の子の頃に会ったことがある唯一の先生。有希にとってお姉さん的存在。有希の裁縫の才能を高く評価している。

長山鏡子〈ながやま　きょうこ〉古典　６２才　風紀検査に厳しい。有希の中学の三吉先生とは茶道の同じ先生の弟子どうし。

斉藤明〈さいとう　あきら〉現国　３０才の男性教師。有希が倒れてとき保健室まで運んでくれた。

嶋田晶子〈しまだ　あきこ〉調理実習・華道部顧問　４０才くらい　ちょっと古風な美人　・・嶋田先生はいつもお淑やかで物腰が柔らかい素敵な大人の女性だ・・・調理実習の先生でもあるから、お料理も上手だし・・何で今だに独身なのか不思議なくらいだ。

白石香帆〈しらいし　かほ〉学校医　３６才　美人女医　善かれと思い有希に女性ホルモンを投与してしまった。有希にとって何でも相談できる頼れる優しい女性。有希のことは何でも知っているが、白鴻女学園に入学したいきさつまでは知らない。実家は開業医で校医は父の跡を継いでいる。両親と同居している。愛車はスズキ・スイフトスポーツ。

若村一樹〈わかむら　かずき〉有希が二年生の時入ってきた数学の先生　会長に誘われ塾講師を蹴って白鴻に来た。有希は補修を受けてから若村のことが好きになったが、若村の結婚によって失恋?写真が趣味で良く写すのは風景や猫など。２３歳。奥さんの名前はサユリ。

高島亜矢子〈たかしま　あやこ〉有希が二年生の時、若村と同時に赴任してきた英語の先生。有希が習っていた英語の先生が産休になり、かわりに習い出した。若村と同じで、去年大学を卒業て白鴻にきた、２３歳。授業では英訳した童話や童謡のプリントも使うこともある。

春日第二中学　関係

井原〈いはら〉先生　中学の有希の担任　３５、６才　有希に白鴻女学園を紹介し、ある意味有希を女にした張本人。１４３話で有希と再会した。

三吉〈みよし〉先生　中学の家庭科教師　６０才近い　有希にお嬢様教育をした人物。躾に厳しいが真面目にやるコには優しい面も見せる。有希にとっては恩師であり、現在も先生の自宅でお茶や着物の着付けを習っている。女子の間でのあだ名クソババァ。

鈴木　中学の仲が良い男友達。有希とは良く鈴木の家で映画を観ていた。時にはこっそりＡＶを観たことも・・・有希が携帯の番号を変えてしまったため音信不通。弟がいる。

九州ＪＩＮＯＮ〈ジノン〉関係

佐々木編集長〈女〉３０代後半　スーツに細めのオシャレなメガネ、髪はほとんどアップ、仕事が出来る女という感じ。有希の母親とは気が合うらしく、たまに連絡をとることもあるらしい。

カメラマン　進藤〈しんどう〉　４０代　短髪に鼻の下だけヒゲを生やしている、洗いざらしのシャツに穴が開いたジーンズ。鋭い目が一見怖そうにも見えるが本当は優しい。

スタイリスト　永沢ケイコ〈ながさわ　けいこ〉　２０代後半？サイケで派手な服が好き　オシャレ

メイク　カネちゃん　背が小さな丸顔の女の人、若いのか歳とってるのか良くわからないがニキビがたくさんあるところを見ると若そう。有希に親近感を持っているらしい。

藤〈ふじ〉編集部コンピューターオペレーター、主に編集ソフトＩｎＤｅｓｉｇｎでＪＩＮＯＮの紙面を作っている。机の引き出しにはお菓子がたくさん入っている。甘いものよりせんべい派？

ＪＩＮＯＮ専属モデル　蟹原ユリ〈かにはら　ゆり〉　ニックネームはカニちゃん。トップモデルの一人。モデルとして有希の良き先輩で、有希が憧れている女性。

ジノンボーイ　道端純平〈みちばた　じゅんぺい〉２２才　仮面レンジャーシリーズ星徒で“マース”役をやっていた。有希とはお互いに惹かれる恋人どうしだが、有希が男だとは知らない。有希とはまだキスのみ。バイクに乗る。

ジノンボーイ　古池鉄平〈ふるいけ　てっぺい〉仮面レンジャー星徒で“ジュピター”役

東京

カメラマン　宮城〈みやしろ〉細身で革パンツに革ジャケットを好む。オシャレでカッコイイ。髪はチリチリで長め。有希の弁では「面長でなんとなく俳優の玉木宏に似てるかも」

モデル　メグミ　雑誌では柔らかいイメージだが、実際はキツイ性格。だが慣れると気さくな面もある。上下間系にウルサく、読者モ

デルは好きではないらしい。胸は大きめ。

ジノンボーイ　ジョージ　ハーフで見た目はカッコイイが言動は軽い。

その他

二光〈にっこう〉　おかまのメイクアップアーティスト　４５才
全国に十数店のエステサロンを経営している。出身地の福岡には博多と春日原の２店舗がある。

愛島ハルカ〈あいじま　はるか〉天神三丁目にあるニューハーフパブ“みつまめ姫”でトップのニューハーフ。歳は２０代後半から３０代前半らしい。アソコは工事済。

綾乃〈あやの〉ハルカと同じ店で働くニューハーフの若いコ、まだアソコの工事はしてない。

三吉先生のお茶教室の生徒たち
リーダー格は一番長い前田さん、もうひとりの古株の武田さん、中堅の田所さん、新入りの中嶋さん

刈谷章之介〈かりたに　しょうのすけ〉　活け花の花月流家元　オバサンみたいな風貌だが意外に筋肉質。有希を騙して犯すなどヒドイことをしたが、今は良好な関係になっている。有希を“ユウコ”と呼び、自分のことは“おじさま”と呼ばしている。

ジミー・フジタ　イベントプロデューサー　ダンディーだがやたら調子が良い。　有希の母とは仕事仲間。

宮川〈みやがわ〉舞台演出家、クリスマスコレクションの演出をした。普段は芝居の舞台演出が本職。

神崎沙耶〈かんざき　さや〉レナの同級生、サヤとかサーヤと呼ばれている。家はパチンコ屋でお金持ち。ＪＩＮＯＮで有希が着た服を好んで買う。

男性アイドル事務所Ｊニーズ
アイドルグループ「ニース」のメンバー　山上　通称“ヤマペー”。
有希が好きなアイドル
　メンバーは他に西喜怒など。

アイドルグループ「カツーン」のメンバー　亀有

カンジヤ　バスケットボールを題材にしたドラマで純平の恋人役をした女優。週刊誌で純平と噂になったことも。

松田聖子　夏休みに二光やハルカなどのオカマグループとコンサートを観に行った。本人であるため説明不要。

キてぃちゃん　株式会社ソンリオの可愛いネコのキャラクター、ねいぐるみを手にしてから有希のお気に入りに。

第１６７話　柳川　さげもん祭り

「有希、今度の日曜日撮影とか入ってるの？」
「え？・・えっとね・・ちょっと待って・・」
弘子に聞かれて、オレは鞄からスケジュール帳を出して調べてみた。
このごろは専属モデルになったこともあって、結構忙しいのだ。

まあ、専属って言っても東京に行くオマケでなったみたいなもんだし・・休みたいと言っておけば休めるんだけど・・・オレはせっかく専属にしてもらったんだから、出来るだけお仕事をしたいと思ってる。

「あ、今度の土曜日はダメだけど、日曜なら空いてるよ？」
「よかった！　だったらさ、“さげもん祭り”に行かない？」
「・・さげもん・・祭り？」
「有希知らない？“さげもん祭り”っていうのは柳川のひな祭りのことなのよ。お雛様と一緒に“さげもん”ていう下げ飾りをいっぱい飾ってあるからすごくキレイよ！」
「へぇ～　あ・・でもひな祭りはもう終ったのに・・柳川ではまだやってるの？」
「旧暦に合わせたお祭りなのよ。」
「へぇ～　そうなんだぁ・・」
・・旧暦とかってオレは良くわからないけど・・・終ったと思ってたひな祭りをまだ楽しめのは良いことだと思う。

「有希そういうの好きでしょう？」
「うん・・他は？誰が行くの？」
「直美も千里もダメだから、有希とふたりなんだけど・・ふたりじゃつまらない？」

「ううん。そんなことないよ？」
「長谷川さんとか、ミサトちゃんを呼んでもいいけど・・？」
・・長谷川は来ないと思うし・・・ミサトちゃんはどうだろう・・・
この前も結局はお雛様より長谷川のウチに来たかったみたいだし・・
・
「う～ん・・でも、わたしは弘子とふたりでも全然だいじょうぶよ
！」
「そう？　良かった、本当は有希とふたりで行きたかったの。」
「え？！　そうなの？　でも・・なんで？」

「だって、有希とふたりでなら落ちついて見れそうじゃない？」
「ぅ・・うん・・そうかな・・・」
・・たしかに弘子は落ちついてるけど・・・オレはどうかなぁ・・
そんなに落ちついてない気もするけど・・・まあ、みんなでワイワ
イ行くよりは落ちついて見れるだろうな・・・
「じゃぁ・・わたしも騒がないように気を付けるね。」
「何言ってるの、有希はいつもどおりでいいのよ！　わたし有希の
自然な佇まいが好きだから。」
「・・・・・」
・・たたずまい？・・・弘子って難しいこと言うなぁ・・・オレの
佇まいってどんなんだろう・・・

「有希のその女の子らしい感じなら、柳川の落ちついた雰囲気にも
ピッタリだと思うわよ？」
「そ・・そんなぁ・・・」
・・女の子らしいなんて・・弘子に言われると他の人に言われるよ
り照れくさい・・・だって弘子はオレが本当は男だって知ってるの
に・・・良くそんなこと言えるよなぁ・・・

・・でも・・弘子とふたりでひな祭り見に行くなんて・・なんかす

ごく楽しみ！

３月１４日の日曜日、オレは二日市で特急に乗り換え、久留米で弘子が乗ってきて合流した。　そのまま特急は次の停車駅の柳川へ・・・今日は3月だけどまだ寒い・・・

柳川で降りると、けっこう観光の人も来てるみたいだ・・・オレたちは駅で“さげもん祭り”のパンフレットをもらった。

その柳川の観光協会が出してるパンフレットを見ると、“さげもん祭り”は毎年2月の旧正月の頃から初まって、４月3日まで行われているらしい。その間いろんなイベントがあって、３月の初めには“柳川きもの日和”なんていう、着物を着て柳川の町を散策する日もあったらしい・・・オレもそういうの参加したかったなぁ・・・着物きて町を歩くなんてそんなに無いことだもん・・・

「弘子は着物もってる？」
「ううん、着物は持ってないなぁ・・巫女のじゃダメよね。」
「アハハ・・たぶんね。」
「有希は着物も似合うよね、学園祭の時きれいだった！」
「ぁ・・あれね・・・」
・・あの時は不良にからまれて散々だったっけ・・おまけにミサトちゃんに助けられちゃって、元男としては形無しだった・・・まあ、ミサトちゃんはオレが男だなんて知らないのが救いだけど・・・

「有希は体型も着物に合ってるしね。」
「・・それを言うなら・・身体に凹凸がないってことでしょう?」
・・だって・・オレは男だもん・・・いくら体型が女の子っぽくなったといっても・・本物の女の子と比べたら、ヒップも小さめだし・・腰のくびれも足りない・・・ただ・・男にしては肩幅がないのと・・首が細いから何とかなってるようなもんだ・・・
「有希はまたそんなこと言う、修学旅行で裸になってもバレなかったじゃない!もっと自信持ちなさいよ!」
「うぅ・・それは・・そうだけど・・・」
・・そうなんだよなぁ・・・オレ裸になってもバレなかったんだ・・・もっと自信持たなきゃいけないなぁ・・・

駅を出ると、もう“さげもん”が目に飛び込んできた! どうやら町中いたるところにあるみたいだ。

“さげもん”というのは女の子が生まれると、親戚なんかからもらった着物の端切れで作った毬〈まり〉をぶら下げたのが始まりらしい・・・今は“鶴”とか“お多福”とか、いろいろ云われのある物が毬と一緒に沢山ぶら下がっている。

民家で自分の家に伝わるお雛様を飾り付けて、観光の人にも観せてくれるところもあるみたい。すごく古いお雛様もあるんだって・・・パンフレットの写真では、いくつも並んだお雛様の上にさげもんがいっぱいぶら下がっている様子が写っている。すっごくキレイ!

「弘子ぉ、これからどこ行くの?」
「11時から“おひな様水上パレード”があるから、それを見に行くのよ。」
「“おひな様水上パレード”?!」

・・なにそれ?!・・お雛様がパレードするの?!・・それに水上って!
「お雛様やお内裏様に扮したお稚児さん達が舟に乗って川を上っていくのよ。」
「お稚児さん?」
・・お稚児さんって・・子供のこと?・・お祭りで稚児行列とか聞いたことあるけど・・・

柳川は灌漑用の掘割りという水路が網の目のように走っているらしい・・・そういえば小学生のころ公民館で柳川の映画を観たことがあった・・・水路が汚くなって行政が埋め立てようとしたのを、地域の住民が清掃とかしてキレイな水路をよみがえらせたってやつ・・・たしか・・高低差のない平野に水を流すために、いろんな工夫をしてるって言ってたのを憶えている・・・

パレードが通るあたりの川べりには、もう沢山の見物人たちが集まっていた。この川を沖端という所から“おひな様水上パレード”が上ってくるらしい・・・川を上るというから、どうやって上るのかと思ったら、ほとんど流れはないから大丈夫そうだ。

川の上には向こう岸からこっちまで何本も紐が張ってあって、そこに沢山の大きな“さげもん”が吊り下げられている。川の上は“さげもん”だらけだ!

「キレイねぇ弘子!　写真うつしちゃおう!」
オレはあんまり“さげもん”がキレイだったから、たくさん写真を撮った。
「あ、有希、舟が来たわよ!」
「え?!　どこどこ?」

川の向こうを見ると、遠くからゆっくりと舟がやってくる・・・舟は何そうも来てるみたいだ・・・

だんだん近づいてくると、舟に乗っているお稚児さんが見えてきた！　先頭の舟には神主さんみたいな人が乗っていて、その後ろには、まだ5、6才くらいの子供たちが何人も乗っている！　その後ろから来る舟にも沢山のお稚児さんが、平たい舟の上にぎっしりと乗っている！

「見て弘子！お稚児さんたち手を振ってる！」
お雛様の恰好をしたお稚児さんは、観光客に向ってみんなで手を振っている。
「可愛いねぇ！　いいなぁ・・こういうの・・・」
・・柳川には、こんな素敵なイベントがあっていいなぁ・・・
「有希、羨ましそう。」
「うん。」
・・オレも柳川に生まれてたら、こんなこと出来たのかなぁ・・・

・・子供ってほんと可愛い！　特に女の子は、愛らしい睫毛や、ふっくらした赤いほっぺや、少し突き出た桜色のくちびるや・・・どこをとっても可愛いアイテムに溢れている！
次々と通っていくお稚児さんを見ていると・・なんだか胸が熱いような不思議な気持ちになってくる・・・

最後の舟が行ってしまうと、集まった観光客もバラバラに離れていく・・・
「あ～ぁ・・行っちゃったね・・・ねえ弘子、お稚児さんたちどこまで行くのかな？」
「三柱神社までよ、神事だからね。」

「へ～　そうなの・・・」
「有希寒くない？　お店に入って甘いものでも食べようか？」
「甘いもの？！　うん、食べる食べる！」

オレたちは店先に“さげもん”が飾ってあるお店に入った。
「有希、なんにする？」
「わたしは・・みたらし団子がいいや。」
「じゃ、わたしも！」

オレたちは二人とも“みたらし団子”を頼んだ。
「おいしいね。砂糖醤油で食べるおもちみたい。」
「そうね。」
甘いお団子と、あったかいお茶がおいしい・・・冷えた身体があったまる・・・

「ねえ有希、この後、川下りの舟に乗らない？」
「川下りって？！」
「さっきお稚児さんたちが乗ってたような舟に乗って掘割りを巡るのよ。」
「へ～　面白そう！」
「乗る？」
「うん！」

オレたちはお団子を食べるとすぐに、舟着き場へ向った。

柳川名物川下り・・大人１，０００円　子供５００円・・・舟着き場を出発して、また同じ所に戻って来るという３０分コース・・・

お客さんが６人揃うと出発だ。運良くオレたちの前に４人いたから、オレたちはすぐに出発できた。

オレたちが乗るのは、どんこ舟という平たくて底が浅い舟・・・水路は浅いところもあるから、普通の舟じゃ通れないらしい・・・舟にはこたつがあるから、今日のような寒い日でも大丈夫だ！　気がきいてる！

船頭さんが後ろで、長い竹の棒1本を水路の底に突き立てて舟を進ませる・・・

狭い水路をしばらく行くと広いお堀に出た・・・船頭さんが旧立花藩のお堀だと説明してくれる・・お堀には両側から大きな木が水の上に張り出していてる・・・

「わぁっ！」

船頭さんはわざとその枝の下を通ってオレたちを楽しませてくれたりする。

他にも船頭さんは、柳川は北原白秋の生地だとか色んな説明をしてくれたり、歌をうたってくれたりとガイドさんも兼ねている。

そして、お堀からまた狭い水路へ・・・すると前方に石で出来た小さな橋が・・しかも水面から橋の下まで1メートルもないくらいだ！

「きゃぁ〜！！」

オレたちが船頭さんに言われるまま、舟の中にしゃがみ込むと・・頭の上数センチのところをギリギリですり抜けていく！スリル満点だ！！

その後も、すっごく浅いところがあったり・・舟の巾ギリギリの橋があったりして・・そのたびにヒヤヒヤさせられた！

30分後、最初の舟着き場に着いた時には、みんな大満足だった！

「あ～楽しかった！」
「ふふっ・・有希ったら悲鳴あげてたね。」
「うぅ・・ごめん・・今日は落ちついた雰囲気でいくんだったのに・・・」
「あ、そういう意味で言ったんじゃないの。有希が楽しそうだったのが嬉しかったのよ。」
「え？　わたしが・・？」
「だって有希、最近忙しそうだったりして、結構いっぱいイッパイな感じだったから・・実は心配してたのよ。」
「ぁ・・うん・・・」
「少し前は落ち込んでたみたいだし・・頑張りすぎなんじゃない？」
「・・うん・・・」

・・弘子って・・そんなに何も言わないけど・・オレのこと良く見てるんだなぁ・・・

・・だから今日はふたりで行こうって言ったのかな・・・こういう見守ってくれるような・・何気ない優しさが弘子らしい・・・

「ありがとう弘子・・わたしちょっと無理してたかも・・なんか・・色々あったから・・・」
「もし何か悩みがあるんだったら、いつでも相談してよね。」
「うん。」
・・オレには相談出来ないことの方が多いけど・・・その気持ちだけで嬉しい・・・少し気持ちが軽くなった気がした・・・

・・弘子には男だと知られてる分、相談しやすいこともあるけど・・逆に相談しにくいこともある・・・

・・だって・・もし弘子にＳＥＸのことなんか聞いて・・オレが経験しちゃったことがわかった場合・・・オレを女だと思ってるコなら、ただ経験したことがバレるだけだけど・・・オレが男だと知ってる場合・・身体のどこでしたのか想像してしまうだろう・・・親友にお尻でしてるなんて知られちゃったら・・オレ死にたくなっちゃうと思う・・・

「有希、次は“御花”に行こうか？」
「“御花”？　なにそれ？」
「今は料亭なんだけど、昔は立花藩の別邸だったところよ。今の時期はさげもんと一緒に代々伝わるお雛様も飾ってあるの。お姫様の雛人形も飾ってあるわよ！」
「お姫様の？！」
・・それって江戸時代のなのかな？・・・どんなお雛様だろう・・・

“御花”は広い日本庭園があったり、立花藩の資料館があったりするから、お料理を食べる人以外も大勢見学に来るらしい。今日も観光バスが停まっていっぱいの見物客が来ていた・・・もちろん一番の目当てはオレたちと同じでお雛様とさげもんだ。

「わぁっ！すごい！！」
お座敷に上げてもらうと、そこには沢山のお雛様が飾ってあって、その上には無数とも言えるほどの“さげもん”が下がっていた・・・色とりどりの華やかさで・・なんだか夢のような光景だ・・・
「すごいね、弘子・・こんなの初めて見た・・・」
「こういうの見ると女の子で良かったって思うよね。」
「うん・・」
・・たしかに・・男の子のころだったら・・この光景を見てもここ

まで感動したかどうかわからない・・・やっぱりこういうのをステキだって思う心は・・女の子特有のものだと思う・・・

お雛様は時代によって、顔も違うし服装も違う・・飾ってある置物も違う・・・でもどれも素晴しい！

江戸時代や明治時代からのお人形をずっと大事にしてきて、毎年こうして大切に飾っているなんて・・・なんかすごくステキなことだ・・・これまでもそうだけど・・たぶんこれからもずっと続いていくんだと思うとよけいに感動する！　オレがもっと大人になって・・また来たとしても今日と同じ光景があるのだろうか・・・いつまでも続いて欲しいって思う・・・

帰りの駅のホームで・・・

「弘子、今日は連れてきてくれてありがとう！」

「ううん、どういたしまして。」

「あんまり・・お淑やかに出来なかったけど・・・」

「そんなことないわよ、今日の有希はいつもより女の子らしかったよ！」

「・そ・・そうかな・・？」

・・ずいぶん騒いじゃったような気がするけど・・・

「有希は普通にしてても十分女の子らしいし、立ち居振る舞いもお淑やかなのよ。」

「！・・それは・・たぶんお茶とか・・お花とかやってるからよ・・・自然に姿勢よくなっちゃうの・・・」

「それがいいんじゃない！　自然に出来るのが一番なのよ。」

「ぅ・・うん・・・」

・・そういえば昔・・オレが女の子になったばかりのころ三吉先生が言ってた・・・気を付けてやってるうちはまだダメなんだって・・・意識せずに出来るようになって初めて一人前なんだって・・・

・・オレはまだまだ一人前じゃないと思うけど・・・少しは近づけてるってことなのかな・・？

・・理想の女の人に・・・・

補足：有希が公民館で観た映画は「柳川掘割物語」です。
監督：高畑勲、プロデュース：宮崎駿で初めて挑んだ実写映画。都市計画の実施により埋められそうになっているドブ川を、浄化して生活に役立てることを提案し、柳川の水を甦らせたある役所の係長の話に誘発され製作したドキュメンタリー作品です。

第１６８話　雨天　プリティ・ウーマン

今日は雨の中、バスでももち浜までやってきた。百道〈ももち〉はかあさんたちが子供だった頃はまだ砂浜があって海水浴場もあったらしいけど、今は大きな埋め立て地だ・・東京でいえばお台場みたいな感じだろうか・・・今は人工の砂浜があるだけだ。

出来た時には“よかトピア”という博覧会があったらしいけど、それはオレたちが生まれる前の話・・・今は福岡ドームとか福岡タワーとかあって、博物館や図書館もあるからオレも時々来たことがある。　映画館とかもあるけど・・オレにとっては交通の便がいい天神やキャナルシティの方がなじみ深い・・・

博物館前のバス停で降りて、赤い傘をさしながら博物館の横の通りを歩く・・・ここの埋め立て地は道も広いし見晴らしが良いところだけど・・今日は雨ふりだから遠くは煙って霞んで見える・・・でもそれがまた良い感じ・・・

百道にはふたつのテレビ局がある。今日オレはそのうちのひとつに来るために百道にやってきたのだ。

「ちょっと早かったかなぁ・・・」

傘をたたんでロビーに入ると、雨のためか人はあまりいなかった・・・

・・テレビ局の中には通行証がないと入れないから、ロビーで待ってるように言われたんだけど・・・

ロビーのソファーに座って１０分ほど待っていると・・・

「あっ！おじさまぁ！」

オレは遠くのエレベーターから出てきた刈谷先生を見つけて大きく

手を振った。

「ユウちゃんごめんね、雨なのにわざわざこっちまで来てもらって。」

「ううん、全然だいじょうぶです！」

「あら？　なんか今日のユウちゃん雰囲気違わない？」

「ぁ・・・こういう恰好はダメですか？」

「ダメじゃないけど、いつもと違うなって思ったから。」

・・やっぱり・・先生は大人っぽい服が好きなのかなぁ・・・

「・・このレインコート・・実は妹のなんです・・・」

「あぁ、だからなの？どうりで今日のユウちゃん子供っぽいと思ったわ。」

・・麻衣も大きくなったから・・もうオレと服を共有することも出来るようになってきた。・・ただ・・背はオレより小さいから・・ちょっとだけ丈が短くなってしまうのは仕方がない・・・まあ、それくらいはオレの着こなしでどうとでも出来るけど・・・

・・今日はエリやベルトのポイントに赤と白のチェックがあしらわれた可愛いクリーム色のレインコートで、裏地も同じチェックになってるから歩くと裾からチラチラ見えてすごく可愛い。そんなレインコートに合わせて髪も両サイドを三つ編みにして、前髪をピンで留めて少しおでこを出して可愛くまとめてみた・・・

・・先生は大人っぽいオレが好きなのかも知れないけど・・オレは・・・

「・・ユウね・・これまでおじさまと会うとき・・出来るだけ大人っぽい恰好するようにしてたんだけど・・・無理するとやっぱり疲れちゃうし・・・それに・・大人っぽいユウはもっと後でも見てもらえるけど・・おじさまには今のユウも見てほしくて・・・」

「わかったわ。17歳のユウちゃんは今だけだものね！　ユウちゃんは可愛い恰好もステキよ。」
先生はそう言ってオレの頭をなでてくれた・・・
「ぁ・・ありがとう、おじさま！」
・・刈谷先生なら・・無理して背伸びしたくないオレの気持ち・・きっとわかってくれると思ってた！

「でも、ほんとに今日はごめんね。急に東京に戻らなきゃいけなくなっちゃって。」
「いえ・・」
・・まあ・・たしかに先生とは2週間に一回しか会えないから・・それがダメになっちゃうのは残念だけど・・・
「せっかくだから、これだけでも渡しておこうと思って、持って帰るのも何だしねぇ。」
「？」
そう言って先生に紙袋を手渡された・・・
「なんですか？」
「約束してたでしょう？　ポータブルＤＶＤ。」
「あ！」

・・オレがウチに帰って着替えようとしてるところへ、今日はすぐ東京に帰るって電話があったから・・てっきりＤＶＤはおあずけなのかと思ってた・・・
「映画のソフトもいくつか買っておいたからね。」
「え？！　ほんと？　うれしい！」
・・オレはそこまで言ってなかったのに・・・そんな気をきかせてくれるなんて・・・
「おじさま、ありがとう！」
オレは嬉しくて、人目もはばからず先生に飛びついてしまった・・・

「おじさま大好き！」

テレビ局で先生と別れてから、帰りは百道から天神まで高速をバスで帰ってきた・・・来た時は一般道を来ちゃったけど、バスだと同じ料金で高速を走れるから得した気分だ・・時間も一般道よりずっと速い。

もう雨はやんでいた・・海岸沿いを走る都市高速は、ときどき海の上に出るから、海側から港が見えるところがあったりして、普段は見ない景色なので面白い・・・

ウチに帰ると、オレは玄関からすぐに自分の部屋に向った・・・今日はまだ夕方だから、かあさんは帰ってないだろうけど、麻衣は帰ってるみたいだし・・・

部屋で着替えを済ませてから、今すぐにＤＶＤの箱を開けたいのを我慢して夕飯の仕度に取りかかった・・・夜になって落ちついてから開けようと思う・・ソワソワしちゃうけど・・楽しみを伸ばすのも悪くない・・・

「今日は何にしようかなぁ・・そうだ、このまえ煮物作ったときに、おつゆを多めに作ったのが冷蔵庫に残ってるから・・今日は親子丼にしよう！」

鶏肉は冷凍してたやつをレンジで解凍して、甘辛く炒めてからタマネギを加えておつゆをかけ、最後に玉子と和えザク切り万能ネギをのせる・・・オレはあらかじめ下味をつけた方が鶏肉にも味が滲みておいしいと思う。ちなみに鶏肉を炒める時に、ほんの少しチューブのおろしショウガを入れて肉の臭みをとるのがオレ流だ。

麻衣2階から降りてきた・・・

「あ！今日親子丼?！　あたしお姉ちゃんが作った親子丼大好き！」

「ふふふ・・・」

実はオレが作る料理のうちでも親子丼は手抜きな方なんだけど・・・

「おっ！　親子丼じゃないか！」

・・え?とうさんまで?・・・どうして麻衣もとうさんもカンタンな料理ばかり好きなんだろう・・・もっと凝った料理作った時に褒めてほしいのに・・・貧乏舌なのかなぁ・・・

夕食が終って、お風呂を上がると、オレはすぐに2階の自分の部屋に行った。

髪を乾かすのもそこそこに、ＤＶＤの箱を開けてみる・・・箱から発泡スチロールのを引っ張りだして・・袋に包まれた中から取り出すと・・そこにはＳＯＮＹのピンクのポータブルＤＶＤプレイヤーが！

「わぁ、かわいい！！」

オレはもっと味気ないやつを想像していたのに・・こんなにオシャレなヤツだとは思わなかった！

・・角も丸っこくて・・女の子らしいかたちだ・・・これは大切にしちゃうなぁ・・・

「そうだ・・ＤＶＤも買ってくれたって言ってたけど・・どんなの

買ってくれたんだろう・・・？」

・・包みがふたつ・・・とりあえず上のやつから開けてみよう・・・

「あ・・」

どれも女の子が好きそうな映画だけど・・・けっこう古い映画ばかりだなぁ・・・一番新しいのでも「タイタニック」・・・後は「ロミオとジュリエット」・・「ウエストサイド・ストーリー」・・「フラッシュダンス」・・「ローマの休日」なんて白黒の映画まである・・・

「あっ・・・これかぁ・・「プリティ・ウーマン」って・・・」

前に先生にドレスとか買ってもらった時に・・先生が言ってたやつだ・・・（１４８話参照）

・・この中でオレが観たことあるのは「タイタニック」だけだ・・・

先生・・自分が好きな映画ばかり選んだんだな・・・どれも女子高生が観るにはちょっと古過ぎる・・・

・・まあ・・これはＤＶＤプレイヤーを買ってくれたオマケみたいなもんだから・・文句いう筋合いじゃないけど・・・

「あ・・そういえば、もうひとつ包みがあったっけ・・あっちはもっと新しいのだったりして・・・」

オレがもうひとつの包みを開けてみると・・・

「！！！」

・・オレは見るなり驚いて放り出しそうになった・・・エ・・ＡＶだ！

・・うわぁ・・・どうしよう・・・ドキドキしてきた・・・

・・５つのＤＶＤのうちには・・１枚だけ・・女の人が・・縄で縛

られてるのまでである・・・！

「・・こ・・こんなイヤラシイのをオレに・・・？」

・・先生に言われた言葉が頭の中に浮ぶ・・・女の子は・・エッチなことされてる女の子の方の気持ちになって観るんだって・・・オレに・・縛られてる女の人の気持ちになれってこと?!

・・そんなぁ・・先生ったら・・オレにこんなの観せてどうしようっていうんだよ・・・

「・・ダメだ・・とにかくコレは厳重に隠しておこう・・・」

オレはまたＡＶを袋に入れて、兄さんの隠し扉の奥の方に入れた・・・ここには奥にもうひとつ間仕切りがあって、そこを閉めると本棚の奥に見えるけど、実はその奥にも隠せるのだ・・兄さん・・なんて厳重な隠し場所作ってるんだろう・・・

・・でもこういう所があって助かった・・・だってＡＶなんてもしかあさんに見つかったら・・・別の意味で怒られそうだし・・・麻衣に見つかったら・・軽蔑されちゃうかも・・・

・・うぅ・・・まだドキドキしてるよ・・・なんか隠したＤＶＤが気になる・・・べ・・べつに観たいワケじゃないけど・・・

「そ・そうだ！気分を替えるために何か観てみようかな・・・」

・・どれが面白そうかなぁ・・・「ローマの休日」って有名だけど・・白黒だしなぁ・・・「プリティ・ウーマン」でも観てみようかな・・？・・・パッケージのリチャード・ギアが若いや・・・

プレイヤーにＤＶＤをはめてフタを閉めると・・・小さな音をたててＤＶＤが回り出す・・・なんかワクワク・・・
少しの間があって映像が映し出された。

主人公のリチャード・ギア演じる“エドワード”は、経営が上手くいってない会社を安く買う仕事をしている・・企業買収ってやつだ・・・そしてその会社をバラバラにして他の人に高く売っているらしい・・たぶんリストラとかもするんじゃないかなぁ・・・

お父さんの浮気してお母さんが捨てられた恨みで、お父さんとは仲が悪かったから、大人になってお父さんの会社も買収して、バラバラにして売っちゃったらしい・・・

でもお金持ちだけど心には空しさがあるようで、ある晩ひとりで車を運転して街に出る・・・ふだんは自分で運転しないみたいで車の運転がヘタクソで笑っちゃう！

ハリウッドの街に出ると道には男の人めあての女の子がいっぱいで、そこでジュリア・ロバーツ演じる“ヴィヴィアン”と出会うのだ。

ポータブルＤＶＤプレーヤーは、画面は7型と小さいけど、案外問題なく観れる！　でもちょっと字幕は読みづらいかな・・・

刈谷先生は「プリティ・ウーマン」を現代のシンデレラストーリーだと言っていたから、ちょっと不幸な女の子が幸せになるステキな話かと思ったけど・・・その女の子は娼婦だった・・・オレは娼婦っていまいちピンとこないけど・・・たぶん男の人とエッチなことしてお金もらう人のことだ・・・シンデレラが娼婦だなんてちょっ

とショック・・・・

エドワードが自分が泊まってる高級ホテルに連れていったら、ヴィヴィアンの服装がハデだからずいぶん場違いな感じになってる・・・格式が違うってやつかな・・・高級なホテルには上流階級の人しか泊まらないのだろう・・・ホテルの従業員もヘンな顔で見ている・・・

結局女の子は泊まっていくことになって・・とりあえずエッチなこともしたみたい・・・でもキスは好きになっちゃうからしないんだって・・・

朝になったら急に買収先の会社の社長と会食しなきゃいけなくなって、一緒に食事するためにヴィヴィアンを1週間３０００ドルで雇うことにした・・・３０００ドルって・・1ドル１００円として・・３０万円か・・・たしかにかなりの金額だけど・・ヴィヴィアンの喜びようがオーバーすぎる気がする・・・あっ・・昔の映画だから物価が違ったりするのかな・・・？

ヴィヴィアンは食事に行くための服を買っておくように言われてお店に行くんだけど・・お金はあると言ってるのにお店の人が売ってくれないで追い返されちゃう・・・実際にこんなことってあるのだろうか？・・・ヴィヴィアン可哀想・・・

その後ホテルの人が親切で、知り合いのお店に頼んでもらって何とか服は買えたんだけど・・・テーブルマナーなんかも教えてもらわなきゃいけなかった・・・なんかオレが三吉先生に教えてもらった時のこと思い出すなぁ・・・まあ、オレが教えてもらったのはごく簡単なマナーだけど・・・

この映画はパッケージの説明によるとロマンティックコメディということで「プリティ・ウーマン」にはいろいろ笑えるシーンがある・・食事中もエスカルゴを飛ばしてみたり、ヴィヴィアンがトイレに行こうと立ち上がると、テーブルの男たちがみんな立ち上がったり・・そんなマナーがあるのだろうか？　アメリカ人ならみんなこういうマナー知ってるのかな？　こういうところはアメリカ人が観たらもっと笑えるのかも知れない。

ヴィヴィアンに洋服のお店の人にイジワルされたと聞いたエドワードは、カードを使ってどんどんお洋服を持ってこさせて機嫌をとらせる・・・刈谷先生・・このこと言ってたのかぁ・・・たしかに先生にドレスを買ってもらった時の状況と似てなくもない（１４８話参照）・・・でも・・オレはこんなにのぼせ上がってないと思う・・・高い服を着て自慢そうに街を歩くヴィヴィアンは・・なんだかカッコ悪い・・・

・・みんなに振り向かれて嬉しそうだ・・たしかに綺麗だけど・・・服を変えただけで人の見る目が変わるなんて・・・そういうのオレなら恰好だけで判断されてるようでイヤだ・・・高いブランド物とか着てるだけで、こんなに態度が違うんだろうか・・・

・・そういえば昔とうさんが言ってた・・・とうさんは売れてないけど小説家だから、聞くと大抵のことは答えてくれる。
・・ニュースで見たんだけど、資産家の人たちがウソの投資話にダマされたっていうのがあってて・・でもそのダマした人というのが、いかにも胡散臭くてアヤシかったから・・どうしてこんな人にお金持ちがダマされるんだろうとオレが聞いたらとうさんは、お金持ちは相手がどんな恰好をしてるかだけで信用出来るかどうか判断してるんだって言ってた・・・

・・だから大きな詐欺をする人は、まず誰かをダマしていくらかのお金をとったら、それでブランド物のスーツや時計を買って身に付けてから、もっと大きな詐欺をするんだって・・・そうすると、全体的に見れば誰が見たってアヤシイ人なのに、お金持ちは身に付けてる物しか見てないからダマされるらしい・・・

・・でもそれは逆に考えれば・・身に付けてる物だけで判断しても、ほとんどの場合は間違わないってことなのかも知れない・・・相手が詐欺じゃなければ・・・

エドワードには仕事のパートナーの弁護士がいるんだけど、ある時その人にヴィヴィアンが娼婦だって言ってしまう・・・ヴィヴィアンが別の男の人と楽しそうにしゃべってるのを見て嫉妬しちゃったんだけど、ヴィヴィアンはショックを受けてしまう・・・

エドワードは本当のことなんだから良いじゃないかというんだけど・・ヴィヴィアンはすごく傷ついてしまった・・・でも・・オレはどっちの気持ちもわかるなぁ・・・たしかに女の子なら心無い事を言われたら傷つくのは当然だけど・・エドワードだってそんなに悪気があったワケじゃないんだし・・・

・・まあ、結局エドワードが謝って仲直りしちゃうんだけど・・・

そのあと落ち込んでひとりピアノを弾くエドワードのところにやってきたヴィヴィアンの体を、ピアノの上に持ち上げて・・・なんかエッチな雰囲気に・・・これってやっぱり・・エッチなことしちゃったのかな?・・ピアノの上で?!・・今は1人で観てるからいいけど・・もし映画館で男の子と一緒にこんなシーンを観たら大変だ

な・・オレきっとドキドキしすぎて気絶しちゃうかも！　ステキだけど・・オレみたいな女子高生には濃厚すぎる！！

・・それでふたりはお互いに好きだということを認識したみたい・・
・ベッドに入ってキスもしちゃった・・・

・・でもそのせいで“仕事”の関係じゃなくなってしまって・・・気持ちにすれ違いが・・・ヴィヴィアンは約束の６日間が終ってホテルを出ていく決心をする・・・囲われて暮らすのはイヤなんだって・・・

・・エドワードの方もこれまでの仕事のやり方がイヤになっちゃったみたいで、結局、買収しようとしてた会社と協力して仕事をすることに・・・でもこれまでエドワードと一緒に仕事してきた弁護士は、ヴィヴィアンがエドワードにヘンな考えを吹き込んだと思ってしまう・・・まあ、そう思うのも当然だろうな・・・だってこの人はエドワードとヴィヴィアンの間であったことを何にも知らないんだもん。

だから怒った弁護士は憂さ晴らしに、ヴィヴィアンに「ヤらせろ」なんて言って、ヴィヴィアンの顔を平手で叩いちゃったから、怒ったエドワードに殴られて「最低なヤツだ」なんて言われて追い出されてしまった・・・

・・たしかに弁護士はイヤなところもあるし・・女の子を叩くなんてヒドイやつだけど・・ずっと一緒に仕事をしてきたのに・・ちょっと可哀想な気もする・・・
・・この人だって、エドワードがどういう気持ちでヴィヴィアンのことが好きで・・ヴィヴィアンのステキなところを知ったら・・ヴィヴィアン良さがわかるかも知れないし・・・

・・でも・・こういうの女の子だったら・・イヤな男がやっつけられて清々するのかなぁ・・・そこらへんオレは男の気持ちもわかっちゃうから複雑だ・・・

・・映画はクライマックスへ・・・出て行ったヴィヴィアンと、ロスでの仕事が終ってニューヨークへ戻るためリムジンで空港へ向うエドワード・・・

・・でも途中で気が変わって・・・

・・そしてハッピーエンド・・・まさにシンデレラストーリー・・・一番いいとこで終ってしまう・・・

・・この後ふたりは上手くいくのかなぁ・・・エドワードの仕事も・・ちょっと心配になっちゃう・・・

・・弁護士の人とも仲直りして、協力してやれたら良いんだけどなぁ・・・

・・でも久しぶりに観た映画は面白かった！

・・明日は何を観ようかなぁ・・・

第１６９話　開店　天神・福岡パルコ

「みなさん、明日から春休みですが、春休みというものは遊ぶためにあるのではなく、新年度に向けて準備をするための期間なのです。お花見やイベントに出かける事もあるでしょうが、くれぐれも白鴻女学園の生徒として恥ずかしくない行動をとって下さい。
また、みなさんも知っているとおり、新年度からは本校も共学化し、校名も「白鴻学園」に変わります。男子生徒も入学して来ます。それに伴い、校則も時代に合わせてこれまでより少し緩くなりますが、気持ちまで弛む事の無い様、みなさんはこれまで通り白鴻の名に恥じない乙女として、慎み深くいてくれる事を願います。ところで先日・・・」

校長先生の話は相変わらず長い・・・だいたい言うべきことが終っても、なぜかもうわかってる話をダラダラとしゃべっている・・・おかげで最終的には何を言いたかったのか判らなくなってしまうのが常だ・・・まあ、結局のところは学校の名を汚すなってことらしい・・・

新学期から校則はたしかにゆるくなるから、オレも４月からは髪を三つ編みにしないで登校しようと思っている。なんてったって、腰上１０ｃｍまである長くてキレイな黒髪は、オレの最大のチャームポイントだし、オレを女の子らしく見せるのに、この髪が一番貢献してるんじゃないかと思うのだ。

モデルとしてもこの長い黒髪は“春日ユウ”の代名詞といっていいかもしれない・・・まあ、おかげで最近は伸ばしたままだと、街で“春日ユウ”だと気付かれて女の子に声をかけられることも時々ある。なかにはサインを求めてくるコもいるから一応サインも考えて

みた・・・っていうか、安部っちが可愛いサインを考えてくれたんだけど・・・

・・明日は新しくオープンする二光さんのお店を手伝いに行く約束をしてるけど・・オレだとバレて騒ぎになったらイヤだなぁ・・・オレはあくまでお手伝いなんだから、なるべく目立たないようにしていよう・・・

次の日、オレは朝7時に家を出た。

今日オープンする福岡パルコが開店するのは１０時だけど、それまでにいろいろ準備もあるし・・・昨日電話で二光さんと話たら、商品を置く棚が発注と違って大変だったらしい・・それをやり直して今日持って来るから飾り付けとかしなきゃいけないのだ。たぶんギリギリになるらしい・・・

福岡パルコが入るのは、元は岩田屋の本館だったビルだ。岩田屋は戦前からあったみたいで、かあさんが若い頃は福岡でデパートといえば岩田屋が一番だったらしい。昔はお休みの日は家族でデパートに行くのが楽しみだったみたいで、屋上に遊園地があったりして一日中遊んでたんだって・・なんだかひとつのビルの中にずっといるなんて、オレにはちょっと想像出来ないけど・・昔はよほど楽しみが無かったんだろうなぁ・・・

でも時代が変わってデパートが流行らなくなったのと、元は西鉄の福岡駅とくっついていて便利だったのに、再開発で駅がきれいになった時だいぶ離れちゃったうえ、駅ビルには新しく三越が入ってしまったから人の流れが変わったらしくて、別館のZサイド〈ジーサイド〉を残して本館と新館を売ってしまった。
その後、買った学校法人って所がほったらかしにしてたせいで、天神の中心なのに暗くてすごく寂れた場所になっていたんだけど、やっとパルコが入ることになって福岡市民はみんなホッとしているのだ。

7時半ごろ着くと、もう並んでる人が結構いた。オレは教えてもらってた関係者の入口から、まだ開店前のパルコの中に入った・・・
「わあ！けっこう広いなぁ・・・」
通路も広くとってあって落ちついてショッピング出来そうな雰囲気だ。入ってるお店はオレより上の年齢の人を対象にしてるみたい・・・

まだお客さんがいないからエスカレーターは動いていない・・・エレベーターは動いてたけど・・なんかオレみたいな女子高生が乗ってて勝手に入り込んだと思われないか心配で、二光さんのお店がある4階まで、こっそり階段で上がった・・・

「あっ・・ここだ！」
二光さんのセレクトショップ・・名前は“ピンキー”

オレはてっきり女の子が好きなピンクから名前をつけたんだと思った・・・もちろんそれもあるみたいだけど、もうひとつ二光さんが好きだった歌手の名前でもあるらしい・・“ピンキーとキラーズ”

って言ってたけどオレには何のことだかさっぱりわからなかった・・
・かあさんに聞いたら、かあさんが子供の頃に人気があったグルー
プなんだって・・・

「！！」

なんかお店の中から大きな声が聞こえると思ったら、後ろ姿の二光
さんが叫んでいる・・・

「ちょっと、あんたたち何やってんの！　こんなことじゃ開店に間
に合わないわよ！」

・・なんか・・いつもの二光さんと違うなぁ・・・ちょっとコワイ
かも・・・

従業員を叱りつけるのが一段落したところを見計らって、オレは二
光さんのところに行った・・・

「ぁ・・あの・・お早うございます・・・」

オレが後ろから声をかけると・・・

「？　ユウちゃ～ん！！　もう来てくれたの～！」

よかった・・いつもの二光さんっぽい・・・

「あの・・大変そうだから、わたしでもお手伝い出来ることがある
かな・・って思って・・・」

「ホント～！　嬉しい～　じゃぁ商品を見て置き方とか気になると
ころがあったら直してちょうだい！　スタッフに任せてたらみんな
ただ置いただけなんだもん！　ほら見てこういうところ！！」

・・たしかに斜めの角度が揃ってないかな・・・こんな細かいとこ
ろも気にしなきゃダメなのかぁ・・・

「ユウちゃんはセンスいいから任せたわよ！　あたしちょっと外の
様子見て来るから！」

「ぁ・・・」

・・そんなぁ・・任されちゃった・・・なんか責任重大だなぁ・・・
ちゃんと出来てなかったらオレまで怒られちゃうかも・・・

オレも従業員のスタッフさんに混じって、ピカピカの化粧品の容器に指紋が付かないように白い手袋をして、商品がキレイに見えるように並べ替えていった。

８時になってやっと例の棚が届いて、オレたちはその上にキレイに商品を飾り付けていた・・・すると帰ってきた二光さんは・・・

「あんたたちまだ着替えてないの?!　早く制服に着替えなきゃダメじゃない!!」

見ると二光さんはもう自分だけ制服を着ていた・・・胸がＶの字に大きく開いた黒いワンピースに赤いベルトと赤いスカーフ・・・それに黒の帽子と黒いハイヒール・・・ベルトの丸いバックルと靴の飾りがセットになってる・・・なんかレトロな雰囲気の制服だ!

「ステキですね、その制服。」

「そうでしょ～!　アテンションプリ～ズって感じじゃない?」

二光さんはそう言って左手を腰にあて、右手を手のひらを上にして肩の高さに上げたポーズをとった・・・

「・・あてんしょん・・ぷりーず・・?」

「昔のスチュワーデスさんのドラマよ～!　この服、昔の航日のスチュワーデスさんの制服をイメージして作ったの!」

「へえ～・・・」

・・スチュワーデスってのはＣＡさんの昔の呼び方だな・・・

「ユウちゃんの分もあるから早く着替えてらっしゃい!」

「え?!・・わ・・わたしも着るんですか・・・?」

「そうよ!　ユウちゃんにもスタッフとして手伝ってもらうんだから～　ちゃんとお揃いの制服着なきゃダメじゃな～い!」

「!!」

・・手伝いって聞いてたけど・・・まさかスタッフとしてなんて・・

・オレ何にも知らないのに・・・！

「・・わ・・わたしここの商品のこととか知らないし・・手伝えるかどうか・・・」

「だいじょうぶよ～　ユウちゃんはお客さんの整理とか頼まれたことをやってればいいから～！」

「そ・・そうですか・・・」

・・それなら・・オレにも出来るかなぁ・・・

「アルバイト料弾んじゃうからね！」

「え・・そ・・そんなつもりじゃ・・・」

「いいの、いいの～！」

オレは二光さんに背中を押されて、スタッフのお姉さんたちと一緒に更衣室に入った・・・

「ユウちゃんごめんね、今日は開店日だから二光さん気が立ってて・・」

「ううん、大丈夫です。」

今日は忙しいからエステのお姉さんまで駆り出されているのだ・・・

オレとしては知ってる人が1人でもいるのは心強い・・・それにお互いこういうお店は不馴れだし・・・

制服はまず足に黒いストッキングをはく・・・そして服を着てみたら・・オレの女子高生ブラではV字に開いた胸元からブラが見えてしまった・・・

「どうしよう・・ブラがみえちゃう・・・」

モデルのお仕事の時は服によって変えるため、いくつか違ったかたちのブラを持っていくんだけど・・今日はこんなつもりじゃなかったから持ってきてない・・・オレが困っていると・・・

「サイズはいくつ？」

スタッフのお姉さんが聞いてくれた・・・

「ぁ・・７０のＣです・・６５でも何とか・・・」
「だったら私ので良かったら貸してあげるよ。」
そう言ってお姉さんはハーフカップのブラを貸してくれた。
「ぁ・・ありがとうございます・・・」
・・なんか・・知らない人のブラをするなんて・・ちょっと照れるけど・・・このさい仕方ない・・・

オレは借りたハーフカップのブラに替えて黒い制服を着た・・今度はいい感じだ・・・着てみると結構スカートが短いなぁ・・・
・・そして赤いベルトを締めて、赤いスカーフを首に巻く・・・あとは帽子をかぶるだけ・・・
「あっ、ユウちゃん、髪はアップにしなきゃいけないみたいよ。」
「え？・・そうなんですか・・・」
そういえばみんなアップにしてたなぁ・・・でも、そのほうがオレとバレにくくていいかも・・・
「あの・・ピンありますか？」
「やってあげようか？」
「ぁ・・お願いできますか・・？」
オレは結局エステのお姉さんに髪を後ろでまとめてもらった・・・

「ユウちゃんは首がキレイだからアップも似合うわね。それに大人っぽくみえるわよ！」
「そ・・そんな・・・」
・・たしかに・・オレはときどき首が長くてキレイだって言われるけど・・・着物なんか着ると良く言われる・・・
「はい、帽子！」
「あ、ありがとうございます！」
そして最後に白い手袋をして完成だ！
鏡に映してみると・・
「わぁ・・ステキ・・・」

ちょっとレトロな感じだから・・高校生のオレにはどうかなって思ったけど・・・思いのほか似合ってるみたい・・カッコイイから思わずポーズとりたくなっちゃう！

オレたちが着替えてお店に出て行くと、なんだかお店は大騒ぎ・・・良く見ると他のお店もバタバタしてる・・・

「あの・・二光さん、何かあったんですか？」

「あっ、ユウちゃん！やっぱり思ったとおり似合うわぁ！　ステキよ～！」

「ぁ・・あの・・なんかバタバタしてるみたいですけど・・・」

「あ・・そうだったわ～！お客さんが並びすぎたから急遽４５分も開店が早まったの～！もうおおごと～！！」

「え？　４５分も？！」

「そうなの～！　ワタシはこれからテープカットに行かなきゃいけないから、お客さんが入って来たらみんなで並んで大きな声で“いらっしゃいませ！”って言うのよ！わかった～！」

「はい！」

オレたちスタッフ全員が一斉に返事をすると、二光さんは急いでエレベーターの方へ走って行った・・・

・・オ・・オレたちもお客さんを迎える準備しなきゃ・・あぁ・・なんかドキドキしてきた・・！

館内には外のオープンセレモニーの音だけが館内放送のスピーカーから聞こえてくる・・・最初は社長さん・・その後、何人かの後に二光さんも・・・

“もう素敵なお店で・・どんだけ～！！”

・・音だけだから良くわからないけど・・・なんかちょっとスベっ

てるみたい・・・

“それではテープカットをお願いします・・”

そして大きな拍手が・・・？・・あれ？音が途切れた・・・

！！・・もうお客さん入ってくるんだ！

「並んで並んで！」

スタッフのチーフの人に言われて、オレたちはお客さんを迎えるために一列に並んだ。

・・キ・・キタ～！！

エスカレーターで４階まで上がってくるのが見えた。

「いらっしゃいませ！」

オレたちは一斉に頭を下げた。

それから先はもう大混乱だ！　お客さんは我先に安いセール品に群がってるし、二光さんが戻ってくるとオバチャンたちが取り囲んで一緒に撮影したりして・・何がなんやらって感じ・・・

オレたちもお客さんの整理や、商品について聞かれたり、セール品がもう売れちゃったのを怒られたり・・・オレはただペコペコするしか出来なかった・・・

「あ！　いたいた！　ユウちゃんだ～！！」

急にオレのまわりを同い年くらいの女の子たちに取り囲まれてビックリした！

「ユウちゃん！握手して！」

「ぇ・・ぁ・・はぃ・・・」

・・オレは何がなんだかわからなかったけど、とりあえずみんなと

握手をした・・・でも・・こんな恰好で・・髪もアップにしてるのに・・よくオレだとわかったなぁ・・・

「一緒に写真とってもらっていいですか?」
「ぁ・・はぃ・・」
「きゃ~!わたしも!」
「!!!・・ちょ・・ちょっとまって・・ここじゃ他のお店の邪魔になるから・・あっちで・・・」
オレはみんなを少し離れた比較的ジャマにならなそうなところに連れていって、一緒に写真を撮ってあげた・・・

「ユウちゃん二光さんと仲いいんですか?」
「う・・うん、まあ・・お化粧とか習ってるの。」
「ユウちゃん二光さんのお店で働くの?」
「ううん・・今日だけ手伝ってるの・・」
写真を撮りながら、いろんな質問をしてくる・・・オレはいちいち答えながら、カメラや携帯に向ってニッコリ笑わなきゃいけないから結構大変だ・・・

「でも・・みんなよくわたしがいるってわかったわね。」
「二光さんのブログで見たから!」
「え?・・ブログ?!」
「さっきユウちゃんが来てくれた~!って書いてた!」
・・そ・・そんなぁ・・・だからこんなにオレのファンが集まっちゃったのかぁ・・・二光さん何で書いちゃうんだろう・・これじゃお店の手伝いなんて出来ないじゃない・・・

「あの・・みんなも良かったらお化粧品買っていってね。スキンケアとかもあるから!わたしも使ってるの!」
「でもぉ・・高そう・・・」

「うぅ・・」
・・そうだよなぁ・・・たしかにお肌にはいいんだけど・・中学生や高校生が買うにはちょっと高いもんなぁ・・・オレも二光さんに試供品もらって使ってるだけだもん・・・

“ポンポン”
誰かに肩をたたかれて振り向くと・・・
「戸田さんすごい人気ね！」
「！！・・安部っち？！」
・・な・・なんでこんなとこに安部っちが？！
「二光さんのブログの書いてあったから、面白そうだから急いで来てみたの。」
・・そっか・・安部っちはネットとか好きだもんなぁ・・・

「わたしも一緒に撮ってもらっていい？」
「ぅ・・いいけど・・この恰好じゃなんか恥ずかしいな・・・」
「そんなことないよ。すっごく似合ってる！」
「あ・・ありがとう・・でも他の人には見せないでね・・恥ずかしいから・・・」
「うん、わかった。」
オレは安部っちとピースをして一緒に写真を撮った・・・でも・・安部っちって変わってるなぁ・・オレたちクラスメイトだからいつでも写真なんか撮れるのに・・・この制服がもの珍しかったのかなぁ・・・

「ユウちゃんこっち向いてぇ！」
「あ、はい・・」
横の方から声がして、オレは慌ててそっちを向いた・・・
「それじゃ・・あたし、忙しそうだからもう行くね！」
「あ・・うん・・来てくれてありがとう！」

安部っちが帰った後も、ブログを見たらしい中学生や高校生のコがひっきりなしにやってきて、まるでオレのまわりは撮影会か握手会みたいになってしまった・・・

結局、閉店までオレのファンだってコが次々来たおかげで、オレはお店の手伝いはほとんど出来なかった・・・

・・おまけに安部っちまで来ちゃうし・・忙しかったからあまり話せなかったけど・・・

ほんとは今日はちょっとお手伝いして、しばらくしたら帰るくらいのつもりでいたのに・・まさかこんなことになるなんて・・・それもこれも二光さんがブログなんかに書くから・・・

とても途中で帰るなんて言えず、閉店までいたからもうクタクタだ・・ハイヒールで立ちっぱなしだったから足も痛いし・・ふくらはぎなんかもうパンパン・・・

・・だけど・・文句も言えないな・・・だってオレは明日も春休みだから休めるけど・・スタッフの人は明日からもずっとお仕事なんだもん・・・

「ユウちゃ～んゴメンね～！　大変だったでしょぉ～　嬉しくてつ

いブログに書いちゃったの～！」
「い・・いえ・・・」
「コレ少ないけど受け取って！」
そう言って渡された封筒には・・・
「！・・2万?！　そんな・・こんなに受け取れません・・わたし何もお手伝い出来なかったのに・・・」
・・だって・・オレのファンのコたちは誰も商品を買ってないと思う・・・

「そんなことないわよ～！　ユウちゃんのファンのコも少しは買ってくれたし、そのコたちを連れてきたお母さんたちも、いっぱい買ってくれたのよ～！」
「え?！・・そうなんですか・・・？」
・・それじゃ・・オレもまったく役に立たなかったワケじゃないのか・・？
「今日は来てくれてありがとう～！　おかげで順調なすべりだしよ～！！」
「そ・・それなら・・良かったです・・」
なんか・・そう言ってもらえると・・オレもすごく嬉しい！

「ホントは打ち上げとかやりたいんだけど、明日も忙しいから出来ないの～　ゴメンね～」
「ううん、わたしどうせまだお酒とか飲めないし、大丈夫です！」
・・オレは自分が役に立てたとわかっただけで大満足だ！

・・それに・・2万円ももらっちゃったし・・・
・・なんか・・モデルの撮影と違って・・役に立つ仕事してもらったって感じが気持ちいい・・・

・・これはしばらく使えないなぁ・・・

ＡＴから

長くお待たせした上、ちょっと短かめですみません。
別の話を書いていたら、去年現実世界で起こっていたことを思い出して、
急遽書き出したので、なんかバタバタしてしまいました。
（このところ個人的にもバタバタしててイマイチ落ちついて書けない・・・）

でも良く考えたら現実世界とは1日ズレてしまってました（笑）
まあ、それくらいは良しとしてください。

二光さんの店の制服は“　福岡パルコ　ＩＫＫＯ　制服　”ででも画像検索していただければ
たぶん出て来ると思います。
毎度のことですが、服のデザインを文章で説明するのは難しいです・・・
ぜひ有希が着てるところを妄想していただければと思います（笑）

『オレは女子高生』支援ページ
ｈｔｔｐ：／／ｅｍｉｔｈｉｙａｎ．ｈ．ｆｃ２．ｃｏｍ／ｃｏｌｕｍｎ／ｊｙｏｓｉ／０８０６２３－００．ｈｔｍｌ
に二光のお店の制服を着た有希の画像をＵＰしました。
有希の顔はＢｒｉｔｉｓｈＰｈａｎｔｏｍ様が描いて下さった有希を合成していますが
あくまでイメージです。
有希の顔は設定していませんので、みなさま自由に想像して下さってかまいません。

注意：『オレは女子高生』支援ページは１８禁止サイトの中にあります。
くれぐれもご注意下さい。

第１７０話　策略　まんまとハメられたオレ

ひとけのない小さな教会・・マリア像の前で佇む２人の少女をステンドグラス越しの淡い光が照らし出す・・・背の高い方の少し大人びた少女が言う・・・

「マリアさまの前で姉妹の契りを結びましょう」

背が低い方の幼顔の少女がそれに答える・・・

「はい・・お姉さま・・・」

ふたりは静かに抱き合い、くちづけを交わした・・・

「・・・・！」

・・お・・お姉さまだって・・・

・・レナったら・・女の子のくせに・・こんなエッチなマンガ読んでるんだ・・・

マンガの中では背が高い方のコが、低い方の可愛らしいコに乗りかかるように押し倒していく・・・

でも、オレはいたたまれなくなって本を閉じてしまった・・・なんか・・先の展開を知るのがコワイ・・・

レナと違ってオレの学校は女子校だから・・なんだかこんなシチュエーションも生々しく想像してしまうのかも知れない・・・

・・背が高いコが大森先輩で・・可愛い方のコがオレとか・・・・

背が高い方がオレで・・背が低い方がミサトちゃんとか・・・・どうしてもそういうイケナイ想像をしてしまいそう・・・

「面白いでしょう?そのマンガ!」
レナが後ろを向いたまま、着て行く服を探しながらオレに聞いた・・
だけど・・・
「・・お・・面白くないよ!・・レナは・・こんなエッチなの読んでヘンな気持ちにならないの・・?」
「ヘンな気持ちって?」
「・・それは・・そのぉ・・・」
「あ〜っ!　有希ったら、誰かと自分がそういうことしてる想像したんでしょう!」
「え?!ち・・違うよ・・・そんなこと・・・」
「ほら!　顔が真っ赤になってる!　有希はホントうそがヘタなんだから!」
「・・うぅ・・そんなんじゃないもん・・・」
・・たしかに想像してたけど・・オレがそんな想像してたなんて・・恥ずかしくて言えない・・・
「有希ったら相変わらずウブなんだからなぁ!」
「・・だって・・・」
・・オレはべつにウブじゃないと思う・・ただ・・本当の女の子じゃないから・・女の子の性のことに、ちょっとウトいだけだ・・・

「有希の学校も4月から共学になるんでしょう?　そんなんで大丈夫なの?」
「え?!・・大丈夫って何が・・?」
「だって有希は美人なんだから、男の子に告白されたりするかも知れないじゃない。そんなモジモジしてて気があるって勘違いされても知らないよ?」
「!!・・そ・・そんなこと無いわよ・・・だって・・男の子は新入生だし・・わたしは3年生なのよ・・・告白なんて・・あるワケないじゃない・・・」
「なに言ってんの。最近の男の子は年上好きって多いのよ!」

「・・・・」
「可愛い男の子に“お姉さま！僕と付き合って下さい！”なんて来られても知らないわよ！」
「！！・・そんなぁ・・・」

・・もしそんなこと言われたら・・オレ・・ちゃんと断れるかなぁ・・・“彼氏がいますから”なんて言えばいいのかな・・・実際オレには純平というステキな彼がいるんだし・・・でも・・“誰ですか”なんて聞かれたら困っちゃうな・・・

「・・レ・・レナぁ・・そんなことより天神に行くんでしょう？早くしないと遅くなっちゃうよ・・・」
・・なんか気まずいから話を変えたけど・・実際今日のレナは準備が遅い・・いつもは服を選ぶのもオレなんかよりずっと早いのに・・・
「大丈夫よ、まだ時間あるじゃない。」
「時間？・・時間って、何か予定でもあるの？」
「あっ・・何でもない・・お昼にはまだ時間あるってこと・・」
「・・お昼？・・まあ・・12時までにはまだ1時間半はあるけど・・・」
・・レナったら・・なんかヘンなの・・・

「よし！これにしよう！」
レナは服を選ぶとオレに・・
「有希、今日はこれ着て行きなさいよ！」
「えっ！！　な・・なんで？」
・・それはレナが着るなら普通かも知れないけど・・オレにはちょっとハデすぎる・・・
「有希言ってたじゃない、このごろ良く天神でファンのコに声かけ

られるって。」
「ぁ・・うん・・良くってほどじゃないけど・・時々ね・・・」
「だから今日はイメージを変えてバレないようにするの！」
「・・そんな・・バレなかったらいいけど・・そんな恰好でバレたらどうするの？わたしそっちの方が恥ずかしいよ・・」
「大丈夫！絶対にバレないから！」
「・・・・」
・・ほんとかなぁ・・・どうせ声かけられるなら・・オレらしい服の方が、まだマシだと思うけど・・・

「ほら、早く脱いで！」
「・・ぅ・・うん・・・」
・・結局オレは、いつもレナには押し切られちゃう・・・頭が上がらないっていうか・・・
・・今日はせっかく春らしい花柄の可愛いワンピース着てきたのに・・
・・オレがそのワンピースを脱ぐと・・・
「後ろ向いてるから、パンツこれにはきかえて！」
「え？・・下着はこのままでいいわよ・・・」
「ダメよ、スカートが短いんだから！　見えてもいいパンツはかなきゃ！」
「え～！　パンツ見えるの？！」
「もう！いちいち“え～え～”うるさいわね！　黙ってはき替えればいいのよ！」
「・・・・・」
・・オレは仕方なく、その黒いパンツにはき替えた・・・たしかに厚手の生地だしオシャレなパンツだけど・・だからといって見えてもいいという気持ちにはならない・・・

・・ブラもお揃いの黒いヤツ・・・ワキをしっかりサポートして、寄せ上げ効果が高いヤツだ・・・肩ヒモがレースでオシャレ・・・

だからといって見せたいワケじゃ・・・

「次はこのニーソね。」

「・・・・・」

・・これまた黒いニーハイソックス・・・ヒザうえ１０数ｃｍってところだろうか・・・ニーソは撮影でははいたことあるけど、街で実際にはいたことはない・・・だってニーハイはソックスから出てる太ももが見えるようにミニスカートじゃなきゃ意味ないし・・オレはそんなミニはなかないもん・・・

上は大きく開いた、エリが大きめのフリルで飾られている、白い大人っぽいブラウス・・こんなにエリが開いてたんじゃブラの肩ヒモが隠れない・・・下は3段フリルで広がった黒いミニのスカート・・これじゃニーハイソックスから出てる太ももが丸見えだ！・・・用心しないとパンツまで見えちゃいそう・・・

「うん、いいじゃない！」

「ダメだよ・・これでも春日ユウだってバレバレよ！」

それに・・こういうのはレナみたいな・・ちょっとハデ系なコにはいいだろうけど・・・オレみたいなお淑やか系なコには合わないと思う・・・

・・まあ、オレも一応モデルだから・・そこそこ着こなしちゃうけど・・・

「まだ終りじゃないよ、ユウこっち来て座って。」

「・・？」

鏡の前に座らせるなんて・・・まさか・・オレにとんでもないケバいお化粧しようってんじゃないよね！？

・・レナは鏡の前に座ったオレの髪の毛を梳かし始めた・・・髪型を変えるのかな・・？

レナは梳かした髪をピンを使って頭にピッタリとまとめていく・・・さすが美容師めざしてるだけあって上手いもんだ・・・でも・・こんなことしてどうするんだろう・・・

長かったオレの髪を頭にピッチリ張り付けると、その上から黒いネットを被せた・・・あっ・・もしかして！

レナは帽子入れのような丸い箱からウイッグを取り出した。茶色のショートボブのカツラだ！
それをオレの頭に慎重に被せる・・・
「ほら！全然ユウだってわからないでしょう？」
「！・ぅ・うん・・」
たしかに・・これならオレだってバレないと思う・・・黒髪の長髪を隠しただけでずいぶん感じが変わった！

「立ってみて！」
「・・・・・」
オレは立って全身を鏡に映すと、自然にポーズをとってしまった・・・なんかオレ・・すごい大人っぽくなってない？

・・まるでプリティ・ウーマンのジュリア・ロバーツみたい・・・ってそれは完全に言い過ぎだけど・・・

「カッコイイ！　ユウは前からこういうの似合うんじゃないかと思ってたのよ。」
「・・レナ・・スゴイ・・ほんとスタイリストめざした方がいいんじゃない？」

・・なんかレナのこと・・見直しちゃった・・・
「ありがとう、でもスゴイのはユウの方よ、何でも似合っちゃうんだから！」
「・・そ・・そんなぁ・・・」
・・それはいくら何でも褒め過ぎだと思う・・・

「・・でも・・このウイッグどうしたの？」
「これね、お店のお客さんがもう使わないっていうから貰ってきたの！絶対ユウに似合うと思って。」
「・・そうなんだ・・・」
・・ショートボブなんて白鴻に入学する時以来だ・・・あの時は、男の子の髪をやっと伸ばして女の子っぽくしたから、他の髪型は出来なかったんだけど・・・

・・なんだか・・長い黒髪に馴れてたからか・・鏡の中のオレが違う女の人みたいだ・・・髪型と色が違うだけで・・こんなにイメージ変わるなんて！

・・こんな恰好で天神に行くなんて・・考えただけでドキドキする・・・でもこれはイヤなんじゃなくて・・ワクワクのドキドキだ！

「でも、これだけじゃ寒いよ。」
「そうよね・・じゃぁこのカーディガンがいいんじゃない？」
そう言って渡されたのはパープルのカーディガンだった。
「あ・・うん、いいかも！」
普段のオレのイメージには合わないけど・・今の大人っぽいオレならピッタリだ！

天神はいつも人が多い・・・でもこの恰好ならＪＩＮＯＮ読者にバレる心配は無さそうだ。

「ねえレナ、今日は何するの？」

「ダメ、まだ教えな～い。」

「え～・・・」

・・やっぱり今日のレナ・・なんかヘン・・・

福岡駅の中央口を出て、警固公園〈けごこうえん〉へ・・・警固公園は警固神社に隣接する公園で、天神のビルの中では緑がいっぱいの貴重な憩いの場だ・・天神の会社で働いている人たちも昼休みになると、ここにお昼を食べに来たりする。

警固公園を抜けると、レナはＺサイド〈ジーサイド〉の方へ行く・・・ホントどこ行くんだろう・・・

「レナ～！」

Ｚサイドのオープンカフェから呼ぶ声が・・あ！・・サヤちゃんだ・・・

え?！・・オレたちが近づくと、同じテーブルを囲んでいた3人の男の子もこっちに向って手をふった・・・

「ち・・ちょっとレナ・・男の子が・・・」

尻込みするオレを気にせず、レナはそのテーブルに近づいていく・・・

・・オレは思わず・・少し離れたところで立ち止まってしまった・・

・

「レナ、ユウちゃんは？」

「ん？　あ、あそこ！」

レナがオレを指さすと、サヤちゃんは驚いたような顔でオレを見た・・・

「え？　ユウちゃんなの？！」

サヤちゃんはオレのところに駆け寄ってくる・・

「あ！ホントだ、ユウちゃんだ！　あたし全然気付かなかったぁ！」

「さ・・サヤちゃん、声が大きいよ・・・」

そんな大きな声で呼ばれたら、せっかくこんな恰好したのにバレちゃったら元も子もない・・・

オレがサヤちゃんに引っ張られてみんなのところに行くと・・・

「このコはわたしのイトコでモデルの春日ユウ！」

そう言ってレナがオレを男の子たちに紹介した・・・

「コイツらはアキラとリョウとケンジ。ケンジとリョウはサッカー部なの。」

「はじめましてユウちゃん。」

「は・・はじめまして・・・」

・・お・・同じ年代の男の子と話すなんて久しぶりだ・・・オレ・・真っ赤になってないかな・・・

「アキラはわたしと一緒で美容師めざしてるんだよね。」

「おれはユウちゃんのことは雑誌で見たことあるけど、今日は雰囲気違うよね。でも今日のユウちゃんも大人っぽくて素敵だよ！」

「ぇ・・ぁ・・ありがとう・・・」

さすが美容師めざしてるだけあって口が上手いな・・・髪も茶パツでちょっと性格軽そう・・・

ケンジとリョウはスポーツマンだから軽くはなさそうだな・・・ケ

ンジは少し長髪でリョウは短髪だ・・・

「ちょ・・ちょっとレナ・・・」

オレはサヤちゃんと男の子たちが話してるスキに、レナの服のソデを引っ張っていった。

「なんで男の子なんか連れて来るのよ！」

「ダメだった？」

「ダメっていうか・・何で来る前に言ってくれなかったの？」

「だって、言ったらユウ行かないって言いそうだし。」

「当り前じゃない！行かないわよ！」

「ユウがそうやって男の子さける気持ちもわかるけどさ、女の子になってすぐにナンパされて怖い思いしたからね。でもいつまでも男の子をさけてるワケにはいかないよ？」

「・・・・・」

「4月からはユウの学校も共学になるんだから、そしたら学校でも男の子と接しなきゃいけないじゃない。」

「・・それは・・そうだけど・・・でも共学になるのは1年生だけだし・・そんなに接することはないと思う・・・」

「ユウ、さっきも言ったでしょう？　年上の女の子が好みの男の子だっているんだから、1年生だってユウに告白しに来るかもよ！」

「そ・・それはないと思うけど・・・」

・・だってウチの学校が共学になるっていっても・・レナの学校とは違うんだから・・そんな3年生と付き合いたがるような男の子は入学してこないと思う・・・べつに・・たいした根拠はないけど・・

・

「まあ、どっちみちずっと男の子を避けてるワケにはいかないんだから、少しづつ馴れておかなきゃ！」

「・・うぅ・・・」

・・たしかに・・レナの言うことにも一理あるけど・・・オレずっと女の子ばかりの中にいたから・・今さら男の子とどんな話すればいいのかわからないんだよなぁ・・・

「今日はいつものユウじゃないんだから、恥ずかしがらず思い切っちゃえばいいのよ！」

「！！」

・・レナ・・まさか・・それでオレにこんな恰好させたんじゃないだろうな！？

オレたちが戻るとサヤちゃんが・・・

「これからカラオケ行こうって話してたんだけど、レナとユウちゃんもカラオケでいい？」

「ぇ？・・えっと・・」

「いいわよ！」

！・・オレはカラオケはやめて欲しいと思ったけど、そう言う前にレナがＯＫしてしまった・・・

「・・ちょっとレナぁ・・・」

「いいじゃない、きっとユウも楽しめるわよ。この前だって結構楽しそうだったじゃない！」

「・・それは・・・」

・・たしかに楽しかったけど・・あの時はレナとサヤちゃんだけで、男の子なんかいなかった・・・

・・でも結局、言い出せないままオレたちはカラオケに行くことになってしまった・・・

カラオケボックスに入ると、男の子とオレたち女の子は３人づつ向かい合わせに座った。

・・これは・・気を付けないと簡単にパンツが見えてしまいそうだ・・・常に足をピッタリ閉じてなきゃ・・それでも外側から見えてしまいそう・・・

・・男の子たちが、ニーソから出ているオレの太モモを見てるような気がして・・いたたまれない・・・

レナやサヤちゃんはこういうのに馴れてるようで、飲み物やスナックを注文したり、男の子たちに何を歌うか聞いたりしている・・・そのあいだ、オレはただずっと座ったままだ・・・これじゃオレ・・気が利かない女の子だと思われそう・・・でも何したらいいかわかんないし・・・

「じゃぁ、おれたちＧＲｅｅｅｅＮ！」
そう言ってケンジが番号を入力する・・・曲がかかると・・・

“ララ～・・・”

ケンジとリョウがふたりでＧＲｅｅｅｅＮを歌い出すと、かなり上手で驚いた・・・短髪のリョウのラップもなかなかカッコイイ・・・

・・どうしよう・・オレ・・歌はあまり知らないし・・得意じゃないのに・・・

ふたりが歌い終ると・・・
「じゃぁ次あたしたちＡＫＢ～！」
そう言ってサヤちゃんがオレの腕を引っ張った！
・・そんなぁ・・オレも?!
「ほら行きなさいよ、このまえ練習したでしょう?」
え?!・・・それじゃレナ・・あの時からこんなことする計画だっ

たのか?!・・・オレ・・ハメられちゃったのかなぁ・・・

・・うぅ・・こうなってしまったらしょうがない・・・オレも腹をくくるしか・・・

・・でも・・こんなミニスカートで踊ったら・・間違いなくパンツが見えちゃう!

・・もうっ!・・レナのイジワル~!!

“ララララ~　ララララ~　・・・・　ララララ~”（注：ＡＫＢ４８の『会いたかった』を歌っています）

・・うぅっ・・黒いスカートに黒いパンツだから・・目立たないことを祈るのみだ・・・

・・歌ってても・・男の子たちの視線が気になるよぉ~・・・

・・でも気にしてたらＡＫＢなんて踊れない・・・とにかくオレはサヤちゃんに合わせて踊りながら歌うのに集中するしかなきゃ・・・

「あ~・・疲れた・・・」

ＡＫＢの曲は歌って踊るともうクタクタだ・・・

「ユウ、ちゃんとおぼえてたじゃない。上手だったよ!」

「!・・レナ、ヒドイじゃない!最初からそのつもりだったんでしょう?この前カラオケに来たのだって・・・」

「さあ、なんのこと?」

「!」

・・レナったら・・すっとぼけちゃって・・・

「あ、ユウちゃん、アキラがエグザイル歌うよ!　アキラってすっごく上手いんだよ。名前も同じだけどね。」

サヤちゃんがオレの耳元で言った・・・

「・・ほんと?」

・・ケンジとリョウも上手だったのに・・アキラはもっと上手いのだろうか？

でもアキラが歌い出すと、ほんとに上手だった！　まるで本物の歌手みたい・・・エグザイルの中にいても全然おかしくない感じだ！

「ね、上手いしカッコイイでしょう！」

「う・・うん・・・」

・・だけど・・マイクの持ち方とか・・ちょっとカッコつけすぎだなぁ・・・オレはやっぱり・・リョウの方がカッコイイと思うけど・・・

・・でもリョウはスポーツマンだからなぁ・・・オレは自分がスポーツが苦手だからか、スポーツマンには若干のコンプレックスみたいなものがある・・・そして・・その裏返しなのか・・憧れのようなものも・・・

・・それは女の子になった今も変わらない・・・スポーツマンはステキだとは思うけど・・なんか苦手だ・・・

！！・・・オレ・・なにヘンなこと考えてるんだろう・・・べつにお付き合いするワケじゃないんだから、苦手とかステキとか関係ないのに・・・

「ちょ・・ちょっとゴメン・・」

オレはなんだかいたたまれなくなって、一息つくためにトイレに行った・・・

「あ～ぁ・・・」

便器に座ると思わずためいきが出る・・・いくらこんな服を着て・・オレじゃないみたいでも・・中身はいつものオレのままだ・・・人

間そんなに簡単に変われるもんじゃないんだなぁ・・・

・・カラオケでみんなでワイワイ盛り上がれることが出来れば楽しいのはわかってるけど・・・オレはそういう性格じゃないし・・・

・・オレも女の子になって・・少しは社交性も出て来た気もしてたけど・・それはあくまで相手が女の子や大人の場合だ・・・同年代の男の子が相手だと・・昔よりヒドくなった気がする・・・

・・なんだか意識しちゃうっていうか・・・オレ・・男の子だったころ・・どんな感じで男の子としゃべってたんだろう・・・なんだか全然思い出せない・・・

「ふう・・・」

オシッコした後をトイレットペーパーできれいに拭いてパンツをはく・・レナのパンツを汚しちゃ悪いからちゃんと拭かなきゃいけない・・・まあ、オレはいつもきれいに拭いてるけど・・・

・・それにしても・・レナったら高校生のクセに大人っぽいパンツ持ってるなぁ・・・黒の中にも光沢がある黒い糸で刺繍がしてあって・・・黒いレースと相まってすごくステキだ・・・オレもこういうの・・1枚くらい買おっかなぁ・・・

手を洗ってトイレから出ると・・・

「あっ・・!」

角を曲がったところにいきなりリョウがいたから驚いた・・・

「あっ・・ト、トイレ？　どうぞ・・」

「いや、そうじゃなくて。」

「・・あ・・そぅ・・・」

・・じゃぁ・・なんでこんなところにいるんだろう・・女の子がトイレいってるそばにいるなんてどうかと思う・・・

オレが部屋に戻ろうとリョウの前を通ると・・・
「ユウちゃんって付き合ってる人いるの?」
「え?・・ぁ・ぅ・うん・・いるけど・・・」
一瞬“いない”って言おうかと思ったけど・・“付き合って”とか言われたら困るから頑張って“いる”と言った・・・
「え、そうなんだ・・どんな人?」
「ぁ・・ぇっとぉ・・年上の人・・・」
「へぇ〜年上なんだ・・・」
「ぅ・うん・・・」
オレが急いで戻ろうとすると・・リョウも一緒について来る・・・

「その人とは良く会う?」
「ぇ・・ぅ・ううん・・・東京にいるから・・・」
「遠距離なんだ?」
「・・うん・・・」
・・うぅ・・なんかしつこいなぁ・・・

・・もうすぐ部屋だって時にリョウが・・・
「遠距離なんか上手くいかないんじゃない?」
・・ドキッとした・・・
「!・・・なんで!?」
「いゃ・・なかなか会えないだろうから・・・」

!・・たったそれだけのことで?!・・オレと純平が上手くいかないなんて・・・ヒドイ!!

「あんたに何がわかるのよ!　わたしたちお互いに大切に想ってるんだもん!!」
オレは腹が立って、思わず大声をあげてしまった。

・・なんてヤツだ・・リョウのことをちょっとでもカッコよく思ってしまった自分が許せなかった・・・

「わたしもう帰る！」

・・オレはそのまま部屋へは戻らず、外に出てしまった・・・

・・やっぱり・・男の子なんてキライだ！

「ユウ～！！」

リョウから聞いたのか、レナが走って追いかけてきた・・・

「どうしたのユウ？急に帰るなんて・・」

「・・どうもしてない・・・」

「リョウに何か言われたんでしょう！」

「！！」

「やっぱりね、まさかアイツが告るとはねぇ・・・」

「！・・告ってなんて・・ただ付き合ってる人がいるか聞かれただけ・・・」

「それで？」

「・・もちろんいるって言ったわよ・・そしたら・・遠距離なんか上手くいかないなんて・・・」

「そういうことか・・リョウはスポーツバカだから女の子の気持ちなんて解らないのよ！気にしなくていいよ！」

「・・で・・でも・・・」
・・オレもほんとは・・心配してないワケじゃない・・・メールだけじゃなくて・・純平と会いたくて泣きたくなっちゃう時もあるし・・・
・・それに・・純平にホントのことをいつまでも隠しておいていいのか・・・でも・・言っちゃったら・・オレたちは別れなきゃいけなくなるんじゃないだろうか・・・そんなことをいつも考えてる・・・
「あ～ぁ・・ホントいうとね、アキラにユウのこと軽くナンパしてもらおうと思ってたの。」
「!!・・な・・なんで?!」
「ユウに男の子に対する免疫をつけといてあげようと思って。」
「・・め・・めんえき?!」
「でもまさかリョウが先に告るなんて思わないから・・アイツよっぽどユウのこと気に入っちゃったのね。」
「・・・・・」
「許してやってよ、アイツも悪気はないんだからさ。」
「・・・・」
「さっきユウが急に怒っちゃったから、アイツ可哀想なくらい慌ててたわよ!」
「・・・・!」

「ユウ、戻ろう?みんな待ってるよ!」
「・・ぅ・・うん・・・」
・・オレも気持ちが落ちついてきたら・・なんであんなに怒ったのか良くわからなくなってきた・・・

「行こう！　サーヤがユウとＰｅｒｆｕｍｅ踊るんだって楽しみにしてたわよ！」
「え？！　パ・・パフュームなんて踊れないよぉ！」
「大丈夫だって！適当に踊ってればいいんだから！！」
「・・そ・・そんなぁ・・わたしやっぱり帰るぅ・・・」
・
・・オレはイヤがったけど・・結局レナに連れ戻されてしまった・・
・
「あっ！ユウちゃんお帰り！」
・・サヤちゃんが屈託のない笑顔で向かえてくれると少しホッとする・・・
「コイツ余計なことでも言ったんだろう？ユウちゃんゴメンね！」
アキラがリョウの短髪の頭をたたきながら、軽い調子で言った・・・
こういうとき軽い言葉って助かる・・・
「・・わたしも・・あんなに怒らなくても良かったのに・・・ごめんなさい・・・」
「いいからいいから、楽しもう！」
「！！」
アキラがそう言ってオレの肩を抱いて横に座らせた・・・オレの反対のとなりにはサヤちゃんが座る・・・向い側にはレナをはさんでケンジとリョウが・・・リョウはちょっとバツが悪そうに見えた・・
・
それからオレたちは3時間、楽しくカラオケで歌い続けた。
レナがバラしちゃったのを知らないのか、アキラが時々オレにちょ

っかい出してきたけど・・レナに頼まれてるのを知ってたから、オレも適当に対処できた気がする・・・

・・でも・・・やっぱりＰｅｒｆｕｍｅは恥ずかしかったなぁ・・・ぜんぜん上手く踊れなかったし・・・

３周年を迎えて

『オレは女子高生』は今日６月２３日で私のＨＰで公開してから３周年を迎えました。
ずっと読んで下さっている方も、最近になって読んで下さった方も応援ありがとうございます。
まだ１年以上続くと思いますが、今後も読んでいただけると嬉しいです。

私としては、いつも「もう少し書けたらなぁ・・・」という思いでいるのですが、１年が５２週なので平均すれば週に１話は書けている計算になり、目のことで書けなかった期間があることを考えればそんなに悪いペースでもないのかな?とも思いますが、どうでしょうか・・・

この話にとってちょっと問題なのは、「小説家になろう」がリニュ

ーアルして二次小説と別れてしまったため、この「オレ女」を読んで下さる方は二次小説が好きな方と重なっていたようで、すっかり読者の伸びが停滞していることでしょうか・・・リニューアル前は入院によって長期間書けなかった事により落ちていた順位も少しづつ上がっていたのに、最近はすっかり伸び悩んでおります（笑）

まあ、そうは言っても私は順位はさほど気にするタチじゃないのですが、やっぱり低いよりは高い方が多くの方の目にとまって読んで頂けるのではないかと思うので、多少は気にして頑張っていきたいと思います。

何かこの「オレ女」を多くの方に知っていただく良い方法でもあれば良いのですが・・・

ところで、この話もどちらかと言えば終わりに向っています。（まだまだ終りませんけど）なのでいろいろ話したい事もあるのですが、書けないことが多いので難しいです。それで今回は「オレ女」も含めて私の小説の書き方なんかを何となく書いてみようかと思いました。興味がある方だけ読んでいただければと思います。

私の場合必ず、まず始まり方と、おぼろげながらも終り方を考えてから書き出します。物語りは面白く始めるのは簡単ですが、終るのは難しいので、終りが決まらないうちには書き始めません。だいたいでも終りが決まっていれば、その話がどういう方向へ向う話かも迷いませんし、途中で話が脱線してもストーリーに戻すことが出来ます。

始まり方というのは、３６話のおまけにある「制作おぼえがき」に毛の生えたみたいなもので、だいたい１章分のあらすじみたいな感

じです。

プロットはあまり細かく書きません。こんなことが起こるだろうな・・・というのを箇条書きにしたものです。もし初めから何回の話か決まっていれば、ちゃんとしたプロットを作るべきでしょうが、どれくらいの長さになるか決まってない場合は、細かく書いてもその通りにはいかないので、忘れないための覚え書きのようなものです。

この話の場合、最初に書いたプロットにはファッションショーに出るまでが1年の話として書いてあります。結果的には書いていく中で、この話が長くなることが判った事と、1年でそこまで持って行くには無理があることなどから2年間の話になりました。

プロット2にはタマを取った頃から刈谷とのクリスマスまでが書いてあります。（プロット1の時点で刈谷との出来事は書いてありますが時期が違っていました。）

プロット3が現在のもので、秋くらいまでのだいたいの出来事が書かれています。思いついたエピソードもそのつど忘れないように書き足していきます。この話の場合、最初に考えてから実際に書くまでに、半年から1年の間があるので、書いておかないと忘れてしまいます（笑）

私は感想への返事などでも、たびたび“ストーリー”や“エピソード”という言葉を使っていますが、それはこの話独自のもので、例をあげると“ストーリー”とは「東京で純平と会ってキス以上に行きそうになる」というもので、なぜ東京に行くのか?そこでどんな事がおこるのか?というのが“エピソード”にあたります。

“エピソード”の部分は直前まで決まらないこともありますし、書きながら考えることも多いです。みなさんのご要望で変えたり、付け足したりすることもあります。ですが“ストーリー”は誰が何と言おうと変わることはありません。

私の場合、話のアイデアは色んな形で現れます。文章で思い浮かぶ時はわりと楽に書けますが、映像で現れる時はその映像を文章化するのに苦労します。イメージやシーンで現れる時は、大抵短い場面なので、そこに持っていくまでや、その前後を膨らますのが大変です。1カットの絵で思い浮かぶ時はすごく大変です。それがどの話の何処に入るのかを考えて無理なく入れないといけないからです。

人物についてはあまり細かく設定せず、その人物の行動原則だけをしっかり決めます。だからこの話では相手によって、また場面によって言葉使いが違ったりします。

特に有希はそれ以外にも男の子っぽい時や女の子っぽい時があったり、ストーリーが進むにつれても変わっていたりします。それも進むにつれてどんどん女の子っぽくなるわけではなく、話し方などは最初の方がわざとらしく女言葉だったり、この頃はことさら女言葉でなく自然に話してたりという感じですが、それでも“有希はこういうコ”“有希はこういう時こういう行動を取る”というのが決まっているので、どんな話し方をしても“有希っぽい”感じが出ると思います。

逆にゲストキャラは必要ないところまで設定を決めることも多いです。直接話には出てこなくても、展開に困った時なんかに役立つこ

ともあります。まあ、無駄なことも多いですけど（笑）

たぶん私の書き方の特徴は、言いたいことそのものではなく、まわりから書いていく所ではないかと思います。
説明しにくいですが、イメージでいうと、紙をある形に切って、その切り取った形自体ではなく、切り抜いた穴の空いた方というか・・・

彫刻で言えば、盛り付けて造る粘土彫塑ではなく、削り取った後が形になる木の彫刻というか・・・

これはたぶん、ことさらそう書こうとしてる訳ではなく、私の話し方がそうだからだと思います。

例えばテレビを観て面白かったことなんかを人に話すとき、ただ面白かったことを話すのではなく、その番組はそもそもどういう事が面白い番組で、誰が司会で、その場面には誰がいて、それまでの話の流れはどういう流れで、誰がどう振ったことに対して、こう言ったのが面白かったというような話し方をします。
するとその私から話を聞いた人は、日にちが経つとその番組を観たと思い込んでいることが良くあるのです。

時々、この「オレ女」を読んで感情移入しやすいとか、情景を想像しやすいと言って下さる方がいるのは、たぶんこの書き方のせいではないかと思います。

なんかあまり上手く書けませんでしたが（笑）「オレ女」はだいたいそんな感じで書いています。
この「３周年」の文は今日ＵＰするために急いで書いたので判りに

くいところもあるかも知れませんが、感想ででも聞いていただければ、もっと詳しく説明出来るかも知れません。（出来ないかも・・・）

それでは４周年へ向けて、今後とも「オレは女子高生」をよろしくお願いいたします。

第１７１話　ＡＶ　もしも元男の子の女子高生がアダルトビデオを観たら・・・

この回は途中で完全版に移行しますので１８歳以上の方は初めから
そちらをお読みください。

第１７１話　ＡＶ　もしも元男の子の女子高生がアダルトビデオを観たら・・・

「あぁ～・・退屈だなぁ・・・」
ベッドに寝転がってＪＩＮＯＮをパラパラ見てたけど・・さすがに飽きてしまった・・もう何度も見たヤツだし・・・

ホントは今日は撮影の予定だったんだけど、衣装が届かなくなってしまってキャンセルになったから、やることが無い・・・麻衣も友達と遊びに行っちゃったし・・・

・・オレも遊びに行こうかと思ったけど・・どこかに行くのも面倒くさい・・・女の子はお出かけするのもお化粧とか服の準備とかけっこう大変なのだ・・・

刈谷先生にもらったＤＶＤも観ちゃったし・・・

・・純平が出てるドラマは・・自分の部屋で観れるようになったからって、あまり観てるとまた会いたくなっちゃう・・・

「う～ん・・・」
どうしても・・目は兄さんの隠し扉にいってしまう・・・
「観ちゃおっかなぁ・・・」
・・あの奥に“封印”したエッチなＤＶＤ・・・エッチなビデオなんて中学生の時、鈴木のウチで観て以来観たことがない・・・

・・だって女の子になっちゃったんだもん・・・エッチなビデオなんて・・・

「・・うぅぅ・・・」

・・でも気になる・・・

・・いいのかなぁ・・女の子がエッチなＤＶＤなんか観ても・・・

・・っていうか・・それ以前にオレはまだ１７歳だから、本当は観ちゃいけないんだけど・・・でも中学の時に観ちゃったから・・それは今さら関係ないと思う・・・

・・だってさ・・女の子は１６歳になったら結婚もできるんだもん・・・それってもちろんエッチなこともするって事だろうし・・・実際にすることが法律で認められてるのに・・ＤＶＤで観ちゃダメだなんて・・ちょっとヘンだと思う・・・オレたちは大人が思うほど、何にもわからない子供じゃない！

・・まあ・・オレは本当は男だから・・１６歳じゃ結婚できないんだけど・・・

　このまえから、オレは刈谷先生が言ったことがずっと気になってる・・・女の子はＤＶＤの中の女の人になった気持ちでＡＶを観なきゃいけないんだって・・・（１６６話参照）

・・どんな感じかなぁ・・女の人が・・男の人にエッチなことされるのって・・・・

・・刈谷先生は“ドライ”は女の子の感覚に似てるって言ってたけど・・どれくらい似てるのかは良くわからない・・・たしかに男の子の頃、自分でやった感覚とは全然違うけど・・だからと言ってそれが女の子の感覚なのかはオレもわからない・・・

男の子の頃はオチンチンをしごいて・・出ると気持ちが良かった憶えがあるけど・・・何が気持ちが良かったのかハッキリしたものは無かった気がする・・・そして、出してしまうと急にエッチなことから気持ちが離れてしまっていた・・・単純にスッキリするっていうか・・・・

でも“ドライオーガズム”は違う・・・昔タマがあったあたりがムズムズしてきて・・アソコから内モモのあたりまでが熱くなってきて・・しばらくすると下半身が固くなったような重くなったような気がして・・オチンチンやエネマグラがお尻の中でグニョグニョ動きだして・・・すると胸から下が・・時には全身が熱くなって・・身体中の筋肉が勝手にピクピクして・・・

・・そして絶頂を向かえると・・オチンチンから溢れ出した熱い液体が・・太モモのあたりに広がって・・まるでお漏らししちゃったみたいにお尻の下まで流れ落ちる感覚がある・・本当は何も出てないのに・・・そして全身がけだるくなって・・頭の中が真っ白になってしまう・・・その感覚はスッキリするのではなく、余韻がずっと続いて・・すぐにまたしたくなっちゃうのだ・・・

・・女の子は何度でも気持ち良くなれるって、よく女性誌には書いてあるけど・・そういうところはドライと似てるかも知れない・・・

・・女の子ってどんな感じなんだろう・・・知りたいなぁ・・・ＡＶ観ると解るかな？・・・だったらこれはイケナイ行為ではなく・・ひとつの勉強といえるかも・・・・・

「よし！決めた！！」

オレは、意を決して刈谷先生にもらったＡＶを観てみることにした・

・・

・・だって・・オレは女の子になる勉強中なんだもん・・・

・・女の子のいろんな事を知らなきゃいけないんだ・・・エッチの時の女の子なんて・・ＡＶ以外じゃ観れないんだもん！

～～～　これより自粛、以下『オレは女子高生・完全版』へ～～～

ｈｔｔｐ：／／ｎｏｖｅｌ１８．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ４４４８ｐ／

今回は（も？）短かったので最近お気に入りの妄想など書いてみました。

おまけ　妄想「翔太の場合」

ある大きな洋館に連れてこられた少年。

少年の名前は翔太、小学校５年生の１０歳。

翔太は母ひとり子ひとりの母子家庭で育ってきた。
決して裕福ではなかったが、幸せに暮らしてきた
サッカーが好きな元気な少年だ。

しかし突然、最愛の母は交通事故で死んでしまう。
するとその記事を見た翔太の父親と名乗る男が現れた。
父の名は一色、大きな病院を経営していた。

母が男の元を去ったのは翔太がまだ物心つく前だった。
母がなぜ男の元を去ったのかはわからなかったが、
身寄りのない少年は父親と名乗る男の元へ行くしかなかった。

共にサッカーをしていた親友とも別れ、ひとり父の家にやってきた翔太、
しかしそこで聞かされたことは翔太にとって衝撃的な事実だった。

父は事も無げに言った。
「お前はもう死んだのだ」と
訳がわからない翔太に、父は翔太の「死亡診断書」を見せる。

父の話では、もう翔太は戸籍上も死んだことになっていた。
呆然となった翔太に父は追い討ちをかけるように言った。
「お前には翔子という双子の妹がいた。しかし翔子は生まれつき心臓が悪く1年前に死んでしまった。」

父は翔太の気持ちなど気にもかけず話を続ける。
「しかし翔子はまだ戸籍上は生きている事になっている。
これからはお前が翔子として生きていくのだ。」

双子の妹にされてしまった翔太の運命やいかに・・・

この話はたぶんちょっとエッチな展開もあると思います（笑）

第172話　花見　オレはシッパイはくり返さない

オレは今でも、ちょくちょくエステに行って全身をマッサージとかしてもらっている・・・もうムダ毛は永久脱毛したから、ほとんど生えてこないけど・・たまに1、2本は生えてくることもあるから、そういうのを抜いてもらわなきゃいけないし・・・オレは女の子の身体のケアはいまいち得意じゃない・・だからプロのお姉さんにやってもらった方がいい。

・・それにオレはモデルでもあるから・・身体のことは他の女の子よりも気を使わなきゃいけないのだ・・・

「ユウちゃんもすっかり女らしくなったわねぇ、最近は大人っぽいくびれも出てきちゃって！」

「！」

お姉さんはオレのウエストを両側から撫でながら言った・・なんか・・くびれを強調されてるようで恥ずかしい・・・

「もう後はアソコを女の子にするだけね。」

「！！」

お姉さんはオレもハルカさんのようなニューハーフになるものだと思ってるようだ・・・

・・でも・・オレは決してニューハーフじゃない・・・ただ女の子になりたいだけなのだ・・・

・・だけど・・刈谷先生と関係するようになってから・・全身女の子だったらという思いは日に日に強くなってくる・・・だって・・お尻じゃ普通の人とは出来ないんだもん・・・

・・べつに・・いろんな男の人としたいワケじゃない・・・でも・・もしもまた純平と会って・・そういう雰囲気になったとき・・オレは断る自信がない・・・でも今のままじゃ・・・

・・こんなことじゃ・・純平と会うのまで怖くなっちゃう・・・

・・女の子になるという事は・・結局そういう所に行きついてしまうのだろうか・・？

「ユウちゃんいる～？」

「ぁ・・二光さん・・こんにちは。」

「あ！いたいた！　ユウちゃん、この前はありがとうねぇ～　おかげでお店も順調よぉ～！」

「ほんとですか？良かった！」

・・別にオレのおかげじゃないけど。

「今度の日曜日みんな集まってお店の順調な滑り出しも兼ねてお花見するんだけど～　ユウちゃんも来るでしょぉ～？」

「ぇ・・お花見・・・？」

・・オレは去年お花見でシッパイしてるからなぁ・・・

「・・わたしは行きたいんだけど・・おかあさんが許してくれないと思う・・・」

「どうして～？」

「去年お酒飲んで酔っぱらっちゃったから・・」

「だったら～　今年は飲まないようにすれば良いんじゃない？」

「・・でも・・・」

・・オレはお酒のことでは・・かあさんに信用なくなってるからなぁ・・・

「・・いちおう聞いてみますけど・・たぶんダメだと思います・・・」
「ユウちゃんのお母さんって　ずいぶん厳しいのねぇ～」
「ううん、わたしがちゃんとお母さんとの約束を守れなかったからいけないんです・・お母さんはすごく優しいんです。」
「ユウちゃんはお母さんが大好きなのねぇ～」
「はい！お母さんはわたしの憧れの女の人のひとりなんです！」
「まぁ～！　娘にそんなふうに思われてるなんて、ユウちゃんのお母さんって幸せ者ね～！」
・・かあさんも・・そう思ってくれると嬉しいけど・・・
「ワタシもユウちゃんみたいな娘が欲しくなっちう～！」
「・・そ・・そんな・・・」
・・オレはそんなに良いコじゃないから・・そんなふうに言われると居心地悪い・・・
「それじゃ、お母さんに聞いてみてね～　もしダメだって言ったらワタシが説得してあげてもいいわよ～！」
「・・はぃ・・・」
・・二光さんが言っても・・たぶんダメだと思うけどなぁ・・・

- -

- - - - - - - -

“カチャカチャ”
2階のオレの部屋で本を読んでいると、下で小さな音がした・・かあさんが帰ってきたみたいだ・・・
「・・おかあさん・・」

「あら、有希まだ起きてたの？」
「うん・・・」

「ん？・・なに？　かあさんに話があるんじゃない？」
「ぅ・・うん・・・」
「なに？　モジモジして、お小遣いが欲しいの？」
「ううん！・・そうじゃないけど・・・あのね・・・」
「？」
「・・二光さんたちが・・お花見に行かないかって・・・」
「お花見？！　ダメよ、去年行ってわかったでしょう？　みんなお酒飲むのよ。　有希お酒すすめられたら断れないでしょう？」
「うぅ・・」
・・やっぱり言われちゃった・・・

「・・でもさぁ・・今年は断れるかもしれないじゃない・・・」
「断れる“かも”って？　自信ないんでしょう？」
「・・うぅ・・・」
・・たしかに・・絶対に断れるかって言われたら・・いまいち自信ないけど・・・
「もういいわね、そういうのは有希が大人になってから行きなさい。」
「・・・・・」

かあさんはそれだけ言うと、お風呂に入ってしまった・・・

・・かあさんが言うことはもっともだけど・・・２０歳になるまで待ってられない・・・

・・オレは・・女の子になるつもりだけど・・・もしかしたらニューハーフにしかなれないかも知れない・・・だったら・・ハルカさ

んたちとお友達になっておくのもムダじゃないと思う・・・

・・いろいろ相談に乗ってもらえるかもしれないし・・・

3月も終りの日・・・オレは久しぶりに刈谷先生とホテルのベッドにいた・・・

「ユウちゃんとするの4週間ぶりねぇ！　早く会いたかったわ。」

「・・おじさま・・ユウも・・・」

「でも会えない間ユウちゃんはひとりでしてたんじゃない？ＡＶ観ながら！」

「そ・・そんなぁ・・・」

「あら、してないの？」

「・・ぅっ・・ううん・・した・・けど・・・」

「やっぱり！　それで？どうだった？　女の子目線で観たＡＶは？」

「ぅ・・うん・・スゴかった・・・」

「どんなふうに？」

「・・・い・・言えない・・そんなの・・・」

「ユウちゃんったら、恥ずかしがらなくていいのに！」

・・そんなこと言ったって・・・恥ずかしいものは恥ずかしいのだ・・・画面の中のエッチを観ながら・・いつもより気持ち良くなるなんて・・・

「あのＡＶね、男の子がカッコイイのを教えてもらったのよ！」

「！！」

「自分がされてる気分で観るなら、相手の男性はカッコイイ方が良いでしょう?」
「・・うん・・・」
・・たしかに・・男の人が観るんだったら・・自分よりカッコイイ男はちょっとイヤかもしれないけど・・女の子として観るなら・・男の人はカッコイイ方がいい!
・・だって・・自分がされてる気分なんだもん・・・相手はカッコイイ男の人の方がいいに決まってる・・・
「縄のヤツも観た?」
「!・・ぁ・・あれは・・まだ・・・」
「そうね、ユウちゃんにはまだ早かったかな?」
「・・うん・・・」
「まあ、観たくなったら観ればいいわ。もしああいうのやりたくなったら、してあげるわよ?」
「!!!」
・・先生って・・もしかして・・そういう趣味・・・?
「ううん、心配しなくてもソフトなやつなら痛くないわよ。もちろんユウちゃんが痛いのが良いならそれでもいいけど?」
「!!・・ぃ・・いいです・・しなくて・・・」
「ふふっ、冗談よ!」
「!!」
・・な・・なんだ・・ビックリしたぁ・・・
「・・もうっ・・おじさまのイジワル・・・」
・・ホント刈谷先生ったら・・イジワルなことばかり言うんだからぁ・・・
・・でも・・あんなに縛られてホントに痛くないのかな・・・

事も終って身支度を整えていると・・・
「こんどの日曜日ユウちゃんも行くんでしょう?」
「え?・・どこに?」
「お花見よ!　今年は西公園でやるんでしょう?」
「ぇ・・なんで・・おじさまが知ってるんですか?・・お花見のこと・・・」
「だってあたしも“組合い”だもの!」
「ぁ・・そっか・・・でも去年は・・・」
「あ～　去年は忙しくてこっちに来れなかったのよ。」
「・・そうだったんですか・・・」
・・それじゃ・・もしかしたら去年・・先生と会ってたかも知れないのかな・・・?

「ユウちゃんみたいな、あたし好みのコが来てると知ってたら、去年も無理してでも行ったんだけど。」
「・・そんな・・・」
「もちろん今年も行くんだろうと思ってスケジュール空けたんだけど・・ユウちゃん行かないの?」
「・・そ・・それが・・・」

オレはかあさんに怒られて行けないことを先生に話した・・・

すると先生は・・・
「だったらあたしが迎えに行ってあげるわ!　わざわざあたしが行けばお母様だって行かせない訳にはいかないでしょう?」
「・・さ・・さぁ・・・それはどうかなぁ・・・」
「いいわ、あたしにまかせておきなさい!　お母様には言わずに、

ユウちゃんはただお花見に行く準備だけしてればいいから。」
「・・そ・・そんなことしたら・・おかあさんに怒られちゃう・・・」
「大丈夫！　あたしにまかせなさいって！」
・・うぅ・・本当に大丈夫なのかな・・・オレ心配だなぁ・・・

日曜日、オレは着替えてお化粧すればすぐに出かけられるように準備を整えて、刈谷先生が来るのを待っていた。
いくらすぐに出かけられるようにっていっても・・さすがによそ行きの服を着て、お化粧してるとバレてしまう・・・
かあさんは日曜日も仕事でいないことも多いけど、今日はかあさんもウチにいる・・・なんだかドキドキしてきた・・上手くいくかなぁ・・・
夕飯を食べないと怪しまれるから軽く食べた・・先生が向かえにくるのは8時すぎごろのハズだ・・・

ウチの前で車が停まる音が・・来た！

“ピンポン！”
「は～い！」
かあさんが出ていくと・・・
「刈谷先生！　どうなさったんですか?!」

驚くかあさんの声を聞きながら・・オレはなんか悪いことしてるみたいな気がした・・・

もちろんオレが刈谷先生に頼んだワケじゃない・・オレはかあさんがダメだと言ったら行かないつもりだった・・だけど・・こんなふうになったら・・かあさんはオレが先生に頼んだと思うんじゃないだろうか？

先生がかあさんに何か話している・・・たぶんオレを花見に連れて行くために来たことを伝えてるんだろう・・・

「有希・・有希！　刈谷先生がいらっしゃったわよ！」

「え?!　はい・・」

オレはいかにも先生が来ることを知らなかったような顔をして玄関へ・・・かあさんに先生がいきなり来たって思ってもらえるように・・・

「せ、先生・・なんで・・・」

・・驚いたふうに言ってみたけど・・ちょっと白々しかったかな・・・

「急に来ちゃってゴメンね。ユウちゃんをお花見に誘いに来たのよ。」

先生もオレに合わせてくれた・・・

「え?!　で・・でも・・お花見は・・・ねぇ、おかあさん・・」

オレは“行っちゃダメでしょう?”って顔でかあさんを見た・・するとかあさんは諦めたように・・・

「せっかく先生が向かえに来てくださったんだから・・行って来なさい。」

「え?　いいの?・・行っても・・?」

「でも先生、有希はまだ子供ですからお酒は飲ませないで下さいね。」

「もちろんよ！あたしが付いて見張ってるから心配いらないわ！」
！・・先生ったら良く言うよ・・自分だってオレにワイン飲ませたクセに・・・

「先生、ここじゃなんですから上がって下さい。　有希、何してるの！あなたはさっさと行く準備してらっしゃい！」
「あ、はい。」
オレが急いで2階の自分の部屋に上がろうとすると・・先生が・・・
「そうだわ、忘れてた！　ユウちゃんにお土産があったのよ！　これ春物のコートなんだけど、ユウちゃんに似合いそうなのがアウトレットで安かったから買って来たの！　ほら、バーバリーのコート！　今日なんか着るのにピッタリでしょう！」
「ぇ・・・」
オレは思わずかあさんの顔色をうかがった・・・バーバリーってけっこう高いハズだし・・・先生に高いもの買ってもらっちゃいけない事になってるから・・・でもかあさんは・・・
「まあ、すみません・・有希もちゃんと先生にお礼言いなさい。」
「ぁ・・はぃ・・お・・じゃなくて・・先生、ありがとうございます。」
・・あやうく“おじさま”って言いそうになってアセった・・・
「いいのよいいのよ、安かったんだから！」
・・先生は満面の笑みで・・嬉しそう・・・

・・たぶんかあさんがいる所で渡せばダメとは言えないだろうから・・わざと高いもの買ってきたんだと思う・・・先生ったら・・ずいぶん悪知恵が働くなぁ・・・

　オレは自分の部屋に入ると鏡台に座り急いでお化粧をした。あらかじめ顔は洗って後はお化粧するだけにしてたのだ。近頃ではオレ

も簡単なお化粧なら１０分もかからず出来るようになった。

服は準備していた春物の切り替えワンピース。上は白いブラウス風で下はピンクのスカートになっている・・お花見は座ったりするから、上下別だとブラウスのスソがスカートから出てしまったりして気を使うから、一見するとブラウスとスカートに見える切り替えワンピは便利なのだ。スカートの腰の位置も気にしなくていいし・・ただ、一体化されてるから、組み合わせを変えられないのが難点だけど・・・

あまり先生を待たせてもいけないから・・いや、先生はオレが準備に少しくらい時間がかかっても平気だと思うけど・・かあさんが気を使うだろうから、髪は巾広で花柄の布地のカチューシャをして纏めるだけにした。でも風が強いと面倒だから、束ねられるようにシュシュもバッグに入れておこう・・・

今年は去年よりも寒いから、ちゃんとコートも用意してたけど、せっかく先生が買ってきてくれたバーバリーのコートを着ることにした。表はシンプルなベージュで、裏地がバーバリー柄になってステキだ！

「お・・お待たせしました。」

リビングのテーブルでかあさんとコーヒーを飲んでいた刈谷先生は、オレを見ると立ち上がって・・・

「ほら！　やっぱり似合ってるわ、ステキよユウちゃん！」

「ぁ・・ありがとうございます・・・」

「ユウちゃんは何を着ても似合うけど、良い物を着るとさらにステキになるわね！」

「そ・・そんな・・・」

・・なんか・・かあさんの前でそんなこと言われると・・照れくさい・・・

「着こなしもバッチリよ！　それじゃ戸田さん、ユウちゃん借りてくわね。あたしがちゃんと見てるから心配ご無用よ！」

先生はオレの肩に手をまわして玄関の方へ・・・

「ぁ・・じゃ・・おかあさん行ってきます！」

オレは慌てて振り返りながらかあさん言った。

「行ってらっしゃい。先生にご迷惑かけちゃダメよ！」

「は～い！」

ブーツを履いて玄関を出ると、ウチの前で待っていた車に乗り込み西公園に向った・・・

・・かあさんは先生のこと・・すごく信用してるみたいだけど・・・もしあのとき、先生がオレにお酒を飲ませて悪い事したって知ったら・・かあさんはオレと先生を引き離すだろうか・・・？

・・でも・・もしそんなことになったら・・オレはどうしたらいいのかわからない・・・

・・オレはかあさんが言うことは守りたいけど・・・先生とも離れたくないのだ・・・

斉木さんが運転する車で西公園の坂の下についた。

西公園は花火大会やマラソンで有名な大濠公園からまっすぐ海側に行ったところにある、あまり大きくない山だ。結構急な坂を登ると広場があって、そこからまた長い階段を上がると光雲神社という神社がある。

ここの桜は有名で、この時期は正面から見ると山全体が桜で埋め尽くされているように見える。広い坂道の両側には下から上まで途切れることなく沢山のいろんな出店が並んでいる。

坂の下で車を降りて歩く・・・この坂は普段は車も通れる道だけど、お花見の時は坂の下で通行止めになっている・・・夜の出店って電球や提灯のあかりでなんだかロマンチック・・・梅ヶ枝餅・・カルメラ焼き・・金魚すくい・・ヨーヨー釣り・・風船・・射的・・焼きとうもろこし・・・夜店っていつ見てもワクワクする・・・

「カルメラ焼きなんて懐かしいわねぇ、ちょっとやってみようかしら・・ユウちゃんもやる?」

「うん!」

オレは丸いルーレットみたいなやつで、棒の先に付いた糸から垂れた針でどれかが当たるのをやってみた。

「よ〜し・・えい!」

オレが棒を勢い良く回す・・すると自然にゆっくりになった棒からぶら下がった針は、もう少しでお砂糖で出来たまねき猫のところで止まりそうになったのに、ちょっとズレてハズレのところに行ってしまった・・・

「あ〜ぁ・・もうちょっとで当たりそうだったのに・・・」

おじさんは小さなハズレ用のカルメラをくれた・・・

「じゃぁ、あたしはこっちをやってみようかしら?」

先生はパチンコのように斜めの板にたくさん釘が打ってあって、上

からビー玉を落すやつをやる・・・ビー玉が落ちたところによってカルメラ焼きの大きさが違うのだ・・・
「ほい！」
先生がビー玉を穴から落すと、カチカチ釘に当たりながらジグザグに落ちていって・・・なんと一番大きいヤツのところに入った！
「あ、大きいやつだ！　おじさまスゴイ！」
「こんなのまぐれよ。」
先生は大きなカルメラをおじさんから貰うと・・
「はい、あげる。」
そう言ってオレに袋ごと手渡した・・・
「え？　いいの？」
「いいわよ、あたしには甘過ぎるもの。」
「わぁ・・ありがとうおじさま。」

オレは自分の小さいヤツと割ってひと口食べてみた・・作ってから時間が経っていないのか、まだ少し温かい・・・
「ほんとだ、あま～い！」
・・これはたしかに大人が食べたら血糖値が上がりそうだ・・・これなら小さいので十分だった・・・先生に貰った大きい方は、割れないように持って帰って麻衣にあげよう！

「でも、さっきのは惜しかったぁ・・もうちょっとでまねき猫が当たりそうだったのに・・・」
「ふふふっ・・ユウちゃんったら、あれはおじさんが足で操作してるのよ！」
「え?！　インチキなの?」
「そうよ、知らなかった?」
「・・うん・・・」
「だいたいああいうのはインチキなのよ。昔からね。」
「・・な～んだ・・つまんない・・・」

「出店ってのはそういうのも含めて楽しむものなのよ。ハズレたけどそれなりに面白かったでしょう？」
「ぁ・・うん・・・」
「お客さんはハラハラドキドキして楽しくて、お店はハズレで儲かるってワケよ！」
「・・そっか・・そうですね！」
・・たしかに・・良く考えてみれば目くじら立てるほどのことじゃないかもしれない・・こういうのは楽しければそれでいいんだ！
・・大きいと喜んだところで・・どうせたいしておいしくもないんだから・・・

坂を上まで登ると・・・
「たしかこのへんにいると・・あ、いたわ！」
「！！」
・・広場にいる二光さんたちはすぐに見つかった・・・ハッキリいって二光さんたちを見つけるのは簡単だ・・・だってお花見にドレスや毛皮のコートで来る人なんて他にはいない・・・

「にっこ～！」
先生が手をふると
「刈谷！　あんた来たの～？！」
そう言いながら手を振った二光さんは、刈谷先生の後ろにいるオレをみつけて・・・
「ユウちゃん！今日は来れないんじゃなかったの～・・って何で刈谷なんかと一緒なのよ～？！」
「あら、ユウちゃんとあたしはお友達だものねぇ！」
そう言ってオレの肩を抱いて引き寄せた・・・

「刈谷！あんたユウちゃんに何かする気じゃないでしょうねぇ！ユウちゃんに変なことしたら承知しないから～！」
そう言ってオレの手を引っ張って先生から離しながら・・・
「ユウちゃん気をつけなさいよ～！　コイツすっごく手が早いんだから～！」
・・今ごろ言われても・・オレはもう先生に手を付けられちゃったもん・・・

「二光！　ユウちゃんにお酒飲ませちゃダメよ！　ユウちゃんのお母様との約束なんだからね！」
「・・わかってるわよ！　あんたに言われなくたって～・・なによ偉そうに！」
二光さんはブツブツ言いながら・・・
「みんな～ユウちゃんが来たわよ～！　でもお酒飲ませちゃダメだからネ～！」

二光さんに連れられて、オレもみんなの輪の中へ入った・・二光さんのとなりにオレ・・そしてもう一方のとなりには先生が座った・・・

“組合い”の人の他には二光さんのお店の人もいる・・・オレはパルコでブラを借りた女の人と目が合って軽くお辞儀をした・・・

「二光さん・・今日はハルカさんはまだなんですか？」
「あ、ハルカちゃんは今日は来れないみたいよ。」
「ぇ・・そうなんですか・・・」
「ユウちゃん、ハルカちゃんに会いたかったの？」
「ぅ・・うん・・ちょっと・・・」
「何か話でもあった？」
「ううん！・・そうじゃないの・・・」

・・べつに・・何を話そうってワケじゃないけど・・・ただなにか話せたらと思っていた・・・

「ハルカちゃん人気者だからね～　お店抜けられないのよ～！」
「そ・・そうなんですか・・・」
「なんだったら、携帯のアドレス教えときましょうか？　ワタシ知ってるけど・・・」
「ぅ・・ううん・・いいんです・・ちょっと・・いたら話してみたかっただけだから・・・」

すると刈谷先生が・・・
「ユウちゃんハルカに会いたいんだったら、今度お店に連れて行ってあげようか？」
「え？！」
「刈谷、あんた何いってるの～！　ユウちゃんまだ高校生なんだから～　あんなとこ連れて行っちゃダメよ～！」
「何いってんのよ。あんただってユウちゃんくらいの歳からああいうお店行ってたクセに！」
「もう～っ！　ユウちゃんはワタシたちと違って純粋なコなの～！　純情可憐な乙女なのよ～！」

・・オ・・オレはそれほど純粋でも・・乙女でもないけど・・・でもそういうお店はさすがにかあさんに聞くまでもなく、行っちゃダメなのはわかる・・・

「ユウちゃん行っちゃダメよ～！」
「はぃ・・・」
すると先生は・・・
「ユウちゃんはホント真面目すぎるわねぇ・・まあ、そこがまた可愛いんだけど！」

そう言って先生はオレの頭をナデナデした・・・すると二光さんも・・・

「ユウちゃんの頭を汚い手でさわらないで～！」

そう言いながらオレの頭をゴシゴシした・・・ヒィ～・・髪がグシャグシャになっちゃうぅ・・・どうやら二光さんもだいぶ酔ってるみたいだ・・・

時間が経ってみんな酔っぱらってくると、だんだんバラバラになってきた・・・刈谷先生も少し離れたところで二光さんに絡まれてる・・・でもなんか二人は意外に仲が良さそうだ・・・昔から知り合いなのかな・・・？

「ユウちゃ～ん、あたしのこと憶えてる～？」

いきなり紙コップを片手に横に座ってきたコがオレに声をかけてきた・・・

「・・えっと・・・・」

・・どこかで会った気がするけど・・・あっ！もしかして・・・

「聖子さんのコンサートの時の・・・？」

「そう！綾乃～！　憶えててくれるなんて嬉し～！！」

そう言ってオレに抱きついてきた！　コップの中身がこぼれちゃうよ！

「ユウちゃん、あたしね～　もうすぐ女の子になるのよ～！」

「女の子に？」

「オチンチン取っちゃって～　女の子にしちゃうの～！」

「え？！　ほんと？スゴイ！」

・・綾乃さんは細身でキレイな人だから・・ほんとに女の子とわからなくなっちゃいそう・・・

「・・そ・・それって・・・どんなふうに・・・・」
オレが聞こうとすると・・・
「あ～！　なっちゃ～ん！」
急に誰かを見つけて綾乃さんは行ってしまった・・・
・・もう少し・・詳しく聞きたかったのに・・・でもそうとう酔ってるみたいだったから・・どっちみち話にならなかったかも知れないけど・・・

「あ～あ・・お酒飲みたい・・・」
「ぁ、斉木さん・・・」
・・いつのまに？・・運転手の斉木さんがオレの横に座ってた・・・
・・てっきり今日も車で待たされてるのかと思って可哀想に思ってたけど・・斉木さんもお花見できて良かった・・・車を運転しなきゃいけないからお酒はムリだけど・・・

「ぁ・・あの・・いつもありがとうございます・・」
「ん？　あたしあんたにお礼言われるような事した？」
「ぁ・・いつも・・送ってもらってるから・・・」
「あ～・・仕事よ仕事！　あたし運転手だから、言われれば誰でも送るの。」
そう言って斉木さんはコップにオレンジジュースをつぎ足した・・・

「ぁ・・でも・・わたしみたいな子供を送るのって・・ムカついたりしませんか・・？」
「ん？・・まあ・・正直ムカついたけど・・・」
！・・やっぱりムカついてたんだ・・・
「・・べつにあんたが初めてでもないし・・・」

・・そっか・・・斉木さんはオレの前にも・・いろんなコを送ってきたんだろうなぁ・・・

「まあ、最初はあんたも他のコと同じだと思ったけど・・今は・・まあ・・だいぶ違うってわかってきたし・・・」
「え?!」
「・・あんたみたいに真面目なコは初めてよ。　始めはブリッコなのかと思ったけど・・そういうワケでもないみたいだし?」
「・・・・・」
「先生があんたのこと大切にする気持ちも、わかんなくはないわ・・・」
「??」
「あんたホント可愛いんだもん・・・」
「!!」
・・まさか・・斉木さんが・・オレのことそんなふうに思っていたなんて・・・

「先生・・あんたと会うと癒されるみたい・・このごろあまり怒んないし・・」
「・・刈谷先生が?」
「先生も大変な人だから、ユウちゃんこれからも癒してあげてね。」
そう言って斉木さんはいきなりオレの手を握った・・大きな手・・・
「え?・・あ・・はい・・!」
オレは慌てて返事をした・・・

・・斉木さんが先生のことを尊敬してるのは・・なんとなく知っていたけど・・・まさかオレに先生のことを頼むなんて・・そんなことされるとは思いもしなかったから・・すごく驚いた・・・

斉木さんってちょっとイヤな人かと思ってたけど・・やっぱり良い

とこもあるんだなぁ・・・

「・・そういえば、あのＡＶ良かったでしょう？」
「え？！」
「あの男優、あたしのお気に入りなのよ。筋肉質で浅黒くて・・ステキよねぇ！」
「！！！」
・・あのＡＶ・・・斉木さんが？！
「ユウちゃんもああいう男にヤラレてみたいって思ったでしょう？」
「・・そ・・それは・・・」
オレが口ごもっていると・・・
「恥ずかしがらなくていいわよ！　女の子なら誰だってあんな男に力づくでヤラレたいって思うもの！」

・・・誰だって・・かどうかはわからないけど・・・オレは・・ちょっとわかるかも・・・

・・だって・・いま言われたとき・・・オレのアソコがピクッて反応した・・・

・・乱暴な男の人はイヤだけど・・・女の子って・・どこかで・・そういうのに憧れてるのかも・・・

・・でもオレはやっぱり・・純平みたいに優しい男の人の方がいい・・・でも・・純平もイザそのときになったら・・力づくで来るのかな・・・？

・・でも・・それはそれでいいかも・・・

「ユウちゃん、そろそろ帰りましょう！あまり遅くなるとお母様も心配なさるわ。」
「あ、はい！」
・・時計を見ると・・もう１１時を回っていた・・・
・
「二光さん、それじゃわたし帰ります！」
「またねユウちゃ～ん！　刈谷！ちゃんと送りなさいよ！」
「わかってるわよ！　斉木！車を坂の下に持ってきて！」
「はい、先生！」
斉木さんはコップのジュースを飲み干すと駐車場へ走っていった・・
・

第１７３話　３年　新たな体験・自粛版（前書き）

この回は途中で完全版に移行しますので１８歳以上の方は初めからそちらをお読みください。

第173話　3年　新たな体験・自粛版

「本日から諸君も2年生と3年生になります。2年生は上級生として、3年生は最上級生としての自覚を持ってこれからの1年を過ごしてほしいと思います。ついては・・・・」

校長先生の話はあいかわらず長い・・・小学校、中学校、高校とそれぞれ校長先生は違うのに・・朝礼での校長先生の話が短かったためしがない・・・校長先生になる人って、みんな話好きなのだろうか？

「あ～疲れた・・・教頭先生まで話が長いんだもん・・・」

教室に戻ってオレが言うと・・

「ホントどうせ大したこと言わないのにね。校長先生なんか去年と同じこと言ってたし。」

直美が同調してくれた・・・こういうことにはオレと直美はすごく気が合う！

「毎度のことじゃない、文句いってたらキリがないわよ。」

弘子はちょっとさめている・・・千里はそんなオレたちをニコニコしながら見ている・・・オレたちって4人の時はいつもこんな感じで、それがすごく心地いい。

なんかオレたちって、すごく心が通じてる感じがする・・・親友だからって言ってしまえばそれまでだけど・・・元々は男だったオレがみんなと親友になれたのは、たぶん3人がこの関係を作ってくれたからだと思う・・・

オレってあんがい人見知りする方だし・・・もしこのクラスに千里たち3人がいてくれなかったら・・オレは今頃どうなっていただろうなんて考えるとゾッとする・・・

・・それに・・千里たちがいつも近くにいたから・・オレも自然に女の子になれたけど・・・もしいなかったら・・オレはまだ、ただ女の子のふりをしていただけだったかも知れない・・・

・・みんなで応募しなければオレがモデルになることもなかっただろうし・・・モデルにならなければ・・純平に出会うこともなかった・・・

・・純平に出会わなければ・・女の子として恋することもなかったかも・・・・

・・オレは男の子としても恋なんてしたことなかったのに・・女の子として男の人に恋するなんて・・今でも信じられない気持ちだ・・・

・・恋する気持ちはオレを無意識に女にしてしまう・・・これはホルモンのせいだろうか?・・それとも・・オレが元々女の子の心を持っていたからなのだろうか?・・・それは今もわからない・・・

「でも有希が制服なのに三つ編みしてないと、なんかヘンな感じがするね。」

「・・そ・・そう?・・変かなぁ・・・」

弘子に言われたのはちょっとショック・・・オレは鏡で見てイイ感じだと思ったんだけど・・・

「へンってそういう意味じゃないわよ。すごく女らしく見えるから、いつもの有希じゃないみたいってこと！」
「ぁ・・それなら良かった・・似合ってないって言ってるのかと思った・・・」
「似合ってるわよ！　有希はどんな恰好だって似合うじゃない！」
「・・・・・」
・・それは・・さすがに言い過ぎだと思うけど・・・でもそうでなきゃモデルなんてやれないし・・・

オレと弘子は友達だけど・・オレは弘子のことを尊敬もしている・・・弘子は何げに色んなこと知ってるし・・・オレが男だとわかった後も、変わらず女の子として接してくれる・・こんなこと誰にでも出来ることじゃないと思う・・弘子みたいな人を“人格者”って言うんじゃないだろうか？

弘子はオレを男だと知ってるから、いろんな場面で助けてくれる・・・クールで、趣味も変わってるし・・ちょっと取っ付きにくい印象もあるけど、すごく優しくて友達思いなのをオレたちは知っている。

「1年生が入って来るの楽しみだね！どんな男の子が入学してくるのかな？」
直美はこんど入学してくる男の子に興味津々って感じだ・・・

「何人くらい入ってくるのかな？」
千里も内心興味あるみたい・・・
「共学になるのは新しく出来る進学クラスだけみいたいだから、多くても２０人くらいなんじゃない？」
「そうなの？　有希よくそんなこと知ってるね。」
「ぁ・・若村先生が・・言ってたから・・・」

・・本当は教頭先生に聞いたんだけど・・ただの生徒のオレが教頭先生と知り合いなんてヘンだから・・・

・・みんなそれなりに入学してくる男子に興味があるみたいだけど・・オレはどっちかと言えば心配の方が多い・・・これまではまわりに女の子しかいなかったから・・オレも意識せず自然に女の子でいられたけど・・・男の子がいると・・なんか意識しちゃいそうで・・・

・・レナとカラオケに行った時だって・・近くに男の子がいるだけで・・なんか挙動不信になっちゃうし・・・

・・いつものオレでいられないっていうか・・・

・・それにもし・・レナが言ったように・・お姉さん趣味の男の子が告白なんてしてきたら・・・オレはどうすれば良いんだろう・・・？

・・断るのはカンタンだけど・・・ムゲに断って・・男の子を傷つけちゃっても悪いし・・・

・・ま・・まあ・・そんなことは無いと思うから・・今から心配する必要も無いんだけど・・・

始業式が終って部室に向っていると・・後ろから“ポン”と肩をたたかれた・・・

「よっ！　部長！！」

！！

「は・・長谷川さん・・びっくりしたぁ・・・」

「もう、腑抜けた声だしちゃって。まだ休み気分なんじゃない？あんた今日から部長なんだから、しっかりしなさいよ！」

そう言ってオレの両肩をつかんでグイグイ前後に揺すった・・・

・・そうなのだ・・オレはどうしても断り切れず、華道部の部長になってしまったのだ・・・

・・それもこれも長谷川と井川さんが推薦したせいなんだけど・・・3年生は3人しかいないのに、ふたりがケッタクしたらオレに決まっちゃうのは当然だ・・・こんなのヤラセだよ・・・

「ぁ・・あのね・・わたしは長谷川さんたちがサポートしてくれるって言うからシブシブ引き受けたんだからね？！」

・・だいたいオレは部長なんてガラじゃないし・・人を引っ張っていくようなキャラじゃない・・・どっちかといえば長谷川の方が部長には向いてると思う・・・

・・まあ、人望っていう点ではイマイチかも知れないけど・・・

「わかってるわよ！　有希がモデルの仕事で忙しい時は、わたしと井川さんでサポートするから！　有希は“大船に乗ったつもりで”いていいわよ！」

「・・・・・」

・・ホントかなぁ・・長谷川さんたちじゃ、かなりの小舟な気がするんだけど・・・

今日は先生も来ないし、お花も無いから、とりあえず今年度最初のあいさつでもして終りにしよっと・・・

帰りの電車に乗っていると、お腹が“グ～”と鳴って、オレは慌ててあたりを見回した・・空いてるから近くには人がいなくて助かった・・・だって女の子がお腹を鳴らしてるところなんて見られたくない・・・となりの長谷川は平気だけど・・・

・・あぁ・・おなか空いたなぁ・・・

「有希おなか空いたの？」

「うん。」

今日は授業も無かったからお昼前に終っちゃったし・・このままウチに帰るのもなんだから・・久しぶりに大森先輩のとこに行っちゃおうかな・・・

・・ホントは春休みに行こうと思ってたんだけど・・・先輩のウチに行くとなんかされそうだし・・卒業式の時は・・ディープキスされちゃったし・・・ちょっと怖くなっちゃって・・・

でもいつまでも行かないワケにはいかない・・・だって広島風お好み焼きも食べたいし・・・

「ねえ長谷川さん、ちょっと寄り道して高宮の大森先輩のお好み焼き屋さんに食べにいかない？」
「イヤよ、わたし大森先輩と親しくないし・・」
「いいじゃない、食べるだけなんだから。すごくおいしいよ？」
「行きたいなら有希ひとりで行ってくればいいでしょう？」
「うぅ・・」
・・あいかわらず意固地だなぁ・・・長谷川だっておなか空いてると思うんだけど・・・

・・仕方ない・・ひとりで行くか・・・

・・あの時のディープキスは急だったから驚いちゃったけど・・構えてれば上手く対処出来るかも知れないし・・・

・・去年、襲われちゃった時だって・・あの頃のオレはまだ性について何にも知らなかったし・・・今のオレはあの頃のオレとは違うと思う・・・あれからいろいろと経験してきたんだもん・・・

・・こういうのは時間が経つほど行きにくくなっちゃうものだから・・思い立った時に行くべきだと思う・・・

結局オレは長谷川と別れて、ひとりで高宮までお好み焼きを食べに来た・・・長谷川が一緒ならヘンなことされないと思ったんだけど・・・

「こんにちは～！」
オレがつとめて明るくお店を入ると・・・
「いらっしゃい！」

と先輩の声が響いた。

「あ！ユウちゃん来てくれたの！？」

先輩は嬉しそうに言ってくれた・・・

・・もしかしたら・・あんなことがあって春休み来なかったから・・もう来ないと思ってたのかな・・・

「・・先輩・・ひとりですか？」

先輩ひとりならカウンターで食べて帰れるかも・・・

「うん、でももうすぐ父さんも母さんも帰ってくるハズよ。あ！私より父さんの方が良かったとか？」

「！　ううん！」

オレは慌てて首を振った。

「私も前より上手くなったからさ、まあ食べてみてよ！」

「うん。」

学園祭の時だって十分おいしかったから、オレは先輩が作ったので全然かまわない。

「制服にそういう髪って初めて見るね。新鮮な感じ！」

「あ、はぃ・・三つ編みしなくても良くなったから・・」

・・なんか照れくさい・・・オレがカウンターに座ろうとすると・・

「もうすぐお昼だから第一のコたちがいっぱい来そうだし・・また私の部屋に行っとく？」

「ぁ・・はぃ・・・」

・・先輩の部屋って・・また襲われないかな・・・

・・でも運動部の男の子がドヤドヤ来るのもイヤだし・・・それならまだ先輩の部屋の方がマシかも・・・

「ユウちゃん何が良い？」
「ぁ、えっと・・ミックスで・・おモチが入ってるの。」
「ミックスモチ玉ね！　じゃ出来たら持って行くから2階で待ってて！」
「はい。」
オレはひとりでお店の奥にある、急な上りにくい階段を時々手をつきながら上って、先輩の部屋に行った。

しばらく部屋で待っていると、下で声が聞こえた・・最初はお客さんかと思ったけど、どうやらお父さんとお母さんが帰ってきたみたいだ・・・
（・・あいさつに行った方がいいかな・・？）
どうしようかと迷っている間に階段をあがる足音が聞こえてきた。

「お待たせ！　父さんたち帰って来たから私も一緒に食べさせて。」
先輩はオレの分と自分の分のお好み焼きを持っていた。
「ぁ、はい。」
・・そうだよな・・先輩もお昼食べなきゃいけないもん。

オレたちは小さなテーブルにL字に座ってお好み焼きを食べた。
「どう？」
「おいしいです！　すっごく！」
「ハハハ・・ユウちゃんったらもやしが付いてるよ。」
そう言って先輩はオレの口の端に付いていたもやしを取ってペロッと食べてしまった！

・・オレはなんかすごく恥ずかしくなってしまった・・こんなことされたら先輩の顔が見れないよ・・・

オレがうつむいて話も出来ずパクパクたべてると・・・
「ユウちゃんってホント美味しそうに食べるね！」
「！・・そ・・そうですか？　たぶん・・食い意地が張ってるんです・・・もっと上品に食べなきゃいけないのに・・・」
・・でも・・お好み焼きの上品な食べ方なんて教わってないもんなぁ・・・
「お好み焼きなんて上品に食べなくていいんじゃない？　上品に食べても美味しくないわよ！」
「ぁ・・はい・・」
・・それもそうだな・・先輩の言うとおりだ・・・
・・それでも女の子なんだから・・やっぱりガツガツたべちゃマズイと思うけど・・・

「あ～　おいしかった！」
やっぱり先輩のとこの広島風お好み焼きはおいしい！
「父さんが作ったヤツと比べてどうだった？　やっぱりまだまだかな？」
「そ、そんなことないです！　先輩が作ったのもすごくおいしいです！」
・・だって学園祭の時だっておいしかったんだもん・・
「ありがとうユウちゃん。ユウちゃんが言ってくれると自信がつくよ！」
「ほんと？」
オレなんかが言って自信がつくんだったら、いくらでも言ってあげる！

「ユウちゃん・・私に卒業祝いのプレゼントとか無いの？」

「え?!」
・・そ・・そっか・・そういうの持ってこなきゃいけなかったのか・・
・・オレってそういうとこ気が利かないから・・・
「・・せんぱい・・ごめんなさい・・・こ・・こんど来る時に必ず持ってきます!」
「そう? でも・・今日も持って来てると思うんだけど?」
「エ?!」

・・どこだろう・・オレ何か持って来てたっけ?・・・学校の帰りだから何にも持ってないと思うんだけど・・・今日は授業も無いからカバンにもロクなモノは入ってないし・・・

オレがキョロキョロしていると・・・
「ここよ!」
先輩はそう言って・・オレの制服のブレザーを指さした・・・
「ぁ・・コレ?」
・・そっか・・先輩は新しい制服を着たことがないから着てみたいのかな?・・でも・・先輩体格が大きいから・・オレので入るかなぁ・・・
「あの・・わたしの制服で・・入りますか?」
「アハハ・・制服じゃないわよ。私が欲しいのはその中身!」
「え?!・・中身って・・・わ・・わたし・・・?」
「そう、ユウちゃん!」

・・ど・・どうしよう・・・
「・・わ・・わたしなんかより・・やっぱり何か・・モノの方が・・・」
「いいえ、ユウちゃんがいいの。もちろんずっとなんて言わないわ。今日だけ!だめかな?」
「・・そ・・そんな・・ダメっていうか・・・」

「私のこと嫌い？」
「！！　そんなことないです！　わたし先輩のこと大好きです！」
「だったらいいじゃない！」
「・・でもぉ・・それと・・これとは・・・」

「ユウちゃん、キスした時・・そんなに嫌そうじゃなかったじゃない？」
「！！！・・それは・・・」
「ユウちゃんも少しはその気があるのかと思ったんだけど？」
「・・うぅ・・・」
「興味あるんじゃない？　女どうしでするの。」
「・・・・・」

・・それは・・オレも女の子どうしでどんなことするのか・・興味ないって言えばウソになるけど・・・

「ユウちゃんって、もう男の人知ってるの？　知らないんでしょう？」
「・・・・」
オレは黙ってコクリとうなずいた・・・本当は知ってるけど・・・先輩はオレが男だって知ってるんだから・・男の人を知ってるなんて言ったら・・・オレがお尻でしちゃったことがバレちゃうかも・・・それはいくら何でも恥ずかしすぎる・・・
「男なんてダメよ、乱暴なだけなんだから。私ならすっごく気持ち良くしてあげるわよ！」
そこまで言って先輩はハッとして・・・
「・・でもユウちゃんは普通の女の子じゃないから・・・絶対とは言えないけど・・試してみない？」
「！！！」

・・ドキッとした・・・そうだ・・オレは本当の女の子じゃないんだから・・・女の子どうしと同じことは出来ないんだ・・・

・・でも・・先輩としてみれば・・・オレの感じ方が女の子と同じなのか・・そうじゃないのかわかるかも・・・

・・刈谷先生は・・前立腺で感じるのは・・女の子の感じ方に近いって言ってたけど・・前立腺なんて見たことないから・・本当かどうか良くわからない・・・

・・だって・・先生は女の子との経験は少なそうだし・・あるのかどうかもわからない・・・もしかしたら初体験だって・・男の人だったかも知れないし・・・

・・その点、先輩は・・女の子の感じ方は良く知ってるハズ・・・もちろんオレには女の子と同じことは出来ないけど・・それでもどんな感じなのか・・少しはわかるかも・・・

「どう?ユウちゃんも興味あるでしょう?」

「・ぅ・・うん・・・」

すると先輩は唇をオレの口に近づけてきた・・・

「ぁ、ま・・まって・・いま食べたばかりなのに・・・」

「大丈夫よ、私も同じもの食べたんだから!」

「!・・そんな・・あっ・・・」

唇を割って先輩の舌がオレの中に入ってくる・・・そしてオレの舌にねっとりと絡み付いてくる・・・

・・なんてイヤラシイんだろう・・・まるでオレの舌をフェラされてるみたい!

でもその感覚は濃厚で・・オレは先輩に身をまかせてしまうしかなかった・・・

・・たしかに同じものを食べたけど・・・それでも先輩の味はオレとは違うみたい・・・先輩のつばを呑み込みながらオレはそう思った・・・先輩は・・なんだか女っぽい味がする・・・

・・オレのはどうなんだろう・・・男の味だったらヤだな・・・へンな味だったらどうしよう・・・

先輩はさんざんオレの口を吸った後、唇を離すと・・・

「ユウちゃんのって爽やかな味だね。」

「！！」

・・さ・・さわやか・・？　オレのつばってさわやかなの?!

「私のはどう?」

「・・なんか・・・ほんのり甘いっていうか・・・」

「甘い?!　嫌じゃない?」

「ぜ・・ぜんぜんイヤじゃないです・・」

・・お好み焼きの味と混じってるのは・・イマイチだけど・・・

「やっぱり私たちって合ってるみたいね！　私もユウちゃんの味、好きよ！」

そう言って先輩は、またオレの口に吸いついてきた・・・

・・長いキスが終る頃には・・オレはもうすっかり先輩のペースに引き込まれていた・・・頭はポーッとして・・なんだか現実じゃないみたい・・・

ふと気づくと、先輩はオレのブレザーの金のボタンを外そうとしていた・・・

「ぁ・・じ・・自分で脱ぎます・・・」

オレが自分でボタンを外そうとすると先輩は・・・
「ユウちゃんはジッとしてて、プレゼントは貰った人が開けるものよ！」
「・・・・・」
・・そうだった・・オレは今、卒業祝いのプレゼントなんだ・・・

先輩はオレの制服のブレザーを脱がすと・・こんどは首のリボンの端を引っ張った・・・オレのリボンは最初から形になってるのを留めるだけのみんなのと違って・・本当のリボンだから・・端を引っ張ればスルリとほどけてしまう・・・

・・まるで・・ほんとうに・・プレゼントになっちゃったみたい・・
・

・・エリから赤いリボン抜き取ると・・・ブラウスのボタンを上から外していく・・・他人に脱がされるのって・・すっごくドキドキして・・心臓の音が耳にひびく・・・

ブラウスを脱がされると・・後はブラだけだ・・・先輩はオレの背中に手をまわし、片手でホックを外してしまった・・・オレはそのあいだずっと・・動くことも出来ずに、ただジッとしていた・・・

・・“ヘビに睨まれたカエル”って・・こういう状態をいうのだろうか・・・

ブラを外される瞬間・・オレは思わず目を閉じた・・・恥ずかしくてたまらない・・・

・・せんぱいに・・ムネ見られちゃった・・！
「可愛いね、ユウちゃんの胸。まだ誰にもさわられてない感じ・・」

「・・・・・」
・・ほんとうは・・刈谷先生にさわられまくってるんだけど・・・
でもそんなふうに見えるなら嬉しい・・・

先輩はオレの後ろにまわって壁を背に座ると・・・
「ユウちゃんおいで。」
オレは先輩の足の間に座らされて・・後ろからだっこされるような形になった・・・

・・なんだか・・こうして大きな先輩に抱かれていると・・・小さなお人形にでもなってしまったみたいな気がする・・・

「あぐらかいて・・もっと私に寄っかかっていいよ。」
・・オレは言われるままに・・スカートの中であぐらをかいて・・先輩の身体に体重をあずけた・・・

・・スカートであぐらかくのって・・なんか変な感じ・・・ずりあがってパンツが見えちゃいそう・・・

～～～　これより自粛、以下『オレは女子高生・完全版』へ～～～
ｈｔｔｐ：／／ｎｏｖｅｌ１８．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ４４４８ｐ／

9章　第174話　共学　男子がいる入学式

今日は入学式・・校舎の窓からこっそり校門を見ていると、お母さんと一緒に新入生たちが入ってくる・・・新入生はみんな新しい制服だから、黒いセーラー服に比べると今年の入学式はすごく華やかな雰囲気だ。

オレたち3年生はかなりの人が新しい制服になってるけど、2年生はまだ前のセーラー服を着ているコも多い。

そりゃそうだ・・体が大きくなったコは仕方ないけど、それ以外は古くなってないのに買い替えたらもったいない。それでもミサトちゃんみたいに買い替えたコもいる・・・

まあ、卒業まで古い制服のままじゃ可哀想な気もするけど・・・それかオレたち3年が卒業する時に2年生に譲るってのも良いかもしれない。こんど教頭先生にでも相談してみようかな?

「やっぱり新入生はちっちゃくて可愛いね!」
直美が言うから・・
「うん、まだ制服が大きめだから余計小さく見えるよね。」
オレも同意した。

「見て直美!　あそこにも男の子がいるよ!」
オレはまた男の子を見つけて直美に教えた。
「あ、ほんとだ!　なんか女の子と同じくらいの背丈だね。」
「うん・・」
これまで見つけた男の子は5人だけど、みんなあまり大きくなかっ

た。せいぜい女の子より少し大きいくらい・・たぶんオレより小さそう・・・

共学になるのは進学クラスだけだから、スポーツに熱中してるような男の子は入ってこないハズ・・・だからみんな小さいのかな・・・？　女子校にいきなり大きな男の子が入ってきたら目立っちゃうけど、こんな感じならあんがい違和感ないかも・・・

・・でも共学になったからって言っても上級生には男子がひとりもいないのに・・初年度から入学するなんて・・みんな勇気があると思う・・・

・・まあ・・オレがそんなこと言うのはヘンかも知れないけど・・・オレの場合は他に入れる高校も無かったし・・・案外みんなオレみたいに、それぞれの事情があるのかも知れない・・・

・・どんな事情があるにしても・・女の子としての入学じゃないんだから・・オレの時よりはマシだろう・・・

・・それに女の子の中に、たった1人じゃないし・・・

・・良く考えてみたら・・オレの方が勇気あるかも知れないな・・・

「あのコは少し大きいね、有希くらいあるんじゃない？」

「ほんと・・ここからじゃ良くわからないけど・・わたしくらいあるかも・・・」

・・中学の頃から大きなコもいるけど・・だいたい男の子は高校になってから背が伸びるみたいだし・・・みんな在学中に大きくなる

のかも知れない・・・

・・オレは女性ホルモンの影響か高校に入ってパッタリ成長が止まっちゃった・・・かわりに女の子の部分は少し成長したけど・・・

・・もっとも・・男の子の頃はもう少し背が高くなりたかったけど・・今は女の子だから背は伸びなくても構わない・・・正直もう少し小さかった方が女の子としては可愛かったと思う・・・

「有希、直美！　先生がそろそろ集まりなさいってよ！」

千里に言われて・・・

「あ、はい！」

オレと直美はこっそり見ていた窓から離れた・・・これからいったん廊下に並んで、整列して講堂前の通路の両側に並ぶ。そしてオレたち3年生が拍手して迎える中を新入生たちが歩いて行くのだ。

・・オレたちが入学した時にはこんなセレモニーは無かったから・・今年の新入生がちょっと羨ましい・・・もっとも、あの時のオレがこんなことされて喜んだかどうかは疑問だけど・・・

・・何しろあの時は・・女の子ばかりの中でひとり、ガードルで押さえ込んだオチンチンと・・かさ上げ用のヌーブラを引っ付けた胸の重みを気にしている・・女装の男の子だったんだから・・・（10話参照）

・・あの頃はまだ・・自分が将来ほんとうに女の子になりたいと考えるようになるなんて・・思いもしなかった・・・

・・高校の3年間・・男だとバレないようにしようと必死だった・・

・

・・それが今は・・学校にいる時は、ほとんど自分が本当は男だということを意識しなくなっている・・・そう考えると、オレもずいぶん成長したものだ。

オレは前列に並んで新入生たちを待ちながら、となりにいる弘子に耳打ちした・・・

「ここならどんな男の子がいるか良く見えるね！」

すると弘子は・・・

「有希、男子が入学してくるの不安だって言ってたのに、ずいぶん浮かれてるじゃない？」

「うぅ・・」

・・たしかに・・オレはウチの学校に男の子が入学して来るのが不安だったけど・・・さっきから校門を入って来る男の子を見ていたら・・なんだかみんなすごく子供っぽくて・・そんなに心配する必要もないような気がしてきたのだ・・・

・・これもオレがこの2年間で成長したからなのだろうか？

・・それとも・・レナに男の子と一緒にカラオケなんかさせられたから・・オレの中の男の子に対する警戒レベルが下がっちゃったのかも・・・

・・どっちにしても・・3年生と1年生じゃ、そんなに交流もないだろうし・・・新しく出来た進学クラスはクラブ活動も必須じゃないらしいから、みんな勉強が忙しくてクラブには入らないんじゃないかと思う・・・クラブに入りたい人がいても華道部に入りたがる男の子なんていないと思うし・・・

・・もし男の子の入部希望者がいたとしても・・オレが部長の権力で落しちゃうもん！

「あ！来たよ！」
新入生の姿が見えて、オレたちは一斉に拍手をしだした・・・1年生はその間を緊張しながら歩いていく・・・
（ふふ・・あのコ緊張しすぎて手と足が一緒だ・・）
そりゃそうだよなぁ・・入学式だけでも緊張するのに・・3年生の間を歩くなんてすっごく緊張すると思う。　やっぱりオレの時は無くて良かった！

（あ！男の子たちだ！）
男の子は真ん中あたりに集まって歩いてくる・・みんな進学クラスだけあって真面目そうだ・・たぶんオレの何倍も勉強出来るんだろうな・・・

レナの友達みたいな男の子や、不良っぽい男の子が入学して来たら、せっかくのんびりしたウチの校風も変わってしまうんじゃないかと思ったけど・・・このコたちなら心配なさそう・・・少なくともオレが卒業するまでに学校の雰囲気が変わってしまうようなことは無さそうだ。

・・校則がゆるくなったと言っても少しだけだし、相変わらず髪を染めたりは出来ないから、それほど変わらないと思う。

・・なんか・・女子とお揃いだけど、下がズボンの制服で・・オレの目の前を歩いていく男の子たちを見ていると・・なんだか目頭が熱くなってきてしまった・・・ホントみんなスカートでの入学じゃなくて良かったねって言ってあげたい・・・

・・オレの場合は偶然、本当に女の子になりたくなったから結果的に良かったけど・・もしそうじゃなかったら・・最低の高校生活になっていただろう・・・

・・そんなことを考えていたら・・目が潤んできて・・・新入生みんなが通ってしまった頃には涙がポロポロこぼれてきてしまった・・
・

「どうしたの有希?」
直美に聞かれて・・ハンカチで涙を拭きながら・・・
「な・・なんか・・自分の入学の時のこと思い出しちゃって・・そしたら・・・」
「あいかわらず有希って感受性が豊かだね。」
「・・そ・・そんなことないけど・・・」
・・直美はオレの特殊な事情を知らないから・・・

「行こう、わたしたちが入る番だよ!」
「・・う・・うん・・・」
オレたちは新入生の後ろに座るために講堂へと入っていった。

入学式は滞りなく終って、オレたちは教室に戻ってきた。また窓から外を見ていると校門のところに人集りが出来ている。
「!」
・・そうか!・・・校門の学校の名前のプレートをバックに写真を

写してるんだ！　オレも入学式の日、かあさんと一緒に写してもらった。

春休みの間に校門のプレートは“白鴻女学園”から“白鴻学園”に変わっていた。

あの時の写真・・かあさんが持ってて、オレは恥ずかしいから見てないけど・・・いま見るとたぶん、まだそうとう男っぽいんじゃないかと思う・・・だってあの頃は女性ホルモンも使ってなかったし・・・ただの女装だもん・・・

・・でも・・考えたらオレは当時から“女の子っぽい”って言われてた・・事実、男だってバレなかったし・・・あの頃のオレで“女の子っぽい”のなら・・今のオレってどうなんだろう・・・だってオレはあの頃よりも確実に女の子らしくなっているのは自分でもわかる・・・

・・そういえば・・オレは今年に入ってから、やたらとみんなに“女らしい”と言われるようになった・・・“女の子っぽい”じゃなく“女らしい”って・・・

・・オレはてっきりみんながお世辞言ってるんじゃないかとか・・髪型が違うからじゃないかとか思ってたけど・・・もしかして・・本当にオレって女らしいのかな・・・なんか・・信じられないけど・・・

新入生たちが帰ってしまうと、オレたちのクラスは講堂の後片付けをしなきゃいけなかった。たくさん並べたパイプイスをたたんで体育館の裏へ持っていく・・・“講堂”っていっても本当は体育館

だから、早く片付けないと運動部が使えないから・・・体育館の裏はそんなにスペースが無いから、きれいに並べていかないとイスが全部入らないから大変なのだ。

「ふぅ～・・もう少しだ・・・」

たたんだイスを両手に2コづつ持っていくのは結構たいへんだ・・・時々下ろして休みながら持っていかなきゃ腕が痛くなっちゃう・・・

「有希、なに休んでるの！　もうちょっとで終りよ！」

「ぁ・・うん・・・」

・・直美は力あるなぁ・・・オレは元は男なのに・・直美の方がオレよりずっと力持ちだ・・・

「有希、頑張って！」

「！・・うん・・・」

後ろから来た弘子に励まされて・・オレはまたイスを持って歩きだした・・・弘子・・オレのこと情けないヤツだって思ってるかなぁ・・・

「有希は今日クラブ遅くなる？」

「ううん、今日はクラブないよ。」

「だったら一緒に帰ろう？」

「うん！」

オレも久しぶりに弘子と一緒に帰りたいと思ってたところだ！　なんか気が合うな・・・

「はい、先生！」

オレたちがイスをキレイに並べている担任の山口先生にイスを渡すと・・・

「あとどれくらいある？」

「もうちょっとです。」

「それじゃ、ちゃんと入りそうね。」

オレと弘子がイスを取りに戻っていると・・・
「有希、弘子・・これでおしまいよ。」
そう言って千里がヨロヨロしながらイスを運んでくる・・・千里はさすがにオレより力がないから大変そうだ・・・
「じゃ、わたし半分持つよ!」
「ありがとう・・」
「わたしも手伝おうか?」
「ううん、2人で大丈夫だから、弘子はシートの方手伝ってて、わたしたちもイス置いたらすぐ行くから!」
オレは千里からイスを半分受け取って、2人で最後のイスを運んでいった・・・

あとは床のシートを畳んで、モップで掃除をしたら終りだ・・・
ってまだけっこう時間かかりそうだなぁ・・・

「片付け大変だったね。」
帰り道、弘子に言うと・・・
「そうね。でも並べる方が大変だったと思うわよ。」
「ぁ・・そっか・・そうかも・・・」
弘子に言われてオレも思った・・・

昨日、イスを並べて準備したのは1組と2組だ・・・準備組は2クラスでやったのに、片付け組は1クラスなんてズルイと思ったけど・

・確かに言われてみれば並べる方が大変そうだ・・・歪まないようにキレイに並べなきゃいけないし・・・それに比べたら、片付けはどんどん運ぶだけだ・・・

「弘子ってすごいね。いつも他人のことまで考えてるんだもん・・・」

・・それに比べてオレなんか・・いつも自分のことしか考えてない・・・

「そんなことないわよ、有希だってみんなに優しいじゃない！」

「・・そうかなぁ・・・」

・・オレは自分に自信がなくて優柔不断だから・・優しいように見えるんじゃないかなぁ・・・

「有希は優しい女の子よ。」

「・・・・・」

「・・弘子はさぁ・・わたしを見て・・女らしいって思う？」

「そりゃ思うわよ。有希はクラスでも・・ううん、学年でも一番女らしいんじゃない？」

「！！・・学年で？！」

「わたしはウチの学校でも一番だと思うけど、女らしさの基準も１つじゃないからね。」

「・・弘子は・・わたしが本当は男だって知ってるのに・・そう思うの・・・？」

「有希は自分のこと“女らしい”って思わないの？」

「わかんない・・自分がどう見えるかなんて・・・」

「ふふ・・面白いね。」

「？・・おもしろい？」

「だって有希はモデルだし、学園祭クイーンでもあるのに、自分が女らしいかどうかわからないなんて。」

「・・うぅ・・・」
・・それを言われると・・オレもツライんだけど・・・
「でも、わたし有希のそういうとこ好きよ。」
「え?」
「自信が無さ過ぎるのも困りものだけど・・自信過剰より良いと思う。」
「・・そ・・そうかなぁ・・・」
「そうよ!そういうところが有希の奥ゆかしさになってるんだと思うわよ?」
「・・奥ゆかしさ・・・?」

オレと弘子は話しながら帰っているうちに久留米駅のバスセンターに着いてしまった・・・
「・・弘子のバス・・時間まだなんでしょう?」
「そうだけど・・ミスド寄ってく?」
「うん!」
・・ちょうど良かった・・オレはまだ弘子と話したいことがある・・
・弘子に聞きたいことも・・・

「有希どれにする?」
「わたしエンゼルショコラ!それとコーラ。」
「じゃぁ、エンゼルショコラ2つとコーラとコーヒー1つづつ。」
店員さんがトレーに乗せてくれる・・・
「あ、わたし持つよ。」

オレがトレーを持って、弘子のあとから席についた。
「ねぇ・・弘子・・ちょっと聞きたいことがあるんだけど・・・」
「なに?」

「・・そのぉ・・・やっぱり聞きにくいな・・・」
「なによ、いつも何でも話してるじゃない。」
「ぅ・・うん・・そうなんだけど・・・」
・・うぅ・・やっぱ思い切って聞いちゃおう！

「・・あのね・・弘子って・・ムネ大きいじゃない・・？」
「・・まあ・・ね。」
「・・それでね・・走ったりした時って・・すっごい弾んで走りにくかったり・・乳首が・・・感じちゃったりしないの・・？」
「有希・・感じるの？」
「ぅ・・うん・・最近・・・」
・・やっぱり・・こんなこと聞くの恥ずかしい・・！　弘子はオレが男だって知ってるのに・・男が乳首感じるなんて・・・

「わたしは割と平気だけど・・だいぶ前から大きかったからもう馴れてるのかも知れないけどね。」
「・・・・・」
「弾むのは有希の走り方が男の子っぽい走り方だからじゃない？」
「男の子っぽい走り方？！」
「そう、有希の走り方って頭が上下する感じで走るから、ムネが上下に弾んじゃうのよ。」
・・オレって・・そんな走り方してたっけ・・？
「・・女の子っぽい走り方って・・どんなの？」
「あんまり体が上下しなくて、横にゆれる感じっていうか・・・こんな感じ？」
そう言って弘子は胸の横で両手をグーにして、小さく前後に振りながら、体は左右に回すように動かした。

「・・女の子ってそんな走り方してたんだ？」
「まあ、ムネが無いコは有希みたいな走り方でも平気だと思うけど、

有希くらいあったら、スポーツブラじゃないと飛び出しそうでしょう？」
「うん！」
ハーフカップのブラで走ったりすると、まさにそんな感じだ！

「こ・・こんな感じかなぁ・・・」
オレは弘子がやったみたいに横に揺らす感じでやってみた・・・
「あ！・・ほんとだ・・・これいいかも・・・」
動いてもちゃんとムネがブラの中に収まってる感じがする・・・

「乳首が感じちゃうのは、ニプレス貼ったらいいんじゃない？」
「！・・ニプレス？」
「知ってるでしょう？　丸い絆創膏みたいなの。」
「う・・うん・・・」
「マラソンの時なんか貼ってるコ多いわよ？　知らなかった？」
「ううん・・知らなかった・・・」

・・ニプレスなら実はオレも貼ったことがある・・・モデルの仕事の時に、万一の時に乳輪が見えてしまわないように貼ることがあるのだ・・・

「マラソンの時は男の人でも貼ることがあるみたいよ？ウェアで擦れて血が出ちゃうんだって。」
「へぇ～・・そうなんだぁ・・・」
・・オレ全然知らなかった・・ニプレスにそんな使い方があるなんて・・・もしかしてそっちが本当の使い方なのかな・・・？
「バンドエイドで代用してるコもいるけど、乳首が大きいと動いてるうちにズレてしまうこともあるから注意しないと。」
「！！」
・・そういえば・・オレも体育の前にバンドエイド忘れちゃったっ

て言ってるコに、２つあげたことが何度かある・・・ケガしちゃったのかと思ってたけど・・あれって乳首に貼ってたのかな・・？

・・オレの乳首って大きいかなぁ・・・あまり人と比べたことがないから良くわからない・・かあさんよりは小さいけど・・どうなんだろう・・・

・・やっぱりバンドエイドで代用するより・・ちゃんとニプレス買った方がいいかな・・？

・・オレが真剣に考えていると・・・

「ふふふっ・・・」

急に弘子がクスクス笑いだした・・・

「？・・どうしたの？」

・・オレ・・何かヘンなこと言ったかな・・・

「ぁ、ごめん・・有希ってやっぱり男の子の部分もあるんだなって思ったら・・なんか可笑しくて・・」

「え？！」

「わたしは有希が本当は男の子だって知ってるけど、いつも有希と一緒にいても全然そんな感じしないから、つい忘れちゃうんだけど、でもやっぱり女の子のことで解らないこともあるんだなって思って。」

「・・そ・・それはあるわよ！」

オレがちょっとふくれぎみで言うと・・・

「ホントごめん！　もしまた解らない事があったら、遠慮せずに聞いてよ。」

「・・うん・・ありがとう。」

・・弘子の気持ちはホント嬉しい・・・でも・・オレには弘子にも聞けない悩みもいっぱいあるし・・・

「あっ、弘子もうバスの時間じゃない？」
「うん、もうすぐ来るかな。でもまだ聞きたいことあるんじゃない？」
「ううん、大丈夫！　次のバス待ってたら遅くなっちゃう！」

オレは最後のひとくちのドーナツを口に放り込んで店を出た。
「あ！」
八女行きのバスがちょうど入って来るところだった・・・
「じゃぁね、有希」
「うん、バイバイ！」
オレは弘子が座ったバスの窓に向って手を振った・・・バスはゆっくりとバスセンターから出て行く・・・

「・・・・・」
・・そっか・・いいこと聞いちゃった・・・さっそくニプレス買ってかえろうっと！

第１７５話　部長　成長してるオレ

今日はさっそく新入生がオレたちの華道部を見学に来ている。

「はい、それぞれ好きはお花を選んだら始めてくださ～い。」

みんなが活けはじめるとオレは見学に来ているコたちに・・・

「見学のみなさんは自由に見ていってください。もしウチの部に入りたいと思ったら、そこに置いてる用紙に必要事項と華道部に入りたい気持ちを具体的に書いて、なるべく早く顧問の嶋田先生に渡してください。先着じゃないですけど、入部出来るのは３人だけなので、入れなかった時のために他の部もあたっておいてくださいね。」

伝えるのが済んだら、オレもお花を活けていく・・・お花を行ける時はどうしてもうつむくから、髪を伸ばしたままではバラバラ落ちてきてやりにくい・・・だから今日は両サイドを三つ編みにして後ろで髪留めで挟んだ、ちょっとお嬢様風の髪型にしてみた・・・だって見学のコたちが来てるし・・オレのことモデルの“春日ユウ”だって知ってるコも多いだろうから・・少しはオシャレな感じにしないと・・お化粧もしてないから実際に見たら大したことないなんて思われたら恥ずかしいもん・・・

・・それにしても、こんな髪型が出来るようになったのも校則が緩くなったおかげだけど・・なんだか余計な気も使わなきゃいけなくなった気がする・・・前は何も考えずに三つ編みしておけば良かったのに・・・

・・でも・・やっぱり見学のコがいると緊張するなぁ・・・学園祭の時を思い出してしまう・・・

！・・いけない・・こういう時こそ平常心が試されるんだ・・・

「ふう・・・」
オレはひと呼吸して気持ちを落ちつけた・・・

活け花は、活けた花だけでなく、花を取る手や、葉っぱをムシる仕草や、余分な茎を切る手つき、剣山に刺す様子・・それに姿勢や身体の動きまで、すべて活け花なのだ・・・何ひとつおろそかには出来ないのはお茶のお作法と同じだ。

みんなもそれぞれ緊張はしてるだろうけど、それなりに出来ているから良かった。
オレが部長になってダメになったなんて言われないように、しっかりみんなをまとめていかなくちゃ・・・

「！」
ちらっと見学のコたちを見ると、外の方から男の子がひとりこちらをのぞいていた。

だけど、たぶんウチの部に入ろうと見学に来たんじゃなく興味本位にあちこち見て歩いてるんだと思う。オレと目が合うとスッといなくなってしまった・・・

「今日は見学のコがいたからちょっと緊張したね。肩凝っちゃった。」
「ちょっとなんてもんじゃないですよ〜！　あたし手は震えるわ、

足は痺れるわで大変です！」
「足が痺れるのはいつものことなんじゃない？」
「うぅ・・まあ・・そうですけど・・・」
・・ふふっ・・ミサトちゃんは相変わらず可愛いなぁ・・・
「でもミサトちゃんたちも新入生が入ってきたら教育係になるんだから、頑張らないとね！」
「そぉなんですよねぇ・・でもあたし自信ないです・・・」
「みんなそうなのよ？　わたしたちだって自信なんて無かったもの。」
「ほんとですか？有希先輩も？！」
「ほんとよ！　わたし全然自信なくって、長谷川さんに怒られたり、弘子に相談したりしたもの。でも今は良かったって思ってるわよ。ミサトちゃんがだんだん上手に活けられるようになっていくとスゴク嬉しかったし、わたし自身の勉強にもなったし・・・人に教えるのってスゴク自分のためになるのよ。」
「へ～・・そんなもんですかねぇ・・・」
「コラ！」
「イテッ・・」
オレは後ろから頭を平手ではたかれた・・・もちろんはたいたのは長谷川だ・・・
「な・・なによ長谷川さん・・・」
「あんたたち何マジメぶって話してるのよ！終ったらさっさと片付けるわよ！」
「マ・・“マジメぶって”って・・たまにはマジメな話したっていいじゃないねぇ、ミサトちゃん。」
「アハハ・・はい！」
・・もうっ・・せっかく良いこと言ってたのにぃ・・・長谷川のせいで調子が狂っちゃった・・長谷川がいるといっつもそうだ・・・

「でもまあ、今日の見学の新入生への対応は有希にしては上手だったわよ！」
「・・そりゃどうも・・・」
・・長谷川たちの陰謀とはいえ、オレだって部長になった以上はちゃんとやるのだ。

「あっそうだ、長谷川さん、わたしあさってクラブ来れないから部長代理よろしくね！」
「え？！何でよ！」
「・・だって言ったじゃない・・撮影が入ってる時は長谷川さんと井川さんで手伝ってくれるって・・・」
「あさって撮影なんだ？」
「・・うん・・水曜日は隔週で撮影って決まってるの。よほどの事がない限りは・・・」
・・本当は撮影じゃなくて、刈谷先生と会う日なんだけど・・・みんなには撮影って言っておいた方が面倒くさくない。　どうせ詳しく説明なんて出来ないし・・・

「・・仕方ないわね・・じゃ井川さん、一緒にやろう！」
「え・・わたしも？」
「あたりまえじゃない！有希がやれない時はふたりでやろうって言ってたでしょう？」
「・・わたしたちで戸田さんみたいに上手くまとめられるかしら・・？」
「なに言ってんの！　有希だって出来ることがわたしたちで出来ないワケないじゃない！」
「・・・・・」

「ま、まあまあ・・わたしがいない時はふたりで仲良くやってよ！

部長っていったってそんなに仕事ないんだから。」
「ほら！有希もああ言ってるじゃない！」
・・どうせウチの部は新入生が入ったって9人なんだから・・正直だれだってやれると思う・・・

「ユウちゃ～ん・・」
「ちょ・・ちょっと・・おじさま・・・」
刈谷先生はベッドの中でオレの胸の谷間・・まあ、オレのCカップ弱の胸には大した谷間はないんだけど・・そのわずかの谷間に顔をうずめながら、両手はオレの乳首をコリコリしてる・・・
「・・んんっ・・・」
・・さっき終ったばかりなのに・・そんなにしたらまたオチンチンが立ってきちゃう・・・

刈谷先生は偉い華道家なのに・・・こういう時の先生はただのエッチなオジサンだ・・・
・・でも・・なんかこんなエッチな先生なのに・・・ときどき可愛く見えちゃうから不思議・・・エッチの最中、オレを突き上げてる先生は・・あんなに激しくて男らしいのに・・・

「・・ねえ・・おじさま？」
「ん・・なに・・ユウちゃん・・・」
「・・あのね・・・お尻に何も入れてないのに・・ドライになっちゃう事ってあるの？」
「ん？」

先生はオレの胸から顔をあげて・・・
「どうしたの急に？」
「あ・・ううん・・そういう事ってあるのかな？って思って・・・」
「そうとうの達人になれば、そういう事もあるみたいよ？　妄想だけでイッちゃうとか。」
「妄想だけで？！」
「まあ、それはかなりの達人ね。　でも何年も開発していくと乳首イジっただけでイッちゃう人もいるみたいよ。」
「・・そ・・そうなんですか・・・」
・・オレ・・まだ４ヶ月くらいしか経ってないのに・・・もう開発されちゃったってこと？！・・そ・・そんなぁ・・・
・
「どっちにしてもユウちゃんにはまだまだ先のことだから気にしなくていいわよ！」
・・うぅっ・・・もうなっちゃったなんて・・・とても言えない・・・
「あ、でもユウちゃんってすごく感じやすいとこあるから、もしかしたら案外はやくなっちゃうかも知れないわね！」
「！！」
「ウフッ、冗談よ！　そんなに簡単にはそこまで行かないから安心しなさい。」
「・・・・・」
・・どうしよう・・このまま行ったらオレ・・どんどんエッチなコになっちゃいそう・・・・
「そういえば、ユウちゃんの学校もう入学式あったんでしょう？」
「あ、はい。」
「どうだった？　共学になったんでしょう？カッコイイ男の子いた？」

「ううん、カッコイイっていうより・・みんな子供っぽくて・・」
「あぁ、そうよね。　高校生くらいの歳だと1年生はまだ子供かもしれないわね。」
「でも良かったです。ユウは同じ年代の男の子が、ちょっと苦手だから・・・」
「あら?どうして?」
「ユウ・・高校生になったばかりの頃・・天神で男の子にナンパされて・・すごく怖かったから・・・」
・・オシッコちびっちゃったのは・・さすがに恥ずかしいから先生にも言えない・・・
「そうなの・・」
「それに・・高校が女子校だから・・この2年間男の子が身近にいなかったせいか・・どう接したらいいのかわからなくなっちゃって・・・」

「あ、そういう事ってあるらしいわね、女の子でも女子校出身のコは男の子が苦手になるコ結構いるみたいよ。　でもそういうの直していかなきゃね。」
「・・うん・・・」
・・まあ・・オレには純平がいるからいいんだけど・・・
「・・でも・・ユウ年上の人なら大丈夫なんです・・だから平気です・・・」
「まあ!　ユウちゃんったら、可愛いこと言ってくれるじゃない!」
「?!」
オレはいきなり先生に抱きつかれて驚いた・・・もしかして・・年上の人って・・先生のことだと思っちゃったのかな?

・・刈谷先生のことは好きだけど・・・恋愛の対象としてはいくらなんでも年上すぎる・・・

「有希先輩おはようございます！」
「あ、ミサトちゃん、おはよう！」
「昨日はどんなの着て撮影したんですか？」
「ぁ・・えっと・・」
・・ミサトちゃんが撮影のこと聞くなんて思わなかったから焦った・・・
「・・特別どうこうってのじゃない・・普通の服よ・・」
「へえ～　何月号に載るんですか？」
「えっとねぇ・・・何月号だろう・・6月号かな？7月かな？・・雑誌の撮影って撮影した順に載るって決まってないから良くわからないな・・・あれ？・・でもミサトちゃんってＪＩＮＯＮとか読んでたっけ？」
「あ・・最近・・見てるんです・・・」
！！・・ミサトちゃんもそろそろオシャレが気になるようになってきたのかな？・・もう2年生だし・・そんなお年頃なのかも！！

「ミサトちゃん！ファッションのことで聞きたいことがあったらいつでも聞いてね。くわしく教えてあげるから！」
「ぁ・・ありがとうございます・・でもあたしまだ・・・」
そう言ってミサトちゃんは恥ずかしそうにうつむいた・・・
「うんうん、いいよいいよ。　聞きたくなったらでいいからね。」
ミサトちゃんみたいな男の子みたいに育ってきたコは、急にファッションの話なんか恥ずかしくても無理はない。それに勉強と同じである程度わかってないと何を聞いたらいいのかさえわからないし。
オレも女の子になりたての頃はそうだった。

「そうだ、昨日は長谷川さんと井川さん、部長代理上手くやってた？」

「はい。あ・・ちょっと井川先輩が振り回されてる感じでしたけど・・」

「！！・・ミサトちゃん、そういうこと長谷川さんの前で言っちゃだめよ？　長谷川さんってそういうの敏感なんだから。」

「はい。わかってます！」

「でも先輩たちって仲良しなのに、有希先輩はいつも長谷川先輩に気使ってますね。」

「う・・うん・・長谷川さん怒らせると面倒なのよ・・・」

・・本当は長谷川がオレのこと男だと知ってるから・・万が一にもバラされないように気を使っていたから、こんな関係になっちゃったのかも知れない・・・まあ、面倒な性格なのもウソじゃないけど・・・

「おはようございます。」

校門の前で立ち止まり、お辞儀をしてから校門の中に入る・・・校則が緩和されたとはいっても、今でも毎日校則チェックの先生が立っていて、オレたちの服装が乱れてないかチェックしている。

オレもミサトちゃんも校則に違反するような事はしないから、ただあいさつをして通るだけだ。まあオレたちだけじゃなく、この学校にはわざわざ校則に違反するようなコはそんなにいないけど。

「有希先輩の髪ってキレイですよね。三つ編みにしない方がステキだってみんな言ってますよ。」

「え?!　そんなに三つ編み似合ってなかった?」

「ううん！そんなことないです！！　三つ編みも可愛かったけど、今みたいにロングの方が女性らしくてステキだって・・・あっ！すみません、先輩のこと可愛いなんて！！」
「いいよ、気にしないで。ミサトちゃんみたいに可愛いコに、可愛いって言ってもらえるなんて嬉しいわよ。」
「・・そんなぁ・・・」
「アハハ・・ほんとよ！」
オレはミサトちゃんのこと妹みたいに思ってるんだから、そんなに気にしなくていいのに・・可愛いなぁ・・・

「ん？」
「？・・どうしたんですか？」
「・・今・・2階の進学クラスの窓からこっちを見てる男子と目が合ったの・・・」
「どこですか？」
「ううん、もういない・・」
ミサトちゃんが見上げた時には、もうその男子は引っ込んだ後だった・・・

「ただ眺めてただけじゃないんですか？」
「うん・・そうかも知れないけど・・・」
「それか美人の先輩が気になって見てたとか？」
ミサトちゃんが冗談っぽく言ったから・・・
「ま・・まさか、そんなことないわよ・・・」
オレは慌ててミサトちゃんの考えを否定した・・・

・・でも・・ミサトちゃんには否定したけど・・・なんか・・ほんとにオレのこと見てたような気がした・・・

・・あのコたしか・・華道部の見学の時・・目が合ったコだと思う

んだけど・・・

今回も短かったのでこんな妄想などいかがでしょうか？

－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－

おまけ　妄想「天才子役・愛田茉菜」

愛田茉菜〈あいだ　まな〉は誰もが認める天才子役である。

茉菜が子役になったのは偶然のことだった。

ある日すでに子供服のモデルをしていた兄にＣＭの仕事がきた。
茉菜は母親と一緒にスタジオに付いて行ったのだが、共演の女の子が急に泣き出して撮影が出来なくなってしまった。困ったＣＭディレクターは、男の子役の兄について来ていた妹に目をつけ急遽茉菜が女の子役をすることになったのだ。

ところがそのＣＭの女の子が可愛いと話題になり、ついに茉菜は子役デビューしたのだった。
子役を始めてみると、その可愛くも大人顔負けの演技に人気は急上昇。一躍人気子役になってしまった。

その茉菜も来年は中学生・・・

子役には１５才の壁があると言われている。
それまでは可愛い子供の演技で良かったが、中学生からはそれなりに大人の演技が求められるからだ。

普通、子役は出来るだけ子供役を長くやれるように、不思議に体も大きくならない場合が多く子供っぽさを保つため、大人になるのが遅れてしまう。
また、子役として有名になりすぎると、そのイメージがついてしまい、いつまでも子供のイメージで見られてしまう。
それゆえ、事務所によっては才能のある子役は１０才ごろから露出をひかえ、１６、７才から再デビューさせることさえあるくらいだ。

しかし、茉菜にはそんな心配は無用だった。

小学校６年生の現在、可愛らしい中にもすでに大人の雰囲気も漂わせ、その天才的な演技は１１才にして女の色気さえ感じさせることもあった。身長も１５０ｃｍと子役としては高く、背が小さな高校生役もやったことがあるくらいだ。

それでいて普段の茉菜はあくまで小学生の女の子らしく、可憐にして素直で誰にでも分け隔てなく愛想が良く、スタッフからも大いに好かれていた。

すでに大女優への道も約束されたも同然。
茉菜には何ひとつ悩みなど無いように見える。

しかし、そんな茉菜にも悩みはあった。それもとんでもない悩みが…

天才子役・愛田茉菜は……実は男の子だったのだ！

いつかつづくかも（笑）

これまでのおまけ（その他）の場所

３６話　制作おぼえがき　０８．６．２１
４０話　『オレは女子高生』の世界　人物、舞台設定など
４５話　架空の西鉄大牟田線案内
４９話　名前について
５３話　ドラマ化を妄想してみる
６１話　「放生会編」おまけ
６７話　１周年を迎えて
７１話　『オレは女子高生』の世界　第２弾（架空の西鉄大牟田線案内付き）ドラマ『ブザー・ビート』のお知らせも
７３話　「ヒロイン」について
７８話　「出版されたら買いたい作品」のお礼
７９話　「文章」について
８２話　「文章って難しい・説明編」
８６話　ちょっとあとがき　長谷川の誕生日とお父さん

８９話　「Ｑ＆Ａ」
９３話　『オレは女子高生』の世界　第３弾（架空の西鉄大牟田線案内付き）
１１９話　２周年を迎えて
１３２話　イヌ型とネコ型
１３３話　有希と純平
１４１話　文章って難しい・文章と言葉編
１４２話　ＡＴから１８禁へのお詫びと説明
１４５話　ＡＴから年末のあいさつ
１５５話　今だから言える話（７章について）
１５７話　ＡＴから「ランウェイ」と１話での表現について
１６０話　タイトルとサブタイトル
１６３話　ＡＴから　普段の有希たち　１年生の名前
１６４話　感覚の表現
１６６話　『オレは女子高生』の世界　第４弾（架空の西鉄大牟田線案内付き）
１７０話　３周年を迎えて
１７１話　妄想「翔太の場合」

第１７６話　春雷　晴天のヘキレキ

入学式から１０日ほど経ったある日の朝、登校して靴箱の扉を持ちあげると、上履きの上に１通の封筒が乗っていた。一瞬あせったものの、何気ないそぶりで手提げに突っ込んでから、ゴムの部分が赤いオレの上履きを出して登校用の革靴と履き替えた・・・今日はひとりだったから良かった・・もし直美なんかが一緒だったら「見せて見せて」って大変だ・・・

オレはときどきラブレターをもらうことがある・・・もちろん女の子からだけど、去年も新入生が入学してきた当初は結構たくさんもらったものだ・・・

女の子からの手紙は、封筒も可愛くて、可愛らしい丸文字で書いてあるのが普通だ。そしてほとんどが「モデルのお仕事頑張って下さい」なんていう内容も可愛らしいものだから何の問題もない。たまには「好きです」とか書いてるのもあるけど、自分の名前を書いてないから、それも“応援”の一種だと思うことにしている。

・・でも・・今日の手紙は違った・・・

封筒からして普通の白いヤツだし・・文字も角張っていて黒いボールペンで書いてある・・・オレはひと目見て男の子の字だと思った。

こんなの教室で読んでてみんなに見つかったら、冷やかされちゃうかも知れないから、そのままトイレに駆け込んで、個室に入ってから封を開けてみた・・・

「？！」

オレはてっきり「好きです」とか「付き合ってください」とか書いてあるだろうから、どうしようかと思ったけど・・・書いてあったのは・・・

“　戸田有希さんへ　今日の放課後3階の渡り廊下に1人で来てください。　絶対に1人で来てください、待っています。　”

とだけ書かれていた・・・

・・どうしよう・・・行かなかったら、ずっと待たせちゃうかも知れないし・・・誰かについてきてもらおうか・・でも“絶対に1人で”って書いてあるし・・・

・・3階の渡り廊下っていったら・・つきあたりの教室は使ってないから誰も通らない・・・そんなとこに1人で待っていて・・もし襲われちゃったら・・・・

「ぷっ！！」

オレは可笑しくて思わず噴き出してしまった。だって今年入学してきた男の子たちっていったら、真面目そうでとても女の子を襲うなんて想像もできない！

（しょうがないなぁ・・）

年上の女の子にラブレターなんて書くのは勇気がいっただろうから、その勇気に免じて1人で行ってあげるかな・・・どうせ断らなきゃいけないから可哀想だけど・・仕方がない・・・オレには純平っていう彼がいるんだもん！

オレは放課後までちょっとドキドキしながら過ごし・・終業のチャイムが鳴ったらすぐ、弘子たちに気付かれないようにそっと教室を出た・・・

オレが着いたときには、３階の渡り廊下にはまだ誰もいなかった・・・

「ちょっと早過ぎたかなぁ・・」

・・待たせすぎてもいけないと思って早めに来たけど・・・良く考えたら・・こんな早く来てたら、すごい期待してるように思われないかなぁ・・・そんなふうに思われたら恥ずかしい・・・

・・窓から外を見ると、さっきまで晴れてたのに・・なんだか急に黒い雲・・・

“ゴロゴロ・・・”

・・遠くでカミナリも鳴ってる・・・

・・雨・・降るのかなぁ・・一応、折りたたみのカサは持ってきてるけど・・・

しばらく待っていたけど誰も来ない・・・クラブもあるのに・・早く来てくれないかな・・・

「・・もしかして・・冷やかしだったりして・・・・」

！！・・もしそうだったら・・いつまでもこんなとこにいたら笑い者になっちゃうじゃない！

オレが慌ててこの場を立ち去ろうとすると・・向こうからひとりの男の子が歩いて来るのが見えた！

・・男の子はニコニコしながらオレに近づいてくる・・・１年生になりたての男の子・・緑の上履きを見るまでもなく、男の子は１年生に決まってる・・・

（！！・・あのコ・・・）

・・ウチの部を外から見てたり・・この前も校舎の窓から見てた男の子だ・・・たぶん間違いない・・・

とうとう男の子はオレから３ｍの所まで来て立ち止まった・・・

・・背はオレと同じくらいか少し小さい・・・なんか気が利いてそうな顔だちしてる・・・まあ、進学クラスで勉強も出来るんだろうから・・気が利いてても不思議じゃないけど・・・

「戸田さん？」

「は・・はぃ・・」

・・なんだろう・・なんかヘンな感じ・・・今すぐにでもこの場を逃げ出したい気分になってきた・・・

「春日二中出身の戸田有希さんですよね？」

「え？・・あ・・そ・・そうですけど・・・」

オレがそう言うと・・男の子はニヤッと笑った・・・

「戸田さん、僕のこと憶えてないですか？」

「え?!・・あ・・この前クラブをのぞいてなかった?」
「そういうことじゃなくて、もっと前の話ですよ。」
・・このコ・・オレのこと知ってるんだろうか?　・・オレは男の子の顔を良く見てみたけど・・思い出せない・・・

「・・ど・・どこかで・・会ったこと・・あるのかしら・・・?」
「さあ、どこでしょう?」
男の子は可笑しそうに笑っている・・・

!・・もしかして・・春日二中のコ?・・・でも教頭は春日二中からの生徒はいないって言ってたけど・・・

「・・あなたも・・春日二中から・・?」
「いいえ、違います。」
・・やっぱり違うか・・・そりゃそうだよな・・・

「・・街で会ったとか・・・?」
「いいえ、それも違います。」
・・うぅ・・じゃぁ・・いったいどこで・・・?

「あ、仮面レンジャーショ・・」
「違います!」
・・今度は喰いぎみで否定してきた・・・

「クリスマスコレクション?」
「全然違います。」

「じゃぁ・・プールで溺れたてコ・・はもっと小さいか・・・」(54話参照)
「・・・・・」

・・イヤな沈黙・・・・
「僕ってよっぽど印象薄いのかな？」
「・・・・・」
・・今度はオレが黙る番だ・・・確かにそんなに印象に残る顔じゃないかも知れないけど・・・この前はチラッと見ただけで憶えてたし・・・

「それじゃ、名前を言ったらわかるかな？　僕、聡二〈そうじ〉っていうんだけど。」
「・・そうじ・・・？」
・・名前を聞いても思い出せない・・・けど・・よくよく顔を見ていると・・・なんか見覚えがあるような気も・・・

「まだわからない？　まあ無理もないかな、あのころはまだ僕も小学生だったし。」
「！！・・小学生？！」
・・いま高校1年生が小学生の頃ってことは？！・・・オレが男だった頃に会ったってこと？！！
「・・も・・もしかして・・あなた・・わたしの本当のこと・・知ってるの・・？」
「本当のこと？　それって本当は男だってことですか？」

（ガガ～ン！！）
・・バ・・バレた・・・ついに恐れていた事が起こってしまった！！　このコが誰にしろ・・上級生のお姉さんに愛の告白をしに来たんじゃないことだけは確かだ・・・じゃぁ・・何が目的で・・？
・・足がガクガク震える・・・でも・・ここで認めてしまったら何もかもオシマイだ・・・何とかごまかさなきゃ・・・

「・・ナ・・ナニ言ってるのヨ・・わたしオトコじゃないワ・・・」
・・うぅ・・言葉が上手く出てこない・・・
「へ～、でもおかしいなぁ。戸田さんが卒業した年の二中の卒業アルバムには女の戸田有希なんていなかったけどなぁ？　あ、男の戸田有希ならいたけど。」
！！・・卒業アルバムまで見たの？！・・・でも・・こんな時のためにとうさんが考えてくれた設定が！！

「そ・・それは・・わたしは卒業間近に転校して来たから・・卒業アルバムの撮影に間に合わなかったのよ・・・」
「ほんと？　そんな事あるのかなぁ？」
・・うぅっ・・疑ってる・・・
「あ・・あるのよ！　実際あったんだから！」
「ふ～ん。」
「そ・・それに・・わたしはあの時はまだ名前も佐藤有希だったし・・・」
・・佐藤はとうさんの旧姓だ・・・オレは熊本のとうさんの実家の養子になってたって設定なのだ・・・（２１話参照）

「じゃぁなに？　卒業アルバムの戸田有希って人は別人ってワケ？　たまたま同姓同名の人がいたんだ？」
「そ・・そうよ！・・ってあの頃はまだ佐藤だって言ってるじゃない・・・」
「へ～、それじゃその男の戸田有希って人はどこにいるのさ。」
「そ・・そんなの知らないわよ・・わたしが知ってるワケないじゃない・・・」
オレが苦し紛れにそう言うと・・・男の子はオレの顔をまじまじと見て・・・
「ぷっ！・・あははは・・・そんな訳ないでしょう。　良く見れば顔もそんなに変わってないし！」

・・うぅ・・やっぱり無理だよとうさん・・・こんな設定じゃ気が利いたコは騙せないよ・・・

「あははは・・ほんとおかしい！　戸田さんってこんな面白い人だったんですね！」

「・・・・！」

・・お・・面白いだって?!・・・こっちは必死なのに・・・いったいコイツ誰なんだよ！

「・・あんた・・ほんとは誰なの・・?」

「だから聡二って言ってるじゃないですか。鈴木聡二ですよ！」

「すずき・・そうじ・・?」

・・オレが知ってる鈴木は・・中学の時の親友、鈴木俊一〈しゅんいち〉だけだ・・・“そうじ”なんて・・・エッ?!

「・・“そうじ”って・・・ま・・まさか・・鈴木の弟の?!」

「やっと解りました?　そうですよ、鈴木俊一の弟の聡二です。」

「・・・・・」

・・そ・・そっか・・鈴木の弟なら・・オレのこと知っててもおかしくない・・・オレは一瞬、目の前が真っ暗になった・・・

・・オレは何とか気を持ち直すと・・・

「・・で・・でも・・あんた春日二中じゃないって・・・」

「知りませんでした?　僕は私立の中学に行ってたんですよ。アニキと違って頭良かったから。」

・・そ・・それでか・・・そういう可能性があること考えもしなかった・・・

「・・でも・・そんな頭良いコが・・なんで・・ウチの学校なんかに・・・?」

「・・・・・」
あれ？・・黙っちゃった・・オレ・・なんか悪いこと言っちゃったかな・・・？

しばらく黙ってたけど・・・
「戸田さんはうちの父さん知ってる？」
「・・ううん・・会ったことは・・ないけど・・・」
「父さんね、去年死んだんだ。」
「え？！」
・・あの・・ＡＶ隠してたお父さんが？！

「・・え・・えっと・・な・・何て言ったらいいのか・・・」
「べつに、何も言わなくていいですよ。これ言わなきゃ先が話せないから言っただけだから。」
「・・どうして亡くなったの？・・病気・・？」
「いや、交通事故で突然。」
「・・そうなんだ・・・」
「それで学費が高いとこは行けなくなっちゃってさ。」
「で・・でも・・奨学金とか・・そういうのあるんじゃないの？」
「奨学金って卒業したら返さなきゃいけないんですよ？　大学からならまだしも、高校から奨学金なんかもらってたら大変なんです。奨学金を払えなくて自己破産する人だっているんですから。」
「・・そ・・そうなの・・？」
「そうですよ、戸田さんって何も知らないんですね！」

「・・うぅっ・・・」
・・たしかにオレは・・そういうこと良く知らないけど・・・え？・・
・でも・・それじゃ鈴木は・・？
「・・じゃぁ・・そのぉ・・お・・お兄さんは・・？」
「アニキは高校はあと１年だから何とかなるみたいだし、大学もス

ポーツ出来るんで大丈夫そうですよ。心配しました?」
「!!・・そ・・そんなことはないけど・・・友達だったし・・・」
「ふ~ん。」
・・うぅ・・またニヤニヤしてる・・・なんか人の事バカにして・・
ハラたつなぁ・・・

「・・で・・でも・・それで何でウチの学校なのよ・・共学になっ
たからって・・ウチの学力で良い大学に行けるかどうか・・・」
「まあ、それは僕も悩んだんですけど、予備校で習ってた信頼出来
る先生がココの先生になってて、相談したら責任持つって言ってく
れたからね。」
「!!・・その先生って・・若村先生のこと?」
「そうですよ。良く判りましたね。」
「・・・・・」
・・そっか・・若村先生がこの学校すすめたんだ・・・責任持つな
んて・・若村先生らしい・・・

「戸田さん知ってます? 今年の男子は授業料もタダなんですよ!」
「え?!」
「それぐらいしないと去年まで女子校だった学校になんて、なかな
か来ませんよね。」
「・・・・・」
・・オ・・オレの時はそんな話なかったのに・・・今だって制服は
タダで作ってもらったり・・いろいろ便宜は計ってもらってるけど・
・授業料はちゃんとかあさんが払ってる・・・

「そうだ、僕のことはどうでも良いんですよ。戸田さんのこと聞か
せてくださいよ。」
「え?!」

「戸田さんは何で女子のふりなんかしてるんですか？」
「・・うっ・・・」
オレは言葉に詰まってしまった・・・
「それに女の子の雑誌でモデルまでしてるそうじゃないですか？」
「・・そ・・それは・・・」
「去年の学園祭では学園祭クイーンになったみたいですね、写真見ましたよ！ウエディングドレスなんか着てましたよね！」
「！！！」

・・やめて～・・・それ以上言わないで・・・

「アニキに聞きましたよ。戸田さんとは携帯替えたみたいで連絡とれないって。」
「！！！」
・・そ・・そんな・・鈴木に・・・！
「お・・お兄さんに・・言ったの？・・・わたしのこと・・・」
「まさか！　言いませんよ、元友達が女になってるなんて言う訳ないじゃないですか。アニキのやつショック受けちゃいますよ！」

・・うぅ・・そ・・そんな言い方しなくても・・・

・・でも・・鈴木に知られなくて良かった・・・オレが女になってるなんて鈴木に知られたら・・オレどうすればいいか・・・

「もしかして戸田さん、性同一性障害ってヤツですか？」
「・・ぅ・・・」

・・オレは何も言えなかったけど・・コクリとひとつうなずいた・・
・

「やっぱり！それじゃ先生たちも知ってるんだ？　戸田さんが本当は男だって。」
「・・ぅ・・うん・・・」
「へ～　この学校理解あるんだなぁ。でも生徒は知らないんですよね、みんなに言ったらどうなるかな？」
「！！やめて！みんなには言わないで！！」
・・そんなことされたら・・オレみんなに嫌われちゃう・・・

「う～ん・・どうしようかなぁ・・」
「絶っ対ダメ！お願い！」
・・オレは手を合わせて必死にお願いした・・・
「そうだなぁ、僕の質問に正直に答えてくれるなら、言わないでおいてあげてもいいけど？」
「うん、わかった！正直に答えるから！」
・・みんなにバラさないでいてくれるのなら・・オレはなに話したっていい！

「ネットで調べたんだけど、性同一性障害の人って生まれた時から心は女の人が多いみたいですけど、戸田さんも？」
「ぅ・・うん・・そう・・・」
「それじゃ、戸田さんは中学の頃も本当の気持ちは女の子だったって事でしょう？」
「・・うん・・まぁ・・・」
「ってことは、アニキのこと、本当は好きだったってこと？」
「は？！」
・・な・・なんでそうなるんだ・・？

・・いや・・そうだ・・中学の頃から女の子だったら・・鈴木のことも女の子の気持ちで見てたことになる・・・でもなぁ・・・オレ

はあの頃は普通の男の子だったし・・そんな気持ちは無かったと思うんだけど・・・

「・・で・・でも・・お兄さんとは・・ただの友達っていうか・・・」

「ほんと？」

・・うぅ・・ど・・どうしよう・・・鈴木のこと好きだったってことにしないと怪しまれるかな・・・鈴木のこと・・心では想いながら・・男どうしとして付き合ってたなんて・・・そんなウソ言えない！！

「どうしたんですか？　正直に答えるんじゃないんですか？」

「・・わたし・・あの頃は・・・・」

・・まだ自分が女の子だと気付かなくて・・と本当のことを言おうとしてやめた・・・それじゃ小さい頃から女の子だったって事に矛盾する・・・

・・オレは小さい頃の記憶が無いから・・本当は矛盾しないかも知れないけど・・・それを説明するのも大変だし・・・そんなこと言ったら高校に入学する前、突然目覚めたってことになる・・・何ヶ月かの間に突然目覚めて・・高校に女の子として入学したなんて・・・それじゃあまりに不自然だ・・・

「・・本当は・・お兄さんのこと・・好きだったの・・・」

・・もうオレはこう言うしかなかった・・・もし鈴木がこんなこと知ったら・・気持ち悪がると思うけど・・・でもオレには今の生活の方が大事だ・・・鈴木には犠牲になってもらうしか・・・

「やっぱりねぇ、アニキのこと好きだったんだ！　どうりで良く一緒にいると思ってたんだ。」

・・うぅっ・・・オレと鈴木の思い出を・・・勝手にヘンに想像しやがって・・・

・・オレと鈴木は男どうしの親友だったのに・・・

・・今のオレではもうありえない・・男どうしの親友なのに・・・

「この事アニキに教えてあげようかな?きっと驚くでしょうね。」
「ダメよ!そんなことしたら・・・」
「でもアニキ、戸田さんと連絡とれなくなったの心配してたからなぁ。」

え?!・・鈴木がオレのこと・・心配してくれてたの?!

・・オレは男の子の戸田有希なんていなくなっても・・誰ひとり心配してくれないのかと思ってた・・・鈴木がオレのことを・・・

「それに戸田さんがこんなに美人になってるって知ったら、アニキも受け入れるかもしれないよ。」
「そ・・そんな事あるわけないじゃない!」
・・オレのこと男だって知ってるのに・・受け入れるハズがない・・
・
「そんなの言ってみなきゃわからないですよ。」
「ううんダメ!絶対ダメ!!　言わなくたってわかるもん!」

・・オレがこんな姿になってるなんて・・鈴木には絶対に知られたくない・・・

・・オレは鈴木とは・・ずっと男どうしのままでいたいんだ!

・・たとえそれが・・想い出の中だけだとしても・・・

「でも、アニキにも言わないんじゃ話が違うな。」
「え?・・なにが・・?」
「だって僕はみんなに言わない約束はしたけど、アニキに言わない約束はしてないから。」
「そ・・そんな・・・じゃぁ・・どうすれば・・・?」
「新しい契約が必要ですね。」
「・・け・・けいやく・・?」
「どんな契約がいいかなぁ。」
「・・ちょ・・ちょっと待ってよ・・わたし契約なんて・・・」
「じゃぁアニキに言って良いんですか?」
「それは・・ダメ・・・」
「だから契約が必要じゃないですか。」
「・・うぅっ・・・」
・・でも・・いったいどんな契約を・・・

「そうだ!　戸田さん、今度の土曜か日曜あいてますか?」
「・・えっと・・土曜日は・・あいてるけど・・・」
「だったら土曜日、僕とデートして下さいよ。」
「え〜!!」
・・な・・なに言ってんだコイツ!!
「そんなに驚かなくても。」
「・・だ・・だって・・・あなたはわたしのこと男だって知ってるのに・・・」
「でも見た目は女みたいじゃないですか。」
「・・まぁ・・・」
「心も女なんでしょう?」

「・・そう・・だけど・・でも・・・」
「だったら良いじゃないですか。どこかに男の部分があるのかも知れないけど、僕はそこまでは考えてませんから。」
そう言って鈴木の弟は、オレのスカートの一点を見ながら可笑しそうに笑った・・・
「！！！」
・・そ・・そんなのオレだって考えてないし！！
・・鈴木の弟とそんなことするなんてまっぴらだ！
「それじゃ詳しいことはまた今度ってことで、もう行っていいですよ。華道部の部長さんだから忙しいんでしょう？」
「・・・・・」
・・どうしよう・・大変な事になっちゃった・・・オレがフラフラする足でその場を立ち去ろうとすると・・後ろから・・・
「あ、そうだ。デートには“春日ユウ”で来て下さいよ！」
「・・え？・・ど・・どうして・・・」
「だってもし友達に会ったりした時に、モデルと付き合ってるなんて紹介したらカッコイイじゃないですか！」
「・・そ・・そんな・・・」
・・コイツ・・・どれだけオレに恥をかかせようとしてるんだ・・・
・・でもオレは・・バラされたくなかったら・・コイツに従うしかない・・・
「・・ぅ・・うん・・わかった・・・」

・・オレはそれだけ言うと、フラフラする足取りで部室に向った・・
・

・・いつの間にか、ポツポツ雨が降っていた・・・オレが部室に行くと・・・

「あっ、有希遅いじゃない！部長がこんなに遅刻したんじゃ、新入部員が入ってきたら示しがつかないわよ？」
「・・ゴメン・・・」
・・今のオレには長谷川に言い返す元気なんて全然ない・・・もともと言い返すことなんてほとんど無いけど・・・
「？・・どうしたの？お腹でも痛いの？」
「・・う・・ううん・・なんでもない・・・」

・・本当は長谷川に相談して・・一緒に対策を練ってもらいたいところだけど・・・そんなことしたのわかったらオレのことバラされちゃうかも知れない・・・

・・思えばオレ・・これまでいつも困ったとき長谷川に頼ってたんだなぁ・・・自分ひとりじゃどうしたらいいのか全然わからない・・
・

「・・お花は？」
「井川さんが持って来てくれたわよ。」

「あ・・そう・・じゃ、始めようか・・・」
「有希・・ホントに大丈夫なの？」
「ぅ・・うん・・大丈夫、大丈夫！」

・・そうは言ったものの・・この日は結局・・どうすればいいのかと同じことばかり考えて・・頭の中がグルグル回っていて・・とても活け花なんて手につかなかった・・・

「・・有希？　やっぱり具合悪いんじゃない？」
「ぁ・・ぅ・・うん・・・そうかも・・・」
「先輩、ぐあい悪いんだったら無理しない方がいいですよ！」
「・・ミサトちゃん・・・」
・・みんな心配そうにオレのことを見ている・・・

「・・うん・・やっぱり今日は・・・ごめんね・・」
「そんなの良いですって！　早く帰って寝て下さい！」
「・・ぅ・・うん・・・」

「じゃ、わたしも心配だから家まで送るわ！」
「！・・そ・・そんな・・ひとりで大丈夫よ・・・」
「大丈夫じゃ無さそうだから言ってるの！　雨も降って来たみたいだし。井川さんあとお願いね！」
「うん、わかった。」

「・・みんな・・・」
・・みんなそんなにオレのこと心配してくれるなんて・・・もし・・オレが本当は男だなんてバレちゃったら・・きっとこの友情もなくなっちゃう・・・

・・そんなことを考えると・・目から涙がこぼれてきた・・・

「有希、そんなに痛いの？　それじゃ保健室行こうか?!」
「・・ううん・・だいじょうぶ・・グスッ・・・おウチに帰る・・・」
・・白石先生だって・・こんなことには対処できないと思う・・・
・・学校で何か対処してくれたとしても・・一度ウワサを広められたら・・・もうオレたちの関係は戻ってこないだろう・・・オレは何としても・・そんなことにはしたくない・・・
・・オレが・・アイツの言うことさえ聞いていれば・・・それで済むのなら・・・オレは・・・・・・

お知らせ

これまでもピクシブで「オレ女」の絵を描いて下さっていたＢｒｉｔｉｓｈＰｈａｎｔｏｍさんが
「オレ女」のマンガを描いて下さいました。
コミケに参加されるそうなので、行かれる方はぜひ手に取ってご覧になっていただければと思います。
一部はピクシブにもＵＰしてあるので興味がある方は観てください。
（ピクシブで「オレは女子高生」で検索して下さい。）

なかなか良い感じで感激です。私の有希のイメージにも違和感ないかも。

場所「８／１３（土）コミケ２日目西館ま３６ａ」
サークル名「クリクレ推進委員会」です。

第１７７話　仮病　長谷川のひとりごと

オレたちはどしゃ降りの中を、長谷川がさすカサに入って駅へと向っていた・・・

・・オレは頭も足もフラフラで・・とてもひとりでカサをさしては歩けなかったから・・長谷川にささえてもらいながら歩いた・・ホント情けない・・・おかげでオレも長谷川も、カサをさしているのにビショ濡れになってしまった・・・

「有希、やっぱり保健室に寄ったほうが良かったんじゃない？　フラフラしてるよ？」

「・・ううん・・いいの・・・」

・・オレはべつに病気じゃない・・・ただあまりのショックで何がなんだかわからないだけだ・・・とにかく早く家に帰りたかった・・・

・・本当なら駅まで１０分くらいで着くところを、だいぶ余計にかかってしまった・・・

「ふう・・やっと着いた。」

「・・ごめんね・・わたしのせいで・・ビショ濡れ・・・」

オレたちはそれぞれ、カサから出てた片側づつが特にズブ濡れだった・・・

「どうせこの雨じゃ濡れるから気にしなくていいわよ。帰ったらすぐに水気を取って干さなきゃね！」

「・・うん・・・」

・・今日は長谷川・・なんだかやさしいな・・・長谷川って時々やさしい・・・

・・ホームに降りると、もうすぐ急行が到着するところだ・・・
「急行は座れないから・・時間かかるけど普通で行こうか？」
「・・ぅ・・うん・・・」
・・確かに今の状態じゃ・・立って行くのは無理っぽい・・・
オレたちは急行待ちで停車していた普通電車の方に乗った・・・普通電車はガラ空きだった・・・

「・・長谷川さん・・ごめん・・・」
「だから気にしなくていいって！あんたを送んなくても雨の中を歩けば濡れるんだから。」
「・・ううん・・そうじゃなくて・・わたしいつも長谷川さんに世話になってばかりだから・・・」
・・長谷川だけじゃなく・・オレはいつも誰かに甘えてた気がする・・・
「どうしたの？有希らしくないじゃない。やっぱりそうとう具合悪いみたいね。」
そう言うと長谷川は、オレの前髪を上げておでこに手をあてた・・・
「熱はないみたいだけど・・いやあるかな？・・どうだろう・・・」
「・・・・・」
・・長谷川の手・・冷たくて気持ちいい・・・

・・いっそこのままカゼでもひいて・・土曜日まで治らない方がいいかも・・・

・・鈴木の弟・・病気だったら仕方ないってことにしてくれないかな・・・

「有希、キツかったらわたしにもたれていいよ。ほら。」
長谷川はオレの頭に手をまわして・・自分の方にグイッと引き寄せた・・・

「ぅ・・」

オレは抵抗せずそのままコテンと長谷川の肩に頭をのせた・・・

・・こうして長谷川の肩にもたれていると・・なんだか不思議に落ちついてくるようだ・・・

・・長谷川に相談出来たらなぁ・・・でもダメだ・・・今回は自分で何とかしなきゃ・・・

・・だから今だけは・・・

普通でゆっくり行くあいだ、長谷川のあたたかさを感じていたせいか、春日原〈かすがばる〉の駅に着いたころには何とかひとりで歩けるようになっていた。

・・でも長谷川はオレを家まで送っていくと言ってきかなかった・・

「有希の家に行くの久しぶりじゃない？　ねえ！」

「・・ぅ・・うん・・そうかも・・・」

「麻衣ちゃんいるかな？」

「・・いないと思うけど・・このごろいつも遅いから・・・」

・・麻衣も来年は高校受験だから、学校で自主的に補習を受けてるらしい・・・麻衣はオレと違ってしっかりしてる・・・オレは中学

3年生のこの時期、まだ高校受験のことなんて考えてたこともなかったのに・・・

「有希のウチっていいよね、なんか落ち着けるっていうか・・」
「・・そう・・？」
「あまりみんな干渉しないからかなぁ・・」
「・・干渉・・？」
「それでいてお父さんもお母さんも、イザとなったらちゃんと有希たちのこと考えてくれるし・・」
「・・かあさんはそうだけど・・・とうさんはどうかな・・・」
「お父さんだって、ちゃんと有希たちのこと気にかけてると思うわよ？」
「・・・・・」
「だって普通は自分の息子が女になりたいなんて言ったら、お母さんは許してくれても、お父さんは無理だと思うな。」
「・・・・・」

・・そういう意味か・・・ウチのとうさんは小説家なんかやってるせいか・・確かに普通じゃないところがある・・・でもそれが長谷川が言うように良いことかどうかは・・オレには良くわからない・・・

・・こんなことになった今ではなおさらだ・・・

・・あの時、強引にとうさんが反対して・・オレが女の子になってなかったら・・今日みたいなことにはならなかったのに・・・

・・でも・・もしオレが女の子になってなかったら・・・たしかにこんな事にはならなかっただろうけど・・・これほど無くすのが怖

いと感じる友達関係も出来なかったと思う・・・

・・長谷川とも・・中学を卒業してそれまでだっただろうし・・・

・・そうなっていたら・・長谷川の怒りっぽいところも・・ちょっとイジワルなところも・・時々やさしいところも・・たぶん知ることはなかった・・・

・・男の子の頃のオレはどこにでもいる・・いや・・いてもいなくても誰も困らないような男の子だったのだから・・・

・・長谷川だって・・オレが男の子のままだったら・・きっとオレのことなんか見向きもしなかったと思う・・・

家に着いて玄関のカギを開けると、長谷川も当然のように一緒に入ってきた・・・

「お父さんいるのかな?」
「・・うん・・たぶん・・・」
「あいさつした方が良いかな?」
「・・いいよ・・しなくたって・・・」
・・どうせオレたちが帰ってきたことは、とうさんには伝わるもん・・・

オレたちは廊下を濡らさないように玄関で濡れた靴下を脱いでから上がった・・・靴の中もグショグショだ・・・あとで新聞紙入れておかなきゃ・・・

階段を上がってオレの部屋に入ると・・・

「ほら、有希服脱がなきゃカゼひくわよ。」

「！・・ちょ・・ちょっと・・自分で出来るから・・・」

「いいからいいから。まだ少しフラフラしてるじゃない。」

「・うぅ・・」

・・長谷川に服を脱がせてもらうなんて・・なんかヘンな感じ・・・

ブレザーを脱がすと腕に掛けて、こんどはスカートを・・・

「・ス・・スカートはいいって・・・」

「いいからいいから！」

「・・・・」

スカートの次は首のリボンをほどいてブラウスのボタンに手をかけた・・・

「・も・・もういいよ・・自分で出来るから・・」

「いいからいいから、遠慮しないで！」

「・・そんな・・・」

・・オレ・・べつに遠慮なんかしてないんだけど・・・

・・まあ・・相手が長谷川じゃ大森先輩の時みたいな事になる心配は全然ないけど・・・

・・結局オレはスリップ姿にされてしまった・・・

「えっと・・有希寝るとき着るのはどれ?」

「ぁ・・自分で・・」

「いいからいいから！」

自分で部屋着を出そうとするオレを長谷川は押しとどめる・・・

「・・2番目の引き出し・・どれでもいいから・・・」

長谷川は引き出しを開けると・・・

「わぁ！可愛いのばっかりだね。どれがいいかなぁ・・・」

「！！・・どれでもいいよ・・・」
「・・じゃぁ、これにしよっ！」
・・それはピンクでエリとスソに可愛いフリルが付いたヤツだった・
・7分丈のパンツのスソにもフリルが付いてる・・・結構お気に入
りのヤツだ・・・

・・オレがその部屋着を着ようとすると・・・
「何やってんのよ！スリップも脱がなきゃダメでしょう？汗もかい
てるんだから！」
「え・・でもぉ・・・」
「ほら、さっさと脱いで！」
「うぅ・・」
・・長谷川の前でブラとパンツだけになるなんて・・・

・・おなじクラスの弘子たちとはいつも一緒に着替えてるから平気
だけど・・1組の長谷川と着替えることは無いから・・すごく恥ず
かしい・・・

だからオレはスリップを脱ぐと、急いで部屋着を着た・・グズグズ
してブラやパンツまで脱ぐように言われちゃたまらない！

着替えると長谷川はオレをベッドに無理矢理寝かせた・・・
「・あの・・靴とか乾かさないと・・・」
「大丈夫よ、わたしがやっとくから！」
「え～・・長谷川さん・・ちゃんと出来るの・・？」
「失礼なこと言わないでよ！出来るに決まってるじゃない！　ちゃ
んと制服も水気取って干しておくから、あんたは心配しないで寝て
なさい！」
「・・・・・」

そう言うと長谷川は部屋を出ていった・・・

・・長谷川のヤツ・・オレが病気のフリしてるのを良いことに、言いたいこと言いやがって・・・ほんとにちゃんとやってくれるのかな・・・

・・うぅ・・それにしても・・長谷川の前で下着になったせいで・・まだ胸がドキドキしてる・・・

・・まあ・・おかげで少しの間はイヤなことも忘れてたけど・・・

・・・・・・

－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－

「有希、お父さんが晩ごはんどうするって・・・」

「・・・・・」

「?・・あ、寝てるのか・・・ふふっ・・可愛いかおして寝てる・・・」

「・・・・・」

「・・こんなの見てると本当に女の子みたいだなぁ・・・だけどわたしは有希が男の子だったこと忘れてないわよ・・・有希は時々忘れちゃうみたいだけど・・・」

「・・・・・」

「・・でもこのごろ有希・・ホント女らしくなった・・・身体も女らしくて・・こっちがドキドキしちゃったわよ・・・有希このまま女になっちゃうつもりなのかな・・・」

「・・・・・」

「・・有希なら・・なっちゃうかも・・・」

「・・ん・・・」

・・あれ?・・・オレどうしたんだっけ・・・

「・・・9時・・?!」

ヤ・・ヤバイ・・遅刻しちゃった!!

慌ててベッドを跳ね起きて、制服に着替えようとすると・・・

「?・・制服がない・・??」

・・あっ・・そうか・・・思い出した・・・あんなことがあって・・長谷川に家まで送ってもらったんだ・・・

「?・・あ・・まだ夜の9時か・・・」

・・オレ・・いつの間に眠っちゃったんだろう・・・長谷川・・ちゃんとやってくれたかな・・・とうさんたち夕飯はどうしたんだろう・・・

1階に降りると・・玄関の靴には新聞紙が詰めてあった・・良く見ると水分を吸うように新聞紙の前に吸水性が良いペーパータオルを詰めている・・・オレが教えたの憶えてたんだな・・・後でもう一度替えておこう・・・

リビングには制服のブレザーとスカートが干してある・・・さわってみるともうだいぶ乾いていた・・・ちゃんとやってくれたんだ・・・これなら明日着て行けそう・・・

「ふぅ・・」
リビングのソファーにグッタリと腰かけていると・・・

「お姉ちゃん、もう具合いいの?」
麻衣はお風呂あがりみたいだ・・・
「・・う・・うん・・麻衣たちお夕飯どうした?」
「あ、お父さんと順ちゃんと一緒にピザ取って食べたよ!」
「え?!長谷川さんも?」
・・長谷川のやつ・・夕飯まで食べて帰ったのか・・・

「お姉ちゃんが好きなおナスのピザ残してあるよ。」
「エ?!ホント?」
オレは残してあった大好きなおナスのピザを、温め直すためレンジに入れた。
「ピザ食べれるなら元気そうだね。」
「・・うぅ・・・」
・・麻衣ったら・・生意気なこと言っちゃって・・・

“ピーッ”

出来た出来た！・・・オレが温まったピザを食べていると・・・
「あ、そうだ！　三吉先生にお姉ちゃん元気にしてる？って聞かれたよ。」
「そう、何て言った？」
「元気だって言っといた。でも華道部の部長さんになったりして忙しそうって。」
「・・・・・」
・・そういえば・・このところ三吉先生のところにも行ってないな・
・・今度の土曜日にでも・・！！

・・そうだった・・今度の土曜日は鈴木の弟と・・・

「あたしね、三吉先生にお姉ちゃんに似てきたって言われちゃった！」
「・・え？」
「お姉ちゃんに似てるなんて嬉しいなぁ。」
「・・そう？」
・・そういえば・・最近麻衣はかあさんに似てきたかも知れない・・
・小さい頃は、オレはかあさん似で、麻衣はとうさん似なんて言われてたけど・・・大きくなると変わるんだなぁ・・・

「そりゃそうよ！　お姉ちゃんはキレイだし、みんなが憧れるモデルさんだもん！」
「・・・・・」

・・うぅ・・もし・・オレが男だってバレたら・・・麻衣もオカマの妹とか言われちゃうのかな・・・

・・そうだ・・これはオレだけの問題じゃないんだ・・オレが男だってバレたらみんなが困っちゃう・・・

・・オレは自分が女になったことを後悔してはいない・・・最初はなりゆきだったかも知れないけど・・今ではオレを女にしてくれたみんなに感謝している・・・だから鈴木の弟の思いどおりにはさせるワケにはいかないのだ！

・・今はまだ・・何も良い方法を思いつかないけど・・・土曜日までには、きっと何か良い方法を考えつくんじゃないかと思う・・・・

妄想の続きでございます。

おまけ　妄想「天才子役・愛田茉菜・2」

茉菜が兄のＣＭ撮影についていった時、
女の子に間違えられたのは茉菜が女の子の服を着ていたからだ。

なぜ女の子の服を着ていたか…それはまだ茉菜が生まれる前、
お母さんのお腹の中にいた頃に、病院のエコー検査で医者に女の子

だと告げられていたのだ。
だから女の子の服ばかりをそろえていたお母さんは、小さな茉菜に女の子の服を着せていた。

そのうち大きくなってきたら男の子の服を着せるつもりだったのに、女の子の子役として人気が出てしまったため期を逸してしまった。

茉菜が通う小学校は、芸能科があることで有名な私立鳥越学園初等部だ。
茉菜が所属している事務所の社長と、この学校の校長は旧知の仲だったため、
特別に茉菜は誰にも本当のことを知られることなく女の子として通うことが出来た。

小さい頃の茉菜は、いつか自分もお母さんのように大きくなったらオチンチンがなくなると思っていたが、さすがに小6の今では自分が本当は男の子だということは理解している。
それでも茉菜には自分が男の子だという実感は無かった。
家でも学校でも普通に女の子として暮らしているし、仕事では普段にも増して完璧な女の子を演じていて、それで何ひとつ問題はなかったからだ。

それに今となっては、もし茉菜が男の子の戻りたかったとしても、戻ることなど出来そうになかった。
茉菜はもはや国民的人気の子役だったし、
日本中どこに行ってもみんな茉菜のことを知っている。
こんな状態では突然茉菜が男の子になってしまったら、
それこそ日本中が大騒ぎになってしまうだろう。

けれど茉菜が男の子に戻れない理由はそれだけではなかった。
茉菜がお金をいっぱい稼ぐようになると、
お父さんは脱サラして長年の夢だったラーメン屋を始めてしまったのだ。
ラーメンは美味しく評判も良かったが、お父さんは良い材料ばかりを使うため、
売れば売るほど赤字になってしまい、その補填は茉菜の稼ぎから出していた。

それでも茉菜はお父さんが大好きだったし、お父さんが作るラーメンも好きだったから
全然不満に思ったことは無かったが、
茉菜が働き続けなければ、お父さんのお店は潰れてしまうし、
中学生のお兄ちゃんの学費も払えなくなってしまうのは事実だった。

だから茉菜はこのまま女の子でいつづけなければいけなかった。
第二次性徴が始まる前の小４の３学期から、事務所の社長の勧めもあって
少しづつ女性ホルモンを飲むようになっていた。
おかげで茉菜は誰にも知られることなく、
可愛い中にも美しさを秘めた女の子として成長してきた。

茉菜自身もまた、男の子に戻りたいなどという思いが頭をかすめたことは、
これまで一度もなかったのだった。

・・あの時までは・・・

つづくかも（笑）

第178話　邂逅　待ち人きたる

結局・・オレは何も良い方法など思いつかないまま土曜日を向えてしまった・・・

長谷川に家まで送ってもらった次の日も、オレがいない間にバラされると困るので、けっきょく仮病も使うことができずに普通に登校した・・・

・・でも鈴木の弟は知らんふりで何の連絡もしてこなかった・・・

・

でも昨日の朝、学校に着くと、また靴箱の中に手紙が入っていた・

手紙には・・・

“　戸田さんへ　明日は朝9時までにキャナルシティの池の横で、西側の階段から4番目のテーブルに座って待っていて下さい。　ちゃんと春日ユウのメイクで来て下さい。　もし遅れたり来なかったりしたらどうなるか解ってますよね？　それじゃ明日、楽しみにしています。　”

・・うぅ・・・キャナルシティか・・・9時ってやけに早いなぁ・・・まあ・・早い方が人は少ないからいいかも知れないけど・・・

・・鈴木弟の言いなりになるのは癪だけど・・・今のオレには選択肢がない・・・

・・それにしても・・鈴木弟のヤツ・・・オレとデートなんかしてどうするつもりなんだろう・・・

・・オレのこと男だって知ってるクセに・・・

－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－

オレがキャナルシティに着いたのは8時45分ごろ・・・まだ人影もまばらで、出勤してくるお店の従業員の人を時々見かけるくらいだ・・・

・・なんでこんな早い時間なんだろう・・・

キャナルシティは中洲の近くにある複合商業施設だ。外国人の建築家がデザインしたオモチャっぽいオシャレな建物で、いろんなお店が入っている建物とホテルが一緒の敷地にある。お店がある方の建物にはシネコンがあるし、有名な劇団の専用劇場なんかもある。

・・もっとも有名劇団の劇場は最近お客さんの入りが悪いらしく、経営が苦しいようだ・・・

・・オレも福岡で生まれ育ったからなんとなくわかるけど・・福岡の人は熱しやすくて冷めやすい性格だ。新しいものが好きで、すぐに飛びつくけど、つまんないと思ったり、他の人がやめちゃうとすぐに興味がなくなってしまう・・・だから同じ劇をずっとやっていても何度も観に行く人は少ないと思うのだ。

・・ここキャナルシティ自体、最初の頃はすごく成功していたみたいだけど・・今はいまいち活気がない・・・

「・・もうそろそろ来るかなぁ・・・」
手首を返して時計を見ると・・もう9時を過ぎていた・・・

・・鈴木弟のヤツ・・オレには遅れないようにって書いてたクセに・・・デートで女の子を待たせるなんて・・・

・・これが本当のデートだったらアイツ女の子に嫌われちゃうぞ・・・まあ・・オレはデートしたくて待ってるワケじゃないから、遅れたってぜんぜん構わないけど・・・

・・今日のオレはアイツの希望でバッチリ“春日ユウ”のメイクだ・・・普段、街でこのメイクをすることは無いからちょっと緊張する・・・アイツ・・友達と会った時にモデルと付き合ってたらカッコイイなんて・・・オレ・・鈴木弟の彼女だなんて紹介されたらどうしよう・・・オレにはちゃんと純平という彼がいるのに・・・

・・でも・・アイツに秘密をバラされるワケにはいかないから・・・そんな時でも言いなりになるしかないのが悔しい・・・

・・本当はアイツのためにオシャレなんかしたくなかったけど・・モデルの“春日ユウ”がヘンな恰好をしてるワケにはいかないから・・この前買ったばかりの淡いピンクの半袖ワンピースに、丈の短い長袖の白い春物カーディガンを合わせてきた・・・この時期まだ朝晩は寒いけど、昼間は暑くなることもあるから・・脱いだり着たり出来るカーディガンがあると便利だ。

キャナルは道路から掘り下げて建てられているから、細長い池がある1階のような感じのココは正確には地下になる・・・建物から入る入口はたくさんあるけど・・道路から直接ココに来るには東側と西側の階段しかない・・・バスで来るならたぶん東側だけど・・・西側から4番目のテーブルと書いてあったから・・西の階段から来るのだろうか・・・？

キャナルには天神から歩いても10分くらいあれば来れるけど・・・中洲の近くだから途中の道にはエッチなお店への客引きの男の人がいたりして・・女の子がひとりで通るにはけっこう勇気がいる・・・だからオレはバスで来たけど・・・アイツは男の子だから歩いて来るかも知れないから・・・もしそうなら西側から来る可能性が高いかも・・・

・・西側の階段なら・・ココからでも見える・・・

・・それにしても遅いな・・・

・・もしかしてアイツ・・ここに来る途中の道で・・客引きの人につかまってヘンなお店に引っ張り込まれたりしてないだろうな・・・

・・利口そうに見えても、まだ子供だしなぁ・・・

・・イヤなヤツだけど・・・鈴木の弟だし・・・鈴木はオレの親友だったヤツだし・・・もしそんなことになってたら・・オレまで責任感じちゃう・・・

ふと階段の方を見ると、上から誰か下りて来る！・・アイツか？・
・いや・・だいぶ背が高いかな・・・

！！！

・・目をこらして見ていたオレは自分の目を疑った・・・しかし・・
間違いない・・・

「・・鈴木だ・・・」
・・鈴木は鈴木でも・・弟の方じゃなく・・オレの親友だった・・
アニキの方だ！！

「・・ど・・どうしよう・・なんであいつが・・・」
・・オレは急いで逃げるか、どこかに隠れようかと思ったけど・・・
思いとは裏腹に身体が硬直して動けない・・・その間にも鈴木はオ
レの方に近づいてくる・・・

「・・偶然・・通りかかっただけかも・・・」
・・それだったら・・オレに気付かずに通り過ぎるかも知れない・・
・だって・・今のオレはモデルの“春日ユウ”だ・・・鈴木が知っ
ている男のオレじゃないんだから！

鈴木はオレが座っているテーブルのところまで来ると・・・

「戸田・・だろう？」
「！！」
えぇ～～～！！・・・な・・なんでオレだってわかるのぉ・・・

・・オレが何も言えないでいると鈴木は・・・
「おかしいと思ったんだ。あいつがこんなところで待ち合わせなん

て・・・」
「・・・・・」
・・ど・・どういうこと・・・？

「戸田も聡二にダマされたんだろう？」
「・・・・・」
・・戸田も？・・え・・じゃぁ鈴木も・・ダマされて・・・？

・・えっ？！・・・オレ・・アイツにダマされたの？！

「でも久しぶりだな戸田、会いたかったよ。」
「・・ぇ・・ぁ・・なんで・・・」
「ん？」
「・・な・・なんで・・戸田だって・・わかるの・・・？」
・・鈴木・・なんでオレだってわかるんだよ！・・・今のオレはこんなに春日ユウなのに！！

「あ、ごめん。おれお前が女になったこと知ってたんだ。」
「え！？」
・・ど・・どういうこと？・・オレが女になったの知ってたって？・・・そんなハズは・・・

すると鈴木はオレの前のイスに座った・・・でも・・オレは鈴木の顔を見ることが出来ず、うつむいた・・・
「お前、携帯換えただろう？　その前から電話しても全然つながらなかったし、メールしても適当な返信しかなかったから変だとは思ってから、心配になってお前の家の近くで待ってたんだ。」
「！！」
「そしたら、お前の妹と白鴻の制服を着た女子高生が帰ってきて、お前の家に入っていった。」

・・そ・・そうか・・・鈴木・・見てたのか・・・
「おれは最初、お前のアネキかと思ったんだけど、お前にアネキがいるなんて聞いたことなかったし・・・」
「・・・・・」
「だから何度か通ってこっそり確認したら、背格好がお前と同じくらいだし・・顔もお前に良く似てたからな。」
「・・うっ・・・」
「おれはお前に会ってどうしてそんな事してるのか聞きたかったけど・・たぶん何か事情があるんだろうと思って聞けなかった。お前もそっとしておいて欲しいから、携帯替えたんだろうと思って。」
「・・・・・」

・・オレは・・鈴木がそんな気持ちでいたなんて・・・ぜんぜん知らなかった・・・

「・・ごめん・・・」
・・オレは泣きたい気持ちだった・・・
「・・鈴木・・くん・・が・・そんなふうに思ってたなんて・・・」
・・オレは・・なぜか昔のように、鈴木を呼び捨てには出来なかった・・・

「いいんだ、おれはお前が雑誌に出てくれたおかげで、元気でいるとわかってたから。」
「えっ!!・・知ってたの?」
オレは思わず顔を上げて、オレの前に座っていた鈴木と目が合ってしまいうろたえた・・・顔が熱い・・・

・・なんか鈴木・・ずいぶん大人っぽくなってる!

・・でも・・オレがモデルやってたことを知ってるなんて・・そん

なハズは・・・だってＪＩＮＯＮは女の子の雑誌なのに・・鈴木がどうして!?

「知ってたって・・モデルのこと?」

「ぅ・・うん・・・」

「偶然、おれのクラスの女子が白鴻の生徒がモデルやってるって話してたの聞いて、お前と同じ学校だったから興味持って見てみたら・・お前だったから驚いたよ。」

「・・うぅ・・・」

・・まさか・・鈴木が九州ＪＩＮＯＮに載ってるオレを見ていたなんて・・!!

・・恥ずかしくて・・顔が真っ赤になってないか心配だ・・・

「でもセーラー服の時のお前も可愛かったけど、モデルやってるお前はすごく綺麗だったからホント驚いたよ。」

「そ・・そんな・・・!!」

・・鈴木が・・・オレのことを・・・可愛い?・・・それにキレイだって?!・・・いったいどうなってんだ?!!

・・鈴木とオレは・・男どうしの友達だったハズなのに・・・

「だから、お前がいるの知ってたから聡二が白鴻に行くって言った時は、何とか止めようとしたんだけど、世話になってた予備校の先生に勧められたって言って聞かなかったんだ。ごめんな。」

「・・・ぅ・・ううん・・・」

・・そうだったんだ・・・そんなことがあったんだ・・・

「あ!・・弟くんに聞いた・・お父さん亡くなったって・・・」

「あぁ、うん、そうなんだ。」

「ごめんね・・わたし何も知らなくて・・・」
・・知ってたとしても・・オレには何も出来なかっただろうけど・・
・
「あの時は急だったから大変だったけど、今はまあ落ちついたっていうか。」

「・そう・・なら良かった・・・ぁ・・いや・・良かったなんて言っちゃダメだけど・・・」
「いいよ、戸田がそんなに気にしなくても。たしかお前はうちのオヤジには会ったこともないだろう?」
「・・うん・・そうだけど・・・」
・・オレが鈴木のお父さんについて知ってることといったら・・AVを隠し持ってたってことぐらいだもん・・・

・・それにしても・・・

「・・鈴木・くん・・背・・伸びたね・・・スポーツやってるって・・・」
「あ、そうなんだ。高校に入学してバスケ部に入ったら急に背が伸びて、いま１８７ｃｍあるよ。」
「！・・すごい・・・」
・・昔はオレと同じくらいか、少し低いくらいだったのに・・・

「戸田は?」
「・・わたしは・・中学の時とおんなじ・・もう止まっちゃった・・・」
「でも女の子なら、それくらいがちょうど良いんじゃない?」
「ぁ・・ぅ・・うん・・・」
・・オレもそう思うけど・・・大きくなった鈴木に言われると・・

なんか・・ちょっと悔しい・・・オレだけ成長していないみたいで・・・

「ところで、戸田は聡二になんて言って呼び出されたの？」
「ぁ・・うん・・・」

・・本当のこと言っちゃっていいのかな・・・でも・・鈴木になら言ってもいいかも・・・だってアイツとは兄弟なんだし・・・

「・・デ・・デートって・・・」
「え？！　聡二とお前が？」
「・・だって・・デートしないと・・わたしの本当のこと・・みんなにバラすって・・・」
「聡二そんなこと言ったのか、しょうがないやつだな・・ごめんな戸田、後で叱っておくから・・あいつも本気で言ったんじゃないと思うから、許してくれよ。」
「・・ぅ・・うん・・・」
・・うぅ・・本当に本気じゃなかったのかなぁ・・・なんかオレ・・少しホッとしたのと・・嬉しいのと・・なんだかわからないヘンな気持ちで・・泣いちゃいそうだ・・・

「・・・鈴木・くんは・・弟くんに・・なんて言われて来たの・・？」
「おれは久しぶりに一緒に映画観ようって。」
「ぁ・・」
・・それでキャナルなのか・・・

「でもオカシイと思ったんだよなぁ、最近あいつと二人で映画に来たこともないし、その前に用があるからこっちで待ち合わせなんて

さ。」
「うん。」
「そうだ！　だから前売り券2枚ともおれに持たせたんだ。」
「前売り券？」
「ほら、これ。」
鈴木はポケットから映画の前売り券を2枚出してオレに見せた・・・

「戸田は『アバター』なんてもう観たんだろう？」
「ううん・・わたし・・高校生になって映画館に来たことないから・・」
「そうか、おれと一緒だな。おれもクラブとか忙しくて時々ＤＶＤ借りて観るくらいなんだ。」
「・・そう・・・」
・・オレはＤＶＤも借りてないけど・・・

「でも・・『アバター』ってまだやってたんだね・・」
（この話は現在２０１０年４月２４日　『アバター』は前年の１２月から公開されていて、まだ公開されているギリギリの時期です。）
「うん。おれがずっと観たいって言ってたのを聡二が知ってて、これ聡二のプレゼントだよ。」
「・・・・・」
・・そういえば鈴木・・ジェームズ・キャメロン好きだったもんな・・・アイツ・・なかなか良いとこあるじゃん・・・

「戸田も観てないんだったら・・１０時からなんだけど一緒に観る？」
「え？！・・で・・でも・・弟くんは・・・？」
「あいつは来ないよ。きっと・・」
「・・どうして？」
「たぶんあいつ、おれたちを会わせるためにウソついたんだと思う。

」
「・・ぁ・・・」
・・そうなのかな？・・鈴木弟はオレと鈴木を会わせるために・・こんなとこに呼び出したんだろうか・・？
・・デートしなきゃバラすなんて言って・・・？
・・オレは鈴木と会いたいとは思わなかったけど・・・でも・・今は会えて良かったような気もする・・・
・・女になったオレの姿を鈴木に見られるのは・・すっごく恥ずかしいけど・・・鈴木がオレのことどう思ってたのかわかって・・なんだかホッとしたような・・・
・・それにオレ・・女の子になってしまったこと・・・もう鈴木に・・後ろめたい思いもしなくていい・・・
・・こういうのを“肩の荷がおりた”っていうのだろうか・・・？
「どう？観る？」
「・・・・」
・・鈴木と・・女の子になったオレが・・・一緒に映画を・・？
「それって・・３Ｄかな？」
「そう、３Ｄだよ。」
「・・だったら・・観る！」
・・だってオレ・・３Ｄ映画って一度観てみたかったんだ！

・・修学旅行で行ったＵＳＪのスパイダーマンもスゴかったし・・・
・・こんな姿で・・鈴木と映画観るのは恥ずかしいけど・・・３Ｄの魅力には勝てない！

「じゃぁ、もう行かなきゃ。もうすぐ始まるよ！」
「ぁ、うん！」

オレたちは映画館がある最上階へのエスカレーターへと急いだ・・・

・・鈴木・・ちょっと速いよ・・・オレは小走りに後ろからついていった・・・

・・後ろから見ると・・鈴木・・ほんとうに背が高い！

・・今日は鈴木弟にひとつだけ嫌がらせして・・少し高めのヒールを履いてきたのに・・・鈴木の背なら少しくらい高いヒールでも何も全然問題ない・・・いや・・逆にちょうどいいくらいだ・・・

エスカレーターの上の段から、鈴木が振り返りオレに微笑みかける・・・

「！！！」
・・鈴木・・・そんなステキな笑顔をオレに見せてどうしようってんだよ・・・

・・オ・・オレ・・はにかんでじゃうじゃないか・・・

・・そういう笑顔は・・オレなんかじゃなくて・・・・

・・彼女に見せるもんだ・・・・

第１７９話　映画　鈴木にとってオレは・・・

映画館の窓口で前売り券と交換に座席券をもらう・・座席は後ろから３列目の真ん中２つ・・そういえば中学のころに鈴木と映画を観に来た時も、そのあたりだったのを思い出す・・・鈴木はスクリーン全体を一目で見渡せる位置が好きなんだ。

窓口がある階からエスカレーターで上にあがる・・キャナルは窓口がある階の上の階から３階分が映画館になっている。

最初の階に行くと、プ～ンとキャラメルの甘い匂いが漂ってきた。

「ポップコーン買って行こうか。」

「あ・・うん。」

オレたちはキャラメル味のポップコーンとコーラを買った。　オレがバッグからサイフを出して開けようとすると・・・

「戸田はいいよ。おれが出すから。」

「え、でも・・」

「気にしなくていいよ、おれクラブが忙しくて小遣い使う時が無いからさ。」

「・・そうなの？・・それじゃぁ・・・」

・・鈴木のやつ・・お父さんが亡くなったから・・大変なんじゃないかな・・・

・・でも・・そんなこと聞けないけど・・・

オレがひとつ持とうとすると・・・

「いいよ、おれが持つ。」

そう言って鈴木はトレーを２つとも持ってエスカレーターへ向う。

オレは仕方なく後ろからついていった・・・

・・なんか・・鈴木やさしいな・・・鈴木ってこんなに気が利くヤツだったっけ・・？

上の階にあがると３Ｄ用のメガネを渡していた。両手がふさがってる鈴木のかわりにオレが２つ受け取った。

「ありがとう。」

「ううん。」

振り向いてお礼を言ってくれたけど、オレたちは親友だ、こんなことにイチイチお礼なんて言わなくていいのだ。お互い様だもん！

オレたちが劇場に入ってみると、お客さんは他に誰もいなかった。

「おれたちだけか・・」

「なんか貸し切りみたい・・」

・・早い時間だし・・もう公開も終わりがけだから・・こんなもんなのかな・・・

「・・２人だけなんて・・緊張するね・・・」

オレがそう言うと・・・

「そんなことないよ。映画が始まっちゃえば同じだよ。」

「・・そっか・・そうかも・・・」

・・鈴木は緊張しないのか・・・オレだけが意識しすぎなのかな・・・

イスに並んで座って、前の席の背中部分にトレーを置く・・・

「もう終わりがけだからスクリーンも小さめだね。」

「うん。」

「この大きさの劇場ならもう少し前でも良かったかな?」

「いいよ。ここらへんで・・３Ｄがどのへんがちょうど良いかもわからないし・・・」

「そうだな。おれ３Ｄは初めてだもんな。戸田も初めてだろう？」
「うん、あ・・わたしも映画は初めてだけど、修学旅行で行ったＵＳＪでスパイダーマン観たよ。」
「へ～いいな。どうだった？」
「すっごい飛び出して来たよ！スパイダーマンが目の前にいるみたいなの！」
「もう観たヤツらが言ってたけど『アバター』は奥行きもスゴイらしいよ。」
「・・へぇ・・そうなんだ・・」
・・高校生になって鈴木には新しい男の友達がいっぱい出来たんだろうなぁ・・・オレにはひとりもいないのに・・・

暗くなってコマーシャルが始まった・・・
「あ・・そうだ・・ちょっとお手洗い行ってくる・・・」
・・たしか『アバター』って長い映画だった気がするし・・ジェームズ・キャメロンの映画ってみんな長いんだよなぁ・・・『タイタニック』もすごく長かったもん・・・途中でトイレに行きたくなったら最悪だ。
「暗いから階段気を付けなよ。」
「うん・・」
「あ、やっぱおれも行っとこう。ジェームズ・キャメロンのは長いからな。」
「！！」
・・鈴木もオレの後から階段を下りてきた・・・うぅ・・マズイなぁ・・・

・・オレは出来ればトイレに入るところは鈴木に見られたくなかった・・・だって・・オレは女性用に入らなきゃいけないんだもん・・
・

「ぁ・・わ・・わたし・・こっちだから・・・」
鈴木の方を見ないようにして、そそくさと女性用トイレに駆け込んだ・・・
「うぅ・・最悪だぁ・・・鈴木に女性用に入るとこ見られちゃうなんてぇ・・・」

・・スカートを捲りあげてパンツをストッキングごと下ろすという・・もうオレにとってはごく当り前の行為でさえ・・鈴木の顔を思い浮かべてしまい、なんだか恥ずかしく感じてくる・・・

・・鈴木・・オレが女性トイレに入ったの・・どう思ったかな・・・

・・うぅ・・そんなこと考えてたら・・なかなかオシッコが出て来ない・・・ただでさえ女の子の恰好は小さいパンツの上からさらにストッキングで締めつけられるから・・オチンチンが潰れちゃってオシッコしにくいのに・・・
「・・急がなきゃ・・映画が始まっちゃう・・・」
オシッコが終ると拭くのももどかしく、急いでパンツとストッキングをあげた・・・もし多少濡れてても・・今日はナプキンしてるからパンツは汚れない・・・

・・そして・・ちゃんとスカートがキレイになってるか確認する・・・

女の子はこれを怠ると、スカートの後ろが折れ曲がってたり、最悪スカートがパンツの中に入っちゃったりするのだ・・・昔、オレもそんな失敗しちゃったし（３７話参照）・・・あの時は一緒にいたのが長谷川だったから良かったものの・・鈴木にそんなの見られたら・・オレもう恥ずかしすぎて死んじゃうよ・・・

手を洗って・・バッグを置いてきたことに気づいた・・・
「しまった・・まあ誰も見てないから振っとけばいいか・・鈴木も席に戻ってるだろうし・・男の子はトイレ早いからな・・・」
オレが男の子の頃のように手を振って水気を飛ばしながらトイレを出ると・・・そこには鈴木が待っていた・・・
（な・・なんでまだいるんだよ～～・・）
「なんだよ、ハンカチ持ってないのか？　お前昔からそうだよな、ほら使えよ。」
「・・ぁ・・ありがとう・・・」
オレは鈴木が渡してくれたハンカチを使って手を拭いた・・・
「・・バ・・バッグには・・ちゃんと入ってるんだけどネ・・・」
オレは言い訳しながらハンカチを返した・・・

・・うぅ・・最低だ・・女の子なのに男の子にハンカチ借りるなんてぇ・・・！

オレたちは急いで劇場に戻ったら、まだ予告編が始まるところだった。
・・ＣＭずいぶん長かったんだなぁ・・・

・・いきなり暗いところに入ったから良くみえない・・オレたちの席は・・・あ、あった・・・オレのバッグがあるあそこだ！
階段を急いで上がろうとすると・・・
「キャッ！」
階段につまずいてしまった。
「おっと！」
「！！！」
危うくコケそうになったオレは・・鈴木に抱きとめられてしまった・・・
（ヒィ～～～！！）

・・オ・・オレのムネが・・鈴木の腕に～～！！
「あぶないよ、ちゃんと見て上がらなきゃ！」
「・・ぁぅ・・う・・うん・・・」
・・す・・鈴木・・・オレのムネが本物だって・・気付いちゃったかな・・・鈴木もオレが身体まで女の子みたいになってるなんて・・たぶん知らないと思うんだけど・・・

・・でも・・暗くて良かった・・・だって明るかったら・・たぶんオレ真っ赤になってるところだ！

・・オレってホント最低だ・・・いつの間にか他にも何人かお客さんがいて・・オレのことクスクス笑ってるし・・・

「転ばなくて良かったね、あの勢いで転んだらケガしてたよ。」
「・・うぅ・・ゴメン・・・」
・・もう・・恥ずかしくて・・鈴木の顔なんて見れない・・・もうすぐ映画が始まるから助かった・・・
オレはコーラを少し飲んで、なんとか気持ちを落ちつけた・・・

長い予告編が終って、やっと本編が始まった・・・

・・映画『アバター』の舞台は“パンドラ”という地球に良く似た星・・・そこで地球から来た人間たちは鉱物を採掘している・・・

・・でもこの星は何でもが大きくて、木も巨大だし、動物も大きくて凶暴・・・大気も人間には合わなくて、マスクをしてないとすぐに死んでしまう・・・そして原住民も凶暴で毒の付いた矢で撃ってくるらしい・・・

・・キレイだけど・・人間にとっては恐ろしいところだ・・・

“アバター”というのは、この星の青くて大きな原住民と地球人のＤＮＡを融合させて創った生き物・・・ほとんど原住民と同じだけど・・顔がなんとなくＤＮＡを融合させた人と似ている。

主人公は戦争でケガして足が動かない退役軍人・・・自分の“アバター”とシンクロするハズだった、科学者の双子の兄弟が死んでしまって、代わりにこの星に連れてこられた。たまたまＤＮＡが同じ人間がいて助かったってワケだ・・・“アバター”を創るのには、ずいぶんお金がかかるものらしい・・・

科学者たちは機械に入って、この“アバター”と脳をシンクロする・・するとまるで“アバター”を自分の身体のように動かすことが出来る。そして人間には危険なこの星を“アバター”という原住民と同じ体になって調査する・・・

主人公は科学者だった双子の兄弟とは違って“アバター”のことも、この星のことも何も知らない。だから初めて“アバター”とシンクロすると、自分で歩けることが嬉しくて、科学者を振り切って走り出してしまった・・・

「エヴァみたいだね・・」

「・・うん。」

たしかにエヴァンゲリオンに似てるかも・・・シンクロするとことか・・大きな“アバター”が暴走する感じも良く似てる・・・

「すごい立体感だね。」

「うん。」

飛び出す感じもスゴイけど・・奥行きもすごい！　景色がず～っと向こうまで続いてるみたいだ。

・・３Ｄ用のメガネをかけているからお互いに顔が見えないのがありがたい・・・３Ｄメガネは少しサングラスっぽくなってるから、相手の目がよく見えなくて少しは恥ずかしさが軽減されるみたい・・

・

“アバター”になって調査に出た主人公は巨大なサイみたいな動物に襲われて、他の人たちとひとりではぐれてしまう・・・この星の生き物ってホント凶暴だ・・・

・・夜になり狼みたいな動物に襲われて絶対絶命になった時、原住民の女性が助けてくれる・・・本当は殺すつもりだったけど、神様のお告げかなんかで助けることにしたらしい・・・この星の人は凶暴らしいけど・・生物の命を無闇に奪わないみたい・・・

主人公は原住民の女性についていって・・なんとなく村に受け入れられる・・・兵隊＝戦士ってことで主人公に興味をもったらしい・・

・

この星の人は髪を三つ編みにしてるけど、その先が触手みたいになってて、馬みたいな生き物の触手と絡ませると意思の疎通が出来るらしい・・・とっても便利。

・・でも・・なんかエッチな感じもする・・・

空を飛ぶ竜みたいなヤツとも同じようにして意思を共有する・・・

そして自由に空を飛べる・・一度意思を共有すると一生友達なんだって・・・いいなぁ・・・

主人公は最初はダメダメでバカにされてたんだけど、そこは元兵隊だからだんだん実力をつけて、原住民の女性も興味をもってくる・・・

最初、主人公は村にもぐり込んで採鉱会社のスパイみたいなこともしてたけど・・だんだんこの星の人のことが好きになってきて・・会社とは上手くいかなくなってくる・・・

そして戦士になるための最後の試練として・・野生の竜をつかまえて意思を共有することが出来ればみんなに戦士として認められる。でも竜がいるとこは空に浮いた岩で、そこまで蔓を伝って上っていかなきゃいけない。

・・・３Ｄだから本当に空に浮いてるみたい・・・すっごく高い・・・

主人公はついに竜を捕まえて、戦士として認められた。

・・原住民の女の人と竜に乗って飛ぶ主人公・・お互い好きになり始めてるみたいだ・・・

・・そして・・先祖の霊が宿っている神様の木のところで、ついに抱き合ってしまう・・“禁断の恋”ってやつ・・・この星の人たち・・どんなエッチするんだろう・・・もしかして・・あの触手をからめちゃったりするのかな・・・

・・あぁっ・・まただ・・・オチンチンの奥のほうがピクピクする・・・

大森先輩にいっぱいイかされてからというもの・・電車の振動くらいではウズウズしなくなったのは良いんだけど・・・最近はＡＶ観たり・・エッチなこと考えちゃったりすると・・何もしてないのに股間がピクピク騒ぐようになってしまった・・・

・・うぅ・・映画に集中しよう・・・

・・でもせっかくこの星の人たちと仲間みたいになったのに・・結局、会社は高価な鉱物が根元に埋まってるからって・・みんなが住んでる大事な巨木を軍隊を使って焼き払ってしまう・・・かわいそう・・・せっかく仲良くなれたのに・・・

それだけじゃ終らず、神様の木まで燃やそうとするから、怒った主人公は原住民のみんなをまとめて、軍隊をやっつけようとする・・・

・・そして・・映画はクライマックスへ・・・

「あ～・・面白かった！」

・・オレは主人公と原住民の女の人との惹かれる合っていくのが、すごくロマンチックでドキドキしちゃった！

「なんか全体的に『ナウシカ』に似てたね。」

「ぁ・・そうかも・・・」

「それにしてもすごいＣＧだったね！世界を全部ＣＧで創るなんて

信じられないよ。」
「ぅ・・うん・・・」
「あの空に浮んだ岩ってルネ・マグリットのイメージだよね。」
「・・ルネ・・マグリット・・？」
「戸田知らない？あの海岸に大きな岩が浮いてて、その上に城が乗ってるヤツ！」
「・・ううん・・・」
「そうかぁ・・けっこう有名なんだけどなぁ・・」
「・・・・・」

・・なんか鈴木・・オレと観るとこが違うんだなぁ・・・

「あの星は重力が小さいから、人間も動物も大きいし、石も空に浮んじゃうんだろうね。」
「・・・・・」

・・オレは主人公と女の人のことばかり気にして観てたのに・・・
鈴木はＣＧとか・・そんなことばっかり・・・

・・オレは・・そんな話したいんじゃないのに・・・

「？　どうしたの？」
「！・・ううん・・な・・なんでもない・・・」
・・しまった・・なんか話がつまんなくて黙っちゃった・・・
「お腹空いた？」
「ぁ・・うん・・そうかも・・・」
「じゃぁラーメンスタジアムに行こうか。あ、もっとオシャレな店の方がいいのかな・・」
「ううん、ラーメンでいい！」
・・オシャレな店って・・・鈴木・・やっぱりオレのこと・・女の

子として見てるんだろうか・・・

・・オレは久しぶりに・・男の子どうしでいたいのに・・・

「あのぉ、ユウちゃんですよね？」

「え？」

後ろから声をかけられて振り向くと高校生くらいの女の子がふたり・・・

「ぁ・・はぃ・・」

・・しまった・・今日はバッチリ春日ユウだから・・気付かれても当然だ！

・・鈴木のいるとこでモデルの“春日ユウ”として振舞わなきゃいけないなんて・・イヤだなぁ・・・

「ほらやっぱりユウちゃんじゃない！」

「きゃー！」

女の子ふたりはテンションＭＡＸだ・・・

「あ・・握手してください！」

「ぁ・・はぃ・・・」

「サインもらっていいですか？！」

「ぁ・・いいですけど・・・」

オレが手帳にサインしてあげると・・・

「きゃー！　ありがとう！　みんなに自慢しよう！」

するとひとりの女の子が鈴木を見て・・・

「あ、もしかしてユウちゃんの彼氏さんですか？」

「！！・・ち・・違います・・ただの友達・・・」

「え～！　なんかアヤシ～い！」

女の子たちはひとしきりきゃーきゃー騒ぐと・・手を振って行ってしまった・・・

「戸田、人気あるんだな・・」
「そ!・・そんなことないって!・・ただ雑誌に出てるから・・みんな芸能人みたいに勘違いしてるだけで・・・オレそんなんじゃ・・・」
オレが慌てて否定すると・・・
「でもスゴイよ。普通にサインしてたじゃない。やっぱ戸田は可愛いからな!」
・・す・・鈴木・・・なんでそんなこと言うんだよ・・・オレは全然すごくも可愛いくもないのに・・・

・・オレは昔と全然かわってないのに・・・・??

「!!」
オレは突然気がついた・・・

・・そうか!・・今日のオレは“春日ユウ”だから・・鈴木だって、どうしてもオレのことを女の子みたいに見てしまうんじゃないだろうか・・?

・・きっとそうだ!そうに違いない!!

「・・ねぇ・・ちょっとここで待っててくれない?・・オレお手洗いに・・・」
「うん、いいけど?」
オレはベンチのところに鈴木を待たせて、急いでトイレに行った・・

・

トイレの個室に入ると・・・

「良かった・・クレンジングクリームも持ってきてて・・・」

クレンジングクリームを手に出して、ファンデーションのフタの裏の小さな鏡を見ながら、お化粧を落していく・・・目のまわりは特に丁寧に・・・

ティッシュでキレイに拭き取ると・・・そこにはいつもの飾らないオレがいた・・・

「これなら大丈夫だ・・ノーメイクなら春日ユウだとバレないだろうし・・鈴木も昔みたいに接してくれるはず！」

個室を出て洗面台の大きな鏡でキレイに拭き取れているか確認して・・前髪をととのえる・・・ノーメイクなのはちょっと恥ずかしいけど・・鈴木にはありのままのオレを見て欲しい・・・

「・・そうだ・・ラーメン食べるなら・・・」

髪がジャマな時のためにバッグに入れていたシュシュで、長い髪を後ろでひとつに束ねた・・・女の子が髪を気にしながら麺類を食べる姿が好きっていう男の人もいるみたいだけど・・オレは髪なんか気にせず食べたいのだ。

「鈴木、お待たせ！」

「え？　どうしたの？」

「お化粧・・落しちゃった。」

「・・なんで？」

「だって、せっかく鈴木といるのに・・春日ユウだってバレたら面倒だし・・・それに・・・」

「それに？」

「ぁ・・ううん、何でもない！」
・・鈴木に普段のオレを見て欲しいなんて・・恥ずかしくて言えないよ・・・
「・・・・・・」

・・あれ？・・鈴木のヤツ黙っちゃった・・・なんか・・ヘンな感じ・・顔が赤いよ・・・
「・・も・・もしかして・・春日ユウの方が良かったとか・・？」
「い・・いや、戸田って化粧してないと、あんがい子供っぽっくて可愛いなって思ってさ。」
「！！」
・・な・・なんだと～・・？
「おれ・・戸田のことは雑誌でしか見てなかったから、最近はずいぶん女性らしくなったと思ってたけど・・こうして見ると昔と同じで可愛いんだな・・・」
・・な・・なに言ってんだ鈴木・・・自分が言ってること・・解ってるのか？！

・・昔のオレは・・男の子なのに・・・昔と同じで可愛いって・・なんのことだよ・・・

「じゃぁ・・ラーメンスタジアム行こうか・・」
・・なんかぎこちない空気・・・
「・・ぅ・・うん・・・」
・・うぅ・・・せっかくお化粧落したのに・・よけいヘンな感じになっちゃった・・・

・・鈴木・・なんでノーメイクの方が緊張してんだよ・・・

・・こ・・こっちまで緊張しちゃうじゃない・・・

ラーメンスタジアムはキャナルの中にある色んなラーメン屋さんが入って人気を競っているところ・・・他の地方のラーメンも食べられる人気スポットだ。

「・・鈴木は？　なに食べる？」

・・オレはヘンな感じにならないように・・出来るだけ自然に聞いた・・・

「おれは・・やっぱりトンコツかな・・戸田は？」

「オレもトンコツがいい。」

「・・・・・・」

「ん？　どうかした？」

なんか・・鈴木が不思議そうな顔でオレのこと見てる・・・

「戸田・・さっきから自分のこと・・オレって言ってるよ。」

「・・えぇ～～！！　そ・・そうだった？？」

・・ど・・どうしよう・・・もう女の子になって長いから・・オレって言っちゃう心配なんてないと思ってたのに・・・

？？・・あれ？・・でも・・鈴木とは男どうしだからいいのかな・・・？

・・や・・やっぱりダメ！・・女の子なのに“オレ”なんて！・・ヘンなコって思われちゃう・・・

・・で・・でも・・鈴木はオレが男だって知ってるんだから・・・

あぁ・・もう何がなんだかわからない～～・・・

「つい出ちゃったんだろう？　気にすることないよ。」
「・・す・・鈴木・・・」
見上げると鈴木の顔が！・・オレは慌ててうつむいた・・・
「おれはどっちでも良いと思うよ。戸田が言いたい方で。」
「うぅ・・・」
・・そう言われても・・オレどうしていいか・・・
・・オレは鈴木と男どうしでいたい・・・
・・でも・・オレはもう男じゃない・・・
・・いくら頑張っても・・鈴木と男どうしではいられないんだ・・・
「まあ、とにかくラーメン食べよう！　お腹好いただろう？」
・・うぅぅ・・・
「・・鈴木ぃ・・やっぱり・・“わたし”でいく・・・」
「！・・そう？・・うん、それが良いよな。そっちの方が似合ってる。」
「・うん・・」
・・そうだよ・・オレは女の子なんだもん・・・鈴木がオレのことを女の子扱いしたって・・それは当り前のこと・・・だからもう平気だ！
・・鈴木は男で・・オレは女・・・それでも・・昔からの友達には違いない・・・
・・昔からそうだと思えば・・こんなの何でもないことだ！

・・だって・・男のオレなんて・・もういないんだもん・・・

・・鈴木が・・オレの男の子の頃のこと忘れたって・・それも仕方がないことなんだ・・・

トンコツラーメンをすすっていると・・・

（・・ん・・鼻水が・・・）

慌ててバッグからティッシュを出していると・・・

「・・ぁ・・あれ？・・どうしちゃったんだろう・・・」

いつのまにか涙がほっぺたを伝っていた・・

「ハハ・・へ・・ヘンなの・・・おいしいのに・・なんか・・・」

「戸田・・」

「・・ぁ・・き・・気にしないで・・なんか・・湯気のせいかも・・」

「・・・・・」

・・あぅっ・・な・・なんで・・・

「・・そうだな、コショウのせいかも知れないな・・」

「ぁ・・うん・・そうかも・・」

・・そうだ・・これはラーメンにかかったコショウのせいだ・・・

オレはそう思いたかった・・・

・・でも・・そうじゃないことは・・オレにもわかってる・・・

・・オレの気持ち・・鈴木には知られたくない・・・

・・涙はラーメンを食べ終るまで止まらなかった・・・

・・こんな時なのに・・お化粧を落してたから涙で崩れなくて良かったなんて・・思ってるオレがいる・・・

・・こんなのもう・・男じゃない・・・

－－

「ごめんね、なんか・・頭が混乱しちゃって・・」

「・・・・・」

「わたし・・また鈴木くんと会うことがあるなんて思わなかったから・・・会えるなんて思わなかったかし・・・なんだかワケわかんなくて・・・」

「おれは、またいつか会えると思ってたよ。」

「え？」

「だっておれたち親友だろう？」

「！・！・！」

「想ってればいつかは会えるっていうし、天神なんかでバッタリ会うこともあるかも・・なんてね。」

「・・うん・・・」

「でも、まさかこんな形で会うことになるとは思わなかったけど。」

「・・わ・・わたしも・・・」

「これもまあ、聡二のおかげって言ってもいいのかな？」

「ぁ・・ぅ・・うん・・・」

・・出来ることなら・・鈴木とはもう少しマシなかたちで会いたかった・・・でも・・前もってわかってたらオレは逃げちゃって鈴木には会わなかったと思うし・・・結果的にはアイツのおかげかも知れないけど・・・

・・でも・・オレはとてもアイツに感謝する気にはなれない・・・こんな・・デートみたいなシチュエーション作りやがって・・・

・・オレは鈴木と・・男どうしで会いたかった・・・

・・そんなの無理なのはわかってたけど・・・

・・鈴木はオレの心の中では、たったひとりの男どうしの親友だったのに・・・

・・それなのにもう鈴木は・・オレのことを男として見てくれないのがわかってしまった・・・

・・そしてオレも・・・もう昔と同じ気持ちでは・・鈴木を見ることが出来ない・・・

・・だって鈴木を見てると・・・いつのまにかオチンチンの奥のほうが・・ピクピク動きだすんだもん・・・

・・親友にこんな気持ちになるなんて・・・オレって最低だ・・・

ＡＴから

この話、みなさんに伝わるのでしょうか？

有希が自分の気持ちを認めたくないようで、なかなか言葉にしてくれないので困ります。

次回も鈴木の話は続きます。

第１８０話　鈴木　たったひとりの男友達

その後オレたちはペットショップで子犬を見たり、ゲームセンターでＵＦＯキャッチャーをしたりした。　だけど一旦気まずくなってしまった空気は、なかなか元へは戻らなかった・・・

オレたちは何となくキャナルを出て、天神への道を歩きだす・・・川べりの清流公園を通って、那珂川〈なかがわ〉の川岸を並んで歩く・・・

ここは夜になると沢山の屋台が並ぶ博多では有名な場所・・もう仕込みを始めている人もチラホラいる・・・

・・オレの手にはキてぃちゃんのぬいぐるみ・・・

「かわいいなぁ・・」

オレが欲しがったから、鈴木が頑張ってＵＦＯキャッチャーで取ってくれたキてぃちゃん・・黒いゴスロリ着てるのがすごく可愛い。

「でもお前がキてぃちゃんが好きなんて知らなかったな。」

「・・うん・・」

・・当り前だ・・鈴木が知ってる頃のオレはキてぃちゃんなんて何とも思っていなかったんだから・・・

・・でも・・今は大好きになっちゃった・・・

・・オレは自分では男の頃とちっとも変わってない気がする・・でも・・やっぱり男の頃とは違う・・・

・・オレは女の子になって、男の子の頃は見えなかったものが見えるようになってきたし・・・わからなかった事がわかるようになっ

てきた気がしてた・・・

・・でも・・もしかしたらそれは・・男の子の頃は見えてたのに、
見えなくなったものもあるのかも知れない・・・

・・鈴木の気持ちが良くわからないのは・・オレが女の子だからな
のだろうか・・？

・・それとも・・男の子の頃は・・鈴木の気持ちを知りたいなんて・
・思わなかったのかも・・・

・・その可能性は大きい・・・

・・このまま帰っちゃうのかな・・・もう少し何か話したいけど・・
何を話せばいいのかもわからなかった・・・すると鈴木が・・・
「ちょっと座らない？」
「ぁ・・うん・・・」

オレたちは川に向って置かれたベンチのひとつにふたりで座った・・
・

川の水はすごく浅かった・・・浅瀬には、なんて種類かわからない
けど小さな魚が群れていて、時々キラキラ光っている・・・

「戸田はいつもそういう恰好なの？」
「・・う～ん・・今日はだいぶオシャレかな・・だって今日は・・
春日ユウだったから・・・」
そう言ったとたん、急に恥ずかしくなってしまい、慌てて付け加え

た・・・
「・・好きで・・春日ユウで来たんじゃないよ・・・弟くんが・・春日ユウで来いって言ったから・・・」
「聡二が？」
「うん・・」
・・言い訳だけど・・でも本当のことだ・・・

「・・春日ユウと戸田は違うのか？」
「うん・・全然違う。　春日ユウはモデルだもん・・わたしは・・ただの女子高生だから・・・」
「面白いな、お前そんなふうに思ってるんだ？」
「・・思ってるっていうか・・ホントのことだもん・・・全然違うでしょう？　春日ユウと今のわたし・・・」
オレはノーメイクの顔を指さして言った・・・

「まあ、確かにそうかな。でもおれは今のお前の方が好きだけど・・」
「え？！」
・・好き？！
「春日ユウの時のお前は、綺麗で手が届かない感じだけど・・今のお前は・・綺麗だけど、ちょっと頼りなげな感じもして・・守ってやりたいっていうか・・」
「？！」
・・なに言ってんだ？　コイツ・・・

「戸田はさ・・まえから女になりたかったのか？」
鈴木に急に聞かれて・・オレは言葉に詰まった・・・
「いつからなんだ？」
・・どう答えたらいいんだろう・・・

「・・ずっと昔から・・憶えてないくらい・・・」

・・本当は・・昔の事はホントに憶えてないんだけど・・・

「それじゃ、中学のころ・・おれと遊んでた時も・・？」

「ぁ・・ぅ・・うん・・・」

オレは・・“違う、あのころはオレはまだ普通の男の子だったんだ！”と言いたかった・・・“おまえとは男どうしの親友だったんだ！”と・・・

・・でも・・今はそんなこと言えない・・・そんなふうに言ったら・・卒業間際に急に女の子になりたくなった事になるし・・・

・・オレは自分が女の子になりたいと思うより先に・・女子校に入学するために女の子になってしまった・・・でもそこはどうしても説明することが出来ないのだ・・・

・・オレが昔から女の子になりたかったとすると・・その気持ちを隠して、鈴木との中学生活を送っていたことになる・・・すると・・鈴木とのいろいろな場面がおかしな事になってしまう・・・

・・オレは鈴木と肩を組んだことがある・・・修学旅行では布団を並べて寝たことも・・・クワガタを捕りに行った山の中で並んで立ちションしたことも・・・そして・・ふたりでこっそりＡＶを観たことも・・・

・・そんな鈴木との男どうしの想い出が・・オレの心が女の子だったとすると・・違った見え方をしても仕方がない・・・

・・オレは鈴木がそんなふうに想像してるんじゃないかと考えると・・たまらない気持ちになってくる・・・

「おれさ、会ってすぐ聞きたかったんだけど・・」
「・・・？」
「前から思ってたんだけど・・・お前さ、中学卒業した後、学校の近くを歩いてなかったか？」
「え・・？」
「おれが高校に入学する少し前、中学の近くを歩いていると、前から二中のセーラー服を着た女の子が歩いて来たんだ・・」
「！！」
「おれ・・可愛いコが歩いてくるなって思ってたんだけど、すれ違う時に一瞬、お前に見えて・・」
「・・・・・」
「だから振り返って見たんだけど・・その女の子は振り向きもせずにそのまま行ってしまった。おれずっと見てたんだ・・・」
・・あの時だ・・・オレが井原先生にさよならを言って・・学校を出て少し行ったところで鈴木とすれ違った・・・（9話参照）
・・オレは・・鈴木がまったくオレに気付かなかったと思ったけど・・まさかあの後・・鈴木が振り返って見てたなんて思いもしなかった・・・
「おれ、そのコのことが忘れられなくて、高校に入学しても頭を離れなかった。また会えないかと思ってたんだ。」
「・・・・・」
「でも、白鴻の制服を着たお前を見た時・・やっぱりあれはお前だったんじゃないかと思った。」
「・・・・！」
「戸田、あれお前だったのか？　そうなんだろう？」
「・・・・・」

・・あの時のオレは・・自分が女の子として立派に卒業出来た気になっていた・・・でも違った・・あれは自分勝手な思い込みだったんだ・・・

・・井原先生は・・オレが自分に自信をつけるためだけに言った言葉に傷付いて・・責任を感じていた事を後で知った・・・（１４３話参照）

・・そして鈴木も・・オレのせいで居もしない女の子が頭を離れなかったなんて・・・・

アレ？？・・頭を離れなかったって・・また会いたかったって・・・どういうこと？

・・それって・・もしかして・・？！

「どうなんだ？　あれお前じゃないのか？」

「・ぅ・・うん・・・」

「？　それ、お前だったってこと？」

「・・うん・・わたし・・・」

オレは正直に言った・・鈴木が何でこんなことを聞くのか知りたかった・・・

「やっぱりそうか！良かった、やっと会えた！」

「？！」

「お前で良かったよ。おれ女の子となんて上手く口きけないけど、お前となら元々親友だしな！」

！！・・いったい・・どうなってんだ？

「・・鈴木・・なに言ってるの？・・わたし・・男だよ・・？」

「わかってるよ。でもおれ、お前のことが好きなんだ！　たぶん一目惚れってやつじゃないかな。」
「え？・・へ・・ヘンだよ・・そんなの・・・」
・・鈴木・・頭がおかしくなったんじゃない？
・・ちょっと前まで男友達だったのに・・女の子の恰好したオレに一目会っただけで・・好きになっちゃうなんて・・・

「だってお前もおれのこと好きだったんだろう？」
「え？！」
「言ったじゃないか、昔から心は女だったって！　男と女が親友ってことは好きだって事だろう？」
「・・そ・・そんな・・・それは・・嫌いじゃないけど・・・」
・・でも・・それは・・男として・・・

「おれはお前のことが好きだった。もちろん男としてだから、愛してるとかそういう事じゃないけど・・」
「・・・・・」
「でも今はお前は女だろう？　女のお前を好きな気持ちは・・愛してるってことだよな？」
「！！・・そ・・そうかなぁ・・・」
・・そんなことオレに聞くなよ・・・お前の気持ちなんかオレは知らない！
「・・お・・女と男が好きだからって・・べつに愛してるとは限らないんじゃないかな・・そうよ！・・ただ単に好きって事だって・・・」

「そんなのじゃないんだ。オレはお前を好きなのは。　お前のこと愛してるんだ！」
鈴木はオレの肩をつかんで自分の方に向かせた・・・

（キャ～！）
・・こ・・これって・・もしかしてプロポース?！
「おれ、お前見てると・・ドキドキしてたまらないんだ！　お前はしないのか?」
「・・そ・・そりゃ、わたしだって・・ドキドキくらい・・するけど・・・」
「！！・・それはおれのこと好きだからだろう?」
「・・す・・好きだけど・・・」
「だったら！」
鈴木がいきなりオレに抱きついてきた！

「ダメ！！」
オレは力いっぱい手を突き出して、鈴木を突き飛ばしていた・・・
「・・好きだからって・・そういうことじゃないの・・・」
でも・・どう言えばいいのかわからない・・・

「・・わたしは・・たしかに心は女の子だけど・・男の子の部分もあるの・・・」
「・・・?」
「・・自分の本当の気持ちを隠して男の子として暮らしてた時は・・女の子の気持ちじゃなくて・・本当に男の子の気持ちだったの・・・言葉で言えば“隠して”ってことになっちゃうけど・・そんなに簡単な事じゃない・・・」
「・・どういう意味?」
「・・わたしはずっとずっと男の子として生きてきた・・・女の子の気持ちは心の奥底に閉じ込めて・・出て来ないようにフタをして・・・だから・・鈴木とも男の子どうしと思って付き合ってきたの・・・」
・・オレ・・いったいなに言おうとしてるんだ・・?

「・・でも・・高校受験になって・・将来やりたい事とかいろいろ聞かれた時に・・・隠してた気持ちに気付いてしまって・・・いや・・それまでは気付かないふりしてたんだと思う・・・」
「でも、さっきは中学の頃から女の子だったって。」
「・・そう言ったけど・・そんなに単純じゃないの・・気持ちって・・男の子として暮らさなきゃいけないのに・・常に女の子の気持ちでなんていられない・・・」
「じゃぁ・・おれの事は・・何とも思ってなかったってこと?」
「何ともってことじゃないけど・・鈴木のことは・・男どうしとして・・・」

「そうか・・・」
「うん・・」
・・うぅ・・鈴木・・がっかりしちゃったかな・・・

「それじゃ、いま女としてはどうなんだ?」
「えっ・・女として?」
「女のお前は、おれのことどう思ってる?」
「・・そんなの・・わかんないよ・・・だって・・わたし女としては・・考えたこと無かったもん・・・」
「・・・・」
「・・鈴木がそんなこと・・思ってるなんて知らなかったし・・・それに・・・わたし・・いま付き合ってる人がいるし・・・」
「え?」
!・・しまった・・こんなこと言うべきじゃなかったかな・・・
「それって・・男?」
「・・うん・・・」
「ど・・どんな人?」
「・・モデルの人・・やさしい人なんだ・・・」
・・うぅっ・・言っちゃった・・鈴木・・ショック受けちゃった

かな・・・

「その人、戸田が本当は男だって知ってるの？」
「・・まだ・・知らない・・・」
「それじゃ無理だよ！　男だってバレたら・・・」
「わかってる！　そんなのわかってるもん！　でも・・・」

・・それでもオレは・・純平のことが好きなんだ！

・・純平への気持ちは・・鈴木へのオレの気持ちとは全然ちがう・・
・

・・だって・・純平の前では・・オレは恋するただの女の子になってしまうのだから・・・

「そいつの事、すごく好きなのか？」
「・・うん・・・」
「そうか・・・」
・・鈴木には悪いけど・・純平と鈴木じゃ比べ物にならない・・・

「・・鈴木のことは・・ずっと大切な友達だと思ってた・・今でも思ってる・・・それじゃダメ？」
「・・・・・」
「・・でも・・鈴木がわたしのこと・・女の子として認めてくれたのは嬉しかったよ・・・」
・・もう男として見てくれないのは・・悲しかったけど・・・

「わたしたち・・もう会わない方がいいと思う・・・」

「戸田・・新しい携帯の番号教えてくれよ！・・駄目か？」
「・・ダメ・・・」
「メールアドレスも？」
「・・うん・・・」

「でも・・おれの番号は知ってるよな。　まだ前のままだから・・」
「・・ううん・・憶えてない・・・」
・・鈴木の番号は・・古い携帯と一緒に捨てちゃった・・・
「戸田、なんか書くもの持ってない？」
「？・・ボールペンならあるけど・・・」
オレがバッグからボールペンを出して手渡すと・・鈴木はポケットから映画の半券を取り出して裏に何か書いた・・・

「これ、おれのアドレスだから。」
「い・・いらないよ・・わたしかけないもん・・」
「かけなくて良いから、捨てても良いから。」
「・・そんな・・・」
・・こんなのもらったら・・捨てられないよ・・・

「もし、何かおれに相談したい事とかあって・・まだ捨ててなかったら、その時はかけてきてよ。」
「・・ぅ・・うん・・かけないと思うけど・・・」
・・女の子としての相談なら弘子たちにするし・・・男の子としての相談なんて・・家族にしか出来ない・・・鈴木に相談することなんて・・・

「・・相談するなら・・わたしが男の子のころの友達でいてくれなきゃ困る・・・」
「・・・・・」
「・・今日みたいなこと言ったら・・わたし・・鈴木のことキライ

になっちゃうよ・・・」
「うん、わかった。もう言わないよ。」
・・そんな簡単に・・気持ちなんて変えられないのに・・・
・・鈴木・・ちょっとやさしすぎないか？
・・カッコつけすぎだ・・・

オレたちは天神まで歩いて、電車で春日原駅に着くとそのまま別れた・・・その間ほとんど何もしゃべらなかった・・・

・・別れ際に・・・
「それじゃ、おれはまた会えるって思ってるから。」
鈴木はそう言ってオレに背を向けた・・・
「ぁ・・」
・・もうこれが最後かもしれないのに・・鈴木が行っちゃう・・・
「・・も・・もし！」
オレは思わず鈴木の後姿に声をかけていた・・・
「？」
「・・もし・・わたしの近況なんか知りたかったら・・弟くんに聞いたらいいよ・・・なんか・・わたしのこと調べてるみたいだから・・・」
「・・そうだな・・あいつ同じ学校だからな。」
「うん・・」
「じゃあ、元気でな。“春日ユウ”も応援してるよ！」
「・・うん・・」

・・鈴木はそのまま行ってしまった・・・今度はオレが見送る番だ・・・

・・鈴木は振り返りもしなかった・・でも・・振り返りたいのを我慢してるのを後ろ姿に感じた・・・

・・その後ろ姿を見て・・オレはなぜかキュンとしてしまった・・・

・・鈴木には言わなかったけど・・オレは女の子としても・・少し鈴木のことが好きだ・・・

・・もちろん・・純平とは比べ物にならないけど・・・

それにしてもオレ・・あの時なぜ・・あんな口から出任せ言っちゃったんだろう・・・

・・男の子として暮らしてた時は・・女の子の気持ちじゃなくて・・本当に男の子の気持ちだったなんて・・・

それに・・・将来やりたい事とか聞かれた時に・・・隠してた気持ちに気付いてしまったなんて・・・

・・・でも・・もしかしたら・・アレはオレの心から出て来た本心なのかも知れない・・・

・・オレは昔のことは憶えていない・・心のどこか奥底に・・自分の気持ちを封印してしまって・・今はもう自分でも思い出せない・・

・

・・だけど・・・オレが思い出せなくても・・・オレの心は知っているのかも知れない・・・オレの記憶を・・・オレが女の子の気持ちだった頃のことを・・・

・・心は憶えていたからこそ・・オレはこうして女の子になれたのかも・・・

・・でも・・・近況は弟に聞けって言っちゃったのはマズかったかなぁ・・・

・・だって・・あの時の鈴木の背中・・淋しそうだったんだもん・・・つい・・・

・・それにしても・・聡二のヤツ・・・アイツ・・本当にオレのことみんなに黙っててくれるかなぁ・・・

・・鈴木は叱ってくれるって言ってたけど・・アイツ・・お兄さんの言うことちゃんと聞くのかな・・・

・・また心配になってきちゃった・・・

月曜日、ドキドキしながら靴箱を開けると、また手紙が入っていた・・・

“放課後　例のところで待ってます。　デートの詳しい話きかせてください。”

！！・・アイツぅぅ・・・またこんなこと・・・全然反省してないじゃない！

・・鈴木のやつ・・ちゃんと叱ったのかなぁ・・・

・・アイツがまたみんなにオレのことバラすなんて言ったら・・鈴木に言いつけるために電話しなきゃいけなくなってしまう・・・鈴木に電話なんてする気ないのに・・・

・・一応・・携帯番号書いた半券は大事にとってあるけど・・・

「おはよう！」

オレが教室に入ると、来ていたのは千里だけだった。

「おはよう。有希今日は早かったね！」

「うん・・」

・・また鈴木弟が手紙なんか入れてたらいけないから、今日は早めに来たんだけど・・・

・・千里は来年受験だから、３年生になってからは毎日早めに来て、若村先生や英語の高島先生が自主的にやっている補習を受けている・・・千里はマジメなコだからもうオレなんか足元にも及ばないくらい点数も良くなってるみたいだ・・・だけど東京の大学を受けるには、それでもまだ足りないらしい・・・だから他の大学受験するコ

たちと一緒に進学クラスの先生に教えてもらっているのだ・・・

・・でもいいなぁ・・若村先生に教えてもらえて・・・

・・新しい1年生が入学してきて、元々勉強強化のためにウチの学校に来た若村先生たちは、みんな進学クラス担当になってしまったから、オレたちのクラスを教えることはほとんどなくなってしまった・・・

「千里?・・どうしたの?」

千里がオレの後ろの方に目をやるので、オレも振り返ろうとすると・・・

「有希~!」

「あんっ!・・ちょっと直美ぃ・・・」

こっそり教室に入ってきた直美に、またムネを揉まれてしまった・・・

「もうっ・・いっつもなんだから・・やめてって!」

「・・有希このごろ“ぎゃ~”って叫ばなくなったからつまんないなぁ・・」

まだオレのムネを揉みながら直美はそんなことを言う・・・

・・そういえば・・そうだったかなぁ・・・オレ・・前はもっと大きな声あげてたっけ・・・?

「直美があんまりやるから・・馴れちゃったのよ・・きっと・・・」

・・でも今日は体育があるからニプレス貼ってて助かった!・・・

さすがに乳首は感じちゃうもん・・・

「有希・・もしかして・・もう経験しちゃったんじゃない?!」

「バ・・バカなこと言わないでよ!!・・け・・経験なんて・・・」

「あれぇ? なんかアセってる!」

「本当なの有希？」
ち・・千里まで？！
「ち・・違うって・・信じてよぉ！」

「どうしたの？　有希ったら大きな声だして、廊下まで聞こえてるわよ。」
「あ、弘子・・」
「直美がね、有希がもう経験しちゃったんじゃないかって！」
「え？！・・有希が？」
！！・・千里ったら・・弘子にまで・・・

・・弘子はオレのこと知ってるんだから・・そんなこと言ったらへンに思われちゃう・・・
「違うよ弘子！　直美が勝手に言ってるだけなの！」
「直美・・また有希のことイジメてるの？」
「イジメてないわよ。ただ最近の有希・・なんか反応が違うから・・」
「・・・そんな些細なことで疑ってるの？　やめなさいよ。」
「・・うぅ・・些細じゃないのに・・・」
しばらく睨み合ってたふたりだけど・・いきなり直美が！
「・・このデカ乳女め！」
「あっ！・・ちょっとやめなさいよ！」
・・あぁっ・・どうしよう・・オレのせいで弘子が胸揉まれてる！

「このこのぉ～！」
「・・ちょっ・・直美ぃ！！」
！！・・な・・直美ったら・・両手の人さし指と中指の間に・・弘子の乳首はさんでる！・・・あ・・あんなにグリグリしちゃって・・・あぁ・・なんか・・オレまでヘンな気持ちになってきた・・・

ふたりはしばらくもつれ合っていたけど・・・
「あはは・・もうっ・・直美気が済んだ・・？」
「うん、久しぶりの弘子の胸、柔らかくて気持ち良かった！」
・・な・・なんだ・・・ふたりとも・・じゃれ合ってたのか・・・
！？

・・たしかに・・弘子の胸って柔らかそうだなぁ・・・どんな感触
なんだろう・・・

！！・・オレ・・なんてこと考えてんだ！・・・弘子はオレのこと
助けてくれたのに・・・

・・で・・でも・・・あんなの見せられちゃったら・・・オレ・・
股間のビクビクが止まらないよぉ・・・

放課後になって3階の渡り廊下に行くと、もう聡二は来ていた・・
・

「どうでした？　アニキとのデート！」
「ア・・アンタねぇ！」
「あ、怒らないで下さいよ。　もうアニキにさんざん怒られたんだ
から。」
「・・怒られたんだ・・・なら・・もうみんなにわたしのこと・・
バラすなんて言わない？」
「まだそんなこと気にしてたんですか？」

「そ・・そんなことって！　わたしにとっては重大なことだから・・・」

「僕が本当にバラす訳ないじゃないですか。」

「・・なんで・・？」

「良く考えて下さいよ、バラしたら戸田さんも困るだろうけど、僕だってこの学校に居づらくなってしまうじゃないですか？」

「・・・・？」

「戸田さんが入学することは学校が認めたんでしょう？　だったらみんなにバレても学校を退学になったりはしないじゃないですか。」

「・・うん・・まぁ・・・」

「でももし僕がバラしたってわかったら、どうなるかわからないし・・退学とかなったら困るんです。僕もいまさら他に行く学校なんて無いんですから。」

「・・あっ・・・」

・・そうだ・・・コイツも授業料免除とかしてもらってるし・・学校に世話になってるんだった・・・

「じゃぁ・・ホントに・・信じていいのね・・？」

「ええ、戸田さんのことは言いません。そんなことしても僕には何の得もないし、僕そんなにバカじゃないですから。」

「・・・・・」

・・うぅ・・あいかわらず口の減らないガキだなぁ・・・

・・でも・・ちょっと安心した・・・

「・・あ・・でも、怒られたのなら・・なんでまた呼び出すのよ・・・」

「だってアニキ何にも教えてくれないからさ。」

「何も？」
「戸田さんとどんなデートしたのか。」
「！！」
「でも驚いたなぁ、アニキも戸田さんが女になってること知ってたなんて。」
「！・・うん・・・」
・・それはたしかにオレも驚いた・・・

「ねえ、どうだった？　久しぶりにアニキに会って。　背が高くなってて驚いたんじゃない？」
「うん・・まあ・・」
「惚れなおした？」
「バ・・バカ言わないでよ・・・」
「だってアニキのこと好きだったんでしょう？」
「好きっていっても・・いろいろあるの！」
「いろいろって？」
「・・それは・・いろいろよ・・・」
・・オレと鈴木の大切な思いを・・こんなヤツに話してたまるか！

「え～　教えてくれないんだ？　僕が会わせてあげたのに！」
「アンタ・・わたしたちそんなこと頼んでないでしょう？！」
「でもアニキは会いたそうだったし、戸田さんだってアニキのこと気になってたみたいじゃない。」
「き・・気にはなってたけど・・・」
「じゃぁ・・」
「だからって！　あんな会わせ方ヒドイ・・・いきなりなんて・・・」
「でもアニキと会わせるって言ったって会わないでしょう？」
「・・それは・・そうだけど・・・でもヒドイよ・・・」

「アニキは喜んでたみたいだけど・・」
「え?・・鈴木が?・・でも・・怒ってたって・・・」
「僕が戸田さんのことバラすなんて言ったことは怒ってたけど、戸田さんと会えたことは嬉しかったみたいですよ。」
「・・・・・」
「もうアニキに電話した?　アドレス渡されたんでしょう?」
「・・もらったけど・・してない・・・」
「なんでしないのさ、してあげれば喜ぶのに。」
・・そんなの・・アンタに言われなくてもわかってる・・・
「・・わたしは・・もうアンタのお兄さんとは会わないし・・電話もしないの!」
「え?!　なんでさ!　そっちのほうがヒドイよ!」

・・ヒドイ?・・・そうだ・・オレはヒドイ女だ・・・

・・自分は女の子になってるクセに・・・鈴木には男の子のころの想い出のままでいてほしいと思っている・・・

・・オレは・・鈴木がオレを女の子として見ることを恐れている・・
・

・・鈴木にまで女の子として見られてしまったら・・・男の頃のオレが・・何処にも無くなってしまうような気がして・・・

・・それが鈴木にとって・・残酷なことかも知れないのは解ってるけど・・・

・・オレだって・・恋する気持ちがどんなものかは・・良く知っているから・・・

・・それが・・叶わない恋ならなおさら・・・

「戸田さんはアニキのこと好きじゃないの？」
「・・好きだけど・・わたしのは・・愛とか・・恋とか・・そういうのとは違うの・・・」
「ふ～ん・・」
「・・アンタには・・まだわからないのよ・・」
「あ！僕のこと子供扱いしてる！！」
「・・だってアンタ子供じゃない。」

「戸田さんにそんなこと言われるなんて・・なんか屈辱的だな。」
「別に屈辱なんかじゃないわよ・・アンタだってこれからいろんなこと経験するんだろうし・・・」
・・まぁ・・オレが経験したようなことは・・経験しないと思うけど・・・
「イヤでも・・大人になっていくんだから・・・」

・・大人・・・オレも・・大人になる時が近づいている・・・いつまでも女の子ではいられない・・・オレもいつかは大人の女にならなきゃいけないのだ・・・それもそう遠くないうちに・・・

「ねえ、そういえば僕とのデートの契約はまだ残ってるよね。」
「？！・・残ってるワケないじゃない！　アンタとのデートはお兄さんに言わないのと引き換えだったんだから。」
・・なんだ・・コイツまだ何かヘンなこと考えてるのか・・・？

「ちぇっ・・憶えてたか・・・」
「？・・アンタ・・・もしかしてわたしとデートしたいの？」

「え？・・いや・・まぁ・・そういうわけじゃ・・」
「してあげてもいいけど・・・」
「ホント？！」
「でも、わたしまだアンタのこと完全には信じてないから・・・アンタが本当にヘンなこと考えてない、良い子だって信じられたら、デートしてあげてもいいわよ？」

「僕ヘンなことなんて考えてないよ！」
「言葉で言うのは簡単なの！　信じて欲しいなら行動も伴わなきゃ。」
「・・なんか・・上からでムカつくんだけど・・・」
「わたしのほうが２つも年上なんだから、それくらい我慢しなさいよ。」
「・・うぅ・・わかった・・でも約束だからね。忘れないでよ！」
「うん、忘れないよ。」

・・ニッコリ笑った聡二の顔・・なんとなく鈴木に似てる・・・

・・なんかコイツ・・生意気なヤツだと思ってたけど・・・

・・意外にカワイイところもあるのかも！

第１８１話　増長　長谷川の困ったところ

今日の体育はバレーボール。

オレたちの体操服は首回りと袖口がエンジの上着に、エンジ色のブルマー・・・最近はブルマーの体操服も減ったらしいけど、ウチの学校はかあさんが通っていた頃からずっとこの体操服らしい・・・

・・最初に着た時はドキドキだったこの体操服も今では普通に着ている。　ブルマーからのお尻のハミ出しも最初のころは気になったけど・・今では親指で自然に直すことが出来る。

・・さすがに着替えの時はスカートの下でブルマーをはいたり脱いだりして・・みんなの前でパンツ姿になることはないけど・・・

「有希いったよ！」
直美の声に・・
「は～い・・エイッ！」
オレが向こうのコートから弘子がサーブしたボールをレシーブすると
「安部っち上げて！」
「はい！」
安部っちがトス！
「そりゃー！」
直美がスパイク！！

「きゃ～！」
千里はボールをレシーブ出来ずにコケてしまった。
「やった～！」

勝ったことを喜ぶオレたちのチームに
「直美ぃ！本気出し過ぎよ！」
向こうのチームから非難がきた・・・

ウチの学校は勝負にこだわる生徒は少ない・・どっちかといえばみんなで仲良くやるタイプのコばかりだ・・・

・・まあ・・オレもこだわらない方なんだけど・・直美と同じチームになると、頑張らないと怒られちゃうのだ・・・直美は運動部なだけあって他のコよりは勝ちたいみたい・・・

・・とはいえ・・直美のバトミントン部は、ほとんど何もやってないみたいだけど・・・

・・オレは元々男だけど・・スポーツはあまり得意じゃないから、女の子の中だとちょうどいい感じ・・・みんなで仲良くやるってのが心地いい・・・

「痛かった？」
でも直美も試合が終れば気遣いは忘れない・・だってオレたちは友達だもん！
「ううん、そうでもないわよ。ちょっとコケただけ。」
千里もネに持つタイプじゃない。

「有希、調子はどう？」
「あ、うん、だいぶいいみたい！」
オレは弘子に教えてもらってから、体育の時はニプレスを付けるようになった。だから体育で激しい動きをしても、前みたいに乳首が

こすれて感じてしまうことが無くなって動きやすくなったのだ。
おかげで今日もバレーボールをしても平気だった！

・・弘子はオレが男だって知っているから、女の子として知らなきゃいけないことを教えてもらうことが出来てありがたい・・・長谷川には聞きにくいことも、なぜか弘子になら聞くことが出来るし・・
・

・・弘子には感謝してもしきれない・・オレは何度も弘子に助けてもらっている・・・

・・でも・・オレは弘子に何もしてあげてない気がする・・・

・・オレにも・・弘子にしてあげられることって・・あるかなぁ・・
・

「好きなお花選んだら、各自活けてください！」
「はい！」

部長はいろいろと大変だけど、３年生は全体を見てればいいから思ったよりラクだ・・・
・・大変なのは2年生・・・ミサトちゃんも新入部員に手こずってる・・・
「あ～・・そんな持ち方したら危ないよ！」
「あ～・・そんなに力入れたら茎が折れて剣山でグシャッて手刺し

ちゃうよ！」
ミサトちゃんがオレに言われたことを、こんどはミサトちゃんが言っている・・・こうして代々続いていくものなんだなぁ・・・

オレと長谷川と井川さん・・・それぞれが教えたコが教えられたように教えているのがおもしろい。

2年生が新入部員を見てくれるおかげで、オレも落ちついて活けることが出来る・・・

茎から葉っぱを取ってちょうど良い長さに・・・
“パチン”
切ったものを剣山に刺す・・・活け花はその動きまでもが活け花なのだ・・・何ひとつおろそかには出来ない・・・

華道・・茶道・・書道・・・道と名がつくものはみんなそうなのかも・・・まあ・・オレは書道は苦手だけど・・・

「？」
ふと気付くと・・みんなオレのほうを見ている・・・
「・・どうしたの・・みんな・・・ひとのこと見てないで自分のことやって・・？」
するとミサトちゃんが・・・
「あたしたちが教えるよりも先輩がやってるの見てる方が・・勉強になるみたいなので・・・」
「そんな・・新入部員を教えることは、あなたたちの勉強でもあるんだからね？　わたしたちもあなたたちに色々勉強させてもらったのよ？」
「・・はぁ・・・」
・・ミサトちゃん・・気のない返事だなぁ・・・

「有希、そんなに勿体ぶらないで見せてあげなさいよ！みんなまだそんなに活け花のこと知らないんだから、まず部長のあんたが見本を見せてあげればいいじゃない！」
・・うぅ・・・オレはべつにもったいぶってなんて・・・でも・・
長谷川が言うことにも一理あるかも・・・

「わかったわ。じゃぁ、わたしがやってみせるから、みんな見ててね。」
これまでに活けていた花を一旦ぜんぶ抜いて、最初からやることにした。
「どうせなら、後ろから見た方がわかりやすいかな・・？」
オレは座布団を前の方に移動して、みんなにはオレの背中の方やなめ横から見てもらう事にした。活け花は正面から見るものだし・・
その方が説明もしやすい。

「まず、頭の中でどんな感じにするか考えて・・ポイントになる花を活けるの・・」
中心になる背が高い花を剣山に刺す・・・
「基本は三角形なんだけど・・左右のバランスをずらした方がいいから・・こんな感じね・・」
中心を中心からずらすのは基本中の基本だ・・・
「基本どおりにやるのはつまらないと思うかもしれないけど・・崩すのは基本をちゃんと出来るようになってからの方がいいから・・・」

オレは新入部員のみんなに基本的なことを教えながら活けていった・・・

「はい、こんな感じ！」

「おぉ～！　すごいすごい！！」
なぜか長谷川と井川さんが一番に拍手してる・・・
「な・・なによ・・あんたたちは関係ないでしょう？　新入部員のみんなに教えてるんだから！」
「でも為になったよねぇ！」
長谷川が言うと・・井川さんも、ミサトちゃんたち2年生も「うんうん」とうなづいた・・・
「有希が教えてくれると解りやすいよね。そうだ！これから時々有希にこんなふうに教えてもらうってのはどう？いいと思わない？」
「さんせ～い！！」

「そ・・そんな・・そんなことこれまでやってなかったじゃない・・！」
「これまではこれまで、これからはこれからよ！戸田新部長の新体制なんだから！！」
「うぅ・・まあ・・やるのはかまわないけど・・顧問の嶋田先生にも聞いてみないと・・・」
「そうね、たぶん大丈夫だと思うけど。」

・・もう・・長谷川のヤツ・・勝手なことばかり言って・・・どうせそんなこと先生が認めないと思う・・・

「失礼しま～す！」
職員室の嶋田先生にクラブ終りの報告・・これも部長の仕事だ・・・
「ごくろうさま。戸田さんが部長になってくれたから先生も安心して任せられるわ！」
「・・そんなことは・・・」
・・オレなんかそんなに頼りにしちゃっていいのかなぁ・・・

「あの・・先生・・今日新入部員のみんなに私がお花活けながら教えたんですけど・・そしたら長谷川さんが・・時々こういうことしたらいいんじゃないかって・・・でもダメですよねぇ・・新入部員に教えるのは2年生の仕事だし・・・」
「それは素敵ね！　良いんじゃない？」
「へ？！」
「もちろん戸田さんに任せっきりになっては困るけど、2年生がマンツーマンで教えるのも毎年上達にバラツキが出るし・・私が顧問になる前からの伝統だったからそのままにしてたけど・・そろそろ改善してもいいかな？って前から思ってたのよ。」
「え・・でも・・それじゃ2年生の成長が・・・」
「それはこれまで通りに2年生が教えるから大丈夫だと思うわよ。戸田さんがみんなに教えてくれれば華道部全体の底上げが出来ると思うの。戸田さんがイヤなら無理にとは言わないけど？」
「わたしは・・イヤってことはないですけど・・・」
「それじゃお願いしていい？」
「ぁ・・はい。」
・・まいったなぁ・・・なんか・・結局やることになっちゃた・・・・
・・うぅぅ・・やるのはいいけど・・・長谷川の勝ち誇った顔が目にうかぶなぁ・・・

－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－

クラブが終って教室に戻ると・・・

「あ、弘子まだいたの？」
「有希を待ってたのよ。」
「ぁ・・ごめん・・長谷川さんが一緒に帰ろうって下で待ってて・・・」
「ううん、それはいいんだけど、言おうと思ってたことがあったのに忘れてたから。」
「なになに？」
・・なんだろう・・明日じゃダメなことなのかな？

「有希、今週の週末わたしのウチに来ない？」
「弘子んち？！・・行きたいけど・・週末は無理かなぁ・・・撮影が入ってるから・・・」
「・・そう・・・それじゃ仕方ないね・・・」
・・なんか・・弘子ガッカリしてる・・・
「な・・なんで？・・どうしたの？　なにかあるの？！」
なんか・・絶対週末じゃなきゃいけないんだったら・・今ならまだ撮影をキャンセルすることだって出来るかも・・・

「あ・・ううん、大したことじゃないの。カチガラスのヒナがいるから有希見たいかな？って思っただけだから。」
「え？！・・カチガラスのヒナ？！」
「有希も前に見たでしょう？　あの大きな巣。」
「うん、ま～るいやつね？」
「あの巣で毎年子育てしてるんだけど、今年は巣立ち前に一羽巣から落ちちゃったみたいなの。だからお父さんが保護して小屋作って入れてるのよ。」
「へぇ～・・」
・・カチガラスのヒナなんて・・どんなのだろう？・・可愛いのかな？・・・すごく見たい！！
「ら・・来週は？・・来週ならなんとかなると思うんだけど！」

「来週じゃ・・たぶん巣立っちゃうと思うなぁ。」
「え～・・見たい見たい～！！」
「でも仕事じゃ仕方ないでしょう。」
「・・うん・・・」
・・なんか見る方法はないかなぁ・・写真撮ってきてもらえば見れるけど・・やっぱり実際にみたいし・・・なんかいい方法は・・・！？

「あ、そうだ！・・明日とかは？」
「明日？！　でも帰りがすごく遅くなるわよ？　おばさんが送れればいいけど・・都合が悪かったら帰れなくなっちゃうわ。」
「わたしが弘子んちに泊まればいいのよ！」
「え？　泊まるの？」
「ぁ・・弘子のとこが迷惑なら・・ダメだけど・・・」
「わたしの方は大丈夫よ・・でも次の日も学校じゃない。どうするの？」
「だから～帰りにこの制服のまま行って、また弘子んとこから学校に来ればいいのよ！」
「あ～・・そういうこと・・」

「弘子のウチからバスに乗って登校するなんて、なんだかワクワクしない？　あ・・弘子はいつもだからしないか・・・」
「ううん、有希と一緒に登校なんて何だか楽しそう！」
「でしょう？！　じゃわたし、明日お泊まりする準備してくるね！」
「うん。」

・・わぁ！・・クリスマスでも何でもない日に、お泊まりするなんて・・・なんか不思議な感じですっごい楽しみ！
・・それにバスで登校するなんて・・・弘子にとっては当り前のことだろうけど・・・オレから見たらなんだか遠足みたい！

「でも、有希のウチはいいの？　心配しない？」
「ウチは大丈夫！　弘子のとこに泊まるなら心配しないよ。夕飯は作れないって言っておけばピザでも何でもとって食べるだろうし。妹もとうさんもピザ好きなの。」
「そう、なら大丈夫ね。」

「有希～！まだなの～！」
あ・・しまった・・長谷川のこと忘れてた！　廊下の向こうから長谷川が呼んでる・・・
「じゃぁ、弘子、また明日ね！」
「うん、下着とか忘れないようにね。まあ、忘れたらわたしの貸してあげるけど。」
「ダメだよ、弘子のブラじゃわたしにはブカブカだもん！」
「あ、そっか！」
「ふふっ、じゃぁね！」

オレが廊下に出るともうそこまで長谷川が来ていた・・・
「有希なにやってるのよ、遅いじゃない！」
「ご・・ごめん・・帰ろう帰ろう！」
オレは慌てて長谷川の体を回転させて、いま来た方へ背中を押した・・・
「？・・うん。」
・・弘子とおしゃべりしてて待たせたなんて知られたら・・長谷川ぜったい機嫌が悪くなるもんなぁ・・・長谷川ってそういうとこ難しいんだ・・・

「嶋田先生なんて言ってた？」

「え？」
「もうっ！なにボーッとしてるのよ！　有希がみんなに活けて見せることよ。あんたもしかして聞かなかったの？！」
「き・・聞いたよ！」
「じゃぁ、なんて？」
「・・素敵だって・・良いんじゃない？って・・・」
「ほらみなさい！　わたしが言ったとおりじゃない！！」
「・・・・・」
・・オレは活けるのは決してイヤじゃないけど・・長谷川をいい気にさせるのだけは悔しい・・・絶対クラブのみんなに自分の手柄みたいに言うんだもん・・・

「みんな喜ぶわよ！　あんたが活けてるとこじっくり見れるんだから！」
「そんなの・・いつだって見れるじゃない・・・」
「見れないわよ！　自分の活けながらチラチラしか・・」
「長谷川さんチラチラ見てたの？！」
「み・・見てないわよ！　たとえばの話よ！」
「・・・・・」
「あんたってホント揚げ足とるわね！」
「！・・あげ足なんてとってないもん！」
・・どっちかといえば・・しょっちゅうあげ足とるのは長谷川の方だと思う！
「口が減らないわね・・あんたもっと女の子らしくしなさいよ！」
「！！！」

・・ヒドイ！・・長谷川なんか・・女の子らしいなんてめったに言われないクセに・・・

・・オレは時々言われるもん・・・

「・・女らしいって・・・」
「え？　何か言った？」
「ううん・・なんにも言ってないわよ・・・」
しまった・・声に出ちゃった・・・
それは相手が長谷川だからだ・・・
・・長谷川から見てオレが・・少しでも男の子っぽいとすれば・・・
照れくさいから・・・
・・長谷川の前で、あんまり女らしくするのは・・なんだかすごく
・・だって長谷川ったら・・オレが女の子っぽいところ見せると・・
すぐ茶化すようなこと言うんだもん・・・

- -

妄想の続き

おまけ　妄想「天才子役・愛田茉菜・3」

その日、茉菜が事務所でファンからの手紙に目を通していると
「あ、茉菜！ちょうど良かった。」

「？」
マネージャーの小島だった。
「このコ今日からウチの事務所に移籍してきた奈美レイナちゃん、これまでジュニア雑誌でモデルやってたんだけど、これからはウチで女優の勉強していく事になったから。よろしくね。」
「あ、はい。わたし愛田茉菜です。レイナちゃんよろしくお願いします！」
茉菜はイスから立ち上がって丁寧にお辞儀をした。この世界ではちゃんと挨拶することは大切だ。
しかしレイナはブスッとしたまま
「よろしく…」と小さな声で言っただけだった。
どうしたんだろう？　おなかでも痛いのかな？　茉菜は少し心配になった。

「4月から学校もあなたと同じ鳥越の中等部に転校する予定だから。茉菜はこんど中学だからレイナちゃんは1年先輩ね。」
「そうなんですか。」
「レイナちゃんは茉菜のことは知ってるわよね。なんていっても天才子役として有名だから。」
「ちょっとぉ…　小島さんそういう言い方やめてよ…」
「ふふふ、茉菜は天才って言われるのがニガテなのよ。」
「だって…　わたし天才なんかじゃないから…」

その間も奈美レイナはブスッと黙ったまま茉菜を睨みつけるだけだった。
（　なんか感じ悪いコ…　）
どうらやレイナは、年齢が近いのにすでに有名な茉菜に敵対心を持っているらしい。

もうすぐ春休み。
春休みになったら茉菜は仕事を全て休んでアメリカに渡り、股間を女の子にする手術を受けることになっていた。
ところが…

「茉菜、大変だ！」
「社長？　どうしたんですか」
「大変な仕事が入ったんだ。半年かけて2クールのドラマを撮ることになった！」
「へ～　2クールのドラマなんて初めて！」
「明日からさっそく打ち合わせだ。忙しくなるぞ！　しばらく休みは無くなるが我慢してくれよ！」
「え？　でも…　わたしの手術は？」
「あ、すまん！　それはしばらくお預けだ。」
「そんな…」

元はといえば社長が決めたことなのに…　相変わらず勝手なひとだ…

制作発表は原作が話題の小説だけに注目を集めた。

主役はもちろん愛田茉菜。
今回は高校生という少し大人の役だが、茉菜にとってはまったく問題ない。

相手役は奈美レイナ。
主人公の親友の役だ。この役が発表された時は新人の起用にみんな驚いた。もちろん事務所のゴリ押しで決まった、茉菜のバーターで

の出演だった。

クランクイン。

自信満々で撮影に臨んだレイナだったが、何度もＮＧを出してしまい演出監督にこっぴどく怒られてしまう。

「馬鹿野郎！！　何だその演技は！」

「バーターのくせに！ふて腐れてるヒマがあったら茉菜を見て勉強しろ！」

（　監督さん、なにもあんなに怒らなくても…　レイナちゃん自信なくしちゃうよ　）

結局レイナはショックで撮影出来なくなってしまい、しばらく茉菜だけのシーンを先に撮ることになった。

茉菜の演技が始まると、普段の天真爛漫な女の子の雰囲気から一転女優の顔になる。

高校生の役も難なくこなしてしまうのを見ると、どんな大俳優も大女優も舌を巻いてしまう。

いつもは厳しい演出監督でさえ一発でＯＫを出してしまうのだった。

撮影が一段落して

「レイナちゃん、どこに行っちゃったんだろう？」

少しでも慰めてあげようと、茉菜がレイナを探していると、セットの裏から音が聞こえた。

茉菜がそっとのぞいて見ると、レイナが小さくしゃがみ込んで泣いていた。

「！　あの気が強いレイナちゃんが…　泣いてる」

その姿を見た茉菜は、なんだかレイナのことが愛おしく思えてしま

った。

「え?!　な…　なにこれ!!」

その時突然、茉菜のオチンチンがむくむくと大きくなってきた!

「ど…　どうしよう」

それは茉菜にとって初めての勃起だった。

そしてそれが初めての恋だということを、茉菜はまだ気付いていなかった。

今回で妄想「天才子役・愛田茉菜」は終りです。

ストーリーを思いついてしまったので、もう妄想ではなくなってしまいました。

いずれ小説として書くかも知れないので、その時はよろしくお願いします。

と言ってもたぶんずっと後のことなので、何年先になるか判りませんけど（笑）

これまでのおまけ（その他）の場所

３６話　制作おぼえがき　０８．６．２１
４０話　『オレは女子高生』の世界　人物、舞台設定など
４５話　架空の西鉄大牟田線案内
４９話　名前について
５３話　ドラマ化を妄想してみる
６１話　「放生会編」おまけ
６７話　１周年を迎えて
７１話　『オレは女子高生』の世界　第２弾（架空の西鉄大牟田線案内付き）ドラマ『ブザー・ビート』のお知らせも
７３話　「ヒロイン」について
７８話　「出版されたら買いたい作品」のお礼
７９話　「文章」について
８２話　「文章って難しい・説明編」
８６話　ちょっとあとがき　長谷川の誕生日とお父さん
８９話　「Ｑ＆Ａ」
９３話　『オレは女子高生』の世界　第３弾（架空の西鉄大牟田線案内付き）
１１９話　２周年を迎えて
１３２話　イヌ型とネコ型
１３３話　有希と純平
１４１話　文章って難しい・文章と言葉編
１４２話　ＡＴから１８禁へのお詫びと説明
１４５話　ＡＴから年末のあいさつ
１５５話　今だから言える話（７章について）
１５７話　ＡＴから「ランウェイ」と１話での表現について
１６０話　タイトルとサブタイトル
１６３話　ＡＴから　普段の有希たち　１年生の名前
１６４話　感覚の表現

１６６話　『オレは女子高生』の世界　第４弾（架空の西鉄大牟田線案内付き）
１７０話　３周年を迎えて
１７１話　妄想「翔太の場合」
１７５話　妄想「天才子役・愛田茉菜」
１７７話　妄想「天才子役・愛田茉菜・２」

第１８２話　雛鳥　弘子の家に・・・

今日、オレは早めに登校してきた。

校門に風紀検査の先生が立つ前に学校に来ておきたかったからだ。

なぜかというと、お泊まりのための部屋着を持ってるのを、もしも先生に見つかってとがめられたら面倒だから・・・

「あれ？戸田さんだ！」

「？！」

振り返ると・・・

・・ゲッ・・聡二か・・・イヤなヤツに会っちゃったな・・・

「今日はずいぶん早いですね！」

「・・あんたには関係ないでしょう・・」

「クラブか何かかな？」

「・・・・・」

・・うるさいヤツだなぁ・・・

「何で黙ってるんですか？　僕嫌われてるのかな？」

「・・・・・」

・・それほどでもないけど・・・

・・コイツにはダマされてヒドイめにあったけど・・意外に憎めないっていうか・・どこか人なつこいとこがあるからかなぁ・・・

・・だけど・・何を話したらいいのやら・・でも何か話さないと息が詰まりそう・・・

「・・あのさ・・そのぉ・・聡二は？・・クラブ入ったの・・？」
「呼び捨て？」
「・・ぁ・・ごめん・・“あんた”よりいいかと思って・・・」
「どっちかと言えばそっちの方がマシかな。」
「・・・・・」
「僕、“そうじ”って呼ばれるの好きじゃないんですよ。」
「？・・どうして？」
「だって掃除みたいじゃないですか。馬鹿にされたこともあるし・・」
「・・ぁ・・そぅ・・・」
・・自分の名前がキライだなんて・・・長谷川みたいだ・・・
「・・じゃぁ・・なんて呼べばいい・・？」
「鈴木でいいですよ。」
・・でも・・鈴木じゃ・・アニキの方を思い出してしまう・・・
「・・鈴木だとアレだから・・聡ちゃんにしよっかな？」
「・・聡ちゃん？！」
・・おっ・・鈴木弟がビックリしてる！・・コイツもビックリすることなんかあるんだ・・？
「うん、あんたは親友の弟だから、わたしにとっても弟みたいなものじゃない？　だから聡ちゃん！」
「やめて下さいよ！恥ずかしいじゃないですか！」
「ふふっ、あんたが恥ずかしいなんてらしくないね。」
「・・・・・」
・・鈴木弟のヤツ顔赤くしちゃって・・・でも今日のところはやめとくか・・・あんまり恥ずかしがらせて怒らせちゃ面倒だし・・・
「で？・・鈴木くんはクラブ入ったの？」
「入るわけないじゃないですか。」

「まあ・・あんたたちは必ず入らなきゃいけないワケじゃないけど・・クラブも楽しいんだけどなぁ・・・」
「そんな時間があるなら勉強した方がいいですよ。」
「ふ～ん・・・ま、あんたたちが良い大学に入ってくれないと学校が困るし・・その方がいいんだろうけど・・・」
・・でも・・高校生のあいだ勉強ばかりなんて・・ちょっと可哀想だな・・・

・・鈴木はバスケ・・頑張ってるんだろうか・・・
「・・ところで・・お兄さんは・・元気にしてる・・？」
「気になりますか？」
「べ・・べつに・・気になるってことは・・ないけど・・・」
「気になるなら直接電話して聞けばいいじゃないですか。」
「うぅ・・そんな・・電話なんて・・・」
・・電話なんて出来るワケない・・・オレから・・絶対かけないって言ったんだから・・・

「・・お兄さん・・わたしのこと・・なんか聞いた・・？」
「いえ、べつに。」
「・・そうなんだ・・・」
・・気になるなら・・弟に聞けって言ったのに・・・まあ・・いいけど・・・

「あ、僕ＪＩＮＯＮ見ましたよ。」
「！！」
「でもさ、戸田さんってよくあんな可愛いポーズとれますね！」
「ぁ・・あれは・・“春日ユウ”だからよ・・」
「でも“春日ユウ”は戸田さんじゃないですか。」
「そうだけど・・そうじゃないっていうか・・・もうっ！なんであんたにこんな話さなきゃいけないのよ！」

オレたちはもう校門の近くまで来てたから、オレは弟を置いて走って校門を入って行った・・・

「あっ！何で逃げるんですか！」

・・鈴木弟ったら・・ホント生意気なんだから・・・

・・でも・・時々表情が中学のころの鈴木と似てて・・ドキッとするから困っちゃうのだ・・・

「あ、おはよう・・」

教室に入ると、もう千里が来てて驚いた。

「おはよう、どうしたの？今日は早いわね。」

「ち・・千里こそ・・・」

「わたしは受験の補習があるから、毎日この時間に来てるわよ。」

「ぁ・・そっか・・・」

「じゃぁね、わたしは補習に行くから。」

「うん、行ってらっしゃい！」

・・千里は毎日この時間に来てるのか・・良い大学受験するのって大変なんだなぁ・・・

・・それに比べて・・オレったら・・弘子の家にお泊まりするなんて浮かれてていいのだろうか・・・？

まあ・・オレは特に行きたい大学もないし・・・白鴻の女子大に行くのが一番無難だと思う・・・だって他の大学じゃ・・女の子として通えるかどうかわかんないし・・・

お泊まりのことが頭から離れず、今日は一日ふわふわした感じだった・・・こういうのを“心ここにあらず”なんて言うのかなぁ・・・

放課後、オレが1組の教室をのぞくと、ちょうど長谷川が出て来るところだった・・・

「ぁ、長谷川さん・・ちょっとちょっと・・・」

「なに有希？　これからクラブに行くわよ。」

「ぁ・・それなんだけどさ・・ちょっと用事が出来ちゃって・・部長代理お願い！・・今日はお花が無い日だからいいでしょう？」

「あんたねぇ・・ちょっと用事って・・・部長の自覚が足りないんじゃない？」

「・・あの・・急に撮影が入っちゃったの・・・」

「・・撮影なんだ？　なら最初からそう言えばいいじゃない！」

「ぁ・・うん・・ごめん・・・」

・・とっさにウソついちゃったけど・・仕方ないと思う・・・だって嘘も方便っていうし・・・長谷川に弘子の家に行くからクラブをお願いするなんて言えないから・・・

「まあ、仕事じゃ仕方ないね。頑張っておいで！」

「ぁ、ありがとう・・」

・・うぅ・・でもウソつくのはやっぱり心が痛い・・・

・・でも・・クラブが終ってからじゃ、バスが1本遅くなってしま

う・・・弘子の家は遠いから、1本遅れるとだいぶ遅くなっちゃうのだ・・・

「おまたせ弘子！」
「部長なのにクラブ休んでいいの？」
「いいのいいの！　長谷川さんが代わりにやってくれるから・・・それに今日はお花がある日じゃないしね。　でも部長って言えば弘子だって部長じゃない！　弘子のとこはいいの？」
「まあね、でもウチは3年生はわたしだけだし、今年は新入部員もいないしね。」
「・・郷土史部・・大丈夫なの？」
「郷土史研究部だけど、わたしが卒業したらなくなっちゃうかも知れないわね、2年生はやる気がないし。」
「え～・・そうなの？　いいのそれで？」
「わたしがやりたくて作った部だからね。別にいいんじゃない？」
「・・・・・」
・・弘子ってホント・・考え方クールだなぁ・・・

「でもさ、部がなくなっちゃったら、残った2年生はどうするの？」
「どこかの部に編入するんじゃない？」
「え・・いきなり3年生から？」
「有希のとこみたいに結束が固いところは入りにくいでしょうけど、手芸部とか部員が多いとこだったら問題ないと思うわよ。友達がいるところにでも入れば。」
「・・・・・」

・・オレたち華道部が結束が固いかどうかは良くわからないけど・・
・3年生から別の部に入り直すのはオレだったらイヤだなぁ・・・
まあ・・手芸部は楽しそうだけど・・・

「あと10分くらいね。座って待ってよう。」
「うん。」
弘子とバスセンターのベンチに座ってバスを待つことは時々あったけど・・一緒にバスに乗ると思うと不思議な感じがする・・・

「あっ、来た!」
八女行きのバスは空いていた。オレたちは後ろの方の座席にふたり並んで座った。なんだか気分はもう遠足だ!
田んぼの中を通っていくと、だんだんお茶の畑が見えてくる・・・
「弘子はいいなぁ・・毎日こんな景色見ながら登校するなんて・・・」
オレが何げなくそう言うと・・・
「そんなことないわよ。有希はたまに乗るからいいのよ。毎日だったらいつも同じだから飽きちゃうわ。」
「・・そっかぁ・・・」
・・言われてみればそうかも知れないな・・オレも高校生になって初めて電車で登校した時は、電車で学校に行くなんてスゴイと思ったけど・・今では当り前になっちゃったもんなぁ・・・
・・いつも同じだと・・どんなことだって飽きちゃうのかも・・・

30分走るとお茶畑の中にこんもりとした小山が見えてきた。弘子の神社はあの上にある。

“鵲〈かささぎ〉神社前”のバス停で降りる・・・弘子の場合ウチの前がバス停だから便利だ。田舎はバス停の間隔が遠いから、家からバス停までが遠いと大変そうだけど・・・その点弘子の場合ウチの前がバス停だから便利だ。

・・まあ、けっこうな階段を上らなきゃいけないのは大変だけど・・

・

階段を上がると頭の上でいきなり大きな音がして驚いた！

「な・・なに？」

「カチガラスの鳴き声よ。」

「へぇ～　こんな大きな声で鳴くんだ！？」

「有希聞いたことなかったっけ？　カチカチって聞こえない？　だからカチガラスっていうのよ。」

「・・うん・・そういえば・・・」

・・でも・・カチカチっていうほど澄んではいない・・・カチカチの他にガジャガジャとかギシャギシャって音を混ぜたような鳴き声だ・・・決して良い声とはいえないし・・すごく大きな声でやかましい！

「あんな優雅な鳥がこんな声で鳴くなんて・・・」

「カササギは昔は日本にはいなかったらしいけど、秀吉が朝鮮に出兵した時に“ニッポンカチカチ”って鳴いたから、縁起が良いからって九州の大名が連れてきたらしいわよ。」

「へぇ～！」

・・弘子はほんとに歴史に詳しいなぁ・・・いろんなことを知ってる・・・

・・だけど・・“ニッポンカチカチ”とは聞こえないけど・・・

「どこで鳴いてるのかな?」
「巣のところじゃないかな。こっちよ!」
社務所の裏手にまわっていくと、鳴き声がさらに大きくなってきた。
弘子は建物の影からそっと向こうをのぞいた・・・
「弘子、何してるの?」
「親鳥が来てたら驚かせちゃうから・・いないみたいね。」
弘子について行くと、そこには足が高い小さな小屋があった・・・
「ほら、これがカササギのヒナよ。」
「わぁ!けっこう大きいね。」
小屋の中には親鳥とそんなに変わらない大きさのヒナがいた・・・
でも頭や背中には産毛みたいな柔らかそうな毛がはえている。
「でも目がパッチリしてて可愛いね!」
しっぽの親鳥のように長くなくて・・まだ全体に幼い感じだ・・・

「時々親鳥がエサをあげに来るのよ。ここにとまってあげるの。」
そう言って小屋の床が少し飛び出たところを指さした。
「へぇ~・・でも・・このおウチどうしたの?」
「お父さんが作ったのよ。」
「え?!弘子のお父さんが自分で作ったの?!」
・・こんなの作れるなんて・・弘子のお父さん器用なんだなぁ・・・

「これ何?」
小屋の4本の足には鉄板がまるでスカートのように巻き付けられている・・・
「こうしておくとネコやイタチが上って来ないんだって。このへんイタチも多いから。」
「・・イタチ・・・」
・・オレ・・イタチなんて見たことない・・・
「他にもネズミとかヘビとか、そういう天敵がこうしてると登れないんだって。」

「へ～・・これで登れないんだ・・弘子のお父さんって物知りだね・・・」

するとまた上でカササギが鳴いた。見上げると１ｍほどもある大きな丸い巣の近くの枝に親鳥がいた！

・・でも鳴き声がさっきとは違うような気が・・・

「エサ持って来たのね、ヒナたちが騒いでる。」

「あ、あれヒナの声・・？」

「もう巣立ち間近だからなかなかエサをあげないの。じらしてヒナが飛び立つように仕向けるのよ。」

「へぇ・・・」

急に小屋の中のヒナも大きな声で鳴きだした。

「有希、もう行こうか。親鳥がこのヒナにエサをあげられなくて困ってるかも。」

「ぁ・・そうだね。」

「わたしの部屋からも見ればいいわ。巣が近くに見えるわよ。」

オレたちはまた表へまわって社務所の売店？の前を通ると・・・

「あ、おばさん、おジャマします！」

「あら、お帰りなさい。いらっしゃい有希ちゃん今日はどうしたの？」

「ぁ・・カチガラスのヒナがいるっていうから・・今日は泊めていただこうと思って・・・」

「そうなの？！それじゃ自分の家だと思ってゆっくりして行ってね。」

「はい。」

「弘ちゃん、お座敷使ってもいいけど？」

「あ、今日はわたしの部屋に泊まってもらうから布団だけ借ります。」

「そう、それじゃ明日の朝お布団はお座敷に広げて置いておいて、後で私がなおしておくから。」
「うん、そうする。」
（注：“なおしておく”とは方言で“片付けておく”という意味です。）

「ねえ弘子、わたしに気使わないでいいよ？　お布団自分で片付けるし・・」
「そういう意味じゃないのよ、お客さん用の布団だから、しばらく置いて湿気を飛ばしてから片付けるの。」
「あ、そうだったの・・」
・・そうか・・すぐに片付けない方がいいのか・・・たしかに押し入れって湿っけちゃうもんなぁ・・・

社務所に入ると神主さんの恰好をしたお父さんがいた。
「やあユウキちゃん、良く来たね。」
「こんにちは、今日はお世話になります！」
「遠慮することないからね、自分の家だと思ってゆっくりしていきなさい。」
「はい！　あ、お父さんスゴイですね！弘子に聞きました、あの小屋お父さんが作ったって。」
「あぁ、もうヒナ見てきたんですか。」
「有希ったら、あの小屋お父さん作ったって言ったら感心しちゃってるのよ。」
「あれくらい簡単ですよ。」
「ううん、スゴイです！あんなの簡単に作っちゃうなんて、尊敬しちゃいます！」
「そんなに褒められると照れますねぇ・・」
お父さんは恥ずかしそうに頭を掻いた・・だってホントにスゴイん

だもん！

「お父さん、今日は有希が夕飯作ってくれるって！」
「え？　いいんですか？」
「はい、いつもウチで作ってるので・・ぁ・・でもあまり期待しないで下さい・・お口に合うかどうか・・・」
「謙遜してるけど、有希はお料理がすごく得意なのよ！今日は学園祭クイーンコンテストの時に評判だった“カシワの肉じゃが”なのよね！」
「・・評判ってのは大げさですけど・・・」
・・弘子ったら・・そんなにハードル上げないでよぉ・・・
「“カシワの肉じゃが”かそれは楽しみですね。」
・・まあ“カシワの肉じゃが”はオレの得意料理のひとつだから、それなりに自信はあるんだけど・・・

2階に上がって大広間とは階段をはさんで反対側が弘子の部屋・・・
「ここが弘子の部屋？！」
弘子の性格どおりスッキリした部屋だ・・畳の日本間でベッドも無いからよけいスッキリ感じるのかも知れない・・・さすがにこの建物は神社の社務所だけあって洋間はまったくない。

本棚には歴史の本とか民話の本とか・・オレにはまったく馴染みがないような本が並んでいる・・・一見女の子の要素は皆無みたいに見えるけど・・それにダマされちゃいけない・・・だって前に弘子が言ってたもん・・源氏物語なんかとってもエロチックなんだって！・・・だから弘子はそういうの読んでエッチな妄想してるかも知れないのだ！！

「有希が好きそうな本なんて無いでしょう？」
「・・うん・・ぁ、でもこの“日本の祭り”とかは・・ちょっと興味あるかも・・・」
何げに手にとって表紙をめくると・・・
「ひゃっ！」
・・いきなり山笠の褌のお尻が出て来て驚いた！
「・・あ～・・びっくりした・・・」
「なに？　あ、山笠ね。」
「・・山笠って・・たしか7月だったよね・・」
「そうよ。7月15日が本流れ。」
「・・弘子見たことある？」
「ううん、テレビでは観たことあるけど、朝早いからね。あ、でも集団山見せは見たことあるわよ！」

「弘子知ってる？　ミサトちゃんって小学生まで山笠担いでたんだって。」
「あ、ちらっと聞いたことあるけど・・それって子供山笠よね。」
「・・うん・・たぶん・・・」
・・本物はすごく重いらしいし・・・
「その本にもどこかについてたんだけど・・」
そう言って弘子はオレの手から本をとってパラパラめくった・・・
「あった、これよ！」
「あ！ほんとだ・・女の子も混じってる！」
・・しかも褌して・・・
「でも可愛いわよね。」
「うん！」
・・小さな女の子の褌姿もけっこう可愛いものだ・・・でも、さすがに今のミサトちゃんじゃ・・いくら体は小さくても無理だろう・・
・もっともミサトちゃんは、参加しても良いって言われたら今でもやりたそうだけど・・・

「有希も制服着替えたら？」
「あ・・ぅ・・うん・・・」
「？・・どうしたの？」
「・・なんか・・ウチのつもりで部屋着だけ持ってきちゃったけど・・・良く考えたら・・これでお父さんの前に出るのは恥ずかしいなぁ・・・部屋着だけじゃなくて普段着も持ってくれば良かった・・・」
オレはウチから持ってきたお気に入りの部屋着を弘子に見せた・・・さすがにスソとソデにフリルが付いたピンクのやつじゃ・・他の家で着るにはマズかった・・・パジャマにはいいけど・・・
「なんだ、そんなこと？　わたしの貸してあげるわよ！」
「え、いいの？！　ありがとう！」
オレは弘子のTシャツとパンツを借りた・・・

「！・・有希・・静かにこっちに来て・・・」
「？」
オレが着替え終えると、弘子が窓辺からオレを手招きした・・・
「なに？」
「ゆっくりのぞいてみて、ヒナの小屋に親鳥が来てるから。」
「え、ホント？！」
オレもそっと窓辺に近寄り、ガラスに顔をひっつけて見てみると・・・弘子が言ったようにカササギの親鳥が来ているのが見えた・・・くちばしに何かくわえている・・・
「エサ持って来たのかな・・なかなかあげないね・・・」
こっちのヒナも巣立ちのために、なかなかエサを与えずじらしてるみたいだ・・小屋の中ではヒナがバタバタしながら大きなしゃがれ声でエサをねだっている・・・

するとその声を聞いてか、窓の正面にある巣でもヒナたちが鳴き出した・・・ヒナは大きな丸い巣の上で羽をバタバタ羽ばたかせている・・・ほんとにもうすぐ飛び立ちそうだ！
下の小屋ではさんざんじらしてから親鳥はヒナにエサをあげると、またどこかへ飛んで行った・・・
「お父さんが言ってたけど、明日あたり小屋から出してみようかって。」
「へぇ・・そうなの・・」
・・ヒナっていっても、もう親とそんなに変わらない大きさだもんなぁ・・・もう飛べるかも・・・

「そろそろ下に降りようか、叔母さんもう夕飯作りはじめてるかも。」
「あ、うん！」

よぉし！　頑張っていつもよりおいしく作っちゃうぞ！

ＡＴから

更新が遅くなって申し訳ありません。しかも微妙なところで終ってますし・・・

どうも季節的なこととか、鈴木編が一段落したこととか、

いろんなことが重なったせいか、なかなか筆が進みません。
なので、あまりお待たせするのも何ですし、
ここらで仕切り直したい思いもありＵＰしました。

季節の変わり目というのは急に気温が変わるため血流が変わったりする影響もあるのか
脳がいまいち上手く働きません。
この時期は脳硬塞などで倒れる人も多く、
実際今年３月に死んだ父が倒れたのも去年の今頃でした。

こんな時はストーリーがしっかりあるものなら何とか書けるのですが、
エピソードを思いつかないと書けない今回の話などは難しいです。
どうでもいい妄想ならいくらでも出て来るのですが・・・（笑）

次回もいつになるかわからないので、気長に待っていただけるとありがたいです。
（体調や病気とは関係ないので、その点はご心配なく！）

第１８３話　巣立　ヘンな弘子・・・

「どうぞ召し上がれ！」
弘子の叔母さんと一緒に作った夕飯をお膳に並べて行く・・弘子も“カシワの肉じゃが”の作り方をおぼえながら少し手伝ってくれた。
「いただきます！」
「ほう、これが“カシワの肉じゃが”ですか・・どれどれ・・・」
お父さんがオレが作ったお料理にハシをつける・・・うぅ・・緊張するぅ・・・口に合えばいいけど・・・
「おっ！　これはうまい！　味もしっかり滲みてますねぇ。」
・・ホッ・・良かった！
「こりゃぁ、ユウキちゃんに時々来てもらって夕飯を作ってほしいくらいですね。」
「・・・！」
・・弘子のお父さんったら・・ホント大げさなんだからぁ・・・

「有希に作り方教えてもらったから、そのうちわたしが作ってあげるわよ！」
「それは楽しみだ！　でも弘子にこの味が出せるかな？」
「もう！お父さんったら！」
うふふっ・・なんかいつもクールな弘子も、お父さんといると子供みたいだ！

夕飯を食べ終り弘子の部屋に戻ってくると・・・
「お父さん、すっかり有希の味を気に入っちゃったみたいね。」
「うん・・」
・・ホント良かった・・気に入ってもらえて・・・

「有希が本当の女の子だったら、きっと良いお嫁さんになれるのにね。」

「！・・そんなぁ・・・」

・・女の子だったらか・・・弘子はオレの本当のこと知ってるだけに・・言うことも現実的だ・・・

「有希はどうなの？お嫁さんになりたい？」

「・・そ・・それは・・・どうなんだろう・・・」

「今は男でも戸籍を女に変えたり出来るみたいじゃない。有希もそういうふうにすれば男の人と結婚だって出来るんでしょう？」

「・・それは・・そうかも知れないけど・・・」

・・ほんと・・オレはどうしたいんだろう・・・

「・・で・・でもさぁ・・いくら戸籍を女に変えても・・本当の女になるわけじゃないし・・・子供だって産めないもん・・・そんなの男の人だってイヤだと思う・・・」

「そうかな？　子供欲しくない男の人だっていると思うけど。」

「・・でも・・出来るけど作らないのと、出来ないのとは・・違うんじゃない？」

「う～ん・・同じような気がするけど？」

「でも・・わたしの気持ちは違うよ・・・出来ないのと・・作らないのとでは・・・」

「うん・・まあそうかも知れないわね。」

「あ、ごめんね。変なこと聞いて。」

「ううん、いいの。こういう話出来る友達は弘子だけだし・・・」

「長谷川さんは？」

「！・・長谷川さんは・・こういうマジメな話は出来ないの・・・すぐ怒ったりイジワルなこと言うから・・・」

「長谷川さんったらしょうがないわね。よほど有希のことが好きなのね！」

「！！・・そんなことないと思うよ・・長谷川さんは・・ただの“腐れ縁”ってやつなの。」
「“腐れ縁”？　有希ヒドイこと言うのね。」
「ヒドくないよ・・だってホントのことだもん！」

・・長谷川は中学が一緒で・・オレの男のころを知ってるから・・・なんとなく離れられない・・・

・・こういうのを“腐れ縁”って言うんだと思う・・・

「でも有希には普通に女の子として幸せになって欲しいわ。」
「え？！」
「だって有希は本当に女の子らしいんだもん。千里は有希のこと男っぽいところもあるなんて言うけど、あのコは有希が本当は男のコだって知らないから、そんなことが言えるのよ。」
「・・・・・」

・・なんか・・女の子らしいって言ってくれるのは嬉しいけど・・・それは“男の子にしては”ってことなのだろうか・・・？

・・弘子が言うとそんなふうに聞こえてしまう・・・気のせいかも知れないけど・・・

その後、オレたちは一緒に宿題を済ませた・・難しい数学の問題を弘子に教えてもらえて得しちゃった！

「そろそろお風呂にしようか。」
「ぁ・・弘子先に入って来ていいよ。わたし後で入るから・・・」
「どうして？　一緒に入ろう？」

「で・・でもぉ・・・」
「もしかしてオチンチンのこと気にしてるの？」
「ぁ・・うん・・・」
・・そりゃぁ、気にするに決まってる・・・
「修学旅行の時は一緒に入ったじゃない。」
「・・あの時は・・・」
・・修学旅行の時は白石先生にタックしてもらってから・・・タックしてないとタオルで隠していてもポロッと見えちゃうかも知れないし・・・

「わたしは知ってるんだから気にしなくていいじゃない。」
「でも・・見えたら・・イヤじゃない？」
「イヤじゃないわよ、それにわたしもう1回見てるし・・チラッとだけど。」
「・・ぅ・・うん・・・」
・・まあ・・そう言われればそうなんだけど・・・
「わたしは気にしないわよ。だから入りましょ？」
「・・うん。」

・・そうだな・・弘子にだったら・・見られてもかまわないか・・・

・・女の子としては・・オチンチンを見られるのは・・かなり恥ずかしいけど・・・

弘子のウチのお風呂に入るのは2度目だ・・・もちろん1度目はあの一昨年のクリスマスイブ・・・弘子にオレが男だってバレた日・・・（６８・６９話参照）

・・あの時は・・もうオシマイだと思った・・・

・・でも・・人生何が幸いするかわからないものだ・・・弘子にバレたおかげでオレはいろいろ助けてもらえるようになった・・・

・・もしあの時バレてなければ・・・修学旅行でみんなと一緒にお風呂になんて入れなかっただろうし・・・オレはいまだにいつバレないかと恐れながら学園生活を送らなきゃいけなかっただろう・・・もちろん今もバレないかという恐れはあるものの、クラスにひとりオレのことをわかってくれてる人がいるだけで、ずいぶん気持ちを楽にいられると思う・・・

　オレは下着を脱ぐと、すぐに体にタオルを巻いて胸と股間を隠すようにした・・・もしもこんなことになったらいけないから、少し大きめのタオルを持ってきてて良かった・・・

弘子は何も隠さず堂々としている・・・女の子って恥ずかしくないのかな・・？

オレも弘子も髪の毛はアップにして後ろで髪挟みで留めた・・オレは髪が長いから大きめピンクで、弘子は小さめペールグリーン・・・でも弘子もだいぶ髪が伸びてきた・・・弘子はオレみたいに前髪がないから、髪をアップにするとおでこ全開で可愛い！

　体をお湯で流してから湯舟に入った・・・ここのお風呂は大きいから並んで入ることが出来る・・・

「これなら6人くらい入れるね。」

「6人じゃさすがに窮屈だと思うわよ。」

「そんなことないよ！ウチのお風呂にふたりで入るよりずっと余裕があるもん。」

「ふたり？　妹さんと入るの？」
「ううん、麻衣とは入らない・・時々わたしが入ってるとかあさんが入ってくるの。でも一緒に湯舟に向かい合って浸かると足が重なって窮屈なの！」
「へ～・・」

「でも、木のお風呂なんて温泉みたいね。いいなぁ、こんなのに毎日入れるなんて・・・」
「檜のお風呂って大変なのよ。毎日ゴシゴシ洗わないとすぐにヌルヌルしてくるんだから！」
「そうなの？」
・・それは知らなかったな・・・

・・それにしても・・弘子の胸って大きいよなぁ・・・オレにもしあんなのが付いてたらどんな感じなんだろう・・スッゴク重そう・・
・

「・・有希そんなに凝視しないでよ。」
「！！・・ぁ・・ご・・ごめん・・・」
・・オレ・・そんなに“凝視”してたのかなぁ・・・
「・・こ・・こうして見ると・・やっぱり弘子のムネって大きいなって思って・・・」
「そんなこと言って、有希だってそこそこあるじゃない！　有希より小さい胸の女の子なんてたくさんいるわよ。」
「・・そ・・それは・・そうかも知れないけど・・・」
・・なんか・・こんなこと言ってたら・・オレも大きくなりたいように聞こえるかな・・？

「わ・・わたしはこれくらいで十分なのよ？　もっと小さくたっていいくらいなの！」

・・でも・・・
「た・・ただ・・ちょっと・・どんな感じかなって思っただけなの・・・」
「・・さわってみる？」
「え？！」
「いいよ？　有希ならさわっても。」
・・こ・・これは・・・願ってもないかも・・・
「・・・じゃぁ・・ちょっとだけ・・いい？」
「うん。」

オレはおそるおそる手を伸ばした・・・なんか・・震えちゃう・・・

指先で少し押してみる・・・！！
「やわらか～い！」
「ふふっ、もっとしっかりさわりなさいよ！」
そう言って弘子は、オレの手首を握って手の平を自分の胸に押しつけた！・・すごい“ボヨン”とした感覚が伝わってきた・・・
「ほら、こうやって・・・」
次に弘子はオレの両手をとって、下からすくい上げるようにして持ち上げた！
「ぉ・・重い・・！！」
お湯の中ではわからなかったけど・・お湯から出たとたんオレの手の平にズッシリとした重さを感じた！！

「・・す・・すごいねぇ・・弘子・・・」
・・いつもこんな重いものを付けて歩いたり走ったりしてるなんて驚きだ！・・・オレくらいでも走りにくいのに・・・
「・・弘子・・こんなに重いの・・大変じゃない？」
「急に出来たワケじゃないからね、そんなに大変じゃないわよ。」
「・・・・・」

・・そっか・・オレみたいに高校に入ってから急に膨らんだワケじゃないからなぁ・・・馴れてるのかな・・・

「ねえ、有希もさわらせて？」

「え？！・・い・・いいけど・・・全然たいしたことないよ！？」

弘子はオレのムネをつかんでプニプニすると・・・

「有希だって柔らかいじゃない！」

「！！・・そ・・それは・・まぁ・・・」

・・オレだって・・ムネはそこそこやわらかいけど・・・

「有希・・ちょっと後ろ向いて？」

「？」

オレが弘子に言われるまま後ろを向くと・・・

「ひゃっ！！」

弘子がいきなりオレの脇の下に手を入れて、背中ごしに腕をまわして両手でオレのムネをつかんできた！！！

「ほんとだ！」

「な・・なに？！」

・・何がほんとなの！！

「直美が言ったとおり・・・」

「！・・な・・直美が・・なにか言ったの？！」

「こうするとね、有希の胸って手の平にしっくり馴染んですごく気持ちいいって・・・」

「！！！」

・・直美・・そんなこと言ったの・・？！

「有希の胸って、すごくちょうどいいサイズなのね！　男の子もこれくらいが一番好きなんじゃないかな？」

「そ・・そんなぁ・・・」

・・そんなのオレにもわからない・・・オレも昔は男の子だったけど・・どんな胸が好きだったかなんて・・もう忘れちゃった・・・

・・それにしても直美ったら・・いつもそんなこと思ってオレのムネさわってたのか・・・

「でも・・この柔らかい中にも張りがある感じ・・すごく気持ちいいわよ。」

「あっ・・！」

・・弘子の指が乳首にあたって・・思わず声が出ちゃった・・・

「・・弘子ぉ・・もう放して？」

「あ、ごめん。」

弘子はやっとオレのムネから手を離してくれた・・・

「ねえ有希・・有希もいつか・・アソコも女の子みたいにしたいって思ってるの？」

「え？！・・オチンチンのこと・・？」

「うん。」

「そ・・そうだなぁ・・・いつかは・・するのかなぁ・・・」

・・でも・・もしもオレのアソコが女の子みたいだったら・・・あの時、純平と最後まで行ってたんだろうか・・・（１５９話参照）

「・・でも・・なんでそんなこと聞くの？」

「だって有希が普通の女の子と違うところはソコだけでしょう？」

「・・うん・・」

「ソコさえ女の子と同じにしてしまえば、みんなとお風呂にだって入れるじゃない。」

「！・・うん・・・」

・・そうか・・・そうだよなぁ・・・なにも男の子とのことだけじゃないんだもん・・・

・・アソコが女の子みたいになれば・・着替えの時も気にしなくていいし・・・水着だって何の心配もなく着れるんだもん・・・

「・・弘子も・・わたしのアソコ・・早く女の子にした方がいいと思う？」

「う～ん・・・さすがにそう言われると良くわからないけど・・・手術なんて痛そうだし、大変だろうから・・・」

「・・・ぅ・・うん・・・」

・・そうだよなぁ・・・たしかに痛いかも・・・

・・タマを取った時の手術はそれほどでもなかったけど・・オチンチンを取って女の子にする手術はあの時より大変そうだし・・痛そう・・・

「だけど、そんなことしちゃったら長谷川さんが悲しむかも知れないわね。」

「え？　長谷川さんが？　なんで？」

「長谷川さんって有希が女の子になるの気に入らないんじゃない？」

「どうして？　そんなことないと思うよ？！　だって長谷川さん、わたしに女の子っぽい恰好させたりするもん！　自分は普段はスカートなんてはかないクセにさ・・・」

「ふ～ん・・」

「長谷川さんってイジワルなだけだもん。わたしが女の子になったって関係ないと思うよ？」

・・っていうか・・なんでオレたち長谷川の話なんかしてるんだろう・・・今日は弘子と楽しくお泊まりなのに、長谷川のことなんかどうでもいいのに・・！

「わたし長谷川さんが羨ましいな・・」
「え?!　なんで弘子が?!」
「だって長谷川さんは有希が男の子の頃のこと知ってるんでしょう?　わたしは有希が女の子になってからしか知らないから・・」
「そ!・・そんなの知らなくていいよ!!」
「でもわたし有希が中学までは男の子だったなんて信じられないのよね・・有希って男の子としてどんな感じだったのかな?」
「だ・・だから・・・」

「わたし有希が男の子の頃に出会っても、やっぱり友達になってたと思うな・・」
「そ・・それはないと思うけど・・・」
「どうして?」
「だ・・だって・・わたしは男の子の頃は全然目立たなかったし・・女の子になんか声かけられたことも無かったもん!　バレンタインデーのチョコなんかも・・義理でももらったことないしさ・・・だからすっごくつまんない男の子だったと思うよ?　弘子みたいなステキな女の子が男の頃のわたしと友達になんて・・なるハズないんだもん!!」
「でも長谷川さんとは友達だったんじゃないの?」
「ううん、ぜんぜん!!　長谷川さんとしゃべったのは白鴻を受験する時が初めてだもん。あの時はわたしだけ男の子だったから・・向こうから話かけてきて・・・男のクセに女子校なんか受験してるから、もの珍しかったんじゃないかな・・?」

「それでも・・わたしは有希が男の子でも友達だったと思う・・」
「！！」
弘子がいきなりお湯の中でオレの手を握った・・・
「・・わたしは有希が女の子だから友達なんじゃないの・・有希が男の子でも同じように友達よ。」
「・・ぅ・・うん・・・」
「これから有希がもっと女の子になっても・・変わらず友達だからね・・」
「・・うん・・ありがとう・・・でも・・どうしたの？・・なんか・・今日の弘子ヘンよ・・？」
「そ、そうかな・・そうかも知れないわね。ふたりでお風呂になんて入ったから・・ちょっとのぼせちゃったのかも・・・」
「きっとそうよ！　だっていつもの弘子じゃないもん！」

・・もしかしたら・・オレのオチンチンなんか見ちゃったから・・・ヘンな気を使わせちゃったのかも知れない・・・

・・こんなの・・最初から無かったら良かったのに・・・

それからオレと弘子は背中と頭を洗いあいっこした・・もちろんオレはそのあいだ中、出来るだけオチンチンが見えないように注意していた・・・

・・また弘子に気を使わせてもいけないし・・・オレだった女の子の身体にこんなのが付いてるのを見られるなんてイヤだから・・・

「有希、その服かわいいね。」

「そうでしょう！　これお気に入りなの。」
「パジャマ？」
「うん、あ・・もともとは部屋着なんだけど・・寝巻きとしても着れるから便利なの！」
「そうなんだ。有希は私服もいつも可愛いのね。」
「うん。弘子はいつもＴシャツとパンツなの？」
「そう、だいたいこんな感じ。なんだか色気ないでしょう？」
「・・そ・・そうでもないよ・・・」
・・だってその胸だもん・・・Ｔシャツにノーブラでも十分色っぽいと思う・・・

「じゃ、電気消すわよ。」
「うん。」
弘子がヒモを引いて蛍光灯を消すと、とたんに真っ暗になった・・・なんか怖いくらい・・・

「暗っ・・」
「ここらは街じゃないし、街灯もないからね。」
「・・そっか・・・」

・・でも・・オレの部屋は窓もないから真っ暗なのは同じなんだけど・・・暗さにもいろいろあるのかな・・・

「赤電球つけようか？」
「ぁ・・ううん、このままでいい・・・」
・・オレはべつに暗いと寝れないタチじゃない・・・

「じゃぁ、有希、おやすみ。」
「うん、おやすみ・・」

・・なんか・・他のウチのお布団って違う匂いがしてヘンな感じ・・
・枕も固さが違うし・・・
・・でもオレはそういうので寝れないタチじゃない・・・目をつむるとすぐに睡魔がおそってきた・・・
・・なんか今日はいつもと違うから疲れちゃったみたいだ・・・

－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－

「有希！もう朝よ！」
「んっ・・んん・・？・・弘子・・？」
！・・そっか・・・弘子のウチにお泊まりしたんだった・・・
「お父さんがカチガラスのヒナが巣立ちするんじゃないかって！」
「え？！　ホント？」
「ほら、見に行くよ！　早く起きて！」
「あ、うん。急いで着替えるから・・待ってて・・・」
オレが慌てて着替えようとすると・・・
「そんなのいいから！　カチガラスは待ってくれないわよ！」
「え・・そ・・そんな・・・」
オレは弘子に手を引っ張られて階段を下りて外に出た・・・弘子はいいだろうけど・・オレの恰好は外向きじゃないのに・・・

「お父さん、まだいる？」
「ああ、さっき屋根の上に置いたところですよ・・」
「有希、そっとのぞくのよ・・」

オレたちは社務所の影からそっとのぞいてみると・・・カササギのヒナはまだ小屋の屋根の上にいた・・・でも羽をバタバタして鳴いている・・・

「夜のあいだはお父さんがダンボールに入れて家の中に入れてたの。まだ少し寒いから。」
「へぇ～・・・」
・・だったら・・少しさわらせてもらえば良かったなぁ・・・カササギって天然記念物だっていうし・・天然記念物なんてめったにさわれないもん・・・

木の上で親鳥の鳴き声がすると、ヒナはしきりに上を見上げてキョロキョロしている・・・すると親鳥がいつもヒナにエサをあげる台のところに降りてきた！

「あ、親鳥が来たよ！」
ヒナは親に向ってくちばしを大きくあけてエサをねだるように羽をバタバタしたけど、親はそのままた飛び立ってしまった・・・と思った次の瞬間！！

「あっ！！」
ヒナは親鳥を追うように木の上に飛び上がっていった！
「あれが巣立ち？！」
・・巣立ちって・・オレはもっとこう・・劇的なものだと思ってた・・・
「そうだよユウキちゃん。」

「・・なんか・・ちょっとあっけない感じですね・・・」
「ハハハ、そうですね。でもヒナにとっては一大決心だったと思いますよ？」
「・・・ぁ・・・」
・・ヒナの気持ちで考えれば・・たしかにそうかも知れないな・・・

「さあ、早く着替えて朝食にしないと学校に遅れますよ！」
「あ、そうだった・・・」
・・オレ・・ピンクの部屋着のままだったんだ・・・こんな恰好お父さんに見られるなんて・・・
「弘子！早く着替えよう！！」
今度はオレが弘子の手を引っ張る番だった。

制服に着替えて、弘子の叔母さんが作ってくれた朝食を急いで食べると、もうすぐバスが来る時間だった・・・これを逃すと遅刻してしまう！

オレたちが階段を下りると、向こうの丘を回って来るバスが小さく見えた。
「よかった、間に合って・・」
「そんなに心配することないわよ。ここらのバスは街のバスみたいにすぐに行ってしまわないから。」

バスが停留所に着いてドアが開く・・・
「おはようございます！」
弘子が運転手さんに挨拶した・・・
「おはよう！」
運転手さんも弘子に挨拶してる！

バスの中でも何人かが弘子に挨拶して・・弘子も挨拶していた・・・
どうやら顔見知りみたいだ・・・

「弘子・・知り合いなの・・？」
オレが小さな声で聞くと・・・
「毎日同じバスだからね。」
「ぁ・・そうなんだ・・・」
・・たしかに人数も少ないし・・毎日乗ってれば顔見知りになっちゃうだろうな・・・

・・それに弘子は神社の娘だから・・知ってる人もいるのかも・・・

バスには何人か学生も乗ってるけど、白鴻の制服はオレたちだけだ・・・

朝の光の中・・両側にお茶畑だ広がる道を走って学校に行くなんて・・・なんだか不思議な感じ・・！

・・これから学校に行くのだと思うと・・これまでに来た時とは景色もなんだか違ってみえる・・・

「有希、楽しそうね。」
「うん、だってこんなところ通って登校するなんて初めてだもん！」

・・まあ・・毎日だと当り前になっちゃうのかも知れないけど・・・

「わたしも今日は有希が一緒だから、いつもと違って感じるわ。」
「ほんと?!」
「だって、わたし誰かと一緒に登校するの初めてだから。」

「ぁ・・・」

・・そうか・・・オレはよく長谷川なんかと駅で会って一緒に電車に乗るけど・・・このバスには白鴻の生徒は乗らないんだろうから・・・

「弘子が嬉しいなら、わたしももっと楽しいよ！」

「有希・・」

・・弘子ったら・・いつもはクールな感じなのに・・・今日はなんだか・・・

西鉄久留米駅のバスセンターに着くと、ここからはいつもと同じ道のりだ・・・

・・でも・・朝からずっと弘子と一緒だから・・まったく同じでもない・・・

・・弘子と一緒にバスを降りた瞬間・・同じ場所でも違って見えた・・・

オレたちはそのまま、手をつないだまま学校に向った・・・

第１８４話　一日　夢のような時間・・・

“バシャッ！キューン・・バシャッ！”

スタジオ用のストロボがたてる音・・・流れる女の子たちに人気のポップス・・・オレはスタジオの雰囲気が大好きだ！

「いいよ！　ユウちゃんその笑顔！！」

「！！」

“バシャッ！キューン・・バシャッ！キューン・・”

アタリ用の暗めのライトの中・・一瞬、一瞬のまぶしい光に包まれながら可愛いポーズをとっていると・・オレは本当に女の子になったような気がしてくる・・・ここでのオレは・・オレであってオレじゃないような・・・そんな感じなのだ・・・

・・もっとも・・そうじゃなければ、とてもこんなポーズやれないと思うけど・・・

「可愛いよ！もう少し体重左に！そう！いいよ！！」

カメラマンの進藤さんは乗せ上手だ・・・だからついついオレもいつもなら出来ないような、あとで雑誌を見て恥ずかしくなるような女の子らしいポーズさえもとってしまう・・・

今日の衣装はＴシャツに短いカーゴ風短パン、足には白と淡いグリーンのシマシマのニーソックス、そして白にピンクのナイキのシューズ・・・カジュアルな格好だから髪も軽い感じに巻いてもらった。

・・オレも最近はこういうパンツも少しづつ似合うようになってき

た・・・それは気持ちの問題も大きいかもしれないけど・・体形の影響の方が大きいと思う・・・

・・オレの体は自分で見てもずいぶん女らしくなってきた・・・とくに腰やお尻の感じが変わったせいか、短パンなんかのちょっとボーイッシュにも見える格好をしても、女の子らしさを出せるようになってきた気がする。

このまえ弘子のおウチで一緒にお風呂に入った時も、弘子に修学旅行の時より女らしさが増したと言われたし・・・もうアソコ以外は完璧に女の子なんて・・それはさすがに言いすぎだと思うけど・・・

・・だってオレはどこまで行っても・・完璧な女の子になんてなれないんだから・・・

・・でも・・・アソコを女の子みたいにすれば・・見かけだけは女の子になれるのかな・・・？

・・見かけが女の子になっても・・・気持ちが今のオレでは・・逆に体と気持ちが離れてしまわないだろうか・・・？

・・それとも・・・身体が女の子になれば・・・気持ちの方も変わってくるのだろうか・・・？

撮影が終わって帰り支度をしていると・・・

「ユウちゃんお疲れさま！」

「あ、佐々木さん・・お疲れさまです。」

「今年もまた九州ＪＩＮＯＮでどんたくに出ることになったんだけど、ユウちゃんも出てくれるでしょう？」

「はい！出ます！」
・・今年もパレードやるのかぁ・・・
「もちろん蟹原さんも来るんでしょう？」
「あ・・今年は蟹原さん来れないのよ。」
「ぇ・・そうなんですか・・・」
・・なんだ・・残念・・・蟹原さんに会うの久しぶりだと思ったのに・・・
「でも、蟹原さんは来れないけど、今年はスゴイ人が来てくれる予定なのよ！」
「え？！　だれですか？」
「フフフ・・それは当日まで内緒！」
「え〜・・だれかなぁ・・すっごく気になるぅ・・」
・・だれなんだろう・・オレも知ってる人かなぁ・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

オレと長谷川は思わず空を見上げた・・・
「大きいねぇ・・」
「そうね。」
学校に行く途中、小学校の校庭にある旗を揚げるための棒に、大きな鯉のぼりが上がっていた。
「もうすぐ5月だもんね・・」
青い空に白い雲・・そこを風にのって泳ぐ大きな黒いコイと小さな

赤いコイ・・そして色とりどりの吹き流し・・・金色のウロコが朝日にきらきら輝いている・・・

「有希も小さい頃　鯉のぼり揚げた？」

「ううん、ウチは鯉のぼり揚げるようなところないもん・・それに・・ウチはあんまりそういうことやらないから・・・」

「あ、そういえばひな祭りもしなかったって言ってたね。」

「・・うん・・・」

どうも、とうさんもかあさんも、そういうことにはあまり関心がないみたい・・・

「まあ、有希は女の子になりたかったんだから、鯉のぼりなんか揚げられても嬉しくなかったかも知れないね。」

「・・・・・」

・・どうだろう・・オレは小さい頃どんな気持ちだったのか憶えていない・・・女の子の格好をしてたんだから鯉のぼりなんか嬉しくなかったかなぁ？

・・でも女の子の服を着ていただけで・・心まで女の子だったかどうか・・・かあさんに聞いたらわかるかな？・・・でも・・かあさんでも・・オレの心の中まではわからないかも・・・

「そういえばあんた、今年もどんたくに出るんだって？」

「ぁ、うん。」

「また日本舞踊とＪＩＮＯＮの掛け持ち？」

「ううん、今年は日本舞踊の方は人数が足りてるみたいだから、わたしはＪＩＮＯＮのパレードだけ。」

「へ～　そうなんだ。」
「でも良かった。去年は掛け持ちで着替えとか・・時間もギリギリで大変だったもん。」
「また蟹原さんも来るんでしょう？」
「ううん・・今年は来れないって・・・佐々木編集長が言ってた・・・」
「そう・・有希逢いたがってたのにね・・」
・・そうなんだよなぁ・・オレも蟹原さんに逢えると思って楽しみにしてたのに・・・
「あ、でも佐々木さんが誰か別のスゴイ人が来るって言ってた！」
「え！　だれだれ？」
「それは・・まだ聞いてないっていうか・・秘密なんだって・・・」
「ふ～ん・・誰が来るんだろうね。」
「うん・・・」
・・オレとしては・・他の誰が来るよりも蟹原さんが良いんだけどなぁ・・・

……………………………………………………………………

5月3日、どんたく当日。

♪　ぼんちかわいやねんねしな～　しながわじょろしゅはじゅうもんめ～　じゅうもんめ～のてっぽだま～　たまやが～かわへスッポンポン～♪

街にはどんたくのお囃子がエンドレスで流れている・・・これずっと聞いてると、終わった後も何日か耳について離れないんだよなぁ・・・

博多駅の駅前にオレたちＪＩＮＯＮのモデルが集まっていると、まわりにはＪＩＮＯＮ読者の女の子たちが集まってきた・・・

「ユウちゃん写真撮っていい？！」

「ユウちゃんサインして～！」

オレが女の子たちにサインしてあげてると・・・

“　キャ～～！！キャ～～！！”

急に駅の方で女の子たちが騒ぎだした・・・

「なに騒いでるんだろう・・？」

オレが不思議に思って見ていると・・女の子たちの人混みから出て来たのは・・・

「！！・・じゅ・・純平！？」

・・そっか・・佐々木さんが言ってたスゴイ人って・・純平のことだったんだ・・！

・・純平・・昨日のメールでも何も言ってなかったのに・・・

“　キャ～～！！純平く～ん！！”

オレのまわりにいた女の子たちも純平を見つけると、あっという間に純平の所に行ってしまった・・・そりゃぁ、オレみたいな地方モデルの女の子と、全国モデルでアイドルの道端純平とでは・・比べようもないから仕方ないけど・・・

・・だって・・・オレだって普通の女の子だったら、純平の方に行

ったと思うもん・・！

あっ！・・純平がオレたちの方にやってくる・・・

・・あぁ・・逢えたのはスゴク嬉しいのに・・まさか純平が来るなんて思いもしなかったから・・・心がついていかない！！

・・でも純平はマネージャーさんや何人かの人たちと一緒に、オレたちを通り越して佐々木さんの所に行ってしまった・・・

・・・そうだった・・・純平はどんたくのパレードに来たんだ・・・オレに逢いに来たんじゃないんだ・・・

・・嬉しかった気持ちがしぼんでいく・・・

・・それに・・オレたちが恋人どうしなのは誰にも秘密だ・・・どんなに嬉しくて・・どんなにおしゃべりしたくても・・今日はただのモデル仲間のフリをしなくちゃ・・・オレはみんなと同じ・・一人の女の子のモデルなんだ・・・

佐々木さんへの挨拶を終えた純平が、オレたちに近づいてくる・・・

「・・道端さん・・こんにちは・・・」

オレはさりげなくモデルの一人として挨拶した・・・

・・それでも・・熱い視線を送ってしまうのは仕方がない・・・

「久しぶり、ユウちゃん。」

・・もちろん純平もオレのこと・・“有希”とは呼ばなかった・・・

・・でも・・“ユウちゃん”って呼んでくれただけでもすごく嬉し

い！！・・それに・・純平も目だけで・・オレに“愛してるよ”と言ってくれた気がする・・！

・・うぅ・・純平に見つめられたら・・股間がウズウズしてきた・・

・

・・オレったら・・ステキな純平を見てヘンな想像しちゃうなんて・

・最低の女の子だ！

♪　ぼんちかわいやねんねしな～　しながわじょろしゅはじゅうもんめ～　じゅうもんめ～のてっぽだま～　たまやが～かわへスッポンポン～♪

「はい、みんな並んで～！」

佐々木さんに言われて、オレたち女の子のモデルがパレードのために並ぶと・・・

「純平くんはここに入って！」

「真ん中ですか？！」

純平は一番前の真ん中に・・・

・・ヒィ～・・純平がオレの横に！！

・・ただでさえパレードに緊張してるのに・・純平がとなりにいるなんて！・・もう心臓バクバクだ！！

「右の人は右側を中心に、左の人は左側を中心に手を振ってね！純平くんは両方にまんべんなく！」

「はい。」

まわりの女の子たちがみんな純平に声援を送ってるから・・オレはなかなか純平の方を見れない・・・うわぁ・・そろそろ出発だ！

すると佐々木さんが
「誰か純平くんの映画のノボリを持ってくれない？」
（ノボリ？）
あ・・あの旗みたいなヤツか・・・
「あ！・・わ・・わたし持ちます！」
「え？　ユウちゃんが？　でも・・ユウちゃんはメインだし・・」
「いいんです、わたしに持たせてください！　前の方が良く見えるでしょう？」

・・オレだって・・純平の映画を宣伝したい！・・だって純平のためになることだもん！

オレがノボリの棒を持つと・・・
「そんなの悪いよユウちゃん、俺が持つよ。」
純平がオレの手からノボリを取ろうとした。
「いいの！　わたしに持たせてください。　これはわたしが持ってるから、道端さんはみんなに手を振ってあげてください！」
「・・わかった。ノボリはお願いするよ。」
「うん！まかせて！」

！・・オレ・・いつの間にか純平と目を見て普通に話してた！

・・これもノボリのおかげだ！　しっかりみんなに見えるように持たなきゃ！！

前のグループが進んで、次はオレたちの番・・・緊張してる上に

となりに純平までいて・・・顔が引きつっちゃいそうだけど・・・
オレだってモデルなんだ！・・・頑張ってみんなに可愛く笑顔を振りまかなきゃ！！・・そして映画の宣伝だ！！

歩き出すとノボリは意外に重かった・・・

♪　ぼんちかわいやねんねしな～　しながわじょろしゅはじゅうもんめ～　じゅうもんめ～のてっぽだま～　たまやが～かわへスッポンポン～♪

「これ面白い歌だね。」
「ぁ・ぅ・うん！」
急に純平に声かけられてドキッとした・・・思わず“うん”っていっちゃったけど・・まわりのコに親しげに聞こえちゃったかな・・・

・・オレもだいぶハイヒールにも慣れてきたけど・・やっぱり長い距離歩くのは大変だ・・・

・・のぼりも風が吹くとバタバタして、棒がしなって体を持っていかれそうになる・・・オレは風が吹くたび、必死に両手に力を込めて頑張った。

・・スカートも風になびいて・・両手が使えないからパンツが見えちゃうかも知れないけど・・純平のためだ、そんなの気にしない・・だって見せパンだもん！

・・でも・・写真に撮られちゃったりしたらイヤだなぁ・・・

そんなこと考えてたら中洲の橋がもうすぐそこ・・・あそこが一番の撮影スポット・・・一番カメラマンが多いところだ・・プロも

素人も・・・

・・もしかして・・若村先生もいたりして・・去年もあそこらへんにいたし・・・

・・でも今年は忙しそうだから・・いないかな・・・

橋に差し掛かるとパレードを正面から撮ろうするカメラマンが何人も道に飛び出してくる・・・

！・・ちょっと・・下から撮りすぎじゃない?!・・ただでさえ慣れない長距離のモデル歩きで大変なのに・・・もっと足を交差させなきゃスカートの中撮られちゃいそうだ・・・いくら見せパンでも・・パンツはパンツだし・・・やっぱり撮られちゃったら恥ずかしい・・！

（うわっ！）

・・橋の上は一段と風が強い・・・ノボリが飛ばされそう！

・・もうすぐ橋を渡りきる・・・でもココが一番撮影には良い場所・・・後ろがずっと橋だからバックがゴチャゴチャならなくて写真がキレイに写せるのだ・・だからプロのカメラマンさんは大抵ここで狙ってる・・・

（！！）

案の定カメラを1台首から下げて、もう1台を肩から掛けた人が道に飛び出してきた！・・・進藤さんが言ってた・・2台カメラを持ってるのはほとんどがプロなんだって・・・もし1台が故障や充電切れになっても、すぐにもう1台で写せるように2台持ってるんだって・・・

・・どういう訳か一番のシャッターチャンスに、なぜかカメラが使えなくなることがあるらしい・・そういう経験を一度でもすると、カメラ1台じゃ不安になるんだって・・・昔はフィルムだったから、フィルムが無くなっちゃう失敗が多かったらしいけど・・・フィルムってたくさん写せるやつでも36枚なんて・・今じゃとても考えられないな・・・

何とか橋を渡りきろうとした時、また急に強い風が・・・ノボリが風であおられて・・・

「キャッ！」

バランスを崩しハイヒールの足をこねて転びそうに・・！！・・このまま転んだらケガしちゃう！！

「！！」

・・そう思った瞬間・・・純平が背中に手をまわしてオレが転ばないように！！

「大丈夫？」

「・・・ぁ・・はぃ・・・」

急な出来事に放心状態のオレに・・

「足くじかなかった？」

「・・・ぁ・・うん・・だいじょうぶ・・みたい・・・」

「立てる？」

「・・うん・・」

立ってみたけど純平がすぐに支えてくれたから、どこもケガしなかったし、足首もくじいてなかった・・・

「あっ・・ノボリが！・・ごめんなさい・・」

道路に倒れたノボリを拾おうとすると・・・

「あ、いいよ。俺が持つから。」

「え・・でも・・」
・・純平は・・映画に出てる人なのに・・ノボリなんて持たせたら・・
・・

すると純平が耳もとで・・・
「・・大丈夫だよ、有希・・」
誰にも聞こえないように小さな声で・・・
「ぁ・・」
純平に“有希”と囁かれたとたん・・オレは頭の中が真っ白になってしまって・・まわりに人がいることも忘れて・・オレと純平だけの世界に入ってしまう・・・

そして純平が自分でノボリを持って歩きだすと、オレたちも何ごともなかったようにパレードを続けた・・・

・・でも・・オレの脇腹には・・純平がオレの身体を支えた時の・・手の感触が・・パレードの間もずっと残っていた・・・

・・そして気づいた時には・・もうパレードは終わっていた・・・・

（あっ！　純平は?!）
オレが純平の姿を探すと・・純平は佐々木さんに見送られながらマネージャーさんとタクシーに乗るところだった・・・
（え・・もう帰っちゃうの?!）
タクシーが出る時・・純平がこっちに向かって手を振った・・・

「キャ～!純平～!」
ファンの女の子たちが手を振り返している・・だけど・・・

・・ファンの女の子たちに振ったように見えるけど・・・純平はオレに振ってくれたんだと思う・・・

「！・・メールだ・・」

見てみると純平からだった・・

“　さっきは足大丈夫だった？　今日はあまりいられなくてゴメンでも久しぶりに有希と会えて嬉しかったよ　”

・・純平・・なんて優しいの・・・

“　足は純平が受け止めてくれたから何ともないから心配しないでわたしも純平に逢えて嬉しかった！　こんど逢う時は　もっとゆっくり逢いたい　”

・・あぁ・・もっと純平といられたら・・・

「有希！」

？！・・振り返ると弘子たちだった。

「あ、弘子に直美！千里も来てくれたの？！」

「うん。どんたく懐かしいし。」

・・そっか・・去年は千里も一緒だったもんなぁ・・・

「今年も一緒にパレード出来たら良かったのにね・・・」

「ううん、有希がモデルとして成長してるの見れただけで大満足よ！」

「そ・・そんなぁ・・わたしそんなに成長してないし・・・」

「そんなことないよ！有希はすっごく成長してる！」

「うぅ・・」

・・そうかなぁ・・そんなふうには感じないけど・・・

するとみんなの後ろからひょっこりと・・・！
「あ！ミサトちゃんも来てくれたんだ？」
「はい、先輩キレイでした！」
「・・いいよぉ・・そんな・・」
・・ミサトちゃんにそんなこと言われたら・・照れちゃうよ・・・
「コケたとき大丈夫でした？」
「ぁ・・うん・・全然大丈夫！」

「おねえちゃん！」
「あ！麻衣もいたの？！」
「さっきまで順ちゃんもいたんだけど・・どっか行っちゃった。」
「ぁ・・うん、長谷川さんは人見知りだから・・」
「おかあさんに終わったらみんなでゴハンでも食べなさいって、お金あずかってきたのに・・」
「ほんと？　それじゃどっかで食べようか！」
「うん！」

オレはみんなを近くのイタリアンレストランに案内した・・何度か刈谷先生と行ったところ・・・
どんたくだから結構混んでたけど、お店の人がオレが前に刈谷先生と来たのを憶えてて、テーブルを取ってくれたから、みんなで楽しくお食事することが出来た。

・・・

帰ってお風呂に入ると、なんだかグッタリしてしまった・・・

「あ～・・今日は疲れちゃった・・・」

思いもよらず純平に逢えたり・・みんなが来てくれたりして・・・

嬉しかったけど慌ただしい1日だった・・・

・・なんだか・・今日一日のことが夢のようだ・・・

・・オレは本当に純平に逢ったんだろうか・・・？

・・明日・・目が覚めたら・・全てが夢だったりして・・・

・・でも・・・

・・オレの身体には・・今もまだ純平の手の感触が・・ハッキリと残っている・・・

「・・ふぅ・・・・」

・・今度はもっとゆっくり逢いたいなんて・・メール送っちゃったけど・・・そんなことしたら・・またいつかのホテルの時みたいになっちゃうかも知れない・・・（１５９話参照）

・・今度もしあんなことになってしまったら・・・オレは拒める自信がない・・・

・・でも・・自信があろうと、なかろうと・・オレには拒むしかないのだ・・・

体を洗う・・・

・・オレの肌は女の子みたいにツルツルだ・・・体毛も永久脱毛しちゃったから・・・

・・胸も・・弘子みたいに大きくはないけど・・オレには十分すぎるくらい・・・

・・身体のラインも・・以前よりずっと女の子っぽくなっている・・
・

・・でも・・股間を洗うときだけは・・やっぱり自分が本当は男だと思い知らされる・・・

・・もしココが形だけでも女の子みたいだったら・・オレは純平を拒まなくてもいいのだろうか・・・？

・・男の子の頃と同じように・・オチンチンの皮を剥いてキレイに洗い・・・温まって伸びた、今は何も入ってない袋の皮を丁寧に洗っていると・・・・

ん？？・・・なんだろう・・コレ・・？

・・何も入ってないハズの袋の中に・・何かコリコリするモノが・・
・

・・ま・・まさか！・・・またタマが生えてきたんじゃ？！

・・もしかして・・先生がタマの一部を取り残してて・・そこから新しいのが生えてきたのかも！！

オレ・・男の子に戻っちゃうの？！

…………………………………………………………

『オレは女子高生』のフシギ

みなさんはこの話を読んでいて変に思うことがあるかも知れません。

有希たちは、いまどきの女子高生にしては携帯もたいして使わないし、パソコンも持っていないなど、実際には考えられないことかもしれません。

少し前にそういうご意見もいただきました。

もちろん今でもパソコンが無い家もあるだろうし、携帯を使いたがらないコもいるかも知れません。中には持っていないコもごく少数はいると思います。

でもほとんどの高校生は携帯もパソコンも使いこなしてるに違いありません。

それなのになぜこの話ではこんな感じなのかというと、私はこの『オレは女子高生』を自分が高校生の時の雰囲気で書いているからなのです。

私が高校生のころは携帯はおろか、パソコンも家庭にはありませんでした。
（一部の会社にはあるという程度でしょうか・・・）
ワープロもまだなく、トナー式のコピーがやっと普及しだした頃・・・
ビデオが登場したのもこのころですが、まだごく一部の家にしかなかったと思います。

今思えばのんびりしていた時代です。
もっとも、当時は自分たちがのんびりしてるとは思いませんでしたけど（笑）
そんな時代でも高校生は今と変わらず色んな事に悩んでいました。
それでも今と比べれば悩みの質は単純だったと思いますが・・・

そんな感じで書いている『オレは女子高生』ですが、
私はべつにこの話でノスタルジックなものが書きたいワケではありません。
もしそうであれば昔の話として書くと思います。
それに、この話では扱う内容が性同一性障害や性転換など、現在の時代でなければ
ならない内容になっていますから、昔の話としては書くといろいろ不都合なことが出てきます。

なので私はこの話を“架空の現代”ということにしました。
もちろん小説はどれもほとんどが架空の話ではありますが、
この『オレは女子高生』はもう少し積極的に“架空”に設定しています。

それが携帯の使い方や、パソコンの普及具合や、

芸能人でも一部の人しかブログをやってなかったり、ツイッターが存在しなかったり
という形で現れています。
（もっともツイッターはこの話を書き出した頃はまだ日本では普及していませんでしたけど、笑）

なぜそういう設定にしているかと言うと、もし有希が純平のブログを観て、
逐一何をしているのか知っていたのでは話が面白くならないし、
毎晩電話で長話をするのもどうかと思うからです。
東京と福岡に離れている二人が、一日一回だけメールをする。
それくらいが丁度いいと思うのです。
（まあ、そういうシーンも実際にはほとんど書いてないですけど、笑）

ただ“架空”とはいっても、便利な方向への“架空”にはしたくありません。
例えば薬を飲んだら完全に女になってしまったり、
手術で他人の子宮を移植したら子供が産めたり・・・
そういうのは『オレ女』ではやる気はありません。
（そういうのも決して嫌いじゃないですけど、笑）

もちろん話が話なので、高校生なのにいつの間にか女性ホルモンを投与されていたり
現実世界ではありえないことも沢山ありますが、
倫理的にやれない事と、現代の医学では技術的にまだ難しい事は
私の中では別の問題として考えています。

それに現実にも“病気”という名目でなら
高校生に女性ホルモンを投与することもあるようですし・・・

おそらくこの話でもそういうことで女性ホルモンを投与したり
タマの摘出が可能になっているんだと思います。

そういうワケなので『オレは女子高生』は実際の現代とは少し違うんだな？
という気持ちで読んでいただけると有り難いです。

第１８５話　症状　オレの身体の変化

「それじゃ腕を出して・・」
「はい・・」
ブラウスのソデをまくると、白石先生はオレのヒジの内側を消毒してから、使い捨ての注射器を静脈に刺した・・注射器にはカートリッジが付いていて、ひとつに血が溜ると注射器はそのままにカートリッジだけを引き抜いて、また空のカートリッジを差し込む・・するとまた血が溜まっていく・・採血のたびにいちいち注射を２回をしなくていいから便利だ。

「はい、おつかれさま。採血おわり！」
白石先生はオレの腕に刺した注射器を抜いて消毒液が染み込んだ脱脂綿でおさえてくれた・・・
「あの・・この前の血液検査どうでした・・？　男性ホルモンが増えたりしてなかったですか？」
「いいえ、特に変わりはなかったけど・・どうして？」
「・・・・・」
「何か心配な事でもあるの？」
「ぁ・・あの・・ちょっと・・・」
「なに？どこかぐあい悪い？」
「ううん・・そうじゃないんですけど・・・なんか・・タマが・・生えてきたみたいで・・・」
「？？・・タマが生えてきた？　タマって睾丸の事よね？」
オレがコクリとうなずくと・・・

「まさか睾丸がまた再生してくる事は無いと思うけど・・ちょっと診せてくれる？」
白石先生は保健室の戸に鍵を掛けるとオレの診察にかかった・・・

・・オレはスカートをめくってパンツを下ろす・・・もうココは白石先生には何度も見られてるけど・・今でもやっぱり恥ずかしい・・・それに・・スカートの下のオチンチンって・・なんか卑猥なんだよなぁ・・・

先生は元はタマが入っていた袋を指でつまんでプニプニ触った・・・

「痛くない？」

「・・はぃ・・それくらいの強さなら・・・」

・・今はお風呂に入って温まった時と違って・・シワシワに縮こまってるからわかりにくいかも・・・

先生はしばらく触ってみて・・・

「・・うん・・確かに何かコリコリしたものがあるようね・・まわりはブヨブヨしてるし・・・副睾丸炎に似てるけど・・？」

「副睾丸炎？」

「あ、副睾丸っていうのは、睾丸の上から後ろにかけてくっ付いているもので、精子を蓄えておく所なの。そこが細菌によって炎症を起こすとこんな感じになるんだけど・・・でも有希ちゃんの場合、睾丸を摘出する時に副睾丸も取ってるはずなのよねぇ・・・」

「・・・・・」

「う～ん・・ごめんね、私も専門じゃないから良くわからないわ。」

「！」

「でも心配ねぇ・・有希ちゃん、明日にでも睾丸を摘出してもらった杉田先生の病院に行ってみない？　私が紹介状書いてあげるから。」（５８話参照）

「・・は・・はぃ・・・」

・・白石先生でもわからないなんて・・・ヘンな病気だったらどうしよう・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

　次の日、白石先生の紹介状を持って、前にタマを取ってもらった杉田美容整形外科にやってきた。

・・普通の病院だと待合室で待つけど・・さすがに美容整形を受ける人は他の人と顔を合わせたくないから、この病院は完全予約制だ・・・入り口も正面以外に裏にもあり、患者さんはみんなこっちを利用する・・・

「戸田有希さん、どうぞ。」
看護師さんに呼ばれて診察室に入る・・うぅ・・緊張するぅ・・・

「こんにちは・・」
「久しぶりだね。調子はどう？」
「はい・・あのぉ・・・」
・・コリコリのこと・・なんて言えばいいんだろう・・・
「まあ、症状は紹介状に書いてあったから、詳しい話は診察してからにしよう。」
「ぁ・・はい・・」
・・その方がオレも助かる・・・

　オレは杉田先生の前でパンツを脱いだ・・・今日は一応おろしたての可愛いのをはいてきた・・・まあ、病院の先生はそんなことは気にしないと思うけど・・・

スカートを上げてオチンチンを男の先生に見せるのは・・さすがに

恥ずかしい・・・オレが男の子の頃だったら男の先生が良かったんだろうけど・・今は女の子だから・・・それなのにオチンチンって・・・

（ヒッ！）

縮んだタマの袋を先生に触られると、オチンチンの奥の方が“ビクッ”と震えた・・・

「うん、やっぱり・・これは心配いらないよ。」

「・・そうなんですか・・？　でも・・前はこんなの無かったような・・・」

「このコリコリしたものは前からあったけど目立たなかっただけなんだ。これは精索〈せいさく〉といって睾丸を陰嚢の中にぶら下げているヒモ状のものなんだよ。」

「・・はぁ・・・」

「精索には睾丸へ血液を送る動脈と静脈、睾丸からペニスへ精子を送る輸精管、神経などがひとかたまりになったものなんだ。」

先生はオレの袋をモミモミしながらそう言った・・・

「あと、このやわらかいブヨブヨしたものは精巣挙筋〈せいそうきょきん〉といって寒い時なんかに睾丸を体内に引き入れる筋肉だよ。」

「筋肉・・」

「それにしてもずいぶん“開発”されてるね。」

「え?!」

いきなり先生に“開発”なんて言われたから驚いた・・・

「・・お医者さんも・・“開発”って言うんですか?」

「あ・・いや、医学用語って訳じゃないけどね。君たちが良く“開発”って言うだろう?」

「・・・・・」

・・たしかに・・刈谷先生は“開発”とか言うけど・・オレには何のことだか・・・

「・・あのぉ・・“開発”って何なんですか・・？」

「そうだな・・医学的にいえば、たぶん筋肉が発達することだと思うよ。」

「筋肉が・・発達・・？」

「そう、腕や足の筋肉は鍛えれば太くなって強くなるだろう？　それは身体の他の部分も同じで、どこの筋肉でも動かせばそれだけ発達するんだ。もちろん場所によって発達しやすい所と発達しにくい所があるけどね。」

「・・あの・・ココは・・？」

オレが股間を指さすと・・・

「まあ、一般的には発達しにくいと言えるだろうね。何しろ普通の状態では意識的に動かす事も難しい場所だから。」

「・・・・・」

「精巣挙筋は腹筋の一番下につながっているんだけど、そこは普通の鍛え方では鍛えるのが難しいからね。」

「・・・・・」

「アナルセックスや前立腺を刺激するような事をやれば別だけど。」

「！！！」

・・先生もしかして・・オレがアナルセックスや・・エネマグラ使ってるの・・勘づいてるのかな・・・

「・・あ・・あの・・わたし・・・」

「いいんだよ、気にしなくても。私は学校の先生じゃないからね。」

「・・・・・」

「性的に感じる事が出来るのは重要だからね。日本人はあまりそういう事を重要視しない人が多いけど。」

そう言って先生はニコッと笑った・・・

「君たちみたいなコでも同じだよ。せっかく身体を女にしても、女として感じる事が出来なきゃ女になった意味も半減してしまうんじゃないかな？　なかにはせっかく性別適合手術をして女の身体になったのに、セックスで感じる事が出来なくて男の身体に戻りたくなる人だっているんだ。まあ、なんとか身体を男に戻す事は出来るけど、男の性感は戻ってこないから手遅れだけどね。」

「！！！」

「でも君はそういう心配は無さそうだね。ドライオーガズムはもう経験した？」

「ぁ・・はぃ・・・たぶん・・・」

「それは良かった。その感覚は性転換手術しても消えないからね。まあ、ヘタな手術して神経を切ってしまったらダメだけど。」

「！！」

「ぁ・・あのぁ・・その手術って・・すごく痛いんですか・・・？」

「性別適合手術？　まあ・・身体の中に穴を開ける訳だからね。それなりに痛いと思うよ。手術中は全身麻酔だから痛くないけど、術後は結構痛いらしいね。」

「・・うぅ・・・」

・・オレ・・痛いのはイヤだなぁ・・・

「でも、君もいずれは手術するんだろう？」

「！・・ぇ・・えっと・・・」

・・オレ・・手術するんだろうか？・・したいんだろうか・・？

「・・で・・でも・・手術って・・高いんでしょう・・？」

！・・オレったら・・なに値段なんか聞いてるんだ・・？

「そうだね、今はだいぶ安くなったけど国内だと１５０万くらいかかるよ。海外ではタイなんかだと７０～８０万くらい。でも渡航費

用とか考えるとそれほど違わないから、術後の入院の事も考えると国内の方が安心ではあるけどね。向こうの病院でもかなり医療設備は整ってきているから、形成の面では向こうの方が上手いと言って、タイでの手術を希望する人もいるけど、何かあった時に言葉が通じないのは怖いからね。」

・・たしかに・・言葉が通じないのは不安だな・・・

「もっとも国内の１５０万には豊胸手術も含まれてるから、君の場合豊胸は必要ないなら１００万前後だと思うよ。ここらへんは病院によっても違うから何とも言えないけど。もちろんもっと大きな胸が欲しいなら豊胸するのも悪くないね。豊胸だけならウチでやってあげるよ？」

「！！・・ぃ・・いいです！・・豊胸なんかしなくて！」

・・オレは・・もう少し小さくてもいいくらいなんだ・・・

「もし性別適合手術を希望するなら、良い先生を知ってるから紹介するよ。Ｋ大病院の先生で実際にタイにも行って勉強してきた人だから、形成も向こうの先生より上手いくらいだよ。君は学生だから夏休みに手術するって手もあるんじゃない？」

「！！！」

・・そ・・そんなこと・・急に言われても・・・

「・・わ・・わたし・・まだ良くわからなくて・・・それにお金も無いし・・・」

「そうだね、君は未成年だからご両親の承諾も必要だからね。」

「・・・・・」

「もし手術を希望するんだったら、早めに言っておいた方がいいよ。最近、希望者が多くて手術の予定が詰まってるって言ってたから。」

「・・はぃ・・・」

・・オレ・・ホントどうしたらいいんだろう・・・
・・手術したいのかどうかも良くわからないし・・するにしても・・100万なんてお金持ってない・・そんな大金・・かあさんにも借りれないもん・・・

「あ、そうだ・・あの・・このこと・・白石先生にも・・言うんですか・・？」
「？　この事というと？」
「・・あの・・わたしが・・“開発”されてるってこと・・・」
「ああ、君が言わない方が良いなら言わないよ。医者には患者さんの事を勝手にしゃべってはいけないっていう守秘義務があるからね。」
「・・わたしがエッチなことしてるって・・白石先生には・・知られたくないんです・・・」
「わかった。それじゃ何も異常なかった事だけ伝えよう。心配する必要はないってね。」
「・・はい・・ありがとうございます。」

病院を出るともうすぐ12時だった・・・
・・どうしようかな・・担任の山口先生は来れるようなら午後からでも学校に来なさいって言われてたけど・・・何か食べてから学校に行こうかな・・・

……………………………………………………

まさか私服のまま学校に行くワケにもいかないから、ゴハンを食べてからいったんウチに戻って制服に着替えて学校に行った。

でも着いた時にはもう5時間目が終わるところだった・・・結局オレは6時間目だけしか受けられなかった・・・

「有希、病院に行ったって聞いたけど、どこか悪いの？」
千里に聞かれたけど・・・
「ううん、ちょっと貧血なだけだった・・」
オレは去年の修学旅行から、すっかり貧血キャラになってしまった・・まあ、女の子は貧血のコが多いし・・今日みたいな時に便利だけど・・・
「もっとホウレンソウとかレバーとか食べた方がいいんじゃない？」
「・・うん・・」

みんなと離れたところで弘子が・・・
「ねえ、貧血なんてウソなんでしょう？　なにか問題でもあるんじゃない？」
「うん・・ちょっと白石先生にもわからないことがあって・・専門の病院に行って来たんだけど大丈夫だった。だからそんなに心配しなくていいよ。」
「そう、ならいいけど・・わたしには本当のこと言ってよね。」
「うん、わかってる！」

・・そうは言っても・・弘子にだって言いにくいこともあるからなぁ・・・

放課後クラブに向かっていると・・・
「あれ？　有希今日休みだったんじゃないの？」
「ぁ、長谷川さん・・時間かかったら休むつもりだったけど、早めに終わったから来ちゃった・・・って言っても6時間目しか出れなかったけど・・・」

「あんたそういうとこ変にマジメよねぇ。１時間だけなら休んじゃえばいいのに！」
「・・でもクラブもあるし・・今日はお花がある日でしょう？　部長としての責任だってあるし・・・」
「なになに？　有希ったらずいぶん部長の自覚が出て来たじゃない！」
そう言って長谷川はオレの脇腹をツンツン突っついた・・・
「ちょ・・もうっ・・長谷川さんすぐそんなふうに茶化すんだからぁ・・・」

・・自覚とかそういうんじゃなくて・・オレはただ女の子としてちゃんとしたいだけなんだ・・・男の子だった頃のオレは・・全然ちゃんとしてなかったから・・・

「・・長谷川さん、早く部室に行こうよ。」
オレが背を向けて、さっさと歩き出すと・・・
「あ、ちょっと待ってよ！」
長谷川が慌ててオレの横に並び腕をからめてきた・・・女の子どうしってこういうこと平気でやるから面白い・・・長谷川もオレが男だったなんて、もう頭に無いんじゃないだろうか・・？

…………………………………………

クラブが終わって、オレがそそくさと部室を出ようとしていると・・
「有希、一緒に帰ろう！」
「ぁ、ごめん長谷川さん・・ちょっと保健室に寄って行かなきゃいけないの・・・」

「そう・・何か用事？」
「うん・・今日の報告っていうか・・」
「待っててあげるわよ。」
「いや・・もしかしたら長くなるかも知れないから・・」
「ふ～ん・・わかった、じゃぁわたし先に帰るね！」
「うん、バイバイ！」

オレは昇降口の方に行く長谷川と別れて保健室に向かった・・・

「先生？」
「あ、有希ちゃん。ちょうどいいところに来たわね。さっき杉田先生に診察の結果聞いたところよ。異常じゃなくて良かったわね。」
「はい。」
「詳しい話は聞いた？」
「ぁ・・はい・・だいたい・・」
「杉田先生、本人に話したからって、詳しいこと教えてくれないのよ！」
「ぁ・・あのぉ・・・」
・・どうしよう・・せっかく“守秘義務”で黙っててくれても、オレが話すんじゃ意味ないじゃない・・・

「・・あの・・タマを取っちゃうと・・みんななるんだって言ってました・・・何だっけ・・えっと・・タマをぶら下げてたヒモみたいなヤツ・・」
「あ～　精索〈せいさく〉？」
「そ・・そう！　それだって言ってました・・」
「そうか・・精索は残ってたのね・・・」
「み・・みたいです・・・」
・・オレ・・白石先生にはウソつきたくないんだけど・・でも先生にお尻でしてるなんて知られるの恥ずかしいし・・・先生は女の人

だから・・そういうのって変態みたいに思われちゃうかも・・・オレ・・白石先生に変態なんて思われたら悲しいもん・・・何か話を変えないと・・・

「あっ、杉田先生が言ってたんですけど・・性別適合手術って１５０万円もかかるんですね・・あ、豊胸しなかったら１００万円前後っていってたけど・・・」

「有希ちゃん・・性別適合手術したいの？」

「ぁ・・ぇ・・そ・・そういうワケでもないですけど・・・」

・・しまった・・ヘンな話題フッちゃったかな・・・

「私もそろそろじゃないかと思ってたの。手術は２週間くらい入院が必要だし、その後のこともあるから・・それ考えると夏休みが最適なんじゃないかと思ってたのよ？」

「ぁ・・わ・・わたしまだ・・そこまでは・・・」

「でもこれは良い機会だから考えてみて、まだ夏休みまで時間があるし、ご両親とも相談してみて・・ね？」

「ぁ・・はぃ・・・」

・・うぅぅ・・ヘンなことになっちゃったなぁ・・・オレまだそこまで考えてなかったのに・・・

・・でも・・白石先生が言うように・・ホントにこれはいい機会なのかも知れない・・・

・・オレは男の子のころから・・何ごとも考えるのが遅い方だし・・・受験のことも何も考えてなかったせいで女子校にしか入れなかったし・・・

・・まあ、これは結果的には良かったんだけど・・・でもいつもそ

んなことで良いワケがない！

・・もしかしたら・・かあさんに相談したら何とかなるかも知れないし・・・いや・・たぶん無理だと思うけど・・・

・・っていうか・・・オレ本当に手術しちゃうのかなぁ・・・

第１８６話　相談　オレを導いてくれる人たち

オレはベッドに潜り込んで寝ようとしたけど・・なかなか眠れなかった・・・

・・頭の中では手術のことばかり考えてしまう・・・

・・手術すれば・・見た目だけは女の子と同じ身体になれる・・・でも・・結構大変な手術みたいだし・・そんな大変な手術・・１００パーセントの安全なんて無いと思うし・・・それに・・お金も無いし・・・

・・いくら考えてもいい答えなんて出てこない・・・

・・・・・・

となりの部屋の麻衣も寝てしまったようでシンとしている・・・

・・麻衣はまだオレがタマを取ったことも知らないのに・・いきなり性別適合手術するなんて言ったら・・驚くだろうか・・・？

・・麻衣もこの頃は少しづつ女らしさも出てきた気がする・・・麻衣は生まれた時から女の子で・・何もしなくても自然に女になっていく・・・でもオレは・・・

・・・・・・

・・かあさんはまだ帰ってこない・・・最近もずっと仕事が忙しいみたいだ・・・

・・・・・・

・・もう眠らなきゃ・・そう思ったころ・・・

“ガチャッ”

玄関のドアが開く音・・かあさんが帰ってきた・・・

（！・・・）

オレはそっとベッドを抜け出して・・静かに階段を下りていった・・・

「・・おかあさん・・・」

「あら、有希まだ起きてたの？」

「・・うん・・あの・・ちょっとお話があるんだけど・・・」

「そうなの？　着替えて来るから待っててくれる？」

「うん・・」

かあさんは自分の部屋に入っていった・・・

オレはかあさんが着替えている間に熱いジャスミンティーを入れて待っていた。

スーツから部屋着に着替えてきたかあさんは、お化粧はそのままだけど髪は後ろでくくっていた・・・

「なに？　話って。」

「・・うん・・・あのね・・今日病院に行ったでしょう？」

「そうだったわね。結果はどうだった？」

「・・あの・・結果は何ともなかったんだけど・・・そこの杉田先生と・・白石先生もだけど・・夏休みに性別適合手術した方がいい

んじゃないかって言うの・・・」
「そう・・」
「・・おかあさんは・・どう思う・・？」
「う～ん・・かあさんがどう思うかより、有希はどうしたいの？」
「・・わ・・わたし・・？」

・・オレがどうしたいか・・それが自分でも良くわからない・・・

「・・お金がね・・かかるんだって・・・」
「・・いくら？」
「・・１００万円前後だって・・・」
「そう・・で？　有希は手術したいの？」
「！！・・でも・・そんなお金ないし・・・」
「お金ならあるわよ？」
「ぇ・・で・・でも・・・」

・・かあさんが貸してくれても・・オレ１００万なんてお金・・いつになったら返せるか・・・

すると、かあさんはまた自分の部屋に入っていき・・出てきた時には手に通帳を持っていた・・・
「はい。」
かあさんは銀行の通帳をオレの前に置いた・・・
「？・・なに？」
「あなたの通帳よ。」
「え？」
良く見ると、確かに名前のところがオレの名前になっている・・・

「中を見てごらんなさい。」
・・オレが透明なカバーから通帳を出して・・開いてみると・・・

「！！・・９１万７千円？！」
・・なんでオレの名前の通帳に・・こんなお金が・・？
「有希が働いて貯めたお金よ。」
「え・・モデルの？・・こんなに・・？」

通帳を良く見てみると、読者モデルを始めた最初の頃は２万とか３万・・年が明けたころからは５万くらい・・・そして今年の２月からは７万とか入金されている・・・読者モデルからモデルになった時だ・・・
「！」
全部入金の中、一回だけ出金してる・・これはきっと長谷川の誕生日にプレゼントを買った時の・・・

「・・で・・でも・・これは使っちゃいけないって・・おかあさんが・・・」
「なに言ってるの！こういう時に必要だから貯めてたんじゃない。」
「！！！」

・・そうか・・・オレはただ・・オレが無駄遣いしないように・・使っちゃダメだって言ったと思ってたけど・・・かあさんはちゃんとこういう時のことを考えていてくれてたんだ・・・

「・・うぅ・・おかあさん・・・」
・・なんだか・・かあさんの気持ちが嬉しくて涙が出てきた・・・もしかあさんが管理してくれなかったら・・オレはきっとそのつどお洋服とか買って使ってしまったんじゃないかと思う・・・

「他にも家族でかけてる保険もあるし、手術代は出ないかも知れないけど、入院費の一部は出るかも知れないわ。もしそれでも足りない時は、かあさんが出してあげるから、有希はお金の心配なんかし

ないで自分の気持ちを大事にしなさい。」
「・・自分の・・気持ち・・・」

・・お金の心配がなくなってしまった・・・これじゃもう・・言い訳できない・・・手術するかどうか・・オレが自分で決めなきゃいけないのか・・・

「・・わたし・・どうしたらいいか・・わからないの・・・」
「有希・・・お父さんも一緒に相談しましょうか？」
「・・うん・・・」
・・そうだ・・とうさんは普段は頼りにならないけど・・こういう時はいつもオレの考えを助けてくれるし・・・

かあさんが書斎にとうさんを呼びに行く・・まあ、書斎といっても本当は納戸なんだけど・・・
「あなた、ちょっといい？」
書斎から出て来たとうさんはマスクをはずしながら・・・
「なんだ？　どうしたんだ。」
「有希がね、性転換手術するかどうか迷ってるのよ。」
「ほう。」
・・かあさんが、これまでのことを簡単に説明して、お金の心配もほとんど無いことを伝えると・・・

「で、何を迷ってるんだ有希？」
「・・何をって・・・迷ってるっていうか・・どうすればいいのかわからないから・・・」
「そうか。それじゃ整理してみようか。有希は今じゃなくてもいいから、いずれは手術をしたいと思ってるのか？」
「・・それは・・いずれは・・しなくちゃいけないんだろうけど・・・」

「別にしなくちゃいけないってことはない。しない選択だってあると思うぞ？」
「・・ぁ・・うん・・・」
「したいのか、したくないのかだ。」
「・・うぅ・・いずれは・・したい・・かな？」
「なるほど、それじゃ問題は時期ってことだな。」
「・・・・・」
「そうだろう？　いつかしたい気持ちがあるってけど迷ってるってことは。」
「・・まあ・・そうかなぁ・・・」

「手術にはどれくらいの期間が必要なんだ？」
「・・2週間入院しなきゃいけないって・・・」
「それじゃ、有希は学生だから長期の休みしか出来ない事になる。」
「・・うん・・・」
「だが、入院が2週間といっても、退院してすぐに登校出来る訳じゃないだろう？」
「あ・・そうかも・・・」
「そうだとすると、手術出来るのは夏休みか、高校を卒業後という事になるな。」
「・・・・・」
「そう考えると、問題は高校生のうちにしたいかどうかという事になる。」
「！！」

・・そうか・・たしかにとうさんの言うとおりだ・・・夏休みにしなかったら・・オレは高校生の間はこのままということになる・・・

「まあ、他の病気という事にして、そのあいだ学校を休むという手もあるが、お前の成績じゃ留年する可能性もあるしな・・・」

「！・・そんなのイヤだよ！・・わたしもみんなと一緒に卒業したい！！」

「それじゃ、今度の夏休みにするか、卒業後にするかという事だ。有希はどっちにしたいんだ？」

・・どうしよう・・弘子は手術して身体も女の子になれば・・みんなとお風呂にも入れるって言ってたけど・・・夏休みにしなかったら・・それも出来ないってことだ・・・

・・そっか・・お風呂に入る機会があるかどうかわからないけど・・全部女の子になってみんなと過ごすには・・夏休みに手術するしかないんだ・・・そう考えると・・・

・・コワイのも・・痛いのも・・後回しにしたって結局は同じだからなぁ・・・

・・どうせなら・・オレも女の子の身体でみんなと一緒に卒業したい・・・

「・・やっぱりわたし・・手術しようかな・・・夏休みに・・・」

「そうか。でも今すぐ決める必要もないけどな。」

「？」

「まだ夏休みまでは時間があるんだ。手術してくれる先生に話を聞くことも出来るだろう？　そうすれば少しは不安も無くなるかも知れない。」

「・・ぁ・・うん・・・」

・・そうか・・たしかに・・まだやることが色々あるのかも・・・

「・・それじゃ・・わたし白石先生に、夏休みに手術するつもりっ

てことで相談してみる！　そしたら・・これから何すればいいのか教えてくれると思うし・・・」
「そうだな、おれもそれが良いと思うよ。かあさんはどう思う？」
「わたしもそれで良いと思う。」
「よし、これで決まりだな。」
「うん。」

とうさんは話が終わると、また書斎に戻って行った・・・
「さ、もう遅いから有希も寝なさい。」
「・・うん・・おかあさんも早く寝てね・・このごろいつも帰るの遅いから・・疲れてるんじゃない？」
「ありがとう。でも心配しなくて大丈夫よ。」
「・・うん・・じゃぁ、わたし寝るね。」
・・とうさんとかあさんに話をしたら・・なんだか気持ちがスッキリした気がする・・・

…………………………………………………………

気持ちがスッキリしたのはいいけど・・なんだか眠気がなくなってしまった・・・
・・ジャスミンティーなんか飲んじゃったからかな・・・
・・眠くもないのにベッドに入っていると・・・ついつい手が・・・
「・・あっ・・・」
乳首をさわった刺激で思わず声が出てしまい、慌てて息を止めた・・

・

（・・いけない・・となりの部屋で麻衣が寝てるのに・・・）

・・でも・・刺激しちゃったら・・そこで止めるのは難しい・・・もっとしたくなっちゃう・・・

オレは電気をつけて、本棚の隠し扉の中からポータブルＤＶＤとＡＶのＤＶＤを取り出した・・・オレが手に取ったのは・・縄に縛られて女の人のヤツだ・・・

・・オレはずっと刈谷先生にもらったＡＶのうち、この手のヤツは戸棚の奥の方に“封印”していた・・・ＳＭなんて高校生の女の子が観るようなモノじゃないし・・・

・・でも・・やっぱり好奇心には勝てなかった・・・高校生の女の子だって・・興味はある・・・

・・ましてやオレは・・元男の子だし・・・たぶん普通の女の子よりは興味も大きいんじゃないだろうか・・・？

でも観てみると、思ったほど過激なモノではなかった・・・

・・オレはＳＭっていったら・・ムチでバシバシ叩いたりするのかと思ったけど・・・

・・刈谷先生の話ではＳＭにもいろいろあって、これは“緊縛プレイ”なんだそうだ・・・そのうちでもオレにも受け入れやすそうなソフトなモノを選んでくれたらしい・・・

・・内容はキレイな女の子を縄で縛って・・目隠ししてエッチなこ

としたり・・耳元でエッチなこと言ったりする・・・特に男優さんがカッコイイと・・オレがされてるような気になって・・・すごく興奮してしまう・・・

・・赤い縄で縛られてる女の子って・・意外にキレイ・・・こんなだったらオレも一度くらいは・・縛られてみたいような・・みたくないような・・・

・・でも一度“鼻フック”ってのがあったけど・・あれはキライだ・・・だって女の子が変な顔になって可哀想なんだもん・・・男の人は女の子を変な顔にして楽しいのだろうか・・・女の子の方は絶対イヤだと思う・・・オレがもしあんなことされたら悲しくなっちゃう・・・

（・・ぁ・・きもちいい・・・）

乳首をそっと擦っただけで・・オレの股間はビクビクと何か生き物が暴れているような感じになる・・・そして擦り続けていると・・生き物はオレの身体の中に潜り込んできて・・オチンチンの根元をゆっくりと擦りあげていく・・・

（・・あうぅっ・・・）

・・オレ・・どんどん敏感になってる・・・

刈谷先生とエッチしてた時は・・まだこんな感じじゃなかったのに・・・大森先輩に乳首だけでイカされてからは・・・徐々に自分だけでもイケるようになってしまった・・・

（・・んんっ・・・）

・・これって・・杉田先生が言ったように・・オレの身体が“開発”されたからなのだろうか・・・？

・・もしかして・・この股間でうごめく虫のようなものは・・・キンタマを動かすための筋肉の動きだったりするのだろうか・・・？

“・・アンッ！・・堪忍してぇ・・・・！”

赤い縄に縛られたＡＶの中の女の子が喘ぎ声をあげる・・・すると
まるでオレの身体も同調するように股間一帯がギュッと締め付けられた・・・

（・・あんっ！！）

・・オチンチンのあたりから・・お腹へ・・鼠蹊部へ・・熱い液体がドクドクと流れ出す・・・まるで射精かおもらししたみたいに・・・

（・・うぅぅ・・・）

・・オレはベッドにグッタリと横たわりながら思う・・・

・・女の子もオナニーした時って・・こんな感じなのだろうか・・・

・・それはたぶん・・手術をしても・・オレには想像することしか出来ないのだろう・・・

・・それでも・・オレは女の子の身体になりたい・・！

……………………………………

ＡＴから

後半は完全版にするべきでしょうか？

内容的にはそこまでの表現ではないと思うのですが・・・
ご意見あればお聞かせください。

補足です。
後半というのは、この後にまだ後半があるのではなく、
今回の話のお父さんとお母さんに相談している部分が前半、
ＡＶを観ながらオナニーしてる部分が後半という意味です。
わかりにくい書き方ですみません。

書く前は話がＡＶなので完全版にするつもりだったのですが、
書いてみたら意外にあっさりで（笑）
わざわざ完全版にする必要はないと思ったので・・・

第１８７話　競争　オレの男の意地

「・・有希・・一緒にゆっくり走らない？」
「・ぅ・・うん・・そうだね・・・」
千里に耳元でこっそり言われてオレも同意した・・すると直美が・・
・
「ちょっと！　あんたちほどほどにやろうなんて思ってないでしょうね！」
「！！・・そ・・そんなこと・・・」
・・しまった・・バレてるよ・・・

「今年は絶対１組に勝つんだから！　ねぇ阿部っち！」
「そうよ！」
・・阿部っちも小さいくせに走るの速い・・・小さいといえばミサトちゃんも張り切ってたなぁ・・・
「有希も足が長いんだからもっと速く走れないの？」
「・・足は・・長距離ではあまり関係ないと思うけど・・・」
「短距離だって遅いじゃない！」
「・・うぅ・・・」
・・返す言葉がない・・・

今日は毎年恒例の１０キロマラソンの日・・スポーツが苦手なオレには憂鬱な一日・・・

もっとも、一日といっても１年生が１、２時間目・・２年生が３、４時間目・・そしてオレたち３年生は５、６時間目と学年別にやるクラス対抗のマラソン大会だ・・・

実はオレはこれまでマラソン大会には参加したことがない・・・
1年生と2年生の時は、オレの生理日・・もちろん設定上のことだけど・・と上手く重なってくれたので、それを口実にして見学しまったのだ・・・

・・でも今年はまったく重ならないので、見学する口実が無くなってしまった・・・

・・雨でも降らないかと思ったのに・・素晴らしい快晴だ・・・

「でも1組は今年も手強そうね。速い人誰も見学じゃないみたいだし・・・」

・・たしかに弘子の言うとおりだ・・1組は運動部のコが多いうえに、すごく遅いコも少ない・・・だからオレたちの3組に直美や阿部っちみたいに速いコがいても、なかなか得点で勝てないのだ・・・

・・それに・・これまでは見学してたオレもいるし・・・この状況は元男としたはホント情けない・・・

・・オレは入学する時、男だとバレちゃいけないからスポーツを頑張らないように言われてたけど・・入学してみたら全然そんな心配いらなかった・・・中学のころは男子の中でいつもビリに近い方だったけど・・まさか女の子の中でも中くらいだったとは・・・どうなってんだよオレ・・・

・・まあ・・女性ホルモンを打つと筋肉も減るっていうし・・少しあちこちに脂肪もついたり・・胸が急に膨らんだりして・・これって結構男の子にとってはハンデだと思うし・・・だから走るのも遅くなったんじゃないか?・・・ってことで不甲斐ない自分を納得させてるんだけど・・・

・・ただ、ありがたいのは、男の子のころと違い絶対にビリになる心配はないってことだ・・・だって女の子の遅いコはオレの遅さなんてメじゃない！・・ビリ候補の井川さんもいるし・・・井川さんは去年もその前もビリになって、しばらくクラスの何人かから小言を言われてたみたいだ・・・

・・ウチの学校は校風なのか、そんなに勝ち負けにこだわる人は少ないんだけど、やっぱりクラスに何人かは運動部のコとかこだわる人もいる・・・それでもウチのクラスの直美なんかは終わったらスッキリしちゃうタイプだけど、どうも井川さんがいる2組はそうじゃないみたいだ・・ネチっこいっていうか・・・でもそれでも休まない井川さんって、ある意味スゴイと思う・・・女の子に小言なんて言われたらオレだったら休みたいと思っちゃうな・・・

後ろからポンと肩をたたかれて、振り返ると長谷川だった・・・

「今年はあんたも走るんだ?!」

「・ぅ・うん・・・」

「よし、じゃぁ有希には負けないようにしよっと！」

「！」

「まあ、あんたには負ける気がしないけどね！」

「・・・・！」

・・クソぉ・・長谷川め・・・言いたいこと言いやがってぇ・・・

・・でも長谷川のヤツ・・あんなこと言うだけあって結構走るの速いんだよなぁ・・・

・・去年の１００ｍ走もオレよりタイム良かったし・・・

・・だけど・・オレだってこれまでのオレじゃない！・・・弘子に

教わった胸が弾まない女の子走りも習得したし・・長谷川は知らないけど、スポーツブラの下には・・ちゃんと二プレスだって貼ってるんだから！

・・よぉし！・・今日は長谷川を負かせて、オレだって昔は男の子だったんだってとこ見せてやるぞ！

…………………………………………………………

コースは学校のまわりだいたい2キロを5周してから、校庭に入ってトラックを2周する。

オレが走るのにジャマにならないように、三つ編みにして編み上げた頭に、3組の色の赤いハチマキをギュッと結んでいると直美が・・・

「有希なんか気合い入ってるじゃない！」

「うん！今日は頑張るよ！」

もちろん上位なんて狙えないけど・・長谷川には勝つんだ・・・オレにだって元男の意地ってもんがある！

・・男の意地なんて・・・いつか女の子になる手術をしようって人間が言うのもヘンかも知れないけど・・・

「よーい！　ピリリッ！」

山口先生が勢い良くホイッスルを吹くと、オレたちはいっせいに校門へ走った・・・

オレはなんとか先頭集団の後ろの方につけることが出来た・・・前を見ても1組の青いハチマキのコはたくさんいるけど・・どうやら長谷川はもっと後ろの方みたいだ・・・滑り出しは上々だ！

コースは学校のまわりの一般道だから、たくさんの女の子たちが走っているのを見ると、行き交う人たちはみんな微笑ましそうにする・・・車に乗ってる人もけっこう見てくる・・特に男のドライバーは・・・

・・そりゃぁ・・体操服にエンジのブルマーでたくさんの女子高生が走っていれば、人々の目を引きつけないワケがない・・・特に男の人は・・・

・・いまどきブルマーの学校も少ないし・・みんなも出来ることならブルマーじゃない方がいいって言ってる・・・

・・でもみんなはまだいいと思う・・・オレなんか学校内でのブルマーには、もう2年も経つからさすがに慣れたけど・・・こうして学校の外を走ってると・・人目が気になって仕方ない・・・

・・特に車の横を通る時なんか・・男の人の顔がちょうどオレの股間のあたりにくるから・・恥ずかしくて堪らない・・・なんだかいつもは忘れていた女の子になったばかりの頃の恥ずかしかった気持ちを思い出してしまうのだ・・・

・・もちろん最近はブルマーをはく時は、一応下にガードルをはいているし・・エッチなことをしてるワケじゃないからモッコリすることもないんだけど・・それでも股間が女の子と違わないかと気になってしまう・・・

「はい3週〜！　急がないと1番の人に追いつかれるわよ〜！！」
・・え?！・・まさかぁ・・・山口先生ったら大げさなんだから・・
・

4周目にさしかかったころ・・・
「・・はぁはぁ・・やっと有希に追いついた・・・」
「え?！・・千里?」
・・やばい！・・ヘンなこと考えてる間に、いつのまにか先頭集団からずいぶん遅れてる！！・・気づかないうちに、もう長谷川に抜かれちゃったかも・・・
「・・ハァハァ・・千里・・長谷川さん・・見た?・・ハァハァ・・」
「・・はぁはぁ・・ううん・・見てないけど・・・はぁはぁ・・・」
・・長谷川のヤツ・・どこにいるんだろう・・・

すると・・・
「あんたこんなとこにいたんだ・・！」
「！！・・ハァ・・長谷川さん・・ハァハァ・・」
「ずいぶん息があがってるじゃない！　じゃぁお先に！」
エ〜！！・・長谷川のヤツ・・全然疲れてないじゃない！！・・・
アイツ・・中盤で体力温存してたんだな！！

・・うぅ・・長谷川めぇ・・前に出たままずっとスピードをあげない・・・わざとオレの前でジャマしてるんじゃないだろうな・・・

「・・はぁはぁ・・有希・・はぁはぁ・・わたしに・・合わせないでいいわよ・・」
「・・ううん・・そういうワケじゃ・・ハァハァ・・・」
・・べつに千里に合わせてゆっくり走ってるワケじゃない・・・オレも疲れてるんだ・・・最初に飛ばしすぎたみたい・・足が重い・・

・

「ラスト1周～！　戸田さん佐倉さん頑張って！　先頭がもうそこまで来てるわよ～！」

・・またまたぁ・・・すると後ろから・・・

「有希、千里がんばれ！」

？・・直美？！

・・あっという間に1番の直美がオレたちを追い抜いていった・・・

ホントに追い抜かれちゃった！！

・・チラッと振り返ると・・1組の人たちの後ろに阿部っちの姿も・・！

「戸田先輩～がんばって～！！」

？！・・どうやら5時間目が終わったみたいだ・・・1年生と2年生がみんな校舎の窓から応援してくれてる・・・

「有希せんぱ～い！　がんばってくださ～い！！」

！！・・ミサトちゃんだ！・・オレ疲れてるけど・・そんなこと言ってられない・・みんな応援してくれてるんだから・・頑張らなきゃ・・・

あっ！！・・ふと見るとずっとオレたちの前を走ってた長谷川が、だいぶ向こうに行ってる！・・いつのまに・・・？

「・・はぁはぁ・・ほら・・有希・・はぁ・・長谷川さんに離されちゃう・・・」

「・・ぅ・・うん・・・」

・・あと半周・・たしかに・・ここで離されたら・・もう追いつけ

ない・・・
「・・ハァハァ・・ごめん千里・・わたし行くね・・ハァハァ・・」
オレは千里を残し、疲れた足でなんとか長谷川に追いつこうとスピードを上げた・・・ミサトちゃんやみんなの応援で少し元気が出たみたい！！

「ハァハァハァハァ・・・」
・・オレは何とか長谷川に追いつこうと必死で走った・・・もう長谷川以外なにも目に入らない・・・

「ハァハァハァハァ・・・」
・・でも・・なかなか追いつくことが出来ないまま・・校門まで来てしまった・・・

・・長谷川さん・・待って・・・

校門を入って校庭へ・・・もう走り終わった人たちがトラックのまわりで応援してる・・・

・・うぅっ・・スパートが早すぎたみたい・・・もう疲れすぎて・・足が上がらない・・横っ腹も痛いし・・・

「有希がんばれ～！」
・・・直美と阿部っちの応援も遠くに聞こえる・・・

・・オレの前には青いハチマキの長谷川の後ろ姿が・・・オレはもう無我夢中で長谷川の背中だけを追いかけていた・・・

・・・・・・・・

・・・・・
気がついた時には・・倒れ込んでみんなに抱えられていた・・・
良かった・・どうやらオレ・・ゴール出来たみたいだ・・・
「有希がんばったね！　最後の追い上げすごかったよ～！」
「？・・ハァハァ・・はぁ？・・追い上げ？・・・」
・・オレ・・長谷川しか見てなくて・・どうなったのか全然わからないんだけど・・・
「・・ハァハァ・・直美・・長谷川さんは・・どうだった・・・？」
「長谷川さん？・・長谷川さんは有希より１つ前だったよ！」
「！・！」
・・そうか・・やっぱりオレ・・負けちゃったんだ・・・また長谷川にバカにされちゃうな・・・
・・元男の意地なんて言って・・・オレったら全然ダメじゃない・・・
・・女の子になるんだから良いようなものの・・・長谷川に負けたのはスゴク悔しい！
・・こんなに悔しいのは・・長谷川がオレのこと・・男だって知ってるからだろうか・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

結果発表・・・

「それでは発表します・・・今年の１０キロマラソン大会の順位は・・・」

・・みんなが息をのむ瞬間・・・

「なんと！１点差で３組が優勝です！！」

「ヤッタ～！！」

え？！・・ホントに？！・・オレたちが勝ったの？！

直美も阿部っちも弘子も大喜び！　千里も嬉しそう・・・良かった・・

「やったね有希！　きっとあそこで有希が追い上げたおかげだよ！」

「え？　わたし・・？！」

「だって１点差だったたんだもん、有希が１人でも抜いてなかったら勝てなかったんだから！」

「・・・・」

・・そっか・・たしかに直美の言うとおりかも・・・

・・でもオレは・・・長谷川を追いかけて走ってただけなんだけどなぁ・・・

・・長谷川がいなかったら・・オレきっと・・あんなに頑張れなかったと思う・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「ゆぅ～き！」
「！・・長谷川さん・・・」
ひとりで帰っていたら長谷川が馴れ馴れしく肩に寄りかかってきた・・・

「あんたのクラスもなかなかやるじゃない！」
そう言いながらオレのホッペをツンツンする・・・
「ぁ・・うん・・・」
「こんなことなら、あんたのこと焚き付けなきゃ良かった。」
「・・・・？」
「有希があんなに頑張ると思わなかったからさ。」

「・・でも・・負けちゃったもん・・・」
「なに？　あんたわたしに勝つつもりだったの？」
「・・そ・・そんなんじゃないけど・・・」
・・本当はクラスの優勝より・・出来ることなら・・オレは長谷川に勝ちたかった・・・

「有希は可愛いんだから、そんなに頑張らなくていいのに！」
「・・そ・・そんなぁ・・・」
・・オレは長谷川に・・そんなふうに言われたくない・・・それに・・可愛いなんてホントは思ってないクセに・・・
「でも有希のことちょっと見直しちゃったかな・・あんなに食い下がってくると思わなかったわよ！」
「・・・・・」
「なんか、ちょっと男らしかった！」
「！！」

・・オ・・オレが・・男らしい？！

・・長谷川に男らしいなんて言われちゃった・・！

「うふふ・・」

・・なんか嬉しい・・自然に笑みがこぼれちゃう・・・・

「なに？　どうしたのよ急にニヤニヤして気持ち悪い！」

「・・ううん・・何でもない！」

オレがニッコリ微笑むと・・・

「なにそれ！　ホント気持ち悪い！」

でも、そう言いながら長谷川の顔も笑っていた。

・・オレは女の子になろうとしてるのに・・なんで長谷川に男らしいって言われて・・こんなに喜んでるんだろう・・・

・・オレの男らしさなんて・・もう何の意味もないのに・・・

・・でも・・男らしいなんて言われると・・・オレはなんだか・・・長谷川に認めてもらえたような気がした。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

補足

マラソン大会の様子が解りにくいようなので補足いたします。

本当はこういうことは本文中で解るように書かなきゃいけないのですが、レースの様子を文章で書くのは難しく、その上この話は有希の目線でしか書けないので表現上色々制約もあるので、こういう形

で解説する事をお許し下さい。

最初、先頭集団の後方につけていた有希ですが、ブルマーの事とか考えながらボケボケ走っているうちに、中盤にいた千里に追いつかれて（そこまで順位を下げて）しまいます。

その時、直美は1位で走っており、阿部も先頭集団にいます。長谷川は有希と千里の少し後ろで虎視眈々と（笑）有希を狙っています。

ラスト1周で山口先生が、先頭がもうそこまで来てると言っているように、5周目に入ってすぐに1位の直美に抜かれて有希は周回遅れになります。直美に抜かれた後1組の生徒2、3人の後ろに阿部もいるので、その後有希たちは阿部にも抜かれています。

5時間目が終わって校舎の窓から応援していた1、2年生は、もしかしたら周回遅れの有希をトップ集団にいると勘違いしたかも知れません（これはわかりませんけど・・・）

順位の付け方は、だいたい120人として、1位が120点、2位が119点～ビリが1点という感じで付けたのだと思います。ですが実際にそういう順位の付け方をする事があるのかどうか私は知りません（笑）

ただ個人的に書いてから思ったのですが、有希たちに10キロは長過ぎるかな?という気もします（笑）まあ、そこらへんはお楽しみエピソードなので、あまり深く考えないでいただけるとありがたいです。

第１８８話　Ｋ大　初めての大学病院

「それじゃ今日はこれで終わりましょう。お片付けは2年生の当番ね。」
華道部のお稽古は同じ花で何度も活けなおす・・みんなのお花が短くなってきたら稽古は終わりだ。

「それではお疲れさまでした、ありがとうございました。」
「お疲れさまでした、ありがとうございました～」
オレたちは床に両手をついて丁寧にお辞儀した・・・

・・礼に始まり礼に終わる・・・これは大切なことだ・・三吉先生もいつもおっしゃっている・・・

お稽古が終わって茎が短くなってしまったお花を、水をひいた浅いお盆に飾っていると長谷川が・・・
「有希、帰ろう！」
「うん。ちょっと待って、もうすぐ終わるから・・」
・・お花も練習して用済みになったからってゴミにしちゃったら可哀想だし・・元々お花屋さんで開ききった花だからそんなにはもたないけど・・こうして花だけでもお水に浮かべておけばまだ2、3日はもてるものだ。
「有希はやさしいね、お花がかわいそうなんてさ。」
「だってそうじゃない・・」
「まあね、でもあんたもずいぶん部長が板について来たんじゃない？」
「！！・・そんなことないけど・・・」
・・まあ・・慣れてきたってのはあるかもしれないな・・・

長谷川と一緒に部室を出ようとした時・・・

“ブルル・・ブルル・・”

「あ、メールだ。」

携帯を開くと・・・

「白石先生だ！」

“　そろそろ部活も終わった？　部活が終わったら話があるから保健室に寄ってね。”

「ゴメン長谷川さん・・わたし保健室に寄らなきゃいけなくなっちゃった・・・」

「わたしもついていこうか？」

「ううん、ひとりでいい・・」

「じゃ、教室で待ってようか？」

「ぁ・・でも・・もしかしたら話が長くなるかも知れないから・・悪いけど先に帰ってくれない？」

「・・そう・・わかった・・じゃぁ今日はひとりで帰るわ・・・」

長谷川は少し気に入らなそうだけど・・話が話だから・・まだ長谷川には知られたくない・・・

「こんにちは白石先生！」

「あ、有希ちゃんいらっしゃい。さっきK大の先生から連絡があったのよ。」

「そうなんですか・・」

「それでね、手術のことを説明してくれるそうなんだけど、こんどの土曜日の午後からどうかってことなの。有希ちゃんこんどの土曜日は大丈夫？」

「はい、大丈夫です。」

「それじゃ土曜日の午後に予約入れてもらっていいわね。」
「はい。」
「それで、Ｋ大には私も一緒に行こうと思ってるの。」
「え？・・でも・・先生忙しいんじゃ・・？」
「ううん、有希ちゃんの事では私にも責任があるし、私も手術の事とかちゃんと聞いておきたいし。」
「ぁ・・はぃ・・」
・・大学病院に行くのは不安だから・・白石先生が一緒に行ってくれるのは心強いけど・・・でも手術のこととか先生と一緒に聞くのは・・ちょっと恥ずかしいかな・・・
「だから土曜日は１１時ごろに有希ちゃんの家に迎えに行くから、私の車で一緒に行きましょう。」
「え？！・・先生に迎えに来てもらうなんて・・そんな・・申し訳ないです・・・」
「いいのよ、Ｋ大病院に行くには、どこかで待ち合わせるのも、有希ちゃんの家に寄るのも同じだから。」
「そ・・そうですか・・じゃぁ・・お願いします！」
先生の車に乗せてもらうのは修学旅行から帰って来た日以来だ！
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
“ピンポン！”
「あ、先生だ！」
チャイムが鳴って、オレは急いで玄関に行きドアを開けた。

「？・・有希ちゃん？！　どうしたの、その頭・・」
「あ、もしかして・・ヘンですか？」
「ううん、そんなことないけど。」
「・・病院でもし“春日ユウ”だってバレたら困るから・・今日はウィッグにしたんですけど・・・」
・・この黒のショートボブ・・似合ってないかな・・・けっこうイケると思ったんだけど・・・

「あぁ、そういうことなの。だったら良いんじゃない？　あまり普段とイメージが違うから驚いただけよ。」
「・・うぅ・・やっぱりやめようかな・・このウィッグ・・・」
「大丈夫よ！　有希ちゃんはモデルさんなんだから、何だって似合うわよ！！」
「・・・・・」
・・何だってってのは・・言い過ぎだと思うけど・・・

先生の赤い車でK大病院までドライブ・・・

「そうだ、保険証は持ってきた？」
「はい、ちゃんと持ってきました。」
・・でも・・保険証を使うのは女の子になって初めてだ・・・だって保険証を見ると・・オレが男だってわかっちゃうんだもん・・・今回はどっちみち男だってバレちゃうからいいんだけど・・・

「K大病院に行くのも久しぶりだわ。私ね、K大の医学部出身なのよ。」
「え、そうなんですか？」
「だから懐かしいのよね・・実はそれもあって今日は有希ちゃんと

一緒に行くことにしたの。」
「そうだったんですか！」

「でもわたし・・大学病院で美容整形なんか教えてると思いませんでした・・」
「そうね、私がいた頃はまだ無かったんだけど。医者の私が言うのも変だけど、美容整形外科のお医者さんってヤブ医者も多いのよね。ちゃんとした人もいっぱいいるんだけど・・」
「！！」
「一応医師免許持ってれば医療行為を行えるんだけど、実際の経験は人それぞれでしょう？」
「・・はぁ・・」
「それに医師免許は外科とか内科とかそれぞれ免許に区別もないし全部一緒の免許だから、実際にあまり外科の経験が無い人がやってる場合もあるの。たまに免許を持ってない院長なんかが医者のフリしてやってる時もあるし・・もちろんこれは違反なんだけどね・・」
「・・・・・」

「美容整形した事ってあまり人に知られたくないでしょう？　もし失敗しても表沙汰に出来なくて泣き寝入りする人が多いのね、だから訴えられないのを良いことに失敗しても平気で同じ間違いを繰り返す医者がいるの・・」
「・・コワイですね・・」
「そう、怖いのよ。だから最近では美容整形についてもちゃんと大学でも扱うことになったのよ。」
「へ～・・・」
「それに美容整形っていうと、まぶたを二重にしたり鼻を高くしたり身体の気に入らないとこを直すだけのイメージが強いけど、豊胸手術なんかは乳ガンで胸を取ってしまったり変形してしまった人たちの心のケアのためにも必要な技術なの。」

「！」
「たとえ早期発見でガンが直っても、胸が無くなったことで精神を病んでしまっては何にもならないでしょう？」
「・・はぃ・・・」
「だから最近はそういう技術も大学病院でも扱うようになってきたのよ。」

・・そうか・・豊胸ってただ胸を大きくしたい人がするものだと思ってたけど・・そういう場合にも必要なんだ・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

Ｋ大病院に着くと人影はまばらだった・・聞けば土曜の午後は外来はもうやってないらしい・・だったらウイッグの必要なかったかも・・・

外来が終わって正面の玄関は閉まっているので、駐車場脇の裏口みたいなところから入っていく・・・時間外に来たお見舞いの人とかも、ここから入るみたいだ・・・

別館の美容整形科に行くと、小太りの先生がオレたちを迎えてくれた・・・
「美容整形科准教授の田口です。」
田口先生は太い黒縁の眼鏡をかけている・・なんだかオタクっぽい感じ・・・
「私は白鴻学園で校医をしている白石です。こちらは先日話した戸田有希さん。」
「杉田先生にも伺ってますよ。はじめまして戸田君。」

「は・・はじめまして・・」
握手した田口先生の手は温かく大きくて、指も太かった・・・こんな太い指で繊細な手術が出来るのだろうか・・・

「手術というのは患者さんにとっては不安なものだからね。ましてや性別適合手術というのは人生を変える為の手術だから、良く話し合うのが不安解消には一番だと思うんだ。だから疑問に思うことがあったら何でも遠慮なく聞いてくれて良いからね。」
「・・はぃ・・・」
・・この先生・・オタクっぽいけど・・ちょっと優しそうかも・・・

「それじゃぁ、ちょっと診察してみようか?」
「ぇ・・ぁ・・はぃ・・・」
「白石さんはどうします?　一緒にご覧になりますか?」
「あ~・・えっと・・私は席を外してます。彼女も二人で診られるのは恥ずかしいでしょうし・・」
「そうですね。じゃ終わったらお呼びします。」

白石先生が部屋を出て行くと、なんだか心細くなってきてしまった・・・
「それじゃ戸田君はこっちに来て。」
カーテンを開けたところにあったのは・・・!!

・・まさか・・オレがこの上に・・?!

それは女の人が赤ちゃんを産む時に乗るようなイスだった・・・イスの両側に足を乗せるような台が突き出ている・・・
「・・わ・・わたし・・これに乗るんですか・・?」
「そうだよ。股を診るにはちょうど良いからね。」
・・それは・・ちょうどいいかも知れないけど・・・

オレが意を決して乗ろうとすると・・・
「あ、パンツを脱がなきゃ駄目だよ。」
「！！」
・・そうだった・・・パンツも脱ぐんだ・・・そしてこの上に・・・
？
・・パンツを脱いでこの上で股を開いている自分の姿を想像すると・
・死にそうに恥ずかしい！！
・・顔がすごく熱い！・・・オレたぶん真っ赤になってると思う！！
オレはスカートの中に手を入れてパンツを下ろした・・・そして
イスに座ると・・・
「！！」
先生がオレの足を、ヒザを引っ掛けるようにして固定した・・・う
ぅっ・・女の人もお股を診察する時・・こんな格好させられるのか
な・・・
“ウイ～ン・・・”
イスが倒れていくにしたがい、オレは半分寝たような格好になり・・
先生に向けて股を丸出しにさせられてしまう・・・
「ふんふん・・なるほど・・」
・・でも先生はオレの恥ずかしさなど、まるで気にする風もない・・
・いつもしてるんだから当たり前か・・・
「ちょっと触るよ。」
「！・・は・・はぃ・・・」
先生がオチンチンを持ち上げてタマの袋のあたりをさわってる・・・
うぅ・・ゾクゾクするぅ・・・

「ちょっと引っ張るけど、痛かったら言ってね。」
「・・はぃ・・・」
先生はオチンチンの先端の皮の部分をつかむと、かなりの力で引っ張った。
「ヒッ!!」
・・それほど痛くはないけど・・何だこの状況・・!
「うん、良いね。だいぶ前に睾丸を摘出したって聞いたから、縮んでないか心配してたんだけど十分な長さがあるみたいだよ。」
「・・・・」
・・エッチなことしてから・・また勃起するようになったからかな・・・

「こっちはどうかな?」
こんどはタマの袋の方を両手でつまんで引っ張る!
「こっちも大丈夫だね。色素も沈着してないし、キレイな陰唇が形成出来そうだよ。」
「!!!」
・・い・・陰唇って・・あの写真で見た黒くてビラッとした部分?!

「皮膚が足りないと太ももとか他の所から皮膚を持ってこなきゃいけない場合もあるからね。でも出来れば戸田君のキレイな身体に余計なキズは付けたくないし、モデルやってるんなら尚更だよね。」
「え?!・・し・・知ってるんですか?」
「何を?」
「・・わたしが・・モデルやってるって・・・」
「あぁ、知ってるよ。雑誌でモデルやってるんだろう?」
「あ・・あの・・それって秘密なんですけど・・・」
「解ってるよ。誰にも言わないから安心して。それに医者には守秘義務があるから患者のことを勝手にしゃべったり出来ないんだ。」
「・・・・・」

・・また守秘義務か・・・

「秘密だったら早いとここコも女の子にしておかなきゃね。女の子のモデルが男だったなんてバレたら大変だよ。」

「・・うっ・・はぃ・・・」

・・たしかに・・先生の言うとおりだけど・・そんなにハッキリ言われるとさすがにショック・・・

・・オレのこと・・目標にしてるなんていう女の子もいるのに・・・そのオレが男だなんてバレたら・・みんなどう思うだろう・・・怒るかな・・・

「うん、とりあえず形成には問題ないみたいだね。後はまあ、身体が全身麻酔の手術に耐えられるかどうかだけど、君は若いし健康そうだから問題ないと思うよ。」

そう言いながら先生は、イスを戻してオレを下ろしてくれた・・・

オレは急いで今日おろしたてのパンツをはいた・・・

「白石先生、終わりましたからどうぞ。」

廊下のイスで待っていてくれた白石先生が部屋に入って来ると・・・

「戸田君のペニスと陰嚢は女性器の形成に十分な大きさでした。膣と外性器の形成には問題無さそうです。」

「・・良かった。」

「手術はいつ頃を考えてる?」

「一応、夏休みが学業に差し支えなくて良いと思うんですが・・ねぇ有希ちゃん。」

「ぁ・・はぃ・・・」

「このごろは予定も詰まってるから、予約するなら早い方がいいんだけどね。」

「そうですか・・」

・・どうしよう・・なんか・・先生どうしで話がどんどん進んでる・・・

「ぁ・・あの・・すみません・・わたしまだ絶対手術すると決めたワケじゃ・・・」

「え、そうなの？」

「田口先生、有希ちゃんは手術するのを不安に思ってて、それで今日は田口先生に詳しく話を聞きたくて来たんです。」

「あ～、そうだったの。それは早合点して悪かったね。」

「い・・いえ・・・」

「それじゃ手術の方法を説明しようか。写真とイラストとどっちが良いかな・・？」

「え？　写真とイラスト？」

「あ、写真だとこういうので、イラストだとこういうのなんだけど？」

「！！！」

ヒィ～！！・・オチンチンにメスを突き立ててる写真だ！！

「・・イ・・イラストでお願いします・・・」

「そうね、有希ちゃんにはイラストの方が良さそうね。」

「うん、確かに写真じゃ高校生には少し刺激が強いかも知れないね。それじゃイラストで説明しよう。」

・・高校生にはって・・こんな写真見たら大人だって目を背けたくなると思うけど・・・

「まず陰嚢の真ん中を縦に切る・・切開するのは陰嚢より少し下まで・・女性の性器は男性のより下に位置してるからね。」

「・・・・」

「次にペニスの皮を亀頭の下の部分をメスで切って・・皮下組織ごと剥ぐように皮だけをきれいに根元までむいてしまう・・剥いたら陰嚢を切り開いた部分からペニスの中身を皮から抜き取ってしまう・・」

「・・・・！」

「ペニスの皮は身体に付けたまま、ジャマにならないように引っ張っておいて・・抜き取ったペニスに付いている海綿体を、尿道や筋膜を残して取り去ってしまう・・この時に慎重にやらないと神経を傷つけちゃいけないからね、そうしないと亀頭は後でクリトリスの材料にするから、神経を傷つけてしまうとせっかく造ったクリトリスの感覚が無くなっちゃうんだ。」

「・・・・！」

・・クリトリスっていうのも造るんだぁ・・亀頭で?!・・・

「膣を造る場所は陰嚢と肛門の間・・そのあたりに直腸を傷つけないように注意しながら膣にするための穴を開ける。」

「・・・・・」

「尿道は根元で切ってチューブを挿しておいて・・海綿体をきれいに取って筋膜や尿道と亀頭だけになったペニスは亀頭の部分を半分に切って・・片方は切り口を縫い合わせてクリトリスとして尿道上部に埋め込み・・片方は開いてペニスの皮の先端に縫い付ける・・これはセックスした時に男性に子宮があるように感じさせるためと、君が気持ちが良いための両方だね・・神経も繋がってるから奥に当たった時に感覚でわかるよ。」

「・・・・!!」

「あとはペニスの皮を裏返して開けた穴に入れて縫い合わせ・・陰嚢を引っ張ってきて陰唇のように整形する・・まあざっと説明するとこんなところかな。　何か質問ある?」

「・・・・・」

・・うぅっ・・なんか・・生々しい・・・話きいてたら頭がクラクラしてきた・・・でも・・ちゃんと聞いておかなきゃ・・・

「ぁ・・あのぉ・・・」

「なに？」

「・・オチンチンの皮で・・チツ？・・造るんですよね・・・」

「そうだよ。」

「それじゃぁ・・わたしのオチンチンより・・あのぉ・・大きい人だったら入らないんじゃ・・・」

「あぁ、それなら心配いらないよ。皮はかなり伸びるからね。普通の日本人のサイズなら十分まに合うと思うよ。もし外国人だったら・・少し足りないかも知れないけど。」

「！・・が・・外国人は・・しないからいいです・・たぶん・・・」

・・外人なんて・・・オレがもしするとしたら・・・純平だけだと思うし・・・！・・オレ・・何てこと考えてんだ！！

「そうだ、実際に手術後の写真を見せてあげよう。」

田口先生は机の上のファイルを手にとると・・・

「ほら、こっちが手術した男性のもの、こっちが本当の女性のもの。見比べてもほとんど分からないだろう？」

「！・・ほんとだ・・・」

・・オレは女の人のアソコは写真で見ただけだったけど・・あの時見たのよりずっとキレイだ・・・

「ほんと・・私も初めて見るけど良く出来てるわね・・」

白石先生も感心してる・・・女の白石先生が感心するぐらいだからホントに良く出来てるんだろうな・・・

「田口先生は元々整形外科だったんですか？　それとも泌尿器科とか？」

白石先生が聞くと・・・
「いや、僕は元は産婦人科だったんだけど、産婦人科はどうも男の先生は敬遠されるみたいでね。それでこっちに来たんですよ。」
「・・・・・」
オレと白石先生は思わず顔を見合わせてしまった・・もちろん男の先生だからってのもあるだろうけど・・この先生がよけい敬遠されてるんじゃないかと思う・・・だって・・なんか雰囲気がちょっとイヤラシイんだもん・・・

「それでタイやアメリカの病院で性別適合手術を実際に学んできたんだけど、僕のやり方はどちらかといえばアメリカでやってる方法に近いかな。」
「ぇ・・アメリカとタイで違うんですか？」
「だいたいのやり方は似ているけど、細かいところは各先生によっても違うね。アメリカはどちらかと言えば感覚も重要してるってとこかな？」
「・・感覚・・？」
「アメリカって国はセックスの相性を重要視するからね。だから形だけじゃなく出来るだけ感じるように造るんだよ。」
「・・感じるように・・・」
・・たしかに・・感じないより感じる方がいいだろうけど・・・

「切り離すと神経が繋がるまで時間がかかるから、なるだけ切り離さずに造るんだよ。その方が組織が活着しない危険も少なくなるからね。」
「・・失敗って・・あるんですか・・？」
「無くはないけど、僕がやった限りではこれまで失敗は無いから安心して良いと思うよ。」
！・・この先生は失敗ないのか・・だったら少し安心できるかも・・
・

「外側の整形に関しては、産婦人科だったから女性器は沢山見て来たし、資料も多いからずいぶん役立ってますよ。」
そう言って田口先生は別のファイルをパラパラめくって見せた・・・
「！！！」
そこには沢山の女の人のアソコの写真が・・・これ・・産婦人科に来た患者さんのを撮ったんだろうか！？

・・こんなことしてたら・・敬遠されるの当たり前だ・・・

「戸田君はこういうのなんか似合いそうだと思うけどな・・見た目に合わせて清楚な感じが良いんじゃない？」
「・・・・！」
「まあ、お望みならどんな形にも造るけどね。」

・・望みなんて・・オレ・・どんな形が良いかなんて・・わからないよ・・・

「ぁ・・あの・・お金って・・どれくらいかかるんですか？・・わたし・・胸は造らなくていいんですけど・・・やっぱり１００万くらいかかるんですか・・？」
「そうだね、だいたいそれくらいかな。日本の国民健康保険の制度では混合診療は禁止されてるから、本来なら全ての検査も自由診療になるんだけど、やっぱりＣＴとか撮りたいし、そういうのは別の名目で検査しようと思うんだ。」
「・・別の名目・・？」
「まあ、何らかの病気の疑いで検査して、何ともなかったって事は多いからね。実際に手術するかしないかは別にして、検査だけは早いうちにやっておいた方が良いかも知れないね。直前だとそのための検査じゃないかとお上に疑われるかも知れないから。」

「・・はぁ・・・」
・・なんか・・言ってる意味が良くわからない・・・
「他にもいろいろ抜け道はあるからさ、出来るだけ安く手術出来るようにしてあげるよ。」
「ぁ・・ありがとうございます・・・」
・・まあ・・安く出来るに越したことはないけど・・・かあさんは足りなかったら貸してくれるって言ったけど・・オレはあまりかあさんに迷惑をかけたくない・・これまでも色々迷惑かけてきたし・・女の子になってからはずいぶんとお洋服とか買ってもらっちゃったからなぁ・・・

……………………………………………………

「それでは失礼します。有希ちゃんが手術を決めた時はよろしくお願いします。」
「わかりました、でも出来るだけ決断は早い方が良いですね。」
「はい。」
白石先生はそう返事をしてオレの方を見た・・・
「ぁ・・はぃ・・・」
・・うぅ・・オレの気持ち次第ってことか・・・あまり長く迷ってもいられないみたい・・・

白石先生はK大病院からオレのウチまで送ってくれる車の中で・・・
「どうだった？　話を不安は解消された？」
「ぁ・・う〜ん・・なんか話を聞いたら・・よけい不安になったっ

ていうか・・・」
「あ～・・そうか、私は医者だから気にならなかったけど・・有希ちゃんにはキツかったかな？」
「・・はぃ・・・」
・・あんなに具体的に聞いちゃったら・・普通の人なら誰だって不安が増すと思う・・・

・・でも・・はるかさんもあんな手術したんだと思うと・・なんかすごく勇気あって尊敬しちゃう・・・

「それじゃ、手術はやめる？　先生は有希ちゃんが高校を卒業してもう少し大人になってからでも遅くはないと思うけど・・」
「・・・ううん・・・手術は不安だし・・コワイけど・・でも・・わたしやっぱり早く女の子になりたいです・・・」

・・出来ることなら・・オレは心身ともに女の子になって高校を卒業したい・・・

・・身体が女の子になったって・・心はそんなに変わらないかもしれないけど・・・

・・とてもオレの心の中から・・男の部分が無くなりそうな気がしない・・・

「それなら田口先生が言ってたように、早めに検査だけでも受けておいた方が良さそうね。」
「・・はぃ・・・」

「でも先生ちょっと驚いちゃったな。」
「え？」

「だって有希ちゃんがセックスの事まで具体的に考えてると思わなかったから。」
「！！！」
・・そっか・・・オチンチンが入るかどうかなんて聞いちゃったもんな・・・
「そうよね、有希ちゃんだって17歳なんだから、そういう事も考えるわよね。」
「・・そ・・それは・・・」
急に恥ずかしくなってきた・・オレ・・何であんなこと・・聞いちゃったんだろう・・・

「有希ちゃん・・もしかして今好きな男の子でもいるの？」
「！・・い・・いませんよ・・そんなの・・・」
オレは慌てて否定した・・・

・・いくら白石先生でも・・純平のことは秘密だ・・・っていうか・・先生にそんなこと知られるの恥ずかしいんだもん・・・

・・それにもし・・いま純平のことなんか言っちゃったら・・・先生にオレが純平とセックスしたいと思ってると疑われてしまいそうだし・・・

・・オレは決して純平とセックスしたくてアソコを女の子にしようなんて思ってるワケじゃない・・・

・・もし・・そんな事態になっちゃったら・・・・

・・その時はわからないけど・・・

……

ＡＴから

前回のマラソンの様子が分かりにくいようなので
１８７話の最後に補足で説明しています。
読んだけどなんだか良くわからなかった・・という方はごらんください。

２０１１．１１．７
性別適合手術の説明が文章では分かりにくいと思うので、
オレは女子高生支援ページに簡単なイラストで説明しています。

ｈｔｔｐ：／／ｅｍｉｔｈｉｙａｎ．ｈ．ｆｃ２．ｃｏｍ／ｃｏｌｕｍｎ／ｊｙｏｓｉ／０８０６２３－００．ｈｔｍｌ

１８禁止サイトの中にあるのでご注意ください。上部にエッチなバナーが出ます。
結構悪質なサイトに繋がる場合もあるようなので、くれぐれもバナーは押さないで下さい。

第１８９話　寿司　あれから半年・・・

いつもの刈谷先生との待ち合わせ場所にいると、大きな黒い車が来ていつもの場所に停まった・・・

ふふっ・・でも先生ったら・・まだこっちに気づいてないみたいでキョロキョロしてる・・ビックリさせちゃお！

「おじさま！！」
車の窓から声をかけると・・
「？！・・ユウちゃん！　誰かと思ったじゃない！」
ほらビックリした！　今日はショートボブなんだもん！
「うふふ・・ウィッグなの！」
「ユウちゃんはそういう髪型も似合うのね！　いつもの女の子らしい感じと違って、快活な雰囲気も良いわね。」
「そうですか？　なら良かった。もしおじさまが気に入らなかったらどうしようかと思ったけど。」
「あたしユウちゃんのやる事で、気に入らない事なんて無いわよ。ユウちゃんなら何したって許しちゃうわ！」
「そんなぁ、おじさまそんなこと言ってユウのこと甘やかさないでください！」

・・ただでさえ最近、先生といると女の子になりすぎちゃうんだから・・・

「さあ、乗って！」
「はい。こんにちは斉木さん！」
車に乗り込んでシートベルトをかける・・・
「こんにちはユウちゃん。今日もステキよ！」

斉木さんとも、もうすっかり顔なじみになっちゃった・・・

「おじさま、今日はどこに行くんですか？」
「今日はねぇ、美味しいお寿司屋さんに連れて行ってあげるわ。」
「お寿司・・」
「もしかしてユウちゃん生もの嫌い？」
「ううん、好きです！　でも・・そこって回らないとこですよね？」
「当たり前じゃない！」
「ユウ回らないお寿司って初めてだから・・」
「そう？　だったら今日は本物のお寿司を食べさせてあげるわ！」

・・本物？・・回ってるのは本物じゃないのかな・・・お寿司っていったら、回ってるのか、スーパーのしか食べたことないけど・・・

車は長浜へ・・・長浜は長浜ラーメンが有名だけど、魚市場があるからお魚を使った料理のお店も多いらしい・・・

港近くの一軒の小さなお寿司屋さんの前で車は止まった・・・ここが高級なお寿司屋さん？・・なんだか普通な感じだけど・・・

「今晩は大将。」
「えぃらっしゃい！　先生久しぶりやねぇ！どぎゃんしとったね。」
「ご免なさいね、若いお友達が出来たから洋食が多かったのよ。」
「先生！また今日は可愛かコば連れとるやないね！」
「フフッ　ユウコちゃんよ！」
「ぁ・・こんばんは・・」

・・なんかこういうとこ・・緊張するなぁ・・・先生にうながされてカウンターへ座る・・・こんなとこで食べるの初めて・・・

「ユウちゃん何にする？　何でもいいわよ。」
・・そう言われても・・このお店はメニューを書いた木のフダは壁に掛かってるけど・・・どこにも値段が書いてない・・・これって“時価”ってヤツ・・・？

「あの・・わたし良くわからないのでおじさまにお任せします。」
・・食べる順番とかありそうだし・・そういうの全然わからないから・・・
「そう？　それじゃ大将、おススメのから握ってちょうだい。」
「わかりやした！　じゃぁ旨かアジが入っとりますけん、それから握りやしょう！」

・・大将はおろして置いてあったらしい大きなアジの片身を台の下から取り出すと、良く切れそうな包丁で手際よく切っていく・・・そして片手で酢飯をひとつかみ取ると、流れるような手つきでワサビを乗せ、アジの切り身を乗せると軽く押さえて一貫づつ出してくれた・・・

ひと口食べてみると・・・
「おいしい！」
魚の臭みがまったくないうえに、身がすごく甘く感じる！
「・・これがアジ・・？」
こんなおいしいアジ食べたことない！！
「うん、美味しいわ。やっぱり福岡のお魚は違うわねぇ！」
「今朝生け簀から出したばかりですけんね、玄界灘へげんかいなだ〉の荒海で育っとるけん身が引き締まっとるでしょう！」
・・たしかに・・・だけど硬くもない・・丁度いい歯ごたえ・・・

・・でも生け簀に飼ってたんじゃ味が落ちちゃうんじゃぁ・・・

「・・おじさま・・なんで生け簀に入れるの？」
先生に小声で聞くと、大将にも聞こえたようで・・・
「お嬢ちゃん、玄界灘のごたる流れが強か所で育った魚ば、穫ってすぐ食べると身が硬かとよ。やけん生け簀でしばらく飼って身が柔らかくなったところば下ろすったい。」
「へ～・・」
「ばってん下ろしてすぐじゃいかんとばい。午前中に下してから寝かせとくと、今ごろちょうど旨味が出るったい！」
「へぇ・・知らなかった・・わたしお魚は下ろしてすぐが一番おいしいんだと思ってた。」
「それは穏やかな湾内で穫ったもんや養殖もんの食べ方たい！　養殖もんの鯛なんかは、すぐに食べな身がボロボロになるとよ。穫った場所、養殖もん、流通しとるもん、みんな料理の仕方が違うと！」
「へぇ、そうなんですか！」

・・そんなの全然知らなかった・・先生に連れてきてもらうお店はみんなスゴイところだから、色々ためになることが多い・・・

「だけどこの甘いお醤油で食べると、九州に来た！って気がするわね。」
「・・甘い・・お醤油・・？」
「ほら、このトロッとして少し甘みがあるお醤油よ。」
「・・・・・」
・・たしかにこのお店のお醤油は特においしいけど・・・甘いって何だろう・・さしみ醤油みたいだけど・・・

「そうか！　ユウちゃんは知らないのね？　こういうお醤油でお寿司やお刺身を食べるのは九州だけなのよ！」
「え？　そうなんですか？！」

「関東ではお寿司やお刺身も普通のお醤油で食べるの。」
「へ～！！」
・・普通のお醤油じゃ味気なさそうだけど・・どうなんだろう・・・

「普通のお醤油も関東と関西とでは違うんだけどね。関東のお醤油は濃くて香りが強いんだけど、関西は薄めでダシが利いてるのよね。あたしはどっちも好きよ！」
「・・・・・」
・・九州から出たことはほとんど無いから知らなかったけど・・関東と関西では色々違うんだなぁ・・・

・・純平も・・お寿司には普通のお醤油使うのかな・・・？

大将が握ってくれるお寿司はどれも最高においしかった！　先生が本物って言った意味がわかる気がする・・回ってるお寿司も結構おいしいと思ってたけど・・本当のお店で食べるお寿司はおいしさが全然違った・・・

・・でも・・値段も違うんだろうな・・・先生はカードで払ってたからいくらかはわからなかったけど・・・

お店を出て車の中で・・・
「おじさま・・あのお寿司・・いくらだったんですか?」
「あら、ユウちゃんったら無粋なこと聞くのね。」
「ぁ・・ごめんなさい・・・」
・・やっぱり値段なんか聞いちゃいけなかったかな・・・
「いいのよ、でもそんなに高くないわよ。東京だったらもっと美味しくなくても何万も取られるでしょうけどね。」
「へぇ～！！」

「福岡は安くて美味しいものがたくさんあるから良いわよね！」
・・福岡って・・そういうとこなんだ・・・ずっと福岡に住んでるから知らなかったな・・福岡の良いところ・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「あん！　おじさまっ！」
車を降りたとたん先生が腰を抱き寄せるフリして乳首をさわった・・・
「もうすぐホテルなのにぃ・・」
「だって待ちきれないんだもの。」
「ダメです！ホテルに入ってから・・」
・・もうっ、先生ったら・・いきなり乳首なんかさわられたらビクッてしちゃうじゃない・・・

お風呂を出るとベッドへ直行・・・お寿司屋さんで長居したから時間がなくなっちゃった・・・
「ユウコちゃん・・フッ！」
「ひゃっ！！」
耳に息を吹きかけられると・・思わず声をあげてしまった・・・
「ユウちゃんったら、耳でも感じるようになっちゃって！」
「・・・・」
・・耳が性感帯だなんて話をテレビで聞いたことあったけど・・それはてっきりあのいきなり触れられた時の“ゾクッ”とする感じのことだと思ってた・・・けどそれは違っていた・・耳ってのは本当に性感帯らしい・・だって乳首をさわった時と同じように、オチン

チンの奥の方がビクビクするんだから・・・

「この半年でずいぶん敏感になっちゃったわね！」

「！」

・・そうか・・先生と会ってから・・もう半年も経つんだ・・・

「・・エッチになったのは・・おじさまのせいです・・・」

すると先生はニヤッと笑って・・・

「そうかしら？　お部屋でエッチなＤＶＤ観ながら独りでしてるからじゃないの？」

「！！！」

「ほら図星だ。」

「・・だ・・だってそれは・・おじさまが会うたびにエッチなＤＶＤくれるから・・・」

「そうだったわね。だったらやっぱりあたしのせいか・・じゃぁ、もっとユウちゃんをエッチなコにしちゃう！」

「あっ・・そんなぁ・・・」

先生は乳首に吸い付いてチュウチュウ吸いながら・・片方は指でコネコネしだした・・・

「あっ・・はぁ・・あんっ！」

・・タマの袋のところで何かが激しく暴れだす・・・

・・そしてオチンチンの根元に巻き付くと・・・ヘビが動きながら締め上げていくみたいに・・・ゆっくりとしごきあげていく・・・

「・・あんっ・・おじさま・・もっと・・・」

すると先生はもう片方の手を・・胸から脇腹へサワサワとおろして

いく・・・
「・・あ・あ・あ・あ・あああ・・・」
ヒザを内股にこすりつける・・・
「・・あ・あ・あ・・ダメぇ・・・」
・・身体中が性感帯になったみたい・・・！
・・あちこちの筋肉が勝手にピクピク動きだす・・・
「・・あんっ・・お・・おへソまで・・・」
・・気持ちいい・・下腹部が燃えるように熱い・・・もうっ・・イキそうっ・・・
「・・あ・・あぁっ・・イ・・イクっ！！」
・・股間から熱い液体が流れ出るドライの感覚・・・そして全身へと流れ広がっていく・・・
「・・あ・・あぁ・・・」
「・・ユウコちゃんったら、もうイッちゃったの？」
「・・うぅ・・はぁ・・はぁ・・・」
・・身体の力が抜けて・・ツバを飲むのもやっと・・・
「・・だ・・だって・・・おじさまが・・・」
・・やっぱり・・感じやすくなってるのかなぁ・・・
「もっと気持ち良くなりたい？」
「・・ぅ・・うん・・」

・・いまイッたばかりなのに・・まだまだもの足りない・・・

「だったらあたしのも元気にしてくれる？」

「・・はぃ・・おじさま・・・」

・・もう半起ちの先生のモノを口に含むと・・急激に口の中で大きくなった・・・

「ううっ！」

・・これじゃフェラする意味・・ないじゃないっ・・・

「・・うっ・・上手よ、ユウコちゃん・・」

・・最初は無理矢理やらされたフェラチオも・・今はそんなにイヤじゃない・・・

・・でも冷静に考えると・・コレお尻に入れてるんだよなぁ・・・ちょっとキタナイかも・・・

・・だけどこういうのは冷静になって考えるものじゃない・・・

・・だって・・冷静になっちゃったら・・恥ずかしくてやってられないもん・・・

「・・ユウコちゃん、もう欲しい？」

「・・うん・・欲しい・・・」

ベッドに横になって先生へと股を開く・・・

「ユウコちゃんは本当にエッチなコね！」

「・・ぅ・・うん・・・あっ・・あぁっ・・！」

・・だって・・いまはユウコなんだもん・・・

・・ユウコはエッチなコ・・・普段のわたしとは少し違う・・・
・・もしアソコまで女の子になっちゃったら・・・
・・ユウコはもっとエッチなコになっちゃうのかな・・・

……………………………………………………

ATから

みなさんがお望みの話ではないかも知れませんが、
刈谷とのことも書いておかないといけないので・・・
ちゃんと関係は続いてます・・・

それと、前回UPして早いうちに読んだ方へ
性別適合手術の説明のとこを書いています。
詳しくは188話の最後の方をごらんください。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6159e/

オレは女子高生

2011年11月15日23時23分発行